

無冠の王 アナザーラ
イダー戦記 リテイク

カグ槌

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

アナザーライダー

それはライダーの歴史から生まれた異形の戦士

その身に宿した 力を悪として使い 時の王者に敗れ

歴史の闇へと消えていった

しかし力は使えよう この力で運命を切り拓け！

無冠の王のリメイクです。一部キャラ設定や内容を訂正しながら投稿しますので改

めて宜しくお願いします

目次

| | |
|------------------|----|
| 今更ながらのキャラ設定 | 2 |
| プロローグ | 12 |
| START MY ENGINE! | 24 |
| 車と魔法と欲望と | 32 |
| 欲望、落武者、宇宙来たー! | 42 |
| 預言者と時の王 | 51 |
| 魔王邂逅編 | |
| 魔王降臨2068 | 68 |
| 逢魔降臨 | 74 |
| 決着 | 91 |

| | |
|----------------|-----|
| 通りすがらないシンフォギア? | |
| 仲間と海神と: | 106 |
| 横槍は気の毒でしかない | 121 |
| 錬金術師拾いました | 130 |
| 話し合いとは...? | 146 |
| 潜入と? | 175 |
| 運命のライブ | 195 |
| 第二部 シンフォギア 無印 | 216 |
| 約束は違えない | 234 |
| 鎧の女 | 250 |
| 借りとくぜ永遠にな! | 266 |
| 王から告げられる未来? | 283 |

| | | | |
|--------------------|-----|----------------|-----|
| 時をかけてる？ | 309 | 白騎士事件と誘拐事件 | 503 |
| ホラ吹きか預言者か？ | 336 | 入学前は色々起こりがち | 528 |
| U A 2万突破 記念短編 駆け落ち | | 正妻戦争 | 541 |
| ルート | 349 | 入学式 | 559 |
| ルナアタック前編 | 364 | 代表決定戦 前編 | 572 |
| ルナアタック後半 | 379 | 代表決定戦 後編 | 595 |
| 打ち上げ | 399 | 転校生はフラグの香り | 612 |
| I S 編 | | 無人機事件 | 628 |
| 天災兎が見たタイムマシーン | 418 | 金髪の貴公子と銀の兎と愛娘？ | |
| 魔王を追いかけて | 431 | 653 | |
| ケジメと新しい始まりと | 445 | V T事件 その裏で | 676 |
| 意外と平和な日々 | 472 | 閑話 買物 | 696 |
| 空白の間に | 486 | 福音事件 その裏で…前編 | 717 |

| | | |
|-------------------|-------|-----|
| 福音事件 | 中編 | 735 |
| 福音事件 | 後編 | 759 |
| シンフォギアG編 | | |
| 新たな火種 | | 780 |
| 新たな未来 | その可能性 | 801 |
| 新たな敵と落とし前 | | 820 |
| 会議は踊るか進むか? | | 841 |
| 日常と非日常はバランス良くいかない | | 860 |
| 目覚めなくても良い魂と野心 | | 884 |
| 宴と兄妹喧嘩 | | 904 |
| 怒りと悪意 | | 934 |
| 偽りの開拓地 | | 959 |

| | |
|---------------|------|
| 新たなフロンティア | 981 |
| 転生したらスライムだった件 | |
| 魔物の街 | 1007 |
| 魔物の町と紫 | 1025 |
| リザードマンと黄の襲来 | 1042 |
| オークロードとその裏で | 1064 |
| ジュラの大同盟 | 1082 |
| 魔王降臨と建国と | 1108 |
| 魔王（本物）来る！ | 1131 |
| すれ違うもの | 1173 |
| 少しでも： | 1200 |
| 開戦間際と動乱前 | 1216 |
| テンペスト逢魔動乱 | 1236 |

魔王への進化とその意味と

人魔会談

魔王の宴 ワルプルギス

八星と番外

シンフォギアGX編

調べもの

本能 vs 本能

力と力 楽園からの追放者

掴み取るか否か

初変身は負荷が凄い事もある

ドラゴンと獣帝

流転

未知なる敵

15001480146314461420137913571340 1325130712921266

イレギュラー

超えた一線

決闘と…

渦潮とガッツリ黒塗り

未来と過去

過去とメダルと交渉と

下準備と戦力と

三柱と闇の鎧と

アリ退治と化け狐

悪い狐とニンジャの狸

清算と楽しみ

海のトラブルにはご注意を

終わりを止める為に未来の分岐

183718121775173617121689165716201591156815421523

| | | | |
|-------------|----|---------|------|
| カウントダウン短編 | 1位 | 奏者と仲 | 2265 |
| 仮面ライダーシーカー編 | — | — | — |
| カウントダウン短編 | 2位 | 変身if | 2190 |
| 短編 | 3位 | 転スラ | — |
| — | — | 紅蓮の絆編 | — |
| 100記念アンケート | — | カウントダウン | — |
| 戦い終わって | — | — | 2125 |
| 一致団結! | — | — | 2085 |
| 乱戦からのラスボス? | — | — | 2037 |
| 生存する為に | — | — | 1988 |
| 取り戻す為に | — | — | 1944 |
| 簡易?総集編 | — | — | 1933 |
| 1881 | — | — | — |

| | | | |
|----------------|---|---|---|
| 古参ながらの進化 | — | — | — |
| 因縁 遠い銀河から流れもの | — | — | — |
| 前哨戦終わり そして | — | — | — |
| 未来から来た過去の戦士? | — | — | — |
| 呉越同舟 | — | — | — |
| ドギツイ交渉 | — | — | — |
| 新たな火種 | — | — | — |
| 番外編 新たな隣人 | — | — | — |
| 2373 | — | — | — |
| 番外編 未来からやってきた? | — | — | — |
| シンフォギアAXZ編 | — | — | — |
| 悪党とそして伝えたい思い | — | — | — |
| 良し√!? | — | — | — |
| 2734 | — | — | — |
| 2695 | — | — | — |
| 2643 | — | — | — |
| 2601 | — | — | — |
| 2550 | — | — | — |
| 2511 | — | — | — |
| 2477 | — | — | — |
| 2426 | — | — | — |
| 2337 | — | — | — |
| 2312 | — | — | — |

| | | |
|-----------------|---|------|
| 強襲！不敗の建築王 | — | 2779 |
| 相対する長 | — | 2835 |
| 破滅の激情態 | — | 2868 |
| 対立と新たな模索と… | — | 2909 |
| 予期せぬトラブル | — | 2947 |
| 魔王復活 | — | 2996 |
| 戦後処理と話し合い | — | 3054 |
| 両雄並び立つー救世主と魔王ー | — | 3106 |
| 仕事と遊びは表裏一体 | — | 3166 |
| 未来をちよつとカミングアウト？ | — | 3223 |
| 新たな奴には二面性？ | — | 3263 |

| | | |
|-------------------|---|------|
| お前は誰だ？ー俺の中の俺？ー | — | 3300 |
| オペレーション・ハッピーバースデー | — | 3300 |
| !! | — | 3337 |
| 星に願いを | — | 3378 |
| トリニテイ始めました？ | — | 3421 |
| 祝勝会 | — | 3470 |
| 番外編 もしもフラグちゃん達が逢魔 | — | 3470 |
| に来たら | — | 3518 |
| デート・ア・ライブ編 | — | 3518 |
| デート・ア・ライブ編 前奏曲 | — | 3518 |
| に行く前の下準備 | — | 3558 |
| 一周年記念短編 変身IF | — | 3558 |
| ファール | — | 3558 |

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-----------|------|-----------------|------|-------------------------|------|-------------------------|------|------------------|------|-----------|-----|-------------------|------|-----------|-----------------------|----------|------|-----------|------|---------|------|
| 狂三キラー前編 | 3829 | 閑話 人の振り見て我が振り直せ | 3784 | 二亜 I R R E G U L A R 後編 | 3735 | 二亜 I R R E G U L A R 前編 | 3681 | 四糸乃パペット | 1364 | 十香アットエンド? | 483 | 十香アットメント…その前に | 3630 | 3597 | S T A R T ! 異世界からの来訪者 | 3574 | シオン | | | | |
| 3860 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 七罪ウォッチー序章 | 422 | 八舞テンペストー終 | 941 | 八舞テンペストー目覚め | 110 | ケーン!! | 4080 | 八舞テンペストー恋はいつでもハリ | 4046 | 慰安旅行 | | 八舞テンペストー前奏曲 逢魔 夏の | 4003 | 鳶一ミーティング! | 3396 | 五河シスター後編 | 5392 | 五河シスター 前編 | 2838 | 狂三キラー後編 | 3899 |

| | | |
|--------------------|---|----------|
| 後編 終息と裏で動く？ | — | 47984774 |
| 祝勝会!! | — | 47984774 |
| 六喰プラネット 一幕 懐かしき怨敵 | — | 47984774 |
| 短編 ハイパーバトル風？ | — | 48614831 |
| 六喰プラネット二幕 かーなーり強い | — | 48614831 |
| 奴等! | — | 4882 |
| 六喰プラネット三幕! 未来を変える為 | — | 4882 |
| ? | — | 4924 |
| 六喰プラネット四幕 特異点 参上!? | — | 4924 |
| 逢魔王国 設定 | — | 50014968 |
| 六喰プラネット五幕 感動は電車の中 | — | 50014968 |

| | | |
|-------------------|---|------|
| から | — | 5008 |
| 六喰プラネット六幕 別格なあいつが | — | 5008 |
| 現れた？ | — | 5049 |
| 六喰プラネット七幕 切り札は… | — | 5049 |
| 5094 | — | 5094 |
| 六喰プラネット八幕 切られた切り札 | — | 5094 |
| 六喰プラネットFINAL 時の電車 | — | 5146 |
| を超えて | — | 5194 |
| 鳶一エンジェル編 序章 LOST | — | 5194 |
| MEMORY | — | 5244 |
| 目覚めよ! その魂! 前編 | — | 5296 |
| 目覚めよ! その魂! 後編!! | — | 5344 |

| | | |
|----------------|--------|----------|
| 重なる疾風 | 前編 | 54385389 |
| 過去へ向かって | 後編 | 54385389 |
| 過去へ向かって | 時を喰らい牙 | 54385389 |
| と原初の精霊と雷光と? | | 54385389 |
| 鳶一デビル編 | | 54385389 |
| 原初の竜と新たな切り札 | | 54385389 |
| 15の影と原初の竜 | | 54385389 |
| 番外 ハルトin沢芽市!! | | 54385389 |
| 二亜 and 美九編 | プロローグ | 54385389 |
| 5742 | | 54385389 |
| 1話 予想外の依頼 | | 5800 |
| 2話 ライブ開始とローレライ | 目覚 | 5800 |
| めるは太陽と月 | | 5845 |

| | | |
|--------------------|----|----------|
| 3話 星と惑星 集うもの達 | | 59455895 |
| 4話 怒り任せの私刑人 | | 59455895 |
| 5話 本と聖剣と精霊と | 前編 | 59455895 |
| 6010 | | 59455895 |
| 中編 | | 59455895 |
| 後編 1 | | 59455895 |
| 後編 2 | | 59455895 |
| 200話 記念短編 黒狐√ | 天与 | 59455895 |
| の暴君 | | 59455895 |
| 大宴会 | | 59455895 |
| 万由里ジャッジメント 1話 | | 59455895 |
| 新年短編+万由里ジャッジメント 2話 | | 59455895 |
| 6428 | | 59455895 |

帝都へ殴り込み 後編!!

敵か味方か閃光の勇者!

強襲 首狩兔!! 前編

861185348493

今更ながらのキャラ設定

常葉ハルト

設定

種族 人間↓怪人王（モンスロード）

外見年齢 10台後半↓20台前半

身長 178センチ↓180センチ

体重 67キロ↓69キロ

一人称 俺、俺達

イメージソング（敬称略）

無印く転スラ編序盤 怪物（YOASOBI）

転スラ編魔王化くデートアライブ編 BLACK MEMORY（THE ORA

L CIGARETTE）

ライブスIFコラボ時 live Devil（DaiiCE feat. 木村昴）

ありふれ編く REA L i Z E (L I S A)

称号 番外(エクストラ)、災厄の魔王、怪人王

衣装

飛流の王様 v e r 衣装 o r ストリウスの衣装 o r 文字 T

概要

仮面ライダー好きな普通の青年だったが突如アナザーデイケイドの手で招かれた狭間の世界から脱出する為に彼等と元の世界への帰還とそれまでの力の貸与を条件に契約し脱出、帰るまでに様々な世界を旅する事になり様々なものが集う旗印にもなっているが、ある未来で最低災厄の魔王として君臨しているらしい

人物像

普段はマイペースかつ我儘で横柄で他人に対しての共感性が低く無関心でいる事も多いが琴線に触れるものには人一倍優しく協力的

これでもだいたい矯正された方であり特撮ヒーローに出会う前はハルカやトーマが主導したイジメ行為により全てに対して無関心で気弱で性格になり相手の気持ちを中心に考えないと正に I S 原作軸の束レベルの人間嫌いの子供であったが仮面ライダー視聽

後は他人に対して理解を示すようになるが現状でもその名残があるが国家元首となつたのもあり自省や改善をしているが独断専行や自身の楽しみを優先するきらいがあり周りを困らせることもある

ライダー達の影響からか自分でも可能な範囲で助けられるものは助けたりするが戦闘は最終手段という姿勢だったがアナザーライダーと年単位で共にいる弊害か強者との戦闘が多い事もあり以前よりも暴力への抵抗感が薄れており実力行使に走りやすくなっている

アナザーライダー達から教わった技術もあり多芸で器用、得意分野は料理関連と家庭的で仲間に料理を振る舞う事も多い反面、余計な知恵や技術も習得していたりする

・王として

当人の独断専行気質もあつてか最初は上下関係のような部分を苦手としていた（ウオズ達の魔王様や軍団呼びは渾名、友達グループの延長のようなものと割り切った）が成り行きで王となつてからは上に立つ責任感が芽生え

住む者達が楽しく暮らし差別や飢えがない豊かで優しい国

を国是に動く当然政治面では素人なので実務面では有能な補佐役が必要不可欠だが必要と判断すれば即座に取り入れる柔軟性や合理性また現場主義のフットワークの軽さ、運営に当たって人材の重要性を誰よりも理解しておりライダー世界におけるフェードアウトした存在や技術に目をつけ己の世界に引き入れるなどして勢力を拡大している

目標はテンペストと盟主リムルに王として並々ならぬ尊敬の念を抱いている

だが一方で対人交渉能力は低く、基本的には自分や仲間の武力や情報を背景に脅すといった威圧的な交渉が主で誰が言ったか棍棒外交が得意である為かまともな交渉は苦手

差別や偏見は経験から徹底的に毛嫌いしており、シンフォギア世界での魔女狩りを目撃してからその加害者を公衆の面前で殺害したり脅しとして山や建物を吹き飛ばすなど過激な方法でわからせることもある

暴力一辺倒ではなくルミナス教の宣教師にも国としての指標などを熟考して動く所もある（魔物死すべしという考えが生まれると多民族共生国家の根幹が揺らぐ為）

料理スキルはトリコ世界で学んだ事と再来のスキルから相性が良く1人で数千人の料理を朝昼晩おやつを賄う程であり、ハルトの料理目当てに仲間になろうとするものもいる程であり、彼がいなくてもだけで国の炊事が回らないと言われる事もある

・異性関係

前の世界では趣味に生きていたので色恋沙汰は疎く本人も無関心（そもそもハルカ達の所為で普通の色恋など出来る訳もなかった）ねあつたが年相応には興味はある、またキャロルや千冬達の好意も本人の容姿や出会った年齢等もあり兄に懐く妹や親戚のそれと認識していた為、全く自覚してなかった（同世代でかつ異性という意味で最初に意識したのは錫音）あかねという幼馴染もいるが彼女の思いに気づいたのは錫音やキャロル達の気持ちに気づいてからだった

その為、キャロルに振られた（実際はハルトが自責に駆られない為の配慮、後に復縁する）際はショックでアナザーライダーの暴走フォームが覚醒する程のショックを受けたが大事な人の為ならば相手が世界や誰であろうと戦うなど熱い面を見せる

未来の自分の嫁自慢により彼女達の好意を察すると意識するようになるが自分の気持ちよりも彼女達の目的や気持ちを優先する余り旅に同行して欲しいと面と言えない

でいるなど奥手な一面の所為でキャロルがシンフォギアGXの魔法少女事変の遠因となった

・戦闘スタイル

根っからのライダーオタクの為、知識面から来る情報アドバンテージを使う為、対ライダー戦に置いては一部例外もあるが滅法強い（アナザールライダー達のライダーメタ能力もあるが）

現地勢力との戦いでも能力の多彩さからの初見殺しを有効的に活用している

また怪人達の技や能力を体得しており戦闘の幅も広がっているが逆説的に力押しで行く傾向が強いなど弊害もある

特殊能力

アナザールライダーの精神汚染無効化？

オーマジオウが言及したハルトのみ持つ特異体質、詳細は不明だがアナザールライダー固有の精神汚染が全く効かない所か催眠、洗脳など精神に干渉する異能、魔法、技術、投薬などが全く作用しない

遺伝しているのか不明だが実妹のハルカも兄程ではないが耐性を有しているなど謎もある

追加 変身

ブラッドスタークや魔進チエイサーなど仮面ライダーに該当しない戦士への変身を可能にした 専用アイテムや怪人前提のシステムがある事を求められるが変身そのものは可能 しかし一部は見た目だけの紛い物なので別の力で補強する必要がある

あらゆる時間攻撃への絶対耐性

時の王の加護とも言える力で時間、停止や加速などの影響を全く受けない

怪人生成

彼が魔王化に伴い獲得したスキルでカリキュブデイスアルターブック作成が影響している

ハルトが知識として把握している怪人なら忠実に再現する、しかし本能や種族レベルの価値観までは変えられないので生成する怪人は良くも悪くも理知的な幹部職が多い

9 今更ながらのキャラ設定

未来

老ハルト（仮称）

テーマソング 境界線（amazarashi）ありふれ編 勇者（YOASOBI）
ある未来においてアナザーオーマジオウとなった常葉ハルト、未来世界において最低
災厄の魔王と呼ばれ行く世界で災禍を振りまく

ネオタイムジャツカーの構成員であるスズネがいた世界では彼女の両親を奪い本編
で数多の禍根を産む一方で過去に対立したオーマジオウと対等な友人関係を築いたり
妻？と旅行に行くなど愛妻家でもあるなど敵味方の認識が0か100しかないなど身
内と他人の扱いが極端に差が出る

また部下の扱いも割とぞんざいでありジョウゲン達が本編ハルトを見て別人と疑っ
た程

だがテンペストとの友好関係は続けており老いた今でもリムルの元へ向かい遊んだ
りしている。この√の老ハルトは覚醒魔王になっていない人間

魔王になった過程を知らない若ハルトからは「家族との再会という目的を忘れて支配、権力欲に取り憑かれた自分」として毛嫌いしているが未来から目線で忠告や部下（ウオズやジョウゲン達）の派遣、ガジェットの提供をしたりと様々な老婆心を見せているなど過去の自分に対しては複雑でもあるが取り敢えず部下の待遇改善の為 顔面に拳を叩き込まれる

何かの目的の為に歴史乖離を望んでいるようで…

人物像

若い自分には孫を可愛がる祖父のように接しているが未来ではウオズ、ジョウゲン、カゲンに対して冷たく高圧的に接しているなど一見してパワハラ上司の節があるが一定の信頼を置いているが未来の嫁達には全く頭が上がない模様

だが過去の自分が良い影響を与えたのか本編軸の彼は性格が丸くなっていながらも肝心な場面でウツカリしたりと内面部分は過去の自分と変わっておらず力押しに走りやすい

プロローグ

―玉座に座す 偽りの王―

世の中 始まりがあれば終わりがあ

ここは現代ではあり得ないだろう何も無い荒野：否 そこには仮面の戦士と異形の戦士を模した銅像が立っている、そこ目掛けて突撃してくる戦車、戦闘機と言った現代兵器から歩兵、そしてタイムマジン型ロボ

そして 様々な種族の連合軍

迎え撃つのは1人 荘厳であるが何処かハリボテ感のある姿をした異形が玉座に座している

「愚かな、我は真の王にあらず影の王なり」

ただ一言呟くと その異形は手を前に突き出すとエネルギー球が放たれると戦車が
1両破壊された

それを合図に軍団が突撃を開始した

「行けー!」「突っ込めー!」

始まりとは終わりへ向かう事だ

「魔王を倒すんだ!」

だから俺は終わりが嫌いだ終わるのも終わらせるのも先がないと分かるから

「貴様等に我は倒せん…我を倒せるのは真の英雄だ、その涙を仮面に隠し自由や平和の
為に戦う戦士…もしくは遥か離れた星から来た光の巨人や絆をつむぐ戦隊のみ…貴様
等程度では引き立て役にすらなれん」

己に宿る唯一の望みを呟くと、ある歩兵が大声で言っ
た
てはならない事を言ってしまった

「何言つてんだ！オーマジオウ！！」

「貴様……我をあの王の名で呼ぶな！恐れ多いだろうが！！」

異形は激情に駆られるまま エネルギー波動を展開すると周りにいた軍隊全てが消え
えると静寂が支配した

「うむ ウオズ」

「お呼びでしょうか、我が魔王」

何処からともなく現れた男を背中越しに見やると異形の王は指示を出した

「貴様に頼みたい事がある」

「何なりと」

「—————」

「我が魔王の仰せのままに」

大事な人達と馬鹿騒ぎする毎日が…あの時が続けば良い…時計の針が進まない事を願う

「—————」

2019年 現代日本の一軒家にて

「あーあ、ジオウ終わったな」

1人呟きながら、スマホで動画を見ている青年がいた背格好や容姿も取り立てて普通だが、何処か気怠げな目はやる気や覇気を感じさせていない。

男、常葉ハルトは仮面ライダージオウの最終回を見ていたのだが、それも終わり

「けど、ゼロワン楽しみだな…over quartzerも早く見たいや」

平成の終わりと令和の始まりを期待していた

のだが

「え？ええええ！」

突然現れた飲み込んだオーロラカーテンが、その平穏な日々を変えたのであった。

???

「……………ん？」

オーロラカーテンを超えた先でハルトは起き上がると周りを見渡す、明らかに見覚えのない世界だ。何も無いなさに過ぎるぜ！

「あれ？…此処どこ？」

そう言えば俺、いきなりオーロラカーテンで飛ばされて…つまりこれは…あの人の力か！

「ディケイドオオオ!!ありがとうございますー！」

鳴滝さん並みにディケイドへの気持ちを声にして上げてみる、すると

「呼んだか？」

第一村人発見だ！司さん助けて下さい！いや待て 司さんより声低いぞ…それに

…あの子供が泣きそうなビジュアルをしたマゼンタ悪魔は！

「まさか…：デイケイドですか!!」

「ほお、俺の事を知っていると驚いた」

「お前かい!!!」

俺がさっきまで見てた仮面ライダージオウの…そして平成ライダーという物語の最後を飾ったラスボス デイケイド、否!

その名はアナザーデイケイド

「な、何で…：スウォルツ氏が此処に…：確かオーマジオウにボコボコにされて妹に背中から刺された筈!!」

「嫌な記憶を思い出させるな…：しかし…：成る程な貴様の事だが大体分かったぞ」

門矢士の台詞を取るなよ

「申し訳ありません、説明お願いします」

「良からう、まず俺はアナザーデイケイド…：スウォルツではない、貴様はオーロラカーテンを潜りこの世界にやって来たのだ」

「スウォルツ氏でない…：ふむ」

つまりアナザーライダーが変身者無しで自我を持つてるって感じか…：え? 自我ある

のですか？アナザービルドやアナザーアギト（ジオウ）はゾンビみたく暴れましたが？と思うが黙っとこ

「やっぱりアレ、オーロラカーテンだったんだ…んで此処は何処の世界？」

廃墟とかないけど、人はいないな

「慌てるな、久しぶりの会話なのだ少しは楽しませろ」

「久しぶり？」

首を傾げるとアナザーデイケイド は咳払いをして

「まあ、アレだ簡単に言えば貴様は迷い込んでしまったのだ この狭間の世界に」

「何それ？」

「まあアレだ、貴様は時間の流れも景観も何も無い世界に迷い込んでしまったのだ！」

「いや、アナザーデイケイドいる段階で何もないってのはないでしょう俺からすれば十

分刺激的だよ」

「………そうか」

「あははははは!!」

何だろぅ？このアメリカンコメディは？

閑話休題

一通り話したハルトは状況を確認してみる

「で、何も無い世界ってどういう事？」

「まず、この世界は常盤ソウゴ……オーマジオウが世界を作り直した結果、融合し滅びかけた各ライダーの世界は分離し、世界はあるべき形に戻った。それは貴様も知る所だろう」

「ああ…アレか」

最終回で融合してた世界が分かれて元通りになっていた地球を思い出す

「その際にライダーの世界からいらぬ者が閉じ込められた世界が此処だ」

「成る程、つまりゴミ箱の世界か」

「言葉は選べ」

「ごめんって…んで残された者？」

「簡単に言えばアナザーライダーだ…彼等からすれば我々は諸悪の根源、消え去るべき歴史の闇、過去の亡霊なのだからな」

って事はジオウがした世界再編の影響で生まれた世界って訳だ

「端的に言えばアナザーライダー達の牢獄って訳ね」

しかもオーロラカーテンも世界渡航できない位に弱体化してるらしい

「そう言う事だ、戯れにアナザーワールドの世界を見ていたら貴様をオーロラカーテン

に巻き込んだという訳だ」

「お前が犯人かあ！じゃあ元の世界に帰りたいんだが仮面ライダーゼロワンをみたい！」

「それが問題なのだ、この世界は入るのは簡単だが出るのは難しい…仮に出られても貴様の世界に帰れるかは知らない」

「はあ!?じゃあ俺はこの世界でお前と2人きりつて事か！」

「残念だが、2人ではないぞ」

アナザーディケイドが後ろを振り向くと

19人のアナザーライダーと3人のアナザーミライダーが立っていた

「「「「イエエエエイ!!」」」」

何か楽しそうだが

「何だ、このアナザーライダー大戦…つかホラー映画だろ…この光景」

子供涙目所では済まないな

「言っただろう、ここはアナザーライダーの牢獄だと」

「で?8時じゃないけど全員集合して何が出来るのさ」

「そうだ23あるアナザーライダーの力と、その力を束ねる器である貴様がいれば、この監獄から出る事が出来るのだ！」

「『『『おおおお!!』』』」

「は?どゆこと?」

「まず、我々はウオッチから実体化しているが立体映像のようなものだ。なので世界渡航をするには依代となる人間の体が必要でな」

「ふむ」

「簡単に言えば取り憑くようなものだ」

「ん?つまり俺と体を共有するってこと?」

「その通りだ、お前にもメリットがあるぞ」

「メリット?」

「世界渡航してもお前の世界じゃない可能性が高い、万一に備えての自衛の戦力が手に入るし我等は外に出られれば構わないのでな」

「あく確かにそれは頼もしいかも」

「貴様が我々アナザーライダーを束ねる裏の王となり、元の世界に帰る旅に出るのだ」

「俺の人生経験は薄っぺらいからアレだけど、この始まりは突然過ぎるでしょう」

「お前の意見は求めん、貴様等行くぞ!」

「『『『おお!』』』」

「うわ!」

言うなりアナザーライダー達は光初めると1つのウォッチになった、勿論アナザーウォッチ

「これって……」

『この力を使えば貴様はこの監獄から脱出出来る……しかし力を狙いに数多の者が貴様を狙うだろう』

『悪魔達と相乗りする勇氣が貴様にあるかあ!!』

『are you ready?』

いや頭に響くから、いきなり出てこないでアナザーWにアナザービルド 覚悟は良いかって聞いているのか……そんなの

「良いよ、悪魔だろうがアナザーライダーだろうが地獄の果てまで相乗りしてやるよ!」
『契約成立だ、祝え!新たな王の誕生を』

ハルトはアナザーウォッチのスイッチを押すと黒いモヤが彼の体を包むと、20の影が装甲の形成と共に散らばると先程まで会話をしていたアナザーデイケイド になっていた

『デイケイド』

「おお……はあ!」

感動冷めやらぬ中、アナザーデイケイドになった翔吾は手を翳すと新しいオーロラ

カーテンが現れたので、そのオーロラカーテンを潜るのであった。

START MY ENGINE!

ある世界にて

「ふう…脱出くしたー!」

フォーゼの宇宙キター!並みのガッツポーズを取るアナザーデイケイドは直ぐに居直り変身を解除する。

「けど…違うよなあ〜」

元に戻ったハルトの視線の先には自分の世界には無い程、豊かな自然がある
「取り敢えず空飛んでみて周りを見てみようかな?なあ他のアナザーライダーにはどうすればなれるんだ?」

取り敢えず方針を考え、ウオッチに話しかけると

『貴様がイメージすれば、対応のアナザーライダーに変身可能になる』

アナザーデイケイドから返事があつた、成る程、ここう使うのか

「よし、まずは地形の把握だ」

スイッチを押すとハルトの体に黒いモヤが再度包む 彼の体は巨大化した

「クウガ」

平成ライダーの原点 仮面ライダークウガ

そのアナザーライダーとしての姿は巨大クワガタのお化けである

「お、おお……」

自分の姿を見て感動するが背中中の羽で軽く空を飛ぶ

「スゲー………ん？」

自由に空を飛ぶなんて普通の人間には出来ない 空からの綺麗な景色に街の明かり、人がいると安心したのも束の間

「えええええ!!」

以外 それはミサイル!

「この世界の迎撃早すぎませんか!?!自衛隊が有能過ぎる!ガメラでも出るの!?!」
慌てて回避、迎撃して近くの森に姿を隠した

翌日

あの後 何とか人目を忍んで無事 この街にやってきた

しかし日本で良かった、並行世界のこと言う枕詞が付くけど

『謎の巨大クワガタ現る!?!』

捨てられた新聞の見出しを見ると同時にアナザークワガタは使い所を考えないと思

ました。

『作文か?』

取り敢えず

「世界が違うなら、移動しよう」

再びアナザーデイケイドに変身して世界を越えようとしたのだが

『相棒、悪い知らせがある』

「誰が相棒だ……なんか嫌な予感がするんだが」

『暫く、世界を超えられない』

「え?」

アナザーデイケイド曰く、世界を超えるにはエネルギーが必要らしい それを貯めるのに必要な期間があるらしい それはつまり それを貯める

「俺、無一文、戸籍、宿無しだぞ」

ホームレス決定と心で悲嘆していると

『安心しろ、戸籍と宿位は用意している』

「どうやって?」

『裏の王の力を使ったままでよ』

裏の王……つまり

「アナザージオウIIの改変か」

俺の知らない所で歴史改変しやがったな

『まあアイツは暫くおネムだがな』

「暫く使えない訳か…なあアナザーW、お前検索出来る？」

『地球の本棚の事かあ？勿論出来るぜ！』

「助かるねえ、情報は武器になるんだよ、キーワードは当然 仮面ライダー」

『あいよ、ほお安心しな この世界にはライダーはいねえよ お前の見てきた番組もな
いと来た』

「確かか？」

『俺たちみたいな外からの奴が来なきやな』

「そんな…：仮面ライダーがない…」 or z

『ど、どうしたんだよハルト!!』

「ゼロワンとジオウ劇場版を見たかった…」

『え？それだけ？』

「んだよ、悪いか」

『別に…おいハルト…見ろ!』

「あ？」

ウオッチ内のアナザーWに言われるまま、視線を向けると
わー！と逃げ惑う人と化け物の群れが

「……………ええ」

ハルトは思わず天を仰いだ、うん綺麗な青空だ…この空を守った人は元気にやつてるんだらうか？そして現実逃避も限界なので直視する

見えたよ、何か非日常な光景が

「家に帰りたい……………帰る家に愛着のカケラもないけど」

『言ってる場合かよ』

「だよね……………それに傍観するだけじゃ何も掴めない」

どうにか出来るかも知れないのに目を背けて知らないフリは もう嫌だ

(君は客観的で助かるよ、距離の測り方が上手いんだね)

違う

(傍観者だな、お前は舞台上に上がる役も資格もない)

俺は傍観者じゃない！

「なあ、力貸してくれるんだろ？なら一走り付き合つて貰うぞ」

ウオッチに声をかけるとブランクウオッチにアナザーライダーの顔が浮かんだ、さながら事故で廃車になった車のような顔が俺に語りかけた

『良いわよ』

敵つい外見に合わない綺麗な女性の声だけど

「ドライブ」

ハルトは躊躇いなく、スイッチを押したのであった

上下からタイヤ型エネルギーに挟まれると姿が変わった。さながら事故車両な格好はロボットののような印象を与える戦士だ

「ドライブ」

永遠の停滞者 アナザードライブ

アナザードライブは自分の手を何度か振り

本家のポーズを取る

「よーし取り敢えず、あの化け物をぶっ倒す！」

『OK start your mission』

そして俺は平成ライダー屈指の速度で化け物に飛び蹴りを叩き込んだのであった。

「はあ！」

取り敢えず一撃だ、次！つて

「あれ？」

攻撃を喰らった化け物は灰となり消えたのだ

「オルフェノク？けど…」

いや考えてるのは後だ、取り敢えず此方の攻撃が通用するならやる事は一つだ

「こい！アナザートライドロン！」

そう声をかけると、爆音と共に世紀末感満載ドラッグマシンに似た車 アナザートライドロンが現れた

「おお…すげえ…よしタイヤ発射！」

アナザートライドロンは指示に従い燃えるタイヤ、針をつけたタイヤ、手裏剣型エネルギーを帯びたタイヤと多彩なタイヤ攻撃で化け物を灰に変えていく

「あいつら耐久性無いな…」

重加速も使っていないし、まさかタイヤだけで倒せるとか…免許あるけど乗れる？

「取り敢えず、乗ってみようか」

アナザートライドロンに乗ると、シートベルトをつけてエンジンをかける

『!!』

爆音と共に軽くアクセルを踏むと、凄まじい速度で公道を走り抜けた

「いやあああああー！」

予想してなかった速度に悲鳴を上げながらも車体で化物を轢殺して回っている
しかし慣れて無い速度で運転したのでブレーキを踏む

「む、無理！」

アナザートライドロンから降りるとフラフラした足で地面に座るがすぐに立ち上がり周りを見る

「アレ？もう終わり？」

よし、変身を解いて家に帰ろう！そう思ったと同時に

「貴様何者だ！」

現れたのは2人の槍と刀を持った女性だった

何者か、よし

「通りすがったアナザーライダーだ、覚えておけ！」

車と魔法と欲望と

「アナザーライダー？」

首を傾げているあたり本当に存在は認知されていないんだな　まあ仮面ライダーもないから当然か　本物がいないのに偽者がいても分からないから本物になったか……なるほどアナザーライダー誕生での歴史改変したライダーの世界ってこんな感じなんだ

「それより何？そのコスプレ衣装は？今はハロウィンじゃないぞ？」

「これは戦装束だ！」

と青髪の女の子が話す

「なあ、この辺にノイズがいたと思うんだけど知らないか？」

「ん？ノイズ……あの灰になる奴の事か？それなら」

指差す先には灰の山が

「……まさか！」

「倒したってのか……ノイズをシンフォギア無しで！」

「そんなに驚く事？まあいいや後処理は宜しく〜」

専門家がいるなら任せて帰ろうと回れ右をして帰ろうとしたが

「あれ？体が動かない」

よく見れば影に刀が刺さっていたら、どうやら青髪の子が投げたようだ

「何故ノイズを倒せるか知りませんが貴方には我々について来てもらいます」

「やなことった、此処で脅しに屈したとか格好悪いからな！」

体が動かなくても能力は使えるのだ、食らえ

重加速!!

念じると顔が動くなり周囲の人や物の流れが止まった、いや正確にはスローモーション

ンのようにゆっくり動いているのだが

重加速 簡単に言えば周りの動きが限りなく抑制された世界

此処で動けるのはアナザードライブ 俺だけだ

「ふん！」

謎の拘束を解除して、自由になると別のアナザードライダーの力を起動する

「ウィザード」

炎の魔法陣が通過すると姿が変わった

それは砕けた宝石のような外見をシドライバーには骨の手が添えられている まる

で死してなお力に取り憑かれたように

『ウィザード』

絶望に囚われた魔法使い アナザーウィザード

変身と同時にかけられていた重加速は終わるので

「っ、体の自由が効くぞ」

再度取り押さえようとする2人が来る前に、空かさず左手につけた指輪を腰のベルトに翳す

「悪いね、すぐに効かなく成るー」

〔バインド〕

淡々とした音声が流れると魔法陣の鎖が2人を拘束する。そして間髪入れずに

〔テレポート〕

転移魔法を使い撤退した

無策で仕掛けるのはリスクな相手だろうし

背後関係や現状把握が出来てない以上、彼処での戦闘には意味がない

転移した先は、何処かの部屋だった

「……何処だ？」

しかも変身解けてるし

『此処が貴様の家だ、ゆっくりするが良い』

「ありがとう」

『気になる当然の対価だ』

アナザーデイケイド との会話は終わると周りを見渡してみる、部屋には家具が最低限って所か 取り敢えず着替えて、ジャージ姿になると ベットに飛び込んだ

???

「ん?」

ハルトが目を覚ましてみると何も無い空間だった

「何これ」

「此処は夢の中だ」

そう言われて現れたのは アナザライダー達だ

「ま、まさか…夢で修行するの!」

そんな漫画みたいな展開を体験出来るなんて!

「ああ、厳しい訓練になるだろ」「やるに決まってんだろ! 何から始めるんだ!」いや最後

まで言わせてくれ」

「やる気で結構、じゃあ最初は俺から行くぜ」

「俺も手伝おう力の使い方を教えてやる」

名乗り出たのはアナザー響鬼とアナザーシノビの2人だ

「宜しくお願いします!!」

夢の修行が始まったのだ

数時間後に起床したハルトは全身に感じた痛みで震えていた

「お、おお……まさか夢での修行で筋肉痛になるなんて……」

しかし的確な指導だったな……流石はアナザーとは言え響鬼さんのトレーニングだ、アナザーシノビからは体術や忍術の訓練と来た

「まあ期待には応えないとな」

ハルトは右手をギュツと強く握りしめる

「あいたたた……」

だが暫くは筋肉痛の痛みで転がり回るのであった。それから数日は現実と夢の二段構えの訓練で体作りをしていった

現実では実際の体力や筋力をつける為に鍛え

夢ではアナザーライダーの皆に扱かれている

いや流石だなと思うよ、特にアナザー響鬼やアナザーシノビさんは教え方上手いし、アナザードライブはオリジナルが警察官だから護身術とか教えてくれる。クウガさんに2000の技を、アギトさんからは料理を教わった…カブトさんもだけど…何であるか目で料理スキル高いの？お陰で人並み以上に料理が作れます、ありがとう

そして改めて情報収集を試みた

アナザーWの地球の本棚を筆頭に自分でも図書館によって調べた結果分かった
ノイズ

人間のみを襲う災厄 通常兵器では傷一つもつけられず、触れると炭素になる

そして地球の本棚での検索結果だ

シンフォギア

対ノイズ兵器

聖遺物の破片を改良した戦装束 使い手の歌や思いでパワーアップするらしい

確認されているだけで

絶刀 天羽々斬 撃槍 ガングニール

魔弓 イチイバル 歪鏡 神獣鏡

銀腕 アガートラム

獄鎌 イガリマ 塵鋸 シュルシャガナ

と情報を見たところで細かい話は分からないので自分なりに噛み砕く

「つまり…歌いながら攻撃する人がビルドのハザードレベルに近い原理で強化されるって事？」

『そうだな、んでお前さんと話したのはツヴァイウイングって人気アイドルだ』

「今のご時世、アイドルも槍や刀で語る時代か…：よし武闘派アイドルの二つ名を送ろう」

思いに答えて強くなるなど笑えない話だ、御都合主義で逆転など笑えない…：俺なんか見た目完全に悪役だし、そしてシンフォギア奏者を支援する組織の影がちらほらとあるらしい

『どうする？』

アナザーデイケイド の言葉は方針や身の振りを聞いているのだろう

「関係ないよ、ノイズは倒すが連中とは馴れ合わない 自分の生活範囲位なら1人で十分だし別世界に行くなら関わる必要ないでしょ」

『ほお』

「それに信用出来ない連中に背中預ける程ら怖い事は無いよ、戦うなら身軽な方が良い…」

『孤独のヒーローごっこか？英雄にでもなる気か？』

辛辣だな、おい

「別に英雄なんてなる気はねえし、なろうとしたらアウトだよ…それにさ、孤独で結構、人間死ぬときは1人だ…それに俺みたいな人間の最期を看取りたいなんて変人はいないだろうさ」

ウオッチから視線を逸らして起き上がると気晴らしに外に散歩する事にした

そしてフラーリとよった公園のベンチに腰掛け自販機から買ったコーヒーを飲んでポーツとしていて

「はあ…」

世界渡航のエネルギーは足りないらしい、アナザーディケイドは能力であるダークライダーや怪人がいる、『仮面ライダーが敗北した世界』或いは『自分の望みが叶う世界』通称アナザーワールドにも繋がられない為に戦力ダウン

アナザージオウⅡも歴史改變能力を無くし アナザージオウまで弱体化している

いやアナザージオウでも十分強いけどね、何なら1番好きなのはアナザーライダーでもある。変身したいが何故か今じゃない気がするんだよなあ…何でだ？

自分の手札を冷静に分析してみると地球の本棚からの情報を含めた結論

ノイズ相手に過剰だと思うが念入りに越した事は無いが

人ではないのだから殺しても文句はないんだ

実験台としての的になってもらおうかな

「次は誰にしようかなあ〜」

ブランク状態のウオッチを見てハルトは嗜虐的な笑みを浮かべたのであった。

それと同時に開幕と言わんばかりに街に大音量のサイレンは鳴り響くのであった

「はは……きーめた、君にしよう」

ハルトは手に持つ空き缶を公園をゴミ箱に投げ入れると、周りに人がいないのを確認して ウオッチのスイッチを押した。

『ブハハハハ！良からうハルトよ、王の恵みを受け取れエ!!』

ーいや、うるさいな神ー

黒いモヤが体を包むと姿が変わる

頭、上半身、下半身に刻まれた動物の特徴が過剰なまでに生物的な外見を持つアナ

ザーライダー

タカ、トラ、バッタの力を持つ欲望の王

『オーズ』

アナザーオーズに

「私が王だあああああ！」

取り敢えず神へのリスペクトはしておこうか！

欲望、落武者、宇宙来たー！

街中で現れたノイズを蹴散らしているのは、シンフォギア 奏者ではない 歪な怪人

「ブハハハハ！王の力を思い知れエ！」

某平成ライダーの神へのリスペクトのまま暴れている アナザーオーズこと常葉ハルトはノイズをトラクローで切り裂きながらノイズを炭素に戻すが…

「はあ……いや何であのテンションで戦えるんだろ？」

そろそろあのテンションの維持するのに疲れが出てきた…常時ハイテンションなのは辛いものがある

『それは私が王だからダア!!』

本当にお前ら、元の変身者じゃないんだよな！と思う位に力として現れたアナザーライダーの人格は似ているのだ元の変身者に

だがアナザーオーズは、メダルから屑ヤミーを生み出せる筈…あとセルメダルで体が出来てる以上 迂闊なダメージは避けたい…調べたら錬金術師がいるらしいし結社の

なものも作つてるとか、オリジナルである仮面ライダーオーズは古代の錬金術から生まれているので解析、複製されると厄介だし何より情報は隠しておいて損はない

しかし数が多いな屑ヤミー行け!と兵隊を作りノイズと戦わせて高みの見物を決め込んだら

「ん?」

見上げたら刃の雨が降り注いできた

「のわあ!」

攻撃に巻き込まれて、爆破と火柱が上がった

「気のせいかな?何か巻き込んだような」

「いや翼、巻き込んだぞ…どうすんだコレ…」

翼の技 千ノ落涙による面攻撃にアナザーオーズを巻き込んだ為 相棒の天羽奏は心配そうな顔をしている

そんな火の中から現れたのはオーズとは異なる白いアナザーライダーだ

歪なロケット型頭部に蝙蝠の羽飾り

絆や友情の否定者

『フォーゼ』

アナザーフォーゼへと

「宇宙来たー!!」

「へ?」「宇宙?」

お馴染みのポーズを取るが今の俺に宇宙が来てるか疑問を抱くものの、その視線を上げた先には以前調べたシンフォギア 奏者2人がいる…今回の俺は何もしていないのに攻撃してくるなんて許さん!!と怒り爆発し

「お返しだ!!」

「ロケット オン」

右手に帯びたロケット型エネルギーを装着すると同時に体を捻りながら右手を突き出す

「アナザーロケットパンチ!」

そのロケット型エネルギーは奏者がいた建物目掛けて発射した

「なっ!」

慌てて避けた2人は着地すると、アナザーフォーゼを見て

「お前……あの時の車とか魔法使いみたいな奴の知り合いか?」

「知ってる、俺だけど？」

「なら話は早い、私達と来てもらえないか？」

「ふーん、その答えは……これだ！」

アナザーフォーゼは腰のスイッチを押すと足元にミサイルポットとガトリング砲が現れた

「ランチャー オン」

「ガトリング オン」

発射した、まあ左右に散らばりながら避けられたが

「何故、攻撃を！」

「いきなり拘束とか攻撃して来る奴の話なんて信用出来るかボケ！ 和平の使者は武器を持たんわ！」

ランチャーとガトリングを撃ち終わると二つのモジュールを消してベルトにある新しいスイッチを押すと両手には鎖付き鉄球と盾型のエネルギーが現れる

「チェーンアレイ、シールド オン」

今度は両手を武装したアナザーフォーゼはチェーンアレイを振り回した

「そりゃあああ！ 滅殺!!」

何故だろうか、この手の武器は叫ばずには居られなくなる 鉄球はオレンジ髪の奏者

天羽奏に向かうが槍　ガングニールに受け止められる

「ぐっ……なんて力だよ！」

そのまま壁際まで追い込むが

「ふん！」

背後から刀の奏者　風鳴翼が切り裂く為に刀を振り下ろすもシールドで受け止める
と

「ノイズを倒せる力がありながら、何故多くの人のために使わない！」

「何それ？知らない人間なんかの為にこの力を使う訳ないだろうがあ！」

本当、俺にはヒーローなんて似合わないね

「ランチャー　オン」

「っ！」

「吹っ飛べ！」

「うわあ！」

火力は抑えた、ランチャーモジュールの攻撃で翼を壁に減り込ませる

「翼！お前！」

「何でテメエ等に指図されなきゃならねえんだ？俺の運命は俺が決める、じゃあな」

「スモーク　オン」

そして足から煙が出る、翼が煙を払った先には誰もいなかった

高台に逃げ、変身を解除したハルトは柵に手をかける

「しかし面倒事になったねえ」

確か：アレ絡みつて国が絡んでるんだよね？まあ

「お前等を手放す位なら死んだ方がマシだしな」

このアナザーウオッチを無くすのは俺にとつては元の世界に戻る為には絶対ダメな事だ、それに

「友達や先生を連中の研究材料にさせるかよ」

それにアナザーとは言えビルドの力を悪用なんてさせようものなら

あの「愛と平和の為に戦う天才物理学者」に全力で土下座をしなければならぬ…

『ハルト…』

何か感動してるようだが

「何より俺の人生を変えた責任を取れ」

『ツンデレ』 x 2 3

「よーし、お前等そんなに叩き割られたいか？」

軽口で答えるとハルトは逆方向に向かい歩き始めた その時

「キャー……！」

と絹を割いたような悲鳴が

「っ！」

慌てて走り、声のする方向に向かうと

「あ……ああ……」

女性の周りにノイズがいた、あの人避難に遅れたのか？

ちい！

ハルトはウオツチを起動させ、姿を変える

その姿は さながら落武者、腐った果実のような鎧と同じように腐ったオレンジの刃のような大剣を担ぐ戦士

落剥した鎧武者

『鎧武』

アナザー鎧武へと

「はっ！」

すかさず包囲された女性を守るように立つと

「伏せろー!」

その声に従い伏せたのを確認し

「セイヤーー!」

薙ぎ払うように大剣を振り、ノイズを始末し

無言で去る、だつてよ?

イメージしてみな

「大丈「いやあああ!化け物ー!」」

こうなるだろ?絶対(確信)

アナザーライダーつて皆怖いもん、アナザーアギト以外

『そうか?』

ーアナザーアギト、カッコいいと思うよー

『そうか…やったぜ』

ーただ増殖は頂けないな、ガタキリバやデンジャラスゾンビとキャラ被るからー

『一言余計なんだよ、聞こえてるぞ』

『クソ!やつぱりアナザーアギトはアギト本編出てるからか!これだからアナザー名義
なのにオリジナルがある奴は!許さん!』

メタ発言はアナザーW辞めろ…てか

『何?』

バカじゃねえの、誰が好き好んで賞賛やら名声やら求めんのさ?

―贖罪も兼ねてるからな―

『成る程 俺たちが悪事した分、人助けか? 殊勝な心掛けだな』

―黙れ主犯…まあ嬉しいんだよ、ずっと俺は何者にもなれなかつたからな 今の俺は
通りすがりのアナザーライダーだからな―

肩に大剣を担いで帰ろうとした時

「あ、ありがとう! 貴方の名前は!」

その声に自分に言い聞かせる、或いは宣言するように

「通りすがりのアナザーライダーだ、覚えておけ」

それだけ言って、クラックを開きヘルヘイムの森経由の我が家に帰宅した

その日から ネットで囁かれる都市伝説があつた

ノイズが現れると ノイズを倒す化け物

アナザーライダーが現れると

預言者と時の王

ハルトが暮らす街 そのマンシヨンの屋上

「そろそろ私の出番かな、さあ貴方はどうしますか？我が魔王」

灰色の服に身を包んだ男が眩き、風が吹くと

男の姿は消えていた。

そしてハルトは

「どうしてこうなった」

朝食を作ったはずがレストランのモーニングセットみたいになっている、しかし変だ
以前の俺ならゆで卵に塩だったのに 何故こんなに……いや原因わかるんだけど

「……まで特訓効果出るのか？」

アナザーアギト、アナザーカブトだ

オリジナルは平成ライダーで屈指の料理人だ

アナザーは怪人とライダーが合体したような存在であるが、まさか変身者のスキル
ま
で持ってるとは……てか

「アナザーカブトの場合 契約者も料理上手だよな？」

あのパーフェクトハーモニーを掲げていた頃の矢車さんは料理勝負で天道に勝ち、豆腐を勝ち取った程の実力者であるからな

あの当時、蜂に見捨てられ、後に地獄兄弟を結成するとは思わなかったのは良い思い出だ

これも契約のメリットかね？しかし、サンドイッチばかりだな見事に
「折角だから外で食べようか」

ウィザードのコネクトを使えば家の物もすぐに手元に来るから便利なんだよね、手ぶらで移動とか最高

まあ弁当の準備はするんだけどね、俺の思い描くパーフェクトハーモニーの為に
『いいか末っ子、この世にはパーフェクトもハーモニーもないんだよ』

アナザーカブトは、カップ麺でも食べてろ…俺だと何だろう？兄 塩、弟 味噌だから

末っ子 豚骨くらいかな…うーん…

そして来たのは前回 アナザー鎧武で人助けをした丘だ 街が一望出来る場所に
シート良し！コーヒー良し！サンドイッチ良し！では

「いただきます」

そして一口目を頬張る……っ！

「美味っ！すご！これ本当に俺が作ったの！」

『ああ、しかしまだまだ料理の道は険しいぞ？』

『そうだね、僕の技も教えるから頑張ろう！』

はい！アナザーカブト、アギト先生！

「さて、紅茶かコーヒードちらを飲むかそれが問題だ」

「では私はコーヒーを頂こうか我が魔王」

その手に『逢魔降臨暦 裏伝』と言う本を持った男 ウオズとの出会いの日でもあった。

—————

「へ？ウオズ？」

あの『祝え！』でお馴染みの預言者が何故此処に、しかも今何てった？

「誰よ、貴方の知り合い？」

「んや、けど俺の知ってるウオズとは…取り敢えずコーヒーね待ってて、砂糖とミルクは？」

「三つで…感謝するよ、我が魔王」

『おい、何普通にもてなしてんだ！こいつは常盤ソウゴの従者だろう!!』

え？あ…そっか、けど食べたいんなら食べさせてあげようよ食事に敵味方の貴賤なし

！

「では改めて…：我が名はウオズ、我が魔王の忠実な臣下にして正しき未来へと導くものだ」

「魔王？俺が？いや君の王様は別に…：あ…まさかアナザージオウの事？」

確かにジオウ、ゲイツの元に違う未来から来たウオズが現れたのはある

それにオーマの日より前に白ウオズが言っていた

ジオウⅡがゲイツを倒すか

ゲイツリバイブがジオウⅡを倒すか？

そして

アナザージオウが2人を倒すか…と

つまり、このウオズは俺がアナザーライダーの力を得た事で何かしらの未来から来た

ウオズとなる

「はい、この本によれば普通の青年 常葉ハルト…貴方はアナザーオーマジオウになる未来が待っている…」

「え？何？もつかい言って」

「アナザーオーマジオウになる未来が待っている」

アナザーオーマジオウだとお！何だその最強のアナザライダーは！誰が勝てるんだそんなチートの化身みたいな奴に！それになるのか？俺が？

「冗談を」

「冗談ではないよ、我が魔王」

—————

結局、家に帰り料理を振る舞う事にしたので

ウオズからの話を再度聞いて整理してみた

「成る程ねえ、俺がアナザーオーマジオウにねえ…」

『私は知らないぞ、そんなアナザライダーは、いればスウォルツは生み出しているだろう』

アナザーデイケイドが知らない段階で本編や映画に出なかつたアナザライダーか…まあ出たらジオウ終わるしな

「ウオズ、お前の目的は何だ？」

「目的とおっしゃいますと」

「俺をアナザーオーマジオウにしたいのか？」

「いいえ、私は未来の我が魔王から貴方を助ける用に命を受けたのみですので特には」

「そう、じゃあ此処に住むか？」

「よろしいので？」

「1人でこの家は広いんでね」

「是非」

「そつ、じゃあ買い物行くぞ」

「え？」

「は？ウオズ的生活用品買う予定だけど？」

「は……はっ！畏まりました……では参りましょうか我が魔王」

「おう、行くぞウオズ」

シヨツピングモールにて

「我が魔王」

「何、ウオズ？」

ある程度の買いい物も完了し、昼食に購入したハンバーガーを食べてるハルトにウオズは訪ねた

「いえ…その…何故、私を受け入れたのですか？」

「へ？」

ハルトは予想外の言葉に面を喰らう

「我が魔王の性格から見て怪しく見える私の事を放置すると思ったので」

「いや怪しい自覚あるんかい！…まあ…自分のあり得る未来に対しての爆弾発言する奴を無視する奴そういないでしょ」

「それに？」

「ウオズは味方だと思っただよ、何でだろ…直感って奴？それよりもウオズ！未来の俺って何でアナザーオーマジオウになったのさ？」

「それは我が魔王から未来に関しての情報は口止めされているので詳しくは言えませんが…以前、当時を振り返った際に『よく生きてたな…俺』とおっしゃってましたね」

「ありがとう、それだけで未来までロクな目に合わないってのはよく分かった」
『フハハハ！残念だったなハルト！』

元迎れば誰のせいだ！主犯格！

「それにしてもこれからどうするかなあ」

「この書物によれば我が魔王が次に向かう世界は」

巻物をシュルシュルと解いて読もうとしていたので

「お！元の世界に帰れるの？」

「おっと……この先は、まだ未来の出来事でしたね」

「焦らすなよ！てか読ませてよ逢魔降臨歴！」

「ダメです！これだけは絶対に!!」

話していると突然 耳をつんざくノイズ襲来警報 慌てて逃げ惑う人を尻目にハン

バーガーを食べ終わるとハルトは手を合わせ

「はあ……ごちそうさま」

そう言うなり体をほぐすと

「悪いウオズ、少し食後の運動に行ってくる」

『ドライブ』

「はい、お気をつけて」

「はあー！」

ハルトはアナザードライブに変身するなり、アナザートライドロンでノイズを跳ね飛ばして回る。アナザートライドロンの走った先はノイズの炭素しか残っていない。「ふう、やっぱり爆速の轢逃げ攻撃ヤバイね…さて後の残りは？」

と見ると大量に出るはノイズの群、うわあ

「マジでか…」

『俺を使いな末っ子、雑音に地獄の力を見せてやる』

よし、任せた…後、誰が末っ子だ！

そう心の中で答えるとウォッチを起動し直す

『CAST OFF』

その電子音の後、アナザードライブの体が膨張していき圧力に耐えきれず装甲がパージされ 現れたのは

有機的な昆虫 それもカブトムシとその蛹が混ざったような歪な姿をしたアナザードライダーだ

天の道から落ち 地獄に進んだ太陽

『カブト』

アナザーカブトになった

「アナザーカブトの誕生を祝いたいが今日のメインの為にここは耐えなければならぬ
い……」

「ウオズ？」

「さあ我が魔王の勇姿を目に焼き付けさせて貰います」

「ああ、光速のヴィジョンを見逃すなよ」

『clock up』

アナザーカブトは腰に手を当てると、そのまま走り出すが、ノイズも監視カメラもそれ
してウオズさえも視認する事が出来ない

それは誰もついて来れない世界

仮面ライダーカブトが平成ライダー最速と呼ばれる所以の能力 クロックアップ

発動中にノイズを殴り蹴りを連続し最後は、やはりアレであろうとベルトを二回押し
掛け声をあげる

「アナザーキック」

『rider kick』

本家よりも低い音声だが物質を消滅させるタキオン粒子のエネルギーが腰から頭、足へと移動していく

「おらあー！」

エネルギーを込めた前蹴りを放ち一体のノイズを蹴り飛ばす 蹴りの勢いに飛ばされたノイズは他のノイズを巻き込み爆裂霧散した

「付いてこれたならな」

天の道を行く男と同じように右手を掲げるポーズを決める

決まった…と思っただが

「見つけたぞ！アナザーライダー！」

出たよ、武闘派アイドル（ツヴァイウィング）

「またお前らか…」

「今日こそは同行してもらおうぞ」

「答えはNo、お前等は信用出来ない…それにだ」

「何だ？」

「何回も同じ問答して嫌だっるのが伝わらないのかねえ…」

「ならば力付くでも！」

「またそれか…仕方ない食後の運動にしては激しくなりそうだな」

『鎧武』

アナザー鎧武に変身し直し大剣を構える

と臨戦態勢の緊張状態の中 火蓋が切られた

「はあ！」

「ふん！」

刀と大剣の剣戟での乱舞をするのは防人と落武者という 歪な2人、アナザー鎧武は罅迫り合いとなったタイミングで力任せに大剣で刀を払い その勢いで袈裟斬りせんと振り下ろす

「しっ！」

「つと！私を忘れてもらっちゃ困るぜ」

槍に止められた、アナザー鎧武は少し苛ついた口調で

「だったら早く混ざりなよ、あと面倒だから纏めてこい」

「行くぞ翼！」「うん！」

そのまま2 v s 1の構図が続いていた、最初は優勢だったアナザー鎧武だったが次第に2人の連携に押されていき

刀を大剣で槍を左手の装甲で受け止める

「観念しろ！」

「やなことだった…まだ何もしてない初めてすらないんだ…こんな所で止まってたまるかあ
！」

「素晴らしい啖阿だ、我が魔王!!」

現れたのは

「ウオズ!!」

「何者だ!」

「おや初めまして戦姫よ…我が名はウオズ、我が魔王の忠実な臣下の一人にして彼を正しき未来へと導くもの」

と仰々しい自己紹介をする ウオズに奏は

「なあアンタの言う魔王って、アナザーライダーの事か?」

「その通りだ、さあ我が魔王…今こそ真のお姿に」

「まったくさつき言ってたのはそう言う事か…行けるか?」

アナザー鎧武はアナザーウオツチをベルトの部分に近づけると黒い別の形のベルトへと姿を変えウオツチがピタリとハマる、有機的な輪がクルクル回転しアナザー鎧武を違うアナザーライダーへと変える その衝撃波で2人は弾き飛ばされた

その姿はさながら鎧を纏った人体模型、本家よりもマツシヴな体軀から溢れるのは紛
い物とは言え ある種の覇気

時計の長短針を思わせる触覚と双剣を携えたアナザーライダー

その名は

『ジオウ』

「祝え！全アナザーライダーの力を受け継ぎ、時空を超えて影の歴史を統べる裏の王者その名もアナザージオウ！新たな歴史が始まりし瞬間である!!」

やりきった！と言わんばかりの満足気なウオズを見て

「何故だろうな…なんかいけそうな気がする！」

同時にアナザージオウは溢れるエネルギーを双剣に流し飛ぶ斬撃を放つ

「はぁー！」

翼も負けじと刀を構えると刀は物々しい大剣へと姿を変え

「奏！……は私が……はぁー！」

『蒼ノ一閃』

互いの斬撃のエネルギーで相殺された、その爆炎の中から互いに距離を詰めたアナザージオウと翼が互いの剣を振るう事になった

「ふん！」

「はぁー！」

アナザージオウが短剣で牽制しながら長剣で本命の一撃を狙うと翼は冷静に避ける

と還す刀でカウンターを放つ、やはり単純な剣術では翼の方が強くアナザージオウは次第に防御に回る場面が増えていった

「これで決めさせて貰う！」

片膝をついたアナザージオウにトドメの姿勢を取った、翼の内心は勝利を確信したしかし

「見えていた通りだな」

アナザージオウは待っていたと言わんばかりに刀の一撃を双剣で受け止め、翼の腹を蹴り距離を作る

「ガハッ！」

「翼！」

「残念だな、お前の未来は見えている」

同時に双剣を合体させ槍状に変形させると

ベルトに装着されているアナザージュオウオッチのボタンを再度押し エネルギーをチャージ、迸る紫電が槍の両端にチャージされていく

「はあ！」

槍を振り下ろすと時計のビジョンが現れ、2人の戦姫に命中させた

「うわあああ！」「うわああ！」

倒れた2人に追撃をするように一歩ずつ近づくアナザージオウ

「さて、これ以上付き纏われるのも迷惑だから、これで終わりにしよう」

と逆にトドメを刺しに行こうとした時

2人の変身が解除されたのを見るなり

「終わりかよ…」

槍を肩に担いで背を向け、帰ろうと思ったが

「お見事です我が魔王 ですが何故トドメを？」

「俺は別にコイツらを潰したい訳じゃないんだ、最悪の場合互いに引っ込みつかなくなるのが面倒くさい」

「成る程」

「さっさと夕飯の買い物済ませて帰るぞ」

「そう仰られると思ひまして、こちらに買っております」

出されたレジ袋には頼まれた物が入っていた

「流石はウオズ」

「恐れ入ります」

「よし…これを盗み見ているものに宣誓する俺はアナザージオウ、全てのアナザーライダーを統べる裏のライダーの王だ」

と両手を掲げるように宣言し

「俺はノイズと邪魔する者の敵である、だが安心しろ何もしない奴には危害は加えない事を約束する、だが俺の仲間に出せば地獄も緩い相応の報いがあると覚悟しろ」

そう締めるとアナザージオウはウオズの展開したマフラーの転移により姿を消した
これは日陰者のアナザーライダーが世界の表に現れた最初の日

しかしこの数日後 アナザーライダーはこの世界から消える事となる

その先の事を知っているのは

「私だけだ」

ウオズ1人である。

魔王邂逅編

魔王降臨2068

それから数日 特にノイズ襲来とかない平和な日を過ごしていたので自宅でダラダラ
ラさせていた

「なあ、ウオズ」

ハルトもやる気なくソファアに寝そべっていると暇が限界に達したのか

「何でしょうか我が魔王？」

そこには逢魔降臨歴・裏伝を読み返すウオズがいるが相変わらず中身は見せてくれな
い

「ひとつ聞きたいんだけどさ」

そう前置きした後尋ねた

「何でしょうか？」

「仮面ライダーウオズに変身出来ないの？ 見たいなースゴイ！ ジダイ！ ミライ！ って生
変身とか感動だよ！ それにほら俺って、シノビ、クイズ、キカイのウオツチ（アナザー）

持つてるからフューチャリング出来るよ」

ん？そう言えば そのウオツチ達があるならばと考えたるとウオズが答えた

「まさか我が魔王を差し置いてベルトで変身なんて出来ないですよ」

「そっかあ……あ！ウオズ！これ持つてみて」

そう言ったハルトはアナザーシノビ、クイズ、キカイのウオツチを渡してみる

「あ、あの我が魔王？」

「あれ？ウオズが何か力を込めたら出来ると思ったんだけどなあアナザーゲイツリバ
イブとかさ」

「いやいや何を狙ってるかは分かりませんがお戯れは程々にして下さい」

「そっか……アナザーゲイツなんていなかったしなあ出来ないかあ」

（まだ今はアナザーミライダーウオツチやアナザーウオツチで、その考えに至らないで
ほしいですね……入手経路を知つてるとは言えそこに辿り着くとは、恐るべし我が魔王
……）

何やら戦慄しているようだが

「いやいやまさか、だって白ウオズと黒ウオズは変身出来たんだから出来るでしょう？

灰ウオズ」

「灰ウオズ？……まさか私の事ですか？」

「そーそー白と黒がいたからさ、ややこしいのと…あとは最初から見分けやすいようにね灰色の服着てるのと巻物持つてるからわかりやすいし」

「どうだ！とドヤ顔しているが」

「私はヤギではないよ我が魔王」

「何言ってるんだこいつみたいいな目をしているが」

「知ってるけど、どうするのさ！もし他の時間軸のウオズと会った時に灰ウオズを見分ける方法がないよ その時の為の対策さ！」

「私が複数人いるなど、あつてたまりますか」

「なんかありそうな気がする！…でそれ以外で見分ける方法ある？」

「実際 特撮では偽者を見分ける方法はない事はないが…視聴者目線での配慮でわかるようにしてるだけで実際はわからない可能性もある ショッカーライダーなんて、ライダー隊と おやつさんにはイメチェン位にしか思わなかったのだろうし」

「ありますとも」

「例えば？」

「そうですね…例えば、祝い！のイントネーションとか祝詞の文言で察して頂ければ…我が魔王でも一目瞭然かと」

「ごめん今の俺には無理だわ」

俺にはウオズの祝えー！を的確にリスニング出来る聴力はない　ウオズ検定あっても自信がないな

「けど自衛の力は必要なんじゃねえの？」

「ご心配なく私にも自衛の力はありますので」

「心配はしてないけど厳命するね、基本は自分の安全が最優先！危なくなったら祝わずに逃げる事！いいね」

「何と！私から我が魔王を祝う事を取ったら何が残りましょうか！」

「響鬼編でのメタ発言やめい…取り敢えず命大事に！良いね分かった！」

「畏まりました、我が魔王」

「宜しい」

「ならば…我が魔王もお気をつけて下さい」

「当然よ、危なくなったら逃げるから」

「ええ…逃げれると良いのですが…」

「へ？」

ー見つけたぞ　アナザライダーどもー

「何か言った？」

何処かで今の声　聞いた事あるような…

「へ？何で？……つて！」

そう答える前に ハルトはオーロラカーテンに攫われたのであった

「これはまさか……」

ウオズはマフラーを翻すと部屋から転移した

ハルトの自宅から少し離れた場所で

「あの王様も人使いが荒い事で……取り敢えず探して送ってみたが、あのガキ大丈夫か？」

そう呟いたのは ジャケットを着てピンクの二眼トイカメラを持っている青年であった

「ピンクじゃないマゼンタだ!!」

そこに現れたのはハルト宅にいたウオズである

「やはり貴方でしたか門矢士」

「ウオズか久しぶり…でもないな、しかし沢山いるなお前」

「我が魔王からも、白黒2人いるとそう言われましたが…答える我が魔王を何処に送った」

「知りたいならお前も送ってやるよ、じゃあな」

「ま、待ちなさ」

動く前にウオズもオーロラカーテンで転移させられたのであった

「さて…俺は俺の旅に戻るか、また会えたら…そんな時は写真でも撮ってやるか」

そう答えると土も自らオーロラカーテンを潜ったのであった

この世界に残った物は 彼がいた自宅だったものである。

逢魔降臨

魔王邂逅！・2068

「つてて……おい！ 転移出来るエネルギー溜まったなら早く言えよ!!」

とハルトは怒り気味でウオツチにいるアナザーディケイド に文句を言った

『おい待て、俺は何も知らんぞ!』

「じゃあお前以外の誰が、転移できんだよ！ オーロラカーテンが思い切り通過したじゃねえか！ しかも何処だよこの荒野！ GPSも圏外じゃねえか!!」

『本当に知らん!』

「つたく……んで此処は何処だよ、ウオズもないのか……また俺の世界じゃないのか……はあ」

『落ち着くのが早いな』

『どんな情緒してんだよ』

「意味なく取り乱すより落ち着いて現状把握が大事だから?」

『疑問系なのは残念だなオイ』

黙れアナザーW（検索エンジン）

『おいハルト！テメエ今なんてルビ振りやがった！』

「しっかし何も無いなあ〜」

『聞けよ！』

見渡す限り何も無い荒野……いつらと出会った狭間の世界に似ているが……お！何やら建築物ぽいの発見！

「人がいるかも知れないな……しかし……」

この世界に明らかに似合わないパーカーとジーンズ姿にどうしようと考えていると

『私に任せろ（ドレスアップ）』

そうアナザーウィザードが言うとハルトの体に魔法陣が通過すると、ポロポロに見えるような服にフード付きの外套を羽織っている

「相変わらず有能すぎるわ、流石アナザーウィザード」

これなら怪しまれずに相手してくれるだろう

「よし、後は日本語が通じるかだな！」

『重要な其処かよ……』

大事だろう！

そして歩く事暫く、漸く目的地に到着した

「ぜえ……ぜえ……やったー！ついたー！」

と喜びいさんで建物に近づいていくと それは

「へ？」

平成ライダー達の銅像とそれに囲まれてポーズを決めている少年の銅像だった

「ま、まさか……」

銅像の下にある名前を見てみると こう書かれている

『常盤ソウゴ初変身の像』とつまり

「ジオウの世界を再現した、テーマパークか！流石です!!」

何故そうなるというツツコミをするものがないのが悔やまれるが

「つて眺めてる場合じゃねえ！」

と慌ててスマホのカメラでひたすら連写、あらゆる角度から撮影したソウゴの銅像は

勿論の事 平成ライダー達との銅像とツーショットを撮っている

「いやー！自撮りも悪くないけど誰かに撮って貰ってツーショットしたいなあ…けど誰

もないし」

出来れば彼等の変身ポーズを取ってツーショットを撮りたいが一人なので難しいと

思っている

「では私がやりましょう」

「あ、ありがとうございます」

通りすがりのカッシーンにスマホを預けて

クウガの銅像の隣に立ち変身ポーズを決める

「行きます……撮って下さい！俺の！変身!!」

「はいチーズ」

パシヤリと撮って貰ったのでカッシーンからスマホを返して貰う

「いや〜ありがとうございます カッシーンさん」

「いえ、お気になさらず」

「しかし、この仮装よく出来てますねえ〜」

ジオウのテーマパークなら確かに適任であるまあ本編では中々悲惨な目に遭っているが

ペタペタ触ってみる、うん！見事に機械だ！よく再現されてるなあ〜

「本物みたいだあ〜」

「本物ですか？」

と槍を構えるカッシーンに

「あ、良いポーズ！一枚撮りますね〜、またまた〜これ仮面ライダーのテーマパークみたいな場所でしょ？何で此処に来たかは知らないけどら連れてきてくれた人に感謝しな

いとね こんな素晴らしい世界に連れてきてくれたんだから！」

その下手人が通りすがりの仮面ライダー本人とは知らないハルトであった

「え？あの…貴方が常葉ハルトですか？」

「そだよ？何でカツシーンさんが俺の名前知ってるんです？」

「とても魔王様がおつしやつてた方には見えないのですが」

「魔王？カツシーンさんも俺のことをウオズみたいな風に言いますね？」

来た客は魔王と呼ぶのか拘りなのかな？だとしたら凄いライダー愛がある人がオー

ナーなんだなあと思ひ、あつげらんと言ふなりカツシーンは槍を構え直した

「やはり…貴方がアナザーライダー達を解き放つた犯人か！」

放たれた槍の突きを回避するが完全に交わしきれなかった

「へ？ちよつ！」

尻餅をついた形となり頬には血が一筋流れている

「おいおい、ここは仮面ライダーのテーマパークじゃないのかよ！」

「アナザーライダー！貴様を此処で始末する！」

となると、このカツシーンは本物！マジで！

「悪いね、此処が何処かはわからないけど殺される訳には行かんですよ！」

『ジオウ』

ウオッチを腰に当てて アナザージオウに変身し双剣を構える

「おのれ！魔王様の姿をここまで醜くするとは！許せん！」

「うるせえ！以外とカッコ良いだろうが！アナザーライダーもよ！」

2人は同時に駆け出し槍と双剣が交差する、力と技術が互角なら！頭の針が動くとその先の世界が見える

右、左、最後に胴体狙った突きを放つビジョンが見えた よし！

「見えた！」

ビジョン通りの行動をしたカッシーンの攻撃を交わし 最後の胴体の突きがくる前にウオッチのボタンを押しベルトをなぞりエネルギーを溜め

「ふんー」「おらあ!!」

返す刃でカッシーンの槍を交わし、ボディに一撃を叩き込んだ

「これがお前の未来だ」

「ぐ、む、無念です…魔王さまあああ!!」

そして爆散した カッシーンを背に変身解除したハルトは足元に落ちたカッシーンの部品を手を取った

「まっさか…本物のカッシーンだったとは驚いた…：…へ？」

おい待て カッシーン？平成ライダー達の銅像？そして常盤ソウゴ初変身の像？広

い荒野？まさか此処ってテーマパークなんかじゃなくて

「嘘だろ…まさか！」

「そう、貴様の想像の通りだ」

この声…まさか!!と思うと同時に周囲の空間が逆再生するかのよう流れいき爆散した筈のカッシーンが復活していた

「ま、魔王様！申し訳ありません」

「良い、私が此奴の力量を間違えていただけの事…しかしアナザーライダーと契約した者が暴走してない…なんて精神力だ…素質で見れば加古川飛流の奴に匹敵するかも知れん、スウォルツなどとは比べ物にならない」

「い、いやあくそれ程でも」

とデレデレしているが、ハルトはハツとした顔で見た、このナイスな声に渋い風格、顔は知らないけどこの服は見覚えがある

「ま、まさか…」

「知っていると思うが名乗っておこう私は常盤ソウゴ、貴様の知る歴史においてオーマジオウと呼ばれている男だ」

目の前にいたのは最低最悪の魔王がいました

「え？お、オーマジオウ！まさか…本物？」

「まあ疑うのも無理はない貴様の記憶を見たが私の顔は出てないからな、だが私は本物の「サイン下さい!!」……む？」

記憶を読まれたとか言つてたが関係ない!!と言わんばかりの速度で動き出していた、その老ソウゴの前には色紙とサインペンを持ち腰を90度に曲げた ハルトがいた

「まさか本物の魔王様に会えるなんて思わなかつたです！感激です！この世界に連れてきてくれてありがとうございます!!あ、ここにハルト君についてお願いします！」

「う……うむ…それよりも貴様は何故、若き日の私の像を写真を撮っていた？」

サインを書きながら質問をする老ソウゴにハルトはまるで子供のような純粋な瞳で答える

「ファンなら撮りますよ！当たり前じゃないですか!!こんなにカッコ良いのに！あ、撮ったらダメでした…？」

「い、いやそんな事はないぞ…好きなだけ撮影したまえ……そ、そうか…ファンか…」

「魔王様、嬉しそうですね」

「ん、んん!!それよりもだ、貴様に聞きたい事がある」

「な、何でしょうか!」

今更ながらに何故 俺が、この世界に来たのかを考えてみたが…ダメだ分からない、何故だ歴史変えたりとかしてないよ。アナザーライダーの力で暴れはしたが…それでも今は私欲の為に戦った覚えなんてないぞ…：…いや待て心当たりが…

「何故、あの世界に隔離したアナザーライダーを解き放った?」

やっぱりかあ!!と的中した事に頭を抱える

アナザーディケイド が言っていた俺が閉じ込められた世界は元々 オーマジオウがアナザーライダーを隔離する為に作り上げた世界だったのだ、それを破壊して脱走すれば敵と思われても不思議ではない、そりゃカッシーンも槍構えるわ!

「い、いやあ…それはその…何と言いますか…」

『ハルト、変われ俺が話そう』

「ほお、アナザーディケイドか」

ウオッチを見せながら話に参加した

アナザーディケイドの不注意で狭間の世界に来たこと その世界から脱出する為に

アナザーライダー達と契約した事、そして行った世界で武闘派アイドルに絡まれた事を話した

「最後のはアイドル云々は気になるが…成る程そういう事ならば」

と老ソウゴが手をかざすと、その先にはハルトが見覚えのある景色が見えた

「ま、まさか！」

「そうだ、貴様のいた世界に送り返す事にする元を辿れば、アナザーディケイドの能力に対策を立ててなかった、若き日の私の不注意もある特別に送り返す事にしよう」

「っ!!」

ハルトの顔がパアと明るくなったが少し考えた顔をして

「こいつらはどうなります?」

とウオッチを見せると

「破壊する、封印しても悪さを働くならば破壊するしかないだろう幸い、貴様はその力に飲まれなかったようだが、次の者はそうとは限らないからな」

「っ！さ、流石にそれは！」

「貴様は被害者であろう、何故庇い立てする」

その問いにハルトは即答した

「俺はこいつらに人生を変えられました、確かに恨む気持ちも少しはあります…けど…」

「何だ？」

「彼等といった時間は楽しかった……だから決めたんです！元の世界に帰る旅は俺が自分の力で旅をして帰りたいんです！そんな思い出話を家族に聞いてもらいたい！このバカどもには、その責任を取ってもらうまでは最後まで一緒に居てもらいます！」

『ハルト……』

「なるほど……それが貴様の答えか」

「ええ、他人の舗装された道を歩くのも疲れました……だから今度は自分の足で、自分の道を切り開く！その障害になるんでしたら憧れの貴方でも戦います!!」

流されてばかりだったけど、自分が決めたんだからやり遂げるのだ必ず故郷に帰る事とアナザーライダーに責任を取らせる為に

「己の思いを曲げぬか……なるほど見込みはあるようだが、その前にその道を貫けるかどうか試すでしょう」

そういうと老ソウゴは金色に輝くドライバーを取り出した

「そ、それは!!」

驚愕するハルトを尻目に老ソウゴはあの言葉を紡ぐ

「変身」

『祝福の時!』

ドライバーの両端を押し込む足元には時計とマグマを流した文字盤が現れた地割れと共に

『最高！最善！最大！最強王！！オーマジオウ！！』

そのエネルギーが老ソウゴに集約するように動き出した 黒と金色の鎧に包まれると

老ソウゴは最低最悪の魔王 オーマジオウへと姿を変えたのであった。その変身後の波動にハルトは吹き飛ばされるが何とか堪える

「ぐっ……この衝撃波に耐えた……」

あんな啖呵切った以上、逃げる訳にはいかない、頭によぎるのはジオウ最終回の無双振りである故に恐怖しかない……何だよエボルやダグバをワンパンって……絶対勝てないよ……けど後悔はない……戦わなければ生き残れない……

「ウオズに命大事になんて言ったけど……やっぱりそうだね、譲れないんだよ……」

アナザーウオツチを構えるとハルトは腰に添える。そして言わないと心で決めていた言葉

しかし

今 俺は憧れに挑む ならば今の自分ではダメだ だからこそ俺は変わる！

「変身！！」

『ジオウ』

アナザージオウに変身したハルトは双剣を構えオーマジオウに向かって走り出した

「ふっ！はあ！」

「無駄なことを…ふん！」

双剣で色んな角度から切り掛かるが、やはり当然の如く交わされてしまう…そしてカウンターが当たり、やられる未来が見えたので

慌てて後方に下がり体制を立て直す

「つと…危ないなあ…」

構え直すアナザージオウを見るオーマジオウ

「貴様のアナザーライダーへの素質は加古川飛流を越えるだろう、アナザージオウの力を使い正常な自我を保っているのがその証明だ」

ああ、アナザージオウⅡだと確かに暴走してたからな、アナザージオウもやっぱり副作用があったのな…じゃない！

「褒めてもらえて嬉しいですね、でもジオウにはジオウの力でしょ？」

「ほお、基本に忠実という訳か」

アナザーライダーはオリジナルの攻撃に弱い

しかしこれは逆を言えばアナザーライダーの攻撃もオリジナルに対して有効である、

まあ

「当たるかどうかは保証ないんですけど」

「当然だ、力を得て少しの貴様に遅れなど取るか」

「だったらこれでどうだ！」

『カプト』

「クロックアップ！」

『CLOCK UP』

自分以外を置いていく光速の世界に入りオーマジオウに殴りかかるが

「無駄だ」

『カプトの刻 HYPER CLOCK UP』

オーマジオウはベルトを一度押すだけで彼の世界を超える

「ふん!!」

「があ！」

クロックアップを超える移動により一撃をモロに受けたアナザーカプトはアナザージオウに戻り地面に倒れる 幸いにもアナザージオウ経由の変身なのでアナザーカプトは無事であるが

「これならどうだ！」

特殊能力でダメなら、必殺技だとウォッチを起動するとアナザージオウの体に赤いラインが走る

その姿はさながら赤いサメ　その顔は悲しみに囚われている
夢を追わぬ、守らぬ者

『ファイズ』

アナザーファイズに変身した、そのままアナザーファイズは高く跳び上がり足からポインター型エネルギーをオーマジオウに当て、そのままライダーキックを叩き込もうとする

「アナザークリムゾンスマッシュユ！」

その一撃もオーマジオウは冷静に対処する

『ファイズの刻！グランインパクト!!』

「ぬん！」

「があ……ぐ……だったらあ！」

パンチ一発でアナザーファイズは吹き飛ばされる　距離が空いたなら遠距離攻撃だ
！

点でダメなら面でいけとアナザージオウはスイッチを押すと炎に包まれる

「はあああああ……はあ!!」

その姿はさながら文字通り 鬼の姿をしたアナザーライダー

魔に落ちた音を奏でるもの

『響鬼』

アナザー響鬼は両手に持った金棒にエネルギーを込めると赤い炎が金棒に収束していく

「これでどうだあー！」

アナザー響鬼の火炎弾攻撃にオーマジオウの周りで爆破、粉塵が舞い上がる

「はあ……はあ……やった……か？」

あ、やべフラグ……まあ

「やってはないぞ」

「です……よね」

無傷で立たれているオーマジオウの姿を見て軽口を叩く余裕もなくなりそうだ……けど

「負ける訳にはいかないんだよお！」

再度、金棒から火炎弾を放つ為に構えるアナザー響鬼を見て

「見事だ、敵わぬと知りながらもその命を燃やすか……貴様の覚悟に応えてやるとしよう」

『終焉の刻！』

同時にオーマジオウは高く跳び上がり背中
の針が開きエネルギーが動く 迎撃で火
炎弾を放つがそんなのお構いなしにオー
マジオウが突っ込んでくる

『オーマジオウ必殺撃！』

必死で金棒で耐えるが、アナザー
デイケイドを一撃で屠った技に耐えら
れる訳もなく
「が……があ……く、うわあああああ！」

アナザー響鬼は爆裂霧散したのであつた

決着

『逢魔時王必殺撃！』

「ぐああああああ!!」

アナザー響鬼が爆砕したのをオーマジオウが確認すると

「ふむ…良き気概故に見所ありと見たが見込み違いだったか?…ぬ?」

よく見ると爆砕した筈のアナザー響鬼が倒れていた場所には

残念 と書かれていたカカシが立っていた

「何?っ!」

慌ててオーマジオウがガードの姿勢を取ったと同時に何発か刀の攻撃を受けた

「我が魔王!」

「良い…成る程な驚いたぞ、まさか無事とはな」

カッシーンは慌てた様子で近寄るがオーマジオウは静止する その視線の先には

「こんだけやってもダメージ…ではないかな」

その姿は闇に落ちたもの 力の使い方を違えたもの

『シノビ』

忍刀を構えた、アナザーシノビがいた

「変わり身の術か…いつの間に」

「それが忍術の基本だよ手品の種は話しませんよ！」

アナザーシノビは別のウオッチを使い変身する

その姿は木のお化け さながら奇怪な機械

オーマジオウよりも遙か未来に存在するライダー

『キカイ』

アナザーキカイ

「はあ!!」

アナザーキカイは胸部からミサイルの雨をオーマジオウに降り注がせるがバリアに
全て止められてしまうが、これで良い目眩し充分！

するとアナザーキカイの頭部からスパナ型のエネルギーギアがカッシーンに張り付くと

「お？おとおお！か、体が勝手に！」

「行け」

アナザーキカイが指をオーマジオウに向けるとカッシーンはオーマジオウに突貫し

ていく

「わ、我が魔王!! 避けてください!!」

「成る程…ならば」

『ビルド』

オーマジオウは冷静にビルドウオッチを起動してカッシーンの体についたナノマシンを払った

「た、助かりました…:彼奴め! 一度ならず二度までも!!」

「やるな、しかしこの程度で逃げられると思っているのか?」

「逃げませんよ、さて…:問題!」

アナザーキカイの体は黒いエネルギーを纏い姿を変える、その姿は剥き出しの脳みそに電極が刺さった異形の姿

出来が悪く他者に知識を求める回答者

『クイズ』

「俺の回避は失敗する、○かXか!」

「決まっている、○だ!」

オーマジオウの出した波動をアナザークイズは回避し、距離を取ると

「残念、正解はXだ!」

「ぐっ！ぬう…」

問題の誤答により体に僅かながら体の動きが鈍るのを見てアナザークイズはウオツチを起動した

「今だあああ相棒!!」『行くぞ！合わせろハルト！』

『ダイケイド』

アナザーダイケイドに変身、ベルトに手を翳し黄金のエネルギーを貯め、高く飛び上がる

「『いっけええええ!!』」

そのまま、23枚のアナザーカードを通過して威力を上げた アナザーダイヤモンドキックをオーマジオウに向けて放ったがオーマジオウは右手で受け止めたのである

その光景は奇しくも蹴ったものと受け止めたものという構図が逆転していたのであったのは この時のハルトは気づいていなかった

「やるな……しかし甘いわあ！」

オーマジオウはカウンターを叩き込もうと左手にエネルギーを貯めていたが

「何っ！」

少しずつ押されている事に驚いている、オーマジオウ、よく見れば黄金のエネルギーが自分の力を相殺しているのだ、その隙にアナザーダイケイドはキックを押し込んだの

だ

「いつけええええええええ!!」

「……見事だ」

その賞賛と共にオーマジオウは更に出力を上げたカウンターをアナザーデイケイドに叩き込んだ

「がああああ!」

そのまま転がり変身解除した、ハルトはボロボロの体でも立ち上がる

「驚いたぞ、まさか私の力をぶつけてくるとはな」

「ははは……最終回で……アナザーデイケイドが……貴方の……力の……一旦を持つてたのを見たから……ですよ……基本に忠実ってね……」

最終回 スウォルツがオーマジオウの力を抜き取るシーンを思い出したのだ

その最後の台詞 『貴様の力の一旦を受け取った』とまあ逃げようとして妹に刺されたがな

ライダーの力には同じライダーの力が有効

その大原則はオーマジオウでも逃れる事は出来ない ならばこそハルトは賭けた、アナザーデイケイドが抜き出したオーマジオウの力を込めた必殺技でオーマジオウに一矢報いてやると 結果は見ての通り

「効きは…する、けど…：…か…：遠いかあ…」

と大の字になり倒れる、こんだけやってもまだ届かない やっぱりスゲエは最強ライダーは

「当然だ、そう簡単に超えられる程ライダーの王は甘くないぞ」

「ですよ…：…ねえ…」

ハルトは、その言葉を最後に意識を手放した。

「……………ん？」

意識を取り戻した、ハルトは自分の体をペタペタ触ってみる…：うん異常無しだ…：ありや？

「俺、死んだと思ったんだけど？」

「そんな訳なからう、私が治療したのだ」

と現れたのはオーマジオウ、変身解除して老ソウゴに戻っているが

「どうやって？」

「エグゼイドウオッチで傷を癒したまでだ」

「流石…：…って何で傷治したの？俺思い切り貴方に刃向けましたよね？」

「簡単な事だ、貴様の気概と度胸に敬意を示したまで……それに私も貴様の旅路には興味がある、この老人の暇つぶし位にはなるだろう」

「俺の旅は何処ぞのバラエティか……ってか見えるんじやないんですか？未来とか」

「未来は一つではない、私に見えているのは可能性よ他ならぬ若き日の私に言われた事よ」

「そつすか」

「それとだ、アナザーライダー達だが好きにしる貴様に処遇を任せる」

「んじや連れて行く、文句はないでしょ？」

「無論だ受け取れ」

と投げ渡された アナザーウォッチを受け取ると

『ハルトよ、息災なようだな』

「お陰様でな、体弄られてないか？」

『問題ない、それとオーマジオウのエネルギーを使って別世界に転移可能となったぞ』

「え!?マジで！ありがとうございます！」

「さて、まあ……このような破格の待遇にも理由があるのだから」

老ソウゴはハルトの隣に腰掛ける

「理由？」

「実は貴様に頼みたいことがある」

「何ですか？それこそ若い頃の自分とかいるでしょうに」

「いや、若き日の私では解決出来んのだ…それこそディケイドのようなものでなければ
な」

つまり世界渡航できる奴が必須な訳か

「内容は？助けてくれたお礼に聞くだけ聞きますよ」

やるとは言わないがと内心ゴチると老ソウゴは話初める

「若き日の私がアナザーライダーを隔離した後に、タイムジャッカーの残党が令和の歴史から新たなアナザーライダーを生み出す事件が起こったのだ」

「へえ…え!!それって…」

「仮面ライダーゼロワン…令和の1号よ」

「ゼロワンにもアナザーライダーがいるなんて…知らなかった」

「無理もない貴様はゼロワンを見る前に転移したのだからな…しかし事件の影響は大きくその結果あらゆる世界でアナザーライダーが生まれる事となった、その数はライダーの数に等しいだろう」

……なんか読めた

「まさかと思いますが」

「旅の途中で構わん、見つけたアナザーライダーを捕まえて従えろ貴様なら造作もないだろう。腐っても私の歴史の力を有するのだからな」

なんか載せられているようだが

「構いませんよ、こいつらの業を背負うなら他にいるアナザーライダーも一緒ですから」
「やけに素直だな」

「敗者は勝者に従う、自明の理です」

「なるほど…まあ良い、貴様の勇氣に免じて褒美を取らせる何が良い？」

「なら……」

ハルトの答えは

「はい！アルトじゃー！ーないとー！ー！」

仮面ライダーゼロワンを全話見ることだった

「いやー！面白かったー！見せてくれてありがとう！」

「良い、次のセイバーも見るか？」

「良いんですか！ありがとうございます！！」

とオーマジオウが仮面ライダーセイバーのDVDを取り出したのと同じタイミング

で新たなオーロラカーテンが現れる、そこから出た人物の姿を見る

「我が魔王！ご無事で……？」

「おお！ウオズじやん久しぶり……でもないかあ……」

「ほお貴様にもウオズがいるのか？」

「うん、頼りになる仲間だよ」

「そうであるうな何時でも賢明な判断をする男よ」

「そうそう！この間なんかさ」

と楽しく談笑している2人を見て灰ウオズは思わず

「我が魔王、何故オーマジオウと楽しく談笑してるのです？」

「ん？そりや仲良くなったから？」

「だとしてもです！」

「まあ落ち着け……よし灰ウオズよ……貴様もどうだ？」

「貴方も私をそう呼びますか……オーマジオウ」

「そうだよ、ウオズもセイバー見ようよ！」

「畏まりました我が魔王」

セイバー全話視聴後

「ライダーに珍しい大団円だったなあ……さて……と次の世界に行きますか！」

「お供します我が魔王」

「待て、最後に貴様に選別をやろう」

そう言うのとハルトの前に大きなバイク型マシンが現れ

「こ、これって！タイムマジーン!!」

黒塗りでフレーム紫色だけど間違いないタイムマジーンだ！

『アナザータイムマジーン』我々のをベースに貴様用に調整を施しておいた、旅の足になるだろう」

「お、おお……ありがとうございます！」

「最後に一つ」

早速乗り込もうとした時に老ソウゴに止められた

「偶には戻ってくるといい、そして旅の話聞かせて貰おう」

その言葉にキョトンとしつつもハルトは笑顔で答える

「うん！たくさんのお土産話用意するから待っててね!!」

そう言ってアナザータイムマジーンにウオズと一緒に乗り込むと　あの操縦席に謎

の凹みがあった

『ここにアナザーウォッチを入れるようだな』

「なるほど、よし」

挿入するとアナザーウォッチが紫に光り、アナザータイムマジーンの操縦モニターには発進しますの文字が

「よし、行くぞ！次の世界に！」

『待て、ハルト！その前に聞いておきたい事がある』

「何だよ折角良い感じだったのに」

『お前、オーマジオウとの戦いの時に俺の事を相棒と言ったか？』

「……言っていない」

顔を背けるハルトを見てアナザーデイケイド は追い打ちをかける

『いや、言ってたぞ相棒と！』

「言ってねえってんだろう！ほら行くぞ！」

『照れ隠ししてんじやねえよ！行こうぜ相棒！』

「喧しいわ検索エンジンが！」

そう叫びながらアナザータイムマジーンがオーロラカーテンを超えるのを見送った老ソウゴは玉座に腰かけ

「ふう……しかし騒がしい連中だったが偶には悪くないものだな団欒とやらも」

かつての叔父との日常を思い出してクスリと笑う

「なあカツシーン」

「そうですね、私としては暫くは会いたくありませんが……それよりも」

「うむ、やはりというべきか……アレには宿っているなどというより、宿ってしまったのか

アナザーとは言え私の力が……」

この言葉はハルトの耳には届いていなかったのである

通りすがらないシンフオギア？
仲間と海神と…

さて前回、オーマジオウと戦い生き残るといふ偉業をなした俺、常葉ハルトは

「うえーい……」

自宅のソファでやる気なく横になっていた

『おい、ハルト折角別世界に移動出来るのにこの世界に戻ってよかったのか？』

『そうだぜ、また武闘派アイドルと戦いたいのかよ？』

「んな訳ねえよ…けどオーマジオウとの戦いで燃え尽き症候群が発生しているんだ…
あー面倒くさい……」

『まあ相棒の気持ちは分からんでもないがな』

「誰が相棒だ、それにこの世界の事もよく知らないのに旅立つのも勿体ないだろう？土
産話しのネタは多い方が良い」

『成る程な……で？これからどうすんだよ』

「暫く寝る」

さあ行こうか夢の中へく

『ならば我等と修行だな』

と思ったが目々ぱっちり覚めたぜ！

『はあ…』

「我が魔王の安眠を妨害するつもりはありませんが少し話だけ宜しいでしょうか？」

「何ウオズ？」

「此方を」

とウオズから渡されたのは一昔前の携帯電話型のツールであるが、ハルトは一眼見て理解した

「ファイブフォンXじゃん！」

「ええ我が魔王にも必要かと思いましたが」

「ありがとう！これあればヘルヘイムからもかけれるんだよね！」

「はい、それともう一つ」

「何々々？」

「未来の我が魔王から言伝を預かっております」

「は？」

そう言うなりウオズは逢魔降臨歴を開くと立体映像も共に現れたのはアナザージオウに金色の装飾：：そうだなあダグバっぽい意匠をつけたアナザーライダーである

「アナザーオーマジオウ？」

本物見て戦ったから分かるが、なんつーか

「成金感が拭えない」

「我が魔王!？」

『そうだろうな若い俺よ、安心せよ自覚はある』

会話出来る!？」

「ここ、これどんな仕組みなの!？」

「未来の超技術です」

「未来すげえ！」

『良いか?』

「はい」

『では……俺は常葉ハルト：：アナザーオーマジオウだ』

「この人が未来の俺、本当かなあ？」

『この顔を見れば分かるか?』

「っ!!」

ハルトは変身解除した顔を見て理解した、間違はなく自分であると。

「何で帰る事諦めたんだよ!今の力があれば帰れるんじゃないのかよ!」

『その疑問は最もだ……まあ理由はあるのだ色々とな』

「なんだよ?」

『それは未来の事に繋がるから話せん、ウオズにも厳命しているようにな』

「まあそれで話せたら訳ないか…」

『聞いたぞ、ソウゴさんと戦ったそうだな』

「ああ強かったよ流石ライダーの王……あれ?何で馴れ馴れしく話してるの?」

尋ねると老ハルトは笑いながら

『なあに、今では一緒にライダーを視聴したりチェスをしたりする仲よ……今日もこの後、

温泉に行く予定でな』

「おいコラ何て羨ましい真似してんだ」

『まあ妻達も連れての旅行など久しぶりで……あ…』

「おい待て、今なんて言った?」

『旅行が楽しみ』

「違うだろおおお!妻って言ったな!しかも複数形!?!何してくれてんだあ!不貞じゃな

いかー！

『ち、違うぞ過去の俺よ…そ、そのアレだ！王たる者、複数の所帯を持つのは当たり前と……それにだ愛さえあれば関係ない！』

「不誠実じゃないかー!!浮気男は皆そう正当化させんだよ！ウオズ！やつぱり俺、王様になりたくない!!」

『ウオズ！説明せよ誤解とな！』

「いやいや我が魔王、それは無理ですよ」

『それはどつちの事で?!』

『未来でも現在でもハルトはハルトだなあ』

「ええ全くですよアナザーディケイド」

『お、おほん…話を戻すがオーマジオウとの戦いの報酬を俺からも送ろうと思ってな』

「それってファイズフォンX?」

『既に受け取っておるようだな…それにはアナザーファイズ用のガジェットも登録している使い方は分かるな』

「ああ、大体は」

『宜しい、それともう一つ仲間も送ったのだが…ウオズ彼奴らは?』

「まだ途中のようですね、合流には時間がかかるかと」

『そうか、まあ良い若い俺よ最後に一つメツセージを残すぞ』

と前置きしたアナザージオウは話し出した

『貴様には沢山の困難が降り注ぐだろう、しかしな俺とは違うのだ頼れる者には頼る事を覚えよ、それと体には気をつけろよ』

「それ最初に言えばカツコよかったのにな残念魔王」

『ははは！ そうだな否定せんよ、ではな』

そう言うると本は閉じられた、ハルトは溜息を吐いて

「散歩してくる」

「共しましょう」

「いいのか？」

「勿論ですとも我が魔王いく所に私あります」

—————

そして暫く、アテのない散歩をしていた時のこと

「なあ、ウオズ未来から他に仲間が来るって聞いたけど」

「ええ、私の同僚で仮面ライダーの力を有しています」

「マジで!?どんなライダーなの? つーか来てるなら迎え行こか?」

「それは〈爆発音〉……あそこでしようね」

「OK、んじや行こうかウオズ」

「はっ!」

マフラーの転移でハルトとウオズは転移したのである

そしてハルト達が到着した先にいたのは

「う……………うう……………」

「くっ……………」

ボロボロになっている2人と

「誰だテメエは?」

白い軍服のような衣装を着た男だ

「……………」

ハルトは無言でボロボロの2人の元へと近寄ると笑顔ねアナザーウオッチを起動する

「大丈夫だから任せて」

『エグゼイド』

するとピンク色の光が2人を包み込み傷を治したのであった

「こ、これは…」「まさか！」

「さて…とウオズ」

「はっ」

「味方つてどつちだ!!」

「考えなしに治さないで下さい！我が魔王!!」

「ウオズちゃん！」「何故ここに」

「やはり貴方達ですかジヨウゲン、カゲン…全く我が魔王との初お目見えの機会を台無しにするとは恥を知りなさい」

「つて事は…あれやつぱり」「魔王様！」

「へえ、テメエがこの2人の大将か聞いてたより随分と弱そうなナリだなオイ」

「一応聞くけど2人から仕掛けたの？」

モヒカン男の右手には見覚えのある赤槍が握られている

「いいや、魔王の幹部つてんだから痛めつけただけだ…俺達ネオタイムジャッカーの計画の邪魔になるからな」

「ネオタイムジャッカー？」

「まあネオでもニューでもどうでも良いけどよお取り敢えず………テメエは俺達の計画で最大の邪魔者なんだよさっさと終われ」

男が目にも止まらぬ速さで槍を突きにかかる

「我が魔王!？」

ウオズが静止にかかるがハルトは微動だにせずに槍を受け止めた

「っ!!」

右手からは刃先で切れたのか血が槍を伝い地面に落ちている

「我が魔王……」

「そんな理由で2人を狙ったの?…2人は未来の俺からきつと無理矢理、過去の不便な世界に飛ばされて色々不安だった所に…いきなり襲われたんだ……ごめんね2人とも未来の俺の所為で」

「へ? いや……」ウオズ……あの方が本当に」

「ええ、若き日の我が魔王ですよ」

「う、嘘でしょ」

「魔王様が我等にあのような優しい言葉を…」

「本当にごめん…色々と」

「テメエ、何をごちゃごちゃと…っ!」

「取り敢えず…歯ア食いしばれ!!」

空いた左手でそのまま顔面にストレートを叩き込んだ、そのまま男は仰反ったのでハルトは槍から手を離れた

「は……ははは!モヤシかと思つたら中々良い拳持つてんじやねえか」

「そりや良かった、今ので手打ちで良いかな?早く帰つてよ2人の歓迎会しないといけないから」

「はは!連れねえ事言うなよお…なあ!」

男は腰にドライバーを巻き付けると3枚のコアメダルを取り出しドライバーにつけた

「変身」

『サメ・クジラ・オオカミウオ!』

男は戦いを求める海神 仮面ライダーポセイドンに変身した

「仮面ライダー…」

「おおよ、どうしたよ見せてくれよお紛い者の変身って奴をよお！」

「こいつ言わせて置けば！」

「ウオズ大丈夫」

ハルトが制するとアナザーウオツチを構えた

「礼儀のなつてない猿なら調教しないとね」

笑顔だが目が笑っていない怒気を察してか

『ヤベー、ハルトがマジギレしてる』

『触らぬオーマジオウと妹に崇り無し』

それはお前だけだと思ひ直し、ハルトはドライバーにアナザーウオツチを装填するとドライバーが現れ 彼の体をアナザージオウへと変身させる、双剣を槍にして鋒を向ける

「んじゃ倒すけど良い？」

「はは！偉そうに言ってるんじゃねえよ！」

「答えは聞かないけど！」

2人は全くの中間位置で槍が激突した

「そらそらそら!!」

「……………」

ポセイドンの高速とも言える突きのラッシュをアナザージオウは未来予知により捌いている、この速度なら問題はない…:というか

「ははは!どしたあ反撃も出来ねえってか!?!」

「何、反撃して欲しいの?」

何が怖いのかわからない

「ああ??舐めた口聞いてんじゃねえ!」

「いや遅いから」

アナザージオウは自前の槍でポセイドンの槍、ディーペストハーブーンを弾き飛ばし空に打ち上げた

「な、何で」

本物のオーマジオウと戦った俺からすれば唯の槍の攻撃など恐るに足りん

「お前の槍がお粗末なだけ」

『ファイズ』

吐き捨てるように言うと、ハルトはアナザーウォッチを介してアナザーファイズへと姿を変えるとファイズフォンXに555 ENTERと入力する

『READY SHOT ON』

同時にアナザーファイズの右手にナックル型アイテムが現れ装備された

「な、舐めるなあ!」

「はあ!」

拳のカウンターを合わせるように放ったパンチはポセイドンを見事に吹き飛ばした

「が、があ……」

「これで」

再度555 ENTERを入力する

『READY POINTER ON』

『exceed change』

右足にはアナザーファイズポインターが現れたのを確認すると、アナザーファイズはそのまま足からポインターを発射してポセイドンの動きを止める

「が……があああああ!」

「せいやあああああ!!」

そのままポセイドンにアナザークリムゾンスマッシュが命中する筈だった

『テレポート…ナウ』

音声と共にポセイドンはその場から消え、キックが空振りしたアナザーファイズは着地したのであった

「今の…あー！」

ハルトは誰もいない事を確認すると、2人の元へと駆け寄るのであった

—————

その頃 近くの森では

「あははは！任せろって言って負けんのダサイ」

カラカラ笑いながら携帯電話をいじる黒髪ショートトの女性 スズネはポロポロになっっている同僚である レックを見下すように見ている

「何で邪魔しやがった！」

「それはこつちのセリフ…全く問題児はメナスやファイニスだけ充分なのよ、アンタまで勝手されたらクジョーの胃に穴が開くわよ」

「……………わーったよ」

「それで魔王さんの力は？」

「アレで未完成ってなら怖えな」

「ふーん……じゃあ少し遊んでみようかな私も」

スズネは仲間に近寄り介抱する、ハルトに目線を向けたのであった

横槍は気の毒でしかない

ハルト宅でウオズが何故か正座している二人に視線を向け

「では我が魔王、紹介しますジョウゲンとカゲンです」

「ジョウゲンです宜しくお願ひします、魔王様」

「カゲンです、先程はありがとうございます」

軽薄そうなのがジョウゲンで寡黙なのがカゲンか覚えたよ

「俺は常葉ハルトつてもう知ってるか、宜しくね2人とも、それと足痺れるから正座辞めて良いよ、それと俺に敬語とか使わなくて良いからね、魔王様とか辞めてね」

笑顔で答えると二人は固まったように

「……」

「我が魔王、私は？」

「ウオズは別……それデフォルトでしょ？」

「ええ感謝しますよ我が魔王」

「そっか、じゃあ宜しくね魔王ちゃん」

「ジョウゲン!？」

「良いの、良いの、俺的に助かるからさ宜しくねジョウゲン」

「では、私はハルト様と」

「まあ良いや宜しくカゲン…さてとじゃあ買い出しに行くから3人は留守番お願いね」

「供しますよ我が魔王」

「ウオズはダメ、2人の面倒見てあげてよ」

「ですが」

「買い物位一人で出来るから、あ…二人は何か食べられないものある?」

「いえ、何も」「はい」

「そっか、じゃあ行つてきまーす」

ドアを閉めた後 二人はウオズに詰め寄り尋ねた

「ねえねえ!本当にあれが魔王様なの!」

「偽者ではないのか!!」

「貴方達…支えるべき主君の事も忘れる程ボケたのですか?」

ウオズが何言つてんだ、お前らみたいな目で同僚を見ると

「いやいやいやいや!だって魔王様って、もつと怖い感じじゃん!玉座に腰掛けて『猿

め』とか言つてたじゃん!」

「一時期は『圧政を通して平和を』という何処ぞの破壊大帝レベルの暴君だったぞ！」

「一体何がどうして未来でああなった！（のだ！）」

「それ我が魔王の前で口にしないでくださいね、ショックで泣きますので絶対」

—————

『聞こえてんだよなあ』

「うん……本当未来の俺がマジでごめんなさい…」

ハルトは未来の自分を理由は何であれ殴る事を決めた瞬間であった、アナザーディケイドが肩に手を置いてくれてるような気がする…目から滝のように汗が…

「さて、せめてものお詫びに美味しい飯を作るとしよう！おー！」

そのまま近くのスーパーに買い物に行こうとした時

『!!!』

ノイズ襲撃の警報が鳴った

「ええ……………」

ハルトは怒りで肩を震わせながらアナザーウォッチを取り出す

「空気読みやがれ、ノイズの屑どもがあー！」

『ジオウ』

アナザージオウになると双剣携え現れた場所へと向かうのであった。

一連の流れを屋上から見ていた者がいた

「アレが巷で噂のアナザーライダーという化物か…どんなものかと思えば普通の男じゃないか」

その子は金髪を三つ編みし眼下にいたアナザーライダーを見下ろしていた

「まあまあマスター、人は見た目によりませんって…それにガリイちゃんわかっちゃいました」

「何がだ？」

「あの人間……………きつと綺麗事言ってますけど大義のために全てを壊しちゃう面倒くさそうな奴って！あははは!!」

そう宥めたのはゴスロリ風の出立ちの少女は笑っていた

「はあ…本当、お前は性根が腐ってるな」

「そう作ったのはマスターですって」

「ふう……こんなもんか」

アナザージオウの足元には大量の炭素が転がっている。それがノイズだったものだと
言うのは語るに及ばず

「あ、アナザースライダーだ！アナザースライダーが来てくれた!!」

「は？」

双剣を肩に担いで声の方向を見ると、そこには逃げ遅れた人達がいた

「あ、あんたノイズを倒せるんだろ！だったら俺達を守ってくれよ!!」

「そうじゃ！儂の護衛をせんか？金ならいくらでも払う！だから儂だけでも!!」

醜く縋り付く老人が男を突き飛ばしながら懇願すると

「このジジイ！」

「なんじゃ！」

人間、命懸けの場面だと地金が出るな…取っ組み合ってるよ…うわあ お願い！と周
りから涙ながらに懇願されているが

「知るか、俺は俺の敵を倒したただけだ…さっさと避難しろ邪魔なただけだ」

その手を払い、アナザージオウは別の場所に向かおうとすると

「あ、ありがとう!!」

その子供から言われた言葉に

「ん、気をつけてな」

手を軽く振ると、アナザージオウは瞬間消えたのであった

そして別場所に現れた ノイズを消して回っていると

「見つけたぞ! アナザーライダー!」

「はあ……またアンタ等か」

双剣を構えて見るが物怖じしていない…うーん

「今度こそ拘束させてもらう」

「やなことだ、どうせ俺に乱暴する気なんだろ! 薄い本みたいに! 薄い本みたいに!!」

「奏…薄い本って「翼は知らなくて良いんだ!!」そ、そうか…」

「テメエ……無垢な翼になんて言葉教えやがるんだ!」

「うっせえバーカ！毎度の如く帰宅の邪魔されてる、こつちの身にもなれ！」

「逆ギレだと！テメエが同行しねえのが悪いんじゃないか！」

「同行出来ない理由があるんだよ！察せ！」

二人の言い合いをしている間にノイズが大量に二人の元に集まっていく

「奏！」

「邪魔！（だ！）」

キレ気味の二人が振るった槍の一撃でノイズ達は壁に減り込むように吹き飛び炭素に返った

「ええ……」

凄いと感心するが理由が理由なので何とも言えない翼だった

「だーかーらー！私等はテメエをどうこうしようとする気はねえんだよ、その力について聞きたいんだけなんだ！」

「だったら俺からは話す事はない、これ以上過干渉するな」

流星に学習して欲しいんだよなあ！と本気で相手しようと思っただが……ん？

何か近づいてくる音が……はっ！やったぜ！

「つー訳で、チャオ！」

アナザージオウが高く飛び上がると同時にアナザータイムマジーンが通過、そのまま
乗り飛び去ったのである

—————

変身解除したハルトは別場所で買い物を済ませ、家への帰宅途中の事

「ふう……これで良しつと、後は準備つと」

「おい、お前」

「ん？」

声をかけられたので後ろを振り向くが誰もいない……まさかと思いい視線を下に向ける
と、いたのは金髪三つ編みをした女子であった

「俺？というより君、親は？迷子とかなら交番に行く？」

行きたくないけどと思うが良識的な対応だろうと割り切るが

「はあ……何故、貴様のような人間がアナザーライダーなのだ？」

「何のこつ？」

息するような嘘で誤魔化すが

「惚けても無駄だ、貴様の変身姿は此処にある」

幼女が指を鳴らすと立体映像が現れると、そこにはアナザージオウへと変身する自分の姿が おーう、ばれてーら…

「バレてんのか…何者かな君は？」

幼女は顔を上げて不適な笑みを浮かべる

「オレはキャロル・マールス・ティーンハイム、しがない錬金術師だ」

その光景を上階から見ている ウオズは不敵に笑いながら

「さあて、どう動きますかな我が魔王は？」

「ウオズちゃん、どしたの？」

「我が魔王が客人を連れてきそうですので準備をしましょうか、お前達」

「うむ」「了解く」

と二人と共に用意をするのであった。

錬金術師拾いました

ハルト宅

前回、キャロルという自称 錬金術師に身バレされたハルトは用事があると言うことで家上げたのだが

「つて訳」

「成る程…それで我が魔王は身バレしたので保身の為に幼女を誘拐したと…見損ないましたよ！我が魔王！」

逢魔降臨歴に書かれている台詞を読んでいるように見えるが明らかに迫真に迫るよ
うに言われたので

「悪意ある解釈ウー！いや、ちよつ！ウオズ!?誤解だから！この子なんか俺に用事あるつて!!俺の趣味は違うから！俺が好きなのは黒髪ロングの儂げなお姉さんタイプだから
！」

「まあまあウオズちゃん、魔王ちゃんは今は奥方様所か彼女だっていないんだから可愛

い子に声かけられたら仕方ないよ」

「今のハルト様はロリコン……?」

「よしお前等、今すぐそこに直れ!修正してやる!!」

拳を振り上げようとするハルトを見て二人は安堵するように

「やっぱり魔王ちゃんじゃん」

「ああ…安心したぞ」

「何を基準に安心してんだ!!」

この一幕を見ていた自称 錬金術師のキャロルは凄いものを見る目をして

「おい魔王、貴様…従者にどんな教育してるんだ?」

「あ…いやこれは…」

「…未来の彼から教わりました」

異口同音とはこの事だな…それと

「やっぱりアイツ、一回ぶっ飛ばす!」

色んな意味でお話が必要だ

「さて冗談はさておき「冗談かは俺が決めるぞ」…キャロルと言いましたか我が魔王に何
用でしょうか、事と次第によっては」

そう言うところジョウゲンとカゲンはジクウドライバーをつけており、手にはライド

ウオッチが握られ起動体制に入っている

「安心しろ別に貴様等と戦うつもりはない、世間を騒がせているイレギュラーがどんな奴かと思っただけだ」

まあ、と被りを降ったキャロルは冷めた目でハルトを見て

「まさかこんな変人とは思わなかったがな」

「「そりゃそうだ（です）」」

また異口同音になるので思わず

「何で俺アウエイ？」

「まあオレからすればノイズを倒せる秘密を知りたいくらいだな」

「わからないだろう」

「ああ…何故ノイズを倒せる？」

キャロルの問いにハルトは笑いながら答えた

「俺もわからない」

後ろで3人で転けているが知った事ではない

確かに今更だが、どんな仕組みでノイズ殴ってるのか聞いてみよう

—————

教えて！アナザーW先生！

『はいはい！って変な番組始めんな！』

思わず台パンをかますアナザーWに

『お前の意見は求めん』

雑壇に座り暴君ぶりを発揮している一人

『アナザーディケイド!?』

裏切られたと言う顔をしているが、どうでも良いと言わんばかりにアナザーディケイドがフリッップを出した

『今日の議題は何故、ノイズを殴れるのか！だ』

「知りたいんだ！おせーて！おせーてよ!!」

『まったく仕方ねえな…ノイズってのはこの空間では透明人間みたいなもんで、人を襲う

時だけ本体がこの空間に現れるのは知ってるよな』

「今、初めて聞いた!」

『んな訳あるか!前に話したぞ!!…まあ良い、んで本来ならアナザーライダーの攻撃も連中には効かないんだが……』

『俺の力が連中に効くようにアナザーライダーの力を調整しているのだ』

アナザーデイケイドが胸を張る、いや答え知ってるのかい!けど何でアナザーデイケイド?

『こいつのオリジナルを考えろ、そうしりゃわかんだろ』

あ…あーそうかデイケイドか…何でもありだからな 不死の怪人 アンデットを倒したり

清めの音じゃないと倒せない魔化魍を払ったりしてるからな…そりゃノイズにも効くのか

『そう言う訳だ、分かったか?』

「はい!」

『んじゃ次回、需要があればな』

0. 5秒で行われた上記のやりとりであったが結局のところ

「んーと……世界の破壊者の力のお陰？」

としか言えなかつたがキャロルは解答がお気に召さなかつたのか不機嫌そうに「何だそれは？ふざけてるのか」

「いやいやふざけてないって」

両手を振りながら答えると

「はあ……まあアナザーライダーの力がこの世界の法則を無視できる力があると言う事は分かつた……それでだ貴様はこの世界で何をする？」

何をするねえ

「取り敢えず旅かな」

「旅だと？」

「俺は帰るべき場所に帰る旅の途中でな、その時の土産話のネタあつめて所よ」
「って事は武闘派アイドルとのエンカウントは凄いな？」

「まあ良い、オレの計画の脅威にならんなら構わんさ…暇するぞ」

「そっか、まあ飯だけでも食べてけ…でないと大きくなれないぞー」

「余計なお世話だ！第一オレは！」

と話していると空気を読まずに呼び鈴が鳴る

「ウオズ、悪い」

「かしこまりました我が魔王」

「けど、俺宅配なんて頼んだかなあ？」

首を傾げているとウオズは宅配を受け取り宛先を見て驚愕し血相を変えて箱を持つ

てきた

「我が魔王!!我が魔王から贈り物です！」

「嘘っ!」「何だと!」

「いや未来の俺だと知ってるけど、ややこしいわ!!」

エプロン着ていたハルトはツツコミを入れるがキャロルはキョトンとした顔をして

いる

「未来？」

「後で話すから取り敢えず、ウオズ!箱を置け」

「はっ」

ちやぶ台に置かれた箱を囲んで四人は思案する

「この狙ったように我が魔王から贈り物とは」

「お中元のハムとかじゃないの？」

「魔王様は、そんな律儀な事はしない！」

「そうだよ！きつと爆弾か何かだよ！」

騒ぐ二人にハルトは冷めた目でツツコミを入れる

「いや過去の自分にテロ仕掛けるとか無いだろ」

「その前に二人の暴言はお咎めしないので？」

「うん、取り敢えず未来の俺に本気のグープパンチを入れる事にしたから大丈夫」

取り敢えず俺の性格から見ても、爆弾なんか送る訳ないと思ひ

「どうせ俺の強化アイテムか何かだろ、開けるぞ」

カッターで封を切るハルトにウオズはすかさず

「いやその理屈は可笑しい、確かに特撮のお約束ではありますが…」

「つし、開けられた……こ、これは!!」

ハルトは箱の中身を見て目を輝かせた

「仮面ライダーオーズのDVDコンプリートBOXだ!!」

箱をさながらシンバのように天高く掲げて喜びの舞を踊るハルトと

『ヴェハハハハハ！この王の物語だな…ハルトオ…全力で楽しめえ!』

いやお前の話じゃないだろうアナザーオーズ…だが

「その通りだ！ウオズ！」

「レコーダーは此方に」

「よし！直ぐに作るから皆は先に見ていてくれ！」

ウオズにDVDを渡すと駆け足で厨房に走るハルトを見てDVDをマジマジと確認すると

「何故、我が魔王はただのDVDを？」

「きつとアナザーオーズの能力研究しろって意味じゃない？」

「ハルト様の気分転換かもな」

「かも知れませぬ、魔王の深淵な考えは我等には理解が及びませんから」

「いや、何も考えてないんじゃない？」

「ジョウゲンの台詞は我が魔王に報告しますか」

「いやちよっ!」

「折角です、キャロル殿も見ていかれますか?」

来客にもウオズは薦めると

「ほお…魔王の力に関連する情報なら一見する価値はありそうだな」

この世界には仮面ライダーはないのでキャロルはアナザーライダーに関連した情報と判断すると着席し頬杖をついて見ていた

仮面ライダーオーズ視聴中

そしてハルト作の料理を食べ終え、夜も深くなっていた頃

「うう……アंकウ!!」

オーズ最終回に涙を流しながら、机を叩くハルトがいる隣で

「……………」

空いた口が塞がらないキャロルがいた

「どうされましたかキャロル殿？」

ウオズが尋ねるとキャロルは真面目な顔で

「に…人間の欲望とは、このような力を生むのか…。」

と戦慄していた主にメダルの器が暴走してる所で

「はい？」

「あのDr. 真木という科学者の技術力は侮れん…これが魔王のいた世界の話とはな」

何か勘違いしているキャロルにウオズは諫めるように

「あの、キャロル殿？何か勘違いを…。」

「おい魔王、あのメダルはどうやって作られたのだ！」

「へ？800年前の錬金術だけど？」

「れ、錬金術だと！…それならばオレにもあのメダルを作れるはずだ!!」

「キャロルちゃん？」

「情報感謝するぞ魔王！失礼する!!」

そう言うなりキャロルは小さな結晶を地面に落とすと魔法陣が現れ、彼女は何処かに

消えた

「あ、アレ？あの子マジで錬金術師なの？」

ハルトの問いにウオズは溜息を吐きながら

「この本によればキャロル・マールス・ティーンハイム、彼女は世界を解剖する為に世界に挑む錬金術師と書いてあります」

ウオズが逢魔降臨歴片手に話した内容を聞いて

「正体知ってたなら早く言え!!え？じゃあ何だ!?!キャロルちゃん、仮面ライダーオーズ見てマジでコアメダル作ろうとしてんの！」

胸ぐら掴んでガクガク揺らすハルトだがウオズは普段通りの顔で

「恐らく」

「こ、これやばい人にやばい知識渡したんじゃ」

まさか仮面ライダー関連の技術が斜め上の方向に流出するとは…と震えていた

「結果そうなりますね」

「どうしよう」

「大丈夫でしょう、彼女なら」

「どう意味だよ？」

「まあ、少し待てば分かりますよ」

ウオズはフツと笑うと逢魔降臨歴を閉じたのであった

数日間ノイズの出ない平和な日々が続いていたある日、再びあの魔法陣がリビングに現れると中から現れた キャロルが自慢げにハルトに一枚の銀色のメダルを見せる

「見ろ、魔王！セルメダルのハッピーバースデーだ!!」

「マジでやりやがった!!スゲエ!」

「当然だ、オレに出来ん事はない…だがコアメダルの精錬法がな…」

「オーズもつかい見ようか、そしたらヒントがあるかも!」

「そうだな…すまんもう一度見させて貰うぞ」

「勿論!」

ハルトはDVDをレコーダーに入れながら考える

「コアメダル出来たら、治せるよね?だったらアंक復活も夢じゃない!そしたらアナザーデイケイドの力を使って彼女を仮面ライダーオーズの世界に行つて、映司さんにつかの明日を来させてあげるんだ!」

「この欲望の力…思い出よりも集めやすく際限がないし効率も良いOこれはチフォー

ジュ・シャトーの良い燃料になるぞ…計画の前倒しも検討するか？いや待て、ここは慎重に行くぞ、まずはガリイの体の収集能力を思い出からメダルに変えてと…」

「んじやキャロルちゃん、再生するよ」

「ああ頼む」

側から見れば仲良しに見えるが互いに腹黒い本音は隠している事を誰も知らない

—————

ハルト宅の屋上にて3人が集まって何か話をしていた

「しかし我が魔王は恐ろしい方だ」

「止めなくて良いの？」

「私が進言して止まる方とでも？」

「未来なら知らず、今なら素直に聞く」

カゲンの言葉にウオズはやれやれと被りを振り

「確かにそうでしょうが、彼女との協力関係は強みになる…まあそれに我が魔王が気づいているかですが」

「気付けないよねえ〜」「ああ…」

「まあ至らねば我等が全力で諫めるまでの事ですよ…さて、我々も観に行きま【!!!】はあ……」

「ノイズの警報だね」「哀れな」

同時にウオズの携帯に着信が入る

『ウオズ』

「どうされましたか我が魔王?」

『ノイズの奴を消してくる』

「畏まりました、ではお供しましょう」

『頼む、ジョウゲン達は?』

「そうですね二人にはキャロル殿の相手でもして貰いましょうか?」

『そうだな二人には悪いが客人の対応を頼むぞ』

「はっ!!」

電話が切れると同時にアナザータイムマジーンが上空に現れるとウオズは乗り込み現場に向かうのであった。

—————

アナザータイムマジンから降りたハルトはビルの屋上からノイズを見下すようにし怒りの形相のまま吐き捨てた

「ノイズが……俺の至福の時間を邪魔する罪は重いぞ……」

口調が変わるほど怒りを抱いている中、アナザーウオッチを起動するとアナザージオウに変身し双剣を構えると、そのままノイズの山に入る

「ふう……哀れな雑音め空気を読めば死なずに済んだものを」

同時に山は爆散、炭素の山となるとアナザージオウら高笑いしながら現れるとエネルギーの斬撃をノイズを吹き飛ばす

話し合いとは……？

ここはノイズ対策を行う国の専門部署にしてシンフォギア奏者の活動場所 通称
特機物

その会議室の一室にて

「はいはい、じゃあ会議を始めるわよ」

開始の言葉を告げたのは茶髪に白衣と眼鏡を着た女性 櫻井了子 彼女はノイズを倒せる方法やシンフォギアの基礎部分に当たる櫻井論文の作者であり世界的に名前を知られている科学者である

その場集まっているのは彼女を除き4人

1人は巖のような大男、彼女達の頼れるリーダーにして特機物の長でもある風鳴弦十郎

弦十郎の補佐役件、ツヴァイウイングのマネージャー そして忍者である緒川真二
そしてツヴァイウイングの2人である

「議題はアナザーライダーについてね」

了子は資料を何枚か捲りながら説明する

「まず言える事はあの力は、未知の力って事ね」

「未知だと何らかの聖遺物等ではなく？」

「色んな姿に変わる聖遺物なんてないし独立稼働する聖遺物なんて以ての外よ、それに聖遺物の波形とは異なるエネルギーの波長はあったわ、今後はその波長を盛り込めば探知も容易に行える筈よ」

「助かる了子」

弦十郎の礼に首肯して更に続ける

「今分かってる所としては、アナザーライダーは能力に応じて複数の姿を持つてる事ね」
ホワイトボードにはアナザージオウ、カブト、オーズ、ウィザード、鎧武、ドライブと今までツヴァイウィングが邂逅してきたアナザーライダー達の写真が貼られていた

「恐らく基本形態は、この双剣持ち其処から機能に特化した形態に変化する事」

「アレが基礎形態か……しかし」

「ええ、アナザーライダーの共通点其の2は明らかに怪物に見える外見と…体の何処か

しらに名前と思われる文字と年数が書かれている事ね」

「そう言われ拡大されたのはアナザージオウ 其の顔には小さいがZ I—O 201
8と書かれている」

「基礎形態の名前はジオウ、それと他の形態でわかってるのは カブト、オーズ、ガイム、
ウィザード、ドライブね特にドライブやウィザードは高重力や魔法？と思われる能力を
有してるから注意が必要ね」

「はいガイムは近接戦も強いですな私と奏でもギリギリだった」

「しかも手加減していて、それだからな」

2人はそれぞれの感想を述べると、緒川が続けるように

「そして、アナザールライダーの元に現れる謎の男 ウオズ」

と写真を貼り付ける

「アナザールライダーを魔王と呼び、何故か姿を変えると祝詞？を上げますね」

「また神出鬼没でアナザールライダーでさえも出現には驚く程だからな」

それぞれ意見を挙げる中、弦十郎が呟く

「しかし彼等の目的は何だ？」

その言葉に皆が一様に考え始める

「確かにノイズを倒していきませんが、何か狙いがあるようには見えませんね…それに此方に攻撃する時は正当防衛が成立してから攻撃しますからね…過剰防衛気味ですが」
「そうねネットの書き込みでも、避難しそびれた人を助けたりしてみたいだから悪人ではないみたいだけど…」

「だが我等との話し合いには応じない…：：：はあ、あの力のメカニズムがわかればノイズを倒すのも…いや…：：：まずはアナザールライダーの目的や動向を把握せねばならぬ」

「ええ、今では米国を初めとして世界各国がアナザールライダーの身柄を秘密裏に迫つてますからね」

「一刻も早く、アナザールライダーの身柄を確保しなければ彼の身柄も危ない…だが同行にどうやったら応じてくれるか」

「ウオズに説得を頼みますか？彼が唯一アナザールライダーへの窓口ではないかと」

「わかった、一先ずアナザールライダーと邂逅に併せてウオズとの接触も図ろう」

イレギュラーの存在に頭を悩ませる面々であつた

—————

一方 件の彼はと言うと自室で横になりながらテレビを見ていた

「しつかしノイズに会うのつて、通り魔に遭う確率くらいなんだろう？それに連続エンカ

ウント重ねる俺達って」

どんな人生生きたらそうなんだよ、とゴチるが

『まあ貴様は通り魔よりも凄いものとエンカウントしたがな』

そりやそうだ一生分の運を使ったまである

「まあな」

はあ、と溜息を吐くと暫くして何を思ったのか外行きの服に着替える

『どうしたよ?』

「買い出し、夕飯の食材買わないと」

それだけ言うとは気分転換も兼ねて散歩に向かうのであった

そして最近、足繁く通うショッピングモールにて

「なあ良いだろ?別に」

「ちよつと俺達と遊ぼうぜ」

「……………」

その一角で女性をナンパしている2人がいた

何処にでもいるんだな、まあ確かに黒髪ショートで綺麗な顔立ちしている女性である

が、あの人種はと思うが触らぬ神に祟りなしと言わんばかりに無視して通りすがろうとしたら

「あー！ いたいた… たく遅いの待たせないで変な人にナンパされたじゃない」

「は？」

俺に近づいて腕を組んできた、こいつ俺を巻き込みやがった!! そうなると自然と

「おいテメエ、何してんだよ」

「そーだ俺達が先に声かけたんだよ、まさかその冴えない奴がツレか？ ならそんなつまらない奴捨てて俺達と遊ぼうぜ」

煽ってきてバカ共の言葉を聞いたら何故だろうか、俺の従者達がキレたような気配がしたぞ

「はあ………面倒くさ」

「ああ!! なんだと」

「何で俺がお前達みたいな猿に時間を使わないとならないだろうか？ はあ………厄日だ今日」

吐き捨てるように手で顔を隠すと顔を赤くしたナンパ男AとBはキレた感情のまま拳を振り上げた

「テメエー！ふざけんじゃねえー！」

そのまま殴りかかるが遅い、遅すぎるよ

「えーと、こうして……こうして……こうだっけ？」

男の拳を避け、そのまま男に迫ると相手の勢いを利用した背負い投げする

「があー！」

「おお……流石アナザーゴーストやドライブ先生、見事に飛んでった」

ハルトが投げたのは2人のアナザードライダーのおかげである原典でアナザーで警察官であった変身者仕込みの護身術である。これのお陰で素人ならば迎撃も1人で可能である。

驚いた顔をしている男だがナンパ男Bも負けじとハルトに殴りかかる

「この野郎!!」

やはり遅いパンチに呆れた目をしながら男の拳を受け止めると、そのまま握力で拳を握りつぶしにかかる

「あ、があー！や、やめろ!!」

「何？先に仕掛けたのはそっちでしょ？」

膝を軽く蹴り転ばせて、よろめくのもお構いなしに握る力を強めると

「わ、わかった!!もうその女に手をださねえ!だから離してくれ!!」

「やーだ、もう二度こんな真似出来ないくらい心を折らないとね」

笑顔のまま力を更に込めていくが

『止せ、ハルト…力の使い方を間違えるな』

「……………わかった」

アナザーシノビに言われたら仕方ない辞めてやる、手を離すと そのまま跪いている
ナンパ男達にハルトは目が笑ってない笑みを浮かべ

「二度と俺や彼女に近づくな、近づいたらこんな所じやすまさねえよ分かったら消えろ」
「ひ、ひい!!い、いくぞ!!」

ナンパ男2人が離れたのを確認してハルトは自分の腕を組んだ諸悪の根源を睨む

「アンタもだ」

「え……………あ!助けてくれてありがとう、巻き込んでごめん」

「へい、んじや二度と巻き込むな」

ハルトは手を払い買物に戻る、やれやれ面倒だったと思っていたが

「……………」

「……………」

何故か付いてくるんだが？はあ…

「何か用？ナンパ男なら出ないだろうに」

「いや巻き込んだお詫びでもしようかなとね」

ヘラヘラ笑っているが

「どうしたんだい？」

「ナンパなら他を当たって、面倒だから」

「良いじゃない、減るものじゃないし」

引き下がらないなあ…：しゃあないウオズ達には冷凍食品食べて貰お、とメールを送る

「悪い、お前ら」

—————

その頃、ウオズ達はこの世の終わりと言わんばかりの顔で同僚に言う

「お前達、我が魔王から今日は冷食と」

「何だと！」「そんな！一体何が！」

「我等はいつの間にか我が魔王の機嫌を損ねてしまったのか！」

「あの食事が食べれないなど！」

「こうなったら魔王ちゃんに直訴に行こう！」

「おう！」

ウオズは2人と一緒にマフラーで転移したのであった

—————

何故だろう、俺の従者達があらぬ勘違いしているのよ……

「んで、何処に付き合うの？」

「えーと…あ、名前聞いてない」

「常葉ハルト、アンタは？」

「白鳥錫音、スズネで構わないよハルト君」

「初対面で名前呼びかよ」

「良いじゃない、守ってくれた騎士様にね」

「その騎士を望まぬ暴漢退治させたの誰だよ？」

「はは！気にしない気にしない、そんなんだからモテないんだよ」

「何で俺がモテないの知ってた？」

「さあね〜」

なんか変なのに憑かれたなど割り切るが今日だけの関係と割り切り行くとした

—————

その光景を最寄りの喫茶店でお茶しながら見ていた白軍服姿の2人の男性と2人の性別不詳の者が2人いた

「何でスズネの奴、魔王に接近するなんて言ったんだ？」

そう答えたのは先日、魔王と一戦構えた仮面ライダーポセイドンこと レックである
「彼女なりの考えがあるのでしよう、ならば私達は成果を待つだけです」

眼鏡をかけた男、クジヨールは2人を見ていると

性別不明…だが態度はあからさまに正反対な2人 1人は無関心に、1人は嫉妬に満ちた目で

「どうでも良いわよ早く行きましようよ」

「スズネの奴め…魔王と逢引だとお…許せない！」

「フィーニス落ち着きなさい…メナスは関心を持って下さい、スズネの作戦の結果次第では我々も表舞台に上がるのですから」

「お！んじゃ大将！」

「ま、それもスズネ次第ですね」

「頑張れスズネ!!俺は早く暴れてえんだ!」

「貴方は先日許可なく暴れましたよね?」

「うぐっ!」

「しかもアナザライダーなんぞにボコられてスズネに助けて貰ったと聞いたぞ…はあ……早く終わらないか?こんなの時間に時間をかけるのは無駄でしかない」

「でしたらメナスには別命をフィーニスとレックは監視を願います」

「分かった」

「大将はどうすんだよ」

「私は少し予定がありますので…では解散としましょうか」

クジューは財布を開いて会計をしようとしたが冷や汗一滴かいて一言

「皆さん、割り勘にしませんか?今の私のマイブームです」

「しまらねえな大将!!」「はあ……」

—————

ハルトは暫く彼女、スズネが満足するまで買物に付き合っている

「はあ…疲れる……ん?ウオズ?」

知らないうちに通知が来ていたようでハルトは留守電を確認すると

『我が魔王!!我等に至らぬ点がありましたら謝罪させていただきます!だから!!どうか夕餉だけでも作って頂けませんか!!』

要約するところな感じだが

「え?何?怖っ」

俺、料理に変なの入れてないよなどと心配になると

「ごめん、待たせたかな?」

「別に」

「そっか……じゃ[!!]っ!の、ノイズ!」

最早馴染みすぎる位の警報が耳を打つので

「んじゃ避難するぞ〜」

「え!?!」

「シエルター……だっけ行かないと」

「う、うん!」

何故か以外の顔をしているがアナザーライダー見られている以上、変身出来ないの

何処か適当な所で引き離さないとならないな

そう考えているとノイズ達が立ち往生していた、不味いなあ変身しないとダメだけど見られている…：…何とかならないかと考えていると

「避ける!」「行っちゃうよーん」

『ゾンジス』『ザモナス』

『TIME BREAK!!』

聞き覚えのある声と電子音と共に緑と青のライダーが急降下キックを叩き込んでノイズを爆散させた

「っ!」

慌てて爆風から彼女を守ると、ハルトは視線を前に向けた

「っ!!!」

そこにはマントをつけているが何処となくハルトが前の世界で見っていたアマゾンズやシンのような有機的なビジュアルのライダーが立っていた、何故わかるかだど? だって

「らいだー?」

顔に書いてるからだ、と考えていると

「祝え!魔王を守護する為に時代を超えて現れた!2人の戦士!その名も仮面ライダー

ゾンジス、仮面ライダーザモナス！正に生誕の瞬間である！！
(ウオズ！グットタイムング！)

取り敢えず後は任せた！と目で語るとウオズも了承したと返し、スズネの手を取り安
全な場所まで向かう

「ふう……ここまでくれば大丈夫だね」

シエルター近くにきた後

「うん……ハルト、もう少し一緒に「悪い他にも避難し遅れた人がいないか見てくる！」
ちよっ！」

スズネから離れた、ハルトはそのまま走り出し近くの証明写真撮影用の機械の中に入
ると

「ふう……まさか、この手つて本当に通じるんだな」

『んじゃ、ハルト行こうぜ！』

ああ、んじゃ

「変身！」

ウオッチのスイッチを押し、ドライバーに添えてアナザージオウへと変身したハルト

は先程仲間のいた場所まで走るのであった

その頃、別れたスズネはブチギレていた

「あーくそつ!!!もう少いで魔王の連絡先聞き出せたのに!!ノイズのクソ野郎が!!」

近くの灰皿を蹴倒すと鞆に隠していた指輪を右人差し指につけると腰に添える

「ちっ、こうなつたら」

『ドライバー・オン…ナウ』

手を添える認証機 赤い縁取りのハンドオーサーを傾けると左人差し指に顔のよう
な意匠の指輪をつけた

『シャバドウビタツチ・ヘンシン♪シャバドウビタツチ・ヘンシン♪』

場に合わない軽快な音楽が鳴るとスズネは指輪をドライバーに添えた

「変身」

『チェンジ……ナウ……』

魔法陣が通過した後、現れたのは金色の鎧にマントをつけた魔法使いである

金色の魔法使い 仮面ライダーソーサラ

『テレポート…ナウ…』

ソーサラーはテレポートで姿を消したのであった

—————

「ふっ！」

ザモナスはノイズの群れに専用のボウガンで射撃しノイズを爆散させるとゾンジスは負けじとノイズの腰を抑えるとそのままバックドロップをして沈める

「もう一丁！」「行くぞ！」

その頃、ゾンジスとザモナスの戦いぶりを見ているウオズの元に新たな人物が現れた、気配を感じたウオズは逢魔降臨歴を閉じて相手の顔を見る

「ふう……そろそろ私の所に来ると思いましたよ、風鳴弦十郎殿」

「気づいていたのか」

殿のような大男が現れたがウオズは冷静に

「ええ、この本によれば我が魔王と相對する為貴方が現れると記されていますので」

逢魔降臨歴を叩きながら言うとき

「ウオズと言ったかな？ 私は「ご」存知ですよ」なら話は早い…アナザライダーと話す場を設けてくれないか？」

「何故、私が貴方達の言うことを聞かねばならないのでしょうか？」

露骨に嫌な顔をしていると

「頼む、でないと日本政府を始め世界各国がアナザライダーの身柄を強引に確保して兵器利用する恐れがある！」

「だから日本政府が保護したいと？ はあ…結局、政府は我が魔王を兵器運用するでしょうね最悪モルモットだ」

前にも言ったが俺の大事に手を出すなら等しく敵だろうハルトなら本気でやりかねないし

（歴史的にもやめてほしいですよ、予定に無い早期の覚醒は）

「そんなことさせない！ わ「貴方達の言葉等信頼に値しないですよ、宮仕の貴方は上の指示には逆らえないのでしょう？ あと」何だ？」

「私に命令して良いのは後にも先にはあの方のみ…我が魔王は鉄風雷火の三千世界全てを支配するに相応しい方だ、国家の利権など矮小な物差しでしか考えない貴様等とは立っているステージが違うのですよ」

「そ、それは…世界相手に宣戦布告すると言う事か」

「誤解なきよう、我等は我が魔王の日常を害する者を排除してのみ…全てはあの方の御心のまま…もし…その日常や望みを害するのが国家や貴方達ならば…全力でお相手しましょう」

「ウオズ、話を壮大にさせるな俺はそんな人間ではない」

まあ何もしなければ何もしないと返すウオズの笑みを浮かべると恭しく臣下の礼を取る

「ご冗談を我が魔王の力を持つてすれば朝飯前です」

「お前の冗談は冗談に聞こえるので怖いわ…朝飯？食べてないや…食つときや良かったなあ…ああ違う違う…」

その場にアナザージオウが現れた

「話は大体聞いたが…この人が？」

目線が弦十郎に向く、その仮面を引き剥がされたような顔を見て正面から見て後ずさ

る

「やっぱり顔怖いみたいだな」

「ええ、彼は武闘派アイドルの上司ですね」

「何？今までの詫びにでも来たの？」

「いいえ、どうやら我等の身柄を確保とそれによる交渉したいと」

「却下だ、一考にもならない」

「何故だ！君達はノイズを倒している！ならば我々と勘違いするな俺は自分の日常に異物がいるのが我慢ならないから排除するにすぎん」っ！」

ピシヤリと断るとアナザージオウは肩をすくめながら続ける

「俺は俺と大事な者に危害を加える者の敵だ貴様等国家の思惑やら利権やら何やら知った事か」

「その力で助けられる人が沢山いてもか！」

そりゃいるだろうさ沢山、けど

「どうして顔も名前も知らない不特定多数の人間を救わねばならんのだよ」

これで話は終わりかと？ 尋ねるも無言で返されたので

「では帰るとしよう、ウオズ：…すまないが夕餉はカレーで構わないか？」

「滅相ありません、我が魔王のカレーならば2人も喜びましょう」

「うむ、そうかならば早く終わらせ『ライトニング：ナウ！』ん？」

空を見上げると巨大な魔法陣が浮かんでいる未来視するまでもない

「お前達！今すぐ下がれ!!」

「っ!!」

その声に従い回避すると同時に落雷の雨がノイズに降り注ぐ、落雷が止むとそこには炭素の山しか残らなかつた

「今のは」

やばい威力だ、下手すれば2人も死んでいたかも知れない…

『魔法だな、しかも俺と同じ系列の』

アナザーウィザードの言葉に納得がいったよ指輪の魔法…

「つて事は」

上を見上げると、そこにいたのは

「ソーサリー！」

「私を知っていてくれて嬉しいよ、魔王」

仮面の下でスズネは楽しげな笑みを浮かべていたのであった

何が来ると未来予知をして構えてみる

『ハルト変われ！俺がやる！』

ダメだアナザーウィザード…相手も同じ能力だし、相手の魔法の底がわからぬ以上は迂闊に仕掛けられないよ

「さてと単刀直入に言おう……」

何を要求する気なんだと身構えていると

「我等の仲間にならないか？共にくれば元の世界に帰してやろう」

何言ってるんだ？

「やなこと、俺は自分の足で帰りたいんだよ」

で
「ただけ時間がかかってもな！と答えるとソーサラーは、ほおと感心したような声

で
「その果てが未来で最低災厄の魔王でもか？」

「あのなあ、ウオズ達は俺を魔王だの何だので持ち上げてるけど俺自身は魔王所か王様になる気はない！てか最低災厄って何だよ？」

超ヤバイじゃん

ソーサラーの言葉にハルトは耳を疑う

「君は元の世界に帰れない、そして災厄の魔王になる運命なんだよ」

「世迷言を言ってるじゃねえ!!」

ドライバーについてるアナザーウオッチを押しつけてドライバーをなぞりエネルギーを溜め斬撃を放った エネルギー攻撃はソーサラーが指輪を変えると

『ルパッチマジック・タッチゴー！ルパッチマジック・タッチゴー！デイフェンド！…ナウ』

魔法陣を展開して防御した爆炎が上がる中で

「ウオズ！」

「はっ！」

その言葉を合図にウオズは3人をマフラーで包み込むと転移して撤退した

「ふう……ん、撤退するだけの理性はあったか……僕も帰ろうか」

「待ってくれ！君！先程の言葉は一体……」

「その言葉の通りだよ、アナザージオウ……彼は遠くない未来に全てを滅ぼす災厄の魔王になるんだ、じゃあねえ」

『テレポート、ナウ』

ソーサラーが転移して消えた時、弦十郎は何も言えないような顔で空を見上げるのであった

その頃 ハルトはと言うと

「ふう……出来たぞカレーだあ！食べたい奴は並べえ！」

「「はっ！！」」

すぐに並んだ3人を見て

「素直で宜しい！今日は助けてくれたお礼もこめてカツも加えよう、カツカレーだ！」
「おおおお！」「やったぞー！」

「カツカレーで喜ぶとは、ふっ…子供な」

「んじやウオズには追加のチーズや温玉はなしで」

「カツカレー、素晴らしいですな！」

「安定の手のひら返しだな…まあ先食べてて俺は少し話があるから」

アナザーウオツチを見せながら言うと

「かしこまりました我が魔王」

「おう」

そう言うのとベランダに出る、もう直ぐ秋になるうと言う季節故に少し寒いな

「さて…あの時、ソーサラーの言ってた事だが」

その問いにアナザーデイケイドが答えた

『ああ、貴様は魔王になる…最低災厄のな』

「ならどうすれば避けられるんだよ！」

『その答えを貴様は知っているだろうに』

「俺に最高最善の魔王になれってか？」

『ああ』

「なら俺は……仲間達にとつての最高最善の魔王になる！俺が助けられる人なんて決まってるんだからな」

『良からう、俺達も全力でお前を助けるとしよう』

「宜しく」

『所でお前は後ろを見る面白い事になってるぞ』

後ろ？っ!!視線を向けるとウオズ達が喜びに満ちた目をしていた

「祝え！我が魔王が魔王への偉大なる一步を記した瞬間を！」

「おおおお!!」

近所迷惑なバカ3人を沈めるのに時間はかからなかったのは言っておこう

その頃、ネオタイムジャッカー本部では

「ギャハハハハハ！逃げられてやんのダツセエ！」

「アナザライダーなんぞに逃げられるとは」

「黙れ屑ども」

「はい」

笑ってるレックと呆れてるメナスを一瞥したスズネは怒っていた

「まあまあ2人とも、しかしスズネ…私情と仕事を混同するのは感心しませんねえ」

クジューも珍しく咎めるような口調で言うが

「良いじゃないさ、私が仲良くなれば向こうも手加減してくれるかもよ？」

「彼は何れ、倒すべき敵という点もお忘れなく情が移れば」

「分かってるよウツサイな」

ボタンとドアを閉めたのを見て、レックはメナスに問う

「どうなってるんだ？」

「さあ？」

肩を竦め分らないと答えるが、フィーニスは面白く無さそうな顔をしている

「クジヨー」

「却下です、その役目はスズネに任せましょう」

「ちっ」

「フィーニスは舌打ちして詰まらなさそうにしているが

「確かに適任だろうけどよお大将、良いのか？」

「まあ良いでしょうね彼女は

魔王が滅ぼした世界の生き残りなんですから」

潜入と？

前回 ソーサラーとエンカウントした結果

仲間にとっての最高最善の魔王を目指す事にした俺 常葉ハルトは現在

「魔王、見てくれセルメダルが完成したぞ」

「おお……」

技術流出させてしまった相手がマジモンのライダーアイテムを製作した事にドン引きしています

キャロルはタカのマークが入ったセルメダルを見せながら話す

「お前のお陰で感謝するぞ、これで効率よくエネルギーを集められそうだ予定も繰り上げれそうだ助かる」

「そりゃ良かった」

エネルギーって何だ？まあ良いや

「それで、キャロルちゃんは暫く何するの？」

「ああ……暫く引き籠もる事にしたある物を作りたくてな」

「ごくり……一体何を……」

尋ねるとキャロルは堂々と告げた

「コアメダルとオーズドライブだ！」

「お願いだから紫メダルは作らないでね！」

高速の返しだったと思う世界を無に返されたくないからな俺のせいだ！

「先ずは基本形態のメダルからだな、まあ虫ベースの緑系は簡単だろうが」

哀れなウヴァさん……可哀想に……俺はガタキリバ大好きです

「出来たら見せてね」

「当然だ、貴様はオレの協力者だからな……ああそうだ困ったら使うと良い」

とキャロルから投げ渡されたのは前回転移に使ってた赤い結晶だった

「これって？」

「転移結晶だ、色々と人気者みたいだからなお前のファンに会ったら使うと良い」

「まあ……ありがたく」

懐に治すと

「だが…一つ困った事になつてな」

「困った事?」

キャロル曰く、何でも嘗ての錬金術師友達にメダルの事がバレたらしい

「何でバレたんだ?」

「ああメダル増やす為にヤミーを作ろうと、そいつ目掛けてメダルを額に投げたら外れたんだ」

「理由シヨボ!」

「それで簡単にメダルの効能を説明したら、貴様に会わせろと言つてきてな…何とかならんか?」

「うーん…オーズ見せるだけじゃダメ?」

「この世界に仮面ライダーの良さを布教したいのだが」

「ダメに決まつている、貴様の力だろう!」

「それを再現したのはアンタだけだな」

「それで、近々その組織の人間が来る事になつている名前は…」

い キャロルの言つた名前はハルトにも聞き覚えのある名前であつたのは言うまでもない

それから数日、ハルトはお馴染みの面々を加えて散歩に出ていた

「いやあー！平和だねえ今日も肉が美味しい！」

後は転移のエネルギーが溜まればスタコラサツサと行くだけよ　このまま平和なままならばと割り切る

「我が魔王、しかし宜しいのですか？」

ウオズが聞いてきたのには理由があった

「ん？冬のバーベキューも乙だろう？」

ハルトがエプロン姿で肉串を焼いていたからである

「い、いえ……」

「あ！まさかアレルギー的なものが!？」

しまったと言う顔をするがどうやら違うようである

「違いますか……その……」

「何さっ？」

「彼処で我々より食べている方々を止めなくて宜しいのですか？」

「ん？」

その目線の先には一心不乱に焼いた肉串や野菜、魚串焼きを食べている3人の女性がいた

1人は綺麗な銀髪の男装の麗人、1人は露出過多な衣装を着た美人、1人はカエルのぬいぐるみを抱きかかえている女の子…キャロルがメダルを投げたのはこの子らしい…今日、紹介を得て来たのだが…

「良いんじゃない？長旅で腹減ってるらしいし、それに外で食べる方が美味しいよなあ！…そうだろう、お前達!!」

空腹で倒れそうだったのでバーベキューにした

「おお!!」

両手に酒瓶を持って現れたジヨウゲンとカゲンを見て、ウオズが驚く

「っ！お前達…酒臭っ！」

「良いじゃないの〜今日は無礼講らしいしい」

「それに飲めないなら食べる、学習能力がないな…ハルト様！次は魚を頼む！」

「はいよー！ちよつと待ってなー！」

最早、魔王よりもテキ屋の兄さんが似合うハルトにウオズは天を仰いでいるが向こうは一息ついたようで

「ふう……：……申し訳ないわね」馳走になって」

「本当よ、局長が旅費ケチるからマトモに食べられなくてお腹と背中がくつつきそうだったんだからあゝ」

「まあ美味かった訳だ」

礼を言う3人にハルトは笑いながら答えた

「そりゃ良かった、あ……締め焼きおにぎり食べる？」

「是非!!」

この光景にウオズは逢魔降臨歴と睨めっこしていた

「この本によれば彼女達もキャロル殿に負けないような錬金術師の筈なのだが……うむ」

情報と違う そう考えていると酔っている2人が笑いながら近づいてきた

「まあ魔王ちゃんの料理は最強って事だね」

「その通りだ……それよりウオズ」

「何だろう？」

「食べないなら魔王ちゃん特性の焼きおにぎりは貰うよ！」

「頂く！」

「待て！それは私のだ!!」

懸命に皿を守るウオズと焼きおにぎりを狙うジヨウゲン、カゲンのコンビを見てハルトは

「食べ物で喧嘩しない！2人には俺の分の焼きおにぎりやるから！ウオズも食事中に俺の歴史を調べない！」

そう怒ると3人は肩を組みコソコソ話す

「ハルト様…魔王というより」

「オカン？」

「まあ下手な家政婦よりも家事全般出来ますからね」

そして縁も竹縄になって来た頃、焼き終えたハルトは近くの椅子に腰掛けた

「ふいふいやあ！作った作った！」

満足と言わんばかりに笑顔でいると

「隣良いかしら？」

「どうぞどうぞで」

相席した男装の麗人 サンジェルマン

何でもパヴァリア光明結社という錬金術師組織の幹部らしい

そして垢抜けた感じの人はカリオストロ、カエルのぬいぐるみを持っているのがプレ

ラーティ、彼女がキャロルにメダルを投げつけられた人とか

「まずは感謝を…本当にあの局長め…」

どうやら局長とやらは結構問題児らしいな

「あはは…良かったら余った肉とか野菜あるから持つてく？」

空腹で困る人は見捨てたくないなあ

「是非、しかし特務二課との会談は拒否したのに我々の会談には快く応じたのは何故？」

特務二課…確かあのゴツツイ人と武闘派アイドルがいる組織の事だな、いやまあ

「大元迎ればキャロルちゃんの一件は俺が原因みたいな物だからな」

仮面ライダーオーズを見てマジのセルメダル作るとは思わなかった、俺？アナザー

オーズの力で何枚でも持つてますが何か？

「私達からしても画期的な発明よアレ」

その一言に思わず心の中で拍手喝采があがる

流石日本を代表する特撮ヒーローだと

「まどろっこしいのは嫌いだからハッキリ聞くけど、君達何しに来たの？メダルの製法ならキャロルちゃんに聞いた方が早いし俺に会う理由ないよね？」

一応、この場では一番偉いので少し威圧混じりで話す

「私達パヴァリア光明結社は貴方達と相互不可侵関係を提案したいわ、アレだけの技術……他にも有してるのでしよう？」

「無いと言えば嘘になる」

アナザータイムマジーンとかアナザートライドロンとかアナザーデンライナーとか色々と

「局長も今は藪を突いて蛇には噛まれたくないらしいし、貴方達も今は敵を増やしたく無いでしよう？」

サンジエルマンの言葉には一理ある。

キャロルという現地協力者を得ているが公的組織に与する事の出来ない身の上の為、どうしても協力云々はアングラな組織になる

アナザーWに調べてもらったが、このパヴァリア光明結社とやら色んな勢力に色んな技術を渡して支援もしているらしい

不可侵というのは気になるが今は敵対勢力は少ない方が良く、ネオタイムジャツカーの件もあるしな

「不可侵条約の締結は承知した」

「早いわね、仲間と相談しなくて良いの？」

「即断即決、俺の好きな言葉だ…それに不用意に敵を増やしたく無いのはそつちのいう通りだからな」

実際、本格的にネオタイムジャッカーと戦う以上は現地勢力との敵対は避けたい状況的に避けられないなら仕方ないが

「わかったわ、何か必要なら言つて用意するから」

「良いのか？」

「食事のお礼だ久しぶりに美味しいものを食べたわ…貴方、あつちで店開かないかしら？」

「店ねえ…ははっ、良いかも…ならそんな時は頼むわ客なら歓迎しよう」

「ええ、帰るわよ2人とも」

「ええ…まだ食べたらないわよ」

「同じく…次いつまたご馳走様に有りつけるか分からない訳だ」

「彼から幾らか譲つてもらえたから我慢なさい」

サンジェルマンが言うのと納得した2人は取り敢えず帰る事にした

「じゃあまた」

「ええ」「では」「ばいばいー!」

転移した3人を見送ったハルトは一息ついて

「店なあ」

仮面ライダーアギト 津上翔一さんはレストラン AGITOを開いていたな…俺も店か…いやいや

「絆されるな!!」

帰るって言うてるだろう!だが…進路の一つに加えておくとしよう

「どうしたの魔王ちゃん!」

「い、いや何でもないよ」

挙動不審ではあるがな!しかしサンジェルマンから親書代わりに渡された情報 ハルトは怪訝な表情が記載された紙を見せる

「ネフリシユタンの鎧 起動実験ねえ」

完全聖遺物

シンフォギア に使われるような聖遺物の破片と違い、破損なく現存している聖遺物の総称 その力はシンフォギア に勝るとも言われている

ーアナザーW調ベー

「シンフォギア奏者が奏でるエネルギーを使って鎧を起動させよう……その為にライブを行うって、これ国家機密なんじゃねえの？よく調べられたなパヴァリア光明結社」

ヒラヒラと紙を見せるハルトにウオズは少し思案気味に考え

「恐らく起動実験に便乗して何か狙っているのでは？情報もそちら経由で漏れたのかと」

ウオズの推論でほぼ正解だと思いが

「つまり連中に情報を流した内通者がいるって訳ね……そりゃバレる訳だよ……つか内通者がいるなら尚の事、連中との協力は無しだ、ウオズ」

身内に裏切り者がいる組織など信用できないと決断すると

「はっ！」

「さっさと片付けて帰るぞ、あと」

ハルトの視線の先には酔っ払ってシートの上で冬の寒空の元、寝てる2人に

「2人を叩き起こせ、でないとな風邪を引くぞ寝るなら帰って寝ろ」

「直ちに」

ウオズが2人の元に向かったのを見て考える

このライブ……俺達が介入すべきか否か……と自分では決断に悩むので少し目を瞑

り、自分の精神世界に埋没すると

アナザーライダー達が酒盛りしていた

「お前等、人の中で何酒盛りしてんだよ！」

「良かろう？ 貴様等もしていたではないか」

「そうだけども……まあ良いやお前等に相談がある」

「そのライブへの介入の是非か？」

「おう俺の中でメリット、デメリットしているけど心配でな」

とアナザーライダー達にライブ介入のメリットとデメリットを話した

メリットは完全聖遺物を確保しての戦力増と他勢力との交渉のカードに使える事だ

今までのように脅される前提の対外関係の改善が狙いでもあるが

デメリットは完全に二課の連中と黒幕である誰かを敵に回す事

「まあ仕事の武闘派アイドルは出張らないから楽勝でしょ、だとしたら司令的な人だけだろぅしい」

とヘラヘラ笑っていたらアナザーデイケイドが神妙な顔で言った

「あの組織のボスが……こんなんでもか？ ビルド」

「ん、ほいっと」

アナザービルドが空間投影した映像には、拳打で岩を砕く男 風鳴弦十郎であった
「……………あの人さ、ネビユラガスとか吸ってる？それともブラッド族とか？」

「いいや純粹な人間だ」

「あ、わかった！アギトなんだあの人！覚醒したんでしょ！」

「いや人間だって…」

「嘘だ！皆、俺を騙そうとしてるんだろ！あんな人間がこの世に居てたまるか！」
「で、どうする最大の障害は奴だぞ」

「そうだよなあ…よし」

「アナザーシノビで行こうか様子見も込めて」

「良かろう、潜入調査ならお任せあれ」

そして意識を浮上させる

「ふう…………ライブの日だけど、あの2人も動けるようにしておいてくれ」

「はあ潜入なら我が魔王1人でも可能では？」

「陽動と用心だ、実行するなら連中の目を完全聖遺物から逸らす必要があるし罨の可能

性もあるから…無理なら別のタイミングを狙うさ、取ればラッキーくらいで行くよ」

「畏まりました我が魔王」

—————

ある女性達にとっては運命の転換点と言えるライブが始まった。そこに混ざった異物も舞台上上がる事となった

ライブ当日

「ふう…：…何とかなるものだね」

ライブスタッフを3名程、縛り上げてスタッフTシャツや身分証を拝借し会場に潜り込んだのであった

「そうでしょそうでしょ!…どうこの変装!」

そこには同じように変装しているジョウゲンとカゲンの2人もいる、ウオズはアナザータイムマジーンで待機中である同行しないと聞いたなら

『私までコスプレしては見ている人が混乱する』との事であるが

「ウオズがメタい気もするけど驚いたよ、ジョウゲン達にこんな特技があるなんて！」

「これは織田流忍法、この術である奴にしてやられたのでな」

「へえ………ん？織田流？」

何か凄い名前が出たような気がするが気にしたら負けだ 取り敢えずは

「見取り図はあるけど、流石に鎧の場所は書いてないか」

「書いてたらバカだぞ」

「ですよね……じゃあ二手に分かれよう」

「OK、んじゃ魔王ちゃんは俺とカゲンちゃんは「俺1人でやる、2人でそっち」ちよっ

！」

行く先決めるとハルトは回れ右して走ろうとしたので2人は慌てて止めに入る

「それは危険だ！」

「敵地にいるのに安全な訳ないでしょ大丈夫だから、任せて」

ハルトは周りに誰も居ない事を確認するとアナザーウオッチを起動してアナザーシ

ノビに変身した

「では、いざ参る！」

陰に隠れたのを確認すると

「んじや俺達は魔王ちゃんに言われた通りに情報を集めるか」

「どうする？ウオズにドヤされるぞ？」

「しやあないよ魔王ちゃんが決めたんだからさ」

と2人は任せられた仕事をこなすのであつた

—————

2人と別れた後、近くに無線LAN接続部を見つけた ラツキーと思ひ音も立てずに着地すると アナザーキカイへと変身する

「ほいっと」

右手の触手を伸ばし、無線LAN接続部から情報の流れを探すと見つけた

「ふむふむ……鎧は地下か……となると……ん？」

監視カメラの映像を見つけてみると武装した輩が何名がコソコソいるのが分かつた

「競争相手か……うーん……そだ」

相手が盗んだ所を奪うとしよう、無駄な手間は向こうにかけてもらおう！↑主人公です彼

「んじや後は隠れて「隠れてなんだい？」っ!!」

背後から声をかけられたので触手を仕舞い構える

「ソーサラー……」

そこにいたのは金色の魔法使い 仮面ライダーソーサラーであった

「やあ、会えて嬉しいよ魔王！」

何故か嬉しそうだが

「俺はカケラも嬉しくねえけどな」

アナザーキカイはアナザージオウに変身する

『ジオウ』

この閉所での戦闘ではソーサラーの魔法も使えない、連中の狙いが同じなら大規模な魔法は使えない、ならば近接戦かゼロ距離魔法だろうか

双剣を構えて仮面の下で笑った

近接戦なら俺に部がある 地の利を得たぜと言つても何故ここに

「悪いね、この世界の歴史をキミにめちやくちやにされたら困るんだよ」

「は？何言つてんだ？」

「簡単に言えば……完全聖遺物は君に奪わせないよ魔王！」

――

『エクスプロージョン ナウ……』

「うわああああ！」

爆散

――

未来視完了、させるかあ！

『エクスプロージョン……ナウ』

「ちい！」

『ウィザード』『テレポート』

爆破と同時に魔法で撤退した

「また逃げられたか……それに」

今の魔法でスプリンクラーや警報がなった連中が来るのも時間の問題

「しょうがないか」

『テレポート…ナウ』

ソーサラーは撤退したのであった

—————

近くの場所に転移し

「逃げ仰せたな…よし」

ハルトはファイズフォンXで連絡を取る

「ウオズ、俺だ…ネオタイムジャッカーと会敵した撤退するぞ、藪蛇は『我が魔王！お逃げください！』は？」

ウオズからの伝言でハルトは驚きの顔をする事となる

『ノイズの大軍が現れました、会場は大混乱！ジョウゲンとカゲンが戦闘中です！』

「了解、すぐ向かう」

ハルトはファイズフォンXをしまうと真っ直ぐ会場へと走り出したのであった。

運命のライブ

その頃 ライブ会場は地獄絵図となっていた

ノイズの襲来で老若男女問わず炭素と化し会場は助かりたいが為に逃げ出した人の押し合いへし合いによってパニックになっていた

それは高い所から見ていた従者達もドン引きする位に醜い有様である

「うわあ…これマジで？どうしようカゲンちゃん？」

「ハルト様から連絡はない…心配だ」

「だよね、どうしたものか…」

ジョウゲンは考えてみる、ハルトと連絡が取れない以上 現場判断で動いても問題はないだろう ハルトの性格上 その辺咎めるとは思えないし…多分

『命大事に!!死んだら生き返らせてもつかい殺す!』

と言うだろう、いや怖いな

「それに誰の狙いかは知らないけど魔王ちゃんや俺達を陽動か何かに使ったって事だよ
ね？」

あの方に従う身として、主君を顎で使われたとなれば不愉快極まりない、それは隣の
同僚も同じようで

「気分が悪いな…潰すかジヨウゲン？」

「そゆこと、んじや行くよカゲンちゃん」

2人はジクウドライバーをつけて、ライドウォッチをスライドさせ起動する

『ザモナス』『ゾンジス』

2人はウォッチをドライバーに装填すると背後に互いの頭部を思わせるような時計
の意匠が空間投影される、ジヨウゲンはフツと笑いながら、カゲンは右手でJの字を作
り構える

「変身」

2人はジクウドライバーを回転させた

『RIDER TIME』

同時にジョウゲンの体は爆風を起こしノイズを炭素に返した

2人の体はライダーの姿に変わり、頭部には文字が収まる

『仮面ライダーザモナス！（ゾンジス）！』

「じゃあいつくよお！ほいとー！」

「ぬんー！」

ザモナスは専用ボウガンでノイズを狙い打ちながら降下する、ゾンジスは持ち前の頑丈さでそのまま着地、そしてノイズの足を掴むとジャイアントスイングして投げ飛ばした

流石の乱入にツヴァイウイングも驚きを隠せないでいた

「お前達!」「何でここに!」

「ああ？そんなの後、今はこいつ等が先!」

専用ボウガンで連射するが、やはり数が多すぎる

「ゾンジス!」

「任せろ」

ゾンジスは新しいライドウォッチを起動した

『ロボライダー』

するとゾンジスの胸部が展開し体から大量のミサイルがノイズに降り注いだ

「よし、ザモナス！」

「はいよー！」

『FINISH TIME！ザモナス！TIME BREAK！』

ザモナスは必殺技を発動し強化した専用ボウガンでノイズ達を炭素に返した

「今は味方って見て良いんだな？」

翼が刀を構えて確認するとザモナスはヘラヘラ笑いながら

「敵対したいならするけど？」

とボウガンを向けて放つ

「っ！」

しかし矢は奏の背後にいたノイズを的確に射抜いたのであった

「何てね、ほら早くしなよ逃げ遅れた人を避難させないと」

「言われるまでもない！」

と4人で共闘するが数が減る気配が一向にない。しかし

『!!!』

「この音…エンジンか？」

「だよな救助のヘリにしては音が大きいような…」

意味のわからない2人と対象的にザモナスとゾンジスはやれやれと言う顔をしていた

「やつとか」「遅いな」

「魔王様」

アリーナの壁を打ち抜いて現れたのはアナザートライドロン、直進だけでもノイズを炭素に返し、タイヤから放たれた攻撃により大型のノイズも殲滅させた、するとドアが開くと中から現れたのは、アナザードライブである

「ふう……ううやっぱり早すぎる……酔いそう……けど、まあ無事そうで何よりだお前等」
足がふらついているが無事であろう

「まあね、それよりも魔王ちゃんもアナザートライドロンで来るあたり急いでたんだねえ」

「ば、バカ言え！走るなんて体力の無駄遣いをしたくないだけだ！」

「ツンデレだ」

「うっさい！とにかく先ずは連中を塵殺だ、お前等！あの雑音を一匹残らず殲滅しろ！」
「御意！」

ザモナスとゾンジスは再びノイズを潰しに動くアナザードライブも介入しようとしたが

「アナザードライダー、一体どんな風の吹き回しだ？何故、私達を…」

「ザモナスが言ってる？どうやら俺も黒幕に踊らされてた訳か……はははははは!!」

手で顔を覆いながら笑うアナザードライブは遠隔操作でアナザードライドロンを爆破させながらであるが怒りを爆破させる

「誰かは知らんが、必ず潰してやる」

広範囲攻撃、広い場所ならうってつけのやつがいる

「出番だぜ神！」

『神かあ…悪くないが……私は王ダア!』

アナザードライドロンは消えるが数には数と行こうか

『オーズ』

アナザードオーズになると胸部のオーリングが緑一色に染まった

『クワガタ・カマキリ・バッタ』

『ガータガタガタキリバ！ガタキリバ!!』

すると同時にアナザーオーズが増殖し始めた

「うおおおおお!!!」

「行くぞー!」「おりゃ!」「せいやあ!」

一通り増殖を終えるとアナザーオーズ達はノイズ達の駆除に当たるが何人かは動かずに待機している

物量戦で仕掛けたろうに逆に物量で圧倒されるとは…ねえねえ!今、どんな気持ち!?
どんな気持ち!と聞きたいものである

その光景にツヴァイウイングは驚きのあまり固まり、ザモナスとゾンジスは

「魔王ちゃん……やっぱりヤバ」

「ああ……恐ろしい」

待機組は5人、円陣を組むようにしてウオッチを取り出す

「初めてだなあ……こうやるの」

「ああ、楽しみで仕方ない!」

「行くぞ…夕飯の仕込みがあるからな」

「そうだな…今日はどうする？」

「夜は焼肉しよ!!はははは!!」

一人だけノリのおかしい奴がいたがスルーである、全員違うアナザーウォッチを持ち起動した

一人は巨大な体躯の古代の戦士

『クウガ』

一人は夢を呪う鯨

『ファイズ』

一人は闇に堕ちた太陽

『カブト』

一人は友情の否定者

『フォーゼ』

そして彼らの歴史を束ねる 裏の王

『ジオウ』

まさかのアナザーライダー集合会である、いやアナザービルドいないんかい！

「つしやあ！デカいのは任せろ！」

アナザークウガは飛翔して、火球を吐きながら大型ノイズを蹂躞する

「んじや、俺は一気にやるぞ！」

『ランチャー・ガトリング・ファイヤー…オン！』

両足に火器のモジュールとヒーハックガンを構えて一斉射撃、狙いをつけなくとも当たる広範囲攻撃はかなりの物である

そしてアナザーファイズはと言うと

「なあなあアナザーカプト」

「何だ？」

隣でノイズを炭素にしたアナザーカプトに勝負を持ちかける

「俺のアクセルと、お前のクロックアップ…いい加減どっちが平成最速かハッキリしようよ！」

「ほお、望む所だ…」

『待ちなさい！私も!!』

『俺も参戦したいぞ！』

「シノビとドライブは出番が多いからダメ(だ)」

『そんなあ！メタすぎないかしら!!』

『殺生な!』

「んじや2人は審判お願いね!」

『仕方ないわね…じゃあ位置について』

そう言うとなアナザーファイズの体が急に熱を帯びると体が赤く染まり始めた

そしてアナザーカブトは冷静に腰のスイッチに手をかける

『用意…ドン!!』

『START UP!』『CLOCK UP!』

音がるる刹那、彼等の進路上にいたノイズはアナザーファイズに殴り飛ばされ、アナザーカブトの拳打で壁にめり込む

『3』

『2』

『1』

アナザーファイズのカウントダウンがまるで勝負終了の合図のように響く

『TIME OUT』『CLOCK OVER』

同時に彼等の世界から帰ったきたと同時にノイズ達は全て炭素に帰るのであった

「俺のが一体多かつたな」

「何を言っている、俺の方が多い」

拉致が開かないので

「……審判!!」

そう問いを投げたが

『『見える訳ないだろう（じゃない）!!』』

結果 引き分けである

その頃 アナザージオウはと言うと

「なあ、いつまで見てるんだ?」

すると魔法陣が現れたソーサラーはあり得ないものを見るような目と声音で

「何故、共闘している」

「不可抗力」

「何故……関係ない人を守る!!」

「ん〜次いで？死なれると気分悪いし、手の届く範囲だから助けようかなあ〜って」

「っ!!なら何故、災厄の魔王になった！何故私のいた世界を滅ぼした!!何故、私の父さんと母さんを！姉さんを殺したんだ!!」

ソーサラーの慟哭を聞いて理解した

ああ、またお前（アナザーオーマジオウ）かと　っーか世界滅ぼしたのか彼奴め…

「未来の俺、何してんだよ……本当…」

「そうだ！貴様が死ねば私の両親が未来で死ぬ事はないんだ！だからお前は倒す!!今日
！……で!!」

『ライトニング……ナウ』

「っー」

雷の魔法を回避したアナザージオウは双剣を構えて未来を見る、先読みしろ相手が広範囲魔法使ったら大変だな

「俺はアイツと違う未来へ進む！頼れる仲間と一緒に！その果てにアナザーオーマジオウになってしまおうとしても！最低災厄じゃなく最高最善の王になる！」

「口では幾らでも言える！！嘘を言うなあ！」

『ライトニング…ナウ』

「まあ、俺は王にはなりたくないんだけど本当はね…今だー」

「アナザージオウが合図すると待っていましたと言わんばかりに「があああああああ!!」

アナザークウガが雷に打たれるのであった

「「はっ」」

それを見てアナザーフォーゼ、ファイズ、カブトは驚くしかないのだが

「何だ…その仲間を盾にしてるじゃないか！」

「はっ！いつから仲間を盾にしていると錯覚していたよ…まあ感謝するぜ進化への電気をどうしようって思ってたからな！」

「クウガ…雷…まさか!!」

「んじゃ任せたぜ!!」

同時にアナザークウガの体に黄金のラインが入り姿を変える

「ふはははは！漲る、漲るぞ！はははは！」

黄金纏いし偽りの戦士 アナザーライジングクウガ 生誕

「祝え!!全アナザーライダーの力を統べ、時空を超えて過去と未来を統べる時の王、その力の一端、その名もアナザーライジングクウガ!!新たなアナザー生まれし瞬間である
！」

「っしやあー！」

アナザーライジングクウガはそのまま空高く飛び上がると火球と拳打で大量のノイズを炭素に返し、炭素の雨を降らせる

「認めない……こんなの認めるものかあー！」

『ライトニング……ナウ……』

ソーサラーが雷の魔法を再度放つが照準が狂い、アナザージオウではなく天羽奏に向かう、避けようとしたが背後には幼い女の子が

「ちくしょう!!」

槍を回転させ止めれたが破片が威力を殺さず女の子の体に当たってしまう

「……………」

「死ぬな！生きるのを諦めるなよ!!」

「退いてくれ……これは不味い……早く医者に連れてかねば……アナザーファイズ、カプト！」

アナザーフォーゼが倒れた女の子の容態を見る：

「仕方ないな」「だね選手交代く」

そして2人はアナザーウオッチを新しく起動した

『ドライブ』『エグゼイド』

アナザーフォーゼは新しいモジュールをアナザードライブはタイヤを呼び出す

【メデイック オン】

【タイヤコウカーン！マッドドクター！！】

「応急処置は俺達がするから早くドクターかへりを呼べ！」

「わ、分かった！」

その光景はソーサラーに取って動揺を走らせるものとなった

「そ、そんな………私は……」

「まだ死んだわけじゃねえだろが！あの子を本当に死なせたくねえなら手を貸せ！」

「けど……私は……」

「はあ……本物の魔法使いがこれじゃあ、ダメだな……んじや今は」

『ウィザード』

「俺が最後の希望だ」

『フレイム』

アナザージオウはアナザーウィザードになり火球の魔法でまだまだいるノイズを消滅させるが数が多い、アナザーオーズも戦っているがまだまだ全滅には程遠いが

「お前、よく魔法使いになれたな！その指輪を使える意味を知ってるから言うけど、お前がどんな事に絶望したかは知らねえ！けどなあ、それでも諦めずに希望を持つてたから指輪の魔法使いになれたんだろうが！俺みたいに成り行きで得た力じゃない……本当の力だ！だったら誰かの希望になってやれよ！！仮面ライダー！！」

「っ!!」

燃え盛る炎の中、瓦礫の中で叫ぶ私がいた

「よくも父さんと母さんを！姉さんを!!」

その時の慟哭を聞いていた、あの災厄の魔王はこちらを見て一言

「知らん、近くにいた貴様等が悪い…覚えておけ小娘、弱い奴は死に様すらも選べんだ」

「ふざけ……があー!」

すると私の体がひび割れ、何が生まれてしまいそうになっていた

「ほお、ゲートだったのか…家族の死で絶望したか…ならば希望を送るとしよう私を殺してみよ、ファントム如きでは私を殺す事など不可能だ希望を抱き、誰かの希望となれる魔法使いに至れば貴様に殺されるのも藪坂ではない…ではな」

その復讐心のみか私の生きる希望となったのだ

—————

あの時 絶望を与えた魔王 その若き頃の彼が、希望を唱えるとはどんな因果だろうか……だが

「ふざけるなよ……」

「はっ？」

『デューブ……ナウ』

ソーサラーが分身すると全員が攻撃魔法の指輪を起動した

『エクスプロージョン！ライトニング！グラビティ！ホーリ……ナウ』

アナザーウィザード達の倍の速度でノイズが消えていくのが見えた

「へえ、やらあ出来んじゃない」

「黙れ、貴様を倒すのは私だからな……それに」

ソーサラーは今だ治療を受けている子供を見て

「あの子にしてしまった事の償いだ！私のような子供を二度と作りたくない！私こそが最後の希望だ!!」

「……………あれ？主人公変わった？」

「メタな発言はやめようか魔王ちゃん」

まあ大分数は減ったな、よっしやあ！

「一気にやるぞ」

『ルパッチマジック・タッチゴ―！…YES！ファイナルストライク！underst
and？』

「ソーサラー、お前が仕切らないでよ」

「そうだ！」

『FINISH TIME!!ゾンジス！ザモナス！』

「皆、喧嘩してる場合じゃないでしょ、行くよ！」

『フレイム』

「「「おう！」」」

アナザーウィザードは巨大な火球を生み出して宙に投げると、ゾンジスとザモナスは

サッカーボールの要領で蹴飛ばしノイズの群れに突っ込み爆散させると

「はあー!」

ソーサラーのライダーキックが残りの巨大個体の体を貫通させ爆散させたのであった

—————

「さて、皆さま運命の日と呼ばれるライブに介入した我等とネオタイムジャッカー…本来死ぬはずだった天羽奏の生存、それがこの世界にどんな影響を与えるのか…：…：…そして我が魔王の元に現れる新たなライダー…：その名も…おつと話が過ぎました、ここから先は皆様に取って未来の出来事…：でしたね？」

第二部 シンフォオギア 無印

第二部

それから数年の月日が過ぎた

あの後、あのライブで生存した人間にヘイトが何故か向かっていき魔女狩りのような様相を呈して社会的に問題となった

まあその時は流石に怒髪天をついたので実例を目撃した奴には 草加君の刑（首を折る音）を食らわせたり、アナザーデイケイドになってTV局を襲撃し、ライブ被害者に対してのヘイトクライムを止める様、警告：守られない場合の見せしめとして 廃墟を一つ更地にした

次はお前だと警告して姿を消したら、ヘイトクライムの数は減っていったのは言うまでもない

またライブでアナザーライダーが暴れている姿が見えたからか 彼等が黒幕とか変

な噂が流れたりした俺は無いわーと笑っていたがネットで書いた奴は次の日、ボコボコにされ逆さ吊りにあったらしい…何故か従者3人が目を背けたが真実は押ししてべしだな

あと、偶にキャロルやサンジェルマン達が遊びに来るようになった…キャロルはオーズがお気に召したのか三周目に入っている、偶にメダルの器とかハッピーバースデーとか色々聴こえているが気のせいだろう

んでノイズを倒す度に現れる2人、何処そのネズミと猫、もしくは怪盗の孫と警部のような感じで仲良く鬼ごっこをする日を送っている。ただ以前より態度は柔らかくなったのは気のせいではないだろう

ネオタイムジャッカー？あの日から暫く大人しいよ？

そんな感じであった

—————

「んだけどなあ…」

「どうしたのよ?」

何故か俺はあの後も白鳥錫音と不思議な関係が続いている、ふとした事で再会してからと言うもの買い物だったり色々振り回されていたりする、この間 バイク持ってるのがバレてからツーリングにも行かされたのであった

「んや、別に」

「そう言えば今日は大丈夫かい? 食事当番とか」

「あるちゃつあるけど、別に俺が作らないでも自分で勝手に作るだろうさ」

そう投げやりに答えると携帯に恐ろしい勢いで着信が入る…誰だよ? ウオズ…ジヨウゲン…カゲン…よし

取り敢えず着信拒否にしてと…これでよしと

「んで次は?」

「そうだなあ…おや?」

錫音は何かに目線が動いたのか

「ごめん、少し席を外すよ」

「へいへーい」

手を振り見送ると

『おいおいハルト、隅におけねえなあ』

『そうだ、あんな可愛い子と仲良くするなんてな』

俺の同居人が騒ぎ始めた

「そんなのじゃねえよ」

『そうか？ 貴様は彼奴と話す時、笑顔が多い気がするが？』

俺の事情を知らないからな、貴重な友人だよ

『はあ……』 x24

新たに増えた溜息の数からも分かる様に、この数年の間に新しいアナザーライダーが俺の仲間になった、令和の1号 ことアナザーゼロワンだ

『はい！アルトじやーナーナイト!!』

寒いギャグを言う事も多いがスピードや手数を生かした戦い方は他にはない凄みがあるのが特徴だ

「急に頭で騒がないでよ、ビツクリするから」

はあ、と溜息を吐いて詰まらないと思う

「なんつーか、土産話にもならねえ話題が増えてる気がする」

「お待たせ！」

「遅かったな…何買ってたんだよ」

錫音の持つ鞆に目を落とすと

「じゃーん！ツヴァイウイングの限定CD！特典付きだよ！」

どうやら此処でも、俺を追いかけてくるようだ…怖えよ最早

そんな2人を影で見ている集団がいた

「しかし我が魔王、着信拒否とは…」

「まあアレだけ鬼電すりゃ…ねえ」

「毎度の如く尾行しているが良いのか？」

まずはいつもの三馬鹿、そして

「スズネの奴、いい加減に魔王の寝首をかけよ！」

「まあまあレック、スズネはきつと大事な場面で『楽しかったよ貴方との恋人ごっこ！』ってやって魔王を曇らせたいたのでしよう」

「回りくどいなあ、もう早く終わらせてくれないかな？」

「ふわあ……帰って良い？」

ネオタイムジャツカーの4人である

そんなやり取りなど知らない2人は楽しく買い物をしていたが

「さて……俺は少し手洗いに……うん？」

「良いわよ？どうしたのかしら？……あら？」

ハルトの目線の先には三馬鹿がいた

「悪い、出歯亀した奴等に仕置きしてくる」

「いいわよ気をつけてね」

「へーい」

そのまま走り出したら三馬鹿も気づいたようで

「っ！見つけましたか」

「やばっ！」「逃げる！」

「逃すかあ！待てコラア！」

走り出したハルトを見送った後、スズネも

「さて……何か言い訳はあるかしらクズども」

「「「ありません」」」

説教タイム！

—————

無事、3人を捕まえたハルトは人気のない場所で説教をしている

「つたく……お前等なあ！」

何度目だ、と言いかけた時

『!!!』

ノイズの警報が鳴り響く

「おお……話は後だ、ノイズ片付けるぞ」

「錫音殿は？」

「まあ…助けに行く、お前等は先に行つて暴れて良いよ」

「はっ!!」

2人がジクウドライバーを取り出したのを見て、ハルトはアナザーウオッチのスイッチを押す。折角だし場に合わせるか

「変身!!」

『R I D E R T I M E!』

『ジオウ』

3人は変身した後、それぞれ散開してノイズを倒す事にする

いつも通り 無難に終わる……筈だった

—————

「ふっ…はあ!」

アナザージオウがエネルギーの斬撃でノイズを払っていた時の事だ謎の光の柱が登ったのであつた

「何…あれ!!」

『面白そうだな！見に行こうぜ!!』

「そうだな！ウオズ！2人にもあの光の柱に向こうよう言ってくれ」

「畏まりました我が魔王」

アナザーWに促されたので見に行く事にしたのであった。

そしてアナザージオウ達が現着した時、大槍を持った女性がいた彼女はアナザージオウを見るなり快活な笑顔で

「お、来たかアナザーライダー」

気さくに話しかけたので

「天羽奏か…息災なようで何よりだ」

「はは！お前さんが派手に暴れてくれたお陰でな」

「奏、世間話は後…先に片付けるよ…その後でアナザーライダー、貴方を確保する」

「やれるもんならやってみな」

「まあまあ喧嘩すんなよ…つかアンタもいい加減、こつちの話位聞いてくれねえか？」

「悪いな俺は、貴様達は別に嫌いではないがあこのライブの生存者を魔女狩りの対象にした上層部のやり口が気に入らんのだよ」

「そりや……はあ、しゃあねえか」

「まずはノイズを片付けるとするか」

アナザージオウは槍を肩に担いで飛び降りると翼も負けじと飛び降りる

「伏せろ(な)!!」

「へーはい!!」

その子も奏と同じような衣装を着ているが……見ない顔だな新入りか?と首を傾げているが

「らあー!」「ふっ!」

翼とアナザージオウの斬撃で周囲にいたノイズは炭素に帰った

「ふう……:よお、見ない顔だな連中の新入りか?」

「え、えつと……あなたは……」

「俺か?俺はアナザーライダー……ただの風来坊さ」

「お前みたいな風来坊がいてなるものか」

「そりやそうだな、まあ下がってな」

ドライバーのスイッチを押してエネルギーを溜めた斬撃でノイズを払い終えた

「ふう……んじゃ……つと！」

ガキイン！と甲高い音が鳴る

「邪魔が消えたな、今度こそ拘束させて貰う！」

「やなこつた、いい加減出来ないって学習しやがれ!!」

刀の剣戟を槍で止め、払い突くが同じように止められ罅迫り合いとなると

「あ、あの！戦わないで話し合いしましょうよ!!」

「戦場で何流暢な事を（言ってるんだ!）」

「ええ!」

「と言うが子供がいるんでな、怖い化け物はお暇するぜえ〜」

と力任せに槍を振り抜き翼を壁の奥まで吹き飛ばすとアナザージオウはスイッチを押した

「っ！奏!」

「はいよ!」

合図と共に飛び降りるが俺が変身する方が早いな

その姿はさながら赤いドラゴン、しかし戦いを否定する鉄仮面は人を戦いに駆り立ててしまう

戦いを求める赤き龍

『龍騎』

アナザー龍騎

「んじゃな！」

とアナザー龍騎は近くの水溜りに降りると吸い込まれるようにして消えていったのである

「今の……」

これが彼女 立花響との出会いであった

—————

無事全員で帰宅後

「ただいまー」

「ん？ハルトか…邪魔しているぞ」

キャロルが横になりながらテレビを見ていた、おい待て

「鍵かけてたのよな俺？」

戸締まりはしつかりていたのに!!と思つてると

「まあな…だがこの畳の裏にオレの転移座標を仕込んでおいたので、これさえあれば簡単に転移が可能と言うわけだ」

と自慢げに和室の畳を剥がすと裏面には俺にはわからない模様が刻まれていたが

「なんて錬金術の無駄遣い!!」

「この家の敷金が!!」

「いや、そつち!!?ウオズちゃん！」

「まあそれは後で、キャロルは何しに？」

「む？ああそうか…見てくれ!!」

そうキャロルがアタツシユケースを開けて見せてきたのは見覚えのあるドライバーであった

「バースドライバーが完成したんだ！」

「……………」

完成品にウオズは思わず逢魔降臨歴を落とすジョウゲンとカゲンは空いた口が塞がらない

「はははは……ヤベー!!」

ハルトは思った、オーズ見せない方が良かったんじゃないかね?と

『今更か…』

だが、そんな事より!

「キャロル、貸してくれ!!」

ドライバーを目にして満面の笑みを浮かべるハルトに

「ああ構わん、丁度モルモツ……んん! 被験者にと思ったからな知識面ではオレより先達な訳だしな」

「まあ……ん? なあ今、モルモツト言わなかった?」

「気のせいだ、ほらセルメダルだ変身しろ早く」

「おう!!」

まさか仮面ライダーに変身出来るなんて！と喜んでいたのが悪かったのかはたまた、浅慮で憧れに手を出したのが悪かったのか

バースドライダーを腰につけた途端、ファイズギアの変身エラーのように壁まで強い勢いで吹き飛ばされた

「ぎゃん!!」

「む?……ん〜」

キャロルは気になったのか自分の腰に巻き付けるが何も起こらない

「変身」

セルメダルをドライバーに入れて、ダイヤルを回すと ポーン!と言う可愛らしい音と共に装甲が形成されていく、各部に赤い模様が入っているが間違いない

仮面ライダープロトバースの誕生である

「出来たが?」

「嘘だ……」

ドヤ顔してらるだろうキャラルの顔を見て思わず叫んでしまう

「ウソダドンドコドーン!!」

何故だ！何故俺は変身できないのだ!!!

『そりゃそうだろう』

何故だアナザーデイケイド !!何故俺は仮面ライダーになれないんだ！

『この作品のコンセプトが崩壊するからだ、安易な変身など認めん』

メタいぞ!!色々と!!

『冗談はさておき、答えは器の性質だろうな』

容量？

『ようは貴様はアナザーライダーなら無尽蔵に取り込める、その代わりその他の力は受け付けないようだな』

なんつー極端な体質してんだ俺はアナザーライダーに愛されすぎだろ

『俺達全員を取り込んだ上にそれ以外を受け入れても暴走しないのも、それが原因だな』

そつか…まあ良いか…なら

「しやあない、ウオズ達で変身しなよ」

「ですが我々には力がありますので」

「だよなあ……取り敢えずコレの変身者はおいおい探すでしょう」

「そうか…残念だが貴様等に預けておくとしよう人選は任せた」

「うい」

アタツシケースを渡されたので嚴重に保管しておこう

「よし、じゃあ飯にするか…キャロルは？」

「勿論食べていくぞ」

「そつかい、んじゃ待ってな」

ハルトは手を振りながら厨房に向かうのを見てキャロルはウオズ達を見て

「貴様等、色々やってるが二課と迎合しないのか？」

「全力で断ります」

「ほお」

「我等の主君は後にも先にも常葉ハルトただ一人ですから」

「そーそー、魔王ちゃんのご飯美味しいし未来よりも断然優しいしね！」

「うむ！」

「そうか、ならば一つ面白い話をしてやる数年前の鎧の行方だ…取り返せば魔王の覚えも良いんじゃないか？」

「「っ!!」」

この一言で魔王達は 終末の巫女と相對することとなる

約束は違えない

新顔を見て暫くは何事もなく平和であった。時折生活圏外でノイズのトラブルが出ていたが俺には関係ないので無視しておく事にした

いや手の届かない場所まで助けませんよ。だがウオズ曰く 此方の居場所を悟られないようにしないとならないとの進言を受け、転移して暴れる時もある

んで久しぶりに近くに反応があつたと思つて来てみれば、ノイズはいない変わりに

「そう……じゃあ私と戦いましょうか」

「え！ええええ！」

翼か新人に切り掛かっていたのであつた

「おい見ろよ、何かすんごい事なってるな」

2人の戦いを近くの建物の屋上から眺めている4人、ハルトは呆れた顔をしながら眩

くと

「仲間割れでしょうか？」

「ねえねえ、どっちが勝つか賭けない？」

「そんなのどうでも良い」

「そうだなカゲンの言う通りだけどき…あの子多分」

ハルトの記憶に残るのはライブの時にアナザーライダー3人で応急処置した女の子に似ているのだ

「アナザーW」

『おう、言うと思って調べたぜ…ビンゴだぜあの時の子供だ』

「そっか」

「助けたいのですが？」

「内輪揉めなら無視するけど、当事者であり加害者が寄って集って嘗ての被害者を虐めてる構図は我慢ならんね」

あの時、全く関係ない第三者がやって廃墟を更地にした…ならば事態の当事者が被害者を攻撃するのはお門違いってもんだろう

「ウオズ」

「は！監視カメラの類はございませんから身バレはないかと」

「そうか、ジョウゲンとカゲンは待機…その後の指示はウオズに任せる…だが無理と無茶はするな頼むぞ」

「「御意」」

様子を見てハルトはアナザーウオッチを起動した

『カプト』

「クロックアップ」

『CLOCK UP』

するとハルトは光よりも早くなり移動した、それを確認した3人は

「ねえウオズちゃん、どうする？」

「ハルト様は任せると言ってたが」

「我々は我々で動きましょう、ジョウゲン、カゲン…あの鎧の行方を調べますよ彼女の情報が入れば…ただでは置きません」

「魔王ちゃんからは無茶も無理も止められてるけど？」

ジョウゲンはハルトの命令を告げるが

「構いませんよ、以前そう言って単騎でオーマジオウに喧嘩売る魔王なんですから」
「説得力が皆無だど？」

「そう言う事です、行きますよ」

そう言うとうオズ達はマフラーで転移したのであつた

—————

「いや、ちよつ！何で私たちが戦わないといけないうんですか!!」

彼女、立花響は「2人に負けないように頑張ります！」と宣言したと同時に翼さんから先程のセリフを言われ切り掛かられているのだ

「貴方には戦場に立つ気概がない！その意思を見せたいなら己のアームドギアを出しなさい！」

アームドギア それはシンフォギア 奏者が持つ武器のことである、奏が槍、翼は刀となる

因みに響は現在 発現させられていない

「そんなアームドギアなんて」

「甘えているならば斬る！」

「翼！待て!!」

と翼が千の落涙を発動させる、流石にこれは不味いと思っただのか奏は止めに入ったが響に刃の雨が降り注いだ

しかし、それは一発も当たらない事はなかった

「……………へ？」

「下がってろ邪魔だ」

アナザーカブトがクロックアップ中に彼女に当たる刃を綺麗に蹴飛ばし弾いたからである

「アナザーライダー!!」

「え？やっぱり貴方が…TVの……」

新入りさんは何か思う所があるようだが今はそれよりも

「おい、この子があの時の子供って知っててやってるのか？」

「っ！そうだ！私たちの不手際で傷つけてしまった！今でも忘れてなどいない!!」

「なら何で攻撃するよ?」

「彼女に戦場に立つ覚悟があるか見定めるのみ! 邪魔をするならば今度こそ斬る!」

これは恐らく、被害者である彼女にまたあの時のような地獄を味わせたくないと言う意思もあるのだろう…口には出さない思いやりであろうが…

「はあ……無いわ…君もお前も」

アナザーカブトは2人を指差して呆れたような声音で話す

「え?」「何だと!」

「覚悟を見定める? 戦う気がないだと? いいじゃないの! 戦場は力だけが物をいう世界だ! 戦う意思がないなら戦って証明しやがれ!!」

アナザーカブトは立花響の背を叩いて行ってこいと押し出した

「ええええ!! いやいや!! 今のは止めてくれる流れではないんですか!!」

いやまあ正論だけど

「少なくとも俺は戦って証明してきた！今も昔もこれからも！その意思は変わる事はねえよ邪魔する奴は叩き潰す!! まあ…あの時のライブ被害者に攻撃するって言うんならー！」

事情を察せたとはいえ 一度、宣言した以上 盟約は遵守せねばならない

アナザーカブトはアナザーウオッチを押すと黒いモヤと共に赤い鎧が新たな装甲になる

それは赤いやぎの悪魔を思わせる外見をしているアナザーライダー

『電王』

「俺……参上!!」

歪んだ特異点 アナザー電王は歌舞伎の見栄を切るようにして構えると

「来いや風鳴翼！アナザー電王が相手だ」

腰から双剣を抜き構えると

「いいだろう…いざ参る!!」

そのまま走り出した両者の得物が甲高い金属音と共に人気のない場所に響く、威力は周囲のものに響く程の衝撃波を起こしていた

「っ！」

「らあ！」

鏑迫り合いの中、翼に腹蹴りを入れて間合いを作る

「せやあ！」

そのまま持っていた双剣を投げる、翼は冷静に弾くがその間に腰に残した双剣を抜き再度接近戦をする

「貴様！ 剣を投げるとは何という！ 知るか！ 一部を除いて、こんなもんわな！ 刺さって切れれりや何でもいいんだよ！」 なっ！

主に喋る剣とか武器になったりする奴以外はそんな感じだ！

「何という……」

「その辺は見解の相違よなあ！」

双剣を雑に見えるが以外としっかりした我流ながらも訓練で磨かれている技術、それとアナザー電王による喧嘩殺法により翼は少しずつ押されていく事になる

「らあ！」

「くっ」

刀を弾き飛ばして再度、距離を作ったのでアナザー電王は

「敵がテメエの知る剣技で戦うとか思ってたんじゃないやねえよ、んじゃないや行くぜ…酔った勢いで思いついた俺の必殺技!!」

『FULL CHARGE』

オーラエネルギーが通じると双剣同士がエネルギー線で繋がって投げた双剣が浮遊を始める

「アナザーバージョンー!」

そのまま双剣を上下左右に振り回していき退路を絶っていく、そしてフィニッシュと言わんばかりに二つの刃を翼に振り下ろすアナザー電王だが何かを通り過ぎるのを見えたので少し刃の威力を殺すと

双刃を止めた巖のような男がいた

「久しぶりだな、アナザーライダー!」

「おじ様!」「司令!?!」

その男を視野に入れるなり

「出やがったな!リアル超人め!!」

鍛錬で岩を砕いた奴 風鳴弦十郎であった。あの映像を見て以来、俺の天敵ランクTOP10入りしている

「悪魔のようなビジュアルの君には言われたくない!!」

「ですよね!」

正論だぜ! 反論出来ない! これがOTONAか! オーマジオウや怒ったキャロルより怖くないがそれに匹敵するオーラを放ちやがるぜ!

『いや、してくれよ! こんな形でも奪った歴史ではヒーローなんだぞ俺達は!』

いやそもそも歴史奪うなよ! ジオウのOPでも言ってる? 過去の意思は嘘では欺けないと?』

『だとしても!!』

何故だろうか、その台詞は今ではない気がするぞ! まあ良いや どうする?

たたかう にげる まほう どうぐ

よし!

たたかう にげる↑ まほう どうぐ

逃げるぞ! あの男と戦う理由などない!! 俺は自分家で料理をするんだ! お馴染み足元狙いの煙幕で逃げようとするが

「残念だが読めている！ぬん！」

にげられない、周りを囲まれてしまった

「1人なのに!?え?ちよつ!わあ!」

掴んだ双剣をそのまま引つ張り弦十郎はアナザーライダーを自らの射程距離に引き摺り込みと発勁を叩き込んだ

「かはあ!」

そのままアナザー電王は近くの街路樹にめり込む事になった

「……………てて…たく俺が変身してなきや死んでたぞ!つーかどんな鍛錬してそうなった!!」

「しらいでか!映画見て飯食って寝る!男の鍛錬はそれだけで十分よ!!」

嘘だろ!おい!!

「血反吐吐く鍛錬して鬼になった人達に謝れや!」

『響鬼』

「だらっしやあ!!」

火炎を纏いアナザー響鬼になると両手に金棒を持ち、そのまま地面目がけて力を叩き込む

「む！爆進！」

弦十郎はそれを足を強く踏み込む事で相殺しやがった！

「嘘だろ！いや、おいおい本当に人間かよ！」

クロックアップしても目視で対応しそうだし…重加速も鍛錬に良いとかで突破してきそうだ！……魔法？バインドなど時間稼ぎにもならんわ！！

そもそも俺は戦いたくないのに！いや介入した俺が言うのもアレだけどね！

あーだこーだと考えているのを見て弦十郎は話しかける

「俺としても君と戦うのは本意ではない、どうだろうか？我々と同行してくれないか？君には数年前の借りもある、粗略にしない事を約束しよう」

「この場での口約束なんぞ、なんの信頼にもならんわ！！つか俺の補填よりも、あのライブ被害者に補填してやれよ！あの事件後に自殺した奴もいんだろ！イジメとか不当解雇とか色々で！その補填せずに俺の身柄確保とか、この力だけ寄越せと思われてもしいやあないわあ！」

「そ、そのようなことは！」ならあの時、俺がTV局行って、廃墟ぶつ壊すまで静観して

たのにも理由がありますかい？」……」

「沈黙は肯定と見るよ？」

「だが我々は」

「これ以上の問答は無用です我が魔王」

その場に現れたのはウオズである

「ウオズ？良い所に！」

やったぜ！これで勝つる！と思っていたのだが

「我が魔王、お耳を拝借」

「うん何々」

ウオズからの話を聞いたアナザー響鬼の雰囲気にも明らかな怒りが混ざっていた

「それ本当？」

「ええ、3人で調べました」

「……であるか」

うん、こりゃあかんわ……理解した嫌、やっぱりついてけねー

獅子身中の虫がいる場所とか信頼出来るか

「そうか…帰るぞ興が削がれた」

「はっ、2人も待っています」

「そうか、なら行くぞ」

「ま、待ってくれ！」

「一つ忠告だ、人を信じすぎるな痛い目に遭うぞ」

「それはどういう「んじやな」待て!!」

ウオズのマフラー転移で離脱した アナザー響鬼であった。

――

帰宅後

「よく帰ったな」

「本当、居着いてるなキャロル」

本当、自宅みたいに寛いでいるな

「文句を言うな、今日は貴様に紹介したい奴がいる」

「ん？誰？」

「エルフナインだ、オレの研究の助手をして貰っている」

そこにはキャロルにそっくりな女の子がいた

「は、初めまして！宜しくお願いします」

「常葉ハルト、キャロルを仮面ライダーの沼に落としたりした元凶だ」

「実は…お前に頼みたい事があってな」

「な、何だよ…」

助手まで紹介したという事は、俺にどんな事を頼もうとしているのだ…

「他にもオーズ作品があったら見せてくれ！」

「見せるるかあ！」

セルメダル自作出来た錬金術師にこれ以上の技術提供は何故か色々ダメな気がする

！主にメダルの器とかやらかしそうだ！

「頼む！見せてくれたらライドベンダーでもカンドロイドでも提供出来る！」

その一言に

「いいぞ！さあ、どれから見たい!!」

届いた段ボールの中には小説、劇場版、ファイナルステージetcが収まっていた(差

出人は未来の俺)のを見せた

ライダーガジェットやマシンには逆らえないよ…

「高速掌返しとはこの事ですね」

「魔王ちゃん……」

「戦力アツプと考えたら良いのか？」

「よし……まずは劇場版から行くぞ！ハルト！」

「おう！今日はオールナイトでオーズを見るぞ！」

「「おお!!」」

「あの……」

「エルフナイン殿、これが平常運転ですので」

「ええ……」

鎧の女

今、常葉ハルトはキャロルと共にオーズ作品を徹夜で見ている…のだが

「なあキャロル、何で俺の膝の上に座ってるんだ？」

膝の上で偉そうに座る幼女をジト目で見る…側から見て案件だが…彼女は素知らぬ顔で

「お前の目線なら兎も角、オレの目線ではTVがよく見えん…これは目線を上げる意味でもこれは必要な処置なのだ」

いつもの口調でいうが

「は、はあ…いや見たいなら、クッション使えよ貸すから」

「そ、そうですね！キャロルは大人に「何だ？何が文句でもあるか？」い、いいえ！」

「なら構わん、そこで見ている…それとハルト！お前は女の扱いがなっていないな少しは気を効かせろ」

「ん…こんな感じか？」

とキャロルの頭を取り敢えず撫でて見ることにした

「っ／／／貴様！いきなり撫でる奴があるか!!」

「違うのか!!」

小さい頃の妹と同じ感じでやってみたがダメなのか!

「いや／＼／＼構わん、もう少しやれ」

「ん? おお…」

撫で続けてみるが考える分からも、女心とは…難解だ地球の本棚でも答えは404
not foundらしいし

「／＼／＼／＼／＼／」

何故か今のキャロルには逆らわない方が良さそうだ、あと心なしか楽しそう…気のせいだろうか?

そして隣のソファでは

「これが異世界の錬金術…何て高度な技術なんでしょう…キャロルが熱中する訳です」

真面目過ぎる視点で仮面ライダーを見ている女の子、エルフナインがいる…いや本物の錬金術師目線で見るとオーズって凄い気になるな

因みに3人は何か真剣な顔で話し合っている…何話してんだろ?

そしてオーズ劇場版を見終わった後

「我が魔王、少し宜しいでしょうか？」

「お、おう…：どうしたんだよ急に改まって」

ウオズ達が嘗てない程に真面目な顔をしている、こりや一体 どんな話題になるんだ

「以前から話題になってます、バースドライバーの変身者ですが…」

その話題にキャロルも反応する、撫でられながらだが

「ほお、遂にオレの発明が日の目を見る日が来たか」

「で？ 誰にしたんだ？」

「それなのですが…：許可を頂けないかと」

「いやだから誰に渡す気なのさ？ まあウオズ達の推薦なら問題ないだろうがな」

「天羽奏、彼女は如何かと」

ウオズには悪いがそれは

「却下だ！彼女に渡してみる、二課経由で技術漏れて、量産型バースで戦争になるわ！この世界にいて調べて色々分かったけど国の連中大分、腐ってんぞ！ユグドラシルやスマートブレインが可愛く見える連中にライダー技術を渡せるか！」

キャロルやサンジェルマンは結果として今は表沙汰にしないだけマシだが、彼女：引いては二課の連中に渡すのはダメだ。攻撃がノイズではなく人間に：しかも大事な人に向けられる そんな事あつてはならないし

『愛と平和（ラブアンドピース）を掲げる天才物理学者』

の彼に顔向け出来ない！あつたら全力で土下座するぞ！その前にサインをお願いし

よう！

「つーか、あのライブ事件の黒幕がいるのに技術流す奴があるか!!」

「ですのて代替案がありましたて…」

「んだよ、言つとくが天羽奏の拉致とかもダメだからな有名人拉致るとか不味いだろ」
錫音が追っかけてるアイドルだったか？ 確か

「勿論ですとも、それが」

その提案にはハルトは

「わーった、それならOK、細事の判断は一任するが無茶はするな」

「感謝します、では」

「頼んだ」

それだけ言うと、ハルトは小説版に目線を落とすのであったが

「キャロル、読めねえ」

やはり俺の膝の上から微動だにしていないう彼女に視線を向けるが

「良いだろ？おい……この章をよく見せろ！見えないぞ……もつと近づけろ！」

「へいへい」

しやあない勧めた責任は取りますかと、抱き寄せる、因みに

「(しかし、この男は何処まで鈍感なのだ！此処までして無反応とは予想外だぞ！)」

「(キャロル近いなあ……いい匂いがする……はっ！いかん！俺はロリ好きではないぞ！
断じて！)」

互いに内側は色々限界であるのは答えておこう、その様子に

「あの……2人は」

エルフナインがウオズに訪ねてみると彼はいつもの調子で

「ご安心を貴女が思うような関係ではありませんので」

「ほ、本当ですか？」

「まあ今はですがね」

不適に笑うウオズ

「へ？」

「おっとこれは未来の出来事でしたね…これは失礼…さて我が魔王の為に働くとしますか」

「おう!!」

3人は転移して行ったのであった

そしてキャロルは満足したのか、エルフナインと共に帰っていく

「ウオズ達は計画で動いてるし…俺は…そだ」

ハルトはアナザーウオツチに尋ねてみる

「鍛えたいから付き合って」

『構わねえぜ、誰と訓練する?』

「全員で」

『ほお…どんな心境の変化だ?』

「何、ウオズ達が頑張ってるんだ俺もな…それと」

『それと』

「王つてのは臣下を体張って守るものだろ?なら俺は3人守れるくらい強くならねえと

ないつまでも頼ってばっかじゃダメだろう？これから、あのOTONAと戦えるくらい強くないと」

ヘラヘラしながらも確かな意志で伝える

『そう言う事なら任せておけ！厳しく行くぞ！』

「おう！ジープで鬼ごっこは辞めてくれれば大丈夫だ！」

あの特訓はマジで怖いと思ったからな

『アナザービルド！アナザーキカイ！俺達全員分のジープを用意しろ!!』

『『おう！』』

「やめ、辞めろおおお！」

数日間、ハルトは夢でジープに追いかけられると言う悪夢を見る羽目になったとき

そんな感じで数日後、ノイズの反応があって来てみれば

「何だ？また新入りか？」

白い鎧を着た女の子と3人で戦っていた

「いえ、どうやら敵のようです」

「それにあの鎧…」「まさかあの時の！」

だよな、完全聖遺物の鎧だよな

「つー事はあの鎧女を捕まえれば黒幕に繋がるな…しかもあの杖、ノイズを召喚出来るのか…」

「では捕まえます?」

「まあ穏便に出来ればするよ…無理だろうけど」

「でしょうな…となれば実力行使で?」

「そうだなあ…目的の為に手段を選ばず、あまり好きな言葉じゃねえけど」

見せてやろう特訓の成果を!

「んじや行くか!」

アナザーウオッチを構えた、その時!

「オラア!」『ライトニング…ナウ…』

「「「つー!」」」

斬撃のエネルギーと雷の魔法がハルト達に襲いかかった

「今の…確認するまでもねえな」

下手人は上から見下ろしている

「そうだろう！覚えててくれたかあ!？」

「久しぶりだな…今度こそ消してやる!」

久しぶりだな…うん

「やっぱりネオタイムジャッカーか!」

そこにはポセイドンとソーサラーが立つ、狙いは鎧と一緒にある杖か

「魔王ちゃん、ポセイドンは俺達に任せて貰えない?」

「以前のリベンジだ!」

血気盛んな声で言ったのジヨウゲンとカゲン、そういやあ初対面の時はポセイドンにボコられてたっけ…よし

「OK、んじゃポセイドンは任せた…ソーサラーは俺にま「我が魔王」…んだよウオズ?」

「ソーサラーは私が、お相手しましょう」

ウオズの提案にハルトは首を横に振る

「ダメだ、変身出来ないお前じゃ「誰が…いつ変身出来ないとお話しましたか?」…なん……だ?!」

そう話しながらウオズは逢魔降臨歴を開くとあるページに手を触れると書物の中か

ら現れたのはアナザーウオッチであった、そこにはアナザージオウと同じように仮面を剥がれた人体模型のような顔が刻まれている

「おいおいマジかよ」

「これで大丈夫ですよね？」

「ああ…だが念の為に」

そう言うところハルトは体から三つのウオッチをウオズに渡した

「これは…」

「念の為だ…済まない3人ともウオズに力を貸してくれ」

『承知した！』『それ正解だな』『…ん』

3人のアナザーミライダーに許可を得たのでウオズに預ける

「感謝いたします我が魔王」

「終わったら返せよ…それとお前ら死ぬ事は許せん、死んだらアナザージオウⅡの力で生き返らせてからもつかい殺す」

「いや怖いよそれ！」

「そりゃごめんこうむる」

「ですね」

「んじゃ行くぞ!!」

4人はアナザーウオッチとライドウオッチを構えた

「変身！」

2人はジクウドライバーに装填させて回転、そしてハルトとウオズはスイッチを押す

『仮面ライダーザモナス！（ゾンジス！）』

『ジオウ』

そして黒と緑色のエネルギーがウオズを包み込む

その姿はアナザージオウと類似した容姿、つまり仮面を剥がれた人体模型のような顔つき

本家に似てスマートであるが逢魔降臨歴・裏伝が最新のタブレット端末にアップグレードされている

歪んだ未来の先導者

『ウオズ』

アナザーウオズ、登場

「祝え！過去と未来を読み解き、正しい未来を示す預言者！その名もアナザーウオズ！
正に生誕の瞬間である！」

「自分祝ったぞ」「セルフ祝え！だね」

「んじゃテメエら……」

アナザージオウは3人を背にして一言

「頼んだ」

「「はっ！」」

アナザージオウはアナザータイムマジンに乗り込んで現場に向かうが

「通すかよ！」

ポセイドンが槍で攻撃しようとしたが

『ロボライダー』『アマゾンネオ』

「ボルテックシューター！」

「ニードルガン！」

ゾンジスはボルテックシューターで、ザモナスはボウガンにアマゾン細胞を硬化させた矢玉で攻撃するがディーペストハーブーンに弾かれる

「ちい！邪魔すんじやねえよ！」

「それはこつちのセリフだ！」

「リベンジ行くよ！」

3人が激突する中、アナザーウオズは冷めた目でソーサラーを見ている

「さて…我が魔王の邪魔者は排除しましょうか」

「邪魔者はどつちだ！」

『ライトニング…ナウ』

魔法陣から雷が放たれるが、アナザーウオズは冷静にタブレット端末を取り出して音声入力する

『雷は軌道を変えポセイドンに命中する』

その時、不思議な事が起こるポセイドンがディーペストハーブーンを高く掲げた結果避雷針の役割を果たし、ライトニングがポセイドンに命中したのであった

「ぎゃあああ！…おい！何処狙ってんだ！」

「ふふふ…同士討ちとは滑稽な」

「貴方ねえ…なら！」

『コネクト…ナウ』

「近接なら!!」

「なるほど…ならばこれで」

ソーサラーはハルバートを取り出して近接戦を仕掛ける、アナザーウオズも冷静にジカンデスピアに似た、槍を取り出して受け止めるのであった。

「くっ!」

「愚かですね貴方達…我が魔王にとって貴方達は」

—————

その頃、アナザータイムマジーンから降りたアナザージオウであった。どうやら鎧女とツヴァイウィングみたいだな…新入りは見学か？

「よお新入り」

取り敢えず混ざるか

「アナザーライダーさん!」

響の言葉に周りの目線が集まった

「はん! 丁度良い残りのターゲットも来てくれたか」

「は?」

「あの…あの子どもどうやら私とアナザーライダーさんを捕まえようとしてるみたいで」

その言葉に思わず、ハルトキレル

「へえ…：俺を捕まえる？」

確定、敵だあの女

「あ…：アナザーライダー…：さん？」

「おー新入りちゃんとテメエら下がってる、そのアマは俺がやる」

槍を肩に担いでツヴァイウイングの前に立つアナザージオウを止めようとする2人

「待て！アイツの狙いは貴様で「黙れよ俺より弱い奴が命令すんな」っ！」

「テメエが何処の誰かは知らねえし心底興味もねえ…：けどなあ俺の当たり前を脅かすつてんなら例外なく」

槍の鋒を向ける、奇しくもウオズが言うのと同じタイミングで話す

「俺の敵だ覚悟しろ」

「敵です覚悟なさい」

借りとくぜ永遠にな！

前回、ハルト、キレル！

「はん！上等だ覚悟し「クロックアップ」？があああ！」

啖呵切る前にアナザーカプトになりクロックアップで全方位からタコ殴りにする

「え、ええ……」

あまりの不意打ちに響もドン引きだった

『CLOCK OVER』

「ふう……んじゃ次行くぞー」

新しいウオッチを起動した、その姿は緑色の仮面 本来の歴史にも存在した稀有なア

ナザーライダー

『アギト』

アナザーアギト

「何だあ? その地味な格好は!!」

地味だと…ふざけんなあ! アナザーアギトはな! アギト本編にも出てた貴重なアナザライダー なんだぞ! (ビジュアルは微妙に違うが) それなのに地味だと…こいつは噛んで感染させてやろうか?

鎧女が鞭? みたいな物をむけてきたので

「ん?」

両手を構えると両手が縛られたが

「はっ! おしまいだ! 「よいしょ」 ん? おわあ!」

取り敢えずイライラするので手元に引っ張る事にした、んで力を右手に込めると

「アナザーパンチ!」

「がふっ!」

女の顔面殴る事に一応の罪悪感はあるが…敵だろ? お前?

「敵だろテメエ? 敵なら潰れる! 死ぬこら!!」

アナザーアギトはそのままマウントポジションを取って女性の顔面を只管殴り続けるという主人公がやつちやダメを事をしている

「い、いやちよつと！止めないと!!アナザーライダーさん！辞めてください!!」
「ああ？何言ってるんだ？」

殴るのは辞めたが、取り敢えず逃げないように顔踏んどこ

「が…「うるせえ黙ってる」

「辞めましょうよ！話せばわかりますって！」

「それで解決すりゃ戦争なんざ起きねえよ」

「ですけど、いきなり暴力なんて！」

「売られた喧嘩を買っただけ…いきなり暴力で訴える事しか能の無い猿には暴力で教えないと理解しないだろ？言葉が通じる程に理性があるのかね？」

さも当然のように言い放つアナザーアギトに響達は少し後退りする

「さ、猿って…」

「つと、テメエの身柄はコッチ持ちだ…知ってる事キリキリ吐いてもらおうか？話さないと痛い目に遭うぜ？」

「だ…誰がテメエなんか…」

話しそうにないなあ……この手の適任者はいる……あ！

「しまった…アナザークイズがない」

アナザークイズ、彼の力はクイズの成否で相手にデバブをかける以外にも 触れた相手の知識や情報を抜き取る事が出来る

今はウォズに預けてしまっているので手元がない…他に方法はないか…うーん
と考えていると

「っ！今だ！」

すると鎧女は杖的なものからノイズを呼び出したのだ

「んあ？」

するとノイズが拳を持って殴りかかろうとするのでカウンターをしようと拳を握る
が

「は？」

ノイズは突如切り裂かれたが、そのまま下手人は俺にまで切りかかろうとしてきた

「っ！」

慌ててアナザークウガから教わった2000の技能の一つ 真剣白刃取りで受け止めるのであった

「おい俺、今は味方？わかってる？」

またお前か風鳴翼

「ああ…だがこれ以上、彼女を痛ぶるのは防人として許せん……これは見解の相違だな」
意趣返しには知らないんだけど

「ソロモンの杖とネフリシタンの鎧…何処で手に入れたかを聞き出す為に我々二課で身柄を抑えます勿論貴方も」

「おいおい、俺が倒した敵を横取りい？はっ！さっすがお役所様だねえそんな事ばかりするから信用失くすのよ！」

「何とでも言ってください、これ以上彼女を害するなら切り捨てます！」

「やれるもんならやってみる！」

「いざ参る！」

翼が斬りかかろうとした時、アナザーウオッチを押すと目の前に青い壁が現れ 翼を弾き飛ばした

「ぐう…」「翼さん！」「翼さん！」

2人は駆け寄ろうとしたが

「おっと」「ここは通さん」

現れたのはザモナスとゾンジスであった

「お前達…ウオズはどうした!」

「ウオズちゃんなら大丈夫!今頃、アナザークイズでソーサラー達から情報抜いてるだろうから!」

「倒したの!?!あの2人を」

「ウオズなら楽勝だ」

「流石はウオズ…よし、2人は邪魔入らないようにして…んで」

アナザーアギトの目の前に青い壁　オリハルコンエレメントが迫ってくるが恐れずに受け入れる

「があ!」

適合率の意味で合わない鎧女は吹き飛ばされたが関係ない

通過した後　アナザーアギトは姿を変えた

その体軀は他のアナザーライダーと比較しても負けない位のマツシブさを誇る、またアナザー鎧武と異なる西洋風味の大剣も特徴だろう、そして何より

誰かを血眼で探すような双眸が印象だろう

運命に屈した切り札

『ブレイド』

アナザーブレイド

「祝え！全アナザーライダーの力を統べ、時空を超えて過去と未来を示す時の王、その力の一端！その名はアナザーブレイド…また一人 切り札の力に目覚めし瞬間である」

今日の功労者が現れた

「ウオズー！よくやった！」

「いいえ、この程度の事は造作もありませんよ…それより我が魔王に力をお返しいたします」

と三つのアナザーウォッチがアナザーブレイドの元に戻る

「おかえり皆」

『ああ!』

『そうだな、それとハルトには後で知識を共有しよう』

『うす』

「んじや、やりますか!」

大剣を構えると先に翼が仕掛けてきたので受け止める

「相変わらず、色んな姿に化けるのだな」

「驚くだろ? 特技なんでね!」

力任せに振り抜いて間合いを作ると、アナザーブレイドの体から2枚の動物型のエレメントが浮かぶとアナザーブレイドに取り付いた

『マツハ』『タツクル』

チーターの加速とイノシシの突進力が付与される、これぞアナザーブレイドの能力よ
原典ブレイドのラウズカードを模倣した能力の行使だ!

以前から思ってたタツクルの不遇振りに、やると避けられ転ばせられたりと不遇だった何故か! 答えは簡単

「おおおらああああ！」

「があー！」

速さが足りない

マツハはスピードアップと同時にタツクルの威力を上げてくれるのだ！しかし刀を盾にしたお陰で翼はダメージを軽く済ませているな、要改良だな

だがマツハを使った以上、3枚コンボは使えないが、ボロボロの彼女ならこれで十分！

付与させるは跳躍のバツタと雷帯びた鹿だ！

『キック』『サンダー』

力を纏って

『ライトニングブラスト』

「ウエエエエエイ!!」

見事に命中、吹き飛んだ

「うわああああ！」

よし！これで大丈夫へパキ〜：パキ？目線を向くとアナザーブレイドは露骨に不機嫌

になる

「おい」

『シノビ』

「忍法、影縫い」

アナザーシノビに変身して忍刀を投げるとボロボロになって逃げようとしている鎧女がいたので影縫いで動けなくさせた

「っ!」

「何逃げてんだよ? テメエ」

逃すか、情報もらうぞ アナザーウォッチを押し直してアナザークイズに姿を変える

『クイズ』

「ひい!」

「何怯えてんだよ? 俺を捕まえるんだよな? ほらやってみろよ? なあ!」

アナザークイズは戦闘向きなアナザライダーではないが武装した女性を持ち上げるくらいのパワーはあるのでアイアンクローして持ち上げる

「あ……があ……」

「さて、知ってる事全部『く』あん?」

何か聞こえる……歌か……これ？

『やべーぞ、ハルトそんな女捨ててきつさと逃げろ！絶唱が来る！』

絶唱？何だそれはアナザーW？

『話は後だ！早く！』

OK、他ならぬ相棒の頼みなら聞くか……逃げよ

『悪いが間に合いそうに無いぞ！』

「我が魔王！」

「早く逃げなよ！」

「急げ！」

目の前に襲うエネルギーの波動……ほおこれが絶唱か……回避は絶望だが大丈夫だ俺に
良い考えがある！

『嫌な予感がするが……一応聞くぞ何をする気だ？』

「こうする」

鎧女を地面に下ろすと、迷わず鎧女を盾にしたのであった

「ガードベント（手製）」

『うおおおおい!!』

!!!

何か叫んでるが聞こえない、そしてエネルギー攻撃が終わった後

「え? やったのか?」

「翼さん…」

そこにはボロボロだが鎧は何故か再生を進めるが意識が朦朧としている鎧女と

「お勤めご苦労さん」

雑に鎧女を投げ捨てて無傷のアナザークイズがいた

「いやあ今のが絶唱か当たってたらやばかったわア…って大丈夫か! その顔!!」

アナザーWが回避推奨した当たり、かなりやばい一撃だったのは言うまでもないが使っただろう本人が血涙流して半目向いてたら怖い! アナザーゴーストがいきなり背後にいるくらい怖いわ!

「て、テメエ…なにしゃがんだ…」

おお無事だったか鎧女! しかし何しやがるか…うん

「んあ…近くにいたお前があ悪い」

やったぜ！悪役で言ってみたいセリフ3位が言えたぜ！やったぜ浅倉さん！だが

「いや近くも何も至近距離にいましたよ彼女」

「恐るべし魔王クオリティ…この頃からだったんだ」

「やはり魔王の才能があるな」

3人には不評であった、おいカゲン

「テメエら、それ褒めてる？…あ、これ借りるぞ死ぬまでな!!（まさに外道）」

と手に持っていた杖を永遠に借りる事にした

「えーと、こうすれば」

ポタン、ポチツと押すとノイズがワラワラ出てきた

「おーよし行け、ズラかるぞー」

すると残りの奏者に襲い掛かるノイズを見てハルトは指示を出した

「はっ!!」

そうしてウオズのマフラー転移でお馴染みの撤退をしたのであった

ハルト宅

変身解除した後、机の上に戦利品を置く

「しかし我が魔王、それは何ですか？」

「ん〜ノイズを召喚できるみたいだな…よし、アナザーW! 検索の時間だ」

『もう済んでる、ソレはソロモンの杖つて言う完全聖遺物でバビロニアの宝物庫からノイズを召喚して操れる物だ』

バビロニアの宝物庫?

「それって英雄王が持つてる蔵の事?」

俺の知るバビロニアの宝物庫はそれだけである

原初の英雄 その彼が生前集め、そして後の人類が生み出すもの全てを収める蔵
それ即ち人類の叡智を束ねた宝物庫

王の財宝(ゲート・オブ・バビロン)

の事? つまり

「これを触媒にすればギル様呼べるの! やったぜー!」

『呼べるかあ!』

「そつかあ…彼から王の心得的な物を教えて欲しかったのになあ…つかギル様、こんなのあるなら聖杯戦争で使えよ」

『別世界のバビロニアの宝物庫な、そこを勘違いするなよ』

「そだな…んじやこれ壊せばノイズは出ないの？」

『いや、ノイズは自然発生するから壊しても意味がない』

「そつかあ…まあ抑止力が手に入ったんなら良しとするか…けどどうする？」
ノリと勢いで分取ったが…あー…そうだ！

「オレ、参上…だったか？ハルト遊びに来たぞ」

「久しぶりね少し良いかしら？」

丁度良い所にキャロルとサンジエルマンが来た！

「ねえ2人とも、これ何か分かる？」

取り敢えずソロモンの杖を見せてみると

「っ！！」

「おい、ソレを何処で見つけた!!」

「ん? 拾った」

「んな訳あるか!! ソロモンの杖を拾ったで信じられるかあ!」

「拾ったよ! ボロボロの人の手にあったから永遠に借りるぜ! って言って拾ったんだよ
!」

「それは強奪というんだ!」

「違う! 持ち主から永遠に借りてるだけだ!」

「それは借りてるうちに入りますかね?」

「これは……ねえハルト、私達に譲ってくれない? 可能な範囲で何でも譲るわ」

「なっ! それを言うならハルト! オレもだ!」

やはりこの世界ではかなりヤバイ代物みたいだな

『まあシンフォギア以外で倒せない災害を自由に呼んで操れるとか兵器としての需要ヤ
バイだろ』

そっか……しかし

「ん、取り敢えず保留で頼むわ、俺も使ってみたいし……」

陽動に使えるそうだなと漠然と思うのであった

「……………そういやあウオズ、アナザークイズでソーサラー達から情報抜いたって聞いたけど」

「ええ、アナザークイズ経由で情報共有されてると思いますが？」

『忘れてから送るぞ』

「おう……………え？マジ」

その情報にハルトは目を丸くした

「錫音の奴がソーサラー？」

王から告げられる未来?

前回 ソロモンの杖をゲットした俺、常葉ハルト…だがウオズとアナザークイズが集めた情報 仮面ライダーソーサラーの正体に動揺を隠しきれなかった

「何で……」

「大方、我が魔王の絶望を煽るのが目的でしょうね」

「多分『楽しかったぜ魔王との恋愛ごっこ!』とか思ってたんじゃない?」

「悪趣味だな」

その頃、ネオタイムジャッカーのクジヨーがくしやみをした理由は知る人ぞ知るのみとなる

「良い友達とってたのに……」

「我が魔王「わーってるウオズ、敵なら倒すだけ」いいえ、良ければソーサラーの相手は我等が請け負いますよ?」

心配しての忠言と思うが

「俺を甘く見るな敵なら倒す…それが誰とか関係ないよ」

「畏まりました…ですが我が魔王、今日は疲れたのでは？おやすみなさつては？」

「そうだな少し疲れたから寝るわ、おやすみ」

「はい良い夢を」

「多分、良くねえ夢だよ」

へラへラ笑いながら、寝室に向かうハルトを見て

「我が魔王……」

「どうすんのさ？ウオズちゃん」

「ハルト様のメンタルが不安定では戦いに支障をきたす」

「分かっています…きつと明日にはケロツとしてますよ」

だが事態はそうとはならなかった

———

翌朝、全員が朝食を食べにテーブルについた

そこに置いてあったのは生卵と白米のみ…まさか!!

「我が魔王!?!」

探してみるとソファで横になっているハルトは目線を上げると

「んあ…悪い今日、調子悪くてな…ソレで我慢してくれ」

「い、いえ申し訳ありません…お前達」

ウオズは礼をすると2人を集めた

「前言撤回だ、非常事態ですよ」

「誰が明日はケロツとしてるだよ、魔王ちゃんのメンタルボロボロだよ!」

「TKGのみ…ハルト様が味噌汁を作らないとは重症だ!」

「そこで判断しないでよ!このままだと俺達のご飯にまで影響するよ!」

「このままでは行けません、ネオタイムジャッカーを見つめますよ!お前達!」

「おう!!」

「そして我等の食生活を元に!」

「おお!!」

その頃、ハルトは公園のベンチに腰掛け空を見ていた

「ふわあ…空が青い…」

どんな時でも変わらないのだなあ…とぼんやり思っている

『どうしたよハルト、珍しくメンタル弱弱じゃねえか』

うっせえ、シヨックだったんだよ友達が敵だったとかな本当

「知らない方が幸せだったよ」

いつもそうだ 知ってしまったと何かが変わる

そこにあるものは何も変わらない、きつと俺の見る目が変わってしまった事だ…誰か
言っただな

ー人生を楽しく生きるなら、無知でいる事ー

それは俺の人生訓であつたのに、気づけば無知では済まされない場所まで飛んだな

知らないでは済まされない、俺の決断が周りに影響を与えてしまう

『ハルト、お前は前に言ったな…敵なら倒すと』

「うん、守りたい物を守って倒す奴は倒す」

『ならば守る物、倒す物の両方が貴様の大事な物の場合、どちらを選ぶ？』

「っ」

『それを即答出来ん所は甘ちゃんだ、あの時の小娘の事を言えんぞ』

「つせえよ…けど、そうなたら」

どちらを選べば良いんだろ…というより選べるだろうかと

ポーツと空を見ていると、何故か公園で格闘技か何かをしている二人組が見えた

「……………厄日？」

それは風鳴弦十郎と立花響の2人であつたのだ

「はあ……まあどうでも良いや……ん？」

さつさと帰ろうと思つていたら、響が公園の木をへし折らんばかりの突きを放つたのだ

「うわあ……マジか英才教育つて奴う？」

とんでもねえ師弟だなと思うが

世の中には弟子にブーメラン投げたり、ジープで追いかけて回したり、師匠の息子に強制ギブス的なものをつけて鍛錬させてる師匠達がいるくらいだしな……こんなん普通か

『いや、それ普通か？』

普通だろ、ジープとかお前達としてたし

『お……おいハルト、調べたらこの辺に有名なドーナツの店があるらしいぞー！』

OK、んじゃ買いに行こうか連中に詫びも込めてな……ん？

気分転換の散歩も終わりだくと動こうとした時

「なあ、その君?」

「んあ……っ!!」

声をかけられたので振り向くと、そこには金髪で目に泣き黒子のスタイルの良い美人がいた。タイプではあるが

「俺の事?」

「この場で、お前以外の誰がいる」

何処か偉そうな話し方だが、アニメか何かで日本語を学んだのかな?しかし似ているな家に遊びに来る錬金術師に

「何の用?」

「そうだな……一緒に茶でもと思つてな」

「あ、結構です」

スタスタスタと通り過ぎようとしたが

「おい……ちよつと待て!こんな美人が声をかけているのにスルーする奴がいるか!」

腕を掴まれて止められた、いや

「生憎そんな気分じゃないので」

本当にと断るが

「オレじゃ……ダメか……」

一人称で確定だが涙目で上目遣いは反則だろだが

「急成長期かキャロル？」

「な、何故分かった！」

「馬鹿にしてんだろ！鈍い俺でもわかるわ！」

「なら話は早い！さあオレにコーヒ―を奢れ！」

「何故に！」

「良いから来い!!」

そんなの絶対可笑しいよ！と思いつつもキャロル（大人）に引き摺られていった

――

そして喫茶店にて

「何で大人になってんだよ、成長期か？」

「違う、オレは体の年齢を変えられるんだ…子供なのは楽だからだ色々とな」

「そりやそうだろうな」

ハルトが呆れながら目線を下のたわわなものに向けるもハリセンで叩かれた

「つて！」

「ジロジロ見るな…というよりお前にもその辺の欲があるのに驚いたぞ」

「人を仙人みたいに思うなよ、俺だって普通に健全な欲求くらいあるわ健康優良不良青

年だぜ」

「無茶苦茶だな…そうなら安心したぞ」

「何に？」

「フン、お前は知らなくても良い事だ…その前に貴様に確認しておきたい事がある」
「んだよ」

キャロルはコーヒーを一口飲むとソーサーに置いて真面目な顔で問う

「もし…オレが世界を滅ぼすと言ったらお前は止めるか？」

は？んなの

「止めねー、好きにしろよキャロルの人生だろ？俺は人様の人生に干渉出来る程、立派な人間じゃねえよ」

「これは驚いた、絶対に止めると言うと思ったぞ」

「俺なんかキャロルの恩讐を止めれるならとつくの昔に誰かが止めてる…それに冷たく聞こえるかもだけどな」

ハルトはつまらなさそうに窓の外を見ながら吐き捨てる

「この世界の連中がどうなろうと俺的にはどうでも良いのよ…元を辿れば俺は異世界人だしな必要以上に滞在する気はねえよ」

転移のエネルギーが溜まっている以上、いつでも転移出来るのだ…なのに転移しないのは

あの時に俺達を利用した黒幕を八つ裂きにしないと気が済まないと言う所だけだ

正直 二課の言う人助けの正義だのキャロルやサンジェルマンの言うことがどうだの関係ない

つーかライブ被害者の魔女狩りの時からこの世界の人間には愛想が尽きてるし利権しか頭にないか、そんな人間しかいない世界ならラスボスさんよ、さっさと滅ぼせと思ってくらいには嫌いだ

「それはオレも含めてか」

「いいやキャロルやサンジェルマン達は特別だよ助けが欲しいなら貸すよ」

「ふっ……そうか……ならソロモンの杖を貸せ」

「断る」

やはりそれが本命か……と流れるような即答にハルトは

「何故だ!!今の流れは貸してくれる流れだろうが!」

「馬鹿野郎!俺はそんな空気は読まんぞ!」

「良いから貸せ!」

「やなこと!」

「……………オレの体を好きにしても良いと言ってもか?」

また上目遣いされているが……バカにするな!

「ばばばばばか、言っつてんじやねえよ……俺がそんな事で動揺すると……思っているのかあ
!」

震える手でコーヒークップを持っている、カタカタカタカタと中のコーヒーマグが波打っている動揺しているのが丸わかりだ

『声うわずつてるぞ?』

うるせえアナザーデイケイド !! 彼女いない歴〃年齢の俺にこんな色仕掛けな刺激耐えられる訳ないだろう!!!

『だけど未来ではハーレム作ってるんだらうが?』

聞いている限り…そうなんだよなあ未来の俺…一体どんな人なんだらう未来の俺の嫁さんは

〈知りたいか若い俺よ〉

「っ!!」

脳内に響く声にハルトとキャロルは周りに目を向けると 刹那

世界の時間は止まり、ハルトとキャロルだけが動いていた

「な、何だコレは…」

キャロルも動揺する中、黄金の波紋の中から現れた白髪の老人 否 老ハルトであった

「何、大した事ではない世界の時を止めただけだ…昔は苦勞したが今では瞬き感覚でできるようになったぞ」

「それ大した事あるだろう…っっておいおい」

威厳ある黒衣に身を包んで現れた…マジか

「ふっ…直接顔を合わせるのは初めてだな若いお「待遇改善要求パンチ!!」れえ!!」

偉そうに講釈垂れてきそうだったので先手を打ってパンチを顔面に叩き込んだら錐揉み回転しながら飛んでった…ふう!

「スーっとしたぜ!!」

満面の笑みを浮かべるハルトに思わず

「いや！いきなり老人を殴る奴があるか！」

ツツコミをするキャロルであった

「だって、ジヨウゲンとカゲンがパワハラ上司に怯えてる人みたいだったのって未来の俺の過失だろ？それにネオタイムジャツカーの1人の世界滅ぼしてるし…今の俺に降りかかる騒動の原因なんだよな…ああ…思い出したらイライラしてきたな…もう数発行つとく？」

最初は帰って家族に会う事、旅先の仲間を紹介する事を諦めて支配欲と権力に取り憑かれたとしか思ってたが、色々と未来の過失のせいで今の自分が損失被っているので我慢ならなかったZE！

手の骨を鳴らしながら近づくとハルトに

「ま、待て若い俺よ！色々迷惑かけているのは謝るが流石にか弱い老体に鞭所か拳を飛ばすのは世間体的にも問題であろう！PTAが黙つとらんぞ！」

両手を振りながら止めようとしているが

「か弱い言うなし魔王が…いやいやあ…いきなり現れたと思ったらリア充自慢とか今の

俺には宣戦布告としか思えないんでねえ、せめて俺が悩んでる時とかに来いよ、んで道指し示して俺に殴られろ」

「いや待て！昔の私はこんなに過激だったか!? 血の気が多い所ではないぞ！」

「血の気多くて過激だったから世界滅ぼしたんだろ？」

「うみ…それもそうか…いやあ若いってのは良いな！勢いがあつてよろしい！」

妙に納得した顔の老ハルトに思わずキャロルが

「納得するな！」

「おお、キャロルか…変わらないなあ君は…いつまでも変わらずに美しいな」

「お…おう…ハルト…ど、どうやら未来のお前は女性の扱いも心得ているようで安心したぞ」

「ああ大事な人に好意を寄せられているなら全力で答えるさ、悪いなキャロル、若い俺はその辺の余裕がないんだ許してやってくれ」

「も、問題ないぞ…そうか大事な人か…ふふふ…」

「遠回しにデイスってんじやねえよ老害、超自然発火で焼くぞコラ」

「段々扱い酷くなつてないか？まあ良い…未来の嫁達について知りたいのだろうか？遠慮するでない話してやろうではないか嫁の未来のアレコレを」

好好爺のように椅子に座る老ハルトにキャロルとハルトは肩を組んで話し合う

「なあ…俺が顔殴ったから壊れたのか？」

「い、いや…そんな訳ではないと思うが…」

「まあまあ、ウオズが歴史が変わるかも云々五月蠅いだろうし。私も本来なら話すことではないと思うが…少しでも馬鹿らしい話をしてれば悩みも晴れるだろう若い俺よ」

「……………なんでそこまですんだよ」

「私は誰も頼れる人がいなかった…行く世界でも…いや一部を除き繋がりを持とうとしなかった…その結果がコレなのだよ…だが君は違う、変わるのだから…そう思つてウオズやジョウゲン達を送つた悩みや苦難を分かち合える仲間をな」

「それさお前のやつた事で、お前の未来に繋がることが無くなつてもか？」

「それでも構わんさ、幸せな世界線の私がいる…それだけで十分さ頑張つた甲斐がある

と言うものよ……それに今の俺の心を満たしてくれている人の事があるのを知ってもらいたいのだよ」

「はあ……キャロル座ろう、老人の話は長くなるから根気がいるよ」

「ははは！安心せいよ短く纏めるつもりだしお前も知つといて損は無からう」

「んで結局、何人と結婚してんだ？」

「具体的な人数は避けるが多いな……うむ」

「気まずい顔をしているが……まさか」

「なあ帰らなかつたのって、ハーレム作ってしまったとか色んな女性に手を出したとかの事で親父達に殴られるのが怖いからじゃないよな？」

「……………話すぞ」

「凶星かよオイ！ウオズ達が何で胃薬飲んでねえのが不思議でならねえよ！つか子供いたら孫の顔見せに帰れや！何人いても喜ぶぞ俺の親父達なら！」

「一番は彼女だ」

「聞けよ!!」

「織斑千冬 元の世界では世界最強の女性として知られている」

空間投影されたフリップに現れたのは黒髪ロングでスーツとタイトスカートの似合う女性だ、キリつとした雰囲気だな…しかし

「初手から、凄い奥さんだなオイ！」

大学の友達が勧めてくれたラノベに出た人だ！確か主人公の姉だろ！しかも刀だけで銃持つてる奴倒した人だよな！

「彼女の芯の強さには敬意しかないな…過去何度も心が折れそうな時には喝を入れる為だろうが良く叩かれた物だ…男前な性格でな…私よりも家長だぞ」

「ダメだ完全に尻に敷かれてやがる」

「ははは！変わりに家事が絶望的にダメだから私ともう一人がしているよ！」

「色んな意味で主夫だな」

「それに偶に甘えてくる時が可愛…んん！失礼」

何か高笑いしている魔王のイメージが壊れて来てしまった…

「2番目は彼女、アレクサンドラ・アルシャーヴィン、北欧で出会った戦乙女だ」

次のフリップに出たのは同じように黒髪ロングの女性だが、腰に双剣を帯びているが
／／／／

美人だなあ…いや、それに俺のタイプにもドンピシャだ…そりや口説くよなあ…今の俺でもアタックするよ

「彼女との出会いは…色々あつてな私からアタックしたのだよ」

「ほお、ハルトが自らか」

「そりやそうだろうなあ…」

「ほお……」

「キャラル怖いんだけど？」

「その結果ゴールインしたのだよ…そう言う意味では一番安心できる女性だな、因みに華奢に見えて家内の中で1番の近接戦が得意だ」

「そうか……」

「(キャラルさん！何故殺気を出してるのでしょうか!?)」

「しかし元氣な爺さんになるんだな俺エ」

ハイテンションの維持をしている老ハルトに冷めた目をしている

「3番目は篠ノ之東、千冬と同じ世界の住人でISというパワードスーツで宇宙を目指

す天災科学者だ！」

「アウトロー!?」

色んな意味で、やばい人と結婚してたよ未来の俺！

「うむ彼女は『光の国』を目指している同士でな紆余曲折の末に結婚したのだ、色んな発明をするので一緒に別世界に悪戯を仕掛けて千冬に怒られているよ」

「怒られてるのが現在進行形だとお！」

俺が未来で魔王呼びされてるのって天災兎さんのせいでは？だが光の国を目指すのはグツジョブだぜ！是非とも会ってサインが欲しい……だが俺はあの『光の巨人』達に胸を張れるような生き方が出来ているだろうか……うん……少し穏やかに解決を目指すでしょうか！

「そして『私もウルトラウーマンになりたい!』と、あの星のプラズマスパークに手を出そうとしたなあ……いやマジで危なかった色々」と

「全力で止めろ!!多分だがベリアルやトレギアよりも大変な事になる!!」

「勿論止めたよ……あの時程懸命な説得をした日はないさ、まさか『束さんに限界は無い!』と言って……いや良いか、今はウルトラマンヒカリとは研究仲間だぞ」

「すげええええええ!!」

天災の科学力は宇宙にも通じたが…

「ん?…:…:それ発明品パクられない?」

俺のイメージだと発明品↓強奪イベントだが

「盗まれても追いかけるから大丈夫らしいぞ?宇宙警備隊の検挙率は100%だ!」

「まず盗まれないよう対策しようぜ!」

「続けて4、5、6だ」

「何人いるんだ本当に」

「まあ、そいつ級の問題児はいないだろうな」

「キャロル、それフラグ」

「順番にテストアロツサ、カレラ、ウルティマ故あつて出会った悪魔達だ」

そこに映るのは見目麗しい女性達である、しかしウルティマという子は幼く見えるが

…

「女性に悪魔つて無いだろ」

「いいや悪魔というのは種族的な意味でだ」

「まさかのファンタジー!?!」

「うむ何故か気に入られてな…:特に3人は束よりもはっちゃけるから楽しいぞ」

「そして7番目は……この世界にいるぞ」

「ふーん」

「どうした興味ないのか？」

「んやあ…別にいい、未来が分岐して会わないかもなあつてな」

「ははは！それはないさ！」

「何でわかんだよ？」

「解るとも、誰よりも解る」

「？」

ハルトは意味がわからない顔をしていたが

／／／／／／／／

キャロルは爆発しそうなくらい顔を赤くしていたのであった

「他にも何人かいるな……まあ今のは確かに私の歴史でだ、ソウゴさんの介入で歴史が
変わったというのものもあるだろうが…目の前の女性の1人は守れるようになれよ若い俺」

「そうだな…頑張れる範囲でな」

「ああ、期待してるぞ……頑張れ」

言うだけ言うと、老ハルトは黄金の輪を通って消えたと同時に時間は動き出し何もなかったかのように進んだ

「はあ……俺って奴ア……」

話的にまだいるのかなと思う……頭を抱えたくなるよ……

「は……ハルト……」「んあ?」オ……オレは大切……か?」

顔が赤いキャロルにハルトは窓を見ながら告げる

「そりや大切な仲間だ……はは、目的達成したら一緒に旅でもするか?」

「そうか……一緒に旅も悪くないな……そのまま両親に挨拶するか」

「何か言ったか?……だから……その……なんだ……目的失敗しても死ぬな、死にそうなら助けを呼べ絶対に助けるから」

「まあ期待しないでおく」

「おい」

ジト目で睨むハルトだが、その顔には先程までの悩みはなかった

「冗談さ、約定は違えるなよ魔王」

「当然、約束は違えないよ」

「どうやら俺にも守るものがあるようだ」

—————

ビルの屋上に老ハルトがいた、あの後自分のいた世界には帰らずに待ち合わせをしていたのだ

「ウオズか？」

「お久しぶりです我が魔王」

臣下の礼を取るウオズに老ハルトは良いと告げると

「苦勞をかける、色々大変だろう若い俺は」

「いえ、そのような事はございませんよ」

「そうか、なら良いのだがな…それより過去の俺を誑かしているネオタイムジャッカーなる組織についてだが」

「はい、目下全力で探しています」

「見つけたら直ぐに言え、私が潰す…それと悪かったなウオズ…未来の妻の事を話して

しまったよ…あれだけダメと厳命したのに自分がこの様とは情けない」

「そのようなことはありませんよ、まあ若い我が魔王もこれで異性問題に目を向けて貰えば未来での私の心労も軽くなりますからな」

「迷惑をかけるよ」

長年付き添ってくれる家臣には感謝しかない

「いいえ奥方様達は元気で?」

「ああ、元氣すぎるくらいさ」

笑顔で向かってくるレジスタンスに核撃魔法やD4レイを撃ち込んだりと色々な事があり千冬とサーシャがやれやれと言った感じで止めに入る…そんな穏やか?な毎日

未来の俺は、怒られるから帰らないと言っていたが…それは違うと心の中で否定する

「それは良かったですが…まさか惚気話を話す為に態々過去に?」

「いいや違うさ、まあそれもあるが一番は」

老ハルトは目線を逸らすと現れたのは時空の穴を破る巨大な金色の鱗を持つ三首の龍であった

「これは!」

「どうやら過去の俺を消す為に、レジスタンスが送ってきた戦略兵器らしくてな流石に

過去の俺には荷が重いと判断して来たまでの事よ」

まるで黄金の終焉だなど皮肉に笑うが

「なんと…我が魔王御武運を…祈るまでもありませんが」

「ははは！過去ならいざ知らず勝つのは当然よ見ておれ」

と老ハルトが取り出したのは、ジオウに酷似した歪なアナザーウオッチであった

そのアナザーウオッチに内包されているアナザーライダーは語るに及ばず

『オーマジオウ』

そして老ハルトはレジスタンスの戦略兵器を粉碎した後に元の時代に帰ったとき

時をかけてる？

前回、未来の自分と話して数日が経った

その話はウオズにはしてないが、どうやらあの日 何か金色のものが落ちて来ようとしていたが秒で消えたという変なニュースが場を騒がせたのみであった

んで俺は今

「……………」

『おい、緊張すんなよコレまで何度かそんな状況あつたらろ』

凄い緊張した顔で待ち合わせをしていた、それもその筈だ

「友達が敵という漫画的展開を迎えて初めての邂逅とか…こりや何か起こる前触れだろう？」

ファイズフォンXを耳に当てながらだが、アナザーライダー達と会話している不自然には見られていないだろう

『けどよお…おっ来た来た』

ハルトが目線を向けた先には錫音が笑顔でよつて来た

「お待たせ待った」

「んやコレぼっちも」

「そうか…では行こう！」

「へいへーい」

錫音との買い物だ、多分向こうも気づいているだろう身バレしていると

だからコレは最後の買い物だろうな…本当に

決別の時は近い

その頃、ハルトの従者達はこっそり見守っていた

「我が魔王…この本によれば……」

「ウオズちゃん、いいの尾行して？」

「いいえ、これは護衛ですよ2人とも」

「何もなければ良いが」

「カゲンちゃん、それフラグ」

「む？」

「動きがありました、行きますよ2人とも」

「おう」

その頃

「やはり従者も動きますよね」

双眼鏡で相手を見ているクジヨーも冷静に動いていた

「大将、ウオズの奴は俺にやらせてくれよポロ負けしたからなあ…リベンジだ」

「そう言つてポロ負けするじゃないのですか？」

「あははは！うわあレックさまあないなあ…」

「まずはテメエ等からでもいいんだぜ？」

レックはポセイドンドライバーを

「へえ…」「先にやってあげますか」

メナスは腕輪型のツールをフィーニスはウォッチを取り出し構えた

まさに一触即発だが

「辞めなさい貴方達」

クジヨーの殺気で矛を収めたのであつた

「ちっ！命拾いしたな」

「それはこっちのセリフ」

「はい、機会があれば潰してあげますよ」

「仲良くして下さいよ」

険悪さを見てクジヨーは溜息を吐きながら双眼鏡を見るのであった

—————

「フイーニスもネオタイムジャッカー全員いるな…よし！」

そしてまた一人、この状況を見ている男がいた。黒にオレンジラインのパーカーとジーンズというシンプルな服装で、こっそりとだが遠目で2人を見ていた

「今日の今しかねえんだ、この世界の歴史を変えられるのは…」

誰にもわからない、彼にしかわからない思いが去来していた

—————

夕刻

「いやあ！ごめんね今日は付き合わせて貰ってさ」

笑顔で話す彼女にハルトも無難に返す

「いいよ、別にいつものことだからな」

「そうだね…いつものことだね」

「だからさ、一つ聞きたいんだけどさ……何でこんな回りくどい事したのさ？ネオタイムジャッカー」

「ネオタイムジャッカー？一体何の事「恍けても無駄、確かな筋から情報貰ってるから」あゝアナザークイズか…ちっ！」

「どうやら、コレが彼女の地なんだろうなあと思う」

「知りたい？」

「まあね、こんな事せずに直接襲えば楽だったろうにしなかった理由を知りたい」

「簡単だよ…今の日常が消えたら君はどうなる？」

「寂しいな…」

俺も当たり前を無くしてしまった、絶望した事もある……だが今はこの馬鹿どもがいるからな

「そうだよね…だから同じ目に合わせてやろうってさ！私は貴方に当たり前を奪われたんだ！だから決めたんだよ当たり前だった日常が消え去る事を教えてやろうってね！」

彼女の目には復讐に憑かれている、その目には俺への怒りを感じる…家族を殺された怒り

俺への憎悪、今まで浴びた事がない位のものである

「未来の俺がした事か…今の俺も関係ねえとは言わねえけどな…その魔法は誰かの希望になるものだろう？」

だが、これから逃げてはいけない…逃げちゃダメなんだ、だから正面から向かい合う！

「構うもんか！それにお前が死ねば世界が平和になる！若いお前が死ねば未来のアナザーオーマジオウも消える！そうすれば家族だって死なずに済むんだ！」

問答はおしまいだな、まあ納得する論理ではあるけど、それどうなの？

「そうかい…んじや来なよ仮面ライダー、裏の王が相手だ……だけど寂しいかなアンタとの遊ぶの嫌いじゃなかったよ」

ハルトはアナザーウオッチを取り出して構えるとスズネは指輪とドライバーを構え

た

『ドライバーオン…ナウ』

「そうね私も寂しいかな、最初は打算ありきだったけど段々楽しみなってんだ…：君がアナザーオーマジオウじゃなかったら、私と同じ世界にいてくれたらなあって思うよ」
「そうだな、そんな世界もあったかもなけど…」

確かに彼女となら一緒に馬鹿騒ぎするのも飽きないだろうな…：俺があのままいたんなら…：彼女と一緒に普通の青春とやら謳歌出来たのかも知れない

だが悲しいかな、俺と彼女は加害者と被害者

そして敵でしかない

「そうはならない、辛いもんだよ」

「全くね」

2人はドライバーとスイッチを起動しようとした その時！

「ちよつとまったー！！」

「っ!!」

予想外の第三者の声にハルトとスズネはアイテムを慌てて仕舞うと声の主に目を向けた

見覚えのない若い男性である、念の為スズネに目線を向けるが彼女も首を横に振る俺の所の奴でもないし誰だ?

「ここで2人が争う理由はないんだよ!」

「そんな事出来るか空気読みな!」

「だね…取り敢えず危ないから逃げなよ、見逃してあげる…でない安全の保証は出来ないよ」

「断る!ここで戦ったら世界が酷い事になるんだよ!」

意味わからんし融通効かないなあ取り敢えず

「ごめん終わったら迎えに行く、それまで寝ててね起きても森の物を食べたらダメだよ」
アナザー鎧武の力を一部解放、ヘルヘイムのクラックを男の足元に出すが

「とお!」

「は？」

男はまるで足元から何か来るのが分かってたかのような回避をした

「危ねえ…いきなりヘルヘイムに落とすとかやっぱり鬼だなアンタ!!」

やはり妙だな、何で分かったんだ？つーか俺を知ってるような口調だな…ヘルヘイムの森を知っている？

『確かに妙だな…アナザージオウみたいな予知能力か？』

かもね…となるとアナザージオウになればその予測も見えるのか？

「ハルト、君は甘いねえ…邪魔するならこうしちやえば良いんだよ!」

『ライトニング…ナウ!』

スズネは指輪を介した魔法を向けた

「おい待て!魔法は…避けるアンタ!!」

「これもわかる！」

と横つ飛びで魔法まで避けた……こりや一般人じゃねえな

「テメエ……何者だ？」

「そうだね、私の魔法や魔王の不意打ちまで避けるとか普通じゃないよね」

「悟り妖怪か何かか？」

見た目は貧弱そうだが何かあると2人は理解すると男は少し思索しているようで

「え？……あく……そうか……この時は……」

小声で聞こえない部分があるが何だ？

「ああ？」

「えーと……通りすがりの一般人？」

「んな訳あるか！」

「そうね、我々のように力を持ってなかったら対応出来ないわよ今のは」

取り敢えず正体不明な奴が現れたら……アナザーW！奴の顔で画像検索！地球の本棚の出番だ！

『ちよい待て！俺にそんな検索エンジンのな機能はネエよ！』

ちっ！肝心な時に使えねえなあ！検索エンジン！

『この野郎っ…しゃあねえ役立つ所も見せてやるよ、キーワードは？』

常葉ハルト、知人、異世界人、ネオタイムジャッカー

『減ったがキーワードが足りないな』

ならこう加えようか？追加だ

キーワード

マインドスキャン、タイムリーパー、未来人

『当たったぜ、しかしこりや驚いたな』

んだよ？

『お前の世界から来てるなコイツ』

はあ!?どう言う事だよ！

『神様転生？つてのをしているな能力が…死に戻り？悪趣味な事だな』

0 から始めたりする彼だろうか？

『そんな所だろうか』

どうやら目の前の男はイレギュラーのようだ未来で俺と会っているような口ぶり故に警戒心全開で見ていると突然、男が土下座した

「頼む！2人の……いや！魔王軍とネオタイムジャッカーの力を俺に貸してくれ!!」

「は？」

思わず固まる2人に、それぞれの仲間が合流した

「成る程、どうやら訳ありのようですね我が魔王」

「ウオズ？」

「話だけでも聞いてみたら如何でしょう？つまらぬ願いなら私が処しますよ」

ウオズが恭しい礼儀を取り現れると同時にスズネの背後からは

「ですが、魔王とその幹部陣を前に何もするなは無理がありますね」

ネオタイムジャッカーの面々が現れたのであった

「それは同意ですよ、魔王を関する者は等しく敵です」

「そう言う事」「俺達が潰してやる」

3人はウオツチを構えると、ネオタイムジャツカーのレックとメナスはドライバーと腕輪を装着した

「そりゃコツチもだなあ！」

「ええ早く終わらせましょう」

しかし

「おおおおお……王よー！」

その中の1人がハルトの前に立つなり恭しく膝をついたのであった

「はあ……」

「やっぱりか」「やれやれ」

クジョーは溜息を吐き、レックとスズネはやはりかと言う顔になりメナスは不愉快極まりない顔をしている

「……………へ？」

もう！ピルペポパニックだよー！と頭の中で大混乱が止まらない

「お会い出来る、この時を待つておりました！僕はフィーニス！アナザーライダー…いや！常葉ハルト…正統なライダーの王よ、どうぞ僕を配下の末席に加えて頂けないでしょうか！」

恭しく首を垂れてきたので思わずハルトは困った顔で

「ウオズ、どうしよう！この子ネオタイムジャッカーを裏切つて俺達の仲間入りしたいつて！もう俺パニックで何が何やらわからねえよ!!」

助けを求めると、この頼りになる俺の右腕は

「では面接から始めましょうか？」

何処からともなくメガネをかけたウオズは、フィーニスをそのままの姿勢で面接を始めたのであった

「んじゃ俺から！何でネオタイムジャッカーより魔王ちゃんの方が良いと思うんだい？」

「コントしとる場合か！」

ジョウゲンからの問いかけにフィーニスは即答した

「それは魔王様がライダーの歴史を継承するに正統後継者だからです！」

即答!! いやいやいや!

「俺、アナザーライダーよ? その彼女? の言うようにライダーの歴史奪って生まれた存在よ? それに歴史の正統後継者って本物のオーマジオウだからね!」

ハルトはメナスを指差しながら答えるもフィーニスは強めの語気で否定する

「違います! 仮面ライダーは人類を滅ぼす悪の存在です! それなのに: ライダーは人を守る存在になってしまった! だがアナザーライダーは違う! そして常葉ハルト! 貴方は自らの意思でアナザーライダーの力を統べ、悪を成す心に僕は感銘を受けました!」

「いやいや、仮面ライダーは悪の組織から見たら裏切り者の同族殺しだけでも: その姿は人の明日を守る希望だよ! まあ俺が悪人なのは: 否定出来ねえよこの野郎!!」

否定するが、色々やらかして身の上なので否定出来ない!! 多分だがフィーニス? と俺の間にある差異はこれだろうな

推しの解釈違い

「こりゃ根深いわあ: つーか、そっちは良いの!? 幹部ぽいの裏切ろうとしてるけど!!」

ネオタイムジャッカーの方を向くとクジヨはメガネを上げると

「どうぞどうぞ」

「ああ、そいつからの魔王自慢話を聞かずに済むからな」

「僕も助かるよ、これで仮面ライダーだけの健全なネオタイムジャッカーが完成するからね」

「私はどつちでも」

全員のリアクションに思わず頬をひきつりながらフィーニスを見て思った

「こいつ人望皆無じゃん!!ここままでだとは思わないだろ!」

「ライダーだけではなく、ハルト様まで見ているのは評価が高いな…歓迎したい」

「カゲン、今はそこじゃない!!敵だった奴を信用出来るかって話だ!」

「……っ!」

「そうですね…ですが我が魔王に忠誠を誓うならば…どうしましょう?」

「忠誠の儀的な感じ?……うーん」

「ここで魔王なら仲間の首とか手土産にとか言いそうだが…そうだなあ

「適当な杖を膝で折ってもらおう?」

あそここのメガネ男なら似合うだろうが華奢なフィーニスに出来るか分からないが、あの場面見たらエボルトみたいに笑おう

「我が魔王、それは如何なものかと……」

「いやあ！似合うかなあつて……んん？」

ヘラヘラ笑つてしているとアナザーウオッチが光り始めた

「んお？何だこりゃ？」

『喜べ、ハルト！新しいアナザーライダーがメッセージを受け取りやつて来たぞ！』

このタイミングでニューフェイスだとお！よく来てくれた！刹那、精神世界にダイブする

—————

精神世界

「ようこそ!!初めまし……て……」

新しい仲間元気よく挨拶しようとしたが、その体躯にハルトは唾然としていた理由？タイムマジンよりデカい体してんだよ！っかアナザークウガよりもデカいじゃねえか！下半身バイクとかカッコいいな！……んん？

「デカいなアナザークウガよりも巨体とは頼もしい限りだ」

「クソツ！メンバーの巨体という俺のアドバンテージがあー！」

何故か地面を叩いて俯いているアナザークウガにハルトはジト目で言う

「いや、お前モーフイングパワーとかライジングとかあんじゃん」

そつちのが便利だしライジングも使いこなす訓練しないとな

「そ、そうだった！俺にはまだアドバンテージがあつたぞー！」

「契約者に言われて自分の能力に気づくか…ふん…愚か者め」

巨大な新入りはアナザークウガを小馬鹿にした発言をすると、アナザー鎧武が抗議する

「アア！愚か者ダア!?ふざけんなよ！」

おお！伊達に何年も一緒にはいないからな仲間思いで俺は嬉しいよアナザー鎧武！

「アナザークウガさんの脳味噌はクワガタ虫だぞコラア！」

「おう！つたく、褒めんじゃねえよ…」

「いやフオローになつてねえよ!!」

違つた！混ざつて馬鹿にしただけだった！つか おう！じゃない！

「馬鹿なのか？此奴は？」

「大分な…えーと…君はあ……」

恐る恐る話しかけると俺を見ると紳士な口調で

「貴様は……む……失礼した、私はアナザー1号宜しく頼むぞ我々の魔王よ」
「アナザー1号ね……宜しく……ん？アナザー1号お!!」

仮面ライダーの歴史全否定するようなアナザーライダーじゃねえか！ライダーの歴史が消えるぞこれ!!と動揺していると

「ははは！安心せよ私は仮面ライダーという概念へのアナザーライダーだ、本郷猛とは関係ない」

「良かったー!!」

オーマジオウ所が本郷さんと戦うとかなったら1ファンとして涙を流すしかない所だった！

「さて、魔王よ何なりとご命令を私の轍で目の前の連中を轢けば良いのか？」

「しなくて良いから……もつと、フランクで良いよ宜しく、そだなあ……あつ！あのさ！」

ー説明中ー

「良からう、あやつとは何故か因縁めいた縁を感じるのぞな」

「宜しくね！」

———
さて……と

「ウオズ下がつて……えーと、フィーニスつて

言つたつけ？」

「はい！」

俺に声をかけられ目を輝かせているフィーニスに対して

「ネオタイムジャツカーを裏切り、今後は俺に忠誠を誓うと？」

「はい!!この身命を賭して！」

真剣なようだが

「外様が信用を得るのは難しいのは解るな？それと裏切ればどんな末路になるのかも？」

俺は裏切り者は絶対に許さない、何があつてもだと言外に伝える　引き返すなら今だと

「はい……ですがどのような役目でも真つ当させて頂きます！なのでどうぞ配下に！」

「そこまで言うならいいよー」

皆が問い詰めても一点張りな辺り信用しても大丈夫だろうと判断して迎え入れると

「「軽っ!!」」

「さて……ファイニス、君の覚悟と忠誠に敬意と感謝を込めて俺の力を預けるとしよう好きに使い」

ハルトはブランクウオッチをファイニ스에渡す

「こ、これは!!」

「では最初の命令だ…連中を潰すから手を貸せ」

「はっ!」

ファイニスがウオッチを起動しようとしたが

「ちよい待てー!」

やはり邪魔してきたな少年、空気みたいだったが良いツツコミだ…このノリがあれば俺達の所でもやっていけるぞ

「戦わないでくれよ!頼むから!」

「何でだ、今日の俺は気分がジェットコースターでな止めたい理由がつまらないなら潰すぞ、こんな風にな」

友達が敵だったり仲間ができたりと色々メンタルが危ないんだよ、やりたくないが少し殺気を飛ばしてみると

「っ!!」

彼は何かに潰されそうになりながらも膝をつかなかった

「お、俺にも譲れねえもんがあんだよ!頼むから話だけでも聞いてくれ!!ハルト!!」
本気の目だが…

「誰だ?お前?」

「っ!忘れちまったのか?ハルト!」

転生して死に戻りしてゐるって事だから、何処かの未来にいる俺と知り合いか彼の言う前世で知り合いだったんだろうが

—今の俺とは初対面だ—

なので

「貴様、我が魔王を呼び捨てにするとは烏滸がましい」

「ですな何処の馬の骨かは知りませんが…分を弁えなさい痴れ者が」

俺の仲間達はキレ気味である、いやフィーニスさんや馴染むの早すぎませんか?

『気性が似てるのだろうか』

「だろうね…はいはい2人とも話だけは聞くの忘れたの？話せよ早く何で戦うなと懇願するのかわ？」

「ここで戦うと小日向未来が余波に巻き込まれて死ぬ！そうになるとんでもない未来になるんだ！」

小日向未来つて誰かは知らないが、きつと彼にとつての何かしらなんだろうが

「とんでもない未来つて何？」

気になるねえと期待していると彼は一言

「世界の滅亡」

その言葉にハルトは

「ぷ……はははははは……1人の女が死んだだけで滅亡するのかこの世界は！はははははは！こりや面白いなあ〜」

どんだけ、小日向未来という人は世界の中心にいるんだと思うが

「冗談じゃないんだよ！信じてくれ!!」

真剣に言っている所悪いが

「ははは……はあ……悪いね道化の言葉を真摯に聞く奴はいないよ？それと嘘ならもつと

上手くつけよ自称預言者」

根拠も確たる証拠もない言葉を間に受ける程馬鹿ではないのだよ俺はさ

「さて、フィーニスそいつ退ける邪魔だ」

「はっ!」

「ま、待ってくれ!!」

すると、そこで意外な所から声がかけられた

「魔王お待ちを、私は彼の話に興味がありますので」

クジヨーであった、しかしレックとメナスは不快極まりない顔で

「おいおい大将、まさか話聞こうってんじやねえだろうなあ!?!」

「こんな嘘八百信じる程、耄碌したの?…ああ疲れてるのね貴方」

「まさか日和ってる?」

「いいえ彼の言う事がもし億が一本当なら…ここで戦うのは良くないという事です天命というのもあるのでしょうか…それにフィーニスが寝返りましたから人数的には五分ですし組織体制の見直しもあります…それと、その少年の気概に免じて意を汲んだままですよ貴方はどうしますか魔王? 民からの懇願を無碍にしますか?」

その言い方はズルいな……はあ

「良いだろう、今日は手を引く…だけど今回だけだ次はない」

頭を掻きながら言う満足の声

「それは此方のセリフですよ、あ、そう言えば名乗ってませんでしたね…私はネオタイムジャツカーのクジョー この組織の長をしております以後お見知りおきを魔王」

「OK、見つけたら潰す覚悟しな」

「ええ、ではまた」

と言うとネオタイムジャツカーの面々はオーロラカーテンを潜り姿を消したのであった。残されたホラ吹きと俺達である

「よ、よかった…これで…変わる…」

何か安堵してるようだが

「ウオズ」

「はっ！」

「やれ」

「かしこまりました」

ウオズが命令したと同時にホラ吹きを縛りあげると地面に倒れたので、取り敢えず顔面蹴つとこ鬨いの流れを絶つたのは許せん

「がっ！」

「んで、お前誰だよ？本当に迷惑な奴だなあ」

取り敢えず絞めとくかあ邪魔されても迷惑だし…って危ない危ない考えが極端だな
本当に

「取り敢えず情報だけでも、貰うかな本当か分かるし」

ホラ吹きかどうかそれで解る

『クイズ』

「はい、じゃあちよつと脳を震えさせますねえ〜」

アナザークイズに変身して頭に手を触れて情報を見るが

【覗くな！】

「っ!!」

何かの意思によって弾かれてしまった…変身解除しても手に痺れが残る

「我が魔王？」

「アナザークイズの吸い出しが弾かれたよ」

「なっ！そんな事が…」

「実際に起こったから本当だよな…興味深いな、よし話を聞くぞ連れてけ」
「はっ！」

「い、いやちよっ！」

男の言葉も無視してハルト達は転移したのであった。

ホラ吹きか預言者か？

帰宅後、ハルト達はリビングで縛り上げた男を取り囲んでいた

「よし……取り敢えず」

「ひ、ひい！お、俺をどうするつもりだ！」

「こうすんだよ、お前ら！行くぞ!!」

「はっ!!」

「え？あの……」

「フイーニスちゃん、えつとこうして……行くよ!」

「は、はい先輩!!」

5人で手を繋いで男の周りをクルクルと周り始めたのであった

「食らえ！必殺！日本遊戯カゴメカゴメ!」

「外国の方には何の儀式に見えるのかなあ?」

「雨乞い当たりでは?」

「あ、あの……この儀式は魔王様的に何の意味が……」

「知らん! またぞのいつも病気だ」

「本当の事でも言い過ぎですよ、カゲン!」

「フオローせい!」

閑話休題

「ふう……よし満足! 皆、休んでてお茶用意するから」

「あの…給仕は従者の役目では?」

「ああ良いの良いの! 俺が好きにやってるからさ」

「ええ、それに我が魔王の方が美味しく淹れて貰えるので」

「そーそー未来でも言つてたけど適材適所つてね!」

「うむ!」

「はいはい、そう思うならお皿出してね」

一通り遊んだので輪を解くと皆、思い思いの場所に座るとハルトもお茶と菓子を用意すると男に笑顔で聞いた

「んで先ずはお前が何者で何の目的で彼処にいたのか説明してもらおうか？」

「えーと…俺の名前は野田夏樹、前世の名前は…禁則事項です」

ほお、この状況でそんな冗談を言える胆力はすごいと思うが空気を読め

「ははは〜カゲン、彼を窓から投げ飛ばせ」

それが許されるのは朝比奈さんだけじゃい！

「はっー！」

「いや、本当に話しちやダメなんだよ!!」

ふーん…まあ良いや

「カゲン、投げるのは後にしよう…んでナツキ君や未来で俺はどうなってるのかな？」

取り敢えず聞くだけ聞か

「えーと…最低災厄の魔王になってます…はい」

「そつか…無難な解答だが俺達側の人間みたいだな」

取り敢えず納得したが

「はい！」

「カゲン、燃えるゴミの箇所へ投げ飛ばせ外すなよ」

取り敢えず気に入らないので捨てるでしょう、何故か知らないが無性に腹が立つ
「お待ちをハルト様！」

「カゲンさん……っ！やっぱり貴方は良い人だよ……」

「名前で呼ぶな小僧、貴様とは面識はない」

「どうやら未来か、こいつの世界線ではカゲンは良心らしいな」

「何かゲンちゃん、魔王ちゃんに逆らうの？」

「待ってジヨウゲン、普段自己主張しないカゲンのお願いなんだから聞いてあげようよ

……投げたくないの？」

「いいえ、資源ごみの日に投げさせて下さい！」

「カゲンさん!？」

「そっか……地球の事を思ってたんだな……ちきに優しい従者を持って俺あ幸せ者だなあ！」

「成る程……良いよ資源ごみの日に投げてね」

「感謝！」

「流石はカゲンちゃん、地球環境に配慮してるなんてね」

「我々には無い視点でしたよ」

「これが……魔王と幹部達！素晴らしい!!」

「イカれてんのか、お前ら!!!」

「さて…擲揄うのは程々にしてと」

「擲揄う冗談にしては悪いです…」

「何か？」

「いえ何も!!!」

取り敢えず聞きたい事は全部聞かないとな

「んでお前はどんな未来から来てどんな未来を変えたいんだ？」

「え？」

「アレだけの目に遭つても折れない心を持つ人への敬意だ、顛末くらいは聞いてやろうってな」

頬杖つきながらだがな

「は、はい!!」

そこから聞いた話はとんでもない未来だった

あの時、戦っていたら小日向未来とはやら死ぬ　すると芋づる式で立花響の力が大事な局面を動かす事が出来ずに世界の危機を救えずに滅ぶとさ

「やっぱりマジかー無いわー」

小日向未来1人で地球の運命決まるとか無いわー

「そしてネオタイムジャッカーと魔王軍との並行世界戦争（マルチバースウォー）で、この世界は混迷を「ちよい待て」はい？」

「魔王軍って何だ！んなもん作った覚えないぞ!!」

「えーと、暫くしたら…この世界で事件が起きます解決した後、別世界に行つて帰つてくるんですよ、その時にハルト達が指揮してるのが魔王軍です…はい」

聞けば魔王軍とやらは、かなりの規模の軍団らしく話を聞いた面々は

「素晴らしい…我が魔王が軍団を！」

と言っているが

「その俺怖いな…他にもやらかしてそうだな…」

「ええ…結構やらかしてます…戦場じゃない世界に隠れた敵工作員1人を探す為に現地世界の人間を皆殺しにしよう…」

「マジのラスボスムーブじゃねえか！そりゃ錫音の奴にヘイト向けられて当然だよ…！…つかやってることエグいなオイ」

「この間嫁自慢してきた奴の顔が出てくる…あんにやろうトンデモねえ事になってんじゃねえか」

「ええ未来の我が魔王ですな」

「今の魔王ちゃんは出来ないよね」

「する理由がないからな、つーかまたジジイの俺のせいだよ…んで結局何を変えたいんだ？お前さん」

取り敢えず未来がやばいのは分かったが…何故コイツがここまで干渉するのか気になる

「俺は……立花響と小日向未来を死なせたくないんです!!俺のいた未来では2人とも並行世界戦争前に死んでるんです!!だから戦争を回避して2人のいる世界を守りたいんです!だから力を貸してください!」

女の為か……へえ〜悪くないけど

「面白いじゃん、んじゃお前は俺達にネオタイムジャッカーのサンドバッグになれって

んの？」

戦争のない世界 それは俺達に負けると言外に脅してするようにしか聞こえないんだよなあ

「へ？い、いやそんなつもりは！」

彼的には、この世界ではない場所で並行世界戦争（マルチバースウォー）をさせる事でこの世界の影響を無いようにしたいみたいだが

「お前にそのつもりは無くてもそう聞こえんだよコラ」

途端不機嫌になったハルトは、呆れた顔をして

「テメエが幸せの未来の為に俺達に負けろってんならお断りだ、元々別世界の人間の俺達に取ってこの世界なんて本当に戦場の一つなんだからな」

「そんな！」

今は俺一人の命じゃない、ウオズやジョウゲン達、そして新しく仲間になったファイニス：…そしてキャロルやサンジェルマン達と色々背負ってんだ、そんな無様晒せるかよ「ウオズ、不愉快だ摘み出せ」

「畏まりました我が魔王」

ウオズはマフラーで縛ったままのナツキを引き摺り出す

「それとカゲン」

「はっ」

「夕飯の買物頼むわ、ジヨウゲンも付いてけ」

「俺もお〜」

「馬鹿、今はネオタイムジャッカーやら色んな現地勢力と揉めてんだろ単独行動はしない事…それとフィーニスの歓迎会開くからご馳走を作るからさ早くしなよ…嫌なら買物のご褒美にデザートを作ろうかなと思っただけだなあ〜」

ヘラヘラしながら言うどジヨウゲンも笑い

「了解!!んじや行こうカゲンちゃん!!」

「おい、引つ張るな!」

「行つてらっしやーい」

と騒ぎながら騒ぐ2人を見送ったハルトは少し考えてみる

「ふう…ねえ…俺の選択間違えてる?」

『知らん』

「だよね…まあ平和の為に死ねなんて言う奴の台詞なんて知ったこっちゃないよな」

あのナツキの台詞が正しかったとしても、俺はそうするだろうな誰かの屍を踏み抜く

事を

『だが、面白い事を言う奴だったな恐れを知らん辺りは、お前に似ていたぞ』

「そこまで俺は馬鹿じゃない」

『ほお、俺達の為とは言えオーマジオウに喧嘩売る馬鹿がいたような…』

「ちよっ！それ引き合いに出すのは狡くないか？」

『はははは！』 x 25

「笑うなよ、ファイニスが見てる！」

その光景を見ていたファイニスは

「え、えつとアレは…」

『気にするな、アレは我等と魔王のスキンシップだ』

「そうなんだ…勉強になります」

『何のだ？まあ良いハルトに次いで面白い対象だな』

—————

さて、そんな感じで数日が立ったある日の事ハルトはリビングの机に置いてある物の扱いな頭を悩ませている

「んー」

戦利品であるソロモンの杖の扱いに困っている、キャロルやサンジェルマンから購入依頼が出ているが…何か違う気がする

「けど、俺達が手に入れた以上は俺達で使いたいなあ…」

だが使わせる戦力がいないのだ

ウオズ、フィーニスはアナザーライダー

ジョウゲン、カゲンは仮面ライダー に変身するからな

「思い切つて、彼に渡すか？」

先の事を俺達よりも詳細に把握している彼なら面白い事に使うかも知れない…だがタダで渡すのも味気ないし

『おい、ハルト！』

そう考えていたらアナザービルドから報告が入る

『暇潰しに衛星をハッキングしてみたら、完全聖遺物 デュランダル^①の輸送計画情報を掴んだぞ！』

「デュランダル!? 良くやった! アナザービルドよ…お前に情報参謀の肩書きを進呈しよう!」

『ありがたき幸せ！』

『おいコラ待て！その座は俺のだ！どんだけ貢献したと思ってるんだ!!』

頑張れーアナザーW

『誰のせいだハルト!!』

けど、その情報は美味しいなあ…よし

「ウオズ!!」

「はっ！」

「全員集めろ、動くぞ」

な
さーて、これがナツキの言う未来に起こる事件なら、首をつっこまらざるを得ないよ

「俺の行動は道化なのか判るしな」

歴史が俺の動きでどう変わるか楽しみでしかない

「ご安心を全ては我が魔王の意志のままに進みますよ」

「はは！そんな事ねえよ、それより早く動くぞウオズ いつも通り頼むわ」

「はっ！」

これが後の世にルナアタック事件と呼ばれる大事件となり
魔王と終末の巫女の最
初で最後の邂逅となるのであつた

U A 2 万突破 記念短編 駆け落ちルート

これは錫音の正体がバレた後 ナツキが介入する前にハルトがとある選択をした√
です

「そうね私も寂しいかな、最初は打算ありきだったけど段々楽しみなってんだ……君が
アナザーオーマジオウじやなかったら、私と同じ世界にいてくれたらなあって思うよ」
「……………」

これから俺は彼女と戦おうとしている、これは未来の俺の咎であるし受け入れる覚悟
はできている

だけど戦って解決するのかな？力で押さえつけるだけの未来なんてそれこそ災厄の
魔王そのものではないか……俺は…

『ハルト？何してんだ！早く変身しろ！』

「悪いアナザーディケイド、俺には出来ないよー

そう眩いたハルトは両手を広げて無抵抗を示した、流星の錫音もそれには驚く

「何の真似だい？」

「俺を殺せよ、それが君の望みだろ？」

その言葉に彼女は動揺したまま

「戦えよ…戦って私に殺される！無抵抗の人を痛ぶる趣味はないんだ私は君と違ってね
！」

「俺にもないんだがな…これは俺なりの償いだよ、君の察しの通り俺が死ねばアナザー
オーマジオウは生まれない…それが唯一と言える君への償い方だ」

『バカ！何してんだよ！』

『そうだ！この女が嘘をついてるかもしれない！連中の作戦なら乗る意味はない！』

「だとしても彼女には復讐する理由があつて俺にはされる理由がある…お前たちには悪
いけどこれは譲らない」

そう言つて目を閉じてしまう

一部始終を見ていたウオズ達はハラハラしているが同じようにネオタイムジャツカーの面々でもある

「やるなら早くして…あと出来れば優しく殺して貰えると助かるかな？」

短い生涯だった…妹とその彼氏には悪役に仕立てられまくり、ふと異世界で魔王になるとか言われて平和に統治してるかと思えば戦争を起こして不幸を振り撒く…ロクでもないな我ながらと

これで良いよと彼女の答えを待つていたのだが未だ反応がない恐る恐る目を開けてみると

泣きそうな顔で堪えていた彼女がいた

「違う…：私は君が最悪の魔王だから殺したいんだ！だけど今の君は魔王じゃない！違うんだよ！ハルト！」

「けど未来では魔王だよ？」

「まだ未来は変えられる!!修正できるんだ！」

「出来ないよ、俺はあの時選んだんだよもう間に合わない…はは…：本当君の言う通りだ

俺のいた世界で君と出会えたなら俺の人生は少しでも意味あるものだったと思うよ」

楽しかったろうなあ…錫音が俺の世界にいて出会えていたら普通の青春や日常を謳歌する意味があつたらう…悲しいなあ

「……………っ!!」

—————
それを見ていたネオタイムジャッカーの面々は

「なあ大将…」

「流石の僕でも盗み見してる事に罪悪感を抱いているよ」

「奇遇ですねメナス、私もです…と言うより何故今我々は恋愛映画を見せられているの
でしよう?」

「そりや大将が見張れ言うから…」

「私の所為と!それは酷いですよレック!」

—————

「なら!」

「っ…錫音?」

そう叫ぶと錫音はハルトの元に走り出して彼に抱きつく。腰に添えていたワイズマンドライバーに指輪を添え魔法を発動したのだ。

『テレポート……ナウ……』

すると2人の姿は突如として消えたのだ。慌てたネオタイムジャツカーの面々は現場に走り出す。

「スズネ！おい！どこ行っちゃまったんだよ！」

「そうだよ！魔王殺すなら死体を見ないと安心出来ないんだ！」

と叫ぶ2人と冷静に分析する1人……しかし

「魔王ちゃんを拉致するとはやるねネオタイムジャツカー」

『ザモナス』

「何処に攫った言え」

『ゾンジス』

「ええ我が魔王の居場所を吐くなら苦痛無き死を与えますよ」

『ウオズ』

「それは俺たちが聴きてえんだよ！」

『サメ・クジラ・オオカミウオ！』

「そうですね……アマゾン！」

「ふふ……これが魔王の計画ですか、だがさせませんよ！スズネは返してもらいます！」

その激突により一つの世界の運命、そして連鎖的に数多の世界の運命が変わった

だが死に戻る青年は大事な人を守れず悔いて新たに死に戻ることとなる

歴史にはこう記されている

魔王の神隠しと

—————

10年後 小さな一軒家にて

「父さんただいまー！」

店に入ったきた元気一杯な男の子、黒髪短髪で年相応の明るさを纏っている

「おかえりハルキ、学校どうだった？」

外見年齢と中身が合っていない年齢詐称が近所で疑われている2人の1人 ハルトがエプロン姿のまま息子 ハルキを出迎える

「楽しかったよ！」

「そりや良かった…あ、手を洗ってきたよおやつ用意してるから」

「本当！」

「お父さん特性のパンケーキだ…御所望なら〜」

「チョコアイス！」

「OK! まっかせなさい！」

わーい！とドタバタ元気に歩き回る子供の姿を微笑ましく感じているハルト

『子供の成長は早いものだな』

『あああんなに小さかったのにナ』

『そう言うものみたいだよ…子の成長は』

参考になる例が近くにいない為、主観が多いが俺の中にいる相棒達に困り顔で話している息子 ハルキの母が降りてきた

「ふわあ…お待たせ遅かった？」

「眠たげなのは先程まで仕事をしていたからだだろうなと苦笑する

「いや別に…ってまだ寝てて良いけど？今日は予約ないし」

「そうは言ってもね…」

「あ！お母さんただいま！」

「おかえりなさいハルキ、本当に元気だね」

「うん!!今日ねー」

とハルキの頭を撫でてるのはあの時から髪を伸ばした錫音、彼女はハルキの話を嬉しそうに聞いている

「なんつーかこうなるとは思わなかったな」

『まったくだ』

何故こうなったかは10年前、この世界に来てまで遡る

「何処此処？」

「私しか知らない座標の世界だよ…仮面ライダーもアナザーライダーも何も関係ない…それこそ君がいた元の世界に近い世界だ」

「それでこの世界に連れてきて何したいの？わざわざ転移で抜け出してまで…」

「君は私になら殺されても構わない…そう言ったね」

「おう、何なら今スパッとやってください」

「そこだ」

「ん？」

「その死にたいから早くしろな所が気に入らないんだよ」

「そう言われてもコレが俺だし、償いなんてこれしか思いつかないし」

ヘラヘラ笑うハルトに対して錫音は

「だから君にお似合いの殺し方を思いついた」

「ん？……何そ……っ！」

首を傾げていると錫音はハルトの首を両手で拘束するとそのまま唇を強引に奪った、
そしね

「ふう……ご馳走様と」

「ななななななな！何をする!!」

赤面のまま大声を上げるハルトに錫音は涼しい顔で

「ありや以外と初心だね、キスクらいで」

「初めてだったんですけど！」

「私もだが？」

「なら大事な人に使えや！」

「だから使ったんだが？」

「……………これから殺す相手に？」

「そうだよ…だから思いついた私は君を幸せにする、だから君が私を幸せにしろ全てをかけて」

そんなプロポーズ紛いな告白を受けた俺はこの世界に馴染むように勉強した、色々大変な思いをしたが何とか生活が軌道に乗った頃

何気なく趣味と言うか自分の愚行を忘れないように昔話を短編に纏めていたのだが

「ごめん間違えて出版社に送っちゃった」

「何してんの!!」

側から見たら自分の黒歴史とも言える部分を誤送されたのだ…この女、俺を社会的に殺すでいやがる

この時の俺はそう思っていた…のだが

「大賞だつて!」

「本当に大丈夫かこの世界?!」

予期せぬ事は続けて起きるようだ、聞けば

ファンタジーや特撮風味ながら実体験のようなりアリティや世界観の作り込みが評

価されたと

「実体験のような…って実体験だよ」

「まあ知らぬが仏だね」

「誰のせいだ…んで話って？」

「あの話を本にしたってさ」

「人の黒歴史を世界レベルで公開させる気か！」

俺は出版には全反対であったが錫音の圧力に屈して本にして出した…

散々考えた題名は

『無冠の王』

異形の王になると言われながらも愛する者と逃避行という結末を選んだ王様の話だ

『何かしつくり来るな』

『タイトル回収か！』

メタいぞ馬鹿者が！と怒るが俺もそう思ったのは内緒だ

結果として本は大当たりした

そのお金で今の家を建てた：丁度その頃に俺からプロポーズをしたのであった言葉は内緒だが：今更ながらに恥ずかしいなコレは

そして、錫音の世界に行き両親の墓前にて謝罪とこれからの償いを報告し小さいながら式を上げた

その頃にハルキを授かったと聞いた時は驚いたがな

その後自分の覚えている範囲で仮面ライダーやヒーロー達の物語を残すべく本にして作家として有名になった、錫音は魔法の指輪の技術をいかして装飾品の加工をしたりするなどメ切や子育てに追われながらも、この街海鳴で平和な日々を満喫している
「それでこの間、車椅子の女と仲良くなったの！」

「そうか」

「届かない位置の本を取ってー」

「渡してあげたんだ」

「元の位置に戻してドヤ顔したらツツコミ入れてくれた！」

「その出会いは予想外過ぎるわ！」

「ハルトならやりそうだね」

「やらねえけど!？」

「それで話したら仲良くなつて…その…今度家に連れてきて大丈夫?」

「その子大丈夫かい? 色んな意味で」

「いいよ〜大丈夫」

「本当に!」

「ああ勿論だともお詫びしたいし」

「やったー!」

と喜ぶハルキに微笑ましさを感じてしまう、願わくばこの子には俺のような体験をして欲しくない…あと出来れば人には優しくするように言っておこう

「…なあ錫音」

「何だい?」

「幸せか?」

「さあね…まだわからない…だから教えてくれ幸せにしてくれよハルト」

「そうだな…まだ答えは出ないか…ま、急がなくて良いな別に」

「こんな穏やかな一日が永遠に続きますようにと思う」

「あとね! なのはちちゃんとアリサちゃんとすずかちゃんかウチに永久就職すれば良いって言ってたんだけどどう言う意味?」

「ごふっ……っ！」

「あく完全にお父さんの遺伝だねコレ」

「本当！」

「いや悪い所だから」

「へ？」

「はあ……いいかそれはな……」

『ギヤハハハハハ！』

「お前ら後で覚えとけよ！ー」

そう思わざるを得ないよ

暫くして息子が魔法少女の事件に巻き込まれるのは、また別の話

そしてとある高台にて

「普通だった青年 常葉ハルト……彼は未来にて時の王 アナザーオーマジオウとなる存在だった……しかしこの世界とは違う物語でしたね」

と本を閉じた預言者がいた

「魔王ちゃん幸せそうだね」

「形はそれぞれだ」

「そうですね…僕は玉座に座った魔王様見たかったなあ」

「言うものではありませんよ…おや？」

そして

「兄さん、みーつけた」

俺の忌まわしき過去を振り払うのもまた別の機会に

ルナアタツク前編

前回、アナザービルドのハッキングにより完全聖遺物デュランダルの輸送計画を知ったハルト一行は完全聖遺物の奪取を目論んでいた！

「さて……このデュランダルの情報だけどデュランダル……手に入れるか否かだよ皆の意見を聞きたい」

ハルト宅では新入りのフィーニスを初めとする面々が神妙な面持ちで参加していたのだ

「前回のような罠の可能性がありますが我等の戦力が増えるのは好ましいでしょう……罠も承知で襲うべきです」

賛成票を入れたのはウオズ、彼にしては珍しく過激な意見でもあるが、ナツキから並行世界戦争という情報がある以上、戦力の確保は急務であるというのが主張である

「俺も賛成く上手くいけば黒幕を引き摺り出せるんじゃない？ 流石に裏に隠れてる訳には行かないんじゃないかな？」

同じくジョウゲンも賛成しているが

「俺は反対だ、敵の狙いは解らん以上は対応が後手になる上に前回と同じように動く事で敵に利用される可能性がある」

反対票の筆頭はカゲンである。ライブでの事件にいた黒幕の事を考えれば不用意に動くのは危険である。

「僕も反対だね、古巣（ネオタイムジャッカー）連中の妨害が考えれる…敵は現地勢力だけじゃないよ」

以外にもフィーニスが慎重な意見で驚いていると顔に出てしまったようで

「どうしたんだい？」

「え？ いやあ…その…フィーニスは奪取賛成だと思ったからさ反対って珍しいなと」

「一応僕もネオタイムジャッカーの幹部だったから連中の実力は身に染みてるからの意見かな…確かに貴方の下で手柄を上げたい気持ちはあるけどさ不用意に動くのは危険だよ」

「全軍撃つて出て、ネオタイムジャッカーに横合いから殴られる可能性があるのか」

「はい、戦力の分散は良くないかと」

フィーニスの意見には納得するしかないな…と考えていたがウオズも負けじと反論する

「確かにそうでしょうが、ネオタイムジャッカーは組織の立て直し等で動けない可能性もありませんか？」

「そうかも知れど、クジューはその辺は有能だから直ぐに組織を立て直す…聖遺物奪取を仕掛けるなら時間との勝負になる早くしないと」

「つまり奇襲でデュランダルを貰ってスタコラって感じ？」

「はい、それならどうでしょうかウオズさん？」

「構いません我が魔王、指示を」

「ん…じゃあフィーニスとカゲンはデュランダル奪取を非常時は現場の判断を優先して」

「はっ！」「必ずや」

「ウオズとジョウゲンは待機、アナザータイムマシン置いてくから不足の事態に動くようにして」

「かしこまりました」「了解」

「俺は少し連中の目を逸らしてくる」

その言葉に仲間達はビククリした顔をしている

「我が魔王が陽動する必要はありません！」

「二課とネオタイムジャッカーの目をこっち向ける囷には最高だろうよ、それに確実に

「1人は釣れるし」

スズネは動くだろうし、釣られて何人か来てもらえれば重畳…あと

「念の為、これ持つてくよ〜」

そう言つてハルトが持ち出したのはソロモンの杖とキャロルが以前渡した、あるものが収まるケースであつた

ある公園でブランコに乗つた青年が項垂れている

「はあ……来ちまつた」

ナツキは知つていた、魔王に警告した大事件が今日起こる事も解決に必要な協力を得られなかつた事を…だが

「こつなつたら、俺1人で2人を「どうすんの？」え？うわあああああー!」

決意を新たにしようとした時、真横からかけられた声にナツキはブランコから落ち尻餅をついたのであつた

「よ、未来人」

「つーハルト!お前!!」

来訪者に驚いた顔をしているがハルトは素知らぬ顔でベンチに腰掛ける

「そんな顔すんなよ、今日はお前さんと話があつて来たんだ」

「馬鹿にして、部下に俺を投げさせたろ？」

嫌味を返すがハルトは雑に

「それはそうだが、お前さんのにも貴重な話し合いの機会を不意にして良いのかな？俺、気まぐれよ？」

「っ！」

気まぐれ その言葉の意味をハルトは未来で嫌と言う程 理解していた…だからこそ対話の席につく

「OK、さてと単刀直入に言う…取引だ」

「取引？」

「そ、今回の一件で良いから力を貸せ、代わりにお前に力をやる」

ハルトがケースを開けて中に入っているプロトバースドライブを見せるとナツキは驚きの顔を隠せなかった

「こ、これは!!」

「どうだ？死に戻り以外に能力無いんだろ？なら自衛力も含めれば魅力的な筈だが？」

本当はライダーシステムを外部に流すのは避けたいが、こいつの目的が2人の女性を助ける事なら、それ以外には使わないと俺は踏んだ

「何で俺なんだよ使える奴いるだろ？」

「俺の仲間で使える奴がいらないんだよ、それでどうする？使う？使わない？あ、勿論変身用のメダルはあげるから安心して」

嘘である、仲間内は力があるからバーストドライバーを使わなくても良いだけなのだ。本音はバーストドライバーのモルモットだが……ああ、ライダーシステムの開発者の気持ちってこんな感じなんだろうなあと思うと笑みが止まらない

「約束していい、この一件が終わればドライバーは君の物……まあ偶にデータだけ渡してくれば良い、君仕様の完成品も出来たら持つてくから……変わりに」

「アンタの為に戦えと？」

「そうなる、まあ必要な時だけ声かけする感じかなバイト感覚で構わないし報酬は都度払うよ、今回はコレね」

バーストドライバーを見せる

「……………」

「アンタの話的にどちらかに肩入れしたくないのはわかるけど得な話ではあるぞ？」

「え？」

その根拠を指で数える

「まず、ライダーシステムがあればネオタイムジャッカーとの渡りがつけられる……上手いけばバースより強いライダーになれるかも知れない」

自分の戦力強化にもなるしなと被りを振ると

「そして俺達の協力も得られる、一応は協力者だしな義理は果たすよ…どう？アンタが言つてた両組織の協力は得られるだろ？」

「対価は？」

「ネオタイムジャッカーとの交渉の窓口になつてくれれば良い、本当に並行世界戦争なんて始まった場合 終わらせる為の仲介人が必要だろう？」

それともう一つは言える訳がない、これは他ならぬ俺の判断だ

未来によらない現代の外部協力者の確保

ウオズ達を信頼してない訳ではないが、等の主君は未来の俺で今の俺じゃない、アナザーオーマジオウにする為の行動を狙つてるとした場合 客観視出来る者の協力が必要となる

そう言う意味で言うならば フィーニスは貴重な存在と言えるな

「条件が一つある」

「条件ね…聞くだけ聞くけど何？」

「今回の件、立花響達に加勢してくれ…多分だけどアンタが協力してくれれば被害を抑えられる」

「んー」

それは困るな、彼女達が輸送してるデュランダルを狙う為に動いてるし、仮に黒幕が出るならと考えていると

「この件で黒幕は完全に表に出る、誓っても良い今日必ず起こるぞ」

「そうか……なら」

ハルトはファイズフォンXでカゲン達に連絡を取るが繋がらない…

「おいマジか！まさか!!」

慌ててジョウゲンとウオズにかけると繋がった

「おい、今どうなってる!」

『現在、敵と交戦中です!…しつこい!』

「ネオタイムジャッカーか?」

『いいえ、ノイズの群れです…お気をつけて!我が魔王の場所まで大群が向かってます!』

マジかと、思うと空や地面を覆い尽くすノイズの群れだ警報で街は大パニックとなっている

「こりゃカゲンの言う通り陽動だったな…」

『はい！それにデュランダルの行方も！』

「情報そのものが誘き出す為の餌だった訳か…」

やはり相当の策士だなと警戒レベルを引き上げるが、まずは戦力の集中が急務だろう
「ウオズ、ソロモンの杖を転送するからノイズを振り切つて戻つてくれる？」

ノイズを操れる兵器、使うなら今だろうと判断した

『はい！』

「OK、んじや戻るまでコツチは俺が何とかするよ」

『御武運を！すぐに参ります』

「早く頼むな…：…さて、早速だけどバイトの時間だ」

ハルトはケースからプロトバースドライブとセルメダルを投げ渡す

「は、はい！」

「取り敢えず邪魔する奴は潰すぞ、アナザーウィザード」

『コネクトを使ってウオズに送ったぞ…：…今アナザー1号が全員を乗せて移動しているが、時間がかかりそうだ』

さっすがアナザーウィザード、有能だぜ

「了解だ、んじや時間稼ぎと行きますか」

「おう！つてノイズがああ！」

「んあ？」

目の前にはノイズの大群が、これでは変身前にやられてしまうだろう

「どどどどどうすれば!!」

「慌てんなよ…アナザーW借りんぞ」

『好きにしな、今はお前の物だからよ』

許可を得たのでハルトは時計ともう一つの二つ折り形態、そしてカメラにUSBメモ

リ型ツール ギジメモリを挿入した

『STAG』『SPIDER』『BAT』

すると端末類がクワガタ、クモ、コウモリ型メカに変化してノイズ達に突貫し炭素に

返す

「こんなものよ」

「は、はい…：やっぱりチートだよなあ今のハルトも…」

「何か言った？」

「いえ！何も！」

ナツキはドライバーを腰に巻くとハルトはアナザーウオッチを構えた

「じゃあ…」

「行きますか!」

ナツキはバーストドライバーにセルメダルを装填してレバーを回す、ハルトはアナザーウオッチを押して変身する

「変身!」

するとナツキは装甲を纏い、仮面ライダープロトバースに変身 一方のハルトは疾風が包み込み始める

「お……おお……っ!ハルト!」

心配しているようだか問題ない、まあ俺の精神に違う奴が入り込むくらいだが…
『ギャハハハハハ!んじゃ行くぜハルト!』

ああ、やろうか!俺たちは

『2人で1人のアナザーライダーだ!』

その姿はさながら無理矢理繋ぎ合わせたパッチワークのようなアナザーライダー
片方の顔は泣き、片方は笑いを浮かべている

街を泣かせる2枚のハンカチ

『W』

アナザーW に変身完了すると右手をノイズに向ける、愛着は一応ある街を泣かせる
悪党へ問いを掛ける

『さあ！お前の罪を数えろ!!』

それを合図にプロトベースとアナザーWはノイズに向かって走り出すのであったが
「うおおおおお！ついに言えたぞ！この台詞!!『おい馬鹿ハルト！心を合わせやがれ！』
はあーい：：しゃあないなあ」

喜びの余り半身がおかしな行動を取り、片割れが止める光景があつたという

—————

その頃、ウオズ達はソロモンの杖でノイズの大群に切れ目を作るとアナザー1号に捕

まり、強引に突破し魔王の元へと向かうのであった

「ちよつとフィーニスちゃん！もつとスピード出して！」

「今が全速力ですよ！これ以上は皆さんが振り落とされます！」

「くっ……ならば……ウオズ！貴様だけでもアナザータイムマジーンでハルト様の元へ
！」

「了解した、お前達も急いで」

「おう！」

ウオズは飛び降りると同時にアナザータイムマジーンに乗り込み起動。そのまま加速して街に向かっていた

—————

そしてアナザーWとプロトバースはノイズを倒して回るが

「だああああ！数が多い！なあバースバスター無いの!？」

「ない」

「ああああもう！じゃあどうすんだよ！この量!!」

「しゃあない、これを使え！」

アナザーWはセルメダルを4枚投げ渡すと

「良いのか?」

「この際だ、CLAWSも使って潰せ!」

まあ二つしか使えないがな

「はいよ!」

『クレーンアーム』

右腕をクレーン型アーマが装着されるとプロトバースは近くの建物の屋上まで移動すると

クレーンアームを解除し新しいメダルを装填しレバーを回す

『プレストキャノン』

胸部にバース最大火力を持つ武器 プレストキャノンを出すと二枚のメダルを装填してレバーを回した

『セルバースト!』

「しゃあああああ!」

プレストキャノンの赤い光線は進路上にいたノイズを全て消し飛ばす程の威力を持っていた

「うわあ……キャロルの奴、マジで再現したのか…『怖っ!』」

アナザーWも震える程のキャロルの技術力だが負けちゃられないな！

「俺達も行くぞ『おう！』」

『マキシマムドライブ』

アナザーWは竜巻を起こすと。それに力を込めて蹴り飛ばした

マキシマムを加えた一撃はノイズ達を巻き込み宙に上がると炭素の雨を降らせたのであったがノイズはワラワラ襲いかかってくる

「しっかし拉致が開かないな」

『だったら彼処にいけばどうだ？』

アナザーディケイドが出した光景は奏者4人がノイズに対処していたのだ

『約束したろ、加勢すると？』

「憎いねえ…んじゃ『ほいつと！』」

アナザーWはプロトバースを巻き込む竜巻を起こすと奏者の元へと転移したのであった

ルナアタック後半

現在

『よお、久しぶりでもないかあ』

アナザーWとプロトバースが現れると、その場に集まっていた奏者達は一応に驚いた

「あ、アナザーライダーさん…と？」

『こいつは、バース…まあ俺の部下みたいなもんだ』

「誰が部下だ…：…なあ何か打開策があるなら協力させてくれないか？」

「おい勝手に「良いんですか！」 ああ…くそっ！」

「頼もしいですよ！アナザーライダーさん達が手を貸してくれるなら！」

「ちっ…：…何で俺も数に入れてんだよ…」

悪態を吐くがプロトバースは冷静に

「んじゃ協力しないで、この状況を解決出来るか？」

「出来なくはねえだろうが「おい」んだよ」

対応協議中に見慣れない赤い衣装の女が話しかけた

「テメエが持ち出したソロモンの杖を使えばー発じゃねえか、アレでノイズを安全圏まで動かせば大丈夫の筈だろ？」

「残念、アレは今仲間の手元だよ……ん？……あーお前あの時の鎧女か……イメチェンしたの？」

「っ！テメエ！」「クリスちゃん落ち着いて」っ！

何かキレてんだけどさー

「何で俺恨まれてんの？」

訳わからんと言う態度でいると

「そりゃ馬乗りで殴りやそうなんだろ」

天羽奏がカカカ！と笑っているので不満でしかない

「あん時は完全に敵だったんだから排除して当然だろ？それで責められる謂れはねえぞ」

「ちっ……んじゃあのプランで行くか」

「プラン？」

「はい！クリスちゃんが大技でノイズを倒すので私達でクリスちゃんを守ります！だから力を貸してください！」

「わかった、任せてよ！」

「はあ……面倒くせえが……この状況だもんな」

ウオズ達の協力が間に合わない以上、確実性を選ぶだけだが

「バースとやらは素直だな、貴様もそうあれば良いものを」

「アレはあのバカが能天気なだけ、俺は一応は組織の長だから従うのが嫌なだけだ」
溜息を吐くが……しやあない

「んじやバース…何体倒せるか競争なく、んじやヨイドン！『ビルド』」

アナザービルドになるなり飛び降りると、ノイズに火球を投げつけて吹き飛ばす
「おい狡いぞ！待てえ！」

『クレーンアーム』

某蜘蛛男宜しく 建物に添いながら移動するバースを合図に散開するのであった

「んじや成分貰うぜ」

アナザービルドはブランクボトルを近くの街灯に向けて成分を吸収すると、偶然見つけたスーパードの中にあつた魚の生簀にいた蛸をみて

「おーラツキー！」

成分を吸収すると2本のボトルをアナザービルドは飲み込むなりベルトのレバーを

回す

「オクトパス、ライト……ベストマッチ!!」

自前なので寂しい限りだが……ここからがアナザービルドの真骨頂だオラ!

『オクトパスライト!』

肩から蛸足を生やしたアナザービルドは視野に収まるノイズを蛸足で薙ぎ払った

「っしや!」

射程外にいる奴には反対側の肩にある照明攻撃で炭素に返した

「はははは!良いなあコレ!」

『ハルト、ベストマッチ探す』

「おう!ドシドシ行くぞ!」

「眩し……ああアナザービルドか……やっぱり反則だよなあ……アレ!」

プロトバースは近くで強烈な閃光に目を奪われかけたが直ぐに冷静さを取り戻すと、クレーンアームでノイズを掴むとそのままの勢いで放り投げた

「よいしょおおー！」

プロトバース故に武装は２種類しかないが

「オラオラオラア！」

死に戻りを何度もしている過程で編み出した我流の喧嘩殺法でノイズに掴みかかっている

「おー、やってんねえ」

アナザービルドが近寄るとプロトバースは

「何してんの早く倒さなきゃ」

「生憎全部終わってんだけど」

とアナザービルドの背後には炭素が山積みされていた

「流石魔王だな」

「どうも……一つ聞きたいんだけどよお、何で立花響つてのに固執する？」

「それ聞いちやう？」

「異性として好きとかなら「そんなんじゃないから」は？」

予想外の答えにハルトは少し疑問符を浮かべたがバースは語り始めた

「アレは、あのライブの惨劇後の事だった…」

そこから長い過去なので省略！簡単に言えば魔女狩りの被害に遭った時に自分の身も顧みずに助けてくれた彼女達に恩返しをしたいとの事だった

「ふーん」

興味ねえし、あの事件被害者には俺的に果たせる義理は果たしているので興味もない
…つか

「いたんだあの場に」

「ああ…大立ち回りするお前をみて驚いたよアナザーライダー…ってこつちも聞きたいんだけど何でアナザーライダーと旅してるんだ？」

「誘拐されたから責任取ってもらってる」

『言い方あ！』

「は？どゆこと？お前、行方不明になって何してたの？」

「あ？オーマジオウと拳を交わして仲良くなった」

「本当に何してんだあ！」

事実だろう？と肩をすくめて答えていると空には大量の弾丸やらミサイルやらが散

らばっている

「よし何とかかなりそうだな」

「ふう……さて後は「我が魔王！」ん？ウオズ！」

良いタイミングで来てくれたと喜んでいながら何故か逢魔降臨歴を落として凹んでいる

「どした？」

「私として事が…アナザービルド誕生を祝えずに……っ！」

「あー」

確かにと思つてるとバースが

「アナザーWにもなつてたよな？」

「何と!!…それでバースにならている其方の方は？」

「俺が見つけたモルモットだ、面白い個体でな試しに渡したら変身出来たのだ」

「モルモット!?へ？俺実験体なの!？」

「へ？今更？」

「それより…その声は先日の？」

ウオズはアナザーウオッチを出して身構えてるがアナザービルドが止める

「そ、同郷みたいだからライダーシステム預けても大丈夫かなあゝつてさ説明しなくて

「良いし」

「我が魔王の決定なら従いますが…二課に迎合しようものなら」

「その時は俺が始末するね!」

笑顔で答えるハルトの内心は

(キャロルが忠実に再現してるならアレも搭載してるだろうし)

「会話が物騒過ぎるな…」

引いていると、はっ!と気づいた事がある

「は、早くしないとフィーネがカディングルを起動してしまう!」

「カディングル?…何それ?」

その問いに首を傾げているとバースは簡単に説明した

「簡単に言えば月を破壊する大砲だ!今回の黒幕のフィーネってのは月を破壊するのが

狙いなんだよ!」

「月を破壊?」

アナザービルドの手がピクリと動いた

「そうだ!月が破壊されたら地球環境に影響が!この世界の連中なんて、どうでも良いけど月が壊されるのは困る!」へ?」

「我が魔王？」

「ウオズ、残りの連中に別進路に向かうように伝えろ…あの月を壊すなんて俺が許さん！」

アナザービルドはアナザージオウになるとアナザータイムマジンに乗り込んだ

「我が魔王！何故、月を壊すのに怒りを覚えているのですか？」

ウオズのその問いにハルトは力強く答えた

「俺のヒーロー…その相方の故郷だからだ！その人の大事な場所を何の目的が知らないけど壊す訳にはいかない！」

アナザータイムマジンを起動して目標を設定しながら心で思う ああヒーローと画面越しではあるが 交わり、忘れられない約束を

〈優しさを無くさないで欲しい、弱い人を労わり、どんな国の人も仲良くする心を無くさないで欲しい…それが私の変わらぬ願いだ〉

あの強くて優しい光の巨人 その彼の人を思いやる言葉にどれだけ幼かった俺の心打たれたか今、彼等に胸を張れるような人間ではないし未来とか寧ろ抹殺対象にされかねないけど…彼等に憧れた者として この世界に彼女がいなかったとしても

その人の故郷を奪わせる訳にはいかない!

あの人が遠く輝く星から見守る、あの月を破壊させる訳にいかない

「さあ、フィーネだっけか?…散々利用してくれた札を今してやるよ」

アナザータイムマジーンを走らせた彼の目には強い覚悟が見えたのである

「さて、行きますよバース…不本意ですが同僚ですので連れて行くつもりでしょうか」

「え?うわあ!」

ウオズはマフラーワープでバースを連れて行くのであった

だが月は何かしらのエネルギー砲を打たれたが雪音クリスの絶唱により被害は最小限に抑えられた

リディアン女学院 そこについたアナザーライダー達がみたのは

「!!!」

何か暴走してる奴と高笑いしている偉そうな女がいた…フィーネってどっちだ?

「そーいやあナツキに顔聞いてなかった…面倒くせ

「両方潰すか」

『クウガ』

アナザータイムマジーンから降りたアナザージオウはアナザークウガに変身すると口から火球を吐いて中間地点で爆散させた

「っ！貴様はアナザーライダー！！」

「テメエがフィーネか…初めまして…そしてサヨナラ、よくも利用してくれたなコラ」

「!!!」
「何か黒い奴が走って向かってくるが」

「邪魔」

羽虫をはたき落とすように腕を振ると黒い奴はフィーネに向かって飛んで行って、そのまま壁にめり込んだ

「立花さん！」

「おーう、バース…テメエにあの女は任せた…大方ハザード宜しく暴走してるだろうか
ら頼むわ…死ぬなよ」

その為の力だろうか？と言外に伝えると

「おう！任せとけ…ツンデレか？」

「んな訳あるか、死んだらドライバーだけ回収するけど面倒だからな…まあ俺は、この大砲をぶつ壊す！」

アナザークウガの目が光ると体が黄金に染まる　アナザーライジングクウガへと変身すると

『ライジング…クウガ…ドラゴン』

「オラァー！」

近くに落ちていた鉄棒を拾いあげモーフィングパワーでドラゴンロット擬きに変換すると槍投げの容量でカディングルに叩きつけたが

「マジか」

無傷で健在のカディングルを見て、フィーネは笑う

「ははははは！無駄なことを！そのカディングルは貴様や仲間のデータも登録した代物だ！貴様の力での破壊など不可能だ！精々無力さを嘆くと良い！」

ほお、俺のデータを全て集めた気ではいると？甘い奴め

「んじゃ出来る奴呼ぶか」

「何？」

何処から共なく聞こえる排気音にアナザークウガの仮面の下で笑みを浮かべ、ハルトは言う

「出番だぜ！ 新入り共…手柄のバーゲンセールだ惜しまず行け俺が許す」

と爆風と同時に現れたのは下半身バイクの巨体のアナザーライダー、アナザー1号であつた。肩にはゾンジス、ザモナスが乗っている

『おう！ 行くぞファイーニス!!』

「はっ！ お任せあれえええ！」

口からの光弾と同時に下半身の車輪の攻撃でカディングルに予期せぬダメージを与えていくが

「き、気持ち悪い…」

「二度とファイーニスちゃんの運転に付き合いたくない…」

乗り物酔いで戦力外のゾンジスとザモナスがいた
「三半規管って鍛えようないからねー」

謎のアナザーライダー登場にフィーネも驚く

「な、何だそのアナザーライダーは！貴様等は何人いるのだ！」

「知る必要はねえな、これから消える奴にはよお」

『そうだな身の程を教えてやれハルト』

「ああ…行くぜ相棒」

『お、相棒と言ったな今度は言い逃れ出来んぞ？』

「言い逃れる気もねえの…さっさと片付けるぞ宴会の準備は手間なんだ、早くやるに限る」

『おう！』

アナザーライジングの時間制限が来る前に別のアナザーライダーに変身する、その体は20のビジョンが装甲となり現れた姿は正に悪魔

歪んだ世界の創造者、王になる為に王を目指す者

『ディケイド』

首を回すと、フィーネにサムズダウンをすると

「祝え！全アナザーライダーを統べ！時空を超え過去と未来を示す時の王！その力の一端！その名もアナザーディケイド…正に生誕の瞬間である！…やっと祝えました」

ウオズの祝詞を聞いてテンション上がるぜ！

「ありがとう！っしやあ！何かいける気がするぜ！」

『そうか、じゃあやるぞ！』

「了解！」

アナザーディケイドは腰のバックルを操作すると同時に飛び上がると大量のカード型エネルギーが並び始めた

「っ!!」

慌ててフィーネは防御態勢を取るが無駄な事である

「らあ！」

「ガアアアアア！」

そのままアナザーデイメンションキックでフィーネをカディングルまで減り込ませ

る事に成功する

「やっぱ変身してないライダーのデータは無いみたいだなあ」

「くっ……だが鎧の再生能力を……な、何故再生しない!!」

「どうやらアナザーディケイドの蹴りは回復対象外らしい、そりゃそうか何せ不死の生物すら殺せる不条理だからな

「今の俺は通りすがりのアナザーライダー……世界の破壊者だからな、俺に壊せない道理はない……さて、詰みだな、フィーニス!そのまま踏み潰せ!」

「は……っ!」

前輪でフィーネを踏み潰そうとしたアナザー1号であったが攻撃を止めた

それもその筈、フィーネが大量のノイズと混ざって巨大な化け物となったのだからな

「ふははははは! 貴様等虫ケラにこの手を使おうとはな!」

「追い詰められての巨大化は負けフラグだぜ? フィーネさんよお!」

「っしやあ! 皆! アレをやるぞ」

『あれ?』 x 2 5

「あれってのはなあ……ゾンジス!!」

「はっ!」

阿吽の呼吸とは良く言ったもの、ゾンジスは腕のスロットに収まっている仮面ライ

ダー Jのウォッチをアナザードイケイドに投げ渡す。受け取るとスターターを回してスイッチを押した

『J』

「うおおおおお!!」

謎の光がアナザードイケイドを包み込むと彼の体が巨大化していき、フィーネと同じ体躯まで巨大化した

「は?」

流石のフィーネも思考回路がストップせざるを得なかった

その光景を見ていた家臣団も

「えええ!!」

「これはこれは」

「何でこんな発想になるんだろう?」

「やはり思考回路がズレているな、ハルト様は」

「「異議なし」」

と思わざるを得ない程の光景であろう巨大化したアナザードライダーなど光の巨人に倒される宇宙人みたくである姿

アナザーディケイド・ジャンボフォーメーション
『本当に出来たな』

「本家ディケイドがJの体使って巨大化してたから出来ると思ってな」

だが次回作でサイドバッシャーとギガントの雨霰を浴びるとは思わなかったろうな
Jも

そして巨大化したファイネと取っ組み合いをしている間に奏者達は覚醒、デュランダ
ルにエネルギーを込めているのを感じたアナザーライダー達は

『おいハルト！後ろを見ろ！』

後ろに視線を向けると、ハルトは大声で叫んだ

「何じゃそりやあ!!」

キングギリギリスラッシュみたいになってる！良いなあ！俺の武器もジオウ
サイキョウ！とか文字出したい！

『言ってる場合か避けるお！』

「「シンフォギアだあああああ！」」

いやどさくさ紛れに俺までやろうとしてないかあ!?……そうだ！近くにいて尚且つ

諸悪の根源がいるぞ！

ガードベント（ファイネ）

迷わずファイネを盾にして、俺は元のサイズに戻るとアナザータイムマジーンに乗り込み射線から外れて逃げるのであった

ファイネは見事な爆破を遂げたが彼女が最後にした攻撃の余波で月のかけらが落ちてくるらしい

「うわ、本当に落ちてる」

恐竜絶滅もこんな感じなんだろうなあとか詮無いことを考えてると頼れる従者は答えた

「どうされますか我が魔王？」

「ここまで来たらしやあないよ…俺も行くか」

『フォーゼ』

『ロケット・オン』

「宇宙来たー！！」

そのままロケットモジュールで宇宙まで行って攻撃型モジュールで片っ端から破片を砕き地上の破片やノイズは家臣団が破壊した

その後、奏者達は消息不明

アナザーライダー達も転移するなり暫く姿を消す事となった。

打ち上げ

前回 月の破片を砕いたつた

ハルト宅にて

「……………」

ハルトは考え事をしながらも一切、手を休ませずに料理に打ち込んでいた

その胸に去来するのは一先ずの達成感と悩み

「(この世界で俺のやる事は一先ず終わった…となれば後は別世界に渡るだけ…そこが俺の世界だったら旅は終わる)」

フィーネをボコボコにして溜飲を下げた俺達だが、元は外来人で元の世界に帰るのが常だが

「(キヤロル…)」

この世界で出会った錬金術師の女の子…まあ年齢的には玄孫とお婆ちゃんくらい離れてても不思議は「オイ」っ！

「何か良からぬ事を考えてないか？」

子供状態のジト目で睨まれている…おかしい冷や汗が止まらない…

「何も考えてませんです！サー！」

俺は死にたくないので全力で弁明すると伝わったようで

「まあ良いだろう、次はないぞ…それと」

「は、はい！デザートも作ります！」

「よろしい、それと終わったら話がある付き合え」

それだけ言うのと件の彼女はリビングに戻り、オーズ小説版を読み耽っている

『いつの時代も女性の年齢問題は触れない方が良いんだな』

お前(アナザークウガ)が言うと言説得力が違うな…そもそもアナザークウガは五代さ

んではなく先代クウガから生まれているからな…単純な年齢だけなら最年長だろう…
普段はバカなのに…ボケたのか？

『誰がバカだあ！アナザークウガさんの脳みそはミジンコだぞコラア！』

『おう！』

アナザー鎧武！アナザークウガの脳みそが前回より小さくなってるぞ！！

『まあバカ2人は置いておいて…どうする気だハルト？』

アナザーデイケイドの問いかけに溜息しか出ない

「そりゃ…俺はキャロルと旅がしたいよ…まあ次は俺の世界だろうから楽しみなんて無いだろうけど」

『それは無いだろうな』

「辞めろ不穏なフラグを立てるな」

はあ…：…しかしキャロルはこの世界でやりたい事がある、俺の我儘にキャロルを振り回す訳にはいかないよ…その為にかかしてやるんだろうし

『情けないな、そこはいつも通りキャロルに黙って俺について来い位は言ってみろ』

言えるかあ！

『へタレめ』

うるせえ、悪かったなヘタレでよ…けど別れは寂しいなあ…どうしたら良いんだろ…

思考の海に埋没しているとウオズ達から

「我が魔王！もう料理は大丈夫ですから！」

「そうそう！俺達には勿体ない位の料理だけど沢山あると持て余すから！」

「満漢全席を作るなら先に言ってくれ！」

「これが…魔王の料理……」

「フイーニスさん、つまみ食いは辞めた方が良いツスよ…あー！カリオストロさん！お酒を開けるのは待ってください!!」

呼びかけられ手を止めて気づく

「ふえ？」

机に乗せられない位の料理が並んでいたのだ

そして皆の着席を確認する、今日来てくれたのは作戦に参加した面々とキャロルとエルフナイン、それとサンジエルマン達

「んじゃ、皆協力ありがとう！ウオズ達には色々迷惑かけたし、キャロルやサンジエルマン達にも感謝を込めて…まあ楽しんでっつて！」

「『乾杯!!』」

そして楽しい宴が始まるのであった、皆が思い思いの時間を過ごしている

「貴様がバースの変身者か」

「は、はい!野田夏樹って言います!」

キャロルはナツキに話しかける、ドライバーの性能とかの意見調査なんだ〜真面目だなあと思ってたがキャロルの瞳が赤く光ってる気がする…あ

「そうかそうか…貴様が試作品のドライバーを壊した張本人かあ!」

そうだった、暴走した立花響を止める為に戦ったナツキ 何とか暴走は抑え込めたが代償としてバースが大破寸前まで追い込まれていたのだ

「ひい!!」

そりゃキャロルがキレるわけだ

「何故、頑丈に作ったのに面割れするくらい殴られた!どれだけ頭部を攻撃されれば気が済む!プロトバースとは言え頑丈に作ったんだぞ!メンテナンスにどれだけ時間がかかると思っているんだあ!」

「すみませんすみません!!」

「許さんぞ!これを渡すから、データ取りの為に戦え!存分にこき使つてやる!」

とキャロルは怒りながらも新しいケースを二つ渡すのであった、ナツキは恐る恐る開けてみると中には。新しいバーストドライバーとバースバスターが収まっていた

「これは……」

「完成版のバーストドライバーだ、ユニットも全て使えるが…サソリは使うなよ過負荷にまだ耐えられんからな」

「……………俺に？」

「いらんならオレが使うだけだが？」

「いや、俺が使います！使わせて下さい！」

「良いだろう、キリキリ働け」

「はい！」

ナツキはどうやら完成版を手に入れたがキャロルには頭が上がらないようだ、そだ「フィーニス、楽しんでる？」

ハルトは新入りに飲み物を持っていくとフィーニスは驚き

「は、はい!!とても!!」

「良かったら、アナザー1号もありがとね今日のMVP上げたいくらいだよ」

『まあ当然だな』

本当、頼りになる仲間だなあ……それに引き換え

「ワインを樽で飲むことに日和ってる奴いるう!」

「いねえよな!」

「飲むぞお!」

「「おおおお!」」

いつの間にかカリオストロとカゲンがワインを樽飲みしている光景を見て、一気飲みは辞めろよーと釘を刺す……はあ

「楽しんでんのは良いんだけどよお」

『見事にお前に染まってるな』

「いや、俺は彼処まで酷くないぞ?」

『そんな事はない』

談笑をしているとキャロルとナツキがベランダに出ようとしている光景が見えた

……まさか

「……………」

『おい、まさか』

「行ってこいお前等」

『STAG』『SPIDER』『BAT』『FLOG』

メモリガジェットを一斉に解放して出歯亀する……2人きりの良い雰囲気なぞさせるかあ！

—————

ベランダにて酒気に当てられ頬が赤くなっているナツキとキャロルは外気に当たり体を冷やすと本題に入った

「それで話とは何だ？」

ハルトに話をする前にナツキに呼ばれた、バースの事かと思っていたら

「世界の解剖を止めてくれ、出ないとハルトが最低災厄の魔王になる」

「何？」

途端にキャロルの顔から笑みが消えた、それはハルトがアナザーオーマジオウになる事ではなく

自分が途方にもない程 時間をかけた事を辞めろと言ってきたからに他ならない

「何故だ、それには理由があるんだろうな」

「勿論だ、アンタの展開次第で……」

ハルトと殺し合う事になるぞ」

刹那、キャロルと……盗み聞きしていたハルトの時間が止まった気がした

「何?」「は?」

別々の場所で驚いた2人、しかしナツキは関せず説明を始める

「アンタはダインスレイフを使った奏者の攻撃を受ける…それはあの魔剣に込められた力を体に取り込む為にだな」

「何故、オレの計画を…ああ…そう言えば貴様は未来人だったか？それなら当然か」

「まあな…それでアンタは自害する予定だな」

「まあ最悪の展開ではな」

「その瞬間を帰還直後のハルトに見られる…しかも過程を知らずに死んだ場面だけだ」

「それが何だと言うんだ、ハルトなら動揺せずに受け止めるだろう？元々、その辺は淡白な奴だからな」

「どうでも良い奴ならな、けど目の前で大事な人が奪われた…その時のアイツがどうなるか分からない訳ではないだろう？」

「……………」

その言葉にキャロルは反論出来なかったというより理解したからだナツキの言いたいことを

短くない期間を過ごして分かったからだ、常葉ハルトは人の好き嫌いが激しい……だがそれは一度懐に入れた者ならば誰であろうと深い情を持ち受け入れてしまう

それは彼の良い点であり、悪い点である

つまり良く言えば仲間思いで優しい、悪く言えば排他的な上に独占欲が強く我儘

以前、ウオズに聞いたが従者がボコボコにされたのを見るなり敵を半殺し寸前に追い込むは敵と認識したら男女問わずに暴力を行使するなど敵味方の認識能力が極端なのである。

そんな彼が近しい人が死ぬ姿を見たらどうなるか

深い絶望と慟哭に駆られ、ウオズ達の静止など歯牙にも掛けないまま下手人や世界に敵意を向ける事になるだろう

それが自分が忌み嫌う災厄の未来に繋がるとしても彼は迷わずにその未来を選ぶ、そして世界に対して復讐を遂げようとする決して終わらない復讐の炎にその身を宿したまま

「アンタの望みが世界の解剖だろ？けどハルトがアナザーオーマジオウになれば世界を滅ぼす、奇跡を調べるなんて夢のまた夢だ」

「なるほど…その結果、オレとハルトが殺し合うという訳か」

大事な人を奪った世界への復讐

世界分解の先にある奇跡の調査

互いに目的が違うならぶつかり合うだろう…だが

「あのバカならオレが生きてると知れば止まるだろう？」

その辺能天気…まあ怒られはするだろうが泣きながら喜ぶとは思うが…

「それが無理なんだよ未来で嫌という程見てきたから」

その言葉にキャロルは溜息を吐いた

「はあ……どうやらハルトの奴はオレの思ってる以上に子供のようだな」

「アンタ基準なら誰でも赤「ほお、バーストライバーの秘密兵器を使われたいか？」申し

訳ありません!!」

敬礼して謝るとキャロルは少し呆れたような顔をして

「しようがない奴だな…良いだろう計画の変更は検討してやる、勘違いするなよオレの目的の為だ…こればかりはハルトにでも邪魔させる訳にはいかんからな」

「…………ハルトと一緒に旅して世界を知ったどうです？」

「つ!!!」

世界を知る、その言葉はキャロルに取っては地雷源に他ならない

「貴様!!」

「ハルトだつて一緒に行きたいつて思ってます！あのバカはいつも他人を無理矢理振り回すのに肝心な所じや踏み出せないヘタレだ！」

「今更止められる訳がないだろう!!」

「だから一端やるやらないは置いておいて考えたらどうですか？本当に滅ぼすかどうか」

「……………」

「まあ貴女の計画は実行まで長い時間がかかりますからゆっくり考えたらどうですか？

…あと」

ナツキは呆れたような顔で、目線の先にあるバットシヨットに話しかける

「出歯亀するなら器用にやれよ……なあハルト」

「余計なお世話だ……俺は締め焼きおにぎりを持ってきたにすぎない」

「へー」

「折角と思ったがナツキの分は無しだ、おーい皆！ナツキはいらないとき、余った分食べたい奴ー！」

と言うなり、今まで好き勝手してた奴らが焼きおにぎりに群がる、その光景を見て「是非私に！」「俺が食う！」「いや渡す訳にはいかない!!」

「いや、ちよつ！そこまで言つてねえよ！」

ナツキが離れたのを見て、ハルトがキャロルの隣に腰掛けた

「ふう……ござまあ」

「お前なあ……まあ良いさ……それと話だな」

「おう何だよ」

「今はお前旅にはついていかん、この世界でやる事が残っているからな」

分かってはいたが実際に言われると寂しいな

「……………そっか」

ヘラヘラ笑っているが寂しいのは変わらない

「だが困ったら助けには来てもらう、約束だからな」

「そうだな…じゃあマメに帰るとするかこの世界に」

座標は登録してある、アナザータイムマジーンを使えば何時でも帰れるからな一時の別れだ…別にその他の人間に関してはどうでも良いのは言及しておく

「そうか楽しみにしておく…どうやらお前の料理を気に入ってしまったようだ…これで食い納めにはしたくない」

「なら死ぬなよ…作る意味が無くなるからな生きてるなら幾らでも作ってやる」

「そうか…：…なあ、ハルト」

「ん？何？っ!!」

ハルトは二の句を出す事が出来ずにいた、何故なら

!!!

気づけばキャロルに唇が塞がれ目の前には彼女の顔があったからだ、少しして離れる

と

「ふう……………ではな／＼／今度はお前からしてくれるのを期待する」

キャロルはドタドタと場を離れたがハルトは微動だにしていない

『キャロルちゃんめ、大胆だなあハルト!』

「……………」

まだ返事のないハルトに思わずアナザーデイケイドが問いかけた

『どうしたハルト?』

「……………」

『気絶してるだど!ウオズ!!ハルトが気絶しているぞ!』

アナザーデイケイドからの声にウオズはあり得ないものを見るような顔をしていた
が理解した

「そう言えばこの当時は初々しいのでしたね」

「俺も思ったけどソレ言ってる場合!」

—————

その後の事は覚えていないが…数日間は英気を養い、アナザータイムマジーンの前に

はいつもの面々が待機していた

「早く帰ってこいよ」

「そうさせてもらう、前の礼もしないとな」

「そ、そうか…まあ良い此方は任せておけ、あのバカは暫く預かるぞ」

「お好きに」

ナツキはどうやら暫くキャロルの元でベースの訓練をしながらノイズを倒すらしい、その力は過去の恩人の為に

サンジエルマン達はセルメダルの解析をすると今、パヴァリア光明結社間では仮面ライダーオーズが大流行しているらしい新しい錬金術のバイブルとして注目されていると…錬金術大丈夫か!?

キャロルは…まあ今は語らずで良いだろう…また会えるからな

「んじゃ皆！行つてきまーす！」

それだけ言うとうオズ達を乗せているアナザータイムマジーンは別世界に向かうのであった

—————
ネオタイムジャツカー本部

「ほお、アナザーライダーは別世界に」

クジヨールが新聞から目を上げ、メナスの報告を聞く

「座標は…此処ね…うわああの魔王擬き厄ネタな世界に飛び込む呪いでも掛かっているの？」

そこはネオタイムジャツカーの支部がある世界でも結構問題有りと評されているのだから

「では次の世界の人選は任せますが魔王の足止め程度に抑えて下さいよ」

クジヨールの視線を落とした新聞には、一機の白いロボットとアナザークウガが背中合わせに並ぶもの

白、黄、紫の髪をした少女と共に大立ち回りしている2人のアナザーライダー

そして色んな翼を生やした種族相手に仲間を引き連れ攻撃をしているアナザージオウが載っていた

「いや一体何がどうなったらこうなるのでしょうかね」

クジヨ一の顔には冷や汗が止まらずにいたとさ

I S 編

天災兎が見たタイムマシーン

日本某所

神社で1人の少女が寡黙なままパソコンに情報を入力していた。その画面は明らかに常人には理解する事の出来ない、既存の物によらない新しい発明であるが悲しいかな、誰も彼女の発明を理解する者はいない

この世界には誰一人として

「はあ……この子達を作っても世界はつまらないままなんだろうなあ」

結局、利権目当ての有象無象の所為で面倒な事になってしまう……そうなれば唯一の親友や大事な妹にまで迷惑をかけてしまうので作らない

だからだろうか世界が親友や妹以外が灰色に見えるのは

「はあ……つまらないなあ……誰か……壊してくれないかなあ……こんなつまらない世界」

何気なく呟いた言葉……しかし言霊が宿ったのか将又、彼女の運命なのかは知らないが

この日 彼女 篠ノ之束の運命は変異する

ふと見上げた空に開いた、謎の穴……そして出てきたバイク型の大型マシンが煙を上げながら自分の家にある雑木林に落ちていったのだ

「は？……ええええええ!!」

こりや大変だ！と叫びながら、少女 篠ノ之束は雑木林目がけて走り出すのであった

—————

同時刻 ハルト達はと言うと

「さあー次は俺の世界だろうなあ……父さん達に何て説明しよう」

異世界で魔王と呼ばれて仲間が出来ました！とは言えない…うーん…今なら未来の俺が帰りたいくない理由の一端を理解できた気がしたハルトは肩を凹ますと

「我が魔王、宜しいでしょうか？」

「何ウオズ？」

「いえ、大した事ではありませんが…」

「どうしたの？」

「あちらを…右エンジンが火を吹いております」

へ？と思いい視線を向ければ本当に火を吹いているエンジン部を見て目を見開き

「一大事じゃねえかあ!!!何で黙ってた!!」

同時にアナザータイムマジーンを襲う強い揺れを何とか堪えたハルトは計器を操作し原因を調べてみる

「原因は!？」

「ファイネ戦のダメージが抜け切れてないのかな」

そうか…やるなファイネって、ちよい待て？

「ん？あれ？これのメンテナンス頼んだよな…お前達に？」

「「「っ!!」」」

俺はあの世界の後始末があつたので似たマシンを操っていた3人にメンテナンスを

頼んでいた結構日数にも余裕はあったと思うが…まさか

「恐るべし終末の巫女！」

「おのれフィーネ!!」

「許さん！」

「さてはテメエ等サボったな!!」

真面目なフィーニスに頼めば良かったあ!と頭を抱えるが過ぎた事は仕方ない

「アナザーデイケイド!一番近い世界に座標を合わせろ!そこから脱出する!!」

『了解だ!』

「もし無事だったらウオズ達!暫く飯抜き!」

「「そんな!」」

打倒じゃボケエ!と操縦桿を持つ手にも力が入った、そしてアナザーデイケイドが開いた世界に来るなり

「はい、耐シヨック姿勢!」

「「了解!!」」

「行くよ!!」

そこから不時着の衝撃で少し気絶した

いやあの時の俺は、パイロットになれるかもしれないなと思いましたがよ本当に

んで目が覚めた俺達は外に出ると被害状況の確認をする

「うわあ…完璧にイカれてやがるな」

見ただけで分かる程のボロボロで各所には火花が散るほどのダメージを負っていた

「ま、まあ我が魔王なら治せますよね」

「治せる…っ！か治さないと帰れないからな」

ハルトはアナザージオウⅡの力でアナザータイムマジンンを元通りに戻す。同時にアナザージオウⅡのウオッチはアナザージオウのウオッチに戻った

「ちっ！またエネルギー貯めねえとダメじゃねえか！」

舌打ちしながら頭を掻くハルトは周りを見渡す

「しかもまた俺の世界じゃ無えじゃねえか」

露骨に残念な顔になるハルトだが

『そうみたいだな…どうするハルト？』

アナザーデイケイドの質問には適切な回答を出す

「困ったらアナザーWな、悪りい検索頼んだ」

『おう、んじゃ待ってろ』

よし、んじゃ取り敢えず

「治ったか試してみるか」

一応新品同然に戻ったがロボモードは試さないかと思いきり込み端末を操作する、よし！無事に回復出来るかと安心すると

「ロボモード！」

『タイムマジン！』

バイク型のアナザータイムマジンがロボット型に変形した顔にはアナザージオウの顔が収まっている

「うん…問題無し」

手を握ったり体をほぐす様にアナザータイムマジンを動かしているのを見ているとセンサーに反応があった…：…人かこれ？

「ウオズ」

「はっ！」

通信機越しに指示を出すと待ってましたと言わんばかりに走り出して行く…：うん！サボってた分働けえ！（心の声）

「んじゃ…今逃げてる奴、捕まれたら飯無しを撤回しようか」

「っ!!行つてきます!」

「頑張れ」

手をヒラヒラ振ると同時にアナザータイムマジーンに反応がある…接近…ちよい待て!逃げる所か近づいてきてんの?

「フイーニス!」

「はっ!」

アナザーウオッチを構えると来た!機械仕掛けのウサミミに、まだ学生なのだろう制服を着ている バレたなあアナザークイズに記憶抜いて貰おうと思った第一声が

「お、おとおお!!巨大ロボだあ!!」

「は?」

ハルトは思わずキョトンとした顔するしかなかったが

「「っ!!」」

何故かウオズ、ジョウゲン、カゲンの3人は嘘だろ!つて顔をしているが何で?

「えーとえーと…ナイスチューミーチュー!」

「取り敢えずそこで英語を選んだのは賢いけど日本語で大丈夫だから」

「あ！日本語話せるんだ！良かったあ〜ねえねえ!!君はどこから来たの!!」

しかし怖くないのか…：そうだなあ、あつコックピットから降りるか…：よいしよつと
「何処?…うーん…：異世界?」

そうとしか言えないので答えると

「へー!やつぱり異世界の技術なんだ…：しかもこの素材…：今の技術だと精錬も出来ないの…：」

何かブツブツ言いながら調べてるようだが

「あれ?アツサリ信じるんだ」

「そりゃ出てきた所を見たからね!この束アイを侮らない事だよ!異世界人!」

「ハルト、常葉ハルトだよ君は兎さん?」

「私?私は天災 篠ノ之束さんだよ!宜しくねハル君!」

篠ノ之束?…：…あ…：この人が未来の俺が言つてた

『そうだ未来でよく悪戯をしているという…』

『お前の嫁だろ?ぎやははは!』

笑い事じゃねえよ、つまり今俺は未来の俺と同じルートを歩いてるって事じゃねえか
!

頭を抱えるが落ち着け、未来は変えられる…あの人も言ってたじゃないか！と割り切り

「えーと、篠ノ之さん…因みに此処って何処？」

「束で良いよ！ここ？家の雑木林だよ？多分墜落で爆破が起こったから警察来ると思うよっ。」

「お前等！今すぐ乗り込め！ズラかるぞ！」

慌てて皆がアナザータイムマジーンに乗り込み動かす為、ハルトは操縦桿を握ったが「おー！ここがロボットのの中なんだね！」

「いつの間に！」

束が乗り込んでいた！嘘だろ！

「いいじゃん！束さんも乗せてよ変わりに黙っとくからさ！」

「はあ…：しゃあない…：しっかり掴まってるよ！」

アナザータイムマジーンはバイクモードになり少し飛翔すると、ハルトはアナザーフォーゼ状態のウオッチを装填してスイッチを押す

「頼むぜ！」

『ガッテン！』

『フォーゼ…ステルス・オン』

同時にアナザータイムマジンは光学迷彩により姿を消し何処かへ飛び去った
警察が行った先には謎のクレーターが広がるのみであったとき

これが魔王 常葉ハルトと 天災 篠ノ之束の長い長い付き合いとなる始まりの日
である

―逢魔降臨歴・裏伝―

――

???

「へえ、ここがISの世界かあ！」

「レック、分かっているとと思うけど」

「大将の依頼だろ魔王の妃を狙えってな」

「それもだけど…」

「ああ」

現地入りしたネオタイムジャッカーメンバー、レック、メナスは背後にいるメンバー
を見る

「……………」

スズネは瞳から光が消えた状態で空を見ながら一言

「魔王……潰す！」

「レック、貴方はスズネが血気にはやらないように止めはさいよ」

「へいへい……つたく普段はスズネの役割だろうにな」

「それだ魔王憎しつて事だよ、僕だってあの時の邪魔さえなければ殺したいくらいには嫌いだからね」

「そうかい……まあ俺は強いやつと戦えれば満足だけだな」

3人が思い思いにしていると現れた1人の初老の男性が近づいてくるのを見ると3人は真面目な顔となり

「今回は協力感謝します支部長」

そう言われると支部長は好々爺のような笑みを浮かべる

「ほほほ、構いませんとも魔王がこの世界に来るならば好都合ですね此処で彼には退場願いましょうか」

彼の名前はエドワード・ガーデン

この世界では知らないものがない程の大富豪、尚且つ この世界の秘密組織 亡国企業の長をしているものである

――――

場面は戻りハルト達は東に案内された先には同じような森であったが、何故か地表がスライドして隠し通路が現れた

「特撮の秘密基地みてえだな」

まさに秘密基地だ、と思いつながらアナザータイムマジンを基地内に入れると、彼女の方を見て笑顔で答える

「ふう…あんがとな束さん」

「良いって事よー！それとさあの時巻き戻しみたいに傷が治ってたけどアレってどんな原理なの！」

「え？そこまで見てたのか…困ったなあ…」

アナザージオウⅡの回帰まで見られてたかあヤバいなどうしようと考えていたら

「彼の力ですよ、アナザージオウ…時の王と読みます。我が魔王からすれば時間の操作など造作ありません」

「ウオズ!!」

予想外の人物からのカミングアウトにハルトは驚きを禁じ得なかった、黙る筆頭だろうに

「時間操作!? 凄いねえ!!」

「凄いのは俺じゃなくて、こいつ等だけだ」

アナザーウオッチを見せると興味津々に見ている

「おおお! それが力の源?」

「まあそんな所かな……しかし束さん……凄い基地ですなえ」

「でしよでしよ! 1人で作った自慢のラボだよ!」

「1人で……そりやスゲエ……」

驚くしかないな……だつてキャロルのチフォージュシャトーはブレラーテイさんと共同開発らしいし長い時間をかけただろう、それを短時間でやり遂げたのだから天災と呼ぶに相応しい人である

「あのさあのさ! お礼に異世界の話を聞かせてよ! お願い!!」

「良いよー」

さて何から話そうかなあ

魔王を追いかけて

ハルト、東さんに「シンフォギア編」の説明中

「って感じかな」

一通り話し終えたら東さんは笑顔で

「うん……やっぱり何処の世界も上って腐ってるし、つまらないね！」

言つてのけた！この子凄いわあ！

「そうだなあ……つまんねーなあ……だから……」

自分の力で世界を変えたい

純粋な力や才覚だけでのし上がれる世界……今の腐った層を排除すれば……腐った大

木はへし折れて貰わないと…新しい木は育たない…俺がするのは啓蒙ではなく選民…
か

うわあ…陳腐な表現と思想とかマジの悪役だよ…はは、ないわあくけど

「傍観するだけじゃ、意味がなかったんだよな」

あの世界では傍観者にはなれなかった、見て見ぬ振りなど論外だった…だから戦った、結果が魔王と呼ばれる羽目になったが助けられた人がいるので良いだろう

「ねえ、束さんはどうしたい？」

「え？…私はあ……」

「これだけ凄い基地を若いのに作れる才覚や技術があるけど悲しいかな…きつと誰も評価してくれないのね？」

年功序列や血統で評価される世界なんてつまらない…学校だって勉強や運動だけが出来る子が優遇されて、他の才能のある子は別の所に使えよとか無駄とか色々言われるからな

では、ある意味で束と俺は同類だろうな

今の世界では評価されない才能を持つ者

生まれる時代や世界を間違えてしまった者同士…俺の場合は別の理由もあるけど

「……………」

まさに東が不満に思っていた事を言い当てられてしまったのか顔が曇る

「だからさあ、変えたいと思わない?」

ハルトは笑顔のまま両手を広げて話す

「へ?」

「いつだって望んだら勝ち取るだけ、傍観するだけじゃ何も掴めない」

少なくとも俺は元いた世界に帰りたい、それは傍観や他人に与えられるのではなく自力で掴み取らなければならない事だから

「……………」

「考えてみなよ、いつだって歴史は貴族やら武士やら、王やら…少数派のエリートが引つ張ってきた!そいつらはいつだって上に立つ側だったろ、東さんはそっち側だよきつと」

「君も選ばれてる側？」

彼女の問いの答えは決まっている

「まさかくはない俺は凡人、でも東さんは才能があるじゃん、俺よりも純粋で凄い才能がさ」

俺みたいにアナザーライダーありきじゃない才能を有した彼女なら出来るだろう

「いや貴方のような凡人がいてたまりますか」

「ウオズ、ちよつと黙ってて……んで何が言いたいかって言う……動かないで後悔するから動きなよ、つまらない世界ってんなら自分でひっくり返してみない？その方が面白いし理解者だの何だのは後から付いてくる！」

「本当にそうかなあ……」

「大丈夫だって俺もそんな時は付き合いからさ………ん？」

ヘラヘラ笑っていると手元にスタックフォンが戻ってきた……何々へえ……アイツら……

「俺からは以上、あくアナザータイムマジーン隠し場所貸してくれてありがとね……もう

「ちよい借りとくよ」

「え？ちよつ！東さん置いて何処に行くのかな！」

「ん？虫を追い払ってくる」

ハルトは手をヒラヒラ振りながら答えると

「虫？」

天災は解らないという顔をしていたが魔王の言いたい事を理解した者達は立ち上がる

「やれやれ…仕方ありませんね」

「だな」

「魔王ちゃんく俺達も着いてって良い？」

「ぼ、僕もお役に立てるか!!」

4人が同じように立ち上がるとハルトは少し笑いながら答える

「あ？好きにしろよ」

面倒くさいと言わんばかりの声音だが

「では遠慮なく」

「好きにするよ」

「は、はい！」

「行くぞ！」

「デメエが仕切んなよカゲン」

カゲンの背に蹴りを入れると周りもやれやれと言う、いつものノリに安心したハルトが先頭に立つ、そして振り向き

「束さん！アンタも良い仲間と会えると良いなあ！」

それだけ言うの外に出る

「ハル君…凄いなあ…世界を変えるかあ」

その時 束の中に一つ野心が出来た

「そうだね、じゃあ完成させちやおうか！束さんの発明品!!」

視線の先には全身白で染められた騎士が鎮座していた

—————

雑木林を迷わずに突き進むハルト一行の前には見慣れた白軍服達がいた

「よお、相変わらず暇なんだな雑木林まで来てよーしかもお供までゾロゾロ連れてき…カブトムシ捕まれるなら夜にやれよ」

「はっ！あん時はガキに邪魔されたが今日はいねえだろ？それに魔王討伐が使命なもん

でな俺達は」

レックの言葉に反応したのはフィーニスである

「レック、スズネ、メナス！魔王様に弓引く賊め！成敗する！」

「フィーニス：君には言われたくないな、この裏切り者！」

メナスはキレているが

「結構快く送り出さなかつたか？」

「それはそれ、これはこれだ!!」

なるほど…そりや確かに、だけど後ろの兵隊は「へ？フィーニス様が何故魔王と」とか言ってるよ？知られてないんだあ

だがレックの言葉にハルトは冷静に見てみる

(成る程、この世界の人間とも繋がりがああるみたいだな)

改めてネオタイムジャツカーの規模の大きさにハルトは警戒レベルを上げたハルトは混ざっていたもう一人を見る

「よ、久しぶりでもないかあ」

軽い挨拶のつもりが

「は、ハルトオオオ！」

最早、狂戦士となった湖の騎士レベルの咆哮を上げているスズネ…いや怖いな、何故、エボルトオオ！みたいな感じで睨まれるんだよ

『いや睨まれるだろう？』

「かなあ？」

「ハルト…今日は邪魔はいない…魔王のお前を倒す！」

悲報 ナツキ ネオタイムジャッカーから邪魔者認定される

「悪いけど倒される訳にはいかないんだよな」

ハルトは答えるとアナザーウォッチを取り出し構えるとウォズ達もアイテムを取り出し、相手側も同じように構える

「5人对沢山か」

「カゲン、日和ってます？」

「貴様では無いのかウォズ？」

「この人数なんね良いハンデですよねジョウゲン先輩！」

「先輩か…カゲンちゃん、こりゃ良い所見せないとカツコ悪いよね」

「無論！」

「そだウォズ、使って」

ウォズにアナザーシノビ、クイズ、キカイのウォッチを預ける

「感謝します我が魔王」

「良いって事よ…実は俺も結構、今日は燃えてるんでね邪魔が入らないだろうから徹底的にやらせてもらう」

そして敵も同じように構える

「へ！今日はやる気じゃねえか…やつぱり、この先に妃がいるからか？」

「だとしたら早く行きましようよ狩りは楽しんだもの勝ちよ」

「そう…兎狩りね」

レックはポセイドンドライバー、メナスは腕輪型ツール ミリタントアマゾンレジスターズズネは指を構えた

「変身」「アマゾン」

『サメ！クジラ！オオカミウオ！』

『チェンジ…ナウ』

そして

「」「変身！」「」

『ソイヤ！マツボックリアームズ！一撃！インザ・シャドウ！』

変身したポセイドンとソーサラ、そして爆風と共に現れたのはザモナスに似ている異形の戦士 腰にあるドライバー、ネオアマゾンストライバーに付属したインジエク

ターを押し込み右腕にチェーンソーとガトリングが合体した複合武装 スイープソーを構えた戦士と黒い装甲と長槍を構えた仮面ライダーが現れた

箱庭の管理者 仮面ライダーアマゾンネオアルファ

戦場を駆ける足軽 黒影トルーパー

「え？何あのアマゾン系ライダー!?ガトリングとチェーンソーとか浪漫じゃねえか!」

カツコいい!と敵でなければじっくりと観察したいものであるが

「そっか、魔王ちゃんは知らないのか…じゃあ俺が相手するねえ」

「任せた…それと戦極ドライバー欲しいなあ…」

『使えないのか?』

「使えなくても欲しいの、コレクションしたいじゃん…まあそれは後か頼んだよジョウゲン」

アマゾン系ならジョウゲンが適任だろうな

「ではポセイDONはお任せを」

だよなポセイDONのパワーならゾンジスが適任だ…なら

「フイーニスは黒影トルーパーを片付けてくれ、アナザー1号の体なら楽勝だろう?」

「はい!」

「ウオズは遊撃な状況次第に合わせて動いてくれ」

「畏まりました」

となれば残りは…スズネか

「今度は邪魔は入らないだろうよ二人で遊ぼうよ…なあ？」

そして5人は構えを取るとジクウドライバーは回転しアナザーウオッチが起動した

『ジオウ』『ウオズ』『1号』

「変身！」

『RIDER TIME』

『仮面ライダーザモナス（ゾンジス）!!』

5人もそれぞれの武器や構えを取ると一斉に走り出した

「ふっ…はぁ！」

アナザージオウは双剣で黒影トルーパーを切り裂きながらソーサラーに接近して切り掛かるとソーサラーもコネクトの魔法でハルバートを召喚して受け止めた

「ははは！やろう、スズネえ！」

「魔王おとおお！」

アナザージオウvsソーサラー

そして

「よお、まあテメエが相手なら楽しめそうだなあ！」

「来い！」

ポセイドンのデーパーストハーブーンをゾンジスは何と手刀で弾いた

「んなあ！」

「ぬん！」

そして放った強烈な掌底を喰らったポセイドンは蹠跟めく

「ち、何てパワーだよ……」

「日々の筋トレの成果だ！」

「んな訳あるかあ！」

「無駄だ！」

ポセイドンはツツコミながらデーパーストハーブーンから高圧水流を放つがゾンジ

スは変わらず手刀で切り裂く

「どんな手品だよ」

「タネを明かすマジシャンはいない」

「だよなあ！なら正面から潰すぜ！」

「おう！」

仮面ライダーポセイドン vs ゾンジス

また

「歴史の管理者クオーツアールでありながらアナザーライダーに屈した敗北者め！僕の正義の一撃を受けろ！」

と森の中にも関わらずスイープソーから高速で弾丸を放つネオアルファ

「うわあ…俺達の経歴まで知ってるか」

「そうとも！アナザーライダーに屈するなんて！」

「けどーっ残念、俺達はまだ元クオーツアールじゃ無いんだよねえ〜」

「何だと？」

ボウガンとガトリングの矢玉が森の中で走る中、聞こえた言葉に射撃を辞めた

「どう言う事だ？」

「それはウオズちゃんとカゲンちゃんしか知らなくて良い事だから知らなくて良いよ
！」

「そう言う訳にはいかない！詳しく教えて貰おうか！」

アマゾンネオアルファvsザモナス 開始

「我が魔王との戦いに花を飾りますファイニス、よろしいですね？」

「勿論！さあ来い！」

アナザー1号の体躯に黒影トルーパー達は負けじとロックビークルを展開して応戦する中アナザーウオズは

「では、私も参りましょうか」

アナザーシノビウオツチのスターターを押し込んで変身する

『PERMISSON TIME…シノビ』

アナザーシノビに変身したウオズは分身の術で増えると残った黒影トルーパーに攻撃を開始したのであった。

その時から始まる 物語の結末など誰も知る由もなく

ケジメと新しい始まりと

雑木林は戦場と化していた

アナザー1号が巨大な体から轟音を鳴らしながら黒影トルーパーのロックビークルを蹴散らす、ダンデライナーの攻撃に鬱陶しそうにしている

アナザーシノビも分身の術で数を増やすが、黒影トルーパーは更なる数の暴力で襲い掛かる

ポセイDONはゾンジス、ネオアルファはザモナス、アナザージオウはソーサラとそれぞれが相手をしている

つまり膠着状態で互いに決め手に欠けていた

アナザージオウvsソーサラ

槍とハルバートで撃ち合う中、ハルトが吠える

「つーか、俺を殺した所でアンタの家族が死んだ事実は消えんだろ！」

「何言ってるの！ 貴方が消えれば丸く収まるのよ！」

『デュープ…ナウ』

ソーサラーは分身するのを見たアナザージオウはアナザーゴーストウオッチを押し
て力を解放する

「行け!!」

眼魔コマンドに似た戦闘員が現れて分身ソーサラーに挑んでいく…本日からアナ
ザーオーズでガタキリバしたいが…

『体の負荷が大きいだよな確か』

そう、あのライブの後に変身解除した途端全身筋肉痛に襲われたのである…いや分身
した数的に何かしらの負荷はあると踏んだが危険だった…外に恐ろしきコンボの力で
ある

同様の理由でアナザーライジングクウガもダメだ、決め手に欠く今はなれない

「貴方が魔王になるから……並行世界戦争なんて引き起こすから！ こんな事になってる
のよー！」

ん？待てよだつたら

「何でネオタイムジャッカーにいるのさ、そっちも並行世界戦争に出てるぞ？」

「そんなの貴方が家族を殺したからじゃない!! 敵討ちするのに最適だったからよ！」

『YES! punish strike! understand?』

魔法で出来た光球を放つが、アナザージオウは回避する…しかし分身ソーサラーと眼魔コマンド擬きは一瞬で蒸発した

「っ！ならあ！」

と連続で同じ魔法で絨毯爆撃をするソーサラーだがアナザージオウは木の影に隠れて一息つく

「どうしたもんかねえ？」

アナザージオウの未来視で対応は出来るが遮蔽物のある森では攻めにも出られずにいる向こうは遮蔽物を気にせず魔法で攻撃出来るが

『俺に変われ！ハルト！』

アナザーウィザードの提案に少し思案してみるアナザライダーにあつて仮面ライダーにないもの…あ！

「アナザーウィザード…頼める?」

『任せろ、俺が最後の希望だ』

「つしやあ!行くぞ!」

『ウィザード』

アナザーウィザードに変身すると指輪で魔法を発動する

『グラビティ』

魔法を使い、近くの木を何本か引っこ抜くなりソーサラー目がけて投げつける

「小癩なあ!」

同じ魔法で迎撃する、こりや好都合だ

「もう一発!」

再度同じように木を抜いて投げつける、迎撃されるを繰り返す

「はあ……はあ……いい加減にしなさい!」

迎撃された木から煙が上がり、ハルトは笑みを浮かべる

「終わりだな」

「こつちの勝ちよオ!」

『YES! KICK STRIKE under stand?』

構えたと同時に高く飛び上がりライダーキックを放つソーサラーだが

「これ待ってだぜー！」

『リキッド』

キックを受けるといふ刹那、体を液化化させてキックを回避する、そして

『バインド』

ソーサラーの動きを封じると、そのまま魔法を発動する

『ライトニング』

その魔法を見てソーサラーは驚いた

「何で私の魔法を！」

「同じ魔法使いだぜ？それにな…指輪を変えない分こつちの方が有利なんだよー！」

アナザーウィザードとソーサラーの違い、それは魔法の指輪を変えるタイムロスがない事である。アナザーウィザードは一つの指輪で様々な魔法を使うことができるのだ

「くらえ!!」

魔法で生まれた雷撃は寸分変わらずにソーサラーを撃ち抜く

「きゃあああああ！」

余りのダメージに変身解除したスズネ

その光景は周りを硬直させるに十分だった

「スズネ！」

「よそ見してる場合か！」

「邪魔すんじゃないか！」

『スキヤニングチャージ！』

ポセイドンはドライブバーからエネルギーをチャージしてデーパーペストハーブーンから強化してエネルギー波を放つ

「無駄だ！」

『ゾンジス！TIME BREAK！』

強化されたパンチにより相殺されるのを見て理解した自分の攻撃が弾かれたタネを「そう言う事か…：テメエ…：シンの力で肉体を強化してたのか！」

仮面ライダー シン 真とも言う彼は一般的な仮面ライダー のフォームからはかなり逸脱した外見をしている…：恐らく最もアナザーライダーよりなビジュアルをしている彼に幼い子はトラウマになっただろう

しかし彼は単純な肉弾戦に限れば全ライダー屈指の頑丈さを誇るのだ…：特に肘の部分は鋭い刃物として使える程だ その硬度とゾンジスの怪力で振るわれればどうなる

から自明の理だろう

「ハルト様の元へは近寄らせん！」

「この野郎ガア！」

—————

「へえ……やりますねアナザーライダーも」

「魔王ちゃんの発想力が怖いかなあ……あのままだと……」

「ええ……まあ我々が倒す敵としては申し分ありませんかね！」

ネオアルファのスイープソーを、ザモナスはネオウオッチで作り出したブレードで受け止める、チェーンソーが回転し始め火花が散り始め力負けしたのかザモナスは膝をつく

「これで一人退場ですよ、まあスズネがやられればイーブンですが……貴方のドライバーがあれば形成逆転も可能ですね」

「それは……どうかな？」

「何？………っ！」

同時にネオアルファの動きがピタリと止まるかろうじて動く目線で犯人を睨むなり
叫ぶ

「ウオズううう!!」

その背にはアナザーシノビがこっそり現れていた

「叫ばないでくださいよ耳障りです」

忍刀でネオアルファに一撃を与えるとザモナスを立ち上がらせた

「助かったよウオズちゃん：っーか隠れるなら先に言ってくれないと」

「私はシノビですからね忍ばせて貰いました」

「おのれ！」

「忍法、影縫い」

「っ!!」

『ウオズ』

ネオアルファの動きを再度止めたアナザーシノビはアナザーウオズに戻るとノート
端末を開いて音声入力する

『「アナザーウオズとザモナスの必殺技に崩れ落ちるネオアルファであった」』

「っ!!しまった!」

未来ノートに書き込まれた以上、その未来は実行されてしまう！慌てて防御体制を取るが

「遅いよー!」「終わりです」

『F I H I S H T I M E !』

ザモナスはドライバーを回転させアナザーウオズはウォッチのスイッチを押しエネルギーを溜めたダブルライダーキックを放つ

『ザモナス！T I M E B R E A K !』

「ガアアアアアア！」

ネオアルファは必殺技を喰らい吹き飛ばされ変身が解除された

「ふう……では戦利品として頂きますかね」

アナザーウオズがミリタントアマゾンズレジスター拾うとメナスは憎しみに満ちた顔になり

「返せ！それは僕のものだ!!」

「いいえ、これは我々の戦利品です……おや?」

アナザーウオズがミリタントアマゾンズレジスターに視線を向けると

『ネオアルファ』

ライドウオッチに変化したのである

「ほお……でしたらジョウゲン」

ウオズは興味を持ったが追い詰めたのは彼なので投げ渡す

「ほいつと、へえ〜面白え」

受け取るなりマジマジとウオッチを見るジョウゲンにメナスはキレた

「巫山戯るなあ！ 僕のウオッチだ！ 返せ！」

恐らくハルトが居れば、『もつと無様に頼み込め！ ザビーゼクターを取られた影山さんを見習え！』とツツコミを入れていただろう

「五月蠅いですね」

「ウオズちゃん、俺がやつとくから魔王ちゃん所お願いね」

「任せましたよ」

「じゃあね〜……さて」

ザモナスはアナザーウオズを見送ると、ネオアルファウオッチをスロットに嵌めるなり一歩、また一歩とメナスに近寄り始める、目の前に迫る死の恐怖に思わず後ずさるメナス

「や、やめて！こないでくれ！」

「あははく仮面ライダーなら、この場面は命乞いはしないよ〜」

ザモナスは近づき終わるとボウガンでメナスの額に押し付けた

「き、君の魔王はこんな事して許すと思うのかな！」

「へ？君、魔王ちゃんの何知ってるの？」

「あいつは魔王になりたくないとか言ってるアマちゃんだろ！だったら無用な殺戮なんかしないだろ！」

メナス、それは見当違いであると言わんばかりにザモナスは吐き捨てた

「君、何も知らないんだね」

「え？」

「魔王ちゃんには必要なら何だってするよ…必要だからソーサラーのいた世界だって滅ぼしたし邪魔するなら誰でも敵さ、若い頃と言っても彼がその辺で迷うと思う？」

「そ、それは…」

「まあ…魔王ちゃんには見せられないかな？この光景は」

「や、やめて！そ、そうだ！ネオタイムジャッカーの情報を提供するよ！何ならクジョーに君達を狙う事を辞めさせても良い！だから頼む！」

「無理だよ、多分だけど君は生き残らせておくと魔王ちゃんの害にしなければならないからね……だから此処で終わりだ」

「た、頼む！やー」

その時、ボウガンの発射音が虚しく森の中に響くだけであった

「ふう……んじゃ倒した証明にと」

ザモナスは返り血を浴びたままメナスの骸からネオアマゾンズドライバーを剥ぎ取るなりその場を去ったのである

—————

その頃、アナザーウィザードは変身解除したスズネに近寄ると同じように変身解除すると屈んで目線を合わせると

「まず未来の俺が本当にごめん……取り返しのつかない事つての分かる」

真摯に頭を下げた、だがスズネは怒りの形相のまま睨みつけられる

「っ!!」

この怒りも俺が受け止めなければならぬし忘れちゃいけない…未来の俺がした罪禍を…

「だけど、その魔法は誰かの希望になる魔法だ…断じて復讐の為に使つて良い魔法じゃない…アナザーの俺には出来ない仮面ライダー の…希望の魔法使いの魔法だ」

「巫山戯るな! 私はある時からお前への復讐に生きてきた! 殺せるなら殺してみろと言われた…だから魔法を磨いて此処まで来たんだ!」

その言葉を聞いてハルトは

「だったら俺を殺してみなよ」

「っ!」

『ハルト! 貴様何を言ってるんだ!!』

『考え直せよ! 変身解除したお前の耐久力なんざジープに撥ねられて死ぬ程に弱いんだぜ!!』

『そうだ! ハルト! お前は雷に打たれて死ぬ程虚弱なんだぞ!』

アナザーWにアナザークウガよ…それ普通の人でも死ぬよね? とは言えない空気が彼女の気が晴れるなら良いんじゃないやねえんだろうか? と思う 序でに厄ネタしか持つ

てこない未来の俺への意趣返しも込めている

俺はお前と違うと言外に伝えたい為に

「望む未来があるなら勝ち取れば良い……東さんにもそう言ったからね……俺は何もしないし反撃もしない……何ならウオズ達にも手出しさせない……心配なら」

ハルトはアナザーウオッチを地面に置いた

「ほれ、これで俺はアナザーライダーに変身出来ないよ殺すなら早くしな」

両手を上げて無抵抗を示すと

『ハルト！考え直せ！此処で死ぬ等……俺達は絶対に認めんぞ!!』

「アナザーディケイド……経緯はどうでアレ、彼女には復讐をする権利があるし、王様なら理解して償いをする……それを行使するかは否かは彼女の意思だし償いをするのは俺の意思だよ」

『帰って家族と会うのでは無いのか!?!』

「会いたいよ……けど今の俺が家族に会っても胸張って　ただいまを言えない……言う資格もない……これは王様以前に俺自身へのケジメだ」

きつと、この件を解決し無ければ俺は会っても笑顔でいられない……後ろめたさが残っ

たまたまだ、そんなの許せる訳がない

「っ……」

「変身しなくても魔法使えるんだろ？ほら」

「言われずとも……」

上げた両手を横に広げるとスズネは指輪を火球の魔法が納められたものへと変える、両親を奪った彼が使った炎と似た者をくれてやる！

『ファイヤーボール……ナウ……』

右手に現れた火球を構えて彼に狙いを定める

「はあ……はあ……はあ……はあ……」

やつと殺せる！家族の仇だ!!と魔法を放つ刹那によぎったのが

『アンタと遊ぶのは嫌いじゃなかったよ』

敵対する前に自分に向けた悲しそうな顔だった

「っ！」

住んでの所で発射を辞めたスズネだが改めて狙いを定める

『だから俺を巻き込むなよ！ナンパされたくないなら1箇所留まるな！』

『良いじゃないか君は強いんだからさ、ナンパ男くらいからは弱い女の子一人守って

くれないと』

『何処がか弱いんだが…』

『何か言った？』

『か弱い女の子って何処にいる？』

『そこは言わない約束じゃないかなあ！』

何故、このタイミングで思い出してしまうのだ！打算ありきで近づいた時に遊んだ思い出などを！

「……………」

スズネの手は止まっているのを見たハルトは首を傾げる

「なあ、翔る趣味があるのは結構だけど早くしてくんない？」

「……………」

分かっている…いや分かってしまったのだ

目の前の男は、自分の知る魔王ではない

まだと言う言葉は付くかも知れないが打算で近づいた自分にまるで友人のように接してくれた彼は離別する前に言ってくれた、楽しかったと…そして何より自分も言ったではないか

【だんだん楽しみになってきた】

【君がアナザーオーマジオウでなければ良かった】

「……………い……………か」

「はあ？何言っ…っ！」

聞こえなかったのでハルトは聞き直そうと目を見ると彼女は大粒の涙を流しながら話す

「殺せる訳ないじゃないか！」

「……………」

ハルトはやれやれと被りを振ると彼女に近づく、スズネは火球の魔法を解除したのか霧散して消えた

「それが本音？」

尋ねると彼女は首を縦に振ると、ハルトの胸を思いきり殴りつけながら叫ぶ

「何で君が魔王なんだ！何であのアナザーオーマジオウになるんだ!!どうして復讐相手を殺すのに…こんな辛い思いをしなきゃならないんだ！」

「そりゃ不用意に近づくからでしょ？変な事するから情が湧くんだよ」

正論だと思いが一喝された

「うるさい!!」

「ええ……」

そもそも俺自身は、あのアナザーオーマジオウになるのは本意ではない未来でそうなると言われているだけだからな

「君が何で魔王になる! どうして君みたいな能天気が非道な魔王にならないといけない! どうしてあんな風な魔王になった!」

それはハルト自身も解らないので

「それは俺が一番知りたい位だよ……けど君と会って決めてる事がある、アナザーオーマジオウにはなりたくない……けどならないといけないなら俺は最低災厄じゃない最高のアナザーオーマジオウになる」

「っ!! そんなの!」

「未来を変える権利は皆、平等にあるんだってさ……だから俺も……変えられる未来があるなら変える……魔王になるとしても良い道を歩きたい」

「……………」

「だから錫音……もし俺がお前の知ってる未来にいる非道な魔王になったと判断したら迷わず殺ってくれ、その方がスッキリするだろ?」

「っ!!」

「それにウオズ達はきつと俺が最低災厄でも最高最善でもどつちでも良いんだよ、俺がアナザーオーマジオウになってくれれば…だからさ良い悪いは錫音が判断して決めてくれよ」

「……………」

「そんだけ……そだ、また暇なら遊び行こうぜ」

それだけ言うくとハルトはアナザーウオッチを拾うなり脳内には怒声の嵐であった

『ハルト貴様！何考えてやがる!!』

『心配したじゃねえかあ!』

「つせえなあ…俺が死んでもテメエ等は別の奴見つけりや良いんじやねえの?」

『貴様が死ねば俺達も死ぬんだよ!あんな真似二度とすんじやねえ!』

うーん…多分無理

『ハア!?!』

「必要ならやる必要ないならしない、これが俺だから」

『はあ…分かった…だが一つ聞かせろ、アレは貴様は予知して死なないと踏んでやったのか?』

「んやアナザージオウの未来予知だと俺魔法で焼かれてた」

変身解除前に試してみたら、俺火球で焼かれて死んでたんだよなあ

『死んでんじやねえかあ!』

「けど今は死んでねえ結局…俺は未来だけが見えてただけ、それを変えれるだけの力があつただけ彼女にさ…強い人だ…俺の負けだよこれに關しては」

肩を竦めてヘラヘラ笑っていたら3人の黒影トルーパーが襲いかかってきた

「ガラ空きだせえ!魔王!!」

「手柄だあ!」

「ヒヤッハー!」

影松で貫こうとするが、ハルトは溜息を吐いた

「不意打ちなら静かにしなよ…意味ないぜ」

まるでどうでも良い感じに吐き捨てると同時だった

巨大な車輪が黒影トルーパーを轢き潰したのは

「魔王様!ご無事で!」

「フイーニス、良いタイミングだけど…あーあ…ドライバーがペシャンコだ…治せないなコレ」

「も、申し訳ありません!」

「謝らないでよ助けてくれてありがとうな」

「も、勿体無いお言葉!」

「さて……と……何か言いたそうだなあ、ウオズ? はつきり言ってみろよ? なあ?」

ハルトは少し不機嫌な声音でウオズに話しかけると彼も不機嫌な声音で

「我が魔王、二度とあのような真似はされないようにお願いします」

「アナザーライダー達にも話したが断る、これは俺のケジメだ邪魔すんならウオズでも許さねえぞ?」

「我々は魔王ありきの存在です。貴方は我々の長である自覚を持つてください」

「はあ……わーったその辺は妥協してやる……だけど筋を通さないのは俺の流儀じゃない、それだけは理解しろ」

「はっ!」

「んで戦況は?」

「カゲンはポセイドンと戦闘中です」

「ジヨウゲンは?……まさか!」

「俺を呼んだかい魔王ちゃん?」

とヘラヘラ笑いながら現れたジヨウゲンの手には血塗れのネオアマゾンズドライブバーが握られていた

「ジヨウゲン……それ」

ハルトが尋ねる前にジョウゲンは膝をつき臣下の礼を取るなり、まるでドライバーを献上するように差し出すなり

「ネオタイムジャツカーの幹部メナスを打ち取りました…返り血のドライバーがその証拠になるかと…死体は魔王様の御前に捧げるのは不作法と思いいこの形と致しました」

「そうか…良くやったなジョウゲン！」

「はっ！」

「さてと…んじゃ残りの連中を蹴散らすぞ！」

「「はっ!!」」

その後、レックは放心状態のスズネとメナスの遺体を拾い上げた後、敗残兵を集めるなり撤退した結果は俺たちの勝ちだな

「戦利品はドライバー二つとネオアルファのウォッチか…」

ハルト達は束のラゴに変えるなり机に置いた戦利品を見ている

「ジョウゲンにはネオアルファのウォッチを上げるよ勲功一等って奴かな」

「有難き幸せ」

「カゲンもありがとうね」

「いいえ、ポセイドンを打ち取れずに申し訳ありませんでした！」

「大丈夫、生きてれば次がある…だから無事で嬉しいよ」

「っ！ハルト様！」

「ウオズは…何か欲しいのがある？」

「でしたらネオアマゾンズドライバーを」

「へ？コレ？使えんの？」

血は拭き取ったがインジェクターの薬液…それ以前にアマゾン細胞がないと使えん
だろ？

しかも千翼や悠みみたいな素質のある人でなければダメの筈だ

「ネオアルファは変身アイテムがウオッチになりましたので、何処を線引きとして
ウオッチになるのか調べたいのです」

「そうか、わかったじゃあ上げる」

とネオアマゾンズドライバーはウオズに渡した

「フイーニスには悪いけど戦極ドライバーとロックビークルで我慢して…ごめんね仲間
のお願いも聞けないダメな王様で」

「そ、そんな事…ごいませせん！有難く使わせて貰います」

「で残りはコレだな」

カッティンググレバーが破壊され変身出来ない戦極ドライバーとダンデライナーか……
どうしようと考えてると

「ねーねー！それ束さんに頂戴！」

「へーいやコレは……うーん」

ダンデライナーは良いが戦極ドライバーは壊れてるし問題ないか？

「分かった……けど使う時は俺に一声かけてね」

「了解……それとねハル君！私は目指すよあの子と一緒に宇宙へ!!」

手を広げてハルトに見せたのは白い甲冑を思わせるロボットであった

「か、カッケェ！」

「この子の名前は白騎士！私が作ったパスワードスーツ！インフィニット・ストラトスの
一号機だよ！」

「インフィニット・ストラトス（無限の成層圏）ねえ……宇宙か俺も行きたいなあ」
いるから知らないが行けるなら目指したい場所がある

「なら一緒に行こうよ！ハル君も！」

「ハハッ！良いねえくんじゃ付き合おうとしますか宇宙の旅に！」

「イエエエエエイ!!」

とハルトと束はハイタッチしたのであった

—————

ネオタイムジャッカーIS世界支部

「悪い大将、メナスがやられちゃった」

端末で報告をするレックは戦友の戦死を上司に報告すると

〈そうですか…〉

追悼の意を示したクジヨーは少しして

〈では、支部長頼みますよ〉

「お任せください、クジヨーさん」

〈ええ、元からアマゾン細胞を有していますから優秀な素体になりますよ〉

「ええ、我々のプロジェクトも飛躍します感謝しますよクジヨーさん」

「おい大将…まさか!」

〈ええ、そのまさかですよメナスにはある目的に協力して貰いましょう…では〉

クジヨーが通信を切るとレックは止まらない冷や汗を流したまま戦慄していた

「おいおいまさか…」

別室では メナスの遺体に何かしらの手術を行っていた
こう記されていた
その近くの計画書には

と
『
P
R
O
J
E
C
T

S
I
G
M
A
』

意外と平和な日々

前回の戦いから数日、傷も癒えたハルト達は束のラボを間借りしている理由は彼女に預けた戦極ドライバーのデータ収集と彼女の夢である翼を更に進化させる為に…この日の為に専門家も呼んでいる

『ふむふむ…つまりこのPICで慣性を…』

まずは彼、元が天才物理学者から生まれたアナザードライダークンことアナザードビルド

『絶対防御機能か…素晴らしいな…大気圏も突破出来そうだ』

『それにISは人工知能に近い人格…つまり心がある…宇宙の大海原に行くなら頼りなるな！』

新米のアナザーゼロワンとオーマジオウよりも未来で生まれたアナザードライダークン

アナザーキカイ…我等チームの理系筆頭である。

また情報という意味ではアナザードビルドも負けてはいない地球の本棚による情報収集は他の追従を許さない…だが

「……………」

肝心のハルトが情報量の多さにプシュッと頭から煙を出していた

「情報が完結しない」

『無理をするな、ハルト…まだ傷も癒えていないのだからな』

「けどよお、東さんに世話なってる以上は彼女の夢に協力したいじゃないか…夢に向かつて跳べ！だろアナザーゼロワン？」

『その通り！ハルトの春は近い！はい！アルトじゃーナイトー！』

「次は何したら良い？」

『よし、お前等エネルギー直結のテストに行くぞ』

『おう任せておけ』

『いや、ちよっスルーしないでえ！』

今日も今日とで賑やかな奴である

—————

初めまして私は織斑千冬…誰に向かって挨拶しているかは知らん、だが最近私の親友が笑顔で学校に来ることが多い…普段は他人など塵芥と言わんばかりの冷たい目を向ける事が多いのだが…ふと気になったので聞いてみる事にしよう

「東、最近は機嫌が随分良いみたいだが何かあったのか？」
すると彼女が満面の笑みのまま

「そうなんだよ！東さんの事を分かってくれる人が出来たんだ！」

その言葉に千冬の顔から冷や汗が流れた

「そ、そうか…それは良かった…」

一体どんな問題児だ…東と同じレベルだったら大変だと頭を抱えるが

「その人はね、東さんのやりたいことを思い切りやれって背中押してくれたんだ〜それで今私の発明の手伝いもしてくれてるの！」

「そうか…」

何処の誰だ！この自重0の暴走兎のリミッターを壊した奴は!! やつと自重を覚えさせたのにと叫びたいが堪えた

「いつかね…東さんが宇宙に連れて行ってあげたいなああって」

少しほんのりだが頬を赤く染めている東を見た千冬は

「ほお…東にそこまで言わせるのなら会ってみたいものだな」

「あーちーちゃんも会ってみる？きつと仲良く出来ると思うよ？」

「それはお前レベルの問題児という意味でか？」

「違うよ!!」

「はつくしよい！」

『風邪か？体には気をつけろよ』

「問題ねえよ、なんなら毎日健康診断してるからな」

『そうだな、ハルトは健康だぞ』

アナザーエグゼイドの診断も貰ってる訳だから問題なしだよって事は

「噂されてるな…つたく有名人は辛いぜ」

『大方、おのれ魔王おおう！とか叫ばれてるのだろうな』

「やばいな…心当たりしかない」

主に錫音とか…うわぁ

「さてと…後は束さんがプログラムを作るだけだな…よし！久しぶりに飯でも作るか
！」

そう思い、アナザータイムマジン内保管している食材を取り出しに向かうのであった

「いやあ、オーマジオウが簡易だけど調理機材も積んでくれたから助かったよ」

多分、緊急時用だろうけど使える内に使わないとね！えーと小麦粉に卵に砂糖…バター…よしホットケーキにしよう！

ー調理中ー

そして綺麗な円形に出来たホットケーキを2枚バターを乗せると笑顔で近くのテーブルに腰掛ける

「ふう……んじやいただきまーす」

切り分け一口と思ったが

「我が魔王？」

「……おおう」

笑顔の従者達がいた…しかし！俺はその辺の対策も大丈夫だ！

「焼いたのあるから食べな」

「有難き幸せ！」

ウオズは簡易キッチンに走り出したが

「あ、ウオズちゃん」

「一足遅かったな」

「……………っ！」

そこには山積みしていたホットケーキが消え下手人3人がリスのように頬を膨らませて食べていた、それを見て

「ふふふ…どうやら仕置きが必要なようですね」

「何言ってるのさ？こういうのはさ」

「早い者勝ちだ」

「あ、あの…良かったら、まだ一枚残ってる…」

フィーニスが恐る恐る一枚差し出すが

「それでは足りませんよ！」

はあ追加で焼くか…しゃあない…

「ウオズ！追加で焼くから大人しくしろ！」

「は、はっ！」

「お前等も仲間内で喧嘩すんな！しかも食べ物で喧嘩って…沢山食べたいならそう言え！俺が作る！」

「は、はっ！」

『オカン？』

「んや目の前で空腹で泣く奴を見たくないだけ…あー在庫切れか…買わないとな…」

しゃあない

「買い出しに行くけど付いてくるやついる？」

「では私を」

「OK、じゃあウオズには褒美にホットケーキにバニラアイスに乗せてやるよ」

「出来ればチョコアイスで……」

「さりげないな……良いよ、んじや行こう……あ……」

しまった！ 買い物の足がない！ アナザータイムマジーンで買い物には行けないぜよ！

『アナザートライドロンを呼びなさいよ？』

アナザードライブ……あれが公道を走れるのは人気がない場所だけだぞ？

注意 アナザートライドロンは公道を走れません

「うーん……あ、ウオズのマフラー転移……も無理か、転移先に人がいたら大変な事になるし……うーん……」

頭を抱えているとアナザーデイケイドから念話が届く

『それならば俺達の出番だな』

んだよ、何するの？

……

『俺達はアナザーライダーだぞバイクの一台や2台あるさ』

へ？マジ!!…けどさあ

『何だ？』

「お前等のバイクって生き物ばいじゃないの？」

だってアナザーライダーだぜ？本家のバイクを持つてるかなあ？

『良からう…：ならば貴様に見せてやろう！俺達の力を！』

どうやって？

『第一回！チキチキ！ハルトにライダーマシンプレゼン大会!!』

『ワアアアアア!!』

アナザーゼロワンがそう言うとなアナザードライブがデコトラやサーカスを使い出囃子を鳴らす

「……ウオズ、出発待つて貰える？」

「どうされました？」

「アナザーライダー達がプレゼン企画を持ってきた」

「はっ。」

いやそうなんだけどさあ

『今日はハルトが買物に行く！つまり普段使いが出来るバイクを持ったアナザーライダー達がエントリーしてきたぞ！』

それは有難いけど……大丈夫なの？

『エントリーNo.1！アナザーアギト！』

『おう！俺のバイクのプレゼンポイントは何と言っても念じれば来てくれるお手頃さだぜ！意思がある自立走行も可能だ！』

まず虚空から出てきたのはアナザーアギトのダークホッパーだ……いや流石オリジナルにアナザーがあるライダーだ、バイクもオリジナルだな……つかバイク出せるなら先に言え！

「スゲエな……乗っても良いの？」

『勿論だ、乗ってエンジンを吹かせてくれ』

そう言われて跨りハンドルを握ると……何とも言えない一体感がある

「おおおおお！」

子供の頃憧れたライダーマシンに乗れるなんて！と感動していると

『どうだハルト！盗難されても戻ってくる優れ物だ』

「へ？このまま乗りたいけど？」

『待て待て、まだエントリーしている奴がいるんだから最後まで聞いてくれよ』

「そうだな…しかし念じれば来るとかファンタジーだな」

『エントリーN0. 2！ファンタジーなら俺の出番！頼りになる俺達の魔法使い！アナザーウィザード!!』

「大本命だな」

困った時のアナザーウィザードと言うのが俺の認識である…その有能さは…本当頭
が上がらないぜ

『俺のバイクはコネクトの魔法でいつでも呼び出せるしアンダーワールドではドラゴン
と合体するぞ!』

「普段使いにも便利な上に戦闘も熟せるだとお!」

いや普通に凄いが俺、アンダーワールド行けるんだ…てかドラゴライズとか出来るの
!?

『それもあるしドラゴンの力も現実世界で使えるぞ?』

「それ早よ言え!!」

『戦闘と聞いちゃ黙っちゃいねえ!エントリーN0. 3!アナザーフェイスだあ!』

『俺のアナザーオートバジンは…困ったら自動変形して助けに来る頼れる仲間さ…車輪
型のガトリング砲と怪力で並の怪人なら楽々吹き飛ばせるぞ』

「いや、だからソレは早く言ってね!」

それは別として流石タツくんの相棒だぜ！

「だがオートバジンか……へ？今一番タイプだなあ」

このデザインが何も言えないぜえ…

『エントリーNo. 4！普段使いなら俺の出番だ！アナザー鎧武！』

『はん！俺のサクラハリケーンなら錠前になるからお手軽サイズで使えるぜ！』

「おお確かに…バイクって置き場に困るし」

『だがスピードの出し過ぎには注意だ！ヘルヘイムの森に行くからな！』

「それ敵追いかけてる時には不便極まりない能力だな…けど」

戦利品の戦極ドライバーがあればロツクシードを増産する事も可能だ…戦力強化に

は行かないとダメかヘルヘイムの森

『それにヘルヘイムの森には…いるぜ始まりの男が』

その一言は条件反射して答えた

「サクラハリケーン！君に決めたあ！今すぐ行くぞ！待ってるヘルヘイム!!」

ロツクビークル　サクラハリケーンに跨りエンジンを吹かせて発進しよう！

今すぐ会いに行きます！待っててください！紘汰さん!!

『よっしやあああああ!!』

「お待ちをヘルヘイムの森にはコンビニはございませんよ!!」

「あの森ってインベスやら食べたたらダメな果实しかないって!!」

「落ち着け!!」

「HANASE!」

『待て、アナザー鎧武! 狡いぞ!!』

『そうだけ、ハルト…衝動決めは後悔するぜ最後まで聞けよ…エントリーNo. 5! アナザービルド!』

『俺の発明品のライドビルダーならスマホにも使えるしバイクにもなる凄いでしょ! 最高でしょ! 天才ででしょ!!』

『おお…確かにファイズフォンXは便利だけど武器兼用だしな』

単純に移動ツールとしてならとびきり有能だろうな

『でしょでしょ!』

『さあ! 今のバイク達なら誰を選ぶ!』

悩むな…つか

「ジオウのバイクは使えないの?」

『『あ…』』

「だけど皆、ありがとうな状況に合せて使わせて使わせてもらうよ……取り敢えずサクラハリケーンは買い物終わったら使うよ直ぐにでも！」

我々調査隊はヘルヘイムの森に住むと言う始まりの男に出会う為にヘルヘイムの森に向かうのであった！

『おうー！』

同時にライドストライカーを呼び出し乗り込むとウオズは後ろに乗り買い出しに向かうのであった

—————

そして買い出しが終わりウオズの小腹を満たした頃 束がラボに戻ってきた

「たっだいまー！お！何か甘い匂いがするねえ〜」

「あ、束さんおかえり……おやつ作ったから良かったら食べてね」

「いついええええい！あ、そうだハル君に紹介するね束さんの親友のチーちゃんです！」

と言われて現れたのは凜とした雰囲気という言葉がよく似合う女性であった……何故ウオズ達は立ち上がる？食事中に立つのは行儀が悪いよ！

「初めまして織斑千冬だ……貴方の束の？」

「はい、束さんの夢のお手伝いをしてますよ？」

「そうか……ありがとう」

いきなり頭を下げられてハルトは固まった

「へ？」

「貴方と会ってから東は明るくなった、良いか悪いかは知らないが自重が無くなってな……」

遠い目をしている彼女を見てハルトは理解した大分苦労したんだなあ……いや待てこの人まさか……

『ああ未来の奥さんだな』

『ギヤハハハハハハ！予想外の出会いだなあハルト！』

黙れお前等……だからウオズ達は立ち上がったのか……んで思わず臣下の礼を取ろうとして堪えてた訳ね……はあ……

「取り敢えず食べます？おやつ？」

「頂こう………っ！」

千冬は一口食べると目の色が変わった

「すまない……何枚か貰えないか？弟にも食べさせてあげたい」

「勿論くんじゃ準備するね〜」

それが未来の戦乙女 織斑千冬との出会いであった

空白の間に

前回 バイクプレゼン大会から未来の戦乙女邂逅

今日は特にやる事もないので東さんの実家である神社に遊びに来ている

「へえ、凄いな剣道場にもなってるんだ」

東さんに案内していると武道場に入る

「そうだよ妹の箒ちゃんやチーちゃんの弟のいっくんが稽古に来るんだあ」

「二人の弟と妹かあ…千冬さんは兎も角、東さんの妹かあ…」

「何さ？」

「いや、結構苦労しそうだなあと」

「にやにおう!! そう言うハル君はどうなのさ! 兄弟いるの?」

「妹がいるよ…まあ俺に似て面倒くさい性格してるけど」

「元気にしてるだろうか? まあ大丈夫か! 今日も元気に笑顔でバイク乗り回してるだろうな! 取り敢えず空でも見るかなあうん! 眩しい!」

「元気かなあ？」

様式美だなと思うが束さんは別の意味で捉えたようで

「ごめんね…辛い事思い出したかな？」

「へ？いやいや違うから！」

「そっかあ…良かった…あ、それでハル君にお願いがあつて！」

「ん？良いよー」

「即答!？」

「居候させて貰つてる身で断る訳ないじゃん」

束に言われて神社から出るとライドストライカーを展開してハルトは束を背に乗せ案内に従つて運転した…だが背中に柔らかい感触があるのは気のせいではないと言つておこらう

『ムッツリめ』

「うるせえ」

—————

「なんじゃこりゃ」

束さんに案内されて行つた先は千冬さんの家に入つてみるとゴミ袋は散乱してるわ、

「ご飯はインスタントやレトルトばかりである

「東さん…まさかと思うがね」

「うん…流石の東さんでもどうかと思つてきちゃちゃん家の食生活…」

「わ、悪いと思つている！」

「いや片付け下手なら言つてよ手伝うから」

「にいちゃんは誰？」

取り敢えずゴミ袋は外に出してと…ん？誰かいるのかと思うとそれは幼い子供であつた

「君は？」

「おれ？おれは一夏！ちふゆねえの弟！」

「一夏君ね俺は常葉ハルト、宜しく」

「よろしく！ねえハルトさんはちふゆねえの彼氏なの？」

無垢な目が痛いねえ…千冬さんは顔を赤くして怒るな

「一夏!?!」

「違うよ〜」

「ここにウオズがいれば何か言うだろうが知つたこつちやない

「そつかあ〜」

この環境でも逞しい笑みを浮かべる少年に思わず

「千冬さん…流石に、この環境は教育的にもアカンでしょ」

「わ、分かってる！」

東さんの方が長子として問題だと思ったが前言撤回だ！この人もこの人で問題あるぞ!!

「んじゃ、ちやつちやとやりますか」

く暫くお待ち下さい

「はあ…はあ…疲れたあ…」

そこにはゴミひとつない綺麗な部屋が戻っていた頑張ったぜ…

「すまない色々と」

「いやいや…気にしないで…あ…もうこんな時間か…」

そろそろ帰らないと五月蠅い連中がいるが…放っておこう

「良けりや飯作るけど何食べたい？」

「カレー！」

「つしや待つてなさい！」

子供は素直でよろしい！

『なら、お前は大きな子供だな』

ほお……言うねえアナザーディケイド、ならお前は保護者だな

『そうだな……貴様の面倒を見るのは苦勞するよ』

「そんな奴を王の器に見定めたお前が悪いだろ」

『そうでもないんだな』

「あ？」

何言ったか聞こえない……まあ良いか

その夜、織斑家でカレーを振る舞った翌日

「ハルトさん！俺を弟子にして下さい！」

「へ？何の？」

「俺もちふゆねえの役に立ちたい！」

「すまない……どうやらお前の作ったカレーを気に入ったようだな……」

ああ家事が出来る様になりたい訳ね…そうか折角だから2000の技も教えようか

…

「良いよ、んじやまずは簡単なのからやろうか？」

俺もアナザーライダー達から色々と教わったからな…その技術を伝えるのも大事な事だろうし

「じゃあまずはローストビーフから行くぞ少年君」

「はい！」

まさか俺も弟子を持つようになったかあ…人間的にも未熟で早いと思うけど俺も頑張ります！見て下さいいヒビキさん！

「簡単なのか!？」

「意外とな…卵焼きとか色々あるが…俺は王道は守らん！料理の最初はトライアンドエラーだ！少年君！」

ハルトはそう答えた数年後、それを本気で実践している英国淑女のサンドイッチで気絶する事をハルトはまだ知らない

「さっすがハルト君！ネジがぶっ飛んでるねえ！そこに痺れる憧れるう！」

「煽るな東!!」

この頃から千冬は問題児2名に振り回される事となったのである

「あ、フォーゼとビルドとゼロワンのDVDが届いてる…東さん俺の世界の特撮番組見る？」

「見るー！」

未来の俺も偶には良い事をするな…ん？待てよこの展開何処かで…

—————

そんな感じで一夏君に家事の技術を教えたり定期的に織斑宅の片付けに行ったり、束と研究したり仮面ライダーフォーゼ、ビルド、ゼロワンを視聴したり、ヘルヘイムの森の調査に出たりして1年くらいたったある日の事

「や、やった」

研究室で歓喜の声が上がった

「完成だあー！！」

二人は思わず抱き合って喜び合う、そこに鎮座するIS 0号機 またの名を白騎士後の世に歴史を残す事となる名機の誕生だ

しかしハルトが共同開発した結果、原作とかけ離れた箇所もある

「いやあ…やり過ぎだな」

そう呟いたハルトは白騎士腕部につけた「ビームエクイッパー」と背中にマウントさせた大剣型武器「フルボトルバスター」と量子空間に収納させた「ギガント」のデータを見る

「そうだね、コアネットワークに直結して色んな武装や道具をリアルタイムで製作して使用するとか4連巡航ミサイルはやり過ぎたね…デブリ破壊にしては過剰だよ」

「アナザーゼロワン、ビルドやり過ぎたな」

「この案を提案した末っ子組に苦言を呈すが

『良いじゃないか!』

『それにはアークかゼアのAIをつけければ完璧さ!』

「お前達は仮面ライダーでも作る気か?」

「こいつの外見見てもV1みたいな感じだぞ?最悪、自律行動で人類滅亡させるとかなったら笑えないし…てか

「そうか…この技術を使えば仮面ライダーG3を量産できるんじゃないや?」

G4ではないのは俺も人の心があるからと思ってもらいたい…アレなら俺も着れるのでは?と思うが

『そうしたら俺が嘔みついてやるぞ』

辞めよう、アギト編であのシーンはトラウマなんだよ…だが最近はその影響で機械い

じりにハマってしまい廃車場からバイクを失敬して改造を施している：サイドバツ
シャー大好きです

「どんな状況にも対応可能になった反面、使う人間にもマルチな才能を求める結果に
なったな…」

「大丈夫だよ、乗る人は決めてるから」

「誰？もしかして束が乗るの？」

「この一年で呼び捨てれる関係になったハルトが尋ねるが

「ノンノン、チーちゃんにテストパイロットをお願いしたいと思いますー」

「この一年で呼び捨てにしても問題ないだろう程 貸しを作ったズボラな友人なら問
題ないな

「そりゃ良い、千冬なら問題なく乗りこなせるだろうな：フルボトルバスターやビーム
エクイッパーとかギガントとか別にして」

「剣術使いには過ぎたものよ

「それ、ハル君の発明だからね？」

「これだったらモジュールの方がよかつたな」

「結果論だが手に携行するより全身で対応する方が良いとか色々課題はあるが完成を
見たので喜ぶとしよう…：しかし

「ロボットは浪漫があるなあ……」

『ハルトには俺がいるだろ?』

アナザーキカイ……オリジナルなら兎も角アナザーのお前は木のオバケだから……で

「テスト飛行完了したら学会に発表するの?」

流石に学会に発表しても理解なんざ得られないだろう……だって愚かな奴らだし

「まさか! そのまま大気圏超えて月まで行つて、東さんが兎の旗を刺すんだよ、そして地球にいる奴に言つてやるんだ! ノロマめ、ここまで来いやー! つて」

「スゲエな色々と」

カラカラ笑うハルトに東は

「ハル君のお陰だよ! 背中を押してくれたから……私のやりたい事を思い切りやれるのは
!」

「そうか……そりや良かった……うし! 今日には宴会だあ!」

「やったー! よし! チーちゃん達も誘つてさりげなく勧誘するぞー!」

「おー!」

この数ヶ月後 学校を卒業した東は『篠ノ之製作所』を設立し起業、社員に俺と千冬

の名前があつたのは言うまでもない

因みに社訓は

『Love & peace』

『Take off for the dream』

である東さんはビルドとゼロワンにハマりましたよ だつて

「さあ！ハル君！次はヒューマギアを作るよー！衛星アークを打ち上げた後はI Sで火星に行ってパンドラボックスを見つけて帰るんだ！」

俺を引きずりながら言う束に

「ダイブレイクとスカイウォールの惨劇を同時に起こす気!?それとまずはアイちゃんから始めようよ！」

背景、未来の俺よ…恐らくだがキャロルよりも技術渡したら不味い人に技術が渡った気がする…

—————

またI S 研究と並行してハルトはアナザー鎧武が持っていたサクラハリケーンに乗

り束が解析し復元した戦極ドライバーを腰につけてヘルヘイムの森の調査に出ていた。どうやら変身しなければ拒絶反応は起きないみたいだな…というより戦極ドライバーが生命維持装置みたいなものだから使えないと困るんだが

「よいしょ…よいしょ」

壮大に言ってるが実際は、ヘルヘイムの果実をもぎ取りロックシードに変換しているだけのお仕事である

「っ！やった！メロンロックシードが出たぞ！…ぬおおお！スイカロックシードだと！
激レアだあ!!」

たまに本編で出たロックシードに喜んだり

『ハルト、上級インベスが来たぞ！』

「よっしゃあ！かかって来いやー！」

『鎧武』

襲い掛かるインベスと戦い多様なパターンかれ出される攻撃を体験しながら実戦感を養い

「まさかこの森にこんな珍客が来るなんてな驚いたぜ」

「え？…っ！DJサガラだ！サイン下さい！」

「おう…しかし随分懐かしい名前と呼ばれたな…：…つ！帰ってきたか始まりの男が」

「えええ！ま、まさか紘汰さんですか！」

「何だ知ってるのか？そうだ、この間なんかメガヘクスから舞を助ける為に地球に戻ってたりしたな」

「その辺の話を詳しく!!」

ヘルヘイムのアバターと仲良くなったり

「紹介するぜ、コイツが森に迷い込んだ変な奴だ」

「サガラさん、それだけだと俺が変質者にしか聞こえませんが…」

「えつと…君が最近、この森で暴れてるって人かな？」

ヘルヘイムの果実狩り中に我々探検隊（1人）の前にサガラと白い鎧のようなアーマーを纏った男と遭遇した!!まさか

「きやああああああああ!!!本物のアーマードライダー鎧武だあ!!!葛葉紘汰さんだ!!!
本当にいたああああああ!!!」

「え？何で俺の事を？「ファンです!!サイン下さい!!」お、おう…サインか…初めて頼まれたな…」

オーマジオウの時と同様にクロックアップも負けない速度で色紙とペンを差し出し

た

「アナザーデイケイド……俺……興奮で気絶しそう」

『限界化するな！戻ってこい!!』

『コレはマジで変質者だろ』

「え、えつと君は……」

しまった！変な奴だと思われたかも知れない！だけど此処は挨拶をしつかりせねば！
！ー1ファンとしてのマナーだぜ！

「俺は常葉ハルト！年齢多分10代後半！彼女いない歴〓年齢！好きなヒーローは仮面ライダーとウルトラマン!!最近、金髪のお姉さんにも幼女にもなれる錬金術師にファーストキスを持ってかれたのとアナザライダーに取り憑かれて色んな世界を旅してます！よろしくお願いします!!」

『言う程、最近か?』

『お前、個人情報ペラペラ話すなって親から言われなかったか?』

アナザライダー達の声など聞こえない位にハルトは目の前にいる人から目線が動かなかった

「ははっ！面白い奴だな……敵意もないし、そう言えば何で俺のことを？」

「えつと……実はですね」

俺の世界の事を話すと興味深そうに聞いてくれた、後ついでにメガヘクス以降にある貴虎さんのハプニングとか色々話した

「何かスゲエ話だな…そっか貴虎の奴は…」

「はい……だけでもまさか本物に会えるとは思ってませんでしたよ…あの……実はお願いがありました」

「何だ？」

はじまりの男を前に全力で土下座をし大声で頼む

「お願いします！俺を鍛えて下さい!!」

これから先、ネオタイムジャッカーやそれ以上に強い奴が俺や仲間を狙ってくるだろう…となれば俺も今の強さに満足してはダメだ！もつともつと強くならないと！仲間達や大事な人と過ごす当たり前を守る為に！

錫音のように沢山の人を不幸にした並行世界戦争なんざ起こしてなるか！と

そんな思いが伝わったのか紘汰さんは強く領いてくれた

「なるほど……わかったが……厳しく行くぜ!!変身!!」

『フルーツバスケツト！極アームズ！大！大！大！大！大！大！大將軍!!』

「はい!!……変身!!」

『ジオウ』

本物の変身シーンに感動したハルトであるがそれよりも真剣な顔で構えた俺は今から憧れに挑む！オーマジオウとは違う意味で覚悟を決めて挑む!!

「はあああああ!!」

『バナスピアー』『メロンデイフエンダー』

「おおおおらあ!」

互いの得物が激突し森が震えるのであった

—————

「つて事があつた以外は果実狩りだったな」

と森の調査報告をウオズ達に聴かせたのであった 戦利品のロックシードを見せながら話している

あの後、ボコボコにされたが…俺は本物の仮面ライダーが持つ覚悟や思いを直に感じる事が出来た…本当学ぶことが多い森の調査だったな…また一つ大きくなつたかも知れないな…これも全部

「紘汰師匠…ありがとうございます!」

俺は遠く星から見守っているだろう彼に向かって頭を下げる…頭が上がない、それ

に俺には限界なんてない！何処までも強くなれると教えてくれた、いつの日か貴方が言う変身を見せたいです！また：旅の目的が増えたな

「いや明らかに普通ではない展開が混ざってるのですが!!」

「そうだよ！何一人で劇場版展開みたいな事してたのさ!!」

「ハルト様、よくご無事で!!」

心配されたが、それ以上に収穫のある体験だった

この数日後 世界各国からミサイルが日本に向けて発射 その迎撃に出た白い鎧と赤い巨大クワガタ

後に白騎士事件と呼ばれる 世界を変える事件が起こるのであった

白騎士事件と誘拐事件

東が篠ノ之製作所を作り俺や千冬を巻き込んで色々と刺激的だが平和な日々が過ぎ
ていた日の事

色んな国からミサイルが日本に向けて発射されたという、とんでもないニュースが流
れたのであった

「マジ？アナザーW、ビルド！」

こんな時、頼りになる仲間を確認を取ると間違いないと帰ってきた、ミサイルの軌道
変更は出来ないかと聞くと間に合わないと言われる…このままだとミサイルが日本を
襲う…別にこの世界の不特定多数の人間がどうなろうと知った事ではないが

「あの人なら絶対に見過ぎささないよな」

此処で立ち上がらなければ師匠に顔向け出来ないぜ！それにネオタイムジャッカー

が動いている可能性があるならば無関係ではないだろうし……まあ動いてるかは知らないけど

『分かってると思うがアナザータイムマジーンで撃退は無理だ、そもそも武装が少ないからな』

「アナザーデンライナーは？」

『ダメだ！俺達の情報が不用意に拡散したらマズイだろ？それにこの世界の人間には過ぎた技術だ』

そもそもタイムマシンだしな2台とも

『それに俺達で空中戦が出来る奴も限られるぜ？誰で行く？』

「アナザークウガで」

『まさかの指名だな、何でだ？』

「ミサイルのトラウマを払拭したいから」

詳しくはシンフォギア編冒頭、参照だ　いきなりミサイル撃たれてトラウマを負った……シンフォギア世界の自衛隊はガメラ作品の自衛隊レベルの有能さだぜ！

『それが全てだろうか』

「つしやあ！行くぞー！」

『誤魔化したな』『だな』

「とおー」

人気がない崖から飛び降り、そのままスイッチを押してアナザークウガとなるなり空へ飛びミサイルを撃ち落としにかかる、その日の青い空には望まれない赤い火花が上がるのであった

—————

それを見ていたのは、ハルトだけではなかった。ビルの屋上に立ち並ぶ四人の影

「祝え！我が魔王が民衆の為に戦う瞬間を！」

「へえ、珍しい事もあるんだね」

「だな」

「あの……僕達はどうします？魔王様の加勢に？」

フィーニスの問いにウオズが本を閉じると目を細めて篠ノ之製作所に向かう一団を見た

「そうですね我々は……この騒動に乗じて火事場泥棒を企む輩を排除しましょうか」

「ネオタイムジャッカーか？」

カゲンの問いにウオズは答えた

「いいえ、どうやらISの事を嗅ぎつけた何処ぞの諜報員やら公安と言った所ですかね」
「奥方様の発明品を横取りなんて…許せないよね」

「アレ…僕達も開発に関わってますからね…厚顔無恥に横取りとは…恥知らずの猿め
！」

「フイーニスもハルト様に染まつてるな…まあ敵なら排除する！」

「行きますよ」

「「おお!!」」

四人はウオツチで変身するなり火事場泥棒の排除にかかる、襲われた彼等の悲鳴はミ
サイルの撃破した爆音によって掻き消されるのであった

そして篠ノ之製作所

「良いのか束？」

そこには白騎士を纏った千冬が最後の確認だと言わんばかりに尋ねると束も嫌な顔
をしていたが

「仕方ないよ…いっくんや箒ちゃんが危ないし…ハル君だけに任せたくない…だから私
に出来る事をやるよ、チーちゃん行っちゃって！」

「ああ…織斑千冬、白騎士 出るぞ！」

今、白騎士は空を駆ける

—————

アナザークウガは火球でミサイルを落としているが、明らかに捌ききれない数である
『数が多すぎる！』

『わかってんだよ！何か対策ねえか!?!』

『検索中だ』

「一か八か…究極の闇とやらに縋ってみるか？」

『笑えん冗談だな』

「だよねえ…ん？」

その音声はアナザークウガが聴き慣れた音であった

『アタツシユアロー』

その音声と共に紫色の矢が拡散しミサイルを撃ち落とした

「白騎士!?! って事は…」

「待たせたな…しかし話には聞いていたが本当に怪物に変身するのだな…」

その声の主にはルトは頭を抱えた

「怪物ね…まあ正しいか束の奴め」

いつの間にアタッシユエポンのデータを入れてたんだ？

「話は後だ…今は戦わねばならんからな！」

「おう！」

結果から言えばミサイルは全弾空中に撃ち落とされたが…この日 世界は動く事となる

白騎士事件と題された、この事件…アナザライダーに関しては報道関係に徹底して規制されているらしいが一部映像の流出した、しかし都市伝説の怪物と混同されたりしない

その日 篠ノ之束はISの事を正式に発表

各国に宇宙開発を条件に動力である、コアを提供 そして国は篠ノ之製作所を国営にしようとする…大半がIS技術の独占と言う私欲に駆られたもので逆に束が相手方の

スキャンダルを握り事なきを得た……その裏では、ハルトがミサイル撃つた下手人の捜査をし

「ひ、ひい!!」

「テメエか、ミサイル撃つた奴は」

「私ではない!部下が勝手に!!撃つたんだ!それよりも貴様!私を誰と心得ている!!」

「この場でその啖呵吐ければ中々だな……まあ」

各国にいる下手人の所に殴り込みに行ったハルト達は護衛を蹴散らしながら代表の元に言った、因みに護衛達はアナザークイズの力で記憶を消している……いや凄いなアナザークイズ……まあ今はアナザー電王のまま双剣を喉元に突きつけ脅した先の命乞いの内容に怒りを覚えたアナザー電王はそのまま首を跳ね飛ばす、ゴロゴロと無機質な音が響くと

「部下がやらかしたなら大将が責任とるもんだろ?部下に責任押し付けてんじやねえよ……ダセエなあ」

『ハルトお!見つけたぞ犯人をよお』

「流石だな」

『亡国企業（フロントムタスク）…その長が犯人だ！ ISの兵器化を狙ってたみたいだな』
「へえ…何処にいる？ 殴り込むぞ」

『賛成だな…許せねえ…』

『そうだなあ、ネオタイムジャッカーの関係者らしいからなあ益々俺達絡みつけて訳だなあ』

「居場所は？」

『残念だが雲隠れして見つからねーよ、今はな』

「ちっ、しゃあねえな帰るぞ」

双剣の返り血を払ったアナザー電王は、そのまま姿を消すのであった

—————

その後、ISは女性にしか動かせない重大な欠陥が判明し世界は女尊男卑なる下らない思想が蔓延する事となる

それを見た東は

「やっぱり下らない…私はそんな世界にしたい訳じゃないのに…はあ…あの時のミサイルさ東さん達に害のない範囲は見逃せば良かったかなあ」

まるで神がノアに箱舟を作らせ人類を生かした事に後悔したような声音で話している姿に千冬は少し恐怖を覚えた

またハルトも

「東の夢を何だと思つてやがる…亡国企業はネオタイムジャッカーの下部組織ね…ウオズ」

「はっ!」

「此処まで明確な敵意は久しぶりだしコケにされたのも初めてだなあ…ははは!怒りの余り笑いそうだね…探すよ、そして根絶やしだ」

「畏まりました…恐ろしき我が魔王」

怒りを覚えるしかなかった…握りしめた手から血が流れていたのは従者のみが知ることである。

—————

あの日から何か変わった

それは直感的なのかも知れない…東はいつも通り研究してるし、ハルトは忙しくなっ

た私や東の変わりに一夏や箒の面倒を見て貰っている…たまに東とイタズラをして怒られるまでのワンセット…変わらないのに

「はあ…」

東とハルトは各国用のＩＳコアを作った後、私に内緒で何か打ち上げた…アークとかゼアとか言ってたが詳しくはわからない、それと

「見て見てチーちゃん！ハル君!!」

「どうした東？」「ご機嫌だな」

「勿論ご機嫌だよ！行くよ！ジャジャーン！」

東が自慢顔で手を広げながら見せたのは、まるで何処かのバンドのような衣装を着て、変わった形のイヤホンをつけた男女四人組である

「っ!!」

ハルトは手に持っていた、コーヒーカーップを落としかけた辺り、心当たりがあるのだろう

「紹介するね！順番に滅、亡、迅、雷だよ！四人合わせて、その名も滅亡迅雷！」

「名前のままだな」

その言うとはルトは恐る恐る

「え？本物？」

「違うよ東さんが、作った本物そっくりの別人だよ…彼等にね東さんとハル君の夢を…私達の子供を悪用する奴がないか見張って貰おうと思つてさ」

「子供!? ああ… IS の事か…なるほど兵器にさせない為か」

「滅亡迅雷…世界の悪意を監視する者…けど、それならアレがいるだろ東？」

「YES of course! 作つてるともさ!!」

「ま、マジかあ…」

東がアタッシュケースを開けると四つのドライバーと サソリ、オオカミ、ハヤブサ、ドードー鳥がデザインされたパスカードのような物を出したのであった。

ハルトはその中の一人の肩に触れ

「ごめんね、きつと凄く不本意かも知れないけどさ…あの子達を守つてあげて…俺や東じゃ見つけられないかも知れない兵器にされてしまった子を助けてあげて」

そう願いを送るのであった

—————

IS が世界に認知され腐つた思想が蔓延り数年

IS を宇宙開発している所もあれば兵器化企んだりする国もある

現在はアラスカ条約で兵器化を禁止しているが裏ではという事だろう

一般的には新しいスポーツや武道として注目されている

千冬は篠ノ之製作所を背負い I S の世界大会で総合優勝 初代ブリュンヒルデを襲名したその時は全員で祝った

東は I S の開発と同時に福祉分野でヒューマギア事業を展開、世界で高いシェア率を誇る事となる、また彼等を悪意から守る為に滅亡迅雷も独自に行動を開始した

俺は亡国企業とネオタイムジャッカーの行方を追いながら研究やヘルヘイムの訓練を欠かさずに行っている：最近、組み立てたバイクが出来て東や千冬と一緒にツーリングに行った先で錫音と出会って一悶着起こしたのは良い思い出である

一夏は見事に家事スキルを習得し気まぐれに教えたジャグリングやら投げナイフと言った大道芸：手品も覚えていた一夏の奴、やたら飲み込みが早いんだよなあ：千冬と違ってやたら器用だし：脱線したな：箒ちゃんは一夏に恋慕しているが同じように転校生の鈴ちゃんと鎬を削ってるらしい

思い起こしながら端末に情報を打ち込んでいるハルトはヘラヘラ笑いながら

「青春だねえ、つか一夏の奴も気付けば良いのになあー自分を好きな奴がいるって、この鈍感野郎め」

「鈍感か…お前が言えた口か？ハルト」

「何の事だ千冬？」

意味が分からんぞ！と言う顔をしたのを理解した千冬は溜息を吐いて

「はあ……なまじ付き合いが長いとこうなるのだろうな……先程から何をしているのだから？」

「ん？俺専用I Sを作ってる」

「つ!!まさか動かせるのか！」

「みたいだね、ウオズ達も反応があつたんだよなあ……まあバレた時用の非常策みたいな感じかなコレも」

千冬が驚いている通り、どうやら俺達は世界的に初の男性適正者らしい……実験の時にコアに触れたらI Sが展開出来たと言うのが経緯だ、念の為、束に調べて貰ったが詳しい事は分からずじまいだったが

『ハル君達は別世界の人間だから、この世界の枠組にない法則があるのかも』という仮説に納得している、でないを通りすがりの仮面ライダーは倒せない怪人をバンバン倒せる説明が出来ないというものだ

たと公表しないのは実験動物になりたくないし、ネオタイムジャッカーに居場所を宣伝したくないからだ

前回、メナスが死亡した事で組織的にもダメージを負っただろうが並行世界規模の組

織だ人員補充なんて容易だろう…となればいつ仕掛けて来てもおかしくない

またアナザーライダーは、この世界では異端過ぎる技術で外部に流出など絶対させない…仮面ライダーを束と見た段階で何言ってるんだと思うが

「相棒達を実験動物にさせてなるもんか」

という訳で専用機開発である幸いなのかIS設計の基礎は束と一緒に…研究したので大凡は掴んでいる…後は俺専用の機能を加えるだけだが、その辺も問題ない
コンセプトはアナザーライダーをIS技術で擬似展開させる事

本来の性能より落ちるがアナザーライダーをISに擬態させる事で、この世界連中の目を欺こうという訳だ…勿論本来のアナザーライダーにも変身は可能であるが

「念の為って感じが凄いなあ」

この念の為が暫く先になって役立つ事をハルトはまだ知らない

—————

そんなこんなでドイツで第二回IS世界大会 モント・グロッツが開催された

そのVIP席

「頑張れチーちゃん!!」

「千冬!頑張れ!!」

「頑張ってください千冬さん!!」

東とハルトがサイリウムを振って応援していたのである。箒も一緒に来ており千冬の勇姿を目に焼き付けていた。そして

「お待たせしました東様」

東の後ろから紅茶を持ってきた銀髪ロングで目を閉じている女の子　クロエ・クロニクル

彼女はドイツの試験官ベイビーだったが廃棄されそうな所を東が養子として引き取ったのである。ありがとうと二人は紅茶を受け取ると

「もうクーちゃんてば!私の事はお母さんで良いんだよ!!」

と言われ首を傾げたクロエは一言、ドギツイ爆弾を落とした

「でしたらハルト様が、お父さんですか?」

「そうだよクーちゃん!ハル君がお父さんだよ!」

「ぶううう!!、ク、クロエちゃん!俺、まだ若いしお父さんって…つか東!」

結婚もしてませんが!?

「い、嫌でしょうか?…そうですよね私なんて…」

はあ…そんな悲しい顔しないでよ…俺が悪者みたいじゃん

「んな訳あるか、東が母なら俺は父でも構わないよ呼びたければそうしな…けど家族がいる時だけ他の人が聞いたら驚くから」

頭に手を置いてそう言うとかクロエは笑顔で

「あ、ありがとうございます…お父さん」

子供は笑顔でないよね!

『ハルト…成長したな』

『泣いてるぜ!マジ泣きだ!』

『アナザーディケイド…お前誰目線なんだ?』

元の世界の父さん、母さん…俺、異世界で義父になりました…元の世界に帰った時にまさかの孫を連れて行きますね…そして妹よ…貴様は叔母さんだ!

「は、ハル君!?!…そ、その…東さんとのハネムーンは月が良いなあ!!」

「宇宙旅行を俺の財布で頼むとな東!?!箒ちゃん!君のお姉さんを止めてくれ!」

女子中学生に泣きつくのは不本意だがと助けを求めたが

「いや、暴走する姉さんの手綱を握れるのってハルトさんと千冬さんだけなので…寧ろハルトさんとの孫はまだかと父さんも母さんも言っていましたよ?」

「柳韻さん!? 式も挙げてないのに気が早くないですかい!？」

「っーか俺、キャロルの返事もしてないのに!と頭を抱えてしまう

『大変だなあ』

「そう思うなら力を貸せ!!と話しているマシンビルダーの待機形態であるスマホに着信が入る…千冬?」

「もしもーし」

『ハルトか! 大変なんだ!! 一夏が!』

「一夏がどうしたのさ?」

『一夏が攫われたんだ!! 返して欲しくば決勝を辞退しろと…』

「っ!! 束!」

「聞こえたよ! 束さんに任せなさい! いったんこっそりつけたナノマシンで位置情報を…」

「姉さん…いつの間にかそんなものを?」

「万一攫われた時の対策だよ!」

「本音は?」

「そりゃ勿論、いっくんや箒ちゃんやの甘酸っぱい青春ラブコメをテレビで見る為に!

「……あ」

「姉さん、少し頭冷やしましょうか？」

「箒ちゃん!? その台詞は東さんのものな気がするんだけどなあ! ま、待って! いくつかの寝顔写真あげるから見逃して!!」

「私は何も聞いてません…クロエも?」

「はい、私も何も聞いてません」

「よっしや! セーリーフ!」

『アウトだ束…一夏を奪還したら覚えてろ』

「アウトだったあー! チーちゃん! ハル君の写真でどうかなあ!」

『そ、そんなもので釣られると思うなあ!』

「ええーい、持ってけダブルだあ!」

『見逃すでしょう』

「千冬…結構余裕だろ? つたく俺が出る、千冬は決勝に出な…助けたら連絡するから!」

『た、頼むハルト!』

「いっくん見つけたよ! 場所は港の倉庫跡地! …あ、ドイツの警察が動いてる」

「助けて貸しを作る気だなあ…マッチポンプか知らないが思惑通りにさせるかお前等
!」

「はっ!」

「行くぞ一夏奪還作戦だウオズとジョウゲンは着いてこい、二人は束達を頼む」
「かしこまりました我が魔王」

「了解!」「お任せ下さい」「はっ!」

「よし状況開始だ行くぞ」

ウオズのワープで3人は移動するのであった

—————

そして倉庫跡地についたのを確認すると

「んじやまずは調査と行くか」

『STAG』『SPIDER』『BAT』

メモリガジェットで偵察を送り一夏の安全を確認する

「無事だな……よし」

「どうします?コツソリと行きますか?」

「そうだなウオズ…警察連中の妨害頼むわ無理しない範囲でな…俺とジョウゲンは連中
締め上げてくる」

「はっ!」

『シノビ』

アナザーシノビウオッチを渡すと、ウオズはアナザーシノビに変身して影に隠れて移動した

「んじゃ俺達もやるぞ」

「了解く変身」

『ジオウ』『仮面ライダーザモナス』

2人は変身すると、扉を思い切り蹴破り誘拐犯の1人を吹き飛ばした

「よお、ここか？誘拐犯の拠点って奴あ」

「一夏君、助けに来たよー」

「だ、誰だテメエ!!」

「屑に名乗る名前なんざねえよ」

「へ？ま、まさか!!」

「はは目を閉じな少年君、此処から先は少し刺激が強いからさ」

「は、はい!!」

一夏はしっかりと目を閉じたのを確認したアナザージオウは笑いながら槍をペン回しのように回す

「さあて…久しぶりの荒事だからさ加減出来るか自信ねえなあ」

「ふざけんなあ！撃てえ！」

と同時に誘拐犯は手に持つ銃を発砲する通常なら致命傷だろうがアナザーライダーに通常火器でダメージ与えられると思ってるの？未来予知で軌道が見え見えなんだよな

「ほいつと」

弾丸を何処ぞの光る剣を使い銀河の秩序を守る騎士達よろしく弾き飛ばす、殺すのは気が引けるので撃った銃や手足に当たるようにした、ザモナスもボウガンで同じように銃や足など致命傷にならないようにした

「「ぎゃああああ!!」」

「ふう………こんなもんか……師匠の修行様々だな……」

槍を肩で担いだアナザージオウはヘルヘイムの森での鍛錬の日々を思い返す、あの人の戦いではソニックアローやブドウ竜砲の矢玉を弾けなければすぐに終わったからな……普通の火薬銃くらい止まったように感じてしまう

「あれ?……俺も人間辞め始めてる?」

「今更か、貴様も大概人間離れしてるぞ?」

「マジかあ……その話は後だザモナスは少年君を」

『ウィザード………バインド』

誘拐犯達をバインドで抑え込むと、リーダーっぽい奴の前に腰を下ろし一言

「さて…アンタ等何処の回し者？」

国絡みなら東に連絡して、その国のコアを停止させて回収するだけだ…ただでさえコアが最近盗まれてるとか情報来てんだ、東からコアを強請る為の誘拐ならタダでは済まないぞ

「し、しらねえよ！俺達あ金で雇われただけなんだ！ガキ一攫うだけで大金が手に入るとなれば誰だつて動くだろうが！」

何か騒いでるが

「テメエ等クズの尺度で語るんじゃねえよ…警察が来たらアンタらは刑務所な訳だしなさつさと黒幕いるなら吐いてくれよ」

望んで殺したい訳ではないがな、ん？

『ディフェンド』

アナザーウィザードは魔法陣で攻撃を防御する 通常の火器より火力が強いなあ…
これ I S かあ

「はん、やつぱり金で雇った奴は信用出来ねえなあ…ペラペラ余計な事も喋りやがる」
勝ち気な感じだなあ…やつぱり I S かよ…ツ―事は国やらが絡んでるみたいだな

「ザモナスく少年君連れて直ぐ撤退」

「え？魔王ちゃんは？」

「ん〜俺はコイツと遊んでから帰るよ」

『コネクト』

体を解しながらコネクトで剣を取り出したアナザーウィザードは構えを取ると

「はん！ボスの話に聞いているより弱そうだな！丁度良いアタシら亡国企業の手柄になって貰おうか！」

ライフルを展開して構えるが、待て亡国企業？……こいつ等があ…

「やっと見つけた…… temeエ等か…束の夢を汚した奴らああああー！」

ハルトの怒りにアナザーウィザード…正確に言えばアナザーウィザードの中にいたドラゴンが憤怒の感情に当てられ力を引き出した

『ウィザード…ドラゴン…』

同時に赤い炎に包まれた巨大なドラゴンがアナザーウィザードに体当たりすると、右手には爪が腰には尻尾が、そして背中にはボロボロの羽が付けられている姿

アナザーウィザード・ドラゴン 覚醒

「潰す」

「はん！やれるものならやってみな!!」

両者が激しい空中戦を繰り広げることとなる

結果から言えば、亡国企業には上手いこと逃げられた

んで誘拐犯は金で雇われた以外の事はわからなかったアナザークイズで吸い上げたから間違いないが：問題はこれからであった千冬が二連覇したのだが一夏の誘拐事件を棚上げして、質の悪いドイツがIS部隊の教導を依頼して来やがった頭に来たので束と一緒にドイツのコアを停止させようとしたが千冬が待ったをかけた曰く

「対応に不備はあったのは事実だが、ISの正しいあり方を伝えたい」とのことだ
だったら俺達が必要以上に言う気はないがな

取り敢えず長期出張の名目で千冬はドイツに移動したり、鈴ちゃんが中国に帰ったりと一夏を取り巻く環境は変化していた

この数年後 一夏がI Sを動かした事で事態が大きく動くこととなる

入学前は色々起こりがち

ある日の篠ノ之製作所：以前はポロポロな事務所だったがＩＳとヒューマギア事業拡大に伴い大きくセキュリティも頑丈なマンションを建ててるまでに成長した

その応接室にて

「世界初のＩＳ適正者ねえ、大変だな少年君も」

新聞を開いて一面を飾る弟分にハルトは苦笑する隣では

「一夏あ…何故ＩＳに触れたあ…普通は目にしても離れて会場に向かうだろう…」

項垂れている千冬と

「チーちゃんの自分の背を追う的なメッセージが全て無に帰すとは…いつくん…恐るべし…だけど」

『やったあああああ！一夏と同じ高校だあああああ！』

「箒ちゃんが幸せなら良いかあ！」

「あの子…もつと武士道的な女の子だったような…」

画面越しに狂喜乱舞している箒ちゃん……この子、本来の歴史なら姉との確執とか孤独のせいで性格拗らせるのにずっと一緒だったからか姉の影響で弾けてしまった

一夏の事は篠ノ之製作所の設立者3名が頭を抱えていた、千冬はドイツから帰国後
ISの教育機関 IS学園の講師をしている……一応出向扱いなので席は残しているが
今年から担任まで任せられたそう

俺はヒューマギア事業の方を担当しているが実際の仕事は衛星や滅亡迅雷に任せて
いるので暇極まりない 寧ろ束が大忙しだからな

後援や面倒くさい取引まで頑張ったご褒美に……ご飯やデートが対価で良いのかなあ
?

「んで一夏の奴どうするよ？ 此処で面倒見る？」

「出来ればそうしたいけど国の連中が許すかなあ？」

「その辺は何とでも何じやねえの？ 世界初の事例なので製作者自ら調査云々とか」

そう言うなり束は驚いた顔をしながら

「……ハル君天才!!」

「おう、今更気づいたか！」

「お前も束も十分に人から見れば天災だな」

「褒めないでよチーちゃん！」

「ああ…照れるぜ！」

「はあ…日本語とは難しいな」

『全くだなバカの面倒は疲れる』

「それでお前は名乗り出るのか？ I S が使えると」

千冬は、ハルトを見るが首を横に振る

「俺は辞めとく…つーか俺が抜けたらヒューマギア事業は誰が担当するのさ」

暇とはいえ全く仕事がない訳ではないのだ、ただでさえ家族経営の側面が強い篠ノ之製作所…まあ取り扱うものの内容的に産業スパイや外部の人間を必要以上に取り入れたくないと言うのもあるが束一人に負担を押し付ける事になる

「ふふふ…その辺はだいじようブイ！」

「はい、お父さんが抜けた穴は私と亡きんでカバー可能ですよ」

もうナチュラルに父親呼びしてくる、クロエの言葉に成長と寂しさを感じる…やはり亡さんは有能だよなあ…と思うが

「けど、俺の年齢的に学生はキツイなあ…」

外見的な老いが無いとは言え精神的にはキツイものがある

「なら寮のコックはどうだ？ 推薦しても良いぞ？」

「そっか、その辺の道もあるのか」

何なら元の世界に戻ってレストラン開くのもありだなあ…

「ダメだよ！ハル君の料理食べられないと束さんは体が痙攣するんだ！」

「アレ？料理に変なもの入れてはないんだけど」

「まあ気持ちは分かるが…」

「分かるの!?!」

「だからI S学園に入学なんて認めないよ！」

「そんな理由で!?!」

まあこんな感じで平和な日々であるが、俺的にもケジメを付けなければならねえよな

—————

篠ノ之製作所の一室にて、最早お馴染みな面々と一緒に駄弁ることにした

「一応アナザージオウIIは使えるから転移は可能だけど…流石に中途半端なまま投げるのは嫌だなあ…」

「我が魔王ならそう仰ると思いましたがよ」

いつものように笑う従者達に頼もしさを覚える…だが

「うし現状を整理するぞ」

ネオタイムジャッカーはメナスが死亡

残りのメンバーはリーダーのクジューとレック、スズネ　そしてこの世界の現地協力者と思わしき人物と亡国企業……うん

「対して俺達は5人……圧倒的な戦力不足だな」

滅亡迅雷はこの世界の悪意を見守って貰う以上　戦力としては数えないし東、千冬、キャロルにも俺の問題に巻き込ませたくないとなると協力してくれそうな奴は

「ナツキ？」

現状、自由に動かせそうな奴がナツキしかいないコミュカの低さに悲しくなってきた
「助っ人頼めますか？」

「だよなあ……多分今頃……」

――

シンフォギア世界にて

「ナツキ！ 貴様アレだけサソリを使うなど言っただらうがあ！」

「ご、ごめんなさい!! アレ使わないと危機脱出が出来そうになくて……」

「お陰で、またドライバーのメンテナンスだあ……！ たたく折角バーズの強化案もあるの

にこれでは完成がいつになるやら……」

「バースの強化？そんなのオーズにあったかな？」

「ああ貴様は知らんだろうな……オレも最近知ったんだ、ハルトから届けられたコレのおかげでな」

「こ、これは！」

仮面ライダーオーズ 復活のコアメダルのDVDである

「これに出たバースの改良を目指す……まずはコアメダルと言う訳だが……」

「出来ないんですよね？サンジエルマンさん達も悩ませてるって」

「いや、それが出来たが……何故か色が違うんだ」

それは黒い3枚のコアメダルであった

「それビカソ違いですよキャロルさん」

「わかっている……はあ……ハルトが居れば楽に出来たろう……彼奴の知識は侮れん」

「いやハルト居ても無理じゃねえっすか？錬金術は門外漢ですよ奴でも」

「はあ……何しているんだハルト……やりたい事があると断ったが……アイツの知識量を考えればやはり付いて行けばよかったか……どう思う？」

「（い、言えない！未来で見たけど別世界に娘がいるとか絶対言えない）そ、そうですね……発明もありますけどやはり知識面で補佐できるならハルトの力は必要ですよ」

「そうか…旅にはついて行かないが別世界に行く発明をするか…その間開ける、エルフナインの奴と仲良くな」

「は、はい！（頑張れハルト！）」

再会の時に修羅場になるが、それはハルトの責任なので頑張つて貰うとしようとして協力者を見捨てたナツキであった

—————

「きつと、キャロルに顎で使われて悲鳴上げてる…まあ色んな敵とのデータ収集言ええばキャロルも貸してくれるんじゃないやね？ソロモンの杖も預けてあるし…あれ？冷房効きすぎじゃねえ？」

「いえ？冬ですから冷房は入れてませんか？」

「当たらずしも遠からずであるが、置いといて」

「んで本題がコレ見てくれよ」

ハルトはアタツシユケースを開けると中身はアナザージオウになる際に現れる黒いジクウドライバーであった

「これは…」

「俺専用機」

「えええええ！魔王ちゃん作っちゃったの！」

『俺達がいながらISに浮気かハルト！』

浮気じゃねえだろうよ……まったくお前たちの為でもあんだよコレ

「ヘシエイプシフター」能力はアナザーライダーの力をISに変換して使う……その代償にISは飛行や絶対防御みたいな基礎機能以外は使えないけどさ、まあオルトロスバルカと同じ感じだね」

その例えを理解したのか

「つまり……規格違いのものを強引に繋げ、その場で情報を調整しながら無理やり稼働させていると言う事ですか？」

ウオズの問いかけに首を振る

仮面ライダーオルトロスバルカンと違うのは全力稼働しか出来ないのではなく、最初から安全考慮して低出力でしか使えないという事だな、前に全力稼働で試したらアナザーライダーの力にフレームが耐えられなかった

「前回の誘拐や白騎士事件で分かった事がある……：やっぱアナザーライダーの姿で暴れても良い場所って以外と少ない！」

ノイズがいるだけで変身出来た頃が懐かしいよ！

「今更ですね」

「だから考えたさ郷に入れば郷に従えと！」

「ああ…それでI Sですか」

「で、シエイプシフター（変化する者）ね」

「そう！シエイプシフターを使えば合法的にアナザーライダーになれるって訳よ」

まあ枷をつけて戦うと思えば良い…束作のものに比べると一流家具とDIYくらいの差があるがな…アナザービルド達の協力を得ても、これが限界であった

「で、だ…今後の展開的に俺もI S学園に行くべき？」

束達の前ではああ言ったが亡国企業がネオタイムジャツカーと無関係なら放置でも良かったが一夏誘拐にネオタイムジャツカーが絡んできると現地勢力で一夏を守るかは難しいラインである。

「それは魔王ちゃん次第でしょ？まあ学生は無理じゃないかなあ」

「ああ…ハルト様が余り1箇所留まるのは宜しくない…3年間学園に通えるか？」

「そこもありますねオタイムジャツカーの動きが見えないのに三年も動けないのは…」

「義弟殿の安全を考え、我が魔王自ら出陣ですか…悪い選択肢とは言いませんが連中に居場所がバレる可能性もありますね」

「うーん…ウオズがナチュラルに一夏を親族認定しているなあ」

反対案の方が多いか…確か…：友達が貸してくれたラノベを元にすると

入学早々、決闘したり束作の無人機が学園襲つたり 千冬の教え子が喧嘩売つたりとか軍事兵器の I S を迎撃するんだつたな

「なんつー濃厚な一学期だ…けどこれって」

俺が介入しなかった場合の歴史だ…参考までにし過剰に鵜呑みにしない事を徹底しようか

そう考えているとカゲンが思いつきを発言した

「外部講師はどうだ？必要ならその都度呼ばれるだけだから必要以上に通う意味もない上に講師なら学園を徘徊しても不自然ではない」

良い提案だが

「俺が人に教えられる事って何？…料理？」

俺は元の世界に帰ったらレストラン開くんだ！名前はアギトで…失礼脱線した

「違いますヒューマギアや I S についてです。貴方、束様と I S 製作したりヒューマギア開発した人間ですよ？対外的には世界的ベンチャー企業の N o . 2 ですのよ」

「奥方じゃねえけど…え？そうなの!!？」

「ええ、ある意味 V I P です」

「知らなかった…」

「まあ中身はコレですが」

「魔王ちゃん。その辺無頓着だしね」

「マジ！俺今でも束のラボ間借りしてるのに外ではそんな感じの認知なの！」

「一番の罪は無知と知ってます？」

「ごめんなさい…」

「素直ですね、そろそろ未来でアナザーオーマジオウになる事も認知して頂かないと」

「それは認知しないからな、クロエを娘と認知してもアナザーオーマジオウは認知しな

い」

「ちっ」

「さりげないねえウオズちゃん」

「抜け目なし」

「いや、さりげなくクロエ様を娘認識してますね魔王様」

そりやそうだろ！あんな可愛い娘がいたら溺愛するわ!!舐めるなよ！

「子離れ出来ます？」

「うーん……頑張る！」

「ではクロエ様や妹君が彼氏を連れてきたら？」

「彼氏……それはアナザードラグレッターのご飯かな？」

そう言う意味では浅倉さんのリスペクトは忘れずにいたい

「子離れ出来ないじゃないですか!!」

取り敢えず束には俺の事は黙る変わりに講師として入れないか相談したのであった

—————

そして入学式まで暇だったのもあつたが今は

「……………」

入学前の詰め込み学習で頭をパンクさせている一夏と箒の勉強を見ていた、そりゃ竹刀持った千冬がいれば怖いよなあ…だつて一夏の奴さ電話帳と間違えて捨てたんだぜ? そう言ったら千冬が怒りの余り覚醒しそうだったから頑張つて止めた…苦戦したぜ

ハルトはその光景を見ていたが、関係ない俺は内緒でシエイプシフターの改良に務めねばならんのだが…うーん、この辺の調整が甘いのか…けどどうしたら?

「それなら、この回路を弄れ」

そうアドバイスをされたので試すと上手くいった、やったぜ!

「ありがとう束! 流石天才だ…いな…」

振り向いてお礼を言うが顔が凍りついた

「そうだろうそうだろう…所で…束って誰だ教えてくれないか？ハルト？」
「キ…キヤロル!？」

だって目の前にはいない筈の青筋立ててるキヤロルが立っていたからだ

正妻戦争

前回のあらすじ キヤロル襲来！

「キヤロル!？」

「誰だ!？」

ハルトが驚いている中、千冬は箒と一夏を守る為に竹刀で警戒しているがキヤロルの目線に入ったのが少し不機嫌そうに

「ん…なんだ貴様は？誰に向かって剣を向けている？」

「何だと！貴様は何者で何処から入ってきた！そしてハルトの何なのだ！」

「ちよつと待つて千冬！彼女は敵じゃないからキヤロルもそんな直ぐに拳を出さない！そんな乱暴する子じゃないでしょ！まずは会話からだよ！」

ナツキが入れば『響の台詞!』とツツコミを入れるくらいの内容である

「ハルト…お前に言われたくないな、いつだったか連中と戦つてた時に碌に会話せずに不意打ちしてからマウントポジション取り笑いながらノリノリで女を殴つてたろ？」

う、雪音クリスの事を引き合いに出されると反論出来ない

「彼女は敵だったから大丈夫なの！その辺俺は男女平等なんだよ!!」

「いや！その前に笑いながら女殴ったってどんな状況なんだよハル兄！」

「その前に！どうやってここに来たのさキャロル！」

「何、余ったセルメダルを使って次元跳躍装置を開発しただけだ…大した事じゃない…
幸い貴様の持つアナザーウォッチの波長は記録してたからな追いかける装置の開発は
簡単だったさ」

「だから大した事してんだよ!!どんな原理で!？」

「錬金術だ」

「だから、やばい事してる自覚を持って錬金術師!!」

「だから、お前に言われたくない！それより貴様！人がコアメダルについて聞きたい事
があるから頑張つて世界線を越えたのにその先で女とイチャイチャしてたのか！」

「え、コアメダル作ったのか！スゲーなキャロル！」

「そうだろう！だが質問に答えろ！」

「誰が女の子と楽しくイチャイチャしてんだよコラア！こちとらネオタイムジャッカー
の連中からストーリーカーされてんだぞお！」

『そうだぞ！ハルトは錫音ちゃんからの好意を自覚してねえ鈍感ヘタレだそコラア！』

「アナザー鎧武！後で覚えてやあ！」

誰の事を言ってるやがる！今にもキャロルと取っ組み合いが始まろうとしていたが騒がしいねえ……ん？ハル君、其処の子誰かなあ？かな？」

何故か何処の魔砲少女のような覇気を纏う束と

「お父さん……いつの間に他に子供を！」

今にも泣きそうな顔のクロエが来た

話が余計に拗れてきたあ！と頭抱えると、キャロルが絶対零度を思わせる瞳でクロエを見ていた

「お父さん？……ハルト貴様！いつの間に子供なんか作った！その黒髪か？それともあのウサ耳のどっちだあ！」

「違うわ！あの子は父と慕ってたんだ！俺をよ！」

「な……んだと……」

「取り敢えず話聞け！」

—————

そんな感じで、何とか全員を対話のテーブルに着かせたハルトは屋上テラスに集まったのだが

「「……………」」

この何とも言えない重い空気に思わず、心中では

(何でこんな状況になってんだよお！何でキャロル達あんなに怒ってる訳！俺は清く正しく生きてるぞ！何故女性トラブルが発生してんだ！どうすりや良いんだよ！助けてアナザーライダー!?)

『いやあ見事なまでに自業自得な風景だな』

『ギャハハハハハ！いやあハルトの修羅場で酒が美味しい！』

『いや全く』

(お前等!?)

年単位でいるから忘れてたけど、こいつ等って元々ヴィラン側だったあ！つか人の修羅場で酒盛りを始めるな！そんなに飯ウマな現場じゃないぞ！

『じゃあお前ならどうするよ?』

(笑顔でコーヒー飲むな)

『だろ?皆そうする俺達もそうする』

(そりやそうだな)

反論も封じられ、相棒達から見放された俺だったが彼女達は自己紹介中のようで

「オレはキャロル・マールス・デインハイム、錬金術師で…そこにいるハルトの初めて

を貰った女だ」

少しドヤ顔な彼女に思わず

「キャロル!? 誤解を招く台詞を言わないで貰えます!? 確かに俺のファーストキスでした
が!」

「そう言う事だ…つまりオレはハルトの初めてを貰った訳だな…残念だったな外野共」

不敵に笑うキャロルを見て思わず

「ハ、ハルト君はロリコンだったの!」

「ハルト…貴様の価値観を矯正する日が来ようとは…」

「違う! つーか束には初めて会った時に話してるだろ! 特撮仲間の錬金術師!!」

「……………あ、君が!」

合点が言った束は少し落ち着きを取り戻す

「何だ束は知ってたのか?」

「知ってたけど実際に会うのは初めてかな…けど確か金髪の大人って聞いてたけど
なあ」

「ん? ああ…そう言う事かハルトの言っているのはコレだろ?」

と言うなりキャロルは指を鳴らすと大人モードになると束と千冬もだがこっそり見
ていたら一夏達もあり得ない物を見る目になる

「どうだ？これなら不足ないだろう？」

立ち上がるなりハルトの腕を組む彼女に。狙ってるのか柔らかいものが二の腕に当たった幸せである

「どんな原理でこうなるのさ……というより」

「驚いたな……これはだがその前に」

「ハルト（君）から離れる（て）！」

「断る！嫌なら力づくでハルトを奪いに来い！」

キヤロルさん、ダウルダブラを着ないで貰えますか？

「そこは対話で解決しません!？」

「無理だな……ハルトが欲しいならオレを倒していけ!!」

「それ何て無理ゲー?」

だってこの子、オーズ技術をものにしてますよ?何ならバースドライバー……しかも話的にコアメダルまで作ったらしいじゃん無理じゃね?

「チーちゃん!」「ああ!」

東は白騎士……否、新しい愛機である暮桜の待機形態を渡すと展開する、そして東はアタッシュケースから取り出したのは

何処か凄い見覚えのある、蛍光カラーのドライバーを腰につけた

『ゼロワンドライバー』

「いや待て東…ちよつと待て」

「何かな、ハル君？」

「何でそのドライバー持ってるの!？」

「それは簡単だよハル君」

『JUMP』

『authorize』

プログライズキーを起動させると同時に宇宙から機械仕掛けのバツタが屋上の床に穴を開けながら元気に飛び回っている

「ほお…面白い技術だな」

「感心しないで止めて貰える?あのままだと床の陥没で費用偉い事なるから」

「無理だな変身中の攻撃は流儀に反する」

地でカツコイイを行くな、この錬金術師はと思つてると

「東さんは皆の社長だからだあ!変身!!」

『PROGRISE! 跳び上がRISE!ライジングホッパー!』

同時にバツタは東の周囲に滞空すると彼女の体に装甲と跳躍の力を付与させた

蛍光色のボディ、平成ライダーの中でもクウガやWのようにシンプルな出立ち。それは紛れもなく新たな時代を切り拓くもの

「ゼロワン、仮面ライダーゼロワン！それがこのライダーの名前だあ！」

「束様！」

「ありがとうクーちゃん！」

『ブレードライズ』

ゼロワンになった束と細腕には合わない腕力で投げたアタッシュユカリバーを受け取る光景にハルトは空いた口が塞がらなかった

「ええ……」

「ほお仮面ライダーか……良いだろうお前達の本気をオレにぶつけてみる！」

「はああああああ!!！」

同時に屋上でとんでもない爆発が起こるのであった

「アナザーウィザード、ビルド」

『分かった認識阻害の魔法を使おう』

『衛星のハッキングなら任せておけ』

「悪い……んで相棒」

『キャロルのいた世界の座標は確保済みだぞ？』

「んや、送り返す用意だ最悪だが片道切符かも知れんからな」

『分かった…全く…人使いの荒いな』

「お前には負けるさ」

背景、元の世界の両親…次いでに妹よ

俺…やばい人達に仮面ライダーを布教してみたいです

—————

別階にて

「つ!!何だこの悪寒は!」

休憩していたウオズ達は突然、震え上がったカゲンに目線が動く

「どうしましたか?」

「命の危機を感じる…具体的には平行同位体の俺が殺された時と同じ危機が近くに
いる」

「大袈裟だなあカゲンちゃんは〜」

「はい、しかし上の階は騒がしいですね奥方様が実験でもしてるのでしょうか?」

「いえ、そのような予定は…あ」

不愉快な顔で言うフィーニスの言葉にウオズは何か思い出したかのように逢魔降臨
歴を開く

「あれ？今日何かあったっけ？」

「特に何もなかった気がするぞ」

「この本によれば今日、この屋上にて……『第一次正妻戦争』が行われる」

「っ!!!」

ウオズの言葉にしまった！と言う顔をしているジョウゲンとカゲンと反対に首を傾げるフィーニス

「正妻戦争？」

「そっか入ったばかりのフィーニスは知らないのか……えーと簡単に言う」と

「奥方様達の痴話喧嘩だ」

「え？魔王様の？……でも、ただの喧嘩なら僕達が「わかってませんね」はい？」

ウオズが口を挟むと珍しく早口で

「あの魔王が普通の女性を妻に選ぶと思えますか？」

「……………」

短くない付き合いいでフィーニスもハルトは根は善人だが倫理が斜め上にいる人間と理解しているの口をつぐむ

「その結果、我が魔王の奥方達は全員、とんでもない強さでして喧嘩もかなりの規模になるのですよ……ある時は国一つ更地になりました」

「あくあの時かあ…確か魔王ちゃんに明らかかな政治利用を狙ったハニトラ仕掛けて奥方達が凄い憤慨したんだよねえ…魔王ちゃんは相手突っぱねたからお咎めなしだったっけ」

「いや、あの後…日を分けて全員とデートに行った」

「え〜」

「そう言えば過去に派遣される前で何回目だったかな？」

「最新だと143次正妻戦争ですね…確かこの間の原因は…誰と温泉旅行に行くか…でしたね」

「あ、魔王ちゃんが分身して行った奴ね」

「はい、あの時の我が魔王は正に慣れたと言わんばかりの対応でしたが…今の我が魔王は…」

「無理だろうね」「ああ無理だ」

「どうします？魔王様的に助けを求めてそうですが」

「今回はまだ可愛いものですよ…取り敢えず、ほとぼり冷めたら助けに向かいましょうか」

「「異議なし」」

「ええ!?!」

「フィーニス、貴方も我が魔王の末席にいる者ならば覚えておきなさい」

怒れる魔王と奥方達は基本スルー

である

—————

そして戦いが始まって数時間、流石に体力的に限界だったのか

『ライジングインパクト!!』

「零落百夜!」

「何するものかあ!」

3人の大技で地面を大きく揺らし終結した、修復困難な屋上を残して、そして全員が横になり

「やるな……お前等……」

「はは、キャロリンもね」

「誰がキャロリンだ……はあ……まあ……貴様等なら異論はない……だが正妻はオレだ」

「は？何言ってるの？束さんが正妻だよ？」

「お前達、私を差し置いて何を言う？」

「いやチーちゃん家事能力皆無じゃん」

「流石のオレでも料理は出来るぞ？普段はせんがな…ハルトの方が出来るからな」

「だよね！ハル君の料理美味しいよね！」

「ああ…そうだな千冬とやらは出来んのか？」

「うっ！だ、だがハルトに教わってマシになった」

「けど部屋汚いじゃん」

「がはっ！」

KOされた千冬をスルーして

「うさ耳…束と言ったか、あの飛行する鎧…お前が作ったのか？」

「うん、インフィニット・ストラトス…束さんが作った宇宙へ行く翼だよ」

「そうか…その翼の話、興味がある聞かせろ」

「勿論、じゃあじゃあ錬金術の話聞かせてよ」

「良いだろう…それとハルト！」

「ん？」

「お前にはコアメダルの事で聞きたい事がある、アंक達以外にもコアメダルのグリー

ドはいるんだろ？」

「へ？……お何で知ってんの？」

「オレの所にコレが届いたからだ」

とキャロルが見せたのは復活のコアメダルDVDだが

「な、何じゃこりやあああああー！」

見覚えのないDVDの存在はハルトに驚きを与えたのであった

—————

復活のコアメダル視聴後

「……………」

ハルトは空いた口が塞がらずに硬直していた

「いや、その気持ちはわかる」

キャロルはそれだけしか言えなかった

「そ、それでコアメダルの話だったな……えーと」

空気を変えようとするがやはり引き摺るな

「オレが作ったのが黒いコアメダルだ……コレに出たバースXの試作品として製作したの

だが……何故アナザーウォッチを懐に直した？」

「んや、このコアメダルが意思持ってたら面倒な事になるから
「ん？あぁ…コアか」

仮面ライダーコア

三枚のコアメダルとメモリーメモリに収められた仮面ライダー達の偏った記憶から生まれた異形の仮面ライダー

ある意味でアナザーライダーの先輩、アーキタイプとも言える存在ではある

こいつの復活条件がライダーの記憶というなら

「アナザーウオッチもライダーの記憶を内包してるからな」

寧ろガイアメモリよりも濃厚かつ芳醇なライダーの記憶が収められている、これでコアが蘇ろうものなら大変な事になるだろう

「安心しろ、今のオレの実力では意志のあるコアメダルは作れんさ」

笑顔でそういうキャラルに安心感を覚える

「そうか…なら安心だな」

「だろ？それとだが東の奴にも」

「はい仮面ライダー見せました、コレです」

とゼロワン、フォーゼ、ビルドを見せた。

「ほお、おいオレにも見せろ……それとコレは何だ？」

「言うと思ったよ、つて鎧武じゃん見よ見よ」

DVDをセットするとキャロルはムツとした顔で

「それと」

「はいはい、ほら」

そう言うときキャロルはハルトの膝に腰掛けると仮面ライダーゼロワンから視聴する
事にした

その光景に

「キャロリンめ……ロリ化したらハル君の膝に座れるのかあ……くそお……その手があったあ
……」

「いや、アレはそう言うのではないだろう」

「だけど羨ましいじゃん！チーちゃんは思わないの？」

「まあ少しは……」

「でしょー！」

「だったらこうすれば良い」

と千冬はそう言うなりハルトの右側に腰掛ける

「ち、千冬!？」

「何だ、私も見たいのだから良いだろう？」

「良いよー」

思考などかなぐり捨てて仮面ライダーに没頭する

「おい」

「はいはいキャロル喧嘩はやめてねー」

「おい！頭を撫でるな！」

「た、東さんも！座るー！ー！」

と左側には東が腰掛ける事となったのである

その後、キャロルにコアメダルの装置について説明した後、また来ると言って帰っていった…頑張れナツキ！

—————

「ほらね？」

「結局円満解決するんだよなあ」

「これで魔王の器！」

「仲良しですね」

その光景を見ていた家臣団はほっこりしていたが

「けど不定期に学園に通うらしいですが学園の護衛どうします？」

「「っ!!!」」

こっちはこっちで別の戦いが始まるのであった

そして月日が経ち、一夏のIS学園入学となる

それから始まる物語

入学式

「ここは世界に冠たるI・S学園、そこに

「おーおー凄い凄い本当に女の子の子しかないや」

珍しくスーツだが赤いネクタイが変に結んでいるハルトの隣に同じようにだがきちんとスーツを着ている千冬がいた

「ハル…常葉講師、言葉を選んでください」

「硬いなあ千冬は…まあ真面目なのは良い事だけど…で？弟の新しい始まりに姉的に思う所は？」

「……………心配です色々」と

「俺もだよ…けど安心しな俺が可能な範囲で力になるからさ」

「礼を言う…ふっ…変わらないなお前は」

「当然、俺はいつだって心は若いままだからな」

『発言が老いてるぞ』

うっせえ、成長したと言え

入学式が肅々と進む中で

【では新しい講師を紹介します、ではまずはIS臨時講師 篠ノ之東さん】

「は？」

会場がざわめくと同時に空から人參が落ちてくると中からプシューと煙があがり

「はーいー！もすもすひねもす？はあーい！皆のアイドル篠ノ之東だよー！宜しくねー！」

と普段の彼女が着ないようなスーツを着て手を振る彼女に思わず

「は？」

一夏と箒も固まっていたが東にロックオンするなり手を振り

「あー！いっくん！箒ちゃん！見てるねー！……よし！これで箒ちゃんといっくんと縁が出来たよ！！東さんとの縁は良縁だあ！あ！ハル君！チーちゃん！見て見て！東さん先生になりましたー！いえい！！」

千冬と同じ言葉が出るよな

「千冬」「分かってる止めに行くぞ」

そのまま壇上に上がると千冬は東にアイアンクローをかます

「あ！チーちゃん！驚いたあいたたたたた！ちよつ辞めて！頭割れちゃううう！！」
「良いではないか、割れば少しは大人しくなるだろうからな」

「ハル君助けて!」

「このニンジンロケットどう作ったのさ? 抜かないと……あ……床の修繕費は篠ノ之製作所に請求書お願いします」

見て見ぬふりしてスルーする

「裏切り者おおおお!」

騒がしい入学式で悪い一夏、大変だろうが許せ

—————

そして入学式後は一通り挨拶を終えた後は挨拶くらいだが、その前にやる事もある
「いたいた! おーい!」

笑顔でハルトは近くの警備をしていたヒューマギア マモルに近づく

「ハルトさん」

「元気? ごめんね、いきなりで」

「いいえ、コレが私の仕事です」

「そっか色々大変だろうけど、お願いね」

「はい」

そう俺の仕事 それは学園に配備されたヒューマギアのチェックである…コレは俺にしか出来ないからなと笑顔で別れた後、一夏のいる教室に入ると バゴン！と強い何かを叩く音がした

「何?!音撃?魔化魍でも出た?」

あの大自然の崇りの奴が、この近未来都市的な場所にか!

『違うぞ』

あ、冗談だけど、ありがとうアナザー響鬼

「だよな、失礼しまーす」

「あ、常葉講師!」

「山田先生どうもです」

彼女は副担任の山田麻耶先生、千冬と対照的におっとりとした女性だ…それと束やキャロルよりも立派なものが…はっ!殺気!

慌てて白羽取したのは出席簿だった

「つぶな!」

「ちっ…常葉講師挨拶なら早くして下さい」

千冬、本気の威圧は止めようね生徒怯えちゃってるからさあ

「怖いねえ、はいはいと常葉ハルト…臨時講師で偶にしか会わないけどね担当科目は最先端科学の人工知能 AIやプログラムに関してが主な担当ね宜しく」

ヘラヘラしながら挨拶すると、女子は以外な顔をしていた

「え？あの人が常葉ハルト？」

「篠ノ之博士とISを作った人だよね」

「もつと怖い人だっと思ってたけど…」

あれ？俺の評価良くない？

「静かに常葉講師は非常勤講師だが失礼のないように、あんなナリだが篠ノ之製作所のNo. 2だからな一応はVIP…それと非公式だが2人目だ、内密にな」

教室がざわめくがコレは教員や一部の人間が知っている事である

「あんなナリは酷くない？千冬…のわつと！」

「この場では織斑先生と呼んでください常葉講師」

「はいはいと、んじゃ皆またねー」

と手をヒラヒラ振って外に出ると、ハルトは笑みを消す

「報告」

『学園周囲に異常はありません』

『同じく…けど大丈夫なの？こんな真似して』

「束を介して学園長には許可を得ている問題ない」

今回はウオズ達は学園外での情報収集に任せている、学園の警備システム上、中に入る人数は限りがあるからな

「情報収集と監視を頼む、交信終わり」

よしよしと

「んじゃ二組に行きますかね」

その時間は無難に挨拶を終わらせて済ませた

—————

一限目 原作と違う点で言うなら一夏がああの本を呼んで知識面を、ある程度は頭に叩き込んでいる事だろう

休み時間

「しかし凄い人だなあ…」

「一夏を一目見ようと集まったもの好きだな」

「もの好きって…：…本当、箒がいてくれて助かったよ流石に知り合いがないと心細いからな」

「私もだ…正直姉さんの奇行には慣れたと思ってたがまだまだだった…まさか先生にな

るとは」

「いや、東さんのアレはハル兄か千冬姉くらいしか止められないだろう?」

「だな…本当、ハルトさん…姉さんもらつてくれないだろうか…もうあの人くらいしかないと思う…姉さんの奇行に付き合える人は」

「まあハル兄も結構、奇行をするけどな…」

「違ういな」

「ちよつと宜しくて!」

そんな感じで英国淑女襲来したと言う

二限目

細かい部分は省くが、学級委員になるのに

一夏推薦↓英国淑女 セシリア・オルコット参戦!↓突然の日本dis!

それを聞かされていた千冬は、はあ…と頭を抱えた

「大丈夫?」

「問題ない…と言いたいが、これは東にバレてるなコレ」

「だろ?うなあ、英国のIS終わったね」

と言うとクラスの面々の視線が千冬と俺に集まる

「どう言う事ですよ！」

「え？ 質問 東と千冬の国籍は？」

「それは……っ！」

理解したのか顔を青くしたオルコットを見てハルトは悪い笑みを浮かべる

「日本だよねえ、国のことは別にしても身内を悪く言われたら東は何すると思う？ 有名だと思ふよ？ あの人が今世界に何思っているかって」

思つてること 東は宇宙開発を望んでいたのに今では兵器として使っている国があり不満だという事 そして身内思いで有名で他人など興味がないことを……そして不要と判断したら冷徹に切り捨てることも

「……………」

「ご愁傷様……同情はしないけどね」

「だ、だまらっしやい！ 男の分際で！」

「いやいや男も何も事実言っただけだけど？」

「うるさいですわ！ これだから田舎の猿は！」

「あ……」

オルコットだっけ？ どれだけ墓穴掘るのさ！ 辞めなよ！ とハルトは天を仰いだ

「ほお……オルコット貴様……死にたいと見える」

『この女……我が魔王を猿と?』

「千冬堪えて、先生が生徒殴るのは色々問題」

あとウオズは何処から話してる? いきなり声が聞こえて怖いんだけど

「一応は講師に暴言を吐く辺りは矯正せねばならんだろう? 教育的指導だ」

それは大義名分だろうけど、別にさ

「良くね? 別に性別で偏見持つてる淑女に礼儀作法なんて説いても無駄だからさ」

と言うなり顔を赤くする

「何ですって!!」

「おーおー怖い怖い」

へらへら笑って見下すように見ている、残念、コレより怖い目を知ってるんだよ猫の

威嚇より迫力ないわ

「だつてさ、これだよ」

ハルトは懐に入れていたギジメモリをフロッグポッドに装填する先程の罵倒がオル

コットの肉声で綺麗に再生されていった

「つー訳よ、これ英国に渡したらどうなる? 流石に危ないよね? だから辞めた方が良い

よっ。」

「脅すなんて卑劣な……決闘ですわ! 勝つたらわ、そのオモチヤを壊して私への暴言を

謝罪して奴隷のように働かせてやりますわ！」

「OK、んじや俺が勝つたら…そだなあ焼き土下座してもらおう？」

俺のフロッグポッドを破壊するとな？ははは！決定だ…この女は教え子ではない
……敵だ

若干、黒いオーラが出ていたようで一夏達は流せるが他の生徒は萎縮していた

「いや待て、常葉講師それは不味い…」

「んじや、アイアンメイデンやファラリスの雄牛かな？」

世界的に有名な拷問器具の名前を出す

「拷問も禁止です…何故物騒な方法で片付けようとするのですか？」

「だって俺が、しっかりしない対応しないと他の連中が何しでかすか分からないから…
俺個人で対応するのは慈悲ある方だと思うよ？」

「どう言う意味ですの!!」

「あのさ…こう見えて束の右腕な訳よ…それとさ篠ノ之製作所を敵に回したら、どうなるか位この学園にいたら解ると思うよ？」

「はん！所詮は篠ノ之博士の威を借る狐ですわね情けない！」

「なら日本風な表現で狐に化かされてみる？束〜」

呼ぶと何処から共なく現れた束は笑顔で

「はいはい！じゃあ狐さんの魔術で英国のコアは全部機能停止してボツシュートしよ
うかあ！ついでに病院とかにいるヒューマギアもシャットダウンしないとね！国の経
済が1日でガタガタだあ！」

と笑顔で物騒な事を言っている束を指差して

「つてなるよ？篠ノ之製作所全体……つーか一応身内に認識の俺なのさ……んで束を完全に
敵に回したらアンタの身一つでどうこうなる問題じゃないけど？」

「……………」

顔面蒼白でガタガタ震えるオルコットに一言

「目上に噛み付くのも悪くないけど、喧嘩売るなら相手を選べ……だからさ千冬……俺個人
が対応しないと不味いんだつて焼き土下座とかは無しにしてもケジメつけないと不味
いのよ」

英国を何処ぞの少佐みたいに地獄を作りたい訳ではないのだ……あの演説は凄いい好
きなんだがな……

「……………」だな良いだろう、織斑との勝負後に常葉講師との模擬戦をさせる」

「先輩!？」

その言葉に千冬も反論出来ずに肯定すると山田先生が驚いた顔をしている、理由は簡
単だ

東なら本当に英国のコア全部機能停止させたり世界各国の大陸弾道ミサイルをハツキングして英国狙うだろう…何なら滅亡迅雷の4人がマギアを率いて暴れるかも知れないし、ウオズ達なら

—————

『さて…：ダイマジーンを英国に派遣します、フイーニス、英国首都を貴方の脚で破壊して差し上げましょう！』

『はい魔王様を猿呼ばわりした小娘に身の程を教えてやります！』

『キャロルからソロモンの杖を借りたぞ！』

『ねえねえウオズちゃん！俺アマゾン細胞ばら撒きたいんだけど良いかな？』

『許可します、お前たち…あの西の島国を地獄に変えなさい！』

『『『お—————』』』

—————

変な所で過激な家臣団を思い出す、やばいな

「大変な事になる…：パリは燃えているか？じやないのよ止めないと連中、本当に燃やしちゃうよ？」

取り敢えずジョウゲン、アマゾン細胞の散布は辞めなさい…：それしたら俺はお前を許

せないから…千翼君に土下座しないとダメだしアマゾン絶対殺すマンには会いたくない…サインは欲しいがな

千冬と一夏、箒は口を揃えて

「「だろうな…」」

哀れオルコットとカッとなって喧嘩した相手とは言え一夏も同情せざるを得なかった…

代表決定戦 前編

さて何とか無事に講師生活1日目を終えた

放課後 夕飯時

「さーて…食堂で夕飯だなあ」

久しぶりだなあ人の料理食べるのは…基本ずつと俺だったからなあ炊事周り担当と思いつつながら食堂に向かう俺の両手を掴んだ奴がいた

「っ!!」

「待てハルト!」

「お願い!チーちゃんの部屋掃除手伝って!!」

「ええ…掃除しなよ千冬…」

「……………」

涙目の束達を前に断る訳にもいかずに掃除をしたせいで食堂で食べれなかった
「はあ……………しゃあない簡単に作るか」

「やった!!」

「俺の分だけな」

「えええええ！いいじゃん!!」

「つせえ作って欲しいなら材料持ってこい」

「そう言うと思ってるってきましたー!」

「わ、私はコレだが……」

東は食材を千冬は缶ビールを出してきた……はあ

「じゃあねえ……少し待ってろ」

「やったー!」「よし!」

……
どうやら俺は炊事周りからは逃げられないようだ……

翌日 昼休み

その前の時間で一夏に篠ノ之製作所から専用機の提供という話になった、授業後、気になりどんなものかと東に聞いてみたらだ

「ふーん……あのコアをねえ」

白騎士のコアを一夏の専用機 白式に使ってるらしい

「そ、どうかなあって」

「良いんじゃないの？ 束が決めた事なら文句ねえさ…けどよ」
「何？」

「一夏にビームエクイッパーは使えんぞ、アイツに状況に合わせた武器作成なんざ使えるか」

「大丈夫、チーちゃんの暮桜と同じ近接特化だし、あの子と同じ機能は搭載してないよ」
「なら大丈夫だな」

一夏は地頭は悪くねえし勝負勘も良いんだが俺みたいに知識や情報を使ってとか考えて戦うタイプじゃない自分の直勘や技術、経験で戦う千冬のような戦士タイプだ

ようは

俺、束は戦極凌馬、一夏、千冬は呉島貴虎である…比べる対象がおかしい気もするが
な

「んで箒ちゃんには？」

「勿論作る予定さ！ 束さんの誕生日プレゼントだよ！」

「そりゃ良いプレゼントだな」

肩を竦めるが束が笑ってんなら良いか

「でねハル君にお願いがあるの」

「お願い？」

「うん、今専用機のないチーちゃんに戦極ドライバ―渡したいんだけど良いかな？」

「良いよ、じゃあ俺はメロンロックシードを用意する…千冬には似合うと思うんだよなあ」

無敵の主任にも負けないだろうさ彼女なら

「いいねえ！」

「だろ？」

と、いつまでも変わらない馬鹿騒ぎをしているのであった

—————

翌日 放課後

常葉ハルトは現在、学園でのアリーナで体を温め終えると シエイプシフターの待機形態の黒ジクウドライバ―を腰に装着した

「一夏には悪いけど、権力とか使えるものは何でも使わないとね…それも力だよ」

コレ幸いとオルコットに喧嘩を売られた俺だが別に気にしていない…するだけ無駄だしな

「さて……シエイプシフターの初運用だな…アナザービルド、キカイ頼むな」

『ああ、シエイプシフターの出力調整は俺達が担当するから任せろ』

『変わりに俺達には変身出来ないがな』

2人がシェイプシフターの核である…この2人がリアルタイムで調整してくれるから俺が変身出来る

「うし…んじゃあ最初は平成一番で」

『クウガ』

アナザークウガウォッチにしてシェイプシフターに装填した、これだけだとアナザークウガになるだけなのだが

〈shape Shifter active〉

そんな電子音が鳴るとアナザーライダーがシェイプシフターを介してISのような機械的な装甲に変化する

「おお！成功だあ！」

『おめでどう、モニターに映像を出すぞ』

アナザービルドが出した画面にはISサイズまで小さくなり、機械的な装甲となっていたアナザークウガがいた…だが真つ白な装甲で細身である

「グローイングじゃねえか！」

クウガ・グローイングフォーム

早い話が不完全形態で消耗状態や戦意がない時になる形態だ…まさかこんな形まで

弱体化するのか！

「失敗か…グローイングじゃ……ん？勝てるな」

『勝てるのかよ』

舐めるなよ、オルコットと俺とじゃ立ってる暴力のステージが違うし自分の力の知識量も超えている何故なら体の一部だからな！

「確か…グローイングのキック3回でグロンギが爆散出来た…つまりオルコットに3回蹴りを叩き込めば勝てる（爆散可能）！」

『脳筋か！』

『つーか今物騒なルビを振ったぞオイ！』

「そう？グローイングって事だから…俺が戦う覚悟を決めたら完成する？」

『違うからな…今はIS風に言うとはルト仕様に調整中なんだ…だから機能に一部ロツクが掛かってる』

「わかった！じゃあ……見ててください！俺の！変身!!」

ノリが良い方が大事だな

『何も理解してねえだろ！悪いが機械的なローディングだから、そんな直ぐには終わらねえよ！』

なーんだつまらん…んじゃ他の形態でも弱体化してんの？

『ああ例えば…』

アナザーカブト↓マスクドフォームの防御力だが鈍足

アナザー電王↓プラットフォームベース

アナザーW↓ジョーカーの面しか使えない

などなど…はあ

「あははは！まじで2人で1人とかじゃなくて半人前の探偵じゃねえかよ検索エンジン」

『テメエ！その呼び方辞めろ！…良いんだよ…俺には最高の相棒がいるからないつも通り半分力を貸してくれよ』

「お前…ツンデレでも呼び方は変えねえよ気持ち悪い」

『ちっ！可愛くねえ奴だなあ！』

「俺達らしいだろ？」

『違いねえ』

取り敢えず教本通り飛んだりしてみるか…えーと…確か角錐を…ややこしい！こうなったら飛んでる感覚を使うぞ！アナザーフォーゼだとロケットだし他のアナザーライダーで飛べそうな奴はいない…となれば…っ！アナザークウガ！そらをとぶ！

『悪い、今は飛べねえんだ』

「はあ！テメエから飛翔能力や巨体を取ったら何が残るんだよ！」

『ん？モーフィンングパワーとライジング？』

「よく覚えたな！…じゃあアナザー剣なら飛べる？」

『ああ…だが中間フォーム系統はシエイプシフターが負荷に耐えられないらしいぞ』

『待て待て、よし一次移行完了だ…他のアナザーになれるぞ』

「了解……よいしょ」

そっか取り敢えず飛行訓練は後だなど、取り敢えずアナザークウガからアナザージオウに変身し直す

〈Z I — O …… CONVERT!〉

その姿はジオウに近い外見となったが頭部部分がアナザーライダーを意識してなのか、バイザー型で何故か口だけ露出しているのだ

「お、武器は慣れ親しんだ双剣だな」

コレが良いんだよ！実に馴染むゼエ！槍にもなるのか！

『そう思ってたな、調整した…ああ…後な未来予知は時間制限付きだが可能だ…五秒ほど』
「マジ!?アナザージオウなら数十秒先まで見れるんだけど！」

『言つたるシエイプシフター自体、無理矢理稼働させてるんだ…能力的な過負荷を考えるとコレでも頑張ってるんだよ！』

『変わりに槍に少し悪戯をさせて貰ったぜ?』

「悪戯あ?」

そう言われて、双剣を見るとそれぞれにウオッチが治まりそうなスロットがあった

「これ……」

『アナザーウオッチを装填して俺達の力を解放出来る様にしたぜ』

「すごいな! さいつこうだな! てんつさいだな!!」

『それ俺の台詞!』

「お前のものは俺のもの」

『俺のだ!』

「新しくなったなら名前つけないとな! 名前! そうだなあ…:アナザージオウの武器ベ-スはジカンギレードとサイキョーギレードだからな…」

難しいな…:良いのが思いつかない…

「チョーシンケンとタンシンケンじゃダメ?」

『無いな』『無いね』

ただ一人アナザードライブだけは賛成のようで

『良いと思うのだけど』

『そりやお前、ハンドル剣やドア銃とか名付けてたらそうだよ』

「だよなあ……うーん……あーアナザージカンツインギレードで」

『それなら良いか』

ということとで命名！アナザージカンツインギレード！

どんな組み合わせでやるのかなあと考えているとセンサーに反応？つかしいなあ貸切で頼んでた筈だけど………ん？

センサーに視線を向けると、水色っぽい髪の毛のメガネをかけた女の子が目をキラキラさせて俺を見ていた………なんつーか何処かで見たような………それと凄い親近感を覚える目だなあ……

取り敢えず彼女に近寄ると、頭部だけ展開を解いて話しかける

「君どうやってここに入ったの？貸切って看板が立ってたと思うけど？」

「え？いや……あの………その………看板は………なかったです………」

「へ？いやいや俺立てたよ!？」

思わず語気を強めてしまったので驚いたのか

「つーごめんなさい!!」

立てたの見落としたか？と思ったが入られた以上、追い返すのでしょうか

「それだったら、ごめんね……悪いけど貸切だから帰「あの！写真良いですか!!」はあ？い

やあのコレ篠ノ之製作所の新作だから写真NG」

「へ……あ……はい……」

うーん……何だろこの罪悪感は………はあ

「遠くからなら良いよ」

「本当ですか!」

「つーか、珍しいねえ全身装甲なんて前時代的とか聞いてたのにさ」

東曰く、全身装甲はダサイと言うのがトレンドらしい……愚かな宇宙で装甲なしとか異常があったら危険でしかないだろうに!と声高にしたい

「そんな事ないです!その……まるで特撮ヒーローみたいでカッコいいです!!」

みたいじゃなくて元は特撮ヒーローなんだよ……まあ怪人になってる悪役だけだな……ん?」

「あ……わーった、そりゃ見覚えあるわ」

「え?」

「いやこつちの事……んじゃ動画はダメだけど写真は撮りな……以上!」

飛び上がったシエイプシフターは多様な飛行ムーブを取る中 ウォッチにいたアナザーデイケイドが興味を持ったように問いかけた

『珍しいな、どんな風の吹き回しだ?』

「ん？簡単な話だよ……特撮好きに悪い奴はいねえ」

『本当か？』

「本当だよ！うっせえなあ！」

まあ理由があるとするなら……似てるからだ

「こうなる前の俺みたいだなあつてな……純粹に仮面ライダーに憧れてた頃の」

俺も同じ立場なら絶対同じ事を言うだろうからなきつと……なら邪険には出来ないよ

『いや、オーマジオウや葛葉紘汰に会った時の、お前も同じような感じだぞ？』

『確かにな』

「おい記憶読むな」

—————

そして試合当日

「なあ箒……何でISの訓練なのに剣道しかなかったんだよ！」

「仕方ないだろう！訓練器の予約が一杯だったのだから！」

「だけど座学とか色々あるだろ！」

「う、うるさい！それよりも勝算はあるのだろうか」

「あ、ある……多分」

話していると

「まったく……緊張してないとは大物かバカか」

「ははは！緊張と思ってるなら大物だね」

「あ、千冬姉「織斑先生だ」……先生」

千冬の出席簿アタックに悶絶する一夏

「すまん、お前の専用機だが最終調整中だ少し待て」

「え、じゃあ……」

「試合順番変更だ、常葉講師」

「へいへーい……いつでも行けるよ」

「すみません」

「いいって……けど」

「ええ織斑と戦える戦意は残しておいてください自分で仕掛けておきながら心が折れての不戦敗など認めないので」

「うわあ……難しい事を言うねえ」

「当然です喧嘩を売ったのなら、自分でケジメを付けるべきですから」

「わーったよ…けど、それで連中が納得するかは別問題だぜ？」

「承知の上です」

そう言われたのでハルトは頭を掻きながら会場に向かうのであった

「あの！常葉さん！カタパルトは此方ですよ！」

「ん？俺の専用機は展開方法が特殊なのさ…だから大丈夫ですよ」

朗らかな笑顔で手を振りながら出ていくハルトを見て

「何かハル兄はいつも通りだな」

「常葉講師だ馬鹿者…はあ…寧ろいつも通り過ぎて怖いかな」

「どうしてですか？」

「アイツは頭のネジが緩い…ひよんな事から何をするか解らん…そういう意味ではハルトは東と同類だ方向性は違うがな」

—————

そのままアリーナに行くと割れんばかりの大歓声と、少しの動揺
ISを展開し飛んでくるオルコットは別の意味に解釈したのか見下すように

「I Sを展開せずに出ると…なるほど戦わずに降参という事ですわね？情けないこと」
「違う、俺の機体は展開方法が特殊なだけだよ」

「なら早くしなさいな、全く…鈍間ですわねこれだから男は…」

オルコットと同じような意見の女性がクスクス笑っているのだがハルトは残念そうな顔のまま

「本当に小せえなあ…男女とか、そんな尺度でしか物を見れねえなら先なんざねえよ…まあ俺も東達に会うまで、こんな広い世界なんて知らなかったなあ…」

アナザーライダーとなり旅をして色んな世界や文化、知識…キャロルや東など色んな人との出会いが彼を成長させた

キツカケは突然だったが今では感謝していたりする絶対連中には口にはしませんが…
…んで、あのバカ達と騒いだ話を家族が聞いたらどんな顔をするか楽しみ……つーか異世界旅して子供出来ましたとか言ったら腰を抜かすだろうが、そして誰にも聞こえない声でポツリと

「本当、父さんと母さんが今の俺見たら何て言うかな？」

息子が暴力的になったかと悲しむか、以外な力で人助けした天晴と誉めてくれるのか……まあどちらにしても家出少年として確定の説教はされるだろうがご愛嬌だろう

会えるなら会いたいな今すぐにでも……何年経っても決して癒えない望郷の念と仲間への感謝

それを知ってか知らずかオルコットはハルトに取って最大の地雷を踏み抜いた！

「っ！貴方のような男がISの歴史を汚しているのですわ！貴方と同じようなお仲間や、そんな貴方を産んだ両親の顔を見たいですわね……どうせ貴方と似たように鈍間で愚図なんでしょうけど」

「……」

その刹那ヘラヘラ笑っていた筈のハルトの瞳から光が消え、口から出た一言が先程まで騒がしかったアリーナの歓声が沈黙させ物理的か比喩かは知らないが気温が下がった。何名かは放たれた殺意に顔面蒼白で震えているが直接向けられたオルコットは警戒心を一段階上げている

――

それは唯の危機感の欠如である。常に狩る側にいたから彼女は忘れていたに過ぎない

今回は自分が狩られる側であると

――

この殺気を直接的に向けられ命のやりとりをした人が見れば理解しただろう

「愚かな小娘だ」

「うわあ……あの子命知らずう！」

「あ……………ああ……」

呆れと笑みを浮かべているのは、この様子に慣れた様子の2人とは対照的に怯える
フィーニスの肩をウオズが触れて一言

「見ておきなさいフィーニス、あれが逆鱗に触れた魔王ですよ」

—————

1人はアリーナで慌てて携帯に連絡を入れた

「束！早く一夏の専用機を完成させろ！！今直ぐに！！」

千冬は過去に部屋の汚さを改善させなかった結果、ハルトを怒らせた事があるので瞬時に理解した、同じ……いやそれ以上にハルトはマジギレしていると だが

『え？別に、あの金髪がハルくんに殺されようが束さん知ったこっちゃないけど？寧ろハル君のお義父さんとお義母さんをバカにされて笑えないよね？あのままIS解除させて落下死させてやろうか？』

束は興味もなく寧ろ嫌悪感剥き出しの態度

「それは私もだ、私人ならオルコットを締め上げている！だが立场上そうはいかないのでな」

『ふーん……チーちゃんも大変だねえ……束さんはどうでも良いよ、あんなつまらないバカ

女共を量産する為にI S作ったんじゃないし…あの子達にも害悪でしかないなら消えて貰おうかなあ…』

そもそもハルト達に会い大分、丸くなったが束の根つこにある人間の好き嫌いの激しさは余り変わってなかったりする。それ以前に近しい人間をバカにされて流せるほど束も大人ではなかったが、彼女を諭すのは慣れた

「クロエを人殺しの子にさせる気か？」

千冬の言葉に露骨に嫌な顔をし

『あくクーちゃんの為なら……しようがないなあ直ぐ終わらせるよ…面倒くさいなあ…何で束さんがあんな奴の為に…』

「頼む、出来る限り急げ」

『貸しーだよ、チーちゃんも束さんの計画に手伝ってね』

「仕方ない…了解した」

—————

「……………」

『ジオウ』

〈Z I — O C O N V E R T ! 〉

シエイプシフターにアナザージオウウオツチを装填して姿をアナザージオウ（ver I S）に変身するとアナザージカンツインギレードの鋒を向けるのみ

そんな中、試合開始のサイレンが鳴り響く

「警告しますわ！今こうさつ…かはっ！」

「……………」

オルコツトは二の句を告げる事は出来なかった、何故なら開始と同時に瞬間加速したハルトが問答無用でボディに拳を数発叩き込んだ後、疼くまり無防備の頭部を確認すると慣性を見逃す機能、PICを使い体を捻らせるその遠心力を加えて振り上げた足を振り下ろした、踵落としはオルコツトの後頭部を的確に捉え地面まで叩き落とした。その際発動した絶対防御は急所を守る為にエネルギーがガリガリ削れた訳である

「ふう……………」

「っ！卑怯者！！」

決闘の筈だ！と糾弾するが、その声は途中で遮られた

「何それ？ 呑気に口上垂れてんじやねえよ始まってんだぜ？ 相手が待つと思ってるの？」

「なっ！ 決闘の作法も心得ない蛮人が！」

「決闘（チャンバラごっこ）なら他所でやれよ……んで何だっけ？ I Sの歴史を汚した？ それも束の夢を自己都合で兵器転用させてるテムエ等だろ？ あの兎さんはテムエ等みたいな思想の女が蔓延ってるのに辟易してんだの……何処までも純粹に宇宙に行きたいんだ……その彼女の夢を……いや……その前に俺の仲間や家族まで笑ったな……」

ハイライトは消えた目のまま双剣を向けるその純粹な感情はアナザーウォッチにも伝播したようで

『ハルト……お前……』

『あーあー俺達ア知らねーヨ、つか許す気ねえ……だろアナザーデイケイド？』

『ああ……小娘、貴様は我等が王を怒らせた……だが、こんなに沸点の低い奴だったかハルト

は？……む？』

『どうしたよ？』

『少し調べる事があるアナザーW付き合え』

『おう』

アナザーデイケイドは理解していた彼の逆鱗が何なのか

自分達が誘拐紛いな事をした時でさえヘラヘラ笑いながら流していた

そしてオルコットは理解していなかった誰を怒らせたのかを

「っ！やはり蛮族のようですわね不愉快ですわ！そのISも泣いてますわよ!!」

オーマジオウの時は命を顧みず自分達の為に迷わず体を張って戦った最高の相棒が初めて

「何勘違いしてんだ？これは決闘じゃねえよ俺ア最初っからテメエを罫り殺しに来たんだからヨオ！」

本気の殺意を向けているのだから。

代表決定戦 後編

前回のあらすじ ハルト激昂！

「不意打ち決めて油断しないでくださいまし！行きなさい！ブルーティアーズ!!」

オルコットは反撃だと言わんばかりに機体に格納させた無線誘導武装 ブルーティアーズを四基発射させる、そのオールレンジ攻撃は某機動戦士の世界なら脅威になるが今回は相手が悪過ぎた

「無線誘導兵器には面攻撃…基本だなオタクなめんなよ対策なんざ腐る程考える時間があるわ」

淡々とした口調でハルトはアナザージカンツインギレードの長剣部分にアナザーウオッチを装填しトリガーを引いた

『W…フアング!』

「ふっ!」

そして長剣についているスイッチを押して放たれた牙型の斬撃はブルーティアーズを撃ち落とすとオルコットを襲ったのであった

「きゃあああ！…そ、そんなブルーティアーズが！」

オルコットは驚いているがハルトは完全に無視してアナザージカンツインギレードをマジマジと見ている

「想定以上の性能…標準装備決定だな」

良い性能の武器であると高評価、ウオッチ内のアナザービルドとアナザーキカイ、アナザーゼロワンはハイタッチをしているとハルトは実験の続きと言わんばかりに淡々とした口調で

「師匠…使わせてもらいます」

今度は短剣部分に別のアナザーウオッチを装填する

『鎧武！アナザースパークキング！』

「せいやあああ！」

最大限にエネルギーを貯めたオレンジの光弾がオルコットに雨霰のように降り注ぐ、何とか回避したオルコットは

「中々やりますわね…賞賛に値しますわよ」

「いらん…それより本気で来いつまらんぞ」

「っ！」

そう言うなりアナザージカンツインギレードを連結、アナザージオウ時の槍型に変化

させた

『ハルト！連結状態だとアナザーウオッチの力を同時発動可能だ！』

アナザービルドの言葉を聞くなり、了解と短く答えたハルトはアナザーウオッチを装填するが彼女も代表候補生である厳しい選抜から専用機持ちとなったのだ同じ手を安とさせるわけではない

「させませんわ!!」

レーザライフルで狙撃するがハルトはまるで分かっていたかのように体を少し傾けただけであつた

「っ！小癩な！」

連射するが同じように避けられるだけである

「な、何故私の射線がわかるのですか…」

「答える必要はない」

答えを言えばシエイプシフター（アナザージオウ）の能力、五秒先の極近未来視である本家より劣化しているがそれを除いても当たる訳がない殺気や銃口の位置で丸わかり、そう言う意味で言うなら銃は剣のようにフェイントや掛け合いがない分読み易い

それ以前に命のやりとりに対する経験が違ふこの年の子に言うのは酷だろうし戦闘経験が浅い癖に偉そうに言うなと思うだろうが少なくないアドバンテージだがそれだけでは埋まらない絶対的な差が存在する

「終わり」

『オーズ！ゼロワン！TWIN！ANOTHER FINISH TIME！』

痛めつけるの喧嘩と命をかけた殺し合いという前提として戦うには両者の暴力のステージが違いすぎるだろう

『ミキシング！アナザースラッシュ！』

「おらあー！」

紫色のエネルギー波がオルコットを撃ち落とし墜落させると同時に長剣側に装填したアナザーゼロワンウオッチから解き放たれた黒い濁流 それはシェイプシフターの周りを飛び回っていた

「くっ……！な……何なのですのソレはあ!!」

オルコツトは、その姿に本能レベルで恐怖を覚えた

アナザーオーマジオウが人類にとって未来の災禍なら此方は人類史に伝わる最古の
災厄

時には空を覆い隠さんばかりに飛翔し道すがらの物は全て喰らい尽くす姿は聖書にも記された暴食の悪魔

その名は蝗害 齋すはバツタ…その正体は飛電メタル製のクラスタ―セル

あのレイダー怪人の装甲を食べ尽くすだけでなくバルカンアサルトウルフや作中当時最強だったサウザー、そして圧倒的初見殺しで有名な仮面ライダーエデンに有効打を与えた暴走フォーム 仮面ライダーゼロワン・メタルクラスタホッパーの力をアナザーゼロワン経由で再現させた

「ひっ…う、動けない…なっ！」

観客はその光景を理解してに恐怖を覚えているが知った事ではないし、当事者でボロボロになったオルコットは逃げようとするがアナザーオーズに内包してる。プロティラの氷結能力を使って動きを拘束させている、その濁流の行く末理解して顔面蒼白になつても知った事ではない

「や、辞めてくださいまし！」

「何言ってるの？お前は俺の敵だろ？」

ならば慈悲などない、敵は潰すだけだ自分と周りの安寧の為に消え失せろ悪魔達に与える命令はただ一つ 食い荒らせ

シエイプシフターから送信された指示に待ってました！と言わんばかりにクラスターセルの大量は迷う事なくオルコットに襲い掛かる迎撃でレーザーライフルで射撃をするが焼石に水である少し減るだけで総体には何の影響もなく

「ぎゃあああああああ!!!」

クラスターセルはオルコットの群がりISの装甲を削り食べるというホラー映画のような状況であるが絶対防御でオルコットは守られているのだがこのバツタの嵐は当人のメンタルまでは守れずにいる、現に一夏と箒は呆然とし千冬は頭を抱え束は良くやった!と拍手喝采を送っている

だが不思議な事にオルコットの機体は装甲やブルーティアーズ(ビット)に関連する機能以外 つまりライフルや隠し玉は残したまま放置されたのであった…まあオルコットの心はもう既に折れているのだが、それで許すハルトではない

この女には絶望を味合わせてやる

『クウガ…タイタン……CONVERT!』

アナザークウガとなりアナザージカンツインギレードを双剣にするとゆつくり一歩近づき始めるのであった飛行能力を失いクラスターセルにより大きなトラウマを植え付けられたオルコットは涙目で

「い、いやああああ！近寄らないで!!」

叫びながらレーザーライフルを乱射するがアナザークウガ・タイタンフォームは持ち前の頑丈さから体が仰反る事はあってもその歩みを止める事はない

「この化け物おー！」

その通りであるが化け物を目覚めさせたのは誰だと言いたい、隠し玉のミサイル型のブルーティアーズを発射した回避する訳ないアナザークウガに命中、爆炎を上げているを見て一安心

「お…惜しかったですわね！油断大敵ですわよ！」

と気丈に振る舞うがクラスターセルのトラウマは拭えないのか両足が震えている

オルコットは勝鬨を上げるが早すぎた炎の中から変わらぬ歩行音が聴こえている嘘だろと思いつながらハイパーセンサーの感度を上げると

「本当、惜しかったな」

煤けているもののほぼ無傷のアナザークウガが歩いてきたからである、ただダメージから装甲が少し剥がれアナザーライダー本来の容姿が見えたのも相まって軽くホラーである

—————

それをバットショットを介して映像で視聴していたフィーニスはこう言ったという

「信じます怒った魔王様は未来から来た殺人マシンです、あの映画と違うのはシユールツネツガーが演じてない事だけです」

「フィーニスちゃんそれ本当…魔王ちゃんがキレたら收拾つかないのは若くても同じなんだねえ」

「笑えん冗談だな……どう止めるウオズ？」

「まあアレを見れば思いますか問題ありませんよこの本によれば………おや？」

—————

そして最後の一步を終え、間合いを詰め終わったアナザークウガは問いかける
「どうしたあ今ので終わりかあ？」

抵抗手段全てが有効打足り得なかった事で彼女の心は完全に折れ

「こ、降参しますわ!!」

〈試合終了！勝者 常葉ハルト！〉

そうアナウンスが鳴るがハルトは無視してアナザージカンツイングレードを構えた
「ち、ちよつと！試合は終わりましたわ！私の負けですわよ!!」

【と、常葉先生終わりです！武器を下ろして下さい！】

オルコットと山田先生がアナウンスで終わりと伝えたがハルトは

「立てよ決闘だろ？なら倒れるまでやろうぜ」

全く聞こえてないのか、クククと笑いながら近づくとハルトの背には某脱獄蛇ライダーの影が映っていたのが特撮好きな4組代表には見えていた

「ひ、ひいいいい!!」

オルコットは背中を向けて逃げようとしたのでアナザークウガは、巨体を支える足で踏みつける

「どうしたよ？強いんだろお前エ？」

そのまま足を退けると返す刃でガラ空きボディにアナザージカンツインギレードを鈍器のように振り下ろし叩きつけた

「どうした？ほらほら強いんだろ？ほら、ご自慢のISで反撃してみろよ!!」

そのまま起き上がらせるとアナザージカンツインギレードを横に振り抜いてオルコットを飛ばした…悲しいかな手加減してるのでまだエネルギーが残っている

「あ……ああ……」

「これで終わりだ……あん？」

ガタガタ震えるオルコットは全力で後悔しているがハルトは知ったことではないと

言わんばかりにダメ押しで剣を振り下ろした、その時

ガキイーン！と甲高い音でハルトの剣を止めた白い影があった

「ああ？」

「止せよハル兄!! 試合は終わったろ!! なのにオルコットに攻撃する理由はないだろ！」

一次移行を完了させた白式を纏う一夏は凜とした顔でアナザークウガを見る

「邪魔すんなよ、そいつは敵だ…俺の大切を脅かす敵は排除する！」

「敵って…敵だからって痛めつけて良い理由にはならねえだろ！それはハル兄が憧れてるヒーロー達もやってるのかよ！」

「っ!!」

その言葉でハルトは我に帰る、はあ…と溜息を吐くと剣を収納して

「はあ…興醒めた一夏に諭されるとか俺もまだまだだな…メンタル訓練も視野に入れないと」

いつものようにヘラヘラ笑うハルトの瞳にも光が戻っている、一夏もよく知る顔であった

「ハル兄？」

「そうだよな…悪かったな、お前達もこんな使われ方されたくねえよな？」

ハルトはアナザーウオッチに手を触れ、中にいる相棒に謝罪するが

『いや別に気にしてないが?』

『そーそー!もつとやれよハルト!』

その言葉にハルトは呆れと苦笑を浮かべながら

「そんなんだからアナザーなんだよ…つたくオルコット」

「は、はい!!」

ガタガタ震えてる彼女にハルトは冷たく言い放つ

「過剰に攻撃したのは謝罪する、悪かった…だが引鉄はお前の暴言だ次はない」

というハルトはシェイプシフターを解除して束や千冬のいる部屋に戻るのであった

帰った後

「ハルト、話がある」

「はい」

怒気を帯びている千冬を見て迷わず正座したハルトに千冬と束、山田先生は

「オルコットの発言にも問題はあるが、やり過ぎだ馬鹿者!!かなり怖かったぞ!!」

「うんうん！東さんも思わずガクブルだよ！魔王じゃん！」

「そ、そうですね！常葉先生やり過ぎです！」

「ええ…いやまあやり過ぎたのは自覚はあるけど…良いんじゃない？オルコットみたいな思想の奴が減るなら学園的にも万々歳じゃん？」

「だからってやり過ぎですよ！」

「言葉で通じる相手なら言葉で伝えますよ…けど伝わらない相手なら力で捻じ伏せるしかないでしょ？邪魔者は排除しないと…」

「ハルト？」

「ごめん、今日少し可笑しいな席を外すよ……」

そう言って外に出たハルトの持つアナザーウォッチが新しいアナザライダーのマークを浮かび上がらせた

ハルトの精神世界の中で

まるで歪に笑う悪魔でありアナザーWのように無理やり繋ぎ合わせたような顔のアナザーライダーが

『フハハハハハ！』

黒いモヤに隠れながら高笑いしている奴の肩を叩く者がいた

『おい』

『何だよ今良い所なの……に……』

モヤ越しにだがアナザーライダー全員が取り囲んでいたのである

『貴様か、ハルトを攻撃的にさせた奴は』

『そうだぜ！俺たちの力で交戦的にさせたのよ！凄くね!!凄くね!!』

『確かに……だが解せん何故ハルトに精神汚染が効いたのだ？我等の影響は全く受け付けないのに』

ハルトはアナザーライダー達からの精神汚染を全く受け付けない特異体質の持ち主故に彼の精神に影響を与えた、このアナザーライダーは優秀な能力の持ち主である

『それは簡単！俺たちはハルトの精神汚染をしてないぜ、キレたハルトの心の隙をつけて攻撃性を助長させただけよ悪魔の囁きって奴う？』

『ああ…デルタみたいなものか』

アナザーファイズがそう言うときアナザライダーは正解と指を刺す。仮面ライダーデルタは変身に不都合な場合、変身者を交戦的な気質に変えるのだ今のハルトのよう

『そう！ハルトの奴がキレた時に俺たちの力で煽った訳よ！そしたら見事なバーサーカーに変身よ！』

『やるな貴様の名は？』

『俺たち？俺たちはアナザライバイス!!よろしくう！先輩!!』

『だそうだハルト』

『へ？』

「へえ増えてたんだあ…：…しかも凄い奴だねえ…」

そこには青筋を額に浮かべているハルトが仁王立ちしていた

『は、ハルトさん！イヤだなあ！到着しての挨拶じゃないですかあ！』

「ほお…俺にも理由ありとは言えやりすぎじゃボゲエー！」

『ぎゃん!!』

ハルトは仕返しと言わんばかりにドロップキックを叩き込むのであった

オルコットと一夏？そりや原作通りですよ…ただ

試合前にオルコットが何故助けてくれたのですか？と問うと一夏は迷わずに兄貴分の暴力をあれ以上見たくなかったと少し乖離していたとき

転校生はフラグの香り

転校生は新たなフラグ

そして代表戦は無事、一夏となった……んでオルコットはその時に俺含めてクラスメイ
トに謝罪したのであったが、それ以降は俺を見て震えている

『いや、そりや震えるぞ?』

『ああ……パラドを消す時と同じ雰囲気だったぞ』

アナザーWとアナザーエグゼイドにツッコミされて解せないと言う顔をしていると
アナザーウオッチから騒がしい声が聞こえてくる

「そつか? 蘇生させるんなら結果生きてるから大丈夫じゃね?」

『相棒?』

「何か変な事言った?」

『なあハルト! 次の戦いは俺っちを使ってくれよ!!』

アナザーリバイス、前回俺を交戦的にさせた張本人で聞けば心の隙間について俺の戦

意を上げていたとしている

まあ俺は来るもの拒まずの精神なので向かい入れるのはいつものことであるが流石に五月蠅いと顔を顰めて返す

「静かにしてたらなあ」

『言つたな！じゃあ俺っち黙るよ！だから使っておくれよ!!』

「おう、後で能力教えてな」

短く返すと屋上で少し黄昏る、担当授業まで時間あるので有意義に過ごしている……つもりだが目線を感じた

『ハルト……見張られてるぞ』

「分かってるよ、そりゃあんだだけ派手に暴れたからな」

誰か知らないがアナザーシノビの監視網に引つかかる相手とならば要警戒であるが対策済とハルトは目線を扉の方を向き一言

「授業をサボるのは感心しないなあ」

ハルトはカラカラ笑いながら言う、物陰から見覚えのある水色の髪をした女性が出てきた

「あら？ 気配は消したのに気づいたんだ？」

「気配は消せても人がそこにいる痕跡は消せねえだろう？」

『デンデン』

ハルトはデンデンセンサーを起動させて見せつけると女性は何か理解したようで

「成る程、それで探知された訳か」

「正解、サーモグラフィーだ」

正確には色々な電磁波やらを観測したように見せかけているのだ

「誰と何年間一緒にいたと思う？ その辺の対策もバツチリな訳」

「成る程ね…じゃあ隠れても意味ないか」

そして改めてハルトを見た女性は扇子片手に挨拶する

「初めまして私は更織楯無、IS学園生徒会長です以後お見知り置きを常葉先生」

「どうも、んで授業サボって盗み見してたのは？」

「それは…先生の事が気になって…」

曖昧な返事の意味に関しては理解した

「俺じゃなくて俺の専用機だろ？」

「あらくバレてるか…気になるのはあの機体シェイプシフターに関してね、あの機体は東博士お手製なのよね？」

どうしたものかとハルトは考える、確かにISベースは東であるが機体の核となるのはアナザライダーである、俺はその変換器を作成したにすぎないのだが親切に話してやる義理はないな

「まあな東の技術をベースに俺のアレンジを加えた所だな」

「へえ、あの仮面の戦士がアレンジかしら？」

「そうとしか言えないかな、けどそれ以上は企業秘密だし君に話す義理もないよ授業だから失礼するぜ」

話を切り上げたハルトは教室に向かう、刹那肩の位置からこっそりと

「彼女の周りを嗅ぎつけるなら覚悟しな」

「っ！」

手をヒラヒラ振りながら屋上から出ると残された彼女は冷や汗をかいているとメガネをかけた女性が近づいてきた

「お嬢様、常葉先生とお話しされてみて如何でしたか？」

「ええ：そうね簡単に言うのと鎖で繋がれてる狂犬かしら普段は何もしないけど自分や東博士の敵と認識すれば鎖引きちぎって問答無用って感じね、実際クラス代表決定戦のエキシビジョンでもそうだったし初対面の私にも警戒心全開だったわね振った話題を間違えたと言えばそれまでだけど」

「かなりの脅威ですか？」

「と言うより下手に刺激しない方が良いかもね：多分だけど利用しようとしたら逆に利用されるか：最悪利用されるだけされてこっちが潰される：：まあ触らぬ神に祟りなしね一先ず静観しましょうか」

「かしこまりました」

—————

ハルトが教室に向かう途中の事

「よ、千冬これから授業かい」

「ああそうだがハルトもか？」

「そ、なら途中まで一緒だな」

仕事の話をしながら歩いてると1組の教室前に誰か立っているツイントールで小柄の女の子だ

「はあ…」

「どしたの？…あ」

千冬は溜息を吐くと出席簿で一撃叩きこむとその子は怒りに満ちた目で睨むが千冬を見て顔を青くしていた

「ち、千冬さん…」

「織斑先生だ馬鹿者」

「やっぱり〜久しぶり鈴ちゃん」

「ハルトさんまで！お久しぶりです！」

「うん、取り敢えず授業だから一夏と話したいなら昼休みねでない」と千冬の出席簿でやられるよ」

「は、はい!!」

とピューッと走り去っていた彼女を見送るのであった

—————

昼休み

「遅いわよ一夏！」

「いやそこ立つなよ…まったく席取っててくれ頼んどくから」

「分かったわよ」

そして一夏、箒、セシリアの3人は注文を取り席に着くと

「久しぶりね一夏、風邪とかひきなさいよ」

「いや引いても中国から来れるか！」

「一つ飛びよ！…それと久しぶりね箒」

「ああ久しぶりだな鈴」

再会を祝っているが背後のオーラが危ない…原作と違い一夏と一緒にいた為だが箒も鈴や弾、蘭と面識を持っているのである良き友人でもある以前に恋敵でもある

「その様子だと一夏を落としてないみたいね」

「ああ…考えてもみろ一夏の唐変木が数年で治ると思うか？」

「無理ね」

「そうだろう」

「何か言ったか？」

「いや別に」

「ちよつと！私を忘れないでくださいまし！」

「あーと…英国の候補生よねアナタ」

「そうですわ！」

「そしてハルトさんをマジギレさせた相手でもある」

箒の言葉にあり得ないものを見るような目でセシリアを見るなり

「あ…アンタ、あのハルトさんを怒らせるって何やったのよ？」

「え、いやその…」

言い淀むセシリアに鈴は続け様に

「あの人基本的に怒らないのよ面倒身は良いし怒る云々の前に基本、興味ない人間には無関心だから他人にマジギレなんて見たことないって」

「そ、そうなのですか？」

セシリアの脳裏には淡々とだが一方的な力を振り翳す彼しか浮かばないが

「セシリアはトラウマしかないだろうがハルトさんが面倒身良いのは本当だぞ…でなければあの暴走列車の姉さんと起業したりして年単位で一緒に入れるものか」

「いやそれ束さん聞いたら泣くわよ箒」

「事実だ…というより姉さんの手綱を握れてるハルトさんには尊敬しかない流石は未来の義兄さんだ」

養子とは言え娘までいるしなどは言葉に出さないがその言葉に

「ちよつと待て箒、それは聞き逃せないな」

「何だと一夏？」

「ハル兄は千冬姉と一緒にいるべきだろ？」

「ほお……」

「箒も知ってるだろハル兄の家事スキル」

「勿論だ私も鈴も炊事面ではお世話になったからな」

「そうね……というかあの人が作れない料理ないんじゃないの？手際もだけどやりくり上手いし……ああ〜」

「ん？ああ……そう言う事か」

「やっぱ相変わらずなのね千冬さん」

「ああ……ハル兄でないと素直に言うこと聞かない節まである……」

「まあハルトさんなら何とかするでしょうね」

「そうだと良いがな……」

此方は此方で悩ましい所でもあった

—————

そして鈴が転校してから数日経った頃、休みを利用して仲間を集めたのであった
拠点にしてる束のラボを一部、酒場風に改築し直しそこで酒を飲みながら会話して
いる

「ネオタイムジャツカーの気配すらねえか」

ハルトは元々、一夏誘拐事件の犯人にして自らの敵である亡国企業と黒幕であるネオタイムジャツカーから一夏や仲間を守るために講師として潜入している…セシリアの所為で色々バレそうではあるが

「ええですが我が魔王の関係者と知りレックとスズネは襲い掛かりました…メナス死亡も相まり慎重になったと見るべきでしょうね…向こうも流石に畑から兵士が取れる訳ではないでしょうから」

ウオズの言葉に納得した一同にカゲンはハルトに尋ねた

「ハルト様…質問よろしいでしょうか？」

「何だ？」

「ネオタイムジャツカーが一夏殿や奥方様をターゲットから外した可能性はありませんか？他にも狙おうと思えば狙える者もいます」

「キャロルとか？」

「はい…ナツキ殿を置いてますが彼奴を信用出来ますか？ネオタイムジャツカーの回し者の可能性も…」

「ねえな、あつてもバーストライバーに仕掛けた玩具で終わるし…キャロルがそんな

うっかりをすると思えない…それにナツキの目的はあの世界を俺とネオタイムジャッカーの戦場にさせない事だ、その点に関しては信用できる死に戻りなんて好き好んでやりたくないだろうし」

仮に裏切ろうものなら戦場になるのは目に見えてるだろうしなと補填して酒を煽るハルトにフィーニスは恐る恐る提案する

「あの…でしたら他の世界の転移も考えませんか？僕達が現状打てる手は打ってますしIS学園の警備体制を考えれば連中は仕掛けないんじゃない」

「私もフィーニスに賛成です亡国企業は現地勢力で対応可能でしょうし、ネオタイムジャッカー幹部陣の動きは読めない以上転移するのも手です」

と思いきいの酒の席故に色々な意見が飛び交う、確かにIS学園のセキュリティは世界屈指だ外部の人が入れるのは学園祭というようなイベント事、それも選ばれた人だけである

確かにフィーニスやウオズの言い分も分かるが

「ジョウゲンはどう見る？」

「暫く静観で良いかなあ〜少なくとも夏休みまでは見ても良いんじゃない？」

転移するべしという意見が多い中、ジョウゲンは夏休みまで待つか…一理あるな

「ジョウゲンの意見を支持する夏休みまでは今の状況を維持して夏休み間は転移する…

治ってケロツとした顔のハルトは学年別の代表戦のトーナメント表を見ると

一夏と鈴が対戦するとな

「おー……………ん？」

そのリストにあつた名前を見てハルトは首を傾げた

4組……………更織簪!?

「あれえ？専用機出来てねえんじゃ…」

友人から貸してもらつた話だと専用機が一夏の専用機開発によつて凍結して確執云々とあつたが

「何故？」

『そりや考えてみるよ、お前が束と起業したからだろ』

「……………あ」

一夏の専用機 白式はこの世界だと束が手がけた機体で本来の製作元である倉持技研が関与してないのだ

「つまり……………俺が余計な事した結果歴史改変しちゃつた？」

『そうだな』

「そつか……………良いんじゃね？」

『そうとは言えないよなあ…』

何で？と首を傾げるとアナザーWが答えた

『いや専用機出来てないお陰で一夏と出会い姉と仲直り出来たんだろ？ならキツカケを無くしたようなもんじゃねえか』

「……………そ」

淡泊に答えたハルトは興味なさそうに答えると食堂でスイーツとコーヒーを頼み一服する

「このフレンチトースト…美味しい…ふむシナモンとバニラエッセンスを少し入れてるのか…隠し味なんだろうが」

俺にはお見通しだぜ！とハルトはドヤ顔するがアナザーライダー達から総ツツコミである

『何呑気にスイーツの批評してんだ！』

「だって姉妹喧嘩とか勝手にやってろよ、そもそも姉が妹に言つて良い言葉じゃねえだろ『無能であれ』なんて」

ハルトからすれば家庭環境での姉心だとは思うが配慮が足りない

「兄姉は下にいる者を守る為にいる…んで下は上の背中を見て学ぶもの…突き放すのは筋違いって訳だ」

兄姉が成功すれば見習って同じ道を進むのも良いし、失敗したら別の道を模索する……だから下の子は要領良く見えるだろう

「少なくとも俺の妹は間違えなかった……まあ彼氏を見る目は絶望的になかったがな」
何故あんな正義感しかないような男を選んだのか理解に苦しむと苦い顔をする

『ギャハハハハハ！』

「本当、笑いたきや笑え」

『あゝ悪い悪い……んで今のお前は良い兄貴か？』

決まってるだろう？

「さあ知らね」

フレンチトーストを平らげコーヒーを飲み終わるとハルトは退屈そうに空を見上げるのであった

—————

そして試合当日、臨時講師故にやる事のない俺は適当に校内をふらついていた

「いやあ平和だねえ〜」

だがハルトは知っている試合途中に無人機が襲い掛かり会場がパニックになる事を……だが

「無人機って束製だよな……ん〜」

この世界の篠ノ之束がやるとは考えられない試しに自立稼働の無人機作れる？と聞いた事があったがその時の答えは出来るとの事なのでやろうと思えば出来るだろうが

「あの束が箒や一夏を傷つける為に無人機派遣するかね？」

答えは否である、思えない：てか原作軸の束よりだいたい性格が丸いのだ鈴とも面識はある為そんな真似しないだろう

「ま、これも改変結果なら良いさ鈴ちゃんが一夏に思いを告げられるならお兄さんは暖かい目で見守りましょうか」

先 頑張り一夏と思いながらハルトは今のうちに飯済ませるか食堂に行こうとした矢

赤い光が一夏達が試合しているアリーナに降り注いだ

「はあ!？」

それを見たハルトは呆れたようにツツコミを入れたのであった

無人機事件

前回のあらすじ 無人機イベ発生

「はあ!?!」

慌てたハルトは携帯で連絡を取る

「千冬!」

『ハルトか? 緊急事態発生だ! 何処にいる!』

「食堂近く、アリーナの状態は?」

『所属不明機の攻撃を受けた、被害者はいないがアリーナの隔壁が閉じられ避難誘導が出来ない! 束が解除しているが少し時間がかかりそうだ』

「一夏達は?」

『避難までの時間稼ぎをしてるがいつまで持つか…』

「了解、直ぐに移動する…何ならウオズ達も呼んで良い?」

『構わない非常事態で贅沢言っただれん』

「OK……じゃあお前等、先に行って一夏の援護してこい!」

『STAG』『SPIDER』『BAT』

メモリガジェットを起動させ現場に向かわせた

「追加だ」

そして近くに置かれている黒い自販機にセルメダルを投入しボタンを指定の順番で押すと

『タカ缶』

壊れたのかと思うくらいに大量の赤い缶が出てきた一つのプルタブを開けると缶はタカカンドロイドに変形し連動するように他のタカカンドロイドも変形すると

「アリーナの敵を攻撃しろ」

指示を出すなりタカカンドロイドは群れを成してアリーナに向かうのであった

「うし、俺も急ぐか」

俺もサクラハリケーンをバイクモードにし

現場に急行しようとしたが思わぬ輩に足止めされる

「行かせませんよ」

その姿はネオタイムジャッカーの軍服を纏う中性の人物であるが

「は？…う…嘘でしょ…」

その顔はハルトにも予想外だった…何故なら

「久しぶりですね……魔王」

そいつは死んだ筈のメナスであつたからだ

—————

別場所ではウオズ達が現場に急行中に驚いていた

「ええええええええ！め、メナス!!」

逢魔降臨歴から立体映像で映し出されている光景にフィーニスは走りながら驚くと言う器用な事をしていたがウオズは怪訝な顔をする

「ジヨウゲンしくじりましたか？」

「まさか！トドメは刺したよ！眉間も打ち抜いたさ！」

「なら何故生きてる？」

「そんなの行けばわかるよ！ウオズちゃん早く!!」

「行きますよ！」

ウオズ達は事態を確認する為にマフラーワープするのあった

—————

死人を眼前にしたハルトは冷静に対応する

「あれえ？ジヨウゲンにやられたって聞いたんだけど…誤報だったか？」

「ええ確かに私は彼にやられましたよ」

口調は同じだが違和感がある淡々として感情が籠っていない以前感じた俺への憎悪

など一切感じないのだ

「死者蘇生とかマジか…」

そんな事出来る選択肢も少ない、オルフェノクにでもなったか仮面ライダーゴースト系列の力で蘇生したか…はたまた別の力での蘇生か

「そうです、貴方に復讐する為と…私の新しい力を試す為にね」

「生憎だけど試される程今こっちも暇じゃ…てこのやり取りどつかで…っ！」

メナスが取り出したウオツチを見てハルトは驚いた

「そのウオツチは！」

人が手を出してはならない禁忌の力、まず真つ当な人間なら考えない 最強の生物兵器

メナスがネオアマゾンアルファになれたのだから可能性はあったが、そこまでするかネオタイムジャッカーと驚愕する一方淡々とした顔でメナスはウオツチを起動した

『アマゾン・シグマ』

同時にメナスの腰にアマゾンズドライバーが装着され右側のグリップをメナスは回すとドライバーの目が紫に怪しく光り

『S・I・G・M・A』

「アマゾン」

同時に爆炎が巻き起こりハルトを焼き尽くそうとするが

「変身！」

『仮面ライダーザモナス！』

ザモナスの爆炎が相殺する

「我が魔王ご無事で！」

「ナイスタイミング！」

「アレは」

「メナスだよ甦りやがったシグマ型とか最悪」

仮面ライダー アマゾンシグマ

死者を生物兵器にした最悪のライダーである

本編でもアマゾンアルファ、オメガ、モグラアマゾン、駆除班と作中キャラ総動員でやつと倒した化け物中の化け物。そして2期の悲劇を生み出してしまった存在でもある。

「現実にはアレは存在しなきゃいけないんだよ」

ハルトはアマゾンシグマを睨みつけるライダーとしては好きだが、あんなの人のやる事ではない…因みにハルトはエターナルやNEVERが大好きである、やはり彼等に人間味がある空に他ならないだろう

「それを言いますか？魔王…貴方こそ存在してはいけないだろうに」

「死人も冗談を言うとは…いや生前の自我ですかね？」

「魔王ちゃん、此処は俺に任せて早く先に行つて」

「馬鹿！そんなあからさまな死亡フラグ立てた奴を置いてけるか！」

「いやいやアマゾンズライダーなら俺のが適任でしょ？それにシグマウオッチも回収しておきたいかなあ〜持つてないし」

「けど…」

「心配なら俺も残るそれで良いか？」

「先輩達が残るなら僕も！元同僚の葬送させてください！」

「2人とも分かった任せた！けど死ぬ事は許されなからな！ウオズ！」

「はっ！」

2人は転移するとカゲンもゾンジスに変身、フィーニスもアナザー1号になろうとしたが

「待て、お前の巨体だと学園に被害が及ぶ」

「そ、フィーニスちゃんはそこで先輩の活躍ちゃんと見ててよ」

「は、はい！」

「不愉快ですね…ふむ…貴方達なら12手で詰めますよ」

「その予想は外れる行くよカゲンちゃん！」

「おう！」

アマゾンシグマvsゾンジス、ザモナス

そしてハルトとウオズはアリーナ付近に到着する、まだアリーナには避難し遅れた生徒がいるが果たしてアマゾンシグマのいる外に解放して良いものか悩む

「ネオタイムジャツカーめ…こんなタイミングで仕掛けてくるなんて！」

「ええ…残りの面々は何処に…」

「くそっ！人手がやっぱり足りない！」

こんな時、戦力的に動かせる人員の少なさに頭を抱えていると

『そんな時は俺たちの出番だぜ！相棒！』

「アナザーリバイス？」

このタイミングでどうしたよ？確かに使う約束はしたが今話しかけてくるなよ

『実は俺たちになればお得な事が！』

「セールスは間に合ってるから早よ本題！」

『んもーせっかちなあゝ俺たちを使えば分離して2人で戦えるぜ！』

「何？」

『要する俺たちが独立して動ける訳よ！どう！お得でしょ！』

「分かった…戦わせるって約束もあるしな信じるぞ東がドアを解除したら生徒を安全な

場所まで護衛しろ」

『OK！契約成立！読者の皆も#初陣バイス！で宜しくう！』

「お前…他の連中より自我濃くね？」

ハルトはまだリバイスを視聴していないが仮面ライダーリバイスはリバイとバイスの1人で2人の仮面ライダー そのアナザーとなれば強烈な自我を有してても問題はない

「我が魔王」

「ああ何とかなりそうだ、ウオズ使え」

ハルトはそう言うのアナザーウィザードの接続経由で取り出したアイテムをウオズに渡す

「これは…シエイプシフターですか？」

「その予備機というか2号機だな現状アナザーライダーに変身するなら、コレが必要だからな使ってくれ」

「ですが私専用の調整は？」

『問題ねえよ、その辺完了してるぜ！』

『ハルトの念の為が効いたな！』

「我が魔王…私の為には？」

「ま、まあ普段から世話になつてゐるからな…感謝の印だ…やっぱり俺の変身を祝つてくれないと味気ないからな」

「感謝します…この場でより一層の忠節をここに」

「あんがと…さあ行くよ！」

そしてハルトがウォッチを起動すると

『リバイス』

ピンクの波動を発生させると

背後に

アナザーリバイス やったー！暴れるぜ！

ハルト え！何このトーク画面！

アナザーリバイス 気にしたら負け！

ハルト そんなもんか？

そんな会話が繰り返り広げられていると

黒いモヤがハルトの体から抜け出しアナザーウォッチを掴み起動させた

『バイス』

するとアナザーウォッチは二つに分離しモヤが変身を始めた、ハルトは残された

ウオツチを起動しシエイプシフターに装填する

『リバイ』

そして変身を終わると、そこには髑髏を帯びた顔に機械的な装甲を装着された

アナザーリバイ、アナザーバイス 爆誕

『ウオズ』

「祝え！全アナザーライダーの力を受け継ぎ次代を担いし者 その名もアナザーリバイ
ス！悪魔と力を合わせた瞬間である！」

「おおいねえ！ウオズたちに祝われるのは！さいっこう！」

「そうだろ？んじゃ後は頼んだぜ…束！」

『はいはい束さんにまっかせなさいい！』

その合図で隔壁が開くと我先にと生徒が避難する、教員が避難誘導する中でアナザー
バイスはアリーナ席に誰かいないか探しに動き、アナザーリバイとアナザーウオズは無
人機の元へと向かうのであった

—————

そして無人機の元へと向かった2人だが箒が一夏に檄を飛ばそうとしていた…よりもよつて此処かあ！

「鈴！俺を撃て！早く!!」

「ええ！ちよつと…接近警報？新手なの！」

「何だよ次から次へと！」

その瞬間無人機が体制を崩してよろけた

「へ？」

よく見ると小さなクワガタが膝関節を攻撃しており同じサイズのコウモリがクモを連れて両脚を糸で拘束しようとしていた、ようは膝カックンされるとタイミングを見ていたかのようにタカのようなロボットの群れで無人機に襲い掛かるのであった

「な、何よ…あれ」

「あ、ハル兄の護身用グッズだ」

前に自慢気に見せてもらったので見覚えがあるガジェット達を見て思い出した一夏に鈴は

「ハルトさん…もう本当何でもありね」

ツツコミと同時に

「おおおおりやあああー！」

と2つの光が無人機を吹き飛ばしたのであった

「ダブルアナザーキック！」

着地を決めるとアナザーウオズは

「決まりましたね」

「だな…一夏！よく持ち堪えた！後は任せろ！」

「は、ハル兄！だけど俺達も一緒に！」

「大丈夫だって、そんなに心配なら補給して早く戻ってこい」

「けど！」「引くわよ一夏！」

「鈴！けど」

「ハルトさんの言う通りよ…それと後ろの緑色の奴は」

「ウオズだ」

「お久しぶりですね鈴さん」

「あ、アンタも動かさせたの…驚かないわよ本当に」

「だから大丈夫…あ、それとアリーナ席で1人ハイテンションな奴いるけど無視して良

いからー！」

「それどんな状況なのよ一体!!」

「おーいハルト！避難完了だぜ！さあさあ思い切りやろうぜ！」

「ご苦労様、んじや3人で行くか！」

「ガッテン！」

アナザーバイスは高速移動でアナザリバイの隣に立ち構えるがまだ反応がない

「オカシイ」

「ええ人が乗ってるなら動いても良いですのに」

「え？つて事は…アレって無人なの！」

「かも知れないってだけな…束」

『はいはい！そうだねアレは無人機だねえ…けど束さん製じゃないよ…誰か知らないけど不愉快だね束さんのISをあんな風にするなんて…ハルくん！ぐちやぐちやにして！』

製作者からの許可も得たのでボコボコにしてやろう

先手はアナザーウオズ、槍を構えて投擲する

投槍は無人機の肩に当たるが装甲が凹んだのみでダメージ量は少ない

「やはりパワー不足ですか」

まだウオズはシェイプシフターの操作に慣れてない感じだが

「んじや俺つちも行くぜ！」

「え？ちよつオイ！」

そう言うなりアナザーバイスは無人機の腰を掴み

「オーラア!!」

そのまま後ろに仰反り無人機の頭を地面に叩きつける

「これぞ悪魔式バックドロップ!!」

「あの体でなんつーパワーだよ…えーとアナザーリバイは何が出来るんだ？」

『こんな感じだな』

勢いになったので能力を把握しきれていないハルトにアナザーデイケイドから説明をされた…ふむふむ成る程結構スタンダードだな

「アナザーバイス！リミックスだ!!」

「OK！じやあやつちやおう！」

そのままアナザーバイスの膝に乗っかり組体操のような構えを取ると体が二足歩行の巨獣に変化、その姿は嘗ての地球を支配していた暴君竜 ティラノサウルスである

これがアナザーリバイスの能力 リミックスで能力は色んな動物の力を使えると言

うものだ他にも色々あるらしい

「!!!」

!咆哮を上げながら無人機を踏み倒し顔面を大顎で噛み潰した

「!!!」

返り血のようにオイルを浴びたが知った事ではないと言わんばかりに勝利の雄叫びをあげたのであった

「やれやれ…我が魔王は相変わらず自重しませんね仕方ありません」

アナザーウオズは未来予定を書き込む端末を取り出し入力する

『此処であった私の事は忘れる』と

その日の監視カメラなどの映像はハルトが乱入する前の映像から進む事はなく周りの人も記憶から抜けたのだ…一部を除いて

「んじや、ジョウゲン達に加勢に行くぞ!」

反転して向かおうとした時、ファイズフォンXから連絡が入る

「もしもし?」

『ま、魔王ちゃん聞こえる?』

「終わったぞ援護に向かうから待ってるよ！」

『いや大丈夫だよシグマは撤退したから…けど怪我したから治療お願い出来ないかな』
「勿論！ウオズ！」

そのままマフラーワープで移動した先では見るからに重症な2人がいたフィーニスが応急処置を施していた

「っ！」

『ジオウⅡ』

迷わずアナザージオウⅡの力で回帰させ傷を治す

「ありがとう魔王ちゃん」

「かたじけない」

「良いって、それより」

「はいシグマにしてやられました…ですが」

「トドメ刺さずに帰ったんだよね…不思議な事に」

「え？」

「狙いは性能テストって所ですかね」

「かもね…取り敢えず分かった事があるけど」

「報告は後、しっかりと療養してくれ取り敢えず無事でよかったファイニス！ありがとうございます
お陰で間に合ったよ」

「い、いえ僕はそんな…」

「何も戦うだけが仕事じゃないからな、いてくれるだけで嬉しいよ」

「あ、ありがとうございます！」

前々から思ってたが

「医者仲間にするのは今後の課題だな…俺の回復も間に合わない可能性もあるし…：
さてと…ウオズ俺は後始末があるから3人の介抱は任せた今日はありがとうな、何が欲
しい？」

「では…宴の際の食事を」

「え？そんなんで良いのか？なら好物沢山作るとするか！」

「感謝します我が魔王…では」

ウオズは転移するとハルトはアナザーバイスに向けて話しかける

「スゲエなお前ありがとな、この間の事は忘れてやるよ」

『良いって事よ！俺たちも暴れられて嬉しいぜ！』

「そうかならもつと暴れさせてやるから楽しみにしてろよ」

『やったぜ！』

だがアマゾンシグマまで実戦投入してくるとか笑えない話だな…俺の所も戦力を拡大しないとダメだな…やはりなあなあで済ませていたが

「早めの転移も視野に入れないとマズイなこれ」

何処か暴れても問題ない世界はないものか…

因みに一夏達は原作通りのやりとりしてましたとき

—————

場面は変わりIIS学園地下にて

「どうだ東、何か分かりそうか？」

千冬と東、そして山田先生、ハルトの4人が襲撃した無人機の調査を行っていた

「うん！結果から言うとな〜この無人機のコアは前に盗まれたからもう一個頂戴とかお

バカな事を言つてた国の物だったよシリアルナンバーもばっちり一致さ」

「では今回の事件はその国が関与してるんですか？」

山田先生の言葉を束は否定した

「ノンノン：仮にそうだとしてもその国じゃこんな無人機は作れないよ…この技術つて…ちーちゃん、もうちよい調べて良い？」

「勿論お前でないと分からだろうさ」

「だよねえ、天災でないとダメなのさ！」

「んでコアはどうする？盗品だが返すか？」

「まさか！テロに使われたコアだよ！返したらまた盗まれるよ！だったら束さんの手元が安全だよ！」

「まあそりやそうか…んで千冬、その国のお偉方は？」

「返せと言っているが盗まれた過程を世界中に公表すると言って黙らせた」

「おー怖…もし乱暴な方法を取ったら俺に言え、その国を焦土にしてやるから」

「そんなコンビニ行く感覚で実現可能させるお前が怖いぞハルト」

「ハハ！よく言われる…けど学園の機体を使うとしてもなあ」

「それなら大丈夫だよ！束さんに良い考えがある！」

「何だ？」

「このコアをクーちゃん専用機にしちゃうんだ！」

「そ、それは良い考えだな東！前々からクロエにも自衛手段が必要だと思ってたんだよ！」

念の為に予備のメモリガジェットを渡しているが念には念をと云った東に流石だと頷いているが山田先生は恐る恐る千冬に尋ねる

「い、いいんでしょうか？」

「構わん杜撰な管理でコアを盗まれた方が悪い本来なら国中のコア全没収やＩＳ機能停止を避けられたんだからマシだろうさ」

「ＩＳを国防に当ててる国も多い中、束の持つボタン一つでそれが無力化されるというのだから笑えない話である

「そうそう！だからクーちゃんの専用機にしても問題なし！！これで転入試験も問題なし！」

「そうだな……ん？転入？」

「うん！クーちゃんもＩＳ学園に転校するんだあくやっぱり同年代の友達も必要かなあつて会社は亡ちゃんいれば大丈夫だろうし」

「確かにと頷く、ぶつちやけ篠ノ之製作所は東が教師と兼任して動かしているので問題

ない

寧ろクロエの年齢を考えれば学校にいるのが自然だと理解する

「そうだな！もし虐められても俺達が守れば良いだけか！」

「そうそう！そんな事した奴がいたら地獄を見せてあげるよ！」

「そうだな…究極の闇が可愛い位の地獄を作るぞ！」

「おー！」

天に拳を突き上げる2人を見て山田先生は

「あの先輩…2人の娘さんって」

「そうか麻耶は知らなかったな…養子だがな2人が溺愛してるんだ、束は別だがあのハルトも親バカになったがな」

「先輩的に良いんですか？」

「構わんさ親に愛されん子供より愛される子供が良いだろう…私と一夏は愛以前の問題だったからな…それに何だかんでハルトは私も愛してくれるさ」

と不適に笑うのであった

後日、クロエは簡単に転入試験を突破し今日が転入の日だ…試験? 学術は束仕込み、実技は俺や千冬仕込みだぞ? 楽勝だ

「クーちゃん、ちゃんと教科書持った? 忘れ物ない?」

「辛い事があつたら言えよ俺達が何とかするからな、こんな可愛いクロエを虐める奴がいたらアナザライダーに変身して追いかけてそいつのトラウマにしてやるから」

『なら俺の出番だな』

「そうだなアナザーゴーストならピッタリだ!」

『それ何のホラー映画?』

「はい…あ、あの…お母さん、お父さん…少し恥ずかしいです…そのカメラ下ろしてください」

「何言ってるの! クーちゃんの晴れ舞台なんだよ! 写真と動画を撮らなくてどうするの!」

「そうだぞクロエ、折角バットショットに束が専用アタッチメントをつけて一眼レフよりも高性能な解像度を実現させたんだ! いつ使うの!」

「「今でしょ!」」

「親バカ共は少し黙ってろ！」

「ぎゃん!!」

「あ、ありがとうございます千冬さん」

「何、お前もこの馬鹿2人が親で大変だな」

「いいえ…私にとっては大事な両親ですから」

「クーちゃん（クロエ）大きくなって！」

「ですが少し自重してください恥ずかしいです」

「そんな!」「嘘だろ!」

「……………はあ」

「どうしたんですか先輩？」

「いや…親がこうだと子はしっかりするのだなどは」

「あ、あははは…」

そんな冗談は世界でも千冬しか言えないとドン引きしている麻耶であった

金髪の貴公子と銀の兎と愛娘?

1組の教室にて

「はあ……」

一夏と箒は同じタイミングで溜息を吐いていた

「どうしたんですの2人して」

とセシリアが訪ねたので一夏がポツリと

「いや今日転校生来るだろ?」

「そうですわね鈴さんと同じように試験を突破した方が来ると聞いてますわ」

セシリアの解答に箒は続く

「その1人は姉さんの娘で私の姪だな」

「へえ……む、娘!?あの篠ノ之博士に御息女が!」

「ああ……因みに父親はハル兄だ」

「常葉先生の!?待って下さい……そうなりますと何歳の時の子供なんですの!!」

セシリアは混乱していたがそれを盗み聞きしていた生徒も同様だ

ISを生み出した天災 篠ノ之束とセシリア戦から魔王の二つ名を得た篠ノ之製作所No.2 常葉ハルトの娘：何そのIS世界において最強の娘はとクラスがざわついていると千冬が教室に入り転校生を紹介する、その中の1人に周りの目線が集まった「初めまして、シャルル・デュノアです宜しく願います」

まさかの2人目の男性適性者（ハルトは非公式）しかも金髪的美男子登場に色めく教室を千冬は一喝で黙らせると

「続いてボーデヴィツヒ」

「はっ！教官！」

「この場では先生と呼べ」

「はっ！ドイツ出身、ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

少しの沈黙に山田先生が口を開いた

「あのそれだけですか？」

「以上だ」

それだけ言うとならウラは一夏に近づき

「貴様か！」

と平手打ちをお見舞いした

「へ?」

「認めんぞ! 貴様があの方の弟など!」

それだけ言つて元の位置に戻るがラウラの目線は最後の一人に固定された

「似てる…だが…」

自分と同じ型は自分以外は処分されたと聞いているが…何故

そんな彼女を無視して千冬は咳払いをしクロエの番と伝える

「最後にクロニクル」

「はい、初めまして篠ノ之製作所から来ましたクロエ・クロニクルです宜しくお願いいたします」

その挨拶に周りが色めき立つ

「え? じゃああの人が篠ノ之博士と常葉先生の?」

「凄く綺麗な銀髪だね…あれ? 常葉先生の遺伝子何処にあるの?」

と話しているとクロエは

「私は養子ですので2人と血縁関係はありません…ですが自慢の両親に恥じない娘であるうと思ひます」

その言葉にドアの向こうから啜り泣く声が聞こえる、クラスの面々は少し怯えている

が何かを理解しているものは頭を抱えている、その一人である千冬は溜息を吐いて扉を開くとやはりかと思息する目の前で東とハルトが号泣していたのであった

「うう…クーちゃん…立派になって…」

「子の成長は早いなあ…嬉しいよクロエ」

「東、ハルト…担当授業はどうした？」

「そんなの自習にさせた！」

「真面目に授業せんか親馬鹿者供！」

「ぎゃあああああ！」

折檻された声にクロエは思わず頭を抱えた

「お父さん達のバカ…」

だがその顔は笑顔であったがボーデヴィツヒはマジマジとクロエを見ており

そして一夏はシャルルと一緒に授業に向かう

―閑話休題―

山田先生 v s 鈴、セシリア戦が行われた後の昼休み

「一夏さん、箒姉さん、鈴さんお久しぶりです」

「久しぶりクロエ」

「ああ久しぶりだ元気だったか？」

「数年ぶりかしらね久しぶり」

「はい、お元気そうで何よりです鈴さん」

と朗らかな会話をしている

「あ、クロエは初めましてだなセシリアとシャルルだ」

「初めまして、セシリア・オルコットですわ…その常葉先生…貴方のお父さんには大変なご無礼を…」

「いえいえ父もやり過ぎたと反省してましたし気にしないで下さい…父は父、私は私ですから宜しくお願いしますセシリアさん」

「はい！宜しくですわ！」

「初めましてシャルル・デュノアです宜しく…しかし転校早々大変だねえ…」

シャルルの目線が自分達に向けられている意味を理解していた、貴重な男性操縦者2人と代表候補生2人、企業所属者2名…この2人に関しては篠ノ之束の身内と来たものだ、そりやそうだなと思うが

「ええ困った両親です…ですが編入したいと言ってくれた時は2人は全力でサポートし

て貰いました…本当に良い自慢の両親です…」

「その台詞、ハルト兄や束さんが聞いたら泣き崩れるよな」

「一夏の言う通りの事になるわよね」

「そうですね少し愛が重いですが」

と笑顔で答えるとシャルルは何か思う所があるのか苦い顔をするが直ぐに戻し

「そ、そうなんだ…そう言えばクロエさんも専用機があるんだよね？」

「はい、お母さんとお父さん作の機体です」

「は、はあ!？」

「IS開発者2人が製作したとか、どんな専用機よ」

「世界のパワーバランスが変わる代物ですわね」

「姉さん達が自重しないなら恐ろしい限りだ…いやしないか」

「だよなあ…ハルト兄って本当ネジが外れたら凄いからなあ…」

と自分達の身内は大変な奴しかいないと思いき知らされる一夏達であった

—————

同時刻　ハルトはと言うと食堂に向かって歩いていたら仁王立ちして待っている人がいた

「アレ？転校生の…」

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ：お前が常葉ハルトか」

「そだけど：つて一応先生だからな俺、敬語でお願いね」

ヘラヘラ笑って答えると不思議そうな顔をしてハルトを見ている

「お前の事はドイツにいる時から聞いているぞ教官の嫁だろう！篠ノ之博士と浮気したのか！」

「は？」

この子何言ってるのと顔に出すとラウラは意に介さず続ける

「ドイツでの教官はいつもお前の事を話すと笑顔だったしツーショット写真を見ている時は顔を赤くしていた！そうかと思えば浮かない顔で空を見て名前まで呟いていたぞ！」

すると出るわ出るわ千冬のドイツ時代の話がてか千冬の奴、以外と可愛らしい所があるんだな東に話そう！

「そして副官に今の話を言うと、そこまで行くと嫁だと！つまり貴様は教官の嫁なんだな！」

QEDって顔してるけど、この子の副官は嫁の意味を知っているのだろうか…多分だけどオタク的な嫁なら微妙に違うなあ…けど

「千冬の嫁かあ…」

彼女の尻に敷かれる未来しか見えないなど遠い目をしているが…あれ？今と大差なくね？と思い直す

「それとお前の娘と言う奴、何故私と似た顔をしているのだ！」

ラウラの質問には思わず即答した

「あ、それ思ったクロエに似てんなあつて」

「何も知らないのか？」

「うん、クロエは束が引き取った子だから…あ、そう言えばその辺聞いてないや」

「その…：養子にしたのなら、そのあたりは普通聞くのではないか？」

「聞くだろうけど別に良いかって思ってたんだクロエ・クロニクルが何処の生まれでどんな育ちでも俺と束の娘なのは変わらないよ、あの子の為なら…あの子の望む未来を邪魔する奴がいるなら魔王にでも何でもなつてやる」

「……………」

「気になるなら束に聞いてくれ話すか知らないけど…：もしクロエに強引に迫ろうもの

ならその時は覚悟はしとけよ」

笑顔で言うとう食堂に向かうのであった

「あの威圧感……やはり教官の嫁だな、私も強くなければならないか……」

と感心していたラウラだったが

「そうか千冬がなあ……あ！束！」

「何？ハル君？」

「聞いてよ今ささ」

とハルトが束に話が繋がり千冬のドイツ時代の話をリークされ束が千冬に尋ねた結果、顔を真っ赤にした千冬がラウラに説教したのは別の話である

そして一夏のルームメイトはデュノアに変わり箒のルームメイトはクロエに落ち着いて暫く

その夜

ハルトは東にクロエについて聞いてみた、よく考えたら娘のこと何も知らなかったと告げると東は答えてくれた

曰く クロエはドイツが生み出した人造人間で元は兵器として生まれたが能力が規格に満たないで廃棄されて瀕死だったらしい、規格に満ちたのが彼女、ラウラのみであるがそれ以外で無事だったのはクロエのみであったと

つまり

「じゃあラウラとクロエって姉妹な訳だ」

「血縁関係とかで言うならね、クーちゃんを知ってるけどあの子は知らないんじゃない？まあ顔は似てるからまさかと思うだろうけど」

「確たる証拠も無いからなあ……んで倒れてたクロエを東が保護して養子にしたと」

「そ、ビックリした？」

「したよ？けどそんだけで俺がクロエを嫌ったり何かしねえよ俺達の娘だからな親は子を愛するものだよ？血の繋がりとか瑣末なものさ」

笑って答えると東も笑顔で

「うんうん！やっぱりハルくんがお父さんで良かったなあ」

「東が母で良かったんだよ、でないとかクロエは生きてたか分からなかったからな」

「ハル君……」

ハルトは東の手に触れると東も握り返し潤んだ目で

「あ、あのさ……クーちゃんにも弟か妹が欲しいかなあつて思うんだあ……いいかな？」

「た…東／＼／＼／」

「ハルくん／＼／」

2人の影が一つになる…筈だった

「ほお…私がいる前でイチヤコラとは良い身分だなお前達」

と向かい側で缶ビール片手に持った千冬が冷めた目をして睨んでた

「あー！クーちゃん邪魔しないでよ！」

「あ、危ねえ！酔ってるとは言え流される所だった…これ…大人の階段登れなかったのを喜ぶべきか悲しむべきか？」

「まあタイミングが悪かったな、次は2人の時にやれ…まあハルトは大変だろうがな」

「何が？」

「キャラルの事だどうするつもりでいる？」

キャラルが俺に異性的な意味で好意を持つてるのは分かっている、その辺俺は一夏程

鈍感ではないつもりだ……つまり東や千冬の気持ちにも気づいてる訳だがハルトはあつ
けらかんと答えた

「ん？皆で幸せになれば良くね？」

「流石ハルクん天才!!」

「だろお……まあ俺なんかのせいで泣く人を見たくないからさ好きって言われた子の
手を払えないよ……だから好きって言ってくれた皆で幸せになりたいなあって」

「お前、それ男として最低の台詞だぞ？」

「関係ねえ俺が皆を幸せにする異論は認めるが否定はさせん」

「おう……ナチュラルにハーレム宣言とはハルクん流石だぜえ……」

「それを言うなら一人に決められない優柔不断のダメ男だろう？」

「そんなダメ男を好きになったのは誰だ？」

「はあ……仕方ない、お前が女関係にだらしなくならないように見張るとするか」

「あはは！チーちゃんのツンデレえ！」

「ほお？軽口を叩くのはどの口だ束？」

「イタタタ！チーちゃん！頭割れるう！」

「はははは！」

やはり俺達の空気感はこの感じだなあと微笑みながら酒を煽るのであった

その頃、シンフォギア世界で

「つ！ハルトが何か嬉しい事を言ってくれた気がしたぞ！ハルト！オレも好きだ！」

電波を受信したようにアホ毛が立ったキャロルの言葉に

「キャロル…ハルトさんに会えなくて心を…」

「病んじまったかあ…いや年齢的に朦朧か？はあ…エルフナイン頑張ろうぜ」

「はい頑張らないとですね」

「ほお、誰が朦朧したと？」

「やべ！逃げるぞエルフナイン！」

「はい！」

「逃すか！ガリイ!!追え!!」

「はいはい！ガリイちゃんにお任せを」

エルフナインとナツキは頭を抱えていたのであった直後、キレたキャロル達に追いかけ回されたのであった

後に帰還したハルトが好意を伝えた後

『オレが正妻だな』

『は？』

その後の一悶着：第二次正妻戦争の幕開けをまだ誰も知らないのであった

そんなこんなで数日が経った、その間はラウラも問題を起こさずに穏やかに過ぎていたのだが

一夏から連絡があり、何事かと部屋に入ると

「シャル」

「うん…」

そこには金髪の美少女：シャルル否、シャルロットがいた

「え？女の子？」

「うん…その僕は…」

まあ簡単に纏めると愛人の子のシャルロットは会社の命令で一夏やクロエの専用機データを盗めと言われたとの事

「うわあ…マジか」

厄介な事になったなあと頭を抱えると一夏に目を向け

「一応相談されてる身だが一夏の考えはあるか？」

「えーと…俺の知識だと学園にいる間は干渉されない三年間でシャルの生活基盤とか色々準備して…けど法律とか細かい話ならハル兄に相談した方が良いかなと同性だし」

「まあな…その辺は正解だ」

公私混同しない千冬なら退学させるで動くだろうし束の場合は真つ先にデユノア社への報復に動くだろうしなあと考えてみるが腑に落ちない

「だが何で男装までしたんだよ…普通なら異性でハニトラだろうに」

「多分同性なら接しやすいのかなあって…それとルームメイトになる可能性もあるからデータ取りやすいからじゃないかな？」

「うーん……」

アナザーWに検索依頼を掛けてみるとするか

頼んだ

『任せろ』

よしこれで大丈夫と思い、シャルロットの話を整理し直すが矢張り何かありそうだな
「一夏、確認だけどこの話は誰かにした？」

「してない知ってるのは俺達だけ」

「OK、この件俺に預けろ少し調べてみる」

「大丈夫なのか？」

「誰に向かって言ってるんだ任せてとけ一夏」

それだけ言うのと部屋を出たハルトは

「んで結果は？」

『バツチリだぜ先ずはー』

アナザーWの検索結果を確認した：成る程 結果を聞いたハルトは一言

「はあ生徒会長の身内もだけどホント不器用だねえ」

肩を竦め溜息をついたのであった

『まあ世の中、お前みたいに本音や本能だけで生きてる人間しかいないんじゃないかねえんだ』
『よ』

「うっせえ、伝えたい時に気持ちを伝えないとかダメだろ次キッチンと伝えられないかも知れないのにな」

『ハルト…お前』

「ま、折角の弟分の頼みだからな一つの家族の幸せを目指しますか！」

『珍しく本気だな』

「かもな取り敢えず束にはデユノアは敵じゃないと伝えないと厄介事になる前に」
そう思い走るのであった

翌日 束には簡単に説明すると、そっかあ!の一言で解決した:今頃恐ろしい勢いで連中のスキャンダル暴いてんだろうなあ可哀想にと思っていた、翌日の放課後

「常葉先生!ボーデヴィツヒさんがオルコツトさんと凰さんとクロニクルさんの模擬戦に乱入して!!」

大体理解した

「そっかあ:情報ありがとね」

それが答えかボーデヴィツヒと感情を殺しながらも現場に走って向かうのであった

その先の景色はラウラがセシリアと鈴を倒し終え、そして狙いをクロエに向けていた
「言え、何故私と同じ顔をしている?」

「他人の空似です知りませんか？似た顔の人は世の中に3人いるそうですよ？」

「そんな訳あるか他人の空似にしては出来過ぎだ恐らく遺伝子レベルで同じだろう……もしあの計画の廃棄躯体であるならば私の姉妹なのに……偽りの家族と共にいるなど」

その言葉はクロエにとって地雷である

「偽り？……ふざけるな！私は篠ノ之束と常葉ハルトの娘！クロエ・クロニクルだ!!」

そう言うときクロエは専用機である『アーセナル』に搭載されたビームエクイッパーで大量のアタツシユショットガンを作成し一斉射撃を行うと追加でアタツシユアローを使い狙い打つ

「くらいなさい！」

ズドドドト！と大量の弾幕にラウラは驚くが専用機 シュヴァルツエア・レーゲンに搭載した停止結界A I Cを展開し弾丸と矢を止める

「中々やるな……だが数撃てば当たるものでもないぞ？」

「っ！だったら！」

クロエは作成したアタツシユットガンを乱射させ煙幕を立てる

「小癩な……………っ！」

煙を払うが誰もいないが別角度、それも視覚からレイピアを思わせる金色の武器 サウザンドジャツカーの鋒をレーゲンに刺していた

「何!？」

『JACK RISE』

そのままジャツカーのグリップを引つ張るとレーゲンの機能の一部とエネルギーが低下し膝をついた

「ぐう……………これは！」

「確か父さんが言っていましたね…えっと…レーゲンのテクノロジーを頂きました」

そうしてビームエクイッパで製作したのはレーゲンに搭載されているリボルバー弾倉の電磁投射砲であった

「っ！レーゲンの技術を盗んだというのか今の一撃だけで！」

「安心下さい、取ったデータは戦闘後廃棄しますので…では」

『JACKING BREAK!』

ジャツカーの引き金を引くとなった電子音を合図に必殺技が発動する、肩の電磁投射

砲から同威力の攻撃が放たれる性能がダウンした機体では避けられる訳もなくラウラに命中したのであった

「ガアアアアア！」

「ふう……さて鈴さんとセシリアさんを安全な場所に……っ！」

体が動かない……まさかとセンサーを向けたらボロボロだが立っているラウラがいた
A I Cに囚われたようだがそれ以前に驚きの方が勝る

「まさか……あの一撃に耐えたのですか？」

「何、A I Cが間一髪間に合ったに過ぎない……さてこれで終わりだ話を聞かせて貰おうか」

「っ！」

クロエは目を深く瞑り痛みを堪えるような素振りをしたが

「安心してくれ乱暴するつもりはない私はただ話を「辞めろおおお！」む？」

ラウラは冷静に突貫していた一夏をA I Cで捕縛する、それはクロエが自由になつてしまつたが

「また私の邪魔をするか！織斑一夏！」

「何で俺を恨んでるかは知ってる……けどセシリア達を狙うのは違うだろう！」

「倒れたのは奴等が弱いからだ！だがお前も弱い奴のようだがな！」

「っー！」

「一夏ー！」

シャルロットが専用機 ラファール・リヴァイヴのアサルトライフルで攻撃してラウラの拘束を解くと距離を取り構えた

「大丈夫一夏？」

「ああ…早くボーデヴィツヒを片付けないと大変な事になる」

「へ？いや別にボーデヴィツヒさん倒さなくても先生達があれば解決じゃないの？」

「いや違うんだよシャル…俺が言ってるのは」

と一夏が説明する前に来た、来てしまったのだそれは圧倒的な圧力と覇気を帯びながら一夏が切り裂いたバリアの亀裂から現れた

「俺の娘をいじめようとした奴はだーれだ？」

笑顔でシェイプシフターを装着しているハルトがいたのである

「ああ…不味い」

一夏は頭を抱えて少し視線を合わせたハルトの顔と放たれる怒気から理解した何な

らセシリアは顔面蒼白でガタガタ震え

「い……いやあああああ！」

「セシリア!?! 落ち着きなさい! ハルトさんは味方よ!!」

「違うぞ鈴、アレがマジグレしてるハルトさんだ…後は言わなくても分かるな」

と現れたのは訓練機 打鉄を纏う箒である緊急事態故に訓練機を借りて救助に来たのだ

「あくそりやビビるわよねこつちに怒ってないって分かっても怖いもの直接向けられるとか溜まったもんじゃないわ」

鈴は同情的な目線をボーデヴィツヒに向けたのであった

「えーと…一応確認だけど任意の模擬戦かな? それだと俺も介入はしねえが?」

「わ、私はただ貴様の娘と話があるだけだ!」

「ならセシリアさんや鈴さん達との模擬戦に乱入しなくても良いよね?」

「それなんだが何故か知らんが避けられてな…こうでもしないと話せないかと…」

彼女なりの事情はあるのだろうがクロエの事情も察して欲しいかな

「なるほどな…だからといって乱入するのは看過出来ないかな…それに学園のイベント間近なのにあんなにポロポロにしちゃってさ、どうするの? 英国や中国から抗議された

らっ？」

「うう……」

「じゃあこの辺で手打ちって訳で……良いかな？千冬？」

「ああ良くやってくれた常葉講師」

「き、教官」

「話は後だ……タツグトーナメントまでの実弾を使用した模擬戦は禁止とする以上、解散
！」

千冬の一言で場を収まったのであった

VT事件 その裏で

千冬の仲裁で解決した夜の事

「お父さん…少しよろしいでしょうか？」

俺が学園から与えられた個室にクロエが入ってきた、その顔は浮かないがハルトはいつものような笑顔で

「勿論」

短く答えるとお茶を出して一息つくとクロエは話し始める

「お父さんは私が何処の子か知らないんですよね？」

「んや、東から聞いたボーデヴィツヒに似てんの何でって」

「っ!!」

何かに怯えている彼女にハルトは自分の気持ち伝える

「最初に言っておくクロエが俺の娘じゃないとか言う気はねえよ…お前が嫌じゃなければな」

「嫌だなんてそんな…」

「まあご存知の通り俺は問題児だし割と色々やらかしてる自覚はあるけど…曰く付きだからって娘を放り捨てる人でなしになった覚えはねえよ」

敵なら盾（ガードベント）に使うことはあるけどな

『実際やったしな』

いやアレは近くにいた2人（クリスとフィーネ）が悪い

「っ…」

「だから安心しな、もし世界がクロエを否定するなら自分は自分って肯定できる様な世界にしてやるから」

自分が変われば世界は変わると、あの人は言った…しかし変えられない前提がこの世界にあるならば俺が変えてやるだけだ

「お父さん…」

「だから大丈夫、俺はずっとクロエの味方だから」

「!!!」

そしてクロエは泣き始める寝るまで泣いたのでハルトはクロエに毛布をかけると1人学園の屋上に向かう

「ウオズ」

「はっ」

「すまないがデユノアの方面を頼めるか？」

「万事お任せ下さい我が魔王」

「頼りにしてゐるぜ」

「はっ！」

それだけで主従の会話は完了する、ハルトはこの後の展開を振り返る

「確か…暴走したボーデヴィツヒを鎮圧して無人機騒動か…しつかしなあ」

ボーデヴィツヒの件はドイツが黒幕かは知らない、無人機事件に亡国企業が一枚噛んでいたら無関係と樂觀視するのは良くないな

「ま、後は野とやれ山となれ…か」

その場その場で最善手を打ち続けるしかない情報があつても出所が不安定になつてしまつた以上、万事疑つていくしかない

「ま、細かいのは一夏に任せるか」

期待してゐるぜ弟分

メナスが皮肉気味の声音で現れてきた、やはりネオタイムジャッカーが関与してたか
：
「やっぱり気持ち悪いな、シグマ系譜はアマゾン細胞が体にある記憶から本人の真似し
てるだけだろ？」

「それは酷いですね僕を殺したのは貴方でしょう？」

「指示は出したが、殺されるのは弱いからだまさか敵に情けをかけるつもり？」

否定はしないが戦争で相手を殺すなどは無理な話だろう

「そうですね…ならここで貴方が死ぬのは貴方が弱いからですね」

メナスはアマゾンズドライバーを腰につけて構えると

『S・I・G・M・A』

「アマゾン」

変身時の爆風をアナザージオウの波動で相殺させる

『ジオウ』

相対する中、シェイプシフターを介さずに直接、アナザージオウは手を前に出すと

『アナザージカンツインギレード』

新しい武器を取り出して構え、二刀流にすると

『二刻』

電子音と共に分離したが、こんな音声あったか？と首を傾げているが良いや

「魔王……貴方は5手で詰む」

「はは！未来予知できる俺を詰めるもんなら詰んでみなあ！」

「ふっ！」

2人の拳と剣は中間位置で交差した

その頃アリーナではシャルロットが白式にエネルギーを譲渡している最中、千冬がアリーナの中央まで歩いてきた

「千冬姉!?何したんだよ！」

「織斑先生だ馬鹿者……何、教え子の尻拭いをしに來ただけだ、お前達も下がっている」

「けどアレは！」

「所詮は過去の私……しかも劣化した模造品に負けると思ってるのか？」

「けどISSも無しに！」

「それなら問題ない、あの馬鹿2人から渡された物がある」

と千冬は何処からか取り出したのは小刀型レバーがついた黒いバックルを腰につけると

レバーの逆側には鎧武者を模した戦士の横顔が現れた

「ボーデヴィツヒ……お前は何処まで行っても私にはなれんさ、それを今教えてやる」

確か2人と見た番組の男はこう言っていたな

「変身」

『メロン』

千冬はハルトから渡されたメロンの模様がある錠前　メロンロックシードを解錠すると彼女の真上にクラックが開き中から出てきたのは

メロンが宙に浮いていた

「め、メロン?」

「うわあ…アレはハル兄の趣味だな完全に」

ロックシードを宙に投げ、掴むとドライバーに装填する

『ロックオン!』

法螺貝の音色をアレンジしたBGMが周りに鳴り響くと千冬は小刀型レバーを倒してロックシードを切った

『ソイヤ!メロンアームズ!天下御免!』

するとメロンが千冬の頭に落ちてきた

「えええええええ!!」

驚く2人を他所に白いアンダースーツで体を包み込むとメロンが展開し鎧となる

その姿は高貴な貴族 ある世界では人類の明日を守る最強の戦士として君臨していた仮面ライダー

「仮面ライダー斬月…推して参る」

そう言うのと左手のメロンデイフエンダーを投げ捨て無双セイバーを腰ために構えてボーデヴィツヒと同じ構えを取る、場が沈黙する刹那付近でなった甲高い音を合図に斬月は疾駆する素早く懐に入るとボーデヴィツヒは迎撃で模倣の居合切りを放つが「遅い」

放った斬撃は無双セイバーに弾かれ体は仰け反ると空かさずレバーを一度倒す

『ソイヤー！メロンスカッシュユー！』

緑色のエネルギーを刀身に帯びた斬撃はボーデヴィツヒを包む黒い膜を切り裂くと中から出てきた彼女をすかさず抱き止めて黒い膜から距離を取ると一言

「束やれ」

「はいはい！東さんにまっかせなさいい！」

『ロクク…オン レモンエナジー！』

そして放たれた黄色い矢が黒い膜の眉間に命中するとそのまま爆散した皆の視線が矢を撃った者へと向かうと

黄色と青の装甲に身を包んだ戦士が赤い機械的な弓 ソニックアローを構えたまま立っていた姿はさながら斬撃とは異なる高貴さを与える戦士

仮面ライダーデューク

「束さんの前でそんな不細工なもの見せないでよ気持ち悪いなあ」

爆炎上がるアリーナでデュークの仮面越しに聞こえた束の声は歓声によつて消えたのであった

これは後に戦乙女の復活としてセンサーシヨナルに捉えられ 1人の女性の運命を動かす事になるのを誰も知らない

—————

その頃

「どうしたどうした！5手で詰むんじゃないのか！」

「……………」

アナザージオウとアマゾンシグマの戦いは膠着状態に陥っていたと言うよりも相手の癖や戦い方を見抜いて理論的な戦闘マシーンであるアマゾンシグマに対して

どんな未来でも予知して先手を打ち出すアナザージオウとは相性が最悪であった、しかも

確率論などではなく自分の出す手が読まれているのだから当たる訳がない

「前言撤回します…貴方には常識が通用しないようですね」

「そんなのお互いさまだろうになあ！」

『一刻』

アナザージカンツインギレードを槍型に直すとアナザーウオッチを二つ装填した

『響鬼 ウィザード TWIN! ANOTHER FINISH TIME!』

「悪霊退散!!」

『TIME SLASH!』

アナザーウィザードの炎の力にアナザー響鬼に宿る清めの音を付与させたエネルギー斬撃をアマゾンシグマにお見舞いする爆炎を上げるがアマゾンシグマには効いてないように立っていた

「ま、そりゃ普通に立つよな…それで良いけどよ」

アマゾンシグマ…正確にはシグマベースのアマゾンには致命的な弱点がある

「死なないなら死ぬまで殺し続けてやる」

それは痛覚がないことだ自分の体にかかる負荷を理解せずに限界を超えたパワーを使い続ける、そして負荷は大きくなり最悪自壊する

実際、本来のシグマはこの方法で倒せた、しかしネオタイムジャッカーの奴等が攻略法がある奴を俺にぶつける意味がわからないとハルトは考えるが思考を放棄して新しいアナザーウオッチを装填しようとした時

「さっせませんよ魔王」

その声と同時に放たれた矢をアナザージオウは弾き飛ばすと現れたのは戦極ドライブバーを腰につけている戦士　しかし千冬のと違い顔の部分がゲネシスコアに換装されており別の赤いロックシード　ブラッドオレンジロックシードが収まっていた

黄金の戦士に似た、赤い出立ちに同じ赤い刀身の橙々丸とソニックアローを持っている

鮮血の救世主と呼ばれVシネと小説版で大暴れした仮面ライダー

「セイバー?」

〈烈火抜刀!〉空耳↑

「違いますよセイヴァーです仮面ライダーセイヴァー、発音は間違えないように」

「そうだな悪い…つかまた新しいライダーかよ」

「ええネオタイムジャツカーIS世界支部長、エドワード・ガーデン…:貴方の敵です」

「支部長何故此処に?」

「メナス、あなたのダメージが限界値を超える前に回収せよクジヨーさんから頼まれましてね」

「クジヨーからか…:了解…:威力偵察を完了撤退する」

「ふーん俺の敵かあ…:んじや」

『鎧武!クウガ!TWIN!ANOTHER FINISH TIME!』

『TIME SLASH!』

「初対面の挨拶だ受け取れ」

問答無用でアナザー鎧武の力とアナザークウガの封印エネルギーを込めた斬撃を放つアナザージオウを見てセイヴァーはレバーを一度倒した

「やれやれ問答無用ですか」

『ハッ!ブラッドザクロスカツシュ!ブラッドオレンジスカツシュ!』

「ぬん！」

赤い斬撃でアナザージオウの攻撃を相殺すると爆炎が立ち上る晴れた先には誰もいなかった

「はあ…：ファイニスの言う通り戦力増やしたか…：厄介な事しやがる」

そう溜息を漏らすのであった

—————

その夜、一夏とシャルロットを呼んだハルトはアナザーWの得た情報を纏めて紙で渡した

「ほら調査報告書」

内容はデュノア社長の動機である、それはシャルロットを驚愕させるのに十分であった

「え！これって……」

「そ、裏取りも完了さ…：まったく不器用だねえアンタの父親は」

そこには専用機データ奪取ではなく、シャルロットを暗殺し後継者が消えたデュノア

社の乗っ取りを目論む会社幹部から守る為にIS学園に送ったと、その間に社内の不穏分子の一掃を狙ってたという事だ

「そうなんだ……僕って…嫌われてなかったんだあ…」

震えてる彼女を見てハルトは一夏の肩に手を置いて

「なあけど不穏分子って」

「ああ、その辺なら問題ねえよ俺の従者が上手くやるさ」

「へ？」

—————

フランス某所、シャルロット暗殺を狙った幹部の別荘はさながら地獄絵図となつてい
る警護の間人は見るも無惨な姿に変わり果て、残された幹部達も同じように後を追つて
いる

「ウオズちゃん、こっちは終わったよ」

「同じく」

返り血を浴びた姿のゾンジス、ザモナスはアナザーウオズに報告に行くと

「ご苦労、やはり君達は優秀ですね」

「当然でしょ!」「うむ」

「き、貴様ら!我等デユノア社にこんな狼藉が!」

醜い中年太りの男が唾を吐きながら喚き散らす。アナザーウオズはまるで屠殺所に連れられる豚を見るような目で

「何、社長は貴方の背信に気づいてましてね。貴方達の粛清の用意をいたしましたよ……ならば貴方の破滅が早く来ただけの事です、時間の問題です」

「な!貴様等社長の「違います我等が忠を尽くすのはただ一人のみ」何だと!我等に刃を向けるとはどのようなバカが、があ!」

暗殺対象の幹部をアナザーウオズはマフラーで首を絞め宙に浮かべたが2人は助ける気もないのが主君を馬鹿にされた怒りを示している

「バカだと?それはどちらだ?」

「魔王ちゃんに狙われた段階で君達終わってんの」

「その通り、我が魔王の道は綺麗でなくてはならない…路傍の石如きが邪魔するんじゃない」

「ま、まて！ぎや……」

そのままアナザーウオズがマフラーを強く引くと末期の痙攣をして幹部は生き絶えた

「おしまいです、フィーニス後始末をお願いします」

「かしこまりましたウオズ先輩」

「それと我が魔王から言伝ですよ、帰る前に数日フランス観光でもしてこいと…軍資金は此方に」

「やったあああああ！じゃあ俺エツフェル塔行きたい！」

「凱旋門！」

「僕は美術館に……」

「わかりました…でもまずは後始末から入りましょうか」

その後、アナザー1号が幹部の別荘を踏み潰した後に放火して証拠を隠滅させた…念の為屋敷中を調べまわったウオズ達はネオタイムジャッカーや亡国企業に関連した資

料を得るとそのまま持ち帰りフランス観光に向かうのであった

「楽しんでるかなあ？」

「え？何が？」

「こつちの事、んじや一夏後は任せた」

「え？ちよつ！ハル兄!!」

「頑張れよつと」

「のわ!」

一夏の背を押してシャルロットの隣に座らせるとそのままシャルロットは一夏に抱きつき泣きじやくる、一夏はアタフタしながらも落ち着くまで抱きしめるのであった

翌日、シャルロットは女性と再入学し鈴がキレて攻撃しラウラが攻撃を止める

「大丈夫か怪我は？」

「あ、いや大丈夫だけど…そつちは？」

「ああ予備パーツで治した…その以前はすまなかつたな」

「へ？いや俺は気にしてないけど」

「そうか…よし」

「んぐっ！」

気づけばラウラが一夏にキスしていた、それを見て驚く一夏ラブズ達

「「「なあ!!」」」

驚く周りと硬直する一夏にラウラは言う

「貴様は私の嫁にする異論は認めん！」

「嫁？婿じゃなくて？」

「それとクロニクル、以前はすまなかつた」

「いえ私は別に気には」

「そうか…では宜しく頼むぞ姉よ！」

「は？何故姉になるのでしょうか？」

「そう呼びたいからだ」

「はあ…：姉ではありませんが」

「む？私と嫁が結婚すればそうなるだろう？」

「え？」

「一夏と結婚すれば姉とは親族だ、教官は常葉と結婚するだろう？」

「「ええええええ!!」」

騒めく教室に現れた千冬は顔を赤くして

「ほお…ボーデヴィツヒ、少し話がある」

「は、はい…」

何故か睨まれたカエルのようになってたのは言うまでもない

一部始終を見てたハルトとアナザーウオッチ越しのライダー達は

「不意打ちでキスされれば固まるよな」

と頷くハルトも強烈な既視感を感じていた

『貴様もキャロルにされたからな』

「そーそーあの時はビックリしたよ」

『しかも幼女モードのキャロルだったからな…一夏も同じようにファーストキスはロリ

…これは何の縁だ?』

『似た者同士って意味だろうナア!!』

「ん?叩き割られたいか?お前達?」

『『つてアナザーリバイスが言ってた(ぜ)』』

『いやちよっ!先輩!』』

「よしアナザーリバイス、後で俺が受けた皆の乗るジープ訓練をして貰うか…フィーニ
スにアナザー1号ウオッチ返してもらお」

『理不尽!!俺っち死んじやう奴う!』

『『あはははは!』』

『この悪魔ア!』

「悪魔はお前だろう?はあ…暫くは退屈しそうにはねえか…さて俺は束の所に向かうと
するか」

『何かあったか?』

「誕生日プレゼントだよ、箒ちゃんのね作るのを手伝うつて訳よ」

閑話 買物

前回から少し経ったある日、ハルトは課外授業で海に行くので水着を買いに出かけた。よく見れば一夏とシャルロットが楽しそうに歩いている……その背後にセシリアと鈴がいる事を知らずに

「よし殺そう！」

ISを部分展開している鈴を止めるべきかと悩んだが取り敢えずスルーだな俺には関係ない

「頑張れ一夏」

と応援するのみであった、そして近場で何でも揃うショッピングモールに着き案内板を見て目当ての場所に行こうとした時だった、ハルトの背後に立った誰かの手が視界を遮った

「だれーだ？」

「この声……錫音か？」

「おー！せいかいおめでどう」

パチパチと手を叩く彼女はネオタイムジャツカーの幹部にして仮面ライダーソーサーの錫音を見て溜息をつく今は職務外なのかあの白い軍服は着ておらず私服であった

「何のようだ？まさか！」

シヨツピングモールでひと暴れする気なのか！シグマ型アマゾン：アレはゾンビとも言えるな……あ

「増殖したメナスを送り込んだのか？まさかシヨツピングモールで立て籠もり？」

「いやいや何処のゾンビ映画だい？違うよ今日は非番で買物なのさ」

「ネオタイムジャツカーって休みあるんだ」

「そうだよ君たちは無いの？」

「休み？うーん……」

ハルトは腕を組んで考えて一つの結論を出した

「あんまりないな」

「この間、仕事終わりに観光してきたとは言ったが……うそ……魔王軍がブラックすぎ……これか！新しい人員が入らない理由は！」

『違うと思うぞ?』

「へ?」

『考えてみる、あの4人に休みを与えると云ったら』

「明日から休んで良いよ!」

「それは…お暇を出されると言う意味ですか?…:我が魔王?」

「そんな!何か気に触る事しちゃった!魔王ちゃん!」

「嘘ですよね…魔王様…」

「クジ?」

と項垂れる4人が思い浮かんだ

『絶対別の意味に捉えるな』

悲報 魔王軍はブラックでした…:休みとりにくい環境を作った原因は…やはり

「未来の俺、もっかい締め上げるか」

当面は連中の意識改革が課題だなど思考を切り替える

「是非そうしてくれ、私の気持ちも晴れるから」

「なら数発殴つとくわ…:んじゃ何買いに来たんだ?」

「水着だよ、この辺に大きなプールが出来ると聞いてねその時usage」

「ふーん…ネオタイムジャツカーってのも暇なのか？」

「君がアクシオンを起こさなければ、タダの暇人の集まりだからね」

「ぶっちゃったな大分…：つかセイヴァーに会ったぞ」

「この間 出会った新ライダーのことを問う」

「セイバー？ 私達の所に聖剣使いはいないよ？」

「ああ…違う救世主のセイヴァーな」

「あゝ支部長か…：たくあのジジイ…：表舞台出るのが早すぎだろ」

「支部長？」

「そ、ネオタイムジャツカーは並行世界に沢山の支部を持つてるんだIS世界にもあつてねそのライダーがセイヴァーなのさ」

「はあゝ何でセイヴァーなんだよ本当」

仮面ライダーセイヴァー

詳しい詳細はネタバレになるので省くが能力が一種の不死性に由来している厄介なライダーだ

「まあ倒し方が無い訳でもないか」

「だよねどんな存在も無敵じゃないよ君もね」

「知ってるよ俺が弱いつて事くらいは」

オーマジオウにも手加減されてたしな……俺は弱い!!

『いや、それはお前の強さの基準がバグってるだけだぞ』

「さて！仕事の話はこれまでとして……私の買物に付き合ってくれよハルト」

「は？」

「ほら前に約束しただろ？また遊ぼうと……君から言っただんじやないか」

「え？……あゝ」

言っただな、また遊ぼうともだが敵対してる組織の長と遊ぶとかこの子にどんな教育したんだよネオタイムジャッカー!!

「まあ俺も臨海学校だから水着買いに来たし別に良いか」

「そっかでは私の水着も選んでくれないかい？」

「はあ……嫌って言っても連れてくんだろ？」

「よく分かっているじゃないか、じゃあ出発」

「おいコラ待て服を引っ張るな!!」

錫音はハルトの腕を掴むとそのまま引き摺るように連れて行くのであった

その時

「ん？アレは……」「ハル君だねえ……ん？」

「あ、あのお二人とも？」

同じように買物に来ていた戦乙女と天災に見つかるのであった

—————

水着のフロアで、ハルトは適当に黒のトランクスマodelを選んで買った悲しいかな男物は選ぶ選択肢が少ない、錫音を待たせる間もなく女性の水着フロアに向かう途中

「つーか俺への復讐は辞めたのか？」

爆弾を投下してみると錫音は涼しい顔で

「まあ……休憩中だよ君が災厄の魔王になった時に復讐させて貰うかな？だから今は無くした分の普通を取り戻してる所だよ」

「そっか……んじや俺も最高最善の魔王にならないとな」

「頼むよ、それと私は個人的にだが未来の君は大嫌いだが目の前にいる君の事は嫌いでは無いからね……寧ろ好ましい部類だよ、あの世界で会ってたら告白してるかもね」

「そりや良かった……あと何故その世界に俺は産まれなかつたっ!」

「だろう? だから私に殺させないでくれよ魔王」

「善処する」

「そこはしないよって言う場面だよ」

「俺は必要ならそうするよ誰が何と言ってもその選択の結果死ぬなら悔いはないさ」

ヘラヘラ笑いながら、だが心の中にある感情が伝わったようで

「そう言えば君はそう言う人種だったね……おや?」

錫音は視線を感じて振り向くと、そこには

千冬と東がコツソリと此方を覗いていた……正確に言えばハルトだろうが

「……………」

ニヤリと黒い笑みを浮かべると錫音はハルトの隣に立ち

「さて重い話はこれまでだ、じゃあ私達のデートを続けようじゃないか」

「いつの間にデートに昇格してんだっ!」

ハルトがツツコミを入れると同時に錫音はハルトの左腕に抱きつき体を寄せる、部分

的に感じる柔らかさにハルトの頭では情報処理が追いつかず赤面している

「このまま向かうとしようか？良いだろう別に？」

「……………」

「沈黙は肯定だよ……………ふふふ……………」

そのまま歩き出すハルトと錫音、ハルトは情報処理が追いつかずにいるので周りを見ていない、だが錫音は愉快犯のように笑うと後ろから見ている2人に向かって振り向くと口パクで話した読唇術が使えた束が翻訳すると黒い衝動を溢れさせた

「何を……………」

「どうした束!？」

「チーちゃん！あの女は敵だよ！色んな意味で！」

「敵？ああ…確かネオタイムジャッカー…だったか？そのメンバーと記憶しているが…何故ハルトと腕を組んでいるんだ？」

「違うよチーちゃん！それもだけどあの女はね束さん達にこう言ったんだよ!!」

千冬の疑問をそんなことじゃないと束は否定して読唇術の内容を伝える

「ハルトは私のものだ君達やキャロルのじゃないし渡さない…私だけのものだ手を出すなよデートに誘えなかった敗北者達め」

「つて言つてたよ！」

「ほお……」

「行くよチーちゃん！あんな女にハル君を取られてなるものかあ！略奪愛とか束さんの矜持が許さない！」

「ああ…そうだな敗北者か…取り消して貰おう！」

—————

「っ！何か悪寒がした…」

「夏風邪かな…大丈夫かい？お、ココだココ」

水着コーナーはド派手になっているのを見て

「好きなを選んで来いよ、支払いは俺持ちで良いんで…んじゃ俺はこの辺で待つとくか

ら」

自販機でコーヒー飲みながら待とうと離脱しようとしたが拘束がキツくて抜け出せない

「いやいや君が選んでくれるって話だろう」

「えー…」

「君がどんな水着を選ぶか楽しみだなあ、興味あるなあ…マイクロとかスリングとか？君の頼みなら試着するよ？」

「着てる姿には興味あるけど、その辺の話はR18になる可能性があるからNG」

「釣れないねえ」

「それで結構………ん？」

一瞬だが綺麗な金髪の子と黒髪の男が一緒に試着室に入ったような………気のせいかな………つてえ！

「今は私だけを見てくれよ、ハルト」

よく見れば腕が折れる勢いで握りながらも少し頬を赤らめ不安そうな目をする彼女に少ししたじろぐ

「あのお錫音さん？一体どうされたんですか？いや本当に」

「何、私は自分のやりたい事を思い切りやってるだけだが？」

不適に笑う彼女の顔を見て思った、いっぞやの台詞がこんな形で返ってくるとか予想外だよ!!とハルトは懐に入れていたアナザーウオッチを強く握りしめて相棒達に助けを求めたが

—————

精神世界

「頼む助けてくれ！積極的な女の子の相手ってどうしたら良いのさ！わからないよ！」

『いや、やりたい事を全力でやれと言ったのはお前だろ責任取れ』

「そんな殺生な！頼むからこの状況を切り抜ける知恵を貸してくれ!!」

『いやそんな事よりも止めないといけない奴がいてな』

「そんな事って……止める？誰を？」

『アレよアレ』

アナザーWが向けた視線を追うと

『いたぞ！リア充には俺の新発明シアーハートアタックの出番だあ！』

〈コツチヲミロー！〉

骸骨頭の形をした掌サイズの戦車型爆弾を抱えたアナザービルドがいた、その爆弾見覚えあるんですけど！

「ぎゃあああああ!!」

『お前達! アナザービルドを停めろ!』

『おおー!』 x 2 1

『お前ら…辞めろ! HANASE!!』

—————

クソ!! 肝心な時に役立たずだった! それとアナザービルドよいつの間にスタンド能力に目覚めたか後で聞くぞ…: そんな事より!

「やりたい事って?」

俺に何をやる気だ! と少し警戒していると

「それを私の口から言わせたいのかい? 以外とSなんだねえ君は」

「何故そうなる」

「今はムードじゃないから今度にするよ、それで君はどんな水着が良いんだい?」

「へ? いやその…」

「あははは! いやあ初々しいねえ」

カラカラ笑う彼女にハルトは少し困った顔をしているが

「んじやアレ」

と指差したのは黒いビキニであった

「ふーん…普通だね」

「うるさい普通で良いんだよ、お前が派手なの着てみるよ良からぬ輩にナンパされて大変だろが…タダでさえナンパ避けに連れられてんだから俺の仕事を増やすな」

「素直に良いなよ、可愛い私の水着姿を他の男には見せたく無いって」

「そこまで自己肯定するとかポジティブ過ぎるだろ」

「まあ…良いか、じゃあ試着するから待っててね」

「んー」

と試着室に入った錫音を見送ると

「その男、私の水着を買いなさい」

偉そうな態度でハルトに命令してきた女がいた

「はあ？何で？」

「それは貴方が男だからでしょ、それにその女に買うなら2着も3着も同じよ買え」

「やなこと、自分で買えや」

「男の貴方がそんな口聞いて良いのかしら？ISも使えない劣等が」

「へえくじゃあISで殴ればいいじゃん持ってんでしょ？専用機、何処の代表？企業に

いるの？」

「そ、そんなのある訳ないじゃない！」

「だったら偉そうにすんなよ持ってない力でマウント取るとか悲し身を通り越して哀れだわ」

「なっ！男の分際で！警備員呼ぶわ……ひっ！」

「ん？」

今時の思想のバカ女をあしらつてるとバカ女は何かに怯えたような顔をしていた

「つ、次はないわよ！私の慈悲に感謝なさい！」

酷く怯えた様子で逃げるように去っていった

「何だったんだ？」

「さー？それよりさ束さんもハル君に水着選んでほしいなあ〜」

「私も頼めるか？」

「ん〜いいけ……ど……」

おい待て、今誰と話した俺は？そう思う視線を後ろに向けたハルトの先にいたのは

「ねえねえハル君、あの女の人は誰かな？かな？」

「そうだな少し聞かせて貰おうか」

良い笑顔だが殺意やら黒い衝動が爆発している千冬と束が立っていたのだ

「な、何で2人がいんだよ…」

「それよりもあの子とどういう関係なのかな？」

「ん？馬の合う遊び友達？」

「水着を選ぶような関係が遊びだと？」

「千冬…その言葉のチョイスには悪意しかないな！」

「そうだよ！だって束さんから見てもあの子ハル君の事が！」「ハルト、着替え終わったから見てくれ…おや？」 あ！

黒ビキニを着た、錫音が試着室のカーテンを開けてハルトを見ると笑顔が途端に復讐者時代の目に戻っていた

「何で敗北者達がいるの？私とハルトに手を出さないでって言ったよね？」

「敗北者？取り消せよ」

「チーちゃん、多分だけどその台詞さ死亡フラグだよ」

「千冬もネタに走るか」

「ハル君の影響だよね……じゃなくて！君はハル君の何なのさ！」

「ん？私かい？そうだなあ……」

考えると錫音は黒い笑みを浮かべて一言

「彼の生殺与奪を握っているとだけ答えよう」

「いやある意味でそうだけど語弊しか産まない!!」

「ハル君……生殺与奪の権を他人に握らせたらダメでしょ！」

「束、鬼滅読んだ？」

「うん！」

「そっかあ……ってか束は知ってるだろ俺と錫音が殺し殺されるような関係って」

「それって……殺して独占したい程愛してるの！」

「度の過ぎたヤンデレも真っ青な思考回路に俺は混乱してるよ、しっかりしろよ天災」

「まあまあ落ち着きたまえの2人とも店の迷惑だ」

「誰のせいだ誰の」

「ハハハ！よしじゃあ水着を選び終えたら少しお茶でもしよかな奢ってくれよハル

ト」

「しやあない…か…ほら東、千冬も水着選ぼうな手伝ってやるから」

そんな感じで買物を楽しんだ後、喫茶店に行つて4人で席に腰掛ける

「じゃあ自己紹介と行こう私は白鳥錫音、ネオタイムジャッカーの幹部さ」

「天災の篠ノ之東さんだよ」

「織斑千冬だIS学園で教師をしている」

「俺は「知ってるから良い」…はい」

シユンとしているが東と千冬は笑顔のまま彼女に問い詰める

「何で敵なのにデートしてたのかな？」

「別に敵でもデートして良いんじゃないの？それに今のハルトを殺す気はないし」

「ほお…では何故腕を組んでいた恋人でもないのに」

「腕を組むのに誰かの許可が必要かい？」

「私達やキャロリンの許可はいるよねえ、ハル君は3人の共有財産だよ」

「いつの間にか俺は共有されてたのか…ふわあ…」

遠い目をしてコーヒーを飲むハルトは現実逃避でアナザーライダーのいる精神世界に潜つたのである

その間の事

「ハル君く寝ちやつたか…まあ良いか」

「では担当直入に聞くがお前はハルトの事を」

「好きだよ、勿論君達と同じ意味でね」

「でも君つてハル君を憎んでたよね？」

「それは未来にいる災厄のハルトであつて今のハルトじゃないよ…あの後私も考えたんだどうすればハルトをあの魔王にさせないかってね」

「それで結論は出たか？」

「私がハルトと一緒に暮らして見張れば良いんだって、そうなればハルトはアナザーオーマジオウにはならないからね…そうだな…お互いに全部の立場も仲間も捨てて何処か穏やかな世界で家を建てて一緒に暮らすのも悪くないかな」

「そんな幸せ計画は東さんは認めないよ！」

「いやどちらかというと駆け落ちでは？」

「そうだね誰にも認められる必要はないさ、私はハルトが隣にいればそれで良いんだよ…隣にいてくれるなら…」

「なら何故、ネオタイムジャツカーにいるんだそこまでの想いがあるならハルトの側にいる選択肢もあるだろうに」

「それは別の理由があつてね今は言えない…けど君達にハルトは渡さないよ此処にいないキャロル・マールス・デインハイムにもね」

「へえ…東さん達を敵に回すんだあ」

「ハルトからライダーシステムを貰っただけで強くなつたと思うなよ、君達と私とじゃステージが違う」

「やってみなければわからんが？」

「ここで身の程を教えてあげようか？」

余りの迫力に周りの客が怯えてるがそんな空気は霧散した

「ふ…合格だな束」

「そうだねチーちゃん」

「合格？」

「そ、ハル君はね、自分なんかを選んでくれる人の手は振り払えないから全員幸せにするって言ってたんだよ」

「自分なんかではないのだが…コイツは自己評価が低いのが難点だ」

「そうだよね……ってまさかハーレム宣言してたの？」

「そうだよね……けどハル君本気で考えててさ東さんもチーちゃんもハル君の泣く顔は見たくないんだあくだからさ本気でハル君を好きな人がいたら受け入れてあげたいんだよ、ハル君が私達にそうしてくれてくれたように」

「このバカは寂しがり屋な癖に人の好き嫌いが激しいから私達が見てないと何を仕出すかわからん」

「確かにね」

「だから皆で幸せになろうって話」

「ふむ……悪くないね、わかった少し時間をくれ答えは出す」

「待つてるぞ」

「うんうん！東さんも魔法は興味深いなあ」

「私もISに乗ってみたいですよ」

とワイワイ話している光景になった時に

「……………ん？終わった？」

「起きたか」

「ん、千冬う……どんな感じ？」

「デザートを追加で頼むらしいぞ」

「そっか……わかった好きなかだけ食べなよ俺が出すから……」

「ふっ、では遠慮なく行かせてもらおうか」

「すいませーん！メニューのここからここまで！」

「あとこの……高そうな飲み物お願いします」

「いや本当に遠慮なしかよ！」

思わず意識が完全に戻った、ハルトはそうツツコミを入れざるを得なかったのであつた

福音事件 その裏で…前編

お待ちかねの臨海学校！だが…

「海だあ…」

とハルトは海パンを履いて夏仕様であるが、熱気に当てられパラソルが出たがらずにいた

「暑い……目の保養は困らないが目のやり場に困るな」

水着を着た若い子が楽しんでる姿は目の保養になるが凝視はできない

「ハルト、大丈夫か？」

と心配そうに覗きこむ千冬は、俺が選んだ黒のビキニを着ている束は赤のビキニで箒ちゃん達と遊んでいた。

「おう千冬も大変だな生徒の監督もあるから遊べないとか」

「まあお前や束と違って担任だからな私はその辺の忙しさもある」

「だな」

「しかし元気な事で」

「まあ悪い事ではなからう」

「そうだね〜……しかし暑い……」

インドアな俺には日差しと湿度は天敵である

「そうかキツイなら横になるか？」

「そうだなあ、そうする」

「わかった、ほら」

「……………ん？」

千冬さん、何故自分の膝を叩いてるのです？

「何、膝枕だ構わないだろう？」

「今、自分が水着姿なの忘れてます？」

「忘れる訳ないだろう？ほら」

「……………ん」

もう夏の暑さで頭も働かないので千冬の好意に甘える事にした……が生足の膝枕か目を開けた先の刺激が強すぎる！寝たいが幸せな感触を味わいたくて寝たくない!!俺はどうしたら良いんだ！

『笑えば良いと思うぞ？』

そっかあ！

「ありがとう千冬……」

「ハルト？……寝てしまったか……ふっ」

寝顔を見ながら千冬はハルトの頭を撫でている

最初は束からの紹介を聞いた時にはどんな問題児かとヒヤヒヤしたが実際会ってみれば気さくな青年であった……まあ時折ネジが外れたり身内周りで沸点が低すぎる事もあるが基本は善人だ、仲良くなるのも時間はかからなかったし人柄に惹かれていったのも事実だ……この感情が色恋絡みと気づくまでに時間はかかったが自分の思いにハルトは答えてくれた……が

「錫音の奴も言ってたが……本音を言えば私だけを愛してほしいんだぞハルト」

だがそれをしたら恐らくハルトは何処か壊れてしまうのは直感的に理解した

必要ならすると公言しており敵なら情け容赦ない彼だが身内関係となる途端に悩み始めるし人一倍苦しむ傾向にある

誰かを選ぶというのは選ばれなかった人がいるという事であり誰かが自分のせいで不幸になったと思うてしまうのだ

大切な人の涙や悲しむ顔が大嫌いなのだと本人が前に言っていたが

「まあ、そんなお前が好きになったのだからな」

「「「「……………」」」」」

「チーちゃん？」

「……………は！」

生徒の面々がマジマジと見ていたのに気づいて赤面するのは少し後となる

その夜、食事を済ませるとハルトは束の元へと向かう明日、渡す予定の箒へのプレゼントの為に

「よっ、束」

「あ、ハル君！」

「紅椿、形になってきたな」

「でしよでしよ！後は箒ちゃんが乗れば完璧だよ！」

束の背には箒の赤い機体が鎮座していたのを見て

「けど良いのか？ライダー技術使わなくて別に箒ちゃんの機体なら文句ねえよ？一夏もだけど」

前から疑問に思っていた事を聞いてみた束は白騎士以降の自作ISにはライダー関

連の技術を搭載させていないクロエのアーセナルは俺と共同だったからビームエグ
イッパや武装のデータは入れているが一夏の白式だって千冬の単一仕様が使える以
外は足の速い暮桜のようなものだ

「うん！東さんは東さんの技術で最高を目指すんだ！確かにハル君のライダー技術は凄
いけど下手したら戦争の引鉄になるかも知れないからね……」

「まあな」

というより実際に戦争が起こったからなビルドで

そもそもビルド本編の北都編はスクラッシュユドライバーのデータや実物が流出した
事から端を発しているから、ビルドやゼロワンなど科学要素の強いライダーに影響され
た東とも話したが今の人類がライダー技術に手を伸ばすのは早すぎる 平和利用され
る日までは隠蔽すると…そこだけベルトさんみたいな思考だが気にしないでおこ

「喜んでくれるかなあ〜」

「喜ぶさ東が一から手がけたんだから」

「そうだと良いなあ〜」

「大丈夫だって安心しろよ」

東の頭を撫でながらハルトはカラカラ笑うと

「も、もう！ハル君は!!それよりも！」

「わーってるよツママミ持って千冬の部屋な」

「うん！宴会だあ！」

「明日に響くから酒は程々にな」

勢いよく飛び出た兎の背を見送るとハルトはやれやれと溜息を吐きながらついていくのであつた

千冬の部屋の前にて

「お前等何してんだ？」

「箒ちゃんもクーちゃんも混ぜてさ」

何故か一夏を好きな5人とクロエがドアの前で聞き耳を立てていたがクロエはどちらかと言うと不安そうな顔でオロオロしている、よくある光景だが側から見るとシユールな絵面である静かにと指を立てられたので何聞いてんだと思ひ束と一緒に耳を傾けると聞こえるのは千冬の嬌声と一夏の声である……ん？

「あゝコレかあ」

「チーちゃん……声抑えようよ誤解されちゃってるよ」

偶にして貰うからこそ理解した千冬は俺や束と違って声に出やすいからなと頷くと

クロエが恐る恐る

「父さん…一夏さんは…」

「大丈夫、多分皆が思うような展開じゃないから」

「え？」

「まあ見てな、千冬！入るぞ」

「いや、ちよつ！ハルトさん!!」

鈴ちゃんが止めるがお構いなしにドアを開けると、そこにはうつ伏せの千冬にマツ

サージをしている一夏の姿があつた

「あれハル兄、何でここに？」

「明日の打ち合わせだよ…んで来たら部屋の前にな」

指を刺した先にはドアが空いた事で前のめりで倒れた5人の姿があつた

「千冬、声出すのは構わないが程々にしろよ多感な子は勘違いするからな」

「ほお…盗み聞きしてたのはそう言う理由か」

「だろうな…まあ俺も知らなければ同じリアクションしてたらうけど」

「それはそれで見てみたいな」

「ハル君の初々しいリアクションかあゝ」

「辞めとけ辞めとけ、多分だけどショックで凄まじき戦士に覚醒するだろうから」

「恐ろしい事をサラリと!」

「いやそれで覚醒したらウオズ達が何というか」

「喜ぶだろうな」

笑いながら答えるハルトと千冬と束、その真意を理解出来るのは一夏や箒、クロエなど少数である

「マツサージは良いぞ、だいぶ解れたな……よし一夏、汗かいたろうし風呂にでも入るといい」

「へ? いや俺は別に」

「良いじゃねえの学園じゃ大浴場は使えないんだから、偶の贅沢だよ」

「え……んじや入ってくるよ」

「んじや俺は菓子だけ置いてくよ……クロエも夜更かしは程々にな……折角だし俺も入るか」

「はい」

「すまないなハルト」

「良いって事よ。んじやな」

手をヒラヒラ振って部屋を出て戸を閉めると

「何してる貴様等、座れ」

千冬がそう言うのと皆思い思いの場所に座る

「どうしたいつもの元気がないな」

「へ、いや」

「こーやって話すのも久々で」

「そうか…なら飲み物でも買ってやろう、ほれ好きなのを選べ」

と言われたので皆、思い思いの飲み物を手に取り飲んだのを確認すると

「呑んだな」

「呑んだよチーちゃん、さあ！レッツツパーティー！」

千冬と束は黒い笑みを浮かべると冷蔵庫から缶ビールを取り出し飲み始めた

「へーいや大丈夫何ですか？」

と筈が訪ねたが千冬は事前に口止め料を払っていると話すと皆がアツと言う顔になる

「千冬さんも姉さんもハルトさんに似てきましたね」

「そうね…この抜け目のなさとか特に」

普段の千冬なら絶対にしらないだろうと皆が頷くが

「そうか？まあ…付き合いが長いからな…それに教師も大変なんだ適度に息抜きしない

とやってられんさ」

「そうだよね」

「しかしお前等、アイツの何処が良いんだ？」

千冬は酔った勢いで弟に思いを寄せている者達に理由を聞いてみる、箒と鈴は幼馴染としてすっかりして欲しいと答える素直でないので伝えると言うと強めの語気で否定した

セシリアとシャルロットは優しいところと

シャルロットは自分の悩みを真摯に向き合ってくれた事、家族問題解決の糸口を作ってくれた事、セシリアは一夏に思いを寄せたのはハルトの恐怖から助けてくれたからである…ある意味で吊り橋効果であろうが

そしてラウラは

「強い所ですかね」

「そうか？アイツは弱いぞ私や東やハルトから言わせればまだまだだ」

「それ比較対象からダメだよチーちゃん、武力設定がおかしい3人だからさ」

「ん？それはどう言う意味だ束？」

「いいえ……心がです」

「あ…因みにクーちゃんも気になってる人いたりする？」

「いえ私は特にそう言うのは」

「良かったー！もしいたら先ずは拳で語らないと行けなかったよー！」

東が笑顔なのは酔っているからだと思いたい

「まあ一夏の奴は家事回りは基本得意だな、ハルト仕込みだから色々やりくりも出来る…それに今時珍しい位に真つ直ぐだ…まあ世間知らずと言えばそれまでだが…：…なんだ欲しいのか？」

「「「「くれるんですか!!」」」」

「まああのバカが振り向いたら検討してやる惚れた男なら自分の魅力で振り向かせてみろまあ頑張れ小娘共」

「そう言う教官は常葉講師とどうなんですか？」

「んなっ！」

「あ、僕も気になります」

「そうですね、お昼も膝枕されてましたし…まるで熟年の夫婦ですわ」

「色々と気になるわね…振り向かせた話も聞きたいし」
「姐さんもキリキリ話してもらいましょうか？」

「私も!？」

まさかの教え子達の反撃で赤面した千冬と東であった

—————

露天風呂に浸かり夜空を見ながら一息…何て贅沢だろうかと思うがこの場は野郎だけだから聞いてみるか彼方は彼方でガールズトーク中だろうしな

「ふう…：…：…：…：そういやあ一夏」

「ん？何だよハル兄？」

「あの子達の中で好きな子はいるか？」

「は？」

「いや何、好奇心だよ弟分の色恋事情に興味津々ってね」

「色恋って何だよ皆、友達だろ？」

「友達がいきなり人前でキスするかよ」

「いや、それって海外とかなら挨拶じゃ…」

「それなら手の甲とか頬だよバカ」

「え？」

「はあ……俺もそうだったがお前は俺よりも酷いな」

実際、未来の俺が嫁自慢した時に言われなければキャロルの好意に気づけなかったからな

コレを鈍感と言わず何と言うのか、ハルトを弁護するなら初対面が迷子認識だったし大人モードあるとか知らなかった、懐くのも子供が親戚のお兄さんに懐くようなものだろうと

「へ？ハル兄も？」

「ん〜っ〜か俺の場合は色恋よりも趣味だからなあ……だから気づかなかったと言うか……何というか……」

『はつきり言えや前の世界ではモテなかったって』

ー皆！アナザーWがジープの特訓したいらしいから付き合ってやれー

『い、いやちよつと待て！謝るから許してくれ！つてお前等何ノリノリでジープ出してんダアー！』

最早、我らの中で恐怖の対象であるジープ訓練である

『すまんなアナザーWよ我等が王の命令とあれば断る訳にもいかんのでなあ』

『チクシヨウ楽しんでやがる！この…跳ねられてたまるかあ！ルナメタルでえ！』

『逃さんぞ！追え！』

『『おおー！』』

よし制裁完了だなと黒い笑みを浮かべるハルトであつたが気を取り直し

「気づいた時が楽しみだな一夏、式には呼べよ」

「へ？お、おう」

「言つたな」

「てかハル兄も式とかどうすんだよ」

「おっと反撃か……そうだなあ先ずは関係者の挨拶回りからだし俺の方の仕事が片付い

てからだな」

「逃げた」

「そう言われてもしやあねえか……んじや出るとしますか」

ハルトは温泉から出て浴衣を着ると団扇を持って涼む為にベンチに腰掛けたのであつた

「はあ……明日かあ」

福音事件 無人機だったか有人機が日本目がけて爆走し一夏達が鎮圧した事件である…確か原因は束が絡んでるとか言ってたが

「無人機と言いつ束がするとは思えねえんだよなあ」

となればネオタイムジャッカーか亡国企業だろうと思考を切り替える連中の狙いだ

IS側が狙われる可能性としては

紅椿の奪取、一夏の殺害と

「束と千冬のライダーシステムかなあ」

戦極ドライバーとゲネシスドライバーだ、ラウラの事件で衆目に晒して以来篠ノ之製作所にも発注の声がかかるが束はガンと否定している……まあドライバーだけあっても意味ないロックシードがあつて初めて成立するのだそのロックシードはヘルヘイムの森にしか生えていない

「まあ戦極ドライバーとかロックシードを軍事利用するとかの悪意あつて森を侵略する馬鹿がいたとしても師匠が許す訳ないだろうけど」

特にネオタイムジャッカーの事は師匠にも話を通しているし俺のいる世界の人間の愚かさも話しているが

「そう言えばセイヴァーの事を話してなかったな…本編だと邂逅してないライダーだし…」

ハルトはアナザー鎧武の力でヘルヘイムのクラックを開くと

「よいしょっと」

スタッグフォンにセイヴァーの情報を吹き込んだフロッグポットを抱えさせて師匠の元に飛ばしたのであつたクラックを閉じ、ふと思ひ出した

「そーいやあウオズ達何してんだ？」

軍資金でフランス旅行をしてるだろうけど、音沙汰ないなあ

その頃、ウオズ達は

「うおおおお！見てよエツフェル塔だよウオズちゃん！」

「ええ素晴らしい、写真に撮りましょう！」

「そうだな…む？フィーニスどうした？」

「あの…魔王様の元に戻らなくて大丈夫なのかなと」

「大丈夫だよ魔王ちゃんにはアナザーライダー達や王妃様もいるんだから」

「ですが…」

「まあフィーニスの心配も分かりますがね…この本によれ…ば!!」

久しぶりに逢魔降臨歴を開いたウオズは見た内容を見て大声を上げた

「どうしたの!」

「私とした事が!時差を忘れていた!明日ではないですか!我が魔王が覚醒を始める日は!」

「つ!!」

「覚醒?」

「こうしてはいられません!お前達、タイムマジーンで飛びますよ!」

「了解!」

「ええ!そこはワープじゃないんですか!」

「あれは距離が遠すぎると使えないのですよ!」

と慌ただしくタイムマジーンの方角へと走るのであった。

覚醒

それは後にオーマの日と呼ばれる事になる

常葉ハルト アナザージオウの新たな力が目覚める日である

福音事件 中編

そして翌日

「さあさあ箒ちゃんに束さんからの誕生日プレゼントだよー！カモンー！」

束が指を鳴らすと空から落ちてきた箱、それが開くと中には赤い甲冑を思わせるような機体が入っていた

「これは…」

「箒ちゃんの専用機だよ！名前は紅椿、束さん自作世界初の第四世代機だよ！」
そう言うのと専用機持ちや周りがざわついた

世界各国が第三世代機を開発している中、あつさりと第四世代機という新たなステージに立っているのだから

周りには姉だから貰えるとか狡いとか色々言っているが束はヘラヘラしながら

「へ？何？人類史で皆が平等だった瞬間なんてないよ？狡いとか言うなら自分も努力すれば良いよロクにしてないのに箒ちゃんを羨むんじゃないよ」

「東、それは色々俺に刺さるよ」

努力とは別の枠でアナザーライダーと知り得た俺には色々耳が痛かったが得た後、鍛錬は欠かしてないので相殺されてるだろう

「東、自重しろとアレ程」

「何で？ 東さんは宇宙に行きたいのに未だに地球しか見てない連中がいるせいで宇宙に行けないんだよ？ だったら皆が上を向くようにしないとイケないよね！ その為の第四世代機だよー！」

「……………」

「姉さん？」

「あ、ごめんね箒ちゃん直ぐに調整するね」

「私も手伝いますお母さん」

「クーちゃん宜しくう！」

すると紅椿は箒仕様に完全に変化し空を自由に飛び回り仮想敵の映像もバンバン撃ち落としている

「これが紅椿…私の力……」

何か感慨深いものを感じてる箒を見ている周りだが山田先生が千冬に耳打ちをした

後、専用機持ち組と一般生徒に分かれて授業は一時中断となった

—————
旅館の一室

「突然だがアメリカとイスラエルの共同軍事 I S である〈銀の福音〉が暴走して日本に向かっている」と情報を得た」

その一言は一室にいた専用機持ちを驚かせたのであった。暴走した I S が日本に向かうのもそうだが

「軍事 I S って……その」

「兵器だな」

言い淀んだ鈴の言葉を捕捉するようにラウラがハッキリと言う

アラスカ条約と篠ノ之製作所との約定で軍事兵器前提の I S 作成は禁じられているのだ国防ならいざ知らず侵略前提の I S など東の地雷以外の何者でもない

「話を戻すぞ福音は現在、音速で日本に向かっている……狙いは不明だが自衛隊や米軍の出勤態勢が間に合わない以上、現戦力で迎撃しなければならぬと政府から依頼があった」

「依頼つて事は支払うものもあるんだよな？」

「ああ、まあ今作戦の資材や弾薬周りの負担くらいだろうが微々たるものだろうな」

「ないよりマシか……んで対策を練ろなあ……加害者側の頭は随分おめでたいなあ……束」

「勿論！今、福音以外のアメリカとイスラエルのコアとISは強制停止させたいよ！」

「じゃあ後はコアを引き取るだけか」

「……………」

やはりこの2人は敵に回してはいけなさと戦慄した専用機持ち、すると同時に束の携帯に電話が入った

「はい篠ノ之製作所……………ん？ああ、お前らが私の子を兵器にして日本に向かわせたでしよ？約束破ったから罰で停止させたから、じゃ、コアの回収に行くのとお金宜しくね……は？コアだけは許して？おめでたいなあくんじゃ払わないなら解るよね？うん！宜しく!!」

と電話を切ると束は笑顔で

「喜べ皆の衆！今回の作戦は給料が出るぞ！」

「それは賠償金では束？」

「うん!!払わないと軍事施設ハッキングしたりとか衛星ハッキングしてめちゃくちゃにしてやるって脅したら締め上げられた鶏のような声で何でもするから許して!!」

言ったから何でもしてもらおうよー」

「さつすが束だな、そんな一面も大好きだぜ！」

「いやあ！褒められると嬉しいなあ〜」

「イチヤつくな馬鹿者共」

「さて…と問題は一つ片付いた所で考えるか」

原作でも読んで思ったが同じISとは言い、軍事兵器相手に競技用を迎撃に向かわせたのやら、これって

「普通車がレーシングカー相手にレースで勝てとか言うようなものだろう」

「そうだな無茶苦茶なのは承諾済みだろうさまあ迎撃は最上だ最低でも自衛隊が来るまでの時間稼ぎが出来れば問題ない、何か意見のある者は？」

「では敵の詳細なスペックを要求します」

「分かった、だが口外すれば問題になるその辺は理解しろ」

と千冬は福音の情報を提示した

「音速飛行に加えて荷電粒子砲ですか」

「私の打鉄式式の山嵐よりも広範囲攻撃が出来るんだ」

「軍用だから高い耐久性なのね…って普通こんな足早いのもって一夏の白式みたいに耐久

性や武装が少ないんじゃないの？」

「けど零落白夜みたいな能力がないな」

「そうだけど軍用だからスペックにない武装や能力も視野に入れないといけないね」

「近接武装も見当たらないが警戒しなければ……偵察は行えないのですか？」

「無理だな音速で飛ぶ相手だ、今更出たところですれ違いになるか戦闘だろうな」

と各々が意見を言う中でクロエが手を上げる

「あの……：I Sの暴走なら、さつきお母さんがしたように福音本体かコアに停止コードを送れば解決するのでは？」

その意見にそれだ！と言う一同だが束は

「それなんだけど……コアが完全にオフラインにされてるみたいで外部からのアクセス出来ないんだよおく停止させるなら福音に接触して信号送らないと停止させられないなあ……本当に余計な事してくれたな」

「それに束のアクセスが間に合って福音を強制解除させても、パイロットの確保に誰か向かわないと行けないし……それに今はP I Cが働いてるから無事だけど高度や慣性的に空で解除されたら音速のまま生身で海に叩きつけられるから人命的な意味でも危ないかな」

束とハルトの意見を聞いてラウラが整理した

「そうなる私達の選択肢は……」

1 防衛ラインを引いて援軍到着まで時間稼ぎ

2 一か八か福音を奇襲して倒す

「となりますね」

そして話し合いは進み、奇襲するなら現状の中で適任は一夏と決まるが肝心の零落白夜はHPを攻撃に回す諸刃の剣であり福音の性能を考えると白式のエネルギー全てを攻撃に回す必要が出てくるので誰が運ぶかで話し合いをしていると

「っ！」

ハルトは何かを感じ取り外に出る

「ハルト!?!」

「ハル君!?!」

「悪い直ぐ戻る」

それだけ言っただけで旅館の外まで出ると

「私、探してきます！」

「真耶待て！」「ダメだよ！」

予想外が起こるのであった。

森まで走ったハルトは人気がないのを確認して周りを見渡すと

「この辺で良いか……出てこい！」

その声に釣られて現れたのはエドワード・ガーデンとメナス、この世界にいるネオタ
イムジャツカーの正規メンバーコンビか

「ほお気づくとは流石、魔王ですね」

「便乗して何かしら狙うのは読めてたからなあ、けどこのタイミングで仕掛けるのは予
想外だったよ」

「奇襲とは虚を突くものですよ？しかし何故居場所が」

「知ってる……まあよくやる手だからな対策済みよ」

そう言うなりハルトの周りには大量のディスクアニマルやカンドロイド、プラモンス

ターが現れた

「じゃじゃーんってね」

「ほお、こんなに」

「こんだけ人海戦術使えば居場所くらい割れるっての」

「予想外ですが、いつもの直属幹部不在のようです……つまり魔王一人排除すれば全ての方がつきます」

「確かに、その傲慢さが貴方の敗因ですよ」

「試してみる？」

エドワードとメナスはドライバーを腰につけるとハルトも同じようにアナザーウオッチを構えた

『ジオウ』

『アナザージカンツインギレード』

無言で変身したアナザージオウは双剣を構える

「変身」

『S・I・G・M・A』

『ブラッドザクロアームズ！ 狂い咲きサクリファイス！ ブラッドオレンジアームズ 邪の道オンステージ！』

アマゾンシグマとセイヴァーになり構えるもアナザージオウは不適な笑みを隠さず
にいた

「そろそろやられてろ！」

「言つてなさい！」

「今日こそ詰む」

アナザージオウvsセイヴァー、シグマ開始

—————

その頃、始まりの男がいる新世界で

「紘汰コレ」

「ありがとな舞…お！ハルトが持ってた奴じゃないか」

「ハルトつてこの間此処に来てた」

「そうそう…確かえーと…」

紘汰が触れるとフロッグポットが再生を始めた

『師匠、お元気ですか？今日は師匠に伝えたい事がありました…本来なら直接向かって話さないとありませんが、仕事の都合で離れる訳にはいかず道具に頼る無礼を許して下さい』

「律儀ね」

「ああ」

『実は私が今いる世界にアーマードライダーがいます』

「何だって！」

『2人はデュークと斬月…戦極凌馬と呉島貴虎が変身するライダー此方は俺の味方です
が…1人だけ敵のアーマードライダーがいます、その名はアーマードライダーセイ
ヴァー師匠の世界で黒の菩提樹という組織の長が変身していたライダーです』

「っ！あいつの!!」

紘汰の記憶には先日戦ったセイヴァーの姿が思い起こされた

『俺の敵なので師匠にどうこうを頼む訳ではありませんが、あのアーマードライダーの能力を考えると群を抜いて危険ですから師匠世界に対して干渉するような事があれば
と思いい情報共有した次第であります…あ、このガジェット取りに戻るので忘れずに持つ

「てて下さいね〜では!」

それを最後にフロツグポットは待機形態に戻る

「舞、少し出かけてくる」

「気をつけてね」

「ああ任せておけ!」

—————

場面は戻りアナザージオウとシグマ、セイヴァーだが

「……………っ!」

アマゾンシグマの拳打を未来視を使い双剣で捌くがセイヴァーアローの一矢が的確な為有効打を与えられずにいる、アマゾンシグマの腹を蹴り距離を置き構え直す

「ふう…………」

防御に徹して時間稼ぎさえすればウオズ達が来てくれるだろうけど…いつまで耐えれば良いのか分からない…けど下手に焦れば思う壺と機を待つしかない…もどかしいなあ

『慌てんなよハルト、こういう時こそ落ち着け』

「わかつてる落ち着いてるよ…………お前たち出番だ!!」

「っ!!」

その声にセイヴァーとシグマは背後や周囲を警戒したが何も無い…だがこの何も無い時間が欲しかった!

————

アナザーバイス フハハハ!俺たちの出番だなハルト!

ハルト そう言う事だ出してやるから働けよ

アナザーバイス OK!任された!

————

アナザーリバイスウオッチを起動すると黒いモヤとアナザージオウがアナザーウオッチを起動すると2人のアナザーライダーに分離した

『バイス』『リバイ』

アナザーバイスとアナザーリバイになった2人は拳を合わせる

「いよっしやあ!!」

「バイス、これ使え」

『二刻』

アナザージカンツインギレードの長剣部分を投げ渡すと受け取るなり嬉しそうに

「いやったあ!ありがとな相棒!」

「つせえ、んでどつちにする？」

「んじや俺っちはアマゾンで」

「じゃあ俺はセイヴァーナ」

「おーらあ！」

と分担も済んだので一気に肉薄し、回避が遅れたお陰で漸くクリーンヒットを当てて事が出来たシグマは効いた素振りはないがセイヴァーも膝をついた

「ワンダウーン！」

「イエイー！」

アナザーリバイとバイスでハイタッチを交わすとセイヴァーは動揺した様な声音で

「まさかブラフだったとは……」

「どう？びつくりしたあ？」

「ははは……とんだ食わせ物ですね」

「何だお前知らねーのか？はいハルト！」

「おう、一つの言葉に針千本お前も俺に釣られてみる？」

「ははは私は魚ではありませんがね」

「何知らないの？不勉強だね！」

『電王……アナザーフィニッシュタイム！』

アナザー電王ウオッチを装填して短剣を槍のように構えるとセイヴァーに投擲すると亀の甲羅模様が浮き上がり相手を拘束すると

「が、ガアアアアア！」

「ふっ！オラアああああ！」

「グアアアアアア！」

そのままライダーキックを叩き込みセイヴァーを爆散させ着地するアナザーリバイは一息を吐く

「さて……お、一夏と箒ちゃんは無事発進したかあ」

目線の先には綺麗な飛行機雲ができているのを見送るアナザーリバイはアナザーバイスの加勢に走ろうとした、その時

「っー！」

慌てて体を捻り避けたと同時、赤銅色の矢が通過したのであった

「ほお、初見で交わすとは驚きましたよ」

そこには倒した筈のセイヴァーが無傷で立っていたのであった

「一応はライダーオタク自称してんでね把握済みだよ」

「でしたら、これは予測出来ましたか!？」

『ロックオン！ザクロチャージ！』

セイヴァーは明後日の方向に矢を放つ、誰もいないのに……っ!!その矢の先にいた者
山田先生に気づいた瞬間、体が勝手に動いていた

『カブト』

「のわ！」

アナザーカブトに変身した結果、アナザーバイスが引っ込んでしまいが関係ない

「クロックアップ!!」

『CLOCK UP』

全てを置いていくスピードで駆け抜けた、アナザーカブトは

「っ!!」

変わりに矢を受けたのである…必殺技故に吹き飛ばされ変身が解除されてしまう

「うっ…」

「常葉先生!?!」

山田先生が駆け寄るがハルトは変身解除と同時に木に叩きつけられてしまう

「にげ………て…」

「そんな！貴方達は一体」

「知る必要はありませんが感謝しますよ、貴女がいたお陰で魔王を討ち取れます」
「だけど見られた以上は生かして置けない」

「ええ：なので消えて貰います」

『ロックオン！ハッ！』

『バイオレント：ストライク！』

「っ！」

山田先生がハルトを守ろうと庇う

『ザクロチャージ！ブラッドオレンジスカッシュユ！』

「はあ！」

先程より大きな赤い矢と蹴りが2人を襲う刹那、クラックが開くとツタがアマゾンシグマを拘束し矢は弾き飛ばされた

「っ！」

シグマは拘束を解こうともがくが解ける気配がない

「これはヘルヘイムの：まさか！」

セイヴァーの問いの返礼は黄金の波動で吹き飛ばせたのだった

「があ！」

「ビックリしたな、まさか本当にアーマードライダーがいるなんて」

「お、お前は!!!」

「し……………しよ……………」

ハルトが薄れかける意識の中で見えたのは銀髪で鎧を纏う男

「よく頑張ったなハルト、ここからは俺のステージだ!」

始まりの男 葛葉紘汰 参戦 その姿に安堵を覚えたハルトは意識を手放す…筈
だったが

『エグゼイド』

応急処置レベルでアナザーエグゼイドの力で回復したハルトは立ち上がるとフラフラしながらも紘汰の隣に立つ

「いいえ師匠、俺達のステージです!」

自分が人生で何度望んだかわからない景色に立っているのだから

憧れのヒーローと肩を並べて戦うと…この時間だけは誰にも邪魔をさせない

が両手を交差させて受け止められた

「ははは！」

「この死に損ないが」

「死人に言われたくないねえ、悪いけど今の俺は……誰にも負ける気がしねえ!!」

興奮でアドレナリンが出ているのか疲れや痛みが消えているのか普段よりも強い力で大剣を握ると右足でシグマを蹴飛ばした

「くっ……」

「今ダア！」

『オレンジオーレ』

低い電子音と共に腐ったオレンジの砲弾がシグマに命中し爆破するが何のそのと立ち上がるのであった

「無駄だ」

「そうとは思わないね……師匠に良い所を見せたいからな倒れて貰うぜ！」

セイヴァー side

「まさか始まりの男まで味方につけていたのか魔王は！」

「らあ！……ん？魔王？それってハルトの事か？」

「そうだ！あの男は並行世界を破滅させる災厄の魔王となるのだ！始まりの男よ！貴様
が守ろうとした世界すらも滅ぼそうとするのだぞ！世界を守るため、共に戦うべきでは
無いか！」

セイヴァーは懸命に説得を重ねるが鎧武は一言

「それは無いな、それに……そんな真似したら問答無用で倒せと本人から頼まれてんだよ
な」

「師匠、頼みます……俺が災厄の魔王になったら本気で倒しに来て下さい！仮面ライ
ダーにやられるなら本望です!!寧ろお願いします!!」

「まあ変な所はあるが」

「そんな口約束を！」

「口だけじゃないさ、実際に戦って解つた事もある……それに俺を師匠つて慕ってくれ
る弟子を見捨てるほど薄情じゃないんでな！」

『ソニックアロー』

「っ！」

「行くぜ！」

『ロック…オン』

「ちい！」

『ロック…オン！』

「はあ！」「しっ！」

『チェリーエナジー』『ザクロチャージ！』

両者の矢が中間地点で爆散すると衝撃波でセイヴァーはシグマと同じ場所に飛ばされた

「行くぞハルト！」

『火縄橙々DJ銃』『無双セイバー』

「はい！師匠！」

『アナザーツインギレード！一刻！』

『ソイヤ！』

『鎧武！ウィザード！MIXING！』

「セイハアアア！」

「オーラア!!」

『極スカツシユ!』『アナザースラツシユ!』

「おのれええええ!」

『ロツクオン!ハツ!』

セイヴァーも負けじと必殺技を放つ

『ザクロチャージ!ブラッドオレンジスパークキング!!』

両者のエネルギーは中間地点で交差したが込められているエネルギーの差で矢を貫きセイヴァーを貫いた

「お、おのれええええ!」

そんな断末魔を最後にセイヴァーは爆散したのであった

「任務達成不可、撤退」

シグマは冷静に分析しセイヴァー爆散を隠れ蓑に撤退したのであった

誰もいなくなったのを確認すると変身解除した2人、まずハルトは思い切り頭を下げ

「師匠…助けてくれてありがとうございます(ござ)いました!!」

「ああ…コウガネみたいな奴が別世界にいるとなると安心出来なくてな」

「ええ……っ! いけない! 早くあの男を追わない……と…」

セイヴァーの厄介さを知っているハルトは追いかけてようと体を動かすが意識に体が追いつかなかったのかついに体勢を崩したハルトを紘汰は受け止めた

「つと…だいたい無理したみたいだな「我が魔王!」来たか」

「っ!! 葛葉紘汰!!」

「魔王ちゃんに何かしたの!」

「許せん!」 「仮面ライダーは…敵!」

4人はそれぞれのアイテムを取り出し構えたのを見て

「ちよつと待った! 俺は敵じゃないって!」

「そうだぞ、お前達師匠に無礼だぞ」

「我が魔王! ご無事でしたか!」

「おう……悪い……セイヴァーを探せ…絶対…生かして帰すな……」

それだけ言うとハルトは完全に気絶したのであった

福音事件 後編

前回のあらすじ

始まりの男と共にセイヴァーを倒したがハルトは意識を失ってしまったのであった。因みに山田先生は紘汰が不思議な力で記憶を消してもらいました。

後、一夏達は原作通りの展開です。

旅館

「我が魔王……」

ウオズ達は貸し切った一室で寝たままのハルトを心配そうな顔で見ている。玄関前にはジョウゲンとカゲンが待機していた。

「ウオズさん、魔王様の容体は」

「ご安心を今は疲れて寝ているだけですよ」

「そうですか…その…本当に今日がオーマの日なんですか？」

「ええ…この本によれば今日、我が魔王がアナザーオーマジオウに覚醒する日なんですが…」

とウオズが自分の持つ、逢魔降臨歴・裏伝をフィーニスにこっそり見せると

「え？」

そこに書かれていた内容はウオズから聞いていた内容から乖離していたのであった

—————

「束」

「何チーちゃん？今束さんは忙しいんだけど」

「私もだ、あの小娘共が一夏の仇打ちに出てしまった…まあ私達もこれから吊い合戦だかな」

「いやハル君死んでないからね」

「知ってるさ、それと…これなのだが」

と千冬が見せたのは束が作った覚えのない緑色の大型のロックシードであった

「それは？」

「ハルトの師匠からの贈り物だ、何でもー

精神世界

「おいおい、もう体は治っただろういつまで此処にいなきやならねえんだよ！」

そこでハルトはアナザーデイケイドに怒りの感情をぶつけていた

「まだ完全復活とは程遠い、慌てずに養生する事だ」

「俺は早く起きて仲間を安心させたいの!!」

普段は竹馬の友である2人だが今回は何故かアナザーデイケイドは頑固なままである

「問題無いだろう、お前の仲間や惚れた女がその程度で泣き崩れると思うのか？」

「泣き崩れはしないだろうけど心配してるだろうが！」

拉致が開かないとハルトは理解したのか机をドン！と強く叩いて

「俺をそんなに起こしたくない理由があるなら素直に話せ！相棒に隠し事される方が不愉快だ!!」

はつきり言うとお前が観念したのかアナザーデイケイドは溜息を吐き

「お前の体を作り変えているのだよ」

「え、何それ怖い……って待て！俺改造手術されてんの！それなら俺は起きるぞ!!」

「待て！これはお前の為でもあるのだ!!」

「へ？」

キョトンとしたハルトにアナザーデイケイドは話を続ける

曰く、シンフォギア、IS世界で年単位かつ凄惨な頻度で変身してきた戦いをしてきた結果として鍛えたとは言え中身が常人と言え俺の体はかなりポロポロらしいのと

「俺達もお前が本来はいないアナザーライダーに変身したから、かなりの負荷になっているのだぞ」

「は？リバイスとか？」

「違うアナザーライジングクウガだ本来の歴史以前に存在すらしてないのだからな」

「あくアレか……」

アナザーデイケイドに言わせるとイレギュラーかつ中途半端に別アナザーライダーの力を目覚めさせてたので体に大きな負荷が掛かっていたとの事だ……つまり

「オデノカラダハポトホドダア！って感じ？」

「そう言う事だ、そしてこれ以上戦えばお前の体は後数回の変身で壊れる」

「記号が摩耗しきった草加さんみたいな感じ？」

「何故貴様は仮面ライダーに例える」

「俺なりの翻訳」

「まあ良い、それは俺達の本意ではないからな契約不履行など恥だ」

「そっか…んで俺の体をどう作り変えてんの？」

「まずはアナザーリバイスの反省を活かしてお前への精神攻撃耐性を上げておいた、これで前みたいいな事にはならんだろう」

「ああ〜アレ大変だったなあ…」

今でもセシリアはトラウマなのか俺を見ると笑顔だけど後退りするからなあ…対策がクマのそれだとショックを受けている

「そして体の回復と身体機能の向上だ…喜べいつもライジングでいけるぞ」

「俺の体が人間辞めてる件について」

「元から辞めてるがな」

「は？何それ」

「まだ知る必要はない事だ…それとだセイヴァーの件だがお前が心配する必要はなさそうだぞで」

「どう言うこと？」

と首を傾げるとアナザーデイケイドが映像を見せてくれた

—————

その頃、森の中で

「まさか始まりの男が出張るとは…やはりアナザーライダーの王は排除すべき敵です…それに彼を倒せば組織での名誉も思うがまま…」

実は復活していたセイヴアーことエドワードは懲りずに再度襲撃を狙っていたのであった

「そうなればクジョーの若造にデカイ顔など二度とさせるものですか…ネオタイムジャツカーの首領は私にこそ相応しい、あんな若造や魔王なんぞに私の栄華を汚されてたまるか」

組織の長に対しての暴言 これを聞いていたのは彼だけではなかった

「ふーん…自分の出世の為にハル君を狙ったんだあ」

「しかも真剣勝負の最中に麻耶を狙うなど…この卑怯者め」

「だよね〜けどさハル君の言ってた事、本当だったよ甦るから警戒しとけてさ」

「ああ…聞けば私の弟を攫った犯人らしいではないか…あの時の貸しを返して貰おうか」

森から現れたのは2人の女性であった

「篠ノ之束に織斑千冬…：…っ！」

「ん？その顔…あく思い出した、お前学会で『若造の夢物語』って束さんを笑ってたジジイだあ」

「誰のこ」惚けるなよボケ老人が」ふざけるなあ！年上に対して何だその態度は！…まあ良いお前達に話がある」

「は？」

「私の物になりなさい、そしてネオタイムジャッカーを思いのままに操り世界を支配しませんか？」

「何言ってるの？」

意味分からないと言うような顔の束と千冬に

「わからないとは天災の質も墮ちたものだなまあんな愚かな魔王に関わった段階で器など知れていると言うものよ」

「明らかな怒気を纏う2人を無視しているのか自分に酔っているように高らかに話始める」

「篠ノ之束、貴女の目的は宇宙進出による人類進化……私ならその目的を達成出来ず、愚かな魔王や先見の明のないクジョーには無理な話ですからねどうです？今すぐにも魔王の首を持つてくるなら直ぐにでも「冗談は辞めろ」は？」

堪忍袋の尾が切れた束が怒りの顔のまま、話し始めた

「三流の分際で」

「っ」

「ハル君は会いたいヒーローが宇宙にいるんだって、それと純粹に宇宙に行きたいから束さんの夢を応援してくれてるんだ……そこにあるのは行きたい、会いたいつて純粹な気持ちだよ……だけどお前は違う」

「ああ、あるのはつまらない虚栄心と自尊心だけだ」

「そーそー……だからいつまでも支配者気取るなよ老害が」

束と千冬はゲネシスドライバーと戦極ドライバーを構えた

「っ！しののののたばねええええええ!!」

『ブラッドオレンジ』『ザクロ』

「変身」

『レモンエナジー』『カチドキ!』

『ロックオン!ハッ!』

『ロック…オン!ソーダア! (ソイヤ!)』

『ブラッドザクロアームズ! 狂い咲きサクリファイス! ブラッドオレンジアームズ! 邪
の道オンステージ!』

『レモンエナジーアームズ!』

『カチドキアームズ! いぎ出陣! エイエイオー!』

セイヴァーとデューク、そして新たな重装甲の鎧を纏った斬月・カチドキアームズに
変身した3人は示し合わせていたように動き始めた、束はセイヴァーアローを自らのソ
ニックアローで受け止め罅迫り合う

「東さん専用のゲネシスドライバーのテストと行こうか」

「私を滅ぼす事で出来ませんよ貴女なら理解出来るはずだあ！」

「いいや理解出来ないね、三流の分際で！」

「はあ！」

その間に斬月が無双セイバーで割り込み距離を作ると今度は互いの飛び道具による射撃戦に移行した

森という射線が通りにくい場所での撃ち合いだが勝負は以外にもあつさり着いた

「……そっ……」

デュークがソニックアローで攻撃した先にいたセイヴァーは直撃を受けて倒れた

「な、何故私の居場所がああ！」

「このゲネシスドライバーには、ハル君や東さん達の戦闘データ全てが収められてるんだよ……居場所の割り出しなんて訳ないね」

「ま……まさかデータを取られていたとは」

「ハル君と何回戦った？アレだけあればパターン認識とか訳ないよ」

「くっ！おのれええええ！がああ！」

反撃に一矢撃とうとするが、その隙を逃さないものがいた

「私を無視とは随分と余裕だな」

斬月が無双セイバーで切り付けたのであったブラッドオレンジの肩装甲が切り裂かれる程鋭い斬撃であった

「流石チーちゃん！」

「当然だ、何年いると思う？」

「だね、さて……と」

「ふふふ……愚かな……私是不滅の存在ですよ！」

『ロックオン！ザクロチャージ！』

反撃の必殺技を放つが斬月がメロンディフェンダーで矢を空に逸らすとデュークがメロンディフェンダーを踏み台にして高く跳躍するなりソニックアローから何発か放ったが

「予想済みですよ、その程度！」

と予想していた通りになりセイヴァーは反撃の矢を放つ、その矢は吸い込まれるかのようにデュークに当たる……筈だった

「なにー！」

当たると途端、デュークが蜃気楼のように消えたのであった

「ま、まさか!」

『レモンエナジー!』

「グアアアアアア!」

その回答は斬月の背後から現れたデュークのソニックアローによる一撃である、束専用のゲネシスドライバーは本家の改造ドライバーと同じように光学迷彩、高度な情報処理能力

それと幻影など多彩さを極めている、また強化されたソニックアローの一撃は的確にセイヴァーのドライバーに命中した

「があああああああ!」

ダメージが通るのが明らかな光景にデュークは納得したように

「ハルトと、あの男の言う通りだったか」

「だね、人間を辞めたお前の体が実体を保てるのはそのドライバーのお陰なんだね」
それだけ分かれば大丈夫と構える2人だがセイヴァーは

「私は……神に……なり……世界を意のままに……いい!!」

「貴様のような人間が神になどなれるものか」

『火縄甜瓜DJ…ロックオン!』

「そうだね、お前みたいな奴が神なんて認めないよ東さんの夢はね…ハル君達と宇宙に行く事だあ!」

『ロックオン!』

斬月の銃とデュークのソニックアローが狙いを定めた、動けないセイヴアーでは逃げる事も出来ない

更に追い討ちをかけるようにデュークは手首を回すとソニックアローのアークリムが大きく展開されエネルギー密度が更に上昇したのであった

「はあ!!」

『一、十、百、千、万、億、兆!無量大数!!』

『レモンエナジー!』

「いやだあああああああ!!」

緑と黄色の閃光をドライバーに直撃されたセイヴアーは体をカクカク震わせると末期の痙攣をして爆散するのであった、本来ならセイヴアーは再生する予定であったが

「そうはさせねえよ」

爆砕した後の赤い粒子をボトルのような物で吸い込み蓋を閉めた男：レックがいた
「つたく独断専行した理由が大将を蹴落とす為とか笑えねえな支部長？」

「その結果がそれだと情けないよねえ」

レックの背後からは2人の面識のある顔の人物が現れると変身解除して駆け寄る

「あ、スーちゃん！」

「久しぶりだな錫音」

「うん久しぶり2人とも元気してた？」

と3人が集まりガールズトークが始まりそんな雰囲気思わず

「ちよつ、スズネ!?何で魔王の妃と仲良くしてんだよ!」

「そりや、私もハルトの事が気に入ったから?」

「なあ!」

「そう言えばスーちゃんはネオタイムジャッカー側だよね」

「知らんものから見れば異様な光景が」

「な、じゃあネオタイムジャッカーを裏切るのかよ!」

「いいや違うよ?」

「は?」

「私がネオタイムジャッカーの頂点に立って魔王と不可侵条約を交わせば平行世界戦争なんて起こらないんじゃないかなあって思ってたね…それに君もメナスを人間兵器にしたクジヨの方針に思う所があるんじゃないの？」

「……………」

「沈黙は肯定だから私は好きにやらせてもらおうから」

「と言うとレックは寂しそうな目をして撤退した、それを確認した3人が

「あ、スーちゃん今ねハル君は寝てるんだ」

その束の一言で錫音は思わず

「寝込み襲える？」

「イエース！キャロりんも呼ぼう!!」

「そうだな…皆で楽しめば問題ないか」

「待て！この話でR18展開は認めんぞ！」

「硬いなあチーちゃんは…行こスーちゃん」

「そうだね」

『テレポート…ナウ!』

「待てえええええ！」

―――
そして精神世界
―――

「おい！アナザーデイケイド！早く俺を起こせ！！じゃないと、この話の年齢設定を上げなくなる！！」

「ははは！アマゾンズが出てる段階で見てる年齢層は高いだろうさ、それに…据え膳食わぬは男の恥だぞ」

「メタいんだよお！！俺は！…：…：…：つーかテレポートしたつて事は！」

「もう来てるな…：あ、ウオズが反論に困った顔をしてるぞ」

「ウオズう！頼む全力で止めてくれえ！後どれだけ時間がかかるんだ！」

「ええ！終わるまで見てえんだけどナ」

「サボったらジープで追いかけて回すぞ！！」

「急げお前ら！」

―――
「ですから東殿、流石に寝たきりの我が魔王に…」

「大丈夫だよオズ！東さん達は、ハル君と添い寝するだけだから」

「そうだよ別にあんな事やこんな事なんて狙ってないから」

「それは狙っているのでは!!」

と頑張つて止めている間にハルトの肉体改造は完了したので

「目覚めよ!その魂い!」

勢いよく体を起こして覚醒したのであつた

「ハル君!」「ハルト!」

「東、錫音…ステイ」

思わず何処かのラプトル調教師よろしく、両手を前に突き出して構えたハルトだが2

人は一歩、また一歩と間合いを詰めていく

「俺、病み上がりOK?」

「OK!」

助かった、話は聞いてくれるようだな

「大丈夫優しくするから」

「そうだよハルトは天井のシミを数えてたら終わるから…」

聞いてねえ!いやちよっ!

「ま、待て!ここには学生がいるんだよ!そんな場所で出来るなあ!」

「ん?興奮するかなあと」

「俺はそこまで倒錯的な趣味はない!!」

千冬戻つてきてくれ！俺じゃ抑えられない…はっ！

「ウオズ！よく帰つてくれた!!報告を聞かせて貰おう！」

「はっ！」

俺の意図を汲んでもらいデュノア社幹部陣の肅正報告を受けた

「ありがとうなウオズ」

「いえお構いなく」

「そう言えば旅行楽しかった？」

「ええとても」

「そっか、休みが欲しければいつでも言つてくれよ…たまには仕事の事も忘れたいだろうしな！」

「感謝します…それと我が魔王に質問が」

「いいよ、何でも聞いて」

「今日がオーマの日だったら我が魔王は何をしますか？」

「はっ。」

オーマの日 それは仮面ライダーの歴史を画する審判の日 歴史の終わりかそれとも始まりか！選べ！自分自身の未来を！

違うな確かオーマジオウに覚醒した日の事だよな…本編だとジオウトリニティに

なったんだっけ

「何？今日アナザーオーマジオウになったの俺？」

「いえ例えばです」

内容的に今日、なったんだろうなあ〜と思ったハルトは自分なりの解答を出した

「なるんだったら師匠いなくて千冬も東も皆死んだんだろうなあ…じゃないと最悪の選択肢なんて選ばないだろうし」

「怖くはありませんか？オーマの日が」

「怖いけど未来が変えられる物なら俺は未来にかけて見たいかな、それになるなら最高最善の魔王だよウォズ」

「では、そんな我が魔王にプレゼントを」

とウォズから渡されたのは、何も刻まれていないブランクウォッチだった

「誰のウォッチ？」

「誰でもありません…ただ少し先の未来で必要になる物でございますよ我が魔王」

「そっか、んじゃ貰つとくありがとな」

「いえ」

その後、一夏達も無事帰還したとの事だが

「アナザーオーマジオウになった時、俺は今と同じ事言えるのかなあ…」

その答えは誰にも分からない

そして無事に期末テストも完了した面々は

「夏休み!!」

久しぶりの長期休みである…よし!

「キャロルの所に帰るかな」

帰ると約束してるし、個人的に会いたい気持ちもある　行くメンバーは俺とウオズ

達、そして

「さあ!キャロリンの世界へ!!」

「異世界で夏休み…か」

束と千冬である因みにクロエは篠ノ之製作所に帰ると、滅亡迅雷のメンバーと遊ぶのだとさ

「んじゃ行くよー!とお!」

『ダイケイド』

は
アナザーディケイドの力でシンフォギア世界に転移したハルトを待ち構えていたの

終末の巫女…それを語る者達と英雄を焦がれる者が引き起こした、とある事件

「行くぞ」

「うん今すぐ連れ戻すから……兄さん！」

これは魔王軍とシンフォギア奏者達

それだけでは済まされない最悪の戦いの始まりであった

次回新章 シンフォギア GX編 開幕

シンフォギアG編

新たな火種

ここはキャロル達が拠点にしているチフオージユ・シヤトー

そこに仕組んだ座標によりオーロラカーテンを超えて帰ったハルト達は

「ただいま〜」

ヘラヘラと両手を振りながら帰還を伝えると

「お、おかえりハルト…」

「ハルトさん…おかえりなさい…」

見るからにボロボロになっているナツキとエルフナインがいた

「どうした2人とも!!」

その様子に慌てて駆け寄るハルトはアナザーエグゼイドの力で回復させる

「よく帰ってくれた……」

「お願いです…キャロルが……キャロルが!」

エルフナインの言葉にハルトは思わず身を乗り出して

「っ！キャロルがどうしたんだ!!」

「着いて来てくれ!!」

ナツキの案内でチフォージユ・シャトーを全速力で走るのであった

そしてナツキに案内された部屋の中を見て

「う……うわぁ……」

ドン引いたのは言うまでもなかった

「ふははははははははは！今日は新しいコアメダルのハッピーバースデーだぁぁぁぁぁ
!!」

ボサボサの髪と目の下に濃いクマを作り、両手には三枚のメダルを天に掲げ高笑いしているキャロルであった

「き……キャロル?」

恐る恐る声をかけるが聴こえていないようで彼女は高らかに
「ふはははは…オレの才能にい…不可能はなああああいい!!」

その変わりように

「いや！俺のいない間に何があつた!!」

ハルトは思わずエルフナインとナツキを見ると2人はバツの悪い顔をして

「いや最初の数日は普通だったんだが…」

「暫くしたら1人でブツブツ吹き始めて…そして何故か突然、寝ずにドライバーやメダ
ルを作り始めてですね…」

「それであの惨状と?」

「うん(はい)」

何処ぞの神のようなリアクションに思わずハルトもキャロルに駆け寄る

「キャロル!!その神様の域まで至ると色々不味いから！戻つて来て!!」

余りの惨状に居た堪れずにキャロルを抱きしめて静止するハルトの気持ちが届いた

のか

「ん……ハルトか？」

ハイルイトの消えている目で話しかけられて怖いと言う気持ちを堪えてハルトは言う

「そう色々言いたいが……取り敢えず寝ような」

「ん……そうさせてもら……おう……」

ポンポンと背中を軽く叩きながら穏やかな声音で言うときャロルは糸の切れた人形のように眠りについたので見えて

「取り敢えずベットに連れてくよ、2人はウォズ達の案内宜しく」

「おう気をつけてな」

「ん？おお」

お姫様抱っこしてキャロルを寝室に連れていったハルトを見て

「あのキャロルを寝かしつけたぞ……」

「やっぱりハルトさん凄いですね……僕たちも寝ましようか」

「だな」

2人は寝かしつけられずに実験に協力させられていたのでウオズ達の案内を済ませた後、2人も同じように泥のように眠るのであった

—————

そして寝室にキャロルを横にさせたのは良かったのだが

「うーん……離れない」

しつかりと服の裾を握りしめており離してくれる気配がない：無理に剥がすと起きそうだなな気持ちよさそうに寝ている手前もあり申し訳ないので

「じゃあないな」

これは必要悪と言いつけるとキャロルと一緒に横になり一眠りする事にしたのであった

そして数時間後キャロルが目覚めると

「ん……ん？何故オレは寝ているのだ？」

まだ冴えない頭をフル稼働させながら周りを見渡す前に正面にあった光景に固まった

「っ!!」

そこには穏やかに寝息を立てて気持ちよく寝ているハルトがいたのを見て思い出した

「ああ…帰ってきてたのか…体が動かな…」

ならば邪魔しては悪いと動こうとして初めて自らの状況を把握し赤面する

「っ!!!」

俯瞰して言うならばハルトはキャロルを抱き枕と思わせるようにガツチリと抱きしめて眠っていたのだ、大人になれば抜け出せただろうが子供状態の今では抜け出せないでいる

「zzzz……」

「おいハルト起きろ！直ぐに離……さなくても良いか」

欲望と理性を天秤にかけ欲望にあっさり傾いたキャロルは

「暫くぶりだからな束達には悪いがこの位はさせてもらうぞ」

そう言い訳し強めに抱き締めると条件反射で強めに抱きしめられる

「こ、これは…悪くないな…よし」

キャロルはふと思う事がありハルトを軽く揺るとハルトは目を半開きにし完全に

寝惚けている

「起きろハルト」

「ん……きやろる？おきた？」

見事に寝ぼけており現実と夢が曖昧な状態である精神的な壁がないのだ、つまりハルトの本音を聞くには絶好のチャンスである。因みに彼の中にいるアナザーライダー達はこの後の展開にワクワクしているのかハルトを起こす気はない

「ああ」

「うーん……」

「眠いのか？」

「うん……だいたいじょうぶ……」

眠いのか台詞が辿々しいハルトにキヤロルは

「お前はオレをどう思っている？」

「んくだいすき……」

「それは……っ！」

キヤロルが二の句を尋ねる前にハルトがキスをしたのであった時間は短かったがキスを終えたハルトは無垢な笑顔のまま

「ん……これが……ほん……ね……え？」

だが、夢か現実か曖昧だったハルトが柔らかな唇の感触により現実と理解したのか完全覚醒を果たしたのであった

「そこには俺と同じように顔が赤いキヤロルである
!!!」

「声にならない悲鳴を上げながらハルトは飛び起きた

『ほお…抜け目ないなハルト』

『ちやつかりしてるな』

『ギャハハハハハ!』

「笑つてんじゃねえよ!これは事故だ!」

『本音だろ?』

『ギャハハハハハ!責任取れよ!』

「わーつてんよ…取り敢えず事態の解決を図る」

「キヤ…キヤロル…今のはその〜」

「ふふふ…言質は取ったぞハルト」

「い、いや俺は!」

『んくださいき』

「そこには寝ぼけてる俺の声が…まさか!

「こんな事もあるうかとブロックポットに録音済みだ…ふつ、これでオレが正妻だな」

「用意周到過ぎませんか!!」

「そんな事より言い逃れは出来んぞハルト？」

最早逃げ道はないので観念したハルトは顔を赤くしながら

「うう……そーだよ！俺はキャラルが好きだよ！離れたくないし離れたくない！だから俺に一生ついてこい!!」

『やつと言ったかヘタレ』

『長かったなあ〜いや本当』

『告白飛ばしてプロポーズか』

『『あ』』 x 2 3

「……………」

「んだよ嫌か？」

「はあ……この流れでオレが断ると思うのか？」

「さあ？んで答えは？」

「良いだろう一緒にいてやる、お前はオレのものでオレはお前のものだ……では早速だが」

「んだよ？」

「連中に自慢するでしょう、また後でな」

言うなりレポートジェムで転移したキャラルを見て

「あ！おいコラ待て!!!」

慌てて皆の場所まで向かうのであった

その数分後

「祝え！我が魔王が伴侶を得た瞬間を！！」

「おめでとうございます魔王様！妃様！」

「めでたいねえ！魔王ちゃん！」

「ああ……めでたい！」

パチパチと拍手喝采の皆にハルトは嬉しさとムードも無かつたなと反省半分

「いや、ありがとう……けどアレ止めなくて良いの？」

ハルトが指差した先では

「ハルトにプロポーズされただと！」

「しかもハル君からキスされたの！」

「そうだ！最初に告白された……つまりオレが正妻だ！」

「『そんな訳あるかあ！』」

『レモンエナジー！』『カチドキチャージ！』

「何するもので仮面ライダー！！」

『スキヤニングチャージ!!』

千冬と東の攻撃をキャロルはオーズに変身しタトバキックで迎え撃っていた
「キャロルがオーズになってる!!」

ハルトは別の事に驚き

「この本によれば、ほお…後の第二次正妻戦争ですね」

「おお！聞きしに勝るとはこの事！」

「いやあ…レベル高いなあ〜」

「そうだなーご飯つくろー」

もう考えるのやめた、と思考を放棄して厨房に行くのであった

—————

そしてハルトはナツキから離れていた間の事を聞いている。東はキャロルの技術に興味を示して一緒に研究し始めたし千冬はオートスコアラーの1人 ファアラと剣を交えた模擬戦をしていた

「ソードブレイカー、その剣と思うなら」

「っ！剣が折れた…：そうか…：これが…：強者との戦いかあ！」

「良いでしょう、貴女の剣見せてもらいましょうか！」

「良いだろう織斑千冬…：参る！」

楽しく剣を交えている…：千冬も全力を出せる相手が欲しかったのか笑顔で戦っている

ウオズ達は暇潰しにTVをつけていると武闘派アイドル（ツヴァイウイング）とピンク髪の女性がしているライブ中継が流れていたのだが大量のノイズが会場に現れると

何故かピンク髪の女性が黒いガングニールを身に纏うなり

「狼狽えるな！」

一喝すると彼女は宣言した

「私はフィーネ」

それはかつてハルト達を目的の為に利用して痛い目にあつた敵の名前である

その言葉にナツキを除く皆に驚きが走った

「な、フィーネだと!」

「まさか…」

「生きていたんだ」

「あの時、ハルト様が盾にした筈なのに!」

驚く家臣団に対してハルトは

「んじやあ御礼参りする?」

カラカラ笑いながら家臣団に伝える

「はて、御礼参りとは?」

「は?アナザータイムマジーンにダメージを残したの忘れた?」

「「あ」」

シンフォギア 世界を離れた当初 アナザータイムマジーンのメカトラブルは整備をサボったのではなくフィーネの所為と言ったのを思い出したウオズ、ジヨウゲン、カゲンのリアクションを見て

「あ…ってやっぱりメンテナンスをサボってたか」

「「っ!!」」

「フィーネここで会ったが100年目!!」

「あの時の恨み返してやる！」

哀れ、理不尽な暴力がフィーネを襲う

「カゲン、ジヨウゲン大丈夫だから…俺怒ってないから」

とハルトは宥める

「だってそのお陰で千冬や束と…娘に会えたからな」

満面の笑みを浮かべたハルトであるがTVの向こうで色々演説しているフィーネ（仮）を見ている

何か月の破片が落ちてくるとか国土の割譲とか色々言ってるねえ

「大変そうだなあ」

イタズラではないのは分かるなあ〜と見ている他人事なのにTVのフィーネ（仮）は俺達の地雷を思い切り踏み抜いた

ーそして日本政府が保有しているソロモンの杖と生物兵器であるアナザージオウとアナザージャイダー並びに魔王軍と称される軍勢を要求する!!ー

「は？」

その言葉にチフオージュ・シャトーにいた面々が沈黙した刹那、周囲にいた野生動物が逃げ出す程の大きな殺気を放ったその中でもハルトは手に持っていたグラスにヒビが入る程の圧を放っていた

「政府保有の生物兵器？何それ？」

「いつから我等は日本政府所属の兵器になったのでしょうか？」

「不愉快だ」

「ええ先輩、我等が政府如きに首を垂れると思ってるのでしょうか？」

と家臣団は怒りに満ちた声音で思い思いの感想を述べている中、ハルトは

「行くぞお前等、久しぶりに素敵な招待状（宣戦布告）をされたんだからなあ：俺の相棒達やお前達が生物兵器？面白い冗談だよなあ：ジヨウゲン、カゲン」

「はー！」

「お前等は、俺達を政府保有の生物兵器とか宣った何処かの愚か者供を見つけて俺の前に連れて来いたつぷりとお礼してやる：死なない程度に痛め付けても良い匙加減は任せた」

「必ずやー」「お任せをー」

「ウオズとフィーニスは着いて来い、あの負け犬に絶対に歯向かっても勝てないトラウマを植え付けるぞ」

「はー！」

「それと…お前達はどう？」

『好きにしろ、あんな不愉快な奴は消し飛ばすに限る』

『ああ…久しぶりに頭にくるぜえ』

その言葉が総意であるのか相棒達からは強い意志を感じた…いやあ久しぶりに俺も怒ってるのを理解したキャロルは

「ほら預かり物だ、さっさと終わらせて帰って来い」

雑にソロモンの杖を投げ渡す、受け取ったハルトは

「行ってくる、束と千冬は見ててね俺の変身」

そう言うハルト達はテレポートジェムを叩きつけて転移したのであった

—————

その頃、ライブ会場…いや特務二課改めてSONGS本部は混乱の極みに達していた。嘗ての敵 フィーネの復活はもとより

「アナザージオウ達が政府の生物兵器ってどうなってるんですか!!」

司令でハルトをして人間辞めてるOTONAの風鳴弦十郎が机を強く叩いて画面向こうの事務次官に問い詰める事務次官は蕎麦を啜りながら

『何処かの馬鹿が見栄張って諸外国にアナザージオウは政府製作の対ノイズの生物兵器って喧伝してやがったんだ……たくルナアタック以降は姿を見せないのを良い事に魔王の名前で私欲のまま外国にアナザライダーを派遣して攻め込むとか脅して利権を貪るとか馬鹿な事やりやがって!』

事務次官もこの事には大変立腹しているが

「彼等は生物兵器ではないし政府保有などではない……外国への面子云々は別として、この事がもしアナザージオウにバレでもすれば」

共闘していたからこそ把握している戦力差以前の問題である、そもそも政府側に不信感しかない彼等が今回の扱いを知ればどう報復するのかも

『アナザライダー達とも戦争だな……ソロモンの杖も連中が持つてるから数の優位なんてないし最悪ノイズに蹂躪されちまうぞオイ』

最悪のケースを考えて皆の顔が青くなるのであった

「はあ……」

弦十郎の脳裏には画面越しであるがアナザーライダーの方針を思い出していた

協力しないのは奏者ではなく自分達を利用するしか興味ない政府連中が嫌いという事

それを政府の面々にほ説明して現場協力者として攻撃対象にしないとまで話を進めたのに飛躍して政府保有の生物兵器扱いをしたと知れば、ノイズ撃退に協力してくれていたが今回の件で完全な絶縁ないし宣戦布告されてしまうと頭を抱えていた

「司令……」

オペレーターの一人も気持ちには理解していたあのライブの惨劇後に起こった魔女狩りの火消しをしたのは政府ではなくアナザーライダーである、その事実は周知の事実で実際アナザージオウはライブの生存者達からは一定の感謝の念を持たれている以上、その名を使って利権を貪ればどうなるかなど分かっていている……あの魔女狩りの加害者と被害者が入れ替わってしまうくらいのことであり

そして最悪のケースとは避けたい時に現れる

そのライブ会場に、フードを目深に被り容姿などはハッキリ見えないが一人だけフー

ドなどで顔を隠さずに堂々としている巻物を持った従者のような男の姿を見る、見覚えのある彼の名は

「ウオズ………ということは!!」

『終わった……』

この時、蕎麦を噉っていた事務次官も箸を止めて天を仰いだという

—————

そしてその光景を別の部屋から見ていた2人がいた、1人は天パ混じりの黒髪の男性とシヨートヘアの女性である

「来たぞ」

男性の一言に女性は笑顔で

「ええ……マリアは約束を果たしてくれたわ」

「そうだな……しかし、あんな挑発に応じるとは」

「ふふふ……あの人ね冷静なフリしてかなりの激情家だから」

「だが生物兵器呼びただけで反応するか」

「ああ……自分よりも周りを悪く言われたり道具扱いされる事に怒るのよ多分だけど今頃仲間使つて言い出しつぺのホラ吹きを見つけて締め上げてるわよ十中八九、意外と根に

持つし執念深いから」

女性はハルトが出した指示をドンピシャと言いついていた

「まさかハルトがな」

「そう今までなら絶対に怒りはしても報復なんてしなかった…優しい人だったのに…」

「だから俺達が止めに行くのだろう？」

「ええ……待つてて今助けるからね」

兄さん」

ハルトが右手に持ったアナザーウオッチを見せると翼と奏は驚いた顔をして「その時計……」「まさか!」

そのリアクションとウオッチのスターターが押され腰に現れたドライバーに装填したのは全くの同時であった

ハルトの体を紫のオーラが包み込み姿を変えた

『ジオウ』

「その姿は……」

フィーネ（仮）が動揺し会場は騒つくがお構いなしなのが俺の従者だ

「静まれ観衆よ!」

それと同時に隣で控えたウオズがステージの中央に立つ

「祝え!全アナザーライダーの頂点に立ち、時空を超え過去と未来を統べる制御不能な時の王者!その名もアナザージオウ!!魔王がこの世界に再誕した瞬間である!!」

その祝詞を聞いた瞬間ある者は悲鳴をまたある者は喝采と感動を発するなど思い思いの感情が世界中で爆発した

「お！以外と歓声が聞こえるとは嬉しいねえ〜どうもどうもー！」

ツインギレードを肩で支えながら周りを見渡すアナザージオウは悲鳴ありきだが割れんばかりの歓声に一応の嬉しみを覚える

「よく来たわねアナザーライダー…日本政府も即決で貴方を手放すなんて可哀想だけどその力は私達が目指す樂園の為に使うから安心なさい」

「はあ…」

尊大な口調なフィーネ（仮）の言葉にハルトの堪忍袋の尾がとうとうキレた

「誰が…政府保有の生物兵器じゃあ!!」

アナザージオウはドライバーに装填したウオッチを押しなり溜まったエネルギーの斬撃をフィーネ（仮）に放ったが自ら纏うマントで受け止め空に弾き飛ばした

「あら違うのかしら？」

「おうとも、俺は誰の物でもねえし政府保有なんて全くの大ウソだっ！あ、これ見てるホラ吹きに言つとく必ず御礼参りに行くからな覚えとけよ！俺達はお前等を逃がさない……俺の名前で好き勝手した報いを受けて貰おうか」

その瞬間、魔王の名を借りて利権を貪っていた政府高官の一人は怯えながら逃げ支度をするが

「どうもー！魔王軍だよー！」

「貴様か魔王様の名を借りたホラ吹きは」

御礼参りに来た従者達に連行されていったと言う

—————

「へえ……随分と野蛮なのね」

「野蛮？そんなのお前も良く知ってんだろうよ」

ガードベントしたのを忘れてるならおめでたい頭であるな

「けど目的は達成したわアナザーライダー、会場の人を解放したいからノイズに道を開けるようにしてもらえないかしら？」

「は？」

アナザージオウはフィーネ（仮）の言葉に違和感を覚えた

こいつが自分達の知る彼女なら絶対に言わない言葉だから、この場面ならば彼女は絶対に会場の人を人質にするのに自らの優位性を捨て去るとは何か裏があるのかは知らないが

「まあ俺としても無関係な人間を巻き込むのは反対だ……良いだろう」

ソロモンの杖を操作して避難ルートを作った

「皆！おはしを守って安全に避難しろよな！それと見てる奴等！……ここにいる奴を生き残ったからってイジメたら首折りに行くからそのつもりで！」

アナザージオウが手を振りながら観客を見送るといふシユールな光景が全世界生中継されていたの言うまでもない

観客の避難を完了するなりアナザージオウはつまらなさそうに首を鳴らす

「感謝するわアナザーライダー」

「礼なら……いらねえよ！」

『ビルド！キカイ！MIXING！』

「らあー！」

『アナザースラッシュユ！』

その一撃はフィーネ（仮）ではなく会場に点在していたあらゆるカメラ類や機械関係をハッキングし映像が非公開となった

「カメラが！」

「ここからはR指定だ、お仕置きの時間だぜフィーネもつかい終わらせてやる」
さて、これでよしと割り切ったのは理由がある

会場に響く守る為の歌

両翼揃いし戦姫に負けはない

翼と奏がシンフォギアを纏うと得物を構えて

「久しぶりだなアナザーライダー」

「つたく生きてたんなら、そう言えよ」

「はあま？俺はお前達がどさくさ紛れにデュランダルで狙った事忘れてないからな」

「誤解と言っておくぞ」

「知るか…？つーかやつぱりテメエ等は信用ならねえな人の名前で大分好き勝手してるとか腹立つ話だ」

「それは…くっ…！」

再会を楽しんでるのに仕掛けないとは余裕かな？

「劣勢なのに随分と余裕だな」

「ええ…だってアナザーライダーは貴方だけじゃないからよ」

「は？…っ！」

首を傾げたと同時に未来予知が反応し、ツインギレードで攻撃を弾き飛ばした

「今のは」

「ええ私達にもいるのよアナザーライダーがね」

「…っ！！」

そう言うなり現れたのは同じようにローブを被る二人組である

「まさか本当にアナザージオウになつてるとはな」

「驚きよ…：…久しぶりね兄さん」

フードを取り見えた素顔に

「誰だ、お前達！！」

某炎柱のようなハキハキした口調でアナザージオウが反応した

「おい！この藤塚冬馬（トーマ）の顔を忘れたのか友達だぞ！」

「は？ナツキみたいな事を言うって事は…お前も同じか」

「ナツキの奴も此処に…いやその前にお前からだハルト！」

「っ！」

何故、俺の名前を知っていると動揺するとSONGSの面々もアナザーライダーに変身する者の名前を初めて知り得たのであった

更に

「妹の顔を忘れる程、ボケたのかしら兄さん？」

その声と突き放すような話し方…まさか

「ハルカなのか…」

「ええ常葉ハルカ…貴方の妹よ」

「そうか吹き飛べ」

『アナザースラッシュ！』

「ええええええ!!」

感動の再会も何もない無慈悲な一撃を回避した2人だったが動揺を隠しきれなかった

「待て待て待て！俺は兎も角妹に刃を向ける奴があるかあ！」

「そうよ！兄さん正気!？」

「至つて普通だし正義しか信じない男とそれに惚れた妹とか俺は知らん」

「がつつり覚えてるじゃないの！」

「うるさい取り敢えず吹き飛んで俺に捕まれ…：そしたら電気風呂や温泉で日頃の疲れや肩こりを解した後、ドクターフィッシュに足を食べられる拷問を受けさせる…：情報を吐いてもらうぞ」

「それ拷問か？：勞つているようにしか思えないが…」

「兄さんが美容に気を使ってくれてるですつて！」

「驚く所はそこですか妹君」

流石にウオズもツツコミに混じると

「あれ？ウオズ？：何で兄さんと一緒にいるのさつきまで一緒にいたわよね？」

「は？」「え？」

「我が女王、そちらは兄君に味方する私ですよ」

と現れたのは青いスーツを着た

「ウオズ（先輩）!?!」

ウオズであった、その驚きに灰ウオズも思わず

「私がもう一人…だと」

「そうだと君は同じウオズだ…まあ擁立したい王が違うだけのね」

「なるほど青い私…つまり青ウオズという事ですか」

「いや待て私はヤギではないよ」

そんなツツコミも他所にアナザージオウは灰ウオズの肩を叩きながら

「ほら!だから言つたら!ウオズが増えた時に見分ける方法があるって!!」

「申し訳ありません我が魔王…まさかあの時の言葉が現実になる日が来ようとは…色々シヨックで」

「気にすんなって、俺も予想外だったから」

「しかし先輩の見分け方が色以外で必要かと」

「そんなの簡単だよフィーニス」

「へ?」

「つと」

『ディケイド』

アナザーディケイドに変身したハルトは一言

「ウオズ…祝え」

「はい？」

「祝えと言っている」

「あの…その台詞最終回付近で言うべきなのでは？」

そんなフィーンズの台詞は無視して2人のウオズは

「祝え」「祝え！」

「よし後から言った方が俺達のウオズだ」

「えー！」

「なんで分かるのよ…」

「流石は我が魔王、私の祝え検定を取得しましたか」

「当然だろ何年俺は祝われたと思ってる」

「これが魔王…まさか祝えのフレーズだけで的確に本物を見抜くとは！これは負けられません我が女王をもっと祝わねば！」

「そんな場合じゃないでしょ」

「張り合う場所が違うぞ青ウオズ」

「トーマは順応性高いね相変わらず」

そんなこんなでアナザージオウは青ウオズを見ていた

「マジでいたよ色違いウオズ」

「私はポ○モンではないよ兄君」

「つー事は、お前も」

「ええウオズが渡してくれたのよー兄さんを助ける力をー」

トーマとハルカが取り出したのはハルトと同じアナザーウオツチ、そのスイッチを押すと

ドライブバーに装填し

「変身!!」

同じように赤と黄色のオーラが2人を包み込み姿を変えた

その姿は両者アナザージオウに似て仮面を剥がれた人体模型のような顔立ち、辛うじて残されている頭部装甲の三日月と蝶型の形と

体に刻まれた年号とライダー 名で理解した

『GEIZ 2068』

歪んだ救世主と

『TSUKUYOMI 2068』

外世界の女王である

更に青ウオズが動く

「祝え！新しき時代に我等を導く聖女と救世主、その名もアナザーゲイツ、アナザーツクヨミ…新たな未来の力が生まれし瞬間である」

祝えたというノリノリな姿に思わず

「うわあ…やっぱり青ウオズも祝うのかあ」

「お約束でしょ」

「だな」

「行くぞ、アナザーディケイド！」

『アナザージカンザックス』

「兄さんを誑かした罪を償ってもらおうわ！」

「は？」

アナザーゲイツは斧型の武器をアナザーツクヨミは素手で構えるなり走り出してく
るが誰が誑かしたって？と疑問になったが今は

『妹怖い妹怖い妹怖い妹怖い……』

『おいハルト！アナザーデイケイドの奴が体育座りをして壊れたラジオみたいと同じ台
詞を言つて怯えてやがる！』

ーいや、どんだけの妹に背後刺されたのトラウマなの！ー

『だ、大丈夫だ問題ない！』

ーその台詞は大丈夫じゃないんだよ！ー

取り敢えずアナザーデイケイドは手を広げて衝撃波を放つが2人は退く事なく前進
し

「はあ！」「たあ！」

「ちい！」

アナザーデイケイドは2人の斧と拳を捌きながら冷静に分析していた

その頃、2人のウオズはと言うと

「我が魔王、加勢に」

「おっと君の相手は私だ」

「お前に構っている暇はない」

「なら君の視線を釘付けにしよう、それが我が女王の御命令故に」

青ウオズが取り出したアナザーウオッチを起動させると

「……………」ゴクリ

何と口に含んで飲み込んだのであつた

「ええ……」

流石の灰ウオズもドン引きの光景であつたが変身した姿を見て警戒した

変身したその姿はさながらアナザーデイケイドに酷似した悪魔の顔と体格をしたア

ナザーライダー

『デイエンド』

ただ奪う強盗 アナザーデイエンド

「やはりアナザーライダーか」

『ウオズ』

アナザーウオズに変身し槍を構えるとアナザーデイエンドも銃型ツールを構え一言

「そうだウオズは君一人ではないよ」

その発砲が戦闘開始の合図となった

その頃、チフォージュ・シャトーでは会場近くに派遣させたガリイとの視覚共有で映し出された光景に驚く

「何！ハルトの妹だど!!」

「ほお…同じように変身するのだな」

「こうしちゃいられない！束さんは義妹ちゃんに挨拶に行くよ！そして束さんを正妻認定して貰うんだあ！クーちゃん！行くよ！」

「はいお母さん」

「何っ！させるかあ！」

「行かせるものかあ束!!」

と全く別の争いが幕を開けていた

「やっぱりお前かトーマ」

「あの…あの人って」

「俺とハルトの悪友と…あの2人の影響を受けた妹だよ」

ナツキはそう答えたのが全てであろう

—————

昔から兄は変わっていた

「お兄ちゃん、何してるの？」

「ん〜花の種を蒔いてるよ〜」

「ねえ…お兄ちゃん、そこは滑り台の着地場所だよ？」

「え〜慈しみの心を持つてるから大丈夫だよ〜此処には絶対綺麗な花が咲くよ！」

「お願いお兄ちゃん！そこに咲くお花と滑る私達の気持ちを考えて!!」

「ええ？大丈夫だよ〜花に気持ちなんてないよお〜」

「いや慈しみの心は!!」

公園の滑り台の足場周りに花を咲かせようとしたり

「お兄ちゃん…何してるの？」

「ん〜節分だから豆撒きの用意をしてるヨオ」

「お兄ちゃんそれ大豆じゃない…岩塩だよ」

「鬼にはこれくらいの方が良いかなあって…ほら悪霊祓うならこつちかなあって…別に

お父さんが鬼役だからさ〜手加減したら悪いかなと」

「お願い、お父さん今すぐ逃げて!!」

節分を名目にして父親に岩塩を投げつけようとしたりと色々変な所があったが、ウルトラマンや仮面ライダーを見てから奇行はピタリと止んだのである何でも

「彼等のようなヒーローになりたい…本当の強さと優しさを持った男になりたい！」

またそんな兄であったが私には優しかったし周りからも慕われていた…ある友人から言わせればカリスマらしいのだが

ある日、行方知れずとなった

全てが狂って変わった、そんな日常に終わりを告げさせてくれたのは「初めまして我が女王、宜しければ貴方の兄の元へとお連れしましょう」

青いスーツを着た胡散臭い男であった

そして恋仲のトーマにも混ざってもらい聞いた話は信じられなかった、あの兄が沢山の世界を滅ぼす魔王になると

そんな未来、否定したいと言うとウオズは私達に力をくれた…そして帰る為の方法も…だから

「ここで止めるよ兄さん!!一緒に帰ろうよ!」

「俺は自分の足で帰るから邪魔をするな!!」

あと

「ウオズから聞いたけど何股する気なのよ!兄さん!!」

「な、何の事か知らんなあ〜」

「不誠実よ兄さん!父さん達も悲しむわ!」

「いや喜ぶんじゃないあの2人なら?」

「……………確かに!」

「納得しないでくれハルカ!」

新たな敵と落とし前

ライブ会場では

アナザーデイケイドとアナザーゲイツ、ツクヨミ

分裂したウオズ

アナザーウオズとアナザーデイエンド

ツヴァイウイングとフィーネ（仮）

そして相手がいないで手持ち無沙汰感のあるフィーニスがノイズを蹴散らす戦いで
混迷を極めていた！

「僕だけ不憫では!!」

—————

ライブ会場

「ふっ！はあ！」

「せい！たあ！」

「くっ……ちい！」

アナザーゲイツとアナザーツクヨミの2人は得物に寄る攻撃をアナザーデイケイドは的確に受け止め避けているアナザーデイケイドとアナザーツクヨミの拳がぶつかり両手を組み合い顔を見あい

「何で、お前が此処にいるんだよ！父さんと母さんは!!」

「こっちの台詞よ！何、異世界で魔王になってるのよ！皆心配してるのに！」

凄いい気にしていた事を言われて不安しかないが

「それは…」

正論過ぎて反論出来ないが…

「帰る方法ならある！ウオズが教えてくれからさ一緒に帰ろう！災厄の魔王になんてならなくて良いよ！」

「それは無理」

「何でよ兄さん！」

「それは……」

「それは？」

前までなら自分の為としか言えなかったのだが新しい理由もある

「俺が災厄の魔王になったから傷つけてしまった子がいる！そんな未来や傷つけてる人が他にもいるかも知れないのに責任を果たさずに帰るなんて無責任な事したくない！」

錫音、彼女は俺が災厄の魔王になってしまった故の被害者である以上、その償いをしていないのは不義理でしかない：ならないのが最大の償いだろうが、もし俺がならなくても彼女の両親が死んでしまった以上、何かしらの咎は受けなければならぬがハルカには「ないわ〜そんな責任感とか義務感とか使命感とか一番嫌いだっただじゃん兄さん!!」

「そうだな」

「でしょ！それに魔王なんて他の誰かがやるよ兄さ「だけど」何？」

「俺のした事の責任は取る！」

『ジオウ』

「この解らず屋あ！きやつ！」

アナザージオウに変身し直しツインギレードで切り付けて弾き飛ばした

「下がれハルカ」

「トーマー！」

「お前なあ…」

「行くぞおおお！」

今度はアナザーゲイツとアナザージオウで互いの得物をぶつけ合っている、アナザージオウの突きをアナザーゲイツは斧で払うと反撃と言わんばかりに頭目掛けて振り下ろすが槍を双剣にして受け止めるなど一進一退の攻防が続く、そしてアナザーゲイツと鏑迫り合いになり

「何で！妹や家族の気持ちを考えないんだ！それはお前のエゴだろう!!」

「否定はしない……まあ全部投げ出したらカッコ悪いだろうよ後なトーマ」

受け取めた双剣で斧を振り払うと力を込めた一撃をアナザーゲイツにぶつけた

「何で妹を止めてないんだあ!!」

『鎧武！アナザースラッシュユ!』

「があー!」

オレンジ色の斬撃による一撃を加えて追撃に連撃を叩き込む

「ムカつくがお前なら大丈夫だつて思ってたんだ妹を守ってくれろと……それなのに!!何で!!」

本当に腹が立つが妹の事を任せても大丈夫と思っていたのに……戦いに巻き込むなど何やっているかと怒りに任せながら感情を吐露すると

「ハルカ的笑顔の為だ!あの子がお前がいなくなつて寂しがっていた……そしたら兄を助けたいから力を貸してと涙を流して頼まれた……そんな顔を見せられたら……男なら戦

う道を選ぶだろう！」

『FINISH TIME』

「だからって巻き込む奴があるかあ！止めるやあ！」

『FINISH TIME』

2人の斧と合体し直した槍にそれぞれエネルギーが溜まっていき

『TIME BURST』

『TIME BREAK』

電子音を合図に駆け出した

「はあー！」

アナザーゲイツの斧の攻撃を未来視で受け止め回避して此方の一撃をぶつけようとしたが

「取ったらあー！」

「っ！」

慌てて後ろに下がると自分のいた場所にピンク色の刃が数発着弾した

「っ！良いタイミングだ調」

「ちっ…横槍かよ…」

ツヴァイウィングの方を見ると初めましての小柄ツインテールの女の子と鎌をもっている金髪の子、そして明るい色の髪をした女の子が現れると立花響とガトリング乱射魔こと雪音クリスも現れた……こりや仕切り直しだなとツヴァイウィングと肩を並べる

「アナザーライダーさん！お久しぶりです！」

「おう、月のカケラが落ちた時以来だな」

「はい!!」

再会の挨拶を交わしていると向こうも

「トーマ……大丈夫？」

「ああ助かったよ調、ありがとう」

「なら良かった……ん……」

「あ！調ズルいデスよ！」

「これは正当報酬だよ切ちゃん」

「2人とも真面目にやりなさい」

「マリア姉さんは羨ましいだけですね……まあ私も羨ましいですが」

「そうデスね」

「なっ！セレナ、切歌まで！」

「トーマ？調を撫で過ぎじゃないかしら？」

「え？そうか普通じゃないのか？」

「大丈夫ハルカは嫉妬してるだけ」

「ち、違うわよ！何言ってるのかしら調ったら！」

「なら…このままトーマは貰う」

「へえ！取れるものなら取ってみなさい」

アナザーゲイツは調という女の子の頭を撫でてる彼女も満更でもないので何やらい感じのようである…しかも切歌とセレナなる子も…この男……

「おい貴様…ハルカというものがありながら…」

「え？…いや待て！」

アナザージオウは槍を握る手に力が入るが

「何で私達が戦うの？一緒に話し合おうよ！」

と響が尋ねる、やはり彼女は対話から入るか悪くないなと思う

「それこそが偽善」

「へ？」

その問いかけに調は怒りに満ちた顔を見せる

「誰かの痛みがわからない貴女に分かるわけがない!!」

丸鋸の雨を放つが翼が剣を回転させて弾き、クリスは矢で反撃する

「何してんだ！」

と一喝するが響には応えてるようである

「私は……」

「ははは！偽善ねえ」

アナザージオウはやれやれと被りを振ると

「俺の好きな言葉に、やらない善よりやる偽善つてのがある」

「……………」

「アンタがした良い事つて本当に嘘偽りか？安心しろキッチンと誰かを助けてるし俺は助けられた奴を一人知っている」

「へ？」

「そいつはアンタと友達に助けられたんだと……んで、その時の恩を返したいからつてルナアタツクの時、直接頭下げて助けてつて頼み込んだくらいだ」

ナツキという悪友が生きてるのは彼女のお陰であるのなら偽善で人を助けられる事も教えよう、錫音の件の借りを返さねばならないからな

「……………」

「俺は人の偽善を肯定するよ、何もしないでいる方が悪だ……月の欠片が落ちた時に何も

しなかったコイツらみたいな奴等がな」

「っ！何を！」

「黙ってるよ」

「……………」

「手を伸ばすのにしなかったら死ぬ程後悔する、それが嫌だから手を伸ばす…俺の憧れの男がそう言ってた、あと戦う気がないなら手を伸ばすのを辞めたなら引っ込んでろ邪魔」

「辛辣ですね我が魔王」

「そうかい？まあ答えは貴女次第だけだな……………さて」

アナザージオウは槍を敵に向けると

「続ける？」

「当然でしょ…兄さんが私に勝てた試しがある？」

「ぶっ潰してやる！」

「本当痛い目みないと分からないのよね！頑固者！」

アナザーツクヨミは互いに示し合わせたように走り出したが

「お待ちを我が魔王（女王）」

2人の従者が止めた

「な、何すんだ（のよ）ウオズ!!」

兄妹よろしくのシンクロにウオズも驚きながらも

「時間切れです」

青ウオズが上を向くと来た、へりを見て

「ちっ！帰るわよトーマ、ウオズ……兄さん」

「ん？」

アナザーツクヨミは怒りに満ちた顔で

「兄さんは必ず私達が連れ帰るから！どんな手を使っても！」

「やなこった、帰るなら自力で帰るわ」

「そういうと思った、んじや邪魔者達の足止め宜しくう」

「は？おいちよっ！人使い荒いなあ……」

と全員がへりに乗ったのを見て、奏者達は追撃しようとした

「待て!!」

「逃すかよ！」

「追わせるかよ」

アナザージオウはソロモンの杖を操作して、周辺のノイズを融合させて巨大ノイズを作成した

「アナザーライダー！」

「何すんだよ!!」

「何って…アンタらが俺達にした事への仕返しだよ張本人にはコレから御礼参りするが…そうだな、デュランダルで攻撃したことへの礼かな？ フィーニス！」

「はっ！ 『1号』」

フィーニスが変身したアナザー1号に皆、乗っかると

「んじゃさよなら！ アディオス!!」

「意味同じですよ我が魔王？」

挨拶そのままにライブ会場をアナザー1号の前輪で粉碎して逃走したのであった

—————

そしてチフォーージュ・シャトー

「はあ……ハルカ……」

帰りなり変身解除して机に頭を押し付けているハルトは妹がこの世界にいる事にシヨックを受けていた

「魔王様」

「大丈夫だよフィーニス、俺は俺のやることを果たすまで帰らないから…んで」

「はっ！不届き者は現在、地下牢に捕らえてあります！」

「うし、んじゃ先ずは其処からだな」

ハルトは気分を切り替えて地下に向かうのであつた　これはケジメである

—————

地下牢

「!!」

そこには猿轡を噛まされた立派なスーツを着た男がいた…へえコイツか

「よお、お前か俺の名前を使って好き勝手してる奴つてのは」

少し屈んでガンつけてみると俺を見るなり

「!!」

何か叫んでるが猿轡で吃っていてわからないので

「外せ」

「はっ！」

その言葉を合図にカゲンが外すと

「貴様！この私を誰だと思つてゐる私は「人の名前で好き勝手してた屑だろ？」な！一体何様のつもりだ！」

喚き散らす輩に頭を抱える前にだ

「王様」

ちよつと脅しておこうと変身する

『ジオウ』

アナザージオウになるなり政治家は怯えた目に早変わりだ変身解除しても怯えたままである

「ま、まさか本物の！」

「おう……：しつかし俺の名前で脅迫、恫喝、金銭、土地の巻き上げやら色々やってくれんなあお前……：挙句に政府の所有物扱いとは恐れいったよ」

変身解除して信用してもらつたところで話と思つたが

「と、当然だろ！貴様も日本に住むならば国民の利益になるのが名誉な事だろう！」

「国民？お前等政治家連中だけの間違いだろ？」

「何を言う！我等上級国民が貴様等のような下々の中で有能な物を有効に利用するのは当然だろ……があ！」

あまり汚い言葉しか吐かないのでハルトは八つ当たりも込めて足を振り上げて政治家の顎を砕いた序でに齒が何本か抜けて涙を流す奴を知った事ないような目で見下し一言

「囀るなよ」ミが

「が……ああああ……がふ！」

「一発で済ませねえよ俺達の看板に泥を塗りやがつて」

口から血を流しているがお構いなしに数発ボディに蹴りを叩き込んでやるとアツサリと泣きながら

「づ……づ……めんなさ……い……い……」

謝罪の言葉が聞こえたが

「は？欲をかけた権力者の末路は決まってる慈悲はねえ……まあ」

ハルトが指を鳴らすとカゲンが取り出したのはビデオカメラであった

「散々、俺達の名前で美味しい思いしたなら少し取り立てても文句はねえよな？」

ハルトの顔は悪い笑みを浮かべていた

翌日、とある動画サイトに消息不明となっていた政治家がボロボロかつ拘束された状態で自らがアナザライダーを政府所有物とホラを吹いた、そしてアナザライダー名義やその他で自分が今まで行った罪状を懇切丁寧に涙ながらに話しているというものだった次いでに何人か連名でしていたらしく後日、同じように御礼参りされ泣きながら懺悔の動画をあげさせたのであった

そしてこの動画はこのように終わる

「俺はこの国にいる理由がなくなったよノイズ騒動で避難しそびれた奴も助けねえ恨むなら上を恨め」

この後、アナザライダーに助けられたライブや現場で助けられた生存者達を中心にデモを行うと、政府連中は火消しに奔走する事となり奏者達への指示や対策が後手になる結果となったのを彼は知らなかった

動画を見ていた面々は

「これは…」

弦十郎は顔を顰めているが組織の人間ではなく個人的な感情で見たらアナザライ

ダー側に同情もあるので複雑な顔をしている

「人質を取って脅すなど何という卑劣な……」

「なあ、これって」

「先に仕掛けたのってコッチなんだろ？ オツサン？」

「ああ……まあ政府にいる一部の連中だがな」

「なら当然だろやつたからやり返された、それだけだ」

「けどクリスちゃんこんなの間違ってるよ」

「あのなあ……あのバカ連中の所為でアタシ等はアッチのアナザーライダーとも戦わないとならねえんだぞ！ 余計な敵増やしやがって」

「クリス君の怒りは最もだがな……それで現状が変わる訳でもないがな」

一方、フィーネ（仮）を自称している組織FISでは

「これ……って」

「政府の人が騙してた訳ですな……マリアの言葉を聞いて怒る訳ですよ、対話前に攻撃した事も納得しますが……しかし貴方の兄は聞いていたより随分と乱暴なのですなえ」

組織のシンボルであるフィーネことマリア・カデンツァヴナ・イヴはその光景を見て目を背けたが、車椅子に乗っている老齢な女性ナスターシャは冷静に分析し傭兵として雇った2人に視線を向けると

「それはこつちも意外ですよ兄が彼処までやるなんて……まあ相手のやった事を考えれば妥当ではありませんがね」

「けど彼処までやる必要があるのかしら？」

「マリアは知らないから忠告しますけど、兄さんはやるなら徹底的にやる人ですよ」

「そーそー受けた痛みや恩は必ず倍返しする奴だからな……今回の場合は仲間と作った組織そのものに対する侮辱行為に対する報復とみた」

トーマも言うともマリアはやり過ぎだろうと目線を向けるもハルカは冷静に

「まあ、これはこれでいい展開と見ましよう」

「どう見るデスカ？」

「簡単よ切ちゃん兄さん達は日本政府と敵対関係に入ったの」

実際、ハルト陣営は立花響陣営……正確には上層部を完全に見限り現場レベルの対応も状況次第で敵とすると決断を下した事でナツキはまた別の事で悩まなくてはいけなくなつたのである。

「それがどう良くなるの？」

「現場でもハルト達は向こうの奏者が戦うだろうから……欠片落下事件と違って三つ巴の乱戦に持っていけるって所か？」

「まあ、この政治家達の処遇を一任するからって兄さんが手打ちにしてる可能性もあるけど……ないか兄さん、その辺の政治的根回しまで頭回る人じゃないから……けど」

「けど？」

「もし政治とか交渉とか上手くできるブレインがいたらいいよ止まらなくなるわよ」

—————

その頃

ハルトはと言うと政治家連中にやる事やらせた後、アナザークイズの力で記憶や知識を抜き取りアナザーウィザードの力で転移して適当な野山に投げ捨て帰ると家臣に向かつて爽やかな笑顔で一言

「これも全部乾巧ってやつ of の仕業なんだ」

「何だってそれは本当かい！……ではありませんよ我が魔王」

「そうだね完全に犯人俺達だよ魔王ちゃん」

「そうか……おのれデイケイドオオオ！」

「今回に関してあの破壊者は冤罪ですよ！我等をオーマジオウの元に連行したのは事実ですが……」

「そうか、ん……ちよつと待て!!俺をオーマジオウの所に連れてったのつて門矢土きさんだったのか!」

「ええ私も連れられましたからね」

「本物に会ったのか!」

「はい」

「この愚か者めが!何故サインを貰わなかった!!」

「いや、あの男の所為で我が魔王は死にかけましたよね?」

「それとこれは別だ!」

「ええ……」

「それは一旦置いておいて……ウオズが2人いるから皆、気をつけるように」

「ウオズちゃんか2人とか……」

「悪夢だな」

「ほお……貴様等お仕置きされたいか?」

「滅相ありません!」

「けど何で先輩が2人も……」

「恐らく妹君が王になる未来から来たのでしようね」

「それつてつまり解釈違い?」

「有体に言えば」

「えーと：それだと妹様も魔王になるかもって事ですか？」

「じゃねえの？まあさせねえけど」

「まあそうですよね」

「俺を助けに来たのに俺の代わりに魔王になるとか無いわ、なら俺が魔王になった方が
良いだろ？」

「まあ向こうにはアナザーゲイツ、ツクヨミ、デイエンドがいる以上は警戒せねばなりま
せんね」

「それに向こうの落ち度だけど今回の件で完全に政府側敵にしたし」

「今更でしょ魔王ちゃん」

「今までなあなあだったのが明確に敵味方になっただけだ」

「カゲンの言う通りこれから奏者連中とも敵だ容赦はするなよ：まあ特に情はないが立
花響と小日向未来を殺すのはダメな：ナツキを敵に回すのは面倒くさい、あと風鳴弦十
郎に会ったら直ぐ逃げろよ敵前逃亡とは認めないから」

死に戻りして対策されでもしたら大変だし人間辞めてる奴と戦うのは嫌だと嘯くが

「本音は？」

「ん？錫音と和解した未来を作ってくれた友人への最大級の礼だよ」

でなければあの場所でオーマの日を迎えていた可能性があるから

「つー訳で非常時になったから千冬達を元の世界に送る、今日は解散だ明日から忙しくなるだろうから英気を養う事いいな」

「「はっ！」」

さて

これから始まるは巫女の残した負の遺産を巡り争う戦姫の舞の裏で始まる世界レベルの兄妹喧嘩

その始まりである

会議は踊るか進むか？

翌日

チフオージユ・シャトー、その一室

「嫌だ」「断る」

「そこを何とかお願いします！」

東と千冬に頭を下げるハルトの姿があつたのを見た家臣団は

「おーやってんねえ〜」

「え？そんなんですか？」

「ええ未来ではよく見ますよ、主に我が魔王がやらかした時とかに」

「うむ、実家のような安心感だ」

「カゲン先輩、魔王様が土下座してる光景に安心しないでくださいよ」

と色々言ってるのは無視

「だって折角の異世界旅行なのに帰れなんて酷いよハル君！」

「いや俺としても普通に案内したかったけど喧嘩を売られたから危険になったんだって！」

「しかも妹がいたとはな」

「あ、それは俺も驚いたよ何で来てると思ってたなかった」

「私はお前の義妹と挨拶するまでは帰らん」

「東さんもだよ！」

「妹の読みが違くない千冬？」

「いやその通りだよ！折角ご家族がいるなら挨拶しないと…挨拶は大事って古事記にも書いてるよー！」

「東、多分それ違う古事記」

「まあそう言う事だ、私達は帰らんぞ危険と言われようがな」

「千冬ウー」

「潤んだ目をしてても無駄だ」

「何で今日はそこまで頑なのさ！」

「キャロルに先を越されるのは我慢ならん！」

「これ以上、キャロリンにマウントを取らせてなるかあ！」

「え?そこ?」

「あと東さん達は、ハル君に少し怒ってるんだよ」

「へ?いやまあ確かに旅行出来ないのは俺のせい「違う」はい?」

「一番不愉快なのは私達を足手纏い、戦力外と見ていることだ」

「そんな事な「東さん達は守られるだけのお姫様じゃないんだよ」…」

「もうあの時の子兔じゃないんだよ?これでも少しは強いと思うけどなあ…」

「そうだな私も狭い世界でだが伊達に世界最強と呼ばれてはいないさハルト…お前は少しは頼れ別にウオズ達以外にも仲間はあるだろう?」

「けど俺の我儘に巻き込むのは「戯け」痛っ!」

「我儘で振り回すのは今更だろう?これは私達の我儘だ王なら寛容に領いていろ馬鹿者」

「そうそう」

そんな2人の様子を見てハルトは観念したのか

「分かったよ…けど外出するのは1人じゃダメ、それと必ずガジェットやドライバーを持つ事が条件ね」

「うん！」

「キャロル」

「聞こえている、良いだろう滞在するのを許してやる」

「何で上からなの？」

「ここはオレとハルトの家だからな、まあ戦闘に出番があるかは知らんが精々大人しくしていろ……補欠共」

「ほお……」

「キャロりん？少し頭冷やそうか？」

「喧嘩なら後にして、それにキャロルも煽らないでくれよ頼むから」

「ふん……まあ良い、それでお前は どうする気だ？」

「取り敢えず妹軍団を潰して元の世界に帰ってもらおうよ……最悪だけど腕くらいは折つても良いかな」

「兄妹喧嘩なら好きにしろ、邪魔者がいたら排除くらいはしてやる……あと死ぬのは許さ
ん必ず帰ってこい……」

「お、おう……ありがとう……キャロル」

「……………ん」

「おい2人の世界に入るな」

「そうだよ！ハル君は3人の共有財産だよ！」

「……残念だか最低でも後4人増えるがな」

「は？」

「未来のコイツが言っていたぞ嫁が増えるとな」

危ない気配を感じたので逃げようと思ったのだが

「詳しく聞かせて（もらうぞ）ハル君（ハルト）」

その覇気とくれば蛇に睨まれたではないTレックス級である……それに思わず

「あ、あいさー！」

と怯えながら返事するしかなかった

—————

そしてハルトはキャロルのラボに着くなり目的の人物を見つけて呼び出した

「悪いな忙しい時に」

買った缶コーヒーを投げ渡す、受け取るなりプルタブを開けて飲むのはナツキである

「良いよ別に……それで話って何だ？」

「二つあつてな……まずはあの時、錫音と和解出来たのはお前のおかげだよ、ありがとう……」

それとあの時の暴言や暴力と言った非礼の謝罪だ…本当に申し訳なかった」

深々と頭を下げたハルトを見てナツキは慌てた様子で手を振る

「い、いや待ってくれよ！俺は俺の為に止めただけだから！そこまでしなくても」

「そうだとしても今があるのはお前のお陰だからさ錫音の本音も聞けずしまいで殺し合
いをして…ネオタイムジャッカーと戦い続けてたら…」

此処からは直勸だがと前振りすると

「あの日がオーマの日となつてたと思う、本当に最低災厄の魔王になつてんじゃないか
な…あの場でなる可能性もあるんだウオズ達は見たかつたらうけど」

「ハルト…」

「お前には借りがあるからな何かあれば俺を頼れ必ず力になる…それともう一つ」

「何だよ…」

「お前は此処から先の未来を知っているのか？」

「え？」

「聞いてみただけだ本気にするなよ」

「知ってる……だから…頼む助けて欲しいんだよ」

「早速借りを返せる訳だな良いよ何すれば良い?」

ハルトはいつも通りヘラヘラした顔で尋ねるナツキは簡単にある未来を話すとハルトの顔は怪訝なものに変わる

「成る程なあ」

「そうだ出来るか?」

「出来る出来ないで言うなら出来る…だが他の連中をどうするかだ確実に俺を狙ってくるから対策がいる」

「分かった、そこは何とかする」

「出来るのか?」

「実はエルフナインと作った新型装備が完成間近でな早ければ直ぐにでも動かせる」

「へえ良い知らせだが…頼みとは言え連中を助けるのはなあ…」

「それで良い仲良くしろとは言えないから」

「それも未来の体験談か?」

「と言うよりキャロルの事でどの道…」

その一言で大体の予想がついた

「わーっつたよ、その件だがタイミング来たら連絡してくれ」

とナツキの元から離れたのであった

—————

自室に戻ったハルトは眠りに落ちアナザーライダー達と精神世界で会う

「アナザーゲイツにツクヨミ、デイエンドかあ」

「厄介だな特にアナザーゲイツが」

「そうだよなあ…」

そもそも論で俺達が現地勢力に対して優勢を誇れているのはアナザーライダーの多彩な能力やあるルールのお陰である…それは

アナザーライダーは同じライダーの力でしか倒せない

本家オーマジオウにすら通用する概念であるが稀に例外も存在する…その例外がゲイツなのであることに加え

「アナザーだから俺の知らない能力がある可能性がある」

アナザーライダーはライダーと怪人の歴史を宿すハイブリッド…しかも本家の能力に加え契約者の願望に合わせたオリジナル能力を獲得するときた

「ケケケ…誤算も良い所だなあハルト」

「そうだな…仮面ライダーと戦う可能性は視野にあったが同じアナザーライダーは予想外だぞ」

同胞と思つてた奴が敵だったからと呟く

「アナザーゲイツか」

本家仮面ライダーゲイツはジオウと同じアーマータイムを使える…その法則で行くと他のアナザーライダーへの変身能力は必ずあるだろうと考えてみると

『おいハルト、起きろ』

「おつと時間切れか悪いいな後で」

と相棒達に断り入れて起きることにしたのであった

「アナザーディケイド」

「まあハルトなら大丈夫だろう対策を上手く立てる…あと」

「アア…ウオズからアナザーミライダー達を回収しねえトナ…出ないと最悪アレが出来ちまう」

アナザーWの言う、アレとは現状唯一とも言えるアナザーとは言えジオウを倒せるだ

ろう力の事

ある未来で魔王を倒し救世主となった力だ

アナザーは本家よりも強い性能を得る傾向にある、また特性も進行中の歴史ならアナザライダーの誕生段階での最強形態の能力を得る場合がある、つまり原典よりも凶悪になってしまいう事を意味する

アナザーゲイツの力がハルトが想定した強さの先にいる事が唯一の懸念材料だ

「早く準備しねえとなアナザーデイケイド」

「そうだな…早くこの力を完成させなければ」

そう答えたアナザーデイケイドの手にはブランクウォッチが握られていたのであった

—————

意識を浮上させたハルトは起こしてくれた人物を見て柔らかな笑みを浮かべると

「起きたか？」

「うん……おはようキャロル」

体を起こし欠伸びながらも

「ああ、それで束達は?」

「散歩してる、多分束辺りはエルフナインちゃんというんじゃない?」

「やはりか……ちっ!」

「少しは本音隠せよ……つたく、ほら」

ハルトはキャロルを抱き寄せて背中を軽くポンポンと叩く

「お……オレを子供扱いするな!!」

「2人と仲良くしろよ……頼むから」

「良いだろう、変わりにこの世界にいる間はオレを優先しろ」

「へいへい」

束と千冬とは数年いたからなあ、キャロルといえるのには文句は無いだろうと思うし俺としても一緒にいたいからな

「んじや久しぶりに朝飯作るか……何食べたい?好きな作るけど?」

「任せた……オレは少し部屋に籠る出来たら呼んでくれ」

「おお……って何作ってんだよ」

「知りたいなら少し待て」

「わーった……けど無理したと判断したら寝かせる」

「ほお、何だ寝かしつけてくれるのか?」

「スリープの魔法を使うんだよ」

「変な所で効率を重視するな！」

「つせえ！でないとこの間みたいに深夜テンションでハジけるだろう？」

「何だと！」

「事実だろう？まあして欲しいってならやってやらん事もないがどうする？」

「やれ」

「え？マジ？」

「ハツタリか？このヘタレめ」

「な、やってやらあ！」

『煽り耐性が低すぎるだろ』

『ギヤハハハハハ！普段煽るから煽られるのには慣れてねえンダよ』

この後は久しぶりに食事をとりゆっくりとした時間を過ごした

—————

そして翌日、皆を集めて会議を開いた

「取り敢えず状況の整理と行きましよう」

ウオズの言葉を合図にハルトが話始める

「ああ…まず連中の正体は束がクラッキングしてくれ情報の中にあった、連中はF I

S 言って言ってフィーネが米国にシンフォギアの情報を売り渡しながら併設させた自分の復活する為に必要な器を集める施設の人間らしいな」

「では今回は米国が関与を？」

「いや独断らしい、何でも月のかけらが落ちて質量が変わった結果、として月が落下する云々…それを止めたいらしいな…これはウルトラマンファンでもある俺としては絶対的に月の落下などさせたくない」

「本当に余計な真似をしてくれましたね」

「あの時デュランダルで吹き飛ばされたフィーネは死んでなく別の器で復活したそれが彼女って事か」

映像に出たマリアを見てウオズは不本意ながら称賛する

「しかし用意周到ですね死んだ際のバックアップがあるとは」

だがハルトは

「まあ世の中には私は不滅だー！とか言って何度も蘇るコンティニュー機能持ちゾンビ神もいるくらいだからな」

「それ別の世界の神様だよね魔王ちゃん？」

「そうだな…けど理屈的には似た者だろ？まあフィーネが神様になって宇宙にコミット

してるかは知らんがな」

「えと……どんな神様なんですか？」

「ん？ ああ檀黎斗神って言って普段のテンションが深夜のキャロルみたいな感じな奴だ」

「うわあ……」

「おい……今のはどう言う意味だ！」

「まあそれは置いといて「置いとくな！」取り敢えず敵の戦力はこんな感じ」

指を鳴らすと映像は切り替わり電鋸、大鎌、短剣を持った少女達に変わる

「シンフォギアは4機に加えてアナザーライダー3人」

「対して政府側はシンフォギア奏者4人ですか」

「俺達はアナザーライダー3人、仮面ライダー4人……いやキャロルとナツキを合わせれば6人か」

戦力的には優勢であるがシンフォギアにはハザードレベルのように感情の振り幅で強化される傾向がある為、一発逆転があり得るから油断ならない……また政府側の奏者もライブ会場で残されたノイズを一掃したS2CAだったか？ そんな奥手もあるらしいので要注意だ

「しかも先日の動画で日本政府は俺達を危険人物認定してるから政府側の奏者も攻撃し

てくる可能性がある油断しないように特にウオズは顔バレしてるから気をつけるように」

「畏まりました我が魔王」

「そんで取り敢えずの方針なんだが東とクロエは此処に残って情報収集お願い」

「分かった!」「はい」

「前線に出るのは俺、ウオズ、ジョウゲン、カゲン、フィーニスと…千冬頼めるか?」

「任せろ」

「頼んだ、後はナツキだがお前は好きにしろ」

「ん? いいのか?」

「お前の場合は変に拘束するよりも自由にさせた方が都合が良い…だがライダーシステムの管理は気をつける事」

「分かった」

「後は何か報告ある?」

「はいはい! 東さんがクラッキングした情報んだけどさくネフィルムって何?」

東の問いに

「「っ!!」」

驚いたのはキャロル、エルフナイン、ナツキ

逆に知らないのは魔王軍である

「俺は知らないかど…知ってるのかキャロル？」

「ああ…ネフィリム…あの鎧やデュランダルと同じ完全聖遺物で自立行動をすると聞
く」

「はい、そして聖遺物の欠片を食べて成長します」

「ふーん」

「そして成長しきった姿から放った攻撃は1TK（テラケルビン）…つまり一兆度の火球
を放つんだ」

「一兆度の火の玉!?それって確か…束さんの計算だと……っ！太陽系所か数光年先まで
焼き払える熱量だよー！」

「何というか規模が大きいな色々と」

「なあナツキ、ネフィリムには硬いバリアや瞬間移動能力とか光線吸収能力とかあつた
りするっ？」

「いやそんな能力は無かつたな…バリアじゃないけど再生能力があるから生半可な攻撃
じゃ意味がないな」

「そうか取り敢えずだがネフィリムも何とかしないとイケないな」

「対策はどうしますか？」

「キャロルと束は…急いでペンシル爆弾と発射装置を作ってくれ」

「ペンシル爆弾? 何だそれは?」

「ネフィリムを倒す為の秘密兵器と言っておこう…詳しくはこれを見てくれ」

そう言つてハルトが取り出したのは彼永遠のバイブルである、ウルトラマンのDVDであつたのを見て

「これは……」

「俺の先生だ人生で大事な事は彼等から学んだ」

「ほおハルトの先生か」

「束さんも見たけど…確かにハル君が会いたい理由もわかるよ」

「だろ?」

それを聞くとナツキは立ち上がり一言

「ネフィリムはゼツ○ンじゃねえよ」

「え? 違うの!?!」

「まさかと思つたけどやっぱりか…瞬間移動やらバリアやら色々聞いてきたから不安

だっただよ

「ん？一兆度の火の玉って言えばゼットンの名詞だろ？ウルトラマンいないんだから地球大ピンチじゃん」

「いや確かにピンチだけど：敵はネフィリムだからゼットン違うから」

「だからこそゼットンを倒したペンシル爆弾を作らないと！」

「隠す気なしか！ペンシル爆弾が効かなかったらどうするんだよ！」

「そうなたらもつと強力な兵器で相手してやる！ネフィリムがそれより強いなら更に強力な兵器で！」

「それは血を吐きながら続ける悲しいマラソンだよ!!セブンさんも言ってたろうが！」

「本当にごめんなさいセブンさん：貴方から教えられた事なのに……」

「凹んだハルトは無視してと冗談は置いといてゼットンはまだ覚醒しないから安心してくれ」

「まあ時間の問題だがな」

「分かった、取り敢えずアナザーゲイツやツクヨミが現れた迎撃に出る感じで行こう」

と方針を決めた後

「んじゃ皆！一緒にウルトラマン見ようぜえー！」

「おー！」

「いや真面目な空気どこやった！」

日常と非日常はバランス良くいかない

それはチフオージユ・シャトーにてナツキから提案された

「学祭イ？」

「リディアンで学祭があるんだ良かったら行ってみたらどうだ？」

「学祭って…何で俺がそんな所に」

「まあ家族サービスと思つてよ、それに息抜きも大事だぜ？」

「うーん…まあ確かに千冬達に旅行らしい事させてあげてないからなあ…わーつた行こう」

「つしやチケツト渡しとくから気をつけてな」

「おう」

———
つて訳で

「また来てしまったな」

ハルトは苦虫を噛み潰した目でリディアンの正門を潜った

「何だ良い思い出がないのか？」

「良くも悪くもな」

主にフィーネに攻撃したり奏者の攻撃でガードベントしたり、ドヤ顔で自慢してた大砲をフィーネスが破壊したりした位で大した事はない

『今更だけど結構やらかしてるな』

「それは言わない約束で頼むぜ相棒」

「まーまー、今日は遊びに来たんだから楽しもうよ」

そう言う束はTPOに合わせて服を着ている位には配慮はしてくれているが

「た、束さん！何故腕を組むのです!？」

腕に柔らかいものが当たってるんですけど！

「いやあハル君とのデートも久しぶりだなあって」

「ん？デートとかしたか？」

「酷っ!」

「冗談だよ…ん？千冬？」

何故チラチラと周りを見るのですか？と思つたら恐る恐るだが腕を組んできた

「千冬さん!？」

「束だけに役得はさせん」

「チーちゃん最近欲望に正直だね」

「誰かさんの影響でな」

「ふふふ…両手に華ですね、お父さん」

クロエは笑っているが周りの目線が痛い嫉妬の炎に焼かれそうだよ、だってタイプの違う美女が2人なんだから…って

「クロエは良いのか？」

「抱きつく所がありませんので」

「あつたらやる気だったのか？」

「はい、羨ましいです」

「クーちゃんは本当にハル君が大好きだね」

「はい勿論お母さんも大好きです」

「やばい泣きそう」

「私もだよ」

「イチヤつくのも後にしろ日が暮れる」

「はーいー」

「はあ……」

「頑張ってください千冬さん」

「ああ、ありがとうクロエ」

「あれ？そう言えばキャロりんは？」

「え？いや誘ったんだけど…」

「おいナツキ！オレのチケットが無いだと！どう言う了見だ！」

「ちよつと待ったコレには深い理由が！」

「問答無用」

「わ、分かった！今度、ハルトと二人の温泉旅行手配するから許して！」

「まあ良いだろうだが次はない…：行きたいが断るとしよう…：だが忘れるな」

「はい！ありがとうございます！」

「ナツキさん最低ですね」

「いやエルフナインの言う通りだわ…：今回はマジで反省してるけど必要な事でもあるからな」

「未来の為にですか？」

「うん…：…でない」と

—————

「何故か断られたんだよ」

「珍しいねえキャロリンなら行くって言うのに」

「だろ？……お！これが美味しいもんMAPか…制覇しようぜ」

「オー！」

「キャロルの土産にでもするとしよう」

「そうだな千冬、行こう！」

「ああ」

—————

その頃、別の集団が近くの木に寄っかかり話し合っていた

「切ちゃん私達の目的は学祭を満喫する事じゃないよ」

「いやいや、これも作戦デス」

「作戦？」

金髪とツインテールの女の子 暁切歌と月読調の2人は怪訝な顔で話していた

「人は誰しも美味しいものに引き寄せられるのデスよ、だからこの美味しいもんMAPを使うのが目的の近道デス」

「……………」

切歌の提案にジト目で睨む調を見て

「調ちゃん可愛い!!」

思わず抱きしめたハルカを横目で調はポツリと

「離してくださいハルカさん」

「お姉ちゃんって呼んで!!」

「……………」

プイと顔を背けられて凹むハルカであるが

「大丈夫大丈夫、クライエントには私から言っておくから2人は学祭を楽しみなさいな
仕事は私がするから二人の任務は学祭の満喫よそれとセレナの土産も買わないとね」

「ハ、ハル姉!ありがとうデス!」

「良いのよ切ちゃん!もう本当に素直で可愛いわあ〜」

切歌に頬擦りしながら満面の笑みを浮かべるハルカを見て二重の嫉妬で頬を膨らま
せる調を見て飲み物持つて現れたトーマは困った顔をしながら

「ハルカ程々にしろよ……たく最近忙しかったから……2人を甘やかし過ぎだろ」

「良いじゃないのトーマ、甘やかすくらい私はお姉ちゃんだぞ!!」

「はあ……」

調と切歌を両腕で抱えて言う言葉にトーマは溜息を吐く

「それに切ちゃんの作戦は正解よ」

「え？」

「私知ってるもの美味そうなものに惹かれる人」

「誰デスか？」

「私の兄さん……今頃何してるのか……しら」

「どうしたよ……え？」

ハルカが固まったのを心配して視線を向けたトーマも言葉を詰まらせていた
その先には

「ハル君！はいアーン！」

「あー……ん……美味しいな……えと束、アーン」

「あーん………幸せだねえ！」

「は、ハルト……次は私に……」

「はいアーン」

と美女2人と一緒に食べさせ合いという甘酸っぱいイベントをしている兄の姿が
あった

「……………」

その光景をこの世のあり得ないものと見ていたハルカは手に持っていた飲み物を落

としかけるが調が慌てた拾ったので溢れるのは避けられた

「は…ハルカ…アレって…」

「トーマ行くわよ！」

「は、はい!!」

その庄に押されたトーマはハルカの後ろをついていった

そして

「幸せって気づくとあるものだなあ」

「そうだな」

「まさか生きてる内で親になるとは思わなかったよ」

「本当本当、正に事実は小説より奇なりい！」

「だな…本当に俺は幸せ者だな…千冬もう一口」

「ん、ほら」

「あー何、公衆の面前で何イチャイチャしてるのよ兄さん!!」あむ…うん美味しい

あ?妹よ元氣そうだな…お礼にアーン」

「辞めなさいよ恥ずかしい!」

「何でいんの?」

「話す必要あるかしら？」

「だよな此処で話す奴はいないな」

「兄さんは何しに……って話さないか」

「デート」

「話してくれた?! いや待ってどっちと?」

「2人と」

「2人……あ、ダブルデートって訳ねナツキさんもいるって言ってたし……でどっちとなのよ?」

「いやいや俺とこの2人で」

「嘘ダ!!……兄さん騙されてるわ!」

「んな訳あるか健全なお付き合いだ」

何処かでカラスが飛んだような気がしたが気のせいだろうと思つてたら

「君がハル君の妹だね! 初めまして私はハル君の彼女、篠ノ之東だよ! 宜しく」

「織斑千冬だ……君の兄とは将来を見据えたお付き合いをさせて貰つてゐる挨拶が遅くなつて申し訳なかつた」

「あ、いえご丁寧にありがとうございます! 私は常葉ハルカです兄がお世話に……え? 兄と交際してゐるんですか!!」

「そうだよ！束さんとチーちゃんはハル君と男女の仲なのさ！」

「後、もう2人いるがな」

「よ…四股…あの甲斐性なしの兄さんが…」

「ハルカ落ち着け」

「なんだトーマいたのか」

「いたよ…つたく聞いてたとは言え間近で見るとくるな色々と」

「うるせえお前には関係ねえだろ」

「俺は一応未来の義「ん？」いや…なんでもない」

「戦いに来たなら後にしろ…この祭りの邪魔をするな楽しいデートが血で汚れるのは勘

弁したい」

「私もよ兄さん…なら、その子は誰？」

「あ、そうだなクロエにも紹介するよハルカ俺の妹だ」

「初めましてクロエ・クロニクルです。お父さんの義娘です宜しくお願いします

ハルカ叔母さん」

その何気ない言葉に東、千冬は『ヤバイ』と言う顔をハルトは爆笑している中、調、切歌、トーマが恐る恐る見たハルカはまるでファントムを生み出さんばかりの絶望顔をし

「……………」

色んな感情がごちゃ混ぜになり泣きそうになっていた

「あの……大丈夫ですか？叔母さん？」

「……………お……さ……ん……」

「はい？」

「ハルカお姉ちゃんって呼んで！お願い!!……って兄さんの娘!？」

とクロエを掴んで肩を前後で揺らしているハルカを見て

「お前の姪だぞハルカ」

「ど、どう言うこと!?!ってどつちの娘!!」

「はいはい！東さんだよ」

「に、兄さん！いつの間に結婚を……と言うより大人の階段を！」

「あ、まだ式は挙げてないし登ってないよ」

「そうなんだ……けど兄さんや東さんと」

「似てませんよ私は2人の養子ですから」

「……………」

「嫌ですよね私みたいな「そんな事ないよ」え?」

「兄さんが娘って認めたなら血縁なんて瑣末だから私にとつては可愛い姪よクロエちゃんもしね父さんや母さんも同じ事を言うから安心して…変なこと言おうものなら物理的な交渉するから安心なさい」

その態度を見てクロエは柔らかに笑い

「ふふ…ハルカお姉さんは本当にお父さんの妹ですな優しい所がそっくりです」

「ありがとうクロエちゃん、けど私は彼処の放蕩兄とは違うわよ誰が似るものですか」

「折角可愛いクロエが誉めてるのに一言余計なんだよ別世界で妹を増やしてる沸騰脳みそが」

「ええ?1人に決めれないで沢山の現地妻を囲ってる兄さんに言われたくないなあ」

「全員幸せにするって決めたんだよ外野は黙ってろ」

「ええ私は貴方の妹ですけどお・兄・ちゃん?」

「辞めろ気持ち悪い」

「それはこっちのセリフよ」

「あっ？」「はっ？」

「お、おい喧嘩は辞めろよ」

トーマが止めたので冷めた目で睨み合う2人を見て

「よ、よし祭りのイベントで蹴りつけよう」

「それなら良いのがあるわよトーマ」

「そうだな」

「喧嘩祭りだ（よ）！！」

アナザーウォッチを出そうとする2人をトーマと千冬は慌てて静止すると

「さつき楽しい祭りで血を見るの嫌とか言っただけだ!」

「沸点が低いぞハルト!」

「大丈夫だよ兄妹喧嘩だから」

「ええそうよ…本当に」

2人は火花を散らしている中

「あの……」

クロエはハルカといた調と切歌に近づく

「何?」

「えっと…貴女達はハルカお姉さんの妹ですか?」

「そうデスね」

「あの人の主観だとそうみたい」

「あの…お二人から見てハルカお姉さんってどんな人ですか?」

「私達から見ると優しいけどそれ以上に心配な人…昔から世話焼きのお姉さん…けど偶に今みたいに暴走するから大変」

「デスね」

「そ、そこはお父さんと同じですネ」

「貴方のお父さん…ハルカのお兄さんってどんな人？」

「同じですよ…知らない人は血も涙もない魔王と呼んでいますますが私から見れば子煩悩な優しいお父さんです」

「そうだね、あの時と同じ人に見えない」

「彼処まで意地っ張りなハル姉を見たのは初めてデス」

「私も彼処まで闘争心剥き出しのお父さんは初めてみますから」

と仲良く会話しているが当事人同士は見て見ぬふりで喧嘩しそうになったいたので千冬の目線に入ったのは

「ほお…歌唱大会飛び入りありかアレで喧嘩の変わりで行かないか？」

「勿論」「千冬が言うなら仕方ないなあ」

—————

そして歌唱大会に飛び入り参加する事にした、何やら勝てばツヴァイウィングから景品が貰えるらしい……が

「興味ねえー」

誰が武闘派アイドルのグッズを欲しがるかよ貰って喜ぶ人はそんな奴俺の周りに……いた

「錫音喜ぶかな？」

「また別の女の名前を……いつか刺されるわよ兄さん」

「構わない、その時は俺が悪かったただけだ」

「ふーん……やっぱり帰らないの？」

「やらなきやいけない事がある……全部終わったら帰るよ」

「そっか……けど私は兄さんの事情無視してでも連れ帰るから」

「いいんじゃないの？俺は人のやりたいことを否定しねえよ好きにすれば良いさ」

「それ……昔の私への当てつけ？」

「さあテメエで考えろ」

「次の方、どうぞー！」

「はいー！んじゃ後で……フェアにやろうぜ」

「うん！負けないから！」

「おう」

ハルトはマイク片手にステージに立つ前に同アナザーリバイスウオッチを起動してバイスを顕現させると予備のマイクを投げ渡し

「つしや！やるぜバイス！」

「おうよ！俺つちとハルトのコンビネーションを見せてやろうぜ！」

「それじゃあ歌うので良ければ聞いて下さい！俺と着ぐるみバイスでlive Dev i
ー！！」

それを舞台袖で見ている妹は歌い終わるなり

「二人とかズルっ！！」

「ははは！何を言うバイスは俺から生まれた悪魔だぜ…つまり俺llバイスってな訳だQ
ED！」

「そう言う訳だ！ザマアみろ！！このアマ！」

「何で俺より当たりキツいんだバイス？」

「知らね？」

「この卑怯者！」

その後、ハルカも負けじと持ち歌である will save us を歌ったが結果で言えば同点引き分けな上に雪音クリスに敗北したのであったが

「チャンピオンに挑戦「デース」

「頑張れ二人ともお！」

と応援するハルカを見て

「同じ大人としてあぁなりたくないなあ……」

「ハル君、クーちゃんも歌いたいらしいから出たんだけど……」

「クロエ頑張れえ!!」

「この馬鹿者めが」

「やっぱりこう見ると兄妹だな」

こんな感じでゆったりとした学祭であったが

—————

そして暫く経ったある日の事、ある博打としてハルトは東に依頼し複数のサーバー經由で政府側にメッセージを送ったのだ内容は

指定座標にて待つ、代表一名でこられたし
もし約定に背けば相応の報復あり注意せよ

ーアナザライダーよりー

と

「ナツキの頼まれ事とは言え…あの怪物と話すのかあ」

あの俺とは別の意味で人間辞めてる怪物と好き好んで対話などしたくない…一応、あの時と同じロープで顔は隠しているから大丈夫だと思ふ雰囲気作りで高い場所に腰掛け、右後ろにはウオズが立ってくれている

「良い機会ですから以前の無礼者共に対しての賠償でも狙いますか？」

「しなくて良いよ…まあ欲に目が眩んで多人数で来たら考えるけど」

種は時かかてるから後は発芽させるだけだしとアナザーウォッチを手に持ち遊んでいると

「お、来た来た」

気配を感じたハルトは嬉々として来客を出迎えた

「ようこそ風鳴弦十郎、二課の長よ…こうして直接は久しぶりだね」

「アナザーライダー……いや常葉ハルト君か」

「名前……そうか……あん時見てたんだっけか？」

ライブ会場の映像はシャットアウトしたつもりだったが二課の端末は別回線だった訳か身バレしちやつてたか

「そうだ戸籍を調べたら君に行きついた」

となるとチフオージュ・シャトーの前に住んでた家もガサ入れされてるな

「プライバシーに配慮してくれてないねえ」

フードを脱ぎ意味ありげに笑うが

『結果論だがアナザージオウⅡが戸籍作つたのは失策だったか？』

ーいや別に当時の状況を考えれば最善だ本当に結果論だから責める必要はないー

そんな内面の取引など露知らない弦十郎を見て

「取り敢えず約定通り一人で来てくれた事には感謝するよ、俺としても顔バレは望む所じゃないからね」

「単刀直入に聞く、何故対話を？」

「それがあの人の望みだから……奏者……正確には立花響って一人の女の子を助けて欲しいと」

「何だと」

「世界初の聖遺物と融合している存在……だが度重なる力の行使で聖遺物が彼女の体を蝕み初めてると聞いた」

「っ!!」

力が自分に牙を剥く

仮面ライダー では良く事、力の代価だ

剣・キングフォームやオーズ・プトティラの侵食系のデメリットしかり

ゼロノスの代価である記憶の忘却のようなものだろう

因みに俺の好きな代価としてはハザードフォームの暴走だろうか……あの兵器として完成しているビルドの姿にTVの前で震えたのは良い思い出……その後のトラウマは別として

「あの人には個人的な借りがあってね返す為に少しでもお手伝いしてるんだ」

「それは願ってもない事だが響君の事は……」

「神獣鏡」

「っ！何故その名を！」

「魔王の情報網を侮るなよ、俺は地球という大きなデータベースと直結してるんでな」

「ははは、面白い冗談だな尻尾は掴みませんか」

本当である、この男アナザーWの力で地球の本棚にアクセス出来るのだ…普段は面倒くさいのでアナザーWに検索を丸投げしているが

「あの魔を祓う聖遺物の力ならば彼女を蝕むものも取り払えるだろう…まあ適合する奏者が確保出来るかは別問題だがな」

「だ、だがあの聖遺物は…」

「行方知れずだろ？」

「ああ…」

「だから俺が来た神獣鏡の居場所を提供してやる」

「代価は…」

「ない、さつきも言ったがコレは個人的な借りを返す為だ代価などいらん、俺個人として魔王の名前で好き勝手してた下郎を放置した貴様等は信用に値しないと見てるんでな…あの人に頼まれなかったら誰がこんな事。場所はこの紙切れに…あ？」

ハルトは不愉快に顔を歪めた、何故なら

「動くな常葉ハルト！貴様を内乱罪、騒乱罪、凶器準備集合罪で逮捕する！」

「それテロリストに使われる法律だよな？」

ハルトの体には複数の赤い点が出ているレーザーポインターか…多分だけど外には狙撃手もいるな

「あははははは！いやあまさか此方の親切心が裏切られるとはねえ…流石は組織の長だ腹芸も出来たとは武力頼みの脳筋とタカを括ったのは反省だな」

「手を上げろ！」

「ま、待て！お前達、何故ここに！」

「大方、アンタを尾行してたんだろうなあ…んで黒幕の狙いは俺の力と部下って当たりかな…この間の件で失墜した外国への信用回復かは知らないがテメエ等の好き勝手に俺を振り回せると思われてんなら心外だ」

「何とでも言え、この国の安全とより良い未来の為に前前の力を利用してもらう！そして明るい未来のために！」

「自分達の為だろ醜いな本当…けと約定に背けば相応の制裁があるのは見せないかね」

「黙れ！さあ地面に手を着いて我等に頭を下げな…聞けば美人を囲ってるそうじゃないか、俺達も上司のおこぼれに預らせて貰おうか」

「それがお前達の本音って訳か…下衆共…あくもうコレだけは使いたくなかったのに別

に良いか」

「観念しろ！そしてその力、我等組織の為に使うのだ！」

その言葉を合図にハルトは嫌々と言う顔でウオツチのスイッチを押す
「お前等は敵だ、その末路も受け取れ」

そして起こるのは

「あ……があ……ああああああああああ!!!」

種の発芽 即ち 人から新たな種への強制的な進化である

「ウオズじゃないけど……祝え新たな種族の誕生を」

目覚めなくても良い魂と野心

魔墟

「ガアアアアア！」

「お、選ばれた奴がいた」

「祝いませんよ我が魔王」

「うん、さてさてどうなるかなあ〜」

以前、魔王の行動により発生したデモと一部の政治屋連中の暴走による結果、外国の信頼が失墜した事で完全に面目を潰された政府上層部は今回、魔王が自らコンタクトを取ったことを知るや否や、特殊部隊を投入し魔王と魔王軍の身柄確保に動く以前述べていた政府保有の兵器とするという帳尻合わせの為、その愚かな欲望の対価は自らの血で持つて贖う事となるとは知らずにいた

「楽しんでなあ、あー！」

特殊部隊の何人かは急に苦しみ始めるとハルトは座っていたが興味を持ち落とされた銃を拾うと構えた

「つと…おお！本物じゃん！見てウオズ！」

「念の為回収して行きます？」

「そうだね！どんなものもいつ必要になるかわからないし沢山集めよ！特に弾薬は肝心だよ、今回の迷惑料ね…本物を撃てる日が来るとはなあゝ」

とウオズと一緒に銃と弾、装備などを拾い始めるハルトに弦十郎は問い詰める

「常葉ハルト！彼等に何をした!!」

「え？言つたでしょう？制裁つて今回のメッセージ見て俺の事を物扱いしてる連中が狙ってくるのは読めてたからな…対策はするよ…けどまさか俺の特別に手を出そうとするとおは恐れいった…結果論としてはアンタには見事に裏切られた訳だな」

「そ、そんなつもりは…」

「言い訳とかどうでも良いよ俺は被害者でアンタ等は加害者だ、あの人に渡してくれと頼まれた神獣鏡の正確な居場所だけどさ」

最悪のケースがよぎった弦十郎の予想は見事的中した、その紙切れを折り曲げると

「ま、待ってくれ！」

「やなこつた」

アナザーウィザードの炎魔法で紙切れを燃やし灰にした

「っ！」

「さて……そろそろかなさあ！happy birthday！」

「うわあああああ！」

その言葉を合図に何名かは姿を変え初めていた

「everybody, crap your hands！」

ハルトが手を叩くと部隊のメンバーの顔は変わり果てた異形へと変わる

それは緑色の髑髏、人ならば何れ至る可能性の一つ 誰にでもなれる故に資格は誰にもある……その頭部のヘルメットが砕かれ現れたのは異形の顔であった

「アナザーはカッコ良いなく他人がなるのを見て初めて初めてだからさあくだから教えてよどう？アナザーライダーになった感想は？」

「あ………ああ………」

「うーん……やっぱり俺以外がなると自我がない感じかあ？アナザーアギトの本体は別だしい増殖個体だから当然なんだけど、なんか結果が分かっている理科の実験みたいにつまらないなあ？変に失望もしないあたり余計に……ねえ君はどう思う？」

と怯えてる隊員に問いかけるがそれどころじゃない隊員に目がけて一歩一歩と進めるアナザーライダーを見て

「う、うわあああああああ！！！」

「ま、待て！迂闊に撃つな！陣形を…ちい！」

特殊部隊は混乱して同僚だった怪物に銃を撃つが効かぬと言わんばかりに接近して仲間だった者に襲い掛かる

「あははは！そんな豆鉄砲が効く訳ないじゃん、そいつは頑丈な鉄板貫通するハンドガンの掃射にも耐えるし俺の再推しである仮面ライダーG3より強い奴に効くかよ！」

本来ならば1人しか存在出来ない筈のアナザーライダーにいる例外中の例外、その異常性からハルトも使用を躊躇した程のもの

『アギト』

仮面ライダーにされたもの アナザーアギト

そして襲い掛かった個体が特殊部隊の1人に馬乗りになる

「お、1人目か」

「や、やめろ…やめてくれえええええ！」

「た、頼む！アンタなら止めれるんだろ！頼むよ！止めてくれ!!」

仲間達の懇願もハルトは笑顔で断る

「そう言われて辞めると思う？俺を殺そうとしたんなら殺される覚悟を持てよ」

さながら死刑宣告と言わんばかりに頼みも聞こえないアナザーアギトは嘯み付いた

「うわあああ……ああ……」

悲鳴は気づけば遠くなり、唸り声を上げて現れたのは同じ顔のアナザーアギトであった。

「増えるんだなあ〜コレが」

増殖能力 襲われれば本体を倒さない限り再現なく増え続ける それを理解したら人が取る行動は一つ

「て、てった……」

「え？誰！人生かして帰さないでね〜」

逃げようとするのを見逃すようなお人好しではないアナザーアギトは本能に従い仲間達だったものに襲い掛かる、それは自分達の場所まで来いと誘っているようにも見える

「た、隊長!!助けて……うわあああ!」

部下の1人も足を止めてしまったので同じように襲われてしまった結果など

「あああ……あああ……」

「こう見るとゾンビパニックって怖いなあ……まあ、あの社長のゾンビクロニクルってこれよりは良心的なんだよね倒したら相応の見返りあるから」

同じアナザーアギトになり仲間を襲い掛かる、後は鼠算式が増えていく阿鼻叫喚の絵に

ハルトは喜びよりも同情の感情があつた

「けど勿体ねえな」

ハルトの視線には最初にアナザーアギトになつた隊員に目が行く

「世が世なら仮面ライダーになれたかも知れないのに」

俺がアナザーアギトの力は変身と増殖能力、しかし噛み付かないでアナザーアギトにさせるには一つ条件がある

アギトの因子を持つ者のみアナザーアギトに変身させられる

脅しとしては十分だな

『いや脅しに聞こえないぞ』

ー良いんだよ、この位言わないと分からない連中なんだからー

と念話しているとアナザーアギトの一体が弦十郎に襲い掛かるが

「っー！」

「ガアアアアア……」

見事な正拳突きが急所に当たったアナザーアギトは壁に減り込む位まで吹き飛ばされる。減り込んだ瞬間、アナザーアギトは爆散して人の姿に戻って光景を見て、ハルトは頬杖をつきながら絶句した

「増殖個体とは言えアナザーアギトをワンパンって……やっぱり人間辞めてやがるな化け物め」

「あの時にも言ったが君には言われたくない！」

「ですよね……ウオズ!!」

「はっ」

「帰る、この世界の人間には失望した……そんなに自分の利権だけ求めるなら滅んじやえ
ば？それがきつと地球の為だよね」

この世界の人間の醜さはきつとウルトラマン達でさえ地球を去る決断をするくらい
だと一人呟く

「ま、待ってくれ！」

だがナツキへの義理もあるので最低限の情報だけ流す

「はあ……神獣鏡はシンフォギアに加工済、後は起動すればOK」

「っ！」

「そんだけ……じゃあな」

ハルトはウオズのマフラーワープで撤退すると、それを合図にアナザーアギトに変身
していた人間は元の人間に戻ったのであつた

—————

チフォージユ・シャトーの研究室で

「悪いなハルト」

ナツキは申し訳なさそうに……しかし少し含みがあるような顔で謝ってきた

「テメエ…俺が襲われるって知ってたなら先に言えよ」

「悪かったって…俺の知ってる歴史だと特殊部隊強襲なんて無かったんだ多分だけど…俺の知ってる未来と分岐したんだろうな」

「だとしてもだ…こんな所でアナザーアギトの力を使いたくなかったのに…」

「ナツキ殿、我が魔王のこれ以上、不興を買うような真似は控えて下さい…でないとならば我が魔王の恩人とは言え我々にも我慢の限界がありますから」

「承知してるよ…それで」

「約束通り伝えた、神獣鏡はシンフォギアになってるって…まあ場所は教えなかったがな」

「そうか」

「次は？」

「この後、立花響と小日向未来が争う…結果として」

「フロンティアって大きな空島が出てくるんだろ？」

「ああ響と未来は無事でフロンティア事件も解決はするんだけど」

「お前の知ってる歴史だと二課預かりのソロモンの杖が俺達持ちだからバビロニアの宝物庫が閉じないから、その未来がわからねえって事か」

とソロモンの杖を見せつけるハルト

「ああ…それでだ…ソロモンの杖を渡してくれないか？」

「断る何で俺がアドバンテージを捨てる必要があるんだ？」

「っ！」

「ソロモンの杖を放棄する以上のアドバンテージがあるなら分かるがなタダで渡すのは嫌だ」

「協力してくれるんじゃない？」

「そうだけど一回襲われた以上、危険手当ががいるよね？これ以上のタダ働きはやなことだ、これからギブアンドテイクでやろうぜ」

俺を利用するだけ利用して捨てる気なら友達でも許さない、少なくとも錫音への義理は返した以上は付き合う理由もないしな

「……………」

「見返り無いならこの話は終わりだ」

「フロンティアを乗っ取るのはハルト達のメリットにならないか？」

「は？」

「俺の知ってる歴史だとキャロルはチフォージュ・シャトーを破壊する…そうなった時に自分の拠点になる場所があるのは便利だぞ」

「へえ」

言外に続けろと促すと

「フロンティアは元々異端技術で作られた外宇宙船だ……人が生きていくのに必要な環境は備わってるし自活出来るようになるんだ……キャロルやサンジェルマンさん達がいるなら異端技術をライダー技術に転用するようになるだろうから手の中に収めるのも無理ではない、ネフィリムが動力だが変わりを使えば良いんだ」

「ふむ」

「フロンティアを拠点にすれば政府連中だつて今回みたいなバカをする奴は減るだろう……それに」

ハルトが王様、国民は魔王軍達、政治体制は王政で主権もある つまり

「公的に国家を名乗れるつて訳だ、フロンティア空中国家構想だ各国の制空圏を掌握してるとなれば馬鹿な真似をする奴だつていない、いけば上空から爆撃されるだけだ」

「空中国家ねえ……そんなの魔王じゃん、でも最上で完全掌握した場合でしょ最悪の場合フロンティアは破壊される場合は結果タダ働きになるお前のプランは博打が過ぎる……ウオズ？」

「……………」

「……………」

「素晴らしい！空中国家を建国し世界を見下ろす我が魔王……これは面白い！」

「ウオズ？」

「そうかこの事件で我が魔王は…なるほど…やはり歴史とは面白い…」

「おーいウオズさーん」

「だとしたら…っ！我が魔王、ここは一考すべき案件と具申いたします！」

「へ？いやだけど？」

「彼の言う事も一理あるかと…今の我が魔王は彼女の家に居候してるヒモですよ？家主なら家を持つて迎えるべきでは？」

「っ！ひ…ヒモだと…っ！」

「そう言われて振り返る…元々の家に帰れない以上はキャロルの家に住まわせてもらっている家事周りはしているがこの世界の俺は無職だ」

「今の俺…キャロルに養われてるのか…ふふ…伝説のヒモ…はははは！」

失意のあまり膝をつき泣き笑うハルトであるがウオズは肩をポンと叩き

「ですが我が魔王がフロンティアを手に入れれば？」

「逆にキャロル達を養える？」

「ええそれに彼女達の家まで建てれば」

「ずっと一緒に…完璧だなウオズ！よし採用だフロンティアを占領するぞ！！」

「はっ！！」

「あれ？俺もしかして付けなくて良い火をつけた？」

これが正しいのかはどうかはナツキでさえ分からないのであった

――
会議室

「皆！フロンティアを占領するから力を貸してください！」

「国を作るのか」

「凄いですね……」

「やつと魔王ちゃんらしくなってきたねえ！」

「祝え！我が魔王が野心を顕にした瞬間を！」

「脱ニートで領土侵略するとか魔王じゃん」

「カゲン……そこにいる反乱分子を窓から投げ捨ててこい」

「はっ！」

「(言論統制……)」

フィーニスは冷や汗掻きながら流れを見ていた

「こ、このやり取り久しぶりい！」

「ぬん！」

「あ……」

カゲンは窓からナツキを投げたのであった、一応クツションになりそうなものを選んで投げたから大丈夫だろう

「さて：フロンティア乗っ取りの為に立花響と小日向未来が争って神獣鏡でフロンティアのロックを解かないと行けないらしいから早い物勝だから動くチーム分けな」

という訳で人選した

俺、ウオズ、束は突入組

ジョウゲン、カゲン、ファイニス、千冬は迎撃組である

「後は：サンジェルマンさんに連絡取って……と」

ハルトはファイズフォンXでサンジェルマンに電話した

「あ、もしもしサンジェルマンさん？はい！お久しぶりです……えとですねえフロンティア占領して俺の領土にするんで異端技術方面の知識を貸してください」

「いやそんな遊びに誘うようなノリで大丈夫なんですか？」

『!!!』

と言うとサンジェルマン達が大声で叫んでいるので携帯を耳から離す

「え？えーと対価ですか？なら成功した暁にはフロンティア内に結社の研究施設を作

るってのはどうですか？オマケで3食付きの食堂もありますよ……はい！ありがとうございます
（ぎゅいまずー）」

と電話を切り家臣団に笑顔で

「食堂作つてくれるなら結社全員で行くつてさ」

「恐るべし我が魔王の料理力」

「よ、良かったね魔王ちゃん」

「ああ……さて残りの問題か…アナザーゲイツとアナザーツクヨミが来たら通してね俺
がケリつけるから」

「かしこまりました、青ウオズは？」

「やれ手加減無用だ」

「はっ！」

「あと動力面はゼツ○ンからセルメダルに変える、極力安全な動力にしようよネフィリ
ムは捨てるとして奏者にぶつければ良い精々利用させて貰うか」

動力は人間の欲望ある限り無尽蔵に得られるのだから遠慮いらぬ

「成る程それでオレ達の出番つて訳か」

「そう言う事、キャロルは錬金術、束は科学方面からフロンティア掌握のアプローチをか
けてくれる？」

「勿論！東さんにまっかせなさい！」

「東、足を引つ張るなよ」

「誰に言ってるのかなあ？」

「極論だけドフロンティアを掌握したらこつちの物、奏者とFIS連中を蹴落として：落下する月はフロンティアにある異端技術で押し上げれば良い」

「それで世界各国に恩を売るのですね」

「そうそう後ね月をいつでも落とせるよーって脅せば核抑止よりもお金のかからない上に健全な抑止力だよねーまあ落とさないけど、そんな事したら僕らのエースが悲しむよー」

「明るいテンションで言うことではないな」

「まあまあチーちゃん、けどハル君が楽しそうで東さんは嬉しいぞー！」

「ありがとう…：作戦決行まで待機、よし！今日は前祝いだ好きな作るよ！！サンジェルマンさん達も呼ぼう！！」

「！！」「おー！！」「！！」

『で本音は？』

相棒達の問いには思わず本音が出てしまう

―皆の安全の為に安住の地があるだろう？今回みたいな事があって…その時に俺の大切が無くなったら…きつと自分を許せなくなる―

『そうか』

―ああ、だから皆で笑える場所を作るんだ―

数日後 世界を震撼させた後のフロンティア事変が発生する

それは終末の巫女が残した遺産の奪い合いだが本来の歴史とは異なる形で記録となる事を知るのは…まだ誰も知らない

そしてフロンティアが後にどう呼ばれるかも

――

未来

「あの時から色々始まったのだったな懐かしい…」

玉座に座る老ハルトは空を見上げながら過去を懐かしんでいると現れたのは雪のように白い髪と肌、そして対するように目立つ赤い瞳と唇：まさに絶世の美女と言うに相応しい軍服を纏う女性が老ハルトに話しかけた

「ハルト、そろそろ準備を今日はリムル様との会談の時間ですよ」

「もうそんな時間か：：ありがとうテストarroツサ」

「この程度の事など当然です」

「いやテストarroツサが居てくれて良かった」

「……………／＼／＼／」

「はあ：：俺は、あの頃と違って醜く老いぼれたのに君は変わらずに若く美しいな」

「つ……………／＼／＼／そ、そんな事ありません：：私からすれば貴方はあの頃と変わらない悪

童のままですよ」

「ははは：：そうか：：いやあ勝てんなあテストarroツサには」

「ねえハル、ボクもいるよ？」

「我もだ！」

「知つてるともウルもカレラもいつもありがとう：：さてと行くとするかの我が友の場所に久しぶりの茶会だ：：お前達も羽を伸ばすと良い：：だが節度は守れよ？この間、ディアブロに怒られたのだ大人しくしてくれ」

「それはフリというものだな！我が君」

「知ってる押すなよ絶対押すなよって奴？」

「いや本当にお願いだから」

「まあ善処しますわ」

「頼む…テストアロツサが頼りだよ」

そして老ハルトは転移したのは、綺麗な夜景と笑い声の絶えないスライムの治める魔物の街である

宴と兄妹喧嘩

さて俺達の国取を決めた日、パヴァリア光明結社を呼んでのパーティーになった中でハルトの目線に知らない人がいたので話しかけてみる

「初めまして」

「初めまして」

あ、ゲネシスドライバーの人だ！と思った感情は殺して会話と行こう

「今日の宴会はどうですか？」

「騒がしいな少し」

「まあフロンティア占領の前祝いとガス抜きもありますから……あ、自己紹介が遅れましたね常葉ハルトです貴方は？」

「僕は「局長！」ん？サンジェルマンか……丁度良い所に」

「あ、サンジェルマンさん……今回は結社あげての助力感謝します」

「いや礼には及ばないわ、我々にも益のある話だから……それよりも局長、アレ程離れるなと」

「いやいや悪いねえ」

「局長？」

「ええ彼はアダム・ヴァイスハウプト、私達の組織　パヴァリア光明結社の長よ」

「新たな錬金術の伝道師か宜しく」

「この人が結社の長か…初めましてだが…：…本当にサンジェルマン達の旅費をケチるような人には見えないな

「はい宜しくお願ひします…：えと何ですか？その伝道師云々って」

「それはね…：貴方が新たな錬金術の聖典（仮面ライダーオーズ）を持ってきた異世界の伝道師と結社ではそう呼ばれているわ」

「何ですとお！」

「オーズが聖典にと聞いてはいたが実際に見てみると凄い所もあるな

「俺は布教しただけなのに…：流星は仮面ライダーだ…」

「新鮮な驚きもあつたよ僕もね…：しかし金を錬成してない錬金術であそこまでの力を完璧でないのに」

「あくno buddys perfect…：この世に完璧なんてありませんよ」

「何？」

「完璧は終わりで先がないんです…：だけど未完成なら何処までも無限に成長出来ます…

俺に限界はねえ！つてね」

「……………」

「そこが限界と思つた時、壁を無くすです…自分はまだ完璧じゃないと思えますよ」

「……面白い意見だ魔王だね流石」

「いやあ…それほどでもお有るのかなあ？」

『謙遜しろ愚か者』

「つせえ」

「だから…僕は…」

「局長？」

「いや忘れてくれ…しかし君の仲間も愉快な人種のようにだ」

「は？」

そう言われてハルトは目線を向けると

「今日は負けないわよくカゲンちゃん！」

「望む所だ今度こそ決着をつける！」

「頑張れカゲンちゃん！」

「カリオスト口様！頑張ってください！」

カリオスト口とカゲンが酒樽を何個も空にする飲み比べをしていたりジョウゲンと

構成員が煽っている

「前にも話したが、このチフォージュ・シャトーの権限は私にある訳だ」

「あるなら放置しておくのが悪い、家賃ならセルメダルで払っているが？」

「なら100年単位の滞納分も払えという訳だ！」

「滞納分？そんなの記憶に……無いな済まない焼却したようだ」

「都合良く思い出の焼却で惚ける事は許さない訳だ！」

「ならハルトにも家賃請求をしろ！アイツも此処に住んでるのだぞ！」

「そう言えば請求出来る訳だ」

「おい、まさか気づいてなかったのか」

と言いついてはいるプレラーティとキャロルはチフォージュ・シャトーの権限で争っている、束とクロエは構成員から錬金術の知識を学んでるし千冬とナツキ、エルフナインも飲み食いに興じているな

「馴染んでるなあ……」

その一言である、あと家賃なら払うので許してキャロル、プレラーティさん

「ええ最近は息抜きも出来なかったから楽しいのでしょうね」

「そっか……じゃあサンジェルマンさんも楽しんでてよ、この後は特性のデザートもあるの」

「つ！そうさせて貰う」

とサンジェルマンも輪の中に戻るのを見て

「いやあ楽しいねえ〜」

と笑顔でワインが並々注がれているグラスを傾けるハルトはカラカラ笑いながらワインを煽っている

「我が魔王…お酒は程々に」

「大丈夫だって今日は調子良いんだ…もうちょい行こう！」

「飲みすぎても知りませんよ」

「大丈夫！そうなたらアナザージオウIIの力で酔う前に巻き戻すから！」

『力の無駄遣いだな』

「良いじゃん少しくらい！」

とハルトも最近のストレスで飲むペースが早くなり

「……………あはははは!!」

ハルトがワインボトル片手に大笑いしているのを見てウオズが頭を抱える

「はあ……………だからアレ程気をつけろと」

「楽しかったんじゃないの？魔王ちゃんって酒は強いけど場の空気でするタイプだし」
「そうだな楽しいのは良いことだ」

「って何で樽で飲んで普通でいるんです？カゲン先輩…カリオストロさんは？」

「ん」

「はい？」

カゲンの後ろで

「うーん……」

カリオストロが酔い潰れていた

「完全勝利！」

「はあ…後で酔い止めの薬を手配しておきますね」

「頼む！」

注意 酒は分量を守って楽しく飲みましょう

「どうしようか魔王ちゃんを悪酔いする前に移動させなきゃ」

「そうですね……おや？」

ふと視線を向けるとキャロルがハルトを介抱していた

「おいハルト、寝るならさっさとベットで寝ろ邪魔で片付けられん」

「えーやだ！もつとのむー！…あ、からっぽ…もう一本!!」

「完全に酔ってるな…やれやれ…」

「あ……ない…よし、ツマミ作ってくるからまって！」

キッチンにふらついた足取りで向かおうとしたのでキャロルが全力で止めに入る

「おい待て！酔っ払いに包丁など持たせられるか!!」

「ならキャロルが作ってよ手料理食べたい！」

「断る子供かお前は良いから寝ろ！明日から忙しくなるんだろが！」

「やー！もつと皆と飲むの楽しい！もつと続けたい！」

「はあ…分かった、また皆で宴会をしよう…だから今は寝てくれ…な？」

「わかった！」

「よしそれでいい「じゃあ今日一緒に寝て」…は？」

「寂しいから一緒に寝よ…キャロル……一人はヤダよ…」

小動物のようなつぶらな瞳を浮かべるハルトの爆弾発言に思わず凍りついた面々

「なっ！／／／／」

「はっ。」

と对象的に

「ハルト様は大胆だな！」

「いや酔って堪えてた本音がダダ漏れなだけでしょ」

「僕もそう思いますが…」

「ストレスですかね？」

「いやあ魔王ちゃんストレス溜め込むようには見えないけど？」

「人は見た目によらないのでしよう、それを我々はよく知っている我が魔王が抱えている心の闇を」

「今は奥方様とイチヤついでるけどね」

「そうですね…ですがジョウゲン、カゲン」

ウオズが苦笑しながらいると身の危険を感じたのか単純に慣れたのか知らないが家臣団が的確な対応をしていた具体的には客の避難である

「はいはい皆離れてく修羅場が始まるよー！」

「眺めるなら会場から離れて安全に見ろ」

「そんな国民的アニメの前振りは辞めて下さいよジョウゲン先輩、ウオズ先輩」

「踊る！ぼ」それ以上は権利的にアウトかも知れませんがカゲン先輩！」む…」

フィーニスがツツコミに奔走していた頃

キャロル、千冬、東の3人が火花を散らしながら睨み合いをしていた

「し、仕方ないな…そこまで頼まれたなら…一緒に「ちよーつと待ったー！」何だ東？」

「キャロリンだけズルい、その権利は東さんにもあるよ！」

「私にもあるとだけ言っておこう」

「黙れ、ハルトに頼まれたのはオレだお前達は敗者は下がってろ」

「敗者？それはどつちかな？かな？」

「いい度胸だ」

『レモンエナジー』『カチドキ』

千冬と東はロックシードを起動し

「丁度良い、この際どつちが真の正妻か教えてやるエルフナイン！」

「はい！キャロル！コレを使ってください！」

「エルフナインのエイムがヤベエ…」

キャロルはオーズドライバーをつけるとエルフナインが3枚のコアメダルをアंक
と思えるような正確なコントロールで投げ渡す、その光景に思わず眺めていたナツキも
ツツコミをいれざるをなかったが

それと同時に

「あ、あのドライバーとメダルは…」

「ま、まさか…」

と周りもざわめいているのをお構いなしに、キャロルはタカ、トラ、バツタのコアメダルを装填しオースキャナーを構えるのを合図に

「変身!!」

『レモンエナジーアームズ!』

『カチドキアームズ! いざ出陣!』

デュークと斬月に変身した2人と向かうように

『タカ!トラ!バツタ!タ・ト・バ!タ・ト・バ!タ・ト・バ!』

キャロルが変身したのは仮面ライダーオーズであった

「はっ!」

変身したと同時に錬金術師たちが騒ぎ始めた

「オーズだ!伝道師が連れてきた新たな錬金術の力!」

「いけえ!オーズ!!」

「頑張れ!」

光景はさながらヒーローショーである

「行くぞ」

「何かアウエーな感じだけどやるよチーちゃん!」

「ああ!」

オーズはメダジャリバーを構えるとデュークと斬月もソニックアロー、無双セイバーを構え一触即発の中 魔法陣が浮かび上がる

「つと…仮面ライダーの気配がすると思つて来てみれば何だ君達か」

錫音が転移魔法で現れた、どうやら仮面ライダーの力を観測して転移してきたようだ
「錫音が久しぶりだな」

「久しぶり千冬…あ、君がキャロルか宜しくね」

「元ネオタイムジャツカーか…ああオレがハルトの正妻、キャロルだ覚えておけ」

「正妻?…それは聞き捨てならないね」

「やるか?」

「いや実力を示すよりも…」

ハルトの隣に座る錫音に気づくと

「ん? よー錫音も飲む」

「いや、それよりも今日は少し疲れたから寝たいかなベッドで一緒に良いかい?」

「んーいいよーキャロル達忙しいみたいだし」

「よし契約成立」

『テレポート…ナウ』

「「あーー!!」」

錫音が美味しい所を持つていった事により3人は叫ばずにはいられなかった、まあ結果論だがハルトはすぐに寝落ちした為かR18的な事はなかったと言っておこう……しかしハルトが目覚めた時に錫音が抱きついていたのもあり起床と気絶を交互にしていたのは秘密である

また

「俺って奴ア……」

酔っても記憶が残るタイプのハルトは昨夜の醜態に自己嫌悪していたのを見て

「だから言ったのですよ酔うと暴走して自己嫌悪するから辞めろと」

「そこまで言われてねえよ」

「楽しかったで良いじゃん魔王ちゃんもさ」

「ジヨウゲン……」

「まあトトカルチョしたかったから錫音ちゃんは空気読めと思うけど」

「どっちの味方だ……お前は……けど楽しかったなまたやりたいよ」

「ええ是非……ですが今度は酒量をお控え下さい」

「はい…肝に銘じます」

結論、お酒は程々に

取り敢えずフロンティア浮上までやる事も特にないのでハルトは精神世界で修行する事にした

「さて何する？ジープ鬼ごっこ？」

「いや今回は違う…お前に報告してなかったのだから」

「何々」

「リバイスが終わったぞ」

「何ですとお!!んじゃ次の仮面ライダーって誰なんだよ!そうか…シノビさんか？」

「いや仮面ライダーギーツというらしい…詳細は確認中だから」

「何故だ2022年は俺の時代の筈なのに」

「ギーツか…よし覚えたありがとよ相棒、あとアナザーシノビは泣くなく大丈夫だよ
きつと映像作品にはなるから」

「メタいな」

「構わんさ敵の情報は集めておいて困ることはない」

「敵って大袈裟な…：そうか仮面ライダーギーツか楽しみが増えたな」

「ああクマ顔のライダーがいるらしい」

「ボウガンを持ってたぜ」

「クマにボウガン…：どこの狩人だ？本当に俺のいない間に仮面ライダー業界に何が起こってるんだよ!!会ってみたいなそのクマ顔ライダー！…って…修行だよ早くやろうぜ」

俺が発信したメッセージを受け取り世界を超えて来てくれるアナザーライダーも多
くいる以上は彼等の力の特訓も俺がせねばならないものだからな、使いこなせないとか
カッコ悪いというのは内緒であるが何故か反応のない子もいるのは不思議でならない

「そうだな今日の修行内容は」

ハルトはワクワクしながら次の言葉を待っていると

「お前の中にある心の壁を取り払わせてもらおうぞ」

「心の壁？はて…：俺はお前達とは壁を作ってないつもりだが？」

「そう言う意味での心の壁ではない」

「はい？」

意味がわからないと首を傾げているとアナザーWが補足してくれた

「実はな…今までのお前は俺達の力の半分しか使いこなせてねえんだ」

「え？嘘！アレで半分だったの!?!お前等スゲー伸び代の塊じゃん！何でそれでジオウ達に負けたの？」

「褒められて悪い気はしないが…一言余計だしお前の問題だぞハルト」

「へ？」

年単位いて初めて知らされた衝撃の事実である

「ああアナザーライダーはライダーと怪人のハイブリッド…だがお前はライダーの部分しか引き出せていないんだ」

「ん？いや、そりやまあ怪人よりライダーの力の方がイメージしやすいから…かな」

「そこだ」

「へ？」

「片方だけではダメなのだ、両者の力を引き出せない以上はお前の見ていたアナザーライダーの力は引き出せないのだ」

「けど普通に能力使えたよ？」

実際年単位で戦い生き残れている自信もあると言うと

「そうなんだよなあ…本来なら弱体化する所をお前は知識とライダー愛がブーストを掛

けて補っていたんだヨ」

「マジでか…つか性能差を補う程の愛って俺スゲエな」

奏者連中にハザードレベルみたいな強化あつてズルイと思つていたが実際は俺がやっていたということだな

「我々も予想外であつた、というより」

「ああ相棒…多分俺と同じ事思うよ」

そう今の俺はアナザーデイケイドと心が通つていた

「半分力でオーマジオウによく挑んだな」

今更ながら本当によく生きていると思う…まああの人の本気なら俺などデコピンで瞬殺だろう

「それだ、半分の力でよく一矢報いたヨお前等」

「これは俺のライダー愛がオーマジオウに届いたという事だな！」

「それで今日の修行はライダーではなく怪人の力を引き出す特訓だ」

「無視!?けど具体的にどうしたら?そもそも仮面ライダーと怪人って根っこは同じだし…イメージなんてし辛いよ」

「そこは安心しろ俺達の手伝つてやる」

「悪魔と相乗りする勇氣はあるか?」

「え？俺っち呼んだ？」

「「呼んでない（ねえ）」」

「俺っちシヨック！」

「悪魔と相乗りねえ……んなの数年前と答えは同じだ、地獄の果てまで相乗りしてやるよ
！」

「よく言った！ビシバシ行くぞ！」

「っしやあ!!」

その日から数日間は筋肉痛で動けなかったのは言うまでもない

—————

そして計画が進んでいって、ある日の事

ハルトは食糧の買い出しに外に出た流石に大人数に料理を出す以上は大量に買い込むのでカゲンとジウゲンを連れて

「えーと……こんなものか」

とメモ書きを見ながら必要なものを買い終えたハルトは人目がないことを確認し

「はいっつと」

『コネクト』

アナザーウィザードのコネクトを使ってチフォージュ・シャトーに送るとノビをして
「んじや遊ぶかお前達」

「はっ！」

そのまま町の中をブラついていると、タワーが目についたので気晴らしに高い所に登
る事にした

「絶景だな」

と景色を堪能していた時

「ハルト様」

「どうしたの……は？」

カゲンの視線を追うと立花響と小日向未来が楽しく買い物をしているではないか
「帰るぞ大至急」

「へ？」

「俺の予想だと面倒な事が起こ^{!!!}ほら」

同時にサイレンが鳴ると逃げる人達、その先には待ってたようにノイズがいた
「ありやく囲まれちゃってるね」

「転移すべきです」

カゲンはキャロルから貰った転移結晶を取り出すが

「いや避難誘導が終わるまで俺達で時間を稼ぐぞ」

「へえくどう言う風の吹き回しなの魔王ちゃん」

「ジヨウゲン、ハルト様に対して無礼だぞ」

「だってこの間、助けない宣言してたのにこの場は助けるとか矛盾してるじゃん」

「あ、助ける云々は建前ね」

「じゃあ本音は…」

「簡単、修行の成果を確かめたいのさ…丁度良いサンドバッグが目の前に沢山あるから

や」

「そう言いハルトは窓の外を見ていると

「じゃあ私と遊ばない兄さん？」

「ハルカ」

「いやあ護衛に來ただけなのに面倒事に巻き込まれて嫌になるわあー、本当米軍の部隊が襲ってきて拠点無くなってシャワーも浴びれなかつたり散々よ」

「護衛？ つー事はこの騒動」

「そうクライエントの交渉決裂トラブルね…はあ支払い能力がなくなったクライエント

なら潮時かなあ……金の切れ目が縁の切れ目ってね」

「相変わらずその辺淡泊だな」

「まあ私としてはどうでも良いけど自分が何者かなんてアイデンティティで悩んでるよ
うな面倒くさい女は嫌いだし……調ちゃんも切ちゃん、セレナちゃんだけお持ち帰りした
いわ」

「欲望ダダ漏れじゃねえか」

被りを振ってやれやれとしていると

「あーハルカさん！」

此方の雰囲気気づいた女性が近づいてきた

「げえー！立花響」

リアクションはクマに会う、それである

「その気持ちは良くわかる」

うんうんと頷いていると

「どうして此処に……」

「貴女なんかには話す理由はないわ、それともアレかしら胸に爆弾抱えたまま私と戦う気
？」

「っ！」

「響!!」

「未来…でも!」

とやりとりしているがハルカは詰まらなそうな目で

「どうでも良いわ貴女との戦いは依頼外の事だし…今は貴女なんかに関わってる暇ないのよ失せなさい」

「お願いします!良かったら此処にいる人達を助けてくれませんか!!」

「はあ?嫌よ」

「私は戦えないんです…だけど貴女なら…」

「報酬は?私は傭兵なの、雇うなら相応のものがないと断るわ」

「そ、そんな……」

「だから諦めなさい、私は私の目的を果たすだけだから」

冷たく突き放すような態度を取るハルカに変わらせずに真摯な目を向ける響に根負けしたように溜息を吐き

「ウオズ」

「は、此方に」

現れたのは青ウオズである…何処から出たんだろうかと思っただが

「私と兄さんの戦いの邪魔者は排除なさい」

「かしこまりました」

『ディエンド』

アナザーディエンドになり移動する前に一言

「ああ…それと外にいる蠅を撃ち落とすとして私ね虫が大嫌いなものよ」

「仰せの通りに」

「ハルカさん」

「勘違いしないで貴女が私達の邪魔されたら迷惑だからよ別に此処にいる人間達なんてどうでも良いんだから」

「それは同感だ…ジヨウゲン、カゲン頼んだぞ不本意だろうがな」

「はっ!!」

「それと必ず生きて帰る事、死ぬ事は許さんよ今日は醜態の詫びで特別な晩飯なんだ食べずに死ぬなんて勿体ねえぞ」

「「必ずや!!」」

『ゾンジス』『ザモナス』

2人は示し合わせたように移動したのを見て

「あの人たちが…」

「さて……用済みなら下がらなさい巻き込まれても保険は降りないわよ」

「けど…その人と戦うなんて…話し合いましょうよ！戦う意味なんて「ある」え…」
ハルトがそう力強く答えるとアナザーウォッチを構えた

「その時計…まさか！」

「少なくともコレは俺達、兄妹の問題だ部外者は引つ込んでろ」

「そうね、それと…ダメじゃない大事な人が手を引いてるんだから一緒に居てあげなさい」

「っ…」

「は、はい！未来」

「え、ちよつ響！」

と未来の手を引いて離れたのを尻目にハルトは皮肉混じりに話し出す

「何だ今の？」

「何って？」

「大事な人が手を引く云々とかの説教」

「そのままの意味よ、その手を離したら後悔する……実体験よ」

俺がいなくなった事で何か起こったのか知らない、何やら神妙な顔をしているように
悪いが

「君の妹が君と仲良くしたら皆で私をイジめる…って…だからごめんね…ハルト…さ

よなら」

「ハルト君はお兄ちゃん何だから我儘言わないで留守番しててね……」

「お前、付き合い悪いから遊ばね……つまんねから妹と遊ぶよ」

（待つて何で僕のせいなの？何も悪く無いのに……どうして……アイツは全部取っちゃうの？皆……置いていかないで……）

フラッシュバックするのは忌まわしき過去、兄は自分の手で得たものを妹のせいで全部無くしたのだ……その咎人が何を偉そうに語っている

過去あの事があつてから人を敵か味方でしか考えられない、なんて身勝手な価値観だろう、そりゃ災厄の魔王になるかと自嘲する

『やっちまえハルト（寂しいよ）』

バイスの声と重なり聞こえるのは幼き頃の声……ああ悪魔の囁きとは良く言うものだと自嘲する、そうか今わかったよバイスが何故、ハルカに当たりが強いのか

「そうだな……けどな俺が掴んでた手を全て引き剥がしたお前だけはそれを言う資格はない！」

『その女をぶつ潰せ！』

俺が人生で一番の絶望し命を断つまで思い悩み苦しんだ…心は光の巨人と仮面の戦士に救われたが…その時期に生まれた悪魔だからだ主犯である妹を許せるわけが無いよなどハルトが憎悪に満ちていた顔に変わっていたようでハルカは申し訳なさそうな顔で

「そうね私の身勝手に兄さんを長く傷つけた…その償いをさせて欲しい、だから一緒に帰ろうよ兄さん！今度は私とトーマと一緒にいて守ってあげるから！」

ハルカは手を伸ばすがハルトは怒りに満ちた目で手を払い除ける

「え？」

「俺の手はな…今沢山の人と繋いでるんだよまたお前は俺から繋がりをその手で奪うつもりか？」

「え？そんな事「違わないよなあ」違うのに……」

「お前のやりたい事が俺の大事な繋がりを特別を奪って悦に浸りたいって事なら」

思い出すのは、旅を始めてから出会った仲間や大切な人達　まあ色々大変な所もあるが俺にとってはかけがえの無い存在だ家族の場所に帰りたいのは大事な人を紹介し、一緒に笑いながら旅の話をして聞かせて欲しいからだその明るい未来を奪うというのなら

兄妹故のシンパシーかハルカは兄の次の言葉を理解してしまい過去の過ちを悔いた。彼の中にある根本的な価値観をよく知っているからだ、その価値観の徹底さと末路を辿る姿を

「俺の敵に決まってるなあー」

怒りに飲まれてたとは言え兄失格発言あると後に老ハルトは未来でウオズに溢していたと言うが、今の彼にはわからない

その感情のぶつける先と方法が

—————

ハルトの精神世界

普段は何もない真っ白の空間が突如、黒く暗く全てを埋め尽くすような闇が覆い始めていた

「やり過ぎだ、アナザーバイス！」

「煽るなよ…あんなハルト初めて見たゾ…っかこの世界がこんななるのも初めて見

たわ！」

と2人が止めに入るが

「先輩？俺たちはハルトから生まれた悪魔だぜ？まあアナザーバイスウオッチを核にしてるけどお…先輩達よりも誰よりもハルトの事を理解してんだぜ？」

「何が言いたい？」

「俺つちのやりたい事はハルトが心の奥底からやりたい本音つて事、つまりい…ハルトはあの女の事、か…なーり恨んでる訳よ」

「っー！」

「気持ちはわかるな」

とアナザーウィザードが近くの岩に腰掛けていた

「お、ウィザード先輩わかっちゃう？」

「ああ本来の歴史で俺になつた奴と同じだ大事な人を奪われるかも知れない恐怖から悪魔と相乗りした…だから止めん好きにやれ」

「言われずとも！」

とアナザーバイスはハルトに恨みのパワーを送り込んでいたのを見てアナザーディケイドはアナザーウィザードに語りかける

「お前の場合は相手の思いやりを知らなかったただけだろ？」

力が溢れるとは陳腐な表現であろうが知った事ではないが今なら負ける気がしない
弱い奴には何も出来ない……だから俺は……

「兄さん……」

「ねえ？俺に勝てるかと本当に思ってるの？」

ハルカはアナザーツクヨミに変身して構える

「私と兄さんは同じアナザーライダー……しかも同じ作品のアナザーなら能力は同じよ」

『ツクヨミ』

「んじゃ不勉強を極めてる妹は」

『ジオウ』『ツインギレード』

アナザージオウへの変身と同時に2人が刹那で間合いを詰めツインギレードとエネ
ルギー状の片手剣が激突した

「身の程を知れ、俺はこのまま旅を続ける……やり遂げる事に意味があるんだ！」

「その旅を止めたいのよ！あの場所できちんと謝りたいから！」

被害者と加害者

何がきつかけだつたかなど最早、瑣末な事
手遅れか否か それは当人が決める事である

怒りと悪意

タワー外部では

「あーもう！数が多い!!」

「ボヤくなら倒せ!」『ロボライダー』

「はいはい!」『アマゾンネオアルファ』

ザモナスがメナスから分取ったネオアルファウオッチにより強化されたボウガンの連射型矢になる狙撃で大型ノイズを攻撃しゾンジスはロボライダーウオッチで体内からミサイルを発射し小型ノイズを倒していた

「最近俺達の目立った活躍無かったからね！フィーニスちゃんには負けられないよ!」

「ああハルト様に良い報告をさせて貰う」

「そうだね〜…っ!」

2人は気配を察して回避をすると、いた場所にエネルギー弾が飛んできたのだ下手人

の顔を見るとザモナスは呆れたような声音で

「今は敵じゃないも思っただけどねえ〜」

ボウガンを敵に向けると

「勘違いしていますね我が女王が仰ってました戦いの邪魔になるものは排除せよと」

アナザーディエンドに話しかけると過大解釈だろう言葉に

「ま、それは魔王ちゃんに俺達も仰せ使ってるけどね」

「邪魔するなら排除する」

「望む所…」

一触即発になったと同時のこと

「[[[[!!]]]]」

場を支配して余りあるほどの殺意の嵐が起こった

「これって…」「ハルト様が…」

似た気配を知る身故に即断した2人

「これは流石は魔王になる未来があるもの現段階では我が女王は勝てませんね…分が悪い」

「だからってお前を逃す訳ないけどね!」

「先手必勝!」『ロボライダー』

ゾンジスの胸部ミサイル攻撃で予期せぬ場外乱闘が開始した

—————

その頃、タワー内部では

「らあ！」

「くっ！」

ツインギレード二刀流の前に守りに回るしかないアナザーツクヨミが何とかカウンターを狙うが

「隙がない、まるでこっちの攻撃がわかるみたいだ」

必ず此方の先手を塞いで自分のペースで戦うアナザージオウに機を得ないでいた。

「まだまだあ！」

普段よりも感情が武器に乗っておりキレやスピード、威力が増した攻撃になっているのも理由の一つであろう、そして何より

「そっ！」

未来予知の能力が強化されているような感じがする数十秒先の手以上の未来までみえているので先手を必ず潰しにかかる

「くっ…」

「どうしたどうしたあ！能力なら互角なんだろ？ちったあ根性見せろヤア！」

双剣でフェイントをいれガラ空きの胴体に回し蹴りを叩き込み距離を作ると双剣を槍に戻してアナザーウオッチを装填する

『セイバー…アナザースラッシュュ!』

炎を纏う骨の龍が真つ直ぐアナザーツクヨミの元へと突撃するが

「こんなもの!」

『アナザータイムジャック!』

ライダーキックで骨の龍を砕き、そのままアナザージオウに倒そうとしたが先には誰もおらず不発に終わった

「ど、どっこに…」

確かにジオウとツクヨミ、そこに大きな能力差は存在しない

「っ!」

アナザージオウが姿をいきなり表し槍の刃を胴体に添えていた

「い、いつの間…」

「最初からいたけど?」

それはライダーのみの力であり、怪人の力を引き出せた訳ではないのはアナザーデイ

ケイド達が話してくれていた事

『龍騎』

ハルトは特訓によりラスボス格は無理だが幹部格怪人の力を引き出せるのに成功した。今は龍騎に登場するベルデの契約モンスターのバイオグリーザが有する光学迷彩に匹敵する擬態能力を使つたのだ 更に

『エグゼイド』『龍騎』

連動してアナザーエグゼイドの力も解放する

槍の両刃が炎を纏い赤くなる。今から放つは敵である事に胸を張り戦い続けた誇り
高い龍戦士の技

「紅蓮爆龍剣」

「きゃああああああ！」

そのまま振り抜いた一撃は赤い龍となつてアナザーツクヨミに噛みつき彼女をタワーから飛び出させ、近くのビルの屋上まで吹き飛ばした

「……………」

アナザージオウは割れたガラスの先から相手を確認するとタワーから飛び降りる、そ

れと同時に現れたダンデライナーに跨り目標へと飛行したのであった

その光景はタワー外部にも見えていた

「我が女王！」

「ぬん！」

「ちい！」

アナザーディエンドは光景に思わず動揺したが、ゾンジスとザモナスの連携攻撃を捌くだけで手一杯である

「何故ですか……というより何故同僚の顔を普通に攻撃出来るのです？」

凄い素朴な疑問をぶつけてみる、一応彼等の同僚と同じ存在なのに躊躇いなく攻撃されてるのだから

「え？そりゃ」「簡単」

「それは？」

「ウオズちゃんの顔してる敵とか殴って心が痛まないから」

「寧ろ普段の扱いから殴り甲斐がある」

「え？そちらの私は何したんです？」

思わずその言葉が出るのも無理はなかるうな

別場所にいた灰ウオズはその頃、謎の悪寒に襲われていたという

「だから行くよー!」「覚悟!」

『ゾンジス!ザモナス!TIME BREAK!』

「ちい!」

2人のライダーキックをアナザーデイエンドはデイメンションシユートで迎撃するのであった

—————

ビルの屋上にて

「く……………うう……」

ボロボロのアナザーツクヨミを逃がさないとばかりダンデライナーから降りたアナザージオウは槍を肩に担ぐと

「わかったか?能力が同じだけじゃ勝てないんだよ諦めな」

「そ、そんなの…出来る訳がないじゃない…兄さんに…あの兄さんに…私が負けるなんて!!」

「それがお前の限界だ」

「何よ、いつも兄さんなら仕方ないって諦めてくれたじゃない…なのにどうして今回は

言う事聞いてくれないのよー」

「俺が果たさないといけない責任があるからだ」

「そんなの知らないわ！兄さんはあの世界で私達と穏やかに暮らすのが唯一の幸せじゃないの!!」

「違うな…お前は都合の良い人形が欲しいだけだろ？」

俺だって自分のエゴで色んな人の人生を狂わせてしまった…穏やかに暮らせたかも知れない人を戦場に駆り立てたならば俺が王様となり未来を変えるしかない…なのに

何でいつもいつも俺の邪魔をするんだよと心の中にある黒い感情のままウオッチを装填した、IS世界のセシリアのようにクラスターセルで攻撃しようとした今回は絶対防御などないので酷いことになるだろう

『ゼロワ……』

だがアナザーゼロワンウオッチが停止した

「え?」

するとアナザーゼロワンウオッチの顔が別のアナザーライダーへと変わったのだ

『アークワン』

「初顔のアナザーライダーだな…挨拶は後で……っ!」

「スパイトネガ…アクティブ、対象の感情を固定します……対象を掌握…目の前の敵を

破壊します」

するとハルトの視界は真っ赤に染まり、体も勝手に動き始めた

『FINISH TIME! アークワン…悪意、恐怖、憤怒、憎悪、絶望、闘争、殺意、破壊…検出』

「あ…があああああ!」

彼の中にある黒い衝動をアナザーアークワンウォッチは吸い込み始めると苦しみ始めるがツインギレードから流れるのは彼が溜め込んでいた彼女への悪意である

「はあ……………はあ……………」

『アナザーパーフェクトコンクルージョン…ラーニング8』

同時にアナザージオウから流れ出たのは悪意の濁流、スパイトネガはアナザーツクヨミの体を拘束する

「う……………きやあああああああ!」

パチパチと放電しているが関係ない

「……………」

空中に大量展開されたアナザーツインギレード・槍モードが某王の財宝のように一斉に放たれた

その全弾がアナザーツクヨミを粉碎するアナザージオウとアナザーアークワンの未

「ハルカ…後は任せろ」

「うん…」

屋上に着地したアナザーゲイツはハルカを下ろすと階下にいるアナザージオウを見て

「ハルト…お前が彼女を恨む理由も彼女から聞いていた…だから彼女に誘われて帰るのが嫌なのだと最初はそう思っていた」

「当然です」

「だが今のやりとりで理解したよ、自分の妹を俺の大事な人を殺したい程憎んでいる奴に…あの世界に帰る資格などない！お前は…此処で倒す」

アナザーゲイツが取り出したのは砂時計の形をしたウォッチである

『バカな！』『何でアイツが持ってやがる！』

アナザーライダー達の動揺を尻目に、トーマは躊躇いもなくウォッチをアナザーゲイツウォッチの逆位置に装填した

『ゲイツ…リバイブ』

その姿はアナザーゲイツと同じだが胸部の左部分のみ展開し羽のようになっていて、逆側は閉じたままの姿 歪んだ救世主

アナザーゲイツ・リバイブ

「行くぞハルト」

パワードノコのを思わせるような電鋸武器を構えているとアナザージオウは怒りで染まりあげ

「敵……敵だお前ええええ!!」

全力の未来視で動きを見ながら全速力で疾駆した

『落ちつけハルト!!』

相棒の静止も聞かずにアナザージオウは槍でアナザーゲイツリバイブを貫こうとしたが

槍は鈍い音と共にアナザーゲイツリバイブに受け止められたのである

「っー」

「はあー!」

「がっ……」

アナザーゲイツリバイブは槍を持つと力任せにアナザージオウを殴り飛ばした

「こいよ、今度はこっちの番だ」

「コイツ……っー……コチラにお任せを」

『おい頭を冷やせよバカハルト!』

『アナザーバイス、いい加減止めろ!でないと大変なことになるぞ!』

『え。俺っちアナザーアークワン先輩出た時から何もしてないけど?』

『はあ!?なら何で今のハルトは暴走してんだよ!』

『あ、アナザーアークワンの奴がハルトの怒りや憎悪感情のまま固定してやがる!ロックを解かねえとこのままだぞ!』

『お前達、早く止めるぞ!アナザービルド!アナザーW、アナザーキカイ!早速作業にかかれ!』

『『『おう!!』』』

相棒達が何やら騒いでいるが知った事ではない

「対象の攻撃パターン分析開始」

アナザーアークワンの力である空間投影機ビームエキップパーでツインギレードを大量に複製し同時に広範囲を爆撃し煙幕を作ると

『カプト』『ドライブ』

ツインギレードに装填したのは最速ライダー トップ2の力、クロックアップと重加

速による速度バフを自分にデバフをアナザーゲイツリバイブにぶつけた刹那に間合いを詰めた、未来視ではこのままの一突きでアナザーゲイツリバイブは爆散すると

(取った!)

と安心したのは束の間である、アナザーゲイツリバイブはウォッチを逆さに反転させるとウォッチの砂が落ちて新しい顔を出す

『リバイブ…剛烈』

半開きだった片側が閉まると完全なりバイブ剛烈形状になったアナザーゲイツリバイブはアナザージオウの突きを受け止めたのである

「……………」

「俺を遅くしようが自分を加速しようが関係ないぞ」

「理解不能、アナザージオウ、アナザーアークワンによる億単位の未来予知に該当しません」

「まだ解らんのか…お前がどれだけ先を見通しても俺が必ずその先へ行く」

「対策……………検証開始」

『ゴースト…W mix ing…アナザースラッシュュ!』

「ふっ!」

アナザーWのトリガーフルバーストを元にしアナザーゴーストによる技の霊体化を起こした不可視の魔弾である、これなら

「無駄だ」

今度は砂時計を逆回転させた

『リバイブ…疾風』

すると今度は両側が展開し羽になるとアナザーゲイツリバイブ・疾風へと変身すると弾丸を変形したスピードクローで切り裂いたのであった、文字通り目にも止まらぬ速さで

「無駄な事だ、お前が大量のアナザライダーを従えていても根本的な出力で俺には勝てん」

「至急、再演算をおこな『よっしや!ロック解除だ!ハルト!目を覚ませ!』……え?」
心の中にあつた憎悪などの感情が付き物が落ちたように晴れると仮面の下の彼の目に光が戻つた

「俺は……何を…」

『怒りで我を忘れてたみてえだナ』

「みたいだな……助かった相棒」

『気にするでない……だが』

「うん……アナザーゲイツリバイブか」

能力はパワーの剛烈、スピードの疾風に切り替えするつて所か。そして変身時はどっちの性能も引き出せるが傾けると本家のように特化性能に変身するか

『しかも明確に俺達を消滅させられる力がある』

出力によるゴリ押しでアナザーライダーを完全に消滅させられると来た、本家のアナザーメタを此処で出さないでほしい

「けど勝ち目がない訳じゃない」

「なんだと？」

そもそも今回がリバイブウオッチを初使用したならば

ーダラダラ戦ってれば向こうが勝手に自滅するー

仮面ライダーゲイツリバイブ

新たな未来を切り開く救世主の力

どんな攻撃にも耐える防御力と攻撃力の剛烈

クロックアップにも追随可能な疾風

だがその対価として使用者の体内時間を圧縮、引き伸ばす事により体への負荷が大き

いものとなっている

本家リバイブでさえ初使用後は吐血していたのだアナザーは本家より高出力という性質状

体にかかる負荷も並ではない、時間稼ぎに徹すれば自滅する、だけ俺もアナザーアークワンの影響で少し体が怠いし人工知能レベルの情報処理と演算をした際に頭も痛い知恵熱なんて出るとは思わなかった：長時間の戦闘続行は不可能だ

「だけど」

俺は倒さずに逃げるとしよう、慣れてたとしても勝ちの目ならある

ージョウゲン、カゲンー

ーどうしたの魔王ちゃんー

ーイレギュラー発生、撤退するぞー

ー御意ー ー了解ー

「んじやお前達、また会おう今度は未開拓の大地で」

「ま、待て！」

ツインギレードの斬撃波をハルカ目がけて放ち、その隙に近くの窓ガラス目がけて飛び込んだ

『龍騎』

激突して割れる寸前にアナザー龍騎へと変身しミラーワールド経由で逃走したのであった

「ハルト！………ゴフツ！」

追いかけてようとしたがアナザーゲイツリバイブは強制解除され、トーマは吐血してその場に倒れた

「トーマ！しっかりしてトーマ!!」

ハルカは泣きながら介抱した

ジョウゲンとカゲンはアナザータイムマシンを使って現場から逃走し、チフオー
ジユ・シャトーで合流した

—————

精神世界

「皆、ごめん！俺の所為で迷惑をかけて！」

ハルトは飛び込むなりアナザーライダー達に頭を下げ、謝罪をした

「頭を上げよハルト」

「ん」

殴られるのを覚悟して顔を上げたが待っていたのは手で頭をポンポンと叩かれただけであつた

「へ？」

「許す、俺達はお前の力だ使い方などお前が決めれば良い事だ…それに下手人はホレ」

「ご、ごめんなさい」

よく見ればアナザーバイスが正座した膝上に石板が乗せられている…ごめん…俺の悪魔の

「けど、バイスは俺から生まれた悪魔なら俺も同罪だろ？怒りで我を忘れてあの醜態だよ…皆の王様失格だ」

「何を言う、王とは誰よりも喜怒哀楽を発露し己が覇道を唱える人でありながら人を超えた存在だ…今までのお前は喜怒哀楽を発露する事はアレども爆破させた事などなかった、これこそ我々の望んでいたものよ」

「けど…」

「はあ……ウジウジするな調子が狂う、お前はいつものようにヘラヘラ笑つて、ドーンと構えていれば良いのだ…でなければ周りの者も心配するぞ」

「おう……ありがとうな相棒」

「当然の事だ……しかし」

「だね、新しい顔への挨拶と行きたいけど…凄いいジャジャ馬だね」

アナザーアークワンウオッチを見る、アナザーゼロワンから分離して生まれたアナザライダーだ…因みにアナザーゼロワンは無事である

能力

仮面ライダーアークワンの演算や武器作成

悪感情の増幅と悪意以外の思考停止

「頼りになる仲間だけど使い所は選ばないと」

「それ以前にハルト、気をつけろよお前の中の悪意に反応する傾向がある油断してる今日二の舞だぜ」

「恐らく今回の件で対策を立てたろうから同じ手は効かんぞ」

「マジか…まさか俺にアルティメットクウガへならないよう堪える展開があるとは思わなんだ」

「余裕じゃねえか」

「大丈夫だよ、ようは俺が笑ってれば良いんだろ…それに悪意もあれば必ず善意も人には必ずあるから」

「ほおなら悪意に飲まれるかどうか高みの見物とさせて貰うぜ」

「おう見ててくれ！」

ハルトは現実世界に戻った

—————

チフォージユ・シャトーの一室にて

「……………ん？」

ハルトが目を覚ますと何故か横になっていた何故か後頭部に柔らかい感触があり、見上げる

「起きたかハルト」

千冬が心配そうな顔で覗き込んでいた

「千冬？どうしたのさ」

ハルトは体を起こして目を合わせると

「ジョウゲン達から聞いた、お前が怒りに飲まれて暴走したと」

「あはは…恥ずかしい事に」

まさかアークワンのアナザーがメッセージ受け取って来てくれるとは思ってなかったから

「そうだな…感情に任せて振るう力は暴力に過ぎん、それで守られても私達は嬉しくな
い」

「はい……」

「私や束はハルトの笑ってる顔しか知らんし学祭で会った時は彼女と仲良くしていたから関係は良好と思っていた……だが実際は」

「恨んでる、それも根深く長年もね……はは小さい男でしょ？」

「違う……よく考えれば何も知らないんだと思っただよ私も束もキャロルもな」

「知らなくて良いよ、それに皆には知られたくないし俺のダークサイドな部分とか」
「何故だ」

「知った所で気分悪くなるだけ……それに過去はもう変えられないけど……未来なら変えられる……皆で明るい未来にしたいんだよ」

「ハルト……」

「だから俺が間違っただと思っただら迷わず止めてくれ……でないと止まらないから」

「分かった、安心しろ何かあったら殴っても止めて連れ戻してやる」

「それは痛いのは嫌だから頑張らないとな」

「そうだな私も……っ！」

「千冬、ありがとう大好き」

ハルトはいつものようにヘラヘラと笑うと千冬にお礼と言わんばかりにキスをした短い時間で終わったが、そこには笑顔のハルトと赤面して爆破しそうな千冬がいた

そして数日後

「おいハルト、神獣鏡の反応を確認したぞ場所は……船の上だな」

「海上か……キャロルと東はサンジェルマンさん達にも準備を頼んでくれよフロンティア掌握は時間との勝負だ」

「おう」

「りようかーい」

「あと残りは話しての通りバトルチームだ……船まで向かうぞ」

「お待ちを我が魔王、我々を運ぶ程の大型の船舶はございません」

「誰が船で行くって？今からのんびり出港しては間に合わないよ、だからさ今日は電車の旅と洒落込もうよ」

「電車？……ああ」

「行くよ皆！」

『電王』

アナザーウォッチを起動すると時空を超えて現れたのは、時の列車

アナザーデンライナー

それに乗りに込んだハルトは笑顔のまま乗っている皆に声をかける

「さて………行こうぜ国取って脱ニートだ！」

『その掛け声で良いのか!?』

アナザーデンライナーが発進した、乗り込んだ皆が向かうのは、彼等の欲する未開拓の土地一つである

—————

ここは魔物の国 ジュラ・テンペスト連邦国

そこにある小さな和室で2人が茶飲み話に花を咲かせていた

「ははは！そう言えばそんな事もあったっけ」

1人は水色の髪に中性的な容姿をした人？彼は、このジュラ・テンペスト連邦国の総統

魔王であるスライム リムル・テンペスト

「うむ、リムルさんとの初対面は何十年経っても忘れられぬものよ……それだけ衝撃的だったという事だ」

対面でお茶を飲んでいるのは老ハルト、彼と昔話に花を咲かせていた

「そうだな俺達もまさか空島を見るとは思わなかったよ」

「であろうな……我等もまさかこの世界で建国しテンペストと国交樹立するなど思わな

かったさ……そう言えばテストタロツサ達はどうか？きちんと仕事に励んでいるだろうか？リムルさん達に迷惑をかけてないか？」

「大丈夫だよ、何かあればディアブロが何とかするから」

「迷惑をかけたなら話してくれよリムルさん、仕置きはコチラでも考えるのでな」

「いやあそんな……具体的にどんな？」

「ん？おやつとデザート抜き」

「子供かよ！……って、どうして今更そんな話を？」

「何、昔を思い出しただけよ……そろそろ若い俺が当時のテンペストに向かう頃だったからな」

「そうなんだ……なあハルト、今更なんだけど何処で見つけたんだよ空島？」

「ははは……そうでしたなリムルさんには話してなかったですね……アレは今から何十年前の話よ」

思い返す老ハルト……しかし語る内容は彼のであり今のハルトが紡ぐのは 別のフロンティアである

偽りの開拓地

ある船舶の甲板にて現れた紫の装束を纏う少女　小日向未来の登場に

「小日向なのか…」

「嘘だろ」

翼とクリスは驚き、場にいた切歌、調とアナザーツクヨミは警戒している因みにアナザーツクヨミとトーマはりバイブの負荷から病欠である

「あれが神獣鏡…魔を祓う鏡…」

アナザーツクヨミの言う通り、神獣鏡のシンフォギアは対ノイズ戦に置いては余り戦力たり得ない、言うなれば弱いシンフォギアである

だがその本質は対シンフォギアに有効打を放てる　最弱にして最恐のシンフォギアである

「うわああああああ」

と誰に向けてか分からない声を上げる小日向未来、それを上空のへりから見守るマリアがいたリーダーに接近警報が鳴ったので慌てた目を向けたら

「……………は？」

そこには空飛ぶ電車が線路を展開しながら走ってきていたのである
マリアは空いた口が塞がらなかつた

それは基地にいた二課の面々も同じよう

「電車が空を」

「アレって…」

「アナザーライダーだな…まさかあんな技術を有しているとは…」
と基地で戦慄していた

—————

甲板にハルト達は着地すると簡単に伸びをして周りを見渡す

「俺、参上!!……………あ、海だー!」

「いえーい!潮風最高ー!」

と両手を上げて叫ぶ、ハルトとジョウゲンに

「あのですね少しは緊張感を「海だ!」貴方もですかカゲン？」

「はあ……………」

「気持ちわかりますよフィーニス…お願いします千冬殿」

「ああ任せろ」

そして振り下ろされる千冬のゲンコツ3発で

「真面目にやれ馬鹿者共」

頭にコブを作ったハルト達は

「……………はい」

素直になるしかなかった

「あ、貴方達は…」

「あ！あの時のお姉さんデス!!」

「ん？ああ…何処かで見た顔と思ったら学祭の時の小娘達か久しぶりだな」

「何者だ貴様等！」

と刀を構えている防人さんには悪いが

「この場面で察せないのか…まあ良い変身」

『メロン…ソイヤ！メロンアームズ！天下御免！』

千冬は斬月に変身して無双セイバーを構えた

「来いお前のような奴なら、これで話す方が早いだろう？」

「成る程分かり易いですね」

風鳴翼 vs 織斑千冬

「ちよつ！何やってんだよ！こつちは真剣なんだ！」

「それは」「コチラのセリフだ」

「つー事はオツさん達はあの顔文字野郎か！」

「顔文字!？」

「確かに顔のアレは文字だがなオツさんではない」

「カゲンちゃんの顔だと説得力ないよね〜」

「ジョウゲン、貴様あ…」

「今取り込み中なんだ後にしやがれ」

「悪いねえ俺達的にそれは聞けない相談なんだよ」

『ザモナス』

「ハルト様の邪魔はさせん」

『ゾンジス』

「変身!!」

『RIDER TIME! 仮面ライダーザモナス(ゾンジス)!!』

「ちい!ならおねんねしてな!」

「こつちのセリフだね」

雪音クリスvsゾンジス、ザモナス

「血気盛んですね先輩達……僕達はどうします?」

「我々は真打が来るまで……彼女の相手でもしましょうか?」

『1号』『ウオズ』

「あ……あああああ!」

アナザー1号、アナザーウオズvs小日向未来

そして

「兄さん」

「よお久しぶり……でもないかあ……」

「あのね兄さん聞いてほしいの私は別に兄さんの事を「もう良いよ」へ?」

もう隠す気のない自分の感情をむき出しにしてぶつける

「お前の持つてるアナザーツクヨミウオッチを回収して座標にお前を投げ込めば全てが終わる」

『ジオウ』

「ならせめて私の思いだけは聞いてほしい！」

『ツクヨミ』

「聞く意味がない」

「それはこれから判断してよね」

互いの得物を構えて睨み合う

「……………」

アナザージオウは一息吸って、割れんばかりの大声をあげた

「やっちまえ!!」

同時に全員が攻撃を開始、船のあちらこちらで爆破が起こった

—————

まずは斬月 v s 翼である

「参るー！」

翼の刀と斬月の無双セイバーで切り結ぶ、数度剣を交わすと

（ほお、篠ノ之や一夏と同年代でありながら剣の腕が立つな実戦で磨かれたものだな……二学期からか私も一夏の訓練に参加するか？）

千冬は教師としての側面から、そう判断した強いがそれだけだ

「何故だ……何故そんなに強いのにアナザーライダー……テロリストと共にいるのです！」

「テロリストだと？ 貴様等政府連中がアイツの名前で好き勝手してきたツケを払わされた件か？ それとも対話を利用して特殊部隊を送って返り討ちにされたと聞いたがな。前の理論はただの逆恨みに過ぎん」

「っ！ なら目の前で仲間を化け物にされた者達の気持ちに貴女にわかるのですか！」

翼の問いに千冬は首を傾げ

「知らない化け物にされたくなければ戦わなければ良いだけだ、ハルトは理由もなく無抵抗の人間を痛ぶるような外道ではない……まあそんなバカをやらかしたら刀のサビにしてやるがな……それと……惚れた男を悪く言われて笑って流せる程、私もまだ大人ではないのだよ」

「つ……貴女とは仲良く出来ると思いましたが勘違いだったようです」

「私もだよ知り合いに似ている雰囲気だったからな国家などと曖昧なものを守る剣を振るうようでは私の教え子にも劣るぞ侍？」

「つ！なら見せよう防人の剣！」

「良いだろう、先達として教えてやる」

「はあ！」

『蒼ノ一閃』

「ふっ！」

『メロンスカツシユ！』

2人が走り出した後、剣を振り抜き交差した

そして勝ったのは斬月、無双セイバーを流れるように納刀し、倒れた翼に一言

「お前は確かに強いが遊び心が足りない、どれだけ強い弓でも張り詰めれば切れてしまふ……だったか？やれやれ私もハルトに大分染められてしまっているな」

斬月はそのまま近くの岩に腰掛け仲間の戦いを見守る事にした

「何故、トドメを刺さない」

「無闇に殺すなど言われているし私も殺す気はないさ……こう見えて教職なんでな前途あるものは切りたくないのにな」

と目線を仲間に向け

「さて無様にも私の助けが必要な奴はいるか？」

—————

ザモナス、ゾンジスvs雪音クリス

「う、嘘だろ先輩がやられたってのか…」

「余所見してる暇あるの？」

「ちい！」

クリスはガトリングからボウガンに切り替えて攻撃するがゾンジスは無視して突貫するのをザモナスが専用ボウガンで撃ち落とすと言った連撃で間合いを詰めた

「俺達には勝てないんだよねえ」

「ああ」

「何でいつもいつも邪魔しやがる！」

「そう言えば魔王ちゃんがマウントポジションで殴り続けたのって君だっけ？」

「ああそうだ！だから1発殴らせる！」

「それは〜」

「断る！」

やはり2人に攻撃は効かないようだと思っただと理解したクリス、そもそも彼女のシンフォギアは広範囲殲滅に特化したものであり船上という場所的にも足場を壊す可能性もあり迂闊な一撃が放てずにいた

「あ、何もしなきゃ何もしないよ」

「は？」

「俺達はハルト様に邪魔するならと厳命された、しないなら戦う理由はない」

「そ、それってつまり…あそこの奴をどうにかするって事か？」

と視線を向けた先には小日向未来とアナザーウオズと1号がいた

「まあね…けど彼女を何とかするのは俺達じゃないけど」

「何方かと言えば大将同士の一騎打ちだ」

アナザージオウとアナザーツクヨミの戦いはやはりアナザージオウが優勢である
「このおー！」

アナザーツクヨミの攻撃をやはり先手を取ったようにして潰しにかかるアナザー
ジオウは

「はあ……」

何か期待していたかのような顔をしていたが外れたのかツマラないという声音で

「何でアナザーツクヨミだけなんだよ困ってるなら他のアナザーライダーにならば良い
のに」

昨今の女性ライダーも多彩な能力を持っているものも多い

白鳥の戦士 仮面ライダーファミ

恋愛の戦士 仮面ライダーポッピー

煙の騎士 仮面ライダーサーベラ

無敵の悪魔拳士 仮面ライダージャンヌ

とツワモノ揃いであるし令和最強と名高い仮面ライダーゼロツーだっているのだから

「私は兄さんと違って……ツクヨミにしかねないのよ!!」

「へ？俺の妹なのに何で他のアナザーライダーに認められてねえの？」

こう言うのってアナザーライダーが支持する同士で熱いバトルと思っていたのにと肩透かしてると

『前にも言っただろう？貴様は特別なんだ普通の人間では何人ものアナザーライダーを受け入れる事は出来ん』

ーそうだったなー

『仮に出来たとしても暴走するだけだ……まあ流石の我々として力を貸す者は選ぶぞ、そう言う意味ではハルトの妹は変身して自我は保てるがアナザーライダー達の器になれん……つまり完全な適正がなかったのだな』

ーそう言うものなのか？ー

『ああ、まあ変身して自我を保てるのは流石は妹というべきだが』

ーふーん……ー

【ハルカの兄なのに対した事ないね】

そう言えばそんな陰口言われてたなあ……はあ

「俺の妹なのに大した事ないな」

「このくらい在意趣返しは許されるだろう」

「っ！誰がだあ！」

何だろっう段々と鍍金の剥がれたコイツに対して思うのは怒りとか憎悪ではなく

「つまんねーな」

軽蔑である敵として見ていた事さえも恥ずかしい

「な、な……」

「あの時はアナザーアークワンの力で暴走状態だったから今度は自分の手だと思っただけど、何だろっう弱い者いじめで気分良くないよね」

とヘラヘラしながら言う

「弱い者は兄さんでしょ！あつちでもずっといじめられて守られてきた！私が兄さんを守るのよ！ずっとね！」

「お前は下を作って安心したいだけだろ？それに扇動してた奴の言葉なんて信用に足るか」

「っ！私じゃない！私が扇動する訳ないじゃない！！信じて兄さん！私が兄さんを一人に

しないから！」

「もう良い……俺は一人じゃない頼りになる相棒達が大切な人がいる……だけど俺の過去は戻らない……ハルカ！」

アナザージオウは別のアナザーウォッチで変身した

『W』

アナザーWに変身すると、2人は声を揃え

『『さあ、お前の罪を数えろ！』』

「数えるのは兄さんの方だあ！」

『アナザータイムジャック！』

アナザーツクヨミは必殺技を放つがアナザーWは冷静そのものだった

『ハルト、対策完了だ』

「おう」

選択肢としてはありだがアナザーライダーには悪手と言わんばかりにアナザーWとハルトも必殺技を解放した

『マキシマムドライブ』

そのまま風を纏い高く飛び上がると、アナザーWもキックで迎撃した

『『アナザーエクストリーム!!』』

呼吸を合わせた2人のアナザーキックにより競り負けたアナザーツクヨミは甲板の端っこまで吹き飛ばした

「きやああああああ！」

すると変身解除されたハルカは再びアナザーツクヨミに変身しようとするが

『コネクト』

アナザーウィザードに変身し直したハルトがコネクトの魔法を介してアナザーウオッチを取ったのである

「これで良しと」

「か、返してよ！兄さん!!」

「断る、返す理由がないんだ事件が終わるまで引っ込んでろ負け犬」

「ま、負け犬ですって！それは兄さんじゃないの！アナザーライダーなんて時代の敗北者達に王様って担がれて良い気になって！元の世界での負け犬が力を持った位で良い気ならないでよね！」

「は？」

思わず溢れた殺気は周囲の注目を集まるのは仕方のない事だった、千冬は呆れてウオズ達は懐かしみを覚える殺気を感じていた、奏者達は震えて止まっている唯一動けたのは操られている小日向未来であった

「!!」

殺気に対して反射的にレーザーを発射したが

「邪魔」

『ディケイド』

アナザーディケイドとなり自分の前後を挟む形でオーロラカーテンを展開すると光線はアナザーディケイドをスルーして海上に当たり爆散したのであった

「遊んでも良いけど君には別の役目があるからね…相手は「未来!」彼女に任せよう」
響vs未来を尻目にハルトはハルカを見遣る

「ひ…ひい!ト…トーマ助けて!!」

「無理だなゲイツリバイブの副作用はレジスタンスとして鍛え上げた人間でも悲鳴をあげる代物だぜ、俺みたいにな人じゃない限りはベットのの上だろ」

「……あ……ああ……」

「安心しろ命は取らねえよ妹だから…けどな」

変身解除して一言

「相棒達をバカにした言葉は取り消せよ」

最後の慈悲であると言うのに

「は、はっ！何よ負け犬同士で傷の舐め合いしてるのが兄さんならお似合いよ！」

特大の地雷を踏み抜いた

「前言撤回だ、殺さないけど死ぬほうがマシな目に遭わせる…俺の意見に賛成の奴」

『賛成だー！』 x 2 6

「反対のものはいるか？」

『いない!!』 x 2 6

「賛成多数で決定だな……さてハルカ、今まで散々酷い目に遭わされたのは別に良いよ俺が弱かったただけだしハーレム云々とか災厄の魔王の事はどう言われても弁明し切れないからな……けど親父達に任せられない事が一つだけある!!」

『ジオウ』

「相棒達をバカにした報いは受ける!!」

とアナザージオウの手加減した拳でハルカにラッシュを叩き込む、思い切り殴られた顔は歪み歯も抜けて返り血を浴びるがハルトは知った事ではないと拳を振り抜く、逃げようとしても捕まえて必ず顔面に振り抜いた

「がっ……ふっ……このっ！」

さながらゴ・ジャラジ・ダに怒りの拳を叩き込むクウガのようである返り血浴びたア
ナザーライダーの顔はホラーだが

ハルトは妹の歪みを正さずにいた後悔も込めて振り抜いた、そこに過去の恨みはない
…いやちよつとだけはあ

「(……)べん……」

謝ったので

「よし！んじゃ暫く寝てろ」

『フォーゼ』

アリエス・ゾディアーツの睡眠誘発能力で眠らせて少し気分が晴れたハルトが不意に
空を見上げると

「うおおおお！ビットだあ!!」

光線が響を狙った全方位から反射、屈折させている武器を見て感動していた

「良いなあ〜俺も欲しい！」

『お前には俺達がいるだろう！反射能力は持つてる奴がいるのを忘れたか！』

「あ、そだった…今度会いに行かないとな」

鏡の世界の彼にも挨拶したいしと内心で思ってたらビットが収束させた巨大な極太レーザーが響と未来に命中した先から巨大な地鳴りと共にフロンティアが浮上したのであった

「つしやあ!!お前達早く乗り込めえ!」

ここからは時間との勝負と言わんばかりにアナザーデンライナーに乗り込んだ面々はフロンティア目がけて向かうのであった

そしてフロンティアに到着したハルト達は本部に着くと

『レポート』

「おお……ここが…」

「皆さん感動してる所に悪いけど掌握お願いします」

「お任せを！伝道師様！」

パヴァリアの皆さんが基地の端末を弄っていると

「……………」

「アダムさん？」

アダムさんが端末を弄る姿に不思議と疑問に思えてならないが
!!!

謎の轟音と共に稼働してるのが伝わった、え？まさか…

「掌握したよ、フロンティアを」

「「えええええええ!!」」

アダムさん有能過ぎだろ！と皆が顔を向けている特にサンジエルマン達の驚きようは大きい、あの局長が！と言わんばかりの顔だ

「早ええ！スゲエええ！」

「当然だよ、この位」

凄人じゃないか俺も負けられないぞ！

「ありがとうございます！お礼は後日に今は空いた時間で……フロンティアを増やすぞ
！」

「[[[はあ]]]」

これには全員キョトンとしていたが

「まずはほいつと！」

バイオグリーザの光学迷彩でフロンティアの姿を隠してつと、そして

「ポチツと」

『ジエミニ』『コピー』

二つに分身するゼブリアンデットとアナザーワイザードの魔法の力でもう一つのフロンティアを作成させて表に出したのであった

「よし完了！あ、ネフィリムはコピーフロンティアに捨てるとして本命の動力はセルメダ
ルで回すから」

「はっ！」

「いやいや…化け物だろ君の方が」

「ははは俺はアダムさんみたいには出来ませんよ……まあ精々連中には偽者のフロン
ティアの取り合いでもして貰いましょうか」

「魔王だな本当に君は」

「安心して下さい、決めましたから」

「何をだい？」

「俺は王様になります、敗者と言われた彼等を勝者にする為に」

新たなフロンティア

「へえ……その心は？」

「ハルカに言われて気づきました……コイツらを敗者だ怪人だって言って悪役にしている……こんなに良い奴らなのに……」

『ハルト……』

「最初は恨む気持ちもありましたが今では俺の大事な相棒ですよ……そんな彼等が化け物と軽蔑される世界なんて認めません……今俺の世界に帰っても彼等は化け物と呼ばれてしまう……」

「だから王にね」

「はい、皆が俺を王と認めれば偏見なんて無くなります……これはリベンジなんです負けたままのアナザーライダーが世界に勝ってヒーローになる為の」

「覇を唱えたりするつもりはないがアナザーライダーの名誉回復や復権が出来るのは俺だけだろう」

「ふーん……まあ好きにしまえ、君の自由だ」

「そうしますよ…あ、良ければ見ませんか？偽りのフロンティア争奪戦」

「良いかな余興としては」

「はい見ましよう見ましよう」

その後、偽りのフロンティア争奪戦は原作通りに進行している…あ、因みにアダムさんに頼んで月の施設を起動させて落下を止めました！やったぜ！そして70億人の絶唱が自称英雄と合体したゼットンに当て消し飛ばした後

「なあキャロル」

「何だ？」

定位置と化したハルトの膝上から見上げるキャロルに問いかける

「お前もフォニックゲインってあるの？」

「あるぞ」

「どれくらい？」

「ん…そうだな…聞いて驚け、オレはあの絶唱を超えるフォニックゲインだ！」

「え？スゲエなキャロル！」

「そんな事ないさオレなど800年前オーズの足元にも及ばん」

「いやアレは俺からしてもチートだと思っから比較したらダメだよ」

何でガタキリバで軍隊作れるの？サゴーズで地割れ起こせるの？と疑問しかないくらい強いんだよなあ、あの王様

「ふふ…オレのなるオーズは彼処の域にまで達したいのだ」

「彼処まで行かなくてもキャロルは強いから安心して！」

と話していると

「スマナイ少し良いだろうか？」

「この部屋も広いわねえ〜」

「フロンティア…予想外に快適な訳だ」

「あ、サンジェルマンさん！今日はありがとうございました！」

「いいえ前にも話した通りにフロンティアの一部を結社も使わせてもらっうわね」

「勿論！」

「あと…食堂の件も忘れずに」

「勿論だけど…そっちが本音？」

「まさか…そうだ良ければだけど聖典（オーズ）を見せてもらっても良いかしら」

「どうぞどうぞ」

ともう隠す気のないDVDを渡すとサンジェルマンとカリオストロは離れたが

「……………」

「何だプレラーティ？」

「どうしたの？」

「貴様等にはチフオージユ・シャトーの家賃滞納の件で問い質したい訳だ」

「あーそうだった…具体的には幾らだろうか…」

「滞納したのをキャロルに払わせるに当たって効果的なダメージがあるもの考えた訳だ、おいハルト立て」

「ん？おう」

キャロルを下ろして立ち上がると

「私の前に座る訳だ正座でな」

促されたので正座をする…何だこれ？

「では」

「ん？」「はあ!!」

プレラーティがキャロルの代わりに膝上に座り始めたのであった、何故かドヤ顔でキャロルを見るプレラーティ

「うむ、悪くない訳だ」

「なあ？何故これがキャロルに効くんだ？」

物理的ダメージ入らないだろ？と思っっていたら

『ハルト、アレ見ろ』

ーアレ？……ひい！ー

顔に出なかつたのは自分を褒めてあげたい、よく見ればキャロルが今にも世界を燃やしてしまいそうな程の表情に血涙流してるとお！俺は今のキャロルが無銘剣虚無をもつていても驚かないぞ！

「どけ」

「断る訳だ、嫌なら家賃を払え」

「ぐう……………」

「ほれ」

「っ！」

プレラーティは渋るキャロルに追い打ちをかけるようにハルトに抱きついたのだ、余りの事で赤面し硬直していると

「わ、わかった！だからハルトから離れろ！」

「言質は取った訳だ、感謝するぞハルト…お前には食堂の3食セットで手を打つ訳だ」

「そんなので良いの？」

「食事は私の数少ない娯楽な訳だ」

「んじや好きなの作るわ」

「感謝するぞハルト」

とブレラーティが降りてトタトタとサンジェルマンの後を追うとキャロルが

「おいハルト」

「は、はい!!」

「貴様正座しろ正座あ！」

「してますけど？」

「口答えするなあ!!オレというものがありませんながらデレデレしよって許さん!!」

「デレデレはしてたくない!？」

「言い訳するのか!!」

「それでも俺はやってない!!」

「やってるだろう！」

とやんややんやと喧嘩しているのを見ていた人物達が入ってきた

「まったく…外まで聞こえたぞ幾ら広いからって節度は守れ」

「そうだよ！イチャイチャするなら東さんも呼べえい！」

「2人とも！ありがとうね！」

「ノープロブレム！まあ殆どあのゲネシスドライバー声の人が持つてただけどね！」
「そうだな私も声が似てると思ったぞ」

中の人一緒だからとは言えないと、それは置いておいて俺個人として伝えたい言葉がある

「皆、ありがとう」

「気にするな、予期せぬ形で2人の家が出来たのは驚いたが……まあ快適だから許すとしてよう」

「そうだなら……それよりも宴会なのだろう今日も期待しているぞハルト」

「うんうん……って何処が2人の家なのかなキャロリン？」

「それは「喧嘩するならデザート抜き」皆の家だな……うむ」

「うんうん……あ、そうだ！一夏達も呼んで宴会する？」

「そうさせて貰おう……そう言えば二学期はいつから始まるのだ？」

「あく大丈夫大丈夫、時流操作してるからあっちだと……夏休み始まってからまだ1日も経ってないよ」

「「え？」」

「まあ大した事じゃないな……そうだな……あ……一夏達を呼べば夏休みの宿題が一日で終わる計算だな」

「大した事だよ！ハル君！いつの間にそんな事が出来るようになったのさ！」
「ん〜修行と気合い？」

「大事な所が曖昧だあ！私達の事をチート呼びするけどハル君が1番のチートだよ!!」
「待てハルト、今すぐ一夏達を連れてくる…丁度あのバカ共に実技面の補修をさせよう
と思っていた所だ」

「良いよ〜けどISの会場設営には時間がかかるな…」

「何言ってるのさハル君！私達が開発したヒューマギアの1人、最強匠親方に頼めば直ぐだよ〜」

「そうだけど1人じゃ…そうだ親方が増えれば良いんだ！」

「イエース！経費は篠ノ之製作所で発注するぜ」

「ありがとう〜！」

「どういたしまして〜！」

とハイタッチする2人を尻目に千冬は一夏達を連れて行こうとキャロルに頼んでI
S世界のポータルまで向かうのであった

「さてと残りは…ウオズ」

「は〜！」

「ついて来い」

「仰せのままに我が魔王」

—————

マリア、セレナ、切歌、調、ハルカの5人は護送される事になった。その砂浜にて響にマリアのガングニールが手渡された瞬間の事

「やーやー！感動の場面に悪いねえ皆さん」

ハルトがウオズを伴った現れた

「兄さん！」

「おー妹よ手錠かけられた姿は滑稽だねえ」

つまらない物を見る目で妹を見ているハルトに対して噛み付くように

「つ!!返しなさいよアナザーウオッチ！」

「やだ、あれ？トーマは？」

「トーマなら青ウオズと一緒に何処か行ったわよ…」

「あー捨てられたんだ可哀想」

「い……いちいち煽らないと会話出来ないのかしら？」

「今までの事考えて煽られるような事をしたのはどっちかな？」

「小さな事まで根に持つて……小さい男！」

「んじやお前はもつと小さい女だな……残念だわ……俺と血が繋がってるとか本当嫌だ」

「ぐう……」

「あ、貴方がハルカさんのお兄さん……言い過ぎじゃないんですか！」

「立花響か……一応君には感謝してるよ、君ともう一人のお陰でフロンティアが起動したんだから」

「けどフロンティアは破壊されたわ残念だったわね兄さん」

「そうだけど……疑問じゃないの？最初に上陸した俺達が何もせずに戻ったのか……普通なら爆弾なり仕掛けるよ？」

「……兄さんならやりかねないわ」

「……………まさか!!」

「はいな！貴女達がチャンバラごっこしてたフロンティアは俺が拵えた精巧な偽者よ！

俺は…いや俺達魔王軍が本当のフロンティアを占領してるんだ！」

両手を広げて笑顔で言う周囲が戦慄した

「領土も主権も国民もあるからね、国家になる訳だこれからは名実とも王になったから、よろしくね〜」

「に、兄さんが…王様……」

「そうだよ一応長い付き合いだからさ言つとこうと思つてね、これ以上アンタら政府とか国連所属とか頭のおかしい事言われたくないし」

「っ!!」

堪忍袋の尾が切れたと弦十郎は理解した、あの件で完全に魔王達が敵に回つたと

「そんな事聞かされて見逃すとても？」

「俺を殴つても良いけど、そしたら月の欠片が落下を再開する…そうなつたらもう止められないし……それより良いの？」

不適に笑うハルトの顔を見て待つてましたと現れたのはエビルダイバー、ボルキヤンサーにアビソドンと言つた海洋性のミラーモンスターに加えて陸地を包囲してるのはギガゼールの大群とマグナギガが武装を展開しているまた空に逃げようものならばダークウイングやドラグレッターと言つたモンスターが包囲しており逃げ場など何処にもない…光景だけ見たら劇場版後半のライダー集合に大しての怪人軍団である

「大事な仲間さんは既に俺の間合いだよ…それにこの場にいない天羽奏がどうなるかなあー?」

「奏に何をした!人質とは卑怯だぞ!」

「別に何もおくまあ彼女には近い内。会いに行こうかなあ〜アンタらの中では珍しく面白い奴だし…あ、手土産もいるかなあ〜…こら!」

と襲おうとしたモンスターの頭を叩いて止めた、ハルトの隣に立つはサイ型ミラーモンスターのメタルガラス…密かに推していたので召喚に応じてくれて嬉しいモンスターの一人

「よしよし…あ、彼処の人たちは食べちゃダメだよ…妹は食べるなよ〜食べると腹壊すだろうから」

『!!』

「あはは!良い子良い子」

素直に頷くメタルガラスに良い子良い子と頭を撫でるハルト

ハルトの修行の成果 アナザー龍騎編においたアドベントするモンスターの範囲を拡大化に成功したのだ…地味に食費が嵩張って大変なデメリット付きだが…

「ぐっ!」

「それと手を出すなら覚悟しろよ…俺達は仲間一人がやられたら全員でやり返す、それ

を覚えとけ……んじや」

「ま、待ってよ兄さん！お願い助けて！私も連れて行って!!」

「は？やなことつた刑務所で反省してろ、んで二度と帰ってくるな」

「私は役に立てるわよ！必ず兄さんの力に!!」

「俺の作りたい国にお前みたいなの人間は必要ない」

「そんな……」

「さて……と」

完全に疫病神認定の妹に視線を逸らしたハルトは仰々しい態度を取り

「ではでは皆様、束の間の平穏をお楽しみに今度から魔王は貴方達の味方になるとは限りませんので悪しからず」

バイバイと手を振るとウオズのワープで転移した、それを合図にミラーモンスター達も各々がミラーワールドに帰ったのであった

—————

フロンティアは現在、仮面ライダーウィザードに出る ファントムの1人 キマイラに頼んでカメレオンリングで使う光学迷彩の魔法を貼ってもらっている

「ありがとうキマイラさん！」

「ふん！人間よ対価は安くないぞ」

「勿論、これをどうぞ！」

と出したのは大きな豚の丸焼きであつた

「良からうでは……うむ……旨いが……励めよ」

一口で平らげるとキマイラは昼寝をしたのであつた

「ア……アレを一口かよ凄いな流石は古のフアントム」

「我が魔王、宴席の用意が整いました」

「ありがとうウオズ、んじや行くか」

「はい」

と案内された先には今回協力してくれた。パヴァリアの皆やキャロルや千冬達、それらウオズや皆である

今は家が出来てないので青空の元で悪いがシートや簡易テントを建てて思い思いにお酒や食べ物を持っている、よし

「えーと……長い話は面倒なので今回は協力ありがとう！嫌な事は忘れて楽しんでつて!!
かんばーい！」

「」「」「おー……」「」

と宴会が始まったのであった

料理もひと段落したので宴会に混ざりにハルトが動きかと目当ての人を見つけたので近づいていく

「あ、一夏ー!」

「あ、ハル兄」

あの後、千冬が課題と補修……まあ実際は一夏を精神と時の部屋の要領で訓練させたいとの事で連れてこられたのだ……確かに一夏の成績考えれば妥当ではあるけどな。一応は箒と鈴ちゃんなどある程度事情を知っている人は呼んである……2人も驚きながらも順応しているが

「楽しんでる?」

「ああ……今更だけどハル兄って本当に異世界人なんだな」

「何だよ疑ってたのか?」

「少しだけ……千冬姉からカミングアウトされた時は嘘だろと思ったよ千冬姉でも冗談言うんだなってさ……けど」

言い淀んだ一夏の言いたいことを見抜いて一言

「あく誘拐の時か変身したからな俺」

首肯したので補足するように話す

「アレ見たら信じるしかないなつて」

「そつか…頑張れよ二学期からは色んな行事があるらしいじゃん無理せず楽しみ、後千冬のシゴキに耐えろ頑張れ」

「ハル兄も無理しないでくれよ…ごめん自信ない」

「阿保、俺は過労死などせん」

「そこまで働く前に止めさせるよ！」

「流石だな流石は俺の弟分」

「……………ハル兄は良いのか？」

「何が？」

「妹さん…刑務所に行ったんだろ？」

「どうでも良いよ…元々仲良くなかったんだ両親の手前堪えてただけだし、もうその辺のしがらみないから好きにしようつてな向こうも大人なんだ自分の不始末くらい何とかしろつてな」

「……………」

「ああ間違つてると思うけどな…恨みは簡単には消えないんだよ、お前だつて覚えてるだろ転入初日のラウラが初対面で何したか？」

「ああ……けど兄妹って互いを支え合うんじゃない」

「正解だけど支えるのに疲れたんだ俺はな……だからよ一夏、お前はこうなるなよ千冬が間違つてると思ったら怯えずに言つてやれや俺は止めずにいたのも助長した一因だからな」

「じゃあ千冬姉は部屋の片付けと家事と……」

「それ千冬に会心の一撃が入る奴、まあ俺がするから関係ねえ様な気もするけど」

「あつ……千冬姉はハル兄の所に永久就職するか」

「ははは！ そう言う一夏はどうよ？ 箒ちゃん達と甘酸っぱい思い出は作れてるかい？」

「何でそうなるんだよ」

「悪い悪い、まあ普通の人生で送れない筈だった体験をしてんだ楽しんでくれ」

『お前は数年単位で異世界旅してるがな』

「それは言わない約束だ」

「ありがとうなハル兄！」

「おう」

「後は頑張れ、箒ちゃん鈴ちゃん」

と影ながら応援している2人の女の子を目線を送るのであった。

そしてウオズ達を見つけたので輪に入ると

「祝え！我が魔王が王を目指すと決めた日を！」

「おおおおお！！」

「魔王になると決めた日だから魔王記念日ですね」

「サラダじゃない記念日を増やすな」

「我が魔王、私は嬉しいですよ…今までならないと言ってたのに…私は…」

「ウオズ…」

もしかしてこのままならないで欲しいのかなと思っていたのだが

「これで遠慮なく祝えます!!」

「俺の感動を返せ馬鹿野郎」

「冗談です…：それと我が魔王、以前話してたバース装着者の件ですが」

「あ、進展あったの？」

「実はバースの候補者が追加で3名見つかりまして選考に我が魔王のご意見を」と

「けどバースドライバーは、もう一機だけだぜ？それ以上はキャロル作らないって言っ

てるし」

「それで我が魔王には提案がありました」

「ああ…：前言った奴だろ？候補者をバース装着者としてスカウト、適正なくても候補者を完全に味方にする為に候補者に合わせたライダーシステムを開発しないかって奴か」

俺達が保有しているライダーシステムは

オーズドライバー、バースドライバー

戦極ドライバー、ゲネシスドライバー

である、一応、戦極ドライバーとゲネシスドライバーはスペアも合わせて一定数は確保しているから渡す分には問題ないし束曰く戦極ドライバーにもブレーカーを仕込んでるらしいから反乱の心配もないと安全性もお墨付きである

ーあと束がキャロルに負けじと最近ゼロワンやビルド周りの技術を何やら研究してるなあ研究室からチームがどうだのプロスとかレイダーとか聞こえたり、一緒にアギトやドライバーを見た日から青いパウダースーツや音速のライダーを作ってるらしいけど是非もないよね！ー

『それ答えじゃねえの？』

ー落ちつけ、ネビュラガスやコアドライピアもないのにライダー 関連の技術が再現できる訳ないじゃん！

『そう思ってたら再現されたよな？』

「あ、安全装置はあるらしいから!!」

「人選大変なので我が魔王の力でサバトを開いて魔法使いを作れませんか?」

「ナチュラルに外道な儀式を提案すんなよ……つーかサバトはファントム化が成功で魔法使いになるのはイレギュラーだからなアレ」

「でしたら……手筈通りに」

「まあ細事は任せる言ったからな……えと候補者の情報は?」

「此方に」

と渡された資料を見てハルトはウオズに一言

「ウオズさ……立花響に恨みでもある?」

明らかに彼女を曇らせる人選なんだがと尋ねると

「いいえ……まあナツキ殿が我が魔王を利用して特殊部隊と当てさせた件に思う所がない訳ではありませんが」

「思うところしかないだろ意趣返しか」

「さて今日は飲みますよ!!」

「「おお……」」

「話逸らすな!!はあ……フイーニスも楽しんでな……それと」

「はい酔ったら引きずりますので」

「頼む」

すっかり手慣れたフィーニスを背にしたのであったがハルトは資料を見て溜息を吐いた

「ま、自由意思だから断つてくれて良いんだけどねえ」

その顔写真の横には名前があった

安藤創世 仮面ライダーG3、ヘルブロス装着者候補

板場弓美 仮面ライダーマツハ 装着者候補

寺島詩織 仮面ライダー黒影・真 装着者候補

立花響と同じリディアン女学院の生徒で彼女達の学友

ある世界では龍の鎧を纏う彼女達がこの世界において仮面の戦士となり戦う事をハルトはまだ知るよしもなかった

「あ、キャロル！」

「ん？ハルトか」

「楽しんでる？」

「まあな……しかし随分と増えたものだな」

「パヴァリア結社の人もいるからね前回よりも大人数だ、宴会は多い方が楽しいよ」

「そうだな………はあ………」

「悩みか？」

「わかるか」

「当たり前だろう大事な人が悩んでるのに心配しない訳ないだろ」

「自然と口説くな……オレはどうしたら良いんだと思つてな」

「は？」

「最初は恩讐に身を委ねて世界を分解したいと言つた……だがお前と出会つて世界には色んなバカがいると知つた」

「一言余計だぞ誰がバカだ」

『少なくとも意地の為にオーマジオウに喧嘩を売るくらいにはバカだな』

「いつまでそのネタ弄る気だ」

「パパがオレに残した命題は色んな人と会えと……そっちなのかと思いはじめている……どっちが正しいんだろうな」

ナツキの話ではオレの計画は立花響達の手によって失敗すると聞いている……アダム達も失敗前提で計画を練っているのだろう……フロンティアに関しては万一の避難所感覚だろうな

「知るか、錫音や束にも言ったけど自分がやりたい方が本音だろうよ世界を分解でも旅でもキャロルがやりたいなら全力で手伝うよ、その……俺の特別だからな」

「そうか」

恐らく今回の件でナツキはオレ達から離れるだろう、彼が協力してくれているのは立花響と小日向未来の安全の為だ、最近エルフラインと良い感じらしいので2人で逃してやるか……だがそうしたらオレはきつと……ナツキの言う未来に向かうのだろう

「ただ死ぬのは絶対に許さん、もし死んだら俺がアナザーオーマジオウになってこの世界を滅ぼして俺も死ぬ、キャロルを1人だけで死なせるものか墮ちる時は一緒だ」

キャロルの手を握るといつものように笑うハルトを見て

「ほお世界と心中か……ウオズ達には残念だろうよ折角お前がアナザーオーマジオウになったのに自殺でもされた困るだろうな」

「ナツキには貸しがあるのは事実だけどキャロルと天秤にかけるまでもない…敵に回らなれば倒す…邪魔するなら敵だ…：ん…：そう言えばキャロル」

「ん？何だ…：つ！！！」

キャロルが二の句を継ぐ前にハルトがキスをして唇を塞いだのであった、短い時間であったが効果的面で赤面したキャロルとイタズラ成功と言う顔のハルトは一言

「この間のお礼と仕返しだ…：何っ？か…：俺からするのは覚悟いるな」

「……………」

「キャロル？」

「……………」

そのままキャロルは倒れてしまった

「キャロル？キャ、キャロル…！え、衛生兵！！この中にお医者様はいらっしゃいませんか！！」

とハルトが大声で呼んで現れたのは

「！！」

救急車型ミニカー…：否！マツトドクターシフトカーである

「あ、ありがとうドクター…！よし！」

ハルトは武器としてなら使えるメリケンサック型アイテム ブレイクガンナーを取

り出すとドクターを装填した

『TUNE……MAD DOCTOR』

「キャロル！戻ってこい！」

ブレイクガンナーを当てようとした時

「落ちていて魔王ちゃん！それ治るけど死ぬ程痛い奴だから!!」

「HANNA SE！俺はキャロルを治すんだ！」

「恋の病は治せない！」

「ドクターで治せない程に重傷ですと！ならアナザージオウIIの巻き戻しで!!」

「取り敢えず正気に戻れ馬鹿者」

「ぎゃん！」

「正気に戻ったか？」

「オレハシヨウキニモドツタ！」

「まだのようだな後何発かやってみるか？」

「いえ戻りました。本当に申し訳ありません」

「キャロルは混乱してるだけだ：私も不意打ちされたがな」

「あの時の千冬可愛かつ「何だ？」いえ何でもありません！」

「ええー！2人ともズルい!!!束さんはハル君！」

「雰囲気作つてからやるから待つてて」

「期待してるぜベイバー！」

と酒瓶片手に浮かれてる束にクロエは

「お母さん…お酒控えてください」

「クーちゃんも飲もうよー！」

「未成年に酒を勧めるな馬鹿者」

「それ娘にやつちや一番ダメだよ束」

流石に庇えないので止めておく事にしたのであつた

宴は楽しく過ぎていく、魔王が見るのは明るい未来か救いのない未来か

それは次の旅路で決まるだろう

「ん？」「何だ？」「あらあら…」

冥府に住まう 三人の悪魔と出会う時、ハルトは一つの決断を下す事となるのはまだ
誰も知らない物語

転生したらスライムだった件

魔物の街

さてシンフォギア奏者邂逅と妹と過去に決別してから数日後、転移エネルギーが溜まったので転移する事にした

「よし準備完了！」

あの後、東、キャラル、結社の皆さんの協力でフロンティアを丸ごと転移させる事が可能になった：俺が転移すると知りアダムさんやサンジェルマン達幹部陣はシンフォギア世界に残る事に、ただ一部の研究者はフロンティアの解析の為に滞在する事になった

キャラルは残るらしい計画の実行寸前というのもありついでに行かないと言われたがポータルも併設したので以前のような寂しさはない

「大丈夫だってキャラルちゃんは俺達に任せろよ」

と笑顔のナツキに対して

「ああ……もしキャロルに手を出したり裏切ったりしようものなら灰化させるから」
「え？いつの間にかオルフェノクの力に目覚めたの？」

「冗談じゃないよキャロルを裏切った瞬間、お前を敵とみなす同情もないと思え」
「……………分かったよ」

「んじゃ「ハルト」おう後でな」

ナツキから離れキャロルの場所に向かうと

「気をつけろよ」

「ああキャロルもな」

「まあポータルがあるから直ぐに会えるがな」

「だな、んじや行ってくる！」

「ああ！」

そしてフロンティア中枢に向かい、アナザーウォッチを端末に挿入する

『新たな座標を確認、ジャンプするぞ』

「つしや！全員何かに掴まれ！」

その言葉を合図にフロンティアはシンフォギア 世界から転移したのであった

――

世界から世界へ移動する、ほんの僅かな時間で不思議な事が起こった

〈別世界からの来訪者を確認、これより最適化させます〉

アナザーライダー達ではない何処か事務的な声が聞こえたのである

〈当人の持つ技術スキルに変換…成功しました〉

―何か知らないがやったぜ―

〈ユニークスキル変身者（カワルモノ）の獲得に挑戦…成功しました〉

―おお！ユニークって良いやつじゃん―

〈加えてユニークスキル料理人（サバクモノ）の獲得に挑戦…成功しました〉

―料理人か…皆に美味しいもの食べさせたいなあ―

〈更に時間耐性の獲得に挑戦…成功しました〉

―時間耐性か、まあ時の王だから是非もないよね―

〈以上で完了します〉

―うん、ありがとう―

それだけ言うとはルトの意識は途切れたのであった

――――

ここは魔物の町、ある存在が率いておりボブゴブリン、ゴブリナ、鬼人などが互いに

仲良くして暮らしている、その存在とは

「オークロードか：何か厄介事の匂いがするよなあ」

水色の流動体の生き物 そうスライムである

名前はリムル・テンペスト この世界でスライムに転生し暴風竜 ヴエルドラと友達になつた唯一無二のスライムだ

「大丈夫ですよリムル様ならオークロードなど一捻りですよ！」

と息巻くのは額にツノの生えたスタイルのよい美人 名をシオン、リムルの秘書であり最近リムル達の仲間になつた鬼人だ

「そうは言つても、まだまだやらないと行けない事も沢山あるし………ん？」

急に暗くなつた事にリムルは疑問に思い窓の外を見ると街全体が薄暗くなつていた

「あれ？もう夜？」

と首を傾げていると

〈否 時間的に夜になるのはおかしいです、原因を解析：完了しました〉

―何なんだ大賢者？―

〈はい、これは何かが街の上空に浮遊し影となつていると推測〉

―何だソレ？―

彼のスキル 大賢者と話していると部屋のドアを大きくボタン！と力強く開け放つ

者がいた

「リムル様、空に謎の大型の飛行物体が」

青い服を着る角を生やしたイケメン、鬼人ソウエイが慌てた様子で報告に来た

「ああ…一体何なんだあれ…とにかく厳戒態勢だ直ぐに動くぞ！」

「「はっ！」」

彼等が忙しいそうにしている中、フロンティアでは皆が覚醒してダメージチェックに勤しんでいる中、ハルトは一人溜息を吐く

「やっぱり俺の世界じゃない…」

別の意味でショックを受けていた

『そんな事もあるさ…まあ今を楽しめ』

「そだな、急ぐ旅でもないし俺は俺のペースで旅をするか」

とハルトは端末からウオッチを外してポケットに入れると研究員の1人が近づいて

「で、伝道師様！ここが異世界なんですね！」

「そうだよ錬金術師君、新たな未知が君を待っているんだ…ようこそ新たな世界についてね此処にはどんな人がいるんだろううな楽しみだよ」

「そうですね素晴らしい新しい発見が…ああ、それとですねちようど真下に街があるの

ですが如何致しましょう?」

それを聞いて即断した

「フロンティア発進! その街の日照権を守れ! んで、その後謝罪も込めて街に降りる! 対策も練りたいから主な奴を集めてくれ!」

「はっ!」

慌てて錬金術師が動いたのを見て

「異世界だ……どんな人がいるんだろ面白い匂いがするな一足先に降りるとしよう……皆が別室に集まつてるその際に」

楽しみで仕方ないと軽い足取りでハルトは会議室に向かう……フリをしてアナザータイムマジーンに向かうのであった

アナザータイムマジーン格納庫

「そんな事だろうと思いましたがよ我が魔王」

「ここがどんな世界かもわからないのに大将が進んで危険地帯に行くのは感心しないな魔王ちゃん」

「うむ」

「まあ気持ちはわかりますよ魔王様……抜け駆けしたい気持ちは」

待ち合わせしたと思うような正確さで待っていた家臣団を見てハルトは朴が引き攣り

「何で分かったの？」

としか言えなかった

「バレバレですよ我が魔王、さあ皆集めてるんですから会議に向かいますよ」

「嫌だ嫌だ！アナザータイムマジーンで街の人とお話するんだあ！」

「我儘言わないで下さい」

「断る！彼処には面白い冒険が待ってるかも知れないんだ行かなきゃ損だよ！」

「いやいや先ずは対策をですね……」

「対策なんて……動いてから考えれば良い！」

『お、翔太郎の台詞だな』

ーふっ……ハードボイルド魔王と呼んでくれー

『つせえ半熟卵魔王』

ーな、何だトオー！

アナザーWと話しているとウオズから

「聞いてますか我が魔王！」

「ごめんまったく聞いてなかった！」

「素直なのは美德ですが……はあ……良いですか我が魔王、ここは我々に取って未知の世界なんですどんな強者がいるかも不明ですので我が魔王の安全の為に下ろす訳には行かないのですよ」

「えー！うっ！……じ、実は…俺は『新しい街に降りなきや死んでしまう病』なんだ！」

『何だソレは！新しい病気か！』

『間に受けるなアナザーエグゼイド !!』

まあそんな嘘通じるわけもなく

「ありますかそんな病気!!」

「ダメ？」

「ダメです……まったく『!!』な、何事ですか！」

侵入者のサイレンが鳴り響くフロンティアに対してハルトはアダムから教えてもらったコンソールで侵入者の位置を見ると

「あ、上陸してるね……あの街の人だ……ヤバイ怒ってるんだ……俺が早く降りなかったからー！」

しまった！と後悔しているがウオズ達は

「いやいや調査でしょう、虚空からいきなり空に浮かぶ島が出たんですから驚きますよ」

冷静に対処していた

「んじや代表して俺が謝ってくる、皆を危険な真似に合わせたくない」

「そんな事言つて向こうの人に会いに行きたいだけでしよう？」

「そうとも言う、んじや行つてきまーす！」

「行かせませんよ変わりに私かジョウゲンが向か「アデュー！」お待ちを我が魔王！」

ウオズが止める前にハルトはダンデライナーを解錠するなり直ぐ様向かったのであつた

「ええい…自由奔放なのは昔から変わらさずですか！」

「寧ろ若い分、勢いで動くから大変だよね」

「いやハルト様には深い考えが…：…ないな」

「そうですね大方、面白い匂いがしたから会いに行つたでしょうけど…：これ僕達も行かないとまずいですよね」

フィーニスの言葉に皆が動き始めた

「ジョウゲンは千冬嬢を呼んで下さい、やはり我が魔王の手綱を握れるのは今はあの人だけです」

「了解」

「フィーニス！」

「はい…んじや魔王様追いかけますヨオ」

『1号』

アナザー1号になったファイニスの背にウオズ達が飛び乗ると直ぐにハルトを追いかけたのであつた

———

その頃、リムル一行はと言うとフロンティアに上陸して周りを見渡していた

「凄いなあどんな原理で島が浮いてるんだ？」

〈告 この世界の飛行魔法に該当しない法則で浮いています〉

「え？それってつまり」

〈解 異世界の技術となります〉

「すごいシンプルな答えだな」

「我が主、此処は」

現れた大きな狼 ランガの問いにリムルは頭を撫でながら

「多分、誰かの何だろうけど……誰……の……」

自分の考えを話そうとしてリムルだったが突然聞こえたエンジン音に耳を澄ませてみて見たらだ

「何アレ？」

空飛ぶバイクに乗ってる人がこちらに向かってくるではないか

「おーい！その人オ!!」

「我が主！」

「大丈夫……多分」

〈告、対象の生体反応から見るに好奇心の感情を検出しました〉

「敵じゃないと思う」

そう一人呟くと青年は浮遊バイクから降りて笑顔で一言

「つと……初めまして！俺は常葉ハルト、このフロンティアを治めています！」

第一印象は大事と笑顔で話すと敵意はないと分かってくれたのか情報が飲み込めないのかキョトンとしているが

「街の人ですよね？貴方達の日照権を害して申し訳ない直ぐに島を動かすから待つて欲しいんですがよろしいでしょうか？」

「あ？えと……俺はリムル、悪いスライムじゃないよ」

「……………え？何でその台詞……」

あの有名なゲームのセリフじゃんと考えに至った結果として

「貴方と一緒だよ」

「つまり」

「そ、俺は日本人だ」

「よ、良かったあ……知らない場所に来て不安だったんです同郷に会えて嬉しいですよ！」
海外旅行で同じ国の人に会ったらこんな感じだろうなあと思つてたのは内緒である

「俺もだよ、しかし凄いい島だな……フロンティアって言つたっけ？」

「はいようこそ！ 歓迎しますよリムルさん!!」

「ありがとうな」

「ではこちらへ俺達の島を案内しますよ」

「おう」

これが後の歴史において永世友好国となる

ジュラ・テンペスト連邦国 総統 リムル・テンペストとの最初の出会いであつたが

「追いつきましたよ我が魔王」

「げっ……ウオズ……リムルさん乗って下さい！」

「え？ ちよつ、うわあ！」

「発進!!」

「我が主い！」

「逃がすとお思いで？ フィーニス加速です」

「はいはい」

ダンデライナーでリムルと一緒に走り出したハルトをアナザー1号とウオズは追いかけて直すのであった

そして

「到着……ふう……危なかったぜ」

「え、えーと……あの人達って」

「俺の仲間ですよ何か異世界に来たばかりだから皆神経質気味で申し訳ありませんね」

「別に気にしてないよ」

「そう言っただけで良かったです、そう言えばこの先に……あ……」

「どうした？」

リムルが首を傾げているとそこには

「言い訳なら聞くがどうするハルト？」

覇気を纏い仁王立ちで待ち伏せていた千冬がいた怖い……

「千冬ちよつと待って……怒るのは後にしてくれ今俺は異世界間交流の真っ最中なんだ抜け駆けした件については「正座」はい……」

「客人よ我等が代表が迷惑をおかけして失礼した、これより先の案内は代理の者がする……私はコレと話すので少し待ってください」

「ウオズ達だなあ……これ」

「その通りだ……まったく……好奇心のままいきなり飛び出すバカがいるか！」

「ごめんなさい!!」

その怒号を背に聞こえたリムルは顔を顰めて

「なあ……アレって」

「大丈夫」

「いやけど……アイツって此処の領主？なのに……」

「ノリと勢いと思いつきで動きハルト様には千冬嬢の説教が一番」

「これって……」

〈告 个体名 常葉ハルトは尻に敷かれています〉

「ああ見なくてもわかる」

リムルの目には涙目で正座しているハルトの姿があった

会議室にて

「みつともない所を見せてしまいましたね」

「ああ大丈夫だ……それでお前達の目的は？」

「異世界交流です」

「え？」

「「「え？」」」」

「何でお前の仲間達も驚いてんだよ」

「本当ですよねウオズく知っててくれないと困るよ」

「そんな話聞いてませんよ我が魔王！」

「リムルさんと会って決めた……やっぱ国を作るなら色々な人達と仲良くしたいじゃん
！それもまた旅の良い1ページ」

と
それに未来の俺だって独りぼっちだったから闇墮ちしたかも知れないじゃん
と

「お願いですから脊髄反射で動かないでいただけますか？ 貴方の行動に振り回される
我々の身にもなって下さい！」

「良いじゃんリムルさんは信頼できる人だよ」

「……………その心は？」

「え？『悪いスライムじゃないよ』って言ってくれたからだけど」

「凄い素直な理由だ…ってスライム？」

「ああそうだ俺はスライムなんだよ」

そう答えるとリムルは本来のスライムの姿に戻ると束や錬金術師達の研究者達が、オオ！と驚いた顔をしておりハルトは恐る恐るリムルを少し触りフニフニした感触を楽しんでいる

「凄い…本当にスライムだあ…な！リムルさんは悪いスライムじゃないんだよ！」

「ハルト様…信じる心は素敵だが!!」

「少しは疑ったりしましょうよ!!未知の生命体の言葉を間に受ける人がいますか！」

「魔王ちゃんが好きなウルトラマンでも疑うよ！」

「まずは相手を信じる事、そうでないと人間は永遠に平和なんて掴む事なんかできっこ

無いんだ！…って俺の憧れるヒーローは言ってたぞ！」

「何でそれをあの世界の人に説かないんだハルト？」

「言っても意味ないから、それに大丈夫だよ」

家臣団が諫める中、ハルトはカラカラ笑って

「俺一人ならどうにもならないけど俺には何かあっても頼りになるお前達と一緒にいるんだから心配なんて何もしてねえよ」

ドンと胸を張って答えると

「と…当然ですね、我が魔王の筆頭従者である私が頼りにならない訳がない！」

「そうだ俺達は頼りになるぞ！」

「さつすが魔王ちゃん分かってるう！」

「まあ伊達に長年仕えていませんからね」

浮かれている家臣団を見てリムルは呟いた

「主人と部下って似るもんだなあ…」

このセリフがブーメランになる事をリムルはまだ知らなかった

取り敢えずその後、フロンティアはリムル達の街から少し離れた場所に木を倒さない範囲で滞空する事にした。そしてリムルさん達の街も案内してもらったのである

「……………あ、良ければお近づきの印に」

とハルトは袋一杯の香辛料を渡したのだが

「塩と胡椒……………は、ハルト君」

「はい？」

「他にもそう言うの持ってる？」

「ありますよ〜コーヒー豆とか」

来る前に大量にストックしてあるのがあるので大丈夫だし何ならフロンティア内で栽培も可能である…本当に至れり尽くせりの島である

「物々交換をしないか!？」

「是非!!」

「これがテンペストとの初の貿易であるのは後の人のみ知る」

逢魔降臨歴・裏伝 テンペスト黎明編より抜粋

魔物の町と紫

前回、シンフォギア世界においてフロンティアと言う国土を得た我々、魔王軍は元の世界に帰る為にジャンプしたが、そこはスライムが街を作っているという世界であった疑問に思ったハルトは町の調査の為、それとギギとカガの腕輪を探すために擬態が解ける猛毒のトラロックの雨が降る南米のアマゾンに飛んだ

「いやアマゾン関係ありませんよね？」

「アマゾンのトラロックとか俺にとって危険地域でしかないんだよけど魔王ちゃん」

「アマゾンは大変な事になるな…」

「というより前回からキャラ変わってませんか？」

「いやあく今まで患ってた胸の支え（ハルカ）が取れて気分が良いんだよ。兄という枷が無くなった俺は誰にも止められねえ！」

「だからって暴走はしないで下さいよ」

「断る！」

「あの…ハルカ殿ってある意味、我が魔王のストッパーだったのでは？」

「……………」

リムルさんの街に降りた一行は食料品と交換した物資を見てご満悦だった

「おお……」「素晴らしい素材だ」

と錬金術師の皆さんは魔物の素材を見て未知の技術に心が躍り

「モフモフ」

ある者は街で暮らす狼の魔物達をモフモフし

「リムルさん！良かったら仮面ライダーと一緒に見ませんか！」

「うおおおおお!!良いのか！」

「はい！是非!!」

ある者は懲りずに仮面ライダーを布教する、リムルはリムルで前世の記憶にある番組を見れる事で興奮しているのを見てウオズ達家臣団は円陣を組み

「ハルト様のキャラが」

「凄く変わりようですよね…あれ？元からだったかな…」

「まるで子供のよう…いや元から中身は子供か」

「何というか我慢してた反動が来たような感じですね」

カゲンとフィーニスは話してるが正解である

実際、ハルカの影響もあり外に出て友人や恋人を作ると言う当たり前の事が出来なかったハルトはハルカの兄という枷から解放され今漸く失った時間を取り戻すかのよ
うな自由さなのであるが、ジヨウゲン達は別の方向に目が言っていた具体的にはハルト
の片手にあるDVDである

「ねえ魔王ちゃんさ学習してないよね？」

「ええ…全く前世が日本人でも今はスライム何ですから何が起こるかわかりませんよ本
当に」

「奥方様がライダーシステム再現してるのにね」

「はい…：…またこの本によれば…」

「だよねえ…：てか悪魔の奥方様達ってどう会ったのだろ？」

「さあ？そこまで詳しく知らされていません…：そうだ」

と思ったウオズは近くで会話をしていた住民の輪に入る

「失礼」

「ん？おお空島の人かどうした？」

「空島…：良い呼び方ですね、コレは失礼我が名はウオズ、彼方にいる魔王常葉ハルトの従
者をしているものです宜しくお願ひします」

「カイジンだ、旦那の下で鍛冶をしている宜しくな……しかし魔王?」

「ええ常葉ハルト、彼は未来において魔王となるのです」

「そいつあ、凄い話だな……んでどうしたんだよ?」

「はい、実は我が魔王から調査の一環で魔法について調べて欲しいと……特に何か召喚魔法の類などあれば教えて欲しいと」

「そうだなあ……俺ア門外漢だから詳しくは知らねえが本職の奴等が悪魔や精霊を召喚出来る……つー話は有名だな原理までは分からん」

「ふむ悪魔」

「何でも願いの代わりに対価を貰うんだとさ」

「対価……成る程、ありがとうございます」

と場を離れた後

「ウオズ」

「どうしましたか我が魔王? リムル殿と仮面ライダーを見るのでは?」

「そう! だからポテチとコーラ三人分追加でお願い」

「私は給仕ではありませんが……おや? 一人多いようですが?」

「ん? あの子も一緒に見るんだって」

「あの子?」

「あっちの子…びっくりしたよまさか人間の子もいるなんてさ〜」

と指差した先には紫髪のサイドテールをした小柄な女の子がいた軍服を着ているが年齢的には子供時のキャロルに近いだろう、その子を見た瞬間、ウオズ達は身震いし跪こうとしたが寸前で堪えた

「「っ!!!」」

「え?どうしたんです先輩達?」

知らないフィーニスはキョトンとしているが

「緊急事態です」

「何故奥が…ウルティマ様が此処に!」

「え!あの子が!?!魔王様の…」

「今は違います…皆、気をつけなさい彼女達の機嫌を損ねたら」

2人は生唾を飲む、緊迫感は伝わっているがイマイチわからないフィーニスは質問した

「あの…魔王様の奥方でしたら良識を弁えた方では?キャロルさんや千冬さんもそうですし」

その問いに3人は慌てた様子で否定した

「それはありません…良いですかフィーニス我が魔王の奥方様の中で千冬嬢のみが唯一の常識人ですよ」

「後の人達はネジが飛んでるから」

「うむ…俺たちも未来で大変だった」

「え？あんな大人しそうな子供がですか？」

「あなたは知らないのですウルティマ殿の本性を！」

と集まって話す光景に

「何してんだ？アイツら？」

「知らない…ねえコーラってこれ？」

「そうそう飲む時、気をつけてね鼻にツンと来る時あるから」

「うん………っ！」

「どう？」

「美味しい…おかわり！」

「はいはいジョウゲン〜コーラ追加でお願い」

「かしこまりました!!」

慌てて走り出したジョウゲンを見たハルトはキョトンとした顔で

「何で慌ててんだ？」

と言うしかなかった知らぬが仏である

「さあ……ねえねえ君強いのか？」

「ん？喧嘩なら弱いよ〜」

「俺単体だとその辺の下級戦闘員をあしらえるくらいの戦闘力しかない……生身で頑張れば……そだなあ……グロンギのズ集団とタイマン張れるくらいかな？」

『いや普通の人間基準なら化け物だよ』

「何言ってるの？クウガみたいに封印も出来ないし風鳴弦十郎ならゴ集団まで戦えるだろう生身で！」

『お前の中でアイツは閣下レベルの敵キャラか』

「近いかもなあソレ〜」

念話で話していると紫色の子は不思議そうな感じで

「そう……じゃあ君の中にいるのは？」

「え？強いよ……って何で知ってるのか？」

アナザーライダーには変身してないのに何で見破られたので驚いていると

「君の魂ってね色んな色が混ざってるんだ普通の人間なら魂の色って1つなんだよ？だからわかった」

「それで俺に異端の力があると気づいたのか……魂の色ね……」

―混ざってるか、なあ相棒―

『気づいたか…実は』

―これが一心同体って奴だな魂レベルで一緒とはな！―

『いや…その…』

―頼りにしてるぜ相棒！―

そんな会話をしているのだが

「本当に強いなら戦おう！」

「俺弱いからパス」

「む…つまらない！何で戦わないの？強いんだから戦わないと勿体ないよ！」

「んー今は戦い以外にもやる事がある」

「何さソレ！戦うよりも大事な事ってあるの！」

「言うより見たほうが早いな」

とハルトが見せたのは、彼と同じ名前を持つ最後の希望 指輪の魔法使いの物語

視聴後

「うん……やっぱりフレイドラゴン初登場回は最高だな」

ハルトはハンカチで涙を拭いていると

「……………」

瞳をキラキラさせながら女の子が画面に食いついていた

「指輪を介することで詠唱の手間を省いてるんだ……ボクの魔法にも応用出来るかな」

「俺の親父が言っていた……人生で大事なものはアニメ、漫画、映画から学べると……見て学ぶのも新しい発見があるんだってさ」

「へえ……」

「他にもウィザードのDVDあるけど見る？」

「うん、見たい」

そう話すと紫髪の女の子はTVに釘付けであった。

結局 徹夜でウィザード本編、劇場版まで視聴した翌朝、気づくと紫髪の女の子は霞のように消えていたのであった

「あの子……大丈夫なのかな？」

「我が魔王、あの子はですね」

「誰か知ってるのウオズ？」

「いえ……未来の我が魔王から奥方様の自慢をされませんでしたか？」

恐る恐る尋ねるウオズにハルトはあっけらかんとした顔をして

.....

「いや自慢なんてされてないけど？」

「え？」

「会ったのは覚えてるけど何の話したんだろ？」

「っ！」

シヨックで倒れかけるウオズを見て慌ててハルトが駆け寄る

「え？ちよっ！大丈夫かウオズ？」

「え、ええ……どうやら転移したばかりで疲れているようです」

「そ、そうか……ゆっくり休んでくれ……あ、良ければお粥でも作ろうか？」

「大丈夫です寝れば治りますから」

「本当か？辛いなら言ってくれよ」

「はい、では」

とウオズが離れるとアナザーライダー達から

『おいハルト、今の話』

「ああ未来の俺がどうかかって奴？」

『そうだ』

「そんな事あったっけ？」

『まさか：おいアナザーバイス』

『どしたの先輩？』

『ちよつと来い』

『え？どしたの先輩…のわあ！』

「喧嘩は程々になあ〜」

変な様子の周りだが異世界転移で疲れているのだろう、そう言う時こそしっかりと食べて体を休めるのが一番だ

「よし、今日はリムルさん達から譲ってもらったものでご飯を作るか！」

そして厨房へと向かう途中で

「もしかしてウオズ達、あの子の事知ってるのかなあ？」

—————

冥界、ここは悪魔達の世界

特にやる事のない場所故か悪魔は召喚されない限り、一部例外を除いて日夜戦い続けている。その中でも別格とされるのが

原初の悪魔 世界に7人しか存在しない色を冠した悪魔の総元締めである

その白、黄、そして紫の三人は冥界で普段通りに戦闘をしていたのだが今日は様子が少し違っていた

「ふう…今日はボクの勝ち」

そこで笑っていたのはハルトと出会っていた紫髪の女の子であった。そう彼女こそ原初の紫である

「な、ヴィオレ！貴様……!!」

同格の相手が突然の強さを見せた事で動揺を隠せなかった軍服にコートを着た女性
原初の黄（ジョーナ）と同じような軍服を着る雪のような白髪をした女性 原初の白（ブラン）である

「ええ…まさかこんな魔法を使うなんて」

3人は普段通りに自らの持つ最大火力の魔法を撃ち合っていたのだが、ヴィオレはウィザードのコネクトを再現し攻撃の出入り口を接続する事で別方向から自分の攻撃が飛んでくると言う不意打ちを行い2人を倒したのであった

「すごいでしよ変な人間から教わったんだ〜」

ヴィオレはあの日、誰に呼ばれたか知らないが近くにいたハルトと話してみる事にしたのだ島なるものも持つてるし異世界の娯楽や文化に詳しいのもあるが何より

彼の中にある存在に対しての好奇心に興味を持っている、普段なら戦って首チョンパして頭の中を除いている所なのだがハルトの人柄を見て戦うよりも生かしてたら面白い事を提供してくれるのなら付き合うのも藪坂ではない

「ほお…我等は人間なんぞに教わったもので一杯食わされたか…くう」

「これはこれは…面白そうな話ですわね…」

「あ、時間だ…じゃあねえー」

とヴィオレは転移したのを見ると

「では我も行くとするか…ヴィオレの奴のお気に入りなぞ消し飛ばしてやる」

「あらあら…私達にないものを持つてる人間なら価値はあると思いますが…まあ面白そうだから会うだけ会ってみましょうか」

悲報 フロンティアにピンチ迫る

—————

フロンティアの広場にて

「おーい」

ハルトが声がしたので振り向くと、そこには行方知れずだった女の子がいたのだ
「あーどこ行ってたのさ心配したんだよ」

心配に満ちた声音でいうと

「ごめんなさい…」

素直に謝罪するなど冥界にいる彼女の部下が見たら目を見開くような光景だったと
後に聞くまでハルトは知らなかったとの事

「大丈夫だよ今度から出かける時は何処行くか教えて、この森って危ない魔物がいるらしいから…あ…そう言えば名前聞いてないね俺は常葉ハルト…君は？」

「ボク？ そうだなあ…ヴィオレで良いよ、それで今日は何見るの？」

「そだなあ…あ、コレどう？ 束も好きなんだよ」

と取り出したのは仮面ライダービルドのDVDセットであった

「見たい？」

「うん！」

「よし、じゃあ部屋を明るくしてTVから離れて見よつか」

「はい…よいしょつと」

「つと、はいはい…じゃあ始まるよ〜ヴィオレちゃん」

そう言いソファに座ったハルトの膝上に座ったヴィオレと一緒にビルドを見るのであった

—————

シンフォギア世界

チフォージュ・シャトーにて

「つーハルト!!そこはオレの定位置だぞ!!何で他の女に座らせている!!」

「マスターどうかしたんですか?」

「ああ…ハルトの奴が膝上に他の女を乗せている気配がするんだ」

「ハルトの奴、マスターというものがありませんながら派手に浮気をしているのか」

「まあ…一夫多妻をしているので浮気は語弊がある気もしますがね」

「それよりマスターの目は色んなモノが見えルンダナ!スゴイゾ!」

「あ、ガリイちゃん分っちゃいました!もしかしてハルトさん、マスターの事飽きちゃって他の女に浮気したんじゃないですか?キャハハハハハハ!」

「え……」

「いやだつてハルトさんと一緒に行こうつて言うのを断り続けるから遂に愛想尽かされたんじゃないんですかあゝ」

「そ、そんなことないだろう……ハルトはオレの事好きって……言ってくれて……」

「それはマスターの一方通行だったりしてキャハハ！」

「……………グス……」

「あ！ガリイがマスターを泣かせたゾ」

「え？ちよつマスター!?!」

「ガリイ、派手に散れ」

「さよなら……今作の出番は以上ですかね」

「製作陣の所へは向かわせナイゾ！」

「へ？いやいやあ冗談に決まってるじゃないですかあくそんなに心配ならポータル通つて会いに行けば良いんですよ」

「そう……だな……よし準備が整い次第向かうか……大丈夫、オレは嫌われていない筈だ」

「ガリイ」

「いや流石のガリイちゃんもやりすぎたとは思ってますがねえ……マスター本当に大丈夫なんでしょう？メンタル弱体化以前の話ですよアレ」

「わかりませんわ、私達はマスターの道具ですからマスターの望む事をするだけですから」

とオートスコアラ―達は別の意味で決意を固めたのであった

――

翌日、フロンティア上空に悪魔門が開くと中からジョーヌが現れたのであった

「ここかヴィオレの言う面白い人間がいる場所は、よし!!」

そう言うなりジョーヌは核撃魔法を問答無用でフロンティアに放ったのだ

リザードマンと黄の襲来

フロンティア

「地震か？けど空島で地震なんてあるのか？」

凄く大きく地鳴りがしたので窓を開けてみると軍服を着た金髪の女の子が魔法でフロンティアを攻撃していた…のだ

「え……ええええええ！」

何で俺たち攻撃されてんの！とか色んな驚きはあるが…取り敢えず警報鳴らしてと「非戦闘員はポータルでチフォージュ・シャトーに避難急いで！あ…それとウオズ達呼んどいて」

「はっ！」

「誰か知らないけど喧嘩なら買うよ」

「あ、ジョーヌだ」

「ヴィオレちゃんとの知り合い？」

「うん…ボクの玩具に手を出すのは許せないから行ってくるね」

「き、気をつけて〜」

と手を振るとヴィオレは窓から空を飛んでジョーヌ？さんに蹴りを入れたのであった

「はははは！やはり此処にいたかヴィオレ！」

「ジョーヌ、ボクの娯楽を邪魔したんだタダで済むわけないよね」

「良いだろうリベンジだ！」

と空飛ぶ2人飛び交う魔法や攻撃…これはまずいなフロンティアが人が住める場所じゃなくなってしまうな

「はあ……被害が酷くなる前に動くとするか」

王様になる以上は国土を荒らされるなら敵対者は排除せねば

『そうだな』

「んじゃ行くぞ相棒」

ハルトはアナザーウオッチで変身する

『ディケイド』

そしてヴィオレと同じように窓から飛び降りるとアナザーディケイドは空を飛んだのであった

「アレ？今更だけど何で空飛べてるの？」

『それはな新顔が入って来たからだ』

「は？」

『アナザーサイガだ！宜しく頼むぜボス！』

挨拶してくれたアナザーサイガを知ると背後にフライングアタッカーが現れた…成る程これで空を飛べるのか

『アナザーオーガ……まあ貴様に力を貸してやらんでもない』

アナザーオーガとサイガか……つて帝王のライダーが2人も来てくれたって重要情報
報は

「先に言え!!あと来てくれてありがとね！」

—————

そしてヴィオレとジョーヌの戦いは一進一退の攻防となっている

「はあ……はあ……」

「どうしたらしくくないな貴様が本気の魔法を撃てば打開できるかも知らんのに」

「そしたら彼処で番組見れない」

「成る程……ならばこうすれば本気で来るか！」

ジョーヌは全力の魔法をフロンティアの管制室目がけて発射したのであった、しかも

最大火力に近い核撃魔法をだ

「っ!!」

ヴィオレがしまったという顔をするが間に合わない当たると思った矢先の事、オーロラカーテンで核撃魔法を異世界に飛ばした結果、消えたのであった

「なっ!!」

「テメエか……俺達の土地でドンパチしてたのは」

『READY』

ジョーヌの前に現れたアナザーデイケイドはアナザーオーガの力でオーガストランザー・長剣モードを肩に担いでいる

「ははは！ 貴様が空島の主か！」

「ああどうもジョーヌさん！」

『Exceed charge』

「らあー！」

不意打ちと言わんばかりに超高濃度のフォトンブラッドで延長した刀身を発生させ勢いそのまま振り下ろす必殺技、アナザーオーガストラッシュをジョーヌにお見舞いするが

「ふん、この程度……なっ！」

ジョーヌは素手で受け止めようとするが受け止めた素手が灰となったのである、灰化は右腕まで侵食しようとしていたのでジョーヌは右腕を消し飛ばして距離を取ったのである

「驚いたぞまさか私の右腕を灰にするとはな…どんな能力だ」

隻腕となるが痛みを感じないのか高笑いするジョーヌに

「素直に話すバカがいるかよ」

オーガストランザーの刀身を戻したアナザーデイケイドを見て

「そうだな違うくない!!」

怯む事なくジョーヌは接近戦を仕掛けるが蹴りと拳の連打に防戦一方となるが

「早いな…だが光の速さには及ばないよ」

『CAST OFF』

同時にアナザーデイケイドの装甲が弾け飛び中からアナザーカブトが現れた

『カブト』

ジョーヌは弾け飛んだ装甲によって間合いが広がり

「速度は重さ、光速で蹴られた事はあるか？」

「光の速さは無いな…蹴れるなら蹴ってみろ！」

「お望みのままに」

『CLOCK UP』

アナザーカブトはクロックアップすると周りの速度は比例して遅くなる、ゆっくり近づいていき

「アナザーキック」

『RIDER KICK』

「ふっ！」

タキオン粒子を込めた回し蹴りをジョーヌの胴体に当てて近くの岩場まで吹き飛ばすとアナザーカブトは着地した

「がぁ……はははははははは！弱い人間と見下していたのは謝罪する……これからは手加減は無用だ！」

体が崩壊する痛みがある筈なのに何故笑ってられるんだよと内心では動揺しているが

「俺としては油断してくれたままだと嬉しかったんだけどね」

「それではつまらないだろう戦いとはこうでなくてはな！」

と2人の間合いはつまり肉弾戦に移行する、本気とは冗談ではないようで先程と違い此方が防戦一方になってしまっていた

「ちっ……」

「わからんな我と戦える人間が戦う事を何故楽しまない！」

「ボクも思ったハルトは強いのに勿体ない」

「俺だけの力じゃないから…皆の王様だからな負けたら終わる…だからー」

上に立つ以上は責任が出てくる、戦う以上負けてはならないのだと だが

「つまらんぞー！戦いを楽しまない人生などに価値はない勝ち負けなど後で考えれば良いのだ我は貴様の本気が見たい詰まらん枷など外して本気で来い!!」

「戦いを楽しむ」

『ハルト、最近からそうだが…いい加減に本気の我儘を押し通してみろ中途半端な遠慮は俺たちも不愉快だ』

『そうだな思い切り俺達を使ってみやがれギャハハハハハハ！』

今まであまり私的な理由で変身したことはなかった…まあフロンティア奪取とか色んな事をした自覚はある、しかしウオズと会う前の短い期間だけ自分の為にした変身など…だね

「お前等………そうだな周りの被害考えて勝てるような相手じゃないよな後の事はウオズ達に任せて俺は俺のやりたい事をするでしょう」

『ジオウ』

アナザーカブトはアナザージオウへと変身し

アナザーツインギレードをかまえる

「ジョーヌさん、今までの非礼を謝罪する…これからは王じゃない1人のか弱い人間である常葉ハルトの力をお見せしよう」

『ジオウⅡ』

懐古の力でジョーヌの腕を戻したハルトは

「っ腕が治った…まさかダメージが戻ったのか!」

「怪我したから負けたと言われたくないからな、お前とは対等な条件で殴り合いたいんだどうだろう?」

「はははは…こうでなくてはならんだろうが馬鹿だな貴様は…だがその辺りは嫌いだな
い」

「そうかい、んじゃ行くぞ」

「はあああああ!!」

ハルトは笑いながらアナザーツインギレードの突きをジョーヌに放つが受け止められ
れる

「やっと見つけた知識無しで勝てるかどうか分からない程の…俺のありったけをぶつ

けられる相手があ！」

「良いぞ本気で来い!!」

『龍騎 エグゼイド MIXING』

「くらえ…紅蓮爆龍剣!!」

「やるが…まだだ！」

赤い龍の突貫をジョーヌは魔法で防御すると反撃で核撃魔法を放った

「何の!!まだまだ！」

『エグゼイド ウィザード MIXING』

「究極魔法!クダケチール!」

エグゼイド のアランブラが使う究極魔法(本編未使用)のクダケチールだ…何故本家よりもゲムデウスやクロノスが使っているイメージだったのは内緒、その魔法に対するように

「核撃魔法」

2人の全力魔法が放たれようとした時

『『破滅の炎』』

とんでもない爆炎がアナザージオウとジョーヌを襲ったが2人は住んでの所で回避し犯人であるヴィオレを見た

「つと危なかった…」

「何の真似だ！ ヴィオレ！」

「ボクだってハルトと戦いたいののにジョーヌだけズルい！ 先にボクが目をつけてたんだよー！」

「今は私の相手をしているのだ邪魔立てするならお前からだ！」

「邪魔してるのはジョーヌだ！」

と示し合わせたように2人が戦うのを見て仲良しだなあとはいつつ

「こういうゴチャゴチャした戦いは好きじゃないんだよなあ」

『龍騎』

アナザー龍騎ウオッチを起動させる

「こいマグナギガ」

するとアナザージオウの足元から緑色の巨体を誇るミラーモンスター マグナギガが現れ全身の銃火器の照準をヴィオレとジョーヌに向けると武装を展開、チャージされていき

「ド派手な花火と行こう」

指を鳴らすとマグナギガの一斉射撃『エンドオブワールド』が発動しヴィオレと

ジョーヌを巻き込んで派手に爆散したのであった、フロンティアの一角に甚大なダメージを残す程の激闘とだけ答えておく……アナザージオウⅡの力で巻き戻して元通りにした、ヴィオレとジョーヌは消えていたが取り敢えずスルーして復旧作業に当たったのであった

—————

そんなバトルから数日経ったある日の事

「ハルト」「来たぞ！」

「また来たか」

『ジオウ』

アナザージオウウオツチを取り出したのだが2人は

「いや待て今日は戦いに来た訳ではない！」

「……………本当？」

「信じて」

「よし！なら話を聞かせて貰おう」

「我等は……お前の配下となろう今後は宜しく頼む我が君」

「宜しくね」

「……………は？」

ジョーヌさんから聞いた話を纏めると彼女達の悪魔は負けたと認識してしまったまま消滅すると復活した際に倒した相手に服属するというものらしい。つまり今回はマグナギガを召喚した俺が当たるようで

「ええ…」

「宜しく頼むぞ我が君」

「宜しくハルト、仮面ライダー見よう」

「我が君呼び辞めろ…そうだな取り敢えず見るか」

何故か知らないが愉快な面々が増えたのであった

因みに本来なら悪魔を現世に留めるには受肉させないといけないのだが、俺はボディを用意できないので暫くは対価無しでの召喚という事で落ち着いた…だがジョーヌが仮面ライダーエボルを見て感心していたのは何やら嫌な予感しかないのだが…

この事件の後に白い悪魔が仲間となるのだがその同胞である赤い悪魔に目をつけられ魔王の宴に呼ばれる事になるのは少し先の話

そんなこんなでフロンティアの雑務中

ーハルト！ー

「リムルさんどうしました？」

ーちよつと俺たちの所に来てくれないか？ー

「了解ですちよつと待ってて下さい」

思念伝達で来た会話的に俺たちにも関係ある話と判断しウオズを共にしてテレポ
トで現地に向かうと

「リムルさん、どうしたんですか？」

「いや実はなりザードマンの一団が此処に来るらしいんだ、ハルトもご近所さんだから
良かったらと思つてな」

「ありがとうございます、リムルさん」

そう話しているとリザードマンの一団が式典のような感じで音頭を取り、中から現れ
たりザードマンが堂々と自己紹介をした

「我が名はガビル！」

取り敢えず要件を纏めるとオークロードと戦うので俺たちに下に付けとの事だった

「このトカゲ畜生が…」

「こいつ殺して良いですか?」

「ああ良い(構わない)よ!」

そう言うなりベニマルとウオズが動こうとしたので

「NO!NO!!」

「ウオズ落ち着け!俺が悪かった!!」

全力で2人を止めた後にランガが現れるがガビルは無礼は発言をし開戦前の状況で現れたのが

「お!皆さんお揃いで何してんスカ?」

「ゴブタ!お前死んだんじゃ!」

「へ?それどう言う状況です?」

聞けばメシマズ料理を食べたら毒耐性を得て助かった事:凄い生命力だなと感心しているランガは代理人としてゴブタとガビルの一騎打ちを提案した

「部下にやらせれば要らない恥も書きませんからな」

「むつ:遠慮は要らんぞゴブタやったれ!」

「うん思い切りやって下さいゴブタさん!」

「ええ:」

とイマイチやる気のないゴブタに対して

「勝つたらクロベエにお前専用の武器を作ってやるように話してやる」

「俺達の所から年代物の葡萄酒と手製の燻製を提供します」

「本当ツスカ！ちよつとやる気出たつす」

「負けたらシオンの手料理の刑な」

「負けた場合は浮上した空島でバンジージャンプをして貰いますが」

「ゼツテー負けられネエつす！」

罰ゲームの方でやる気が出たのはバンジーかシオンの手料理か理由はゴブタのみぞ知る

余談だが後にこの些細なアイデアが空島バンジーなる度胸試しという名前のアクティビティが生まれたとは誰も知らない話である

結果はゴブタが投槍からの影移動でガビルを一撃で蹴り倒したのであった。取り敢えずリザードマンの一団は帰った行ったのだが

「リムルさん」

「ああ」

「リザードマンの態度的に彼等の所にオークロードって奴が出張ってる可能性ありますよね」

「そうだな…今夜会議を開くからハルトも参加してくれるか？」

「勿論です、俺たちの所も無関係ではないと思いますから」

リムルさんの所と最初の出会いから色々和交流をさせて貰っている食糧の物々交換から始まった交流は千冬と一夏は鬼人の1人で刀を使うハクロウさんに稽古をつけてもらって嬉しいし東は東でカイジンさん達の魔法方面の技術交流に乗り出してるし錬金術師の面々は自分達の知識や技術を対価に魔物の素材や加工技術を得ている、まだまだ個人レベルの小さいものだが何れは大規模で行いたいものだな

その夜、リムルさんの町にある会議室にて

「20万か実感ができない程、馬鹿げた数だな」

「嘘でしょ…そんな大軍が…」

「はい間違いありません」

「俺達の里を襲ったのは別働隊って訳か」

参加しているのはリムルさんとゴブリンの代表、カイジンさん達とベニマルさん達鬼人である俺は外部からの代表って訳で列席させて貰っている

鬼人の1人 ソウエイさんの話だと20万の武装したオークがリザードマンの湿地

帯目がけて進軍しているとの事であるが

「そもそもオーク進軍の目的って何だ？」

と皆が考えてるとカイジンが

「オークってのは元々あまり知能の高い魔物じゃねえ、組織で動いてるなら何かしらバックの存在を疑うべきだな」

「バックの存在だけか？」

鍛冶師のクロベエさんの問いに

「例えば魔王とかか？」

「え？」

「あ、ハルトの事じゃないから」

「ですよね…すみません…」

呼ばれすぎて違和感無くしてたと反省する、この世界には魔王が存在しているようであり、リムルさんと因縁ある魔王がいるとの事…この辺の国際事情とか詳しくそんな仲間が欲しい所だなと考えていると

「なあ外部の者から見てどう見る？」

視線が集まったのを感じてハルトも意見を述べる

「誰かしらの支援者はいますね、20万の軍団を維持する兵站や補給物資の確保とか俺たちの世界にある大国でも四苦八苦してる問題ですよオーク達が大国で自国の物で賄えるなら別ですが」

俺の世界の歴史でも補給の概念は特別視されている程のものだ、古今東西の猛者や知者も補給方法の確立には頭を悩ませていた。この世界はリムルさんの話だと中世に近い時代だと言う、ならば車や飛行機などないから運搬方法も限られるが

「うーん……」

「っー」

話してる途中にソウエイの分身体に接触したものがいると聞く所によるとリムルに取りついで欲しいとか

「その…ドライアドなんです」

周りが驚く中、リムルとハルトも驚いている

「ドライアドって木の妖精みたいな存在ですよね？」

「ああ…構わんソウエイお呼びして」

というと待つてましたと言わんばかりに現れた

「初めまして、複数の種族の魔物を統べる者…そして空島の主よ私はドライアドのトレイニーと申します貴方達にオークロードの討伐を依頼したいのです」

そしてトレイニーさんの話を聞けばオークロードがいるのは確定らしい、そこで議題は進行の目的となった訳だが

「あの、その可能性について考えが…」

意見を上げたのは白い和服を着た鬼人 シユナである

「何だ？」

「ソウエイ…私たちの里を見てきたんですよね？」

「はい」

「……その様子だとなかったんですね」

「はい同胞のものもオークのものも一つ残らず」

「無いつて何が？」

「死体です」

「へ！」

「ま、まさか…」

「ハルト殿が言ってたように20万の食糧をどう賄ってるのか疑問だったのだが」

「奴らには兵站の概念がありませんからな」

「それって……」

トレイニーさんの話だと、それはユニークスキル 飢餓者（ウエルモノ）との事、それは王の軍団に影響され食べた相手の力を取り込む代わりに満たされない飢餓感に襲われるという

「飢餓って……」

「ハルト?」

「失礼しました……あとトレイニーさん一つ質問なんですが」

「はい何でしょう」

「リムルさん達は森の住人だから戦力とか分かるんですけど……俺達の戦力って何処で見たの?」

「あらかの間、森の上空で悪魔と戦ったではありませんか」

ジョーヌの時か!と冷や汗を掻いて

「げ……見てたの?」

「ええ……まさか……」

「どしたの?」

「いえ何も、その力の一端を見れば森の住人でなくても助力を願うのは当然ですよ」

話は進んでいき、オークロード討伐となった

リザードマンの首領にはソウエイが交渉に向かう事となりリムルさんとのやりとりで街にいる非戦闘員の魔物は俺のフロンティアで一時的に面倒見る事になった、浮遊させてオークの進行を阻む予定である

リムルさん達はゴブリンライダーと鬼人達とランガさんと言った部隊である

俺達側はウオズとフィーニス、それと俺の軍門に降っているミラーモンスターを中心とした怪人軍団である。ミラーワールドから召喚出来るのでタイミング待ちである

ジョウゲン達は留守居だフロンティアとリムルさんの町を守る戦力がいるとの事で待機して貰っている

あとジョーヌ達だが参戦したがっていたが依代がないので我慢してもらおうとしよう
…一応呼び出す為の召喚魔法をアナザーウィザードの指輪に登録しているので問題はないが

「よし行くぞー」

「「はっー」」

リムルさん達も出立のようなのでハルトは今回自分が背に乗るメタルガラスの頭を撫でた

「宜しくな」

オークロードとその裏で

そしてリムルさん達はリザードマン首領の娘を助け出し同盟を締結、ソウエイに首領救出を任せて前身する事となったのだが進軍途中で予想外の男と出会う事になる

「ハルト……貴様あ!!」

「まさかこんな所で再会するとはなトーマ」

あの世界にいた筈のトーマが目の前にいたのだ

「誰だ…魔人？」

「いやそんな殊勝な物じゃない俺の客ですよここは任せてリムルさん達はオークロードの方に!!」

「ああ無理するなよ!」

「問題ありませんよ」

とリムル達が向かうのを見てトーマは

「邪悪な魔物め…逃すか!」

「させると思う?」

動こうとしたが鏡から呼び出したギガゼールとデストワイルダーの奇襲により足止めされてしまいリムルを追えなくなってしまうた

「つと…ありがとなメタルゲラス」

「!!」

どういたしましたの咆哮を上げるのを見て安堵しメタルゲラスから降りたハルトはトーマに視線を向ける、その感情はマイナスの物だ

「はは…うん、アイツだよ我が身可愛さに妹を見捨てたクソ野郎はさ」

怒りの感情をトーマにぶつける

「俺の妹を見捨ててネオタイムジャツカーの手先に成り果てたか…はあくオリジナルの救世主が知ったら悲しむね」

「だ、黙れ！ハルカは貴様の所為で牢屋にいるんだぞ！それなのに貴様はフロンティアを我が者にしてテロリストに堕ちた！そしたら低レベルの魔物連中と取引か…何を考えてるか分からんな」

「そうですね我が救世主」

「ありや青ウオズさんじゃん」

「久しぶりですね魔王、あなたの所為で倒したのが女王から救世主に未来が変わったので大変なんですよ」

「そんなの知るか浮気男め：取り敢えずリムルさん達を低レベル認識とか実力を見切れ
てない証明だよ、あの人達俺より強いから」

「何だと！たかがスライムに率いられる魔物の群れを弱いと見て何が悪い！！…この邪悪
な魔王め今こそ俺の正義の力でお前を倒す！」

何っーか会話するだけでも疲れる

「絶対の正義とかマジ無いわ、そんなんだから何度もやられるんだよ俺達にさ…それと
ご自慢のアナザーゲイツリバイブだけど対処方法は出来てるから」

あの時とは違う力があるのを今お見せしよう

『ジオウ』

「なら見せて貰うぞ魔王め!!」

『ゲイツリバイブ』

2人がアナザージオウとアナザーゲイツになると

「では此方はウオズ対ウオズの第二ラウンドと行きましようか」

『デイエンド』

「ええ逃すつもりはありませんよ、フィーニスはリムル殿の元へ」

『ウオズ』

「かしこまりました先輩、御武運を」

『1号』

アナザー1号が大量の木々をへし折りながら前進していくのを見送ると、ある木をへし折ったのと同タイミングで4者は激突したのであった

「ふっ！」

「甘い！」

ジオウの突き技をゲイツリバイブは受け取めるとパスワードノコで攻撃を測った、しかし

「貫ったあー！」

「油断大敵」

「!!」

メタルガラスの体当たりによりリバイブは吹き飛ばされた

「があ……く……く……ひ、卑怯だぞ！複数人なんて一対一で来い！」

「いや何で救世主がお前を選んだのか分からない、後さ命の取り合いに卑怯汚いがあるものかよー！」

俺の世界七不思議が更新された瞬間である本当謎でしかない……自分の正義以外は受け入れない奴に何を感じたのだろうか

「だ、だまれえー！」

立ち上がり俺にパウードノコを叩きつけようとしたが

「おいで虎ちゃん」

アナザージオウの言葉を合図に動いた影がある

「な……があああああああ！」

背後にいたデストワイルダーがアナザーリバイブを爪で捉えるとアナザージオウの元まで引き摺り回す、アナザージオウは突如飛び出したデストワイルダーの手を模した鉤爪、デストクローを構え待ち伏せすると相手の動きが読めたのだ、澄んでの所でリバイブウォッチを剛烈に切り替え防御力を上げたがそれ悪手である

仮面ライダータイガの必殺技 クリスタルブレイクを放つ

「その装甲が固いのは知ってる……けど熱破壊なら破れんじやねえのお？」

高熱に熱した装甲ならこの冷気の爪で破碎してやる

「やられてたまるなあ！」

そんな叫びに呼応してかアナザーディエンドが動いた

「やれやれもう少し粘って貰いたいのですが」

『KAMENRIDE……』

本家よりも低い音声で聞こえた電子音声にアナザージオウの目線が動いてしまった

「兵隊君、行きたまえ」

手を翳すとオーロラカーテンから新たな戦士が現れた

『RIOTROOPERs』

音声と共に射出され現れたのは銅色ボディに白い複眼をした一言で言うとは簡易型ファイズ量産型ライダー筆頭と言っても過言ではないライダーのライオトルーパーが3人に現れた

「ちっ…テストワイルダー！」

「!!!」

「があああああ…あつ！」

アナザージオウの指示に従い必殺技をキャンセルしたのだがテストワイルダーは手を離さずにリバイブを引き摺り回してそのまま近くの木に頭をぶつけさせて気絶したのである

「うわあ気絶してる…まあ良いや少し寝てな」

→テストクロウを投げ捨てると新しいアナザーウォッチを起動した

『ファイズ』

アナザーファイズに変身してツインギレードを長剣と短剣に分離させてウォッチを装填する

『ファイズ』『オーガ』

すると長剣にオーガのフォトンブラッド、短剣にファイズのフォトンブラッドの金と赤のエネルギーターがチャージされていく、最大に貯まったので走り出した

「お!!らあ!!」

「!!!」

「とりゃあ!」

「!!」

長剣でライオトルーパー2体を切り裂く間合いから離れてた1体には短剣の投擲をお見舞いし鮮やかに爆散した

「さて…どうするよ青ウオズ?」

「我々2人相手に勝てるだけでも?」

「私の役目は貴方達の足止めなので…抗わせて頂きます…っ!!」

アナザーディエンドが新しいライダーを呼ぼうとしたが新しいオーロラカーテンが現れたこれはどうやら予期してなかったもので

「な、何だコレは!」

「アナザーディエンドでも俺でもないオーロラカーテン…まさか!!」

オーロラカーテンを超えて現れたのはマゼンタのトイカメラを首にぶら下げた男で

あった

「ここが新しい世界か…偉い殺風景だな」

その男の姿を見てアナザーファイズ…否ハルトは仮面の下で感涙に震え灰ウオズは苦い顔をしていた

「お前は…」

「ん？ああ…影の魔王に従うウオズか久しぶりだな」

「久しぶりですねか」「門矢士さんだああああ！」我が魔王、空気読んで下さい」

アナザーファイズは変身解除すると士に近づいて

「は、初めまして！俺は常葉ハルトって言います…フアンです！サイン下さい!!…ああ、一緒に写真も良かったらお願い出来ませんか!!」

例の如く限界化したハルトは色紙を差し出して土下座をせんばかりの低姿勢でお願いした灰ウオズは頭を抱えアナザーディエンドは攻撃すべきか悩んでいたが門矢士は気をよくしたのか

「お前がアナザーライダーの王だな…ん？俺のサインが欲しいのか？分かっているじゃないか本家の魔王とは大違いだな」

士は気を良くしたのかサインに応じ色紙を受け取るとハルトは満面の笑みで

「あ、ありがとうございます！仮面ライダー ジオウのソウゴさんと比較されるなんて恐れ多いですが嬉しいですよ!!」

「我が魔王は下手に出ないで下さい！その人が貴方をオーマジオウの所に連れてった張本人ですよ」

「そんなことより…門矢士さんが俺なんかの事を認知してくれてるんだぞ！一ファンならこんなに嬉しい事はない!!」

「そんな事!?あの急死に一生を得たような案件をそんな事扱いですと!」

『これがハルトクオリティだな』

『ハルトのライダー愛が重たくて胃もたれしやがるぜ』

『胃薬を処方しよう』

『俺達に胃袋つてあるのかアナザーエグゼイド?』

「その理由ご存知ですか?」

「へ?俺の思いが届いたから?」

「違います我が魔王がアナザーライダーの力を使うからです!」

「え?まさか…俺達を倒しに!」

「いや違う」

「良かった…なら何でこの世界に?」

「……………通りすがったただけだ」

「そうなんですね！ 凄い事もあるんだなあ…」

「いや違うでしょ我が魔王、明らかに嘘ですよアレ」

「そうなんですか？」

「違う」

「わかりました、違うってさウオズ！ 士さんを信じよう！」

「いやいや少しは疑いましょう!?!」

「憧れのヒーローの言葉を疑う奴があるか！」

「だとしてもですよ！」

「おい灰ウオズ」

「貴方まで私をそう呼びますか……………何でしょう」

「この男って馬鹿なのか？」

「以前はそう…いや割と残念魔王です」

「ウオズはフォローしろ…泣くぞ」

「なんでこいつをオーマジオウの奴が警戒してんだ？」

「さあそこまでは……………あ、そう言えば青い私とトーマは」

ウオズに言われて周りを見渡したが2人はどうやら逃走したようだ

「逃げられたな…まあ良い今はリムルさんとフィーニスに合流するのが先決だ」
「お前達、何をしてるんだ？」

「えと、20万のオークから森と仲間を守る為に戦ってる途中です」

「面白そうだな見物させて貰おう」

「っ！聞いたかウオズ！偉大な先輩の前でカッコ悪い真似は出来ないぞー！」

「ええ……」

「と思ったが、オーマジオウがお前に相應しいか試したんだろ？なら俺も試してやる同じデイケイドの力を持つのに相應しいかをな」

士さんが取り出したのはマゼンタカラーのデイケイドライバー…ネオの方である

「っ！はい!!宜しく願います！」

『デイケイド 』

アナザーデイケイドに変身したハルトを見て

「いい返事だな…変身」

『KAMENRIDE DECADE!』

アナザーとは違う20の影が交差し頭部にプレートが刺さると変身完了だ

世界の破壊者 仮面ライダーネオデイケイド

「今回は時間停止はないからな、デイケイド同士、互角の戦いで行こう」

「互角？失礼な力は同じでも俺と貴方では中身が違う！俺は弱い!!」

『そこまで卑下することはないぞハルト』

「何か調子狂うな…まあいいお前の力を見せてみる！」

「デイケイドはライドブツカーを剣モードにして走り出す

「はい!!…うおおおおお!!」

アナザーデイケイドも走り出してエネルギーを込めた拳を前に突き出した

リムル達がオークロードと戦っている中、予期せぬ場外乱闘が幕を開けたのである

その光景を木の上から見ていた白いジャケットの男が1人

「へえ、退屈な世界かと思っただけどアナザーライダーがいるんだ…これは面白そうなお宝がありそうだね士」

男はシアン色の銃を回転させて2人の戦いを見守っていた

———

「はっ！とりやあ！」

「ふっ……おらあ！」

アナザーデイケイドの拳の連打をデイケイドは慣れた様子で捌きの確にカウナーを叩き込んでくるオーマジオウと違う意味で戦いの年季の差を感じざるを得ないな

「がっ……ちい！」

負けじと反撃に転ずるがデイケイドの射撃や剣劇により転ずる事が出来ないでいる

「なら………これでえ！」

アナザーデイケイドは拉致を開ける為にオーロラカーテンに手を突っ込み何か探ると目当ての物を見つけたのか引っこ抜くように取り出したのは

『アナザーツインギレード』

「ほお、どんな武器なんだ？」

「ご覧あれ!!」

『デイケイド ジオウ MIXING!』

「せいやあ！」

『アナザースラッシュユ!』

カード型エネルギーを通過して強化された時計のエネルギー斬撃がデイケイドを襲うが

「ふっ」

『FINAL ATTACK RIDE DE! DE! DECADE!!』

同じようにカード型エネルギーが現れるとライドブツカーガンモードによる赤いエネルギー弾が放たれた中間地点で激突し両者のエネルギーは爆散した爆炎が上がる中アナザーデイケイドは必殺技であるアナザーデイメンションキックを放つ

「せいやあああああ!」

大量のカードを通過して上昇した威力の間違いなく現段階で最高の一撃だったそれをデイケイドは

「中々の一撃だ…だが俺には及ばない」

『FINAL ATTACK RIDE DE DE DECADE!』

「はあ!」

同じように両者のライダーキックが激突し上がった爆炎立っていたのは

「がっ……」

アナザーデイケイドが倒れ、デイケイドが立っていた
「かあ…はやく…」

『W』

アナザーWに変身してアナザーデイケイドのダメージをキャンセルする、同じライダーの力故にダメージも大きかったのだ

「まだまだあ！」

「今日は終わりだ…これから励めよ」

「は、はい…ご指導ありがとうございます!!」

ハルトは頭を深々と下げると士は変身解除しオーロラカーテンを超えて別場所に向かった

するとフィーニスからスタッグフォンから連絡があり出ると

リムルさんがオークロード討伐という連絡が届いたのであった

「俺、リムルさんの役に立ってなくね!!」

「いや謎の勢力との戦いという意味ならば役に立ったのでは？」

「やっちゃまったぜ!と頭を抱えてしまうのであった。」

その日、フロンティアの一角に新しい店が最初からあったような風格で出来ている場所がある

その名は 光写真館

「あ、士！どこ行ってたんだよ」

「そうですよ心配したんですから！」

「何、サインをねだられた位だ人気者は辛いな」

「士君にサインを頼むって、どんな変人ですか？」

「おい失礼だぞ夏ミカン」

「そうだよ夏美ちゃん、世の中には士のサインで喜ぶ人はいるよきつと需要はあるって」

「お前が一番失礼だぞユウスケ」

「士君もおかえり、ささつご飯食べよう」

「ふふふ、はーい」

「お前達は興味を持って」

「見てくれ士、コレがこの世界のお宝四肢欠損も治る秘薬フルポーションだよ！」

「帰れ」

「僕だけ扱い酷く無いかい士？」

—————

冥界では

「へえ…貴女達がねえ」

「まあ若干、不意打ちではあるな負けは負けだからな我が君が依代を用意するまでは待機しているよ」

「うん…けどジョー又は良いなあ本気のハルトと戦えて」

「短い時間だったがな邪魔さえなければもっと楽しめたが」

「それは独り占めするジョー又が悪い」

「何を！やるか!!」

「はいはい喧嘩なら他所でして頂戴、私は少し離れるから」

「どうしたのブランも混ざらないの？」

「ええ、私も貴女達の言う人間に興味がありますわ…ぜひお目通り願いたいですわね」

「ならボクからハルトに言っとくよ」

「感謝しますわヴィオレ」

「ここでも動くものがまた1人

ジジュラの大同盟

戦後直ぐ

「リムルさん、申し訳ない戦場に遅参するなど恥だ」

リムルさんと合流するなり謝罪した

「何言ってるんだ意味分からん連中の足止めしてくれたしフィーニスさんの活躍でこっちの被害は少なかったんだからお礼を言うのはコツチだよ」

「ありがとうございます」

「王になる人ってのはこう言う人？を指すんだろ？俺みたいにかだけの人間じゃないんだな」

「それよりも各陣営の代表で戦後処理の話し合いがあるんだ、お前も参加してくれないか？」

「勿論です、それにリムルさんにも俺達が戦った敵の事を知って貰いたいので」

となりリザードマンの陣營で戦後処理の話し合いとなった。議長はリムルさんが取って話し出す

「まず名言しておくが俺はオークに罪を問う考えはない」

その一言から始まった会議はいきなり騒めきが起こる、そりやそうだ敗者に責を問わないなど前代未聞であろう

「被害の大きいリザードマンからしたら不服だろうが聞いて欲しい」

とリムルさんから話された内容は今回の進行となった原因である

飢饉による食糧確保

これが全てである…なのでオークに賠償金など取るのも無理な事だ、それとオークロードのスキル 飢餓者によって飢えなど麻痺していた部分が今、戻ってきているとのこと

「それって…腹減ってるの?」

「端的に言えば」

ハルトは背後に控えていたウオズに指示を出す

「ウオズ、至急フロンティアにいる連中に炊き出しの準備をするように言ってくれ…陣頭指揮は一夏に任せて空腹の者が大勢いるなど俺の目の届く所で許すものか」

「かしこまりました、早速準備に入ります」

「頼んだ」

その言葉は皆にも聴こえていたようで

「いいのかハルト、15万もいるんだぞ?」

「構いません…俺達の島は食糧は余りに余つてますので…それに腹が減つてる奴には食わせるのは俺の矜持みたいなものでしてね…嫌いな奴でも敵でも腹が減つてるなら関係ありません話は腹一杯になってから聞かせて貰いますので」

調理の手間があるが、それはマニュアルを渡してあるし俺が一から料理を教えた弟子もいるから問題ないだろう

「そうか助かるよ」

「いやいや…失礼話を腰を折ってしまいました」

そして話が進みリムルさんは一つの案を出した

ジュラの森林に住まう種族で大同盟を締結

リザードマンから魚や水などの水資源

ゴブリン から住む場所

リムルさんの街から加工品を出す代わりに

オークは労働してもらうとのことだが

「リムルさん、良ければ俺も協力させて貰えませんか?」

「へ？」

「この森の住人じゃありませんが……その力になればと、俺たちからは……そうですね、世界の嗜好品とかどうするお酒とかコーヒーとか」

「あ……そうかその手があつたか！」

「はい、俺も力にならせて下さい」

「何故そこまで我等に義理立てを？」

「腹が減つてる人を見るのは大嫌いなので……それだけが理由ですよ……空腹の辛さは俺も良くわかるので」

「……………」

「じゃあハルトも頼む」

「任せてください」

これがリムルさんを盟主とするジュラの大同盟の設立であつた、リムルさんがオーク15万に名付けをしている間の事

フロンティア

レポートで帰還した俺の元に現れたのは慌てたジョウゲンであった

「どしたの？」

「ま、魔王ちゃんこつち来て！」

「どうしたのつて引つ張らないですよ！」

引つ張られて先にあつたのは見覚えのない店であるが店名を見て、まさかと思つた

「光写真館…嘘でしょ」

ハルトは意を決してドアを開けると

「あくいらつしやい」

「マジだ……」

柔和な笑顔を浮かべる老人と椅子に座る見覚えのある男がいた

「ん？よお影の魔王」

「つ、士さん!？」

「やはり…この世界に何のようだ、デイケイド！」

ドライバーとウオッチを取り出そうとしたので慌てて静止する

「ジョウゲン、ストップ!!」

「けど魔王ちゃん…」

「店内で戦うなんて言語道断だよ、デイケイドは世界の破壊者じゃない、それは俺が見て

きた物語が語ってるから…それに」

「それに？」

「写真お願い出来ますか？」

「え？魔王ちゃん？」

折角だ写真なんてこの世界には無いものだしよくよく考えれば全員との写真など撮った覚えもないからな

「勿論、ささつ此方に」

おじいさんが案内する前にジョウゲンに

「はい、ジョウゲンは皆呼んで来て全員で写真撮ろうよ」

「え？けど…世界の破壊者のいる店でなんて」

「早く全員呼んでこい今すぐに」

少しだけ威圧してみるとジョウゲンには背後に未来の俺が浮かんだようで

「は、はいー！！」

慌てて走り出した、うん今度会ったら締め上げよう未来の俺

「流石は魔王だな部下の扱いも堂に入ってやがる」

「辞めて下さいよ土さん、部下とかそんなのじゃないですって仲間ですから」

と謙遜している

「え！貴方がアナザージオウなんですか！」

「嘘でしょ！この子が災厄の魔王!?!」

2人の男女が現れたのを見てハルトは硬直したが再起動し

「いや俺はその魔王には……って……ひ、光夏美さんに小野寺ユウスケさん!?!うそ……本物の仮面ライダーキバ……ラとクウガだ……さ、サイン下さい!!」

『お前色紙なんて何処から出した?』

「え？そう言われると何処からだろう……けどライダーの人達もベルトを何処からか出してるよね？それと同じだと思うよ」

『不思議って事か……』

「……そうだね」

「え？私達の……って何で私達が仮面ライダーって知ってるんですか!?!」

「サインね照れるなあ……いいよ」

「あ、ありがとうございます!!」

「ユウスケは話を遮らないで！」

「はいー！」

「そうですね…話しましょうか俺が何で皆さんの事を……つてあれ？海東さんはいないんですか？」

「いる訳ないだろ」

「そっかあ…サイン欲しかったなあ」

「僕のサインが欲しいなんて、見所があるね青年」

「つ！！本物だあ…」

「海東、何しに来たんだ」

「この世界にある、お宝フルポーションを試したんだ、流石だね傷が一瞬で治ったよ」

「リムルさん作のポーションの効果やべえ…この人の眼鏡にかなうとか…」

「そして別のお宝も見つけたよ、思っていたより凄い世界だ」

「へー…」

「フロンティアって言うんだ」

「フロンティア…って俺達の島じゃないですか!!」

「この島の事か？」

「はい、こことは違う世界のもですが」

「そうだ…へえ君のものなら正直に言おうフロンティアをくれ」

「俺だけの物なら譲る所ですが皆のもんですから渡す訳にはいきません！」
「譲る気あるんですか……」

「それは残念だ……なら変わりにコレをもらって置こうかな」

と海東さんがチラつかせたのは

「そ、それは!!」

—————

その頃のジヨウゲンは皆を集めて写真真館に向かっていた

「ハル兄の憧れの人かあ……どんな人なんだろうなあ」

と一夏の言葉にジヨウゲン達は

「何でもありな人かな」

「旅人という意味ならばハルト様の先達でもある」

「へえ」

と頷く一夏、鈴と箒は一夏と一緒に写真と喜んでいるが

「……………何で仮面ライダーの店なんか」

「フイーニス、あなたの信条もわかりますが皆で写真など良い機会です笑顔ですよ笑顔」

「はいわかりました」

「まさか東さんも仮面ライダーに会えるなんて思ってたなあ〜」
「私もだ」

そう話していると

「やあ東、千冬」

「この世界の人間基準の服を身につけた女性が現れた

「あ！スーちゃん！」

「久しぶりだね」

「本当だよ！元気だった!!」

「当然だよ、それより皆揃って何してるの？」

「ハル君が皆で写真撮ろうって言うから写真館に向かっているんだよ」

「そうか、なら私も混ぜてもらおうかな」

「勿論だよねチーちゃん！」

「反対する理由はないな」

新たな人物も混ざり談笑しながら進んでいくと

「そう言えばキャロルはどうしたんだい？」

「ああ何でも今は計画の最終段階で手が離せないと言つててな写真撮影の話をしたのだ
が」

「『今は構つてる暇はない!』 ってさ」

「そうか残念だなあ」

「本当だ」

「そう言えば知ってるかい? 使い魔でこっそり覗いてたんだがハルトがまた女を囲つて
るらしいんだ」

「その話詳しく」

「良いよ…まずは喧嘩してる女の子に硬くて熱いもの（マグナギガのエンドオブワール
ド）を放った辺りから」

「なん…だと…」

「新参者がハル君の貞操を美味しく頂いたというのお! 束さんもまだなのにい!!」

「ちよつ! 魔王ちゃんの誤解が広まってるう!」

「これは自業自得だな」

「語弊がある気もしますが紹介しない魔王様が悪いでしょう」

「ハル兄つてモテるんだなあ…」

「それを、どの口が言うのよ」

「え？何か言ったか？」

「いやハルトさんとお前は似た者同士とな」

「そっか良かったよ」

「何処が（よ）!!」

—————

噂をされていたのかハルトはくしやみをするが気を取り直して

「そ、それは…俺が未来の俺から貰った仮面ライダーのDVD!」

ある意味で二度手に入らないお宝である

「僕達の事も纏めてると来た…異世界のお宝だね」

「それは島の中心で厳重に管理してたのに、どうやって…」

「ま、あのセキュリティなら僕に突破出来ない事はないよ…暗号もパズルみたいだったかな」

「今度警備体制を見直そう…一応聞きますけどそれ返して貰えますか？」

「断るよ僕が手に入れたお宝なんだから」

「それ、俺のものなんですけどね…はあ良いや変わりに海東さんのサイン下さい」

「良いだろう」

「それで良いのか？」

色紙を渡して取り敢えず交渉成立だと思つてると

「てか盗むとかしなくても皆さんなら、ここでの最上位のもてなしをしますのに」

「え？」

「そりやそうでしょ、皆さん俺の憧れのヒーロー何ですから是非旅した世界のお話を聞かせて欲しいです」

「そうだな、まずは女の子2人を新しく嫁に増やした話から聞かせて貰おうか」

「いやいや俺の話よりも……………え？」

恐る恐る振り向くと、そこには目が笑つてない千冬と束がいた

「ふ、2人とも早いな…」

「ああ…それよりも錫音から聞いたが喧嘩してる女2名に自分の硬くて熱いものを撃ち込んだと聞いたぞ」

「ズルいよ！束さんさえまだなの！！」

「は？女2人？…それマグナギガの必殺技だから！そんな如何わしい展開にはなつてない…っ—か錫音の奴そんな語弊ある文言だったのか！！」

と2人の背後にいる錫音を睨みつけると申し訳ないような顔をして

「やーやーごめんごめん、ハルト」

「お前の頭に魔法でタライを落とし続けてやる」

「なんでギャグ的な制裁なの？」

「なら……アナザーウィザードが開発したターゲットに全身こむら返りにさせる魔法を」

「地味に痛い魔法を考えるのは君の趣味なのかい？」

「嫌なら全身にレ○ブロックを踏んだような激痛を与える魔法や全身に電磁波を当てて破裂させる魔法とか……つていたんだ」

「いや最後の魔法が不穏すぎるんだけど……まあいきなりなのは本当だけどね」

「あ、店長さん大人数なんで写真外でもいいですか？」

「勿論だよ」

「つしやあ皆、外に出ようぜ」

「その前に」「少し頭冷やそうか？」

「はい」

店内で正座して説教されてる姿に

「アレが魔王なのかい士？」

「今のところ、ただの変な人なんですが…」

「一応なオーマジオウの奴の話だと遠くない未来、アイツは重大な決断をするらしい…」

『その時、若い日のアイツが闇に落ちそうなら止めてくれ破壊者よ…もしそれを超えたらコレを彼に託してくれ』

「随分と面倒くさい頼まれ事だな」

と士はオーマジオウから渡された端末を見ながら呟いた

「何か言ったか？」

「いいや暫くは退屈しなくて済みそうだ」

その後無事に写真撮影は完了、頼み込んでライダー皆さんとのツーショットを撮ってもらい部屋の中に綺麗な飾ってあるのであった

最後に写真を撮り完了したが

「キャロルの奴、根詰めてなきや良いんだけど…今度差し入れ持っていくか」

彼女だけ写らない写真に寂しさがあるのは本当の事だ

—————

その後、リムルさんがオークに名付けをし終え ハイオークに進化した彼等がフロンティアに到着したのだ

「宜しくね皆」

「はっ！」

「えーと…暫くの予定だけど皆の住環境の整備する班とリムルさんの町へ道を作る班に別れて作業してもらいます。足りない資材とか道具とかあれば遠慮なく言ってね！」

その数ヶ月の間でフロンティアは建築ラッシュ、あの更地は見事な街が出来ていくではありませんか

「ハイオークの皆さんスゲエ…」

「いやいや、そんな事ありませんよ」

と1人のハイオークが話しかけてきたので素直な感想を述べる

「あの更地が街になるとか魔法だよ…俺からすれば…ありがとうな」

「そうですね我々も街を作るとは思ってませんでしたから生きてみるものですよ」

頬杖つきながら聞いてみた

「つーか何でこの島を選んだのさ？リムルさんの街の方が色々便利だろうに」

「我々はリムル様もですが貴方の善意にも助けられましたから」

善意つて炊き出しのことか…なら

「最初に言っておく貸しなんざ忘れちまえ、貸した側も何も覚えちやいねえよ」

「そうはいきませんよ貴方にとっては些細な事でも我々にとっては何よりの恩なのですから」

「そっか…」

ハルトは恥ずかしいのか顔を逸らす

「何か食べたいものあったら言ってくれ差し入れする」

「はい、ありがとうございます!!」

「おう」

と手をヒラヒラ振りながら別れたハルトであった

—————

リムルさんの街

今日は事前取引していた食料品の納品日で代表してハルトが向かっていた、他の面々

にはフロンティア内の事を任せてある

一応シンフォギア世界で言ったように国としての完成を目指しているので統治のシステムや人事などを話し合つて貰つて貰っているが余り進まない

「はあ……」

「どうしたよハルト？ 悩みか？」

リムルさんの自室で納品の手続きを完了したのでハルトは悩みを先達に相談してゐる事にした

「いや人手つて足りないなあつて」

「へ？ 建築で人手足りないのか？」

「違います皆さんにはお世話になってますよ……その政治や事務面での人材不足が」

ハルトは三国志を読んでおり三国の一つ蜀漢は人材不足故に孔明が内政、外交をやるしかなかったと言われるほどであった。その時ハルトの脳裏に孔明過労死説が出来た位である

どこでも有能な人材というのは得難いものなのは身に染みて理解してしまつた

「ああ……それは……」

「リムルさんの所つてどうなんです？ 参考にさせて貰えればと」

「俺の所は見ての通りかな司法、立法、行政に分けて担当の長を早い段階で決めてたから

なまだまだな部分はあるけど形にはなってるんだよ」

分け隔てなく受け入れる姿勢や柔軟さは俺も見習いといけないな

「そうか……リムルさんが羨ましいです。俺達の所は今まで少数精鋭だったものですから規模を拡大すると慣れない場所があるものですから」

組織としてもファミリー色の強い魔王軍は行く世界で必ず敵対勢力を作ってしまった。中には関係ない勢力の所為で別勢力と敵対という展開もある

現状、魔王軍に組織としての味方つてパヴァリア光明結社の面々くらいだよなあ……彼処の人達は今、異端技術の解析をしたりハイオークの人達の異世界の情報交換をしてたりと関係は良好でもある良いことだ

「うーん……そうだ！ハイオークの連中にフロンティアの事務仕事をさせるのはどうだろうか」

リムルさんの提案にハルトは雷に打たれたような衝撃を受けた

「そ、その手が！」

「流石リムル様です！」

これはハイオークの人達にもメリットがある話だと思う、今こそ土方の仕事がメインの彼等であるが長い目で見たら事務や政治的な仕事も出来る者がいれば後々の展開でも損はないだろう俺達も慢性的な人手不足が解消されるし勉強の一環で試験的な導入

も悪くない

「よし…志願者を集めて小さい所から始めてみるか」

「そうだろうそうだろう」

その後、事務方に志願したハイオークの皆さんのお陰もあり。俺達の業務関連は改善されていったのは少し先の話である

—————

そして暫く経ったある日の事、ハルトが新しい街の視察に出ていた時

「!!!」

「つとどうしたお前たち?」

自分の所へ飛んできたディスクアニマルのアカネタカを手に持つ確か、周囲の警戒で飛ばしてたんだっけ…一応ソウエイさん達には俺の使い魔って事は説明してるんだけど…何か手違いでもあったか?

変身音叉を取り出しアカネタカをディスク状態に戻し、音叉で記録した映像を再生するとペガサスに乗ってる一団が此方に向かっているではないか

「避難警報と対空戦闘準備!」

ハルトが指示を出すとリムルさんからの念話が届いた

『ハルト、見えてるか？』

「はい、えつと…ペガサスに乗ってる人達ですよね？」

『そうだ念の為だけ俺の街の人を避難させても良いか？』

「勿論です、避難誘導はそちらにお願いしても？」

『ああ任せろ』

「よし…ウオズ」

「はっ！」

「行くよ」

「畏まりました我が魔王」

マフラーワープで転移した先にリムルさんがいたので合流すると

「リムルさん、アレって」

「昔少しだけ色々あったんだよ」

「ペガサス乗ってる人達に絡まれるってどんな事したんすか…それより避難は完了です

よ」

「ありがとう」

そうして降りてきたペガサスに乗ってる一団が着陸するとカイジンさんが前に出て臣下の礼を取る

「王よ」

「久しぶりだなカイジン…そのスライムもな」

「ああ」

すると視線が俺の方に向き

「貴様が彼処の浮島の者か」

「ええ、そうですが」

「そうか…」

その後、何故かリムルさんと王と呼ばれた人武装国家ドワルゴンの王 ガゼル・ドワ
ルゴンさんとの一騎打ちとなった、結果としてガゼル王の必殺技をリムルさんが受け止
めた事で終結したのだが

「次は主だ浮島の者よ」

「え？俺も？」

「そうだ貴様も見定めてやる」

「我が魔王に何と不敬な「ウオズ待て」しかし」

「手を出すなよ、俺がやる」

「ほお思い切りが良いな」

「いやー最近大將らしい事してないからさあ良いかなって」

ハルトはリムルさんとの物々交換で得た刀を抜き構えた

「ほお…お主もか」

「得意は槍なんだけどリムルさんが刀なら同じにしなきゃカッコ悪いでしょ？」

「良いだろう来い！」

「それではハルト・トキハ様とガゼル・ドワルゴン様との一騎打ち…始め！」

暫く睨み合いとなる…：…確かこうだったかな

「っ!!」

刹那、ガゼル王の前に現れたのは刀を振り下ろそうとするハルトであった

これはこの世界にある魔力やスキル、アーツなるものとは違う場所から生まれた技術である

「ほお零拍子か」

「おーハル君いつの間になー！」

戦いを見にきていた千冬と東が分析する

「え？アレが何なのか分かるのか千冬さん」

「ああ零拍子…簡単に言ってしまうえば相手の動きより先に動く技術で私のいた世界の技術だ」

「正確には東さんの実家の道場にある技だよ」

「ええ…東さんの実家って…」

「けどハル君に教えた覚えはないんだけどなあ」

「そう言えば斬月の習熟訓練の時に何度か見せたな」

「え？チーちゃんの真似したって事？」

「普通に考えればな…まあ付け焼き刃の模倣だが先手は取れるか」

「アレで付け焼き刃なの？」

「ああ極めた先生なら気づく前に切られてるさ」

「その世界…色々と凄いな」

「ははは！今のはどうやったのだ？」

「わからないでしょ？俺もわからない習うより慣れるで覚えたからさ！」

ガゼル王と鏢迫り合うが変身してない俺ではパワー不足で少しずつ押されてきている流れを掴み続けるには攻めること！攻めようとした時

「はあ！」

慌ててガードの姿勢をとつたと同時にリムルさんと同じように凄い勢いで刀を打ちつけられた…危な!

「それまで勝者 トキハ・ハルト!」

「危ねえクロベエさんの刀じゃないとへし折れてたよ…つか今の…」

ガゼル王は刀を下ろすなり笑い始めた

「はははは! 此奴ら二度も受け止めよつた! どうだ主の技よ…まあ見よう見真似だがな」

それであの精度とか

「それで見よう見真似とか自信無くすわ覚えるのに2年かけたのに」

つーか千冬は凄い戦いたみたいいな顔でガゼル王を見ない! 最近血の気多いよ!

「しかしリムルも主も見事よな」

「その技、俺の師匠がよく使うんだよ…それでよく打ちのめされたからな」

「何、その師匠とは」

「ほほほ、あの時の童が見間違えましたぞ…あ、いや失礼ドワーフ王」

「剣鬼殿ですか! お久しぶりです」

「ハクロウさんの弟子って事…そりや強い訳だ」

「ですね」

「ところでリムル、ハルトよ上空から見た限りじゃ美しい街並みだったぞ…美味しい酒もあるの难道?」

「ああ…つか裁判の時と比べて軽すぎない?」

「お酒を所望ならありますが…ん? 裁判ってリムルさん…本当何したんですか?」

ハルトはリムルの話を聞いて二度驚くのは別の話

魔王降臨と建国と

さて前回、無事に一騎打ちを乗り越えた

その夜はリムルさん達の面々と俺達とドワルゴンの皆さんとで宴会が催されたのである

場の雰囲気も盛り上がっているところで

「リムル、ハルトよ俺と盟約を結ぶ気はあるか」

そう言われて盃を飲む手を止めたリムルとハルトの目を見てガゼル王はツツコミを入れる

「2人して「何言ってるんだ、このオッサン」みたいな顔をするんじゃない」

「え？マジ」

「本当ですか？」

「うむ……この街と浮島は素晴らしい街並みだった、何れは新しい交易路や行商の中心都市となるだろうそんな時、後ろ盾になる国があれば便利だぞ」

「そっかフロンティアを使えば遠い異国の物品を輸入してそれを輸出出来るのか新しい交易…空輸という概念か面白い」

「いいのかよ、それは俺達魔物の集団を国として認める事になるぞ」

「ですね空島なんて色んな国を飛び回れる異端の場所も国家認識して大丈夫です？」

「無論だ、コレは双方に利益のある話よ善意だけの言葉ではない」

「ホントにいく俺だまされてない？」

「俺達疑り深いですぞ？」

「ははは！ 恩師やドライアドを前にその主を謀ろうのどせん」

それからガゼル王の出した条件は二つ

国家の危機に際しての相互協力

相互技術提供の確約

である

「なに、答えは急がすともよいよく考えると良い」

「いや、この話喜んで受けたいと思う」

「同じく俺も断る理由がないからな」

ハルトの現状を考えれば味方が多いに越した事はないと即断する

「決まりだな…で、お前たちの国の名は何という？」

その時2人の心は

(考えてなかったー!!)

そしてリムルはジユラの森と自分の名を合わせて

「ジユラ・テンペスト連邦国だ」

「ほお…主は」

咄嗟に思いついたのは

「逢魔(オーマ)王国」

相棒であるアナザーライダーは魔の存在とも言えるしリムルさんやヴィオレちゃんみたいに魔物や存在がいるとわかった…そんな人達に出会えたからこそ出来た国…目指すは楽しく仲良く皆が飢える事なく生活出来る場所にしたい…オーマジオウさんに敬意も込めてるのは俺の胸だけに留めておこう

すると周りも賛同し、今話してる街は首都となり中央都市 リムルとなった
んで俺の所はと言うと

「祝え! フロンティア改め逢魔王国誕生の瞬間である!!」

「今、俺達は歴史を目撃したよ!」

「目出度い!」

「はい! 魔王様の国…アナザーライダー達の国です!!」

「ははは……お前らなあ」

結局、首都の名前は決まらずに保留である……まあ浮島なのでその辺は保留でも良いかその後、ドワルゴンとテンペスト、オーマとの三国同盟は無事締結されたのである

それはつまり建国と言う意味であり

「仕事が多いだけだー!」

俺の仕事が増えたのである書類の山に頭を抱えているとウオズが

「良いではありませんか今は建国に伴い住民の調査やフロンティアの開墾と色々やる事は多いのですから」

そう彼の言う通り、国として少しずつだが認知されているオーマ王国はドワルゴンやテンペストからの人間や亜人達と言った多様な人種が訪れているのだ……故に

「ヒヤッハー! 良い町じゃねえか! 今後とも最前にしてやるぜ!」

こんな世紀末のような輩も来る……まあ

「ようこそオーマ王国へ」

『メロンアームズ! 天下御免!』

「あべし!!」

「ふん…愚か者が」

千冬達がボコボコにして外に投げているのだが数が減らない

「うーん治安面の問題かあ…あー!」

何か思いついたようにハルトは立ち上がると

「ちよつとリムルさんの所行ってくる!」

『テレポート』

—————

テンペスト

「それで俺の所に?」

「はい、リムルさんなら魔鉱石から悪魔の依代を作れるんじゃないかと思ひまして」

「悪魔?」

『告 この世界の悪魔は召喚すれば対価により取引が可能です、また受肉させればこの世界に留まる事も可能』

「ふーん…そうか…」

「リムルさんが協力してくれるならお礼はコレです！」

ハルトが取り出したのはお酒と燻製器である

「あ、お望みならTVや特撮映画のDVDもあります」

「乗った!!任せろ！」

って感じでリムルさんが用意してくれた最上級の魔鉱石の人形3体である、予備で用意してもらった、それを王都まで運ぼうとしたのだが

「なあ良かったら悪魔召喚を見ても良いか？」

「良いですよ」

そんな感じでリムルさんと護衛のランガさんも招いての悪魔召喚である

「っしー! やつとヴィオレちゃんとかジョーヌを呼べる…約束を果たせるぜ」

「悪魔召喚か初めて見るな」

「んじや呼ぶ準備をしますね」

そう言うとうとハルトは地面にチョークで魔法陣を手書きして魔力を流して魔法となる
…因みに俺の魔法発動はアナザーウィザードが行ってくれる指輪の魔法を応用しているらしい頼りになるアナザーウィザードさんは…よし

「悪魔召喚!!」

すると大量の魔素と共に悪魔が現れたが

「ふふふ…そう此処があの子達の言つてた場所ね」

「あれ？つかしいなあ…ヴィオレちゃんとジョーヌが来る魔法陣の筈なのに…すげえ美人が来た」

目の前に現れたのは雪のように綺麗な白髪と血のような赤い唇、またヴィオレやジョーヌのように軍服のような装いをしている女性であったがアレと首を傾げていると彼女は優雅に振る舞い

「失礼しましたわ、私はあの子達の代理で召喚された者ですわ」

「あ、そうなんですか…つてあの子に何か？」

「まあそうですね々と」

世間話をしているが何かしらの圧をかけられている…まあ無視できる範囲なので無視していると

「へえ…あの2人を下せる位の強さはあるそうですね」

「へ？いやあその…まあ…」

「歯切れが悪いのには理由がありますの？」

「2人が勝手に喧嘩した所に範囲攻撃を入れただけなので別に俺1人で倒した訳じゃ…っ！」

見えた未来視に従い腰の刀を抜刀し俺の首を守るよう添えると甲高い金属音と共に爪が俺の動脈を狙っていたのだ

「あら、やりますのね」

「まあ……ね！」

「ハルト！」

「下がって下さい……俺にも予想外の展開なので早く！」

力を入れて弾き飛ばす、リムルさん達を下がらせてタイムマンだ

「あの姿には変身しませんの？」

「お望みならしますよ……その前に何で襲い掛かるのか理由が知りたいんですけどね」

『ジオウ』『アナザーツインギレード』

変身してツインギレードを槍にして構えた

「語る理由がありませんわ」

『気をつけろよハルト。今までにない敵だ』

ー分かってるー

と一触即発になりそうな所で魔法陣から新しい光が現れたのだ

「我が君！」「大丈夫？」

「2人とも良かった……つか誰アレ？」

馴染みの顔に一安心した所で改めて犯人の顔を見る

「ブランいきなり何をするんだ！」

「ハルトに攻撃する為に召喚を変わった覚えはないよ」

「あらあら…本当に懐いてるのですね」

「ブラン？」

「ええ以後お見知り置きを異世界の魔王様」

そう言うなり彼女は両手を上げたのである降参とも見れるのだが警戒を解かずにいると

「ご安心ください、もう攻撃は致しませんから」

「我が君を攻撃したのを見て信じろと？」

「流石にそれはないよ…ボク達2人が相手になる」

「待った2人とも」

2人が警戒するのでハルトは手で制し

「わかった、けど理由があるんだよね？教えて」

「ええ…2人を下し従えた人、私が支えるのに値するか試させて頂きましたわ…正直2人が離れてしまいますと暴れる相手がいなくて退屈ですよ」

「で合否の結果は？」

「合格ですわ、私も配下の末席に加えて頂けます？」

「いいよ、けど配下とか変に考えなくて良いからね」

「ははは！即断即決とは流石我が君だな」

「けど大丈夫、攻撃したんだよ？」

「問題ないけど暴れるのは控えてね」

「善処しますわ」

「そこは頑張つてよ…まあ無理ない範囲でね」

相棒達に結界魔法やそれに当たる何かしらの能力つてあつたかな…と思わざるを得なかつた

「（この方の力の底が見えなかつた…それにあの時計は…）」

ブランが罅迫り合い、アナザージオウとなつた彼の背中から見えていたのは大きな時計である、それは彼の力の具現なのかは知らないが恐らく時に関する概念を操れるのだろうそんな存在はこの世界では龍種のみ…それを行使する人間など聞いたことがない故に面白いと感じた、それにたかが人間の数十年に支えるくらい暫くの暇つぶしとして見守るのもありだろう

ブランがハルトを選んだ最初の理由はこれであつた

取り敢えず危険も去ったのでリムルさんと呼んで事情を説明した

「大丈夫だったか!？」

「はい、えーとですnee…面接だったみたいです」

「あ、悪魔の面接って物騒だな」

「まあ仲間が増えて良かったですよ」

「やっぱりお前の認識って何処かズレてるよな」

「いやそれ程でも」

「褒めてneeよ!」

「そう言えば…なあヴィオレさん、あの魔法陣に魔力を流したら誰でも悪魔呼べるの?」

「うん…けどハルトは私達を倒して呼んでから対価はないけどスライムさんが悪魔を呼

ぶなら何か対価が必要だよ」

「そうかあ…んじや今度だな今は用意出来ないや」

この言葉を冥界からリムルを見守っていたとある悪魔が聞き、惜しい!もう少しで呼んでくれたのと思っていたのはリムルは知らない話であるが

「あ、ブランさんの対価って何が良いんだろ?」

そう尋ねると

「でしたら貴方も持っているウォッチを貰えますでしょうか？」

「これなら良いよ」

とブランクウォッチを2個投げ渡したのであった

「これは…」

「中身は空のウォッチだけど…いつか君の役に立つかも」

「そうです…では有り難く」

「ええ！ブランクだけ狡い！」

「私も欲しいぞ我が君!!」

「はいはい」

とブランクウォッチを渡したのであったのだがまさか

『エボル』『キルバス』『ブラッド』

『ダイモン』『キマイラ』『ベイル』

とんでもないアナザーライダー達が生まれている事になるとは思わなかった

—————
そんな感じで新しい仲間も増えたのでハルトが行った事は

「建国祭だ！好きなかだけ飲めや歌えー！今日は無礼講だあ！カンパーイ！」

「「うおおおー！」」

建国祭の大宴会である…いやあ仕込み大変だったあ、最近は料理部門も出来て色々教えてたりするがまだまだ途上で俺が動くことも多いがな

「ふう……」

仕事も終わり新しくできた建物の屋根に登り一人ゆっくりとお酒を飲むハルトは階下にいる楽しんでる面々を見て思う

「いやあ楽しい楽しい…多分人生で一番楽しいな」

『そうか』

盃の酒を飲み干すと酔いが回ったのか笑顔で本音を吐露する

「これもお前達と会ってからだな…俺の運命が変わったんだよな…ありがと」

少なくともあのままでは妹とトーマに振り回されるだけの人生であっただろう、それが逆転したのはアナザライダー達との出会いであるのだから感謝が止まらないのは当然なのだが

『止せよ気持ち悪い』

『ああ明日は槍の雨で降るノカ?』

「んだよ折角、人が感謝してんだ礼は素直に受け取っとけよ」

『俺達もお前に会えて良かったな…まあ楽しいぞ相棒』

「そりや良かった俺も頑張った甲斐があるってもんだ」

『だが、お前の天然ジゴロは何とかならんのか』

「何の事かさっぱり」

『まあ良い、俺達は貴様の修羅場をつまみに酒を飲むだけだ』

「かなり悪趣味なこつて……なあ俺がいなくなったら皆はどうなるんだろうな」

『知らん、心配ならずつといれば良い』

「そうしたいのは山々だけど、いつかは俺もいなくなるんだよ…」

最初は家に帰る為の旅路だったのにあれよあれよという間に大事なものがどんどん増えていき

「今じゃ一国一城の主か…人生何あるかわからないものだな」

両親が聞いたらひっくり返るよね、行方不明になった息子が王様になりましたなんて話は、それでこの国を見せに連れてくれば信じるだろう…けど妹を牢屋に投げ込んだ件は…まあどうでも良いか、そんな事より

「その為にも座標は手に入れるんだ俺の力で」

帰る座標を得る事は変わらないし相棒達の復権も目指さねば…やる事が多いが楽しくて仕方ない

『そこは俺達の間違いだろ』

「だな悪い…んじや「やあ隣良いかい？」 錫音か…好きにすれば」

「では遠慮なく」

と隣に座つたのでハルトは無言で盃に酒を入れる

「ほら酒は飲めるだろ？」

「ありがとね…いやあ王様から貰えて光栄だなあ」

「冗談でも辞めろ、俺が王になるのは大事な居場所を守るのに都合が良いからであつて支配者とか窮屈で嫌いなんだから…君臨すれど統治せず、俺の好きな言葉だ」

「だろうね君は自由を尊ぶ人種だ、自分も他人も…それは嘗て束縛された籠の鳥だったからというものもあるかな？」

ハルカとトーマが無自覚にやつていた悪役仕立てのせいでろくに友人らしい友人もいなかったからな…だからこそ

「籠の鳥だからこそ広い空の青さを知るんだよ、だから今が凄く楽しいんだ」

何気ない当たり前と言うものは素晴らしいと大手を振って言えるよ

「これから大変だね」

「そうだな内政やら外交やら軍務やらの人手も足りないし……あ……あ……この辺に頼れる魔法使いさんはいないかなあ」

「はは……何だいそのわざとらしい芝居は？」

「バレたか……まあ単刀直入に言う俺の隣にいて俺を見張れ、んで「それ以上は言わなくてもわかる」それ

「前に言ったが君は本当に寂しがり屋だね」

「そうだな……多分、老いた俺は誰にも……それこそアナザーライダー達にも自分の悩みや気持ちと言えないで溜め込んで……その気持ちが爆発したんだろうな」

少しだけ雀の涙くらいの気持ちだが分かった気もするのである

「だとしたら本当に面倒くさい男だな……恋心拗らせた乙女の方が可愛いわ……さっさと死ぬ色ボケジジイ」

露骨に嫌な顔をしたので思わず大笑いする

「あはは！相変わらず未来の俺は嫌いなんだな」

「当然だ」

「けど俺も老いたら同じ顔だぜ？」

「中身は君だろ？なら問題ないさ私は常葉ハルトを好きになったのは顔じゃないから

ね」

「そっか……んで返事は？」

「良いよ……けど今のセリフが私への告白ならもう少し言葉を選んでくれると嬉しいな」

「一応は夜景が綺麗な場所で2人きりなんだが」

「うーん……まあ及第点かなプロポーズはもっと凝った台詞を言う事」

「歯が浮くような台詞でお前を口説けど？」

「嫌だねそんなハルトは気持ち悪い」

「だよな俺もそう思う」

「返事はYES……仕方ない、まあ君と協力すればネオタイムジャツカーの長になる近道だろうからね」

「おいおい俺が潰そうとしてる組織の長になる気？」

「まあね」

カラカラ笑いながら酒を飲んでいると盛り上げる為に立てた櫓に誰か登ってる……マイクを持つてるな……あのメカうさ耳はまさか

「一番、篠ノ之束!!歌いまーす!!お前達!私の歌を聞けーい!」

「」「うおおおおおー!」

会場が突然の大盛り上がりときたもんだ

「何やってんだアイツ？」

「まあ楽しみ方はそれぞれだよな」

「そうだな」

「それよりまた嫁を増やしたんだ」

ジト目で睨まれるが

「人間き悪いんだが…それに向こうはそう思っただけよ…強いて言えば友達だろうな」

「原初の悪魔を友達にするとか普通じゃないんだけど？」

「原初？何それ普通の悪魔と違うの？」

「ん？なーんだあの子達その辺話してないんだ…じゃあ錫音さんが優しく教えてあげよう」

「頼むわ」

錫音の話だとこんな感じらしい

この世界の悪魔には明確な序列が存在しており人が呼び出し操る事が出来る

下位悪魔（レッサーデーモン）

上位悪魔（グレートデーモン）

上位魔将（アークデーモン）

上位魔将に行く程に強いが召喚者の言う事を聞かない事もあるらしい：理由は報酬が法外で契約した側が払えないというものらしいが

んでここから重要で上位魔将とかなになると自身の性格や志向などから色訳される：もしくはスカウトされて、とある悪魔の傘下に入る

それが原初の悪魔 世界に7人しか存在せず彼等の頂点に君臨する者 先ず誰かに従うなどあり得ない不退転の存在である

中でも赤、黒、白は最上級にヤバイと言うのが通説であるらしい：中でも白は最近テンプストよりも東にある帝国の属国でとんでもない虐殺事件を起こしたと有名ならしい：泣くも黙るとはこの事と

「怖いな白の悪魔……ん？白（ブラン）？」

「そう君に付いてるブラン、ヴィオレ、ジョーヌの3人は紛れもなく原初の悪魔だよ」

とんでもない悪魔達だったぞ！までアナザーのブランクウオッチ預けたのってヤバ

いんじゃ…

「マジか…いや強いとは思ってたけどそこまでなんだ」

「それは私のセリフなんだけどね…まあ彼女達の扱いは気をつけなよ」

「まあ善処する…けど多分大丈夫じゃかいかなあ」

「何処から来るのさその自信は」

「さあねえ」

そんな感じで建国祭は楽しく過ぎて行った

数日後

正式にブラン、ヴィオレ、ジョーヌ、錫音を採用し

ヴィオレ、ジョーヌには裁判や治安維持など司法に関する部分をブランには外交や内政を錫音は魔法に関する部分を頼むと改善される所も多く、王国の都でバカやる連中の数はずっと少なくなった。なんでかと聞いても内緒というので深く聞くのは辞めてい

そんなこんなで国としての活動基盤が少しずつ整い始めていたある日

り
テンペスト付近で大きな爆破音がしたと思ったと同時に流れたやばい魔力を感じ取

「警戒態勢!!……ウオズ！」

「はい、出撃用意は出来ております」

「つしゃあ！行く『ハルト聞こえるか？』リムルさん？聞こえますよ」

『そうかなら単刀直入に言う、大きな魔力を感じたろうが問題ないから安心しろ』

「けどあの魔力量はブラン達3人に匹敵……いやそれ以上の強さを持った奴でしょ？加勢に向かうんで待っててくださいね！」

『いやその……何でも魔王が挨拶に来たらしい』

「え？」

『あ、この世界の魔王な名前はミリムって言うんだ……何とか落ち着かせたから安心してくれ』

「はあ……ちよつと待ってて下さいねブラン」

ハルトはブランを呼ぶ一番、俺達の中で国際情勢に明るいからだ

「何でしょうかハルト様？」

「ミリムって魔王知ってる？」

「はい…ミリム・ナーヴァ、この世界最古の魔王で竜の力を宿している敵対したらダメな魔王とも言われてますわね」

「強いのか？」

「ええ今のハルト様よりも確実に」

「マジか…その魔王が今近くにいるらしいんだけど」

「ご命令とあらば私達3人で倒して参りますが」

「しなくて良いから！リムルさんが何とかしたみたいだから！」

「あら、そうなんですの残念」

本当に残念そうにしている当たり戦だったんだろなあ…だが戦おうものなら王国の国土が灰になるだろう

「あ、あぶなかった…色んな意味で」

一息ついたのも束の間である、ドーン！と凄いい爆発音が鳴り響くと思わず念話で

「リムルさん!？」

『大丈夫、ガビルが殴られたただけだから』

「何も大丈夫ではなくないですか!？」

最近リムルさんの所に身を寄せ。無事に竜人（ドラゴニユート）に進化したのだが…

割とガビルさんの扱い雑!と思ってるよ

「我が君!何やら凄い魔力がするのだが…テンペストに遊びに行っても良いか!」

ドアを雑に蹴破りきたジョーヌに対してハルトは冷静に

「その魔力の主と喧嘩しないならな」

「安心しろ手合わせしてくるだけだ!」

「言い方変えりや良いってもんじゃねえよ!?!…ヴィオレは?」

「先にテンペストに行くと言って出かけたが?私は許可を得てから行くこうと」

「何してんだあの子!今すぐ止めに行くぞお!!10秒で戦闘準備しろ!」

その魔王ミリムと戦いでもしたら大変な事になる!

「10秒でなど何処の戦闘民族ですか?」

「準備完了だ!」「はい」

「ええ……」

「いいから行くぞ!」

ハルトはアナザータイムマジーンに乗り込むと仲間達を乗せて、テンペストに向かうのであった

魔王（本物）来る！

テンペストにて

「ほんつとうにすみませんでした！」

ハルトは一戦交える寸前だったヴィオレを止めるなりリムルさんに頭を下げた

「むー…ジョーヌがチクらなかつたら魔王と戦えたのに」

「まったく…我が君の迷惑を考えろ、そうしたら魔王ミリムと我等との間で戦争になるぞやれやれ…我が君から役職を頂いたのならその辺も考えろ」

一応、まだ形式的な部分だがヴィオレには最高検察庁長官、ジョーヌには最高裁判所長官、ブランには内外省大臣という任官を予定してもらっている

以外なのだがブラン達って頭良いんだよな…中でもブランは俺が予定した法令などを一眼看着て暗記したし問題点を指摘する程と来た、しかも人間と違って賄賂とかそんなで動かないからの任命である

「あら貴女も許可があれば戦おうとしてたわよね？」

「ぐっ…そ、それはそれだ！」

「そう言うプランも戦いたいんだろ？」

「ハルト様、ご覧ください空気ですよ」

「話題を逸らすな!! ったく…あのリムルさん…この子が魔王なんですか？」

「ああ」

「マジですか」

ハルトは最古の魔王と呼ばれた少女を見る

「そうだぞ！吾輩はミリム・ナーヴァだ！お主は…」

古風な話し方だと思うが蜂蜜舐めながらなのでどうも威厳が伝わらないが礼儀は大事だな

「ハルト、あそこに見える浮島…逢魔王国の代表ですね」

「ほうほう…空島か…リムルが言っておったが異世界からの物が沢山あるのだろ？何か

見せてくれなのだ」

「そうですね…うーん」

『コネクト』

「どれが良いかな…コレじゃないアレじゃない」

魔法陣の中から物品を漁っていると目当てのものに行き着いたので

「よいしょっと…はいコレ」

渡したのは大量に作ったものなので問題はない

「何だコレは？」

「ドーナツ、小麦粉を油で揚げた異世界のお菓子ですよ」

名前的に親近感を抱いた希望の魔法使いの好物と同じように砂糖を塗してあるもの……因みに揚げたてを袋に入れている

「俺のおやつだが仕方ない」

「ハルト」「我が君」「ハルト様」

「わかっている皆の分も揚げてるから……取り敢えずコーヒーか紅茶淹れないとなあ」

「あ、それならボクの所に紅茶淹れるのが得意なのがいるよ」

「お、いいねえ」

と談笑している中ミリムは

「んっ………ふむ」

渡された袋をマジマジと見て、振り回し匂いを嗅ぐとお気に召したのか封を切り一口

食べた

「……………うまいのだー！」

凄いいっぱいに迫る声に思わずキョトンとしてしまうが

「食べたいならまだありますけど？」

「うむ！貰うのだ！」

「あの…リムルさん」

取り敢えず何袋か渡し笑顔で食べる彼女を見て思わずリムルの肩を組む

「あの子が本当に魔王なんですか？迷子の子供って言う方が、まだ信頼出来ますよ！」

心象としては親戚の子を餌付けしてるような感じである…そう言えば最初にキャロルと会った時もこんな感じだったなあ

「俺もそう思ったけどベニマル達を蹴散らした姿見たら信じるしかないよな」

「ベニマルさん達相手に!？」

オークロード戦後に内の面々と交流も込めて模擬戦をしたのだが、その強さは身を持って味わった事もあり蹴散らしたと言う言葉には驚きしかないな

「それでどうするんですか？」

「取り敢えず街の連中を集めて周知させようと思う」

「賛成ですねガビルさんの犠牲を無駄にはしたくありませんから」

「いやガビル死んでないからな」

「んじや俺は街に戻って連中に周知させます…でないと」

「でないと？」

「テンペストに隕石の雨を降らす事になりそうなので」

それはフロンティアの破片なのと言うまでもない、三人娘には周知してるが他の連中なら変身して暴れそうだし

「断固阻止してくれ!!」

「ガッテンです!!」

やはりリムルさんとは仲良く出来るなと思った瞬間だった

王都

「つー訳でテンペストに本物の魔王がいるから行く人は気をつけてね」

と主な面々を集めて周知させた、ウオズとジョウゲン達はシンフォギア世界で裏工作中なのに呼びつけて悪いなと思うが

「我が魔王を差し置いて魔王と名乗るとは…許すまじ!」

「いやこの世界基準なら魔王を自称してるのは俺だからね…それと3人もだよ気をつけるように」

ブラン、ジョーヌ、ヴィオレに釘を刺す

「それとヴィオレは独断専行の罰で明日のおやつ抜き」

「そんな!!」

「まあ我が君の意向に逆らった報いだな」

「ジョーヌも偉そうに言ってるけど未遂だからね」
「わ、わかつている！」

本当かなあ……まあ基本ミリムさんはリムルさんの方にいるから何とかなるかな

そう思ってた時期が俺にもありました

「リムルさん、俺を呼んだのって」

「ああ……実はな」

ある日、普段通りに仕事をしていると最早見慣れた爆破が起こり何事と見ていたらリムルさんに念話で呼ばれたのである

何でも魔王カリオンからの使者がゴブリンの長　リグルドさんに狼藉を働き魔王ミリムにしばかれたとの事、話を聞けば俺にも話があるとの事なので来て欲しい……か

「カゲン」

ウオズやブランは裏工作などで動いて不在だからな、それにカゲンは大人しい子だから大丈夫だろう

「ハハハハ」

「リムルさんの所に来た使者が俺に用事があるらしいから話し合いだつてさ着いてきて」

「かしこまりましたハルト様」

アナザーウィザードのテレポートで転移してリムルさんのいる議事堂に移動したのだが、いたのは獣王国ユーラザニアから来た使者。名前はフォビオと言うらしいが：俺を見て

「何で人間が此処にいんだよ」

「呼んだのは君だろう？ 私は君達の言う所の浮島の王だ」

リムルさんやガゼル王の前では碎けているが対外的には未来を俺を少し意識していると思う普段の俺だと弱腰に見られてしまうとと言うのがブランの意見である本当に凄くない本意だが未来の俺は長年の積み重ねからか上に立つ者の振る舞いがキチンと出来ていたからな

とー
嫌いだからって完全に否定するのはダメだ取り入れられる所は素直に取り入れられない

まあ取り入れる所もない程の愚か者もいるのだけど

「は？あの空島は人間が支配してんのか？なーんだどんな奴がいるのかと思つたら期待した損したぜ」

「言葉を選べ犬畜生」「お前も言葉を選んでねカゲン」申し訳ありませんハルト様」

ダメだブラン達より穏健だと思つたから選んだけどそもそもウオズ達って俺に過保護だったと後悔する

「何だよやるってのか人間がよ」

「あく…配下の過失は上の責任だ、変わりに謝罪するすまなかつた」

「ハルト様…申し訳ありません魔王様に何とお詫びして良いか」

「お詫びしなくて良いから、未来の俺だし今の俺が許せば問題なしだから」

「ハルト様…流石は未来の魔王っ！」

「話がややこしくなるから黙ってる！」

「は、人間が魔王を自称してんのかい滑稽だな」

「そうだけど使者の言葉も上の言葉だ君の態度や言葉一つは魔王カリオンの言葉や態度と此方も判断する…その上で質問だが、あの広大な空島全てを敵回すのかい？魔王カリ

オンではなく君の判断でだ：善意で言うがおすすめしない」

あの後、試しにほんのお試しにシンフォギア世界に帰って三人娘の能力を見せてもらったのだが：一瞬で的にしてた無人島がいくつか消滅したと言っておこう、あの子達の魔法って戦略兵器みたいだなと思ったのは内緒だし対人戦を頼むのは余程の時だけだと戒めたキツカケでもある：まあ仮に

シンフォギア世界を滅ぼすなんて決断をしなければだが

そんなIFはないと願いたいがキャロルの事と向こう連中の愚かさを考えると現実味がありそうで怖い：が

「その愚かさの代価を多くの無関係な命で払いたいなら構わないけどな」

あの（シンフォギア）世界の人間なら別に良いんじゃないやねえのかなと考えてしまったり俺も酷い人間だな、まあ受けた仕打ち的には3回くらい焦土にしてやりたい気持ちもあるが：いけないいけない、こんなんじゃないや憧れのヒーローに笑われちゃうな

「ちっ……」

「まあ俺は異世界人で魔王は異世界でやらかした事への二つ名みたいなのでね、この世界で魔王になる気はないよ必要にならない限りね」

と笑いながら話すとリムルの琴線に何か触れたようで

「魔王って呼ばれるなんて、お前異世界で何したんだ？」

「いやあく何万の（ノイズ）の軍勢をこう：プチツと？」

殆どがアナザートライドロンで轢殺したりアナザーデイケイドやアナザージオウの技の実験台であるが

「何万の軍勢をプチツと!!」

「あと月（の欠片）を砕いたりとか？」

「あの時のハルト様は見事だった：破片が落下せぬように動いていたのを私は見てましたあの逢魔王国の国土を複製した時など私の目には感動しかありませんでした」

ルナアタックやフロンティア事変の時は大変だったなあ：

「月を破壊に：あの島をもう一つ作るとか：ミリムよりも魔王じゃねえか!!」

「ちよつとリムルさん！辞めてくださいませんか？俺より強い人は沢山いるんですよ!!」

「嘘つけ！」

「本当ですって!!その人（オーマジオウ）の前では俺なんてデコピンで倒されるくらい弱いんですから！」

「お前をデコピンで倒せる奴の方を知りたいわ!!」

「今度会いに行きます？」

「え、会えるの？」

「会えますよ？座標ありますから」

「あく考えとくわ」

「はい……」

流石に周りも驚くのを掴みと捉えてハルトは顎を両手に乗せて笑顔で話す

「その上でどうします？俺は勝つまでやりますよ？相手を滅ぼすまで戦いを楽しむ上位種族と違いますから殺す気でね」

「な、何を言ってる……」

「俺の旅した全ての世界で固有の武術、暗殺、固有生物、先住民の虐殺や支配 e t c が存在しない国なんてありやしませんよ……でなきや何千年も同族同士で終わらない殺し合いなんざするものか」

人間はやる時はやる……まあ中には例外も混じる事もあるのは内緒だけど

「……………わかったよ」

そこからフォビオは魔王カリオンの言葉を指示を話してくれた、何でもオークロードを倒した存在の調査と倒した存在と配下になるように動いてほしい

リムルさんの答えは交渉なら日を改めてるとまあそうだよな、因みに俺も同じ解答である

理由としては

「ジヨウゲン：我が魔王の世界からダイヤモンドを招聘だ、あの犬畜生の国に逢魔の力を見せてやる」

「ファイズフォンXで連絡を取るカゲンを止めて一言

「アホか！平和的な解決を目指すんだよ！」

「ハルト様も煽ったぞ？」

「アレは必要だったからな人間を見下す奴等にはあの位脅してやらないと話が聞かないし：：それと未来の俺の手を借りるのは絶対ダメな」

「かしこまりましたハルト様」

周りの奴等が俺に対して過保護すぎるのだ！と頭を抱えた、その後のミリムの話だとあのオークロード誕生は何人かの魔王が傀儡の魔王を作ると言う計画だった事が判明した

「そうか：：念の為ハルトも気をつけろよ」

「はい、リムルさん達も用心を必要なら俺達側から何名か派遣しますが：：」

「大丈夫だよ本当に危なくなったら頼るから」

「わかりました、俺達も同じように頼みますね」

「ああ任せろ」

そうして暫くはミリム旋風に困ってるリムルさんに差し入れを持って行ったりと
している

漸く逢魔王国の運営も軌道に乗り始め一息だ

「ふう今日の仕事も終わったし少し外に出てみようかな」

身軽な衣装に着替えて外に出たのである

『テレポート』

王都

「へえ思ってたより賑わってるなあ」

ハイオークの皆さんが建築してくれた建物には沢山の商店が並び、また露店でも沢山
賑わいを見せている

「空島なのに…お」

ドワルゴンやテンペスト、また色々な種族の人達が楽しく過ごしているようで安心し
たよ

「すみません一本下さい」

「はいよ」

串焼きを買い食べ歩く、素顔で歩いているがバレないものだなあ

「美味しいなあ」

久しぶりの1人でぶらり旅と楽しむのも悪くない

「しつかし宿泊施設や飲食店、歓楽街もあるけどテンペストみたいに温泉とかあれば…

あ、銭湯とかなら導入出来そうだな」

ふらりとよつた茶屋でお茶を飲みながら街並みを見ていると

「よ、兄ちゃん町は初めてかい？」

気前の良い店員さんにハルトも笑顔で

「はい、噂に聞いてた浮島でしたが思ってたより賑わってて驚きましたよ」

よかったバレてないと思ひ答えると

「そうだろ前までは治安は悪かったんだが新しい司法の人になってから犯罪が無くなったと思うくらいに減ったんだよ」

「へえ」

本当にあの2人は何してんだ？と聞きたいなと思つてると

「あ、ハル「あー！」むぐっ！」

現れたヴィオレの口を手で塞いで止める

「俺、お忍び、わかる？」

「んー！」

「よしヴィオレも食べたいのがあつたら食べなよ」

手を離して一息入れると

「うん！で、何してるの？」

「まあ散歩？」

「ふーん…ならボクと散歩しようよ…」馳走様」

「はいはい、会計つと」

支払いを済ませたハルトはヴィオレを連れてフラフラするのであった

「最初に言っておく、あの状態の俺は王様ではないからな場所呼び方を変えてね」

気分は何処かの旗本と名乗る暴れん坊將軍である…悪徳役人を自らの手で成敗しないとダメかな？俺がやらなくても他の奴がやりそうだけど

「ならハルトって呼ぶね」

「そうして、さて…何故バレた」

「気配でバレバレだよ多分ジョーヌやブランにもバレてる」

「本当この三人娘は有能過ぎて頼りになるよ」

「でしょでしょ、けどー人でふらつくのダメだよ危険だから」

「えー俺の国なのに」

「まだ町の治安を整えるのに時間がかかるから終わったら大丈夫だからそれまで籠って」

「そつかあ……皆のお礼とか折角新しい仲間が来てくれたからその試運転したかったんだけどなあ」

「問題ない！ボクと戦えば尚良いよ！」

「まあ良いか……俺もヴィオレがどのアナザーを得たか興味あるし」

「うん！じゃあ場所変えよ「ちよつと待った！」ちつ」

「抜け駆けは許さんぞヴィオレ」

「ええ私もハルト様、私にもアナザーライダー？の教授を願えないかと」

「そうだな、んじやまずは簡単な力の説『ハルト！』何すかりムルさん？」

『緊急事態だ』

「またフォビオみたいな奴が来たんすか？」

『違うカリユブデイスって魔物の封印が解けて、この街に向かっているんだ』

「カリユブデイス？」

ハルトの頭の中には、あのハルバートを振り回す大食らいの三属性メギドが過ぎった

のだ

あいつ強いんだよなあ普通に…そう言えば俺もカリユブデイスの力使えるのかな？

『使えるぞ』

ん？つて事は…俺も食べた奴の力使えるの？

『まあ劣化コピーくらいにはなるだろう』

やばい脱線した

「デザストを食べた奴が封印されてたのか…厄介だな」

俺の推しキャラを喰らった怪人め許すまじ、だがその後の剣斬との一騎打ちは俺のセイバーベストバウトなので…複雑な気持ちだ

『デザスト？』

「此方の話です、わかりました逢魔王国の王としてテンペストの安全協定に従い軍を出しますー！」

『本当か！』

「はい…よしやるぞ！デザストの弔い合戦だあ！」

あの怪人はカッコいい仲間になりたいが敵なら仕方ない

「ハル……凄い勘違いしてる気がする」

「ハル？我が君に対して不敬ではないか」

「そう呼んで良いって……あのねボクは特別らしいよ」

「んな！」「あらあら……そうとなれば」

「ここでは違う意味で争いが起ころうとしていた

議事堂にはハルト達の幹部達が一同に介していた……因みに逢魔王国建国に伴い色々な種族の者も文官、武官とくわして働いている能力主義を採用している為か腕が立つ者が多くて助かるよ

「今回は逢魔王国建国初の実戦……テンペストとの共闘だから此処は臨時の基地や医療機関となる各々準備を急いでくる……それと皆遠慮なく意見を出してくれ

「はっ！」

「まずはこっちの兵力はどうだろうか？ウオズ」

「はっ！すぐに動ける戦力は、ハイオークの志願兵300にゴブリンやコボルトなどの混成部隊200、それとヴィオレ、ジョーヌ、ブラン殿の傘下にいる悪魔700ですね」

「総勢1200人と此処の面々か、パヴァリアの人達はどっちかと言うとフロンティア

の維持や解析の技術者だからなあ戦力には出来ないしそもそもアテにしてない」

「カリユブデイスは空を駆ける大妖と言われる存在です、浮遊したこの国ではカリユブデイスの良的になる可能性がありますが島の高度を下げるべきかと」

この地にいるハイオークの代表の意見にハルトは頷き

「分かった直ぐに高度を下げよう…ブラン、カリユブデイス討伐に割かれる戦力は？」

「400あれば良いかと」

「少なくともいいか？」

「初の防衛戦でありますしテンペストやドワルゴンの兵力もあります…それに街の防衛や避難誘導、護衛など考えれば妥当かと」

「うむ…わかった編成は任せた」

「畏ましたわ、ハルト様」

「よし…皆、初陣で色々緊張もあるだろうけど無理せずにな生き残る事に最善を尽くせ
！」

「「はっ!!」」

その後、テンペストとも連携を取る事で防衛線を引いたのだが

「デカっ！」

ハルトが見たのは巨大なエイのような龍のような魔物である聞けば森の守護をしていた暴風竜ヴェルドラの魔素溜まりから生まれた魔物らしい、かつて勇者が封印していたらしいのだが

「あれ封印した勇者って何者だよ」

特撮見ててよく思うのだがラスボスやら怪人やらよく封印出来るよな、モスラ、バラゴン、キングギドラを封印した大和朝廷だったり初期四形態でダグバ達全員を封印した初代クウガだったりだ

「だよな…俺もそう思う」

「こういうのを見るとやっぱり異世界なんだなあって思いますよね」

「だな……さてアレが」

その周りには浮遊した複数の鯨が護衛のように待機している、メガロドンという魔物らしい

「メガロドン…ファイニスとアナザー1号よりもデカイのか」

「ですね僕の方では抑え込むのがやつとかと」

「んじゃファイニスが足止めてウオズ達の必殺技でお願い倒せる？」

「その大任、是非！」

「愚問ですね、私の新たな力をお見せしましょう！」

「任せてよ魔王ちゃん」

「お任せを」

「期待してるぜ無理すんなよ」

「我が魔王には言われたくありませんね」

「だね」「うむ」「はい」

「そんなに信用ないか俺は！」

「ハルト、私たちはどうする？」

「千冬達は高火力技で皆の援護を頼む、束はデータ取って弱点分析」

「はいはい！束さんにお任せあれ！」

「錫音は「私は相性の関係的に今回は回復役だね」頼んだ」

「我が君、私達はどうする！」

「ジョーヌ達はメガロドンを1匹ずつ頼む、普段と違うんだ好きに暴れてよし！」

「わかった！」「うん！」「お任せを」

「あ、それと1匹で良いから丸焼きにしないで倒すとか出来る？」

「可能ですか？何故でしょう」

「ん？捌いて打ち上げ宴会のメインディッシュにするからだけど？刺身とか煮付け出来るみたいだし」

真顔で言った言葉が何かの琴線に触れたのか三人娘は大笑いした

「「あははははははははは！」」

「え？変なこと言った俺？」

「言いましたよ我が魔王」

「言った？……異世界怖いなあ」

「いや常識的にです」

「ははははははあ……ふう、失礼した普通ならば畏怖すべき魔物を捌いて食べようなどと言うとは……流石は我が君だな」

「だね、普通なら食べようって考えないよ」

「何故食べられると思ったのですか？」

「うん、俺のエクストラスキルに料理人つてのがあって……そのスキルで食べれる食べられないが分かるんだ、あと美味しい調理法がわかるんだよね」

来て暫く意味わからんと放置していたスキルだがこうしてみると実用性ある能力で感謝する

「因みにカリュブデイス食べれる？」

「いやあアレは食べれないってさ、思念体の一種だから無理って」

「成る程…そうなると依代となるものがありますね」

「そうみたいなんだけど見つからないよ…だから皆、無理せずに倒してね食べるとかは別の話だから」

そして始まったカリユブデイス戦は先ずはメガロドンを分散し各個撃破となった

リムルさんと俺達とで分散した

「……………」

「ハルト殿、仲間に任せて構えておくのも大将の仕事だ」

「ははは、流石ベニマルさんバレてましたか」

「顔に出てましたよ心配なんですな仲間が」

「ええ前までは俺も前線に出て暴れる側でしたから誰かに任せて自分だけが後ろにいるとか初めてで」

「心配しなくても大丈夫でしょう、俺から見ても彼等は強いですから」

「そう言つて貰えると嬉しいです、頑張れよ皆」

「行きますよー！」

『1号』

アナザー1号に変身したファイニスは、その巨体で突進するメガロドンを受け止めて動きを抑えた

「くうう……い、今です！」

『ゾンジス（ザモナス） TIME BREAK』

「はああああああ!!」

2人のライダーキックはメガロドンの頭部を捉えて頭部を凹ませる事に成功するが、生命力が強いのか起き上がって反撃に転じようとした

「ウオズちゃん！」

「頼んだ」

「ええ……さて行きますか新たな力を」

ウオズが取り出したのは大型のウオツチだ、トーマのアナザーリバイブとも違うウオツチを回転させてドライバーに装填すると

『ギンガ……ファイナリー』

ボロボロのマントに崩壊したような星系を体に刻んだアナザーライダーが現れたのであった

「祝え！宇宙最強アナザーファイナリー……緊急時故に短縮版である」

「良いから早く攻撃してくださいウオズ先輩!!」

「任せたまえファイニス！」

『ギンガ……エクスブロージョン!』

「たあああああ!はあ!」

アナザーファイナリーのライダーキックは的確にメガロドンを捉え、追撃の小型隕石数発がメガロドンに直撃しメガロドンは爆散したのであった

「見ましたかこれが宇宙の力ですよ」

「って爆砕させてどうすんのさウオズちゃん!」

「ハルト様は極力身は残せと言ってたぞ!」

「宴会の肴があ!」

「しまった!」

実は余裕だった魔王古参組である

その頃、ヴィオレ達はと言うと

「うーん…やっぱ魔法は威力が落ちるなあ」

「そうだな…忌々しい限りだ」

「まあ倒すだけなら簡単ですがハルト様の手料理を作られるなら素材の無力化が好ましいですわね」

カリユブデイスの能力である魔素を乱すことで魔法の威力を落とす魔力妨害で苦戦していた、元来悪魔は魔法攻撃を得意とする当然ヴィオレ達も持ち前の魔力を生かした広範囲高威力の攻撃を得意とするのだ

「じゃあさ競争しない？誰が一番早く、綺麗な状態でメガロドンを倒せるか」

最早ヴィオレ達に取っては勝つことは当たり前で倒し方に拘りを持つてくるくらいだ
「良いだろう、丁度我が君から賜りし力を試したかった所だ」

「そうですねハルト様にも見て頂きましょうか」

と3人が取り出したのはアナザーウォッチであった

「ん？なああの3人の持つてるのって」

「俺と同じアナザーウォッチですね…けど誰もいなかった筈だけだな」

双眼鏡で見ながら首を傾げていたハルトであった

—————

「えいつ」「行くぞ」「こうでしたわね」

すると3人の姿が変わり始めた

ヴィオレの周りには機械状のカブトムシが滞空し

ジョーヌの前後には蜘蛛の巣が現れ

ブランの周りにはボロボロのランナーが前後に現れると同時にランナーが閉じ、蜘蛛の巣が包み、カブトムシが真横から突貫した

ヴィオレと似たように軍服であるが体のあちこちが銃弾を受けたように凹み、かつ右半身から左頬にかけてカブトムシが抱きついているような外見をしている

「お〜」

それは最初の悪魔を宿したライダー

『ベイル』

アナザーベイル

「よし、じゃあやろうか」

ジョーヌは蜘蛛の巣が包み終えた姿はまるで鮮血を浴びた蜘蛛と言える姿、しかし何処か有機的な印象を与える破壊の君

「この色は複雑だが、まあ良いか」

恐らく刹那的な部分が彼女と引かれたのだろう その姿は星狩の王

『キルバス』

アナザーキルバス

「さあ始めようか！」

ブランは前後のランナーが装甲となり纏う、顔は蛇と人の混合とも言える姿、まるで進化の途中のような歪さを持つアナザライダーだ、しかしその実は強さと狡猾さを兼ね備えている

「ふふふ…」

進化する災禍

『エボル』

アナザーエボル

「良いですわね…では少し遊んであげましょう」

その頃

「あいええええええええ!!」

ブラン達が変身したアナザーライダーに思わず大声を上げてしまう

「ど、どうした!」

「何でブラン達、あのアナザーライダーに!?!」

『予想外だが大収穫ではないかハルト』

「言う取る場合か!アレ全員ラスボス級のアナザーライダーだよ本気で暴れたら下手したら地図から森が消えるぞ!」

『大丈夫だろう、その時はお前が止めれば良い』

「へ?」

『実は最近、アナザーWの奴がなエクストラスキル 変身者を解析して新しい派生スキルを編み出したのだ』

「検索エンジンの奴、最近出番がなかったと思っただらそんなことしてくれてたのか」

『一言余計だ…それで編み出したスキルは名付けて【王の勅令】だ』

「おおカッコいい名前だな」

『能力は簡単だ貴様が渡したアナザーライダーなら強制的に変身解除、またお前に従っていないアナザーライダーの動きを一時的に止めると言うものだ』

「チートじゃん…それ対アナザーライダー戦だったら有効すぎるよ」

『まあ使い所は見極めろよ』

「了解…お、始まるぜ」

—————

「よいつしよっと」

アナザーベイルとなったヴィオレは試験と言わんばかりに軽く一歩歩いただけでメガロドンの目の前に移動していた

「おおく凄いな」

感心したのも束の間、メガロドンが大口開けてアナザーベイルを食べようとしたのだがアナザーベイルは瞬時に回避しメガロドンの真横に移動するとガラ空きのボディに

「えいー」

可愛らしい声と共にメガロドンの骨や肉があり得ない程の軋む音を立てて吹き飛んだ

「うわあ…手加減難しいなあ…それに手が痛いし、まあ治るけど」

手をぶらぶらさせながら呟くヴィオレ、しかしこれにはアナザーベイル…もとい原型の仮面ライダーベイルのライダーシステム上にある問題なのだ

仮面ライダーベイルの素晴らしい威力のパンチやキックは実は変身者自身にとんでもない負荷をかけておりパンチやキック1発で実は衝撃で骨が折れると言う欠陥を抱えている

それをヴィオレは持ち前の魔法で回復しながら強引に稼働させているのだハルトには出来ない彼女にしか出来ない使い方である

「後でハルトに聞けば分かるか…さてと綺麗に仕留めるんだったら」

アナザーベイルの仮面の下でヴィオレは嗜虐的に笑うと刹那、メガロドンを挟んで逆側に移動していた

「はいおしまい」

変身を解いたヴィオレは無邪気に笑うとメガロドンが吐血しながら地面に落下していった

そう移動の刹那にアナザーベイルの力で心臓を突き絶命させたのであった

「あーあ、終わっちゃったなあ…アレやっちゃおうかな？」

ヴィオレはそう呟くとターゲットをカリユブデイスに向けていたのであった

その頃、ジョーヌはと言うと

「はははは！ 凄いなこのアナザーライダーは私と相性が良いと来たか！」

アナザーキルバスとなり目にも止まらぬ早さでメガロドンを翻弄している

「くらえ！」

返す刀で鼻柱を思い切り殴り飛ばすと綺麗な放物線を描いて飛んでいくのを見た、実際にオリジナルである仮面ライダーキルバスのスペックはビルドドライバー使用時でかなりのハイスペックなのだアナザーライダーに変異すればどうなるかなど語るに及ばず

「おお……では終わりだ」

必殺技を出して終わらせよう、アナザーキルバスは両手から糸を伸ばし頭と尻尾を拘束するとそのままオーバーヘッドキックをガラ空きの胴体に叩き込んだ

「はあ！」

そのまま一直線にメガロドンは森の中に落下アナザーキルバスの一撃は全身の骨を粉々にし動きを止めたのであった

「ま、こんなものだな……瀕死だが生きているこれはら我が君も喜ぶだろう」

そしてブランはと言うと

「何だ終わっていったか」

「ええあなたより早かったようね」

アナザーキルバスと似たような外観、違うとすれば蜘蛛ではなく蛇と言う所だろう

火星を滅ぼし、尚且つ地球を喰らおうとした大蛇は進化を止めずに突き進む破滅の王

アナザーエボル

「どうやったのだ？」

「必殺技で一撃よ樂しむのもそうですがハルト様に喜んで頂くようにメガロドンの魂だけを攻撃しましたの」

アナザーエボルには本家仮面ライダーエボルと同じく防衛システムを無視して本体にダメージを通す機能がある、それをブランは応用してメガロドンの魂だけをピンポイントで攻撃したのだ

「そう言う事かやはり我が君に一度教えて貰うべきだったな」

「ええ私も是非ね」

「でどうする？リムル殿達もメガロドンは始末したようだぞ」

見ればメガロドンは丸焦げになったり神経網を乗っ取り同士討ちしてるなど現場もまあまあ混沌としている

「でしたら本命を頂くとしまししょうか？」

「だな初陣だからな我が君も驚く手柄を立てるか」

「ええ」

「ん、じゃあお先〜」

「なっ！ までヴィオレ！」

「あらあら」

3人も先陣を切っていたシオン、ソウエイ、ランガと合流しカリユブデイスに取り付いたと同時にカリユブデイスが動き始めた油断するなど指示を出して警戒はしているが何をしてくるのやらと思つたのだがカリユブデイスは自らの鱗を剥ぎ取り風の魔法か何かで鱗を生き物のようにして操っていた、その体躯故に量は多く密度も濃い

シオン達を振り落として地上戦で各々が迎撃に転じているが、量が多くて撃ち落とせないでいる。全員が覚悟を決めたように突貫しようとしていたので大将2人が自ら動いた

「まったく、こう言う時こそ俺を頼ってくれよ」

「ですね、ウォッチ達には後で使い方教えてあげるから…そこで見てて」

リムルさんは自前の羽で飛んでいるが俺はエビルダイバーの背に乗り現れた…だつて飛べないよ人間だもの

すると2人を狙って鱗の攻撃が来たが

「喰らい尽くせ…暴食者（グラトニー）!!」

リムルさんの新しいスキル 暴食者により鱗を残らず消滅させた…ド派手だ…こりや負けてられないな

「撃ててええ!!」

その声を合図にハルトは待機させていたマグナギガ、サイドバツシャー バトルモード、オートバシン、そしてアナザータイムマジーンやアナザーデンライナーが現れて一斉に攻撃を開始した、各々の攻撃がカリユブデイスの体にダメージを与えているが巨大故に効きが悪そうだ

「行くぞハルト」

「はい!」

『ジオウ』『サイガ』

アナザージオウに変身してアナザーサイガからフライングアタッカーを借りて飛翔する

リムルさんは雷魔法で攻撃している中、カリユブデイスには超速再生という高い回復能力があると判明したのでベニマルさん達に攻撃して回復の隙を与えぬように指示を出したとなれば

「皆、カリユブデイスを攻撃してどんな方法でも良いから奴の体を削り取ってやれ！」
「「「「おおおお!!」」」」

テンペストと逢魔王国、そしてドワルゴンの援軍も合わせて戦力は十分以上あとは総攻撃でお願い

だったんだけどなあ

何時間経つてもカリユブデイスは倒しきれない、元々魔法攻撃が弱体化する以上は三人娘の本気魔法も効きづらいらいだろうと判断して物理攻撃に徹しているのもあるだろうが

「3割くらいか？」

「アレだけ攻撃して3割か…どうします？一時撤退して仕切り直します？」

「そうだなあ…それもあ「み…」ん？」

「へ？」

2人が目線をカリユブデイスに向けると

「おのれ…：…み…：…みり…：…むめえ！」

「え？カリユブデイスって知性がないんじや」

「ミリム？大賢者解析鑑定」

『解 カリユブデイスの中にある依代から強い怒りの感情を感知しました』

『ハル君！今、カリユブデイスの依代の位置がわかったよ！』

「さっすが東だ、よしそこを攻撃して「待ったハルト」え？」

「今分かったんだが、こいつミリムに用があったみたいなんだ」

「……………ん？俺達じゃなくて？」

「いや気持ちはわかる、俺も同じだ」

と言う訳でミリムに話を通すと依代はこの間のフォビオらしい…そりゃ恨むか

「悪いなミリム、お前の客なのに邪魔して」

「気にするななのだ！」

「取り敢えずフォビオはどうします？」

「なあミリム殺さないでやってくれるか？魔王カリオンの部下なんだろ…できれば助け

てやりたいなって」

「わははは！任せるのだここで学んだ手加減を見せてやるのだ！」

「総員退避!!」

三国の軍隊を下からせてミリムとカリユブデイスのタイマン勝負なのだが、それは強者と弱者が明確に分かれた戦いであつたミリムは鱗攻撃を不思議な力で無効化し、そし

て

「これが手加減と言うものだ!!」

三人娘の比ではない位の一撃でカリユブデイスを倒したのである

「手加減って何だろうなあ」

強者故に手加減のハードルが弱者には高く見えるのか……オーマジオウも俺や若い日のソウゴさん相手に手加減してくれたんだだろうなあ……

「ああ……あーいた!」

リムルさんがフオビオを見つけたまでは良かったが

「マズイな」

「え?」

「このままだとカリユブデイスがすぐに復活する」

「どうするのだ?」

「ここで手術する大賢者、お前は能力の制御に回れ手術は俺がやる」

「時間がネックなら俺が止めましょうか?」

「あのかなあ今、そんな冗談に付き合ってる暇は「ポーズ」……え?」

「どうですか?」

最近アナザークロノスが来てくれたお陰で俺もポーズが使えるようになったのだ……

まあ悪用はしないよう決めてるし、今回は人助けだしと思う

周囲が無音となり周りの風景も停止したとなれば大賢者も解析する

『告 フォビオ含め世界全ての時間が停止しております』

「え……ええええええ!!」

「大丈夫です、こうして俺が触れている間ならリムルさんも停止する事はありませんから」

「どんなことも応用であると頷いていると

「そ、そうか！なら頼むぞ！」

「はい」

そして手術は成功、カリユブデイスの核はリムルさんが取り込み解析鑑定するとの事
「ふう……よし解除してくれ」

「了解、リスタート！」

すると世界は再び動き始めたのであった

「リムルもただけとお前も大概だな」

「いやありムルさん程じゃないですよ、それにこれは皆の力ですから俺の力じゃないんです」

アナザーライダー皆の力であり、俺の力ではない……俺なんか

「ただ料理が得意な普通の青年ですよ」

爽やかに笑ってみるが

「話は後にしてと」

「スルーしないで！」

そう言うとりムルさんは回復薬をフオビオにかけて質問タイムだ。と言っても俺はリムルさんの依頼でカリユブデイスの迎撃をしただけなので別に背後関係は興味がな
い…それよりも今は

「ねーねー、ボクが一番綺麗に仕留めたと思わない？」

「私だな、見てくれ骨だけを砕いたのだヴィオレのように血を出してはなはなぞ」

「それならば私ですね、ご覧下さい血どころか骨もそのままですわ」

「スゲエな皆…本当ありがとう、その前に血抜きや鱗取りだな…ヴィオレのは血抜きして
るから直ぐにでも今日の宴会に…つかウオズはいつの間にギンガの力に目覚めた
のや〜」

ハルトはウオズに目線を向けると

「はっ、それには血も滲むような特訓の日々がありました」

「特訓か凄いなそれは…アナザーファイナリーの力は強大だから気をつけてくれよ」

「はい当然です」

「それと3人にはどんな力があるか後で話しておくね……ん？」

目線を向けるとリムルさんがガタイの良いお兄さんと話している

「アレは」

「魔王カリオンですわね」

「ああ、あのフォビオの……って何しに来たの？」

ハルトが首を傾げていると向こうも俺に気づいたようで

「よお、アンタか浮島の王様ってのは」

「ええ、ハルト……逢魔王国の王だ」

「へえ……オークロードと戦ってデカイ奴か？」

「それは俺の仲間だ、あの戦場では別の奴と戦ってたよ」

「そうかい……まああのデカイ奴を従えてるなら強いんだろうな」

「この世界基準なら弱い方だよ」

「ははは、そんな訳ないだろう……それより悪かったな部下が暴走しちまったようで迷惑かけた」

「え？ いやあ別に俺の所には被害はなかった訳で……むしろ良い機会だったというか」

「そうか礼を言う、この件は貸しにする何かあったら俺を頼ってくれ」

「なら俺達の国と不可侵条約を結べないかな？」

「リムルもだが変わってるな、良いだろう獣王国ユーラザニア、獣王カリオンの名においてお前達には刃は向けないと誓おう」

「ありがとう」

「では後日、お前の所にも使いを送るとしよう、またなりムル、ハルト」

そう言うときカリオンはフォビオを担いで転移していった

「取り敢えずひと段落だな外交は後にして今は…」

「だな」

「宴会だ！」

この夜、テンペストとオーマ合同宴会が催される事となった

すれ違うもの

さてカリユブデイスの脅威が去って暫く経ったある日のこと

「ふう……これで今日の仕事もおしまい……さて帰ってゆっくりしよう」

「は、ハルト様！」

慌ててドアを開けて入ってきたのは新入りだった最近、来客の応対を頼んでいるものだが

「どうしたの？」

「は……はい！実はハルト様の友人なるものがハルト様に会わせると」

「友人……テンペストの人？」

「いえ、それが変わった衣装にハルト様の持つてる時計のようなものを「すぐに応接間に通せ危険だから誰も部屋に入れるな」は、はい！」

おいおいまさか堂々と真正面から来るとは予想外だぞと

慌てて玄関まで向かうとメガネをかけた知的で白い軍服を着た男が立っていた

「やあ魔王久しぶりですね」

「堂々と来るとは思わなかったよネオタイムジャッカーのクジョー」

取り敢えず応接間に通して粗茶を出す、一応は客だ

「ありがとうございます」

「けつ、さつさと飲みやがれ」

と一息で迷いなく飲む姿に

「敵を出したのを一息か…毒とか警戒しないんだ」

「ええ、貴方は食べ物と粗末に扱いませんから例え敵に出すものだとしてもね…良い茶葉ですね何処の銘柄です？」

「ドワルゴンから仕入れたもので出所は知らん俺れ方はヴィオレの部下にいる奴から習った…スゲエ入れる紅茶が美味いんだよ凄すぎてコーヒー派から転向したくらいさで何？今更宣戦布告でもしに来た？」

「まさか、ただ一つ面白い話をね」

何だよと警戒していると

「貴方の大事な錬金術師さんですが世界に宣戦布告しましたよ」

「っ!!………そうかい」

やるとは思っていたが早すぎるだろキャロル

「貴方の留守を見計らったように行動を初めましてね別れて直ぐに廃棄ホムンクルスと自称タイムリーパーの彼を追放したようですね追手を出しましたが無事奏者達に保護されたようですよ」

「やっぱりライダーシステムが現地世界に漏洩したか」

懸念していたが再現出来そうな技術者は向こうにはいないと判断してるが

「ええ…まあバースのシステムは向こうの技術者では再現出来ないので漏れても問題はありませんが」

「当然だな俺とキャロルが作ったライダーシステムだ、原案があるとは言えその辺の猿に模倣出来るかよ」

けど

「その情報を俺に渡して何が狙いだ？」

「貴方に止めて貰いたいんですよ彼女を」

「断る何でお前に命令されなきゃならん」

「私の知る歴史では彼女は立花響達に敗れます、ですが貴方がライダーシステムを提供した事で未来がわからなくなりました」

「そんなんで曇る未来ならたかが知れてるよそれにあの世界では冤罪でテロリスト認定

するような屑の掃き溜めだ助ける義理はない」

「それに良いのですか？ 歴史に従えば彼女は死にますよ？ 愛する人を守りたいとは思いませんか？」

「俺がキャロルを止めに行くだけでも？ 残念だな俺は彼女を応援するだけだよ、何ならあ
の世界の人間に御礼参りするまでであるけど？」

「これを見てそれが言えますか？」

「ん？」

そう言われて出されたのは携帯の録画映像であつた、何だこれ？

『そんな…キャロルどうして！』

映つてるのはエルフナインちゃんとキャロル、ナツキか

『そんな事したらハルトが悲しむぞ！』

説得してるんだなと見ていて分かるが

「一体何の映像」「この後ですよ」「は？」

するとキャロルは頬杖をついて偉そうに

『ハルト？ 誰だそれは？』

「……………は？」

え、ナチュラルに傷つくんですけど

『キャロル？ハルトさんの事を忘れたんですか!？』

『誰のことだ？オレはパパの命題を遂げるだけだ失せる今なら見逃してやる』

それだけ言うとうエルフナイン達はキャロルの元を離れ映像は終わった

「キャロル…何で？」

「私が聞きたいくらいですよ、貴方とキャロル・マールス・デインハイムは仲睦まじい夫婦と歴史に記されているんですから」

「取り敢えずその未来は凄い気になるな」

「なので私も驚いています、貴方のことを忘れるなんてね」

「はあ……キャロルの所に行ってみる」

「感謝しますよ「ただし」はい？」

同時に周囲の温度が下がり野生動物や魔物が本能で危険を感じて警戒した比喩ではなく物理的にある、その原因の男はクジューを絶対零度のような瞳で見

「畏なら潰す…それとお前等がキャロルに何かしてるんなら潰す」

「何を今更、私達が敵など今更でしょう」

「情報提供に免じて今は見逃してやる、だから早く去れ」

「はいはい、では期待してますよ魔王…錬金術師の運命を変えるのか否か高みの見物を

させて頂きます」

と言うなりクジヨーはオーロラカーテンで消えた

「ウオズ」

「はっ」

「少しあつちに帰る……その間の内政はフィーニスに外交はブランに任せる」

「お待ちを我が魔王、帰還は時期尚早ですテンペストやドワルゴン……それにブルムンドやユーラザニアとの会谈が「後にしろ」え？」

「俺にとつてはキャロルに原因を問い詰める方が優先だ」

「っ！我が魔王お待ち下さい!!」

「大丈夫ウオズ……アレが嘘か本当か確かめるだけ……って待てよ……おい何であの世界で裏工作していた筈のお前がキャロルの急変を黙ってた？」

「……………」

「答えろウオズ、今すぐに」

「それは……」

吃るって事は何か知ってやがるな、なら

「命令だ」

「お答え出来ません、例え我が魔王であっても」

「これでも言わないか：何か理由があるなら言ってくれよ」

「我が魔王とキャロル殿の為です」

「その答えで俺が納得すると思ってるのか？」

「してもらう必要があります」

ウオズがアナザーギンガウオッチを取り出したのを見てハルトも臨戦態勢に移行する

「へえ……そう言えば本気でお前と喧嘩した事なかったな」

「そうですね……今しますか？」

「そ「ちよつと待って魔王ちゃん！」ん？」

現れたジョウゲンとカゲンに止められたので舌打ちをしてウオッチを懐に戻す

「ウオズも落ち着けハルト様に武器を向けるとは何事だ!!」

「どうしたのさウオズちゃん、らしくないよ！それに議事堂で暴れるなんてダメだよ魔王ちゃんも!!」

「キャロル殿と我が魔王の為です」

「だからって戦う必要がある!?!」

「それ以外言わないんだよ、俺は答えが知りたいんだ……早く言え、でないと反乱罪に問うぞ」

「つ！ハルト様、ウオズもハルト様を思つての忠言：何卒寛容な処置を！」

カゲンの言葉に頭が冷えて冷静になったハルトは頭を搔きながらバツの悪い顔で「わかつた：悪かつたなウオズ言ひすぎた、カゲンもありがとう諫言感謝する」

「はっ！」

「いえ申し訳ありません、我が魔王の望みに添えられず」

「ただ一つ確認したい：キャロルが俺を忘れてるのは本当か？」

「……………はい」

「そうか…ゴタゴタが終わつたらチフォージュ・シャトーに帰るぞ、そんな時にキャロルを問いたです」

「承知しました」

「これまでの労に転じて罪は問わん、だがな肝に銘じろウオズ」

「はっ！」

「もしキャロルに何かあれば俺はあの世界にいる猿共を塵殺して滅ぼす、お前の進言を取り入れて俺を後悔させるなよ預言者」

その時、ハルトの黒い感情がウオツチに吸い込まれ新しいアナザーウオツチが生まれようとしていたのを彼はまだ知る事はない

「あーダメだな、少し考えれば分かるのに俺の馬鹿…多分未来の俺もああ怒るんだろうなあ」

『そうだな貴様もウオズも馬鹿だ』

「つせえ検索エンジン…：…そだあの人に頼むか」

ハルトはそう呟くとアナザーウオッチを押し現れたオーロラカーテンを超えたのであった

ウオズ達3人は一室に集まるとカゲンが口を開く

「何があった？貴様がハルト様の命令に背くなど余程の事だ」

「そーだよ、それに俺達に魔王ちゃんがあんな怒るなんて滅多にないよ俺達を罪に問うとか正に未来の魔王様だし」

「ええ貴方達まで巻き込んで悪いと思います…ですが」

「何があったのか？」

「聞きます？」

ウオズが聞いたキャラルの真意を聞くと

「それはー」

「不器用だねえ」

「まったくですよ」

翌日ハルトはウオズに真摯に謝罪し和解、一段樂するまでは現状の世界に留まる事を決定した

数十日は問題なく公務も進んでいるのだが

「何かがおかしい」

「そうだよね、ハル君がキャロリンの事を忘れたように仕事するなんておかしいよ」

「私もそう思う彼は良く言えば愛が深い、悪く言えば独占欲の塊だ、そんな彼がキャロルの異変に何もしない筈がない」

食堂の一室で昼食を食べていた千冬、東、錫音の3人は最近の疑問を話し合う、内容はハルトの最近の態度である

自分達と同じ位、愛しているキャロルの異変に何もしないなどおかしいと言うのが彼の意見である。仕事で現実逃避してると言えばそれまでだが同じ男を愛する身として不思議の違和感を感じているのだ

「そう言えば今日は久しぶりのハル君手料理日だ」

「そうだね最近では王様業で忙しかったから久しぶりだ……ん？何だろう……何か足りないような」

「だね……ハル君調子悪いのかな？」

「顔に出さないだけで心配なんだよきつと」

「やはりおかしい……考えろ……私達の知るハルトならどうする………っ!!」

考えながら味噌汁を口に含むとピクリと反応し立ち上がり走り出した

「チーちゃんどうしたの!？」

「ついて来い！」

3人は慌ててハルトのいる部屋に入った

「ハルト!!」

「え?どうしたのさ皆揃って……何かあったの？」

「ああある」

愛する男の偽者が目の前にいる事だ」

「っ！」

千冬の言葉に仰天する二人を見てハルトがヘラヘラと笑う、束も錫音も良く知る笑みだ、よく困った時にするから見覚えがある

「えく酷いなあ偽者とか俺は俺だよ」

「そうか……なら何故味噌汁に出汁を入れていない」

「ん？……ああ！」

「出汁なんて味噌汁に入れてたか？」

「っ！！！！」

その言葉で確定したと言わんばかりの目線がハルト?を射抜いた

「料理に妥協をしないハルトが、そんな初歩的なミスをする訳がない! 貴様は何者だ!」
『カチドキ』

「誰だよお前、ハル君を何処へやった!! 教えないなら新開発したロックシードの的にしてやる!」

『ドラゴンフルーツエナジー』

「事と次第によつてはお前を」

『ドライバーオン…ナウ…』

と3人の圧に怯えたハルト?は

「わー! ちよつと待つて下さい! 分かった分かりましたよ、そうです! 俺は影武者なんです! お願いだから殺さないで!!」

土下座して許しを乞う、偽者と確定したと同時に

「束!」

「はいな! ハル君追跡だね!」

「錫音」

「わかってる彼から情報を吐かせれば良いんだよね？」

「ハルト様ならウオズ殿に謝った直後からキャロル殿に会いに行きました」

「尋問せずにアツサリ吐いたよ！って君は一体何者なのさ何でハルト君にそっくりなの！」

「バレたらそうカミングアウトしろと…あ、そうでしたね私はこう言うものです」

指を鳴らすとハルトだったものは別の姿に変わる、その姿は端的に言えば人型のカメレオン

「お初にお目にかかります、私はカメレオンデッドマン…元デッドマンズという組織で幹部をしまして…今は魔王ハルト様に忠誠を誓う者です」

「それでカメレオンデッドマンとやら何でハルトに入れ替わった？」

「王様業とキャロル殿に真意を問うという二重の問題を解決する為に私を影武者にとハルト様からスカウトされました…本来でしたら仕事完遂後に皆さまへのサプライズを予定が…まさか味噌汁の味でバレるとは」

「それだけ我が魔王の料理スキルが高いという訳ですよ自分を責めないで下さい、カメレオン」

新しくウオズ達が入ってくるとカメレオンデッドマンは感動したような顔で

「ウオズ殿！」

「何気ない一挙手一投足、口調全てが我が魔王とそっくりです…：年単位いた我々でも見抜けない程の擬態、天晴です…：貴方は我が魔王の影武者に相応しい！」

「あ、ありがとうございます！」

「しかし…：見抜けないとは…：我等も従者失格だ」

「てか忘れてたね魔王ちゃん若いからフットワークが軽いんだった…」

「やはりキャロル殿の事は一段楽するまで伏せておくべきだったか」

「誰がこの異変の情報を漏らしたか知りませんが…：我々は我が魔王の援護にあの世界に向かいます…：フィーニスはブラン、ジョーヌ、ヴィオレ殿と一緒に留守居を頼みます」

「はい！」

「千冬殿達は？」

「ハルトの所に行く、あの馬鹿とキャロルには説教が必要だ」

「そうだね寛大な束さんでも怒り心頭だよ!!ウサギは怒ると脚で首を刎ねるんだぞ！」

「うん…：彼は少し頭冷やしてもらう必要があるかな」

「「ふふふ…：ははははははは!!」」

「「……………」」

ウオズ達は互いに震えた体を抱き寄せるほどの恐怖であったというのは言うまでもない

—————

シンフォギア 世界

「へっくしょい！」

『風邪か？』

「知らね……けど背筋が寒いのか震えてるよ」

『だろうな、しかし大丈夫だろうかカメレオンの奴』

「大丈夫でしょ、バレたらカミングアウトしろって言ってるし」

『しかし良かったのか？ 誰にも言わないで飛び出すなど危険だろ？』

「動かないで後悔したくないから、怒られるなら後で潔くだよ」

『そうだな……しかしまさかチフォージユ・シャトーのポータルが閉鎖されてたとは』

「そうだね驚いた……まさかオーロラカーテン経由で行くとは……それに久しぶりだなー人で動くの」

『昔を思い出すか？』

ハルトはアナザーウィザードの魔法で転移したのであった

「あ……まあ良いでしょう、せいぜい絶望して下さいな」

とガリイは空を見上げるのであった

—————

チフォージユ・シャトー

その玉座に君臨する金髪の幼女、キャロルは目を開けた先にいる男を見て一言
「誰だ貴様はどうやって此処がわかった？」

最初に会った時と同じような目をしているな懐かしみと寂しさを感じてしまう

「ここは俺の家でもあるんだよ、そんな事も忘れたのか？」

「知らん、この城はずっとオレのものでオレ以外に住んだ事などない」

「ヘーマジで俺のことまで忘れてるのか……やっぱり」

クジヨーには腹正しいが早めに動けて正解だったかな……お劳しいな

「年齢的にボケたんだなキャロル！」

「……………は？」

「いや皆まで言うな、知ってるよ途方もないほど長い年月を生きてるって事……だからつ
てずっと一緒にいた俺を忘れるまでボケるとか酷いよ！それだったら俺と一緒にいて

くれればボケ対策も一緒に考えたのに……ってのわあああ!!」

最後まで言い切れずハルトは鍊金術の光弾を慌てて回避したのであった

「殺す気か!!」

「当たり前だ!それと誰がボケ老人だ、オレの前で年齢の話題を出すとは命知らずだな
本当にお前は何者で何故オレの事を知っている」

「知ってるよ、ずっと長い年月一緒にいたからなキャロルにとつては瞬きのような短い
一瞬かも知れない……けど一緒に此処で暮らしてたんだ」

「……………」

「キャロルが思い出を燃やして力にするのは知ってる……だからって俺の……俺達との思い
出を全部燃やす程、嫌なものだったの?」

「さあな燃やす前のオレが何を思ってたか等知る由もない事だ」

「なあキャロル「くどいぞ人間」いやそっちも人間だけど?」

「黙れ……覚えてないが過去のよしみで見逃してやる……オレの前から失せろ」

「……ああそうかいそうですかい!!そんなに俺が嫌いになったのか今まで無理に付き合
わせたならゴメンよ!なら最後の思い出だ!」

とハルトは迷わずガンガン前に進み彼女の前に立つとキャロルの唇を強引に奪った

「んぐ!!……お、お前な!!」

「忘れたいなら俺の思い出なんて全部焼き捨てる！じゃあなキャロル……好きだよずっと」

オーロラカーテンで転移して消えたのを見ると

「……………ハルトすまない」

その頬に涙を流す錬金術師がいた

此処はシンフォギア世界のハルト宅、最初の拠点にしていた場所だ……時折掃除で戻る事もあるのだが、今は

「はあ……フラれた……」

『まあそんな事もあるさ』

「気づかなかったよ、そんなに嫌われてたとか」

『まあ行く世界で現地妻囲えばそりゃ嫌われるナ』

「……………」

それがダメ押しとなったのかハルトの目に涙が浮かぶと

『はあ……アナザーW』

『あ、ヤベ』

「う……うわあああああ！」

『あーあ、ハルトを泣かせた』

『先生！アナザーW君がハルトを泣かせました！』

『ちよつ、俺のせいだよ！』

『お前以外に誰がいる』

『けど事実だろ！』

『時と場を選べ、ほら見ろハルトの感情がマイナスに振り切れてるから』

『見てくれ！アナザーハザードが使えるようになったぞ！凄いだろ！最高だろ！天っ才

だろー！』

『見て見て！俺っちアナザージャックリバイスになれるようになったぜ！』

『アナザープリミティブドラゴンになれるがこの本に物語のオチがないのは気に入らん

！』

『暴走フォームのアナザーに覚醒して行ってるな』

『何てこった!!……つーかキャロルの奴、本当にハルトのこと忘れてたか？ポケ老人の

下りとか覚えてるような振る舞いだったが』

『さあな……しかし』

『ああ』

嗚咽を漏らして泣くなど長い付き合いのアナザーライダーでも見たことない光景であつた別世界に幽閉されたとか、そんなハード展開でも泣く事なかつたのに

『泣けハルト、失恋や挫折は心の骨折だ！次は遅しくなる！』

『いやアナザーフォーゼ、これ以上心やわ骨折したらハルトの心は折れて戻らんど』

その後、ハルトは泣き疲れて寝たのであつた

—————

その頃 チフォージュ・シャトーでは、ハルトの光景を見ている者がいた

「良いんですかマスター？ハルトさん大号泣じゃないですか？あはははは！カッコ悪
！」

「派手に泣いてるな」

「珍しい光景ダゾ！」

「構わん……構わないんだコレしかないんだ」

「マスターがナツキさんが言った未来を避ける為にハルトさんを巻き込みたくないからって、知らぬ存ぜぬの演技なんてしなけりや良かったんですよ……じゃなきやハルトさんが悲しむ事もなかつたのに……まあ失恋して可哀想なハルトさん……あはははは！現地妻にでも慰めて貰いなさいな!!」

「「やはり性根が腐っている（ゾ）」」

「元々、奴はただの協力者：踏み込みすぎた関係だったただけだ」

「踏み込みすぎな気もしますけどねえ〜」

「分かっている：それで計画はどうなっている」

「順調ですよ、まあただ」

「分かっている、オレ自身が呪いの旋律を受けなければならない事はな」

—————

翌朝、失意のどん底に落ちたまま王国に帰還したハルトを見るなり皆は安堵と同時に
「我が魔王、アレ程行かないでと進言しましたのに!!」

「ごめんな影武者立てて、今度からはキチンと話しを聞くよ我儘に付き合わせていつも
悪いなウオズ」

そう謝るなりフラフラの足取りで自室に戻ろうとしているハルトに思わず

「…………へ？」

「ね、ねえ魔王ちゃん何かあったの？」

「ん〜何、キャロルにフラれたただけだよ」

「だけとは思えないダメ〜ジだ」

「まあそうだね人生初の失恋だから心の置き方がわからなくてさ…………はは…………うわあああ

あー！」

泣き崩れて倒れるハルトにフィーニスは心配そうに声をかけるが

「あ、あの魔王様…その…」

「ご…ごめんな皆、後で千冬達にも謝りに行くって伝えてくれる？それとカメレオンは何処かな？お礼言わないとね…あ、仕事しないと溜まってるだろうし」

執務室に足先を向けたハルトを見送ると

「何があつてこうなったの!?魔王ちゃんのメンタルボロボロで情緒不安定じゃん!!俺達の知ってる魔王様なら泣かないよー」

「この本にも書いてません…恐らく完全に我等と知る歴史から分岐している可能性があるあります」

「だからアレ程、ハルト様にキャロル殿の真意を示してあげると」

「そんな事言つてないよねカゲンちゃん？」

「すまん」

「ですけど本当にキャロルさん…」

「彼女の決断なら我が魔王も肯定しますが…ただ」

「すまないなウオズ呼び出して」

「いえ、それよりどうされましたか？」

「オレはハルトと距離を置く……いや関係を精算する」

「……その真意は？我が魔王が貴女の事を深く愛しているのはよくご存知の筈です」

「だからこそだ、オレが死ぬ光景を見たハルトが悲しみのままアナザーオーマジオウになる未来を実現させたくない……その先にある殺し合いなど論外だ……オレはあの馬鹿にいつも笑って欲しいだけだ」

「それには貴女がいなければ「だろうな」でしたら何故！」

「やはりオレは命題がどちらかわからない、だから過去の行いに筋を通す事にした」

「……………」

「これはハルトには話すなよ、バレたら面倒だ」

「キャロル殿……それは我が魔王は望みませんご存知でしょう？」

「ああ寂しがり屋だからな、だが大丈夫だろう千冬達がいる」

「そういう話では……っ！」

キャロルが頭を下げた光景を見てウオズは何も言えなくなつた

「わかつている……だがコレしか思いつかないんだ頼むハルトには黙っててくれ」

「何と言いますか…何で夫婦揃って変な所が似るのですかね？」

「だよね」

「今回は悪手だな」

「はい、反省が多いですね我々も」

「……………」

「フイーニスどうされました？」

「いえ…その…何というかクジヨーが考えそうな手だなあつて」

「「え？」」

「あ、いえ何となくですクジヨーが取りそうな作戦に似てるなあつて思っただけで、ほら

一応は元幹部ですから僕も」

「そう言えばウオズちゃんの話す前から魔王ちゃんつて」

「キャロル殿の異変を知っていたな」

「誰から聞いたか疑問でしたが…至急あの日議事堂にいた物を調べて下さい！」

「は、はい!!」

この日から色々と動き始めたのは言うまでもない

並行世界戦争、その災厄の未来は一步ずつ音を立てて近づいているのだ

少しでも…

何も言わずに出て行った事を千冬達に謝罪したハルト今 罰を受けている具体的に
は

「ご、ごめんなさい…」

ロープで縛られ、糞虫のように木に吊るされていた

「独断専行の罰だ甘んじて受けろ」

「そうだよ！心配したんだからね!!流石の東さんも今回は怒ってるよ…今ハルトの首を
折る練習してるんだから！」

シャドーボクシングをしている東

「束待ってくれ、その前に私の魔法で火破りにしたいかな…そうだ…ある魔法に必要な
骨の彫刻があったね、成人男性の頭蓋骨が欲しいんだよねえ」

指輪を恍惚な顔をしてみる錫音を見て思わずハルトは涙になり
「俺に出来る範囲でお願い聞くので命だけは勘弁してください!!」

「言ったな」

「はい!!喜んで!!」

「聞いたよハルト、ね束?」

「そうだね!束さんの耳と脳細胞がキチンと記憶したよお!」

「……あれ?どの道、俺死んだ?」

「いやあこれは魔王ちゃんが悪いよ」

「ああ」「反論の余地ないですよね」

「これが後の世に言う、魔王への仕置きですか…我が魔王良く耐えましたね本当」

そして制裁を終えたハルトは無事に業務に復帰、周りの手助けを受けながらだが仕事をこなしつつあったが

「うーん……この辺の開発はもうちょい後だな」

街の開発計画の進行を確認したハルトは書類と睨めっこしていると

「ん〜」

「どうされましたかハルト様」

俺の隣に控えてくれたカメレオンデッドマンが尋ねる、この間の影武者の功績と擬態能力を高く評価され逢魔王国の諜報部門に任命した管轄としては三人娘の部下となる

が重要ポストの抜擢に異を唱える幹部はいなかった。因みに本当の顔は嫌いという事で今はリバイスの若林長官の顔を借りているとの事

「いや、最近の都市開発速度が早くてな…そう言えばこれはお前が促進してくれたんだよな」

以外にも事務仕事が得意なカメレオンデッドマンの手腕に関心しかない

「ええ数は正義、それを集める為ならば今の投資など瑣末ですから」

「後の大きな収益に繋がるか…流石の視点だカメレオンデッドマン…部長と呼ばせて貰うけど良いか？」

「勿論ですともハルト様」

予想外の所で良い人材が仲間になってくれと感謝するしかないな

「じゃあ都市開発はこのまま進めてくれ…それと人が多いつて事は乱破の類もいるだろうから引き続き警戒も頼むぞ諜報部長」

「お任せを…ではヴィオレ殿達と打ち合わせですので」

「おう気をつけてな」

部長が退室したのを確認したハルトは、ふと疑問に思ったことがある

「面白いやあ俺、ナチュラルに怪人呼べるようになったなあ…」

前まで怪人の力を使える事が出来て嬉しかったが召喚出来る事を知ったのは最近の

事だが

「頼りになる……それなのに怪人っただけで嫌われて差別されて……それって理不尽なんだな彼等だっけ生きてるんだから」

『どうしたよ詩的だなオイ』

「そうかな？」「ハルト様」入れ」

「はっ！失礼します！ハルト様、至急リムル様がお会いしたい事があると」

「リムルさんから？何だろう？」

珍しいなあと思いいハルトはテンペストに向かうのであった

テンペスト

「リムルさん、お久しぶりです」

「ああよく来てくれたな」

「ははは、勿論ですよ友人の頼みを断る訳がないでしょう」

「そう言ってもらえて助かるよ」

そして議事堂に向かう途中に立ち話で内容を確認する

「へえ……ミリムさんが」

「他の魔王に手を出さなっけ言うっけ」

「何だろー騙されそうだな」

「俺達も思ったよ…なあハルト」

「何です？」

「ちゃんと寝てるか？クマが凄いで」

指摘され鏡を見ると凄いクマが出来ていた、そーいやあ最近眠れてないなあ…寝るとキャロルの事ばかり出るからなあ…

「え？いやあ最近仕事が楽しくて楽しくて…あはははは！」

「いや寝ろ！変なスイツチが入る前に!!あのゲルドでも無理せずに寝てるぞ!!」

「大丈夫ですよーお酒飲んで寝ますから」

「寝酒は体に毒だよ…」

「あははく知ってますかりムルさん、人間の体って簡単には壊れないですよー」

「余計に怖いわ!!本当に養生しろ！」

「ポチツと」

『ジオウⅡ』

するとハルトの血色は良くなっていき

「俺、復活！」

「なんつーか便利な能力だよなあ、それ」

「体しか治せませんがね…心は治せませんから」

「どうした本当に」

「何でもありません、それでまさか呼んだのは俺にミリムさんが去った事を伝えに来ただけではないですよね？」

「ああ実はな」

議事堂に入って聞いた言葉に驚いた

「え？イングラシアに？」

確か人間の都市だよな何しに行くんだろ？

「良いんですか？テンペストの総統が単独で人間の国に行くなんて」

「我が魔王？」

「悪かったってウオズ」

この男、つい先日まで仲間黙って影武者を立て異世界に一人行っていた口で言うなとはウオズの口から言えなかった

「ああシズさん…俺の恩人の心残りがあってな、それを果たしてあげたいんだ」

「そうですね心残りは果たすのが筋ですよ…俺も行きたいなあ…」チラリ

「ん？一緒に行くか？」

「我が魔王？」

「が今は機でないな！」

「いや何でもない……んで俺はありムルさん不在時のテンペスト防衛協力と言った所ですかな？」

「頼めるか？」

「ええテンペストの方にはお世話になってますからね、うちの兵士を好きに使って下さい」

「いいのか？そっちも国防で軍備がいるんじゃ」

「大丈夫ですよ、実は特訓の成果で異世界からライダー怪人を呼び事に成功しましてね」「っ！……それ大丈夫なのか？世界の敵みたいな奴だろ」

「ははは！リムルさん、それを言ったら俺もですよアナザーライダーは世界の敵だったんですから、それに反応的な子には少し従順になるよう教育するので大丈夫ですよ人間は餌やゲーム的ではないってね」

最近、入ってきた偉そうなお洒落コウモリ野郎には軽くだが地獄を見てもらった、ダグバの破片で強くなった気にいるんじゃないと身の程を教えた断じてキャロルに振られた悲しみを拳にぶつけたかったからではないと言っておく、そう断じて違うのだ！！

「成る程な、そりゃテンペストの協力も即答出来るわけだ」

「それだけじゃないですよリムルさんだから協力するんです、それに俺がやりたい事ですから」

「つかライダー怪人が往来歩いてたら土さん達危ない…この思考に行き着いたと同時にハルトは

「取り敢えずあの人たちには俺から言っておこう…そうだよキバの世界ではファンガイアと人間は共存共栄出来てたじゃん、アレこそが俺の目指す世界なんだよ…：うん…」

「あ、ありがとなハルト助かるよ」

「いやいやそんな事ありません…あの…良ければテンペストで一番綺麗な場所をお借り出来ませんか?」

「ん?別にいいけど何に使うんだ?」

「いや最近ですなぁ彼女達を怒らせたので、そのお詫びをと思つて」

「怒らせたつて千冬さん達をか?お前何したんだよ」

「お願いしますリムルさん!何も言わずに貸してください!料金は払います!でないとな俺の首が折れるんです!!物理的に!!こう…コキつて!」

まさか束が首を折る練習をしているなんて思わなかったんだよ!!試しに見せてと言つたらお試し用のマネキンの首が綺麗にへし折れたのだ、アレが未来の自分になるのではと頭を抱えていると

「いや本当に何があった!!」

「俺は草加さんみたいに覚悟決めてないんですよ!!」

「決めろよ覚悟、ハーレムを形成した男ならな」

「いや俺に死ねと!?!つかリムルさんもハーレム云々は人のこと言えませんよね!!」

「何だと!俺がいつ形成したんだ!」

「シオンさんとシユナさんを前にさつきと同じセリフ言えますか!?!」

「何で二人の名前が出てくるんだよ!」

「嘘でしょ!!気づいてないの!?!」

と言い合っていた姿は日常的なので皆微笑ましく見ていた、一部の面々は赤面していたがな

数日後にリムルさんがイングラシアに向かったのでハルトは話し相手を失ったが約束通り協力の兵士達を送ったのであった:まあ平和だろうから観光や技術を学べと言っているので問題ないだろう:ただ千冬がノリノリでハクロウさんの所に行ったのを俺は見逃さなかったのである

—————

最近ウオズ達が慌ただしく動いているが何かあるのだろうか?まあ俺に報告しない辺り大した用事ではないのだろうな、聞いても後でと言われるし

最近ブルムンド王国やユーラザニアと正式な国交樹立に伴い色々大変である。内政や外交の人手も足りないので色んな奴を呼んでみたのだが

「内政は別として俺の身内で外交出来そうな奴が少なすぎる」

元々組織運営を得意としていた面々をスカウトすれば内政面は楽になるのだが外交はそうもいかない

外交とは国の窓口、その大使となれば王の言葉に等しいのだ生半可なものには任せられない：故に人選も悩ましい所、怪人達の場合は一部例外を望み他種族は滅ぼすのがデフォルトなので平和的解決など夢のまた夢だ

となると頼れる人材は限られる最初に浮かんだのがウォズ、ジョウゲン、カゲン、フィーニスの古参組だが

イメージ

『我が魔王のご意向に逆らうのですか？』

『えゝそんな話聞けないなあゝ』

『知らんやれ』

『へえゝでは戦争ですぬ！』

「れ、連中に交渉は無理だなあ…と言うよりライダー組は外交を任せられないんだけど」

ではジョーヌやヴィオレならどうだろうも思ったが無理だ、送った国で核撃魔法の雨が降る

ネオタイムジャッカーの脅威がある以上はアナザー、仮面ライダー組は国内に残って欲しいのだが背に腹は変えられないな

「やっぱりブラン頼める?」

「はいお任せ下さい」

—————
そんな感じで日は進み

「賑やかだなあ」

篠ノ之製作所の大工ヒューマギア、最強匠親方もハイオークの面々に混ざってるし

弁護士ビングゴはヴィオレやジョーヌ相手に犯罪者の量刑を軽くするよう動いたり無罪を勝ち取ったりしてる

腹筋崩壊太郎も街で人々を笑顔にしているときた、まるで

「ヒューマギアの実験都市だな」

飛電或斗さんの夢だけど、叶うと嬉しいなあ

「我が魔王」

「わーってるよ、デイベレイクタウンの二の舞はない様にする……後はヒューマギアの皆がシンギュラってくれると嬉しいなあ」

「いつかは彼等は彼等ヒューマギアとしてキチンと種族として認知できるようにしたい……誰もが差別や偏見なく居られる国の実現のため各種族や仲間達の意識改革は当座の課題だ」

「その為にも頑張らないとな！」

「はい……その……あの……我が魔王ですよ、カメレオン殿ではなく……」

「そうだよ！何なら手料理作ってやろうか！そうだな、満漢全席だ！」

「それでこそ我が魔王です！今日は宴会と行きましょう！」

「俺に何人前作らせる気だあ！」

「取り敢えず前回の影武者を上手くやりすぎだ部長！！と笑うもウオズがない所では

「もつともつと強くならないと……仲間も沢山集めて大きくしないと……よし！」

『ハルト？』

「なあ相棒、頼みたい事がある」

そして

「ありがとうアナザーセイバー」

『良いつて、けど中身は空だぞ?』

ハルトの手には大型手帳のような白い本がある題名はないが

「大丈夫、ネフィリムの捕食能力を入力して…そうだこの間戦ったあの化け物のデータも書き記しておこう」

そして本…アルターライドブックに物語を記し始める

また、ある世界では

『ねえ君、ダグバの整理で消されたくない?』

『何だお前? リントが何故、俺達の言葉話せる? というより何故ダグバの名を?』

『未来を教えてやるよ、見込まなしと判断したダグバに粛清されて消える全員だ…お前が持つお守りの力を取り込んでみてもだ』

『何だと…』

『それが嫌なら俺と来い、新しい世界でダグバに怯えずにリントを狩れるけど? まあ一

定場所のリントは狩るのはダメだけど』

『ほお…まあ良いだろう、俺は使い走りのままじゃ終われないからな』

『交渉成立、さて…他に賛同者は？』

『『賛成だー！』』』

『良いだろう俺について来い！』

「つてな訳で王国に住む予定のズ、ベ、又集団のグロンギ達だ皆仲良くしてくれ」

「ちよつとお待ちを!? 何殺人ゲームに興じる危険種族を受け入れてるんですか!」

「大丈夫だよ、俺の国と友好関係にいるリントは襲わないって新しい掟にしてみましたから」

「え……ええ……」

「又集団にはウチの国の技術部で働いてもらいたい、ベ集団は警邏を頼む、ズ集団は俺の直属部隊として働いてくれ!」

『『うおおお!!! ハルト様万歳!!』』』

「何で協調性のない戦闘民族の心を掴めてるのですか我が魔王!」

「それは…俺が王様だから?」

「答えになつてませんよ」

「まあダグバに肅清されかけたのを助けたんだから感謝はされるだろ」

「ああ……なるほど」

「それとユウスケさんには一声掛けておこう絶対に……この町でクウガ対グロンギは見た
い気もするけどダメだな」

「因みにメヤゴは？」

「声は掛けたけど連中はゲゲルが優先みたいだね今はダグバの肅清対象外だからかな
？」

「ガドル閣下は仲間に欲しいなあと思つているのは内緒だけど」

「ラ集団も仲間に欲しいなあ〜」

「とほんわかしているハルトであるが」

「いやいや、そんなノリで仲間増やされても……」

「そう言えば……この力を使えば心変わり前の木場さんやチエイスにも会えるんじゃない
やいや」

「1ファンとしては会えたら嬉しいが身勝手に巻き込むのは自分が許せない……しかし
「サインをもらいに行くくらいは「ダメですよ」ちつ……さて……やるか」

グロンギの面々を紹介した時、ユウスケさんや土さん達は身構えたが彼等はボスに弱

いからという理由で殺されかけたので保護したのだから攻撃しないでとお願いする
こととなる

開戦間際と動乱前

どうも先日色んな事があつたハルトです。今日の話は

「まったくこれだから辺境の田舎者は……」

目の前の命知らずを相手している所から始めようか

事の発端はリムルさんがイングラシアに向かつてから数日後の事

執務室

「ファアルムス王国？」

聞いたことあるなああの認知なのだが

「ええ貿易の交易路を使つて利益を上げてる大国ですわ」

ブランの説明に首肯したハルトは彼女達から教わつた記憶を探り思い出す

「あの国ね……けど離れた所にあるんじゃないや……って何でその名前が出てくるの?」

前会つた時にガゼル王が好かんと言つてた国である……根腐れしているのかな?

「はい、その先触れが参りまして使者がくるから丁重に持て成せと」

「何の使者さ」

「聞いた話ですと貿易についてですわね」

「うーん……けどドルゴン、テンペスト、ブルムンド、ユーラザニアの貿易で物流は賄えてる……つか予想外に塩とか売れてるし」

主に輸出しているのは塩やお酒、後は一部異世界の娯楽品だろうか 某キューブだったりパズルなど当たり障りのない範囲で輸出している……そこ！異世界転売とか言わない！

あの世界の経済循環に協力し俺は異世界で売り、それで利益を出すウインウインの關係だ

勿論、逢魔王国の制作の酒類や家具などの調度品も売っていたりするからセーフ！

『けっ、国家ぐるみで転売事業しといて何言つてヤガル……』

ー皆くアナザーWがジープ……いやこの間の失恋ネタで弄ったからアナザートライドロンやサイドバツシャーと鬼ごっこしたいってー

『おいコラ待て！あの時の事は謝つただろう!!つかライダーマシンと鬼ごっことか正気かオイ!』

ーははははさあ、お前の罪を数えろー

『ちよっ！それ俺のセリフ!!おいアナザーデイケイド！辞めさせろ!』

『すまんな相棒の頼みとあれば断れんなあアナザードライブ』

『ああ最近走らせてなかつたからな…丁度よいか』

『俺の味方はいないのかチクシヨウ!!』

その言葉ヨードンだったのかアナザートライドロンやサイドバツシャー、果てにはアナザードレンライナーなどのライダーマシンとアナザードWの鬼ごっこが始まったのであった

アナザードWの仕置きはこんな感じで良いのだが

嬉しい話だとは思うが逢魔王国は世界唯一の移動国家である…まあ見方によれば大型の商船とも見えるか、だからこそ俺としては遠い東にある帝国との貿易を考えているんだけどなあ

「西方の貿易はこれ以上広くする気はないんだよ、教会の人達は面倒くさかつたし」

それは健康して直ぐにきた宣教師さんを思い出してゲンナリする

ルミナス教、この世界に存在する魔物は倒すべき悪と教義にある宗教でテンペストから少し離れた場所に聖地がある、遠方からありがとうと感謝し皆と相談して無礼じやない範囲で物品を持たせて帰らせた…願いは布教させてくれだったんだけど

俺の理想の国は多民族人種の共存共栄が国是である為、魔物や魔人の皆を差別したり内乱の発生する温床になりそうな宗教はごめん被りたい　つーかライダー世界の怪人

呼ぶとかしてるしな

そもそも俺は人間だけの繁栄なんざ望んじやない手を取れるなら沢山の手を取りたい

「それはあの人の夢だからな…沢山の人に届く手って言うのは…」

少しでも届くといいなと笑うと

「けど俺の師匠は神…鎧武教を国教にするのはありでは？皆が誰かの為に手を取り合い変わることが出来る…それが変身…かつ…ねえ仮面ライダー鎧武を聖典にする？」

「ハルト様がお望みでしたら直ぐにでも」

「いや冗談、忘れて…そんな事は師匠は絶対に望まないだろうから」

と話している

『何故ダア、ハルトオ…此処は私い…檀黎斗神教にすべきだあ!!』

アナザーオーズ…お前王じゃなかったっけ？

『そんな事は瑣末だあ…この神の才能にい…不可能はなあーい!』

だろっうな常人にお前を理解するのは難しいよと宥めたハルトは溜息を吐くと

「まあ話を聞くだけ聞くか…取り敢えず幹部連中集めれるだけ集めといて」

「はっ!」

「あと念の為、長官も呼んどいて」

あの人が必要かも知れないから

「え?…ええかしこまりましたわ」

ブランが退室したのを見て

「さあーで、出番だぞお前たち」

『STAG』『SPIDER』『BAT』

「後はアカネタカやルリオオカミ…それと」

『ガルーダ』『ユニコーン』『クラーケン』

『ゴレム』『ケルベロス』

プラモンスターも呼んで諜報員の炙り出しや録画録音もばっちり

「大国の使者が来るとか碌でもない前触れだからな対策はしっかりしておこう…」

用心に越したことはないな

玉座の間

本来はいらないと言ったのだが来客用とウオズ達が言って止まらずに作った部屋だ

…見ただけで贅を尽くした内装には異世界からの職人と現地の職人の技術が見事な融

合を果たしている

その椅子にふてぶてしく座るハルトは頬杖をついて来客を待った

「遅えな…もう着いてるんだよな？」

「ええ、その筈ですが…」

そう話していると

「まったく…おい貴様がこの島の王か冴えない風体だな」

端的に言えば醜い中年太りのハゲたオッサンだ…何というか、こう言う漫画やアニメだと悪い見本みたいな人で

「三下な感じが凄いな」

直ぐに死にそうな感じと思いき笑っていると

「[[[[………]]]]」

皆笑いを堪えるのに必死だが命知らずは顔を赤くして

「さ、三下だと！我は誇り高いファルムス王国の使者であるぞ！」

「おっと失礼した君の態度に合わせただけなんだ、それで要件を言え俺は忙しい」

相手に合わせて態度を変える、王としては良くないかも知れないがこの使者の態度でファルムス王国への興味が失せ時間の無駄となるからさっさと終わらせよう

「まったくこれだから田舎の成り上がり者が」

「さっさと話せ」

「ちつ、まあ良い王の言葉を伝えるぞ」

そこから使者の書状の内容を聞いて眉を顰めた

まあ内容は通商条約締結の提案だが条文が酷い、

国の空を飛ぶのに税金払えだの貿易に余りの滞在費を払えだの逢魔には関税自主権がないだの：しかもそれに加えてファルムスの大使館の者を内部に入れろとかバカだろ、極めつけは

「逢魔王国はファルムスの戦時に必ず国を上げて協力すべし、だ返事はハイだろう？ 貴様のような小国が大国であるファルムスと友誼を結べるのだ安くはないだろう」

何で話を通ると思ってるんだ？ 属国勧告だよな？ そんなの

「下らん、そんな不平等条約の締結など結ぶと思うか？」

「おやおやそんな態度で宜しいのですかな？ 近くファルムス王国軍が西方聖教会の名の元隣国テンペストに侵攻する用意をしております。その時に流れ弾を浴びたくないでしょう？」

ようはテンペストに攻め込む時に便乗して攻めると言うことか：後でベニマルさん達に伝えよう、ファルムス王国軍が攻め込んでくる守りを固めるべしと

「ジュラ・テンペスト連邦国と我等、逢魔王国は隣国で国交と友誼を結んでいる、かの連邦国総統リムル・テンペスト殿とは私的にも友人だ：個人的には刎頸の友と知っている

よそんな彼の国を攻めるといふのならば我等逢魔王国はテンペストの味方としてファ
ルムスと戦う所存だ」

リムルさんに背後は任せたと頼まれたならば全力で答えるまでだ、あの優しい王様か
らは俺もまだまだ学ぶことが多い、それ以前に

「礼節を尽くす連邦と無礼に属国勧告をする王国……どちらの味方になるかなど言うまで
もないだろ？ 猿でもわかることだ」

丁度良い、ファルムスの皆には悪いが家の連中のガス抜きに付き合つて貰おう戦いが
生き甲斐の連中もいるからな

「あ、あんな汚らわしい魔物の群れが国家と名乗るなど恥を知れば良い！」

「はあ……」

ハルトは完全に興味が失せたと言う顔をしていたが使者の視線は周りにいたブラン
や千冬達を下卑た目で見ており

「貴様は小国の蛮族だが調度品や女の趣味は良いようだな……どうだお前達、こんな暗愚
な蛮族よりも大国であるファルムス、それもその大臣の側近である我の妾にしてやつて
も良いぞっ？」

「はあ……」

その一言で今まで堪えていた連中がキレた、と言うより今までよく我慢してたと思う

我が家の暴走列車が発進してしまった

「あ…：ジヨーンヌ、ちよい待…」

「くたばれ!!」

「ぶりゆぎゆわああああ!」

ハルトが静止する前にジヨーンヌの拳が使者の顔を捉えて壁にめり込ませた

「ア…………ふゆ…………」

「黙っていれば我が君が暗愚だと笑わせるな礼儀知らずは何方だ!…この人間風情が!!」

逆鱗に触れたので常人なら発狂するような覇気に当てられガクブルの使者だが、もう遅いな悪魔の逆鱗に触れてしまったのだから

「やっちまったな…：ジヨーンヌ」

「わ、我が君すまない!」

「いや良くやったよありがとうなジヨーンヌ、俺だと殺しかねないからさ」

実際、アナザージオウになりかけたし

「う、うむ…：この位造作でもないさ!」

「しかもよく我慢したじゃないか前までなら核撃魔法を打つてたもんな成長だよ」
殴つたのはダメだけど褒めるところはキチンと褒めないとな成長は嬉しい事だ

「わ、我が君を侮辱するなど許せんだけだ」

「だね、アレだけ言われてボク達も何もしいない訳には行かないよね…よっと」

ヴィオレは使者の頭を鷲掴んで持ち上げるとそのまま投げ飛ばして定位置に戻した
「き、きしやまら！ファルムスの使者である我に手を出してタダで済むとても思っているのか！」

大国の権威を傘に来て偉そうな態度を取る、その権威が最後の砦みたいな感じだけど
「と喚いてますが？どうされます？」

「ただの猿叫だろ？ファルムスの猿は騒がしいなブラン」

「ふふふ…そうですね権威を傘に着るしか芸の無い身の程を知りなさい」

興味ないと断言したハルトは笑みを浮かべたままだがブランはまるで屠殺所の豚を見るように事務的な顔で見下しているのを理解したのか顔面蒼白である

「な、なんだ…と…何言ってる…」

「猿語はわからんが…大国だろうが小国だろうが俺の…俺達の居場所や特別に手を出すなら敵だ例外はなく…こんな品位のない使者を出す段階でファルムスの質や此方を見る目など分かるからな」

我ながら悪い顔をしているのだらうと自嘲するが外国の特使なら人を選べと

「これは引鉄だ、お前が引いたなら末路も受け取れ…治癒はしてやる凄くない本意だ使者を殺すのは本意ではない」

ハルトは取り敢えず回復させた使者を蹴飛ばして馬車に送り返すと

「さっさと帰れやボケ」

「き、きさままら！覚えてろ！！貴様等の蛮行を国王に報告してやるからな！！」

「二度と来るなウオズ、塩撒け塩！！」

「やめましよう我が魔王、塩が勿体無い」

「岩塩投擲用意だ！」

「話を聞きましよう」

「大丈夫、きつとこの岩塩なら幽霊にも物理ダメージ入るから！」

『何！そんな効果があるのか…岩塩怖い！』

『落ち着けアナザーゴースト、岩塩にそんな力がある訳ないだろう』

捨て台詞を吐いて帰っていく使者の馬車を見送った後にブランが不愉快な顔のまま話す

「汚らわしい、本当にアレがハルト様と同じ人間なんですか？礼儀も何も弁えていませんわ」

「前にも話したか忘れたけどさ、あれは猿だって…後さ面白い事を言ってたね覚えて

ろつて」

ハルトは両手を叩く

「無事に生きて帰れたら覚えといてやるよ、この国では何もしないけどジュラの大森林は範囲外だよな？」

夕闇に隠れて現れた影がいたブランが警戒するがハルトは手で静止する

『何のようだ』

その言語はこの世界においてハルトと門矢士、海東大樹しか話せない言葉である

『今逃げ帰った人間と護衛だけど食べて良いぞ出来れば凄惨な感じにして、死体は残し
といて見せしめに使うから』

『いいのか？』

『ああ、ただ確実に恐怖や絶望を教えて殺せ生かして故郷の土を踏ませるなよゴオマ』

『良いぜ、アンタには整理から助けて貰ったからな命令を聞いてやる』

『ありがと、死体の処理はコッチでやっておくから遠慮なく血を吸っても良いぞ…ミイ
ラにしてやれ』

『ふん！あのリントは不味そうだが…仕方がないな』

そう言うのとハルトの影に潜んでいた蝙蝠型のグロンギ　ズ・ゴオマ・グは翼を翻して
飛翔するのを見送ると

「あれは…」

「俺がスカウトした怪人だよ…夜目が効く奴だね」

「お言葉ですが我等の手勢にお任せ頂ければ確実ですわ、あのような怪人になど…」

「ブラン達の仲間は皆優秀だつて知ってるよだからこそ俺達の切り札だ、もし魔力で誰か分かる技術とかあつて犯人が俺達つてバレたら危険でしょ？だから分析出来ない異世界の怪人に頼むんだ…まあ呼んだ以上は彼等のガス抜きもしてあげないとね」

戦闘種族だから平和は退屈だろうし

「流石の慧眼ですわハルト様」

「よしてよ俺はただ臆病なだけ…だから敵は根まで叩かないと落ち着かないんだよ、あ！ゴオマ気をつけていつてらっしやいく…さて…話聞いてたる長官？」

ハルトは笑顔で後ろを向くとカメレオンデッドマンが立っており

「ええ私がああの使者になりきれれば良いのですね」

「頼むな命令は一つ、ファルムス王国を内側から潰せ詳細の指示は念話で伝えるから…後は逐次報告するように」

「はっ！お任せを私は戦闘より元々コチラの方が得意ですので」

「期待してるぞ」

「はっ！」

そう言うとかメレオンデッドマンは使者に変身して歩き出したのであった

「以外と怖いのですね」

「流石にいつもはしないよ…ま、何事にも例外はあるから」

綺麗事だけで世界は回らない、だから現実にしたいたいと言う

「さてさて…戦闘になるなら彼の物語を書くとしますかね…戦力アップは必須だからな」

ハルトは笑顔で、とあるアルターライドブックを持って自室に向かうのであった
タイトルは

【カリユブデイス】

この世界でも強者と呼ばれる渦潮の化け物の名を冠したメギドの物語である。

「祝え、俺の新しい友達達の誕生を…ってウオズじゃないから上手いの祝詞が浮かばないからゴメンね…あ、ベニマルさんに話通しとかないと」

そう思うとハルトはテンペストに転移してベニマルさん達に襲撃者の軍団が来る警備や警戒をするように伝えたのであった

その夜、無礼な使者の一団は暗い森の中でゴオマに襲われ翌朝に残ったのは血を吸われ乾涸びた死体のみであった、その検分された死体を調べたものは新しい魔物の襲撃により帰還途中の事故として処理される

しかし使者本人は奇跡的に助かりファルムス王国に帰還し上記の証言をしたと言う

「逢魔王国は使者の団を礼節持つて接したと故に遊戯を結ぶ事も前向きに検討している」

と、それを聞いたファルムス王国の王は嬉々としてテンペストと逢魔王国に進軍する、しかも両国共に防衛体制を整えてる上で

それがファルムス王国の運命を決めたと知らないで

使者も既に死に、成りすましをされている事を目の前は偽者で本物は既に死体になっっている事も

その真実を知るのは

「ふんふん…」

部屋でカリユブデイスの物語を執筆しているハルト一人である

「歴史は俺達が書き替える少しでも良い方向にね」

無礼者を謀殺してからハルトは逢魔王国の軍事面の整理を行った

本来ならテンペストと合同軍事演習を行いたいが総統であるリムルさんが不在な上である以上はテンペストに声をかける訳にもいかないと思い遠慮する事にした

「森全域に近い範囲をディスクアニマルやカンドロイドで見張ってるから何かしらあればすぐに伝わるな」

一応、コチラもアナザーウオッチでダスタートや眼魔コマンド、戦闘員達の軍を用意はしているこの世界の敵の強さはわからないが物量でごり押すとする

「なあファルムス王国がああ三下使者を派遣する理由って」

『ワザと殺させて大義名分にするつもりだろうな』

「だけど死なずに出国した」

『まあ中身は違うがな…だが』

「別の理由で侵略行為に走るって事？」

『テンペストを攻め込んで此方を挑発するのかもしれない、まあ狙いは分からんが…』

一流石アナザーディケイド、策士目線だなー

『ふん、この程度考えれば分かることだ』

「だな、本当に頼りになるよ」

ハルトは真面目な顔で考えてみる、ファルムスは貿易で潤う大国だ…その国が俺達の国やテンペストを狙う理由を考えると一つの可能性に当たった

「あ…もしかして交易路の為？」

ガゼル王の言葉を思い出す、テンペストや逢魔王国と盟約を結んだのは新しい交易路や貿易の中心になるからだ…つまり

「ファルムス王国からすると自分達の交易路が使われなくなってしまうと国の運営に関わる…だから今のうちに潰すって算段か？」

『筋は通るが確証がないな』

「アナザーW」

『はいよ』

「検索出来るか？テンペストと逢魔の交易路によって受けるファルムスの経済損失について」

『任せろ……うわあ…こりゃ酷いな』

「どのくらい？」

『何年かしたら国が干上がる位だ、元々交易の関税とかで荒稼ぎしてるのに街道の整備とかしてないから周りのウケが良くねえと来た、そこに』

「安全かつ早く動けるテンペストの交易路が出来る」と邪魔つて訳だ……ん？じゃあ何で俺達の国にちよつかいかけて来たんだ？」

商売敵となるテンペストを狙うのは分かるが逢魔とは別に争う理由なんてないだろう？

そう考えていると背後から現れたのは東であった

「それは多分あの世界でISが兵器扱いされてるのと同じだと思うなあ〜」

「どういう事？」

「あのねハル君、フロンティアは言うならば大型の飛行船なんだよ、しかも船で自給自足出来るくらいに」

「そうだな」

「ISもだけど基本的に制空権を持つ方が有利なんだよ、だからね乗っ取れば永久的に戦力や基地として利用出来るんだよ」

「フロンティアを掌握して世界征服でもしましょうてか？バカなのかよ…」

「そこまでは行かないけど国で考えると防衛とかが大変だからじゃないかな？いつでも侵略戦争可能な空中要塞とか悪夢だよね多分」

まあ確かに飛行機概念がない世界である以上、国防の事も考えると常に侵略戦争の危険性があるけど

「ようは逢魔王国を侵略する方にもメリットがある訳だ」

使者の奴、何処が流れ弾が来るかもだよガッツリ領土狙ってるじゃないか……やれやれ仕方ない

「だからって仕掛けるか？」

「仕掛けるよ私とハル君は知ってるでしょ？人間の醜さ強欲さを」

白騎士事件で味わったよな……人の強欲さ浅はかさを、けど

「だね……ありがとう束」

「いやいやそんな事あるかな！」

「いや謙遜しろよ」

同時に束のように純粋な人もいると知っているから捨てたものではないのかな

その夜

「なるほど、それで俺達に別世界に行けと」

「はい、避難してくれると助かります」

俺は土さんをお呼びして話を聞いてもらった近く大きな戦争になるので別世界に移

動して欲しいと

「断る、俺達の旅だ行く先は俺が決める…違うか？」

「そう言うと思いましたが…だけど俺の所為で憧れのヒーロー達に迷惑をかけたくないんです！」

「俺の迷惑はお前が災厄の魔王になる事なんだけどな」

「え？それってどういう…」

「まあ良い…お前もライダーだ、アナザーだけどな同じデイケイド同士これで語るとしよう」

『KAMENRIDE DECADE!』

そう言うのと士さんがネオデイケイドに変身するのを見て

「ですね…では参ります！」

『デイケイド』

ハルトはアナザーデイケイドになりデイケイドと互いに拳をぶつけ合ったのである

テンペスト逢魔動乱

テンペスト、逢魔動乱

結論から言おう、テンペストと逢魔王国はファルムス王国と西方聖教会に襲撃された。対魔法の結界アンチマジックエリアにより魔法の使用が満足に出来なかった上にファルムス王国と西方聖教会の連合軍と異世界人3人投入し街を襲撃そして

テンペスト、逢魔に犠牲者が出るほど甚大な被害となった

首都リムル

「すまないハルト…私がいながら…っ！っ！」

包帯を全身に巻いた千冬が涙ながらに謝る

彼女はテンペストが襲われた日、ハクロウと共に異世界人との侵略行為に立ち向かったが振り返りにあいい重傷を負ってしまったのだ

アンチマジックエリアの影響で錫音は回復薬に束や俺達をメインで体制をとって

たが…向こうの戦力が予想外だった…

「千冬が無事ならそれで良い…それに死んだ奴もアナザージオウIIの力で元に…」

とアナザーウオッチで時間を戻そうとするが戻らない

「な、何で…何で何だよ！死んだ士さんだつて生き返ったじゃないか!!死者蘇生だつてアナザーライダーなら可能なんだそれなのに!!」

何で何で何で何で何で何で!!

動揺するハルトにアナザーWが冷静に話す

『この世界の魔物は死ねば魔素つてもものに帰るんだ時間を戻しても帰るものじゃねえ』

「何だよそれ…ふざけんな！俺達を慕う仲間一人助けられないで何が王だよ!!」

「ハル君…」

「知つてたのに…対策したのに届かないって…」

『それがお前の傲慢さだ、全部を救える等と本気で思っていたのか?』

「ああ思つてたよ、もう二度と無くさない…その為に頑張つたのに!!」

ずっと昔から奪われてばかりだった周りの人がするような当たり前の日常をハルカに奪われ続けて…漸く幸せになれると思つたのに…

『戦争での生き死には当たり前だぞ』

「知つてるよ…ならこれからは俺だけが戦えばいい…それこそ最強の魔王にでもなれ

ば守れるだろ？」

アナザーウオッチに金色の輝きが帯び始めていた時に一人の男がトイカメラでハルトを撮影した

「随分と酷い顔だな、それがお前の結論か？影の魔王」

「っ！土さん？」

声をかけられるとアナザーウオッチの輝きが消えた

「人は一人では生きられない、だから一緒にいて共に戦うんだ…これはお前だけの所為じゃない抱え込むな」

「それでこの醜態ですよ、仲間が傷つくなら俺だけが戦えばいい最強の魔王として」

「違う互いに影響しあうからこそ見える景色がある…お前はアナザーオーマジオウになった常葉ハルトと違う未来を歩める、それなのに全部諦めるのか？」

「っ……」

「もし助かる方法が他にあるなら考えろ、一人だけで無理なら皆で考えろ！一緒に歩んでくれるのが仲間って奴だ」

「土さん……やはり貴方は……」

「何だ忘れたか？俺は通りすがりの仮面ライダーだししっかりと覚えておけ」

「ははっ、忘れる訳ないじゃないですか……ありがとうございます」

深々と頭を下げたハルトに士は

「礼を言われる事をした覚えはないがな」

「いや必ず何かしらの形でお礼はさせて貰います……よしアナザーW、検索だ死者蘇生の方法をこの世界の全てを使って洗い出せ！必要なものがあれば言え！今すぐ揃える！」

両手で頬を叩いて喝を入れる

『ガッテン！』

「ウオズは俺についてこい、ブラン留守は任せる」

「はっ！」

「お任せを」

「うし、じゃありムルさんに相談だ」

『レポート』

—————

その場所は何より空気が重かった

「酷いなコレ」

国防策もありある程度、上空にあつた逢魔と違い街道から奇襲されたテンペストの被

害は逢魔より大きかった

「あ、リムルさ……ん……」

目当ての人物を見つけたが放たれる圧力に思わず沈黙せざるを得ない始めてだリムルさんがあんなに怒ってるなんて

「ん？ハルト……すまなかつたな情報送ってくれたんだろ？それなのにお前の所から預かってた奴にも犠牲者が……」

「いえ知っていたのに情報収集と対策が甘かった俺の所為です」

というよりアナザージオウⅡの力を過信したのが悪かったのだ……

「なあ「戻せないですよ試しましたから」そうか……」

言うと思った事を先回りして言う、アナザージオウⅡの懐古は使えないと知り凹むリムルさんに俺は方針を話す

「俺はファルムス王国と西方聖教会に宣戦布告します、ここまでされて黙ってられませんよ森にいる連中を全滅させたらフロンティアを動かして向こうの本土まで進撃してそれまでの場所は全て焦土にしますけどリムルさんはどうしますか？」

王国は浮遊する移動国家だ、それはファルムスが狙つての通りの国であり攻撃基地となるのだ故にお望み通り直接本土決戦に持ち込ませてやる、カメレオンデットマンの内通情報を確認しないと

「……………なあハルト」

「何ですか？」

「死人が生き返るなんて話があつたら信じるか？」

人が聞けば世迷言と言うだろうがハルトは

「信じます僅かにでも可能性があるなら、俺の信じるヒーロー達なら絶対に諦めません」

「それが多くの人間を手にかけてとしてもか？」

「迷う意味ありますか？自分が大切な誰かと知らない誰かを天秤にかけて時、どっちに傾くかなんて決まっていますよ」

俺の手は血で汚れきっているから今更だし

「そうだな…………ハルトお前達の力を貸してくれ」

「当然ですよ、リムルさん全力で協力します」

互いの大事なものを取り戻す為に手を取るのであった

そして作戦はこうだ、まずテンペストと逢魔の四方に展開する魔物の弱体化を促す結

界発生装置を破壊する、そしてその後テンペストと逢魔に代用の結界を貼る

テンペストはシユナさんとミュウランさん

俺は初対面であつたが何と彼女は魔王クレイマンの元部下という人らしく今回の件の片棒を担いでいたらしい、本来なら俺は彼女を糾弾する立場なのだろうが状況も状況だからな

んで逢魔の方の結界は錫音が展開、束が錫音の魔法を維持する装置で持続させる何故このような真似が可能かと言うのはソーサラー……というよりウィザードライバー系列の成り立ちからだろう

製作者の笛木は科学の力で指輪の魔法を製作している勿論魔法の部分も多分にあるが指輪の魔法には科学的根拠があると束は考え錫音と分析し一部ながら解析に成功しているが欠点があり束がデューク・ドラゴンエナジーアームズに変身した状態での演算処理がないと装置の維持が困難なのである千冬は護衛に残している

そして破壊後はリムルさんがファルムス王国軍を1人で殲滅する、流石にそれには待ったをかけたが何でも魔王化するにあたり必要な儀式なんだとか　そして仲間達の蘇生をする

「んじゃ俺達の役割は復活するまでリムルさん達の護衛ですね〜」

「ファルムスの別働隊がいる可能性もありますから用心すべし」

「ネオタイムジャツカーの動向もありますね」

「戦力が分散する以上仕掛けてきますクジョーならやりかねません」

「わかった……よし、ジヨウゲンとカゲンはテンペストをフィーニスとウオズは逢魔を頼む」

ネオタイムジャツカーの備えは残しておこう

「私達は？」

「ブランは逢魔、ヴィオレはテンペストの護衛にジョー又は俺についてこい暴れたいだろ？」

「おお！わかってるではないか我が君！」

「ええ……いいな」

「そうですね」

「ファルムス王国との戦端を開いたのは俺達2人だからな任せとけよその……2人には俺の大事な場所を守ってほしいんだ、頼むよ」

「むう……しようがないね次はもつと暴りたいな」

「残念だな、お前達は留守番だ頑張れよ」

「はっ」「はっ」

「煽るなジョーヌ…わかったよ近々思い切り暴れる場所を用意する派手に暴れて良いぞ」

「約束だよ！」

「分かったって」

「私も宜しいですか？」

「勿論クレイマンへの報復戦も視野に入れてるから安心してよ」

誰の国に手を出した身をもって教えてやると意気込むハルトであった

そして雪辱戦の火蓋が切って落とされた

東西南北の魔力阻害装置はベニマル、ソウエイ、ハクロウ、ガビル、ゲルド、ゴブタ、リグル達が破壊、攻撃してきた異世界人は全滅したのは言うまでもない

—————

その頃ハルトはと言うと、逢魔王国からブルムンドに向かう中間地点の場所でジョーヌを伴って待機していた、あまりに暇なのでアナザーライダーの能力や詳細を話していたがネタ切れになりそうだった

「暇だな我が君、これなら2人と変わって貰った方がよかった」

「そう言うなって…ほら来たよ」

「ん？おお」

とジョーヌの視線の先には大軍が軍靴を鳴らして行進している姿であった
「なるほどコレを待っていたのか！」

数はざつと一万くらいか：だけどファルムス王国軍ではない

「そ、万一リムルさんが進化するのに魂が足りなかった用に貫つとこうと思つてさあ、いやあネオタイムジャッカーには感謝だよ：態々生贄を拵えてくれてさあ」

そんな事はないだろう俺を殺す為に一万の兵士を用意したつて事か：この世界にある支部の兵力なら恐れ入つたよ、まだ敵なら殲滅するだけだがな

「やっぱり国を荒らされて対応をテンペストに全部任せるのは面子にも関わるし殲滅は決定だけど……ん？誰かいるの？」

気配を感じたので話してみるとジョーヌは頷き

「ああ共周りを連れてきたのだ、おい出てきて挨拶しろ」

ハルトが呟くと、ジョーヌの影から2人の上位悪魔が現れた1人は納刀している男性型、1人はギャルっぽい女性型である

「お初にお目にかかりますハルト様」

「宜しくねえハルトちゃん！」

「おい失礼だぞ！」

「いいじゃん！ね！」

何だろう、初対面の頃のジョウゲンとカゲンを思い出すなこの2人は

「気にしてないよそれに敬称もいらぬから砕けた感じで大丈夫」

「……………御意」

「やったー！」

「宜しく……………はあ…悪いジョーヌ、連中の対応は任せた指示は一つだけ……………生かしてこの森から帰すな」

「我が君？」

「俺に客みたいだから、ちよつと遊んでくるよ」

『ジオウ』

ハルトはアナザージオウとなり森に歩を進めた

「そうか見てもらえんのは残念だが我が君から許しが出たのだ本気で相手してやろう」

「あのジョーヌ様、流石に本気で暴れられたらハルト様も消し飛ぶのでは？」

刀の悪魔は冷静に淡々と説くように話す、彼はジョーヌの気性をよく理解しストツパーとなつてくれている実際ジョーヌの本気魔法など撃てばジュラの大森林が消滅する、そんなのハルトは望まない

「そうだな……………うむ我が君が望まぬならば避けるか」

「っー」

刀の悪魔は驚いた、今までこのような場面は何度かあった基本隣の同僚が煽ってダメにするのに素直に聞き入れただと顔に出ていたようで

「おい何だその顔は」

「い、いえ…その変わられたと」

「そうだねーいつもなら人間の言うことなんて聞かないのにねー」

「無論だ我が君以外の人間など塵芥に過ぎん滅ぼせと言えば喜んで滅ぼすさ」

この後 正確に言えばとある√において

ジョーヌ、ブラン、ヴィオレの3名は名付けされ進化し

とある世界にある三大大陸とそこに住む人間を核撃魔法で塵殺し更地にした悪魔として名を馳せたとする未来があったが、そうなるか分岐するかは誰も知らない話
「さて、私は私の頼まれた事をしよう」

そう言うジョーヌの手には大きな魔法陣が浮かび上がったのである

—————

森の中

「隠れてるなら出てきなよ、知ってるでしょ？ドライアドの目は誤魔化せないって」
そう声を張り上げると視線を別に動かす、まるでそうくるのがわかってるように
「そうでしたね貴方はテンペストと国交がありました…森の監視者の目は誤魔化せませ
んね」

ハツタリなんだけど釣れた魚は大きいな

「この間ぶりだなクジョー」

「ええ久しぶりですね」

「あの援軍もお前の「せやあああああ！」ちっ！」

質問を出す前に攻撃されたのでアナザーツインギレードで受け止めガラ空きのボ
ディーに蹴りを入れると

「ふう…」

「ちっ！」

ポセイドンがディーペストハーブーンを杖代わりにして立ち上がり構え直した

「何で俺の攻撃が…」

「あんな大声で叫べばバレる」

「何だとメナス！」

ポセイドンの背後から現れたのはネオアルファ…つて事はメナスだな

「まだ死体で遊んでるんだ悪趣味だね」

3対1…ま、数の優位なんて今の俺にはあつたなきようなものだけど

「死体を生き返らせようとするのは悪趣味ではないも？死人は起こさずに眠らせるべきですよ」

正論だろうけどな残念と仮面の下で不適に笑いながら話す

「それは無理、俺とリムルさんは見た目よりずっと強欲なのさだから仲間や大事なものは絶対に見捨てねえんだ」

だから旅の途中でいろんな者を抱えてしまった、まあ良いんだけどなと背後を見るとリムルさんが光の雨を降らせている…向こうは順調みたいだな、なら俺は俺の仕事をしてよう

「強欲…それは捨てる事、選ぶ事を知らずに抱えすぎて身を滅ぼす愚か者ですよ…おや？と言うことはあの錬金術師の事も諦めていないと？」

「当たり前だろ？俺が一回フラれた位で諦めるかよ」

「諦めが悪いと嫌われますよ」

「それは困る」

『キバ ゼロワン MIXING』

「なあ！」

『アナザースラッシュユ!』

飛電メタルで生成されたクラスターセルと大量のコウモリが敵を貪らんと襲い掛かるが

「流星は魔王ですね……では此方も正装で挑みましょうか」

そう言うときクジヨールが取り出したのは金色のハンコ：金印とでも言うような荘厳さを兼ね備えていた

『あ、アレって!』

アナザーバイスが驚いているが知らんが喰らい尽くせば終わる

クジヨールがスイツチを押すと三角形の模様が現れた

『ジユウガ』

同時に展開されたTレックスやマンモスなどの大型生物が攻撃を防ぎアナザージオウにカマキリやコングなどの生物が攻撃をして足止めをしている

「現存するアナザードライダー共を殲滅し新しい平和な世界を作る為に我々はその器と旗頭である貴方を倒す」

そして腰に三角形のバックルが収まるドライバーをつけるとスタンプ：ジユウガバ
イスタンプを装填した

『レックス・メガロドン・イーグル・マンモス・プテラ・ライオン・ジャツカル・コング・カマキリ・ブラキオ』

クジョーは両手を交差させて十の形にして構えた

「変身！」

『スクランブル！』

アンダースーツを形成し十体の生物エネルギーが粒子となり装甲に流れ込む

『十種の遺伝子！強き志！』

黒の体に金の意匠には親近感を覚えてしまう俺のよく知る究極の戦士 それをメカ

ニカルにしている雰囲気だ

『爆ぜろ！吠えろ！超越せよ！』

その姿はまるで凄まじき戦士と究極の闇のハイブリッド その名は

「仮面ライダージユウガ…」

『GO OVER』

覇気は強い…伊達に一組織の長を務めてはいないとわかる、またライダーシステムも強力なのだろう

「常葉ハルト、お前は世界の害となるもの……今ここでジャツジを下す！」

「俺を裁く？ 冗談は程々にしなよ、このクウガ擬きがあー！」

アナザージオウはそのまま接近してジュウガに切り掛かるがツイングレードを驚掴みされた上に力負けし、逆に腹を蹴られた

「っー！」

「この程度ですか？ はあー！」

思い切り殴り飛ばされてしまった

「があ……ならコレでどうよー！」

『W』『ルナ トリガー』

アナザーWに変身し直しルナトリガーにチェンジ、トリガーマグナムを連射する変幻自在の弾丸は森の木を迂回しながらジュウガを狙うが手で弾かれる

「兎戯ですね」

「マジかよ……ならこいつだ」

『ドライブ』

アナザードライブとなり高速戦ならどうだ！ 重加速で動きを止めながらの拳打 こ

れは通るようだが

「ぬん！」

「っ！……ちい！」

最小のモーションで効率的なカウンターをくらい吹き飛ばされた

「手品な終わりですか？」

「はは……舐めんな！」

『ウィザード』『グラビティ』

「押し潰れろ！」

周囲の樹木も巻き添えにする形でジユウガを押し潰しにかかるが

「なんの」

ジユウガは動きは遅いがドライバーにあるスタンプを3回倒した

『パワードゲノムエツジ』

「らあ！」

「があ!!」

コングのエネルギーを込めたパンチは魔法を破り、アナザーウィザード本体に命中し

彼は転がるのであった

「あ…………く…………」

「はは！いい気味ですねえ」

「……………」

「おや？言い返す気力もありませんかあ？」

嘲笑つてるようだが

「はあ……………こんなもんか」

ケロツとした感じでアナザーウィザードは立ち上がり体をほぐしていると体のほこりを払う

「何？」

「ジョージ・狩崎のライダーシステム以上の能力を警戒していた俺がバカみたいじゃないか」

「な、なにをいって…」

「いや、最大限の警戒をしてた長の隠し玉がコレって……………ないわー」

どれも想定以下、ジュウガは元々ジョージ・狩崎専用のライダーシステムそれを他人が使えばどうなるかなんて決まっている

「アレだけ押されていたのも演技だったと？」

「あ、気づいたかどうかよ！俺の2000の技の一つである演技よ！」

「は、ハツタリだ！その余裕も無理矢理持たせてるだけだろう！」

「そう思うならご自由に…まあその間にお仲間がどうなるか知らないけど」

「ああ…あの女性ですか…確かにこの世界基準では化け物級でしょうが我々ネオタイムジャツカーの各支部から精鋭一万を前にすれば恐るに足り…：…な、なんだアレはあ！」

ジュウガの目線の先には巨大ブラックホールが現れているよく見れば

「…」「わあああああ！」「…」

断末魔をあげながら吸い込まれていく敵兵の姿はさながらユニクロンに取り込まれていく惑星の住人のような悲惨さがある…いや敵だから同情なんてないけど、それを高笑いしながら魔法を行使し楽しんでいるのはジョーヌである

「ははははは！良い気分だ感謝するよ我が君！」

その様子を見たアナザーウィザードは目線を逸らした

「まあ…楽しそうなら良いか！」

考えるのやーめた…さてと

「あ、ありえない…現地勢力で我々に対抗など…っ！」

「ありえない……なんてのはありえない、だっけか？まあ圧倒的な強者の前には数なんて意味をなさない……それはよく知ってるだろう？」

オーマジオウがレジスタンスの大軍を片手間で倒していたり、デイケイドのプロローグでクウガからキバまでのライダー軍団を蹂躪するシーンなど幼心にデイケイドへの恐怖心があった……今は頼れる先輩なんだがな

「そ……そんなこと!!」

「生憎、今の俺は忙しいんだよ……手品のネタ切れなら……こんなのはどうかい？」

『コネクト』

魔法陣を繋ぎ取り出したのは一冊のアルターブック、それを躊躇いなく開いた

『カリユブデイス』

「何!」

「おおおらあ!」

ジュウガの背後からカリユブデイスメギドが大鉈を振り下ろそうとしたが

「つと!大将同士の果し合いに横槍は無粋だろ?」

「あああああああー！」

「叫ぶな獣が」

「!!!」

「まだ覚醒したばかりで自我の乏しいカリユブデイスは本能に任せるままポセイドンとネオアルファと戦闘に移行、目線がカリユブデイスに向かうのをチャンスと見たか

「今ですー！」

『インパルスゲノムエッジ』

ジュウガはスピード系の必殺技を発動、ドライブを超えるスピードで攻撃を敢行防衛の構えを取るが

「早いけど俺たちの力には及ばない」

『カブト』

ウィザードの装甲を弾き飛ばしてアナザーカブトに変身する

「クロックアップ」

『CLOCK UP』

同じ高速の世界で激突するジュウガとアナザーカブトであるがカウンターで殴り飛ばしてジュウガと間合いを詰めると

「……おのれええ！」

そのまま感情に任せた速度で突貫するだが

「アナザーキック」

『RIDER KICK』

「はあー！」

タキオン粒子を帯びたカウンターアナザーキックはジュウガの装甲にダメージを与えて吹き飛ばすがまだ倒れない流星はジョージ・狩崎の最高傑作だ

「ぐ……ぐあああー！」

ボロボロのまま立ち上がる彼は正義のヒーローに見えるのだが

『ジオウ』

「俺にとつては悪役……まあ」

アナザージオウに変身し直したハルトはアナザーツインギレードにアナザージュウオツチを装填する

『ビルド……ハザード』

『セイバー……プリミティブドラゴン』

『MIXING』

「側から見たらどつちがそうなのかは今は知らんがな」

同じく先日覚醒したばかりの暴走アナザーライダーズの力を借りるとしよう

原点の両者共通しているのは目の前のもの全てを破壊するかのような暴力である

「く……覚えておきなさい！」

逃走を図るのは目に見えているので

「逃すかよ」

同時にアナザージオウの背からプリミティブドラゴンのように骨型のエネルギー手がジユウガを拘束し

「オラア！」

ハザードの力を込めた拳の一撃はジユウガの装甲を削り取り本体に直接ダメージを与えた

「ガアアアアア！」

「まだ変身解除しないか……ならもうちよい俺の腹いせに付き合ってもらおうかあ！」

今までの鬱憤を込めるが如く握る拳にも力が入るのだが未来予知に従い後ろに下がると青い雨のエネルギー攻撃が降り注ぐ

「おいおいやっぱり来たかトーマ!!」

アナザーリバイブ疾風が現れた

「……………逃げますよクジヨールさん」

「ええ感謝しますよ……どうやらドライバーの調整が必要なようです」

抱えて飛んで逃げようとするので丁度良いと思い「王の勅令」を発動するとアナザーリバイブ疾風は体からバチバチと放電して膝をつき変身解除した

「が……………く……………貴様……何をした!」

「さあ? ウオツチの不調じゃない?」

種明かしの理由がないから強いスキルだなと実感するが使い所は選ばねならぬいな

「そんなはず……………」

「悪いけど今日は出し惜しみは無しだ」

『ジオウ デイケイド ……MIXING』

現状、もっと相性の良いウオツチの組み合わせによりアナザーツインギレードに嘗てない程の強大なエネルギーがチャージされていく両刃にマゼンタのエネルギーが溜まっていく

「せいやあああ!」

『アナザースラッシュ!』

巨大なエネルギー斬撃が2人を襲うが

「大将!!」

タイムマジーンに乗ってたレックの手を掴むと2人はタイムマジーンに回収されて飛んで逃げていった

「逃げたって事はカリユブデイス負けたのか…」

戦闘経験値0の状態だから仕方ないけど…ってやば

「やばっ! 斬撃が森を切り裂いてる!!」

不味い! このままだとトレイニーさんに怒られる!…そうだ!

『カリユブデイス』

「食べちゃって!」

「うん!」

攻撃線状にカリユブデイスを召喚すると持ち前の大口でエネルギーを捕食したのであつた

「ご馳走様」

「以外と礼儀正しい!」

この子の成長早すぎる!!と感動していると

「終わったぞ我が君」

「ああこつちからも見えたよ凄い一撃だったな」

「そうだろうそうだろう！」

「ご機嫌なジョーヌ、その隣から刀の悪魔さんが

「ジョーヌ様」

「そうだった我が君着いてきてくれ」

「ん？おう」

変身解除したハルトはそのままジョーヌについていくと、そこは先程の大きなブラツクホールで扱られた跡地である残っただろう死体などはなく

「あれ…魂か？」

何かふわふわしたものが漂っているだけである

「わかるのか？」

「まあ…な」

アナザーゴーストの力のお陰である、彼の力のお陰で魂など霊的なものに対しての感覚が鋭敏になっているのだから感知出来たのだ

「この魂がどうしたんだ？別に食べても良かったのに」

悪魔は魂を食べると聞いていた、それだけ考えるとかなりのご馳走様だろうにと

「これは我が君に献上しようと思っただけ！千冬から聞いたが魂を補食出来る力があるの

だろう！」

自慢げに話しているが刀の悪魔さんがウンウンと頷いてるので彼の入れ知恵だろうな……だけど素直に

「ありがとうジョーヌ……それと2人もね」

お礼を言ううと精神世界の皆に意見を問う

この魂どうする と

『食べるよ、アナザーゴーストの力が強化されるぜ！』

そうだよなあ……てか全員の意見がそれだった確かにアナザーゴーストは数十前後の魂を取り込むだけでジオウ・デイケイドアーマーと互角に渡り合えたことを考慮すれば一万の魂を取り入れればどうなるかなと言わずもがな

論ずるまでもなかったか

「取り込むよ」

『ゴースト』

「ふっ……はあ！」

アナザーゴーストに変身して印を結ぶと同時に一万の魂をアナザーゴーストは取り込んだのだ それと同時に

「ぬあああああああ！」

【種の発芽に必要な養分を確認しました、これより収穫祭（ハーベストフェスティバル）を開始します】

収穫祭って…確か…！

「え？ちよつと待て！それってリムルさん達魔王種を持つてる魔物にしか発動しない無いはずじゃー！」

違和感を解く前にハルトの体を強い睡魔と虚脱感が襲う

「う……………あ……………」

「我が君！」

慌ててジョーヌに抱き抱えられるハルトは薄れいく意識の中で

「ジョーヌ、取り敢えず逢魔に戻って…それと緊急事態だ……………」

「我が君?!」

それだけ言つて意識を手放した、それと同時に

「ぬああああああ！」

カリユブデイスもアルターブックに戻り各地にいたミラーモンスターやグロンギ達、

そしてファルムスに潜入していたカメレオンデッドマンも眠りについた幸いなのが目覚める時まで誰も彼の寢床に入らなかつた事である

それに加えてアナザライダー達も眠りについたのだ

ようはハルトが選んで連れてきた者達が一斉に眠り始めたのだ

「どうなっているのだ…」

「ジョーヌ様、今は一刻も早く」

「ハルトちゃん達を連れ帰らないと！」

「そうだな…待っている我が君！」

ジョーヌは慌てて浮遊魔法で逢魔に帰還したのであつた

魔王への進化とその意味と

ハルトとアナザーライダー達が意識を飛ばしている間、世界の声がかたまする

【確認しました】

【種族 人間から怪人王（デモンロード）への超進化に挑戦：成功しました】

【全ての身体能力、魔力が大幅に上昇しました】

【続けて旧個体で獲得していたスキル、耐性の再取得：成功しました】

【新規固有スキル〈怪人統率（ヒキイルモノ）〉〈魔王覇気〉〈怪人変異〉〈怪人生成〉を取
得】

【新規耐性〈状態異常無効〉〈怪人特性無効〉〈精神攻撃耐性〉〈仮面ライダー攻撃耐性〉を

獲得…成功しました」

【以上で進化を完了します】

これで終わる筈だったのだが世界の言葉に異を唱えた者がいた

『アナザージオウから世界の意味に請願、種族アナザーライダーの進化を申請』

アナザーライダーで唯一自我を有さずにハルトが変身の為に使っている王の影アナザージオウである。未だ自分本来の力を覚醒させないダメダメな主人ではあるが

ー皆の名誉回復が俺の望みだー

同胞の被害者でありながら彼等を受け入れ絆を紡ぎ力を束ねて名誉回復を目的とする我等が王の為、そして同胞達が原典を超える可能性を得る為に

それが今まで日陰者の王と揶揄された世界と最低最悪、最高最善の魔王への意趣返し

偽者が本物に勝てないと誰が決めたのを言外に示す為に新たな可能性を示した王の力にならん為、沈黙を貫いていた王が世界に訴える

【了 アナザージオウの申請を受理、種族アナザーライダーの進化へ挑戦……失敗しました】

『再度実行』

【失敗しました】

『再度実行』

【失敗しました】

それをどれ程繰り返し返したのだろう途方もない回数を重ねて

『アナザージオウがユニークスキル 変身者へカワルモノ』と収穫祭の祝福を糧に種族の進化に挑戦』

【…成功しました種族アナザーライダーの一部個体能力は現最終到達点への進化を開始します】

・アナザーライジングアルティメットクウガ

・アナザーシャイニングアギト

- ・アナザー龍騎サバイブ
- ・アナザーファイズブラスタ
- ・アナザー剣キング
- ・アナザー装甲響鬼
- ・アナザーハイパーカブト
- ・アナザー電王ライナー
- ・アナザーキバエンペラー
- ・アナザーデイケイド ・コンプリート21
- ・アナザーWエクストリーム
- ・アナザーオーズプロティラ
- ・アナザーフォーゼコズミックスティツ
- ・アナザーウィザードインフィニティ
- ・アナザー鎧武極
- ・アナザードライブタイプトライドロン
- ・アナザーゴースト無限魂
- ・アナザーエグゼイドムテキ
- ・アナザービルド・ジーニアス

- ・アナザーゼロツ
- ・アナザークロスセイバー
- ・アナザーアルティメットリバイ
- ・アナザーアルティメットバイス
- ・アナザーグラウンドジオウ

の進化に成功しました、以降のものも順次進化を開始します」

そんなとんでもないことが起こっていた裏でこんな話があった

テンペスト

「あーあ…暇だなあ」

頬杖ついて退屈そうな顔で紅茶を飲むヴィオレを見て

「ボクも無理言つて付いてけばよかった、ハルつて押しに弱いからイケるんだよねえ」
「ヴィオレ殿、暇なのは良いことですよ」

「はい、リムルさんと魔王様の作戦が上手くいつてるって事ですから」

ウオズとフィーニスは話しかけるが

「それが嫌なんだよ、それってジョーヌの奴が上手くいつてるって事ですょ」

「陰悪な相手の成功が妬ましい彼女はムスっとしている」

「邪魔したいなあゝあいつの自慢げは顔とか見たく無いし」

「それは我が魔王が聞いたら止めますよ絶対に…へ？」

「ウオズにしては珍しく間の抜けた声でしたのも無理はない、何故なら」

【魔王進化……成功しました】

「それはハルトが種族魔王への進化を果たしたと言う世界の声が聞こえたからだ」

「ええええええ！魔王様が魔王に進化あ!!」

「な、なんだと…我々の歴史にこのような事は存在しない!!」

「おお〜リムルさんだけじゃなくてハルも進化するんだ〜すごい〜！2人同時に魔王が」

生まれるなんて聞いたことないよー！」

「上機嫌なヴィオレは進化の影響で寝ているランガを内緒でモフモフしていると」

「あ?」

「っ!!」

「普段の彼女とは思えない程、ドスの効いた声を出して侵入者を警戒する」

「その男は黒髪に金の瞳孔を持つ紳士のような外見だった、共周りなのか2人の部下を連れていたが部下はヴィオレを見て動揺していたが男は動じずに」

「くくく…おや?久しぶりですねヴィオレ何故ここに?」

「それはこつちのセリフだよ……何してんのきノワール」

両者の魔力が激突するが

「生憎と今の私はマスターからの命令を受けてましてね貴女と遊ぶ気はありませんよ」

「気まぐれな君を呼び出すなんて凄くマスターだね」

「ええ……本当に素晴らしいお方ですよ……それでどうしますか？ 私としては貴女と戦うのは本意ではありませんが」

「そだね、ボクもハルに危害加えないならどうでも良いし」

魔力を解くと同時に逢魔で待機していたプランが転移してきた

「あら懐かしい気配がすると思ったら貴方だったのねノワール」

「ええ貴女と会うとは思いませんでしたプラン、本当に人間の下に居るとは驚きですよ」
先程と違い警戒している様子の男 ノワールである無意識で苦手意識があるのかは

知らないが

「ふふふ……知的好奇心って所かしら私的に入れ込んでるのは否定しないけど」

「お前達何をしている！我が君と連れてきた種族共に異変が……ノワール！貴様あー！」

ハルトを逢魔に返すと指示を伝えようと同僚の元に飛んできたジョー又はノワールを見て身構えた

「くくく……ジョー又までいるとは驚きましたよ、まさか本当に貴女達に従えるものがい

るとは…しかもタダの人間がね」

「あら…普通の人間って枠組みから外れているのよハルトは」

「そうだね普通じゃない…というより元からハルは」

「精神構造が人間ではないのだ自覚してないだけのな、あれは怪物だよ」

再開した友人と近況報告するような気軽さだが結界が破壊されると同時にリムル：正確に言えば叡智者（ラファエル）が行った反魂の秘術により全員無事に生還したのであった

—————

「うーん……………」

目が覚めたら

「知りすぎてる天井だ」

一度やって見たかったので良しとしよう

「つて…何で俺まで進化してんだあ！」

寝起き早々枕を壁に叩きつけて起き上がる

「どうなつてんだよ!!本当!!魔王進化つてリムルさん達魔物にしかないんじゃないの!!
つーか俺魔王になったの!!」

『うるさいぞ、ハルト…我々は眠っているのだ』

『うつせえ…』

「ああ…ごめん…じゃない!」

アナザーウオッチ片手に絶叫しているというシユールな光景を展開しているのだが

「皆は!」

状況を確認しようと部屋を出ようとした時

「ハルト!目が覚めたのかい!?!」

錫音が入室すると驚いた様子で

「錫音!死んでた皆は!」

「落ちついて…大丈夫皆無事だよリムルさんが全員蘇生したから」

「そっか…良かったあ…」

安堵で力が抜けそうになるが錫音は深刻そうな顔で

「それと…落ち着いて聞いてねハルト」

「ん?」

「貴方人間辞めたのよ」

「え…」

その一言にハルトは俯き絶望するかと思つたら

「そつかあ！何となくそんな気がしたんだよ」

ヘラヘラ笑つていたのであつた

「いや明るく受け入れる場面じゃないよ！」

「だって怪人連中の力も特訓で使えんとか不思議だったんだからさ」

バイオグリーザの迷彩やグラフィイトの紅蓮爆竜剣が使えるとか普通の人間の自分に何故使えたのか不思議だったのだから

『それについては俺が答えるぜ』

「アナザーW？」

彼の話をつまみと

アナザライダーには本来契約と使用期限のようなものが存在する

ジオウ本編で言うアナザーファイズとアナザーフォーゼの契約者のように長い年月使い続けると力を失い変身や存在の維持が難しくなるらしい

しかしここでネットクとなつたのがアナザー電王なのだ、あのウォッチは保持者を特異点とする力があるらしいのと俺の場合は契約で多くのアナザライダーを受け入れた事で力を失うことがない上に定期的に補充がされている

また元々のアナザライダー達との親和性が高いのも災いしたのか仮面ライダー言う所の強化デメリットによる怪人化と言うのがかなり進んでいたらしい

「つまり…俺は剣崎さんみたいに融合係数が高かったから怪人化したって事か」

『正解だ、つまり今のお前は人間ではない怪人を束ねる存在って訳だ』

「おお……カッコ良い…あ、だから俺に怪人の力が使えたのか!」

『ああ…なあ…そこは人間に戻せよ!とか言わないのか?』

「うーん……なあ錫音、俺…」だからどうしたんだい?」先回りしないでくれよ」

「はあ…前にも言ったが私は…私達は君が怪人だろうが人間を辞めようが常葉ハルトという存在は変わらないだろう?なら私達は一緒にいるだけさ」

「だからだよ人間辞めても皆がいてくれるなら俺は怪人でも魔王でも良い………はっ!」

『どうしたハルト?』

「アナザーWよ今の俺は…インベスやオーバードみたいな存在って事だよな」

『そうだな』

「つまりヘルヘイムの果実を食べても大丈夫なんじゃねえのか!」

やってやるぜ!世界初とも呼べる、ヘルヘイムの果実の食レポを!!師匠しかわかってくれないだろうけどな!

『待て！正気か!?』

「初瀬さんよりはな」

『嘘だろ！そんなに病んでるのか!』

「冗談……けど不思議だな五感が残ってるけど……」

あらゆる怪人になったのならグリードのように五感を失う筈なのだが

『それはお前の〈怪人特性無効〉が発動しているからだ』

聞けば怪人特性による弊害を打ち消す耐性とのこと

「それ出来れば早く獲得したかったなあ」

若干残る人間への未練もあるが気にしないスタンスで行こう

「……んでお前達はどうなのさ普通の人間だった俺が超進化してんだ、お前達にも変化があるんじゃないのか?」

『ふふふ……よくぞ聞いてくれたハルト!』

『俺達はなあ……アナザー最強フォームに進化してんだよ!』

『目覚めたぜその魂!!』

「な……何じゃそりゃあ!!」

背景、遠い世界にいる両親へ

俺とその相棒達は完全にやばい存在になりましたとです

そして街に戻るとそこには馴染みの連中がいた

「我が魔王！」

「大丈夫だった魔王ちゃん！」

「お体は？」

「進化したんですよね？物理的に魔王に」

「そうみたいだけど俺はホラ、ご覧の通り普通だよ」

と戯けてみせると千冬と束は

「それなら早く起きろ馬鹿者！寝坊助め三日も寝てるとはな！」

「そうだよ！戻ってきたハル君が気絶してたの見て驚いたんだからね！」

「ごめんって…本当にこれに関しては俺も予想外と言いますかあ…何と言いますかあ…
…って三日も寝てたのか」

そうとしか言えないので平謝りするしかなかったのであった

テンペスト

「あ、皆——！」

ハルトは三人娘に声をかけると気づいたようで

「ハル、大丈夫？」

「おうよ！予想外中の予想外だったけどな」

「無事で良かったぞ我が君」

「逢魔まで運んでありがとうなジョーヌ」

「まあ礼を言われるまでもないがな」

「ありがとうなブラン」

「いえ当然の事ですわ」

「皆にもお礼がしたいな……そうだな……」

そう言えばリムルさんの仲間達は名前があるな……今更だがブランやヴィオレとはあだ名のようなもので名前ではないらしい……なら

「名前とか……どうかな？」

「「っ!!!」」

「ダメ？」

「いや構わないぞ！」

「うんうん！」

「そうですわね」

「そっか良い名前を考えないとな」

俺のネーミングセンスは「ハンドル剣」や「ドア銃」の人と同じくらい壊滅的なので
リムルさんに相談しよう

『それが良い』

「だろう?」

わかってるじゃん相棒

—————
そして

「リムルさん!魔王への進化おめでとうございます!」

「ハルト!聞いたよお前も進化したんだってなおめでとう!」

「ありがとうございます…っでも何か変わった感じがしないんですよええ」

「俺もだよ…っって、そんな事話してる場合じゃなかった」

と世間話をしているもののリムルさんからは真面目な顔で

「聞いてくれ、俺達が寝てた三日の間で凄い事になってんだよ」

聞けば寝てた三日の間に魔王カリオンさんとユーラザニア首都がミリムさんにやられたと言う事だった

「ミリムさんが?カリオンさんに攻撃したって…」

「ああ…結果魔王カリオンは行方不明なんだ」

幸いなのは国民は避難しているらしい…待て

「ウオズ！大至急避難所と色々の用意して！」

「そう言うと思って用意してあります」

「流石はウオズ、賢明な判断だ」

「当然新参のブラン殿には負けませんよ」

「え？張り合ってるの？」

「ええ…我が魔王の筆頭秘書の座は誰にも渡しませんとも！」

「お前は俺の預言者だろうが！」

—————

そして人払いしリムさんとランガ、俺とウオズ、ブランの4人と1匹で話し合いとなる

「問題が山積みだな」

「ファルムス王国と西方聖教会…しかもミリムさんやクレイマン問題か…」

「どうしたものか…」

取り敢えずファルムス王国の王様と宮廷魔道士と教会の大司教を捕虜にしているらしいので使い道を検討中らしいと話していたら

「お目覚めになられたようで何よりです、我が君」

紳士的な男性が現れた誰とハルトは首を傾げるが彼はリムルさんに

「無事に魔王へなされた事、心よりお喜び申し上げます」

その一言にブランはあり得ないものを見る目をしていた、え、何？そんな凄い人なのと考えると

「えーと…誰だっけお前？」

「っ!!」

リムルさんの一見無慈悲にも取れる発言に彼は凄く傷ついたようで

「これはご冗談を…悪魔である私が心核にダメージを受けました…」

「マジか」

確かヴィオレ達は心核にダメージを負ったから俺についてきてくれてんだよな？と

ブランに視線を向けると

「……………」

リムルさんに尊敬の念を送っている、肝心の当人は誰だと考えていると

「この者は主がファルムスの兵士を餌に召喚された悪魔です」

ランガが説明するとリムルさんは

「そうかまだいたんだ！」

「っ!!…まだ…」

無自覚って時に残酷だなと俯瞰してるから言えるのである何ならブランは笑いを堪えながら、その様子を以前渡したガトライクフォンで動画を撮影していたくらいだ…いや技術に順応してるね君

「聞いたよ色々手伝って貰ったって助かったよ」

「っ!!」

一転して嬉しそうな顔になる彼は

「いえとんでもございません…つきましては」

「長々と引き留めて悪かったね…もう帰っても良いよ！」

「っ!!」

まさかの上げて落とすとはリムルさん…悪魔さんが泣いてるよ

「リムルさんマジ魔王」

俺なんかより余程魔王してるぜ

「あのノワールが泣きそうな顔をしてる…これを2人が見たら驚くでしょうね」

動画を見て悪い笑みを浮かべるブランを見て

「辞めなげな！あの悪魔さんのライフが0になるよ！」

止めるハルトは彼を見る

「ブラン達と同じ悪魔だよな……何という格？つても近いと言うより何か3人より強そうだな……ん？待てノワール？」

その時 以前錫音に教わった事を思い出した

（原初の悪魔は7人いて、それぞれが色の名前で呼ばれてるの）

つて事は……この悪魔さんは原初の黒!!心核を砕いてないのにリムルさんに好意的なのだ凄いな理性的な悪魔だな三人娘なんて核撃魔法とかでいきなり攻撃してきたのに

「リムルさん……この悪魔さんはブラン達と同じかそれ以上の悪魔ですよ」

こっつそり近づいて耳打ちする

「え？マジで？」

リムルさんの脳裏にはカリユブデイスの時にメガロドンを笑いながら倒す三人娘が思い浮かんでいたが

「仲間にした方が良いでしょうよ……それに今は優秀な仲間が1人でも欲しいでしょう？」

「……報酬とかないけどいいの？」

「お仕えできるだけで十分でございます」

「嘘でしょ…」

「ブランが驚く辺り凄いなんだなあ」

何が凄いつてリムルさんは原初の悪魔とかその辺知らないのに受け入れているのだから知らないって怖い

『お前だつて錫音に聞かされるまでヴィオレ達の事を知らんかつたら?』

何も聞こえない

『現実逃避するなあ!』

そしてリムルさんは悪魔にディアブロと名付けると彼は進化したのであつたのを見て相談することにした

「そうだ…ねえリムルさんちよつと…」

「ん? どうした?」

「実は三人娘に名前をつけたいんですがアイデアをお借りできないかと」

「三人娘にか…そうだなあ…」

「ディアブロつて悪魔つて意味ですよね?」

「そうそう、それとそんな名前のスーパーカーもあつたから」

「車ですか…成る程…」

「あの3人なあ…そうだ！こんなのはどうか…」

今度はリムルさんに耳打ちされると

「っ！ありがとうございます!!」

するとリムルさんが少し思案したように顔を伏せると

「何とかなりそうだ」

「おお！」

「え？マジですか？」

この人本当に凄いなあと思うしかなかった

—————

そして暫く経った時、取り敢えず記念の宴会をテンペストと合同で行う事となったのだが

街にいる者達全員が訳のわからない威圧感に襲われた

「これは…ヴェルドラ様？」

リグルドさんの言葉に周りは驚くがハルトは知らないので

「ヴェルドラ？」

「ヴェルドラとはこの世界に存在する竜の一体でこの森の…そうですね守り神みたいな存在です」

ウオズの説明に

「へえ……つてドラゴン!!」

ハルトは目を輝かせる

「ええ」

「凄いファンタジーって感じだなあ!よし!早速ドラゴンに会いに行こうぜ!」

「お待ちを我が魔王」

「何?」

「来たようですよ?」

「言われた方を向くとリムルさんとガタイの良い金髪の人…件の暴風竜ヴェルドラがいた」

「ドラゴン…初めて見た!」

「ん?お前は確か…DVDなるもの持っている男だな」

「お中元のハムの人みたいな呼び方は気になりますが…何でしょう?」

「お主の持っているものを見せてくれ!」

「はい！…とりたいのですが幾つか失伝しまして…」

具体的には何処その泥棒に盗まれたんだがな

「構わん構わんさ、ははははははは！」

「なんて大きな器だ…これが…ドラゴン！」

『いやお前もアナザードラグレッターやアナザードラゴンがいるだろう？』

ー生きてるドラゴンなのが良いんだよ！ー

そして始まった合同の宴会、皆が思い思いに楽しんでいる、カゲンは獣王国の人と飲み勝負をしている樽で呑んでるとか単位がおかしい！

「いやあ！めでたいなあ鍋を振る手に力も入るもんだよ！」

俺はいつも通り料理作っている仲間の復活祭と言うめでたい日に鍋を振るわない訳には行かないだろう

「アレ？俺魔王になったのに…いつもとやってる事変わってなくね？」

「おかわり!!」

「はいよー！皆、並びなー」

まあ良いかー！と思考を切り替えるのであった

翌日、テンペストと会議があるが開始前に少し時間があつたので3人と配下を集めた

「皆、忙しい中来てくれてありがとうね」

「いえお呼びとあらば即座に」

「うむ！」「うん！」

「前に話してた名付けだけど、それに当たってリムルさんと一緒に考えた名前がある…それを褒美って事で受け取って欲しい」

「何と！リムル様も協力してくれたのか！」

「凄いね！」

喜ぶ3人を見てホッコリするとハルトは真面目な顔に戻し

「では三人とその配下に受け取ってほしい」

ブランはテストアロッサ

ジョーヌはカレラ

ヴィオレはウルティマと名付け

そして配下にいたものにも名付けを行った

アゲーラ、エスプリ

モス、シエン

ゾンダ、ヴェイロン

するとハルトの体の中から何か黒いモヤがごっそり抜け落ち彼女達に取り付いた

「うおおおお!!」

あまりの虚脱感に驚くがすぐに治った…あれ？

「何これ？」

前よりも強くなってるような…これって

『今のはフアントム、フェニックスの自己再生能力だ』

あの太陽に飛ばされ焼かれ続けてるファイナーレは無いでお馴染みの不死鳥さんの力

…ん？

「つまり…それって…」

『お前は一度に沢山の名付けをやりすぎだ、名付けで一回死んでるって事だぞ』

「怖っ!」

ブラン…じゃなかったテストタロツサ達に名付けたら俺が死ぬってどんだけ強くなる

のさー！

結果として三人娘は悪魔公 デーモンロードに配下達は上位魔将に進化したのであった

「これ…やり過ぎた？」

『知らん』

「まあ良いか困つても未来の俺が何とかするだろうし」

『本当に変わらんなあ…これで魔王に覚醒したとは信じられん』

「酷いなあ俺は俺だよ…ずっと昔から石を蹴れば当たるくらい何処にでもいる普通の男
さ」

当たり前だろ？と笑うと

『お前のような男が普通であるかあ！』

「何だと!!」

解せん…とは言えないよなあ…俺も大分遠い存在になったものだ過去の俺が見たら何というやら…

人魔会談

首都リムルの議事堂にある会議室にて

「まさか世界の歴史を動かすような会議に出れるなんて光栄なんだが、なあウオズ……この格好は何とかならないのか？」

ウオズからお召し替えとして言われて渡された服に袖を通したのだが

「まんま加古川飛流（王様）時の格好じゃん」

確かに彼もアナザーライダーの王様だけどさあ

「お似合いですよ我が魔王」

「そ、そうか……なんか馬子にも衣装な感じもするけど……」

あの人は先輩にはなるのだが敬意を払えるかは微妙な人なので多少複雑である

案内された先にいたのはドワルゴンからガゼル王、魔導朝サリオンからエラルド公爵、ブルムンドからはギルドマスターのフューズさん、そしてテンペストの盟主リムルさんなのであるが

リムルがヴェルドラを紹介した事で会議が中座、何故か俺も含めた4人で密談となった。

因みにフューズさんはヴェルドラを見て気絶した

「お主らのことを話して貰うぞ」

「は、はい」「ですよね」

そしてリムルさんは魔王化に至るまでの経緯

スライムに転生してヴェルドラと出会い街を作って死んだ仲間を蘇生させるために魔王となった：まあ大雑把にはこんな感じと

「で？お主は？」

「俺はあ……」

異世界を旅してたらこの世界に来てリムルさん達と出会い街や国を作った、そして俺がいた世界の敵が軍隊を送ったので返り討ちにして魂を吸収したら何故か魔王になったと話す

「ではお主は狙って魔王になったのではないのだな」

ガゼル王がそう言うので頷き

「元々の力は魂を吸収しての自己強化スキル？だったんですよ、多分この世界にきた影響で変異したのではないかと…まあ仮説ですが」

アナザーゴーストウォッチを見せながら、あつけらかなと言い理解してもらえた所で話を再開した

ファルムス王国軍二万全滅の情報はどう隠蔽するかで頭を悩ませた

「まあ普通に考えて2万の人が跡形もなく消え去ったって事実をどう公表しても問題になるような…」

戦場跡地には鎧兜や天幕、食糧や武器しか残ってないし

「普通ならな…だが裏を返せば生存者はおらんし証拠もない…どう言い含めても問題はないと言う事だ」

「ええ…確かにそうですね」

そして話し合った結果として

ファルムス王国軍かヴェルドラの封印を解いて軍は全滅、英雄ヨウムと魔王になったリムル、ハルトが交渉し守護者として祀る事で手打ちにしたという筋書きとなった

そうした会議は再開し今の内容を話している

まずリムルさんがイングラシアからテンペストの帰り道にヒナタ・サカグチという教会の騎士に襲撃されたという所だ

「完全に取り付く島もなかったよ」

「何とか教会つて何でこう過激なんでしょうね異教徒の弾圧とか特に」

俺の教会のイメージは銃剣を使い若本ボイスで叫ぶ親父が同じように渋い声の吸血鬼に突貫するというものである

『何処の世界の教会だそれは』

もしくは何かあれば銃火器の販売や銃で反撃する暴力教会かな

『だから何処の世界にあるんだその教会は』

ロアナプラ？だっけ

「あとリムルさん達とも情報共有なんですけどファルムス王国と教会が攻め込む前にファルムス王国の使者が来ました」

「ほお…」「それは初耳ですね」

「内容は貿易や親善に関しての内容だったんですが内容が酷くて酷くて…テストタロツサ」

「はい、その内容の写しはこちらに」

以前きた使者の書簡を渡して読んでみると

「呆れたな属国勧告ではないか」

「ええ…国としてなつていませんね不平等過ぎます」

まあそうだよなあと頷くハルトは

「その時にテンペストを王国と教会が攻めると聞きました、戦いの流れ弾を受けたくないなら逆らうなと…テンペストの味方するから無理と突っぱねてやりましたがね」

「それでその使者は」

「聞いた話では夜道で魔物に襲われたらしいですよ、まあ悪運強いことに使者と護衛何人かは帰国したみたいですよ」

嘘である、使者はカメレオンデッドマンになり変わってるし護衛はワーム達が擬態している完全に俺の手先って訳だ

「今思えば逢魔に攻め込む大義名分にするつもりで使者送ったんでしょね、死んでも良いような奴を」

「だろ…うなああの国の連中ならやりかねん」

そして話は進んでいき、ファルムス王国の対応だが

今回の件でテンペストと逢魔が連盟で賠償金を請求する

「あの国の貴族達がマトモに賠償に応じるとは…」

「俺もそう思いますよリムルさん、あの使者の態度からして応じるとは思えない」

「賠償はキツカケだよフューズ君、ハルト狙いは内乱だ起こして英雄ヨウムを新しい国王に擁立するんだ彼は国民の支持は厚い」

なるほど英雄ならウケは良いなと頷く

「任せてくれ旦那」

話はエラルド侯爵来訪理由を聞くと娘の冒険者がリムルさんに魔王化の方法を教えたので魔王が生まれたので事実確認をしにきたと

「まさか魔王が2人も生まれてたとは…」

「あのエラルド侯…俺の魔王化は偶然ですよ？」

人間の俺が魂取り込んで進化するとは思わなかったから

「だとしてもですよ」

「魔王リムル、魔王ハルト貴方達は世界をどうされるおつもりで？」

「俺が快適な国、出来る限り豊かで楽しい暮らしを」

「誰も飢えない豊かな国を」

「そんな…叶うとお思いで？」

「力のない理想は悲しいし力だけを求めるのは虚しいだろう？」

「傍観するだけじゃ何も手に入らない、いつだって挑んで掴み取るんだよ」

「ははははは！成る程…：ジュラの森の盟主と浮島の王よ我等、魔導朝サリオンは貴方方との国交樹立をお願いしたい…：色良い返事を期待します」

「勿論だよ宜しく頼む」

「そうだねこつちも宜しくお願いします」

まさかの国交樹立と思っていたのだが何か小さな光が…あ、窓にぶつかった
「ら、ラミス!？」

「話は聞かせてもらったわ…あのね…この国は滅ぶわ!」

「「な、何だつてー!」」

「つて誰？」

首を傾げてる合間に妖精はディアブロに捕まり

「リムル様、この羽虫の処分はいかように？」

「そうですわねハルト様…如何なさいます？焼きましようか？」

可哀想な妖精さんだ原初2人に絡まれて

「辞めろディアブロ!」

「焼くとかダメだよテストタロツサ!」

「つてリムルさん知り合いなんですか?」

「ああラミリス…魔王だよ」

「魔王!!この小さい妖精さんが!」

以外!という顔をしてるとバレたのか

「何よ!そうよ私が迷宮妖精のラミリスよ!」

「いや二つ名を言われても困ります。ミリムさんやカリオンさんしか面識ないんですから」

「失礼ね!そこの人間?…じゃないわね何者よ?」

「うーん…異世界の怪人?」

マジで人間辞めたんだよなあ…としみじみ感じてしまうよ

「そつ…色んな力が混ざって気持ち悪いわね」

そう言ったラミリスの羽をディアブロのように掴んだテストタロツサは誰もが見惚れる綺麗な笑顔で

「ハルト様、やはりこの羽虫焼き捨てましょうか?」

とんでもない物騒な発言をした

「テストタロツサ!」

普段はカレラやウルティマを抑えてくれるから頼りにしてるんだけどなあ！この人さ血の気多くね!?

そしてラミリスの話を聞くと魔王達の話し合いがあるとか、その名もワルプルギス「取り敢えずやばいイベントってのは伝わる名前ですね」

「奇遇だなハルト、俺も同じワルプルギスを想像したよ」

「これさ…俺が時を戻して何度もやり直さないといけない感じ？え？それは別の人がやる？わかりましたよー！と誰にもわからないツツコミをしていると

「何よ？ってそのワルプルギスの議題が魔王を自称するリムルとアンタを始末するって内容なのよ！しかもクレイマンが軍をこっちに進めてるのよ！」

その言葉にリムルさんと一緒に悪い笑みを浮かべる

「漸く明確に敵意を表してくれたなクレイマン」

「いいねえ、やっぱリコソコソされるより派手に仕掛けてくれる方が思い切りぶん殴れる」

「うわあ可哀想…同情しないけど」

そして世界初の人魔会談は無事に終了した夜テンペストの来賓館で食事と談笑だが内容は

「ワルプルギスカ」

件の魔王の宴である

「どうします?」

今後の命運を占うような展開であるため悩ましい話だ

「丁度良い直接クレイマンの所に行つて倒せるチャンスだ」

「俺としてはガラ空きになった拠点を強襲するチャンスだと思うねえ」

リムルさんはワルプルギスに混ざる、俺はクレイマンの拠点侵攻と方針が割れるが

「ハルトの意見も正しいと思うけどミリムの事が心配だ直接会つてみないと…」

「リムルさんらしいですね…つてかワルプルギスに俺達つて参加出来るんですか?」

「そうだな、なあラミリス!俺達も出れるか?」

「え?ワルプルギスに?…うーん出ても良いけど護衛は2人までよ前にそれで問題になつたからね」

「2人か」「どうしよう」

と考えた結果リムルはランガとシオン、俺はウオズとテスタロツサに決めた

理由?実力とか内面とか考えると外に出せそうなのが2人くらいだからだよ

そしてユーラザニアの国民が戦火に巻き込まれないように避難させる事となつたが到着日数の問題がネックとなる

「じゃあ俺の国を動かして避難する人を…」

「いやそれでも間に合わない…よしんば間に合ってもクレイマンが対策してるぞ」

だがリムルさんが大人数を転移可能の魔法開発に成功したのでユーラザニアの避難が一気に始まる、ハルトはその間

「なあベニマルさん」

「何だ？」

「うちのウルティマをクレイマン戦に連れてつてくれないか？俺の名代として暴れさせてやりたいんだ」

交渉となる特にウルティマは暴れさせると約束させたからな

「あの子をですか？」

「そう、広範囲攻撃なら彼女にお任せだ」

「わかりました」

「ありがとうございます、彼女には貴方の命令を聞くよう言うておきますので」

「お願いしますよ」

「ありがとうございます、ツー訳だウルティマ」

「ありがとうねハルト」

「俺の分までクレイマンの連中を痛めつけてこい」

「うん！」

そして時は来た

「リムル・テンペスト様とハルト・トキハ様ですね、我等が主ギイ・クリムゾン様がお呼びです」

「おう」「分かった」

そして門を潜った先にいたのは赤髪の男：側から見れば大した事ないと感じるが――やべえくらい強いな、この人とは関わりたくねえ――

中身を見抜いて理解したハルトは脅威判定を上げたのであったが彼は俺……というより後ろにいるテストタロツサを見て手を上げる

「久しぶりだな白、元氣そうでなによりだ」

「ええ赤……久しぶりね」

ディアブロの時にも思ったがどうやら面識があるようだな再会しての近況報告……つて待て赤って言ったか……んじやこの魔王が最初の赤かよ!!と警戒心をマツクスまであげる……最悪アナザーライジングアルティメットクウガの出番である

「冥界で争ってた、お前達がその元人間に従ったと聞いた時は何の冗談かって思ったぞ」

「そうね2人は別ですけど私は単なる知的好奇心よ、私的に入れ込んでるけどね」

「そうかいそうかい黄と紫も懐いてる辺り、その元人間は面白そうだ」

目線が俺に移るのを感じた

「どーも」

そっけなく返すと

「おっと2人とも避けた方がいいぞ踏み潰される前にな」

そう言われてリムルさんと一緒に振り返るとそれこそ昔話に出るような巨人が門を越えて現れたのだ

「おっと失礼、小さき者達よ」

紳士的な巨人だなあ…というか声が

「オーマジオウ?」

俺の目標であり恩人である彼と同じ声なのは何故だろうか…他人とは思えない

「ハルト?」

「いや何でもありません…俺の憧れてる王様に似てる声だったので」

そして入ってきたのは気怠気な感じの青年だラミスをチビと揶揄ったり眠たそうな感じという印象だ

何というか個人的に仲良く出来そうな感じである時間があれば仮面ライダーかウル

トラマンでも布教してみようかな？

続いて入ってきたのは黒衣にスーツといたったいかにも吸血鬼と言った感じの男性だ
「やっぱり吸血鬼ってああいうイメージだよな…」

俺の所にいるゴオママあれくらい落ち着きと余裕を見せてほしい、魔王化により祝福を受け取り進化した彼はゴ集団に匹敵する究極体が標準装備になったのもあり俺に下克上を狙ったが俺も強くなっているので逆に締め上げました

あの時程、お仕置きしたガドル閣下や暇潰し感覚で相手したダグバの気持ちが分かった日はない、今は落ち着きを戻しているがな

続いては、ハーピーの女性…何というか妙齢の美女という感じだなりムルさんも見惚れてるが気持ちはわかる

だがさっきの吸血鬼とハーピーの人の従者だが魔王格の力を感じる何なら吸血鬼のメイドさんは魔王よりも強いと思う

最後に来たのはミリムさんとクレイマン

「さっさと歩けよウスノロ」

とクレイマンがミリムを叩いたのを見て周りの魔王が騒めく中、リムルさんは敵意マシマシの目をハルトは怒りに満ちた顔でクレイマンを睨みつけていた

「覚悟しろよクレイマン」

「どう落とし前つけてやろうか」

この日 魔王達の運命が動き出す

それは異世界から来た魔王も同じ

魔王の宴 ワルプルギス

始まったワルプルギス、まずは参加者の紹介からだ

暗黒皇帝 ギイ・クリムゾン

白金の剣王 レオン・クロムウエル

眠る支配者 デイノー

大地の怒り ダグリユール

鮮血の霸王 ロイ・ヴァレンタイン

この五人は完全に初めましてだけドリムルさんは魔王レオンに浅くない因縁がある
ようでバチバチである

そして面識を持っている

妖精女王 ラミリス

破壊の暴君 ミリム・ナーヴァ

しかしミリムさんの様子はやはりおかしいというのが印象だ
んで今回の問題の敵

人形傀儡師 クレイマン

そして協力関係にあると考えられる

天空女王 フレイ

カリオンさんは不在なのもあり

ジュラ・テンペスト連邦国盟主のリムルさん

逢魔王国 国王として俺と紹介がされた：

「何か二つ名って良いなあ〜」

『お前にもあるだろう影の魔王とか』

「やっぱお洒落なのが良いじゃんか……ん？」

何故かダグリユールさんとヴァレンティンさん、レオンさん…特にレオンさんから凄
い形相で睨まれた気がしたが気のせいだろうか。な身に覚えはないし

そして本題 クレイマンが発起人なので話を始めた

曰く

カリオンさんがリムルさんと俺と共謀してカリユブデイスやヴェルドラの封印を解
き放ちファルムス王国軍を壊滅させ覚醒魔王となったが席がない、だからクレイマンを
追い落とそうという陰謀に気づいた部下のミュウランを殺害した、ミリムさんはクレイ

マン側に立ちカリオンさんと首都を滅ぼしたと

情報操作というか何というか詭弁とわかる、反論したいが今回のメインはリムルさんである為、俺はサポートに回ろうと思う

「証拠は？」

尋ねられると部下の1人ミュウランが俺達に殺されたと話すが、ああリムルさんが疑似心臓で助けたのを知らないのか

「皆さんこの場で魔王を自称する彼らを肅正すべきでは！」

と主張が終わったのを見て

「茶番ですね」

計画が杜撰すぎるエボルドから策略のイロハを教えて貰え、あのくらいしないと策士とは言えんぞ

「ああ…クレイマンお前、嘘つきだな」

「何い？」

「ミュウランは生きているしヴェルドラは友達だ…後証拠がお望みつてなら」

リムルさんが手をかざすと現れた映像にはクレイマンの部下らしい男が何かしらを飲まされカリユブデイスに変異した映像や仮面の男女がクレイマンに計画の失敗を報

告する映像が流れていた

「こういうのでどうだ？」

「映像がありますがどう反論します？」

「で、出鱈目だ！皆さん騙されてはいけません！」

「ならそつちも証拠を見せてみろよ」

「同じようなものがあれば見せますよね？」

「調子に乗るなよ邪竜の意を借るスライムと人間があ」

「マジないわーこのエセ紳士……ん？」

と熱弁する中で違和感を感じた

『おいハルト、精神支配受けてんぞ』

ーやっぱりか何かチクチクすると思つたー

『無駄なのにな』

ー言うてやるな、けどー

「ねえ今、俺を精神支配しようとしてるよな？」

「っー」

驚いているが関係ない

「参加者を精神支配して嘘の証言引き出させようってのはワルプルギスで当たり前なの？」

と議長のようなポジションにいるギイに視線を向けると彼は否と言う

「いいや、ワルプルギスでは己の言葉で相手に訴える事を是とするよ」

「んじゃあルール違反な訳だなクレイマン」

「は、ハツタリだ！」

「残念だね洗脳しようにも俺は精神支配攻撃には魔王化の耐性だけじゃなくて生まれつき耐性があるもので、それもすんごい奴がさ」

何せ使えば暴走前提のアナザーライダー達と年単位でいて暴走したことないからなくそれに魔王化で精神攻撃耐性手に入ったし、俺に洗脳や催眠は効かないぜ！とドヤ顔をする

「……………」

沈黙するクレイマン……うーん

「あくそう言う」

何となくだが魔王とクレイマンの思考の違いが読めてきたぞ

クレイマンは見た通り打算とか損得勘定とかを優先するタイプだワルプルギスも他の魔王を集めてる間に獣王国へ進軍し何かする予定だった事からも策士タイプである

が

他の魔王達は力こそ全てというある意味でシンプルな思考回路がある、だからこそというかりムルさんと俺を糾弾する確実な証拠がないならば戦って証明しろって事だろ
うな水掛論よりも実力って事だ

その差異を見抜けなかったのが命取りだったな…というより政治的な根回しが杜撰の一言であろう

リムルさんも似たような感覚を抱いたようで

「別に俺は快適な国が作りたいただけなんだよ…それを作るには人間の協力も必須なんだよだから教会でも国でも何でも俺の邪魔をする奴は敵だ、お前みたいにな」

「くうー！」

クレイマンが悔しそうな顔をしているのを見てリムルさんが机を捕食したのか消滅した

皆は立ち上がるがデーノは寝ていたので姿勢を崩して倒れたのだが…そのまま寝ている

「えーと…大丈夫ですか？」

流石に巻き込まれないように引きずりながら心配するが

「……………zzzz」

この状況で爆睡かましてる魔王デイーノを見て

「色々と遅しいなこの人！」

結果を言えばリムルさんとクレイマンの魔王の座をかけた喧嘩となる、しかしリムルさんが加勢すると分が悪いと判断したハルトは

「っ！リムルさん俺も加勢します！」

腰に手をかけてアナザージオウ用のドライバーを呼び出しアナザーウオッチを構えるが

「おっとお前には別の話がある、参加は終わってからだ」

「え？」

そう言われリムルさん達とクレイマン達が結界の中に隔離された

「俺の話ってなんですか！」

「主に二つ、これはクレイマンの議題とは関係ない話だがな」

「ん？」

俺魔王に何かしたかと首を傾げていると

「まず一つ目…お前この世界をどうする気だ？」

リムルさんにも問いた問題だが答えは得ている

「俺は自分の国で楽しく面白く暮らせれば良いですよ…まあ今回みたいに邪魔する連中

がいれば相応の対処はしますがね…それが誰であろうとも俺の敵…ですが何もしなきゃ何もしませんよ」

専守防衛が俺の常と領くとギイは納得したようだが

「まあいい…次の理由がこれの主にお前をワルプルギスに呼んだ理由でもある」

「ん？クレイマンの件で糾弾するのが目的じゃないの？」

「それはクレイマンの理由であつて俺たちの理由じゃない」

「じゃあ理由つて」

「まあ簡単に言えば賠償だな」

「賠償？」

おかしい俺は他の魔王に喧嘩など売つた覚えがないのだが…

「申し訳ない身に覚えがないんですが」

「正確に言えば君の配下にいる悪魔達が起こした事への損害賠償だ小さきものよ」

「ああ俺など領土を攻撃されたから嫌だと言つてもしてもらどうぞ」

ダグリュールさんとレオンさんの話でハルトは理解した

「領土？攻撃？………あ」

「あの三人娘やらかしてたのか！ー」

慌ててテスタロッサの方を見るがやれやれと肩をすくめている

「私ではありませんわハルト様」

となると

「カレラとウルティマが何かやらかしたのか！」

頭を抱えて悩むハルトに他の魔王達はキョトンとしていた、代表して魔王ディーノが「なあアンタ…あの悪魔達に名前つけたの？」

「名前？つけたよ？三人とその配下にも」

「おい嘘だろ！何で人間が悪魔に名付けして平気なんだよ!!」

「ご安心を一度死んでフェニックスの力で蘇生しましたから大丈夫じゃなかったですよ」

「うーん…魔王化したから？」

怪人の力が使えなければ即死だった

「理由になつてねえよ！」

「……………」

ディーノは眠気が吹っ飛んだようにツツコミを入れ、ダグリユールとヴァレンタインは驚いて口が塞がらずレオンも顔には出さないが内心では驚いていた

またこの魔王も

「おい何だ白、黄と紫も名前つけてもらったのか？」

「ええ…後、ノワールも名付けされましたわ」

「ほお…黒はあのスライムにか？」

「ええ」

「そうかい…」

頷くテスタロッサにギイは面白いなと言う目で2人を見ているが賠償話は続く

曰く

ウルティマはヴァレンタインとダグリユールの領土に顔を出しては暴れていた

カレラはレオンの領土に現れては気まぐれに核撃魔法を打ち込んでいたと…テロだね言い逃れできないな

「うちのものが申し訳ありません！」

これは謝罪しかない素直に頭を下げると

「しつかりと賠償はさせて貰います！」

流石にしないと不味い！と判断した

「だとさお前たちは何を要求する？」

「では私としては…」

結果として言えば三者の要求は破損した物品の補填と賠償、そして再発防止だ…賠償はそれに色をつけて手打ちとしたが

「懷事情が一気に寂しくなった」

かなりの額賠償されたと言っておこう……さて

「終わりなら俺もクレイマン締めていいですかな？」

「ああ好きにしろ」

諸悪の根源滅べ慈悲はない……あと断じてワルプルギスを起こした事への八つ当たりではない！起こさなければ賠償されなかったのにと思い目線を向ける

『それが全てだろうが』

「うるさい……リムルさん！加勢に来ました！」

「……………」

「あ、ハルト……悪いもう終わってるぞ」

ボロボロになって倒れてるクレイマンと笑顔のリムルさんを見て

「リムルさん!?俺が加勢して殴るまで待つて貰えませんでしたか！遅れて助っ人登場とか俺カッコ悪いじゃないですか！」

「いやあ悪い悪い」

「それと……何でヴェルドラさんが来てるんです？」

あそこで某龍の玉のような激しい空中格闘バトルをミリムさん相手にしているヴェルドラさんを見ていた

「あー…何か俺のスキルで来てみたいで」

「へえ……………ん？」

するとヴェルドラは男の子なら一度は真似をするあの必殺技の代名詞とも言える構えをする

「かゝめ〜〇〜め〜……………波あー！」

放たれたエネルギー波はミリムを吹き飛ばしていた

「おいコラ、波を打つな波を」

「おおおおお！すげえ！マジで打てるんだ…波を！」

子供のように感動するハルトを見て

「感心してどうする!!」

と話していたら旗色悪しと判断したクレイマンがミリムに

「何をしているのですミリム！狂化暴走（スタンビート）しなさい！この場にいる全員を殺し尽くすのです！」

「っ！」

それは不味いと慌てる2人だがミリムはケロツとした顔で

「何故そのような事をする必要があるのだ？」

「へ？」

俺たちのよく知る天真爛漫なミリムの顔をしていた聞けば黒幕を探るために敢えて術にかかったフリをしていたとのこと

「すげえ演技力……うちのカメラオンにも負けてねえぜ」

あの人さ狩崎さんが違和感持たなければ誰にも気づかれなかったからな……凄いい人なんだよ以外と強いし

「ま、まあ俺は気づいてたがな！」

「流石ですねリムルさん!!……けどそうなるとミリムさんはクレイマンを騙す為に獣王国を攻撃したことになるんじゃない」

「あ……」

別の意味でやばい問題が発生した瞬間である

「そ、その人間の言う通りだ！貴女は私を欺くためにカリオンを殺したのですか！」

だが結界の外から

「おいおい誰が死んだって？」

それは魔王フレイの背後に控えていたライオン頭の従者さんだった……この声

「まさか……」

「俺がリムルやハルトを唆したとか面白い事言うじゃねえか？なあクレイマン？」

そうクレイマンが呟くとライオンの頭が外れ……被り物だったんかい！と内心動揺し

てるが現れた顔は

「カリオンさん！」

無事を確認して安堵するリムルさんは最初は動揺していたようだが落ち着いた雰囲気
気で

「魔王カリオン…無事だったんだな！」

「おう2人とも俺の民が世話になったな」

「いいよいいよ」

「そーそー困った時は助け合いですよ」

だがクレイマンはそれ所ではないようで

「カリオン!?だが…フレイの報告では…」

慌ててフレイを見るが

「あら?いつから私が味方だと勘違いしてたの?」

「なん…:…だと…」

「お前はお前でネタに走らんで宜しい」

リムルにツッコミされたがハルトは予想外だったと言う顔で魔王フレイを見ていた
アンタ敵じゃないんかい!!

「何というか…怖っ」

「黒？」

「えーと…多分ディアブロさんの事です」

「え？ディアブロと知り合いなのか？」

「でしようね彼、テストアロツサ達やディアブロさんと同じ原初の悪魔ですよ」

「えええ！」

「しかし黒と白達に名付けをするとはな…魔王を名乗ろうとする事はある」

と話していたら

『魂を還元 進化を開始します』

この声確か…収穫祭で聞いた…世界の声!? そう思い出したと同時に皆が視線をクレイマンに向けてると

「ふははははははははははは！天は我を見捨てなかったあ！」

高笑いしながら傷が癒え先程とは桁外れな力を解放する、その力は先程よりも増大しているが

「勝てそうだな」

『偉く自信满满々なハルト』

「当然、何せ今の俺は初変身無敵化があるからな」

まだ変身してないから使えるもんね！と胸を張るが

『何てメタメタな』

「つせえリムルさんに良いところ取られてるんだからコレくらいは言わせろよ…つかリムルさん俺も加勢します」

「いや下がっててくれ、魔王の席は自分で分取りに行くから」

覚悟決めてる人の目だ止める気はない

「そうっすか…頑張つて下さいね」

何というか…

「つまらんなあ俺も暴れたいのに…ん？」

『どうしたよハルト珍しいな暴れたいなんて』

「え？俺そんな事言ったか？」

『おいおいボケたのか？キャロルの事を笑えないぞ』

「うっせえよ…それよりも終わりそうだけ」

目線を戻すとリムルさんが手を前に出して

「クレイマンを処刑する文句のある奴はいるか？いるなら相手するけど」

と言うも周りは止める気はないようなので仕方ない

「イツテイイってさ」

某死刑宣告をクレイマンに示すと綺麗に吸い込まれていった

「これで一件落着…つて結局俺何もしてねえじゃん！」

魔王達に賠償金取り立てられただけだよ！と頭を抱えるのであった

八星と番外

さてクレイマンの死に伴いリムルさんが空位となった魔王の席についた訳だ、そしてヴァレンタイン以外は賛成したのだがヴェルドラさんが何故かメイドに絡んだ結果何と本物の魔王はメイドさんだった名をルミナス・ヴァレンタインというらしい

西方聖教会が信仰するルミナス教と関係あるのかな？と考えると

ミリムに負けた事、リムルや他の魔王との実力差を知ったカリオンさんとフレイさんが魔王を辞めミリムさんの配下になった事で

「じゃあ十大魔王じゃなくなったのか」

とリムルさんが言うのと周りの魔王達は戦慄してしまう

「参ったな、そうとなると新しい名称を考えねばならない」

ダグリユールさんが頭を悩ませている

「幸い、ここには8人の魔王がいる良い知恵も浮かぶだろう」

「前回それが決まらなくてワルプルギスを何回も開くハメになったからな」

「え？ワルプルギスってそんな理由でもひらくんですか？」

「おう」

「ん…8人？9人じゃないのか？」

とリムルがハルトを見るが肩をすくめて一言

「俺はリムルさんと違って魔王の座を力で取ってませんからね、ノーカウントで良いです。それから新しい名称の対象になる魔王は8人ですよ」

とカラカラ笑うがギイが待ったをかける

「それは困るな覚醒魔王…しかも原初3人と数多の異世界の魔人達を傘下に加えているような勢力を放っておく訳にはいかない」

「そう言われてもな…俺はリムルさんみたく力を見せた訳じゃないし」

だが気持ちは分かる、自分達と同格に近い存在が無所属でいるなど警戒するしかないだろうな

「ならハルトもワルプルギスに参加出来る魔王だけど国柄、異世界を旅する事もあるから8人と同格だけど一部特権のない別枠の魔王にするってのはどうだ？」

「じゃあワルプルギスの開催と主催は出来ない以外は同格にするとかどう？」

とラミリスの提案にギイも納得したようで

「成る程、それは良い提案だお前たちも異論はないな」

「賛成だ」

「俺も…賠償金を踏み倒さないように顔出しはしてもらおうぞ」

「oh…」

皆が頷く、いやいや待て待て！

「リムルさん…俺が異世界で魔王って呼ばれてるの知ってますよね？」

「え？今更だろ？そう呼ばれるのは」

「そうですけどね！慣れましたよ！」

何せ実妹からも魔王呼びされたからなとゴチる

「おい、もう決まった事だ一々騒ぐな」

「へい」

恨むぞリムルさん、あと

「祝いたい…祝いたいが堪えろ私」

「あらあら逢魔に帰れば祝えますわよ」

「ええ…言われずとも…」

俺の従者が暴発しそうで怖い…今は堪えてね

そして名前を考えているとヴェルドラさんがリムルに任せようと提案し全員が丸投げした

ギイに至つては半ば脅すような形で任命した
少し思案し空を見ながら

「八星魔王……オクタグラムつてのはどうだ」

これが満場一致である……アツサリと決めたな

そしてリムルさんは新星（ニュービー）

俺は番外（エクストラ）と二つ名が決まるのであつた

その後 各魔王の支配地域の話となりリムルさんはジュラの森全域となり俺はフロンティア……逢魔王国がこの世界で名実ともに俺の領土と保証されたのである

んで終わった後、魔王レオンとヴァレンタインは帰つたリムルさんは魔王レオンに問い詰めた事があつたらしいので残念そうな顔をしていた、その後ギイ主催の食事会があつたのだが

「……………」

ハルトは出された料理を食べ硬直していた

「スゲー美味い誰が作つたんだろう……レシピ教えてくれないかな……俺に再現出来るだろうか？」

時間はかかるがやってみる価値はあると思わざるを得ない程の美味である

『お前が感動するとは相当だな』

「ああ…ワルプルギス出てよかったあ〜」

バクバク食べるハルトにアナザーWは呆れた様子で

『さつきは出なきや良かったとか言ってたのにな…チョロいな』

うるさいと答えながらもお酒を飲む…美味しい！と笑顔になるが

「酔えない？」

いつもなら酔ってダル絡みをするのにと首を傾げると

『ああ状態異常無効だろうな酩酊も状態異常になるんだろうよ』

「そつかあ…まあ良いや美味しいし〜」

『ある意味酔わない分、面倒くさいんじゃない？』

「それに」

「ふにや〜」

ラミリスは酔い潰れていたのをみて

「耐性も魔王で個人差あるみたいだし」

そう話していたがハルトは思い出したようにリムルさんに相談を持ちかけた

「へえ〜異世界の娯楽を？」

「ええ…この世界でも売ろうと思うのですが流行るかどうか…」

「なら俺が腕利きの商人を紹介するから試したらどうだ？」

「そうですね是非紹介してもらえると助かります」

と話しているとディーノさんの琴線に触れたらしく

「なあ、その娯楽ってどんなの？」

「えーと…」

売ろうとしているのは六面揃えるキューブや知恵の輪、パズル、あとはボードゲームの一部。そして国の一部には映画や漫画、ゲームを売るつもりだと話すと

「へえ……」

何やら興味津々な様子だ

「えーと…良ければ今度遊びに来ます？」

「お、良いのか？ やったぜ〜」

その時、ダグリユールさんがやった！ みたいな目をしてたが何故だろうか？

と各々の時間を過ごし会はお開きとなった

そして逢魔王国に帰ると国民皆が膝をついて出迎えてくれた

「え？ あ…何で皆さんその姿勢で？」

「祝え！我が魔王が名実ともに魔王を襲名したこの日を！」

とウオズが我慢してたのか爆発すると周りの面々をオー！と喜び始めた…少し複雑である

「そっかあ…魔王になっちゃったなあ…ま、番外だからリムルさん達と少し毛色が違うけどな」

「それでも魔王ちゃんが魔王になったのはめでたい話しじゃないか」

「ああ…我等もついてきて良かった！」

「はい！魔王襲名おめでとうございます！」

「お前等…ありがとう」

「あ、おかえりハル！聞いてよボクね魔法でカリユブデイスを吹き飛ばしたんだよ！」

「ただいまウルティマ、えーと…どっちのかなあーメギドなら説教だぞ」

アイツはお気に入りに入るんだからな…何せ作成に当たって、ゴレム、アヒル、ハンザキメギドを素材にしこの世界のカリユブデイスやシンフォギア世界のネフィリムの破片を取り込ませた特注品だからな、材料があれば魔導書でも作れるな…

「いや我等が全員で相手した方だぞ我が君」

「そっちか…良かった〜偉いぞウルティマ〜」

「うん！悪魔公に進化したお陰だよ！」

「凄いな種族進化って…カレラも留守を守ってくれてありがとうな」

「何気にするな！」

「けど過去に他の魔王を攻撃した件は別で話があるから後で執務室に来るように」

「っ!!テスタロッサ!!!」

「あら私がバラした訳じゃないわよ、ギィ…赤が主導で話してわ…まあレオンやダグリユール達からすれば賠償は当然の要求よね」

まあ、今は置いておいて

「んじや宴会と行こ」「その前に」何さジヨウゲン？」

「魔王ちゃんにお客さんが来てるの」

「客？」

案内された先に座っていたのは

「エルフナイン？」

キャロルのホームンクルスで助手の子だ

「は、ハルトさん！」

「久しぶり元気だった？…どうやって此処に？チフォージュ・シャトーのポータル関連は全部使用不可なの…」

そうキャロルと離れたあの日から

篠ノ之製作所、フロンティアにあるポータルは使用不可となった恐らく行き来を管理していたチフォージュ・シャトーが機能を停止させたと分析していたのだが抜け穴があったのか？

アナザーデイケイドのオーロラカーテンでもないと今は転移は無理なのであるが

「あの…実はハルトさんが前に住んでいた家の畳に残っていた転移陣を擬似ポータルに改造してきたんです」

「前に住んでた家？……畳の裏？」

それってまさか

—————

「まあな…だがこの畳の裏にオレの転移座標を仕込んでおいたのだ！これさえあれば簡単に転移が可能だ！」

と自慢げに和室の畳を剥がすと裏面には俺にはわからない模様が刻まれていた

「なんて錬金術の無駄遣い!!」

—————

あの家に残してた転移陣か

「ああ…キャロル残してたなあ…」

「懐かしい話ですね」

「あの時は狭い部屋に野郎4人でルームシェアだったなあ」

「うむ」

「今じゃ一国一城の主になったからなあ」

「時の流れは恐ろしいね」

「いや全く」

「本当に」

しみじみ話す4人に

「あの…懐かしんでる場合でしょうか？」

フィーニスも冷めた目をしていたので話を戻す

「そうだな…しかしあの転移陣を応用してポータルにすると驚いたよ流石はエルフナインだな」

「えへへ…ありがとうございます！」

「それで今日は何用かな？俺も今は凄く忙しいんだけど」

具体的には魔王達への損害賠償請求でな!!

「あ、そうでした…ハルトさんキャロルを止めて下さい！お願いします！」
「だろうなと思った」

「断る」

「え……」

「俺のことを忘れた薄情女の事なんて知るかよ」

「そ、そんな事ありません！キャロルはハルトさんのことを「エルフナイン嬢」ウオズさんもハルトさんを説得して下さい！！お願いします！」

「それは出来ない相談です」

ウオズはキャロルとの約束を守る為に動いていたから

「そんな…ハルトさんとキャロルはあんなに愛し合ってたのに…」

「その思い出もキャロル嬢は見事に全部燃やしちゃったんだよね」

「ハルト様を覚えてないからな」

事情を知るジョウゲンとカゲンも加わると

「……………」

「それに仮に全部が嘘の場合、エルフナイン…君はキャロルをどうしたいんだ？」

「ぼ、僕は……」

「答えられないんでしょう？君がここにいるのは逃げた先の人達を助けたいからであって

キャロルの事なんて二の次だからな…キャロルの為にならないから早く帰ってよ」

「……キャロルがハルトさんのことを忘れてないですよ…忘れる訳ないじゃないですか!!」

「「っ!!!」」

「え?」

「ハルトさんの望みは大事な皆が笑顔にですよね! だったら大好きなキャロルの笑顔も守って下さい! それが僕の望みです! SONGSの皆とか関係ないんです!!」

「やめろよ……今更そんな事言われたって…」

その一言に耐えられなくなるハルトは叫んだ

「頼むから帰ってくれ!!」

「……わかりました失礼します…: だけど僕も諦めません!!」

エルフナインが退室したのを確認すると動揺を隠せないまま胸ぐらを掴む

「ウオズ……お前全部知ってて黙ってたのか!」

「申し訳ございません、キャロル嬢から黙るように厳命されておりました」

「蒸し返す趣味は俺にはないから咎めないけど…なっ！」

ハルトは思い切りウオズの顔面に拳を叩き込んだ鈍い音が響く

「これは黙ってた罰だ以降俺に隠し事は許さないぞウオズ」

「はっ！身命を賭して」

「さて…お前等、俺が魔王に目覚めて最初にやる事を伝えるぞ」

「…何なりと」

ハルトは覚悟を決めた目で

「あの世界に行つてキャロルを逢魔に連れ帰る…異論反論は認めん」

「っ！ですが今は魔王襲名に伴い各勢力の長の挨拶回りが」

「その辺は問題ない、カメレオン…はファルムスに潜入中だからワームにでも擬態してもらうよ俺の影武者だ」

「ですが…」

「それと俺が決めた事だから一人でいく」

「っ！お一人で行くつもりですか！」

「そりゃそうだろ俺の我儘だし、この国の事もあるからな教会やファルムス王国の後始末も残ってるのに全軍出発とか出来るわけないだろう？」

「……………」

「つー訳だ少しの間離れるから留守を頼むぜ皆…解散！」

退室しオーロラカーテンを開こうとした時

「やあやあハル君」

「また脱走か？」

「それは感心しないね」

「皆…俺は「キャロリンを迎えに行くんだよね？」おう止めるなよ終わったら逆さ釣りでも何でも受けてやるから」

「まさか逆だよ!!」

「え？」

「私達はついていく気だ一緒にな」

「そもそも君があの時、私達に内緒にさえしなければ説教もなかったんだよ」

「何で…」

「私達もキャロリンが大事だからねー！」

「この件の責任を取らせないとならんからな」

「私としては正妻戦争から一番厄介なのが脱落して貰うと嬉しいんだけどね」

「スーちゃん本音が怖いよ！」

「冗談だよ、まあ元同僚が関与してるなら連中を一掃して私が組織の長になれば良いんだからね……ふふふ……」

「この子だけ別の思惑があるよハル君！」

「いいよ別に……寧ろ良いぞもつとやれ」

「ありがとう」

「ハル君!？」

「けど良いのかこれは俺の我儘だけ……」

「そうかならついて行くのは私達の我儘だ」

「君は他人の我儘を止めないよね？」

「はあ……好きにしろ……だけど死ぬ事は許さんからな行くぞ」

とハルトはオーロラカーテンを超えてシンフォギア世界へ足を踏み入れたのであった

シンフオギアGX編

調べもの

さて転移した先はエルフナインが転移場所に使っていた昔の家だ

「ここは……」

「俺達が暮らしてた家だ……そうだな……定期的にフィーニスが入る前後くらいまでいたな」

あの後には身バレ防止も兼ねてチフオージュ・シャトーで暮らしてたからな

「へえ……ここがハル君達が最初に住んでた家なんだあ」

エルフナインが来たって事だから連中が荒らしてると思ったがそうでもないな……

『そうだな盗聴器やカメラの類もないぜ』

「そっか……杜撰だな」

「ここが魔王始まりの地か……」

「そうそうあの時は1人で広いかなって思ってたんだけど未来から3人が来て、キャロルがサンジェルマンさん達が連れて来たりって賑やかだったんだよなあ」

懐かしむような年月かと思うが思い出すと感慨に浸る中、千冬が尋ねる

「それでここに来た理由は？」

「エルフナインが使った転移の錬金術を改造して逢魔と繋げる…そしたらキャロルのポータルを介さずに逢魔主力を呼べるのと万一の抜け道だよ」

「本音は？」

「最悪の時に備えての皆の逃げ道だよ」

それこそ狂気に駆られたとかなければ良いだけなのだが保険は多いに越した事はない

「さて……と」

「どうしたハルト？」

「どうやってこの錬金術を改造すれば良いんだ？」

その一言に3人は転けそうになる

「おいカツコつけた意味がないぞ」

「締まらないなあ…これがハル君クオリティ」

「うっせえやい！考えろ…出来る人…出来る人…そうだ！もしもし！！」

思い立ったが吉日と思い電話をかけたのはサンジエルマンさん達である

「つまり私達にこの錬金術の転移座標へ変えて欲しいって事かしら？」

「はい！お願ひします！」

「まあキャロル級の錬金術を改造するなど私達レベルでなければ無理な訳だ」

「そう言う意味ならハルトは見る目があるわね」

「いやあく頼れる方が御三方しかいないものでして…」

「何故かしら？」

「作つた本人に頼めば良いじゃないの」

「そうか2人は知らない訳だ…この男はキャロルにフラれてた訳だ」

「ええ…こつ酷くフラれました…お前みたいな男知らんと…」

「ほお…なら私達と一緒にするのはどうだ？」

プレラーティが偽悪的に笑い

「は？」

「私達もお前には興味がある、まあ色恋ではなく未知の技術や知識を学びたいという知識欲だ今まではキャロルに独占されてた訳だがな部下の報告で聞いたが異世界で王となったのだろうか？涙腺ものの知識や技術が集まる訳だ」

「いや頼めばフロンティア載せましたよ？」

「そうね貴方なら断らないのは知ってるけど」

「キャロルに止められてるのよ」『オレも乗ってないから我慢しろ』って〜
「あいつ何してんだ？」

「さあな今の真意などわかる訳ない訳だ：ほれ終わった訳だ」

「ありがとう、プレラーティさん」

「礼は不用な訳だ：今度フロンティアに乗せるだけで良い訳だ：3食フルコースでな」
「はいよ」

というとき3人は転移して帰ったのを見て

「アナザーW検索」

今の状況を知りたいと相棒に頼むが

『そう言うと思って検索済みだぜ』

「何?！」

俺が言わなくても仕事をしてる！この検索エンジン更に出来るようになったな…

『お前の魔王化で俺の力もアナザーサイクロンジョーカーエクストリームになったから
な処理能力は飛躍的に向上してるんだぜ!』

『言うならばアナザーWは今、地球というデータベースと直結してる状態だ』

「スゲーー!」

出来るようになったじゃない！出来てる!!

『よし報告するぜ』

アナザーWの報告は現在は

シンフォギア奏者＋エルフナイン、ナツキ

vs

キャロル

という状況となっている、エルフナインは打開策としてヘグニ・ドヴェルグの遺産である魔剣ダインスレイフをシンフォギアと融合させた決戦装備 イグナイトモジュールを開発中とか

キャロルも負けじとライダーシステムを採用しており何と

「800年前のオーズとか何の冗談だよ」

小説版で脅威しかなかった王の力を得ているではないか

「詰んでるじゃん、そりゃエルフナインが俺に助けを求めるか」

800年前の王の力は不味い、1人で軍隊と戦うようなものだからな

覚醒魔王になりアナザーライダーも最強形態を得た今なら分からないが800年前のオーズ相手か

「覚醒した俺で互角なんだよなあ」

「以外だな圧倒すると思ったが…」

「というより」

そもそもこのキャロルのスペックが高いのだ、進化してやっど互角と判断するしかなかった…というのもの

「キャロルはライダー知識を持つてゐるからなあ…俺の手札の8割がバレてゐるしオーズがな」

コアメダルの組み合わせ、コンボや亜種を含めればオーズは平成ライダー最多フォーム数を誇るのだ

手数で勝負する俺に対して手数で挑める例外それが仮面ライダーオーズなのだ

『肝心な事を忘れてるぞハルト』

「アナザーオーズ？」

『この王がいれば800年前のオーズに大ダメージ…いや倒せる事すら可能…やはり私こそが最大最強王だア!!』

『オーマジオウに謝れ』

『…：謝罪するようなことをした覚えがない』

『お前等、もしまたオーマジオウと戦う事になったらアナザーオーズは見捨てるぞ』

『『異議なし』』

『貴様等ア！は、ハルト！貴様は！』

「見捨てる訳ないだろ？お前達もそんな事言わない仲良くしてくれ…俺は仲間は見捨てんよ、それにアナザーオーズの意見も一理あるしな」

「言いつ分はわかるアナザーと本家ならば互角の戦いが可能だし同じオーズなら特攻ダメージが入るからなキャロルと戦うには適任だろうけど」

「最悪お前が破壊されるから却下だ…キャロルはオーズを何周してると思う？相手の土俵で戦うもんかよ」

『何だとお！』

『まあハルトならそうするよな』

『自分の土俵まで相手を落とすのが常套手段だからな』

「わかってんじゃないん…って事は、シンフォギア側のライダーはナツキだけ？」

『いやそれがな』

「ん？」

『ハルトはウオズに委託したライダーシステムの譲渡する人を覚えてるか？』

「ああ、あの立花響を狙い撃ちにしたような人選の奴？」

「明らかに私怨混じりの人選だったのを覚えているよ」

『そうだ…んで』

聞けばウオズが天羽奏と3人にライダーシステムを提供した

天羽奏にはプロトバース

安藤創世にはリモコンブロス

板場弓美には仮面ライダーマツハ

寺島詩織にはエンジンブロス

G3は装着の都合で場所を選ぶからと候補からは外されたのであるゲネシスドライブはロックシードの副作用的に辞めた方が良いとなったと

それが今、奏者側で戦ってるらしい

「結構数では劣勢…か」

しかもイグナイトモジュールなる隠し玉を考慮すればキャロルもワンチャン危ない…だけど違和感がある

「キャロルがそんな不確定要素を残したままにするか？」

長い付き合いで彼女が合理的な思考をすると知っているだからこそエルフラインやナツキの逃亡を未然に防ぐ事をしなかつたことが気になる

「まずは移動だな…ここは連中も目をつけてると見た…転移ができりやなあ…」

最悪チフオージュ・シャトーに乗り込んで決戦というのもあるが

「乗り込む方法がない」

キャロルから貰った転移結晶も使えなくなっている今ではお洒落な宝石でしかない

「はあ…オートスコアラアの誰かしらから取るしかないかな」

持つてるならガリイ、ファラ、レイアの3人…ガリイなら確実だな

「錫音頼めるかい？」

「何を？」

「使い魔を何匹か放つて街を探索してくれ俺のも出す」

「人海戦術か…悪い選択肢ではないね」

「それならカンドロイドは使わないの？街においてるよね？」

「束の言う通りだライドベンダーを使えば良いのでは？」

「2人の選択肢も悪くないんだけど…キャロルがシステム管理してるからな使えるかが

分からないし使うと俺達がいるのがバレル」

「そうかなあ…キャロリンが錬金術師でもライドベンダー関係は科学だから束さんの領

域だと思うなあ」

「あ……よし使い魔を出した後、ライドベンダーを取りに行くぞ」

錫音と一緒に使い魔とディスクアニマルを大量に展開し家の1番近くにあるライドベンダーにセルメダルを投入しボタンを押したが変形しない

「よしよし」

自販機モードのライドベンダーを傾けて跨ると

「はい変わった!!」

「何をしている…」

「変わるかなと思っただがやっぱダメか…東」

「はいはい! 東さんにまっかせなさい!」

とライドベンダーに自分の情報端末を接続させると

「ふむふむ…キャロリン以外と細かく作ってるなあ…よし良いよもう一回押して見て」

「おう」

再度押してみるとライドベンダーは可変してバイクモードへと至る

「もう一台あれば問題ないか、えーと誰か俺の後ろに乗ってもらう形になるけど…」

「「私が乗ろう(る)(よ)!!……………あ?」」

息ぴったりで嬉しいんだけどバチバチ争わないで!

「仲良く喧嘩しないでくれる!? 今は一刻も争うんだよ!」

私の為に争わないでと言いたいが…辞めよう不毛だ

「それは東さん達も同じだよ! チーちゃん! スーちゃん!! ハル君とのタンデムを賭けて

勝負だ!」

『ドラゴンフルーツエナジー』

「良いよ最後まで残った方が勝ちだ！」

『ドライバーオン…ナウ…』

「良いだろう…勝つのは私だ！」

『メロン』『メロンエナジー』

「変身!!」

『ソーダ!ドラゴンエナジーアームズ!』

『チェンジ…ナウ』

『ミックス!ジンバーメロン!ハハア!』

「束さんのゲネシスドライバーの力、とくと見るが良いさ!」

「私の魔法は科学を超える!」

「ふん肝心なのは己の力だ…それを教えてやる!」

「はあああああ!」

斬月とデューク、ソーサラーは各々の遠距離攻撃を発動する…まあ結果は言わずもがな大きな火柱や爆発音が鳴り響くのであった…ああ

「いやあ…潜入任務って大変だなあ…」

『カメレオンの奴…頑張ってるのだな』

「だね…今度褒美奮発しなきゃ…」

『おい止めろよ!!』

相棒と共に遠い目をしているとアナザーWの意見に従い止めに入ろうと思うが

「これ…俺も巻き込まれね？」

『まさか…これがキャロルの罠か!』

『タンDEMかけて内紛起こるとか流石のキャロルも予想してねえだろ』

「いや月の欠片やフロンティア事変まで計算してたキャロルだからきつと考えてるよ」

『慌てるな! キャロルの罠だ!』

と俺達が動揺していた

—————

その頃 チフォージユ・シャトーでは

「ん? ライドベンダーのシステムをハッキングした奴がいる?…どれ少し調べてみるか

……」

キャロルはタカカンドロイドから来た映像をバツタカンドロイドで見ると

「このハッキングのプログラム…まさか束のものか？音声が入っているか…何々」

久しぶりの知己の映像に頬が少し緩むが

【ハル君とのタンデムを賭けて勝負だ！】

「は？」

キャロルの眉間に眉がよるみれば束達がハルトの乗るライドベンダーの背中をかけた変身して争っていた

「おい待て！オレの知らない所でハルトとタンデムを賭けているだと！許さんぞお前達！…ていうか千冬は止める側だろ混ざってどうする!!」

「いやいやマスター、ツツコミ入れる所違うでしょ」

「そ、そうだな…しかし何故アイツ等がこの世界に」

「あーどうせマスターに未練たらたらでハルトさんが復縁して下さいに来たんじゃないですか？マスターの可愛いのは見た目だけなのにあはははは！」

「性根が腐ってやがる…ちっ」

「どうしましたかマスター？」

「少し席を外す」

「はいはい、わかりましたよマスター」

—————

3人がもはや戦わなければ生き残らないばりの戦闘をしているのでつい「やめて！俺なんかの為に争わないで！」

わざとらしく涙を浮かべてみるが効果はない

『言う奴があるか！』

「うーん…雰囲気？効果なしみたいだけど」

『おいおい……ん？誰か近づいてくるぞ』

「っ！お前達戦闘中止!!誰か来るぞ!!」

「「っ!!」」

一時的に手を止めて警戒してたのだが現れたのは

「あ！アレってハルトさん！」

「何しに来たアナザーライダー!!」

「くそ！こちらら錬金術師で忙しいってのにアナザーライダーかよ…シンフォギアも整備中だつてのに」

お馴染みの信号トリオに

「よお久しぶりだなアナザーライダー…いや常葉ハルトか」
「天羽奏……」

ウオズがプロトバーストライバーを渡しているので警戒レベルは上げているのを察してらんだらう顔が少し困っていた

「ナツキから聞いているぜアンタが異世界から来てて、コッチの事情でかなり迷惑をかけてるって」

その言葉に苛立ちを込めながら

「そうだな神獣鏡の情報を親切心で渡そうとしたら捕獲する為に特殊部隊投入されたり波風立たせず帰ろうとしたら刀の雨が降ったり影で拘束されたりと散々だな」

「え？じゃああの時…あの場にいたのも」

「そう言うことよ、フロンティアが出ると知ってたからだ」

したり顔で頷くハルトであったが

「ナツキの話を聞けばお前達は争いを好まないと聞いたが…あそこの者達は何故争っていた？」

「え、それ聞くのか？凄く不毛だぞ」

「言えない…タンDEMかけて戦ってるとか」

「……………そうか」

「な、なら「断る」え？」

「さつきも話したが親切心で情報を渡そうとしたのに特殊部隊を送るような輩は信用出来るか……あれ？前にもこんな流れあったような……」

『言つてたな攻撃する奴の話なぞ聞けるか！つて言つてたぞ』

「だよな！言つてたよな！」

「ならせめて彼処の争いを辞めさせろ！」

「は？」

目を離れた際に第二ラウンドを幕開けていたので

「ごもつとも、おい辞めないと一人一台バイク運転させるぞ！」

「「……………」」

3人は不承不承と言う感じて手を引いてくれた……よし

「後ろに乗るのは順番な……まずは千冬から」

「そうか私からか……ふつ勝った！」

「えー！……だけどハル君が決めたなら良いか次は東さんだよ！」

「錫音は？」

「私は最後が良いよ……変わりに長い時間走ってくれ」

「はいはいわかりましたよ……よし乗れ！」

「ああ失礼する」

千冬が背に乗ると東達は別の場所からライドベンドラーを持ってきて二人乗りする
「じゃあ次は気をつけますのでー！」

バイクを発進させると

「はーい！」

「つておいバカ！あたしらの命令は連中の捕獲だぞ何逃してんだよ！」

「……………はっ！これがアナザーライダーの力……」

「お前がバカなだけだあ！」

「問題ない……と言うより餅は餅屋だ」

「ああ……アイツか」

クリスは呆れたような口調で空を見たのであった

本能 v s 本能

ライドベンダー2台で街を走る4人は

「アツサリ見逃して貰えたな」

「もう少しこねるかと思ったよね戦闘も辞さなかったのに拍子抜けだよ」

運転するハルトと錫音は並走している、後ろの千冬は満面の笑みでハルトの背にしがみついている…その時彼の背中に柔らかいものが当たっている為、煩惱とせめぎ合うハルトであった

「ふふふ…」

「ぐぬう…今程チーちゃんが許せない時はないよ…」

「次は東だろ堪えてくれ…しかし…」

錫音は周りを見渡すが誰もいない…これは

「あからさまだねハルト」

「だな、畏ならもうちよい上手くやれよって話だ」

と笑いながら運転している道路の目の前に誰か仁王立ちしていた

「待つてたぞ!! いや…ちよつと待て! 本当止まれええええ!」

キイイイ…ドン!!!

「あ…やべ」「あらら〜」

何か言つてたがそのまま轢いてしまった…不思議と罪悪感よりも

「お……お前……減速……しろよ」

生きてる事への恨み節が出てしまったのだ

「道路に立つてたお前が悪い…クソ、もうちよい速度上げればよかつた」

よく見ればナツキだったので問題はなかつたし浅倉さんの台詞が言えたのでそれで良しとする!

「ズの奴にゴがやつてたバイク使つたゲゲルしたいって奴がいたな…この世界でやらせてみるか問題はなさそうだし」

ぶつちやければこの世界の人間などどうでも良い 一部を除いて滅べば良いと思つている

「いや問題…だ…ろ…」

「面倒くさいけど、救護処置しないとダメなんだよな〜まったく何で道路で仁王立ちしてた奴轢いたらコツチが悪いんだろうねえ」

一応は協力者な訳だしとアナザーウオッチを起動した

『エグゼイド』

「……………治った？」

「次は飛び出すなよ道路でドヤ顔してたらまた轢いてやる…今度はアナザートライドロ
ンかアナザードンライナーで轢くからな」

「何て脅してんだ！…いやちよつと待て！」

「やなこつた「キャロルに会いに行くんだろ！」…そうだよ何か問題か？」

「ある！今のお前達はこの世界でフロンティアを不法占拠したテロリストになつて
る…だから世界中がお前の身柄を「知るか」っ！」

「そもそもテロリスト認定したのは政府の上が暴走したのが原因だろう？生物兵器だの
何だの言つてたから返り討ちにしてやったら冤罪吹っかけてきたのが始まりじゃねえ
か…ああ…あの弦十郎って人は信頼出来そうだったのに特殊部隊送り込んできやがっ
たからな」

「そ、それは「お前には神獣鏡の情報を流した代わりの対価でソロモンの杖もやったよな
？」っ！」

「その対価だつてフロンティアを占領を提案したんじゃねえか…占領事件に関してはお
前も共犯だろうが何被害者目線で話してんだ？」

笑顔で威圧しているのを見て瞬ぐナツキであるが

「ち、ちが「それと…頭が高いぞ誰に向かつて話してる？」っ!!」

「身の程を弁えろ痴れ者が」

ハルトはスキル 魔王覇気を発動して威圧するとナツキは跪く前は仲間だが俺とキャロルと袂を分つならば敵である、色々迷惑かけたナツキには悪いが

そっちにいる時点で俺にとつちや裏切りなんだよ

まあ彼等の立場も把握してるからの行動だ、これで連中にも俺とナツキが敵対関係になってるとアピール出来る事件後の彼等の安全も保障されやすいと思う

「は、ハルト…」

「しかし世界的なテロリストか…まるでNEVERみたいだな…ならば俺の名前をこの世界に刻みつけてやろうか永遠に」

魔王覇気を解除していつものようにカラッと笑うとヘルメットを投げ捨てるどまるで踊るように両手を広げると自分の体を抱きしめる

「永遠…良い響きだなあ…この世界の連中が俺達にした事を考えれば相応のお礼をしてやらないと帳尻が合わないよな?…:…んじやまずは手始めにあの奏者どもを殺すか」

ハルトはいつもの明るい笑みで話す内容に千冬達は戦慄していた、正面から見ていたナツキの目にはハルトが狂気に染まっているとしか感じられなかった…その瞳には一

切の光が宿っていなかったのだから

「っ!!!」

「前から邪魔だったんだよなあ〜今までやることなす事邪魔しかしいし…あーあ…取引とは言え助けたのは失敗だったかなあ…」

まるで明日の予定を立てるような気楽さで話す彼にナツキは頭を回してハルトの意図を探ると同時に戦慄した

何故なら

これは自分が知らない会話である今までとは違う

彼の権能は死に戻り、それは読んで字の能力

何処かで死ぬと運命を変えられるターニングポイントまで巻き戻せるというもの

故に彼は何度も死に戻り、その度にハルトと会話をしている為性格や傾向も予想は出来たのだが

この会話だけは自分が死に戻り始めて全く知らないことだ…つまり

ターニングポイントが更新された事となる、故に此処からはアドリブ、完全に即興で対応しないとならない

だから頭を回す彼が何を言いたいのか考えろ

まずハルトとキャロルは自分の知る歴史を知っている…その過程でキャロルが自死する事で魔王化すると……はっ！まさか

呪いの旋律を帯びた攻撃を受けたからキャロルは自死を選んだ、ならば

呪いの旋律を浴びるのがキャロルの狙いなら奏者を現段階で殺されるのは都合が悪い、何かしらの干渉をしてくるだろう

つまりハルトはキャロルかオートスコアラ―達を奏者を餌に誘き出そうとしているのか！

と彼は結論付ける、しかし彼は少し読み違えていた

確かに人の頃のハルトならばそれが狙いとしていただろう……だが

人間から逸脱し怪人の王となったハルトは敵対する者への関心や情を全て失ってしまっていた寧ろ蹂躪して愉悦を楽しむ娯楽の対象ではない…その自分が注ぐべき情愛は全て仲間や愛する者達にのみ注がれてしまっている

愛の対象が狭い分、深く独占欲が強い

それ故に邪魔するならば誰だろうと容赦なく手にかけてしまうだろう幼少期からの経験もあるが特撮と出会う前のハルトは元々が原作軸の束よりも人間嫌いかつ無関心であった為か対象にない人間の安全など配慮は一切しないその辺の石ころや虫ケラと同じでしかないからだ払ったり蹴ったりしたところで罪悪感など持つ訳がない

勿論推察の通りキャロルを誘き出すのが目的であるが奏者を殺すのも実益を兼ねている故に実行することに一切の躊躇いがない

「さて、どうするよナツキ？」

理屈で言うならば黒幕を誘き出す為に彼を見逃すのがセオリーであろう…だが

「ハルト…俺はお前とは戦いたくない…一緒にいる仲間だからな」

今のハルトは危険だ、本当に彼女達を手にかけるかも知れないと言う予感が彼を戦いと言う手段に駆り立てた

「俺も仲間と思ってたよ、お前がキャロルの暴走を知ってたなら止めて欲しかった…：知ってたなら教えて欲しかった…：前から分かってたんだよ…：俺とお前は目指す先が違

うからこうなるのはさ」

ハルトは腰にドライバーが現れるとアナザーウオッチを構えた

「そうだね…：だけど俺も止まれないんだ彼女達を守る為に」

ナツキも対抗してバースドライバーを装着してセルメダルをドライバーに装填、レバーを回す

「変身！」

同時に機械的な装甲が装着され変身が完了したセルメダルで戦う戦士

仮面ライダーバース

対するは人間を辞めた逸脱者 影の王

『ジオウ』

アナザージオウ

『アナザーツインギレード』

アナザージオウは武器を召喚しバースもセルメダルを追加でドライバーに入れる

『ドリルアーム』

右手にドリル型の打突武器を装着して構えた

「っ！」「はあ！」

2人は同時に走り出して互いの武器は交えたのであった

その光景を眼下に見下ろすキャロルはつまらないと言った顔をしていた

「何をしてるんだあのバカともは……だが今アイツ等に死なれるのはオレの計画が狂うかな仕方がない今回だけだ……あのバカをイジって良いのはオレだけだ」

彼女は飛び降りたのであった、眼下にある戦いに参加する為に

「らあー！」

「ふっ、りやあー！」

アナザージオオウの刺突を回避したバースはドリルアームで一撃を叩き込むがツインギレードを分離させて片方で受け止めた

「っー！」

「この程度か？」

「ちいー！」

『キヤタピラレグ』『セルバースト！』

「おらあー！」

「……………」

新しく呼び出したキヤタピラレグを装備して必殺技で蹴り上げたがアナザージオウは弾き飛ばして間合いを作る

「……………」

「流星は魔王だな…ジオウ単体の力でもコレか」

「ああ…まだ俺には頼れる仲間達が沢山いるお前じゃ俺に勝つ事は出来ない」

「だ今は勝てないよ…けどな彼女達ならどうだい？」

「っ！」

アナザージオウは今いた場所から離れると

「たあ！」

誰かが弾かれたように落下してきた

「大丈夫ナツキ君！」

「はい、ありがとうございます響さん！」

「立花響か…面倒だな」

「はい！えーと…ハルトさんでしたっけ」

「ああ…今更隠す意味もないがな」

「あ、ありがとうございます！」

「は？」

流石に予想外で思考が固まると

「貴方が神獣鏡の事を教えてくれたから未来や私の中に残っていた破片も消えたんですよ！助けてくれたんでよね」

頭を下げられて悪いが毒気が抜かれてしまったな

「はあ…ナツキとの等価交換だお前には、礼を言われる覚えはない」

「だから分からないんです…教えてください…貴方がこの世界で何をしたいのかを」「何がしたいねえ……最初はそんなのなかったよ」

基本これに尽きるんだよなあ

「本当に移動のエネルギー溜まったら通りすぎるだけの場所だったからな変身だって本当はする気なかったし」

「へ？」

「最初は自分の生活圏内にいたノイズを追い払えば良かったんだよ、なのにそつちの侍や上の連中が強引について来いって毎度攻撃するから迎撃するかなかったんだよ、んで拒み続けた結果が世界レベルのテロリスト扱いときた迷惑以外の何者でもない」

「翼さん……あ、あの人も悪気があつた訳じゃ」

「仕事柄かも知れないけど、こつちからすれば凄く理不尽な要求なんだよ……観光客を兵器と扱うくらい横暴さといえはわかる？ 初手刀の雨がなければ穏便な話し合いにもなつたらうに」

考えても意味なき事とはわかるがな

「それは……変わりに謝りますごめんさい」

「ん、取り敢えず謝罪は受け取つたが俺がお前達を信頼出来ない理由はわかつたかな？ そつちが何言つても信用なんかしないって」

「はい……」

「俺達がこの世界に戻つた理由だか「見つけたぞ盗人め」来た……時間潰した甲斐があるつてもんだ」

アナザージオウが顔を上げると見慣れた顔がいた

「キャロルちゃん!？」

「よおキャロル久しぶり」

「この声……ああこの間の男か、一度ならず二度までもオレの前に立つとは……余程死にたいと見えるな」

「立つよ俺の事を思い出すまで何度でもな」

「キャロりん！」

「何だ…ウサ耳」

「ウサっ！まさかハル君だけじゃ飽き足らずこの天災篠ノ之…いや常葉束さんの事まで忘れたかあ！」

「常葉…だと……」

キャロルが動揺しているところ悪いが

「おい姓が変わってるぞ束」

「だいじょうぶい！束さんはハル君の嫁として永久就職するからモーマンタイ！」

「その就職先ですが大丈夫？」

「大丈夫だけど俺の隣は生涯雇用…解雇は認めない変わりに福利厚生も完璧だけど？ど
う？」

「大丈夫問題なしだあ！」

「採用だ束！」「ハル君！」ヒシッ！

抱きつく2人にキャロルは青筋を立てながらイラついている

「大有りだ馬鹿者共！だが…キャロルは本当に忘れているのだな私達の事を」

「あ、ああ…その私生活自堕落女の言う通りオレはお前達など何も覚えていないぞ」

「いや待て…覚えてるだろう貴様ア！…よりもよつてそこだけピンポイントで覚えてる！」

「さあな…燃やした思い出の中に部屋が汚い奴がいたような気がしただけだ」

「おのれえ…」『カチドキ』

「変身するのは構わんが隣を見ろ」

「隣？…っ！」

「俺の記憶が薄れるくらい千冬の部屋はヤバいのかあ…ははは…」

そのやりとりにフォトンブラッドを浴びて灰化するオルフェノクのようにボロボロになってるハルトを見て千冬は慌てて

「ハルト！待て違うんだ！アレからは少し片付けるようになったぞ」

「けど9割くらいハル君だよな？」

「1割だけでも大きな成長だよ…前とか全部俺だったし」

この様子を見ていた響の頭の中では千冬と翼がイコールで繋がったのであった

「けど待ってくれ…何故ここにいるんだい？」

「ああ、オレの発明品をハッキングした不届き者がいたのでどんな奴か見に来たのだ」

「君にその発明品の知識を上げたのは誰かな？」

「覚えてないな…全くだ何処かの未来人だったか？…少なくとも行く世界で現地妻を

沢山抱え込むような男ではないな」

「やっぱ俺のこと覚えてんだろ！かなり都合の良い記憶喪失だなあ!!」

「いや現地妻沢山いるのかよ!!」

ナツキの正論ツツコミに錫音は肩をすくめて

「最近3人増えたよ」

「3人も!?嘘だろハルト!!」

「……………記憶にない!」

キャロルはエルフナインの視界を共有していたから知ってたが知らないなら知らないえ激情に駆られていたろう、が今は別の理由で怒りそうである

「まあアレだ…オレの発明品を利用しようとした奴がいたから回収に來ただけだ貴様等等など知らん」

キャロルのオーラは周りにいた者が後退りする程であったがハルト達は欠伸しながら流せる程度の圧である

「ふーん……そうかあ…そうかあ…」

「おい何だその目は」

「そう言うなら」

アナザージオウは変身を解除すると

「束」

「何？ハル…」

ハルトは束に近づくとそのままキスをした

「んぐー」

「「「なっ!!!」」」

キャロルを始め周りで見ていた人も固まるが

「ん……ちゅ……」

まさかのディーブな方だった

「し、舌まで入れてるだと……っ!」

「ハルト……いつの間になって……」

赤面してる錫音が目線を戻すとヒイ!と震えた

「……………」

彼女の瞳から光が消えており懐に閉まっていた3枚の紫色のコアメダルを取り出していたからである…何ならメダルを入れ終えてオースキャナーまで構えていた

「……………ふう」

キスを終え舌なめずりしたハルトは笑顔で束に話しかける

「は、ハル……くん……」

「束………続きは近くのホテルでしようか♪あ、クロエは弟か妹どっちが欲しいと思う？」

「ふあ………ふあい!!」

「両方かな……今夜は初めてだけど激しくなりそうだ……2人はどう？」

「っ!!」

恍惚としてポーッと呂律の回らない束の姿に千冬と錫音は赤面した

その行為が完全にキャロルの逆鱗に触れていた

「きさまあ……オレの前でイチャつくとは良い度胸だ……」

「え、俺のことを覚えてないなら何でイライラしてるのかなあ？キャロル？」

側から見れば確信犯でしかないハルトの態度にキレた

「殺す！やはりお前だけは一度殺す！バカは死ねば治らんなあ！」

「そうだよねえ……よくよく考えれば喧嘩らしい喧嘩をした事なかったよ……キャロル……だから一回マジで殴り合おうかあ！行くぞお前等ア！」

『喧嘩祭りだあ!』

『痴話喧嘩祭りだあ!』

『不毛で協力したくねえ!』

『スゲエ!こりや犬も食わねえぜ!』

『油濃すぎて胃もたれするなコリヤ!』

取り敢えず相棒達もやる気で嬉しいよ。ただ反対派には謝罪するよ後でな

「ふふふ……」

「ははは……」

互いの心に渦巻く感情は一言で言えば愛

方や 愛する者の運命を変える為に

方や 愛する者と共にいる為に

互いが互いを思い合っているのだが今は関係ない

両者の心にあるのは

「はーははははははははは!!」

己の全力で目の前にいる者を力で振じ伏せ従わせると言う感情のみ 両者が放つ覇気の衝突は空気を震わせその場にいるものに畏怖を与える

何なら圧力で窓ガラスにヒビが入るほど

言外に互いの目線が交差する

お前はオレのものだ！

あの日 声をかけてから何年一緒にいたか…オレの生きてる長い年月からすれば瞬きのような刹那かも知れないだが自分の心から離れないこの男の未来を守る為に

なら、ずっと隣にいて欲しいんだよ！

今まで良心や善意で押し留めていた力のタカを全て外そう…そうでなければ勝つな
ど夢物語、無くしたものは取り戻す為に戦う泣いて祈って降りてくる奇跡などクソ喰らえだ全部俺達の力で取り戻す！

「変身……!」

『プテラ トリケラ テイラノ! プトテイラノザウルス!!』

俺の知るオーズよりも低いトーンかつ古風なりズム：間違いない800年前のオーズしかも

ハルトが魔王化して獲得した力をこの錬金術師は努力の一念で至ったのだ

無への欲望 太古からの禁忌

仮面ライダーオーズ・プトテイラコンボ

「うおおおおおおおおおおお!」

雄叫びと共に周囲の建物全てが氷河期にあったかのように凍りついたのである。ナツキはカッターウイングを使い響をお姫様抱っこして上空に退避、錫音と千冬、束は各々が変身して寒さを超えた

「流石キャロル」

ハルトも笑みを隠しきれずに新しいアナザーウオッチを起動

『セイバー』

「く……ああ……うわあああ!」

それと同時にウオッチから力が逆流を起こしハルトの体をボロボロのドラゴンが抱

きついた

その姿はさながらドラゴンゾンビを思わせる体と胸にかけて伸びる骨が見える腐肉で囲まれたようにも見えるアナザーライダー

本来の持ち手である部分を握らずに刃を直に握っている

「あ……ああ……あああああ!!」

禁忌の竜 未完の禁書

『プリミティブドラゴン!』

アナザーセイバー・プリミティブドラゴン

変身完了と同時に大気を震わせプロトティラの氷を破砕した

本来変身するならお互いに自我を無くした獣となるが

「覚悟しろお……!!」

「そうこなくちやあなあ!!」

互いに思いの力で克服しねじ伏せ譲れない信念を得物に込めて叩きつけたのであった

「らあー!」「おらあ!!」

武器の激突は高い音と共に周辺の高架や町の建物を破壊してお釣りのくるパワーで始まったのである

純粋な暴力と暴力……どちらが勝つなど……わかる訳がない

力と力 楽園からの追放者

その場所は戦場と化していた

「あああああああー！」

「があああああー！」

プトティラコンボとアナザープリミティブドラゴン、暴走フォーム同士の戦いは両者ノーガードの殴り合い

プトティラの武器 メダガブリューの一撃をアナザープリミティブドラゴンが受けると返す刀でツインギレードをバットののように振り回して殴打する

だがその一撃一撃は大気を震わせ、周囲の建築物にダメージを与えるほど深刻なものとなる

何なら今戦場となっている道路の細部は至っては隕石落ちたかのような凹みときた

錫音の魔法で転移した3人は安全なビルの屋上で戦いを見守っている

「これが全力のハルトか」

「初めて見たけど…ハルトが魔王化してやつと互角なキャロルは恐ろしいね」

「ハル君が…大胆に…えへへ…痛っ!」

「戻ってこい色ボケ兔」

千冬は呆れながらも幼馴染を叱咤すると

「何するのさ! あ…チーちゃん羨ましいんだ束さんがハル君とホテルで一緒になるのがあああ!」

思わず千冬がアイアンクローで束を黙らせた

「二度と減らず口を叩けないようにしてやろうか?」

「チーちゃん待つて! プリーズ!! 分かった…初めてはチーちゃんとスーちゃんと4」この話を18禁にするつもりか」メタいよチーちゃん!!」

「あく2人とも終わったかい?」

「ああ、すまないな錫音」

「ふぎじゃ!」

錫音の一声で取り戻す仕置きは辞めた千冬は束を雑に投げ捨てる

「それで状況は？」

「互角、あの2人のノーガードバトルなんて滅多に見れないじゃないか面白いよ」
「いやそう言う話ではなくな」

「大丈夫、流石は本能型の暴走フォームだね本能で致命傷は避けてるよ」

よく見れば互いが急所を狙う中、片方は的確に回避して致命傷を避けている

「これが本気になった2人の喧嘩か」

「つてて…まあ世界を巻き込む夫婦喧嘩なんて出来るのは私達くらいだろうね」

「違ういな…おい待てまだ夫婦ではないぞ」

「まだつて事はいつかはある訳だねチーちゃん」

「それは確定事項だね」

「はあ…本当に人が悪い奴等あ」

「そうだね、何せ同じ人を好きになったんだからさ」

「しかもその男が1人に選ばずに全員と一緒にが良いと言うからな…全く…悪い男に引っかけたな」

「嫌なら離れて良いよチーちゃん」

「うん一緒にいられる時間が増えるからね」

「戯け、貴様等問題児を見守るのは私の仕事だろう…それにハルトが手放すとは思え

ん

「惚気てる…って、ひ、酷いよチーちゃん！一体東さん達の何処か問題児なのさ！」

「そうだね東はそうでも私も含んでるのは納得いかないよ！」

「それどう言う意味さスーちゃん!!」

「問題児2号3号は黙っている」

「2号3号…あれ?じゃあ1号は?」

「下で喧嘩してる大馬鹿者だアイツがハルトに素直に話せばこんな事にならずに済んだものを……ん?誰だ!!」

千冬は屋上に通じる扉から誰かが入ってくるような音がしたので皆の目線が動く

スーツの男がいた

「えーと…貴女達が魔王の伴侶ですか?」

「答えはYESだけど誰だお前?」

東は警戒心全開で話しかける

「失礼しました、私はSONGSの人間です…貴女達には元特務二課というとわかりますかね?」

「二課…あつまりハルトの」

錫音の音頭で2人は警戒した

「敵だ」

『ドラゴンフルーツエナジー』

『カチドキ』

『ドライバーオン：ナウ』

3人はドライバーやアイテムをつけて変身準備をするが

「お待ちを話だけでも聞いて下さいませんか？」

そのスーツ姿の男 緒川さんの態度に一旦は矛を収めるが錫音は疑いしかないような目を向けている

「ヤダよ君達はハルトが善意で用意した会談に特殊部隊を送ったじゃないか信頼に値しないよ」

「それに関しては政府も一枚岩では「どうでも良いよ」…」

「お前たちはハル君の善意を身勝手な悪意で傷つけた、そんな連中の話を聞くと思うの？」

かつて学会でI Sを発表した時に笑われた記憶がある束からすれば信頼における人間以外の言葉など届かない

「それに私達経由でハルトに何か伝えたいなら他を当たれ私達も不愉快なのでな行くぞお前達」

「ああ（うん）」

と背中向けて帰ろうとしたのだが

「待つてくれないかしら義姉さん達」

—————

「はあ……はあ……はあ……」

「はあ……はあ……」

お互いに短く浅い呼吸を繰り返す周囲は瓦礫の山となるが2人は一切躊躇しない

「これで終わりだア！」

『ゴックン……スキャンニングチャージ！』

キャロルが何処からか拵えた大量のセルメダルをメダガブリューに全部食わせチャージする、それこそ今まで溜め込んだ分の半分を使い潰す位に

「ははは！おんどりやあ！」

負けじとアナザープリミティブドラゴンは溜め込んだ力を全て解放しツイングレ-

ドに流し込んだ

「はあ!!」

「せいやあ——！」

「確かハルカだったか？」

そこにはハルトと実妹でこの世界で収監されているハルカがいた

「はい学祭以来ですかね千冬義姉さん」

「お前に姉と呼ばれたくないな」

「酷いですね私が何をしたんでしようか？」

「ハル君にしてる悪行三昧を聞いてればそうなるよ」

「それは兄さんの誤解なんですよ、私はいつも兄さんの事を考えてるんですそして「不幸にしたんだろ」違います!!」

「要件を言え私達は忙しいんだ」

「はつきり言えば人質になつて貰います」

「ストリートだねえ、ハル君には勝てないから東さん達を捕らえて人質にして脅すかあ、
く本当、こつちの政府も腐つてるねえ、」

「今までの話も時間稼ぎの陽動という訳か」

「ハルカさん話が違いますよ、私達はあくまで彼女達や魔王に平和的な協力を「緒川さん、
くめんなさい」っ！」

ハルカは緒川さんに腹パンをかまして気絶させた

「私ね兄さんを止めにこの世界に来たのにね何で牢屋にぶち込まれて考えたのよ……そしてたら分かったの私は何一つ悪くないのよ！全部魔王になった兄さんが悪いって！」

「中々に腐ってるな」

「そうだね本当にハル君の妹なのかな？」

「違うんじゃない？元々彼女の魂が腐ってると思うけど？」

「黙れ！兄さんに取り付く悪い虫め！お前達がいなければ兄さんは昔のまま素直な良い兄だったのよ！」

「それは自分にとつて都合の良い兄の間違いだよね」

「う、うるさいうるさいうるさい！潰してやる……兄さんが作った国は私の物なのよ！フロンティアは兄さんがいなければ私の国なの！私が女王になるはずだったのよ！兄さんの所為で……兄さんの所為なのよこれも全部！私の今の待遇も酷い目にあってるのも！！」

「そのドライバーは……」

「私の力よ、あの人くれた私だけの力！」

「あの人？」

ハルカが取り出したのはゼロワンドライバーに別パーツを取り付けたドライバー

その名もエデンドライバーとエデンゼツメライズキー
それを腰につけゼツメライズキーを解放する

だが解放された力は

『ルシファー』

破滅を掲げた楽園の叛逆者だった

「けど前座は終わりよ、これからは私が逢魔王国の女王……いや異世界の女神よ変身！」
ゼツメライズキーを装填して力を解き放つ

『プログライズ！アーク』

『The creator who charge forward believe
ing paradise!』

背後に顕現した髑髏がハルカの頭に噛み付くと装甲を形成した
外見は中身のない骸骨

『Over the eden』

仮面ライダーシフアー

「フハハハ！これよこれ！アナザーライダーなんて半端なものじゃない真正正銘の仮面ライダーの力！これこそ私が求めてたものよ！あははは！」

自分に酔っているような素振りさ兄に通じるものがある、中に込められている感情は真反対だ

「哀れな」

「何？」

「お前は最初から何も持っていない背負わずに他人から貰ったものを自分のものと自慢してただけだハルトと違い自分で何も掴んでないし選ばれていない、ただの道化だ」

「可哀想な程生粋の負け犬だね」

「何でハルトみたいな優しい人がいたのにお前みたいな愚かな妹になるんだろうね」

その一言はハルカにとって地雷でしかなかった

「ふざけるな！！私がああのお兄に劣るだど！その言葉は取り消せ！！」

『サウザンドジャッカー』

「それはこっちの台詞だな…ハルトへの暴言を全て撤回してもらおう」

武器を召喚して3人に襲い掛かる

「変身!!」

3人も斬月、ソーサラ、デュークに変身し迎え撃つのであった

—————

ハルトSide

「つかしいなあ…お前は牢屋にぶち込まれてる筈だがな」

「兄さんのせいだね!」

「違う、そっちに落ちたのはお前の意志だ、別に俺は何もしていない」

「異世界で魔王になるかも知れないから態々私が!来てあげたのよ」

「残念、もう魔王だったりする訳なんだ無駄骨だね本当に」

「つ!……そう…もう手遅れって事ね」

「手遅れはお前だろ脱獄するとか」

「違うわよ私は牢屋からは出てないわ」

「は?」

「この体は遠隔操作で動かしてるアバターよ本体は牢屋の中にいるの、こう見えて模範

囚だから自由時間があってね」

「外面だけはお前良いからな、アバターね…そんなネタバレして大丈夫か？」

アバター…ゼロワンの技術だっけか？

「ええ大丈夫よ……だって兄さんは此処で死ぬんだから魔王死すべし！」

「それが要件だろ？悪いな今イライラしてんだ加減出来ねえぞ」

「これを見て言えるかしら？」

『ルシファー』

「アークライダー…か」

「変身！」

『over the eden』

ハルカが仮面ライダールシファーに変身し

「ははは！この力で私は兄さんを国王の座から蹴落として君臨する逢魔王国の正当な女王になるのよ！これで私を見捨てたトーマに復讐してやるわ！」

大笑いしてるが

「はあ…」

ハルトは冷めた目で見ていた

「わかるわよ、この墮天使の力が恐ろしいのね…まあ気持ちは分かるは何せアナザーライダーなんて欠陥品よりも正当な仮面ライダーで私の方が上なのよ！ 正当な女王に相應しい力!!」

「相應しくはないな」

ぶつちやけ逢魔を狙う連中が多いから今更感が強いし俺の座を狙う奴なんてズ・ゴオマ・グ位だからな…何でか知らないけどニューライダー病に感染してんのよ、あの蝙蝠…ニューライダーは俺と言う度に締め上げるのが日課になった最早彼処まで行くと可愛いまであるからなゴオオマの奴

『私、こんな女を担ぎ上げようとしたの…』

その醜い姿にアナザーツクヨミが戦慄していた、いや知らないって怖いよね、もう何か取り合うのも疲れた…面倒くさいなあ

「そしてアバターは一人じゃないわ、何人かいて今あなたの女達を襲ってるのよ！」

おい待て今なんて言った

「あ？」

思わず低い声になってしまったがハルカは兄が劣勢となったと誤解したのか饒舌となる

「アバターは一人じゃないのよ何体でも作成出来るのつまりね兄さんのいた逢魔王国にもアバターを送り込んでるのよ！」

「え……」

「驚いて言葉も出ないよ「違うよ」は？」

「あのさ俺がその辺の対策してないと思う？」

「え？」

「寧ろ送り込んだアバターに同情するわ」

哀れ……せめてウオズ達に見付かれと祈るばかりだ

—————

逢魔王国

「……………」ドサツ

突如街に現れ暴れようとした仮面ライダーシフアーであったが

「ねえ何これ？」

「知らん、仮面ライダーのようだが立派なのは見てくれだけか？」

「関係ありませんわハルト様から留守を任された以上は役目をこなすだけですもの」

偶然近くを通っていたテストタロツサ、ウルティマ、カレラ三人娘と出会い各々コアナザーライダーへ変身されず生身でボコボコにされたのであった

「あ……………ああ……………」

ルシフアーは自らの能力で再生するがウルティマがアイアンクロードで捕縛すると笑顔で話す

「へえく再生するんだ」

「面白い能力だな…よし我が君から教わった技の実験台に丁度良いな」

「ええ私もハルト様から賜った力を試したいですわ」

「つまりサンドバッグだね！」

「さあ新技の練習をするぞお前達、まあお前はサンドバッグがな」

「拷問しようかなあく丁度良い練習台だー」

「ええ少しは楽しめると良いのですが」

「い、いやああああ!!」

ハルトSide

「い、いやああ!! な、何なのよあの化け物娘は! 生身でルシファーがやられるなんて…しかもサンドバッグや拷問されるなんて…あ、待って! 引き摺らないで! いやああ!!」

感覚がリンクしているようで悲鳴をあげるハルカの様子を見て全てを理解したハルトは

「だから言ったのに逢魔には俺達陣営の最強戦力が待機してんだから」

と話しているとハルトの脳内で念話が響く

『ねえねえハル』

ーウルティマ?ー

『何か仮面ライダーみたいなのがあるんだけど…』

ーそれ皆で好きして良いよバラバラに切り刻んだりして良い…ウルティマお願いなんだけどー

『何?』

「その仮面ライダーになった奴に絶望を教えて…殺してと言うまで痛めつけてくれる?」

『うん! 任せて…やったあ!』

「あ、ごめん一つ条件追加していい?」

『良いよ良いよ! 何でも言つて!』

「殺してと言つても暫く殺さないであげてね、その匙加減は任せるから、後ねそれから…」

『はーい!!』

念話を切り妹を見ると顔面蒼白であつた

「き、聞いてないわよ…ウオズ達以外であんな戦力があるなんて!…つて兄さんあの子達に何命令したのよ! あの子達が笑顔でアバターを地下室に…い、いや辞めて! お願ひ!! 指はそつちに曲がらな…いやあああ!」

感覚がリンクしてるなら解けば良いのにと思うが

「言う理由ないじゃん…まあ同情もしないけど」

「け、けどこの世界にいる義姉さん達はルシファーに「大丈夫だよ」え?」

「あいつ等は弱くねえよ」

強い事に疑いなんて無いし大丈夫大丈夫

千冬Side

「はあ………はあ………ず、ズルいわ！3人がかりで武器まで使うなんて!!」

とルシファーが叫ぶが斬月達は意にも返していない

「ここは戦場だぞ？それに武器を使つてた貴様が言うか」

「卑怯汚いなんて当たり前だよね、使い方知らないのに武器使わない方が良いでしょう宝の持ち腐れだし」

「まあ私達の大事な人を馬鹿にしたんだ…例え妹でも容赦しないよ」

「寧ろ妹だから許せないよねー」

「け、けと私の体はふじ」「ナノマシンでしょ不死身のタネ」え…」

「成る程ナノマシンを制御してアバターを作つた…それで攻撃しても再生してたのか」

「赤い霧？はナノマシンの集合体がそう見えたとて訳だね流石天災」

「そーでしょー！って読み方違うような…まあいいか！」

「う、うそよ！何でこんなに早く…」

何故デュークは己の能力を看破したのだと動揺してると

「束さんが開発したデューク…正確にはゲネシスドライバーは束さん世界のアークと繋がってるんだ…しかも、このドラゴンエナジーはその演算能力を最大に引き出せるの…」

つまり、高速で相手のタネが割れちゃうって訳」

「そ、そんな事ありえない！」

「ありえない……なんてのはあり得ない、ハル君から教えてもらった漫画の台詞だっけな？まあお前なんか科学知識で東さんに勝つなんて未来永劫不可能だよ」

「タネを暴く為に錫音と攻撃をしたのか」

「そう言う事！」

「君が手札を見せれば見せるほどタネが割れちゃうって事だよ……まあ私達の敵にすらならないのだけどね」

「な、何ですってえ……」

「はあ……何というか」

「ハルトも苦労してたんだねえ……本当にこんな妹持つてさ」

「そりやああなるよ」

「五月蠅いわね！兄なんだから妹の味方をするのは当然な「違うな」な、何がよ」

「上のは下のものを守る為にいる、それは事実だが……お前みたいに性根の腐ったものならば叩き直すのも上のものの仕事だ！」

『ソイヤ！』

「解析完了、これでお前のナノマシンは機能を停止するよ東さん必殺のー！」

『ロック……オン!』

「今ここにいないハルトに変わってお仕置きだ!」

『ファイナルストライク! Under stand?』

「い、いやああああ!」

「逃すと思う?」

『ドラゴンエナジー!』

ルシファアは恐怖を覚えて逃げ出したがデュークのソニックボレーは赤い龍となりルシファアを捕らえた、その中にはルシファアのナノマシンを抑止するプログラムが組み込まれておりルシファアの体はバチバチと放電している

「はああああ!」

それを2人が見逃すはずもなく高く跳躍した2人はライダーキックをルシファアに叩き込んだ、

溢れ出るエネルギーの本流を抑止されたナノマシンで処理できる訳もなく

「いやああああああ!」

断末魔をあげながらルシファアは爆散したのであった

—————

「はあ……はあ……な、何なのよ！あの人は!!」

「彼女達を怒らせたのはお前だろうが」

「う、うるさいわ！ま、まあ！あの女と戦って疲弊してる兄さんを倒せば実質私の勝ちなのよ！さあ覚悟!!」

『ジオウⅡ』

「……………」

空かさず戦闘前に体の状態を戻したハルトは右拳ねカウンターを問答無用で顔面に叩き込み近くの瓦礫まで吹き飛ばした生身でも魔王進化によりかなりの威力となったようだな

「素手で究極体のゴオマを倒せるからゴ集団上位の身体能力はあるって訳だな」

魔力なしでこれなら込めたらどうなるのだろう…多分頭がザクロみたいに弾けるな

「ぎゃいふー」

「さてさて…アバターって事だから思い切りやろうか」

首を回しながらハルトは生身で殴りつけてやろうかと思ったが

『お、メッセージを受け取って新しい仲間が来たぞ』

アナザーデイケイドの言葉に手を止める

「え？このタイミングでニユーフェイス？どんな子？」

『新入り我等が王に自己紹介だ』

『俺はアナザーバツファ：仮面ライダー全員敵だ！俺が倒す！』

―殺意マシマシな新人キタア―!!

『気に入った！ハルト使え！』

「え!?お、おお…」

アナザーウオッチを構えてスイッチを押すと

ハルトの体を泥々流れる液体が包み込むと背中から錆びた機械の腕が装甲を無理矢理装着させた

その体はまるで無理矢理、有機と無機を合わされた牛人間（ミノタウロス）である左手の長い爪を持った左右非対称なアナザーライダー

『バツファ…ゾンビ…』

アナザーバツファ・ゾンビフォーム

「おおカッコ良いな」

変身する姿が大変お気に召したハルトであるが驚きはまだ続く

『ゾンビブレイカー』

「つと……これが武器……おお……」

よく見れば片手剣サイズの武器だが刃がチェーンソーのように高速回転をしているではないか

「か、カッケェ！ ツイングレードと違う意味で常備したい武器No. 1だ！」

『そ、そうか……お前の趣味はわからん』

『照れてるな』『何だツンデレか』

『っ！ そんな事よりさっさとやれ!!』

「OK！」

「この……コケ脅しがあ！」

『サウザンドジャッカー』

互いの武器がぶつかり合う、ゾンビブレイカーの刃は高速回転しておりサウザンドジャッカーをガリガリと削るように切断している

「っ！」

慌てて武器を手放し間合いを離そうとしたがゾンビブレイカーにジャッカーは切削され

「ふっ……おらあ！」

アナザーバツファの頭部の角で突き上げられ宙を舞うルシファア

「きやああああああ！」

「そらあ！」

落下と同時にゾンビブレイカーの一撃を胸部に叩き込んだ

「がっあ…む、無駄よ…この体は直ぐに…き、再生しないの！何で!!」

ルシファアは再生を図るが上手くいかないそれどころか切られたところを中心に体のナノマシンが溶解し始めていた

「わからないだろ俺もわからない！何で!?!」

ハルトはギーツ未視聴なのでバツファの能力がまいちわからずにいたのだが

『ゾンビブレイカーには斬りつけた相手を毒で溶解する事が出来てなゾンビフォームの毒を溜め込む機能を使い切れば』

「ああ言う風になると」

『そうだ生き物に使用えば筋弛緩と思考が鈍化してゾンビみたいになる毒…p o i — z o mが流れ込む』

「スゲー殺意しかない武器だなコレ！気に入った!!」

『そうか』

「んじや、お前痛めつけるけど良い？」

アナザーバッファはゾンビブレイカーを地面に引き摺りながら一步一步とルシファーに近づいていく

「ひ…ひい！ま、待つてよ兄さん！ほら見てよ…私ね逢魔の悪魔や千冬さん達にボロボロにされて心が限界なのよ…だからお願い見逃して…今までの事なら謝るから…」

薄っぺらい謝罪なのは見切っているからな何年も兄してねえよ

「答えは聞いてない、居場所のない楽園から追放される墮天使が！」

『Poison charge』

左手でゾンビブレイカーに搭載されているポンプ状の部品をスライドさせてエネルギーをチャージさせると連動して刃も高速回転を始める

「オラア！」

『TACTICAL BREAK』

強化された斬撃でルシファーの右腕を切断したしかも少しずつつくりとだ

「きゃあああああ！」

毒の影響で溶解してナノマシンは再生しない

「おかしいなあ…人体切断マジック失敗した？」

とヘラヘラ笑いながらアナザーバツファはルシファーを見下ろしている

「へ？」

「ま、いいか…あと3…いや4回も練習すれば上手くいくよね…いやハルカがアバター
沢山作れるならもつと練習出来るか、いやあ俺達あ欠陥品だからさ練習しないとダメ
みたいだ」

『Poison charge』

ゾンビブレイカーを再度必殺技待機状態にして再度、今度は左腕を切断した同じよう
にゆっくりとゆっくりと切削する

「いやああああー！」

悲鳴を上げているが知った事ではない

俺の大切に手を出したなら誰であろうと許さない それが妹でも誰であつても

それに大丈夫と笑う

「ど、どつちも嫌…『TACTICAL BREAK』いやああああ！」

嫌だと言うので俺が決め今度は右脚を攻撃した、これでダルマだな逃すものかよ絶望を教えてやる

『いや、お前が味方で本当良かったわ』

『うんうん』

何故と首を傾げたが

「お前達は俺の味方だろ相棒…：それにな今の俺は機嫌が悪いんだよ」

『おう…この女は同胞どころか相棒を侮辱したその行為は万死に値するな！』

「ああ愚妹よ…：王としての判決を下す」

牙を剥いたものは永遠に奈落を彷徨う…：だっけ？まあ当然かな

『ジオウ』『ツインギレード』

アナザージオウに変身したハルトはアナザーツインギレードを構えてウォッチを装填するが別のアナザライダーの顔になった

「死だ…：…ん？」

『その台詞を言ったなら私を使いなさい…：さあ絶滅タイムよ！』

「おう！」

呼びかけに応じてウォッチを起動する

『キバ』

アナザージオウの体がステンドグラスが砕けたように散り、中からアナザーキバが現れたのだ

『さあ来なさい下僕達』

とアナザーキバが言う

「ガルル!」「ドツガ!」「バツシャー!」

同時に現れた3人のお供……アームズモンスター達にハルトは感動し

「おお……偉大な皆様の力……お借りします!」

早速手を伸ばすと呼応してくれたのはガルルだ彼は彫刻になるとアナザーキバの右手に収まり曲刀 ガルルセイバーへと姿を変えると水のように流れる動きでルシファアの首を跳ね飛ばした

「っし……はあああああ!」

そして残った胴体はガルルセイバーに向けて大声を上げると増幅された遠吠えとな

リルシファーを吹き飛ばし瓦礫の壁に減り込ませた

「が……ああ……」

「んじゃ次！」

ガルルセイバーを投げると元のガルルに戻る

「あはは！それえ！」

同時に陽気な感じでバツシャーが同じように右手に収まりバツシャーマグナムへと姿を変えるとルシファーの頭部を宙に投げた

「あら兄さん、火傷のしたの？可哀想に水で冷やしてあげるわよ！ほら！」

とバケツ一杯の水を被せられた恨み！

「痛いなら水で冷やしてあげるよ！」

と放たれた高压水弾は冷やすのではない水の塊を叩きつけられているので

「痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い！」

「だよね痛いよね……けど俺はずっと前から味わってたんだよ……ドツガア！」

「ん……行く」

バツシャーマグナムを投げ今度は握り拳のようなハンマー ドツガハンマーを構えたのだ

「潰してやる」

「い……いやあ……」

心は折れてるかも知れないが知った事ではない再起不能にしてやる……そうだ

【兄さんドツチボールしましょう！練習したいからのから的になつてよ！あははは……痛い！何で私にこんな早くて強いボール投げるの……酷いよ……】

「ハルカ、野球しようぜお前ボールな」

「へ……ま、まさか……」

アナザーキバは足元からキバの紋章を呼び出すとルシファアの元へと放ち縛り付ける

「ふっ！」

「いやああああ！」

暫く放電した後、弾かれたようにアナザーキバの方向に向かうので

『さあ来ました運命の第一球！アナザーキバ選手〜』

「オラア！」

『打った葬らん！』

『字が違うぞアナザーW』

『まあやつてる事は同じだけどな』

野球のバットを振り抜くくらい気持ち良いスイングでルシファアの顔面を捕らえた

「ふげええええ！」

「ふん！」

そのまま再度紋章に当たったので同じ要領で再度突貫してきたので同じ要領で打ち返した

それを何度も繰り返していると外にいた彼女達が帰ってきて

「ハル君！大丈夫…夫？」

「やつてるね」

「まあ私達と違って10年単位の恨みがあるからな…あの女の自業自得だ」

「あ！皆やつぱり無事だったんだ！…よいしょ！」

「まあね！東さんの手にかかれば造作もないよ！」

「私達全員でやったがな」

「それよりもハルト、いい加減終わらせない？このままだと奏者連中がまた戻ってくるよ」

「そうだなあ…つと！」

「私もその通りだと思う、今はそんな奴よりもキャロルを探す事に時間を割くべきだ」

「それさ早々タンDEMかけて戦った面々が言うと言説得力がない……なあ！」

「まあそうだけど束さん達疲れたなあ〜そろそろゆつくりしたいよ」

「そうか…つしやラストお！」

合間にも律儀に打ち返していたが束達の事を考えて最後にした返ってくるルシファアに対して必殺技を放つ

『ドツガバイト！』

今度は大きな拳型エネルギーが現れると

「はああああ…ドラア！」

同時にエネルギーで振り抜いてルシファアを遠くへ打ち上げたのであった最後に地面に落下したのを見て

「……ふう…制裁完了？」

変身解除すると今までに無い程の爽やかな笑顔を浮かべたハルトがいた

「いいのか？」

千冬の問いに笑顔で首を振る

「反省してたらな…まあアレだけやりや少しは懲りるだろ」

と変身解除して生首みたいになつてるハルカは

「はあ……はあ……許せないわ…そ、そうだ！パパとママに言い付けてやる！……そうし

たら兄さんは終わりね帰る理由が無くなっちゃう…ぎまあみなさい！あははは！」

と懲りて無いのか笑い続ける間抜けの頭をハルトはアイアンクローで持ち上げて

「これだけやって反省してないので第二ラウンド行こうか錫音頼む」

『キバ』

再度アナザーキバに返信し直す

「はいはい」『コネクト…ナウ』

錫音に頼んで出したのは餅つき用の臼

「よいしょっと」

そこに丁寧にルシファアの頭部を置くとドツガハンマーを肩に担ぎながら

「へ？」

「さて……餅つきの時間だよ綺麗に伸びてくれるかな？」

第二ラウンド…フアイト！

「ハルト流石にやりすぎだ「千冬よ…餅つきは互いの以心伝心力が試されるんだ」…待てそれは、つまり上手く餅つきがつけられれば」

「そのペアの相性はピッタリなわけだ」

「よしやろう見ているお前達勝つのは私だ」

「チーちゃん!？」

「ツツコミ役の方がそつちにいくと收拾つかないから戻ってくれ!! 私達が悪かったから
！」

「はあ…冗談はそれくらいにしてそろそろ」

「そつか餅つきは新年にするか…錫音頼む」

「はあ…分かった」『レポート…ナウ』

そう言って今回の戦闘は終わった、圧倒的な力と蹂躪がこの世界にどんな結果を招く
など言うまでもない ルシファーは力尽きたのか赤い霧となって消滅した

魔王の赫怒 そう呼ばれた事件は後に魔法少女事変と並ぶ災厄の事件として名を残
すこととなった

実体はただの夫婦、兄妹喧嘩なのであるのがそれは知る人ぞ知ることである

—————

その頃とある牢屋 ここに収監されていたハルカは涙目になり体をガクガク震わせ

ながら怯えていた

「はあ……はあ……本当に何なのよ……あの人はあ！あんな人の心がなくなった人間よりも私の方が王に向いてるわよ……そう！次はもつと上手くやって」

全てのアバターとリンクしていたとは感じた感覚は忘れ難いものなのに最悪の切り返しをして兄への復讐を考えられる当たり図太い神経なのである

「私の方が優れてるのよ兄さんなんかよりずっと、だから兄さんはずっと後ろで輝かしい私の功績を眺めてれば良いのよ、あんな愚兄は王様なんて器じゃないのよ、その身の程を知りなさい」

そんな事を言つてたら

「身の程を知るのは君じゃないかな？」

「え？」

聞こえた幼い声にハルカは体を震わせ目線を向けると紫色のサイドテールをした女の子がいたのだ

この牢屋は個室となっており他者が来るとすれば看守くらいである

だがこの子は自分と同じ牢屋の中にいる……そんな得体の知れない恐怖に震えているのもあるというよりアバターを介して見ていたのだから分かったのだ

「アナタは逢魔の……何でよ異世界にいるんじゃない「ねえ」へ？」

彼女：ウルティマは逢魔でアバターに拷問をしていた筈なのに！も驚くが

「ハルがね君が何で逢魔のポータルを開けたのか知りたいってさ：ねえ本当に何でなの？今はポータル使えないのにさ教えてよ」

と疑問を素直に話すウルティマに

「話したらどうなるの？」

「別に話したくないなら話さなくても良いよ？頭の知識取れば一発だし：けどハルの妹かあ殺さない方が良いのかな？」

活路を見出したかのように饒舌に話すが

「そ、そうよ！私は逢魔国王の妹：つまり貴方達の王様の身内よ！そんな人間に手を出せば貴女のクビだって「けどハルが抵抗するなら殺しても良いよって言ったから大丈夫か！」…………え？」

この子はなんと言ったか？殺して良い？あの兄が？家族である私を？

「ハルからの伝言、お前は大切を脅かした敵だって：それにさくボク達の王様を罵倒して尚且つ玉座を狙うような愚かな奴はボク達の国にいらぬよ：ゴオマのは体張って挑んでるのが面白いから見逃してるけどね様式美？って言うんだっけ？…………それにハルの敵なら何しても良いよね」

「ひ、ひい！」

と明るく無邪気に笑う姿にハルカは幻視をした

壊れた時の兄と同じような情緒をこの悪魔はしているとだから彼女は彼の元に現れたのだと

「待て、ウルティマ」

「……………カレラ」

新しく現れた人物 カレラに舌打ちをするウルティマだがハルカは気が気でないようだ

「この女か…逢魔を狙った不屈き者は」

「うん、ハルから念話でね拷問して情報を抜き出せ最悪殺しても良いよって言われてるからさ何か有効活用してあげようかなあって」

「成る程、そうだな逢魔に仇なすものへの抑止も兼ねて派手にするか」

「お、カレラにしては珍しく気が合うね」

「そうだな」

「そ、そんなことしたら「何かしら？」ひ、ひいい！」

また新たな人物 テスタロッツサが現れるとハルカをつまらないものを見るような目

で見下している

「つまらないわね、本当にハルト様と同じ親から生まれたの？あの子とその家族みたい
に何で優しい子と愚かな子つてこうも明確に別れるのかしらね：貴女はただ兄の作っ
たものを奪っただけ自分では作り上げてないのに偉そうにしているなんて滑稽ね」

「見下してる癖に困ったら、その威光に縋るとか正にそれだな」

「そんな空っぽの王様にボク達の国は任せられないなあ、有能って勘違いしてる道化は
いらぬいしね」

「私達が我が君に仕えているのは本当にあの人の作ろうとしているものが素晴らしいと
思っているからだ、お前など我が君と比較にすらならん」

「寧ろ今までハルも良くこんな奴許してたよね？」

「ああ：進化の時に流れた記憶を少し拝見したが我慢ならなかった！あの世界に私がい
たなら問答無用で消し飛ばすところだ」

「そうですわね：関係者に死の祝福を打つても足りないってところかしら」

何処かで見えてきたような声音で話すテストアロツサ達にハルカは怯えて声すら出ない
でいる

「あ……あ……あ……」

「んじゃ君をここから出してあげるね」

「ま、ここにいた方が幸せかも知れんがな」

「身の程を弁えないからそうなるのですよ、私達の王を引き摺り下ろす？ 私が相應しい？無理ですわね何度転生しても未来永劫に叶わない望みですわ」

「じゃあね可哀想な裸の女王様」

「愚王の末路は断頭台か獄中なのだよ」

「い、いやあ……ああああああ!!」

牢屋からハルカは姿を消したが数分後戻ってきた、しかしその瞳は虚な目で誰にも聞こえない謝罪の言葉をぶつぶつ話すのみとなっていた

彼女に何があつたなど語る意味がない

掴み取るか否か

とあるホテルの一室

「分かった、ありがとう」

ファイズフォンXの通話を切り報告をする

「ウルティマからの報告でハルカにアナザーツクヨミウオッチを渡してたのは青ウオズ……クジョーってのが分かった」

「「っ!!」」

「どうやらウオズに化けてたみたいだな、うまいことに」

「成る程それでハルカを見捨ててトーマに繋がっても消滅しなかったのか」

ウオズはその未来に繋がらないと消滅すると言うのは白ウオズが体現したしな

「つて事はトーマもネオタイムジャッカーってことになるのか」

「だがルシファアのライダーシステムを誰が渡したのかは覚えてなかった……まあネオタイムジャッカーだろうけどな……しっかし見事にアナザーライダーの副作用出てたな」

『ああ俺達の副作用の典型例だったぞ』

「副作用?」

「簡単に言えば使用すればするほど視野狭窄や悪意を増長させるんだよ…俺には起こらない話だがな何故かな…けど」

アレだけ読めなかったが解せない

「何か気になるのか?」

「仮面ライダーシフアー…いや正解に言えばアップデート前の仮面ライダーエデンには共通している所があるんだ」

「人の悪意から生まれたライダーじゃないの?」

「それも…ただけどライダーとしての意味なら」

その答えは錫音が答えた

「ナノマシンによる再生能力からくる不死性やそれに基づいた攻撃…言うなれば初見殺しかな」

「そ、錫音の言う通りタネさえ分かればルシフアーやエデンの脅威判定は下がるんだよ」
ゼロワン劇場版でエデンが彼処まで大暴れ出来たのは一億台もの仮面ライダーアバ

ドンのライダーシステムや周到に準備した計画：何よりアレは

「変身者の用意周到と事前の下準備の賜物なんだよなあ」

実際、ゼロワンの最強形態仮面ライダーゼロツーは敗れ、メタルクラスタホツパーのクラスタースセル攻撃だって致命打にならなかったとある唯一の弱点を直接叩かねば倒せないエデンに対して

アツプデート後のエデンより強い筈のルシファーがゼロツーとリアライジングホツパーに負けた事から見るとエデンでも単純な力押しでは勝てなかった事を表している
勿論再生能力の可否もあるが

言わばエデンやルシファーは対策が建てられてない状態でかつ使える回数が限られる切り札のようなライダーなのだ

「つまりハルトは攻略法が分かりきってるライダーを刺客に送った事が疑問だって事か」

「アバターを数体遠隔操作させたハルカは凄いんだけど肝心のライダーの力を引き出せないからなあ…ある意味不死性でゴリ押しするのも選択肢では最適解な訳なんだけど」

いかんせん雑でしかない

「そうだなハルトの知識を考えると何故となるか」

「時間稼ぎや陽動…ハルトの手札を調べると色々思い当たるが」

「はいはい！シリアスは後だよ後！それより今日は疲れたなあ」

「んじや寝るとしますかあ……ん？」

おい待て

「何でベツトが一つしかない？」

「それは私達と一緒に寝るからだろ？」

「さあハルト、大人の階段を登ろうか」

「子供は2人かなあゝ」

「っ！」ダツ！

「逃すな追え！」

「大丈夫千冬、追わなくて良いよ」

『バインド……ナウ』

同時に鎖で拘束されたのでミノムシのように動く

「や、やめろ！HANASE！」

「大丈夫だよハル君！天井のシミを数えてるうちに終わるからさ！」

「そうだねお互いの初めてを交換か……長かったなあ」

「ああ……この時をどれほど待ったことか……」

「おい待て！確かにそうは言ったがせめてそう言うのは雰囲気というのがだな！ま、待

て……あー！」

暫くお待ちください

翌朝

「どうしよう……もうお嫁に行けない」

簡潔に言おう俺は大人の階段を登りました…

「何を言う、途中からノリノリだった癖に」

「寧ろ私達が貰われる側だよね？」

「うるさい……責任は取る」

「当然だ取ってもらわねば困る」

「そうだね」

「いやあく流石に疲れたなあ」

結果午前中は全員部屋から出る事はなかったと言う

午後 ホテルをチェックアウトして向かった場所は

「うへえ……こう見ると結構暴れたなあ」

昨日 大暴れした場所である現在立ち入り禁止となつてはいるが隙間を見たら誰かしらが調査しているようで

「何も出ないのによくもまあ無駄な事を」

千冬が呆れたように話すがハルトは意も解さずに

「そうだね…んじやキャロルを探そうか」

「おい待てアテがあるのか」

「知らね、けどここについても意味がないだろ」

「まあそうだが」

「俺からすればこの世界がどうなろうと知ったこつちやない一部以外の人間は興味ねえ

よ」

「ハルト、流石に配慮はしてくれ」

「善処する…本気で暴れた場合の保証がないけどな」

とハルトはカラカラ笑いながら現場を離れたのであつたが

数時間後

「やっぱり見つからない!!」

アテもなく彷徨っているのだから見つかる訳もなく

「ま、当然だよねえ」

「どうする一度逢魔に帰る？」

「悪くないがウオズ達に何の成果も得られませんでしたあ！つて言うとか冗談じゃないよ」

「ルシファーが攻撃したなら逢魔の報告は聞かないと」

「だな」

ハルトはファイズフォンXでウオズに電話をかける

「もしもしウオズか？」

「どうされましたか我が魔王？あ…昨夜はお楽しみでしたね」

「何で知って…つて知ってて当然ってこんな話してる場合じゃなかった…ウルティマから聞いてると思うけどハルカのバカが仕掛けてきた」

【話だけは聞いております現在、ウルティマ殿が笑いながら拷問しておりますので…あ！ウルティマ殿、ベイリングインパクトはダメです！監獄の壁が壊れます!!】

「今すぐウルティマを止めて！…あのバカを唆した誰かを割り出す必要がある…そつち世界での調査は任せた」

【かしこまりました我が魔王をお気をつけて】

「お前もな逐次報告頼む」

【御意】

通話を切り情報共有すると

「逢魔はウオズ達に任せて俺達はキャロルを探そう」

「けどどうやって…」

「今思い出した方法ならある」

「「え？」」

「束にしか出来ない事だ」

「私？」

—————

「どんな方法かと思えば」

「ライドベンダーのハッキング…まあ束にしか出来ないな」

「まあそうだよねえ」

とハルト達の足にしたライドベンダーのハッキングをしていたのだ

「キャロルがシステムを管理してるなら大元のサーバーがあるだろ？そこを逆探知すれば拠点の一つが割り出せる…防衛拠点の一つならヤミーがいるし最上でオートスコアラーの誰かがいる」

「キャロリンがそんなミスするかな？」

「罨の気配がするが」

「罨でも何でも手掛かりになるだろ？」

「よし！見つけたよ……けど胡散臭いなあ〜複数のサーバー経由してたから怪しいよ……罨の可能性が大きいなあ」

その言葉に皆が頷くとハルトは妙案ありと思いつき

「そうか……あ、丁度良い奴らがいるじゃん」

「へ？」

それだけ言うとハルトはファイズフォンXに電話をかける

「ナツキ、俺だ少し時間をくれ」

東達は別場所で待機して貰い近くの港にナツキを呼び出す

「よお久しぶり……でもないかあ元気？バイクで轢いたけど」

「お陰様でな……何の用だ」

「そう怖い顔しないでくれ俺は情報を渡しに来ただけだよ敵意はない……まあ戦いたいな

ら相手するけどな」

「情報？」

「そ、キャロルの重要拠点かも知れない場所のな」

「っ！何でそれを俺に…」

「忘れてたのか？お前は俺の外部協力者だ役目は他の連中とのホットラインだ」

「そう言えばそうだったな…それでバースの力を貰ったんだっけ」

「そつ、俺はお前と違つて彼処の連中を好きになれないがお前達は別だ必要なら情報提供は辞さないよ」

「何で情報を渡す気になったんだ？キャロルが不利になるかも知れないのに」

最もな事だたと被りを降り

「お前達が派手に暴れればキャロルかオートスコアラーが出張る可能性が高い…つまり」

「キャロルに会える確率を上げる気か…なら何で情報を独占しないんだ？」

「戦いに横槍入れられる位なら最初にぶち当たって消耗してもらおうと思っただけだ他意はない」

「他意しかないような…けど…」

「疑うのはご自由だが情報の精度は高いぜ？お互いキャロルを止めたいのは同じだ…」

まあ求める結果は違っただろうがな」

「同じだと思いたい…分かった協力しよう」

「よし受け取れ」

ハルトが投げ渡したのは情報を纏めた端末と3枚のコアメダルである

「つとー……え？コアメダル？」

「サソリ、カニ、エビコアメダル…仮面ライダーバースの強化アイテムだ」

「バースの？バースはセルメダルしか使えないんじや…てかこのコアメダルって」

「忘れたか？オーズのライダーシステム開発には俺も一枚噛んでるのを…あと、それは人造コアメダルだ複製は出来ないから気をつけろよ」

「そうだった…今のキャロルには紫メダルがあるんだ」

「まあな…それはキャロルが残したバース強化プランの一つ…そのコアメダルとエルフナインちゃんが開発してるだろうユニットが完成すればバースはバースXに進化する」

メダルを握りしめて

「ハルト…お前…何でエルフナインが作ってるって…」

「お前が知る必要はない…それは対価だよ情報と力は好きに使え」

さてクールに去るぜと動こうとしたのだが

ドン!

「っ!」

慌てて間合いを作ると大きなクレーターが出来ていた

「これは…」

「見つけたぞ!」

「げ…」 「トーマ」

2人は目線を上げるともう嫌だと言わんばかりの乱入者を見る

「とうとうハルカまで手にかけてのか…人の心を失った化け物め俺が倒す!」

「殺してはないんだけどな心が折れてるだけで…っ!かよく来るな負けてばっかなのに」

「黙れ!」

「ダメだ完全に副作用に吞まれてるな」

「トーマ!」

「ん?…お前はナツキか離れていろお前に用はない」

「そつちに無くてもこつちにはあるんだよ…変身!」

バースになりバースバスターで攻撃するが

「無駄な事を」

『リバイブ…疾風』

「ぐ……があ……うわあ！」

疾風の高速攻撃によりバースは強制変身解除された

「う……うう……っ！」

ポロポロで倒れたナツキに向かい視線を変えハルトを見るトーマは

「次はお前だ魔王」

「はあ……王の「待ってくれ」…？」

面倒くさいと思ったハルトは王の勅令で無力化を凶ろうとしたがナツキは再度立ち上がりバースドライバーを付けた

「頼む、アイツは俺に任せてくれ…ある未来での借りを返す！」

「お前に勝「勝つんだよ！」ほお」

「ふーん…んじやいや」

珍しく吠える彼の姿に感じる所があったハルトは数歩後ろに下がり近くの台に腰掛けた

「ナツキ頑張れ〜」

『ハルトは戦わないのか？』

「ナツキがやるってんなら見守るだけだよ危なかったら「加勢なんて出来ると思いますか?」ん?」

背後を見るといたのはクジヨーである珍しく単独だったので

「何だよ根暗眼鏡、今日はボツチか?」

「貴方もボツチのようで魔王…どうです?暇なら私と遊びませんか?」

『ジユウガ』

「そうだな…この間のお礼はしっかりしねえとな」

『ジオウ』

2人もアイテムを構えるとナツキはセルメダルをクジヨーはジユウガバイスタンプを押し込んだ

「変身」

『!!!』

『仮面ライダージユウガ! go over』

クジヨーはジユウガに変身しナツキはバースになると、それぞれがアナザーライダーに突貫した

「はあ！」

—————

激突から数分　しばし拮抗状態だったのだが

「あ…があ！」

バースが倒れ再度変身解除された事で傾いた

「ちい！」

アナザージオウの未来予知でナツキの安全を確認しているのだが、その場合

「魔王！」

「邪魔だ！」

俺が2対1を引き受けないとならない事だツインギレードを分割して双剣で両者の攻撃を受け止める

「ちい…」

さつさと王の勅令で無力化させたいのだが

「あの力なら無駄だ…対策済みだ」

「へ？おいマジかよ」

『おいおい俺が死物狂いで作ったのか！』

と驚いたが

「ああ…あの技は乱発出来ず集中力が必要なんだろう？なら攻撃し続ければあの技を使うことは出来ない！」

根本的に効かないって意味じゃないのかとツツコミを入れたかったがジユウガが別のバイスタンプを起動した

『オオムカデ』

そしてジユウガドライブに装填した

『アブソープ…カブト！』

「クロックアップ！」

同時にジユウガが消えるとアナザージオウに光速の拳打を打ち込まれた

「へえ俺と早さ比べか…元祖の力を見せてやる」

『カブト』

アナザージオウの体が弾け飛び中からアナザーカブトが顔を出すと腰のスイッチに手をかけた

「クロックアップ！」『CLOCK UP』

光速の世界に突っ込みジユウガとアナザーリバイブの速度に追従した

その様子を見ているしかないナツキは地面を強く叩いた
「クソツ！いつもこうだ…なんでなんだよ！」

彼は何度も何度も死に戻りをして未来を変えようと足掻いてきた

最初のターニングポイントはハルトと錫音の殺し合いを止めること

次にソロモンの杖を確保すること e t c

その度を選択を間違えた

最初のターニングポイントでは何度もハルト達にヘルヘイムに送られ、魔法で殺された
かけた…そう言えばハルトの家に行けてもカゲンにゴミ箱に投げられ死に戻りしたつ
てもあった

仮面ライダーになつたつてのに情けない…

「ちくしょう…何でアイツ等みたいになれねえんだよ！」

地面を強く叩くと

『CLOCK OVER』

加速を終えた三者は再度向かい合うがハルトは内心冷や汗ものだ

「あーこれヤバいな…使うか？」

今まで時間の巻き戻しや変換しか出番のなかった王の力を使うべきかと考えている

と聞こえたナツキの弱音に思わず

「バツカじゃねえの？」

「へ？」

溜まりに溜まった本音が爆散した

「俺みたいに？ お前が俺なんかになれるわけないだろ」

「っ！ お前に何がわかるんだよ！ 世界相手に一人で戦えるくらい強いお前に!!」

「俺一人で戦える？ 冗談じゃねえよ俺はタダの器で本当に強いのはこいつ等だ」

『おいおい謙遜するなよ相棒』

アナザーウオッチを見せて話すハルト

「俺にしか出来ない事があるようにお前にしか出来ない事があんだろ！」

「っ！」

「話してる余裕があるんですか！」

「余裕があるから話してんだよ！ お前たちは少し止まってろ！」

『ドライブ』

アナザードライブに変身して重加速を限定範囲で掛けて動きを抑止しナツキの胸ぐら掴んで持ち上げた

「あのなあ！ウジウジ地べた這いずり回る暇があるなら立ち上がってまた挑め！！戦う意志がないならコアメダルを返しやがれ！！そんな軟弱な奴を協力者に認めた覚えはねえよー！」

「っ！お前に「分かんだよ！全部諦めた人間がどんだけ惨めなのかなー！」っ！」

「その先にあるのは終わらない後悔だ……したくないなら立て！何度も死に戻りなんてイカれた事してまで叶えたいものがあるんだろ！」

「お、俺は……」

「欲しいなら手を伸ばせ！望め！傍観するだけは何も掴めないんだよ……俺は手を伸ばしてアナザライダーになった人間を辞めたが後悔なんてしてねえ！」

もし別の道があつても同じ道を選ぶだろう、それがどんな道だろうと後悔はしない、あのまま妹や彼氏に悪役に駆り立てられた惨めな人生で終わりたくなどない

「お前はどうか！何を望む！叶えたい欲望はなんだ！！」

「っ……」

『あの…大丈夫ですか?』

その時に伸ばされた手の暖かさを知ったから
助けられたら助けたいと思った

『ナツキさん…無茶しないで下さいね』

だがそれ以上に出来てしまった大切な人

「……………だよ」

「あ?」

「何が何でも助けたい人やそれ以上に守りたい人がいるんだよ!!お前のせいで何でも死
に戻ってるんだ!俺の望みの邪魔するってんなら…お前は俺が倒してやる!!」

その咆哮にアナザードライブは気をよくしたように体からマフラー音がなり

「よく言った!!それでこそ俺の友達だ!」

アナザードライブは手を離すとナツキは再度立ち上がると同時に重加速が解除されたと同時に変身を解除した

「ハルト…お前…「ナツキさん!」え?」

トタトタと走ってくる小さな影に驚いた

「え、エルフナイン!?!なんで」

「完成したんです…これをナツキさんに!」

と渡したユニットを見て驚いた、それはジュウガも驚いていた

「バースユニット!これ!」

「この力で皆を守ってください…お願いします…」

「エルフナイン…分かった!…俺の後ろにいてくれ」

「は、はい!」

「エルフナインは…俺が守る!」

「／／／」

「いやあ2人の世界ですなあ〜羨ましい」

「は、ハルトさん!？」

「お久々…俺のことに気づかない程ナツキに熱視線となキャロルが聞いたら何言うか」
「ええ!べ、別にナツキさんとはそんなんじゃないや…」

「ちや、茶化すなよハルト!…それと、ありがとな目が覚めた」

「お礼ならあのバカ2名を倒してから言え」

と視線を向け直す

「待たせたか？」

「いえいえ…まあ私達が悪役になつてる感じはありますが構いませんよ」

「ならお約束通り退場して貰おうか、人の妹を焚きつけた罰を受けてもらうぞ」

「おやおや人聞きが悪いですね、兄を思う妹の優しきでしたのに」

「あの妹にそんな兄を思う心なんてある訳ねえだろうが、あるのは虚栄心と自己満足だけだ」

「本当に貴方は…自分の見たいものしか見ないのですね」

「何言ってるんだ、人間なら誰しもそうだろうがお前だって俺が魔王になるって信じてるから襲うんだろ?…お前のお陰でなつたけどよ」

「やはり貴方は我々ネオタイムジャッカーが倒すに相応しい敵ですな魔王…あの時死んだ同胞の無念をここで晴らします!!」

「そんなに勇者ごっこがしたいなら他所でやれ」

と煽りあう中、ナツキはバースユニットをドライバーに装着して構えた

「ハルト、リバイブは任せる俺がやる」

「エルフナインちゃんに調整頼まないで良いのか?」

「俺は彼女を信じてるから問題ない…ぶつつけ本番でいく」

「そっか…んじや俺もぶつつけ本番で行くか!」

彼がそうするなら俺も見せなきゃ男じやねえよな

『ほお』『お!やるかハルト!』

『遂にだな!』

構えるとアナザーウオッチが光り始める

「へ?」

「何っ！それは！」

「魔王化で手に入れた新しい力だ」

そう言うとなナザーウオツチが金色に変化した：ほほお最強フォームのとなナザーウオツチは色が変わるみたいだな、表示されてる顔はとなナザーライダーだけどな

「まだ強くなるのかよ」

「まあ俺に勝てるのは本物の仮面ライダーだけ：それ以外に負ける気は毛頭ない！」

『他魔王への損害賠償』『嫁』

『これにも勝てるのか？』

「一部例外はある!!」

『しまらねえなあ…』『尻に敷かれてるな』

「行くぞ！」「ああ！」

『誤魔化したな』

「変身！」

ナツキは3枚のコアメダルをドライバーに装填した

『エビ！カニ！サソリ！』

カポーン！

『ババース！ババース！バーバーババース！エーックス！！ソカビー！』
その姿は普段のバースと違うマツシブな体軀とカラフルさを誇る

未来を生み出す戦士 仮面ライダーバースX

「おお……これがバースX！」

「カッコ良いな」

それは俺には絶対届かない場所にいる彼への羨望だ

ナツキは余りある力をハルトに感じ

ハルトはナツキの心のあり方（仮面ライダー）に憧れを抱く

互いに隣の芝の青さを知る故に望んでしまう

だがやる事は同じである

ハルトもアナザーウオッチを起動すると目の前には金色のオリハルコンエレメントが展開され通過すると現れたのはコーカサスオオカブトのような黄金の剣士、その手にはキングラウザーに酷似した大剣を肩に担ぎ左手には盾とまるでカテゴリーK コーカサスアンデットを思わせ、体の至る所に格スペードスートのアンデットの顔が死面のように張り付いたそれはバトルロイヤルに敗れ封印された無念さを表しているように

悲壮感を与える

カテゴリーK以外のスピードスートのアンデットと剣を合わせたような歪さを持つ
アナザーライダー

『ブレイド……キング』

運命を縛るもの アナザーブレイド・キングフォーム

「ば、馬鹿な！キングフォームですって！」

ジユウガは驚いているがアナザーキングフォームは全身に回る高揚感が体を襲うが
笑いたくなるが本能の部分で押さえ込んだ

「俺は運命を受け入れる、その先にある平和を求めて！」

初変身は負荷が凄い事もある

ジュウガとキングフォームの戦いは熾烈を極めた互いの一撃が必殺技に匹敵すると理解しあっているからである

「ちいー！」

『パワードゲノムエッジ』

ジュウガはレバーを3回倒して必殺技パワードゲノムファイニッシュを発動、コングなどパワー型のスタンプを力を解放しロケットパンチを放つが

「……………」

アナザーブレイド・キングフォームの片手に停められてしまう、当然タネも仕掛けもある

体の各所にあるレリーフのようなアンデットの顔に内包された力がそれぞれ最大限増幅されているのだ

「返す」

『マグネット』『サンダー』『ビート』

ロケットパンチのエネルギーにラウズカードに込めた電磁力の力を付与し撃ち返した

「っ！」

超電磁砲となったロケットパンチの一撃を回避し視線を向け直したと同時に港にあつた倉庫が爆破して大きな火柱が上がった

「な、なんて威力なんですか…これが…魔王の一端…」

「……………へ？」

予期せぬ高火力にアナザーブレイドも固まっていたが

『ここ、これがキングフォームの力か！』

『スゲー一撃だな！』

と周りも驚いている…よし

「なるほど…だ、大体わかった」

どうやら最強フォームのアナザーライダーは通常時よりも制御が困難なようだ…加減が難しい動揺を隠しきれないとアナザーライダー達から総ツツコミでアナザーデイケイドからは

『それは俺のセリフだ！』

と言われたが

「いやお前でもないだろうー

「やはり貴方は危険です…完全に目覚めない内に排除します！」

「本当に何で俺を目の敵にするんだが知りたいんだけど…まあ」

アナザーブレイドはキングラウザーに似た大剣を構えると体から抜けたようにラウズカードが大剣に吸い込まれる

「……でお前を倒せば全部解決か！」

『スピード10、J、Q、K、A』

金色のオリハルコンエレメントと紫色に輝くキングラウザー型大剣を構えた

「はああああああ…」

「っ！」

ジュウガも迎撃の為に最強の必殺技を解放した

『アメイジングファイニッシュ!!』

高く飛び上がり大量の動物達と共にライダー キックを放つジュウガに対して

『ロイヤルストリートフラッシュ!』

剣を振り抜き増幅されたエネルギーの斬撃で迎え撃つアナザーブレイド

「せやあああああ！」

「ウエエエエエイ!!」

互いの全力の一撃が中間地点で激突、その一撃は光の柱となり港を照らし近くに停泊している船さえも大きく上下に動く

その一撃が止むと2人は同時にエネルギー波で吹き飛ばされた

「がつー!」「ちい!」

ジュウガは壁にアナザーブレイドはブレイラウザー型大剣を呼び出し地面に突き刺す事で耐えた

「……これ程とは」

「まだまだ行くぜ!」

その頃 バースXとアナザーリバイブは

「そらそらそら!」

バースXはバースバスターを使った射撃戦を展開していたが間合いが詰まるとバースバスターを投げ捨てて肉弾戦へと移行した

「クジヨーさん!……ちい!邪魔だ!」

『剛烈』

「負けるかああああ!!」

アナザーリバイブ 剛烈となり肉弾戦特化のままバースXと殴り合う、分があるのは此方とタカを括っていたのだが殴り合うと少しずつだが此方が押されているではないか

「な、何だこの力は!」

「はああああああ!オラア!」

遂にバースXの拳がアナザーリバイブ 剛烈の顔面を捉えて吹き飛ばすと追撃と言わないばかりにカニコアメダルを一番上になるように装填しドライバーを操作すると

『カニアーム』

右手にカニの鋏型武器 カニアームを装備し

そのままアナザーリバイブの腹部に添えるとレバーを再度回転させた

「剛烈がいくら硬くても、ゼロ距離ならダメージは通るだろ!」

『コアバースト!』

「吹っ飛ば!!」

放たれたメダル型の光弾はアナザーリバイブを吹き飛ばした

「うわああああ!」

そのままアナザーリバイブは変身解除して倒れたのを見てガッツポーズするナツキはバースバスターを拾い銃口を向けた

「ぐ……ぐう……何故だ！何故魔王に味方する！あの男が多くの人間を不幸にするんだぞ！」

トーマの見方も間違いではない実際ナツキのいた未来ではそんなルートのハルトもいたから、そして知っている

「そしてそれと同じくらい人を幸せにしてる」

「っ！」

とある未来の逢魔王国は魔法と科学が融合した近未来都市となり数多の国と貿易をする程豊かな国である

そして何より 世界から爪弾きされ差別の対象になっていた存在を分け隔てなく受け入れ共存共栄しているのだ

とある未来では彼が壇上に立ち高らかに唄う

「ここはお前達はいて良い世界だ、だからお前達はありのまま居れば良い！怪人は怪人、生まれは変えられないが生き方は変えることが出来る何も言わなければあの世界と同じ差別や理不尽な偏見は続き終わる事はなく徹底的に弾圧された……だが最後まで戦い抜きここに来たお前達は運命を変えた英雄である！自分や子孫、仲間に胸を張って生きる！そのあり方を他ならぬこの国の王である俺が肯定する！！」

そんな演説をした王様がいた、だからだろう色々な種族が共存共栄の道を模索して発

展していった

幸と不幸は天秤のように傾き合う

彼が幸せにした人達の裏では不幸になった者もいるのだが

「それを又聞きして全部知った気でいるんじゃないやねえよ」

その点だけが不愉快極まりないのだ、自分のように見てきた訳でもハルトのように作る側でもない。ただ又聞きした情報を踊らされているだけの目の前の愚か者に我慢がならなかったのだ

「わ、わからない！あの男は平気で家族を見捨てるような人間だぞ！そんな人間が多く人間を幸せになんて出来る訳がない！」

「いやあくハルカちゃんの方が悪いでしょアレ」

ハルトの主観もあるので公平とまではいえないがと前置きしたが

「っ！何故だハルカはハルトの事を大切に思っているんだ！」

「恋は盲目って言い得て妙だね、あの子の根っこみたらそうは言えないよ」

何ならあの子のせいでアナザーオーマジオウになった√もあつたしと被りをふる

「そ、そんなことない！」

「ここまで来るともう何も言えないな：俺の幸せの為にここで終われ」

バースバスターの引鉄を引こうとしたその時！

「ナツキさん！」

「っ！」

エルフナインの声に従い後ろに下がりはバースバスターを構え直すとそこには

「つたく、大将に言われて来てみればコレかよ」

「ポセイドン！」

ディーペストハーブーンを肩に担いでトーマを守るように立ったポセイドンを見て

「れ、レック……」

「俺アお前のお守りじゃねえんだけどなあ……」

「逃すか！」

「悪りいが今は忙しいんだ、暴れたいなら今度遊んでやるからよ！」

ディーペストハーブーンで水柱を起こすとポセイドンはトーマを担いで海に逃げたのであつた

「ちっ…」

「ナツキさん！」

「エルフナイン、大丈夫か怪我は？」

「大丈夫ですナツキさんが守ってくれましたから」

「そっかあ…良かったあ…」

笑い合っているナツキは目線をハルトに戻し

「さっさと勝てよハルト…でない」と

ナツキが不意に目線を逸らした先には白いバイクが止まったのであった

—————

「はあ！」「ちい！」

大剣を構えて睨み合おうと逃げたのが見えたので

「お仲間は逃げたようだけ？」

「みたいですね…では私もこの辺で」

「逃すと思うか？」

「問題ありませんよ…重加速を使ったのは早計でしたね」

「ん？それって「見つけたー！」は？」

目線を向ける前にアナザーブレイドを襲うミニカーサイズのバイクの軍団…シグナルバイク達が邪魔して来た

「ちい…んだよコレ！」

「重加速があつて来てみたら、やっぱりいた魔王！さあさあ行くよー！お楽しみは私からだー！」

と赤髪ツインテールの女の子が取り出したのはマツハドライバーであった、そしてシグナルバイクの中から一つ掴みドライバーに入れた

『シグナルバイク！』

「I e t s…変身!!」

『ライダー！…マッハ!!』

すると体に白い装甲と赤いマフラーを帯びたライダーが現れた肩のタイヤ…間違いないな

「追跡！撲滅!!いずれもマッハー！」

「はっ？」

ナツキとエルフナインはキョトンとしているが俺も最初見た時は同じ気持ちだった

ので分からなくもない

「仮面ライダーマツハ!!」

あのおなじみのポーズを決めた

次世代に行く者 仮面ライダーマツハ

「ほお…仮面ライダーマツハですか素晴らしいですね」

ジユウガも関心していると

「さあ行くつよー!」「待って!」「ふにゃ!」

「まったくいきなり飛び出さないでよ!」

「てて…いいじゃん!アニメなら先陣切って行く場面だったしいく」

「アレが…魔王」

「聞いていた姿より金色ですわね」

「うん……だけどビッキの敵なら戦うだけだよ!行こう!」

「はい!」

「おつ!全員変身とかアニメっぽいじゃん!」

「どっちかと言えば特撮じゃね?」

ロングヘアの女の子が取り出したのは紫色の拳銃型ツール。ネビュラスチームガン。そして2人は何処からか取り出した歯車が刻まれたボトルを装填する。

『GEAR ENGINE! FUNKY!』

「はい、創世さん」

「ありがとうっ」と

エンジン音が鳴るとボトルを抜いて相方に渡すと同じようにボトルを装填した

『GEAR REMOCON! FUNKY!』

2人が引鉄を引くとネビュラスチームガンから煙が巻き上がる

「潤動!」

機械的な音と合わさる中、歯車のエネルギーが彼女達に装着されると左右非対称の戦士が現れた

『REMOTE CONTROL GEAR!』

『ENGINE RUNNING GEAR!』

世界を回す歯車の戦士達 エンジン、リモコンブロス

「おいおい聞いてはいたがマジかよ」

『おいハルト、不味いなコレは』

ーああ最初から最強フォームで行ったのは間違えだったかあ？ー

変身してからの体力の消耗スピードが早すぎる魔王化してるのにコレかよと冷や汗が止まらない

「私がエンジンブロス、創世さんはリモコンブロスです、どちらと戦いたいですか？」

「へえ？俺相手にそんな余裕があるとは…舐められたものだなあ！」

「両方ですか…流石ですね！」

「はあー！」

リモコンブロスがネビュラスチームガンで射撃するなかエンジンブロスがスチームブレードで近接と本家鷲尾兄弟に負けない連撃をしてくる、先程の消耗もあり分が悪いなあ…

「では私はコレで、感謝しますよお嬢さん方」

逃げようとしたクジョーを追いかけたのだが3人から邪魔だてされた

「待てやクジョー！ちっ！邪魔だ！」

『サンダー』

地面に大剣を刺して雷を走らせてマツハ達と間合いを作る

「俺君達に何かしたかなあ〜」

「少なくとも君達に何かした覚えがないのだが」

「貴方はビツキーの敵なんだよね…なら私達の敵だよ」

「友達が傷つかないで良いように戦うんです！」

「なるほど友達の為かあ健気だけど」

「そっか…なら俺は帰るとしよう」

「へ？」

「連戦する気分じゃないし君達が来たら十中八九さ来るんだよねお友達、だからもう面倒くさいや帰る」

「それにナツキに情報渡せたから目的は達成したも同じだしとアナザーブレイド・キングフォームはアナザーウィザードになり」

「んじやあねえ〜」

『テレポート』

「すぐに転移したのであった」

—————

拠点にて

「あ！ハル君おかえり！」

「ただいま束」

「どうだった？」

「成功だよ、後は連中のタイミングに便乗すれば大丈夫だ」

「やった！流石ハル君だね！」

「つと……あ、やべ！」

いつものように飛びついてきた束を優しく受け止めたハルトだったが体制を崩して仰向けに倒れてしまった

「てて…怪我はない束？」

「う、うん…大丈夫ハル君？」

「大丈夫だよ初めて最強フォームになって疲れただけだから」

『まあぶつつけだったからな』

「魔王進化しててアレなら人間の頃になってたら死んでたな…確実に」

『ああ…間違いなくな』

「つー訳でまた体を鍛えようと思う」

「成る程」

『単純だが効果的だな』

「取り敢えず筋トレすれば大丈夫だろ」

『筋トレ……そう言えば専門家が来てるな、おい新人！』

専門家？と首を傾げると答えが返ってきた

『お前が魔王か！俺はプロテインの貴公子！アナザークローズよろしくな！』

ーおお！確かに専門家ばい！オリジナルも元格闘家だしな！ー

『筋トレだろ？なら先ずは腹筋10000回だ！』

ーバカか！魔王でも死ぬわ!!ー

『誰がバカだせめて筋肉つけろ!!』

『そつちかよ！』

ー頼むアナザービルド！相棒を止めてくれよ！ー

話していたら束が掴む手の力が強くなっていて嬉しそうな気がする

「あ、あの束さん……そろそろ退いてもらえると嬉しいなあくなんて」

「えーそれは嫌だなく珍しくハル君が弱ってるんだから色々イタズラしたいよねー」

「な、何をやる気で？」

嫌な予感、頼む！動け俺の体あ!!と思うがガツチリとホールドされてる上に最強フォーム変身に伴う疲労で動かないと来た、そして束の目……間違いないアレは獲物を狩

る肉食動物の目だと戦慄すると

「何って……ナニかな」

「女の子がそんなセリフ言う者じゃねえよ！つーか離せ！離さないと悲鳴あげるぞ！」

「それ言うの逆だと思うよ？まあハル君になら東さんは襲われても「何言ってるの!?!」さあさあ東さんと楽しい夜を過ごそうじゃないか！」

「ま、待てやー！」

翌朝、げっそりしたハルトと肌艶の良くなった東がいたのは言うまでもない

ドラゴンと獣帝

5話

今回の舞台はありふれたショッピングモールから話を始めよう

「これで全部だな」

「そうだな…しかし早く終わったな」

と中で楽しく買い物を楽しんでいるのは千冬とハルト、彼等は拠点の日用品の買い出しに出っていたのだ

「プロテインって沢山あるんだな」

だいぶ趣味にもよっている原因は

『そうだろ！だから色々悩んじゃうだよ』

『お前悩まないだろ筋肉バカが』

『おう！コレと決めたらこうだぜ！』

『ダメだこりゃ』

と仲良く話してるアナザービルドとアナザークロースの2人の様子に微笑まじさを感ずる

あの後最強フォームに順応する為の肉体改造を始めた、流石に魔王進化で胡座を描いていたがそれで力を十全に発揮出来ないのは彼等に申し訳が立たないので通常の筋トレや重りりをつけての日常生活を始めたのだが

「体力作りを本格的にし始めた」と聞いたが、そんなに負荷が掛かるのか？」

「千冬にも分かりやすく言えばP I C無しでI S動かすような感じだな、結構しんどい」「ほお…並大抵の負荷でないのはわかったが大丈夫なのか？」

「最近はずワークも多かったからな…体も鈍るよそりや…これくらいが丁度良い」

『そうだろ！じゃあ次はアナザーウィザードにグラビティ使ってもらおうぞ！』
『辞めなさいよ！ハルトが死んじやうでしようが！』

取り敢えずアナザービルド頑張れと思いつつ首を回すハルトに千冬も頷いた

「確かなな…それよりだ時間があるなら面白い物に付き合えハルト」

「良いよー久しぶりに2人だな」

「そうだな、よし行くぞ」

「え？ちよつ！強く引つ張らないでよ千冬！服が破れる!!」

そしてその帰り道

「この荷物どうする?」

大量の紙袋を見たハルトは指輪を使い

「こうすりゃ良い」

『コネクト』

「成る程な」

そう言つて荷物をコネクトした先に投げ込み

手ぶらになったのでバイクで帰ろうと思つたのだが

「さて…歩いて帰るぞ」

「はいよ」

千冬が腕を組んでくるがもう慣れたものである、その先の関係まで行けばそうだろう
なと笑い合っている

「は?」「あ?」

先日、邂逅したマツハとブロス達に加えて

「立花響と小日向未来…それと」

「マリア・カデンツァ・アヴナ・イヴか」

懐かしい黒いガングニールを使い戦っていたのはゴスロリのオートスコアラ―…おい待て！

「っ！性根が腐ってるガリイだと…千冬！」

「分かっている行くぞ！」

と2人は駆け出すのであった

—————

その場は一方的であった

「あらら折角マスターが計画したライダーシステムも使い手がコレじゃたかが知れてますね」

「っ！待って…仮面ライダーって…まさか！」

「おっと話しすぎちゃいましたね、ガリイちゃんうっかり♪」

カラカラ笑いながらガリイはマリアの槍の一撃をピンポイントガードしていた

「くっ！」

「おら少しは頑張れよ外れ奏者!!…まあ良いかマスターが実験してこいつて言ってたからお前で試すか…あむ…」

「それってコアメダル!?何で貴女が！」

「正解だよオラア！」

するとガリイは三枚の青系コアメダルを飲み込み、水流攻撃を放つがそれは通常時の数倍を誇る威力だった

「あはははは！ 凄い凄い！ 流石マスター作のコアメダルですなぁ！ お前たちが10000年使つても届かない領域なんだよ！」

と息巻くガリイであつたが何かを察知して間合いを作ると同時に何か大きな塊が近くの街路樹を破砕した

「誰ですかあゝガリイちゃんの楽しみを邪魔したのは？」

その姿は白くフアスナーで結ばれた魔人、右手には大鉈ザルツドラを構えた魔王の従者

三属性を宿す大渦 カリユブデイスメギド

「外れましたか…いやはやハルト様から授かりしこの力、まだ鍛錬が必要なようですね」

「カリユブデイス…つて事はいますよね」

「ええ勿論…っ！ お待ちしておりますハルト様」

カリユブデイスは何かに気づいて跪くと同時に虚空からハルトが現れた、彼は笑顔のまま

「ありがとうなカリユブデイス…よおガリイ、久しぶりで悪いんだけど転移結晶置いてけや」

「あらあら、マスターの元彼じゃないですか？まだ未練がましく復縁要請してるんですかあはははは！嫌われますよ、あ、コレは失礼もう嫌われてましたねアハハハ！」

「やっぱ性根が腐ってんなあ…本当に」

相對して互いに話す中、周りが驚いていた

「ハルトさん…どうして…」

「よお立花響、久しぶり…でもないかあ、オマケ連中もこの間以来だなあ」

「オマケですって…」

睨みつけられるが子猫の威嚇くらいにしかならないのでヘラヘラ笑いながら

「そんな怖い顔すんなよ、折角助太刀してやろうと思ってるのに」

「どうしたかしら？」

ボロボロになっているマリアにハルトは正面から見て

「ま、理由の一つにはアンタの借りを返す為だな」

とマリアを指差しながら言った

「え…」

「アンタがフロンティア浮上を計画しなきゃ俺は国作って王様になってないからなあ、そう言う意味では貸しがあんだよ、借りの作りっぱなしは性分じゃないだけ…まあそれ

「何時ぞやのライブで攻撃した事の詫びだな」

「そう言う意味ではマリアには貸しがあるので返すのは筋と言うものであろうと

「あなた……それクリスにも言ったらどうかしら？」

「それはソレ、コレはコレ！」

「彼女は俺を殺そうとしたので正当防衛でセーフ！と無視したのであった

「ハルトさん……」

「つー訳で臨時助っ人よ不満か？」

「いえいえガリイちゃんとしては外ればっかりだったので大当たりなハルトさんとのバトルは嬉しいんですよ……マスターを拐かす者を排除出来ますからねえ!!」

「拐かすって人聞き悪いな……千冬」

「ああ、そいつらは任せろ」

「カリユブデイスも頼むな……カリユブデイス？」

「返事がないので後ろを見るとカリユブデイスがマジマジと立花響を見ていた

「え？えーと……どうしましたか？」

「………懐かしい匂いがありますね……」

「え！ビックリ知り合いなの！」

「へー！いやいや！流石の私でも怪人さんに知り合いませんよ！」

「ん？ああ……ぷっ」

そのやりとりを見て納得したハルトは大笑いした

「はははは！そりやそうだよカリユブデイス」

「それは何故でしょうかハルト様」

「お前を生み出す為の素材はしたよな？」

「ええゴーレム先輩、アヒル先輩、ハンザキ先輩を織り込んだと聞いております」

「せ、先輩？」

「そうそう、それとお前はお砂糖とスパイスと素敵なもので出来てるんだ」

「何ですと!!それは本当ですかハルト様!!」

「おうとも！」

冗談混じりで話すと千冬が思わずツツコミを入れた

「マザーグースか！」

「ごめん冗談、実は三属性のメギド以外にも素材があつてな一つは、逢魔で戦ったカリユブデイスと……」

そう前置きしてハルトはドヤ顔で話す

「ネフィリム」

「え!!」「ほお…」

響が驚くのも無理はなかった

フロンティア事変

ハルトが複製させた偽りのフロンティアをかけて当時の二課とF I Sの抗争 途中でウエル博士の謀反により聖遺物を喰らう聖遺物 ネフィリムが暴走し世界70億の絶唱で倒して解決した事件は今もその世界にいる者の記憶に鮮明に残っている

その後逢魔王国の建国やフロンティアが分身であると判明したのだが

「幸い素材は回収出来てたしな」

破片でも聖遺物を食べると言う性質は必ず役立つと思いついて正解だったよ

「その素材は彼女の腕をムシヤムシヤしてたからな…潜在的に覚えてんだろ」

「成る程…」

「この怪人にネフィリムが」

「あ、言つとくけど食べるなよ」

「も、勿論でございます!」

心配になるがカリユブデイスなら大丈夫だろうと思う

「よろしい……さて待たせたなガリイ」

「いえいえ〜マスターから新しいご指示も頂きましたのでお相手させてもらいます〜」
「どんな指示だよ？」

「カリユブデイスメギドを捕縛しろってね！」

「させる訳ねえだろ！ キャロルの頼みでもうちの子に手出しさせるか行くゾォ！」

『おう！ 任せろ！』

同時にアナザーウオッチを押し込み姿を変える蒼炎と煙が包み込み中から現れたのはさながら竜の戦士、両手に備えた鉤爪は鋭く各部からは蒼炎が吹き出ている

その姿は愛と平和を作る英雄の相棒、龍と希望を守る戦士のアナザー

『クローズ』

身勝手な竜戦士 アナザークローズ

「つしやあ!!」

「新しいアナザーライダーですか…なら小手調べ！」

ガリイは新しいアルカノイズを解放するが

「オラオラオラ!!」

ただの拳打でアルカノイズは赤い煙と変えると追加で新しい個体が現れるが鉤爪の一閃により粉塵に換える

「凄いパワーですね…予想外ですよ」

「へへ…強いだろ？これは俺一人だけの力じゃねえからだ！それに今の俺はあ…」

昔と違う、今の俺はアナザライダーや千冬や東、錫音達に支えられている、だから

「『負ける気がしねえ!!』……おい」

「声被せんじゃないよ！バカが！」

「良いだろ別に！……って誰がバカだ！せめて筋肉つけろ！」

「つせえ！やるぞ!!」

『おう！』

『ready go!』

同時に背後から蒼炎の龍が現れ炎を吐く

「おおおおおらあ！」

『dragonic finish!』

と同時に飛び上がりボレーキック、必殺技の

アナザードラゴニックファイニッシュを叩き込んで道上にいるアルカノイズを滅却し

た

「つしやあ！」

「雑魚倒したくらいで舞い上がるなよ！」

ガリイが巨大な水柱を作り攻撃を行おうとしたので

『つしやあ！こうなったらマグマだ！』

「おつしやあ!!」

『バカ！今のハルトが使ったら全身大火傷になるでしょうが！』

『じゃあどうすんだよ！マグマの力がないとダメだろ！』

『ここは…彼に任せよう』

「待て…彼って誰？」

『カノンは何処だア！』

「チェンジで」

高速のツツコミが思わず出てしまった

『同感だ…って違うでしょ！スペクター先輩…俺達が呼びたいのは…どうぞ！』

『ここかあ…祭りの場「採用だあ！」最後まで言わせる…たくイライラする』

再推しのアナザーになれるなんて幸福だあ！と歓喜に震え

「ガリイをボコボコにしてイライラを消してもらいましょ!!」

「目的変わってません!？」

響のツツコミをスルーすると同時に三枚の鏡像が重なり紫色の戦士へと変わる

その頭部はさながら蛇遣いと蛇壺を思わせる出立ちながら右肩と左肩が銀と赤と違うライダーの装甲を取ってつけたような歪さを持っている

正史でも外史でも語られる最恐のライダー

『王蛇』

アナザー王蛇である

「ああ……よし……ふん！」

アナザー王蛇は首を回すと何処からともなくエネルギー状のカードを取り出すなり握りつぶすカードは蒼炎と共に燃え散ると効果を発現する

『UNITE VENT』

アナザー王蛇の前に銀色のサイ、メタルグラス、紫色の大蛇、ベノスネーカー、赤色のエイ、エビルダイバーの三体が現れる

「!!!」

「!!!」

そして三体が体一つにすると強い閃光が当たりを包み込む

「!!!」

光の中から現れたのは一言で言うならば巨大怪獣、その体はメタルゲラスを中心としながら背中に翼となったエビルダイバーと頭部、尻尾にはベノスネーカーの一部が露出している

それはハルトが元の世界で一番好きなライダーとその契約モンスターである

「銜け！ジェノサイダー！！」

「！！」

「！！」
獣帝 ジェノサイダーは咆哮を上げると腹部が開放されると中から現れたのは極小の

「ブラックホール…だと…」

暗黒空間である

「やっっちゃえ、ジェノサイダー！」

その指示に従うようにブラックホールは巨大な水柱をまるで一気飲みするかのよう
に飲み干す、ガリイが攻撃を終えた時には

「！！」

勝利の雄叫びを挙げた獣帝が立っていたが地面に沈んで消える、役目を終えたように

「あらあらまさかこんな奥の手があったなんて…」

「ああ……ガリイ、4枚ある好きなのを選べ」

と見せたカードは全部ファイナルベントであった

『正に外道』

ーうるさいー

一括してガリイの様子を見ると

「それは……どれもお断りですね！」

「そうかよ……なら」

アナザー王蛇のファイナルベントを食らわしてやるとカードを握り潰そうとしたと同時にガリイが出したのは転移結晶であった

「また会いましょう！」

「それを待っていたんだ!!」

瞬時にカードを入れ替え握りつぶした、そのカードは本編で使われることのなかったカードであるが王蛇の物である

効果は強奪

『STEAL VENT』

「あら？……ああ！」

「転移結晶ゲット〜」

仮面で見えないがご満悦の顔をしていたハルトであったが

「この…最初からそれが狙いで…」

「最初からそうとしか言っていないような」

「でしたね…しようがありません、それは差し上げますよ…けどその後、後悔しても知りませんよ」

「するもんかよ」

「そうでしたか、ではまた…外れ奏者は覚えてやがれ」

別の転移結晶で逃げたガリイを見送ると

「帰るぞ千冬、カリユブデイス」

「ああ」「はっ！」

「あ、あの!!」

「んあ？」

「貴方とキャロルちゃんって一体…」

「それ話す意味ある? どうしても聞きたいならナツキに聞いて…エビルダイバー!」

「!!」

「つと」

アナザー王蛇は千冬をお姫様抱っこしカリユブデイスをアルターブックに戻すと飛

翔して現場から離れたのであった

流転

ガリイから転移結晶を強奪したハルトは仲間達を集めて作戦会議を行った

「作戦だが奏者連中が拠点攻略中に俺達は転移結晶でチフォージュ・シャトーに乗り込んでキャロルと決着をつける」

「シンプルだな」

「ああ、それと奏者連中の行動と時間制限がある…作戦には素早さが求められるな」

「そうだな…まさかオートスコアラーにコアメダルを装備させるとは」

「そうだねえ…ガリイに青系のコアメダルだったんだ」

「本気だねキャロル」

「そうだな…流石はキャロルだ」

「褒めてどうする状況は最悪だぞ」

コアメダルを使ってオートスコアラーを強化したと言う事は奏者達がイグナイトモジュールを介して勝てるかどうか分からなくなっている上に

「ミカが燃料無視して動き回れるのは最悪でしかない」

オートスコアラ最強の一体 ミカ

本来なら思い出を動力にして動いていたオートスコアラ達はハルトがオーズを布教した影響でキャロルがセルメダルを動力にするという改造を施した結果

正史よりもタチが悪くなってしまったのだ、ミカが燃料切れを無視して攻撃など悪夢でしかない…かつて模擬戦を挑んだ事があるが

アナザライダー達+怪人能力でやつとだった、まあ今は魔王化してるから互角以上に渡り合えるが

「本当に奏者達が時間稼ぎしか出来そうにないな……ま、俺の責任だからキャロルは俺が止めないとな」

まさか仮面ライダー布教しただけでこんな大変な展開になるなんて冷や汗が止まらない

「まあハルトが仮面ライダーを布教しなければ始まらなかったからね」

錫音の嫌味にハルトは反論、机を叩いて堂々と発言した

「だって錬金術師から見たオーズってどう見えるか気になったんだよ！」

「あのさ…好奇心ネコを殺すって言葉の意味を知らないのかい!？」

そして議題が変わり

「カリキュブデイスを捕獲しろか」

ガリイのカリユブデイス捕獲宣言である

「わっかんないんだよなあ…カリユブデイスの戦力化てのも考えたけど…キャロルの目的とは違うような気もするし」

「理由がないのか」

「中のネフィリムが欲しいのになって思ったけど、ほぼ完全なネフィリムが別にあるんだよね」

「何処にだ？聞いた話ではオリジナルのネフィリムは消し飛んだのでないのか？」

「それが自称英雄の方がお持ちのようなんだよ」

「アナザーWに調べてもらったが、どうやらあのウエル博士は生きているが軟禁状態にいると、まあ助ける理由はないのでスルーしておくが」

「苦労して分捕るより楽して手に入るのらそっちを取るよ私ならそうするね」

「どうする？カリユブデイスのアルターブックを逢魔に返すか？」

「それこそキャロリんの思う壺じゃないかな？ポータルを開いて逢魔に行くかも」

「まああの留守居の連中なら問題はなさそうなんだが…」

「キャロルを追いかけて奏者が逢魔に入る方が問題って訳だね」

「そー、最悪テストアロッサ達がやらかす可能性が高い」

「あく確かに辞めといった方がいいね」

「この世界の地図が塗り変わるからな物理的に」

あの3人には俺がこの世界でやった事を話したのだがその時の怒りようから察するに

世界の大都市で死の祝福や破滅の炎や重力崩壊が起こるとか、それは避けられないとならない

いくら魔王だ何だと言われ、別にこの世界の人間はどうでも良いと思ってもだ

「キャロルの一件は俺が決着をつける…誰にも邪魔はさせない」

『そこは俺達だろ相棒』

「だな…：悪いお前たちの力を貸してくれ」

『当然だなあお前ら!!』

『おう!!』

本当に頼りになる仲間だなと思う…：俺には過ぎたものだ

「作戦開始まで各自自由時間とする解散！」

—————

精神世界

「それで精神世界に来るのはどうかと思うぞ相棒」

「つせえよ…一番リラックス出来るんだからよ本体は寝てるし、それに久しぶりに皆と話したかったからな」

俺の精神世界はあの時と同じように何も無い白い世界…ただ違うのは住む住人の数が桁違いに多くなっているのだ、何なら楽しく酒盛りまでしている…あ、アナザー王蛇がアナザーエグゼイドと喧嘩してる…後で止めに行こう

「賑やかで嬉しいな、これもお前のメッセージが沢山届いてるって事だからな…ありがとう最強フォームまで進化してくれて、お陰で俺は皆を守れそうだよ」

何処からか現れる盃に並々と酒を注いで呷るハルトは笑顔のままである、精神世界故に酩酊も出来るので悪い気分ではない

「礼ならアナザージオウに言え、あの無口の努力成果だ…しかし今度はその守る相手に拳を向けるのだろうか？」

「まあ俺がキャロルを引つ張れば良かったんだ無理矢理にでも自分の弱さが一歩踏み込めなかった未熟さが憎い…だから意地っ張りな奴を説得するんだ」

「意地っ張りはお互い様だろう」

「違くないかな…なあアナザーデイケイド、俺の我儘だけど今回も力を貸してくれるか？」

「はあ…この馬鹿者が王なら仲間の顔色を伺うな、お前がドンと構えているから俺達は

「疑わずに進めるのを忘れるな」

「おう！あ、それとさアナザーWが最近見当たらないんだけど…」

「ああ、あいつなら地球の本棚で誰かと楽しく話しているぞ」

「誰と？まさかフィリップさんとか！あの野郎……俺に内緒で許せねえ！」

「いやそれがな…」

地球の本棚

「あれでもない……これでもない……ん？よおラファエルさんまた調べものか？」

アナザーWが情報収集していると背後に現れた闖入者だが寛容に受け入れた顔馴染だったからである青髪の中性な人？に朗らかに受け入れた

「是、ラーメンやハンバーガーなどの知識を要求します」

「おうキーワードと……出たぜ読んでけよラファエルさん」

「是、個体名 アナザーW協力感謝します」

「良いつて事気にするな」

アナザーWは1人だけだった場所に来た友人の存在を好ましく思っていたのであつた

「……次の本を」

「おい待て、速読だと!!!」

「貴方が遅いだけです」

「何お！」

「つて感じらしい」

「まあ…アイツが楽しそうならそれでヨシ！」

共通の趣味があるなら仲良くするのもありだなと首肯するハルトだがラファエル？
天使かなとしか思っていないのであった

「そう言えば…この間アナザー王蛇みたいに新しい奴がいるなら挨拶したいんだけど…」

「そうだな…新入りども！自己紹介の時間だ」

「「おう!!」」

「沢山来てるんだね」

「そうだ…魔王進化の影響でお前に集うものも増えているのでな」

改めて、自分が人を辞めたんだと言う実感が湧いてしまいが別にいいかと思えば彼らと
交流を深めたのであった

「おい、カノンは何処だ！」

「たこ焼きを食べたいぞ！」

「幽霊コンビは本当に俺のメツセージを受け取ってきてくれたんだよな!」

「ま、まあ戦力としては頼れるだろう次！」

「初めましてアナザーシザーズです、ふふふ…アナザーライダーの頂点を極めるのも悪くありませんね」

「下克上狙うのはゴオマだけで間に合ってます！」

「この精神世界に刑事はいらない」

『FINAL VENT』

「え? いやちよつと待ちなさい! ええい!」

『GUARD VENT』

「はあ!」 「このおとおおー!」

「アナザーディケイド、頼む止めて! これは予想外にカオスだよ!」

「王の勅令を使えば良いのでは?」

「そうだったあ!」

現実世界

「う…う…う…」

「ハルト大丈夫か？ 魔されていたぞ」

起きたハルトを心配そうに千冬が見ている…後頭部の感触的に膝枕されてる幸せだなと満喫している

「ん……大丈夫だよちよつと新キャラの濃さで胸焼けしそうだ…」

アナザースペクターとアナザーネクロムさんはキャラが濃かった後はアナザーシザーズとかなアドベントカードが使えるか心配だよ…あとムシヤムシヤされないか心配だ

「だ、大丈夫ではないな…」

「ああ、だけど任せてねまた皆で笑える日を取り戻すから」

「ああ分かってているが無理をするな…お前が壊れてしまつては意味がない、キャラルも私達もな…」

「ありがと…ならもうちよいこのままで大丈夫？」

「構わんさ、私もそうしたいからな」

「んじやお言葉に甘えて」

そんな感じで穏やかな時間を過ごそうとしていた、その時

『!!』

鳴り響いたファイズフォンXに少し不機嫌なまま電話に出る

「何？」

少し不機嫌な声で話すと声の主 ナツキが大慌てで

『頼む！助けてくれ…街中にヤミーの群勢が現れて大変なんだよ！』

「メダルの後処理ならばバスの方が向いてるのでそっちでお願いします」

『違うわ！倒すのを手伝って欲しいんだ！』

「えー……」

「どうやらキャロルが指揮とつてるみ」それを先に言え馬鹿野郎「は？」

「千冬、悪い聞いてたと思うけど予定変更だ」

「わかった束と錫音には私から話しておく、お前は先に行け」

「ああ…終わったらまた膝枕してくれ」

「いくらでもしてやろう…だから帰ってこい」

「おう！アナザーウィザード！」

『レポート』

現場に転移した直後に転移陣が浮かび上がり中から現れたのは

「っ！キャロル!!」

今回の目標が来たのだ、彼女は真面目な顔で

「千冬か：皆を集めてくれ話がある」

「それより私の部屋を汚いと煽った件で話がある!!」

「今はそんな話してる場合じゃないだろう!?!」

—————

とある市街地ではエンジン、リモコンプロス、マツハが戦闘中であつた

「ヤミーが多いよ!!」

『FUNKYDRIVE GEAR REMOCOM』

「口より先に手を動かしましょうよ!?!」

『エレキスチーム!』

「最終決戦前みたいだね、まさにアニメのような展開だあ!」

『シグナル交換!カクサーン!』

マツハは上空に攻撃して拡散弾を使ってピラニアヤミーをセルメダルに返すが

「数が多いよ!拉致が開かない!!」

「ナツキさん、何か知りませんか?」

「青系のコアメダルの力：生態については専門家を呼んだから聞いてくれ!」

『セルバースト!』

「つて！バースXはどうしたんですか！」

「今メンテナランス中！この間ぶっつけ本番で使ったらコアメダルのパワーにユニットが耐えられなかったの！」

「嘘でしょ!？」

「コアメダルの専門家ってエルフナインちゃんじゃ…」

「いや、メダルの知識をキャロルに入れ知恵した奴がそろそろ来るから」

「「え?」」

と話していたらだ、ヤミーの一区画から大きな爆破が起こっている皆が視線を向けたら

「噂をしたらおいでなすった!」

アナザー王蛇が右手のメタルホーンを前に構えてメタルガラスの肩に乗り一直線の体当たりを敢行する大技 アナザーヘビープレッシャーで強引に突破している風景だった

「うわあ…ハルトの奴豪快にやってきたな」

ナツキが大笑いしているとアナザー王蛇はメタルガラスから降りて両手を広げながら

「此処かあ……祭りの場所は……」

右手に打突武器メタルホーンを携え両手を広げながら言う

「あ、アナザーライダー !!」

と警戒して武器を構えるがメタルガラスが威嚇している

「ナツキ、キャロルは何処だ？」

「その前にこのヤミーについて教えてくれよ……倒さないと前に行けないからな」

「ちっ……青のコアから生まれたヤミーは沢山いて巣を作る……そこにセルメダルを持ち帰るんだ」

「それなら「巣の特定はほぼ不可能だ」……でしたら……」

「メズール・ヤミー攻略法はシンプルだ……この場で皆倒す！」

『FINAL VENT』

「はああああああ!!」

同時に現れたベノスネーカーと共に走り出した現れたアナザー王蛇は飛び上がるとベノスネーカーから吐き出された毒液を背にして両足を交互に叩きつける必殺技 ア

ナザーベノクラッシュを叩き込む、同時にヤミーはセルメダルに変換されたが

「多いな、これならカザリのヤミーの方が100倍マシだよ溜め込むだけだから」

『ユナイトしてジェノサイダーを呼べ』

「楽だけど出来たセルメダルが勿体ないんだよ、この間のバトルで大分消費したキャラルに回復の時間は与えん」

となれば選択肢は少ないし同じ理由でカリユブデイスも呼べない

「広範囲技や多人数戦に自信のある奴！」

『そんな相棒の望みに答えて、第一回！俺の技の此処が凄い！をやっつけていくぞ！』

『『うおおおおお！』』

「やっとする場合か！つと危ねえ…なあ！」

『ADVENT』『ADVENT』『ADVENT』

「行け！ベノスネーカー！エビルダイバー！メタルグラス！」

『!!』『!!』『!!』

召喚に応じた三体は尻尾でヤミーを弾き飛ばし、体当たりして地面に墜落させ、着地点にきた相手を跳ね飛ばすよう連撃をしながらヤミーの数を減らしていく、時間稼ぎには最上であろうが

『ADVENT』

虎の子を解放した

「食らいつけ!!」

ミラーワールドから現れたのは大量のゼール系モンスター達だアナザーインペラーの力である大量のギガゼールの指揮により集団行動を取る彼らの戦闘能力はベノスネーカー達に匹敵する

恐らくコレが王蛇のカードデッキ本来の運用なのだろう…それをベノサーベル一本で近接戦をしてきた浅倉さんには尊敬しかない

「よしこの間に」

とウオッチを構えたが

『一番！アナザースペクター、見せてやる俺の三段撃ち！』

『二番！アナザーゾルダ、広範囲と言えば俺だろうか？』

『三番！アナザーゼロワンメタルクラスただぜ！』

未だにプレゼンしていた

「いや確かにそうだけでも……つてもう良いから！力を貸せ!!」

『せっかちな奴め』

「つせえ！こちとら緊急事態なんだよ！イライラするから早くしろ！」

『しようがないな早い者勝ちだあ！』

同時にウオツチに顔が現れたので迷わず押し込んだ

「つしやあー！」

途端アナザー王蛇の装甲は弾け飛び中から現れたのは

『ヴェハハハハハハハハ！王の力にひれ伏せえ！』

『オーズ』

「お前かああああい！さつきまでのプレゼン大会の意味は!?!」

『ヤミーならばオーズだろう！』

「かも知れない……よし行くぞ！」

そう言うのとアナザーオーズが分裂して大量に増殖したのであった

ガタキリバコンボの力を引き出し、それに加えてその分身体が思い思いのアナザー
ウオッチを起動したのであった

「イライラすんだよ……」

アナザーオーズに3枚の鏡が重なり変身する

『王蛇』

制御不能の暴君 アナザー王蛇

「俺の生き様を見せてやる！」

そしてアナザーオーズの周りにパーカーゴーストが群がるように重なる

『スペクター』

大罪背負う悪霊 アナザースペクター

「王の判決を告げる、死だ」

隣のアナザーオーズも同じように装甲が砕け散り中から現れた白亜の鎧、仮面の下か
らは蛇のような瞳が睨んでいる

『サガ』

分身が違うアナザーライダーに変身したのであった

その頃

「……………嘘でしょ」

「そんな事あるのかい？」

キャロルの要望通りに集められた面々は彼女の話を聞いてあり得ないと言う顔をしていた、特にライダー技術を作る側である束と錫音の驚きぶりは大きい

「本当だオレも…ましてやハルトも予想してなかっただろうな」

「だとしたらハル君が危ないよ！今一人なんだからさ！」

「分かっている!!それだから遠ざけたのに何故戻ってきたのだ!あのバカは!!」

「キャロルの遠ざけ方が悪かったからだよね？」

「ああ、アイツが理由もなく遠ざけたらどうなるかわかるだろう? 私達よりも付き合っただけは長いのにな」

棘のある物言いにキャロルは同じように嫌味で返す

「ほお…千冬嫌味を言うようになったじゃないか」

「当然だ、貴様の所為でハルトが病み始めてるのだからな」

「ああ嫉妬か、大事な男がオレの為に動いているのが妬ましいか…可愛らしいじゃないか」

「っ！」

「チーちゃんステイ、キャロりんも煽らないでよ」

「そうさ話が進まない、それでどうなる？」

「どうだろうな、ただ」

最悪の場合
ハルトが死ぬ」

未知なる敵

その頃 アナザーライダーの戦いを見て行こう

アナザー王蛇 side

「はっ!」

新しく呼び出したベノサーベルをまるで鈍器のように振り回しながらピラニアヤミーをセルメダルに返しているが

「ちっ……雑魚が……」

「!!」

数が減らない上、仲間との連携を妨害するように一塊に対して

「邪魔だア!!」

『FINAL VENT』

その指示に従うように上空にいたエビルダイバーがアナザー王蛇の背後に接近し

「はっ!」

それを見越してジャンプしたアナザー王蛇はエビルダイバーの背に乗りながらの体当たり攻撃。ハイドベノンをやミーの群れにお見舞いして爆散させたが一向に減らない群れを見て

「つと…まだいるのかよ…：ははは…これ以上俺をイラつかせるなあ!!」

『SWING VENT』

エビルウィップを呼び出し振り回すのであった

アナザースペクターside

「ふっ！はっ！」

アナザーゴーストと同じように浮遊、透過とパークーゴーストの使用を得意とするアナザースペクターは呼び出したガンガンハンドで射撃に徹しある程度までいくと腰にあるドライバーに添えるとエネルギーが充填させた

「俺の三段撃ち見せてやる！」

『オメガスパーク！』

背後に現れたガンガンハンドの止む事のない弾幕射撃を行った上、鎌モードにしたガンガンハンドで更に必殺技を重ねた

『オメガスパーク！』

「はあ！」

斬撃を放ち現れたピラミッド型エネルギーに大量のヤミーが吸い込まれていき一定数に達したら

「爆ぜろ」

その言葉を合図にピラミッドエネルギーが爆散しヤミー達もセルメダルに返つていく

「見ろ！俺の生き様！」

『オメガドライブ！』

アナザースペクターは高く跳びあがるとそのまま急降下キック アナザーオメガドライブを叩き込んだヤミーに当たると群れを巻き込んで爆散したがそれでも数は減らない

「まったく…どんな奴の欲望をヤミーにしたんだ!!」

ガンガンハンド・鎌モードにし直して再度ヤミーの群れに突貫した

その頃、アナザーサガは

「多いな、これは参加する大会を間違えたな」

アナザージャコーダーを優雅に振り回しながら立ち回るアナザーサガ、しかし彼自身は他の面々と違って多くの敵を戦う事を前提としていない王が纏うキバの鎧 そのプロトタイプである故に必殺技の威力は別だが広範囲技に関しては一歩劣る……だが

「此方にも使い魔の関係はいましてね、お供がいるのはアナザーキバやアナザー龍騎達だけではないのですよ」

「ベノスネーカー達を見ながら揶揄するような物言い、指を鳴らすと空から現れたのは
「!!!」

「古代ファンガイア語を話す大きな蛇型のモンスター マザーサガークと口から吐き出される量産型サガークである

「行けー」

その言葉を合図に量産型サガークがピラニアヤミーと激突を開始、マザーサガークも破壊光線でヤミーをメダルに返すが近くのビルまで巻き込んでいるが知った事ではないとも言わんばかりに暴れている、これで数の上では並んだならば後は倒すだけの単純作業である

「さて、これからが本番だ」

『WAKE UP』

アナザージャコーダーをその手に携えるは王の先達として彼に在り方を伝える為に力を振るう

—————

アナザーオーズ（本体）はその頃

「アイツら、あんな隠し玉があったのか…」

特にマザーサガークと量産型サガークは驚いた…呼べるんかい！とツツコミたいのは内緒である

「アナザーサガの奴…流石だな本当、俺には良い先輩が多すぎるよ」

王を見習う背中は多くある、故に先達を超えなければ格好がつかない…なる前の失態が多いのは内緒だが

『ヴェハハハハハハハ！だがこの王の力の前では無意味イ!!』

「そうかあ俺から見たら連中の方が凄いと思うが？」

『ほお…ならば王の力を見せてやろうじゃないか』

そう言うアナザーオーズはメダジャリバーを呼び出し右手に掴み地面に落ちてい

たセルメダル3枚をメダジャリバーにセットし力を解放する

『トリプル！スキヤニングチャージ！』

「はああああああああ……せいやあー!!」

放たれた斬撃で世界は歪む、しかし再度位置が元に戻る。だがヤミーはずれたままであり世界の修正により爆散したのであった

『流石私だあ！』

同時に仲間達もヤミーを殲滅したようで、技の威力によりメダルの雨に喜ぶアナザーオーズであったがアナザー王蛇に頭を叩かれたので不機嫌になる

「痛っ…何をするう！」

「騒ぐなイラつくな」

「悪かったよ、お前たちもありがとうな」

「まあな」「気にするか」

「お疲れー……さてと」

そう言うとうと変身解除したハルトは嬉々としてナツキに近づいて笑顔で尋ねる

「なあナツキ、キャロルは何処かな？」

「……………にはいない」

ほお俺を騙すとはやるじゃないかと笑顔のままハルトは告げた

「そうかあ……なら死んで貰おうかあ……」

首を軽く回してアナザーウォッチを押しやしたが

「させない！」

『シグナル交換……トマーレ！』

「はあ！」

「っ!!」

ハルトにシグナル攻撃が命中し動きが止まる

「悪いな、これは預からせてもらうぞ」

とナツキは冷静に手に持っていたアナザーウォッチを取り上げた

「何の真似だ……お前……」

「司令の作戦だキャロルに関与してるだろうお前と話したらしい、キャロルと交渉するさ」

周りをよく見れば銃を持った特殊部隊が待ち伏せていた

「おいおい、つまんねえ奴になりやがって…そんな奴にバースを託してたとか…俺は人を見る目がないなあ…まさか牢屋に打ち込もうなんて…あとあの男もそんなに俺を敵に回したいかあ……」

「俺を恨んでくれて構わないし恨まれて当然だと思っただけで事態の解決にお前の身柄が必要なんだよ…何なら全部終わったら彼女達にも殺される覚悟だ」

「だろ、わーった話だけ聞いてやるからシグナルバイクの拘束解け…手錠かけんだろ？」

「ああ頼む」

「うん」

拘束が解けた刹那の事であった

「ははっ…」

ハルトは狂気に染まったような笑みを浮かべると、周囲に強烈な衝撃波が発生した。マツハやバース、プロス達は耐えたが特殊部隊の面々は近くの電柱や外壁に叩きつけられ戦闘不能となる。

「はあ……はは……ははははははははー」

壊れた人形のように笑い始めるハルトに周りは警戒している。

「ははは……はあ……ああ……面白くないな……ふっ！」

突然冷めたような声になったハルトが手を前に突き出すと、バースがそのまま街路樹に激突した。

「ナツキさん!？」

驚いているなかハルトは冷静に淡々と話す。

「まさか反旗を翻すと思つてなかつたよ……良い作戦だったぜ人間だった俺なら詰んでたよ……あ、返して貰うぞ」

ハルトは念動力のような力でアナザーウォッチをナツキから強引に奪い返し

「生憎様、今の俺は人間じゃねえ……怪人だ」

その時、ハルトの瞳が赤く光つたのであつた

—————

時間は収穫祭直後 覚醒したばかりの頃まで戻る、テンペストでの復活祭でハルトはリムルと一緒に食事をしながら自分達の能力について簡単に情報交換をしていた最中のこと ふと思つた事を口にした

「そーいやあ俺さ怪人王つて種族なんだけど……それ何さ？ 何処かの偉大な怪獣王ばい種族名に困惑しているし怪人の王つて何？」

怪人の王様と聞いてピンときたのが

「創世王ハルトとでも名乗るかなあ…」

キングストーンは持つてないけどな…けど何処かの俺が同じような力を持つてるんじゃないかなと思う

「BLACKかよ…世紀王にしておけ」

「あ、リムルさん仮面ライダー分かる口だったんすね」

「まあ見てる見てないはあるけどな…けど怪人王な」

『告 この世界に該当する種族はいませんが、世界初のユニークモンスターかと』

マジかとリムルさんが頭を抱えているが、俺もアナザーWに頼ってみた どうだ？

『ダメだな… 地球の本棚に載ってねえ』

「完全に手探りな訳ね…どうしたものか」

きつと俺にも怪人としての姿があるのだろう見てみたい気もするが今じゃないだろう

「取り敢えずどんな能力があるのか調べてみたらどうだ？」

「そうですね、カレラやウオズ辺りにでも組手を頼むか」

「程々にな」

「善処しますよ、まあ試運転なんで荒っぽくなりそうだ」

その後、移動した先の無人島が一つ消し飛んだのは内緒である

—————

場面は戻りブロス達とマツハが構え直しているが

「スゲーな俺、超能力使えるんだ」

また新しい発見に笑みが溢れる

「怪人……だと……」

「ああそうさ……結果論だけど俺は人間を辞め、より高位の存在に進化したんだよ」

「何か……直ぐやられる悪役みたいなセリフだねアニメで見たことあるよ」

「俺もそう思う……あ、後言っておくけどだからって人間を差別したりしないからね共存

共栄が俺のモットーよ」

逢魔王国はそんな国になっていつてるし……もし怪人だからって差別するような世界があるなら……怪人全員を俺の国に呼んだ後、その世界は滅ぼす欠片も残さずに

「なら、どうして私達に協力してくれないんですか!」

「それはお前等が卑劣な騙し討ちや悪辣さで俺の尊厳を冒涇したからだ!!素直に話し合

いたいなら応じてやる……だが善意での情報提供に対して武力で脅しに来たり生物兵器認識してる連中の言葉を信頼できるか！」

憤怒に顔を歪ませたハルトの覇気に震えるものの恐れずに話す

「それは！貴方が私達に対して「魔女狩りした奴の虐殺とか生物兵器扱いした腐敗政治家連中のお仕置きか？」え？」

「俺に何もしなきゃ何もしなかったんだ……俺が化け物だからって殺して良いとか軍事兵器利用してやろうとかしたのは……この世界の人間だろうが！」

「だからって、貴方達の所為で一体どれほどの人が「関係ないなあ、この世界の人間がとれだけ死のうが」なっ！」

「一部を除いてな……それと殺した相手がどんな奴だったとか知らねえし相手を殺そうとしたんだから殺されて当然だろ？それに俺は無関係な人間は巻き込まないし助けた事もある……ああそうか」

ハルトは口角が吊り上がり切ったような笑みを浮かべ

「殺したいんだな…俺のこと怪人だからなあ…」

「ち、ちが「違わないよな？俺がアナザーライダー…人間じゃないと思つたからライダーの力を向けたんだろ？」っ…」

ヒーローの不文律だ、その力は敵に向けられるものであり守るべき人間に向けてはならないつまり

「俺が怪人だから何しても良い訳か…けどな俺は体は怪人でも心は人間なんだよ…それは分かつて欲しいかな」

ライダーシステムに適合し、ウオズ達が信頼して預けられると判断した3人娘は殺す気はない…彼女達にはまだ利用価値があるから…

「は、ハルト…」

「あとナツキ…残念だが裏切者には死んで貰うぞ」

だがナツキだけは違う、俺の地雷を踏み抜いた代償を払って貰う

「あれ？裏切るとかには寛容じゃなかったか？」

裏切ることに對して怒りは抱いていない、ゴオマなんて日常的にニューリーダー目指

して襲い掛かってくるくらいだからな…だけど

「そうだな裏切られるのは俺自身の能力不足だ咎めはしない…だが利敵行為は話は別だよ肅正する」

「そ、そうは…いかないんだよキャロルを止めるまで…いや神が世界を滅ぼすのを止めるまで俺は死ぬ訳にはいかないんだ!!!」

「ナツキ…俺はお前を友達と思っていたし…俺の目指す先の世界にはお前のような人間が必要だったが現実是非情だな…この手だけは使いたくなかったよ」

そう言いハルトが懐から取り出したのは一本のシャーペンである、そのキャップを外すとそこには消しゴムではなく赤いスイッチがあった

「バースには俺やキャロルを裏切った時に備えて自爆装置を搭載してる」

「「「っ!!!」」」

嘘だろ！みたいな顔してたが

「バースのマニュアルに書いてたが何か？」

「マニユアル?……あ」

「書いてたなら話しててよ!ナツキ!!」

「ごめーん!いや、俺マニユアル読むの嫌いだつたから…」

「それでナツキや私達がドカーンって吹き飛ぶ…爆発オチなんてサイテーだよ魔王!」

「言ってる場合ですか!!そうだと変身解除すれば」

「それだ!!ってアレ!出来ない!!」

「ナツキ、俺やキャロルの用心深さを疑うべきだったな…外部装置からバースに干渉出来るんだよ」

「これは一重にオーズ周回をしたキャロルのライダー愛が為せる技であると思う…この部分まで忠実再現してるなんて聞くまで知らなかったし」

「待て…バースって事は…」

「奏さんが!!」

「安心しろデータ収集用のプロトタイプには搭載してない…だがお前のは別だ此処で死ぬ裏切者」

ハルトは躊躇いなくスイッチを押したのであった

同時に赤い光がバースを包み込み点滅を始めたが直ぐに収まる

「はあ…やっぱりな…」

予想の範囲内だとリアクションを取る

「え？何で？」

「お前の相棒に救われたんだよ」

「まさか…エルフナインか！」

『はい！僕はマニュアル大好きですしキャロルと作ったバースシステムですからね！危険な自爆装置は外しました！』

同時に通信を繋いだエルフナインの言葉に

「エルフナインありがとう！大好きだ！」

実際、自爆して死に戻りをしたのでエルフナインの感謝の気持ちが発火したのであった

『え！いや…その……／／／』

「どうした顔が赤い？」

『何でもありません!!』

通信が切れたので

「どうしたんだろうなエルフナイン？」

と周りに意見を求めたが

「「……………」」

3人娘は哑然としていたしハルトでさえ

「お前…よく俺のことを鈍感呼びできたな」

言葉があまり出なかった

「ま、まあ…そのハルト頼む話し合いに応じてくれ！」

「いやそれ素直に最初から言えよ、実力行使に走るからそうなるんだよ…それに、なんつーか毒気が抜けたし」

頭を掻きながら話すハルトであった

「まあ…俺の過失も0じゃないからな」

『やつと気づいたのかお前』

「つせえな、気づきたくなかったよ本当言えばな」

『しかし怪人王か…やはり得体の知れん力だな』

「超能力があるのは分かっただけでも収穫だよ」

ドン！！

和やかな空気の中 突如何かが落下した

「っ！」

「え！何！！」

「警戒！」

どうやら彼方も予想外らしいなと構えていたが

「っ！」

ハルトは慌てて防御姿勢を取ると同時に近くの壁まで吹き飛ばされた、衝撃でビルは崩れるが中から這い出る

『ハルト！』

「つてて…問題ないよアナザーディケイド …と思ったかったな」

両手が炎を上げて再生をしているフェニックス・ファントムの力が作用しているという事は魔王化したハルトを上回る力の攻撃という事だ

下手人は粉塵の中から現れた、一言で言うならば全身黒甲冑の騎士とでも言うような存在

「こりゃ予想外だ…結構、この服気に入ってたのにボロボロ」

『フェニックスの再生が発動するという事は』

「回復してる…相当な難敵…けどあの一撃…」

何処かで見たようなと首を傾げるが

「ハルト！」

ナツキの心配そうな目を見て

「んだよ…怪我なら回復してる問題ない…それとお前達はさつさと帰れ」

ハルトは伸びをしながら体を軽く解している

「何で…皆で戦えば」

「それ必要？雑魚は引っ込んでろ」

「ぎ、何ですって!!」

「ナツキ」

「……撤退しよう皆」

「どうしてですかナツキさん！」

「ここで伸びてる人の避難しないとダメだろ！」

「「っ！」」

「現場判断！アンノウンはアナザーライダーに任せて俺達はここの人回収して撤退する！……任せて良いんだよな？」

「ん〜…取り敢えず…」

面倒くさそうな態度であるが首を縦に振るが

「終わったら顔面殴らせろ、それでチャラにしてやる…マジの奴を叩き込んでやるよ」

「あはは…怖いな……けど助かる」

「あと…キャロルの事をダシに呼んだ事は別だから覚えてろ」

「……………ごめん！」

4人が人命救助に走る中

「よお、待たせたな」

「……………」

沈黙してる鎧甲冑にハルトは警戒をしている

それは簡単だ

『おいハルト……こいつの情報だけでもよ検索しても出てこねえ！』

『調べたけど……この時代の力じゃないよ！』

『つまりお前と同じ異世界からの敵という事だな』

アナザーWとアナザービルド、アナザーデイケイドが言うには完全に未知の敵って事だな

「なら加減しなくて良いや」

アナザーウオッチを起動するとハルトの体が水の波紋のように波立つと姿を変えた

その姿はさながらハルトの仮面と番外の異形のハイブリッド 仮面が剥がれた下から見えるのは運命に翻弄される眼

全ての生命の狩人

『カリス』

アナザーカリスとなると体から抜け出した植物のエレメントを解放した

『バイオ』

「最初から全力だ」

両手から伸びた蔦で鎧を拘束すると、そのまま三枚のラウズカードを体に取り込んだ

『フロート』『ドリル』『トルネード』

「スピニングダンス」

『自己申告だど！』

『ハルト！それカリス違うレンゲルだ！』

ツツコミは無視しながらも体に疾風の力が加わり空に舞い上がるとそのままアナザーカーリスは回転しながら鎧甲冑にアナザースピニングダンスを放つ、しかし

「はあああああ！」

「——！」

鎧甲冑はバイオの拘束を千切るなり右手に呼び出した剣で横払いしたのであった

イレギュラー

切られたアナザーカリスは地面に転がり込み痛みを耐えていた
「があ……っ！」

その光景に周りもざわついた

「嘘でしょ、アナザーライダーの攻撃が」

「これ強い奴の更に強い奴が出るアニメ的な奴だ」

「初登場補正とかじゃなくて？」

外野の声は聞こえてないのが幸いなアナザーカリスである

「……………」

『まさかバイオの蔦を千切るとはな』

「アレで決めたかったけど仕方ない選手交代だアナザーカリス」

『仕方がないな』

「ありがとうよ…行くぜ」

『ジオウ』『アナザーツインギレード』

下手な奇襲より馴染んだ力に対応した方が良さそうと判断しアナザージオウになり二刀流の構えを取る

それと同時にあつた鎧甲冑が突貫し直剣を振り下ろしたのは

「っ!!」

ツインギレードを交差して受け止めたが力が強いのかアナザージオウを支える地面が凹むと鎧甲冑は腹に蹴りを叩き込みアナザージオウを蹴飛ばした

「うっ……っ!!」

痛みを殺して横に転がると直剣を投げてビルを倒壊させた未来視による予知が無ければ終わっていただろう…いや再生能力があるから問題ないか…だが

「んだよ…こいつ…」

未知の敵 チープな表現に尽きるが地球のデータベースと直結出来るアナザーWで見つからない情報の敵って何だよ!と混乱するのは良いパフォーマンスに繋がらないのは分かるので思考を切り替える、生憎その辺は得意分野だが少なくともこのままじゃジリ貧で負けるのは目に見えてるとなると…アレを使うしかないな

『アレ?』

「おい社長、力を貸せ」

『良いでしょう、私の力を貸して差し上げましょうか』

『おいまさか』

「言うな相棒、毒を食らわば皿までだ」

『嫌な言われようですが…まあ道具は使いやうですから』

その言葉と同時に鎧甲冑は直剣片手に再度突貫し始める、この一撃で決めようとする意識は感じるがアナザージオウがスイッチを押したのが早かった

「っー」

先程と違い、今度は鎧甲冑が弾き飛ばされたその犯人は巨大な機械のコーカサスオオカブトと二本角のサイ アルシノテリウムである

2体がアナザージオウを守るように周囲を回るとアナザージオウの体に突然2体は体当たりを行うと間の体からは黒い泥のような液体が血のように流れ始めると血が固まるように装甲を形成する。そして形成が終わると泥が弾け飛んだ

その姿はハルトに従うアナザライダー達の中では特に異質とも言えるような外見をしていた

中でもアナザーアークワンを思わせるようなボロボロの装甲は元々が金色だったがメツキのように禿げてボロボロな体と頭部の五本角、何より目立つ右腕が槍とレイピアを合わせたような刺突武器となっており肘に当たる部分にはリング型レバーのようなものがつき対となる左腕には頭の動物の頭部が張り付いているなど奇怪さではアナザーライダーの中でも随一

己の繁栄を求めし社長

『サウザー』

「アナザーサウザー、俺の強さは桁外れだ」

そう言うのと鎧甲冑は直剣を構え直して中段に構え間合いを測っている

『成る程、初見の相手ですから迂闊に仕掛けられないですか…小賢しい私のサウザーがその程度で測れるものですかやりなさいハルト』

ー待てよ、ならアイツはアナザージオウとアナザーカリスの対策を立ててたって事か
?ー

『そこまでは分かりませんがアナザーサウザーを警戒しているのを見るに能力を測り兼ねているようですね、作戦は？』

ー接近してジャックライズしてデータを分取る、そうすりやウチのインテリ組が調べれるからなアイツを丸裸にしてやるぜー

『成る程、確かにそれならサウザーが最適解ですね』

右腕武器のアナザーサウザンドジャッカーはオリジナルと異なり一度だけのコピーとなつているが完全な強奪を可能としている、故に相手の情報を1000:いや1000%調べられるのだ

ー道具は使い用だろ？ー

『ええ、貴方は私（アナザーサウザー）を動かすインナーフレームでしかありませんので勘違いなきよう』

ー誰が消耗品だこの野郎ー

と悪態を吐きながらも間合いを図る両者だったが先に仕掛けたのはアナザーサウザーからだつた

「ん……はあー！」

「っー！」

真つ直ぐに走り出し露骨に右の武器腕 アナザーサウザンドジャッカーで突き刺そ

うとしたが直剣で受け止められる、しかし

「そうなるよな」

『甘い！』

ガラ空きの左拳を握りしめて思い切り殴ろうとするが行動を手刀にして切り上げると

『ペローサ』『クエネオ』

2体のロストモデルから生まれた2色の斬撃が鎧甲冑の関節部に命中し掴んでいる手を離れた

「どつよ」

これぞアナザーサウザーの力だ、左腕にはマジアの力、ロストモデルの力を宿している変身を使うアルシノは入っていないがな、それでも十分で威力に怯えた鎧甲冑は間合いを広げたが

「間合いは掴ませない！」

漸く自分のペースに持ち込めたのだ相手に主導権を渡してなるものか

『オニコ』

背中からコウモリの羽が生え、目標に向かって高速で跳びながら接近する

「せやあー！」

そしてアナザーサウザンドジャツカーを振り上げて剣を弾き飛ばした

「!!」

「つしゃあ!」

そのままジャツクライズを狙ったが何と

「っ!」

鎧甲冑は刃の部分を押むなり、そのまま鐔の部分で頭部を砕こうと振り下ろしたのだ

「やばっ!」

『ビカリア』

頭部をビカリアの力で硬化して受け止めたが衝撃で軽い脳震盪に襲われると鎧甲冑に蹴飛ばされ間合いを戻される…少し回復してきたので

「おいおいモルトシユラークは禁止技だろ」

嫌味を言うしかない

モルトシユラーク

先程のように剣を鈍器にして殴る技で剣士の決闘に置いて禁じ手とされている

「……………」

「相変わらず黙りかよ、いい加減喋らねえと雷落とすぞ!!」

『ドードー』

同時に左腕が赤く光ると赤い羽を意識した剣

ヴァルクサーベルを召喚し赤い雷を帯びさせ斬撃にエネルギーを乗せて放つ、すると受け止めるかと思つた鎧甲冑は何と横に飛び回避した

「っ！」

「……………」

連中の戦闘能力を考えれば雷の斬撃を受け止め跳ね返すくらいの芸当は朝飯前と想定したのだが回避したと言う事は雷が苦手なのか？

『その憶測は検証する必要があるな』

ー そうだなもうちよい検証を重ねる必要がありますうだー

『その為にもジャックライズをする必要があります、早くなさい！』

ー へいへい、おつかない社長だなあ！ー

『ネオヒ』

「ふっ！」

背中からネオヒマギアの力で触手型の副腕を生成、その手にペローサ、クエネオ、ドーの武器を武装させて多方向から攻撃を行うが

「っ！」

鎧甲冑は多方向からの攻撃をまるで全方位に視野があるとしか思えない方法で回避、

弾き、逸らして捌いている…まるで俺と同じように未来視をしているようにも思えた
「芸達者な奴め…」

忌々しいと睨んでいると

『ハルト、喜びなさい奴の行動パターンとハルトの戦闘スタイルをラーニングし強化に成功しました』

ー何ですとお！サウザーって拡張性なくてジャツカーに丸投げだライダーではないのか!!ー

『それは仮面ライダーサウザーだ、私アナザーサウザーはドードーマギアのラーニング速度を取り入れ、尚且つ他のアナザーライダー達の演算能力を使うので暗殺ちゃんよりも早いラーニングが可能です』

ーあの暗殺ちゃんより早いラーニングだと！凄いなアナザーサウザー！ー

『そうでしょう、私の成長率は1,000%ですから』

「採用だ！あの鎧甲冑にラーニングの力を見せてやれ！」

『当然です、Z A I Aの力を思い知れ！』

「いや違うだろ」

するとアナザーサウザーの体が赤く発光し始めた

『ZETSUMERISE』

その音声と共にアナザーサウザーの体に赤い重武装の装甲が装備される背中には重機関砲、両肩にはミサイルグレネードを装備した形態となり右腕と一体化していたアナザーサウザンドジャックカーは右腕を覆うような形態となり手の甲に鋒が付与された

『ザビーみたいだな…あの蜂め…良くも』

何処からか恨み節が聞こえたがスルーしたハルトは新たな形態を確認する

「ドードーマギア改の装甲か…この火力があれば…」

両肩のミサイルグレネードを発射、当然と言うべきかミサイルは鎧甲冑の斬撃で撃ち落とされ爆発する、しかし起こった爆破と共に周囲に煙幕が展開された

「っ！」

「いくら目が良くてもこれならどうだ！」

右腕を相手のボディーに添えると肘にあるレバーが自動で動いた

『ジャックライズ!!』

「っ！」

ジャックライズを行う事によりメリットは二つ、まずは相手のデータをコピーする事

と

「相手の弱体化だ」

『取り込みましたね…さあアナザービルド、ゼロワン、キカイ！解析なさいアナザーWも！』

『へいへい…つたく俺達あ対等だろうがよ』

『道具が指図するな！』

『ハルト！後でアナザーサウザーに辞表パンチを叩き込んで良いか？』

ー好きにしろ任せるー

『つしやあ！お前等今だけは従え！』

『『おう！』』

『ハルト何故ダア！』

悪いな俺のモットーは皆 仲良くなんだよとヘラヘラ笑い答えると

「ん？この力は…：使うか」

「！！」

突如現れた重装備の歩兵2体、手には短機関銃トリテンダを装備したライダーとマジアにも似つかない戦士

「つしや！バトルレイダー、配置につけ」

インベイティンググホースシュークラブレイダー、通称バトルレイダーを2人呼び出すと鎧甲冑を取り囲むように待機する

「何処から来たんだ？」

『さあ？私も知りませんが変身者は居ませんディエンドのような立体映像ですよ』

マジかと驚きながらも鎧甲冑を蹴飛ばし地面に転がす、煙幕が晴れると驚く様子の4人を尻目に

「さて、誰だお前？」

「……………」

相変わらず黙りである黙秘権を使うか、なら

「逢魔に連行してウルティマに任せるか？」

我が国の検察庁長官にして筆頭拷問官となりつつあるウルティマなら的確な情報を抜き取れると判断し連行しようとしたが鎧甲冑は抵抗する

「この様子…ウルティマを知ってるのか？ますますお前の正体に興味湧いて来た……つと、その前にその面を拝ませて貰おうか」

アナザーサウザーが鎧甲冑の兜に手を伸ばそうとした その時

「!!」

「っ!」

バトルレイダーが謎の攻撃で爆散しアナザーサウザーにも一撃お見舞いされたのである

「何処からの攻撃だよ!」

周りを見るが誰もいない上に鎧甲冑の姿も消えていた

「ああ!クソ!!!逃げられた…:そう言えば解析どうなってる?」

『簡単にだか割り出せた』

「流石だな、で結果は?」

それはハルトにも予想外の結果となった

『ダインスレイブだ』

「へ?」

『この世界にもあるダインスレイブだよ、聖遺物の波形も紹介したんだ間違いない』

「ちよい待て!あの魔剣ならエルフナインが持ち逃げしたんじゃないのか!」

確かイグナイトなんちゃらって計画の為に持ち逃げしたって…

『だが、あの鎧甲冑の剣は間違いなくダインスレイブなんだよ』

「どうなつてやがる…:ってその前に!」

アナザーサウザーは周りを見渡すとやはりと言うべきか再起していた特殊部隊員が銃を構え直していた

「……………やっぱり捕まえたいか俺を」

ナツキに不愉快と伝わる声音で話す肩をすくめ

「悪い止めたんだがなあ……………恩を仇で返して申し訳ない」

「そつちも仕事なのは分かるけどよお」

「頼む、いやマジで2回マジピンタしてくれて構わないから！」

「なあ知ってると思うけど俺さ王様よ？俺捕虜にでもしたらどうなるか分かる？それこそ俺の国の連中が襲い掛かるだろうな、キャロルと俺達と二正面作戦出来るほどSONGsの戦力は豊富かねえ？」

「っ!!」

痛いところを突かれたとナツキは顔を歪ませるが

「そうなった時、この世界で何が起こっても俺は関知しないぜ？」

脅してはないと伝える、特殊部隊員達は命乞いしてるようにも見えたがナツキだけは違う

知っているからだ

どの未来ルートにおいてもハルトの隣で支え続け、尚且つ過去、現在、未来において逢魔王国 最強戦力の名を欲しいままにしている3人の悪魔とその配下達

テストアロツサ、カレラ、ウルティマ

今でこそハルトに忠誠を誓い大人しい彼女達だが一度、命令を受けると悪鬼羅刹も逃げかえる無双ぶり

ある未来の世界では彼女達の魔法で地形が描き代わり地図職人達や国の人が涙目になったというのはナツキの記憶にも新しい

その彼女達が攻め込んでくるとなったらキャロルところではないとナツキは全員に銃を下ろせというが

「あ……こうする方が早いか」

そう呟いたアナザーサウザーが指を鳴らすと

特殊部隊員やナツキ達が耳につけていた通信機から大音量の悲鳴が聞こえたのだ

突然の攻撃に耐えられずに気絶する隊員達、辛うじて耐えたナツキはアナザーサウザーを睨みつけたが当人は

「スゲーな流石はアナザーアークワン……こんな芸当も朝飯前か」

彼のやった事は原作ゼロワンでアークがしたことと同じだ悪意を流しこんで相手を

無力化させた

それによって行動不能になった面々を無視、背中にオニコの翼を生やしてアナザーサウザーは撤退したのであった

「はあ……良かった」

この場を切り抜けた事に安堵したナツキだが

『ナツキさん……後でお話があります』

「……はい」

別の危機が目の前に現れたのであった

その頃

「……………ふう」

ビルの屋上に現れた鎧甲冑は一息つくつと兜を脱ぎ背後にいた仲間へ声をかけた

「助かったぞ」

ハルト」

すると背後にいた異形 アナザーカブト：否アナザーハイパーカブトは変身を解除し現れた素顔は老ハルトであった

「こんな真似二度としないでくれ心臓に悪いぞ」

「そう言われてもな…というより何故、あの時のお前より強い？オレの知ってる歴史な

ら彼処まで理不尽じゃなかったぞ」

「それは俺の望みだよ、歴史の乖離さ喜ばしい事じゃないか

キャロル」

同時に鎧甲冑は光の粒子となりペンダントに収まると、スタツと金髪の女性は地面に足をつけた。それは他ならぬキャロルである。

「まあな…だがこれ以上は知らんぞ乖離したら最悪お前が…」

「構わんよ、それならそれで面白い」

そう答えた老ハルトは空を見上げて

「さあ頑張りたまえ若人よ」
そう呟いたのであった。

超えた一線

その夜 ハルトは1人で拠点の外に出ていた

「あの攻撃……」

思い出されるのは鎧甲冑を助けたとも思える攻撃 文字通り目にも止まらぬ速さだった

レ この世界の聖遺物によるものではないのは分かった……だがあり得るのか？ だってア

『クロックアップだな』

アナザーカブトの言葉にだよなあと返すハルト この世界では渋谷に隕石が落ちてないのは確認しているが

「いや確かにワームやネイティブの方を逢魔王国に招きましたけども！」

まさか自分達が呼び水となり仮面ライダーを引き寄せたのだろうかと考えていたア
ナザーライダー達であったが

当の本人は

「よし天の道を行く人を探すぞ！そしてサインを貰う……街の豆腐屋を中心に探す探索
隊を結成しよう！」

目を輝かせていて尚且つブレてなかった悪い意味で

『うおーい！呑気か状況を考えろ!!』

「つせえ！あの人に会えるんだぞお前たち血眼で探せえ！」

『公私混同って知ってるかア!?』

「知ってるが？」

『なら堪えろ!!今はそんな事してる場合じゃねえよ!』

「天の道を行く人に会うという一大事が……そんな事だと……アナザーW 許さん!!」

『おい！何か不思議な事が起こりそうな感じがするぞ!』

『最近新しいライダーが始まったからな!』

『ハルト！お前、日蝕に生まれた世紀王じゃないぞ!』

「おい！ビルゲニアに謝れ！」

『あー！もうこの厄介オタクめ!!』

「あ！言つたな teme エ！」

アナザーライダー達と喧嘩していたら窓がバン！と開き中から千冬が出てきた

「ハルト、騒ぐなら他所で騒げ！煩くてかなわん」

「つて!!……わーった」

千冬の言葉と拳骨で大人しくなったハルトであった

「それでどうだった？」

「ナツキに裏切られた……あの野郎……今度会ったら……」

「会ったら？」

「ここを……こうしてやる」

と体を動かしながら説明しているが千冬は分からなかったようだ

「何をしているんだ？」

「え？ナツキの首を折る練習」

『それ実質死刑宣告だよな？』

「恩を仇で返す奴に慈悲はいるか？」

「まあ今の奴は公僕だ上には逆らえん……気持ちちは分かるがな」

「だから責めるなっただか？ まったく千冬は優しいな流石だ」

「いや、だが察してやってほしい、王様なら従うものの意を汲むのも大事だぞ…あと頭を撫でるな！」

「嫌か？」

「ち、違う…だが2人きりの時に…」

「分かったよ…千冬ありがとう」

「気にするな、それよりお前を襲った鎧甲冑だが」

「ああそれならジャッククライズして調べてみたんだが…」

言い淀むハルトに首を傾げた千冬

「どうしたんだ？」

「なんつーか面倒な手合いってのが分かったから皆に話すよ」

ハルトは溜息をつき、仲間が集まる部屋に向かうのであった

その部屋にてハルトは仲間達に報告した

「まず、あの鎧甲冑の正体はファウストローブ…その近縁種らしい」

「「っ!!」」

ファウストローブ それは錬金術師が編み出したシンフォギアのようなものだ、以前サンジェルマン達が使っていたのを見ていたので知識としてはあったが錬金術師の関与が浮き彫りとなったのだ

「だが話ではダインスレイブではないのか?」

「其処なんだよ意味が理解できねえのがさ」

「だよね、エルフナインがダインスレイブ持ち逃げしてるんだからさ」

アナザーW達の検索能力が間違ってるとは思えない、しかしダインスレイブが二本もあるとは思えないというよりあってたまるかあんな魔剣が

「放置するには危険なんだよな」

ダインスレイブ、世界に伝承される魔剣として認知度の高いものだろう
何より恐ろしいのはその伝承と能力だ

抜剣したならば相手の血を浴びるまで鞘には収まらず、その刃で切られた傷は治らない呪いをかける

「俺の再生能力に対して唯一の弱点だからな」

フェニックス・ファントムやバグスターの再生な蘇生を阻害されるなら想定以上の脅

威足り得るだろうと判断する

「まあ考えられるならダインスレイブを複製してファウストローブに改造したか…別世界のダインスレイブを持ってきたかな」

「束の考えが正解だと俺は思うけど…それができる奴は限られるんだよ…：取り敢えず鎧甲冑の対策は立ててるから次こそは捕らえる」

アナザーサウザーから来たラーニング能力でアナザライダー達には対策が完了している次は逃さない

「で、奏者連中のキャロル拠点の攻撃は？」

「予定通りだね、このまま行けば数日のうちに仕掛けるよ…その間にチフォージュシャトーに行く」

錫音の言葉にハルトは少し悪ガキの笑みを浮かべると

「その予定変更する、裏切り者含めて連中を先にすり潰す邪魔される事気にしてたけど邪魔するくらいなら先に潰した方が早いよなあ俺一人で全滅させてやる…いい加減白黒はつきりさせたいし」

ナツキの狙いが何かは知らないが予定通りにしてやるものか連中から貰い貰った情報より先に仕掛けて向こうの戦力を削ってやる

その言葉に3人は驚いた

「え、ちよつ！ハル君1人って本気で言ってるの!？」

「そだよ束？」

「いや別にそつち狙うのは良いけどキャロリンの力を考えたら消耗するのは良くないんじゃないかなあって」

「んーだけどさキャロルの狙いがアレなら必ず出てくる…自分の計画が狂うのを嫌うからなアイツ」

だから前回現れたのだと言うと錫音も

「だけどSONGs…ライダーやブロスもいるし1人なんて旗色が悪い、私達も出た方が良いよ」

「数ならカリユブデイスもいるし何なら逢魔からウオズ達を呼べば良い…それに乱戦に持ち込むなら1人の方が良い連中にエンドオブワールド叩き込んでやる」

「ナツキ達を殺すのか？」

「まさかくやだなあ千冬、そんな事しないキャロルを誘き出す撒き餌だよ…それにライダーシステムのモルモットだからね利用価値のあるうちははしないよ…まあナツキには

説教とお仕置きと御礼参りも兼ねてるから徹底的に痛めつけてやるけどね」

流石の俺もあまでされたら怒り狂うしかないと言っていたのであった、マジビンタ
2回は甘いなど

「フォトンブラッドを纏った手で頬を少しずつ灰にしてやろうかなあって」

両手の指先をトントンと叩き合わせながら笑うハルトを見て

『何か北崎の奴を思い出したぜ』

『奇遇だな俺は浅倉を思い出したよ』

アナザーライダー達が何か言ってるが知った事ではない

「ナツキの奴に誰、裏切ったのか教えてやる」

ハルトの瞳から色が完全に消えているほどの怒りに千冬達は溜息を吐くしかなかつ
た

「あのバカ、ハルトの性格を考えればこうなるのが分かってたろうに」

「こりゃナツキんの自業自得だね」

「まあハルトがしたいなら私達は止めないけど……危ないと思ったたら加勢に入るからね」
「分かったけど出番ないかもよ?」

翌朝

「♪~~~~」

ハルトはキャロルの拠点から見えるような位置にあるビルの屋上。その手すりに乗りながら陽気に口ずさんでいたのはキャロルが歌っていた歌：殲琴・ダウルダブラと明らかに歌とテンションが完全にミスマッチなのだが楽しそうな様子だ

「虚無こそが安寧の楽園か……世界の全てが無から生まれただけ」

ハルトが見た仮面ライダーの中で同じような事を言っていた剣士を思い出す

「愛する者を失い千年も世界を恨み滅ぼそうとした不死鳥の剣士か」

キャロルと近しさを感じるが俺は封印したい訳じゃない。もう一度伝えたいのだ

「ずっと一緒に……ん？」

同時にドタバタと五月蠅い音が聞こえてきたのでハルトは口角を限界まで上げた

「姿を見せたの時間を考えると……特殊部隊か自衛隊……もしくは……」

同時にドアが大きく開くと銃火器で武装した一団が入ってきたレーザーポインターがいくつかは急所に当たっている

「動くな！手を上げろ！」

「ん？良いのかい？上げても？」

軽口を叩くと頬を掠めるように銃弾が通過した

「今の威嚇だ！次は撃つ！」

真面目な奴等と含み笑いしながらハルトは

「はいはい……つとはい手上げた」

手を上げたのを合図にしていたからか同時にオレンジ色の装いをした黒刃の剣が複数展開されると銃弾のように放たれ一団に襲い掛かった

「「「ぎゃあああああ！」「」」」

完全な奇襲に全員が襲われ体の各部位に剣が刺さり戦闘不能となる辺りは血の池へと変わる倒れた一団を見てハルトが笑った

「あーあ、だから言ったのに良いの？って」

そして地面に刺さったオレンジ色の剣を引き抜き肩に軽く載せると

「しっかし、こんな事出来るんだ無銘剣は」

そのままウツトリした顔で肩に乗せた無銘剣虚無を見るハルトは楽しげな笑顔で

「生身で使えるのが高得点だねツイングレードやゾンビブレイカーは変身しないとダメだから」

『まあ本来、武器ってそんな感じだからな』

「アイテムが武器になるのってあまり無いよな」

サソードヤイバーやイクサナツクル、後はシヨットライザーやセイバー系列の聖剣かな

『おいおいハルト！俺っちのローリングを忘れてるぜ!!』

「あ、だー」

忘れてたと笑うハルトの頭部に鉛弾が命中した

遠くのビルから文字通り狙撃されたのである

ビルではライフルのレバーをコッキングして構え直した狙撃手がいたので合った

「命中……これで対象はしたな」

「ああこれで奴の力は……おい！」

「つーば、バカな！」

仕事を完了させた筈の狙撃手はスコープ越しにあり得ないものを見た何故なら

「……つてえな」

頭部が炎と共に再生し、ケロツとしていたハルトが立っていたからだ近くにある弾痕を見て

「ライフルか……喰らうと痛いな」

『普通は死ぬのだから』

「だよなあ今は不死身の体に感謝するよ、やっぱり人間辞めてんなあ俺は……さてお返しだ！」

無銘剣虚無を地面に強く突き刺したハルトは右手にエネルギー球を生成し狙撃手がいるだろうビルに投げつける

同時に起こった爆破にガッツポーズをとる

「つしやおらあー！」

『派手だが…逃げてるぞ』

「だろーな狙撃つて失敗したら逃げるんだっけ？けど良いんだ騒ぎが大きくなったら来るでしょアイツ等」

そう不適に笑うとハルトはアナザーウィザードの力で襲撃班を拘束し

『ゼロワン』

アナザーゼロワンに変身しトラップングスパイダーの力で全員を天井に吊るして
いた

「コレで良し…後は〜」

そう言ったアナザーゼロワンは落ちていること銃や弾丸などを拾い集める

「何に使えるかわからないし〜あー！そうだ！」

迷惑料を貰うのと少し人質に細工を施したハルトはカラカラ笑いながら拾い集めて
いると聞こえるエンジン音に思わず

「あー来た来た！」

笑顔が溢れたが来た人物の顔を見てすぐにつまらないと言った顔になる

「やはりお前か常葉ハルト!!」

「風鳴翼か……ハズレだなお前に用はない」

右手で首を傾け鳴らしながら退屈そうな声音に変わる

「何だと!!」

「せめてナツキか三人娘でも呼んでこい、お前じや退屈凌ぎにもならねえよ」

「後悔するでないぞ見せてやる防人の歌を！」

「まあ待てよ翼、そうカツカすんなって」

「奏！」

「天羽奏……プロトバースの使い心地はどうかかな？」

「やっぱりナツキの話した通りか」

「なーんだやっぱりナツキの奴全部話してたか……メダルの出所までは話したみたいだな」

「ああ……それとキャロルとの事もな」

「そうか……なら分かるだろ？俺と彼女の問題だ余計な手出しは無用、あと今回は交渉を望んでる、要求は一つ今回は静観しろ奏者ども」

聴くとは思えないが提案だけしておこう最低限の義理を果たす為に

「ならば人質を解放しろ！そうすれば「何き？」……」

「まさかこの後に及んで命は助けてやるとか言う気か？笑わせるよなあカリユブデイス」

「ええハルト様の言う通りですね」

ハルトはそう言い後ろを見るとカリユブデイスがゆっくりと歩きながら現れたのであつた

「お前は！」

「人質を解放しろか……良いだろう解放してやろう……カリユブデイス」

「はっ！」

そう言うときカリユブデイスは体にある大口を大きく開いた それを見て翼達は驚きながら止めに入る

「や、やめろー!!」

「待て、なあ……しろつて言ったり辞めろだつたりどつちなんだよ、カリユブデイスよく嘯んで食べるよ」

『お母さんかお前は』

「人質を無傷で解放してくれ!!頼むから！」

「わかつたよ、だつてさカリユブデイス………嘯まずに丸呑みしろつてさ！」

「はっー！」

それだけ言うとかリュブデイスはロープで縛られた人質を大口で飲み込み取り込んだのであった

その際に聞こえた断末魔が彼女達の耳にこびりついてしまった

「ご馳走様でした」

「おー！偉いぞカリユブデイス！ご馳走様言えたな！良い子だー！よしよしよし！」

と頭を撫でて喜ぶハルトであった奏者2人は戦慄している顔で睨みつけていた

「な、何故だ！お前達は目的が違っていても目指す場所は一緒だと思っていた…なのに何故！」

「えく人質を解放したじゃん苦痛から囚われるくらいなら死を選ぶような人かなあつて」

「なるほど…その苦しみから解放させてあげたのですねハルト様はお優しい」

「そう言うこと、カリユブデイスはやっぱり賢いなあく流石は俺が作った自慢のメギドだ！」

笑顔で仲間の成長を褒めるハルトであるが翼はあり得ないと思いつつも問いかける

「お前に人の心はないのか!!」

「あるけど？連中に銃突きつけられて狙撃されてんだよ俺、可哀想に無抵抗な人間が撃たれたのさ」

『心にもない事を言う』

—うるせえ—

「何が言いたい」

「殺そうとしたんだから殺されて当然寧ろ今までの対応に誠意すら感じてほしいけどなあ、いつでもこうしようと思えばできたって事だよ」

悪に満ちた顔で告げたハルトは無銘剣虚無を構えて2人の戦姫に告げた

「こいよ武闘派アイドル、俺達との因縁を清算しようじゃないか」

「良いだろう！行くよ奏！」

「ああ！変身!!」

—————

SONG s 基地にある画面の向こうで見ていたエルフナインは悲しみに満ちた顔をしていた

「ハルトさん……どうして……」

長い付き合い故に彼の凶行を見てられないと目を背けてしまう

「あの馬鹿野郎!!」

「ナツキさん!!」

ナツキが基地から外に出たのであった

その頃、キャロルは同じように遠目から見張っていた拡大していたモニタの映像にエルフナインと同じように動揺している

「あのバカ…何をしている、そんな真似をしたら…」

あの能天気でヘラヘラしたお人好しが本気で世界と戦うつもりなのか…

「やめろ…そんな事…お前がしなくて良いんだ！お前はいつもみたいにバカみたいに笑っていろば…」

「それくらいハルトは本気って事だよキャロル」

「アイツは大事な人の為なら悪鬼羅刹に身を墮とすような奴だからな」

錫音達が前に立つとキャロルは怒りに顔を歪ませ

「お前達…何をしていた!!ハルトがあんな真似に走ったのに何故止めない!!止められると信じたからオレはハルトを任せられると思っただんだ！」

「あんな真似？一体何の話だ？」

「見てなかったのか…人質を目の前で手にかけてのただぞ！そんな真似アイツは絶対にしなかった！」

「えゝ人質なんていたかな？」

「……………何？」

睨みつけるキャロルであつたが束はどこ吹く風で

「プププ〜キャロりんさハル君と一番長く一緒にいたのに何したのか分からなかつたんだ〜」

「ほおハルトの言葉ではないがキャロル…さてはボケたな」

「仕方ないよチーちゃん、東さん達と違ってキャロりんは独りぼっちだったもんね〜！」

「まったくだ、ははは！」

「何だと！貴様等…表に出ろ！消し炭にしてくれる!!」

「いいだろうこの間の件のお礼と行こうか！」

一 触即発の空気になりそうだったので錫音はため息を吐くと嗜めるように

「はいはい2人とも煽らない、キャロルもだでないとあの時の頼みは履行しないよ」

「はーい」

「だが私は謝らないがな」

「ふん!…まあ良いだろう、それで人質がないとはどういう意味だ」

「タカメダルで生命探知してみたら？」

「ん?…これは!!」

「それが答えだ…あのバカが無策であんな事すると思うか？」

「だよねー…つて東さん達が内緒でキャロりんという事ハル君にバレたら東さん達も危ないんじゃない？お説教コースは嫌だよ…」

「だ、大丈夫だろう…事情を話せばハルトなら分かってくれるさー！」

「でもお仕置きならベットの所で…キャツ！ちよっ！チーちゃん!!何で東さんの頭を鷲掴むのかな!!」

「何、大した事ではない三月兔を締め上げるだけだ」

「ちよちよ！まさかこの間の件を根に持つてるの!!」

「持たないと思ったか？あの日は私の番だったのだ！」

「なん……だつて！チーちゃんずるい！」

「貴様が抜け駆けしたせいで日が伸びたのだぞバカ兔が!!」

「いたたたたたたたた!!してもらってるじゃん!!」

千冬が束をアイアンクローしている光景に思わずキャロルは問いを投げた

「おい待てベットだと？お前達ハルトに何をした？」

「えゝ何つてナニだよ？」

「っ!!なん……だと……!!」

「そう言うことだよ、私達は一足先にハルトとしたわけだ」

「ははは、残念だなキャロル」

「ほお……すまないがオレは席を外すあのバカに用事ができた」

「ああいつてらつしやい」

「ふん！」

キャロルは転移結晶を砕いてハルトのいる場所まで転移したので合った後

「ねえねえハル君とキャロりんどつちが勝つかなあ〜」

「さあね……けど上手くいけば良いかな」

「黒幕が釣れると助かる……か」

「もすもすひねもす〜?!……うんうん……わかった!ねえねえ、チーちゃん」

束はファイズフォンXを仕舞うと千冬に話しかけた

「何だ?」

「逢魔王国にチーちゃん宛の届け物だつて」

「逢魔に……ハクロウ師匠からか?」

「いや違うみたいだけどファイニスが届けてくれるつて」

「そうか」

そう話しているとオーロラカーテンからフィーニスが現れた

「お久しぶりです妃様方」

「ああそれで箱とは？」

「はい、実は宛先がなくて…先輩達も調べましたが爆発的な物でもないのは確認済みなので千冬様にと」

「ほお誰からなのだろうな？……ん？箱に書いてあるな…さたんさーべる？」

「何だろうねハル君に聞けば分かるのかな？」

「では僕はこの辺で「待ったフィーニス」何でしょう錫音様」

「ハルトから君に贈り物があるらしいから見守っていきなよ」

「魔王様から私に？」

ならば断る理由はないとフィーニスは屋上にある椅子に腰掛けたのであった

場面は変わりハルト側に戻る

「ははは！へい！！」

無銘剣虚無を携えて向かってきた翼の刀を受け止めると刀身を滑らせるようにして空いた隙に肘鉄を食らわせた

「がつー！」

「翼…このつー！」

プロトバースはバースバスターで射撃をするがメダル型のエネルギー弾を刃で受け止めるとエネルギー弾が吸収されるように消えていった

「な、なんだ…今の…」

「おお…」

これぞ聖剣 無銘剣虚無の力である

それはあらゆる属性攻撃の無効化、地水火風は勿論 光や闇なども相殺する優れもの、しかも複数に分裂するときた

恐らく存在を知ればキャロルが間違いなく欲する滅びの力だろうが

「手に馴染むな…」

ライダーウエポンはアナザーライダーに変身した時にも持つことはあるので慣れていると思っていたが、何故か無銘剣虚無はその前から馴染むのを感じたが気持ち悪いくらい手にジャストフィットしているので思わず

「何っーか…他の世界線の俺が使ってたのかなあ…」

今はどうでも良いけどなど不適に笑ったハルトは翼とプロトバースに視線を合わせ

「おいおい変身してないのにバテバテだぜ？」

「くっ……！」

「こんなんじやミカどころかファアラやレイアにも及ばねえなあ……弱すぎだ」

「っ！」

「だから引っ込めよ、キャロル達にメダルの技術渡した落とし前と責任は俺達が取る」

これに関しては完全に俺の落ち度である、ライダー技術を流出させたのだから責任は取らねばならないと思うし彼女達にも一応の罪悪感があるからな

「そうはいかない……お前達に任せるなど……防人の名が廢る！」

「ただ何で諦めてくれないのかなあ？と首を傾げる」

「殴つてもダメ、言葉で言つてもダメときたら……はあ……面倒くさっ」

すると空いた左手に現れた新しい無銘剣虚無が、あるアナザーウオッチへと姿を変わる

スイッチを押すと同時にウオッチは消えると無銘剣虚無に唯一宿す事の出来る流転を断つ炎 永久の灯が灯ると炎はハルトの全身を包み込むと背中から燃え盛る翼が生え体を包むように閉じた

そして周囲に羽が舞うのは、とある剣士

その体は全身は炎で焼け爛れたような鳥のような外見をした剣士、顔が炎で焼かれた苦痛に歪ませているような有機的な姿と手に収まる無銘剣虚無という歪な姿を持っている

1000年の虚無感に苛まれる 破滅の不死鳥

『ファルシオン』

アナザーファルシオン

「来いよ無知な戦士達」

決闘と…

ハルトはアナザーファルシオンになりプロトバースと翼 激突

「おらー！」

「くっ…なんの！」

アナザーファルシオンは無銘剣の斬撃は翼の天羽々斬の刃と甲高い音をかわしている、アナザーファルシオンの型にはまらない喧嘩殺法のような剣に対して長年の研鑽を重ねた翼の剣技では中々隙を作れないでいた、純粹な技量の面ではハルトは翼に劣っている

それに加えて隙を見つけても

「アタシを忘れるなっとなー！」

「ちっー！」

長年の連携によるプロトバースの射撃により決定打を打てないでいるが、それは向こうも同じ翼がエネルギー斬撃、蒼ノ一閃を放つが無銘剣により受け止められ無効化される

「やはりその剣は厄介だな！」

「だろーうよ、何せ本来いた世界でも破滅の剣だったからなー！」

正確には破滅の書と共にあつた不死鳥の剣士であるのだが…実を言うと破滅の剣という表現は的を得ていた

セイバー終盤において、デザストがファルシオンに変身しメインウエポンとして使い、後に蓮が自らのカラミティストライクに使用、バハトの意志がストリウスの攻撃を止めたりとヒロイックな活躍もある無銘剣虚無であるが、こうとも言われている

自分以外の力で世界が減びるのは認めないから力を貸した

その根拠に劇場短編、ファイナルステージ、Vシネ 深罪の三重奏では全て敵として存在し世界や剣士達を滅ぼそうとしていた

そんなトリックスターのような聖剣だが今は自分についてきてくれるなら構わない

とアナザーファルシオンは翼との剣戦へと再度没入するが

「させ「るかあ!」ちい!」

バースバスターの照準を別に動かして発砲するがやはり大口で飲み込まれてしまつた

「これ以上、貴女の好きにはさせません」

「こつちもだ…食べられた者を返して貰うぜ!」

『ドリルアーム』

「生憎と吐き出す気などありませんよ!あんな美味なものを!」

「この…化け物めえ!」

「ぬん!」「はあ!」

ドリルアームとザルツドラが激突したのであつた

そして互いの戦いの中、言葉を交わす

「お前はそんなに強いのに!何故多くの人々の為に使わないのだ!!」

嘗て問われた事、あの時は背負う物など皆無に等しかった俺には関係ない、知らんと言えたが今は違う

「俺みたいな奴を相棒や王様だ大切な人だつて言つてくれる者達の幸せの為に使う事を

決めた…それを守る為に…今回の件は結果としてキャロルに技術を渡した責任をとり
に来ただけだ、止めたいのは俺も同じだ」

はつきり言える、自由気ままに旅してた頃と違って背負う物が多くなつた…あの頃へ
帰りたいと思うこともあるが

「大事な人との今を守る為に力を使う、そしてそれが最善の未来へと繋がるように」

「成る程…お前も防人という訳だな」

「かもな…はあ…謝罪する、今までお前達やあの男への配慮が欠けていたすまなかつた
…悪いと思うが外で歌っていただけでいきなり銃を撃たれた以上は此方から手を引く
と仲間へ示しつかないのので引く訳にはいかないがな」

カラカラと笑うと

「承知した…ならばこれ以上は」

「互いの得物で語るか…ははは！いいねえやっぱりその辺がシンプルだよな！」

アナザーファルシオンは無銘剣の鋒を地面に添えると反時計回りで回転させ腰のプ
レードライバーに似たドライバーに戻すと左手には骸骨をあしらった直剣 グラッジ

エンドを呼び出し構える

もしもこの場にウオズ達がいたら驚いただろう実際、現場を見ていたフィーニスと同じようにあり得ないものを見ている目をしていたから

それはアナザーライダーとの特訓で体得した怪人が持ち得た剣技、嘗てアナザーツクヨミとカレラにグラフィイトの紅蓮爆竜剣を用いたがアレはライダーやそれに匹敵する強者だった

ハルトの基準で弱いと判断されている翼に向けられるものではなかったが、これは防人に払う最大の敬意

長年、自分と逃げずに向かい合った1人の戦士に対する返礼である

『必殺黙読』

腰のドライバー擬きが強引に聖剣を収めると聖剣の機能と接続、技の威力を引き上げ

る

『拔刀』

それはとある無価値と断じられた怪人の剣技強さを求める三属性の求道のメギド、だが無価値な存在など誰一人としていない、それは剣士の技を生み出した賢人すら屠る強襲の災禍

「カラミティーストライク！」

同時にアナザーファルシオンの背中に燃え盛る翼とメギドの力を合わせた自らを回転からの連続斬撃を放つ

「っ！ならば!!」

翼も負けじと自らの力を引き上げ、刀の両端を繋ぎ同じように燃え盛る刀身を回転させながら突貫し迎え撃つ

『不死鳥無双斬り！』

『風輪火斬!』

両者の技が激突し互いが背中合わせとなった

「ぐっ……」

最初に膝をついたのは翼であった

「翼!」

だが

「っ!」

同時にアナザーファルシオンも膝をついたよく見ると腹部から出血しているのが分かる

「ハルト様!」

互いに相棒の元へ駆け寄る2人を見ると互いに変身解除して肩を借りた

「大丈夫ですか!」

「あ、ああ……大丈夫だ……ふう!」

心配するカリユブデイスに安心の言葉を言おうとしたら思い切り吐血した

「いや大丈夫じゃないだろ!」

「そうだ医者を呼ぶぞ!!」

両翼のツツコミに思わずカリユブデイスは深呼吸をして叫んだ

「医者ああああああああ!!怪我人が此処にい!」

「いる訳なからう!」

「医者を呼ぶつてそつちじゃないぞ!」

「つせえ!傷口に響くだろうが!」

「も、申し訳ありません」

「全く…誰に似たんだけ…素材が前に食べた立花響か?」

「こんなノリだけの奴なんて俺の周りにいたか?と首を傾げたが

『『『『『お前だろ?』』』』』

「な、何のことだろうか…知らねえな」

アナザーライダー達から総ツツコミを受け目線を横に逸らしたのであった

『ジオウⅡ』

持ち前の懐古の力で傷を治したハルトは面倒くさそうな顔のまま

「……………はあ天羽奏、その窓側の扉を見てみるお望みのものがある約束通り無傷で返

してやるよ」

「え？」

疑問に思った奏が言われた通りの場所を開けてみると

「!!」

そこには無傷の人質がいたのだ

「これってどういう事だ」

「タネは簡単、精巧な分身だよ」

「……っ！フロンティアと同じ技か！」

「正解！ってね」

あの時、宙吊りにさせた人質達をジエミニで複製、その個体を宙吊りにしてカリユブ
デイスに食べさせたのだ

「何故こんな回りくどい事を」

「んー保険？だって、そつちの人間殺したら収まりつかないでしょ？これ以上面倒くさいの
に巻き込まれたくないし、脅しをこめてね」

カラカラ笑うハルトにため息を吐く両翼だったが

「ハルト!!」

その場に新しく現れたバース、背中にカッターウイングをつけ着地し変身を解除した
「ナツキ?」

「どうしてあんな酷いことを……つてアレ?」

「そのネタ良いから……んでこつちの要求と結論から言えば、キャロルのいざこぎに関してだけは現場協力する事にしたヤミーとかメダル面の知識ならエルフナインちゃんよりも詳しいしライダーシステムの事知りたいんだろ?」

「つー!」

「それは願ってもない事だが……良いのか?」

「まあ……でないとキャロルを止めれないだろうから……つー!」

気配を感じたハルトはカリユブデイスを突き飛ばす

「ハルト様!」

それと同時に聞こえたのは

『スキヤニングチャージ!』

電子音と強い地鳴り、地割れがハルトの足を固定すると何かに引き寄せられるかのよう
うにハルトが移動している

「アナザーライダー!」

「ハルト!?!」

「ハルト様あ！」

何が騒いでるが当の本人は

「おお、これが必殺技を喰らう怪人の気持ちかあ！」

やはりバカであった

『感動してる場合か！すぐに変身しろ！』

「言われずとも」

『ファイズ』

アナザーファイズに変身したハルトは待つてましたと言わんばかりと笑声する

「ははは！暴れた甲斐があるってもんよ！そうだなあ！！」

その先で待ち構えている銀色のサイを思わせる重装甲を纏う戦士 オーズ・サゴーズ
コンボが待ち構えていたが中身は分かった

「キャロル！！」

「消えろ！！……この不埒者があ！」

このままではやられてしまうだろう、しかしハルトは対処法を知っていた

ファイズフォンXに555 enter キーを押す

『ready shot on:exceed charge』

そして右手に現れたカメラ型のナックルアイテム ファイズショットを構えるとド
ライバーからフォトンブラッドが流れこむ

「カウンターだああ！」

「せいやあー！」

同時のタイミングでサゴーズインパクトとアナザーグランインパクトが激突した
その結果は両者相殺、威力で2人は吹き飛んだ

「ぐっっ！」「うあー！」

互いに変身解除され転がると2人はすぐに起き上がり

「ははは！来てくれた来てくれた！会いたかったよキャロルうう!!!」

『ジオウ』

「誰か知らんが人様の計画を邪魔するなら今度こそ殺してやろう!!」

『タカ!トラ!バツタ!タ・ト・バ!タ・ド・バ!タ・ト・バ!』

とキャラルが吠えたが別の理由があるとはまだこの場にいた誰にも分からなかった、メダジャリバーとツインギレードが交差し互いに剣を交わす

それを見ていた影があった

「そうですね……ええ戦ってください…そして早く消えて下さいよ魔王」

—————

「はあ!」

「せい!」

互いに持つ得物は似た剣である故に我流なのが目立つが一撃一撃が空気を震わせて
いる

「何という…」

「こりゃアタシら混ざったらヤバいな」

「辞めた方が良いな」

三者三様のリアクションを取る、実際にキャロルとハルトの戦いは前回もあつたように広範囲が大変な事になるのが確定しているからである

だからか近くにヘリが対空すると誰かが飛び降りた

「翼さん！奏さん！ナツキさん！」

「大丈夫か！」

援軍として響とクリスが着地したのだ

「立花に雪音か！」

「話に行く途中で聴きました！」

「つたく：アイツが共闘持ちかけるとかどんな風の吹き回しだよ」

「それだけキャロルは警戒に値するという事だろう」

「だろうよ、部下連中さえアタシらより強いからな」

「あの：アレって」

響が指差した先では2人が戦っていたのだが

「どうしたキャロル！仮面ライダーの名が泣くぞ！もっと本気で来い！」

「舐めるなよ異形の王が!!」

戦う度に周りの被害が大きくなる、何なら先程までの翼とのバトルがチャンバラに見えるくらい激烈だった奏者達は人質だった人を避難させナツキと奏はバースに変身して警戒しているのだが

「いい加減に記憶喪失ネタとか飽きたから素で話せや!」

『ファイズ!オーガ!mixing:アナザースラッシュ!』

超高密度に圧縮されたフォトンブラッドの刃が空まで伸びる　オーガストラッシュを思わせる赤紫の斬撃がオーズを襲うが

「前にも話したが燃やした想い出の事など覚えてるものかあ!」

『トリプル!スキヤニングチャージ!』

オーズも3枚読み込みの斬撃でエネルギー刃を切断し技をキャンセルさせた

「千冬の汚部屋は覚えてた癖にい!」

最近一番ショックだったのはそれである魔王化して人間辞めたとか仲間の離反など色々あったがそれよりもショックだったのだとアナザーツインギレードを投槍のように

に投擲した

「あんなの燃やしても忘れるかあ!! 想い出を燃やしても燃やしても消えないのだあの光景があ!」

オーズはメダジャリバーで弾き飛ばすがメダジャリバーも手から離れたので互いに拳を構えた肉弾戦に移行した

因みにこの会話を聞いてた束は爆笑して激怒した千冬にアイアンクローを決められておりフィーニスが慌てて止め錫音は溜息を吐いて視界を戦闘に戻していた

「やっぱり俺達の事覚えてんだろが!」

拳が的確にオーズの顔を捉えるも蹠跟めく間を生かしてオーズはすかさずメダルを入れ替えた

『タカ! ゴリラ! バッタ!』

タカゴリバになると両手のガントレット ゴリバコーンでアナザージオウの顔面に殴り返した

「覚えてる訳ないだろうがあ！」

「がつー……この馬鹿野郎！お前がいなくて俺が寂しいからさっさと戻ってこいやキャラル!!」

本音をぶちまけ殴り返す

「つー！」

再び顔面に食らってよろけるオーズは起き上がると

「何か……思い出しそうだな……」

「つーキャラル！」

アナザージオウの仮面の下で笑顔の花が咲き誇るが…

「そうだ…思い出したぞ……オレというものがあいながら異世界で何人も現地妻を囲う男がいたなあ!!」

「何て悪意ある思い出し方してんだ!!」

色々想い出あったらうにピンポイントで酷い思い出したんだと思わざるを得なかつた

今度は互いの拳がボディを捉えて間合いを作る

「一体何人増やせば気が済むんだ!」

「そんなの俺に聞くなよ!」

「開き直るな、この浮気者があ!!」

「つせえ!そんなん言うなら俺の隣ですつと見張りや良いだろうガア!」

と壮烈な殴りあいをしているのだが

「あ、あれ?私達キャロルちゃん止めに来たんですよね?」

「ああ…それとアナザーライダーを止めに来たんが…」

「何っーか、これ完全に痴話喧嘩？だよな」

「内容が浮気を問い詰める妻だな」

「しかも夫が割とクズな感じの」

何というか自分達が介入して良いのか別の意味で疑問に思ってしまった奏者達であつた

だが殴り合いの苛烈さは極めてい、オーズはタトバコンボに戻り

「この…：…わからず屋があー！」

『スキヤニングチャージ！』

オーズはバツタレッグの力で高く飛び上がると、赤緑黄の三色の輪が現れ急降下キック

タトバキックを放つ

「そりやどつちだあー！」

『!!』

アナザージオウはドライバーにつけたアナザーウオッチのボタンを押しエネルギーを貯めると同じように飛び上がりからのアナザーキックで迎え撃つ

「オラァー!」「セイヤァー!」

両者のキックは近くの建物の窓ガラスがひび割れて砕けた

両者は変身解除となり地面に仰向けで倒れた

「はあ……はあ……」

「ゼエ……ぜえ……」

互いに息も絶え絶えであるが生身のまま立ち上がると

「な……何故戻ってきたのだ!この世界に残り続けたらどうなるかナツキから盗聴してた
だろ!」

「あ……もしかしてアナザーオーマジオウの事?」

確かキャロルの死を見てアナザーオーマジオウに覚醒して実は死んでなかったキャロルと闘うんだっけか？

「そうだ！三千世界を滅ぼす魔王になると言われなかったか!!」

「言われてたなあ…ナツキのそれは可能性だろう？俺はアナザーオーマジオウにはならないよならなくても俺には強い仲間達がいる、それに錫音に殺されたくないしな」

アレは1人ぼつちのまま誰にも頼れずに力だけを追い求めた自分だと思おう

守れたものもあるのだろうか…それ以上に多くの不幸を産んでしまったから未来から刺客が出されたのだ、俺は違う未来を望む

「オレが死んで同じ事が言葉が言えるのか！」

「そんな未来はない絶対に起こさせない!!」

間伐入れずに答えたハルトはヨロヨロとだが確実にキャロルの元へと歩いていく

「だが…そんな…こと…オレはお前が悲しむ未来が嫌で…だから…」

「あのない俺にとって一番最低災厄な未来は」

間合いに捉えたもう逃すものかと言わんばかりにハルトはキャロルを抱きしめたのであった

「っ!!」

「皆がない独りぼっちの未来だけ、知ってるでしょ俺結構な寂しがり屋なの」

「だ、だがオレは…パパの命題を…」

「キャロルの父さんは世界を滅ぼすことが結論だったの？そんなアークみたいな結論を出す親がいてたまるか」

そう言われ思い出す…いや思い出していた、この男と会ってからだ亡き父の遺言を思い出したのは

【キャロル…世界を知るんだ】

そして気づいてしまった父からの命題、それは世界を滅ぼせなどではないと
「ち、ちが…パパは…世界を…」

始めてしまった事を投げ出せない、それが本当に父の命題なのかも分からない…だが
「だろうな、だつてキャロル優しいし…大丈夫まだ間に合うから」

「…オレは…お前となら…解を…」

「っ！」

だがハルトは突然、キャロルを突き飛ばしたのであつた

「…おい何をする！ハルト……ト？」

その光景を見て絶句した

ハルトの心臓目がけてキャロルにも見覚えのある剣が刺さっていたのだから

渦潮とガッツリ黒塗り

前回のあらすじ

ハルトの心臓を剣が貫いた

「ハルトー！」

キャロルが慌てて駆け寄るが

「……………」

彼の心臓は鼓動を止め、脈も止まっていた

「嘘だ……ろ……」

否応なく理解したのだ

ハルトが死んだ事をだが信じられない

「おいいつまで寝てるんだ！早く起きろ！知ってるぞお前は不死の力がある事を！いつもみたいに冗談と笑ってくれ!!」

フェニックスの力で再生しろと体を揺らすだが彼は微動にもしない

だがキャロルには悲しみにくれる暇がなかったのだ

「残念ですが大団円とは行かせませんよ」

そこに現れたのは1人の青年だった、しかし顔を見て響が呟く

「エルフナインちゃん？」

最近仲間になった子と瓜二つだったのである、しかし男性型と言う違いはあったが間

違いないだろう

「違いますよ、まあ僕も彼女も同じ存在から生まれたという意味では兄妹とも取れますが」

「何者だお前は!!」

その翼の問いに青年は答えた

「僕はノエル、錬金術師でその不出来なオリジナルに変わって万象黙示録を暴くもの」

青年 ノエルの宣言にナツキは大声で問い詰める

「何故ダインスレイフを持ってんだ！アレはイグナイトの素材になってるはずだ！」

「ああ…親切な方が完成品を譲ってくれたと答えましょうか」

「ネオタイムジャッカー…か」

「正解です、流石はオリジナル」

「待てよ…なら何でハルトが起きねえんだよ！アイツなら心臓や頭潰されようとも歴史

から消されても瞬時に復活するんだぞ！」

「え？ハルトさん人間なんだよね！」

「正解に言えば元人間だ……まあ……元から人間離れしていたがな」

「ええ……」

「それで何故治らんのだ、ムカつくがあああの男の回復力は化け物級だぞ」

「簡単ですダインスレイフには呪いが込められているからですよご存知でしょう？神話や伝承で語られるあの魔剣の能力を？」

「っ！不治の力か！」

「正解ですよオリジナル、流石にフェニックスのような自己再生や回復能力には驚きましたが心臓に刺せば回復も阻害されますからね起き上がる事はないでしょう二度と」

「何故オレじゃなくハルトを狙った！」

「簡単な話ですよ、その男のせいで貴女は腑抜けてしまった計画も中止する事も視野に入れて……甘いんですよ、今更そんな真似して過去の罪が消えるとしても！万象目次録はパアの悲願で僕達の目指したものだ！それを辞めさせるような原因なら排除されて当然だ！」

「貴様ア……」

「まあオリジナルにはまだ利用価値がありますからね……その体に呪いの旋律を浴びても
らわないとなりませんから……来い黒騎士！」

ノエルはハルトに刺さっていたダインスレイフを転移して引き戻し、地面に突き刺
す。すると錬成陣が浮かび上がり、何時ぞやの鎧甲冑に似た戦士が立っていた

「アレってこの間の！」

「おや？初めてなんですよね黒騎士を見せたのは？……まあ良いでしょう、さあ黒騎士よ
オリジナルを殺せ！」

「っ！」

と黒騎士はキャロルを殺そうと手に持つダインスレイフを振り抜いたが

「させるかあ！」

そう叫びキャロルの前に立ったカリユブデイスはザルツドラでダインスレイフを受
け止める

「カリユブデイス……」

「我が創造主であるハルト様を手にかけてただけでは飽き足らずキャロル様まで殺すとは……その罪は万死に値するぞ俗物!!」

「逃げる！ 奴はお前のネフィリムを狙っている抜かれたら不死身のメギドでも死ぬぞ!!」

「そうだとしても……主人の仇を目の前にして引き下がれるものかあ！」

と感情を爆発させたカリユブデイスは右腕がはち切れんばかりに膨張し体が歪な体
軀

カリユブデイス・ハーキュリーに進化したのである

「ハルト様の仇は私に取ります!!」

「はは滑稽ですな敵討ちなんて、流星は異形の王が作った醜い魔人だ……さっさと退場して下さいよ!! やれ黒騎士!!」

黒騎士の剣を持つ手に力が入るが

「ならば見せてやろう、我等の王が生み出した力をな！」

そう言うときカリユブデイスの体を開くと中から石像の両手がロケットパンチのように放たれ黒騎士の顔を凹ませた

「何っ！」

「まだまだあ！」

ザルツドラで黒騎士を斬りつけると間合いを作ると今度は光学迷彩のように姿を消すと黒騎士の背後に現れザルツドラで胴体を思い切り殴ると装甲のあちこちが凹み始める

「ぬん！」

「おのれこの化け物があ！」

とノエルが錬金術師でカリユブデイスを攻撃し片腕を吹き飛ばした…しかし

「愚かな…私はハルト様が創造した力だ貴様のようなものでは届かぬ高みの力よ!!」

カリユブデイスは何事もないかのように再生したのであった

「凄い…」

と周りが唾然としていたが当然だろう、ハルトが自ら手掛けて生み出した初の怪人だ
注いだ心血は計り知れない

カリユブデイスメギド

その体にはゴーレムの怪力、アヒルの透明化、ハンザキの再生能力全てを兼ね備え更に捕食により相手の技や能力を獲得するという

強力なメギドであつたのも起因している

「やれやれ…魔王の配下は例外なく化け物ですね…本当に迷惑ですよ」

計算外と言う口ぶりだがノエルは冷静にカリユブデイスを見ていた

「ですがその溜め込んだエネルギー量は素晴らしい…是非捕獲させて貰いますよ」

「できるモノならな…ハルト様…私の力を貸してください!!」

そう言うときカリユブデイスは背中に赤い翼を生やして体を捻らせながら体当たりを敢行した

「カラミティストライク!!」

「今のはアナザーライダーの技ではないか!」

目の前で受けた技故に翼も驚いている、当然というか黒騎士は受け止められずに爆散

する着地したカリユブデイスはザルトドラを構え

「次はお前だノエル!!」

宣言して襲い掛かるが

「後ろだ!」

「っ!何の!」

キャロルの掛け声に合わせて攻撃を回避し再度罅迫り合う、やはりと言うべきか黒騎士は再生していたのだが…その足元には何枚かの銀貨、否

「セルメダルか?」

あのメダルが落ちていたのだ

「そうさ、黒騎士にはセルメダルを使って強化してあるんだ強さはオートスコアラーの比ではないよ!」

「ほお…だが私には及ばない!」

「そうかな?」

「何?っ!!」

突然の方向からの攻撃にカリユブデイスは防御が間に合わずに一撃を受けた
「があー！」

転がる中体勢を立て直し犯人の方向を見た

「おやおやまさか、メギドまで作っていましたか…流石は魔王ですね」

メガネをかけた青年、クジヨールである

「久しぶりですねクジヨール今日は何用で？」

ノエルが親しげに話すところから見ると協力的関係なのは自明だろう

「ええ折角ですから捕獲を手伝おうと思いましたがね」

「良いけど君のドライバー…今はメンテナンス中なんだろう？」

「ですからプロトタイプを持ってきました、メギド相手ならこれで十分ですよ」

と取り出したのは無骨な外観のドライバー

『キメラドライバー』

そして取り出したのは3種の力が込められたスタンプ

『トライキメラ！』

ドライバーにトライキメラバイスタンプを装填すると

『オク！サイ！ムカ！カモン！キメラ！キメラ！キメラ！オク！サイ！ムカ！カモン！

キメラ！キメラ！キメラ！』

現れたサイ、タコ、オオムカデのエネルギー体がクジヨールを守るようにして待機するなかクジヨールはあの宣誓をする

「変身！」『スクランブル！』

『オクトパス！オオムカデ！クロサイ！仮面ライダー！ダイヤモンド！ダイヤモンド！ダイヤモンド！！』

「ははっ…素晴らしい力だあ！！」

3種の悪魔を宿す 審判者

仮面ライダーダイヤモンド

「へえ面白そうですね」

「ありがとうございます…まあ試験中なので体はキツイですがねカリユブデイス、お前

は世界に取って害ある者だここに判決（ジャッジ）を下す！」

「ふざけるなあ!!」

激昂したままのカリユブデイスが再度カラムイティストライクを放つがダイモンは冷静にレバーを倒してカウンターを合わせた

『オクトパスエッジ』

勢いを殺しガラ空きになった胴体に足から分裂した蛸足で連撃を叩き込んだのだ

「が……があー！」

そのエネルギーはカリユブデイスの体で相殺出来ず体から放電が起こり

「も、申し訳ありません…ハルト…様…グアアアアアアアアアア！」

カリユブデイスは爆発した、しかしメギドの特性上 大元のアルターブックは無事でありそれは迷う事なくキャロルの手元に行き着いたが

「さて……残りは貴女だけですキャロル・マールス・ティーンハイム、魔王の妃である貴女を殺せばアナザーオーマジオウに覚醒した常葉ハルトに会えますからねえ！」

「何が目的だ！」

「答える必要はありませんよコレから倒される者にはね！」

ダイモンの手がキャロルの首を絞めようとしたその時！

「オーラア!？」

「がっ！」

ダイモンを吹き飛ばす謎の影があつた、それは

「俺っち参上！」

「ぐっ…な、何故！」

「あ、ありえない！不治の呪いで再生しない筈だ！」

「ハルト……なのか？」

胸部から血を流しながら立ち上がっているハルトであった

しかし

「カリユちゃん、ありがとうねー！キャロちゃん守ってくれて!!」

「「は？」」

普段と違う陽気で軽薄な口調に周りは驚くと

「アレエ？どしたの皆？そんな顔しちやってえ！あ、まさか！俺っち何かした!？」

「おい…まさか…ハルトじゃ……ないのか？」

キャロルが尋ねるとハルト？は答えた

「勿論、俺っちはハルトじゃないぜ！俺っちはアナザーバイス！ハルトの悪魔だぜ！

イエーイ！」

ロックンロールとポーズを決めたハルト（アナザーバイス）であった

—————

精神世界

「つまり俺はダインスレイフに刺されて瀕死の重症な訳だ」

「ああ解呪と再生には時間がかかる、俺達総動員でやっても3日はかかるぞ」

アナザーWの計算にハルトは思わず掴みかかる

「それじゃキャロルが危ないだろうが！現在進行形のピンチだぞ！」

「言ってる場合か！最悪お前が死ぬのだ！そっちの方が俺達は我慢ならん!!」

「だとしても！カリユブデイスが体張ってくれたんだ！俺が倒れたままだとカツコ悪いだろうが！」

「貴様の精神が体に戻ったら今度こそ呪いで死ぬ！住んでの所で引き込めたのだからな此方の解呪が出来るまで出すことを許さん！」

「じゃあどうしろってんだよ誰か！頼む！俺の体使ってキャロルを助けてくれ!!!」

皆の前で頭を下げたハルト、しかしアナザーライダー達は総出で解呪に動く上に基本彼等はハルトの許可を得てウオッチで変身するのだ 彼の許可がないと外へは出られないし現実世界の体を動かせないなら誰も動けないのだ

「はいはい！そんなら俺っちに任せてくれ!!」

ただ一人を除いて

「アナザーバイス？」

「ハルトく俺つちの事忘れてんじやないよく忘れた？俺つちはハルトの悪魔なんだぜ？」

「……………ああ!!」

「そうだアナザーバイスは俺の中にいた悪魔がアナザーウオッチに宿ったアナザーバイスの力を受け皿に存在してるんだ！」

「つまりアナザーライダーで唯一ハルト自身の力で生まれかつ俺に干渉出来るアナザーライダーなのだ」

「え？ガチで忘れてたの俺つちの事」

「い、いやあそんな事…あるか…ごめん」

「あらやだ素直オ！」

「確かに適任だよな…なあアナザーデイケイド？」

「はあ……仕方ない、心臓だけは治してやる……バイスが外に出ればハルトの体が使える……だがアナザーバイス以外になれんし長時間は戦えんぞ」

「問題ないって先輩！それに俺っちも進化してんだぜ？」

「頼んだぜアナザーバイス！」

「おうよ！任されてえ！」

「って訳よ」

「そうか……よかった……生きてるのか……」

「ああ……いや心臓刺されたから痛いけどね！治せたけどボロボロなのは変わらないから早く終わらせないとハルトの命の危機は変わらぬのよ」

「あ、ありえない！ダインスレイフの呪いを解こうなど……そんなの……いやありえるか！そんな事お！」

「てつきり自殺して蘇生する事で呪いを消すかと思いましたが予想外ですね解呪するとは」

「まあそれしたら泣く子もいるから出来ないってのが俺っち達の意見よ」

「ですがカリユブデイスは倒され貴方も満身創痕、そんな体で何が出来るんですか？」
「ふははは！そう思うなら見てな俺っちの変身!!」

ハルト（アナザーバイス）はアナザーウォッチを取り出しスイッチを押したのであつた

同時にハルトの体が黒い液体に包まれ始めた全身がドツプリと使っていくなか、その姿を変え始める

まるで正義の仮面を剥がされ本能のまま戦う悪魔のような出立ちとメリケンサックのようなガントレットが歪さを煽る

悪魔と人間の立ち位置を反転させる 歪の力

『ジャック……リバイス……』

アナザージャックリバイス爆誕

「ふおおおう！凄い力が溢れてくるぜ!!!」

『良いからさっさと連中追っ払え!』

「はいよ全く、ハルトはセツカチだなあ!」

とアナザージャックリバイスはメリケンサックを片手に黒騎士に接近した、そのスピードは誰にも目で追えずにいたのである

「っ!」

「捉えたぜ、オーラア!」

黒騎士の腹を掴むとそのまま体を背面に逸らしバックドロップを叩き込む、地面はひび割れ黒騎士は首から上が地面にめり込む事となる

「馬鹿な!」

「ふはははは!イエーイ!!行くぜ行くぜ行くぜ!!」

「小癩な…悪魔ならば」

ダイヤモンドはその身に宿る対悪魔能力を解放しようとしたが、それよりも早くアナザージャックリバイスが手を鷲掴んで持ち上げた

「その技は使わせねえぜ!」

「うー早い」

「そらそらそらそら!!」

そのまま宙に投げるとパンチのラッシュを左右から一気に叩き込む、その威力はハルトが変身している時よりも強いのだ

「おらあー!」

最後の一発でダイモンをのしたアナザージャックリバイスは自慢げに話だす

「凄いだろ、俺っちの力!」

「な、何故だ…同じ常葉ハルトの体で…こんなっ!」

「簡単!ハルトはまだ進化した体に慣れてないのよ!だから人間時代の感覚のままに戦うからいつまでも弱々なんだよ!」

「では今まで常葉ハルトは手加減してたという事か…」

「正解!まあハルトの場合は全力出して人を傷つけるのが怖いのもあるんだけどな!」

「おいオレの時は本気で顔面殴ったろ!」

「まあまあキャロちゃんの為にハルトも本気だったんだから、それで許してよ言ってたでしょ大好きって!」

「そ、それは…そうか…ふふ…」

「まるで恋する乙女の顔だぜ！」

「余裕ですね、いつまで喋ってるのですか!!」

「つと！もうそろそろ時間だから終わらせるぜ！イエーイ!!」

『アナザー…ナツクルライズ』

「必殺」

メリケンサックについているローラーを三回転させエネルギーを溜め込むと向かってきた黒騎士に拳の連打を叩き込んだ

「オラオラオラオラオラオラオラオラ!!」

強化された一撃一撃は黒騎士の体を凹ませてボロボロにさせていく、そして

「オーラア!!」

最後の一撃を放ち、ダイモンの方向へと飛ばしたのであった

「悪魔…1000レックス拳！」

『恐竜要素あったか?』

吹き飛ばされたダイモンはボロボロになった黒騎士を退かして立ち上がる

「やれやれ…死んでもタダでは終わらせないと恐ろしいですね、ノエルさん引きます

よ」

「ま、まあ良いでしょう今回は引いてあげます」

そしてノエルが転移結晶でダイモンと撤退した後、アナザージャックリバイスは変身解除をしたが

「ねえねえ見た見た！俺っちの大活…や…く」

パタリと倒れたハルトは血を流したまま倒れたのであった

「ハルト…バイスか？」

「バイスでOKよ…あららハルトの体に無理させちやったねえ」

「心配させるな馬鹿者が」

「おー！チーちゃんレベルのツンデレ！」

と話してたが背後に現れたのは見守っていた千冬達であった

「誰がチーちゃんだ、アナザーバイスだったか？貴様にそう呼ばれる覚えはない」

「そうだねハル君にベットのの上でなら」

「構わな…おい束！貴様！」

「チーちゃん！ストップストップ！」

「千冬様、今は魔王様の治療が優先です」

「そうだったな…錫音、転移するぞ」

「ああそうだね任せたまえ、行くよ皆」

『レポート…ナウ』

錫音の魔法で転移したのであった

—————

拠点

「ハル君！さあ蘇るんだ！」

と束はハルトを担ぎテンペスト名産の回復薬で満たした浴槽に投げ入れたのであった

「これでよし…後は待てば大丈夫!!」

「だと良いがな…しかしアレ、ノエルが黒幕か」

「えーと…キャロリンの研究から生まれたホムンクルスだっけ？」

3人はキャロルから以前にこのあらましを大体聞いていたので理解していたが驚きしかなかった

「ああ…セルメダルとダインスレイフに触れた事で歪んだ欲望と自我を得た个体だ」

「歪んだ欲望ってそれハル君に会わなかったらなってたキャロリんだよね？」

「ま、まあな…だからこそアレは自分の咎と受け入れている、寧ろ迷わないという意味ならオレらしいか…」

「本当に良かったねキャロりん、ハル君に会えてさ」

「ああ…っ！おい何を言わせている！」

「あはは！まあ…って事はさあアレ使えるよね」

「だろうなオレと同じだからな」

「オーズになれるか」

「だが安心しろ変身用のコアメダルはココにある」

キャロルはメダルホルダーを見せると周りは安堵したが

「それ以外のメダルは？」

「研究室の中だ…あつ」

キャロルは思い出したのかバツの悪い顔になる

「どうした？」

「い、意志を持ったコアメダルを残している…しかも人造グリードになれる奴を…」

「とんでもないモノ残してるじゃん！」

「キャロル！君は何でグリードを作ったんだ！オーズを見て学んでないのかい！」

「仕方ないだろう！作ってみたかったんだ！あとアंकに会いたいと思うのはファンとして悪い事か!？」

「ライダー技術が漏洩した時のハルトと全く同じリアクションをするな!!」

「開き直りぶりがそっくりです」

「だね変なところだけ良く似てるよ」

「そうだろう、何せお前たちと違いオレが一番ハルトと長いからな！」

「ドヤ顔で威張れることか！」

「そうだよ！変な所だけ似てる方が困るよ！」

「付き合いの長さは関係なくない？」

「黙れ！オレに内緒でお楽しみしてた奴等が偉そうに!!」

「へへーんだ！悔しいならハル君を押し倒せば良いんだよ！キャロリンの貧相なロリポデイでできるモノならね！」

「貴様は調子に乗るな束!!」

「残念だな束、オレは大人にもなれるぞ！」

「いや張り合わないで下さいキャロル様…というより状況的に我々も不味いですよね？」

逢魔から応援を呼びますか？」

「そうしたいが逢魔王国に繋がるポータルは使えんで、行くならハルトのオーロラカーテンを使わないとならん」

「ですが魔王様は寝たきり……これがバレたウオズ先輩達にシバかれる」

「いやウオズ達はしないのではないか？」

「だと良いのですが……」

「まあまあフィーニスちゃんも気楽に行こうよ」

「余裕だな束」

「だってハルト君なら大丈夫でしょ？束さんからして理不尽の権化みたいな人種が滅ぶ訳ないじゃん」

「まあな殺す方法が思いつかん」

「ハルトなら灰にしても蘇りそうだよ」

「いやそんな事……ありそうで怖いな」

「皆さま魔王様を信頼されているのですね特にスズネは殺そうとしてたのに」

フィーニスは唯一、妃ではなく同僚として接する錫音を睨むが彼女はヘラヘラしながら

「まあね今でも彼が道を踏み外せば殺す覚悟はあるよ」

「そうなたら僕が潰します」

「期待しないでおくよ…あ、それとホラ」

錫音が思い出したかのように懐から3枚のメダルを投げ渡した

「これは…コアメダルですか？しかし黒系統のメダルなど」

マジマジと見ているとキャロルが

「おい何故貴様が持つている！」

「ああコレかい？ハルトから頼まれたんだ万一の時に使えってね道具は使ってなんぼでしよ？例え失敗作でもね」

「失敗作？」

「それはナツキのバースXに使うコアメダルの失敗作だ…随分前にハルトに見せて以来だな見たのは」

「これは…僕が失敗作と言いたいのですか？スズネ！」

「ははは！まさか！ハルトが言ってたんだよそのコアメダルと仮面ライダーの歴史を内包させているアナザー1号の力を合わせたら凄い力が生まれるってさ」

「魔王様が？本当ですかアナザー1号？」

『ああ、俺は他の連中と毛色が違うからこそ出来る話だな』

「初めて出来た家臣への褒美だつてさ」

「……出来れば魔王様本人から渡されたかったです貴女じゃなくて」

「だろうね、まあ後はハルトの回復までゆっくりしようか」

とその日は消灯となったがハルトは液体に浸かっていた

精神世界ではアナザーライダー 達が総出で解呪に動いているのだがハルトはやる事もないので暇を持て余していた

「……………はぁ」

しかし不意打ちとは言え瀕死の一撃とは恐れ言つた

「慢心してたねえ大分」

強くなつた傲つていたと思う、だからこそその今だ

「俺も手伝いたいけど、他のことやれって言われてるし」

「この時間で出来る事と言えば一つ」

「頼む！俺に技を教えてください！」

アナザーウオッチにいたる怪人達と組手をする事くらいだった再度の目覚めで不覚を取らぬように

現実世界の体は解呪に並行してハルトの体を更に戦闘やアナザーライダー達に併せ進化させる、呪いを超え大事な仲間と笑い合う未来の為に

未来と過去

そして数日間は嵐の前の静けさと言わんばかりの穏やかだった

そんなある日の事

「……………ん？」

解説が完了し完全復活したハルトは自分の体の様子を確かめる異常無しのように後遺症の類はない

「バイスありがとうな、キャロルとカリユブデイスを守ってくれて」

『いやあー褒められて俺っち嬉しい！』

「まあ当然だろ…よし皆に挨拶しないとな」

『それより。まずは着替えろ馬鹿者』

「あ、やべ前のボロボロ衣装のままだ…アナザーウィザード」

『はいよ、ドレスアップ』

魔法を使ったハルトは新しい服に着替えたのだが

「アレ？この格好……」

黒を中心とした民族風味の衣装だ

『ストリウスの服だ気に入ってたろ？』

「あ、ありがとうアナザーデイケイドにアナザーウィザード！」

『ふわあ…疲れたから俺達は寝る』

『起こしたら締め上げる』

「ありがとうなおやすみ」

相棒達には苦労かけたからなと笑顔で部屋の中に入ったのだ

「おはよう皆！」

「は……ハルトなのか……」

「そうだよ常葉ハルト完全復活、おはようキャロル元気してますかあ！」

「ハルト!!」

元気よく挨拶した俺に待っていたのは駆け寄る彼女の抱擁

「元氣な訳あるかあ！」

「いふあー！」

ではなく顔面への降下キックであった、そしてそのまま後ろに倒れた俺の上にキャロルが馬乗りになりマウントポジションで殴り始める

「貴様が！寝てる間！どれだけ心配したと！思っている！よく呑気に！そんな事言えた！ものだ！人の！気持ちを！知れ！！」

！のタイミングで殴るキャロルの拳にハルトは耐えていたが一撃一撃が予想以上に重たかった

「……………」

『おい何故起きて早々死にかけてる？』

アナザーディケイド：コレに関しては

「お、おれにしつもんするな…」

グツタリと半分気絶仕掛けているハルトの胸ぐらを掴んで揺するキャロルは怒り顔のまま

「おい起きてもう二、三発殴らせろ！！でないとな腹の虫が治らん！その呑気さを修正して

やる！」

流石に不味いと思ったのか止めに入った

「キャロりんストップ！ハル君起きたのにまた寝ちやうよ！」

「安心しろ東、コイツは永遠に寝かす！」

「安心出来ないよ！」

「それでは意味がないだろうが馬鹿者!!」

「治した意味がなくなるでしょ！もうポーシヨンはないから辞めて！ハルトが寝たままだと私達も怪我治らないんだから！」

「H A N A S E！オレはこの能天気を殴らねば気が済まん!!」

「その能天気の力が今は必要でしょ！」

「……………ちっ」

キャロルはハルトを離すとそのまま偉そうに仁王立ちして

「おい何してるハルト、さっさと再生しろ」

同時にハルトの殴られた箇所が高速で再生し元通りになった

「つたく…いくら再生するからって本気で殴る奴があるか…あ、治せるのが当たり前になつてるのが怖い…」

「この間殴ったお返しだ、まったく…女の顔面殴るなど酷い魔王がいたな」

「あんれえーお前もゴリラメダルの腕で散々殴ってねえか？」

「ほお…オレに反論するとは、まだ殴られたりないか？」

「その前に魔剣から体張って助けたのに礼もなしか…俺に言う事あるよなキャラル？」
「ない、オレが助けてなんていつ言った？余計なお世話だ愚か者」

「あ？」「は？」

「あ、あの2人とも？」

「止せ錫音巻き込まれるぞ」

「いやあ実家のような安心感だね」

「お前は暫く神社に帰れ」

「辛辣だよチーちゃん！」

周りが騒いでるが

「……………」

2人は目線を交わした刹那の間に

「(貴様) 表に出ろやあ (お) !」

胸ぐら掴んで睨み合うのであった

「はあ……この2人は……本当に……」

「いつもの感じだね、チーちゃんお願い」

「任せる東……さっさと辞めんか馬鹿者!!」

ゴン!と互いに睨み合う2人を同時に千冬は拳骨を落として沈めたのであった
「……………」

2人は示し合わせたように睨むが千冬は覇気を込め威圧する

「何だ?」

「何もありません (ない)」

その覇気に押された2人は、やはり似た者同士であった

「なら座れ、ミーティングの時間だ」

素直に従った2人を見て状況整理と皆が席に座るのだが

「んじや会議を始めんぞー」

「おい待て、ハルト」

「何だ千冬……ああ、お茶だな待ってくれ直ぐ淹れるからキャロル退いてくれ」

「良いだろうオレは「熱めと砂糖だろ」分かっているじゃないか」

「そりゃな」

「さつさと淹れてこい」

とハルトの膝上から降りたキャロルを見て

「違う！お茶もだが何故、キャロルを膝上に乗せている!!」

「……………っ！いつの間に！」

「いつもの事だろ？」

「違和感ないレベルまで侵食されてたよ！」

「寧ろよく気づいたね千冬」

「お前達の目は節穴か!!」

「まあ当然だな、彼処はオレの定位置だ誰にも座らせん」

ドヤ顔のキャロルであつた束が爆弾を投下した

「けど逢魔でウルティマに座らせてたよね？」

「あ……ば！」「ハルト、誰だウルティマとは？」あ、えーと……俺の国の検察庁長官、司法の

番人です」

「司法の…そうか…お前の国も大分発展してるのだな」

「それとカレラとテスタロツサって2人の裁判所長官と宰相？がいるよ、本当頼りになつてさあしかも戦闘でも強いときた…今の逢魔最高戦力だよ」

「ああ…未来の貴様が言つてた奴等か、よく仲間にしたな」

「まあ色々あつてね」

「何があつた？」

「全員ハル君が熱いものを叩き込んで仲間にしたんだよね」

「貴様…」

「大分語弊があんだよ束!!」

「正解に言えば戦闘で倒して仲間にしたんだ」

「そう!」

千冬がフォローしたが時すでに遅し

「そうかそうか…やはりまた新しい女を囲っていたか!あの時の直勤は間違つてなかつたか!」

「人聞き悪い事言うなよまだ3人とはそんな関係じゃないから!あの時つてどの時だよ!」

「まだとはいつかはなる気だろう!!」

「何言つてんだ人間き悪いな！」

「あーもう！脱線してるよ2人とも！」

「誰のせいだ!!」

「話が進まんからお前らは少し黙れ！」

「「はい!!」」

「大丈夫かな本当に」

「知らん、いつもの馬鹿どもで安心はするがな」

「そうだねハルトもいつも通りで安心するよ」

「あの馬鹿は寝てたのだから、もう少し大人して欲しいがな」

「そう言つてかなり嬉しい癖に、知ってるよ寝てるハルトの見舞いしてたこと」

「揶揄うな錫音、平常運転に戻って面倒くさいと思っただけだ」

「やれやれ何で皆、素直じゃないんだか」

—————
そして皆から俺が寝てる間の情報を教えてもらった

簡単に言えば拮抗状態という所らしいがチフオージユ・シャトーに関してはネオタイムジャッカードとノエルが根城にしておりオートスコアラーの面々は連絡が取れなくなつたとのことだ

「ポータルはオレ以外には開けんから逢魔に攻め込まれる事はないだろうな」
「まあ攻めた所で皆いるから返り討ちが関の山だよねえ」

主に3人娘とウオズ達にだ

「問題は此処での解決だな」

「幸いと言うべきかSONGsとはナツキやエルフナインのホットラインに加えハルト自身が共闘を打診した…まあ向こうからすれば断る理由は無いと思うけど」

というより協力しとく方が現状は得ではあるが

「大丈夫かな？裏切ったりとかしないかな？」

「まあこの世界の連中ならやりかねんな」

懸念材料を話すが

「安心しな連中が裏切ったらアナザーアギトの力で世界中でパンデミック起こすから」

『つしや噛み付くぜえ！』

「おう、思い切りガブつといけ」

「何というか…脅しが脅しとして機能しているのは相変わらずだな」

「まあアナザーアギトは一回使ったしな今更感がある」

「ハル君ってワンマンアーミーだよねえ」

「止せやい、それはアナザライダーの力であつて俺の力じゃねえよ…で、SONGSとは俺が交渉に向かう事にする」

ハルトの提案に思わず千冬達は立ち上がり反対する

「ちよつと待て流石にソレは危険だ病み上がりに行かせる案件ではないぞ」

「そうだよ！ハル君はゆつくりしてて！」

「だが連中の戦闘能力と対応を考えたらトップの俺が出張るのが自然だろ？お前達だ最悪悪人質にされる可能性がある、それにノエル達が仕掛けてくるなら好都合でもある俺」

人でやる皆は待機だ」

人質にされる……この一言でハルトがまだ奏者達に対し猜疑心を抱いているのは変わってないのは分かる

「確かに合理的だな」

「敵の狙いが明白な以上、こうするのが最善だろうね」

キャロルと錫音は賛成したのだ

「キャロル、錫音！」

「誤解するな戦力を考えたら当然と判断しただけだ、それにオレも同行すれば問題ないだろう」

「キャロルには説明義務があるからな」

「ま、大丈夫じゃないかなあくじやあ束さんは機械方面の対策はお任せをスーちゃんは」

「私は魔法方面を請け負うよ人払いや見張りは任せてくれ」

「私は2人の護衛だな」

「頼んだよ皆、んじや今日はゆっくり休んで明日から行動開始だ」

その一言で解散となった

皆が思い思いの時間を過ごす中、ハルトは

「ふわぁ……………ん……………」

陽の当たる椅子に腰掛け眠った病み上がりなのは本当で体力が落ちていた、勿論精神世界ではリハビリがてらの訓練は続けているが

「入るぞ、ハルト悪いが話を…何だ寝てるのか」

キャロルは寝てるのを確認すると周りをキョロキョロと事前を動かし誰もいないことを確認すると、そのまま膝上に腰掛けた

「よし…本来なら体力を回復するのに時間がかかるのに…病み上がりが無理をするなこの馬鹿者が」

キャロルは寝ていたハルトの膝上に腰掛けて寝顔を見て呆れた顔をしている

「しかし…腹が立つ位に気持ち良く寝ているな…悪戯してやろう…」
と思つたが怪我の原因は己を守つたものなので勘弁する事にした

「……………動いているな」

キャロルはハルトの胸部に耳を当て聞こえる心音に安心を覚えた、あの時は完全に止まっていたから

「まったく…本当に馬鹿な奴だお前は彼処まで突き放したのに此処まで追いかけてくるとは予想外だったぞ…：…まあ…：…そ、それだけ思われていたと考えれば悪くないが…」

オレから見たハルトは必要か否かで動く合理的な奴だった、だからこそ最初は互いに利用し利用されの関係で満足していたのだが

ある日ふと気づいた

ー待て…：コイツ何も考えてないのか？ー

実際ハルトと接してみても分かったが、オーズを見せてくれたのは純粹に布教の為だったとそこは打算や思惑などなかった、これは使えるバカと思いい利用してやろうとしたが

ーこの男、オレが見てないと何するか分からんダメな奴だー

気づけば魔女狩りの被害者を助ける為に廃墟を更地にするのは公的機関の人間を返り討ちにするはカ・ディングルを破壊するはとまあやりたい放題していた、しかも止めるべき家臣が止めずに増長させているのだから手に負えない…：だが関心のある事以外無頓着な奴と解ると世話を焼く事も多くなつた、チフォージユ・シャトーに住ませたの

は互いの利益もあつたからだだが今となつては一緒にいたかつただけなのも知れない

その頃から惹かれていたとも言えるが

―其処からオレの苦勞が始まつた―

「オレのいない所であちこち女を作りおつてからに…全くお前はオレだけを見ていれば良いんだ女癖の悪さは生まれつきか？」

独白するキャロルは溜息を吐くと

「だが貴様がいたからパパの命題には他に意味があるのではと思えたのだがな感謝はしている……が」

少し考えれば分かつた事なのにそれが分からなかつた、それだけ心に余裕がなかつたと言える、大事だと思つてくれる人がこれ以上自分を庇つて死ぬ姿を見たくもない

「その……ハルトが死ぬと思つたら怖かつた…だからな…もうあんな真似をするな…お前は寂しいと言つたがそれは同じなのだぞバカが」

その言葉は寝ていたハルトには届いていない筈だつた

精神世界では

「うおおお！キャロルがデレたああああ！」

「五月蠅い!!」

「つせえぞハルト！こちとら三徹で寝てんだ！」

ばつちり聴こえていたのであった

またコレを見ていた面々は

「キャロりんデレデレじゃん」

「束が言うな、お前も大概だ」

「どうしますか？時間的に起こした方が…」

「いやもうちよい見ようよ、その方が面白いし」

「バレたら大変な気も…ちよつとスズネ押さないで！」

「え？ちよつ！フイーニス！もうちよい堪えて!!」

「「「のわっ!!」」」

「っ!!」

ドアが開いて倒れた4人とソレを見たキャロル

「おい…何処から見ていた」

「えーと、病み上がりなんだから無理するなの所から」

「正直に話す奴がいるか！」

「まあベタに最初っからつてね…あはは」

「申し訳ありません、僕は止めたんですが」

「ちよつとフィーニス！裏切る気かい!？」

「止めたのは本当でしょう!!」

キャロルは赤面しながら体を小刻みに震わせている

「……………」

「あ、やば」

「フィーニス！アナザー1号になって直ぐに逃げるよ!!」

「スズネは僕に命令しないでください!!」

『1号』

アナザー1号に変身したフィーニスに3人が捕まって逃げるのを見たキャロルは

「待て!!逃すかあ！お前達の思い出を今直ぐに焼却させてやる!!!」

怒りの形相のまま追いかけて行つたのであつた

「……………はあ…アイツら、壊れた物を治すの俺の仕事だと思つてる?」

流石に起きてしまったハルトはアナザージオウIIウオッチを起動して壊れた部屋を

治すとファイブフォンXに着信が入る

「電話か……もしもし」

電話の主の声を聞いてハルトの顔は不機嫌になり電話を切ると書き置きをして外に止めてあるアナザーオートバジンを走らせたのであつた

—————

そいつから指定された場所はノイズの影響でゴーストタウンと化していた廃墟だつた、バイクを止めヘルメットを片付けたハルトは呼び出した人物の元へと向かう

「悪いな病み上がりの所来でもらつて」

「そうだな本調子じゃないから迷惑極まりないし今更、何のようだなツキ」

「そう不機嫌になるなよ今は俺達、協力関係じゃないか」

親しげに話しかけるがハルトは不愉快とわかる声音で話す

「そうだな……だがその前にお前が俺を利用した事、忘れたか？落とし前はつけさせてもらつて」

結果論として上手く利用されたのだ殴り返さねば腹の虫が治らない

「悪かったな…けど俺も国連所属で立場つてのがあるんだ分っ!!」

余りの物言いに腹が立ったハルトは超能力でナツキの首を絞めそのまま持ち上げた

「言葉は選べよ自称タイムリーパー、お前には利用価値があるから生かしてるだけだ…でなければお前みたいな蝙蝠野郎直ぐに殺してやるよ」

「あ…ま、まて……」

「そもそもお前がキャロルに余計な未来を吹き込まなければここまで酷い事態にはならなかったかも知れないんだよ!!」

少なくともメダル絡みで揉める可能性はあったが、ノエルとネオタイムジャッカーが接触を図るタイミングは潰せたかも知れないのだから、こいつの罪は重い

「あ…がつ……」

両手が首を抑えてもがくナツキを超能力で壁に叩きつけると拘束が解けたので何度

か咳き込む

「す……すまなかつた……ハルト……」

謝罪を受けたのでハルトは近くのテーブルに腰掛け不適に笑う

「それで何で呼び出したつまらん用事なら分かつてるだろうな」

『おい今日のハルトは不機嫌だな』

『ああ、魔王みたいだ』

『ウオズの奴がいたら喜んでるぜ』

「不機嫌にもなる、折角穏やかな日常が帰って来ようって時に呼び出されたんだからな
具体的には病み上がりを押き起こした上にキャロルや皆との時間を奪った罪は重い」

「い、いやまあそれは悪いと思うけど……」

「ん？もう一回いつとく？」

「何でもありません！」

俺もそう思うし、またこの馬鹿には明確な上下関係を叩き込んで置かないとまた利用してやろうなんて思うだろうから

「こ、今回はSONG sとの共闘関係についての話だ…」

「それなら話しただろ現場単位で協力はしてやる、だがなお前達の傘下には入らんとぞ
一個の独立勢力として力は散々見せているがそれでも自分達が上と頭が花畑なら相
応に力を見せないといけないな…：具体的には更地を作ったりかな

「も、勿論…：その辺は司令も理解してくれてる…：というより理解しないと危ないからな」
「それくらいは分かってるか」

「ち、因みにさ俺達に従えと言ったら？」

「逢魔にいる軍勢が本格的に動くだろうな…：…多分世界の主要都市が跡形もなく消し飛

ぶ、ノエルが動く前に世界滅亡だな、お望みなら悪魔門を開いてやろうか？」

俺にしか従わない連中もいるからなと被りを振る、この世界くらい更に簡単に滅ぼすことが出来そうな最高戦力の出番かなとヘラヘラ笑うハルトであったがナツキは冷や汗が止まらなかった

「え、英断だった…流石司令…」

しかしこれは嘘である、逢魔に繋がるポータルはチフォージュ・シャトーで管理されているがノエルの拠点と化している以上は大軍を動員できないのだ

「その司令も特殊部隊を投入したかな」

言葉の裏には針千本あってね、と心の中でほくそ笑むのであった

「アレは一部の暴走だったんだ、司令の意思じゃない」

「そーかい、都合が悪けりや他人のせいは何処も同じだな」

「そんなこ」どーだつてしても俺が襲われた事実は変わらない」…はあ…何か戻ったなお

前

「戻った？何がだよ？」

「翼さんと決闘して何も感じなかったのか？」

.....

「決闘なんてしたか？」

「は？」「あ？」

どうも話が噛み合わないなあ……そういやあ前にもこんな事があつたような気がするけど良いか別に物忘れが酷いつて事だろうな……まだ寝ぼけてるのかな？

『ハルト……さてはボケたナ』

ーお前達、アナザーWをジープで引き回せー

『罰が前回よりエスカレートしてる!!』

『本当に残念だなあアナザーWよ』

『だからなんだお前らそんなに嬉しそうなんだよ!!』

『正解は出番が多いからだ、お前は!』

『メタ的にキレンじゃねえヨ!アナザークイズ!』

『さあ覚悟!』

『捕まつてたまるかあああああ!!』

『逃すな!アナザーWをアナザートライドロンで引き回すぞ!』

『俺、お前達に何かしたか!?!』

取り敢えず笑った奴の仕置きは完了…だがアナザーW嫌われすぎ問題に頭を悩ませるハルトだがナツキを睨むも溜息を吐く

「しやあない、んでお前等側の要求は何だ?」

「あ、ああ…それが…っ!」

2人は何かを感じて動くといった場所に攻撃が着弾したのであった

「やあ魔王、生きてるとは驚いたよ」

「ノエル!!」

「アレが…本当にエルフナインそっくりだな」

「やあナツキ君、妹がお世話になってるね」

「ああスングエ世話になってる…それと最近何故か知らないが手料理を…馳走になった」

「それは多分オリジナルの記憶から再現したんだろう、ああ見えて以外と料理上手いですからね」

「何っ！俺はキャロルに手料理作ってもらった事ないぞ！」

『何処に劣等感を覚えている、お前』

『お前の場合、炊事周りが仕事だろうが』

なんて事だ！料理スキル故に人の手料理を食べられなかったのか！とショックを受けていると

「残念だったね魔王」

「はは…残念だったなハルト！…のわあ！」

「行け、シユートベント（ナツキ）！」

煽ってきたのがムカついたので超能力でナツキを現れたノエルと黒騎士目掛けて投げつけたが

「無駄ですよ」

「けっ…役立たずが」

「おい！いきなり投げる奴があるか！」「いらないので返します」うわああああ！

ノエルは冷静に錬金術で防御、反射の力もあつたのか俺目掛けて戻ってきたので取り敢えず顔面に蹴りを入れて止めておいた

「そんなんいるか」

「ふぎや！……つてて…アレが黒騎士か…」

「普通に会話再開出来る耐久性だけは褒めてやる、そうだあの鎧は見た目以上に厄介だから気をつけろよ特にダインスレイフにはな」

「ああ…何せあのハルトが死にかけたからな」

「一言余計なんだよ、やっぱりノエルの前にお前から始末してやろうか？」

「怖えよ…つたくハルト？」

「はあ……貸さなきゃいけないだろう？俺は約束は守るからな」

「言葉の節々に毒を感じるが……仕方ない……行くぞハルト！」

「俺に命令するな」

ナツキはバーストドライバーをハルトはアナザーウォッチを構える

「良いですね、なら僕も新しい力を見せる必要がありますうだ」

とノエルが取り出したのはオーズドライバーだった

「は!?!何でアレが!」

ナツキは驚いているがハルトは大体察していた

「多分、研究用のスペアドライバーだろうなあ」

「オーズドライバーにスペアあるの!?!」

「そりやあるだろう……けどコアメダルと使える器がないとオーズにはなれないぜ?」

ノエルを指差して挑発したハルトだったが突如。ノエルの体から3枚のコアメダルが現れたのであった

「オリジナルの研究室にあったコアメダルです…それと同じホムンクルスである僕に変身出来ないと思いますか？」

「出来るだろうが映司さんや800年前の王レベルではないなら恐るに足りんな」

「念には念を入れた正解でしたね、オリジナルが製作したコアメダルなら何枚かくすねてますので…コンボで行きましようか？」

ノエルの手にはメダルホルダーがあつたのを見て

「メダルは返してもらおうか、それは俺の大事な人が作ったものだ」

「お断りしますよ、これは僕のものでもありませんから…まったく貴方があの時、オリジナルを庇わなければコアメダルを総取り出来ましたのに…あわよくば彼女をそのままメダルの器に出来ましたからね」

「俺を恨むなら好きにしろ…恨まれる事をした自覚もある、だがな俺の大切に手を出す

ならキャロルのホムンクルスだろうがエルフナインの兄貴分だろうが俺の敵だ！」

対戦カードは決まったと言わんばかりにナツキは黒騎士と相對する

「んじや俺の相手は黒騎士だな」

「精々時間を稼げ、終わったら手伝ってやる」

「はいはい…仕事の時間だ……変身」

『ドリルアーム』『キャタピラレッグ』

「はあああああああー！」

ナツキはバースに変身し武装を展開すると黒騎士に体当たりをしたのであった

「お前の相手は俺だ」

「良いでしょう…：パパの願いを叶える為にお前を排除する！」

ノエルは体から取り出したコアメダルを3枚ドライバーに装填しオースキヤナーを構える

「キャロルや皆と過ごす幸せのためにお前を倒す！」

ハルトはアナザーウオッチに宿る力を解放させる

「滅びの歌を奏でましょう」

方や父の遺志に従い世界を滅ぼす為に

「歴史は俺が変える」

方や己の意志に従い大事な人達を守る為に

その力を使う

「変身」

『シカ！ガゼル！ウシ！』

それは本来は未来で生まれたコアメダル

異例の存在であり例外、偶蹄類の力を内包した俊敏さと突進力を持つ

『シーカーゼシー！シーカーゼシー！シーカーゼシー！』

オーラングに刻まられるは最強の突破力を秘めたコンボ

仮面ライダーオーズ・シカゼシコンボ

対し周りは以前の同じようにアルシノテリウムとコーカサスオオカブトのロストモデル達が徘徊し装甲となる

『サウザー…』

ハルトが選んだのはアナザーサウザー

前回と同じようにアナザーサウザンドジャッカーは右腕にガントレット型として収まっているがドードーマギア・改の増加装備は外されている、軽量化と解析に特化させる為にとりより病み上がりなので アナザーWサイクロンジョーカーエクストリームやアナザーゼロツーンなどの解析能力も含めた最強フォームに変身が出来ないのが現状だ

「アナザーサウザー、俺達の強さは桁外れだ」

「見せてもらいましょうか、その力を……ふっ！」

オーズシカゼシは偶蹄類由来の瞬発力でアナザーサウザーの周囲を高速移動する、パートナーやスピードをアナザーサウザーは残された複眼から分析

(成る程、このコンボは俊敏さが売りのようだな)

そもそもハルトが今までライダーや擬似ライダー相手に優勢だったのは、これまで見てきたライダーの知識から：つまり相手の事前情報有りで戦っていた、しかし知識がない相手に正面切つて戦うのは危険、それ故にアナザーサウザーを使ったのだ

「バトルライダー展開」

『RAID RISE』

バトルライダーを2体召喚して死角をカバーするようにしたが

「無駄ですよ!!」

とシカゼシはそのまま全速力で走り出しバトルライダーの一体を捉え壁まで体当たりで吹き飛ばし爆散させた

「必殺技でない状態でこの威力か」

量産型ながら耐久性に長けているバトルライダーが受けたダメージから来る情報は瞬時に共有されるが必殺技に匹敵する突進力と算出された

同時にアナザーサウザーも反撃に出る

『ネオヒ』『ビカリア』

大量に生えた触手をビカリアの力で先端を硬化させ威力を上げると鞭のように多方向から攻撃した

次いでに黒騎士相手に何発か鞭打ちしておいた

「ありがとうハルト！これで！」

『セルバースト！』

バースバスターの必殺技で一撃をお見舞いし黒騎士にダメージを与えている

「しっかし」

マジアの重ね技でも捉えられない…なら次のプランに移るか判断したと同時に

「今です！」

『スキヤニングチャージ』

シカゼシは半人半馬となり持ち前前の機動力が更に上がった。しかもこれはアナザーサウザーの予測を超えていた速度であった

「せやあ！」

まず最初の体当たりでバトルレイダーが爆散し反転した一撃でアナザーサウザーを粉砕せんと両前脚を高く上げたが

「そこだあ！」

アナザーサウザーは右腕のアナザーサウザンドジャッカーに以前から仕込んでいたとある力をシカゼシ目掛けて解放した

「この間の借り……のしつけて……返すぜえ！」

『ジャッキングブレイク！』

「吹っ飛ばえええええ！」

以前は解析の為に採取した力を武器転用する放たれたダインスレイフの黒い衝撃波はシカゼシコンボを文字通り吹き飛ばした

「がっ!!」

流石にデータの攻撃故に不治の呪いはないがそれでも大ダメージだろう

「ま、まさかカウンター待ちだったとは……」

変身解除されたノエルは怒りの眼でアナザーサウザーを睨みつけるが

「生憎病み上がりだから、体を激しく動かせないからね」

『王蛇』

アナザー王蛇に変わると右手にメタルホーンを装備したと同時に背後からメタルゲラスが現れた

!!!

「これでゲームセットだ！」

そのままジャンプしてメタルゲラスの肩に乗つかると加速し始め一直線にシカゼシコンボに襲い掛かるが

「舐めるなあー！」

『スキヤニングチャージ！』

先程と同じように超加速に伴う前蹴りで迎え撃った

「せやあー！」「おらあー！」

シガゼシストンプとヘビープレッシャーの激突は周囲の地面に大きな亀裂を起こし

両者はそのまま相殺された技の威力の反動で転がることとなる

「き、今日の所は引いてあげるとしまししょう黒騎士！」

「ハルト!!そっち行った！」

「っー！」

ノエルの命令で走り出した黒騎士がすれ違い様にアナザーサウザーを切り裂くとそのまま転移結晶でノエルは撤退したのであった

「ちっ……待てやー……うっ……」

変身解除したハルトはそのまま倒れて気絶したのであったバースが慌てて駆け寄る

「ハルトーおい……気絶してる……どうしよう」

本来なら保護して医務室に連れていくのだろうが起きた時に何が起こるかわからないし最悪、暴れるかもしれない何よりお尋ね者である以上保護するのも色々不味い下手したら身柄で一悶着ある

「けど無視でもしたら……」

それこそキャロル達の本気でこの世界に敵対行動を取るだろう最悪ノエルと共謀なんてなったらいいよ世界の終わりだ

「そっ……」

とバースが走り出した先にあつたのはハルトが乗ってきたバイク アナザーオートバジンである

「これを使えば……えーと……」

きつと何かしてくれると思ひ適当に触っていたら

『BATTLE MODE』

くぐもつた音声と共に変形したアナザーオートバジンは数度視線を泳がせ、倒れているハルトを見つけると

「頼む、ハルトをキャロルさん達の所に連れてつてくれないか！俺が助けて連れてつたら多分……ハルトが拘束具で縛られる可能性がある！」

それだけ聴くとアナザーオートバジンは首肯してハルトを俵担ぎすると思ひ出したかのようにアナザーオートバジンはデコピンでバースを吹き飛ばしたのであつた

過去とメダルと交渉と

翌日

「よし…また大怪我した理由を聞こうじゃないかハルト」

「やれやれ…目を離れたらすぐコレだよ」

「ハルト君、ポーションはもうないよ」

「い、いやあくこれは…ノエルにやられました!」

「はあ…お前という奴は」

千冬に問い詰められ顔を背けたハルトは全身包帯グルグル巻きだった

「だ、大丈夫だよ!ほらアナザージオウIIの力で完治するから」

そうヘラヘラ笑いながらアナザーウォッチを押しながうんともすんとも言わない

「あ…あれ?」

『相棒、残念な知らせがある』

「何、なにさ?」

『アナザージオウIIだが、新作 BLACK SUNを見る為に有給を申請したから暫く

懐古は使えないとの事だ」

「え、ちよつ！それマジで！つかお前達に有給なんて制度あつたか!?後、BLACKSUNって何！仮面ライダーBLACKじゃないの？」

『まあお前はアイツの力に頼りすぎだ、暫くは自然治癒に任せておけ』

「そ、そんな訳に行くかよ…事態は一刻も争うのに…そだ！アナザーエグゼイド！」

『あ、俺もアナザーブレイブ達と有給休暇中だから』

「医者が患者を見捨てるな！」

『お前に治療はノーサンキューだ』

「世界一のドクターに見放された!？」

天は我を見放したあ！と絶望している所に更に千冬達が詰め寄る

「で？アナザーライダーの力で完治出来るのか？」

「無理でした！大人しくします!!」

「よろしい、さてハルトがこんな姿だから会談に関しては誰が変わりに行く？」

千冬の提案に皆それぞれ意見を言う

「東さんはパス、交渉とか面倒くさいし…というかりモートで良くない？直接会うとか

嫌だよやっぱり」

「まあオレとしても楽に済むなら越した事はないがな」

「私もかなハルトだから対策出来ても私達は…ほら、か弱いからさ人質にされたりするかも知れないじゃん、それに乱暴されたりとかも」

錫音の発言に思わずハルトとフィーニスに笑いが込み上げた

「ぶぷ…か弱いってお前達の何処が？」

「ええ流石にスズネ…貴女はか弱くは…」

「おーつとフィーニスも入院したいのかなあ〜」

『YES! punish strike!』

「ハルト、腕の二、三本覚悟しろ」

「断定しやがった！俺の腕をどうする気さ！」

「あれ…チーちゃん、それさ一回完治させたから改めてへし折り気？」

「違う切り落として生やしたのをもう一回切る」

「俺の腕がトカゲみたいに再生する前提で話すのは辞めてくれます!!あとその物騒な刀をしまえ!!何処から取り出した!?!」

「贈り物だ…確か…サタンサーベルと言ったか？」

「さたんさーべる……サタンサーベル!?

「::repeat after me?」

「ん? サタンサーベルだ」

「really?」

「ああ」

「何で英語なのハル君」

「……………はああああああ!?!」

「ハルトはこの剣が何か知ってるのかい?」

「知ってるも何も…何でシャドームーンの剣が此処に!?!」

ハルトからすれば気が気でない

サタンサーベル

それは仮面ライダーBLACKに登場する悪のカリスマ シャドームーンが携えた
世紀王の剣漂う威風は正に王に相応しい剣…というより本物!?!

「この剣って何が出来る?」

「色々」

本当にそうとしか言えない、雷出したりとか色々出来る

「え、ええ…流石にそれは…雑だよ…」

「それで切られると多分傷が治らない」

「ほお…それは良い事を聞いたな錫音」

「任せて」

千冬はサタンサーベルを抜刀、錫音は魔力球を取り出すと2人は顔面蒼白となる

「じゃあ言う事あるよね？」

「はい！皆さんはとてもか弱い女性です!!」

2人は即答し敬礼で答えたのであった…あの刀には何故か逆らわれない方が良い気がするるので視線を逸らした…断じて機械風味の歩く音が怖いからなどではない!…:…頼んだらサインしてくれるかな?

『新入り共、よく見ておけアレが俺達の王とその近衛だ』

『完全に尻に敷かれてるな』

だまらっしやい!と内心で一喝したハルトは溜息を吐いたのであったが会談どうしようと考えていたらだ

「連中のシステムならハッキングして今、映像繋いでるよ」

「それを早く言ってくれ束!!」

—————

そして東の端末越しに見えるのはお馴染みすぎる面々だ

「よお奏者達、包帯のまままで失礼するよ」

『は、ハルトさん!?!』

「悪いね、ノエルに襲われて怪我をしてるからこんな感じで話をする事にした」

『ハルトさんが…そんな怪我をする程の…』

「ちなみに全治1日の大怪我だ」

『嘘ですよね!?!』

「いや嘘じゃないんだよなあ、コレが」

怪人となった事で超能力にも目覚めたが、それ以外にも治癒力なども上がっている…

だから自然治癒で治るのだが

「あ、そだ逆探知しても意味ないからね」

『っ!』

何人か肩を震わせた辺り実際、してんだなあとボンヤリ思ったが
「んで取り敢えず、現状に関して言おうか」

此方側で把握しているのはノエルはキャロル作のコアメダルを使いオーズになれる事とキャロルが本来の目論見としてあった万象黙示録を開く：まあ世界の破滅が目的と話したのであった

『っ！』

彼方は何か驚いていた

『じゃあ何であのノエルくんはキャロルちゃんを襲ったの？』

その問いにはキャロルが答えた

「イグナイトモジュール：正確に言えば素材のダインスレイフにある呪いの旋律を浴びた個体を作る、それを媒介にして世界を滅ぼす歌を使う気だな」

『では何故、ノエルは明確に敵意を君に抱く？目的は同じなら君を害する気はないだろう？』

「オレが方針を変えたのが我慢ならなかった、それが答えだろうな」
『方向性の違いだ』

「ああ、オレはそこにいる包帯浮気男に絆されたようだな別の方法を考えるようになった世界を滅ぼさずに済むかも知れないとな…だがノエルは気に入らなかった、元々セルメダルやダインスレイフに関する研究をしていた個体だ歪んだ自我を持つのも当然だろう」

「浮気とか一言余計なんだよ」

『では止める方法が』

「あればオレ達だけでやっている。お前達の手も借りずにな」

『そうか…』

「その算段が立ちそうだったのに肝心のこの馬鹿が先にノエルと一戦交えたせいで予定が狂ったぞどうしてくれる!?!というより何故怪我して帰ってきた!!」

「ここでその怒りを再燃させないでくれる!?!そもそもあの場に呼び出したのはナツキです!?!」

『俺も場所まで筒抜けとは思わなかったんだよ!てかあのバイク何さ!変形したら俺にデコピンしたから額にタンコブが出来ただけど!?!』

「デコピンで済んだだけマシだろ?タイヤから鉛玉が飛ばないだけ良いと思うけどな…」

『おーい!助けたのにそれは酷いだろ!』

「まあそつちに連れてかない選択肢を取ったのは良い判断だと思うぞ…連れてってたら多分…」

「ハルト奪還の為にノエルに手を貸した後、ノエルを倒して逢魔に行くぞ賛成する奴」

「「異議なし」」

「だってさ」

『ヤベー！あの時の俺グツジョブ!!』

『ナツキさんはいつもギリギリのトライアンドエラーですね』

『そのエラーから起こる問題が恐ろしい気もするが…』

「つー訳で暫く俺達はノエルの戦力を削る為に動く、そうすりゃ打開策は見えてくるんだろよコアメダルの取り合いなんざワクワクしてくる」

『それは助かるが…』

「それに元々は俺が始めた事だ、最後まで責任は取るよ」

「それを言うならオレ達だ、コアやセルメダルを作ったのはオレだからな…仕方ないから一緒に責任は取ってやる」

「ありがとうキャロル」

「つ／＼／ま、まあ…当然の事だ…で、まずはお前達に協力の代価を提供したいと思う」

『代価？』

「ノエルの件に関する詫びとオレの助手が世話になってる札だ」

『キャロル…ありがとうございます！』

「勘違いするな、そのままのライダーシステムではノエルの足止めすら難しいだろう何せ、オートスコアラーを除けばオーズはオレの錬金術師人生で最高傑作、生半可な力では対抗出来ないからな」

『いちいち苛つかせるなオイ』

「此方は善意のつもりだが要らんなら渡さんぞ？」

『けっ…んでどんなアイテムだよ』

「まずはナツキのバースXユニットを完成させてる、お前の事だから他にも手を回してるからまだ調整中なんだろ？オレが完璧に仕上げてやる」

『それは願ってもない話だ有難く受けさせて貰うけど…自爆機能はないよな？』

「ある訳ないだろう…おい待て、何故バースに自爆装置がある事を知っている」

「あ…やべ…」

キャロルは不意の疑問を尋ねた時、ハルトは顔を逸らしたのであったが弦十郎ははっきりと言った

『ハルト君が以前使っていたからなバースには自爆装置があると』
そう聴くなりハルトの胸ぐらを掴み

「ハルト貴様ア！アレはオレがドクター真木の真似をしたいが為に搭載した機能だぞ！それを先んじて使うとは何事だあ！」

「そんな理由でバースに自爆機能を忠実再現したのか！確かに俺【良き終末を】ってスイッチ押ししたけど！」

「それをやる為に割いたオレの労力を返せ！あと先にセリフを言った罪は重いぞ！」

「そんなん知るか！！嫌だったら早く自爆させりやよかつたんだよ！」

「空気を読め！！ナツキが世界を救えると希望を抱いた瞬間に自爆させた方が良いに決まっているだろう！」

「……………つその手があつたか！流石キャロル天才錬金術師だな！」

「そうだろう、何を当たり前な事を言っている」

『納得するな！！』

「すまなかつたキャロル…まったく俺もまだまだな」

「何、気にするな誰にでも失敗はある…そうだ夏の夜にカッターウイングで飛んだバースを爆破させるか」

「お！文字通り汚ねえ火花つてか？」

『え！俺そんな理由で自爆させられるの!?!』

「爆ぜろ、オレをネタに良くもハルトを利用したな…その場で自爆スイッチを押してやる」

『キャロル…流石に自爆装置はダメですよ僕が外したから良かったものを』

「…話を戻そうハルトには後で話がある、そしてマツハとプロスだな」

『待ってましたー!』

『私達にもあるのですか?』

「ああマツハには新しいシグナルバイクを送るプロスは…1人でエンジンとリモコンを使え以上だ」

『うおおお！強化フラグとかアニメみたいだあ!』

『私達だけ雑ではありませんか?』

「仕方ないだろう、そうとしか言えん」

「プロスに関しては割とそうだよな」

とカラカラ笑うハルトと不適に笑うキャロルという煽る事が生きがいのような2人を見てナツキは溜息を吐くが

『：因みにだけどその辺っていつ出来るの?』

「問題ない既に出来てるぞ」

『早いな：と言うより事前に備えていたのか：』

「流石だなキャロル!」

「ああ：だが本当に恐ろしいのは：一夜で全てを仕上げた、このオレの才能さあ!そんなオレを蔑ろにしてタダで済むと思うなよ：ノエルー!」

と急に笑い始めたキャロルを見て思わず視線を束達に向けた

「おい誰だキャロルにエグゼイドを見せた奴は!?!明らかに黎斗神の良くない影響受けてんぞー!」

『ヴェハハハハハハハ!何故かは知らんが親近感を覚えるな!!』

ーそりや元はお前だもんなあ：：じゃなかつたなー

「変なテンションだけど大丈夫か!?!」

「キャロりん徹夜で仕上げたからね：そりや疲れるよ」

「キャロル寝ろ!今すぐに!!悪いなツー訳でまた渡す時の情報は送る、んじゃあな!」
と通話を切った後

「ほら話し合いは終わったから、自分の部屋で休めよキャロル……つか無理するなよ本当」
「断る！」

「いやいや寝ないと体に悪いから！」

「ハルト……オレのクリエイティブな時間を邪魔するなあ！」

「今は何も作ってないだろ！」「アイデアが止まんらん!!研究室に行くぞ！」「ダメだ……深夜テ
ンションになってやがるアナザーウィザード！スリープ使うから力を貸して！」

「こうなったら無理矢理にでも寝かしつけてやる!!とアナザーウオッチを構えたが

『断る！俺の魔法を作る時間の邪魔をするなあ！』

「お前も便乗するな！キャロル頼むよ！なんなら可能な範囲で言う事聞くから！」

「「あつ……」」

千冬、東、錫音がしまったという顔をし

「ほお……なら」

待ち望んでたと言わんばかりにキャロルがハルトを見たのであった

「……………へ？」

そして

「……すう……すう……すう……」

キャロルは俺のベットに潜り込み爆睡をかましているのであったが

「何故こうなった……」

『お前が安易な提案をするからだ馬鹿者』

「つせえよ……しつかし良く寝てやがるな、怪我人の俺よりグースカ寝てるのは腹たつてきたな……顔に落書きしてやろうか？」

『子供かお前は辞めろ』

「はいよー」

この2人は仲良く出来たのは割と思考回路が近かったというのは誰も知らないだろう

『それより相棒、体の調子はどうだ？』

「全快だよ寧ろ前より調子が良いくらいだ」

『そうだろうな』

「お前達さ……嘘下手だろ有給とかさ」

『何の話だ？』

「俺に休めって言いたかったんだろ？ ったく素直にそういやあ良いのに」

『お前の自然治癒力はもう人間レベルじゃねえし、何なら寝るだけでも気分転換になるんダゼ？』

『それを聞かないで懐古やアナザーエグゼイドの力で回復して無理矢理動こうとするバ力は誰だ？』

「……見ろ相棒、太陽だ」

アナザーウオッチを日光に当てたら

『ん？ め…目ガアアアア!!』

「ふう…」

『アナザーディケイド、お前本当に見てどうするヨ…つか露骨に話を逸らすナ、ハルト』
「悪かったよ、これからは無理しないで任せるよ」

『ああ…それに良かったな相棒』

「おう…ってまだ解決はしてねえんだけどな」

キャロルの頭を撫でながら穏やかに笑う、ノエルの事やネオタイムジャツカーの事も山積みであるが今はこの幸せを味わうとしよう…それよりも

「本当にスゲエな1人でメダルやオーズ作るとか」

この小さな体でどれだけ濃密な人生を歩めばそうなるのか分からないが彼女なり苦
労や葛藤もあつたのだろう、それは

「悩まずにアナザライダーや怪人になった俺とは正反対だな本当」

まあアナザライダーとの契約はしないと命に関わるのでせざるを得なかったのも
あるが

基本悩まずにノリと勢いで走つてた俺とは違うなと思う

『嘗てのノリと勢いが俺達を殺そうとしてるがな』

主にメダル絡みの件でと言われたので

「あゝ聞こえない」

とわざとらしく耳を塞ぐも視線を下に向ける

「あの時の迷子とこんな関係になるなんて当時の俺に言ってやりてえな驚くよ絶対」

『ロリコン呼びされるのがオチだぞ?』

「だろうな会つた頃のウオズ達にもそう言われたし」

昔話にも花が咲くのは仕方ないな

【はあ…何故、貴様のような人間がアナザライダーなのだ?】

そんな出会いだった、最初は正体を隠蔽する為にアナザークイズで記憶を消そうとしたが

「幼女相手にアナザーライダーの姿はトラウマ……つててててて！」

起きているのか知らないがキャロルが万力のような力で締め上げてきた寝てても子供扱いは地雷のようだ

だから連れてってオーズを見た……今覚えは未来の俺があのだタイミングで送った事に意味があるときえ思える……あの野郎のシナリオ通りに行くなど我慢ならんが

「キャロルや皆と会えた……ありがとう俺と会ってくれて……俺なんかを選んでくれありがとう」

何も為せずに腐るだけの人生に意味をくれた

こんな自分にも背負って守るものが出来た

「こんなにも誰かを愛しく思う日が来るとは思わなかった

「皆を守る為なら……俺は世界だって滅ぼしてやる」

「こんな事は皆が起きてたら絶対に言わない恥ずかしいと苦笑していたのであった

その扉の向こうでは

「ねえコレ前にも合った気がするけど」

「まあハルトは怪我人だから追いかけてこないから大丈夫だよ……やれやれ……なんかじゃなくてハルトが良いんだよ」

「しかし宝か……ハルトも素直ではないな」

「ええそれが魔王様ですから」

「そうだね……はつくしよい！」

「「っ!!」」

「……………あ」

「このバカ兔が!!」

「ごめん!」

「大丈夫、今から逃げればハルトだつて追いつけ「るよ」……へ?」

「こつそり見るのは感心しないなあ」

「……」

4人が目線を向けた先には怪我をしていてボロボロになっていた筈のハルトであつた

「正直に言つてね……どこから聞いてた?」

それはもう恐ろしい笑みで穏やかに語りかける

「えーと……何でこうなつたから……」

「……てかフイーニスまで混ざつて何してんだよ……」

「申し訳ありません、つい……」

『ベタだな』

「それより怪我は治つたのか? 一日で治るとは聞いてたが……」

「ああ今、治つたみたいだよ……完治さ!」

「おめでどう!」

「ありがとう束……さて盗み聞きしてる悪い子にはお仕置きの時間と行こうか?」

「戦略的撤退！」

「させるか！捕まえてその記憶を消してやる!!」

「つまり！ハルくんからそんなの忘れるくらい、もつと良い思い出を貰えるという事！」

「東はバットショットで隠し撮りしてる俺の写真を焼却しようか？」

「嘘でしょ！物理的に思い出消しに来てるだとお!!」ダツ！

「カマかけたらマジか…お前達兎狩りだ、東を捕まえた奴はお咎めなしとする！写真なんて焼き払え!!」

そう言うなり

『メロンエナジー』

『チェンジ…ナウ…』

『1号』

「「待てー！ー!!」」

「捕まってたまるかあ!!」

『レモンエナジー』

壮絶な鬼ごっこが幕を開けたのであったが

「……………眠い……………」

体が凄まじい虚脱感に襲われてしまう

『だろっうなさっさと寝ろ』

「……………はい……………あふ……………」

そう言うのとハルトはフラフラ歩きながらベットに戻ると眠気に従い再度眠りについた、その際キャロルを抱き枕にして離さないと強く抱きしめていたと言う

「……………しあわせ……………」

翌朝、彼女が現状を理解して赤面しながらハルトを叩き起こしたのは言うまでもない

そして数日後 何とか直接対談の場と話があった

こっちの代表は俺とキャロル

向こうの代表はナツキとエルフナインだ念の為かミルク缶のようなセルメダルケースを担いでいる

ハルト達はアナザーオートバジンで来たのだがヘルメットを脱ぐと

「なあ……何で顔が赤く腫れてんだ？」

ハルトの頬が腫れていた

「いやあ……蚊が止まってたらしくて気付くとビンタされてた」

「……………ふん！」

言えない、抱き枕にしてたキャロルから平手打ちを食らったとは

「そ、そうか……色々大変なんだな……」

「ああ〜そういうやああの愚妹は元氣？」

思い出した次いで感覚で聞いてみると

「ああ……ハルカちゃんなら刑務所で軽くメンタルを病んでるつてうわ言で白と紫と黄が怖いとか何とか」

テスタロツサ達、大分派手にやったみたいだなと内心で呟くと頭を掻きながら

「そっか、まあ傲慢が服着てるような奴だから仕方ないか……人を蹴落とす事ではか維持できないゴミのようなプライドでもな」

「言つてやるなハルト、人から奪った何かで自慢してたから自尊心など獲得出来なかったのだからな……それに今のお前にはオレ達がいる何も心配する事はない」

「キャロル……………っ！やばいますます惚れそう……」

「つ／＼／時と場を選べバカ者が」

「お…………おう……」

「……………」

ハルトとキャロルは頬を赤らめ視線を逸らしていると

「あの…惚気るなら話しが終わってからで大丈夫ですか？」

「エルフナインの毒舌が鋭いな」

「まあ普通の兄妹の関係をあの2人に当てはめるのは難しいですね…寧ろまだ優しいくらいですよ、僕だってノエルと兄妹みたいなものですが価値観が違いすぎますからそう思えませんし」

「あ、はい…何かごめん…軽率だった」

「脱線したが取り敢えず……よつと」

ハルトはケースに入れていたサイドカー付きのシグナルバイクを渡した

「それがマツハの強化アイテムね」

「これが……」

「名前はデットヒート…能力は純粋な出力向上と熱攻撃、ただペース配分は気をつけて

ね」

「……………危険なんですか？」

「いや違うよその子はじゃじゃ馬でねパワーが凄すぎて乗り手次第だと振り回されるんだよ」

「シンフォギアのイグナイトと同じだと思え…まあ暴走したら必殺技でも浴びせれば止まる」

「特殊な鉄板を仕込んだ靴の一撃でも可だ！」

「な、なるほど…それでプロスの強化と言うのを試したのだが…」

「あ、どうだったヘルブロス」

「やはりアレでしたか…それでなんですが…」

「ほら予備のギアエンジンとリモコンだ…お前の望みは、ヘルブロス2体運用だろ？」

キャロルがナツキに二本のボトルを渡した

「助かる、これで何とか」

「一応言っておくが管理はエルフナインの奴に任せた方が良く、他の連中じゃダメにするだけだ」

暗に技術はエルフナインにしか預けないと伝えたキャロルを見て同じように頷くハルトは

「ほらバースXユニット」

ユニットを渡すとナツキはドライバーと合体させた

「ありがとな」

「管理しつかりしろよ、ノエルの狙いがメダルの器を作つて暴走させる事もあるなら必ずコアメダルの奪い合いになる」

「マジか…つかノエルの持つてるメダルつて何枚あるの？」

「シガゼシ、セイシロギン、ムカチリのコアメダル…9枚だな」

「サラミウオやピカソは？」

「サラミウオは製作前だったからな…それにネオタイムジャツカーにいるポセイドンのコアメダルだろう態々敵の予備パーツを作る意味がない、ピカソはバースX用にしたら無い試作品はフィーニスが持っているしな」

「うーん…となるとノエルのコンボは未知数な訳だ」

「幸いなのが残つたメダルが把握出来る所だよな…っ！」

ハルトはキャロルを、ナツキはエルフナインを守つてその場から離れると同時に錬金術の攻撃が先程まで集まっていた場所を破壊した

「ノエルか!？」

「違う…この技は…まさか!」

キャロルは慌てて視線を向けると其処には

「ガリイ…フアラ…」

「レイヤにミカまで」

キャロルの仲間であるオートスコアラが決め決めの立ちポーズをしていたが

「……………」

「どうしたハルト？」

「いや、キャロルにも決め決めな立ちポーズを決めたいつて潜在意識があるんだなあ

…つと痛タタタタ！」

「オレもアイツ等見て凹んだわ！…ではない…お前達…まさか！」

「逃走個体の排除と聞きましたが楽勝ですな」

「あの個体には何故か思う所がありますがターゲットなら消えてもらいましょう」

完全に狩人の目をしているとくれば

「おーいキャロル、これ完全に」

「ノエルにマスター権限を書き換えられている…いや、この場合は認識阻害の類か？記憶がオレからノエルに代わっているようだ」

2人を下ろして彼女達を守るようにドライバーとウォッチを構えた

「なら思い切りぶん殴ればキャロルの事を思い出すって訳だよな」

「そんな古い家電じゃないんだから…それにキャロルの最高傑作だぞ勝てるのか?」

「問題ない、キャロルの最高傑作を超えるくらいじゃねえと俺はキャロルを守れないって事だろ?そんなのカッコ悪いじゃん」

「っ／／／／」

「お前…変わったな色々」

「かもね…けど変わらないものもある…ミカは俺が相手するから他3人は任せた」

「割り当てがおかしくねえか!」

「じゃあねえだろミカは4人の中で一番強いん」「油断大敵ダゾ!」っ!」

ミカが持つカーボンロッドの一撃がハルトを吹き飛ばした

「ハルト!」

「ギャハハハハ!」

笑ってる所、悪いし

「…………ゴフッ!」

進化しててもかなり痛いんだよ内臓や肋骨何本か逝っているしサゴーズの重量系メダルの強化と元から並外れた臂力ときたものだ

「……人間だったら死んでたな」

つくづく怪人に進化して事の恩恵に感謝しかない……人間だったら死んでた場面など一度や二度ではないし、まあ幸いなのがミカの弱点はそのメダルのグリードと同じな点と知ってる事か

「アレ？結構本気で殴ったんだソ？」

「残念、俺の回復力は人間を辞めてんのよ」

もう完全復活しました！と胸を張るが

「そもそも今は人間ではないだろうお前」

「ナラ、治るヨリ早く殴るダケダゾ！」

「あらかだ凄い脳筋……嫌いじゃないわ!!」

「おい真面目にやれ!!」

キャロルに怒鳴られたのでハルトは溜息を吐くと

「わーつてるけどキャロル」

「安心しろ壊れたらオレが治してやる」

それを聞くなり口角が上がり眩く

よかったと

「なら遠慮なく、俺と遊ぼうぜミカあ！」

『響鬼』

「行くゾー！」

走りながら変身したアナザー響鬼とミカとのバトルが始まる、音撃棒とカーボンロッドが歪なりズムを奏でていた

「はあ……て事は俺1人でガリイ達3人かあ」

ナツキは溜息を吐きながらドライバーを巻くと3枚のコアメダルを構えるが

「仕方ない、あの3人ならオレがやるからお前はエルフナインでも守ってろ」

「え！けどキャロルさんでも3人は「おい」へ？のわっ！」

キャロルはそれはもう見事な笑みで

「オレが自分の発明品にやられるような奴に見えるか？」

「見えないです！」

「なら黙ってみている」

「けど何かあつたら俺がハルトに：「心配いらん」へ？」

「丁度良い機会だ、オレの新しい力を見せてやろう」

キャロルは不適に笑うとオーズドライブを腰につけるとホルダーに収めていたメダル全てを何と全部空に投げるとオースキャナーで全部取り込んだのであった

様々なメダルの力が解放されると同時にベース用に貯めていたセルメダルもキャロルに吸収されていった

「えーちよっ！」

「変身」

すると普段と違うオーリングが形成され装甲となる

その姿は仮面ライダーオーズ タトバコンボであるが顔はひび割れ、背中にマントを

羽織る また特徴なのはその四肢だ

両手がカマキリとトラの腕、両足がゾウとタコのもの代わり
その中央のオーラング
には

4体のグリードが円状模様になって刻まれている

その姿は古代から君臨してきた王

ノエルが未来の力なら、此方は過去の力

800年前の王が目指した一つの答え

「ふう…さて後はもう知らんぞお前達」

仮面ライダーオーズ グリード吸収態

誕生

下準備と戦力と

アナザー響鬼vsミカはと言うと

「アハハハハ！お面白いゾ！」

「コツチは笑えねえよ！」

音撃棒に炎を纏わせて火球を放つがカーボンロッドに防がれ、今度は鏢迫り合いのパワー勝負だが

「おいおいマジかよ！」

アナザーライダー達の中で基本フォームでは比較的パワーよりのアナザー響鬼でさえ押されているだと！

「アハハハハ！まだまだ行けるゾ！」

更に出力を上げてきたミカに思わず舌打ちをする

「ぐぬぬ…だったらアナザー響鬼・紅で！」

『待てハルト、アナザークウガに変われ！こうなったらタイタンでゴリ押しだ！』

『いやパイナムズだ！』

『いやいや、此処は俺つちに任せて貰おうか！アナザージャックリバイスだぜえ！』

『お前はダメだアナザーバイス！』

『ええ！どしてよ先輩！』

『それは簡単だ…それは』

『それは？』

『お前が目立つ事で俺達のヒーロー感が薄れるだろう！まだ出てない奴もいるんだから

！』

『ええー！そんな理由ありい！』

精神世界でコントを繰り返しているバカどもに思わず本音が漏れた

「おまえ…ら…なあ！少しは真面目にやれ!!」

「何！人で吠いてるんだゾ！」

「作戦会議だよ！」

沢山いるのに良い案が出てこない最悪ミカの最終決戦能力を引き出させて自滅狙い

に……ちよい待て……ミカの最終決戦能力か……よし

「お陰で一つ閃いた……ふう！」

口から鬼火を吹いてミカと距離を作ったアナザー響鬼は再度ウオツチを構えて

「行くぞ」

スイッチを押すと同時に膨大な熱波が周囲を襲った

「オー……まだ何かあるんだナー！」

ミカは感動していると熱波が収まる中現れたのは

頭部から見てアナザーアギトであるのだが、その体は溶岩に爛れた皮膚のような出立ちとなっており体の内側からは燃え盛る炎がチラチラと上がると同時に新しい装甲が炎を蓋するようには止めるが熱はそれでも収まることはない

燃え盛る豪炎の戦士

『アギト……バーニング』

アナザーアギト・バーニングフォーム

「オオー！変わったなどんな力があるンダ？」

「それは……その身で味わえ！」

アナザーアギトはシャイニングカリバーを呼び出すと薙刀状のシングルモードで構え直しミカのカーボンロッドを迎え撃ったのであった

それには別場所で戦っていた者達も手を止めて此方を見る

「熱いですねえ……何ですアレ？」

「さあな……ハルトのやる事だどうせ碌でもないに決まっている」

「まあそうですねえ……潰れなさいな！ 廃棄躯体！」

「忘れたなら、思い出させてやろうお前達の主人の力をな！」

そう言いオーズはゾウレッグを強く振り下ろすとゾウ型のエネルギー攻撃が建物を揺らし地割れを引き起こす

「「っ!!」」

3人は瞬時に避けて反撃に転ずる

「派手な攻撃…嫌いではない！」

とレイアはコインを昆虫系コアメダルに付与されている雷撃の力を付与した射出を行う

電磁力の力とオートスコアラアの先天的なパワー、そしてセルメダルの消化により電磁投射砲（レールガン）の様相を呈するコインの雨にもオーズは冷静に対処する

サゴーズコンボに使われている重力操作を使い超速度で放たれた弾丸だが間合いに入った瞬間、地面に全てめり込んだ

「なっ……!」

「でしたらこれでどうでしょうか？」

とファアラが手に携える、あらゆる刀剣をへし折る哲学兵装 ソードブレイカーで攻撃

を行う

「ソードブレイカーか…セルメダルやコアメダルで強化されたソレならば千冬のサタンサーベルもへし折れるのだろうか」

ハルトが本気でビビり倒していた、あの剣は今千冬の腰に収まっている鍛錬する度に馴染む剣に彼女は気に入っているようだが装いを日本刀のようにしようとしてハルトと揉めていたのは記憶に新しい

「サタンサーベル？それを剣と思うなら私のソードブレイカーに折れないものはありませんわ！」

「知っている!!」

オーズはトラクロウを伸ばしてエネルギー斬撃を放つと少し間合いを作り メダジャリバーに3枚メダルを入れてリードする

『トリプル！スキヤニングチャージ！』

「セイヤー！」

斬撃は世界の位相を切り裂くような一撃だが、ファアは冷静にソードブレイカーを振り下ろす事でその斬撃を無効化した

「ふふふ…残念でしたわね」

「油断大敵だ撃て」

「あいよー！」

『セルバースト』

「発射あー！」

「っー！」

ファアラにバーストが撃ったメダル型光弾が直撃しかけたが体に収めているネコ系メダルの力にある柔軟性で華麗に回避したのであった

「さて…」

「3人がかりなら」

「どうしますー！」

三方向からの同時に攻撃に襲われる

「キャロルー！」

エルフナインが心配そうな声を上げるが

「対処可能だ」

そう言うのとオーズの複眼が紫色に変わると足元や周囲のものを凍りつけにしたのであった

「氷なんて、こんなのがリイちゃんにかかれば……っ！動けない!!」

「さて……悪いが少しの間大人しくして貰うぞ」

オートスコアラー達の洗脳？を解かねばならないとオーズが近づいた瞬間、攻撃されたのであった

「っ!!」

トラクローで迎撃すると新しい敵が現れたのであった

「ノエル！」

「「マスター!!」」

「大丈夫ですか？後は任せて下さい……ではオリジナル……貴女のコアメダルを頂きます……しかし寒いので丁度良い」

と新しいメダルを読み込ませて

『セイウチ！シロクマ！ペンギン！』

「変身」

『セイ！シロギン！セイ！シロギン！！』

読み込んだメダルから現れたのは、シガゼシと同じく人造コアメダルから生まれた新たなコンボ

極寒の寒冷地を生き抜く動物の力を宿した力はプトテイラが宿す絶滅の寒さではない力もは異なる

破滅を望むものが生き抜く力とは皮肉であるなどキャロルは見ていたが内心では怒りの感情で燃えていた

仮面ライダーオーズ セイシロギンコンボ

「さて…第二ラウンドと行きましょうか」

「黙れ!!オレの騎士達を返して貰うぞ！」

オーズ同士での戦い開幕

その頃 アナザーアギト・バーニングフォーム vs ミカとは言うところ

「ちいー！」

「あははは！面白いゾ！」

カーボンロッドをシャイニングカリバーで跳ね除けているが単純にパワーが互角になっただけで決めきれないでいる、それ以前に

（制御が難しい！）

元々のバーニングフォームが暴走一步手前フォームである事を考慮すれば解らなくもない事態であったが何と言えば良いのか、遊園地のコーヒーカップを酔わない程度に回すような繊細さが求められている

『何か簡単そうだな』

例えばが悪かったかと頭を抱えるが、それよりもこの状態は不味い

キャロルがノエル含めて4人か…ナツキも参加してるがやはり人足が足りない、ならば！

『カリユブデイス』

「お任せを！カラミティストライク！」

出てきたなり必殺技でノエルを吹き飛ばしたカリユブデイスを見て思わず

「有能すぎて助かるう！」

『本当だな製作者に爪の垢を煎じて飲ませてやりたい』

ーアナザーディケイド残念だよ……ジー『製作者も素晴らしいな！』それでよしー

『恐怖政治だ！』『言論統制だ！』

アナザーセイバー達が、やんややんや言っているがいつも通りなのでスルーしておく
流石のハルトも冗談ではなく忙しい、どうする？と考えた時に一つの解答が出た

制御不能のエネルギーがあつた時の制御法は二つ 制御装置を作るか

「……………必殺」

エネルギーを放出するかだ

「紅蓮爆竜剣！」

シャイニングカリバー越しに放たれた赤竜はバーニングフォームの熱量を纏い威力が向上した一撃であるが

「当たらなければどうって事はないんだぞ！」

「それで良いんだよ！」

『ウイザード…テレポート』

その紅蓮の一撃はオーズが戦う場所に到達した、ハルトの真意に気づいた2人は慌てながら

「っ！ナツキ！エルフナイン！」

「わかってますって！」『カッターウイング』

「え…ちよつと…うわっ！」

オーズはチーターの加速力で助走してバツタの力で跳躍し、バースはカッターウイングを展開エルフナインを抱えると慌てて飛んで行った

さて科学の問題と行こう

個体の氷を急に水蒸気に変えた場合 体積の関係で何が起こるか

!!!!!!

答えは簡単と言わんばかりに耳をつんざく爆発音と振動が周囲に響いたのであった

水蒸気爆発

それが起こると同時にセイシロギンコンボとオートスコアラーは吹き飛ばされて
各々倒れる変身解除されたノエルは周りを見渡すが

「逃げられましたか…全く変な所での勘は鋭いですね」

となると此処に用はないと言わんばかりにノエル達は現場をさったのであった

—————

拠点に無事撤退出来たハルトは皆に声をかけた

「ふう……皆無事」「二」な訳あるかあ！（りますかあ！）」「三」ごふう！」

当然と言わんばかりの飛び蹴りを喰らったハルトであった

「い、いや……逃げるなら丁度良い目眩しかと……」

「だとしても示し合わせろ！」

「俺達だから分かったようなものだぞハルト！」

「危険ですよ！」

「その……ごめん……」

「まあお陰で何とか逃げられましたし……ですが」

「オートスコアラー全員が敵か」

「厄介だな……このオレの才能が他ならぬオレを苦しめる事になるとはな

「自画自賛してる場合じゃありませんよキャロル」

「分かってる……しかしどうするか……」

キャロルが頭を抱えていると

「皆で挑めば良い、そうだろ？」

「そーそー！その為に束さん達いるんだからさ〜」

「そうだね……幸い人手はあるんだから数が同じなら何とかなるでしょ？」

「ま、魔王様！是非僕にも役目を！」

そう言ってくれる仲間達を見て思わず涙ぐむハルト

「ありがたいな皆、助かるよ」

「気にするな…それでどうする予定だ」

千冬の言葉で皆が思案を巡らせていた中で

「あの…魔王様が元気なのですからオーロラカーテンを使って逢魔王国から援軍を呼べば良いのでは？」

フィーニスが恐る恐る手を上げての意見を聞き皆がそれだ！と指を刺したが
「それでハルト、誰を連れてくる？」

「そこ何だよなあ…」

テストアロツサ、カレラ、ウルティマとその配下達は逢魔王国内でも治安維持や外交などの要職に当たる者もいる為 気軽に連れて行くことが出来ない俺が言えば来てくれるだろうが流石に現状で彼女達の投入は時期尚早だ

最有力候補のウオズ、カゲン、ジヨウゲンの3人も難しいと判断する俺の影武者ワ

ムを補佐しつつ政務にあたっているだろうし、常設している王国軍の投入も出来ないというよりあつちの世界にある　ファルムス王国や西方聖教会など他の魔王の備えも疎かに出来ないのだ

そうなると王国で自由に動かせそうなのは

「ゴオマくらいかあ…」

と　王国にいるニューリーダー病患者　ズ・ゴオマ・グしか思いつかない所まで行きつく

「王国の人材不足は思いの外深刻だった…テンペストが羨ましい」

まさかこんな展開になるうとは…と頭を抱えていると

「パヴァリアの皆は？」

「無理だな今回の件は連中は関与しないだろうな」

「そうだねえ、これ以上サンジェルマンさん達は頼れないよ」

転移陣の解析を頼みを受けてくれただけでも御の字なのだからと被りを振ると

「篠ノ之製作所にいたあの4人はどう？」

錫音の提案にハルトと束は少し考え、思い出したように手を叩いた

「……ハル君！」

「了解だ束!!」

いたのだ一騎当千の強者達が！篠ノ之製作所に！とハルトは束を連れてオーロラカーテンを超えると直ぐに戻ってきた、そこに現れたのは世紀末風味のファッションを着てまた特徴的なヘッドギアをつけていた4人組がいた

「皆、お願い！力を貸して！」

「頼む！彼女の仲間を助きたいんだ！」

ハルトと束は4人をお願いするとヘッドギアが発光し

「………アークの意思なら従うまでだ」

「はい」

「分かった！」

「そうだな……そのノエルって奴には雷を落としてやる」

彼等は滅亡迅雷 束がヒューマギアを人間の悪意から守る為に用意した守護者であ

る普段は篠ノ之製作所にいたのが災いし呼ぶ事が出来たのだ。キャロルは空いた口が塞がらずに驚きを隠しきれていなかったが

「兄貴もいて助かったよ…」

ハルトはメンバーの一人 雷の姿に安堵を覚えている普段彼は弟と一緒に宇宙にある人工衛星アークの管理人をしているのだ地球にいる事が少ない彼がいてくれて良かった

「俺には頼れる弟がいるんでな管理は頼んでおいたしアークから地球に戻れって指示もあつたんだよ」

「流石だな本当に」

「ハルト、状況はアークから聞いている、操られている仲間を助けたいとな」

「ああ彼女のな」

「頼む、協力してくれないか？」

「勿論、友達なら助けないとね」

「では行動開始です東、端末をお借りしますよ」

「うん亡ちゃん一緒に頑張ろ！」

「はい」

東と亡は情報収集か、最強コンビだなと思う

んじゃ俺達は

「滅、迅、兄貴は「おい待てハルト」ん？どしたキャロル」

「今更なのだがな、何故：滅亡迅雷・netが助つ人に！いつ知り合いになったのだ！」
「あくそゆことか彼等をモデルにしてるんだよ東が作ったヒューマギアの未来を守るって考えたらさ相応しい守護者と思つてさ」

「な、なるほどそう言う事か」

「だからハルトが狂喜乱舞しないんだ」

「おい待て、俺の認識について意見があるなら聞こうじゃないか」

このライダーオタクが本物の滅亡迅雷に会えば発狂しているだろうというのが仲間達の見解である

「取り敢えずナツキとエルフナインは帰った方が良いな、早く連中に装備を渡してくれ」

ナツキはバースに変身し

「分かった、エルフナイン行こう」

「はい！じゃ「よつと」：きやつ！な、ナツキさん！」

「ご、ごめん：けど帰るなら、こうするのが早いからさ！」

「もう…事前に言っておきたいよ…びつくりしますから…」
「ごめんって！」

エルフナインをお姫様抱っこするとそのままカッターウィングを展開して空を飛んだのであった

「アイツもアイツで頑張ってるなあ」

「……………」

「どしたキャラル？」

「い、いや…何でもない」

その時、ハルトの頭に電流が走るとキャラルをお姫様抱っこしたのとあった
「っ！な、何をする!!」

赤面しながらのキャラルを見て

「え？エルフナインちゃんが羨ましいんじゃないの!？」

「そ……そんな訳あるかあ！」

「ゴフツ……っ！」

見事なアツパーカットがハルトの顎を捉えて地面に仰向けに倒れキャロルは勝利のポーズと言わんばかりに拳を天に突き上げていた

「……………」

「ええ……」

その光景を見ていた3人も閉口するしか無かったというが

「その……それは……2人の時にやれ馬鹿者」

「……………」

『ダメだ気絶してるぞ』

アナザーデイケイドが頭を抱えたのであった

そんな感じで頼れる助っ人が加わった事により一層、俺達の活動にも力が入るつてものだが連中の情報が全く入って来ない、ナツキ経由でSONGsの情報も入ってくるが同じような感じだ

「大人し過ぎて逆に不気味だな」

「時が来るまで待つしかない」

滅の言う事も当然であるが、この時間を有効に使いたいので

「そうだな…つしや！滅！迅！兄貴！模擬戦頼めるか？」

「良いだろう」「うん！」「ああ」

バトルジャンキーも真つ青な命懸けの鍛錬に励んでいると時折、千冬がサタンサーベル片手に乱入してくるのが怖いのは内緒だぞ　だがその日は普段と違って、ファイズフォンXからの連絡に出ると

「はいはい…ええ…ヤミーか…わーったよ行くから俺の分残しておけよ」

通話を切り仲間に視線を向ける

「敵だけどオートスコアラーじゃない3人は亡に連絡して待機しといてくれ、鈴音の魔法で必要に応じて転移させるから」

「了解した」「はい」

「気をつけろよ」

「ああ…任せてとけって」

ハルトはファイズフォンXにとある番号を入力したのであった

ENTERを押すと目的地まで走り出すのであった

バースがカッターウイングで飛びながら現れハルトを静止したのであった

「何さ俺はコレからキャロルの膝枕をして貰う予定なんだが？」

「何さ？じゃねえよ！見て分かるだろ！ヤミー沢山！人手足りない！手伝え！」

「何でカタコト？…それと帰って夕飯の仕込みしないといけない大事な予定が…」

「いや大事だけどさ！…ああもう！キャロルさんがした事の償いをすんだろ！」

「…ん…行くぞ」

痛い所を突かれたと溜息を吐いたハルトはジェットスライガーを操作してミサイルの雨をヤミーに叩きつけた後、自動操縦に切り替えるとそのまま飛び降りた、上空でアナザーウオッチのスイッチを押したハルトは着地と同時にアナザージオウへと変身し着地点にいるヤミーをツインギレードで切り裂きセルメダルに返した

『ジオウ』

「はははは!!! 紐なしバンジー……怖かったー!」

『締まらないな』

『いつも通りだロ?』

「つせえよ……かかって来いやー!」

ツインギレードを天に構えたのであった

暫く戦闘していると、この世界の3人娘がやってきた1人はライドマツハーに乗り2人はライドベンダーに二人乗りしていた

「ま、魔王!」

「丁度良いじゃん新しい力を見せようよ！来い！デットヒート!!」

そう言うのと彼女の元に先日渡した新しい力がやって来たのでマツハドライバー炎に
装填した

『シグナルバイク／シフトカー!』

「lets 変身!!」

『RIDER!DEAD HEAT!』

そして現れたのは赤い装甲と襷のようにタイヤを装備した戦士
死線を超えしもの

仮面ライダーデットヒートマツハ

「追跡!撲滅!いずれも…マツハ!!仮面ライダー…マツハ!!」

『ゼンリン!』

「行くよー!!せいやあ!」

デットヒートマツハはゼンリンシューターを回転させてヤミーを思い切り殴りつけたのであった

「じゃあ!!」

「うわあ…何と言うか」

「いいではないですか、私達も少しはカッコつけないとダメですわ」

「そうだね!」

と2人は同じネビュラスチームガンを取り出し同じ白と青のボトルを装填したのであった

『GEAR ENGINE! GEAR REMOCOM! FUNKY MATCH!!』

2人は全く同じタイミングで交互に装填、ネビュラスチームガンの引き金を引いた

「潤動!!」

『FEVER!』

同時に起こるのは青と白の歯車が噛み合い装甲となる

戦場を円滑に回す歯車 ヘルブロス

『PERFECT』

「……………ヘルブロス誕生」

「ですわね」

ネビュラスチームガンを構えなおしてデットヒートマツハを援護する為に攻撃を開始したのであった

その頃 アナザージオウは向かってくる大量のヤミーをツインギレードで相手していたのだが

「数が多い!!」

『そう話す暇があるなら戦え!』

「あ……………ジェットスライガー!!」

アナザージオウは手を振ると待つてましたと言わんばかりにジェットスライガーが着地すると迷わず乗り込んだ

「さあ……、コレからはコイツの出番だ!」

とハンドルを操作するなりジェットスライガーは急発進、あの背部についたエンジンとマフラーが爆音を上げ音速に迫る速度で爆走する

「Y A ——— H A ———！」

もう何とも言えぬ爽快感に目覚めたアナザージオウはジェットスライガーでヤミーを轢き逃げする

「ははははは！見ろお前たち！セルメダルが紙吹雪のようダア！あはははははは！」

仮面の下では恍惚な笑みを浮かべているハルトを見てアナザーライダー達は慌てながら

『ま、マズイ！何かに目覚め始めている!!』

『止めろ！俺達の王を止めろ!!』

「あはははははは!!」

『ダメだハイになってやがる!!』

セルメダルに返しながらもアナザーウオッチをツインギレードに装填した

『ビルド！ドライブ！MIXING！』

技の発動に合わせ綺麗な直線グラフが現れると射線上にいるヤミーは例外なくグラフの中に収まる

「おんどりやあー!」

『アナザースラッシュ!』

「!!!」

ジェットスライガーにアナザートライドロン型エネルギーが付与されると爆速超えて音速になった体当たりはヤミーを効率よく跳ね飛ばし爆散させた

そしてドリフト停車させると反撃でミサイルでヤミーを吹き飛ばすと

「ふう………最高だな！速度は至高だア！」

『『いや怖いわ!!』』

「えー！良いじゃん別にいゝ」

『周りを見ろ！音速からの衝撃波で街が大変になつてるぞ！』

言われてみると人がいないとは言え硝子が砕け散り建物も一部が瓦礫の山のようになつていた

「大丈夫大丈夫、俺なら戻せるし……今はそんな事言えない数だろ」

ハルトからすればシンフォギアの世界なんて戦場の一つに過ぎないからどれだけ壊れても構わないと言う感じであるがキャロルが生まれ育つた世界だから滅ぶのはなあ、溜息を吐いたアナザージオウが目線を向けるとまだまだヤミーがいた

「どうなつてんだ？結構跳ね飛ばしたつもりだけどなあ」

よく見ると見覚えのないヤミーだ……体的にはアリののように黒い体と触覚が目立っている

「あ、ありがとうございます！」

「それよかお前さ…免許持ってるのか？」

「免許？…はははは！」

クリスの問いかけにアナザージオウは笑いながら堂々と言う

「必要なのは免許じゃない…技術だ！」

「無免許かよ!!」

「えええええええ！」

「よもや…」「マジかよ…」

さてと冗談で場が和んだ所でだ

「このアリさん多いですね」

「ああ初めてみるヤミーだな」

「ひたすら数が多くて困る」

「ではどうするアナザーライダー？我々もだがお前も体力的に限界もあるだろう？」

「つて訳だからさ、どうするよ大技連発で一掃するかチマチマと戦うか？」

「どちらにしてもジリ貧だな」

と意見を聞いていると響が思いつきを口にする

「アリなら女王とか巢とかないんですかね？…あはは…」

その意見に全員が食いついた

「「「それだ!!」」」

「えええええ！」

「アナザーライダーどうなのだ？」

「あり得る仮説だなメズール系のヤミーに似てるならセルメダルを溜め込む巣がある…成る程…アリの巣か…やるな立花響」

「えへへ…それ程でも」

「だがどうやって巣を見つけるのだ？」

「そうだ、お前は巣を見つけるのは至難の業って言ってたよな！」

「まあそうなんだけどさ…アレ」

と指を刺した先にある大きな塔に大量のアリヤミーとハアリヤミーがこれでもかといいた

「あそこだろうなあ…」

「うむ…では雪音頼んだ」

「ああ任せな先輩！」

とクリスが待つてましたと言わんばかりに手持ちのガトリングやミサイルを大量に発射したがアリ達がやられただけで巣そのものにはダメージがなかった

「マジかよー！」

「ならコイツでどうだ！」

と自動操縦にしていたジェットスライガーが持ち前の武装を手当たり次第に撃ちまくるが同じ結果である

「嘘だろ!!」

「……………あー！もう!!巢に直撃出来ないんじゃ意味ねえじゃねえか！」

「何か手はないのか！」

ようはアリ達を蹴散らしながら巢に直接攻撃出来ると一掃可能な火力があれば…

『アナザーゾルダでアナザーエンドオブワールド?』

ージェットスライガーと結果同じだろう?ー

『ならアナザーハイパーカブトでマキシマムハイパーサイクロンだ』

ーやっても良いけどこの範囲だと最悪取りこぼしが出るし富士山が削れるのは日本人として複雑だなー

あの技、最大射程が東京から富士山まであるらしいし

『ではアナザーメタルクラストでどうでしょう？』

ーアリに物量差でゴリ押しされるが…待てー

「あるじゃん」

いるじゃん逢魔王国最強のワイルドカード

「本当ですかアナザーライダーさん！」

「ああ…居るじゃねえか…俺の頼れる仲間達がな！」

ハルトは念話でとある3人に声をかけると快諾されたのを確認

指を鳴らすと魔法を発動した

「危ないから下がってな巻き込まれるぞ！」

足元に魔法陣が浮かび上がった、アナザーWの知識とアナザーウィザードの魔法操作があつて初めて成立するものである

「こ、これって錬金術!？」

「いいや魔法だよ!」

呼び出すのは最強最悪、神すら恐れぬ七柱の3人

「代価は拵えた…出てこい頼れる俺の悪魔達! 発動! 上位悪魔召喚門創造 (コールデーモン・クリエイトサモンゲート!)」

虚空から悪魔の門が現れるとギンギンと音を立てながら開いた門の中から3人の女性が見れようとしたがアリヤミー達は生存本能なのか分からないが現れた門目掛けて一斉に襲い掛かるのであつたが、手遅れであるし門を消したいならハルトを狙えばよかつたのだ

端的に言うとは動物的本能に従い大勢が見えていなかったのだ

開いたと同時にボーリングのピンのように弾け飛ぶアリヤミーの大群、中には消し飛んでセルメダルに戻った個体も大勢いたのだ

門から堂々と現れると

「ボク達…参上！」

1人はあの構えを取り

「はははは！呼ばれて来たぞ我が君！！」

1人は腕を組み仁王立ち

「お待ちせしましたわハルト様……あらあら……」

「あ、危ない!!」

1人はお淑やかに髪をかきあげながらも眼下のヤミーは危険を排除する為に動いたが、それは悪手にしかならない

「何？邪魔」「失せろ」「消えなさい」

そう言うなり3人は核撃魔法でヤミーを消し飛ばしたのを見て

「うわあ…スゲエなやつば」

単騎での戦闘能力もだが彼女達の専門はある意味で対軍で真価を發揮する傾向にある殊更今回のような場合は彼女達に任せるのが良いが

俺も負けてられないな…皆の王様としてカッコ悪い所は見せられないと喝を入れ直す

「今更手札出し惜しみしてる場合じゃないか…いや違うなもう遠慮しなくて良いか、さっさとノエル倒してキャロルを逢魔に連れ帰ろ」

敵よ滅べ俺達の幸せの為に

「お前達…俺がああ巢にいるだろう本丸を潰すまで周りの羽虫共を蹴散らせ!!」

その感情に呼応したのか3人娘が持つウオッチも反応し三人も言葉を返した

「心得たぞ我が君!」

真つ先に反応したのはカレラ、腹心をしてブレーキのない暴走列車と呼ばれる彼女に自制心などある訳なく持ち前の魔法である重力崩壊でアリアミーのいる場所に放つと、自らも剣を抜きヤミーの群れに突撃、単騎でヤミーを無双ゲームのように一閃で吹き飛ばしたのであった

「さあ……来ると良い、最近書類仕事ばかりで鈍っていてな私のリハビリに付き合ってもらおうぞ!!」

その光景を見てビルの屋上に腰掛けていた2人は冷静に見ていた

「あーあ、カレラ行っちゃった」

ウルティマは足をバタバタしながら眼下で暴れる同僚を見ているとテストアロツサも同調するように答えた

「まあ彼女なら当然ですわね、寧ろ彼女にしては我慢した方でしょう？」

付き合いの長さから言えるがカレラは基本自制せずに走る傾向がある、そんな彼女がハルトの指示が出るまで我慢したのは成長と言えるだろう、まあカレラよりもハルトの方自制しない傾向があるのは内緒だが

「だよねえくけどさ、ハルも粹な事してくれるねえくボク達の為にこーんな遊び場を用意してくれるなんて!!」

ウルティマから見ればこの惨劇はハルトが用意した遊び場というとんでもない認識であった好きだけ暴れても文句を言われず褒められるとあれば彼女もやる気が出ると言うもの

「ええそうですわねカレラも言っていましたけど少し鈍っていますから…ハルト様の好意に

「甘えさせて貰いましょうか」

無論、テストタロツサも同じである彼女は普段他2人よりも冷静に振る舞っているが苛烈さでは2人以上なのだ折角の機会を棒に振るなどありえない

「うんうん！だよね！」

と頷くと同時に2人も飛び降りた、当然足場になる場所にはアリヤミーがいたのだが「だーかーらー！邪魔だつて言ってるよね！」

「まったく…獣風情が」

「ねえテストタロツサ、やっちゃおう？」

「ええやってしましましょう」

2人はアナザーウォッチを構えてスイッチを押し

『ベイル』『エボル』

アナザーベイルとアナザーエボルに変身したのであった

そして

アナザージオウは新しいウォッチを起動させる

『良いだろう俺の力が使えるか試させてもらうぜ、お前の奏でる音楽を聞かせてみる』

同時にアナザーキバのようにステンドグラスが砕け散り中から現れた、黒いアナザーキバ、しかし体から溢れる覇気はアナザーキバの比ではない

—————

同時刻、逢魔王国の中にあるガルル、バツシャー、ドツガの部屋

「っ！」「ねえ……コレって」

人間態のドツガとバツシャーの背がビクッと動き、ガルルは冷静だが少し昔を思い出したのか不機嫌になる

「ハルトの奴…まさか」

—————

その身に宿るのは数多の種族を絶滅させた王の鎧
滅させる 種の繁栄の為に邪魔する物は絶

闇の鎧

『ダーク……キバ』

アナザーダークキバ 顕現

「さあ…絶滅タイムだ！」

アリ退治と化け狐

16話

前回 原初の悪魔召喚、アナザーダークキバ変身！

「さあ絶滅タイムだ」

そう言ったアナザーダークキバは足元にキバの紋章を召喚してアリヤミー達に叩きつける

これこそあの過去キングが使った最強のハメ技である その紋章に囚われたものの最期は

「!!!」
「!!!」

言うまでもなく爆散した

「まだまだあー！」

そして今度はアリヤミーの頭上にキバの紋章を落とし動きを止める彼等の体がステンドグラスのようになったのを見計らい指を鳴らすと見事に碎け散ったのであった

「ま、こんなもんよ」

『ドヤ顔してる場合か？まだまだ来るぞ』

「大丈夫」

まだまだいるアリヤミーの大群を見たアナザーダークキバは足元に現れた紋章の中からある剣を取り出したのであった

それはファンガイアの王のみが持つを許される剣である

「ザンバットソード」

だが

「あ、あれ！ザンバットバットがない!!」

あの制御装置になつているコウモリが鏢になつていない初期のザンバットソードであつた

「あれ？暴走しない？」

ザンバットソードつて認めた相手じゃないと暴走する危険があるのでは？と首を傾げていると

『ま、お前さんなら使いこなせるって判断されたんだろうな』

「そんなもん？つかザンバットソードに力的なものを吸い取られてるような気が……」

『ザンバットバットがないとお前さんのライフエナジーを吸い取つて力にするみたいだな』

「え？それ何て呪いの剣？……けど何で俺普通にしてられてんの？普通なら俺一瞬で干物だよな？」

何て恐ろしい機能を搭載してんだ！と頭を抱えるが

『そりやお前が不死鳥だったりするからだろ』

「あ？………あ」

合点がいったのであった

アナザーファルシオンとフェニックスファントム

両者に宿る不死の力…いや無尽蔵の生命力と言うべきそれがザンバットソードの吸収を相殺していると言う事だろうな

『無限に等しい生命力を食らう魔剣…消えない命を吸いながら切れ味や威力が掛け算式に上がっていくぞ』

「それなんてチート仕様？」

『だが喜んででもいられんぞ、ザンバットソードの吸収力に相殺される形でお前自身の不死性は失われている致命傷は確実な死だと思え』

「やれやれ…それが生き物のあるべき形だろうにつくづく化け物じみてる……な！」

そう言いながら無造作に振り回したザンバットソードの一閃は射線に入っていたも

のをバターののように両断したのであった

これには周りもだが本人が一番驚いていた

「……………マジ？」

『愚か者めお前の理不尽な生命力を食らう魔剣だぞ！威力が可笑しいのは当たり前だ』

「誰が予想出来るよ！こんな威力!!」

「!!!」

「つと…」

そう叫んだと同時にアリヤミー達の脅威対象が俺に更新されたようで一斉に襲い掛かってきたがアナザードークキバは空いている片腕でアリヤミーの1匹の頭を驚掴むと全力で巣に目掛けて投擲したのであった

「アナザーバイスに言われたからな…人間の尺度で戦うなって、だからよ少し怪人ぽく戦わせて貰うぜ」

音速に匹敵するそれは、アリヤミーの体を削りながら激突すると

「ドカン！」

巣から大きな爆破が起こった

「さあーて……そろそろ出てこいよ女王さんよおケリつけようぜ？」

その巣から出てきたのは巨大なアリのお化けとでも言うべきヤミー、あれが女王蟻で間違い無いな

「何故だ……」

「あ？」

喋れるか……こりや驚きでもないなヤミーは会話できる奴が殆どだしなと肩をすくめると

「何故！愛しき我が子達をそんなに簡単に殺せるのだ!!この悪魔め!!」

愛する者を奪われた怨嗟の聲が周りに響く、聞けば心を痛める悲痛さを感じる声音で話しかけるが

「敵だからだけど？」

何当たり前の事言ってるんだ？とハルトは無慈悲に一蹴した、別の場所で戦っていたテスタロッサ達も

「そんなの知りませんわ」

「知らん」「知らないよね」

と同じく彼女達からすれば弱肉強食が常、それ故に強者には礼儀を払うが ハルトだけ
けは違う

「それに弱者の声なんて誰が拾い上げるんだよ」

思い出されるは妹に蹂躪されるだけであつた

忌まわしき過去 あの日、その時に辞めて、助けてと何度周りに叫んだか声に出した
か分からない

しかし誰も聞かないし届かない

結局弱い奴の声なんて誰も拾い上げない

だから、そんな声を拾い上げれる王様になる、俺みたいな悲しい者が現れないように

だが

「それは俺が守ると決めた者達だけだから…お前はそこに入っていないだけ」
守る者を決めたからこそ、その領域を犯してくる輩は皆…敵だ

「俺達の敵は必ず絶滅させる！それがライダーの王でも世界の破壊者でもだ！」

外敵は排除するとザンバットソードを構えて挑発すると

「おのれええええええ!!」

怒りに任せて突貫してくる女王アリヤミーである、流石と言うべきか他の個体と違い
パワーもスピードも段違いだ文字通り目にも止まらぬ速さだったろう

だが

「やっぱ怒りは視野を狭めるよね」

「っ！か、体が!!」

女王アリヤミーは自分の体の動きが異常なまでに抑制され遅くなっていることに気づいたのであった

「流石だなカレラ、1着おめでどう」

気配を感じたので背中越しに話す

「気づいたか流石は我が君」

そこに現れたのは少し服装がボロボロになっている以外は無傷のカレラが重力崩壊の応用で相手に重力負荷を与えて動きを抑えたので彼女を見て女王アリヤミーは驚愕しながら

「な、何故だ我が子達は！」

「決まってるだろう？塵殺してきた」

「おまえええええええ！」

激昂して生き残ってる個体全てがカレラに襲い掛かるが

「ははは！何だまだ遊んでくれるのか？」

『キルバス』

「では付き合ってもらおうぞ！」

カレラはアナザーキルバスに変身して生き残った個体の一掃し始めた

「ねえ余所見してて良いの？」

「っ！」

言い終わる頃には間合いに入っていたのもあり

「んじゃ……皆さんの力お借りします！」

すると何処から共なく音楽が流れたのであった

—————

場所は変わり逢魔王国

その一室ではガルル、ドツガ、バッシャーの3人が暇つぶしにポーカーをしていたが

突然聞こえた音楽にガルルは楽しそうな顔をして

「あつちの空気でも吸いに行くかあ」

「えゝ行つちやうの？」

「ズルい……次狼だけ……」

「悪いな早い者勝ちだ」

と不適に笑うとガルルは自身の爪を研ぐ動きをするなり彫像モードとなり自らを呼んだ者の手元へと向かうのであった

—————

そうしてガルルの彫像をアナザーダークキバが手に持つと曲刀　ガルルセイバーへと変形したのであった

「行きますよガルルさん！」

『ああ……それと約束、忘れるな』

それは彼等が力を貸してくれる理由でもあった

「分かつてるよアナザーデレンライナーで過去に行つてウルフェン、マーマン、フランケンシュタインの三族は全員、俺が責任持つて逢魔王国に迎え入れる…だけど一族達の説得は任せますよ?」

『任せておけ』

彼等の願いを叶える事だが

「いつか他の種族も迎えたいなあ…よし…んじや行きますか!」

ザンバットソードと二刀流で女王アリヤミーを切り付ける、すれ違い様に斬撃を浴びせると膝をついて倒れた

「ぐ、ぐああ…ま、まだまだ!」

と地面を強く叩いて粉塵を上げると地中に潜つて逃げようとしたので
「逃すかよ」

地面にキバの紋章を表すと、その拘束力は地中に及ぶと射程にいた女王アリヤミーの
声が聞こえた

「お、あそこか」

居場所が割れば此方のもの、モグラ叩きと洒落込もうかと思つてたらだ

『…………』

溜息が聞こえたので手を止める

「どした次狼さん？」

『その紋章には嫌な思い出があつてな』

「へ？……あー」

「そーいやああの3人つて過去キングに紋章でハメ技されてたなあ…そりゃトラウマになるなと少し苦笑する

「んじゃ2人目行つてみよう」

今度鳴るのはかなり低い管楽器のような音

それを聞いた力 ドツガはやったと喜んだ顔で彫像になつて移動した

「えー！…2人だけズルい!!」

バツシャーは露骨に不満な態度であつたのは言うまでもない

そんな事も知らないアナザーダークキバはガルルセイバーを投げ、ザンバットソード

を腰に納刀すると現れたドツガハンマーを両手で持ち構えた

「つしやあ!!」

行くぞ!と構えたのだが

『……………アレ』

「だよなあ……」

本当に根深いトラウマのようだ……あの技使えるの控えようかな

「と、取り敢えず……よいしょっ……」

ドツガハンマーで地面を強く叩くとモグラ叩きの容量で女王アリヤミーが飛び出てきた

「そーりやつさー!!」

現れた女王アリヤミーの腹目掛けてドツガハンマーを殴りつけると上空に弾き飛ばす

「はあ!」

キバの紋章で今度は上空で拘束した

「んじゃ3人目!!」

今度は軽快な音楽が流れると

「やっと呼ばれた！」

ドツガハンマーを投げ、緑色の彫像が飛んできて掴み取るとバツシャーマグナムになる狙いを済ませて高圧水弾を女王アリヤミーにぶつけて地面に落下させたが

『うわあ……』

「もうそのリアクション良いから……さてこれで終わりにするか」

「や、やめろ!!私を倒せば私の子が制御を失い暴れる事になるぞ！」

「へえ〜」

そりゃ怖いな、けど

「お終い、破滅の炎！」

「滅びなさい、死の祝福」

「ではな、重力崩壊！」

同時に起こった大爆発と怪しい光による攻撃で生き残っていたアリヤミー達はセルメダルの山へと帰るのであった

「ふう……終わったぞ我が君！」

「ええ」

「楽しかったよ！ありがとー！」

ウルティマのだけ妙にデジャブるセリフだな

「頼みの綱も切れたようだな？じゃあトドメ行くけど良い？」

「っ！た、頼む！辞めてくれ！」

必死の嘆願で悪いけど

「答えは聞いてない」

『WAKE UP 2』

すると周囲の世界は紅い満月が照らす夜に変わるのを見て高く飛び上がると

「はあ!」

「ガアアアアアアアアアア!」

そのまま急降下キックを叩き込む、女王アリヤミーは地面に倒れその足にはキバの紋章が浮かび爆散したのであった

残るは夥しい量のセルメダルのみ、それを

「つしや!大量大量」

バースがユニットで回収していたので取り敢えず

「……………」

キバの紋章でバースを拘束して手元に引き寄せた

「な、何すんだよ！」

怒っている所、悪いが胸ぐら掴んで持ち上げると仮面で見えないがそれはもう良い笑顔で話す

「今回のセルメダルの取り分は9対1だよな？」

さて取り分の話と行こうかと笑顔で話す

「は、はあ！ふざけんよ！」

「当然だ俺達が連中を殆ど殲滅したようなものだ取り分なら妥当だろう、総取りしないだけ情けだと思え…嫌だつてなら」

ザンバットソードを肩に担いでチラチラ見せるのであったがバースは諦められる訳もなく交渉に入る

「今宵のザンバットソードは血に飢えてるから何人か斬り捨ててやろうか？」

「っ！」

『こ、これが噂の棍棒外交か』

ー失礼な武力を背景に交渉してるだけだよー

『それを棍棒外交というのだ、お前はテスタロッサから交渉のイロハを覚えてもらえ』

ーはーいー

と不貞腐れるとバースは違う意味で捉えたようで

「……………取り分80」

「やだ90」

「75」

「90」

と話していると変身解除した3人が近づいてくる

「何話してるのだ？」

「どうやらこのメダルの取り分を話してるようですね」

「全部じゃないの？変なの」

「何か理由があるようですね」

「はあ…」

2人が話しているとカレラは少し不機嫌そうな顔で近くの瓦礫に腰掛けた

「数だけか…アツサリ終わってつまらんね」

「そう？結構暴れて楽しかったよね」

「ええハルト様の好意は嬉しいですね」

「それもそうだな、我が君が頼ってくれたのだからな」

と談笑していたが

「60だこれ以上はない！」

「ふはははははは！」

そう言うとアナザーダークキバは徐に取り出したハンカチを振ると中から現れたフリップを見せた。するとそこには

60%と書かれていたのであった

「イエエエエエイ！6割分取ったぜ！」

「つあああ！アंकと社長の取り分の所か！」

「そこに気づけばもつと早く終わったのにな」

交渉成立とアナザーダークキバはバースを解放、2人は変身解除して軽く伸びをする

「3人とも来てくれてありがとうだな」

「気にするな我が君、それよりもだ」

「うん」

「あそこで見ている輩はどうしたら良い？」

「ん？………ん!? 誰か見てたのか!」

カレラが指を向けた先を凝視してみると誰かいた、奏者達は合流しているので

「攻「ふん!」か、カレラ!？」

「やったぞ我が君!」

ハルトの指示が分かっていたかのようにカレラは魔力弾で攻撃したのであった、満面の笑みで

「カレラ、ハルトの言う事最後まで聞かないとダメじゃん」

「そ、そうだが敵ならば先に攻撃せねばならんだろう?」

「敵ならね、味方だったらどうするのよ?」

「…むむむ」

「大丈夫だよカレラ、失敗しても俺なら直せるからさ失敗は成長の種だよ」

肩に手を置き頷くハルトにアナザーディケイドはポツリと

『それならお前の種はいつ発芽するのだろうか』

それは知らん!とドヤ顔で言いながらカレラが攻撃した先に近づくと錬金術で防御していたノエルがいたのであった

「はあ………はあ………不意打ちとは恐れいりましたよ魔王」

何だノエルか

「3人ともく遠慮なくやって良いぞ」

良心痛まないし、寧ろやってしまえと

「ま、待ちなさい！何故僕がここに居るのか気にならないのですか!？」

「知らんし興味ない、ドヤ顔で勝ち誇りにきたなら残念ながら失敗だな序でに此処で終われ」

そう言つてハルトが視線を3人に向けると、髪で隠れて見えないがその瞳は赤く光つているように見える

…これは怖いな敵ながら同情するよ

「あ、アリヤミーが作り出したセルメダルは全て我々が頂きます！チフォージュ・シャトーで呪いの旋律を奏でる為にね！」

ナツキの話では、ウエル博士というネフィリムと合体した人間を動力にするらしいが

セルメダルの影響で歴史の乖離があるようだな、けど

「それ聞いて俺が見逃すと思う?」

あそこはキャロルの家であり俺達が笑い合った大事な場所を取り戻すとアナザー
ウオツチを構えたハルトは

「ハルト!」

「つ!ちい!」

慌ててバツクステップを取ると先程いた場所に大砲のような一撃が放たれた粉塵が
上がるとハルトは手刀で粉塵を切り捨てると馴染みのある顔が立っていた

「久しぶりですね魔王」

「クジヨーか…今日はお前が相手してくれるのか?」

「ハルト様」

「アレがネオなんとかと言う奴か」

「ネオタイムジャツカードよカレラ」

「わ、分かっている!我が君の敵だとな」

と談笑していたがクジヨーはカレラを見るなり憎悪に満ちた顔に変わる

「その金髪…貴女はあの時の!」

「ん?スマナイが何処かで会ったか?」

そう言えばカレラはニアミスしてたなあ

「いまだに忘れませんよ…同胞をブラックホールで消し飛ばしたのを！」

「ど、何処の場所での話だ？」

「こ…心当たりがありすぎて分からないのか…ここまで来たら感動するよ」

「カレラほいね」

「ウルティマ、貴女も人のことを言えませんか？」

「な、何の事かサツパリだよ」

とやりとりをしていたが

「っ！」

「つー訳で仇敵はアンタを歯牙にもかけてないが？」

「だとしても仇は打たせてもらいます！」

「ノエルと黒騎士の3人ですか？」

それなら数は此方が多いが？

「いいえ4人ですよ」

そう話すと現れたのは顔馴染みだった

「トーマか…」

「ハルト…今度こそ俺が倒す」

『ゲイツ…リバイブ』

「まあそんな所ですよ…変身」

『スクランブル！ダイモン！』

仮面ライダーダイモンとアナザーゲイツリバイブか取り敢えずアナザーライダーは無効化出来るから実際の敵はダイモンだけだな

臨戦態勢というのもあり3人娘もアナザーウオッチを構え直す、ハルトもアナザーウオッチを構えた時にアナザーデイケイドから話しかけられた

『ハルト、新入りが来たぞ』

「悪いな、今は力を試してる場合じゃない最初から最強フォームで行くぞ」

『新しい主役ライダーだが？』

『本当にムカつく奴だがな』

『そう言うなよバッファ…おい魔王、俺を使え望みがあるんだろ？その願い叶えてやる俺の望みを叶える序でにな』

アナザーバッファの知り合いか…それなら問題ないが偉く自信満々だな、お前の名前

は？

『ギーツ、アナザーギーツだ』

それと同時にアナザーウオッチに刻まれるのは割れた狐の面のような顔だった

「しようがない、ハツタリだったらタダじゃ置かないぜ」

ハルトはアナザーウオッチを押すと通常のアナザライダーと同じエネルギーを纏い変身する

その姿は割れた狐の面をした戦士、その割れた左半分の亀裂部分から植物の蔦が侵食しているような外見をしているが頭部以外は黒いシンプルな外見をしている

人を化かす白狐

『ギーツ』

アナザーギーツ・エントリーレイズフォーム

「ん？……あれ？」

自分の体をペタペタ触ってみるが何も無い、凄いシンプルななで思わず

「な、なあ特殊装備とかないの？」

アナザーバッファは最初からゾンビフォームで専用武器があったが？と尋ねると

『それは探すんだ』

「は？」

少し落ち着いて周りを見渡すとエグゼイドのエンジーアイテムのように何やら箱が沢山配置されている

「ま、まさか…アイテムを探す所から始めろと!!」

『その分強力だ、保証してやる』

『おいハルト、ギーツに化かされてるぞ俺に変われ！俺は最初からゾンビフォームだ！』
と対抗心からアナザーバッファは自分に変われと薦める、そうしたいけどな

「騙されるなら最後まで付き合ってやるよアナザーギーツ！弱い武器なら承知しないからな！」

『おい！』

『安心しな』

と話し合いが終わり構えるも

「何ですか、その弱そうな外見のアナザライダーは？それで勝てると思われているなら舐められたものですね！」

「ふっ!」

ダイモンの攻撃をアナザーギーツは後ろに下がると追撃で更に肉薄し始めた
「クジヨーさん!」

アナザーリバイブは援護に動こうとしたが、邪魔はさせないと3人娘が動いた
「つと、キミの相手はボク達だよ」

「ハルト様の邪魔はさせませんわ」

「お前はアリよりも骨があれば良いがな」

「邪魔をするなあ!」【剛烈】

アナザーリバイブ剛烈になりアナザーパスワードノコで斬りつけようとしたが

「つと!危ない……なあ!」

『ベイル』

ウルティマはアナザーベイルに変身して回避するとリバイブ剛烈を殴り飛ばし近くの瓦礫に吹き飛ばした

「がつ!」

「君でしょ?ハルを虐めてた奴は」

殴り飛ばすと怒りに満ちた声音で話しかける、仮に配下がいれば震え上がる程の恐怖

を覚える、それを当てられたアナザーリバイブであるが本人からすれば言いがかり（そう思ってるだけ）に対して

「い……イジメ……そんな事してない！」

全力で否定するが

「じゃあ妹越しに見た記憶は何だろうね？」

「妹……まさかハルカの様子がおかしかったのは!!」

アナザーリバイブは思い当たる節があつた最愛の人が突然狂つた原因が……まさかこの子なのかと

「あくハルからさ殺して言うまで痛めつけろって言われたんだよ、だけどきアイツ壊れなくてさく情報抜くだけにして放置しといたの殺さなかつただけ慈悲と違ってくれないと困るよねくあははははは！」

アナザーベイルは自慢気に笑いながら話すとアナザーリバイブは激昂しながら

「お前エエエエ!!」【疾風】

アナザーリバイブ疾風に変身すると超高速で移動するが

「ぎーんねん」

アナザーベイルの動体視力…もとい異世界において最強の一角に数えられるウルティマと元が人間のトーマとでは基本スペック、もとい持つて生まれたものの差がありすぎた。アナザリバイブの速度は目を見張るものであったが彼女からすれば取るに足らないと言わんばかりに首を掴んで持ち上げた

「がっ！」

そのまま前後に強く揺さぶりアナザリバイブは脳震盪を起こしたように体がフラフラしているのを見てアナザーベイルは煽る

「ねえねえどんな気持ち？大事な人の仇なのに手も足も出ないで一方的に痛ぶられるのってどんな気持ち？」

「き……きさまのせい……え……」

「責任転嫁しないでよ、半分自滅したような感じなんだよあの女…それもこれもみーんなハルのものを取ろうとしたからだからさ」

「そ……そんな……と……」

「ないって君達はずっとそうだったみたいだね」

ウルティマが見たのは無自覚の悪意 それに晒され続けたハルトの過去だ

「昔のボクなら好物な悲劇なんだけどき、ハルがやられるのを見るのはあまり気分が良くないね…ハルはボクのお気に入りなんだから手を出して良いのはボクだけだよ」

それだけ言うと手を離れたと同時にアナザーベイルは必殺技を発動する

『ベイリンググインパクト』

「そらそらそらそらそらー！」

アナザーベイルは魔力を帯びた拳のラッシュを浴びせまくる、直接の拳打も入るがそれ以上に魔力が時間差で流れこんでくる…つまり一度の打撃で二度の衝撃が生まれているのだ

剛烈ならまだしもスピード型の疾風では耐えられない

「おしまいー！」

「がああ…っ！」

ラストの拳打で華麗に吹き飛ばされたアナザーリバイブは壁に叩きつけられると変身解除される

「さて…後は記憶から情報でも取ろうかな、ハルが喜びそうな話があると良いんだけど」
トドメを刺そうとした時にカレラに止められた

「待ちたまえ」

「……………何さカレラ？」

露骨に不機嫌な顔をしながら尋ねると

「お前だけ戦うのは如何なものだ？我が君の敵は私達の敵だろうか？」

「ボクが倒したんだからカレラは邪魔しないでよね」

「それはお前が抜け駆けしたからだろう！」

「アリ連中倒す時に抜け駆けした君に言われたくないね！」

と2人は周りのことなどお構いなしに力を解放していく、それは周りの生物が危険信号を感じて逃げ出したくなるほどの圧力、それを流せたのは一部の強者だけである

ウルティマとカレラが揉めてる中、テストロツサはコツソリとトーマに近づくと2人もそれに気づいたようで

「テストロツサ！何をしている!!」

「あら？任務遂行ですわ」

「ちよつとボクが倒したんだから2人は邪魔しないでよ！」

「邪魔をしているのはどっちだ！」

「でしたら喧嘩せずに三等分はどうかしら？ハルト様は1人で圧倒するより協力して倒したと言えばきつと褒めて貰えるでしょう」

「……………」

カレラとウルティマは閉口して考えるハルトならどっちを喜ぶかと その結果

「仕方ない」「だね」

と納得したのであった

「では捕縛と…今のうちに…私はノエル？とやらを狙いましょうかハルト様の喜ぶ顔が
楽しみですわ」

とテスタロッツサは恍惚な顔のまま目線をハルト達に向けるとそのまま踵を返して大
将首を狙いに行くのであった

「……………」

その頃 ダイモンとアナザーギーツのバトルはダイモン優勢、ギーツ劣勢となってい
た。そもそものカタログスペックが低いアナザーギーツではダイモンに決定打は与え
られない為 アナザーギーツはアイテムの位置どりを確認しながらの立ち回りを余儀
なくされていたが、もう我慢出来んとアナザーギーツは近くに落ちていた箱を開けると

「……………何これ？」

手のひらサイズの蛇口のようなものが出てきた

『ウォーターバックルか…試してみな』

「ああ念願の武器だ使わせて貰うぜ」

それをドライバーのような部分に装填してみると

『アームド・ウォーター』

するとアナザーギーツの右手に蛇口の意匠がある水鉄砲が装備されたのだ

「おおお！水系武器か…ヒーハックガンみたいな感じか！」

フオーゼに出た武器のような外見と性能を期待してアナザーギーツは水鉄砲をダイヤモンドに放った

「くらえ!!」

だが勢いが良かったのは最初だけで後は園芸で使うようなホースと同じ水量の水しか出なかった

「……………へ？」

「何がしたいんですかアナタは！」

『オクトパスエッジ』

油断した隙を突かれダイヤモンドから必殺技を受けてしまうアナザーギーツは起き上が

るなり思わずキレた

「んだコレ！本当にただの水鉄砲じゃねえか！」

『それハズレバツクルだからな』

アナザーバツファの言葉に脊髄反射で答えた

「だろうな！おい！こんな武器しかないのか！」

『そんな訳ないだろう？他の箱も開けてみる強いバツクルが入ってるから』

「最初から装備させろよ」

『それじゃゲームが面白くないだろ？チートなんて誰も喜ばないぜ』

「まったく…ん？よし…新しいアイテム来い！」

アナザーギーツはウォーターバツクルを外して新しい箱を開けようとしたが

「させるか！」

とダイヤモンドが走り出した流石にこの距離では新しいアイテムを手に入れられない…ならば！この水鉄砲で迎え撃つしかない！

「すい…どう…どう…かーん！」

水鉄砲を逆に持ち蛇口が上にくるようにしてダイヤモンド目掛けてバットののように振り

回した

「ゴフツ！」

すると自身の速度も上乘せされた事もありダイヤモンドが見事に錐揉み回転しながら落下したのを見て

「な……なんて強力な武器なんだ！」

見事に掌を返したのであった

『そうだ使い方は自由だ』

「っしや今のうちに」

とアナザーギーツが新しい箱を開けてみると中にあつたのはウォーターと同じように小さなバツクルだった

「……………盾？まあ良いか」

アナザーフォーゼのモジュールに似てるなあと思いつながらも水鉄砲よりは役立つと思ひ装備しダイヤモンドに近接戦を挑んだのであった

『アームド・シールド』

「はあ！」

それを見ていたナツキ達

「水鉄砲を鈍器にするとは何て発想力！」

「いやそれであの破壊力はおかしいだろ！」

と翼が感心する傍らでツツコミを入れるクリス

「けどよお、この箱に武器が入ってるならアタシらでも使えんじゃねえのか？」

そのクリスの一言で奏者とマツハ達が箱を集め開けていくが入っているのはアナザーギーツが当てた シールド、ウオーター

他にはプロペラ、ドリル、ハンマー、クローなど当人の適正的に微妙な武器ばかりである

い
ドリルバツクルは響と相性は良さそうだが、ドライバーが無いと使えないのは仕方ない

「そうだな、この箱を開ければハルトの援護にもなる…これだ！」

ふと何かを思つて近くに合つた箱を開けてみると

「……………え？」

そこには毛皮を半分くらい剥がされた生々しいタヌキの顔が刻まれたアナザー
ウオッチが入っていた

手裏剣があしらわれた大型のバツクルと共に

悪い狐とニンジャの狸

ナツキが開けた箱には、ハルトしか持ち得ない筈のアナザーウオッチと対応してるだろ。うバツクルが収まっていた

「ええ！何コレ！…けどアナザーウオッチとこのバツクルなら！」

ナツキはアナザーウオッチを手取る

「ハルト！コレを使え！」

ハルトなら力を最大に引き出せる思いとアナザーウオッチを投げた…までは良かったのだが

「あれ？ちよつ…！のわ！」

何故か投げたアナザーウォッチが方向転換してナツキの体に取り憑いた

「な、ナツキさん？」

響が心配そうな顔で見るがいつもの笑顔で答える

「だ、大丈夫！皆は下がって俺がやる…いける？…よし変身！」

するとナツキの体が紫のオーラと共に別の姿に変異する、その姿はまるで毛皮を剥がされたタヌキのような顔をしている体はアナザーギーツと同じく黒い装甲だ

『タイクーン』

誰かの為に尽くす忍

アナザータイクーン・エントリーレイズ

「えええええ！」

「ナツキなのか…」「嘘だろオイ！」

周りが驚く中、ナツキだけは通常通りに動く

「よし…これなら…えーと…こうか」

アナザータイクーンは箱に入っていた手裏剣型のバックルをドライバーに装填した
するとアナザーバッファと同じように背中から錆びたアームが伸び、アナザータイ
クーンの体と無理矢理繋げる

『ニンジャ…』

その姿はボロボロの忍び装束を纏う緑の影

アナザータイクーン・シノビフオーム 誕生

変身するなり忍者特有のスピーディーな動きでダイモンに接近しライダーキックを
叩き込んだのであった

「ふう…：よしー！」

「え？アナザーライダー…：何でナツキに!?!しかも俺より良さげなバックル付けてるだ
と！」

思わず身を乗り出すがウオッチの意思は素直に答えた

『タイクーンが選んだんだ、何度も何度も死を繰り返してでも守りたい人の為という強い思いと共鳴したみたいだな』

な、なるほど…死を繰り返しても響やエルフナインを守ろうとする想いに応えたって訳かと感心しているが

「そ、そうか…って他の連中も入ったのかよ！まさか凄い武器って」

アナザーライダーがいるの！と驚くが

『いやそいつ等はいない』

「そっか…けどな」

取り敢えずアナザータイクーンを後ろから蹴飛ばす

「てっ！…何すんだよ！」

「つせえ！戦いの邪魔すんな！」

「何だよ助けたのに態度悪いな！」

「加勢なんて誰が頼んだよ！」

言い合いをしていると

「貴方達！真面目にやる気があるのですか！」

「うるさい（つせえ）!!」

『TACTICAL SLASH』

『シールド・ストライク』

アナザーギーツは盾で殴り、アナザータイクーンは必殺技でダイヤモンドを両断して弾き飛ばしたが、そんな事気づかない2人は言い合いを辞めない

「大体なんでアナザーライダーに変身してんだよ！仮面ライダーになれるのによ！ハイブリッドとか俺のアイデンティティを壊す気か！」

「そんなん知るか！お前に渡そうとしたらウオッチが俺の方に来たんだよ！」

「え？何それ怖っ…投げたら戻ってくるとかレンゲルじゃねえんだから…」

思わずドン引きしたハルトであるが

「アナザーライダーに変身するのが嫌なら俺が引き取ろうか？剥がせる力あるからな」
ハルトのスキル、王の勅令で強引に剥がそうとも考えはしたが

『魔王、タイクーンの意思を汲んでくれ』

とアナザーギーツに言われたので

「わーったよ、アナザータイクーンも好きにすれば良いさ、けど今はダイヤモンド倒すのに

手え貸せ」

「何だ結局、俺の力貸して欲しいんじゃない」

仮面の下ではニヤけてるだろうから気に入らないと一蹴する

「んな訳あるかアナザータイクーンに頼んだんだ！断じてお前じゃねえ！」

「はいはい、そう言う事にしといてやるよ」

「この野郎…後で覚えておけ背中を撃つてやる」

取り敢えず言い合いも終わり

「待たせたなクジヨー、そろそろ終わりにするか」

「そもそもの話、お前を倒せば並行世界大戦は終わらないからな！」

2人は構えると

「良いでしょう、そんなに消えたいのならば私の手で消して差し上げます!!」

とダイヤモンドが走り出すとアナザーギーツとタイクーンも同時に動くがアナザーギーツは高速で回れ右をして走り出す

「よしアナザータイクーン…任せた」

「え？ちよつ！どこ行くんだよ！」

「ばつきやろう！強いバツクル探しだ！この水鉄砲と盾じゃ決定打にならん！」

「ええ…もう！」

アナザータイクーンはアナザーデュアラードでダイヤモンドと高速移動しながら戦っている

そう言つて離れたアナザーギーツは手当たり次第にバツクルの入った箱を開けていく

「持つてる！持つてる！持つてる！」

その度に中身を回収し箱は捨てている、ええい！

「何でこんなダブるのさ！しかもちっちゃいバツクルしか出ないし！」

『お前の運がないからだろう？』

「そ、そんな事ない！」

『そう言うならアレを見てみる』

「アレ？」

そう言われたのでアナザータイクーンの方に視線を向けると

「あ、あつた！」

そこ手には開けただろ箱から取り出された銃のようなバツクルであった

『何かあるか?』

「……………理不尽」

『まあお前さん女運と俺達に会ったので運とか使い切った感じあるよな』

「…かもな」

『ハーレム許容してる段階でお前を慕う女は寛容そのものだろう? 終わったら家族サービスしてやれよ』

「そっか…そうだな終わったら…ってまだ家族じゃねえよ!」

『将来的には計画してるのだな』

「この野郎…じゃなかったナツキ!」

実はこの機能はアナザータイクーンにある運氣増大と言う固有能力から派生しているとはまだ知らなかったのだ

「え? うん…ハルト! コレ使って!」

アナザータイクーンはそう言うなり先程の銃のバツクルを投げ渡してくれたのだ

「…勢いで貰ったけど…強いのか？」

マジマジと銃のバツクル マグナムバツクルを見ながら聴くと強いと返答があったが

「本当かよ」

シールドとウォーターという前歴がある為、疑り深くなってるハルトであったが

『マグナムは俺と相性が良いバツクルだ能力は保証するもつかい化かされてくれ』

「はあ…そういうなら化かされてやる！」

『いや素直か！』

ドライバーにマグナムバツクルを装填するとアナザータイクーン、バッファと同じように錆びたアームが形成した装甲をアナザーギーツに押し付けた

『マグナム』

アナザーギーツ・マグナムフォームである

『マグナムシューター40X』

その手にはいかにもヒーロー的なハンドガン型の武器が現れたのだ

「やーつとカツコ良くなったな」

『そうだろう、じゃあやるか』

強い武器が手に入れば此方のものダイモンなんて怖くない！

「ああ、こつからはハイライトだ！」

消化試合と言わんばかりに銃を構える

ダイヤモンドを射撃しながら接近するとそのまま蹴りを叩き込み吹き飛ばした

「待たせたな」

「へえ似合つてて良いじゃん」

「つたく俺が見つけてたかったよマグナム…つと」

アナザーギーツはそう呟くとガンズピンしながら的確にダイヤモンドに射撃を当てると
いうとんでも技を使っていた

「え！今のどうやったの！」

「簡単だよガンズピンしながら引鉄引くだけ」

「それが至難の業なんだよ!!」

分かんないかな？と首を傾げながら話す

「結構分かりやすく話したが？」

「え？これが噂に聞くバラルの呪詛!？」

「ここまで相互理解を阻むとは恐るべしとナツキは戦慄していたが

『そんな訳あるか！この男の説明が絶望的に下手なだけだ！』

「そんな訳あるかよ」

アナザーディケイドのツツコミで苦笑するアナザータイクーンだが

「あれ？けど仮面ライダーとか特撮勧める時って結構分かりやすく話してくれるよな？」

この男、何故か人に勧める時の説明はめちやくちや分かりやすいのだ、理由？そんなあの錬金術師達が勧められてオーズ見てバイブルにしているの見ればわかるだろよ！

「え？興味持った事だから勧める人にも好きになって欲しいし」

フアンなら布教は当然と首肯すると

「それを興味ない説明にも応用してくれ！」

「えー面倒くさいなあ…」

「本当にこの人って王様なの？」

アナザータイクーンが首を傾げていると

「聞き捨てならないね」

「そうだなタヌキ擬き」

「っ！」

突如感じた怒りの覇気により身震いしながら後ろを見ると怒りに震えているカレラとウルティマがいた

「ねえ、誰の主が王様に見えないって？」

「消し飛ばされたいようだな貴様」

すると気配に気づいたアナザーギーツが目線を向ける

「どしたの2人とも…あれ…テストタロツサは？」

とアナザーギーツが尋ねると2人は赫怒した

「聞いてくれ我が君！テストタロツサなら抜け駆けして大将首を狙いに行きおった！」

「ボク達には手柄三等分とか言ってたのに狡いと思わないハルト!!」

「え…ノエル狙いに行つたの!!マジか…けどテストタロツサなら大丈夫じゃね？」

内政から外交、果ては戦闘など何でもござれのテストタロツサはハルトの信頼を見事に勝ち得ていた…いやまあ留守にする事が多いので色々迷惑かけてる後ろめたさはあるが

「スゲエ…ウオズより右腕してるわ」

本当テストタロツサ様々である、同時刻逢魔にいたウオズに謎の悪寒が走るのであつた

「えー！そこは怒る場面でしょ！」

「そうだ！我等とてトーマを捕虜にしたのだぞ！」

「それもボクがやったただけだね！カレラは何もしてないじゃん！」

「え？そりゃ凄いい手柄だな2人ともありがとな、3人には仕事後の褒美も考えないと…さて後はあのアホに取り憑いてる力を抜けばOKだな」

とブランクウオツチ片手に呟いた

原典ジオウでのアナザージオウ 飛流もやっていたがレジエンドライダーが変身能力やライダーとしての記憶を無くしてもウオツチに力の核を残せたように アナザーライダーの契約者もその力の残滓のようなものを宿している

アナザージオウはその残滓をウオツチに取り込み己の力に変えられる唯一のアナザーライダーなのだ そもそも

「アレが勇者や救世主とかマジないわー」

勇者や救世主が魔王への抑止となるものならば、俺を抑止出来る奴など

「あのバカくらいだろうしな」

今絶賛、ガクブルしてる忍者のタヌキである

「ま、俺はレジェンドライダーの皆様以外に負けてやる気はサラサラないがな」
はははーと笑うが相棒は苦言を呈する

『誰にも負けるなよ相棒』

「わーってる…今は俺だけの命じゃないからな」

背負うものが増えたのは喜ぶべきなのだろうなと思う

当時 ハルトは知らなかったが転スラ世界で魔王となる者には対なる存在 勇者と
因果を結ぶらしいが彼がそれを知るのは少し未来の話
そしてダイモンは動揺した

「ま、まさかアナザーゲイツを倒したのですか!」

対魔王の切り札があっさり敗れた事に驚いているが

「え？あんなの敵じゃないよ」

「そうだな少し早くて硬いだけだ」

「そのオリジナルにアナザーライダー達は、かなり追い詰められたんだけど……
本味方で良かったよと安堵してると

「でしたらコレなんてどうでしょう！」

とダイモンはレバーを3回操作して必殺技を放つ

『オオムカデエッジ』

その手にオオムカデ型のエネルギーを放ったが

「鬱陶しいなあ」

『ベイル：ベイリングインパクト！』

ウルティマはアナザーベイルになるとカブトムシ型のエネルギーが相殺した

「ば、バカな！」

「じゃあボクが倒すね」

「待てウルティマ、アイツは俺達がやる長い因縁もある事だからな」

「んー分かった、じゃあボク達はテストロッサの所に行くね」

2人は離れたのを確認した

「頼んだ……んじやお前は終わりだ、合わせろタヌキ」

「俺はタヌキじゃない！」

『ニンジャ・ストライク』

アナザータイクーンが分身の術で別れると分身が大量に手裏剣を投げつける何発かは命中し怯んだダイモンは反撃に転じるが

『マグナム……アナザー』

マグナムシューターのライフルモードに変化させアナザーマグナムバツクルを装填しシリンドー部分を回転させエネルギーを溜め込む

「いや思い切りタヌキだろよ！」

狙いは完璧、外しなどしない

「BANG」

『TACTICAL BLAST』

紫色の光線がダイモンを狙うがオオムカデ型のエネルギーが高速で展開盾代わりと

なり防ぐと同時にマグナムバツクルを腰に戻してトリガーを引くと高く飛び上がる

「く……まだだあー！」

『トライキメラエツジ』

両足にエネルギーを溜め込んで必殺技を発動しようとしたが

「いいや……」

そう前置きすると隣にはアナザータイクーンが現れる

「これで終わりだあー！」

『ニンジャ（マグナム） ストライク!!』

アナザータイクーンは手裏剣にアナザーギーツは銃弾型エネルギーを帯びた両者のアナザーキツクはダイモンの三体のエネルギーを破壊し彼の胸部に命中し彼を遠くに吹き飛ばした

アナザーギーツとアナザータイクーンが拳を合わせたと同時に

「ぐ………ガアアアアア！」

ダイモンは爆散した、しかし壊れたのは使っていたキメラドライバーのみ彼の体は重

症であるが生きていた

「く……つ……次こそは！ 貴方を倒して……！」

オーロラカーテンを使い逃走を図ろうとしたクジヨーだが

『ダイケイド』

その音声と共にオーロラカーテンは碎け散った

「っー！」

その方向にはアナザーダイケイドが立っており右手を前に突き出していた

「お前に次なんてない、ここで終わらせる」

ゆっくり歩き出すがオーロラカーテンを使いショットカットして目の前に現れたのだ

「っ……がつ!!」

クジヨーの首を鷲掴んで持ち上げる

「これで」

終わりと手に力を入れようとしたその時

「っー！」

突然感じた力の波動、これはまさか！と目線を向けた先にはノエルの周りに浮き上がる大量のセルとコアメダルの数々、そして相對しているのは逢魔三強である

「何だ今のは」

「えー…はい…っハルト！大変だチフォージュ・シャトーが起動してる！」

アナザータイクーンは通信で得た情報に驚く

「はあ!?マジで！ツーことはノエルの奴がセルメダル総取りしたのか！」

こりや不味いことになった、取り敢えず

「あの野郎…盗人にはこうだ！」

トドメは後だノエルを止める為にクジヨーを投槍の要領で投げつけた

「うおおおおい！黒幕だろアレ！捕縛しろよ！」

「最もだけどよチフォージュ・シャトーが起動したとなったら大分不味いんだよ」

世界を壊す歌が今 歌われようとしていたが

チフォージュ・シャトーは起動せずに沈黙した

「やはり呪いの旋律を浴びた個体とオートスコアラの生贄が必要ですか…」
「余所見してる暇はありませんの？」

冷静に分析していたノエル目掛けてテストロツサが貫手を行うが黒騎士が盾となり防ぐ迎撃の一閃を振る事で間合いが生まれたのだ

「貴女は僕より強いですが僕達には敵いませんよ」

「あら？ そう言うのならさっさと見せて頂けませんか？ 私待つのは嫌いなので」

「ええ見せてあげましょう、僕の本気を…ん？」

何かが投げられたのでノエルは錬金術で防御すると、それはボロボロになったクジューであった。コレを見て形成を悟ったのか

「それは次回ですね、では」

「逃すと思いますか？」

「いいえ貴女は追いかけられませんよ」

「何？」

「僕達が全力で逃げますので」

とノエルが呼び出したのは大きなオーロラカーテンである、チフォージュ・シャトールを丸ごと転移させようとしたので

アナザーデイケイドが出したオーロラカーテンが三人娘を回収すると同時にチ

フォージュシヤトーは消えたのであった

これで一応の解決はなった

「ほいっと」

その後、変身解除したハルトはアナザージオウIIの力で吹き飛ばした町を戻す

「よし、帰るぞ」

「ハルト様……この度は」

とテストタロツサが申し訳無さそうな顔をしているが

「気にすんなよ俺が敵の力量を誤っただけだ……全部俺の責任だから自責は許さんよ」

「そ、そのような事は！」

「それに俺が抜け駆け、単独行動云々で人に色々言えると思う？」

頬を指で搔きながら気まずい顔のまま目線を逸らすハルトにアナザライダー達

も同意する

『本当にな』

『それでよく説教されてるからナ』

『お前が言うな…』

「そう言うこと、それにテストタロツサ達は俺のいない逢魔の留守を守ってくれてんだ感謝こそアレ責める気はないよ」

「っ！」

「けどさあ信賞必罰だから何かしらのお仕置きはいるんじゃないの？」

「そうだな流石に周りに示しがつかんぞ我が君」

「んじゃこの後、紅茶淹れてくれる？お茶菓子は俺が作るからさ全員分頼むよ」

「はい！お任せを」

「お前たちもそれで良いよな？」

「んーハルが決めたなら良いよボクはお菓子食べたいし」

「そうだな…はあ…我が君来たぞ」

「ん？…あく何だ奏者供」

そこにいるのはすごい顔になってる面々である

「アナザライダーよその3人は何者なのだ、街を一撃で消し飛ばすなど人間の出来る事では」

「ボク達が…人間？」「ほお…」「……………」

やばい我が家の核弾頭がキレそうだ、特に話さないテストタロツサが怖い！くらえ！秘

技話題逸らし！

「へ、へえくそれ言っちゃう？ フィーネが大砲で月を吹き飛ばしたけどく」

「つ…それは…そうだが彼女達は…お前の仲間なのか」

「そうとも逢魔王国が誇る最強の3人さ」

自慢しながらカラカラ笑うも釘を刺すのを忘れない

「下手に刺激しない方がよいよ彼女達俺より沸点低いから…ノエルが滅ぼす前に世界滅ぼされても知らないよ」

多分キャロルが殺されてたら俺が実行してたろうし

「つ…だがあの街を消し飛ばした一撃について私達は聞きたい事が「おい」な、なんだ？」

ウルティマが鬱陶しそうな顔で話す

「ハルが折角警告したのに口挟んでんじやないよ」

「ウルティマ」

「何？」

「この辺は今更だから無視しておけ言っても聞かんよ俺達の話が聞きたいならナツキカエルフナインを通せじゃないとテメエらと話なんて誰がするかよ…帰るぞ皆、つたくせ

ルメダル取れなかったし骨折り損だよ」

戦果はこの害虫になったトーマダだけか割に合わないな

「あ、待つてくれハルト！」

「…んだよ3人に何かしたいなら断るぞ、てか何かしてみる俺がこの世界を滅ぼす」

「いやいや何もしないよ」

「この世界の人間が俺にした仕打ちを考えれば妥当だろ」

「その何割かはお前の過失もあるからな」

「俺に過失なんてあるか？ 特殊部隊の連中やらライブの件は正当なものだろうに」

「魔女狩りの加害者始末したり、山吹き飛ばしたりは？」

「ん？ 助けた人間が不幸になるのが許せなかっただけ、というよりお前達がしなかった事を変わりにしてあげたんだから感謝してほしいくらいだよ被害者救済なんてそれこそ国の仕事だろうあろう事かヘイトを向けられてるのに放置とか…マジないわー」

「その優しさをもう少しだけこの世界にいる普通の人も分けてあげて！」

「やだ、俺の優しさや愛を向ける先はもう決めてるから分ける訳ないじゃん…それに善意の行動を悪意で返されたんだから二度と出すものか」

「そう言えば…ハルト様が対談を用意したのに卑劣にも手勢を差し向けた連中というのは」

「そこいる奴等の上層部だな対した事なかったけど」

「…ハルト様、少し用事がありますので席を外して宜しいでしょうか？」

会話の流れから下手人に報復しようとしていると周りは理解していたが、ハルトはコ
ンビニ行くような感覚で

「ん？良いよ」

あつさり許可した

「いや、ちよつ！流石にそれは困つ」

「待てまた抜け駆けかテストタロツサ！許さん私も行くぞ！」

「ねえハル、ボク達さこの世界で少しお出かけしたいなあ見た事ないもの沢山あるしい
く」

「そうか気をつけて行つといで…お小遣いだよ」

「やった！ありがとう！」

「どういたしまして、ご飯前には帰って来てね」

「うん！」

「いや止めろよ!!…一応だけど殺されたら困るんだって！」

あの事件後、関係者は更迭され一応の仕置きを受けてはいるが非公式故に厳罰に課せ
られなかったのもあり逆恨みで魔王に報復しようと噂もあるが役人が殺されては国も

引つ込みがつかないとナツキは止めに入るが

「あらあら私達に取つてハルト様を害なす虫ケラが存在する方が困りますわ」

テスタロツサの言葉に2人もうんうんと頷く

「それにさテロリスト認定したのもそつちでしょ？ 冤罪に近いとは言え汚名を被せられた身にもなつて欲しいよ一応はルナアタック解決とか協力したのにさ」

「そ、それは…」

ナツキとしてもあの事件での影響として響を助ける方法を知り得る機会を妨害した事もあるしSONGSの面々からしてもこれまでの行動から思う所があるので放置したいが建前上は無視できないと構える

「それに暗殺、襲撃の首謀者を放置するのは逢魔王国の代表としても許せる立場ではないカレラも言つてたが示しがつかないんだよ」

これも建前、別に今更どうでも良いが再発するならば排除する、頼むのも3人に任せるのが正解だな

「それは確定したから覆らないけど…話つて？」

「ま、まあ一応警告はしとこ…あーいやアナザータイクーンからお前につてコレを協力

出来ないお詫びにつて」

と出されたのはバイクのハンドルのようなバツクルだ：何とか仮面ライダーア
クセルのドライバ―ぼい

「ふーん：…んじやセルメダルの代わりつて事で貰つとくよ」

取り敢えず貰えるものは貰うとしようとして手に取ると

『やるなタイクーン』

―何だよ知つてるのかこのバツクルの事？―

『ああブーストバツクルつて言つて性能を底上げするバツクルだ：性能が10倍くらい
変わるぞ』

―とんでもねえチート武器じゃねえか！ありがとうアナザータイクーン！―

取り敢えずこのバツクルの性能に免じて情報は提供せんでもないな

「取り敢えずノエルが世界を滅ぼすのを止めるにはオートスコアラ―をイグナイト無し
で倒す事、これに尽きる縛り有りだけど頑張れ」

「いやちよつ！無理ゲーじゃんオートスコアラ―が強いのはお前の責任もあるんだから
手伝えよ！」

「へいへーい、んじやオートスコアラ―には俺の所の精鋭を送るわ：…んじやな」

そう言い転移した

この数分後、対談襲撃の首謀者達は見ても無惨な屍となり発見されるのだが、その事実を知る者は少ない　p s　魂は捕食されずに碎かれましたとさ

ハルト宅

「ただいまー！」

「帰ったかハルト」

キャロルが出迎えてくれた：丁度良いな取り敢えずアイアンクローをかまして持ち上げる

「いたたた！い、いきなり何をやる！」

「アリヤミーさ超数が多いんだけど！」

その一言で察したキャロルは痛む頭を抑えながら

「てて：：そうだろうさアリヤミーならオレの計画では滅びの歌を歌わせるチフオージュシャトーに人を近寄せない為の雑兵だからな、増殖能力に長けた個体にしたからな女王を倒さん限り死なんぞ」

「お陰で大変だったよ…本当、逢魔から3人呼ぶ事になったしさ」

「逢魔…3人…ウオズ達か？」

「んや…あくそつかキャロルは初めましてだったな」

と話してると魔法陣が現れるキャロルは警戒して身構えるがハルトは優しく手で止めた

「大丈夫、おかえり3人とも」

「今戻りましたハルト様」

「ただいまハル！」

「戻ったぞ！」

出迎えるハルトにキャロルはムツとした顔だが千冬達も合流し

「カレラか久しぶりだな」

「ああそうだな…千冬、この後良ければ一戦どうだ？」

「良いだろう私も試したい技もあるしな」

以外なのか普通なのか千冬とカレラは以外と馬が合うようだ、まあカレラって以外と彼女なりの騎士道精神があるからな…でないとアゲーラとか粛清されるだろうし

「久しぶりだねテストアロッサ」

「ええ錫音…良ければですが貴女の魔法について聞きたい事が」

「勿論、何でも聞いてよ」

と話してるがハルトはマイペースに

「紹介するよ彼女達は逢魔で司法や外交を諸々担当してもらってるテストタロツサ、カレラ、ウルティマ、3人とも彼女はキャロル」

紹介するとキャロルは

「初めましてだな、ハルトという悪魔なのだな？話に聞いてるぞオレがキャロル・マールス・デインハイム、ハルトの正妻だ！」

「他の挨拶を選んで貰えませんか!？」

戦線布告と言わんばかりの挨拶に反応したのはウルティマであった

「キャロル…キャロル…あ、思い出したよハルの事をこつ酷く振った奴じゃん」

「っ！そ、それはだな…」

追い打ちをかけるようにカレラも

「そう言えばその件で我が君が酷く心を痛めていたな」

「そ、それは…」

トドメはテストタロツサである

「そんな方が正妻なんて…ありえないですわね、まだ錫音さんの方が正妻に見えますよ」

「……………は、ハルト」

少し涙目のキャロルを可愛いと思いつつ抱きつく彼女の頭を撫でるハルトは3人に

「はいはい…彼女とは和解はしたから皆、これから仲良くしてもらえると嬉しいなあ
コレが終わつたら逢魔で一緒に暮らすわけだし」

「それよりさハル、今日はボクが一番頑張ったよね！敵捕まえたよ役立つたよね！」

「そうだな…捕虜の件は大手柄だ、皆とは別にお礼しないとな…俺にできる範囲なら何でも言ってくれ」

「じゃあさー！」

そして報告も兼ねてのお茶会

「ふう…美味しいなあ」

「ふふ…お褒めに預かりましてありがとうございます」

「いやいや…ありがとう毎日飲みたいよ…」

『何かジジイみたいだなハルト!』

「お前からアナザーバイスにジープの刑：いやライダーマシンで引き回しの刑だー
何か罰ゲームがレベルアップしてるう!?てかナチュラルに死刑宣告しないでよお!』

『残念だな、これも目立ちすぎたのが悪い』

『出る杭は打たれるつとね!アディオス!』

『逃すなー!』

と大捕物が始まり静かになったのでお茶菓子を摘みながらだが大体の報告は出来た
ノエルがチフォージュシャトーを起動させ最終段階寸前の事、トーマを捕虜にした事
などだ

「アナザーギーツが参入してくれて層が厚くなったのが嬉しいけど敵がな」

色々心配だと言うとカレラは笑いながら

「気にするでない我が君、あのような城など私の核撃魔法で一発だとも」

頼もしい、本来ならそうしたい所だが

「出来ればチフォージュシャトーは無傷で奪還したい」

「その理由を聞いても良いでしょうか?」

「うん、あの施設にはキャロルが作った逢魔を始め俺が旅した世界を繋ぐポータルゲートがあるんだ」

「それがどうしたの?」

と俺の顎の下から聞こえるウルティマの声にテストロツサは成る程と頷く、因みに褒美はコレとの事だが

「……………」

今にも殺しそうなキャロルの目が怖い! ハイライトが消えてますよ!!

「やはりあの時の予感当たっていたようだな…」

ハルトは目を合わせられない恐怖に襲われているとテストロツサも空気も読んで話を逸らしてくれた

「つ、つまり逢魔王国の利益的にもチフォージュシャトーは抑えてないとダメという事ですね」

「そう言う事、最悪はポータルゲートの部分だけでもかな」

「えーと、ごめんわかりやすく話してもらえると助かるんだけど」

錫音が恐る恐る手を上げるとテストロツサは説明してくれた

逢魔王国は浮遊島である故に遠方の国と貿易可能な商船を兼ねている唯一の国家だ、そして主な産業は

「異世界の物品を仕入れて売るのも産業ですからね、幸いと言いますか彼処は転移や転生者が多い世界なので需要は高いですから」

殊更香料や酒関係は多少高くても飛ぶように売れるし娯楽関係も導入を検討している、実際にテンペストにはその手の品が喰るほど納品予定でもある、リムルさんが割と娯楽や食に寛容なのがあるがたい

「つまりポータルが壊れたら仕入れられないという事か」

「いえ効率が落ちるといふ所でしようか…かなり収入などの面を見直す必要がありますわ」

「そう言う事、俺のオーロラカーテンじゃ大量の物品を通せないし安定性に問題がある…それ以前にチフォージュシヤトーには俺達の思い出が詰まってる場所だからな
そこが一番の理由である

「でしたら私の死の祝福なら無傷での奪還が可能ですわね」

「けどスタロツサの魔法だとオートスコアラ？だっけそれは倒せないよね？」

「ああ連中は機械人形だから、魂の概念はない」

とキャロルが補足した事で別の作戦に切り替えるが結局のところ

「連中の動き次第なんだよなあ〜」

何というか防御側ってその辺不利なんだよなあと思ってしまう…さてお茶会も終わったが

「ウルティマ、ちよつと片付けたいんだけど流石に皆に任せて放置は出来ないよ」

「やだ」

「ええ…」

動いてくれないと殺気を放っている彼女が

「そろそろ離れるウルティマ、見ろハルトが嫌がつているだろ？」

動いた動いてしまった！と頭を抱える

「違うよ照れてるんだよ、ねえ〜ハル？」

わざとらしく抱きつくくと遂にキャロルがキレた

「ハルだと…おい！何故愛称で呼ばれている！」

「いや、まあ…その…」

「そう呼べって言ったからだよねえ」

「まあ…そうだな…って逢魔の街を彷徨く間って話じゃなかったか？」

「ははは、細かい事気にしちやダメだよ」

「ほお：なら何故、オレの特等席に座っているの何か？」

「うん、というより君のじゃないよね？」

「何を言っているそこはオレの特等席と決まっているさつさと退いて貰おう、この新参者が」

「あのさ千冬達の時にも思ったけど何で最初に拳を交えようとすんだよ！もつと話し合おうよー！」

「お前が言うな！」

「ハルって割と口より先に手が出るよね」

「だねえく以外とハル君そんな所あるよ」

『悪魔に言われてしまったな』

『ぐうの音も出ねえナ』

「という訳だ、さつさと退いて貰おう」

ダウルダブラを纏うキャロルに対してウルティマはハルトの膝から降りると

「ここで一回序列は決めとかないとね？」

アナザーウオッチを構えて臨戦態勢のウルティマ：ま、不味い！

「良いだろう：「ちよつと待ったー！」ハルト？」

「喧嘩ダメ絶対、それと序列とかないから俺は皆平等に大好きだからな」
「ですがハルト様も対外的にも正妻は決めないと不味いのでは？」
「テストタロツサー！それは今決めなくて良いことだから！」
と止めるが手遅れだった

「ほらテストタロツサーもそう言ってるし、やろうか？」

「良いだろう…来い！」

「何やら面白そうではないか…千冬、私達も混ざるぞ！」

「ああ…その座に座るのは1人で良い」

「うわあく楽しそうだねくけどハル君の正妻は私だあ！」

「あらあら…別に興味はありませんがこんなに強者が集まっているのに戦わないのは勿体無いですわね」

「テストタロツサーまで!？」

なんてこつたい！と頭を抱えたと同時に結界が展開され開戦となった

これが後の歴史で大惨事正妻戦争と呼ばれる不毛な戦いの始まりであった

清算と楽しみ

さて大惨事正妻戦争だが例の如く泥沼の引き分けて終わった…やはり

「この戦いに正義はない」

何処かのゲームマスターみたいな台詞を言うが

『お前が決めれば良いだけでは？』

「そう言ってもなあ」

と頬杖を突きながら呟くハルトはノエルの動きまで暇を持て余していたのだが
「あ……そろそろ時間か」

徐に立ち上がるとハルトはオーロラカーテンを潜ったのであった

そこは逢魔王国にある監獄だ、罪人を放り込む所なのだが今は少し違う

「よお、気分はどうだい？」

「は……ハルトおおおー！」

ウルティマが捕まえた、この男を拘束している場所である

「き、きさまの…貴様のせいでええええ！」

俺見て狂犬よろしく睨みつけるトーマを見て思わず呟く

「なんかスゲエ恨まれてるけどさ」

どこ吹く風で流している、だって

「それ逆恨みじゃん」

俺の何が悪いの？と聞いてみる

「何だと！ハルカはお前の為を思ってる！」

「違うな、あのバカは自分に都合の良い子が好きなのだ」

「そ、そんなこと…」

「まあ、お前さんは異性の意味で好きなんだろうな見てたら分かるけどよ、アイツ見捨て

たこと恨んでたぞ?」

とブロックポットから再生されたのはルシファー事件の折にハルカが言っていたセリフの数々である

「怖いねえ女の嫉妬つてのは…いやあいつの場合は逆恨みか醜いよね」

「こ、こんなの嘘だ!」

「本当なんだよなあ…つてやつぱりか」

『ああ見事に俺たちの副作用が出ているな』

何だろう、これが俺のI Fと思うと目も当てられないな…アナザーライダーの契約者は副作用で精神に異常をきたすらしい

「飛流さんもあんな感じだったんだろなあ」

アナザーライダーの先輩を彷彿とする姿だが俺のやる事は変わらないので

「これで正気に戻れば良いけど…さ!」

「がはあ…」

そう言うのとブランクウオッチを思い切り腹に殴りつけた

『何故力強くやった?普通に添えるだけで良かったんだが…』

「今までの憂さ晴らし!」

ハルカもだがこの男にも一応の恨みはあるのでな!と念話で伝えた

『そ、そうか…』

すると

「うわああああああ!!」

体から紫のエネルギーが抜けていきブランクウォッチに回収されていくとウォッチはアナザーウォッチとなった

『ゲイツ』『ゲイツリバイブ』

「コレでよし…つと」

なつたのは二つのアナザーウォッチを懐にしまい

「はい朝ですよー！起きてー！」

手に持ち替えたフライパンをアナザー響鬼の金棒で叩いてカンカンカン！と大きな音を出すのがトーマは目を覚まさないのです

「寝てんのか？なあ相棒アナザー轟鬼とかアナザー斬鬼とか来ていない？」

『一応聞くが何故だ？』

「起きないコイツに音撃斬・雷電激震を使えば起きるかなあって、清めの音だしあの心が浄化されればと思つて」

『いても使わせるかあ！』

『一応断るがアレは体内に清めの音をぶつける技だぞ！生身の人間に使つてみる！一瞬

で消し飛ぶわ!』

『清めの音でお前の心を浄化してやろうか!』

「辞めて!浄化されたら王道な主人公になってしまっただろう!」

『何処から来るのだその高い自己評価!!』

「普段の行い? いい子ちゃんとかやってらんねえけど」

へラへラあくどい笑みを浮かべるハルトに

『だとしたらお前の場合極悪だぞ』

「んじゃ悪らしく…氷水を被せるか?」

『いくら恨みがあるからと…されて当然の仕打ちをされたからと言ってやって良いこと

悪いことがあるぞ!』

「わーっただよ待ちますよ」

相棒に説教されたので起きるまで待つ事にした椅子に腰掛けた数秒後

「起きない…ねえやつぱり電撃浴びせない?」

『さつきまでの話忘れたノカ!?!』

『今度はキャロルに説教させるぞ』

「はい…んじやさ暇だから話相手なつてよ」

『そうか…ならばこの時間を利用して…イカれた新メンバー紹介タイムだあ!』

『『『うおおおおお！』』』』

「おー、これは嬉しいな最近色々あったから助かるよ…って、やっぱ新メンバーもイカれてんのか」

『この主あつての俺達だな』

「なあアナザー鎧武、それどう言う意味だ？」

『主従は似るって事だ！』

「それ遠回しにお前たちもイカれてるって意味だけど？」

『気にせず行こう！新メンバー！アナザーエターナル！』

『さあ地獄を楽しみな！』

「お前達はそれで良いのか!? してお前は一番目に来るような奴じゃねえよ！」

マジでイカれた新メンバーじゃねえか! つか何で俺のメッセージ受けたんです

!?

「それで…どんな事が出来るんですか？」

『それは使つてのお楽しみだな』

凄いな早く変身してみたいと思つてしまう

『まだまだ行くぞ、続いて二番手！』

「まだいるのか…もう腹一杯なんだけど」

『アナザーカイザだ』

『邪魔なんだよ俺を好きにならない奴等は！』

「うおおい！集団の輪が乱れそうな奴だけど俺はカイザ好きです！友達のサイドバツ
シャーにはいつもお世話になっていきます！」

『そうか…それなら良い』

「けどアナザーファイズがメインかな…怪我で出れないとか別だけど」

アクセルやブラスターフォームになれるし

『なら…望み通りにしてやる！』

『おい待てカイザ！何モタモタしながら武器構えてんだよ！』

「模擬戦は良いけど殺し合いとかしようものなら王の勅令使うので気をつけてね」

『……ちっ』

『まあ戦闘時の連携は凄いい安定感があるからな』

「そうか宜しく頼りにしてるよ」

『さて三番目だな』

しかし

「なんつーか、最初の23人から本当増えたよな」

あの時も多くて驚いたが今ではもつと多いアナザライダーが俺の所に集まってい

るんだよなと笑う…俺の精神世界どうなってんだ？

『そうだな…寧ろ今は昔と違って俺達全員殺伐とされているぞ…主に誰が出番を貰えるかでな！』

「もうちよい別の理由で殺伐としてくれないかなあ！過去の因縁とかそんなんで！！あ、三番の人どうぞー」

『アナザーレンゲル、リモートでアナザライダー達の封印を解く事が出来ます』

「そうか封印を……………ん？」

おい待て今なんて言った？この新メンバー

「もっかい言ってくれる？」

『リモートで封印が解ける』

……………おい

「お前達！素晴らしい人材を逃すなあー！！確保しろ！！」

何てこった！…とんでもない人材が入ってきたじゃないか！

「そうか皆が解放可能か…これでもうハブラレンゲルとは呼ばれないな」

『けど俺だけ実体化出来ない…』

「……………」

『……………』

何とも言えない沈黙が周りを包むのであったが

「う……………ううん…」

「あ、起きそうだわ…アナザーレンゲル、是非即戦力で働いて貰いたいけど大丈夫？」

『は、はい！』

『けど俺達の封印解いたらオーマジオウ飛んできそうだな…』

「大丈夫じゃね？リモートのラウズカードって対象の封印を解いて操る能力だし、そもそも封印そのものが消える訳じゃないんだろ俺が操る、制御できてるうちはオーマジオウさんも介入はしなないと思うけどなあ」

ようは一時的に元の姿に戻るコナ○みたいなものだろうと思う

「んじや残りの新メンバーは後で紹介頼むな」

トーマが目を覚ましたのでハルトは座ったまま話しかける

「お目覚めかい？」

「っ！ハルトか…」

先程と違い憑き物が取れたような顔をしているが油断はできないと身構えている
「凄い頭がスツキリしてるんだが心当たりはないか？」

「多分、これだな」

抜き出したアナザーウォッチを見せると

「……本当に暴走するんだな」

「そこが分からん」

「え？」

ハルトのトーマを擁護する発言に驚いてるが

「ゲイツはジオウと対なる存在だ、魔王と救世主だからな……それはアナザーでも変わらんと思ってるのにだジオウの俺には異常がないのにゲイツのお前に異常があるのはおかしいんだよ」

忌々しいがなと吐き捨てる、まあトーマの耐性が俺以下なら仕方ないのだがなと考えてたらだ

『ビンゴだな……やっぱりアナザーウォッチに細工してやがる』

アナザーWの報告で確信に変わった

「やっぱりか」

『アナザーツクヨミのウオッチも同じ可能性があるな』

「んじやあの妹も同じようにしないとな」

でなければ俺もトーマみたいになつてたのだから

『使い続ける度に力の依存や思考の硬直が起こるようになってやがった』

「それ解除出来るか？」

『もう済んでる』

頼れる相棒に流石と笑い答えるとトーマに告げた

「どうやらネオタイムジャッカーはお前とハルカを利用する為に改悪したウオッチを渡したみたいだな」

「そ、そんな…クジヨーさんが…」

「別にお前の事は知った事じゃないけどよ、やっぱりネオタイムジャッカーは滅ぼした方が良いな…よくも俺の仲間を…」

「っ！」

ハルトの握る拳に力が入るのをアナザライダー達は見逃さなかった彼は怒つてると

同時刻では逢魔王国の民は謎の悪寒に襲われていたのであった

「自分の意志で従ってるなら仕方ないと思ったが細工して言う事聞かせてるなんて……クジョーの奴……許さん……っ！」

アナザークライダー達は知っているハルトは身内に対して異常なまでに優しいし見限らない

それに自分達を分け隔てなく受け入れ人の身を辞めた事からも分かるし、今回のキャロルの一件でも同じである

『相棒……』

「ハルト、お前……」

トーマは何か言いたそうだが

「あ、それと全部終わったらお前とあのアホも同じように力抜き取って、アナザークイズの力で記憶消して元の世界に送り返す、大人しく俺が帰るまで待ってろ」

「……………」

「じゃあな」

「ま、待ってくれ!!」

外に出ようとした時、トーマに止められた

「んだよ」

「……………すまなかった」

小さいが心からの謝罪をしたトーマを見てハルトは小さく肩を震わせるが

「は？今更何？」

感情なんてない絶対零度の瞳と色を無くした虹彩のハルトから放たれるスキル 魔王
王覇気により怖気付くもトーマは

「許されない事をしたのは分かる……………本当にお前目線で見たら俺は最悪の人間だよな」

「どうしたの急に気持ち悪」

「アナザーゲイツになってた時の言動やハルカの態度を見て思い直してみたんだ……………お前の言う通り本当に逆恨みだった……………」

「……………」

それだけ聴くとハルトはさっさと外に出ていった

「バツカじゃねえの、言うのが遅すぎだろ」

それだけしか出なかった、もう何と申うか呆れたとしか言えない

すると出入り口で

「お久しぶりです我が魔王」

「お久々魔王ちゃん」

「ウオズ達！何話ぶりだ？」

久しぶりの再会に喜ぶハルトだがウオズ達はやれやれと言う顔だが今までにない真面目な顔で臣下の礼を取り

「メタな話は辞めて頂きたい…それよりも事情はテストタロツサ嬢から聞きました是非次の戦にはテストタロツサ達ではなく我々に出陣を命じて下さい」

「え？」

「そーそーフィーニスちゃんばっかり狡いよ魔王ちゃん」

「アリヤミーの一件やこれまでの件もだが何故我々ではなく新参者のテストタロツサ嬢達や滅亡迅雷を招聘したのですかハルト様」

「いや適正を考えたらとしか…ってジョウゲン、カゲンどうしたよスンゴイやる気じゃ

ん

「当然です新参者がアリヤミー殲滅、アナザーゲイツ捕縛と武功を挙げたとなれば我が魔王を最初期から支えている我等も負けてはいられませんので」

「別にウルティマちゃんに『昔から一緒なだけで対した手柄をあげてないのに偉そうにふんぞり帰つてる古参共は後ろで大人しくしてなよ、これからはボク達の時代だからさ』つて中指立てて笑顔で煽られたから行きたい訳じゃないよ、あのガキが……」

「その後、カレラに『はつきり言い過ぎだぞウルティマ』と言われたのも理由ではない……おのれ、未来の奥方でなければ……」

「え？ウルティマとカレラつて影でそんな感じなの!？」

ウルティマ腹黒!……まあ俺も似たような所あるしな

「我々を焚き付ける意図はあると思いますがテストタロツサ嬢も『火急の際に呼ばれましたから第一秘書は私ですから貴方は後ろで祝うだけにしてくださいね』と煽られた事なども理由ではありません!ええ断じて私情ではありませんとも!」

この様子を見て

「お前等……がつつり私情じゃねえか!」

『私情で動きがちなお前が言うな!!』

「そ、それは…ごめん」

取り敢えず三人娘には説教が必要だと思ふ

「ですが我等とて逢魔最古参、その意地があります！是非出陣を命じてください！」

「テスタロツサ達は逢魔内部の要、戦闘の切り札だ…それにノエルは必ずお前達の対策もしてる…けどウオズはキャロルの一件で迷惑をかけたのもあるが…」

渋るハルトにウオズは

「それは私の落ち度でもありません…それに我が魔王は我等がいない事を良い事に色々と暴れられたようで…そんなに元気でしたら帰還後の公務は3倍に…」

「行くぞ野郎共！俺について来い!!」

「「はっ!!」」

『王が脅しに屈してどうする』

『仕方ねエヨ、ウオズ達は付き合ひ長いから弱味も握られてるからな』

『まあ今回の件はハルトの我儘が発端だから逆らえんか』

——うっせえよ!!——

—————

そして三人娘には皆、仲良くと説教をした後ウオズ達を伴い帰るとだ

「む？ウオズか久しぶりだな」

「キャロル嬢、お久しぶりです」

「ハルトから聞いたぞ済まなかったな…色々」と

「いえ寧ろ我が魔王をお止めできずに申し訳ありませんでした」

「気にするな、お前が隠蔽しててもハルトなら来ただろう…そ、それにハルトの気持ちも

再確認出来たからヨシとする…」

「ありがとうございます」

取り敢えず状況の整理だな

今

SONGS

奏者とバース（アナザータイクーン）マツハ、ヘルブロスx2つて感じか
ノエル陣営

オーズ未来コンボ、ポセイドン？アマゾンシグマ？つて感じか

「クジヨールはどうしたのさ？」

「結構痛めつけたから回復には時間がかかると思う…攻め込むなら今だけど」

「それフラグじゃないか？」

「かも知れない」

—————

チフオージユシヤトール内部

そこには七つのボールを探す物語に出る回復ポットのようなものに入っているボロ
ボロのクジヨールがいた

「なあ本当にこんな胡散臭いので治んのか？」

代理で来たレックは複雑な顔をしていたが

「嫌なら抜き出しても構いませんよ……これでないともまあ重症なので命の補償は難しいですが」

ノエルは知る由もないが同じ状況だったハルトは風呂の浴槽に放り込まれテンペスト産のポーションで同じような回復してた事を

「……………大将、何で……」

「完全に初見殺しでしたよ、まあ彼も本調子で無かったのもあるでしょうが」

とノエルは右手を押しえながら話をするが内心では

（もう少し時間を稼げていれば……まあ良いでしょう、しかし彼女から消し飛ばされた右腕では補填せねばなりませんね）

あのテストタロツサとの戦いだが実をいうとノエル自身も劣勢だった黒騎士はウルティマとカレラを抑えていたのもありタイマンだったのだが結果として彼女との戦いで片腕を失う事となったのだ、寧ろ彼女の能力を考えたら片腕落ちで逃げたのは誇る事であるがノエルのプライドとしては許せるものではない

「魔王め……」

「しかしこの液体素晴らしい効能ですが何方の世界で手に入れたのです？」

ポッドに浸された液体について尋ねるとレックが答える

「ああ、それはなクジラ怪人の一族に伝わる秘薬を俺達の技術で解析して複製したものだ……まあオリジナルよりは効能は下がるんだがな」

「クジラ怪人……へえ世界は広いんですね」

「そうだな……次は俺が出る連中には借りがあるしな」

「ええお願いしますよ、オートスコアラも連れて行って下さい彼女達の役割もありますから僕は僕の役割を果たしましょう」

「あんがとよ」

全てはパパの命題の為に

—————

そしてウオズ達が合流してから平和な日が続いている

「平和だなあ……けど暑い」

「我が魔王、夏嫌いですからね」

「おう……エアコンの効いた部屋から外に出たくないんだよ」

ハルトが夏バテで倒れているとウオズが思いついたように

「でしたら息抜きで海やバーベキューに向かってはどうですか？」

「ウオズ、俺が外に出たくないと言ったのを忘れたかな？」

「なら怪談や肝試しなども」

「い、いや…それは辞めた方が良いんじゃないかな……」

ハルトは団扇を仰ぎながら視線を逸らす、

実を言うとハルトは怪談や肝試しなどホラー全般が大嫌いなのである。パニックなどは平気なのだが、ホラーに関しては映画やゲームですら触れたくない程で、その嫌いぶりは最愛である仮面ライダーにも適応されている程唯一の例外は仮面ライダーゴーストくらいであり

「ホラー要素なければ見たいんだよなあ…仮面ライダーTHE NEXT」

と呟いていたがウオズは素知らぬ顔で

「ですがこのまま部屋の中では娯楽など怪談くらいし「よし！外で何かするか！ウオズ皆を集めろ！」はっ！」

そして

会議室変わりのリビングではとんでもなく重い空気に支配されていた…このピリつきは感じた事のない程のものである

その内容とは

「行くなら海だよ！」

「いや山でバーベキューだ！」

「温泉街が良いですね」

どこに行くかの話し合いなのだが

「はあ……」

『何だ相棒、気乗りしないのか？』

「ああ……非常時なのに浮かれて良いのかなってな」

『珍しいな相棒が浮かれてないなんて』

『明日は影松の雨が降るな』

「いや……俺だつて色々考えてんだよ本当に」

『お前が考えるのは精々、夕飯の献立くらいだろ』

「んな訳あるか……はあ……」

『愚か者、王と言うのはこういう時こそ明るく振る舞い皆を鼓舞するものだぞ何事も切り替えだ』

「そういうものか…うーん…」

そうすると皆の目線がハルトに動いた

「では我が魔王に決めてもらいましょー！」

「そうだな皆の指揮に関わる」

「ん？」

「ハルト…行くなら海だろ！」

「いや山でバーベキューだよー！」

「温泉というのも悪くないだろ」

と皆が言うので

「そうだな海の見える山でバーベキューした後温泉入ろうか」

てんこ盛りといこうか

「そんな神の悪戯みたいな立地がありますか!!」

「なら探すか…アナザーW頼むわ」

『久しぶりだな任せろ』

後は…取り敢えずナツキのホットラインに繋ぐ

「もしもしオレオレ」

『詐欺なら間に合ってるけど…どうした？』

「おう海の見える山があつてバーベキューしたり温泉に入れる場所があつたら教えて」

『は？いや何の話』

「良いから答えろ！これは逢魔王国軍、夏の慰安旅行計画に關しての超重大案件だ！」

『い、いやそんな奇跡的な立地があるかあ！本当にお前悩んだからつててんこ盛りにしてんじゃねえよ！つーか現状考えろ旅行してる場合か！』

「え？息抜きも大事だろ？働くものの慰安も上に立つものの務めだ…それに色々迷惑かけてるからな」

『何でそこだけ現実的なんだよ！……はあ……バーベキューは出来るし温泉もあるが山はない場所なら知ってるぞ』

「そっか、山はないけど温泉とかはあるつてさ」

「と言うと仕方ないなとなりナツキから場所を聞き出す

『俺達と奏者も行く形だけで大丈夫か？』

「問題ないマキシナムハイパーサイクロンで吹き飛ばすから」

『問題しかねえんだよ！一緒に楽しむ発想はないのか！』

「なら邪魔にならないようにするか…」

『そうしてくれ頼む』

「おう、色々悪いな」

と電話を切りハルトはウオズに

「テストタロツサ達も呼んでこい、夏のイベントと行こうぜ！」

「はっ！」

そして楽しいだけでは終わらない夏の慰安旅行が幕を開けた

海のトラブルにはご注意を

前回のあらすじ

夏の慰安旅行だぜ！

とまあ息巻いてたのだが

「暑い……」

「やはり我が魔王には夏の暑さは敵でしたか」

「おう………：IS世界でも思ったが俺は夏は嫌い……そだ」

『ブリザード』

アナザールンゲルの力であるブリザードの力を微弱ながら解放して涼むことにした

「いやあ……快適、流石だ」

「相変わらずですな地味な応用力」

「それほどもあるな！」

「はあ……それで我が魔王はこれからどうされるので？」

「ん？バーベキューの仕込み皆食べたんだよな？」

手にはバーベキュー用の串を握っていた

「初めてなんだよな、串で焼くタイプは」

「いや我が魔王」

「分かつてるよ普通の焼肉タイプもあるから好きな方を選んでね」

「あの…泳ぎましよう、折角なのですから」

「戯け！俺が遊んだらお前達の食べるご飯がないだろうが!!」

とエプロンつけて準備に入ろうとしていたハルトを見てウオズは思わずツツコミを入れる

「あの我が魔王…慰安旅行の意味知ってますか？」

「俺が皆を労わるのが目的だろう分かつてるさ！」

やけに早口で話すのを見てウオズが尋ねる

「微妙に違うような気も…あの我が魔王？」

「分かつてる皆まで言うな普段迷惑しかかけてない、お前達に最大のもてなしをするのが今日の俺の仕事だ今日は思い切り羽を伸ばしてくれ！」

とドヤ顔で言うがウオズは何かを察したような顔で尋ねる

「あの…まさかと思えますが我が魔王泳げないとかではありませんよね？」
「っ！」

その話にジヨウゲン達も入ってくる

「いやいやウオズちゃん、泳げないとかないでしょ」

「ああハルト様が泳げないなど冗談が過ぎるぞ」

その言葉の雨霰にハルトの肩が小さく震えたのであった

「は…ははは…んじや俺は仕込みに戻るから！……ぐえ！」

「いや逃す訳ないでしょう」

一目散に逃げようとしたらウオズのマフラーに縛られたのであったがジヨウゲンと

カゲンはマジかと言う顔で見る

「え？嘘でしょ」「まさか…泳げないのか」

「体調面で夏バテしてたのもあるでしょうが…ああ…だから学園の臨海学校でも泳がなかったのですね」

「いやいや俺が泳げないとかあり得る訳ないじゃないですかあ…あの時は千冬の膝枕が気持ちよかったからだ泳げないとかではない！」

ハルトは手を振りながら否定すると両肩を掴まれてしまう

「あ、あれ？」

恐る恐る後ろを見ると

「そうかなら一緒に泳ごうじゃないかハルト」

「珍しく弱気だな…よし、お前の泳ぐ姿を見せてみる」

悪い意味で良い笑みの錫音とキャロルが力をかけていて外れない…ま、まずい

「い、いや…お、泳げるんだよ俺、ほらアナザークウガから教わった2000の技で古式泳法を学んだから泳げない訳ではない！」

「それで海を泳いだ事は？」

「ないけど、沈んだら助けてくれるビート板（エビルダイバー）がいるし大丈夫！」

「やはり泳げないのだろう！シャウタみたいな水中フォームが使えんのはライダーファン失格だぞ！」

「だ、大丈夫だから！その時は連中に丸投げるから！」

「御託は良いから早く泳ごうよ！」

「辞めろ！H A！N A！S E！」

とやりとりしていると

「来て早々何やってんだお前ら」

「お久しぶりです！皆さん！」

パラソルなど道具を持つナツキとエルフナイン達、そして奏者達がいたのであった

—————

浜辺ではある意味ピリピリした空気が流れていたのは最初のみであり今では水着となり思い思い日光浴や海水浴を楽しんでいる

「つてな感じだよ」

「ふーん…じゃあ、そのスイカ割り？つてのやろうかお前スイカね」

「へ？いやちよつと待て！俺の頭割つてどうする気だ！」

「え？君の悲鳴が聞きたいから」

「ハルト！この子可愛らしい外見して中身が悪魔みたいなんだけど！」

「悪魔だからな実際に…ウルティマく頭割つても良いけど俺が治せる範囲に抑えてくれよ」

「はーい！」

「いや、かち割るのを止めてくれ!!いや逢魔王国つてそんな殺伐してんの！」

「失敬なウルティマとカレラのお陰で治安はきちんと保たれているぞ！」

「それハルト含めた3人の力による恐怖政治なのでは？」

「そんな訳ないだろう逢魔は我が君の名の下で団結している、それ故に罪を犯すものもない」

「だから暇なんだよねえ、誰も犯罪してくれないしやつても外から来たつまらない奴だし捕まえて少し遊んだら壊れちゃうし」

「壊れた…え？ウルティマ今なんて…」

「あ、ハルト見て新しいアナザーライダーが飛んできたよ！」

「何！……っ！……め、目ガアアアアア!!」

ウルティマの言われた方向を見ると夏の強い日差しを直視してしまい悶絶する

「わ、我が君!?!」

『お前もお前で何をしている』

「ててて……あれ？何の話してたっけ？」

「えーと犯罪がないのは良い事だよねって話」

「そ、そうだったな」

「待て騙されてるぞ！」

「えと、その司法の番人が無実の人の頭かち割ろうとしてる件については」

「え？息抜きは大事だろ？」

「そうそうハルト良い事言うねえ、あ！千冬サタンサーベル貸してスイカ割るから」

「断る、これは私の愛刀だスイカ割りには使わせん」

「ちえ…んじゃハル、ザンバットソード貸して」

「ダメ、アレはファンガイアの王だけが持つ剣だからなウルティマには使えないし、スイカ割りには使わせないよ」

「えー！」

「けど変わりに良いものを上げよう、はい」

とハルトが渡したのは綺麗な長剣であった

「何これ？」

「又集団のグロンギがね、俺の武器につて作ってくれた剣だよ切れ味はお墨付き…前に巨大な蜘蛛に試したんだけど切られた事にさえ気づかなかった切れ味だよ」

グロンギの中で物作り…まあリントを殺める道具作成スキルを持つ職人集団手製の剣を渡した

「へえ…悪くないね」

「だろ？最近テンペストと協力してる奴がさカイジンさんやクロベエさんに負けないよ
うにつて切磋琢磨してるらしいんだよ」

「そうなんだ…じゃあ早速切れ味試しちやおうかな」

「ああ是非」

「い、いや息抜きで殺されてたまるかあ！」

各々が楽しんでいる中、視界にエルフラインとキャロルを捉えた何か話しているな…

――

キャロル side

「何をやっているのだ、あの馬鹿どもは」

彼女は冷めた目で最愛の人の茶番を眺め溜息を吐いていた

「キャロル、良かったですねハルトさんと仲直り出来て」

とピンク色の水着を着ているエルフラインは笑顔で白の水着を着ているキャロルと
話していた

「ふん！お前が余計な事をしなければオレの計画通りだったかな」

「そうですね…もしそうならハルトさんが今の世界を滅ぼしてたかもしれません

よ

「そんなもしもは興味がない……がありえんでもないか、あの寂しがり屋ならやりかねん」

「否定出来ないのがハルトさんですからね」

「伊達に魔王とは呼ばれてないさ」

というより実際やったらしい、エルフナインがナツキから又聞きした話しなのだが……メタ的にはシンフォギア原作のイグナイト初起動イベントでキャロルが自死するのを見たハルトは絶望し世界を闇に包み滅ぼした√もあつたという

「だから僕は嬉しいんです、こうしてまた皆で笑える日が戻ってくれましたから……僕とナツキさんは、いる場所が少し違います」

「まあ……今はノエルを止めるのに共闘してるに過ぎんからな、アリヤミーを殲滅したあの3人もハルトが止めなければ世界を滅ぼしたかもしれないしな」

悪魔3人娘対奏者達の異次元ビーチバレーを見ている……いや何故仲良くできるのだ……

因みにカレラのサーブで奏者達が車田飛びと落ちしてたりする

「ですね……あの……キャロル話は変わるので……」

「何だ今日のオレは機嫌が良い、話なら聞いてやらんでもない」

「はい……僕もキャロルみたいに大人モード？になれますか？」

「……………コアメダルやライダーシステムのことを聞かれると身構えてたオレが恥ずかしい」

キャロルは呆れた顔をして溜息を吐く

「何があつた詳しく話せ」

「はい実は……前にナツキさんとデートをしたのですが「おいちよつと待て」何ですか？」

「お前達……いつの間になんな仲にっ！」

キャロルは震えていたがエルフナインはあっけらかんとした様子で

「あ、僕がデートとそう思ってるだけでナツキさんは思っていないかも知れませんが……」

実を言うとエルフナインの好意はSongsの間では周知の事実として以外と応援されていたりする、周りから映画のチケットなど色々渡されて以外とデートなどしてたりするのだ

「それはそれでナツキの奴は締め上げる必要があるな、おいハルト！ナツキを締め上げておけ！」

そう言うとはルトは笑顔で了承、ツインギレードを持つてナツキを追いかけ回すのであった

「良いんです…ナツキさんに振り向いて貰えなくても…僕が好きでやってることですから」

と儂い笑顔で言うエルフナインにキャロルは尊敬を僅かに覚えたのは言うまでもない

「エルフナイン……だが何故大人モードになりたいのだ？別に今のままでも問題は……」

そう言うキャロルの視線は全力でウルティマから逃げ惑うナツキに移るとエルフナインが頼んできた理由がわかったのだ

「ああ……大方デート中に兄弟か何かに見られて複雑という所か」

実際、キャロルもエルフナインも幼い容姿をしているキャロルの場合は大人モードにもなれるが普通の姿のまま並んで歩いてる姿は兄妹かロリが好きな人の絵であろう

「はい……職務質問などかなりされまして……」

大切な人と気兼ねなく一緒にいたい、そんな乙女な理由にキャロルはフツと笑ったのも一瞬

「……………エルフナイン、その気持ちは良くわかる…すごくよく分かるぞ」

とエルフナインの肩を強く掴んで同意していた

「キャロル？」

「オレも全く同じ苦労をしたからだ」

何を隠そうキャロルもハルトと恋仲に至るまでの道のりが、あのダグバに挑むザキバスゲゲルよりも高難度であつたのだから

そもそもハルトはキャロルがアプローチを仕掛けても容姿や体格の影響もあり親戚の子扱いだったからだ、此方が異性としての愛情を示しても反応しなかつたしそもそもハルト自身が異性の好意に疎かつたのも一因でもある、こちらの思いを未来のハルトからの発言で漸く自覚する程の鈍感であつたから

だからこそ錫音達はそんな鈍感時代のハルトを振り向かせたとしてキャロルには一目置いているが正妻と自称する件については納得などしていない

「そう言う事ならオレも人肌脱がせて貰うぞ大人モードと…そうだな性別も付与させるかお前には、なかつただろうからな」

「良いんですか？」

「当然ハルトにも相談する…もしナツキにフラれたらオレに言え、あいつに終焉へのカノンを聞かせてやる」

「えーと…何する気です?」

「具体的にはオーズの全スキヤニングチャージを食らわせる」

後にハルトに相談するのだがナツキがフツたと分かれば問答無用で全アナザーライダー必殺技メドレーを喰らわせると宣言したという

「それ辞めてくださいね?」

「善処する」

「因みに大人モードになる時ってどんな感じなのですか?」

「安心しろダウルダブラやアイテムを介さねば精々全身が成長痛で痛いだけだ」

「あの…全然安心出来ないのですが…というより痛かったんですね大人モードになるの」

「まあな」

「………僕頑張ります!成長痛くらいでナツキさんが振り向いてくれるなら安いものです!」

「協力はしてやる、惚れた男なら振り向かせてみる…オレにも出来た同じホムンクルスのお前に出来ない筈はないからな」

「ありがとうキャロル！」

「……………」

素直にお礼を言われて赤面しているキャロルであった

「くらえナツキ！必殺！」

「ぎゃあああ！」

その頃、ナツキも綺麗にハルトの一撃で吹き飛ばされていたのであった

—————

何だ？僕も大人モードがどうか何だろう新しい技の話かな…あ、エルフナインが笑つてるとほんわか思う、さてそろそろ料理の仕込みをするかと炭火で串を焼き始めると

「……………」

立花響がバーベキューの串を凝視していた視線に気づいた未来が止めに入る

「響やめなよ困ってるよ」

「えー」

何というか…やれやれだな

「食うか？」

「良いんですか！」

「けど少し待て、まだ生焼けだから」

「はい！」「もう…すみません」

「別に他の奴が食うと思って多めに仕入れたから問題ない」

何っーか…甘いなあ俺も

『普段が岩塩対応だからな』

ー誰が岩塩だー

『日頃の行いを振り返れ』

ーん？俺って割と誠実だと思うが？ー

『棍棒外交する魔王が誠実と呼ばれるのは乱世だけだ』

…
…
…
— わつ…俺って乱世に輝ける英雄って…こと？相棒…そこまで俺のことを評価して

『わつ…ではない！英雄達に謝れ烏澁がましい！』

『あと何処から来るんだその自信？』

『何でそのネタ知ってるの？』

— 知らん！—

「あ！皆！ハルトさんが食べても良いって！」

— と思ったらやはり皆で食事する流れになりました防人さんと奏さん、クリスさんは複雑な顔をしていたが…仕方ないよね！

『誰のせいだ』

— 全く記憶にございませぬ—

— と肩をすくめたのであった

— そして食後の昼下がりに事件が起きた、ハルトがノンビリと後始末をしているとウオズが慌てた様子で現れた

「我が魔王!」

「どうしたくおやつなら少し待つてなスモアつてお菓子作るからさく」

雑誌で読んで作りたかつたんだよなあく

「と、とても興味深いですが……その……ネオタイムジャッカーが現れました!」

「誰?」

「レック……ポセイドンですね」

「そつか、クジヨーじゃないなら問題ねえな」

一言眩くなり料理に戻ろうとするので

「我が魔王行かないのですか?」

「え?ポセイドンでしょジョウゲンとカゲンに任せて良いでしょ、海に近づけなければ大丈夫だって……いや待て慰安旅行の邪魔をするなら俺が始末するか」

『コンビニ行くみたいなきげさで倒せる相手ではないぞ』

「わーつてる……水辺なんて地の利を得たから攻めたんだらうけど2人なら大丈夫でしょ、あの2人強いし」

あの2人なら追い払えると思ってるがこの後の予定もあるので邪魔するなら追い払おうと言うと

「実はオートスコアラがいましてマリア・カデンツァヴナ・イヴが迎撃にイグナイトを

使用に失敗、暴走しています」

「ふーん………ん？………何してんだよあのアイドル大統領!!」

アレだけノエル目的達成に近づくからイグナイトを使うなと言ったのに!

「行くよウオズ」

「はっ!」

ウオズに言われマフラー転移をした先には暴走して暴れているマリアとポセイドンがいた

「来たか魔王」

「ポセイドンか……クジヨールの弔合戦なら後にしてくれない?」

「悪いなそうはいかねえよ……大将の御礼参りきちんとさせてもらうぜ」

「後にしてくれない、クジヨールならまだしもお前なんかじゃ退屈凌ぎにもならないよ」

「テメエ……まあ精々余裕こいてな、今日は新メンバーがいるからよ」

「新メンバー?」

「ああ他の支部から連れてきた奴だ、おい! 出番だ!」

「はっ」

そう言つて現れたのはサングラスをかけた大柄な男、何とか映画で見るとようなボディーガード的な印象を受ける

「こいつはネオタイムジャッカーの全支部で俺やスズネのような幹部に匹敵する実力を持つててな裏切つたスズネとフィーンニスの抜け番で入る予定の新幹部だメナス含めて俺達3人でお前を「レック様……」あ？……っ！」

「申し訳……ありません……」

それを最後に助つた人の男は全身から出血し倒れる、当然死亡しているのが一目でわかる程に滅多切りだ

「何……まさか！」

ポセイドンの視線の先には血を払い落とした

無銘剣虚無を肩に担いでいるハルトがいた

「あのさ…… 錫音とフィーニスがいないと幹部になれないような数合わせが俺の相手出来るの？」

「……………」

息を飲んでるところ悪いけどと呟くと

「これだけ？」

「……………この野郎っ！」

デーパーペストハーブーンを持って走ってくる勢いは早いのだが

「別に君を舐めてないけどね」

『ゾンジス（ザモナス）！TIME BREAK』

「はあ！」

電子音と共にゾンジスとザモナスがハルトの背後から現れライダーキックをポセイドンに叩き込む。ディーペストハーブーンで防御するが吹き飛ばされてしまう

「戦力差が違いすぎる単騎でどうにかなると思ってるのか？」

「魔王ちゃん無事？」「お怪我は」

「無いよ、ありがとう…にしても」

視線を向けると暴走しているマリアを見て

「2人は暴走してる奴を止めろ、思い切りやって良いけど死なない程度にな」

「はっ！」

「!!!」

2人は暴走マリアに向かいバトルを開始した

「ウオズは下がってる、俺がやる」

「はっ」

ウオズが後ろに下がるとポセイドンは槍を肩に構え直し

「魔王自ら相手か」

「この後、温泉や花火と楽しい夏のイベントをやるからな…邪魔者にはさっさと退場して貰う」

「そんなことさせねえ!!」

ポセイドンがディーペストハーブーンで水刃を放つがハルトはアナザーウオッチを起動と同時に現れた紫色のオリハルコンエレメントが攻撃を止めた

「約束してるから無理…力貸してもらおうよ」

『はっ!』

通過して現れたのは仮面ライダーレンゲルの体から蜘蛛の脚が現れた有機的な姿
蜘蛛怪人とも言える容姿をし、右手にはレンゲルラウザーを思わせる杖を装備している

剣のライダーシステムで唯一アンデットが操ったライダー

蜘蛛の糸に囚われた戦士

『レンゲル』

アナザーレンゲル

「祝え！全アナザーライダーを続べ、過去と未来に名を示す時の王、その名もアナザーレンゲル、新たなアナザー目覚めし瞬間である」

「おお…祝われるのは久しぶりだな！」

「ええ我が魔王、存分に戦われよ」

「おう、しっかり見てな」

杖を構え直しポセイドン目掛けて走りだすと同時に現れたラウズカードの力を解放した

『ラツシュ』

そのまま強化された突進と突きでポセイドンを押し込むとガラ空きの拳を敵の顔面に叩き込んだ

「おーらあ！」

「があっ…」

怯んだ隙に仰反る体目掛けて蹴りを叩き込み間合いを作るがポセイドンは奥の手と言わんばかりにコアメダルの力を解放した

「そらあ！」

「っ！」

放たれた火炎攻撃に杖を回転させて防ぐ間にポセイドンは接近し雷撃を帯びた一撃を放つ

「ぐう…」

体が少しの間だけ痺れてしまうがポセイドンはそれに合わせて連続突きを放つ

「ぐ…この！」

ラストの技を放とうとしたが

「させるかっての！」

とザモナスがボウガンで射撃して隙を作ってもらおうと見逃さなかったアナザーレンゲルは

『スタップ』

強化した杖の一撃を入れて間合いを改めて作った

「流石ジョウゲン」

「当然でしょ…つとー！」

援護射撃に礼を言うのと暴走したマリアの相手に戻った

『あいつの武器、アローに似てるな』

突然話しかけてきたアナザーギーツの言葉にへえ…と答える

「弓のバツクルもあるのか今度使わせてよ…つか思ったより硬いな」

伊達に本家は劇場版でラスボスを張ってただけあるな耐久性は折り紙付きだ

『元々、あの3枚のメダルの力を最大に引き出せるドライブだからな』

「コンボ特化ベルトで変身してるから、あの強さ、いやアイツ自身の強さもあるか」

だが異常だな…恐らくオートスコアラーと同じようにコアメダルを補助武器として使ってるな、でなきゃあの辺の技が使えるものか

「コアメダルを何枚持つてようが意味はないよ」

仮面ライダーのファン歴を舐めるなよ、どれだけ設定資料や他媒体の作品を読んで、見て調べたきたと思う、単純にライダーシステムを道具として使ってるお前達とは

「かけてる熱量が違う、俺の愛を見くびるな」

俺を倒せるなら未来の仮面ライダーでも連れてこいもしもライダーと戦うならつて
対策を考える時間なんか腐る程あつたわ

『暇人か』

「良いじゃねえのどんな事も役に立つ」

「だったら…これだ」

ポセイドンが取り出したのは何と

「アナザーウオッチ…何でお前が…」

動揺してる隙にポセイドンは起動して投げつけてきたのである

「そうだ…これこそ逆転の策よ…いけ！」

すると虚空で停止したアナザーウオッチを核として一つの形となる

その姿はまるで中身が溢れたようなカボチャ衣装の熊？を意識したアナザーライ
ダー、特徴なのは背中中のオレンジマントだろうが愚かな

「何が逆転だよ俺の仲間じゃねえか初めましてカボチャ君、俺は『下がれ!』へ?のわつ!

挨拶しに接近するがアナザーデイケイドの忠告と同時にカボチャ頭はアナザーレンゲルに殴りかかってくる数発の飛び蹴りを何とか耐え凌ぎ武器を構え直す

「うっそでしよ何で!?!」

まさか仲間に攻撃されるとは思ってもなかったので驚きを隠せないでいると勝ち誇ったような顔でポセイドンが話す

「ははは!流石にお仲間殴られるとは思ってなかったようだな」

「テメエ…このカボチャ君に何しやがった!てか君は誰だカボチャ君!!!」

未来のライダーで来いとは言ったが本当に呼ぶ奴あるか!俺はリバイス途中までしか見てないんだぞ!かろうじて分かるのはアナザーギーツ達のエントリーフォームに似ている事だけだ

「そいつは改造アナザーライダー」

「改造……？まさか!!」

「そうだ！自我を持つアナザーウォッチを洗脳して生み出した戦士だその名前は！」

「イエエエエエイ！I， m パンクジャック!!」

『パンクジャック』

運営に従う箱庭の番人

アナザーパンクジャック

本当に洗脳されてるの？と思うくらい自我が濃いのだが、彼等とリンクしているからこそ感じとれた……見た目だけなのだ中身が籠ってない

「……………自己紹介ありがとう」

『空気読めを馬鹿者』

「……………」

『魔王頼む、こいつを助けてくれ』

「任せろ」

アナザーギーツの依頼に変身を解除したハルトは首を軽く回しながら短く答えた

もしレックがナツキのように死に戻りする為の分岐点があれば、改造アナザーライダーを使うかどうかであつただろう

もし仮面ライダーのまま戦うのであればハルトも敬意を払って倒すが彼は選択を間違えた

それも一番最悪な方法で

「アナザーパンクジャックは必ず助けるよ仲間は絶対に見捨てない……なあポセイドン……覚悟は出来てるよな？」

やはり慈悲などない……メナスの時にも思ったがこいつ等はやはり

害獣だ、ならば駆除するに限る

「殺す」

『おーおー俺達の王様はご機嫌斜めだな…ま、俺達も何だけどナあ！』

怒りが度を越し逆に冷静になったハルトであるが同胞を弄ぶような奴に慈悲などない、それはアナザーライダー達も同じであり怒りの感情がハルトと同調し力を普段以上に引き上げていた

それはアナザーウォッチに込められた力を最大に解放したのである

アナザーウォッチを押すと同時にハルトの周りに蒼炎の柱が打ち上がる、空まで届かん炎は彼の怒りを知らしめるように迸る

以前試した際は使えたが赤炎だった、蒼炎にならないのは一重に本来の適合者と同じレベルに至ってない未熟：否　それがハルトと相性の良い力でなかったからだろう

以前アナザーデイケイドから聞いたのだが、俺が従前に力を発揮できるのは作品で言うところの1号系列のみであり2号以降のアナザライダーは俺との相性により力の振り幅が変わるとのこと、故にこの力は試しても完全に目覚めなかった

だが感情のリンクにより力の純度を高められ本来は至る事のなかった領域へとハルトを押し上げる

炎が消えると現れたのはアナザーパーンクジャックと異なりボロ布のような黒マントを纏う異形の戦士　全身にあるスロットホルダーと手と足首にあしらわれた蒼炎のマーク

永遠の死人　ガイアメモリの支配者

『エターナル』

アナザーエターナル・ブルーフレア

「死神のパーティータイムだ…精々足掻け」

アナザーエターナルは右手にサバイバルナイフ型の短剣を構えると同時にポセイド
ンに襲いかかるのであった

「アナザーのエターナルだと…ふざけんな！パンク」では露払いは私がしましょう」ちい
！」

アナザーパンクジャックがアナザーエターナルを阻もうとしたがアナザーファイナ
リーに変身したウオズにより邪魔された

「でかした…」

短く褒めるとアナザーエターナルは短剣を生かしてポセイダンの槍の間合いを無視した超近接戦を仕掛ける、ポセイドンとしては素手で殴るがアナザーエターナルローブにより攻撃が吸収されてしまう、間合いを作り槍の斬撃を放つても無効化されてしまうのだ

「ちい！邪魔してんじゃねえよ魔王！」

「……………」

そんな問題など無視したアナザーエターナルはベツトバツトを喰らわせると怯んだ隙にガイアメモリを取り出すとガイアウィスパーを響かせ投げつけるポセイドンは弾き飛ばすがメモリはまるで吸い込まれるようにガラ空きの右腕部のスロットに装填された

『ACCELL！JOKER！METAL！SKULL！HEAT！VIOLENCE！
MAXIMUM DRIVE！』

解放するのは肉体強化型のメモリ

一瞬でポセイドンに肉薄しガラ空きの腹部目掛け、アクセルによりつけられた加速度から放たれたのはメタル、スカルで硬化された右拳がヒートメモリで赤熱を帯び、それがバイオレンスメモリの力で元からの腕力が底上げされるに加え

使用者の感情に答え 性能を限界知らずに引き上げるジョーカーメモリで強化された一撃はハルトとアナザーライダーの怒りを糧に通常の拳打の力を引き上げた

「ふっ！」

「ガアアアアア！」

生半可な必殺技より恐ろしい威力を帯びた拳をポセイドンに防ぐ術はなく見事に吹き飛ばされていく進路上の木は全てへし折りながら止まる事なく進んでいく

「……………」

『ZONE MAXIMUM DRIVE』

それを逃がさんとばかりにゾーンメモリで転移して追撃を開始したのである

それは数百メートルまで吹き飛ばされたポセイドンは、ディーペストハーブーンを杖
変わりにして立ち上がる

「はあ……はあ……何て威力だよ……くそ……次こそは！」

リベンジを誓うポセイドンであつたが

「次なんてない」

鎌を振り上げた死神からは逃げる事なんて出来るわけがなかった

「な、なんで……こんな一瞬で！」

「転移」

「何を……っ!!だが俺にはまだ、いつ……っ！」

『ICE AGE MAXIMUM DRIVE』

「させない、逃がさない」

足元を氷漬けにして動きを止める、これでもう逃げられない

「答える他の改造アナザーライダーは何処にいる」

「ど、どうする気だよ…がふっ！」

ポセイドンは質問し返した返礼は殴打であった

「質問するな、聞かれた事だけ答えろ」

淡々とした口調で話す姿はさながら機械のような無機質さを与える…それは一重にアナザーの原典が屍人というのも起因しているかもしれない

「い、この…魔王が…っ！」

分からないようなので今度は顔を殴る

「話せ」

アナザークイズで情報を抜き取ればすぐに済む事なのだが、アナザークイズはウオズが持っているから使えない

こいつ等にアナザークイズの力は慈悲だろう優しさならかけてやる義理はないだろう

「……………」

「沈黙は認めん」

『ROCKET UNIKORN MAXIMUM DRIVE』

右手に螺旋回転するエネルギーを帯びた拳が右肘から出てきたロケット加速によって鋭い刺突攻撃になりポセイドンの腹部を貫いた

「あ……が……ああ……」

明らかに致命傷の一撃を受けてもポセイドンは口を割ろうとしないのでアナザーエターナルは右手を引き抜くと血が吹き飛び返り血を浴びるが、そんな事など気にしてない

「取引、話せば治す黙れば殺す」

「だ……だれ……が……」

「……………」

アナザーエターナルはいい加減飽きたと言わんばかりに新しいメモリを起動させようとした、その時

「おやおや随分とボロボロじゃないですか」

「……………ノエル」

ノエルが現れたのであった

「アレだけ血気盛んでしたのに…いやあネオタイムジャッカーも落ちたものですね」

「……………」

『ROCKET TRIGGER MAXIMUM DRIVE』

挨拶変わりにアナザーエターナルはミサイル型エネルギーを発射してノエルを攻撃するが錬金術で防がれる

「いきなりですが魔王、流石というべきか」

「な……………なにしに……………」

ポセイドンが息も絶え絶えになりながら尋ねるとノエルはニッコリ笑顔で

「簡単ですよ、あなたを利用してしようと思ひまして」

「な……に……」

「どうせ死ぬのなら、僕の研究に役立つて貰おうと思ひまして…ほらアレですよメダルの器にしようかと」

「この世界を滅ぼす為か」

「はい良き終末をと思ひまして」

「っ…や、やめろ……」

「嫌ですよ、まあ確かに本来ならコアメダルを大量に使うオリジナルがなるオーズか魔王が良い器だったんですがこの際貴方で妥協しますよ、コアメダル使うのですから同じ

ようなものでしょうし」

「や、やめ……」

「君も人間辞めてみたらどうです？ そうしたら魔王を倒せるかもしれませんよ？」

ノエルが取り出したのはキャロルが好き予備として保管していたコアメダルである、それに加えアリヤミー事件時に回収したセルメダルを大量にポセイドンに投入した

「があああああああああ！」

するとポセイドンの体が大量のセルメダルとコアメダルに比例して巨大化し始めたのである姿は人形から大きく逸脱し始め、まるで海亀と古代に存在した首長竜合わせたような姿へと変わった

「グリード暴走態？」

側から見ればあのメダルの化け物に見えてしまう……まあ間違いないのだろうが

「何故？」

レックは人間の筈だ、メダルの器となり暴走するなら違う形になるだろうと首を傾げると

「!!!」

その巨体の咆哮は周りにいたものを震わせる大きなものである

「……………けど」

『ACCELERATOROCKET!LUNA!TRIGGER !XTREME!MAXI
MUM DRIVE』

その巨体にアナザーエターナルは怯む事なくロケット型エネルギーをルナメモリで大量に複製しアクセルメモリの力で加速、そしてエクストリームの力で全体強化を加え射出したが

命中しセルメダルをばら撒くが巨体ゆえにダメージとして通ってないと来た

「なら」

とローブを脱ぎゾーンメモリを構える最強の技を発動しようとしたが

『ハルト一旦退却だ、体制を立て直すぞ状況が変わった流石の俺達でもアレは手に余る』

流石のアナザーエターナル：ハルトも頭が冷えた、というより事態が変わりすぎた
「ん」

『ZONE MAXIMUM DRIVE』

相棒の指示に従い撤退した、それを見たノエルは

「さて、とこれで時間は稼げましたから：後は頼みますよガリイ」

「はいはい！ガリイちゃんにお任せあれ」

それぞれの目的の為に動き始めたのであった

終わりを止める為に～未来の分岐～

前回のあらすじ

アナザーパンクジャックにした非道に激怒したハルトは怒りに任せアナザーエターナルに変身、仮面ライダーポセイドンを後一步まで追い詰めたが

「ノエルの介入でメダルの器になって暴れています」

「oh…」

エルフナインの言葉に重苦しく沈黙する魔王軍、場を和ませようと東がオーバーリアクションをするが

「しかし、レックがメダルの器かあ…」

「ありえないですね」

答えたのは錫音とフィーニスの元ネオタイムジャッカー組だ2人はレックの性格を

良く知る為、あり得ないと断じた

「そこはお前達にしかわからんだろうが、オレからすればアレはグリード暴走態だろう？何故、グリードでない人間が…」

「相棒…アナザーパンクジャックは？」

『安心しなレックが暴走したらウオツチに戻ったから解呪した、おい挨拶しろ』

『イエエエエエイ！I， m アナザーパンクジャック！助けてくれてthank youな魔王！』

「宜しく…騒がしいな…けど元気なら良かった」

『まあな』

取り敢えず安堵するも疑問が残る

「…確かアレってガメルとメズールが融合した姿だよな」

取り込まされたコアメダルにシャウタやサゴーズのメダルが多いという可能性もあるだろうが

ー教えてアナザーW先生ー

『はーい！じゃねえよ！』

答えを知ってそうな存在に声をかけるとアナザーWはノリノリで答えた

『レックがグリードだからだ』

『は？いやさつきレックは人間って…』

『ハルト、お前ポセイドンについてどれくらい知ってる？』

『え？』

仮面ライダーポセイドン

本来の歴史では仮面ライダーアクア

湊ミハルが未来でアクアに変身出来なかった彼がその代用として変身していたライ

ダー

力の根源は尽きない戦闘欲…まあ端的に言えば王蛇みたいなバトルジャンキーだな

そして名前のモデルである海神の名に恥じない水中戦能力、そして未来のコアメダルの時間跳躍など様々な機能がある映画のラスボス

「だろ？」

「ああ…そういう事か」

その問いの意味に気づいたキャロルはアナザーWに答え合わせを頼む

「ポセイダンのコアメダルはオーズ世界で発生したセル、コアメダルを獲得した事で自我を持った…それに加えて最後はミハルを切り離してグリードのように活動していたな」

『正解だ』

「えーとつまり…レックが変身してたポセイドンって…映画に出てた本物のポセイドン？」

『正解に言えばコアメタルがな…その自我を持ったコアメダルを強引に従えてたんだろ
うが戦闘で弱ったから復活の為に隙を突かれた』

「その結果、主人格がメダルのグリードになったからセルメダルだの何だの大量接種して暴走した姿があのグリードの姿だったと」

『そうだつまりレック本体はカザリヤミーに取り憑かれた状態に近いな』

「あ、それ凄いいかりやすい！」

と納得した所で

「それで…どう倒すのだ？あの巨体だ我々の攻撃ではダメージたり得ないぞ」

千冬の問いかけにハルトが

「アナザーデンライナー、アナザータイムマジーン…後はアナザーブレイキングマンモスと…ドラグレッッター…キャツスルドラン…ジェットスライガーにギガント…ディスクアニマル…」

指を折りながら思いつく対策…主に巨大な敵と戦う力を羅列するが決定打にないよ
うな気もするので

「エラスモテリウム…オロチ…ゲムデウスとか？」

「え!?!ラスボス連中も呼べるの?」

「多分…けどさ、呼んだらそれこそ收拾つかなくなる」

主に某星狩族や究極の闇など呼んだら世界が減ぶしな

アナザーWが解析してくれた結果、俺の種族である怪人王つてのが何なのか分かってきたらしい

その特性はあらゆる怪人達を呼び出し支配する事ができるとのこと……恐らく魔王進化前にグロンギ連中引き入れたのがキツカケで獲得したのだろうが……あらゆる怪人を従えると言われたのです

「俺は大シヨツカー作る気は無いので！ー」

と言った記憶は新しいなと苦笑したが思考をすぐに切り替えた

「メダルの塊ならバースは？」

鈴音の提案に製作者のキャラメルが苦い顔をする

「最適解だが、あの巨体だメダルを削り切る前に世界を喰らうだろうな」

「んじゃ答えは一つだな」

キャラルのセリフに周りが沈黙するがハルトはアナザーウオッチ片手に立ち上がっ

た

「ハルト待て何をする気だ？」

「ぶつかってみようかなってな、俺一人でやるから皆は逢魔に戻ってて、そもそも俺がキャロルにオーズ布教したのが発端なんだし責任は取らないとな」

「っ！無策で仕掛けるのは危険だ！」

千冬は慌てた表情で止めるがハルトはいつものようにヘラヘラした顔で

「大丈夫大丈夫、策ならある」

「ほお：：なら教えてもらおうか」

「簡単簡単：：最強フォームでゴリ押す」

『この脳筋め』

「もう少し考えろ！」

「対策なんて動いてから考えれば良いじゃん」

「いやお前は考えないとダメな立場の人間だろう!？」

「つてな訳でちよつくら世界を救いに行つてきまーす」

「話を聞け！ハルト！」

とだけ言うとハルトは部屋を出た

扉をバタンと閉じ外に向かい歩いてる間の事

「……よし！行くぞ！」

『良いのか？今なら全員で逢魔に戻るのも……』

「おいおい……そんな事してみろよ師匠やオーマジオウ達に顔向け出来ねえよ、そもそもライダー技術が広まったのって俺のせいだから責任は取らないとな」

ヘラヘラ笑うが一心同体の相棒には隠し事は出来ないように

『俺達しかいない、正直に言え相棒』

「え？いや…スнгеエ怖いんですけど何か！てか世界の危機を何とか出来るのが俺だけなの！？失敗出来ないとか凄く怖いじゃん！」

『不安とか怖いって感情…お前に備わったんだな』

『『『うんうん』』』

「なあ俺って…そんなに感情壊れてる？」

『割とな勢いで突っ走って笑いながら戦うから…色々不安しかないぞ』

「いやいやまさか〜」

『壊れてないって自覚がないのが怖いぜ』

『これ否定できるか？』

「俺の狂気（正気）はお前達が補償してくれんだろう？ならそれで良いしな」

カラカラ笑うが本気で思っているとアナザーライダー達は溜息を吐いた

『だが…やっぱりか…』

「まあ世界の危機なんて今まで実感した事なかったから怖いなあって」

『いや待て、月の欠片が落下した一件を世界の危機と認識してなかったのか！』

「え？隕石落下とか仮面ライダーやウルトラマンじゃ、よくあるイベントじゃん」

アギトやカブト本編で渋谷に落ちてたとあっけらかんに言い放つと

『何故その辺りの感覚が麻痺している!? 一番のピンチだろうか!』

『この特オタが!』

「それは褒め言葉…まあいつも通り何とかかなるだろう! いつも頼りにしてるぜ、お前達」
外に出ると呼び出したサイドバッシャーに跨り現場に向かうのであった

その頃、ウオズ達古参組が立ち上がると溜息や頭を抱えながら

「やれやれ陣頭指揮を取らねばならない人間が最前線に出るなど言語道断なのですが」
…」

「まあまあ魔王ちゃんらしいじゃん、けど最強フォームになったら動けなくなるのに護衛もなしって…東ちゃんの件で学んでないのかな? いや寧ろ狙って…?」

「そこは知らんが…いつもの病気（独断専行）だろうな後の事など何も考えてない」

「そうですね従う者の気持ちも考えてほしい所ですよ、あの人の我儘に振り回されるのって心臓がいくつあっても足りませんから」

「ええ本当に仕方のない王様ですね…お前達行きますよ」

そう言いハルトを準備し始めたので

「待て！お前達はハルトを諫める側だろう！」

「ええ、ですがああ言った我が魔王は止まりませんよ他ならぬ我々が一番よく分かってます」

「未来でも似たような事は多くあった、ハルト様は勢いで飛び出すと7割後悔している」
「それでも以外と何とかしてしまおうんですがね」

「だけど俺達が見てないと不安なんだ、あ、魔王ちゃんの心も汲めなかつた新参者は大人しくそこで見てな、俺達で片付けるから」

「では…」

「硬すぎだろ！このカメ野郎！」

『セルバースト』

バースバスターの必殺技を放つがやはり暴走態の動きは止まらない

「どうなつてんだ？バースの攻撃で倒せた筈だろ！」

『恐らく原典よりも多くのコアメダルとセルメダルを獲得しているので城のような頑丈さを得たのではないかと』

バースの通信装置にエルフナインから連絡を受けた

「じゃあバースデイやサソリも」

『はい、効かないと思います』

「畜生……こうなつたら大量にセルバーストしたブレストキャノンで！」

『チャージ完了前に押し潰されますよ！え……はい……分かりました！ナツキさん下がって下さい！巻き込まれます!!』

「え？何に……っ！」

その問いの返礼変わりと言わんばかりに大量のミサイルや実弾、ビーム砲が雨霰のように暴走グリードに命中して少し怯んだ、その爆風で少し膝をつくも

「まさか！」

バースが目線を向けた先ではアナザージオウがサイドバツシャー（バトルモード）に跨りマグナギガのエンドオブワールドで広範囲攻撃を叩きつけたのであった

『マグナギガ、再チャージに入るぜ』

「頼む…さて勢い任せで出たけど、どう攻略するか」

バースの攻撃を弾きエンドオブワールドを通したと言う事は必殺技級の攻撃でやつとダメージが入るといふ事だなどと分析していると

『ハルト！俺を使え！』

そう志願した奴を見てアナザージオウは成る程と納得した

「よし、行くぞー！」

アナザーウオッチは金色の光を放つと同時にボタンを押す、アナザージオウの体は紫の炎に包まれアナザー響鬼へと姿を変えると怪しげな妖刀を天に掲げる

「アナザー…装甲！」

その言葉を合図に大量のディスクアニマル達がアナザー響鬼の体に一斉に襲い掛かるように集まり出す、そしてディスクアニマル達はアナザー響鬼の体に強固な鎧として

赤熱しながら装着されていき最後のディスクアニマルが取り付くと

「はああああああ……たあ！」

その体はさながら鎧を纏った鬼武者のような姿 右手に持つのは清めの音を奏でる音撃棒ではなく血を啜るような赤黒い妖刀を携えた悪鬼

アナザー装甲響鬼

「鍛えた甲斐があつたな！よっ「待ってくれハルト！」しあだあ！」

アナザー装甲響鬼が刀を手に走ろうとしたのをバースがクレインアームで足を拘束して転ばせた

「な、何すんだよ！」

「俺に良い考えがある！」

「……そのセリフは失敗フラグって、とある総司令官から学ばなかった？」

仮面の下から見える有機的な瞳でジロリと見るとバースは

「あのメダルの化け物にブレストキャノンが耐えられるギリギリのエネルギーを貯めた一撃を食らわせてやる」

「ふーん……じゃあブレストキャノンが暴発しないように頑張れ」

そう言うのと走るが、また止められた

「だから発射まで護衛してくれ」

「断る！アレを倒すなら一撃で一刀両断する方が良いに決まってる……その点ならアナザー響鬼がおススメよ何せデカイ敵を数多く切り捨てたからな、お前が俺の技発動まで護衛してろ主役は俺だ！」

「ふざけるな俺のブレストキャノンの方が強いに決まってる！」

「いや、アナザー響鬼の一撃が強いに決まってるね！」

「……………」

「もう一度言ってみろ!!」

『言い争ってる場合（です）か!!』

「ごめんなさい！」

「ってキャロル、何してんの？」

『お前一人では何しでかすか心配なんでな管制させて貰う…全くこの手のは束の領分だろうに』

2人の通信装置に異口同音でキャロルとエルフナインからの声が聞こえたので手を止める

「こうなったら一緒にやるしかないな」

「どうすんだよ流石に俺達だけじゃ」

「……………奏者は？」

非常に………ほんつとうに複雑だが助力を頼もうと提案したのだが

「悪い今オートスコアラーと交戦中で動けないって」

『滅亡迅雷、出動だよ!』

と東が別枠で指示を出していた声が聞こえたのであった

「けつ……となりや」

「あのさウオズさん達は？」

「ん？逢魔に帰つてると思うよ戻れって言つたし」

「何してんの！貴重な戦力をわざわざ帰しちゃつてさ！」

「ちゃんと理由があるから安心しろ」

「あ……そうか非戦闘員の避難が終わつたら来るとか？それなら「俺も危なくなつた逢魔

に帰るから」安心出来るものか！」

バースが頭を抱えてると地響きを感じた

「地震か？」

「いやまあ無くはないだろうけど」

その地響きは段々と大きくなっていき俺達に近づいている

「何だ……こ……れ……」

「どうしたハルト？」

アナザー装甲響鬼は冷静に妖刀を構える、しかしまだ気づいてないバースに問いを出した

「なあセルメダルを割るとどうなる？」

「え？ 確か屑ヤミーが……あ」

ナツキは理解した理解してしまったのだ

「お前が攻撃した時に回収してないメダルが…地面に落ちて割れて」

「屑ヤミーになつてる!？」

そう生まれた屑ヤミー達は、宿主とも言える暴走態の命令に従いアナザー響鬼達に襲い掛かろうとしていたが

「どうすんだ!」

「取り敢えず……切り捨てるか、出来る？」

「出来るの!?!」

舐めるなよ最強フォームのアナザーだぜ？

『誰に言ってるんだ……って切る間もないか』

「あ?」

『超ギンガエクスプロージョン!』

『ゾンジス（ザモナス）TIME BREAK!』

それを待ってたと言わんばかりに小さな隕石の雨が屑ヤミー達を一掃したのであった後、生き残りは黄色の一矢に貫かれたり緑色の体当たりにより爆散したのであった

「え……ウオズ!？」

「その通りですとも我が魔王!」

「我等もいます!!」

目線に向けた先にはアナザー1号の肩に乗っているアナザーファイナリーが堂々と立つが

「避難しろって言わなかった?」

1人でやると言ったよね?と尋ねるも

「ご安心下さい、奥方様は先んじて避難を…それにですね我々がいない位では大勢に影響はありませんから」

「そうか……って影響あるだろう!!逢魔主力が何してんだ!」

「王1人で戦おうとするのを見て、馳せ参じない臣下など言語道断ですからね」

「そーそー、独断専行される方が迷惑」

「我等は未来から派遣された貴方の臣下です…何なりとご命令を」

「僕は違いますけどね、未来ではなく今の魔王に従ってますが」

「はあ本当に何と言うか…馬鹿な奴等だな、来てもらったからには一緒に戦ってもらおうぞー！いいな！」

「…はっ！！」

これで戦力は整った、作戦はハルトとナツキが強力な一撃を撃って決める

その為にウオズ達に護衛と暴走態の足止めを頼むと

「魔王様、その役目は非お任せ下さい！」

アナザー1号が意気揚々と志願してくれたが

「勝算はあるのか？」

「はい、魔王様から賜りましたメダルを使わせて貰えばと」

「メダル…分かった暴走態の足止めは任せたぞファイニス、あの羽虫ともを蹴散らして
ハッー」

「はっ！」

「頑張つてよねファイニスちゃん！」

「俺達も全力で援護しよう」

「ありがとうございます先輩達…では行きますー！」

そしてアナザー1号は3枚の黒いコアメダルを取り込むと、アナザー1号の体が炎へと変換されていく

アナザー1号の姿に似て非なる存在だが訴える事は同じ

「……………僕は異形へと改造された悲しみを怒り

に変えるもの……………そうだ僕は……………我は!!」

哀しき歴史の代弁者

「我が名はアナザーライダー…コア（1号）！」

『コア（1号）』

ウオッチの音声が重なるように聞こえたのは来歴の異端さであろう

歪んだ歴史を示した先駆者

アナザーコア 爆誕

「行くぞー！」

そのまま燃え盛る轍を走らせたアナザーコアは屑ヤミーは勿論の事、飛び上がると同

時に前輪で暴走態を思い切り殴りつける

「来い脆弱なる者達よ、我等の怒りを味わえ！」

「フイーニスに遅れをとるな！屑ヤミーなど恐るるに足らんと奴等をメダルに返してやれ」

「そうだね！行くよカゲンちゃん！」

アナザーコアの戦闘に吊られてザモナスとゾンジスは走り出し取りこぼした屑ヤミーを相手にする、ザモナスがボウガンで射抜きゾンジスは両足を掴んでジャイアントスイングで投げ飛ばした、ウオズは護衛に回るなか

『セルバースト！セルバースト！セルバースト！セルバースト！セルバースト！セルバースト！セルバースト！』

「……………」

バースが手を強く前に突き出す、その威力はかなりのものである

だがしかし何処でも蝶の羽ばたきは起こるもの

「やったか！」

「翼！それフラグ!？」

それが因果を収束させたのか放たれた光線は暴走態グリードが体制を変えた結果、当たりはしたものの本体には僅かな傷が残るのみとなった

「嘘っだろ！あれ避けるのか！」

「ごんにやろう………だったらもう一発……っ！」

アナザー装甲響鬼は再チャージに入った刹那体から尋常ではない虚脱感に襲われ膝をつく

「これでタイムアップって……ぎげんな！まだ敵は倒れてねえんだよ！おい相棒、力を回せ！他のフォームになるぞ！」

『馬鹿を言うな！それ以上の変身は体が持たんぞ』

『持たせる！最悪死んでも俺なら生き返れるから持たせる！』

『不死の力も万能ではないと話しただろ！テンペストのポーションもないのだ今は退け！』

「出来るかよ……ここで下がったらこの世界が終わってしまうだろうが！」

『だがどうする？次はないぞ！』

「こうなったら……アナザーオーマジオウになってやる！それで解決してやる!!」

そう言うのとハルト残しにあのドライバーの輪郭が浮かびあがるのを見て止めに入る

『だからそれが危険だと言うのだ！』

と言い合いをしていたら待ったをかけたものがいた

『おい魔王、俺を出せるか?』

声をかけたのはアナザーギーツであつた

「あ?……出せるけど?」

『なら出してくれ、アナザーパンクジャックを助けてくれた礼をしたい』

「そっか、なら」

『レンゲル……』

アナザー響鬼はツインギレードにアナザーレンゲルのウオッチを装填し

「ほいっと」

アナザーギーツウオッチを宙に投げると狙いを定め

『リモート』

紫の光線を発射した それはアナザーレンゲルが持つ封印の限定解放能力 リモー

ト

それにより解放されたアナザーギーツはエントリーフォームのまま軽くノビをする

「ふう……ありがとうよ魔王」

「気にすんな、それよりお礼って……」

「ああ……あのデカ物を仕留めてやる」

アナザーギーツの言葉にバースが突っかかる

「こっから俺たちが倒そうって話してんじゃないか」「はあ……分かってないなあ」「んな！」

「ラスボス戦がある前に全力を出すがいるかよ体力取っとけ」

「……俺最強フォームになっちゃって体が怠い……」

「それはお前が何とかしろ、アナザーコア守ってろよ」

「貴様に言われるまでもない」

「そっかじゃあやるか」

アナザーギーツが取り出したのは小型バックルだった

「それ…蛇口ってハズレじゃん！マグナム使えよ！」

変身解除したハルトはよろめく体をウォズに支えられながらもツツコミを忘れなかった

「分かってないなあ魔王、性能なんて使い方で化けるもんだ」

『良いことを言うではないか』

ーアナザーサウザーは黙ってろー

「行くぜ」

『ウォーター』

アナザーギーツは蛇口を構えると近くの水が吸い込まれていくと溜まったのか引き金を引く

「!!」

「まだまだ!」

同時に放たれた高圧水流は凄まじき威力で放たれ暴走態を仰反るほどの威力を発揮した、そのまま蛇口を絞ると高圧水流は圧縮され無尽蔵の水刃となり暴走態を切り裂いたのであった

「すげええええ！」

「あの…蛇口に大事なやつて水場だったのか…使い用だなハズレでも使い方次第で最強フォームに匹敵するか」

ハルトは冷静に分析しているが暴走態は瞬時に再生した

「なんて再生能力だよ！」

「けど今のポセイドンはグリードだセルメダルの要領までしか再生しないんだが…妙だな」

それもそうであるレックが暴走態になる前に願ったのは

死にたくない生きたいという生物と当たり前の欲望

それを叶える為に暴走態が持つ再生能力はハルトの比でない

「純粹かつ単純な欲望ほど大きな力を得るというのはオーズ本編で睡眠欲を刺激したヤミーが大量にメダルを蓄えた事からも確認済みである故に生半可の攻撃では傷ひとつ負わない」

『マグナム』

『ライフルモード』

マグナムフォームになったアナザーギーツはマグナムシューターを長距離用のライフルモードに変形して暴走態の体から生えてる触手部分を打ち抜いて落とすとしていくが光弾では本体にはダメージが入っていないのか弾かれてしまう

「硬いな流石鉄壁の要塞……おい魔王、タイクーンから貰ったバツクル貸してくれ」

アナザーギーツの頼むものは以前、受け取ったブースト？バツクルである、それを取り出すと

「ん？ほらよ」

アナザーギーツに投げ渡した

「そうそうこれこれ…行くせ」

マグナムバツクルを外してブーストバツクルを装填してレバーを操作した

『ブースト』

アナザーギーツ・ブーストフォームになるとアナザーブーストストライカーに跨り発

進するなり暴走態からの攻撃を回避し颯爽と駆け抜けていく、遂に高く飛び上がりぶつ
かろうとした時

バクン

アナザーギーツは暴走態グリードに食べられた

「はあああああああ!?!」

「いやカツコつけたのに何してんの!?!」

「アナザーギーツ!今すぐ助けるから待ってる!!」

思わずシンクロする2人、バースは慌ててブレストキャノンチャージしハルトは慌
ててウオツチの力で呼び戻そうとしたが暴走態は何故か苦しみ始め、体の節々から炎を
上げているのだ

「え?…これって…」

「まさか…」

—————

アナザーギーツはアナザーブーストフォームの力で加速、体内で暴れ回っていた
「流石の要塞も内側は昔から脆いものだからな……はあ！」

今度は右腕のマフラーからエネルギーを発生させ更にバイクを加速させたのである
中

「……………ん？アレは」

アナザーギーツがその視線の先に見つけたのは

—————

場面は変わりハルト達は状況を理解したようで

「カツコよ……じゃなかった早く回復して加勢しないと」

ハルトが思わず呟くも自力の回復をする為にアナザージオウIIウオッチをしようとしたが

『HYPER CLOCK UP』

「!」「は、ハルト!?!がつ!」

何処かで聞き覚えのある音声と共に背後から恐ろしく速い手刀をくらいハルトはそのままバースは強制変身解除して気絶した因みに誰も見逃すしかない速度で放たれていたのだがウオズは溜息を吐くと背後に感じた気配に声をかける

「つ!…って何をしているのですか?倒れた2人を運ぶのは嫌なのですか?」

『HYPER CLOCK OVER』

「我が魔王」

咎めるような声音でウオズが声をかけると加速は止まったアナザーハイパーカブトは変身解除し現れた老ハルトは普段通りの口調で

「久しぶりだなウオズよ、どうしたその顔は」

「呆れているのですよ何しに過去に？ 貴方は干渉するのに否定的でしたが？」

自分やジョウゲン達に未来の事を話すのを禁じた、それなのに自らが過去に介入してきた事を咎める

「いや、若い俺が苦勞している時分だったと思い出して加勢にと来たのだが……」

老ハルトは少し困った顔をして向ける目線の先には暴走態グリードの体内で暴れ回るアナザーギーツの姿があった

「ほお……あれが噂に聞く……俺の時間軸にあんなアナザーライダーはいなかったな」

「ええ私の知る歴史でも我が魔王傘下のアナザーライダーにギーツなど聞いたことはありません」

「それだけ若い俺が頑張つて多くのアナザーライダーを引き寄せているのだろうな…全く無理しよつて」

「無茶はしますが無理はしませんよ…若い貴方は…いや考えなしで行動するのはどちらも変わりませんね…それで…本題は？」

「ふつ…バレてたか」

「当たり前です、今の我が魔王と違い貴方とは何十年の付き合いですから察せない訳がありませんし…貴方でしょう？以前我が魔王とキャロル嬢との決闘に水を刺したのは」

「分かっているとは流石だなウオズ」

「我が魔王や錫音嬢が知れば怒りに震えますがね」

「錫音？…ああ…あの時の小娘（ゲート）か、そうかそうか指輪の魔法使いになったか、こいつは重畳」

「何を考えているのです？我が魔王」

ウオズと問いに老ハルトは不適に笑う出す

「決まっているだろう俺の望みはただ一つ」

気だるげな眼は飛び回る暴走態に向けられる

「新しい可能性世界の発生と観測だとも、こう見えてハツピーエンド主義者なので不幸な結末なんて認めん……あの強欲の魔女にも否定させん、狡いと言われようがやらせてもらうだけだ」

『ハイパーカブト』

老ハルトはアナザーウオッチを起動しアナザーハイパーカブトになると右手に現れ

た剣

「その欲望と共に滅べ、メダルの化け物め」

パーフェクトゼクターを構えたのであった

—————

アナザーギーツはバイクに乗り加速する中発見したのは

「アレは…ネオタイムジャッカーの…」

レックがボロボロの状態で気絶していたのを目撃した

「仕方ないか……つと」

（アナザーギーツ…だったか？）

年話で聞こえる声音、これを使えるのは彼等の王のみである…が

「ん？……魔王…にしては声が」

（俺は…未来のハルトさ、アナザーギーツよアレを消し飛ばす為に力を貸してくれ）

「良いぜ、協力してやるよ世界を守る序でにな」

アナザーギーツはレックを掴むとそのまま加速して暴走態の体を貫き脱出すると着地するなり地面にレックを置くと老ハルトの指示に従うことにした

『ブースト マグナム』

二つ装填しブーストマグナムになるアナザーギーツだが

「間違えた…：反転！」

『マグナム ブースト』

「ほお上下反転か…：時代は進むものだな…」

「見てな、これが俺の力だ」

そう言うのと体の上下が反転し装備換装をする

マグナムブーストになるとブーストバックルのエネルギーを最大値解放し飛び上がる

『ブーストタイム！』

「これでゲームエンドだ！」

それと同時にアナザーハイパーカブトの持つパーフェクトゼクターの呼びかけに応じて現れた ハチ型のザビー、トンボ型のドレイク、サソリ型のサソードゼクターが吸い寄せられるかのようにパーフェクトゼクターと合体、そのままパーフェクトゼクターにある四つのボタンを押して力を解放する

『GUN MODE』

『カブト！ザビー！ドレイク！サソード！POWER！ALL ZEACTOR CO
MBINE！』

アナザーハイパーカブトにある体の角部から膨大なエネルギーが放出され放たれる砲撃に耐える用意をする

「せやあああああ！」

アナザーギーツはそのまま暴走態目掛けて下半身にあるブーストのエンジンを全快

にし体を弾丸型エネルギーにして貫通する

「出番だぜ爺さん！」

その威力は暴走態がもがき苦しむ上、熱により体の再生が遅くなっているがそれでも治そうとするのは生きたいという欲望か戦いたいという欲望故か…だが

「あの時の礼だ味わえ！メダルの化け物め！」

災厄の魔王はその欲望を終わらせる

『MAXIMUM HYPER CYCLONE!!』

引鉄を引くと同時に放たれた赤い閃光は万物を分解する力を帯び暴走態グリードの体を根刮ぎ削り取る、再生など間に合わない理不尽な物量がそこにはあった

「!!!」

咆哮と共に暴走態グリードは爆散、その力の元となったコアメダルも灰燼となったのは言うまでもない

「ふう……終わったよ皆」

変身解除した老ハルトはマントを翻して一言言う

「そんな訳ないでしょう、これからが本番ですよ」

「そう言うでないウオズ、俺のサービスタイムはこれで終わりだノエルに関しては若い俺に任せよう」

「魔王ちゃん！片付いたよーって魔王様！」

「なぜ此方に!!」

気づいた2人は慌てて膝をつくがフィーニスは驚いた顔のまま固まっている、かつてのネオタイムジャッカー時代に見せられたアナザーオーマジオウその人という事実

驚きを隠せないでいる

「アレが…未来の…」

「久しぶりだなジョウゲン、カゲン…おお…そうか君がフィーニスか…初めましてだな、俺は未来の常葉ハルト…まあウオズ達の主だ」

「は！初めまして…魔王様」

「よいよい貴様の主君は若い俺であろう謙る事もないぞ…貴様の働きを楽しみにしている」

「はっ!!」

「よし…では帰るとしようか」

「いや貴方が出張れば全部終わるのですが」

「そうだねえ、つていけないいけない…普段の話し方になっちゃう」

「よせよせ、こんな年寄りが介入しても碌な事にならんしこれ以上の助力は若い俺のためにもならんからな」

「本当ですか？」

「まあ必要なら逢魔近衛師団（ロイヤルガード）投入するだけよ」

「い、いやちよつ！魔王様それはダメでしょ!!」

「う……うむ…我々もあの者達と会うのは…」

「投入は辞めて頂きたい！あの問答無用の殺戮集団は今の我が魔王には刺激が強すぎます」

「うんうん」

「え？何ですか近衛師団って…」

「簡単に言えば未来の我が魔王が集めた理不尽極まりない守ると言う意味の近衛つて名を借りた殺戮集団ですよ」

「うむ…忠誠心などない不貞な輩だ」

「そうであろう俺とて人選をやり過ぎたと思うからな…ほれ、いつまで寝てるのだ起きろ若い俺」

「……………うーん……………っ！」

「漸く目が覚めたか勿体ないのお、この俺の活躍を見逃すなどお!」

ハルトは目を覚ますなり老ハルトのガラ空きのボディに一撃叩き込んだ、体が綺麗にくの字に曲がると鮮やかな放物線を描いて飛んでいき不時着した

「我が魔王!?!大丈夫ですか!」

ウオズは目を見開いて驚くあまり同じように気絶していますナツキを放り投げて駆け寄るがハルトはやったぜ!と笑顔である

「ははは!殴り返す元気があるならよきかなよきかな」

好々爺のように笑う老ハルトにハルトは思わずイライラを重ねるが現状把握を優先した

「ウオズどうなってるんだよコレ、何でコレがいるんだ？」

「コレとは扱い酷くないか？若い俺よ」

「まあ簡単に言えば我が魔王が暴走態を倒しました」

ウオズの報告に頭を抱える

「マジでか…？つーかよく倒せたなアレ」

アナザーオーマジオウになるの覚悟した位の敵だったのに

「当然じゃとも何せ貴様よりも戦闘経験豊富じゃからなあの手の手の獣の対策など朝飯前だともさ若い俺よ」

ほほほと笑うジジイの胡散臭さに思わず

「ムカつくな……つか、何で助けたんだよ？」

「簡単じゃよ、俺の歴史では此処で詰んだからじゃ、あのお前も抱いた激情のままアナザーオーマジオウになって世界を救ったが肝心な特別は誰も救えなかったのだよ……」

「……………爺さん」

「若い俺にはそんな思いをして欲しくないと助太刀に來た……まあ個人的にあのメダルの化け物にはリベンジしたいのもあったが……それは杞憂だったな」

「まあ俺がいれば当然だ」

アナザーギーツがドヤ顔でいると

「アナザーギーツ……もう既に俺の知る歴史とは乖離している……それで良いお前はお前の道を進むと良い、これは老体のお土産じゃ」

老ハルトが手を翳すと黄色の光に包まれると

「た、体力が戻った……これなら」

「ん？……」

最強フォームになれるぜ！と体を動かすと老ハルトは羨ましい目をしてるがアナザージーツは何故か知らないが明後日の方向を見たが

「頑張れ、若い俺よ期待し」「あ！老いた魔王！危ないぞ」え？あだあ！」

決め台詞を言おうとしたらアナザージーツのドライバーから射出されたアナザージーツバツクルが老ハルトの後頭部を捉えると空を飛んでいったのだ
「ててて……こら！空気を読まんか！」

「すまん爺さん」

「軽いな！若い俺もじゃが年上は敬うものじゃぞ!!」

「はあ……締めりませんね」

「だな……取り敢えずあと何回か殴っておくか」

「やめんか!……やれやれ帰るとするか」

「ジジイ」

「一応だが俺は未来のお前だぞ! 思うところはないのか!」

「ありがとよ、お前のお陰で今の俺がある……が錫音の件は許さないからな」

「当然じゃな許しを請うつもりもない、あの小娘に伝えておけ俺は未来で待っていると」
「は? それってどう言う……っておい帰るなよ!」

そう言うとき老ハルトは未来に戻っていったのである

簡易?・総集編

「これは我が魔王が歩んだ歴史の1ページ」

「つてか総集編みたいなもんだろ?」

「お黙り下さい我が魔王」

「お前最近俺に対して遠慮ないよな」

「何を言いますか、私が我が魔王に遠慮などした事がありましたでしょうか!」

「あく本当に今更だったな…ま、頼りにしてるぜ俺の預言者」

「身に余る光栄…では少し長いと思いますが、よければどうぞ」

シンフォギア世界編

アナザーライダーと共に行動し転移のエネルギーが貯まるまでは大人しくしているつもりだったが生活圏内で暴れ回るノイズの撃退にしか力を使っていると未来から派遣されたウオズ、ジヨウゲン、カゲンと出会う

「まさか俺がアナザーオーマジオウになるって聞いた時は驚いたよ」

「ええ、あの時のリアクションは忘れられませんよ」

「まあ実際に現れたのは色ボケジジイだったかな」

「そうではないのですがね…あの人なりに苦労したのは察してください」
「察したらいろいろ負けな気もするけどな」

途中オーマジオウからアナザーライダー達の処遇を巡り交戦したが意地と覚悟を見せた事で害意無しと判断され、交友を深めることとなる。その後キャロルやサンジエelman達と邂逅し彼女達の勢力と共闘関係を結ぶ事となる

ネオタイムジャッカーという新たな敵、そのメンバーの一人である錫音との出会い、彼女との決闘事に乱入した死に戻りの権能を持つ転生者ナツキとアナザーライダーを本物のライダーと信じハルトに忠誠を誓ったフィーニスとの出会い、そして知らさせる並行世界大戦という自らが引き起こす災禍を知り

最高最善の魔王となり並行世界大戦回避の為に自身の世界（以降基本世界）への帰還を目指す

奏者達とは付かず離れずの関係を維持しているが本編開始時のライブ事件とその後、の魔女狩りなどで現地世界の人間や権力者を醜いと嫌っており戦いの被害が出ても頓着しなくなった

今作のルナアタック事件では前述のライブ事件で聖遺物強奪の片棒を担がされた事に激怒報復の為に乱入する自慢していたフィーネのカディングルを破壊し奏者達のデユランダルによる攻撃命中をアシストする形となったが、その際にどさくさ紛れに自分も攻撃されたと思っており後に遺恨を残す事となる

インフィニットストラトス編

ルナアタック事件解決後に転移した初めてのの世界、アナザータイムマジーンの整備を

ウオズ達がサボった事もあり森に不時着、その森を所有していた者の娘である篠ノ之東と出会う夢に悩む彼女の背中を押した彼はネオタイムジャッカーの錫音にもやりたい事を選べと告げ、殺される事を受け入れるが彼女の意味により否定される。

「おいやっぱり整備サボってたのか!」

「……これもファイネの作業なんですよ!」

「何だつて!!……いやいや死人に口なしって言葉知ってる?」

「知ってるから使っています!」

「やっぱりサボってたんじゃない!!」

その後は束と共にISの開発をしている中テストパイロットとして紹介された千冬と出会い意気投合、弟の一夏に家事を教えた事もあり家族ぐるみで付き合う事となる。またこの時に束の養女となっていたクロエと出会い溺愛する

「クロエは嫁に出さん!」

「過保護は程々にしないと嫌われますよ我が魔王」

「……………嫌われてるの?俺?」

「いいえ……しかしクロエ嬢が想い人を見つけた時は快く送り出さないと」

「そうだな……まずクロエを守る証明として俺を超えてもらおうか」

「あの……話聞いてました?」

東が卒業後設立した篠ノ之製作所勤務となりISとヒューマギアを発表するも、ネオタイムジャッカーの陰謀により起こされた白騎士事件から世界は女尊男卑の思想に染まる事に訓練と東作の戦極ドライバー用のロックシード調達も込めてヘルヘイムの森へ入り森のアバターと始まりの男 仮面ライダー鎧武 葛葉紘汰と出会い彼に弟子入りした

「いやあ…アナザー鎧武の情報に従ってヘルヘイムに行っただけで師匠に会えたのは忘れられない体験だったよ」

「私としては弟子入りしたことに驚きですよ、手合わせだけに済ませるかと思っただけで」

「この愚か者！俺が本物のレジエンドライダーに勝てると思っただけか!!」

「何ですかその後ろ向きな自信…」

一夏入学後は護衛も兼ねてIS学園非常勤講師として勤務、非公式適正者として時折試合をする事もあるが基本穏やかな時間を過ごす

福音事件ではネオタイムジャッカーと戦闘になり窮地に陥るも紘汰と共闘しコレを退ける

「師匠との共闘は今でも忘れられないよ…後悔があつたとすればあの時の映像がないこ

とだ……！何故録画しなかつた俺!!」

「そう言えば束嬢のカメラに映像が「ウオズ！ちよつと束の所行つてくる！」お待ちをそれは後にしてください」

事件解決後は束、千冬達と夏休みの異世界旅行と称してシンフォギア世界に一旦帰る

シンフォギアG編

帰還直後のキャロルに困惑するも束達を紹介し第一回正妻戦争が勃発、鎮圧後に見ていたTVで倒したはずのフィーネと名乗ったマリアが厚顔無恥にもアナザライダーやウオズ達の身柄を要求、その際不在時に日本政府所有物とされた事にも立腹し手勢を率いて会場に乱入し政府所有を否定し宣った愚か者達を捕縛するも、基本世界にいる筈の妹 ハルカとその恋人トーマがアナザライダーとなり戦う事に、前述の愚か者達に制裁を加えた後にナツキから助けたいと言われた人物を助けられる情報を得る為に二課と接触を図るもののその情報を得た愚か者一派が乱入し交渉は決裂、またハルトも完全に奏者陣営を敵と見做す

「ま、前から溜め込んだものが爆発した結果だな」

「今更ですが我々にも何割かは過失はありますよね？」

「それは言うな、若干罪悪感はあるだよ」

フロンティア事変には事件に便乗にフロンティアをサンジェルマン達パヴァリア光明結社とキャロルの協力を得て占領、直後に偽物を複製し奏者達は偽物のフロンティアで事件を解決する事となる

事件解決後にハルトはフロンティア事変でのフロンティアは紛い物という宣誓とハルカとのある意味の決別を叩きつけ満足感に満ちたまま別世界に転移する事となる

転スラ編

新たに転移した世界で眼下にジユラの大森林と後のジユラ・テンペスト連邦国頭上に現れた事もあり謝罪も兼ね向かったが代表のリムルが同郷と知ると意気投合、異世界から仕入れた物品をテンペストと売買する関係に

また誰かに召喚されたヴィオレ（後のウルティマ）と出会い仮面ライダーを視聴した彼女は新しい技を編み出すなど、また異世界の存在にライダー技術や知識を漏洩させる、結果論だが彼女と犬猿の仲であるジョーヌ（カレラ）とブラン（テスタロッサ）と出会うキツカケにもなった。

丁度その頃にハルトはフロンティアを母体とした空中国家 逢魔王国を建国し名実

ともに王となった

その後は暫く国の立ち上げに奔走する中

ファルムス王国 教会勢力

vs

テンペスト、逢魔連合軍

の戦争に発展、その騒ぎに便乗してネオタイムジャツカーは精銳一万を投入しハルトの命を狙うが護衛に連れてきてたカレラにより消し飛ばされ、その魂はハルトの魔王覚醒の贄となる

魔王に覚醒したハルトはワルプルギスに参加

黒幕であるクレイマン相手に戦意剥き出しであったが、実際はカレラ、ウルティマが配下になる前に起こしたトラブルにより賠償を取り立てられることに：

その結果なのかハルトは八星魔王よりは格の落ちるが魔王の一角として認知される事に

「祝え！我が魔王が魔王となった瞬間を」

「まさか本物の魔王になるなんてな」

「我等の知る歴史にはない事象でしたので驚きましたよ」

「え！あのジジイ魔王化してないのにアナザーハイパーカブトになったの！」

「おっと…話過ぎました…忘れてください」

「やだ後で教えて」

「はあ…仕方ありませんね」

仲間の復活と魔王襲名に伴い宴を開こうとしたが突如現れたエルフナインの嘆願により暴走したキャロルを止める為にシンフォギア世界に向かう事となった

「と言う感じですね、いやはやなんと言いますか」

「まあ今後も旅は続いてくけど…親に話す土産話が満漢全席レベルの重さだな…胃もたれしねえかな…」

「ええ、そして今はキャロル嬢の暴走から始まった事件もいよいよ佳境、黒幕たるノエル

を我が魔王は倒せるのか…」

「大丈夫だろ、俺達なら何とかなるよな…そうだろお前たち！」

『まあ当然だな』

「そうだ、私の魔王ならそれくらいやって貰わねば困る」

「おや？…貴方は何者ですか！」

「嘘!?ここにきて新キャラ!?つか何だそのバツクルは!カツコ良いな!」

「いかにも!私は魔王様の「おーとこれ以上はネタバレになるから次回予告いけ!ウオズ!!」…何故ですか魔王様…どうして…」

「え、ええ!次回チフォージュ・シャトーに突撃した我等魔王軍、しかし中で待ち受けていたのは新たなライダー…それは敵が味方か…では次回お楽しみに!」

「
じ
ゃ
あ
ね
ー
!」

取り戻す為に

前回のあらすじ

老ハルトの助力により暴走態を退けた一行は取り敢えずアナザーギーツが確保したレックを襲虫みたいに拘束し連行したのであった

取り敢えずと言わんばかりに傷は治したのだがレックは目を覚ますなり噛みついてくる

「何のつもりか知らねえが！殺すなら殺せ！捕まって辱められるなら死んだ方がマシだ
！」

そうかそうかとハルトは頷くと

「んじや人質にしようか」

そう笑顔で言いのけたのであった

「んな！」

「助けたのに礼の一つも言わん奴には相応だろうよ、生きて辱めてやろうじゃないか！」
「流石魔王ちゃん！主人公が言わないような台詞を平然と言つてのけるなんて！そこに痺れる憧れるう！」

「だろお！いやあ折角さ利用価値あるなら使つてやろうぜえ！」

「イエーイー！」

笑顔でハイタツチをする2人に思わず

「煽るなジヨウゲン！」

「それよりもノエルが本気で仕掛けていますよどうする気ですか？」

「問題ない！」

「何か対策を立ててるのか…流石はハ「俺達は帰る！」帰んな!!」

「ま、冗談はさておき」

「心から冗談でよかったと思うよ本当」

「今の現状はウオズ？」

ウオズに尋ねると待ってましたと言わんばかりに報告する

「現状は小康状態ですね…：どうやらノエルはレイラインにあります、ドクターウエルの居場所を探る為に大胆な揺動作戦を行ったようですね…：」

「ドクターウエルって…：逢魔から捨てたゼットンと合体した人？」

「ネフィリムですよ…：彼は聖遺物と融合しましたからね、ノエルはネフィリムの蓄えたエネルギーを使う予定なのでしようね」

「動力にして強引に滅びの歌を起動させる気？」

「どうでしょうか…もしくは別の方法で世界を滅ぼす気かも知れませんね」

「まあ…考えても仕方ねえな」

それでレイラインで現在、滅亡迅雷vsオートスコアラアの全面对決となっているらしい…それ凄いい見てみたいが

「つまり暴走態もオートスコアラアの奇襲も陽動か…凄い贅沢だな」

アリヤミーで蓄えたセルメダルやキャロルが用意したコアメダルを使うなんて

「ええ、寧ろ勝負を決めに来たとも見えますね実際にアナザーハイパーカブトが出なければ大変なことになってましたから」

「そだね…魔王ちゃんノリノリでマキシマムハイパーサイクロン撃つてたね」

「あの技100キロの射程があったな」

「凄い殺意こもってますね…流石は未来の魔王様」

「ま、まあリベンジとか言ってたし多目に見てよ、そこは未来の俺に感謝しないと…あ、滅亡迅雷はオートスコアラーを追撃するように連絡して絶対に呪いの旋律を浴びせるな奏者が邪魔するなら撃退するよう言っというて」

「畏まりました」

俺達がオートスコアラーに対して躍起になるのはキャロルを守る騎士という個人的感情もあるが、イグナイトによる呪いの旋律を浴びてしまうとノエルの目的が達成されてしまう

それは是が非でも止めなければならぬ

「はっ！」

「それで俺達はどうする魔王ちゃん？」

「そんなん決まってるじゃん」

ジョウゲンが尋ねたのでハルトは笑いながら答える

「本丸を狙う、ノエルの企みを潰すぞ俺達もレイラインに向かう！こんな全部終わらせて逢魔で宴会の続きダア！」

「つしやあ！滾ってきたあ！」

「好物言え！全員好きなの作つたる!!」

「いいのか！」

「俺にい…まっかせなさい!!」

とテンションの上がる周りを見ながらナツキは冷静に

「あの…今のうちにチフォージュ・シャトーを取り戻せない？」

その一言にハルトは思わず食いついた

「ナツキ……………お前天才か!？」

そうだノエルが攻勢をかけられているのはチフォージュ・シャトーにある滅びの歌、それとオートスコアラーである

「成る程…確かにチフォージュ・シャトーを奪還するメリットは大きいですが」

主にキャロルの研究室や世界を滅ぼす歌を流す装置の破壊をするだけで良いのだ…
キャロルには悪いが…変わりに逢魔に研究室作るから許してねと内心で謝るしかない
「危険じゃない? 流石に何の備えもしてないとは思えないけど…てか魔王ちゃんと一緒にチフォージュ・シャトーを改造してたよね」

ジョウゲンの言葉に思わず肩をびくつかせる

「あ、ああ…改造したなあ〜まさか家が牙を剥くとは…」

対奏者に色んな武装つけて改築をしたのを思い出した…当時は奏者連中にしか攻撃がないと思ってたかれ過剰に色々やり過ぎたなと後悔するしかない

「後悔よりも対策ですよ今は…：確か強化したのは主に対空砲火などですな突破するには生半可な防御では難しいかと」

「あーと常時エンドオブワールド並みの火力だっけ？」

「そーそー、しかも対ライダーも視野に入れたから錫音の魔法とかも対策してるから転移とか使えないよ〜オーロラカーテンみたいな裏技は別だけど座標がだいぶ狂うようにしたんだー!」

「なんでそんな魔改造しちゃうかなあ!!」

「つせえ!俺だつて締め出されるなんて考えてなかったんだよ!家の警備なら良いのを

望むだろ!？」

しょうがないじゃんとか開き直るハルトだが

「その辺りは問題ない、このアナザーコアが魔王の道を切り開こうではないか!」

「いやいや危険って事だよ! フィーニスちゃん新しい力に変身して気が大きくなってる!？」

「強化したアレを突破するには盾が…盾?」

「あ、だよね…」

カゲンとハルトの目線にあつたものとは

「ひい!」

「みい〜つけ〜たあ〜」

見つけた時のハルトはそれとても良い笑顔をしていた

「はあ…」

やっぱりこうなるかとウオズは頭を抱えたのであった

—————

数十分後

起きたナツキは取り敢えず奏者の所に送り届け、ハルトは召喚したキャツスルドラン
頭上に仁王立ちして眼下に浮上したチフォージュシャトーを見下ろしていた

「いやあ！前からやってみたかったんだよねスカイダイビング！運んでくれてありがとう
うなキャツスルドラン！」

「!!!」

「うんうん流石はファンガイアの王が住まう城なだけあるな！」

お礼の咆哮に気を良くしたのか呑気な発言をするハルトに対してウオズ達は強風に

煽られながらも立っているが

「あの…魔王ちゃんのパラシュートないけど!」

「俺達のを使ってください!」

「あく大丈夫大丈夫、ほらアナザーサイガのフライングユニットとかアナザー剣のフュージョンJで空飛べるからさ」

飛べる力あるからパラシュート無しで問題なしとケロツとして答える

「……………では我が魔王、そこに縛り付けてる捕虜をどうするおつもりで?」

「え?簡単だよオズ、こいつを盾にして降下する!!」

そこにはサーフボードに縛り付けられたレックを見せた、アビソドンでも大丈夫なんだけど折角の捕虜だから有効活用しないとね!そう言うのとレックは引き攣った顔で

「こ、この野郎……なんて冷酷な奴なんだ!!お前に人の心がないのか!!」

「え?俺もう人じゃないよ?」

種族 怪人王だしとキョトンとした顔で話すがウオズは頭を抱えて

「あ、いや種族的な意味ではないかと……」

「あ、そういう事か……いやあ虜囚の辱めを受けるなら死を……って心意気に答えてやろう
と思つてね!死を賜つてやろうっさ」

暗に利用して殺そうという腹つもりが見え隠れしたので思わず

「せめて戦いの中で殺せえ!」

「やなこつた何で敵のお前の頼みを聞かないといけないのさ……そう言えば随分前に

ジヨウゲンとカゲンを痛めつけてくれた礼だ精々苦しめ」

そう言うとはルトはサーフボードを蹴落とすとその背に乗っかり降下すると他4人も一緒に降下する

「いやっほーーーーー！」

「全く……あの魔王はもう少し自重してください！先陣切って落ちる大将がいるものですか！」

「魔王ちゃんらしいよね！」

「うむ！」

「仕方ありませんね・何と言うか慣れました・いろいろと」

ハルトはノリノリで降下するが、それを合図にチフォージュシャトーの対空砲火が発射されるがウオズ達にはアナザーウィザードの防御魔法により攻撃を防いでいる……応捕虜にもだが

「がああああ！」

「つやい」

「んぐう！」

衝撃は殺さないでいるので痛いのは変わらない、因みに仲間達には完全な魔法を使っているので安心して欲しい：捕虜の声がうるさいので取り敢えずバインドで口を塞いでおいた

「いやあ！盛大な歓迎嬉しいねえー！」

人生で一度は言ってみたいセリフを言えて満足してると

「この状況で良く言えますね！」

「魔王ちゃんが守ってくれてるって言ってもこの火力じゃ：盾も持たないかもよ！」
「仕方ない：ジョウゲン、俺達で迎撃するぞ！」

「ああ！」

「それなら僕にお任せあれー！」

そう言うのとファイニスが先陣を切ると新しいアナザーウォッチを押し込むと同時に体から膨大な熱量と共にアナザーコアへと変身した

「行きますよアナザー1号さん！」

『ああ、すでに感覚は掴めたからな最初から全開で行くぞ！』

『コア（1号）』

「ふははははは！こんな豆鉄砲如きで我らが王の道を遮れると思うナア!!」

アナザーコアは下半身をバイクに変形させると手近な砲台を叩き潰すと同時に手の火球で砲台を破壊して回る

「ファイニスに遅れをとるな！」

「つしやあ後輩ちゃんに負けないよ！行くよカゲンちゃん！」

『ザモナス』

「おう！」

『ゾンジス』

「変身!!」

『R I D E R T I M E』

「せやあー」「ふんー」

『アマゾンネオ』『ロボライダー』

ザモナスはネオウオッチにより専用ボウガンにニードルの力を付与し針を高速で連射、ゾンジスは胸部が開いて誘導ミサイルを発射して砲台を潰して回る

「やれやれ…お前達、私の役目を奪わないでもらいたい広範囲攻撃は私の専売特許ですよ」

『ファイナリー…』

「ふっ！」

アナザーファイナリーに変身したウオズは背後で浴びる日光により増幅された力を解放した

『ギンガ…エクスプロージョン！』

背後から現れた小惑星型エネルギーの塊が流星群となり進路を妨げる砲撃をする砲台を全て潰すと道が開けると4人は着地、アナザーファイナリーの重力操作で皆無事に着地できた

「凄いな流石は俺達の仲間」

頼りになるなと感心すると盾の役目がなくなつたので

「あ、もう良いよ邪魔」

とサーフボードを雑に蹴飛ばし、そのままハルトは生身で降下するとアナザーウオツ

チを押そうとした時に海面から飛び出した黒い影がハルトの足場となるように現れると、ハルトは影の正体に驚く

「え……エビルダイバー!？」

「!!」

『ふむふむ……そうか貴様の着地まで守るとの事だ』

「え! 本当ありがとうなエビルダイバー!!」

『だが変わりに人間を食べたいらしいが』

おおう中々狡猾だな……まあ確かにミラーモンスター達に最近食事を提供しきれなかったからなあ……俺の管理不行き届きだ誰か……襲わせても罪悪感の湧かない奴等……あ!

「この間俺達を襲った特殊部隊の奴らなら皆で食べて良いよ俺(アナザーアギト)の匂いついてるから追いかけると思うからさ」

「!!」

エビルダイバーは嬉しそうに体を動かしていると

「ベノスネーカーやメタルゲラス達と仲良く食べなよ約束な」

「!!」

『ナチュラル外道だな』

「何の事く取り敢えず御礼参りは大事でしょ？アナザーアギトにしたけど俺の気が済まないし」

よしこれで食糧問題は解決したなと頷いてると無事にチフオージユシャトー外壁に到着出来た

「つしゃあ！……さて」

ハルトは深呼吸をして変身解除した皆に聞く

「どうやって中に入ろうか!!」

凄い良い笑顔だったが臣下たちは驚きの余りこける

「ノープランだったのですか!」

「対空砲火どうするかで頭一杯でした!」

「それでノエル倒すぞ!とか言ってたの!?!」

「……オーロラカーテンは？」

「んー使えなくは無いかど座標がブレるなあ場所によつて奪還前にノエルが帰つて来るし」

「……ならば此処を壊して進みますよ！」

「どうやってさ？」

「はっ！……フィーニスこじ開けなさい！」

「お任せを!!」

『コア（1号）』

そう答えるアナザーコアは炎の体を使つてシャトーの外壁を炎熱で溶解させ穴を作り出した

「さっすがだねフィーニスちゃん」

「よくやった！」

ザモナスとゾンジスが入るのを見るとウオズとハルトは後に続いて降りると手を伸ばす

「つと…フィーニスも来い早く！」

「いい僕は此処に残ります、この巨体ではシャトーの中では役立たずですからね…」

アナザーコアの目線の先には大量に徘徊する屑ヤミー達と無人操縦されてるダンデライナーやスイカアームズを見てアナザーコアは不敵に笑う

「ご安心を魔王様の背後は僕が守ります」

「待つてろ、すぐに終わらせるから！」

「いやいや、ゆつくりで良いですよ魔王様」

「言つたな…：それと命令だ死ぬ事は絶対に許さん！何か何でも生きて帰れ!!」

『サイドバッシャー come closer』

ハルトはサイドバッシャーを呼ぶとウオズを背中にサイドカーにはジョウゲンとカゲンを2人載せて走り出したのであった

「魔王様の仰せのままに」

本当に心配性の魔王様だな、少しは信じてくれても良いのに……まあ

「此処からは少し刺激が強くて魔王様には見せられませんからねえ!!」

両腕から火球を放ち屑ヤミーとダンデライナーを落としたのを合図にスイカアームズを引きちぎり投擲、それと同時にチフオージユ・シャトー外壁で衝撃波が起こるのであった

「我が名はアナザーコア、正統なるライダーの歴史を宿す魔王に仕えし最初の戦士！貴様等木偶人形如きが倒せるなどと思うなあ！」

—————

その振動を肌で感じたハルトは心配が声音に現れていた

「フィーニス…無茶すんなよ…」

カリユブデイスでも置いていけばよかったと少し悔やんでいると

「大丈夫だよ魔王ちゃん、フィーニスちゃん強いし」

「ええその通りですとも」

「……急ぐぞ、さっさとこんなん終わらせてやる！」

「「はっ（おう）!!」」

『今更だがサイドバツシャアの重量オーバーではないか？』

「大丈夫！問題ない！」

『アナザーW知ってるぜ、それ失敗するフラグだろ！』

「縁起でもねえ事言うんじゃねえ！」

サイドバツシャーでシャトーの内部を走らせているのを見ていたものがいた

「……………アレが」

「ええ…そうよ」

その目に映る感情は善意か悪意か？

—————

一方その頃、チフオージユ・シャトー外壁では

「はははは！まあ木偶人形にして頑張った方だな」

アナザークオアの戦闘は一区切りついており眼下や足元にはメダルの破片やバラバラになったスイカアームズの部品が散らばっていた

「他愛もないな……っ！」

気を抜いたと同時に放たれたのは大量のコインとカーボンロット

「これは……っ！」

「うわぁ……あの感じ……魔王のゲテモノ配下ですか」

「あの炎の体にバイクの足とは派手な奴め」

「早く戦いたいんだゾ！」

「マスターの留守を狙う輩には相応の罰を与えましょうか」

オートスコアラ―4人が武器を構え始めると

「ははは丁度良い雑魚ばかりで飽きていた所だ！」

アナザーコアがそう言い構えるが、横槍ではなく紫の矢が両者の中間地点に落ちた

「これは」

「ちっ……さっさきの奴らですね」

とガリイが目線に向けた先に現れたのは4人のヒューマギアであった

「見つけたぞ」

「束様の情報通りですね」

「今度こそ君達を解放するよ！」

「まーた貴方達ですか邪魔しないで欲しいのですが！…：しょうがない相手してあげますか」

「ムカつく奴だな雷落としてやる！フィーニスは下がってろ」

「全てはアークの意志のままに…：行くぞ」

現れた滅亡迅雷の4人はそれぞれのドライバーを装着すると束が渡したプログライズ、ゼツメライズキーを起動する

『POISON』

『JAPANESE WOLF』

『INFERNOWING』
『DOODOO』

同時に現れたのは機械仕掛けのサソリと燃え盛るハヤブサが滑空し宿主を守るように動く

残りの2人には赤雷や吹雪が巻き起こる

「[[[[変身!!]]]]」

[[[[FORCE RISEE]]]]

『SLASH RISE』

サソリは滅の胸部に毒針を突き刺し隼は迅の体を包み込む、4人の体を纏うアンダースーツと共に弾け飛びそうな装甲を強引に抑え込むようなゴムが反動で戻ると強引に装甲を装着する

『STING SCORPION!』

紫の装甲に弓矢を持つ蠍毒の戦士

『JAPANESE WOLF!』

白の装甲と鉤爪を持つ白狼の戦士

『BURNING FALCON!』

赤熱化した装甲と背中の赤い翼を持つ戦士と

赤の装甲と両手に羽根型の双剣を持つ戦士が現れた

『『BREAK DOWN』』

その名は仮面ライダー滅、亡、迅、雷

ヒューマギアを人間の悪意から守る戦士

再誕

「聖戦の始まりだ」

「あははは！ 返り討ちにしてやるよ！ 人形が！」

ガリイの言葉を合図に滅亡迅雷 vs オートスコアラの開戦となった

—————

「わかりました…我が魔王、フィーニスからです滅亡迅雷とオートスコアラが接敵し

ました」

「そうか無理せずに時間稼ぎに当たれ」

そのウオズの言葉に首肯したハルトはエンジンを蒸して加速して暫く走っているとカゲンの強化されている嗅覚が見慣れる匂いを感知した

「……………っ！ハルト様！」

その言葉を合図にサイドバツシヤーを停車させると

「わかりますか？」

「ああ…凄い圧だな…何というかノエルなんか目でもない」

それと同時に現れるのはオーロラカーテン、ハルトのものではないとすると破壊者か怪盗か…はたまた

「初めましてだなアナザーライダーの王よ、いきなりで悪いが貴様には消えてもらう」

「え！う、嘘でしょ!？」

「やはりディケイドは破壊の力だったか…アナザーだから違うと思ったよ…あわよくば門矢士を倒せる対抗馬とも見ていたのだが…」

「あ、貴方は!？」

「おのれアナザーディケイドおおお！貴様の所為でシンフォギアの世界はめちゃくちゃだあ!？」

現れたのはチューリップハットを被る中年に入るかどうかのメガネをかけた男性であつた

「な、鳴滝さん!？」

以外！それは鳴滝！

「まあめちやくちやにしたのは我が魔王なので否定出来ないのですが…」

「え？ いやまあ…そんな事よりサイン…って空気じゃないよね」

いつもなら色紙とペンを片手に突貫している俺だが流石に空気を読み自重する、この状態でサインを求める奴がいれば、それは真性のバカだろう

『なあ相棒、ブーメランって知ってるか？』

「一体何の事やらさっぱりだ」

「貴様を始末する為に各世界からライダーを集めてきたのだ覚悟しろ！ 確か…レジエン
ドライバーにやられるのは名誉と聞いたせめてもの手向けとして受け取れ！」

「つ…つまり！ ライダーが俺なんかの為にファンサしてくれるって事…わっ…」

鳴滝さん、アンタ良い人だよ!!

『空気読め!明らかに貴様を消そうとしているぞ!』

「はっ!……さ、流石だな鳴滝さん……だがそんな作戦で俺が狼狽えると思ったかあ!」

「ガッツリ動揺していたようだが?」

「アナザーライダーは狼狽えない!」

『いや動揺してたのお前だけだぞ』

「まあ良いだろう、では貴様を倒す為に最強のライダーを呼んできたのだからな」

そう言うなり鳴滝はオーロラカーテンに消えたが……え?まさかオーマジオウ?だったら終わった俺の冒険……詰んだと思ったのだが予想に反して新しいオーロラカーテンから現れたのは

「……………」

漆黒の鎧を見に纏う 鏡の龍戦士

「仮面ライダーリュウガ!？」

仮面ライダーリュウガ

平成三作目 龍騎に存在する鑑合わせの存在で元祖ネガ、ダークライダーとも言えるような存在だ 龍騎を超える基礎スペックに加え敵に対して情け容赦ないファイトスタイルも特徴だ…何故か後輩の客演での扱いは酷い所もあるが

「うおおお! スゲエ本物だあ!!」

「我が魔王」

「わ、わかつてらい! リュウガさんは俺にサインくれねえことくらいな!」

『そつちではない構えろ!!』

だがリユウガは冷静に一言

「……………いいぞ」

「へ？」

「サインだ書いてやる」

「あ、ありがとうございます！！」

「わ、我が魔王！」

「いや警戒心持とうよ！」

「っしやあー!!!」

「ダメだ完全に浮かれている！」

「まあ平常運転ですね」

予想外だ、まさかりユウガさんがサインをくれるなんて！と喜びながら色紙を持って近寄るとリユウガは冷静にベルトからカードを抜いてドラグバイザーにベントインした

『ソードベント』

通常のライダーよりも低い音声が鳴ると右手に現れたドラグセイバーを持つとそのまま横に斬りつける

「っ！」

慌てて身を屈めると自分がいた位置にあった色紙は真つ二つになっていたがカウナーとばかりにファイズフォンXの銃撃をリュウガに当てると間合いを作り銃口を向ける

「な、何するんですか！」

「これは戦いだサインなんて求めるな、ふざけてるのか？」

「ふざけてません！俺は至って真面目です！」

「…本物のバカだな」

「そうですよ！くそっ！真司さんなら書いてくれただろうに」

　　どうやら俺はリュウガの地雷を踏み抜いたようで

「貴様あ！良くもアイツの名前を言ったなあ！」

「言うに決まってるだろうが！よくも純粋なファンの気持ちを手でくれたな！！絶対許さねえ！」

俺の純情を弄びやがってと怒りに燃えるハルトだがウオズが静止する

「我が魔王、気持ちちはわかりますが目的を履き違えないで下さい」

「……………わーったよ」

ハルトはサイドバツシャーを降りるとファイズフォンXの Enter ボタンを押し、すたサイドバツシャーが自動運転で走り出した

「わ、我が魔王!!」

「ちよっ魔王ちゃん!」

「悪い、先行つといてくノエルの場所についたらキャロルを転移させるからシャトーの権利を取り戻すように!あの野郎を締め出してやれ!!」

「ハルト様はどうされるつもりですか!」

「リュウガと戦う、それに鳴滝さんの話通りだしね世界がめちゃくちゃになったのは俺のせいだしな」

大きく手を振り見送るとハルトはリユウガと相對する

『本音は？』

アナザーデイケイドは知っている、別にハルト自身この世界に技術を持ち込んだ事に罪悪感なんて抱いてない事とこの世界の一部の人間以外に対して慈悲も持ち合わせていない事を魂レベルでリンクしているからこそ分かるのだがハルト自身 既にこの世界はネオタイムジャッカーと戦う為の戦場 ゲーム会場の一つでしかない故に先程の発言は腑に落ちなかった

その問いへの解答はいつものように不敵に笑ったのだ

ーこの世界の命運やノエルをブツ飛ばすのも大事だが、そんな事より今はー

ー

「サイドバッシャー！頼むから反転してよ！」

「そうだ！ハルト様の場所へ戻れ！」

「鎮まりなさい2人とも」

「ウオズちゃんは魔王ちゃんが心配じゃないの！」

「心配してますよ、ですが我が魔王の言う事にも一理ありますリユウガの足止めには我が魔王が適任です」

ハルトの持つ最大の武器は知識と情報アドバンテージ、これは対ライダー戦において絶対的な利点となる、だからこそルシファー戦などで優位に立ち回れたのだ実績面でも彼が残るのがセオリーであるが

「だからと言って大将を置いていく臣下がいるか！」

「我々の目的はノエルからチフォージュ・シャトーの主導権をキャロル嬢へ戻す事です」
「ウオズちゃん！」

「……はあ…貴方達、戻っても構いませんが我が魔王の不興を買いますよ」

「「え？」」

「見送る時に見ませんでしたか？我が魔王の笑みは……未来と同じ笑みでしたよ」

「「っ!!」」

「全く未来でも今でも変えて頂きたいですな理由にかこつけて楽しみを優先するところは」

—————

「どうでも良くなった、折角本物の仮面ライダーと戦えるんだよ師匠や土さんと違って、本気で俺を殺す気でいると来たんだ、こんなお楽しみ我慢出来る訳じゃないウオズ達にも邪魔させたくないよ……誰にも……誰にもだ!!」

『ウツヒョー!流石ハルト!いつけえー!』

『アナザーバイス!?!煽るんじゃないよ!』

「俺を前に余裕だな」

リュウガはドラグセイバーを構えてるがハルトはアナザーウオッチを起動すると赤炎を纏い姿を変える

「余裕なんてねえけど?……けど少し親近感が湧くなあ……お前も俺と同じだろ?光から

生まれた影…あ、いや鏡か」

『龍騎』

「何が言いたい」

「まあお互い本物がいて俺達が偽物ってなる訳だ」

側から見れば俺達が偽者なのは動かぬ認識だろう

鏡の争いを止める戦士 仮面ライダー龍騎

その鏡合わせ 仮面ライダーリュウガ

時とライダーの歴史を束ねる王である仮面ライダージオウ

その影、偽りの王 アナザージオウ

互いに対となる存在がいる

しかし決定的に違うのは片方は憧れ、片方は成り代わろうとする点のみ

「……………っ!!」

アナザー龍騎になりドラグセイバー擬きを構えると彼に問いかける

「だから戦おうぜ!!此処だけは本物も偽物もない純粋な力と力のぶつかり合いをよお

!!
」

この戦いに正義はない、あるのは純粹な力のぶつかり合い

本気で挑め、本気で足掻け、本気で戦え

他の誰でもない自分のために

方や憧れに挑む為、方や依頼に応じて倒す為

また大事な人達との明日を迎える為にも負ける訳には行かないのだ

アナザー龍騎がカードを取り出すと同時に周囲に赤い炎が巻き起こる

目の前にいる相手に自分の手札を出し惜しむ程ハルトは人間が出来てなかった、いや
仮面ライダーに手加減をするなど彼に対しての最大の無礼、持てる全てを使い倒す！

その熱意が届いたのか、はたまた狩ると思っていたウサギが狩られる前に精一杯の抵抗を見せるヘラジカに化けたと感じたのかは知らないが対象の脅威判定を更新したのは事実のようであり

「面白い」

そしてリュウガも同じようにカードを抜き取ると黒い炎が巻き起こり両者の中間地点で激突した

リュウガのバイザーは黒い銃型 ブラックドラグバイザーツヴァイへと変化すると黒炎が刻まれたカードを

アナザー龍騎は左手のドラグクロー型のガントレットが銃型ツールに変形すると、その手に握られるカードを

互いに宿る生存を求めるカードを

読み込んだ／握り潰した

『サバイブ／サバイブ』

交差した音声は2人の存在を新たな次元へと引きずり上げる

リュウガの体は漆黒の追加装甲を纏う

仮面ライダーリュウガ・サバイブ

アナザー龍騎は有機的な赤い装甲を纏う

アナザー龍騎・サバイブ

そして鏡の世界から現れたのはその恩恵により力を高めたブラックドラグランザー、

アナザードラッグランザーだ両者は咆哮をあげながら威嚇し合う

「じゃあ始めようか！」

「……………」

互いにカードを読み込ませる形走り出す

〈ソードベント／ソードベント〉

同タイミングで解放された力は互いのバイザーにブレードを展開し激突することになった

生存する為に

互いに生存を望む戦いを見ているものがいた

「許せない…あんな戦いを…英雄になるには僕が相応しいんだ！」

そこに抱くのは歪んだ願い

互いに銃剣化させたバイザーで切り合いを演じている、本来なら戦闘経験値やスペックでリュウガが優勢なのだが此処でアナザーライダーの特性が反映されていた

「おらぁー！」

本来アナザーライダーを倒す有効な方法として用いられるのは同じ力。つまりレジェンドライダーのウォッチを介した攻撃かレジェンドライダー自身の攻撃である。

本来リュウガを倒すならアナザーリュウガになる必要があるのだが残念ながらハルトは所持しているが現状。変身しない……まあ特殊な来歴も相まっているのも使えない理由でもある……何より変身しようとしても拒否される。

そこで変身したのがアナザー龍騎だ

これはリュウガが鏡の存在というのも影響しておりアナザー程ではないが

リュウガ⇨龍騎で繋がりはある

アナザーとオリジナルが戦った時と似た事象が発生するのでは？と思ったのだが結果は見事の中

「が……くう……」

「はあ……はあ……」

特攻ダメージは入っているのだがアナザードラグランザーリュウガでない為か純粋にウオッチを使っている状態よりも低めである端的に言えば微妙なのだ、逆に此方にも同じようにダメージが入ってしまう

しかも予想外にリュウガ・サバイブで応じられた事で戦況は宜しくない

「……っ！」

〈シュートベント〉

近接戦では拉致が開かないと判断したのかりユウガは新しいカードをベントインし
ブラックドラグランザーと共に火炎とレーザーで攻撃する

「ちいー！」

〈ガードベント〉

迎え撃つようにアナザードラグランザーが火炎壁で攻撃を防ぎ切る

「お返しだー！」

〈シュートベント〉

今度は此方も同じように攻撃をするが

〈ガードベント〉

同じように防がれてしまう

「無駄だ、お前に俺は倒せん」

「そりやどうか今のところ互角じゃん」

そう言っても結構ギリギリでもある、使用カードが性質上似ている為か読み合いも強いられている

「舐めるなよガキが」

〈アドベント〉

「貴方を舐めれる程、強くはないんですけどねえ！」

〈アドベント〉

「!!」

呼び出した契約モンスターは互いに火球を放ちながら絡まるように動き噛みつき合う、やはりモンスターが互角と来たならば

「これで決めてやる！」

〈フアイナルベント〉

同時にアナザー龍騎はアナザードラグランザーに騎乗するとアナザードラグランザーはバイクモードへと移行し火球を放ちながら突貫しようとしていた、しかしリュウガは冷静にカードを読み込ませたのだ

〈ストレンジベント〉

自身の戦闘に優位となるカードへ変化するカードで読み込ませると別のカードへと変わり瞬時にベントインした

〈コンフアインベント〉

それは相手のカードの力を打ち消す力でありアナザードライダーとは言え同じ力を用いるのだ効果の例外にはならない、アナザードラグランザーは霧のように消えてしまったのだ

「しまっ！」

「これで終わりだ」

〈ファイナルベント〉

同時にブラックドラグランザーは火球をアナザー龍騎の足元へと放った

「やばっ！」

それは燃え盛るダメージを与える訳ではなく動きを封じている為の火球だ龍騎と違い乱射して突貫ではなく動きを止めてからの轢き逃げする気である、ガードベントはさつき使ってしまったてない

「この野郎……め！間に合え！」

最後の抵抗とばかりにとあるカードを取り出し握りつぶす

〈ストレンジベント〉

「頼む良いのが出てくれ!!」

そして新しく複製されたカードを握り潰そうとした その時

〈フリーズベント〉

「っ!!」

予想外の音声と共にブラックドラグランザーの動きが凍りついたように止まる、しかしアナザー龍騎はカードは潰していない

「どうなっている」

リュウガは降りると周りを見渡すが誰もいない：しかし

「このパターン…まさか!」

ハルトにはかなり心当たりがあつた為、瞬時に警戒に挑んだのだが

〈ファイナルベント〉

「っー」

「リュウガ！…ってデストワイルダー!?何してんだ!!」

身構えていたとは言え背後から現れたデストワイルダーがリュウガを捕らえるとそのまま引き摺り回し始めた…間違いない俺がよく使う不意打ち技 クリスタルブレイクだ…って事は！と目線を向けた先には

「はああああ……」

白銀の猛虎、仮面ライダータイガがデストクロウを構えていた…間違いないリュウガを仕留める気である

「させるか！」

何故か知らないが止めないとダメな気がする！と判断しストレンジベントから変異したカードを発動する

〈アドベント〉

!!!

デストワイルダーの道を遮るように走るのは最早ハルトの親友とも言える存在 メ

タルゲラスがデストワイルダーを体当たりで弾き飛ばすとリユウガはその勢いのまま転がり止まってしまう

「よし!!」

「う……………あ……………あ……………」

「何!」

動いてないのはダメージが重すぎるからだろう…しかし犯人を射程に捕えると

「テメエ、俺達の戦いの邪魔をしやがって!!」

衝動に従うままアナザーウオッチを起動する本来なら最強フォーム変身後は体が負荷で動けないが怒りの感情で負荷など無視して変身した

『王蛇』

〈ソードベント〉

アナザー王蛇になるとベノサーベルを呼び出しそのまま走り出しタイガに襲い掛かる

「っ！な、何をする！僕は！」

「知るかよ…俺の楽しみを邪魔しやがって」

誰かは知らねえが

「男の真剣勝負に水刺すんじゃねえ！」

「お前…」

ベノサーベルでデストクローの片方を弾き飛ばすとそのままもう片方も弾き飛ばす、丸腰になる前にタイガは斧型ツール デストバイザーを取り出して迎撃する何度か打ち合いを行うが乱暴に振り回すだけの一撃一撃はタイガでは受け止められるものではなかった

「ふざけるな！僕は英雄になるんだ！その為にもアナザーライダーや仮面ライダーを全

て倒すんだあ！」

歪んだ承認欲求を吐露する、冷静なハルトなら一定の理解を示したかも知れないが

「テメエみたいな不意打ち野郎が英雄になれるかあ！」

「があー！」

「潰れろ」

怒りでネジが外れている力任せの乱暴な一撃でタイガを吹き飛ばすとトドメの技を
発動する

〈フアイナルベント〉

同時に背後から現れたベノスニーカーの気配を感じたのか

「っ！」

〈フリーズベント〉

タイガはフリーズベントを使いベノスネーカーを凍り付かせる

「へえ複数持ちか」

ガイと同じだが…まさかりターンベントの枠をフリーズに変えたのか？ いやまあな
くは無選択肢ではある汎用性を考えたなら良いデツキ構成だが

「あはははは！…どうです必殺技を封じられた気分はあ！」

完全に相性が悪かった

「愚か者め」

〈ファイナルベント〉

「ふっ……はあ！」

そのまま使ったのは別のファイナルベント、現れたエビルダイバーに乗り降りそのまま突貫する必殺技　ハイドベノンを発動した

「死ねやあああああ！」

おおよそ主役のセリフでない体当たりである

「な、なに!!」

慌ててタイガはジャンプするがラリアットの姿勢で待機していたアナザー王蛇からの一撃をくらい吹き飛ばされた

「あ……ぐう……な、なぜですか！デツキにファイナルベントは一枚しか無いはず！」

「勉強が足りないな、いつからファイナルベントが一枚しかねえと思ってた後2枚あるぜ」

「なん……だと……」

こいつノリが良いなと思考していると何とか体を動かさそうとするタイガだが

「何だよ…もう終わりか？」

アナザー王蛇は仰向けに倒れるタイガに近づいていく

「ひ、ひい！」

「おい立てよ……英雄なんだろ…お前え…」

そのままガラ空きのパティにベノサーベルを何度も叩きつけダメージを与えるとタイガはボロボロのまま立ち上がり這々の体で逃げようとするが

「い、いやだ！こんなの…！」

「何だ逃げるのか？」

それを逃すアナザー王蛇ではなく

「もつと俺を楽しませろお！」

『戦う目的が変わってないか!?』

「ぎゃあああああ！」

追撃の一撃でタイガを遠くまで吹き飛ばすと壁に激突すると気絶したのか動きを止めた

「鳴滝さんの奴…最初からもう1人伏せてたのか？まあ良い、それより…おいデストワイルダー…何してくれてんだお前？」

アナザー王蛇は自分の契約モンスターでもあるデストワイルダーに問いかけると肩を震わさせる、明らかに怯えているのは言うまでもない

「!!!」

何やら懸命に話しているが意味がわからないと首を傾げているとアナザー龍騎が翻訳する

『ふむ…どうやらカードデッキにあったアドベントカードの力で逆らえなかったみたいだな、邪魔して申し訳ないと』

「そうか災難だったなあんなのが契約者だよ」

『!!』

『そうだな、つてよ襲わせる人間の質も低くて困るつてさ』

「はは…んじゃ」

アナザー王蛇は気絶しているタイガのカードデッキからアドベントカードを抜き取るとタイガはブランク態に変わるのを見て

「これでお前さんは名実共に俺の契約モンスターだ不満あるか？」

『!!』

『ある訳ない、お前の下につけば飯には困らないからとさ』

「そっか…んじゃさつきとミラーワールドに帰れ今の俺は機嫌が悪いんだよ」
「!!」

『ごめんなさい！つてさ』

「おう次からは気をつけろよく…つたく人騒がせな奴め…さてと」

その言葉を合図にデストワイルダーはミラーワールドに帰ったのを見てアナザー王蛇は倒れてるリュウガの前に立つ

「……何してる……殺せ」

凄んでるけどさ

「俺がお前の命令を聞く必要がある？」

『ジオウⅡ』

懐古の力でリュウガのダメージを消して快復させるとリュウガは立ち上がり体から消えた痛みを確認する

「何故助けた」

「ボロボロのお前を打ち倒してもこれっぽっちも嬉しくねえ俺は正々堂々と戦って仮面ライダーを倒したいんだよ…俺達（アナザーライダー）のやり方だな！」

そこがアナザーリユウガへの変身へ踏み切らなかった最大の理由だ、俺の持っているアナザーウオッチはオリジナルの歴史を奪う事はないのだが仮面ライダーリユウガだけは確証がない

龍騎の世界ではミラーワールドと現実世界が繋がっていた歴史が消えているので仮面ライダーリユウガの歴史に関しては現在進行中の可能性もある つまり俺がアナザーリユウガになったらこの戦い自体が無かったことになる可能性があった

そんなの仮面ライダーのファンであり最大の敵とも言えるアナザーライダー達の戦いを汚す行いだらう 何より

「こんな中途半端な所で終わってフラストレーションが溜まったわ!!」

「……………」

「で、どうする? まだ俺とやるか?」

「良いだろう……と言いたいが助けられたことに免じて今日は引いてやる」

「……………ん？」

リュウガはそのままミラーワールドに戻ろうとしたが、何となくだが

「おい」

「……………何だ？」

「お前、俺の仲間になる気はないか？」

『はあ!?!』

「何を言っている?」

「いや何、俺の知ってるリュウガなら不意打ちアドベントからのファイナルベントくらい覚悟してたのに使わなかった…:それによ」

少しハルトは貯めて話す

「最強のライダーなのに俺に負けたよな？元最強」

アナザー王蛇の仮面の下はそれはもう悪い笑みをしていたという

「っ！貴様……」

「任務失敗したお前をあの男がどうするかねえくまあディケイドやディエンド先輩達の
囁ませ犬としてやられたいなら別に良いんだけどねえく最強さんw」

『お前、性格が悪いつて言われるだろ？』

「何言ってるの？俺ほど品行方正な優等生は他にいないでしょ？」

『むしろ問題児だ馬鹿者』

「んだと？」

『独断専行、情報漏洩による事態の悪化、無許可で影武者とすり替わり… e t c …さて反

論?』

「申し訳ありませんでした」

『よろしい…だが良い煽りだったぞ』

「あ?」

仮面の下では煽るように悪い顔をしていたのを理解したのかはたまた自分の最強への自負心を貶されたからか知らないが

「……誰が囓ませ犬だ?!」

リュウガはかつて無いほどに激怒していたのを見ると釣れたとほくそ笑む

「おーおー違うのか?呼び出されたのに不意打ちくらって任務失敗…それで最強とは片腹痛いねえ」

「ふざけるな!俺は最強のライダーとして君臨する!あの破壊者にも怪盗にも負けてない!」

「へえ〜本当かなあ〜俺が助けなかったらタイガにやられてたよね〜助けた借りは返してもらわないとなー!」

「……………良いだろう、お前の口車に乗ってやる!」

やっぱ鏡合わせでも城戸真司だなあ…中身は違っても純粹なところは変わらないな

「つしやあ取引成立!!よろしくなりユウガ!………チヨロ」

『お前…黒いな』

ーいやありユウガ程じゃないよー

『ウルティマがお前に懐く理由が分かった気がするぞ』

ーえ?何でウルティマ?素直で可愛い子じゃんー

ガッツポーズで喜びを表すアナザー王蛇だがリユウガは冷静に

「俺はミラーワールドに帰る…それともう一人の俺によりよく言っておけ」

それと同時にアナザーウォッチが鈍く光り始めたのだ

「え?何?!………っ!」

「気づくとお馴染みの精神世界にハルトは立っていた

「まあコレかよ、あのさあ…スカウト中なんだから呼ぶ時は前もつてな」

文句を言おうとするアナザーディケイドに片手で制される

「そう言うな貴様と話したい奴がいるのだ」

「誰だよ」

「出てこい」

「おい、だれが…誰がかませ犬だあ！」

「そう呼ばれる理由が知りたいならディケイドやジオウを見直せ!!あと天井しなくて良
いんだよー!」

まさかのアナザーリュウガに頭を抱えてしまう…つか普段沈黙してる癖にどうし
て出張ってきたんだか

「何の用だよ」

「簡単だ貴様に手を貸してやる」

「今更だな本当に」

「違う…リュウガも俺もだ…あいつは素直に言えないみたいだからな」

「……………ん？」

要領を得ないと首を傾げているとアナザーリュウガは溜息を吐き

「俺とアイツは元は同じ存在なのは知っているだろうか？」

「……………あゝ」

「ハルト…貴様忘れてたのか？」

「んや」

そう言えばとハルトは納得した

ジオウに出たアナザーリュウガの変身者は

鏡の中の城戸真司　つまり今、目の前にいた原典リュウガと同じ人が変身している

「って事は…」

「リュウガが死ねば連動して俺も消える所だったんだ」

アナザーリュウガとリュウガは同一の存在と言うことになる　現実世界に出れた力がカードデツキなのかアナザーウオツチなのかの違いだからな…そりやリュウガが死ねばアナザーリュウガと死ねのかって

「危ねえな！…いやだからあ…そんな大事な事は早く言え!!」

「お前も似たようなもんだったらうがよ」

危ねえタイガの不意打ち見逃してたら仲間が死んでたじゃん！

「やっぱタイガの奴殺す！」

ミラーモンスターの餌にしてやると怒り心頭でいると

「気にするな…まあ本来なら俺を縛り付けてるお前を殺す事で自由になれると思っ
たのだがな」

「腹黒い野心を抱えてやがったな、この鉄仮面…やっぱ見逃せば良かったか？」

「おい手のひら返しが早いぞ」

「しかしながら貴様に助けられたのも事実、リュウガと精神リンクして話し合いをした
結果…お前に従う事にしたのだ」

「おー…：うん、ありがとう」

「礼はいらん…：いつがかませ犬呼びは撤回して貰うぞ」

「そう思わせれるように頑張れ」

—————

「さて…：…起きろ」

アナザー王蛇は気絶したままのブランク態タイガの頬を叩くが反応がないので腰につけたカードデツキを引き抜くと中の変身者が現れた

「カードデツキをゲット…さて誰に渡そうかな…:…つ!!はあ?」

その人は右手が異形のように膨れ上がった白髪の男性、ハルト自身に直接的な面識はないが資料として知っていた…確か

「ドクターウエル…:…だっけ?」

彼は確か、ノエルが助けに向かっていた筈だったのだが…:…つて待て!

「ノエルが帰ってきてんのか!!…ウオズ!」

アナザー王蛇は慌ててファイズフォンXで電話するのであった

—————

『大変だノエルが帰ってきてるみたい!』

「我が魔王、知っていますよ…今目の前にいますから」

ウオズがフェイスフォンXで応答してくれている

「留守の間に僕の家でだいぶ好き勝手に勝手してくれましたよね」

ノエルが怒髪天をつくばかりに現れた、ドクターウエルを助けたすぐに転移で戻ってきたらハルト達が好き勝手暴れていたのと言う訳だが

「盗人猛々しいとはこの事ですね我が魔王とキャロル嬢の家を盗んだ奴が何を今更」

実際の所、ウオズはかなりキレていた。直前にあったハルトの独断行動に始まった一連の事件と最近仲間になった新人とも言える悪魔三人娘の態度の悪さ e t c により沸点が低くなっていた

それは同僚2人も同じのようで

「ウオズちゃんやっちゃう？もうやっちゃおうよ」

「ああハルト様が出るまでもない我等だけで事足りるな」

「舐められてますね魔王の腰巾着3人如きで僕をどうにかできるとでも?」

『お前等…すぐ向かうから待つてろ!俺を仲間を舐め腐つてる野郎は俺が叩き潰す!』

「いいえ我等3人でお相手しますので我が魔王はお先へ…恐らくコイツは…」

『は?』

「いえ…我々を舐めている失敗作のホムンクルス風情には相応の仕置きをする必要がありますから」

笑顔の下には怒りがあつた腰巾着と呼ばれたウオズ達にも家臣としての意地がある、あの災厄の魔王と共に戦つたと自尊心と問題児の面倒を見てきた責任感だ

「それと来ても構いませんが、その場合先程のサイドバツシャーの件で少しお話が」
『電波が悪くなったから切るぞ!あと死ぬ事は許さん!』

プツリと切れたのでウオズは溜息を吐きながら

「はあ……」

「魔王ちゃん何て?」

「先へ向かうと死ぬのは許さんと…まあここを抑えれば我等の勝ちですので」
「そうだな」

ジョウゲンとカゲンはドライバーを構えると

「なるほどシャトーの支配権をオリジナルに返還する予定でしたか残念です、ね貴方達を倒せばすぐにでも魔王を倒しに「囀るな小物」なんだと！」

「偉大なる我が魔王が住まう家を盗むだけに飽き足らず我が魔王をすぐに倒せるとたか括る…その傲慢さがお前の敗因だ」

「そうだねえ、俺達も魔王直属なんだよ弱い訳ないじゃん」

『ザモナス』『ネオアルファ』

「その通りだ我等の力を見せてやる」

『ゾンジス』『真』

今回は本気と言わんばかりにウオズはアナザーギンガウォッチをジョウゲン達に新たなアーマーを取り出しドライバーに装填する

「ウォーミングアップにはなりますかね」

ノエルもコアメダルをドライバーに装填し構えると

「変身！」

『ギンガ……ファイナリー』

『ザモナス（ゾンジス）』

『シーカーゼシー！』

4者は互いに変身をすると同時に現れた有機的なアーマーと左手にチエーソーとガトリングが融合した武装を保持したアーマーがザモナスとゾンジスと合体する

『ARMOR TIME！』

『真！（ネオアルファ）』

ゾンジスは元々有機体よりの姿が更に有機的となり両腕のカッター部分の鋭利さが更に増し ザモナスは左腕に複合武装スリープソーを装備した姿

仮面ライダーゾンジス・真アーマー

仮面ライダーザモナス・ネオアルファアーマーに変身した

「行くぞ」

「ああ……狩り開始！」

ザモナスのスリープソーを発射するとアナザーファイナリーとゾンジスが走り出し

たのであった

その頃 ハルトはと言えば、アナザーオートバジンに乗り込むとチフォージュ・シャトーの司令室（本編でキャロルが座ってるあの部屋）を目指していた

「怒りで疲労を感じないのは何でかな！今なら他の最強アナザーにもなれそうだよ！」

取り敢えずタイガ：ではなくドクターウエルを藁虫にしてアナザーオートバジンの後部に取り付け引き摺り回している

「あははははははははははー！」

何か愉快に飛び跳ねているが俺の決闘の邪魔をした罪は重いのだ、ミラーモンスター
の餌にしないだけ慈悲である

『まあそう言うものなのだろうな』

変身解除してても肉体疲労がないのは疑問でしかないが今は感謝するしかないが

「ノエルはウオズ達が相手してるなら向こうのガードは手薄の筈…滅達はどくなってる？」

『ああ…それはなー』

—————

その頃 チフォー・ジュ・シャトー外壁部で戦闘をしていた滅亡迅雷vsオートスコアラーの戦いと言うと

「本当、魔王の配下連中はゲテモノばかりですね!!あはははははは!」

「その舐めた態度が気に入らねえな雷落としてやる!」

ガリイの水攻撃は雷の持つヴァルクサーベルで両断した後、赤雷を帯びた斬撃は水壁を切り裂くがガリイは済んでの所で回避するというやりとりを数度繰り返しているが（不味いですねえ何故か知りませんが攻撃の精度が上がってますねえ…）

「余所見してる暇があるかよ!」

『カバンシヨット!』

雷はアタツシユシヨットガンから収束弾頭で攻撃するのであった

「その赤と羽攻撃…派手過ぎるな!」

「いや君のトンファアやコインも大概だよ!」

レイアのコインを迅は背中 of 炎を帯びた羽を射出し相殺している

「しかし私たちの事をよく調べているのだな」

そう言うレイアの目線の先には両腕の鉤爪で襲い掛かる仮面ライダー亡の姿がある、先程近くにあった重機を操作して鉄球をレイアに投げつけたがソードブレイカーで両断された

「まあね、あの人のソードブレイカー?を使われたら僕と雷の武器壊れちゃうからね」

雷の武器は剣、迅に至っては変身ツールなどマッチングは避けたかった相手でもある
「なるほど…まあミカがいれば此方の勝ちは決まっているが」

「それはこっちのセリフだよ滅を舐めないでよね」

滅は冷静にミカのカーボンロッドをアタツシユアローで弾きながら反撃の矢を放つ

ている

「何でアタシの攻撃が効かないンダゾ？」

「ラーニングによって進化する、それが人工知能の強味だ」

それに尽きる、そもそもオートスコアラナー達はキャロルといった時代からハルト、千冬、束との模擬戦で戦闘データを蓄積させ続けていたのもあり滅亡迅雷はそれぞれが相性の良い相手て戦えるのだ…また攻撃パターンも分析済みである

「難しくてよくわからないゾ！」

ミカのカーボンロッドの一撃には滅も全力の一撃で答える、フォースライザーのレバーを一度引くと足に毒針が纏わりつくそのまま蹴り上げを行った

「分からなくて良い俺達はお前達を無力化するだけだアークの意思のままに！」

煉

滅

殲

獄

『STING DYSTOPIA!』

「ふん！」

「ダゾ！」

両者の激突で大気は強く震え滅の足に纏う毒針とミカのカーボンロッドは同時に砕けるとカウンターでアタッシュユアローと追撃の一撃を行うなど待機中だったアナザーコアも驚く程の手並みであった

「これ…僕いる意味あるかな？」

—————

強く揺れる振動にハルトは遠い目をした後

「あく取り敢えず大丈夫そうだな」

『だな……よし此処を右だ』

「ん…あ、邪魔」

到着したので急ブレーキかつドリフト停車の勢いでドクターウエルを近くの壁に叩きつけて気絶させておく

「あだ！」

「……か……」

相棒の道案内された扉に入ると

「って医務室じゃん寄り道してる暇はねえの」

『違う、此処に反応があったのだ』

「誰の……って成る程ね」

その目線の先には液体に浸ったポットに浮かぶクジヨーがいた……恐らく治療中なのだろうか

「……………」

『どうした？』

敵の首魁である此処で殺せば後の禍根は残らない……しかし

「寝込みを襲うのはちよつと……なあ相棒一応だけ俺主役ぞ？ そんなに倫理観がない奴と思われてるのはちよつと凹む」

俺にだって戦いの流儀はあるさ……そこまで外道と思われていたのかとショックを受けていると

『人質を肉壁にしてサーフィンする奴のセリフとは思えんな』

「それはそれ、コレはコレよ」

と返すが起きて暴れられるのも面倒なので

「生命維持装置をカットして異空間に放り込むか」

『それ言外に殺すと言ってるのと同じだぞ?』

俺のアナザライダーで異世界に繋がられる存在は少なく繋ぐのは派手なのだ外で暴れてるもしくは他のネオタイムジャッカーのメンバーに現在地がバレるのは面倒くさい

『ハルト!それなら俺を使うんだ』

「アナザーフォーゼ?」

『実は最近、ヴァルコ・ゾディアーツの力を解析して擬似ダークネビュラに接続出来るようになってな〜こいつを宇宙空間に飛ばしてやるぜ』

「そこは進化して得たコスミックステイツの力でワープ出来る様になったの方が嬉しいよ」

『……コスミックステイツに覚醒したからワープ出来るぞ!』

「訂正が遅いぞ馬鹿野郎!いやヴァルコでも良いよゾディアーツ好きだし……一応聞くけど超新星かと出来ないよな?」

あの強化できるなら使いたいとボヤくと

『え?出来るぞハルトが魔王化した時にな!』

「だからそんな情報はもつと早く言え！…まったく仕方のない奴だな」

『しかし珍しいな助けるのか？』

「ムカつくし何なら今この場で攻撃したいが

この野郎が警告したからキャロルと話せた…本当に大変、誠に不本意だが見逃してやる運が良ければ助かるかもな」

これで復活して来たら寧ろ心置きなく殺せるのでそれはそれで良いと判断した、今殺すとその辺が蟻りになって気分が悪い

「俺の気分だ文句は言わせん」

『フォーゼ』

アナザーフォーゼになり手をかざすと真上に現れたダークネビュラがポットを吸引して異空間へと引き摺り込んだ

「んじゃな」

取り敢えずコレでよし、とアナザーオートバジンに乗り込んで遂に目的地に到達する

『ここだ!』

「よーし!これでエンドゲームだ!」

ノリノリでドアを開けると、そこには

何もないただの荒野が広がっていた

「……………あれ?」

おかしい俺はあの部屋に着いたはずだと思っていると

「漸く来ましたか、魔王」

優雅に佇んでいた男を見てハルトは驚く

「ノエル!?嘘だろウオズ達負けたのか…こんなあからさまにフラグ回収してんじやねえよ馬鹿野郎!」

だがノエルは首を横に振り

「残念ですが彼処にいる彼は分身…まあ同じモデルの躯体に記憶を渡してるので同一人物とも取れませんがね」

「……ま、まあ俺は気づいていたがな！」

『いや思い切り騙されていただろう？』

「つさい………んで？何よ降伏しに来た？」

「まさか此処であなたを倒しに来たのですよ!!」

ノエルが取り出したのはおなじみのダインスレイフである、魔王化した俺にもダメーヂが入った剣となれば倒せる根拠だろうがなと慢心してたのがダメだったのか

「出でよー！」

と合図するなり別空間から現れたのは大量の屑ヤミーにヤミー…見慣れた奴からそうでない奴まで多様である

「ここはクジヨーが拵えてた対魔王結界！他の世界と断絶してましてね自慢のオーロラ

カーテンで逃げる事も叶いますまい」

「……………」

『忌々しいが言う通りだオーロラカーテンを開けんぞ』

「そして控えるヤミー軍団2万に対して貴方1人！この状況で何が出来ましようか!!」

だがハルトはヘラツとした顔で

「……………あれ？これってもしかしてピンチ？」

惚けたことを言うのであった

『お前、大物になるぞ』

「既に国王ですが何が？」

『ダメだった…既に大物だった…いやバカか』

「一言余計なんだよ…まさか俺が逃げるとしか考えてないのか」

アナザーデイケイドはオーロラカーテンってだけじゃないのにな

「成る程…現実を直視できないのですな可哀想に」

「え？別にピンチじゃないよ……ほら」

そうハルトが目線を上げた先には以前彼が使った魔法で現れる

悪魔門が現れていたのだから

「あ、アレは!!」

「魔法は使ってないんだけど」

いや何処から現れたと首を傾げていると扉がギギギと開き始めた

ノエルに過ちがあるならば自らの逃げ場も失うような方法を取らなければ良かった

その過ちも対価は命で払うことになるだろう
中から現れたのは

「お待たせ致しました、ハルト様」

「ごめんねハル、悪魔門開く魔力貯めるのに時間かかっちゃった」

「だが良いタイミングであったな！」

原初の三人娘に加えて、その副官や末席に至るまで大量の眷属達が門から現れたのだ

「留守居を除いた魔王直轄親衛隊500が勢揃いだ！」

と嬉しそうにカレラが言うが

「あれ？俺って親衛隊とか作ったかな？……あ、てか逢魔に避難しろって俺言ったよな
何で此処にー」

一応命令違反を咎めたが

「ですがウオズ達は勝手に動きましたし、ハルト様の危機を救うために手勢を連れまし

たわ」

「はあ…OK、これは命令違反じゃない、でかしたテスタロッサ、カレラ、ウルティマ」
「お褒めに預かり光栄ですわ…まあ理由は別に…」

「そーそー、ジヨウゲンに煽られたからとかじゃないからね！」

「それが本音だろ……つたく悪魔門どうやって開いたのさ？俺の魔力ないと使えないよな？」

「そこは…ボク達の魔法の力でハルトの魔法をこう…チヨチヨイと」

「深くは聞かないけどさ…ありがとよ助かった」

さて数では負けてはいるが質は最強となったし

「大乱闘とか…心が躍るな、皆!!死ぬことは許さねえ…死んだら俺が生き返らせてからもっかい殺す!」

「[[[[はっ!!]]]]」

まあ問題ないと判断してるがな、さて

「な、何だこいつらは……っ!お前はあの時の!」

「あら貴方は…」

突然現れた手勢に慌てふためくノエルの目線に映り込むテストタロツサの姿は流石に予想外だったようで呼び出した黒騎士の背に隠れた

互いに戦闘開始までに準備運動をしている中テストタロツサの魔力量が爆発的に跳ね上がった配下の悪魔は怯えるがハルト達は理由を理解した

「やっと見つけましたわ…しかし外野が煩いですわね…それにアレはハルト様の敵…ど

うしたら」

テスタロッサからすれば取り逃した敵でありハルトの覚えを悪くさせたと思ってる犯人だどんな手を使ってでも自らの手で始末したいが主人の敵を奪うことになる、これ以上不興を買いたくない：主君はその意を汲んだのか知らないが

「倒したいならテスタロッサに任せるカレラとウルティマは？何か意見あるなら聞くけど？」

ヤミーは俺がやらないとなと首の骨を鳴らす

「我が君が決めたなら仕方ないなウルティマ」

「そうだね、ボク達は雑魚を相手するからテスタロッサのリベンジの邪魔しないであげるから感謝してよね」

「ハルト様、ありがとうございます」

「んや、この間のリベンジしっかりな」

「ええ必ずや」

「ちよつとボク達への感謝が抜けてるよ！」

「あら？ハルト様は別ですが貴女達では手に余るから私に投げたのではなくて？」

「何（を）!!」

何というか安心する遣り取りにハルトは疑問に思い目線をノエルに向ける

「何というか安心感スゲエ…」

いやカレラも言ってたが本当に良いタイミングだなあと感心してると

「お前達にそんな余裕があると思っっているのか!!」

その声に3人の歪み合いはピタリと止まり目をギロリと向けると三人娘と配下達は笑顔を浮かべている

「さて我が君から許しも得たところで始めようか」

「ねえ誰から死にたい？」

「ノエル…でしたか？ 貴方は私が殺します」

「んじゃ………行くぞオラア！」

『ジオウ』

それと同時に全速で走り出し方やメダルの怪人 かたや冥府で争いあう悪魔とそれを従える魔王との最終戦が始まろうとしていた

乱戦からのラスボス？

この乱闘で先陣を切ったのは言うまでもなく

「お前達、私に続け!!」

「「「うおおおおお!!」」」

カレラと彼女が率いる黄の眷属達がアゲーラのように武人肌かつ他の色よりも戦うことが生きがいの悪魔が多い為か、今回の戦いで一番士気が高く勢い任せに敵陣に突撃していく刹那、屑ヤミーが華麗に空を舞ったのを見たアナザージオウは

「…ええ?」

複眼をパチパチ開閉したのであった…あ、何気にアナザーライダーって瞬き出来るん

だよね」

「所詮は獣か…動きが単純だな」

アゲーラが納刀すると同時に大型ヤミーであるオトシブミヤミーが千切りにされ爆散し次の獲物を見定める

「あはははははーいやいやこんなに暴れるのは久しぶりですねカレラ様あー」

エスプリは笑いながらネコヤミーの頭を掴むと手近な敵に投げつけボーリングのピンのように弾き飛ばすと新しい獲物を探してまわる

「そうだな…さて少し派手に行こう、ウルティマやテストタロツサなんぞには負けん」

カレラはアゲーラから習った刀でクワガタヤミーを切り捨てると納刀、いつものように笑いながら魔法の準備に取り掛かる

彼女は思っていた自分は他2人と違いハルトからの信頼されていないのではないか

と

付き合いの長さならウルティマが実務面ではテストアロツサがいる、勿論自分は彼女達にも負けてない評価を得ているのは要職に就いてる事からも解るし戦闘など有事の際には必ず声をかけて頂いているが元を辿ればハルトの領土をいきなり攻撃しているのがキツカケで完全な信を置いて貰ってないのではないかと

だが実際、ハルトはそんな事思つてなく寧ろカレラの事は魔王化させて貰った恩人でもあり明朗快活な姿や気楽に接して貰っているのは大変ありがたいと思つている、眷属の頑張りもありヤミーの軍勢はみるみる減つていく

他の黄の悪魔達も己が力をまざまざと見せつけているのはカレラの為と見て思う、流石というべきだなカレラの気質なのか武人氣質な悪魔も多くいる事もあり、大軍がいても怯むことなく戦っている勇猛果敢を体现している

「いやあ見てて気持ちの良い戦いぶりだなあ…メツセージ見て新しくきた奴もいるし今度の組手はカレラに頼んでみるか…けど…」

そうハルトが呟いたからか少し出遅れてしまったテストアロツサとウルティマは額に

青筋を浮かべ不機嫌になると眷属達は震え上がっている

「あら…ボサつと立ってて貴方達は何をしているのですか？」

「何してるのお前達…早く行け」

気質で言うとかレラが暴君ならば、さながらそのオーラは女帝と怒る姫君である、特にライバル関係のウルティマの怒りようはない

覇気に圧倒された眷属達はさかさず戦場に突撃しヤミーを狩り始めた…それだけ2人が怖いのだなと実感したが何故だろう…：死なない程度にフレンドリーファイヤを起こしてるように見える…これは一重に

「何をやるウルティマ！ここは私の見せ場だ！獲物の横取りは感心しないな！」

「何言ってるの？良いところ取りなんてさせないから！」

「何だと！そもそもこの我が君のピンチを助けるのは私の考えだぞ！」

「詭弁だね！皆で考えてた事を自分の考えみたいに言っちゃってさ!!」

主との関係に起因しているのだろう…アゲーラやゾンダに聞けば現在進行形で仲が悪いらしい、やられたらやり返せを100年単位でやっているとこの事…あの2人は敵そっちのけで同士討ちしてるのだが余波で綺麗に吹き飛んでいる…彼女達の眷属も巻き込んで、死んでる個体がないのは俺の命令に準じて手加減しているがそもそも頑丈なのか…いや後者だろうな

「こりや俺の出番はないな」

『それ、フラグだぞ』

「自覚してる最近その手のフラグ回収しやすいんだよなあ」

やれやれと話しているとだ背後から現れたカブトムシヤミーが襲いかかってきた
「死ね魔王！」

「遅え」

『セイバー…アナザー必殺撃！』

「グアアアアアアア！」

そのままツインギレード長剣にアナザーセイバーウオッチを入れると現れた炎を帯びた斬撃で追加ダメージを加えた振り向き様の斬撃でカブトムシヤミーは鮮やかに爆散した

「んじや続いて……はっ！」

ツインギレードを連結させると長剣部にアナザーエグゼイド、短剣部にアナザー龍騎ウオッチを装填した

「誇り高き戦士の技だ…避けんなよ」

『MIXING』

「超絶奥義・紅蓮爆龍剣!!」

放たれた赤竜の咆哮と一撃は射線上にいたヤミーをメダルに返しただけに飽き足らず綺麗な直線を作り出した

「っしやあ! テスタロッサかつ飛べ!」

「はっ!」

アナザージオウはそのまま道に向かって走り出すとテスタロッサもそれに気づいたのか同行する、当然、道は閉ざされるのが常だが

「カレラ…今のままではテストarroツサに全部手柄持つてかれるよね」

利に聡いウルティマが持ちかけた取引はカレラにもメリツトのある話だったのもある、実際彼女達は逢魔で内外ともに活躍し実質ハルトの右腕に収まっているテストarroツサに嫉妬している…勿論、彼女の能力は認めているし自分達も大事な役職というのも自覚しているし重用されているのも分かる、実際にハルトは分け隔てなく接しているのは伝わっているが感情では少し納得出来ない自分達が先に従っているのに

「……………ちつ、しょうがない今回だけだぞ」

「それはこっちのセリフだよ」

と2人は互いに高威力の魔法を走るアナザージオウとテストarroツサの邪魔をする敵に目掛けて放つ、すると綺麗にヤミー達は宙を舞うのであった

「ありがとうな2人とも!!」

「珍しく役に立ちましたわね」

「この言葉に思わず2人はプチっとキレた

「ねえ…今ならテストタロツサの方向に攻撃して当たっても流れ弾で済むよね？」

「奇遇だな私もそう思った所だよ、やるか」

「うん…消しとばしてやる核撃魔法…」

「や、辞めてください!!お二方!あとウルティマ様、それ流れ弾ではありませんよね!ハルト様まで吹き飛びますよ!」

慌てて止めに入るテストタロツサの副官モス…苦勞人である

「大丈夫だよハルならきつと良い感じで無傷………だと思っ」

「ああ我が君ならきつと灰からでも蘇るだろう!………多分」

「全く安心できないのですが!?!」

—————

「煽るのも程々にしろよテストタロツサ…てかウルティマは俺を何だと思ってるんだ?…後

…モスこれが終わったら呑みに行こうか…いやマジでごめん…」

「そんなつもりはなかったのですが？」

「それはそれで酷い気もするけどな」

話してると目当ての場所についたので

「ノエルさつきぶり」

それはもう良い笑顔で話しかける

「二万の大軍が500に負けてるのってどんな気持ち？」

「……………」

苦虫を噛み潰したような顔をするノエルを見て思う

「質より量なんだろうけど連中に数だけじゃダメさ…勝てる訳がねえだろ」

「魔王…」

「んじや、アレはテストアロッサに任せるから俺は」

アナザージオウが目線を向けたのは言わずもがな自らに深い手傷を負わせた因縁のある黒騎士である、あの時はアナザージャックリバイスが殴り飛ばして事なきを得た：バイスは俺の悪魔なので別に良いのだが

「よお黒騎士、いい加減決着付けようぜ」

やはり自分の手で殴り返さないと気が済まない

首を向けて場所を変えようと指示すると黒騎士も無言で反応し動く

「ま、まあ良いでしょう黒騎士が魔王を倒せば良いだけですからね…さて…：前は不覚を取りましたが今回は「黙りなさい」っ!!」

テスタロッサと相対するが彼女の目は以前と違い戦いを楽しむものの目つきではない例えるなら狩りを楽しむ狩人から殺す事を前提として戦士のそれだ

意識改革なのかは別だが今彼女の胸に去来しているのは

あの時、私がコイツを取り逃してしまったから…ハルト様が困っている…今まで全幅の信頼を得ていた私の覚えを悪くした主犯だ…許せない

そのオーラが当たったのか将又、以前から女帝の苛烈さを知る眷属達は以前、彼女の友人を裏切った結果滅んだ国の事を思い出し悪寒に襲われウルティマとカレラは先程までの怒りを抑えて適当な場所に腰を下ろした

「ねえカレラちよつと休憩しない？ボク疲れちゃった…おい飲み物」

「同感だ、珍しいものが見れそうだから…私も貰えるかな？」

「はっ！お任せをお嬢様」

いつの間にか現れたゾンダとヴェイロンは命令に従い動いてると

「だよねえくあのテストアロツサがさ」

「ああ全く、我が君の下に来てから退屈しないな」

「だよねえくまあボクが一番最初に見つけたんだけどね」

「何だ？」

「何さ？」

「あの……喧嘩するのも構いませんがテストタロッサ様が動きますよ」

モスの発言に2人は喧嘩をやめて視線を戻す2人は同格の存在故に感じ取ったのだ、優雅に振る舞うのが常の彼女が幽鬼のように体を動かしながら見つめる事前に宿るは滅多に無い感情

「この人間風情が……覚悟なさい」

本気の怒りを発露していたのだから

—————

「うわあテストタロッサの奴、マジじゃん……」

ハルトが遠巻きに感じた魔力と覇気に対して素直な感想を述べているが

「彼処まで気にしなくて良いのに……」

それはハルトの偽らざる本心である、そもその発端は俺なので咎められこそすれ彼

女が自責することはないのだが

「いや美人が怒ると怖いって身に染みて理解してるけどさ……」

色々やらかしてお仕置きされてるし……例えば千冬がサタンサーベルで牙突放ったり、キャロルがデンキウナギの鞭で電気流しながら逆さ吊りしたり、束がオーソライズバスターで砲撃してきたり、錫音が笑顔でライトニングを放っているの理解しているのだから

「一番怒らせたらダメな奴だったなテストタロツサ」

直情的でない分、怖さ2倍である

『寧ろ今までお仕置きされて、よく生きてるな』

「いや本当それな……まったく責任感が強すぎるのも考えものだねえ、俺みたいにお気楽にすれば良いのに」

『お前はお気楽すぎるぞ……いや本当に責任感持て』

「いやいや大丈夫大丈夫、責任感ありますよ何たって俺は王様ですから」

『……………』

「いや……その……相棒？」

『……………』

「あく悪かったよ！以後、気をつけますから無言は辞めて！一番堪えるから!!」

『よろしい…で、あいつをどう料理する？』

意識を目の前の黒騎士に向ける、正直言つてあの魔剣、ダインスレイフの一撃を気をつければ大丈夫であるが逆を言えばあの魔剣で斬られたら俺でも致命傷になるのは以前体験済みなので

「アナザーリュウガになつても切られるのは勘弁な反射ダメージの我慢比べとかやつてらんね」

我慢比べになつたら不治の呪いを受けるのに向こうには切られたダメージしか反射しないとなつたら相性が悪すぎる…というよりアレって人なのか？

「まあそれは全部倒してからで良いか…けどセオリー通りアウトレンジで削るのも気分じゃないし」

取り敢えず近接戦で仕留めると決めたのだ…だから飛び道具は牽制程度にしておく

『だろ？…じゃあ誰でやる？』

「ん…：…：…じゃあ安価か志願で決める？やりたい奴！」

誰になっても自信しかないし年単位で切磋琢磨してるのだ誰が来ても問題なく勝てる…これは慢心ではなく純粋な格の差だ

『掲示板ネタは辞めろハルト、おいお前等から何か言つてやー』

『ヒヤツハー！新鮮な安価だあ！』

『いよつしやー！燃えてきたぜ!!』

『イエエエエエイ!!』

『この命懸けの状況で安価するなんて!』

『流石ハルト！俺達には出来ない事を普通にやってのける！そこに痺れる！憧れるう！』

『俺達の王様はやっぱり最高にイカれてるぜえ!』

『貴様等もか!!』

この発狂ぶりは予想外だった

「いやあ見事に染まってんなあ…後イカれた呼びした奴は後で説教な」

『悪い方向に染まりすぎだ!!やれやれハルトと契約してからコイツ等の様子がおかしいったらない』

『そもそもお前が連れてきたんだけどな』

アナザーWのツツコミに思わず、ウツとなったアナザーデイケイドは

『し、仕方ないだろう暇潰しにあらゆる並行世界を視聴していたら目の前に俺達全員を抱えても壊れない体質や普通に受け入れようないカれたメンタルを持った条件最高の人間がいたら連れてくるだろう!』

「え！俺ってお前等から見て、そんな優良物件だったの！！ならもっと大事にしてよ！」

『いや実際に連れてきたら只イカれてるだけの野郎だったから別にこんな扱いで良いかと思つてな』

「この悪魔め…」

『後それは誘拐犯の発想なんだよ！』

「つて、その前に誰がイカれたメンタルの持ち主だ！」

『『『『え！違うのか！！』』』』』

「俺ほど健全なメンタルを持つてる奴はいないだろう！」

ドヤ顔で胸を張るも

『まあ（悪い意味で）健全なメンタルだな』

『ああ（俺達を使つて壊れない）頑丈なメンタルだな』

「おい副音声聞いてんだよ検索エンジンども」

『べ、別に：俺達は：俺達と契約してアナザライダーになってよと言っただけだが？』
『と犯人はこのように供述しており』

「いや、お前のツンデレとか誰得なんだよ二日酔いレベルの気持ち悪さだな：吐きそう』
『違うわ!!：それとハルト！元はと言えば貴様が戦いの場でふざけるからだ！』

「つ！…：つたく人の頭で騒ぐなよ：おいまだ俺達が話してる途中だろうがぁ！」

黒騎士の一撃をアナザージオウは槍で切り上げて防ぐ罅迫り合いのまま肩を切り裂こうと言うのが見え見えなので腹を蹴り飛ばして間合いを作ると、やれやれと被りを振るが少し安心する

今までもこれから変わらないだろう付き合いだ…いや本当に頼りになる仲間達だから

「俺は皆と楽しく旅をしたいんだ…そんな遊び心もないお前なんか邪魔してんじやねえよ」

『ハルト！決まったぜ！』

「お、んじや行こうか」

アナザージオウがウオツチを起動させると姿が変わった姿は

『パンクジャック』

「へえ…お前か」

『皆が譲ってくれたんだよ』

「ふーん」

あの生々しいジャックオランタンこと アナザーパンクジャックであるが本人は凄みを持たせた声で話しかける

『ハルト！今回は俺に任せてくれ！コイツ等には貸しがたんまりあるんでな、あの鎧に利子つけて返してやる！』

成る程…操られてたりベンジって訳か確かに俺と同じでネオタイムジャッカーやノエルには一撃入れてやりたいのだろう…その心意気、買ったぜ

「そうだったな…つしやあ！力を貸してくれパンクジャック!! だけどお前エントリーで戦えるの？ 持つてるのはこのオレンジマントだけよ？」

『おうよーんじゃ先ずはコイツを使ってくれえ！』

「任せろ!!」

と現れたバツクルをドライバー擬きに装填した

『シールド…チエーンアレイ』

その両手に現れたのは青い盾とオレンジ色の鎖で繋がれた鉄球であった

「……………ん？」

鉄球がズシンと音を立てて落ちたと同時にアナザーパンクジャックは見事なサムズアップをして一言

『さあ頑張れ！』

「お前リベンジする気ないだろ!? てか、この組み合わせアナザーフォーゼで前に使ったわ!!」

因みにこの時、観戦していたウルティマとカレラは爆笑していたという

「!!」

そんなツツコミを入れてみると黒騎士が突貫してきたので

「ガチャガチャ、うっせえんだよ!!」

ダインスレイフをシールドで受け止めると鉄球を鷲掴んで黒騎士の脳天目掛けて振り下ろした後よろめいた隙をついて蹴りを入れると

「そらあああああ！滅殺!!」

二度目の叫びながら投げるチェーンアレイ攻撃に黒騎士は思わずダインスレイフを盾にするもズルズルと押されていく

「このハロウィン野郎！何で小型バツクルを渡すんだよ！そこはギーツやバツファみたいに専用のがあるんじゃないのか！これ微妙に使いつらいんだよ！」

『ナイスノリツツコミだな…聞けば前は使いこなしたらしいが…あとナイスツツコミ！』

「んなもんノリと勢いだ!!ってツツコミ待ちだったんかい!!」

同じようにチェーンアレイで殴りつけると

「やっぱり鉄球使いつらい！チェンジで！」

『ほい来た！んじゃコレを使え！』

「っしやあ!!………ん？」

渡されたのはそれはもう見事に立派な

「卵？」

そうとしか言えないものがあつたダチヨウの卵くらいあるなあ…

「……これどう使うの？」

仮面ライダーで卵使う奴とかいたかなあと記憶を閲覧しているが

『孵化させればOKだ』

「アナザーバツファ」

『何だよ』

「そのハロウィン野郎の頭を手を持つてるチェーンソーで叩き割れ、お前達！今日の夕飯はカボチャスープだ」

『イエエエエエイ！』

『何てカニバリズム!?!じ、冗談だよな!!』

『ああ任せろハルト』〈poison charge〉

『え？いやちよつと待て！これには深い訳が…つてバッファ、マジで何でゆっくり近づいてきてんだ！考え直せよ！』

『問答無用！』〈TACTICAL BREAK〉

『ぎゃああああ！』

アナザーパンクジャック…お前の敗因はただ一つ、たった一つのシンプルな理由だ

「お前は俺を煽りすぎた」

『いや、どの口が言ってるんだよ』

「何だ生きてたのか優しいなアナザーバッファ」

『はっ…全部終わったらかボチャ頭を切ってやるよ』

「そうだな俺もドツガハンマーで叩き割ってやろうと思うよ」

『嘘だろ！一難去つてまた一難!?!』

「この卵の中身がふぎけてるならな起きろ寝坊助、子供なら元気に遊びまわる時間だよ」

話しているが何も起こらない…よし

「孵化させるには熱が要るんだよな？えーと…コレで良いか」

そう言いながら取り出したのは偶然発見したアナザーブーストバックルである

「んじや孵化させるぞ〜」

卵の孵化RTAの始まりだ

『ま、待て！その温度では卵が固茹で卵になってしまふ!!』

「何？固茹で卵（ハードボイルド）だと！なら尚のことやってやるぜ！何せ俺は固茹で卵だからな！」

『辞めろ言つてんだよ!!半熟卵（ハーフボイルド）!!』

「何を!!…それはそれで褒め言葉！…ってそんな事してる場合じゃなかったな」

よく見れば黒騎士は身構えている……何というか警戒している、まあ数発殴られれば警戒もするか、テストタロツサに目線を向ければノエルの錬金術を魔法で相殺し反撃で逆にダメージを与えている…優勢と言えば良いのだが

「こいつダインスレイフ投げてくるからな…あ…」

あの時は剣を投げるとかマジかよと思つたが仮面ライダーで割と投げてる奴が多いことに気づいた仮面ライダージオウも仮面ライダーギンガ相手に剣を投げていたと思ひ出すと

「やはり…仮面ライダーはいついかなる時でも俺に大事な事を教えてくれるな、対策や

教訓だよ」

『いや本当言えば、アイツ等は俺達の敵だからね？お前が勝手に師匠とか呼んでるだけだから』

「いや俺は仮面ライダー鎧武公認の弟子だよ？あとお前達の事情は知らんが取り敢えず卵を孵化させないと俺はこの鉄球で黒騎士をボコボコにしないとならぬからな」

以外と面倒に思えてきたので

「えい」

『うおおおおい!!』

軽く言っているが罷りにもアナザーライダーの腕力から投げられた卵である、その威力は並みの豪速球ではないのだが黒騎士は冷静にダインスレイフを鞘に収めるとそのまま鞘の部分で卵を殴り打ち返した

『ナイスバッティング!』

「褒めてる場合か!!…お！孵化してる！」

『正確には割れたのだ馬鹿者が』

飛んできたものをキャッチして見ると何か悪魔みたいな顔をした奴が寝ているようなバツクルだった

「……もうちよいバツクルのビジュアル何とかならなかった？」

多分、本家では可愛らしいビジュアルしてるんだろなあ

『良いから使えよ、見てろギーツやバツファより強い力だからよ！』

『へえ…言うじやないかパンクジャック』

『やっぱり切り刻んだ方が正解か？』

『いや此処は頭に爆弾を取り付けてドカンと行こう』

『『それだ！』』

『命の危険は現在進行形だぜ!!助けてくれハルト!』

「くっ…悪い今俺は黒騎士の相手で手が離せない! 2人の相手はお前がやれ!」

『王に見捨てられたあ!』

それは聞き捨てならないな！

「人聞き悪いこと言うんじゃないよ！俺は絶対にお前達（アナザーライダー）を見捨てない！絶対に守ってやる！何があっても俺は絶対にお前達の味方だからよ」

でなければあの頃から何も変わらないそんな世界で生きても楽しくない笑うなら沢山の仲間と笑い合いたいのだ…と吠えるが

『ハルト……お前……ツンデレだったのか！』

このハロウィン野郎……人が折角本音で話してるのに……良いだろう俺を揶揄った罰だ

「よしカボチャの花火をはじめるか」

『おいハルト！パンクジャックの頭に爆弾つけようぜ！』

「馬鹿者、そこに加えて打ち上げ用のロケットを括り付けて飛ばすんだよ！」

せめて派手に散れ！

『誠に申し訳ございませんでした!!』

それはもう鮮やかな土下座だったのでアナザーパンクジャックは許すとしよう、さてと……んじや

「ふう……んじやKOしてやるか」

アナザーパンクジャックはそのバックルをドライバーに装填すると生々しい手がいづものように装甲を本体を強引に接続する

その姿はファンシーな本家と違い殴り飛ばす為の腕に返り血がべつとりと付いているような装飾、それと何か爆発したのかボロボロの体に対して綺麗なマントが歪さを与えている

というよりホラゲーの悪役のような出立ちだ

『モンスター』

アナザーパンクジャック・モンスターフォーム

「いや正にその通りだな」

アナザーライダー元来の風貌も合わせり完全に両腕にグローブつけた怪人である

『まあ気にすんな！やっちゃえハルト！』

「おう」

「!!」

構えた黒騎士の突貫に合わせてカウンターパンチを放つ、本来なら肩慣らしと軽く撃った一撃は衝撃波を伴い黒騎士を襲うがダインスレイフで一刀両断される。しかしその衝撃波は威力を残したまま近くの岩を粉碎したのであった

「コレ良いな気に入ったぜ、パンクジャック」

ハルトはその威力にご満悦なまま

「んじゃ黒騎士、あの時のお返しだ泣いて喜びなよその立派な鎧を鉄屑に変えてやるからよ!!」

—————

その頃 ノエル（偽）と戦っているウオズ達は

「っー！」

倒れたオーズの間を見逃す訳なく2人は必殺技を発動する

『『FINISH TIME!』』

『ネオアルファ』『真』

『TIME BREAK』

「ぬんー！」

まず真・アーマーのゾンジスが硬化させた両腕から放たれた手刀の一撃は切られた事すら認識できない程鋭く、また

「コレで!!」

ネオアルファ・アーマーのザモナスから放たれたスリープソーの乱射を受けると

「うわあああああー!」

オーズは爆散した

「いよっしやあー!」

「これで終わった…ハルト様からの褒美が楽しみだ」

と既に試合終了の雰囲気であるがオーズが倒れていただろう場所から3枚のコアメダルが表れるとそのまま何処へと飛び去っていった

「え?何アレ」

「知らん」

「やはりか…お前達、あのノエルは偽者のようですね」

「ええ！つてウオズちゃん最初から気づいてたでしょ！」

「だから手を出さなかったのか！汚いぞウオズ！」

「静まれ！アレが偽者となると…我が魔王が危ない！」

急がねばとウオズが言うが

「いやそれは無い」

2人は口を揃えて否定する、長年仕えているからこそ知っている彼の本当に危ない時を感じ取れるがそんな気配しない…と言うよりするだけ無駄であると

「お前達…そんなのだから新参者に舐められるのですよピンチであろうと無かろうと馳せ参じるのか臣下の務めであろう！」

それを怠慢だと諫めるウオズの態度に2人はハツとする、新参に舐められているのは
実力以前に王への献身であると最近の態度を鑑みて明らかに弛んでると気付かされた

「!!」

「気づいたようですね…それと」

本来いない筈の存在故に感じられた謎の結界と圧力を見て理解した、ハルトはノエル
本体に接敵し加勢に三人娘が現れている

「となると下手すれば我が魔王の一撃に巻き込まれる可能性がありますね」

「大将戦に乱入するのはリスクが高いよね…ってか何なら俺達三人の一撃で消し飛ばす
もね」

「その通りです…さて」

ウオズは自分達の状況を整理した、此方は戦闘を終えて手が空いたので何処を援護す
るか

シャトー内部…恐らく中枢

ハルト、三人娘、傘下の悪魔vsノエル、黒騎士、ヤミー

シャトー外壁では

フィーニス、滅亡迅雷vsオートスコアラ

市街地では

バース、奏者、ライダーチームvsアルカノイズ、屑ヤミー連合

と見事にバラけている、現状では千冬、東、錫音は逢魔に帰還して国の警備を最警戒体制に移行している…後備えもいる状態で仕掛けるバカはいないだろう　いてもこの世界から逢魔には迎えない

「ねえウオズちゃん」

「何ですかジヨウゲン」

「取り敢えずさキャロルちゃんの研究室に向かわない何か情報あるかも知れないし」

「そうだな…この状況で火事場泥棒が出ないとも限らん」

キャロルは錬金術を極めた存在であり、世界で唯一のコアメダルの精錬法を知っている、その研究資料など他の錬金術師から見れば宝の山だろうと

「確かにフィーネの件もありますからね…分かりました、研究室には私がお前達はフィーニスの援護に向かいなさい…我が魔王も心配されていますからね」

「おう（了解）」

その頃 滅亡迅雷とオートスコアラアの戦いにも終わりが見えそうであった

「終わりだ雷落としてやる！」

「詰みです」

煉

雷

剛

獄

「おらあ！」

「ふっー！」

雷の赤雷を帯びたエネルギー斬撃と亡の高速移動に伴うすれ違い様の斬撃がガリイとファアラを切り裂いた

『ZETSUMETU DYSTOPIA!』

破壊せずに行動不能にしたのは他ならぬ束の頼みであるからだ

「何だあの字のフォントは…派手だな！」

「メタな事言わない!!」

「カタを付けるぞ迅」

「うん！」

『INFerno WING!』

そして2人は飛び上がりライダーキックを放つ

「たあ!!」

『バーニングレイン！ラッシュュ！』

『STING UTOPIA！』

「ちっ…ミカ！」

「任せるんだぞ!!」

カーボンロッドを盾代わりにレイアはコインで弾幕を張るが そんなの何のそのと
言わんばかりに攻撃は貫通した

「!!!」

オートスコアラ―沈黙に滅亡迅雷の4人は一息つき

「で、どうすんだよコイツら？」

「取り敢えず逢魔に連れて行くぞ持ち主なら再プログラムが可能な筈だ」

「そうだね…けど逢魔ってどんな所なんだろう楽しみだなあ」

「聞けば色んな種族がいるとか…ん？」

「どうした亡？」

「いえ…熱源が接近中！」

その言葉に皆が構えるとボロボロのレイアが

「やっと来たか…妹よ派手にやれ！」

明らかに滅達よりも巨大な体をしたミイラのような出立ちのオートスコアラーが現れたのだ

「何アレ滅!？」

「知らん…だが撃退するしかない！」

と臨戦態勢を取る中、聞こえたのは大きなエンジン音とタイヤの振動だ

「あははは！誰か知りませんがありがとうございます！退いてろ滅亡迅雷！僕の相手
ダア!!」

その持ち主 アナザーコアは火球を投げつけながら巨大なオートスコアラーと取っ組み合いを始めたのである

「この巨体なら不足無し！」

「いや君しか無理でしょ」

迅のツツコミが的確だったのは言うまでもなかった

—————

さてその頃 アナザーパンクジャック v s 黒騎士はと言うと

「オラオラオラオラ!!」

「っー」

モンスターバツクルにある変幻自在な攻撃を可能とした拳の一撃は上下左右あらゆる方向から黒騎士を殴りつける、その一撃一撃の威力は言うまでもなく高いのだが

「コレは洗脳されたパンクジャックの分! コレはアナザーバイスに任せて殴れなかった分! これはあの時不意打ちで良いシーンを台無しにされた分!! んでコレはあの時、俺の返り血浴びて曇ってたキャロルの分!!」

『おつかしいなあ…俺の怒りよりも私怨の方が多いい気がするぞ?』

『気にしたら負けだアナザーパンクジャック』

「コレもコレもコレも…あの時殴れなかった分ダア！」

ドドドドド！と放たれた連撃は黒騎士のガードを崩し遂に本体にダメージを通し始めた

『やっぱり私情優先してんじゃねえか!!』

『相当悔しかったんだなあ…ハルトの奴』

そしてトドメと言わんばかりに溜の姿勢に移り込み

「そして何より…：チフォージュ・シヤトーを奪い、キャロルを傷つけた分ダア！」

咆哮と共に必殺技を発動する

『モンスター…：ストライク!』

「吹き飛ばヤア！」

その一撃は星のマークを伴いながら多段的にダメージを与えながら黒騎士を吹き飛ばしていき近くの岸壁に激突し

『さあ皆さんご一緒に！』

出てきたアナザーバイスがノリノリでカウントを初める

『3』

『2』

『1』

最後にアナザーパンクジャックが指を曲げて締めると黒騎士はダインスレイフを残して爆散した

『いよつしやあ!!リベンジ達成!!』

とアナザーパンクジャックが両腕を上げて勝ち誇ると

『zzz……』

モンスターバツクルが眠りにつき、エントリーフォームに戻ったのであった

「戻った?…まあ良いか……テストアロツサ、そっちは……」

と目線をテストアロツサに向けたら

「終わりましたわ、ハルト様」

そこには右手で首を掴まれ、全身ボロボロにされたノエルがいた…よく原型を保てていると思つた流石はホムンクルスだな頑丈だ

「流石というか以外だな殺さなかつたのは」

てつきり魂まで消しとばすと思つていたから予想外だつたと伝えると

「いえ……この事件解決後にここに居る愚民達が勘違いでハルト様とキャロルへの怒りが向かないよう首謀者は生かしておくべきかと愚行いたしました…」

つまりヘイトタンクにしてやろうって訳か…

「戦いながらそこまで考えていたとは…流石はテストアロツサだな！まさに逢魔の叡智だね」

己の思慮の浅さは反省しないと思うが

「本当、皆は俺には過ぎたものだな…」

「勿体なきお言葉です」

「ありがとう……さて覚悟は良いなノエル」

まずは抵抗手段を奪う、具体的にはアナザーエグゼイドにあるリプログラミングでコイツが錬金術を使えなくしてやる、そこからSONGに突き出して解決だ

「……………まだまだ終わりませんよ！」

「往生際が悪いな頼みの黒騎士も倒れて、持ち前の兵隊も全滅した今のお前に何が出来る？」

「ふふふ……この手だけは使い高く無かったですが見てなさい…黒騎士！」

「は？……っ！」

すると何処から伴く現れたダインスレイフがノエルの体を貫いた

「ははは…魔王、あなたはオリジナルが呪いの旋律を浴びなければシャトーは起動しないとタカを括ったようですが…同じホムンクルスの僕でも同じ事象が起こせるんですよ！」

「完全状態のダインスレイフで強引に起動する気かよ！」

「まあそれだけでは出力が足りないのでこうしますけどね!!」

とノエルが指を鳴らすと別場所で倒れていたオートスコアラの4人がセルメダルと強化用に持たされていたコアメダルに分解されノエルの元に飛び取り込まれていった

「おいおいマジかよ！ガリイ達まで！」

「そしてダメ押しです……………このコアメダルに宿る意思よ僕の体を使い新たな命となり世界を滅ぼせ!!」

『へへへ、待ったぜその頼みをよ……………変身!!』

そのコアメダルは節足動物の意匠が盛り込んであり、更にノエルが変身に用いた未来

のコアメダル、オートスコアラ―が使つてまコアメダルまで取り込んで力を膨張させていく中ノエルが保持していたドライバ―とスキヤナーが起動する

『ムカデ―！ハチ―！アリ―！』

「遂に……俺は最強の力を手に入れたゾオ!!」

『ゴ―ダ―！ゴ―ダ―！ゴ・オ・ダ―！』

変身と同時に起こった余波により結界は消し飛び見慣れたシャト―内部が変わるが現れた強敵にハルトはパンクジャックからアナザ―ジオウに変身し、テスタロッサは事態の急変を察し眷属やウルティマ達に指示を出す

相手の体はさながらアナザ―とは違う意味で歪んだタトバコンボ

右手にはダインスレイフと両腕から伸びるトラクロー擬き、両肩の角そして胸部のオーラングにはオートスコアラ―を意識した4人のマークが刻まれている

キャロルが偶然生み出した意志を持つコアメダルから顕現した
にしてライダー
新たなグリード

「よお初めましてだな…親父」

「誰が親父だよ…俺にお前みたいなお前はいいねえ」

「おいおい冷たいねえ、俺はアンタの知識とお袋の錬金術の賜物だろうがよ、なら俺はお前達の子供な訳だ」

「違うな、お前は…俺の敵だよグリード」

「そう呼ぶなよ、俺にはゴータって立派な名前があるんだからよ、ああそうかよ…まあ良いかノエルに頼まれたからなあ、この世界を滅ぼせよなあ！」

「やれるもんならやってみろや!!」

何故か怒りに満ちたツインギレードの一撃とダインスレイフの一撃が交差し、シャ
トー全部に振動が響いたのであった

一致団結!

チフオージュ・シャトー中心部で起こっているアナザージオウとゴードとのバトルは熾烈を極めていた、何故か最強フォーム使用からの連戦で疲弊している筈なのに普段よりも素晴らしいパフォーマンスを発揮しているハルトの動きに疲れてるからと油断していたゴードは面を食らっていた

「何だよコイツ……化け物かよ!」

「お前に言われたくねえんだよ!!」

大ぶりのツインギレードの一撃はゴードをシャトーの外へと吹き飛ばすと近くのビルに落下したゴードを逃がさないとばかりにアナザージオウは着地した

「テメエ……疲れてんじゃねえのかよ……」

「疲れてるよ、今布団があれば3秒で眠れる自信がある位にはな!」

強引に体を起こしてるから倒れるのギリギリ踏ん張っているようなものだ」と

「なら何で…」

「理由は三つ…これが最終決戦という事でテンションが高いこと、お前を倒せば全部解決だってこと…そしてこれが一番の理由だ…」

「何だよ……」

その問いにハルトはツインギレードにアナザーオーズウオッチを装填する技が来ると警戒したゴードは殺気を感じ慌てて防御態勢を取ったのである

「映司さんの仇が目の前にいるからなあ!!俺の憧れの男を手にかけてお前を絶対許さねえ!!地獄の閻魔様にも任せられねえんだよ…テメエは俺が裁く!!」

『それが理由?!』

悲報、身に覚えが微妙にある怒りがゴードを襲うのであった

『アナザースラッシュユ!』

普段よりも感情が乗った紫の斬撃が放たれると同時にアナザージオウの背後から飛び上がったキャロルが変身したオーズからのライダーキックという二段攻撃だった

「倒れるゴーダア!」

『スキヤニングチャージ!!』

「キャロル…いつの間にも!!!」

ハルトのツツコミも虚しくタトバキックがゴーダを襲うが

「冤罪だろ!俺じゃないゴーダがやったことだろうが!!」

『スキヤニングチャージ!』

「ぬん!」

サゴーズの力で地面を強く踏みつけ重力を増大させると近くにあったビルが倒壊すると瓦礫が盾となりタトバキックを止めたのであった

「隙だらけだな、死ね!!」

「しまった!」

ガラ空きのキャロルにダインスレイフを突き立てようとするが

「させるか」

『カブト……CLOCK UP』

アナザーカブトに変わりクロックアップでキャロルを拾い上げ離れた場所に移動する中

「やっぱりお前は俺の敵だな…」

誰にも聞こえない世界で一人呟いた

『CLOCK OVER』

「まったく何で戻ってきたんだよ」

「滅達から連中を鎮圧したと聞いてな……アイツらの洗脳を解きに来た……そしたら目の前に映司の仇がいてな気づくと体が勝手に……変身してタトバキックを放っていた」

「それである連携の精度って……そこまで恨まれるって俺のオリジナルは何したんだよ？」

「「え？重罪」」

この時の2人の顔は仮面の下で見えなかったがハイライトが消え無表情であったという

余談だがパヴァリア結社の面々がもし現場にいたならば、恐らく全員が襲い掛かるく

らいには重罪である

「……ま、俺はノエルの野望を果たすまでだがな……それにオートスコアラーを助けたいなら俺は殺せねえよな！」

「くっ……人質か……」

「何とでも言えよ！」

「うーん……」

アナザーカブトは至高の海に沈むがアナザーWに声をかけられる

『どうしたハルト?』

ーこの場合のオートスコアラーってさ、カザリヤミーみたいに肉体が囚われてるのか
バグスターみたいに分解手順踏まないと助けられないのか分からなくてさー

助ける方法を考えていた、キャロルの頼みでもなければゴードなどアナザームテキやアナザーライジングアルティメットでトラウマを植え付けるような戦いをしようとも考えたがオートスコアラーに情もあるので出来ない

もしこれがナツキやトーマとかなら躊躇いなく必殺技を打ち込んでいただろう…あのバカ共に人質としての価値はないと思っっているが、残念な事に今回は人質が人質しているのだ価値があるので困る

「ハルトー！」

そこに現れたのは滅亡迅雷の面々

「お、良い所に！来たなお前たち！あれ？ファイニスは何処？」

「ああファイニスには巨大な奴を任せてある…俺達はオートスコアラーの救出に来たのだが」

「見ての通り皆、ゴードに取り込まれています」

「なんて事を…」

周りは驚く中、ハルトは淡々と

「はい！という訳で解決策を募集していますアイデアある人！」

『先生か！』

「何とまあ呑気な奴だなあ！」

ゴードは声と共にダインスレイフからエネルギー斬撃を放つ、ノエルが使っていた時よりも強力な一撃であるが

「知らないのか？俺はマイペースなんだよ」

アナザーカブトは虚空から取り出した無銘剣の鋒を向けると、その一撃のエネルギーを無に帰した

「流石、無銘剣…聖剣のみならず魔剣の力も無効化するか…残念だが剣を得物にする以上は、お前の不治の刃は俺に届かない」

「残念だな見てみろよ」

アナザーカブトが首を傾げるとピシリと音がすると無銘剣が折れた

「っ折れたア!」

『何だと!!』

「哲学兵装ソードブレイカー、折れるぜお前がそれを剣と思うならな!」

「……………」

アナザーカブトは折れた無銘剣を見つめる治せるのだが

「良い剣だが残念だったな俺はオートスコアラアの技も使えるんだよ! 剣で俺は倒せねえ!」

ドヤ顔のゴードに苛立ちを覚える

「みたいだな、ま…修理は後でするとして」

「貴様……よくもオレの騎士達を！」

「お前が吠えた所でどうもならねえよな」

「何だと！」

「そうだな……力づくで解決するだけだ無銘剣の恨みも味わえ……っ！」

「ハルト……」

「安心しろ策はある……東、錫音聞こえる？」

アナザーカブトはアナザージオウに戻ると通信装置を起動して逢魔にいる仲間に声をかける

「はいはい！ハルトくんのアイドル篠ノ之東さんだよ！」

【お待たせ】

「行けるか？」

【もちのロン！今、滅達に送るよ！スーちゃんお願い！】

【任されたよ（コネクト）】

錫音の魔法で転送されたのは、ライダーの顔が刻まれたプログライズキーであった

「コレは？」

【マスブレインゼツメライズキーだよ！それで皆の心を一つにして新しい力を目覚められるんだ！】

「4人の力を一つに……」

「へえ……面白えじゃないか」

「皆を助けられるなら…滅！」

「わかっている…行くぞ」

と4人は躊躇いもなくマスブレインゼツメライズキーの力を解放に合わせてアナザージュオウも新しいアナザージュオウッチを起動する、仲間を助ける為

『マスブレイン！』

「「「変身!!」」」

『プログライズ!!』

その時 不思議な事が起こった

『CONNECTION! CONNECTION!』

意識データが抜け落ちると4人は変身解除され倒れ、データは一つの体となるヒューマギアの救世主である、仮面ライダー滅亡迅雷への変身だが

その意識データは何故かアナザーウオッチに転送されていき見覚えのないアナザーライダーの顔が浮かんだのだ、それを見たハルトは驚く

「へ?え……ええええええええ!」

するとアナザージオウの周りに現れたのは仮面ライダー滅、亡、迅、雷 4人の顔が有機的になると アナザージオウは別ライダーのアンダースーツを形成していくとフォースライダーで変身するような結束バンドが4人の仮面を拘束し反動で体に装着された

右肩に雷、左肩に亡、胸部には迅、そして頭部の左半分を滅となるが左半分はマギア化する際に現れる素体が剥き出しとなったヒューマギアの顔面となっている

まるで使えるパーツ全部合わせて強引に生み出した フランケンシュタインの怪物のようなアナザーライダー、そのオリジナルにある統一感などカケラもない歪な姿

変身とは言えないイレギュラーでありかつアナザーライダーの王も予想してない姿

『滅亡迅雷!』

聖戦の旗頭 アナザー滅亡迅雷

「何……アレ……」

「ハルト……だよな……」

「うんそうだよ!／なんじゃこりゃ!／これは……／つて口が勝手に!?!」

ハルトの声音で支離滅裂な内容に思わずゴータも含めた周りもキョトンしている

「おい束!これどうなつて／うわあ!凄い!皆一緒だ／だから邪魔するな!／これが

アークの意志／黙れってんだろ!!」

「なあハルト…大丈夫か？」

キャロルが心配そうに尋ねるが

「ああ大丈夫だよキャ／んな訳あるか！体くつついたんだぞ！／ええこれは想定外です／凄い皆一緒だあく／束の言ってた新しい力か迅、もう少し端に寄ってくれ／んな訳あるか少し黙ってろ!!」

やはり多重人格者のような話し方にキャロルは膝をつく

「すまないハルト…そんなに沢山の人格が分かれるほどのストレスをオレが…」

「いや違うと思うよキャロリン」

「うん、またハルトがやらかしたただけでしょ？いつもの事だね」

「……………なら聞くが束、アレは何だ？」

「多分…マスブレインに送られる予定だった4人の意識データがハルクンのアナザー」

ウオッチに取り込まれたんだろうね、何というかアレは変身じゃない何か、かな…東さんも予想外だよ…さっすがハルクくん！」

「それはハルトに異常はないのか？」

【逆に聞くけどキャロリン、ハルクんつて1000人を超える人格と同居してるんだよ？今更4人増えた所で問題ないでしょ】

「……本当に今更だったな」

【彼つて私達の事を天災とか色々言うけど彼が一番逸脱してるんだよねえ…】

「まったくだな」

【いやキャロリンは他人の事言えないよね？】

と頭を抱えているが当人はそれどころでなかった

精神世界

「…あれ？いつもの空間じゃない」

ライダーファンにわかりやすく言うならマスブレインシステムの空間にいる、滅亡迅

雷の4人は定位置だが俺はその中央のテーブルに立つてる感じだ

「何で俺達がハルトの中にいんだよ!」

「へえ…ハルトの心の中ってこんな機械的なんだ!」

「んや、いつもと違う部屋なんだけど…てか皆いるとかどうなってるんだ?」

「恐らく我々の意識データがアナザーウォッチに取り込まれたようだな」

「それマジかよ! 皆大丈夫なのか!?!」

「…大丈夫です、ハルトと融合したお陰で他のアナザーライダーから力を得ていますので想定外の出力を確保出来ました…余裕がある状態でオートスコアラール救出に力を回せます」

「って事はどう言う事なの? 滅?」

「それは…「予想外のパワーアップって事だろう!」台詞を被せるな雷」

「流石だな雷の兄貴! ……んじやお前達は下がってる、後は俺がやる!」

とハルトの動きに合わせてアナザー滅亡迅雷が動き始めたが

「いや俺がやる」

『否決』

と滅が反対するとアナザー滅亡迅雷の動きがピタリと止まる

「っ？何だ？」

「おい隙だらけだぜ！」

「っ！」

ゴードの一撃をモロに喰らってアナザー滅亡迅雷は倒れ伏した

「何だ立派なのは見た目だけか？」

あからさまな挑発に精神世界にいた雷が激昂する

「おいハルト、俺がやる変われ！あの野郎に雷落としてやる！」

「いいえ、その前にオートスコアラーの救出をした方が良いです」

『否決』

「なんだよコレ!!」

反撃に動こうとしたが再度、電子音声と共に動きが止まる

その光景を疑問に思ったキャロルは分析する

「(あのフォームはどうやら4人とハルトの意識が合体してる状態だ…束が渡したマスブレインは皆の心を一つにすると言っていたな…つまり…っ!)」

キャロルは自身の解答をアナザー滅亡迅雷に伝える

「ハルト! そのアナザーライダーはお前達の心を一つにしないと動かない可能性があるぞ!」

「成る程…つまりクライマックスフォームやジオウトリニティみたいな感じだな!」

「相変わらずの理解力で安心したぞ!」

「おう!」

体が動けない疑問が解ければ問題ない！

「俺がやる！」

「ダメだ俺がやる」

『否決』

「いいえ私が」

「亡は分析してなよ、僕が助けるからさ」

『否決』

「おい迅、亡に指示するとは偉くなったな退いてろ俺がやる」

「何、弟の出番奪ってんだよ暴れたいだけだろ兄貴！」

『否決』

「何をしているのだお前達は…仕方ない俺が…」

「『ダメ（です）!!!』」

『否決』

心を一つにする所か全員の主張が激しくアナザー滅亡迅雷はただ立ってるだけのカシになっているのをゴードは笑う

「はははは！何だアレだけカツコつけたのに出てきたのは気持ち悪いガラクタの化け物かよ！」

「「「「「……………」」」」」

ゴードの一言に全員がキレた！

「おいお前達、誰が体の主導権握るとか後だ……………取り敢えず今は…俺達をバカにした奴を倒してオートスコアラを助けるぞ！」

「良いだろう滅亡迅雷 net の意思のままに」

「「可決!!」」

敵の敵は味方、仲良くなるなら共通の敵を作れとはよく言ったものである

「ここで意志統一がなったのだ」

『いやそれヒーローもの的に大丈夫なの？』

『可決 Accept!!』

アナザー滅亡迅雷に埋まってる仮面の目が赤く光り殴りかかろうとしたゴードアの拳を止めるとカウンターパンチを叩き込んだ

「があ………テメエ……」

「ゴードア……お前を倒す！」

その一言は皆の心が重なった証左だろう、アナザー滅亡迅雷の口から出たのは5人のバラバラの声ではなく

『G O D A w i l l b e E X T I N T 』

電子システムを思わせる無機質な声音だった

「ちっ！舐めんじゃねえ！」

『シカ ガゼル ウシ』

『サメ クジラ オオカミウオ』

「亡、演算を頼む／了解しました」

『可決』

突進力に長けたコアメダルコンボとポセイドンのコンボを用いた超高速移動でアナザー滅亡迅雷へ体当たりを行うが、頭部の複眼が光ると亡の演算能力により分析された行動パターンに基づきゴードアの動きに合わせたカウンターを滅が主導して行う、当然人工知能の反射は人外とは言え生き物であるハルトの体では追従出来ない部分もあるのが雷が持ち前の雷撃を用いてハルトの体の筋肉を活性化、滅の要求するスペックまで引き上げる

その結果、アナザー滅亡迅雷のカウンターはゴードをピンポイントで捉え吹き飛ばした

「解析完了…オートスコアラを救出します次は私に任せてください／いいよ、やっちやえ亡！」

『可決』

同時に左肩部分の複眼が赤く光ると動いた左手から機械的なケーブルが伸びゴードの体を捕縛した

「ガアアアアア！」

「摘出します」

叫ぶゴードを無視して目当てのものを見つけると、そのままケーブルが強引に捉えたものを引き抜くとオートスコアラ達が気絶したまま抜き出たのであった

「お前達！よかった…」

「マスター…：…申し訳ありません…」

「いい…戻ってきたならな…」

キャロルが慌てて近寄り介抱する姿を見ると

「目的達成しました／やったね亡一…んじゃ次は僕だね…よくも友達を傷つけたな許さない!／いけ迅!」

『可決』

すると今度は胸部の複眼が光ると背中から炎を帯びた翼が生えると羽が一斉にゴー
ダ目掛けて襲い掛かった

「やあ!」

「燃える羽根は嫌いなんだよ!!」

「ダインスレイフで迎撃するがスラッシュユライザー片手に近接戦を仕掛けたアナザー
滅亡迅雷の猛攻は短剣サイズ由来のリーチにより肉薄した戦闘となる

「そうか暑いのが嫌なら雷でも落としてやる迅／わかった!」

『可決』

すると右肩の複眼が赤く光ると両手に持つのはヴァルクサーベル、その二本には赤雷
を纏わせ強烈な斬撃を叩き込むとゴーダはダインスレイフで受け止めるが武器から通

電して

「あががががががが…なんの…まだまだあ！」

「チツ！硬い奴だな／奴はグリードだからな五感がないもしくは麻痺してるんだよ兄貴、俺に変われ！因縁込みで一撃叩き込んでやる！／ああ思い切りやれよハルト！」

『可決』

すると今度はヒューマギアの素体部分が赤く光るとハルトが主導権を得ると飛び膝蹴りを叩き込むと両手から二ホンオオカミノツメを取り出して切り付けるのであった

「つしやあまだまだ行くぜ！」

その頃、キャロルはと言うとオートスコアラ達から残った力を託され変化した3枚の鳥系コアメダルを見ていた

「この馬鹿者共め……わかったぞ、これがお前達の本当にやりたい事なのだ……行くぞ皆……変身！」

『タカ！クジャク！コンドル！』

オートスコアラー4人の声が重なりながら合わさる思いの力は通常のタジャドルでは済まない程のパワーを発揮した

『タージャートルー！（エーターニティ！）』

「これは…」

すると研究室の鍵をかけハルトを祝おうと飛んできたウオズが高い所が祝詞をあげる

「ハッピーバースデー!! 祝え! 仲間達の思いを背負い、大空へ羽ばたく永遠の猛禽! その名も仮面ライダーオーズ タジャドルエタニティ!! 奥方が新たな力に目覚めた瞬間である!!」

「はっ!」

オーズはそのまま走り出しアナザー滅亡迅雷を飛び箱の要領で乗り越えろとドロツ
プキツクをゴードに叩き込んだ

「があ…て、テメエ等!!」

「キャロル! そのカツコ」

「ああ…済まないが一緒に戦わせて貰うぞ!」

「おう良いなお前達!」

『可決!』

すると全身にある複眼が赤く光り始め、力の出力が上がったのである

「ふっ! はあ!」

『今までのお返しダゾ!』

オーズが両手で攻撃を弾きながら腹にパンチを打つ時 一瞬だがミカが現れると
カーボンロッドを射出するような鋭い一撃を叩き込んだ

「いのおー」

ゴードは先程も同じようにサゴーズの力で足場を崩しにきたが阻止するようにオーズは高く飛び上がり

「はっ!」

左手に装備されたタジヤスピナーにセルメダルを入れスキヤナーでリードする

『ギン!ギン!ギン!ギン!…ギガスキャン!』

『マスター…派手に行け!』

「ああ…せいやー!」

放たれた赤い火球は小さなコイン状の散弾となりゴードを襲うもシャウタの力で付近の水道から水を操作し盾として使おうとするが瞬時にただの液体に戻った

「なっ…うわあああ!」

『あはははは!可哀想ですねえ』

『相変わらず性根が腐ってるンダゾ!』

『聞こえてますよ!』

「五月蠅いぞお前達…はあ…ハルトはいつもこの騒がしさを味わっているのか…」

何というか辟易すると言外に語るが

「まだだ……これで終わった貯まるかあ！」

ノエル……ゴータ……

「貴様やノエルを生み出したのはオレの責任だ……だからその責任は取る！」

「黙れええええ！ パパの意思を履き違えた偽者があ！ オレは……僕は奇跡を殺すためにい
！」

ダメージからかノエルとゴータの意識が混同しているようで支離滅裂な言動をする
が

「違う、パパは世界を知れといった……その答えは断じて破壊ではない!!」

「何っ！」

「学ぶこと、この錬金術が誰かの為になる事をパパは望んでいたのだ！」

「そんな事あるわけがない!!」

ゴーダがダインスレイフを振りかぶると

「そうだなオレもとあるバカと会わなければ気づかなかったさ!」

「キャロル! コレを使え!」

ハルトが投げ渡したのはメダジャリバー、それを受け取ると鏢迫り合いとなる筈だったが

『ソードブレイカー…貴方がそれを剣と思うなら』

メダジャリバーが緑色に光ると同時に甲高い金属音と共にダインスレイフは折れたのであった

「っ!」

「はっ！」

アナザー滅亡迅雷とタジャドルのダブルキックでゴータを吹き飛ばす

「決めるぞハルト！」

『スキヤニングチャージ！』

「おう！」

『滅亡迅雷…インパクト！』

同時にタジャドルは背中から綺麗な羽根を展開し高く空を飛び、アナザー滅亡迅雷は体の複眼を赤く発光させると 滅亡迅雷 net のマークを背にアナザーキックを放つ

「せいやー！」

タジャドルは足が猛禽を思わせる脚となりゴータの体に当たると同時に別場所から現れた鉤爪がゴータを貫くとアナザー滅亡迅雷のアナザーキックが更にゴータをチフォージュ・シャトーにある呪いの旋律を増幅する装置まで吹き飛ばした

「お、おのれえええええ！」

断末魔と同時にゴードアのコアメダルは砕け本体は爆散し装置も破壊された

「終わったなハルト」

「ああ…まあ後始末が色々あるがな」

「そうだな終わったら少し頼みたい事がある」

「何でも言え、叶えられる範囲なら叶えてやる」

「そうか…なら………おい、なんだガリィ騒がしいぞ…ん？ゴードアが爆発しそうな場所？」

「それって…確か……あの辺に…」

2人の目線が一つの場所に重なった

「……………あ」

ゴードアの爆発によりチフオージユ・シャトーの一部が損壊したのであった

それと同時に屑ヤミーはセルメダルに戻り、レイアの妹も一旦機能停止したようである。件落着だ、此方の損害は対してない取り敢えず彼女の研究資料やポータルなどの緊急性を有する情報はウオズがモスの協力の元、事前に逢魔へ持ち出してくれたようだ

そして奏者達も戦闘が終わり、ひと段落をついている中、キャロルは変身を解除して消滅しそうなノエルと何か話しているのを見て邪魔しては悪いと思いつつアナーザー滅亡迅雷の変身を解除すると4人は無事に再起動したが

「あれ…何か急に…ねむ…っ！」

ハルトは気絶して倒れたのであった

「ハルト!」

その時

『体を調整、再構築を開始します』

『アナザーギーツ、バッファ、タイクーン、パンクジャックの集結を確認…新たな怪人の召喚、使役が可能となりました』

そう誰かの声が呼びかけた気がしたんだ

—————

またその流れを見ていたものがまた一人

「いやあ! 結構結構、キャロルを助けただけじゃなくゴードまで倒すとは…流石は若い

俺！」

老ハルトは高みの見物で事態を見ていたのだが

「これで歴史は変わる…さてさてどうなる事やら…ん？」

『体を調整、再構築を開始します』

『新たな怪人の召喚使役が可能となりました』

同一存在故か聞こえたメッセージに

「ほお…では早速試してみるか」

「お待ちを我が魔王」

「いや、ちよっ！早速実験とか辞めてよ魔王様！止めるの大変なんだからさ！」

「フィーニスの救護もあるので流石に自重して欲しい」

「悪いお前達、もう呼んでしまった」

と老ハルトが使って呼び出し、現れたのは

「……………」

何かウツボカズラを思わせるような外見の怪人であった

「こいつ等…アナザーギーツに似てる部分がありますが…」

「ああ初めましてだな、よおお前達に種族としての名前はあるかい？」

「ジャ…………ジャ……………マト…」

「ジャマトだな歓迎するぞ」

「ヘン…………シン…………」

「ヘン…………シン」

「何!？」

すると木の実を思わせるような出立ちの怪人達は腰にドライバーを巻くと植物のよ
うなバツクルを取り出し変身したのであった、同時に体には植物のツタが纏わり付き左
の複眼が怪しく緑色に光った

『ジャマト』

その姿 ジャマトライダーを見た老ハルトは

「成る程……使役するなら倒せか……良いだろうお前達の本気を俺にぶつけてくれえい
！」

アナザーウォッチを構え笑うのであった

「はあ………また始まった」

「老いてもなお盛んだな」

「全くいい加減にしてもらいたいものです、そんなのだから怪我して奥方様に折檻されるのですよ」

「聞こえとるぞお前達…全く若い俺の影響を受けすぎじゃ碎け過ぎて…まあ以前のお前達よりも接しやすいがな」

『オーマジオウ』

アナザーオーマジオウになった老ハルトはノリノリで挑発する

「さあ来い新参者よ、その力で俺を楽しませろ!!」

「ワタシハカタナキヤナラナインダ!」

「イヤ、ジンメイキュウジヨガサイユウセンダ」

「アレ？喋った？」

「空耳だろう…しかし何というか人間のような気がするな」

「怪人ですからね、そりや似てる所もありますよ」

「アナタトイツシヨニシナイデモライタイ」

「「っ!!」」

「喋ったか！ありや驚いた！ますます興味が湧いたぞ！」

そう言いながらアナザーオーマジオウはジャマトライダーと拳を交えたのであった

戦い終わりにて

老ハルトがジャマトライダーとドンパチしてるなど全く知らないハルトが意識を取り戻して見ていたのは

「見覚えのある天井だ」

逢魔の自室かとブーツとした頭で気絶する前後の事を思い出す

「そーいやあ……チフォージュ・シャトーや皆はどうなったんだ？」

『そこは俺が話してやるぜ！』

「検索エンジン！」

『寝起き早々それか！…まあ良い簡単に話すぞ』

どうやら俺は3日近く寝ていたらしい、まあ最強フォームに変身したり新しい力を使ったりと色々あったからな

んで、あの後チフォージュ・シャトーは世界を滅ぼす装置を積んでた部分は爆破解体して海に捨てたという……えと取り敢えずキャロルには環境問題で話す事がありそうだが、まあサルベージして使うやつもないだろうな滅びの歌を奏でる為のダインスレイフもへし折れてるし……あ、無銘剣直さないと

そのチフォージュ・シャトーなのだが…

『必要な部分以外は切り離して捨てたぞ』

「はっ？」

主に俺達の生活空間やポータル、そして自身の研究室などはそのままにそれ以外を投

棄したとのこと何故と聴くと結社の人間が買い取ったらしいがプレラーティさんがシャトーの変わり果てた現状を見て発狂していたらしい

「キャロルは？」

『今現在、SONG s 連中と司法取引中だ』

「それを先に言えよ!!」

『あ、おい話は最後まで聞け!』

ハルトは体を強引に起こすと扉を開けて部屋から出ようとしたが

「起きて早々何処へ行くこうと言うのだ？ハルト」

まさかのサタンサーベルを構え仁王立ちし千冬が待ち構えていた…正直ゴードよりも怖い

「千冬！キャロルが大変なんだ司法取引とか何とか…向こうに捕まってるなら助けな
いと!!きつと何か色々されてるかも知れない!もしそうだったら…今度こそあの世界
なんか滅ぼしてやる!!」

「落ち着け馬鹿者!!司法取引は主にエルフナインやナツキ達のものだ間接、直接的に問

わず2人は我々側だったからな関係の精算をせねばとならんしキャロルには説明責任もあるのだ！」

「実際、キャロリンのホムンクルスな訳だしね自作自演とかマッチポンプとか向こうの政府の人に言われてたよ〜」

「は？誰だ、そんなふざけた事言った奴等を教えろ束、俺達が前にアレだけやったのに理解してねえバカがいるなら今すぐ締め上げてやる…おいカリユブデイス」

「はー！」

「ゴオマとかバズーとか暇してる奴全員呼んで来い…ガルルでも良いやライフエナジー
食い放題の祭りに案内してやる」

そう言うのと金切り音と共に鏡の向こうで咆哮を上げる契約モンスター達を見てハル
トは言う

『!!!』

「お、テメエ等も来るかあ？」

!!!
」

当然だあ！と賛同してるので

「んじゃ行くぞ野郎共！」

一人ムービー大戦じゃあ!!

「止さんか怪我人は大人しく寝ていろ!!」

「そんな事を言う奴等は逆鱗に触れたテストタロツサ達から相応のお仕置きされたからさ
それより、おはようハルト」

「錫音…それってどんな感じ？」

「まあモス君が影でプチつとして変わりに擬態したワームを滑り込ませたつてさ今後は
あの世界の連中を良い感じで動かせるようになったよ…いやあ早すぎる手並み、私じゃ

なきや見逃しちやうね」

「そりや良い…つか流石だなテストタロツサ達…」

あとモスには特別な褒美を考えよう…うん

「あ、おはようハルくん！いやあ久しぶりの逢魔の朝は爽やかだねえ！ここにハルくんのモーニングセットがあれば最高だよー」

「おはよう…作れるけど病み上がりだからね俺っ…って今はそんな事より！」

「帰ったか東、錫音」

「うん、キャロリンの話し合いも終わったよコレで護衛完了！」

「護衛？」

「束と錫音、それとテストタロッサ達に頼んでおいたのだ…私達が敵陣にキャロル単身で向かわせるなどそんな抜けた事をすると思つたのかハルト？まあキャロルの腕は心配していないし…寝てるお前の代理として色々やらかしたのは謝罪するがな…束、首尾は？」

「勿論上々だよ！政府のお偉方のスキヤンダルや逢魔の武力を背景に脅…こほん、あとは世界中の軍事基地をハッキングしてミサイルを此処に向けて撃つちやうよくつて紳士的な会話で2人をSONGの所属させる事で恩赦させたんだ！」

「何か物騒なワードが聞こえた気がしたが…気のせいか！ありがとう束！」

「どういたしましてえ！」

……やはり俺と会つて丸くなつても束つてやろうと思つたら白騎士事件起こせるじゃんと思つた

『あの棍棒外交は完全にお前の影響だぞハルト』

「まあな！」

『褒めてないのだ馬鹿者!!』

「それにキャロルの事もOKだSONGにカンドロイドやライドベンダー技術のレンタルくらいかな、向こうさん思ったより条件緩かったなあ…今までの件で多少はこつちの力を把握してるから強気に出れなかったのかな？」

「まあその辺の匙加減は任せていたが正直言つてハルトが暴れ回った影響の大きさに呆れるな」

「いやあそれほどもおく」

「褒めとらんわ馬鹿者」

「けど一つ面倒な条件が…」

「何だ？」

「これ、ハルト絡み何だけど内容が内容だから本人に話して貰おうか」

「ん？」

「戻ったぞ…何だ起きてたのかハルト」

「キャロル！」

ヨロヨロだが慌てて駆け寄り抱き締めると

「離せ！…寝起きなのに力強いな苦しいぞ！」

「離すかよ…心配したんだぞ！」

「ハルト……すまなかった…」

「ん……また起きていなくなったらと思うと悪夢見そう」

具体的にはDRAGON KNIGHTのキッドがオニキス（リュウガ）になって仲間を手にかけるくらいの悪夢である

「それは此方の台詞だ目を話した際に気絶してる馬鹿を見た気持ちになれ！肝が冷えたわー！」

「何だと！色々心配させておいてその言い方は無いんじゃないかな！心労重なってんだぞー！」

「黙れ！お前が倒れた場面だけ見て怒れるウオズやテストタロツサ達を止める身にもなれ！フィーニスなど『魔王の吊い合戦だ！』と言ってアナザータイムマジーンを壊しかけたのだからな！」

「それはごめん!!」

本気で世界の危機だったと冷や汗を掻いている……流石に笑えない冗談だろう

「だが悪くはないな……おいもう少し強くしろ」

「わーった」

「ふふ……」

と強く抱き締められ、ご満悦のようだが

「キャロル、ハルトは病み上がりなのだそろそろ離れたらどうだ？」

「断る、これはハルトがやりたい事なのだろう？ならば……やらせてやるだけだろうか？違うか千冬？」

ドヤ顔だったのが琴線に触れたのか知らないが

「ほお……キャロル、お前が起こした一連の件での私達の苦労も知らずによく言えたな！」

『カチドキ！』

「ねえキャロリン……久しぶりだけど東さん達とお話ししようか？」

『HEDEN METALS ABILITY！』

「そうだね……一体君を取り戻すのに十何話かけたのかな？メイン回が私達よりも多いんだよね……」

『ドライバーオン……ナウ……』

「錫音その辺はメタいから辞めてくれ……」

「何だお前達、羨ましいのか？」

「「そりやそうだ（よ）!!」」

「おいハルト、後でハグしてやれ」

「何で命令されにやなんのか…いやまあ皆には別でお礼とご褒美はと思つてたけど…何かして欲しい事ある?」

「それなら東さんはハルくんとの子供が欲しいな!」

「慎みを持つとうか東は…まあ私も…」

「まったくだ…つて錫音もか、そう言うのは式を挙げてからだな…そう言えばキャロルはまだだったのだな付き合いが長いと自慢していたが?まだか可哀想に」

千冬、ドヤ顔しないでくれ…アレ?何か雲行きが怪しくなってきたな、よし離れよう

『残念だな相棒、もう手遅れだ』

「え？それ「ハルト」はい」

そうみたいだキャロルが俺を万力のような力で抱きしめている…いや鯖降りされている骨がミシミシとなつている音が聞こえる…

「そう言えば貴様、俺がいないのを良いことに束達とヤルことヤツてたのだろうか？」

「な、何のことでしょうか？」

「惚けても無駄だバレてる」

「……………おい」

視線を千冬達に向けると全員素知らぬ顔でいるが

「お前たち…まさか」

「あははくべ、別にハルくんとユナイトベントした話なんてしてな「してんじゃねえか!!」」

「それよりもだ早くコツチを見ろ」

「……………」

恐る恐る目線を下に向けると、それはもう良い笑顔のキャロルが俺を見ていたが…俺を見る目に光が籠ってなかった…離れようとしたが

「おっとオレを離さないんじゃないのかハルト?」

「この状況に危険を感じんだよキャロル!」

「何を怯える必要がある、これはお前のやりたい事だろ?…何天井のシミでも数えてたら終わる…」

「この展開は前に束がしたから天井なんだよ！」

不味い……この圧力は色々とまずい、あ！押し倒された！

「さてと……では始めるか」

「い、いや……ちよつ！辞めて！皆の見てる前でとか羞恥心で死ぬるから！」

「ならベツトに……いや近くのホテルでどうだ？」

「近くにホテルとかあるかあ！あるのは旅客用の宿泊施設だったりVIP用の迎賓館しかないわあ！」

「ハルト……お前……以外と真面目にその辺の設備を整えていたのだな」

「いや整えるわ！我、王ぞ！……つか離せ！」

「断る！ふははは……悪いがこのまま……」

と危うしな所に

「あ、ハル起きた？」

「我が君！快復喜ばしいな！」

「ただいま戻りました」

現れたのは後頭部で腕を組んだウルティマと仁王立ちしたカレラ、そしてあらあらと困った顔をしたテストアロツサだった

「3人とも丁度良い所に来た…助けてくれ!!」

慌てて助けを求めたが少し見て状況を把握するなり

「ん〜やだ！」

「同じく！」

「え……テストロッサは!?」

「申し訳ありませんわハルト様……だって」

「「そんなに弱ってるハルト様（ハル）（我が君）なんて滅多に見れないから（な）（ね）」

「この悪魔め!!」

「悪魔だよ、ボク達はハルの事が大好きなんだ……勿論ハルの困って泣きそうな顔もね」

「人の絶望などを好むのは悪魔の性だ許せ我が君」

「私は……面白そうなので様子見ですわね」

「薄情者！」

『お前は他人のこと言えた義理かよ』

「……………アレ！ウオズ達は！」

『おい無視したぞ』

「あああいつ等なら少し野暮用とかであの世界に残っているぞ」

「そっか無事なら大丈夫だろう」

正直さ、アイツ等だけでも奏者倒せるだろうから大丈夫と思ってる

「まあ夜の事は置いといて…さつき錫音が話してた条件についてだ…そのお前に迷惑をかけるかも知れないが」

「水臭いゼキヤロル！まあ今の俺は君が帰ってきてくれて最高に上機嫌だから迷惑な頼みの一つや二つくらいドンとこい！」

「押し倒されてる状況じゃなければカツコイイのだから」

「バツと見は襲われてるからね」

「王の威厳などあったものではない」

今なら何でも出来そうと自信に満ちた声で言う

「そうか……ならSONGsが改めてお前との対談を要求してきた、あの世界に言ってお偉方と話してきてくれ」

「ゴホゴホ……わ、悪いゲーム病に感染したから療養するので会えませんと伝えておいてくれ」

「いや君、バグスターでもあるから普通は感染させる側だよな？それにあのウイルスって人から人へは感染しない筈だけ」

「これはゲームデウスウイルスなんだよ」

「私達に近寄るな病原菌め」

「錫音は取り敢えず全バグスターに謝れ！」

特にポッピーピポパポやバガモンには謝ってもらいたい！良い子なんだぞ！

「スーちゃんの恐ろしい毒舌、東さんじゃなきや見逃しちゃうね」

「それより錫音の暴言で俺のゲーム病悪化してるから…よし、あの世界でパンデミックを起こそう」

「何、近くのコンビニ寄るノリで世界規模のバイオハザードを起こそうとしてるのさ！」

「けど、あの世界なら耐えられそうな奴が多そうだな…辞めておこう」

そんなパンデミックが起ころうものならナツキがまた死に戻るのはい言うまでもないので止めておく、前にアナザーアギトを使ってわかったがアギトの因子持つてる奴がいる以上は変な覚醒など避けたいものである

「懸命な判断だ、さてそろそろ対談に向かうぞ」

「えー！まだ俺病み上がりなだけど！」

「黙れ、さっさと行くぞ」

「いやだー！まだ逢魔でゆっくりしたい！久しぶりのベットでもう少し寝たい！よしー……千冬も一緒寝よ？」

「っ！そ、そそそそそ……そんな甘い言葉に私が惑わされると思ったか!!」

「いやチーちゃん、凄く惑わされてるよ」

「うん…いやまあハルトに言われたらそうなるか」

「ダメ？」

上目遣いで攻めてみたが

「だ、ダメなものはダメだ！」

「あ、堪えた」

「そっかあ…ちっ…」

やっぱり野郎の上目遣いとか需要はないか

『そっちの問題ではない』

「ま、まだ駄々を捏ねるようなら…」

と千冬は腰に収めているサタンサーベルの鯉口を鳴らしているのを見たハルトは顔面蒼白のまま

「腕の二、三本は覚悟しろ」

「壊した両腕治させて、また壊す気だよ〜あの目はやる気だよ〜ハルくんどうする？」

「はい！是非向かわせていただきます！」

「よろしい、では行け！」

「はい！……よし行くぞ!!」

『ギャハハハハハ！相変わらずシマラネエな！』

『ま、相棒らしいな』

「つせえ…さつさと話打ち切って帰るだけ…面倒くさい事はさつさと終わらせるに限る」

「前までのカツコよさはどこ行つたのだ…」

「知らん、やる時しかやらない男だからな」

「いやあ！実家のような安心感だねえ」

「やっと平常運転に戻つたよ皆…本当に大変だつたんだからねキャロル、君がいなくなつたからハルト病んでたし」

「それは…悪いと思つてる…しかし病んでたハルトか見てみたいものだ」

「いや見てたでしょ最初の喧嘩の時にさ」

「あゝハルくんが大胆になつた時のだね」

「いやその…オレが見たいのは、もっと精神的に病んでるハルトなんだ具体的には…そう！闇落ちち5秒前くらいの一！」

「何て歪んだ趣味を持つてるんだい？」

「そう言うと思って、キャロリンが不在時の情緒不安定のハルくんをバッドショットに記録させておいたのだあ！皆で見よう〜」

「でかしたぞ束！」

「辞めないか!!そんなのよりメンタルがボロボロになって幼児退行したハルトの映像をガルーダに記憶させてるからそれを見よう！」

「一番錫音が痛めつけてないか？」

「てか何で俺、知らない所でタコ殴りされてんの？」

『エグゼイド』

アナザーエグゼイドの力で回復したハルトだが

「おかしいな心は治ってない？」

『いや治るかよ』

どうやら俺のメンタルまで化け物ではないみたいだ

—————

久しぶりのポータルを使って転移したハルトは近くのライドベンダーを使い待ち合わせ場所に向かっていた：途中アナザーオートバジンやサイドバッシャーが浮気か！と問いつめられたが：まあその話は置いて

「いやあ！やっぱりポータルの移動は楽だな」

『オーロラカーテンの移動は連続して使えないからな』

「そう考えると理不尽だな土さん…ディケイドの力つて…同じディケイドなのに何で差があるの？」

『それは向こうの経験値的な部分で勝るからだろうな』

「そう言うもんか」

『そう言うものだ』

逢魔に拠点を構えて頂いている破壊者の事をそんな感じで話していると、着信が入ったのでバイクを止めて誰か見る

「……………ナツキ？何？」

電話に出ると大声で叫び始める

【ハルト!!】

耳がキーンとなったので思わず叫び返した

「つせえなあー！」

『お互い様だろ？』

【そ、そんな事より!!大変なんだよ!】

「何が？」

「エルフナインが倒れた!! 助けてくれ！」

「あ？」

—————

そう言われたので指定された病院に向かうと

昏睡しているエルフナイン、それを見守るナツキと奏者達がいた

「よお…ナツキ、テメエは病み上がりの人間に労働させるのが好きなのか？ 本当に性格悪いな」

嫌味の一つでも言わねば気が済まんとばかりに毒を吐く

「ハルト！」

「アナザーライダー！ 何故貴様が」

「ナツキに呼ばれたんだよ、テメエらとのチャンバラごっこなら用が終わったら相手してやる………んでエルフナインの容態は？」

「ずっと寝てるよ時期的にノエルが倒れた後からだ………何で………」

「俺は医者じゃねえから専門的な事は言えねえ……キャロル呼べよ」

「呼んだら大変な事になるからお前を呼んだんだよ」

「結果は変わんねえだろうよ」

『ハルト、アナザーエグゼイド達の知識があれば真似事は出来るぞ』

「え？そうだったの？」

「そう言われたのでアナザーエグゼイドの力を解放、付与された医療知識をフル活用したが」

「異常無しか……コレ、ただ寝てるだけだな」

「けどおかしい………何で」

「昼夜問わず働いて疲れたとか？それならそれで問題なんだけど」

「いやそんなにブラックじゃないよ此処」

「本当か？」

「ハルト、ほら…その…そう！眠りとか夢に關したライダーや怪人の力を使えないかな」

「お前…人を猫型ロボットか何かだと勘違いしてる？まあ、あるけど」

「あるんかい！」

だが夢や眠りに關連した力を持った怪人なんて…ナイトメアドーパントかアリエスゾディアーツくらいしか思いつかないけど…アリエスゾディアーツは本編でも昏睡していた人を起こせたから大丈夫だろう…一応幹部怪人なんだけどこんな緩い感じで使つて良いのか？とか考えていると

「テメエがエルフナインに何かしたんじゃあねえのか？」

クリスの発言に

「ばっ！クリスちゃん!!」

「は？」

少しカチンときた、

逢魔王国は基本的にテスタロッサ達と相談しながら法令を決めたがハルトが自ら定めた唯一絶対のルールが存在する

仲間殺しをする、また計画は重罪である

このルールがあるからこそ三人娘とて喧嘩はするが命懸けのバトルなどはないし、グロンギ連中も国民を対象にゲゲルを行うのは禁忌と定めている。これはあのゴオマさえも守っているであるし、これが俺自身に化したルールであるからだ

絶対に仲間は見捨てない、傷つけない事

それは逢魔に与するものも対象となっておりエルフナイン達に危害を加える事は無いのだが何故地雷を踏み抜きたがるのか…

「エルフナインの奴もキャロルに何かされたんじ「黙れ」があー！」

念動力の力で首を絞め、そのまま宙に浮かばせると

「あ……(っ)………」

「クリスちゃん！ハルトさん辞めてください!!」

「寝起きかつ病み上がりで動いてんのに、いきなり交渉に呼び出されるは暴言も吐かれたらイラつくよね…ノエルもないから非常事態の協力関係もないし………ここで逢

魔と全面戦争に行っても良いんだよ？」

「この人数を相手に勝てる気か！それに其方とて戦力を消耗しているだろう…それで勝てると思われるのは心外だな」

「俺一人でも問題ないし、あれが逢魔全軍とも言つてねえけどな」

ハルトがドヤ顔していると同時に待つてました！と鏡の中から現れたのは

「!!」

デストワイルダーであった、前回の失態を返上せんと我先にと駆け付けたのである

「よしよし良い子だな」

「アレはドクターの言つてた！」

「 MARIA が驚いているが、そう言えばあのドクターどうなったんだドアの前で放置してたよな？」

『あのドクターなら伸びてた所を MARIA に保護されたぞ、んで今は麻酔撃たれて隣の部屋で寝てる、レックは知らん』

「ふーん……………ああまさかお前…」

「!!」

『気づいたか流石は魔王様！つてさ』

「いやまあ気づくだらうよ」

ミラーモンスターの習性を思い出して辟易した顔になる…多分ドクター食べようとしたんだなと納得した

事 ミラーモンスターには色々な習性があり、その一つが一度狙った獲物は必ず仕留める

それは仮面ライダーナイトの彼女を彼の契約モンスターであるダークウイングが狙ってたりする事からもよく分かる、逃げるにはモンスターが倒されるまでSEALのカードで身を守るしかないと言う鬼畜仕様だが

「食べても良いけど腹壊すなよ?…つか食べない方が良いと思う」
「!!」

「あれ…虎？」「クマさんみたいデス」

「白虎だよ以外と思うだろうけど…:…さ」

初見で誰が白虎って解るんだよ俺も熊にしか見えなかったってね

「俺が護衛の一人も連れてこないで敵陣ど真ん中に来たと思ってる？」

と言うなりミラーワールドから聞こえる金切り音とミラーモンスターの咆哮である

「残念、お前達は負けてんだよ兵力差で…分かったら少し黙ってろ」

「(イ)ほ(イ)ほ…」

「クリスちゃん！」

と能力を解除してクリスを落とすと咳き込む彼女に駆け寄る奏者、ナツキはやれやれと言った顔で

「程々にしなよお前は敵を作り過ぎだ」

「忠告どうも…どうせ、この世界に来るのも最後だろうし今更だ」

「え？」

「俺達はこの世界に来ない、元々キャロルを取り戻す為に来ただけだしこれ以上残ってたらまた何されるか分かったものじゃない…まあ代理で誰かは送るかもだけど…それにお前としても最高だろ、この世界を

戦場にならなくて恩人が死なずに済むしな…喜べよ」

「……けど」

良い雰囲気を出してるハルトであるがナツキは知っている

数週間後にサンジェルマン達、パヴァリア結社の面々が武装蜂起することを、その際にメダル関連の技術で大暴れすることを、そして…

「取り敢えずだがエルフナインとお前にはホットラインは残したままにする…念の為に」

「どうしたよ珍しく優しいな」

「そりゃ未来の義妹と義弟の為ならな」

「……………え!？」

「何でもない、さて早く終わらせるぞー」

「いや待て！お前今なんて言った!!」

『フォーゼ』

ハルトがアナザーフォーゼへと変身しホロスコープスイッチを懐から取り出した

「ポチツと」

そしてアリエスゾディアーツに変身して杖をエルフナインの額に当ててみるが

「あれ？」

何の反応もない……おかしい

「ほいつと起きろーエルフナイン〜」

もう一度試したがやはり反応しないな……よし

「ナツキ……ラリ〇ー」

ナツキに杖を向けて能力を発動すると

「え!? どうし……zzz……」

即オチと言わんばかりに倒れ眠ったのを確認すると

「……ザ〇ハ！」

「zzz……はっ！ おいハルト！ 俺で実験すんなよ！」

「ふむ……やっぱり俺が使えない訳ではないのか……後、お前の意見は求めん」

『それ俺のセリフだ！』

「お前のものは俺のもの」

『俺のだ!』

おかしいな普通の眠りなら、こんな感じでアリエスゾディアーツの力で起こせる筈なんだけど…ならナイトメアドーパントの力で見ても恐らく同じだろう…多分これは夢の世界に囚われてるとかそんなのではないな…よし

「待つてろ……おいキャロルこっち来れるか?」

そもそも専門家を呼べと言う話であった

数分後、キャロルが来てエルフナインを見るなりとんでもない爆弾発言をした

「ああ、こいつの寿命だ…確か設定した自滅因子（アポトーシス）でそろそろ死ぬ頃だったからな」

淡々とした発言に周りは驚いて固まる

「へ!?!何で!」

ハルトも含めてだ

「オレは世界を滅ぼした後のことなど考えてなかった…だからオレの転生用素体にならない失敗作には万一敵に囚われた際、秘密漏洩防止のためにある程度短命に設定していたのだ、それと一定期間以上はそもそも生きられないようにもなエルフナインも元々の頭脳面が良かったからオレの助手にしてただけの廃棄躯体の一つに過ぎない」

「お前の方が魔王じゃね？」

やり方的に

「お前に言われたくはない！オレとて…何も対策を講じなかった訳ではない…コイツには色々借りがあるからソレを返さないのはオレの本意じゃない」

「キャロルちゃん…」

響は何か感動しているが

「一応言っておくが勘違いするな！貴様等の為ではない！この馬鹿者がハルトの所に行かなければ…その…こんなことには…ならなかったのだから！」

照れながらのキャロルに思わず抱きしめたくなる衝動を堪えたハルトは

「んで対策は？」

「シャトーに残してた転生用に残してたオレの予備躯体とコイツを融合させる……のだが」

「だが？」

「正直に言えばオレ以外にこの転生方法を試したことないから成功するか保証がない……でだ」

「俺に手伝えと」

「そう言うことだ理解が早くて助かる」

「まあな……エルフナインはキャロルと同じ遺伝子を持つてる……言うならばクローンみた

いなものだ……つまり融合させるには……うおお！出来るじゃん俺！」

「なあ……お前マジで猫型ロボットじゃね？」

「俺は彼処まで万能ではないさ……けどこれなら助けられるぞ！」

ハルトは合点が行き指を鳴らした、いるじゃん！こう言う事に適した奴が！

『私達の出番ね……そう融合態ロイミュードの技術を使うのよ！』

『バーロー！違うな此処はカリユブデイスの技術を応用した人と融合するメギドの力を
使うんだな！』

『いいや違う、ここは……エルフナインをバグスターにするのだあ！ヴェハハハハハハハ
ハ！』

『いやそれは俺のセリフだアナザーオーズ！』

どれも違う確かに平成や令和ライダーは人と融合する怪人も多く存在するが此奴は
一味違う

「キャロル、その予備ボディを」

「安心しろ既に持って来ている」

「ナイスだ……んじゃ始めますか」

アレは歴代最弱怪人と言われているが、彼の能力程応用が効く奴は他にいないだろう……何なら使い手の性格が良かったから穩便に済んだ訳で悪い奴が使ったなら作中最強のメモリとしても数えられたかも知れないメモリの力な

『エターナル』

アナザーエターナルになるとスロットに二本のドーパントメモリを装填する

『GENE XTREME! MAXIMUM DRIVE』

「そおーいー」

そんな掛け声で両手に予備躯体とエルフナインを掴むと緑色の光が強く輝く

俺が選んだジーンメモリの力は自他問わずに遺伝子組み換えを行う……はっ！

「…………このメモリで野菜とか果物の品種改良できるじゃん」

やはりこのメモリの可能性は無限大だな！

『今思いついたの!?!』

ー帰ったら試してみよう果物や米とか色々と！ー

念の為 エクストリームで力を増幅させ細かい制御はアナザーWに丸投げしたが…

光が消えると予備躯体は消えキャロルに似たエルフナインがいたのである

「ハルト……お前……彼処にあったキャロルの体とエルフナインは何処にやった！」

「……君のような勤の良い奴は嫌いだよ」

「ネタは止せ」

「……………ん……………あれ？」

「お、目覚めたかキャロルナイン」

「おい謎のキメラを作るな馬鹿ハルト！」

「あの…何してるんですかハルトさん、キャロル？」

「エルフナイン！大丈夫か何処か痛い所とかないか！」

「はい大丈夫ですよナツキさん…少し苦しいです」

「あ、ごめん…」

「い、いえ……その……嫌じゃないので……」

「え？」

まあ側から見れば金髪幼女に抱きつく青年など側から見たら事案でしかないので

「通報しました」

「っ！ハルト!!」

「冗談……キャロルも言ってたけどさコレで貸し借りはチャラで良いな」

「ああ……」「はいありがとうございます」

「エルフナイン」

「はいキャロル」

何か言いたそうな顔をしているのだが

「……………その体にある機能をつけた好きに使い」

「え？」

「帰るぞハルト」

「おーいキャロルさん、俺はこれから話し合いに向かうのですがあ？」

「……………そうだったな」

「お前が言った話だろう！」

「すまないな、お前の寝ている間にオートスコアラー達の復元をしていてな」

「「「「「つ!!!」」」」」

自分達を苦しめる強者の復活!?!と奏者達は身構えたが

「だが肝心の素材がない…わかっているすぐにボディを用意してやるから騒ぐな！」

「もしかしてガリイ達はキャロルの中にいるんですか？」

「俺と同じ…いやキャロルの場合は融合してんのか」

「ああ…だから黙っている…：やれやれ4人でもうるさくて耐えられんのにハルトは倍以上いるのだろう、疲れないのか？」

「慣れたし何なら今も増えてるから…今はえーと…」

と話してると

『ヒヤツハー！』 x2万

『ハルト！アナザーライトトルーパー達がバイクに乗って暴れてるぞ！』

『ヒヤツハー！』

『おい！あの馬鹿共を何とかしろ!!』

『い、イかれてやがる!』

「取り敢えずエンドオブワールドかマキシマムハイパーサイクロンしておけ、後で説教するから」

もはや慣れたものと答えたらだ

『了解だ！…アナザーカブト！』

『分かっている…地獄に堕ちろ！』

『MAXIMUM HYPER CYCLONE！』

『あぎやああああああ！』

『ああ！アナザーライオトルーパーが宙を舞ってる！』

『ふう……暴動を鎮圧したぞハルト！』

「おう……つたくライオット（暴動）が名前の由来で暴れてるなら、もうちよいなあ……次暴動起こしたらアナザーライオトルーパーの体に仕込んでる毒使うって言っとけ」

『ひ、ひい！』 x2万

本当に変な奴も来ちゃったよなあ……まあ拒まないんだけどな

「万人単位だな……」

「は、ハルト!?なんか遠い目をしてんだけど!」

「ナツキさん、アレはきつと僕達ではわからない世界なんですよ」

「エルフナイン!?だけどさあ…」

「ナツキ、お前に心配される程まで弱い覚えはない」

『倒れてるアナザーライオトルーパー達!元氣出せよ……んで俺の歌を聞けてけええ
!』

『序でにポツピーの歌も聞けえい!』

『イエエエエエイ!!』x2万

『ハルト大変だ!アナザーパンクジャックとアナザーポツピーがアナザーキバやアナ
ザードークキバ、アナザー響鬼、威吹鬼、轟鬼…他のアナザー鬼ライダー達を楽器隊に
して音楽フェスを始めたぞ!何!倒れたアナザーライオトルーパー達がライオブレイ
ガンをペンライト変わりに応援しているだとお!』

「ああ分かつてる頭の中でガンガンするけどすんごい上手い音楽が聞こえるからさ…曲
リクエストさせてよ、ほらあの…無音って奴！」

『ああ！アナザーエターナルやアナザースカルが歌い始めた！お前達！いつからマイク
を用意していた!!え?こんな事もあるうかだと!ハルトどうすれば…』

「それは全力で盛り上げろ、もっと音量を上げろおお！」

その2人の生歌はご褒美でしかないぞ！

『いよっしゃあ!このフロアのバイブスを上げてくぜえ!!』

「しまった…カボチャ頭を増長させただけだった…」

『ニヤア!』

『METAL Thunder!』

『あれ?知らない奴がギターを鳴らしているぞ!!』

「もうしーらない」

億単位の金が動くダークキバこと音也さんのバイオリン演奏会とか松○さんや○川さんの生歌ライブとか凄いが

『お前達！』

お、アナザーディケイド！止めてくれるの？

『花火や酒を用意しろ!!!今日は無礼講だあ！もつと盛り上げろおお！』

『『『イエエエエエイ!!』』』

「……………」

「どうしたハルト？」

「いや…アイツらが俺の中で音楽フェスしてる…」

「本当によく耐えられるな!!!」

「五月蠅いけど上手い演奏だから怒れないし…まあ頼れる奴らだから今回の件では色々世話になったからな…好きにして良いよ」

『よし！ハルトの許可も出たし好きなかだけ暴れ…』

「流石にやり過ぎないから大丈夫だよ、俺が寝たら辞めろよ……でないと爆ぜさせる」

『野郎ども節度は守れ!!』

『おう!!』

「よし」

「な、慣れてる…」

「キャロルも慣れると大丈夫、俺も最初は大変だったけど今は楽しいよ」

と達観した顔にキャロルは頬を引き攣りながら

「す…すぐにオートスコアラーのボディを治さねば音楽フェスなどあのバカ共はやりかねん…っ！お前達！良い事聞いたみたいいな顔するな！設営準備だと…おいガリイ！！」

「大変そうだなアイツら」

「そうですね…これ…ふふふ…キャロル」

「何だ？」

「助けてくれてありがとう！」

「ああ話は終わりだ、おいハルト行くぞ」

「え？ちよつ、おい！！手引つ張るなよ！後何で顔が赤いんだ!?うおおおい！」

「うるさい！黙ってオレをバイクの後ろに乗せろ！」

「え？そんなのよりオーロラカーテンで転移した方が、あいててて！分かった分かつ

「だから！叩くの辞めてよ！」

「んでエルフナイン、何を搭載されたんだ？」

「はい、それは…お楽しみにですナツキさん」

「そ、そうか…」

「これでナツキに…:…っ」

「え、エルフナインさーん」

「大丈夫ですナツキさんと既成「キャロルとナツキの奴、無垢なエルフナインに何吹き込んだ!!」ち、違いますよ！2人は悪くありませんから！」

「寧ろ心配だわ！あの2人から絶対悪い影響受けてるよな！」

「そんな事ありません！キャロルは僕に教えてくれました！」

「一応聞くけど何を？」

「押ししてもダメなら押し倒せと！」

「それだよ心配なのは!!つかキャロルの情操教育ってどうなってるんだ!!ハルトすら押し倒せてないのに！」

「いや何でハルトさんが押し倒される前提なんです?……あ……そ、そう言えばキャロルちゃん達、話し合いがどうこうって言ってたよね？」

「ああSONGSとの対談が恩赦の条件について」

「そんな話叔父様からは聞いていないが……」

「秘密裏だったからじゃないか？」

「何か嫌な予感がする…」

「ええ確か前に特殊部隊が投入されたのよね？」

「はい、んでハルトがブチ切れしてからと言うもの…」

「まあソレに関しては…ナツキ済まなかった元はと言えば私が…」

「いやいや翼だけの所為じゃないって！」

「そ、そうだって先輩だけの所為じゃねえよアタシだってさつきやられたし！」

「そうか…：：：そうだな今は仲間の回復を喜ぼうではないか」

と盛り上がる中 ナツキだけは

「大丈夫かなあ…：」

そう心配しながら空を見ていたのである

—————

同時刻、漸く到着したハルトは不機嫌なまま案内された場所に着いた

「はあ……面倒くさい」

まだ連中は音楽フェスしてる……何？今から仮面ライダー主題歌メドレーだと……あ、フロググポットで録音しといて

「つか、また倉庫跡地かよ芸のない奴等だな」

「仕方ないだろう？オレ達は言うなれば世界規模のお尋ね者だ、そんな奴を料亭に呼ぶ奴はいないさ」

「まあな……しっかしこうなってくると暇だなあ……精神世界に入って俺もフェスに出るか？」

もっかいアナザーバイスとLIVE DEVIL歌うかな？とか考えていると

「それはつまらん……オレが暇になる……その……だから……」

「分かったよ、んじゃ2人で待つか……ほらキャロル来いよ」

「うむ…では失礼する」

そう言うなりキャロルは定位置である膝上に座る

『おい貴様等！何か…こう…そうだ！…なんか良い感じの音楽をかける！このムードを盛り上げるのだ！』

『凄い雑な指示だな！』

余計なお世話だと言っておこうか、そしてアナザー響鬼達よ…その上手い演奏技術は俺ではなく魔化魍に向けての力だろう？使い方を間違えているぞ

ま、まあ良い感じの音楽は助かるな…気も紛れる…しかしまあ

「俺も変わったな」

最初は自分がいるべき場所へ帰る為の旅だった

気づけば仲間が増えて…相棒達の名誉回復も目的になったりやりたい事も多くなつていく内に

「帰る場所が増えちゃった…はは俺って思ってるより欲張りさんなんだな」

好きな女の子達の為に世界に喧嘩ふっかけたり仲間の為に国を作り、繋がりが生まれ居場所が出来て、背負うものも出来た…何なら義娘の出来たと来た

全てはこんな俺を王様と呼び慕う者の為に未来を示す為に、俺が憧れる背中に手を伸ばし肩を並べる為に

「そうだな以前の貴様ならオレが暴れた所で無視していただろうな…それに知らんのか？ 貴様は欲張りを越した強欲だ捨てる事を知らずに見つけ、拾い、受け入れる…絶対に懐に入れたものを見捨てはしない…」

「かもな嫌なんだよ捨てるのが手放すのが…それは東や千冬、錫音…テスタロッサ、カラ、ウルティマ…それと…」

「……………」

彼女を見ると頬が赤くなり瞳も潤んでるキャロルと目が合う

良い感じの音楽も最高潮になったその瞬間

「クロエだな…愛娘には勝たん」

キャロルは真顔になり頬色も戻ると静寂が周りを支配した、そして滑稽なBGMへと様変わりするなり

「そ・の・あ・た・りの空気読まなさは昔からまつつたく変わらないな！そこは【キャロル】って言う場面だろう！」

「つせえ！今更過ぎて恥ずかしいんだよ！」

「焦らされたオレの身にもなれ！」

「んなのいちいち言わないとダメなのかよ！」

「それを言ってくれると期待していたからな！それと言わねば後悔すると学ばないのか！！」

「あ、あの「黙れ（つせえ！）」…」

誰かいたがそんなの後だ、今は

「ほら言わねば、また貴様を忘れて世界を滅ぼすぞ！」

「この世界は別にどうでもよいけど……俺を忘れるのは困るんだよ！」

「ん？……っ！」

ハルトはキャロルを自分と向き合わせると

「絶対に俺の事を忘れられなくしてやる」

「っ／＼／＼／」

『こ、これがハルトなのか！』

『あのヘタレが自分から口説きに！ハルトが成長して俺……凄い嬉しい！』

『何で親目線なんだよアナザーバイス…』

『だがぱつと見、幼女を口説いているロリコンの絵だな…もしもしポリスライダーズ!』

『はいアナザードライブよ…さて犯人はここかしら?』

『同じくアナザーシザーズ…ふふふ任せておきなさい』

『同じくアナザーアクセル…お前を逮捕する!』

取り敢えずこの馬鹿共には後でお仕置きだな

「……………」

「……………」

互いに見つめ合い距離が少しずつ近くなっていく中

『おいハルト』『マスター』

「何だよ相棒」「何だガリィ…空気読め」

『いやキスとかしても問題ないが』

『周りを見た方が良いでしょう？』

「あ?」「は?」

2人が視線を向けると少し気まずそうな顔をしている風鳴弦十郎と緒川慎二がいた

「そ、そのすまなかった……」

その一言がキツカケで2人は顔面がクローズマグマになったのは言うまでもない

100記念アンケート カウントダウン短編 3位 転
スラ 紅蓮の絆編

それはキャロルがシンフォギア世界で起こしたとんでもない事件が解決して半月くらい経った頃の事だ

逢魔に来たカミーノ人やクローン研究施設と軍事工場を新しく迎え入れた結果、逢魔に銀河最強の軍団が仲間に入ると言う一幕があったが、それはまた別の機会に話すとして、現在は白い装甲服を着た誇り高い兵士達が警邏に努めている姿を見てハルトも最高にご機嫌なのだ

漸く溜まった実務を終えたハルトは一息入れ

「飯でも作るか」

そう思いキッチンで夜食を作ろうとした時だった

「っ!!」

感じたのは魔王覇気、このスキルを使える者は少なく距離や方角からしてもテンペスト…って事は…

「リムルさん!？」

親愛なる隣人が何らかの形でピンチでは?と思ひ

「今行きます!」

『テレポート…ナウ』

そうしてリムルの魔力を辿った先にいたのはテンペストの迎賓館だった

「リムルさん!魔王覇気を感じてきましたが大丈夫ですか!!まさか教会!?あのヒナタ・

サカグチが来たんですか!!ならば我等がグラウンドアーミーの力を見せてやります!」

逢魔の戦力を見せてやる戦闘上等!とアナザーウォッチ片手に構えたのだが…何やら宴会の途中だったようで

「あ、ハルトすまんすまん…その魔王って聞かれたから証明の為に魔王覇気を使っただよ別にピンチって訳じゃないからさ安心してくれ」

「はあ……ビックリしましたよ…いきなり魔王覇気感じたので何事かと」

「悪かったって…てかお前もミリムも普通に入ってこいよな」

「普通…そうなるかと最近納品されたガンシップやキャツスルドランになりますかね…」

「あれ?普通って何だっけ?」

「それよりもお客がいるなら自分はお暇しますね」

と離席しようとした時、ベニマルと同じ紅髪的美男子が尋ねる

「失礼……そちらの御仁は？」

「ああそうだったな彼は……ハルト・トキハ、俺やそのミリムと同じ魔王だ」

「どうぞ宜しく……ま、番外魔王だから安心して下さい」

俺は八星魔王の成り損ないですからと冗談混じりに言う

「ハルト・トキハ……まさか逢魔王国の！」

「あ、はい王様してます、えーと……そう言えばそこの方はどなた？」

「っ！失礼した私はヒイロ、ラージャ小亜国からきた使いのものだ、そのベニマル達とは同郷になる」

「ベニマルさん達の!!なるほど…それでか…強い魔力を感じたのか鬼人なら納得ですよ……」

オークデイザスターの事件から生き残った精鋭ならば納得だな…だけど逢魔にもオークがいるからどうしようと考えた結果

「えと…確かラージャって金の採掘が盛んな国ですよね？」

話題を逸らした

「ええよくご存知で」

「優秀な参謀がいますから…けど此処から少し離れてますよね？…何故テンペストに？」

本当、テストアロッサ様様であると感謝しつつ来訪の目的を訪ねると

「実はなー」

とリムルさんが話してくれた内容はこんな感じだ

ラー ज्याは金の採掘で栄えたが今は採掘出来なく成り国は困窮している事

採掘による鉱毒で水が汚染されている事

そしてラー ज्याの女王 トワが身を挺して水の汚染を食い止めていると言うがテイアラの代償にある呪毒に蝕まれて危険な状態という事

だが国事態の食糧問題などが残っているのでジユラの大森林の一部を開墾したいのと助力にと直談判しに来たという

「なるほど…そんな理由が…」

ふむふむと納得していると

「実はテンペスト来訪が終われば逢魔に向かう予定もありました…ハルト殿！」

「はい!!」

「いや、どうした?」

「すみません最近、色々ありまして」

主に仲間から説教など色々された反動とは言えない

「逢魔には異世界の物品や人材が集うと聞きました、無礼を承知でお伺いしますがその中に呪いや病に効く薬や通じるものなどはございませんでしょうか!」

「えーと…ありますよ…ただその女王に効くかどうかは別ですけど」

何なら最近、遙か彼方の銀河系からのとんでも医療技術が流れ込んだからだと、だがこの時、ハルトは知らなかった

女王の呪いや病に効く薬や術師どころか、そもそもの黒幕が身内にいた事を

「それでも構わない頼む！力を貸してくれないだろうか！」

ヒイロに深々と頭を下げられハルトは慌てながら

「え、ええ！」

いきなりの事でアタフタしていると、渋ってるのかと思われたのか

「ハルト殿、俺達からも頼む……」

ベニマルさん達にも頭を下げられたとあつたら

「分かりました、ベニマルさん達には色々と借りもありますし……何処までお役に立てるか
かは分かりませんが是非、協力させて下さい」

「かたじけない！」

「良いって事ですよ俺も行ってみたいですし……んじゃ先ずは医薬品と医者だな……それと
人員の選定をして……よし！んじゃ使節団の人選をしてくるのでこれで失礼します！」

『テレポート』

と言う訳で帰国後、逢魔の幹部陣を集め事情を説明し

「つて訳でラー ज्याに向かうに当たつて、メンバーを決めたい付いてきてくれる奴いる？」

そうハルトが言うと珍しくウルティマが

「それよりハル、国の仕事とか大丈夫なの？」

「つー…いい、いやまあほら…重要案件は片付いてるからさ…それに最近忙しか「それハルがキヤロルを助けに行つてる間に溜まった仕事だよな？」そ、それはまあそうなんだけど…」

ハルトは気まずいと目線を逸らす

「ハルはこの国の王様なんだよ、そう何度も長い間離れられると皆が心配するよ」

「私も同感です暫くは内政に励むべきかと」

同じく意見したのは。ハルトが副官として雇用し軍事的戦略を一任したトルーパーの総責任者 クローン・マーシャル・コマンダーのハウンド

「ハウンド達の言う通りだけどさ…ほら！アナザーウィザードや錫音がテレポート使えるから日帰りで行けるし」

「そうやって何日か滞在する予定でしょ」

「右に同じく」

「い、いやまさかそんな事あるかも」

「なら代理立てて行ったら良いじゃん」

「ええそう言う意味でしたら、テストロッサ殿が適任かと」

と話しているとカレラが会話に入る

「どうした珍しいなウルティマ、いつもなら我が君が行くなら自分もと手をあげるのに」

「カレラには関係ないだろうボクはハルが最近、仕事をしないで色々とうろついでるか
ら心配なんだよ」

「ますますらしくない別に構わないだろう我が君のやりたい事、それ即ち逢魔の方針
だ邪魔するのは良くないと思うが」

「だからって王様が頻繁に外出てるのもどうかと思うよ！」

ウルティマとカレラの言う事にも一理あると思う：特にウルティマの言葉はキャロ
ルの一件で国を開けすぎた自分の所為でもあるので強く言えないのも事実だ

「ええそれに万一の時は私達で支えれば良いだけの事…それに今回は今までのとは違いキチンとした外交や支援なのですから寧ろ協力しなければ不誠実ですわね」

「確かに現状、逢魔と国交を結んでる国は少ないですからね…少しでも良き国と知って頂く為にも我が魔王には出立してもらおうのも一理ありますね」

一方で逢魔の政治面を担当してくれている、テストロツサとウオズからは賛成を表明する彼女達からしても今回の件は逢魔に利益のある話と理解している

「それに私達でスケジュール管理をすれば良いだけのこと…ウルティマとハウンドの懸念も最もですしね」

「確かに…それで宜しいですかウルティマ嬢？ハウンド」

「…：まあそれなら」

「ええ問題ないかと」

何か不満な感じであるウルティマに一抹の不安を覚えたハルトであるがラー ज्याに向かう人員の選抜を始める

「決まりですね、では我が魔王」

「だな…どうやって行こうか？」

「可能な範囲常識的な範疇で頼みますね」

「善処する」

そう呑気に考えている先にはキャツスルドランが吠えていた

「キャツスルドランで行くか？」

「常識とは何か一度、我が魔王とお話する必要がありますね…コマンダー！ガンシップ

の用意を」

「イエッサー！」

「あれ？俺が王様だよね？」

その頃、会議が終了した後のウルティマはと言うと

「（まずいまずいまずいまずいまずいまずいまずいまずいまずい）」

珍しく狼狽えていた、今回に関しては暗躍含めて色々とまずいと冷や汗を掻く、以前ワルプルギスで魔王ダグリユールとヴァレンタインに仕掛けてた時期の事がバレたよりもやばい！

「お嬢様…そのハルト様に正直に話「黙れ」…」

ウルティマはヴェイロンの提案を即座に却下した、事実正直に話せばハルトなら事態

を解決すれば不問にするだろう　実際過去にも同じようなことあったしと納得する反面

「今回に関してはボクのゲームなんだからハルでも邪魔させないよ」

悪魔としての性がそれを邪魔する

「でしたらどうします？道中で妨害なんてしたらそれこそハルト様怒りますよ…というよりお嬢様だから疑われたなかつただけで普通ならカレラ様みたいに勘ぐりますよ」

「恐らくあの2人にはバレていますな…何かしたと言うよりかはラージャとお嬢様の関係に」

「分かってるよ……どうしよう」

カレラやテストロツサには話せない絶対にハルトに報告する何よりあのゲームの内容を知られるのは2人も本意ではないだろうが今の2人なら何をしてくるか分かった

ものではない

「けど念には念を入れとくか」

そう言うとうルティマは転移し逢魔から離れたのであった

翌朝ハルトは使節団と護衛のクローン小隊を率いてガンシップで飛び立った、因みにメンバーはウオズ、錫音、束、キャロルと科学、魔法、錬金術に長けたものや逢魔で医師をしている者も動向させた

「しかし今更だけど何でもありだね」

「まあハルくんの事だから驚かないけど」

「と言うより無駄なだけだろ？」

「皆酷いなあ、こう見えて自制してるんだよ」

「「どの口が言う（つてるの？）」「」」

「あれ何で俺アウェイなの？ここ俺のホームなのに」

『日頃の行いだな』

「……………何かごめん」

そんな感じで無事、ラージャについたハルトの乗るガンシップが停止するとトルーパー達は一糸乱れぬ統率で並ぶのを見て

「ありがとう」

「いえ当然の事です陛下」

「ハルトで良いってハウンド」

「公私は分けるべきだと思うので」

「硬いなあ〜」

そう話していると女王のトワさんに会いに行くとりムルさんに言われたので

ハウンドやトルーパー達はガンシップで待機させると通されたのは応接間だった

「遠路はるばるどうも私はこの国の大臣です」

「あ、ご丁寧にどうもハルト・トキハです」

「我が名はウオズ！我が魔王の筆頭秘書をさせて頂いております」

「取り敢えずウオズは大人しくしててなあ〜」

「オレはキャロル・トキハ…逢魔王国の正妃だ！」

「何と!!」「これは失礼致しました！」

「え！ハルト、お前結婚してたのか！」

リムルさんまで驚く顔をしているが

「キャロルも黙つとれ！まだ違うだろ！」

「まだ？成る程…：そう言う事か…：勝つたな」

「ねえキャロりん少し頭冷やそうか？」

「そうだね…：…」

「お前たちも喧嘩しない！…：つたくすみませんウチのが」

「いやいや、そんな事はございませんよ」

「あ、つまらないものですがお見舞いの品をお持ちしました…：これ目録になりますので良かつたら」

「ありがとうございます」

と大臣が礼をすると別室から現れたのは尖った耳をした老齡のエルフ？ドワーフ？だった

「チクアン殿、トワ様の容態は？」

「落ち着いておられる客人よお待ちせしました……っ！」

「ん？」

何故かチクアンなる医者が見るなり一瞬顔を怒りで歪めた…何で？と首を傾げる、リムルさんもそれに気づいてたよう

「なあお前、あの医者に何かしたのか？」

「いや全くこれっぽっちも」

そう答えるハルトであった、そして部屋に案内されると病床に伏せるトワさんがいた

リムルさんが鑑定した所、テイアラの呪いは術者にしか解けない事 力を使わねば呪いは進行しない事を教わり、きちんと養生するようにと言われた

「リムルさん、マジでチートだわ」

「お前が言うな、それより頼んでたもの持つてきてくれたか？」

「勿論、まあリムルさんの健診に間違いないと思いますよバクタで治療するのもアレなので食の療法でアプローチをかけますかね医食同源って奴です」

「成る程な頼んだよ」

「ええ…それよりこれから」

「ああ水質の調査に向かおう」

—————

そして案内された先にある湖畔なのだが

「うわあ……」

ハルトは思わず引いてしまう程の毒気に満ちていたのである

「……………おかしい」

リムルはスキル 智慧之王（ラファエル）と会話していた、その高度な演算により割り出されたのは汚染されている湖に流れる毒は鉱毒ではないと言うことだ

「リムル殿の言う通りだな…軽く調べてみたが、これは鉱毒ではない別の何かだ」
とキャロルは持ち出していた簡単な検査キットで調べて同じ結論に辿り着いた
「えーもうわかったの!」

「だねえ、科学的に見ても鉱毒じゃないよ自然界にない物質を検知……原理的には魔法かな…スーちゃん何かわかった?」

「そうだね東達の推察通り魔法だよ…ただこの規模の魔法を発動させるなら媒介か装置みたいなのが必要になるね…けど100年単位で魔法を発動し続けるなんて……そ

んなこと…」

「ま、原因は後で調べれば分かるか……さてと」

ハルトは湖に魔力を流してみると…何かの発信源を掴んだ

「リムルさん！彼処です！」

「ああ……わかった！」

するとリムルさんは魔法で湖を真つ二つに割り、毒を発生させていた装置と汚染された水を捕食、浄化して吐き出したのだが

「あつぶな！錫音！」

「はいよー！」

『『ダイフェンド（ナウ）』』

ハルトと錫音は全員を水から守るようにバリアを張るのであった

「ふう危なかったですよ！」

「あ、ごめん…けど解決だな」

「何かアツサリし過ぎて拍子抜けですね」

「良いじゃん万事解決…：…だけど呪いについてはどうします？」

「解呪方法は術師が解かないとダメらしいしと考えているとリムルさんが

「まあそれは追追だな…今は解決を喜ぼう」

「ですね！」

それで良いかと割り切ったのであった

そしてその夜は国を挙げての宴会となった、湖の汚染が消えた事、女王に回復の兆しが見えた事などを祝ってなのだが

「っ…これ美味しい…：…ねえこれどうやって作るの！」

「はい其方はですねー」

そんなのそつちのけでハルトは料理の知識を蓄えたり、仲間達も思い思いの時間を過ごしているとリムルさんが何かしようとしたのが見えたのでこっそり同行する

「リムルさん、抜け駆けは狡いですよ」

「そう言うなよ…分かるだろう俺達だって立場が…つと此処だな、や、トワさん」

「どうも〜」

「リムル様にハルト様も…」

「元氣そうで良かったよ」

「はい、ありがとうございます…何とお礼を言つて良いのか」

「良いつてコツチも仲良くしていきたいしよ」

「そうですね、此方としても…学ぶことが多いですから…この土地の作物である料理の

バリエーションは素晴らしい…これは以前から考えてたジーンメモリで作った遺伝子組み換え作物を…」

「お前、何つーこと考えてんだ」

「いやあ食糧事情改善にお手伝いをお願いします！」

「おい！」

砕けた感じで話しているとトワは少し神妙な顔をして一言

「……………私はお二人が羨ましいです…打算無しに絆を紡げてる貴方達が」

「え？いやあ…アイツら割と俺に遠慮ない所もあるからな」

「同じく…何と言うか俺の場合は王様の威厳なくて困るくらいで」

『お前の場合は割と自業自得だろ？』

『普段から好き勝手してるからナ！』

うるさい黙れと念じてしまおうが事実なので溜息をつく

「私は羨ましいです…ヒロ口だって私は恩で縛り付けて…っ！」

「考え過ぎだよ」

「そうですねよ貴女の為に動いてた…そんな純粋な奴は滅多にいませんし、トワさんは真面目過ぎるんですよ王様なんですから我儘過ぎで周りを困らせるくらいで良いんですよ」

「うんうん…っってお前は割とやり過ぎだろうが」

「いやいやリムルさん程では…ありませんよ」

「おー！」

「ふふふふ…」

何なら少しヒロに親近感を覚えたくらいであるとは言えないがな

翌朝、使節団の代表に資材や医薬品の提供を準備するように伝え一時帰国した念の
為、キャロルに無理言ってポータルを用意してもらい即応可能にしたのだが

「あれ？ウルティマは？」

定時報告の時間には欠かさずに来る彼女が来ないことに不思議に思っているとウオ
ズも同じように

「そう言えば見当たりませんね、ゾンダとヴェイロンも同じくですね」

「何だサボりか？」

「いやいや我が魔王では無いのですから」

「だなくって…ちよつと待てサラリと俺を貶したなウオズ」

「果て何の事やら」

何というか取り合うのも不毛だと判断したので頭を抱える

「つたく…本当に大丈夫か？念話にも出ないし…カレラ」

【どうした我が君？】

「ウルティマが定時報告して来ないんだ、何してるか知らない？」

【知らんよ、あの根暗なら今頃何処かで悪巧み中だろうさ】

「冗談は良いから探してきてくれない？」

【まあ我が君が言うなら仕方ないな…だが】

「見つけたら暴れても良い世界に引っ張るから気が済むまで喧嘩してよし」

【それでこそ我が君だ！すぐに探してやろう！】

念話を終えたハルトは溜息を吐き仲間の心配をしているが悪い事は続いていくとい

うものである

【ハルト！大変だトワさんが倒れた！】

「……はあ!？」

リムルさんからの念話に思わず執務室の机を強く叩いてしまったのであった

—————

慌ててポータルでテンペストに來たハルトはリムルのいる廬に向かうと

「どう言う事ですか!？」

「いや俺も何が何やら…聞けばまた湖の汚染が始まったとかでティアラの力を使って倒れたらしい」

「つまり…あの湖の汚染源はもう一つあった?？」

「いやそれはない俺達が確認したのは一つだけだったろ?？」

「つて事は誰かがまた設置した?？」

「その可能性が高い…しかも最悪な事に隣国の軍までラー ज्याに進撃してるらしいんだ」

「何てバツトタイミング……つか都合良過ぎですね」

「ああ…何とか誰かが裏で動いてる気がしてならない……というよりあのチクアソって医者もグルだったりするの？」

「かも知れませんね…医者なら真つ先に薬とか食養生とか考えるべきでしょうに…藪医者なのかも知れませんが、これはチャンスかも知れませんね…汚染装置を作った術師が黒幕ならとっ捕まえてトワさんの呪いを解かせることも出来るかも」

「そうだな…よし！俺はラー ज्याに向かう！ハルトも手伝ってくれ」

「任せて下さいよウオズ！」

「はっ！」

「し」出陣の準備完了、我が魔王の号令一つでいつでも……流星はウオズだなすぐに戻るよー！」

これで俺達も問題ないとハルトはキャツスルドランを呼び出し逢魔に戻るのであつた

—————

その頃 冥界にあるウルティマの屋敷にて

「ふう……………久しぶりに帰ってみたけど、やっぱり何もないね此処」

やはり逢魔やテンペストの方が色んなものがあり楽しいなと呟くと紅茶を飲み一息入れまウルティマの元に現れた黒い影、それを感じるも視線を向ける事なく

「これは珍しい客だねディアブロ」

「おや流石に気づきましたか」

「そりゃね……………で何しに来たのさ?」

「大体は把握していると思いましたがねえ…単刀直入に言いますラー ज्या小亜国から手を引きなさい」

「ラー ज्या? ……一体何の事かな?」

「惚けても無駄ですよ湖に仕掛けた装置…アレは貴女が作ったものですよね?」

ディアプロの詰問に溜息をつく

「だとしたら何さ?」

「分かりますよね? 女王を解呪なさい、今ならハルト殿には黙っておきましょう…もしバレそうなら隠蔽には手を貸します」

「嫌だよ、これは初代女王との契約なんだからさ知ってるだろう悪魔の契約は絶対って」

「契約?」

「アレは…何百年位か前だったかなあ」

それからウルティマが話したのは事のあらまし

数百年前

当時テストロッサ、カレラ、ウルティマの三人は互いに最高の器を作って理想的な受肉を誰が最初にするかと言うゲームをしていた

テストロッサやカレラも器を探す中、ウルティマが目をつけたのは

建国したばかりだったラー ज्याの初代女王の元へ向かったのである当時のラー ज्याは魔物や強国に居場所を追われたものが作った国であった、ひよんな事から会ったのが何故か彼女はウルティマを見るなり女神と呼んだ、それを気に入ったのか彼女は女王にゲームを仕掛けた

内容はティアラの力に溺れるか否か

対価にこの国にある金の事を教えたが同時に金を狙う国や魔物からも襲われるだろ

うと

だがティアラを使えば国を守れると説いた

負ければウルティマが受肉する最高の器になると言うもので

普通なら何代かは私欲に使う愚か者がいるのだがラー ज्याの家系は初代の高潔な魂を有しており中々進行してなかったのだが、今の女王トワか次代辺りで器は完成すると読んでいるのだが

「けど、もう受肉したからなあ、ボクもアイツらも」

「ならばそもそも契約は不履行です」

そもそもこの話、それ以前に三人はハルトと出会い受肉をしたのだ…女王との勝負がそもそも成立しなくなっている

「だけどさ、一応は契約な訳だよ勝ち負けは明確にしないと気分悪いじゃん」

「それは辞めておいた方が良いと思いますよ、でなければ」

その殺気にウルティマは不機嫌になる

「何、ボクとやる気？」

「まさか私はお願いに来ているのですよ、力ずくなんて野蛮な真似などしませんよ」

「どの口が…名付けされて調子乗ってるみたいだけど、ボクだって名付けされてるからさあまり舐めない方が身の為だよ？」

「ええその通りですね…：…ん？くくく…残念ですが今回は私が出る幕は無さそうですね…ハルト殿も例外と聡い」

「はっ…っ！」

尋ねようとしたと同時にウルティマの城が吹き飛ばされた彼女やディアプロは魔法

で身を守ったが城は瓦礫と化したのである

「これ……っ！」

「ディアブロに言われて来てみれば……一体此処で何をしているのだウルティマ」

魔法で浮遊しながら現れた手下人、金髪碧眼に軍服を羽織る姿は最早語るまでもないウルティマにとって不倶戴天の敵である同僚のカレラ、背後にはアゲーラとエスプリを連れている

「カレラ……ボクの城をよくも！」

「そんな事よりも我が君に報告もせず何に遊んでいた」

「そんな事？ボクの城を消しとばしておいてそんな事はないだろう！」

「いいから質問に答えろ!!」

「それ答える意味ある?」

ウルティマの挑発にカレラの眉がピクリと動いた

「なるほど…我が君に背く気か?」

「いや違うけど? 今回の件はハルに知られたくないだけだから」

「何の話だ?」

「君やテストタロツサにも関係ある話なんだけどね!!」

「何の事だ?」

「っ!! 忘れたなら思い出させてやる!!」

『ベイル』

「お前達下がつている…良いだろう、思い出すかは知らんがな!」

『キルバス』

アナザーライダーに変身した2人の攻撃は中間地点で爆ぜた

「くくく…これで良しと、ではリムル様の元へ参りましょうか」

とある歴史では戦っていた彼女を知り合いに押し付けるといふ何だかんだで腹黒い行動をしたディアアブロであつたと言う

—————

その頃、リムル達とラージャに向かったハルト達は状況を確認すると地形的に見事に取り囲まれていた

「囲まれてますね」

「ああ…念の為、シオンやハクロウを呼んでおいて正解だったな」

「こうなるならトルーパー達、沢山連れて来れば良かった」

実戦経験に良いタイミングだったのにとボヤくと

「いやいやそれこそ隣国に余計な誤解を招くだろ？」

番外魔王の庇護している国に仕掛けたと余計な問題を招くと言われ苦い顔をする

「ですね…その所為で精々が大隊（576人）規模しか手配出来なかつたです…今は王宮警備や避難民の誘導しか手を回せませんでしたよ」

現在はハウンドの指示の元でラー ज्याの国民疎開を支援している… 避難場所までガンシップで運んでいるのだ

「それで充分だよ…さて俺達は…」

「ええ消えたトワさんを探すんですよね…なら」

とプラモンスターやディスクアニマル、メモリガジェットなどを解放してトワさんを探したのが見つかからない

「うーん……ランガ」

「はっ！我が主」

そう言うとりムルさんはランガを連れトワさんの匂いを元に探知することにしたが「そもそも何で隣国の連中か攻めて来たんです？」

「は、それがラー ज्याの金鉱脈を狙ってと」

「……え？でもヒロさんの話だと金は掘り尽くしたんじゃない？」

そう言うのと皆が黙りするとランガが嘘は許さんと威嚇するが近衛兵は身に覚えはないと弁明し確かにあった金だが鉱脈は全て掘り尽くしたと言うのでりムルさんがランガを止めた

「そうなりますと隣国の連中はデマに踊らされたってことになりますよね？」

「ああ……つて事は……」

「誰かがラー ज्याへ派兵するよう唆した黒幕がいるわけか……【我が君！】っ！」

突然きたカレラの念話に手を止める

「どうしたのカレラ？」

「ウルティマを見つけた……がどうやら今回のラー ज्याの件に絡んでいる……何か調べているようだ」

「はあ!?!」

まさかのウルティマが絡んでるのか!とハルトは頭を抱えている、また昔、ダグ
リユールやヴァレンタインさんと同じような理由かと考えたが

【だが理由はまだ聞けてない、もう少し時間をくれ】

「すまない頼んだぞカレラ！」

「任せてくれ我が君！ウルティマから必ず理由を聞き出そうではないか！」

「無理はするなよ」

念話を切るとリムルさんに何と言って良いかと頭を抱えてるとランガが何か見つけたようだ

「この下か」

「はい我が主！」

「ならさつさと進みましょう、アナザーフォーゼのロケットドリルキックで目的地まで一気にいきます！」

アナザーウオッチを構えるが

「いやハルトには別に頼みたい事がある：黒幕の逃げ道を塞いでくれ」

リムルさんの依頼に従い通信機 コムリンクでコマンダーハウンドに繋ぎ指示を出す

「了解しました！ハウンド！仕事を終えた大隊連中で都付近を全部包围しろアリの一匹も見逃すな！何なら逢魔から応援を呼んでも構わんし、あのクルーザーでも引っ張ってこい変な奴がいたらスタンモードで眠らせろ！」

「イエッサー！野郎ども逢魔から兄弟を連れてこい！！」

【はっ！】

いやはや頼りになるな流石はクローントルーパーだなと感心しているが負けてはいられない

「これで大丈夫です、行きましようリムルさん！」

「ああ行くぞ！」

と中に入ったわ良いが、中ではボロボロになっているトワさんと何か異形の身になったヒイロと高笑いしているバイスに似た声の黒幕ほい奴がいた

「お前が黒幕だな」

「何っ！か仲間の声に似てるから複雑……」

『何ハルト、もしかして俺たちの事を思っていたりするう！』

ーうっさい、次余計な事言ったらジープで跳ねるかアナザーライオトルーパーに襲わせるぞー！

『うわあ！ごめんなさい!!』

「……だが…少し攻撃するのに躊躇ってはいる」

『やっぱり…』『ツンデレ?』

「アナザーライオトルーパー…追いかけて回してよし」

『ヒヤッハー!!』 x2万

『逃げろー！』

『おい待て置いてくな!』

「これでよし」

と話してたらだ、その黒幕 ラキユアは俺を睨んだ

「き、貴様が…元人間で新参者の魔王か…そして…あの方の魂を穢した輩かあ!」

「は？」

「なあハルト、あの医者と同じで何かしたか？」

「いや全く身に覚えがないんですよね〜」

あの医者と同じで睨まれたりする理由が分からなかったがどうやら関係者の誰かがラキユアと縁のある奴らしいが逃げたラキユアをリムルとハルトはそれぞれランガとアナザーオートバジンに跨りながら追跡を開始した

「逃すかあー」「待て!!」

逃げた先に待ち受けていたクロイントルーパー達がブラスタライフルをラキユアに放つが効いてないようで、そのままトロッコで逃げおおせると空を飛ぶ際に見えた羽を見てリムルとハルトは納得した

「その羽…悪魔か」

「ああ…なるほど」

リムルは悪魔と納得したがハルトも別の意味で納得した

（ああ、コイツはあの三人の関係者か）と

すると医者の子クアンも悪魔な感じで現れる

「リムルさん、俺がアイツを何とかするんでベニマルさん達の加勢に」

「ではあの藪医者俺が相手しよう」

「え…頼みます…ああ分かった！ランガも任せたぞ！」

「はっ！」

とリムルさんは移動してくれた…これでタイマンとアナザーウォッチを構えらるとラキユアは怒りに満ちた顔で

「貴様を殺せば、あの方が本来の姿に戻られる！」

「あの方？」

カレラが言っていたことを鵜呑みするなら

「まさか…ウルティマの事？」

逢魔にいて、あの愛らしく最初に出会った彼女を思い出すが

「う、ウルティマだとお！貴様が名付けや受肉してあのお方は変わられた…悪魔として持つべき矜持と強さへの執着が無くなってしまったのだ…それも全部貴様があのお方…：…ヴィオレ様を倒してしまったからだあ！」

ラキユアの意見を纏めれば、ようは俺がウルティマを倒し受肉や名付けをした事が気に入らないらしい

実際にテスタロッサ、カレラ、ウルティマの三人が逢魔に加入した際に各々の眷属を連れてきたが一部は別任務で席を外してるものもいた…ああ、成る程

「やっぱり俺はまだまだだな」

俺が上にいる事が納得いかないのだな…まあいきなり自分の慕う上司の上に上司が

出来れば不満に思うだろう、しかもそれが何の目立った功績も立ててない青二才なら尚更だな

「オーマジオウ…師匠…俺は王様としてまだまだみたいで…今後ともご指導ご鞭撻よろしくお願いします…あと出来ればリバイスの続きとギーツを見せてください」

『最後に欲望が漏れてるぞ』

ーこ、これはアナザーギーツ達の事を詳しく知る為に必要な事なのだ！ー

『本音は？』

ー見たい！ー

『宜しい』

ーっじゃなくて!!ー

「悪魔つてのは強い奴に従うんだろ？ならウルティマの意に背いているのはラキユア、お前になるが？」

「黙れえ！俺は貴様を認めんぞ…貴様を殺せばあのお方も必ず正気に戻られるのだ!!故

に貴様は死なねばならない！」

とラキュアは自分に酔っているのだが

「それは困るなあゝまだ死ねないし…それに俺を殺して良いのは絶対にお前じゃない」

.....

俺を殺して良いのは本物の仮面ライダーだけだ…それ以外の力を持っただけの有象無象には俺の命は渡せない

「俺の物語の結末を決めるのは全知全能の書でも高度な人工知能でもない……あの人達だけなんだよ」

相棒達には悪いが俺としては殺されるなら仮面ライダー本人の手にかかりたいと思う、あの誰よりも優しく強い戦士達に…最強の敵として……

だからこそだそれ以外の誰にも負けないと決めている

「なんだと…っ！」

「あれ？聞こえなかった？お前に殺される程弱くねえんだの俺はな」

ヘラヘラと笑いながら、いつものように相對する

「新参者の魔王だけに飽き足らず八星にもなれない成り損ないが、あのお方を従えるなど恥を知れ!!」

「知るのは貴様だ下郎」

「え？ウオズ？」

「我が魔王は普段は昼行灯のような方だが、実際は我々には計り知れない深い思慮を持つお方…そんな我が魔王の意図すら汲めない愚か者がいたなど…こんな配下を抱えたウルティマ嬢が哀れでならない」

何やら演説してくれてるがハルトは内心すごい動揺していた

「……………」

「え？計り知れない深い思慮？ウオズは一体どこの誰の話をしているんです!?」

「つい先日も巧みな話術と交渉術で数十万規模…いや百万規模の軍隊を手に入れたばかりなので…：…今まで棍棒外交しか出来ないと思ってきましたのに」

「あれ？それ褒めてる？」

「百万規模だトオ！そんなのハツタリだ！」

「ハツタリではありませんよ」

ウオズが指を鳴らすと待つてましたと言わんばかりに現れたのはクロントルーパー達を輸送するガンシップが数機、そのブラストシールドは開かれており大量のト

ルーパー達がブラスターライフルとガンシップの武装でラキユアに狙いを定めていた

「ウオズ、何か狡いなソレ俺もやりたい」

「コレは失礼しました我が魔王…過ぎた真似をお許してください」

「いやー流石はウオズだな、俺の考えが分かるなんて」

「いえ私やテストアロツサですが我が魔王の深淵な考えの一端を読み解くだけで精一杯ですの」

「ははは…皆、俺を買い被りすぎだよ」

『ソウダナ』

『ただの行き当たりばったりがとんでもない言われようだな』

「ま、まあ言われようだろうけどさ褒められて悪い気はしないがな…見ていろ！お前達の王の力を！」

『ジオウ』

アナザージオウになり、アナザーカリスのフロートを使い浮遊するなりラキユアは魔法で攻撃をするがアナザージオウはツイングレードではたき落とすと、未来視ですぐに隙をついて肉薄し胴体に流れるような一撃を叩き込んだ

「ぐぎやああああ！」

その悲鳴を聞いて思わずに苦い顔をして

「な、何かバイスを攻撃してるようで罪悪感が凄い…」

『へ？いや別にそんなの気にしないでよハルトちゃん！』

「そうか…なら遠慮なくボコる！」

『アレ！ハルトさん…僕ちゃん何かした!?!』

「この国を泣かせ続けた悪党を裁くにはお似合いな奴がいる」

いや主に良心が痛むかどうかの話になるのだが今更だが仲間でないのだから別に良いやと思ひ、アナザージオウはウオッチを起動すると、街：国を守る為の風が吹く

『W』

アナザーWとなり、あの街を泣かせる悪党にかける台詞を告げる

『『さあ！お前の罪を数えろ!!』』

「罪だと！罪人は貴様の方ダア！」

叫びながらラキユアは魔法弾をアナザーWに放つが

『ルナ トリガー』

アナザーWルナトリガーになりトリガーマグナムで様々な軌道から放たれたる攻撃を全弾撃ち落とすと追撃で何発かは命中して怯んでる隙に新しいアナザーライダーに変身した

「ほいっと」

水色の血管が流れ光った姿は、まるでライオンにΨの意匠を嵌め込んだような異形の怪物背中には翼を意識した機械的なブースターが装備されている

空から舞い落ちるのが定められた蠟翼の帝王

『サイガ』

アナザーサイガ

「it's show time！」

そう言うのと背部のブースター フライイングユニットを起動すると持ち前の旋回性能を活かしてラキユアの背後を取ると、そのままフライイングユニットを攻撃モードに変形させ高濃度のフォトンブラッド弾を浴びせた

「あぎやあああ！」

「ENJOY（楽しめや）!!」

—————

その頃、悪魔界にある場所ではアナザーベイユルティマとアナザーキルバス、カレラの犬猿の仲によるバトルが行われていた

アナザーライダーに自らの悪魔としての魔法や異能、技術を落とし込んで戦う2人…テストアロツサも加えると三人はハルトにない強さがあつた

「はあ……はあ……はあ……」

「はあ……はあ……」

互いに能力は互角であり決定的に欠けていた

「で？思い出した？」

「ああ…あのゲームか」

「そうだよ！ラージヤはボクの受肉に用意した場所だったんだ…なのに！」

「その契約が契約と呼べるのなら我が君に歯向かうのも問題はないと思うぞ、私とて同じ立場なら我が君を止めるだろうからな」

「え？」

カレラの言葉を繋ぐ前にゾンダとヴェイロンがウルティマの元に現れる

「お嬢様、ラキユアの奴が勝手に動いていたようです」

「前にお嬢様が作った、ヴァレンタイン嫌がらせ用呪毒装置をラージヤに用いています！」

「は？何それ…って事は」

それを聞くとカレラは一旦手を止め

「お前の妨害で契約不履行だな」

「……………みたいだね」

「カレラ様戻りましょう、ウルティマ様の件をハルト様に報告せねば」

「それはお前達に任せたぞ」

「あれ？カレラ様は？」

「私はまだ用が残っている…任せたぞ」

「そうだね…まだ」

「決着をつけてない!!」

今度は互いの最大火力の魔法が中間地点で放たれたのであった

側近達は

「……………これどうする?」

「取り敢えず離れましょう…ゾンダ、ヴェイロン貴方達もです」

「分かりましたよ」

「ええ…しかし今回の件、ハルト様に何と報告すれば…」

正直に話せば、ウルティマの信用が落ちてしまうと頭を抱えていると

「あ、私に考えがあるけど聞く?」

「是非」

「んじゃー」

エスプリが提案した内容はゾンダとヴェイロンも納得行く筋書きであった

「おや面白い話をされてますね」

「ディアブロ様？」

「何、少し私も口添えしようかと」

「見返りは？」

「そうですね…有事の際に一度で良いので協力を頼めますか？」

「問題ないだろうテンペストの危機はハルト様の危機だ、ならばハルト様にも提案がしやすい…：カレラ様には私から話しておこう」

「ちよ、アゲーラ勝手に！」

「エスプリ考えてみなさい、我々が隠蔽してもディアブロ様がリムル殿に口外すれば同じ事ですよ…：しかし」

「くくく…ええ勿論しつかりとフォローはさせて貰います…：しかしウルティマの後始末しなくて良いのですか？」

「今のお嬢様を止められるのはハルト様以外ありますまい…：そのハルト様が動けないのならば気の済むまで暴れてもらった方が良いですから」

「そうっすね、今回の件で割とイラつかれてたので…私達に火の粉が来なければ何方でも」

「その気持ちよく分かります」

モスやシエンがいたら同調しただろう、悠久とも言える時間各々あの三人に仕えてい
るのだ気苦労も一つや二つでは足りないのである

色々と苦勞の絶えない側近達であつた

—————

その頃 アナザーサイガはフライングユニットをトンファーマードにしてラキユア
にラツシユを叩き込んでいるのだが

「やっぱりトンファアって少しクセの強い武器だな」

それと接近してクロスカウンター狙うのは胴体切られる死亡フラグな感じがするの
で…ここは違う奴で行こう

【ハルト様、取り急ぎご報告したい事が】

「アゲーラ？」

「—————」

「そっかありがとうな……よしお前は敵だ」

そう言うことだったのかと納得すると一息入れ、心の中にあるスイッチを切り替えた

温和な人ではなく……魔王として……1人の怪人として

「王としての判決を下してやる……」

そう言ったハルトの右手にはステンドグラスのような模様が現れると

「サガーク！」

「!!!」

『サガ』

そう言うと同時に現れた円盤型の蛇 サガークがアナザーサイガの右手に収まるとアナザーウオッチに変化するなり強くスイッチを押し込むとアナザーサイガの体はステンドグラスのように弾け 中から現れたのはアナザーサガだ

「見てくれだけ変わって所でええええ！」

ラキユアは魔法で攻撃をしようとしたがアナザーサガはジャコーダを使い数度殴打すると首を絞める

「さて……………と……………そろそろ幕引きと行こうか」

「ふ、ふざけるな……………あのお方が…お前を…」

何かラキユアが言おうとした、その時だった

【おい、お前】

「っ！あ、あなた様は……」

【誰の主に手を出してるか分かってるの？】

「主ですと……あなた様は騙されているのです！目を覚まして下さい！あなた様は孤高で至高、誰にも屈する事のない存在！それなのに何故あのような成り上がり者なんぞに……！」

【別にお前がハルをどう思おうが関係ない……けどさボクはラー ज्याを見張ってるとしたか言ってるよ？何勝手な事してくれてるの？】

「い、いや私は一重にあなた様のお側に仕えたく！」

【知らないよ……あーあ……お前のせいで折角の計画がパーだよ、お前が勝手しなければハルにもバレずにゲームを続けられたのにさ……この役立たずの無能が……ま、今回はボクが手を下すまでもないかな……どーそお前ハルに始末されるだろうし！】

「っ！そ、そんな!!」

「うわー誰と話してるか知らないけど見捨てられたんだな…かわいそ、同情はしないけど」

「こ、こうなったら…これで!っ!」

ラキユアがそう言うなり紫色の玉を飲み込むと途端に魔力が暴走して膨らみ始めたのを見て

「な……あいつはせ、セ○なのか!」

「違うだろ!」

ま、まずいこのままでは地球どころか太陽系の危機だ!と慌てていると

「こ、この国諸共…この魔法……破滅の炎で消しとばしてくれてやるわあ!!」

「な、なーんだ国範囲なら大丈夫だな…太陽系規模とかならどうしようかと」

いやはや最近地球規模のピンチに対応してたせいかな大丈夫な気がしてきたよ…パン
ドラタワーや破滅の塔とか出来たら流石に逃げたくなるからな

「いやいや！何呑気にしてんだよ…こうなったら…」「大丈夫です任せて下さい」え
？」

「アレの魂を破壊するのでリムルさんは魔力を食い尽くして下さい」

「え？お、おう」

「判決は一つ…死だ！」

『WAKE UP』

するとジャコーダから伸びた赤い刺突がラキュアの魂に突き刺さるとアナザーサガ
はジャコーダをなぞるように動かすと同時にラキュアの体がステンドグラス状に変わ
り爆破した

「リムルさん！」

「ああ…暴食之王（ベルゼビュート）！」

その魔力はリムルさんが全て食らいつくした

「ウオズ！」「はっ！」

変身解除したハルトはウオズと共にマフラワーワープで転移した先では、ポロポロになっっているヒイロと介抱しているベニマルさん達であった

「ベニマル、フルポーションを！」

手持ちの完全回復薬を使おうとするが

『解 紫紺の球（カースオーブ）による副作用です…回復出来ません』

「……………くっ！」

「なら懐古の力で！」

アナザージオウIIウオッチを構えるが

『無理だな、以前の死者蘇生と同じだ使えんよ…戻しても同じ形で死ぬだけダゾ』

「っ……………」

キャロルや錫音を呼ぶ？いや間に合わない…テスタロッサなら…ダメだ逢魔の守りについてる彼女に負担をかけるわけにはいかない

ならばこそだろうか…ハルトは待機していたトルーパーに指示を出す

「せめて忠義の戦士に敬意を…弔砲放て！」

近くに待機させていた戦車 ウォーカーやガンシップが空に大砲を放つとトルーパー達は全員敬礼した容姿は違っても忠を尽くす彼に戦士のそれを感じたのだろう

後に、この現場に居合わせたトルーパー達は彼に敬意を持って緋色のペイントと赤鬼のパーソナルマークをつけた部隊 レッドオーガが生まれたのは少し先の話である

「ははは……随分と派手な見送りだな」

ボロボロと崩れていく彼の体を止められず彼は灰のようになり消えてしまった

「ヒイロさん…っ！」

だがその時

「ティアラよ！」

トワさんがまさかティアラの力を使ったのだ

「おいおいおい！そんな事したら!!」

結果としてヒイロは生き帰ったが今度はトワさんが光の粒子となった…筈なのだが

『おめでとう、ゲームは君達の勝ちだよ…それとお詫びかな奮発させてもらうね』

その時、とある魔法が起こるとトワの体が元に戻ったのだ

「トワ様！」

これにて一件落着き！と言いたいな…取り敢えず皆が最後の宴で盛り上がる中、ハルト

は逢魔の議事堂にいたしかも不機嫌で

「……………俺も参加したかった」

「我が魔王の気持ちはわかりますが」

「わかってる……さてウルティマ」

「っ！」

目線の先には今回の件で色々動いていたウルティマがいたのだカレラと喧嘩したのか衣服はボロボロかつ今にも泣きそうな顔を見て

「アゲーラやヴェイロンから報告は受けている……………身内の不始末よくやってくれたな」

「……………?」

あれれ可笑しいぞ?と言う顔をしていたのに気づいてないハルトは

「お前は前からラー ज्याにいた眷属の陰謀を察していてゾンダとヴェイロンを率いて調査をしていたのだろう…すまなかつたな迷惑をかけて」

「いやいやハルトが謝ることじゃないよ、黙ってたボクが悪いんだし」

「出来れば今後は報告して欲しいなあって思ったな」

「わかつたよ…ごめんなさい」

「いいよ…さて夜食でも作るかウルティマもどう?」

「ボクは良いや、溜まった仕事しないと」

「そっか、んじやまた明日な」

—————

そして部屋から出たウルティマは少し不機嫌な顔で待っていた同僚を見る

「何で、ボクを庇ったのさ？カレラ」

「私ではない彼奴らの提案だ」

視線を向けると2人の副官がいた、恐る恐るだがウェイロンは話す

「はい、お嬢様の今後やハルト様の為にも今回の件はラキユアの独断専行にするべきと判断した次第です」

「……………そつか…ありがとう」

「勿体なきお言葉」

「だけどカレラ、これで借りを作ったとか思わない事だね!!」

「知らんなそんなこと……さて我が君と夜食に行「ちよつと待て」なんだ？」

「何でハルと夜食行くのさ？」

「誘われたのだよ、お前は断つたのだろうか？なら黙ってみているが良い」

「ボクも行く…今ならハルに訂正でき「させるか！」邪魔するな!!」

そう騒がしく言い合っている間に当たり前と言わない形で通り過ぎたテストタ
ロツサが部屋に入ってきた

「ハルト様、お待たせしましたわ」

「おう、んじや行こうか」

「しかしハルト様、自ら手料理なんて」

「昔から好きでやってるんだよ…テストタロツサ達の口に合えば良いんだけど」

「期待してますわ……それと」

「何してんだお前ら」

「……………」

「ウルティマもアゲーラ達も来いよ仕事は明日にしようぜ」

「うん!!」

「我が君はウルティマに甘くないか!？」

「わーったわーった、皆ついてこい！」

そう言うハルトは今までと変わらない屈託のない笑顔であり付いてきてくる者達も笑っていたのであった

カウントダウン短編 2位 変身 i f
仮面ライダー
シーカー編

これはハルトに渡された力がアナザーライダーではない世界線の話

「おめでとうございます！厳正なる審査の結果、今日から貴方は仮面ライダーです！」

「仮面ライダー……え？ドツキリ？」

謎の女性にそう言われ渡されたボックスを開けると入っていた中身のドライバーをつけたことが普通の青年だった俺 常葉ハルトの新たな人生の始まりだったのである
う

「変身!!」

『ENTRY』

そして俺は言われるがまま数多の世界を巡り、そこにある危機を救ってきた

「ありがとう、君のお陰で世界は救われたよ」

そう、救ってきた

出会い、救い、別れ、出会い、救い、別れと

エンドレスに繰り返す内に徐々に擦り切れ忘れてしまったのだ自分の本当に叶えた願いを……

「いや、それは頼まれただけだから……」

そして青年は、また世界を救ったのである

そんなある日の事

「何コレ？」

ハルトは報酬として貰った箱の中身を見て啞然とした

「あのキュウベえやら悪魔ほむらちゃんやらワルプルギスの夜やら蔓延る鬼畜世界から円環の理となった女の子を救った報酬がこの金色の札一枚だけだとお！」

何てブラック労働なんだ！と拠点になっている部屋の中で思わずツツコミを入れてしまった

「……………はあ」

まあ貰えないよりマシかと思う事にしたハルトは取り敢えず

「つぎけんなあ！あの鬼畜ゲームマスターがあ！」

以前出会った人を人とも思っていない外道なゲームマスターへ世の中の不条理を込め、この地面に叩きつけると、何やら虹色の光を放つ危ない気配がしたのでドライバーを構えたが

「っー」

現れた模様が刻まれた激痛走る右手に持ったドライバーを落としてしまうと同時に現れたのは鎧甲冑の騎士だった

「セイバー、モードレッド推参だ問うぜアンタがオレの……マスター!？」

俺を見るなりその騎士 モードレッドは兜が変形し中から見えたのは金髪の美少女だったが顔はありえないものを見るような表情であった

「……………へ？」

待て待て何で俺の事を知ってんだよ…待て

「いやマスターだよな…何でここに…いやその前に…」

「セイバー…モードレッド…つえ、いや嘘だろ…」

俺がこうなる前にどハマりしてたゲームのキャラだよな…何で…

「あ、やっぱりマスターか！いやあカルデアに顔出さなくなつたから心配してたんだー！しかし…今どんな状況だ？」

この切り替えの速さは流石と感心しているが俺も切り替ええないとな

「へ…あ、ああ…実はね」

事情を簡単に説明しながらモードレッドと情報を擦り合わせる、どうやらモードレッドは俺のアカウントにいた彼女らしい……それがあの金色の札を触媒にして此方に来たと言う事

「へえ……つまりマスターは色んな世界に飛ばされて特異点修復擬きをしてると……何つーか……あつちこつちで大変だな……お前」

同情されてるな、呆れているが

「ま、割り切ったからな……さてとまずは」

「んだよ」

「服買いに行くぞ、お前……霊体に戻る気ないんだろ？なら鎧甲冑は目立ち過ぎるし金ならあるから好きなの買って良いぞ」

「へえ……分かってんじゃねえかマスターー！」

「ハルトで良い、人のいる場所ではその呼び方は目立つからな」

「そっか……んじゃ行こうぜハルト！」

「飲み込みが早くて助かるよモードレッド……んじゃ歓迎も込めて飯でも作るか」

人並みの料理しか作れないけどね……え？パーフェクトハーモニーの人やアギトに料理を教わった俺がいるだと……宜しいならば戦争だ

因みに

「……………っ!!」

モードレッドはジャンクフード系がお好みのような覚えておこうと思ったとき

彼女の服を調達し生活にも慣れてきた頃、ハルトに渡されているスパイダーフォンに

通知が来た

「……………うへえ」

メッセージを見るなり嫌な表情を浮かべるハルトに暇を持って余してたのか読んでた雑誌を投げ捨てたモードレッドが肩越しにメッセージを見ていた

「どうした？そんな顔してよ」

「仕事……」

鬼畜ゲームマスから来たメッセージに軽く殺意を覚えたのだがモードレッドはそんな事気にしてないと言わんばかりに

「つし行くか！出陣だ！」

「んや俺一人でやるからモードレッドはゲームでも（剣を首に添える音）…一緒に来る

「？」

「一緒に行くに決まってるんだろが！主を放っておく騎士がいるかよ」

本当にこの騎士様は

「そっか…頼りにしてるよモードレッド」

頼りになる…いやゲーム時代からお世話になってるのだ

ハルトはモードレッドの頭をポンと触りながら言うと

「おう！…それより、マスター」

「ん？」

「仮面ライダーだったか？マスターが貰った力の名前…ライダーって事はあんだろ？」

「乗るか？」

「この世界での初陣だ一番良いのを頼むぜマスター」

その台詞には少し不穏な空気を感じるのだがモードレッドの言う通りだと思うので

「んじゃ取っておきで行こうか」

ハルトはそう呟くとバイクのハンドル型バックル ブーストバックルを操作して呼び出す

『ブーストストライカー』

現れた赤いバイクに口笛を吹きながら目を輝かせるモードレッドにヘルメットを投げ渡すと彼女は

「ヒヤツハーハー！」

人間慣れると楽しめるものである、凄まじい運転の荒さだがハルトは持ち前の三半規管で逆にモードレッドの運転を絶叫アトラクションと認知し直して楽しんでいた本来なら横転する筈なのだがバイクは自然と体勢を直したのを感じて

「物理法則にも叛逆してるとかスツゲエ！」

「少し黙ってろマスター、舌噛むぞ！」

「ヒヤツ……っ……かんだ……」

今回の教訓、人の忠告は素直に受け入れよう

そして運転してついた先にあつたのは奇妙な外見の生物が人間を襲っているのだ

「なんだ、このプニプニしてそうな奴ら」

「そ、ノイズって謎生物…何か俺達の攻撃は効くけどパンピーの攻撃は効かないってさ」

「ふーん」

興味なさそうにモードレッドは鎧をつけた腕で小突くとノイズが炭素になったのを見た同時に着メロが鳴りスパイダーフォンに目線を落とすと今回の依頼が来ていた

M I S S I O N

この街にいるノイズを市民を守りながら退治せよ！

「へえ…民草を守りながら戦うって訳か…：…んじやお先に!! 悪いなマスター!」

そう言うなりモードレッドは赤い角を意識した鎧甲冑を纏うと右手に聖剣 燦然と輝く王剣（クラレント）を呼び出すとノイズを斬りつけ蹴り飛ばす…と周囲の個体を巻

き込みながら爆散する、スイッチが入ったのか剣を持つと魔力でブーストをかけ身体能力を上げる

「っ！お前等こっちだついて来い！」

目に止まらぬ速さと共にノイズを切り捨てていき塵芥の山を築き上げながらも逃げようとする人を見捨てずに誘導するのは、それでも彼女は騎士である表れであろう

「……………」

対して俺は、どこに居ても来てもやる事は変わらない…のだが

「ま、ハンデはつけてやらないとな」

こう見えて負けるのは嫌いとかくとハルトは懐から取り出したのはシンプルなバトルであった、それに黄色くまた鹿のような顔が印字された部品 ライダーコアIDを

中心部に装填する

『ENTRY』

それは仮面ライダーへの片道切符と言われた

付けたら後戻りなど出来ないと…だが俺はそれを選んだ…憧れの仮面ライダーになりたいと言う思いがあつたのは否定しないが

あのまま身に覚えのない悪役に利用されるだけの生を長く生きるなど真つ平だ…後戻り？するつもりはない

短くても儂くても愚か者だと笑われようと

「俺が……なりたい自分になる為に」

『DESIRE DRIVER』

腰にドライバーを巻き付けるとスパイダーフォンのアプリを起動すると足元に現れたボックスを開き、ハルトからすれば馴染み深い建機に似たバックル。パワードビルダーバックルと3種の武器を内包した小型バックルを合体したギガントコンテナバックルを手に取り構えると両端にバックルを装填する

『SET WARNING』

危険を通知するような電子音と組み立てる音と共に背後に現れたのは鉄骨や足場と言った建材と組み立てを行なった二本のロボットアームが上下の装甲を形成した、邪魔しようとしてノイズが襲い掛かるが『SAFETY FIRST（安全第一）』の壁が阻むのであった

その勢いのまま両手を交差しながら突き出す

一息入れて告げる、その宣誓を戦う為の装束を纏うがために

「変身」

同時に右側に装填したパワードビルダーバックルのレバーを一気に開くとロボットアームがハルトの体を纏う黒いアンダースーツに重なるように装甲を装着する

『WOULD YOU LIKE A CUSTOM SELECTION』

その姿はヘラジカのような角を持つ頭部に、さながら建機のような黄色の装甲を帯びた鎧となる

己が願いの探索者

仮面ライダーシーカー

「悪いなセイバー、勝つのは俺だ」

そのまま飛び降り着地したシーカーは手近なノイズを殴り飛ばすと炭素に還すとモードレッドはシーカーに気づく

「お！それが仮面ライダーか以外とカッコ良いじゃねえか」

「そうだろ？」

喋りながらも的確な一撃でノイズを狩る姿は最早戦いが日常と化している者にしか出来ない動きのモードレッドに流石と思いつながら持ち前のパワーでノイズを蹴散らしていたが

「見てくれだけは立派だな」

あの兜の下の表情はわざと煽っていると分かりきっているのだが

「挑発なら乗ってやるよセイバー、そこで見てな」

このバックルとの付き合いの長さから来る戦い方を見せてやる

「おう」

モードレッド が下がったのを確認すると左側にあるコンテナバックルから青いギガントハンマーバックルをビルダーバックルの拡張部分 ギガントアセンブルに装填しレバー パワードヘビローターを閉じると変身の要領で再度開く

『GIGANT HAMMER』

電子音と共に体に装備されたコンテナから現れたのは紺碧の巨大なハンマー、それはパワードビルダーバックルにのみ許される拡張武装 ギガントウエポン

一部他のバックルにも専用装備がついているのだがギガントウエポンにはバックルに準えた専用能力がある

「そーりやつさ!!」

ハンマーを力任せに振り下ろすと地面が隆起し巨大な鉄柱が生えたとノイズを串刺しにした衝撃で吹き飛ばされたノイズはハンマーのついでにブースターで加速された一撃で鮮やかに吹き飛ばす

「オラァー!」

これぞ仮面ライダーシーカーの能力：正確に言えばビルダーバックルの力

それは ギガントウエポンによる建築能力

ギガントコンテナバックルに格納されてる武器には壁、柱、階段 e t c … を作る機能がある、組み合わせで家を作れたりもする住み心地は悪いが野宿よりかはマシであると答えておく

「もういつちよー！」

今度は赤い剣型バツクルを装填して起動する

『GIGANT SWORD』

ハンマーが消えるとコンテナから現れ右手に収まるは巨大な大剣 ギガントソード

明らかに片手で振り回す事の出来ない大きさの武器であるが

「つしやあー！」

左手で放り投げると同時に胸部にマウントされたサブアームが起動、ギガントソードをキヤツチするなりサブアームが回転を始めるギガントソードがサブアームに渡された力に従い回転を始め、巨大なプロペラのように近づくノイズを炭素の山に返すと両手で持ち直して近くの巨大ノイズを一刀両断、肩に担ぐと同時にノイズは建材に作り替えられると

ザン！と赤い雷がノイズを切り裂いたのであった

「あ！ズルっ！」

「マスターに言われたくねえよ！何だよその武器！」

「いやいや奥の手で派手なビーム撃つ奴に言われても……な！」

『GIGANT BLASTER』

今度は大型の銃 ギガントブラスターを召喚し逃げている人を守る為に壁を作り出し進行を阻むが市民から

「あ、アンタ！あの壁じゃダメだ!!ノイズは通り抜け 「問題ねえ」 へ？」

ノイズは通り抜けようとするが壁に触れた瞬間に炭素に変える、いやあギガントウエ
ポンは便利だねえ……これだ！

「アレは使わないで済みそうだな」

「アレって何だよ」

「それはお楽しみ……さて」

シーカーはスパイダーフォンに目線を下すがミッションはまだ終わっていないと判断するとギガントブラスターを肩に担ぐと一息吸い相棒に作戦を伝える

「逃げ遅れた人を1箇所集めるぞ」

「どうする気だよ?」

「俺に考えがある」

それはある意味シーカーにしか出来ない戦法だ今回のような殲滅、護衛、大型ボスレ

イド、市街地戦のように地形を生かす戦いにおいてシーカーは自分の力で地形を変えて戦える、弱点とすれば狭い空間では使える建築能力に制限があると言う点くらいだろうか、後はギガントウエポンの取り回しの悪さくらいだな

「…つとー！」

視界に入ったノイズにギガントブラスターを発砲、その先にいたノイズは炭素となると弾丸が壁へと変わり逃げ遅れた人を守ったのだがノイズは生き残った人を襲い掛かるが壁を突破出来ない、ならば

「バリケード…いや簡易的な砦を作って籠城させるか」

建築能力で砦を作ればある程度の時間が稼げるミッションが終わるまで拠点に人を集めれば良いが…

「そうなると人手が足りねえ…」

このプランの関係上、建築にかかりきりだからモードレッドだけの行動となり助けられる人に縛りが出来てしまうと考えていたら

『SECRET MISSION CLEAR』

「え？」

スパイダーフォンに視線を向けるとそこには

SECRET MISSION CLEAR

逃げ遅れた人を一定数助ける事

表記されると足元に新しい箱が出てきたのだ

「っ！」

開けてみると中身はモードレッドを呼び出した金色の札が一枚入っていた

「頼む！俺は手を伸ばさないと後悔したくないんだ！頼む誰か力を貸してくれ!!」

そこにあるのは偽りのない助けたいという思いやりの気持ちで誰かを呼び出す為に地面に叩きつけようとしたが、もし冗談で麻婆豆腐が出てきたらゲームスにご馳走してやろうと思った

「良いだろう、その願い聞き届けた」

『エクспロージョン…ナウ』

起こるのは大爆破と一緒に吹き飛ぶノイズ達…それはもう様式美と言わんばかりに鮮やかさであるが

「っ誰だ！」

警戒心全開にギガントブラスターを向ける先にいたのは指輪をつけた黄金の魔法使いであつた

「私はソーサラー…希望の魔法使いだ」

「え…まさかの仮面ライダーか…：はは…マジモンのヒーローじゃねえか…今出てくるとかかつこよ過ぎだろ」

「ああ…君の作戦は理解した私も人助けに手を貸そう」

「助太刀は感謝するけど…：んな事言ってる場合じゃねえか…セイバー!」

「あ!?!わーったよ巻き込まないでやる…けどなオレのマスターに手エ出すなら容赦はしねえ」

「勿論だよ、私の説明は後で構わないからね」

『デュープ…ナウ』

魔法を使い自分を増やしたソーサラーは各々が持ちうる魔法でノイズに攻撃や防御、逃げ遅れた人を安全圏まで転移させた先には

「……………つしゃあ完成!!」

シーカーが建築した簡易的な砦があったのだ

「ソーサラー!ここに全員飛ばせ!」

「言われずとも!」

『テレポート…ナウ』

「つしゃあ化け物ども…コレでもくらえ!!」

『G I G A N T S T R I K E!』

ソーサラーがレポートさせると砦の中から安堵の声が聞こえたのを確認すると、シーカーはギガントブラスターを無差別に乱射しノイズ達を射抜き倒すと

第一ピリオド クリアと出た

「つー事は第二、第三もあんのかよ」

露骨に不満が出たが、取り敢えず

「ソーサラー、さっきは助かったよアンタが居なかったら危なかった」

協力者に感謝するしかない

「いや私もだ君の建築能力が無ければ、多くの人を守れなかったからね」

しかし礼儀正しいなあ…何処かの運営助っ人のカボチャ頭は見習うべきだろう、あとエンタメ極振りしてくるゲームマス補佐も

「んで色々聞きたいんだけど…」

「っ！マスター!!」

「ちっ…私の正体はまた今度見せるとしよう」

『テレポート…ナウ』

「あ！逃げた！」

「んな事言ってる場合か来るぞ!!」

一安心だと思っただが全員慌てて体を飛び下がると同時に降り注いだのは剣と矢の雨、それに驚いたソーサラーは転移した追撃の攻撃が来たのでギガントブラスターで壁を作り防御したのだが

「おいおい……何だこりゃ」

「新手か！」

モードレッドの視線を向けた先には青髪と銀髪の女性が刀と銃を向けていた

「貴様等は何者だ！」

「おいおい名前を聞くな自分から名乗れって教わらなかったか？」

モードレッドが剣を肩に担ぎながら尋ねシーカーはギガントブラスターを構えていると相手も武器を構えたのを見て

「マスター武器を下ろせ、でないと話せないだろうが」

「……………ん」

モードレッドに諭されたのは予想外だと思いギガントブラスターを下す

「何だよ、そんな顔して…まあ仮面で見えねえけど」

「いや真っ先に突貫しそうな奴から大人しくしろと言われて驚いてる」

「オレの事どう思ってたよ、マスター」

「相棒」

実際、リアルでもゲームでもお世話になったし…だからシナリオの関係で敵対した時は心が痛かったよ後、静謐ちゃんを手にかけてトリスタンは絶許である

「お、おう」

「んで俺達をどうする気だよ」

「あ、ああ…出来れば同行して貰いたい何故ノイズを倒せるのか…何故…聖遺物であるクラレントを持っているのかなどな」

「……………」

これは不味い：以前運営に言われた禁則事項に定着してる

曰く 現地世界人に身バレNG、バレたら退場（死）と

脅しか本当か知らないし確認する度胸がないし召喚したモードレッドはその辺の事情も把握してもらっているのと同じように兜の下で冷や汗をかいている

「話す理由がない、この力はノイズとやらを倒せてクラレントは俺の騎士が持っている剣だ、それ以上でも以下でもない」

「その説明では困るな私達としても英国伝来の宝剣が何故その者が持っているのか把握せねばならないからな」

「関係ねえだろ、コレは父上が留守の時に宝物庫から失敬したんだよ」

「いや間違つてねえけど今そのセリフは誤解を招くつて」

「成る程、つまり盗人という訳かならばそのクラレントは返して貰おう！」

本物の円卓の騎士とは知らないので仕方ないと思うがその辺の話題はモードレッドにとつて地雷でしかない

「おい…誰が盗人だ？ざけんな…じゃあアレか…お前はオレのマスターを盗人のカシラ呼ばわりするつもりかあ!!」

激昂しながら赤雷を推進力にし突貫しようとするモードレッドを見てシーカーは慌てる

「セイバー!!」

「っ！マスターけどな!!」

その声に放たれようとした狂犬を制して一安心する一方

「止せ、俺の騎士なら力を振るうに相応しい戦場がある……それに……戦場に遅参するよ
うな恥知らずが守るべきものを守れなかった腹いせに俺達に当たるのは筋違いだろう
に」

やれやれと被りを振ると

「それは断じて違う!!」

「こつちを盗人と断定した手前、その意見が通ると本気で思っているのか?」

意趣返しと言わんばかりに言うともモードレッドに念話でハツタリを言うから逃げる
準備をしろと言うと頷く

「それにお前達の態度次第であの砦を瞬時に消して、またノイズに襲わせても構わない
のだが?」

「!!」

「まあ俺としてそこまでしたくないが……俺達にこれ以上何かするなら」

とわざとらしくギガントブラスターを砦に向けようとしたら

「させつかよー！」

槍を持った子が突貫してくるがシーカーは迷わずに目の前に向かってギガントブラスターを発砲し壁を作り攻撃を邪魔すると同時に壁につけてた窓が開くと同時にエネルギー弾を発射して吹き飛ばす

「奏ー！」

「んじやな」

シーカーがそう言うのとモードレッドが隣に立つと同時にギガントブラスターで転移門を作り移動した

――

そして転移した後、鎧を脱いだモードレッドは不機嫌なまま近くの物に当たるのを見たハルトは顔を顰めている片付けたのにとボヤク

「何だよアイツ等、人を盗人呼びしやがって！」

「辞めなよモードレッド」

「つせえ！こっちの事もロクにシラねえ奴等に色々言わればなしで良くヘラヘラしてられるな!!」

「そんな事より早く休みな、まだミッションは続くみたいだからさ」

「はっ？」

「結構長丁場みたいだよ…面倒くさいなあ…：…ん？…：…げえ！」

スパイダーフォンを投げ渡してミッションの経過が途中と知るなりハルトは少し不満な顔をしたが首を振ると扉に手をかけた

「悪い少し出る、留守は任せた」

「どこ行くんだよ」

「何処でも良いだろう？危なくなったら令呪使うし変身するし…まあ強いて言うならから俺のファンに…かな？」

「は？」

「つー訳で行ってきまーす」

「あ、おい待てよ!!」

慌てたモードレッドはドアを開けた先には誰もいなかった

—————

ここではない時空間

豪華な椅子と机で優雅に紅茶を飲んでいた男がいた着ているスーツは一点物、付けてる装飾品も贅沢の極みとも言えるものばかりである

「急にお呼びたてして申し訳ありませんね」

「別に…」

ハルトはそんなの興味ないと言わなければかりに紅茶を一息に飲み干し、コップをソーサーに戻す

「いえ、先日の円環の理を救った話…いやあ感動しましたよ…貴方にも熱い一面がある

と知り興奮が止まらなかつたです!!」

お茶菓子を食べながら話す男はまるで芸能人の以外な一面を見たと言わんばかりに興奮しているが

「そうかい、楽しんでくれたならそりゃ良かった…んで要件は？俺のサポーター（支援者）さん」

ハルトは頬杖つきながら吐き出すように尋ねる

男はサポーター、ハルトの支援者で行く世界で内緒のミッションと報酬としてアイテムの提供をしてくれる存在だ…実際にブーストバックルやビルダーバックルは目の前の男からの贈り物…何故そう支援するのかと聞いたが目的は娯楽の為と単純である

『君風に言うなら推しのvtuberにスパチャするようなものだよ…そこにあるのは純粹な愛さ！』

初対面の時にそう言う、このサポーターに納得半分、恐怖半分の感情を抱いたのは内緒だ

まあこうして接してみると紳士的なので安心するが

「しかし…まさかソーサラーがねえ…」

「知り合い？」

「いや一方的に知ってるだけだよ、それと一つ付け加えると、あのソーサラーの正体は君の知ってる大臣ではないよ」

「そっかい…まあそうだったら嫌だけどな」

と被りを振るがハルトは真面目な顔で

「アレはプレイヤーか？」

「いいや、アレは異世界からの迷い人（エトランゼ）：簡単に言えば君と違う原理で旅してるものだよ」

「運営の対応は？」

「深刻な運営の妨害を確認すれば排除に動く予定ってさ：まあ程の良い様子見だね」

「悠長だな、この間の『ワルブルギスの夜』事件を経験しての対応じゃねえよ」

聞けば平行世界にまで及ぶ大事件だったらしいじゃないか：具体的に言うとかバイカイザーが起こした 並行世界同士の衝突くらいやばかったらしい、流石にあの時は運営はなりふり構わずに色々と手を尽くしてくれた

『並行世界なら、お前も通りすがりの仮面ライダーって訳か：ま、ヒョッコだがな』

『お前もダチだ、何があつたら呼んでくれよ！』

いや本当にな…だが

『君も変身したんだな、師匠として嬉しいよ』

憧れの人に弟子入りした世界線の俺許すまじ

「そう言わないでくれ、実はゲームマスターが臨時で君の助っ人を手配しているらしいよ」

「ん？」

「誰が助っ人かはお楽しみにね、時期にソーサラー探索ミッションが出されるから頑張ってる」

「マジかよ…なあアイツは俺を知ってるような感じだったな」

「偶然じゃないかい？あつても平行同位体の君だ」

「そだな俺は何を期待してんだろ…あ、悪いそろそろウチの騎士が腹空かせるタイミングなんだな」

そう呟いたハルトは部屋を出るとサポーターはニコニコした顔で後ろを見る

「聞いてましたか？」

「バッチリとな」

視線を向けずに話しかけると現れたお菓子を頬張っている赤い髪の女の子だった

「どうします？ 助っ人枠はパンクジャックですがサポーター特権で追加します？」

「決まってるだろ、やってやる」

「言うと思いましたがよ…では此方を」

サポーターが渡したのはデザイアドライバーと楽器の形をした大型バツクルであった

「へえ……ありがたく貰うよ」

ドライバートバツクルを受け取った女の子は不適に笑うと手に持ったお菓子をサポーターに差し出す

「これはお礼だ、食うかい？」

「ありがたく、宜しいですよねゲームマスター？」

「仕方ありませんね……しかし貴方はプレイヤーに肩入れしすぎですよザケリ」

仮面をつけたゲームマスターがサポーター、ザケリの意見を受諾しスパイダーフォンを渡したのであった

「へえ……んじやあな」

『ENTRY』

彼女がデザインアドライバーに猫のコアIDをつけると目的地に転移したのを確認したゲームマスターも同じように指示を出す

「頼んだぞパンクジャック、シーカーを助けるワルプルギスの二の舞は回避しろ」

「OK!!任せてくれえええええ!」

パンクジャックと呼ばれた黒コートを着た男は陽気に答えデザインアドライバーにコアIDを装填したのであった

『ENTRY』

この世界で起こる物語は探索者が仲間と一緒に自分の夢を探す物語

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
:

カウントダウン短編 1位 奏者と仲良し√!?

「どうもウオズです、この話は我が魔王が体験する事がなかったアナザーワールドの1つもしこの世界の我が魔王を見たら…きつと我が魔王が発狂しかねないので内密に「ウオズく頼みたい事が」っ!」

「あれ?つかしいなあ…ここにいますかと思っただけど…これって逢魔降臨歴!?!さてはウオズの奴落としたな…丁度良いや俺の未来が乗ってるなら少しだけ見てもバチは当たらんだろう」

そんな好奇心の元で動いたハルトは覗いて後悔する事となる

—————

時間軸はシンフォギア一期前の初対面時まで遡る

第二話 start my engine より分岐

「何故ノイズを倒せるか知りませんが貴方には我々について来てもらいます」

「やなこった、此処で脅しに屈したとか格好悪いからな！」

翼の脅しにアナザードライブは重加速を使い動きを止めようとするが

「何してんだよ翼」

奏が槍の峰で翼の頭を軽く叩く

「…けど奏！あの面妖な奴を「怪しいからって力で押さえつけたら話すことも話せない
だろ？」ん…わかった」

翼は影縫いを解除すると

「付き合いきれるかよ……」「ちよつと待った！」あ？」

アナザートライドロンに攻撃命令を出そうとした矢先 奏に止められた

「うちのが悪かったよ、いきなり攻撃して……その何だ……ウチらは……あーと……国のエージェント？ みたいなもんで言い方は悪いがノイズを倒せる得体の知れない奴を放置する事が出来ないんだよ、だからさ簡単にでも良いから話してくれないか？ お前が何者で何が目的か」

「……………」

アナザードライブは未だに猜疑心を抱いていたが

『ハルト、話すだけならタダだぞ』

ーけどよお、万一戸籍調べて捏造ってバレたらヤバいだろ嘘か本当か知らないけど公的機関の奴だせ?この場は逃げるが吉だー

『あのな俺達がそんな半端な偽造をしようのか!』

『寧ろ書面やデータも完璧に仕上げてるぜ!』

ー悪いことを胸張って言うんじゃねえ!ー

『その恩恵に助けられてるヨナ?』

『それにお前さん、未来でもっと悪いことする予感がするが?』

ー今はしてないからセーフ!ー

『未来でするならアウトだ馬鹿者!』

『それに公的機関なら転移に転用可能なエネルギーをしってるかもしれねえぜ?』

『なあ…』

ー…………わーっつたよー

「目的か…俺の生活圏内にアレがいたから払ったに過ぎない、家にGが出たから潰すのと大差ない」

「……………本当にそれだけか？」

「拍子抜けか？だが事実だよ」

「お前は何者なのだ！その力は一体」

「言っただろ通りすがったアナザーライダーだと…この世界には存在しない世界を救ってきた偉大な戦士達の影法師よ」

「存在しない？」

「簡単に言えば異世界だな…恐らく俺はこの世界にいない人間故にこの世界の法則が適

用されんからあのノイズ?とやらも倒せたのだろうさ」

「異世界つてマジかよ…なら何でこの世界に?」

「たまたまだ」

「は?」

「元の世界に帰る途中でトラブルに巻き込まれた故に一時滞在している、別に世界征服だの何だの考えちゃいない帰還のエネルギーが溜まれば直ぐに帰る」

「……………」

「これで満足か?俺が何者で目的も分かったんだ、これから余計に絡むな面倒臭い」
アナザートライドロンに乗ろうとした時、奏はふと思った事を聞いてみる

これがある意味で最大の分岐とも知らずに

「なあ、お前生活費どうしてんだ？」

「っ!!!」

そこでアナザードライブは肩を強く震わせた気づいてはいけない所に触れてしまった

『あ』『やべ』

「……………自給自足？」

「やっぱりか…ならよバイトしないか？」

「バイト？」

「ああアタシらと一緒に戦ってくれよ、倒した敵の数に応じて報酬を払うつてのは？」

「奏！私達は国を守る為にいるんだ、あんな得体の知らない奴に…しかもお金目当てなんて…」

「あのなあアタシらだけじゃ手の回らない場所もあるの知ってるだろ？」

「……………」

「考えてみるよ敵よりも味方の方が良いだろう?それにギブアンドテイクなら向こうも悪い気はしないだろうさ」

「まあ奏がそう言うなら…けど」

「任せときなっておやつさんはアタシが説得するからよ」

「なら良い」

「おーい、そつちはどうだ?」

「……………」

「だいぶ悩んでるな」

そして結論が出たので話す

「顔出しはしない、その場で現金をその場で支給、あくまで俺達は独自勢力でお前らの傘下に入る訳ではない、約定を違えたらそれまで…それで良いなら」

「まあその辺は妥当だな」

「それと帰るのを邪魔するならば敵だ、引き留めるなど考えるなよ」

「分かってって」

「……変な奴」

『向こうもお前には言われたくないだろうな』

「黙れ、ウオツチを叩き割るぞ」

それから暫くしてウオズやジョウゲン、カゲンと合流しアナザーオーマジオウになる
運命を知るなど色々あったがウオズ達も一応の共闘関係に納得していた

あのライブの日も鎧の強奪などではなく純粹に護衛として仕事を完遂したのであつ
た

—————

「何じゃこりゃー!」

あまりの別人かつ善人ぶりに思わず逢魔降臨歴を地面に叩きつけてしまう

「何で奏者連中と共闘してんだ!？」

あまりの乖離ぶりに発狂だよ!と頭を抱えていると

『ギャハハハハハハ!傑作だな!』

「うるせえよ!」

『おい続きを読め、気になってきた』

「はあ…わーったよ、つかこの後って…」

この後は魔女狩りがあった…俺がこの世界の人間を手につけ、かつ愛想が尽きたキツカケでもある

「こ、この時間軸の俺でもきつと愛想尽きるよ」

世界なんてそんなものだろう、理不尽で曇るとハルトは再度逢魔降臨歴を開いたのであった

—————

ライブの後に起こった魔女狩りについては驚く程アツサリ収束した、その方法？簡単だったよ政府の対応が紳士的だったのもあるし

そんな現場見ようものならアナザーライダーが加害者をノイズの群れに放り投げて見殺しにしたり鏡から現れた化け物に襲われたり、クラックが開いて森に人が攫われ、更に特定の法則で加害者が死んでいく事件が発生したとのことだ

—————

「これ完全に俺やっちゃってるな…政府が黙秘してる分、こっちより悪質な気もするが…つか紳士的対応出来るなら俺の世界でもやれや日本政府！……あとさ」

『ああグロンギ呼んで、ゲゲルをしてるな』

「ま、まあ良いんじゃないかねえの？死んで当然の悪い奴ならさゲゲルしても構わねえよ」

『…ミラーワールドの件は？』

「いいんじゃないね？食糧問題が解決してさ」

『ヘルヘイム誘拐は？』

「師匠の世界の国民が増えるだろ？」

『罪悪感は？』

「感じてねえ、今更あの世界の連中死のうがどうでも良いしな」

『多分、その辺なんだろうなあ違いが』

—————

そして数年後 立花響がシンフォギア奏者として目覚める事になる

「紹介するぜ響、こいつが都市伝説で有名なアナザーライダーだ」

「街の怪異みたいに呼ぶな天羽奏、まあそんなナリなのは否定せんがな」

「悪いって…あれ？ウオズ達は？」

「いつもの如く別の場所で仕事中だ…それよりも風鳴翼の奴を何とかしてくれ俺の仲間と事前通知した奴等を見た目で襲うとな」

「あく…ごめんなアナザージオウ……ん？お前は…」

「は、初めまして！立花響です！好きなものはご飯&ご飯!!」

「何か凄い元気な子だな…ん？お前はあの時の子か」

「へ？」

「ま、顔は覚えとくがお前は見た目で判断して襲い掛かるなよ」

「え！しませんよそんな事！」

「お前の先輩は初対面の俺に刀で襲い掛かってきたからな…んじゃあな」

そう言うとアナザージオウはエビルダイバーの背に乗り帰宅するのであった

そして翼と戦い、落ち込む響に顔を隠したハルトが隣に座り話しかける

「よお、何か悩んでるな新人」

「あ、アナザライダーさん…仕事以外で会うのはNGじゃ…」

「顔とか含めて身バレしなきゃ、セーフなんだよ…んで何か悩みがあるみたいだな、ほれ人生の先輩に話してみな」

「あ、はい…私このままで良いのかなって…遊びじゃなくて本気で助けたいだけなんです…が翼さんが…」

聞くだけ聞いて一言

「いいんじゃないの？別に好きにすれば、あの防人の話なんか無視すれば良いさ…俺なんて天羽奏が止めなければ多分だけど敵対してるだろうしな」

いや絶対してたなと自嘲する

「へ？けど…」

「何か出来る力があるのにしないと一生後悔するよ、『手を伸ばせるのに伸ばさないと死ぬ程後悔する…それが嫌だから手を伸ばすんだ』って俺の憧れの受け売りだけだな」

「後悔…」

「君はその憧れの人に近い人間だよ助ける事に迷いが無い分、心配で危なかつしいんだ…しかもこの間まで一般人だったんだから尚更ね翼の奴もその辺気にしてんだろうな、日常に帰って欲しいならそう言えや」

暫く戦って見て分かったが、この子のそれは憧れの人（映司）に似ている、ようは自分の命を顧みてなさすぎる、まるで自罰的に生きてる事が消えない罪と言わんばかりに

『前向きな自殺衝動、願望だな』

『しかも本人が自覚してない分、タチが悪い』

「あの…アナザーライダーさんはどうだったんですか？」

「俺か？俺は死ぬほど体を鍛えて戦えるようになった鍛えれば大体の事は何とかなるし…あとは…傍観者でいる事に疲れたんで自分から首突っ込んでるだけ」

「……私は」

「悩めば良いよ正解なんて無いんだから自分の後悔がない方を選びな、戦姫として戦うのか全部忘れて日常に戻るのかさ、ま、頑張れよ新人ちゃん」

ハルトは缶コーヒートを響に隣に置くと立ち上がり人混みに消えた

『で？お前は選んだのか？』

「知ってんだろ？あのオーマジオウに喧嘩売った時からお前達と心中する覚悟だよ後悔なんざ欠片もねえ」

『……そうか』

—————

「何だこの頼れる先輩キャラ!？」

『そ、それにデレるのが早くないか!？』

「え?この頃は俺既にお前達を信頼してたようなあ…」

『ギャハハハハハ!いやあ世界線が違くと前作主人公みたいな感じだなお前!』

「つせえ!今でもカツコ良い主人公だろうが!」

『『『『え?カツコ良いか?』』』』』

「カツコ良いだろ!…え?カツコ良いよね!？」

—————

そして暫く経ち 雪音クリスとの初めてのエンカウント

「は!ターゲットが2人来たか!」

「え?まさかアナザーライダーさんも!」

「そう言うこつた!」

と鞭を伸ばす攻撃にアナザージオウは迷わず掴み取った

「ははは…力比べなら負けねえよ!そらっ!」

アナザー響鬼は簡単に鞭を利用して樹木に叩きつけた

「があっ!」

「はい捕縛つと…さて情報を吐かせて…あ、定時だ、んじや後の対応よろしく!」

「え…ええ…」

そしてルナアタック事件

「そんな…了さんが」

「どうでも良いや、取り敢えず倒せば良いんでしょ?」

「そんな!話し合えば「分かり合えないよ覚悟決めてるなら特にな」…」

「だから徹底的に邪魔する事にしてやる行くぞお前達!」

「「はっ！（おう）！」」

そして事件解決後、ハルトはIS世界に向かい一時的に離れることとなる

「ふーん……この世界の俺でもIS世界に行つて師匠や束達に会うのは決まつてるのか」

『ま、その辺は運命つて奴なんだろうな』

「そつか……この時間軸でもアナザータイムマジーンはフィーネのダメージで動けないのか」

『ま、まあ全部フィーネが悪い』

「そうしておくか……つかキャラルやナツキは？」

「何読んでんのハルト？」

「お、ナツキ丁度良い、これ読んでみるよ」

「ん？何だこれ？」

—————

「この時間軸のキャラル達はと言うと

「やつほ遊びに来たよキャロル」

「ハルトか…例のものはあるんだろうな」

「勿論シンフォギア奏者の情報と日本政府が把握してる聖遺物のデータね」

「助かるが…それよりも」

「分かってる…見ろ！オーズ小説版だあ！」

「それを待っていたぞ！その本をな！」

特に今と変わっていない…いやノリノリで二課の情報を流しているあたり本編ハルトよりもタチが悪かった

—————

「うおおおい！がつつり内通してるじゃねえかフィーネの事に文句言えねえぞ！」

「何言つてんだこれはキャロルへの愛故にだ！つまりセーフ!!」

「余裕でアウトだ馬鹿野郎！…あ、此処は俺との会う所だな…確かあの時、未来人wつてハルトに笑われたんだよな」

「今も時折そう思ってる」

「嘘だろ!?!」

—————

ナツキとの出会いはと言うと

「ここで戦うと小日向未来が余波に巻き込まれて死ぬ！そうなるのとんでもない未来になるんだ！」

「そっ……んじや辞めようか」

懸命な説得にあっけらかんと答える

「「……へ？」」

ナツキもそうだがウオズ達もあり得ないものを見るような目をしていた

「彼女の知り合いが巻き込まれるのは気が引けるし止めたのにも理由があるんだろう」

「……っ！何を言ってるんだ日和ったのか魔王!？」

「お、落ち着きなさいスズネ！魔王の言う通りです此処で争うと何かがあるのでしよう……魔王との決着は別の機会に作りますから！」

「ちっ！覚えてろ！」

『テレポート……ナウ』

転移した後は本編通りナツキを連行し情報を知ると

「成る程……小日向が死ぬと響がおかしくなり今後の脅威と戦えないのか……しかも原因

がアナザーオーマジオウ化した俺か：それなら他人事でもないなウオズ、確かキャロルが開発してたバーストライバー：その装着者候補にコイツを入れておいてくれ」

「はっ！」

「え？」

「未来は変えられると、お前が証明した、これは魔王に恐れず嘆願した度胸に敬意を示す、その褒美だと思え：まあ結果として装着者を選ぶのはキャロルだけだな」

と笑うのであった

—————

「いや本当に誰だこのハルト！全くの別人じゃねえか！俺の世界のと交換してくれ！」

「相棒、アナザーワールド用のオーロラカーテン用意して」

『いいだろう、どの世界にする？』

「ナツキが全てを救えなくて絶望した瞬間を永遠に味わう世界でお願い」

『何て残虐なレクイエムだ！ボスの奴も真っ青だぜ！』

『意図も容易く行われるえげつない行為だな』

「この世界のハルトも素晴らしい魔王様です！」

「うんうん、それで良いんだよこの愚か者が」

『『言論統制だ…』』

「てかこの場合だと逢魔建国ってどうなるんだ？」

「確かに二課に俺達がいるんじや、フロンティア事変ってどうなるんだろ？」

「つか共闘態勢出来てるから…俺達と結社が同盟組んでないときた」

「そもそもキャロルや結社と手を組んだのって」

「……資金面」

「だよな」

「だからどうしたんだろ？」

とハルトは目線を戻すのであった

t o b e c o n t i n u e ?

悪党とそして伝えたい思い

26話

前回のあらすじ

イチャイチャを目撃され赤面した2人であった

「済まなかったな余りに遅かったので自分達の時間を優先していたよ」

普段通りの尊大かつ傲慢な態度と口調で話すがいまいち閉まらない

「い、いやその…此方も悪かった…」

き、気まずいと互いに思ったが

「それで俺を呼んでの話し合いとは何だ？」

「あ、ああ…まずは事件解決の協力に感謝をと思つてな、ありがとう助かつた」

「それはナツキ經由で話したが、今回の件はそもそも俺の責任だから別に…寧ろ謝罪や礼するのは此方の方だ協力には感謝するよ」

肩をすくめながら答えると

「エルフナイン君とナツキ君の件は承知した此方で面倒を見る事を約束しよう戦力としても期待しているがな」

「当然だ、オレの助手とモルモットだぞ役に立つに決まってる」

「ナツキは最高のモルモットだあ！つて奴？」

『それは私のセリフだぞハルトオオオオ！』

『黙れアナザーオーズ』

キャロルがそう言うのと緒川は

「しかし……あのライダーシステムの提供元も貴方達だったんですね」

マツハヤヘルブロス達の事だろうか

「ああ丁度良くロールアウトしたんだけど適任がいなくてな……俺は諸事情で使えないから困ってたら丁度使えそうなのがいいたので渡しただけだ別に良いだろう？ そっちは損してねえんだからさ」

使えるなら使つてると言外に言うが

「……………何が目的だったんですか？」

「シンプルにデータ取りかなあ……ま、想定内のデータしか取れなかったからちよつと残念、折角デットヒートやヘルブロスまで教えたのにさく期待はずれも良い所だね、たかが屑ヤミーの群れ如き追い払うので手一杯とか本来ならオートスコアラーや上位のヤミーだつて余裕で倒せるポテンシャルがあるのにさく」

「っ！貴方達の所為でどれだけの人が苦しんだのか…被害者遺族の気持ちを考えた事はないのですか!!」

「ねえな」

と断言した

「んじや聞き返すけど、あのライブの悲劇を起こしておいて被害者の魔女狩りにあつた人の気持ちを考えた事ある？」

その言葉に2人は押し黙るしかなかった、響は親と歩み寄れたが、それ以外の被害者は真実を知ればどうなるか何て考えなくてもわかる

それに自分が守るべきもの以外の存在なんて知ったことでは無いとヘラヘラ笑いながら小馬鹿にするように見下すハルトを見て緒川がキレた！

「っ！貴方って人は…っ！」

「何、俺とやる気？…まあ立つ鳥跡を濁さずって言うし遊んで上げても良いよ」

そう言うハルトの両目が赤く光り始めると顔にステンドグラスのような模様が浮かび上がった

実はハルト、魔王化に伴い怪人化の能力を獲得している…言うならばイマジンやファンガイアとしての姿も獲得しているのあ、その姿は…まあ今後出てくるかも知れないので黙っておこう

「そう言えばお前、愚妹事件の時に千冬達に手を出そうとしてたんだっけ？…遊ぶじゃダメか…殺す」

そう言い取り出したのは赤いバットバイラルコアであった

『お前の情緒不安定過ぎだろ！落ち着け！』

『良いわハルト！そのまま融合進化態になりなさい！』

『アナザードライブ煽るな！』

「おい話し合いなのにキレる奴があるか！バカハルト！」

「つ……わかったキャラルが言うなら辞める」

そう言い懐にしまい怪人になるのも辞める残念、折角 常葉ハルト・怪人態の初お披露目と思つたのにさ

「緒川も落ち着け！……それで君達はこれからどうするのだ？」

「あ？この世界からは手をひく、奏者連中には話したが、これ以上いてもお互いに問題を

呼び込むだけだし」

『いやお前が問題呼び込んでるような…』

ーん？ー

『何でもないともしさ!!』

「それと俺がこの世界に残してた心残りが一緒についてきてくれるらしいからな…ま、言い方はアレだか俺的には首を突っ込む理由がなくなった、まあそっちが仕掛けてくるなら相手するのはやぶさかではないけど？」

そう言うと膝上の彼女の頬は紅潮していく

「……………」
／／

「君と彼女は本当に相思相愛なのだな」

「ああ……何せ俺の特別だからな、だから」

そう答えるとぬいぐるみを抱きしめるように優しく、しかし強く力を込めるとそれはもう面白いくらいにキャロルは赤面した

「……………っ！」／／／／

「全力で動いたんだよ無くしたくないからな」

顔を赤くしたキャロルを見て癒されていると

「何でその思いやりを何で他の人に分けてあげないんですか？」

は？いやいやと被りを振り

「俺が分けられる愛の向け先と量は決まってる、それは俺の大事な仲間達と俺みたいなのを王と慕ってきてくれる国の皆だ」

頭に思い起こすのは仲間達と逢魔の民達

それは俺が背負い守ると決めたもの、だから

「何でそれ以外の奴に分けてやらないとならないんだよ……もし彼奴等と俺を引き裂こうとか奪おうって考えてるってんなら……滅ぼすぞこんな世界」

と魔王覇気を出しながら威圧すると2人は身構えるがキャロルは今にも顔から火が出るくらい真っ赤になっている

『おい、この天然を何とかしろ』

『あ、問題ねえダロ……どーせ今言った事を思い出して……』

「……………ん？……………っ！」

『自爆するから』

今度はハルトの顔が赤くなったのを見てアナザーWは冷静に見ていた

『成る程』

アナザーデイケイドが納得したのは一重に長い付き合いからだろう

「ま、まあ俺としては仕掛けなければ何もしねえよ…それは今までの事で理解してくれてると思いたいね」

唯一自分から仕掛けたのはフロンティア強奪位である、それ以外は基本過剰だが正当防衛が成立しているしキャロルの件だって共闘の体は成っていたので問題はない

「うむ……それはそうだが」

「それにキャロルとの司法取引で技術やら色々取ったんだろ？なら良いじゃねえか得したろ？…はい話終わり解散！帰ろ帰ろ」

と強引に会話を打ち切り帰り支度を始めるハルトはキャロルを膝から下ろして立ち上がるのを見ると慌てた弦十郎は静止する

「待ってくれ、まだ話は！」

「え？一応会談の体は成したしキャロルから頼まれた義理は果たした、それより早く帰って大宴会を開く予定なんだ俺の恩人や師匠達も呼ぶ予定なんだよ、その仕込みも考えたら時間なんていくらあっても足りない、それに今は」

折角ならアナザーライダー達を実体化させてあげたいし、それにと呟いたハルトはキャロルをお姫様抱っこすると

「離れた時間分…一緒にいたいな…」

「!!!!」

『おい誰か、この馬鹿王を何とかしろ！キャロルがおかしくなりそうだ』

『いやもう無理だろ』

「つー訳で帰るぞ相棒」

『おう』

そう呼んでハルトはアナザーディケイドに頼んでオーロラカーテンを開いて貰い帰ろうとしたが、ハルトは見落とした

ハルトが展開したオーロラカーテンに被せる形で別のオーロラカーテンが現れたのを

「!!!」
「!!!」

そのオーロラカーテンから逆流するように現れたのはカマキリヤミーとプテラヤミー、屑ヤミーの大群であった

「はあ!?!何でこいつ等が…」

「つと…どうやらノエルが作ったヤミーの生き残りのようだな何故オーロラカーテンから出てきたかは知らないがな」

ハルトの手から離れたキャロルが冷静に分析した意見の一つに

「……まさか」

思いついたのが先日、俺をデイケイド並みの殺意を向けて対峙した鳴滝の顔であった

「心当たりが?」

「それは後、こいつら片付けるよキャロルは帰「オレもやるぞ」ノエルの件なら無関係ではないからな」…無理するなよ」

「心配し過ぎだ安心しろ、お前の惚れた女は強いと知っているだろう?」

そう言うときャロルはハルトの手から離れオーズドライバーを装着すると

「そりやもう嫌と言う程ね…キャロル、コレを使え！」

キャロルにアंक級のコントロールでコアメダルを投げ渡すとドライバーに入れスキャナーで読み込んだ

「変身！」

『タカ！トラ！バツタ！タ・ト・バ！タ・ト・バ！タ・ト・バ！』

「丁度良い、新しい力を試してみるか」

それに対してハルトは不適に笑いながらウオッチを起動すると足元からひび割れたピーカーが現れ、中から濃い紫色の液体がハルトの体に浸るまで流れると容量に耐えられなかったのかピーカーが一気に砕け散ると

現れたのは新しいアナザーライダー、その頭部と左手にはまるでワニのようでありながら、顔の右半分がコウモリのような戦士出立ちをしているのね強引に溶接したような歪さを感じられる。そして何より体にも影響が出ており体には噴煙を上げる煙突と装甲内部を浸していた液体が溢れ落ちる、まるで戦争で流れる人の血のようだ

野心と大義に身を焦がした戦士

『ローグ』

アナザーローグ 誕生

「祝え！全アナザーライダーの力を持ち、時空を超え過去と未来を統べる野心の王！その名はアナザーローグ！我が魔王が大義を掲げし瞬間である！」

「お！ウオズ!!」

「我が魔王、ご快復お喜び申し上げます」

「おうよ！それより見てくれ新しいアナザーライダーだ！」

自慢するようにアナザーローグの姿でクルクル回る

「ええ久しぶりに祝わせてもらいましたよ…そしてこれは我が魔王への快復祝いです、
行けお前達!!」

『『ジャマト』』

「!!」 「!!」

突如現れた、ジャマトライダーが屑ヤミーに襲いかかったのである

「え？誰!？」

「彼等はジャマトライダー、未来の我が魔王が呼び出した新たな仲間です…後未来の逢
魔王国で人工栽培されています」

「へえ……とんでもねえなあ……ん？ジャマト？それって確かアナザーギーツ達が言つた怪人じゃね？え！未来でアレが人工栽培されてんの！」

『カタナキヤナラナインダ！』

「え？喋つたあ!!」

『ナカマノタメニモ！』

「……ん？」

何栽培許可してんの？と頭を抱えるが今の一言に手を止める

「ええ管理人は楽しそうに育ててました……と言うより我が魔王に直談判してましたよ『育てさせて！』と」

「やっぱあのジジイとは一回本気で殴り合った方が良いのでは？世界の為にも……けど」

『ナカマノタメニモ!』

仲間の為に体を張れる奴に悪い奴はいいな

「雑魚は頼んだジャマトライダー!」

「マカセロ」

「行くぞハルト!」

「おう!」

タトバはドロップキックでカマキリヤミーを蹴り飛ばし、アナザーローグは背中から羽を生やすとプテラヤミー相手に空中戦をしかけるが、そもそもの格の差は出ているのでハルトも少し遊びが入る

「んじゃ試してみるか」

アナザーローグが取り出したのはスマツシユの成分が入っているボトルであり、それを割ると

『デイスチャージボトル！』

警戒したプテラヤミーは冷気の一撃を放つがアナザーローグの目の前に現れた赤い城壁が攻撃を阻むとプテラヤミーは再度飛翔して攻撃を行おうとしたが

『チャージボトル』

その音声と共にアナザーローグの背中に黄色の猛禽類のような翼が生える急加速、急降下でプテラヤミーの背後に立ち地面に落とす

『チャージボトル』

そしてプテラヤミー落下スピードよりも早く着地したアナザーローグの手に青いク

ワガタの顎を横した双剣が握られるとすれ違い様に強烈な一撃を叩き込んだのである
転がるヤミー、そして

『jya jya jya! strike!』

ジャマトライダー達の鳶を伸ばした締め付け攻撃は屑ヤミーを消しとばすと

「これで終わりだ」

『スキヤニングチャージ!』

「大義の為の犠牲となれ!」

2人は高く飛び上がるとオーズはタトバキックをカマキリヤミーにアナザーローグ
は両足でプラヤミーを挟み込むと体を捻りそのまま体勢を崩して地面に叩きつけた
アナザークラックアップファイニッシュを叩き込むと同時に爆散した

「つし決まった」

「ああ」

そしてキャロルは変身解除して子供モードに戻るのが見て

「つし、んじゃ俺も変身解除っつと」

そしてハルトが変身解除をした時、キャロルの目が見開いていた

「は、ハルト……」

「どうしたキャロル？」

「な……なんだその格好は!?!」

「あ?」

俺の格好つていつもの黒尽くめじゃんと思うが？と首を傾げるが

『アハハハハ！』

それと何故か相棒達も爆笑してる…何故？

「……………これを見てもそう言えるか!？」

キヤロルが錬金術で即席の鏡を作ってもらい漸く現状を理解した

「い、これは!!」

全身ピンクの奇抜の…何というか一昔前のアイドルのような格好だ…そしてTシャツには

『し、親しみやすさって……………あははははは！そのカッコでか!!』

そう！あの文字Tシャツ間違いない

「ローグ、これはまさか！」

『そうだ俺に変身すると一時的に服が俺仕様が変わるのだ！』

つまり本編で玄さんが着てた服になると言う事か

「ローグ…グツジョブ！」

『……………は？』『？』

アナザーデイケイドは硬直しキャロルは宇宙猫のように思考が固まっていた

「まさか憧れのヒーローの私服に袖を通せるなんて！」

と目を子供のように輝かせていたのを見て

『そうだった…こいつライダーバカだった…』

『…ここまで来れば病気だろ』

哀れ本来ならば罰ゲームになるだろうそれは、ハルトにとっては大抵のコスプレと変わらないのである

『そ、そうか…因みにこんなのもあるぞ』

照れながらアナザーログが指を鳴らすと、黒いポンチョのような民族衣装に早変わりである

「うおおおおお！スゲェ!!」

「……はっ、ハルト！今すぐ着替えろ！そんなダサイカツコでは閉まらんだろうが！」

「え、キャロルには分からないの!? このセンスの良さが!」

「まだ寝ぼけているのか! …ええい! 脱げ!」

「いやちよつ!」

とキャロルが強引にポンチヨを剥ぎ取ると、そこには

〈二枚目気取りの三枚目〉

と書かれていた文字Tシャツが仕込まれていた

『ブハハハハ! ダメだこの想像の斜め上の破壊力だ堪らん!』

『しかも文字Tシャツの言葉がハルトにお似合いだあ!』

爆笑している相棒達には悪いしキャロルも思わず笑いそうになるのを必死で堪えていた

「え？ 似合うと思うけどなあ……」

「まずは貴様のセンスの徹底的に矯正せねばならんな束達と話さねば」

「なあローグ、この文字Tさ標準装備にしていいい？」

『辞めろ！ 流石の俺達も文字T着こなすお前なんて見たくねえよ！』

『国民の支持率を考えろ!？』

「えええええ！ 何でわからないかなあ……こんなにカッコ良いのに」

「ウオズ！ どうやったらハルトのセンスは元に戻る！」

「この本によれば時間経過で治ると」

「よしジャマトライダーだったか…王の尊厳を守る為に奴を気絶させろ！こうなれば時間が経つまで大人しくさせるしかない！」

「リョウカイ」

「え？どうしたのお前達…ごふっ！」

ジャマトライダーから無言の腹パンを食らい気絶したハルトを肩に担ぐのを確認すると

「よし帰るぞウオズ、これ以上バカの醜態を晒すわけにはいかん」

「ごもつともです」

「あ、いやちよつとま「悪いな目を改めて行うとしようタイミングを見て先触れを出す」

…ま、まあそれなら」

「ではな」

と弦十郎を黙らせたキャロルとウオズ一足早く逢魔に帰るのであった

—————

後日

「オレハシヨウキニモドツタ！」

『いや戻ってねえよ!!』

『安心しろ副作用は消えている…まあ』

「んじゃ今日はこれにしよう！」

『本人からすればコスプレみたいなものだから意味がないかも知れんが…』

『ダメだこりや』

逢魔で副作用が解けた後のハルトだったが、
「威風堂々」と書かれた文字Tシャツを着て政務にあたろうとし、千冬達から全力の説教を食らったのは別の話

—————

逢魔王国になる小さな丘にある小さな墓碑

キャロルとハルトは墓参りにきていた

「なあ本当に小さくて良かったのか？」

そこにあるのはキャロルの父、イザークの墓逢魔に来た後に彼女がハルトに墓を作りたいと頼んだのだ。快諾したハルトであったが

「キャロルのお義父さんなら…」

「いいんだ…遺骨も遺品もないからな…これはオレの気持ちの問題だ」

そう言われたら、そつかと納得するしかないなと思いきや、キャロルの隣に立つ

「パパ、ごめん…色々回り道して間違えて…パパの最期のお願ひまで……」

懺悔するような彼女を見てられなかったのかハルトはしやがみ

「初めましてお義父さん俺、常葉ハルトって言います…その…娘さんとは将来の事まで考えてます！」

「ハルト？」

「娘さんと最初に会った時ぶつちやけ生意気なガキだなくらいにしか思ってた！あつて俺の正体バレたからどう隠蔽しようかって事で頭一杯でした！」

「おこ」

「ですが時間を重ねる内な彼女の色んな一面を見る事が出来ました…口が悪いですけど一生懸命で優しいんですよ」

「……………」

「あの世界に来て、相棒やウオズ達以外で誰も信じられない…奏者の所為で現地の人なんて敵だって思ってた俺にとっては彼女の存在は凄く嬉しかったんです信じてもいいんだって」

「……………」
／／

「そんな彼女に俺は惹かれたんだと思います…」

『惹かれてヤンデレみたいになってたな』

「だね…けど皆それくらい大事なんだよ」

「確かに彼女は許されない事をしましたが…ですが…彼女の気持ちも汲んで貰いたいです俺だって大事な人が目の前で殺されたなら目の前の世界なんて全て滅ぼしたくなりますよ…その力があるなら尚更に」

「ハルト…」

「だけど力の使い方を間違えたなら何度でも俺が体を張って止めますから！…では本題を」

と言うと真面目な顔になり、宣誓する

「俺は彼女を幸せにしますー人だけではなく何人も…不誠実に聞こえると思いますが誓います俺は彼女をこの身が朽ちても守ります誰が相手でも」

「!!」

「だから安心して見守ってください…娘さんを俺にくださいい！」

「は、ハルト…お前…」

「キャロルの罪なら背負うよ一緒に…だから離れないで寂しいのはもう嫌だから」

「はあ…仕方の無い奴だそこまで言うなら離れないでいてやる感謝しろ」

「おう…んじやまた来ますね」

「また来るよパパ」

「キャロル幸せにね…それと君、キャロルを泣かせたら呪うから」

「…」

慌てて振り向くがそこには誰もいなかったがキャロルは声の主が誰かを理解し

「……………うん」

そう短く返すとハルトの手を取る

「行こうぜキャロル、逢魔を案内するからよ！」

「ああ……………ハルト」

「ん？」

「この手だが「離さねえよ二度も言わせんな」…ああ」

そう言った2人は街の方へと足を向けたのである、そこには綺麗な白い花が植つていたと言う

「……………あ、キャロルこの文字Tどう思う?」

二枚目気取りの三枚目と書かれた文字Tを見せるハルトに

「空気を読め、バカハルト」

キャロルは冷めた目で睨むのであった

—————

「如何でしたでしょうか?我が魔王と錬金術師キャロルの恋物語は」

「ま、いよいよ折り返しだね」

「長かったなウオズ」

「え？折り返し？何の話ですか？」

「フイーニスは知らなくても構わない事です…さて暫くは幕間となりますが、これから我が魔王に起こる出来事は悲劇か喜劇か…そして出会うは遙か彼方の銀河系から来た者達…おつと話が過ぎました、この話は皆さまには未来の出来事でしたね？」

シンフオギアA X Z編

番外編 未来からやってきた？

逢魔王国の議事堂にて

「ふう……」

最後の書類にハンコを押して背伸びをするハルト、留守中は影武者に業務代行させていたがやはり直接俺の採択を仰ぐ部分が残っていたのでキャロルの事件後は仕事に忙殺されている、皆との時間が取れないのは寂しいが王としての責務も果たさねばならない

「お疲れ様ですハルト様」

本当、テストタロツサと補佐のモスがいなければ何度過過労死していたか……いやマジで

「ありがとう、テストタロツサ」

「いえ当然の事をしたままですわ」

「いやいや留守もそうだけどアリヤミー殲滅やルシファアの襲撃を未然に防ぎ、この間

の乱戦参加の功績は大きいよ3人には特別報酬も考えてるから楽しみにしてて」

「それは…身に余る光栄ですわ」

「そんな大袈裟な…よし終わりだなテストアロツサ、最近の情せ [!!] つ！何事!!」

最近の逢魔王国を取り囲む状況を確認しようとした時、突然謎の光と衝撃が建物を地震のように揺らしたのである

「空島で地震!?!」

「収まりましたわね…今のは一体…」

「取り敢えず被害状況の確認! テスタロツサはここに残って情報収集をお願い俺は現地に向かうよ警邏のベ集団も招集!」

「かしこまりました…しかしハルト様お一人では危険です是非護衛を」

「大丈夫だよ」

カリキュブデイスアルターブックを見せながら事件現場に向かおうとした

「あのハルト様…そちらは窓ですが」

「こつちのが早いから行ってきます！」

『剣・ジャックフォーム』

アナザー剣・ジャックフォームになり目的地まで飛翔するのであった

そして目的地に到着すると街の外れでクレーターが目立つのと人集りが目に入ったので降下、着地と同時に変身解除して駆け寄る

「お前達、大丈夫か！」

すると警邏をしていたベ集團のグロンギとハイオークの1人が気づいて敬礼する

「ハルト！来たのか！」

「はい我々は大丈夫です！」

「そうか他に被害は？」

尋ねると2人は気まずい顔をして恐る恐る報告する

「人的被害はありませんが…その…」

「何だ？」

「アレ」

と指さされた先を見ると

「は？」

「だから言ったじゃねえか！危険だって！」

「うるさい！そもそも使おうって言ったのはお前だろ見てみるよここは逢魔じゃない

！

そこには壊れてるマシンがあり赤みかかった髪と濡羽色の髪をした2人の男性、特に濡羽色の髪をした男が腰に帯刀している得物には凄い見覚えがある……てか顔立ちが完全に似てると頭を抱えたハルトに気づいた小さい子がいた

「……………ねえお姉ちゃん」

「はあ……………もうこのバカ弟2人は…ハルキまで放っておいて」

「エルフナイン？」

「つてちよつ！バカ弟達!!」

眺めているのは、何処か上の空な少年と金髪で少し垂れ目の女の子である……見間違えるはずがない程のそっくりな子な俺を見るなり

「誰がバカだ!!」

「アレ!!」

と俺を指差す失礼な子だな

「あ?…っ!」

「嘘でしょ!!」

「「「お父さん（親父、パパ）!!」」」

何処かに、この子の親がいるのか…全く少しお話しせねばならないな

『お前だろ?あの子達を感じから見るに』

「いや何のことかさっぱりわからない」

「はあ!？」

「嘘でしょ…」

共周りが驚いているが取り敢えず厄ネタの香りがしたので

「……………?」

ハルトは惚けてみる…知らんぞ俺にはクロエ以外に子供はいない、そう言う行為はしたがこの子達みたいな子はいない出来れば報告するし年齢が合わない

「父…と言うことはハルト様の御子息!？」

「ウソだろ!いつの間に作ってたんだ!」

「いやいや…今の俺にクロエ以外の子供はいないから…」

と言うなりウソ!?! って顔になった4人は

「はあ! 何で俺たちの……………あ……………なあ今年だ?」

「ん? ……年だが?」

この世界の暦で良いと思ひ答えると

「ってことは……………25年前!?!」

「そりゃ俺達生まれてないから信じられないか…? ってか親父の外見変わってねえんだけど!」

「お父さんが普通の人みたいだ!」

と騒いでるところ悪いが

「イラついた一言があったが…それより誰だお前たち、何で俺を親父と呼ぶ」

「そりや…未来から来た、あんたの息子だし？」

「っ！」

ほほお…つてことはつまりと思うなり

「お前たち下がれ！こいつらは娘、息子に擬態した未来からの侵略者だ！多分俺を殺す事で歴史改変とか狙ってるパターンの敵だ！」

『『な、何だつてー！』』

『いや、いきなり過ぎるだろ』

共周りも武器を構えて威嚇するしハルトもアナザーウォッチを構えたアナザーライダー達も驚いている冷静なのはアナザーデイケイドだけだ

「「えええええ！」」

驚いている所悪いが俺は騙されんぞ！

「きつと未来の子供に化けてるパラドックスロイミュードに違いない…残念だったな！
その辺のネタはドライブ劇場版で予習済みだ！その手には乗らんぞ!!」

残念だな俺には『撃っちゃダメだ！父さん！』は通じない!!とドヤ顔すると

『アナザードライブ、何か言いたい事はあるか?』

『ごめんなさい全面的に私が悪いわ』

『なあどうするよコレ?』

『泳がせておけコレは面白い茶番だ』

相棒達が話してるがそれどころではないと警戒してると

「うおおおおい！昔聞きたいいきなり自称子供が現れた時と全く同じ対応してるぞ、このバカ親父！」

「ヒューマギアみたいに情報照会…ああ俺達生まれてすらないならそれもできないか…あ、親父！」

と濡羽色の髪をした千冬似の少年は帯刀した刀を掲げる

「母さんから譲り受けた王の剣サタンサーベルだ！」

「そ、それよ！逢魔王国王子の証明…これならきつと」

「なあ、けど今見せんのは…」

「なっ……未来の千冬を殺してサタンサーベルを奪ったのか……絶対許さん!!」

勝手にヒートアップしてるハルトに思わず

「ほらあ……父さんに見せるのは悪手だよ」

と冷ややかな目をする

「譲り受けたって言ってるだろ!あと母さんを殺せるかあ!あの人とうとうクロックアップを目で追えるし、オーロラカーテンまで両断できるようになったぞ!」

悲報 千冬、人間辞めてた件について

「俺の大事な人を手にかけてその罪!死んで償「何をしている馬鹿者」え?あいたあ!」

さあ変身というタイミングで後頭部に強い衝撃が間違いない

「な、何すんのさ千冬!？」

「テストタロツサから聞いたのだ事件調査の為に飛び出したとな…しかし…いきなり窓から飛び降りる奴がいるか！常識を考えろ！」

「アナザーライダー達と契約してから世間一般の常識とかゴミ箱に投げ捨てました」

『いや元からないだろ』

うるさいとアナザーライダーにツツコミを入れると

「それならもう一度教えてやろう」

「い、いやそんなことより未来からの敵だって！」

「敵だと？…ああ」

と目線を向けると

「千冬母さん（ママ）!!」

4人は安堵するのを見て千冬も柔らかい表情となり

「お前たちだな…未来の束から話は聞いている、バカ夫が迷惑をかけたな」

「え？未来の束？え、何言ってる…」

『バカ夫云々はツツコミしないのだな』

「だって先を見据えたお付き合いしてますし」

「この子達は未来から来た私達の子供だ、擬態したロイミュードやワームではないぞ」

「……マジ？」

逢魔王国議事堂

「やっぱりここは変わってないね」

「そうなんだ君達の時代にも議事堂はあるんだね」

「寧ろ新築の匂いだからびっくりだよ」

話しているのはハルトの未来の子供？である

先程まで喧嘩していた赤髪の子、常葉綴は束との子、綴と喧嘩していた黒髪の子は常葉知秋、千冬との子、そしてまとめ役のように振る舞っている金髪の子はノエル、キヤロルとの子：嘗ての宿敵の名前をつけるとは未来の俺やキヤロルは何を考えているのだろう、そして先程からブーツとしている子供は春樹、錫音との子らしいが

聞けば全員、ライダーに変身可能との事だ

詳細は内緒らしいがノエルはオーズ系、ハルキは恐らく指輪の魔法使いだろうな
しかし知秋と綴に関しては全くわからないのだが

「……………」

楽しく談笑する中 ハルトのみ訝しむような視線を絶やしてない

「ねえまだ疑ってるの?」

「当たり前だろ…未来から来たならアナザーデンライナーやアナザータイムマジーンを
使えば良いのに…なんで東のタイムマシンで?」

「それは父さんが貸してくれないからだよ、歴史改変が何たら〜とか…あ、そう言えば
『昔の自分と会ったら、多分ロイミュードと思って信用しないから気をつけろよ』って
言ってたな」

『まんまの行動を取ってんじゃねえか！』

うん、絶対俺なら貸さないと納得したしよく分かっていると思っただが

「そんな事より何で過去に？」

何か重大事件でもあるのかな？と首を傾げると

「それはね若いパパ達に会いたって束ママとキャロルママに頼んだらタイムマシンを作ってくれたよ」

「理由シヨボ!？」

「え!?! 未来の束さんはタイムマシンを作れたの!」

「ほお…オレはそんな事までしてるのか錬金術を極めると時間遡行まで可能なのか…」

「そんな錬金術が、あつてたまるか！」

「まあその実験失敗でここに居るんだけどな……とにかく安全確保してから使えつての」

「綴、お母さん達にそんな話し方はダメですよ」

その中、クロエはそれはもう凄い良い笑顔で未来の弟の頭を撫でている、娘が幸せなら良い事だ

「つせえよ、やっぱりクロエ姉はこの時もうるせえな……とにかく心配してんじやねえよ」

「ふふふ……私にとっては可愛い弟、妹達なのですから心配にもなりませんよ」

「……………おう」

満更でもないようだが

「ほほお…君は東さんの子供って事だろうけど態度が悪いねえ少しOHANASHIする？」

「そうだなオレも参加しよう…修正が必要なようだ」

「っ！こ、怖くないぞ！」

「なら俺も参戦しよう!!」バンツ！

「魔王がなんぼのもんじやない!!」

「いや足震えてますよ？大丈夫ですか？」

「こ、怖くない！ファウストローブの糸とスパイトネガで物理やら精神的にも拘束された所にゼロツービツクバンを叩き込まれたくらいで母さん達の説教を恐れるものかあ！」

「いやよくトラウマにならないでいたね！それと流石の束さんも大事な我が子にはそんなことしないよ！精々クラスターセル使うくらいだよ！」

「それも問題だぞ束!？」

「そうだな俺も流石に子供には手加減するさ」

「………具体的には？」

「アナザー響鬼で爆裂怒涛の型？」

「十分トラウマになるわ馬鹿者！前にオルコットとの決闘でしたことを忘れたか！」

「記憶にございません！」

「覚えていろ馬鹿者共!!」

と話してるのを見て

「うわあ…一夏叔父さんに聞いてたけど、昔から母さんって苦労してんだな」

「あのさあ私も聞きたいんだけど…その…パパの膝に座ってる子って…誰？」

「ん？キャロルだけど？」

「え！」

「全くオレの娘？ならもう少し聴くあれ…これは間違はなく、この鈍感さは夫に似たな」

「誰が鈍感だ！これはその…あれだ！その…あの…ゴルゴムの仕業だ！」

『飛んだ冤罪だぞ!!』

「ほお…反論出来るのか？人に言われるまで好意に気づかないような男だろう」

やれやれと被りをふるが娘はそれどころではないようで

「ウソでしょ！この子がキャロルママ?!?25年前だけど…ママ…子供じゃん！何！父さんってロリコンなの！光源氏だったの!!」

キャロルナインみたいな感じなのだが

「あ、お前…俺の娘だよ間違いないな」

「ああ本当にそっくりだな無自覚に余計な一言を言うところかな！」

キャロルとの娘(仮)の発言にキャロルと俺は目が笑ってない良い笑顔で、とあるロックスードを解錠するとギターの音と共にクラックが開き頭上から

「あ………めんなさ……あいたあ！」

金だらいが直撃した後に

「誰がロリだ恥を知れ！」

「そうだぞ！ キャロルは自在に大人と子供モードを切り替えられるんだぞ可愛いと綺麗が両立してんだ、それに実年齢から行けばキャロルの方がシヨタコ「ハルト…貴様も夕ライを落とされたいか？」何でもありません！」

女性に年齢の話はタブーだったと冷や汗を流すと

「け、けど私の知るキャロルママは大人で…」

「ああ…未来では子供の姿は見せてないのか…：…ならば刮目せよ！」

とキャロルは膝から離れると同時に大人モードになると娘はハツとなり

「キャロルママだ！」

「そうと言っただろう…まあハルトは大人と子供どちらでも大「おーと、キャロル少しお黙ろうか？」まあ良いだろう」

「それよりさ…東は何してんだよ…タイムマシンの実験に子供使うとか」

「い、今の東さんじゃないよ！未来の東さんだよ！」

「せめてやるなハルト、未来の東と話したが本当に申し訳無さそうに謝っていた…まさかあの東が未来では人並みの思いやりを持っているとは……」

「ちーちゃんの中で東さんは良心を持ってない人だったのかな？」

「長年お前とハルトに振り回せてくれら、そう思うさ」

「あはは～それは～……ごめんなさい」

「まあそう言う事だけど後は…ウオズ!!」

最終確認とばかりに呼び出すと

「はっ！参上しました……っ！若君達何故此処に」

「よかったー！やっとなってる人に会えたよ！」

その態度を見てやはりかと思うしかなかった

「俺の……ふむ、やはり本物か」

ふと思ひ息子達に近づき頭を撫でてみた

「父さん！」

「うん…この年齢でクロエくらいの実の子がいるのは複雑なんだが…未来の俺は良い父親になれるか？」

「うん！良いパパだよ！」

「そうか…良かった俺は仮面ライダーの父親ロクデナシ説の親には該当しなかったみたいで…どうだろうか好きな子はいるかな？」

「はあ!?いる訳ねえだろンなの」

「この間、首都リムルで獣人族の子と楽しそうにデートしてた」

「へえ〜隅に置けないねえ〜」

「あ、アレはデルタの買い物に付き合ってただけだ！そう言う綴だって学校で、いつも女の子といるじゃねえか！」

「誰もデルタとは言っていない」

「そうかそうか知秋、未来に帰ったらその彼女を家に連れてきなさい歓迎しよう」

「だ、誰が連れてくか！まだそんな関係じゃ」

「まだという事はいつかはあるのだろうか？」

「千冬母さんまで!？」

「知秋は勘違いしてるだけ俺は彼女なは勉強教えてるだけ」

「はい嘘ー！絶対に違うだろう！このムツツリが！」

「本当…鈍感なのは父さんと一夏叔父さんだけで十分」

「おい待て、あの愚弟はまだ鈍感なのか!？」

千冬は別の意味で弟の心配をするのを見てハルトはニヤニヤ笑いながら

「こう見ると年相応だな俺には普通の青春なんてなかったからさ…羨ましいよ」

「安堵する所がその辺、父さんらしいね…まあさっきの綴みたいに私達がやらかしたら色々お仕置きするけどね」

「え、マジで？」

「この前なんて綴と知秋が喧嘩してたのを見て」

—————

未来

「テメエ、表に出ろや！」

「前から気に入らなかつた顔面を愉快な彫刻に変えてやる!!」

胸ぐら掴んで威嚇し合う2人に周りの市民はオロオロしている中

「綴、知秋 喧嘩は辞めな」

「ハルト様?!」

「まったく周りの人がビビっているだろう？ 全く… 仮にも次代の逢魔王国を担う『世紀王』のお前達が喧嘩などお父さんは悲しいよーアレか！ この間見せた『仮面ライダーBLA C K』に影響されたのか！ 別にブラックサンとかシャドームーンに感化される年頃かもしれないがな…」

「つせえ、この場面でクソダサTシャツ着て説教してんじゃねえ!!」

知秋の言う通り、ハルトは『和を持って尊しとなす』とプリントされた文字Tを着こなしていた

「そうだよ！ガキの喧嘩に割って入んな！」

「へえ…なら王として国を騒がす乱闘に対処するでしょう」

満面の笑みのハルトを見るが2人は理解した

「あ……」 「やべ……」

父がキレたのを

『はあ…ハウンド、頼んだ』

「お任せを…さあ皆さん此方へ!!」

その時、ハルトの怒りを察した市民はクローントルーパー達誘導の元、慣れた手つきで避難し始める

「お仕置きの時間と行こうか大丈夫：少しの間、悪夢に魘されるだけだから」

『エターナル』

『NIGHTMARE MAXIMUM DRIVE』

「っ逃げるぞ知秋！あの親父、ナイトメアメモリで悪夢見せ続ける気だ！」

「わかってらい！あの親父にはやると言ったらやる凄みがある！！」

「待てやあ！この服をクソダサ文字Tシャツと言った事は許さんぞお！」

「いやそつち（か）!?!」

—————

「てな事がありました」

「大人気な!?!つか色々気になるワードが沢山あったんだけど!!」

何!クローントルーパーとか世紀王とか!俺未来で創世王とか名乗ってるの!?!と動揺していると

「話し過ぎちゃった…これはパパに取って未来の事だったね」

「急なウオズムーブ辞めい…だがダメな事はダメと叱れる父親になれたんだな俺は」

『お仕置きの方法がぶっ飛んでいるがな』

「いいじゃないか殴ったりしてないんだから」

『いや悪夢で精神攻撃してんじゃネエよ』

「そうか……こうなった時は俺の超能力で『それを止めろ！』わかったよ……あ、あとは最高最善の王様になれてるかな？」

「うーんそうだなあ……国は平和だし……あ、最近アナザーライダーの皆が担いだ神輿に乗って【祭りだ！祭りだー！】って騒いでるよ」

「アナザーライダーに【お供達！】って言ったりしてるし」

「出会う人に【そこのお前、俺と目があったな！これでお前とも縁が出来た！】とか」

「おやつがキビ団子だった」

「え、何があったの未来!?俺そんなやばい感じなの!？」

『つーか何、俺達実体化してんだよ!!』

『未来では神輿を担いでるのか?』

『何それ？アナザーオーマジオウ化するよりもカオスな未来じゃない？』

「いや今も大体そんな感じだろう？」

「は、どうせ未来から送られた特撮を見て影響されたのだろうさ……このバカならやりかねん」

キャロルの推察の通りである事実、老ハルトからの贈り物であるドンブラザーズを見た結果であつた

「だろうな！何せ未来の俺だし！」

と自慢するようにジャケットを脱ぐと下にはキャロルに賛同するかのように『そのとおり！』の文字Tを見せる

「まだ着てたのか……いい加減にしろ」

「似合うと思うんだがなあ……そうか未来でキャロル、東、千冬、錫音と」

「な、何だよ……」

「千冬に似てるのも何というか分かるな顔立ちが一夏に似てんのも納得……君が長男だっけ？」

「わ、悪かったな！俺が第一王子ですよ！けどいつかは俺が逢魔王国の王になってやるんだ！」

「なるだけじゃダメだよ、未来でも言われなかった？」

「は？」

「王になるだけじゃダメ、その先のビジョンをきちんと考えないと王位なんて夢のまた夢だよ王ってのは下にいる人の事を第一に考えないと……まあ後これは個人的な意見だ」

けど」

ハルトは目を細めて

「俺を超えられない青二才が継げるほど、この国の王は甘くねえよ」

仮面ライダー 時の王 仮面ライダージオウ

アナザーライダー 偽りの王 アナザージオウ

成り行きで玉座を得たが国を作り、慕うものが増えた、人一倍愛着がある皆が笑顔で暮らせ飢えない国、それを託すのが王になるのが目的になっている奴には渡せない

「っ！」

「此処は俺の大事な家であり帰る場所…此処で暮らす奴等は皆、俺の家族だ…だからこそこの場所を守る奴はそれを飄々と当たり前のように笑顔で背負えるくらいでない」と

俺は安心して王位を譲れねえ…俺は伊達や酔狂で魔王を名乗る程、その言葉の意味を軽んじた覚えはないがな」

「……………っ！」

「……………我が魔王！」

何故か号泣しているウオズ達を見て、ハルトは呆れた顔をする

「はあ……………なあ、何でお前等泣いてんの？」

別に感動する要素なかったじゃんと言ねるが

「感動したよ魔王ちゃん！俺達の事を家族って思ってくれてたなんて！」

「例えこの身が朽ち果てても私は貴方のお側に！」

「僕も心は同じです!!」

「カゲン、フイーニス…朽ち果てて死ぬのは俺が許さん、死ぬなら俺より後で…それも畳と布団の上で死ぬ」

「……………はっ!」

「我が魔王…今のセリフを逢魔王国民全員に放送させて頂きました」

「あのさあ…恥ずかしいから辞めてくれないかなあ!」

「手遅れです、させて頂きました」

「はあ!?!何勝手にしてくれてんの!」

「この預言者め、説教と近づこうとしたが

「ハルト様！…我等を家族などと何と勿体無きお言葉…我等一同今後とも貴方の為に！」

「ちつ…こうなるだろうから連中に聞かせたくなかったんだよ」

「先程の言葉を聞いた皆が歓喜で震えております！」

「何で!？」

『お前は自分の言葉の意味をきちんと理解しろ』

「や、やっぱり父さんは理不尽だ、それって国を継がせないって言ってるようなもんじゃ無いか！」

「んな事言ってるねえが、今の言葉で理不尽と感じるようならお前に王は夢のまた夢だな、くだらんプライドと野心を持つてるようじゃな」

「んなっ！」

『お前もくだらんプライドで割とやらかしてるだろ』

『ああ色々とな！』

―そのプライドで助けられた事あるだろ？―

『まあな…だが遺伝すんだなプライドの高さとは』

―だから俺の子に同じ過ちは犯して欲しくない…俺と違って生まれながらの王だからな―

「ふざけるな俺は既に王位を継ぐに相応しい人間だ実力も実績もある！なのに何故誰も認めようとしない！」

『……何故だろうな凄い既知感を覚えるのだが』

「そりゃあ、お前の中の人（スウォルツ）に似てるからだろうさー

「そのつまらんプライドが弱さだつて言うんだ、実力があるなら見せてみる腰のサタンサーベルは飾りか？なら今すぐ千冬に返せ、生半可な覚悟でつけて良い剣じゃねえよ」

「言つたなクソ親父！」

「今の俺にはクロエ以外の子はいないよ、お前に継がせるくらいならクロエに継がせる来いよ若造、俺の戦い方を教えてやる」

2人は互いの得物を構えると周りの子供もあたふたし始める

「はあ…昔の親父とも喧嘩かよ」

「いい加減に勝てないの分らないかなあ」

「……………知秋兄ちゃん負ける？」

「負けるよだつて世界平和になる前の逢魔王国黎明期の全盛期パパが相手だよ」

それは彼、彼女の母も同じで

「まったくハルト…お前は子供とのコミュニケーションにしては過激過ぎるぞ」

「ちーちゃん!? コミュニケーションにはしては派手じゃないかな!? ちょっとハルくん！
此処で暴れたら大変だよ！」

「よせ東、今のバカには何を言っても聞かんさ錫音頼んだ」

「はいはいお任せあれー」

『テレポート…ナウ』

すると逢魔王国外れの無人区間に転移した

「ありがとう錫音」

「いいともさ変わりにご褒美は期待して良いかい？」

「任せておけ…ほらこいよ」

「せやあああああ！」

挑発と同時に走り出す成る程確かに鍛えられている数度かわして感じ取ったが、この
剣筋は

「ほおカレラ…いやアゲーラ辺りに剣を習ったか悪くねえな…来い！」

『無銘剣虚無』

呼び出した無銘剣虚無でサタンサーベルを受け止めると簡単に鏝迫り合いに勝ち、腹を蹴り押し退ける

「ガハッ！」

「だが、まだまだだな」

「ちっ…零拍子！」

まさかの千冬や束が使う技術で来るとはな…意識外からの接近技術だけ…

「もうちよい踏み込みを強くしてみろスピードが変わる…つてこの技は千冬達に教わった方が良いか」

「っ…なら！親父から教わった…カラミティストライク！」

サタンサーベル持ってカラミティストライクを放つ息子にハルトは

「甘いぞ、カラミティストライクはこうやるんだ！」

まさかのカラミティストライクで迎え撃った結果は息子が吹き飛ばされるだけで終わった

「な、何で…同じ技なのに！」

「それは簡単だ、お前には色々足りないが一番は…【愛】が足りない!!」

「何故そこで愛!?!」

「この技を単なる技としか思っていない、そこに至る研鑽を思いを何よりサタンサーベルの性能を剣聖ビルゲニアよりも活かしきれていない！その剣は王の為にある剣だ、その気になれば色々と思議なことを起こせる…俺を殺す事も可能だ、その事にも気づかないとは愚かだな」

「……………は？」

「もつと自由にしてみる逢魔王国の王とは誰よりも自由と浪漫を求める多元世界屈指の我儘な男が周りを巻き込んで作った国だ、その次期王候補…いや世紀王とも言うべきお前が王という型にはまってどうする、自由であれ未来の息子よ」

「……………っ！親父！」

「まだ親父ではないがな…さあ来い！」

「ったあああああ！」

結果は…語るだけ野暮であろう

そして数日後

「治ったよタイムマシン！さっすが天才東さんだあ!!これで元の時代に帰れるよお！」

「オレの力も必要だったがな」

さてお別れかなと思うと寂しいかなあ

「何だよ親父、悲しそうじゃねえなあ」

「そりやあな未来で嫌というほど顔を合わせるんだ当たり前だろ？」

「それもそっか……あ、そういやあ未来の親父が会ったら【頑張れ】って……何の意味だ？」

「ん？」

頑張れ？確かに教会やファルムス王国の後始末などもあるが……まさかネオタイムジャッカーの残党が何か仕掛けるのか？と思考を巡らせるがどれもあり得るな……と結論つけてたらだ

「そう言えば他のママはいないんだね」

「この娘はとんでもない爆弾を投下しやがった」

「は？ママ？」

「未来…お母さん沢山いる…アンティリーネ母さん、唯一母さん、二亜母さんと…」

「へ？いや、ちよっ！」

「あ、マシンが起動する…またねパパ!!」

「ばいばい」

「おい待てお前達、サラリと爆弾発言残してんじゃねえ!？」

「『『ほお……』』」

怪しく目が光る4人に思わずハルトは恐怖し

「お前らも何でピンポイントで聞いているかなあ!? ウオズ！ 教えるマジでいるのか!?」

「未来の事を話すのは禁則事項ですのぞ」

「今更そんな初期設定持ち出すなあ！」

拝啓 元の世界の両親へ

色々ありますが俺は楽しくやっています…いつか帰りますので楽しみに待っていて下さい

追伸 妹が心を病んでると思うのでケアをお願いします

—————

その夜

「あ、あのお…皆さん？どうして俺は縛られてるのでしょうか？」

ベットの上で四肢を縛られてしまったハルトは恐怖に震えていた

「何、まだ嫁を増やす節操なしの未来を聞けば誰もが怒るだろう」

「そうだな…まさかまだ増やす気だったとはな」

おかしいキャロルの目が笑ってない…

「いやいや、それは可能性世界の俺な訳でして今の俺は増やすなんて考えては」

よ、よしこうなったらアナザーウィザードの転移魔法で

「残念だけど君の転移魔法は無効化させて貰ってるよ」

錫音の言葉に絶望が宿る…ならば怪人としての怪力で！

「ハルくんのデータを元に作ってる力技で突破は出来ないよ」

「素材はオレの錬金術で補強している無理だ諦めろ」

「何で他ならぬ最愛の人達が一番俺を追い詰めてるのかなあ!？」

「いやあくまさかハルくんとの子供かあ〜」

「そうだな…色々刺激的な体験だったな」

「いやあ実際に触れてみると欲しくなるものだねえ…」

「そう言えばオレはまだだったから色々なゴタついていた分、楽しませてもらうぞハルト」

目の前には4匹の肉食獣…まずい色々搾り取られる！

「た、助けて相棒！」

『あゝすまん俺達は、今呼吸で忙しいんだ後にしてくれ』

―雑な理由で逃げてんじゃねえよ!!―

「い、いやちよつ……ま、まさか！」

『頑張れってさ』

知秋が言ってた頑張れって

「この事かあ！」

この夜に何があつたか語るのは野暮だろう

番外編 新たな隣人

???

「おい本当にやるのか？」

「局長達からの指示だぞ、やるしかない」

「だが俺達は逢魔に世話になってるからなあ……まだ研究してない事もあるし……」

「私もベスターさんにまだ聞きたいことも……」

「何より」「ああ…」

「あの飯が食えないのはちよつと」

「この腑抜け共め！もうよい！貴様等がやらぬなら我等だけで逢魔を落として見せよう！あの我等の手にかかれば魔王など敵ではないわ!!」

と怒鳴りながら移動した

「なあ、どうする？」

「うまく行くわけないんだよなあ…」

「この国でクーデターや暗殺なんて」

その言葉を証明せんばかりに小さな白の眷属が見張り

「へえ…面白そうじゃん」

嬉々とした表情のウルティマがいた

—————

未来の子供事件から色々頑張った後

ハルトは主だったものを集めて会議を開いた

開口して直ぐに

「兵士の数が足りない」

その一言から始まった

それはノエル事件から痛烈に感じた事である現状 逢魔の戦力は

メ、ズ、ベのグロンギ軍団や三人娘の眷属達

それと市民から志願した者たちで構成された軍団というより自警団の延長な感じがする

戦闘力も高く精鋭揃いであるが数が少ない

「しかし軍拡をすれば周辺国から勘ぐられる可能性もありますわ、それに逢魔は天然の要害とも言えるジュラの森にあり尚且つ浮遊国家です、また森の盟主は魔王リムルさん、仕掛ける大馬鹿者がいるとは思えませんか」

「だけどリムルさんにずつとおんぶに抱っこもいかない、それに俺達の敵は周辺国だけじゃないネオタイムジャッカーの残党や各世界の敵対勢力などから自国は自分達で守る必要がある、逢魔とテンペストは対等な同盟者だろ？それに魔王軍とするなら相応

の規模というのがあるそれに逢魔は兵は強いが数が少ないし個人の力任せで戦う傾向が目立つのは問題だ今後は防衛戦争以外の戦いも視野に入れねばならないからな」

そこが懸念点であつた戦鬪に勝てても戦争に負ける…そんな不安感を抱いた

「それに指揮官が少ない、テスタロツサ達は国家運営の要だから非常時以外での出陣は好ましくないって、この間の事件で色々学んでな…というより基本的に全軍出陣は国防的に問題だろうか？」

「確かに我が君の言う通りだ、こここの志願兵は性質上屯田兵に近い、戦争になつてからの初動に問題がある…だから能力や規格が共通かつ即応可能な常備軍創設をしたいという事だな」

「そう言う事だよカレラ」

戦いへの知識や洞察力に長ける彼女は頼れると感心していると

「だが募集した所で数などたかが知れている…それならばハルト様の力で下級戦闘員でも増産すればよいのでは？」

「ああアナザーライオトルーパーもいるぞ？」

「フィーニス、俺が欲しいのはキチンと戦える軍隊だ張子の虎はお呼びじゃないし、アナザーライオトルーパーは俺以外の命令なんて聞かないから制御出来ないぞ？」

「しかし、そのような軍団を製作する予算も時間はない」

「カゲンの言う通りですわね、本来であれば富の生産をしない消費する側の軍を拡張するには反対です」

「現状は懐に余裕がないからねボク達、主に他の魔王への損害賠償で」

「いや、それでも無いんだよ」

「我が魔王…まさか！人に言えないような悪い事を！」

「んな訳あるか！あの世界にいる間にアナザージオウの未来予知やアナザーゼロワンのAI演算を使って競馬や株で大儲けしただけだ!!」

『堂々と言うことかあ!?!』

「それが良くない事なのですが!?!いつの間に!?!」

「こんな事もあるうかと…別に帰る前に暇だったから…能力試してこうなるとは思わないじゃん」

いや、この手は今後使わないと決めましたよ流石に良心が痛んだ…まあそのお陰で他の魔王達への借金完済の目処が立ったのだが…それは内緒である

「何て能力の無駄遣いをしてるのです！」

『全くその通り』

「それでも無い…取り敢えず兵を集める頭金はある!!何なら鎧や武器も大丈夫だよ!」

「……それで借金返済したほうが早いのでは?」

と話していたら、逢魔を強い地震が襲うのであった

「また!空島なのに毎度毎度地震とかふざけんな!またか未来から子供達が来たのか!?!」

ある意味最も縁遠い災害に混乱する皆であったが揺れはすぐに収まるなり慌てて窓から外を見ると

「……………なんじゃありや!!!」

見覚えのない近未来的な都市が広がっていた

「な、何だ…アレは…」

キャロル達は驚いて混乱していたがウオズ達はと言うと

「っ！うおおおお超未来都市!? 冒険の香りが凄いするじゃねえか！こうしちゃいられねえ！ちよつくら行ってくるぜ!!」

好奇心とノリと勢いが暴走して窓から飛び出そうとするハルトを見て

「我が君を止めろ！」

「命令しないでよカレラ…じゃなかったハル落ち着いて！」

「H A ! N A ! S E !」

最早手慣れた様子で止めに入る2人と揉めてる向こうを無視してる未来組、ジヨウゲ

ンは冷や汗を掻きながら指を刺す

「あ、アレは!？」

「ね、ねえウオズちゃん…アレ…」

「ええ…まさかこの時に来たのですか」

「何か知ってるのかウオズ？」

「ええ…ですが先ずは調査をするべきでしょう我が魔王」

「そうだな! つしやあ! 向こうの人に粗品を用意して挨拶に行くぜえ!」

「我が魔王以外で行きましようか今までの件で痛感しました、この人に国家間の外交は任せられません」

「「「「異議なし」」」」

「何でええええええええええ！」

露骨に不満なハルトにテストタロツサが諭すように話す

「ハルト様…いきなり国家元首が挨拶に向かうのは宜しくありません向こうに舐められて
てしまいます」

「我が君が舐められるのは気分が悪いな！」

「そーそー、だからハルは大人しくしてよ」

三人娘の説得にハルトは

「そっか…分かった……」

と素直に引き下がり部屋を出たが背後にはウオズがピタリとついてくる

「ねえ……………何でウオズ付いてくるの?」

「以前テンペストの時に、そうなって抜け出して行こうとしたのをお忘れで?」

そう言えばそんな事もあったなあと思つたが

「監視?」

「そう呼んでもらつて結構ですよ」

「けつ…良いなあ…皆、未知との遭遇してんだあ…俺を除け者にして…良いよなあ…皆、楽しそうで……」

『おいウオズ、どうしてくれんだ!ハルトが地獄兄弟に入りそうなくらい凹んでるぞ!』

「な、何て面倒くさ……ごほん、人聞きが悪いそろそろ我が魔王も王としての自覚をですねえ……というより前回のご子息の時に王としての立ち振る舞いをされると言われませんでしたか？」

「……………」

ウオズが長い説教を始めそうだったので、バイオグリーザの光学迷彩で姿を消して逃げようとしたが

「逃がしませんよ」

マフラーで首を絞められた

「ぐえ！な、何故バレた！」

「バレバレです何年一緒にいると思っただけですか!!」

「さ、流石は…俺の預言者だ…」

「褒めても説教しか出ませんよ」

「不幸なんだが？」

—————

話し合いの結果テストタロツサを代理として送り、得た情報を整理した

あの近未来都市の名前はティポカ・シティと言い、カミーノアンという如何にもなエイリアンボディな人達がクローンを生産しながら暮らしているらしい

最近までとある戦争にあたりクローン兵を生産し出荷していた

そんなある日 戦争が終わったと同時に発注予定だったクローン兵達の発注がキャンセルされてしまいどうしようかと困っていた時に

突然、転移して訳もわからずにいたとの事

逢魔議事堂

「なあ、逢魔は何か面白い奴等を吸い寄せる機能でもあるのか？」

報告書を読み終えたハルトが呆れたような声音で話すが

「ですがどうなさいます、ハルト様の命令があればあんな都市など一息に「ダメだよテストタロツサ」かしこまりました」

「経緯はどうであれ逢魔に來た新しい隣人なんだ歓迎しよう、それよりも報告にあつたクローン兵士ってのは？」

ハルトは其方に興味を示した前回、娘のノエルが言っていたクローントルーパーとやらの関連していると読んでいるが

「はい実際に目にしましたが見たことない杖型の武器と多様な兵器で武装をしていますわ」

テスタロッサの報告から纏めると杖型武器は銃の事だろうか

「不要在庫として沢山いる訳だな勿体ない事をしたな、その国の奴らは」

「ええ、それでなのですがカミーノアンの代表 ラマ・スーから親書を頂いていますわ」

「へえ…内容は？」

「要約すると『うちのクローン兵を買わないか？』ですわね」

「良いじゃん丁度、兵士を探してたんだし大歓迎!!お金もあるし」

ハルトは賛同の意を示した、元より軍拡には賛成だったのもあるが

現状お互いの利益は一致している

ネオタイムジャッカーや他の現地勢力との戦争等に備えて強い常備軍が欲しい逢魔と

不良在庫となったクローン兵の扱いに困ってたカミーノアン

「テストロツサの報告だとカミーノアンは職人気質な連中みたい…ギブアンドテイクがしっかりしてるなら裏切ってくる事はしないだろう」

「ええそんなのよりもボク達の方が強いよ」

「そうだな、そのクローン兵とやらの実力が分からぬ内は採用など…」

ウルティマとカレラは反対のようだが

「私は賛成ですわ実際に見たからというのかもしれませんがよく訓練されていまして、我々の知り得ない技術で武装されている…この世界で戦うならば大きな利点ですし何よりほんの少しの予算で数十万単位の兵士が手に入るなら安い買い物ですよ」

「兵士よりも東さんは技術に興味があるなあ!!」

よし、と思いハルトは立ち上がる

「んじゃ、そのラマ・スーに会ってみるか俺もクローン兵とやらを見てみたい」

「それでしたら私がお供致しましょう、先方とは顔合わせも済んでますし」

「そうだなテストarroツサ頼んだよ」

「お任せを」

「テストarroツサ殿、少しよろしいでしょうか？」

「何でしょうウオズ？」

「我が魔王が暴走したら止めて下さいね」

「お任せを」

「しないってTPOは弁えるよ俺だって国の顔なんだちゃんとするよ」

「奏者や上相手には弁えてませんが」

「は？アレ相手に弁える意味ある？対話すると言いながら特殊部隊放り込むわ守るべき民間人をスケープゴートにする奴等だよ？」

「やれやれ…相変わらずですね」

「ま、もう関わり合いにはもならないけどな」

「それはどうでしょうか」

「不吉なフラグを立てんじゃねえ」

—————

ティポカ・シテイ

「ようこそお待ちしておりますテストタロツサ殿、其方の方が」

目の前にいたのは首の長い、本物のエイリアンである好奇心で目を輝かせているが今の俺は逢魔の王だ、凛々しくなければなど自制する

「はい、彼が私達の王ですわ」

「初めまして私は逢魔王国、国王の常葉ハルト、カミーノのラマ・スー首相お会い出来て

「光栄です」

『お前、本当にハルトか!?!』

『は、ハルトが敬語を!?!』

『貴様、偽物だな! 本物を何処へやった!?!』

「俺だって敬語使うわ! はっ倒すぞ!」

「此方もです、テストロッサ殿から我々の商品を即決して頂いたとお聞きしております
素晴らしい目をお持ちのようだ」

「テストロッサの報告に間違いはないですからね…それに私も楽しみなんですよ」

現れた椅子に座ったハルトは取り敢えず

テイポカ・シテイ付近を特区として独立保証逢魔王国議会の議席、そして件のクロイン兵達を監査する代官の設置を提案

ラマ・スーは了承しクロイン兵の説明…というよりプレゼンだな

曰く クロイン兵は10年前後で前線投入が可能

曰く 彼等は従順で命令に逆らう個体は余りいない

曰く 銀河最強の賞金稼ぎの遺伝子から作っているので高い戦闘能力は保証する

一通り聞いたハルトは

「首相、今此方が購入した場合どれだけの兵士がいる？」

するとラマ・スーは考えてから

「そうですね…取り敢えずお試しという事で1軍団 9216ユニットと付属する兵器を提供致しましょう、その後で購入なさるが宜しいかと」

一気に魔王軍が一万単位の軍団になったが

「いや購入は決めているんだよ…良ければだが君達が不良在庫として困っているクロン達の面倒は俺がまとめてみよう」

「つまり貴方が一括購入されるの？」

「そうなるな成果次第で今後も継続して購入していききたい、ダメか？」

「いやいや文句などありません、それは喜ばしい話です…お試し部隊は数日後にお渡し致しますよう」

「ああ宜しく頼むよ首相、貴方とは仲良くしていきたいからな」

「此方こそ貴方とは長い付き合いになりそうだ」

そう言う2人は固い握手を交わすのであった

後日 先程話した条約が締結され

ティポカ・シティは逢魔の特区として自治が保証されたのである

その数日後、大型の宇宙戦艦：スターデストロイヤーが飛翔し中から赤白のガンシップ L A A T が数十機、新設のプラットフォームに着地するなり白い装甲服と独特なヘルメットそしてやはりと言うべきかプラスチックスターライフルで武装した兵士達が整列する

「気をつけ!!」

その言葉を合図に全員がザッ!と敬礼をする姿を見て

「素晴らしい……この統制の取れている兵士達……これこそ逢魔が欲した兵士そのものだ」

満足していると代表者なのだろう兵士が一人近づいてきた

「お初にお目にかかり光栄です国王陛下、私はこの軍団を統括するクローン・コマンダー 認識番号C C—8694 です以後お見知り置きを」

「よ、宜しくお願ひします…あーと…コマンダー?」

「我々に敬語など不用です国王陛下」

「ハルトで良いよ、国王陛下なんて敬称で呼ばれるとむず痒いしガラじゃない」

そう言うのと周りのトルーパーも困惑しているようだが

「そ、そんな無礼を…」

「俺が気にするんだ、さて…お前には今後逢魔に来るトルーパーの統括と逢魔が展開する軍事作戦を一任する」

「わ、私にそのような大任を!?!」

「だから遠慮なく俺に意見してくれよ C C…長いな……お前達に名前とかないの？」

「ありません我々は認識番号でやりとりしますので」

「けど、それだと色々不便だしなあ……よしお前達が逢魔王国の兵士になった意味も込めて最初の命令……全員自分の名前を名乗る事」

そう言うとトルーパー達が一瞬騒つく

「よ、よろしいのですか!？」

「名前、ないと不便だろ？俺が許す各々好きな名前を名乗るように！」

「さ…サー・イエッサー!!」

「コマンダー、お前には先程話した通り逢魔王国の軍事作戦を任せるつもりだ。そんなお前には幹部として働いてもらう激務だが宜しく頼むぞ」

「イエツサー！」

「だから、お前には俺が直接名付けをするが構わないか？」

「む、無論でございます！これ程光栄な事はありません!!」

「そうだなあ…よし、逢魔に仇なす者を狩る猟犬の意を込めて…お前はハウンド、コマンダーハウンドだ！」

「ハウンド…それが私の…」

「ダメか？嫌なら他にも「いいえ！是非！」そっか…宜しく頼むぜハウンド！」

その時、ハルトの体から魔素が抜けてハウンドの体に入るのであった

「……あ、名付けしたらこうなるって忘れてた」

やはり何処か抜けているハルトなのであった

さて、まずはこの9216名のトルーパーをどう配置するかを考えた

まずは前提としてあった逢魔王国軍を正式に創設 中核としてクローントルーパーを採用した 統帥権は俺にあるが総司令官はハウンドにした餅は餅屋に任せよう、ぶつちやけ軍事作戦のイロハも知らないので丸投げである

だが細部に関しては徹底した打ち合わせをした

警察、治安維持などの部隊はウルティマとカレラの下に新たに入国管理にも配置

他にも幹部陣の護衛やI S世界の篠ノ之製作所の警備部隊

そして逢魔王国の中心をなす旧フロンティアの制御ユニットには精鋭を配置

そして一部工兵部隊はテンペストやティポカ・シテイまでの道を開通する工事をさせ
ハウンドを中心とした一部は俺の親衛隊となった……が

「やっぱり……皆同じ色だと見分けつかないな……各々所属で装甲服を改造、ペイントして
よしー！」

すると、どうだ町には黄色や紫など多様な色のトルーパーが街を歩くようになり、観
光客にも名物として好評である……一応案内板には簡易的ながら所属も纏めていたりす
る

「ハウンド、お前達親衛隊にはマゼンタの塗装をしてもらいたい……この色は俺にとって
特別な色でもある……それだけ、お前達親衛隊には期待をしている頼むぞ!!」

「サー！イエッサー!!」

「あと三つある、一つ犬死は絶対に許さん！二つ死ぬまで最善を尽くせ！三つ！死んだら俺が生き返らせてからもつかい殺す！これを訓示とせよ!!」

「サー！イエツサー!!」

そして俺の親衛隊はマゼンタのペイントを施したのであった…よく似合う

『ほお俺の色か特別とは嬉しい事を言ってくれるじゃないか相棒』

ーあ、お前じゃなくて士さんに敬意を表しているよ事前に承諾は得てるからー

『お、おのれディケイドおおお!』

ーお前もディケイドだろー

—————

光写真館

「ユウスケ聞きましたか？」

「まさかハルト君が軍隊をね」

「でも何でマゼンタのペイントを…」

「それは……間違いなく」

「ですね」

と2人は士を見るが当の本人は

「全く…あいつめ粹な事をしてくれるじゃないか」

満更でもない様子だったと言う

「あんなドヤ顔の土見たの俺初めてだよ」

「私もですよ」

「聴こえてるぞユウスケ、夏ミカン」

「何故、彼はシアンにしないんだい！」

「帰れ」

「土、僕の扱い最近酷くないかい？」

—————

そんな感じで逢魔にクロントルーパー達が日常に溶け込んでいくばかりの時間が流

れた

その間にラージャ小亜国やウルティマに関するトラブルなどあったが

トルーパー達は新しい環境に馴染みつつある

東はクローン・メカニックから色んな技術や知識を吸収し、スターデストロイヤーに乗るなり狂喜乱舞していると

千冬は何故か心配というか物憂げな顔をしている事が多くなった

そう言えば前に顔合わせとして皆を紹介した時にラマ・スーがキャロルと千冬をマジマジと見ていたなアレは異性云々ではなく知的好奇心の目だった

キャロルはホムンクルス…つまりカミーノアンとは違う化学ではない錬金術から生まれたクローンだ…東と同じように未知の技術に興味があるのはわかるが

「何で千冬？」

何故彼女が気になるのだと思う確かに並外れた身体能力と回復能力を有しているが

「え？普通でしょ？」

『お前の感覚は麻痺してるぞ、常人から見れば千冬の方がおかしい事には気づくものだ』
「そうなのか？俺からすれば可愛いものだけど？」

『はあ…貴様はあの世界で生身でISと戦える事が異常だと自覚しろ』

「だけど確かに気になるな」

彼女と一夏には両親はいないとの事だ千冬に聞いてもはぐらかされるし一夏も知らないと…まさか…千冬と一夏って…

「ま、考えても意味ねえか千冬は千冬だ、俺の特別なのは変わらんさ一夏も俺の弟分つて
事実は変わらんからな」

クロエの時もだが生まれだ何だで見るのは間違っている大事なのは自分がどう思う
かだであると

そして以外な事に反対していたウルティマやカレラ達が部下となったクローン達に
優しいのであった。俺が無碍に扱わない事などを厳命したのもあるが武人氣質のカレ
ラと実直なトルーパー達は相性は良いと思ったがウルティマは何の琴線に触れたが知
らない

「これで逢魔の戦力も十分だし国家運営も軌道に乗りつつある…よし！今日は視察に
行くかあ！」

『そう言いながら街ブラするだけだろう』

「何を言う、これも仕事だ」

「でしたら、その前にこの書類の山を片付けてからにして下さいハルト様」

「はい……」

『NICEだハウンド』

「いえ嫌な予感がしましたので」

そう言われて書類を素直片付けていく、え？何で素直か教えてやろう

ある日

仕事をサボ……ごほん、視察にとバイオグリーザの光学迷彩使ったら

「……いたぞー！」

「撃て!!」

「ぎゃあああ!」

ヘルメットのサーモグラフィ機能により体温で位置バレしてスタンモードのライフの弾幕で気絶……あの時にアイツらから見た俺はクマと同じような扱いだと悟り

またある日はアナザーサイガで飛んで逃げようとしたら

「お前、飛んでるアレを撃て」

「イエツサー!」

「え? ほ……………ほわあああああ!!」

彼等の戦車と言える六足歩行戦車 ATTEやジェットパック装備のトルーパーに

撃ち落とされ

またまたある日はバイクで逃げようとしたら

「逃すなあ!」

「俺のバイクより早いのがあんまりじゃない!」

向こうのスピードラーバイクなるもので捕まった…ライダーとして面目丸潰れである

そんな感じなので、トルーパーとの鬼ごっこをするより真面目に仕事をしてから遊ぼうと学んだのである…断じて彼等のブラスタライフルが痛いからと言う訳では断じてない!!

『もの見事に完敗だな』

とある世界のシス卿が見たらこう思うだろう

「何で抑制チップ起動してないのにオーダー66されてるの？」と

「真面目が1番だな」

『それが普通なんだよ』

「いいじゃねえか少し遊ぶくらいは……けどまさか大砲で撃ち落とされるとは思ってたかったよ……あの当てた砲兵には勲章を贈らねば」

「ハルト様、私語はお控え下さい」

「はい」

「以前報告させていただきましたラージャ小亜国に建築予定の基地なのですが……」

「その件ならテンペストにも報告したけど基地建設は向こうのハイオークも協力してく

れるって」

真面目に職務にあたる姿を見てテストアロッサとウオズは感動していた

「ハルト様が真面目に仕事を!?!」

「す…素晴らしい!流石はクローントルーパー!我が魔王が借りてきた猫のように大人しくなるとは!」

「俺が仕事してるのがそんなにおかしい?」

『今まで影武者に丸投げたからだろう』

「か、返す言葉がない…っ!」

「感動しないでください、ウオズ殿」

「これは失礼しました」

「なあハウンド」

「何でしょうハルト様」

「終わったぞ」

「へ？」

「仕事終わった…んじゃ街に行ってくる」

「あ、お待ち下さい!!」

慌ててハウンドは書類の山を見ると

「っ！本当に終わってます、数時間はかかると思っていました…何という事務処理能力

…
」

完璧に仕上がっていたのである

「我が魔王…やれば出来るならやりましょうよ！」

「これがハルト様の全力ですか…でしたらもう少し書類増やしても大丈夫なのでは？」

「そうだったら国を上げての大捕物になりますよテストタロツサ殿」

「……否定出来ませんわね」

「はは、俺達はとんでもない人に雇われたのかも知れないな」

「そうでしたコマンダー、一つ頼みたい事が」

「何でしょう」

「ウルティマ殿やモス殿からの報告なのですが実は数週間後に逢魔で…」

ウオズが耳打ちした内容にハウンドは

「っ！本当ですか！」

「ええ、お力を貸して下さい」

そう言うとハウンドは通信機でトルーパー全員に通達する

「無論です野郎共！仕事の時間だ！」

裏切り者の錬金術師に目にももの見せてやろうぜ!!」

—————

その頃、逢魔に訪れる危機など知らないハルトは

「カレラく飯食いに行こうぜ」

「無論だ、では参ろうか我が君よ!」

呑気に仲間誘って食事に向かおうとしていた

「乗れよカミーノアンから貰った、このスピードダーバイク（サイドカー付）で行こうじゃないか！」

「うむ！」

「待ったボクを仲間はずれにし「さあ行くぞ我が君！」い、いやちよつと待ってよ！つその乗り物早くない!? 報告しないと行けない事があるのに!!」

「なあウルティマの声がしたような気がしたが気のせいかな？」

「気のせいだ我が君！ウルティマなぞおらん!!」

「そっかあ！」

「【そっかあ！】 じゃない待てえええええ！」

「ちい！邪魔するなウルティマ！我が君と食事をするのは私だ！」

「ウルティマいるのか！よしサイドカーに乗れ！」

「はーい！」

「ちっ……」

「抜け駆けは許さないよ」

「こうなるなら庇うのではなかった」

「何か言ったか？」

そしてハルトはフラリと街にある店に入ると

「よお店長、元気かい？」

「ハルさんじゃないか！久しぶりだねえ何してたんだい？」

「まあ仕事で色々とな」

「ウルちゃんもいらっしやい」

「こんにちは店長さん」

「俺とウルはいつものお前は どうする？」

「おすすめで頼む」

「はいよ少し待ってな！」

店長が厨房に入ったのを確認するとカレラが

「まさかと思うがウルティマ、我が君と何度も」

「来てるんだよ残念だねえカレラ、ボクは何度も誘われるんだ」

「なっ！」「喧嘩すんなよ」わかっている」

「暇あったら声かけるからいまはおちつけあ、それで報告が云々って言ってたけど何かあったのか？」

「あ、そうそう…えーとパヴァリアなんちゃらだっけここの調査してる奴等」

「ああ今は出向扱いでキャロルの部下だな」

「そいつら裏切るってさらに数週間後にクーデター起こすってハルを殺して国の実権を握ってあの世界にいる結社？の幹部にフロンティアを渡すって」

「……………タチの悪い冗談だな笑えねえよ」

「こんな冗談でハルを笑わせようなんて思わないよ真面目に調べた結果さ」

「ふむ…」

そう言われたのでハルトも一度思考を張り巡らせる、まず疑問なのが

サンジェルマンが同盟関係を破棄してまで逢魔を狙う理由がわからない

確かにあの世界に干渉しないと決めたが念の為のホットラインは二つ残してある

一つはナツキとエルフナイン達に

そしてパヴァリアに

だからこそ、向こうはクローントルーパーを導入した事を知っているだろう…今までの自衛前提の軍団ではなく、それこそ国と戦争までできる戦力を得たのだ…まさか彼等を狙って？確かに向こうにもメダルの技術は流れているが

「判断材料に欠けるな」

あの世界で暴れた結果を見れば裏切るメリットよりも静観する方が良いと思うのだが…

「それで…ボクから提案なんだけどー」

ウルティマの提案を聞いたハルトは悪い笑みを浮かべ

「それ採用」

動くのであった

その数週間後

ハルトは再び帰らないと言った世界に帰るハメとなった

新たな火種

クローントルーパー導入し、ラー ज्याの事件が終わって暫くは平和な時間が流れた…
それはもう平和だった

—————

「「「お待ちください！」「」」

「はははは！親衛隊なら俺を捕まえてみる!!」

「こうなったら最終手段だ、あの方達を連れて来い！」

「イエッサー!!」

「おいおいハウンド、誰を連れてこようとも俺を捕まえるのは無理だぜ」

「我々では無理かも知れませんが、ですが彼女達ならどうですか？」

「彼女達？……っ！まさか！」

「この気配は……と思い振り向くと」

「聞いたぞコマンダー、この鬼ごっこでハルトを捕まえたら1日好きにして良いと？」

「はい捕縛したらご自由にどうぞ誰も止めません、ですが最初に捕まえた1人のみとなります」

「あ、ばっ！お前!!」

「なんて事を……そんな事聞いたら」

「へえ……」「ほお……」

目の色変わるじゃんかあ……まずい

「なら、その権利は束さんが貰ったあ!!」

『JUMP!』

「それは私のものだ!」

『メロンエナジー』

「悪いな足の速さなら負けん!」

『ライオン!トラ!チーター!』

「新しい魔法のお披露目と行こうか」

『ジャバドウビタッチ ヘンシン!』

「そこまでしなくて良いんじゃないかなあ!？」

変身までして捕まえようとする、あまりのガチぶりにハルトは顔を青くしながら全速力で走り出した

「何で逃げるのだハルト!」

「お前達! 俺を捕まえて何する気なんだよ!!」

「ナニだな」「だね」

キャロルと束の発言で確定である、捕まってみろの俺の体にあるエキスの何かが抜けてしまう、そうになったら俺は創世王（BLACK SUN）のような感じになる未来が見えるのだ

「っ! 捕まってたまるかああああ!」

色んな意味で戦わなければ生き残れないを体感し

「あ…危ねえ…助かったあ！」

逃げ切り安堵した自分の生存を

「ははは…キャロル達をけしかけるのは良いアイデアだったが…惜しかったなハウンド」

『あ、それフラグ』

ポン

「へっ？」

そう呟いたのと同時に肩を叩かれたので恐る恐る見上げると

「見つけたぞ」

それはもう良い笑顔の千冬がサタンサーベルを抜刀している…やばいオーロラカーテンで

「悪いなもう切つてある…臙次元斬！まさかハクロウ先生の技がここで役に立つとは」

そこに砕け散ったオーロラカーテンの破片が

「あ…ははは…ぎゃああああああ!!出たあああ!」

「私も君の妻なのだがな!」

そんな感じで拉致られ千冬とホテルで一日過ごし

—————

2068年

アナザータイムマジーンから降りて一言

「遊びに来たよオーマジオウさーん！」

「よく来たな」

「はい！たくさん土産話用意しましたから！大体100話くらいなの！」

「そして遅しくなったな」

「ええ…やっぱりこの銅像はいつ見ても感動だ」

「そうか…まあそこに座れカッシーンお茶を用意せよ」

「かしこまりました！」

「あ、カッシーンも久しぶり〜元気してる〜」

「おのれ常葉ハルト…私は忘れてないぞ、この体を操った事をな！」

「あゝごめんなさい…」

「国を作ったと聞いたが」

「はい！目指せ多民族共存共栄国家！」

「そうか…うむ、それよりもだ門矢士から話は聞いているがお前はお前で魔王へと向かっている…だが我の知る歴史のハルトよりも丸いな」

「そりや世界に散らばったアナザーライダー 達が俺を旗頭に集まっていますからねえ、そりや色んな奴等がいれば視野も広がりますよ、それにネオタイムジャッカーも倒しましたから「戯け」へ？」

「クジヨー、レック、メナスは生きておる…メナスはシグマ型だが…他2人はまあ全快に

は時間がかかるだろう、何処かに身を潜め力を蓄えている」

「っ！」

「ここからが正念場だ、期待しているぞ」

「はい!!」

「それよりも一つ聞かせて欲しい」

「な、何でしょう」

「あの時の選択に後悔はないか？」

それはあの時

オーマジオウがハルトのいた世界に返す

という提案を断った、その問いへ悔いはないかと尋ねた

「ないですよ、その選択をしたから今がある仲間も最愛の人達も」

『『……………』ニヤニヤ』

「と、時折人の精神世界でどんちゃん騒ぎする愛すべき馬鹿達もな」

『け、ツンデレめ』

「なあジープの代わりにスピイダーバイクで引き摺り回されたいか？」

『あ、悪魔め！』

『え？俺のことか？』

『お前じゃネエよ！』

『バツカだなあ先輩、俺たちだよ！』

『お前でもネエよ!』

「はあ…このバカどもは…」

「大分、賑やかなようだな」

「ええ、お陰様で楽しくやっています…キツカケはアレでしたけどね」

「さて…難しい話はここまでにして今ここに仮面ライダーリバイスとギーツのDVDがあるのだが」

「是非観たいです!お願いします!!…あれ?あの何で士さんが逢魔にいるって知ってるんです?」

「そ、それはだな…」

「まさか士さん達が逢魔に来たのって…」

「こ、このオーマジオウの目はあらゆる並行世界を見通せるのだ、それを使い知ったのよ
！」

「な、なるほど!!流石オーマジオウ!だから逢魔に士さんがいるって知ってたんですね
！」

この男、憧れの存在の前では疑うことを知らなかったのである

「うむ、そうなのだ…よしギーツを見終わったら久しぶりに手合わせをしようではない
か」

「良いんですか!胸を借りさせてもらいます!」

『デイケイド…コンプリート2』

「良かろう、来い!」

『祝福ノ刻!』

そしてオーマジオウとの第二ラウンドはボコボコにされた

—————

そしてある時は

「……は？」

「あ、貴方は……まさか剣崎一真さん!？」

「何で俺のことを……君は一体……」

「貴方のファンです! サインください!!」

「……え？」

まさかのレジエンドライダーと邂逅を果たしたり

—————

ある時はエネルギーが溜まり移動した先で

「あら、貴方は何者かしら？」

髪が器用に白黒に分かれている…束に似た声の女の子に聞かれたので

「通りすがりのアナザライダーだ覚えなくて良い…さて、ここは俺の世界じゃないな
…残念ださつさと帰ろ」

「待つて…ねえ貴方強いわよね私と戦いましょう？」

「えゝ面倒くせえけど、戦う理由ないし」

「私には私のやりたいことがあるのよ、それに何の収穫もなしに帰るなんて勿体無くないかしら?」

その目には何か強い思いが込められていると感じ取ったのが運の尽き

「……まあ良いかアナザーライダーの王、常葉ハルトだ、お前は?」

承諾した

「『漆黒聖典番外席次 絶死絶命』」

「違う、お前の本当の名前だ、肩書きだけですませてんじゃねえ…名乗れよ戦の作法も知らねえか?」

ハルトは以前、決闘前の名乗りなんて意味がないと嘲笑していたが…今は違う立場を得て上に立つからこそ分かる 目の前を敵を倒すものと伝える意思なのだ

「アンティリーネ・ヘラン・フーシエよ」

その名前に首を傾げた…何処かで聞いたことがあるような…まあ良いか！

「OKだ…んじややろうかあ！」

『ジオウ』『ツインギレード』

「あははは！貴方の力を見せて頂戴!!」

同時にツインギレードと彼女の大鎌が激突

そこでアナザーバーニングアギトで彼女を倒したのだが

「ふう……こんなヤバいのがゴロゴロいんのか……この世界の出入り口は蓋しとこ、帰る前に」

「……………うう……………」

「束と同じ声で…死なれたら目覚め悪いしな…つと」

『ジオウⅡ』

すると傷は元に戻り、目を開けた彼女は目をパチクリする

「え…傷が…貴方をしたの？」

「俺が時間を戻して治した」

「……は？……ねえ私……負けたの？」

「ああ俺が勝ったけど紙一重の勝負だったなお前は強いが、能力でゴリ押しなんていつか限界が来るぞ」

これ程の猛者が逢魔に加わってくれるなら頼りになると思うが、この世界には来ないように蓋をする以上は誘ってもなあと諦めるが

「そう私が…ねえ…貴方…ハルトと言ったかしら？」

「おう」

「私と子供作らない？」

「……………はい？」

「ふふふ……………そうと決まれば早速」

「いや今のはいい、は了承の意味じゃないから！…おつと俺はこの世界から離れないといけないから、このへ「なら私もついて行くわ」いやいや！てか何でいきなりそんな話に!?」

「強い男との間に子を作るのが、私のやりたいことなのよ」

お、おかしい先程とやりたいの意味合いが変わってきた…

「いやいや！俺は既に複数の女性と関係を持っているので、これ以上は「貴方、さつき王つて名乗ったわよね」…ひゃい」

「なら側室は何人いても構わないわよね？それこそ一人くらい増えても…」

「いやいや、これ以上増やしたら「私もついていくわね」……はい…」

「決まりね…じゃあ案内して貰うわよ旦那様」

んで彼女を連れ帰ったら、どうなったか？教えようか

「おいハルト、貴様が元の世界に帰る旅をしているのは知っている…実際にオレもお前の義父と義母には会いたいからな」

「だが…」

「行つた世界で新しいお嫁さんを連れて来るのは如何なものかと束さんは思うなあー
！」

「はあ…ハルト、君つて奴は何人増やせば…」

「ちよつと待て！何か誤解し「ええそうよ私は彼との間に子供が欲しいだけだから」おい話をややこしくするなアンテリリーネ!!」

「名前まで呼び合う仲だと…っ！」

「ダメだ、話が色々ややこしくなってきた」

「そうねえ…何で分かつてくれないのかしら？」

「何割かはお前のせいだと分かつてる？」

「知らないわ…それよりもどうすれば貴女達は納得するかしら？」

「決まっているだろう！戦え…そうすれば分かる！」

「凄くわかりやすく良いわあ！」

まさかのキャロル、東、千冬、錫音vsアンティリーネというルール無用の乱闘が発生したのは言うまでもない、流石の彼女も4vs1は分が悪く負けてしまったが

「取り敢えず合格だがハルトには後で別で話があるからそのつもりでいろ」

「わかりました…はあ……んで立てるかアンティリーネ？」

「ええ…流石、旦那様の妻達ね…全員強い…まさか同じ日に二度も負けるなんて…」

「言っておくけど逢魔には、まだ強い奴がいるからな喧嘩しても良いけど命のやりとりは厳禁だ、それは理解しておけ」

「そう…ふふ私、貴方についてきて正解だったわあ…まだまだ強くなれるのね私も」
「そっかい」

「宜しく頼むわね私の旦那様」

「……お、おう」

—————

とある惑星にて

「師匠……女心って難しいですね」

ボロボロになったハルトは師匠 葛葉紘汰に相談を持ちかけていた

「苦労してるんだな」

「ええ……あ、そう言えば師匠は舞さんとどうなんですか？」

「君の思うような関係じゃないよ俺達は」

「またまたご冗談を」

「それよりも君が黄金の果実に類似した力を得たとサガラから聞いたんだけど」

「あの蛇め……まあコウガネと同じ、俺も金メッキですよ……貴方と比較するなんて」

「そんな事ないさそれは君と中にいる彼等が頑張つて得た力だ、それはメッキなんかじゃないよ」

「師匠……ありがとうございます……あ、そうだ！良かったら俺の国に遊びに来てください！師匠なら大歓迎ですよ！何なら師匠の降臨の為に神殿も「いやそこまでしなくて良いから」わかりましたー！けどいつか遊びに来てくださいいね！」

師匠に悩みを相談したのであつた

—————

なーんてこともあつたが

「今日も平和だなあ…」

「明らかに平和ではない事件がありましたか!?!またオーマジオウと戦つたのですか!我が魔王!」

「おーよ…だが手も足も出なかつた…完敗だ最強アナザーライダーでも勝てなかつたよ、いやあ流石はオーマジオウだよね」

「それに逢魔に劍崎一真…仮面ライダー劍がいたのですか!?!」

「何か俺の中にあるアンデットの力に引かれたらしいよ、けど俺にもジョーカーの力もあるからバトルフアイトは無いってさ、そんな事より見て！サイン貰った!!」

「少しは危機感を抱いて下さい我が魔王！」

「大丈夫だよ士さんが複雑な顔してオーロラカーテンで送ってくれたから」

「……そりゃそうでしょうね」

何せ本編で一度殺されかけてるからなと答えるハルトにウオズは呆れながらも簡単に報告を始めた時の事だ、ドタバタと騒がしい音が執務室に響き渡ると

「バタ！と強く扉が開くとそこにはパヴァリア結社から来ている錬金術師がいたのである」

「何用だ貴様等、ここを何処だと心得る!?!」

「偽りの国王がいる部屋だろ？」

「何？」

「偽りの王か：カツコ良い響きだな：じゃなかったクーデターらしいねウオズ、ウルティマからも報告もあった、まあ可能性レベルだったけどさ」

「ほお流石は常葉ハルトだな」

「ここは俺の国だぜ？その前に一つ確認、これは君達のボスであるアダムさんやサンジェルマンさん達の意味なのだと受け取って良いのかな？」

「そうだ局長達は以前から逢魔：いやフロンティアを奪うことを考えていた、しかし広大な土地を開拓するには色々時間がかかるのでな」

「成る程、街を成長させたら奪うつもりだったと」

一から作るより奪う方が早いのは事実であるがやられる側になると腹が立つな色々

「その通り、それがまさか国を作るなんて思わなかったがな……」

「クローントルーパーで人足が足りると思ったのか」

「その通りだ……さてこれでお前の役目は終わりだ後は貴様を殺して乗っ取るだけだ……ああ安心しろキャロル・マールス・デインハイムや篠ノ之束達の安全は保証してやる……優秀だからな技術者としても女としてもな、お前は女の趣味は良いみたいだしな」

何人かが下品な笑いをするがハルトはヘラヘラしている

「ふーん……彼女達をねえ」

「既に街の主要施設は押さえてある、お前の負けだ降参した方が身のためだぞ」

「その言葉そっくりそのまま返してやるよ反乱者ども、画面見てみな」

「何？っ！」

リーダー格が慌てて通信機を見ると、そこに現れた映像にノイズが走ると街には今まで通りの日常が展開されていた

「ば、バカな！」

「さっき話したろ？ウルティマから報告受けたって…彼女が甘い備えなんてする訳ないじゃん」

【鎮圧完了、現在反乱分子を監獄に移送中】

「ハウンドよくやった」

ハルトは最近手に入れた通信機 コムリンクでハウンドに通信を入れると

【いえ兵士として当然の事をしたままです】

「情報ありとは言え被害0は大きいよ、ありがとう」

【勿体無いお言葉…ハルト様、今回のクーデターはどうやら結社側に不参加を決めている者もいるようですが、そちらの処分は】

「勾留後、無実とわかれば釈放…だが隔離はしておけ危険分子なのは変わりはないからな」

【了解しました、では私は残りの反乱分子を捕らえて参ります】

「無理すんなよ」

【では無茶はさせてもらいます、ハウンドアウト】

通信を切られたのでハルトは

「んで誰の国を乗っ取るって？」

「な、何故こうもあつさりと…」

「いやあまさか同盟結んだ理由が開拓して横取りの為だったとは驚いたよ、流石はサンジェルマン達だね…だけど」

【ハルト、鎮圧完了だ】

【こつちもだよお！】

【手応えなさすぎよ…つまらなかつたわ】

【あのねえアンティリーネ、私達レベルはそういないから】

【全く人の錬金術を真似しただけで勝てると思ってるのか…】

「流石だな皆」

【ああ、それとだ制御装置にこいつらが細工してるようだからすぐに解除させる】

「どんなの？」

【あの世界へ転移するようだな…しかもフロンティアを使って月を落とそうとするみたいだな】

「それは、すぐに解除してくれ…だが座標はロックしたままで消すのは裏切者に制裁を加えてからだ」

【わかった】

「さて…奥の手も尽きたがどうする？」

「こゝ、この化け物があ！」

リーダー格が武器を取り出そうとしたが

「遅い」

そう言うとうオズがマフラーを伸ばして全員を拘束した

「我が魔王を害なすなら敵です」

「凄いマフラー捌きだな、俺でなきや身落としちゃうね」

「ええ……これこそ仕事をサボって逃げようとする我が魔王を捕まえんが為に磨いた我が技です！」

「マジかよ……さて君達の話聞かせてもらうよ、大丈夫アナザークイズになって記憶を抜いたりなんてしないから」

そう言うとう周りは安堵したが

「んじゃ頼んだよ、ウルティマ」

「はい！んじゃあボクがたっぷりと情報を抜いておくね」

「ひ、ひい!!」

「一応注意しておくが殺すなよ」

「分かってるよ」

「ま、まってくれ…た、たすけて…」

「知ってるでしょ？俺は利敵行為は許さないってさ…連れてけ地獄を味合わせろ」

ウルティマが満面の笑みで連れてったのを見送るとハルトはウオズに

「鎮圧完了後、主だった奴を集めろ会議を開く」

「かしこまりました、今回のパヴァリア光明結社の対処は？」

「それを話し合うんだよ……今まで同盟相手に裏切られた事ないから……今後の方針に
関係する事だからな」

さてさて、これから始まるのは錬金術師達が神の力を手に入れようとするのを止める
奏者の物語

しかし彼等は間違えた

本来ならば存在しない筈の魔王達を呼び寄せてしまったのだから

ドギツイ交渉

事件解決後、逢魔の会議室では重い空気は流れていた

「まさかサンジェルマン達がね」

シヨックを受けている、ウオズやフィーニスなど最初期からいる古参組であるがキャラルは別にと言う感じだ

「まあ今の逢魔にはオレがいるから奴等はお役御免だろう？それにフロンティアの解析もほぼ完了している、乗っ取るなら良いタイミングだったろうさ」

自分がいるから用済みであると言わんばかりの態度であった。これは事実であり聡明な彼女のお陰でフロンティアの解析は進んでいった…まあだからこそ決起のタイミ

ングが早まったのかも知れないが…

「それに私達は彼方との関わりを断つてるし向こうとの関係維持などを無視した結果かも知れないね…まあ最初から乗っ取り目的だったかも知れないけど」

キャロルと錫音だけは事実を淡々と答えていたが

「ねえ、そんなに結社との繋がりがりって重要なのかしら？」

新参者のアンティリーネだけは分からないと言う顔をしていると

「知らない者もいるだろうから簡単に話すぞパヴァリア光明結社との関係は逢魔建国前からだ、俺、ウオズ、ジョウゲン、カゲン、フィーニスだけの魔王軍とは名ばかりの弱小サークル時代からの付き合いだったんだよ」

「そんな頃から…いやいや、そのメンバーで弱小サークルではないでしょう？」

「あの頃の俺達は今ほど強くなかったからな」

ハウンドはマジかという顔をしているがアンティリーネは、ふーんとだけ呟くと前の世界から持ってきたルビクキュー…あの立体6面パズルに目線を戻した

「何なら、この逢魔の前身とも言えるフロンティア奪取計画のスポンサー兼協力者でもあるー」

「へえ予想以上にズブズブな関係だったんだあ」

ウルティマも思った感想を言うとかレラも頷く

「そうだな…まあそうだったんだよ、あ…ウルティマ報告頼める？」

「はいー！えとねえ、あいつの記憶を見たけどさ、確かに結社の人が唆したみたいなんだけど誰かまでわからなかったよ」

「記憶操作されてたつてこと？」

「そーそー、ハルやボクが記憶から情報抜くの知ってるからの対策だねえ」

「やつかいだな…そいつの顔も見えなかつたんだよな？」

「何かノイズみたいなのが走ってたんだよねえ」

「それは厄介だな、それメモリーメモリでも同じ結果になる奴だ…こうなると不必要に変身した自分の浅慮が憎いな」

「キャロルの一件でもあつたが情報のアドバンテージがないのは辛いな」

「あ…因みに参加しなかつた面々はどうしたハウンド？」

「はっ！武装解除の上で監獄に入れています現在、事情聴取中です」

「念の為、監視続行、情報も出せるようなら引き出しといて、人質として使うから乱暴しないつもりで……んで今回の対応について皆の意見を聞きたいな各自自由に意見してくれ」

その一言で

「結社の奴が唆したなら決定ではないか！直ぐにでも手勢を率いて奴等に報復すべき！」

「自分も賛成です戦線布告と受け取れますならば戦うしかないかと！我等クローントルーパーの力を見せてやります陛下、是非出兵の許可を！」

「未然に防いだとは言っても何もしないのは弱腰と見られるな戦うべきだ」

そう立ちながら報復すべしと提案するカゲンとハウンド、カレラに対して

「オレは反対だ態々あの世界に戻ってまで奴らに報復する程、オレ達も暇じゃないだろ

う?」

「そうですわね報復の為だけの遠征なんて経費の無駄ですわ、見返りがあるとは思えませんし」

「俺的には、また奏者連中と絡むのもなあ」

キャロルとテストロツサ、ジヨウゲンは反対
そんな事よりも国内の事を考えようと言う

両者正しいと思うから判断に困るな

「ウオズとフィーニス達はどう思う?」

「私は我が魔王の意に従います」

「ぼ、僕も同じです!」

『俺達もだ相棒』

ウオズとフィーニスとアナザーライダー達は中立って感じか

「うーん……」

「因みにボクもハルに任せるよ、どっちでも面白そうだし」

今までのフィーネ、ネオタイムジャッカーと違い最初から敵対していたわけでは無い、寧ろ味方が敵になったのだ…それも有り対応に困るのだ

敵として見ていたら悩むこともなく報復しに行くところであるが

「はあ…どうしたら…」

そう言うと千冬が冷静に呟く

「全く…一度味方と見たら甘い対応になる貴様の悪癖だな」

「だからこそキャロリンの一件があつたとも言えるけどねえ」

「ま、まあそこがお前の良い所なのだがな…だからオレは…お前が…」

「あのさあ…会議の場で惚気ないでよ…意見は出揃つたが結局決めるのは君だハルト、どうする?」

「私達はお前に従うだけだからな」

周りの目が俺に集まる…よし!

「俺がアダムさんに会いに行つて事の次第を確認する!」

その一言に会議室は戦慄した

「待て待て……一人でか！それは危険すぎる！」

「その方が向こうも油断してペラペラ喋ってくれるかもよ？……それに大丈夫だって危なくなったら変身するからさ、何せ俺には相棒達がいるし！」

「先程己の浅慮を憎んでませんでしたか!？」

「多分何とかなる！」

「今までのようにノリと勢いで何とかなる相手じゃないんだ！」

「そうだ敵は今までと違うのだぞハルト！対策されているかも知れないのに単騎でなど反対だ！」

「その通りです我等もついていきます！このような事態の為の親衛隊でありましょう！是非お側に！」

「分かってる流石の俺も護衛無しで行こうとは思ってないよ、今回の俺は逢魔王国の王として行くんだからさ…：相応の手製は連れていくよ」

「魔王ちゃん…：立派になって…：っ！」

「【魔王なんてならない！】って言っていたあの頃が懐かしい！」

「祝え！お前達!!」

「「「うおおおおお!!」」」

「はあ…：これだから古参組は…：ハウンド、親衛隊と精兵部隊のクローンコマンドー達を率いて現地で待機、俺の直衛にはウオズ、カゲン、ジョウゲン、フィーニス頼んだよ」

「お任せを」

「つしやあ！久しぶりの出番だあ！」

「心踊る！」

「が、頑張ります！」

「テストタロツサ、カレラ、ウルティマは逢魔の留守を任せる」

「ええ、折角暴れられると思ったのにい」

「安心しろ多分だけど出番はある！多分ドギツイ交渉になるから！」

「なら良いけど…」

「キャロル達は「ついていくに決まっているだろう」言うと思ったよ、アンティリーネ」

「何？」

「お前にも働いて貰うよ」

「報酬は？」

「これでどうだ？」

とハルトが渡したものを見てアンティリーネは笑顔で承諾したのであった

—————

んで結果として、あの世界に帰る事になったので

「はあ…彼処に帰るのいやだあ」

自室で弱音を吐いている

「まあ気持ち分かんんでもないな」

キャロルに膝枕されながらである、因みに部屋にいる誰かは日によつて変わる…その辺は彼女達が仲良く話し合っているらしいな

「あんなキメ顔で、この世界に戻らないとか言つときながら帰るとかカツコ悪いじゃん」
「確かにな…オレも長い時を生きたがあんなドヤ顔を見たのは中々ないぞ、しかし国の代表としても無視できない事でもあるだろう？なら今は個人的な感情は別にしろ」

「じゃあ…明日から暫く忙しくなるからさ…今日は…キャロルに甘えてもいいかな？」

「……………うむ」

ハルトは膝枕から離れると顔が赤くなつてるキャロルを肩に手を置き互いに向かい合う。顔を近づけていき影が重なるうとした時である

「ハルト様宜しいでしょう！」

「っ！」

「少し待て！」

駆け出したトルーパーがノックしながらの声を聞いて赤面しながら離れた2人、少し残念と思いながら扉を開く

「な、何だトルーパー！」

「は！ポータルの再開通を確認！直ぐにでも移動可能です！」

「よし！遠征隊は準備開始だ明朝に立つぞ！」

「サーイエッサー！」

トルーパーが走ったのを確認したが、そんな空気ではなくなってしまったので

「はあ……キャロル」

「仕方ないな……ほら」

「……ん」

そのままハルトはキャロルを抱き枕のように抱きしめると眠りに落ちたのであった

翌日

「いいかお前達、今回の作戦はあくまで対話であり報復はその次になる対話で解決すれば良いのだが……各員血気に駆られた行動は慎むように分かったか！」

「サーイエッサー！」

「ブーメランって知ってる魔王ちゃん？」

「ならば…もし俺が今回短気に駆られた場合スタンモードで俺を撃つてよし！これは軍法会議にかけないものとする！ウルティマ、カレラの2人は記憶と記録しておけ」

「はーい！」「承知した！」

「よし何か間違えてると思ったら遠慮なく俺を撃てハウンド！」

「サーイエツサー!!」

「いや誰もそこまでやれとは言っていないよ！それに見てよヘルメットだから分からないけど皆困惑してるよ！上官撃てとか皆ストレスで倒れるよ!？」

「何を言ってるジョウゲン、アレを見る」

「アレ？」

「お前達！いつもの訓練を思い出せ！陛下を撃つことは訓練でやっていただろう！今こそ成果を見せる時だ！」

「ああそうだ！陛下をスタンモードで撃つなんざいつものことじゃねえか！」

「逃げ隠れもしない陛下に当てるなんて完全武装のブリキ野郎に弾当てるより簡単だぜ
！」

「その通りだ行くぞ野郎ども！親衛隊の初陣だあ！！」

「「「うおおおお！！」」」

「見るジョウゲン、これが俺が鍛えた親衛隊よ面構えが違うだろ？」

「何処が!?!…あのさ!魔王ちゃんの親衛隊って本当に守る意味の親衛隊だよ!魔王ちゃん暗殺部隊じゃないよね!」

「何言ってるんだジヨウゲン、アレこそが俺の親衛隊だ!最高だぜお前達!!行くぞオラア
!」

「!!!!!!」
「うおおおおお!!」
「!!!!!!」

「あの魔王様…今回は平和的な対談なのでは!?!」

「こ、これがウオズちゃんの言ってた初代親衛隊?…血の気多すぎない?」

「流石は災厄の未来では魔王の鉄槌の二つ名を得ている武装集団…恐ろしいですね、そう言えばカゲンは?…さつきまでこちらにいたような…」

「ウオズちゃん、あっち」

「え？………はあ………」

「うおおおおお！」

何故かクロイントルーパーと混ざって叫んでいるカゲンを見てフイーニスも二度見しながらツツコミを入れた

「か、カゲン先輩!？」

「違和感無かったね…何普通に混ざってんのさ」

「はあ…落ち着きなさいカゲン！」

「………はっ！こ、これがハルト様のカリスマ!？」

「いやどちらかと言えばストレスでは？最近デスクワークばかりでしたからね」

「そ、そのようなことは断じてない！」

「なら良いのですがね、行きますよ我が魔王」

「皆、ガンシップに乗ったか!!機長!発進!」

「イエツサー!乗り物酔いしないでくださいよ陛下!」

「おいおい安心しろ余裕だ、何なら曲芸飛行しても良いよ機長…いやモホーク!」

「お、いいですね…では…ガンシップ【ドラゴンフライ】に乗船のトルーパー、これよりモホーク機長は陛下の許可を得たので曲芸飛行をしながら目的地に向かいます、全員手すりに捕まってなあ!」

「「「「イエエエエエイ!!」」」」

『しかし見事にハルトに毒されてるな』

『まあ俺達もだけどな…しっかし。パヴァリアの奴等とか…』

『関係ないさ。俺達は相棒についていっただけ…だろ？』

『違いねえな…取り逢えず、お前達何かに捕まれ!!』

「発進！」

その言葉を合図にハルト麾下の軍勢

ガンシップ5（二機はウオーカー搭載）

はポータルを潜り再び戦姫の世界に舞い戻るのであった

—————

その頃

「何考えているのですか局長！」

パヴァリア光明結社にある一室で、局長 アダムと幹部であるサンジェルマン、カリオストロ、プレラーティの3人が憤りながら詰め寄っていた

「大丈夫、きちんと考えているよ逢魔の件だね」

「報告を聞きました、何故逢魔に仕掛けたのですか！彼等とは同盟関係の筈です！」

「そうよ！ハルトを利用すれば計画だつて上手くいく可能性があるのい！」

「最悪繋がりを喧伝して抑止力となったかも知れないワケだ！」

「それに」「何より…」「ええ…」

「「あの料理が食べられなくなってしまうたじゃないか（の）（わけだ）！！」「」

「いやそれで良いのかい？組織の幹部として」

「し、しかし個人的な感情を抜きにしてもハルト達は信頼のおける人物です」

「それと同時に1番敵に回したく無いワケだ」

「そうよ！フィーネが敵対してどうなったか忘れたの!？」

あの時、カデインギルがアナザー1号に破壊されたシーンは全員、映画のようだと現実逃避し

「そうです！キャロルとの戦いで周囲にどれだけ被害が出たかお忘れですか!？」

あの時の些細な喧嘩で街の一角が消し飛び、尚且つ彼が保有する軍勢の恐ろしさを見ただばかりだと言うのに

「覚えているよ、はつきりとね」

「なら何故！」

「フロンティアが必要なんだ、僕の計画にね、だから来て貰うんだ彼に」

「あなたって人は「失礼します！謎の飛行船団が拠点の周囲を曲芸飛行しています！」
…」

「ハルトね」「魔王が来たわけだ」

「貴女達、奇行に走るだけで彼と判断するのは早計よもう少し冷静に「飛行機には伝道師様が変身されるアナザージオウのノースアートが施されている模様！」確定ね…その飛行機には攻撃しないで着地させなさい絶対によ！」

「は、はっ！」

—————

そしてガンシップが着陸した後 ハルトは

「楽しかったぜモホーク!…さてと」

グツジョブとするとモホークも敬礼で応えるのを見たハルトはホットラインを起動して電話の相手に北緯と東経を伝えると会話を終わらせた

「行くぞ、お前等」

「ま、魔王ちゃん……」

「お待ちを…」

「誰か…酔い止めを…うつぷ…」

「え、衛生兵!!」

「まったく情けないですね貴方達、あの程度で乗り物酔いするとは」(実を言えばアナザーギングの力で重力操作してなければ同じようになっていたとは絶対に言えませんね)

「はあ…メデイック、連中に酔い止めを処方してやってくれウオズ介抱任せた、ズルした分は働け」

「バレてましたか…我が魔王の仰せのままに」

「イエッサー、陛下はどちらに？」

「当初の目的を果たしに行く…丁度迎えも来たみたいだしな」

「お久しぶりです伝道師様！」

「おう錬金術師、アダムかサンジェルマンいるか？ちよつと連中と話したい事があつてな」

「勿論です！どうぞ此方へ！」

「おう、お前らは外で待つてろ…ウォーカー展開しておけ、俺が短気を起こしたら分かっているな」

「イエッサー！遠慮なく砲撃させてもらいます」

「結構」

「う、撃つのはお辞め下さい！」

「安心しろよ平和的に話し合いに来ただけだから何もしねえよ…今はな」

『出たぞ！相棒の十八番の棍棒外交だ』

『いやあ！安心するなコレ見ると』

「つせえ：つか彼奴等が行くの止めない段階で決定だろうさドギツイ交渉なのはよ」

『ま、外交役なら他にも適任がいるからな』

『大將が行くことに意味があんだよ』

だなど呟くと案内された先にはいつもの結社のメンツがいた

「久しぶりですね皆さん」

「魔王、久しぶりだね」

「こつちもですよ」

「久しぶりねハルト、今日はどう言った用件で？」

「いやですねサンジェルマンさん、其方が派遣した方が何を思ったか逢魔でクーデターを起こしたんですよ！そしたら局長やサンジェルマンさんの命令って言うてたんで、この是非を確かめにね」

その言葉にサンジェルマンは頭を働かせる

「これはチャンスよ、向こうの独断って事にして賠償をすればきつと付き合的に今回は見逃してくれる…彼自身身内には甘い男よ…なら付け入る隙はある」

と話そうとした途端にだ

「フロンティアを奪えといったのは、僕の指示だよ過ぎたものだからね君には」

「へえ…」

「局長!?!」

カリオストロとプレラーティが何してんだ！と頭を抱えサンジェルマンは嘘でしよつて顔をした

「僕の物なんだ、かつての先史文明の遺産はね使う資格は僕にだけある、君と違ってね」

「それがどう言う意味か分かってんのか？」

「勿論分かっているともさ…それに僕のお陰だよ、フロンティアを手に入れたのはね」

「そだな…けど俺と敵対したバカどもがどうなったか位は聞いてんじやねえのか？」

「戦わないよ勝算がないならね」

「へえ…俺と…それは俺達、逢魔王国と本気で戦争するつて意味で捉えて良いよなあ？」

敬語が外れた段階でそうなると決まっていたかも知れない

「そう言ってるんだけどね最初から…それに一つ訂正しよう」

両者の覇気が中間地点で激突し当たりの壁や窓に亀裂が入り始めるとハルトは怒りの形相のまま右脚を高く振り上げてアダムの机を破壊しながら睨みつけた

「返してもらうんだよフロンティアを君達からね…さて用済みの役者…偽りの王には退場願おうか」

「用済みはテメエだ老害、それと俺達の強さは本物なんだよ…そう言う事なら次顔合わせた時は敵だ、今回は付き合いのよしみで見逃してやるから感謝しな」

「いや、帰る事は出来ないよ君と部下はね、包囲してあるよ僕の手製がね」

「そりや残念だなあ古臭え脳みそに一つ教えてやるよ…俺の親衛隊は普通じゃねえ誰に従ってると思ってるんだ？」

それと同時に青い閃光が部屋に当たり爆ぜたのである

「クリア、どうしますコマンダー…陛下はかなりご立腹ですな」

「そのようだ、コマンド分隊が各々潜入して情報を抜き出してるようだが…これは…」

ハウンドに尋ねるトルーパー達の周りにはスタンモードで気絶させられている、錬金術師達がいた彼等は攻撃してきたのだが、トルーパー達の連携の前に潰されたのである。錬金術なる技を持つのが所詮は個の力でありキャロルという錬金術師を知る親衛隊からすれば彼等の錬金術はただの手品でしかない。

また所詮は組織的な行動を取れない素人

そんな連中に人生のほぼ全てを戦闘訓練に割いた我等が負ける筈がないのだ

そして『優秀な兵士は命令に従う』ならば

「陛下が短気を起こされたようだ我等で止めるぞ撤収用意！…おい砲兵、彼処を撃て！」

すると待機してATTUウォーカーの砲身がハルトのいる部屋に向けられたのであるが

「「「ええええええ!!」」」

乗り物酔いから回復した4人が躊躇いなく発砲した姿に驚いたのは言うまでもない、唯一冷静だったウオズだが空いた口が塞がらなかった

「……………」

「ご安心を陛下なら、アレくらいの一撃で死ぬ事はありませんよ」

「いや分かっていますが本気で撃つ奴がいますか！」

その頃 部屋の中は瓦礫の山となっていたが

「ケホ…ケホ…無事かしら？」

「こっちわね〜プレラーティも無事よ」

「大丈夫なワケだサンジェルマン…しかし脅しではなく撃ってくる辺り、ハルトと部下は怖い訳だ」

「基地を爆撃しないだけ優しいわよねえ〜」

「話はそれまでよ2人とも仲間を集めて撤収するわよ、このままだと外の手製まで此処にくる逃げるのも難しくなるわ」

「テレポートジエムを使えば？」

「アレはキャロルの技術よ彼女が逢魔側である以上、対策を取られている可能性があるわ」

「わかったワケだ、それで局長はどうする？」

「ハルトの足止めを頼みましょうか」

「そうね」「わかったワケだ」

と3人が逃げ出したと同時に2人は瓦礫の中から出る

「撃ったね本当に…イカれてるね君の部下は」

「そりやどうも、じゃなかったら俺の部下になんざなれねえよ！」

『ジオウ』

『鎧武』『ビルド』

『MIXING…アナザーツインスラッシュ!!』

「らあ！」

オレンジ型のエネルギー球がグラフの運動に従い最良の質量を持って襲いかかるが、アダムはサッカーボールのように蹴り返すがアナザージオウの頬を掠めるだけで終わる筈だったが

「陛下！」

ガンシップに乗っているハウンドの伸ばす手を見て

「わーってるよ！」

アナザージオウは高く跳躍、ハウンドの手を掴むとそのまま乗船しガンシップは加速、全部隊無傷で退却したのである

「逃げられたね…サンジェルマン」

「聞け、お前等」

別の場所にいたアダムとハルトは同じ言葉を口にしていた

「開戦だ」

次回

「久しぶりだなハルト！」

「くたばれ、タヌキ野郎」

「お久しぶりですハルトさん」

「久しぶりだなエルフナイン、元気そうで良かった休めてるんだな」

「はい！皆さんには良くしてもらっています」

「そりや良かった、もしブラック労働させられてたら……政府の人間をターゲットにしたゲゲルをさせてた所だったよ」

「危ねえ！マジでありがとう司令!!てか俺とエルフナインで扱い違いすぎるだろ！」

「義妹と貴様を同列で考えるか愚か者め、さっさと要件言つてアナザータイクーンを返

しやがれ」

「理不尽!?! んじゃ要件だハルト!!」

「僕達と協力してサンジェルマンさん達を止めてくれませんか!」

「断る!!」

呉越同舟

呉越同舟

前回 パヴァリア光明結社との同盟を破棄し宣戦布告となったハルト達 逢魔王国陣営は現在 少し離れた場所にある廃屋を拠点にしていた

実は戦車兼兵員輸送車のATTEウォーカー内部にて

「つー訳で結社とは戦闘状態になったからハウンド、逢魔から兵隊呼んどいてくれ」

「そう仰ると思ひまして一個大隊待機中、いつでも出撃可能です」

「流石だなハウンド、皆今日はゆっくり休め明日から忙しくなるぞ」

「かしこまりました、ハルト様のご予定は？」

「明日、現地協力者と会ってくる」

「この世界にいるのですか？」

「ああ彼ですか」

「話しておくべきだな」

「一応は現地協力者ですからね…本当に一応ですが」

「義妹殿も元気にしてますかね？」

「キャロルも来るか、彼奴を呼んだら来ると思うぞ」

「そうだな久しぶりに会うとするか、オレの助手とモルモットに」

その頃 SONGsでは ハルトが事前に渡した座標に向かってみると既にサン
ジェルマン達は引き払っており残るのは戦闘後の瓦礫の山である

「これは一体」

「誰もいないみたいだけど」

「さっきまでドンパチしてたみてえだな」

「これ十中八九、ハルトですよ…あいつ今度は何したんだ…けど、この爆発はアナザーラ
イダーだと出来ない…：…なんでこうなってんだ？」

「何!?!魔王達はこの世界に来ないのではなさったのか!?!」

「帰らざるを得ない理由があるんだろ？なあ…ん？もしもし…お、噂をすればって奴だ

な、丁度お前の話をしてた所だよハルト」

ナツキが電話を出ると周りは固まる

「それでこの瓦礫の山は何だよ……うん……うん……はあ!?! パヴァリア光明結社と決別して戦闘になったあ!?!」

「っ！何だと!!」

パヴァリア光明結社、先日から自分達と事を構えていた錬金術師の一团でありキャラルのメダル技術を使ってくる厄介な相手である、

キャラルとの関係から真逆と思っていたがやはりハルトが一枚噛んでいたとは…と戦慄している奏者達で合ったが状況はどうやら想定とは異なるようである

ただナツキからしたら、あり得ない事であったパヴァリア光明結社の蜜月を知るからこそ別の驚きだ

「何があつて……わかつた、その辺の話も会つて話そうぜ……え？座標？……これか……今受け取つたよ、じゃあ明日な」

と電話を切つた後

「翼さん、今回の件……かーなーりの面倒事です」

「話から察してはいるが何があつたのだ？」

「少し長くなるんで、此処から撤退してから話します……誰が盗み聞きしてるか分かつたものじゃない」

場面は変わり潜水艦内部にて、ナツキは全員にハルトから聞いたことを報告した

「結社が彼の領土でクーデターだとお！」

「ええしかもフロンティア事変から計画されてたみたいですね」

「ねえ…クーデターって何？」

「響先輩！きつと新しいお菓子デスよ！」

「違うよ切ちゃん、力で政治を変えようとする事だよ」

「ハルトの話だと、あの座標には結社の拠点があつたみたいですね…トップ会談前に情報を流すなんて強かになつたな…あわゆくば俺達に襲わせる気だつたのか」

「なるほど…それで明日、彼は話し合いの場を設けたいと？」

「正確に言えば事後報告みたいな感じでしょうね…あとは今まで通り俺達に関わるなつて釘を刺す感じですね、多分…『これは逢魔と結社の戦争だから首突つ込むな』とか」

「だが我々も結社と事を構えている…共闘とまで行かなくても敵対はしたくないな」

逢魔、SONGS、パヴァリア光明結社

今までは何とか戦えているが逢魔が介入するとなれば話が変わるのだ

「勿論此方の要望は伝えますけど、あのハルトですよ素直に聞き入れますかね?」

「聴かないと思うなあ」

「それに今までの事がありますが…キャロルも一緒にいます彼女経由なら聞いてくれるかも知れませんが…」

「キャロルちゃんもいるの!」

「はい…僕の端末にも帰ってきたってメールが来ました…明日の会談、ナツキさん僕もついていっても大丈夫ですか?」

「断る訳ないだろう?それに連れてかなきゃハルトとキャロルに半殺しにされる」

「僕もそう思います」

「私も行っていいかな！」

「辞めた方が良くぞ立花」

「そうだな奴等と目的は同じでも今までの事で共闘関係を結ぶのは」

「大丈夫ですよ、話せば分かり合えます！」

「言うと思った…」

「なら私も行くわ」

「マリア…」

「不幸中の幸いなのか彼は何故か私に悪感情は余り無いみたいだから…最初は思い切り攻撃されたけどね」

「あ、そう言えば…」

「マリアに貸しがあるとか言ってたデス！」

「危険だよマリア姉さん」

「それにLINKERの数も余りない以上、戦闘になったら」

「問題ないわ」

「だったらコレを念の為に…ハルトさんなら大丈夫だと思えますが結社が仕掛けた時に自衛は必要ですし」

とエルフナインが渡したケースの中身を見て驚いた

「これってマツハドライバー？と…鍵かしら？」

「はい、チフォージュ・シャトーの残骸にあったマツハドライバーのスペアパーツを組み合わせて何とか実用化させました…その鍵はトライドロンキーと言いましてドライバーに疑似認証させることで変身を可能にします…中であつたデータも破損してたので変身した姿は大分つきはぎかもしれません」

「ありがとうエルフナイン」

「けど僕の技術では一回の変身にしか耐えられません…それと長時間の戦闘は無理ですから…無理をしないでください」

「分かったわ」

「では行動開始だ！」

「了解!!」

一方その頃 ハルト達はと言うと待ち合わせに指定した場所で待機していたのだが

「なあお前等、何でそんな決めポーズ取ってんの？」

中央に座るハルトは別にして両隣にいるウオズ達はまるでヒーローの全員集合感を出すかのような決めポーズをとっていたのである

「久しぶりの出番ですので目立とうと思ひまして…祝え！」

「そうだね最近影薄かったからさ！」

「我等、魔王四天王！」

「弱小サークル時代から魔王様を支えた4人とは我等の事です!」

「四天王とか辞めて!!つかお前達にそんな決め決めなポーズを取りたがるか思わなかつたよ!!」

「やはりそうなるよな、分かるぞハルト…オレもオートスコアラの連中が決め決めなポーズをしているのを見て凹んだのをよく覚えている…アレがオレの潜在意識にあると思うと…特にガリイとかな」

「キャロルのは別の意味でダメージが入ってるな」

ハルトが思わず普通にツツコミを入れるほどの光景に頭を抱えそうになっていると

「ハルト久しぶり!」

「くたばれタヌキ野郎」

「辛辣う!?! どうしたよ随分不機嫌じゃないか?」

「帰る気なかった場所に帰ってきたのと、お前がエルフナイン以外の余計なおマケをゾロゾロ連れてなければな」

そう言うハルトの目に映るのは響、マリア、未来であるが響は走り出すなり

「キャロルちゃん久しぶりー!」

「は、離せ!! オレに抱きつくくな!」

「いいじゃん、あの時すぐに帰っちゃうんだもん!」

「前にも話したがオレはだな!」

響が笑顔でキャロルを抱きしめている

それを見て

「響?」「キャロル?」

何だろう…凄いいやいやする、いや別にそう言う意味の行為ではないとは分かっているのだが何か嫌だ…キャロル…また離れちゃうの? いなくなっちゃうの?

「……………」ギョツ

軽く自分を抱きしめるように堪えるとフラッシュバックする忌むべき記憶

【ごめんね、君と仲良くすると私がいじめられるんだ…だからハルカと仲良くするよ】

「俺からキャロルや皆を奪うな…」

呟くように、しかし怨嗟が込められた声音は

「ま、魔王ちゃん？」

「我が魔王、落ち着いて下さい」

ウオズ達にしか聴こえてなかった

「……………」

「……………」

心中別としてハルトと未来は心は一つのように絶対零度を思わせる瞳でオーラを放っている。ウオズとマリアが止めに入る。

「我が魔王」「未来…」

そこで一息つくと同時に

「おい」「響」

「キャロル（ちゃん）と近いな（ね）離れろ（ようか）？」

「は、はいいい！」

響は慌ててキャロルを離すと

「ふう……びつくりした……助かったぞハル……ト？」

「そうか？以外と満更でもなさそうだったなキャロル？」

「ちよつと待て一部始終見ていただろう！何故そうなる！」

「いいよ、キャロルがそつちに行きたいとか思ってるなら行けば？俺はもう止めないし助けないから」

「臍を曲げるな！」

「曲げてない！」

「はえんお前がそうなると面倒なんだまつたく安心しろ…お前はオレのものでオレはお前のものだ離れるつもりなんてないさ、地獄に落ちても一緒にいてやる…約束だ」

「……悪かったキャロル、少し妬いた」

「構わんさ、まあ少しは自重をしてくれよ」

「おう」

と笑い始めたハルトを見てナツキが遠い目をしながら

「そう言うのは家でやれよハルト」

「何だこれでも抑えているぞ？家だともっと過激だ」

「そうだな…夜など特にな」

「一言余計なんだよ！」

「よ、夜ですか！／＼／＼／＼キャロル！詳しく教えてください！！」

「良いだろう、その話はホテルで「エルフナイン」の前で刺激の強い事言わないで貰えます!?てかエルフナインに大人モードつけた理由って何ですか！」

「それは貴様と大人の階段を登「ストレート過ぎだ！」…まあアイツの気持ちを汲んでやれ」

「大変だったんですよ！皆が離れた後、大人モードになったエルフナインに押し倒されて…そのまま…じゃなかった…サンジエルマンさん達と敵対って本当かよ！」

「強引だな…まあ冗談でも言わねえよ、第一お前なら分かるだろう　俺が約定を違えてまで来た意味を」

「……………本当なんだな」

「ああ証拠もある…んで本題なんだが「逢魔と結社の戦争に介入するな？」正解だ流石よくわかってるじゃないか」

「それは断る、こつちも結社の連中と交戦中なんだ」

「へー」

「いや興味持てよ！」

「いや魔王ちゃんからしたら、どうでも良いんだよねえ」

「感覚がカブトとクワガタの相撲見るのと同じですから」

「精々戦つて結社を消耗させろ」

「勝つなんて期待してませんから」

「ジヨウゲンさん達も辛辣だな！」

「そんな事より久しぶりだなエルフナイン、元氣そうで良かったししっかり休めてるか？
もしブラック労働させられてたら政府の人間をターゲットにしたゲゲルをさせていた
所だ」

「はい！皆さんに良くしてもらってます！」

「そうかそれはよかった」

「やっぱ一番危険なお前だわハルト！」

「いやあそれ程でもおろ」

「褒めてねえ！」

「それでだナツキ、今日お前を呼んだのは他でもない」

「……………何だ？」

ナツキに手を伸ばして一言

「アナザータイクーンウォッチを返せ」

「へ？」

「この間の事件ではアナザータイクーンの意味を尊重していたが…：それも言ってもらえなくなっただ」

「どうしたんだよ?」

「アダムは強い、まあレジエンドライダー皆様と比較して一那由多にも及ばないがな、そもそも比較するのも烏滸がましい：そういえばアダムとメガヘクスって声似てるな：これは俺の混乱を狙ってる孔明の罠か?」

「魔王でも手強いと思う結社のボスか」

「俺は万全を期したいのは正解、それに今のお前じゃアナザータイクーンの力を完全には引き出せない」

「そんな事「分かるさ」な、何でだよ!」

「お前やアナザーライダーが弱い訳じゃない問題なのは俺みたいに連中への異常な親和性や完全な精神汚染耐性を持つような例外を除いて、必ず発生する使用回数に応じて蓄積する精神汚染から来る使用者の劣化だ」

ハルトも後に知ったが、トーマのようにある程度の耐性があっても使い続けていくと副作用に襲われてしまうのだと言う

「そんな事あるの!?!」

「そうだよ、記号が摩耗するって意味なら草加雅人と同じだが…それにお前は耐性持ちが壊れた実例を知っているはずだけど?」

「っ!!」

思い出させるのはハルトの妹 ハルカの姿である最初こそ制御しているようであったが使用し続けた弊害か最後は彼女もジオウ本編のアナザーライダー変身者のように暴走していた

「アナザータイクーンの力を何度使ったか知らないが定期的に除染しないとハルカの二の舞だ、今回の展開的にそれは避けたい」

「俺が……」

「ま、純粹に俺の方が使い熟せるって理由でもあるんだけどね」

「……………だけど」

ナツキはアナザータイクーンウオッチを見る

「除染が終わるまでの変わりにだ使え」

ハルトが投げ渡したアナザーウオッチを見てナツキは驚いた

「あ、アナザーゲイツウオッチ!？」

かつてトーマが使い俺達を追い込んだ力、それは捕虜にした彼の中から取り除かれウオッチとなったがハルトの手元ではうんともすんとも反応しない唯一のアナザーである

「安心しな精神汚染や暴走しないようにセーフティーは設けてある、トーマみたいにはならない……ま、あいつの場合はネオタイムジャッカーの傀儡だったからなあ……目的からして利用されてたみたいだな同情はしないけど」

「ならアナザータイクーンに今すぐにセーフティーをかけてほしいな……けど何で俺にゲイツ?」

「セーフティー作成には時間がかかんだよ……あと俺にアナザーゲイツは使えないから」

「え!そんな理由!?!」

「もう一つあるが、それは秘密だよ……しかし欲しがりだなりバイブもつけてやるよ副作
用で倒れてろ!」

「つと……いや嬉しいけど……って俺にリバイブになって血反吐吐けと?」

するとアナザーゲイツウオッチが光り始める

「おーアナザーゲイツに認められたみたいだね、おめつとさん」

「何これ！頭の中に声が聞こえるんだけど！」

「大丈夫、すぐに慣れる」

「なあハルト、真面目に答えてほしい……何で今更俺達を呼んだ」

「何？」

「今のお前達には万人単位のクロントルーパー……世界最強の軍隊があるんだろ？なら
結社なんて一息に潰せるはず……何で俺たちに一声かけた」

「ついでトルーパー達を……ああ何処ぞの周回で見たのか……厄介だな、その力」

「そりやどうも……何か訳ありでトルーパーを全軍動員出来ないんだろ？だから数を絞っ

てきた…俺達に声をかけたのは、その戦力差を埋める為…違う?」

「貴様、黙って聞いていれば!魔王様の手にかかれば結社の奴等など!!」

「落ち着けフィーニス!」

暴れ出す2人を制したハルトは淡々とした口調で話す

「そうだよ俺は大事な家族が戦いで傷つくのを見たくない、だからお前達が戦って疲弊させろアダム倒す所までは期待してねえ…フィーニスが言ってたなコレ」

ハルトからすれば幹部陣に対して報復出来れば良いのでその他大勢の構成員は眼中にないので好きにしろと伝える

「雑魚でも倒してろ、アダムや幹部陣は俺が倒す」

「そこはオレ達で倒すだ…ハルト」

「うん…俺達で倒す」

「言い直した！」

「そんな訳だ邪魔するな…さて脱線したがナツキ、アナザータイクーンウォッチを返せ
除染してないアナザーウォッチを持ち続けるのは危険だ」

「……………おう」

「んで、お前達は何用だ」

「え？」

「俺はナツキとエルフナインしか呼んでないんだが」

「お、お願いです正式に私たちと協力してくれませんか？」

「断る、なあ知ってるか？同盟や協力とは対等以上の関係で成立する…お前達が一度でも俺達と並び立てた事があるか？」

「そ、それは……」

「一番危険なのは敵より無能な味方だ、お前達の上など信じられるか」

突き離すように言うとエルフナインが

「あ、あのキャロル……その……」

「なんだ言ってみろエルフナイン」

「linkerの研究を手伝って下さい」

「ん？ああ……あの薬か何故だ？」

「実は…マリアさん達のlinkerが底をつけて4人は戦えないんです、僕も研究してるのですが上手くいかなくて…キャロルなら何かわかるんじゃないかと…」

「なんだと…貴様…それでもオレの助手か！linker程度の薬品を量産出来ないとは嘆かわしい!!」

「ひう！」

「程度つて貴女、それは言い過ぎよエルフラインに謝りなさい！」

「謝罪をする理由はない！あんな薬を作る暇があれば「変身一発！」でも発明してライダーになれる奴を増やせ!!あの司令が変身すれば解決だろうが！」

「そつちい！あの薬のデメリット知ってて言ってるの？コスパ最悪だぜ変身一発は!？」

「しかし…戦力がないか…成る程な…はあ（ハルト、アイツらと一時的に手を組むのは

「どうだ？」

「えー！」

「ええ…」

驚く響達と対象的に露骨に嫌そうな顔をするハルトを見てキャロルは諭すように話しかける

「考えてみる戦力が低下した連中など当て馬にもならん…せめて雑魚を倒せる基準まで引き上げてやろうではないか、そうしたら馬車馬のように働かせれば良い」

「なら俺たちだけで戦うだけだ」

「それだと今までと同じだ、コイツらが邪魔してくるぞ」

「一緒に倒せば良い」

「この脳筋が！その足りない頭を使って考えろ！！千冬や錫音に言われているだろう！」

「今までもそうしてきたから大丈夫！」

「それで困っていたのだろうが学習しろ！」

「……………はっ！だから俺はいつも邪魔ばかりされてたのか！」

「今頃、気づいたのかこの大馬鹿者お！」

「流石…キャロルは賢いな」

「貴様がアホなだけだあ！」

とやんややんや騒いでいるのを見て

「さ、流石はキャロル嬢…外交モードの我が魔王に恐れずにツツコミを入れる姿…伊達に妃と言われてませんね」

「そうだね…いやあすごいや」

「うむ！」

そしてキャロルからの説得によりハルトは苦虫を噛み潰したような顔をして

「という訳だ利用できるなら利用し尽くしてやれ…お前もいい加減、人を使うことを覚えろ自分だけで何でも解決を図ろうとするな」

「ま、まあキャロルがそこまで言うなら…お前達がどうしてもと言うなら考えないでもないか」

「どうしてもお願いします！」

ナツキの迷いのない返答にハルトが呆れたような顔をするが

「キャロル！」

エルフナインの喜びに満ちた顔を見て

「貸し一つだ馬鹿者…はあ疲れた…」

「本当ですか！なら「だが貴様等をーミクロンも信用はせんあくまで利害関係の一致だー！」それでもですよ宜しくお願いしますね！」

「あと立花響…：…さつき無許可で彼女に触れたな…許さん!!こいアナザーブラツ…（B LACKSUNのBGM）」

と話していたら背後から現れた光弾を浴びてハルトは気絶した

「ハルト!?!」

「陛下、不可侵条約を結んだのに短気を起こさないで下さい」

「ツツコミでブラスターを撃つなんて過激な奴……何者！」

「私はハウンド、逢魔王国軍総司令官兼王族親衛隊（ロイヤルガード）隊長……まあ王国軍のトップと見てももらえれば大丈夫かと」

「この人が……って凄い自然にハルトを背後から撃ちましたね兵士としてそれはどうなのよ……」

「慣れました、と言うより1日一回撃たないとダメなレベルになりそうで……はは……優秀な兵士は命令に従う？その命令が間違っていたら？私はどうしたら……そうだ陛下を撃てば解決する……」

「まずい！何かに目覚めようとしている！」

「やっぱり親衛隊って怖いよ！未来でも今でも！」

「それよりハルトが隠れてると言ってたろ？何しにきた？」

「……は！キャロル様、実は周囲を警戒中のコマンドー部隊がこのようなものを捕らえたので連行してきました……おい連れて来い！」

そう言い現れた一般のトルーパーとは違う装甲服　カターン級アーマーを身につけた4人組　クローントルーパー最強チーム　クローンコマンドーである

彼等が捕縛したのは錬金術師の一団であったその手には通信端末が握られていた

「これは」

「ここでの会話を盗み聞きされたかも知れませんか」

「となると……来るぞ！」

キャロルの声を合図に大きな爆破が起こると粉塵の中から現れたのは大量の屑ヤミーとリーダー格であろう、プテラヤミーが2体

「敵だ野郎とも戦闘配置！撃ちまくれ！」

「変身!!」

『RIDER TIME!』

『ギンガ：ファイナリー』

すかさず三人は仮面ライダーザモナス、ゾンジス、アナザーギンガファイナリーに変身しヤミーの相手をする

「私達も行くわ！」

とマリアが取り出したマツハドライブバーとトライドロンキーを装填する

『シグナルバイク／シフトカー』

「変身!!」

『R I D E R ! 超デットヒート!』

そして大量の煙と共に現れたのはネクストシステムが導き出した新たなドライブ

仮面ライダー超デットヒートドライブ

である

「行くわよ響!」

「はい! 未来は下がって兵隊さんお願いします!」

「響……気をつけてね」

「うん！平気へっちやらだ！」

「此方へ」

「っ！うわああああ助けてくれええええ！」

ハウンドの合図で待機していたトルーパー達は手をもつライフルを一斉射撃し屑ヤミーをメダルの破片に返すがプテラヤミーはケロツとしており飛翔、近くにいたトルーパーを掴むと高く飛翔して地面に落としたのであったがキャロルがワイヤーを使い足跡のクツションを作る

「た、助かりました！」

「礼は良い、おいハルト起きろ！」

「ん……ふわぁ……え……何でヤミーがいるの？」

「説明は後だ早く変身しろ！」

「寝起きだけど……ハウンド、負傷兵下げてて……後で俺が治すから……っしやおらぁ!! 見
てろ……俺達の変身!!」

『こ、このセリフは！俺の出番だぁ！』

ハルトは迷いなくアナザーウォッチを起動した

しかし、その姿はアナザークウガではなく

黒き龍を宿す鉄仮面 アナザーリュウガであった

『リュウガ』

「しゃあ!!」

『えええええ!俺じゃねえのか!』

『ハルト…約束は果たす』

「ああ…行くぜ!」

〈SWORD VENT〉

呼び出した青龍刀を手に取ると同時に屑ヤミーを斬りつけると倒れた屑ヤミーを足蹴にすると片手に収まる龍頭のガントレットが黒炎を放ち屑ヤミーの足を炎により硬めると

「よし、これで決めてやる!!」

「ナイス、魔王ちゃん!」

「うむ！」

『ゾンジス（ザモナス） タイムブレイク!!』』

「あ！・テメエら!!俺の獲物を！」

「……やれやれ、仕方ありませんね」

『アナザー…エクスプロージョン！』

「たあ!!!」

「!!!」

勢いに任せてプテラヤミーの一体を屠るウオズに思わずツツコミを入れてしまうア
ナザーリユウガ

「ウオズ、お前もか!!んじゃ残りは俺が決めてやる!!……ん？」

「!!」

「つがあああ！」

プテラヤミーもやられてばかりではなく光弾を数発当てるが

「あああああ……なーんてな！」

同時にアナザーリユウガの目の前にライダークレスト型の鏡が現れ
中からアナザーリユウガが受けた光弾がプテラヤミーに目がけて放たれたのである

「反射からの絶対防御は健在だね」

『当然だ』

これがアナザリーリウガの最大の特徴、例外以外の攻撃をそのまま跳ね返す。それは多方向からの攻撃も個人に狙い返す、何なら本家ライダーキックさえも跳ね返す理不尽さだ、その反射能力によりプテラヤミーが地面に倒れたのを見たと同時にアナザリーリウガは片手でカードを握りつぶした

「んじゃ終わりは派手にやるか！」

『ああ…滅ぼしてやる鏡の世界からもな！』

〈FINAL VENT〉

「はっ……はあああああ！」

ガントレットの炎がアナザリーリウガの両足に纏うと鏡の中から現れたアナザードラブラッカーと同時に浮遊し、そのままの炎の爆破による勢いで放たれる

アナザードラゴンライダーキックを逃げ場を無くしたプテラヤミーに叩き込むと爆散しメダルの雨になったのだが

『クレーンアーム』

「つしセルメダル大量ゲット！」

バースになったナツキがセルメダルを総取りしていた

何か気に入らないのでアナザーウォッチを起動する

『クウガ』

『やっと俺になってくれたか！』

「ああ…ハウンド、武器貸して」

「此方を」

アナザークウガになると同時にハウンドは自身の得物であるハンドブラスターを投げ渡す

受け取ったアナザークウガの体が緑色に変化し始め ハンドブラスターも大型のクロスボウ（イメージはガドル閣下のボウガン）のような外見へと変わる

「まさかのペガサスフォームだと…」

「へ？い、いやハルト、撃たないで！その武器の一撃は体が消し飛ぶから！」

慌てるバースであるがアナザークウガ・ペガサスは手にあるボウガンを放とうとした
が

「ん？」

『あらまあ…ヤミーが全滅よ！』

『やはり要警戒なワケだなサンジエルマン』

『ええ、まずは彼を何とかしなければならぬ……革命の為の礎になって貰うわ』

「あ、声聴こえる……すげえ……マジで聞こえる……つかこの声……！」

アナザークウガ・ペガサスフォームにより強化された五感による超感覚に従い声のした方角へボウガンに向け、引き金を引くと超圧縮された空気弾が真っ直ぐに三人かいるだろう方向に放たれたのだが、わざと外した

「我が魔王？どちらに撃ってるのです？」

「誰かいたから撃った」

「……………まさか！」

「そう……まあ避けられた……つと」

ペガサスフォームの時間制限から変身解除となるが、ハルトは苦い顔をしながら呟く
「こりや真面目に同盟は考えた方が良さそうだな…冗談でああ言ったけど…本腰入れ
ねえとダメかも」

「それが我が魔王のご決断なら我等は従うのみです」

「呉越同舟って本当にある話なんだなあ…」

その頃、サンジェルマン達は

「あ、危なかったワケだ」

冷や汗を流すプレラーティの直ぐ側を大きな空気弾が命中、近くにあった鉄塔をへし

折ったのである

「本当よ！まさか空気弾でビルが壊れるなんて思わないわ！」

「分かっていたワケだが…あの化け物め」

「どうするのよサンジェルマン」

「けど彼と一緒にいる人は無敵じゃない、彼と長くいて分かったのは…彼は病的な程仲間を大事にしているわ、けどその絆の強さは弱点にもなる…だから人質のような作戦は有効なんだけど」

「逢魔で誘拐できる奴いないワケだ」

「全員規格外よ？あのピンクの兵隊さんなら出来そうだけど…」

「ピンクじゃないマゼンタだ！」

「ん？今誰かの声が聞こえたような……まあ良い一兵卒如きでハルトが動くとも思えん側近や身内の誰かとターゲットになるワケだが」

「私達三人がかりなら……娘の誘拐はいけるかしら？」

「そ、それはダメだ！あいつの逆鱗に触れるぞ全員、肉塊に成り果てるワケだ！」

「ミンチより酷くなりそうね……てかハルトがその辺の対策してないとは思えないんだけど……だって実際に何度も襲撃されてるし」

「……………作戦を練り直すわ2人とも」

「了解」

「厄介なことになったわね……あの局長め……っ！」

三人はとんでもない連中と敵対したと溜息を吐くのであった

未来から来た過去の戦士？

SONG s と同盟締結後 SONG s の拠点となっている潜水艦にて

「潜水艦とは存外、広いのだな内陸国の逢魔では海上など縁遠いから新鮮だな」

「あのさあキャロリン？」

「何だ束？」

「この辺はキャロリンの担当なのになんで束さんが此処にいるのさ！」

「オレが指名した、連中で科学方面を安心して任せられるのがお前しかいないからなズネは畑違いだし他2人は脳筋だからな」

その時、千冬とアンティリーネはくしやみをしたのは誰も知らない」

「ま、まあね、このてんつさい科学者の東さんの手にかかれば…つてキャロリンのせい
かあ！」

「あと、お前は放っておくとハルトと過ごす夜が増えそうで怖い」

「な、何故それを！」

「やはりか…千冬と相談して正解だったな、この三月うさぎめ」

「ちーちゃん！お前もか！！つてこんな所いられるか！東さんはハルクんの場所に帰る
！」

「フラグ立ったよ！やめて縁起でもない！キャロルちゃん、東ちゃん…見たでしょう？
魔王ちゃんだつて泣いてたの？それにさ心配だつて俺や超精鋭のコマンドー部隊まで
つけたんだよ？ほら！」

「はっ！我等クローンコマンドーのオスカー、マイク分隊が奥方様達を必ずやお守り致します！」

「ぶー！クーちゃんもないし…はあ…兎は寂しいと死んじゃうんだよ」

「なら死ね、オレ達に割いてくれる時間が増えるからな」

「っ！死んでたまるかぁ！」

「その息だ、三月うさぎはキリキリ働け」

不機嫌な態度一杯のキャロルと束を宥めるジヨウゲン、そしてコマンダー部隊の面々である

何故彼女達がSONGSにいるのか、それを明確にするには時系列を遡る

今回の共闘にあたりSONGSが要望したのはlinkerの生産と量産の確立である、それをするにはキャロルの知恵と技術が必要となり、此方の拠点に来て欲しいとなったのだが

「やなことだ！何で大事なキャロル達をお前たちに預けないとならない！」

『そ、それについてはlinkerの研究の性質上、どうしても来てもらわないと』どうせそんなこと言ってこの間の事件をほじくり回して逮捕するとか俺への人質カードに使う気だろ！』ぜ、絶対に我々はそのようなことはしない!!』

「口では幾らでも言えるんだよ！上の命令絶対遵守のお前たちの言葉なんか信頼出来るか!!今でも特殊部隊の件許してねえんだからな！」

ハルトは露骨に不平不満を伝えるが

「オレは別に構わんぞ？」

「え……キャロル!？」

「どうせエルフナインとモルモットには仕置きをせねばと思っていたからな丁度良い……
そもそもはlinkerを作れない方が悪いんだからな……」

「いや待て考えろ連中だぞ、どうせ来た途端に不意打ちとか捕まえたりとか……食事に毒
とか……」

「貴様はオレが連中に遅れを取ると?」

「い、いやそんなこと……」

「それにだ錫音の魔法やお前のオーロラカーテンを使えばいつでも会える心配いらん、
もし襲われたらサゴーズやシャウタコンボで潜水艦など沈めてやる」

「キャロル……わかった……おい此方からは武装した護衛を出す それくらいは良いだろ
?そつちが何もしなければ良いだけだ」

『あ…ああ、しかし爆発物などは辞めてくれ』

「善処はする、ハウンド!!」

「はっ!」

「選りすぐりのコマンドー部隊を二つ選べ…何なら連中の拠点近くに別働隊に潜水艇で見張らせろ!」

「お任せを奥方様をお守りする為の精鋭を選抜いたします!」

「頼んだ、さてジヨウゲン」

「了解、俺は?」

「万一の備えだ、向こうのライダーが出張ったら止められる戦力がないとな…すまない

長期任務って事を考えると、この辺りの事を信頼できるのがお前しかいないんだ……」

ウオズ、フィーニス、カゲンは一癖強く俺の影響からか排他的な側面もある、その点ジヨウゲンは態度は緩いが周囲の当たりは比較的緩い、戦闘能力も長年の信頼関係から言うまでもないなど判断した

「大丈夫だよ任せて魔王ちゃん」

「任せた……もし皆に危害加えようものなら見敵必殺だオーバー？」

「承知……けど魔王ちゃん大丈夫？寂しくて泣いたりしない？」

「何心配してんだ？前だって別々にいたんだ今更悲しいなんて……かなし……い……なんて……」

その目に大粒の涙が浮かぶのを見て慌てるジヨウゲン

「いや魔王ちゃん泣かないでよ!!」

「な、何をしたのですがジョウゲン!」

「まさかハルト様に無礼なことを!」

「ご、誤解だつて魔王ちゃん的情绪が不安定になつたんだよ!」

「何だ、いつものことか」

「なら放つておいたら治りますね」

「驚かせないでくださいよジョウゲン」

「これ本当に俺離れて大丈夫!?!魔王ちゃん!」

「ご安心を私がついてます」

「頼んだよ」

「お任せあれ…情緒が不安定になればスタンモードで射撃しますので！」

「ある意味一番信用おけないね!!」

ジョウゲンは別の意味で心配になるのであった

「ウオズちゃん、あの人呼ぶ？ちよつと今色々面倒だよ人手多い方が良いつて…てか魔王ちゃんが奥方様以外で信頼できる人員が少ないよ!!」

「検討せねばなりませんね…しかし…」

「俺は反対だ！あの人を呼ぶなど…」

「私もです…あの方は苛烈すぎる」

「だよねえ『味方も恐れ敵は視界に入っただけで絶望する』って触れ込みだしねえ」

「あの…誰の事なんですか？」

「未来に残っている我等の仲間です」

「本当ならウオズちゃんとその人が派遣される予定だったんだけど…ちよつと性格に難があつてね変わりに派遣されたのが俺達な訳」

「あの未来のハルト様も若い頃の己に合わせるのは問題と判断したのだ」

「あ、あの傲慢を絵に描いたような魔王様や嬉々として付き従う先輩達が問題児認定するような人格破綻者が未来にいるんですか!？」

「「へえ……」」

「あ……ま、魔王様助けてくださいませえええええ！」

「お、俺つてフィーニスにそう思われてたの？」

「い、いえ違いますよ!!けど客観的に見たらと言いますか……」

「……絶望が俺のゴールだ」

『落ち着け馬鹿者ども!!』

今日も今日で締まらない一団であった

—————

その頃 老ハルトのいる逢魔王国で

「ふう……今日も世界は平和だなあ……」

別邸で楽しく余暇を満喫している老ハルトはそこで流れる時間をお茶を飲みながら満喫していた

「確か…そろそろ結社との抗争かの…いやあ懐かしい…「??」…おおジャマトよ、お前達もそこに座って飲まんか？良いお茶が入ったんだ…いつもなら喜んでくる奴がいるんだが最近いなくてな…この桜の木を見ながら飲むのも風情があるからと喜んでるのに」

「じゃ……はっ!」

「??」

「はっはっは!おい水を用意してくれ…それとアルキメテルに差し入れも頼む」

「かしこまりました」

「さて、どこ行つたのやら……この間キャロルと過去へ行つてから姿を見ておらんのだ？」

「？」「みてない」

「……………キャプテン・ロメオに繋いで大至急、タイムマジーンの予備機を数えさせろ」

しかし時遅く

『陛下大変です！今、タイムマジーンが発進しました！』

「であるか彼奴め……まったく……面倒な事よ……まあ悪い奴ではないのだがな」

『彼女をそう言えるのは陛下だけです、それと止められるのも陛下だけです』

「そうじゃな……うむ！頑張れ若い俺！」

と丸投げたのであった

—————

ハルトのいる世界に件のタイムマジンが着陸すると

「かーかつかー……」が魔王様が結社と抗争をしていた時代か！先の事件は逢魔建国や奥方様の件故に介入はしないでいたが、今回は純粹な闘争……ならば妾が参加しても問題あるまい！」

そう笑うものがいた小柄な体躯の少女で軍服を着ており使う言葉が少し古風でもある

「しかし魔王様も酷いのウオズと私だけで十分な仕事を何故、ジョウゲンとかゲンなどクオーツァーあがりの外様者に任せる彼奴等も手練れなのは認めるが妾の方が良いだろう」

しかし、その場所が悪かった

「おい止まれ」

哨戒中のクローントルーパーの一団と邂逅したのである

「何者だ何故、タイムマジーンを保有している？それは逢魔の財産だ返してもらおう」

「ん？装甲服が少し違うが主等はクローントルーパーだな…妾を知らんとはピカピカか？お前たち認識番号を、ああそうか過去だから知らんのも当然だな…しかしマゼンタのペイントとくれば話に聞く初代逢魔親衛隊か？」

「初代？いや何故俺達の事を…」

「まさか…ネオタイムジャッカーの残党？」

「っ！大至急ウォズ様達に連絡を取れ！」

「ここは我等が時間を稼ぐ！」

「待てお前達、安心せよ妾は敵ではない味方だ武器を下ろせ」

「ならば何故、タイムマジーンを持っている？」

「これは未来から故あって借りておるのだよ一応専用だぞ？」

「いよいよ信用ならんな未来から来たならば、ウオズ様達が来るまで動かないで貰いた
ら」

「それは困る、そろそろ魔王様とサンジェルマンの第一戦が始まる時間じゃ…それを見
逃すのは妾の本意ではないのでな押し通るぞ、若い魔王様への挨拶が遅くなるのは本意
ではないのでな」

その会話の間にもトルーパー達は包囲するように散開、部隊長のハンドシグナルに従

い冷静に行動する

「ほお流石は未来にその名を残す初代親衛隊じや練度が高いのお：伊達に魔王様に鍛えられておらん戦争を知らん平和ボケしたピカピカ世代とは大きい違いじや」

「兄弟の侮辱は辞めてもらおう」

「そうだな謝罪しようすまなかつた、何せ主等は逢魔国防の要、ここから何十年、何百年と逢魔に尽くす同胞じや：まあ少し位は遊んでも良からう？なあ見せてくれ親衛隊、その強さを！」

「構えろ来るぞ!!」

「安心せい命までは取らんさ、まあウオズが来るまでの暇潰しにはなるかの？」

そう言い、手を前に突き出すと

「出番じゃ、コウモリ」

「じゃあ行きますか？ドロンドロン…」

「変身」

「撃てー！」

—————

そんな謎の未来人と親衛隊がバトルしているなど知らないハルト達は二手に分かれて行動を開始した

キャロル、東、ジヨウゲンはSONG sで研究と護衛

「ほら、この公式通り進めてみる」

「は、はい……っ！凄いですキャラル！」

「当然だ、おい東よ素材だが「準備出来てるよー！」よくやった」

エルフナインー人よりも凄いスピードで研究が進んでいくのを見て

「これが逢魔の叡智か」

「改めて恐ろしいですね今まで停滞してた研究まで……それに」

「ああ……かなりの訓練を積んだ精鋭だな、それに」

「はい魔王の側近まで……何というか信用されてませんね」

「色々あったからな」

「そもそも僕たちに協力を求めたキャロルの一件に関しては相当にイレギュラーだったんでしょうね」

「だろうな、しかし」

と玄十郎の目は付近に待機しているクローンコマンドー達とジョウゲンである

「見た事ない武器と装備やはり異世界の技術か…彼等に何かして此処から漏洩しようものなら…」

「世界滅亡ですな冗談ではなく」

「彼女達には必要最低限の接触としよう…もし他国や家の連中がちよつかいをかけようものなら俺が止める」

「そうですね…本当に」

緒川も冷や汗かいているくらいには危険であると判断したのである

—————

その頃、ハルト達と言うと街で買い出しに出ているのだが

「はあ……なーんで、お前が一緒なんだよナツキ」

「じゃあないだろ、お前この世界じゃ特A級のテロリストなんだから……俺が見張ってるってしとかないと市街地の買い出しはダメなんだって」

そう言ったのでハルトはクローントルーパーの何名かを補給担当として各国に派遣、大量に食糧や酒などの嗜好品を大量に購入しポーターを介して逢魔に流して売っているのである……はいそこ！異世界転売なんて言わない！

「それ、お前達側のせいだけだな？フロンティアの件は別だけど……つか建国しなかった

ら今回みたいに対話じゃなくて武力行使してきたろ？」

アレに関しては加害者側なので責めるつもりはないが

「ありえそうだから返す言葉がない、けどSONG sの皆は悪い奴じゃないんだ約束は守るって信じてくれ」

「そう言われて信じたら自国ならず海外の特殊部隊まで投入されましたが？」

「アレは別の派閥の奴らが…」

「つか魔女狩りの時点で愛想尽きてる…つたく何でキャロルや東まで行くんだよ…はあ…何で格下連中を助けにやならねえんだ…いやキャロルが言った事も一理あるよ…けどさあ、それなら俺達のラボに来てやる方が機材や設備も良いのに…つたく国家機関つーのは、つまんねーマウント取らないと気が済まないのかねえ、なあナツキどう思う？」

良い笑顔だが心から笑ってないのを理解したのでナツキも

「ほんつとうにごめんって！けど俺達の状況も理解してよ！逢魔はこの世界だと非合法武装組織なんだって内緒で提携してるのがバレようものなら大変なんだって」

「知らん、敵なら倒すし滅ぼすぞ？それに証拠隠滅なら任せろ俺の国には比喩なく星を破壊できる火力（スターデストロイヤー）の船が何隻もあるからな」

「辞めてくれない!？」

「だからさっさとサンジェルマンの居場所見つけろよ」

「そんな簡単に見つかる…あ、アナザーWに頼めば良いじゃん」

「よし出番だ相棒、早急に探してくれ」

『おーよ……つか検索しなくても近くにいますぜ』

「っ！そう言うことか！」

「へ？え、えええええ!!」

とハルトは迷わず横っ飛びして避けるがナツキは訳もわからずに立ち尽くしている
と何かの爆破に巻き込まれ車田飛びと車田落ちをした

「へぶうー！」

「そこっ！」

『いや一応は介抱してからウテよ！』

気配のする方向へファイズフォンXを銃モードにして発砲するも外れた

「やっぱり射撃下手か俺？今度ハウンドに教えてもらおう」

「やるわねハルト」

「サンジェルマン？いつもの2人はどうした？」

「別件で動いているわ…それと今回来たのは組織ではなく個人的な話だよ」

念の為に控えさせている親衛隊が遮蔽物に身を隠しながらプラスチックライフルを構えているのだが

「だから待機してる護衛を下がらせてくれないかしら、物騒なものを向けられては話も出来ないわ」

「何言ってるの？仮にも一国の王が護衛なしで敵対勢力の幹部と会話なんてできる訳ないじゃん」

「アナザーライダー達は護衛じゃないのかしら？」

「あいつ等は俺の半身だから俺って訳よQED」

「いや、その理屈はおかしい」

まさか彼女にツツコミを入れられるとは思ってなかったな

「んで何のようだよ」「っててて…っ！サンジェルマンさん!？」うるせえな」

「久しぶりねナツキ、さて私が聞きたいのは君達の所でクーデターを起こした人達の処遇や安否って所かしら」

「ああ連中なら捕縛して今は監獄の中だな、安心しろ拷問はしてねえよ尋問はしたがな」

「そう…」

そうだなウルティマのアレは拷問ではなく平和な尋問や取り調べだ…そう、逢魔では

合法だ、頭の中覗くとかセーフ！

『いやアウトだろ』

「知らん、つーか俺としては逢魔が育った段階で乗っ取り企てたのが驚きだよ」

「それは局長始め、一部の過激派の仕業よ私も事態を知ったのが最近…それこそクーデターの一報を受けてからだったわ」

「つまりアダムの独断と？つか組織の長が動いたなら組織の意思じゃねえの？」

「違う…と言いたいけど否定しても意味ないわね、実際今のフロンティア…逢魔には強引にでも奪おうとするメリットがあるから」

「もう俺達だけのワンマンチームでもないからな攻め落とすなら、軍艦でも引つ張って
ハッ」

三人娘や傘下の悪魔、クロイントルーパー達もいるし簡単に揺らぐ組織ではないと胸を張ると

「一つ聞かせて貰えるかしら」

「何？」

「貴方にとって王とは何？」

それは彼女が一番聞きたかったことである

己の奴隷として扱われた境遇から支配者層への恨みがある彼女であるが生まれながらの特権階級にいなかったのに関わらず王へとなつた男への純粋な問い

だからハルトは迷わず告げる

「俺みたいなのを慕う連中全員を幸せにそして連中に害をなす存在を根こそぎ滅ぼすもの」

その答えは己の過去にあった

奪われ続けた人生と彼等に選ばれたことで変わった人生で自分の心に従い選び続けた

身軽な一人旅のつもりだったのに気づけば色んな人と出会い、仲間が増え…そこにあ
る全てを守りたいと思えた

大事な初めての居場所と沢山の仲間達…そしてそんな俺を好きと言ってくれ寄り
添ってくれる彼女達

逢魔には居場所を追われて流れついた者も多い だから一部を除き奪われる悲しみを
知っているから俺はそれから守る、それに必要ならば

「あそこで暮らす奴らは皆、俺の特別だ…手を出すなら自分の居場所を滅ぼされる覚悟をしてから来いの俺が…俺達が地獄を見せてやる」

喜んで災厄の魔王となろうと威圧する

「そう…」

威圧を解き此方の番と質問をする

「俺からも質問、君とアダムの方針に差異がある事は理解した…その上で聞くけど結社は結局どうしたいの？」

「結社の目的に殉ずるのみよ、ただ私としては逢魔を利用してSONGsと対立してる間に事を運びたかったのもあるわね…貴方は身内には優しいけど敵にはとことん苛烈だから利用しやすいと踏んでただけど」

「そだな、まあ利用してるのが分かったら報復してたから結果は同じだろうけど」

「結局、早いか遅いかの違いという訳ね」

「そうなるな」

話しながら2人は懐から取り出したのは、プリントロック式の銃とアナザーウオッチである

「派手に散りなさい」

「散るのは、お前だ」

実を言うと根っこは似た者同士この2人

互いに仲間思いで目的に一途、悪く言えば頑固で融通の効かずに己の願いのために数多の障害を排除してきた

だからこそ、この対立は避けられないものであったのだろう

サンジェルマンは銃の引き金を引くと内蔵されていた賢者の石が起動し、キャロルが使うファウストローブと同型の装束を纏う

ハルトは逆に馴染んだ力だ

『ジオウ アナザーツインギレード！』

アナザージオウに変身しツインギレードを槍型にして構え直す、隣でアナザーウオツチの起動音が鳴る

「……はあ！」

『ゲイツ』

2人の目線の先にはアナザーゲイツに変身していたナツキの姿があった

「ほ、本当だアナザータイクーンより全然楽…凄いなセーフティーって！」

「え？何でお前まで変身してんの？」

「え？俺も必要だろ？」

「ハウンド達いるから、いらないんだけど空気読め」

「いや、いるんだなあコレがさー！」

とアナザーゲイツは弓形武装で射撃するとその場所には擬態していたヤミーがいた

「え？あんなにいたのか…中々の擬態能力だな」

「アレは俺に任せといてよハルトはサンジェルマンさんを！」

「はあ…俺に命令するなよ……ハウンド、ナツキを援護してやれ」

「イエツサー、御武運を野郎ども続け！」

「おうよ」

背中を任せて3人は互いの敵に走り出すのであった

—————

その頃 ウオズ、カゲン、フィーニスはと言うと

「はい……はい、かしこまりました直ぐに対応します」

ファイズフォンXの通話を切り

「はあ……寧ろ今まで自制してきてくれたのは優しさですかね？」

ため息を吐いた所で慌てたフィーニスが駆け寄る

「大変です先輩！親衛隊が未知の敵と交戦中、何でも「タイムマジーン」を持っています違いますか？」は、はい！クローン・キャプテンから救援要請です！」

「分かりました……カゲンは奥方様達と合流なさい、私とフィーニスで親衛隊の加勢に向かいますよ」

「は、はい！」

『1号』

「仕方ないのない人ですね」

ウオズはアナザー1号の肩に乗り大至急目的地まで走り出すのであった

—————
そして此方でも事件は起こっていた

「ハハハね」

「ああハルトの妻達がここに居るワケだ」

そこにいたのはカリオストロとプレラーティの2人 彼女達は別名でハルトが根城
にしている場所に来ていたのである

「けど、あのメンバーの誰かを誘拐なんて強引よ」

「サンジェルマンは可能と言っていたが…此処は本当に野営地か？軍事基地と言っても
違和感がないワケだ」

「一旦引いた方が良くないかしら？」

「そうしたいが、そうしたらサンジェルマンの苦勞が報われないワケだ」

「そうだけど…」

「それにハルトにはチフォージュ・シャトーの件もあるから、嫌がらせはしておきたいワケだ」

「……冗談で済まされない関係よね？」

「分かっているワケだ…それに」

「ウオズに言われて警戒していたが」

「まさか2人で来るとは私達も重要人物みたいよ千冬？」

現れたのはポニーテールにして戦闘モードの千冬と、魔法使いのようなローブをつけ

た錫音の2人であった

「織斑千冬に白鳥錫音…っ！」

「ターゲットが向こうから来たワケだ」

「先程、私達を攫うと聞いたが？」

「そうね大人しく投降するなら乱暴はしないわ元同盟相手だしね」

「それに極力傷つけるなどサンジェルマンのオーダーなワケだ」

「仮に成功したら、あのバカはこの世界を滅ぼすな」

「そうだね…この世界はいつでも良いけど彼が災厄になろうものなら殺さないといけな
いから私達は攫われる訳には行かない…君達も長い付き合いでその辺分かってると
思ってたんだけどなあ」

「そう…けどサンジェルマンの理想の為に！」

「引けないワケだ！」

「そうか…なら倒させてもらおうぞ私達は、あのバカを泣かせない為に」

「私は愛する人を殺さない為に…かな」

正に一触即発と言う空気の中

「お待ち下さいいな、お二人さん」

ルビクキューで遊んでいるアンティリーネが退屈そうな顔をしていた

「アンティリーネ、何故此処に？」

「暇だから、そしたら面白そうな話してるじゃないの戦うのよね？」

「だ、誰よ、その子は！」

「情報にないぞ誰だ！」

「彼女はアンティリーネ、まあ最近加わったハルトの妻だね」

「ま、まだ現地妻を囲っているのかあの男は!!」

「しかも子供の話では増える予定だからな…恐ろしい」

「ふ、増える予定だど!!あの男…見境なしか！」

「ねえチフユ、スズネあの人達は敵よね？」

「ああ」

「なら暴れてもハルトは許してくれるわね…なら私がやるわ2人は下がって…ねえ貴女達、私の手柄になってくれない？」

「そんな事せずとも、あのバカは平等に愛するさ」

「そうそう今更だよ」

「だけど褒美はあるかも知れないわ…そう大将首を取るとか…ね」

「……………」

「もう了承は得てるから邪魔しないでね」

い 2人は震えているが、そんな事よりも目の前に現れた未知数の戦士に警戒が止まらない

「ふふ折角だから旦那様から頂いた力…試させてもらいましょうか」

アンティリーネが懐から取り出したのはメリケンサックのような武器

「えーと…そう…その命、神に返しなさい」

彼女はそれを思い切り掌で叩いた

『READY?』

前哨戦終わり そして

さて前回のあらすじ

サンジェルマン vs ハルト (アナザージオウ)

ヤミー vs ナツキ (アナザーゲイツ) & 親衛隊

プレラーティ、カリオストロ vs アンティリーネ

そして ??? vs クローントルーパー

となり混迷を極めていた

—————

???
s i d e

「変身」

「それじゃあ行きますか？ドロンドロン！」

「撃て!!」

1 トルーパーが合図で一斉射撃をする、ハルトから教わった対ライダー戦術指南 その

変身時を攻撃せよ

本当にライダーファンなのかと疑う戦術であるがそれは目の前に現れた巨大な紋章に止められたのである

「へえんしいん！」

そして現れた紋章が砕け散ると現れたのは先程の少女の面影もない巨大な戦士

タイムマジーンと同じ位の体躯に巨大な三叉の槍を携えた仮面ライダー

それはとある種族の王が纏う キバの鎧と似て異なる鎧

伝説を束ね、厄災を招く王

仮面ライダーアーク

「何て…巨大さだ、お前達！ウオーカーとガンシップを連れてこい！！残りは援軍が来るまで持ち堪えるぞ！」

「ははは！良いのお…妾を楽しませてみるお！」

「行動開始！」

その頃 逢魔にいたガルル、ドツガ、バツシャアの3人は表現に困る悪寒に襲われるのであった

—————

ハルトside

「はあ！」

アナザージオウは未来視により相手の攻撃を邪魔するように立ち回りながら自分の攻撃をしている、側から見れば鬱陶しさも感じる戦い方にサンジェルマンも舌打ちを隠しきれない

「ならー！」

地面に結晶を落とし大量のアルカノイズを召喚するが

「けっ！しゃらくせえ！」

『響鬼…セイバー…MIXING！』

「つたらあ！」

『アナザースラッシュ！』

放たれた斬撃はアルカノイズを粉塵にするだけでは留まらず彼女へと襲い掛かる

「ちっ！」

彼女は手に持つ銃を発砲し攻撃の軌道を逸らして何とか回避した

「やるね」

「伊達に貴方の戦闘パターンの研究はしてないわ手数が多くて全ては見えてないけど」

「そりゃ厄介な事で」

「それよりも彼は大丈夫なのかしら？暴走して貴方に襲いかかったら」

「あく大丈夫大丈夫、暴走しないように対策済みだから…それに暴走したら俺達なら抑えられるし…あ…」

『ウィザード』

アナザージオウはアナザーウィザードに変身すると

『コネクト』

「えーと…アレでもない…コレでもない…あつた！」

魔法で繋いで空間から取り出したケースを

「よし、受け取れナツキ!!」

思い切りぶん投げた

—————

ナツキ side

「はっ!ふっ!とりゃあ!」

「がっ!ぐっ!っ!」

アナザーゲイツは弓形武装を斧に変えて何度も何度も斬りつける、そして首元に浴え

ると

「うおりやああああ！」

「ガアアアアア！」

そのまま斧を下ろすと現れた大量のセルメダルが血の雨のようにも見えた

「これがアナザーゲイツ……トーマの奴も勿体無い事してんな強いじゃん」

『何を言っている、この素人が』

「そう言つてハルトには手を貸さなかつたら？」

『それは奴は魔王だからな！あんな奴やトーマに使われるよりお前の方が良いと思つただけだ』

「そりゃ良かったよ！ったあ！」

体勢を立て直し襲い掛かろうとしたヤミーを弓モードに変形して射撃すると粉塵に紛れて姿を消した

「ちっ！…「受け止めなツキ！」へ？つと何だコレ？えーと…」

「!!!」

投げられた箱を見ている隙をついて再度襲い掛かろうとするが

「はあ……お前たち、余所見してる坊やを援護してやれ」

「「「サーイエツサー！」」」

ハウンドの指示に従い遮蔽物に身を隠していたトルーパー達がブラスターを一斉に発砲しヤミーに浴びせた

「ありがとうございます！……これ……？」

『アナザージカンザックス』

よく見るとそれ先程の武器と違い機械的かつ、ヒロイックな感じに仕上がっている……ってか

「自己紹介したな……」

「それはアナザービルド、キカイ達が設計して束やキャロルが組み上げた至高の一品だ大事に使い！壊したら殺す！」

「ありがとう！大事に使うよ！」

『MODE AXE』

「っしやあああー！」

アナザーゲイツはそのままヤミーに切りかかるのであった

—————

同時刻 アンティリーネ side

「その命、神に返しなさい」

『READY』

「変身！」

『FIRST ON!』

するとアンティリーネの体を白い装甲が身を包む その姿はさながら修道士のよう

にも見えるが中身がさながら悪魔祓い（エクソシスト）である

白い正義の断罪者

仮面ライダーイクサ・セーブモード

「中々良い着心地ね病みつきになりそう、えーと確か武器があつたわね…よいしょ…イクサカリバーかしら？」

「ま、まさか新しいライダー！？」

「くう！やるぞカリオストロ!!」

2人もファウストローブを見に纏いカリオストロはガントレットをプレイヤーティはケン玉のような武器を展開した

「あらあら…見たことない武器ね、私もだけど…楽しませて頂戴！」

と恍惚としながら駆け出したイクサを他所に

「あ、何だアレは…あんなベルトあつたか？」

千冬は自身の把握していないドライバーの存在に困惑していると錫音が

「アレね例の如く三馬鹿（ハルト、キャロル、束）の3人が悪ノリして作ったんだよ」

「またか…今度問い詰めるか、何を作ったかと」

「そうだねえ…」

錫音は知っている、ベルトが完成する度にハルトが変身しようとしてベルトに弾かれ泣いているのを

「仮面ライダーに変身したいんだろうな…一途と言うか何というか…さて私達はアン

ティリーネに任せてゆっくりする？それとも」

「決まっているだろう」

「だよねえ…」

錫音の目線の先には巨大な三叉槍を持つアークが見えている

「アレを止めねばなるまい、ネオタイムジャッカーの残党か何かは知らんがな」
『スイカ』

「そうだね、さあショータイムだ」
『ドライバーオン』

と2人は変身しようとした時

「お待ち下さい！」

カゲンが割って入った

「何で止める、アレを見てみる怪獣映画みたいではないか！」

「その辺りでその例え出る辺りハルトに染まってるねえ千冬も」

「う、うるさい…何故止めるのだカゲン」

「あ、アレは味方ではありません！」

「は？…何を言っているクローンと戦っているではないか？ウォーカーやガンシップま
で出ているのに」

「恐らく…暇つぶしでしょう、未来に我等も引くレベルの戦闘狂です…それこそウル
ティマ様やカレラ様に並ぶような…まあ仲間なので殺さない程度に遊んでるのかと」

「戦闘狂の巨大なライダー……あ、もしかして仮面ライダーアークのヤクヅキ？」

「左様」

「知っているのか錫音？」

「うん、ネオタイムジャッカー時代に資料で見たことがある……仮面ライダーアーク、本来の歴史、そう災厄の魔王になったジジイ（ハルト）の作った逢魔建国の幹部だよ」

「なら何故フィーニスは知らんだ同僚だろう？」

「あいつ、その時までネオタイムジャッカー未参加だったから」

「はい本来ならば未来のハルト様という筈なのですが……何故……」

「そんな事より早く止めねばならないだろ！ウオズは何している!？」

「ウオズは彼方に」

カゲンが目線を動かすとアークとアナザー1号が睨み合っている

「フィーニスと森で睨み合ってる気分はさながら怪獣映画だな」

「私も思ったよカゲン」

と千冬は笑うのであった

場面は変わりウオズ

「何してるのですか貴女は!!」

アナザー1号の肩に乗りながらメガホンで叫ぶウオズを見てアークは手を止めた

「おお！ウオズではないか久しいのう」

「ええ…お前達、撃ち方辞め!!…よし少し下がってなさい…貴女は未来で留守番頼まれてたのに何してるのですか!!」

「仕方なからう、お主達は楽しく過去にいるのに妾を除け者にしよつて!」

「一番の実力者だからこそ留守番頼んだのですが?」

「先輩…この方は?」

「ん?そこのアナザーライダーは…ああ報告書にあがっていたアナザー1号となるとお主はこの時代で得た家臣のフィーニスじゃな」

「そうだが…お前は何者だ!」

「よくぞ聞いた妾はヤクヅキ!誉れ高いレジエンドルガ族の王(ロード)にして魔王ハルトの臣下だ!」

「れ、レジェンドルガ族!？」

レジェンドルガ族

それは仮面ライダーキバに登場する13種族の一つ 主にウルフェンやマーマンと言ったような種族に該当しない伝承の生き物で構成されている種族 人間の悲鳴が最高の音楽という嗜好で人間を襲い同族を増やしていた

しかし嘗てのキバにレジェンドルガの王は封印、その後復活したレジェンドルガ族がどうなったかはキバの劇場版を見てもらおう

「レジェンドルガ族の王は…確か男だったような……?？」

フィーニスの疑問に答えたのはウオズである

「並行同位体…ようは、もしも世界の住人ですよ」

「なるほどー!」

「ハルト坊にもそう言ったら理解してたな懐かしい…」

「ハルト坊？」

「我等レジエンドルガの年齢から見れば彼奴は子供じゃからな」

「だとしても不敬なので公私で分けてもらってますが…」

「へえ…あ、変身しての世間話もアレなので解除します？」

「いや、それはちと困るな…なあ…少し遊んでくれ新人！」

走り出したアークを見てアナザー1号は慌てながらもしつかりと取っ組み合いとなる

「え？ いやちよっ！先輩!!」

「仕方ありませんね」

『ギンガ…ファイナリー』

「私も…はあ！」

『1号（コア）』

「ははは！ 峻る展開ではないか!!」

アナザーファイナリーとアナザーコア1号に変身した2人は目の前のアークを止めんと動いたのである

それを見ていたトルーパー達は

「俺達…凄い人の下にいるんだな」

「あお兄弟、しかもあんな人たちを従えてる奴がいるんだぜ？」

「陛下だろ？ 普段、訓練でコマンダーに撃たれてるのにな」

「全くだ…何であの人に従ってるのだろうか」

「お前達！ 何を油売っている！ 早く怪我人を安全な場所に運べ！」

「さ、サーイエツサー!!」

—————

その頃 ハルトはと言うアナザーキバに変身しザンバットソードで攻撃をしていた、ただ振るだけで

「っ！ 厄介な剣ね！」

「だろぅよ！何せ俺の命を吸う魔剣だからな…んじや行くぜダメ押し！ガルルさん…力お借りします！」

『ガルルセイバー！』

手を天に掲げると同時刻、イクサ（アンティリーネ）も

「これを使ってみようかしら？」

『GA・RU・RU・FAKE』

キバの笛の音を解析したフェイクフェッスルを起動したのであった

「ん？音が重なってる？まあ良い…あっちの娑婆の空気でも吸いに行くかあ」

「ガルル！気をつけてな！」

「おう」

『!!』

以前約束した通りハルトは過去の世界に飛びウルフェン、マーマン、フランケンシュタイン族を逢魔に呼んだのである、一応マーマン族の背景もありマーメイド族とも交渉中なのだ：ガルルとしては再興の目処が立ったのでハルトには一応の感謝はしているので力を貸すのもやぶさかではない

同族に見送られながらアームズウエポンとなったガルルが向かった先は

『何!?!またか!』

「あら？喋る武器とは珍しいわね…インテリジエンスウエポンはレアなのよ?」

『俺はガルル、あのバカの協力者だ』

「へえ…私はアンティリーネ、あの人の妻よ」

『アイツ、また困ったのか…アイツは音也よりタチが悪いな…まあ良いイクサには色々貸しもある力になるう』

「へえ、話がわかるじゃない…行くわよ狼！」

と同時に

【パーソナライズが完了しました】

「何かしらコレ？」

『バーストモードに移行しますか？』

「ばーすともーど？」

そうアンティリーネが疑問に思ったと同時にセーブモードの頭部がスライド 中から赤い複眼が現れると熱波が2人を吹き飛ばした

「へえ…コレでようやく私専用って事ね、この辺の仕組みは束が作ったのかしら？」

「見掛け倒しなワケだ！」

「そうかしら？試してみる？」

プレラティイが振り回したケン玉の鉄球はまっすぐイクサを狙うがガルルセイバーで弾かれる

「もう何してるのヨォ〜！」

「余所見してる余裕はあるのかしら？」

イクサはガンモードにしたイクサカリバーを発砲するが弾は明後日の方向に飛んで

いった

「……………あら？」

「射撃は下手くそなワケだ！」

「なら此方はどう？ 困ったら使えって、ハルトから教わったのよ」

『I・K U・S A・K N U C K L E・R I S E・U P』

新しいフェツスルを取り出しドライバーに装填しベルトについているイクサナツク
ルをスライドし取り出すとカリオストロに向けて5億ボルト、落雷に匹敵するエネ
ルギーを放つ技 ブロウクン・ファングがカリオストロの頬を掠めた

「な、何よ今の威力!!」

「やはり逢魔の連中は化け物なワケだ!!あの局長め!この戦力を上手く利用出来たらう

に!!」

「凄いわね…この技気に入ったわ」

『だろぅな』

「じゃあこっちのフェッスル？は何かしら？」

とまるで力を試すかのような余裕ぶりに2人は腹を立てたが実際、未知の敵故に警戒が解けないでいる

そして無知とは何よりも恐ろしい

『P O ・ W E R ・ E D ・ I ・ K U ・ S A 』

すると拠点から重機のようなけたたましい音と共に現れたのは白亜の機械恐竜である

「あら？可愛いわね」

「な、何よコレー!?」

「恐竜のような化け物なワケだ！」

「驚いたわ、イクサは魔物も使役できるの？」

『少し違うがな…アレに乗ってそのナツクルを座席につけてみる』

「えーと……これね」

それはパワードイクサ、巨大なファンガイアと戦う為に【素晴らしき青空の会】が開発した大型マシンである。それに飛び乗ったイクサは鍵代わりのナツクルを装填し稼働させた

「いくわよー！」

しかしパワードイクサは首を高速で前後に振るのみであった

「「……………？」」

流石の光景にカリオストロもプレラーティも当の本人も首を傾げていた

『お前、ハルトか束に乗り方教えてもらったか？』

「いいえ今日初めて使うのよ」

『終わったらハルトに教えて貰え、でないと思いきなせん』

「大丈夫よ……動かし方なら大体わかったから……こうね」

すると動きを止めたパワードイクサは首を背後に回すと装填されている爆弾を口に

啞えた

その光景を見ていた2人は

「逃げるぞー！」

「同感よ！あんなのと戦えるワケ！」

「えい」

「うわああああ!!」

可愛らしい声と共に投げられた爆弾は2人のいる場所に着弾、ギリギリ防御が間に合ったがそれでも力をだいぶ消耗した

「凄い威力ね…あら？もう終わりかしら…：…ならウオズ達が戦ってるあの巨人の方が面白そうね」

もう2人は戦えないと判断したイクサはウオズとフィーニスが戦っているターゲットに目移りしていたが

『おい、まだ敵は残ってるぞ』

「そうね…邪魔よ」

とガルルセイバーの拵えをむけて叫ぶと狼の遠吠えとなり2人を吹き飛ばすと

「じゃあ行きましょうか」

パワードイクサがアーク目掛けて爆弾を投げたのであった

その頃、ガルルに振られたアナザーキバは

「あ、あれ？おつかしいなあ……つぶねえ！」

こない事に首を傾げるとサンジェルマンから狙撃されたのである

「ふざけてるのかしら？」

「至って俺は真面目だ！」

『ドライブ』

「ひとつ走り付き合えよ!!」

アナザードライブに変身し直しドア銃擬きでの射撃戦に移行したのであった

—————

その頃 アナザーゲイツはと言うとボロボロになったヤミーにトドメを刺すべく動

いていた

「よし……これで」

『SET…アナザータイクーン』

「はあああああ！」

『アナザー……ストラツシユ！』

「せいやあー！」

「ぬわああああ！」

緑色のエネルギーを帯びたアナザージカンザックスを振り抜いた一撃は大きな手裏剣型のエネルギーとなりヤミーに着弾、そして爆散しセルメダルへと帰ったのを見ると

「よし今のうちに…変身！」

『カポーン！…クレーンアーム』

「大量だな、よし！」

速攻でバースに変身し直したナツキはセルメダルを集めたのであった

「任務完了、お前達陛下を援護するぞ！」

「「「イエツサー！」「」」

トルーパー達が方向転進してサンジエルマンを撃とうとしたのが見えたので

「「「ここで潮時ね撤退させてもらおうわ」

「逃すと思うか？」

「残念ね今頃2人があなたの大事な人達を攫つてる頃合いよ……こんな手は使いたくないけど革命には必要なのよあなたの大事な人達にはその礎になつてもらおうわ」

「あ?」

その言葉に血の気が失せるが、すぐに思考を切り替えると同時にアナザードライブの装甲はパージされるとアナザーカブトへ変わる

『カブト』

「……クロックアップ」

『CLOCK UP!』

光の世界を駆け抜けながらサンジェルマンに拳打の雨を浴びせにかかるアナザーカブト、そして腰のベルトもどきを2回触り

「アナザー……キック！」

『RIDER KICK!』

「オーラア！」

右足にタキオン粒子を纏わせた回し蹴りを掛け声と共にサンジェルマンに打ち込む

『CLOCK OVER』

時の流れが戻ると同時に

「きゃあああああ！」

サンジェルマンは吹き飛ぶと変身解除して転がるのであった

「そうになったら、お前を人質にして交渉するだけだサンジエルマン…それにな」

アナザーカブトは何処か呆れたように話しかける

「俺の惚れた女達だぞ？普通の女だと思うな全員俺より強いぞ」

『『『いや本当』』』』

『尻に敷かれてると言う意味ならな』

「……俺の特別達をお前の革命の犠牲にはさせない俺が…俺達を守る」

「っ！」

サンジエルマンは慌てて連絡の来た通信端末を開くと

【サンジエルマン…すまない失敗なワケだ】

「無理しないで撤退しなさい」

「『そうしたいが謎の巨人とイクサ？なる奴が使うマシンのせいで満足に動けないワケだ！』」

「巨人？…つかパワードイクサ出したのか、アレまだ乗り方教えてないのに…待てよ？」

「フィーニスの事だな確かにアナザー1号はデカくて強い…のだが何故同士討ちを？アンティリーネは戦闘狂だからな…しかし見境なく味方を狙うか？まてイクサって事は」

「あくアンティリーネの奴、フェイクフェッスルでガルルセイバー呼んだのか…そりや俺の所に来ないよな」

「ハルトは原因を悟り遠い目をするが背後から現れたトルーパー達はお構いなしにブラスターを構える」

「あ、終わったんだ早いね〜」

「我々の手際は陛下より良かったのですな」

「言つてろ、偶には下の顔も立てないとな…待てそいつは殺すなよ人質にする」

「誰が…人質に何かなるものか！」

「諦めろよ、四方を囲まれてるのに逆転なんざ」だとしても!!」…あ、やべFLAG立てた」

立ちました！

何処から聞こえた声と共にFLAGは回収される

ドーーーーーン！と強い衝撃と粉塵が舞い上がる、その煙に全員が驚く中、冷静にサンジェルマンは転移結晶で逃走した

「っ！んだよコレ!？」

すると

「はーはっはっはっ！……ここだなハルト坊がサンジェルマンと戦った場所と言うのは！パワードイクサとの戦いも悪くないがまたの機会にだ！」

と楽しそうな笑い声と俺を名指して呼んだ奴誰？と首を傾げたと同時に粉塵が消え現れたのが

「お、懐かしい顔じゃな……やはりまだ幼いのおハルト坊！」

仮面ライダーアークであった

「え、仮面ライダーアーク？……どゆこと……あ、サンジェルマンに逃げられたあ！」

「何じやと！一体何故「お前のせいだろうがあ！」そ、そんなバカな事が！」

「誰か知らないし親しげに話される覚えもない！俺の邪魔をしたから敵だQED！」

「いやもう少し考えるのじゃ！」

そんな話をしている中、ハウンドがコムリンクで報告を受けている

「はい……はい……っ！陛下！キャプテンからの報告でアーク？が親衛隊とアンティリーネ様と一戦交えたとの事！」

「このタイミングでその情報を渡すのは悪すぎるぞ親衛隊！」

「その情報を聞いて敵確定以外の何者があるかあ！野郎ども攻撃か「我が魔王お待ちください！」え？ウオズ？」

攻撃指示を出す寸前でアナザーファイナリーになったウオズが現れた

「アークは敵ではありません！」

「嘘つけ！なら何でトルーパーやアンティリーネを攻撃したんだ！」

「彼女はその……王蛇並みの戦闘狂と言っておきましょうか……まあ未来でもクロールトルーパーの教官なので延長感覚で……それとアンティリーネ様に関しては彼女から仕掛けました」

「あいつ勝手にパワードイクサ使ったにも関わらず……んじゃアレか、このアークもお前達と同じ」

「ええ未来から来ました……しかし我々と状況が違いました……」

歯切れの悪いウオズに尋ねると彼は恐る恐る

「ようは私的に過去に来てるのです、本来ならば未来の我が魔王をお守りしているはず

なのに…」

「今すぐ未来に送り返せ、クーリングオフだ」

「かしこまりました…直ちにトルーパー」

「そんな…ハルト坊よ考え直せ！今ここで妾をクーリングオフすれば敵と戦える戦力のみならず指揮官も失う事になるぞ！」

やたら自己PRが凄いのだが…

「戦力はクロイントルーパーが指揮官はハウンドがいるので間に合ってますし…それに名前を知らない奴なんて信用できないです」

「妾に敬語じゃと！お主は本当にハルト坊か!？」

「またコレか…ジョウゲン達の件といい…あのジジイめ、やっぱもっかいめる！」

「何じゃ、若くてもハルト坊ではないか」

「何処で安心したかは放っておいて、お前は何者だ」

「そうじゃな……妾はヤクヅキ！ 誉れ高きレジェンドルガの女王にしてお主の臣下よ
！」

変身解除して堂々とする自己紹介に首を傾げた

「ん？レジェンドルガってあの？」

「ええそのレジェンドルガで大丈夫です」

「何で…のじゃロリに？俺の知ってる王はあんな可愛らしい感じじゃないぞ…はあ…取り敢えず引き上げだハウンド、ガンシップ用意してくれ皆が心配だ」

「そう仰ると思ひまして手配済みであります…それと奥方様は皆無事です、アンティリーネ様が撃退したとの事」

「流石だな…「しかし」どうした？」

「ガンシップとウォーカーの何機かは逢魔でオーバーホールしないとならぬらしいです…それもパワードイクサもメンテナンスが必須とのこと」

「っ！」ビクッ！

「え？何でさ部品ならストックがあるだろ？余程のダメージがない限り「彼方のアークにやられた弊害との事」マジが…パワードイクサに関してはアンティリーネにも責任があるが…アレ直せるのは束達しかいないからなあ…取り敢えずヤクヅキ？はクーリングオフで」

「堪忍してくれんか！妾は、あんな飛行機や戦車もどきの何倍もの働きを約束する！だから送り返さないでくれ！」

「いやアレ結構金かかってんだけど…あんなとか言われてもな…つか何で帰りたくないの?」

「そりゃあの時代より此方の方が楽しいからじゃ、未来は平和じゃからの戦いがないからつまらん!」

「うわあ本当に戦闘狂だあ…はあ…」

だ
迷いのない瞳を見てハルトは溜息を吐く、正直に言えば彼女の言う事にも一理あるの

だ
ジョウゲン達が離れてる現状、実働部隊の指揮を任せられる人材が欲しかったので

「ウオズ」

「は!」

「ジジイに一応報告しといてくれ、当座は面倒見るけど見切れなくなったら返すつて」
「畏まりました」

「妾は犬猫か！」

「つせえ嫌なら即送り返してやる」

「そんな訳なからう！」

とヤクヅキはノリノリでガンシップに乗り込むのであつた

「お久しぶりです陛下、早速ですがアクロバット飛行しても？」

「今日は辞めてくれ機長」

「それは残念です」

「本当におお…そうは思わんか？」

「そうだねえ」 「何だつまらん」

アークキバットの隣でパタパタ飛ぶ渋い声のコウモリロボを見て

「……………え？」

ハルトは二度見したのであった

—————

その頃 サンジェルマン達と言うと

「そう私達も知らない仲間がいたと」

「逢魔は異世界の国家、私達の知らない技術や人脈もあるワケだな」

「結社単独で挑むのは少し難しいわよね」

「はあ…どうしたものか」

「でしたら我等と手を組みませんか？」

現れたのはメガネをかけた白い軍服を着た男と中性的で無機物のような顔をした男と槍を持った血の多い男あった

「「っ！」」

「武器を下ろして下さい、私は敵ではありません…まあ味方でもありませんが」

「あなた達……なんで…っ！」

「あり得ないワケだ…っ！」

「まあ色々ありましたね…」

「おいおい大将、本当に良いのか？こいつら魔王の味方だった奴らだぞ？」

「今は敵ですよ、敵の敵は味方ですから構いませんよ、魔王の敗因は私と貴方を遠い宇宙に飛ばして手をかけなかった事…それを教えてやります」

「ま、俺あ今まで通り暴れられるなら文句ねえよ」

「そして返り討ちに合うだけ」

「んだとメナス！」

「喧嘩はそれまでにして下さいいきますよ、ネオタイムジャッカー復活の時です行きますよー！」

現れた男　クジヨの後ろには

「ラジャーラジャー」

　　頷く機械仕掛けの兵がいた

因縁 遠い銀河から流れもの

拠点にて

「皆、大丈夫か!？」

ハルトは慌てて仲間達の元へと駆け寄ると

「ああ問題ない」

「敵の殆どはアンティリーネが殆ど対処してたけど」

と錫音が視線を向けた先には

「うう……」「あ、足が…痺れて…」

【私はウォーカーとガンシップを壊しました】

【私はパワードイクサを壊しました】

と首からプラカードを下げて正座をしているアンティリーネと新メンバーのヤクツキがいた

「暫く反省してろ」

「ま、まあまあプレラティとカリオストロから守ってくれたんだから」

「それでパワードイクサ使うか、あれ本来は巨大な敵用だからオーバーキルだぞ」

「あ、あははは〜」

「んでウオズ、何でレジェンドルガの王が俺に従ってんだ？」

あのレジェンドルガが素直に従っているなど信じられないと伝えるとウオズは困ったような顔をして

「簡単に言うとなが魔王が封印を解いたのです」

「え、俺のせい！やばいよキバの世界の終わりを招いちゃった!？」

「それで取り憑こうとしたのですが例の耐性に弾かれました……対話をした結果、レジェンドルガ族の未来の為に従うと決めたのです」

「結果としてキバの世界を平和にしたんだ」

「ちよつと待て……キバの世界にいたって事は……あのジジイまさか……」

「はい、紅親子と登太牙と名護啓介にサインを貰ってました」

「野郎共討ち入りじゃあ!!」

「はあ……」

今回のイベント諸々のストレス発散も込めて殴らせろ!!と拳を突き上げると

「おー!あの魔王には一撃お見舞いしてやる!!」

「落ち着いて下さい、我が魔王」

「錫音も混ざるな!経緯が複雑な奴が混ざると本気か冗談か分からん!」

だがまあ取り敢えず

「被害は?」

背後に控えているハウンドに状況を聞くと」

「負傷者数名、これは此処で治療可能なレベルのものです」

「良かった…：そうだな後でアナザージオウⅡの力で治しとくよ」

「それとヤクツキ様との戦闘でウォーカーとガンシップ…：パワードイクサはメンテナンスが必要…：まともな運用が可能なのは偵察用のスピーダーと重砲だけです」

「ウォーカーとか補充出来ないの？」

「逢魔に確認しましたが補充には一月かかります」

「わかった…：パワードイクサは何とかしようキャロルと東と連絡しないと流石の俺もアレは治せないし」

「ジオウゲンからの報告では現在、エルフナインとの研究をしていると報告があります

が」

「手が空いたら戻ってきてつて言おうか…それと何か悪ノリで何か作ってない？」

「ええ問題ありませんよ…ただI S技術を応用したG 3シリーズを開発しようとしていると」

「今すぐ辞めさせろ!!空飛びながらGX 05撃つG 3—Xとか悪夢でしかないし、この世界の倫理観的にG 4とか作った世界大戦待ったなしだよ!」

「早急に止めさせます」

「頼んだ」

結果としてG 3シリーズは逢魔で開発する事となったが、それが別の火種になるのは別の話

臨時会議室

今回に計画に参加している幹部陣とトルーパー達全員を集め集会を開いた

「さて…長い話はなしにして皆も知つてるところが昨日ド派手な挨拶をした新入りがい
る……ヤクヅキ前へ！」

「う……………うむ……」

「痺れてる足踏むぞ？」

「それは辞めてたもう！…妾はヤクヅキ！未来から来た家臣で仮面ライダーになる宜し
く頼むぞ」

「この子があの巨人に……」

「妾を見た目で侮るでないぞ、フィーニスがおらん本来の歴史なら貴重な巨大戦士じゃ

「からな」

「確かに僕が介入しない歴史なら最強の戦士ですね」

「む、一言余計じゃぞファイニス」

「取り敢えずヤクヅキには1個小隊預ける…だが勝手な行動はするなよ」

「分かっておるわい……じゃが」

ヤクヅキの目が鋭く錫音を睨むと肩を竦めながら話す

「何だい？」

「まさか、あの時のゲートがハルト坊の妻か…改変した結果とは言え因果なものじゃの」

「っ!!!」

「あの殲滅作戦には妾も参加しておったから、ウオズから話を聞いた時は驚いたわ」

「え？マジでいたの？」

「うむ、確か…あの世界に隠れた潜入工員一名を炙り出すために、あの世界全てを破壊しろと命令だったからの降伏も認めなかった…あの時ほど素晴らしい音楽は聴けなかったぞ」

「っ!!」

「じゃが唯一の生き残りがそのゲートじゃよ、のお主はハルト坊が憎くないのか？」

「今のハルトは好きだよ、私が嫌いなのはあの未来のジジイさ…それに私の復讐はあの未来へ辿り着かせない事、彼が道を踏み間違えたら私が殺すから安心して」

「ほお坊を殺すとな…やれるのか？」

「その腕があるか試してみるかい？」

2人はバチバチに火花散る中

「止せお前ら身内で争ってる場合か…それに錫音、俺はお前が望むならいつでも殺されてやるよ、それで良いだろう？」

「まあね」

「それとヤクヅキ、お前の歴史では古参かも知れんが此処では新参者だ勘違いするなよ」

「う…うむ、分かった…」

「よし……んじゃ今日は歓迎会をするぞ宴会の用意だあ！久しぶりに俺が作ろう!!」

「」「」「うおおおおおお!!」「」

その一言でシリアスな空気は吹き飛ぶのであった

『それで大丈夫か?』

数時間後

「はぁ……疲れた……」

ヘトヘトになったハルトが椅子に腰掛けて一息ついた流石に10000人単位の料理など最早炊き出しレベルなのだから疲れもすると思う……流石に分身しないと無理だった……

楽しそうに皆が呑んでる姿を見て一安心する

「頑張った甲斐があるな……よし残りの奴も誘うか」

ハルトは立ち上がると

『テレポート』

アナザーウィザードの魔法でジヨウゲン達の場所へと向かう

—————

「よっ、ジヨウゲン」

「魔王ちゃん、いつ来たの!!」

「アナザーウィザードの魔法でな…そんな事より宴会してるから皆呼びに来ただけど
キャロル達は？」

「キャロルちゃん達なら、彼処だよ」

「へ？……はあ!？」

ジョウゲンに指刺されて目線を向けた先には資料の山に突っ伏してるキャロルと束であつた

「キャロル、束！しっかりしろ何があつた!？」

慌てて駆け寄り2人の肩を叩くと

「は……ハルトか？」

「おお…ハルくんじゃん……」

「2人とも……」

目の隈が出てるのを見て

「まさか連中はキャロル達に違法な労働や研究をさせたのか?……こんな心がすり減ってるなんて…護衛のコマンドーは何してんだ?」

「あ、いや…それは」

「ジヨウゲン真面目に答えろ、でないところの船沈めるか不始末の責任を取らせるぞ?」

「俺は別にこの船は沈んでも良いんだけど流石に冤罪で処されるのは勘弁かな…2人が眠そうのはいつもの寄り道だよ今はアークドライバーゼロの設計図作ってるって」

「マジか……つかG3シリーズ以外も作ろうとしてたの?おい待てアークドライバーって、東が作ったアーク用のだよな?」

「そうそう今後の戦力強化も考えてね、そらとコマンドーは部屋の外だよ彼等を責めないであげて頑張って仕事してたからさ」

「そうか……ごめん早とちりだったな」

『全くお前は最初の情報で走りがちなのだから気をつけろよ』

『熱くなりすぎるのがお前の悪い癖だ』

「何言ってるんだ俺ほど冷静なやつはいないぞ」

『逢魔でグッズ転売があつたら？』

「死罪じゃボケエ!!ウルティマとカレラが止めようと死罪じゃあ!」

『冷静?』

『いや逢魔の法律なら半年位しか牢屋に入れんぞ?』

「そ、そうだった…悪かった相棒達…そうだな俺は冷静じゃないな、だが疲れてるなら起こさない方がいいか…今日の料理は俺が作ったんだけど」「行こう!」「早っ!?!おいオスカー、マイク分隊ついてこい!食いぱっくれるぞ!」

「「急ぐぞ野郎ども!!」」

と分隊も皆、移動したのを確認し

「よし行こうか」「どこに行こうとしてるんですか?」「え?そりやあ宴会にだけど?」

目線を下げるとそこにはエルフナインがいた

「僕達も良いですか?」

「ん?良いよ」

その時の僕達の定義をよく聞けば良かったと後悔したのは少し後の事

—————

宴会場と化している場所では

「おお！ジヨウゲン久しぶりじゃなあ」

「げ…なんでヤクヅキ先輩が」

「まあ今は堅苦しい事は抜きにしようではないかそれよりハルト坊が作った肴がなくなってしまうぞ」

「そんな事させない！……つてカゲンちゃんは？」

「ああ奴なら彼処じゃ」

ジヨウゲンが目線を向けるとそこにはトルーパー達に囲まれて樽ごと呑んでるカゲンと標準的なグラスで飲み比べをしているトルーパーがいた

「……………つ……………つ……………つ！ふはあ！俺の勝ちだ!!」

「そりやそうでしょうよ！樽ごと飲むなんて！」

「あははは！カゲン様相手の飲み比べは命懸けだぜえ！」

盛り上がっている光景を見て

「相変わらずだなあカゲンちゃん」

「ジヨウゲン」

「おおオズちゃんじゃないの、しかし何でヤクヅキ先輩が？」

「勝手にタイムマジーンを使ったらしいのです」

「マジで…それヤバくね？」

「ええ…しかし貴方達が不在の現状ですので取り敢えずは残留させているというのが我

が魔王の判断になります」

「へえ、そう言えば魔王ちゃんは？」

「彼方です」

「……………うわあ…何であんなに不機嫌なの？」

「彼方をご覧下さい」

—————

場面は変わりハルト側

「つたくエルフナインの奴め大分強かになったな」

とボヤクハルトの目線の先には

「おいしいー!」

「デス!」

楽しく宴会に混ざっている奏者たちがいた

「……けっ」

「すまないな我々の分まで」

「しやあねえよエルフナインが僕達つて言つたんだ、まさかお前達全員とは思わなかつただけだ精々ナツキの奴くらいだと思つてたからな、それに」

申し訳無さそうに話す弦十郎だがハルトは不承不承ながらも話す

「客人は持て成す……この一つをとつても逢魔は頂点に立つ国だ、それが例え招いてない

奴等であっても粗略に扱うのは俺の流儀に反するし此処では楽しむといい咎めはしない……がこつそり情報抜き取る人とかいたら撃っちゃうかもね」

「それは無いさ皆楽しんでる……そう言えば」

「何だよ？」

「君とこうやって立場抜きでゆっくり話すのは初めてだと思つてな」

「そーだな、前は邪魔者どものせいもあつて話せなかつたし」

「ああ、まずは謝罪からだな……ライブ事件から今に至るまでの不手際、申し訳なかつた組織の代表としても一個人としても謝罪したい」

「別に気にしてねえよお陰でフロンティアは手に入ったし……それにキャロルの一件では大分そつちに迷惑かけたらこつちの不手際もある言い過ぎな分はあつたと思うが個人的にはお前みたいな奴は嫌いじゃない……が解せないな現場指揮官ではなくもつと上

に立てば良い……それだけの実力があるなら尚のことだ」

「だが俺はこれで良い、上に立って肝心な時に動けないでは困る自由に動ける今の地位で大丈夫だ」

「そっかい、そっちの仕事に嫌気が刺したら逢魔に来ると良い、強いアンタなら歓迎するよトルーパーの教官があつちで新しく出来た基地の司令くらいには取り立てれる」

「過分な評価だな」

「こう見えて人材不足でね、有能な人材は欲しいんだよ」

「断るよ、俺にはまだ仕事があるから……そう言えば一つ聞きたいのだが」

「何だよ」

「フロンティア事変で判明した月の破片落下誘導は異世界にある逢魔でも可能か？」

「ん？こつちくればな落とせるがあの世界からの遠隔操作は出来ない、まあそんな事したくても出来ねえけどな」

「なるほど」

「何だ落としてほしいの？」

「そうではない…仮に逢魔がコチラに来た際核兵器よりも恐ろしい兵器を持っているのだと思ってな」

「そうだな最悪落とす」

「そうならないよう努力するよ」

「期待してねえがな……」「ねえ……」ん？何だよ電鋸さん」

「……月読調」

「俺に何の用？」

「この料理全部貴方が作ったって兵隊さんから聞いた」

「おうとも、何か不満か？」

「ううん美味しい」

「それは良かった」

「私にレシピ教えてほしい…切ちゃんに作ってあげたい」

「ん？別に良いけど…ほら」

あっさりとレシピをまとめたメモを渡すのを見てキョトンとしていた

「いいの?」

「もう全部覚えてるし料理の師匠なら同じことをすると思ってな」

『何地獄のレシピを渡しているんだ末っ子』

『まーまー、良いんじゃないかなハルト!』

約一名反対してたが…まあ良し!

「ありがとう」

「礼はいらねえよ」

そう言うのとハルトは立ち上がり場を離れると

「キャロル楽しんでるか?」

「ああ息抜きには持ってこいだな」

「そっかい…無理するなよ」

「無茶はして良いのか？」

「時と場合によるかな」

「なら遠慮なくさせて貰おう」

「何でアークを」

「それは戦力拡張にだ」

「俺はアークゼロを産むのは反対だアークは人工知能搭載衛星、それで良いじゃないか」

「だが滅亡迅雷やヒューマギアを介して人間を学んでいる…もうただのAIじゃないと言うのが束の出した結論だ」

「けどなあ…」

「心配するな、アークドライバーはアーク自身の防衛プログラムのようなものだ…あの世界には亡国企業が残っている用心のためだ」

「それ信じて良いんだな」

「オレを疑うか？」

「いいや信じてるよずっと」

「ならよし」

「キャロル…愛してる」

「知っている、昔からずっとな」

とキスしようとする2人を見てエルフナインは頬を膨らませナツキの足を踏んでいた

「つて！何すんだよエルフナイン」

「別に……ただナツキさんはああ言わないなあ」と

「あ？……はあ公衆の面前で言えるか、こういうのは家で……かな」

「はい！」

と2人も楽しんでいる時にハルト達がキスする寸前で束が駆け寄り待ったをかける

「ちよつと束さんを見無視するなあー！」

「ちつ！余計な事を」

「無視してねえよジョウゲンから話は聞いたるよ…頑張ってるな束」

「えへへ〜」

頭を撫でると彼女は気持ちよさそうに目を細めるのを見て和んでると

「それで研究はどうだ終わって帰れそう?」

「あの薬のこと?」

「それなら、ほぼ終わりだオレ達はすぐに帰れるから安心しろ」

「良かったよ、結社との戦い…まあ彼処のヤクヅキが原因なんだけどウォーカーやパウードイクサが壊れたから治してほし「おい待て」何?」

「パウードイクサの乗り方をアンティリーネに教えたのか?」

「教えてないよアイツが勝手に使ったんだ、俺はまだブロウクン・フアングしか教えてなかったのに、フェイクフェッスルまで覚えてた」

「特に無知の方が最適解を出すか」

「チーちゃんとは違う意味で戦闘の天才だよ」

「俺もそう思う…生まれ持ったものなのかは知らないがな」

肩を竦めながら答えると

「あー私の話？」

件のアンティリーネが顔を出すと

「アンティリーネ！ パワードイクサを壊したと聞いたぞ!!」

「ごめんなさい、アークの相手で壊れちゃったのよ」

「はあ……全く帰っても忙しそうだよチーちゃん」

「そうだな早く戻ってこい、お前達は私の見てない所で何するか分からないからなG3
計画など私も初耳だったからな」

「わかってるよ、束さんの帰る場所はハルくんの胸の中だからね！」

「そんな冗談を言う余裕があるなら、もう暫く過ごしてもらおうか？」

「嫌だ」

「だろうな」

そして宴会を終えた後、全員元の場所に帰った後

「ふう……………さて」

ハルトは軽くノビをした後、背後に目線を向けた

「驚いた、ダークネビュラの中から出てきてたとはな」

「ええ貴方のお陰で命拾いましたよ」

「久しぶりだなクジョー」

「ええ、また新しい仲間を引き入れたようですね」

そこに現れた人物、かつて倒した筈の敵ネオタイムジャッカーのクジョーが立っていた

「ああ、お前は折角拾った命を捨てに来た？」

ハルトはファイズフォンXの銃口を向けると

「まさか…改めて挨拶にですよ、我等ネオタイムジャッカーはパヴァリア光明結社と同盟を締結、貴方達に宣戦布告します」

「それがサンジェルマン達の結論さ…そうかいそうかい来るなら何度でも潰してやるよ」

「それとコレは挨拶です」

クジヨーが指を鳴らすと、暗闇からザツザツと丸で隊列を成してくる音が

「あ？」

暗闇の中から現れたのは細身の人型ロボットである

「なんじゃありや？」

「彼等はバトルドロイド、貴方がダークネビュラで飛ばした先にあつた惑星の生産工場から生産されたロボット兵士…貴方の従えるクローン兵とは因縁深い相手ですよ」

「ハウンド達と……ああ訓練施設で的にしてた奴等か」

「確かティポカ・シテイの訓練施設で仮想敵になつてたのが、コイツらであつたと思ひ出す」

「リーダー」

「ええ、やつてしまいなさい」

「ヤッチマエ！」

号令と同時にドロイド達は発砲と共に放たれた赤い光弾を慌てて回避し柱の影に隠

れると

「あつぶね!!」

攻撃を凌ぎながら放たれたる光弾の雨を見て

「熱烈歓迎だな……いやぁ人気者は辛いねえ」

『冗談言っている場合か早く対処しろ!』

「ああ任せろよ相手がロボットの兵隊ならアナザーキカイで……そういやあウオズが持つてるよな……けど大丈夫」

『ジオウ』

アナザージオウに変身、ツインギレードを構えてバトルドロイドに啖呵を切った

「今の俺は一人じゃねえ……そうだろうハウンド！」

「待つてました野郎共！ブリキ野郎をスクラップにしてやれ!!」

「『『『サーイエツサー！』』』」

すると建物の中から横合いから放たれた青い光弾がバトルドロイドに命中する

「クローン ダ！ヤッチマエ！」

「こつちのセリフだブリキ野郎！クローン戦争の決着つけてやる!!」

クローントルーパーvsバトルドロイドという遠い銀河で行われていた戦争が、今地球を舞台に改めて開戦したのであった

「さーてタイマンだクジヨー、今度こそ地獄に送り返してやる」

「それは此方の台詞ですよ魔王、久しぶりに私が相手してあげます」

『ジユウガドライバー』

「変身」

現れた十体のエネルギー体がクジヨーと一つになる

『仮面ライダージユウガ! go over』

「あの頃と同じと思わないでください」

「なら見せてみな!」

クジヨーはジユウガになるとアナザージオウは同時に走り出した

「はあ！」

「ふん！」

ツイングレードの突きを片手で弾いてカウンターを顔面に放つがアナザージオウも回避して掴みあう形となるがすぐに間合いを取り直して互いにエネルギーを込めた技を放つが相殺される粉塵が消えて先には誰もいなかった

〈今日は挨拶で終わらせてあげますので、また今度〉

逃げられたと理解したハルトは舌打ちすると

「ちっ……逃げられたそっちはどうだ！」

「クリア！鎮圧完了です死傷者なし……完全に威嚇ですね」

「そうかバトルドロイドの残骸を回収しろ、明朝ここを引き払うぞ」

「サーイエツサー！」

古参ながらの進化

さて今回の物語は前回の拠点から移動した先から始めるとしよう以前と違い堅牢な場所を選んだ定期的に歩哨を立て、ディスクアニマルやプラモンスター達が巡回している程 警備を厚くした

会議室

「クジヨーが生きてた!？」

その一言に皆は驚く特に前回のキャロル事件からのメンバーは尚更に、しかしハルトは普段通りの余裕ある態度で

「あの様子だとレックも生きてるだろうね…しかもバトルドロイドなんて兵隊連れてたよ」

「バトルドロイド?…ああティポカ・シティの仮想敵か」

「そうそう…今更だけどバトルドロイドってどんな奴なんだハウンド?」

「我等の敵で壊すべき奴等です」

「いやそうなんだけど、連中の弱点とか特徴とか」

「はっ！簡単に説明いたします」

ハウンドからの説明はこうである

バトルドロイド

それはクローントルーパーが戦っていた相手で前回の奴は初期型のB1というモデルらしい

機械故に活動場所を選ばず、色んな形があるらしい 歩兵は勿論の事、戦闘機や戦車など多岐にわたる

しかも最大の特徴は数と生産性の良さとのことだが予算の関係なのか頭は空っぽらしく貧弱な体をしているとのことだが真に恐ろしいのは

「連中は数に任せた波状攻撃を得意としますその戦法はシンプルながら侮れません、我々のいた世界でも沢山の兄弟が命を落としますから…」

「危険な敵に変わりなしか…そのドロイドは何処かで遠隔操作されてるのか？」

「それなら東に頼めば良い、遠隔操作で操れるなら苦労はない」

千冬の問いにハウンドは首を横に振る

「いえ、それは不可能でしょう確かに以前は一括制御されてましたが今は此処である程

度の行動が可能となります」

「厄介だな…そうなるかと広範囲技を持つ奴が必須になる…：テストアロツサ達呼ぶか？」

「無用です、ご安心下さい」

「え？」

「ハルト様はネオタイムジャッカーと戦って下さい、ブリキ野郎は我々が蹴散らしてやります」

「大丈夫か？」

「誰に言っているんです？連中相手の戦闘訓練なら10年は熟してます、ヤミーやハルト様の訓練で戦うよりずっと専門ですよ」

「そうか…期待してるよ、そう言えばこの間回収した連中な残骸は？」

「回収済みです」

「よし戦闘後は残骸の回収を忘れるなよ、この世界にあの無人兵器の技術が流れたら大変だ……それと束が戻り次第、頼んで此方側に着くよう再プログラミングする」

「まさか……ブリキ野郎を使う気ですか!？」

「使えるものは何でも使うのが俺の主義だ……それに数があるなら揃えて壁にしてお前達は背後から進軍すれば良いし、夜間警備とか危険地帯の偵察や作業を頼めば良い適材適所だ」

「成る程」

「道具は使いようだ、ハウンド」

「かしこまりましたハルト様、勉強になります」

「つー訳だ結社連中との戦いに並行してのネオタイムジャッカー戦だ、これまで以上に厳しい戦いになるぞ覚悟しておけ……そうなるのだ」

それだけ言うとハルトはヤクヅキに目線を向ける

「この間のセリフ通り、ウオーカーとガンシップ数機分の働きを期待してるぞヤクヅキ
言い訳じゃない事を願うがな」

「任せておけ、ハルト坊」

「よしキャロル達の研究が終わって戻ってきたら本格始動だ、それまで全員英気を養うように！解散!!」

と場を閉めたハルトであった

そして自室に戻ったハルトは一息つくど

「疲れた」

ベットに飛び込んだ

『そりゃそうだろうな』

「……こんな時は温泉にでも入りたい」

『いや無理だろ』

「だよなあ、はあああああ……zzzz」

『今までにない長い溜息だったなオイ』

『待て寝てるだろ！起きろハルト!!』

「……………ん……………ごめん師匠……ヘルヘイムの果実を転売したやつを……半年しか牢屋にぶちこめなかった……………」

『それは即、死罪にしろ!!』

『何つう夢見てんだ!寝ぼけてんじゃねえよ!』

「癒されたい……………そうだ!デフォルメした下級インベスのぬいぐるみを作ろう!」

それをドアの向こうから聞いていたものは、色んな意味で冷や汗をかいていたと言う

『正気かハルト!?!』

「ええ〜アレ結構可愛く……………ないな、うんダメだ疲れてて頭が働かない……………」

そう呟いたと同時にノック音がしたので

「あいてるよ〜」

「失礼するハルト」

「千冬？どうしたの？」

「何だ…お前が英気を養えと言っただろう？だから…英気を養いにと思っただけ…その……」

その態度から何かを察したハルトは

「俺と一緒にいいのか？」

「お前とがいいんだ、いちいち言わせるな馬鹿者」

「んじゃ町にでも行くか？」

「う、うむ…待っているぞ」

「おう…：んじゃこの最新の「文字Tシャツは着るなよ」っ！な、なぜわかった！」

「バレバレだ馬鹿者」

その時ハルトが取り出した文字Tには「解せん」と書かれていたのであった

—————

その頃 SONGsの潜水艦にて

「…：…っ!!」

「ん？」

何かの気配を感じ立ち上がった束を見てキャロルは呆れるが慣れたように片手に缶

コーヒーを渡そうとする

「どうした束？手を休めてる暇があれば、手を動か「キャロりん！チーちゃんがハルくんとデートに行くよ!!」な、何だとお!!」

その衝撃に缶コーヒーを握りつぶしたキャロル、そして大声を聞いたのでコマンドー達やジョウゲンが部屋に入る

「大丈夫！まさかネオタイムジャッカーが仕掛けてきた!？」

「い、いや違う……束の奴が」

「ハルくんがデートしてるんだよ！多分!」

「と言う訳なのだがどうだ？」

「ああ〜そう言えば今日か〜……………あ」

口が滑ったと気づいた時には手遅れであった

「キャロりん！」

「ああオレ達が仕事で留守の間に…千冬の奴め真面目な顔をして抜け目のない奴」

「いやキャロりんいない時に全員で夜を過ごした時もちーちゃんいたから割と抜け目のないよ？」

「………そうと決まれば束！」

「うん!!」

「行くしかない！」

仲良く手を取り合う姿を見てジョウゲンは止めに入る

「え、いやちよっ！人のデート邪魔しちやダメじゃ」「ジョウゲン」はい！」

「安心しろオレ達は邪魔をしに行く訳ではない」

「そ、そっか…よかつ」「仕事をしてるのに遊んでる奴等を出歯亀に行くのだ」「いやアウト——！」

「何故だ？」

「いやいや束ちゃんもキャロルちゃんも魔王ちゃんという時間長いんだから！千冬ちゃんに譲ってあげないと以外と千冬ちゃんって我慢してるんだよ！」

「確かにそうだな千冬にはオレが不在時に迷惑をかけてしまった…主に病んでたハルトを任せて事に関する件で」

「そうだねえ〜けど束さんは邪魔はしないけどチーちゃんが恥ずかしがる姿を見たい訳

「やー」

「そうだなオレも見てみたい…あの鉄面皮がどんな顔をするのか」

「キャロりん、チーちゃんのことそう思ってるの？」

「前まではな…しかし以外と表情豊かだと知ったのだ…よし束、転移結晶で行くぞ」

「やったあ！あ、ジヨウゲンくアイツら上手いこと誤魔化してねー！」

「はあ……本当に邪魔しないでくださいよー！」

「善処する」

「確約して下さいよ!?!」

そうして2人は転移すると

「見つけたぞハルトと千冬だ」

「何かイチャイチャしてるねえ〜こんな時は…よつと」

『STAG』

「束はピンク色の小型携帯モデルのスタッグフォンを起動して2人にバレないように浮遊させると」

「よしよしこれで2人の会話は聞こえるよお〜」

「でかした束」

と2人は出歯亀をするのであった

—————

同時刻、とある町で

「はつくしよん！」

千冬チヨイスの黒を主体としてコーデに身を包んだハルトはくしやみをすると千冬は心配そうに顔を見上げて話しかける

「どうした風邪か？」

「んや多分、俺のことを噂してる奴がいる…それに言うだろバカは風邪をひかないって」

「そうだな…まったく心配して損をしたな」

「最近、俺の扱い酷くない千冬？」

「貴様は私の知る限り束を超える一番のバカだ、ならば風邪など引かんだろう」

『そうだな相棒が風邪を引くなどあり得んな…バカだから』

『そうそう』

―千冬は許すがお前達はアナザーライオトルーパー達に引き摺り回される―

『待てハルト！ 擲楡いすぎたから許してくれ！』

『あお…あの暴走族に追いかけられるのは許してくれ！』

―残念だな相棒…命令済みだ―

『ヒヤッハー！』

『『逃げろー！』』

取り敢えず制裁完了と落ち着くと

「まあ色んなことしたバカだけど元は普通の青年だったんだけどなあ…あれ？普通？だよな？相棒はどう思う？」

『お前の普通の定義がおかしいぞ』

『何処に建国して王になる一般人がいるか』

「それに行く世界で現地妻を増やすと言う大バカだ」

「へ？いやそれはあ…事実だから否定し切れないけど…それならそんな男に引つかかる千冬も悪いじゃん」

「分かってる、そんな貴様に惚れてる私もバカだと言うのは…だが仕方ないだろう？惚れた弱みというものだ」

抱きつくように手を伸ばされると思わず赤面するハルトを見て少しはにかむと

「最近……貴様は王としての仕事や今回の事件にばかりかまけていた……それが王として対応する者として普通なのだが……それに私はキャロル達と違って荒事でしか役に立てない……」

「んな事ねえよ千冬が隣にいてくれるから安心するんだ……頼りすぎて悪いと思うくらいには」

「そうか……だが2人で私という時間も少ないなってしまったなのも事実だ……こう見えて寂しかったのだぞ」

「そうだな……ごめん……仕事ばかりで時間取れなくて……」

「だ、だからだ……その……今日は私だけを見てほしいキャロルや他の連中は忘れてくれ」

もしこの顔を写真にして一夏とラウラに見せたら驚くだろうなあと考えはしたがや

める事にする、俺が独占したいからな

「わかった、じゃあエスコートはお任せをお姫様」

「それはやめろ気持ち悪い」

「凄い辛辣う！」

頬を赤らめながら言う千冬は少し照れているので効果がない訳ではなかったのは幸
いか

その頃、盗み聞きしていた2人はと言うと

「ぶはあ…デレたチーちゃん破壊力をなめてたよ…」

「ハルトにお姫様呼びだと…羨ましい」

「けどキャロリン、お姫様抱っこされてるよね？」

「それはそれだ！」

「あ、動くみたいだよ」

と画面はスタツグフォンに戻る

—————

取り敢えず街ブラとなり出歩いている

「しかし、よくよく考えると千冬と2人きりって言うのは本当に久しぶりだな」

「お前は普段、仕事柄キャロル、東か錫音という事が多いからな…最近は教導でアンティリーネもか」

「本当ごめん…：そう言えば一夏の調子はどうよ夏休みの補修込みで逢魔にいるけどさ」

「ああアイツなら、何とか実技と筆記の基礎部分の履修を完了させた…：取り敢えず次節は何とかなるだろう」

「けど二学期って…」

「キャノンボールファストや学園祭…：まあ行事が多いな」

「そうだな…：忙しくなるな…：…しかし一夏って他の専用機持ちとの戦績良くないよな…：白式ってそんなに弱いかな？」

「いや純粹に乗り手の問題だな、初期から開発に参加してる私達のような例外を除けばIS学園に入る者は小学校の頃から勉強する…：一夏は篠ノ之製作所からのスタートだからな他の連中よりも遅い」

「そう考えると予備知識なし高校スタートなのに身体能力は代表候補生に迫る実力持つ」

てるのかよ」

「そうだな……オルコットやボーデヴィツヒの場合は多少の油断もあつただろうが機会を掴んでいるのは奴の才覚だ認めざるを得ない」

「それ本人に言ったら？喜ぶよ絶対」

「言ったら調子に乗るのが目に見えているのでな」

「確かに……クラス代表戦の時に浮かれてる時の癖が出てたなあ……」

「そうだ……だが……」

「大丈夫、何かあるなら俺を遠慮なく頼ってよ必ず千冬の力になるから」

「そうか頼りにしているぞ」

「おう…：任せてくれよ！俺達は最強だからさ…：それにしても服選んでくれてありがとう」

「でないとお前はあのダサイTシャツを着るだろう」

「良いじゃん似合うんだし…：つてかダサくない！」

「良くない！」

「うーん…：じゃあ皆が選んで、皆が選んだ服なら喜んで着るから」

「私達が服を選ぶ…：それは良いな」

「千冬？」

「何、着せ替え人形にしてやろうと思っとな覚悟しろ」

「そりや楽しみ………ん？」

「どうしたハルト？」

「いや誰かいるかなと思ったが勘違いみたいだ、何でもないよ」

「そうか…では行こう」

「おう」

道中ナンパされた千冬を助けたりと色々な一幕があつたが割愛しよう

そして夕暮れも近くなり簡単な夕食を済ませた頃にはすっかり日が暮れていた

「俺もゆつくり出来たよありがとう千冬」

「礼には及ばんさ、私も好きでしているのだからな」

「そりや良かった」

「そ、それでたハルト…今日なのだが「ちよつと待て…誰だ！」ん？」

ハルトは気配を感じると千冬を抱き寄せながらアナザーウオッチを構えた、すると虚空から現れたのはサンジェルマンである

「バレていたのね」

「サンジェルマン…デートの出歯亀する程結社の連中は暇なのかい？」

「え？出歯亀なんてしてないわよ」

「あれ？じゃああの気配は一体…」

「まあ目的はわかるわよね…貴方の命貰い受ける」

「嫌だけど？それに昔からこう言うだろう……人のデータを邪魔する奴は……」

そう喋りながらファイズフォンXにとあるコードを打ち込んだ

『5・8・2・1 ENTER』

『9・8・2・1 ENTER』

「メカに蹴られて月まで吹っ飛べ!!」

「いや言わないわよ」

サンジェルマンがツッコミをしたのと同時に

『オートバジン（サイドバッシャー）come closer』

ハルトの元にやってきた2台のバイクは彼を守るように並ぶハルトは躊躇いなく一台のボタンを強く叩く

『BATTLE MODE』

「撃て！」

無骨な音声と共にアナザーオートバジンに変形し前輪が変形した機関砲を躊躇いなくサンジェルマンに発砲、錬金術で防御するが弾切れまで間撃ち続けるのであった

その間に2人はドライバーとウォッチを構える、中でも一番怒っているのは千冬であつた

「貴様……よくもハルトとの時間を……」

『メロン』『ドラゴンフルーツエナジー』

「流石に今日は空気読め、サンジェルマン」

「変身！」

『MIX！ジンバードドラゴンフルーツ！ハハア！』

『ファイズ』

千冬は斬月・ジンバードドラゴン、ハルトはアナザーファイズになりアナザーオートバジンのハンドルを引き抜き剣とした同時にフォトンブラッドを帯び始めるとアナザーオートバジンの射撃が止んだ刹那

「っ！」

斬月はソニックアローで射撃し体勢を崩させるとアナザーファイズが待ってましたとばかりに斬撃を放つがファウストローブを纏ったサンジェルマンは武器を剣モードにして何とか弾き飛ばすが

「……………」

「しっ—」

ソニックアローにエネルギーをチャージして真上に放つとメロン型エネルギーが矢へと変わり降り注いだ

「今だハルト—」

「っ—」

「サンキュー—！千冬!!」

サンジェルマンは銃モードに変えて撃ち落とすが数の桁が違う、それ以前にその隙を見逃す訳がなかった

『READY SHOT ON』

「チェック！」

『EXCEED CHARGE』

「しまっ！」

「はぁ！」

右手にアナザーファイズがアナザーファイズショットを召喚して走りながら必殺技を発動するとフォトンブラッドを溜め込んだファイズショットでサンジェルマンにアナザーグランインパクトが決まる その刹那

「くっ！」

巨大な鉄球が間に挟まると壁になりアナザーグランインパクトを受け止める

「……ちっ！」

「助っ人登場なワケだ」

「プレラーティ、どうしてここに？」

まさかの助っ人に驚くサンジェルマン、しかし斬月は油断せず次の矢を構えている

「気まぐれなワケだ…それにハルトには借りがあるワケだ」

「俺に借り？」

はて何かしたか？と首を傾げていると

「ふざけるな……貴様がノエルを吹き飛ばした影響で私のチフォージュシャトーが瓦礫の山になった件だ！」

そう言えばチフォージユ・シャトーの残骸を結社が引き取った時、プレイヤーティが発狂していたと思いい出し

「……………あ」

思わず出た言葉で彼女は激怒した

「貴様あ…今の今まで忘れていたワケだ！」

「いや、アレは爆散したゴードが悪い…俺はライダーキックしただけだから」

「とんだ責任転嫁なワケだ！」

「事実なんだけど…まあ良いや、パワー勝負がお望みなら見せてやるぜ新しい強さを」

実は最初期組のアナザーライダー達は魔王化に辺り最強フォームを獲得した後も個

別に進化していたりする……俺の願望を取り入れているかも知れないとは思うが

アナザーウオッチを押し新たな姿となるオーラが黄色の装甲を形成した、その様相はまるで熊に襲われた人間のように顔に引つ掻き傷を持つアナザライダーである

『電王……アックス』

アナザー電王・アックスフォーム

同時に紙吹雪が舞い散るとアナザー電王はキンタロスが持っているような無骨の斧を肩に担ぐと

「俺の強さにお前が泣いた！涙はこれで拭いとき！」

「誰が泣くワケだあ！」

踏み込みながら放たれた鉄球は迷いなくアナザー電王を吹き飛ばそうとしたが

「どすこい！」

相撲の突っ張り感覚で放った右手の一撃で相殺されたのであった

「な、何だと！」

「言つたろ？俺の強さは泣けるで！！」

『物理的に泣かせるフォームだな』

「ふざけるなよ、この馬鹿力があ！」

「そうだろ、まあそれだけじゃないのがアナザー電王だよな…っ！選手交代！」

『ちよつと待て！早すぎや！』

『電王……ガン』

そしてドラゴンゾンビを思わせるような外見をしたアナザーライダー

アナザー電王・ガンフォームになると

「『えへへ〜今更だけど、お前倒すけど良いよね?』」

「何?」

「『答えは聞いてない!!』」

同時にリュウタロスが持っている銃を発砲、乱射の要領で放たれた弾幕射撃にはプレートイもサンジェルマンを守るようにしか動けなかった

『危ないぞアナザー電王!後ろにカリオストロだ!』

「え！何処!!」

慌てて後ろを見るが誰もいない

『よつと』

「あれいない?……うわあ!」

今度は青いエネルギーがアナザー電王を包むと老いた漁師と亀を思わせる装甲を纏う戦士

『電王……ロッド』

アナザー電王・ロッドフォームになるとウラタロスが持つ青い錨のような武器を肩に担いで

「『なんてね言葉の裏には針千本……お前も僕に釣られてみる?』」

アナザー電王とハモリながら決め台詞を言うと

「何でノリノリなワケだ!」

「教えてあげないよ、はああああ……はあ！」

鉄球を槍で弾いて投げると亀の甲羅模様が浮かび上がると同時にアナザー電王はジャンプし急降下キック アナザーデンライナーキックをお見舞いするとプレラーティの武器は破壊されたが2人は無事であったのを見て

『おいおいハルト！この俺を抜きにしてクライマックスなんてつまらない事言わないよな！』

「当たり前だろ、何せ今日の俺は最初からクライマックスだからな！」

『よく言った！行くぜハルト！』

「おう行くぜ相棒!!」

『電王』

「『俺…参上!!』」

と同時にだ

『お前たち、私を忘れるな』

「へっ……いやちよっ!のわ!」

白いオーラがアナザー電王に襲い掛かると、それは白鳥のような顔をしたアナザーラ
イダーへと変わる

『電王……ウイング』

アナザー電王 ウイングフォーム

「『降臨!満を辞して!』」

『この手羽野郎！俺のクライマックスを横取りしやがって!!』

『これが教養の差だ俗物』

『何だよこの野郎!!』

「何一人でぶつくさ言って姿を変えてるワケだ!!」

「これは失礼、そう言う仕様なのでな…では参ろう」

その手には歪なブーメランとマチエットが握られオーラエネルギーを込めると同時に投擲したが現れたアルカノイズが盾となり止めるが隙は出来た

「出番ですよ麗しの戦乙女」

「ハルトの姿で齒の浮く事を言うな！」

『ロック…オン!』

「はあ!」

『ドラゴンエナジー!』

紅龍となった一矢 ソニックボレーは2人目掛けて襲い掛かるが住んでのところで出した結晶により脱出したのであった

「ちっ!逃したか」

「くっそ……キャラルに頼んで転移先を割り出してやる」

とファイズフォンXで電話をかけたら

『♪♪♪♪♪』

「え？」

凄く近くから着信音が鳴るではないか

「……………」

まさかと思うが…いやそんな事ないだろう

「千冬」

「了解」

俺の意図を察してくれた千冬はソニックアローを構えて最大エネルギーで放とうとする

「待て（待って）！！」

と慌てた様子で飛び出す兎と錬金術師を見て

「何してんの？」

「これはさそう！ハルくんが襲われてピンチと思って駆けつけたんだよ！」

「それならコマンドー達もいるよな？」

「うっ！」

「はあ……出歯亀してたのはお前たちか……」

「そ、それは……」

「別に良いよ、他の奴も同じ事するだろうし咎めないよ」

「ほっ……」

「許す、俺はな」

「ん？」

あれ？雲行きが怪しくなつたと首を傾げる2人は見た、彼の背後で殺気を出しているメロンの君を

「んじゃ千冬、後は任せた」

「ああ……人のデートを盗み見するとは……覚悟は良いか？」

『カチドキ！』

「い、いやあああああ！」

その翌日 彼女達は死に物狂いで研究を終わらせ帰ってきたと言う

だが彼女の機嫌は悪くなったので

「……………まったく、甘えたいならそう言えよ」

「良いだろ別に」

暫く彼女に膝枕をする結果となりました……………あれ？結構役得？

強襲!不敗の建築王

強襲される意味?

トルーパー達は拠点にしている場所で逢魔からの補給物資を受け取っていた

「任務完了ですコマンダーハウンド」

「ご苦労だったなキャプテン」

「当然の事をしたままでです…しかし本当に違う世界なのですな」

「ああ俺も驚いたが慣れた…ハルト様について行ってから毎日が驚きの連続だ」

「それは…そう言えば噂に聞きました、ブリキ野郎が現れたって」

「本当だ、それでハルト様も本気で戦うつもりでいらっしやる」

「血が滾りますなコマンダー」

「その通りだキャプテン俺達の仕事だ」

2人が会話していると

「暇じゃーーーーー!!」

と叫ぶヤクヅキがいた

「何かありましたか?」

「何もこうもない!この時代は妾の感覚で言えば逢魔黎明戦乱期じゃ」

「何ですか?その物騒な時代は?」

「日夜いろんな勢力が逢魔を奪おうと守ろうと戦いに明け暮れておったのに!何じやこれ!平和ではないか!」

「いや平和なのは良いことでは?」

「それでもお主らはクローントルーパーか!妾でさえドン引きする程強い戦闘民族マンダロリアンの血を引く存在か!!」

「いや…まあそれ以前に我々は兵士ですから」

「そうじゃったな…:ハルト坊め新参とは言え妾の扱い悪くないかの?」

「そう思うなら少しは働いてください」

「おおうオズ、丁度良い所に妾と戦「いませんよ」ちっ」

「やれやれ……ジヨウゲンやキャロル嬢達も帰ってくると言うのに……見てください我が魔王を……あれ？」

とウオズが指差した先では、ハルトが逢魔空軍の中核をなすスターファイター隊を支える相棒とも呼べる アストロメクドロイドを整備していた

「あの………何してるのですか？我が魔王」

「あ、いやあ何か調子悪そうな子だったからさ………これで良しと大丈夫かい？関節部に砂が詰まっていたみたいだからさシーリング処理しといたよ」

「!!!」

「どういたしました………えーと………君の名前は……R2―D2か宜しくね、消耗部品も新品に変えたからさ」

「!!!」

「けど君の持ち主凄いい君の事好きなんだね自作パーツでカスタムしてるなんて初めてみたよ」

「!!!」

「あはは、そうかそうか…へえ…：君はジェダイと一緒にいたんだ俺はクローントルーパー達から噂程度にし聞かないからさく良かったら詳しく教えてよ」

「!!!」

「そうなんだくえ? いや彼等は俺の大事な仲間だよ帝国? って奴の手先じゃない…王国の仲間さ」

「いや我が魔王! その子は今すぐ元の次元に帰すべき存在です!!! と言うよりこの作品にいてはいけない子です!」

「メタいよオズ：つかR2―D2って有名なの？」

残念ながらハルトは知らないようなので

「その子は仮面ライダーの歴史で言う立花のおやつさんくらい重要な存在です」

「超大事な存在じゃねえか！R2今すぐお帰り！」

慌ててオーロラカーテンを繋いだ

「!!」

ありがとうと言った気がしたR2は元の世界に帰っていった

—————

「何処へ行ってたんだいR2！ルーク様が心配されていたぞ！それにどうしたんだ砂漠
装備なんてして」

金色のロボットが心配そうに話しかける

!!!

「何?クローンが現役で働いている世界にいた?何を馬鹿な事を帝国のクローントルーパーは全員退役したぞ夢でも見てるんじゃないか?」

!!!

「はいはい、そんな事よりこれからルーク様の指示でジャバの宮殿に向かうんだ失礼のないようにな」

!!!

「何、私の方が心配だと…何を言って…おい待てR2何処へ行く!」

そんな一幕があったという

—————

さてそんな予想外な日常を過ごしていたが

「つー…はあ…はあ…はあ…はあ…はあ…はあ…」

ナツキは凄い汗を掻きながら息も絶え絶えになり仰向けになっているがハルトはケロツとした顔で汗をかかず

「ま、妥当かな辛うじてリバイブは実戦使用可能だよ…まあ長時間使ったら倒れちゃうけどさー！」

「お、俺は人間なんだよ…人間辞めたお前と同じ体力じゃねえんだ…よ…まだ慣れてないけど…やっぱ強えよお前…」

「当たり前だ何年こいつらと一緒にいると思う？それに今日はお前がアナザーライダーの戦い方教えてくれて言ったから時間見つけて手伝ってるのに…んで手応えは？」

「ある！」

「それなら良かった、んじや終わ「ハルト！」何さ？」

「お前に相談がある、ハーレムを形成して女性経験豊富なお前にしか頼めない事だ！」

「なあ相棒、実は最近さ新しい必殺技を考えてんだけど目の前のアナザーゲイツに試すのどうかな? 『良い考えだ』 んじゃ 『デートで女の子を楽しませたいです!』 …いや自分で考えろ」

「いや、そこは先達としてアドバイスをですね」

「一生懸命に考えればエルフナインも喜ぶよ」

「そつ、そうか……けどなあどうしたら」

「まあ頑張れよ」

「んじゃ、ハルトは初デートのこと覚えてるのか?」

「勿論だよデート……アレをカウントして良いのか?」

『錫音をナンパから助けた結果、デートになったな』

「まあそんな感じだ頑張れよ」

「お、おう」

「んじゃ次はどの子で「陛下大変です!」どうした?またヤクツキの奴がな「いいえ違います!」ん?じゃあ」

「奥方達の載っているガンシップが何者かに襲撃されています!!」

「相棒!」

『分かっている、オーロラカーテンだな』

オーロラカーテンを出すと

「大至急部隊を派遣しろ、ウオズ達も早くこいと言え!俺は先に行く!」

「サーイエツサー!」

「俺も行く!」

「勝手にしろ」

—————

そう言うとおーロラカーテンを超えた2人が見た物は広い砂漠とガンシツプの残骸と物言わぬ骸となつているコマンドー隊員であつた

「つ! キャロル! 束! ジョウゲン!! コマンドー!! 誰がいないか!!」

と叫ぶが誰もいない

「お前達! 草の根を分けても探し出せ!」

ディスクアニマルやプラモンスター、カンドロイドを解放し広範囲索敵を行う

「なあ相棒、俺にもアギトの力ってあるよな？」

『アナザーアギトの力があるからな持っている』

「ならサイコメトリーの的な物も可能か？」

『ああ、問題ないが使う意味もないだろう』

「何？この状況でそんな悠長に【!!】あそこかあ!!」

『フォーゼ……ロケット』

「宇宙来たーーーーー！」

派手な爆音と共にハルトはアナザーフォーゼは右手にロケットモジュールを装備するとすぐに発進した

「いや俺を置いてくなー!」

—————

その頃 キャロル達は爆散したガンシップから離れて一息ついていた

「まったく…帰り道で襲われるとは予想外だったな」

「まったくです……殉職者4名、コマンドーの一個部隊がこうもあっさり」と

「そうだよ!これじゃあハルくんに会う前にお風呂だよ……いやハルくんと一緒に入れば良いのでは?」

「そうならいいよ連中全員やりかねんぞ」

「oh……」

「いや2人ともかなり余裕じゃん！砂漠のど真ん中で遭難してるんだよ！もうちよい危機感持とうよ！」

「ジヨウゲン、貴様は知っているだろうハルトが事情を知れば「宇宙来たー！ー！」飛んでくることだろう」

「ま、魔王ちゃんどうして……てか来るの早っ！」

「皆良かった…本当に良かったよ…」

ハルトは安堵の表情を見せるが直ぐに切り替えて

「隊長、被害は？」

「はっ！コマンダー部隊1壊滅、残りも怪我を負っています」

「何があった?」

「待ち伏せに会いました、ブリキ野郎の攻撃でガンシップは墜落」

「それで連中は?」

「問題ない今頃は砂漠の中だろう」

「キャロル殿がオーズに変身、サゴーズで全員を砂中に沈めました」

「分かった取り敢えずここは危険だ早く拠点に戻るぞ、ここにもうすぐ増援も来る予定だから「早くお前を消さないとなあ!」っ!」

反応して言葉を交わす前に

『ランチャー、ガトリング…オン』

両足に装備すると一齐に射撃した

「い、いや、ちよつ、のわあああ！」

爆破で軽く吹き飛んだのはレックである

「つてて……いきなり攻撃する奴がいるか！前振りをだなあ」

「……………コマンドーの仇だ」

『ロケット、ドリル…オン……リミットブレイク』

「アナザーロケットドリルキック!!」

『技名は叫ぶんだな』

「様式美だー」

同時にレックに放たれると粉塵が上がる

「あちやあくハルくん、怒ってるねえ」

「当然だな」

「仲間をやられたら魔王ちゃん必ず報復に来るから……つてええー!」

よく見ると回転するドリルモジュールを驚掴んでキックを止めているレックがいた

「っ!」

「そーらよつと!」

キックが不発となるなりモジュールを解除し少し距離を空けるアナザーフォーゼ

「今の感じ…人間辞めたのか」

「ああメダルの器にされた後な目が覚めたら半分グリードみたいになったんだ…あの時からな、今までと同じだと思ふなよ」

「ポセイドンへのメダルを無くしたお前に変身能力はないだろう？」

「つて思うだろ？見せてやるぜ俺の新しい力！」

ベルトを取り出そうとしたのが見えたので

「撃て」

「おいおいおい!!」

コマンドーが冷静に全力射撃をするが器用に避けるレック

「容赦なしか!」

「変身前を狙えと俺が訓練したからな」

「本当にお前ファンなのか!」

「当たり前だ俺が敬愛して止まない偉大なるレジエンドライダー達だな!彼等のような大義も志もない、ただライダーの力を使うのみの奴など俺は認めない!」

「なら見せてやるよ…!」

取り出したのはジャマトライダーが使っているドライバーであった

『デザインドライバー』

そしてその手に握られているのは、まるで重機のような重みを感じさせるバツクル

パーツと武器を思わせる小型バックル収まっているバックルである

『SET WARNING』

背後からエネルギーが壁のように立ち上がり両柢にはロボットアームが装甲を建築している

「変身」

『WOULD YOU LIKE A CUSTOM SELECTION』

同時にアンダースーツと黄色の装甲が纏う
ヘラジカのような戦士

不敗の重機 仮面ライダーシーカー

「あのライダー…ギーツ系統か」

「ああ、だがその力はお前の知るはずのない未来のライダーだ!」

「いや、オーマジオウのゼミで習った」

「……………は?ハツタリだ!!」

『G I G A N T H A M M E R』

シーカーはコンテナバックルから専用バックル パワードビルダーバックルに装填しギガントハンマーを召喚、地面を強く叩いて大量の柱を伸ばすと

「たあ!」

そのままハンマーで柱を打ち出した並外れた速度で放たれる柱は弾丸のようにアナザーフォーゼに襲い掛かるが

「舐めんなあ！」

『N…S　マグネット…オン』

アナザーフォーゼ・マグネットステイツになると両肩にある磁石擬きが起動すると鉄骨や柱などを止める

「これぞ磁石の力だ！これは返すぜ！」

同時に磁石で囚われた柱が反射して弾き飛ばされた

「うわあ……ちっ、やるな……なら！」

ハンマーで鉄材を操作して壁を形成し

『GIGANT　BLASTER』

「これでどうだ!」

「何の!」

呼び出した銃を使い壁の穴を開けるとバリケード代わりに使ったシーカーの一撃を放つがアナザーフォーゼの電磁砲により相殺されたのであった

「ちっ!」

「これで決める、砂漠の日差しは嫌いだ」

『LIMIT BREAK』

「アナザー……超電磁ボンバー!!」

純粋な電磁力の弾丸が砂漠にある砂鉄と反応し巨大な鉄球となりシーカーの作った壁を破壊した

「一撃でだど！」

「これが俺達の手だ……見てろ」

とハルトが取り出したのはフォーゼ最強フォーム変身アイテム コズミックスイツチを取り出すが

「……………あれ？反応しない？デンジャーとも言わない？」

無反応故にハルトは驚いていると

「今だ！」

「っ！」

ギガントブラスターの弾丸がアナザーフォーゼに命中すると

「え…何でコズミックになれないのさ!」

『それは自分で考えろ』

「うーん、…大体の理由は分かるけど……よ!」

恐らく本家フォーゼと同じように仲間の絆的な何かのアナザーコズミック変身への条件なのだろうな

「しっかし……暑い……」

勢いで出たから砂漠の熱で体が火照るように感じるな

「……きつい…熱耐性スキル…機能してるのに……」

『それは気持ちの問題だな、まったく何故その辺の部分が人間と同じだと言うのだ』

「以外と人間……らしくて……良いだろ？」

『はあ…アナザーレンゲルに変われ、ブリザードの力で冷やす』

『いや、ここはアイスエイジのメモリを使え』

『いやフリーズモジュールを使え！』

「そうだな流石に砂漠でコレはきつい…アイスエイジを」

「知らんのか、もっと効率の良い方法があるぞ」

「へ？」

首を傾げたと同時に砂塵を巻き上げながら着地して現れたのは赤髪の軍服を着る少女

「ヤクヅキ?」

「そうだ何時ぞやの約束通り、ウォーカーやガンシップ数機分の働きをしに来たぞ!」

「よく来たな…俺は暑いから下がる…やっぱり暑いのは嫌いだ」

「うむ、任せておけ」

自信満々にヤクヅキが答えるとシーカーは見るなり

「何だ子供か?」

「誰が子供だ!まあ良い、貴様の音楽(悲鳴)を聞かせてみせろ若造…こいレイキバ!」

「行こうか!華麗に激しく!」

同時に現れたのは白いコウモリ型ロボット、レイキバットはヤクヅキの周りを飛び回

りながらシーカーの攻撃からヤクヅキを守っていた

「変身」

『へんしん!!』

同時に雪の結晶のような紋章が現れると碎けてヤクヅキの体から白い装甲と冷気を纏う両腕を鎖で固められた戦士

機械仕掛けの雪男 仮面ライダーレイ

「では参ろうか！」

「舐めるなあ！」

シーカーとレイが戦闘に入っているとレイから発せられる冷気の強さで砂漠でも心地の良い温度になる

「ああ……涼しい」

「ひんやり」

キャロルと束は満喫しているがコマンドーの着るカタン級アーマーには体温調節機能もあるが心理的にはヘルメットを脱ぎたくもなるとボヤク

「……相棒」

『何だ?』

「ぶっちゃけるよ」

『おう』

その目線の先には

「がっ！ふっ！」

あの頑丈な鎖で包まれた両腕での一撃でシーカーの装甲を凍らせながら殴つてきたが

「ふははははは！良いぞシーカー反撃してみせろ!!」

「ハ、ハ、ハの野郎!!」

肝心なのがヤクヅキが笑いながら拳を奮っている……雪、笑顔、拳……うつ！頭が!!

「何というかヤクヅキだけで大丈夫じゃね？」

『ああ』

「さて、そろそろ終幕じゃな」

『WAKE UP!』

同時に両腕の鎖が破壊され中から巨大な鉤爪ギガンティッククローが現れるとレイキバの口から冷気が飛び出し砂漠の中でありながらシーカーの足を凍らせた

「はああああ!せやあ!」

それと同時にギガンティッククローで切り付けた

「ガアアアアア!」

シーカーは爆破と共に強制変身解除される

「まあ良き音楽じゃったな」

「く……おい!出番だ!」

砂の中から現れたのはバトルドロイドとは異なり両端が放電しながら刃となっている武器を持つドロイドであった

「やれ!!」

そう言うときシーカーはギガントブラスターを発砲すると門を作り転移した

「あれはマグナガード!」

コマンドーの隊長は驚くと周りも同じように尋ねる

「何それ?」

「要人警護を前提としたドロイドで、その戦闘能力は我々コマンドーやARC（高品質）トルーパーと互角であります」

「やばいじゃん」

周りが心配そうな顔でレイを見るが当人は

「はあ………何じゃどんな奥の手かと思ったかちよつとマシなブリキかつまらん」

「どうする女王?」

「音楽(悲鳴)を聞きたいのに……これではつまらん、ハルト坊変われ奥方の避暑は任せろ」

レイは変身解除するとヤクヅキは背を向けてアナザーフォーゼの肩を叩くと

「つたく……しゃあない……暑いのがヤダから終わらせてやる10秒でな」

『ファイズ……アクセル』

アナザーファイズの胸部装甲が展開、加速形態の アナザーファイズ・アクセル
フォームになる

『READY SHOT ON』

右手にアナザーファイズショットを装備するとさせるかと！マグナガードは動き始めるが何故か刹那動きを止める

同時刻 別世界にいる青いアストロメクトロイドがコンソールを操作していたと言
う、まるで借りは返したぜと言わんばかりに

その刹那にアナザーファイズは加速をした

『START UP』

視界からアナザーファイズが消えると同時にマグナガードが宙に浮き上がる

それは加速する世界の中でアナザーファイズが何度も拳打を浴びせていた

「チェック！」

『EXCEED CHARGE』

アナザーファイズショットにフォトンブラッドをチャージするとマグナガード達に
アナザーグランインパクトを叩き込む

『3』

「せやあー！」

『2』

「もう一丁！」

『1』

「ラストお！」

『TIME OUT』

同時に加速が終わるとΦの模様と共にマグナガードは灰となり砂漠と一体になったのであった、アナザーファイズに戻るとハルトは変身解除して

「ふう……終わりだな……お、来た来た」

同時に現れたのはガンシップが数機

「我が魔王ご無事ですか！」

「遅いぞウオズ」

「申し訳ありません、被害は？」

「コマンドーが何人やられた…それとガンシップが一機」

「回収作業はお任せを…」

「お願い…2人とも！」

「触るな（らないで）!!」

「え？」

「いや、その汗掻いてるからな」

「砂埃でシャワー浴びてからじゃないと…」

「あ、そつか俺も砂まみれだな…んじゃホラ」

2人の手を握りガンシップに乗り込むと

「ネオタイムジャツカーの奴等…何でガンシップの航路を…」

「まさかSONGSが？」

「それはないと思いたい…希望的観測だな」

「では誰か…」

謎が謎を呼ぶ…しかし以外と答えは単純な所にある

『そう言えば、テストタロツサ達が何人かこの世界の権力者をワームがロイミュードに擬態させて無かったか？』

アナザーWの発言は嘗て三人娘がこの世界で彼を利用した者を肅清した後 替え玉でワームやロイミュードを擬態させて潜伏させているのだ
ハルト、ジョウゲン、ウオズの3人は

「「……………あ!!」」

と驚く全員であるが機長が恐る恐る発言する

「あの…………陛下、あそこで両手を振っている男が見えるのですが…」

「へ?……………あ!!」

砂漠にて

「俺を忘れるなあ……………」

悲報 ナツキ 砂漠で遭難しかける

……………

拠点に帰りウオズ、ジヨウゲン、カゲン、フィーニス、ヤクツキを召集し会議を始め

る

そして擬態してる内通者の情報から分かったのは

「成る程…情報を漏らしたのはバヴァリア結社の内通者か…それと」

「風鳴機関ですか」

「確かSONG sの前身、二課の支援者ですね」

「あの家系…かなり面倒な場所なんだな、んでいつからだ？監視してたのは？」

「出張していた時に間諜の類がマークしていたようです」

報告書にあった名前を見て苦い顔をするハルトであった

「しかも狙いが束とキャロルの技術目当てで理由が国防の為に利用してやるだど？俺の

嫁達を何だと思ってやがる!!」

ハルトは机を強く叩き怒りを発するが

『ナチュラルに嫁呼びとは』

『あの時の唐変木がだいぶ変わったなあアナザーデイケイド!』

『うむ…落ち着けハルト、貴様が怒ると俺達のいる空間にも影響が出るのだ』

『はあ…分かったよ、茶化すなって恥ずかしい』

「……………それと我が魔王の身柄と逢魔の国土を狙っているとも調べはついてます」

その聞き捨てならない情報に

「何?」

「過去のフロンティア事変でハルト様を政府所有と宣っていた一派が、その関係者だと調べがっています…どうやら国土にするだけで飽き足らず攻撃要塞にしようとも」

「潜伏していたものからも証拠を確保しています」

「ほお…それは厄介じゃなどうするハルト坊」

「一応参考までに聞くけど、あのジジイならどうしてる？」

「宣戦布告ですね」「国を焼いておるな」

ウオズ達の言葉に天を仰ぐ

「まあ皆に手を出すなら同じ事をするかも知れないから怖い…」

「それで対応は？」

「今はSONGSとの共闘関係を維持しないとまずい」

単純にネオタイムジャツカーがバトルドロイドを導入した事で数的に越えられたのがいたい

「連中が仕掛けてきたら遠慮なく反撃するぞそれと単独での外出は厳禁だ敵の狙いが皆だある以上必ず複数人で動く事良いな」

その指示には

「」「」「我が魔王（魔王ちゃん、ハルト様、魔王様、ハルト坊）が言わないでくれ」「」

「何でここで心が一つになるかなあ!?!この仲間達はあ!」

全員の心が一つとなっていた

『日頃の行いだらう』

「そもそもです、ね我が魔王、以前から言いたかったのですが、このような事態になって心配なお気持ちは分かります、しかし大将が勢い任せで飛び出すのは如何なものかと具申致します」

「そうだよ！俺だってビックリしたんだからさ！」

「い、いやそりゃ心配になるだろう！皆のピンチなんて知らせ聞いて落ち着いていられるか！」

「ですがオーロラカーテンを使い単身で突入など……」

「早い方が良いに決まってるだろう！」

「しかし罠の場合、魔王様がピンチに」

「そんな時はあ……相棒達を頼る！」

『任せろ!』

「まあ、その行動や思いを慎めとは言わん…じゃが一度お前は自分の立場を理解する必要があるなハルト坊」

「……はい」

「ウオズの言う通り、お主は国の王なのじゃぞ誰よりも自らの不安や心配を律して冷静に立ち振る舞う必要があるのじゃ…それこそ仲間の死に対してもな」

「っ!」

「お前と言う光を無くせば逢魔は滅ぶ、そうなったら連中の思惑通りよ」

「……………」

「まあ未来のお前も感情的に動いていた…だがいつでも冷徹な判断が下せた仲間の死な

ど羽毛より軽いと宣っておったな」

「あのジジイ、マジでやばいな」

「だが今の貴様はウオズや皆と出会って変わった、同じ時期に傘下に入ったが貴様は仲間や愛する者を守ろうと命を惜しまない…そんなのは妾の知る常葉ハルトではない」

「そうだよ俺はあのジジイと違う未来へ向かう、そんな俺が嫌なら帰れ誰も止めないさ」

「違う決めたのだ改めてな…常葉ハルト殿、レジエンドルガ族の王 ヤクヅキ…貴方の傘下に加わりたく存じます、加えて今までの非礼ご容赦ください」

「……………え？」

「まあ端的に言えば貴様が気に入ったのだ、あの冷徹なハルト坊も捨てがたいが今の青臭いハルト坊も良いと思っておる…寧ろあのハルト坊よりも面白いものを見せてくれると思つてな」

「嬉しいけど皆のピンチって聞いてその場に残れなんて」

「以前、ベニマル殿が仰っていましたよ仲間を信じろと」

「だけど……」

「魔王様がボク達を心配してくれる気持ちは凄く嬉しく思います……ですがボク達も同じように貴方が心配なんです」

「あ……」

「フイーニスの言う通りです我が魔王、私達は確かに貴方から見れば未来の自分から来た使者とお思いでしょう……ですが歴史は変えられる、それは他ならぬ貴方が教えてくれたことです」

「俺達は魔王ちゃんだから良いんだよ」

「飯が美味しいのと待遇が良いからな！」「ちよつとカゲンちゃん!」「む？違うのか？」

「だから遠慮なく我等をお使いください我が魔王」

「わかったよオズ、俺も皆を信じてる…んじやガンガン無茶振りするから宜しくう」

「お任せ下さい我が魔王」

と話していたら扉が強く開かれた

「ハルト（ハルクン）!!」

「お、2人ともシャワー終わったんだ」

「そ、そうだ…それよりも」

「束さん達を【俺の嫁】って言ってくれて嬉しいよ…きやは!」

「な、何でそれを…ま、まさか!」

「おや? 何という事でしょうか懐に入れていたファイズフォンXがキャロル嬢と通話モードになっていました、切らねば」

「ウオズ!? さつきまで俺達を信頼してよって話してなかった!？」

「それは失礼…うっかりです」

「しっかりしてくれよ俺の預言者!!」

「祝え! 我が魔王が人生の墓場に向かい、尻に敷かれる日を!」

「「「いえええい!!」」」

「そんなん祝うなあ!?! 不吉な予言だなオイ!」

「それでさハルクくん、今日まで東さんは頑張ったご褒美が欲しいなあなん「おい待て」何さキャロりん」

「それを貰うのは正妻のオレからだ」

「あ、ちよっ!」

「あれれ可笑しいなあ、いつからキャロりんが正妻だったかなあく記憶にないんだけど」
「ほお知らんのかハルトとオレは親への挨拶を済ませている…後は式だけだお前たちと進んでいるステージが違う」

「そ、そんなの東さんだつてすぐに終わらせるもんね!」

「ほお…今はしていないのだろうか? 遅れてるな」

「おい面出ろよ」

「良いだろう久しぶりに遊んでやろうか」

一触即発な空気の中

「あら旦那様、帰っていたのね」

「それよりお前たち、何の話をしている？」

「面白そうな話をしてるねえ確か…正妻とか」

千冬達の来訪に頭を抱えると

「何、後は式を挙げるだけのオレと違いプロポーズもまだな貴様等が哀れと言う話でな」

「マウント取るんだよ！どう思う！」

「事実だろうか？」

「何？」「へえ…」「ふーん」

「え、いや、あの…皆さん？」

ハルトは何とか止めようとするが

「ならば今こそ雌雄を決しようではないか誰がハルト坊の正妻か！」

「煽るなあ、ヤクヅキ!!」

ヤクヅキの言葉に周りが呼応する

「良いだろう、今度こそ誰が一番か教えてやる」

『プテラ トリケラ テイラノ!』

「キャロりん…砂漠の熱で頭やられたなら…少し頭冷やそうか?」

『HIDDEN METALS ABILITY』

「まったく貴様等のような暴走バカにハルトの正妻は相応しくない」
『カチドキ!』

「それは千冬もだよ、ハルトの隣は生殺与奪を握る私が相応しいな」
『ドライバーオン……ナウ』

「あら正妻とか拘りはないけど面白そうね私も混ぜて貰おうかしら」
『READY』

「い、いや喧嘩するなよこんな所で……皆助けて……って、いねえ!!」

「あいつら!俺を置いて逃げやがった!」

『いや流石の連中もコレは業務外だろう？』

『夫婦喧嘩は犬も食わないか』

『君子危うきに近寄らずか…』

『こりや良い、ギャハハハハハ！』

「笑ってる場合か！いい、いや待て！ここで暴れた大変な事になるからさ頼むから戦うのは勘弁して変わりに俺にできる範囲なら何でもするから！」

「「「言ったな（ね）」」」

「はあ……これはその言葉を言わせたいが為のやり取りよ旦那様」

「……………へ？」

「んじやあハルくん」

「続きはベツトの上でだ」

「逃げるのは許さん」

「まあ逃げたら縛り上げるんだけどね」

「ふふふ…楽しみね」

ま、不味い…何かと言わないが……!

「あ、相棒助けて!」

『頑張れ』

『大丈夫だ死にはしないさ…多分』

「お前等も!?!へ?い、いやちよっ…うわああああああ!」

その夜に何かあったかは語るのは野暮って物でしょうよ

結果としてウオズの預言が当たるのは複雑な思いだった

相対する長

???

前回 ハルトは砂漠戦を生き抜き

仲間と改めて戦おうと誓いを立てたのである

そんな感じの、ある日

「そのパルベルデって国に情報があるのか？」

「ええ…ですが機密情報は奏者達が回収しており現在は天羽奏、風鳴翼、マリア・カデンツァ、ヴァナ・イヴが持っているとの事です」

「あの3人か……んでどんな情報なんだ？」

「機密故にそこまでは……しかしサンジェルマン、カリオストロ、プレラーティ、ネオタイムジャッカードの面々が前回まで我々に仕掛け続けていたのは、この情報やSONGSとの連携を警戒……あるいはこの情報を知られない為の陽動の可能性が高いかと」

「幹部陣が自ら陽動する辺り、そんなだけ俺達は警戒されてるって事だな」

『実際は逢魔の戦力を図りかねているというのもあるだろうな』

「成る程ねえ〜」

「確かに三人娘だけじゃなくてクロントルーパー達……それにハルト坊と妾のような幹部陣……何ならこの世界滅ぼそうとしたキャロル嬢もいるからな向こうが警戒するのは未知数……という所じゃなウオズ」

「そう見て宜しいかと……さらにlinkerの量産がなった今、結社の情勢も芳しくな
いのでは？」

「或いはネオタイムジャッカーとの連携に問題があるかも知れませんか」

「ならば仕掛けるなら今が好機！」

カゲンの意見に頷く面々を見て専門家の意見を聞く

「どう見るハウンド？」

「自分からすれば危険だと思います、敵の情報が少ない現状仕掛けるのはリスクが大きいかと」

「成る程…んじや暫くは情報収集もしくはSONGsと連携して結社の対応かな？」

「そうなります、ブリキ野郎が相手なら数は我々よりも遥かに多いですからね」

「結局進展がないのが一番来るんだよなあ…やっぱりパルベルデって場所に行ってみる

か？」

「無駄足でしょう、大凡の情報は抜き取られているでしょうし手掛かりもない可能性の方が高いです」

「だよなあ…そんなんあるならナツキから話来ててもおかしくないし」

協力者である彼ならば、その辺の頭を回してもおかしくないだろう

「だけど、このまま静観するってのは面白くないな連中の動きがあるまで待機とか柄じゃねえ」

「誘い出す罠でもあれば良いのですが…」

「炊き出しでもするか丁度補給受けたから食糧余ってるし」

「いや兵士の英気は養えますが」

「それで釣られるのは立花響くらいです」

「幹部で釣れてもカリオストロだ」

「いや釣れるわけないでしょカゲンちゃん」

「……釣れる」

「取り敢えずカゲンの案は保留で……んじゃ逢魔に残ってる人質を使って呼び出す？」

「それは悪手じゃ、ハルト坊よ人質を使うのは逢魔の風聞に関わるぞ別世界なのじゃから風聞はくどい位に気にしておけ」

その意見にハルト、ウオズ、ジヨウゲン、カゲン、フィーニス

「「「「あゝ」」」」

「む？何じゃお主達」

首を傾げる中、ウオズ達が話す

「い、いやそのー」

「ヤクヅキ…実を言えば」

「俺達はこの世界ではテロリストと大差ない！」

「しかもだいたい過激な方の…」

「ヤクヅキ先輩の意見は正しいのですが…」

「この世界の逢魔の風聞って地に堕ちてるから」

「妾が言うのもアレじゃが不安しかないぞー」

取り敢えず会議の結果は現状保留となった

—————

その後、ウオズを連れて拠点の屋上に登ると溜息を吐く

「しかし逢魔を長く開けるのは不安になるなここまでの長期遠征はこれまでに無いからな」

何かコレこそが向こうの狙いのような気がしてならない不安に襲われていると

「そうですね…しかし三人娘に逢魔本国主力部隊と残っているのですから大丈夫でしょう今の逢魔は我が魔王のワンマンチームではありませんからね」

「いつが俺のワンマンチームだったんだよ？それにテスタロッサ達なら大丈夫だ問題な

いん何というかホームシック気味だから寂しいな」

『分かるぞハルト、その気持ち』

「お、分かってくれるか相棒」

『俺達にとっても大事な場所だからな』

アナザーライダー達も契約者が国を起こしてオーマジオウもしていない新しい可能性の模索をしているハルトは見ているだけで楽しかったりするのだ

「良かった、そう言ってもらえてさ」

『それでどうする？パヴァリアとネオタイムジャッカーを倒すのだろうか？』

「当たり前だ…って言いたいんだけどさ」

『何だ？』

「パヴァリア何だけどき……こう、一枚岩じゃない感じなんだよ、殴り込みに行つた時もサンジェルマン達が敵対する事にビックリしてたし」

「敵対はアダムの独断つて事でしょうか？」

「だと思ふんだよなあ〜」

ハルトの意見も的外れではなかったし直勸は正しいものであった、しかしながらプレートイとカリオストロは兎も角サンジェルマンだが

『ありやもう覚悟決めてるぜ、説得は無理だろ』

「何でや〜」

『サンジェルマンはお前レベルの頑固者だからナ』

「お、俺は頑固じゃな『否定出来るか?』あく出来ません…」

キャロルの件だけではない過去の積み重ねが否定をさせないでいるのは何とというか

『それにサンジェルマンを何とかせねば、あの2人もついてこないぞ』

「そうだよなあ……はあ、本当どうしよう…それに」

実際、ハルトの敵はネオタイムジャッカー、パヴァリア結社だけではない

獅子身中の虫はフィーネのみと思っていたが前回のキャロル達襲撃事件に関する黒幕はもつと厄介であつた

「風鳴機関とか?」

聞けば国家の枠組みや国土を守ることのみしか見ておらず、民草を考えてない過激派だ…

純粹に山や自然を守るなら護国三聖獣がいるだろうに……富士の樹海にはギドラはいるのかな？いるなら会いたい……是非仲間に……失礼脱線した

キャロルや東、ひいては逢魔を奪おうとしている

俺の敵だ、俺達じゃない何故だろうか俺が倒さなければならぬ気がしている

「確か……護国災害何とか法だっけ？」

『そんな感じだ、可決されたら連中……こっちに自衛隊を派遣してくるぞ』

「そうになったらこんな世界終わらせてやる……ねえ知ってるでしょ相棒？ウオズ？」

突如降り始める雨、濡れるのも構わないハルトの背中から聞こえる声に

『まあな……俺達は貴様の過去も共有しているからな』

『おいハルトが黒ハルトになったゾ!』

『黙ってなよクズ〜』

『アナザーバイス、テメエ!ハルトから生まれたからって調子乗るなあ!!』

『ひでぶ!』

『クズ!』

『おーラブコフは可愛いなあ〜』

『ラブ!』

『ちよつと理不尽じゃない先輩方!!』

『お前はこつちに来い説教だ!』

『嘘っ! 久しぶりの出番なのにいー!』

それは過去に奪われ続け

そして出来た場所を得た温もりや繋がりを奪われる恐怖を誰よりも知り過ぎ

何より誰よりも信じていた家族に裏切られ

心の壊れてしまっていた男の狂気ともいえる本音である

「全員殺し尽くしてやる、俺達が笑ってくらせる世界の為に…邪魔する皆は死ねば良い
…」

長年腹の底で熟成され続けている狂気が正気となる

子供のように戯けた口調と声音で話す姿だが場にいなかった全員も自分に向けられた怒りや怨嗟という訳ではないのに気配で一様に震えたという

「恐ろしき我が魔王」

『いやあ逆に感心するわ、俺達何もしてないのに最初からこのレベルだからナ…そりや俺達の精神汚染効かないわ、だって元から汚染されてんだもん』

『俺達に会う前のハルカや両親に言えるのはお前達はとんでもない怪物を育ててしまったな愛情表現さえ間違えなければ…：きちんと向き合ってあげていればな』

『なあハルト、その先にあるのが断頭台でも進むか？』

「え？生きてるならいつかは死ぬ、それまでの登り方は決めれるよ…俺の結末を決める

のはあの人達だけだ」

幕を下ろすなら彼等の手にかかりたい、最強の敵…なんてチープな表現ではあるが少しは印象に残る敵にもなりたい

『だから今俺達が向き合ってンダロ?』

「分かってる…だからさ俺は守りたいんだ、それくらい大事な居場所だから」

実際に法の元で自衛隊を派遣して動こうと向こうは色々していたのだが弦十郎が現状を説明して何とか止めさせていたりする

この世界の末路は喜劇か?それとも……

『そんな事より対策か…どうしたものか…』

「あ、そだね」

普段の調子に戻ったハルトがケロツとした顔で言う

「風鳴機関の拠点か渋谷に隕石落とす？」

『何処の悪の組織だ！』

『いや風鳴機関の拠点は分かるが：何故渋谷？』

「え？渋谷（エリアX）って隕石が落ちる場所だよね？」

『あの街に物騒なルビを振るんじゃネエ！』

『貴様はハチ公が健気に主人を待っていた場所を何と心得る！』

「え、仮面ライダーカブトの聖地？」

常識だろと言わんばかりの即答に

『ファッションの街だ馬鹿者!!』

「え!?!あの街ってそうなの?じゃあ渋谷の109って廃墟とかセットじゃなくてマジであるのか!!よし玄さんの文字Tを流行らせようぜ!」

『おいやつぱりヤベエぞ、常識無いどころか変な所で振り切れてやがる!』

「んな事ないだろ?」

『じゃハルト、モーフィングパワーについて教えてくれ』

「仮面ライダークウガ、またはグロンギが保有する触れた物質を任意の物へと変わる能力の総称だ。本来なら媒介となるものが必要だがクウガ・アルティメットや同格のダグバは媒介をなしに武器を作れると言われておりその時の色は黒一色だったりするらし

「どう？」

『ほら言っただろうがイカれてんだよ！このライダーヲタクが!!』

「いやそれほどでもないさ！」

『褒めてねえヨ!!』

「我が魔王、それでどうなさいますか？」

「静観、ハウンドの言う通り情報も少ないしパルベルデの機密文書の事も気になる…ナツキに頼んで教えて貰うか？」

「その方がよろしいかと」

「念の為にねアナザーW、検索頼める？」

『おう俺に任せておけ』

「よし後は待つただけだけど…暇だなあ…」

「だったら妾と手合わせせんか！」

「そうね私とも良いかしら？」

「ヤクヅキにアンティリーネ!?いつの間に！」

「何、ハルト坊が病みを拗らせておった時から見ておったぞ」

「最初からじゃん」

「まあそんな事よりもだ、戦おうではないか！」

「いいよ…俺もヤクヅキの実力見て起きたいし」

「よし!!」

「ちよつと私は？」

「アンティリーネはまた今度な…お前と戦うのは疲れるんだよ」

「残念だったな奥方よ行くぞレイキバ！」

「あら？そこは私に譲るべきでなくて？」

「何を言う？妾はハルト坊から指名されたのじゃぞ？」

「私は彼の妻よ？なら私の方が優先されるでしょ？」

「ほお妾の楽しみを邪魔するなら…少し遊んで貰おうか？」

「良いわね」

「喧嘩するなら今日は無しだよ」

とハルトがスタコラ行こうとしたので

「ちよつと待たんか！」

「仲良くするから頼めないかしら!？」

「んじゃあ「陛下!」ナツキから連絡でサンジェルマン達が日本で暴れていると」お、動いたか…出るぞ！」

「そう仰ると思い、コマンダーハウンドがガンシップを待機させています」
と話をしていたらガンシップが建物に横付けされ、扉が開くと

「陛下! 現場への直行使ですが乗られますか？」

「馬鹿言え乗るに決まってるだろ、ウオズ！ヤクヅキもアンティリーネもついてこい！」

「かしこまりました我が魔王」

「当然じゃ！」

「ええ」

4人はガンシップに乗ると現場に向かって発進したのであった

現場につくと、お馴染みのアルカノイズの群れに加えてバトルドロイドが隊列を成して奏者に襲いかかっていた

「ブリキとノイズだけ？」

「陛下、5時の方向」

ハウンドに言われた方向を見ると、バースになっているナツキと響がサンジェルマン達と戦っているのが見えた

「なるほどな……ウオズ蹴散らしてこい」

「はっ！では参ります！」

『ギンガ……ファイナリー……』

「ハウンドは部隊を率いて逃げ遅れた奴の避難誘導とウオズの援護」

「イエツサー！野郎ども続け!!」

ウオズはアナザーファイナリーに変身すると空に浮かぶなり

「はあ！」

『アナザー…エクスペロージョン!』

惑星型のエネルギーが雨のように降り注いでバトルドロイドとアルカノイズの二団を吹き飛ばすのを合図にガンシップが発進しハウンドは部隊を展開した

「アンティリーネとヤクヅキは仲間を巻き込まない範囲で好きに暴れて」

「やった」

『READY FIRST ON!』

「かかか!良かろう!!!」

『へんしん!』

「変身!!」

アンティリーネとヤクヅキはイクサ、レイに変身すると敵陣ど真ん中に飛び降りる着

地と同時に

『I・KU・SA・KNUCKLE・RISE・UP』

『WAKE UP!』

電子音と共にバトルドロイドやアルカノイズは部品や赤い塵となり爆ぜると

「貴様等の所為でハルト坊との組手がなくなったのだ」

「少し八つ当たりにつき合ってもらおうよ…」

ギガンティッククローとイクサカリバーで武装するなり同時に駆け出した2人は敵を見つけるなり肉食獣のそれを思わせるように暴れ始める

レイはギガンティッククローで敵を斬る前に冷凍させ破碎している

イクサはセーブモードのままだがイクサカリバーの斬撃とイクサナツクルの衝撃波

を上手いこと併用してドロイドを吹き飛ばしている

「ヤクヅキ！」

「わかっておるわ凍らせてやるから砕け！」

「任せなさいな」

また互いにフォローしあいながら戦っている姿に原典の関係から見ると胸熱ではあるがイクサがあのような戦い方をするのは思う所がある

「んじゃ俺は残りに向かうか」

ハルトは手遊びしながらアナザーウォッチを起動

『サイガ』

アナザーサイガになり背後のフライトユニットを起動し目標へ飛翔したのであった途中邪魔するようなノイズがいたがフライトユニットの武装で撃ち落としていったの

である

—————

その頃 サンジェルマン v s パース、響はと言うと

「サンジェルマンさん辞めましょうよ！俺達と話し合えとは言いません！ですが少なくとも逢魔に仕掛けるのは辞めてください！」

そもそもナツキの目的は恩人である立花響と小日向未来を死なせない事 これに尽きる、その過程でハルトがこの世界でアナザーオーマジオウ化する事が原因と知っている故に

今回の事件の平和的解決を誰よりも望んでいるのだ 個人的にも付き合いのある知り合い達が戦う姿を見たく無いというのもあるぞ

「え!?!ナツキ君…そこはせめて話し合おうじゃないかな？」

「響…一つ言っておく、ハルトや逢魔を敵に回すのはヤバいだろ」

「いや…それは…まあそうですけど!」

「そうね私も本来なら逢魔に仕掛ける気は無かったわ…全てはあの局長の独断よ」

「それなら「けど彼が裏切者に対してどうするか分からない貴方じゃないでしょ?」…ですが知ってますよね彼身内に甘いですよ?」

「知ってるけど問答は終わりよ…だって」

『アナザーエクスペロージョン!!』

サンジェルマンが目線を向けた先には隕石の雨霰や近未来のガンシップなどが飛び交っていた

「来たわ」

「アレって…ウオズさん!?!…って事は」

「良いタイミングだな」

「やはり呼んでいたのねナツキ」

「そりやそうでしょ……つかハルトも和平したいならしたいと思えますよ? アイツならネオタイムジャツカーの相手に集中したいと思えますし」

ナツキは何周か死に戻りしてパヴァリア結社との抗争は、ハルト自身望んでいない事を知っていたと言うのもある

ネオタイムジャツカーの主要メンバーが生存し尚且つバトルドロイドという手駒がある以上、クローントルーパーがいるとは言え、かつてのように二正面作戦を行えるような戦力的余裕はないと言えるが

「中々良い勘してんじゃん、ナツキ！」

「ハルト！」

「よおナツキ久しぶり…でもないかあ、そつちは最近会ってるなサンジェルマン」

「そうねハルト」

相対する2人を見て思わず下がる響達、そこには一組織を牽引してきた者特有のオーラがあった

「しかし以外ね貴方が和平を考えてくれているというのは」

「俺だって一度は同盟関係だった相手をアツサリ敵つて認知する程、過激では無いんだよ」

本音はネオタイムジャッカーに専念したいからだけどというのはバレてるな

「そうしたいけど、私もネオタイムジャッカーと手を組んだ以上は貴方と戦うと決めたのよ……貴方は誰かを支配する側なのだから弱い人の為に革命しないと意味がない死でしか灯せない私達にしか！」

それは本気で覚悟を決めた目である……ならば説得は無意味か

「本質は弱者を虐げる強さを持たない世界か、師匠のライバルみたいな理想だけど……それでも俺は皆の幸せの為に戦うんだ、悪いけど君の夢を呪いにさせてもらう」

『ジオウ』

「だとしても!!私は私の正義をなす!」

アナザージオウになるハルト、ファウストローブを纏うサンジェルマンは互いの武器をぶつけ合うのであった

それを遠いビルの屋上から見ていたクジヨーは両手を叩いて喜んでいた

「いやあ素晴らしいですね…ではもう少し盛り上げるとしましょうか」

眩きながら取り出したアナザーウオッチを起動すると地面に落とすとビルそのものがアナザーライダーへと変身を初める

その巨体はアナザーコアやアークを超える巨体を有している さながら山のように

これに対抗できるものは、いないとも思われる程だ

「さあ行きなさい、アナザーJー」

「!!」

奇跡の巨人 アナザーJ襲来

破滅の激情態

アナザーJが動こうとしていた同時刻
逢魔坩点にて

「魔王ちゃん達が先に動いてる!？」

「ウオズにヤクヅキもか！」

「これは…出し抜かれましたね」

ジョウゲン達は戦場に遅参している現状に齒噛みしており

「何でアンティリーネがハルトと一緒に…抜け駆けデートか!!」

「ちーちゃんも抜け駆けしてたよね？」

「うっ！そ、そんな事よりハルトのピンチだ行かねばならんだろう！」

「そうだね！……とはならないよちーちゃん!!」

レーダーに警報が鳴ると

「反応？……何だコレは……っ！」

映像を見た千冬は唾然となるとカゲンは冷静に呟く

「Jだ」

「え？アナザーJ……って事？」

その言葉にカゲンは頷く

「じゃあ味方じゃん、アナザーライダーはハルクんの仲間だもんね〜」

樂觀的な束に対して錫音は顔を顰めながら話す

「いやそうとは言えないかな」

「どうしてさスーちゃん？」

「確かにアナザーライダーはハルトの味方だけど、過去に何度かネオタイムジャッカーに操られてハルトの敵として戦っている個体もいるんだよ」

「っ！じゃあアレも！」

「その可能性があるよ」

「ならば俺が出る、ゾンジスならばJウオッチで戦う事も可能だ！」

「そうだね頼んだよカゲンちゃん！」

「任せろ」

「おい、オレも行くぞ」

「キャロルちゃん？」

「ハルトから聞いた事がある、アレは奇跡の力で巨大化したと」

「え？ま、まあそうだな…」

「奇跡の殺戮者として、オレはJの存在は許せそうに無い……ハルトの顔に免じて一撃で許してやる」

「かしこまりました、此方へ！」

そう言ってカゲンはアナザータイムマジーンに乗り込んで戦場へと向かうのであった

その頃

「はっ！」「ちっ！」

互いの武器を交える中、巨大な地響きにより中断して視線を変えると

天を掴んばかりの大男が雄大に歩いているではないか

「で、デケエエエエ！何アレ!?何方さん！まさか光の巨人…ではないのか？」

『馬鹿者、アレはアナザーJ我等の仲間よ…全く巨体故にノンビリ屋だな漸くメッセー

ジを受け取って来たのか』

「つまり…あいつは味方って事？」

「何だと！」

「ええええええ！」

「マジか！あの巨人ってハルトの仲間なの!？」

ハルトの言葉に驚く3人であるが、それよりも仲間が増えた事に対して仮面で見えな
いが満面の笑みで手を振る

「よっしゃあ！おーい！こっちだよー！」

アナザージオウは両手を大きく振るとアナザーJはゆっくりと歩を進めてくる

「初めまして俺は常葉ハルト！よろ……し……くうううう！！」

挨拶したら右手を振り下ろされた、まるで虫でも潰すかのような気楽さであったのである

あつさりと潰れる未来が見えたので慌てて横っ飛びで避けるなり

「挨拶にしては過激じゃねえか!？」

『おい、どうしたアナザーJ!』

アナザーディケイドが呼びかけると

「あ……………あ……………」

何も話せないのか呻くだけである

「え？どゆこと？」

『まさか操られているのか!?!』

「それってアナザーパンクジャックと同じって事?」

『恐らくな…おのれネオタイムジャッカーめ…俺達の仲間をよくも!!』

以前、同様に操られた仲間を思い出したハルトはアナザーJを見るが今は被害を抑えるのが先決だ

「だったら取り敢えず大人しくさせないとなー!」

手を前に翳して異能 王の勅令を発動する、アナザーJの体にバチバチと電気は流れるが効いているようには見えない

「え?効いてないのか?」

『あいつの体のデカさ的に効き目が弱いみたいだな』

「なら痛めつけないとダメ？ダメージ与えないと捕まらないとかポ○モンか!？」

『ああ…カゲン（ゾンジス）がない以上は完全に抑え込めないからな』

アレを止めるならフィーニスやヤクツキならギリギリかつキャツスルドランやアナザードンライナーなどの総力戦となる逢魔は大打撃を受ける事になりそうだが

．．．

「よし総出でアナザーJを助けるぞ俺に力を貸してくれ!」

倒すではない

「仲間は絶対に見捨てないって決めてんだ!だから待つてろ!絶対に助けるぞ!!」

仲間を助けるのに迷う理由などあるものか

「「「了解!!」」」

その意を汲んだ臣下は彼の願いを叶える為に動き始めたので

「立花響!」

「はい!」

「アナザーライダーは俺がやるからサンジェルマンの相手は任せたぞ!」

「は、はい!!」

た
そう言うとアナザージオウは高くジャンプして建物から建物へと飛び移るので合っ

—————

同時刻

「聞いたな、お前ら持てる火力をあの巨人にぶつけてやれ!!」

ハウンドの指示を合図にガンシップやウオーカーが持てる火力を持ってアナザーJを砲撃するが、やはり巨体故にダメージは薄いようで

「散開!!」

ハウンドの指示を受けたものは回避が間に合ったが間に合わなかったものやウオーカーやガンシップの何機かはアナザーJの攻撃で撃ち落とされてしまった

「くそ…コルサントで暴れたジロ・ビーストって奴よりも凶暴じゃねえか!! 怯むな撃ちまくれ!」

彼等は射撃し続けていると同時に

『アナザーエクスプロージョン!!』

「たあ!!」

アナザーファイナリーの必殺キックがアナザーJの顔面にヒットする、流石の威力故に蹠踉めきはするが大ダメージと言う訳ではない

「ちっ……こうなるならカゲンを連れてくれば良かったですね!!」

アナザーファイナリーは火力こそ高いが現状では足止めに徹するのが吉と判断したので

「お借りします!」

『PERMISSION TIME シノビ!』

「分身の術!!」

アナザーシノビとなり分身の術を使い手裏剣の物量攻撃に移行した

『へえんしいん!!』

『PO・WER・ED・I・KU・SA』

「ぬん！」

「ふっ！」

ヤクヅキはアークに変身し直すと三又槍に力を込めると厄災を起こす力で足元は陥没アナザーJの体制を崩すとイクサはパワードイクサを召喚し乗り込むなり爆弾を投擲、その威力にアナザーJは落ちていったが

「やったか？」

「っ！下がるわよ！」

声と同時に右手で地面を掴み立ち上がるアナザーJを見て2人はすかさず間合いを取る

『『BATTLE MODE』』

自律行動していたアナザーオートバジンとサイドバツシヤーはバトルモードに変形し持ちうる武器全てで攻撃を開始した。それだけにならず

「よくやった、お前達！」

『龍騎』

『FINAL VENT』

「寝てろ!!」

アナザージオウはアナザー龍騎に変身し直すとマグナギガを呼び出すなり全身に搭載した武装を一斉に発射する必殺技のエンドオブワールドを躊躇いなく発動した火力はアナザーJに完全なダメージとして入るのだが

「う……うう……」

「アレだけ食らって何で倒れねえとか流石の耐久力だな」

まだ立ち上がろうとするアナザーJに思わず呟いたのである

『ああ昔からタフさには定評ある奴だ、一応言っておくがサイドバツシャーとギガントでのゴリ押しでは倒せんで、あんなの出来るのは激情態のデイケイドくらいだ』

「え、ダメなの!?!あんな感じで倒せると思ってた!」

何ならアナザースカイライダーがいたらファイナルアタッククライド発動してカードが大量に追いかけてから撃ち落としてみたいとか思っていたりする

『倒せるかあ!!』

「そっかあ……んじゃどうしたもの……おいアレ」

『うん?……っ!』

アナザー龍騎が目線を向けた先には自衛隊?の人達や軍艦、戦車がアナザーJに照準を向けているではないか

「いや映画の撮影じゃないからお帰り下さいませんかねえ!!何で今、無駄にガメラ映画の自衛隊ばりの有能さを今見せんな!!」

同時にバットニュースが来た

『ハルくん大変だよ!風鳴機関の奴等が護国災害派遣法?えーとそんな感じの法律を使ってアナザーJを亡き者にしようとしているよ!!』

「マジか！つーか司令さんは何してんだよ!!!」

『それと追加情報だよ亡き者にする予定のアナザーJの遺体を解剖して護国の礎にするんだとさ』

「『……………あ？』」

錫音の一言にハルト達の心は一つとなった

『ハルト、俺に変われ直ぐに片をつけるぞ』

「ああ、何だろうな……………やっぱこの世界の連中は俺の許せない奴ランキング一位を更新し続けるな…マジで不愉快だよ！」

『安心しろ俺達も同じ気持ちだ』

ハルトとアナザーライダーの心が重なる刹那にアナザーウォッチを起動した

『ディケイド』

無言でアナザーディケイドに変身した、しかし彼とアナザーディケイドの感情がリンクした時 新たな力が目覚める

悪魔のような形相とも言えるアナザーデイケイドの顔が、更に歪み怒りに狂うような顔へと変わったのである

アナザーワールドという世界の創造者という可能性を得たのがアナザーデイケイドならば

此方は本来の役割 世界を滅ぼす悪魔としての側面が現れた姿だろう

世界の破壊者 アナザーデイケイド・激情態

「あ……あぁ………」

蹠踉めくアナザーJはダメージなのか覇気に怯んだのかは定かではないがアナザーデイケイド 激情態は

「……………やるぞ」

無言のまま右手を前に突き出す それは王の勅令ではない

『許可するわ』

『FINAL FORM RIDE KIVA』

真つ先に反応したアナザーキバ、目の前に映像として現れる体は大きなコウモリを意識した巨大な弓矢へと姿を変えたのである

そのまま弓矢を番えると、引き絞り狙いを定め手を離すと赤いエネルギー矢がアナザーJの胸部に命中、キバの紋章が現れると地面に倒れたのであるが

「があああああああ！」

遂に怒ったのか激情に任せて立ちあがろうとするアナザーJはアナザーディケイドを叩き潰そうとしたが

『FINAL FORM RIDE AGIO』

何処から共なく現れた緑色マシントルネイダーに飛び乗り回避すると高度を上げてアナザーJを見下ろすと

「撃てー!!」

自衛隊が命令に従い攻撃を開始した狙いはアナザーJもだがミサイルや砲弾は

『俺達も狙ってるゾ?』

『アナザーJと俺達を諸共か? 愚か者め』

『仕掛けたなら正当防衛だ流れ弾でもないだろ？ハルト、慈悲はいらん』

「……………」

『ATTACK RIDE CLUSTER CELL』

『殺せ』

「……………」

それはアナザーディケイドの体の中から抜け出る 黒い金属バツタの大群であった、それら全てが壁となり自衛隊の攻撃からアナザーJを守るのである

「ば、ばかな!!」

「た、隊長…アレ……」

『アナザーゼロワンからクラスターセルにオーダー、目的：アナザライダーに攻撃した戦闘員や兵器の完全破壊、沈黙まで無力化させる事：行けるよハルト』

「攻撃」

自衛隊の各部隊は混乱する、無理もない先ほどまでアナザーJを守る壁となっていたクラスターセルの大群が一斉に此方へと襲いかかってきたのだから

「げ、迎撃だー！撃てええー！」

その声を合図に撃つ、しかし大群に攻撃した所でジョウロで山火事を消すとき無謀さ

何より 人間が自然災害に勝てる訳ないのだから、そしてクラスターセルは戦車や戦闘機などの船を食い荒らし始めると慌てて逃げ出した搭乗員達であるが、逃げた先でもクラスターセルが襲い掛かる、その愚かな代償を払う為に 恐怖と絶望を返礼として

歴史に名を示す新しい災厄が人類に取って最古の災厄を従えていた姿は最早

「ま、魔王かよ……」

魔王としか呼べなかった

『激情態の能力を全て閲覧したぜ、ハルト』

「ん……」

アナザーWの調査で判明したアナザーデイケイド・激情態の能力

それは各アナザーライダー達をファイナルフォームライドで武装化させるだけに飽

き足らず、その力をアナザーライダー本人の承諾を得れば変身せずとも力の行使が可能となる

一見 最強とも言えるアナザーライダーであるが ハルトとアナザーライダー全員の心が怒りに染まった時のみ発動可能なフォームであり、変身可能時間も怒りが持続している間のみという制限もある不完全フォームだが、今はコレで良いとハルトは眼下にいる同胞へと視線を合わせた

「お……………お……………う……………よ」

朦朧している中でも助けを求める声に

「待ってろ今」

『助けるぞー！』

魔王は迷わずに手を伸ばす

『FINAL FORM RIDE BLADE』

アナザー剣を自らの体軀を凌ぐほどの大剣へと変えると

『THUNDER』『FIRE』『TORNADO』
『BLIZZARD』

体から抜けた4枚のラウズカードがアナザー剣が変形した大剣に吸い込まれる

『FOUR CARD』

雷、炎、風、氷と4属性を帯びた大剣の斬撃はアナザーJの装甲を切り裂き深い刃傷を与える事となる、これで助ける準備完了だ

「次」

終わりの技に移ろうとした時

「ハルト様！」

アナザータイムマジーンで近づくものがいた

「……カゲン？」

その声に一瞬正気に戻ろうとしたハルトであるが

『スパイトネガ 感情を悪意で固定』

アナザーアークワンの力で怒りの感情に再度囚われたハルトは

「後は俺に任せてください」

Jライドウォッチを構えるカゲンに対して

「却下、お前はあっちで遊んでろ」

無情に指差した先にはクラスターセルに襲われ逃げ惑う人の姿があった

「しかし「聞こえなかった?…やれ」…はっ!」

『仮面ライダーゾンジス!』

ゾンジスに変身するとハルトの命令通りに行動を起こす

「待て、ハルト!」

「キャロル?」

「何をしているんだ!?!」

「何ってアナザーJを助けるんだよ?んで邪魔者の排除さ…彼処の奴等は俺達の仲間を

…家族を殺そうとしてる…そんなの許せないよね？殺そうとしてるなら…殺されても文句ないよねえ〜？」

黒い衝動に取り憑かれているハルトを見てキャロルは理解した

「はあ……ハルト、後で話がある」

怒りが収まるまで待つ、この男は一度怒ると中々止まらないというのを理解しているから

「分かった…アナザーJ待ってて今助ける」

『FINAL ATTACK RIDE DECADE』

「!!!!」

アナザーデイケイドが手を前に翳すと同時に大量のカードエネルギーが現れるとエ

エネルギー球を投擲する。カードを通過する度に増幅されるエネルギー球は巨大化していき最終的にアナザーJに命中すると爆砕、アナザーJはアナザーウオッチの中に吸い込まれた

「……………ふう」

『取り込み完了…除染中…』

『お疲れ様』

しかし

「まだ終わってないよ奴等…この間のキャロルと束の件もあるけどさ…あいつらに誰の仲間に手を出したか教えてやる！」

とクラスターセルが襲っている奴等…それも非武装かつ無抵抗の人間に怒りの矛先を向けようとした、その時

「落ち着けハルト!!」

キャロルがアナザーデイケイドの頭を『落ち着け!!』と書かれたスリツパで叩いたのであった

「っ！……っ！」

痛みで頭を抱えると同時に変身解除となりアナザージオウへと戻るとクラスターセルは霧散したのである

「ててて…何すんのさ！」

「ハルト、これで終わりだ」

「何で？あと何でWの次回予告風？」

「アナザーJを助け終わっただろ…それに報復にしてはやり過ぎだ」

「いや何度言っても聞かない連中なら身に染みさせた方が分かりやすいでしょ?」

「だからと言って武装を持たない奴等にまで攻撃をするな、お前のヒーローや師はそんな事しないだろう?」

「確かにしないけど…そう…分かったよ」

『ジオウII』

アナザージオウは懐古の力で壊れたウォーカーやガンシップ、戦死した筈のトルーパーを蘇生させていると

サンジェルマンが現れた

「本当に魔王ね、まさか近代兵器で武装した軍隊をこうもアツサリと」

「俺の仲間の手を出したら、こうなるの見せしめも込めた……それより立花響の説得しなかつたか？」

「いいえ最初から意味のない説得だったのよ私はあの程度で止まる訳にはいかないの」

「なら、こつちもだよ……人様の国でクーデター起こすような悪い奴は許す訳にはいかないんだ」

「ならコレは挨拶よ受け取りなさい！」

「……………っ！」

サンジェルマンが放った一発の弾丸だった

「何だ、ただの鉛玉か……なら避ける必要はないな」

超能力で弾こうとしたが、弾丸の正体に気づいたキャロルは叫んだ

「避けるハルト！賢者の石だ！」

「は？」

その声に従い防御ではなく回避を選んだが解せんと言う顔をしたがサンジエルマンは反対に悔しそうにしている

「ちっ……余計な入れ知恵をしないでくれるかしらキャロル？」

「夫を殺そうとする奴の言うことなど聞く馬鹿はいないだろう？」

「あんな鉛玉で俺死なないよ？鉛玉で死ぬような虚弱に見える？」

『いや普通の人間なら致命傷だぞ？』

不死鳥だったりアンデットだったりバグスターだったり色んな怪人とも言える俺が鉛玉で死ぬとは思えない

『この間、魔剣ダインスレイフで死にかけてたよな？』

「あつたな…それ」

心臓を貫かれて、リムルさんのフルポーションを大量に使って助かったんだよな色んな意味で苦い過去である…正直に言えば刺された痛みよりも病み上がりにくらったキャロルのマウントからの怒りラッシュの方が痛かったのは内緒である

『お前の不死は万能ではない、それを忘れるなよ』

「わーってるけど賢者の石？ホムンクルスの材料？それともキングストーン的な奴？」

「ああ…アレは賢者の石（ラピス・フィロソフィカス）と言ってな、魔を祓う力を宿している…さっきのは弾丸の形に削っているな」

「魔を祓う？つまり清めの音に通ずる何か？…なるほど一応は魔化魍でもある俺には有効って訳だな」

確かに不浄な存在（アナザーライダー）を宿しているから聖なる力的なのは有効だろう

『おい何てルビ振った今？』

ーそんな事よりあの弾丸の危険性を錬金術素人の分かりやすく言ってくれー

『スルーすんなよ！』

『あの弾丸か？神経断裂弾と思え』

アナザーWの例えを聞くなり

「サンジェルマン……テムエ……なんでもんで狙ってんだ危うく死ぬところだったじゃねえかこの野郎があ!!」

「いや殺すつもりで撃つただけぞ」

「はあ……そう言ったのだがな……」

魔王覇気を全開で出して威嚇するアナザージオウに頭を抱えるキャロルであるが何かに気づいたようで

「ハルト、潮時だ引くぞ」

「へ？」

「このままだと連中が軍隊率いてやってくる、今の手勢で戦うのは分が悪い……サンジェ

ルマン悪いな決着はまた別でつけてやる」

「そう…まあ良いわ」

「え…まあしやあないか」

アナザージオウは嫌な顔をしたがキャロルの言い分も最もだも思い、コムリンクでハウンドに撤退の指示を出すと同時に

「ウオズ、カゲン」

「はっ!!」

「引くぞ」

「それと…カゲン悪かったな嫌な命令して」

「いいえ、ハルト様のお怒りは最もです…遅参した無礼をお許してください」

「俺も悪いから結果はお互い悪いって事で…まあお前達のやった事は許せんけどなあ」

変身解除をし怪人の力で宙に浮きながらのハルトは軽蔑の意思を込めた瞳で眼下にいるバースを見ると

「アレがお前達の答えならな」

「ハルト待つてくれ!!」

ハルトはオーロラカーテンで全員撤退した、残るは武装を失い恐怖に震えている面々と遠い目をしている響であった。

そして拠点に帰るなり

「ハルト正座しろ」

怒りに満ちたキャロルを待てハルトは観念し素直に正座した

「へい」

「まず…彼処まで暴れる奴があるか!!」

「やり過ぎるのは感心しないなあ!」

「怒るのは分かるが船や戦車を潰すのはやりすぎだ!」

「怒ってるハルクくん怖かったよ!!」

その説教は最もなのでハルトは甘んじて受けるのであった

この展開が後にある騒動へと発展するとは誰も思っていなかった

対立と新たな模索と…

現在、拠点の端末にあるニュースで

『これより護国災害派遣法の対象にアナザーライダー 常葉ハルトとその一派、並びに白い兵隊達や武装した兵器群も対象とする！』

『ふざけるなー！アナザーライダーに助けられた人もいるのに災害扱いかあー！』

『だが彼等はテロリストです、国家を脅かす存在である事に変わりはありません！』

と言うと周りは紛糾する国会を見て

「よし帰るぞ、お前等」

笑顔でそう言うハルトに周りはイヤイヤと立ち上がり止めに入る

「え？パヴァリア光明結社への報復は？」

「知らん、こんな世界滅べば良い」

最早気分は地球に愛想が尽きたウルトラマンジャックである…あの怪獣ムルチ回は人間の醜さが良く出ているがまさか自分がその対象になるとは思わなかったな残念だが俺を止める防衛隊長はいないがな

「ネオタイムジャッカーとパヴァリア光明結社だけに飽き足らず俺達まで敵に回したい馬鹿どもの面倒なんか見れん」

一応はライダー技術を渡した責任と義務感で協力していたが

「いっまで愚かだとは思わなかったよ」

愚かだとしか言えないと呆れていると

「我が魔王」

「何、ウオズ？」

もう何とも言えない顔のハルトであるがウオズが立ち上がる

「ホットライン経由で今回の件を抗議しました際、ナツキの謝罪ぶりから見て完全に上層部の判断と」

事実、ナツキは胃薬を飲んでいたのはこの場にいる者は誰も知らなかった

「んで向こうは何言ってた？」

「言い分を纏めると…上の意向で逆らえなかった…出来れば秘密裏の協力をと」

「断る…それより相棒、来てない連中と連絡は？」

『取れねえよ』

「困ったなあ…なら相棒、新しいメッセージを送ってくれ俺以外と会ったら隠れろって」

『了解した、後で送信しておくが過激な奴もいる保証はせん』

「アナザー王蛇やアナザーバツファ級の問題児がまだ他にいるのか、まあ頼んだ…：…さて今回の件についてお前達の意見を聞きたい」

ハルトは参加した幹部陣に意見を聞くと

「私は立ち去るべきです、この世界の人間の陛下への態度は目にあまります…：それに我々の物資として無限にはありません遠征が長期化するのには兵士の士気にも関わります」

「僕もハウンドと同じです！…何より魔王様にあのような態度など直ぐにでも逢魔に帰り教会や亡国企業に戦力を割くべきです！」

ハウンドとフィーニスは帰るべきと主張する

「私は残ってキッチンと結社に落とし前をつけるべきだと思います」

「俺もかな〜流石に軍隊を率いて戦果無しは問題だよね失敗に見られるから功績は欲しいかな」

ウオズとジョウゲンは残って戦うべきと主張

「妾はこの際、全部纏めて倒すべきと思うぞ…その方が沢山の音楽（悲鳴）を聞けるからのお」

ヤクツキは別の理由で残って戦うか

「みんなは？」

「東さんは帰りたいなあ、別に此処の連中興味ないし……あと、彼処でいやらしい目で見
てきた奴等もいたなあ」

「おい誰だ？そいつはミラーモンスターの餌にしてやる」

「落ち着け馬鹿者、私は残るべきだ帰るにしてもきちんと関係を清算してからだ」

「私は別にどつちても」

「キャロルは？」

「オレはどうでも良い、元々奇跡の存在があるかを知るために分解予定だった世界だからな……しかし賢者の石は錬金術師から見ると興味深いが……いや待てよ」

賢者の石……前回サンジェルマンが俺に向けて放った不浄を祓う力を宿したものらし

いのだ

そして問題なのはコレからだ、この力はイグナイトモジュールを使用不能にさせダメージを与えるらしい、イグナイトモジュールの原材料 魔剣ダインスレイフの力を打ち消すからとの事でキャロルは机を強く叩き

「オレが大変な思いをして見つけたダインスレイフへの完璧な対策…サンジェルマンめ最初からオレの計画が失敗する前提で動いていたのか……っ！許さん!!」

「ま、まあハルくんが止めに入るって考えれば失敗前提で計画するよね」

「っ！」

「いや、俺のせいかな？」

怒りを示すキャロルを見てハルトは考える

ハウンドの言う事にも一理ある

今までのような小集団としての活動ではない、組織としての行動を考えると現状はダメリツトしかない

しかしジョウゲンの言う通り戦果無し、遠征はまずい：何より逢魔にいる結社の捕虜をどうするかに困る

『意見は出揃ったぞ』

『どうするハルト？俺達はお前に従うぜ』

全部、俺の決断……なら

「アダムと幹部陣……ついでに国賊呼ばわりした連中に報復する、俺達を利用しようとする奴らに目にももの見せてやれ!!」

「「「「「はっ!!」」」」」

「ハウンド、お前達クロイントルーパーは一時撤退、休息だ変わりに逢魔のテストロッサ、カレラ、ウルティマを呼んでこい」

「はっ！しかし逢魔最強のお三方を呼ぶのですか？」

「テストロッサ達にこう言え、ドギツイ交渉の時間ってな」

「イエッサー」

「これは引き金だ、連中が引いたなら相応しい末路をくれてやる」

『だが賢者の石、対策はどうする？あの銃弾が一発だけとは思えないぞ』

「よし対策を教えてください検索エンジン」

『おう！…じゃねえ！誰が検索エンジンだ！』

『様式美だな』

『そう言うと思って調べたから言うぞ』

「さっすが」

アナザーWの検索結果だと

賢者の石対策は至ってシンプル、賢者の石と対となるエネルギーで相殺する事らしい

「凄い単純だな」

「だけどそんな都合の良いものないよね？」

『いやあるぞ』

「何処にだ？」

『相棒の中にある』

アナザーWの言葉にハルトはキョトンとした顔で

「は？」

としか答えられなかった

—————

場面は変わり

SONGSの本部ではアナザライダーとの敵対というバッドニュースで

イグナイトモジュールの無力化させた賢者の石対策というグッドニュースがあった

それは立花響がかつて融合症例だった際に生まれていた破片を加工したもので愚者の石 というマイナスに振り切れたエネルギーを持つ事で賢者の石メタ能力を有して

いる

「ですが愚者の石のサンプルが少ないんです」

そもそも立花響の一人から生まれた愚者の石では絶対量に限界がある

「せめて…もう少しサンプルがあれば…」

「けどこの馬鹿みたいな奴が他にいるか？」

「バカって酷くないかなクリスちゃん!？」

クリスの言葉に無いものは無いと沈黙はする面々だがナツキは口を開いた

「あつ……………ハルトが…」

「何？」

周りがナツキの目線が集まると

「いや魔法少女事変の際、ハルトは心臓をダインスレイフで貫かれています」

思い出されるのは2人の喧嘩の後にノエルからの一撃からキャロルを庇い刺された光景である

あれは嘗て奏の破片を食らった響と近い状態である

「つまり嘗ての響君と同じと？」

「はい、アナザーライダーの力でダインスレイフの呪いは払ってますが心臓には魔剣の破片が残っている可能性が高い」

「けどよお、そんなのキャロルや他の連中が気づかないと思うか？大分過保護な連中だぞっ。」

「無いでしょうね」

「は？」

その問いにはエルフナインが答えた

「良くも悪くも今のハルトさんは肉体の傷や痛みにも鈍感なんです…なまじ高い再生能力や不死性を有しているので病気や怪我もないから医者にも見せてませんのでダインスレイフの欠片がそのままの可能性が高いです…何なら自分の体に埋まつてる事も知らない可能性もあります」

「なら摘出しないと危ないよ！もう未来の神獣鏡は使えないんだよ！」

「しかし彼が素直に摘出の外科手術受けてくれますかね？」

緒川の問いにナツキは首を横に振る

「俺達の提案なら聞かないでしょう、あんな事した後なら尚更に…だから逢魔の連中に取って貰いましょう」

「何？」

「その後でハルトに交渉して貰えば良いんです、まあ交渉に応じるかは別ですけど」

—————

場面は戻りハルト側

「成る程な俺の心臓に残ってるダンスレイフの破片が賢者の石と対なす力を有している…って事？」

「[[[!!]]]]」

この時、俺は周りの人が悲しそうな顔をしていたのに気づかなかったが

『ああ、向こうでは愚者の石と呼ばれているな』

「愚者？その呼び方は却下だ相棒、俺から取れた石はキングストーンと命名するぞ！」

とBLACKのポーズをとり言うハルトに対して

『ライダー オタク極まれりだな』

『ここまでブレないお前に敬意を払うぞ』

『その前に創世王になったつもりか』

「んー流石に心臓だけの存在にはなりたくないな「ハルト」え？何みんな…のわっ!!」

会議室の中だが突然、キャロルに押し倒されてしまった

「あ、あのキャロルさん…俺的には嬉しい場面ですが、それは2人の時に「……………いいは?。」

「何でそんな危険な状態になっていると言ってくれない!!」

「……………ん?」

「あの時、ノエルの攻撃からオレを庇ったからだろ?…オレのせいで貴様が融合症例擬きになっているのだろ!!…どうしてそんな大事な事をどうして話してくれなかった!!」

「いや俺も今初めて聞いたんだけど…それに何かと融合してるとか今更だし…何ならちよつとクウガみたいで良いなあとか思ったし何かに侵食されてるとか今更なんだよなあ〜」

『そうだった!お前ならそう言うと思っただぞ!この馬鹿者め!』

「そんな事どうでも良い!フロンティア事変で立花響がどうなったか忘れたのか!!」

彼女は自らの体からの高熱と聖遺物の破片が突き出す痛みと人を辞める恐怖に襲われているのを思い出したが

「けど今まで彼女みたいな事にはなってなかつただろう？」

『いやそうとも言えんぞ』

「相棒？」

『お前は種族的な意味で人間をやめているからな立花響と進行する速度が遅いかも知れんのだ、時間がかかるが彼女と同じ事になっていた可能性は否めないし、突発的に発症する可能性もある』

時間進行で副作用が出ていたって

「マジでか」

『マジだ』

「そっか……んじゃ早く摘出しないとイケないな」

あつけらかんと言いつ放つハルトに対して

「そういつているだろうが馬鹿者！」

千冬は迷わずに丸めた資料で頭を叩いた

「つてえ！」

「けど普通の病院でなんて手術出来ないよ？」

「この世界の病院は使えないし東さん達の世界でも難しいだろうね」

「では逢魔に戻っては？」

「いやハルト不在を敵に悟られるのはまずいな」

「そもそも誰が手術するのさ？」

「あ！スーちゃんのコネクトで心臓から破片が取れるなら医者はいらないんじゃないかな？」

「コネクト使ったらハルトの心臓を物理的に鷲掴みだろうね…絵的に私がハルトの心臓を掴むから大分グロテスクになるよ…あれ？この魔法を使えば老ハルトを暗殺できたんじゃないかな？…っ！ちよつと試してくる！」

「今は辞めてくれないか錫音！あと魔法の使い方には悪意があるぞ！」

「そうだよ！それと希望を守る指輪の魔法使いがそんな真似しないで！！」

「ではどうする?」

「まあまあ皆、まだ慌てる時間じゃない」

「お前はもう少し慌てろ!自分の事だぞ!」

「大丈夫だって、何せ」

『ブレイブ』

アナザーウォッチを起動したハルトは笑顔で実体化したアナザーライダーに言葉をかける

「世界一のドクターが俺を執刀してるからな」

「当然だハルト、俺に切れないものはない」

「それと」

『アギト』

呼び出したのはアナザーアギトである

「俺だなハルト」

「ブレイブと一緒に頼む、トルーパーの医者も協力してくれ」

「任せろ！」

「はっ！」

「さて……と、大丈夫だからキャロル」

「だが！」

「この傷はお前を守った勲章みたいなものだ男にとっては名誉の負傷だよ」

キャロルの背中に手を回して抱きしめると

「……っ！何故貴様はそこまで馬鹿なのだ！」

『いや全くだ』

「俺はそう言う人間だよ知らなかった？」

ハルトはあっけらかんと言いつつと

「え？人間？」

「ウオズ後で話がある……アナザーブレイブ達の手術中、ウオズ達は俺の護衛を頼む！」

「「「はっ！」」」」

と話していたらだ着信音がしたのでウオズは取り出したファイズフォンXを見るなり嫌な顔をした

「我が魔王、ホットラインです」

「俺手術するから対応出来ないとか言っついて」

「かしこまりました…はい、お久しぶりですねナツキ殿…はい、我が魔王ですね何のようでしょうか?…我が魔王亡き今、私が魔王ですので」

「おい何言っつてんだ預言者」

「失礼…冗談ですよ我が魔王は健在です、まあ何処ぞの誰かの所為で怒り狂ってますが」

「ウオズちゃん揶揄うのは辞めなよ」

「それは笑えん冗談だ」

「ハルト坊に叛意を抱けば肅正するぞ」

「だから冗談です」

「そう聞こえないのが先輩たる所以ですよね何というか…こう…胡散臭いと言うか」

「フイーニス、あなたは私もどう見てるのですか？」

「どうでも良い、さっさと向こうの要件を聞いて切れ」

「あれヤクヅキ先輩、怒ってます？」

「無論じやとも妾達に砲火を向けたのじや、末路など決まつとるのに未練がましい、ハルト坊よ絶滅させて良いかの！」

「ダメだ、利用価値があるなら殺さない」

「それを情なく言えるのがハルト坊たる所以よな」

「で、我々に何のようでしょうか？」

ウオズが話を聞くなり苦い顔をして

「伝えますが、後は知りませんよ」

それだけ言うとウオズは周りにこう言った

「要約すると手術で患者の石を摘出したら我々に譲ってくれないかと」

「」「断る！」「」

「です…いやそこを何とかと言われましても」

「そうだ愚者の石ではない…：俺に宿るのはキングストーンだ！」

『そこだけ切り抜くと南光太郎みたいだな』

「俺は太陽の子！」

『違うだろ!!』

「何か不思議な事が起こらないかなと思つてな」

「いや石の言い方変えたら問題ないとかではありませんが」

「取り敢えず断つといて、謝罪もなしに寄越せとは横柄だし」

「ですね…はい…：いや直であつて話したいと言われましても」「いいよ」「へ？」

「手術前に対面で、けどお前一人で来い俺達は護衛ありだな」

「それは危険です我が魔王」

「大丈夫大丈夫、人選はヤクヅキとアンティリーネだから」

その人選にウオズは冷めた目で話す

「最初から交渉する気はないですよね？」

「いや交渉だよ…と言うより…」

「何だハルト坊？」

「怒ってるヤクヅキのストレス発散させないと俺達がヤバイ」

「「「確かに」」」

「おい、聞こえておるぞ貴様等!!」

そして此方が指定した場所で待っていると

「ハルト…」

お待ちかねの人物が来たのでハルトは笑顔になり

「よお、久しぶり…でもないかあ」

「今回の件は本当にごめん…けどSONG sはお前達と戦うつもりは「戯け」え?」

「お主等の事情など知るか、妾達がアナザーJの一件に関して何も知らんと思っ
ているのか!!」

覇気に気後れするがナツキは負けずに食らいつく

「こつちだつてまさか、あんな展開になるなんて思わなかつたんだよ！セーブポイントも更新されてるし……こつちも今はトライアンドエラーしてんだ！」

「そんなの言い訳になるか！死に戻るのなら今づくに消してやろう！こいレ」待てヤクツキ」何故じゃハルト坊！此奴は「待てつて言ったよ？」う、うむ」

「よし……さてとお前の言い分も大体察したが此方としても同胞への攻撃は看過できない事態なんだよ」

「分かつてる……、だけど「風鳴機関だっけ？東とキャロルの帰路情報を結社に横流しした連中」っ！」

その言葉を映像越しで見聞きしていた弦十郎は嘘だろ！と言う顔をしたのは言うまでもない

「俺だけ狙うならまだしも、俺の仲間や妻達に危害を加えるような輩を俺が許すと思ってるの?。」

「だ、だけど結社と戦うならこっちの戦力も必要な筈だ!三竦みになるのは望まないだろう?。」

「怖いのは有能な敵より無能な味方、背中を狙うような連中を俺は信用出来ないから三竦みになる方が良いよ」

戦力比は結社5 俺達3 連中2かなとボヤク

「俺達の支援もいる場面があるだろう!。」

「ねえよ、今まで邪魔された事はアレども支援なんざされた覚えないしそもそも俺達の技術提供なしで連中と戦えるのか?。」

「言えない…」

「だよなあ奏者のイグナイトモジュールだってキャロルの原案だし、ライダーシステムは言わずもがなだからな……まあお前達が提案を飲むかどうか別だが、電話の件を譲歩しないでもない」

前から検討していた部分がある最強フォームへと至っているアナザーライダー達
今も尚メッセージを受け取り来てくれる面々もいるが

強化が頭打ちになっているのではないか？と思う、ならばこそだ強くなれる方法を模
索しまい

「提案？」

その為の交渉だ

「俺のキングストーンを一部渡す代わりにネフィリムを俺達に渡して貰おうか？」

「ネフィリムを!? ってキングストーン?」

「ああ主達の言葉なら愚者の石じゃな」

「あ、ああ…いや助かるけど…何故にネフィリム?」

「いや賢者の石が邪魔ならアイツに食べて貰おうと思つてな…あと不死身だからミラーモンスターの餌代わりにな」

『ああ…成る程』

「一応だけど、ドクターも人間って忘れてないよね?」

「人間じゃねえよ俺と同じでな…で、どうだナツキ?」

「そんな事俺の一存じゃ「んじゃ交渉おしまい」いやちよつ!」

「どうする?」

「……………っ!分かったネフィリムと交換だ!」

何か雰囲気の変わったナツキを見てハルトは笑顔になる、恐らくダメとなった未来で何かあったのだろう

「よし交渉成立「ただし!」あ?」

「渡せるネフィリムは破片や一部になる総取りは出来ない」

「貴様…身の程を弁えよ!」

「そうね私達に攻撃したに飽き足らず、譲歩してるのに条件を加えるなんて…死にたいのかしら?」

と怒りの余りオーラが飛び出る2人に対してハルトは右手を上げた

「良いよら破片でも培養すれば済む話だし、元々貰えればラッキーなレベルだったからな」

「そつちも忘れるなよ愚者の石をな」

「ああキチンと対処するともしさ…さてナツキに一つ聞くぞ」

「何だ？」

「お前誰かに付けられたか？」

「っ！」

「隠れても無駄だぜ、出てこないとレイキバが凍らせるぞ」

「ほほお、良いのかハルト坊」

「対応次第だ潰しても構わん」

周りは臨戦態勢となるが、影はゆたりと現れた

「い、いやちよつと待つてよ!!」

「お前は…」

「まさかバレてるなんてね」

「当たり前だ俺から隠れたいならライダーの力でも使うんだな」

現れた人物に皆、驚いた

「え、カリオストロ!?!」

パヴァリア光明結社 幹部の1人カリオストロであった

「久しぶりねナツキ、ハルト達も…その新顔さんとは初めましてかしら？ 私はカリオストロ宜しくね」

「取り敢えず要件を言え、話はそれからだ」

「簡単よ貴方達と取引がしたい」

「ん？俺たちと？」

ナツキは首を傾げると

「正確に言えば逢魔とね」

「ん？ああ、捕虜の件か」

確かに今回の件で対応を考えていた案件ではあるとハルトは頷いている

「それもあるのだけど……私達を

逢魔に亡命させてくれないかしら？」

このカリオストロの提案が事態を急変させる事となる

予期せぬトラブル

「逢魔に亡命させてくれないかしら？」

カリオストロの発言はハルト達にも予想外で面を喰らうのであった

「何？」

「実は局長のとんでもない計画を知っちゃってね、その計画通り進むとサンジェルマンが死んじゃうかも知れないのよ、局長はどうでも良いけどサンジェルマンとプレラーティの事に関しては、あーしとしては困るのよ、だ・か・ら嘗てのよしみで私達を亡命させて貰えないかしら？勿論、クーデターの件の贖罪も兼ねているのだけど」

「うーん……」

「相棒どう見る？」

ハルトは腕を組んで考えながらアナザーライダーと相談する

『その計画とやらの内容によつては亡命を認めても良いのではないか？元々サンジェルマン達とは和平の道を探していただろう？』

『それに連中が離反したら敵はアダムだけになるだろう向こうの取れる戦術は少なくなる戦いも楽になるし万年人材不足の逢魔には願ってもねえ提案だ』

『だが畏の可能性もある、逢魔の捕虜と結託するかも知れんぞ』

『そうだそうだ！』

『それにあのサンジェルマンが亡命なんて提案に素直に従うとは思えない、カリオスト口の態度から見ると万一に備えての保険という風にとれるな今は真剣に取り合わなく

『ても良いだろう』

賛否両論か…取り敢えず

「カリオストロ、その計画つてのは何だ？アダムがサンジェルマンを切り捨てようとする段を立てようとしているなんて余程の事じゃ」

あれだけの人材を捨てるなんて余程の作戦だろうと尋ねるが

「それは……『ドン！』…ま、まさか気づかれたの！」

カリオストロは慌てた様子で扉の外を見ると大量のアルカノイズに飽き足らず

「ブリキ野郎にヤミー…ネオタイムジャッカーか」

「けど、こんな数どうやって…つか情報が漏れてた!？」

「どーせお前じゃねえの?」

カリオストロに尾行されているのでナツキを疑いの目で見るとハルトに心外と態度に出す

「だから事ある事に俺を疑わないで貰える!」

「お前しか電話してないから盗み聞きされてたか、或いは」

と考えているとスタッグフォンからの通信が入った

『ハルト、やはりな…洗脳されてる奴等を見つけた3人…1人は空を飛んでいるぞ』

やっぱりナツキの動向を見られてたか…空を飛んでる?

「洗脳したアナザーライダーから情報が漏れたのか…しようがないコレは俺の過失だ対処は俺がやる」

でないとアナザライダーの王なんて名乗れないよ

「けどこんな数を一人で！」

「貸しだ、こつちで何とかするから早く逃げろ…ヤクツキ、アンティリーネ頼んだ」

「任せておけハルト坊」

「そうね、此処は良いからお仲間を助けなさいな」

『READY!』

「そうさせて貰う！ありがとう2人とも!!」

そう言い走り出すハルトを見送ると

「さて暴れるとするかの」

「ふふふ…さあ楽しませて頂戴」

2人は変身アイテムを前に突き出し

「変身!!」

『FIRST ON』

『へんしん!…WAKE UP!』

イクサとレイになりバトルドロイドとヤミーに向かうのであった

そして外に出たハルトは障害物に身を隠すと

バットショットを使って上空の写真を取るとマントをつけたバッタのお化けが飛行機と同じレベルで飛んでいるのが見えた

「凄いスピードだな…サイガと同じくらいか？けどフライングユニット無しでなんて」

単純なスピードはアナザー剣・ジャックフォームやアナザーサイガと同じだが旋回性は向こうが有利だな

「……シエイプシフター使うか？」

IS世界で制作したアナザーライダーをIS化させる変換機能に特化させた専用機シエイプシフターを使うか考えていると

『ほお飛んでるのはアナザースカイライダーだな』

「んじや他2人は？」

『反応を検知、アナザースーパーとアナザーガタックだな』

「何だろう…その人選にそこはかかないデジャヴを感じるな」

具体的には何処かの激情態さんが大暴れしたシーンだが

「相棒助けるよ」

『分かっている、いくぞ』

『ディケイド』

「んじゃ挨拶変わりだ！」

アナザーディケイドに変身すると飛んでいるアナザースカイライダーをロックオンして必殺技を用意するのである

—————

その頃 空を飛んでいるアナザースカイライダーは

「まだハルトは発見出来ない」

報告するとアナザースーパーが応答する

「だが油断するな奴は多くの同胞を洗脳している……奴は悪魔だ」

これがアナザールライダー達に施された洗脳である

ハルトは敵である同胞の為に立ち上がれと

そう誰かに洗脳されているのだが本人達は気付いていない

「っ!!」

アナザースカイライダーは体を捻らせ回避すると大量のデイメンションカードが追

尾するように追いかけてくる

『FINAL ATTACK
RIDE』

「な、何だこれは！」

『避けろ！スカイライダー！』

「だ、ダメだ振り切れない!!……ぐああああ！」

スーパーの警告虚しく、アナザースカイライダーを貫いたのはマゼンタ色の光弾だった

燃えながら墜落するアナザースカイライダーは近くの工場跡地で大きなクレーターを作り爆散した

「アナザースカイライダー！」

「大丈夫か!!」

駆け寄るもアナザースカイライダーはウォッチとなり、そのアナザールウォッチを拾う影があつた

その影はアナザールウォッチを押し込み

『カプト…CLOCK UP』

弾けた装甲からアナザールカプトになると急加速しアナザースーパーを殴りながら宙に上げている

『CLOCK UP』

それに気づいたアナザールガタックも同じ光速の世界に突入し下手人であるアナザールカプトを見つけると

「アナザーカブト！お前やつぱり彼奴に洗脳されているのか！」

「……………」

「答えろ!!」

『ANOTHER CUTTING』

両手にガタツクカリバーを思わせる曲刀をハサミのようにした一撃で襲い掛かるが

「ハイパークロックアップ」

『HYPER CLOCK UP』

突如更なる加速をしたアナザーカブトによりその一撃は空を着る

「ど、何処に！」

『FINAL ATTACK RIDE DECADE!』

「はあああああ!」

2人が丁度直線で重なる所にデイメンションカードが展開されると両者の死角からアナザーデイクイドがアナザーデイメンションキックを放った

「ぐあああああ!」

「うおお!」

そして爆散した後にはアナザースーパーの腕とアナザーガタツクの有機的な角しか残ってなかった、変身を解除したハルトは手に持っていたアナザーガタツクの角を放り投げると手元に残ったアナザーウォッチを見て迷わずに体内に押し込んだ

「っ……………どっ!」

『除染中だハルト、お疲れ様』

『見事な戦いぶりだったな』

「んや、激情態じゃないと技使うのに切り替えないといけないから大変だ」

特にクロックアップのような特殊環境下では使える手札に限りがあるからと呟くも

「まあいつも通りか…よし戻ってヤクヅキ達に加勢し「きやあ！」っ！」

そう呟くと爆破音と共に転がるのは変身解除されたヤクヅキとアンティリーネである

「2人とも大丈夫か！」

『ジオウⅡ』

傷は懐古の力で傷を治したがこの猛者2人を倒せる奴がいるのか…厄介だな

「は、ハルト…実は」

「え、ナツキが裏切った?」

遂にやったか、あのタイムリーパーはと思つてると

「違うわよ…アレよアレ」

アンティリーネが指差した先にいたのはアナザーゲイツに変身したナツキを圧倒する仮面ライダージユウガ…つまり

「クジヨーか」

「ええ久しぶりです、魔王」

「おう…死ね」

『ジオウ』

最早問答さえも面倒くさいとアナザーウオッチを起動、アナザージオウになると

「は、ハルト…」

「ボロボロになってるならリバイブ使えや」

「い、いや俺は」

「彼は健気でしたよ、貴方の妃を守ろうとしてアナザーゲイツになりましたから」

「ふーん…まあそれなら助けてやるよ」

「へ？」

ツインギレードを肩に担いで鋒をジユウガに向けるなり

「テメエだなアナザーパンクジャックから今回の3人までの連中を洗脳して消しかけてんのは」

「ええ、アナザーライダーの王を倒すなら同じアナザーライダーと思わせてね」

「他にもいるのか？」

「さあ？ 貴方に答える義理があるとも？」

「答えて貰おうか!!」

『セイバー 龍騎… MIXING!』

「はあ！」

『ANOTHER SLASH!』

怒りに任せて発動させると火炎竜がジユウガに突貫する、しかし

『POWERED GENOM EDGE』

ゴリラの力を込めた拳で火炎竜を殴りつけ技を避けたのである

「ふう…実を言えば貴方が飛ばした先でドライバーを強化しましてね、お陰様で力を発揮しやすくなりましたよ」

「その位のハンデがなかったら詰まらんからな…さてそろそろ行こうか本気の俺の必殺わっ……!」

突如、胸の痛みがアナザージオウを襲い膝を突く

「おや?」

「……………ど、どうしたんだよ相棒、体がだるいんだけど？」

『簡潔に言えば前に話した、融合症例の症状が出てンダよ！くっ！このタイミングでか！』

「あく急になるかも知れないって言ってた奴か」

『やはり副作用が出たのか早く引け！でないと間に合わなくなるぞ！』

「そうか…なら「逃がしませんよ」っ！」

周りを見渡すとバートルドロイドが隊列を組んでブラスターを構えている

「この砲火の雨、貴方の妃を守りながら逃げられますかね？」

正直言つて3人なら逃げられるのだが倒れてるナツキと向こうで暴れてるカリオス
トロがいるので難しい

「こりや…ちよつとピンチかも…」

『何を呑気で言つてんだ!!』

「ではコレで終わりです魔王!!」

とクジヨーが指を鳴らそうとした刹那

『ドラゴンエネルギー!!』

赤い竜の矢が

『カチドキチャージ!』

大きなメロン型のエネルギーが

『YES! V A N I S H S T R I K E U N D E R S T A N D ? 』

大きな魔法の一撃がバトルドロイドの隊列に穴を開けると

『スキヤニングチャージ!』

「せいやー!」

ガタキリバコンボのオーズが大量にライダーキックを行いバトルドロイド達が鮮やかに吹き飛んでいき、何体かはジユウガに蹴りを叩き込み怯ませたのであった
「皆……どうして?」

「話は後だハルト!」

「スーちゃん今だよ!」

「任せて!」

ソーサラーがアナザージオウを守るように立つとナツキとカリオストロが合流させると

『テレポート…ナウ』

全員でテレポートすると

「くっ……逃げられましたか……まあ良いでしょう勝負は持ち越しですね」

ジユウガは生き残ったドロイドを連れて撤退したのであった

—————

さて無事に帰還した一同はと言うとハルトは疑問をぶつける

「何で？」

「ウオズがピンチだから行ってくれとな」

「いや察したなら…自分達で来いよ」

「そうしなかったがテストタロツサ達の引き継ぎで動けなかったのだ、アイツ等を責めるな血涙流すような形相だったからな」

「え、何それ怖い……つか責めないよ……あの……ごめん……痛くて……そろそろ限界」

『ブレイブ』『スナイプ』『アギト』

アナザーウオッチを起動して

「ごめん、手術頼んだ」

「任せろと言いたいが」

「お前に麻酔効くのか？状態異常耐性持つてるよな？」

アナザースナイプの疑問は最もであった実際にハルトが魔王化で得たスキル 状態異常耐性により麻酔の類が効かなくなっているが問題ない

「大丈夫こうすれば良いんだ錫音、ちよつと指輪貸して もう体が辛くてアナザーウィザードにもなれないから…」

「いいけど…つてまさか………」

ハルトは錫音からとある指輪を借りると彼女は意図を察したのか発動状態にするとドライバーに手を添えた

「えい」

『スリープ……ナウ……』

「おや……………」

スリープの魔法発動と共にハルトは倒れて深い眠りにつく

「いやまさか魔法で寝るとは」

「これは好都合だすぐにオペを始めるぞアナザーアギト、スナイプ手伝え」

「おうよ!!」「ああ」

そして担架に乗せられてハルトは手術台に連れて行かれるのであった

「これよりキングストーン摘出手術を開始する」

「ノリが良いなアナザーブレイブ」

「ミッション開始」

手術が始まると皆は待つしかなかった

「ハルトは大丈夫なのか…」

「大丈夫だよ、だってハルクくんが世界一の医者って言ったアナザーライダーだよ！」

「まあ後はハルト次第だ…それより錫音、何故そいつ等を拾った」

千冬が指差したのはナツキとカリオストロである

「ああカリオストロは亡命希望って言ってたから」

「何だと…：…おい…：貴様等が逢魔に何をしたのか忘れたのか！」

千冬からすればクーデターを起こそうとして自分達を害そうとした連中という認識であるかつての恩人であろうと関係ないと今にもサタンサーベルを抜刀しようとして

いるほどだ

「それは局長が勝手にやったのよ！サンジェルマンやあーし達は寝耳に水だったの！」

「そうだろうなハルトから聞いてる話と合致する」

キャロルの答えに周りは納得するが

「そうだなウルティマが来たんだから情報の精査は捗るよね」

「それもそうか…：カリオストロ、貴様の話が本当かはウチの者に調べさせるぞ、そのアダムの計画の詳細もな」

「当然よ、暫く厄介になるわ」

「好きにしろ…：おい錫音」

「何さキャロル？」

カリオストロの件はコレでよしだがキャロルの目はナツキに向かい

「何でこのモルモットは何で拾った？」

「ん〜次いで？」

「え！次いでなの理由あつてとかじゃ…」

「別に君はどうでも良いけどアナザーゲイツウオッチを向こうに取られたらクジヨーは絶対悪用するからね一応保険も込めて」

「え、ええ理由あるじゃん……なのに次いで扱いとか…流石はハルトと駆け落ちた世界線もある人だ」

「君、その話詳しく!!」

「何ですとお!」「錫音抜け駆けかあ!」

「ふふん!残念だったね2人とも私とハルトはこうなる運命だったんだ」

「いやまあ…そうですな結果として世界滅びましたが…」

「それは私の知る話じゃないね」

あっけらかんと言う錫音を見てキャロルが溜息を吐くと

「はあ…ヤクヅキ、アンティリーネ」

2人に視線を向ける

「貴様等が付いてながら、この失態…いやまあハルトの不調や違和感を見抜けなかったオレ達も同罪だから咎めはしない」

それは逆に罰して貰った方が楽と2人は思っているが

「だからこそだ失態は今後の働きで返してもらおう…ハルトならこう言うだろうな」

「無論じゃ任せておれ！」

「ええ約束するわ」

2人の覇気が戻るのを見ると

「さて……お前達はいつまで痴話喧嘩をしている！」

「だってスーちゃんだけハルくんを独占してる世界線があるんだよ！そんなの許せないよー！」

「はあ…手術してて気が立つのは分かるが喧嘩をするな心配しているのは皆同じなのだ、今は待つしかないのだ堪えろ」

「ま、まさかキャロリンに諭される日が来るとは」

「ああ…流石は我等の最年長だ風格が違うな」

「だね…圧倒的年上だよな」

「亀の甲より年の甲とはよく言ったものだ」

「おい貴様等…オレに対して言っではならん事を言つたな!!」

「あらあら盛り上がってきたわね混ぜて頂戴な」

「はあ…喧嘩するなど論じた本人がキレないでよもう…：ハルトつて以外と苦勞してたんだなあ…：それで手術は成功するのかな？」

「無論です、我が魔王はピンピンしますから慌てる理由はありませんよ」

「だから安心しなつて皆」

「うむハルト様は不死身だ」

そう話す面々であるがキャロルがふと気づいた

「おいナツキ、貴様…：今までの会話や映像を誰かが見ていたとかないか？」

「え？あ、ああ…：一応護身のためにGPS「それを渡せ！」え、あ…：ああ！」

「ふん!!」

キャロルはナツキから端末を取り上げると思い切り踏み潰した

「何すんのさー！」

「馬鹿者!!GPSや映像でこの位置を知られたのだ!こうもする!!」

「つて事は?」

「TVで言つてたな…連中は法律の執行に私達を対象にすると」

「つまり…」

「連中は此処を攻めてくるぞ…ウオズ!戦闘用意だハルトの手術が終わるまで持ち堪えるぞー!」

「はっ!…つて私に命令をして良いのは我が魔王だけです!」

「ウオズちゃん今言つてる状況じゃないよ!」

「お、俺は逢魔に戻りトルーパーを連れてくる!」

「では僕は先に出て蹴散らして来ます！」

「いや待て、まずは作戦会議だ皆を集めろ！」

キャロル指導の元 皆が会議室に向かうのであった

—————

その頃 ハルトはと言うと精神世界で慌てていた

「そんな……敵が攻めてくる状況なのに指を咥えて見てるだけなんて」

「落ち着け、以前のダインスレイフの時と違うのだからな」

「だけど落ち着いてなんていられるか！くそつワアナザーバイス！俺の体使つて暴れてハハー！」

「それはNOだぜハルト、ダインスレイフの時と違うのよ手術中に動いたら俺っちアナザーブレイブに切られちゃう!!」

「っ！ならどうしたら…」

「はあ…前にも話したが貴様は優しすぎるのだ俺達という反動だろうな万能に等しい、それ故に誰かに頼る事を知らん」

「……………」

「その思いやりが悪いとは言わん…だが信じる貴様の仲間を愛する者達をな」

「……………んじゃ暇だから鍛錬に付き合え、俺は皆を守れない弱い王様にはなりたくねえよ」

「良いだろう、だがその前にアナザー1号を介してフィーニスに伝言でもあれば聞いてやるぞ？…れ」

「なら、こう伝えてくれ」

—————
そして会議室で座る面々、先程合流したテスタロッサ、ウルティマ、カレラの三人娘も参加している

「ふ、不幸だ…」

「当然だろう、殺さないだけ情けと思え」

対してナツキは膝に重石を乗せられていた結果論とは言え今回のトラブルの原因なのであるから

「さて…東がハッキングして調べた情報によれば連中は大軍を率いて此方へ向かってい
る…時間は今から3時間後だ」

「ふーん…」

「装備の質も良い、それだけ警戒されているとも言えるか」

「目的は殲滅もだろうけど、こっちの技術や知識と人材が目当てかな。ハルクくんが不在なのを理由に派兵してきてる節があるねえ。完全にSONGSだっけ？連中の情報筒抜けだよ」

「逆に何でそこまで調べられてるの？」

「そこは以前私達がハルト様に不敬な真似をしたものと私達の配下をすり替えて内通者にしたからですわね」

「そうそうテストちゃんのお陰だよ」

「光栄ですわ東様」

「ちよつと、ボク達も頑張ったけど？」

「無論把握している、ハルトも誉めていたからな」

「それなら良いや」

「……………あれ？これ俺が聞いていい情報？」

ナツキは知っては行けない事を知ったと思ったが

「取り敢えず後で忘却魔法をかけておくね」

「お願いね錫音、何ならボクが頭の中直接見て記憶抜いておこうか？」

思わぬ優しいアフターフォローに対して

「お願いです助けてください！」

「それで作戦はどうする？」

「無視ですか!？」

「いや別にお前の処遇はハルクンが決めるから別にどうでも良いし」

と東が聴くとハウンドが提案する

「はっ！地の利を活かして遅滞戦闘やゲリラ戦かと、時間を稼ぎハルト様が手術を終えれば逢魔に撤退し目覚め療養後に攻勢に転じて殲滅させればと」

「いや、ここは我等だけで殲滅すべきだ！」

ハウンドの提案をカレラは一蹴した

「それって厄介なのはハルトだけでボク達は弱いつて舐められてるって事だよな？」

「そうですわね…アレだけ暴れたのに私達の事を忘れてるなら、そのめでたい頭に一撃見舞いしましょうか？」

それに賛同するのはウルティマとテストタロッサである、強さが絶対の彼女達からすれば現状の評価に納得していないのは自明の理である

何より彼女達の実力は下手な戦略兵器に匹敵する 確かに蹴散らす分には問題ないが念には念を入れる

「よし束はハッキングで情報収集、千冬やトルーパーは護衛につけ…何なら連中の電子系統や通信機器を潰せ」

「わかったー！」

「任せておけ」

「ウオズとジョウゲン、カゲンはハルトを守れ」

「お任せください」

「さて……今回は逢魔初の軍事的衝突だ、この戦いの先駆けを望む者はいるか？」

キャロルが悪い笑みを浮かべると

「「「「!!」」」」」

三人娘とヤクツキ、アンテイリーネが挙手をすると周りは大きく納得するとキャロルは

「よし希望者で暴れると良い、オレは少し用事がある……ウルティマ前に頼んでいたものだが」

「コレの事、確かに採取したけど何に使うの？この気持ち悪い奴」

とウルティマが取り出したのは専用の入れ物に収まっている黒い塊である それを見てナツキは

「それってネフィリムか？どうして…」

「逢魔の動力炉に破片があつたんだ、それを取ったんだよ、カリユブデイスにも同じものがあるって聞いたけど流石に取れないしね」

「……っ！フロンティア事変の時か！」

「何それ？って言うか君「待てウルティマ」誰さ？」

「そいつの始末はハルトに任せろ、それよりもだ…フィーニス」

「はい！」

「お前のなるアナザーライダーから何か伝言はないか？」

現状 ハルトの精神世界とリンクしているアナザーライダーはアナザー1号とミライダーの3人のみなので尋ねると

「え、えつと……はい！……その…魔王様からでして…派手にやれと」

その言葉に皆の目が爛々と輝いた

「ならば我等も加減はしません、我等グランドアーミーの力を見せてやる野郎ども戦闘用意！」

「では私達も前線に出ましようか」

「ああ…そう言えば我が君は他に何か言っていたか？」

「えつと…死ぬことは許さんと」

「それは難しい任務ですな、ですがそれこそやり甲斐のあると言うものです！」

とハウンド達、クローントルーパーは戦意高揚し

「オレは少し研究で席を外す、残りは各自の判断で行動するように……では解散だ」

—————

そして三時間後

「束の情報通りだな」

見れば綺麗に整列してる連中がいるではないすると代表の者がスピーカーで告げる

『貴様等は包囲されている！大人しく投降するならば条約に基づき捕虜としての権利は保証する！なお貴様等の技術や資材や兵器は我が国が接収させてもらう！』

その内容を聞いた返礼はウオズが答えた

「断る！貴様の道理に従う理由がない！」

『ならば護国災害派遣法に基づいた対処をさせてもらう！』

「望む所ですよ、と言うより最初からそれが狙いな癖に」

『戦闘用意！』

「悠長ですね、ハウンド」

「はっ、撃ち方初め!!」

ハウンドの合図と共に待機していたウォーカーやスターファイターが空と陸から電磁。パルスを帯びた弾丸で爆撃と砲撃を行う

当然 電磁。パルスなんて浴びれば

「隊長！各部隊との連絡途絶！」

「妨害電波か…ならば各部隊に光信号で連絡！散開して各個撃破！」

司令室の光通信で迅速に行動する精鋭達

しかし彼等の相手が悪かった

「来たな……よし撃て！」

付近で伏せていたトルーパー達が一斉に射撃を開始したのである、ブラスタアの放火により隊員の一人一人とまた倒れていく

無論彼等も血の滲むような訓練をしてきた故に精鋭なのであろうが

兵士としての土台が違い過ぎた

クローントルーパーは生まれて直ぐに高度な軍事訓練を行う、当然階級や技能などに差は出るが、それは優先して獲得した後天的なスキルであり生まれたばかりのクローンには個体能力に差はない、大きな違いは独立心の強いARCや連携と高い個人技能に

長けたコマンドーのような例外だろう

生まれて10年近く 戦う為だけに訓練してきた兵士 しかも素体が銀河最強の賞
金稼ぎ由来の精鋭しかも装備にも差があるとなれば

鎧袖一触とならざるを得ない

初戦はハウンド率いるクローントルーパー部隊が敵を圧倒する事となった、無論被害
は0ではないのでジリジリと後退していくと隊長のハンドシグナルを合図と共にク
ローン部隊は散らばる それを追うように敵部隊も散開した…それもまた作戦とも知
らないで

「撃て!!」

伏兵に更に伏兵を重ねる 彼等からすれば数が多いドロイド軍と戦う為に磨き続け
た戦術

自らが数的を優位を取った戦いなど少ないのだ 数で勝る相手との戦いに関して

百戦錬磨なのである

そして歩兵と兵器の戦列を崩せば

「さあ貴様等の音楽（悲鳴）を聞かせてみよ」

「突撃！」

仮面ライダーアークとアナザーコア1号が手勢を率いて戦車などの兵器軍に襲いかかるのである

巨大な戦士と二足歩行の機械を駆る騎兵隊の攻撃の破壊力は整った戦列を崩すにいたる、上空ではARCC-170スターファイターが既存の戦闘機相手に技術力と性能差で圧倒していた

この戦いに参加したトルーパーパイロットは七面鳥撃ちとすら言われたのだが、技術的な差は技量では埋められない程なのだろう

しかしながら全体で見ればやはり数で劣るは覆せず逢魔である部分的に優っているが俯瞰すると劣勢である

ならばこのまま負けるのか？

否

「さて…場も温まってきたし」

「始めるか！」

「ええ」

逢魔の最強戦力が行動を開始する

魔王復活

魔王復活

その頃 奏者達は自衛隊と逢魔主力が戦っている中 ナツキ救出の為に動いていた

「ここにナツキ君が…」

「アイツのお手柄と褒めるべきか、こうなった事を責めるべきか分からんな」

奏者としても逢魔と本気でぶつかるなんて思ってた、というより護国災害派遣法が逢魔を狙い撃ちにするなんて予想してなかったのである

ナツキのGPSで居場所がわかったが、まさか連動して軍隊を動かし軍事的に衝突してしまった

「まあ先輩、取り敢えずはあのバカを助けてから考えましようや」

「そうだな…待て」

そう話していると

「敵は付近まで来ているぞ急げ！陛下の側に近づけさせるな！」

指示を出しているトルーパーを見て

「なあ先輩、あいつ等の服奪ってかないか？」

このクリスの発言を本気で実行したジェダイマスターと銀河最速のガラクタを駆る密輸業者がいたのはこの場の誰も知らない話である

「何？」

「いや流石にコソコソして動くのは限界だろう？それに外にいる連中のライダーはまだ残ってる可能性があるしな、だから」

「それで奴等の通信機器を奪うと言う訳か…あわゆくば詳細な地図も手に入るか」

「そうそう、どうよ？」

クリス達が話をしているとダエルフナインから通信が入る

『皆さん気をつけてくださいいね…』

大事な人が囚われて心配な声音を感じる、ナツキが捕まっている。これだけなら後で安全に送り返せただろうが今回の衝突だ原因となった彼に逢魔が何かしている可能性がある。があると考えている

実際にそう言う現場を見てきたのでエルフナインも考慮して不安になっているのだ

「うん……………あ」

「やべ……………先輩」

「了解だ「おい」少し黙っている「おい！」だから静かにしてくれ!!……………なっ！」

その声に注意しようと振り向いた先には

「此処で何をしている？」

クローントルーパー達がブラスターを構えて威嚇していたのである

「い…いやあ……………あ！ハルトさん！」

「何！陛下!!お目覚めになられましたか！」

その言葉に全員が振り向いた隙を3人は見逃さなかった

「今だ！」

3人は全力で逃げ出したのだが

「おい待て!!」

「何て古典的な方法を！逃すな追え!!」

「言われずとも！」

「捕らえろ！陛下の名を語ったのだ最悪射殺しろ!!」

「此方警邏隊、侵入者発見！繰り返し！侵入者が陛下の手術室に向かっている！増援を頼む！」

拠点内部でもとんでもないパニックになっていた

その頃

「わかった私が迎撃に出る、任せておけ」

『申し訳ありません！』

「構わん、外で暴れている奴等を思えばこれ位はな」

コムリンクで外部の映像を見ていると

『ん〜何処か音が足りないのお……分かった！足りないのはお主達の悲鳴じゃあ!!』

『死ね！我等が魔王様に仇なす愚か者どもよ!!』

『『ぎゃあああああああ!!』』

『あははははははははは！』

戦車を砲丸投げのように投げ飛ばすアークと火炎の車輪となった両足で敵を踏み潰しながら暴れているアナザーコア1号が大笑いしている映像に思わず千冬も閉口するが

「やり過ぎだ馬鹿者」

これを言えるあたり逢魔王国の数少ない良心であり未来でも唯一の常識人と言われる千冬なのであった

「今思えば、ハルトはハルトなりに部下を制御していたのか……いやアレはその辺りは考えてないか」

自分が出て暴れるから部下が暴れる部分が少ないからだろう……相対的にハルトが暴れているが目立っているだけなのだろう

コムリンクを切断すると強化外骨格のスーツに身を包み 腰には6本の刀を装備し髪をポニーテールに纏める千冬がいた

「ふう……久しぶりだなこの格好は……あの時以来か……そう言えばハルトの奴この髪型の時は凄い嬉しそうだったような気もするがハルトはまさかポニーテールが好きか？」

そう邪推している程度には千冬に余裕があつた

「それはバカが起きた時に聞けば良いか……ん？ほお来たか予想より早いな」

噂をすればと響達3人が走ってきた

「え？……あ！メロンの人！」

何という覚え方をしているのだこの小娘はと千冬は呆れる、仮にIS学園でそんな事を言ったら周りは凍りつくだろうなと思うが

「織斑千冬、あのバカの妻だ」

「あ、それはご丁寧に……あれ？ハルトさんって……キャロルちゃんと結婚してるんじゃない？」

響が突然の情報に宇宙猫となっているとクリスが頭を叩いた

「このバカ、前にナツキが言ってた重婚してるって」

「あ！そうだった！……じゃないお願いです！そこを通してもらえませんか!!」

「断る、この先には行かせん」

この時

千冬は通路の先にいる手術中のハルトを守っていた

故に響達を混乱に乗じて彼を暗殺しに来たと警戒しているのだが

当の響達はナツキの救出に向かっていたので

互いにすれ違いをしているのである

「何ですか!!話し合いましよよ!」

「話し合いをする度に騙し討ちするのは何方だ?此方が誠意を示したら鉛弾を撃つような輩の言葉など聞く価値もない」

「そんな!」問答に意味はなし此処は私に任せて先へ行け立花」けど翼さん!」

「彼奴には借りがある…いつぞやのリベンジ果たさせて貰うぞ!」

「ん?そうか、あの船の時か?」

良いだろうと千冬は答えるとハルト達をして

【王を殺せる剣】

と称されるサタンサーベルを抜刀し鋒を翼に向ける

「この間と違って手加減はせんぞ、貴様等は超えてはならない一線を越えたのだからな」

「ご安心をして貰おうとも思いませんので」

「そうか……なら剣士として相手しよう来い」

「はあああ!」

天羽々斬を纏った翼と同時に駆け出した2人の剣は中間地点で交差したのであった

「先輩…頼みます！」

「気をつけてください翼さん！」

走り出す2人を見送った翼は尋ねる

「何故通したのですか？貴女なら私達3人を相手出来るでしょうに」

「心配していないからだ…此処を守るのが私だけだと思ふなよ」

「知っています」

「だが3人がかりなら私を倒せたかも知れんに…惜しい事をした！」

千冬は零拍子を使い翼に肉薄するのであった

その頃 拠点の中心部では

「ちーちゃんか接触したね〜やつぱり連中はハルくん暗殺に動いたか〜こりやキャロりんも呼んだ方が良かったかな？」

東がコンソールを操作しながら状況分析をしコムリンクを使い呼びかける

「ねえねえ親衛隊のみんな、ハルくんの部屋の前でバリケード作って待機しててよ敵が来たらサーチアンドデストロイで！」

『かしくまりました』

トルーパーに指示を出した東は

「さてさて君はどうするの？アンちゃん」

自分の後ろで椅子に座りながらルビクキューで遊ぶアンティリーネに尋ねる

「というより東さん的にはヤツちゃんと思つたんだけど〜珍しいね〜」

「そうね……………雑魚を倒しても退屈なだけと言っておきましょうか」

「なるほどおくじやあ今侵入してる奴等は？」

「論外ね最低でもジョウゲン達くらい強くないと楽しめないわ」

「流石アンちゃんだねえ、強さのハードルが高いよ」

ジョウゲン達もハルトの側近だけあつて連携を取ればアンティリーネと戦う事も可能である。因みにヤクヅキは1人でも戦えるレジエンドルガの女王は伊達ではなかつたりする。

「それで私に行かせたいの？」

「まあそうだね、スーちゃんは魔法で怪我人避難させてるしくちーちゃんは見ての通り、キャロリンはネフィリムの残骸で何か作ってるし…だから自由に動けるのはアンちゃ

んくらいなのさ」

「カリユブデイスやゴオマのような怪人達は？」

「みんなは逢魔の守りについてるから不参加だよ寧ろ此処にこようとしてカリユブデイスが暴れてるらしいから呼ばない方が良いかな」

「なら、テストタロツサ達は？」

「ああ、あの3人なら」

東が映像を見ると

『あら…もう終わりかしら？』

『この程度かつまらん！』

『なーんだ：偉そうに降伏勧告してたのに拍子抜けだね見たことない武器だったから警戒してたけどさ弱過ぎ』

『そうね折角、核撃魔法を使わないって縛りをつけたのに勿体無いわ』

『そうだな我が君が臥せてる今こそ私達の力をこの世界の連中に教えてやるとしよう』

『じゃあさじゃあさ、あそこにある大きな基地壊した奴の勝ちね！お先！』

『待てウルティマ！抜け駆けは許さんぞ！』

『あらあら』

映像には兵器の残骸と兵士の亡骸の上で退屈と言わんばかりの声音で会話している3人娘がいたのである手加減しているのが会話から見て取れる。更に本拠地まで潰そうとしているのだから、基地にいる面々はウルティマ達を見て必死の形相で逃げようとするのを見て

『何だ逃げるのか？つもらんな』

『仕方ありませんわ、彼等だって命は惜しいのですよ』

『だとしてもだ…』

『ふふん！じゃあ纏めて消し飛んじやえ！』

ウルティマが大魔法を発動する前に

『ウルティマの奴に手柄は渡さん』

『アナザーエクスプロージョン!!』

大量の隕石が敵基地を半壊させたのである

『あ……ああ！何してんのさウオズ!!』

ウルティマは現れたアナザーファイナリーに文句を言うとは彼はいつも通りの礼を取り

『これは失礼ウルティマ嬢、敵司令部の破壊は私の役目でしたので』

『誰の命令だよ!!』

『うむ、よくやったぞウオズ!』

『恐悦至極ですカレラ嬢』

『カレラ…いつの間に!!』

『何、ウオズ達にも花を持たせたに過ぎんさ』

『ありがとうございますカレラ嬢』

『ええ見事な手並ですわね…ですが』

『ひ、ひい！に、にげー』

眼科には生存者が慌てて逃げようとしているのを見えたのでテストロッサが魔法を放ち一撃で消しとばすと笑顔で

『生き残りがいるようでしたらまだまだですわね、ハルト様の敵ならば塵殺ですわよ』

『精進致します、テストロッサ嬢』

『ふう……これで終わりか？』

『じゃないの？つまないね数だけいても…ねえ、この魂を全部ハルにあげたらどうなるかな？』

『通常、覚醒魔王以上の進化はありませんわよ』

『知ってるけどさ、ハルなら何かやってくれそうじゃない!』

ウルティマの目には純粋な好奇心が宿っていたそれは2人も同じだったようで

『そうだな…よし念の為に保存しておくか』

『ええ…それで全体の状況はウオズ?』

『は! トルーパー達はゲリラ戦で時間稼ぎ中ですが、拠点内部に潜入した敵と千冬嬢が
接敵している』

『馬鹿者! それを先に言え!!』

『そうだよ! ハルが死んだら元も子もないじゃん! 戻るよ!』

『あの今更ですが2人とも我が魔王がその辺の鉛弾や刃物で死ぬと本気で思ってます？』

『いや全然』

『大丈夫ですよ我が魔王の側にも頼れる仲間はいますから、そうですね束嬢』

とコムリンク越しの会話に束も混ざる

「うん！さあアンちゃんは どうする？サボったままだとハルくんが起きた時のご褒美が無くなっちゃうよ〜」

「少し散歩に出るわ…その時にたまたま敵がいたら相手してあげる」

「いつてらっしやーい」

含みを持たせてアンティリーネが外に出るのであった、そしてコムリンクで会話する

「ねえキャロりんは何してるの？」

『前にハルトが言つてた賢者の石対策と実験だ』

「実験？」

『聖遺物とアナザーライダーの融合による強化だ、ハルトが言うには条件を満たせば可能かも知れないとな』

その根拠は融合進化態ロイミュード

だ
アレは人間、特性バイラルコア、ロイミュードの三位一体となつて生まれた強化個体

本来は混ざらない存在の融合は未知の力を引き出せる根拠になる

『カリュブデイスの例もある、試してみるさハルトが起きたらアナザーウオッチを起動と同時にネフィリムを放り込んでみる』

「ハルくんが聞いたらひっくり返るよ」

『それより状況はどうなっている、まずいならオレが出るぞ』

「あく大丈夫だよ外は片付いてるし、中は今ちーちゃんとアンちゃんが迎撃中だよ」

『そうか…そろそろハルトの手術が終わる頃合いだな、オレも動くぞ』

「はいな！気をつけてねキャロりん」

『善処する』

と部屋から出て歩くキャロルだが走る後ろ姿を見て

「やっぱり心配なんじゃん皆、だからさ早く起きなよハルくん」

そう呟く束であった

—————

その頃 手術室では

「ふう……………完了だ」

「お疲れ様」「よくやったな」

「さて、おいハルト終わったぞ早く起きろ」

「普通なら麻酔切れるまで待つけど」

「ハルトの場合は…」

「ふわぁ……おはよう〜」

普通に寝起きのような気楽さと共に起きると手術跡などは再生能力で消え全快になる

「気分はどうだ？」

「快復の喜びと馬鹿共の攻撃での怒りで狂える最高で最低な目覚めだ」

「元氣そうだな」

「デザストの真似する位にはな…んでキングストーンは取れたか？」

「ああ見ろ」

アナザーブレイブが見せたのは金色の石ころである

「これがキングストーン？何か地味」

『まあ貴様の体内で出来たものだから創世王のものと比較するな』

「それもそつか…んじやコレをキャロル達に渡してと…あ、俺の中にまだ残ってたりする？」

「そんな事ない完璧に切除した…本来なら二、三日は安静にしろと言いたいのだが」

「治ってるから動くぞ」

「そう言うと思つてたぜハルト！」

「それで状況は？皆は無事？」

「外は、ほぼ決着がついているテストタロツサ達が敵主力を撃滅しフィーンニスとヤクツキがトルーパーと連携し敵前線を崩壊させている、ウオズが敵司令部を破壊した…：そうだな幹部連中と妻達は無事だがトルーパーに戦死者ありだ」

「そうか後で俺の為に戦ってくれた英霊は弔わないとな…：つか終わってんじゃん、何なら逢魔大勝利？」

「それに近いな、お前が相手するとしたら中にいる連中だ現在は千冬が風鳴翼と交戦中でもう少してアンティリーネが立花響と雪音クリスと接敵だ」

「わーった、じゃあ「ハルト！」っ！」

「はあ……はあ……よ、良かった……無事か」

扉を強く開けたキャロルを見て

「ああキャロルおはよう、ごめん寝起きだけど行ってくる」

「そうだろうな……使えお望みのネフィリムだ」

キャロルが取り出した箱の中身を見てハルトは少し困ったように笑うが

「ありがとうよ……さあ実験を始めよう」

ハルトはブランクウォッチを取り出すとアナザーディケイドは慌てながら止めに入る

『馬鹿！貴様は病み上がりなんだぞ忘れたかそんな状態で実験など』

「ポチツとな」

『話を聞け!!』

不思議なことが起こった

ハルトの中にあるアギトの因子とネフィリムがブランクウオッチに流れ込むが聖遺物を食らう聖遺物というネフィリムの性質と病み上がりの状態で流れ込んだアギトの因子は一部ネフィリムに食われてしまい不完全な形でウオッチに入ったことで新たなアナザーウオッチが誕生したのである

現れた顔は元来の有機的な顔にネフィリムを思わせる黒い獣のような顔面となっている

アギトと言う種の突然変異個体

人からアギトになろうとする蛹

あるいはアギトに慣れなかった奇形

様々な解釈はあるがネフィリムが混ざった事で方向性が定まったのだろう

『ギルス』

光が残した遺産 アナザーギルスウォッチの誕生である

「へえ…アギト…いやギルスの力か」

『これは予想外だ』

「俺もだよ…じゃなかった行くぞお前達、ありがとうゆつくり休んでくれ」

「そうさせてもらう」「ああ」「いやあ後輩が出来たなあー!」

そう言った3人はウオッチに戻るとハルトは

「ふう……んじゃ行ってくる」

「ああ気をつけろよ」

「キヤロルは東の所に迎え……もしかしたら侵入者の目的は俺の暗殺じゃないかも知れん」

「………ん?まさかモルモットの回収に来たのか?」

「調べれる?」

「待っている………はあ、そうみたいだな」

エルフナインと視覚の共有をしたのか事情を理解したキャロルは溜息を吐く

「中に入って奏者は殺すなど伝えてくれ束」

『はいはい！』

「アンティリーネは接敵したか？」

『まだだよ』

「しょうがない拠点内部の放送を使え」

『了解くじやあ誘導するね』

「頼む……こりや皆には何かしてあげないとな」

『お、言ったねハルくん！』

「ああ俺に叶えられる範囲なら叶えるよ」

『やったあ！後は束さんに任せなさい！』

「オレも忘れるなよ」

「忘れるかよ千冬達もだけどな…つか俺そんなにアレか？」

「そうだな捨てる事を知らんバカだ」

「うるせえ世界を滅ぼそうとした錬金術師と同じレベルのバカなんざ俺くらいしかいないだろうよ」

「違うないな、そのバカな錬金術師を助ける為に国…いや世界に喧嘩を売った大馬鹿だ

な」

これだから自分達がついてないと心配なのだ、でなければ何をするか解つたものではない

「だからさ皆、ありがとう…俺なんかの為に…皆には感謝してんだ、頼りない王様でごめん、情けなくてごめん…けど俺みたいな奴と一緒にいてくれる皆には報いたいと幸せにしたいと思ってるんだ…いつも」

混じり気のない純粋な思い それはハルトの本音であり宣誓だ

「俺にとって大事な場所を奪おうとする奴等には容赦なんかしない…」

『俺じゃない、俺達だ相棒』

「だから行こうぜ出陣だあ!!」

ハルトはアナザーウオッチを押し込むと同時に基地周辺で戦闘中だったトルーパーと部隊の戦場に異変が起こる

「撃ちまくれ!! 怯むなあ!」

「進めえ! 此処を突破すれば魔王まであと少しだあ!」

「た、隊長!! アレを!」

隊員の1人が異変に気づき隊長も視線を向けるとトルーパーも視線が向く

「な、何だアレは!」

虚空が水面を打つような現象に敵が混乱する中

「はい……はい……了解、野郎共撤退だ! 退け! 退け!」

トルーパーは束から来た無線の指示に従い全部隊が一斉に退却を開始すると

「逃げたぞ逃すな！追え！奴らは国家反逆の危険分子共だ！人残らず打ち倒せ！！殺した所で罪にはならん寧ろ手柄だ！」

逃げるトルーパーを追撃しようとするが、それは出来ない

「聞いたなお前等」

「ああ…あいつらに」

「教えろつてな」

何故なら彼等は払う事になる

「」「皆殺しの時間だぜえ!!」「」

魔王の逆鱗に触れた　その代償を自らの命でだ

突如　虚空から現れたバイクやバトルモードに変形済のサイドバツシャーやジェツトスライガーに乗る銅色の装甲を纏うアナザーファイズに似たアナザーライダー

それはファイズの量産モデル　平成ライダー屈指の数を誇る量産型の中の量産型

令和に生まれた機械仕掛けの蝗害

仮面ライダーアバドンが現れるまで変身した数が判明している最多のライダー

その名に込められた意味は暴動を鎮める騎兵

しかしアナザーとなり歪んだ力と人格は丸で

「ヒヤッハー！なあ旦那今日は好きだけ暴れても良いんだよな！」

【構わん敵は全て粉碎しろ!!】

彼等の王からの命令に嬉々として従うのである

「了解だ旦那！初仕事だ気張れよお前らア！」

「「「「ヒヤッハー!!」」」」

さながら暴動を煽る愚連隊

『ライオトルーパー』

アナザーライオトルーパー軍団 出陣

彼等はハルトが保有する核のアナザーウオッチが砕かれない限り死ぬ事はない、故に恐れなど知らずでありアクセレイガンに似た銃や警棒のような鈍器をバイクに乗りながら発砲し振り回して暴れ、大型マシンに乗るものは持てる火力全てを持って戦場にい

る敵兵を撃ち倒す、中には鎖を使い敵を捉えてそのまま引きずり回すものや

「や、やめてくれ！た、頼む！命だけは！俺は命令されただけで……」

「「へへへへ」」

「家族がいるんだ帰りを待つてる……だから頼む!!見逃してくれえ!!」

「おい聞いたか？俺達に降伏迫る時と偉く態度が違うなあ接收とか色々上から言つてたのによお」

「それにお前等言つたよなあ……法律に基づいて対処するつてよお、人様をまるでモノみてえな扱いしてたよなあ」

「同じように降伏したら見逃したかよ？んな訳ねえよなあ！」

「あ、ああ……ああ……」

「俺達も我等の王が作った法律に従ってテメエ等を蹴散らすだけだあ！ やつちまおうぜ兄弟!!!」

「ぎゃあああああ！」

逃げ遅れた者や倒れた者に対し複数人で取り囲み殴る蹴るなどの暴行を加えるなど

ある意味で敵には慈悲を持たないというハルトの一面を色濃く持っているアナザーライダーと言える

その出現は

「この力…陛下だ陛下がお目覚めになられたあ!!」

「反撃開始だ野郎共、よく我慢したな遠慮はいらん！ 撃ちまくれ!! 敵は逃げてるぞ！ 手柄の稼ぎ時だあ!!」

「よっしや！ goo—goo!!」

味方には魔王の復活という希望を

「祝え！全アナザーライダーを統べ、時空を超え過去と未来をしろ示す時の王の力の一
旦！その名もアナザーライオトルーパー、正に出陣の瞬間である！」

ウオズの祝いで敵には絶望が生まれたのであった

祝うのと同じタイミングで戦いに決着がついたヤクヅキとフィーニス、ジヨウゲン、カゲン、ハウンドが合流する

「ウオズ！」

「魔王ちゃん起きたんだね！」

「凄い…病み上がりでアレだけの力を…」

「かかか！それでこそ我等の王じゃなハルト坊！」

「わかった…ご存知かと思いますが陛下の手術は完了、完治し前線に復帰しました！」
「ええ知っていますとも…っ！」

突如魔法陣が現れ中から現れたのは、ハルトである

「我が魔王！ご快復おめでとうございます！」

「ありがとうウオズ、みんな俺の為に戦ってくれてありがとう」

「何をおっしゃいますか、これは我等全員の我儘です！」

「そう…「ハルト！」 錫音もありがとうな」

「ううん…無事で良かった…心配したんだよ…」

泣きながらハルトを抱きしめて錫音を抱きしめ返し

「ごめん遅くなった」

「だって…君がいなかったから…周りの連中が全く自重しないで暴れたんだからね!!怖かったんだから!!」

「え?そっち!?俺の事心配してくれてたんじゃないの!!」

「いや君は殺しても死なないから心配なんて欠片もしてない…あの時、呪いの魔剣に刺されても生きてるような奴を心配するだけ無駄だから」

「キャロルや束を見習ってよ2人は心配してくれてたぞ!!」

「なら早く終わらせようよ…そしたら2人で話したいな」

「OK、んじやさつさと連中を威圧しますかね」

アナザーライオトルーパーが前線を押し上げ終わり 戦況は完全に此方の勝利だが

「あれ？ウルティマ達は？」

あの3人娘が消えていたのである

—————

内部の戦況はといえば

「木端微塵」

「つく！……つく！」

千冬が指を鳴らすと同時にサタンサーベル以外の地面に突き刺さった刀が一斉に起爆し翼を巻き込む倒れて起き上がる前に鋒を喉元に突きつけた

「終わりだ小娘」

「な……何故、殺さないのです」

「放送を聞いてないのか？ 貴様等は殺すなど言われたのだハルトの指示でな」

「魔王が？」

「それと勘違いを謝罪するぞ、お前達はナツキを助けに来たのだな」

「あ…あぁ」

「私は貴様等がハルト暗殺に来たと誤解していた…これはトルーパー達も同じだがな」

「では」

「ただナツキに関しては今回の件に対しての対応をハルトが決めてからだ、まあお前の仲間は殺されないから安心しろ」

「立花…雪音……」

「ふっ……この褒美は奮発して貰うぞハルト」

—————

その頃 最初は勝ちを確信していた敵軍は混乱の中にあつた

「戦力の8割壊滅です」

「そんなまさか……」

軍事作戦を後方で指導していた本部には混乱が起こっていた

魔王不在の手勢など烏合と侮り軍勢を差し向けたら返り討ち　しかも魔王が前線に出たら後はひたすら蹂躪されたのである

「こんなバカな事があるか！　こうなればもう一度攻撃だ！」

息巻く幕僚もいるが中には風鳴機関の手の者もおり彼等は訃堂からの肅正に顔を青ざめさせていた

「ふーん………ここが今回の責任者がいる場所かあ〜」

そんな場所に不似合いな声音に周囲の視線が集まる　そこには軍服のような衣装を着た紫色の髪をサイドテールにした小柄な女の子がいたが有り得ない

「何者だ………っ！　貴様は………だが何故ここにいる前線まで何百キロ離れていると思っっているのだ!!」

先程まで画面の中で機甲師団や兵士達を笑いながら仕留めていった3人の1人なの

だから

「ボク？ボクはウルティマ、今日はね色々聞きたいことがあつて来たんだあ、君達もう直ぐ死んじやうからその前に色々聞いておこうと思つてね」

可愛らしい声で恐ろしい言葉を紡ぐと周りの幕僚達も理解した 魔王からの死刑宣告と

「ふざけるな!!誰が貴様等の「誰に向かって口聞してるの?」お……」

立ち上がり抗議しようとした幕僚の1人が言葉を言い切る前にウルティマが魔法で的確に頭部を粉碎、血柱が綺麗に上がるのであつた

「……何が聞きたい」

「幕僚長!」

「幕僚長…ああ君が一番偉いんだ」

「情報を提供する代わりに条件があるらこの場合は私一人の命で勘弁して貰えないだろうか？」

その提案にウルティマはキョトンとした

「あのさあ普通逆じゃない、助けるから私だけはおくみたいな」

「そうだな…しかし私も今回の作戦の被害を見れば未来などない…ならば先のある者が逢魔に勝つ為の可能性を残すことこそ私の役目だ！人間を余り甘く見るなよ化け物共！！」

ドン！と出る言葉に嘘はないと分かったのかウルティマは笑いながら

「あははは！いいよ、じゃあ君から情報を貰おうか…君以外には何もしないよ」

「感謝する、お前達は早く退避しろ！」

その言葉を合図に一齐に我先にと逃げだす

「ボクはね」

この時ウルティマの口角が上がったのに気づければ運命は変わっていたのかも知れなかった

この部屋にはウルティマと幕僚長の2人のみとなると

「何から聞きたい」

「作戦の情報と目的、それと誰からの差金とか黒幕の情報とか全部」

「ならば」

と幕僚長はUSBメモリを取り出しウルティマに渡す

「その中に今回の作戦に関する、あらゆる情報が記載している…軍事作戦のものに限るがね君が言う黒幕とやらは解らんが、ヒントはあるだろう」

「ふーん…ありがとね…あ、そだ」

東辺りに渡せば大丈夫かと思懐にしまうと

「この基地にはボク以外も来てるから気をつけてね」

「っ!」

「何だ貴様は!」

「あらあら、まだ生き残りがいたのですね」

「何だウルティマの奴、まだ遊んでいるのか?」

幕僚長は血相を変え扉を開くと先程まで会話をしていた同僚が見るも無惨な姿に慣れ果てていた下手人だろう金と白髪の女性2人は不思議そうな顔をしながら自分を見ていたのだ

「何故だ！情報を渡せば見逃すと……」

話が違くと責めるが

「ボクは何もしないけど？どうやらボクと同僚が来てたみたいだねえアイツ等が何しようがボクは知らないし〜」

楽しそうに笑うとウルティマは嘘はついてないと言うと

「ボク以外がやったんだから契約関係ないよね、あ、それとこの情報大事に使わせて貰うから感謝するよ」

それはハルトの仲間になり落ち着いていた悪癖のようなものであり魔王ダグリユールやヴァレンティン達をして「残虐非道の代名詞」と言わしめる悪魔の最古参 原初の紫と呼ばれていたのだ

人間の慌てふためく姿や健気な自己犠牲の を楽しい暇つぶしだったと言わんばかりに見ている態度を見て漸く幕僚長は理解した

「き、貴様ああ……この悪魔めえええー！」

怒りに任せて銃を取り出し向けるが

「何だ今更気づいたの？」

ウルティマは音速で移動し貫手で幕僚長の心臓を貫き引き抜く、するともう興味が失せたような顔をして

「そうボク達は悪魔だよ、ハルの邪魔をするなら誰だろうと消し飛ばす悪魔なんだ覚えときなよ……あ、ごめん死んでたら覚えられないか」

カラカラと笑っていると嫌な同僚から話しかけられた

「何をしている情報は抜いたのか」

「うん」

「では帰るぞ我が君がお待ちだ」

「急ぎますわよ」

「はい…あ、ここも爆破しておくか…えい」

ウルティマは魔法で建物を木端微塵にすると同時に3人は転移して戻るとハルトが心配に満ちた顔をして話しかける

「あ！どこ行つてたのさ心配したんだよ！」

以前と同じように心配する姿にウルティマは懐かしさと変わらないハルトの姿を思う

「ごめんなさい…実は」

とウルティマがUSBメモリを取り出して

「え、何これ？」

「今回の件での向こう側の戦力や投入した規模の情報…あと軍事作戦情報色々を纏めて
るとの事ですわ」

「マジでか…そりやお手柄だな、ありがとう3人とも」

「うん！」「ああ！」

「いえいえ当然の事をしたままですわ」

「だとしてもだ、何かご褒美がないとね」

ハルトは笑顔で答えるとカレラに聞く

「それとさあ結構 この辺に魂が凄いい残留してんだけど…何これ？」

アナザーゴーストの力で確認したのだが、収穫祭を思わせる量の魂が残っている

「ああ魂だな。我が君に渡そうと残しておいたのだ」

「え？いや…え？覚醒魔王って更に進化するの？」

つまり今の俺はアメイジングクウガみたいな不完全な魔王だったのか？

『いや進化しねえお前は既に覚醒魔王だ』

「けどハルトの種族はハルト以外ないからさボク達も知らない進化があるんじゃないかなー！」

「更に強くなれるのか」

そう呟くと嘗て自分の友人であるリムルさんが言っていたと思い出した

力無き理想は戯言、理想なき力は空虚と

なら俺の取るべき選択は

「迷うまでなかったな」

『ゴースト』

ハルトはアナザーゴーストに変身すると魂を取り込むのであった

その魂を取り込んで得たハルトの力の波動は各世界に散り散りとなったアナザーライダー達が目印となるのを彼はまだ知らない

そして目に見えて新しい変化がもう一つ

『BLACK SUN』『SHADOW MOON』

彼がひたすらに呼んでいたからか千冬の持つサタンサーベルに反応したかは分からないが とあるライダーのウオッチが生まれていたのであるのを彼はまだ知らない

この戦いは逢魔王国の勝利として歴史に名を残す事となるが

互いに多くの犠牲を出したのは言うまでもない

戦後処理と話し合い

前回、無事に敵を倒す事に成功したハルト達逢魔王国であつたが犠牲は多かつた。戦いが終わった後、ハルト達は戦力再編の為に一時逢魔へと撤退する事となる。それは膨大な戦後処理の雑務が始まるのであつた。

――

逢魔議事堂 会議室にてハルトは先ずやった事は損害の確認と戦死者の弔いであつた。

兵士達の葬儀を行なっている最中、ハルトは涙が止まらず、彼等の墓前に何かを誓つたという。

その後は主だった者を集めての論功行賞を取り纏め終わったが
戦闘外交面で逢魔最大の功労者であるテスタロッサに褒美を聞くと

「でしたら王国内に墓所を一つ作らせて頂けないでしょうか」

「いいよ好きな場所に建設する権利と資材の手配をするね」

逢魔に墓を作る権利と言われたのは驚いた快諾したが誰の墓なのだろう？ 献花しに行っても良いかな？ と考えたりしてる

そんな忙しい日々を過ごしたハルトはウオズを連れて逢魔にある、ティポカシティ
カミーノ特区へと足を運ぶのであった

ティポカシティ

「ようこそ、ハルト殿」

「お久しぶりです、ラマスー首相」

ハルトは普段と違い身なりを整えており普段と違い毅然とした態度を取っている、互いに腰掛けて本題の話となる

「さて早速本題に先日、逢魔が異世界で軍事衝突したのをご存知でしょうか？」

その理路整然とし落ち着いた話し方にハルトの中のアナザーライダー達やウオズは驚いているが顔には出さなかったが

『お、お前どうしたんだよ本物のハルトか！』

声は出ていたので

「少し黙ってて貰えるか？」

『あ、ああ……』

「ええ、お話にお伺いしております…トルーパー達も戦端が開いた事で訓練に熱が入っておりますとも…我等のトルーパーがどうされましたか？」

「そこで貴方達の作ったクローントルーパー達の戦いぶりを拝見させて頂きました…：素晴らしい兵士達です勇敢で精強、尚且つ恐れ知らずで臨機応変と来た」

「思い出すのは、あの世界で俺の為に懸命に最期まで戦い抜いたトルーパー達の姿である敵の砲火や爆撃などを掻い潜り戦い抜いた英霊達に敬意を示していると」

「お気に召して何よりです」

「ラムスーは自分の所の製品がクライアントから高評価なのにご満悦なのである」

「とてもね…首相、以前私が彼等の功績と実績でクローントルーパーを追加発注を検討するとお話しされた事は覚えていますか？」

「無論ですとも」

「あの話、宜しければ前向きに検討頂きたい逢魔専属で向こう1000年の契約とその期間中に作れるクロールントルーパー全ての発注をお願いしたい」

「1000年!!こ、これは驚きましたそこまで買って頂けるとは…しかし彼等のオリジナルのジャンゴ・フェットのDNAは劣化しております1000年持つか分かりません…」

この依頼にラマスーも驚きを隠せないのか声の上擦った、まさか今の1000万ユニツト発注のみならず更に1000年単位の契約を交わそうとは、今までこんな依頼主はいなかったと

「そこは大丈夫、俺の力でDNAを新鮮な状態に戻すことを約束する」

「何と…それは素晴らしい提案です、良いでしょう貴方専属で契約させていただきます」

「ええ私は彼等が気に入りました、今後とも良い関係でいたいですな」

「私もですハルト殿」

—————

そしてティポカシティの話し合いも終わると来賓室に向かうのであった

「あら珍しいわね王自ら挨拶なんてね」

そこには亡命の提案をしたカリオストロがいる、分身した小さなモスとカゲンを共周りにつけているハルトは溜息を吐くと

「色々と片付いたから報告に来ただけだ、お前を御せる奴等は別件で動いていてな、暇なのが俺だったただけだ」

「普通なら王様が一番忙しいじゃないのかしら？」

「まあそうなんだが…優秀な仲間が多くて助かるよ、俺の仕事殆どないし」

「それに今回の件の情報を漏洩しない為の処置でもある」

「カゲンの言う通りだお前は一応うちと司法取引しているが逢魔では政治犯だしテロリストだからな外面もある、結果から話すけど3人の亡命なら受け入れる事にしたが事件解決までは大人しくしてもらいたい」

「分かってるわよ、けど本当に国なのね」

「皆の頑張りの結果だよ…で、聞けずじまいだったが結局アダムの目的って何だ？」

「大雑把に言えば、神の力を手に入れる事よ」

「神の力？」

何とまあベタな悪役が欲しがりそうなものを…と呆れていると

『ヴェハハハハハハハハ！ほおアダムのお目が高いな…この神の力を狙っているだとお！』

ーいや、それは絶対に違うー

『何だトオ！ハルトオ!!!』

『そうだぜアナザーオーズ、きつと神の路線とか関係してんだぜ！』

ー多分それも違う、歴史改変なんてしてみろ時の運行を守る抑止力が飛んでくるぞー

『え！嘘っ!!』

ーけど…一度会ってみたいなあー

『んじやアダムの欲しい神の力って何だ』

その意見にハルトは目を細めキリツとした顔で告げる

「恐らく黄金の果実……仮面ライダー鎧武……否！師匠の力に他ならない！アダムはヘルヘイムの森に進撃して師匠から黄金の果実を奪うつもりなんだ！！」

『『『な、なんだってー！』』』

「そうはさせんぞ！公認弟子1号の俺が断固阻止してやる！！野郎ども決戦ダア！」

『『『それが一番違うだろう！！』』』

思わぬ総ツッコミに対してハルトは動揺している

「ば、バカな！これ以上に完璧な推理はないでしょ！だってアダムの声、メガヘクスと同

じだよ!!あの師匠でも手を焼いたヤバい奴だよ!」

『まったく…少しは成長したかと思えばコレか!あとメタいからよせ!』

『さつきまで見てた、あの落ち着いた交渉ぶりは幻覚だったのか?』

『まあ良くも悪くもブレんな…だが安心したぞ』

「まあアダムには今回のお礼も込めて相応に報復してやらないと気が済まん」

そもそも逢魔にクーデターなんてしなければこんな展開にはならなかったのだ故に諸悪の根源は根絶やしにするとハルトは怒りに燃えているのである

「取り敢えず、連中はどうしてやろうか」

『戦後処理で行くなら賠償金や領土割譲が基本だがな』

アナザーデイケイドは中の人が王族故に教育されていた事もあり明るく、ハルトが即位してからもサポートしてくれているのだ

「けど、あの法律的にさ俺達って災害扱いなんだっけか？地震や台風と交渉して賠償金払うバカはいないだろ？請求出来るならカミーノに発注したクローン100年分の金額を頼むか」

暗に国を傾けるくらいの賠償金を請求してやると言っている

『対応がないなら、今度こそ全てを滅ぼすだけだ例外なくな』

「なるほど…って、そんなしたら錫音に殺されるわバカ！」

タダでさえ色々やらかしているのだからと答えるハルトだがカリオスト口はキョトンとして

「いや交渉には応じるんじゃないかしら？」

「は？」

「だってナツキと奏者を三人捕虜にしてるのよね？ だったら乗らないと行けないわ」

逢魔ではあの世界の拠点跡地に幽閉させている三人とナツキは現在、三人娘の部下に見張らせており捕虜としての待遇はしているが拷問やウルティマの情報抜き取りなどはしていない俺達はあくまで法治国家であるからに他ならない

「そうだな、 んじゃ連中経由で取り立てるかな」

ハルトは悪い笑みを浮かべるが、その前に落とし前はつけなくてはならない相手がいる

シンフォギア世界 逢魔拠点 営倉にて

「ナツキ」

「は、ハルト！」

「随分とまあやつてくれたもんだなあ、今までは大目に見てたが、お前の望む未来の所為で俺達側に死人が出たんだ、今回の件タダで済ませる気はねえよ…向こうの態度次第では本気で戦力を投入する予定だ」

「……………」

生き返らせれば良いとアナザージオウⅡの力を使おうともしたがハウンドから兵士は戦場で死ぬのが本望だから眠らせて欲しいと懇願されたのでしていない…だがいなくなつたのは事実だ

「この世界を戦場にしたのは、お前…と言いたいがネオタイムジャッカーやアダムの所為でもあるしな」

「……………え？」

「だから事件解決まで俺達側に立って死に物狂いで戦え、それを償いとしておく……だいぶ甘いと思うな」

「……響達は？」

「交渉カードもしくはお前が裏切らない為の人質だからな大事に扱ってるよ」

「解放しないのか？」

「向こうの態度次第で考えてやらんでもないな」

「響は解放した方が良く……神の力を得たアダムを倒すなら神殺しの力を持つ彼女が必要になる」

「お前の見た未来の話か？」

「……………」

頷くナツキにハルトは顎に手を当てて考える

「神殺しねえ」

表現としてはシンプル極まりないが、説得力はある、彼女のシンフォギアの素材は北
欧神話の主神 オーデインが持つ槍 グングニルの破片となれば根拠たり得るだろう

神の武器は神を殺せる

王を守る力があるなら倒せるとファイズ達が証明しているので笑い飛ばせない
……………」

「興味深いな神の力か…俺も狙って…………いや辞めた、そんな得体の知れない力で強くなっても嬉しくねえな」

『そうだな貴様にはいらん力だ』

「だな……取り敢えず立花響はアダム打倒の切り札かなら手元に置いて損はないか」

「っ！頼む！俺はどうなっても良いから響は皆の場所に『コネクト』え？あいたあ!!」

ナツキの懇願に腹が立つたのでコネクトの魔法を使い頭に金だらいを落としたのである

「アホかテメエ！俺の義妹を泣かせるような真似してみろ超自然発火能力でこんがり焼くぞコラア！」

『舐めんなよ！最近細かい出来る様になっただぞ！』

『アナザークウガは成長してミディアムからウェルダンまで焼けるんだぞコラア！』

「え、えええええ!!？」

「それとお前にアナザーゲイツを預けた意味を考えろ」

本来ならウオズやフィーニス、三人娘のように腹心の中の腹心にしか渡さないアナザーウオッチ しかも自分を倒せる可能性があるアナザーゲイツの力を渡した意味を理解しているのだろうかと疑いたくなる……あの力は王を抑止できる力 そして

「俺に?」

確定 理解してなかった、このバカならあの世界で勇者を名乗っても良いと思ってるし

「はあ……少し頭冷やしてとけ」

ハルトは営倉から出ると奏者の所へ向かう

営倉で警備してるトルーパーに一声かけ部屋に入る

「よお快適かな?」

「あ、ハルトさん！こんにちは！」

「おう久しぶりだな立花響、元気かい？」

「はい！ご飯ありがとうございます！」

「ああ気に入ってくれたなら良かったよ…流石にネットとかの娯楽は無理だがボードゲームや新聞みたいなものなら提供出来るから必要なら言ってくれよ」

「ありがとうございます！じゃありバースシがやりたいです」

「おう手配しとく」

「って何普通に会話してんだ、あいつ敵の親玉だぞ！」

「じゃあ、お前達はその捕虜だな」

「ぐっ…」

「本来なら何も無い監獄に入れる所を千冬達の早とちりの詫びでホテル並の部屋と来客待遇にしてんだから文句は言わせねえぞ」

クーデターの実行犯なんて崖から吊るしてるのだから慈悲深い思え

「私達をどうするつもりだ！」

「んー取り敢えず人質だな、ナツキの裏切り防止と連中を交渉のテーブルにつかせる為のな」

鹵獲したシンフォギアはキャロルに預けているのだが

『何だコレは！…この程度で賢者の石対策が出来ると思っているのか！仕方ない助手だな…見ていろ！これがオレの力だ！』

と息巻いて、前回摘出したキングストーンを使って何かしていたのだが

「交渉？」

「普通の国同士なら戦後処理で交渉するんだけどな……アンタらの価値観で言えば俺達つて自然災害みたいなものだろう？だからさ交渉しないとかわれたら困るじゃん」

「それで私達を人質カードにか」

「そーそーシンフォギアやイグナイトシステムを人質カードにすりや連中も反応せざるを得ないだろうな」

「……………」

「安心しろ別に殺したりはしねえよナツキとの約束もあるしな……だが」

ハルトは少し威圧するような声で言う

「お前達の上層部の所為で流れなくても良い血が流れた事は忘れるな」

そう言うのと部屋から出たのである

—————

「お前達、見張りは大丈夫か？」

「はい！問題ありません！」

「そうか連中の仲間が助けに来るかもしれん警戒は念入りにな」

「サーイエツサー！」

ハルトは玄関前で警護してるトルーパーを労うとフェイスフォンXに登録した番号

に連絡する

「よお久しぶりだな風鳴弦十郎、お前に話したい事がある指定の場所に来て1人でな誰にも言うな」

それだけ言うとう電話を切り、コムリンクで通信する

「ハウンド、手の空いてる奴等を指定の場所で待機させろ」

『はい直ちに』

「ウオズ」

「御身の前に」

「ついて来い、連中に落とし前をつける」

「仰せのままに我が魔王」

久しぶりにハルトはウオズのマフラーワープで移動する事になったのである

—————

そして指定の場所に向かうと風鳴弦十郎が1人でいた、俺はウオズを連れているが

「久しぶり…でもないか」

「そうだな…あの時の宴会以来か」

「俺としてはこんな形での再会は不本意ですよ…まさか協力関係を結んだ相手から討伐対象にされるとはね、何度目の裏切りなのやら」

「それに関しては何と詫びれば良いか分からない……」

「どうでも良いよ……実際ドンパチやった以上はお互いに加害者な訳だけど……ご存知の通り、あの戦いは逢魔の勝利だ故に俺としては戦後処理の賠償金や対応などを貴方達の上層部……国家に請求するつもりでいる」

「難しいだろうな、一部の上層部は君達を災害と見ている……聞けば手勢を整えて二次攻撃の用意までしてららしい」

「まだ我等を倒せるなんて思ってるのですか？もしくはそこまで逢魔が持つ資源が欲しいのですか？」

ウオズの意見に俺も同意するこの辺りは計算通りだが、まだ逢魔の權益を狙ってるのか？愚かだなあ

「それならフロンティアの力で月の欠片を落とすか……あの時のフィーネやドクター達が成そうとした事を俺がやろうとするってなんて皮肉だな」

止めた側にいた逢魔が、あの時とは立場が変わってしまおうと苦笑する

俺には正義のために悪を成すなんて御大層な志はない、俺は逢魔や関係者皆が幸せな国を作る それを害する奴は等しく敵だ：敵なら倒すだけ慈悲はない

「っ！」

以前、宴会の時に聞いた内容が頭によぎった

フロンティアを操作すればルナアタック事件の再現が起こせると

「それに：二次攻撃なんてやったら今度こそ互いに引つ込みがつかなくなりませよ？ア
リヤミーの時に放った、街なんて簡単に吹き飛ばせる魔法やトルーパー達の持つ武装が
貴方達：正確に言えば何も知らない民間人に向けられる事になります：それも日本だ
けじゃなく世界に同時多発的に：そうなったら国際社会にも影響出ますよね？」

今まで散々この世界で暴れているのだ良い加減に此方の脅威判定を理解してもらいたいし

伊達に スターデストロイヤー（星を破壊する軍艦）を艦隊規模で保有してなどいな

い その砲火で世界を灰塵にする事も辞さないと脅す…つかマジで異世界で戦争出来る軍団作っちゃったよ

「っ！」

「そもそも今回の災害派遣法から来たドンパチに負けた事で結構そっちも批判されてるらしいじゃないですか」

ただの災害に被災したと違う、災害と銘打ったテロリストと戦って負けたのだしかも序盤は優勢だったが俺が出張るなり逆転負け、仲間達の援護ありとは言え向こうから見たら俺1人にボロ負けしたようなものだろう戦死者の遺族達からの批判や逢魔からの報復を恐れる国民の怒りから内閣はガタガタで支持率なんてストツプ安と来たし風鳴機関には波紋を呼んでいる影響が落ちれば良いなとは思っているのに…

「それなのに懲りずに再攻撃なんてしたら、どうなるのやら」

さつきも言ったが、今度こそ引つ込みがつかなくなるしナツキとの約束があつても俺も本気で滅ぼしにかからないとダメになる、俺達が潰し合いをして誰が得をする？

「態々、アダムやクジヨー達の策謀に乗つかる理由はねえよ」

「まあ乗ってしまった…と言うより機関の長の私欲でしょうか？」

「かもな、まあ結果がアレだ護国言っておきながら矛を向ける相手を間違つてるとはな…何の為の戦力なんだか…」

連中の手垢混じりの作戦な気がしてならないのだと伝えるが

『出た！ハルトの棍棒外交！』

ーうるさいなあ、分かっているよ脅してるってさー！けど今回は俺の方が適任だろうさー
少なくとも今回の件は俺が自分の手で下さねばならない案件だ此方も加害者だから

な

まあ向こうは外国につけ入る隙を与えてしまっただろう。フィーネの手引きでかつて外務長官が暗殺されて向こうに都合の良い親米派になったり、フロンティア事変では米国特殊部隊が潜入して暴れたりと色々やらかされているのだから今更か

「翼や皆は？」

「無事だよ。待遇は来客さ、キャロルの件での貸しもある事だしな」

「そうか」

「それで返答は？」

「話を聞かせてほしい、ただ実際に履行出来るかどうかは上に確認させて欲しい」

「まあそう言うと思った、取り敢えず俺達の要求はこんな感じ」

端末にメールと紙で渡す、俺達の要求

主な内容としては

護国災害派遣法の即廃止と類似する法律の策定禁止、並びに逢魔王国への賠償金

風鳴機関の解体と資産凍結

慰霊碑の建立

以上の条約を履行するならば3人十ナツキは解放する

最初のはテロリストなんて汚名を返上する事と国の利権を狙う愚か者どもへの牽制である

あと戦後処理に当たって2番目にある護国災害派遣法に基づいた逢魔Ⅱ自然災害のままでは問題がある向こうも交渉の妥協点を探しにくいだろうと判断したまで

ついでに言えば国家単位で貿易出来るなら逢魔がテンペストなどの同盟国に輸出している食糧や娯楽、嗜好品などの輸入がスムーズに進むからという理由もある…この世

界にテンペストとかの物品の輸出？する訳ないじゃん火薬渡したら爆弾作るような連中に渡す技術なんてないでしょ

また俺達が出陣する度に部隊を派遣され二正面作戦を強いられるなど言語道断だし、散々迷惑かけられたのだから賠償金くらいないと周りが納得しない、まあ額は法外と言う訳ではない皆と話し合った結果であるが金額にはカミーノとの契約もあるので若干色付けている：何セラマスの話だと13年契約していた銀河共和国っていう惑星単位の連邦国家がクローンの育成や発注で財政が傾きかけたらしい：外貨や金銭は多いに越した事はない……というよりこいつらにクローンの費用出してもらうか100年分

そして2番目これは絶対だ風鳴機関は解体せねば根本的な解決とはならない、法律や機関の名前を変えても残そうものなら手に追えないが最悪、今回の事件解決まで大人しくさせれば問題ない

慰霊碑に関しては亡くなった者達へのケジメとあの悪法の被害者を忘れない為にと思ったからである

「……………」

凄い顔をして考えているが弦十郎は一声

「君はこの世界が憎くないのか？」

予想外の問いかけに

「別にどうでも良い…まあ憎いよりもキャロルや皆に会えたから一応は義理で守つてやつても良いかなあつて思つてる…一部を除いて守る価値なんてないけどな」

愛する人が生まれ育ち、大事な者を失い憎み続けて滅ぼそうとした しかしとある人と出会い運命が変わつたこの世界

そこにいる人間の悪意や醜悪さに辟易するが、まあ彼女との繋がりを生んでくれたから完全に切り捨てられないではいるだけ

「……………」

「何、以外？」

「いやてつきり【全てを滅ぼす程に憎い】と言うと思っいてな…失礼だった」

「ん〜キャロル達が死んでたらさ」

そんなもしもは絶対に無いがとハッキリ言うが、仮にそうなら

「この世界は既に滅んでるだろうね」

怒りや絶望に取り憑かれて全てを破壊しただろう、そのまま消えない炎に焼かれながら進み続ける あのヒーロー達に倒される日まで

「三千世界全てを破壊するまで止まらないよきつと」

「っ！」

「んで実際、風鳴機関の解体とか資産凍結は現実的か？」

「難しいだろう…それだけ影響力は大きい名前を変えるなどして残そうとするだろうな」

「看板変えても中身が同じなら意味ねえだよ…んじゃアダムの件が終わるまで大人しくさせられるか？」

「それは可能だろう、向こうも手痛い損害が出ている建て直しの時間も考慮すれば現状は動けないだろうからな」

「ま、今はその辺で妥協するか」

取り敢えずアダムの件が終わったら色々考えないとダメだな

「独立云々や賠償金の請求に関しては時間があるが構わないか」

「どうしたよ偉く素直だな」

「いや、あの作戦で君の逆鱗に触れて万人単位の死者が出たからな…その矛先が民間人に向けられるのは絶対に避けたいというのが現政権の意向だ」

「まあそうなるよな、今回は再発防止も込めて徹底的に叩いたし…それに今までの御礼参りも込めたし」

そりやビビるわな、そんな奴が仲良くしようたって信じられないし俺だっただけ無…しかし現実問題で困るところをうまく対処しているリムルさんって凄い人だよなあ本当に流石です…しかし

「俺が災害か…いつそ人間台風とか名乗るか？」

災厄の魔王は未来の俺の二つ名だ：一応俺にも番外（エクストラ）なんてものもあるが、やはりカッコ良い二つ名が欲しいと思うのは俺の心に少年がいると言う事だな！

『なら究極の闇とかどうだ？』

ーダグバのあだ名じゃん辞めてくれ：俺には荷が重すぎる、いや待て、今回の犠牲者を考えれば俺もこの世界ではダグバ級の厄災かー

『では破壊のカリスマ』

ーガドル閣下じゃん……………あー

あの時、キャロル庇ってダインスレイフに刺されたらモーフィングパワーで剣に変えればよかった！ちくしょう！何で俺はガドル閣下と同じように刺された剣を自分の武器にするって発想が無かったんだ！あのシチュエーションなら出来たら！

「ちくしょう！！俺の無知が憎い！」

『そんな余裕あったと思うか？』

「ないですよねぇ」

思わず地団駄を踏みそうになるが

「何の事だ？」

「あ、いやこっちの事ですよ」

だが仮面ライダークウガに刺されたら喜んで爆散するな…やはり刺した武器を剣にするのは辞めよう、男らしく潔く爆散しようではないか、うん

『それは抵抗しろ馬鹿者、俺達も死ぬ』

『ああ〜やっぱりハルトだあ安心する』

『このバカさ加減が何ともな』

ーよし、お前ら取り敢え…っ！ー

ハルトと弦十郎は殺意の方向に気づくと現れたのは護衛ドロイド　マグナガードが両端が放電している槍を携えながら行進しているが左右から分かれると敬礼するその中央から現れたのは

「魔王、久しぶりだね」

「アダム…」

「っ!!」

アダム襲来にはハルトはアナザーウォッチを構えるが

「待ちたまえ」

「どの口が言ってるんだテメエ！この裏切者があ…」

ハルトは怒りに任せてアナザーウオッチを起動しようとするがウオズに止められる

「お待ちを」

「離せウオズ、！コイツのせいで俺の仲間が…親衛隊が！」

ハルトは激昂に任せて魔王覇気で威圧するもウオズは身を呈して進言する

「ですが事実確認や話も聞かずに実力行使に走るのは王としての品位に関わりません、今はそのお怒りを沈めてください」

そう言われたら引つ込むしかない

「……………わかった、仮にも元同盟相手だ話だけでも聞いてやるか」

冷めた目で話し合いに応じようとするがアダムは冷静に一言

「邪魔者は消えてもらう、組織の長である君達を倒せば「攻撃開始！」話を聞きたまえよ」

「つせえ！最初からお前を殺す発言した奴の話聞けるかあ！」

アダムは恐らく今ほど、倒置法で話す癖を後悔した事はないだろう…まあ本人からすれば自覚のない話だが

「まあ良い、やりたまえ」

合図するとマグナガードドロイドが槍を持ち襲い掛かろうとしたので

「ウオズ」

「はっ」

『ファイナリー』

「潰せ」

指を鳴らすと同時にアナザーファイナリーへ変身、待ったましたと隠れていたトルーパー達が現れブラスタライフルでマグナガードを攻撃する、中にはガトリング型のロータリーキャノンを乱射するトルーパーもいる過剰だろうがドロイドには不意打ちが有効、しかしながらそれはB1のような個体に限るマグナガードはすぐに体勢を立て直しトルーパーに襲い掛かろうとしたが

『アナザー…：エクスプロージョン！』

「はあー！」

アナザーファイナリーが引力を用いて体勢の崩れたマグナガードを引き寄せられて

いると

「ぬん!!」

その進路上にいた弦十郎が拳でマグナガードを粉碎したのである。

「ええ……」

ハルトは嘗て資料映像で見た岩砕きがマジだったとドン引きしているも

「あいつ人間か？」

「どんな訓練したらああなるんだよ」

唾然とするトルーパー達、実際マグナガードはクロイントルーパーの上位部隊ARRCやコマンドー、もしくはジェダイの騎士が対処するくらい強いモデルのドロイドであるのだから

それをただの拳の一撃で倒した事に対して弦十郎が

「知らないでか、飯食って映画見て寝る！男の鍛錬はそれだけ十分よ!!」

「な、何と！そんな訓練方法が後で詳しく！教えて頂けないでしょうか!!」

「ハウンド鵜呑みにしないで!!それ出来るのはこの人くらいだから!」

本気で訓練プログラムに入れようとしているハウンドを全力で止めるハルトだがアダムは無視するように

「酷いことするね、高いんだよドロイドも」

「安心しろ、金の心配なんて出来ないくらいに痛めつけてやるからさ」

少なくとも、この男だけは生かして返さない

裏切りの報いを受けさせてやらないと散っていった仲間達に申し開き出来ない

「ハウンド、トルーパーの指揮は任せた…ウオズは万一の時に頼む」

「イエツサー！」

「はっ！」

「魔王、君が相手してくれるのかい？」

「お前には色々、お返ししないとな…それに」

ハルトは決めていた、神の力なんてものに手を出した奴と戦うアナザーライダーなど彼等しかない

「折角だ新しい力を見せてやる」

ハルトは初の異世界技術が融合して生まれたアナザーライダーの力を解放、スイッチを押すとハルトの背後からゆっくりと歩く幻影

その姿は仮面ライダーを思わせるV字の有機的な角、それはまるでバッファローのように太く大きく伸びており変身する人間の戦意の高さを示している尚且つ四肢には鋭利な突起物が生えるなど有機的かつ生物的な外見を誇るアナザーライダーの中でも群を抜いて生物それも人と何かのキメラのような意匠をしている

更に気をひくのは顔や腰に収まるベルトの一部が黒く有機的に変異しているところだろう

歩きながらアナザーライダーを侵食するように蠢くもの、それを知るものからは一応に驚きの声が上がる

「ほお……」「ネフィリム……だとお！」

聖遺物を食らう聖遺物 嘗て戦姫が命を賭して戦った敵 人から外れた天使……しかながら身に宿した事で新たな進化をする

ハルトと幻影が重なりし時 新たなアナザーライダー が生まれたのである

アナザーライダーの突然変異 進化を続ける居場所を探すもの

「うおおおおおおおおお！」

『ギルス』

アナザーギルス 生誕

「祝え！全アナザーライダーの頂点に君臨し時空を超え新たな歴史を生み出す時の王、その力の一旦 その名もアナザーギルス!!世界に二つとない新たな力が目覚めし瞬間である」

「見せてもらおうか、その力」

とアダムはマグナガードを4体送り込むが

「うおおおおおー！」

獣のような咆哮と同時に助走をつけて飛び込むとドロップキックを行いマグナガードの顔面を破壊すると踏み潰した顔面パーツを近くにいた一体に投げつける

マグナガードは槍で頭を弾き飛ばすとガラ空きの胴体に鋭い貫手の一撃で中心部を破壊、引き抜くと機能が停止する

たちまち最精鋭なマグナガードが瞬殺されている光景にトルーパーも驚いている

「あつという間に二体もやったのかよ」

「スゲエな陸下は」

「お喋りの時間は終わりだルーキー、陸下を援護するぞ」

「イエッサー!!」

「うおおおおおおお！」

アナザーギルスは両手から黒い触手を伸ばすとマグナガードの一体を取り込む。その時にバリバリとまるで咀嚼音のような音が鳴ると

頭部のツノが更に肥大化し四肢の突起物もその鋭利さを増す事となった

これぞアナザーギルスの能力

取り込んだ相手からエネルギーを吸い込み己の力へと変えると言うネフィリム固有の能力

そして吸収したエネルギーを戦闘能力にする

その余りあるエネルギーは管理を怠ればハルトの体さえも自壊しうる諸刃の剣

オリジナルの仮面ライダーギルスが力により体を襲う老化現象を再現しているのだからと推測されるが

「うおおおおおー！」

その増幅されている戦闘能力に咆哮を上げるハルトを見て

「狂戦士だね、まるで」

アダムは評価を下しているとマグナガードの一体が右腕から伸ばした触手の一撃で上下に両断されると

残りの一体には、アナザーギルスがトドメとばかりに高く飛び上がり両足の踵の突起物を肥大化させると、そのまま右足を振り下ろした

「うおおおおおおー！」

槍を盾にして守ろうとしたが、そんなのお構いなしとばかりに潰し砕いてマグナガードドロイドの右肩から背中を貫通した

「うおおおおおおおおお！」

そのまま有り余るエネルギー全てをマグナガードに流し込むと腹を蹴り後方に宙返りをして距離を取る、着地と同時に流されたエネルギーでオーバーヒートしたマグナガードは爆発霧散したのであった

「うおおおおおおおあお！」

勝利の雄叫びと言わんばかりの咆哮を上げるアナザーギルスは変身を解除すると膝をつく

「はあ………はあ………な、何て暴れ馬だよ」

元々のギルスが持つエネルギーとネフィリムが取り込むエネルギーの制御にアナザーWやビルド達が動かないと、碌に動けないのかつまり最初からフルパワー稼働しか出来ないアナザーライダーって訳か、つまり

「こいつを制御出来れば俺達はまだ強くなれる」

やばいな、ぶつちやればアギトという種族の進化スピードを甘く見ていた…恐らく最初期組にアナザーギルスがいたら俺は直ぐに干物の仲間入りだっただろう、そのくらい燃費が悪いしパワー過多だが

「アダムを殺せるか？」

『可能だ』

「なら良い」

「我が魔王！見事な戦いぶりでした」

「ああ……つか……叫びすぎて喉痛い……水」

「でしょうね……水筒は此方にまた形勢は此方に有利です」

「ごほ……どうするまだやる？」

『エグゼイド』

ハルトは応急処置をするとアナザーウォッチを構え直すと同時にトルーパー達もアダムを包囲してブラスターを構えるが

「いいや、また今度」

「逃すな撃て！」

しかし秒の差でアダムは転移したのであった

「けっ……」

「アレがパヴァリア光明結社の……」

「親玉だよ、んで一連の騒動の原因でもある」

「そうか……君の提案だか出来る限り早く返答しよう……どうやら結社の力は我々の想定よりも大きいらしい」

後日談ではあるが

護国災害派遣法は廃止されたが完全撤廃まで時間はかかる　しかし逢魔王国関連は完全に執行対象外となった

これに関しては先の敗北が影響しているが賠償金に関しては額が額故に揉めているらしいがまあ支払いは一応　前金で一部残りは借款とした

んで一番重要な風鳴機関に関しては完全解体とは行かないが規模は縮小、外部監査機関の作成など再発防止に備えているとの事

まあ取り敢えずは今回の事件に首を突っ込まないようにさせられれば大丈夫だし、取り敢えず3人とナツキは解放したのであった

両雄並び立つー救世主と魔王ー

前回 後始末が完了したハルト達は遠征の戦力再編後 テスタロツサ達三人娘と一部部隊を逢魔に待機させ現在、新たな拠点を作成しパヴァリア光明結社との決戦に備えていた！

「基地としては7割完成です陛下」

「ありがとう警備や防衛、通信システムを最優先に構築してくれ人手が足りないなら言ってくれ其処に回すから」

「いや充分です陛下」

「そうか、けど無理はするなよ」

「は、陛下」

ハウンドを見送ったハルトは手に持っている水を飲み一息吐くと

「ふう…さてどうするか」

まずは現状のおさらいと行こう

勢力としては

パヴァリア光明結社&ネオタイムジャッカー

v
s

逢魔王国&SONGS

で
だが先日の一件から此方の足並みは揃っていないと来ているが、それは向こうも同じ

カリオストロが自らの死亡を偽り、ハルトに接触

サンジェルマン、プレラーティと共に逢魔王国への亡国を依頼した

聞けばアダムの目的はこの地球にある神の力を手に入れる事らしく、その儀式の為に

サンジェルマンを生贄にしようとしているとのこと彼女を慕う面々からすれば納得いかないでいる

「このアダムの目的を共有すべきが否か」

共有したメリットはアダムの目的を先読みできる、しかし下手したらカリオストロの死亡偽装がバレてしまうと思えば

「黙っておくのが先決だな」

先日の件もあるから黙っておくのが先決だ、しかし今後の戦闘への難易度も上がるかなと判断するが

「何とかなるかな、そうだろうお前達？」

「！！！！！！」

背後にいる付き合いの長い仲間達に問うと迷いなく返ってくる言葉に頼もしさと安堵を覚える

「次はどうしようか？」

まるで今晚の料理をリクエストするかのような気軽さで尋ねると

「先ずはサンジェルマンとプレラーティの兩名をアダムから引き剥がす事が先決かと」

「そうだねえ、儀式にサンジェルマンちゃんが必要なんですよ？なら狙うのは必須だね」

「しかし生捕りの難易度は高い、連中にはメダルの技術がある」

「関係なかるうさ、カリオストロに聞けばキャロル様の技術を少し改良しただけなのじゃろ？」

聞けば精々メダルを少し沢山作れるくらいらしいが油断は出来ないと伝えるとファイブフォンXから通知が入り見てみると

エルフナインから通信である

「もしもし?」

『ハルトさん!何ですかあの音声は!!』

「は?何の事?」

電話に出るとエルフナインが凄い剣幕であるのに驚いているとキャロルがハルトの服を引っ張り

「変われオレがやった件だ」

「お、おう」

取り敢えずファイズフォンXをキャロルに渡すと

「久しぶりだな」

『キャロル！何ですかあの音声は！響さんや翼さんがシンフォオギアを纏う度にミスターナツクルマン！とか天下御免！みたいな電子音声が鳴るんですが！』

「え？マジで…何でなのキャロル？」

何故戦極ドライバーの音声を？それって束の許可もらったのか？とか色々考えてしまいが彼女は堂々と

「オレの趣味だ良いだろう」

「……グツジョブ！」

「ああ久しぶりに張り切ってしまったがな」

『あの…愚者の石の提供には感謝しますがシンフォギアに自分の趣味を追求しないで下さい！』

「愚者の石じゃないキングストーンだ!!」

「そうだ！それにな…シンフォギアを鹵獲された貴様等が悪いのだ、それにキングストーンを使うのに、あんな半端なシステムを組み上げたお前が悪い！」

『2人も黙って貰えますか!?!僕の技術不足は否認ませんが…:…お願いですから話し合いが成立する千冬さんか錫音さんに変わって下さい!』

エルフナインが怒っているのは珍しいな…:と言うより千冬と錫音は真面目認識か…よし、キャラルと目を合わせると以心伝心で通話が変わる

「エルフナイン…:シンフォギアを纏うのにライダーの音声で鳴るようになったのはキャラルを止められなかった俺の責任だ」

申し訳ないと心を込めて伝えるが

『ハルトさん…』

「……だが俺達は謝らない、君やナツキならそのノリを理解して乗り越えてくれると信じている」

『ハルトさん!?!いやシンフォギアは響さん達な纏うものなので辞めて貰いたいのですが!!』

「よく言ったハルト!烏丸社長のセルフを引用するとはな!」

「イエーイ!一回使ってみたかったんだよね!」

その驚くエルフナインの声を背にキャロルとハイタッチするハルト、この2人やほり同じ思考回路である、だからか背後から来た千冬の一撃に気づかなかつた

「いった!!」

「何をしている、すまないなエルフナインこの馬鹿者達が迷惑をかけたのだな」

『い、いえ…その千冬さん…今回の件は…』

「安心しろ私達は手打ちにしたと思っている、まあ次はないだろうな…」

『そ、そうですか…ありがとうございます!』

「気にするな、それでこのバカ共に文句を言う為だけに通話したのか?」

『あ、それだけではなくてですね』

エルフナインの話からの通信で届いた内容に皆驚いたのである

—————

臨時会議室

「まさか、神の力が外国で暴れてるなんてね」

映像を見れば巨大な蛇的なエネルギーが暴れているのである

「アレはただの力に指向性を与えただけの物だ神などではない…まあ神の力と言っても差し支えはないがな」

「成る程…ヘルヘイムの果実をドライバーを使ってロックシードに変えるようなものか」

「その通りだハルト」

「よっしやあ！」

「何故ライダーに例え……………今更か」

最早定位置となったハルトの膝上から話すキャロルは冷静に分析していると束は

「それより何なのさ？あんな非科学的なもの…」

「束、そ「研究したいね！」うだった…君はそうだったよ…何という神秘殺し……………科学に愛されてると言うか…」

錫音は諫めようとしたが彼女の人柄を見て納得したのであったがハルトは

「これが、アダムの欲しい力なのか？」

「いまいち違うように気もする儀式には生贄があるようだがセルメダルを用いる事で即応性をあげているようであるが、コレ完全に

「チフオージュシャトーにあるセルメダルのエネルギー変換データが使われてるな」

「ああ…だから連中はサルベージしたのか」

「ハルトとキャロルはまた自分達の技術が原因かと頭を抱えているがなってしまった物は仕方ないと割り切る

「んじゃ、この神の力対策を俺達も考えようか」

「はいはい！」

「束！」

「ハルくんが頑張れば大丈夫」

「まさかの精神論!?!神の力対策を科学的に見てほしかった!」

「いやあく東さんの技術じゃハルくん師匠の錠前は再現出来ないのさ〜出来れば対抗手段にはなるんだけど」

「無理しなくて良いよ、アレは本来地球にない方が良い力なんだ…つかアレ目当てで戦争になってるし」

ヘルヘイムの森にいた先住民族が最たる例である

「ならばキャロル、お前から何かないか?」

千冬の問いかけにキャロルは頬杖しながら答える

「さつきも言ったがアレは神の力、聞けば受けたダメージを並行世界の個体にスライドするらしい…仮にそんな事になったら対処しようがない」

「そんな時は並行世界の俺全員で攻撃すれば良くね？」

「なんてバカ丸出しな考えなんだいハルト」

「え！良いと思っただけだなあ…」

「取り敢えずアダムが目覚めさせようとしている力が何なのかを調べる必要があるな」

調べものなら誰よりも頼れる奴がいる

「相棒、頼めるか」

『もうやってるぜ、けどキーワードが絞り込めねえ…もうちよい情報が欲しいな』

「そうか…：…んーどの辺のキーワード？」

『アダムが、どの神の力を狙ってるかだな』

「んじやひたすら思いつく神話の神様を上げてみるかな、えーとゼウス、ハデス、ポセイ
ドン…オーディン、ロキ、トール…インドラ…ケツアルコアトル…天照大神…どうだ
？」

『ダメだ違うみたいだな』

「こりや大変だな……」

『だがアダムの正体は分かっているぜ』

「そうかあアダムの正体が分かっているのか……ん？」

おい待て、この検索エンジンは今なんて言った？

『おいアナザーW、それはいつから知っている？』

『そりやパヴァリア光明結社との同盟締結後くらいに個人的に調べた』

「『それめちゃくちゃ重要な情報ではない（じゃねえ）か!!』」

よりもよつてこの検索エンジンはとんでもない情報を握ってやがった!!

『え? そうなのか』

「馬鹿野郎! 正体分かってるなら先手打てるじゃねえか!! そんなトクダネを握ってるのに話してくれないとか」

『い、いや別に俺は聞かれてないから言っていないだけで』

「ま、まあそれもそうか…だが聞いて以上は皆に話してもらおうよ」

『も、勿論だぜ!』

アナザーWから伝えられた情報は以下の通りである

曰く

この世界線の地球は俺達で言うところの神様が何かの実験の為に作り出したものであり

そしてアダムは一番最初に作られた完璧な存在　つまり人類のプロトタイプだった

しかし完璧故に神達はアダムを廃棄し不完全な人間を作ると地球から去っていった

完璧な自分に劣る人類を選んだ事に嫉妬したアダムは長い年月をかけて神の力を身に宿し、完璧な自分がこの実験場である地球と不完全な人間を滅ぼし見捨てた神の元へと向かうのが目的と言うことだ

話を聴き終えた東とキャロルは思わず

「話の規模がデカいよお!!」

「そんなことが…」

「合点が入った、だからフロンティアを一瞬で掌握したのか…自分の親が作ったものならそりゃ分かるか」

ハルトの脳裏にはフロンティア事変の記憶が蘇るのであった

「えーと…つまりアダムの目的は産みの親に捨てられたから御礼参りに行くってことかしら？」

アンティリーネは何とか噛み砕いて解釈する

「そうなるな」

「産みの親に愛情もなく捨てられたね…少しだけ同情するわ」

「アンティリーネ？」

そう言えば俺は彼女の境遇をあまり知らないが俺や千冬みたいに家族に何かあるのだろうか？

「ううん何でもない…それに私には旦那様といる今があるから…」

「そ、そうか」

「だから今日の夜、ベットでお話ししないかしら？」

「あれ？さつきまで良い話だったのに!？」

「急に惚気るな新参加者!!」

「あら？古参はハルトの膝上から消えてもらいましょうか？」

「何だと！ハーフェルフの年増め！」

「あら私と違って外見まで弄れる貴女も同類よね？」

「何だと？」「何かしら？」

「まあ東さんから見れば2人はロリバ「東そんなに死にたいか？」…何でもないよキャラりん!!」

「はいはい喧嘩しないよ2人とも…東も謝ってね…何というかこの世界の人が聞いたら気絶する案件だね」

「錫音の言う通りだ、しかし完璧だから選ばれなかったのは何故だ？完璧なら選ばれるべきであろう？」

何か思い詰めたような千冬の問いにハルトはつまんねえって顔をして言う

「先がないからでしょ完璧は終わりだから」

これって何処かの科学者の言葉だったけ？と首を傾げながら続ける

「完璧だと後の進化も発展もない、だから不完全が良いんだよ色んな未知や経験から学んでいけるからな、人は手を取り合えるんだよ逢魔だって俺一人で作った訳じゃないみんなで作った国なんだから」

一人じゃ限界はある、だから手を取り合うのだと…俺は仮面ライダーや光の巨人達からそう教わった

「そして進化していく…仲間の思いや絆を力に変えてな…あのヒーローも今まで絆を紡いだ後輩たちの力を助けに強化した時に言っていた【俺に限界はねえ!】と」

もしかしたらこの世界の神様も可能性を感じたかったのか？まあ今となってはわからない話だが…

「俺はアダムに負ける事は絶対ないな!」

「「「「「おお……」」」」」

その言葉にウオズ達はどよめくとキャロルは溜息を吐いて

「はあ……一応根拠を聞いておこうか」

「俺には皆がいるー人ぼつちで強いアダムにはない強さがある、それが根拠だ皆というなら俺は負ける気がしねえ！つてね」

『当然だ貴様には俺達アナザーライダーと怪人の力がある、完璧な人間程度超えて貰わねばな話にならんぞ』

「よし、アダムの小さな完璧なんて俺達で踏破してやろうぜ!!」

ハルトは演説するように告げるのであった

そして少し時間は経ちハルトの自室にて

「はあ……疲れた……メンタル的に……」

ベットで仰向けになっっている彼の頭上から声がする

「やれやれ……前にも言ったが寝れる時に寝ろ馬鹿者」

「ごめん……キャロル……」

キャロルに膝枕されながら頭を撫でて貰っている……ロリ状態のキャロルだから完全に事案な感じがするが慣れてしまった恐ろしい物である

「構わん、貴様が倒れる方が迷惑だ……あんな思いは二度とごめんだからな」

「多分ダインスレイブで刺された時か手術の事だろうなと思う」

「ごめん」

『あの時、刺した剣をモーフィングパワーで変えなくて』

「そーそー……じゃねえよ」

『この間、そう考えていただろう？』

「つせえ……けど皆に心配かけたのは本当の事だから……悪いと思ってる」

「まったく……貴様はあの時から変わってないな」

「そう？」

「ああ王様やら人間を辞めたやら魔王になったやら色々あったが、オレの目には昔と変わらんノリと勢いで生きている考えなしの特撮バカにしか見えん」

「何か凄い失礼だと思うんですが？」

「妥当だろう、仲間の為に本当に世界と喧嘩する奴が馬鹿じゃないなら何という」

「ですよね〜」

「だから暫くはゆっくり寝てろ、どうせ暴れるのだろう?」

「そうするよ……オヤスミー」

「ああ、おやすみ」

少ししてハルトの寝息が聞こえたのでキャロルは悪い笑みを浮かべる

「……寝たかハルト?……よしではこのまま」「ちよつと待った!」「ちっ!」

同時に扉が開くと錫音、東、千冬、アンティリーネが入ってきた

「このままキャロリンだけ美味しい思いはさせないよ！」

「そうだ！ハルトは私達の共有財産だろう！その権利がある」

「そうね、だから旦那様を返しなさいな」

「うんうん、私はそのままテレポートして独り占めしたいな！」

「スーちゃん話聞いてた!?皆で分け合おうよ！」

「はあ…貴様等、ならオレに提案がある…不満ならお前達もここで寝れば良い」

「「はっ！」」

「はあ…このバカどもが」

数時間後、目を覚ましたハルトは彼女達に抱き枕にされて暫く起きる事はなかったと

言う

有事であるから暇な時間は少ない、しかし休息は大事と諭されたのでハルトは旧拠点跡地に来ていた

「……………」

正装で花束を持ち、とある場所に拵えた小さな墓に献花し哀悼する。これはあの戦いで散った戦士達への敬意を込めて

「せめて安らかに……って上司に言われても嬉しくないか、どう思う？」

『知らん、死人に話す口はないからな』

『それにあの時の魂は全部食べたじゃねエか』

アナザーゴーストが取り込んだ魂達…しかし覚醒魔王になった俺に更なる進化はなかった代わりと言っては何だが新しい仲間がきた位である

『俺は墓参りでも頂点に立つ男だ！』

『それは感動的だな…だが無意味だ』

『この場で必要なのはパーフェクトハーモニー完全調和だ』

色々と来てくれて助かるのだが

『この世にはパーフェクトもハーモニーもないんだよ！』

『落ち着けアナザーカブト！』

『何だあの不協和音は？』

『頼むから連中の地雷を踏み抜くな!!』

『アナザーキック、パンチホッパーも落ち着くんだ!!』

『離せ!!』『あの不協和音には地獄を!』

「この曲者達を何とかせねばならなくなつた…

「まあ、そうなんだけどさ……ケジメと約束だよ弟達の未来は俺が守るって、だから安心して見守っててよ向こうで酒でも飲みながらさ」

そう呟くとハルトは酒瓶の蓋を開けて中身の酒を墓石にかけ終わると背を向けて墓を去るのであつた

「んじゃまたな」

「え? ハルト?」

「はあ……何でお前が此処にいんだよ」

何故ナツキがと身構えているがハルトは馬鹿馬鹿しいと呟き

「俺も墓参り……あの戦いで死んだ人達のだ……半分は俺が殺したようなものだから……」

「ふーん、墓なら向こうだから……それじゃ」

帰ろうとしたが

「なあ……少し話せないか？」

「断る、今はアダムの件とこの間の事後処理で忙しい」

「頼む」

真剣な様子を見てハルトは溜息を吐くとフェイスフォンXにメールを送って一言

「本当に少しだけな」

「ありがとう」

ナツキの墓参りが終わると、ハルトはコネクトで缶コーヒーを取り出してナツキに投げ渡す飲んで一息つくくと彼は話し出した

「なあハルト、またサンジェルマンさん達と笑い合えないかな？」

「何で？ 敵だよ、俺が敵に対してどう対応するか知ってるでしょ」

「全滅させる」

「そつ、誰でも例外じゃないよ」

それは嘘、カリオストロの裏取引があるのでサンジェルマンの態度次第だが現状は彼

女達と戦う意志は微妙である

「いや前にした宴会が楽しくて…覚えてるだろカリオストロとカゲンさんが飲み比べしたの」

「やってたな樽で飲んでたカリオストロをカゲンが潰した奴か」

「そうそう」

「つか、どうした急にセンチメンタルになるとか…気持ち悪いぞ」

「酷くない?…いやまあ…カリオストロさんが死んだんだ…この間の戦いで」

「そつ」

「そつ…つて他に無いのかよ!!」

笑いを堪えてんだよ！ナツキは生存を知っているが辛いのか会話や映像はないよ
うでカリオストロの生存はSONGSにはバレていないのだ

「敵が1人倒れた、それだけでしょ」

「敵つて……昔は仲間だったじゃないか！」

いや取引して生きてますとは口が裂けても言えない……てか演技上手いね君

「けど裏切り逢魔をこの戦いに巻き込んだ、もう仲間じゃない敵だ」

「ハルト……」

「お前がもし幸せな大団円を望んでいるなら諦めろ……この物語の結末は俺が決める」

それだけ言うとハルトは立ち去ろうとしたが

「やっと見つけたワケだハルト」

そこに現れたのはカエル人形を抱きしめる女の子 プレラーティであった

「プレラーティ!!」

「どうした、わざわざ何のよう?」

単独で来るなんて…何か俺したかなと首を傾げていると

「簡単なワケだ……チフォージュシャトーを壊したお礼をしに来たワケだ!」

「あ……」

無茶苦茶、俺が恨まれても仕方ない件だった

錬金術の光弾を慌てて避けたハルトは言い淀む

「いや、まあそれは〜」

「久しぶりに戻ってきた私の家が瓦礫の山になった気持ちに貴様にはわからないワケだ
！」

怒りに任せてファウストローブを纏いケン玉型の武装を構えるプレラーティに思わ
ず

「アレは全部ノエルとゴードが悪い」

『責任転嫁も甚だしいぞ！』

「そんな事で私が納得するワケない!! 貴様はこの手で潰す！」

プレラーティは鉄球をハルトに目掛けて放り投げる

「本当なんだけどなあ！」

『原因はお前のキックでゴータを飛ばした事にあるような…』

「お黙り!!」

『ゴースト…ニュートン!』

ハルトはアナザーゴースト・ニュートン魂になると両手についている球体の力で重力と引力を操り鉄球を止める

「何だと!」

「コレはお返しだ!」

ニュートン魂の力で跳ね返すとプレーヤーティはケン玉の形に戻して鈍器として殴りかかるのである

「はあああああ！」

「何とお！」

ニュートン魂の力で近くにある岩や瓦礫を操りプレーヤーテイ目掛けて発射し足を止めるも拉致が開かない

「っ！」

『ゲイツ』

ナツキもアナザーゲイツに変身してアナザージカンザックスで援護する

「ちっ！邪魔しないでほしいワケだ！」

「させて貰います!!俺は…」

ナツキは何度も何度も何度も何度も失敗してその度に死に戻り続けてきた それこそ選択肢の総当たりをするように

時にはノイズに炭素にされ、時にはライブの時にガングニールの破片を心臓にくらい
即死

またある時はハルトと錫音が仲違いしたあの決闘を止めようと何度も殺され

またある時はハルトの機嫌を損ね超自然発火能力で焼かれたり無銘剣で首を刎ねら
れ

またある時はアナザーアギトに噛まれ増殖個体にされたり

またある時はアナザードライドロンの跳ね飛ばされ

またある時はキャロルとの夫婦喧嘩の余波で死んだ事もあった

……あれ？俺の死に戻りの原因ってハルトだった事多くない？

だがそれでもあの時、手を伸ばしてくれた恩人達への恩返しのために最高の結末を目指
したかし今は少し違う

『ナツキさん!』

自分みたいな得体の知れない奴の事を好きだと言ってくれる彼女がいる

死に戻ると俺と彼女の関係もリセットされてしまう

俺だけが覚えている思い出が増えてしまう

それが凄く怖い…だからなのか以前よりも死に戻る回数が圧倒的に減った…

もしハルトにそれを言えばどう返すだろうか？かな笑うだろうか？初志貫徹出来てないと呆れるのかな？だけど俺は…

「また皆で馬鹿騒ぎがしたい！サンジエルマンさん達やハルトや逢魔の人達やSONG Sの皆も一緒にいたい！そしてエルフナインを幸せにする!!その結末を掴む為に俺は戦う!…俺の物語の結末は俺が決めるんだ!!」

それを通信で聞いていたエルフナインは顔面がトマトのような赤くなったという

「っー！」

「はっ！やーつと恩返しなんてよりも俺の心が動く本音を言うようになったじゃねえか
自称タイムリーパー」

再度引力で瓦礫をプレラーティに投げて間合いを作ると

「仕方ない協力してやるよ」

わざとらしく聞こえるので思わず

「それ本当に思ってるのか？」

「信じろそれと……だ、友達の頼みだ答えてやらないとダメだろう？」

友達、それはキャロル達のように愛する人ともウオズ達のような部下とも違う特別で

あるとハルトがこの世界を簡単に切り捨てられない理由の一つ 何よりハルトはハルトなりに認めているのだ

その覚悟と執念に敬意を込めて共に戦うのも藪坂ではないと

「そっか、んじゃ頼むぜハルト」

「ああ……この場所を騒がしくしたら寝てるあいつらに怒鳴られちまうからな行くぞ」

「おうー！」

ナツキとハルトは互いに新しいウオツチを構えたナツキは砂時計型のリバイブ
ウオツチ

『ゲイツ』『リバイブ…剛烈』

ハルトは懐古の力を宿した 王の力を解放する

『ジオウⅡ』

2人は腰のドライバーにウオッチを装填する

ナツキはアナザーゲイツになると同時に胸部装甲が展開した

『ゲイツリバイブ…剛烈』

歪な救世主 アナザーゲイツ・リバイブ剛烈

そしてハルトが解放したのは懐古の王

今までは能力の使用のみで留めていた力 普段と違う金輪が展開され中から現れたのは豪華な装いで彩られたアナザーライダー

『ジオウⅡ』『アナザーツインギレード』

武器を構えると同時にプレラーティは

「見た目極悪人…安物のヒーローショーなワケだあ！」

そう叫びながら鉄球を投げるもののマフラーのようなもので縛り上げられ地面に落ちる

「なっ！」

「控えよ王の凱旋である!!」

「え!いつの間に!？」

「ウオズ待つてたよ!!頼むぜ！」

「ご期待には全力で…では」

そこに現れたのはウオズ、彼は逢魔降臨歴・裏伝を片手に高らかに宣言する

「祝え！全アナザーライダーを凌駕し時空を超え過去と未来をしろ示す時の王者…その名もアナザージオウⅡ!!新たな覇道が始まりし瞬間である!!ついでに祝え!!」

「え？俺も？てか次いでかよ！」

「巨悪を駆逐し新たな世界へと歌姫を導く、イル・サルバトーレ！その名もアナザーゲイツリバイブ…歌姫達の救世主がこの地に降り立った瞬間である……はあ…やっつてしまった我が魔王以外を祝うとは……このウオズ一生の不覚!!」

「凹むなら祝うなよウオズ！」

「これがハルトがいつもしてもらってる祝えか……なんか行ける気がする!!」

「いやそれ俺のセリフ!!…いや俺のでも無いけどな」

「……では我が魔王、ついでにナツキ君存分に戦われよ」

「おう！」「ああ！」

「なら全力で行くワケだあ！」

プレラーティはセルメダルを大量に武器に装填し強化した鉄球を投げつける、強化した影響かさながらモーニングスターのように突起物を得た一撃は恐ろしい速度で襲い掛かるのを見て

「任せた」

「おう！」

アナザージオウⅡは下がるとアナザーリバイブ剛烈が盾代わりとなり鉄球を受け止めた

「なっ!」

「凄いこれがゲイツリバイブ…救世主の力なのか!全然痛くない!!」

本家由来の防御力で鉄球を止めると、そのままの勢いでジャイアントスイングしプレ
ラーティを瓦礫の山に叩きつけた

「そーらあ!!」

「がは……ま、まだまだ!!」

再度モーニングスターを投擲する、今度は樹木を中継地点として方向を変えてアナ
ザーリバイブを死角から襲い掛かるのであった

「取った!」

そう確信した時、アナザーリバイブはドライバーについているアナザーウォッチを逆

さにした、それと同時にモーニングスターの一撃が外れ

「何!」

「残像だ…なんちゃって」

『リバイブ…疾風』

慌てて振り向くとプレラティの背後にはアナザーリバイブ疾風が立っていたのである、そのまま高速移動を生かした体当たりでプレラティを廃墟の壁に減り込ませると

「ハルト!」

「ああ…お前達、are you ready!」

『出来てるよ』

『行くぞ野郎ども!!』

『『いええええええい!!!』』

これからはアナザージオウⅡの力を見せていくとしよう

「初お披露目だ!」

アナザージオウが手をかざすと黒いモヤの中から新たなアナザーライダーが現れる

『電王』

「念願の俺達…参上!」

『ドライブ』

「丁度良いわ、ひとつ走り付き合いなさい」

『W』

「さあ！お前の罪を数えろ！」

これがアナザージオウⅡ本来の力である懐古は副産物に過ぎない　それはアナザーライダー達を召喚するというものである

「くっ……数で劣るならコレだ！」

とプレラーティは地面に結晶を叩きつけてアルカノイズを召喚するのを見て

「は……こんなの俺達の敵じゃネエ！」

『ルナ　トリガー』

「お前達倒すけど良いよね？答えは聞かないけど！」

『電王……ガンフォーム』

アナザーWと電王は互いに射撃形態となりアルカノイズに弾幕射撃をする、数が減ってきた所に

「あははは！フルスロットル!!」

アナザードライブがアナザードライドロンを呼び出して突撃しアルカノイズを赤いチリに返す…あと屑ヤミーを何体か跳ね飛ばしていた

「な、何てめちやくちやな連中なワケだ!」

プレラーティは驚くがアナザージオウIIは笑いながら答える

「あつたり前だ!こいつ等が誰の仲間だと思つてやがる俺の相棒達には常識なんて通じねえんだよ!」

「クソつ…王が王なら部下も常識外れの問題児か!!」

このプレラーティの台詞に

「あ？」

「んだと…誰が問題児だコラア！」

「聞き捨てならないわね、私をこんなチンピラ連中と一緒にしないでくれる？」

「何だと？もっぺん言ってみろアナザードライブ！今度こそ廃車にしてやろうか！！」

「あら？貴方の悪趣味な電車を廃線させてあげましょうか！」

「おいおい喧嘩してんじゃねえヨ、今は戦闘中だぜ」

「はっ！出番の多い奴は黙ってる！」

「正直目立ってるのは貴方じゃなくて地球の本棚なのよね検索エンジンさん」

「何だとテメエ等あ！俺の地雷を踏みやがったなあ！それとそのあだ名で弄って良いの

「はあそこにいる馬鹿だけだ!!」

何故か喧嘩し始める3人を見てハルトは呑気に

「お前等、本当仲良しだなあ〜」

精神世界でしか見れなかった光景にほんわかしていると

「『空気読め、問題児筆頭!』」

「……おい言われてるぞナツキ」

「俺じゃねえよ!!」

ワイワイ騒いでいると

「お前達……いつまで私を無視すれば気が済むワケだ!!」

「うるさい！」

『TRIGGER MAXIMUM DRIVE!』

『FULL CHARGE』

『ヒツサーツ！フルスロットル!!』

同時に変幻自在の光弾が、雷を帯びた紫の弾丸が、アナザードライドロンの収まっていたタイヤの連続攻撃が一斉に放たれるプレラーティは防御するが重い一撃に膝をつく

「はっ！無視してねえよ」

「ああ行こうぜハルト！」

「俺に命令すんな！」

2人はドライバーにつけたアナザーウォッチのボタンを押し込み高くジャンプしダ

ブルアナザーキックを放ったのである

「はあああああ！」

「くっ！」

プレラーティはセルメダルを砕き大量の屑ヤミーを展開、肉壁としてアナザージオウⅡとアナザーゲイツリバイブの攻撃を防いでいる間に転移結晶で逃げたのであった

「ちっ……逃げられたか」

「まあ良いんじゃないの、俺からすりや騒がしい奴がいなくなったから嬉しい……さて」

ハルトはアナザライダー達の元へ駆け寄ると

「ん？どうしたヨ、ハルト？」

「やっと会えたな相棒」

実体を持って話せるのは最初に会った時だけだからな

「そうだな、いつも会うのは精神世界だしナ」

「最初に会ってから遠くに来ちまったな俺達も」

「ああ…だがまだ旅は続けるンダろ？」

「当然だ俺との契約があるだろ？終わってもずっと悪魔と相乗りしていくよ、ついてきてくれる？」

「当たり前前ダロウが」

互いにクロスタッチを交わすと

「おいおい俺達も忘れるなよハルト！」

「そうね」

「分かってるって」

2人とも屈託のない会話をしているがハルトが変身解除すると全員アナザーウオツチへと戻ったのだが…

『ハルト、次は俺だ』

『何言ってる俺だろう』

次は俺と名乗り出るアナザーライダー達にハルトは慣れたように

「わーっつたよ順番な」

そう宥めるとナツキの近くに行くとハルトは手を伸ばした

「ん」

「え？ああ…」

ナツキも握手に応じる

「取り敢えずお前の気持ちは汲み取った、サンジェルマン達は生捕りにしてアダムを倒すネオタイムジャッカードも含めてな」

「……いいのか？」

「しやあないだろう、お前の我儘を聞いちゃまったんだ協力してやるよ」

ヘラヘラ笑うとハルトは

「頑張れよ色恋もな、アドバイスは出来ないが応援はするから」

「は、はあ!?! いや何とそんな話に!!」

「いやエルフナインを幸せにすると公言したろ? まあ俺は口外しないから安心しろ…つか俺黙ってても意味ないか」

「へ?」

「だって、ほら…それ」

ハルトは右耳をトントンと叩くと意味を理解したナツキは顔面が青ざめていく…そうだ通信機で会話していたと…となれば先ほどの会話の一部始終が聞かれていたのか

「もうバレてるし」

『ナツキさん』

「はい!!」

『えつと……その……あの……ふ、不束者ですが宜しくお願いします!!』

まさかのOKに思わず

「……………はい？」

「ほうほう…そうかナツキ、頑張れよ彼女と結婚したくば俺かキャロルを倒してからにしろよ出なければ嫁には渡さんよ俺達の可愛い義妹なんだからな」

「お前に妹いるだろう」

『兄さんの分際でえ!』

思い出して気分が悪くなってしまふ…最悪だな忘れたい記憶だ…

『なら忘れさせてやろうか？』

ー辞めろアナザーゼロノス、お前が言うと言葉の重みが凄いー

「誰の事だ？知らんよ俺の義妹はエルフナインだけだ欲しくば俺を倒してからにしろ」

『それなんて無理ゲーだ相棒』

「え、ええええええええええ！」

「ははは！じゃあなナツキ！」

そうナツキを揶揄い終わるとハルトはメールで呼んでおいた迎えのガンシップに乗り込むのであった

仕事と遊びは表裏一体

???

前回 アナザージオウIIとアナザーゲイツリバイブに変身したハルトとナツキはプレラーティを撃退、気を焦ったパヴァリア光明結社は日本の古都 京都にて神の力を解放しようとしていたが、その情報はアナザーWの力により筒抜けだった

拠点

「偵察からの報告によれば京都にある、神の力を解放し暴れさせようとしていると」

ハウンドからの報告に頭を抱える

「マジかよ、よりにもよって京都か」

「神様ところか魍魎魍魎跋扈の伝承なんて山のようにある都市で神の力なんて解放したら…」

『現代和風ファンタジーに早変わりだな』

『呪いや祟りが人を襲うナ！』

『呪いを使って呪いを倒す奴が増えそうだな！』

『アナザーゴーストが勘違いで討伐されそうな世界だな…』

ねえ、それって何処の呪い○廻戦？

「んじや俺は安倍晴明か源頼光かな？」

『ほぎけ、お前も怪異側だろうに』

『しかも討伐される系のな！』

「……それよりハウンド、サンジェルマン達は？」

「姿は確認しておりません、陽動の可能性もありますな」

「引き続き偵察は続行、無理だと判断したら即撤退して」

「はっ！では、そのように」

「さて……どう出るか」

幹部の姿がないのは残念だが放置するには危険度が高い、なまじ八百万の神なんて概念があるから日本でどんな指向性を与えられるかわかったものではない

「これで酒吞童子とか玉藻前とか出たら泣くぞ」

FGOなら可愛らしいのに伝承元だとかなりヤバい連中だからな……いや本当

「放置しておくには危険かと思えます我が魔王の読み通りサンジェルマン達がどんな力

を得るか分かったものではない」

「自分もウオズに同感です、資料で見た蛇のような力が暴れたら街や民間人への被害は大きなものになります、それは避けないと」

「そうだな…よし…俺が京都に行つて確かめてみるか」

「陛下?」

「だって連中が暴れるまで俺達は待ちだろうか?それは陽動かも知れないし本命かも知れない…なら現地に行つてみるのも悪くないだろ」

「それはそうですが…しかし陛下自ら」

「俺が出れば必ずサンジェルマン達も動く、その反応で本命か陽動かの判断もつくだらう」

「それはそうですが…陛下お一人では」

「大丈夫だよ現地の偵察隊もいるし、それにこの中からも護衛につて思ってるからさ」

「それならば構わないのですが…誰を護衛に？」

「そうだなあ」

ハルトは目線を動かすと

「「「「!!」」」」」

キャロル達全員目を輝かせて見ている…よし確かにデートにはもってこいだろうが
仕事は仕事なのだ此処はバランスタイプの預言者に頼もうか

「ウオ」ハルト…オレはヤツハシと言うものに興味があるぞ」え？いやウオズに頼「ハルト、私は木刀を買いたいのだ…理由か？とあるバカの脳天に振り下ろす為にサタンサー

ベルも用意しよう」 んじゃ千冬行こうか！」

まさかこの俺が棍棒外交されるとは…千冬め更にできるようになったな…

「ああ…楽しみにしているぞ」

「ハルクくん！脅されてないで拒否しなよ！それとちーちゃんはそんなキャラじゃないよね！…どうして弾けたかなあ!!それとこう言うツツコミは束さんの仕事じゃないよ！」

「残念だったな、お前達…それにI S学園の修学旅行の参考にもなる…これは臨時講師としてハルトにも一緒に来てもらおうと思ったのだ…それに婚前旅行も兼ねている」

「趣味と実益を兼ねてるだとお！なら束さんも行くよ!!」

「ダメだ貴様はそこで私とハルトのデートを見守っている」

「い、いやデートではなくて偵察…」

「「ハルト（くん）は黙ってて！」」

「はい！……ん？お、おう」

ハルトは誰かに引き摺られていくとハウンドは敬礼をウオズ達は手を振るのみであつた

「よろしいならば正妻戦争だよ！ちーちゃん!!」

「ああ束……まさかこうなるとはなハルトも承諾しただろう何をキレている」

「脅しで承諾とは片腹痛いな千冬、正妻のオレを差し置いて京都デートなど認めんぞ」

「ハルトは私達の共有財産だ認められる必要はないだろう……それと正妻は私だ！」

「まだ続いてるんだその争いつて認められる必要は大いにあるんだけどなあ……つて

「アレ？ハルトは？」

「アンちゃんもいないよ！」

「どう言う事だウオズ!!」

「ああ…彼女なら皆さんが揉めてる隙に我が魔王と京都に向かいましたよ」

「何故止めなかった！」

「あれも立派な戦術と判断しましたので」

「ぐぬぬ…おいお前達！行くぞ！新参者にハルトを独占させるなあ！」

「「ああ（うん）！」」

全員結託して走り出すのであった

「……ウオズ殿」

「何でしょうかハウンド」

「陛下も陛下で苦労されてるのですな」

「未来でも尻に敷かれています…何なら増えて大変です」

「それは何とまあ…」

「では我々は調査を続けましょうか」

「イエッサー！」

—————

京都中心部にて、エルフ耳を隠すようにしたこの世界のコーデイナートをしたアン
テイリーネと何故かサングラスをかけたハルトが歩いていた

「ねえ旦那様、何故サングラス？をかけているのかしら？」

「俺は特Aクラスのお尋ね者だからな配慮してる」

「それは残念ね以外とカッコ良いのに」

「以外とって何だよ、そしたら他の子に言い寄られてしまうかな？」

『この自意識過剰なバカを何とかしろ』

ーそれは一体、誰の事かな？アナザーデイケイド君？ー

「それは嫌よ…けどそんな場面を見たら大変な事になるわね」

「ああ俺は明日の朝日を拝めないだろうな」

『なら、そんな事言うな愚か者め』

物理的なお仕置きが待っている…うん

「くふふ…そうね、だから今は私だけ見てね旦那様」

「おう、んじゃ行こうか」

ハルトはアンティリーネの手を握ると街の中へと歩いていくのであった

それを見ている黒い影が四つ何処となく殺意に満ちており虹彩には色がなかった

「ねえ君達、暇なら俺達と遊ばない？」

「君達、可愛いじゃん京都は初めて？良かったらどうよみんなで」

とチャライナンパ男達が言い寄ろうと近づいてきたが

「「失せろ」」

「「は、はいいいいいい!!」」

哀れ彼女達の殺気に当てられたナンパ男は顔面蒼白となり逃げ出したのである

「ねえ」

「何かな、スーちゃん？」

「あれ…手握ってるよね千冬見える？」

「ああ…握っているな」

「よし殺そう!!」

「待てキャロル早まるな!」

その時　IS世界と逢魔王国に滞在している英国と中国代表候補生はくしやみをしたと言う

「けど、ちーちゃん! 抜け駆けされて悔しくないの!」

「そうだな…悔しいが同時にアンティリーネの手腕を誉めるべきだろう」

「まあ確かに普段なら私がやってるような事をやったからね、バトルジャンキーだからその辺の勘は鋭いよねえ」

「錫音の件は別で聞いたですとしても新参者故に私達と違ってハルトといる時間が短いから…仕方ない譲ってやるか…」

「おおキャロりん！流石は最年長の余裕だね！」

「東、貴様…ダウルダブルの糸で空に吊り上げられたいか！」

「い、いやだなあキャロりん…これは東さん流のジョークだよジョーク！」

「まあ良い…：…しかし！」

キャロルの目線の先には

「行きますよナツキさん!!」

「え、エルフナイン待ってくださいよ！」

大人モードになったエルフナインが手を引きながら走るナツキの姿があった

「何をしてるんだあの2人は」

「どうでも良いよ、それよりハルクくんが…アナザーオートバジンで移動しようとしてるよー。」

「何だと！お前達追いかけるぞ！」

とキャロル達はライドベンダーを使い追いかけるのであった

—————

その頃 ハルト達はと言うと

「凄い金色ね…初めて見たわ」

「だよな、俺も初めて来た時同じ事思ったよ」

金閣寺を楽しむ

「こんなに鳥居？が沢山あったら視界が遮られて邪魔ね切り倒しましょうか」

「辞めて！そんなのは映画の中で十分だから！」

千本鳥居を切り刻もうとするアンティリーネを止め

「いやあ高いねえ〜」

「ねえ旦那様、あそこの舞台から飛び降りるって言うのは…逢魔にある度胸試してみたいなもの？」

「違うよアンティリーネ、それは諺で逢魔のバンジーは娯楽…アクティビティだよ」

「そうなら旦那様は飛び降りれる？」

「うーん…飛び降りても高所ダメージで死ぬ事はないから飛び降りれるよ？」

『いや違う、そうじゃない』

死なないから度胸以前の話であつたが清水寺の舞台から飛び降りる話をしたり

「美味しい…みんなのお土産にしようすみませーん！この店の生八つ橋全部下さい！取り敢えず手持ち分だけで後は発送お願いしまーす！」

「ま、毎度ありがたい!!!」

近くのお土産屋から生八つ橋を買い占めたりと色々した

アンティリーネがお茶を買いに席を外している間待っているハルトは

「いやあ楽しいねえ京都」

『お前、この後偵察隊と合流するのにそんな呑気で大丈夫なのか？』

「大丈夫だよ、今もゆっくり目的地には向かってるからさ」

『なら良いのだが』

「それに何と言うかアンティリーネの事がほっとけなくてさ」

『と言うと』

「この間のアダムのことを話してた時にさ捨てられた事とかで同情するとか言ってたから家族の事で何かあったのかなって…」

キャロルや千冬や錫音のように親を無くした、いないとは違う…何と言うか

「俺みたいな感じ？」

家族の誰かのせいで家族仲が悪い…いや違うな、そもそも彼女の俺という動機って…

今更だが子作りだったな…となると

「愛したい？愛してほしい？」

愛情に飢えているのか？と考えになるが

『それならお前の得意分野だな、その重い愛をぶつけてみる』

「おいテメエ誰の愛が重いつてんだ」

『キャロルと喧嘩した時に俺達はヤンデレのお前を見て引いていたぞ正直』

【会いたかったよキャロル!!】

あの時の記憶を思い出して顔を背けたハルトに

「それはアナザーウィザードに言われたらおしまいだな」

本来の契約者よりも愛が重いつて事だから…だが彼女との付き合いの長さは短いが、

そんなの関係ない…

「その…妻だから悩みを打ち明けてほしいと言うか何と言うか…」

『その前に皆に指輪を渡せ』

そう言えばまだだったと思うが

「うーん…俺が指輪作るとウイザードリングみたいになるよ」

いかんせん俺のセンスではウイザードリングみたいになるのが関の山だ

『せめてビーストのリングにしろ』

「え？アンダーワールドに入るじゃない意味のエンゲージリングってよくない？」

『ダブルミーニングかハルトにしては考えるじゃないか』

「それ程でもあるかなあゝ…つて遅いなあアンティリーネの奴」

と話していたらだアンティリーネがナンパされていた…色んな意味でまずいと思い

「失礼、俺の妻に何か用かな？」

「あ、んだよテメエはこんなつまんねえ奴が旦那なのか？」

「警告する言葉は選んだ方がよいよ、でない顔が醜く歪んで鏡の前に立てないだろうからさ」

それは暗にミラーモンスターをけしかけると言う意味なのだが、この脳筋みたいな奴には理解できない

「このヒョロガリがふざけんじゃねえ！テメエみたいな奴よりこんな女は俺様みたいな奴が相応しいんだよ!!」

「I Qが一定以上離れてると会話が成立しないってマジだったんだ」

「あら旦那様、出張らないで良かったのに丁度始末しようと思つてたのよ？」

「だから出たんだよ、お前が実力行使に走つたら危ないつたらありやしない…こんな人間秒でミンチになるからな」

「あら秒なんて掛からないわ、刹那あれば十分よ、それに私が旦那様以外の男に靡くと思つてるの？心外ね、この私を倒せるような男なんて旦那様くらいだから」

その台詞に冷やかす声やナンパ男への嘲笑で盛り上がっている

「そうだな…けど万一というのものもあるからな任せておけ俺一人で十分だ」

「俺様をバカにしてんじやねえよヒョロガリが!!」

激昂したのかナンパ男は拳を振り上げるが雑なテレフォンパンチであるし

「遅っ」

動体視力のせいかわろーモーションに見えるクロックアップは使っていないんだけど
などと思うが、その勢いを利用して投げ飛ばす

「お〜」

アンティリーネが拍手すると周りも騒めいている

「ま、粋がるだけの強さじゃ俺には勝てない……お前もナンパするなら人を選べ人妻
を寝取るとか悪趣味にも程がある」

『お前は言葉を選べ』

「な、何しやがったんだヒョロガリ！」

「まあ武道とかわからないよね…失せる猿、今なら見逃してやるよ、これ以上俺達のデートを邪魔するな」

「くすくす…わかる訳ないじゃない旦那様、こんな猿に人間様の言葉なんて」

「それもそうか」

「テメエ!!舐めてんじゃねえよ!!」

男は激昂してナイフを取り出すと周りは叫ぶがハルトは冷めた目をして

「そんなので俺を殺せるとか思ってるの?んじゃその筋肉はハリボテな訳か情けな」

ひたすら煽り倒す、俺を殺したいならサタンサーベルやりボルケインみたいな名剣を持つてこい鉄の刃物などで俺が死ぬと思ってるのか

『相棒の発想が人間をやめている件について』

『もう慣れたな』

『寧ろここまで順応してる奴が怖いわ』

とアナザーライダー達が騒いでいるのだが

「ふぎけんな！滅多刺しにしてやんよ!!」

「よつと」

猿叫のような声と共に突貫してくるナンパ男にハルトは右足を蹴り上げてナイフを持つ手をへし折ったのである

「ひ、ひぎゃあああああー！」

「んで、まだやる?」

そう言えばこんな手合いがハルカのファンで頼まれたか何か知らないけどよくイジメられてたなあ、と思いついて不愉快になったからハルトは威圧しながら近づく…こいつには少し八つ当たりにつき合って貰おう、単細胞は煽れば攻撃するから正当防衛の名目で殴り倒そうと思いつくと

「ふ、ふざけんなあー!このヒョロガリなんぞに!!そんな美人なんざもつたいねえんだよ!さっきの金髪の奴もそうだ!何でお前らみたいな奴に女がよつてくんだよお!」

「本当救いようの無い奴だな…つか金髪?」

もしキャロルがこの場においてこの男がナンパしたなら

「よし殺そう」

慈悲はないと拳に力を込める

「そんなに見せてやるよ、俺の力をお!!」

『VIOLENCE』

男が残った左手から取り出したUSBメモリーを見てハルトは驚いた

「何で…じゃないそれを使うな!!」

しかし警告も虚しく男は右腕に現れコネクタにメモリーを差し込むのであった、すると男の体はみるみると姿を変えていきバイオレンスドローパントへと早変わりしたのであった

それを見て慌てて逃げ惑う一般人だがハルトはアンティリーネを守るように立つ

「おいおいマジかよ、何でガイアメモリが!」

『恐らくネオタイムジャッカーだな』

アナザーデイケイドの推測にハルトは怒りに満ちた顔をする、何も関係ない街にメモリをばら撒く事 それは

「陽動か本命か実験か知らないけど大変だなオイ」

『ハルト！俺の出番だろ奴にメモリを使わせた罪を教えさせてヤル！』

ドーパントならアナザーWが有効なのは分かる穏便にメモリブレイクするしかない……って俺にできるのか？あの2人で1人の探偵みたいに……と悩んでると

「ハルト！」「ハルトさん！」

騒動に気づいたナツキとエルフナインが駆け寄るのであった

「2人とも何で……デートか？」

この野郎、交際始めた途端に色づきやがって

『お前が言えた義理か』

「ま、まあそうですね…」

「デート?…まあそうですね…うん」

「は……はい……今回の調査ですがナツキさんが僕と一緒にが良いと言ってくれまして……えへへ楽しいですね観光も!!」

守りたいこの笑顔……まて今はとナツキが構えると

「アレ……バイオレンスのドーパントか?」

「ああ……なあエルフナイン、お前もしかして筋肉ダルマみたいな奴にナンパされた?」
「そう言えば金髪の女をナンパして失敗したみたいな事言ってたなと思う尋ねると」

「は、はい…急に来て強引で怖かったです…がナツキさんが僕を守ってくれました」

照れながらも頬を赤らめて体をくねらせている彼女を見ると此方も恥ずかしくなる

「あんな筋肉ダルマは俺の体験してきた理不尽（ハルト）に比べれば子供みたいなものだからな！」

「おい待て今、何て読んだ？」

そんな空気を読まないバイオレンスドーパントは力に溺れながら告げる

「ふははははは！さっきの女まで来たか、こりやいい！ヒヨロガリ共は俺様に従ってその女共を差し出しな!!」

「……………あ？」

その一言を聞いてキレた2人にアナザーライダー達は思わず

『あーあ、終わったわアイツ』

『知らんぞ俺達は何も知らん』

そう他人事であるが怒りの感情はウオツチを介して感じた

ハルトはメモリブレイクする気がないかもと

そもそもメモリブレイクとは仮面ライダーWがメモリ使用者を殺さずに罪を数えさせる為に編み出したものなのだ

彼等の師匠 仮面ライダースカルこと鳴海荘吉が変身したくなかったのは当時のメモリが毒素が強すぎた為ドーパントを倒す⇨相手を殺す事に他ならなかったから

左翔太郎の意を汲んだフィリップはシステムを改良しメモリブレイクを編み出した
2人の呼吸を合わせるために技名を言うのは　メモリブレイクに必要なのである

因みに仮面ライダーアクセルは1人でメモリブレイクが出来たりする　それは製作者が探偵の流儀に合わせてくれたからかは、もう誰にもわからない話だがハルトがメモリブレイクしないならバイオレンスドーパントはメモリと運命を共にするだろう

「やるぞ」「おう」

こんな所で息が揃うのは一重に愛する女性が似ているからであろう2人はアナザーウオツチを取り出すと

「私もやるわ、あの筋肉ダルマ見ていて不愉快だったのよ」
イクサベルトを巻いたアンティリーネが隣に立つ

「いやお前はエルフナインを守ってやってくれ」

「それなら大丈夫よ、ほら」

アンティリーネが指差した先には

「オレ達が来たからにはもう大丈夫だハルト好きに暴れろ！」

「キャロル!? それにみなさんも…どうしてここに！」

「それはその抜け駆けしたアンティリーネにお仕置きをする為にだ!!」

「そこは嘘でも僕やハルトさんを心配できたとか言ってください!!…それと、この間話したシンフォギアの変身音声何とかしてくださいよ！最近、調さんや切歌さんに奏さんが羨ましそうにして僕に自分のシンフォギアにめ実装してくれと頼んできてるんです！」

「そうか…ならオレに任せておけ、厳選してしっかりつけてやろう」

「いや外して欲しいんですあの音声システム！」

「断る！」

「はあ……何をしているのだキャロル」

「まあキャロルんだからね」

「東、後で外してあげなよ私達の中で君とキャロルしかシンフォギアの仕組みわからな
いんだからさ」

「えー！折角だから東さんも変身音声つけてみたいな、何ならゼロワンみたいに英語も
行けるよ！BREAK DOWNとかALL ZEROとかどうよ！」

「何でアーク側なのだ？」

「悪ノリしないで下さい東さん！」

「待て東、その辺りにしておけ…そうだ錫音みたいに騒がしい音にすれば良い！」

「千冬、君は私のワイズドライバーの事うるさいって思ってたんだ？」

「そ、そんな事はない…だがあの音声には意味があるのか？」

「歌は気にするな、だよ千冬」

「なあ何話してるんだろ？皆」

「知らね…後で聞けば良いだろう」

「そうね…じゃあ行きましょうか変身」

『READY』

そして3人は変身する

「その命、神に返しなさい」

『FIST ON』

同時にバーストモードになりイクサカリバーをソードモードにする

「いや俺達は殺す気ないからね」

『ゲイツ』

「まあこの世界でガイアメモリの毒抜きが出来るか微妙なんだよな」

『ジオウ』

何せメモリが生まれた世界でもメモリ使用者のリハビリ方法って描写されてないし、あの筋肉ダルマ助けるのにエクストリーム使うのもなあ…本当嫌だなあ、けど本物の仮面ライダーは嫌な奴でも分け隔てなく助けようと動けるんだから凄い人達だよなあ

変身完了と同時にイクサは走り出すとイクサカリバーでバイオレンスドーパントを滅多切りにする、先程の鬱憤をはらすかのように斬りつけると至近距離からガンモードにして発砲し全弾命中させた

「ふう…どうかしら旦那様？ゼロ距離なら外す事はないわ」

「グツジョブ、んじゃ次は俺の番だ！」

さつきまでは生身の人間だったがドーパントになれば手加減など無用だと

「はっ、てやあ！」

バイオレンスドーナパントの攻撃を回避しながら的確にツインギレードの斬撃を当てていくもバイオレンスも負けじと反撃するが

『MODE AXE』

「はあ！」

アナザーゲイツがアナザージカンザックスで受け止めそのまま弾き飛ばしたが

「はははは！俺に接近戦は効かねえんだよ！」

何故か高笑いしているバイオレンスを見て

「何処かのザリガニイマジンみたいな事言ってるな」

『ハルト、あれザリガニ違うアルマジロ』

そう言えばこんなセリフ言ってた奴がいたようなと思ってたらアルマジロだったと思うが

「似たようなもんだろ」

『一回眼科に行つてこい』

「冗談言つてる場合!?!つかアナザーWに変身してメモリブレイクしてよ!」

「んゝやらなきやダメ?」

「やれよ!」

「何呑気に話してんだ!!」

「ちっ!」

アナザーゲイツが間合いを保ちながら戦っている中、イクサが斬獲しバイオレンスの装甲を切り裂いた

「さて……と綺麗に切れたかしら?」

ずるりと右腕が落ちたのを確認したバイオレンスは

「つ…ぐ、ぐぎやあああああ！」

「うんやん」

そう言い顔面に蹴りを叩き込むとイクサはフェッスルを取り出した

『I・X・A・CALIBUR・RISE・UP』

同時に灼熱の太陽を背負った袈裟斬りがバイオレンスドーパントを切り裂く

「ぐぎやあああああ！」

そのエネルギーの奔流に耐えられずバイオレンスは爆裂霧散する…筈だった

「あら？」「何！」「嘘でしょ！」

皆が驚くのも無理はない倒したはずのバイオレンスドーパントの体が瞬時に回復したのだそれも体が肥大化してだ

「ふははははは！何だこれは凄い良い気分だあああ！」

と喜色に満ちた声が響いている

「どうなってんだバイオレンスのメモリにはこんな機能はないだろ相棒！」

その問いを待ってたぜと言わんばかりにアナザーWは答えてくれた

『調べ終わったぜ、あいつはハイドーブだ』

「へえ初めて見たよ」

「何だそれ？」

ナツキの問いにハルトは答える

「大雑把に言えば…ドーパントにならなくてもメモリの力が使えんだよ、リリイ白銀とは違う完全に制御した形でな」

「何それチートじゃん!!んじゃあのムキムキになるにもハイドロープの力って事!?!」

『そんな所だなバイオレンスの攻撃性と本人の攻撃性がベストマッチしてるって所だな調べたが奴は受けた必殺技のエネルギーを体に溜め込む事が可能のようだ』

「吸収原理はカッシスワームに近いな」

アイツの場合は受けた必殺技を吸収して取り込むだが、このハイドロープは必殺技のエネルギーを回復と強化に充てているようだ、そして厄介な事に

『あと奴を地上で倒すと爆発するぞ!』

キャンサーノヴァかな？いいえバイオレンスドーパントです

「ん〜じゃあメテオストームパニッシャーでも使わないとダメ？」

あのエネルギーを吸収して威力に変える技なら倒せそうだなと思うが

「アナザーメテオウオッチを持つてるのかハルト！」

「……………いないな」

持つてるではない、来ていないのだ同胞を物扱いされるのは不愉快と声音に乗せる

「じゃあどうやって倒すのかしら？旦那様」

「そうだアナザーエターナルはどうよ!!」

確かにアナザーエターナルならばメモリの力を無力化出来るな、それでいこう

『確かにアナザーエターナルの力なら無力化は可能だが奴が溜め込んだエネルギーを処理できないで中身は死ぬぞ』

「それじゃ意味ないよな〜」

『どうしてだ相棒、リハビリ方法がないから殺した方が慈悲とか思ってたろ?』

「そうなんだけどさ…それって俺の尊敬してるヒーロー…あの探偵達に対する冒涇だよなって思ってる」

あの良い風が吹く町に住む人間の涙を拭う2枚のハンカチと走る不死身の情熱

今も何処かで見守っているだろう町を愛する骸骨男

彼等は悩み、対立しながらも力を合わせて町を襲うドーパントと戦っているメモリに

侵された人の罪を数えさせて前を向かせる為に

の
そんな彼等の在り方をずっと見てきたのに、俺は助ける事を諦めていたのだ…そんな

「情けないよ…もし会った時に胸張ってファンですって言えないじゃん!!」

倒して助ける…矛盾してるけどね、だがどうやって倒すか そうなるとメモリブレイクしないとダメだがアナザーWやアナザーエターナルの力では街に甚大な被害が出てしまう…

いや待てよ…そうじゃんメテオストームパニッシャー使わなくても何とかなる!

その答えはやはりライダーの中にあっただあの笑顔がよく似合う青空の人たちがやったようにすれば何とかなる

「っ…相棒…この辺で誰もいない空き地みたいな場所ない?」

『OK、調べるぜ！』

『どうする気だ？』

「安全にメモリブレイクする方法がわかった」

「本当か！」

「先ずはこの街から奴を飛ばす、アナザーデイケイドはオーロラカーテン用意して」

『成る程、アナザーWの指定した座標に飛ばすのか！』

「そう言うことナツキはこのウォッチをアナザージカンザックスに装填！」

アナザージオウとはあるアナザーウォッチを投げ渡す

「え？装填…って、ウォッチのロットがあつた！」

アナザーゲイツが見たウォッチには復讐に囚われた悪鬼のような顔をしていた

加速の止まらぬ復讐心 アナザーアクセルのウォッチであった

「けどメモリブレイクしたら大爆破が！」

「だから街の外に飛ばすんだよ、そしたら思い切り技が使えるだろう？」

ようは仮面ライダークウガがグロンギとの戦いで封印エネルギーと付随する爆発被害が大きくなった事がありクウガと警察は連携する

無人区間までグロンギを誘導 クウガがトドメを刺すと言う方法で対抗したのだ

つまり同じように安全な場所で爆破させれば良い

「エルフナイン、連中に連絡しろその場所から全員避難させろとな」

「は、はい!!」

これで大丈夫、後は待つのみだ奴は攻撃すればする程、体にエネルギーを溜め込んでいく。そのエネルギー量にも限界はあるだろう最悪。そのまま自爆する可能性がある

「てか殴られれば強くなるって、DMなの？」

「そうとしか思えないな」

「ん？それはどう言う」「アンティリーネは知らなくて良いから!」そ、そうなのね…」

そのままの君でいて!と話していると

『見つけたぜハルト、アナザーディケイド座標だ!』

『確認した、オーロラカーテン!』

そしてアナザージオウ達はオーロラカーテンを使い街から離れた先は誰もいない海岸線だった

「ど、何処だこゝは!!」

何て動揺してるけど

「俺達に質問するな!」

『SET……: ANOTHER ACCEL BOMBER!』

アナザーゲイツがノリノリでアナザーアクセルウオッチをアナザージカンザックスに装填し必殺技を発動 斧モードの時はどうやらAの文字をした斬撃で切り裂くらしい

「ぐぎゃあああああ!なんて…っ!何で治らねえ!!」

「ハルト!!」

「任せろ!」

アナザーWやアナザーエターナル単体の力では安全にメモリブレイクが出来ない可能性がある…ならば

『おい合わせろ』

『何言ってやがるお前が合わせるんだよ!』

「仲良くしてよ!」

『W エターナル! MIXING!』

アナザーツインギレードで2人の力を1つにする!!

「悪いね…メモリの数が違うんだよ!」

アナザーエターナルとアナザーWに宿るメモリの力、そしてとあるメモリの力をエクストリームで強化すれば

『アナザーツインスラッシュ!!』

「せいやあ——！」

さながらネバーエンディングヘルのようなエネルギー球となった一撃をアナザーツイングレードで操作してバイオレンスドーパントに投げつけた

「や、やめろ——！」

命乞いをするが意味はない、エターナルの力でバイオレンスの力は機能不全となるだけでは足りない、溜め込んだエネルギーをWのラスボスである ユートピアのエネルギー吸収能力を使い取り込んでいくとバイオレンスの外皮は削れていき遂にメモリに触れると

「ぐああああああー！」

バイオレンスドーナパントは爆散、予想通りの爆炎を起こすが人的被害は1

「が……あ、ああ……」

砕けたメモリとドーナパントの中身である筋肉ダルマも無事だ……まあメモリの毒素があるし人前で変身したのだ生きるのは大変だろうが自分の罪を数えてやり直してほしい

「さて……と後は警察に任せるか逢魔の法律で裁くか……」

変身解除したハルトは一息つくと対応に悩んでいるが同じように解除したナツキは驚きながらツツコミする

「こっちの法律で裁くからね！」

「んじやメモリーメモリで記憶抜いとくか逆恨みされないように」

『MEMORY』

懐から出た緑色のガイアメモリを見てナツキはツツコミを入れる

「何で持ってるのガイアメモリ!?違法な奴だよね!!」

「失礼な、これは俺がミュージアムから正規のルートで購入した正規のメモリだぞ!それにこれを使ってドーパントになる気はないから、自分には一切使っていない生体コネクタもないからセーフ!!」

「お前風都行けるのかよ!つかメモリは持つてるだけで違法だろう!仮面ライダーWとアクセルに会ったらどうすんだよ!」

「馬鹿め……サインを貰うんだよ」

「なら鳴海探偵事務所に行つてこい!!」

「そ、そんな…俺なんか…鳴海探偵事務所に行くなんて…その…その…恐れ多いと言
か…何と言うか…」

「この厄介オタクが!!」

「あら旦那様、コムリンクに通信来てるわよ」

「お、おうどうしたコマンダー？」

アンティリーネはもう帰ろうかなと思つてたらコムリンクに通信が入つたのを知ら
せるとハルトは起動するとハウンドが

『陛下！プレラーティを発見しました現在奏者2名が追跡中です』

まさかの情報だった

「了解だ、すぐに現場に向かうナツキは事後処理頼む」

「分かった！」

「俺達は転移、キャロル達と合流してプレラーティの追跡を「させませんよ」っ！ク
ジョー！」

現れたクジョーとレック、ネオタイムジャッカーの構成員と現れたのである

「魔王と仲間達が離れたチャンス、生かさない手はありませんから」

『ジユウガ』

「ああ今までのお礼、たんまりさせてもらうぜ」

『SET WARNING』

「変身!!」

『仮面ライダージュウガ!』

『WOULD YOU LIKE A COSTUM SELECTION』

ジュウガとシーカーに変身した2人は武器を取り出して攻撃を行おうとした。その時黄金の波動が邪魔をしたのだ

「これ……まさか!!」

「嘘でしょ……何で!!」

「おやおや、まさかの大物が釣れましたね」

「ああ……こりや驚いた」

ハルト達は驚愕の表情が出ていた。そこに立つ黒い正装を纏う王

「消耗した魔王（俺）に勝って何が楽しいのだ、ネオタイムジャッカーよ」

老ハルト 未来に君臨する魔王に他ならなかったからだ

未来をちょっとカミングアウト？

前回 ハイドローブ化したバイオレンスドーパントを倒したハルト達であったが戦力が消耗した隙を狙い ネオタイムジャツカー達が強襲 ピンチのハルト達を助けに来たのは老ハルトであった

「あれ…誰なの？」

初対面のアンティリーネは状況を飲み込めないで混乱しているがハルト達からすれば顔馴染みなので

「何しに来たジジイ」

「えーアレが未来のハルトなの？」

「そうじゃとも…つて未来の自分に冷たくないかの？」

「つせえさつさと要件言え」

「うむ此奴らの目的はプレラーティの元へ行かせる事ではなく京都にいるキャロル達の拉「行くぞ！お前達!!」コレでよし」

オーロラカーテンで転移したハルト達を見送った老ハルトは笑うが对象的に2人は不機嫌となる

「ちっ、腹立つジジイだな」

「まさか未来から来て邪魔するとはね」

「お主らの思い通りになどせんよ忌々しい輩め」

「だが手間が省けたせ、こんな枯枝みたいなジジイを倒すだけなら俺一人でも「待ちなさいレック」んだよ大将、さっさと……っ！」

レックは2人が出す覇気に圧倒されて何も言えなくなる、付近にいた野鳥に至っては命の危険を感じて生まれ故郷から全力で逃げ去るくらいの覇気を出している

「この人を侮らない方が良いですよ、私達では彼にはまだ勝てない……それに彼はアナザーとは言えオーマジオウの力を宿せる例外の器……ぶつかるなら此方も相応の準備をせねばなりません」

「なら引いて貰おうか若いの実力差は言わずもがな勝てる見込みがないなら尚更な……災厄の魔王、その二つ名は伊達ではないぞ？」

その殺意にジュウガは両手を上げ降参のポーズを取る

「はあ……何故貴方は災厄の魔王になったのですか？今の常葉ハルトからはそんな気配は

無いのですが」

「それをお前達ネオタイムジャッカーが問うのか？」

「へえ………」

その一言でクジヨーは理解したのだ

「成る程…貴方は我々の思惑通りに進んだ未来から来た常葉ハルトのようですね」

「そうとも…故に貴様等の存在が不愉快で仕方ないのだ…過去の俺が手を出すまでもなく今ここで消してやろうか!!」

老ハルトがアナザーオーマジオウオッチを起動しようとした その時

「ミツケタゾ！ウテー！」

同時に隠れていたBーバトルドロイド大隊が一斉射撃を行う、老ハルトはバリアを展開して防ぐが

「ブリキが…邪魔をするでない!!」

老ハルトが右手を突き出し衝撃波を出してバトルドロイドを蹴散らすと端材の中に

紛れるシーカーは持ち前の建築能力で門を作る事で撤退したのである

「ちっ逃がしたか…うむ…まあ良いコレで関門は突破じゃな」

アナザーオーマジオウオツチを懐に仕舞うと老ハルトは

「さて京都観光でもするか…そうだリムルさん達にお土産でも買おうかな」

「そこは奥方様達に買わないと怒られますよ」

「大丈夫じゃよ皆には内緒にしておるから…ん？」

老ハルトが振り向くとウオズが呆れた顔をしていた

「おおウオズ久しぶり…ではないのお」

「ええ…それでまたまた何しているのですが我が魔王？」

「何、ネオタイムジャッカーに嫌がらせじゃよ…それと京都観光じゃ」

「後半の部分が本音でしょうね、まったく仕事を抜け出して…奥方様が怒りますよ」

「大丈夫じゃ問題ない！」

「この本によれば二亜嬢の天使で奥方全員に京都で遊んでるのがバレていますが？」

「一番良い土産を頼む」

「かしこまりました、此方へ」

—————

そして京都に戻ったハルト達は慌てて戻ったが

「みんな！だいじょ……うぶ？」

その光景に口を閉じた

「む？遅かったなハルト」

「いやあもう少し早かったら束さん達の大活躍が見られたのにね！」

「ま、こんなものだよね」

変身した彼女達の足元には大量のバトルドロイドに加えて高級モデルのマグナガードやドロイデカが大量のガラクタと化していた

「ねえねえ見てよスーちゃん、このドロイド君のことが好きだつて！あははは！」

「はあ…大人になりなよ束」

「同感だな仮にも一児の母だろう」

「クーちゃんもハルくんもこんな束さんが大好きなんだって!!」

「まあなどんな束でも愛してるよ」

「ひやつほーい!!」

「勿論、皆もね」

「まあ当然だな」「うんうん」

「しかしドroid軍団がアツサリ壊滅か」

ナツキは残骸と化したバトルドroidを見ていると

「ま、怪人でもないドroidに私達が負ける理由がないだろうさ」

「そうだろうけど…心配してきてみたら…」

「何だ心配だったのか」

「当たり前だろ、俺の見てない所で何かあったら不安でたまらないよ」

未来の俺は何故、拉致られるなんて言ったのだろうか？まあ良かったよ何事もなくて

「んじゃプレラーティの追跡を」

「その前にハルト」

「何さ？」

「そこに直れ」

「何で？」

「簡単だ、アンティリーネと抜け駆けした件についての説教だ！」

「おい待てよ今はそんな事してる場合じゃないだろう！結社の幹部とつ捕まえるチャンスじゃん！」

カリオストロの件もあるから奏者達に幹部がやられるのは色々と不味いのである……
ナツキが情報を集めているが妨害はできない

「ハルト、その件なら奏者達が対処したよ」

「マジか」

「だから時間があるので説教だ」

「………京都デート」

「そ、そんな事でオレが買収出来るとで「旅館を抑えて1日ずつデート」と思ったがそれなら良いだろうお前達」

「そうだね」「ああ」「うんうん」

よし乗り切ったと安堵したその時！

「ウオズよ赤福とやらは何処じゃー！」

その声で錫音の顔が険しくなった、まさか

「我が魔王、赤福はお伊勢名物ですよ」

「何と！知らなかったな!!では木刀を買って行こうカレラが千冬と模擬戦して最近へし折ったらしいから新しいのを買おう」

「恐らくカレラ嬢と千冬嬢の戦い耐える木刀となると……この世界にはないのでは?！」

「ならグルメ界にでも行くかの…久しぶりに次狼さんと一杯やりたいしな」

その声に目線を向けると老ハルトがウオズとお土産買っていた、いや待てジジイ

「何してんの!?!」

「おお若い俺よ、もう終わったのか早いのお」

「いやいやクジョー達は俺に任せて先へ行けとか言ってたのに何で土産物色してんの!?!」

「簡単じゃよ追ひ払い終わったから今は妻達の怒りを抑えるためにお土産が必要なのじゃ」

「は？何言ってるの?」

「実は奥方様達に内緒で来てたのがバレてるのでお土産を買っているのです」

「買わねば太陽まで打ち上げられるのでな！不死になつとるから俺にファイナーレはないのだよ」

「……………なんかごめん」

「おい……………錫音堪えろ」

「大丈夫だよキャロル、私は冷静だから」

「では聞こう、今ハルトが居なかったらどうしてる」

「こいつにヘルニアになる魔法をかける」

「何で恐ろしい魔法作ってんの!？」

「冷静だなピンポイントに悪意のある魔法を使うとは流石だ錫音」

「冷静な分、かけられている悪意が凄いと思うなあ……」

「これはハルトが前に話してた全身こむら返りの魔法を参考に編み出したんだよ」

「発想の原因俺か!？」

「恐怖とは正しく過去からやってくるのお」

しかし千冬と束は誰こいつ？と言う顔をしていた

「ねえハルクん、このジジイ誰？ハルクんのお爺ちゃん？」

「束、言葉を選べ本当なら失礼だぞ……申し訳ない友人が失礼した………ん？」

千冬は少し冷静になって考えてみた、さつきウオズは何と言った？我が魔王と？……
彼がそう言う人はハルトだけだ……まさか！

「お前…未来のハルトなのか？」

「ははは！そうだよ千冬、気づいてくれて嬉しいよ」

「ええ！このジジイが未来のハルくん!?…なんか冴えないね!!」

「よく言われるよ束」

「束、その言葉は今の俺にもダメージ入る」

「ま、マジで災厄の魔王なんだ…今の俺にはただのお爺ちゃんにしか見えない」

「僕もですナツキさん」

老ハルトは2人を視野に収めると

「ほおこりや懐かしいな自称タイムリーパーとエルフナインか」

「未来でも俺ってそう呼ばれてるのか……な、なあそっちの俺はどんな感じなんだ？」

「幸せにしとるよ、この間は姪っ子を抱っこさせて貰ったからな」

「姪…ってまさか！」

「／／／／／」

赤面してる2人を見て悪い笑みを浮かべたのをハルトとウオズは見逃さなかった

「まあ、この未来につけるかはお主の頑張り次第じゃよ…ん？そう言えばナツキよ颯風の姉妹はおらんのか？」

「は？」「え？」

「何じや、エルフナインとあの姉妹を嫁にしといて伴ってないのか…まったく家族サービスは大事じやよ除け者は悪いことだ」

「い、いや待て一体何の「ナツキさん」は、はい！」

暗黒微笑を浮かべるエルフナインにナツキの両足は笑っていた、そりやもう爆笑である

「姉妹でお嫁さんってどう言う事か教えて貰えますか？まさかハルトさんみたいに増やしたんですか!!」

「え、エルフナインさん…待ってくれ！俺にも一体どう言う意味なのか…」

「おお、そうだったな若い俺が二亜にも会ってないなら知らんでも当然か…おい忘れろ」

「その前に説明責任を果たせえ!!」

「ナツキさん！ドロイドの上に正座です!!」

「ふ、不幸ダァー!」

「つー事は俺は何処かで碌でもない事に首を突っ込んだのか」

「それはどうかな？はてさて……しかし彼奴は揶揄い甲斐があるなあ愉快愉快」

「一応聞くけど災厄の魔王って人の修羅場作るからとかじゃないよな？」

「安心せい、きちんと暴れた結果ついた名前じゃ」

「まったく安心出来ねえよ……」

凹んでると錫音は思い出したように

「そう言えばキャロル、このジジイがハルトって知ってるようだけど？」

「ああ前に、このバカが未来で沢山の現地妻を作ると話した現場にいたからな」

「ははは、そうじゃったな…所で千冬よサタンサーベルは大事にしてくれとるかの？」

「やはりアレは…未来からの贈り物か良い切れ味の剣だな」

「うむ気に入ってくれたなら嬉しいよ」

やはりこのジジイがサタンサーベル送ってたか…待てよ

「そーいやアレ何処で手に入れた、まさかと思うが創世王やシャドームーンから奪ったとか言わねえよな」

「安心してくれ流石の俺もレジェンドライダーにそんな恐れ多い真似は出来んよ…アナザーライダーの王になったとは言えども仮面ライダーを愛する心までは無くしておらんぜ」

「良かった…もしシャドームーンから奪ったとか言ったらどうしようかと思ったよ」

「奪うなどとんでもない、アレは親友のビルゲニアに貰った」

「おい待てジジイ、あの鉄面皮と友達って嘘だろ」

「ははは…俺の親友を愚弄するのは例え過去の俺でも許さんぞ！」

「つか何であのビルゲニアと親友なんだよ！創世王なれなくて暴れた危険な奴じゃん！」

「何、大雑把に言えば現代日本で怪人差別に悩む怪人の為に創世王を拉致して怪人達に差別のない居場所を作ったら感動されて忠誠を誓われた…したら何やかんやでビルゲニアと意気投合した」

『こ、このジジイ…あのやばい世界でとんでもねえ事しやがった!!』

『マジかハルト!』

とアナザーW達は驚いているが

「それ、どこの世界線であった創世王継承戦?…それと待て拉致したとか言わなかった?」

俺には全然分からない話である

「まあビルゲニアの説得のお陰でダロム、バラオム、ビジウムも仲間になってくれて助かっておるよ」

これには流石のナツキもツツコミをする

「ちよつと待て——!」

「ゴルゴム三神官まで仲間に取り入れてんじゃねえか！何なの未来の逢魔ってゴルゴムだったりする!？」

「いや俺は護流五無を乗っ取りしておらんよ？彼等に怪人行政自治特区を作り共存しておるのだ」

「嘘つけえ！いやその前に…」

「何があつた未来!!」

「まあこれは俺の時間軸の話だ、お前の時間軸でそうなるかは分からない」

「だ、だよな…だって俺あのゴルゴム幹部と友達とか部下とかイメージ出来ないもん」

「そうじゃ貴様は貴様の道を進むと良い」

「何か凄い良い話をしているけど、この人さ未来の東さん達にお詫びのお土産買ってる

んだよね？」

「そうじゃな、まあ話はこの辺にしておこう」

「おい待て最後にオレから質問だ」

「何だろうかキャロル」

「以前貴様から現地妻が増えると聞いていたが最終的に何人になる」

「あ、それ俺も気になる…つか増える前提なんだ…」

「当たり前だこの間きた未来の娘からの話で最低でも3人増えているのは分かっていたからな」

1人はアンティリーネで1人は二亜という女性だったかなと思ってるし周りの目が集まると老ハルトは一言

「……………俺に質問をするな!!」

「いや教えろよ!」

「ぎ、逆ギレだど!」

「まったく…これだから最近の若いものは直ぐに答えを知りたがる、俺の若い頃には答えなんてなかったぞ…分からねば自分の手でそれでもダメなら親に友に仲間に愛する者に聞き、それでも分からずに困った時は…地球の本棚を使ったものだ」

「結局お前も最短ルートで答え探してんじやねえか!」

「待て辞めろ若い俺よ、アイアンクローは辞めろ!頭が割れる!!」

「いいぞハルト、やってしまえ!」

「錫音！何してる今直ぐ止めろ！」

「我が魔王、堪えてください！」

「……………けっ」

ハルトがアイアンクローを終えると

「こ、これは老人虐待じゃ！」

喚き散らす老いぼれに向かって一言

「人聞き悪い、未来の自分を殴ってるから自傷行為だ！」

「……………何て横暴なのだ!!暴君め！」

「そりゃ俺は過去のお前だよ」

「何と!!」

「はあ……我が魔王未来へ帰りますよ」

「うん、そうじゃな帰るとするか妻達よ……見るが良い俺の華麗な空中三回転半捻りからの土下座を！」

と言いながら未来に帰る姿を見て

「ああんりたくないな」

ドン引きしてるハルトにキャロルが淡々と告げる

「ならこれ以上嫁を増やさん事だな」

「善処します」

「よろしい、では早速「その前に事態の確認だ遊べるかはその後で」うむ」

「コマンダー」

『陛下、ご無事でしたか今大量のブリキ野郎が奥方様と陛下のいた場所に展開されたのですが一瞬で消えましたが一体何が…』

「知ってるよ、残骸の回収を頼むそれと現状は」

『京都はネオタイムジャッカーが担当していたようです、プレラーティと奏者の追跡劇を知られたくない、つまり陽動でしたな』

「そうか…俺達は釣られちゃった訳か」

『カリオストロが瀕死のプレラーティを回収し現在、バクタタンク（フリーザの使う再生カプセル的な奴）に入れていきます』

「了解…だが京都の地脈から出る神の力を連中が使う可能性もある、ここに暫く逗留して様子を見る事にする」

『ははは！そう仰らずに婚前旅行に行くと言えばいいのに』

「……頼むハウンド、緊急事態は連絡してくれ」

『はい、ハウンドアウト』

通信が切れたので丁度戻ってきたウオズに指示を出すと

「んじゃ約束通りデートな」

まさかこの時にしたデートが後の世界で頼りになるとはハルトは知るよしもなかった

その夜

「東さんの歌を聞けー！」

「高くつくぞオレの歌は！」

と天災2人が騒いでいる中

「ふう……つーか宴会会場貸し切ったけど騒ぎすぎだろ節度あるのは千冬と錫音だけか
「あのー此処からここまで！」「この店で一番高い日本酒を頼む」自重してない……だと！」

ハルトは呆れながらも楽しいと酒を煽るが

「やっぱり酔えない……これが状態異常耐性か」

酔えないと知るが

「まあ酔っ払って醜態晒すよりマシか」

以前、泥酔してキャロル達にベタベタ甘えた事を思い出して顔を赤くする…いやはや
恥ずかしい事で

『あのハルトは傑作だったな』

「つせえ……んで、お前は混ざらないのかアンティリーネ」

「旦那様が離れてる場所で呑んでるからよ」

「そっか…」

ふと思ったことがあるので尋ねてみる

「なあアンティリーネのさ親ってどんな人なんだ？」

「最低のクズね」

「お、おう……」

即答で返ってきたので思わず引いてしまう

「そのさ……俺ってよくよく考えたらアンティリーネの事知らない所が沢山でさ……」

「あらどうしたのかしら旦那様？」

「これを機会にお互いをよく知ろうと思ひまして」

「ふーん、じゃあ大雑把に話すかねー」

それはハルトの想定より何十倍も重い生まれだった

彼女の父親はエルフの国の王様で、何故か強い自分の子供を作る事に執着していた……である時、何を思ったかスレイン法国最強の女性に手を出し妊娠、産ませた……だから母親は国に帰った後、産んだ自分を毛嫌いしていたと言う

そして国ではその異質さから軟禁されておりずっと退屈だった

「なまじ強かったから、出世して調子に乗ってる奴に身の程を教える仕事をしていたわ」
「なんて恐ろしい仕事をしてんだ…」

うちの国ならウルティマ辺りが喜びそうな仕事だなと思う…いやカレラの場合は嫌味なしでやりそうだな

「そんな日を過ごしてのだけど、あの日散歩してたら旦那様に会って負けて今に至るって訳よ」

最後まで聞いたハルトは

「取り敢えず…そのエルフの国は滅ぼそうか」

『ほおハルトにしては珍しい発言だな』

「流石に今の話聞いて心中穏やかじゃないよね」

満面の笑みで物騒な事を言う：アンテイリーネはクスクス笑う

「ええ、機会があれば是非」

「んじゃ約束な」

「ええ：そう言えば私も旦那様の事もよく知らないわね強い王様と言うことしかわからないわ」

その言葉に先程まで飲んでいた4人も思わず

「アンちゃん、それで良くハルくと一緒に来たね」

「ノリと勢いとは恐ろしいな」

「しかも彼女の話的にさ…駆け落ちてるよね何か少し複雑」

「それで旦那様は私をどうするのかしら？」

「変わらねえよ俺の妻なら全力で守るさ」

「……そう」

「だから愛してるし愛されたいならいつでも言ってくれ俺みたいな重い愛で良ければな」

「なら愛してくれるかしら？」

「おう」

「直球だ（ね）!!」

――

そして彼女達との婚前旅行も終わりを迎えたハルトは新拠点にある医務室にやってきた、そこには目当ての人物がいたので挨拶する

「よお、プレラーティ元気か？」

病人服を着ているが傷ひとつなく治っている彼女は不思議そうな顔で

「ああ…しかしどんな技術なワケだ？ 瀕死の重症だったのに」

「バクタって体の回復を促す医薬品、そのバクタで浸ったバクタタンクに放り込んだのよ通常の医療より回復速度は倍ってね何なら骨折とかの治療にも持ってこいの逸品よ」

「ほお…逢魔の医療は発展しているのだな」

「因みに純粋バクタタンクや同盟国産の完全回復薬は逢魔でも俺や幹部格じゃないと使えないダメだな」

「な、何だと！」

「具体的に一回の使用料がこんな感じ」

とハルトが電卓で見せた数字にプレラーティは目を見張った

「ぼったくりなワケだ！」

具体的には高級外車が新車で買える金額である

「んな訳あるか異世界の最先端医療技術だぞ取引して割り引いてこれだわ！」

「なん……………だと……………」

と話していると

「まあまあ今は取り敢えず…プレラーティあんた何で追いかけて回されたのよ？」

「それは……」

要点をまとめるとアダムがサンジェルマンを犠牲にし、己の野心のために動く計画の一部始終を聞いたからだという

「というワケだな…そして死んだと思った奴と敵に助けられたワケだ」

「嫌味言える元気あるなら治療費を一般金額で請求してやろうか？まあ内容はカリオストロの話と概ね同じか」

「でしよでしよー」

「それより…何故此処にいるカリオストロ？」

「簡単に言えば、貴女と同じ計画を聞いちゃってね、それなら逢魔に亡命した方が安全と
思っ取引したのよ」

「な、何だと！サンジェルマンを見捨てる気か!？」

「違うよサンジェルマンもお前も合わせた3人の亡命だから聞き届けたんだよ」

「見返りを聞きたいワケだ、お前が慈善事業で受けるワケないだろう」

「ひでえな、あの時ポーターの座標変換してくれた借りを返しただけだよ…まあこれは
本音の一部かな」

「残りは？」

「ヘッドハンティングだよ、クーデターの実行犯と逢魔に出向してる連中の面倒を見て

欲しい：まあ国的な言い方をするなら研究開発部門を立ち上げたから代表やってっ
て感じだな」

元々、クーデターした逢魔出向組の処分には頭を抱えていたので彼らを管理してくれ
るなら助かるし、彼等の影響力にも関係してくるからな

「それ幹部待遇って事!？」

「まあな優秀なの知ってるし相応のポストがないとな」

「本音は？」

「キャロル達とイチヤイチャしたいから働け」

「色々と台無しよ（なワケだ）!!」

新たな奴には二面性？

???

前回 プレラーティを助けたハルト達は京都旅行で英気を養った後、打倒アダムの為に戦力を再編している、その間にもアダムの陰謀は進行していた…

逢魔拠点

「此処をこうして…よし…」

プレラーティは回復してからと言うもの何かを懸命に用意していたのである
見物していたハルトの膝上にキャロルが座ると

「ほお…」

何を作っているのか分かったのか関心の声を上げるが何を作っているか分からない
ハルトは尋ねる

「なあキャロル、プレラーティの奴何作ってんの？」

「ラピスを錬成しているのだ」

へえーラピスね……ふむふむ…俺も小学校の頃つくったなー（棒読み）……はい

「なるほど……さっぱり分からん」

「だろうな、貴様にもわかりやすく言うのだな賢者の石を作っているのだ」

「へえ賢者の石を……なあキャロルそれって安全か？」

「正しい手順を踏めば問題ないが？どうしてそんなことを？」

「賢者の石ってさ大量の人の命で作るとかじゃないよね？…儀式の祭壇用意して沢山の生贄から作るとか？」

「それは何処の世界の錬金術だ？」

「いや違うなら良いんだよ…あの錬金術よりもオーズの錬金術の方が幸せだからさ…それよりおやつの時間だけど何食べたい？」

「そ、そうだな…なら貴様の作るアップルパイを頼もうか」

「OK、んじゃ直ぐに支度するね紅茶も淹れないと」

「まだまだ趣味の範疇だけど色々勉強しているんで喜んでくれるかな？と考えていたら扉が強く開いた」

「ちよつと待ったー！」

「キャロルだけに美味しい思いはさせないよ！」

「ああ、ここは平等にだ！」

「ええ…独占なんてさせないわ」

「ああ…アンティリーネが染まつてる…」

「前まで少し皆と壁があると思ってたが、今ではあんなに打ち解けて嬉しいよ…だが」

「まったく外野がうるさいワケだ！イチヤつくなら他所でやれ！あと作ったアップルパイは差し入れるワケだ!!」

「プレラーティがキレたので」

「と言うことだハルト、行くぞ」

そして部屋を出たハルトは溜息を吐く現状此方に関しては問題ない…アダムへの戦いに備えて皆士気も高い…こんな時こそ何か起こるかもしれない

「警戒しないとな」

『フラグを立てるな馬鹿者』

「そうだ久しぶりの日常パートをシリアスに持っていくな」

「メタイよキャロル…まあそうだな折角なんだからゆつくりす……っ！」

『そんな白けること言うなよ暴れようぜ』

「っ!？」

「ハルト!？」

突然、体がふらつくが大人モードのキャロルに支えられる

「い、いやごめん少し立ちくらみがしただけ」

「まったく心配させるんじゃないぞ」

「そうだね、うし！んじゃ皆の分も作るか！」

とノリノリで食堂に向かう途中にハルトはアナザーライダーに尋ねた

「なあ今の誰？新入りとかなら自己紹介しろよ」

『ん？俺達は誰もお前と話してないぞ？』

「またまたあく白ける事すんなよとか言ってたろ？」

『だから言っていないッテ』

「ふーん…じゃあアナザーバイスお前か？」

『違うよハルト！俺っちの声なら分かるでしょ！何年の付き合いだと思ってるのよ！』

「だよなあ……」

「何話している、さっさと来い！」

「はいよー」

なら誰だ？この疑問の答えが出たのは直ぐであつた

そしてアップルパイを作つたハルトは両手を上げて

「メス」

『それは俺の真似か？』

「ああ、キングストーンの件はありがとうな」

『ノーサンキュー、俺は自分の仕事をしたに過ぎん』

「そう言つてもさ、俺の命を助けてくれた事には変わらないだろう？皆には返せない借りが出来たな」

『忘れろ何を貸したか等覚えられん』

「それ俺のセリフ」

『誰かの真似だ』

以外とお茶目なアナザーブレイブに苦笑しながらとアップルパイを切り分けお茶を出していると

「いやー平和で嬉しいよ〜！」

「東、それフラグ」

「え？」

それと同時になる警報に周りのトルーパーは食事を中断して配置につく

「だから言ったのだ立てるなど」

「まあ非常時だからしやあないんだけどな」

「ごめんねハルくん…」

千冬は責める目をし束はシヨボンとしていたのでハルトは頭を撫でて慰める

「次から気をつけようね…：…コマンダー何事？」

コムリンクを繋ぐとハウンドは敬礼して

『現在、アダムとサンジェルマン、立花響が交戦中との事です！』

「来たか…用意してくれ」

『そう仰ると思ひガンシツプ一機いつでも出れます』

「流石だな…んじやお先に」

『我々の敵も残しておいてくださいよ陛下』

「それは早い者勝ちだぜ、ハウンド」

コムリンクの通話を切ると

「皆は此処でお茶会してて…ウオズ」

「此処に」

「久しぶりに家臣団全員で行こうか？」

「ご随意に」

「終わったら、アップルパイとミルクレープと紅茶かコーヒーだね」

「お前達！さっさとアダム倒して帰りますよ四十秒で支度しなさい！」

「「はっ!!」」

一糸乱れぬ統制を見てハルトは引き攣るが

「やる気があってよろしい」

『俺も食いたいな、それ』

「はいはい分かったよ……ん？」

『どうした？』

「いや……また空耳がしたただけだ、行くぞ」

満足したハルト一行はガンシップに乗り込むと目的地まで発進したのである

そして着陸した後、ハルト達が見たものとは

惜しげもなく抜剣（意味深）をしているアダムと相對しているサンジエルマンと響であつた

「だとしても!!」

盛り上がつてる所悪いが

『1号』

「何をお茶の間に晒しているのだあ!!」

フィーニスがアナザー1号になるなり持ち前のエネルギー球をアダムに投擲した

「これって」「まさか！」

と此方に視線を向けたので

「よお立花響、サンジェルマン…俺達抜きで何楽しんだよコラ」

「ハルトさん!!」

「早い到着ね」

「ああ…取り敢えず今は」

「予想外だよ不意打ちとは、魔王お早い到着だね」

「よおアダム、いつ以来だ？…取り敢えず死ぬ」

『ジオウ』

アナザージオウに変身しツインギレードにウオッチを装填する

『エグゼイド 龍騎… MIXING!』

「紅蓮爆竜剣!!」

挨拶代わりに放った赤竜の突貫はアダムの防御に阻まれる

「やるね以外と」

「普通に防がれるのは腹が立つな」

「ハルトさん!」

「あ?」

「お願いです、一緒に戦いましょう!」

「やだ、あいつは俺達の獲物だ…俺達の居場所でクーデターなんて馬鹿げた真似しでかしたんだからな!」

「そうね…私達は思想も目指す先も違う…けど今は！」

「恨みがあるのは同じか…んじやお前達、やっちまおうか」

「「「はっ！」」」

「断るよ君と戦うのは、代理を連れてきたんだ」

「代理？」

そう答えたと同時にアナザージオウの未来視が作動、防御すると

「決着をつけましょうか魔王」

「この間と違ってジジイは邪魔しねえよな？」

ジウガとシーカーが現れた

「ネオタイムジャッカー…」

「ねえ魔王ちゃん、アレは俺達がやるよ」

『ザモナス』

「ハルト様はアダムを倒してください」

『ゾンジス』

「ああ…あの時の輩か…忌々しい消しとばしてやる」

『今日の主は怖いねえ〜行きますう〜?』

「その通りです、フィーニスお前は我が魔王をお守りなさい」
『ギンガ』

「いいや俺がやる、お前達全員でアダムをやれ」

数的有利を考えればと言う状況とアナザーギンガファイナリーに宿る力はアダムにも有効ではないかと言う考えにウオズも至ったようにで

「……………武運を！」

「おう」

アナザージオウは手を振るとウオズ達は響の加勢に移動した

「行かせるかよー！」

『GIGANT BLASTER』

「させねえよ」

『ウィザード……デIFエンド』

シーカーはギガントブラスターで射撃するがアナザーウィザードに変身して防御魔法で受け止めた

「ふっ……」

「流石ですね、しかし私達3人相手に勝てますかな？」

『S I・GU・MA』

「っー！」

その言葉と同時に両者の間で爆炎が巻き起こると中から現れたのはメナスことアマゾンシグマである

「けっ……」

「さてどうしますか？」

「数の不利なんて今の俺には意味がない、行くぞみんな！」

今の俺には仲間がいるとアナザージオウⅡウオッチを構えたのだが突如声がした

『おいおい三対一なんてフェアじゃないな俺も協力してやるよ、ついでにお前もこい』

「え？」

空耳では断じてない、それは

『まっ、ちよつと…のわあ！』

「っ！」

突如、アナザージオウの体から何かオレンジ色の粒子が飛び出す、その中からアナザーバースが現れ尻もちをついているのを見て一言

「あだ！………いててえ…もう誰なんだよ!!」

「それはこっちのセリフだっつーの…んで誰だアレ」

憤慨している所悪いがアナザージオウは肩にツインギレードを担いでみる

「やつぱりニューメンバーがいたのか随分とシャイな奴だな…」

オレンジ色の粒子は浮遊しているがアレが新しいアナザーライダーの力かなと思っ
ていたが

「いやいやハルト、あれそんなんじゃないよ!!」

「え? んじゃあ敵?」

【おいおい俺は敵じゃねえよ! 言っつたる三対三でフェアに行こうぜって】

そしてオレンジ色の粒子は1箇所を集まると姿を現した、全身黒尽くめの服を着ている青年の姿を取るとネオタイムジャッカーも驚きの声上がる

「なっ!」「これは…」

しかしそれはアナザージオウとバイスも同じであつた

「えええええ!」「嘘でしょ…」

自分の知る記憶の彼とは雰囲気が違うが顔は見間違ひようがない

「ふう…:…やっぱり自分の体があるのは良いもんだな、長かつたな自由になるのが」

そこにいたのは天才ゲーマーの相棒

矛盾に行く最強ゲーマー

「パラド!?!」

驚くこちらを他所にパラド？はハルトを見ると

「パラド……それが俺の名前か？」

「え…違うのか？」

「いいや気に入ったぜ、パラドか良い名前だな」

「あー成る程ね俺っち、大体わかつちった！」

『それは俺のセリフだ！』

「お前でもないだろうが…おいバイス、これってどう言う事だ？」

「説明は後だよんハルト、彼方さん偉くやる気みたいだし」

「そうだな」

「まさかの助っ人ですね…ですが生身の貴方では私達には敵いません！」

「つパラド！これを「安心しろ俺も玩具は持ってきたからさ」玩具？」

するとパラドの目が光りオレンジ色の粒子が右手に収束していくと一つのアイテムを形作る

それは黒色のダイヤルがついた特異な形状を持つアイテム

『ガシヤットギアデユアル』

「自己紹介したよハルト!!」

「いや分かってる」

「どう驚いた？」

「そんな…まさか！」

「えーと確か…こうだったな」

パラドはダイヤルを捻る

『PERFECT PUZZLE』

『WHAT'S THE NEXTSTAGE? WHAT'S THE NEXTSTAGE?』

同時にゲーム画面が現れ、画面からコイン型の強化ツール エナジーアイテムが排出された

「ははは！良いねえ心が躍るな！あとはコレがないとな…：…変身」

『DUAL UP!』

『GET THE GLORY IN THE CHAIN PERFECT PUZZLE』

最後にバグのようなノイズが入るのと黒い装甲となっているが間違いようがなかった

その姿は

「仮面ライダーパラドクス…いや仮面ライダーアナザーパラドクス レベル50」

仮面ライダーアナザーパラドクス パーフェクトパズルゲームレベル50

「ええええええええええええ!!!」

「行くぜ!」

「小癩な…見掛けだけの仮面ライダーなど！メナスは魔王を相手なさい！」

「……狩り開始」

「しゃあねえ行こうぜバイス！」

こうなってしまうては仕方ないとアナザージオウはアナザーウオッチを構え直した

「おうよー久しぶりのリバイスだぜ、みんなもハツシユタグ ナイスバイス！で宜しく
！レツツゴー！」

バイスもアナザーウオッチを取り出してスイッチを押す

『リバイ』『バイス』

アナザーリバイ、アナザーバイスになった2人は拳を合わせてアマゾンシグマへと向かうのであった

「ふははは！お前なんかぎーったぎたのめーっためたにしてやるもんね!!」

「その表現使って大丈夫かな？」

「……必ず詰む」

「それって意味合い変わっちゃうけど……」

「まあ」

「詰めるもんなら詰んでみなあ!!」

そして

「参ります!」

ジュウガは真っ先に走り出すと高速移動してパラドクスと拳を交える、その勢いのま

ま宙に飛び上がるも

「よつとー！」

アナザーパラドクスは右手を横に払うと近くにあった岩石がジュウガに激突した

「ガハッ……ま、まさかこれは魔王ハルトの超能力!？」

「違う違うこれは俺のゲーム、パーフェクトパズルの力だこのゲームはエリア内のものを動かして遊ぶパズルゲームさ……だからこんな事も出来る」

とアナザーパラドクスが両手を上げるとランダムに配置されていたエナジーアイテムが1箇所を集まってくると、その中から

「んじゃコレにしよう」

と3枚のエナジーアイテムを選ぶとギアデュアルのダイヤルを再び回転させる

『高速化』

『マッスル化×2』

『ウラ技…デュアルガシヤット…』

同時に走り出すアナザーパラドクスにジユウガも迎え撃つ構えを取る

「ならば！」

『アメイジングファイニッシュ！』

カウンターを合わせんと蹴りを放つ

「はあああ！」「でりやあああ！」

このクロスカウンターは高速化したアナザーパラドクスに軍配が上がるのであった

『PERFECT CRITICAL COMBO！』

「があああああ！！」

強化された胸部へのライダーキックは一撃でジユウガを強制変身解除させるに至つた

『ALL CLEAR』

「が……がは……このっ!!」

「ふう、どうよ俺の超フラインプレー!」

「凄いなあのジユウガを一撃で……」

『それと早く動いて強力な一撃で倒す脳筋戦法……何処か親しみを感じる……』

「凄いじゃん!新しい後輩の出現に俺っち嫉妬……あ、危ない!!」

「え?」

と調子に乗っていたアナザーパラドクスの背後からシーカーが斬りつける

「調子乗ってんじゃねえ!!」

『G I G A N T S W O R D』

「がっ……っ!」

ギガントソードを肩に担いだシーカーは

「アイツめえ…不意打ちなんて卑怯な!」

「戦いに綺麗も汚いもねえよバイス、うしアレやるぞアレ」

「ん?……ああアレね完璧に理解したぜ!」

「んじゃレッツツゴー!!」

取り出したアナザーウォッチを押し込むと2人の体が一つに重なると黒い液体が溢れ出る

そこから現れたのはアナザージャックリバイス、かつてバイスが変身しハルトの命を救ったフォームである

『ジャック…リバイス』

『これでぶっ飛ばす!!!』

「やれるなら見せてみる」

—————

「テメエが何処の誰でも関係ねえ！大将の敵なら倒すだけだ！」

啖呵を切るがアナザーパラドクスは

「知るか……これ以上俺を怒らせるなよ」

仮面の下に怒りの形相を宿し、ギアデュアルの拳を構えた戦士の方へとダイヤルを傾けたのである

『KNOCK OUT FIGHTER』

再度展開されるエナジーアイテムに合わせて

『THE STRONGEST FIST! ROUND 1 ROCK AND FIRE!』

「大変身」

『DUAL UP! EXPLOSION HIT! KNOCK OUT FIGHTER!』

同じようにバグの音がしながらだが背部のダイヤルを押し込むとパラドクスの顔が格闘家を思わせるフェイスパーツに変わり両肩の装甲もガントレットへと変化した

災厄の2Pカラー 仮面ライダーパラドクスファイターゲームレベル50

「らあー！」

拳を振り上げた一撃 それだけで炎が起りシーカーを焼こうとするがギガントソードを使い近くのを壁に加工して攻撃を止める

「危ねえ奴だな…まあこの壁を突破は出来んだろうさ、何せクジョーのデータではアナザー王蛇のヘビープレッシャーにすら耐える強度らしいからな」

立ちました！まだ描写がないのに性能を誇るのには敗北フラグです!!

「ん？何か聞こえたような…っ！」

耳を澄ませれば壁を殴りつける音が高く強く響き始めた

「まさか！」

同時に壁が破壊されアナザーパラドクスが走り出してきた

「そのまさかだ！」

『ウラ技！デュアルガシヤット…』

遂に間合いに入ったアナザーパラドクスはダイヤルを操作してシーカーにボディブローを叩き込んだ

「はあ！」

『KNOCKOUT！CRITICAL SMASH！』

「いふうー！」

シーカーはそのまま殴り飛ばされ近くの木に打ち付けられると同じように変身解除となったが、クジヨーよりも重症である

「ええ…俺達より過激じゃん、てかパラド一人で良くね？」

「レック…っ！」

「おい待て！パラドそっち行つた！」

「OK、強い遊び相手は大歓迎だぜ！」

「な、なんだよ…それ…！」

「ん？俺の攻撃は相手の装甲を無視して本体を殴れるらしいんでな、お前さんの装甲も意味がないみたいだな」

「……………このやろう！」

「これで終わりだ、敗者にふさわしいエンディングを教えてやるよ」

そう言いながら懐からバグヴァイザーを取り出した、その時

「!!!!!!」

声にならない咆哮と共に皆の目が動いた先には

「何だアレ？」

巨大な光に包まれたナニカが現れたのであった

お前は誰だ？―俺の中の俺？―

あの巨人が現れたのを契機にアダムとネオタイムジャッカーは逃走、残されたサンジェルマンとハルト達は合流を果たした

「我が魔王ご無事でした……か？」

「誰だ貴様は!!」

「な、何か増えてるー!? いやこの人誰なのよバイスちゃん!!」

「えと……この人はあ……」

「敵じゃな! 離れろハルト坊!」

「へえ……レジェンドルガの女王が相手とは心が躍るな！」

「ヤクヅキ待て！彼は敵じゃないから!!パラドもガシャットを下ろせ!!」

「サンジェルマンは？」

「待機してもらっております、あの状況を説明出来る唯一の人ですので」

「そうか……いやあつちもだけどこつちの方が気になるな」

ジョウゲンの言葉にアナザーバイスは後頭部を掻きながらも答える

「いやあ、流石の俺つちも少ししか分からないのよ不思議な事が起こったくらいしか」

アナザーライダーを除きハルトと密接に繋がりがあある、バイスでもわからないと答えられたら本人に聞くしかない

「俺も気になるんだよ、パラドお前は何者だ？」

「さあ？分からない」

予期せぬ解答に言葉が詰まり沈黙が支配するので耐えられず

「お、教えてアナザーW!!」

困った時の検索エンジンに頼る

『おうよ！んじゃ説明するとだな』

このパラド、どうやら俺から生まれたらしい：いやそうだけでも！

「どう生まれたか知りたいんだよ」

と聞くと説明してくれた

『えつとなー』

皆忘れてると思うが俺の種族は怪人王

あの後アナザーW達も気になって調べてくれたのだが怪人王とは過去、現在、未来にいる仮面ライダーの敵である怪人達の種族特性を宿した種族らしいそれは仮面ライダーエグゼイドの敵であるバグスターも例外ではないとの事だが

「何でパラド?」

グラフィイトやゲムデウスのように原典があるバグスターが生まれるなら解るがパラドは少し来歴が異なる、彼は言わばバグスターウイルスの原種から生まれるがそれは人の身で取り込めば即死しかねない危険性のあるウイルスの抗体を持つものにか生まれえない筈だが

『それはお前の中にあるのが原種だからだろうな、それとお前のスキルも関係している』

「前に冗談で言ったウイルス持ちがマジになるとは…ってスキル？」

『ほらアレよスキル『怪人生成』って奴』

「ああ…あつたな」

カリユブデイスを生み出してから出来たスキルだよね、けど下級戦闘員しか出せない筈と分析していたが

「それが無自覚に発動したんじゃないの？」

「そうなのか？」

バイスの言葉に頷いたハルトであるが

「けどどうして？」

「それなら分かるぜハルト」

「え？」

「お前は最近は何んや愛する人に囲まれて幸せだが……それよりも長い時間孤独でいた……何なら歩み寄ろうとしたが人に拒絶されたから信頼出来ないでいるんだろ？ 猜疑心が強く他人に攻撃的、だけど誰かに必要とされたいって歪なピースで出来たパズルなんだよ」

「っ!!」

「ちよいちよい！いきなり出てきて何、俺は全部分かってますみたいな面すんなよ!!」

「俺もお前と同じハルトから生まれた、まあお前は負の感情、俺は正の感情からって違いがあるがな」

「何お！先輩として礼儀を教えてやる!!!」

「良いぜ、俺と遊ぼうぜ！や

「よせお前等！話が進まない!!……んじや何で仮面ライダーに変身出来るんだよ？俺の体質じゃ仮面ライダーには変身出来ない筈だ」

俺はアナザーライダーの力を無制限に受け入れられるが代償として仮面ライダーに変身出来ない弱点？を持っている、束とキャロルが作ったライダーシステムで変身出来ないのはその証拠だと、その問いにも待つてましたとばかりに答えた

「それはお前の願いだ、お前の【仮面ライダーに変身したい】って願いが俺を産んだんだ
アナザーライダーの器じゃなければ変身出来る訳だし」

「はあ!?!」

「えーとつまり、このパラドは魔王ちゃんの仮面ライダーへの変身願望が怪人生成ス
キルとバグスターウイルスで実体化した………って事？」

『掻い摘めばな』

ジヨウゲンが纏めた考えをアナザーWを肯定して頭を抱えた

「ややこしいが、これでウオズ達もパラドが味方って分かったな」

「はっ!」

「んで、ありや何だ?」

「えーと…ウル○ラマン?」

「っ、フィーニス!!」

「あ……」

後悔したが遅い、この男の特撮ヒーローオタク魂に火がついてしまった

「何だと!! 遙か宇宙の星にある光の国から僕らの為に来てくれたのか!! こうしちやいられないなバイス! パラドついて来い! 出迎えるぞ!! 来たぞ我等のウルト○マン!」

「おう!」 「ああ心が躍るな!」

「ウオズ任せたぞ」

「御意」

走り出そうとした3人を見てヤクヅキはため息を吐いて指示をするとウオズは冷静にマフラーで縛り上げたのであった

「「ぐえ!!」」

「やっぱり全員魔王ちゃんから生まれたから特撮ヒーロー好きなんだねえ」

「そうじやおお…これで面倒を見るバカが3人に増えたのおウオズ?」

「そうですねやれやれ…」

「おいハルト様をバカ呼びとは不敬だウオズ」

「あとで言つてやろー」

「っ!ハメましたねヤクヅキ!!」

「さ、さあ何の事かのお?」

「くっ…!」

「あの魔王様なら怒らないと思いますよ?自覚してると思いますし」

「そんな事より話を始めて良いかしら？」

「「「「あ、はい」」」」

忘れてたと言わんばかりにサンジェルマンが会話に混ざる

曰く、あの巨人はアダムが解放した神の力が「神殺し」と言う哲学兵装を持っている
立花響に流れ込んだ結果、神殺しの巨人となったとの事だが

「なーんだウルト○マンじゃないとか…マジないわー」

「ほーんとね」「白けるぜ」

あからさまにやる気を失ったハルト達を見て

「この残念魔王は…危機を正しく認識してないのかしら…」

「ご安心をアレが慌てたら本当に危ない事なので…冷静なうちは対応可能と思っておりますよ」

「心強いのかそうでないのやら」

ハルト達のテンションは下がっていったのを見ていると説得力がない

「魔王ちゃんそんな事言ってる場合?アレを放つては置けないでしょ?」

「怪獣退治の専門家はいるが何とかしないとならんじやろう?」

「んー」

「因みに熱線を吐きますよ」

「それを先に言え!!」

聞けばプラズマ熱線を吐くらしい…正確に言えば歌、シンフォギアのエネルギーをプラズマ化した光線らしい幸いなのか俺達との戦いで護国災害派遣法は機能を失っている為か即攻撃とは言っていない模様だが目線の先には巨人がいるので危険なのは変わらない、いつ自衛隊が派遣されるか分からないし外国の連中が良からぬ企てをするか…

「どうすりゃ良いんだよ？」

アーク(ヤクヅキ)やアナザーコア1号(フィーニス)よりもデカイ…しかも俺の持っているアナザーデンライナーやキャツスルドランよりも巨大ときたので

『アナザーJ、いけるか？』

唯一同サイズまで巨大化可能なアナザーに話を振るが

『無理だな前回の戦いで大地の精霊達が力を弱めていてなジャンボフォーメーションにはなれないようだ…すまない』

「まあアレって奇跡の力で生まれたらしいから期待してもか」

仮に奇跡の力で巨大化しようものなら奇跡の殺戮者を名乗る妻がどうなるか分かったものではないし

「私に良い考えがあるわ」

と言うサンジェルマンであつたが

「ウオズ、なんか嫌な予感がする」

「同感です」

「SONGSと私達で共闘して押さえ込むの向こうの司令と繋いでくれないかしら?」

「やっぱり」

—————
そしてSONGSに通信して弦十郎に繋ぐと

【成る程、事情は理解した私達も協力させて貰おう】

「取り敢えず近隣の避難誘導と変な連中が動かないように牽制してくれ、それと無断の攻撃も辞めてくれよ刺激したら大変だ」

【了解した…一つ確認だが作戦はあるのか？】

「ある」

「そんなハルト…いつの間に作戦を考えてたの!!」

「作戦を考える頭があったのですか我が魔王!!」

「お仕置きー!」

『コネクト』

そうしたハルトは金だらいを呼び出して頭に落とすのであった

「つ! 申し訳ありません」

「よろしい…まあ正確に言えば彼女の立案だがな」

ハルトが通信機を繋ぐと出たのはキャロルと知るとエルフナインが変わる

【キャロル! 久しぶりです!】

『ああ……まったくオレ達にはお茶会してろと言っていてこの様かハルト?』

「い、いやあ……ごめん何か予想外な事があって…」

『構わんさ、寧ろ頼ってくれて嬉しく思うぞ…その最近忙しくて構ってくれないからな…』

「キャロル…」

『ちよつと2人の世界に入らないでよ!!キャロりん!!』

『私達からの報告もあるからね』

『んん!挨拶は抜きにして本題と行こう、オレの錬金術、束の科学、錫音の魔法から見てアレは簡単に言えば立花響と神の力が融合した状態、媒介は歌の力…つまり原理的にはシンフォギアを纏っている状態に近い』

【何だと!ならばアンチlinkerも効くのか!】

『理論的にはな、しかしアレを止める量など用意できんだらう?』

「そうね結社にもアンチlinkerの備えはあるけど、アダムが抑えてるでしょうから無理ね」

「俺達の所もキャロルが実験サンプルで持つてる分くらいだろうな足りないな」

『スプーンでトンネル掘るようなものだからね!』

【我々もマリア君達の必要分を考えると使用限界がある】

『第二にハルト達による音撃だな…理屈の上ではダメージが入る』

「流石アナザー響鬼達だな清めの音をぶつける訳か!」

アナザーアームド響鬼になれば攻撃出来るし

『いけなくはないが最悪、彼女事ドカンとなるかも知れないな』

「響を助けられなくて危険つてよ」

『だからプラン3で行くぞ、今のアイツは言うなれば立花響は神の力という病気に感染しているとなれば医者の出番だろう?』

「病気………あ、ああ!!」

『そう言う事だ、アナザーエグゼイドの出番だ』

成る程、言うなれば今の立花響もバグスターユニオンやゲムデウスクロノスに近い状態だならばとウオッチを手に尋ねる

「アナザーエグゼイド! お前のレベル1の力なら立花響を引き剥がせるか!!」

患者とバグスターを分離できるレベル1の力が効くはずだと

『可能だぜ! だがハルトが変身してくれても俺1人じゃ…巨人響はデカすぎる』

「問題ねえよ手術は一人でやらないんだろう?俺達はずっと一緒じゃねえか」

『ハルト…』

「アナザージオウIIの力で皆召喚するし俺も変身する、アナザーレーザーのレベル0の力で弱体化も行ける上にパラドのパーフェクトパズルで皆にエナジーアイテムを付与…出来るか?」

「出来るぜ、何だ俺も混ぜてくれるのか?」

「ああ一緒に戦ってくれ、お前の力が必要だ」

「ああ!俺達が組めば無敵だ」

「おう!…ウオズ達も援護を頼む」

「仰せのままに我が魔王」

「つまりハルトの持っている分離能力？みたいな力で立花響と神の力を分けると言うことね」

「となると奏者全員も含めた総力戦だが……もう一人欲しいな」

「そう言うと思って来たぜ！」

着地した場所にはアナザーゲイツリバイブ疾風に変身しナツキがいた

「ナイスタイミング!!」

「当然よ！勿論、俺も作戦に混ぜて……ぶう！」

変身解除したと同時に吐血して倒れたナツキに駆け寄る

「え!ちよつ、ナツキ!？」

「何事!まさかアダムの攻撃を受けたの!？」

【何だと!!】

サンジェルマンの言葉に皆が動揺しているが

「じ、実はリバイブ疾風に体が追いついてなくてさ…早くつかなきやと思って無理した」

ナツキがゲイツリバイブの副作用でボロボロだと知るなりカゲンはハリセンを構えて頭を叩く

「考えて飛べ!!」

「早くついても役立たないじゃ話にならないよナツキちゃん!!」

「カッターウイングで飛べるでしょう？」

フィーニスの言葉に思わず

「……………あ」

そうだったと溢れたナツキに皆がハリセンアタックを加える中ハルトは冷静に

「このバカがエルフナインを心配させるな、ほら見ろ」

【な……………ナツキさん…】

【エルフナイン落ち着きなさい！狼狽えたら終わりよ！】

【マリア姉さんが言うと言説得力ありますね】

【です—す!】 【うんうん】

【セレナ!? みんなも!?!】

映像を見ると顔面蒼白で気絶寸前のエルフナインがマリア達に介抱されている光景であった

「ハルト…:ジオウIIで…:治して」

「やなこった…:だがその心意気に免じて治療はしてやる」

『ドライブ』

アナザードライブに変身すると、救急車のシフトカー マッドドクターを呼び出し必殺技を発動した

『ヒツサーツ！フルスロットル！ドクター！』

「最初に言っておく死ぬほど痛いぞ！」

「え…い、いやちよつ、ま！」

同時にナツキの悲鳴が周囲に響いたのである

数分後

「し、死ぬかと思つた……」

「よく耐えたな…いや本当に」

本来のドライブでも全快に丸一日かかった奴なんだけど、そう呟くと

「そんな事よりハルト、俺はどうしたら良い!」

「ウオズ達と同じく攪乱と壁だ、アナザーエグゼイド達の手術が完了するまでネオタイムジャツカーの妨害に耐えてくれ」

「おう!」

「そうはなりませんよ魔王」

その声に全員が振り向くと同時に変身アイテムを構えた
「っ!」

「お待ちを戦う意志はありません」

「ネオタイムジャツカー!?!」

「お前等、何をしに来た!?!」

「答えは単純です、協力の打診ですよ」

「信じられるか！アダムと協力しておいて!!」

「先に潰してやるよ敗残兵が!!」

「そのアダムに裏切られたと言えば信じますか？」

「あ?」

「どうやら解決後に我々も切り捨てる算段を立ててるようですね先程の敗北で見切りをつけ肅正に動きました…逃げる為にドロイド軍はほぼ壊滅しましたよ、まあ再生産は容易なのでアレですが…彼等もタダではないのでね」

「お前たちもアダムに御礼参りがしたいのか？」

「はい、今回我等が貴方の邪魔をした理由は神の力を貴方に渡さない為でした。しかし立花響に力が譲渡された以上、彼女の中から神の力は消えれば霧散しますので敵対する理由がない…：それにアレを助けるのはアダムへの最高の嫌がらせでしょう?」

「ふーん……」

だが実際、この作戦の懸念材料だった奴が味方になるのは心強いし

「それに俺様の建築能力で戦いやすくなるぜ」

「盾でも何でも」

レックが変身するシーカーが持っている建築能力を使えば柔軟に立ち回れるだろうしメナスのシグマなら盾にも使えるか

「それに貴方と同じように私もエグゼイドの力はありますから」

懐から見せたジャツカルバイスタンプを見るとハルトは溜息を吐くが利用しあうなら妥当か、それと戦力分析だなと割り切る

「一時的だ、今回の件に関しては協力だ」

「感謝しますよ」

「我が魔王！」

「早計じゃ！せめて妾達で話してからでも！」

「いやいや考えてみるよ、あのネオタイムジャツカーが大嫌いな俺達に協力を頼むくらいにはアダムに腹が立ってるって事だろ？」

ハルトはヘラヘラ笑っているが理解している

クジヨーのように理屈で動くタイプは利害関係が一致してる間は裏切らないと

「ええ敵の敵は味方ですから」

「だから巨人響を何とかするまでは信用できる」

「…我が魔王がそう言うのならば」

「つー訳だ準備が整ったら作戦開始だ!」

ハルトの号令でそれぞれが準備に入るのであった

そして各組織の長達と作戦だが

まずアンチ linker を貯めたトレーラーが巨人響に体当たりして適合係数を下げる

次にウオズ達と奏者が持ちうる火力で足止めを開始、シーカーは並行して即席で足場や防御拠点を建築して時間稼ぎ

そしたら俺がアナザーエグゼイド達を召喚して 巨人響を攻撃して分離させる

念の為 予備の計画もあるらしいが今は置いておこう

「あの巨体をレベル0で何処まで下げれるかだな」

アナザーレーザーが持っているレベル0の力それは力の抑制と弱体化、触れるだけで相手のレベルは下がるしスペックも落ちる幾らレベル1で殴り続けても時間がかかりすぎる上に響が完全に飲み込まれてたらゲームオーバーなのだから

「大丈夫かなあ……」

『心配ならテンションの上がる音撃で場を盛り上げてやるぜ!!』

『俺達の出番だあ!』

『ライブをやるぞお!』

『アナザー響鬼達! お前等は空気読め!!』

自信がないと呟くがいつも通りと安堵する

「ははは……ま、何とかなるか!」

今までも何とかなってるし!と鼓舞すると

『そうだな俺達を…アナザーライダーを信じろ!』

「酷いなあ、お前達を疑った事はねえよ相棒」

『そうだったな』

「さて、戦う前に腹拵えだ飯作るぞ!」

『いや休め』

そんな話していたら

「少し良いでしょうか」

「いや良くねえなあ」

クジヨーが来たので怪訝な顔つきになる

「酷いですねえ今は味方ですよ」

「今回ただだろ俺は馴れ合うつもりはない…何せキャロルの件だけじゃないからな、白騎士事件もテメエの仕業だろ？」

「ま、私達もですがね…おや驚きました事実気づいてましたか？」

「たりめーよ相棒の情報収集能力舐めんな」

「そうでしたね…」

「だから殺す、東の夢を汚したお前達は必ず殺す」

「まあ良いでしょう…本題ですが以前ISの世界で暴走した支部長の件で謝罪をと思いましてね」

「ん?…ああセイヴァーか」

セイヴァー、IS世界で俺を重症に追い込み師匠、東、千冬に倒された奴だな途中から寝てたから事後報告で聞いてるくらいである

「ええ最初の攻撃が失敗したら引くようにとは言ったのですが、まさか無断で二次攻撃…しかも私への謀反を企んでいたとは思ってもなくですね」

「ま、あの件に関しては師匠に目をつけられた時点でセイヴァーは詰んでたさ…お前が

謝るような件じゃねえ」

「そうは行きません、一応は組織を束ねるものですからね」

「んじや今回の件で手打ちだ」

「ふふ…それで良いのなら、ふう…これで次からは遠慮なく戦えます」

「そーかい、んじや俺達も遠慮なく潰してやるよ」

「ええ…そうではなくて面白くないですからね貴方は私達が倒すべき敵なのですから」

では後程と言ったクジヨールを見送ると

「やっぱ信用なんねえな」

『そうだな』

「戻るか」

『ああ』

そう呟くと仲間達の元へと戻るのであった

そして作戦開始の時を迎える

それは新たな幕開けと共に一つの関係の終わりを示していた

原初の男は神の力を狙い、歌姫と錬金術師は仲間を助ける為に

そして魔王達には……

その日の夜空には獅子座

レグルスの星が光り輝いたと言う

オペレーション・ハッピーバースデー!!

さて、巨人響を助ける今回の作戦名なのだが

「オペレーションハッピーバースデー!!」

「ハルト、あの会長の真似をしなくて良いぞ」

「これに合わせてケーキ作ろうと思ったんだけど？」

その言葉に魔王軍の指揮が上がったのは日頃の行いか彼のスキルの賜物か知る人ぞ知る

「そうですとも我が魔王！私のライバルの話はしないでもらいたい！」

「え？会長がライバルだったのウオズ？」

「彼は祝う達人ですから私としても負ける訳には参りません、我が魔王の生誕日も近いのですから」

「お、おう……しっかしアイツ等と共闘する羽目になるとはな」

眼下には作戦準備の為にギガントウエポンで建築しているシーカーと指示をしているジユウガがいた

「予想外でしたね」

「そんだけアダムへの恨みがやばいって訳だろうさ」

「ま、今はかな」

取り敢えずは信用しているが

「うむ」

「……時間です我が魔王」

「おう！」

『ジオウⅡ』

変身するとアナザーライダーを召喚した

「頼むぜみんな!!」

『エグゼイド』

「ノーコンティニューでクリアしてやるぜ！」

『ブレイブ』

「これより神の力切除手術を開始する！」

『スナイプ』

「ミツション開始！」

『レーザー』

「ノリノリで行っちゃうぜ！」

『ゲムム』

「コンティニューしても…クリアする！」

「パラド！」

「ああ心が躍るな！」

『PERFECT PUZZLE』

「変身」

『DUAL UP! PERFECT PUZZLE!』

アナザーパラドクスに変身し終わると同時にトレーラーが激突したのだろう爆炎と緑色の煙が上がるのであった

「よし第一段階は成功だな、みんな頼んだ!」

「お任せを我が魔王!」

『ファイナリー』

「変身!!」

『ザモナス! ゾンジス!』

『へえんしいん!』

『コア(1号)』

全員が変身を終わると挨拶変わりどアナザーコアは火球を投げる

『アナザー…：エクスプロージョン！』

ファイナリーは周囲に隕石を降らせ足止めすると同時に背後から3人のライダーがライダークリックを放つ

『『TIME BREAK！』』

しかし巨人響は反撃にとプラズマ熱線を放つが

「させねえよ!!」

『GIGANT HAMMER』

シーカーが地面を強く叩き壁を作ると熱線の射線を上へと逸らしたのである

「いけや！取り巻き二、三号!!!」

「うるさい!!!」

シーカーが防御した2人はかつてはポセイドンとなっていた自分が魔王の元へと馳せ参じようとした場所でボコボコにしたことを思い出す、しかしその後きちんと御礼参りされたので因果を感じるが、きちんとライダーキックを叩き込みと

「ヤクヅキ先輩!」

「たあ!」

『WAKE UP!』

そしてダメ押しにと足にエネルギーを溜めたアークのライダーキックは巨体と威力から体を仰反る巨人響に向かいアナザーエグゼイド達とアナザージオウIIは動き始める

「たあ!」

アナザーエグゼイドの飛び蹴りは予想通り巨人響にダメージを与えるが巨人響はブラズマを吐こうとしたしかし

「悪ノリが過ぎるぜ立花のお嬢ちゃん!!」

「この私を差し置いて神を名乗るなど烏滸がましい!!私の神の才能に!!ひれ伏せえ
!」

同じように飛び蹴りを行い巨人響にしがみつくアナザーゲムとアナザーレーザー、彼等のレベル0の力は巨人響を弱体化させるが巨人故に弱体化速度は遅い かし

「俺の出番だなゲム、レーザー受け取れ!」

支援役（パラドクス）がいれば話は変わる

『分身』『分身』

「でかしたぞパラドお！」

「よっしやあ！このまましがみ付くぞ神！」

「よく言った」

「チョロいな行くぞ！」

アナザーパラドクスがパーフェクトパズルの力で投げつけた分身のエネルギーアイテムによりアナザーレーザーとアナザーゲムは分身して弱体化速度を早める。しかし巨人響も負けじと腕を振り回すか

「はあ！」

アナザーブレイブの一閃がその腕をバターのようには切断する

「俺に切れないものなどない!!」

「受け取れブレイブ!」

『伸縮化』『マツスル化』

「感謝する……たあ!!」

同時に剣が巨大化するとそのまま振り下ろして切り傷をつける

「出番だ無免許医!」

その戦いぶりにアナザースナイプは射撃しながら感心するが同輩に負けてはられないと

「パラドクス!俺にもエナジーアイテムを渡せ!」

「分かってるよつと!」

『鋼鉄化』『高速化』『マッスル化』

「はああああああ…たあ!」

アナザースナイプがレベル1状態でのみ使える弾丸になる力を使い鋼鉄化により自らを徹甲弾とかし高速化とマッスル化で速度と威力を上げた一撃は巨人響の傷口に命中し巨大な風穴を開けたのだ

「!!!」

ダメージは入っているのを見るとアナザースナイプは叫ぶ

「ハルト!!」

「行こうぜパラド…超絶奥義!!」

『エグゼイド ウィザード MIXING!』

パレードに合わせるならエグゼイドも悪くないが隣に立つなら俺はあの誇り高き龍戦士が良いと思った、それにこの技は彼の誇りだ形は違えても友の為に振るうなら彼も許してくれるだろう この技名を名乗るのも！

「ああ！」

『マツスル化x3』

『ウラ技…デュアルガシャット…』

「ドドドドドド！紅蓮爆竜剣!!」

『アナザースラッシュ!!』

「たあ!!」

『PERFECT CRITICAL COMBO!』

アナザージオウⅡの紅蓮爆竜剣は赤竜となり突貫するエネルギーを背にしてアナザーパラドクスがライダーキックを巨人響に放つ

「!!!」

胸部に入った一撃は大ダメージと隙を作るには十分であった

「今ダア!!」

そう言うと本体のアナザーゲムとレーザーは着地して構える

「フィニッシュは必殺技で決まりだな!」

「神の力は俺が切除する!」

「これでミッションコンプリートだ」

「ノリノリで行っちゃうぜ!!」

「神は1人で良い、私こそが神ダア!」

『ANOTHER CRITICAL FINISH!』

そう言うのアナザーエグゼイド達は高く飛び上がりライダーキックを叩き込み巨人響に強烈な一撃を与えた

「一件落着!」

かと思われたが

「!!!!」

「はあ!?!」

普通に立っていて怒りの咆哮を上げていた

「うっそだろ！アレだけ食らって何で倒れねえ…」

『ハルくん！巨人はアンチlinkerを反転させて吸収する事で自分のエネルギーにしているよ!!』

『そのエネルギーで防御した訳だな』

「マジかよ」

『一応レベル0の弱体化はしてるしレベル1の分離ダメージは入ってる…後は彼女の意思を目覚めさせる何かがあれば良いんだけど』

「よしみんな一旦解散！」

アナザーエグゼイド達を引っ込めると通信機を起動する

「風鳴弦十郎、イレギュラー発生だ足止めはするが予備計画とやらを進めてくれ」

「分かった、すまないが君たちのガンシップを借りれないか此方のへりより早くつける」

「了解だ機長！今から指定する座標に最短で迎え！」

「イエッサー！」

さて、と作戦が始まるまで時間稼ぎと行くかな

「つつつても切れるカードが少な……くないな」

『まあそうだな』

伊達に手札の多さがウリではないと呟く

平成と令和のアナザライダーを仲間に行っている為か巨大な奴との戦い方は多いのだ

「よし、パンクジャック!!」

『イエエエエエエー!!』

「力貸してもらおうよ」

『OK! ロックンロール!!』

『パンクジャック…モンスター』

アナザージオウIIはアナザーパンクジャックに変身してモンスターバツクルを装備した

「っしやあー!」

『一応聞くが何考えてる？』

「モンスターバツクルなら必殺技でデカブツを一発KO出来る」

『脳筋か!!確かにアナザー響鬼の音撃では傷つける可能性はあると聞いたしアナザーJも巨大化出来ない以上は此方も対抗手段がないのは分かるが、このピンチをそのカボチャ頭に任せる気なのか!』

『ライダーマシンによる攻撃を提案する』

『いや、俺のブレイキングマンモスの出番だ!』

『失礼しちゃうなあディケイド先輩達は…普段はふざけてるがな俺だって命かけて助けてくれた恩人に頼られたら報いたいんだよ!!』

「それにアナザーパンクジャックなら…外部と通信をしながら戦える状況把握にはうっ

てっけだ」

『…よし行けカボチャ頭!』

『OK!行くぜベイビー!』

「先手必勝!!」

『MONSTER STRIKE!』

「だあ!」

巨大化した拳が巨人響に届いて体制を崩す事に成功したがアレに耐えるか…なら

「怪人召喚スキルで…呼ぶか」

体格が近い奴を呼ぶしかないと腹を決める

『何を？』

「エラスモテリウムオルフェノクとか、クライシス要塞とか、ケツアルコアトルドーパン
トとか？ブラキオザウルスドーパントとか？」

巨大怪人の名前を羅列していくと

『止せ！別の意味で世界が滅ぶぞ！！』

「だよねえ」

ウオズ達も懸命に足止めしているがやはり…体力にも限界がある時間の問題であり
ガンシツプが間に合うかどうかだ

「……………どうしよう」

焦りが始めた時にアナザーパラドクスが肩を叩く

「ハルト、もう忘れたのか？」

「え？」

「言つたら？俺達が組めば無敵だって」

パラドの言葉を反芻する

「無敵…むてき…:…ムテキ…っ！そうか！そう言う事か!!」

「おう！行こうぜハルト！」

「ああ！」

突き出された拳を重ねると同時にパラドはバグスターウイルスに戻りハルトと融合

すると瞳が赤く染まるそしてアナザーエグゼイドウオッチを構えると

【条件達成 アナザーエグゼイド・ムテキ解放】

何処かで聞いたような声が新たな力を目覚めさせた黄金の力がハルトに流れこむ

「みんなの運命は俺が変える!!」

ごめんなさい、今だけはこの言葉を使う事を許してください…

「ハイパー……大変身!!」

ウオッチを起動したと同時にアナザーエグゼイドに変身、加えて金色の装甲が付与された金髪ロングのような出立ちはアナザーの不気味さを引き立たせるがライダーの歴史においては最強の名に相応しい力を有するもの

『エグゼイド…ムテキー!』

アナザーエグゼイド・ムテキゲーマー

それには思わずウオズも手を止め祝う

「祝え!我が魔王の目覚めし力!その名もアナザーエグゼイド・ムテキゲーマー…また一人新たな最強アナザーへと変身した瞬間である!!」

「祝う暇があったら攻撃せい!」

「今回ばかりはヤクヅキ先輩に同感です」

「そんな…私から祝うことを除いたら何が残るのですか!!」

「手を動かせ(してください)!!」

とツツコミをする2人を見てシーカーは冷めたような雰囲気でザモナスとゾンジスに訪ねた

「なあ…お前等って、いつもああなのか？」

「大体あっている」

「様式美だね」

敵にすら驚かれているのだから何も言えない

「行くぜ！」

同時に短距離ワープで巨人響に肉薄してアナザーパンクジャックが殴った部分を追加で殴る

「たあ！」

それは技でもないただのパンチである、しかしムテキの力とヒット数を操作出来る能力を合わせれば

H I T H I T H I T H I T H I T H I T
H I T H I T H I T H I T H I T H I T H I T
T H I T H I T H I T H I T H I T H I T H I T
H I T H I T H I T H I T H I T H I T H I T!!

一発のパンチでもアタタタタタタ！と打ち込めばダメージとなるのは言うまでもない

!!!
「!!!」

その反撃に巨人響がプラズマ熱線を吐こうとしたが

「ヤッせませんよー!!」

『POWERED GEMOM EDGE!』

ジュウガが頬の部分にライダーパンチを叩き込み光線の方向を逸らすのであった

「つと……ムテキですか？相変わらず厄介な進化ですねえ行きますよ魔王」

「俺に命令すんな!!ま、フィニッシュは必殺技つてね!」

『ANOTHER CRITICAL SPARKING!』

「立花響!貴女の中にある神の力、消させて貰います!」

『アメイジングフィニッシュ!!』

逢魔王国とネオタイムジャッカー不倶戴天の敵同士である両組織の長が手を組み放ったダブルキックは遂に巨人響をKOする

「よっしやあ!!」

「さて、あとは頼みますよ…ではレック、メナス帰りますよ！」

「おーよ！んじやな取り巻き共！次会う時はボコボコにしてやんよ！」

「それはこっちの台詞だよ」「ああ」

「フイーニスもだが…また戦えて嬉しかったぜ」

「黙れ、今の僕は魔王様の臣下だ」

「だったな、錫音にも宜しく頼むぜ」

そう言うところシーカーは建材から転移門を作り離脱したのであった

「さて……後は予備プランってのがどんなのか………ん？」

空を飛ぶガンシップから何かが落ちてきたな…つて人じゃん!!

「響————!!」

それは小日向未来…まさか彼女の親友が紐なしバンジーやってきたとは思わなかったが

「未来さん!!」

ナツキはアナザーリバイブ疾風に変身すると空を飛び未来を抱き抱えた

「きや…!な、ナツキ君!」

「俺が彼女の元まで運びます!!」

「うんお願い!!」

「ここだけ見ると完全に主人公とヒロインであるが恐る恐る通信画面に目線を向けると」

『……………』

それはもう良い笑顔でいるエルフナインさんがいるのではないですか：最近怖いよあの子、キャロルに似て少し嫉妬深いし：いやなまじナツキの純愛度から見てヤンデレの素養があるな真面目な子ほど怖いのは把握しているが

「響—————！お願い目を覚まして!!!」

「響さん！目を覚ましてください！」

「立花響！早く目を覚ませ!!でないとなツキが殺される!!」

「え？どういう事!？」

皆が呼びかけると巨人響は徐々に消えていき最終的には彼女と神の力は分割され彼女と未来は一緒になる

これでめでたしめでたしとは行かないもので

『ハルト大変だ！アメリカから反応兵器が発射されたゾ！』

「反応兵器？」

『核兵器のようなものだよハルくん!!』

「何い!!」

【すまない！どうやら神の力と魔王を排除しようと米国の過激派が反応兵器を発射した】

弦十郎の通信で事実と分かる

「さいっあくだあ!!!っーか空気読めや連中も!!」

頭を抱える此方も戦力を消耗している、今から逢魔にいる三人娘を呼ぶ訳にもいかな
いし

何なら反応兵器とやらは汚染とかも引き起こすから迎撃で爆散ともいかない広範囲
の戦略兵器と来た

「こっうなつたら……私が!」

サンジェルマンが飛び出す

「待て!何をやる気だサンジェルマン!!」

「死を灯す……この身が新たな地平の礎と「やれやれ」人だけとは寂しいことを言つてく
れるワケだ」っ、ブレラーティ!カリオストロ!貴女達生きて!」

「アダムの計画を知ってたから逢魔に潜伏してたのよお」

「私はそのお陰で命拾いしたワケだ」

「そう……」

「1人では行かせないわよ行くなら3人で！」

「ああ」

「ええ、では「ちよい待て」ハルト？」

「何が良い感じで行こうとしてる？亡命を反故して借金踏み倒す気かな？」

「！！！！」

「何の事？」

「い、いや何でもないわよ!」

「そ、その通りなワケだ!!」

「今、プレラーティイの治療費請求とカリオストロが3人の亡命を提案してるのですが?」

「2人とも?」

「これはアレだカリオストロが話せ!」

「ちよつと!酷くない!!あーしはアレよ!亡命して逢魔に行けば色々便利かなあと思つたのよ!」

「フロンティアの研究も異世界技術も研究し放題なワケだ!」

「本音は?」

「食堂でござ飯食べたい!!」

「素直だなあ……いやまあ確かに言っただけども」

「はあ……けどどうするの？ 反応兵器を止める方法なんて他に」

「それこそ心配するだけ無意味なワケだ」

「そうよねえ〜」

「おいハルト、反応兵器を何とかしろ」

プレラーティの発言に思わず

「えええええええ!!あのさあ! ナツキもだけど皆、俺を何処ぞの猫型ロボか何かと思っ
てんだろ!! いつもいつも無茶振りしやがって!! もういやだああああ! 逢魔帰ってみ
んなと平和に過ござしたいよー!!」

『おいアナザーダイケイド!!相棒のメンタルが壊れかけてるぞ!』

『ああ…ゲーム病に感染してたら即死レベルのストレス値だ!』

『相棒の情緒は今日も不安定だぜ!』

『『『言ってる場合か!!』』』』

まさかの無茶振りに不満の声を出すが解決策なんて思いつか…あ

「もう頭来たから、この反応兵器はアメリカに返品してやる!!」

俺達を狙って撃ったんだから自分の国が吹き飛ばされて文句はないよねえ?

『ダイケイド』

アナザーデイケイドになるとオーロラカーテンを出して

「反応兵器でホワイトハウスごと消し飛ばす大統領（プレジデント）!!!」

アメリカに反応兵器を送り返して爆散させてやろうとすると

「すまないが国際社会の影響を考えてくれないだろうか？」

「やなこと因果応報天誅、撃つてよいのは撃たれる覚悟のある奴だけ…なら撃ち返してやるだけよ!! ついでに滅べ！」

弦十郎の静止も聞かずオーロラカーテンを開いたが

『あの人達ならしないで、そんな真似は絶対にな』

伊達に長年一緒にいるからか相棒の説得も慣れたものであるハルトはも少し頭が冷えたのか

「んじゃ、宇宙へ飛ばすか」

しょうがないと遠い宇宙に飛ばすのであった

余談だがこの転送された反応兵器はとある銀河系にあった死の星なる惑星破壊兵器の一部を破壊するに至った事は誰も知らない物語

「これで終わりだな！」

満足満足と頷いていたのだが

『大変だハルト！』

「今度は何さあああああ！」

もう泣きそうな声で反応したのだが

『さつきからエルフナインが俺の話を聞いてくれないんだよ未来さん抱えたのは作戦の為だつて言ってるのに浮気したのかつて言つて聞かないんだよ!! 何とかしてくれよハルえもん!!』

「……………」

ブチ…とハルトの中で何かが切れた

「知るかボケェ!!」

『ATTACK RIDE GIGANT』

G4のギガントを呼び出して馬鹿(ナツキ)目掛けて4発発射した

「のわあああああ!マジで撃つ奴があるかツツコミにしては過激だぞ!ギャグパートじゃなかったら死んでるわ!!」

『ハルトさん！ありがとうございます！』

「エルフナイン!？」

「礼はいらんさ義妹よ、面倒事を人に全部丸投げしといて彼女じゃない女とイチャコラしてる奴など…トライドベンダーで引き摺り回してやる!!」

「女の子とイチャコラする事に關してはお前にだけは言われたくねえよ!!あと罰ゲームが鬼畜じゃない!?だから魔王って言われんだよ!!」

「黙れ！アナザライダー達はスピーダーバイクやアナザートライドロンで引き摺り回してる分慈悲だと思え!!」

「理不尽!!」

ナツキと騒いでいるとサンジエルマンが恐る恐る近づいてきて

「その…一応は感謝するわありがとう」

「礼なら働いて返せ」

「それは……」

サンジェルマンからしたら異世界とは言え宮使えになるのは己の過去の複雑なものである

「まあ、その話は後だ今は取り敢えず」

「ええ」

アナザーディケイドとサンジェルマンは己の敵対者へと相對する

「あいつを潰す」

「賛成よ」

「やはり危険な存在だよ君は、排除させてもらおうさ常葉ハルト!」

珍しく激情に駆られているアダムに対してハルトも負けない怒りの感情をぶつける

「その台詞そのまま返してやる、俺はイライラしてんだよ少し八つ当たりにつき合えやアダム!!」

『王蛇……SWORD VENT』

サンジェルマンが小銃を発砲して隙を作るとアナザーデイケイドはアナザー王蛇に変身、ベノサーベルを呼び出すとアダム目掛けて突貫するのであった

星に願いを

???

前回のあらすじ

パヴァリア光明結社とネオタイムジャッカーと手を組み破壊神ヒビキを止めることに成功したハルト達。しかしアメリカからの反応兵器を対応を終えたのも束の間、ついにアダムが現れ、物語は最終局面へと動き始める

「らあ！」

「ふん！」

ベノサーベルの一撃は錬金術の防御とカウンターにより止められ弾き飛ばされた

「効かないよ僕にはね」

「そうかい」

「調べてるからねネオタイムジャッカーが、鏡がないと能力が使えないんだよね？その形態だと」

「それはどうかかな？」

「何？？」

「鏡ならあるだろ？大きな鏡が！」

「このフィールドを何処だと思ってるやがる反射できるものなんて沢山あるんだよ!!」

「まさか！ガラスの破片から!!」

「判断がおせえ！」

『ADVENT』

カードを握りつぶして海面から飛び出したエビルダイバーがアダムに体当たりを行い地面に叩き落とした

「く……」

「頑丈だな……まあ良いよその分俺の仲間達が受けた痛みを味わいな！」

『ADVENT』

「!!!」

待つてましたとばかりにメタルガラスで体当たりを行いアダムを吹き飛ばす

「ほら行け」

『ADVENT』

「!!!」

呼び出したベノスネーカーがアダムを締め殺す勢いでとぐろを撒く、ミシミシと音がなるが

「くー…おのれ人間が!!」

アダムは神から完璧と言われた力で僅かな隙間を作り抜け出したのだが

「そうだよお前を殺すのは今まで見下してきた人間の力の結晶だ!」

『UNITE VENT』

具体的にはとある女の子の書いた絵が生み出したモンスターであるが、融合したジェノサイダーによる攻撃には流石のアダムも防御に専念するしかなかった

「んじゃ「ハルト！」あ？」

「俺にも手伝わせてくれ!! 奴には借りがある」

ナツキの目には真剣な意志がこもっていた…恐らく何処ぞの周回で酷い目にあつたのだろう全く

「しやあないな、ほらよ」

ナツキにあるウォッチを投げ渡した

「つと…これ…アナザータイクーン!？」

「除染と調整は完了してるから好きに使え、そいつがお前とが良いってさ」

『ぶぶぶぶ、フラれてやんの…あ、ちよつと待って!!』

ー構うもんかお仕置きーー

『ぎゃあああ!!』

そんな展開など知らないナツキは

「サンキューハルト!!…頼む力を貸して!」

『タイクーン……ニンジャ』

アナザータイクーンに変身して双剣を構えると

「いざ参る!!」

分身の術を使いアダムの周りを走り回り攪乱し始めた

「分身してる?」

「な、何だこれは!!」

「緒川さんとの忍術特訓の成果だ! 見ろアダム! これがお前が見下していた人間の力だ
!」

「ほお…長年の鍛錬でこのような動きができるのか人間とは…残念だよ、君達など最初から超えているのさ! この僕は!!」

「そうか……忍術特訓したのかシノビ以外の奴と!!」

『今その話をしてる場合!?!』

ナツキはドヤ顔しているのだろうかアナザージオウは現実逃避をしていたがアダムは面攻撃でアナザータイクーンを倒すがそこには本物はいない

「ど、何処に！」

「余所見してんじゃねえ!!はあ！」

アナザータイクーンは真上から双剣で斬りつけてダメージを与えると蹴り飛ばして間合いを作り

「行くぞ忍法！火遁の術！」

印を結んで火を出そうとしたが

ポツ……

出たのは指先からマッチ棒レベルの火であった

「あ、あらあ……まだまだ修行しないとだなあ……あ、あはははははー！」

「コントか!!」

『バッファ……ゾンビ』

『ZOMBIE STRIKE!』

「ふん!!」

アナザーバッファに変身してゾンビフォームの必殺技を使う、現れた巨大な手がタイクーンを驚掴むと近くの壁目掛けて投げたのであった

「あべしー！」

「はあ……まったく」

少し頭が冷えてきた、ナツキの体を張ったコメデイのお陰でというのは皮肉だが……と
眩くとゾンビブレイカーを肩に担いでアダムを見る

「仕切り直しだアダム」

「一難さつてまた一難つてものかな？」

「さあな『おい魔王』ん？何だよアナザーギーツ」

『俺のオリジナルの力も他の奴らと同じようにアップデートされたんだ使ってくれ』

『おい待てギーツ、ここは俺の力をだな』

『お前の力、仮面ライダーにしか効かないだろ怪人とか他の奴らにはちよつと強い位で
役立たないし』

『黙れ!!お前だって副作用があるじゃないか!』

「喧嘩は後で、んじや対ライダー戦で期待してるよバツファ……今は頼らせてもらうぜ
!!ギーツ!」

『ギーツ』

アナザーギーツのエントリーフォームになると

「んで新しい力つてのは?」

『取り敢えず頭上に気をつけろ』

「頭上?」

そう言われて上を見上げるとお馴染みのアイテムボックスが落ちてきた

「つてえ!!」

狙い澄ましたように顔面へと

「てて…んだよこれ？」

開けてみるそこには金色のスロットを模したバックルが入っていた

「へえ、なかなかご機嫌な奴だな…つて何処から落ちてきたの？」

『熱心なファンからの贈り物だ、それはファイバーベーススロットレイズバックル性能は…実際に試してみろ』

「おう！」

バックルを挿入しようとしたら

「させるか！」

「あ!!」

アダムの攻撃による衝撃波でバツクルが飛んでいってしまった

アナザータイクーンの足元へと

「え?これって……う、うん!反転!」

『 / ニンジャ 』

上下を入れ替えるとアナザータイクーンがファイバーバースロットを装填したのである

「あ、待てそれ俺の!!」

「えいー！」

『フィーバースロット／ニンジャ』

「……………あれ？」

音声のみで何も変化のない現状に首を傾げていると誰に言われたのか

「……………こうか！」

アナザータイクーンはスロットのレバーを倒すと凄い勢いでスロットが回転を始めていく

中ではMAGNUM ZOMBIE NINJA BEAT MONSTER
と凄い勢いで回っている
???

それを見て理解したのかハルトは不機嫌な声で言う

「おいギーツ、俺を化かしたな」

『何の事だ魔王』

「あのバックル、タイクーン用だろう？運任せの力は俺とは相性が悪いからな」

実際に俺が見つけたアイテムが小型バックルのみなのに対してマグナムやブーストをタイクーンは引き当てている、実際はタイクーンの運気を上げる能力らしいので相性は良いだろう……俺の運が悪いとは認めないがな

『バレたか、そうだファイバースロットはアナザータイクーン用だ』

そう示すようスロットが止まる

N I N J A

『JACKPOT HIT! GOLDEN NINJA』

出ると新しい装甲と金色のマフラーがアナザータイクーンを包み込んだまるで大当たりを祝う景品かのように

「うおおお！なんか力が漲ってきたあ！改めて忍法！火遁の術!!」

先程と同じ忍術を放つと今度はマッチ棒ではなく火炎放射器を思わせるような炎がアダムの体を包む

「す、すごい……これが……新しいバツクルの力か！行くぜ！多重分身の術！」

アナザータイクーンは数十人規模に分身するとアダムに襲い掛かるのであった

「ギーツ、んじゃアップデートしたってのも嘘か？それなら選手交代だぞ」

『いや、それは本当だ』

「んじゃ、どうやんだよ」

『簡単だ、この世界は俺が守る！と強く熱い思いと共にブーストバツクルを掲げろ』

「え？地味に難易度高くない？」

そんな主人公みたいな感情は胸から湧き上がらない件について……

「無理だあ、俺にはそんな思いねえよ……」

迷惑かけられ、かけた記憶しかないと何ならさつきも反応兵器を打ち込まれたしとボヤくと

『なら何でも良い、お前が本気で守りたいものをイメージするんだ』

「俺が本気で守りたいもの」

それなら簡単だとブーストバツクルを天高く掲げた

「逢魔王国に住む者達とアナザーライダーの大馬鹿ども……そして」

『おい誰が大馬鹿だ』

『そうだ！馬鹿なのはバイスだけだ！』

『ちよっ！それってハルトも馬鹿と言ってるよ先輩達い!?!』

『はー!』

『はあ……だから馬鹿と呼ばれんダヨ』

いつも通りのやりとりに安堵すると同時にだ

「こんな俺を慕ってくれるみんなを守るために!!」

すると、ゴーン!ゴーン!ゴーン!とまるで教会の鐘のような音が聞こえると宇宙から何が飛来してきた大気圏から来ているからか摩擦熱を帯びてきている

—————

同時刻　　ここではない何処か

「アレは……まさか!!」

そのハルトの映像を見ていた白スーツに身を包みメガネをかけた男は慌てて懐から取り出したカードを見て驚愕した

「なるほど…:そう言う事ですがナツキ君、君はつくづく私達を楽しませてくれますね」

そのカードにはこう書かれていた

『自分が本気で誰かを守りたいという願いを叶える力

常葉ハルト』

「彼の死に戻りが魔王のエントロピーを加速させてこんなイレギュラーを生み出すとは予想外です」

【それで今回はどうするつもりだ？】

「流石に今回は自分も動かないといけないね」

【そうかい観測者が当事者になるのか】

「せざるを得ないでしょう、まあ必要ないと思えますがね」

そう言った男はアタッシュケースを持つと何処かへ転移したのであった

—————

「アレは何だ!!」

「え? ブーストバツクル?」

アダムとタイクーンも驚いているが何より驚いたのは

「え。えええええええ! ブーストバツクルを天に掲げたら宇宙から新しいブーストバツクルが降ってきた!!」

『お前の熱い思いに答えて未来からブーストバツクルが飛んできたぞ』

「そうなのか!!」

『アナザーカブト、あれハイパーゼクターと違うブーストバツクルや』

当の本人であった、そしてそのブーストバツクルは吸い込まれるようにアナザーギーツのブーストバツクルと合体する光終えたその手に現れたのは

新たなブーストバツクルであった

「こ、これがアナザーギーツの新しい力」

『名付けてブーストバツクルマークⅡだ試してみる魔王』

「……おう！」

空いたバツクルを装填しようと構えた時

「最終決戦なら私も混ぜてくれないかしら？」

「ハルトさん私達も一緒に戦います!!」

サンジェルマンと響が変身して隣に立つ

「病み上がりは引っ込んでろ」

「そうはいきませんよ折角、ハルトさんとも手を繋げるかも知れないんですから！」

「……………キャロルの時に繋いだような気もするけど、まあ良いや足引っ張るなよ」

「はい！」

「んじゃ気を取り直して『ミスターナックルマン!!』え……………は？」

思わぬ音声にアナザーギーツは二度見してしまったのである、まさかこれがキャロルが搭載した変身音声か!!

「たあ!!……………いやあ、やっぱりこういう音声があると良いですねぇ〜翼さんも『天下御免!』とか以外と気に入ってましたし……………クリスちゃんには何故か不評ですけど」

「和風な音声が好きなら電子的な英語音声とかあるよ? 束なら喜んでつけるさ」【BREA

K
D
O
W
N
【S
H
O
T
R
I
S
E】とか色々」と

イガリマを振る自称常識人と相棒のシウルシャガナを振る奏者がピクリと反応したのは向かっていた成り行きでアナザー1号に乗せて貰った面々からしか知らない

「あ！良いですねえ！ならイグナイト用の音声も欲しいです！」

「イグナイト……黒……暴走……」

『アンコントロールスイッチ！ブラックハザード！ヤベーイ！！』

「い、いやあああああああああああ！！！！」

「ハルトさん!?!」

『ま、まずいハルトのトラウマスイッチが入ったぞ!!』

『こいつきアンダーワールドの絶望した瞬間って妹達からのイジメじゃなくてハザードの暴走シーンなんだよなあ…』

『家族からの迫害よりもハザードの暴走がトラウマなのか…このオタクは…』

「あのそろそろ仕事をして貰えますか!!時間稼ぎも限界なんですけど!!」

「お…お喋りはおしまいか…んじや行こうかい」

「あの大丈夫でしたか?何か錯乱されてましたが…」

「狼狽えるな!!」

『それは、お前だけだ』

アナザーギーツは新しいバックルをドライバー擬きに装填した

すると赤い星がアナザーギーツに装甲として合体する

その姿はまるで返り血を浴びた妖狐

『ブーストマーク2』

アナザーギーツ・ブーストフォームマーク2

爆誕！

「その姿は何だ!!」

『俺達はアナザーギーツ、この言葉をお前は信じるか?』

その言葉と同時にアナザーギーツはアダムの懐に肉薄して

「オラオラオラオラ！」

拳の連打を雨霞のように浴びせる、ブーストバックルマークⅡの力で強化された
フォームの一撃一撃は他の最強アナザーに負けずとも劣らぬ威力を誇っている

「(い)ふう……(い)のー！」

「これはクーデターを起こされた分！これはそのせいで遠征費用が嵩んだ分！これは護
国なんちゃら法で死ななくてもよかったトルーパー達の分！これがプレラーティにバ
クタタンクを使った分！そしてこれが!!」

『ブーストストライク!』

「ハザードのトラウマを思い出させた分だあ！」

『私怨じゃねえか』

アダムの容姿がめり込むばかりの一撃が顔面に入り宙に飛び上がるのを見てサン

ジェルマンは小銃を打ち込む

「これは今まで利用してくれた分よ!!」

「がっ!」

「今だ立花響!」

「はい!! たあああああ!」

『クルミスパーキング!』

「あれ? 必殺技の音声までキャロル入れてたの?」

そしてダメ押しとばかりに放った顔面への一撃はアダムを捉え近くの無人区間まで吹き飛ばした

「っしや!」

『まだ終わりじゃないぞ、追撃だ!』

「おう!」

走り出そうとした時にアナザーギーツから質問された

『……………なあ魔王、お前の体には何も無いのか?』

「ん?何も?強いて言えば少し眠いなくらい?コーヒー飲めば治るくらいの眠気だな」

『嘘だろ…………』

「何で?」

『その力は反動が凄くて慣れるまで体への負荷が凄いだよ』

「具体的には？」

『本来の変身者が最初の戦闘後に倒れるくらいの負荷だ…本人曰く早いスピードで動きすぎたことによる時差ボケらしいが…』

とんでもねえデメリットありじゃねえか…速さによる時差ボケ？

「速さならクロックアップや重加速とかで慣れっこだからなあ…何なら俺ってワームとかロイミュードみたいに速さの世界の住人でもあるし」

適応している辺り自分の体の恐ろしさを理解していると

「我が魔王！」

「お！みんなー！」

ウオズ達と合流する

「ご無事で……っ！しまった！アナザーギーツの新形態を祝いそびれるとは一生の不覚！！」

「ウオズちゃん祝う暇あつたら戦おうよ」

「うむ！」

「そんな私から祝う事をとつたら何が残るのですか!？」

「俺の右腕」

「っ！我が魔王!!」

「魔王ちゃんつて人たらしだよねえ」

「うむ！」

「まあ乗せられてる妾達も他人の事は言えんがの」

「それで魔王様、アダムは？」

「ああ、あそ……こ？」

あれれ……おかしいなあアダムが殴り飛ばされた所に巨大な羊？牛頭の化け物……バ
フオメツト？が立っている

「許さんぞ魔王!!!!」

俺名指しでキレてるんですけど!!

「誰ですか貴方は!!」

「アダムよ」

「嘘でしょ!? アダムって第二形態持ってたの!? すごい親近感湧くんだけど!!」

「いや変身形態あるのが当たり前だと思うなよハルト!?」

「え? 昨今は沢山の強化形態があるのは当たり前だろ?」

「何処の常識!？」

「あんなの見かけ倒しだろうがよ!」

「待てハルト!!」

立ちました! 相手を過小評価しての突貫は敗北フラグです!

ブーストマークⅡの加速力でそのままドロップキックを叩き込むが

「うっそ！」

「今まで通りいかないよ!!」

キッチンと受け止められて投げ飛ばされたのだ

「がつ！」

「ハルト!! つ分身の術!!」

アナザータイクーンは分身して多方向から攻撃したが

「効くと思うな、同じ技が!!」

アダムは冷静に広範囲攻撃で全てを対処したアナザータイクーンも吹き飛び変身解除される

「くっ！」

「でしたら、この辺りはどうですか！」

『アナザーエクスプロージョン!!』

太陽エネルギーを収束した熱光線を放つがアダムは錬金術の防壁で凌ぐとカウンタートばかりに光弾を放った

「っ!!!」

「解析済みなんだよ君達の攻撃パターンわね！」

「なら……新しい攻撃で攻めれば良いんだよ！」

其方等手数がウリだと新しいアナザーライダーへと変身しようとするが

「っ！」

急に倒れて膝を突くと変身解除してしまう

「時間切れ？こんな時に!!」

「嘘でしょ…これまじい」

「ジヨウゲン！カゲン！フィーニス！我が魔王とオマケを助けなさい！」

「はいよ!!」「任せろ!」「はい!」

「俺オマケ!？」

「おいウオズ、妾は？」

「アレの相手を頼みますよ時間を稼いで下さい!」

「かかか！良からう…じゃが別にアレを倒しても構わんかの？」

「それ死亡フラグですよヤクヅキ」

「問題ない、高々人間規格で完璧を誇っている程度の輩じゃ誇り高きレジエンドルガの足元にも及ばぬよ」

「フラグにフラグを重ねていくう！」

「そんな先輩に痺れる憧れますう！」

「ジヨウゲン、フィーニス！ふざけてる場合じゃない！」

「いやあ…何というか…ごめんヤクヅキ頼んだ」

「無論じやとも伊達に魔王軍最強とは名乗つとらんさ…変身！」

『へえんしいん!』

アークに変身してアダムとパワー勝負に移行した隙についてジョウゲン達が助けに入り安全圏まで下がると同時に

「戻るぞ!」

「いやいや魔王ちゃん今の体じゃ危ないって!」

「今は休んでください!」

「けど!」

「奏者達も足止めに参加しています…少しでも今は休むべきかと」

「……………わかったよ…んじゃ対策考えるぞアナザーW、地球の本棚で探してくれ」

『問題ねえ、調べたからな!』

「グツジョブ!」

『調べた結果だが奴の弱点は』

「弱点は?」

『ない!』

「アナザーW……君には失望したよ」

まさかこんな大事な場面でふざけるとは

『いやいや本当にないんだって!!』

『俺も調べたから保証するぜハルト』

アナザービルドにも言われたので納得すると

「そうか…なら毒とかは？」

『効かない事もないが少し動きを止めるくらいだな』

「んじゃアダムの攻略法は初見の必殺技で殺し切る事か…ん？待てよアダムが急にフェニックスに思えてきたぞ、よし！」

『太陽まで飛ばすか？』

「フォーゼのコズミックでワープしてからなら…行ける？」

『出来んわ!!』

『それにネオタイムジャッカーからの情報提供で今いる俺たちの能力は割れてるだろうぜ』

「けっ、やっぱりアイツら余計な事しやがったな」

そうなる最強アナザーもダメという事になるな…しかしブーストマークⅡに対応出来てない所を見ると

「情報の鮮度次第って所か」

『ああ……』

「さて、どうしたものか」

『ハルト』

「どうしたアナザーフォーゼ？」

『……空を見ろ』

「ん？いつもの星空だな」

『獅子座のレグルスが輝いているぞ』

「悪い、俺にはどれが獅子座かわからないんだが……レグルスって確かアレだろ王の星って奴……ジオウで覚えた」

『そうだ、それが凄い輝きを出しているのだ』

「レグルス……輝き……っ！まさか！ウオズ、ナツキ！悪いお前達のウオッチを貸してくれ」

「はっ！」「え？おお」

「ジオウゲン達はヤクヅキに加勢して時間を稼いで！」

「はっ!」「了解!」「お任せを!」

3人が変身したのを見送ると

2人からアナザーウオッチを受け取り自分のジオウIIウオッチと一緒に自分の中に
ある力を三つのウオッチに流し込むと空のレグルスから光が降り注ぎウオッチの中か
ら新しいアナザーウオッチが現れたのである

「こ、これは!」

「マジで!?!」

「何か行ける気がする!!」

トリニティ始めました？

ハルト達の元にレグルスの光が降り注いでいるのは離れたアダムと奏者、錬金術師、魔王軍達からも見えていた

「何だアレは…」

翼の眩きにジヨウゲンが答えた

「レグルス…」

「何？」

「間違いない！レグルスの光が魔王ちゃんの所に降り注いでるよ！！カゲンちゃん！」

「そんな！今日が逢魔の日だったのか！」

「何じやと!!それは重畳じや!ハルト坊がアナザーオーマジオウに目覚めればアダムなど軽いデコピンで消滅よ!」

「えええ!何ですかそれ!」

「前から思ってたけど彼って何処へ向かってるのよ…」

「跪け愚民共!魔王様が過去、現在、未来全てを統べるアナザーライダーの王になった瞬間を!!」

「いやフィーニス、ウオズちゃんのセリフを取らないであげて!」

「あのお…逢魔の日って何です?」

「大雑把に言えば魔王ちゃんが最強無敵の大魔王ちゃんになる日…かな」

「今と何が違うのよ？」

「うん、並行世界全てに戦争するようになる」

「本当に大魔王ではないか!？」

「異世界に逃げた諜報員を探すために、その世界の人間を塵殺するようになるが…別に
対した変化ではないな！」

「対した変化なワケだ!!あの能天気が本当の魔王になるのか!」

「なるほど…だが覚醒前に叩けば良い!いくら強くてもね!!」

そうアダムが飛び立つ為に放った衝撃波で皆の変身が解除されてしまう

「うっ……くっ……」

「魔王の手土産に君達を倒すとしよう力を裏つた礼をしなければな…まずは君からだ神殺し!!」

「っ!!」

その拳が響に振り下ろされる事はなかった

「!!!」

突然 虚空からドラブラッカーがアダムに体当たりをして弾き飛ばしたのである

「まったく騒々しいっいたらありやしねえなあ!」

「そう言うなよ心躍るだろ、こんなシチュはさ」

「うるせえ俺はお前の気持ちかわからねえよ」

「はは！そう照れるなよ」

そこに現れたのはパラドと

「魔王ちゃん？」「ハルト様！」

普段より暗いオーラを放っているハルトであった

「ん？よおお前等、久しぶりだな」

「あれ何言ってるんの魔王ちゃん？ボケた？」

「ああ…そつかそつか会うのは初めましてか？アイツはハルトだよ…鏡の中のな」

パラドの言葉に全員がハツとした

「鏡の中って…ミラーワールドの魔王ちゃんって事!？」

「では本物のハルト様は！」

「本物なら彼処で不思議な光に包まれてる」

「まさかアナザーオーマジオウになるのか？」

「んや、つつても俺も詳しく知らねえんだよなあ…」

「あの光では何が起きているのですか！魔王様は無事なんですか！」

「安心しろ俺がいる限り死んではない」

「では一体何が…」

「いや新しい力を手に入れたんだが、ウオズがどう祝うか考えてんだよ」

「そーそーだから俺達も時間稼ぎに混ぜて貰おうつてな」

「は？」

時は遡る事 数分前

「うおおおおお！ やつぱり新しいウオッチが出来たぞ！ これならアダムに対抗できる
!!!」

「よっしやあ!!」

「祝え!! 全アナザーライダーの頂点に…いや違うな…これは我が魔王単体でこそ意味のある事…そうなると祝え！」

「あのウオズさん早く行きましようよ！」

「ナツキ君、君も分かるでしょう！ この新たな歴史が創成された瞬間を!!」

「確かに驚きましたが、今はそんな事を言ってる場合じゃ」

「んじやお先ー」

「待つてハルト！ウオズさん止めてよ！お前の言うことしか聞かないんだからさあ！！」

「けど俺も回復しながらだから遅くなるからパレードと君にも手伝ってもらおうよ…つと
！」

近くの石を窓ガラスに放り投げて壊すと甲高い音を聞き笑顔になるとアナザー
ウオツチを起動しガラス目掛けて投擲、すると鏡の中から伸びた手がウオツチを掴むの
であった

『リュウガ』

「おいテメエ、いきなり呼び出すとはどんな要件だ」

鏡から現れたハルトは不愉快な顔をしているが

「皆を助けてくれ頼む」

「はあ……………行くぞパラド」

「はいよ」

根は同じ存在なので以外と素直なのである

—————

「つてな感じで…」

「「「早くっいやー!!」」」」

「いや新しい力に目覚めたら来てくださいよ!!」

魔王軍全員の心が一つになった瞬間である

「あいつら今は試運転中だからさ俺達が遊び相手になってやるよ」

『DUAL UP! KNOCK OUT FIGHTER!』

「まああいつには借りもあるしな………それにあいつは俺達を守ると言ったがな俺達の王（ハルト）は俺達（アナザーライダー）が守るって決めてんだよ!!」

『リュウガ』

パラドクスとアナザーリュウガに変身した2人はアダムを倒さんと攻撃を開始したのである

—————

その頃

「ふう……いやあ！窮屈な世界からおさらば！……と言いたいですかね」

先程まで違う世界に居たはずの白スーツの男がシンフォギア世界に現れたのであつた

「さてさてさーて、私の推しがそろそろ目覚める時ですね…頑張つてほしいですよ、まあ私は私の仕事をしますがね」

—————

そして戦いは一方的でもあつた

アダムの攻撃はアナザーリュウガの反射攻撃により封殺され、アナザーパラドクスのエナジーアイテムにより強化、妨害を続けられるアダムにはそもそも勝ち目は薄い

「ははは！大した事ねえなあ！」

「油断するなよパラド…つつてもそろそろ真打登場だな」

「おっ！来たか！」

「何……が！」

騒々しいエンジン音と共にアナザートライドロンがアダムに体当たりして吹き飛ばすと

『BATTLE MODE』

アナザーオートバジンがロボット形態になりタイヤから機関砲を乱射した粉塵が上がる中

アナザートライドロンから下車した男

「俺、参上!!」

ハルトは大見得切って現れたのである

「ハルト坊!」

「魔王ちゃん!」「ハルト様!」

「お前等、待たせたな!いや本当ありがとう」

「いえいえ対した事では…」

「お前たちもありがとうな」

ハルトはパラドとアナザーリユウガに話すと

「ああ当然だろ」「ふん!」

「あんがとよ選手交代…するか？」

見たら結構アダムはボロボロであるのだが

「しなくても良いがな…しかし」

「おのれ魔王!!!」

アダムは傷が回復しながら立ち上がるのである

「適応されたな、俺達の攻撃も効かなくなったな」

「関係ねえ、今日の俺達には獅子座のコズミックエネルギーが漲ってるからな」

『まあ俺の力は使わないがな』

「あれ？お前ホロスコープスになった？」

「なつてねえよ……見てろコレが俺達の新しい力だ!!」

『ジオウ』

ハルトはアナザージオウになるとレグルスの光から生まれた新しいアナザーウオッチを起動するのであった

それは原典が存在しないアナザーウオッチ、それを逆側に装填するとウオッチについているダイヤルを捻ると現れる異形の三人

『ジオウ！ゲイツ！ウオズ!!』

するとアナザージオウ以外の場所2箇所にも光の柱が登る

「な、何だアレは！」

アダムは驚く中、ハルトは本家ジオウのポーズを取り決める

「三つのアナザーの力…お借りします！アナザートリニティ!!」

『ハルト、それ違うトリニティだ』

「こ、これは…」

「何じゃこりや!! って俺は肩あ!」

「あ、やっぱり俺の顔が動いた!」

『ジオウトリニティ』

何処からか飛翔したアナザーゲイツとアナザーウオズの仮面がアナザージオウの両肩に装着される、さながら死仮面を思わせる容姿に合わせアナザージオウの顔が胸部に

収まると新しい仮面には怒りの形相を思わせるマスクが装備される

三位一体の王 アナザージオウトリニティ

「な、何だその姿は」

「わ、我が魔王と融合！このような光栄なことを……」

「おい何で俺は肩なんだよ!!」

……

「そりやジオウトリニティですし俺がメインなのは当然でしょう」

「てか何でお前そんなに冷静なんだよ!!普通なら一つの体に沢山の精神とかびつくり仰天するだろう!!」

「いやあ…前に滅亡迅雷の4人と合体したりしたしそれに…何とか肉体のシェアと

か今更で」

『まあ年単位で俺達と入ればそうなるか』

「それもそうだな…って何でアナザライダーの皆さんも此処に!!」

『此処はハルトの精神世界とも密接にリンクしているからな…よく来たな歓迎するぞ』

「勿体無いお言葉です」

「いやいや!こんなに沢山いるんだったらハルトも慣れるよそりや!!だってちよつとしたテーマパークじゃん!!あそこでカボチャの人がライブしてるし!」

『アナザーパンクジャックは最近スピノフで主役になったからな浮かれているのよ、そしてこの光景がハルトの日常だ』

「…………ハルトの奴結構苦労してるんだな」

『まあ俺達の器でもあるしな…さて粗茶だが用意する少し待っている』

「いや俺達今戦闘中!!」

『そして見てくれ！最近ハルトの心のデッドスペースを利用した収納スペースを作ったのだ!!』

「こ、これは凄い！」

「確かに凄いけど俺達にしかわからない!!」

「いや何、人の心の中にゆとり空間を設けてんだよこいつ等は…」

「あの…ハルトさんどうしたんでしょうか？急に一人芝居初めて…」

「きつと疲れているのよ私達の所為かしら…」

「そうなんですネ」

「違うよ2人とも今、魔王ちゃんの中にはウオズちゃんとナツキちゃんが融合しているんだよ！」

「な、なんだと!!」

「そんな…何だその姿は!!」

「これ「ひれ伏せ!」ウオズ?」

「祝え!!どうやら3人のアナザーの力が結集し多分!新しい歴史を生み出す時の王者!その名もアナザージオウトリニティ!きつと新たな歴史が創成された瞬間である」

「……………なあ、それって本当に祝えてる?」

『カマシスギ!!』

「私達を散々待たせた祝詞が悩んでそれですか?…みんな大変な思いをして戦ってるのに先輩最低です」

「(・皿・)」

「ちよつ、ウオズ!?!」

「う、ウオズちゃんが顔文字でリアクションした…:…だど!」

「フイーニスから初めてのダメ押しで少し凹んでいるな」

「いや大分凹んでおるじやろ」

「この…こけ脅しがあ!!」

「危ない!!」

アダムが巨体を揺らしながら走り出し拳を振るうがアナザートリニティは右手のみで受け止めた、地面には逃した衝撃や大気の揺れが起こるが当の本人はケロッとしている

「そんな!」

「怖くねえな」

「いや怖いんですけど!俺右側担当だからあの威力を至近距離で見えたし!!」

「このパワーなら行けます!我が魔王!」

「おう!見てろアダム!パンチはこうすんだ右手で撃つべし!撃つべし!!」

アナザートリニティは右側アナザーゲイツ側からの右ストレート、右フック、右アツ

パーと執拗に右側から攻撃を行う

「これ絶対に嫌がらせだろ!!」

「何言ってるんだ？左側で殴ったらウオズが痛いだろう!!その辺お前なら良心が痛まないから助かるよ!もっかい撃つべし!!」

「俺にもその優しさを少し分けてくれませんか!？」

「えく……んじゃコレで」

『アナザーパワードノコ』

右手に現れた武器を見て

「え!何で俺の武器が!!」

「アナザートリニティは変身してる奴の武器を使えるのか、こりや良い!」

「おのれええええ！」

「右手で撃つべし!!」

『ノコ切断!』

アダムは地面を踏みつけ振動波を放つがノコ切断の一撃で相殺し間合いを取る

「しかし我が魔王、こうも言います…左を征するものは世界も征すると！」

「そうか…んじゃ行くぞウオズ!!」

アナザーパスワードノコを投げ捨てて左手を前に突き出すと

「はっ！」

『ジカンデスピア！ヤリスギ！』

「俺には、やっぱ槍があつてみたいだな」

「この武器…凄く久しぶりに出したような気がします」

「気のせいだろ！行くぜ行くぜ行くぜ！」

「この程度お!!」

アダムは突如、分裂個体を生み出しアナザートリニティに襲い掛かるが

「何の!」

『カマシスギ!』

鎌モードに変えると横薙ぎ一閃で分裂個体にダメージを与えるが本体は瞬時に回復する

「やるね、だが傷つかないよ！僕の体はね!!適応してるのさ！」

「ならこうしましょう『アナザージカンデスピアの刺突攻撃は適応出来ずに食らうアダムなのであつた』」

「何を言つて…」

「では我が魔王どうぞ」

ウオズが出したと書かれた内容を見てハルトは笑みを浮かべ

『ヤリスギ！』

「そう言うことね!!!せいやあ！」

槍モードに変えて刺突するとアダムは適応した筈の攻撃を食らうのであつた

「無駄だよ、僕に……っ!!! そんな！僕の体に何をしたあ！」

「別に、ただその完璧な力にも限度があるって事だろ？」

「実際は未来ノートによる確定した未来宣告なんけどな」

「っ！ふざけるなあ！僕は完璧なんだ！なのに貴様等みたいな不完全な生命体が何故あの方達に選ばれたのだ!!」

「貴様まだそんなことを！」

「えー1人だからじゃねえの？」

「何？」

「1人だから自己完結する、完璧だから先がないからだよ不完全でも歪でも誰かに手を伸ばせれば先だってあるのにな……」

『ハルト…』

「それに俺単品だと最弱だし…皆に助けて貰わないと生きていけないって自信と自覚はあるから安心してくれ!!」

『俺達の精神汚染を現在進行形で無効化している奴がそれを言うか?』

「……ふざけるな!!僕が神の力を得なければこの世界だって滅ぶのだ!それをあの小娘達が奪ったのだ!「興味ねー」なんだと!」

「世界の運命とかどーでも良いよ俺は俺の特別とその居場所を守るって決めたんだよ、もう皆をいなくならないようにまた離れて遠くへ行つてしまわないように……弱くて何も出来ないで弱い自分のままで後悔なんさしたくねえ!」

「ならば僕に逆らつた事を後悔して死んでいけえ!!」

アダムは拳を振り下ろすがアナザートリニティが目にも止まらぬ速さで鎌モードにし片腕を切断したのである

「それは飽きたよ十年近くしてたらな」

「立ち止まる暇があつたら目指すんだよみんなが笑ってる最高最善のハッピーエンドをな！」

「私の後悔は我が魔王の新しい力の覚醒を祝えないくらいですね…このアナザージオウトリニティの祝詞は別で考えましょう」

「ブレないなあウオズは」

「な、なんだと…っ！」

『ツインギレード ジオウ…ゲイツ MIXING!』

「行くぜ俺達の必殺技!!」

槍モードにしたツイングレードから現れた弦を引っ張ると巨大なエネルギー矢となるエネルギーチャージが完了するとアナザートリニティは矢を放った

『アナザーツインスラッシュ!!』

その一矢はアダムに命中すると巨大な時計の紋章がキバ宜しく地面に現れると同時に爆砕したのであった

「ふう……一件落着!!」

「そんな訳ないだろうがあああああ!!」

「っ!」

と最期の悪あがきで攻撃をしようとしたアダムだったが

「たあ!!」

歌いながらアダムは殴り飛ばされた

「ナイスタイミングだぜ響!」

「はい!お待たせしました!」

そこには黄金のシンフォギアを身に纏った響がいたのである

「黄金錬成だと…錬金術師でもないお前があ!!」

「……錬金術で金作るのがって違法なんじゃ」

「いや金を作るのが錬金術の最終到達点みたいなものだからな!」

「じゃあアダムは長年勉強してた自分の得意分野でもぼつと出の人間に負けたのか…何かここまで来ると哀れだな」

「き、きさまあああああああ！」

肥大化していくアダムを冷めた目で見る

「皆さんの力を私に貸してください！」

「勿論だよ！んじゃ行くぜ2人とも！」

「俺に命令すんなよ…ウオズ！」

「はっ！『アナザートリニティと立花響の必殺技になす術なく爆散するアダムであった』」

「さてアダム…お前の運命はこれまでだ!!」

「人でなしならその手は繋げない!!」

アナザートリニティウオッチにあるボタンを3回押し込む

『ジオウ！ゲイツ！ウオズ！』

そしてアナザージオウウオッチを押し込むと三色のエネルギーが両足に貯まると同時に飛び上がる。するとアナザージオウ、ゲイツ、ウオズの3人が分裂したように幻影が現れるとその力は1箇所収束される

その間に響が何度も殴打してアダムを宙に打ち上げた。その技の名前はTESTAMENT

人と神との誓約を関する技を受けるのは、人でないアダムへの最高の皮肉である

そして人でなしには同じ人でなしからの餞別を

『アナザータイムブレイク／バースト／エクスプロージョン!!』

低い音声と共に放たれた三位一体のアナザーキックはアダムの胸部に命中、その威力に吹き飛ばされたアダムは背後にある緑色の箱に閉じ込められると箱が爆散したのであった

「ぎゃあああああああああー！」

と爆散するアダムの悲鳴に

「かーかかかかー！良き悲鳴じゃな、その一点だけは完璧と認めてやろうではないかアダムとやら!!」

「レジェンドルガの価値観的にはそうでしょうけど…って魔王様!？」

2人は着地するとアナザートリニティは変身解除となり3人は倒れようとしたが

「つとセーフ！お疲れ様、魔王ちゃん」

「ありがとうジョウゲン」

「危ないなウオズ」

「まあ次こそはキチンと祝いますよ」

ハルトはジョウゲン、ウオズはカゲンに支えられるナツキは響に抱えられたが

「だ、大丈夫ですかナツキさん！」

「あ、ああありがとう響助かったよ…けど」

『ナツキさん、また浮気ですか？』

「いや違うからエルフナイン！俺はお前一筋だから!!」

『……ま、まあ仕方ありませんね今回はカラオケに行ってくれたら許してあげます』

「勿論だよ！何回でも行こう！」

『はい！』

「みんなでさ！」

『ハルトさんお願いします』

「この男は一夏レベルの鈍感だったのか？いやまあ何とか

「あいよ…」

あの覇気にはキャロルに通ずるものを感じた直勘だが逆らってはいけないものだ

「いやちよっ！俺何か変なこと言った!？」

「死に戻ってやり直せ」

「あの死闘をリプレイしろは拷問だよ!!」

ハルトは普段から持っているISシェイプシフターを介してバックのように格納されているガトリング型武装 GX-05 を取り出した

『1 3 2』

と打ち込むと【解除します】の音声と共にロックが外れると直ぐに組み立てて構える

「ハルトさん……何で銃口を此方に向けてるのでしょうか!？」

「いや鈍感男に制裁をと思つてな、何安心しろゴム弾の大バーゲンだ」

「いやそれ安心出来ません!」

「痛みは感じないぞ」

「え? そうなのそりゃ」「ガトリングは痛みを感じずに死ぬ銃と言われているからな」っ
!!

「逃すか」

ナツキは顔面蒼白となり逃げようとしたがハルトがGX-05の引き金を引く方が早かつたのである

「ぎゃあああああ!!」

鈍感に仕置きが完了した所で

「ふう……さてアナザーW、調べて欲しいことがある」

『了解だ任せろ』

—————

その頃 とある場所にて

「ははは……助かったよ間一髪のね」

アダムがズタボロになりながらも歩いていたあのバフオメットの体をダミーにして爆散する事で死を偽る事に成功したのだ

「今度はうまくやる……復讐してやるぞ魔王め」

しかしアダムの決意は無駄なものへと終わる

「ダメですよ、ちゃんと死んでなきや」

「何?」

アダムの視線には白スーツの男がいたのである、その顔は柔和に見えるが心中には何も言えない虚無感があった

「だ、誰だい君は?」

「さあ?…まあ強いて言えば魔王の物語を紡ぐものかな」

「さては魔王の仲間か!」

「いいや、けど彼の運命と願いを叶えたいと願う……そうだなフアンのようなものかな」

「何者かさっさと答えろ！」

アダムは錬金術で攻撃するが白スーツの男は右手で払うように軽く振ると錬金術は方向を変えて着弾したのであった

「なっ！」

「何者ねえ、私が介入するのは今回だけのゲストみたいなものだけど…強い名前を名乗るなら」

そう呟きながらもケースから取り出したのは

一つのドライバーであった

『ヴィジョンドライバー』

「火野カグ槌、まあ仮の名前だけど…しがないただの神様擬きだよ」

「神だと……巫山戯るなああああ！」

しかし火野の防御によつてやはり防がれる

「ふざけてるのは君だよりアリティィを汚したのだ用済みの役者には退場願おう……それがこの世界の意思だと知れ」

火野はそのまま右手親指でドライバーにある生体認証機能付きのボタンを押す

『GAZER LOG IN』

軽快な待機音と共に腰についているプロヴィデンスカードを取り出すと宙に投げると両手を広げると落ちるはずのカードが浮遊（イメージはクロノス変身時のクロニクルガシヤット）しながらドライバーにあるリーダーからスキャンを開始するのであった

「変身」

『INSTALL INNOVATION & CONTROL GAZER』

同時に現れた5つのユニット　ドミニオンレイが両肩、胸部、両膝に装着されると白と金の装甲を纏う戦士が現れた

全てを取り仕切る異邦人

仮面ライダーゲイザー

「さて、かかってきなさい」

「ほざけええええ！」

そのまま右手から高速のパンチを放つのだが両肩のドミニオンレイが分離され即席のバリアを形成する

「な、なんだと！」

「想定通りかな、まあフェニックスファントムのような適応と再生能力を得た世界とは思わなかったが」

「な、何を言ってる…」

そんな中 遠くから

「おいこの辺なのか？」

「間違いないよ」

ナツキとハルトの声が聞こえるではないか

「貴様、まさか最初から!!」

「いいやコレは予想外かな、これで終わりだよ独りぼっちの人でなしさん」

!!!
」

アダムは再度ボロボロの体で殴りかかろうとしたが

『DELETE』

ゲイザーは読み込んだカードから抽出したエネルギーによるカウンターキックの一撃のみでアダムを吹き飛ばしたのであった

「お、おのれえええええええ!!」

そして今度こそ爆散したアダムを見送っていると走りながら近づく音が聞こえると

「っ!」「おいおいアダムを一撃か」

「何故？」

「へへ」

同時にハルトの手元に戻ったバットショットとスタッグフォンを受け取る2人を見て火野はしまったという顔をする

「さて…お前はだ…あ、新しい仮面ライダーだとお！一体何処の作品から…いい、いや違うか…よし！サイン貰えませんか（お前は何者だ）!!」

「ハルト本音と建前が逆だよ」

そのコントを見ながら背にして立ち去ろうとするゲイザーをナツキは追いかけてやるとするがハルトは静止する

「っ！何でさハルト！」

「消耗してる俺達2人と得体の知れないライダーとの戦闘なんて勝敗決まってるじゃ

ん、それよりも今は事後処理だ…無闇に敵対行動する意味ねえだろ」

「何とか怖い実感籠ってるね」

「それして話こじれたのが良い経験だからな」

「あ、あはは…そ、そんなことより調べないとだね！」

「それはお前だけでやれ、俺は祝勝会の準備で忙しいから」

「え、ええええ！」

「その後、留守中の書類整理に報告会議それとパヴァリア結社残党の後始末やら色々ありますか？」

「失礼しました!!」

「ん……またな」

そして舞台から離れた火野は変身解除すると

「ミッシヨンコンプリート、では次の世界へとポータルを……おや？」

（たすけて……だれか……たすけて）

「ふむ、誰かは知りませんが助けを求める声を聞いたら放っておけないのが魔王ですから……次はその世界にしましょう、そう言えばこの世界には異世界に繋がる聖遺物がありましたね、それをこうして……と」

『おいおいどうする気だ？』

「何、新しい冒険の始まり……世界を滅ぼす災害を救う1人の少年の物語と……魔王と救世

「主の異世界共闘ですよ」

『ほお楽しみだな』

「お望みなら舞台にあげましょうかケケラ？」

『お！前向きに検討させてもらうぜ』

「ええ是非…では皆様、またお会いしましょう」

次回 祝勝会

祝勝会

アダムを倒してから数日が経ち世界は平穏を取り戻し始めていた

対外的にはサンジェルマン達は反応兵器を止める為に命をかけたと公表し元凶のアダムは倒した…のだが

「アレ結局誰だったんだろう？」

白と金の仮面ライダー…何処となくサウザーに近い印象を受けるので何処かの仮面ライダーよりも高性能モデルなのは間違いない問題は敵か味方だけである

「ま、その辺はまた会ったら聞けば良いか」

俺達は現在、拠点の引き払いを行なっている全て片付いたので逢魔に帰る為なのだが

「戦利品は賠償金くらいか…後は」

「少し良いのかしら？」

そこにいるのはサンジェルマン達、彼女達はカリオストロとの交渉通り逢魔に亡命という運びになっている、主に錬金術の研究や逢魔国内でクーデターを企てた反乱者の統括も頼んでいたりするのだが実を言うと話には続きがある

アダム亡き後結社は分裂し一部は逢魔へ一部はネオタイムジャツカーに流れた

俺達の派閥は言うなればオーズ布教に伴い伝道師と呼ぶ連中の事でネオタイムジャツカーについてはオーズを邪教呼びする愚か者が流れたと

また両者につかない派閥は現在国連が対処を検討しているらしいのだが十中八九討伐とのこと

「そこで一つ提案なのだけど、その未所属派閥を取り込みたいからこの世界に暫く残り

「たいのだけど構わないのかしら？」

「え！うーん……」

確かに人材は喉から手が出る程欲しいのは事実であるが危険も大きい

「大丈夫よ厳密に言えば踏ん切りついてない派閥を説得するだけよ」

「それなら……大丈夫だな、よし頼んだよサンジェルマン」

「あとプレラーティとカリオスト口も連れて行くけど構わないかしら？」

「一応聞くけど、そのまま逃げるような真似はしないよな？」

「しないわ誓っても良い」

「それなら構わないよ……念の為にコムリンクを渡しとく何かあったら連絡してくれアダ

ムを一撃で屠った謎のライダーの事もある無理はしないように」

「わかったわ、ありがとう魔王」

「気にすんな……よしコマンダー！」

「はっ！」

「アレの準備は出来てるか？」

「無論です！全員今か今かと待ち望んでいます！」

「よし、ではコレから祝勝会だ!!コマンダー！会場設営は任せたぞ！俺は料理を拵える
！」

「サーイエツサー！野郎とも！ついてこい!!」

「さて…サンジェルマン達もた「是非いただくわ」お、おう」

食い気味で思わず引いてしまったが、これも新しいいつも通りかなと苦笑するのであった

あと取り敢えず奏者達も呼ぶことにした一応は協力した訳だしな…んで

「呼んでくれてありがとうなハルト！」

「アホか、お前は配膳担当だリバイブ疾風になって皿を運べ高速で中身をこぼさずにな」

「そんな!!」

「日常の中にも鍛錬あり…とは誰の言葉だったか忘れたがお前は働け、んでリバイブで動ける時間を伸ばせ」

「っ！成る程任せろ！」

「本当にチョロいな」

そして

「みんな！飲み物持った？よし今回の遠征お疲れ様！色々あつたが今回は俺達の勝利だ！……長い挨拶は嫌われるから……行くよ！」

とハルトはジャケットを脱ぐと文字Tにはこう書かれていた

『盃を干すと書いてえ!!』（オーラア！）

「「「「かんぱーい!!」」」」

そして祝勝会が始まったのである

ハルトは一人一人と会話を交わしていきウオズ達が飲んでる場所に向かうと

「いやああの時は魔王ちゃんがアナザーオーマジオウになると思っただけだなあ！」

「うむ！まさかレグルスの光からアナザートリニティが生まれるとは、流石ハルト様だ」

「そうじゃなウオズの言う通り妾達の知らない新しい歴史になっておるのやも知れんな
…」

「まあまあ今は飲みましょうよ先輩達！」

「そうですね…おや我が魔王」

「みんな楽しんでる？」

「勿論、今回の宴会も大きな規模ですね」

「だな…そう言えばカゲンと飲み比べりベンジってカリオストロが言ってたぞ」

「受けて立つ！」

「よっしゃ！応援するよカゲンちゃん！」

「僕も応援します！」

「ほお樽単位で飲むカゲンと飲み比べか…見ものじゃな」

「程々にしとけよ…ウオズは行かないのか？」

「ええ私は我が魔王と回ろうかと思ひまして」

「良いよ、んじゃ行こうか」

そして待ちかねていた彼女達の元へと向かう

「皆、お待たせ〜」

なのだが

「おいハルト！何故オレ達の食事よりサンジェルマン達の方には品数が多いのだ！」

キャロルが問い詰めるが

「それはな…この間の喧嘩覚えてる？」

「ああ…それがどうした？」

「あん時、俺いきなりお前の所に行つたる？」

「そう言えば…シャトーには魔法転移は阻害していたしポータルの出入口は全て止めておいたのだが」

「それは前の家に残してた畳裏の転移陣を使ったんだ」

「……あ」

「しかもエルフナインが逢魔に来たのも、その転移陣を弄ったからっていうんだよ、だから3人に頼んでチフォーージュシャトーに繋いでもらった、んでその時の3人との約束なんだよな次の飯は豪勢にするって」

「………だが妻のオレよりも豪勢な食事なのは気に入らん」

「はいはい、分かったよ特製デザート作るから待つてな」

「分かった…だが急げよ、でないと」

「でないと?」

「特製デザートと聞いて！東さん参上！」

「私達を除け者とは狡いぞキャロル！」

「ハルトもだよ同罪かなあ」

「あらあら、なら罰として全員分作って貰おうかしら旦那様？」

「おう、んじゃ作るからちよつと待ってるよ〜」

最早慣れたものと言わんばかりの対応である

そして行こうとしたらだ

「助けてハルえもん!!」

ナツキが酔っているのかビールジョッキ片手に抱きついてきた

「何だいナツキ君、また豆腐の角で死に戻りしたのかい？」

「そんな死に戻りした事ねえ!!」

「じゃあベーコンブロックで頭部を殴打されたか?…食べ物で粗末にする奴なら天の道を行く人に変わり俺がお仕置きするけど?」

「ちがうよおー!あの時からエルフナインがずっと不機嫌なままなんだ、いくら謝ってもデート行ってもムスツとしてるし…俺には何が原因かわからないんだ何とかしてよハルえもん!!」

人の恋路に手を出す気はないのだが…義妹が不機嫌なのは困るので

「本当にお前は何してくれてんだよおく…しょうがないなあナツキ君は…いや本当」

「お願い!」

「はあ…」

『コネクト』

ハルトはコネクトの魔法を使いとある物を取り出した

「アレでもない、コレでもない……あ……」

ハルトが引つ張り出したのは以前集めたヘルヘイムの果実……それは無言で引つ込めた

「コレは違うな」

「いや待て！今地球人的に見過ごせない危険物を持っていたよな!!」

「気のせいだ……あつたぞ！たらららー！婚約指輪ー！」

「いや仲直りをすつ飛ばして婚約だとお！」

「贈り物は大事だぞ、ちゃんと気持ちを入れて渡すんだ！」

「っ！それはつまり俺達の結婚を認めてくれる……っってこと」

「んな訳ねえ、前にも言ったが結婚したくば俺かキャロルを倒せ……まあ指輪つければ言
いよる奴も減るだろうさ」

「な、なるほど……他には？」

「……………はあ……束、キャロル！」

「何だ？」「何々々」

「お前等が持つてる夜に使いそうなヤバめの薬をエルフナインに渡してナツキを押し倒
すようにき」
「ありがとうハルえもん！指輪を渡して頑張ってみるよ！」
「おう、あと今
のタヌキはお前だぞ」

ナツキは走り出すのを見送るとハルトは一言

「俺も結婚指輪渡さねえとな」

『だな』

「その前に東の両親への挨拶だな…キチンとしないと…その前に一夏達にも言わないとな」

2人から見たら大事な家族なのだからな

そもそも親のいない千冬、キャロル

ジジイが手にかけてしまった錫音

アンティリーネは親が親なのでノータッチ

だから束しか挨拶する人はいないのだが緊張はする

『頑張れよハルト』

「ああ！」

「ハルト、早くデザートを作れ！」

「はい、喜んでー！」

『既に尻に敷かれてるな』

『オンオフが激しいナ』

そしてデザートを作り終えたハルトは宴席に戻り、皆の元へ戻ると

「……………」

「電鋸少女はどうした？」

「この間はメニューありがとう、みんな喜んでくれた」

「そりや渡した甲斐があるってもんよ」

「あのレシピ、誰から教わったの？」

「料理の師匠からだな…地獄の料理人と神様殴った料理人直伝レシピだ」

「そうなんだ…:…ん？」

「ま、新しいレシピが出来たら渡すから楽しみにしとけ」

「…:…うん、ありがとう」

「おう」

出会い方によって違う関係もあつただろう2人であつたとき

「あ！ハルトさん！」

「よお立花響、楽しんでるかい？」

「とても！いやあ凄い美味しいですねえ！」

「ん…そりや良かった、そういやあ色々聞いたがこの間の作戦の時がお前の誕生日と聞いたぞ、おめでどう」

「はい！ありがとうございます！」

「つまらないものだがプレゼントを用意したぞ」

「へーい、いやあ！ありがとうございます……す……す？」

響は喜びながら箱を開けると中には

『働いたら負け!』

とザリガニが吹き出しで言っているイラストが書かれたTシャツであった

「え?あの…」

「凄いぞ!何とオーダーメイ「本当につまらないものを渡す馬鹿がいるかア!」ごごふう
!」

自慢しようとしたと同時にキャロルからドロップキックをくらいハルトは吹き飛ば
されるのであった

「まったく…油断も隙もないな」

「な、何故……ケーキも用意してたのに…がく」

「あ！キャロルちゃん久しぶりー！」

「っ！抱きつくな貴様!!」

「えー！いいじゃん!!」

「お前のこの間の件で学んで無いのか！」

響は前回の件で気づいたが遅かった

「……………あ」

そう言うのと恐る恐る離すのであったが

「響？」

393さんがマジギレである

「あ、あはははは！いい、いやあ〜」

「まあ良い、それよりプレゼントだオレ達みんなで作ったのだ受け取れ」

「へ！いいのありがとう!!」

「気にするな、バカ夫が迷惑かけたお詫びだ」

「わーい!!」

響は笑顔で箱を開けるとUSBメモリが入っていた

「……………何コレ？」

「シンフォギア用の変身音声集だ！好きなものを選んで取り付けると良い！取り付け方法

のマニュアルもつけておいたぞ！」

「ありがとうございます!! 奏さーん! 切歌ちやーん! これで皆にも変身音声がつけれますよー!」

「何!」「早速聞いて見たいデース!」

と喜んで走り去る響を見てキャロルは冷や汗をかく

「やはり此方を渡さないで良かったな」

キャロルが錬金術で取り出したのは作中では呪いのベルトと呼ばれたものであり

「これは草加雅人しか大丈夫じゃないからな」

「いや草加雅人も大丈夫じゃなかったよキャロル、つか何で誕生日に呪いのベルト渡そうとしたのさ」

「か、カイザの日と聞けばプレゼントに渡そうと思って何が悪い！」

「渡すセンスが俺と良い勝負なんだよ！」

「……………」

「え？ガチ凹みする程か!？」

「センスの無さがお前と同じだと…このカイザギアが同じレベル…っ！」

「え？まさかそれ本物のカイザギアなの？…それならごめんね！キャロルの方が良いセンスだ！」

待てよ？本物なら

「あ、アナザーデイケイドさ俺もオルフェノクだから変身出来るよね!!」

フアイズ系列のライダーは元々、オルフェノクの王であるアークオルフェノクを守るためのベルトなので都合上 怪人にしか使えないつまりオルフェノクでもある俺なら変身可能なのでは!!と淡い期待を抱きベルトを腰につけたが

『使えんぞ、カイザに変身したら逆にベルトが灰化する』

「変身し発飲んでないのに!?こんちくしょう!!なんて不都合な体なんだ!」

『だがバグヴァイザーを使えばバグスターに変身は可能だ』

「怪人から怪人はOKなのか…それはそれで嬉しいな」

『だが残念だなライダーへは変身出来ん!!』

「どんまいだなハルト、お前のライダーに変身したいのに出来ないというストレスは俺をもっと強くしてくれる」

「おのれえええ！パラドおおお！」

「ははは！心躍るなあ！」

「はあ……何一人芝居している？」

ハルトは知らないうちにとんでもないものに手を出したキャロルだが

「ハルクン！見て見て！実は束さんは新しい端末を作ったんだよ！」

ハルトの嫁は自重を知らなかった

「凄いな束！」

「うん！名付けてZ A I A スペック！今はメガネと併用しないとダメだけど付けるだけでヒューマギア級の演算能力を手に入れれるんだ！」

「凄いチートアイテムじゃねえか！」

「でしょでしょ！けどまだまだ実践データが足りなくて…」

「試したいな、それ…」

トルーパー達に頼むか？事務方や軍医もいるし彼等のサポートに打ってつけと考
えていると

「実はさー

「いいねえ」

東の話聞いてハルトは感心と同時に困った顔をするが 実験の許可を出すので
あつた

そんなふうには話していると

「ハルト！千冬宛に小堤が来たよ！」

「何だとまさかメダジャリバーか!!」

同じように宅配で貰った剣の名前を出すか

「いや違うでしょ」

よく見ると大きな箱である

「宛名は……ゲイザー？」

名前に監視者とかそんな意味だろうか

「知らない人からだね……一応X線やスーちゃんの透視の魔法で見たんだけど普通に剣ほ

「いんだよね」

「ふーん、千冬開けてみる？」

「ああ…しかし私には愛剣のサタンサーベルがあるからな」

「もう千冬とは一心同体だからなコレは予備兵装感覚で良いんじゃないかね？」

「だが斬月だけでは多彩な敵との戦いに限界を感じてもいるのだ」

「いや斬月単体でも強いんだけどなあジンバーにカチドキとかなれるし」

というより比較対象である主任が強すぎるのだが…弦十郎と何方が強いのか実は気になってたりする師匠に頼めば主任と会えたりするのだろうか…いやダメだ！私利私欲の為に仮面ライダーに会うなんて！てか師匠にも失礼だろうと苦悩してるなか話は進む

「しかし基礎スペックの変わりにクロックアップや重加速といった特殊環境化では戦えない欠点がある……私は東やキャロルのように賢くもないからアイテムも作れず錫音のように魔法も使えない……数少ない自慢の戦闘能力もアンティリーネに押され気味で最近良い所がない私は」

「んな事ねえよ、千冬がいるから俺達は集団として引き締まってるんだよ」

「そーそー！ちーちゃん居なかったら多分私達は正妻戦争で全滅してるだろうし」

「言えてるね……なんと言うか風紀委員長みたいな感じだよ」

「貴様がハルトの支えになっているのは認めているぞ、弱気になったハルトを叱れるのはオレ以外ではお前くらいだ」

「皆……ありがとう」

感動してるが俺は中身も気になるので開けた

「よし開封……………は？」

ハルトは中身を見て引いたのである、東とキャロルも見て驚きの顔となった

「なんだと!!」「うっそ!!」

「コレって…サソードヤイバー!」

紫色の機械仕掛けの刀を思わせる武器が入っていたのである

「これは……………」

千冬が手に取ると

『生体認証…織斑千冬を登録本機サソードヤイバーは貴女に譲渡されます』

そんなシステム音声が聞こえたのである

「何だこれは……ハルト今のさ？」

「知らない機能だな……そもそもカプト系列のベルトやアイテム自体にAIの類は搭載してねえよ変身者を自分で選ぶゼクターは別だけどよ」

「今のつて、サソードヤイバーはちーちゃん専用武器になつたつて事？」

「そ、そうなのか？」

「試してみるか動くなよ」

そう言うもハルトとはとある種族の力を解放する

それはマスクドライバーシステムの技術提供者にしてワームに類似する外見を持った穏健派　しかしその実　過激派のせいでワームと同じ扱いをされる悲しい異星人

ネイティヴ

元々カブト、ガタツク、ザビー、ドレイク、サソードは人類とネイティヴを守る為に作られたライダーなのだ

変身者が決まっているカブトとガタツク以外のゼクターと変身アイテムはネイティヴが使う場合 何処からともなく飛んできて変身出来る力がある

言うなれば千冬のサソードヤイバーを分捕りサソードに変身する事も出来るのだが

「……………何も無いね」

「だな……………ネイティヴの力でも呼べないならサソードヤイバーは完全に千冬専用だな」

「そうか……………また剣が増えてしまったな」

『STANDBY』

「ん？」

「ハ、ハの音声はー！」

ハルトは周りを見渡すと地面から現れた機械仕掛けのサソリが現れると

『!!』

やあー！と手を上げるが2種の悲鳴が宴会場に轟く

「きゃあああああ！サソリいいいー！」

サソリにびつくりする錫音のような黄色い声と

「うおおおおお！サソードゼクターだあああああ！」

正体を知る故に狂喜乱舞する馬鹿の声である

「は、ハルト……ここ、これは」

「サソードゼクター、その剣の持ち主と認めた者の側に現れる頼れる仲間さ」

「そ、そうなのか……大丈夫なのか……その……毒針で刺したりしないのか？」

流石の千冬もサソリが怖いのか少し距離をとっているとサソードゼクターもその感情が伝わったのか

『!!』

何かを懸命に伝えようとしている

「な、何だこの電子音声は？」

「何かちーちゃんに伝えたいみたいだね……よしこんな時は東さん特製翻訳端末ー！」

「え？そんなので大丈夫なの束、何と云うかお祭りにある景品の玩具みたいだけど」

「大丈夫だよスーちゃん！これはハルクんと逢魔にいる怪人みんなの全面監修で仮面ライダー界にいる怪人や色んな言語を翻訳出来るつまり！ゼクターの言葉も翻訳できるんだよ！じゃあサソードゼクター君！ちーちゃんに伝えたい事をこの端末に話しかけるのだー！」

「何てチートアイテムを……と云うかハルト！あんな便利アイテム作ってるなら教えてよー！」

「あ、いやあ…俺は全部わかるから別に良いかなあって…グロンギ語とかオーバーロード、最近はジャマトの言語も話せるし…」

「ハルト？」

「ごめんなさい、後で束に頼んで全員分用意します」

「お願いね…あ、話初めたみたいだね」

『!!』

「ふむふむ」

「な、何と言っているのだ束？」

「『主よ怯える事はない、私は主の力として時空を超え馳せ参じたのだ…私を使いサソードになればあらゆる分野で頂点に立つ事が出来る!』って!」

「そんな自信満々なプレゼンをあの短い電子音声だけで済ませていたのか…なんてコスパの良さだ!!しかし翻訳が伝えられないとは…これがバラルの呪詛か!」

「驚くところ違うと思うよキャロル…あとサソードゼクターってそんな話し方だったんだ」

そりや剣さんを選ぶよ似た者同士だもの

「し、しかし私は…」

『!!』

「『私を使えばクロックアップが可能だ、逃げる夫の追撃も楽になるぞ以前逃げる夫を捕まれたら好きにして良い権利を取り合つたと聞いた、私を使えば頂点になれるぞ』」

「クロックアップ…だと…!」

「はん!そんなやつすいセールスでちーちゃん動く訳ないよ!」↓ゼロワン、デューク

「そうだね千冬はそんな事せず正々堂々と勝負する大和撫子なんだ!」↓ソーサラ

「そうだ!純粋な身体能力では私達の中でも最上位チートなのだぞ!」↓オーズ

「特殊能力極振りな3人が言っても説得力がないわね」↓イクサ

「大丈夫だアンティリーネ、お前は基礎能力チートだから」

「一番反則な旦那様に言われたくないわね」

「宜しく頼むぞ相棒」

『!!』

「ちーちゃん!?!」 「嘘でしょ!」

「いや流れで察せるでしょう?」

千冬は人差し指を前に出すとソードベクターも右前足を突き出して合わせる、まるで拳と拳を合わせているようにも見えるが

「『此方こそ宜しく頼むぞ我が主よ!』だって」

「いや何で変な所で意気投合したの!?!それと千冬さん!信頼するの早すぎませんかね!!」

「何を言う、私はサソードゼクターの信頼に応えただけだぞ断じてクロックアップで逃げるハルトを捕まえるのが楽になったとは思っていない」

「後半全部が本音だろうがあ!」

さてさて、そんな感じで宴会も終わったハルト達は逢魔に帰る事にした日には全員が迎えに来たのだ

「ありがとうございます!」

「勘違いすんな、俺達は自分の国が襲われたから報復しに来ただけだ」

「けどハルトさん達のお陰で助けられたのも事実ですから!」

「それもそうだな…それと何かあつたら呼べ、サンジェルマンや結社の一部も逢魔に入る以上は前みたいは無関係ともなれんだろうしな」

完全に関係を断つのが難しい腐れ縁と理解したのか苦笑するハルト

「っ！はい!!宜しくお願いします!」

「ん」

彼女の出された手に対して俺も握手で答える

「良いのか?」

「だが内容によるぞ、テメエ等がまたつまらん御託並べて何かするってんなら協力なぞしねえからそのつもりでな」

と釘を刺してる中

「キャロル…ありがとうございます！」

「礼などいらんさ、早くナツキと幸せになれ」

「今度は是非、真剣勝負をしてもらいたい」

「良いだろう何度でも相手してやる小娘」

と各々因縁ある相手と会話しているが

「時間だな…んじゃまた会おう出来れば会いたくないけどな」

「はい！また会いましょう！」

「話聞いてた？」

そして転移して皆、帰るべき場所へと帰ったのである

—————

そして逢魔に帰る

「ただいまみんな！留守番ありがとう!!」

「おかえりハル！」「おかえりだ我が君！」

「おかえりなさいませ、ハルト様…では帰還早々ですがこの書類を片付けましょうか不在時にかなり貯まっていますので」

テスタロッサが指差した書類の山を見るなり

「……………クロックアップ！」

ワームの力で逃げようとしたのであった

「いきなりか！逃すな追ええええ！」

とハウンドが久しぶりの鬼ごっここと親衛隊に声をかけたが直ぐにハルトは見つかった

「何処へ逃げようとしたハルト？怒らないから言え」

「そ、それ怒る奴じゃん！」

千冬がサソードヤイバーの鋒をハルトの喉元に突きつけていた

「何ですぐに使いこなせるの？…スゲエ練度でさ…まあ良いやアレ見て」

千冬とテストタロツサが視線を向けると

「ハルト様が3人に増えて…」

「ははは！俺も成長してるんだ、因みにコレはアナザーウィザードが持つてるドラゴタイマーを使つて分身している…修行しながら仕事効率もアップだぜ！あとゼブラアンデットのジェミニを使う事でさらに増えられる！」

『なんて魔法の無駄遣いだろう』

『地味だな』

「素晴らしい応用と言ってくれよアナザーウィザード」

「でしたら仕事も増やしましょうか」

「お願い、この力の維持の練習になるから」

「あらあら熱心ですわねハルト様」

「当然よ此処はみんなの国なんだ、そこを守る王として学ぶべき事も守るためにはみんなの力が必要なのも多いからな！これからよろしく頼むぜテストタロツサ！」

「勿論ですわ、ハルト様」

そして笑顔で書類に取り組む姿に

「っ！魔王ちゃんが為政者として当たり前な事を言ってる!!」

「なんて日だ！これが新しい歴史！」

「祝え！我が魔王が職務に当たる姿を！」

「うおおおおお!!」

最初期組は不機嫌時のハルトを知る故に真面目に職務にあたる姿に感動していたが

「お主等、前から思っておったがハルト坊に失礼じゃろ？未来でも普通に仕事しとるぞ？」

「これがデフォルトなので気にしないで下さい、ヤクヅキ先輩」

「普段がどれだけ不真面目なのじゃ？」

「よし、早く終わらせて街に遊びに出るぞお！」

と息巻くのであった

無事に仕事を処理したのだが…

「…しまった分身を解いたら体の負担が全部本体にのしかかるデメリットを忘れてた…」

「この馬鹿者が体調管理をしろ!!」

「(イ)もつとも…」

『ただの馬鹿なだけだな本当』

疲れて倒れキャロルに膝枕をしてもらったハルトがいたという

—————

「さて錬金術師が引き起こした事件を乗り越え王として大事な事に知り得たハルト、そして開く新しい世界への扉そこには「いえーい！遂に私の出番だあ！ファン

の皆みつてるー！」落ち着きなさい貴女の出番は先ですよ」

「なん……………だと……！」

「当然よ……けど私なんかヒロインで大丈夫なのかしら……本当に……ほら私みたいなちゃん

ちくりんが……」

「大丈夫ですよ、さて魔王との戦争（デート）を始めましょうか」

「いよっしやあ！燃えてきたー！」

「はあ……不安だわ……私なんか……」

番外編　もしもフラグちゃん達が逢魔に来たら

俺の名前はモブ男、何処にでもいる普通の男だ

「つてアレエ！ここ何処!!」

気づくと俺は見慣れない街に来ていたのである

「え？何！ここ何処…ふざけるな！俺は家に帰るんだ!!」

「立ちました！」

「あ、フラグちゃん」

そこに現れたのは黒髪で小柄の女の子 かし手には大鎌を持っている名前は死神
No. 269 またの名を死亡フラグである

「突然の帰宅宣言は死亡フラグです」

「それだけで!」

騒いでいると

「どうした?……待てお前達はたしか…」

白い装甲服を着た人が話しかけてきた、その手には……銃!?を握ってる!

「申し訳ありません!撃たないで下さい!!命だけはお助けを!!」

渾身の命乞いであるが白い装甲服の人は笑いながら答える

「は？いやいや撃つわけないだろう、守るべき市民を撃つなんて兵士の風上にも置けな
し」

無茶苦茶良い人達だった!!

「あ、あの此処は何処ですか!？」

「ん？逢魔王国の歓楽エリアだ」

「逢魔王国？」

「はい、ここは逢魔王国と言って魔王が治める空島です」

「空島!?!そんなワン〇ースみたいな場所本当にあるんだ!てか魔王がいるの!?!」

「お前さん達、逢魔は初めてか？」

「あ、はい！」

「なら案内してやろう迷子の案内は慣れている、この辺りは新しく出来て迷いやすい区画でな広場まで出れば何とかなるだろう」

「ありがとうございます！えーと」

「俺はクロイントルーパー…逢魔を守る兵士だ」

「ありがとうございます、トルーパーさん！」

「良いつて事よ、こっちだ」

そして

「おおお！凄い未来…ってフラグちゃんは どうして此処に？」

「最近この魔王さんと一派の方が沢山のフラグを立てると言うことで天界から調査依頼が来たんです」

「どんな状況なのフラグ沢山立てるとか！」

「主に生存フラグと」

「恋愛フラグだねえ〜」

と現れたのは包帯のみを身につける白髪ロングの女性 生存フラグとピンク色の髪をしたガリーな女性 恋愛フラグである

「生存フラグさん、師匠！」

「小奴等は鉄火場で恐ろしい勢いでフラグを乱立しておるのじゃ」

「それに此処の魔王さんは本人の知らない内に恋愛フラグ立てるのが上手いんだよねえ

既に5人も奥さんがいるんだよ」

「5人!?」夫多妻なのか…羨ましい!」

「モブ男さん?」

ジト目のフラグちゃんを無視してと

「あれ? そう言えば失恋フラグちゃんは?」

「ああ、彼奴なら彼処で」

「あ! みんなくお土産買ってきたよ…ってモブ君!? どうして此処に!」

「それはこつちのセリフだよ失恋フラグちゃん! 凄いエンジョイしてるね!!」

「いやあく色んなものがあるから楽しくてさあ〜」

「そうだね…流石の俺も歩く戦車？とかタイヤのないバイクみたいなのも初めて見たよ…あとさっきのクローントルーパーさんとか凄い親切だったけど銃持ってたしどんな国なの一体！」

「あ、あの人達ですよ死亡フラグ乱立させるのは」

「嘘でしょ!？」

「本当ですよ！砲弾飛び交う中飛行機で『どうせミサイルなんて当たりっこないさ』って言うてましたから即回収させて頂きました！」

「忘れてたけどフラグちゃんって死神だったね」

「それに悪魔？がいるのじゃな」

「悪魔!?本当にそんなのいるの!？」

「いるよー」

と現れたのは紫色の髪をサイドテールにした可愛らしい女の子である

「君は？」

「ボクはウルティマ、この逢魔王国の検察庁長官だよ」

「この国の司法の番人!? こんな小さな女の子が！」

「モブ男さん！見た目で侮るのは死亡フラグです！」

「そうじゃな此奴は知るものから見れば残虐非道の代名詞とも呼ばれておるのじゃぞ」

「嘘でしょ!?!」

「本当じゃぞ？この間の紛争では笑顔で敵基地を消しとばしておったからな」

「悪魔だ！文字通りの悪魔だ!!」

「ふふふく恐れられるのは良い気分だねえ」

「それで私達に何のようじゃ？」

「あ、そうそうハル…魔王から君達を王城に招くように頼まれたんだあ」

「俺達を？」

「何でも自分の能力実験中に君を巻き込んでしまったから送り返したいって」

「魔王、予想外に良い人だった！」

「じゃあ案内するから付いてきてー」

そして

「魔王…一体どんな人なんだろう…」

俺は固唾を飲んで構えるもウルティマさんはお構いなしにドアを開けた

「ハルく連れてきたよー」

そして見たものとは！

「まったくお前達は新しく発明を作るの是一向に構わんが場所を選んで実験をしろといつも言っているだろう!!」

黒髪ロングのお姉さんが黒髪の男と金髪幼女を説教していたのだ

「くっ……正座くらいで何するものかあ!!」

と金髪少女は息巻くが

「ならば今そこで伸びている兎と同じ目に合わせてやろうか？」

「……………」

そこには物言わぬ骸のように倒れている機械式うさ耳をつけているドレス風の服を着た女性が倒れていたのを見て無言になる

「……………む？ウルティマかすまないな」

説教していた女性がウルティマに気づくと此方に視線を向ける

「お前がモブ男…だったか？今回はすまなかつたな此処にいる馬鹿どもの実験に巻き込んでしまつて送り返す用意はしているから暫く逢魔の滞在を楽しむと良い」

無茶苦茶良い人だ！間違いないこの人が

「あ、いや魔王様に言われると照れますね…まさかこんな美人が魔王とは知らなかったですよ」

そう言うとな彼女は驚いた顔をして

「ん？魔王は私ではないぞ」

「ええ！嘘でしょ！だって今の場面は部下の失態を怒る上司の絵だったよ！」

「魔王にどんな想像をしているかは知らんが現実の魔王は彼処で正座に耐えている男だ」

「……………え？」

「そう！俺こそが逢魔王国の王にして魔王と呼ばれている男 常葉ハルトなのだあ！」

そうやって立ち上がり自己紹介をしてくれたが

「誰が正座を解いて良いと言った？」

「はい」

睨まれたので素直に正座する

「嘘でしょ！もつと魔王って『よく来たな勇者よ我が軍門に降れば世界の半分をくれてやろう！』とか言うんじゃないの!？」

「そんなステレオタイプな魔王はこの世界には居ないよ？いるのはお菓子を食べに来る子供か部屋の一室で遊び呆けている奴くらいかな…」

「嘘だ!!」

モブ男の中での魔王イメージが崩れた音がした

「本当だよ、あ、今回は実験の事故で巻き込んでしまつてごめんね」

ハルトは申し訳無さそうに謝ると

「あ、いやそんな…」

「君達が来たつて知つたからトルーパー達には顔写真を送つたんだよ密入国者じゃないから撃たないでつて」

「……………因みに本当に密入国者だったら？」

「発見次第、スタンモードにした銃で撃たれてウルティマが取り調べた（拷問）後にカレラの所で裁判かなあ」

「危なかつた！色んな意味で!!」

「早目に王城に案内出来て良かったよ、今帰る用意してるからさ終わるまで逢魔を観光してっつよ」

「良いんですか！」

「勿論、けどお金がないのか…よしなら俺が案内しようお金もあるし」

「えええ！王様自ら案内って」

「大丈夫大丈夫、街に溶け込む格好はちゃんと用意してるからさ行くよウルティマ、千冬行つてきまーす」

「ああ夕飯前には戻ってこいよ、ウルティマハルトを見張っておいてくれ」

「うん任せて」

と皆が部屋を出ると

「……ハルトの奴、自然なノリで逃げなかったか？」

「はっ、待てハルト！お前は説教だあ！」

「…………ふぎや！」

キャロルの言葉に気づいた千冬が血相変えて追いかける途中で束を踏んだが無視して追いかけるのであった

観光

「んじゃあ早速、逢魔を案内してあげよう！」

「あの……王様？」

「いやあ王様なんて仰々しいなあハルトで良いよモブ男君」

「ならハルトさんで…その格好は一体…」

「言つたら？市井の街に溶け込む格好をすると！」

『私は逢魔観光大使！』（オーラア！）

と書かれている文字Tを着こなしていた

「バッチリだろう」

「いやいや全然溶け込めてませんよ！そんなTシャツ外国人しか着てるの見たことないって!!」

ダサイと言わないあたりモブ男の人の良さが出ている

「ふふふ安心してくれ皆、この格好をしていると誰にも王とはバレたことがないのだ！」

「え！まあ確かに王様がそんなTシャツ着て出歩いてるとは思わないけど……」

だが

「あ！ハルト様だ！」

「陛下おはよう御座います！」

「おう、みんなおはようー！」

「バレてます！バレてますよハルトさん!!」

「はっ！俺の完璧な擬態を見破るとは……流石だな！」

「いや寧ろ今まで気づかないフリされてましたよ!!」

「なんだと!…本当に俺はいつも色んな人の優しさに支えられているな」

「単純にハルが馬鹿なだけだと思うよ?」

「え?」(?!ω?、)

どうしよう、この人が急にバカ殿に見えてきた

「き、気を取り直して案内だ!」

「そう言えばこの国って産業って何ですか?」

「メインは貿易だよ異世界の品物を仕入れてこの世界で売ってるんだ」

「へえ〜」

「この世界には異世界人も沢山いてね彼等の故郷の食べ物やおもちやを用意してあげて
るんだ」

「な、成る程需要があるんだ」

「後は医療と遺伝子工学と錬金術を研究して産業にしているよ」

「科学とオカルトが交差している!?!」

「あの…観光名所はありますか?」

「お、良い質問だねえ〜こっちだよ!」

と案内した先にあったのは

「此処が逢魔王国名物の闘技場だよ!」

「「うおおおお!!」」

歓声が響いているのを聞く、周囲には来客用に出店や露店が軒を連ねている

「あれ…おかしいな此処だけノリが古代ローマだ」

「まあそう言われても仕方ないけど此処は逢魔王国には戦いこそが人生！強さが絶対と言わんばかりの脳筋バトルジャンキー達の憩いの場なんだよ！因みに今は…中々良い対戦カードだねカリユブディスメギドvsダンクルオステウスジャマトか！」

「本当にここ異世界なんだ！ライダー怪人の異世界闘技場とか凄いね！」

「いやあ怪人達の息抜きに作った施設がまさか興行的に当たるとは思わなかったんだよね」

「ほおほお」

「因みにクロイントルーハーの訓練用にサバゲー会場を意識したフィールドも用意してるんだ！遊びの中にも学びをつてね」

「以外と考えてますね！」

「まあね！」

観光案内してもらっている

「ねえフラグちゃん、本当にこの人魔王なの？何かイメージと全然違うんだけど！」

「確かに：…何とかというか普通の人に見えますね」

話しているのを見てると走っている子供が転けたのを見てハルトは近寄る

「大丈夫か？よし待ってろ」

『ジオウⅡ』

「あ……治ってる！ありがとうハルト様ー！」

「おう、気をつけてなー！」

「何か王様というより普通に近所のお兄さんみたい……だけど」

アナザーライダーの力で怪我を消したのを見て

「アレは？」

「あれはアナザーウオッチ、ハルトの中にいる総勢100人以上のアナザーライダーの力が内包されたアイテムだよ」

「アナザーライダーって……仮面ライダージオウの敵キャラじゃん!!何でそんな力をあ

の人が！」

「そこは私が説明しましょう」

「うお！誰!!」

そこに現れた男に驚いているもウルティマは知り合いのようで

「あ、ウオズじゃん」

「ウルティマ嬢此処からの説明は私が」

「分かった、じゃあボクは少し遊んでくるね」

「ええ、では」

「えーと貴方は…ウオズ！仮面ライダージオウのキャラがどうして！」

「それは別人ですので：改めて我が名はウオズ彼処にいる魔王 常葉ハルトの従者と覚えて頂ければ幸いです」

「あ、そのウオズさん何でハルトさんはアナザーライダーの力を持っているんですか？」

「そうですね端的に纏めればアナザーライダーに誘拐されました」

「誘拐!？」

「ちよつとウオズ、要点を端折りすぎ」

「失礼しました我が魔王」

「まったく：まあ事実ではあるんだけどな」

「事実なんだ！なのに何で一緒に暮らせてるの!!」

「そりゃコイツら悪い奴じゃないから？」

「いや悪い奴でしょ！仮面ライダーの怪人だよ！てか何で暴走しないのさ！」

「まあそうなんだけどね〜コイツ等をほっとけないと言うか何というか…あ、なんか俺暴走しない体質らしいんだよね〜」

「え、マジで！」

「まじまじ、オーマジオウからもお墨付きもらってるよ」

「会ったんだライダーの王様!？」

「サインももらったんだ〜」

「え！いいなあ!!」

「あの…何とかというかハルトさんとアナザーライダーさんの関係って…ストックホルム症候群でしょうか？」

「違いますよフラグさん我が魔王はアナザーライダーと契約して世界を旅しているので
す」

「そうなんですか!？」

「だよ！俺は自分のいた世界に帰る途中でなんやかんやあつて国を作り王様になったの
だ！」

「そのなんやかんやが気になるんだけど！」

「分かつてる皆まで言うな…詳しくはバックナンバーを見てくれ」

「急なメタ発言！」

『おいハルト！俺達にも喋らせるヨ！』

「分かったよつと」

『W』

「さあ！お前の罪を数えろ！」

「うわあ！本物のアナザーライダーだ、改めて見ると怖いなあ」

「怖いのは見た目だけ、こう見えてノリの良い奴なんだぜくな？検索エンジン」

「誰が検索エンジンだ！」

「だってお前地球の本棚ってデータバンク持ってんじゃん」

「地球の本棚をGoogleと同じ扱い!？」

「それより何で詳しいんですかモブ男さん」

「嫌だつて俺、仮面ライダー見てたし」

「何? そうならそうと早く言つてよく何処のシリーズが好き?」

「うーん一番は決められないな」

「うんうん! 皆違つて皆良いよねー!」

と普通に会話を始めようとしたので

「所で師匠から聞いたんだけど、ハルトさんつて本当に5人と結婚してるの?」

「おうとも! 彼処で説教してた千冬と倒れてた束、そして同じように説教されてたキャ

「ロルそして」

「あ、いたいたハルト探したよ」

「旦那様、千冬が追いかけているわよ」

「指輪の魔法使いの錫音とハーフェルフのアンティリーネだよ」

「この人たちも奥さん!？」

「そうだよー」

「あら？その大鎌…中々の一品ね」

「あ、分かりますか!」

「ええとても」

「何か面白そうだねえ…よしこの天界アイテムを」

「よさんかまったく油断も隙もない」

「いーじゃん、せーちゃんのケチ」

「天界アイテム？それってどんなのがあるの？」

「フラグを回収する為に神様が色々用意してくれるんだよ」

「神様…：本当にいるんだな」

「信じてない感じ？」

「いや俺の師匠は神様だけど、アレはちょっと違うからさ」

「師匠が神様!？」

「あ、勿論みんなとは違う神様だよ俺の師匠はアイテム作らない……待てよそう言えばカチドキ作ってなかったかな師匠」

「そう言えば恋愛フラグさんは俺達の所にもフラグ立てたりとかしてるんです?」

「ん? そうだねえ最近君の弟分(ナツキ)に立ったかなあ」

「そうかまったくアイツ(一夏)め更にやりやがったな」

何か微妙なすれ違いをした気もするが良いだろう

そして

「完成したよー! ハルクん!」

「これで元の世界へのポータルが完成したぞ」

「ありがとう2人とも」

「何気にするな不具合の修正だけだったからな」

「やったー！帰れるー！」

「いや今回は本当にごめんね」

「いやいや案内してもらったしフラグちゃん絡んだのに平和に終わったのは初めてだよありがとう！」

「モブ男さん？」

「……君も君で大変なんだね」

「ああー！」

「今回の件は貸しにするよポータルは残したままにするから困ったことがあつたら俺の所に来てライダー好きのよしみで力になるよ」

「本当！助かるよ！」

そんな話をしていた所に

「やっと見つけましたよ皆さん」

そこに現れたのは緑色の髪をした美人であつた

「あ、No. 13さん」

「え？何この人クローンなの？」

「違います私は死神No. 13、彼女達の上司のようなものですよ魔王」

「タロットカードみたいな感じだな」

「この度は私どもの者がご迷惑をおかけしたようで」

「いやいや！元はと言えば此方が迷惑をかけたのですからお詫びするのはこちらの方ですよー」

「……………」

「どうされました？」

「いえ、貴方から死亡フラグの匂いがすると思ひまして」

「死神から突然の死の宣告!?! いやいや大丈夫ですよ〜俺不死身ですし〜」

「立ちました！過信をするのは死亡フラグです!!」

「そうですNo. 259」

「え？まじ？」

「では…皆さん帰りますよ」

「え、ちよっ！不吉な予言残さないで！のわっ！」

「え？」

その時、ハルトが死亡フラグの詳細を聞こうとした際に転けてしまいNo. 13の方へと向かう

結果として

「あ…」「あ」

ハルトがNo. 13を押し倒したのような形になってしまったのである

「ご、ごめんなさい！怪我はないですか!!」

「大丈夫ですが」

「」「」「ほお」「」「」

「立ちました」

「へ？」

体を起こし殺気に気づいたハルトの頬が引くつくと

「そう言えば貴様には先程の説教が残っていたな」

『STANDBY』

「あの時逃げた恨み」

『ライオン トラ チーター!』

「はらさしておくべきか」

『ZERO 2 JUMP!』

「旦那様、今のは流石に有罪ね」

『READY?』

「これ以上増やすのはどうかと思うよ?」

『CHENGGE!NOW』

どんな世界のラスボスよりも怖い……なんならアダムよりも恐怖を覚える5人が怒りの形相で見ている

「し…死んでたまるかああお！」

全速力で逃走を図るハルトを

「「「「待てー！ー！ー！」」」」

変身したみんなが追いかけるのであったが

「ぎゃあああああああー！」

ハルトは全員の攻撃を受け爆散（すぐに回復）した

「回収完了」

「恐ろしく早い回収でしたね」

「そうだねフラグちゃん……ん？」

「……………?」

その日から少しN.O. 13が上の空になる事が多くなったという

デート・ア・ライブ編

デート・ア・ライブ編 前奏曲 デートに行く前の下準備

パヴァリア光明結社との抗争が終わり束の間の平和を取り戻したハルト達、逢魔王国では今まで通りの日常に戻っていたある日

「ハルト様に来客です」

「客？誰だろう？またフラグちゃんかな？」

「違いますわ、此方へ」

そうテストタロツサに言われ付いていくと来賓室ないた者を見て驚いた

「……………ZZZ」

来客がソファで横になり寝ているとは思わなかったので

「凄いな色々と」

驚いているとテストロッサは右手に魔力球を出して構えていた

「うふふ…ハルト様、消しとばしても？」

「ダメだよテストロッサ!?堪えて！」

「でなければカレラとウルティマが攻撃しますわ？」

それはマズイ…テストロッサより沸点の低い2人なら即攻撃になる！

「あの…お願いだから早く起きてくれませんか!!」

必死の懇願が通じたのか騒がしかったからか相手は起きる

「ん……ああ、ふわあ……おはよ」

顔を見て思い出した

「え？……ああ！ワルブルギスで寝てた人!？」

リムルさんが机を消した際に顔面から倒れた人だと思い出した

「ディーノな…番外」

「ハルトですディーノさん」

「おーそだったな…ねむ…」

まさかの魔王ディーノ襲来にハルトは身なりを整えて椅子に座る背後にはテストタロツサが控えてくれているのが心強い

「さて本題ですが何故逢魔に？」

「ああ……これ」

ディーノから渡された手紙を受け取り開くと

「ダグリユールさんとギイさんから？」

「っー！」

テストタロツサも身構えた賠償中の相手と魔王の議長的な人からの連名の手紙を身構えて読むと

「……………へ？」

内容を見て目を疑った

「あの……この手紙の内容をそのまま受け取ると逢魔で暮らしたいって事ですか？」

「そーそー、だからダグリユールとギイに紹介状書いてもらってんだよ」

ダグリユールさんからは追い出されたのでギイ紹介で逢魔に来たと、しかしそれではメリットがないからとダグリユールさんからは変わりと言ってあれだがディーノさんの生活費は賠償金から引いて構わないとの事だ

「いや別に暮らすのは構わないけど……てか魔王の勢力的に大丈夫なんですか？」

？
リムルさんが治めるジュラの大森林に同じ八星魔王がいるのは大丈夫なのだろうか

「いやいやリムやラミスだってテンペストに遊び来てんだろ？なら俺が此処にいるくらい問題ないって」

「まあ2人の紹介状もあるし…リムルさんには俺から話しておくか」

「おう頼むぜハルト」

「ではハルト様、彼にも働いてもらいましょうか？」

「そうだね」

「いや働いたら負けだと思っ！」

何故だろう…：…すぐく仲良く出来そうな気がするが

「は？？」

逢魔の女帝がキレてる!!

「テスタロッサ、殺気が漏れてるから堪えて！モスとシエンが震えてるから!!それに八

星魔王を逢魔で働かせたら色々問題でしょう！同格のリムルさんなら別だけど番外の俺がやったら不味いと思うし！」

対外的な関係は八星魔王＞番外なのだ

因みにギイはカリオンやフレイを番外に置くのも悪くないと検討していたりするが対外的には八星魔王を傘下したように見えて色々まずいのだ

「失礼しました」

「んー」

どうするかと考えるハルトに天啓が降ってきた

「あ…：ディーノさん、良かったら俺の国に輸入した異世界の玩具やゲームで遊びませんか？」

「は？」

実をいうと前から気になっていた問題である。食品や酒類には一定の需要があるがゲームなどの娯楽品はこの世界の人間にハマるか心配なのだ。沢山あるから飽きる事はないだろうが、この世界ならではの文化的視点もあるかも知れないならば売って良いか悪いかの判断を任せようと思ったのだ。

「遊んで感想を聞かせてくれるだけで構いません……その報酬として、こんな感じでしょう？」

と提示した書面を見てディーノは目を白黒する

「ま、マジで!？」

「はい、適正価格かと」

「本当に遊ぶだけで金が手に入るの？」

「言い方は悪いですけど、大体あってます」

これでデイーノさんには役職を与えられるし周りの目も何とかなるだろうと思う

それに悪い話ばかりではない

対外的には魔王リムルの領土に番外魔王の俺と同じ八星魔王のデイーノさんがいる
…これだけで抑止力になるのではないかと、また逢魔の国防的にも抑止力になるのは助
かる…まあ実際は張子の虎だが

「……宜しく頼むぜ旦那」

良かった！納得してもらえた！しかも呼び方変わってる!?

「はい、宜しくお願いしますねデイーノさん！」

その様子を見たテスタロツサはハルトの成長を感じたという

その日からディーノさんは逢魔にある一室で遊んでいるが時折「感想を書いて送ってくれている……しかもかなりの確なレビューを書いてる辺り遊ぶ事への凄いこだわりを感じた

「ディーノさん……俺達の世界なら玩具レビューだけで食ってんじゃないかな……ったこんな時間か……リムルさんの所に行くか」

流石にこの問題は放置出来ないとテンペストに向かうのであった

首都リムル

「お前の所も大変だなあ」

「いやいやリムルさんが直面してる問題に比べれば可愛いものですよ、ただ……ミリムさんと違って部屋から出ないので別の心配もあります……一応は部屋の前に置いた食事

はなくなっているので食べているのは確認してるのですが…」

「それはそれで心配だな…つて引きこもりかよ！」

今回の件を報告しながらお茶を飲むハルトとリムルの2人は互いの近況報告をしていると彼は思い出したように聞く

「そう言えばお前の所の奴が大量にポーション買ってたけど、何かあったのか？」

「いやあ大した事じゃないですよ異世界で紛争をしまして買い足しに、いやあ流石テンペストのポーション効き目が違いますね！」

「いや大した事じゃねえか!!何してんの!？」

「大丈夫ですよ完勝して賠償金がつぱりですよ異世界だから向こうからは此方に手出しできませんので！」

「いや別の問題だよそれ！」

「あ、そんな事よりお土産の生八つ橋です」

「コレは丁寧にもどうも懐かしいなあ和菓子かあ……じゃない！」

リムルさんの報告を済ませたハルトは錬金術師事件を解決した事後処理を終え、膨大な雑務を処理しているのだが

「あー暫く働きたくない〜」

ハルトは強烈な燃え尽き症候群に襲われていたのだ

『この馬鹿、西方聖教会やファルムス王国の後片付けなどやる事が山積みなんだぞ！
さあ働け！』

流石の怠惰ぶりにアナザーデイケイドも叱るが

「やー！テンペストに温泉旅行行きたい!!もしくは皆んなと別荘でゆっくりしたい!!」

『我慢しろ!!』

「やー！ー！」

『子供か!!』

『いい歳の大人が駄々こねるんじゃねえよ!』

「好きで大人になったと思うなよ!!」

と騒いでいた時である、ドン！と強い振動と揺れが逢魔を襲ったのだ

「っ!!」

幸い地震？はすぐに済んだが

「何！また未来から子供が来たの!？」

「陛下!!」

燃え尽き症候群になっていたハルトの元は届く謎の衝撃と爆発が起こったと言う急報が事態を動かすのであった

慌てて現場に向かうと

「陛下！此方は危ないので下がってください！」

「んな事言つてられるかよ被害は？」

「死傷者はいません無人区間なのが幸いでしたが」

「何さ……これ……」

ハルトは地面が抉れたまるで爆心地のような景色とその先にある此処とは違う街並みが見える景色に困惑するのであった

「直ぐに関係者以外立ち入り禁止にして！それと大隊規模のトルーパーを滞在、此処から出てくる奴が接触したら友好的に接する事、抵抗とか悪意があるなら射殺して構わない！」

「イエツサー！」

「テストアロツサ、緊急会議を開くから幹部を集めて」

「かしこまりましたハルト様」

『五月病は吹っ飛んだか？』

「アレを見て吹っ飛ばない奴がいるかよ」

どうやらまた新しい厄介事が来たようだな

一周年記念短編 変身ⅠF フアルシオン

この分岐はハルトがジオウ最終回放送前に自殺という最悪の選択肢を選んだ際に始まる√

しかし落ちた先がジャマーガーデンではなかったらとなります

もしも自分の運命が誰かに何かに決められていたとしたら？

優しい家族？理解のある友人？最愛の人？との出会いも所詮は何かの舞台装置ならば

「ごめんなさい、君といるとイジメられるんだ…だから近づかないですよ」

「そう…」

「ごめんなさい……本当にごめんねハルト……っ！」

「この終わらない不幸と絶望にも意味があるのだろうか？」

「いや意味なんて何も無いよ……はあ……こうなる前にジオウの最終回放送して欲しかったなあ、あとゼロワン見たかった」

唯一 俺の人生に意味があるなら仮面の戦士や光の巨人に出会えた事だろう 例え絵空事であっても心を救ってくれた

「神様がいるなら、その日まで生きてたら何かあったのかな？……あつたら責めて幸せになりたくないなあ……1人は寂しいから誰かいて欲しい……」

恨みはある……だからこそ最期に意趣返しとして 死んだら連中の悪事が証拠と共に

ネットやマスコミへ拡散するようにした、誰かの心に残ればとだが

「もうどうでも良いか、そんなことはさ」

―飲めや歌え 死後に快樂などない―

この日、俺 常葉ハルトは高所から飛び降り自らの生を終えた 川に落ちた為か遺体は搜索されたが見つからなかった

後日 彼の骨なき墓に涙を流しながら花を手向けた女性が1人いたという

—————

目が覚めたら、そこは

「俺、死んだ筈だったんだけどなあ…やっぱり水落ちは生存フラグだったか」

知らない天井とは言わずに起き上がると自分の体を確認したが

「あれ？」

今まで受けたイジメや暴力の外傷が消えていたのだ…成る程

「ここが死後の世界って奴か……え？」

まさか本当にあるんだなあ…いやはや驚いた理由？それはね

「!!」

赤い龍が飛んでいるからだよ

「……………凄いなあ」

「ん…あれえ！これは驚いた君大丈夫かい!?怪我はない？」

第一村人発見!と思い振り向いたのだが

「はい!申し訳ありませんが此処はど…」

声をかけてくれたのはド派手な格好をしたカイゼル髭を蓄えた人だった

「……死後の世界の番人ってアヌビスとか牛頭馬頭とかケルベロスじゃないんだ…」

予想外にファンキーな人だと驚いてると

「死後の世界?何言ってるの?ここはワンダーワールド!様々な知識や物語が集まる世界だよ!!」

その言葉に思わず条件反射で

「おじさん…何かやばいキノコでも食べた?」

「おじ…っ！違うよ僕の名前はタツセル！宜しくね、えーと」

「常葉ハルトです」

「ハルト君、良かったら僕の家に来ないかい？」

「え…良いんですか？」

「勿論！困っている人を放っては置けないよ!!」

「……………」

その優しさに思わず涙が溢れたのであった

「え？ええええええ！」

「あ…いえ…すみません…：人に優しくされたのが久しぶりで…」

「どんな環境にいたんだい？」

純粋な善意で伸ばされた手を見てハルトは泣き崩れタツセルは混乱するのであった

そしてタツセルさんの話を聞いてハルトは驚きで固まった

「つまり…その全知全能の書つてのに皆の人生や運命が書かれてるってこと？」

「そうなんだ、だからその本を巡って争いが起きてね…全知全能の書はワンダーライドブックと言う小さな本に分割されて色々な世界に散らばったんだ…そして今ソードオブロゴスというワンダーライドブックを使える聖剣に選ばれた剣士達が回収しているんだよ」

「そんな事が……」

俺の人生がその本に決められた事だと言うなら

「俺の運命は変えられたのかな？」

「それはどうか……しかし君の話を聞いたけど何というか」

「気にしないで下さい復讐するにしてもやる相手がいんですし……そんな事よりこのワ
ンダーワールドや助けてくれたタッセルさんに恩返しをしたいです！」

「明るいテンションで後ろ向きなこと言わないでよ！それに恩返しなんて気にしない
で」

「俺が気にするんですよ……そんな事に意味がないって笑う奴もいるかも知れませ
ん……けど意味があったって言われるようになりたいんです……俺にも生きてる意味があ
るって自信が欲しいんです」

「君……」

「だから俺は意味を探します、永遠の時間をかけたとしても必ず」

そんな感じで話していたら2人が茶飲みしていたテーブルに一本の剣が突き刺さったオレンジ色を基調とした装いに黒い刃を持つ剣が現れたのである

「……………なにこれ？」

「何で無銘剣虚無が此処に!!」

「無銘剣？」

「その剣は世界を滅ぼす聖剣で危ないんだ、下がって！」

「世界滅ぼすのに聖剣なん……………だ……………」

とタツセルさんが忠告してくれたのにハルトは危険というよりも

「綺麗じゃん」

そう思ったのだ吸い込まれるように俺は

「ダメだよ！」

「お前も存在証明が欲しいんだろ！だったら俺と一緒に探そうぜ！！」

タツセルさんの忠告を無視して無銘剣を手にとったのである

—————

それから数年後ハルトは無銘剣虚無に選ばれた剣士としてソードオブロゴスに加入し様々な世界に散らばったワンダーライドブックを回収する仕事をしているのだが

「んで、この世界にあるのかデザスト？」

「ああ匂うんだよ、本と剣が交わる最低で最高な匂いがな！」

ソードオブロゴスの制服に身を包むハルトの隣には骸骨のような顔をした本の怪物であるメギド デザストが隣に立っていた

この化け物との出会いは別の機会に話せればと思う

「そつ、んじやさつさと回収して帰るぞ」

「釣れねえな強い奴がいるなら少しくらい遊んでも良いだろう？」

「ダメだ本の回収優先」

「なんだよケチくせえ」

「まあ、その強い奴がライドブックを持って渡すのを拒んだ場合は別だ暴れてよし」

「流石相棒！分かってんじやねえか！」

「つせえ相棒じやねえよ!!何度言ったら分かる!……こんな時間か…飯は牛丼で良いか？」

「ああ紅生姜山盛りでな！」

「程々にしろよ、あの山やると怒られるの俺なんだからな！」

と肩を組むデザストの手を払うが邪険にはしていない辺り彼の人の良さがわかる

「そーいやあテメエの女はいねえのか？」

「女？」

「アレだよアレ記憶消そうとしたら『君を好きになつた思い出を消さないで』つて泣かれた奴」

「バツカだなあ、俺とあかねはそんな関係じゃねえよ」

「俺は別にそいつの事とは言ってねえが？」

「……………」

「おい、デザスト今の会話は忘れろ」

「どうするかなく」

「牛丼特盛汁だく紅生姜山盛りでどうだ？」

「乗ったあ！」

「取引成立だあ！」

「これで良しと安堵したが

「ん？匂うぞ！この匂い…近いな」

「牛丼屋か？」

「んな訳ねえよ！本のだ！」

「っ！場所わかるか？」

「おう…上だ！」

「は？…っ!!」

ハルトとデザストは構えると同時に突風が周囲を襲う。その中から現れたのは巨大な驚…何というか特撮映画なら看板貼れる奴だな…いや待てよそう言えばウルト○Qでこんな感じの怪獣がいたような…じゃない

「風と驚か…成る程な」

「ストームイーグルライドブックか…大方ライドブックがこの世界にいた生き物と融合したって所か」

「だろうなあ…で、どうするよ」

「決まってるんだろ回収するぞ」

『無銘剣虚無』

「そこなくっちゃな」

ハルトが右人差し指に嵌めた指輪が光ると格納魔法で収納された無銘剣虚無が右手に現れると同時に腰には炎と共に覇剣ブレードライバーが現れると無銘剣をドライブバーに装填した

ハルトが取り出したのは一冊のライドブック

神獣 生と死を永劫繰り返す不死鳥

その記録

『エターナルフェニックス』

『かつてから伝わる不死鳥の伝説が、今現実となる！』

ライドスベルを読み終えるとハルトはライドブックを閉じてドライバーに装填すると低い待機音と共に右手で無銘剣を再度握りしめる

いつもこの瞬間に関しては何とも言えない感覚となる…本当にあの日から何か変わったのだろうか？それとも変わってないのか？

そもそもこの戦いに意味などあるのか？そんな無価値で無意味な問いだけが頭を支配する

しかし今は戦わないとならない

今までもこれからも…まとわりついて止まらない過去への迷いを振り払うようにトライバーから無銘剣を引き抜いた

『抜刀』

音声にすればシンプルなものであり永遠の灯を帯び燃え盛る刀身の無銘剣をハルトは驚掴み狂ったように笑うと同時に無銘剣に宿せる唯一の力 永遠の灯がハルトの全身を焼き尽くさんとばかりに燃え広がると

「あはははははははははははははははは!!」

「よく笑えるよな…ドン引きだぜ」

デザストは相棒の狂気を見て引いているのはご愛嬌だが

痛い痛い痛い！だけど…コレで良い…痛みがあるから生きていると感じられる

…

「はははは……」

そして辺りに静寂が支配するとハルトは宣誓した敵を倒す為に

「変身!!」

するとハルトの背中から翼が現れると体を包むように纏うと、その姿を変えた

さながら燃え盛る不死鳥を思わせる騎士

本来の歴史なら終わりを齎す破滅の不死鳥

しかし新たな担い手は世界の均衡を保つ為に大空を翔る

『エターナルフェニックス！虚無！漆黒の剣が無に帰す！』

仮面ライダーファルシオン 爆誕！

「行くぞデザスト」

「はいよー」

ファルシオンは羽で空をデザストはマフラーを介して建物から建物へと飛び移る

「!!!」

大鷲も高く飛び突風を放とうとするが

「頭が高い」

『永遠のお猿…無限一突!』

「ふん!」

ファルシオンは無銘剣に「西遊ジャーニー」のライドブックをリードして無銘剣の刀身を延長するとそのまま鳥頭目掛けて振り下ろした

「!!!」

大鷲はそのまま地面に落ちようとしたので

「良くやったハルト、後は任せな」

デザストは右手に持つ片手剣 グラッジエンドの鋒を地面に這わせて構えを取るも

そのまま突貫するのをみて

「何言つてやがる俺がやんだよ！」

『必殺黙読！抜刀！』

ファルシオンも無銘剣をドライバーに戻しトリガーを引き再度抜刀すると炎を纏いながら大鷲目掛けて突貫する

「カラミティストライク！」

『不死鳥無双斬!!』

「たあ！」

!!!
!!!

2人がすれ違う形となり大鷲を切り裂くと断末魔を上げて爆散する着地した2人の手元にはストームイーターグライダーブックが治ったのだが

「ふう…任務完了だな」

「んじや牛丼屋に行こうぜ！約束通りのオーダーをさせて貰うぜ」

「おう、んじや買いに行くか」

「俺も店内で食わせろよ」

「お前が店に入るとパニックになってメシ所じやねえんだよ」

「ちっ！しようがねえなあ！じやあ行こうぜ相棒！」

「誰が相棒だ！っておい肩組むなよ!!」

変身解除して2人は町に向かうのであった

それを見守っている黒い影、その手には暗黒剣月闇が握られている

「流石は同業者というべきかなライドブックの暴走体をあっさりと鎮めるとはね」

「何してんのさカリバー、早く行くよ！」

「ああ………必ず助けるから待っててねハルト……あの時と違って私も強くなったんだよ？」

その剣士は眩くと空間を切り裂き消えるのであった

START! 異世界からの来訪者

1話

前回 パヴァリア光明結社との戦いもひと段落し燃え尽き症候群に襲われていたハルト、しかし突如起こった爆破により異世界と繋がってしまう、異常事態にハルトは王国幹部を集めるのであった

「さて事情は聞いての通り、あの爆破で異世界のポータルが出来たから対応と方針を決めたい」

「放置すべきだ偶発的なら閉じるまで監視するのみに留めるべきだ藪を突いて蛇を出すのは勘弁願う」

「俺もカゲンちゃんと同じだね厄介事は遠慮したいかな、それよりも今はこの世界の問題ファルムスや教会の対応が優先だよね」

ジョウゲンとカゲンは放置と逢魔本国の対処って感じかうオズも頷いているあたり賛成って所だな

「私もです錬金術師のいざこざが片付いた以上は地盤硬めに当たるのが適切かと」

「あら私は最低限の調査はすべきと思いますわ、あの爆破が一度だけなら問題ありませんが二度三度あるなら無視出来ませんね」

「うむ、それにあの世界の脅威判定もせぬ内に閉じるのは勿体なからうよ」

テスタロツサとヤクツキは賛成か

「私は何方でも構わん、異界の門は珍しいが我が君と異世界を何度も行き来しているから今更だ」

「そうだよねえ、強い奴がいるならアレだけど」

カレラとウルティマは中立かな

ハルトも意見を言う

「アレが最悪市街地でドカンとか笑えねえよな…今回は無人区間だから良かったのもあるし一回は調べねえと危険だな最低でもアレが何なのかは知る必要がある」

あの世界が繋がったのも何かの縁だし調べておくに越した事はないだろう概要だけでも把握しておかねばならない

「調査に向かおう」

「構わんが誰が行くのだ？」

「そりや俺でしょ！アナザーデイケイドの力で転移や座標把握も出来るの俺だけだし」
「ふむポータル作成も加味すればオレだな」

「となると東さんはお留守番かな、こっちのポータルをそっちに繋げる人が必要だし」
「これは絶対だろうと皆が頷くと」

「そうなれば現地の人々と交渉を行うものが必要ですね」

「そうだね魔王ちゃんもキャロルちゃんも外交力皆無だしね」

「何だとジヨウゲン!!」

「待て否定は出来んだろう？ハルト坊の得意な交渉は物理的な交渉が主だからな」

ヤクツキの意見にハルトは納得した顔で

「……それもそうか！」

「納得しないで頂きたい！」

取り敢えず調査と相なりハルトはキャロルとウオズを連れて行くことになる

「……今更だけどキャロルとハルト2人きりよね？」

アンティリーネの言葉に全員がハツとしたのであつた

『おいハルト』

「ん？」

『ナツキにつけた座標が別世界で検知されたぜ？』

「へ？どゆこと？」

『さあな？けど面白いものが見つかったぜ』

とアナザーWが見せてくれた映像には

『変身!!』

ジャマトライダーになっている俺の姿があった

「……は？」

その後の詳細は禍福の天秤の通り、千冬と束を派遣する形を取ると

「んじや調査開始だな」

と旅支度を済ませたハルト達をハウンド達が見送りに出る

「陛下！……武運を！」

「おう！ま、程々になな」

「それで済む訳なからうバカが」

「何だと！せめてライダーをつけろ！」

『それ俺の台詞!!』

『お前は筋肉でしょ?』

「はいはい喧嘩してないで行きますよお二人とも」

そして3人が潜ると世界の門は閉じたのであった

—————

ここはどこにでもあるような場所 来禅市

そのこの廃屋に立つ3人の男女がいた

「よし調査開始だな！」

『気合い入れて行きます！』（オーラア！）

早速ハルトが初心を忘れずに文字Tで伝えると

「さっさと脱げ、悪目立ちするぞ」

「えー！折角良いのだったのに…あ！なら」

『ドレスアップ』

アナザーウィザードの力で速着替えをするとあのラブアンドピースを掲げる天才物
理学者 桐生戦兔の私服になる

「まさか……この服に袖を通せる日が来るなんて！」

感涙咽び泣くハルトであるが

「コスプレして泣いてる暇があったら行くぞハルト」

「コスプレとか酷くない!？」

ドライな部分はドライなキャロルであった

そして一向は街に到着すると

「アナザーW、地球の本棚にアクセスしてくれ」

『あいよ、んじゃ検索を始めるぜ』

「キーワードは、爆発、空間歪曲って所か」

『かなり絞れたな…がもう少しキーワードが欲しいな』

「うーん…：そうだなあ…」

「ならこう継ぎ足せ、異世界」

キャロルのキーワードで本が瞬く間に整理されていき、とある本が現れた

『空間震だつてヨ』

「空間震…聞いたことがないな」

聞けば、大気が突如圧縮して爆破を起こすらしい。この世界で起こったユーラシア大陸の空間震では多くの犠牲者が出たとの事だが

『……………おいハルト大変だ!』

「どうした? 誰かがポテチ食べた手で本を開いてたのか?」

『そんな事絶対許さねえヨ:じやない! 中身が一部読めねえんだ』

「え? 今までそんな事無かったのに: 具体的にはどんな部分が?」

『何故空間震が起こるのかって一番知りたい部分が読めねえ』

「マジかよ:…つか地球の本棚に細工できる奴がいるのかよ」

『誰か知らねえが、知られたくない情報を意図的に隠してるな:…この手のは細工した本人に解除してもらわないとダメだ』

「さいつあくだ:…しやあないウオズ、キャロル取り敢えずポータルを作へサイレン音な
にこれ?」

ノイズか？と首を傾げていると

「空間震だあああああああ！」

一斉に街の人が逃げ始めたのを見て

「よし、避難しよう！」

「いやその空間震の調査に来たのですよ！」

「そうだ、取り敢えず隠れるぞ」

「我が魔王、透明になれる能力はありませんか？」

「あるよー！つかウオズまで俺を猫型ロボと同じ扱いするなよ」

『ベルデ』

アナザーベルデになるとキャロルは抱きつきウオズはハルトの手を繋ぐと空いた手でカードを握りつぶす

『クリアーベント』

透明になりながら街中を探索していると1人の少年が血相を変えて走っていた

「よし第一村人発見だぜ」

それをビルの上から見ていたハルトは透明化を解除して見下ろしているとウオズとキャロルはフードを被り顔を隠すと

「何で隠すの?」

「我々の事がバレたら大変ですので」

「……俺は?」

「大丈夫だろう、精々が珍しい動物か街の怪異くらいの認識だ」

「んな訳あるかあ！」

と話していたら先程走っていた少年が黒髪のドレスを着た女性から剣を突きつけられていた場面を見て

「剣を喉元にか…俺も千冬にされてるよなあ…」

「お前の場合は束との悪戯がバレた制裁だろうか？意味合いが違う」

「制裁で剣はやりすぎなんだよキャロル？」

「あの…我が魔王、あそこの少年を助けないのでですか？」

「うーん…何となくだけど大丈夫じゃないかな？だつてほら」

と指差した先から大量のミサイルが飛来するがドレスの女性は手に持つ剣で薙ぎ払うと、突貫してきた銀髪の女の子と剣を交わしているではないか……そしてハルトの方にも運命の悪戯が流れミサイルが来るではないか

「あ、来た」

『ミサイル接近を公園で散歩してきた犬が近づいたようなテンションで言えるな相棒』

「何か慣れた」

「オレも感覚が麻痺しているな恐怖に思えん」

「我が魔王お願いします」

「うむ……よいしょつと」

『ウィザード』『コネクト』

「お返しします」

とミサイルを反射して撃ち返したらだ撃ち落とされると同時にパワードスーツを着た女性達が包囲してきて銃をむけているではないか

「動くな！……って言葉通じるのかしら？」

「通じるが？」

「そ、そう……私は自衛隊の日下部よ、お前は一体何者だ」

「何者か……ねえ、そだなあ指輪の魔法使いとでも名乗るか」

「魔法使い（ウィザード）だど！」

「そだけど?」

「新しいシステムの実験? いやしかし…」

と何か考えているのか知らないが取り敢えずISSなら強制解除パスコードを使って無力化しようとしたが反応しない

「……………ん?」

アレはISSじゃないのか?

『おう、アレは顕現装置(リアライズ)って特殊な装置を使ってるISSとアレは似て非なるものだけハルト』

「……………?」

『ムササビとモモンガのようなものだ似ているだけの別物だな』

「成る程な…ふむ」

「えーと…悪いのだけど同行してくれないかしら？」

「あ、ごめん…それ無理」

だって俺達戸籍作ってないし…って前にも何処かでこんな展開会ったような

「そう…なら構え！」

「やれやれこうなりますか」

「仕方ない事だろう？」

と2人も臨戦態勢に入ったと同時に3人は何とも言えない浮遊感と共に転移したのであった

そして

「……………ん？」

「()は？」「何処だ？」

周りをキョロキョロ見渡すと

「初めまして…日本語わかるかしら？」

「は？」

「日本語分かるわ、ナチュラルに馬鹿にしてんじゃねえ」

『コネクト』

ハルトは迷わずに金タライを少女の頭に落としたのであった

「あいたあ！あんた何すんのよ!!」

「嬢ちゃん、俺は敬語使えないんだよ」

「その心は我が魔王？」

「え？だって俺が一番偉いから？」

「おい」

「なんてね王様ジョークだよ」

「笑えんぞ馬鹿者」「ええまったく」

「ハウンドなら何でやねん！って言いながらブラスター撃つのに…」

「それはそれで問題のような気がします!!」

予期せぬ出会いをする事となった

—————

ここは浮遊戦艦ラタトスク そのブリッジにて

「うちの戦艦の方が大きいな」

「え？ ああ…我が魔王の旗艦ですね」

「そーそー…スターデストロイヤー『ピースメーカー』宇宙まで航行出来るから凄いなええ…」

異世界で紛争起こしておいてピースメーカー（平和の創造者）を冠したあたりハルトの凶太さが現れていたりする

「結論は？」

「うちの子の方が凄いい！」

「私達は別に張り合っていないから、さっさと直りなさい！」

と赤髪ツインテールの子供に言われたのでハルトは変身解除して向き合う

「よっす俺は「ちよつと待ちなさい！」ん？どうした」

「あの骸骨顔が素顔じゃないの！」

「アレは俺の顔の一つではあるかな」

「どうなってるのよ？」

「知らない方が良い事もある」

「そんな訳ないでしょ！色々教えてもらうわよ貴方達が何者かあの骸骨顔は何なのかとか色々ね！」

「この小娘舐めた口を「キャロル嬢、落ち着いてください見てください我が魔王を」む？」
「なら此方も聞かせてもらうぞ、あのパスワードスーツは何なのか空間震とは何なのかをね」

「は、ハルトが脅していない…だと！」

いつもなら頭が高いと魔王覇気で黙らせるのに！とキャロルが驚いていると

「その通り！数多の世界を旅して一周年を迎えた我が魔王も成長しているという事です！」

「メタいよオズ」

そしてラタトスクの艦長 五河琴里と副官の村雨令音から聞いた情報は以下の通りである

曰く 空間震というのは精霊界という場所に住まう世界を滅ぼす災厄と言われる精霊が此方側に顕現する際に発生する

曰く 精霊の対処方は武力を持って排除している その組織がAST 日本の自衛隊から派生した部隊らしい

「精霊というのか…相棒」

『わーった精霊だな調べておくぜ』

「じゃあ今度はこっちの質問に答えてもらおうよ」

「ああ、だが…この話はここにいるものだけに留めて欲しい…まあ荒唐無稽だけだな」

「……分かった話してみなさい」

「んじゃ行くぜ、先ず前提として並行世界の概念を念頭において欲しい」

そこから俺の説明となる

俺達は異世界人と前振りして話した

自分達の世界にある国で空間震が発生、この世界と繋がったため空間震の関連を疑い原因の調査をしにきたと

そう伝えると琴里は頭を抱えて

「まさか別世界つて精霊界以外にもあるの?…それにその世界で空間震とか嘘でしょ…」

「本当だよ、じゃないと俺達はここには居ないからな」

「そうよね…」

「正確に言えば俺達の国で何故、この世界の現象が起こったかだ原因の解決をしないと俺達の国の民が空間震に襲われて夜も眠れない」

「…以外と責任感があるのね」

「以外とは失礼だな俺達の国なんだから当たり前だろ」

「俺達…?」

「そう言えば自己紹介が遅れたな俺は常葉ハルト、異世界にある国 逢魔王国で王様をやっている」

「嘘でしょ!こんなのが王様!?!」

「因みにこんな風体だが魔王と呼ばれている」

「嘘でしょ…絶対こんなの四天王最弱じゃない」

「貴様、我が魔王を愚弄するか！」

「そうだ！精々が四天王の2番目に出てきたはいいが主人公の修行の成果で嘯ませ犬になる奴だ！」

「落ち着いてウオズ、最初は信じて貰えないと分かっているからさ追々認めて貰えば良いよ…あとキャロルには今日の夕飯は作りません」

「はっ！」「そんな!!」

「何というか…予想外な来客だな琴里」

「まったくよ士道の件でも手一杯なのに…異世界から何て…」

そこで琴里はあるアイデアが思いついた

「ねえ貴方達の目的は空間震が自分達の世界に来ないようにする事…違う？」

「まあそうだな、後は原因の対処もだな」

「なら提案があるんだけど…私達に協力しないかしら？」

「へ？」

「私達も空間震の発生を無くしたいの、そして空間震を生む精霊との平和的な共栄を望んでるの」

「ふむ」

首肯して会話を促すと

「今までは武力で排除ないし撃退してたけど今はそれが可能な交渉人がいるの、その子

の護衛や精霊の対応に協力をしてくれないかしら？」

「対価は？」

「そうねえ……貴方達の世界で空間震が起こらなくなるは違うし……あ……戸籍とかこの世界でやっていくのに必要なものを手配するのはどうかしら？それと拠点の提供よ」

「乗ったあ！」

ジオウⅡの改変に頼らないのは助かるぜ！と安堵すると

「はあ……我が魔王」

「まあ構わんだろう、それよりポータルを作るぞ手伝えハルト」

「おう！」

「ポータルって？」

「まあ俺達の世界とこつちの世界を繋ぐ橋みたいなもんだと思ってくれ」

「もう何でもありね、貴方達」

「……………そう言えば君達の世界にもラタトスクに似た船があると言ってたが」

「お、見たい？そこまで言われちゃ仕方ないなあ」

ハルトはコムリンクでハウンドに通話を繋げる

『陛下、ご無事でしたか心配はしてませんでした』

「ああ、少しはしろ」

『意味がありませんからね』

「まあな…現地人の協力を得られそうだ、もう少しでポータルが完成するピースメー

カーの発艦用意をしておけ」

『っ！そこまでの敵なのですか？』

「いや、ただ今後の展開と此方の武威を示すのに必要なんだ頼むぜハウンド」

『直ちに、ハウンドアウト』

通信を終えると

「おい完成したぞ」

「よっしやあ！ポータル起動！」

それと同時に巨大な青色の門が現れると中から現れたのは赤と白のツートンカラーの巨大戦艦 ブリッジが二つあるのが特徴の船

ヴェネター級スターデストロイヤー

逢魔王国軍 旗艦 ピースメーカー

の登場である因みにデストロイヤーとは

駆逐艦（デストロイヤー）ではなく文字通り

星を破壊する意味でよスターデストロイヤーである

「はーはははは！アレこそが逢魔王国軍の旗艦 ピースメーカーだ！」

「我が魔王、その台詞だと王国が圧政をしているように捉えられます」

「そうか…じゃあ笑い方は控えよう、ハウンド！良くやった掴みはバツチリだ！」

『陛下の期待に応えられて良かったですよ、さて目の前の船が同盟相手の船ですか？』

「そうそう、攻撃しないでね」

とハルトは笑いながら紹介すると

ラタトスクの内部では全員が口を開いたまま固まり

「SF映画？」

そうブリッジの中で呟いたというがハルトは笑みを浮かべて

「さあ俺達の戦争（デート）を始めようか」

十香デットエント：その前に

さて前回 空間震の原因を把握し現地勢力、ラタトスクと同盟を結んだハルト達は精霊と交渉可能な少年に会う事となった

「初めまして五河士道です宜しくお願いします」

見たところ普通の少年だが：俺と一緒に何かに選ばれているのだろうかと考え

「常葉ハルトだ、宜しく頼むぜ少年くん」

先達として少しでも助けられたらと思うと握手する

「はー」

「君も知っての通り、俺の役目は君がする交渉…まあデートらしいんだか…そのデートでの露払いと護衛が主な仕事だよ変なSPだと思ってくれ」

「SPって…そんな大袈裟な」

「実際、君の働きにはこの世界と俺の国の命運がかかっているからな…助けが必要ならいくらでも言ってくれ力になるよ」

「あ、ありがとうございます！ハルトさん！」

「おう任せておけ」

「挨拶は終わったかしら、なら先ずは精霊との交渉に必要なコレをしまらうわ令音」

「ああ」

そう言われて見せられたのは『マイ・リトル・シドー』と書かれた…まあ端的に言え

ばギャルゲーである

「これを解いてもらうわ」

「これって恋愛ゲームか？」

「そうよ先ずはコレで女性とのコミュニケーションやエスコートを学びなさい」

「こんなゲームで「ゲームをバカにしてはダメだよ少年くん」え？」

「どんなものであれ、作り手の思いが籠っているものを否定しちゃいけない折角皆が君の為に作ってくれてるんだからさ」

「ハルトさん…」

「ん？……おう、なあ令音さん、それってもう一つある？」

「あるが…君もやるのか？」

「おいハルト、まさかと思うが現地妻を落とすテクニクを学ぶ為か？」

「不謹慎な事言うな、こいつが遊びたいって言って聞かないんだよ」

「こいつ？」

と土道が首を傾げるとハルトの体の中からパラドが現れた

「え、誰！」

「こいつはパラド、俺の相棒だ」

「体から抜け出したこととかに関してはツツコミを入れないわ」

「まあ宜しくな、なあハルト遊んで良い？」

「おう……つか恋愛ゲームならトキメキクライシスとかラブリカの出番だろ」

「何なのよそのトキメキクライシスって」

「至って健全な恋愛ゲームの名前だが？」

「アンタの世界のゲームタイトル事情どうなってんのよ!!」

「何せ神様が名付けたからなあ……」

「どう言う事!?!」

—————

その後、士道は大変な苦労を重ねながらゲームをクリアし実践編となったのだが

「なあ何で俺とキャロルがデートする流れなんだ？」

質問には無線機になつてるイヤホンから答えが来た

『単純な土道じや複雑な女心が分からないから見本でデートしてあげなさいな』

「いや、その…俺達のデートに初々しさとかを求めんなよ」

「オレ達のデートを監視されているのは気分は良くないが…まあ良いハルト行くぞ」

「おう…ま、結果オーライか…最近はどうして2人の時間もゆっくり取れなかったからな」

「構わんさ…だがアイツらとも時間を作つてやつてくれ、口には出さんが寂しかったからな」

「当たり前前だろ？皆幸せにするのは俺の人生に取つて最重要かつ決定事項だ、帰ったら

錫音とアンティリーネ達ともデートだな」

「ああ、だが他の女の名前を今は出すな」

「分かってるよ今はキャロルしか見ないから」

「……………ずっとオレだけを見てほしいのだがな」

「分かってるよ、けど知ってるだろ？俺がろくでもないのは」

「今更だな、だが夫のダメな部分も愛するのも正妻たる所以だな」

「んじや行くぞキャロル」

「ああ、監視している連中に砂糖を吐かせるか」

「辞めような、俺達が帰って呑むコーヒーが無くなるから」

その言葉通り、ハルトとキャロルは熟年夫婦を思わせるデートと惚気を見せてラタトスクの中には砂糖を吐く船員と嫉妬に狂った船員がいたと言う

デート後

「言つたら俺のデートは参考にならないって」

「♪♪♪」

そう言いながらキャロルの頭を撫でると彼女は気持ちよさそうに目を細める姿に

「た、確かに…土道の参考にはならなさそうね」

互いの好感度がMAX所がカスタしているのだから仕方ないと令音が言う

「うん、俺も彼処までグイグイ行けないよ」

「ただな少年君、エスコートの基本は相手のことを第一に考えることだ、そしてきちんと目を見て話すこと自分の気持ちを言葉でもだが行動で見せる事、それと個人的な意見なだけで」

「は、はい！」

「デート中は他の異性の話はぜったいしない事、したら血の雨が降ると思え」
『実際に血の雨降らせたからナ』

「……はい!!!」

「良い返事だ」

『珍しいなハルトが真面目にアドバイスするなんテ！』

「当然だ助力は惜しまない…何せ国のため以上に彼のような少年少女の青春を奪う権利

なんて誰も持ってないんだからね」

「お……おお……凄い余裕ですね」

「ま、安心してデートしなよ俺達は最強だから」

『お前は何処の五条悟だ』

「俺は青春を奪われた側だから少年くんには楽しんで欲しいんだよ」

『またサラリと暗い過去を話すな』

「大丈夫だよ乗り越えてるから」

『ほお……なら貴様が時折夢に見る あかねとは誰だ未練があるのか？』

「そりゃ「待て」……あ」

「あかね？それは初耳だな…オレも聞かせて貰おうか」

いつの間にかキャロルが万力の如き力、それこそ赫刀に出来そうな程の力で抱きついてきたのだ

「あ、あはは…って折れる折れる！背骨が折れるからキャロル辞めてー！」

「お前なら再生するから問題ない！」

笑って誤魔化そうとしたが失敗した、その時！

「た、東と千冬から通信？何かあったかな？」

話題を変えようと慌ててコムリンクを起動する流石のキャロルも力を緩めたが

『ハルくん！あのね今、並行世界のハルちゃんと会って、ちょっと聞きたい事があるんだけ

』ど』

「な、何だ束…俺で答えるなら答えるよ！」

並行世界の俺…どんなやばい奴だったんだと息を呑むと

『うん！あのさ…あかねって幼馴染について束さんは教えて欲しいなあ!!!』

マジでやばい奴だった、束達にもあかねの事をカミングアウトしてやがる!!

『それは私も気になる夫の女性遍歴くらい把握しておかねばならんからな』

「ほお丁度良い、お前達…オレも今ハルトにあかねとやらの事を問い詰めていた所だ」

『やるねキャロリン』

『ノーヒントでたどり着いたのかキャロル』

「重要なタレ込みがあつたから当然だ」

相棒に裏切られた！

『失礼だナ！』

「よし、お前達は並行世界のハルトから情報を集めてこいオレはこっちのハルトから聞く」

『合点承知！』

「いや君達の目的つて、ナツキとエルフナインの助力じゃなかつたっけ!？」

『安心しろハルト、私はお前のことを愛している……これは嘘ではない、だがな夫婦間で隠し事をされるのは私も不安になる……だから聞かせて貰うぞベットのうえでな』

「千冬さん!!真面目な貴女がボケに回られると色々ややこしくなるから!!それとベット

の上でつて…ま、まあそれなら「おい待て」ぎゃあああああー！」

「千冬、それならオレが変わりに聞いておいてやるから安心しろ」

『何を言っているキャロル、これは私が聞くと決めているのだが？』

「ほお…オレと戦う気か？」

『そうだなそろそろ誰が正妻かハッキリしておこうか』

「新しいライダーシステムを手に入れて有頂天になっているなら分からせる必要があるな」

「ち、ちよつと待つて…キャロル…このままの力で締め上げられると病院のベットで話すことになる」

「ほお…ナース服が御所望か」

「ちがーう！18歳未満の少年君もいるからその辺の話は後にして!!」

『ちよーつと待ったあ！正妻と言うなら東さんを忘れてもらっっちゃ困るね!』

「何だ、いたのか兎」

『酷いよキャロりん!……あ！仲間はずれは良くないからスーちゃんとアンちゃんにも連絡したからね』

「い、いやちよつと待て!!あの2人にもか!!」

『当たり前じゃん』

『それに手遅れだ、連絡したぞ今頃』

「……あ」

「ハルト？」

背後から殺気！

「私にも教えて欲しいかなあ」

「ええ旦那様の秘密、教えてよ」

「あ、あははは…た、助けて相棒！！」

『おつとすまないなハルト、これから俺達はイクササイズの時間だからお暇するぞ』

『さーて解散解散！』

「おいコラ、元はと言えば誰の」「お前／ハルト／旦那様が隠してたのが悪い！」「で、ですよね…：わかったよ！話すから！ちゃんと話すから！！」

「そうか…：なら良いだろう」

「ほっ…助かつ「だが黙つてた件については問い詰めるぞベットのうえでな」へ？」

「そうだね」「『バインド…ナウ』」

「い、いやちよっ！」

「旦那様、観念して貰いますわよ」

「アンティリーネ!？」

「すまないがコトリ、今日は失礼するぞ」

「構わないわ、家族の問題でしょ？応援してるわ」

「感謝する、お前達連れていけ」

「いやああああ！ドナドナされてるう!!!」

と鎖でミノムシにされ攫われるハルト達の背中を見て

「見なさい士道、アレが女性関係を拗らせて尻に敷かれた男の姿よ」

「ハルトさん…」

「シン、君も遠からず体験するだろうから覚悟すると良い…まあアレより酷いかも知れんがな」

「不穏な事言わないで下さいよ令音さん!？」

翌朝 頬がこけたハルトと肌艶が良くなった三人を見て何があったかそれとなく察した士道なのであった

十香デットエンド？

さて色々あったが今回、士道は初デートとなる世界の命運をかけているがな

「ハルトさんや皆んなの為にも頑張らないと…それでハルトさんは何処…：…に」

と待ち合わせの合間を使い周りを見渡しているが誰もいないなど考えていると耳につけた通信機から連絡が入る

『どうかしら士道、聴こえてる？』

「あ、ああ…なあ琴里、ハルトさんって何処に」

『あら？さつきから貴方の後ろに立ってるじゃない』

「へ?」「やあ」「うわあああああ!」

尻餅ついて慌てた土道を見ていきなり現れたハルトはケタケタ笑う

「あはは! いやあごめんごめん、けどナイスリアクション! 逢魔だとみんな対策してるから誰も驚かなくてさくあー楽しつ!」

「い、いや! いつの間!!」

「タネも仕掛けもございまーす!!」

指を鳴らすとハルトは周囲から見えなくなったのだ

「え? 何これ!」

「光学迷彩だよ俺の仲間、バイオグリーザの能力…俺ね仲間の力を借りられるんだよ」

「へ、へえ…」

「だから隠れて護衛するから安心してデートしなよ少年君、じゃあねえ」

「え？」「シドー」あ、うん！

そして土道や十香とデートを楽しんでいる中

「ふう……」

ハルトはディスクアニマルやメモリガジェットの支援を受けながらもデートの尾行をしていた

「しっかし初々しいねえ…」

『お前もあんな時代があつたよナ』

「そうだね誰もが初心者だよ、俺の初デートはナンパ男から錫音を助けた所からかな…」

『そんな奴が五人の妻を持ち、あまつさえ義娘までいると言う』

『とんだスケコマシになりやがって!!』

「ほほお…アナザーW?今日は久しぶりにジープで追いかけていたのかな?」

『はっ!スピーダーバイクで追いかけて回された今の俺にジープなんて怖くねえぜ!』

「最近アナザービルドとドライブが改造したらしいけど?」

『……………』ダツ!

『逃すな!追ええええ!』

『おいみんな!奴を跳ねてK O C K B O C KのPV撮ろうぜえ!』

『音源は俺達に任せろ!』

『カメラなら俺のカメラモジュールがあるぜ!』

『大丈夫だアナザーW、痛みは一瞬だ』

『お前ら血も涙もねえナ!!』

今日もいつも通りだなあ……こいつら

『こんな当たり前認められるかああああああ……』

『あ、アナザーWがジープに跳ねられて錐揉み回転しながら宙を舞ってる！』

『よしアナザーパンクジャック出番だ！K○C K B○C Kを歌え！』

『OK!!!』

「ふう……今日も青空が綺麗だなあ」

コーヒーを飲みながら遙か遠くを見ているのであったが

『!!!』

「どつたの?」

手鏡越しに話しかけてきたのは今回の護衛として選んだ ギガゼールである…こいつら連携能力が高いのでチームで土道を守っているのだが

「ふむ誰か少年君のデートを尾行しているとそれは聞き捨てならないな…うん、許可するまで食べちゃダメだよ」

ギガゼールに指示を出したハルトは通信機で連絡する

「艦長さん尾行者発見、対処は?」

『こつちでも確認してるけど…厄介ねASTよ』

「あああの精霊絶対殺す組織の…良かったら陽動で暴れるが?」

『それじゃアンタが護衛の意味ないじゃない…まったくよりもよつて何で鳶一折紙なのよー』

「相棒、検索」

『もう済んでるぜ…しかし危なかった…ファングメタルに変身してなかったら即死だったぜ』

「どんだけの加速力だったんだ？んでその折紙って奴は？」

『おお、大雑把に言うぜ士道の同級生でASTのエースで精霊への殺意がカンストしてる…oh…それと愛が重い女だぜ』

「ふーん…最後のはアレだけど…もしかして」

『ああ恐らく気になってる男の子が他の女とデートしてて嫉妬してる可能性が高いな』

「なーんだ可愛らしい理由じゃないか」

『精霊を恨む理由は殺された両親の復讐だな』

「可愛くない理由だな」

〈何でハルカは出来たのにお前は出来ないんだ!〉

〈ハルカに何故暴力を振るつたのよ!お兄ちゃんなんだから我慢なさい!!〉

「俺は何としてないのに!」

「……………」

『相棒?』

「んや何でもな『精神リンクで伝わってるぞ家族の事だな』…ん」

『俺達は記憶を見て知っているが、何故あの世界に帰ろうとする…あの家族の元に帰る意味があるとは到底思えない両親を逢魔に連れていけば利権を貪る老害にしかならんぞ』

『まあ、んな事したらテストアロツサ達から肅正されるがな』

「俺の家族は、アイツらじゃないよ…爺ちゃんや婆ちゃんだから」

唯一の味方である、あの人達に恩返しをしたいのだ…

「それに…俺にも家族が出来たからな」

『お前ら！久しぶりにハルトがデレたぞ！』

『録音したな貴様等！今日はこのネタでイジっていくぞ！』

「アナザーW、アナザーデイケイド…ジープと鬼ごっこ耐久勝負の刑！」

『ヒヤッハー！』

『『いいいやあああああああ!!』』

「まったく…らしくない事を言うもんじゃないか」

『『それでもないさ皆、嬉しく思ってるぜ』』

「そうか…あんがとよアナザーギーツ、嘘でも嬉しいよ」

『『本当なんだかな』』

『『お前は普段の態度が悪いから誤解されてんだよ』』

「アナザーバッファも煽らない…けどありがとうよ」

『『仮面ライダーをぶつ潰すにはお前がない困るからな!』』

『『ツンデレが』』

『何だと!!』

『やるか?』

『おい乱闘だ!ハルト止めてくれ!』

「はあ……王の勅令」

『『っー』』

「少し反省してろ……つたく」

『ハルト大変よ!鳶一折紙が鏡から出た謎の生命体に襲われてるわ!』

「ギガゼールの奴、何やってんだあ!」

『!!!』

鏡を見るがギガゼールは違う違うと首を振る…ならミラーモンスターの誰が…

『巨大なクモみたいな奴よ』

「デイスパイダーか？俺の所の奴じゃないとすると……野良だな、よし艦長さんちよつと蜘蛛の相手してくる」

『ASTを助ける気？』

「少年君にとっては友達なんだろう？なら死なれた目覚めが悪いだけだ、それに護衛なら他の奴に任せるからさ…んじゃ宜しくー」

『龍騎』

ハルトは近くの鏡に向かって走り跳ぶとアナザー龍騎に変身し鏡の世界に入っていた

———
その頃 折紙はディスプレイダーが出す糸に首を絞められミラーワールドに引き摺り込まれようとしていた幸い戦闘服を展開出来たがそれでもパワー負けでズルズルと引かれていく

「ぐ……………土道……」

愛する者の名前を呟いた、その時！

「たあー！」

蜘蛛の化け物のいる鏡の中で現れた鉄仮面が糸を切断し化け物に一撃叩き込んだのである

「え……………」

———

ミラーワールド

「つたく…野良モンスターでコイツが出るとはな」

『ああ、驚きだぜ』

デイスパイダー

龍騎の最初に出た敵であり、あの『折れたア！』の名場面を生み出した頑丈な装甲が持ち味な蜘蛛型モンスター

こいつと契約したら割と勝ち残れそうと思っただけだろうか？TVSPでガイを捕食してたし…

「よし！んじゃアレをやるか！」

『因みにブランク態の剣は呼べないぞ』

「う…ウソダンドドコドン!!それじゃああの場面が再現出来ないじゃないか!!」

『真面目にやれ!!来たぞ!』

!!!

デイスパイダーが食事を邪魔された怒りで捕食しにアナザー龍騎に前脚を振り下ろすが

『SWORD VENT』

アナザー龍騎がアナザードラグソードを呼び出し、一気に切断すると悲痛な叫びを上げるデイスパイダーに追撃の一撃を叩き込むと

!!!

「つせえなあ!」

『STRIKE VENT』

片手にアナザードラグクロー…あの有機的な龍頭を構えて火球を浴びせると流石の外骨格でも炎はダメージが入るようだが

「!!!」

「流石仮面ライダーを単独で倒せるポテンシャルの持ち主一筋縄じゃいかないねえ」

『遊ぶなよ護衛の任務中だ』

「だから、さっさと終わらせる！」

アナザー龍騎はカードを取り出すと周囲に炎が巻き起こるとデイスパイダーは下がり間合いを作ると

『SURVIVE』

アナザー龍騎は生き残るための力を解放し、アナザー龍騎サバイブになると

『SURVIVE』

自分ものより低い音声が届いたので視線を変えると黒い鉄仮面と青龍刀を装備した黒炎の戦士

アナザリリュウガ・サバイブが立っていたのだ

「ん？お珍しいなお前が出てくるなんて」

「まあ…今回は俺の管理不足が原因だから出張っただけだ」

「ゆつくりしとけば良いのにさ、折角トリニティの時の借りを返せると思ってんだから」

「だがサバイブになったのだ、俺にも働かせろ」

「OK！ライダー同士、力を合わせよう！」

「アナザーだな」

同時に現れたカードを握りつぶすと手に持った武器が銃へと変わる

『SHOOT VENT』

すると何処から共なく現れた アナザードラグランザーとアナザーブラックドラグランザーは2人を守るように滞空すると2人は狙いを定めて引き金を引いた

!!!

放たれた閃光と2体の龍の火炎は、デイスパイダーを焼き払ったのである

そうしてモンスターから抜け出たエネルギーを元に戻ったアナザードラグレッダーとアナザードラブラッカーが取り合いしながら去っていくのであった

「仲良く食べるよ〜！」

すると

『SECRET MISSION CLEAR』

「は?！」

音声がしたのでスパイダーフォンを見るとこう書かれていた

『龍騎の力で敵を倒す』

すると新しいミッションボックスが現れたので開けてみると

「これ……アナザーギーツのバックルじゃん」

だがよく見たら

「うおおおおお！Vバツクルがデザインされてる！ツー事は龍騎の力が宿ってるのかああああ！……あ、けど俺には無理だよ……どーせベルトに弾かれるんだからさあ……」

凹んでいるとアナザーリユウガがため息を吐き

「アホだなアナザーギーツなら武器だけ呼べるぞ本物のレジエンドライダーの武器がな」

「ソレを先に言え」

ハルトはキリツとした顔に戻りバツクルを持つと

「つしやあ！早速、あつちの世界で試すぜオラオラオラア！」

全速力でミラーワールドから飛び出ると

「つし決まった！さて……少年君の援護に早速！」

着地を決めたハルトは士道の護衛の為に動こうとしたのだが

「ねえ？」

「あ？」

突然かけられた声に思わず振り向くとそこには緑色のロングヘアでスタイル抜群の女性がいた……ただ魔女のような格好に箒を持っているが

「……………今日ってハロウィンだっけ？」

『俺がいれば毎日がハロウィンだぜえ！』

『誰がパンクジャックを押さえつけろ！シリアスな雰囲気か台無しだ！』

ありがとうアナザーギーツ

「違うわよ、そんな事のみ貴方今鏡の中から出てこなかったかしら？」

「いえ違います勘違いです、では僕はこれにて！」

と走り出そうとしたが

「待ちなさいな」

通せんぼされた…マズイ…ミラーワールドの出入りを見られてるな間違いない

「ねえ……お姉さんに貴方の秘密教えてくれる？」

「丁重にお断りします」

「あら、残念ね…教えてくれたらお姉さんの事好きにしても良いのよ？」

「妻子ある身なので遠慮します…それに増やそうものなら…」

顔面蒼白で震えているハルトに彼女は何か察したようで

「そ、そうなのね…けど貴方にお姉さん興味あるなあ…」

「それに本当の自分を隠してる子に本当の事は話せない」

「……………何の事かしら？」

「擬態でしょ、その姿は？俺分かるんだよその手の奴に知り合い沢山いるから」

「あら、そんな事ないわよお」

「……………」

『コネクト』

挙動不審なお姉さんに対して白黒はつきりさせようとハルトが取り出したのは小さな小瓶だった

「たらららー！アンチミミック弾!!（ダミ声）」

説明しよう！アンチミミック弾とは

仮面ライダーカブトに登場したゼクトの秘密兵器、コレを使えば人間に擬態し暴れ回る怪人ワームかどうかを一発で見分けられる優れものなのだ！

「な、何なのかしらその小瓶は？」

「これを使えば君が擬態してるかどうか分かる！」

「ちよつと！乙女の秘密を暴く事に躊躇いはないの!!」

「男の仕事の8割は決断！後の2割はオマケと俺の尊敬してやまない探偵が言っていた

！だから決断した俺に躊躇いはない！」

『台詞からすると最低野郎だけどナ』

地面に叩きつけようとしたが

「っ！ちよつと待ちなさい貴方の事については問い詰めないから！それだけは辞めてくれないかしらー！」

「うん！良いよー」

了承して振り上げたアンチミミック弾を懐に仕舞うと

「はあ…ビツクリしたわよ聞いていた通りのびつくり人間ね」

「は？俺のこと誰から聞いて『ハルト！緊急事態よ！土道が撃たれたの！助けに行つて上げて！』っ！OK！俺達に任せておけ！！こいアナザートライドロン（道路交通法違反の

塊（！）」

『私の愛車に何てルビ降ってるのよ!』

『良いじゃねえか俺なんか検索エンジンなんだぜ!』

『妥当じゃない』

『何だと!』『何よ!』

「取り敢えず今はそんな話は後だ!行「ちよつと待つてくれるかしら?」あ?なに!」

「えつと…:…本当の姿で会っても貴方は私を見つけてくれる?」

「ん?当たり前だが?」

「そう…:じゃあ待つてるから…:私を見つけてね」

「お、おう？…よし！加速!!」

とアナザートライドロンは背部のエンジンを爆速で蒸して目的地まで走るのであった

その頃 土道が撃たれた事に激昂した十香は狙撃した張本人である鳶一折紙に対しての自らの持つ力 天使 塵殺公を振り抜いていた

しかし撃たれた筈の土道は青い炎と共に傷が回復していった

「え？アレ？…何で俺撃たれて…「少年くん！どいてー!!」 え？のわあ!」

土道は慌てて回避すると同時に爆音立てながら現れたアナザートライドロンがドリフト停車を決めると中からハルトが出てきたのである

「少年くん！大丈夫かい！俺が治療にき…た？アレ？」

ハルトは慌てていたが回復してる土道を見てキョトンとしているが土道はハツと気づいて

「ハルトさん！俺を十香の所に連れて行ってください!!」

「おう俺に任せておけ！行くぞ！」

その誰かを助けたいと言う純粋な思いはハルトの心を撃つたのである

『スカイライダー』

アナザースカイライダーになるとハルトは土道をおんぶして

「しっかり捕まってるな!……セイリングジャンプ!!」

「へ? いや、ちよつ! うわああああああ!!」

そして十香の近くまで来たが

「ASTが囲んでる…」

「よし少年君、俺がアイツらを引き寄せるから君は彼女の元へ！」

「は！はい！」

「後は彼女に受け止めて貰いな…よつと！」

アナザースカイライダーは手を離したのであった

「へ？うわあああああああ!!」

落下する土道を見送ると

「後は露払いだな…よし折角だから空の帝王の力を見せてやるか！」

『サイガ』

「it's show time！」

アナザーサイガはフライングユニットを使いASTの魔法使いを攪乱するのであった

そして土道の懸命の説得で十香はこの世界で生きることを決意、そして今回の戦争（デート）は幕を下ろしたのである

その後、ハルトは報告後

「おかえりハルト」

「おうただいまキャロル」

飛びついてきたキャロルを抱き占めて癒しを感じていると

「……………おい」

何故かさつきを感じる……………え？

「どうしたのキャロル？」

「何故貴様の体から知らない女の匂いがする？」

「……………ん？ラタトスクの人じゃないの？」

「違う……………これは初めて嗅ぐものだ…答えるハルト」

万力の如き力で締め上げられるハルトは悲鳴をあげる背骨の痛みを耐えながら回想する

「……………あ、そういえばミラーワールドの出入りを魔女っ子に見られたな」

「魔女っ子?」

ウオズはピクリと反応したがキャロルは知らぬ存ぜぬで

「そうかそれなら仕方ない…ではないわ!何をしている!それは別に説教だあ!」

「何でさあ!」

「貴様はもう少し身持ちを固くしろ!でないと食われるぞ!」

「いやそんなことないでしょ?」

「……………」

「いやちよつと反応してよ!」

「カモがネギと食材や調理器具一式背負ってるような奴の言葉は疑わしいわ」

「キャロル!?俺そんなに信頼ないの!」

「アンティリーネの件だって、あの世界の奴から見たらお前駆け落ちしてるようなものだぞ?」

「……………はっ!」

「今更気づいたのか馬鹿者!!そこに直れえ!」

と説教している中、ウオズだけは

「おかしい…この本によれば我が魔王が七罪嬢に会うのはもつと先の筈…一体何が起つて…………」

別の懸念に襲われていた

四糸乃パペット

それは凄まじい雨が…それこそ

「レーザーが退場したクリスマスくらいに雨が降ってるなあ」

あのクリスマスほどトラウマになった日はない

『辞めろ不穏な前振りは！』

「うん……だけど十香ちゃんの件が解決したのにまだ空間震が逢魔で起こるとか泣けてくるよ!!」

そう十香ちゃんが精霊の力を無くしても空間震が終わらなかつたのだ、つまり逢魔に

空間震を叩き込んでいる黒幕がいるのだ

「見つけたらマッスルインフェルノをお見舞いしてやる」

「何で必殺技なんだ？」

俺の膝の上からキャロル（子供モード）が話しかけてくると

「いや打撃よりダメージ入りそうだから？」

「何故疑問なのだ…馬鹿者」

「けど雨ばかりで参ってきたな…よし！」

「我が魔王、何をなさるつもりで！」

「ハウンドに頼んでデストロイヤー（ピースメーカー）を飛ばしてもらおう！雲を突き抜

ければ晴れ間が見える！こんな気分なんて吹き飛ばさー！」

とコムリンクで指示を出したが

【それ燃料の無駄ですね】と断られた

「何でダア！俺の精神衛生より燃料の心配かあ！」

『いやハウンドが正しいぞ』

『そーそー、つか精神衛生って世界最強の精神汚染耐性持ちが何言ってるんだ？』

「よし！ならウエザードーパントに変身して天気を晴れにしてやる！これでメモリの有効活用！」

『すまないがウエザーメモリはメンテナンス中で使えんぞ』

『まあ合っても此処までの大雨を晴れにするにはかなりのエネルギーが必要だぜ、エクストリームしても無理だな』

「……………絶望が俺のゴールだ」

『雨くらいで大袈裟だな』

「けど俺は今、この低気圧のせいでやる気が無いんだよ出来る事と言えばキャロルやアンテイリーネ達の頭を撫でるくらい」

「ほお…そんな重要な事が出来るならやって貰うぞ」

「おう」

「ちよつとキャロル！独占は良くないよ」

「そうね私もやってよ旦那様」

ハルトはキャロルの頭を撫でると隣に近づいてきたアンテイリーネや錫音の頭を撫

でて安心感を得ていると

『ふむ：分かったぞアナザータイクーン経由でだがナツキがお前のことを女誑しのダサ文字T野郎と言ってたそうだが？』

「おいアナザータイクーンとナツキに伝えろ、会いに行くとな」

『待て、まだ仕事中だろうが！』

「つか誰が女誑しのダサ文字T野郎だとお！あの野郎、俺のいない所で悪口とは言うようになつたなあ！」

とハルトがキレるがキャロル達は冷めた目で

「いや的確な表現だろうか？」

「そうねTシャツ云々は別だけど女誑しは否定できないよねハルト」

「ごめんなさい、旦那様それは私も同意見よ」

「嘘!?!俺に味方はいないのか!」

「日頃の行いですよ我が魔王」

「そんな事ある!?!」

—————

そして取り敢えず買い出しに雨の中を歩いていると

土道が大きなうさ耳フードを被り片手にパペットをつけた幼女と会話をしていた

「ほむ…:通報するか?」

流石にちよつと…:

『そうになるとキャロルやアンティリーネの奴らは実年齢的シヨ 『アナザーWそれ以上はいけない!』 お、 おう』

「……………アナザーWは後でお仕置きな」

『ウソダドンドコドーン!』

『それ俺のセリフ!?!』

『お前でもないだろう』

少年君とは言えども歳の差がありすぎるが…俺が言えた義理ではないのでスルーしよう

「あら久しぶりね」

「は？」

そこにはこの間会った謎の女性だ、確か

「ま、魔女コスさん！」

「あの…覚えててくれて嬉しいけどもう少し他の呼び方なかったのかしら？」

「魔女コスさん！雨降ってるから傘刺さないと風邪ひきますよ…あ、これ使ってください」

『コネクト』

折り畳みの傘を渡すと彼女は嬉しそうにはにかむ

「あ、ありがとう…と言うより君の方が魔法使いじゃないかしら？」

「いやあ…俺なんかが希望の魔法使いなんて恐れ多いですよ」

『誰もそこまでは言っていない』

「魔女コスさんは、コスプレイベント帰りですか？」

「……………あの一つ誤解を解いておくとね、これお姉さんの正装だから！」

「成る程…そう言う設定なのか…はい！そうなんですネ！」

『違う、そうじゃない』

「人の好きは極力否定しない、それが俺の流儀よ」

『家族の好きは？』

「あの家族の理想や幸福は拒絶する！」

『おい』

「あの人達が幸せになるのは解釈違いなので」

本当に欲しいものをくれなかった家族の幸せなんて認めない…俺が不幸にしてやり
たい

『久しぶりに相棒の闇を見たな』

「ねえ…やっぱり貴方面白いわね」

「いやいやそんな事…な…?」

アレレ〜おかしいなあ、何でASTの人達が飛んで来てるんだろう？

「教えてよ検索エンジン！」

『あ？その女が精霊だからだろうか？』

「へえ〜精霊…?…へ？魔女コスさんが!？」

「っ……っ！」

魔女コスさんは動揺しているが……はあ

「取り敢えずAST?は追い払うか、魔女コスさんは俺の背中に隠れててください」
「え……私を守ってくれるの?」

「まあ顔見知りになれたら気分悪い……んじや行く……あれ?」

変身しようと思ったら魔女コスさんをスルーして何処に向かっているのである

「魔女コスさんじゃないとなる……と……」

『あのうさ耳フードが精霊なんだろうな』

「少年君が危ねえ!……が」

魔女コスさんを放置するのは心配だな

「ウオズ」

「はっ！此方に」

「彼女を護衛してくれ」

「畏まりました…成る程新しい妃候補ですか？」

「え／＼／＼、それは早いんじゃないかしら」

「違うわポケエ！あと満更でもない顔しないでくれ魔女コスさん！」

「まあどうでしょうか？」

「ウオズは怖え事言わないでくれる！」

『カブト』

「クロックアップ!!」

アナザーカブトになりクロックアップして土道の元へと走り出した

ウオズは魔女コスさんに話しかける

「ご安心を我が魔王の命に従い護衛させていただきます」

「あ、ありがとう…えーと」

「我が名はウオズ、あの方 常葉ハルトに仕える従者ですお見知りおきを…」

「七罪よ宜しくね」

「では七罪嬢、此方へどうぞ」

ウオズはマフラーワープで移動したのであった

そしてアナザーカブトで走り抜けたハルトは近くのデパートに入ると琴里からの指

示に従い遂に土道の場所に辿り着いた

「少年君！大丈夫か……いい？」

誰が予想出来るだろうか？目の前で少女に押し倒されてキスされてる少年君がいるとは

「……………」

「……………」

終わった後。恐る恐る見るとハルトの背後から現れた怒れる十香と土道と少女のやり取りを見ている中

「そーいやあ俺のファーストキスはキャロル（少女）だったなあ…」

「そんな体験談よりも今を乗り切る方法を教えてください！」

過去を懐かしんでいるのであった

場面は変わりラタトスク

あの精霊 四糸乃というらしいが今回は彼女をデートする事で助けられるらしいが十香としては面白くないので不貞腐れているのだ

「はぁ……」

「悩み事かい少年君」

「あ、ハルトさん」

「相談してくれ、こう見えて女性関係では先輩のつもりだよ」

『おうよ！迎えた修羅場は数知れず！妻の嫉妬を掻い潜り現地で妻を増やし続けるスケ

コマシ!!その名は常葉ハルト!人は彼を女誑しの魔王と呼ぶぜ!」

「アナザーW……磔刑!!」

『いいいやああああああ!』

『あ!アナザーWが磔にされたぞ!』

『これは仕方ないぜ!地雷原でタップダンスしてたからな!』

「はあ…馬鹿が…ごめんよ何か悩みなら話すと良い気が楽になるよ」

「あ、あの…」

そこから話を聞いたが異性の嫉妬にどうしたら良いのかと言うものだ、うん

「一回殴られれば大丈夫じゃない?」

キャラルならオーズのコンボからのスキヤニングチャージだし、千冬ならライダーズラッシュユ、東ならソニックボレー、錫音はパニッシュユだし、アンティリーネはブロウクンフアングをしてくるから素手でのパンチなど可愛いものだ

『寧ろよく生きているな貴様』

「え？ いやまあ確かに不誠実な事してるとは分かりますけど」

「少年君の理論だと俺は不誠実の塊になるけど？」

「あ、いやそんなつもりは」

「まあ事実だからね、俺も嘗ては少年君みたいにハーレムなんて言語道断な思考回路だったからさ」

『それが今じゃあ、みんな幸せの為にハーレムしてるからな！』

「アナザーW？また磔刑されたい？」

『な、何も言っていないぜ俺は！』

「まあ真面目に答えるなら：十香ちゃんにとって君は自分の世界を変えてくれたヒーローなんだ君がいるから未知の世界でも大丈夫って思ってるのに、そんなヒーローが他の子ばかり見てたら心配になるよ」

「それって実体験ですか？」

「んーまあな」

俺だって仮面ライダーと出会わなければ心なんて折れているし、アナザーライダーといなかったら不安で誰も信じられないと思う所がある

「だから一回、十香ちゃんとキッチンと話し合うと良いよ、それで出る答えは別だけどね」

「十香と…」

「まあ少年君のやりたいようにやれば良いんだ、そうしたら皆理解して着いてきてくれる…理想や夢の理解者は走った後から付いてくるんだからさ」

『これは信じて良いぜ！こいつはそうした我儘を貫き通して今があるからな！』

「ハルトさん…」

「困ったら俺に言え協力する」

「あ、ありがとうございます!!」

「おう、頑張れよ少年君」

士道を見送るとハルトは立ち上がる

『お前、偉くアイツを買っているな』

「まあな少年君の働きの逢魔の未来がかかっているなら全力で応援するさ……それにアレだけ真っ直ぐなんだ個人的にも応援したくなるよ」

笑うハルトだが、ふと思い出しウオズを呼び出す

「ウオズ、魔女コスさんは大丈夫か？」

するとウオズはいつもの不適さを交えて応える

.....

「ええ問題ありませんハルト様」

『おいハルト』

「そうか……それは大問題だなあ」

「何か？」

「ウオズは俺のことを名前で呼んだ事は一度もねえんだよ……お前……誰の許しを得て俺の右腕の擬態なんてしてやがる？」

普段の笑みを消し殺意を込めた視線を送ると同時にアナザーウオツチを構えると

「っ!!」

「私が許しました、我が魔王を謀った無礼はお許しを」

と現れたウオズに対して疑惑の満ちたハルトは問いかける

「ウオズ、祝え」

「は？」

「祝えと言っている」

また擬態かも知れないと身構えると

「祝え！」

そのトーンを聞いて

「よし本物だな…しかし魔女コスさんか？ 凄い擬態だな…」

「本当に分かったのね」

と擬態を解いた七罪を見てハルトは

「何で擬態したのさ」

「聞いたでしょ？ 私を見つけてくれる？ って」

「ソレで試したのか…たく、けど魔女コスさんで良かったよ」

「……………違つたら？」

「殺してたね確実にさウオズに擬態したって事はさ俺の右腕に危害を加えたんだろ？なら楽に死ねると思うなってね」

「っ！」

「さて、魔女コスさんで安「七罪」あ？」

「私の名前よ七罪、貴方は？」

「俺は常葉ハルトだ」

「そう、また会いましょうハルト」

そう言うのと箒に乗り飛んでいくので合った

「ふう……さてと帰るか『ハルト大変だ!』あ?どした?アナザー響鬼」

『四糸乃?だっけか?あの精霊が暴れてるぞ!』

「何っ!」

急転直下とはよく言ったものである

『テレポート』

ウィザードの魔法で転移したハルトが到着すると

巨大なウサギが暴風雪を伴い暴れているではないか!

「いやあ流石にアレだけの巨体を止めるのは……」

いや待てよ

暴風雪↓山ではないが俺だけが対応可能なシチュ↓つまり最終局面……はっ！

「アナザーアルティメットで行くゼエ！」

相手はダグバではなくウサギだがな！倒してやる！！

『よし行けハルト！！』

「おう！「待ってくれハルトさん！」おう…少年くん見ててくれ…俺の変身！」

「いや後で見ますから俺を四糸乃の場所まで運んでくれませんか！！」

「へ？」

士道の説明では、あの精霊 四糸乃はずっと独りぼっちだったが、パペットの親友よ

しのんが一緒にいてくれたから頑張れたのだと…

「独りぼっち…」

「よしのんがいなくて四糸乃は不安なだけなんだ…本当は誰も傷つけたくないって言う優しい子なんだ…なのに精霊だからって攻撃されて…けど彼女は痛いだろうからってやり返さない…そんな子が助けを求めてるんだ！」

「っ！……なあ少年君、よしのんとやははその子の親友なのか？」

「ああ自分のヒーローだって言ってた」

「そうか……ヒーローか」

—————

思い出したのは嘗て子供ながら迷子になった俺偶々辿りついた場所です。いたヒーローショーで俺は怪人に攫われてしまった、まあ今思えば演出だが子供の俺には何が何

やら分からない話なので泣きながらだが

「たすけてクウガー！」

本気で助けを求めて声を上げた…実際あの頃から俺の家族は助けに来ないし見捨てられているようなものだったから…俺は子供心に全部諦めていた、けど助けてくれたんだ

「……………！」

古代の戦士 仮面ライダークウガ

彼がグロンギから俺を助けてくれたのである

自分を抱えて会場に戻してくれた…些細な事かもしれないけど俺は確かに助けられたのだ仮面ライダーに

「っ…ありがとう!!」

今思えばこの頃に俺は彼等に憧れたのだろう
幼い自分を助けてくれた唯一のヒーローに

「……………」グツ！

だからか彼のサムズアップに俺は

「っー」グツ！

全力の笑顔で答えられた

—————

ハルトは士道の答えにフツと笑みが溢れた

ーそうか、少年君は彼女のヒーローを助けようとしている…真剣に向き合ってるん

だー

「よし任せてくれ!!俺が少年君とよしのんを彼女の所に連れて行こうじゃないか!」

「っ!お願いします!!」

その先達として道を示す!同じくヒーローに救われたものとして今度は自分が助ける番だ!

『アンタ勝手に何言ってるのよ!』

「俺も彼女と同じだったから…ヒーローが壊れそうだった俺の心を支えてくれたんだ」

それが原典だったと…自分が何故彼等に憧れを抱いたのか、今思い出させてくれた

「助けを求めている声があるなら必ずかけつける…俺の憧れのヒーローが教えてくれた事だよ、今あの子が助けを求めているのにソレを見て見ぬふりをするのは俺に光を教えて

くれた師匠達に申し訳が立たない！それ以上に胸を張って俺は貴方達の弟子だ！って
 言えねえんだよ！」

自分を助けてくれたから憧れたなんて単純な理由、しかもそれは完全な善意じゃない、演出で偽者で存在そのものが虚構のヒーローでも

「っー」グッ！

—————

あの時、自分に差し出してくれたサムズアップに心が救われた、そこに嘘なんて何もないんだから！

だから助ける!!過去の自分にあのヒーローがしてくれたように！迷わず手を差し伸ばす!!

「少年君行くよ！あの子のヒーローを助けてあげられるのはキミだけだ！それまでの道はこの俺が作る!!」

「はい!!」

「だから頼む、皆の力を俺に貸してくれ！」

『おうとも！俺っち燃えてきたああああ！』

『良いだろう相棒！その願い俺達が聞いたぜ！』

『ああ心躍るな！ハルト!!』

「っ！パラド！」

ハルトの体の中から抜け現れたパラドはハルトを見る

「お前の憧れが形になって生まれたのが俺なんだろう？ならその願いの為に戦ってやるよ……行こうぜハルト！」

「……………おう!!」

拳を合わせるとパラドもギアデュアルを構えた

『そんな事言つて士道を危険な場所に…』

「大丈夫だ艦長さん、少年君は必ず俺を送り届けて四糸乃ちゃんも助けて事態を無事に解決させる…」

俺は貴方達の背中を追いかけてるだけの陰法師に過ぎず、ただの悪役でしかない…

けど今は…今だけは俺の背中を押ししてくださいお願いします!

「約束する…俺が最後の希望だ!」

誰かを守るための勇気をください

『感情の規定値が一定に達しましたアナザーライダーの使用申請…許諾 アナザーグラ
ンドジオウへの変身可能』

『よし時は来た！行くぞ野郎ども!!』

『『おおおお！』』

ハルトの左手に現れたのは新しいアナザーウォッチであった

「っ…っ、これ…」

俺の知ってるものと違い顔はアナザーライダーに変わっている…地味に怖いし黒曜
石のような光沢を放っているが…宿る力は俺が見てきたソレに等しいだろう

「ハルトさん…それって」

「最高の相棒達だ！」

「……………何か行ける気がする!!」

『ジオウ』

まずはハルトがアナザージオウに変身すると

「祝え!!全アナザーライダーの力を続べ時空を過去、現在、未来を続べる時の王者!その名もアナザージオウ!正に再誕の瞬間である」

原典回帰した魔王 アナザージオウ 再誕

「え、ウオズさんいつの間に!」

「我が魔王いる所に私あります…それと静粛に士道くん、これから我が魔王覚醒の儀が始まるのだから」

「……………え?」

「行くぜ相棒!!」

そしてアナザージオウは迷わずに力を解放した何がを奪う為じゃない誰かを助ける
為の力を

ー祝え!!影の王の生誕を!!ー

『グランドジオウ』

—————

同時刻 2068年

「む?ほお……遂に至ったか!ハルトよ!」

最低最悪の魔王は覚醒を感じ

とある星では

「っ！そうかハルト…変身したんだな」

師である始まりの男は弟子の成長を感じ

そして逢魔にある写真館では

「ほお……あいつがねえ…暇だし少し見ていくか」

様子見に世界を超えたのである

—————

『グランドジオウ』

同時にアナザージオウを時計回りで囲むようにアナザーライダー達の像が並び始めると彼等から石が剥がれ落ちていき姿を表していく

そして全員の姿が露わになったその時！

「……………変身!!」

アナザーグランドジオウオウオツチをドライバーに装填した

アナザライダー達はアナザージオウの体にポーズを決めた彫刻へと変わり、最後は頭頂部にアナザージオウがポーズを決めると

『祝え!!アナザライダー!グランドジオウ!!』

その姿は本来の姿と違って黒曜石のような暗い輝きを放ち体の各所に埋め込まれたアナザライダー達は原典と違い無理矢理縫い合わされたような顔をしている…ただ纏う覇気そのものは偽りであれども王のものに他ならない

自分の原典を思い出し、それを統合して先を見るもの

最高最善に到し影の王

アナザーグランドジオウ

生誕

推奨BGM NEXT NEW WΦULD

「祝え!!!いや……最早言葉は不要……ただこの瞬間を味わうが良い!!」

あのウオズも祝うことを放棄して、生誕の瞬間を噛み締めていたのである

「よし……行くぞ皆!」

『『おうー!』』

『まずはおのウサギの足止めだな!』』

「問題ねえよな！頼んだぜ！」

やはりその役目は彼に任せようと体につけられたアナザーライダーの顔を触る

「おおおお！」

『クウガ』

それと同時に門が開き現れたアナザークウガは巨大ウサギ 氷結傀儡の足止めにも正面から迎え撃つのであるが

「何アレ！怪物!？」

「関係ない攻撃開始する」

「ちよつと折紙！」

折紙はレーザーブレードを持ち突貫しようとするのが見えた

「やばいな……この距離は俺の射撃武装じゃ射程外だ……アナザークウガの援護が出来ない」

『はは！実を言えば相棒の喜びそうな機能もあるぞ』

「機能？」

『反転!!』

するとアナザークウガの顔がハルトの英雄 仮面ライダークウガの顔に変わったではないか

「……………まさか」

その顔を触ると

『クウガ』

オリジナルのグラウンドジオウと同じ音声と共にクウガの像からペガサスボウガンが現れたのだ

「っ！えええええ！」

『そうだ俺達はライダーと怪人が混ざり合って生まれた存在……怪人でありライダーなのだ故にグラウンドアナザージオウ時に限り武装や本家ライダーを擬似召喚を可能にしたぞ！貴様は光も闇も統べるものとなれ!!』

「……………今は感動してる場合じゃないな……………よし！」

アナザーグラウンドジオウはペガサスボウガンで狙いを定めると折紙の武装目掛けてボウガンからの空気弾を発射 折紙の武装のみを破壊したが仲間から武装を貰い狙撃場所にいた俺を狙いに来た

「少年君、最初に言っておく」

「な、何ですか？」

「スピードはお墨付きだ」

『反転!』

『ドライブ』

呼び出したのはアナザードライブ、彼女がアナザートライドロンを召喚すると同時に左右に飛行ユニットが装備されると窓から身を乗り出し

「良い知らせがあるわ、この車でウサギさんの所まで運んで上げる」

「は、はい!!お願いします!!」

そして土道はアナザートライドロンに乗り込むと爆速しアナザークウガと怪獣大戦争をしている氷結傀儡の元まで飛翔する

折紙はそれを素通りしてアナザーグランドジオウに突貫した

『剣』

アナザー剣が持っていた大剣を召喚して罅迫り合いに応じる　あの子がエースなら足止めすれば問題ない！

罅迫り合いになる中　折紙が問いかける

「何で私達の邪魔をする!!」

「悪いな……無抵抗な奴を痛ぶる奴等の邪魔をするのが趣味なんだよ!!」

「無抵抗? 隠者が今暴れてるのはあの精霊のせい! 私達はそれに対処してるだけ!」

「あの子がどんな子かも知らないでか?」

「精霊と対話なんか出来ないなら排除する……それに精霊なんか消えれば良い!!」

「復讐か?」

「復讐じゃない！願いだ！」

『この女、俺のセリフを！』

『お前は黙ってろよ』

「それは復讐だろ……その感情は否定しないが……力は復讐対象だけに向けろ！関係ねえ第三者に向けるな！って俺も言えた義理ないけどな」

鏑迫り合いで吹き飛ばしながらも答える

「お前が本当に復讐する奴にだけ力を使うなら問題ないが……あの子に使うのだけは間違えてる！」

「そんな事ない!!」

再度突貫する彼女に対してアナザー剣の大剣を投げ捨てると別のアナザーライダーの顔に触る

『ビルド』

「っ！たあ!!」

アナザービルドは水泳選手と弓道選手のベストマッチを使い地面を潜航しタイミングを見てエネルギー矢を折紙に浴びせたのである

「くっ!」

「まだまだ!」

『ディケイド』

「ぬん!」

アナザーディケイドのアナザーディメンションキックが折紙を吹き飛ばし壁際に追いつく

『W』

「行くぜ！アナザー…フルバースト!!」

トリガーマグナムを持ったアナザーWが込めたエネルギー弾が折紙に命中、すると彼女の武装は解除され気絶したのであった

「決まったぜ」

「よし少年くんの援護に向かうよー」

走り出そうとした時である

パシヤリとシャツターの音がした

「おめでとうかな、魔王」

「士さん!!」

そこに門矢士がいたではないか！

「元気そうだな」

「はい!!お陰様で!!」

「それは良かったな……じゃあ一つ魔王から伝言だ」

「……どつちの？」

「オーマジオウから……祝電だったか？」

「っ!!」

身構えると同時に現れたのはオーマジオウである

「久しぶりだなハルトよ貴様の成長、我も嬉しく思うぞ」

「あ、ありがとうございます！」

「そこでだ、一皮剥けたお前に依頼したいことがあるのだ」

「っ！な、何でも言つて下さい!!」

あの魔王からの依頼！どんな難しいミッションなんだ！と身構えると

「とある研究所に向かい、ある人を助けて貰いたいのだ」

「そ、それはどんな人なのでしょう！」

「精霊…そして人に捕まり人体実験を受けておるのだ」

「っ！そんな…」

「今のお前なら助けられると確信している…まずはあの子と少年との約束を果たすが良い時が来れば改めてデイケイドを送るとする」

「おい俺は使い走りか」

「何を言っているそんなことはない」

「どの口が、祝電は以上だ助けに行ってやれ」

「お、オーマジオウを恐れないとか流石デイケイド！」

「まあな、んじや頑張れよアナザーライダー」

「っ！はい！！」

スゲエ元気になったぜ！よっしやあ！

「行くぜ行くぜ行くぜ！！」

そのまま高くジャンプしてアナザートライドロンの上に乗ると

「少年君！そろそろ下車の時間だよ！」

「ハルトさん！いつの間に！」

「ちよつと！変な所に乗らないでくれる！」

「悪い話は後で……頼むぜ魔法使い！」

『反転』

『ウィザード』

すると現れたのは希望の魔法使い 仮面ライダーウィザード・フレイムドラゴン擬似
召喚したハルトが切り抜いた記憶は

「フィナーレだ」

『チョーイイネー！スペシャルサイコー！』

フレイムドラゴン初登場時 そのドラゴンブレス発射のタイミングだ

「道を作るから後は全力で飛び込め!!」

「はい!!」

「お願いします!!」

同時にウィザードがドラゴンブレスで氷結傀儡の暴風雪を抑えると同時に土道は四糸乃の元へと飛び降りたのであった

結果論だが四糸乃とよしのんは助けられた

その時の空は今まで見た、どの空よりも青く見えたのである

—————

後日談

「いやあ、まさかアナザーグランドジオウに目覚めるなんて……ありがとな相棒」

『気にするな我等とて力を得ているしな』

「けど同じように責任も感じてる…やっぱり重いなライダーの力って」

『なら俺達も背負ってやるヨ、相乗りしてるからナ』

『そうだな…これからも俺達の力を使うと良い』

「ああ頼むぜ相棒」

「お待たせしました我が魔王！本日のアナザーグランドジオウへの覚醒…私とした事が祝う事を放棄してしまいました」

「いや気持ちは分かるよ、これからも宜しくなウオズ」

「はっ！…それはそうと七罪嬢が化けた時に私のことを右腕と仰ってませんでしたか？」

「言ったけど？」

「っ！ありがたき幸せ」

「大袈裟…よし帰るか、オーマジオウの依頼もあるし覚醒祝いに宴会と行こうか…今日はお前達も無礼講で騒いで良いぞ」

『その言葉を待っていたぞ相棒！アナザー響鬼よ鬼達を集めて楽器隊を編成しろ！』

『よしアナザーカブト、アナザーアギト！料理は任せた！』

『よしアナザライオトルーパー達は会場設営だ！急げ！』

「……………コイツら手慣れてやがる」

「どうされましたか我が魔王？」

「んでもねえよ、行こうぜ」

「はっ！」

その頃 とある国の研究所にて

「……………たすけて」

誰にも届かない声で呟く女性が機械に繋がっていた

二亜IRREGULAR 前編

前回のあらすじ

「祝え！今日は我が魔王がアナザーグランドジオウへと至った日…そう！グランドジオウの日である！」

これにつきると言わんばかりにウオズが盃を掲げて乾杯の音頭を取るのであった

「「「うおおおおお!!」」」」

「いやサラダの記念日みたいに言うなよウオズ」

やれやれと呆れているが満更でもないハルトである

今はピースメーカーの食堂で仲間達を集めての大宴会、東や千冬も並行世界から帰っており全員で楽しんでいるのだが

「くそ！ハルト様の覚醒を見逃すなんて！」

「まさか魔王ちゃんがこのタイミングで覚醒するなんて思わないじゃん！」

「そうですよ！何で僕は…そんな感動場面を見逃したのですか!!同行しなかった自分が恨めしい!!」

「かーかつかつかつか！いやあ絶望混じりの良い悲鳴じゃのお!…しかしその力、是非手合わせ願いたい！」

古参組は盃片手に悔しかっているが

「ヤクヅキ、多分それ悲鳴と違うし模擬戦はまた今度…：つかお前達は一々大袈裟なんだ」

とお盆に載せた料理を渡すハルトの言葉に

「だってウオズちゃんに変身見たマウント取られるじゃん！」

「そうだ！それに俺達とてハルト様の勇姿を見たかった！」

「僕もですよ！」

「だから大袈裟だろって……ウオズ！どーせお前の事だ録画でもしてんだろジヨウゲン達にも見せてやれ」

「流石は我が魔王、ご存知でしたか……では……では皆様、本日の我が魔王の勇姿をこちらのスクリーンでご覧ください！！」

「ん？スクリーン？……っ！おい待て！！」

「俺も彼女と同じだったから…ヒーローが壊れそうだった俺の心を支えてくれたんだ！」

同時に空間投影された映像に思わず

「！！！！おー！！！！」

「おい誰が全員に見せてやれと言った！！恥ずかしいからやめろ！！しかも無駄に丁寧な編集までされてるだとお！誰がした！」

『はい』

「アナザーキカイさん何してるんです!?! いやその前に止めない!!」

羞恥心でハルトは辞めさせようとしたが

「あ、アレ？糸で体が動かねえ！」

「少し大人しくしている鑑賞中は静かにだ…ふむ…以外と情熱的ではないかハルト?」

キャロルがダウルダヴラの糸でハルトを拘束する少しお酒が入っているのかウツトリした顔で映像を見ている

「ああ普段は冷めたように見えてるが実は心は熱いか…：…本当に、素直でないな」

「けど良いなあ〜束さんもアレくらい熱烈に迫られたい!」

「しかしハルトもツンデレだったんだねえ」

「流石は旦那様…けど私達にも同じくらいじゃないと嫉妬しちゃうかしら」

「もうやめて／／／／／／／／」

ニヤニヤされて見られるのが恥ずかしく赤面した顔を両手で隠して疼くまるので

あつたが

『しかし嬉しいぞ最高の相棒か……あの頃の誰がお前達の相棒だ！と否定していた頃が懐かしい』

『そんなツン全開のハルトの映像はこち……？らあああああ！』

『ああ！アナザーWがとんでもない強風で飛んでいった！』

『懲りないな相変わらず……』

『そんな事より「そんな事!? 現在進行形でイジられてる状況がそんな事だも！」はあ……お前のグランドジオウ化に伴い新人がやって来たぞ！』

「……………新人？」

『自己紹介を頼む』

『初めまして魔王、私はアナザーアビス…ふふ貴方の女性問題に判決を下します』

「何だ嫉妬か？」

『違います…それと私に勝てるアナザーはいませんか？』

『ほお？』コンプリート21

『アビスよ』剣・キングフォーム

『何か？』アナザーライジングアルティメット

『言ったか？……やった初セリフ』ブラックサン

『な、何もありませんよ何もね』

「うん、何かごめん…皆も覚醒してんのかな後初めましてかなブラックサン」

『ああ宜しく頼む』

『そして！』

『お前を片腕5秒でぶっ倒す！ハツタリじゃなくてマジでな！アナザーハツタリだ！宜しく頼むぜ大将！』

「え？ダークドライブ？」

『おっとそれ以上はいけないぜ、ぼく…俺様にもふーかい事情があるからな！』
どうやら大人の事情があるようだ

『そして100年後の未来からやって来た！』

「つまりオーマジオウよりも未来のライダーでキカイよりも後輩か」

『時系列の整理やめえ！こいアナザーセンチュリー！』

『おいハルト！大阪行こうぜ！』

「うん…みんなで行こうか新幹線で」

『何故しんみりとする！』

「何かセンチユリーになる人見てるの色々泣けてきて…いいじゃん君はキチンと家族に愛されてて…俺なんか……ほんと……はあ…俺って奴あ」

『違った！トラウマを刺激されただけだった！』

『どうすんだよアナザーセンチユリー！ハルトが闇墮ちして地獄兄弟みたいになるぞ！』

『うわ、面倒くさっ！』

『何だ不満か？』

『お前は黙ってるアナザーカブト!!』

『よし、アナザー響鬼達! そんな気落ちしたハルトが盛り上がる音楽を宜しくう!』

『よ、よし! なら行くぞ! 多重露光!』

脳内でガンガン響く音楽に

「お前らも楽しそうで良かったよ」

ハルトはやれやれとするが今更であるかと笑うと

「俺の家族はお前等かな…:ははっ」

『何か言ったか、こっちは盛り上がっているから聞こえんだ』

「何でもねえよ」

『そうか、ならあつちはどうだ？』

「え？………あつ！」

【………変身!!】

【祝え!!アナザーライダー!グランドジオウ!!】

【何か行ける気がする!!】

「「「「うおおおおおおお!」「「「「」

「まだ上映してたんかい!!」

そして場面は直後だ

【祝え!!! いや……最早言葉は不要……ただこの瞬間を味わうが良い!!】

「いやウオズちゃんさく祝おうよ」

「貴様だけハルト様とライブ感を楽しんでいるのは感心せん」

「祝う役目を放棄とか先輩最低です」

「お主から祝え! を抜くとただの胡散臭い奴しか残らんだろう?」

「お前等がただのファンにしか見えないんだが…あとヤクヅキ毒舌が鋭いな」

「いいえ私は我が魔王公認の右腕ですので、君達と違ってね」

とウオズがドヤ顔していると

「[[[[[……]]]]」

「揃って見るな無表情が一番怖えんだよ!」

やっぱりさ 曲者揃いだ 幹部陣(字余り)

ハルト 心の俳句

「まったく……ん?」

ハルトが目線を向けるとオドオドした雰囲気を目を合わせないようにしている可愛らしい女の子 四糸乃とパペットのよしのんがいた

「あ!おいでおいで皆で楽しもうよ!おイトルーパー!椅子を用意しろ!一人追加だ!」

「お、四糸乃入って良いって!」

「は……………はい……………」

ハルトは四糸乃の前に立ち屈んで目線を合わせると

「改めて初めましてだな、俺は常葉ハルト…まずは君に……………ありがとう」

頭を下げる、彼女のお陰で自分は大事なものを思い出す事が出来たと伝えると

「い、いえ……………その……………私も……………士道さんも助けてくれて……………その……………ありがとう……………います……………」

「おお！ちゃんとお礼が言えて偉いねえ四糸乃！」

よしのんが頭を撫でて褒め、照れてる姿にハルトも微笑ましくなる

「何かあったら言ってくれ力になるからさ、欲しいものとかあったら言ってくれよ」

「は……は……は……」

「何…そうか…おいハルト」

「は、はい!!」

「ならオレ達も欲しいものを用意してもらおうぞ…そうだな先ずはベットの上で話すでしょうか」

ま、まずい！何か知らないが地雷踏んだ！逃げねば!!

「あ、あはははははははははは！クロックアツ「させると思うか？」ち、千冬さん！待つて！サソー
ドヤイバーが刺さってチクチクしてる!!」

「それに何処に逃げようが東さんのゼロツのの前じゃ逃亡は出来ないよ!!」

「魔法で逃げても私が追いかけるし」

「純粋な身体能力で逃げれると思わない事ね旦那様」

「この俺が既に包围されてるだとお!!」

おかしい…少しは強くなった筈なのに彼女達に勝てる未来が見えない!!

『相棒学べ、これも貴様が旅をして掴んだものだ』

「誰が上手いこと言えと!？」

『ギャハハハ！見事に尻に敷かれてるなハルト!』

「済まないなヨシノとやら、これから少し大人の時間だ…失礼する、おいハルトをドナドナしてやれ」

「了解!」

ミノムシにされ束に俵持ちされたハルトは

「い、いいやあああああ！何かデジャブうう!!」

前回と違い五人にドナドナされたのであった

それを見たウオズ達は

「はあ…我が魔王」

「何というか未来とあんまり変わらないねえ」

「実家のような安心感だ!!」

「奥方達に主が拉致される風景を異端と思わんか馬鹿者！」

「未来が少しだけ怖いです…」

眩くのであった

そして翌日、無事回復したハルトは事前に話し合っただけで決めていた待ち合わせ場所で世界の破壊者を待っている

「よお昨晩はお楽しみだったか？」

「それ笑えないですよ」

「そりゃ失礼、オーマジオウの頼みで送って行くことにする帰りは自分で何とかしろ」

「はい」

「……報酬の話とかしないのか？」

「いらなですよ…これは俺がやりたいだけですから」

「そうか…本当に変わったな」

「えへへへ」

「だが報連相はちゃんとしておくべきだったな」

「……………え？」

「うーしーろ」

そう言われて見るとそこにはウオズ達が笑顔で待機していた…全然顔は笑ってない
寧ろキレてる

「我が魔王どちらへ？」

「え？ウオズも知ってるだろう？オーマジオウの依頼に行くんだよ」

「成る程…それを我等に報告せずですか」

「俺が受けた依頼だ…お前等を巻き込んできてくれませんか？」へ？」

「我等は我が魔王の従者です。未来の貴方から言われた来たとは言え貴方の従者なのは変わらないのですから」

「まあ俺はぶつちやけると今の魔王ちゃんの方が俺達好きなのよ」

「うむ、パワハラもないからな」

「カーカツカツ！ま、妾はこの時代の方が争いが多いから来ただけじゃがな」

「ま、未来から来た先輩達と違って僕はこの時代で貴方に仕える事を決めてます…ならこの身は貴方のお側に」

「どうしたのみんな頭打ったの？」

昨日、俺の羞恥心を煽って奴らと同じにはとても見えないのだが…

「取り敢えず普段の接し方を考え直す必要が生まれましたね……いえ先日の勇姿から改めて忠誠を誓おうと思ひ」

「……お、おう、そうか……って大体、お前等不在だったら誰が非常時に動けるんだよ！今回はクロエもいるんだから護衛してくれないと」

「それならご安心をクロエ様には護衛をつけております」

「誰？」

「我が魔王がよくご存知の方ですよ」

「ん………あ！」

———

ピースメーカーの中で

「へえ…こうなるのか」

「はい…あ、パラドさんすみません」

「構わねえぜデバッグだろ？なら処理しようぜ」

とパラドとゲームしているのである

—————

「そっかパラドが…なら大丈夫だが…キャロル達の」

「あのさ逆に聞くけど魔王ちゃんを生身で倒せる奥方様達に護衛つて足手まといじゃないっ？」

「それにオートスコアラーがヒューマギアの素体を使い復活予定だ、護衛なら問題ない」

「いや今動ける護衛が欲しいんだけど！」

「安心せい滅亡迅雷を呼んでおるわ」

「それを早く言えよヤクヅキ!!」

「わ、妾が悪いのか!!」

「いやだから！」

「おいコントは終わったか？早く行くぞ」

「はい！ただいまー！」

「我が魔王…」

そしてハルト達はオーロラカーテンで転移したのであった

—————

転移した先は少し離れた場所であり、そこにはいかにもな研究施設があった

「此処だ、ここの中に件の精霊がいる」

「ありがとうございます、必ず助けます」

「そうか、ま…頑張れよ色々な」

「はい！……ん？」

士は含みがありそうひ言うとおーロラカーテンで移動して行った

「さて……まずはあの基地にどう侵入しますか我が魔王？」

「うーん……っ！アナザーベルデのクリアーイベントで忍び込むか！」

「ですが入口を見る限りパスワードか何かを打ち込まないとダメのようですね」

「アナザービルド、キカイのハッキングで開ければ良い」

「内部の見取り図を」

「アナザーW、検索」

「………魔王ちゃん1人で良くない？」

「だから言ったんだが……まあ人手は多い方が助かるのは事実だしな」

「と言いますと？」

「例えばそこにおる、奴の相手とかか？ハルト坊」

「「っ!!」」

ウオズ達は慌てて背後を振り向くと目線の先には

「……………」ジー…

クワガタとそして何処となくダイヤモンドの形状をした頭部をしたアナザーライダーがこっさり見ていたのである

「ま……まさかアナザーギャレン!!」

「え？あの未来で魔王ちゃんがいざと言う時に使うで有名の！」

「強化フォームが強化していないと噂に聞いたことがあるが生で見たのは初めてだ」

「き、聞いた事があります！未来の魔王様の下には普段の全然戦績は振るわないのに何故かジャイアントキリング率100%を誇る有名なアナザーライダーいると」

「そうじや彼奴がアナザーギャレン、ハルト坊のメッセージを受け取り駆けつけたのは良いがいつ仲間入りしようかタイミングを測っておるシャイな奴じや」

「お前等全員アナザーギャレンに謝れ!!後来たんなら声掛けてよ!ナゼエミデルンデイス!!」

そう話しかけるとアナザーギャレンは基地を指差し

「目標地点まで7020キロ!」

とんでもない爆弾を投下したのである

「え?...精霊がいるのはあの基地じゃないのですか!?!」

「7000…ふざけるな！座標ミスで済む話ではないわ！おい、ガンシップを手配しろ！」

「「おのれデイケイドおおおおお！」」

士さんにあらぬ疑いをかけ始めた仲間達にハルトはため息を吐き

「南西に20キロだろ？分かってるって」

「ああ…」

「でもメツセージ受け取ったなら早く来てくれよ大歓迎なのに」

とアナザーギャレンをウオッチに融合し一言

「取り敢えずお前等、アナザーギャレンが来てるのに気づいてたなら言ってくれ……つか俺のアナザーライダーのセンサーに反応しないステルス性能って何だよ」

「寧ろアナザーギャレンで潜入した方がスムーズに行くのでは？」

「いや…一つ良い考えが思い浮かんだ」

「取り敢えず聞いても宜しいですか？」

「ああ……アナザーゴーストで通り抜けられないかな？」

あのアナザーライダーって幽霊だから出来るんじゃないかね？その意見に

「「「「あ……………」」」」

ウオズ達はそう言えばと言う顔をした

『ゴースト』

アナザーゴーストになったハルトと

『シノビ』

アナザーシノビに変身したウオズがいた

「我が魔王、私もお供します！」

「あー！ウオズちゃんズルっ！」

「クソツ！俺達では潜入が出来ない！」

「あ、アナザーハツタリウオツチあるけど使う？」

「はいはい！俺が使うよう！良いでしょ！」

「待てジヨウゲン！俺が行く」

「ジャンケンで決めろ！」

「最初はグーー！」

ジャンケンと同時にジョウゲンとカゲンがクロスカウンターで互いの顔面を捉え気絶したのを見て

「誰がジャジャン拳をやれと言った!!」

結果として

「頼むフィーニス…ヤクヅキ、そこで伸びてるバカ2人起きたら説教頼むわ」

「任せておけ」

「殺すなよ」

「うむ！気をつけてな!!」

—————

そしてアナザーゴースト、シノビ、ハッターリに変身して研究施設に潜入した

「いやあ……まさかあの伝説の傭兵よろしく潜入ミッションをする日が来るなんて……
はっ！」

ハルトは思わず蹲り耳元に指を当てて

「此方スーク……なんてな」

何となくやってみただが

『お、呼んだか?』（石動ボイス）

「え？誰？」

知らない誰かと通信が繋がった！

『そうかお前さんとは初めましてだな俺 『お前はお呼びじゃねえよエボル!! 貴様はテストタロツサの所にいる筈だろう!』 つと自己紹介が省けたな俺はアナザーエボルだ宜しくな』

「いや確かにテストタロツサの所にいるよね？」

『まあ暇だったから遊びに来たんだよそんな事より……よお！アナザービルド、久しぶり……でもないかあ』

『エボルトおおおおおおお！』

『落ち着けビルド!』

『俺は負けてない!』

『難波会長の仇いいいい!』

『お前等も落ち着けえええ!!』

ビルド組が騒がしくなってきたな…

「で?…:…何しに来たんだよ」

『何、今回の件だが俺様の力が必要かと思つてな…断じてアナザーキルバスやブラッドの小言が面倒だから逃げた訳じゃないぞ』

「それだろ理由は…何でだよ今回はアナザーゴーストとアナザーシノビ達だけで充分だろ?」

『この場だけで済むならな』

「え？」

『考えても見ろ、このままアナザーライダーで暴れ続ければ流石の連中も備えをするだろう今後の展開上、お前さんに追跡の目が行くのも困る初見殺しがお前の得意技だろう？』

「……………一理あるな」

身バレのリスクも考えればアナザーライダーへの変身も適材適所って訳か

『それなら俺の出番だ、ブラッドスタークになれば声も変えられるし身バレのリスクも軽減される』

「け、けどライダーファンとしてやっぱり変身するのは…………つか俺ってソレ出来るの？」

『可能だ、怪人使用が前提のシステムであるのと専用道具があれば…急拵えだが変身は出来る』

「そ、そうなんだ……けど……」

ファンとしての愛＞変身欲求

『………んん！お前さんには、こつちの方が馴染みがあるかあ？どうだ俺に変身してみないか？（エボルトボイス）』

ガタン！ ファンとしての愛＜変身欲求

「やるぞて」

『相棒!?!』

『そう言うと思ったぜ、右手を見てみる』

「っ!!」

その手から赤いスライムのようなものが流れでると黒い掌サイズの銃 トランス
チームガンが現れたのだ

『それとコレだ大事に使えよ』

そして手にはコブラロストボトルが現れたと同時にハルトに湧いたのは歓喜の声で
ある

「ふはははははは!」

『おいエゴルドライバーを渡してないのに笑うなよ』

「遂に…この時が来たあ!」

『だからエボルドライバーは『エボル、お前は知らんだろうがハルトはこう言う奴だ』
ほお、これだから面白いんだ人間って奴あ』

『人間辞めてるけどナ』

「っ！」

ハルトは変身解除するとトランスチームガンにコブラロストボトルを装填した

『コブラ』

低い待機音と同時に銃口を上に向けると

「今の俺の理性は燃え盛るライダー愛で蒸発した！……見る蒸血!!」

そして引き金を引くとハルトの体は黒い蒸気に包まれると

『ミストマッチー・コ・コツ・コブラ…コブラ…ファイヤー!』

同時に周囲で花火が上がり現れたのは赤と緑の意匠を持つゲームメーカー

覚醒を待つ血塗れの蛇 ブラッドスターク

推参

「さーて、ここそこ隠れるのも飽きたし派手に行くか…寧ろ精霊研究なんて悪辣な事してんだから少しは痛い目に合わせないとは…ヤクヅキは変身して暴れる…あ、その前にジヨウゲンとカゲンのバカを叩き起こしとけ」

『そう言うと思って起こしておいたわ』

「良くやった、バカ2人はデータを送るからその場所にある逃走ルートを潰せ、ウオズとファイニスは潜入続行だデータ回収と件の精霊を探してくれ」

「お任せを」「はい！」

2人が離れたと同時に

「貴様だな侵入者とは！どうやってこの研究所の位置が！」

「……ん！んん!!……よし（エボルトボイス）迷子になってねえ入ってみたら随分と面白い事してるじゃないか？ええ」

「何者だ大人しく銃をー」

銃を突きつけた奴に右手から伸ばした毒針を突き刺して毒で消滅させた

「次に死にたい奴は誰だ？まあ全員生かして帰す気はないがな」

トランスチームガンを構えて威嚇するスタークに対して

『おいこのバカ、無駄にブラッドスタークの真似が上手いぞ!』

『伊達にライダーのエミュしてねえよなあ』

「驚いたろ、こう見えて演技や声真似が得意でねえ!」

『何その才能?!』

『声真似のレベルを超えてるんですが!!』

『いや声変えてるからだろう?』

「撃てええええ!…何!外では巨人が暴れてる!?!ええいどうなっているのだ!!」

「余所見は厳禁だぜえ」

スタークは何人か峰打ちで気絶させると

「よし……こいつが隊長か何か端末を……ビンゴだな頼むぜ2人とも」

近くの端末にアナザーウオッチを近づけると

アナザービルド、キカイがハッキングを開始した

『完了だ……ふむ……精霊はこの先にいるぞ！』

「さて行くか……」

そこに転がる警備員達をスマツシユにするか考えた 実際ブラッドスタークの力を
持つてすれば相手をスマツシユに変えることが可能だ……しかし

「そこまでする必要はないか……んじや協力感謝するぜ、チャオ！」

ブラッドスタークのまま。赤いオーラを纏う高速移動をするのであった

目的地付近に着くと変身解除してコツソリ覗き見る

「……………なあ相棒、精霊の場所を探せと言ったけど？」

『ああ』

「誰が資材コンテナを探せって言ったよ」

『お前、オーマジオウの言葉を忘れたのか？』

「馬鹿野郎、一言一句違わずに覚えて……………あ」

精霊が人体実験を受けている……………つまり

「まさか人じゃないから、モノみたいに運んでるってこと？」

『そうなるな、デندنでも見たが生命反応を検知した…過去の十香や四糸乃と同じエ

ネルギー反応を検知した』

人間じゃないなら何しても良い…か

「……………お前等」

ハルトがポツリと呟くと資材を運んでる研究員を見て手鏡を向けると

「全員食え、俺が許す」

その言葉を待ってた！と言わんばかりにミラーワールドから現れたメタルガラスやエビルダイバー、アビスラッシュャーやアビスハンマー、メガゼール達が逃げる研究員に襲い掛かる

「な、何だこいつ等は!!」

「ま、まってくれ、い、いやだああああ!」

全員が断末魔を上げながらミラーワールドに引き摺り込まれていくのを見届けると

「よし……さて、どう開けたものか」

そう考えていると

「じゃあ僕が開けて貰うとするよ」

「っ！」

ハルトは身を捻り回避するといった場所に弾丸が降って来たのである、そしてハルトは見上げると下手人の顔を見て苦い顔をした

「まさか邪魔してくるとは予想外でしたよ海東さん」

「土の話を盗み聞きしたんだ、あの魔王が欲しいと思うほどのお宝なんて凄いなものだろ

うと思つてね」

ネオデイエンドライバーを向けられているが此方もトランスチームガンを構え拮抗状態を作る

「私利私欲で来たなら俺もはいんどーぞと渡せますがオーマジオウからの依頼…しかも俺を信頼してくれて頼んでくれたんです、今回は貴方に譲る気はありませんよ海東さん！」

「なら仕方ない実力行使で貰うとしよう」

『KAMENRIDE』

海東はネオデイエンドライバーにカードを装填すると頭上に構えて

「変身！」

引き金を引く立体映像が三つ重なると頭上からカード型のエネルギーが降ってきた

装甲となる

世界を股に掛けるトレジャーハンター

仮面ライダーネオデイエンド

参上

「さあお宝は僕のものだ」

「渡す訳にはいきませんよ！」

『ジオウⅡ』

アナザージオウⅡに変身したハルトは突貫ネオデイエンドの射撃を耐えながら強引に近接戦闘に移行したのであった

その頃

「先輩、魔王様がディエンドと接敵し戦闘していると」

「何故彼が…っ！我等も我が魔王に加勢しますよ！」

「はい！」

「おっと、そうはさせない」

オーロラカーテンから抜けて現れたのは士である

「ディケイド！何故ですか！」

「これはアイツに必要な事だからだ過保護なお前たちがいると意味が無くなるんでな」

「成る程…我々はオーマジオウに一杯食わされたと」

「それは違うな、あの魔王はアイツに助けて欲しいと依頼のは本当だ…まあこの戦闘は

俺達の我儘だ、だが海東の奴が盗み聞きしてるとは思わなかったが利用させてもらうか
…アイツが本当に俺達の力を使うに相応しいか見極めてやる」

「…フィーニス行きますよ、どうやら戦うしかないみたいです」

「言われずとも…大ショツカーの首領でありながら、その役目を忘れた奴に負ける訳には行きません！」

『ギンガ…ファイナリー』『1号』

「俺の黒歴史をほじくり返すな…まあ良い少し遊んでやるか変身」

『KAMEN RIDER DECADE!』

ネオデイクライドに変身すると2人を挑発するように手招きしたのである

二亜 I R R E G U L A R 後編

前回のあらすじ

オーマジオウの依頼で精霊が囚われている研究所へ潜入したハルト達、途中ブラッドスタークに変身するなど色々あったが突如として現れたデイケイド、デイエンドコンビとの戦闘になったのである

ハルト side

「流石は歴戦の仮面ライダー！俺なんかの攻撃は当たらないか！」

徒手空拳の数々も空を切り、逆にカウンターを食らってしまう

「当然だよ僕は君や士よりも前から通りすがりの仮面ライダーなんだからね！」

「でしたね……ならコレならどうだ！」

『ゴースト』『エグゼイド』

アナザーゴーストとアナザーエグゼイドを召喚し

「頼む！」

「おう！」

「任せろ！アイツには色々借りがある！」

2人に任せているうちにコンテナから精霊を助け出そうとする、しかしディエンドに襲い掛かるが持ち前のスピードですり抜けると

「その手の技は僕の専売特許って知らないのかい？それにその組み合わせは前にも見たよー！」

『KAMENRIDE ブレイブ！スペクター！』

仮面ライダーブレイブ、スペクターの2人を召喚してアナザーライダー達の足止めをした

「テメエ！この野郎！」

「狙ってやってるなら最低だな!!」

そしてディエンドは再度アナザージオウⅡに視線を合わせる

「それには個人的に因縁があつてね！」

かつて自分が暴走したことだろうか？なら

「暴走して土さんの命狙ってボコボコにされたからって八つ当たりが過ぎませんか！」

「違う！僕が苦しんだ副作用に苦しまない君が妬ましいだけだ！」

「完全な八つ当たりじゃねえか!!」

アナザーツインギレードにエネルギーを流して斬撃波を放つも回避されてしまう

「何故、君はそのお宝が欲しいんだい？」

「それは「オーマジオウに言われたから？」っ！」

「なら辞めた方が良い誰かに言われた位の理由なら持つ意味はないよ、それよりも君は魔王の方が向いている怪人を差し向けている姿が似合っていたさ！」

「っ!!泥棒の説教する事かあ！」

怒りに囚われそうになっているハルトを見て

「まあ僕も説教出来る側ではないけどね」

『FINAL ATTACK RIDE! DI DI DIEND!』

「ふっ!」

「っ!」

ネオデイメンションシユートを放たれる住んでの所でガードしたが威力が強すぎて件のコンテナにめり込むと変身解除となり

「あ……がぁ……」

同時に戦闘していたアナザーゴーストとエグゼイドも消滅しウォッチに戻った

「確かに君は成長した、それこそ僕達の力の一旦を使えるくらいにはね……けど憧れて

る内は僕達には勝てないよ」

「っ！」

「大人しく見ていたまえ僕がお宝を手に入れる瞬間を」

『相棒、早く起きろ！でないと精霊をディエンドに取られてしまうぞ！』

しかしハルトの頭に去来したのは別のこと

仮面ライダーに勝つなんて考えた事もなかった

自分の永遠のヒーロー達、その背中に憧れ続けヒョンと事から同じ力を得た、まあ怪人であるが

【俺を倒せるのは本物の仮面ライダーだけ】

この一念だけを支えにして……だが海東さんは勝てないと言ったのだ　つまり

「仮面ライダーが負けるかもなんて考えてくれたんだ……嬉しいねえ……」

「君は遠慮しているようにも思えるね僕達に並ぶポテンシャルがあるのに……同じアナザライダーならスウォルツの方が強かったよ」

『そうであろう！』

『お前は調子に乗るナ！』

「君に足りないのは「勝ちへの執着」わかってるのなら」

「そうですよ……忘れてたんですよ……あの時こォーマジオウとの時だつて」

．．．．

「頑張れ！お願い俺なんかには負けないで！」

なーんて心の片隅で思ってたんだからさ

「そこが君の弱さだよ憧れには勝てないって思いが心にブレーキをかけてるようだからね」

「俺は…憧れは捨てません、今でも貴方達は俺に取つてのヒーローなんです！あの時からずっと！」

「なら僕には勝てないよ勿論、士にもね」

「勝ちますよ、俺のブレーキの所為で負けるとかダサイし」

「何？」

「約束を守る、憧れ(推し)達に勝つ…両方やらないといけないのがファンの辛い所だぜ」

そうハルトが懐から取り出したのは、ブーストバツクルと白い銃型デバイスであった

———

A X Z編 アダム戦後の撤収準備時

「なあ、アナザーギーツ」

『どうした?』

ハルトは事務仕事の最中、アダムとの戦いを思い出していた

「あのバツクル……ブーストのマーク2だっけ?結局アレって何処から来たの?」

『ああアレか、実はあの後エネルギーが霧散して普通のブーストバツクルに戻った』

「は?いや何で今カミングアウトすんだよ化け狐!」

『聞かれなかったからな、それに俺にとっても未知の現象で戸惑っている』

「どういう事だよ？」

『もしかしたら、あの場限りの奇跡に近いものだったんじゃないのかと思ってな』

「奇跡……ねえ」

キャロルが知ったら何というかな

『実はアナザーギーツ、その件なのだが俺達も仮説を立てて見た』

『聞かせてくれるか？アナザーデイケイド』

『ああ…あのマーク2とやら実は継続的にあるいは安全使用において制御装置に該当するものが必要なのではないか？』

『ほお』

「制御装置？」

『ハルトに対して分かりやすく言えばハザードに対してのフルフルだ、ようは外付けのデバイスが必要なんだろう？』

「凄い分かりやすいし、どれくらい重要か伝わった…」

ハルトは苦い顔をするとアナザーギーツはフツと笑い

『正解だ、あのバックルを使うにはとあるデバイスが必要になる』

『やはりか、それで『俺は持っていない』ならば』

『兎や錬金術師、カミーノ？に頼んでも無理…いやそもそもこの時代のものじゃないし

作成出来ないものだし図面もないからな』

「何じゃそりや…つか束とキャロルにも作れないんじや変身しても使えるか分からな
いって事!？」

『そうなる、幸いな事にある人の支援でマーク2は後一回使えるがデバイスを入手しな
いと前回の二の舞だ、しかも二度は無いかもしれん』

「なあ制御装置ってカツコつけてるけど実際はゼロノスみたいの使用回数制限があると
かじゃないの?」

『それは違うから安心しろ魔王』

「そうかい…:じゃあ大事に使わないとなマーク2」

「使い所を見極めないとなと言うと話を打ち切り、仕事に戻るかと思いきや端末に目線を落
としたと同時に」

「っ！」

世界の時が止まったのである

「これ…何事！」

「安心して、僕がこの世界にいるために必要な処置だから」

そこに現れたのは白いスーツの男である

「誰だお前!!何をした!!」

とアナザーウオッチを構えるハルトに男は両手を横に振り

「俺はで、敵じゃないから話を聞いてくれ!!」

あまりの慌てように演技かと疑うが

「それに危害を加えるつもりなら、あの時に加えているよ」

「あの時？」

「……………あ、君にはこの姿で会うのは初めてだったかな？僕はこういうものです」

と取り出したドライバーを見てハルトは驚く

「そのベルト……………あんた……………この間の白ライダー！」

「正解、私は火野カグ槌、またの名を仮面ライダーゲイザー以後お見知りおきをハルト」

「へえゲイザーって言うのかアレ、って火野？まさか「偽名ですのぞ」なーんだ……………けつ
！」

「では誤解も解けたので早速話しをしよう」

「その前に質問、何でアンタがアダムを殺したんだ？」

問いかけに対して肩をすくめて答える

「その質問に意味があるとは思えないな僕が何もしなくても君とナツキが消していただろう？まあ答えるとするならば…死ぬべき時に死ねないのは可哀想と思ってね緞帳を下ろしてあげただけさ」

「それだけ？」

「それだけでも終わりがあからこそ美しく人は死ぬ時こそが一番美しくある…b y s トリウスってね」

「……………」

「僕の価値観だから気にしないでくれ、それとアダムを倒したのはオマケみたいなもので本題はこっちだよ今回の世界におけるクリア報酬だ受け取ってくれ」

火野が取り出したアタッシュケースに入っていたのは、4個のアナザーウオッチと白い銃型デバイスであった

「何コレ？」

ハルトは銃型デバイスを取りマジマジと見ると火野が説明する

「レーザーレイズライザー、君の問題を解決してくれるものだよ」

「これが？」

「そもそもブーストマーク2バックルのエネルギー切れの理由は世界を救うと言う願いがあのかきぎりの力だったって言うのが大きいんだ」

「つまりアダムを倒すためだけの力だったって事か？」

「まあね本来はアレキリの予定だったんだけど少し僕の計画に狂いが生まれてね…君が強くないとダメになったんだ」

「は？何で俺が「ハルカが以前作ったアバターが自立稼働して行く先々の世界で暴れている」はあ！そんな事になってんの!!」

「これはハルカ本人の意志は介在していない、能力が一人歩きしているんだわかりやすく言えば、ノオーリアスBIGに近いかな」

「それ俺、倒せる？あのスタンド同じとか悪夢なんだけど…いや逆に何度でも殺せるなら役得か？」

「はは……まあ、だからこそその力という訳だ、それを使えばブーストマーク2を安全に使える、そしてその上に行く事も可能だよ」

『ああ、それを使えばな』

「へえ…そうなんだ」

「因みにこのカードを差し込めば仮面ライダーにも変身可能だ」

そう言つて火野が見せた4枚のカードを見てハルトは目を輝かせた

「うおおおおお！すげえええええ！」

「まあ君には使えませんが変わりにコレと言う訳です」

「うん知つてたー…じゃあ、そのアナザーはコレで変身する奴らのアナザーつて事？」

「その通りです、どうぞ」

火野の差し出すアタッシュケースを受け取るハルトは訝しむように見ると彼は困つ

たように笑う

「名前はアナザーゾーン、ケケラ、キューン、ペロバ……ご安心を爆弾なんてつけてませんよ」

「本当か？目の前で爆発させて 魔王！今お前の未来を奪ってやったぞ！とか言うつもりだろう！俺は仮面ライダーが好きだから知ってたんだぜ！」

「その場合でも未来からレーザーレイズライザーとアナザーウオッチが飛んできますが？」

「ふーん……で、結局お前は何者なんだよ？」

「強いて言えば遠い世界からの観測者ですかね？これからも貴方の物語を特等席で見せて貰います……では、チャオ！」

「ヴィジョンドライバーの力で転移して消えると同時に世界の時間が元に戻る

「夢?……じゃないよな」

その手にあるアタツシユケースとレーザーライズライザーが現実であったと言うのを証明していたのであった

—————

「何だいソレは？」

「見てろ……新しい力を！」

アナザーギーツ・エントリーフォームになりブーストバツクルを使った　しかし何も起こらなかつた

「あ、あれえ!!」

『馬鹿だな…前にも言つたら守りたいって強く思えつてな』

「あの時とは違う………けど…今の俺は精霊を助けたい!!十香ちゃん、四糸乃ちゃんや七罪さんとそのコンテナにいる精霊の為に負ける訳にはいかないんだあ!」

あの時、アナザーグランドジオウに覚醒した時の気持ちを思い出し頭上にブーストバツクルを掲げると

ゴゴゴゴゴゴ…

「……………何がしたいんだい?……………っ!」

ゴーン!ゴーン!ゴーン!と鐘の音が聞こえると空から

『来たぞ魔王、ブーストバツクルだ』

「っ!しゃあ!!」

ハルトは自分の持つブーストバツクルに更に力が加わるのを感じる、そしてその手には嘗て失ったブーストバツクルマーク2が握られていたのだ

「それは」

「……………っ!」

『SET…ブーストマーク2』

返り血を浴びた化け狐 アナザーギーツ・ブーストフォームマーク2 見参!

「へえ、それがアダムを倒した力か…ならさぞかし凄いお宝だろ…っ!」

「はあ!」

アナザーギーツのストレートをモロに受けてしまったデイエンドは近くの壁まで吹き飛ばされた

「中々のスピードだけどそれだけなら僕には勝てないよ、兵隊さん行ってらっしゃい」

『KAMENRIDE ライオトルーパーズ』

ライオトルーパーを三体呼び出してアナザーギーツに襲い掛かるが一体は拳の一撃で爆散、一体は蹴りを喰らうも手で抑えたしかし

『BOOST STRIKE!』

エネルギーを込めて放たれた蹴りはもう一体目掛けて飛んでいき2体とも爆散した

「成る程、中々のお宝だけど君の体はどれだけ持つかな？」

同時にハルトの体を時差ボケに匹敵する睡魔が襲う、以前は問題なく使えたがアナザーグランドジオウからのブラッドスターク変身による連戦で体力が落ちていたようだ

「っ！………確か…：反転！」

『 / ブーストマーク2 』

アナザーギーツが言っていた言葉に従いレーザーレイズライザーをドライバーにセツトすると体の負担がかなり軽くなった…：よし！

「何か行ける気がする!!」

『SET UP!』

同時にハルトはバックルを起動すると赤い炎を発する、しかしレーザーレイズライザーの引き金を引くと完全燃焼の青い炎と変わるとライザーの引き金を引いた

『DUAL ON HYPER LINK レーザーブースト：READY FIGHT!』

ブーストマーク2に重なるよう展開された装甲が体を包みこむ、しかしその姿は白狐

の絨毯を被ったような歪な化け狐 本家が絆で勝ち取ったものなら アナザーは強引に剥ぎ取り奪ったような外観

未来と願いを込めた化け狐

アナザーギーツ・レーザーブーストフォーム

爆誕

「っ！」

未知の力にディエンドは警戒して新たなライダーを召喚する

『KAMENRIDE イクサ！サイガ！』

「どれだけ早くても無駄だよ、その2人はクロックアップさえも追えるからね！」

「その命、神に帰しなさい！」

「i t , s s h o w t i m e !」

イクサ・バーストモードとサイガ、特にイクサはアンティリーネが変身しているので
思う所はある…

「っ！たあ!!」

「っ！」

その加速力はイクサの目に追えなかったのである

「っ！」

サイガはフライングユニットで飛翔して攻撃をかけようとするが、アナザーレーザー
ブーストは体をなぞると

不思議なことが起こった、サイガの体が壁にめり込むとまるで重力のベクトルが変わったように立っていたのである

「What, s!?!」

流石にこの現象は予想できなかったようだかそんなサイガの背後に立ったアナザーレーザーブーストは躊躇い引き金を引き2体のライダーを爆散させたのである

「……………ごめんなさい」

やはりファンとしては心にくるものがある…よし

「仮面ライダーディエンド、償って貰いましょう純粋なファンの心を弄んだ大罪を」

『FINISH MODE! レーザーブースト! VICTROY!!』

「そこまでの事かな? けど狙った獲物は逃がさないよ!」

『FINAL ATTACK RIDE!』

そうディエンドが必殺技で迎え撃とうとした時

「待て海東、魔王終わりだ」

破壊者の一声で止まるのであった

「士?」

「士さん!?!……って何でウオズ達はそんな顔してるの?」

そこに現れた士よりもウオズとフィーニスガムスツとした顔をしていたのである

「コイツ等は俺にナマコを投げつけて逃げようとしたからな…説教しただけだ」

「ナマコを!?!何でそんな事を!」

「士の弱点だからね、そりやビビるだろうさ」

「誰が…そんな事より海東、お前何勝手に乱入してる」

「オーマジオウが欲しいと思うお宝を狙ってね」

「なら辞めた方が良く、お前の手に余る」

「何だって？そんなことを聞いたら余計」「これを見てもそう言えるか？」え？」

士がコンテナのロックを外すとそこには機械で拘束された女の子がいるではないか

「この子がオーマジオウが言っつて精霊の…」

「成る程、確かに僕の手には余るかな…人がお宝か…あの魔王も中々面白い言葉回しだね」

「そう言う事だ帰れ」

「だが手ブラという訳にもいかないかな」

「………ならばバイクとかどうです?」

「何?」「おい」

変身解除したハルトが指を鳴らすとオーロラカーテンから現れたのはシアン色のマシンデイクイダーであった

「こ、これは!」

「マシンデイクイダー…まあウチの連中が製作したバイクです、良かったら」

「そ、そう言う事なら今回は引いてあげよう…別にバイクを貰えて嬉しいとかではないからね!」

「うるさい、さつさと乗っていけ」

「釣れないなあ士は、じゃあまた会おう今度は君のお宝をいただくよ、じゃあね」

『ATTACK RIDE INVISIBLE』

マシンライダーに乗るとインビジブルのカードを使い透明になり消えたのである

「はあ……何て傍迷惑な」

「それについては激しく同感だ、しかし……お前、部下にナマコを投げさせるなんてどう言う教育をしてる？」

「あ……つか何で投げたの？」

「デイケイドの弱点と聞いてましたので」

「効果的かと」

「だからって投げる奴があるかあ!!」

ハルトの声は森の中まで響いたのであった

その後、ハルトはオーマジオウの所に行き報告すると

「おお！彼女を助けたか…うむよくやったな」

「途中ディエンドに妨害されたんですが…結果として新しい力にも目覚めましたから結果オーライです」

「前向きなのは良いことだ、そしてお前には頼みがまだある」

「何でしよう?」

「彼女の面倒を見てやってくれないか？」

「はい！お任せ下さい！！」

ハルトは二つ返事で了承するのであった

「それと報酬と言ってはアレだが貴様宛てに荷物を預かっているミラーモンスター用のベーコンとウインナー、それとガイアメモリとドライバーに関するデータと凶面だ…今頃詳細は貴様の妻達の元に届いているだろう有効に使うと良い」

「あ、ありがとうございます！！…あの…このミラーモンスター用のウインナーとベーコンの材料って…」

「安心せよ信頼の野座間製菓と護流五無製だ」

『おい待て！それやばい奴だろ！』

『ハルト！そのベーコンとウインナーの材料は！』

「……………そうですか！ありがとうございます！！」

ハルトは考えるのを辞めたのである

『おい！』

「それとだ貴様のファンを名乗るものから色々預かっていてな…受け取れ」

「俺のファン？なんだろう……っ！アルターブックにレジェンドのライドブック!？」

「それを使えばアナザーセイバーの戦略も豊かになろう」

「あ、ありがとうございます!!」

「以上だ、では頑張れ」

「はい！また来ますねー！」

ハルトを見送った後

「まさか我が仲人の真似事をするとは…面白い体験だった」

因みにその頃 海東は貰ったバイクをユウスケ達に自慢していたと言う

—————

数日後

ピースメーカー艦内でハルトはクローン軍医に助けた精霊の容体についての報告を受けていた

「体に打たれていた薬などは中和しました、少しですが栄養失調の傾向がありますが…

これは治療可能です……しかし」

「メンタル面は別か」

道具扱いで人権無しの人体実験をされていたとなれば……その心中を察するのは難しい

「日常生活へ戻るには時間はかかると思います」

「その辺りはラタトスクの面々や少年君にも手伝って貰うかな……さてとその子に会いに行くとしますかね」

医務室へと向かう途中

うわあああああああああ！

艦内に響く女性の悲鳴にハルトは全速力で走り、ハウンドは艦内の警報を鳴らすよう

に指示を出す。悲鳴のあつた場所は……あの精霊の部屋か！

バダン！

「大丈夫「この漫画が完結してらうらうらう！」……へ？」

そこには誰かがお見舞いで用意しただろう漫画の単行本が山積みになっており、精霊は涙していた……

「こ、これを取りアタイで見れなかったのか私は!!そしてこの感動を誰とも分かち合えないのか……おのれDEM!!許さん!!」

と台パンをかます姿に

「え、ええ……ビツクリしたあ……」

ハルトはホツと胸を撫で下ろしたが

『あの台パンする姿…何処かの誰かにそっくりだな』

『ああ瓜二つだな』

「誰さ？キャロル、束？」

あの2人も結構台パンするけど？

『『お前だよ!!』』

「いやいやまさか俺はそんな事しないが？」

『じゃあ聞くぞ仮面ライダーの放送がゴルフで潰れたらどう思う？』

そう言われて想像してみた…うん

「……っ許さんぞ！おのれ全○ゴルフ!!」

『そう、それが答えだ』

『アレ完全にお前の同類だよ』

「……………あ、誰？」

気づいたのか精霊はハルトを見た

「どもども俺は常葉ハルト、宜しく」

「私は本条二亜、助けてくれてねありがとねん、常葉ハルト…へえ君が異世界の魔王なんだくそんな君に用があるんだけど…ってそれにしても面白いTシャツだね何処で買ったの？」

銀髪の女性 二亜はハルトの着ているTシャツに興味を示した

「これか？これは全部オーダーメイドのTシャツだ！」

「へえ、凄いじゃん私にも一着頂戴よ！」

その一言に医務室にいたトルーパーと駆けつけたハウンドそして

「！！！！！！！！」

様子見に来たキャロル達とウオズ達が戦慄したのである、まるでこの世のものではないものを見る目で二重を見る何より一番驚いたのは

『何だと！』『嘘だ口！！』

『このセンスを介する猛者がいたのか！！』

『と言う事はこの女もハルト級のセンスなのか……ああああ！』

『ああアナザーWが風都の強風で吹き飛ばされた!』

『あの風でゴールドエクストリームにならないあたり何ともなあ…』

彼の壊滅的なセンスを身近で見えてきたアナザーライダー達である、するとハルトは目を輝かせて

「見ろお前ら…遂に…この世界に幻さんのセンスの理解者がいたぞ!」

『おい待て!その前にこの女なんで相棒達が異世界人って知ってたんだ!』

「そりや私、精霊ですし?それにこの全智の天使 囁告篇帙の力に掛ければ一発だつての、まあ君の中にいるアナザーW?の情報収集能力を超える力とだけ言っておこうか」

その挑発的な物言いに吹き飛ばされ不時着したアナザーWがキレた

『っ！何だとお！この女…なら見せてやるぜ！俺の検索能力!!まずはこの女のスリーサイズからだ！上か…ふあ！』

『ああ！アナザーWが錐揉み回転しながら宙を舞ってる！』

『流石アナザーディケイド！』

『何セクハラしようとしているのだ馬鹿者!!』

『本当ごめんなさい！』

『いいよいいよ、そんな事より、ねえ君…』

『何かな？』

『私とデートしようよ調べたけど君、士道少年よりも面白そうだし』

「いいですよー完治したら一緒行きましょうか」

「「「即答!?!」」」」

「いえーい！あ、何処に行くの？」

「え？アキバ」

「デートスポットとしてそれは良いの!?!」

「……………っ!!!友よ!!」

「イエーイ！」

「打ち解けるスピードが私達の誰よりも早いんだけど！」

「警戒心を持ってバカハルト！」

「はあ……思い出した、お前達……この女だ未来の子供が言ってたのは」

「「「……あ!!」」」

「ん？何の話してんの？」

「知らね……そう言えばさ二亜、異世界とかに興味あつたりする？」

「異世界!?それはつまり薄い本に出るようなスライムやオークやゴブリンが沢山いる世界なのかい!」

「その言葉、俺の国で使わないでねオークもゴブリンも大事な民だしスライムに至っては俺の友達の魔王だからね理性ない魔物とかじゃないから」

「おお……ならエルフとかいたりする!」

「エルフはいないな…ハーフエルフならいるよ?」

「うおおおおお!是非!そんなネタの宝庫に行かない漫画家がいるか!いやいな
!」

「そう言うと思ったよ、宜しく二亜」

「宜しくう!」

閑話 人の振り見て我が振り直せ

さて前回 無事にディエンド、アナザーギーツレーザーブースト、突然巻き込まれた
ダークライの三つ巴の戦いから精霊 本条二亜を助け出せたハルト 二亜は彼のT
シャツセンスに共感してくれた事もあり彼女を気にいたのであった！

『何て雑な前振りよ！ってダークライ何処から来た！』

「まあ……取り敢えずそんな感じかな艦長さん」

ラタトスクと通信を繋ぎ今回の経緯を説明したのである、DEMに囚われていた精霊
の救助をした事と現在その精霊を保護していることを

「けどまあ良いニュースね精霊の居場所が確認取れるだけでも安心よ」

「艦長さん、彼女…二亜が俺の国で空間震を起こしてる精霊なのかな？」

「そこまでは知らないわ取り敢えず今は霊力を封印するのが先決ね「ち、ちよつと待った艦長さん」何よっ？」

「俺の所の軍医も言ってたが投薬やら色々されてるみたいだし、まずは体のケアが先決だと思いう霊力や天使が今の彼女の心を支えている可能性も捨てがたい、強引に奪いに行くのは辞めた方が良い」

『まあ一理あるわね、流石にすぐにこっちを信頼は出来ないって事？』

「だから暫く少年君にも内緒にしない？それで彼女の療養が完了してからの封印でどうだろう？」

『成る程…まあその辺は助けたアンタに任せるわ士道にも黙っててあげる、んじゃ交信終了』

と通信を終えて一息吐くハルトは背もたれに全力でもたれかかる

「ふい〜これで良しと」

「お疲れ様です我が魔王」

「あんがとウオズ、それより彼女の様子はどうだい？」

「ああ彼女なら…」

報告を受ける前にドアが強く開かれるとアンティリーネが涙目で抱きついて来たではないか

「旦那様助けて!!」

まさか我が家での戦闘最強格の彼女が涙目になる程の敵……はっ!まさか!!

「どうしたアンティリーネ！キッチンにGでも出たか！」

確かにあの最強生物ならアンティリーネ相手でも！勝てないか！

「……違うわ！早くニアを何とかして！」

「は？ニア？」

首を傾げていると

「あくやつと見つけたよ、リーネんお願いだからインタビューさせて!!」

「ひっ！」

彼女の接近を感じて背後に移動するアンティリーネ……成る程迫り来る精霊　二亜が怖かったと言う事か

「あのアンテイリーネが泣くほどって…二亜は迫りすぎ」

「えー！いいじゃんまさか本物のハーフェルフとかファンタジーな人に会えるなんて思わなかったしいー！それにこの宇宙戦艦よ！何このオーバーテクノロジーの塊は!!これは次回作はS F ファンタジーで書けるぞお!!ネタが決まって最高にハイって奴だあー！」

ばんざーい！と両手を上げて盛り上がる彼女を見て

『何か変なスイッチが入っているな』

『元気いっぱいだな』

「まあ療養する意味ある？くらい元気な訳なんだよなあ…」

「つ！そう言えば…ハルきちにも聞きたい事が!!」

「は…ハルきち!?…まさかの渾名で俺、動揺してるよ!!!」

『は、ハルきちか……ブハハハハ!!』

「アナザーW、ライダーキック〜」

『タイキックみたいなのりで死刑宣告するな! え? いやちよつ! お前等何で飛んで…あああああ!』

『オールトウエンティ(アナザーW抜き)アナザーキック!』

『with 令和!!』

『with 劇場版!』

『with Vシネマ!』

『お、俺も平成ライダーなんですがおあああ! 何でお前等もおおお!』

『あ、アナザーWが吹っ飛んだ!』

『この人でなし!!』

何処かの槍兵みたいな体当たり芸が身についたなアナザーWよ…

「はあ…やれやれ本当に元気だな」

「まあ此処みたいなネタの宝庫に来れば漫画家なら誰でも喜ぶよ、あ、囁告篇帙で調べただけどさくハルきちの部屋にあった冷えたビールを飲んだけど良かった?」

「は?…それ俺が異世界で買ったちよつと高め瓶の奴…おい待て飲んだのか!」

「……………あははは…っ!」ダツ!

「逃すな追ええええ!!」

「イエツサー!」

「え？ちよつ！トルーパー達は反則でしょー!!」

「それだけじゃねえ!!我が全身全霊をかけて…お前を捕まえる!」

そしてハルトは新しくきたアナザーウオッチを起動すると彼の体を蜘蛛の糸が包み込み膨らんでいく(オルテカのデモンズ風)と中から現れたのは、まさに怪奇 蜘蛛男

命を対価に力を渡す悪魔

『デモンズ』

アナザーデモンズ

「せいー!」

勢い任せに地面にプロトバイスタンプを押すと地面からヌルツと大量に現れたのは

「いけーアナザーデモンズトルーパーのアルファ！ベータ！」

大蜘蛛に従い 餌を運ぶ小蜘蛛

アナザーデモンズトルーパーアルファ／ベータ

が正に蜘蛛の子を散らさんとばかりに追いかけるのであった

「いいいいいやあああああああーこの蜘蛛の群れは何か無理いいいいいい！！」

と全力で走る二亜であった

が
まあ結果としてスタンモード（最弱）のブラスターが二亜の動きを封じたのであった

「はあ……大変だな……アイツさ……あのノリでDEMに入って捕まったとかねえよな？」

『どうだろうな？それより分かったか？』

やれやれやつと分かったか、みたいなりアクションをするアナザーライダー達にハルトは首を傾げる

「ん？何だよお前等？」

『今お前が味わっているのは俺達が長年経験していたものだからな』

「は？」

『ああ…問題児のお守りってナ！』

「誰が問題児だ？」

『無自覚は罪だぜハルト！さあ！お前の罪を数えろ！』

「罪？……え？俺って今の二亜と同じくらいアレだったの!？」

『『今気づいたのか!!』』

今日一の驚きがそこにあつた！

結論 人の振り見て我が振り直せ

—————

さて流石に毎日、この世界に滞在するのもピースメーカーの補給や修理もあるので逢魔に一時帰還を果たしたのであるが

「うおおおおおおーん、ここは空中都市だとお！それにゴブリン、オークに……っ！あ、アレは！リ……リアルケモ耳幼女が歩いてる！凄い！これが異世界なのか！！ふははは！我が世の春が来たぞー！すみません！その君！次回作のヒロインのモデルになつてくれませんかあ！！」

二亜が興奮に震えているのを見ると

「凄い新鮮なりアクションをありがとう…けど子供も怯えてるから落ち着いてね」

「はーい！」

「さて、とハウンド補給と修理にはどれくらい必要？」

「時間にすれば補給で一日、修理で三日ですね」

「併せて4日だな、わかったよ…じゃあ俺は貯まった仕事でもしますかね」

「これは珍しい陛下が自らそんなことを言うなんて、明日は隕石でも降りますか？」

「縁起でもないから辞めろ、定期報告は頼むぞコマンダー」

「サーイエツサー！」

そして執務室についたハルトは真面目に仕事をしていると

「おい、ハルト…」

「どうしたのキャロル」

「ん」

何か言いたそうな顔をしているので

「おいで」

ペンを机に置き近づいてきた彼女を抱きしめ頭を撫でる、ああ癒される

「……………ん…最近仕事ばかりだろ？」

「疲れてないか？」

「大丈夫、キャロルや皆から元気貰ってるから」

「本当か？」

「安心して…そだテンペストの温泉行く？」

「うむ悪くないが…その…エルフナインとナツキが千冬と東が話があると…だがその前にお前といたくて…」

「お、おう…それで伝言は？早く聞いてさ…2人でゆっくりしたいなあ…」

「ああ何でも「そこからは東さんの時間だあー！」この兎め！オレの時間を!!」

「すまないな報告に来たのもその件なんだ」

「千冬!!」

「実は…ハルカのアバターが暴れているらしい」

「うへえ、あの白スーツの言う通りかよ」

「白スーツ？」

「いや何でもない、けどそれなら俺が出張って始末つけないとな」

「それもだが実はー」

千冬の話だと、並行世界の立花響が融合症例になっておりナツキのいる世界の響が大変な事になった、そしてナツキは話し合いの末

「愚者の石の摘出手術をした医者を呼んでくれと頼まれた」

「愚者の石じゃないキングストーンだよ！」

「アナザーブレイブ達で手術をしてやって欲しい」

「スルーされた!? なーんで俺が「その世界のハルトに会った」……へ? マジ?」

『何だと! 並行世界の相棒が!』

『おいおい面白そうじゃないカ!』

「マジマジ! この世全てを不幸にしてやるって感じで闇堕ちしてた!」

『それはいつも通りな気もするな』

「それとジャマトライダーに変身していたぞ」

「何いい! 俺じゃ出来ないライダーのベルトで変身してんのか!!」

『そんな…俺達と会っていないのか!! そうだとしたら、その世界の相棒はかなりの人格破綻者になっているぞ!!』

「アナザーデイケイド、そこまで言うか!」

『愚か者！我々がどれだけ貴様の性格面を矯正したと思っっている!!』

「あ、その世界のハルくんね…あかねって人と一緒だった」

「えっ!!!」

「ハルくんの幼馴染なんだよね？」

「ああ……俺がドブの煮凝りみたいな自分の世界に帰りたい理由の一つでもある」

ハルトは頭をポリポリ掻くも束達全員を抱きしめたのである

「けどな」

「「「「っ！」」」」

「今の俺はお前たちといえる方が幸せだよ」

そう答えるとハルトはヘラヘラと笑い

「だから安心しろ、俺は何処へも行かないお前たちが良ければ死ぬまで一緒にいるよ……なんかアレだな少し気恥ずかしい……よ、よし！ ナツキのいる世界とやらに行こうじゃないかなノマシン対策は束メインだったからさ、頼む力を貸して欲しい」

「もちのろんだよ！」

「あの……お父さん……」

「クロエどうしたんだい？」

「良かったら私も「ダメ！ クロエには危ないよ！」……ダメ……ですか？」

「うっ……涙目をして俺は騙されないよ！」

「これは全部、乾巧さんって人から教わりました」

「何だって！それは本当かい！！てか何処にいるんだクロエ！サイン貰わないと！！」

「そのナツキさんのいる世界にいますよ、私が案内します」

「よっしゃあ！連れて行くから案内頼むぜ！！」

『おい、完全に騙されてるぞ相棒』

「どうしてついて行きたいんだ？夏休みの思い出にしてはだいぶ重たいよ？」

「その……実は夏休みの自由研究でAIナノマシンについてって論文を作ろうかと」

「絶対それ自由研究で済ませちゃダメだよね！」

「ダメ？ハルくん？」

「ダメだよ！あのハルカだよ？人を蹴落とし欺き、不幸にして悦に浸って高笑いするのが大好きで世が世なら恐怖の独裁者になっていた取柄と言えば人を狂気に駆り立てる事だけのゴミクス野郎だよ！何をしでかすか分かったものじゃない！」

「ハルくん、一応だけど実妹だよね？」

「だからこそクロエには危ない事をして欲しくないんだ…」

「いいじゃないのさ自衛の力もあるんでしょ？行かせてあげなよ過保護なパパは嫌われるよん」

「二亜？」

「それにそんな面白そうな話漫画のネタにしたいんですがよろしいでしょうか！」

「許す！あの愚妹の悪行三昧を三千世界に響かせろ!!」

「いよつしやー!」

「確かに籠の中の鳥は窮屈だな…よしクロエと束行くよ」

「良いんですか!」

「行きたいんだろ?それに長らくクロエの相手もしてあげられなかったし…珍しく我儘を言ってくれたからね」

「は、はい!!」

「よし、んじや行ってみようか!」

とハルトがナツキのいる世界に向かうと彼は偉そうにボイスレコーダー片手に

「奥さん達からもキッチンと許可貰ってるしバレても尻に敷かれてるハルトだから大丈夫だっつて」

「……………」

あのタヌキ、会わない間に偉そうな態度を取るようになったな…

【立ちました！陰口を叩くのは死亡フラグです！】

フラグちゃん、君は相変わらず良い仕事をする、さて

「ほほお……誰が尻に敷かれてるって？」

「そりゃあのダサ文字T魔王……が……って……え？」

さーてお仕置き時間だぜ、ベイビー

詳しくは禍福の天秤 戦姫15 魔王とフラグ回収 を見てね♪

そしてハルトは挨拶を済ませて帰ると

「東、クロエ…気をつけてな念の為にコレ渡しておくから危なくなったら変身するんだぞそしてハルカ叔母さん見たら遠慮なくやってしまえ！」

娘の初めての外泊だ、心配で堪らないよ

『おい最後に本音が漏れてるぞ』

「大丈夫ですよお父さんは心配し過ぎです」

「そーだよ！東もいるんだから大丈夫ブイ！」

「クロエ、東の事頼むな」

「はいお任せ下さい」

「あれ？もしかして束さんが心配されてる感じ？」

「ハルカ絡みなら「スルーしないでよ！」俺に連絡頼む、あの女の亡霊を今度こそ消してやる」

「うん！勿論だよ！」

「はい、お父さんも気をつけて」

「おう！」

そしてハルトが逢魔に帰るのであったが

「大変です陛下！二亜様が盗んだスピーダーバイクで走り出しました！」

「行く先は？」

「分からぬままです！」

「よし大至急探し出すぞ！つかどうやって盗み出せた！」

『どうやら囁告篇帙で警備システムの穴を見つけたようだな』

「クソツ！なんてチートの無駄遣いしてんだ!!」

『お前が言うな!!最近地球の本棚で何調べた!』

「世界の美味しいご当地料理」

『そんなのインターネットで調べろ馬鹿者!!』

「よし、ならコッチもチートだ！ウオズの未来ノートでここまで連れてこい！」

『無視するな!!』

「サーイエツサー!!」

そして

「スピーダーバイクは危ない乗り物なんだ乗るにはキチンと教習を受けてから乗ってくれ！それと盗んだ罰として今日のビールは無し!!」

「そんな何て殺生な!!鬼！悪魔！魔王！」

「全部該当してるのでその通りです！」

鬼（響鬼） 悪魔（リバイス） 魔王（ジオウ） だしな

「女誑し！スケコマシ！ハーレム王！」

「それ誰の事言つとんじゃあ!!」

『いや全くその通りだろう?』

思わずアイアンクローをしてしまった

「あ、頭が割れるうううう！」

「へ、陛下落ち着いてください!!」

結果としてハウンドが止めたので事なきを得たのであった

そしてピースメーカー艦内 そのブリッジにて

「やはりハッキングとかの備えはしておきたいな世界によつては対策必須だな…ウオーカーやガンシップが勝手に動いて攻撃とか笑えん」

ハルトはそこで溜息を吐く

「それに東はハッカーじゃなくて技術者だし、これ以上みんなに負担かけたくない」

『確かにクロントルーパーにも電子戦部門はいるが…やはり個体差がない故の弊害か』

「はあ…ラマ・スーさんが言ってたけど、クロンフォース99って特化型の優秀なクロン部隊がいたらしいんだ」

『作れなくはないが時間がかかるという訳か』

「そー…だからコレから俺は新しい人材発掘をしたいと思います！」

『頑張れよ』

「お前たちにも関係ある話だからな！」

『分かつている……それより』

「誰かな？この船は関係者以外立ち入り禁止なんだけど？」

一応俺にも万能探知って能力があるんですがね自分以外いない筈の船室でそう答えるとそれはハルトの影から現れた

「あらあらそれは失礼しましたわあ、初めての船で迷子になりましたの」

そこかれ現れたのはゴシックなドレスを着た女性 左右アシンメトリーなツインテールと

片目が時計のようになっていた

「そうかいそうかい、この船は遊覧船じゃないんだよ軍艦の中だからさ……退室願おうか？」

魔王覇気で威圧するが怯まずに後頭部に古式短銃を突きつけられた

「あらあら随分と物騒ですわね」

「はあ……何か用？」

「そうですわねえ……では貴方が匿っている第二の精霊と会わせて貰いましょうか」

「狙いは二亜か！まさか二亜がスピーダーで逃げたのって!!」

「DEMの手先か!!」

「失礼な！私は違いますわよ……ああ成る程ご安心を私は彼女に危害を加えるつもりは
ありませんわ」

「………信じろと？」

「ご自由に、ですが貴方の眉間に穴が増える形になりますわね」

「はあ……わーったタダ、アイツに会わせるなら名前と目的を言え条件だ」

「……………交渉成立ですわね」

少女は銃を下ろすとハルトは振り向き視線を合わせるとドレスの裾を上げて礼をする

「失礼しましたわ私の名前は時崎狂三、精霊ですの」

狂三キラー前編

前回のあらすじ、ピースメーカーの補給と修理で逢魔へ帰還したハルト達

束の間の余暇を楽しんでいた所に時崎狂三と名乗る自称精霊が現れた！そんな彼女の目的とは！

「自称ではなく正真正銘の精霊ですよ」

「地の分にツツコミするなよ」

「失礼、少し不愉快でしたので」

「それで狂三さんとやら、ウチには精霊がいるが何を聞きたいんだい？」

「それは彼女にしか話せませんわね、ラタトスクと同盟関係の貴方達には」

「けど彼女経由で知ることになる、遅いか早いかの違いだ」

「かも知れませんが僅かに時間は稼げますわそれだけのタイムラグがあれば充分でしてよ」

「成る程ねえ」

「誓って言いますが、貴方が懸念してるような乱暴狼藉は彼女に致しませんの本当にただとある精霊について知りたい事があるだけなのですわ」

と話す彼女の姿を見てハルトは考えてみる

確かに二亜の命が狙いなら交渉なんてせずに拉致るか…それにこの世界で単身飛び込み俺に銃口を向けた度胸もある…しかも発砲も辞さないとなると

「分かった、会わせよう……けどさっき言った危害は加えないって条件は守ってくれ」

「ええ勿論ですわ、それにこの国の方にも危害は加えせんわ」

「そりや良かった、ハウンド！二亜を連れてきてくれ」

コムリンクで呼びかけるとハウンドは

『い、いやその…彼女なんですが今』

「どうした何かあったのか？」

『酒場で呑んだくれてます』

『あ！ハルきちも一緒に来なよ！あはは！あ！エールおかわり！！代金は常葉ハルトにつ
けといて！！』

「……………」

まさかの光景に狂三も唾然とするしかなかった…うん、あのさ

「……………あのお狂三さんやその精霊の協力てますが少し待つて貰えますか？」

具体的には俺の金で何飲み食いしている子にお話しをせねばならないので

「ええ、では日を改めて…流石の私も彼女の絡み酒は勘弁して欲しいので」

と言うと狂三は影の中に沈んでいったのである、よし

『テレポート』

そして酒場につくと、周りは騒然とした

「ハルト様！いつの間にも！」

「陛下！お待ちしております！」

「いや俺の名前で飲食してる奴がいるとコマンダーから聞いてな」

「あ、あはははは……」

「二亜、別に俺の金で飲み食いしても構わない実際暫くは俺が面倒見るんだからな……だが俺の名前使って自分だけってのはケチ臭いな」

ま、いいかとハルトは割り切って椅子に座るとビールジョッキを飲み干し

「お前等の飯代全員分、俺が出す！遠慮なく飲めよ野郎ども!!」

「「「うおおおおお!!」」」」

「ハウンド！親衛隊で暇な奴を呼んでこい！俺が出す！」

「ハルト様万歳!!」

偶には王様としてこれくらいの事はしないとな

『所で相棒、二亜に先程の件説明しなくて良いのか?』

「……………あ!」

そうじゃん二亜の囁告篇帙使えば俺の国に空間震を起こしてる精霊を見つけられる
じゃね?

「二亜、いきな「うひよー!流石ハルきち!太っ腹だねえ!店长!この店で一番高い酒を
お願い!」お前はちよつとは自重しろ!」

結果だが二亜は二日酔いでK.O、暫くは逢魔にあるハルトの廬で伸びているのであつ
た

取り敢えずピースメーカーの補給と修理は完了したが取り敢えず、あの精霊 狂三の報告をラタトスクにしたのだが分かった事と言えば

時崎狂三 識別名 ナイトメア

「何見下してんだよ？」

『ナイトメア……っておいネタに走るな相棒』

「いやあごめんごめん」

そして此処から一番の問題 彼女は十香や四糸乃、七罪や二亜と違い 明確に人間を殺傷していると言う点だ それもかなりの数を食べていると

しかし

「陛下と比較すると可愛い数ですな」

「そだな」

哀れ 魔王軍の感覚がボケていた主に魔王の所為で

「よせよハウンド、俺だけの力じゃないって」

『……ちなみにどれくらいなのかしら?』

「多い時は紛争擬きにもなるから万人単位だよ、この間も俺が暴れて万人単位死んだし
！」

あははくと笑うと

『前は四天王最弱とか言つて悪かったわ、貴方本物の魔王よ』

何故か謝罪された……解せん!!

『そりやそうだろうが』

そして二日酔いで倒れた二亜は

「頭痛いいいい…」

「飲み過ぎだよ、お酒は程々にね」

取り敢えずピースメーカー艦内の部屋にポイツと放り込む…取り敢えず情けのシジミの味噌汁を置いていくとデートアライブの世界に帰るのであった

そして土道の元に狂三が現れ精霊とカミングアウトした後だ

「助けてハルトさん！」

「どうしたんだい少年君！何かこのノリがパターン化してて俺は少し心配だよ!!」

士道が少し涙目になり近づいてきた

「三人の女の子と並行してデートに行く方法を教えてください!!」

ふむふむ……よし

「みんなで同じ場所に行けば良くね?俺とかキャロル、東、千冬、錫音、アンティリーネとの五人デートとかしたことあるけど?」

「そんなの恋愛初心者の俺には荷が重いです!てかそれデートなんですか!」

「デートだとも…勿論、2人きりの時間も作ってのな」

「それと十香達には内緒でお願いします!」

「知られたくないと」

「はい!!」

それなら簡単じゃないか

「なら分身すれば良くね?それで解決じゃん」

「ハルトさん!人間がみんな貴方みたいに分身なんて出来ると思わないで下さい!!」

「え!少年君は分身出来ないの!!」

「逆に何で出来ると思ったんですか!」

「え?俺の友達は忍者から忍術教わって分身の術を覚えたから大丈夫と思ったんだけど」

「この件が終わったら、その人紹介してください!!俺も忍術とか覚えたいです!」

かつての少年魂に火がついた土道であった

「よろしい任せておけ！だがな…」

『ハハハ！分身出来ないのは小学生までだよナ！』

『お前は悪ノリするな！こいサイドバッシャー！』

『BATTLE MODE』

『何で現実世界のサイドバッシャーが此処にい!!』

『あ、アナザーWがエグザップバスターで吹き飛んだ!』

『この人で無し!!』

「アナザーW……お前って奴あ…ま！冗談はさておき」さておきなんだ」何でそんな事に

「？」

狂三と十香と折紙とのトリプルデートなんて事になったと恐らく

狂三↓ラタトスクの任務として霊力封印を

十香↓純粹なデートをしたい

折紙↓デート？

である俺の主観だが…成る程

「それなら俺の力で少年君を増やしてあげよう、そしてデート場所を分散させれば問題なしだ」

「そんな魔法みたいなことが！」

「おう！俺には出来る魔法披露ハンパーねーぞ！」

「流石最後の希望！」

「止せやい！俺なんかその二つ名を名乗るのは恐れ多いぜ！」

『ああ恐怖の大魔王の方がしつくりくるナ！』

『アナザーW……お前という奴は』

『……………あ』

「絶望がお前のゴールだ、アナザーアクセルお願いします」

『え？ちよっ！あ、ちよっ！アナザーアクセル待ってええええ！』

『オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラ！』

『あああああああ！』

『TRIAL MAXIMUM DRIVE』

『9.4秒　それがお前の反省までのタイムだ！』

『いやああああ！ごめんなさい！』

『あ、アナザーWが蹴りで吹っ飛んだ！』

『この人で無し！』

「これはお仕置きです！……ふう彼女のデートをする、仕事も熟す両方しなきゃならないのが男の大変な所だ覚悟は良いか少年君？俺はできてる」

『いやお前魔法使うだけだろ？』

『そもそもトリプルデートなど貴様等のような奴しか味合わない案件だぞ』

そして魔法を使おうとしたが

「待ちなさい、これも士道の訓練の一環よ貴方も今回のデートに首を突っ込まない、それと士道それはアンタの優柔不断が招いた結果じゃない自分で解決なさい……まあサポートはしてあげるから」

「琴里!？」

「そう言うことなら少年君、悪いな魔法披露はまた今度で」

「それと……ハルト……アンタは実妹と義妹、どっち派?」

その質問にハルトは満面の笑顔で即答した

「義妹（エルフナイン、箒ちゃん）派ですが何か？実妹？はっ！あんな、ゴ・ジャラジ・ダと比較するのさえ勿体無い外道なんざ誰が好きになるんだよ」↓あくまで個人の感想

です

『だいぶ主観混じりだな、まあ否定出来ないのが貴様の実妹だが…』

『やっぱりハルトは過激派だぜ！』

「そうよねやっぱり！」

「ですが琴里殿、我が魔王は家族仲が悪い為意見としては偏りがあるかと」

「え？」

「ならアンタはどっち派よ？」

「……………黙秘します」

「取り敢えずそんな感じだ少年君、俺はウオズの言う通り、親はネグレクトに加え親は妹

への過保護を患っていた、ソレに増長した愚妹は人を駆り立てて俺や関係者を虐めさせてたからな……本当によくこの歳まで生きれたよ……はははは」

「……そんな」

「だからこそだ少年君、自分を愛してくれる家族や友達は大事にするんだ……そして愛されたならきちんとその人を愛してあげること、物でも言葉でも何でも良いよ気持ちも必ず伝える事それが大事だ」

「ハルトさん……」

「それと惚れさせたのならキチンと責任は取る事だ甲斐性なしはダメだぞ、受け入れたなら全員養えるくらいでないとな！」

「それは普通の高校生には難しいです！」

「あら？土道が重婚とかしたいならラタトスクで支援するわよ？」

「琴里!?!何言ってるか分かってるの?」

「義姉が増えるだけだし」

「発送が淡白だな!」

「そしてそれを傷つけ奪おうとする奴に情け容赦はいらん!それを守る為に世界さえ滅ぼす事は寧ろ大義でもある」

「……………はい?」

「特に人の居場所を荒らして不幸や絶望を見るのが大好きな奴とか、倒しても倒しても復活する奴とか、そういう奴には慈悲などいらん!徹底的にやってしまえ!!」

「え?」

「まあ俺の主観だがね…ずっと人の醜悪な部分を見てきたものとしての意見さ現実はず撮みたいに爽快にはならないよ…だから少年君が眩しいんだ」

「ハルトさんは…」

「ん？」

「ハルトさんはこの世界にいる精霊の誰かが自分の国で空間震を起こしてるのを調べに来てるんですよね？」

「そうだね」

「なら、その精霊が誰か分かっていたらどうするんですか？」

「それは態度と展開次第かなあ…少年が封印するならハッピーエンドだ逢魔としては再発の恐れなしなら報復なんて考えてない」

けどと前置きしたハルトは声がひと段階下がり

「ただ故意じゃなくもし俺の国に狙って空間震を起こしてるとなれば……」

その時のハルトの顔はウオズにとっては馴染みがあり土道にとっては怯えを感じたものとなったという

「この手で必ず殺す」

「我が魔王、覇気が出ています落ち着いて」

「あ、悪いウオズ……けどコレは絶対だ」

「っ！なら俺が精霊を封印します！ハルトさんに精霊は殺させません！」

「よく言った少年君！明日のデートは頑張りたまえ！俺も陰ながら応援しているよ！」

「はい!!」

今思えば士道は此処で少し考えるべきだった

ハルトはあくまで自分の国の為に動いている

二亜や七罪、四糸乃のように話せばわかる精霊もいるとは知っている…だからこそ理解しておくべきだったのだ彼の愛の重さと深さをそして

敵対者への無慈悲さを

――――
少し先の未来で

「少年君、退いてくれその精霊は俺が殺す」

燃え盛るビルの屋上でハルトは取り出したレーザーライザーとブーストマーク2バツクルを構えている、そして土道の背後には精霊の女の子がいた

「つちよつと待つて下さい！彼女は!!」

「前にも話したよね？俺は大事なものを守る為なら世界だつて何だつて滅ぼしてやる……償わせてやるんだよ大事な人達を傷つけた大罪をな！」

『感情が規定値を突破 一部能力をアンロックします』

その時 ハルトの前に現れたのは厚みのある白いバツクル
イズライザーを直すと新しいバツクルを迷わずに使用した

「……………変身」

『ブーストマーク3』

「退け、そいつは必ず殺す!!」

そこに現れたのは正真正銘 災禍を招く狐であった

『BOOST STRIKE』

「はあああああー!」

「やめろおおおおおおおおお!」

これは遠くない内に起こる絶望の話か

それとも

「俺の物語の結末は俺が決めます！変身！」

『クリムゾンドラゴン！』

「ははは！こりや良いね…よし少年君の心意気に免じて見逃してあげるかな…じゃあ彼女への道は俺が作ろうか、本邦初公開だよ泣いて喜びな!!」

『SET IGNITION！』

「変身！」

『マークⅨ!』

「さあ、此処からはハイライトだよ」

新たな世界へと動くのか

「これって」

「君が体験する未来…その可能性ですよ」

士道が振り向くと現れたのは白いスーツの男だった

「貴方は…一体」

「僕は…そう、僕は紡ぐものかな彼の物語をね」

「紡ぐ？ならアレは全部！」

「そう、これは君が選ぶ物語だゲームの選択肢で変わるエンディングと同じだね…運命とも言うかな…：本当パラドも言っていたが人生という物語はパズルのピースのように単純に見えて複雑に重なり合うものだ…：素晴らしいよ」

「俺が選ぶ？」

「まあ、君は死に戻りの力はないから出せるエンディングはたった一つだけだ最高のハッピーエンドか最悪のバッドエンドかは君次第だ選択肢の総当たりやセーブアンドロードなんてナンセンスなんだよ、けど彼はとある魔女に好かれてるようだね…まあ今はどうでも良い話だけだよ」

「……………」

「因みに言うと僕は君みたいな熱血漢は嫌いじゃないから君にはこの力を預けようか判官鼻肩だけだね、それはいつか君の為になる…此処での事は忘れるけど…セフィロト的

にも丁度、君とは相性も良さそうだしね」

と白スーツの男が取り出したのは真っ赤に燃え盛る剣と赤い炎を吐くドラゴンが表紙の本だった

「それと助言だよ、この世界の物語の結末を決めるのは魔王じゃない君だ」

「え？」

「では少年、またの機会に……その時には良い選択を」

—————

そして

「っ！今のは……」

「どつたの少年君？」

「ハルトさん……」

「何？」

「い、いえ何でも……」

「そっか何かあったら相談しなよ、さーて喜べ皆の衆！今日は異世界の食材を使った夕飯をご馳走しよう!!」

「何だとハルト！それはどんな食材なのだ！」

「よくぞ聞いてくれた十香ちゃん！先ずは此方！牛鹿という魔物の肉だ！とてもポピュラーな食材で屋台での串焼きとかが凄く美味しいんだ！」

「うおおおおお！」

「これで作るの、すき焼きだあ！勿論卵もあるぞい！因みに大人組には外で炭火焼きした串焼きだ！ビールやワインもあるぞい！」

「「「うおおおおお!!!」」」

「コレは素晴らしい!!ジヨウゲン達も呼びましょう」

「そうだな手の空いてる奴も連れてこい！俺はキャロル達を連れてくる！」

「はっ!.....おや?」

「どうしたウオズ？」

「いえ彼処」

「.....ん?」

「んぐ……んぐ……ぷはあ！いやあ！やっぱり二日酔いには迎え酒に限るわ！」

「いやそれ危険行為!!」

「あ！ハルきち！先に一杯やってるよー！」

「つか何片手に持ってたんだ！」

「大丈夫だよ、これは炭酸入り麦茶さ！」

「欠片も安心出来ねえよ!!」

「それに私だけじゃないよ、ほら」

「あ？」

「あら串焼きも以外といけるわね…うん」

そこには私服姿の七罪がいた

「アンタも何してんのお！」

つか精霊なの隠してるんだろうけど大丈夫なのか！二亜とかこの間さ療養とか言ってたのに何宴会に参加してんだ!!

「あ、ハルト遊びに来たわよ美味しいわね…コレ何のお肉？」

「牛鹿つて奴の…つかお酒飲まないんだ？」

「ええまあね、それより一緒に食べましょうよハルトく」

「ちよつ！腕組まないで！こんなの皆に見られたら「どうなる？」そりや血の雨が…」

「「「……………」」」

「あ」

「ハルト……………貴様……………私達に内緒で……………新しい現地妻を囲っていたのか！そこに正座だ！直れええ！」

千冬の一喝にハルトは迷わず

「い、いやちよ……………何でさあああああ！」

そう嘆きながら土下座したのであった

「そう言いながらも正座するのねハルト」

「何て恐ろしくて早い土下座、この私じやなきや見逃しちゃうねえ」

「それと貴様等にも話がある」

「え？」「はい？」

「そうね貴女達が旦那様を誑かしたなら……まず私達に話を通して貰うわよ」

「ああ……まずはこの正妻であるオレからだ！」

「ちよつと待てキャロル！それは「まーまー千冬、その話は後でしましょうよ、でないとハルトの料理が冷めちゃうわ」そ、そうだな」

「後で束にも差し入れないと」

「そうね並行世界で頑張っているのだから仲間はずれは良くないわ」

「分け合うか……アンティリーネも成長したな」

「ええ…あ、そう言えばキャロル」

「何だ？」

「この間変身したらイクサの口から携帯？が落ちただけどアレ何かしら？」

「それはだなー」

「あ、あのお…取り敢えず料理作りに戻って良い？」

「構わん、だが終わったら「わかってる皆と一緒にいるよ」それなら良しとする…だが勝手に増やした件は別で問い詰めるぞ…ベットのうえでな」

「あのなあ…俺は七罪さんとはそんな関係じゃねえよ」

「ええそうよ…今は…ね」

「「「っ!!」」」

と揶揄い混じりで腕を組むので思わず出てしまう

「え! からかい上手の七罪さん!」

それを彼女は聞き逃さない!

「あ、ハルきち! それ漫画のタイトルにしたい! 命名権貰っても良いですか!」

と騒いでいるとハルトは思い出したように

「あ、艦長さん! お肉沢山あるんで船の人にも差し入れてくださいな」

「え、ええ…何とか改めて見ると壮観ね」

「琴里、アレは特殊なだけだ」

「ええ……ていうか、あの精霊に療養いる？」

「それは彼の判断に任せよう」

と話している中で

「シドー！すきやきとは何なのだ！」

「士道君、士道君！凄いい匂いがするねえ！」

「え、えーとー」

士道はやはり先程のやりとりを忘れていた、しかし

「……………ん？ポケットに何か入って……………これ…本？」

「どうした少年君、早くしないと十香ちゃんが鍋の肉を全部食べちゃうぞー」

「あ、あの士道さん……行きましょう?」

「あ、今行くよ四糸乃」

士道はその本をポケットに入れるのであった

その本に宿る希望の力　そして少年は

「変身!」

『聖刃拔刀!』

奇跡の力を宿し

「変身」

『アナザーライダー！ストリウス』

魔王は破滅の力に目覚める

かも知れない

狂三キラー後編

前回のあらすじ

無事に帰還したハルト達は宴会をしていた！

「あれ！この間のやり取りとか話す所あるでしょ！」

「まあそれはそれ」

宴会の翌日

ピースメーカーの艦内にて

「……………」

「[[[.....]]」

正座しているハルトとそれを見下ろすキャロル達がいた 何人かのトルーパーがすれ違ったが

「おい、アレ…陛下助けなくて良いのか？や

「ああお前、新入りか気にすんなよいつもの光景だ直ぐに慣れる」

「慣れるのか？ああ…奥方様達も大変だなあ」

と誰も助けてくれない

「さてハルト、昨日の話であの2人が精霊と聞いた、二亜に関しては研究所まで殴り込み助けたと」

「まあなオーマジオウの依頼だったし…いやみんなには迷惑かけてると思ってるよ」

「その辺は今更だな」

「あはは…」

「そう言うオレ達もお前の我儘にはだいぶ助けられてはいるからとやかくは言わんさ」

「キャロル！ありがとう!!」

「だがそれはそれだ…もう少し正座しろお！」

「何でだああああ！そこは寛大な心で許してくれるとかじゃないの!？」

「無自覚に現地妻を増やそうとする性根をたたき直してやる!!」

「理不尽!?!いつ俺が何処で作った！」

「この間の宴会で2人確認！あと何人かまだ増えるだろうが！」

「んな事あるわけないだろう!？」

後で聞いたが士道君はトリプルデートをやり遂げたらしい……何て凄い子なのだろう

しかし翌日 事件が起こった

その時 ハルトはピースメーカー艦内で仕事をしていたのだが

「キヒヒ、お久しぶりですわね魔王さん」

「あ、この間の精霊」

「ええ第二の精霊に会いに来ましたの」

「あ、そうそうちよつと待ってな……二亜く艦長室に来てね」

と艦内放送で呼びかけると

「私、参上！ってハルきちが知らない女の子と一緒にいる！これは……ちふゆんに報告だあ！ちふゆん！ハルきちがまた懲りずに女の子を囲ってラアい！」

「待てえええ！彼女は違う！！二亜のお客さんだ！」

「え？私の？」

「そう！本来は逢魔で会わせる予定だったのにお前が二日酔いで寝込んでたから日取りを変えて貰ったの！な、なんて恐ろしい事をやろうとしてんだ」

「あ、そゆこと……よし分かったよえーと……ゴスロリドレスさん「時崎狂三ですわ」くるみんなハルきちの頼みだから協力するけど何が知りたいの？」

「それは……失礼ハルトさんは退室頂けますか？」

「ん、まあそう言う話だしな」

「え！ちよつ！ハルきちは私を見捨てるの！」

「人聞きの悪い事言うな安心しろ二亜、彼女はお前に危害を加える気はないとさ」

「いやいや初対面の人にそう言われても私信じられないよ！」

「ご安心なさいな私は約束を守るのは信条ですよ」

「お、おう……うーん大丈夫なのかな？」

「んじや二亜。後でなあ〜」

と執務室の外に出たと同時にコムリンクに通話が入る、この波長は緊急の通信か！

「何だ」

『大変です陛下、時崎狂三が五河士道の学校で大規模な攻勢を仕掛けました!』

「はあ!いい、いやちよつ、狂三なら今あの部屋に……っ!まさか!」

これ…

【分身すれば良くない?】

前回、フラグ立ってやがった!!くそツ!

『してやられたな』

『分身が二重に話を聞くのに並行して本体が士道を狙ったのか…典型的な陽動だな』

『あ、アナザーWがまともな事言ってる!』

『お前等!近々大型のサイクロンがくるぞ!備えんだあ!』

『失礼だな、お前等！ハルト！何かやってやれ！具体的には普段俺がされてるような事を！』

「日頃の行いだろ？『ハルト!?』そんな事より『そんな事!』っさいよアナザーW！ハウンド！直ぐに執務室のフロアの隔壁を閉じて包囲！あの子の態度なら二亜には手を出さないが俺達がどうなるか分からん！最悪退艦も許す犠牲者は極力出すな！」

『イエツサー!』

「ウオズ！」

「はっ！」

「少年君を助けに行く！俺を学校近くまで飛ばしてくれ！」

「はっ！」

そしてウオズのマフラーワープで近くまで移動するのであった

しかしハルトにも誤算があった

ハルトは当初 二重に調べ物をさせているのが分身、土道を襲っているのが本体と呼んでいたが それは逆なのである

「キヒヒ…あらあら思ってたより単純なのですわね」

「ん？誰が単純？」

「失礼しましたわ独り言ですの、では本題から調べて欲しいのは……………」

「随分と変わったものが知りたいんだね」

「ええ私にはとても重要な情報ですよ」

「分かったよ囁告篇帙、さあ検索を始めよう」

—————

その頃 土道の通う学校は時崎狂三が展開する時間（寿命）を吸い尽くす結界 時喰
みの城によって生徒全員が昏睡し土道も狂三に襲われ大ピンチなのである

『俺の決め台詞が二亜に取られた気がするぜ！』

「何言ってるの？……よし！ウオズはここで待機して俺とピースメーカーの通信を中継
しろ妨害電波が出てくる可能性もある、通信はアナザーウォッチを介して行うぞ！」

『相棒、俺達にそんな便利機能はないぞ？』

「違うよ！アナザーライダー を通じて会話するんだ！」

『なるほど!』

「し、しかし我が魔王単身で向かうのは!」

「いや、この結界的に俺一人の方が都合が良い」

「え?」

「だろ?アナザーW」

『ああ!ハルトの読み通りコレは相手の時間に干渉する結界だ、つまり!時の王の加護を有しているハルトなら結界の影響を受けないで行動が可能だぜ』

「な、何と!」

「まさか俺の死に設定と化していた時間耐性がこんな形で役立つとは」

『メタ発言はやめろ』

「つー訳だから言ってくる！周囲の警戒を怠るなよ！」

「はっ！」

そしてハルトは結界に入るが予想通り影響は無かった

「こりや不味いねえ……」

耐性があるから分かる……かなりやばい勢いで時間が吸われているのだ、このペースでいけば

『ああ最悪、死人が出るぞ』

「そうだね……アナザーウィザード、結界の発生源は見つけられそう？」

『ああ…見つけたぜ屋上にいる』

「よしテレポートで行くぞ最短で行く」

『いや無理みたいだな』

「……みたいだね」

すると結界の中から

「きひひ」

「申し訳ありませんが」

「ここから先は」

「行かせませんことよ」

「魔王さん」

先程まで会った時崎狂三の分身？が立ち塞がったのである

「これが手品のタネかよ」

『ああ、どうする』

「んなの正面突破しかないだろうよ！」

『そうだな！……おいハルト！』

「ん？」

『新しいアナザーライダー が来てくれたぞ！』

「この状況でグッドタイミング！どんな奴だ！」

『アナザーサーベラ、私に任せなさい』

「お、おとおお！た、確かに!!」

そう思いハルトはアナザーウオッチを押しした

その姿はまるで手足や羽を裂かれた昆虫や人間の放った外来種による交雑が進んでいるようにも見える

あるべき姿を失った煙の騎士

アナザーサーベラ

そしてアナザーサーベラの右手には細身のレイピア
煙の聖剣
煙叡剣狼煙が握られていた

「よし突っ切るよ!」

「させるとお思いですか!!」

「またねえ〜」

『狼煙霧虫!』

するとアナザーサーベラの体は煙となり、分身狂三をすり抜けながら一直線に土道の元へと向かうのであった

その頃 土道はと言うと実妹?の崇宮真那が狂三を倒そうと動いたが二亜から情報を引き出した本体が介入し 天使 刻々帝(ザフギエル)を起動し欠損した片腕を修復、そして時間加速による移動と時間停止により真那を撃ち倒したのである

「さてさてさーて!残りは貴方だけですわぁ土道さん!!」

そして彼女の銃口が土道に向けて放たれようとした その時!

『煙幕幻想斬!』

「せいやあー!」

「っ!」

その斬撃は土道を拘束していた分身体を両断し本体にも間合いを作らせる事に成功したのであつた

「大丈夫かい少年君?」

変身解除したハルトはヘラヘラ笑つて現れたのである

「ハルトさん!!」

「いやあやつぱり便利だなあ…じゃないか」

ハルトは目を細めて狂三を睨みつけるも彼女はやれやれと身振りをする

「あらあら少し遊びが過ぎましたわね」

「別に俺としては少年君が食べられようと、どーでも良い「え！いやちよっ！」けど俺の国に空間震を落とし続ける精霊を封印して貰うまでは死んでしまうと困るんだよな」

「成る程、それが貴方の目的ですの？」

「おう、だから少年君を食べようとする君の邪魔をさせて貰う」

「それは残念ですわね、まあ良いでしょうでは…刻々帝 七の弾（ザイン）」

その手にある古式短銃から弾丸が放たれるが

「何これ？」

雑に振り払うように呼び出した無銘剣で払う

「ハルトさん！ダメだ！それは!!」

「キヒヒヒ…もう手遅れですわあ、その弾丸を受ければ誰であろうと例外なく…あら？」

そこには時間停止していないハルトがいた

「ん？今の何？」

「な、何で止まってないのですの!!」

「止まる？……ああ成る程な君の力は時間に関したもので事か…それなら俺との相性は最悪だ」

ハルトはアナザージオウⅡに変身するとツインギレードを呼び出して構える

「俺に対して時間への攻撃は通らないから」

「は？」「何ですのそれ？」

「んー時の王の加護？」

「ふざけないで下さいまし！ハツタリですわ!!私達！」

と影から大量に出てきた分身体を見てアナザージオウIIは

「ハツタリじゃないんだけどなあ…おいでませえい！」

と地面に目掛けてプロトスパイダースタンプを押し込むと現れたアナザーデモンズ
トルーパーが狂三分身体と戦闘を開始乱戦となるのを見て

「あらあら……これはこれは」

「今すぐ逃げるってんなら俺は追わないけどどうする？」

「え？ハルトさん！」

「考えてみる少年君、現状で戦える俺が追跡に出たら君の身が危ないぜ？」

「……………」

「でしたら、これはどうですか!」

と狂三が手を上げると同時に起こったのは

「空間震警報!?!」

「つー事はまた精霊が出たのか?」

「違いますよ、私は自由に好きな場所へ空間震を発生させる事が出来ましてよお!」

勝ちを確信したのか大笑いする彼女であったが

「……………は?」

『おいハルト、落ちつー』

アナザーディケイドの静止を聞く前にハルトは走り出して飛び蹴りを狂三に叩き込んだ

「死ね」

「っ！」

慌てて銃で受け止める狂三であつたがハルトは瞳の色から光が消えていた

「……あらあら私、何かしまして？」

「何か？ じゃねえよ……そうか、テメエか……テメエが俺の国に空間震を落とした精霊か
あああ！」

「え？」

『おい待てハルト、落ち着け!!』

『おいおい！ハルトの奴、怒り狂ってンゾ！』

『見りゃ分かる！どうすんだよ！』

「テメエ等黙つてろ！こいつだけは許さねえ!!」

ハルトが激情に駆られて現れたウォッチを起動した。それは禁忌を犯した原初の竜

『セイバー…プリミティブドラゴン』

久しぶりのアナザーセイバープリミティブドラゴンへの変身、咆哮と共に建物のガラスは全て割れ地響きが空気までも震わせた

「あらあら……これではまるで獣ですわね」

銃を構え直す狂三だったが土道は通信機から入る逃げての指示も聞かないで

「あの剣……」

アナザーセイバーの持つ聖剣 火炎剣烈火に見入っていたのである、そして

「きゃあー！」

狂三が尻もちをつき、アナザーセイバーが聖剣を振り抜いて首を切ろうとしていた、
その時

「やめろおおおおおー！」

土道は全速力で走り出してアナザーセイバーの前に立ち塞がったが、その手は止まら

ない凶刃が彼に追ろうとした　その時！

「っ！」

士道とアナザーセイバーの間に巨大な火柱が起こり　2人に間合いを作る

「……………え？」

士道の手にはハルトの持っているものと全く同じ　火炎剣烈火が現れたのであった、
そして腰には聖剣ソードライバーが収まっている

「これは……………っ！そ、そうだ…俺が…俺が決めるんだ！ハルトさんに狂三は殺させ
はしない!!」

そしてポケットに入っていたライドブックを取り出し開いた

『ブレイブドラゴン!』

『かつて、全てを滅ぼすほどの偉大な力を手にした神獣がいた』

そして本を閉じ、神獣のスロットへライドブックを装填した

待機音と共に士道は火炎剣烈火の手に取り一息吸う、そしてハルトが嬉々として語っていた英雄達と同じ言葉を紡ぎ出す

「変身!!」

そして士道は剣を抜刀しX字に振り抜いた

『烈火抜刀!!ブレイブドラゴン!!烈火一冊!勇気の竜と火炎剣烈火が交わる時、真紅の剣が悪を貫く!』

燃え盛る刀身の聖剣　そして現れたのは赤い装甲に左肩に竜が載っている

物語の結末を決め、新たな物語を紡ぐ優しき烈火の剣士

「士道……さん？」

「安心しろ狂三、俺が守る」

「……………」

「その姿は……嘘だろ……っ！」

「この物語の結末は俺が決める!!」

仮面ライダーセイバー 生誕!

「お前が……選ばれたってのかよ……その聖剣……火炎剣烈火にい！」

『アナザー…必殺読破！拔刀！』

「ああああああ!!」

『アナザー…グランプ必殺切り!!』

「避けてくださいまし！あの技を受けたら士道さんだつて！」

「大丈夫だから見てて」

アナザーセイバーは激情に任せて必殺技を発動したのを見てセイバーも負けじと聖剣をドライバーに納め、トリガーを押す

『必殺読破！烈火拔刀!!』

「火竜一閃!!」

『ドラゴン一冊切り！ファイヤー！』

「はああああああ!!」

両者の一撃が学園の屋上で大きな火柱となり燃え上がったのであった

五河シスター 前編

前回のあらすじ

狂三が逢魔に発生する空間震を起こしたと状況証拠で判断し激昂、アナザーセイバープリミティブドラゴンに変身しトドメを刺そうとしたその時、士道の手には火炎剣烈火とブレイブドラゴンが、それを手に彼は仮面ライダーセイバーへと変身したのであった。

フラクシナス艦内では

「……………」

『おいハルトー!』

ハルトが不貞腐れた顔をして椅子に座っていた、アナザーデイケイドが注意するがハルトは不機嫌なままである

『まったく…貴様と言う奴は』

『まあ気持ちはわかるぜ相棒、憧れの仮面ライダーにあんな小僧が変身しちゃったんだからなあ！羨む気持ちも分か』『あ、アナザーWなんてー！』『え？ぎやああ！』

『あ、アナザーWがアナザートライドロンの撥ねられた！』

『ねえ知ってる？アナザートライドロンはね…急には曲がれないの』

『お前等コントをやってる場合かあ！そんな事より少年の妹が大変な事になっているだろうが！』

時は前回最終盤 両者の技の激突まで遡る

その火柱が起こる中、突如その柱を両断して巫女服のような衣装を纏い片手に大斧を携えた琴里がいたのだ

「土道…あんたやり過ぎよ、まあ良いわ少し力を返してもらおうから」

「あああああああ！」

「っさいわね王様だってんなら優雅に振る舞いなさい!!落ち着け獣!!」

そして現れた琴里の天使 灼爛殲鬼の必殺技砲（メギド）がアナザーセイバープリミティブドラゴンに命中、ハルトは気絶し狂三もどきくさに紛れて撤退したのである

—————

そして現在、ハルトは土道を睨みつけていたのだ 琴里は精霊の力を解放した事で破

壊衝動に苦しんでいるとの事だが そんな事より！

「なーんーでー！お前が火炎剣烈火とブレイブドラゴンのライドブックを持ってんだ！何でお前が選ばれたんだよ!!」

「そ、そんな事言われても……ってあのライダーのカッコ…ハルトさんのアナザーに似てましたが」

『当たり前だ！俺達アナザーライダーは仮面ライダーの歴史から生まれた影法師、故に似ているのも当然だ』

「な、なるほど…」

「そんな不勉強な少年君にはコレだ未来の俺からもらった、仮面ライダーセイバーのDVDコンプリートBOXだ！これ見て学べ！」

「は、はい……って、え！あのライダーって主役なの！」

『おいバカ、これ以上煽るな!』

「っ!このガキ!」

思わず殴りかかろうとしたがハルトの動きを極細の糸が止めた

「ハルト落ち着け…まったく暴れたと聞いて迎えに来たら」

「不貞腐れてるなハルト」

「キャロル…千冬…だつてえ!」

「だつてもあるか!気持ちわかるが大人としてキチンと飲み込め!」

「好きで大人になったと思うなよ!」

「胸を張って言うことかあ！」

「はあ……それで火炎剣烈火は何処だ」

「あ、これです」

士道が呼び出したのをキャロルに渡すと

「こ、これが世界初の人造聖剣……どんな仕組みで動いてるのだ！いやそれ以前に……ふはははは！良いだろう錬金術師の名に誓い、この聖剣の秘密を解き明かそうじゃないか
！」

「お前もお前で何をやっているのだ!!」

『相棒、時崎狂三が逢魔への空間震攻撃を加えた疑いが濃厚な精霊なのは分かったが……彼処で短気に走るな、お前の悪い癖だぞ』

「……………ん、けどさアイツが狙って空間震を使えるなら犯人だろう」

『状況証拠に過ぎん、アレがブラフの可能性もあるのとあの精霊に世界の壁を壊して空間震を撃てるのかも怪しい』

「世界の壁？」

『一番最初に俺達が会った狭間の世界を覚えているか』

「忘れるか拉致誘拐監禁された人生のターニングポイントだぞ」

『…彼処をイメージすれば分かる、当時いたアナザーライダーのメンバーと未完成な相棒でやつとこさの思いで破壊したのだ…あの壁を越えてピンポイントで空間震を叩き込むなど、今の俺達でも出来ん出力過剰なオーマジオウなら出来るだろうがな』

「ふーん……つまり犯人はオーマジオウと言いたい？」

『違う俺が言いたいのは異空間に干渉する天使を持つ精霊と時崎狂三のような空間震を自在に使える精霊というような複数犯の可能性もあるという事だ』

「なるほど…確かにそう言われると俺は短絡だったかもな彼処は冷静に情報を集めるのに徹するべきだったか…」

『そうだ』

「だが私は謝らない」

『悪い事したらごめんなさいと野上良太郎も言っていただろうがぁ！』

「つ！ご、ごめんなさーい！！」

『よろしい！全く俺達がいないと貴様はてんでダメだな！』

「つさい……はぁ」

「仕方ない奴だな…よし」

キャロルが大人モードになるとハルトを抱きしめ頭を撫でた

「まったく…いい加減に機嫌を直せお前はいつもみたいに脳天気で笑っていれば良いのだ不機嫌な顔など見たくもない」

「……………分かった、だからもうちよいだけこのまま」

「うむ良かろう」

暫くお待ちください

「俺、復活！」

『流石キャロルだぜ！』

『ああ、俺達でさえ宥めるのが大変なハルトが少しで機嫌が治ったぞ！』

「少年君、すまんかった…しかし君が仮面ライダーになったのが何というか…その」

「？」

「あの場面で変身してお前を倒すみたいなのは俺が悪役に見えてしまうからちよつと…」

『いや完全にお前ヴィランだったぞ』

「ですよねー」

「あ、いやそんな…本当にDVD借りても良いんですか？」

「ああ流石に戦闘用のライドブックまでは持ってないから「嘘だな」へ？」

「お前持っているだろう、最近届いた小堤を見て小躍りしてたのを見てないと思ったか」

「違うぞ千冬！あ、アレはだな…そう！アルターブックだ新しいメギドを作れると思っ
て踊ってたんだ！」

「そうかそれは仕方ない…となるかあ！知っているのだぞ！お前がレジエンドライ
ダーのライドブックを隠し持っている事を！」

「何いハルト！オレにも内緒で持っていたのか！」

「い、いやあ…黙ってるのは悪いと思ってたけど少年君には…あげません!!（ウマ娘風
に）」

「いや貸してやれ「嫌だ！アレは僕のだぞ！」はあ…こうなったら梃子でも動かん…すま
ない土道とやら変わりに、ほら」

と土道に投げ渡したのは転移可能な本　ブックゲートと移動ツール　ディアゴス
ピーデーの本である

「それをやる…頑張れよ仮面ライダー…その物語を見た時、お前はその重みを知るだろう」

「え？キャロルさん？」

「行くぞ千冬、おいハルト！オレ達に黙ってライダーアイテムを集めていた件で説教だ！」

「なんでさあああああ!!」

—————

そしてピースメーカー艦内では

「なるほど、現状は時崎狂三なる精霊が逢魔へのテロ行為の犯人に近いのですね」

「そうみたいだね今後の調査次第で他の精霊も候補になるかもだけど…」

「あのキャロル嬢」

「どうしたウオズ」

「何故我が魔王の膝上に座っているのでしょうか？」

「こいつの精神安定の為だ、今のこいつは五河士道が仮面ライダーセイバーに変身した事によってメンタルが傷ついているのでな…それにオレがしたいのもあるな…：…おいちよつと力が強いぞ」

「…：…ん」

「…：…：…」

「ちよつと千冬!!血涙が出てるよ!!」

「私も…もう少し小柄だったら！あの位置に！」

「アンティリーネも!? 君もだいぶ染まってきたね!! じゃないや東戻ってきてー! この量のツツコミは私だけじゃ捌けない!!」

「いや東もボケる側だぞ錫音」

「冷静に返さないでキャロル!!」

「しかし、あの鋼メンタルの魔王ちゃんでも傷つく事あるんだ」

「失礼だぞジョウゲン、ハルト様とて傷つく時もある例えば…誰かが仮面ライダーに変身したのを見たとか」

「それ今の状況じゃん」

「……………はっ！」

「黙れ若造ども！……まったくハルト坊、いい加減に会議を進めろ！」

「わーった……………よし……取り敢えず時崎狂三は逢魔に起きた一連の犯人に近いと思う最優先で探す事にしよう」

その意見に頷く面々であったがハルトは自室に戻ると不貞寝するのであった

大人が不貞腐れると後々 面倒くさい

—————

そして土道と琴里とデートする事になったらしいが

「家族ねえ」

ハルトは複雑な顔をしていた俺とアンティリーネは実の親と仲が悪い…というより家庭環境に問題があった、千冬は親がいらないらしいしキャロルと錫音は親を奪われて復讐に走った…という事は家族仲は良かったのだろうか

俺には家族に良い思い出がないので言葉に詰まる

「何でアイツは家族なんかを守ろうとしてんだよ？」

とポツリと溢れた黒い言葉に

『おい、お前の家族はもうあの連中だけじゃないだろ？』

「あつ……」

ふと我に帰りハルトもフツと笑う

「そうか俺にも家族がいる…」

キャロルや東達、そしてクロエのように大事な娘や一夏達のような義弟、義妹や逢魔の民達それを助ける為なら何だってやる

「何かあれば世界も滅ぼしてやるよ」

『相棒、黒いぞ』

「あーごめん…：やつぱり意識してないと出るわ黒い部分がな」

『黒い部分？お前にはそれしかないだろ…：ん？何でここに雨雲が？つてぎやあああああ
！』

『あ、アナザーWに雷が落ちた！』

『この人でなし!!』

「ま、なるようになるか…そんな事より！皆！これ見ようぜ！」

とハルトは片手にあつたのは仮面ライダーアウトサイダーズと書かれたDVDである

「何か聞いたらさ、俺の最推しでもある王蛇に20年越しの強化フォームが出たんだつて！」

『何！って事はアナザー王蛇に強化イベントが！』

『そうなのかあ……おいハルト、それどこで見つけたあ？』

「ファンからの差し入れ」

『お前にファンなんているのか？』

「いたみたい何だよ…ビックリだよね〜」

と笑いながらDVDを再生しようとした時

「おーっと！ここから何かネタの匂いが！ってなワケでお邪魔しまーす!!…おろ？ハルきちだけ？」

「二亜か…あ、そう言えば生きてたんだな狂三にやられたかと」

「勝手に殺すな！くるみんは約束通り話を聞いたら帰ってつたよ」

「あーやつぱその辺の意識はあんのか…逢魔に空間震落としておいて…」

「ん？どゆこと？」

「え？あー、そうか二亜には俺達は何でこの世界にいるかを話してなかったな」

「え？文字Tの布教じゃないの？」

「それだけで大軍率いて世界を越えるなら俺はかなりの大馬鹿な王だよ、つかそんなんしてたら親衛隊に撃たれるわ」

「あれ？私の辞書だと親衛隊って王様を守るためにある部隊な気がするんだけど」

「俺の親衛隊は俺が道を踏み外した際に容赦なく撃てと訓練している」

「何て恐ろしい！部隊なんだ！」

「前に二亜がビールを盗み飲みして追いかけたのが親衛隊だよ」

「アイツらか!!」

「それにまず異世界の前にまず俺の国で流行らせるわ」

『それは辞めろ絶対!』

「ふーん、なら教えてくれるかな？理由が分かれば私ならこの囁告篇帙で調べられるかもよん」

その一言でハツとした

「そ、そうだよ！その天使を使えば調べられるじゃん！」

ハルトはそうだった！と思い簡単に話す

逢魔で謎の空間震が発生し、俺達の国とこの世界が繋がった原因はこの世界にあると判断した俺達は部隊を率いてやってきた

「つてなワケ」

「何そのSF映画みたいな導入は…なるほどね…なら調べてみるか…ふむふむ…あ
り？」

「どうしたんだ二亜」

「いやその部分だけ切り取られてるみたいに読めないんだよねえ」

『おいおい全知つて言っても大した事ねえなあ』

「何オ！私のは君みたいにキーワードが無ければ調べられないなんて無いんだからね！」

『はん！俺は地球と言うデータベースと繋がってんだ、お前とは管理してる情報量が違うんだヨ！』

「何だとお！」『何ダア！』

「はいはいアナザーW、キャラが被るからって二亜に当たらない」

とハルトは宥めて少し思案を巡らす

以前もアナザーWが精霊や空間震を検索した時もヒットした情報は少なかつた…と
なると

「誰かが地球の本棚や囁告篇帙のデータバンクからの情報を改竄してるとかあり得るの
？」

『そんな事不可能ダ、この世界では俺以外で地球の本棚にはアクセス出来ねえよ！』

「そうだよハルきち！私の囁告篇帙も私以外には扱えないんだから！コレはきつと…孔
明の罫だよ！」

『そうだ！これはフィリップの奴が仕掛けたんだ！』

「何い！」

『おい騙されてるぞ相棒』

「わーってるよ…：…つたく地道な調査が大事だからな…：…それよりアナザーW…：ファイリッツ
プさんがいるのかこの世界に!?!それなら翔太郎さんや照井さんもいるのか!!調べてく
れ!俺は知りたいんだよ!」

『会いたいなら風都に行け!メモリ買い付けに通ってるの知ってたぞ!』

「ふざけんな!!俺なんかが鳴海探偵事務所に行ってみろ!中に入って本物に会えた興奮
でアナザーウオッチがブレイクするわ!」

『ウオッチブレイクだと!何でそんな状況に!!いや待て不穩すぎるぞ!!』

そんな感じで話してたらだ

「所で見ようとしたのハルきち?大人のDVDかい?」

「んなワケねえよ、そんなの見たらキャロル達から搾り取られて干物になる…：…これは
な…：俺の憧れ!俺の魂!仮面ライダーのDVDなのだあ!」

「うおおおおお！これがハルきち達の言ってる異世界の特撮ヒーロー　仮面ライダーか
！」

「……見たい？」

二亜は迷わずに首を縦に何度も振ったので、では布教の時間だ

「よし二亜にはまず、俺が会いたくて会いたくて震えてやまない永遠のヒーローから紹
介しよう」

『恋煩いしてるのか？』

「まあ似ているものだな…一日一話視聴しないと体に不調が出るくらいにはな」

と取り出したのは平成1号ライダー、そして幼き日の常葉ハルトという少年の心を
救って

くれた正に永遠のヒーロー

仮面ライダークウガのDVDセットであった

2 話視聴

【だから見てて下さい！俺の！！変身！！】

【そうかクウガ！】

「う、うおおおおおおお！変身したあああああああ！」

二亜はあの伝説の変身シーンで興奮のあまり立ち上がるのであった、それを見てハルトはうんうんと頷く。やはりこのシーンは何度見ても感動するな

そして視聴後

「いやあハルきちがハマる理由が分かるよ、ありやヒーローだよく憧れるわそりや」

「うんうん…実は俺は幼い頃クウガに助けて貰った事がある」

「ええ！「まあヒーローショーなんだがな」…それでも良いなあ羨ましい！」

「ああ、あの助けてくれた日以来…俺の心には仮面ライダーがずっと側にいてくれるんだ…そしてあの青空の旅人に会うのが俺の旅の目的なんだ」

実際、師匠や士さん、剣崎さんに会えた時だつて発狂したのだ…もしあの人に会えば

「発狂して死ぬな」

「ハルきちが!？」

『いや待て旅の目的が違うだろ、お前の世界に帰るのは祖父母や幼馴染に会うためだろ』

「そうだが…もし道中会えるなら会いたい…そしてお礼が言いたいんだ…あの時助けてくれてありがとう」

『本人からしたら訳の分からない話だろうな』

「だとしても俺の心を救ってくれたんだよ」

『まあ…な、つておいアナザークウガが照れてるんだが…』

『し、知らなかったぜ、まさかハルトがここまで憧れてたなんてな』

「まあお前はそうだな…俺の憧れのアナザーではある、つか先代クウガから生まれたアナザーで良かったよ、もし…ティードがあの人からウオッチを生成なんてしたものなら…」

『してたら？』

「多分今頃は仮面ライダーシンも真つ青な事になってたかもね！」黒い笑み

あの映画の初見時、アナザークウガを見た瞬間、軽く殺意が芽生えたのは内緒である
…今では大事な相棒だがな

『で…でかしたぞデイド！俺を先代のミイラから生成してくれてありがとう!!』

まあ本人からしたら割と気が気でないみたいだが

「まあこんな感じだ、続きが見たいなら次回」

「ちよい待てー！ここまで見せて続き見せないのは生殺しではないかにや!!」

「気持ち分かるから取り合えず俺は仕事だから、残り見てて良いよ」

「いよつしやあー！」

「んじゃまあ行きますか」

『何処へ？』

「少年君の護衛だよ……まあ貸切施設でろうからトラブルなんて無いだろうけど」

『場所は？』

「確か……屋内プールだったか？……丁度良いから誰か誘うかな遊ぶのも良いか」

『フラグ立てるな』

「何かあるの？」

『知らん、ただ物見遊山なら大怪我するだけだ』

「そうだな、気をつける」

とハルトはアナザーウォッチを懐にしまい転移したのであった

そして案内された先の貸切施設でハルトは錫音と来ていた

「しかし私と一緒に良かったのかい？」

「ん？そりや最近キャロル達という時間が長いからな錫音といたいなあ」と

「そっか、まあ私がいないと円滑に回らないからね、千冬は硬い所があるし束とアンテイリーネは自由人だし肝心のキャロルは纏める所か正妻自称してケンカの火種になるし」

「そうかもね」

「ど、どうしたんだい珍しく素直だけど」

「い、いや最近……」

『ハルきち！ごめん！隠してたビール飲んだ！』

『ハルきち!!お願い!このウォーカーを止めてえええ!』

『ハルきち!囁告篇帙で調べたけど奥さん沢山増えるらしいから大変だね!』

「何とか皆んなの気持ちがちよつとわかった気がしてさ…俺も色々問題児だったんだなあと…」

「うん、ちよつと待ってハルトごめん一つ聞き捨てならない情報があるんだけど」

「分かってる皆まで言うな…ビール隠しててごめんなさい」

「そつちじゃないよ奥さん増えるって部分!また何処でフラグを立てたのさあ!」

「知らん!俺は何も知らん!」

「どーせアレでしょ！銀髪ポニテのハッキングが得意の小柄な女の子とかにフラグ立てたんでしょ！」

「偉く具体的だな！つかフラグとか立てるかあ!!」

――

注 現在 連載中のジャマトライダー√は

デートアライブ原作 4巻〜5巻の間の話となっていますのでハルトはまだ銀狼に会っておりません悪しからず

――

「なんか今補足が入った気がする！」

「ちよつとハルト！今更だけど少しお話しが！」

その時、ハルトは自分の直感に従い錫音を庇うように地面に倒れた

「うえ！は、ハルト?! い、いやまあそこまで熱烈に迫られると流石の私も…けど外で何て

大胆……っ！」

同時に自分達がいた場所で強い爆発と火柱が起こるのであった

「危なかったあ……怪我とかない錫音」

「うん……ありがとうハルト」

「おう、つか……誰だ人のデート邪魔した奴は」

ハルトの瞳からハイライトが消えると同時にコムリンクから通話が入るとホログラムが現れ話し始めた

『陛下……無事で！』

「ああコマンダー状況報告を頼む」

『はっ！現在、鳶一折紙が所属不明のユニットを装備して五河琴里に襲いかかっており現在精霊3名でそれを迎撃中です！』

「よしコマンダー、ガンシツプ用意を頼む逃げ遅れた民間人や避難用にだ…その前に最速で一機回してくれ錫音をピースメー」送らなくて良いから「え？いやこれは俺の仕事」

「私達の仕事だよ本当に君という男は」

「いやガッツリ危ないんだけど!？」

「知ってるよだから行くんでしょ？ハルトは放っておくと心臓に魔剣刺さったりレジエンドライダーがいると浮かれてサインもらいに行くし、五人もいるのに更に現地妻増やすし」

「最後のだけは身に覚えはないんだよなあ…」

俺は出来る人助けと自分の意見を言ってるだけなの？

『この野郎自覚無しだトオ!』

「だから私達の誰かが見てあげてないと心配なのさ、それに君が道を踏み外してあのジジイと一緒にになったら私が殺すって約束もある」

「おう」

「その約束が果たされない事を願ってるんだ…ハルトはああはならないでくれ」

「確約しねえよ俺の大事なものの全部守るのに必要なら迷わずなる…全部守った後で俺を殺せ」

「…そこはならないって約束するところだろ」

「まあそうだけどさあ、俺ってそんな奴だし」

「よく知ってる。本当に君って奴は」

「馬鹿だよ特級な馬鹿」

「だから付いて行くんだろ？久しぶりに一緒に行こうか」

『ドライバーオン……ナウ』

「おう終わらせてデート再開と行こうか」

2人はアイテムを構え変身する

『チェンジ……ナウ』

『ウィザード……ドラゴン』

2人はソーサラーとアナザーウィザード・フレイムドラゴンになると現場へと転移したのであった

五河シスター後編

その頃 プールは戦場と化していた

「折紙！頼む！琴里を殺さないでくれ！俺の大事な家族なんだ！」

士道の説得に折紙は揺れ動く

「っ！……けど私のお父さんとお母さんの仇で……」

「頼む！俺から家族を奪わないでくれ！！」

「……………っ！」

折紙は土道の嘆願で実の両親を失った過去がフラッシュバックする、そして

(じゃあな折紙)

(また会えるのを楽しみにしてるわ)

消えてしまった育ての親と、その暖かい居場所の事を

「あああああああ！」

「っ！」

そんな土道の懇願に揺れている折紙であるが暴走している琴里はそんなのお構いなしに灼爛殲鬼で折紙に襲い掛かったが

『デイフェンド…ナウ』

「え?..」

折紙が目を開けるとそこには巨大な魔法陣と黒と金色の意匠を纏う魔法使い　ソー
サラーが立っていた

「ふう…コレでよしつと」

「あ……あなたは……」

「私? 私は…そうね指輪の魔法使いかな」

（私は指輪の魔法使いよ）

（大丈夫よ折紙…また必ず会えるから、いつ? そうねえ…うちの馬鹿旦那の言葉を借りるならいつかの明日…かな）

「……………え」

「少し下がりましたよ、どうか危ないから」

「あ………はい………」

何故かソーサラーを見て折紙は指示に従うのであった

「あん時の礼だ暫く伸びてろ！」

『スペシャル……』

同時にアナザーウィザード・フレイムドラゴンが胸部から現れた。ドラゴンがエネルギーを溜め込むのを見て琴里も迎撃に走る。

「灼爛殲鬼………砲（メギド）!!」

そして土道に通信が入る、令音は淡々と話す

『シン、不味いぞあの2人の一撃がぶつかったら…このプール施設が消し飛んでしまう！』

「そんな！けど俺に2人を止める力なんて…っ！」

士道は思い出したかのように手に入れた新しい力へと目線が動いた

『頑張れよ仮面ライダー…その物語を見た時、お前はその重みを知るだろう』

実際、そう言われて少しだけ見た…確かにハルトさんが自分に対して怒るわけだと納得する

アレだけの覚悟や思いを抱いて始めて手に入れた世界を守り続ける力 その意味や葛藤をハルトは誰よりも見ていたのだろう…だからこそ自分なんかが使う事に激怒したのだ

「けど……俺だって十香や四糸乃……皆を守るんだ……それ以前に俺の大事な家族を守れないでどうすんだよ！そんなの認められるかあ！」

『ブレイブドラゴン』

少年は自分の心に従い力を解放する、そこに迷いなど無い、まだまだ小さくて未熟だがハルトの知る英雄達のように輝くものが確かにあるのだ

『烈火拔刀!!』

「変身!!!」

『烈火拔刀!!ブレイブドラゴン!!烈火一冊!勇気の竜と火炎剣烈火が交わる時、真紅の剣が悪を貫く!』

「この物語の結末は俺が決める!!」

そしてそれと合わせたように2人も動きだす

「さあ、ファイナーレだ!!」

「灰燼に帰せ、灼爛殲鬼!!」

両者の一撃が放たれようとしていた、刹那

『必殺読破!』

「っ!!」

2人は攻撃モーションを解いて声のする方を見た

「火龍蹴撃破!」

『ドラゴン一冊撃！ファイヤー！』

セイバーが迷いなく放ったライダーキックは赤い竜と共に

「……………え？」

アナザーウィザードを狙ったのだ

「っ！……………あ……………があ……………テメエ……………っ！」

味方からの強烈な不意打ちにハルトは変身解除となる

「……………っ！！！！」

折紙はその素顔を見た時、普段の無表情が崩れるほどの驚きがそこにあっただ

「すみませんハルトさん！後で誤ります！けど今は許してください！琴里！」

士道は変身解除して琴里を抱きしめ、キスをする

「っ！」

霊力は封印され事態は無事解決

『エクスプロージョン…ナウ！』

とはならなかった爆破が連鎖で起こり建物が半壊しかける

「っ！……す、錫音さん？」

そこにいたのは激昂したソーサラーだった

「ねえ誰の許しを得て私達の夫に攻撃してるのかな？」

そのオーラは激怒したハルトに似ていた

「え？これは琴里を助ける為に…」

「なら悪手だね私に止めるように言えば良かったんだよ？あのさハルトが私達を愛するように私達もハルトを愛してるんだ…これハルトがいつも言ってるんだけどね」

「っ！」

「私の特別を傷つけて無事でいられると思うなよ」

『コネクト』

そしてコネクトの魔法でハルバートを呼び出して構えるが折紙は持っていたユニツトを解除して土道を庇うように立ち塞がった

「ジ・エンドだ」

「辞めて!!」

「ねえ何かな？」

「土道を狙わないで！錫音お義母さん!!」

その折紙の一言に

「「……………へ？」」

辺りが静まり返った

「……………」

時間は少し前、ピースメーカー艦内では土道の不意打ちに怒り浸透である

「あのガキ、陛下を狙いやがったな！許さねえ!!」

「もう我慢ならねえぞコマンダー！攻撃許可を!!直ぐにあの小さな船など沈めてみせませす！」

「是非一番槍は俺達、サイクロン小隊にお任せください！陛下につけて頂いた疾風（サイクロン）の名に恥じない活躍をお約束します！」

「何言つてやがる！それは俺達ハリケーン小隊の仕事だ！コマンダー！是非俺たちに先陣を切らせてくれ!!」

「なら艦内制圧は俺達のレッド中隊の仕事だなコマンダーご命令を！我々はいつでも出撃可能です！」

「……同盟相手を攻撃など言語道断だお灸を据えてやるぞ野郎共！戦闘配置につけ!!」

艦内では戦闘開始を告げるサイレンが喧しく響いているとトルーパー達は全員武装をして各々の配置につく、それは何処の軍団よりも素早く効率的であった

伊達に戦う為に生まれた兵士ではない寧ろ人としての日常を知ったからこそ兵士としての使命感や義務感がより強くなったと言える

普段、ハルトの扱いがぞんざいなクロントルーパー達であるが

それは一重にハルトの人柄が成せる点があり上下やベテランや新兵問わずに砕けて飾らない態度で仲間と接している為、ハルト直属のトルーパーは自意識や自我は他の部隊よりも強く忠誠心も高いのだ

普段の扱いの所為でそうは感じられないが：親衛隊はハルトのあり方も学んでいた

曰く

仲間には危害を加える輩には慈悲などなし

泣かされた、相手は根絶やし、ホトトギス

これが訓示である

本来ならトルーパーの暴走を止めないとならないのはハルトやキャロル達なのであるが長のハルトは気絶しており

「「……………」」

キャロル達は激昂、トルーパー達でさえ声がかけれないくらいの覇気が出ていた

つまり彼等のストッパーを失っているのだ

「私が行こう…ついでに火炎剣烈火とブレイブドラゴンを回収してくる」

千冬はサソードヤイバーを腰に添えて外に出ようとするのをアンティリーネが止める

「あら待ちなさい千冬、目の前で旦那様を傷つけられているのに此処で待つなんてごめんよ私が行くわ軍曹、ガンシップを用意なさい」

「何を言っている、それは私も同じ気持ちだ!!」

「ふふふ…束から新しいシステムの実験を頼まれててね、あの子で実験してあげるわ」

「断る、これは私の「黙れお前達!」キャロル?」

「ここは最年長?の彼女が場を支配する普段はハルトと並んでボケ倒す或いは彼と同じようにライダーオタク化して周りを振り回すが、かつては世界を相手に1人で戦おうとした程の女傑、そんな彼女は今」

「ハルトならこう言う…全員で行くぞ!ハウンド!トルーパーの指揮を任せた!!」

何気に一番怒っていた

「イエス！ユアハイネス!!」

その言葉にハウンドは頷いて部下にテキパキと指示を出す。流石はクローントルーパーの最上位個体とされるマーシャルクローンコマンダー（星系単位のクローン部隊を指揮可能）なだけはある

断じて普段が

【陛下！また仕事を抜け出して街に行ってたのですね！】

【げ、ハウンド……やべ！逃げろ!!】

【逃しません親衛隊に通達、王様狩りだあ！】

【サーイエツサー！】

数分後

【ぎゃあああああ！】

【さあ陛下、仕事の時間です連行しろ】

【ぐえあああ……】

こんな感じでハルトのポンコツぶりに振り回されている苦勞人だがその実 とびきり有能なのである フラクシナスから通信が入るが

ハウンドは問答無用で切断する

「ハッチ解放、サイクロン小隊出動準備！目標！敵戦艦！！遠慮はいらん沈めてしまえ！！」

あわやフラクシナス沈没の危機だったのだが

『辞めて！錫音お義母さん!!』

折紙の説得で

「「「「「え？」」」」」」

全員我に帰ったのであった

そして時間は戻り

皆が折紙の言葉に驚く中、気絶したハルトの中から抜け出る存在があった

「おいおい少年！俺っちの相棒に何してくれてんの!!」

『ジャック…リバイス』

「これ以上、俺達の心を滾らせるなよ変身」

『DUAL UP! PERFECT PUZZLE』

アナザーバイスとパラド、言うならばハルトの中の防衛本能というべきかももう一つの自我と言うべき彼等は自らの宿主を守るために変身したのである

アナザージャックリバイスと仮面ライダーパラドクスレベル50

「テメエ、覚悟は出来てんのか？」

「っ!!」

セイバーは慌てて防御の態勢をとるが

「遅ええなあ！おらあ！」

アナザージャックリバイスはお返しとばかりにメリケンサックで思い切り殴り飛ば

すとセイバーは吹き飛びプールに沈んだ、しかしそれで許す程甘くは無い浮かんだ所にアナザージャックリバイスが手を掴むとプールサイドまで投げ飛ばした

「おーらあ！パラドちゃん宜しく！」

「ああ任せろ」

『高速化！マッスル化！伸縮化！』

エナジーアイテム3枚コンボ、高速化でセイバーに肉薄しマッスル化で強化した前ケリで飛んでいたセイバーを地面に叩き落とした

「がはっ！……くっ！この！」

と火炎剣烈火で切るが伸縮化した体ではパラドクスは切れずに伸びるだけであった

「こんなもんかよ……拍子抜けだな」

「タイムマンじゃねえんだよ！」

「しまっ！」

「くたばれ！悪魔式バックドロップ!!」

そのまま地面が凹むほどの威力のバックドロップを叩き込むと流石のセイバーも動きが鈍くなる

「決まったぜ」

変身解除されて動けない士道にパラドは躊躇いなく

「おいおいもう終わりか？」

『ウラワザ』

必殺技でトドメ刺そうとした、その時

「テメエ等、止せ」

目を覚ましたハルトが無銘剣を取り出して2人を静止させた

「ハルト！起きたのか僕ちゃん嬉しい！」

「よく寝てたな、もうちよい寝てても良かったんだぜ……このガキ終わらせて聖剣とライドブックをぶん取ってやるからよ」

「止せて言ったのが聞こえねえのかパラドオ！……文句あるなら俺とやるか？」

ドスの聞いた声と取り出したガイアメモリを見て2人は驚くと変身解除する

「わ、悪かったよハルト、あの状況なら出ないと危なかったんだぜ？」

「そうだぜ、流石にアレはな」

するとハルトはいつものようにヘラヘラ笑いながら

「わーってるよ少年君の不意打ちを食らったのは俺の無警戒さが原因だからな、お前達を咎める事はしねえよ」

その刹那、表情が抜け落ちると

「ただなテメエは別だ了承のねえ仲間への攻撃なんて言語道断なんだ次はねえから忘れんなよ」

ハルトからすれば親衛隊とのやりとりは訓練も兼ねているし自分のストッパーも兼ねているので自分を撃つ練習するのは構わないと思っただけだが了承のない攻撃は別だ、その場の流れで敵対すると判断される、しかし今回は事情が事情なので

「ま、俺も大人だからな」

ハルトは彼を見るとパツと笑うのを見て安堵した土道に

「1発には1発で勘弁してやるよ」

高く右脚を振り上げるとそのまま土道の右腕目掛けて強く振り下ろし、土道の腕をへし折ったのである

「あつ………がああああ！」

痛みで疼くまるも直ぐに青い炎と共に再生したのを見て

「お前も俺と同じで怪我は直ぐ治るから別に良いだろ？………テメエ等も分かったな！これです手打ちだ文句があるなら俺の所に来い！！分かったら戦闘配置解け！！野郎共！！」

〈サー！イエツサー！！〉

ハルトはコムリンク越して一するとでピースメーカー艦内も了解の意が届くと艦内では

「本当やる時はやるよな陛下は」

「ああじゃねえと俺達の大將なんざ務まらねえよ」

「いつもああだったら良いのに」

「私語は後だルーキー、今回は良い訓練だったと思え！……それとそこのトルーパー！」

「はっ！申し訳ありません過ぎた事を「全くその通りだ！」……はっ！」

「お前達も今回は良い訓練になっただろう！」

「「「サー！イエツサー！！」」」

続けてプライベートの端末で連絡する

「キャロル達も悪かったな心配かけた」

「本当だバカ者、貴様がノビてる間に戦端が開かれる所だったぞ」

「ははは！そりや良い、もうちよい寝てるのもアリだったか？」

「冗談は辞めろ笑えん、まあ私達は心配などカケラもしてなかったがな」

「それはそれでシヨツク!？」

「あら？真つ先に敵討ち行こうとしたのは誰かしら千冬？」

「アンティリーネ、それ本当？」

「ええ」

「千冬く素直じゃないなあ」

「ほお、もう一回気絶するまで殴りたいか？」

「大変失礼しましたあ！」

「それよりも私達よりも先に謝る奴がいるだろう？」

「そだな」

とハルトは錫音に近づくと頭を下げる

「悪かった錫音、油断した」

「ん……」

「はいはい、おいで」

「っ！」

そのまま走り出した彼女を受け止めると強く抱きしめられたので抱きしめ返すのであったが

「次はない」

この言葉にハルトも

「わーってる」

「……よし、それよりハルト」

「ああ…取り敢えず彼女だな」

錫音とハルトは彼女 鳶一折紙を見ると

「錫音お義母さん…だよね…私だよ折紙だよ…良かった…また会えた…」

感動している所悪いのだがハルトは錫音の肩を掴み聞こえないように小さい声で

「これどういうこと!?!」

「私が聞きたいよ誰かと勘違いしてるのかな!」

「いや彼女は完全にお前のごと母親認定してるぞ?」

「私は君にしか体を許してないよ!」

「生々しいこと言うな!アレじゃないのか養子とかクロエみたいな感じでさ」

「迎えてるなら真っ先に紹介するって!」

「ネオタイムジャッカー時代とかに何かしてないの?」

「あの時はジジイの復讐以外の事なんて考えてないけど」

「それは…なんかごめん…」

と話していたが折紙は続けて

「ハルトお義父さんも…無事で良かった」

「……………は？」

—————

それには艦内でも驚きの声が上がったのである

「どういう事だ？」

「ハルトが…いやしかしこの世界に来たのは数ヶ月前だ…何故彼女は2人を親と呼ぶ」

「…：さあ本人に聞けば早いんじゃないかしら？ もしくは嘘発見器かメモリーメモリーで記憶を覗いたら良いわよ」

「まあそうだな」

艦内の意見が纏まったが

「敵性反応接近！」

「ASTだな流石に派手に暴れたのもある…陛下達は撤退を」

—————

その通信を聞いて

「分かった、悪い少し俺達は出かける…だが必ず会いに行くよ迎えを送るからな！」

「じゃあまた会いましょう、近いうちに」

『テレポート』

「うん……またいつか……」

そして折紙は力尽きたように気絶したのであった

余談だが取り敢えず、セイバーの行為はハルトの言った通り手打ちとなりそれ以降は責め立てる事はないのをハルトは約束したのだが

ピースメーカー艦内ではそんな事どーでも良かった

「さて錫音、取り敢えず確認だがあの折紙なる女の子を養子として引き取った或いは実の母親である可能性は「ある訳ないじゃん！事実無根だよ！」…そうみたいだな信じよ

う……となると……ハルト！貴様またか！」

「何で俺のせい!? いや待て俺だって訳わかんないんだよ！」

「…………ハルト…私も信じてやりたいが貴様はいかんせん前科があるから疑わしい」

「はいいい!? いや待てクロエの件はみんな了承してんじゃん！」

「いやお前は私達の知らない所で七罪や二亜と仲良くしていた前科がある…つまり知らない内に女性と懇ろになり子供を……うむ…現状怪しいのはお前だ！」

「納得いかんぞ！ そうだ！ か、カレラ裁判長を呼んでくれ！ 彼女ならきつと公平な判決を下してくれる筈だ！」

我が国が誇る公明正大な裁判所長官ならばきつと分かってくれと思いき進言したが

「あ、カレラから連絡があつてね『我が君の事を信じているが…DNA検査をしていない

と信じられない…』だつてさ」

「カレラさん!?嘘でしょ!!まさか最高裁判所長官からも女性関連の事は匙投げられてんの俺!」

「日頃の行いだ甘んじてうけろ」

「不意打ちされたり隠し子を疑われたり… 本当に今日はなんて日だ!」

「さてハルトと錫音を擲揃うのは終わりとして何故、彼女が2人を親と呼ぶのかを考えろ」

「ああ…2人に心当たりがないとなれば…まず」

「アナザーW、調べてくれるか?」

『おう任せろ!……見つけたぜ! 鳶一折紙は前にも話したが対精霊部隊ASTの若き

エース、性格は寡黙で人付き合いは希薄、ただ五河士道には並外れた好意を抱いている』

「ふむふむ」

『過去に関しては数年前にあった街の火災で両親が死んでる事と…』

「事と？」

『名前はわからねえが彼女を引き取った育ての親と何年か旅してるみたいだな』

「はて？」

「おいまさか…」

「その親が？」

「2人なんて事はないわよね？」

その三人の言葉にハルトは無いと否定する

「それは無理だよアナザータイムマジーンじゃこの世界に来た4月10日以前には移動出来なかったしアナザーデンライナーは本家と同じくイマジンのいる時間に飛ぶ為のチケットが必要だからイマジンがいないと話にならない」

「だがハルトはイマジンでもある契約して過去に飛んだ可能性もあるだろう?」

「確かにその点は拭えないけどさ…」

他にもキャツスルドランの力でのタイムスリップも出来なくはないのだが

「そもそも俺って特異点だよ歴史改変した所でって意味ないし」

特異点

仮面ライダー電王においては歴史改変が発生しても影響を受けない特異体質の総称

で電王に変身する条件にもなる取り憑いたイマジンを制御することが可能

そして電王の役目は改変された過去を元に戻す事

仮面ライダーの歴史の番人がジオウならば

時間や歴史という概念そのものの番人が電王とも言える

「だが、俺が電王に会いたくて過去に飛んだ可能性も拭いきれない」

「「「確かに」」」

「本来なら唾棄すべき可能性が最も高いとは…流石陛下、今日も安定の信頼度ですね!」

「皆!?あとハウンド、それ一步間違えたら不敬だよ!!」

『しかしアナザーWの話は興味深い…』

「だよなあ鳶一折紙の話が本当なら錫音と俺は何らかの理由で過去に行く可能性があ

るって訳だ」

「けど私達が過去に飛んで大丈夫なの？」

「そこまでは知らないが：：そうしなきゃならないほどの事があるってんなら」
「備えておくに越した事はなしか」

現状ではそれだけだ、後は

「彼女の話を聞かない事にはダメだな」

件の本人からの話を聞くしかない

鳶一ミーティング!

前回、俺達の事を父母と呼ぶ鳶一折紙の存在で混乱を極めたハルト達であった

ピースメーカー 食堂にて

「んー本当にあの子って俺と錫音が面倒見てたのかな?」

「可能性としてだよな? まあ無くは無いと思うよ」

「しかし本当なんだろうか気になって夜しか眠れないよ……だからかな……ニチアサの時間には目が覚めるんだ」

「安心して健康的だし、ハルトに取っては日常だよ」

「あの子の部屋に何かあればなあ……あ」

ハルトは何か思い出したかのようにスパイダーフォンで通話する、相手は

「え？折紙の部屋ですか？」

士道である先日の件は手打ちにしたので思うところはないのと今回の件に関して重要な情報を握っているのだ

「そうそう、前によしのんを探しに彼女の家に行つたと聞いた…その時に家族の写真とか何か目につかなかったか？」

「そう言われても…あの時はよしのん探すのに必死で細かい所までは…それより本当なんですか折紙の育ての親って」

「それを今調べてるんだ、嘘か本当かでそっちの展開も変わってくんだろ？」

A S T側の情報が何処まで割れてるかは不明だが少なくともエース級の情報が手に

入るなら値千金である

「……………あ、琴里ならあの時の映像を持つてるかも知れませんよ!」

「成る程…録画データって訳か」

その後映像を確認したが実の親の写真はあるが俺達との写真はなかったのである

た
流石の事事故に対処に困ったハルト達は時間を見つけて彼女と接触を図るのであつ

「よしそろそろ時間だな」

「そうだねハルト」

ハルトと錫音は待っている、流石のハルトも空気を讀んだのは文字Tシャツは封印し

て普通のカッコをしていた（桐生戦兎の私服）

『……………私服というよりコスプレでは？』

「大丈夫だ問題ない」

「お義父さん、お義母さん」

「うお（うわあ）！！」

背後からの奇襲に驚いたハルト達であったが彼女の様子に一応の安堵をする

「良かった、久しぶり」

「うん」

「ねえ、あの後大丈夫だった？」

「問題ない、お咎めはなかった」

「へ？」

「精霊と謎の怪物が暴れたのを止めたけど独断専行とか何とかで怒られたけど、そんなにだった」

「そ、そうか」

『感情任せの独断専行か…何とかというか誰かに似ているな』

「つせえ」

その報告を間接的に見ていたラタトスクの面々が安堵する情報があった

「それと五河琴里の件は報告しなかった」

「へ？」

「士道がいつか話してくれると思って」

「そうかありがとう」

「……連鎖的にお義母さん達の事バレたら大変だから」

「本当にありがとう!!」

よく出来た子だなあ！

さてさて近くの喫茶店で一服している時に折紙から口を開く

「前に2人から、再会した時…私のことを覚えてないかも知れないと言われた」

「い、いやまあそうなんですよねえ」

「そうなんだよね」

「だからどうすれば私が娘か信じて貰えるか考えてる」

「ならば俺達についてのクイズを出すから答えられたらで信じるでどうだ!」

「そんな単純な方法で大丈夫!?!」

「OK、どんと来い」

「何でやる気になってるの!」

「第一問、俺の誕生日は「4月10日」……正解」

「なら私の誕生日は「6月19日」正解……嘘でしょ」

まさか365分の1をピンポイントで当てるとは

「まだまだいける」

「よし！ならば俺の好きなヒーローは「仮面ライダー」正解！」

『そんなの常識だろ？』

「いや、さも当然みたいに言われても」

「ならば！俺の最推し「仮面ライダーダークウガ」っ！ならば！」

とハルトの質問に対して待つてましたと言わんばかりに即答する折紙を見て

「なあ錫音…この子、俺の義娘じゃね？」

もはや疑いようがなかった

「いやもうそうでしょうよ、完全にプライベートな事知ってたし」

「錫音の事まで知ってたしな趣味とか色々」と

「私の事までとなると流石にねえ」

最早疑いようがないのだが彼女はダメ押しとばかりに

「二人の馴れ初めはナンパされてたお義母さんを助けた所からだ、そしてお義父さんを押し倒して「間違いない君は私の娘だよ」うん」

「さてさて……んじや情報のすり合わせと行こう……取り敢えず聞きたいんだけど……何で少年君にあんな肉食なの？」

凄いい気になった点を尋ねると

「お義母さんとキャロル、アンティリーネ義姉さんが言つてた好きな人を手に入れるなら【押ししてもダメなら押し倒せ】と」

「お前達が犯人かあ！」

「……………」

その頃 ピースメーカー艦内でモニターしていたキャロルとアンティリーネは顔を背けていると千冬からの拳骨が飛んでいたのであつた

「それと東義姉さんからは好きな人と会つた時用につて沢山、媚薬や精力剤……こほん……元気になるお薬をもら「よしあの兎が帰つてきたら説教だ」それは辞めてほしい……あの人のお陰で今の私がいる」

「……………具体的に？」

「バレないようにGPS、監視カメラ、盗聴器それとピッキング「はいダウトー！」……何

故?」

「東はウチの子に何教えてるの!……つてちよつと待ったまさか……」

と錫音は怒るがハルトは、ふと我に帰り顔が青ざめた

「な、なあ相棒……まさかと思うが俺にも」

『ん?ガッツリGPSと盗聴器つけられてるぞ』

「っ!!これは帰ったらマジで東とお話ししよう……もしもし!千冬ごめん東の説教を手伝ってくれる?今俺さ東がちよつと怖いんだ!」

『ハルト、これは私達全員同意の元でつけているのだ東を責めないで欲しい』

「そうか……それなら仕方ない……いや待て!一番大事な本人の同意を得てないのですが!?!」

『ほお…行く先で独断専行し現地妻を増やす貴様が言えた事か？そんな男には監視の目が必要じゃないか？……ん？』

「……………僕、良い子だからちゃんと持つてるね！」 思考放棄

『そうだそれで良い』

アナザーライダー達も溜息を吐くも錫音は続けて

「じゃあ私達が何者かも知ってるの？」

尋ねると首を縦に振る折紙…だが

「流石にあの場所の事は話せない…話す気もない」

「まあ知らない奴からしたラピ〇タ並の荒唐無稽な話だよな」

「まあ両方とも本当にあるんだけどね…そっかありがとう」

ならば俺個人としても敵対する理由はない、情報収集能力だけでは済ませられない個人情報まで割れてるとなれば疑う余地はないだろう

「クロエにも報告しないとな」

「うん…また会いたい」

「んじゃ夏休みにでも遊びに来るか?」

「うん」

「よし決まりだな…んじゃ折紙、少年君を墮とせ俺が許す!」

「わかった、頑張る」

「いやちよつ！それはそれで良いのハルト！」

「ま、結局誰を選ぶかは少年君だしね」

カラカラ笑うが土道からしたら頭を抱える事となったのだが煽るのは彼の得意分野であるから知った事ではないのだ

まあ事実確認は、またの機会にだがと話していたら

「あら折紙じゃない、珍しいわね誰かと一緒なんて」

そう現れたのはポニテに纏めた大人の女性だ：確かASTの人だったかな？と考えていると

「はい、紹介します：私のお義母さんとお義父さんです」

そう言われて草壁は二人を交互に見ると少し宇宙猫のような顔になり

「……………はあ!?!いや、ちよつ若くない!?!失礼ですが何歳の時の子供ですか!?!」

「あくいやいや誤解を招く言い方で申し訳ありません、ようは育ての親ですよ…まあ若いナリなのは否定しません」

「あ、失礼しました!私は日下部、彼女の…まあ先輩みたいなものですね」

「これはどうも折紙がお世話になってます、私は常葉ハルト、此方は妻の」

「錫音です折紙がいつもお世話になっております」

「え!…ああ…いやいやそんな…何というかコチラもお世話になってまして」

余談だがピースメーカー艦内では状況の打開のためとは言え三人が舌打ちをしていたの言うまでもない

柔らかな笑みで挨拶するとハルトの精神世界では軽い暴動が起こる

『お前は誰だ!!』

『間違いない！ハルトの偽者だあ！』

『こいつが敬語を使うだど!!……そんな……こいつが真人間に見えてしまう……』

取り敢えずアナザーデイケイド、鎧武、ゼロワンには後でお置きだ……覚えてろ、俺だってTPOは弁える真人間だぞ！

『『え？それギャグ？』』

アナザーライダー全員に言われて泣きそうだよ……何故だ今日はお気に入りの文字Tシャツを封印してまで真面目に挑んでいるというのに！

『いやいやハルトくそれは俺たちでも弁護できないよ』
『ああ、そうだな』

ブルータス（半身達） よ、お前もか

自分の半身に否定されもう心折れそうなハルトだったが、取り敢えず彼女と上手くやりとりをこなしたのであった

そして

「大変だった」

「お義父さん、ナイス演技」

「ま、私のフォローもありきだけどねー」

「つせえ俺の咄嗟の起点に感謝しろ」

そんな感じで平和的に話しているとハルトの目の前にとある男が現れた

「……………どちらさん?」

「貴様が……………常葉ハルトか?」

虚な目で言われても怖いだけだ

「……………」

無言でハルトは錫音と折紙を庇うように立つと

「誰?」

「あの方の命に従い、貴様の命貰うげえ」

決め台詞を吐く前にハルトは飛び膝蹴りを男の顔面に叩き込むのであった

「……………よし!これで正当防衛!!」

『何処が!?!そんな所が真人間ではないと言われる要因なのだぞ!』

「んー大事なものを守るのに普通でいる必要がある?」

相棒のツツコミも聞き流すハルトは男の胸ぐらを掴み上げ

「んでさ今、俺を殺すと言ったな誰の差し金だネオタイムジャッカーか?それとも奏者連中か?あの研究所の生き残りか?ASTか?それとも『候補が多いぞ相棒!!』それだけ恨まれてる自覚はある」

ユサユサ動かしながら尋問する

「うーん…………ウルティマに記憶抜き取って貰った方が早いかな?」

『情報収集と拷問を並行して出来るからなアイツ』

「そーそー、すごい頼りになるんだよね〜三人娘の中じや付き合い一番長いし」

「全ては……あの方の理想郷のためにいいいいい！」

『H I T』

男がハルトを振り解くと取り出したショットアバドライザーとクラウドینگホッパープログライズキーだった

「はあ!?!」

「変身!」

『TH I N K N E T R I S E ! C L O U D I N G H O P P E R !』

アバドンに変身した姿を見てハルトは

「錫音！折紙を頼む!!」

「分かった！こつちだよ」

と折紙を連れて安全圏まで下がらせると

『いよつしやあ！今日も俺達アナザーライダーの出番だな！』

「あ、悪りい今日は相棒達はお休みな」

『な、何故だハルト！アナザーWのイジリに嫌気が差したのか!』

『俺だけ名指しい!!いや待て！俺結構お仕置きされてるぞ！そんなの言うならお前達の方も色々やらかし』『お前の意見など求めん』理不尽だあああああ!』

『あ！アナザーWがディメンションキックで吹き飛んだ！』

『この人でなし!!……はあ……事後処理面倒臭いなあ……』

『いやアナザーWを心配してあげろよ!!』

「いやいや違う違う、多分この後大きな戦いに巻き込まれる可能性があるから皆の力は温存しておきたいんだよ偶にはゆっくり休んでくれ」

『だが貴様だけでは』

「大丈夫、戦う力はあるから……パラド！」

そしてパラドを呼び出す

「つと、俺の出番か？」

「ああ手伝ってくれるか？」

「勿論！けどお前どうやって「コレを使う」っ!!それは心が躍るな！」

ハルトが見せたのは紫色のゲームパッド型のアイテム バグヴァイザーであった

「コレを使う、それとパラドにプレゼントだ」

とハルトが渡したのは蛍光色が派手なドライバー

「ゲームドライバーか……いやけど俺に人間の遺伝子はないが」

「……………あ」

『GENE』

ハルトは自分の体にガイアメモリを突き刺しジーンダーパントになると右手を振り上げて

「なんとかなれー！」

メモリの力で自分の中にある人間の遺伝子情報をパラドに与えたのである

「……………っ!!」

パラドもそれを理解したのだろう喜びの笑みを浮かべ、ハルトは変身解除すると

「いけるかい？」

「サンキューな！」

「さて…待たせたなイナゴ野郎」

「ハルトの知識を見たから知ってるぜ、群れないと何もできないバツタ野郎だろ！」

「イナゴだって…量産型ライダーを単騎特攻させる?何かの罠…そうになると…ライダーの性能テスト?いや今更か……つて事は…ライダーの知識がない奴が犯人…もしくは」

「愚妹の仲間か」

「それだと思う、なら手加減はいらないな」

「っ!お前達!出番だ!」

『THINKNET RISE!!』

と現れたのは大量のアバドンである、それを見たパラドは不敵に笑う

「心が躍るよ」

『デュアルガシャット!!THE STRONGEST FIST!WHAT, s t h
e NEXT STAGE!』

ドライバーにギアデュアルアナザーを装填するとパラドが使う力が混ざったような
音声が歪になり始める

「あの誇り高き龍戦士には劣るが…俺の戦う理由、それは俺の背中にいる大事な家族達
を守るためだ」

ハルトは逆にシンプル バグヴァイザーのAボタンを押しおどろおどろしい待機音
を鳴らすとパラドと一緒に構えをとった

「マックス大変身！」「培養」

本来の黒パラドでは言わない掛け声、それはハルトから生まれた个体故に彼の影響を
多分に受けたからであろう、ドライバーのレバーを開きハルトはバグヴァイザーは籠手
に装填した

『ガッチャーン！マザルアップ！』

『INFECTIION!!』

同時にパラドの背後に現れたゲーム画面が一つになりパズルとファイターゲームが上下に連なる画面がパラドと一体化、ハルトはバグヴァイザーから流れる特殊なパルスによって体内のバグスターウィルスが活性化し己の姿を変異させる

『悪の拳強さ!闇のパズル連鎖!悪しき闇の王座!パーフェクトノックアウト!!』

『LET'S GAME!BAD GAME!DEAD GAME!WHAT'S
OUR NAME!』

その姿は黒のみで作られた仮面ライダーと赤い龍の戦士

彼等は

『THE BUGSTER』

それ以外の説明はいらない

ゲーム敵役から生まれ敵として仮面ライダーと戦う。それが彼等のアイデンティティなのだから

「ドラゴナイトハンターZの龍戦士グラフィター！この名を覚えておくと良いお前達を倒す者の名だ」

赤き双刃を振るう誇り高き龍戦士

レベル99 グレングラファイターバグスター

「ははは！良いねえこれが…」

「どうだパラド」

「バッチリさ！パーフェクトパズルとノックアウトファイター、レベル50の力が一つ

になった!その名も!」

『パーフェクトノックアウト!!』

「仮面ライダーアナザーパラドクス レベル99」

あくまでアナザーと冠するのはオリジナルがいるからか、アナザーの王から生まれた故かは定かではない

魔王と同じ 玉座に座る悪しき王

仮面ライダーアナザーパラドクス・パーフェクトノックアウトゲームレベル99

「行くぜ!」「ああ!」

互いの守りたい者の為に力を振るう事は同じである

推奨BGM REAL GAME（パラドクス挿入歌）

「ははは！そらそらそら！」

まずは先陣を切ったのはアナザーパラドクス彼は燃え盛る拳と共にアバドンを殴り飛ばす仲間の犠牲に驚くもののショットライザーを持ったアバドンはパラドクスを狙うが、パズル型のエネルギーバリアに守られたパラドクスは間合いを取る

「へえ……」パラド！お前が喜ぶものを拵えた好きに使え！」何だよそれ！」

「見ればわかる!!」

そう言うアナザーパラドクスの左手に武器が現れた それは原典の仮面ライダーパラドクスが持つ専用武器 本来のアナザーパラドクスが持つていないものだ それはハルトが己の半身への信頼と仮面ライダーへの愛が為せる技であった

『ガシャコンアナザーパラプレイガン』

それは片手斧と片手銃が融合した黒い武器を見て

「おお！こりや良い…お前達の遠距離攻撃なら」

『ズ・ガン！』

アナザーパラブレイガンを銃モードに変えて青い弾丸を放つと追い討ちとばかりに武器についているボタンを押した

『1 2 3！』

そして放たれたのは3発の弾丸 それは誘導されているように射撃したアバドンを捕らえたのである

『3連鎖！』

倒れたアバドン達をパラドクスは挑発しながら必殺技の用意をする

「おいおい、もう終わりか?」

「な、なめやがって……くらえ!!」

『HIT!』

複数の必殺技の待機音が鳴る中、アナザーパラドクスは周囲に展開されたエネルギーアイテムを1箇所に集めた

アナザーパラドクスの能力 それは名前の通り パズルゲーマーとファイターゲーマーの力が同時に使える事

つまりパズルゲーマーのエネルギーアイテムの操作とファイターゲーマーの装甲貫通能力を両方宿しているのだ

そして選んだ2枚のエネルギーアイテムを一つは自分に一つはアナザーパラプレイガ

ンに付与した

『鋼鉄化!分身!パーフェクトクリティカルフィニッシュ!!』

「はなてえええええ!」

『CLOUDING BURST CANNON!』

一斉に放たれたエネルギー弾丸は分身したアナザーパラドクスの一斉射撃によって相殺され

「もらい〜」

その間隙を抜き引き金を引いた 鋼鉄化により徹甲弾のように変化したエネルギー弾はアバドン達を貫通し射線上にいたアバドンを全員吹き飛ばす

『ALL CLEAR!』

「よっしやあ！」

と油断していたパラドクスにスラッシュライザーを持ったアバドンが接近した

「くらえええええ！」

しかしそれを止めたグラフィイトがアバドンを切り捨てる

「油断大敵だぞパラド」

「頼れる相棒がいるから油断してんだよ」

「ふん……なら見ておけ行くぞレベル99の力で放つ、この技を！」

そして双刃にエネルギーを込めて放つ赤き斬撃をその名は

「激怒龍牙!!」

「え?そつち!」

パラドクスのツツコミを無視し振るった一撃はアバドン達を飲み込み爆散させたのである

その間にも肉薄してきたアバドンを軽く撃退しているパラドクスは感心し

「やるなハルト……なら俺も負けなげえ近距離攻撃なら」

パラプレイガンのボタンを押し銃モードから斧モードに切り替えるとアバドン達に斬撃を食らわせた何人かは手持ちのスラッシュライザーで防御を試みるが

『マッスル化!』

「はあ!」

肉体を強化して放つ一撃の前になす術なくアバドン達は爆散したのである

そして

『1
2
3
4
5
6
7』

溜め込んだ一撃を思い切り振り抜くと斬撃のエネルギーとなりアバドンを飲み込む

「だあ！」

『7連打！』

そして残り数も少なくなったので

「一気に決めるぞパラド！」

「ああ！フィニッシュは必殺技だ！」

『ガツチョーン…ウラワザ！』

「はあ…ドドドドドドドドドドドドドドドド！！」

そしてアナザーパラドクスはレバーを開く

『パーフェクトノックアウト!クリティカルボンバー!』

『紅蓮爆龍剣!!』(自己申告)

「「たあ!」」

パラドクスのボレーシユートのような横からの蹴りを打ち込んだ後、赤い竜がアバドンを飲み込むと全てのアバドンは爆散する

「決まったぜ…って!」

「浮かれんな…さあて尋問の時間だよ」

変身解除したハルトが同じく変身解除した最初の男に近づくと

「お前、どこの奴?」

「そ、そんなの話すと思ってるのか！俺は仲間を売るつもりはな「ならボクとお話ししようか？」へ？」

その男の頭を鷲掴みにした新しい人物にハルトは驚いた

「ウルティマ!?何でこの世界に？」

逢魔で留守居をしていた筈のウルティマであった

「いや最近、こいつと同じアバドン?が市街地で暴れてる事件が多発してさあくその調査とハルトに報告って思ってきたんだよ」

「はあ!?!暴れてるだつて…被害は？」

「無いよ、暴れてもトルーパーとボク達がいるから大丈夫」

ウルティマの報告にハルトは目を細めて男を見下しながら

「そっか……けど、そう言う事なら……こいつから情報を全部吐かせろ必要なものがあれば好きに使え俺が許す」

そう言うウルティマは満面の笑みを浮かべると男の頭を鷲掴みして

「はいー！じゃあ早速行ってくるねー！」

逢魔に帰ろうとするが

「ぐ、ぐあああああああー！」

男が苦悶の悲鳴を上げながら赤い塵となって消えたのである

「……………これどう言うこと？」

「そう言う魔法？」

「違うよ魔力を感じなかったし科学や錬金術じゃないの？」

「んや思い出したぞ…アバドンはナノマシンの集合体だ」

「ナノ……なに？」

「要するに目に見えない小さい機械の集合体って事だな」

「ふーん……んじゃベルトとアイテムは戦利品でこれ貰つところか…おいお前らコレ全部集めておけ」

ウルティマがそう言うのと紫色のペイントを施したアーマーを装備したクロールーパーが現れると敬礼して

「イエッサー！野郎共回収だ！」

現れたトルーパーが回収に走るのを見て

「じゃあボクは帰るから、お祭りになったら呼んでね」

「多分。この世界でも力借りるし多分だけど今度デカイ祭りがあるから三人も呼ぶよ」

「本当!!良かった〜またねハル」

と笑いながら彼女は帰るのであったがハルトは思い出す、かつてナノマシンで暴れた奴の事を

「アバドンねえ……愚妹絡みか？」

『だろうな』

「もっぺん言ってみるか？あの世界に」

そしてハルトは知ることになる並行世界（マルチバース）にいる自分の存在と
最愛の人の秘密を

「そいつはー」

「黙れと言っている!!」

そしてマルチバースから集うハルト達が

「「「「異世界連合ハルトレンジャー!!」」」」」

そんなヤバい戦隊を結成する事をそして

「俺が最後の希望だ!」

「宇宙キターー!」

新たなレジェンドの登場を

そして異世界での戦いを終えたハルトを待っているものとは!

次回 八舞テンペスト お楽しみに!

八舞テンペストー前奏曲 逢魔 夏の慰安旅行ー

さて並行世界のハルト達との戦いを終えた今作の魔王ハルトは

「えへへへ……」

あの戦いで貰った新しいレジェンドライダーのサインを見てご満悦だった

「いやーツーショットも撮ってくれてたし幸せだあゝ」

『つたく、こんな感じで大丈夫なのかよ』

「俺はやる時にはやる男だぜ」

『やる時にしかやらないから困っているのだ馬鹿者』

――

そして変わった事があつたとしたらもう一つ

「たあ！」

「甘いぞ！」

千冬が訓練部屋で竹刀片手に相手をしているのは前回の事件で千冬と一夏の妹にして俺の義妹 織斑マドカである

「くっ……」

「ほら次だ」

「はい姉さん!!」

以外にも体育会系な姉妹だなあと思っていた

因みに一夏にマドカの事も紹介した本人もまさか妹がいたとは知らなかったの驚いていた 因みに一夏には織斑計画は内緒にしようとなつた流石にいきなりだと混乱するだろうし何より一夏には知らない方が幸せと思つたからだ、なのでマドカの事は束と俺が千冬に頼まれて見つけ出した妹として紹介したのだ

「よ、宜しく……一夏兄さん」

「ああ宜しくなマドカ」

今ではぎこちないが兄妹として接している

俺みたいな兄妹にはなつて欲しくないなと思つているが一夏に料理を教わつたりなど、そんなのは杞憂らしい

後、何故か箒と鈴ちゃんは未来の義妹だから外堀を埋めにかかっているのは微笑ましいと思っっている

――――
だが

「その程度の実力でナツキからエルフナインを奪えると思っっているのかあ！」

「っ！ナツキは私のものだあ!!あの金髪女には渡さん!!」

「私の妹なら大丈夫だ！いざとなったら押し倒せ私はそれでハルトを射止めた!!」

「何てアドバイスしてんだ!!」

何というかナツキを巡って義妹達が争いを始めている事に何か複雑な感情を抱いて

おります、だってキャロルが

「おい恋敵が出るまでノンビリと何をしていた!!何?今度温泉旅行に行くだと…よし!その際に押し倒して既成事実をだな!」

錯乱して義妹にとんでもないアドバイスを送っているではない

「キャロル…彼女にもペースがあるだろ?」

「しかしそのペースが遅いから他の女にナツキを狙われ始めたのだぞ!」

「あのなあ…選ぶのはナツキだぞ?」

「分かっている…だがアイツには幸せになつてほしい…オレの過ちを止める為に動いて…またオレとお前を繋いでくれたからな」

「キャロル……」

「それは私も同じだ」

「あれ？千冬、もう良いの？」

「ああ今は休憩中だ」

その背には息も絶え絶えなマドカがいた

「……………そっか、んじやお疲れ様千冬」

思考放棄したハルトは笑顔で千冬を抱きしめる、あの日以来ハルトは千冬を始め普段のスキンスリップや自分の気持ちをキッチンと言葉や態度にして伝えるようにしている、時間が取れる時はキッチンと家族の時間を取っているのだが

「っ！離れるハルト！私は汗をかいているのだ！」

「ん？別に気にしないけど？」

「私が気にするのだああ!!!」

そんな羞恥心混じりの千冬のアッパーカットがハルトの顎を捕らえたのであった

「さ、流石千冬姉さんだ…あのハルト義兄さんを一撃とは！」

何処かからゴングの音がしたと共に千冬は片手を天に掲げると一緒にきた東とアンティリーネは冷めた目で

「いや今のはハルくんが悪いよ」

「旦那様……こほん…マジないわー」

「ごめん…感情……こめて…アンティリーネ…」

そう言いハルトは気絶したのであった

そして精神世界

「俺が悪かったよ……うん千冬……嫌だったな」

「そうだハルト、過ちを認めることで人は成長するのだ」

アナザーデイケイドに慰められたハルトが目線を向けると

「あのさ……何か増えてね？」

「ああこの間の異世界事件を旗印に新たな仲間も来たようだ伊達にアレだけ暴れてはいないさ」

「そりやなあ……よし！皆改めて宜しく!!」

挨拶すると空から羽が舞い落ちてきた

「戦え」

「よしお前ら歓迎会だ揉んでやれ」「少し言葉の修正が必要なようだ」おう」

「我はアナザーオーデイン、最後のライダーだ」

「…原典的にやばい奴が来た!!」

「何を怯える？貴様もサバイブを持っているではないか」

「お前も持つてんじゃん、つかタイムベントも持つてたりしてる？」

「然り」

「そっか…頼もしいよ宜しくなアナザーオーデイン」

「次は俺だアナザーデュランダル、貴様があの拠点から奪ったデュランダルを經由して馳せ参じた」

「おお！サーベラも来たからまさかと思ったけど…宜しくな！」

「うむ……さてアナザーオーデインよ」

「うむ」

『界時抹消！』

「……………え？」

ハルトは時の加護によりアナザーデュランダルの能力 時間を削り取ったの瞬間移動を目で追えるのだが…何故か

「いふうー」

アナザーディケイド に一撃を叩き込んだのだ

「アナザーディケイド !?!いや2人とも何して「カノンは何処だア!」アナザースペクターまで!混ざって何してんの!!……つかアナザーカブトも何してんだ!!」

目線の先にはアナザーディケイドを袋叩きにされていたのだ

「少し待て契約者よ、あの男には仕置きが必要だ」

「お仕置きってアナザーディケイドが何したよ!」

「妹を雑に扱ったからだ」

「あ(察し)」

オーディン、カブト、デュランダル、スペクターとはシスコンライダー……そのアナザーなのだからそのオリジナルから引き継いだ妹愛が爆発しても仕方ない……何ならアナ

ザーデイケイドは妹を利用して手にかけてたが

「なら俺も対象じゃね？」

マルチバース単位で妹を袋叩きにしてるよ？

「貴様は例外だ……流石にあの妹は擁護できん」

「お、おう……そんだけやばかったか……」

アレの所為で殴られるのは勘弁して欲しいと安堵すると

「そう言えば契約者よ知っているか？」

「ん？何？」

「私のサバイブ『無限』を使えばアナザー王蛇を強化できる」

「え？ やっぱりアナザーでも使えんの!!」

「うむ」

「っしやあ!!」

喜びの舞をしているとアナザーデユランダルは

「俺の加入で時刻剣界時が使えるようになった」

「あれ？ 俺そろそろ聖剣コンプするんじゃないかね？ クロスセイバーとかなれる？」

「今の貴様には無理だ」

「ですよねー…っしや！ 取り敢えず歓迎会だなアナザーW、幹事任せた」

「おう！……ってアナザーデイケイドの仕事ダロ？それ」

「お前は死に体の奴に仕事を振るか？」

と指を刺した先ではボロボロになっているアナザーデイケイド がいた

「お、おう」

「皆も楽しんでくれよ！」

—————

そして意識が現実世界に戻ると後頭部に柔らかい感触…間違いない膝枕されてる

「……………あれ？」

しかし誰だろう？と考えていると

「あ、起きた？」

「銀狼？」

そこには新しい仲間になった凄腕ハッカーの銀狼だったのだ

「うん、皆は仕事だから暇な私が変わりにね」

「変わりなんてないよ嬉しい、ありがとう銀狼」

「う、うん…」

「大丈夫？知らない事だらけだから困ったら遠慮なく頼って？」

「大丈夫、此処は学ぶことが多くて楽しい」

「そりゃ良かった」

体を起こすとハルトはコムリンクで通信する

「ハウンド、着陸地点についたか？」

『はっ！もう間も無いです』

「よし、皆に着陸用意をさせてくれ」

『イエッサー！』

通信を切るとハルトはノビをして

「何するの？」

「ん？夏の慰安旅行だよ海でバカンス」

—————

そして

「海だー！」

と走り出した束の頭を掴み持ち上げる

「取り敢えず準備体操しようなあ束？」

「そ、そうだね！ハルくん!!」

「陛下！全員揃いました！」

「おう！」

ハウンドに呼ばれたので壇上に立つと合図を出す

「傾注!!」

「諸君！先日の愚妹殲滅案件、そして異世界連合ハルトレンジャーなる奇天烈軍団の指揮に従いよく戦ってくれた！」

その台詞に親衛隊はドツと笑う

「確かにな」

「ああ陛下が沢山いてビビったぜ」

「本物の陛下と誤射しないか焦ったよ」

「お前達！「まあまあハウンド本当の事だし何なら俺がビビったから」はっ！」

「そして最近、お前達の功績に何も報いてなかったから今回の慰安旅行を思いついた！
普段の任務は忘れてゆっくり休みを満喫してくれ!!」

「陛下失礼します！スキューバトルーパー達が海は見飽きた！と言っております！」

「よろしい！ならばスキューバトルーパー部隊は山でバーベキューと花火だ！」

「」「うおおおおお!!」「」

「では……お前達も好きに遊べええええ！」

「」「うおおおおお!!」「」

そして魔王軍の夏の慰安旅行が始まったのである…因みにテストロッサ、ウルティマ、カレラや直属のモス達も呼んでいる

「ありがとうございますわハルト様、このような催しに呼んで頂きました」

「いやいやテストロッサ達には普段からお世話になってるんだから、コレくらいはね…あ、何か飲む？作ってくるよ？」

「え、ええ是非」

「んじや行つてくるね」

と厨房に動く途中で一夏と箒、鈴ちゃんがアプローチしているのを見て青春していると感じていた

余談だがカレラとウルティマがその現場を目撃し2人分追加になったのは言うまでもない

そしてキャロルは子供モードで可愛らしい水着、錫音は白ビキニ、千冬は黒いビキニ、束とアンティリーネは赤いスリングショーツ…ちよっ！

「束?!それら着替えて!」

「ええ!何でさ!ハルくん!!」それは夜に俺の部屋で着てくれたら嬉しいです」直ぐに着替えるね!!」

「私も！」

「まったく…クロエの情操教育も考えろよな」

やれやれと肩を竦めていると

「いやあ水着の資料が一杯ありますなあ！」

「楽しそうじゃないのハルト」

「いや、二亜と七罪も何してんの？普通にエンジョイしてるの？」

「ハルきちが慰安旅行って言うから私も参戦しようかと！」

「私も混ぜて良いかしら」

「どうぞどうぞ」

「いやあ夏コミのネタには困らないねえ」

「因みに進捗は？」

「……………明日から頑張る!!」

「大丈夫かソレ？」

因みに少し先の未来で

—————

「ハルえもん!!夏コミの〆切が近いんだ!凄腕のアシスタントを出してくれよ!!」

泣きつく二亜を見てため息を吐くが

「本当、仕方ないなあ〜二亜くんは〜」

『コネクト』

「はい、アシスタント」(ダミ声)

「あのーハルトさん？何故そこから人が出てくるんでしょうか？」

「え？アシスタント欲しいんでしょ？だから連れてきたの」

「まさか誘拐したの！」

「人聞きが悪い！彼はアシスタント型ヒューマギアのジーペンだ！」

「宜しくお願いします」

「何その漫画を描くために生まれたような存在は!!大歓迎だよ!!」

――
 と言う未来が待っているのだがまだ知らなかった

「さてさて私は暑い日差しからキンキンに冷えた炭酸入り麦茶を頂きま―す！」

「程々にしろよ二亜」「ねえハルト」何？」

「サンオイル塗ってくれるかしら？」

「良いよ―」

彼女達の相手をしているので最早慣れたものである

そして夕方

「お前達！知っているか…杯を飲み干すと書いて―！」

「「「乾杯!!」」」」

と外でのバーベキュー大会が始まったのである

「今日の肉と野菜は俺が一から漬け込んだ手製だよ!」

『本日のシエフ』オーラア!

と文字Tシャツを見せていると

「あはははは!ハルきちとお揃いー!」

既に酔ってる二亜はハルトと同じ文字Tシャツを着ていた その文字とは

『貧乳とはステータスだ!』

「いや何処で売ってたのそのTシャツ!」

ハルトさえも認知してない文字Tシャツがあつた

因みに

「騒がしいなって…ハルト!」

「ハルトさん!!」

「お！エルフナイン、偶然だなあ！宴会やってんだ一緒にどーよ」

「え？俺は!？」

「あ？ナツキか…どうしたよ、つか何でいんの？」

「いや帰つたと同時にギャラルホルンの光に巻き込まれて…気づいたら2人で此処に」

「そっか、んじゃ暫くピースメーカーに入れば良いさ部屋なんて余るくらいだし」

「本当か！助かるよ「久しぶりだなナツキ」：あれ？マドカ？」

「そ、そうだ」

「その浴衣さ似合ってるよ可愛いね」

「ほ、本当か！」

と顔がペアと綻ぶがエルフナインの顔から笑みが消えた

「ナツキさん？ちよつとボクとお話ししませんか？」

「ちよつと待て、私はナツキと話しているのだ」

「ダメです！ナツキさんはボクのものなんです！！貴女には渡しません！！」

「そう言われると益々欲しくなるのだ」

と火花を散らしている2人を見て

「いざとなつたら2人とも娶れナツキ、それで丸く収まる」

「それ出来るのお前だけなんだよ！ハルト!!」

「んな事ねえよ、逢魔は甲斐性があれば重婚可能だから逢魔で式を挙げれば良い」

「そりやそうだろよ王様が自らハーレム形成してんだから」

「けど俺は全員愛してる…だから全員離したくないの」

「お、おう惚気られたぜ…」

とハルトが話している時に

「おいエルフナイン…これを気にナツキを落とせ」

「キャロル!? いやボクにはまだ「そんな調子だとマドカに取られるぞ」っ！が、がんばります！」

そんなやり取りがあったと言う

因みにこの後、千冬は恥ずかしそうに話す

「そのマドカ…お前に渡したい物がある」

「え……」

「お前には10年以上渡していないからな、その分とまでは行かないし色のない物だが」

「そんな事ないよ凄く嬉しい千冬姉さん！」

「そうか…実は東やハルトと一緒に選んだのだお前に似合うと思ってな」

と千冬が渡したのはジエラルミンケースだった

「……………それ文字Tシャツじゃないよね？」

「違うから安心しろ」即答

「良かった〜…じゃあ開けるね……………つてえ？」

中身は赤いバイクのハンドル型のバックルとAと刻まれたガイアメモリ、そして大きな剣だった

「これは…」

「アクセルドライバーと対応するアクセルメモリだ…お前にも自衛策が必要と思ってな」

「そしてエンジンブレードはISの拡張領域収納する事で持ち運びが楽になったんだよ！」

「更に強化アイテムのブースターやトリアルメモリだ！因みにマドカ専用マシンもあるぞ！紹介しよう！アクセルガンナーだ！」

そして現れたのはロボットである

「あ、ありがとうハルト義兄さん…けど私は…」

復讐に囚われ、ブジンソードの刃を振るったのだと言うとハルトは笑いながら

「このベルトで変身する仮面ライダーアクセルは家族を殺された復讐の為にライダーになったんだ」

「え？」

「けど大事な仲間達の熱い心が彼を復讐と言う過去を振り切らせて未来を得たんだ…何なら家族も出来たんだ…その生き方がマドカに似合うと思ってるな」

「それにメモリ相性もバツチリだよ！実はマドつちに合うって推薦してくれた人がデータを送ってくれたんだ」

「そ、そうなんだ…嬉しい千冬姉さん、束さん、ハルト義兄さんありがとう！」

「おうー！」「うんうん！」

と喜んでいると一夏は

「良いなあマドカ、ベルト貰って」

「一夏も欲しいなら用意しようか？」

「え？良いの!？」

「そりゃ「その前に貴様はI Sの訓練からだ」ってさベルトはまた今度」

千冬が止まるのを知っていたからハルトは安心している

「やっぱり皆一緒に一番落ち着くよ」

そう呟くと

「やっぱり東さんとくーちゃんいなくて寂しかった!？」

「そりゃね……だからさ東、今日一緒にどう?」

「勿論!あの時の水着の出番だね」

「ん…そりや楽しみだ」

「っ／＼／＼ちよっ！ハル兄!!」

「あーごめん。一夏には刺激的だったな…けどお前だつて惚れた云々はいつかあるんだ
そんな時はドンと笑つて受け入れてやれ」

「分かったよハル兄」

「よし…これで二学期が楽しみになったな!!」

とハルトは呵呵大笑するのであった

八舞テンペストー恋はいつでもハリケーン!!ー

さて慰安旅行に来ていた魔王軍は現在、ナツキとエルフナインを加えたのだが

「なーんで嵐なのさ」

「ピースメーカー飛ばして雨雲を下に見る？」

「そうしたいが艦内のクルーは現在休みだからな休みの日に働かせるのは俺の美学に反する」

「ならハルト…どうだこの後一緒に散歩でも」

「良いね、ゆっくりしようか」

羽を伸ばすのも悪くないな

そしてキャロルを連れて散歩に出ると

「あれ？ハルトじゃん」

「おはよう御座いますキャロル」

ナツキとエルフナインが散歩をしているのを見てキャロルはうんうんと頷いている程アプローチしてんのかと

「しかし以外な穴場だったな」

「そりやあのピースメーカーを停泊出来る場所なんて限られるからな」

「あの船、やっぱステルスとかあるんだ」

「じゃなきやサイズでバレてるよ、アナザーベルデのクリアーベント並みの迷彩だぜ」

カラカラ笑うがナツキは浮かない顔をしていた

「んで、お前さんはどうすんのさ？」

「え？」

「2人の事だよ、エルフナイン一筋だったお前から見たら今回の件は悩みどころだろうしな」

「お、おう……その予想外でさ……今までの√には無かったから……」

「そうなのか？」

「彼女とは敵対する√しかなかったんだよ、互いに憎んで殺し合ってたんだ……けど」

「今回は色恋か」

「どうすりや良いんだよ…まさかあんなにストレートに告白されると思ってなかった
…」

「まあ…頑張れ」

「雑!?もうちよい具体的なアドバイスをくれよ!」

「いや俺に聞いても2人とも娶れしか言わないよ?」

「そうだったな…:はあどうしたら」

「考えれば良いさ考えて考えて考えて考え抜いて答えを出せば良い」

「ハルト…」

「まあエルフナインとマドカを嫁にってんなら俺、キャロル、千冬を倒さないとダメだが

な」

「攻略難易度が上がってるう!!」

そんな感じで話しているとキャロルはエルフナインに何か耳打ちしていた

「ふえええ！ぼ、ボクにそんな「ナツキが取られるぞ」や、やります！ナツキさんは渡しません!!」

何か不穏な香りがするが放っておこう、その方が面白そうだし

『そんなのだからセレブロに取り憑かれたのだろうか』

「人聞き悪い事言うなよ相棒……しっかし風が強くなつたな、キャロル！エルフナイン！ピースメーカーに戻ろうぜ！」

帰ろうとしたらだ両者の中間地点に弾丸が降ってきたのだ

「何事!？」

「ハルト、アレ!!」

と目線を向けた先には先日事を構えた筈の

「アバドン!?嘘でしょ!あれ全滅したじゃん!!」

驚くのも無理はなかった:何故なら先日異世界で起きた大きな騒乱を引き起こした犯人が変身した姿なのだから

「取り敢えず攻撃したって事は友達じゃないみたいだね」

「下がってな俺がやる」

とアナザーウォッチを取り出したのだが

「……………あれ？」

何故かブランクウォッチであった

「おーい、皆さん出演ですよ〜」

ハルトはウォッチを振り回して声をかけるが

『うえーい……………』

『だ、ダメだ……………ハルト、アナザーオーデイン達の歓迎会で飲みすぎた……………』

「嘘だろお!!この緊急事態にい！」

『パラドもバイスも潰れてしまってる…悪いが……………1人で頑張れ』

「嘘でしょ!超、心細いんですけど!!!つかアナザーオーデインに修正してもらえ!何の

為のタイムベントだ!!」

『ま、まだ…その時では……ない!』

『よく言ったアナザーオーデイン! さあこのスコッチを飲み干せ!!』

『良からうアナザーナイトよ…我は負けん!!』

「飲み比べでカツコつけてる場合かあ!」

『因みにあのアナザーライオトルーパーもダメだ』

「嘘でしょ! 二万人いるのに全員酔い潰れたの!?! 俺の精神世界にどんな改造をした!!」

とハルトが頭を抱えているとナツキが

「……………俺がやろうか?」

「お、俺にはまだコレがある！」

と取り出したのはNと書かれたガイアメモリであった

「たまたま見つけたナスカメモリ…その力、見せてもらうぜ霧彦さん!!」

『N A S C A』

ハルトはメモリを起動すると右の掌に現れた生体コネクタにメモリを挿入すると

「はあ！」

赤いナスカドーパントへと進化したのである

「おのれ!!青のほう良かった!!ドライバーが手に入らないのが悔しい!!」

悪い意味でブレないのであったが

「言ってる場合かよ…変身!!」

『BUJIN SWORD READY FIGHT!!』

アナザータイクーン・ブジンソードに変身すると武刃を少し抜き腰を落とし抜刀の体勢に入るとアバドンが高速のクイックドロウを行うが

「はあー!」

ブジンソードの一閃は強化弾頭を切り裂き弾いたのである

「っ!」「余所見してる場合か!」っ!!」

「おらあー!」

ナスカドーパントの長剣で一撃を加えたハルトは火球を数発浴びせると蹴りを叩き込み怯ませると間合いと時間を稼いだ

「今回は見せ場譲ってやつからさっさと切り倒せ!!」

「つさい……今の俺に命令するな!」

ブジンソードは刀を納刀しバックルを開くと再度閉じる 体を中心に墨のような黒いオーラが場を支配するとバックルを再度開く!

『BUJIN SWORD VICTROY!!』

「……………秘剣」

「え?」

ハルトが尋ねる前にアバドンの体は一刀両断されていた、怪人の目にも止まらぬ抜刀術 刹那に斬撃を重ねる理不尽

「燕返し」

納刀と同時にアバドンは爆散したのだ

「グアアアアアア!!」

「嘘おおお！」

「はあ、まだ斬撃にブレがあるゴールは遠い」

「何？お前あのN O U M I Nに弟子入りしたの？」

ハルトが茶化すと変身解除したナツキは倒れたアバドンからドライバーを剥ぎ取ると現れたのは

「「あ？」」

「ひ、ひい!!」

何処の誰とも知らない人だった

――

取り敢えず事情聴取も兼ねて捕縛しプログライズキーとアバドライザーを回収した
までは良かったのだが

「おいテメエ、これ何処で拾った？」

ドライバーを見せながら尋ねると

「や、闇サイトのオークションだ！何か最近出回ってる逸品だつて！言つたから買ったんだ!!」

「銀狼…今から言うサイトに出回ってるドライバーとプログライズキー回収すんで、手

隙のトルーパー使ってガサ入れする」

『OK、任された』

「頼む」

と通話を切るが解せない

「そんで何で俺たちを狙った？」

たまたまの通行人を狙ったにしては都合が良すぎるのだと聞くと

「お前達が悪いんだ!!」

「はっ..」

「俺の嫁である2人とイチヤイチャしやがって！俺の気持ちを裏切ったんだ!!」

支離滅裂とはこういうのだろうな…そして納得したこの男が襲った理由はネオタイムジャツカーやらハルカの怨念とかじゃなく

「キャロルとエルフナインという事への嫉妬？」

「醜いねえ〜」

「黙れ!! 貴様等が俺の嫁を…あ、がああ…」

「これ以上口を開くな、下郎が」

「ハルト!?!」

ナツキが見るとハルトが超能力を使い男の首を絞めていた

「キャロルが誰の嫁だと?」

「お……おれの…」ふざけるな彼女は俺の嫁だ貴様如きが触れて良い存在ではない!」あ

「があー！」

「理由次第では生かしてやる事も考えたが…貴様のような輩はまた襲いに来る…ならば障害は排除せねばな」

ハルトは手鏡を取り出す甲高い金切り音が聞こえたナツキは意味を理解したのか

「おい待て止めろハルト!!」

しかし静止虚しく男はミラーワールドから現れたベノスネーカーに頭を齧られながらミラーワールドに引き摺り込まれたのであった

「たんと食べるよ」

「何で…何で!!」

「いやあ最近、加工食品ばかりだったから新鮮なお肉渡せてよかった「違う!!」あ？」

「どうして食わせる必要があつた！お前ならもつとスマートな方法があつただろう!!」

「はあ……甘いんだよ、あんな輩のさばらせるのは百害あつて一利なしだ俺やキャロル達の精神衛生的にもな」

「けど記憶を消せば」そんなもしもには興味はない」ハルト!!」

「改めて言っておく俺は俺の特別と居場所を守る為なら何だってやる…彼女達を守る為なら必要なら世界だって滅ぼしてやる」

「お前……」

「あんな餌より回収したドライバーの調査を……へ？」

「……ん？っ！」

そこにいたのは橙色の髪をした拘束具？なのか一歩間違えたら色々アウトな服装をした双子が此方をまじまじと見ていたのだ

「おいお前、あの黒い鎧は何だ？」

「疑問、教えてください」

「……………」

それを見てキャロルとエルフナインはあちやうと言う顔をしたのは言うまでもない

—————

そして急遽 ラタトスクの面々に精霊エンカウントの連絡を取り土道の居場所を聞いたのだが

「まさか近くの臨海学校に来てたとは…」

「予想外だったね」

ハルトは錫音と一緒に件の施設に来ていた折紙に会った際のことも考えてなのだが

「ほれナツキよ、私にあの鎧の秘密を話すと良い」

「笑止 耶俱矢ではなく私に教えてください」

とブジンソードに興味があったのが2人はナツキ言い寄っており

「ナツキさん？」『MAX HAZARD ON!』

エルフナインが嫉妬に狂いながらハザードトリガーとドライバーを構えていたのである

「ちよ、ちよっと待ってくれ！エルフナイン!!」

と止めに入ろうとしていたが

「……………おい」

「ま、マドカ!?!何でここに!?!」

「私に質問するな……………私と言うものが居ながら他の女を見ている? 答えろ」
『アクセル』

「い、いやあれはちよつと変身してるところを見られたら何故か興味持たれたと言いますかあ……………何と言うか……………」

事情を説明するとマドカは変身するのをやめ
「おいエルフナインと言ったか、ちよつとこい」

「はいー!」

2人が何かコソコソと話している……ああ俺の処刑方法を考えているのか…

「終わった色々…」

そんなナツキの声は誰にも聞こえなかった

—————

ハルトは精神世界に戻ると同時に

「はいはい皆んな！二日酔いにはしじみの味噌汁だよー！飲んで早く寝て治す！それが一番!!」

皆を労っていた、流石に精霊が絡んできるとなったら二日酔いで動けないのは困る

「た、たすかる……ハルト」

「良いつて事よ、それよりごめんな折角の休みを台無しにして」

「気にするな相棒……だが」

アナザーデイケイドが目線を向けると

「いやあ！寝起きの迎え酒が効くナ!!しじみの味噌汁がつまみに丁度良い！」

と酒盛りを再び始めるアナザーWに突然

『コネクト』

頭目掛けてヒビイロノカネ製の金だらいが直撃したのである

「あがつ！」

「あ！アナザーWの頭部に金だらいが！」

「しかもアナザーカブトのパージされたマスクドフォームの装甲を加工してる！DIYに匠の優しさを感じるぜ!!」

「何て威力だ!」

と慄く相棒達に思わず

「お前は肝臓を労れ!!」

その一言が精神世界に響いたという

—————

現実世界に戻ると頭を抱える

「はあ……あのバカ共は」

「大丈夫かいハルト？」

「ああ迎え酒しようとしたバカに仕置きした」

「相変わらず君の精神世界ってカオスだね」

「まあな」

最初は混乱したが最早慣れたしいない方が不自然で気持ち悪いというのが難儀だな

「しかし少年君がここにいと聞いたんだが…間違えた？」

「そんな事ない」

「「うわあ!!」」

「って折紙かビックリした」

「士道ならいる…私が保障する」

「なら大丈夫だな」

「そうね折紙が言うなら大丈夫ね」

「いや何処で安心してるんですか!!」

「お、少年君久しぶりだね」

「はい!…えーと精霊の子は?」

「あそこ」

と目線を向けると修羅場が広がっていた

「…………え？あの人は？」

「俺の友達」

「あ、成る程」

「何処で納得したかはさて置き、一先ずあの子達から話を聞きたいんだよ」

そしてナツキの説得で令音、琴里、士道、ハルト、錫音、ナツキ、エルフナイン、マドカの面々が精霊 八舞耶俱矢と夕弦に話を聞くこととなった

本人曰く 本来は八舞と言う1人の精霊だったのだが突然 2人に分裂した

その為 1人に戻ろうとしたが何方が主人格になるかで揉めている 数多の勝負を繰り返したが引き分けの平行線

「そこで武力で決めようとしたらナツキが漆黒の鎧と刀を持って大立ち回りしておった

のを見たのだ」

「同意、その通りです」

「成る程ね、つまり戦わなければ生き残れない訳か……そりや大変だねえ」

とハルトはカラカラ笑いながらお菓子をつまみ出す、すると突然耶俱矢がハツとした顔になり

「そうだまだ競い合っていないものがあつたぞ！」

「疑問、それは何でしょう？」

「それは魅力！女性としての魅力でナツキを落としいあの力の秘密を吐かせると言うのはどうだ！」

「驚愕、その案はありませんでした……しかし中の下である耶俱矢の美貌では私に敵いま

せん」

「な、何だとお!!」

「……あの子の顔で中の下とか辛口よ」

「……………はあ!!俺?!」

ナツキは勝負の対象にされたことに驚き

「ほお……………」

エルフナインとマドカは光が消えた笑みを浮かべていた、それには令音も少し怯える程であった

「しかし霊力の封印は「それなら大丈夫です!」え?」

エルフナインが自慢げに取り出したのはブランクフルボトルである

「2人の好意がMAXに溜まったその時に精霊の力が抜けるボトルを作りました、ただ抜き取るだけなので彼にふりかける形にはなりません」

「凄いよエルフナイン！いつそんなものを！」

「精霊の話聞いてからです、ビジネスでナツキさんの唇は奪わせません！徹夜で作りました!!」

「スゲエ!!ならあとは俺の仕事か！」

「はい!……ですがナツキさん……終わったら覚えておいてくださいね」

「………はい、ハルえもんたすけて」

「知らん、コレばかりはどうしようもない」

「そんな———!!」

そしてナツキを巡っての双子の争いが始まったのである

「あの人達が前にハルトさんが言ってた双子……これは危ないですね…最悪マドカさんとも……よし!!」

とエルフナインは思い立ちマドカの所へ動くのであった

八舞テンペストー喧嘩と裏で動くものー

そして始まったナツキ争奪選手権

まず最初は自己紹介

「改めて名乗ろう私の名は八舞耶俱矢！世界に名を示す颯風の巫女とは私のことよ！」

「颯風……あ」

その時、ナツキは思い出したのである

かつて京都で出会った老ハルトが残した爆弾発言を

『颯風の姉妹はおらんのか？家族サービスは大事じゃよ？』

しかしナツキは平常心を保つ、伊達に魔王相手に腹芸をしていないが……それよりも

「ああ…厨二病か」

思ったことが素直に出た

「ち、違うし!!精霊として上位者として威厳ある話し方してるだけだし!!」

「威厳……か」

ナツキの目線の先には

「うん………やっぱ…覇権アニメと言われるのが分かる」

「あの…ハルトさん何を見てるんです？」

涙ぐむハルトが気になったエルフナインが話しかけると

「前に会った並行世界の俺（スパイダークモノス）から勧められたアニメを見ていたんだ名前は…もっふんと一緒にだ!!」

「へえ、面白そうですね」

「おう、以外と感動するんだ錫音も見ようぜ」

「仕方ないなあ…」ポテチとコーラあるよ」それを先に良いなよ」

と皆でアニメを見始めたハルトを見てポツリと呟く

「やつぱり威厳って大事だよな…」

「ちよい待てタヌキ、テメエ今何処見たか教えろ」

「いや一応は王様なのに威厳0の奴もいるなあと『コネクト』あいたあ!!」

「あ？俺ほど威厳ある王様いないだろ？」

「あ、ハルトお茶買ってきて」

「へい錫音！午前の紅茶無糖です！」

「うむ、苦しゆうない」

「……で？俺の威厳が何だって？」

「既に地に落ちてんだよなあ…尻に敷かれてるあたり」

「何なのアイツ。超生意気じゃん！」

「んだとガキンチョ！テメエの上半身と下半身一刀両断して耶／倶矢にしてやんよ！」

「そんなフレなんとかさんの話題を出すな」

珍しく煽り耐性の低いハルトである、それも一重に相棒達が不在故の虚勢であるが……それは錫音以外には悟られていない

「はあ……耶倶矢、あの人は常葉ハルト此処とは違う世界にある国、逢魔王国の王様だ」

「はあ!!王様!!こんなのが!?信じられない!!」

「いや全くその通り」

「ナツキは兎も角錫音は味方しろよ」

そして

「宣言、八舞夕弦…宜しくお願ひしますナツキ」

「おう、宜しくな……つて近い近い」

「離れろだし夕弦!!」

「説明 既に勝負は始まっていますので卑怯ではありません」

「そ、そうなのか…」

「疑問、何故彼女達は私を睨みつけているのでしょうか?」

「へ?……つ!!!」

ナツキが目線を向けると、理性で抑え込んでいるが嫉妬が隠しきれないエルフナインと本能レベルで嫉妬しているマドカがいる

「ん？ああ、あの2人はナツキの彼女」

「驚愕、ナツキはモテるのですね」

「それどういう意味!？」

「返答、恋人がいるとは予想外でしたので」

「俺に恋人いるのってそんなに変かなあ!」

「ふはははははははははは!」（エボルドライバー風）

「爆笑すんなハルト!腹立つ!!」

そして勝負の内容を整理して選んだ方を助ける事になったのだが その夜

「はあ……」

ナツキからしたら人を一人殺すようなものなのだ悩みは尽きないし、ため息も溢れる

「どうしろってんだよ」

「んなのテメエで決めろ」

「なあハルト…俺どうしたら良い？」

「まあ今のお前じゃ助けられねえな保証してやる」

「っ!!」

ナツキはハルトの胸ぐらを掴むがハルトは

「何だ？慰めで大丈夫なんて優しい言葉でもかけて欲しかったか？…つか手エ離せ」

万力の如き力でナツキの右腕を掴みに来たのだ

「っ!!」

「まったく皺がつくだろうが…お気に入りになんだよコレ」

「何で…何で俺には無理って言えんだよ!!」

「そんなん決まってる、どっちか片方だけを助けたいななんてスケールが小さくて笑えてくるな」

「っ!!なら他にどうすれば良いんだよ! 2人の話なら生き残るのは何方か片方なんだぞ!!」

「んな不条理を捻じ曲げる位の覚悟もねえなら論外だな少なくとも俺と錫音の喧嘩を止めた、あの男なら恥も外聞も捨てて助力を乞うぞ?」

「っ!!」

「第一、俺の憧れのヒーロー達なら全員助けるを絶対選ぶ…いつだってそうさ想像通りの未来じゃない…あの人達が見せてくれるのはそれ以上のファイナーなんだ…俺はあの希望の魔法使いからそれを教わった 諦めなければ希望はあるって」

「人間皆、お前や仮面ライダーみたいに理不尽に抗う力なんて持ってなんかいないんだよ!!!」

「は？死に戻り出来る奴に言われたく無いし、俺はそんな抗う力を持った結果人間辞めて化け物ですが？まあ後悔はないけど」

「っ!!!」

「お前がそんな普通の人間だから…まあ死に戻りしてでも貫きたい理想があるから…そんな男だからこそ俺は信頼して力を預けてんだよ」

「信賴してるなら会った頃の俺を囲んでカゴメカゴメしたり、ゴミステーションに放り込もうとしないと思うけど」

「……んん!!お前は両方助けたいんだろ?片方だけなんて選びたくないんだろ!なら選ぶな妥協するな!もつと欲張れ、最高のハッピーエンドを目指す為に呆れるまで死に戻りしたんだろ?」

彼は選ばなかった、全部欲しいと大切だと思い、その不条理に挑んだ…結果は押し知るべしだが

「!!…いや途中の展開で色々残念な事になってるよ」

「つせえ妥協なんて選ぶんじゃないよ…それと俺兄妹の仲直り方法とか聞くなよ絶対に参考にならないから」

「ハルト……お前……いやまあその通りだけど」

「まあ俺は別にどうでも良いけどな…けどエルフナインとマドカの機嫌が悪いままだと俺が困る」

「そつちかよ」

「いや俺が止めないとお前食われるぞ性的な意味で…この間なんかキャロルから聞いたけど薬の調合頼んだとか監禁しないとかな言ってたらしいし…あの子以外と闇深いんだな」

「彼女を止めて頂いて本当にありがとうございます!!」

この時ばかりはナツキも全力の感謝を告げたのであった

「まあテメエの往生際の悪さと人の良さがあるからキャロルも千冬も大丈夫って判断したんだろうさ…俺の惚れた女達の目を曇らせてるなら並行世界のお前を殺し尽くしてやる」

「脅しが本音に聞こえて怖いんだけど!!」

「はははは！嫌なら頑張れよナツキ」

と足元に小袋を置くとハルトは笑いながら去って行った

「あいつ…何入れてんだ？爆弾とかじゃないよな？……っ！これって!!」

ナツキは渡された物を見て驚いたのである

『良いのか？相棒』

「構わねえよ、つかアイツ等が言ったんだろ？あのアホを見極めたいって」

『まあそうだが』

「最悪俺が全部回収するから安心しな」

『そうか…すまん頭痛い』

「痛いなら早く寝ろ」

『うむ……』

ハルトがナツキに渡した物 それは

—————

一方その頃 ピースメーカー艦内にある娯楽施設では大人モードになったエルフナ
インが

「本当にナツキさんはボクのが分かってません!!」

やけ酒をしていた

「お、おい飲み過ぎだぞ」「キャロルは黙っててください!!」「う、うむ」

普段の彼女ではあり得ない程、感情が爆発していたのである

「そもそも！ボクと言う結婚を前提とした彼女がいながら他の女の子に言い寄られて拒否しないなんて納得できません!! 未来で結婚してるとか知らないんですよ!! 今はボクだけを見てください!! まあハルトさんみたいな女誑しなら分からなくもないですが!」

「それはそうだが…おい待てさりげなくハルトを馬鹿にして…ないなハルトめ銀狼なんて新しい妻を迎えおって」

「それにボクだって色々頑張ってるんですよキャロル!! 休みの日は2人でショッピングデートしたり」

「うんうん」

「寝てるナツキさんの布団に潜り込んで添い寝したり」

「う、うん？」

「その時にこっそりキスしたり！お風呂でハプニングで一緒に入る事もありました！」

「おいちよつと待て！それだけ関係を進めておいてあのバカは何故手を出さん!!!」

思ったより肉食系だった妹の行動にキャロルは頭を抱えた

「一体誰に似たのか……ああオレか……」

何なら先程エルフナインがしてた事、コンプリートしており更にその先まで行ったのだから

「キャロルは良いですよね!!ハルトさんみたいな責任を取れる男の人と一緒に！」

「まあ何せオレが選んだ男だ」「その割には記憶喪失のフリして突き離しましたよね？」
ぐっ！あ、アレはだな」

「あの時、ボクがハルトさんに助けを頼まなければ今は無いですよキャロル？」

「そ、そうとも言え「貸しと思うならボクに協力してください」は？」

「そうですね…具体的にはナツキさんが言い逃れ出来ない既成事実…そう子供を作るための薬とか！」

「おいマスター水を頼む！こいつ酔っ払ってキャラ崩壊しかけているんだ！」

「直ちに!!」

と水を用意しているが

「本当にナツキさん……ボクが嫌いになったんでしょうか？」

「そんな事ないだろうナツキはお前を愛しているだからこそマドカや姉妹の關係に人一倍悩んでいるのだ…ハルトの奴なら躊躇いなく娶るだろうから羨ましくもある」

「はあ…ナツキさん…」

「全く…そんなに好きなら閉じ込めてでも一緒にいれば良いのだ」

「そ、その手がありましたか！流石キャロルです！早速ナツキさんを密室に閉じ込めて監「水を飲め!!」んぐ……ぼ、ボクは一体何を？」

「おいエルフナイン、お前は酒を飲む時はナツキという…オレには手が終えん」

「え？」

はあ、とため息を吐くキャロルであった

それをハルトに話したのは言うまでもない

—————

そして翌日

『俺達完全復活!!』

アナザーライダー達が二日酔いから回復するなか

『あ、頭いてえ…』

一部例外がいた

「迎え酒なんてするからだよ」

『いや頭の中と外が痛い…んだ』

「そりや金だらいい落としたからなあ」

『お前のせいなあ！』

アナザーWは二日酔いで苦しんでいたが自業自得なので少し寝てて貰うとする

「さて……と、答えは出たかい？ ナツキ」

「ああ……俺は2人を助けたい優劣なんてなく2人に生きてて欲しい！だから力を貸してくれハルト!!」

「断る！」

「ありが……ええ？」

「冗談、良いよー」

「どつちが!？」

「ははははは！」

「誤魔化すな！おい！どつちだつてんだよ！」

「それより俺以上に説得大変なのがいるよー」

「へ？」「ナツキさん？」 あ…はい」

ナツキはエルフナインとの話し合いになったので

「んじゃ俺は行くかな」

ハルトはカラカラ笑いながら離れる

「何処にです?」

エルフナインが訪ねたので

「何処だって良いでしょ?別に」

そして部屋を出るとハルトはアナザーウォッチを持つと

『何処に行く』

「俺達に喧嘩売りに来たバカを殴りに」

目が光ると同時にハルトは転移したのであった

—————

私はエレン・M・メイザース、DEM社が誇る世界最強の魔法使いだ

今回の任務は精霊 プリンセス（十香）とこの地で存在が確認されたウィッチ（七罪）と先日DEMの研究所から逃亡したシスター（二亜）の捕縛

そして任務を開始、カメラマンに扮してやつとプリンセスの情報を手に入れたが謎の三人組に妨害され続けやつとの事でチャンスを掴んだぞ

「ダメでしょ良い歳の大人が、こんな事したらさ…ある人が言ってたよ若人の青春を奪う権利なんて誰も持ってないってさ」

肩に謎の剣を担いだ男に邪魔されたのである

「何者です貴方は」

「見てわかんない？アンタの味方じゃないのは確か」

その男の不適な態度に、ハッと理解した

「成る程…貴方があの三人娘（アイ、マイ、ミイ）のリーダーですか」

この男がリーダーというのなら納得ですね…あの三人娘の指示もさりげない妨害がメインでしたが私の実力行使を察して出てきましたか…大物が釣れましたね

「へえ三人娘（テストロッサ、カレラ、ウルティマ）の事を知ってるとは…流石というべきかな」

この女、この世界で暴れてない筈の逢魔三強について知っているだと、そしてあのISに似た顕現装置なるパワードスーツ…やはりISの技術が漏洩していた……っ！間違いないDEMのバックにはネオタイムジャッカーかハルカが関与している！

「当然です、世界最強を舐めないで貰いたい」

この男の戦闘能力は未知数ですが私は負ける訳には行きません！

「へえ…最強か大きく出たな」

伊達で名乗れる称号でない…つまり奴はこの世界にあるネオタイムジャッカー支部最強の戦士という事か！

この段階で両者に致命的なすれ違いが生まれたのだが本人達でさえ知らないのである

「単刀直入にウィッチ（七罪）シスター（二亜）プリンセス（十香）の身柄を頂きます」

「誰が誰のことさっぱり知らんが分かるのはウィッチ（錫音）か…ほお俺の特別に手を出すなら容赦はしない！」

「貴方の特別ななど関係ない全てはあの方（アイザック）の為に！」

「あの方（クジョー）の思い通りになどさせない！俺が彼女（錫音）達を守る!!」

『何だろう…何か話が噛み合っていない気がする…』

この最強2人…腕は確かなのだが何処か抜けていたのであった

エレンは顕現装置でISのような装甲を展開

ハルトはアナザージオウに変身すると

方やツインギレード、方やレーザーブレードが交差するのであった

そんなハルトの戦いを知らないナツキはと言うと耶俱矢と夕弦に

「オイル塗ってくれない？」

「同意、私もお願いします」

「ふあ!!」

ナツキはナツキの戦いが始まっていたのであった

—————

ハルトvsエレン

「っ！」「っ！！」

ツインギレードの二刀流とレーザーブレードの剣撃の交差は目にも止まらない速さとなる

アナザージオウは未来視により攻撃と防御が効率よく出来るのだが

「っ！」

一部だけ攻撃が掠り始めている、そう未来視が外れているのだ

「……………」

ーどうなってるんだ？未来視の精度が落ちてる？ー

『違うぜ、相棒の攻撃パターンから自分の攻撃を変えてんだ』

ー並外れた実戦経験から出来る手…最善手だからこそ読まれやすいって事かー

そして罅迫り合いを終えるとエレンは感心したように

「やりますね…しかし貴方の攻撃パターンは見極めました、確かに中々の反応や身体能力ですが効率重視過ぎる故にパターンが読めやすい！」

「確かに今まで予測に依存してたから野生の勘とやらも見捨てた物じゃないな」

アナザージオウはカラカラ笑う

「勉強になるな流石最強」

「煽っても無意味です、次の一手で首を貫きます」

「残念だが、アンタは既に負けてんだ…俺との戦力差でな」

そしてハルトは新しいアナザーライダーへと変身する

その青い姿のサメのような頭部と口元に流れるのは食らった者の返り血のように滴り落ちる

13ライダーの枠組みから外れた世界で生まれた新たなライダー

『アビス』

深淵より襲い掛かる鯨 アナザーアビス

「いっふいっふ」

アナザーアビスは現れたカードを握りつぶす

『アドベント』

「何?.....っ!!」

すると近くの海面が反射し 鏡となっており其処から飛び出したのは

「!!!」
「!!!」
「!!!」

エビルダイバーとアビスハンマーとアビスラッシャーという海をナワバリとするミラーモンスターである

「!!!」

『相棒、ボルキョウサーの奴が俺を忘れるなー!っって言ってるぞ』

「……そうだった！アイツ蟹じゃん!!」

『おいー!』

「成る程…精霊のような力も使えるのですか益々放置して置けませんね!!貴方の身柄も捕縛しますー!」

「やれるもんならやってみろ!」

『ソードベント』

両手にアビスセイバーを召喚し再度の剣撃と洒落込むと呼び出したアビスラツシャーが背後からアビスハンマーが後方から援護射撃をする

「っ!!」

エレンも流石に地上戦では分が悪いと思い飛翔するが、そこは

「!!!」

エビルダイバーのナワバリである

「っ!!!」

その体当たりには遭い不時着するも反撃とばかりにレーザーガンで攻撃するが

『ガードベント』

現れたシエルディフェンスで防ぐとお返しとばかりに

「溺れろ」

『ストライクベント』

右手に装備したアビスクローから放たれた高圧水流の一撃が襲い掛かる

「っ!!」

慌てて回避したエレン

「まさか…これほどの力とは」

「まさか俺の力がこの程度って思われてんなら心外だな…初めてだけど試してみるか」

アナザーアビスが抜いたのはアナザーオーデインから借りた

戦闘において不思議な事が起こる事で定評のあるカード

『ストレンジベント』

「どれどれ、どんなカードになったかな？」

握りつぶすと新しいカードへと変わると一度中身を確認する

変異したカードの名前には翼と青い大波が描かれこう書かれていた

『サバイブ・激流』

「……………づえ!!」

生存を勝ち取る為のカード 認知した瞬間に海が荒れ巨大な津波が巻き起こる

「俺の知らないサバイブカード!?! いやいやあのカードで烈火、疾風、無限の3枚しか無いんじゃない」

『そうではない』

『知っているのかアナザーオーダーイン!』

『然り、我がオリジナルは幾度となくタイムベントで時を戻しライダーバトルを行った

のは知っておろう』

「うん」

『その繰り返しに当たりオリジナルのオーディンは烈火と疾風以外のサバイブカードを製作し所持していた事もあるのだ…まさかストレンジベントで、消えた歴史のサバイブを引き当てるとは予想外だったが』

「はあああああああ!!何その設定初耳なんですけどお!!」

ライダーオタクで今までやってきた俺のアイデンティティが少し傷ついたのである

『契約者よ、貴様が見ていた仮面ライダー龍騎という作品はオリジナルが経験したライダーバトルの極々一部の上澄みに過ぎんという事だ』

成る程

「た、確かにテレビスペシャルやRIDER TIME龍騎だと俺の知ってるライダーと変身者が違うことがあったが…まさかサバイブまでも」

「何をごちゃごちゃと!!」

とエレンが斬りかかろうとするがボルキャンサーやエビルダイバー達が邪魔をする

「おのれ!!」

「ヒーローの変身シーンを邪魔するなって事ですよ」

そしてアナザーアビスは生存を勝ち取る為、新たな力を解放した

『サバイブ』

その姿は先程よりも先鋭化されたサメの意匠に左手に収まっていた召喚器アナザーアビスバイザーが龍騎サバイブのような銃型召喚器アナザーアビスバイザーツヴァイ

へと変異しその開閉した口へとサバイブカードを入れたのだ

深淵から浮上し激流を超え生存を目指した鮫

アナザーアビス・サバイブ

「祝え！全アナザライダーの力を続け！時空を超え覇を唱える我が魔王の新たな力、その名もアナザーアビス・サバイブ！外史のアナザーを呼び出し瞬間である」

「あ、あなたは…」

「ウオズ！いつの間に！」

「このような事もあるかとスタンバイしておりました」

「………流石だぜ!!」

「茶番に見掛け倒しの力だ、そんなハツタリが通用する相手と思うなあ!!」

「それは自分の体で味わえ」

『ファイナルベント』

するとアビスハンマーとアビスラッシャーが呼吸を合わせて海に飛び込むとアビスドンが浮上するとバイクに変形してエレンに体当たりしたのである

「あがあ!!」

その威力はエレンでも流しきれずに近くの樹木に激突したが威力はその樹木を容易にへし折つたのである

「あ、あれえ…今のは俺が乗り込んで一緒に体当たりするのがお約束では? ……え、えええいままよお!!」

ダメ押しとばかりにアナザーアビスバイザーツヴァイの引き金を引くと高水圧カッターと化した水刃がエレンの顕現装置を一刀両断したのであった、肉体を切り裂かなかったのは装置の堅牢さかハルトの優しさか

「……………う……………ぐ……」

「さて、コレでゲームオーバーだ」

トドメの一撃を放とうとした時に

大竜巻と同時に耶俱矢と夕弦が喧嘩していたのだ

「はあ!?!何してんだアイツら!」

「っ!」

その際にエレンは転移装置で撤退したのである

「しまっ…ああ！くそ…ナツキ何でああなった！」

変身解除したハルトは通信機でナツキを呼び出し事情を聞く

「えーと…キノコかタケノコの何方が優れているのかで喧嘩した」

「お前バカじゃねえの！そんな二大派閥論争を引き起こしたらマジギレにするに決まってるじゃん！俺だって仮面ライダー、スーパー戦隊、ウルトラマンの誰が一番優れてるかなんて選べねえよ！みんな違って皆んな良いんだ！」

「どうしたら良いんだよ！」

「取り敢えずナツキは2人を説得しろ…そうだな…こう言え至高はコアラだと！」

「お前も混ざるんかい！！つか余計な火種を放り込むな！！」

『ねえハルト、ちよつと良い?』

「銀狼かどうした?」

『今このあたりの地形を調べたらさ面白いものが埋まつてるんだ、トルーパーの重機で掘り起こせなくもないけどさ、ハルトの力で掘り起こせないかな?その方が早いし』

「面白いもの?」

『うん…多分だけどキャロルや束が喜びそうな奴…実験材料にはうってつけだよ』

「何だそれ?」

『エルフナインが使ってるビルドシリーズに必要な超超高濃度のネビュラガスだよ…けどコレおかしいな反応が通常のそれとは違うね…ガスと言うより……圧縮された液体?』

「分かった掘るけどウオーカーの手配を頼む…あの液体なら利用価値は大いにある」
『フォーゼ』

ハルトはアナザーフォーゼになると

『ロケット…ドリル オン』

「地中来たー！ー！」

そのまま地中に潜航したのであった

その頃ナツキはと言う

「辞めろ2人とも！至高はコアラなんだ！」

ハルトの言葉をそのまま言ったのだ、当然

「邪道!!」

「ですよねー！ー！」

「な、ナツキさー！ーん!!」

そして2人の天使により吹き飛ばされたのであった

「よくも…よくもナツキさんを！確かにコアラは邪道です…至高は小枝に決まっています
！」

「お、おいエルフナイン…まさかあの論争に…」

「参戦します！この戦いを終わらせるのはボクです!!…あとナツキさんにかけて戦っているのにそのナツキさんを雑に扱うのはボクが許せません!!」

「エルフナイン……」

「けど……傷ついたナツキさんをボクが優しく慰める……良いですね……いやその方がボクに依存してくれるのでは？」

「え、エルフナイン？ナツキの救助は？」

「あ、それは後で良いですよ、ナツキさんは頑丈なので死ぬ事はありません……多分！」

「不安しかないぞ！」

「まあ少しは反省が必要ですからね……では！」

エルフナインが取り出したのは縦に長いボトルであった

「それは？」

「とある方から貰ったハザードを暴走せずに使えるギョインギョインのズドドドドドド
！な装置らしいです！」

「擬音ばかりで分からん！具体的な説明をしる科学者だろお前も……しかし私には空を
飛ぶ事は出来ないぞアクセルで飛び道具がないから援護も出来ない」

「大丈夫ですキャロルから聞きましたが、マドカさんも空を飛べるんですよ！」

「何!?!」

「前に渡したアクセル変身セットの中に四角の箱がありませんでしたか？」

「箱?…この事か」

「その箱とアクセルメモリをくつつけてください」

「()う?」

『アクセル アップグレード』

「おお!」

「行きますよマドカさん!」

『MAX HAZARD ON!』

「ああ」

そして縦長のボトル フルフルラビットタンクボトルを振りダイヤルを回す

『R a b b i t! : : : : R a b b i t & R a b b i t!!』

「ああ!」

『アクセル!』

「行きます！」

『ガタガタゴットン！ズタンズタン！ガタガタゴットン！ズタンズタン！！』

アクセルドライバーの信号のような待機音が鳴り終えると

エルフナインは指を鳴らし、マドカはハンドルを握ったままドライバーを起動して言うのである

「変身！！」

『ブースター！！』

マドカは黄色のアクセル、それは空を飛ぶ為のエンジンを宿した最速の戦士

仮面ライダーアクセル・ブースター

『OVER FLOW』

そしてエルフナインはビルド・ハザードフォームになると同時に現れたのは

「!!!」

赤いウサギのロボットだった

エルフナインがキャロルと一緒に仮面ライダーを見た際 一番好きなシリーズは実はオーズではない

「ボクは…あの人みたいな科学者になるんです!!」

愛と平和を胸に掲げた天才物理学者が生み出し作り出した物語が大好きなのだ

「つ!!か、可愛い…」

マドカはそのウサギロボットの愛くるしさに心がときめいていたが、ウサギロボットはバラバラになりハザードフォームの新たな装甲として合体する

『紅のスピーデージャンパー！ラビットラビット!!（ヤベーイ）ハエーイ!』

本来は空中展開した装甲に自分からくつつきに行く戦兔式が正解なのだが、エルフナインは自分の体の負担を考えて葛城式を採用したのである

破壊ではなくみんなの明日を作る その名は

「仮面ライダービルド…作る、形成するって意味のビルドです…以後お見知りおきを」

仮面ライダービルド・ラビットラビットフォーム

誕生！

八舞テンペストー目覚めー

前回

エルフナインとマドカがラビットラビットフォームとアクセルブースターに変身したのである！

「な、何だその姿は！」

「驚愕！ナツキやハルトのよりもヒーローぽいです！」

「当然です！この姿はナツキさんが変身しているアナザーのオリジナル！愛と平和を守る戦士！仮面ライダーです！！」

「ほお仮面ライダー…カッコイイではないか！」

「ありがとうございます……この力でお2人の喧嘩は止めさせてもらいます！」

「まずは私に任せろ！」

マドカが高く飛び上がると体の各所に装備されたブースターが点火し2人の場所まで接近する

「ほ、本当に飛べた！」

「飛べるくらいで浮かれるでないわ！」

と耶俱矢が持つ巨大な槍が襲い掛かろうとしたがエンジンブレードで鏝迫り合う

「なっ！」

「伊達に毎日、千冬姉さんに扱かれていない！」

「耶俱矢！」

慌てて助けに入ろうとしたが

「余所見は嚴禁ですよ！」

ラビットラビットフォームの跳躍からの蹴りにより地面に落とされたのだ

「っ！きやつ！」

「夕弦！」

「さあ全力で来て下さい、一対一で勝てる程私達は弱くはありませんよ」

「ああかかつてこい…お前達に教えてやる…至高はチョコパイだ！」

「え？マドカさんもですか？」

「至高はキノコ／タケノコだ（です）!!」

「えええ!!」

—————

その頃 ナツキは吹き飛ばされた先で

「つ！え、エルフナインがラビットトラビットになった！つかマドカが飛んでるう!？」

とんでもない光景を見ていたのであった

「つか何で2人が参戦してんだ！」

まさかナツキもキノコタケノコ論争のみでここまでのことになっているとは欠片も

思ってたなかった

「と、止めないと!!」

ナツキが走り出す…その時

「うわあああああ!」

足元から間欠泉のように水柱が上がったのだ

「え…っ! な、何事!!」

同時に

「地上来たー!」

アナザーフォーゼがロケットドリルで地上に戻ったのだ

「は、ハルト!？」

「お、ナツキじゃん…何でこんな所いるの？」

「いやそれこっちのセリフなんだけど…何?温泉でも掘つてんの?」

「いやあゝ銀狼に言われて地面を掘削したらさ天然のファントムリキッドが見つかったんだ!いやあ!大量大量!」

「ファントムリキッド?」

説明しよう!ファントムリキッドとはネビユラガスが世界同士が融合した際にガスの圧縮されて液体になった物を指す!

「……それで何が出来るの?」

「強力なアイテムが作れる！……いや待てよ……そうなるよこの世界はビルド風と言うと新世界になるのか……つまり………っ銀狼！日本にある倉庫やフリーマーケットにエルフナインが使ってるようなツールが売買されてるか調べられる!？」

『朝飯前だけど?』

「大至急頼む」

『了解………あ、見つけたよフリーマーケットで蜘蛛型ペットロボを売ってるスカジャンの人がいるって』

「っ!!ありがとう銀狼!すまないナツキ、俺はキャロル達を連れて行かないといけない場所がある!さらば!!」

「いや待ってハルト頼む!みんなを止めてくれ!」

「やだ」「え!」

「お前の恋人達だろ、他の家庭の正妻戦争仲裁とかしたら馬に蹴られるし」

「いやアレ止められるのは「お前だ」え…」

「お前に渡した小袋を開けたんだろ、その力があれば出来る」

「ああ……けど何でコイツらを」

小袋の中身はアナザー2号ライダーシリーズウオッチだったのだ

「俺はジオウのVシネとかファイナルステージは見てねえから一概には言えねえけど…平成1号全員が集まってアナザーグランドジオウに至ったなら…平成2号のアナザーウオッチで同じ事が出来ると思ってるな」

「おおー！」

「多分な！」

「おい!!…けどクウガに2号ライダーはいないだろ？」

「え？ 一条さんが2号でしょ？」

「変身しないよあの人！」

「馬鹿野郎！あの方は変身しなくてもすげえんだぞ！」

あの人ほどクウガのバディが似合う男はいない変身出来なくとも心は仮面ライダーに通じている…つまりクウガの2号とは一条刑事なんだ！（クウガ過激派）

「違くない!？」

「えく…んじゃコレ使う？」

とハルトが見せたのはナツキも初めましてのものだった

「そのアナザーはだれ？」

アナザークウガに似ているが何処かサナギのような印象を受けるのだが

「え？アナザープロトタイプクウガですか？」

「完全に初めましてだよ！テレビ本編には出てない子だよね！！」

「おう、プロトタイプクウガは小説版で出た仮面ライダーだからな！」

プロトタイプクウガ、アークルの試作品を使いグロンギと戦った戦士 見た目はグロイングフォームと同じだが作品内でゴ集団の個体を封印した事からも戦闘能力は高い

「けどコレはダメだな」

と懐にしまったのだ

「何で！」

「コイツは危険なんだよ……心の闇があると直ぐにアルティメット（ブラックアイ）になる可能性があるんだ」

「爆弾じゃん！この間のハルカが使ってたヘルライズより危険じゃん！」

「直接的な被害が本人だけの分良心的なんだけどなあ……」

「一緒だよ！……けどアナザー2号達の力を合わせれば俺もアナザーグランドゲイツみたいなのに慣れるって事だよな！」

「かもなく、んじゃ頑張れ」

「え！ハルトは助けてくれないの!!」

「今回はお前が為すべき事だ」

「本音は？」

「俺はいるなら早く戦兔さんと万丈さんに会いたい」

「それが本音だろうが！後でも行けるから助けてくれよ！」

「いや今回俺が出来るのは手助けだけだよ…じゃねえと意味ねえし」

「それってどう言う「んじゃあ」あ、おい！」

ハルトはドラム缶にフロントムリキッドを詰めると何処かへ転移したのであった

「何でだよ…何で」

『それは君自身が止めないとダメだからだよ』

「え？」

『ハルトは自分の奥さんの喧嘩くらい自分で止めろって言いたいんだよ』

「ええ……」

『お前は どうしたい？このまま放っておいて大事な人が傷つくのを傍観するのか？』

「っ！そんな事する訳ないだろう！エルフナインもマドカも八舞姉妹も俺が助ける！」

『どうやって？君は魔王から借りた力で戦ってるだけだよ』

「……………」

『君の力は借り物の紛い物だ、それでど「ない」え？』

「借り物でも何でも力は力だ！俺は彼女達を助けたい！それは我儘か？んなのテメエらの王様だってやってんだろうがよ！あの我儘王の所為でどれだけ大変か知ってる癖に！！」

だがあの男がどれだけの道を歩んで来たかを知っているからこそ

「俺だってああ、なりたい！大事な人を分け隔てなく助けられる力が！特別な人を守れる力が！……だから頼む！そんな力があれなら俺に貸してくれ！！」

ハルトのように守る為に敵対するものを根絶やしになどしたくない

ただ甘いと言われても貫きたい信念がある

『立てますか？』

あの時、彼女が手を伸ばしてくれたから今の俺があるのだから

そして

『合格だお前さんの理想と生き様、俺に見せてみろ』

『アナザースペクターが言うなら手を貸してやらん事もない…だが俺は魔王や貴様に屈してなどいない!』

『黙っているバロン、俺は甘味を定期的に渡せ』

『……………』

『おいアナザーギャレン黙ってないで何か言えよ!』

そんな騒がしい景色にナツキは笑い出す

「あははは…いやあ…けどアナザーバースとマツハがないよな？」

『『あ』』』

「2号全員いないと変身出来ねえじゃん！きちんと数えろよ！」

とナツキがキレたその時

「欲しいのはコレかい？」

「あ、貴方は海東大樹さん!!」

いきなり現れた海東の手にはアナザーバースとアナザーマツハウオッチが握られていたのだ

「確かにコレが有れば君は力が手に入る…けど…聞かせてくれ。そのお宝の力で君は何をするんだい？」

「大事な人をみんな守る」

「その相手が魔王でもかい？」

「っ！……当たり前ですハルトが最低災厄の魔王になったら俺が倒します!!ですが俺はアイツを倒したくない……それは最後の手段です」

そう言うと海東は笑い出し

「合格だよ彼を倒すだけの答えなら渡す気はなかった……これは君にあげよう……まあこんな副作用があるお宝は僕には荷が重いからね」

「あ、あり「けど」はい？」

「君のお姫様は守られるだけ姫じゃないのは知っておいた方が良い」

それだけ言うと海東は姿を消したのであった

「見りやわかりますよ海東さん…彼女達は強い…：けど俺だつて！彼女達の誰を見捨てるなんてしたくないんだ!!」

そしてナツキの手には全てのアナザー2号ウオッチが揃った

するとナツキのアナザーウオッチが光初め新たなアナザーウオッチへと生まれ変わったのだ、それはハルトのアナザーグランドジオウに似た形状のもの、しかし宿るは魔王ではない救世主

『ゲイツマジエステイ』

「これが救世主の力…」

「その通り！ついに覚醒したかあ！」

「ハルト!？」

「それが俺と肩を並べる力…その力があればお前の願いは叶えられる」

「何で…コレを俺に」

「お前が勇者だからだ」

「勇者?」

—————

それは逢魔王国に帰った時

ハルトは魔王ディーノの元へと遊び行った時のこと逢魔でネオニートな日々を過ごしている彼はボードゲームは一人で遊べないので良く遊びに誘われるのだ

「なあディーノ」

「あ？何だよ旦那」

「勇者って何？」

前々から疑問だった事を尋ねる

「は？」

「いや前にミリムさんが勇者を自称すると因果が云々って言ってたからさ」

「ああ、この世界では魔王と対になる形で勇者が生まれるんだよ」

「へえ〜」

「その勇者に倒されるか仲間にするかとか、はたまた自分が勇者だみたいな例もあるけどお前も魔王を名乗ったなら勇者には気をつけるよ」

「おう…大丈夫だわ…王手と」

「げえ！ま、待った!!」

「ははは！良いよ、んじゃ…ここからな」

と楽しく将棋を指しているのだが

「それなら決めてるよ」

ハルトは何となく察してはいたのだ

彼がそうなのでは？と

「そんな存在に」

「だからお前にはいざとなつたら俺を倒せる力を渡しておきたかつたんだ…まあ2号連中がお前の面接したいってのもあつたからさ」

「ハルト…」

「俺はそんだけお前を買ってんだ、情けない真似したら許さねえぞ」

「ああ！見てろ今からあの4人を止めてやる！」

『あの盛り上がってる所、悪いけどあの4人目掛けて何か来てるよ？』

「え？」「何か分かるか銀狼？」

『人型無人機…多分、ドローンみたいなのかな狙いは』

「耶俱矢と夕弦…」

「それと2人の可能性もあるな」

「こうしちゃいられねえ！」

「ああ…お前はさっさと全員止めてこい」

「ハルトは！」

「俺は…ディフェンディングチャンピオンとしてリベンジマッチを受けてやるつもりだ」

視線を向けるとそこには既に顕現装置を纏ったエレンが立っていた

「気づいてましたか…」

「そりゃ…狙いは双子か？」

「それとあの2人も追加です、あの力を兵器化すればDEMの覇権は揺るがない」

「ライダーシステムは兵器じゃないよ、その意味も分からない奴が使つて良いもんじゃねえ……つかそれ以上に俺の家族に手を出すなら慈悲はねえ」

ハルトはウオッチを構えると

「行け、コイツは任せろ」

「けど！」「役目を間違えるな、お前は行け！」……ありがとうハルト!!」

『リバイブ…疾風』

ナツキはアナザーリバイブ疾風に変身して戦いを止める為に飛翔したのであった

「ありや以外とあっさり通したね」

「ええ、異形の貴方達でもバンダースナッチには勝てませんから」

「へえ…」

「先程は遅れを取りましたが今度は「違う違う」何？」

「逃げ出したお前がチャンピオン気取ってんじゃねえ」

「何が言いたい？」

「まだわっかんないの？…挑戦者はそっちだせ？」

『ジオウⅡ』

「減らず口を!!」

そしてハルトvsエレン 第二ラウンドの幕が開かれたのだ

そして

「皆！喧嘩はやめてくれ！」

「「「ナツキ（さん）！！」」」

「耶俱矢、夕弦！2人は本当に憎み合ってるのか？」

「そ、それは……」

「俺が言った2人を助ける、その方法があるとしても諦めるか2人でいる事を！」

「ナツキさん……」

「マドカにも言ったが消えて良い命なんてない！だから生きるのを諦めるなよ！」

「ナツキ…あんた」「沈黙……」

「待て、アレは……」

その言葉を合図に皆の目が動く、そこには人型のロボット バンダースナッチが大量に展開されていたのだ

「はい……キャロルの話ですと人型ロボみたいですわね」

「ああ…皆を捕まえに来たと」

「くくく、愚かなこの颯風の精霊に「耶俱矢は夕弦と話して」何で！」

「コイツは俺がやる…俺の大事な人達を誰一人奪わせない！」

ナツキは新たな力を解放する

「祝え！新たな救世主の生誕を！」

「変身!!」

『アナザーライダー！ゲイツ！マジエステイ!!』

全身に取り付けられたアナザーウオッチ、それと赤褐色の装甲と歪な顔はアナザーグランドジオウと似て非なる存在、しかし

「祝いたくないが仕方ない……祝え!!巨悪を駆逐し大切な誰かを救いに来た 救世主！その名もアナザーゲイツマジエステイ!!生誕の瞬間である！」

ウオズはやったと言う顔だがジヨウゲンとカゲンは

「無理に祝われても嬉しくないと思うよ？」

「うむ」

「……………では我が魔王の加勢に向かいますか」

「良いの?..」

「問題ありませんよ、あの力はある可能性世界で我が魔王を撃ち倒した力…その辺の木偶人形に負ける通りはありませんから」

八舞テンペストー終ー

前回のあらすじ

アナザーゲイツマジエステイ覚醒！

推奨BGM Future Guardian

「行くぞー！」

アナザーマジエステイは自分の体についてあるアナザーウォッチを起動した

『メテオ』

するとアナザーメテオが装備しているガントレットが現れる…だけではなく

「ほお……わちやあ!!」

アナザーマジエステイはさながらカンフーアクションの動きでバンダースナッチを一撃で倒す

「え！何アレ!!」

「驚愕、あれがナツキの力なのですか」

「ああ……お前達は知らないだろうが、アイツは背中に守るものがあると強くなる」

「まあ守られるだけのボクではないんですけどね……フルボトルバスター!」

ビルドは銃剣一体の武装 フルボトルバスターを銃モードで構えるとラビット、ゴリラボトルを装填した

『ラビット!ゴリラ!ジャストマッチデース!!』

「はああああ……はあ！」

『ジャストマッチブレイク!!』

赤い砲弾がバンダースナッチを爆散させると

「ナツキさんの背中はボクが守ります！」

それは嘗て、奏者やナツキ、キャロル達の影に隠れていた気弱な少女ではなかった

「ああ、頼んだよエルフナイン!!」

だが共に戦うのは彼女だけではない

『エンジン』

「私もいるぞー！」

『エレクトリック！』

ブースターで加速し雷を帯びた斬撃がバンダースナッチを数体切り裂き爆散させたのだ

「やりますねマドカさん初めてのブースターなのに」

「空中戦はISに近いから慣れだ…それにお前もやるな」

「マドカなら構いませんよ…まあ2番目ですが」

「何をいう…貴様が2番目だ」

「……………」

何故か2人は認めあっていたのだ…かに見えた

—————

アナザーマジエステイの近接能力に警戒したバンダースナッチ達は飛び道具で攻撃を凶ろうとしたが

『G3—X』『マツハ』

「コレでもくらえ!!!」

アナザーウオッチから専用装備GX—05とゼンリンシューターを両手に持つと同時に引き金を引いた

!!!!!!!

それと同時に放たれたGX—05の弾雨により爆散するバンダースナッチに対してゼンリンシューターにマジエステイはシグナルバイクを入れたのだ

『ヒツサツ！カクサーン!!』

空に向けて行ったゼンリンシューターの弾丸が空中で拡散した雨霰がバンダースナッチを巻き込んだのだ

「ウオズやハルト程じゃないが俺にも広範囲攻撃はできるんだよ！」

しかし仲間の瓦礫と爆散した煙に紛れたバンダースナッチがアナザーマジエステイに肉薄し、アナザーマジエステイの腹部を貫いた

「っ！ナツキさん!!」

だがそのアナザーマジエステイはガラスのように砕け散ったのである

「え……まさかこれ」

「???

バンダースナッチはあり得ない現象に混乱しているが

『ファイナルベント』

その音声の方向に振り向くと黒いマントと黒い大型槍 ウィングランサーを装備したアナザーマジエステイが高く飛び上がっていたのだ

「俺が死んだと思ったか？ 残念トリックだよ！」

アナザーマジエステイは煙に紛れてアナザーナイトのトリックベントで即席の分身を作っていたのだ、そして生き残りの個体に対して

「喰らえ！ 飛翔斬!!」

アナザーナイトの必殺技 飛翔斬を放つ

ドリル回転を伴う体当たり攻撃はバンダースナッチの防御を貫通し爆散させた

だがこれだけでは終わらない、バンダースナッチを操作していたDEMの空中観戦がアナザーマジエステイに照準を合わせたのだが

「甘い…お願いするぜ！起動！」

『BATTLE MODE』

海岸線に待機していたハルトの愛車 サイドバッシャー がナツキの呼び声に応じて自動変形、バトルモードになると両手の武装で艦船を砲撃し始めたのである

「まだまだ！」

アナザーイクサの力を解放した

『パワードイクサ』

それと同時にピースメーカーに格納されていたパワードイクサが起動、同艦内でパニックが起こるもすぐに呼び声に応じて転移しアンティリーネはそれはもう良い笑顔で出撃したという

そんな事など知らないアナザーマジエステイが呼び出したパワードイクサは爆弾を投擲するのである

またアナザーマジエステイはアナザーディエンドの力を解放した

「いけえー……ディメンションシュート!!」

そのエネルギーの本流は敵艦船を貫き爆散させたのであったが頑丈なのか煙を上げながらも耐えている

「やるな……」

『おいナツキ』

「何だよアナザーゲイツ？」

『朗報だ、アナザーグランドジオウの持つ反転と同じ固有能力が発現したぞ』

「え！ど、どんな力だよ！」

『強化だマジエステイ変身時に限り、お前の使ってるアナザー2号ライダーの力を中間、最強形態まで増幅させられる』

「つまり体についてるウォッチだけで最強フォームの力まで引き出せるって事か…なら
！」

『ナイト』

するとアナザーマジエステイの右手に現れたカードを中心に新たな風が吹き荒れる

のであつた

—————

その頃 ハルトとエレンの第二ラウンドは

アナザージオウⅡの未来視から来る攻撃パターンを完全に見切つたエレンは的確に捌いていくのだが、こちらの攻撃パターンも読まれているので千日手に近い状態となつていた

そんな中吹き荒れる疾風に何かを感じ取つた

『これは…まさか!』

『どうしたアナザーオーデイン!』

『サバイブ・疾風が消えている!』

『何だと!』

「あーっー事はサバイブ使ったな…なら俺もやるか」

アナザージオウIIはアナザー龍騎へと変身すると、とあるカードを呼び出すと森の中で幻影の炎が上がる

推奨BGM revolution

アナザーマジエステイの左手にはダークバイザーツヴァイが現れる

アナザー龍騎にはアナザードラグバイザーツヴァイが現れた

そして2人は全く同じタイミングでカードを潰した

愛する者との日常を過ごす為／愛する者との日常を脅かす脅威から

SURVIVE／SURVIVE

生き残る為に／生きる為に

同時にアナザーマジエステイのマントは青く染まり、その性能も底上げされる

アナザーグランドジオウが力を呼び出すものなら

アナザーゲイツマジエステイは力を宿す者

アナザーゲイツマジエステイ・ナイトサバイブ

「さて……これで終わりだ」

『ファイナルベント』

同時に現れたダークレイダーがバイクに変形アナザーマジエステイが乗り込むと固定光線を放ち動きを止める

「はあー！」

それと同時にアナザーマジエステイのマントがバイクを包み込むと同時に高速で突貫する疾風斬を放つのであった

しかしそれでも巨体故か沈まない

「ちっー！」

その時 背後から聞こえたのは

「颯風騎士！天を駆ける者!!」

和解を果たし一つの力となった天使が巨大な化け物へとトドメを刺すべく放たれた一矢、その姿は正しく彼女達の二つ名である英雄（ベルセルク）に相應しいものである

――
アナザー龍騎サバイブは流石のエレンも想定してなかった

「何ですか…その姿は」

「答える必要ある？」

そしてアナザー龍騎サバイブは戦いを終わらせる為にとあるカードを握り潰した

『シユートベント』

同時に現れたアナザードラグランザーが主人を守るように滞空する

「ど、ドラゴン!!」

流石にコレは読めなかった！とエレンは空中戦を装いつつ撤退を選ぶが

「落ちろ」

シュートベントによる射撃とドラゴンブレスによりパワードスーツが破損しエレンは海に落ちたのであった

余談だがエレンは泳げない為 数十分後にDEMの回収チームが動くのは別の話

「さてと……」

変身解除したハルトはファントムリキッドの採掘場所をクローントルーパー達に護衛させるように命令を出した流石にこの技術は秘匿せねばならない……というより

「外部にライダーシステムが漏洩するのだけはマズいな……」

それだけであるもし本当に愛と平和を掲げる天才物理学者に会った際に土下座をせねばならない

『いや、サインをお願いする時に土下座するだろ?』

「……………あ」

『はあ、このバカは』

「んだと!せめてライダーをつけろ!!」

やれやれと笑っていると

『陛下大変です!』

「どしたの?」

『陛下のサイドバッシャーとアンティリーネ様のパワードイクサが勝手に動いております!』

「な……なんじゃそりゃあ!!」

—————

そして終わり地上に降り変身を解除すると

「終わったな」

「ナツキ！」

耶俱矢と夕弦はナツキに近づく

「良かった2人とも仲直りしたんだ」

「うむ感謝するぞ、ナツキ」

「同意 貴方に感謝を」

「良いって良いって俺は2人が生きられる可能性を提案しただけ2人はそれに乗ってくれたそれだけさ」

「そ、それでだな、その方法とやらは？」

「ああこのボトルで成分を抜くだけだ」

アナザーマジエステイはブランクフルボトルを取り出すと

「これどう使うの？」

「蓋を動かして彼女達に向けるだけでOKです」

「ふーん」

と何の気なし向けたのが過ちだった。霊力を抜き取るそれ即ち霊力で出来た霊装が

なくなる事を意味しており

「っ!!」

／／／／

2人は一糸纏わぬあられもない姿へと変わったのだ

「きゃあああああ!」

「な、ナツキさん!見ないでください!」

エルフナインの右ストレートが顎を捉え彼の意識を刈り取るのであった、そしてマドカが冷静に予備の服を貸したのだが

「……何か胸周りがキツイ」

「同意…締め付けが酷いです」

「っ!!わ、私はまだ成長期なんだ!!これから大きくなるんだあ!」

「マドカさん…」

「エルフナイン! 貴様なら分かるだろう! 私の気持ちに「ごめんなさいボクはキャロルみたいに大人モードがありますので」……この世界に神なんていない!!」

「だ、大丈夫ですよ! 千冬さんはスタイル抜群なんですからマドカさんも「そんな慰めはいらん!!」 ええ…」

余談だが後日逢魔に帰った際、マドカと鈴は共通の悩みで意気投合する事となるのは少し先の話

そして

「俺達のマシンを奪ったアンポンタンを絞めに来たが制裁されてるな」

「そうね旦那様…けど良いの？あんな力渡して」

「問題ねえよ…俺を倒せるのはレジエンドライダーの皆様だけだからな」

「誰にも負けないでほしいのだけど…」

「大丈夫大丈夫、俺を信じろって」

「うん…それよりアレ何とかした方が良いわよね」

「だな、おーい！お菓子用意したからお茶にしよう！」

「この鶴の一声で場が収まったのであった」

—————

その翌日

「はい」

「あ、ありがとうございます」

ナツキは土道に2人の力が入った八舞ボトルを渡すと土道は蓋を取り体に成分を入れた

「これで完了?」

「みたいだな、つか」

ナツキは自分の思った事を素直に言った

それがこの世界の根幹を揺るがすような言葉とも知らないで

「お前もハルトに似てるな」

「へ？」

「何かの力の受け皿になっている所が」

「受け皿？」

「あの魔王は異世界にいる怪人達の力を全て宿してる比喻じゃなく…何なら今も際限なく受け入れている…だからこそその強さなんだが…」

「は、はあ………」

「士道君って言ったかな…君も精霊の力の受け皿に慣れているなら考えた方がいい…そもそも何で、君にその力が宿ったのか…そして」

「そして？」

「火炎剣烈火が君を何故選んだのか…ね」

「は、はあ…」

「まあ頑張れよ！俺も頑張るからさ！」「そうだな次はお前が頑張る番だ」…え？」

そこには仁王立ちしているハルトとアンティリーネがいた

「あ、あのくお二人揃って何を？」

「いや何この間勝手に俺のサイドバツシャーと」

「私のパスワードイクサを動かした人がいるのよ誰なのかしら？」

その言葉にナツキは冷や汗をかく

「……………え？」

『ナツキ残念なお知らせがある』

「……何？」

『実はあのマシンはハルトの所から借りた』

「許可は？」

『俺に質問をするな!!』

「嘘だろ！マジかよそんなの」「さあ懺悔の時だ」「ちよっ…まつ！」

「問答無用だ（よ）!!」

「ぎゃあああああ！」

その後、ハルトとアンティリーネからの制裁をナツキは受ける事になる

そして一通りお仕置きしてスッキリしたハルトとアンティリーネの足元に倒れてい
るナツキは

「し、死ぬかと思った」

文字通りゾンビみたいになっていた

「あ、それとお前に客だ」

ハルトが扉を開けると中から現れたのは八舞姉妹である

「久しぶりだなナツキよ！」

「否定、そんなに久しぶりではないです」

「何をお！」

「嘲笑、どうやら耶俱矢はボケたようですね」

「んなっ！お、表に出ろおお！」

「肯定 受けて立ちます！」

「待てええええい！2人は喧嘩を辞めたんじゃないの!？」

「あ、そだった…実はな先日夕弦と話し合っただ」

「肯定、そして決めました」

「何を？」

すると耶俱矢と夕弦は2人揃ってナツキの唇を奪ったのである

「……………は、はあ!？」

「これが答えよ」

「首肯、ナツキは私と耶俱矢の共有財産にします…おはようからおやすみまで一緒です」

「は、はいいい!？」

「満足、ナツキの了承も得ましたので行きますよ耶俱矢」

「うむ!」

「余談 因みに耶俱矢の取り分は2割くらいです」

「な、何だと!ふざけるでない!そこは半分こだ!!」

と話しているとドアを蹴破る音がして

「ちよつと待ったー！ー！」

「む！来たな!!」

「ナツキさんを独占なんてさせません！そんな事のは正妻のボクが許しません！愛人なんて一人で充分です！」

「ちよつと待て！愛人って誰だ！」

「そうだぞエルフナイン！昨日話し合い私と一緒にシェアするという話ではなかったか！」

「マドカ!?!お前もか!!」

「心配はいらないぞナツキ…確かにこの中では一番チンチクリンかも知れん…しかし将来性は私の方が良いのだ！」

「何の話!？」

「良いから貴様等!どけ!!」

「何を言うかナツキは私達姉妹のものよ」

「肯定、渡すつもりはありません」

「そうは行きません!渡さないと言うなら力尽くで!」

あわや武力衝突間近の時にハルトが思い出したように

「そーいやあケケケラのやつがお前にプレゼントがあるって言ってたなあ」

「へ、へえ!!どんなの!!」

「さあ？外に出て、来い！って念じたら来ると」

「よ、よし！試しに行ってみよう！」

とナツキは慌てて外に出ると皆、ついて行く

「そして……来い!!」

そうナツキが念じると遠くから騒々しいエンジンの音とマフラーの音が鳴る

「え？まさか俺のプレゼントって!!」

と目をキラキラ輝かせた

そうそれは一言で言えば仮面ライダーZ Xの相棒 ヘルダイバーを黒と紫のカラーリングにしたようなバイク、しかし近代改修を施されているのか古臭さよりも近未来な印象を与える

まあ

『のーだーなーつーきーー！』

タンク部分に乗るカエルの置物がスピーカー越しとは言え、怒りの声を乗せてなければ様になったのだが

「え？」

これにはナツキも面を喰らい、エルフナインとマドカは呆れ、八舞姉妹は初めての光景に目を輝かせていた

『前に言っただろう！俺はエルフナイン以外のカップリング以外は認めんな!!』

「いつ!!に、逃『がすと思うか！加速だ！アナザーダイバー2nd!』い、いや1stはあああああ！」

逃げようとしたナツキだが、流石にライダーマシンの速度には勝てずに跳ねられ宙を舞う

「あ、ナツキが跳ねられた」

『見ろ！ナツキがアナザーWみたいだ！』

『それどういう意味だよ、アナザーデイケイド！！』

「夏の風物詩だよ」

『んな訳あるかア！』

「な、ナツキさーん！大丈夫ですか!!」

エルフナイン達は慌てて駆け寄るとバイクも目の前で止まる

「だ……大丈夫だよ……ギャグ時空じやなきや即死だった!!」

「まあライダーマシンって兵器で二、三百キロとか出るしな」

「それに跳ねられてんの？大丈夫ナツキ！」

「心配、大丈夫ですかナツキ！」

「だ、大丈夫だよ……ハルト…治して…」

「OK……こいドクター」

ハルトはコネクトの魔法でブレイクガンナーを取り出すとシフトカー マッドドクターを装填する

『TUNE MAD DOCTOR』

「治すぞ、死ぬ程痛いかな」

「一番良い治療を頼む…そう！アナザーブレイブさんとか！」

「なら安心しろ名医はお前の中にいるから、俺の治療は荒いぜ」

「え？い……いやああああああ！」

「暫くお待ちください」

「……………し…しぬかとおもった…」

「まあ死ぬ程痛いんだよ、これ本当」

『おい茶番は終わったか？なら野田夏樹、さっさとハンドル握れ』

「誰のせいだと……はいはい、こうか？」

跨るとバイク アナザーダイバー2ndの電子音声が発動した

『アナザーバイクーン、アナザーゲイツ変身者専用多目的軌道2輪 アナザーダイバー2nd起動しました生体認証 野田夏樹：確認：以降本機体は貴方に譲渡されます宜しく御願いますご主人様（マスター）』

「お、おうよろしく……って何このバイク？」

『コイツア、俺がとある奴に依頼して製作させたお前専用のバイクだよっぱり仮面ライダーにはバイクがねえとな！』

「あのケケラさん、そのセリフは何人かのライダーに刺さるので控えてください」

『そのアナザーダイバー2ndには、お前さんのアナザーウオッチに対応した能力を引き出せるように改造した、それだけではない！』

？と首を傾げると

『試しにアナザーマツハウオッチを入れてみな』

「お、おう」

『マツハ…擬態…ライドマツハ！』

するとナツキの乗っているバイクが仮面ライダーマツハの乗る
ライドマツハに変
わったのだ

「おおー！」

『ロイミュードの擬態を応用したライダーマシンの完コピ能力だ』

「うおおおおおおおおお！」

「……………」

ナツキは大興奮だがハルトは少し不満そうだった

「ありがとうスタッフさん!!よし!これでツーリングにでも行くか!」

「「勿論、後ろに乗るのは私ですよね!……は?」」

異口同音とはこの事だろう、再度火花散らす面々を見てナツキは

「は……ハルト!ケケラ!助けて!!」

「やなことった、ご自慢のマシンで逃げな」

「そんな!!」

「「ナツキ(さん)?」」

「あ、あははは……っ!!」

「「「待てー！ー！」」」

そしてアナザーダイバー2ndに乗り逃げたナツキと、マシンビルダーにはエルフナインと耶俱矢、バイク形態に変身したアクセルのマドカに夕弦が乗り込みナツキを追いかけるのであった

『そうだよ！俺はこれが見たかったんだ！そうか…これが推しの修羅場が!!』

「良い趣味だな…カエルのおじさんは…あ、そう言えばこれ使う？」

そしてケケラ（置物）の上にとあるレイザーカードを置くとその声にも動揺が走った

『こ、これは！お、お前何処でコレを！』

「白スーツの男がくれたんだよ、何かプレミアア会員の特典とか何とか」

『貰えるならありがたく貰うが…良いのか？』

「ああ、その変わり…アイツらを応援してやってくれ」

『当たり前だろ！俺は推しの味方だ、大好きなんだよ！推しが幸せになるのも不幸になるのも!!』

「あれ？これ俺渡す奴間違えた？」

「ケケラ…お前…本当は俺のファンじゃないだろお!!」

そんなナツキの声が響いたのであった…

七罪ウォッチー序章一

前回のあらすじ

ナツキがアナザーゲイツマジエステイに覚醒した

現在ナツキ達はピースメーカー艦内にある部屋を借りて暮らしている

「……………」

久しぶりの休日とアナザーマジエステイの反動により疲れて深い眠りについていた
のだが

「……………?」

何やら良い香りがするし自分の体に人肌の温もりが来た……うんエルフナインだな、いや待て！

「何者だあ！」

そもそも寝込みを襲われたのだから呑気にしてる場合かあ！と布団を捲ると

「挨拶、おはよう御座いますナツキ」

そこには橙色の髪をした女の子がいたのだ

「お……おはよう夕弦なんで俺のベッドに？」

「返答、前にも言いましたよおはようからおやすみまで一緒と」

「お、お……う」

本来ならラタトスクの検査機関で検査を終えてからの生活だったのだが二人でいる際はメンタルが安定しているので早期退院となった…結果として

「おはよう御座いますナツキさん！朝ご飯の時間で…何してるんですか？…二人とも」

ナツキの修羅場が増えたのであつた

—————

朝 ピースメーカー艦内

「あははははは！そりや大変だな！」

ハルトは大笑いしながら朝食のパンを食べるもナツキはゲンナリした顔でボヤク

「朝から気が気でないよ……ハルトは大丈夫なのか？」

「何が？」

「いやいや、あの人数相手するのとか「無いよ」ええ即答…」

「だって俺みたいなの化け物を受け入れてくれている上に俺みたいな奴を愛してくれる人たちだよ？一緒にいて自分の時間なくて嫌とかそんな事ないよ？何ならずつといてほしー」

と臆面なく言うハルトにナツキは

「や…やつぱお前、女の敵だわ」

その言葉にハルトは少しイラッときたので煽る

「喚いてろ同じ穴の貉が」

「お前と一緒にすんじゃねえ！」

「複数人と関係持つてる段階で同じだろうが！この女誑しめ！！」

「失礼だな……純愛だよ」

と朝から元気に喧嘩しかけてるが

「なあ……陛下とアイツって……」

「バカ！見るんじゃねえ、アレだどんぐりの背比べって奴だ」

「何て贅沢な悩みだが、おいどつちが勝つか賭けないか？負けた奴は今日の夜間任務交代だ」

「いや賭けにならねえよ、見な」

そうクロントルーパー達が冷やかす中

二人の頭に

「朝から騒がしいぞ馬鹿者」

千冬からのゲンコツが降り注ぐ

「つてえ!!」

「はあ…このバカは」

「おつはよー! ハルくん!」

「おはよう千冬、束」

と挨拶する中、マドカもナツキに近寄り

「お、おはようナツキ」

「おはようマドカ」

「隣良いか？」

「おう」

それを見てハルトは立ち上がり

「よし千冬、東！以前話していたファントムリキッドの利用方法を考えよう」

「そうだな」「そうだねー！」

と離れる際に千冬はコッソリと

「頑張れ」

そう言ったと言う、しかし此方も仕事も仕事なので

「で？どうだった？」

「本当にネビュラガスが液体化してたよ、ハツカ（銀狼）ちゃんの言う通りファントムリキッドだね」

「しかしまさか本当にビルドの新世界と融合している可能性があるとは」

「そう！そこなんだよ千冬！つまりこの世界には戦兎さんと万丈さんがいる可能性が高い」

「ほお…」

「なので俺はこれから二人を探してきまーす」

「行かせんぞ馬鹿者」

「えー！」

「戯け！この間見つけたファントムリキッドの採掘地は占拠しているが利用方法が思いつかないなら意味のない、ちよつと危険な温泉みたいものだ！」

「だから聞きに行くんだよ、ちーちゃん」

「何？」

「実際。ビルド世界の技術は生み出した本人にコンタクトを取るのが一番だよ…それに東さんも同じ科学者としてサイン欲しいし」

「はあ……お前もか…」

「けどいるなら意見を求めるのは大事だろ、使い方が思いつかないままなら資源が勿体無いし」

実際、本当に建築とかして温泉や足湯など作って逢魔の慰安施設にしてやろうかと思っている位だ

「キャロルにも話してるけど、現状はエルフナインに任せるのが一番と思ってる」

「確かにビルドドライバーやアイテムは持つてるからねえ」

「適任ではあるな」

「当面はエルフナインに任せるかな…よしご馳走様」

と席を立つハルトを見て

「珍しいね何か用事？」

「ああ少年君が鍛えてくれってさ」

トレーニングルームでは

「はあ……………はあ……………はあ……………」

変身してバテバテになり仰向けになっているセイバーとピンピンしているアナザーセイバーがいた

「はい！次は素振りと剣の構えの練習だよ」

「は……………はい……………けど休ませて」

「ん、じゃあ休憩」

とハルトは言うとう士道は変身解除して仰向けになった

「はあ……凄いや……辛い」

「そりやそうだろ、模擬戦とは言え二冊経由しないでワンダーコンボ決めた奴とか初めてみたわ」

「やっぱり……あれ……やばいんだ」

「当たり前だろ？ウォーミングアップなしにフルマラソン完走しろって言うくらいの無理難題だ」

「そ、そりや……酷い……」

「だから焦らずに鍛錬だ、付け焼き刃の技術なんて意味ねえいざと言う時自分を守るのは積み重ねた基礎練だ」

「は、ハルトさん……はどうだったん……ですか？」

「ん〜以外と思うだろうけど、俺も努力した口だよ」

「嘘だあ…」

「本ただよ、こう見えて地獄の鍛錬をしたから今の俺がある…相棒達の鍛錬がどれだけ役に立ったか…」

「……………因みにどんな？」

「最初の頃はジープに追いかけてまわされたな」

「あ、あれ？特訓なんですよね？交通事故とかじゃなく」

「え？ジープは人間の限界を突破する為の車でしょ！」

「何処の世界の話？」

「なあ、相棒そうだよな？」

『ああ！ジープはお仕置きに使われる乗り物ダゼ！』洗脳済

『まあアナザーWはよく追いかけるからな』

『ハルト、落ち着けジープは普通の乗り物だ』

「……………嘘だ…みんなで俺を騙そうとしている！」

『そんな訳あるか』

ハルトは朝から動揺しているが

「まあ最初はそんなもんだよ、んじゃ少年君訓練再開だ」

「はー！」

士道は起き上がると同時に

「実は今日は少年君の為に特別講師を呼んでおります！」

「特別講師？」

「本当なら逢魔撃剣師範のアゲーラとか考えたけど逢魔の戦力を簡単に呼ぶ訳にもいかないし少年君の剣は仮面ライダーの剣技だから専門家の方が良いと思ってさ」

「な、なるほど……つまりセイバー世界にある剣技を覚えるんですね！」

「そう言う事だ、では皆さんお願いします!!」

そう言うのとハルトの影から四人の人間が現れた全員フードを被り顔は見えないが体から溢れるオーラは歴戦の戦士のそれと相違ない

「えーと……この人達は？」

「四賢神、聖剣を使う仮面ライダー達の戦闘技術の基礎を作り上げた凄い人達だよ。まあ老いたのか当時の上司に殺されたんだけど……」

「え？じゃあこの人達って……」

「まあ、それを全盛期以上の力で甦らせたんだよねー……では賢神の皆様お願いします！」

と言うと四賢神は目を光らせ仮面ライダーに似た剣士　ロード・オブ・ワイズへと変身した

「彼等に鍛えて貰えれば戦闘技術はメキメキ上がる筈さ！」

「あのお……この人達って」

「大丈夫、君がワンダーコンボ使っても3秒も持たないから」

「っ！それは流石に言い過ぎじや「俺でも体術オンリーなら負ける、能力有りでも全力でやらないと倒せない人達だよ」…終わった……」

「頑張れよ精霊を守るんだろ？少年君」

その後、士道はロード・オブ・ワイズにボコボコにされたのであった

—————

そしてハルトは艦内で雑務をしていると

「助けてよハルえもーん！」

と涙目の二亜が部屋に突撃してきたのだ

「どうしたの？」

「コミケに出す漫画の締め切りが近いんだ！腕利きのアシスタントを召喚してよハルえもん!!」

「しようがないなあ二亜は…よいしょ『コネクト』ほいっと」

「あ、あのハルきち…その人何処から出した？」

「え?…ああ!二亜は魔法を見るのは初めてだったな!これは俺の魔法コネクトだ」

「違うよ!確かにアシスタントは欲しいけど誘拐してまで欲しくないよ!ハルきち最低!」

「なーんか誤解されてるな…前に話さなかったけ…俺と束は別世界で会社経営してるの」

「あ、聞いたよ人型ロボ作ってるって」

「そのロボットが彼、アシスタント型ヒューマギアのGペン君だ」

「何てピンポイントなニーズに答えてくれているんだ!!」

「よろしくお願いします先生」

「う、うむ！じゃあ早速…トーン貼りからお願いします！」

—————

とまあそんな感じで新しい日常にも慣れてきたハルトは気晴らしに街へ買い物に出
ていたのだが

「あら、ハルトじゃない」

「七罪か久しぶりだね」

「ええ久しぶりね」

魔女コスさん事 七罪との久しぶりのエンカウントだ

「そっちはどう？」

「まあボチボチ、今度新しい精霊の歓迎会するけど来る？」

「良いわね是非…と…こ…ろ…で♪」

「な、なんででしょう？」

「ハルトはお姉さんの霊力とか狙わないのかなあ〜と思つてね」

「別にい…つかアンタの場合は霊力無くすと擬態が使えなくなるんだろ？なら渡さない

方が賢明だろうさ中身見られたくないんだろ？」

「……………以外と考えてくれてるのね」

「まあアンタが俺の国に空間震を落としてる精霊なら霊力を貰うがな」

「貴方の国に？」

「あ、話してなかったか？俺の国で空間震が起きててな、どの精霊が俺の国に発生させるか調べる為に来たんだよ」

「私の可能性は疑ってないんだ」

「七罪の場合はアレだろ？精霊世界よりもこっちの世界の滞在期間が長いんだろ？なら候補には入らん」

人間世界に長くいる精霊なら時系列的に逢魔の空間震発生時期とは一致しない、二重

も同じ理由で候補には入らん

「成る程ね…けどどの道、私の霊力も封印しに来るわよね？あの少年君」

「だろうな…いやなら俺がしてやろうか？」

「出来るの？」

「おう、エルフナインが開発したブランクボトルを使って成分を抜けば解決だぜ」

「……………アンタ達の国の技術力どうなってるのよ」

「そこは言わないお話しで」

「ねえ前に話したけど、私が本当の姿になっても貴方は見つけてくれる？」

「ん？そりやな」

「……………ならゲームをしましょう」

「ゲーム？」

「貴方を信頼してのゲームよ、私はこの数日間に貴方の大事な人に擬態するわ…ハルトは誰が私なのかを見破ってもらおうの」

「成る程…一種のかくれんぼか」

「見つけたら私の霊力を上げる、もし見つからなかったら…貴方をカエルにするわ」

「何で少しファンタジーな罰ゲームを…」

「因みにだけど、前に見せた擬態を無効化する薬を使うのは禁止ね何故か貴方使いそうな気がするの」

「うわあ…アンチミミック弾はダメか…まあそうだなつまりこのゲームは俺の推理力にかかっている訳だ」

「そうよ」

「ならばこの事件必ず解いてみせる…ハーフボイルド（半熟卵）探偵の名にかけて！」
白い帽子を被り、七罪の戦線布告を受け取るのであった

「期間を決めたらまた来るわ、じゃあねハルト」

七罪が箒乗って飛んでいくのを確認するとハルトはコムリンクですぐに通信を取る

「よし全員集合だな」

ピースメーカー艦内に主だった面々を集め七罪が仕掛けたかくれんぼゲームのルールを説明する

「つまり我々の誰かに擬態していると」

「それを魔王ちゃんが当ててるんだ」

「そう言う事」

「では合言葉のようなものを考えれば良い」

「けどカゲンちゃん、既に七罪ちゃんが入れ替わってる可能性があるなら合言葉がバレル可能性があるよ」

「む！確かにそれもそうだ」

「ならば簡単じゃ、ここにいる全員で殴り合えば良い！擬態しておつても戦闘力は据え置きじゃ！妾が拳で見極めてやろう！」

「ヤクヅキ先輩、それはダメですよ…と言うか単純に戦いたいだけでしょ」

「うむ！」

「しかし私たちも警戒せねばならないな」

「そうだね、取り敢えず艦内の警備態勢は強化しておくよハツカ（銀狼）ちゃん手伝つて」

「りょーかい」

「基本は二人一組での行動を心がけようか」

「ええ…それに仮に兄弟（クローントルーパー）に擬態しても見破る方法は造作もない兄弟の偽物に気づかないやつはいませんよ」

「そうだなハウンド、お前から連中にそれとなく伝えてくれ…けど大々的には話すな艦内で疑心暗鬼な空気は流したくない」

「お任せを……っ！何だコレは！」

「失礼します！陛下！先日 of 闇サイトで売買されていたドライバーとプログライーズキーを使った暴動が町で起きています！」

「よし、俺が行こう皆はゆっくりしててくれ」

「俺もいくぜハルト！」

「じゃあない、ついてこいナツキ！」

そして二人は近くの場所まで転移すると

「こい！アナザーダイバー2nd!!」

とナツキが先日手に入れた愛車を呼んだのである

「呼んだら来るとか良い子やあゝ」

「……………なあナツキ」

「何？」

「何でそのバイクも一緒なの？」

「え……………え!!」

ナツキも驚くので、同じようにもう一台付いてきたからだ。その外見は黒と紫のバイク…その目立つ部分に髑髏の意匠となれば間違いない。

「ライドチエイサーだ!!」

「これチエイスのバイク!? 何で!?!」

「んなの知らねえよ…よしチェイスさんお借りします！」

ハルトはバイクに乗りヘルメットを被るとナツキと同じタイミングで発進したのであつた

—————

そして街につくとそこにはアバドンに変身した愚か者達がライザーで手当たり次第に暴れていたので取り敢えず

「っ！」

手近な奴等をバイクで跳ね飛ばした

「「「っ！！」」」

その影響でアバドン全員が此方を睨むが

「んでハルト、アイツ等どうするよ」

「決まっている全員倒す」

「だよな…よし今日は俺に「二人でやるぞ」え？」

「ライドチェイサーに乗せてくれた礼だ、ファンとして心は痛い但他的姿を借りるとしよう」

「そう言いハルトが取り出したのはメリケンサックに似たアイテム ブレイクガンナー」

「そっか、そう言う事なら俺も！」

とナツキも先日海東から貰ったアナザーマツハウオッチを構えると

「やっちまえ!!」

アバドン達が攻撃を開始しようとするが全員に小型のツール シグナルバイクとシフトカー達が邪魔を始めたのだ

「変身時はお静かに」

「やるぞ、さっさと終わらせる」

「はいよ！俺に任せなつて！」

ナツキはアナザーウォッチを起動し

ハルトはブレイクガンナーのマズル部分を殴るように強く押し込んだ エンジンが掛かる前のような低い待機音が響くと同時に二人はオリジナルのポーズを取る

「LET'S 変身!!」

「……………」

そしてハルトはブレイクガンナーから手を離して構えを取ると紫の装甲が全身を覆う

『BREAK UP』

その姿はかつての英雄が変わった姿、しかしその胸に宿る人間を守ると言う心は変わってはいなかった

ロイミュードの番人にして死神

「覚えておけ俺は魔進チエイサー…逢魔の番人、そしてお前たちの死神だ」

魔進チエイサー 変身完了

更に

ド派手なファンファーレと共に変身したナツキを包むのは白い装甲、しかし頭部を守っていたヘルメットは半分が砕けており体の装甲も事故にあったように凹んでいる

まるでバイク事故の被害者を思わせるアナザーライダー、しかし

「追跡！撲滅！いずれも……マツハー……！」

ナツキはそんなの関係ないと言わんばかりに大見得を切るように動くが元ネタを知らないアバドン達から

「「「「は？」「」」」」

間の抜けた反応が返ってきた

「アナザーライダー！！マツハ！！」

イエー！とノリノリでポーズを決めるのは

次代（ネクスト）の追跡者 アナザーマツハ

「i t , s s h o w t i m e !」

「行くぞ最速で終わらせる」

『GUN』

「おう！さあ後は知らないぞお！」

『ゼンリン！』

異なる世界 異なる変身者 だが今この世界で

マツハとチエイサーは再会を果たしたのであった

次回 七罪ウオッチ かくれんぼゲーム開始

七罪ウィッチ かくれんぼゲーム開始？

前回 街で暴徒と化したアバドンを倒す為にハルトとナツキは魔進チエイサーとアナザーマツハへと変身したのであった

「……………」

チエイサーは冷静に一体一体のアバドンを的確に射撃していく、その一撃は正確無比の一言だ

「な、なんだよ…あの化け物は!!」

「名乗ったが…改めて名乗る必要はない、コレから倒される奴等には」

『BREAK!』

「ふっ!」

全力を込めてブレイクガンナーでアバドンを殴り飛ばすと

「ふざけんなあ!!」

『CLOUDING CANNON!』

アバドンの一体が必殺技を放ち、チエイサーのいた場所が火に包まれるが

「へ、驚かせやがって……んなっ!」

しかしそこには

『TUNE CHASER SPIDER』

大型のクローにも盾にもなる特殊武装ファンクスパイデイを装備した武装チエイ

サーが無傷で立っていたのである

「な、なんだ!!」

「お返しだ!」

黒の先端からエネルギーを放ち怯ませると

『TUNE CHASER COBRA』

新しいバイラルコアをブレイクガンナーに装填するとファンクスパイデイは鞭型武装
装テイルウィツパーへと姿を変えた

「はあ!」

そのしなる鞭の攻撃は散らばるアバドン達を1箇所を集めることに成功したのだ

そしてトドメと言わんばかりに三つ目のバイラルコアを装填する

『TUNE CHASER B A T』

テイルウィツパーは変形し狙撃形態ウイングスナイパーへと変わる先端に込めたエネルギー矢がアバドンを見るなりブレイクガンナーにある必殺技を起動させた

『エクセキューション！B A T』

「貫け!!」

そして放たれた矢の一撃はアバドン達を貫通し爆散、変身者は安全装置で助かったが
全員

『TUNE JUSTICE HUNTER』

シフトカー ジャスティスハンターの作った檻に囚われる事になった

チエイサーはぼやきながら

「殺すとナツキがうるさいし、彼等はこの世界のルールで裁くべきってあの人も言うだろう」

今回はあの英雄へ敬意を表して殺さない…まあ

「一生牢屋の中だろうが」

だから別にどうでも良い、ハルカの被害者でもないしな

「……ナツキはどんな感じだ？」

—————

推奨BGM full throttle (マッハ挿入歌)

「はっ！たあ！」

アナザーマツハはゼンリンシューターとシグナルバイクの援護を受けながらアバド
ンと対峙していた

「あの銃の威力は厄介だ！お前達遮蔽物へ身を隠せ！」
と隠れ始めた奴等を見てもアナザーマツハは冷静に

「んじゃ、コレ行ってみようか」

『シグナルバイク……』

アナザーマツハがシグナルバイクを掴み擬似ドライバーにウイザードのように添え
ると右肩のシグナル部分にマークが現れた

「ふっ！」

そして放たれた弾丸は見当違いの方向に向かっていく

「おいおい何処狙ってんだよ」

その挑発にアナザーマツハはドライバーを叩くだけで返答する

『マ・ガール!』

すると弾丸が待ったましたとばかりに放物線を描き隠れていたアバドンに命中したのだ

「ぐわあ!」

「おい!なんだよあの技、何で弾丸が曲がるんだよ!」

「コレだけじゃないぜ?」

『シグナルバイク……カクサーン!!』

「よっと!」

ゼンリンシューターの弾丸をアバドン達の真上に打ち上げると

『カクサーン!!』

拡散して弾丸の雨として降り注いだのである

「ぐああああ!」

「ふ、ふざけんじゃねえ!!付き合いきれるか!俺は逃げるぞ!!」

【立ちました!】

「言ったる?逃がさないってさ!」

『シグナルバイク……トマーレ!』

アナザーマツハが停止と書かれたエネルギーをぶつけるとアバドン達は全員ダメージにより動きを止める

「んじゃ、そろそろキツイから…これで終わり!」

『ヒツサツフルスロットル……マツハ!!』

「たあああああ!!!」

アナザーマツハは自分の体をタイヤ型エネルギーに変換してアバドン達を跳ね飛ばしたのである

「ふう……どう? 良い絵だったでしょ?」

「言ってる場合かバカ、さっさとドライバーを回収するぞ」

と二人が近づく中

「う……………うわあああああ!!」

アバドンだった変身者の体がオレンジ色の粒子に包まれ巨大化したのであった、その姿は

「バグスターユニオン!」

「嘘だろこの世界にウィルスをばら撒いた奴がいんのかよ!! つか……………待て……………違う……………」

ハルトは怪人故の直勤でバグスターユニオンではない何かと察していた

「何だ……………アレ?」

「そ、そうだハルト! 前みたいアナザーエグゼイドで施術して何とか」

「してやりたいが医者を呼ぶ時間はない！お前が足止めしろ！」

「でもどうやって！」

「……………っ！ナツキ、アナザーダイバー2ndにアナザーマツハウオッチを入れろ！早くー！」

「え！お、おお」

そう言われナツキは変身を解除してアナザーマツハウオッチを装填すると

『擬態……………ライドマツハ』

完コピしたライドマツハが現れたのだ

「けどバイクでアレを止められないぞ！」

「違う！機能までコピーしているなら」

魔進チエイサーはとある信号をライドマツハに送ると受信したライドマツハはライドチエイサーと合体して一つの車両になったのだ

「は、はあああああ！」

「やっぱり、2台揃えばライドクロツサーになれるか！」

「このマシンなら何とか出来るかも知れないって事か！」

「コレで奴の注意を引いてくれ」

「おう！……つてコレ使えば良くない？」

ナツキがアナザーマジエスティウオッチを見せて首を傾げる

「え?」

「ライドクロツサーさ…俺の脳波で動くんじゃないかなあと「なら早くしろ!」は、はい
いいいいいい!!」

そして自動運転モードのライドクロツサーがバグスターユニオン擬の足止めを行う

「さてと…やるかナツキ」

『グランドジオウ』

「おう!」

『ゲイツマジエステイ』

するとハルトの周りにはアナザーライダー達が円陣を組み、ナツキの周りにはアナ
ザーウオッチがバリアのように浮遊する、そして構えた二人は唱えた

「変身!」

『祝え!!』

『アナザーライダー! グランドジオウ!!』

『アナザーライダー! ゲイツマジエステイ!!』

そして二人が最強形態に変身するとウオズが

「祝え! 魔王と救世主が並び立った瞬間を!」

「ウオズ?」

「凄いシンプルな祝え! だったな……うん」

何か違和感を感じるが

「取り敢えず早く、やるぞナツキ」

「おう！」

アナザーグランドジオウは体についた顔をアナザーマジエステイはウオッチをそれぞれ触った

『エグゼイド』『ブレイブ』

「っしやあー！」「よし」

アナザーグランドジオウはガシヤコンブレイカーをソードモードにアナザーマジエステイはガシヤコンソードを構えると

「はあああああ!!」

二人はユニオン擬きに攻撃を仕掛ける

「ふう……何とか誤魔化せたか」

とウオズ？が安堵しているがその背後に

「いきなり私に化けましたか七罪嬢」

ウオズ（本物）がいた

「おやおや失礼しました、前回化けたからバレにくいと思ったのですが以外と勘の良い魔王な事で」

「我が魔王をその辺の人間と比較しないでいただきたい！そして私の口調の真似も辞めて貰おう……何より私の姿で祝いたくもない輩を祝った事許し難い！」

「そう言えば…ゲームの成立には誰に化けたかを調べる…それを踏まえると少し気絶してもらいましょうか?」

「貴女が私を倒す?」

「ええ、ですがこれだと分が悪いですので『贗造魔女』」

するとウオズ（七罪）の右手に現れたのは

『ウオズ』

アナザーウオズのウオッチであった、そしてウオッチを起動してアナザーウオズへと変身したのだ

「な! コレは一体……」

「私の天使、贗造魔女は見たものをそっくり真似ることが出来ます…勿論貴方の力もね」

「成る程面白い、ウオズ対ウオズといこうじゃないか」

『ギンガ…ファイナリー…』

ウオズも負け事とアナザーファイナリーに変身し

「はあ!!」

七罪 vs ウオズ 二人のアナザーウオズの戦いが幕を開けたのである

—————

その頃、アナザーグランドジオウとアナザーマジエステイはと言うとユニオン擬きに有効打を与えられずに焦っていた

「なんだよ、あの化け物!」

「バグスターならアナザーとは言え俺達の攻撃が通る筈なのだが」

「ならライダー怪人じゃないとか!？」

「無くはないが……」

何だろうか……この違和感……

「取り敢えず打開策考えないと!」

『弱点の割り出しなら俺に任せてオケエ!』

「だな、頼んだぜ!アナザーW!」

『よーやく俺の出番か……よし!相手の全てを閲覧した』

「で、どうだった!」

『結論から言えば、アイツはバグスターじゃない』

「じゃあ何だよ！」

『ダミーだ』

「ダミー？偽物って事？」

「違う！ダミードーパントの事…そう言う事か！」

「どう言うこと？」

「奴を倒すのにエグゼイドの力に固執する必要ないって事!!誰か知らないが俺の先入観を突くとはやるな！」

「感心してる場合かあ!…なら遠慮はない！」

『アナザーオールトウエンティ!』

『アナザーマジエステイ!エル・サルバトーレ!』

「はっ!」

二人は高く飛び上がるとアナザーグランドジオウの背後にはアナザーライダー達が現れアナザーマジエステイにはアナザーライダーの幻影が本体と合わさり一つの力となった

「たあああああ!」

『タイムブレイク／バースト!!』

二人のアナザーキックがユニオン擬きに全弾命中すると爆炎と共に出てきたのは碎

けたダメーメモリとボロボロになった一人の青年

「はっ？」

「はあ……………はあ……………」

「「トーマ!？」」

そこには逢魔の地下牢に幽閉されているトーマの姿があったのだ

—————

「ぐ……………き、貴様等あ……………」

「どうなつてんだよ、まさか七罪さんの言つてたゲームつて!」

「なら、だいぶ悪趣味だな…ウルティマ、大至急幽閉してるトーマの身柄を確認しろ」

逢魔に通信を飛ばして指示するが

「貴様等……悪の力を使って正義の味方気取りかあ!!」

「正義も何も暴れたアバドン止めに来ただけだけど？」

「黙れええ！正義は俺だ！俺が正義だ！この力を使ってお前達を倒すう！」

「ガイアメモリ使って頭イカれたか？」

「そもそもさ、トーマってあんな感じだった？」

「さあな、一応の力を抜き取ったから変身出来ない筈なんだけど……あとこの展開何処かで……」

『おーい、ハル聞こえる？』

「ん、聞こえてるよウルティマ」

『言われて監獄に来たけどさ、そいつ…今も変わらずブツブツ言ってるけど？』

「立体映像とかじゃない？」

『うん、魔法を軽く当てたけど手応え的には人体だった』

「そっか……なら束、銀狼」

『ん、言われると思って調べたよ！ハルくん！』

『それハルカの奴と同じだね、何処で人格データを手に入れたか知らないけどハルカのナノマシンにトーマ？のデータを入れて強引に動かしてるみたいだね、だから言動とかめちやくちやだよ』

「誰が何の目的で？」

『そこまでは知らない、けど早く倒した方が良くハルカの二の舞になるだろうし』

「はーい！」

「え!?!そこは正体考察とかしないの？」

「いや天井とか読者飽きるし」

「メタ発言は辞めろ!!」

「次こそは必ず俺が倒すう！正義の名の下にい！」

そう言うとなノマシンとなり消えたトーマを見て

「まさかこの世界で暴れてるアバドンって、トーマの仕業？」

「多分、最初は本当にハルカのドライバーが闇市に流れてたんだろが何処かの馬鹿がナノマシンか何かを弄ったみたいだな」

「誰がだよ!」

「……………DEMとか?」

—————

その頃 DEMの技術部では

「素晴らしい!偶然見つけた道具だが…:このような性能があるとは!コレを使えばDEMの覇権は揺るぎないものに…:そして私の名前は世界に語り継がれるのだああ!」

「ドクター!早く俺の体を治せ!そしたら魔王と救世主を殺しに行かせろ!」

「分かったよトーマ君、じゃあ君の恋人を取り戻しに行こうかの」

「待っている……待っているハルトおおお！」

—————

その頃

「へくち！」

「風邪か？」

アナザーダイバー2ndとライドチェイサーで帰り道のツーリングをしていたハルトがくしやみをした

「かもなあゝ季節の変わり目だから気をつけないと」

『なら安心しろ、お前は風邪を引かん』

「あ、何？怪人だから人間に効くウイルスなんて効果ないとかそんな話？」

『違うな、こう言う事ダロ？馬鹿は風邪をひかな……あああああ！』

『ああ！アナザーWが突然逆バンジージャンプをしてる！！』

『この人でなし！！』

「けっ！あの馬鹿は……けど……」

『どうした？』

「いやウオズの奴、何で祝いたくナツキを祝ったのかなあつて」

「そりや良い場面だから？」

「けど、それだけで祝うかなあ〜？」

そしてピースメーカーに帰ったハルト達が見たものとは

「私がウオズです!」「私がウオズです!」

「これどうなってんの?」

「知らん!」

「まさか七罪の童、ウオズに化けたのか?」

「だとしたら七罪さん、恐れ知らずですね」

と呆れる四人組とキャロルやエルフナイン達をみて

「まさか…」

「で?どつちが本物?」

「私です!!」

ハルトのタイミングにも全く同じと来た、アンチミミック弾を使うのは禁止なので

「ハルト、頼んだ」

「分かったウオズ、祝え」

「は?」

「祝えと言っている」

「そ、そっか!魔王ちゃんはウオズちゃんの祝え!のイントネーションを聴き分けて見分けられるんだ!」

「何て日常生活で無意味なスキルを覚えておるんじや、ハルト坊は?」

「しかしこれで本物が分かるぞ！」

しかし

「祝え!!」「祝え!!」

「ふむ…」

「魔王ちゃん、どう？」

「ごめん、さっぱり違いが分からん」

「「「「ええええええええええ!!」「「「「」」」」」

「こ、これ、どうしたら良いの？」

続く

七罪ウィッチーかくれんぼ？そして本当の姿？ー

さて前回 ウオズが二人になったのだ

なので取り調べ室に二人を分けて、それぞれ個別に取り締まる

「わ、我が魔王！信じてください！私は本物です！七罪はもう一人の方なのです！」

「よし取り敢えずウオズ何故、七罪がお前に化けてるか聞かせて貰おうか」

「はい…実は私がかくれんぼゲームで化ける対象だったようですり替わる為に闇討ちしようとしたら互角で決着がつかない内にジヨウゲンとカゲンが乱入、見分けがつかないのでピースメーカーにつれて行こうとなりました」

「うむ七罪の実力がウオズと互角かそれは予想外だったな……あの手の能力者は化ける方に極振りしてるから本体の戦闘能力は低いと思ってた……仮面ライダーベルデとかそんな感じだったし」

あんな透明化、擬態に極振りからの不意打ちパイルドライバーなんてロマン構築したデツキ使う、あの社長マジで凄いな……

『間違いないアナザー1号が宿るフィーニスも全く同じ話を聞いてるぜ』

「つか何でウオズに化けたのさ……いくら精霊でも闇討ちするには難易度高いよ」

「私もそう思います……何故彼女は……」

「あと……このやり取り仮面ライダーダードライブでもあったな」

ロイミュード072の話だ……あの回は切なくて泣けるが、まさかウオズで同じ展開を経験するとは

「よしー！」

「我が魔王？」

そして二人のウオズを改めて同じ部屋に移動させると、片方のウオズには普段のジヨウゲン達を着る クォーツターの制服を片方にはベレー帽や白い服を着せた

「同じ服だと見分けつかないから今は便宜上黒ウオズと白ウオズと分けよう！」

「いや、それお前がやりたいただけだろ!!」

「我が魔王、私はヤギではないが？」

「お！流石は黒ウオズ！ポケへの的確なツツコミ！これはお前が本物か！」

「騙されてはいけません我が魔王!!」

「すまない」

「どうした千冬?」

「その…変身してもらった方が早くないか?」

「」「あ……」

しかし

「千冬ちゃん、それダメだった」

「俺達も最初に試したが…二人とも同じアナザーウオズに変身したのだ」

「ウオズに聞いたが七罪の天使 贗造魔女とやらは対象の人のみならず物やその性能まで模倣する事が可能らしい」

「ほほお…単なるコピーベント（ベルデver）ではないと」

「しかもハルトでさえ見分けられないとか」

「いやまだ見分けられる方法があるぞ！ハルト坊！」

「一応聞くけど何？」

「やはりここは妾達と戦い強い方が本物というのはどうじゃ！」

「両方、お前に負けたら？」

「うむ！逢魔に弱卒は不要じゃ！」

「馬鹿じゃねえのヤクヅキ!?弱くてもウオズは俺の大事な右腕だぞ!!」

「わ、我が魔王…」 「何と勿体無いお言葉」

「ちえつ、このままウオズちゃん倒れたら俺が逢魔No. 2なのになあ〜」

「ジヨウゲン！お前、そんな野望が！…しかしその位置はテスタロッサの気もするぞ」

「冗談だよカゲンちゃん…やっぱりそうなるよねえ〜」

「じゃが、ハルト坊」

「ん？」

「そろそろ妾達にも役職を与えてくれんかの？流石に便宜上は必要じゃ」

「なら逢魔四天王で」

「即決!？」

「成る程のおウオズは別格としても妾達は鉄火場にいる事が多い…そうかそうか四天王かよし」

「二」四天王最弱はジョウゲン／カゲン／フィーニス／ヤクヅキ!!……は? 「三」

その異口同音にハルトは頭を抱えた

「誰が最弱だと? 舐めるでないわ! 二人一組のバーガー and ポテトのセットコンビが!!」

「ふん! 俺達の連携の前には敵うまい!」

「それよりフィーニスちゃんでしょ! 俺のこと最弱呼びしたの!」

「実際、カゲン先輩やヤクヅキ先輩みたいに巨大化とか奥の手ないのはどうかと? 僕も巨大化出来ませし」

「俺はネオタイムジャツカーの幹部倒したし!魔王ちゃんの信頼も厚いよ!!他の面々よ
りコミュカあるし!それ言うならフィーニスちゃんもでしょ!加入した後の武勲なん
てフィーネのカディングルへし折った位じゃん!」

「何だつて!!もう一回言ってみろ!トカゲ先輩!!」

「言つたな下半身バイクが!!」

と誰が四天王最弱かで揉めてる馬鹿四人に

「はあ………頭冷やせ!!」

ハルトの鉄拳が落ちたのであつた

そして四人を正座させて

「そんなに言うなら皆に最弱とかつけるよ！奴は四天王の中で2番目に最弱とか！」

「何か嫌な呼び方だな、それ！」

「嫌なら序列とかつけないように…それと喧嘩はしない事………わかった？」

「……はい!!」

「よし！コレで解決!!」

「「じゃないです!!」」

「はあ………そうだよなあ。つか二人の見分け方かあ………うーん………あ………王の勅令使えば
良くて」

本物のアナザーライダーならばハルトの王の勅令の影響から逃げられない、ならば

「えい」

と軽く使った力だが

!!!
!!!
!!!

二人の体が痺れて動けなくなったのだ

「あ、あれえ!?!」

『まさかここまでの再現度とはな』

「こうなると厄介だぞ…」

ここまでの擬態の精度とは思わなかった…何なら七罪の事を舐めてたな

「カミーノアンに頼んでDNA検査とか?」

「いやいや、これは未来の魔王様に来て頂ければ」

「何か嫌だ、負けた気がする…：ならさ気絶させるとか？そうしたら擬態解けるんじゃない？！」

「いや戦うなど論じたお主が言った言葉には思えんのじゃが」

話し合っているとフィーニスが思いついたように言う

「そうだ！我が魔王への忠誠心を図るのはどうでしょう！本物の先輩なら負けるはずありませんから！！」

「「それだ!!」」

「いや、普通真っ先に思いつく事だろうか？」

とキャラルが溜息を吐くがナツキは

「まあ、王様がコレだからなあ…」

「そうだな」

「なあ相棒、俺ってそんなに威厳ない？」

『ギャグか？』

「そこまで!？」

その時！

「お待ちせー!」

「遅いぞ東、何をしていた？」

「いや、このメモリガジェットの発明をしていたのさあ！」

と東が取り出したのは

「デンデンセンサーだ！」

「そう！このガジェットを使えばどっちが本物か丸わかり！」

「おおおお！スゲエ東！愛してる！！」

「ハルくんからストレートな愛情表現!? 東さんもだよお！」

「東！」「ハルくん！」

とハグする二人を見て

「」「」「ちっ！」「」

キャロル達は舌打ちをした

「はい皆さん、落ち着いて」

そして更に

「ハルきちー！お願い！Gペン君を雇用した……い？つてウオズが二人になってるう
うううう！」

二亜参戦！

「そうだ！二亜の囁告篇帙ならどつちが本物か分かるんじゃないのか！」

「っ！二亜！」

「えー！私の天使で調べるのつて意外と「二ヶ月Gペンの手を貸そう」よっしや任せん
しやい！さあ！検索を始めよう」

『それ俺のセリフう!?!』

「あの……我が魔王は七罪嬢に恨みでもありますか？」

「んや？けど……ウオズが二人とか……はっ！これって祝福2倍セールじゃん！」

「目一杯の祝福を我が魔王に！ではありませんよ？」

「……………どっちがアナザーミライダーウオッチ持つてる？」

「此方に」

「ちっ！引っ掛からなかったか」

「何て不意打ちを」

「恐ろしい我が魔王」

「一番確実なのはウルティマ呼んで記憶を除いて貰うことだけど…何か事件解いた気にならない」

「拘りか?」

「そーそー…で、二亜は何か分かった」

「うーん。分かったんだけど私の囁告篇帙にはウオズに化けたくとしか書いてなくてさくどつちかわかんない!」

「はあ………ん?もうこんな時間か一先ず飯にするか…取り敢えずマルゲリータで良いか」

「取り敢えずでピザ作るのはどうかと思うよハルきち」

「ハウンドくピザ窯に火入れといてー」

「そう仰ると思い、いつでも焼けますー！」

ハルトは席を立つと何の気なしに聞いてみる

「七罪も食べてく？コーラもあるよ」

いやまさかこんな事でボロが出るわけ…

「勿論」白ウオズ

「「「「「あ」「」」「」」「」」「」」

「……………あ」

「ふう…どうやら間抜けが見つかったみたいだな」

ハルトはドヤ顔するが

『決まった!みたいな感じだけどまぐれ当たりだよナ?』

「あ、あははは……つてうわあ!」

待ってましたとばかりにフツキングレットカーとジャステイスハンターが白ウオズを捕縛したのだ

「グツジョブ、二人共……さてとゲームクリアかな」

んで四天王とはと言えは

「ウオズちゃん!俺は信じてたよ!」

「やはり貴様の方が本物だったか!」

「妾は気づいておったがな」

「掌返しが早いとか…先輩達最低です」

「お前達、後で覚えておけ…そして我が魔王」

「何？」

「私には「チーズマシマシとタバスコだろ？」はい…「取り敢えず七罪、変身解けよゲムは俺の勝ちだ」」

すると七罪は擬態を解き、いつもの大人の女性に「戻る

「そ、そんなチートガン積みで勝って嬉しいの！」

「別に？嫌ならもっかい相手するよ」

「っ!!!」

「それにウオズを襲いはしたが殺さないでくれたんだ、感謝はしてる……けどウオズ真似されたからって互角はないだろうよ」

「申し訳ありません、不覚を取りまして」

「じゃあ取らないようにヤクヅキが満足するまで組手な」

「そんな!」良いのかハルト坊!そうと決まれば行くぞウオズ!」お待ち下さい我が魔王!!」

あの様子を見てハルトは気まずそうに呟く

「お前達さつき序列云々言ったが筆頭は」

「最強はヤクヅキ（先輩）です!!」

「宜しい、肝に銘じておけ…それと部隊を再編して四天王直轄のトルーパー大隊を預ける副官も手配するから好きに使え…ただ道理に外れた事はするな」

「はっ!!」

「さてと…ゲームは俺の勝ちな訳だが…確認だ七罪」

「何かしら？」

「お前、親は？」

「!!」

「ああ皆まで言うなその反応で大体分かったから…そう言う事か」

俺が彼女に抱いた違和感、そして何故俺が敵意を持たないのか理解した

「お前、俺と同じで親に愛されなかった口か」

「っ!!!」

「だから擬態してんだろ?理想の自分になったら周りが認めて貰えるって」

「あ、アンタに何がわか「俺も親に愛されなかったからな」え…」

「だから、イマイチ親の愛情なんざ分からん…クロエにだってキッチンと親の愛情とやらを注いでいるのか実際の所自信はねえ」

「……………」

「だが俺の憧れの人はこう言った、誰かの為に自分を変えられるのが人間だ…自分が変われば世界も変わる!それが天の道!と」

「……………ん？」

「だから変わろうと思えば変われるよ七罪もな、だって俺みたい人間でさえ変わったんだからな！…だろお前達」

『まあまさかあの時の馬鹿と長い付き合いになるとは思わなかったしな』

『そーそー見事なスケコマシ野郎にせいちよ…あー！ー！』

『あ！アナザーWが貸し出す予定の量産型ジェットスライガーに撥ねられた！』

『この人でなし!!』

「そうですね会ったばかりの我が魔王など」

「俺は王様になんかならない！とか言ってたのに」

「今では王様としての自覚が芽生えているのだから変わったな」

「はい、僕も第一の臣下として鼻が高いです」

「「「「一番の臣下は俺（妾）だが?」」」」

「はい!そこ喧嘩しない!」

とツツコミを入れる中キヤロル達もうんうんと頷く

「そうだな、その馬鹿は俺と言う正妻がいながら行く先先で現地妻を増やして回る…
本当、困ったものだ」

「そうだねえ、東さんもハルくん居なかったらどうなってたか」

「東は人嫌いなままだったろうな」

「かもねーちーちゃんは部屋が汚いまま…あああ！」

「少し黙れ残念兔！」

「まあ旦那様の過去とか関係ないわね、強い旦那様だったから私は此処にいるのだから」

「やれやれ…しかし銀狼、君も面倒な男に惚れたね」

「その方が面白いと思ったから、宇宙の果てを見るよりもね」

と笑うのを見て

「……………結局人間見た目じゃない！アンタだって本当の姿を隠しているのに!!」

「ん？」

「化け物の顔があるんでしょ!それ見られてないからそんな事言えるのよ!アンタの本
当の姿を見ればアイツ等だって「じゃあ試してみる?」え?」

「本邦初公開!とくとご覧あれ!これが…常葉ハルトの怪人としての姿だあ!!」

とハルトは謎の黒いオーラを体から溢れさせてその姿を変え始めた…かに見えたが

「……………そう言えば俺ってどうやったたら怪人になれば良いんだ?」

ふと我に帰ると周りの面々は転けたのであった

「ほらやつぱり見せるのが怖いんじゃない」

「ん……なあ相棒、何か知らない?」

『お前の怪人形態変身には強い怒りと絶望の感情が必要となる、でなければ変身出来ん』

「そうか怒りと絶望か……ふむ」

ハルトは強くイメージする、己の中にある強い怒りと絶望
マ、親からの迫害の日々じゃない……そう！

それはハルカやトー

【え！今日ゴルフで仮面ライダーおやすみ!?】

日曜日に仮面ライダーが見れなかった事だ

「おのれ全○ゴルフううううう!!!」

突然、艦内に強い波動が溢れ出た！

「え…ええ!!そんなんで覚醒して良いのかよハルト!そこは…ほら!アナザーライダーやキヤロル達に何かあつてとかで覚醒するとかさ!」

ナツキが冷静にツツコミを入れるがキャロルは

「いや、寧ろこんな馬鹿みたいな理由で覚醒してくれた方が助かる…オレ達に何かあったらハルトが変身するのは怪人じゃないアナザーオーマジオウだからな」

「つふう…」

そしてオーラの中から現れたのは…それは二足歩行の黒いバツタ…恐らく生物としての名残だろう脚は背中に折り畳まれている、その腰のバツクルには仮面ライダー永劫の敵である、シヨツカアのマークがそれは過去と未来を象徴しているかのように刻まれている それは永劫 ライダーの敵としてあり続けると言う怪人の王としての在り方なのだろう…本人の性格から敵対など断じてないが…

影の歴史から生まれし怪人王

常葉ハルト・怪人態

現る

しかし黒光りする、その姿はまるで

「ハルクんの怪人態のモチーフってゴ「束それ以上はいけない!」んぐつ!」

その束の軽い一言でハルトは束達を見て一言

「えええ!俺の怪人態ってバツタじゃないのか!!!ハウンド!鏡を用意してくれ!!これば重要案件だ!」

普段通り過ぎる態度に

「「「いやそこかよ!!」」」」

逢魔の面々はツツコミを入れたので有った

そして鏡を出されたので見ると

「うおおおお!こ、これが俺の怪人態か!いやー!ボスみたいな顔で良かった!ダメー
ドーパントみたいに素体剥き出しな雑魚怪人みたいな顔だったらどうしようかと思っ
たよ」

『しかし中々に生物的な外見だな』

「確かにな!んーそうなるとガドル閣下やカツシズワームみたいなカツコ良い怪人要素
が欲しいな…」

『例えばばっ?』

「うーん……モチーフをカブトムシにするとか?両手に爪とか剣を生やすとか?」

『運命を受け入れろ、お前は怪人バツタ男だ』

「っ!つまり俺の武器は鍛え上げられたこの肉体と言うことか!!」

『対して変わらん』

『前から思ってたが本当にコイツはポジティブな馬鹿だよナ』

怪人の姿のままシユールなやりとりをするハルトにキャロルは呆れたような顔を
してハリセンで叩く

「おい!ハルトよく顔を見せてみる」

「ん?おう!」

ハルトはキャロルと顔を合わせるとキャロルはフツと笑うと体をペタペタ触り始めた

「ふむ…確かに人間ではないな」

「あ、やっぱりどう！怪人の俺カツコイイ!？」

「ダグバを見習えと言っておく」

「……………やっぱりモチーフとか色を変えられない？」

「だが」

「ん？」

とキャロルは躊躇いなくハルト怪人態にキスしたので有った

「っ!!」

「ふう……姿が変わっても貴様は変わらん常葉ハルトというのは容姿ではない、そのアホみたいなノリと勢いで突き進む馬鹿さに私は惚れたのだからな……お前達、ハルトの怪人態を見て愛が冷めたならさっさと失せるオレが独占する時間が増えるからな」

「は?何言ってるの?前にも言ったけどハルトがどんな化け物であつても私は彼を愛しているよ」

「それは同じね軟弱な男なら振り向かないわ旦那様が化け物でも関係ないし何でもありなのは今更よね」

「そーそー!そんな事よりハルくん!その体表組織のサンプル貰って良い!」

「落ち着け束、全く……そうだな私の生まれを受け入れた男だ、なら私もお前を突き離す事はない」

「ハルトは面白いね〜この顔のボスキャラ出るゲーム作ろうかなあ…」

「うおおおお！その怪人の見た目に改造された悲哀や人間としての姿を失いながらも心に宿るは人としての心！…うむ！！次回作の主人公の参考にさせて貰っても良いかな？ハルきち〜？」

「二亜…職業病が出るよ!?!」

「ネタに飢えてる漫画家も本当に大変だね」

「どのような外見でも陛下は陛下です！寧ろその姿の方が撃つ時に良心の呵責がなくなりますので、その姿でいてください！」

「お前はどつちの味方だハウンド!! ったく…」

ハルトは溜息を吐きながら人間態に戻る

「いや〜やっぱりこっちの方がしっくり来るな」

そう頷いていると

「ほ、本当の化け物だったのね」

「おう!けど皆、変わらずに俺だって言ってくれたよ?」

「なら……私の姿を見ても同じ事が言えるかしら!!」

と七罪が自らの変身を解除したのであった

スパイダークモノス√

普通の青年 常葉ハルトがいた

彼はどぶの煮凝りみたいな家族に虐げられていた日々を過ごしていた

ある日 屋上から家族に保険金目当てで突き落とされて命を落とした筈だった……
目を覚ました時、俺の体は

「なんじゃこりゃああああ!」

一部をバグナラクに改造されてしまっていた!!

「ふふふ、どうだ人間よバグナラクの先兵とされた気持ちは「うおおお!カッケェ!」
……は?」

「スゲエ！俺の右腕が人間辞めてるう！スゲエ！！俺人体改造されちゃったよ！！なあはあ！この腕からビームとか出たりするの！！もしくは何か特殊な能力とかある？…なあ誰か知らないけど改造してくれてありがとう！」

と喜びの感情を見せているハルトを見たデズナラク8世は宰相ガメジムを呼び出し

「おいカメジム！あの人間、バグナラクに改造されたのに絶望するところか喜んでいぞ！頭がイカれているのではないか！」

デズナラク8世よ…大体のハルトも同じ状況なら喜びます、彼がイカれているだけです

「これは使えますね」

それでハルトはバグナラクの先兵として戦闘訓練をしていた ある日 非番とかやる事もなかったの この世界 チキユーにある国へと足を運んでいた

「えーとゴツカン…だっけか？よしこの寒さなら良い冷凍みかんが作れる筈だ皆んな喜ぶぞー」

こんなふざけた理由でゴツカンを尋ねた彼だが この場所で彼の運命を変えた出会いがあった

「……………」

「……………」

突然目の前に現れた変なお面をつけた奴と遭遇したのだ

ある日 ゴツカンの中 変な奴に 出会った

歌にすればこんな感じだろう、ただ俺からしたら

「へ……………変質者だああああああ！」

注意 この男 自分と右腕がバグナラクにされています…

!!!
」

落ち着け！と言ってるようなのでハルトは取り敢えず深呼吸する…ゴツカンの気温的に肺が痛くなるが、冷静さを取り戻すなり

「取り敢えず……冷凍みかん食べる？」

ゴツカンで冷凍みかんを薦めるクレイジーな男 それがハルトであったが

!!!
」

「あ？」

これが数十年前の話

バグナラクに改造された男と、人間とバグナラクの共存を夢見る王が初めて会った日である

そして時は流れて

「ジエラミーは何処だあ!!」

「おや、ハルトどうしたんだい?」

そこにいる白いのキザな男 ジエラミーブラシエリを見るなりハルトがバグナラクの手で胸ぐら掴んでゆする

「どうしたんだい?じゃねえよ!またンコソパに蜘蛛男伝承残しやがって!!後処理大変なの知ってるだろうが!!つか近未来都市に蜘蛛男伝承残すとか ピーオーパーカーか 貴様はあ!!」

「大丈夫だよ……だろ？」

その信頼してゐるような声音にハルトは最早違和感のない右腕で頭を搔く、会つて百年ちよい……この男の言おうとせん行間くらいは読める

「ああ分かつた分かつた分かりましたよ、俺が後始末するよ」

「ああ頼んだハルト」

「つせえ、これ使うぞ」

と取り出したのは以前 ジェラミーが製作したクモノスレイヤーの試作品をハルトが改良したものである

「ああ期待しているよ、俺の臣下」

ハルトはこの男 ジェラミーブラシエリの下に仕えている 理由？んなの決まって

るだろ？

「あいよ、我らが狭間の王」

俺なんかより辛い境遇の筈なのに世界や人間、バグナラクを恨む事なく……てか逆に馬鹿正直に千年もいがみ合う連中の共存を夢見ている大馬鹿野郎、そんなの放っておける訳ないだろ？

つか自分が純粹にちっぽけと思つたからかなここにはいない誰かへの恨みを果たすより

その先にある種族の平和と共存を夢見ている狭間の王 その姿が眩しく見えたのだ
……だが

理想だけでは生きていけない時には汚れ役が必要だ……なら

「それは俺の仕事だろうよ」

クモノスキーを装填して力を解放する

『解放』

「……………王鎧武装」

あの王が理想とする世界を作る為に俺は戦う

『スパイダークモノス!!』

その姿は白い蜘蛛の王 だが試作品故か体の一部に黒い線が入っている

プロトクモノスって所かな

「さて…………お仕事開始！つか俺も専用武器が欲しいな…はは、あの馬鹿に作らせるか…
じゃねえと割に合わねえし！」

そうボヤいたハルトは糸を使い、ンコソパの街を飛び交う ジェラミーがヴェノミツクスシューターを作る為と言い部品を盗んだ証拠隠滅の為に

とある分岐によつて

「ふざけんな……俺はハルト……常葉ハルト!!あの狭間の王 ジェラミーブラシエリを守る騎士であり……友達だ!あの馬鹿王の夢を笑うなら……人間もバグナラクも等しく俺の敵だ」

ハルトはひよんな事から手に入れた剣 オージャカリバーZERO 拾ったは良いが別に王の遺伝子なんてある訳ないので切れ味の良い剣くらいにしか思ってたが

「王鎧武装」

本来なら起動すら出来ない筈の力なのだが……

『LORD of THE!LORD of THE!LORD of THE SH
UGOD!!』

何故か起動しハルトは銀色の装甲を纏う戦士となる

『オオクワガタオージャー!』

「……………え? 何このカツコ! つか何! あの黒いキングオージャーは! カツケエ!! ……え?
俺が乗って良いの? よっしやあ! 行くぜ!」

こうなる未来もあると彼はまだ知らない

「おい待てジェラミー! 何勝手に合体しようもしてんだ! つか操ってるのお前か!! ふぎ
けんな! 何? 臣下の者は王のもの? んなの事言うキャラだったかお前!」

七罪サーチ 前編

前回のあらすじ

怪人態になったハルトを見て七罪も自分の姿を晒すので有った

「っ!!」

強い光と共に現れたその姿は！

「ど、どう！これが本当の私よ!!」

緑色の髪をした幼女だった

「醜いでしょ！酷いでしょ！さあそれでも今まで通りだつて言えるかしら!？」

半ばやけくそな七罪には悪いが

「いやハルトの後だから迫力に欠ける…」

ナツキの言葉に全てがつまっていた

「ロリ化するならキャロルやエルフナインも出来るからな」

「そうだな…寧ろ幼くなるからオレと逆か」

キャロルは本来の姿である子供モードに戻ると

「え？あ、アンタも！」

「ま、オレのは錬金術なんだがな…それよりも」

「錬金術!?!」

「何だ普通に可愛いではないか」

「うんうん！ てつきりハルくんも真つ青な化け物かと思つてたよ」

「何でこの顔で醜いとか言えるの？」

「さあ？ この世界の美的センスって割とおかしい？」

「まさか十香ちゃんや折紙ちゃんは美少女認定だよ？ この世界の美的センスがおかしいっていうなら、みんなハルトみたいな文字T着てるでしょ」

「「「「「確かに！」」」」」」

「おいナツキ、取り敢えずお前は後で説教だ……んで七罪、見ての通りお前を否定するよう奴はいないぞ」

「寧ろ宴会の時に酒飲んでないか心配だよ」

「あ……………七罪飲んでないよな？そつちが心配になってきた」

「いや…その…何で？」

「あ？馬鹿じゃねえのさっきのやり取りみて分かんねえかな」

「……………つ！……………わ、私を改造人間にしようってそうはいかないわ!!」

「いや、どうしてそうなる!？」

おかしい今の会話の何処にその脈絡があった!？」

「そんな甘い言葉で私を誑かして改造手術を施そうとしてるんでしょ!!」

「んな事するかあ!……………分かったぞ！お前が治さないとダメなのはそのネガティブ思想か!!」

「そ、そんなの治せるわけないじゃない」

「よし先ずは見た目からだな、取り敢えず服装を変えてみたらどうだ？気分も変わるぞ」

ハルトの言葉で七罪と二亜以外の心は一つとなったのだ

「ハルト！き…貴様、七罪にあの文字Tを着せるつもりではないのか!？」

「は？いやいや別にそんな事考えてないけど？その辺の店で似合う良い服買ったら？と思っただけ」

「「「「「「!!」」」」」」」」

その常識的な一言に

「お前本当にハルトか！実は七罪が擬態してるとかないよな!!」

「あ?」

「は、ハルトがそんな常識的な事を言う訳がない!!」「ボルキャンサー、今日の餌だ頭からバリバリいけ」は、ハルトだ!間違いないぞ!みんな!ハルトが成長してるぞお!」

イライラしたのでボルキャンサーに襲わせたら俺だと信じた…何か解せん

「何か俺のセンスが悪いみたいなの扱いなんだがどうなっている?」

『何だ?ツツコミ入れて欲しいのか?』

「え?嘘…俺ってセンスない?」

『『今気づいたのか!?!』』

七罪に服を買おうとショッピングモールによつたのだが

「七罪ちゃん！次はこれだよー！」

「七罪、これとかどうかな？」

「え……あの……」

束と錫音がノリノリで服を選び七罪を着せ替え人形にしているのであった

「頑張れ七罪」

ハルトはやれやれと苦笑しているが何かを感じてムツとなる

『おいハルト』

「わーっつてる四天王頼んだぞ初仕事、ウオズ連中を頼んだ」

「お任せを」

「…んじや行つてくる」

ハルトは一人でショッピングモールを離れ近くの人気のない場所に着くと

「隠れてんじやねえよ、知らねえのか？人のデートの邪魔する奴は馬（ホースオルフェノク）に蹴られるんだぜ…つか蹴られるオーガコールするぞコラ」

笑いながら言うのと虚空に赤い霧が集まり人の形となる

「デート？女の子達を誑かして不誠実な事をしてるだけだろ？お前なんか女性に誠実な事をするか」

「いやあく偏見つて怖いねえ…幸せの形は人それぞれだろ？」

「黙れ!!あの精霊を利用して悪事を企んでいるな！そうはさせん!!」

「は？俺は別に…つてもう良いかお前と話すだけ時間の無駄だわ…なんつーか相手すんのも面倒いし…」

最早問答無用ではないが相手するのも億劫なので

「潰れろ、やれ四天王」

と言うとアナザー1号の前輪が現れたアバタートーマを踏み潰した

「お任せを!! 貴様など我ら四天王の敵ではない!」

「やれやれファイニスちゃん張り切ってるねえ」

「まあ初陣ともなればな」

「かーかつかつか！良し良しでは悲鳴を聞かせてみる木偶人形!!」

「「変身!!」」

3人は変身するとトーマのアバター目掛けて一斉攻撃するのであった

ハルトはそれを見届けているのだが七罪がゼエハアしながら俺の隣にきた

「な、何なのよアンタの奥さん達は!!慌てて逃げてきたわよ!」

「スゲエだろ?何せ俺でさえ勝てねえから」

『胸張って言うことではないな』

「うるせえ……ま、色々上から目線で言ったけど無理して変わる必要なんてねえよ」

「……………なら何でアンタは変わったのよ?」

「ん？」

「錫音から聞いたわ、アンタ元はとんでもない悪い魔王になる予定だったって」

「そうだね」

「なら何で……」

「変えてくれたからだよ皆が」

「え……」

錬金術師と会って 誰かを愛する心を

宇宙に行きたい兔に会って 夢を見る心を

不器用な戦乙女と会って 誰を助ける心を

魔法使いに会って 過去と向き合う心を

愛されなかったハーフェルフに会って 幸せな未来を求めろ心を

んで歴史の闇に消えた馬鹿どもからは、全てを守り運命を変える力を

「みんなが俺を作ってくれたんだよ…そして俺を変えてくれた、だからこうして今がある」

「私もなれるかしら？」

「なれるんじゃないの？ 誰かの伸ばす手を掴みたいって思うんなら」

「こうしてる間にも四天王がノリノリでアバタートーマをボコボコにしている…うんナノマシンだから身体能力は高いんだけどさ…その辺の戦闘員よりマシってレベルだが人間に毛が生えた程度でしかない」

「つてか弱っ！ 何で!!? あんなカッコつけて出てきたんだからラスボス級の力を期待してたのに何か残念!!」

本当、勢い任せで出てきた阿呆だった

「はあ……本当、何でこんな連中の所為で人生を棒に振ったんだろう……なんか馬鹿馬鹿しく思えてきた」

溜息を吐くと

「思い出したら、なんかイライラしてきた……四天王！七罪を見てやってくれ……この層は俺がやる」

「「「はっ！」「」」

そしてハルトがアナザーウォッチを構えると怯えたトーマの目は七罪に向かう

「き、君!!」

「……………」

人見知りなのか関わりたくないのか両方なのか…彼女はハルトの背に隠れると

「そいつは君の未来を台無しにする悪い奴なんだ！僕と来よう！そしてその力を正しい事の為に使うんだ！！一緒に魔王を倒して平和な世界を作ろう！！そうすれば君は英雄だ！！」

「ねえ…何言ってるのあの人。」

「知らん…もう俺には雑音にしか聞こえねえよ」

「君もあの子達も騙されてるんだよ！その男は何人もの女性を誑かして身を粉にして説得しに来た可愛い妹を亡き者にしようとしているんだ！」

「人聞き悪いな」

「どんなフィルターかけたらそうなるの？」

「だから僕と行こう！平和で正義に溢れた世界を作ろうじゃないか！！」

七罪は可哀想なものを見る目へと変わる

「馬鹿じゃないの貴方、正義？平和？そんなのある訳ないじゃない自分達にとっての言葉が抜けてるわ」

「っ！ち、違う！僕は！」

「それに貴方の方が胡散臭いと思う、私は私を見てきたものを信じたい」

その言葉には七罪が接してきたハルトへの信頼があつた、それが気に入らないのか
「っ……やはり魔王は殺すしかないようだなあ！！」

懐からガイアメモリを取り出そうとするが

「させると思う？ハルト達に何すんのよ……この馬鹿をいじめて良いのは私だけなんだからああああ！『贗造魔女』!!」

そして解放した七罪の天使は鏡であつた

『千変万化鏡（カリドスクープ）!!』

その力は他の天使の模倣 しかし七罪が解放した力とは…筈が変化した巨大な大砲
…否 ゾルダのギガランチャーであつた

「え？ええええええ!!」

まさか自分の武器を真似するとは思わなかつたハルトが二度見して驚く中、七罪は不快な感情のまま

「消し飛びなさいナルシスト!!」

ギガランチャーの引き金を引き トーマの頭を消しとばしたのであった

七罪サーチ 後編

前回のあらすじ

デートの邪魔した奴を七罪が大砲で追い払いました

「作文!?!」

「いや端的だろ?」

「端的すぎるのよ!!!」

そうツツコミする七罪にハルトはカラカラと笑うと頭に手を置いて

「七罪あんがとな」

「……………ん」

「それと頑張れ」

「ん?」

素直に礼を言うのと七罪も頷く、それを見ていた束と錫音は笑顔のまま

「さて七罪（ちゃん）、次の服選ぼうか」

各々の趣味の服を持って近寄ってくる

「え?…い、いやあああああああ! た、助けてハルト!! 私にはあんな派手な服似合わないのよ!」

七罪は涙目ながら助けを求めるが

「ごめん、今呼吸に忙しい」

「凄い暇じゃないの！助けなさいよ！！」

「いや忙しいんだよ…波紋の呼吸してるから」

「何を習得しようとしてるのよ！！」

『相棒が人外化している…』

「いや、その前にいつの間波紋の呼吸を覚えたのさ！お願いハルきち！私にも教えて
！」

「おう……えーと……確か最初の入り口はこう！パウ！」

「ぐえ……っ！」

ハルトは二亜の腹目掛けて一撃を叩き込むと二亜が女の子がしてはダメな声をあげて倒れるのであつた

「……………ありや？ ツボ間違えたか？」

「ハルきち……………か、回復を…」

お、このノリなら

「動けぬ漫画家など必要ない！ そおい！」

取り敢えず片手で宙へと放り投げてみる

「うおおおおお！ まさかナツ〇みたいな展開がああああああ!!」

「っつと」

まあ爆散などさせないのでお姫様抱っこで受け止めると満面の笑みで

「やべえ…凄く楽しい！」

「笑顔が怖いよハルきち!!」

「二亜だから大丈夫」

「なつつん、それがイジメの始まりだよ！」

「ご、ごめんなさい…それよりハルト」

「ん？」

「その…何で人間辞めてるに普通に笑ってるの？」

「え？別に執着ないからだけど？だって変わっても俺は俺だし！」

ヘラヘラ笑うもハルトからしたら本音なのだ

自分を受け止めてくれる人がいる限り

人間の心は捨てない、無くしても俺を止めてくれる人がいるので心配ないと

「そう……やっぱりアンタ変ね」

『本当に』『いや全く』

「おい……テメエ等覚えてろよ」

「そうよ……私なんかに優しいとか……姿変わっても普段通りとか……どうなってるのよ」

「え？俺が人の容姿云々に何やかんや言える権利があるとしても？俺ってバツタ怪人よ？
トラウマになるよ？」

『いや、そこまで怖くないぞ?』

「え?そつか俺にとつては特別な存在以外はね……その辺の石ころと同じなんだよ相棒、だからね前に学校で家族の絵つてお題に全力でノスフェル書いたら先生が家庭環境に問題有りとか思ったのか施設に避難させてくれた事もあったな……」

『お前の家族は怪獣……いや化け物と伝えたかったのか』

「そーそー……そんな事あったけど、今はどーでも良いよ逢魔や俺の特別な存在が幸せならささ〜」

「そ、そう……ねえハルト」

「ん?」

「本当に私を見つけてくれたわね」

「おう、約束したからな見つけるって」

「……………うん」

頭を撫でながらハルトは安堵していると七罪はハルトを手招きする首を傾げて膝をつくと七罪はハルトの頬へキスをした

「「んなー！」」

「ありがとうハルト…その…わ、私も頑張りたい…皆と一緒にだから…ゲームは貴方の勝ちで良い」

「わーった、錫音く服用意しといて」

「任せて」

「丁度良く用意してるから！」

「グッジョブ！」

「え？ちよつ！」

そしてハルトはエルフナイン作のブランクボトルを七罪に向けたのであった

その後、衣服の消えた七罪に服を着せたハルト達はフラクシナスに検査の為 送るのであったが

「行っちゃったね七罪ちゃん」

「だな、まあ検査が終わればすぐに戻ってくるよ」

「そうだねえくじやあ、この後はハルくんの服を見るところ」

「……………へ？」

「そうだね前に言ってたよね私達を選んだ服なら着るって」

「そしたらあの文字Tは着ないんじゃないかな?」

「まずいアイデンティティの危機だ!こうなった逃げるぞ:バイオグリーザの光学迷彩で!」

姿を消そうとしたが、その刹那に千冬が加速し喉元へ刀を突きつけた

「何処へ行く?」

「千冬!いい、いやこれはね」

『光学迷彩で逃げようとした』

「相棒ウ!」

「光学迷彩で逃げても無駄、この辺の監視カメラをハッキングしてサーモグラフィにかける見えなくなってもハルトの熱は残るから探せる…今までは逃げれただろうけど、私がいる限り必ず見つける」

「銀ちゃんナイス！東さんには出来なかった発想だよ」

「基本的に私達は直接的な拘束しか考えなかったからな」

「そうだね、その方が手っ取り早いし」

「皆はもう少し考えるべき…さてこれで逃げ場はないよハルト」

「ま、まだだ！キャロル助けて！」

最後の希望とキャロルを見るが彼女は冷静にサムズダウンした

「すまないなハルト、流石のオレでもお前のセンスはカバーできない丁度良い機会だか

ら見てもらえ」

「う、嘘でしょー！ー！ー！」

「「「「「さあ行くよー」「「「「「」

「ぎゃあああああ!!」

その日からハルトが文字Tに袖を通す事はなかったという

「お、俺のアイデンティティが…」

『いやダサイ私服をアイデンティティにするなヨ…つてうわあ!』

『あ、アナザーWがトラックに撥ねられた!』

『いや待て何処から出てきたんだ、あのトラック!!』

その頃

「う……ぐ……ハルトめえ……女の子を洗脳して攻撃させるなんて……」

七罪からギガランチャーによる砲撃を浴びたトーマ（アバター）はボロボロの体を引き摺りながらも生き延びていた

「くそ……あんな奴に僕が負けるなんて有り得ないんだ、どうせ卑怯な真似を……そうだ魔王なんだからそんな事するに決まってる……」

と逆恨みの言葉を吐き続けるトーマに忍び寄る影があつた

「Hey you! 君面白そうな話してるねえ、僕にも聞かせてよ!」

それは陽気な口調で話しかける黒い狐のような仮面ライダーだった

「だ、誰だお前！」

「そんなの知る必要ないよお〜!!」

漆黒の二刀流で挑発する彼に激昂したトーマは身の程知らずに殴りかかる

「ふざけるなあ！僕が名前を聞いてるんだから答えろおおお！」

まあそんなの通る訳もなく

「slash！」

「あがぁ！」

見事に斬殺された、しかも再生する筈なのに鐘の音が鳴ると同時に再生は阻害され見事に爆散したのであった

「y e a h!!しつかしどの世界でもコイツらはいるなくホント良いよねえ、屑はいくら切つても罪悪感がないからさあー!」

その見た目に反して軽薄な声音だが、多少ふざけても大丈夫という実力と余裕を備えていた

「さて…世界にも俺がいるなら挑んでみるとするかな最強の俺は誰なのか!さあゲームを始めようぜ」

次回 間話にして劇場版 ?

突如、現れた黒いギーツ こと仮面ライダーXギーツ

彼の仕掛けたゲームにより世界に異変が、それはハルトの手にも及ぶ

私服などの芸術的感性を司る センスのハルト!

「復活の文字T!!このビッグウェーブを止められない!何故なら!」

『俺、最強だから!』(オーラア!)

「魔王様!こちらの服に袖を通してください!」

戦闘においては誰よりも頼りになるが頭が足りない 力のハルト!

「力こそパワー!見よ!この上腕二頭筋!!む…敵か!食らえ!俺の渾身のラリアット!!
……yeah!!」

「これ……デフォルトの我が魔王では?」

滅多に働かないがいざという時は働く 知恵のハルト!

「なるほど…そうなのか分かったぞ!この黄金長方形の形に回転させる事で無限のパ

ワーを得られる、そしてゲッター線が導く先の未来とは！そして多元宇宙、人呼んでハルトバースとは何故生まれたのか！そして敵の正体と狙い…全て分かったぞ！」

「貴様、本当にハルト坊か!? 本物ならそんな賢くはないぞ! というかそこまでの頭があるなら普段から使い!!」

「ヤクヅキちゃん、魔王ちゃんの事そう思ってたの!?!」

「不敬な! …しかし否定出来ない…だが何て極端な…」

そして

「……………」

「は、ハルト? おーい、俺ことナツキを覚えてるかあ?」

「……………そうだ星を見よう」

「この状況で!?!いや質問に答えろよ!」

「俺に質問をするなあ!」

「答えてくれないと困るんですが!?!」

一切、正体不明のハルト!

基本的に残念要素しかないハルトに分裂してしまったのだ!まともな奴が誰一人としていないのは大丈夫なのか主人公!?

『いや普段から割とこんな感じだろ相棒は?』

『ソーソー、今更だよな』

『残念要素の塊だし、てか女誑しのハルトがないのが予想がー』

『アナザーWう！貴様は…そんな体を張ってまで…お前の犠牲は無駄にはしない！』
『いや死んでネエよ！』

その影響はジャマト√世界にも及んだようで

「借りを返しに来たぜ魔王の俺……って俺が増えてるう!？」

「は、ハルトが沢山……凄……い……けど私のハルトは隣にいる君だけだよ」

「そうだなあかねも一人だけだ」

「いちやつくなら他所でやれ!!」

そして現れる謎の敵

「俺っちの強さは…魔王を超えるぜい？」

「テメエ…まさか!!だがな俺は魔王を超える神だ！」

「なら俺っちに魔王殺しと神殺しの称号がついちゃうね！行くよ！」

今、マルチバースを巻き込んだ戦いが始まる！

近日 投稿予定！お楽しみに！

劇場版?四人のハルトと黒狐?

四人のハルト

さて今回の物語は突如 来禅市をジャマトが襲った所から始めよう

「最初からクライマックスだあ!」

「いや何故ジャマトが来たのかその過程を説明しろ!」

「そうだよ!折角今日はエルフナインとデートだったのに!」

「へえ〜八舞姉妹とは?」

「いや二人とも今度デートを…勿論マドカともだけどき」

「貴様もハルト様側だったか」

「うぐ！そ、それは否定出来ない」

「あははは！潰れてしまえ！植物ども!!」

「おいウオズよ、フィーニスが目覚めてはいけないものに目覚めようとしておるぞ！」

「はあ……そんな事より我が魔王は何処ですか？」

「そんな事!? 貴様は仮にも四天王の上に立つものだろう!? 部下の乱心を見て見ぬふりするな！」

現在、四天王とウオズ達が懸命にジャマトと戦っているが

「そもそもジャマトってこの間会った別世界の魔王ちゃん世界にいる奴だよ！何で俺

「達に反旗を翻してるの!!」

「知らん!! どうせストライキだろ」

「やれやれお前たち退きなさい!」

『アナザーエクスプロージョン!!!』

アナザーファイナリーの広範囲爆撃によりジャマトは爆散したのだが

「というより魔王ちゃんは何処なのさ!!」

「まさか…デートか!」

「いや流石のハルト坊でもそんな事せぬじやろう」

「そうですとも! 魔王様は今近づいております! ほらあそこ!!」

とアナザー1号（フィーニス）が指を刺すとそこには

「どけどけどけ!!ヒヤツハー!!潰れたジャマトは善良なジャマトで、潰れないジャマトはよく訓練されたジャマトだ!皆ー今日はジャマトを潰して回ろうぜえ〜」

『貴様には血も涙もないのか!』

「我が魔王ですな」

「うん慣れたよあの奇行にも」

「今更だな」

「ああ実家のような安心感」

「これだけの敵に恐れを感じていない流石魔王様です!」

「いやお主等それで良いのか! 一国の王が乱心しながら単騎駆けなど正気の沙汰ではないぞー!」

ジェットスライガーでジャマトを蹴散らすと近くの屋上に着地したのは勿論 ハルトであったが部下達の反応はバラバラであるがハルトはお構いなしである

「待たせたな! 俺、参上!!」

「いや本当に遅いよ! 何したのさ魔王ちゃん!」

「何………今日の私服に悩んでた」

「「「早く来い!!」」」」

「だって文字T着れないからどれ着ていいか分からないんだもん……結局キャロルに選んでもらった」

「ああ……この間の一件で封印されたんだっけ？惚気てる場合か！」

「その前に良い年した大人がもんとか言わないでよ」

「気持ち悪い！」

「ウオズくやれ」

「はっ！」

『アナザーエクスプロージョン！』

「「ぎゃあああああ！」」

「何で俺までー！」

ウオズの爆撃で車田飛びと落ちをするジヨウゲンとカゲン、巻き込まれたナツキを見

ながら

「これでよし」

「逆に仕事が増えたわ戯け!!」

「まあ働いて返すからさ…さあ行こうぜ!」

『ジオウ』『グランドジオウ』

「行くぜ…変身!!」

『祝え!アナザーライダー!グランドジオウ!!』

そして現れたアナザーグランドジオウは構えを取ると

「さあ!行くぜ!!」

—————
ここでタイトルコール

劇場版？ 四人のハルトと黒狐？

—————

「よしGOGOGO！」

『W、ドライブ、ゴースト』

体にあるレリーフを触りアナザーW、ドライブ、ゴーストを召喚すると

「つしやあ！こいリボルキャリー！」

「来なさいアナザートライドロン」

「俺は……いけパーカーゴースト！」

「あと…行け！アナザーライオトルーパー！」

「「「ヒヤッハー！皆殺しの時間だぜ!!」「」」

アナザライダー 達は持ち前の能力を駆使した物量戦を展開していく数で推すなら此方も数で受けて立つ手数では負けんぞい!!

勿論、ハルトも全力で相手するが

「何でコイツ等、俺に立ち向かうのさ！俺怪人の王じゃないの!？」

「恐らく影響を受けてない理由があるみたいですね」

「だな、取り敢えず調べるのは後だ蹴散らすぞ！」

『アナザーオールトウエンティ』

「ええ」

『アナザーエクスプロージョン！』

「うむ」

『WAKE UP！』

「「はあ！」」

アナザーグランドジオウはアナザーライダー全員を召喚してジャマトにライダーキックの雨をウオズはお馴染みの隕石を、それでも逃げようとするジャマトにはヤクツキが変身したレイの出す冷気によって動きを止められ攻撃を浴びて砕け散るのであった

「ふう……」

「これで終わりですかね？」

「だと良いがの」

変身解除した全員が集まると

「まさかジャマトがねえ」

「ジャマトと言えば…あの世界のハルト様か…もしや!!」

「それはないでしょ、同じ俺なら貸し借りは必ず守ると思うし…これは多分、違う世界のジャマトじゃないかな？」

「ふむ、ハルト坊の勘は捨てたものではない…その線で調べてみるか」

「けど違う世界ってどんな世界よ」

「それは俺たちがいる世界だな」

突如聞こえた声に反応するとそこにいたのは

「俺？」

まごう事なくハルトであった：しかし黒いスーツとネクタイといった魔王ハルトなら絶対に着ない組み合わせである口調も相まってチグハグな印象を受ける

「exactly(その通り)!!俺たちは並行同位体だよ!あの時は管理者から呼ばれなかったんだけどね!」

管理者 バールクスになったハルトの事だろう

つまり此奴は先日アッセンブルした異世界連合ハルトレンジャーのメンバーにはいなかった事になる

「んで何しに来たんだよ?アッセンブルなら終わったぜ?」

「NO NO!俺たちの目的はアッセンブルじゃないのゝそう!俺たちの目的は!……
内緒」

「……………」

『SHOOT VENT』

アナザーグランドジオウはイラッときたのでアナザーゾルダの力でギガランチャーを召喚して発砲したがアツサリ回避される

「WAO!!沸点が低いねえ!」

「黙れ、テメエがジャマトを解き放つたなら敵だ」

「ハハハ！良いねえこの世界の俺はギラギラしてる！こりや倒しがいいがそうだ」

「並行世界の魔王ちゃんって言っても」

「危害を加えるならば敵だ」

「潰す」

「寧ろここまで戦闘狂なハルト坊と一戦交えるのも悪くないのお」

「上が上なら部下も部下か…しかも」

黒ハルトが見上げた先には無数のガンシップとウォーカー…こりや分が悪いな

「質と量を兼ね備えてる逢魔の俺は強いねえ本気で潰したいよ」

「なら今相手してやる、う「だから邪魔させて貰うよ」は?」

「ポチツと!」

黒ハルトがリモコンのボタンを押したと同時に変身解除されたハルトが急に胸に手を当て苦しみ始める

「っ!!あ……があ……」

「我が魔王、貴様!何をした!!」

「何ってゲームだよ君達の王を奪う、名付けてワールドフラッグゲームかなビーチフラッグみたいなものだよ」

「何の為に」

「それはまたの機会にお話ししよう、see you again!」

とだけ言うと黒ハルトは何処かへ転移した

「おのれ…全軍に通達、あいつを草の根を分けてでも探し出せ！」

ウオズが指示を出し終わるとハルトの体が強く光り始めた

「我が魔王!!」

皆が心配する中、光が弱まるなりウオズ達は駆け寄るが秒で固まった

「大丈夫ですか我が魔…」

何故なら

「大丈夫ですよウオズ」

そこにはメガネをかけた知的な雰囲気ハルトと

「イヤーハー! 黒い俺よ! この両足でドロップキックを叩き込んでやるから出てこい!!」

タンクトップとジーンズという体育会系な雰囲気丸出しのハルトと

「……うむ、やはり文字Tが至高だ」

『降臨! 満を辞して』と書かれた文字Tを堂々と着ているハルト

そして

「……………そうだ京都に行こう」

意味不明な発言をするハルトの4人がいたからだ

これには流石に家臣団とナツキも

「「「「ええええええええ!!」」」」

—————

そしてピースメーカー艦内にてキャロル達に報告をしていると

「成る程、それでハルトが四人に増えたのか」

「はい、ご覧のとおり四分割されてしまいました…因みに私はオリジナルが持つ知識や知恵を内包した言わば知的なハルトです4人の中で参謀的な立ち位置にいます」

と冷静に話す姿を見て千冬と東は顔が青くなっている

「な、何だこの違和感は…」

「うう……ハルクくんがあんな知的に見えるなんて束さんは病気なんだあ……」

「いやISって束と一緒に作ったんだよね?なら最低限の知識は「ISはアナザーライダーと一緒に勉強しながら作りました」いやそっちも凄いや?」

「けとハルクくんがこんなに知的な訳がない!!」

「そうだ!頭を使うと言って頭突きをするのがハルトだ!」

「その前に一番傷ついているのは私とわかってますか?二人とも?おっと、そして彼方が」

「ヤーハー!」

「戦闘能力やら怪人由来の身体能力に極振りしている、人呼んで力の私です」

「ヤハ!力こそパワー!」

「ああハルトだ、この頭の悪い感じ」

「そうそうこの感じだよ」

銀狼と錫音は安堵を覚えているが

「いやアンタ達それで良いの!?明らかに頭のネジが何本か飛んでるじゃない!!」

七罪は全力でツツコミを入れるも

「こほん…そして彼方の私は」

「センスの俺だ、ハルトの中にある美や芸能センスなどを担当している!」

『私が逢魔のファッションリーダー!』（オーラア!）

と堂々と文字Tを見せる姿にキャロルはワナワナと震えて

「貴様が…貴様がハルトがダサイTシャツを着続ける原因かあ!」

「いやあ久しぶりなハルきちの文字T…まるで実家のような安心感だあ…」

両極端なキャロルと二亜であった

「そして最後に残った私ですが…」

最後に紹介されたハルトは無地の黒Tシャツにジーンズといったシンプルな格好

「……………」

だが遠くを見ているだけであつた

「はて……………どんな私でしょう?」

「いや把握しろよ！」

「実際、私達は本体が持つ性格特性が強く出ている個体と推測出来ますから…うーん…他にどんな私がいるのでしょうか？」

「自分のことは以外と見えないって奴ですね…しかし…何故敵は我が魔王を四分割したのでしょうか？」

ウオズの言葉に皆が頷く

「そうだねえ、ハルくんを四分割した所で東さん達が幸せになるだけなのに」

「まあ…そうだな」

「だが…」

キヤロルは分裂したハルト達を見て

「ん?」「ヤハ!」「YES!」「……」

溜息を吐くも

「やはりオレはあのハルトが良い……よしあのハルトを締め上げてくる!」

「そうね旦那様が一杯で楽しいけど、それはあの旦那様だからよ」

「まあ私としては色んなハルトのデータが取れて嬉しいけど」

と各々の意見を言うが、取り敢えず話し合いの結果 一旦逢魔に帰ろうとなり全員帰還の途についたのであった

数日後の逢魔王国では

「さてと…仕事は終わりましたが他にはありませんかテストタロッサ？」

「い、いえ他には何も」

「そうですか…いやあ抜けたる日数から量が溜まつてると覚悟してましたよ…モス達から聞きましたテストタロッサが処理していてくれたと、ありがとうございます」

「いえ当然の事ですわ」

「それでもありませんよ誰でも出来る事じゃない…おや？」

知のハルトが目線を動かすと闘技場では大歓声が響いていた

「はあ…あの脳筋が」

闘技場

ズーーン!れ

『おーと! ATTE(ウオーカー)に続いて陛下のサマーソルトキックが魔物のジャイアントリザードを一撃で沈めたあ!』

「ははははは! どうだ!! 他にいないのか俺を倒せる奴は!! 出てこい俺が相手になつてやるぞー!」

「ならば私と戦ってもらおうか我が君!!」

「カレラ?」

ハルトはステゴロで巨大なトカゲをKOして勝ちを告げると大歓声があがるとその中から取り出すなり闘技場に着地したのはカレラであった

「漸くこの時がきたな…行くぞー!」

「ははは！良いなあ！カレラ…良いな！乗れるな…本気のお前を見せてみる!!」

と、力のハルトvsカレラという闘技場の三分の一が破損する程のバトルが起こると

「ねえ、ボクなしで何楽しんでるのさ…ハル!!」

「え？ちよっ！何で俺の方向までこうげー」

力のハルトvsカレラvsウルティマvs通りすがりのナツキによる乱戦が始まった

結果は テスタロッサとハウンド達、クローントルーパー達が総出となって鎮圧したが

「陛下は自重されてたんだな…」

とハウンドは分裂前は暴れるのを自制していたハルトに感心し

「ははは！いやあ全力の我が君と拳を交えられるとは今日は良い日だった！」

「そうだね…初めてだよ本気のハルトと戦ったのは、まさか魔力で全力防御したのに何の強化もされてないパンチで突破されるなんて」

「流石は我が君だ！」

「その前に正座しましょうか貴女達？」

カレラとウルティマはテストアロッサに説教されたという

とあるアトリエでは

「はい二亜、トーン貼り終わったよ」

「うおおお！何て丁寧なトーンを…流石ハルきちの中で芸術的センスにたけるハルきちだ！」

「当然だろ、他の粗暴なのとインテリ気取りと一緒にしないでくれ」

「同じ自分なのに辛辣う！なら後一人は？」

「ああ彼なら」

ハルト宅にて謎のハルトは空を眺めていたという

「青空……………綺麗……………」

説明と始まりと

前回のあらすじ

黒ハルトの力により分裂したハルト

それぞれが力、知恵、センス、そして意味不明なハルトになった
そして逢魔へと帰還したのだが

「力のハルトの被害が大きい！」

それは先日の騒動の報告であった

「寧ろアレが魔王としてのハルト様なら妥当な力ではありますがね」

「今までがよく自制できてた」

ハウンドと銀狼の言は以外と的を得ていたのだが

「ですが被害が大きくなるのは歓迎しませんので：我が魔王を元に戻したいと思いません」

ウオズの言葉に皆の視線が集まる

「戻し方が分かったのかウオズ!？」

キャロルの驚きにウオズは仮説を話す

「可能性としてはですがね、電王のクライマックスフォームやアナザートリニティの力を参考に考えました：つまり我が魔王の心を一つにすれば恐らく元に戻るのではないかと」

分裂したなら合体させる 単純だが正統と見える解決策に周りも頷く

「だがどうやってハルトの心を一つにする個性豊かな分、自我もかなり強いぞ」

「同じハルクンでも元に戻るかどうか」

「その辺りも考えてあります、私にお任せを」

ウオズはそう言うのとテレビと椅子を用意してハルト4人を集めた

「何をするつもりですかウオズ？」

「ヤハ！こんな狭い空間にいるより、アゲーラやカレラと組み手をする方が有意義ー！」

「まったく…僕のクリエイティブな時間を邪魔したんだ、相応の理由があつてだろうね
ウオズ！」

「……………南南西から信号が来てる」

「静かに……これなら絶対に我が魔王の心を一つに出来ると信じております」

とウオズがテレビの映像をつけるとOPのイントロが流れた瞬間 四人のハルトは正座して釘付けになった

その番組とは ハルトにとっての原点

仮面ライダーークウガであった

一糸乱れぬ動きと抜けてる謎ハルトでさえ番組が始まると同時にクロックアップもかくやの速度で移動した

全員釘付けであるのを見て

「やはり私の予想に間違いはなかった！」

「最早魔王ちゃんの魂レベルで刷り込まれてるねライダー愛」

「分裂しても憧れは変わらぬか」

「それよりも鎧武に頼んで戻してもらいましょうよ」

「妾もそう考えたが森を探しても見つからんだ」

と各々の意見を言うがハルト達はクウガを視聴するも元に戻る兆しがない

「何故だ？」

「そこまでは…何故？」

カゲンとウオズスの疑問にキャロル達は何か察したようで

「そう言う事か、おいハルト」

「「何？」」

「お前の一番好きなフォームは何だ？」

「そりゃ……」

「二」マイティ／ドラゴン／タイタン／ペガサスだけど……は？「二」

因みに好みは謎ハルトがマイティ、センスがドラゴン、力がタイタン、知恵がペガサスである

「マイティが一番、変身の雰囲気最高」

「分かってないなあドラゴンのスマートさが良いんじゃないですか」

「やれやれこれだから素人はペガサスを使った探知やゴウラムの狙撃など見せ場が多いのはペガサスですよ？」

「お前たちは何も分かってないな！タイタンの相手の攻撃に怯まずに向かう姿が一番カッコ良いだろう!!」

「『……………』」

「あの我が魔王？」

「『表に出ろお!!』」

と同じハルトで醜い殴り合いへと移行したのであった

「うわぁ…見事に好みバラけたね」

「成る程、四分割されたから本来全てを愛するハルトの好みまで四分割されたか」

「それ何気に面倒だねえ、推しの解釈違いは尾を引くよ」

「二亜が言うと言説力が違うわね」

「なつつん、それ褒めてる？」

「はあ……千冬嬢、お願いいたします」

「うむ」

ゴン!! x 4

「「「……………」」」

「さてウオズ、どうする？」

「二亜嬢の力で調べられませんか？」

「うんうん無理、流石の囁告篇帙でも限度があるよ」

二亜でもダメか…あ

「そう言えばアナザーライダーってどうなってるの？」

その問いに知恵のハルトが答えた

「変身は可能ですが私達が四分割された影響で長時間アナザーライダーになる事が出来ません」

「どう言うこと？」

「敵の力で器まで分割されたと言うことですね」

「それと俺達にそれぞれを王だと認めるアナザーライダーがついている形だな」

「まさにハルト戦国時代だな」

「どのハルトが本体かって？なんつーか耶俱矢と夕弦と似たようなことしてんな」

知恵の分析に拍手が響く、誰でもない音に全員が武器を持ち構えると

「やあ」

現れたのは白スーツの男 火野カグ槌（仮）であった、彼はわざとらしくヴィジョン
ドライブーと変身用のカードを見せると見覚えのあるナツキが動いた

「アンタ…確か……」

「久し振りかなアナザータイクーン」

「その声…やっぱあん時の白いライダーー！」

「そつ、初対面の人もあるから改めて、魔王軍とその魔王の伴侶達よ僕は火野カグ槌、ま

たの名を仮面ライダーゲイザーだ」

「ゲイザー……っ！まさか貴様が！」

「その通りさ織斑千冬、君にサソードヤイバーを送ったのは、この僕さ」

「いや今は常葉千冬だが？」

「ま、まだ式は上げてないよちーちゃん!!」

「待て千冬！お前までボケに回ったらツツコミ役がいなくなつて困る!!」

「そうだよ！まだ新米の二亜にこのツツコミを捌けるだけの力量はないよ!!」

「さりげなく自分の仕事を人に投げてるわね錫音」

「まあ仕方ないよね」

「良くない!!」

「成る程、火野とやら貴方の目的は何でしょうか」

「黒い彼について説明してあげようと思ってね」

「彼を…何故です?」

「あいつはゲームって言ったけどルールを説明してないのはフェアじゃないからね」

と笑いながら近くの椅子に腰掛けた火野に全員の視線が集まる

「あれ何者なんだ?」

「あのハルトは並行同位体　つまりパラレルワールドのハルトだよ…まあとんでもない分岐をしてるんだけどね」

「どんな分岐だ？」

「ハルトが君達だけじゃない、アナザーライダーにも怪人にも異能にも誰にも出会わずに孤独であるの世界を生きていたハルトだよ」

つまり只管 あの世界で燻り続けている世界線のハルト

しかし

「ただ厄介な事に面倒な異能を持っていてね」

「異能？」

「アナザーライダーやこの間のハルト連中みたいに精神汚染耐性やらの能力か？」

「違うよ…そうだなあ能力で説明するなら…そう、天与呪縛のフィジカルギフト」

天与呪縛 とある世界において存在する先天的なハンデを対価に巨大な異能を宿せるもの

しかし見返りに対して能力の当たり外れが凄まじいのもお約束なのだが

「あのハルトは異能も何もない世界で理不尽な身体能力を与えられたハルトなんだよ」

身に余る力を強引に背負わされた悲しき暴君

しかもタチの悪い事に本来なら力を向けるべき存在さえもない身に余る力であった

「だからかな格闘家として有名になったんだけど」

「あく皆まで言わないで分かったから」

ナツキの問いにキャロルが答えた

「あの家族連中か」

「そつ、金蔓認識で金をせびりに行つたのが運の尽き」

聞けば、あの世界のハルトの家族は事業の失敗で多額の借金を背負つて最中にハルトが格闘家として名を馳せている事を知ると金をせびりに行つたという

「殴り殺したのだな」

「違うんだよね、関節技で無力化させた後に借金取りにトーマ含めた全員引き渡してベーリング海のカニ漁船に乗せたのさ……お陰で毎年新鮮なカニが食べられると笑つてたよ」

「以外と冷静だったし良い趣味してる!？」

「けど家族が良くない場所から借金して成功した息子にせびるなんてネタ、マスコミが食いつかないはずがなく世間体が悪くなって、ファンから惜しまれて引退……まあ結果論

「だけど家族に人生を狂わさせたね、そんな時に知ったんだよ並行世界で暴れてる自分の存在を」

「やはりあの家族はろくでもないですね」

「ウオズ、御命令を陛下の家族と幽閉しているトーマですか殺傷モードのブラスターで蜂の巣にします証拠隠滅もお任せください」

「ハウンド待ちたまえ、時が来たら頼むよ」

「はっ!」

「話を戻すが、あの事件がキツカケになって黒ハルトは裏側世界で用心棒として働くことにしたんだよ」

「この間のアバターハルカが引き起こしたとんでも事件　そして異世界連合ハルトレインジャーという　ある人曰く　悪役版アベンジャーズのようなチームが集合した事件

の事だろうが真逆の展開になった…やはりハルトの家族は厄ネタでしかない

「けど何で彼が」

「聞けば、バールクス…管理者ハルトはあの時はテンパって異能もない世界のハルトにもメツセージを送ったみたいなんだ」

「それで並行世界の存在を知ったと」

その言葉に首肯して話を続ける

「そして何の因果か世界を渡り、仮面ライダークロスギーツの力を手に入れた訳だ」

「クロスギーツ…ギーツの親戚か？」

「似て非なるもの、ハルト達にはネガライダーと言えば近いかもね」

「クロスギーツ…クロスギーツ…って何このライダー！世界を作り変える創世の力なんて宿してるんだけど!!」

二亜の情報に皆が驚く

「何!!つまりアナザーギーツも世界を作り変える創世の力とやらがあるのですか二亜！」

「知恵の我が魔王、注目するのはそこではありません!!それでも何故ハルト様を襲うのだ?」

「それもクロスギーツの力が関係しているんだ、黒ハルトはクロスギーツに変身出来てもそれに宿る創世の力は使えないんだよ」

「意外だな」

「だから創世の力を使う為にライダーと怪人の歴史を背負う魔王のハルトを取り込む事

でその力を使う為の器を手に入れるのが黒ハルトの狙いなのか」

「「「「っ！」」」」

「えーと、どゆこと？」

「つまりだ、四人のハルトを取り込んで創世の力を使いこなす完全体になるという事だ」

「セルみたいな感じなんだ!!」

「成る程、創世の力で何を企んでいるかは知らないが私達の旦那（ハルト）を狙うなど断じて許せん!!」

「だけど何でハルくんを四分割にしたのさ？」

「それは体を慣らす為だろうね、いきなり100%の力は流石のフィジカルギフトでも不安があるみたいだ」

「だから完全に取り込みやすいように分けたのですね、ステーキを切り分けて食べるように」

「そう言う事だ、そして今回のゲーム内容はこれ」

ワールドフラッグゲーム

ルール

指定した期間内に

黒ハルトが4人を取り込んだら黒ハルトの勝ち 4人のハルトと原点足る魔王ハルトは黒ハルトに統合される

逆に魔王軍は1人でも守り切れれば勝ち

魔王ハルトの人格は統合される

縛り

殺傷厳禁

但し正当防衛は別とする

「って感じか」

「以外にシンプルだね」

「寧ろ期間が明記されてないのが気になるな」

「期間は4日 ただあの精霊のいる世界にいる事が絶対条件になる」

「けどこっちの勝利報酬が明記されてないのが気になるね」

「確かに私達としては戻る以外にメリットありませんし…それに賭けをするなら相応の物を賭けないとね」

「それは勝負に当たり確認したよ流石に相手の存在をかけるならそれに並ぶものを賭けろと言ったからね」

「んで向こうは何を賭けるんだよ？」

「自分の命と金、それと持つてるクロスギーツの力だ」

「ふーん」

「まあハルトを戻すなら乗らざるを得ないんだけどね」

そして話は対策となったのだが

「ピースメーカーを飛ばして4日待てば良くない？」

根本的に近づけさせない籠城策を提案したのである 流石知恵のハルト、汚い！

「そんなに待てるか！逆にコッチから攻めて黒い俺を倒してやるぜ！イヤーーー
ハーーーーー！」

「あ、ちよつ！」

「陛下の言う通りだ！我々の力を見せてやる！行くぞ！親衛隊出撃だ！！」

我慢できない！と力のハルトとトルーパーが全速力で走り出すのであった…

「あのバカ…」

「大丈夫じゃね？力の俺なら負けないでしょ頭悪いけど一番強いし」

「……………ウオズ」

「はっ！」

「次 アギトみたい」

「謎の我が魔王は空気を読みましょう!!」

ゲームスタート

ここは黒ハルトが拠点にしているアパートの一室

「さて、アイツは仕事を果たしてくれたかな？」

黒ハルトはドライバーを磨きながら呟くと声に反応した2人の影があった

「あら貴方が信頼を置いているなら問題ないでしょう？」

「まあな…さて最初は誰が釣れるかな」

と画面を見ていると黒ハルトは、おっ、と呟き笑みを浮かべた

「やっぱ最初は力だな」

「まあ見るからに自信過剰よね、此処にいる誰かさんと似て」

残ったもう一人も呆れたような声音で呟く

「賛成」

「おいおい誰見てんだよ……まあ魔王は普段自制してるが脳筋になった俺なら立て籠もつての時間切れなんて無粋は選ばねえよ……さてゲーム開始だ」

「私達はどうする？」

「いつでも行けるわよっ」

「お前達は好きにしてろよ……兵士の相手しても良いが殺すなよルール違反になる……あ、そうそう元お仲間がいるってんなら会いに行っても構わねえぜ……カフカ」

「あら、じゃあそうしましょうかしら」

「はあ…私は寝てるわ後は好きにして」

「そうさせて貰う、じゃあまずは挨拶変わりと行こうか…行けジャマト」

と黒ハルトは端末のボタンを押したのであった

—————

その頃

「陛下！部隊の展開完了しましたコレでいつでも戦えます！」

敬礼したハウンドに力のハルトは短く答えた

「ヤハ！」

「よし聞いたなお前達！あのスーツの陛下を蜂の巣にしてやろうぜ！！」

「！！！！うおおおおおおお！！！！！！」

と士気を上げる親衛隊だが

「いや言葉通じてんの！？てか脳筋すぎて言語機能まで無くしたか力のハルトは！」

「へ？聞き取れなかったのですかナツキ殿？今のはですね」

と近くの一般親衛隊トルーパーが答えた

ーヤハ（ご苦勞、さて仕事の時間は近いぞ諸君、俺達に喧嘩を売ったバカにはお仕置きをくれてやらないとな）！ー

「と言う意味です」

「あの短い言葉にそれだけの意味が!? ええ? これがバラルの呪詛?」

「ヤー——ハー——!」

「!!!」
「!!!」
「!!!」

「今のは?」

「へ? 『この中に俺と同じ顔の奴と戦うことを迷惑だと思っ奴、いる? この中にジャマトなんて植物擬きと戦う事に日和ってる奴いるう!? いねえよなあ! 黒い俺潰すぞ!』です
よ」

「何で翻訳出来るの!?! つか今のハルトさ、何処ぞの総長みたいな事言ってるの!」

「逆に何故分からないのですか? 陛下は大体あんな感じですよ? 我等親衛隊には必須ス

キルです！」

「お前達の中でハルトはどんなイメージなんだよ！」

心配についてきたナツキであったが更に不安が加速したのであったが

「ジャマ、ジャマ……」

と現れたのはポーンジャマトの大群である中には指揮官役なのか上位個体もチラホラと見える

「うわあ……連中本腰入れてるなあ……」

「ヤハ（撃ち方始め）！」

「撃てエエエエエ!!」

その声を合図にトルーパー達が持ち前の火器をポーンジャマトに向けて一斉な放つ、その火線は敵の体を貫き爆散させるなど高い火力を持つ。また互いが互いをカバールし合うチームプレーが行われていた。

伊達に戦う為だけに生まれた存在ではない：何ならステゴロでポーンジャマトを殴り倒すトルーパーまでいたのだ
そして

「ヤーーーーハーーーー！」

力のハルトが自重なしで武器の使用を許可しているのも理由だろう、市街地戦なのに空戦のガンシップやファイター、地上ではウォーカーや大砲を使っているのだから

しかしながらジャマト達も負けてはいない物量に任せたゴリ押しで段々と肉薄していく

それを待ってました！とばかりに力のハルトが先陣に立ったのである、ナツキも慌て隣に立つとアナザーウォッチを構える

「ハルト！この数だが…勝ち目はあるのか！」

「ヤハ！」

「ここではリントの言葉で話せ!!」

「おう！俺ハルト！奴ら全員叩き潰す！」

「不思議だな…凄い発言がバカっぽいのに実行出来そうな気がしてならねえぜ！よし！
変身だ！」

『タイクーン』

ナツキはアナザータイクーンに変身して双剣を構えるがハルトはアナザーウオッチをマジマジと見ていた

「へ？ハルト？変身しないの？」

「ウーイーヤーハーハー（唸れ！俺の剛腕！）!!」

何を思ったのかハルトは大リーグボールを投げんとばかりに左足を振り上げて、全力でアナザーウォッチを投擲した

「うおおおおおい!!」

慌てたナツキが分身の術を使い、アナザーウォッチをキャッチしてハルトに返す

「お前バカか！相棒の使い方まで忘れたのか!!」

「俺ハルト、忘れる訳ない」

「なら真面目にやれ!!」

「ハア!？」

「キャロル!千冬さん!お願い!!このバカを何とかしてくれ!!!」

「ヤハ!…ん…:…:…つ!ヤーーーハーーー!」

すると突然、ハルトは走り出すなり敵陣ど真ん中に特攻して言った

「え?い、いやあのバカ!リーダーが特攻隊長やる暴走族がいるかあ!」

そんなツツコミ虚しく、ハルトはジャマトの群れに飲み込まれた…:…:かに見えたが

「ヤーーハーーー!!」

『TACTICAL BREAK』

『バッファ』

力のハルトはアナザーバツファに変身、ゾンビブレイカーの必殺技で這い寄るジャマトを切り裂いたのであった余波だけでも無双ゲームの歩兵宜しく吹き飛んでいる

「ええ…」

「さ、流石陛下だ！野郎供！陛下に遅れを取るなあ！続けえ！」

とハウンドの号令からトルーパー達は前進して前線を押し上げて言った

「イヤーーーハーーー！」

『そうだ…この力だ！これがライダーをぶつ潰す力だ…つまり力のハルトは俺が求めた器なんだ!!』

とアナザーバツファが喜んでいるが

「いや、その宿主が脳筋なのはこれ如何に!？」

「ウラアアアアアアア!!」

アナザーバッファはお構いなしにゾンビブレイカーを振り回しジャマトを切り裂くと左手のバーサークロード大雑把にジャマトの攻撃を払うとゾンビブレイカーでカウンターをお見舞い、また無事な奴には足払いを行い仰向けに倒れた奴の腹を踏みつけたのである

「「「うおおお!」」」

ハルトの奮戦に親衛隊の指揮も更に上がっていき。何とハルトに影響されてか徒手空拳でジャマトをKOするトルーパーまで出る始末だし流石のジャマト達も旗色が悪いのを察して退却を始めていくのを見ると

「連中が撤退します! 追撃しますか陛下!!」

「ツツウラウラ」

「よし聞いたなお前達！ 奴等を地の果てまで追いかける庭に生えた雑草と同じだ！ 根まで枯らすんだ!!!」

「「「サーイエツサー!!」「」」」

「え？ そんなどっかの除草剤みたいな感じなの!？」

「続けー!」

「「「うおおおおお!!」「」」」

「つか津々浦々にそんな深い意味が!？ てか最早これ暗号だろう!!」

ナツキのツツコミが響くなかトルーパーは追撃に転じたのであった

しかし

「おいおいまさか借り物とは言えジャマトの大群を押し返すとかどんな訓練してんだよ
少しも消耗してないじゃねえか」

「ブルルイヤアアアアアアア!!」

「は？何言ってるんだ？」

「えーと…自分を日常的に撃つ訓練をしてるって」

「え…お前ら…親衛隊だよな？王様守る側の奴らだよな？」

「あ、ああ…ってそんな事より、お前が黒ハルトだな！」

「あ、ああ……お前さんは…確か資料で見たな……そうだ…確か…ロリコンの奴か」

その何気ない一言に

「テメエ、エルフナインとマドカをロリ扱いしてんなら即刻訂正しろ」

ナツキ切れた、その憤怒たるや闇堕ち気の景和に負けずに劣らぬであるが

「別に俺は誰とも言つてねえが？」

「……………あ」

「アアア」

『ナツキさん、後でお話しがあります』

『ナツキ…私はまだ成長期なんだ…頑張つて八舞くらいにはなる……だからその…見捨てないでくれ…』

「ハウンド」

「はっ！奴を撃て」

ハウンドの無慈悲な命令はウォーカーの砲撃という返礼で行われたのであった

「まさかのオーダー66!？」

ナツキは吹き飛ばすが何とか立ち上がるもボロボロであるのを見て黒ハルトは笑う

「よし、これで1人減ったな」

「陛下が言っていました、それは死亡フラグだと！」

「フラグ立ちやがったぜ！多分これ俺のセリフじゃねえだろうがな！」

とクロイントルーパーもハイになってる中、冷静な黒ハルトは淡々とした口調で答える

「おいおい死亡フラグが立ってんのは、お前達だぜ」

「おいナツキ、立て」

「なら撃たないでくれると嬉しかったんだけどなあ…」

「ヤハ！」

「誤魔化すな!!」

「冗談抜きでやろ」

「……………ああ」

ハルトがフィーバーバツクルを見せるとナツキも理解したのかブジンソードバツクルを取り出したのである

『SET FEVER／AVENGE!』

敵が未知数故に最高戦力で挑むと

「変身!!」

『FEVER ZOMBIE』

『BLACK GENERAL BUJIN SWORD!』

ハルトはアナザーバッファ・ファイバーゾンビ（ジャマ神）、ナツキはアナザータイクーン・ブジンソードと全力の体勢になると黒ハルトは笑みを浮かべる

「最初は武神にジャマ神か…そうこなくちやな」

『DESIRE DRIVER』

「試してみるか偶然見つけた」

黒ハルトはデザイアドライバーを装着すると取り出したのは黒い見慣れないバツクル、それを分割するように外したのであった

「神殺しをよ」

『X GEATS』

そしてバツクルをドライバーに装填する

『BLACK OUT』

黒ハルトは両手を上に上げフィンガースナップをする

「変身」

『REVOLVE ON』

ドライバーを回転させるとバックルは黒い九尾の狐に姿を変えるとバックルのグリップを押すとバックルから炎が上がると同時に黒い機械仕掛けの狐が黒と紫の炎を帯びながら徘徊するとアンダースーツを形成する

『DARKNESS BOOST!』

その姿は黒いギーツ 否 本来の歴史ならば神殺しの名を冠する 戦士

『X GEATS』

仮面ライダークロスギーツ 誕生

「黒い…」

「クロスギーツだ…まあ覚えなくて良 「ヤーーーハーーー!」 っと!」

問答無用とばかりに切りかかるアナザーバツファに黒いレイジングソードを呼び出して受け止めるが

「おいおい人が話してる途中だろうが」

「仮面ライダーには負けない!!俺ハルト、お前を叩き潰す!!」

そうアナザーバツファ・ジャマ神は対仮面ライダーにおいて最強の二つ名を冠している

能力はライダーの攻撃を無力化する事と自らの攻撃力を上げるという完全なライダー特攻を有しているのでどんな能力を持ってようが真正面から叩き潰すと初手からガンガン行くアナザーバツファだが天与呪縛で底上げされた身体能力からくる脅力でクロスギーツは互角に渡り合う、罅迫り合いでは進展がないのを理解したからかクロスギーツはもう一つの武器 黒く染まったギーツバスターQ B 9を構えて発砲するもアナザーバツファには効かず逆に頭突きで吹き飛ばされると

「ヤーーーーーハーーーーー!!」

そのまま追撃でアナザーバッファは頭部の角を有効に使う為に突進を行うのであった

「あのバカ!…警戒しろってもう!!」

アナザータイクーンも一緒に追撃をする

「なあ兄弟、アレを見ろゴリラvsゴリラの頂上決戦だ」

「いや狐とバッファアローの殴り合いだな」

「どっち勝つか賭けねえか?」

以外と冷静なトルーパー達であった

その頃 ピースメーカー艦内では残りハルト達がバトルを観戦していた

「いやあライダー相手に初手バッファは可哀想」

「やれやれ折角のゴージャスな外見なのに戦い方に品がないな」

「……………キャロル、餃子食べたい」

「お前、まさか龍騎まで見たのか!!」

「うん…………」

「しかし凄いな力のハルト坊は…」

「本来抑え込んでたんですねえ…」

「今までのアレも自重してた方なんだあ」

と各々の意見が出る中、ピースメーカー艦内に警報が鳴り響く

「っ！銀狼！」

「調べてる……っ!!」

「どうしたの銀狼？」

そのカメラの映像にはトルーパーを気絶させながら進む、紫色の髪をしサブマシンガンの二丁拳銃と刀を持った女性がいた

「艦内に侵入者!?!どうやって」

「話は後です総員警戒体制！ブリッジに近づけさせるな!!」

とウオズが代理で指示を飛ばす中、銀狼だけは正体を知っていた

「カフカ…」

「え？知り合い？」

「うん…元同僚で私と同じお尋ね者」

「つまり黒ハルトの仲間って訳か」

「けど何で…」

「話は後です迎撃を」

「無駄、カフカには言霊の力がある相手の精神に干渉する…迎撃に出ても時間稼ぎにす

らならない」

と銀狼の話す中

「じゃあ俺が行くか」

センスのハルトが立ち上がるのであった

「センスのー！しかし」

「知恵の俺、消去法で行けば奴の言霊とやらに抗えるのは俺だけだ…謎の俺はライダーを視聴してるし力の俺は戦闘中、冷静な判断を下せるのはお前だけなんだよ！」

「くっ……」

「それに心配すんな、案外銀狼が心配で会いに来ただけかも知れないぜ？」

「いやそれは無い…カフカは危険な奴…何なら私達を人質にしてとか普通にやるだろう

しっ！船を沈めにきたかも」

「なら尚の事だ、俺が時間を稼ぐ全員ピースメーカーから降りて態勢を立て直せ」

「センスの…」

「大事な皆を傷つける訳にはいかない」

「センスのハルト、凄いキメ顔でカッコ良いんだけどさ…その」

「その私服をなんとかしろ」

その文字Tには

『俺に任せて先へ行け!!ここは俺に任せろ!!』(オーラア！)

とあからさまなフラグが書かれていたのだ

その頃

「聞いて、私は敵じゃないの貴方の王様と銀狼に用事があるだけなの」

「そうか、なら俺が案内しよう付いて来い」

トルーパーは言霊に操られるが

「その必要はないぞトルーパー、俺が案内するから早くブリッジに行け」

「イエッサー」

とセンスのハルトが立ちほだかる

「あら、貴方が魔王ね」

「その一部だがな」

「そう…まあ良いわ、それより銀狼ちゃんは元気かしら？」

「ああ元気だよ」

「良かったわ、私、あの子が誘拐されてから心配してたのよ」

「誘拐？……あの愚妹め」

どうやらアバターとは言え愚妹がやらかした事の被害者らしい、黒ハルトについたのもその辺が理由と推測出来るな

「そうなの…だから貴方には死んでほしいのよ仲間を奪った報復は必要でしょう？」

「それはルール違反だろ」

「関係ないわ」

「また愚妹の所為か…けどアレだな戦わないで降参するのは俺のセンスに合わないんだよ」

と同時にセンスのハルトはアナザーウォッチを起動した

『パンクジャック・モンスター』

モンスターフォームになり拳を構える

「さあ来い！」

「……………ねえ聞いて私は別に戦いにきた訳じゃないのだけど」

「いやいや何言ってるの？黒ハルト側にいて艦内に乗り込んだだけで疑惑満載じゃん」

「あら私の言霊が効かないなんて驚きね、ハルトは皆こうなのかしら」

「多分、そう」

とアナザーパンクジャックの背中から現れた銀狼がカフカを見る

「あら久しぶりね銀狼」

「何しにきたのさカフカ？」

「貴女を取り戻しにね」

「嘘だね、君がそんなに献身的な訳がない」

「あら人は変わるものよ私も貴女も」

「まあ否定はしないかな」

「下がってろ銀狼、やっぱり危険な匂いがする」

「酷いわね…ああ確かにゲームなら貴方を連れて行けば良いのかしら？ならハルトの為に捕まって頂戴な」

「やれるもんならやってみろ!!」

センスのハルトvsカフカ 開戦！

神 v s 神殺し

その頃 アナザーバツファ、アナザータイクーン v s クロスギーツは

「はぁー！」

「ヤーハーー！」

両者の身体能力はほぼ互角しかしながらライダーとしての能力が拮抗状態を生み出していた

「はっー！」

「っと」

そしてブジンソードが繰り出す死角からの斬撃への対処は冷静にしているクロス
ギーツにはまだ底が見えない

「やっぱ力つて名乗るだけはあるな」

「普通の人間なのに何てパワーだよ！」

「おっと俺は普通じゃないぜ」

その言葉に周りにいたナツキとハウンド、親衛隊達が反応した

「そんなの知ってるよ！俺が会った何処の世界のハルトもイカれてんだ！普通のハルト
なんて何処の世界にもいねえよ!!」

ナツキの絶叫にクローントルーパー達もそしてピースメーカー艦内にいた全員が首
肯したのだ

「「「「「確かに」」」」」

「皆!?!」

「あの謎の我が魔王…何してるんです?」

「トカゲを串に刺して直火焼きした…食うか? まあ食わねえか」

ムシヤムシヤとトカゲを食べる謎ハルトであった

「誰ですか! 我が魔王に浅倉威をインストールさせたのは!!」

「あ! 魔王ちゃん! 頼まれてたムール貝のパスタ出来たよ」

「ジョウゲン!! それは辞めろ! ハルト様の口の中が大変な事になる!!」

「いや力の魔王ちゃんじゃないから大丈夫…夫じゃないね!!流石の俺でもトカゲの丸焼きはドン引きだよ!!」

「……………美味しいよ?流石に香辛料や下処理とか加熱はちゃんとしてる」

「以外と器用だった!!」

「なら私もトカゲ食べて良いかい!?謎ハルきち!是非コレを漫画のネタにしたいよ!」

「あら私も食べたいわ…久しぶりねえ…前の世界では巨大トカゲの肉を食べてたものよ」

「ん」

と二亜とアンティリーネは謎ハルトの隣に座ると渡された串焼きを頬張るのであった

「あ、以外と行ける…ホント鶏肉みたい…これビール欲しくなるなあ」

「私の時はもつと大きなトカゲだったけど…昔を思い出すわあ、あの頃はウォーカーくらしいのトカゲを倒してたわねえ…」

「ちよつ！そんな所で異世界人らしさ出さないでよアンティリーネ!!」

「いやあ…ハルくん…たくましいね」

「しかし何処で下処理など覚えた？」

「そもそもあの家でマトモなご飯食べるのも難しかったから…それこそ山に行つてカエルとか釣った魚とかザリガニとか焼いて食べてた…選り好みしてる余裕もなかったなあ…春は良いんだよツクシが食べられるから…冬は辛かったなあ…海まで行つて貝とか探したつけ…」

「たくましい以前の話だった!! ワイルド過ぎるよハルくん!!」

「寧ろそんな環境で育つてたのか…?」

「ねえ千冬、東、キャロル」

「何も言うな錫音、ハルトの世界にいたら…あの家族だけは地獄に落とすぞ」

「[[[異議なし]]]」

知恵のハルトはやれやれとメガネをクイツとあげると

「だから僕達は料理スキルがカンストしてるのです、お腹いっぱい美味しく食べれるように…出来るだろう大事な人達に美味しいご飯を食べさせてあげられるように…飢えて苦しい気持ちは痛いほど分かりますから…まあアナザーカプトやアギトのお陰で料理スキルが更なる発展を遂げましたがね」

「嫌な奴でも、まずは食べさせてから話を聞く…家族には焼石をリスみたいに頬張らせる」

「ああ…だからあの時」

ウオズはオークロード戦における戦後処理においてハルトが飢えているというオーク達に迷わずに食糧などを提供した事を思い出した

「やはり貴方は…優しい方だ」

余談だが、並行同位体のシーカーハルトも同じ経験をしていたからこそ、とある利己的な魔法少女の心に寄り添えたのだと言う…家族愛は全く理解できなかつた為、最初は大喧嘩していたのだが…因みにとあるグルメな猛獣や食材のある世界に行った際にハルトは感涙に咽び泣くのだから、それは別の話

「取り敢えず食べ終わってから避難する」

とだけ言うのとトカゲを食べながら龍騎を見るのであった

「浅倉さんもイライラしながらトカゲの下処理したのかな？」

「いやあの人ならそのまま行きますよきつと」

「原作再現すれば良かった？」

「しなくて良いからねハルきち!!」

—————

その頃 現場ではハウンドが領いていた

前回のハルトレンジャー アッセンブルを知っているのだマトモなハルトなどいな
い

「どの世界にもいるのは何処かイカれた陛下ですからね」

「そーそー、この間の打ち上げで陛下から凄い柏餅勧められたんだよなあ〜美味しかったけど」

「俺も俺もクリスマスはシャケを食べるよな！つてノリノリでサーモン料理布教してる陛下に会った…けど別世界でも陛下なんだよな料理の腕は据え置きなんだよ…あのホイル焼きとムニエル美味かった…」

「あ！アレって別世界の陛下だったのか！」

「ヤハ（お前等）!?!」

「そうだな…大方 あの家族の所為でマトモな人格形成なんてされないだろうしな…まああかねや爺さん達のお陰である程度の感性は持つてると思うが？どうだ？」

そもそもネグレクトされ、逆に過保護で増長した愚妹と恋人が主導してイジメまでし

ていたのだ、真つ当な子供になる訳がない

「それには同意しかないよ……つてか、この人格破綻者を矯正した幼馴染とハルトの祖父母はどんな聖人君子だと俺は思うよ」

しかしそれでもハルトが踏みとどまったのは優しい祖父母や幼馴染、そして憧れの存在が大きくある

「違いねえ、そうだろ俺」

「ヤハ！」

「さて、と何で俺が人間離れた力があるのかって話だったな……何でも俺はフィジカルギフテッドって奴らしい」

「フィジカルギフテッドって」

「何でも魔力や気とか人間なら誰しもが持つてるものを持たない変わりに強力な身体能力や五感を有しているらしい…だから怪人になった俺とも互角に殴り合える」

因みにコレは能力を開示することで出力を上げるという 呪術の縛りであり何気なく手札を開示しているようにも見えるが強くなる為のものであったがナツキからしたら情報収集出来る良い機会だしと前向きに捉えてる

「そしてこのクロスギーツには世界を変える力があるが何も無い俺には使えない、万全に使うにはお前たち魔王の持つライダーと怪人の力が必要な訳だ！」

「ヤーーーーーハーーーーー!! (俺の命 取れるものなら取ってみろ!!)」

「いやリントの言葉で話せ」

「ウラァー!!」

ナツキのツツコミを無視して2人は攻撃の速度を上げていく、クロスギーツの攻撃を

無効化しながらゾンビブレイカーを振り抜くアナザーバツファ、しかし飛ぶ斬撃に反応するにレイジングソードを振り抜き防御すると近くの建物が一刀両断され切断面から激毒が溢れ建物が溶解する。レイジングソードが溶解しなかったのは毒が回る前に早く振っただけの事

「おいおい何て恐ろしいもの振り回してんだよ、伊達に魔王なんざ呼ばれてねえなあ…分割して正解だったよ」

ドン引きのクロスギーツに対してアナザーバツファは笑うように

「こうしないとお前消せない」

「何だ叫ぶ以外にも話せんのか」

淡々としかし周りの警戒は怠らないクロスギーツにアナザーバツファは笑う

「お前は俺達を狩りの獲物と思ってるみたいだけど…それは違う」

「何?……っ!」

クロスギーツの足元には大量のゾンビの腕が絡みついていた

「いつの間にな…」

「お前が狩られる黒狐、その毛皮を絨毯にしてやる…」

「しまっ!」

『TACTICAL BREAK』

『GOLDEN FEVER VICTROY!』

「飛んでっけー!!」

全力で底上げした一撃を振り抜きクロスギーツをビルへと減り込ませる事に成功し

たのであった

しかし

「やったか!!」

「あ」

ナツキがフラグを立ててしまったのである、その刹那 クロスギーツは建物から建物へと目にも止まらぬ速さで移動を開始する

「ナツキ…：テメエ」

「いやマジで本当ごめん!!!」

こうなると市街地は危険だ障害物が多く狙いを定められない……更に

『大変だ力の！ピースメーカーに侵入者だ今センスのが対応している！』

狙いはそつちか陽動と奇襲が上手いことと感心しているが

「っ！」

「ハルト!!」

その刹那の油断を待ってたとばかりにクロスギーツが肉薄してきた…よろしいならば

『POISSOM CHARGE!』

併せてカウンターじゃい!!とゾンビブレイカーを振り下ろす

しかしクロスギーツは仮面の下で笑っていた

「確かにテメエのライダーへの攻撃耐性は神と呼ぶには相応しい、実際殴ってみたがまるで手応えがねえからな…だがコレならどうだ！」

虚空から取り出したのは 恐竜の頭部がついた紫色の剣であった

「ライダーの力じゃない戦隊の力」

「っ！」

アナザーバッファとクロスギーツのぶつかり合いはクロスギーツに届く前にアナザーバッファの胴体にその奥の手が決まっていたのだ

「あ、あの剣ってまさか!!」

並行同位体が持っていた 不屈の騎士な持ちし剣

『ガイソーケン!』

「っ!!」

その剣の一刺しはライダーしか耐性のないバッファを貫くには十分であった

「っ!!ハルトーーーー!!」

アナザーバッファはゾンビブレイカーを落とすと変身解除して力なく膝をついたのである

「ふう………まずは一人」

ーーーー

その頃 ピースメーカー艦内はと言うと

「あらあらかん中々頑丈ね」

「まあな…力の俺程じゃないが俺もタフさが売りなのよ」

実際戦闘センスはないので彼女の攻撃に耐えているだけ…まあその間に仲間が逃げ切れれば俺の勝ちだ

「ハルト…その…」

「安心しな銀狼、俺が守ってやるからよ」

「うん…」

「違うハルトからとは言え、そんな事言われてるなんて嫉妬しちゃうわ」

「ならお前も黒ハルトの所に戻れば良いんだよ」

「そうしたいけど手ぶらで帰るのは困るの、だから土産になりなさいな」

「お断りだね！」

『MONSTER! STRIKE!』

「オーラア！」

アナザーパンクジャックは拳型のエネルギーを発射するがカフカは糸を何重にも束ねて攻撃を防ぐ

「中々の一撃だけど、船を壊さないなんて縛り有りでも勝てるなんて思われているの…いや違う逃げるが勝ちって所かしら？」

「あ?！」

「だって前にね」

「ーは?やなことった、テメエと戦うのは割に合わねえー」

「あら？私の懸賞金知らないの？捕まえて差し出したら貴方の居場所…その生活も楽になると思うわ…それに貴方になら私裏切られても構わないと思つてのよ？」

「裏切るリスクとリターンが割に合わないんだよ、いくら積まれてもテメエとやるのだけはごめんだね」

「つて言うもの」

「ふーん」

「多分、実力を評価してるのと裏切った後の報復が怖いんだ…つて事は…この女は強いな」

「だから少し本気で遊びましょうよ」

「油断してくれてる内に倒すか…」

「まあ俺の望む美しい勝ち方…美学には反するが仕方ない相手してやろう！」

『BEAT!』

アナザーパンクジャックはビートバックルを装填し鎧を変える体にスピーカー型の装甲とビートアックスを携えた姿

アナザーパンクジャック・ビートフォーム

「奏でろ！勝利のメロディ！」

ビートアックスを構えるが銀狼は冷めた目で

「それ何か違う」

「いええええい！」

「あれ聞いてる？」

『PUNK BLIZZARD!』

初手から広範囲技である冷気を叩き込むがアツサリとわかっているかのように回避された

「予知？」

「違うわよ…だってある人の脚本だと私に攻撃は当たらないから」

「ある人？」

「今は知らなくて構わないわ…何せ貴方が消えてから出てくる人だもの…さてそろそろ力の彼が倒れた頃かしら」

「は？」

「本当、楽しい時間は直ぐに過ぎ去るものね…お別れの時間よ」

突然、カフカは両手のサブマシンガンを乱射する弾丸は跳弾しあい不規則な軌道を描く

「舐められたものだな！全弾撃ち落と…っ！」

広範囲攻撃はビートの専売特許だぜと構えるが気づいたのだ、まずいこのコースは銀狼に当たる!!こいつ元仲間といえ諸共かよ!!

「このやろう!!銀狼伏せろ!!」

「っ!!」

アナザーパンクジャックは体を捻ると銀狼を庇うように飛び出す

「BOOM!」

しかしカフカの跳弾からくる弾幕はハルトと銀狼を襲い激しい炎が上がるのであつた

――

その頃 クロスギーツはと言うと

「さて、力を頂くか……っ！」

反射により剣で弾丸を弾いたが……そこにはクロイントルーパー達が隊列を成して銃を構えていたのだ

「おいおいテメエ等はターゲットじゃねえんだけどな」

「でしようね……しかし我等は親衛隊です、目の前で守る対象が倒れているのに放置する者がいますでしようか!!」

「なるほどね忠誠心か…見事なもんだねえ」

感心するクロスギーツだが親衛隊は全員首を横に振る

「そんなものではありません」

代表してハウンドが答えるも両手のプラスターを握る手には力が入っていた

「あ?」

「我々は………王ではない…ただの友達を助けるだけです」

思い返せば、この王様は会ってからいつも笑っていたのだ…加えて逃げて仕事を増やすし変に高度な技能を覚えてるから捕まえるのだから訓練になる

この王様は自分達を消耗品として見ていないのだ…いつも先陣切って戦って部下を

切り捨てる事を一番嫌う、甘くて無能な指揮官だ…しかしそれでも

「親衛隊だからではありません、我々はそこで寝ている友をまた家に帰すだけ」

そこには魔王と副官ではない、対等な関係を気づいてきたからこそ紡げた言葉があった

「それが死ぬ事になってもか？」

「例え我等の命を賭してでも為さねばならない事です…つて、いつまで寝てるハルト！目を覚ませ!!」

「そうだ！俺達はお前の負ける姿なんて見たくねえぞ!!いつもみたいに笑いながら立てええ！」

「よっしゃあ！寝坊助を助けるか行くぞ親衛隊!!漸くの見せ場だぜ!!陛下に先陣切らせてんじゃねえよ!!」

「「「「うおおおお!!」」」」

その覚悟にクロスギーツは溜息を吐くが二刀流を構え直す

「はあ……上が馬鹿なら下も馬鹿か……人はそれを蛮勇つて言うんだぜ分かるか？クローンども」

その時、突如伸びたツタがクロスギーツを縛り一部は力のハルトを縛るなりハウンド目掛けて投擲した

「つと……陸下!?!」

「……………」

よく見ればかなりの出血である……これはまずい!!

「衛生兵!!」

「はあ……」

と指示を出す中、クロスギーツは溜息を吐きながらツタを秒で刈り取る

「なんだよ今の……ん?」

「その通り! 激情に任せて吠えた所で得な事なんて何一つもねえ! けど不思議なんだよなあ……そう言うの見捨てる気持ちにならねえんだよなあ……」

皆の視線がビルの屋上に座しているのは、親衛隊やナツキには馴染み深い人物 先日
ともに同じ敵と戦った戦友であったのだから

「ジャマトのハルト?!」

その言葉にジャマトハルトは不敵に笑い挨拶する

「よおタヌキ、それとトルーパーと魔王どもこの間の借りを返しに来たぜ」

ジヤマ神 V S 神殺し 前編

前回のあらすじ

力のハルトが敗北、あわや吸収という場面で現れたのはジヤマトライダーとして戦っている並行世界のハルトであった

「つと」

ハルトはビルの屋上から飛び降りるが直前でツタで足場を作り着地する

「よお初めまして……じゃねえよな」

「悪いが何処の誰だ？最近同じ顔の奴と良く戦うから全然情報が噛み合わないんだよ」

「ははは！釣れねえこと言うなって…借りを返しに来たぜ盗人が」

「知らねえなあ…変な言いがかりは止せよ」

その覇気の激突に周りが戦慄する中

「え、援軍なのか？」

「けど…また陛下か？」

ナツキが恐る恐る尋ねる

「お…お前、ジャマトのハルト…だよな？この間一緒に戦った…」

「ん？おお！あの時の修羅場な宴会以来か！久しぶりだなタヌキ！」

陽気に話しかけるハルトだがナツキとしてはタヌキ呼びは解せんので訂正する

「ナツキだ!!」

「お前にはあの時の借りがある…そこで伸びてる魔王にもな…だからちよつと手伝うけど今は取り敢えず引くぞ」

「逃すかよ」

「残念だけど、間合いだ」

ジャマト由来のツタで防壁を作り視界を塞ぐが直ぐにクロスギーツは一刀両断するもその先にはナツキもトルーパーも力のハルトも誰もいなかった

「ちっ…撒かれた」

「あら珍しいわね、貴方が取り逃すなんて」

そこに現れたカフカを見てクロスギーツは訪ねた

「つせえやつぱり鈍ってんな…首尾は？」

「上々よ、ほら」

と彼女が戦利品のように持ってきたのは気絶した状態のセンスのハルトであった

「まさか自分の身を盾に銀狼を逃すとは思わなかったわ」

カフカは我が身を盾に弾幕を耐え抜き僅かな力を振り絞りブリッジにいる皆の所に送る姿を見た後、頭上から落ちてきたクリスタルの力が発動する刹那にセンスのハルトは頭を鷲掴みして転移した

「取り敢えず」

そう呟いたクロスギーツはブランクフルボトルを向けるとセンスのハルトは吸い込まれ、その粒子を体に取り入れたのであった

侵入者を退けたがセンスのハルトを失い親衛隊にダメージを負った面々はお通夜の
ような空気を支配して

「ごめん…皆…私が…」

「気にしてないよ銀狼、寧ろ守らなかつたらハルトを蹴飛ばしてたから」

「そーそー！寧ろ分割してでも愛されてるのは嫉妬しちゃうね！」

「……ありがとう…皆」

「よし立ち直ったな…さてと」

錫音が手を叩くとそこには蓑虫にされたナツキがエルフナインとマドカに囲まれて
いた

「誰がロリですか？ナツキさん？」

「詳しく聞かせてもらおうか？」

「い、いや…今はそんなことより！何でジャマトのハルトがこの世界にいたのかって話からでしょー！」

「そうだなエルフナイン、マドカも落ち着け」

「ほっ」

「しばき上げるのは終わったらにしろ」

「……………」

とりあえず加勢の理由は知りたいと皆の視線が向くが肝心のジャマトハルトは

「うわあ……マジで俺が増えてる」

「そうだね……けど私のハルトは隣にいる君だけだよ」

「そうだな……ありがとうあかね……俺もそう言ってくれて嬉しいよ」

「どういたしまして」

イチヤイチャする姿に全員舌打ちを堪えていた。ちなみに本能のまま動く力のハルトは現在 逢魔の医療機器 バクタタンク（龍の玉に出てくる治療カプセル的なアレ）に浸かっており不在である

「さて……質問ですが何故こちらの世界に？」

「そうだな……んじゃ話を始めるぞ」

ジャマトハルトは淡々と話し始めた

「あの騒動から少ししたある日、城ジャマトに泥棒が入ってジャマトの苗が盗まれたんだよ」

「苗だと？」

「そう、しかもまだ敵味方の認識を刷り込む前の苗を盗んだ…だから皆を襲うことに躊躇いがなかったわけ…本来のジャマトはゲームエリア内にいる人間やプレイヤーしか襲わないように教育してから出すんだってさ」

「知らなかった…」

「盗まれたもんだから管理人の爺さんとサポーターはもうカンカン、俺達全員に犯人逮捕と苗奪還を命じた訳」

「そして追いかけた先が君達のいた世界だった訳です」

「お、五十鈴遅かったな」

「いや貴方が早いんですよ冴さんが悔しがってましたよ私が速さで負けたって」

「俺はフライングしたから不戦勝とでも言っとけ」

「はいはい」

「えーと君は？」

「ああ僕は五十鈴大智、彼の仲間ですね」

「ああライブ感を大事にしてる奴だ」

「わかりやすく言ってくれ」

「その場のノリと勢いで生きてる」

「何だハルトの同類か」

「貴方に言われたくないですね……おつと失礼、ルサルカから報告です犯人と黒幕が解りましたよ」

「マジで!？」

「黒幕だと?」

「ええどうやら我々世界のデザグラストッフと一部サポーターが裏で動いているようですね」

「何の為に?」

「それは現在、僕達のサポーターが調査中ですが……どうやらガイソグのハルトはやられたらしい……死んではいないがガイソケンを取られたとの報告が」

「ん？……ケケラから連絡？えーと……そつか本当みたいだね……つかあの戦闘狂が負けるか……」

「そしてそのスタッフとサポーターがクロスギーツと取引してある装置を使い魔王を四分割したらしい」

「それで……あの黒ハルトを利用してオレ達の旦那をあんなにした奴は誰だ？直ぐに相應の報いを受けさせる」

キャロルの言葉に千冬、東、錫音、アンティリーネ、銀狼が戦意に満ちた目で見ている。それは他ならぬ愛するものへ害をなす存在への怒りに他ならない

「自分らも同じです、先程の御礼参りはきつちりしないといけませんので」

ハウンド達親衛隊も御礼参りする気満々である

「黒幕の組織名はフリーガン、悪質なゲーム妨害や運営の邪魔をした結果デザグラ出禁を食らった悪辣なサポーター達とゲームを我が物にしたいスタッフ連中さ」

—————

その頃 黒ハルトはというと依頼主へ報告していた

「まずはセンスを取り込んだ残りも時間の問題だな」

『さっさとしなさいよ！あんたがもたついているから運営連中がかぎつけたじゃない!!』

その声はカンカンと喧しい金切り声であり、ゲームを仕掛けたは良いが自らの安全圏が脅かされた事による焦りがあるのを黒ハルトは感じていた

「良いじゃねえか別にゲームが面白くなる」

『良くないわよ!!さっさとアンタは魔王を倒して創世の力を手に入れなさい!!そしたら

「私が最初に使うんだから！」

「好きにしろだが約束は守れよ」

『ええ勿論だけど、まずはさっさと魔王を片付けなさい役立たず!!』

通話を切った黒ハルトを見てカフカは

「あのスポンサー、性格悪いわね」

「言ってるやんなよ、俺あ金払いが良いから従ってるだけだ…まあ最後に笑うのは俺だ…
アイツじゃない」

「そうね頑張りなさい…」

「そうだな…つと日が変わったか残りの魔王はあと3人」

1日目 センスのハルト リタイア

—————

翌日 ゲーム2日目

ピースメーカー艦内では厳戒態勢と共に戦力が集まっている、以前のような轍は踏まないと親衛隊も訓練に前のめりなのに加えてキャロル達も戦闘訓練に参加している全てはフリーガンを叩きのめす為に

そんな中 珍しく守られる側のハルト達はと言うと

「力の…早く起きなさい」

「……………」

重症の力のハルトを見舞いにきていたのだ

「しかし自分の見舞いなんて変な気分ですよね」

「……………ん」

鏡の自分にも会っているのに違和感しかないとかく知恵のハルトは

「さて、謎の君には万一に備えてメモを渡しておきますね」

「ん?」

万一?と首を傾げると

「力のは倒れ、センスは取り込まれたと仮定したら次狙われるのは僕ですなので対策だけでも残しておこうと思いましたがね」

「ん」

「大丈夫ですよ、僕は負けませんから」

謎のハルトはメモを受け取り懐に仕舞うと知恵のハルトは何処かへと向かうのであった

しかし謎ハルトは我慢出来ずにメモと同封していたのを開いたのだが

「……………呼符？」

何コレ？と首を傾げるしかなかったのであるが同時に

「っ!!」

激痛と共に右手に刺青が入ると眩い光と共に現れたのは……

「あら？私を呼んだのは貴方？」

謎ハルトの無念が復讐の鬼を呼んだのかは分からないが…彼女がハルトの元へ来たのは大いなる意志なのかもしれない

—————

精霊の影響で破棄された町にて

「ふう……………僕の予想だとそろそろなのですがね」

知恵のハルトは堂々とした態度で敵を待ち構えている

「へえ護衛（エスコート）はなし…カモだな」

付近にはトルーパーはいない完全なタイマンを希望していると見てとれた

それ故に黒ハルトは早く出てきたのであった

「へえ……てつきり小細工でも仕掛けてくると思ったが……策を講じる時間もなかったか或いは考える頭がないかだな……残念だがお前はここでゲームオーバーだ」

「心外ですね、僕を力と同じにしてもらつては困るよ僕は臆病なんだからさ」

「さつさと自決して楽になりたいか？ そうだな……と言つても知恵と言つてもライダーの知識や女を口説く方法くらいしか頭に入つてないか」

「それは凄い不愉快な例えですね……さて様式美として訪ねますが……センスの僕をどうしましたか？ 貴方に拉致られている筈ですが？」

「知ってるのに聞くのかよ」

「念の為ですよ、分かつてる答えですが聞くまでは覚悟が定まりませんので」

「んなの決まつてんだろ？ センスのハルトは完全に取り込んだ残骸も残っちゃいねえ

よ」

その言葉を聞いて知恵のハルトの目が細まりかけていたメガネを外して懐にしまうと

「そうですか……なら」

低い声音と共に下がった周囲の温度と同時に廃ビルから金切り音と上空から大量のクラックが開き始める

その中から現れるのは

「!!!」
「!!!」

「!!!」
「!!!」

ハルトが使役するミラーモンスターとインベスの大群が上位、下位の区別なく集い

各々が発するのは怒りと殺意の波動

それに呼応するかのように知恵のハルトの目の前に現れた魔法陣から大量のファントムが武器を構えて戦闘準備万端状態で列をなす

平時はハルトの魔力を賄っている彼等だが主人の逆鱗に触れたものへの仕置きはせねばならない…その怒りは己に向かわないように死の物狂いに闘う

この大群には黒ハルトも口笛を吹く余裕もなかった

「っー」

「あっで死ね」

フリーガンに誤算があるとすればハルトを四分割した事により

それぞれのハルトに特化した技能が埋め込まれた事にある

そして黒ハルトにも誤算があったとすれば力のハルト以外のハルトには戦闘能力がないと油断していた事である

力のハルトは身体能力や戦闘能力

センスのハルトは芸術や美的センス

謎のハルトは不明

ならば知恵のハルトに分割されたのは何か

それはハルトの持つ　ライダー怪人を呼び出し、操る力に他ならない

「おいおい、お前の方が余程の化け物だろうがよ…っ!!」

その低く殺意に満ちた声音と共にドラグレッダーが黒ハルト目掛けて突貫したのであった

ジャマ神 v s 神殺し 中編

その頃 ジャマトハルト達はドラグレッダーの激突を見届けていた

「始まりましたね」

「派手にやってんな」

大智とハルトは真剣な顔つきで周囲を見渡している：何故ならゴーストタウンが最早、更地になろうとせんくらの爆破が起こっているのだから

「しかしフリーガンは運営にあつさりバレルあたり随分と杜撰な計画立てたな」

「元々ゲームマスターが問題有る集団としてマークしていたらしいですよ、そしたら案

の定尻尾を出したと…まさかジャマトの苗と創世の力…魔王を狙うとは思いませんでしたか」

「うわあ…マジか……つか何でお前はこっちいる訳？加勢しないの？」

と尋ねるもナツキは首を横に振る

「ハルトが本気で暴れる時、誰も側に居てはならない」

「何処のパープルヘイズだ…」

「怪物バトルに首を突っ込める程、俺は強くないよ…今のハルトは天災のそれだからな流れ弾に当たりたくない訳よ」

「さいですか…さてと五十鈴？」

「準備はできてますよ…そろそろですかね」

大智が端末から目線を逸らす先には大量のポーンジャマト…全員が殺意に満ちた目で見ている間違いない盗まれた苗の個体だ

「ジャマ…」

「なあ農園に帰る気はない？」

と尋ねるが全員臨戦態勢と来た

「!!!」

「説得はダメか」

「仕方ありませんね倒しますか」

「ああ」

ドライバーを構える2人に対して

「おいおいアタシらを仲間はずれにしてんじゃねえよ！な、姐さん！」

「そうね」

その横から現れた銀髪の女性 雪音クリスとスポーティな女性 我那覇冴の2人も同じようにドライバーを取り出したのである

「2人ともナイスタイミングですね」

「テメエらがフライングしたからだろう？…まったく…さつさと終わらせるぞハルト」

「ああ！行くぜ皆！」

『デザイアドライバー』

「え？皆仮面ライダーなの!？」

ナツキが驚く中

「正解」

「フリーガンの連中に思い知らせないとね」

「せいぜい派手にぶっ飛びな」

「さあ取り立ててと行こう」

全員が構え、そして

「「変身!!」」

『SETT』『DUAL ON』

『MONSTER/BOOST!』

『JYAMATO』

『ゾルダ/G3-X』

ナツジスパロウ、ロボ、ダパーンとジャマトライダーに変身したハルト達を見たナツキも自分のやるべき事を成す為に変身する

『タイクーン』

アナザータイクーンになると双剣を構えると

『READY FIGHT』

同時に戦闘が開始された

—————

その頃 知恵のハルトが率いる怪人軍団 v s 黒ハルトとは言えば

『クロスギーツ』

変身してダメージを消したのであった

「焦んなよ、魔王の叡智が感情的になるなって」

ドラグレッタターが突進してビルにめり込ませたが変身して難を逃れたクロスギーツは双剣を肩に担いで周りに現れた怪人軍団を見て辟易する

「成る程な…市街地を選んだのもミラーワールドの出入りが多いからか…最悪不意打ちで俺をミラーワールドに引き摺り込めると踏んだんだらうが」

「!!!」

と呟きに合わせてミラーワールドからギガゼール3体が飛び出し3方向から攻撃を行うも

キン！と高い音が鳴ると同時に三体のギガゼールは爆散、正に目にも止まらぬ速さで両断した両手の剣を払うと

「いくらミラーモンスターでも強化させてないなら烏合だな」

対処は容易と判断するが

「特に…っ！」

クロスギーツが回避したと同時に大量に何かがビルに突貫し壁に穴を開けたのだ

「これは……っ！」

それと同時に知恵のハルトが叫んだ とある周回で龍騎を亡き者にした空の悪魔の名を

「やれ!!ハイドラグリーン!!」

呼応するように大量な青い巨大トンボモンスター ハイドラグリーンが群れを成してクロスギーツに襲い掛かるのである

その速度はミラーモンスター最速格、しかも数が多く頑丈なのが群れを成して恐れ知らずに自らの体を弾丸のようにしてクロスギーツに体当たりという生物として単純な攻撃を仕掛けたきたのだ

まるで大砲の球がガトリングで発射されるような攻撃にビルは倒壊、新しいビルに飛び移ったクロスギーツの足元だがハイドラグーンの連撃により足場が一気に崩れ落ちると

「っ！」

無防備になった隙を見逃さないモンスター達の本能があった、デイスパイダーが糸を放ちクロスギーツを捕らえるとハンマー投げの要領でスイングして投擲しクロスギーツを壁に減り込ませたが

「けっ、残念だな俺には効かないぜ単純な物理ダメージで俺は殺せない」

余裕綽々に聞こえる声音に知恵のハルトは激昂する

「知るかよ…なら死ぬまで殴り続けてやるゲームの時間切れまでな」

知恵のハルトは取り出さしガイアメモリを3本、ガイアウイスポーを鳴らして起動する

『T—R—E—X』

『TRICERATOPS』

『ケツアルコアトルス』

「行ってこい」

そのメモリを近くの野鳥や近くにいたシアゴーストに打ち込み変移させる

「!!!」

咆哮を上げながら近くのビルを蹴散らすのは星を続べた太古の覇者 万物から恐れられた竜 テイラノサウルス、トリケラトプス、ケツアルコアトルスの記憶から生まれ たドーパントであるが

「そうそうコレも忘れてたよ出血大サービスさ」

『ブラキオサウルス』

そう言い近くの下級インベスにガイアメモリを挿入するとケツアルコアトルスよりも巨大な体軀を誇る 恐竜 ブラキオサウルスドーパントが現れたのである

「さながらアバレンジャーだね、1匹違うけど」

「「!!」」

「おいおい、ここまでやるかよ」

「やりますよ? 徹底的にね」

「ならテメエが殴ってこいよ!!」

「生憎、策士なものでして」

と咆哮を上げながらクロスギーツは真つ直ぐにドーパントへ向かうと同時に巨大化しており、さながら恐竜vs人というとんでもバトルの様相を初める

巨体故の怪力とスピードはドーパント有利であり、T REXの咆哮は瓦礫と共にクロスギーツを吹き飛ばしめり込んだ先にトライセラトプスの突進とケツアルコアトルスのエネルギー弾が襲い掛かる。そして最後と言わんばかりにブラキオサウルスの巨大な脚がクロスギーツをビル事粉碎した

が小さく敵の狙いが定められないデメリットもあつた、瓦礫に紛れて隙を見逃さなかつたクロスギーツは冷静にバツクルを叩く

『XGEATS STRIKE!』

「らあー!」

まずはレイジングソードとブラキオサウルスとT REXの首を両断し次にQ B 9の射撃モードでケツアルコアトルスドーパントを、そして強化されたライダーキックでトライセラトプスを沈め、爆裂霧散させたのである

「今の奥の手か？」

「まさか」

と取り出したのは大量のヒマワリロックシード、それを近くの下級インベスにばら撒くとインベスはヘキジャやビャッコなど上位個体へと進化したのである

「第二ラウンドだ」

—————

その頃 ピースメーカー艦内では謎ハルトが白髪の女性と共にカプセルの前にいた

「ねえマスター、その袋は何かしら？すごい生臭いんだけど」

「イナダ」

「何で!？」

それだけ言うなりカプセル内の力のハルトは目を覚ましカプセルを破壊、謎ハルトの袋を強奪すると何処かへ転移した

「な、何よアレ？」

「……………変人？」

「あら自己紹介？殊勝な心がけじゃない」

ムカツときたので思わず

「皆ー！この子が力のが寝てるカプセル壊したー！」

「え？ちよつ！待ちなさいマスター!!」

と吹聴しながら走り出したのであった

その頃

『JYA JYA JYA STRIKE!』

ジャマト全員をツタで捕縛するとロボ、ナツジスパロウ、ダパーンがそれぞれの必殺技を発動する

『BOOST/MONSTER/ゾルダ STRIKE』

巨大な拳や大砲の弾丸が貫通しジャマトが爆砕するのを見てクリスは

「や、やっぱこのライダーの武器良いな… アタシ、この武器じゃないとダメな体になっちまってるぜ」

仮面の下で恍惚な顔をしているクリスにナツジスパロウは冷静にバックルを装填した

「頭冷やそうか」

『ARMED WATER』

「ちべた!!何すんだよクイズ先輩!!」

「妥当」

「姐さん!?!」

「この間の映像は見たけどクリス…まじないわー」

「黙れ!お前だって相手をチェーンソーで切り刻みながら笑ってた癖に!」

「え？何アレ怖」

「冴さん！大至急あかねさんをお呼びください！ハルトのメンタルがおかしくなっています！」

「分かってる!!」

「お願いだからいなくならないでくれ!!」

と取り出したのは黒曜石のような色彩のスロットバックルである

「アレって、この間の報酬だよな？」

それを躊躇いなくドライバーに装填する

『SET JYAMATO FEVER!』

そのままドライバーのレバーを押し込み稼働させると

PORN KNIGHT BISHOP ROOK ???、そしてもう一つのアイコン
がランダムで回転し止まって現れた目は

『CASTLE』

城を意味する出目 つまり巨大ジャマトに他ならないが

「なーんだハズレかよ驚かせやがって」

クリスは安堵するがチェスのルールに詳しくあったナツジスパロウは冷や汗を掻きながら後ずさる

「逃げますよ」

「何でだよハズレじゃねえ先輩」

「問題、将棋の歩は敵陣に入るとどうなるか？正解は…」

「そんなの金に成る……あ」

「まさか」

全員の視線がジャマトライダーのポーンジャマトバックルに視線が行くと、待つてましたとばかりにバックルから音声が聞こえたのである

『プロモーション・CASTLE』

そうチェスのポーンも将棋の歩と同じく変化する　しかし変化する駒がキングを除く全ての駒なのだ

これがジャマ神が持つジャマトスロットバックルの力　どんな出目が出ようともポーンバックルがその出目と必ず合うようになる

つまり確定でフィーバーになれるのだ

!!!
!!!

その音声と共に変化した姿は普段 彼等が拠点にしているスラグフォートレスジャマトの城部分と同じく大型個体のラフレシアの大砲を背負った巨大な姿へと変わる

『FEVER CASTLE』

!!!
!!!

ジャマトライダー・ファイバーキヤツスルフォーム 発進！

咆哮と共に大砲や武器を乱射、更にジャマーエリアを展開して運営側のジャマトを大量に展開 するとジャマト同士の乱戦へと発展したのだ

「これは…同士討ちを避ける為に撤退ですね」

「よし、皆捕まってニンジャの力で逃げるよ！」

と全員アナザータイクーンの転移で逃げる事に成功したが
戦いは混乱を極め始め
ていた

ジヤマ神と神殺し 中編2

前回のあらすじ、

病んだジヤマ神ハルトが変身したファイバーキャツスルフォームが暴走
その巨体は別場所でも確認が取れた

「!!」

「へえ、アレが隠し玉かい？」

「違いますよ（え？アレ何!?!）」

「惚けんなよ、知ってるぜ策士は何十にも策を張り巡らせるってな」

「残念ですがアレは策にあらず（いや本当）」

「はは、そうだな自分の策をペラペラ話さねえよなら悪い悪いさっきの言葉は訂正するぜ：：やつばお前は魔王の叡智だ」

「ふっ…（いや一体どうなってるんですかあー！）」

勘違いしてくれているが内心冷や汗が止まらないでいる

「だが制御出来ないんじや話にならねえな」

どんな力でも使えないなら意味はないのだ

「知らないのです？僕を始めとした魔王は制御しようにも出来ない怪物だと」

「……………あ……！」

「あ？」

「ほら聞こえてくるでしょう？ 妻達でも同じ存在の僕達を以ってしても制御不能な暴君の声が!!」

「う、嘘だろ一年は起き上がれない位痛めつけたぞ…そんな！」

「……………ハア!!（ところがギツチョン!!）」

「たかが一年程度の怪我で僕達を完全に倒せると思わない事だ！」

「イーヤー……ハ……!（御礼参りに来たぜ）」

「っ！」

突如現れた、黒い影の飛び蹴りにクロスギーツは吹き飛ばされた

「さあ名乗りなさい、君は一体何者か！」

「ウィーーーーハーハー！（力のハルト！ただいま参上！」）

「今は決める場面ですよ、リントの言葉を話しましょう」

「俺、完全復活！」

「よろしい…所で何を口に啜えてるんです？」

「鯖だ!!! D H A が豊富で頭が良くなるらしい!!」

「何故に鯖!？」

「そして生だ！多分D H A をたくさん摂取出来る！」

「すぐに吐き出しなさい!!頭の良さ以前に命を無くしますよ!!」

注意 生の鯖は食べたらダメだよ!!

力のハルトは生の魚をボリボリと食べていると知恵のハルトが気づいた

「?…って、それイナダですよ?」

「ヤハ!」

驚く力のハルトであったがクロスギーツは直ぐに起き上がるなり力のハルトへと襲い掛かるのであった

「くたばれ死に損ない!!」

しかし力のハルトは袋から新しいイナダを取り出すと

「これは鯖じゃねえのかあ!!」

生

鯖

否

魚

『サバ デイストピア!』（自己申請）

「鯖じゃない? って何で滅亡迅雷風のエフェクトを出してるのです!？」

「俺の怒り!!! 謎の俺める!!」

「いやイナダだった事に感謝なさい!! 生鯖なんて食べたなら病院行きですよ!!」

「ぶるうわあ!」

思い切りイナダをバットののように振り抜いてクロスギーツの頭部へ生臭くも痛烈な一撃を叩き込む、クロスギーツは錐揉み回転しながら宙を舞い落下したのであった

「ですが計画通り！グッドタイミングですよ!!」

「ヤハ！」

「さて力の、アレいきますよ」

知恵のハルトが取り出したネビュラスチームガンを見て力のハルトも呼応する形でネビュラスチームガンを取り出した

「ん？……っ！ヤーーハー！」

「あ……ぐっ！」

「ええクロスギーツ、確かに僕にも奥の手がありますよ……ずっと懐で暖めていた策がね

「…そもそも僕等が元に戻る方法で派生した形なのですが」

「っ！」

クロスギーツは妨害に走るが怪人連合が全力で妨害して止める

「実際にトリニティやクライマックス、オールドドラゴンなど試してみましたがどれも失敗しました…トライアンドエラーで気づいたのです アレ等の力は違う存在を一つの器に束ねる力だと！」

「え？オールドドラゴンは？」

「いきなり普通に話さないで下さい、恐らくアナザーウィザードの力を続けているのは謎のハルトでしょうね…だからこそ4人に分けられた僕達では一つなれなかった」

つまり全員にアナザーウィザードのフレイム、ウォーター、ハリケーン、ランドの力があれば戻れる事の裏返しだが

「しかし思い出したのです、僕らと同じように同じ存在が一つになったのを！実際に証明したマッドサイエンティストがいた事を！」

「やっぱり仮面ライダーは人生の教科書だぜ！ファンキーな爺さんありがとう!!」

「いやいや普通は融合する方法とか考えないだろうか？」

「確かに…しかし僕達が何故、あの歌姫の世界でカイザーシステムを提供したと思います?」

「こんな事もあるかとな!!アイツ等で実験してデータは充分よ!!」

「っ!まさかここまで計算していたのか!」

「当たり前ですとも!僕達の本来の姿 影の魔王 常葉ハルトは分裂したとしても何か

ら何まで計算済みですともさー！！」

「ウイーーーーハーーーー！」

2人は渾身のガッツポーズを決めるが

因みにそれをピースメーカー艦内で見っていたキャロル、東、千冬、錫音、アンティリィネ、銀狼は声を揃える

「「「「いや違うでしょ（だろ）（よね）」」」」

そしてウオズと四天王達も

「「「あるのは、ノリと勢いだけでしょ？」「」」」

割とハルトの扱いは雑であった…

「…何故か全否定された気もしますが…まあ良い行きますよ」
『GEAR REMOCCOM』

「俺達の力にひれ伏すが良い！」

『GEAR ENGINE』

同時に装填した青と赤の歯車付き ギアボトルがリンクした

『FUNKY MATCH!』

それはヘルブブrossの起動音？否！ とある科学者が生み出した 皇帝（カイザー）の
名を冠した 存在

「バイカイザー!!」

『FEVER』

同時に引き金を引くと歯車が射出され知恵と力のハルトは一つに融合する そのままアンダースーツに歯車が装備されると

赤と青のヘルブロス：否！クロスギーツと同じ来歴 つまり劇場版のラスボス！

『PERFECT』

あの星食いの蛇の暗躍を妨害しておりその計画に一番ダメージを与えていた存在

並行世界の破壊者 バイカイザー 起動

「さて…これでも全力時の半分ですが貴方の相手には申し分ないでしょう？」

「へえ遊んでくれるのか？最強の俺と!!」

「こんなゲーム、さっさと終わらせましょうか…この後は皆と宴会するんです…大人数だから準備に時間がかかるんでねえ!!」

クロスギーツの双剣とバイカイザーのライフルモードにしたネビュラスチームガンがぶつかると近くにいたシアゴースト数体が衝撃により吹き飛んだのである

「ははは！そんな攻撃効くわけねえだろクロスギーツにな!!」

「試してみます？水滴も時間をかければ石を削ります」

「上等だあ!!」

「ヤーーーーハーーーー!!」

その時 フィーバーキャツスルフォームの流れ弾が爆破したと同時に2人は走り出してぶつかるのであった

—————

その頃 フィーバーキャツスルフォームになり暴走中のハルトを見ていた3人は冷

静に

「クリス」

「ごめん…マジでごめん……」

「さて、アレどうする？」

「!!!」

遠目でも分かる安定の暴れぶりでありジャマ神の名に相応しい存在である

余談だがゲームマスターもこの光景を見て驚愕し、スパイとして送る予定のパンクジャックも沈黙していたが一言

「バレたら危ない…任務辞退します！」

「ちよっ！パンクジャック!!お願いだ！君しか適任がないんだ辞めないでくれえ!!」

着任前にこんなトラブルがあったという

そして始まりがあれば終わりもある

「呼ばれてきたよ！」

「久しぶりに参戦つす！」

あかねとアカリが到着すると

「アレが…ハルト？」

「ええ、実は色々ありました」

「はあ……………」

あかねが溜息を吐くと暗黒剣の力で転移するとファイバーキャツスルの頭に乗り

「ハルト」

!!!

その声でファイバーキャツスルの動きが止まる

「クリスに何言われたか知らないけど私はここだよ？ハルト…大丈夫ずっと一緒だよ…
ずっとずっとねや

と
頭を撫でると暴走して目がグルグルしていたキャツスルフォームの目の色が変わる

「……………あかね？」

ハルトは正気に戻った！

「うん」

「あ、戻ったな…つたく人騒がせな」

「クリス」

「ハルトごめんなさい」

躊躇わずに頭を下げたクリスにハルトは笑いながら

「ははは！気にしないでくれ…いやあ巨大化したので一言…見ろ！人がゴミのようだ
！」

「ハルト、あそこの黒ジャマトを焼き払え！」

「おう！」

同時に背部につけた大砲ラフレシアを発射してビルをぶち壊すとクロスギーツ側のジャマトを全員焼き払ったのである

「うわあ…何でもありか」

「はい、はい……わかりました」

とナツジスパロウがスパイダーフォンの通話を切り全員に一言

「運営もフリーガン対策に本腰入れましたよ……テスター軍団を投入し各世界をしらみつぶしに当たっていると」

「終わったね」

「ああ……あいつらに目をつけられたか」

「何ならプライマス課長とユニクロン課長が指揮してるって」

「えええええ!!あのテスター軍団長を統括してる2人がか!プライマス課長って…….テスター軍団の創設者にしてデザロワ生まれの戦闘狂デザ神に居場所を与えた事で有名な!」

「あ、あの…グルメ世界において宇宙にある美味しい星を食べ尽くす惑星喰（プラネット
イーター）ことユニクロン課長まで……これは…」

「オーバークイルだな」

遠い目をしていた…もう何もしなくても解決したのでは？と思ったクリスであった

その頃 カフカともう1人の仲間はフード越しに冷めた目で眼下のクロスギーツを
見ていた

「何してるのかしら？」

「半分には押しされてるわね…しかも融合しただけの個体に」

「怪人との戦いで疲弊してるけど加勢する？」

「いいえ、邪魔しないでくれと顔に書いてあるわあんなに楽しそうなハルトを見るのは
久しぶりよ」

「だからこそ…私達は残ったもので我慢しましょうか…ヴェルザード」

「ええ…まあ終わってるけどね」

フードを取るとそこには白髪に白い肌と小柄な女性の足元には大量のシアゴースト
とギガゼールが凍りついた

「けど退屈しちゃうわ…本当骨のある奴はいないのかしら？」

その声に呼応したのか将又 同種といた匂いを感じたのか分からないが主の危機に
馳せ参じた影があつた

「あはは！みーつけた！…ってアレ？」

「お前は…ギイと一緒にいた奴か！」

「ええ…世界に4体いる竜種　白氷竜ヴェルザード…まさかフリーガンと組んでるなんてね」

「あらあらこれはコレは派手な登場な事、けど一つ訂正させて頂戴な私はフリーガンじゃない、あのクロスギーツといるのよ」

ウルティマ、カレラ、テストアロツサがハルトの持つ悪魔召喚魔法　悪魔門を逆利用してこの世界に現れたのである

「我が君の敵には変わらんさ、しかし竜種が相手とは心が躍るな」

「お前だろ、ハルを面白おかしくしたのは」

「いや私は今の我が君が好きだぞ！何せ勝負に快く応じてくれるからな！」

「ボクは嫌いだよ…あんな理屈染みて頭の良いハルトなんか…ハルトは少しバカな位が可愛いのにボクの玩具を良くも…しかも最近膝に乗せてくれないし…」

「貴女達…不敬罪が適応されるわよ？全く…どんなハルト様であろうと私達の主に変わりはないわ…だからこそ…敵に対して慈悲なんて持たないわ」

「ああ」「だね」

その体から溢れる一種の魔王覇気はヴェルザードの戦う相手としての基準を超えた事を意味しておりクスリと笑っていた

「ここは貴女に任せるわ、ヴェルザード」

「ええ…寧ろ邪魔したら許さないわ」

「あら？噂に高き逢魔の三人娘、いいえあの人と同じ原初の悪魔達…少しは骨がありそうね」

その力の一端を解放し街の一部を凍らせたヴェルザード、しかし原初の悪魔は彼女の知る歴史にはない想定外の進化を遂げている

「いきますわよ」

「うむ！」

「そうだね！」

3人はアナザーウオッチを起動して

『エボル／キルバス／ブラッド』

星を狩る力を宿すと三人娘（アナザーエボル、キルバス、ブラッド）vsヴェルザードと明らかに異なる作品を間違えた者達のバトルが始まったのである

ジャマ神 v s 神殺し 後編

さて前回 各地でバトルが熾烈を極めているが一足先に戦いを終えたジャマトハルトはバイカイザーに加勢すべく走っていたが

「ジャマトのハルト！」

ナツキがアナザーダイバー2ndに乗り込み駆けつけたのである

「タヌキ！」

「ナツキな！乗れ！」

促すナツキの背中に乗るとアナザーダイバー2ndは加速したのであった

その頃 クロスギーツ v s バイカイザーはと言うと

「ふっ！はっ！」

「ヤハ！」

互いに近接格闘を得意とするからか両者の間合いでの戦闘で互角以上に渡り合う

クロスギーツは剣、バイカイザーはライフルを槍に見立てながらも射撃で的確な攻撃をしているが援護とばかりに知恵のハルトが宿した怪人軍団も襲い掛かるのだからクロスギーツは苦戦必死である

「この化け物が」

「それは貴方も同じでしょう!!」

と2人の激突が激化する中、近くのビルが突如として凍りつき核撃魔法が宙を舞うと言う明らかに出来る作品を間違えている攻撃が空を彩っていたのだ2人は誰か分かったのか

「ヴェルザードの奴…」

「あの三人が全力で…成る程、かなりの強者ですね」

「残念だったな最強と名高い原初の悪魔って言っても竜種には勝てんさ…」

「それはどうですかねえ…彼女達も強いですからね！」

「……」

その頃 フーリガンの拠点では

「何してんのよ!! さっさと魔王なんて倒しなさいな!! そして私が創世の力で理想の世界を作るのよ!!」

とフーリガンに所属するオーデイエンスは罵詈雑言を浴びせている…マナーや品位

のないファンである

「仕方ないわ、コレを送るからさっさとやっちゃえ!!」

—————

クロスギーツの頭上へとアイテムボックスが落ちてきた、それを見たクロスギーツはバイカイザーを蹴飛ばして間合いを作ると

「……………チェーンアレイとプロペラ?」

何を思っただけ取ると腰のホルダーはこんなハズレを渡したんだ?

「いらねー」

と箱から取るだけ取ると腰のホルダーにつけるのみであった

その光景に

「折角私達がバツクルを用意したのに何で使わないのよ!!くそっ!あの原始人があ!!」

と理不尽な八つ当たりをプレイヤーに送るフリーガンを見ていた影が

「うわあくマナー悪っ」

「よーし偵察完了だ引くぞドブネズミ」

「おーう、つて誰がドブネズミだよダーダー恐竜!!……こちらチュータ、聴こえてる?もしもーし鉄球ゴリラの旦那く情報通り連中は此処で試合観戦してまーす」

チュータが連絡したのはチェーンアレイバツクルのみでデザロワを勝ち抜いたとんでもない上司である

『ご苦労、撤退して命令があつたら反撃だ…ライノス今回はガトリングとジャイアントハンマーで行こう、スターチは監視を続けておけ』

『了解なんだナ』

『OK！俺はいつでも狙えるぜえ…ん？』

『ハイヤー！』 J E T a n d C A N N O N

『ゴザル！』 A R M E D アロー

『でーす！』 A R M E D プロペラ

『おいおい前回の留守番組が張り切っちゃってるなあ〜コラー！独断専行は行けません！校長先生は許しませんヨオ!!』

『はあ全く…：今回はソラスプライム係長がデザ神特権のハンマーバックルを持参してるんだから気をつけてくれ…：それと皆、もっと冷静にしてくれ…：今回は大帝チームもいるんだから…：』

『え？打ち上げまだ？』

『まだザンスよ！カー！』

『ダニイ！！』

『オラオラ！何してんだよ！さっさと会場抑えとけ！』

『分かったブーン！』

『ゴツツンコ！』

『ウヒヤヒヤ！あつしの作ったデスソースをあいつの海老チャーハンに忍ばせて…』

『面白そうだな！俺様も混ぜてくれよギツチョーン！』

『おい待て！蟹チャーハンが至高じゃろ！！のお！』

と揉めてるのにリーダーは溜息を吐くが

『あ、バナナ持ってきたんだけど皆食べる？』

『何だとお!!それは私にくれえ!』

『冷静じゃないじゃん!おーいお前たちも戻ってこいよーでないとゴリラの旦那が食べちゃうぜ』

「了解、旦那…ほら行くぞダーダー恐竜」

「わーったよ!つたく今仕掛ければ勝てるのに」

「勝った所で被害者が戻らない可能性があんだよ!」

と完全に見張られ包囲されている事にも気づいていなかった

—————

「ふう……」

「……………」

両者の睨み合いは続いている流石にこのままでは分が悪いと考えるが怪人軍団も無尽蔵ではないのだ必ず限界が来る使い所を間違えるなど言わんばかりの慎重さで行くバイカイザーにクロスギーツは逆に果敢に攻めかかる

「っ！」

「っ！」

両者の技術は互角、しかしながら自力の差は明白であった

「ハア！」

「っ！」

い 天与呪縛で底上げされた体であろうと言いは悪いが種族としての差は埋められな

半分になろうが分割されようが化け物は何処までも化け物なのだ

「はあ……はあ……」

「これで終わり？」

あ 流石のクロスギーツも2人が融合したバイカイザーの前には劣勢であった……答であつた

「そうだなあ……終わりだ」

「そっ…んじゃ「お前がな」は？」

「この距離を待ってたんだよ!!」

『クロスギーツ STRIKE!』

「アホか」

『FUNKY DRIVE!ギアエンジン!』

「!!」

お互いに出力を引き上げた蹴りと拳が交差し両者は吹き飛ばされるも互いに得物を地面に突き刺して何とかブレーキをかける

「ふう……………」

「ああ…その位置だよ」

「何?……………っ!!」

同時にバイカイザーの足元から現れたのは巨大な生きている樹木に捕われてしまったのだ

「こいつはウージャングルつて場所に生えてる食獣植物を改良した品種だ、すぐに生えて相手を縛り付ける」

「ただの草木程度なら！」

力任せにちぎろうとするがびくともしない

「辞めた方が良い…これで詰みだな」

「火なら！」

突如怪人軍団からドラグレッターが現れると火球で樹木を焼き払いに動くがドラグレッターの攻撃にびくともしないか…それなら他の怪人でも同じかな…

「これはまずいね」

「けどコレを出さないとダメなのは予想外だったぜ…」

「一応消える前の土産に聞かせて貰えます？創世の力で何をするのか？」

「教える訳ねえだろ」

「そりゃ残念ですわね！」

とバイカイザーは最期の悪あがきとばかりにクロスギーツの体に腕を突っ込みアナザーパンクジャックとアナザーナーゴウオッチを抜き取ると自分の持つアナザーバツファウオッチを謎ハルトの元へと転移した

「このっ！」

「希望の種は残りました…さてと後は任せましたよ」

「ちっ！」

それだけ言い残すとバイカイザーはボトルに吸い込まれた

「想定外もあったが残りのハルト、あと一人」

「あら、もう終わったの？」

隣に立ったヴェルザードにクロスギーツは訪ねた

「ええ…まあハルトが負けたのが分かったから逃げたのわ…流石あの人と同じ原初ね引き際を心得てるわ」

その目線の先には氷河地獄にして建物が熱線で焼き払われているなどさながら怪獣映画のワンシーンである

「んじゃ一旦帰る……っ！」

「ハルト！」

力なく倒れるハルトをヴェルザードが支える

「さ、流石に疲れたな」

「無茶するからよ……全く一人で大群と戦うなんて……」

「けど残りは1人だ……な……」

安堵するクロスギーツは変身解除すると同時に聞こえてくるエンジン音

「!!」

アナザーダイバー2ndに乗った2人が駆けつけたのを見てヴェルザードは舌打ちをする

「ちっ…面倒なのが来たわね」

「まさか…バイカイザーがやられたのかよ」

「魔王の力と知恵が破れたのか…」

「まあ中々の手応えだったな…流石に疲れたしダメージも残ってるのが証拠だな」

「なら…」

2人はアイテムを取り出すと黒ハルトは笑い始めて

「ヴェルザード、離れてろ俺がやる」

「何言ってるの！これ以上戦ったら…」

「俺の売った喧嘩だ…それに此処で倒したら残りのハルトを守る壁も薄くなるな」

クロスギーツバックルを取り出すのを見てジャマトハルトはニヤリと笑う

「へえ〜結構覚悟決めたか…タヌキは下がってろ」

『SET JYAMATO FEVER』

「はっ、丁度良いハンドだ」

『BLACK OUT』

ナツキは首肯してアナザーダイバー2ndを走らせる…見ているだろう面々に報告する為に

と思っていたのだが突如、ナツキの頭にアイテムボックスが落ちてきた

「つてえ！なんだよ…つてコレ…」

ケケラからの贈り物かな？と首を傾けながら開けた箱には金色の札が入っていたのだ

「本当に何だよ！」

地面に叩きつけながら叫ぶと札が光り始めたのである

「えー……つてえ！」

ナツキの右手に謎ハルトと同じ紋章が浮かぶ

その同時刻

「これは……」

あかねの持つライドブック、キングオブアーサーと暗黒剣月闇の持つ闇エネルギーがその札へと取り込まれていくのであった

その眩い光と共に現れたのは黒いドレスと甲冑を合わせたような衣装とバイザーをつける黒い聖剣を持つ物が現れたのである

余談だがその映像を見ていた謎ハルトが呼び出した黒い聖女は思い切り舌打ちし

【うげえ…最高にいけすかない奴が来たわね、何あの黒い聖剣…矛盾してない?】

【ねえブルーメランって知ってる? ジャンヌ?】

【知りませーん】

そんなやり取りがあったが

「問おう、あなたは私のマスターか?」

「だ、誰!?!」

「こほん…もう一度問うぞ、貴様は私のマスターか？」

「えーと、あの札で呼んだのは俺だけど」

「よろしい契約は此処に…私はセイバーオルタだ宜しく頼む…さて要点は把握した運転を変われ！マスター全速力で駆け抜けるぞ！」

「え？いやコレは俺専用マシンで…そだ」

『カイザ…擬態 サイドバツシャー 』

アナザーダイバーをサイドバツシャーに変形させるとセイバーオルタは感心し運転席に座ると

「ほお、よし行くぞー！」

「アナザーダイバー！この子に使用許諾解禁！」

『了解 マスターから使用許諾確認 サイドバツシャー 発進!!』

そのままセイバーオルタはサイドバツシャーを全速力で走らせるのであった

その頃

「さあ今まで分を取り立てさせて貰うぞ」

『KNIGHT：プロモーション』

「返すものはないんだがな」

『クロスギーツ』

ジャマトライダーファイバーナイトフォーム v s クロスギーツ 神 v s 神殺しの戦いが幕が開いた

その頃 ピースメーカー内では

「力、センス、知恵まで敗れ…残りは」

「……………辛味噲」

「一体全体何の我が魔王かも分からない謎の部分だけ」

「終わった…」

「諦めるでないわ！妾達はまだ負けておらん！」

「そうだけど、勝てるのアレに？怪人軍団相手に一步も引かなかつた脳筋な魔王ちゃんをさらに脳筋にしたゴリラに」

「[[[[……………]]]]」

と皆が沈黙する中

『勝てるぜえ〜』

『ああ！寧ろ此処から逆転だ！』

そう言うのと謎ハルトから抜け出たのは

「いよーつす！全国のファンの皆さん！お久しぶりー！バイスつす！」

「よ、久しぶり」

「バイス！パラド！」

そうハルトの中に住まう存在 バイスとパラドが現れたのに周りは驚く

「どしたの？皆揃って？」

「丁度良かった、その我が魔王は何を抽出した我が魔王なんでしょうか？」

「え？皆知らないのー！」

「話してないのかハルト？」

「ん……」

「よし、じゃあ俺たちが話してしんぜよう！こいつは何とー！」

「ハルト、あいつの攻略法が分かったのか」

「うん」

「アレエ!?スルー！」

「それで方法とは我が魔王！」

「アナザーギーツ、バッファ、タイクーン、ナーゴ、パンクジャック、ケイロウ、ロボの力を一つにしたアナザライダーを作れば勝てる」

「成る程、ではナツキからアナザータイクーンウォッチを回収しないとなりませんね」

「それ以外にもデバイスが必要」

「デバイス？」

「ライドケミーカードってのがいるみたい」

「ケミー？そんなアイテム聞いたことないな…」

「未来から新しい仮面ライダーの情報が来た」

とハルトが取り出した端末には 仮面ライダーガッチャードの映像が流れていたのを見たキャロルはあらずじを見て

「れ、錬金術だと……まさか新しい仮面ライダーの錬金術が……素晴らしい!! よし待っている直ぐにカードを作ってやる! エルフナイン手伝え!!」

「あ、キャロル待つてください! ……このバッタは可愛いですね……」

「と言う訳でカードはキャロルに任せて俺は残りのデバイスを手に入れるよ」

「どうやって手に入れる?」

「そう仰ると思いましたが、此方を」

とウオズが持ってきたのは白い狐の半身のようなバツクルであった

「何処で貰ったの?」

「とある狐が祀られている祠にお願いしたら頭上から落ちてきました」

「その話詳しく!!」

「そんな事より!!どうすんのさ流石の僕達でも戦力ダウンしてる今じゃ…」

そんな中

「何よコレだけの面子が揃ってるのに打開策もないとか情けないわねえ」

現れたのは鎧甲冑を纏う銀髪で白い肌をした女性であった

「あ、バクタタンク壊した人」

「そ、それはマスターの誤解よ!!」

「誰だ貴様…まさか黒ハルトの仲間か!」

「違うわよ！私はサーヴァント 復讐者（アヴェンジャー）ジャンヌ・ダルク…まあ彼の従者ね」

「ジャンヌ・ダルクだと？」

「ええ私はサーヴァント、人類史が残した英霊の影法師…まあ細かい説明を省くけど敵じゃないわ」

「味方でもないがな」

と現れたセイバーオルタにジャンヌ・オルタは舌打ちして

「また会ったわね騎士王様？」

「ああ…まさかまた会うとは思わなかったぞ猪女」

「何ですって？黒焦げになりたいのかしら？この腹ペコ王が」

「ほお…消しとばされたいようだな」

「吠え面かかせてやるわよ」

「……………」

そのままナチュラルに戦闘態勢に移行した2人を見て謎ハルトとナツキが止めに入る

「待て待て待て待て!!」

「何だマスター？私はこの目の前の敵を倒すだけだが？」

「そうよこの澄ました顔を叩き潰すだけよ」

「喧嘩してる場合かあ！」

と揉めていた その頃

「ガハッ！」

クロスギーツが変身解除して地面に倒れた

「ふう……」

ジャマトライダーフィーバーナイトフォームは肩にツタに覆われたチェーンソー武器ごとゾンビブレイカー・カスタムを担いで一息つく

「さてと苗と魔王ハルトの要素を返して貰おうか？」

「はは……良いのかよ？今俺を倒せばルール不履行で魔王は二度と苗や力は元に戻らないぜっ」

「ふーん……なら良いや取り立てはゲームが終わってからにしよ」

と変身解除したジャマトハルトに黒ハルトは宣言する

「残り物に伝えろ、明日は襲わない…最終日に全部の決着をつけてやるってな」

「そつ、んじゃ」

とそう答えると手をヒラヒラ振り現場から離れるのであった

「俺は負ける訳にいかねえんだよ」

呟きながら黒ハルトは力と知恵を取り込んだのであるが

「っ！がああああ！」

襲い掛かるのは強烈な激痛、まるで自分の体が大きく書き変わるようだ…痛みにしたうち回るが

「こ、こんなの成長痛だ…」

「はいはい痩せ我慢しないの、ほら帰るわよ」

そうヴェルザードに言われ担がれた黒ハルトであった

2日目 力、知恵のハルト脱落

グルメな世界へ修行 前編

さて前回 知恵と力、ジャマトのハルトが作り出した時間をキャロルやエルフナインはケミーカード作成、千冬、アンティリーネ、トルーパー、テスタロツサ達と戦闘訓練、錫音は魔法の指輪を試し、束と銀狼はフリーガンのアジトを探しなど各々がリベンジの機会を待っていた

その頃 ウオズ達 家臣団は

「謎の我が魔王は何処ですか!!」

「此処にもいないよ!」

「何処だ!!」

行方不明になったハルトを探していたが

「ああハルト坊なら…」

「修行とか行つて何処か行きましたよ？」

「はあ…やれやれ」

「魔王ちゃんらしいね考えるより先に行動するのは」

「知恵のハルト様のように冷静で居てもらいたいものだ」

「カゲン先輩、不敬ですよ寧ろ魔王様にもあんな知的な一面があつたと喜ぶべきです」

「いやフィーニス、お前が一番不敬じゃろ？まあ普段がアレじゃからのお」

「この時、全員の頭には

『ぎゃあああ！』

仕事をサボり町へ出ようとしくローントルーパー達からスタンモードのプラスター

を浴び

『何でさー!』

そして考えなしに暴れた結果、キャロル達に説教されている姿であった…王の威厳？あると思つて？

「……………普段から知恵モードなら我等はどれだけ楽だったか」

「「「確かに」」」

と納得したがウオズは理解してると言つた顔で

「では我等も鍛えますよ、我が魔王が単身で向かうと言う事はかなりの危険地帯…ならば我等として王を守る為の鍛錬をすべきです…というより十中八九あの世界ですからね」

「よお言うたなウオズ！では妾が相手しよう全員で来るが良い！」

『へえんしいん!』

因みに銀狼だけ別の調べものも並行していたという

――

その頃、ハルトはと言えば

「此処に黒ハルトが使った植物があるのか！」

知恵と力のハルトを倒した黒ハルトが用いた植物の手がかりを得る為に別世界に来ていた

『良いのか？あの世界にいないとゲームカウントが進まないぞ』

アナザーディケイド が心配しながら訪ねるも謎ハルトは笑いながら

「それって逆を返せば俺があの世界に帰らない限りゲームは進まず俺は鍛錬出来るって

「事だよね？」

『ルールをそう解釈するハルト怖い』

『力と知恵が抜けて本能で動いているナ』

「それに俺の力であつちとこつちの時間流を弄つたから此処での5年はあつちの1時間にした…つまり！120年分の修行が可能な訳よ！」

『相変わらずのチートだな!!』

『最早普通じゃねえぜ!!』

「そして相棒、ひとつ聞きたいんだけど」

『何だ?』

「急に周りの酸素濃度が高くなったり重力に潰されそうになったり急に暑くなったりしてるけど大丈夫かな俺の体！」

『適応しろ怪人なら』

「そんな殺傷なあ！」

皆はキチンと環境に適応出来るようになってからグルメ界に入ろうね！

さてそんなこんなで少し慣れてきたハルトであったが

「んー腹減った…」

流石に手持ちの食糧にも限界がある…となると

「一狩りするか…いやあいつぶりかなあ！」

過去の経験から別に抵抗はないと体をほぐしていると…何か巨大な魚が魚雷のようになつて襲いかかってきたのだ

「シャアアア！」

魚雷ソーセージ 捕獲レベル195

「晩飯アレにするか……くらえ超自然発火能力！」

アナザーアルティメットクウガ覚醒により俺にも一部だけだがこんな風に力も使えたりするのだ……哀れ、魚雷ソーセージは遠隔で丸焼きとなったのである

!!
そして丸焼きをそのまま齧ったハルトは感動した、こんな美味しいもの食べた事ない

「うめええええええ！何この魚！普通の魚みたいなのにソーセージみたいだ!!」

『いや空飛ぶ魚が普通にいるか』

「え？いやいや逢魔とテンペストに来たカリユブデイスとメガロドンを忘れた？」

『……魚が飛ぶのは普通だったな』

『納得しないでくれアナザーデイケイド !!』

『いやあ先輩達も異世界に染まってるぜえ!』

「しかし、こんな美味い奴等が沢山いるのか……はっ!」

未知の世界、未知の猛獣と環境、食材と来たら

「最高の修行場じゃねえか! ヤバいな…強い奴がわんさかいるとか、おらワクワクすつぞー!」

『キャラを戻せ馬鹿者』

取り敢えず、ハルトは歩を進めるのであった

「へーい……これ皆のお土産にしよ……さてどんな奴がいるかなあ〜」

余談だが、ハルトが帰った後、皆にお土産を振る舞うのだが……ハルトの人生のフルコースの一つ、サラダのビービードンゴムシを出した時

『我が魔王……これは新手のパワハラですか!?!』

『ハルト……オレ達もお前の苦労は聞いている……安心しろ此処ではこんな虫を食べなくても良いんだぞ』

『そうだよハルくん……ごめんね束さん達、ハルくんの悩みを聞いてあげられなくて』

『そうだ、私達は家族なのだから……遠慮なく相談してくれ』

「いや違うから、美味しいから食べて欲しいんだよ」

『お、おう…確かに昆虫食は有名だが生のダンゴムシをそのままとは…いや！コレを食べた経験をネタにするのも私の仕事だあ！ダンゴムシよ！私の糧（ネタ）になれえ！』

『あら？リンゴみたいで美味しそうじゃないのいただきます』

『二亜…あんた何て…』

『アンティリーネ!? 正気!?!』

『お前達の犠牲は忘れないぞ』

『ちーちゃん死んでないから』

『もぐもぐ…キャベツみたいで美味しい、塩かけたらおつまみだね…ビール欲しい』

『初めて食べたわ…以外といけるわね』

『『『『ええええええ!!』』』』』

「言わんこつちやない」

そんな自分のフルコース食材の説明をするなんて一幕もある

そんな感じで

「いやあ……この辺の猛獣には何とか勝てるようになったな！」

う
ごり押しが通じない敵とのバトルは自分の地金の弱さや技術の乏しさを覚えてしま

「けど……まだまだだな……怪人態の力を人間時やアナザーライダー変身時にも使えない
と……つかさ重力がキツイ分良い鍛錬になってんだよなあ……」

恐らく根本的な敗因はそこだろう

天与呪縛で最初から怪人並みの身体能力や感覚を得ていた黒ハルトと違い 後天的
に獲得した故に感覚のズレがあった

力のハルトは単純な身体能力なら互角なのに劣勢だったのはシンプルに技術の問題であろう

「となると俺もやっぱり武術的なのを覚えた方が良いのか？」

そう言ってもそんな都合よくある訳…と考えていると

「ウキ？」

「あ？」

ある日 森の中 奇妙な猿に出会ったと思ったら俺の体は宙を舞っていたのである

「へ？」

まるで反応出来なかった…対応出来なかった…何だコレは……一体！いやそんな事より

「スゲー!!」

この猿には自分にはないものがある! だからこそ

「言葉分かる?」

「ウキ?」

無知とはこうも恐ろしいか…ハルトの目の前にいるのはグルメ界の大陸を収める8匹の王

その一角 猿王バンビーナとはカケラも知らなかったのだ

「今のどうやるの!俺にその技を教えてください!!」

「ウキ!」

王の気まぐれか悪戯心か：将又自分と同じく無邪気で自由奔放な部分を感じたか或いは同じ王故かバンビーナは

ハルトに暇つぶしとして技を教えることにした

そして教わったのが猿武

アナザーWの調べによると受ける力を逸らしたり、体にある細胞全ての意思を統一する事で凄い力を発揮すること

そしてその修行として渡されたのがビービーダンゴムシでのお手玉だ

「おむおむ」

最初はよくわからなかったが、バンビーナと組み手をした際に感じた命の危機により細胞全部の意思統一に成功してからは10個くらいは何とかお手玉出来るようになった

た…因みに覚えるのに10年くらいかかった

「ふう…まだまだ…」

しかし、お手玉をしていると腹が減ってきた

「そう言えば朝から何も食べてないや」

『そうだな』

「……………」

『ハルト?』

「……………コレクエルカナ?」

『お前……まさか!辞めろ!腹減ったからってそんな怪しいダンゴムシ食べる奴がいる

か!!』

「子供の頃に焼いたトカゲとか芋虫食べてるから今更なんだよねえ〜いただきま〜す」

ムシヤリと食べてみると目を輝かせた

「……っ！キャベツみたいで美味しい!!」

『嘘だろ!!?』

「お手玉すると美味しくなるんだ！よし！やるぞお!!」

『目的が違うような気もする…』

「ウキ？」

そしてそんな感じで鍛えて更に10年程

「ふう……50個くらい当たり前のように回せるようになったな……よし！行くぜ！猿さん！！組手だあ！」

「ウキ!!」

後に100Gマウンテンに語り継がれる猿王バンビーナと度々拳を交える怪人と言
う光景でもあった

まあ結果は負けたのであるが……

「はあ……元に戻ったらまたやろうぜ！」

「ウキ？」

「ああ……その……実は俺はちよつと全力で戦えなくて……ごめん」

「ウキ!!（嘘でしょ!なら戻ったら、また遊ぼうよ!）」

バンビーナは何を思ったのかハルトを担ぐと全力で投擲したのだ!

「うきー!」

「え?ちよつ…うわああああお!!」

「ウキー!」

力取り戻したら、また遊ぼう!とバンビーナは手を振るのであった

そしてハルトは投げ飛ばされた先で

「つて!…:…:いたた…あの猿何してんだ…:…よ…:…つか体軽くなったな…:…ん?」

周りを見渡すとハルトの目の前には

巨大な一本の牙を持つ 単眼の竜 かつてこの世界全てを牙一本で支配した伝説の

竜の末裔

八王の一角 竜王 デロウス であった

『おいハルト！直ぐに変身しろ!!』

アナザーデイケイドがそう言っているが

「カッコ良いなお前、俺の仲間になれ」

まさかのスカウトをしたのであった

『うおおおい！正気かよハルト!!』

「至って普通だ…んで返事は…つと」

「!!!」

デロウスは怒りの咆哮と共に舌先にエネルギーを集め異次元レーザーを放つがハルトは猿武と100Gマウンテンの重力から解放された結果底上げされた身体能力で回避すると

「猿武…スマツシュ!!」

猿武の力を込める細胞全てが攻撃で意思統一された全力右ストレートをデロウスの顔面に叩き込むとデロウスの巨体が仰反るのであった

「ははは!っしやあ!修行の成果出てるぜ!」

『ジオウ』

アナザージオウになりツイングレードを構えて一言

「さあさあ!いざ尋常にい…勝負しようかあ!」

「!!」

そして数十日後

「はあ……………はあ……………やるじゃんドラゴン」

「……………」

ポロボロになっているアナザージオウとデロウスだったが

「まだまだ!!」

まるで何処その浅倉さんレベルに戦いに飢えている姿を見て

「……………」

ここまで人間？が自分に喧嘩を売るとは命知らずだ、しかしあの猿の技を使い、自分

と数10日戦えるほどか…そして思う…

まあ喧嘩友達位には認めてやろうと

!!!
」

デロウスが咆哮を上げると空からやってきたのは正に小型のデロウスであった

「あ?」

「……」

言葉にせずとも拳を交えたから理解したのだ

自分には役目がある、だから変わりにコイツを連れてけと

「っ!ありがとなドラゴン!」

「!!」

「宜しくな！さてまた遊ぼうぜ!!」

ハルトは小型デロウスの背に跨ると、そのまま羽撃く

そこで連れて行った場所には何やら水が染み出しているでないか

「ん？」

「!」

「これを汲めつて事か？なら遠慮なく」

とハルトはこの水を大量に汲み取るのであった、これがこの世界の宝ともいえるものの副産物ものとは知らないで、それを一口飲むと

「おおおお！傷が治った!!っしやあ！」

『どんな医療だ…』

『ツツコミしたら負けな気もするぞアナザーエグゼイド』

新たな場所へと向かうのであった

その道中、猿武の訓練がてら倒した猛獣で晩飯を食べていると

「ほほお…幼体とは言えアロウスの奴を連れてるとはお主、中々やるのお」

目の前に現れたのはリーゼントが特徴なファンキーなお爺さんが現れたのだ

「アロウスって、コイツのこと？」

一緒にいる子供ドラゴンを指差す

「！」

「へえ…そつか親父さんの名前なのか…なら親と同じデロウスって名前を送るぜ…ん？」

名付けによりハルトの中から魔力が抜かれるとデロウスは咆哮を上げるのであった

ハルトはそのお爺さんに尋ねると

「ま、まさか其奴の事を知らんのかお主」

「こいつの親玉と数十日戦ったら、俺の代わりに連れて行って言われてから俺と旅してる」

「ははは！まさか八王に喧嘩を売る奴がおるとはの！しかもお主の技、猿武じゃろまさか猿王とも会ったのか？」

「猿王？ ああ… やつぱりあの猿強い奴なんだ」

「強いも何も彼奴は大陸の王じゃが？」

「いやまあ強いから当然か…」

「うむうむ」

「あ、良かったら食べます？」

「おお、では遠慮なく」

と久しぶりに人と食事をするのであった

「へえ、人生のフルコース…」

「そうじゃ、美食屋はそれを追い求めておるのじゃよ」

「なら俺のサラダは、あのダンゴムシだなキャベツみたいだし美味しい」

あつさりとひとつ決めたのであった

「そう言えば爺さん、何か面白い道具持ってるけどそれ何？」

「おおコレか、ノッキングと言って相手の動きを止める技術と道具じゃよ」

「へえ…」

「そう言えばお主、酒は行ける口か？」

「まあ人並みには」

『嘘つけ、グデングデんに酔う癖に』

魔王進化してからは酒への耐性が出来たから人並みに飲めるようになった

「そうかそうか…暇なら今度酒豪諸島に向かうと良い、良い酒をご馳走してやろう」

「本当ですか！やった!!」

わーいと喜ぶハルトはふと思った

「なあ爺さんは此処へ何しに来たの？」

「おお猛獣の捕獲にな」

「どんなの？」

「ほお行ってみるか」

「是非!!」

後編へ続く

グルメな世界へ修行 後編

前回 猿と竜と拳で語り合ったハルトはリーゼントのお爺さんと一緒に猛獣の捕獲に向かうのであった

「この先？」

「おおそうじゃ、この先に王陸鮫とアシユラザウルスという猛獣がいてな…ワシのフルコースなんじゃよ何でも食べたいという依頼があつたんじゃ」

「凄い話な事で…おい、デロウスどうした？」

最近名付けしたドラゴン デロウスは何故か怯えた様子でいるリーゼントのおじいさん、次郎さんの話だと

「ああそろそろ八王の領域じゃからのお怯えるのも無理ない話じゃ」

「八王か……あのバカデカイ鹿みたいなの？」

視界の先には文字通り山のような鹿がいた……これは王だなどと感心している、猿？ 竜？ あれは友達なので例外です

「そうじゃ彼奴は鹿王スカイディア、その背に住まう猛獣捕縛が依頼じゃよ」

「そっか……んじゃ爺さんは頑張つてな……デロウスは周りを飛んでろ合図したら迎えに来てな、これは俺の訓練だからなっつと」

そしてハルトは着地すると軽く体を伸ばして周りを見渡す

「何もいないか……ま、あの鹿の背中に住む猛獣の数なんてたかが知れてるな」

「立ちました！ー」

『フラグちゃんか今の？』

「いやいや異世界でも仕事する訳な…」

反射神経と反応に従い回避するとそこに現れたのは三つ目の大蛇…いや手があるから違うな

「おいおい…何だテメエ」

全力の威嚇、魔王覇気にも怯まずに咆哮を上げ巨大な手で掌底を使ってきたのだ

「!!!」

「っ！」

『ハルト!?!』

近くの大木にぶつけられるハルトだが冷静にそいつを見ていた

それは嘗て八王の一角 バトルウルフと肩を並べたとされる伝説の魔獣 その原種である

デビル大蛇（原種） 捕獲レベル5170

「凄いなあ……このクラスが沢山とか……心が躍る……けどその前に」

とハルトは学んだ猿武の力を全開にして拘束を力技で突破し腕を消しとばしたのである

「その手を退けろや蛇野郎!!」

そしてハルトに渦巻くは歓喜

己の覇気に恐れを感じない強者がいる事

己はまだまだ挑戦する側

戦いへの自制心…タガが外れる音がした

「!!!」

「はははは！決めたぜ…テメエが今日の晚餐だコラア!!」

今のハルトは全身全霊で喜びを感じていた食うか食われるかのやり取りが彼の眠っていた闘争本能を覚醒させたのである

生きる為に何を食らう？

アマゾンでも問われた命題だ…その答えは一つ

目の前の敵を喰らうのみ！撃ち倒し食らい明日の己の生を得よ!!

「!!!」

『いや、あの見た目で食欲湧くとか正気か相棒!?!』

『……そういやあハルトはスキルに料理人って、それが食べれるかとかどう美味しくできるか分かるって忘れられたスキルがあつたナ……今覚えば……アレはやばい食環境から生まれたスキルだったんだな……』

『それで食えると判断したのかハルト!』

「あははははは!俺の血肉になれや蛇もどき!!」

『違った!テンションがハイになってるだけだった!』

「行くぜオラア!」

『剣・キング』

アナザー剣・キングフォームと最初から全力のハルトvsデビル大蛇のバトルは

「しゃおらあ!!見たか蛇もどき!!」

アナザー剣がアナザーキングラウザーを天に掲げ勝利の雄叫びをあげ、地面にはデビル大蛇が倒れ伏している

「まさか全力のフォーカードの属性攻撃と物理ダメージ通さないとダメとか…なんて再生能力だよ」

『しかも猛毒や溶解液を吐き強化されたライトニングスラッシュやロイヤルストレート

フラッシュも学習していたな…』

「この手のがワンサカいるなら嬉しい限りだな………うん！取り敢えず腹減ったからコイツ食べるか!!」

『やはり覚えてたか』

「勿論、よつと」

取り敢えずハルトは薪を並べて火を起こすと

「ジャンヌ連れてくれば良かった…火起こしめんど……くないなアナザーウイザードいるし」

『おい俺をマッチ棒と同列に使うな』

「わーってるよ」

『ギャハハハハハ！マッチ棒と同じ扱いか可哀想だなアナザーウィザード！』

『黙れ！検索エンジンが！』

『何だと！お前まで俺をそう呼ぶか!!』

「はあ……喧嘩は程々になー」

厚切りにしたデビル大蛇の肉をコネクトの魔法で取り寄せたフライパンで焼き塩胡椒を軽く振った

「んじゃ……いただきます……はむ……」

モキュモキュと頬張るとハルトの目はキラキラと輝いた

「うん……砂肝みたいな独特な食感と蛇系ならではの癖があるけど……噛めば噛む程に肉汁が出てくる……蛇肉とあの巨体と動く筋肉から淡白な肉質のイメージだったけど、まさ

かこんな美味しいなんて!! やっぱ見かけによらないな…毒とかちやんと処理したからかな?」

無心で頬張るハルトは、ふと思った

「そだ、フルコースの肉料理にしよ」

決定 肉料理 デビル大蛇（原種）のステーキ

『そんなあつさり!?!』

そして肉を全て食べ終えたハルトは満腹感に満ち溢れていた

「ふう……いやあ食った食った……」

『あの巨体を1人で食べた…だと!』

「まあ猿武や戦いで俺もエネルギー使ったからな…デロウスの土産も用意しないとな
……」

覚えても燃費の悪さを何とかせにやならんとぼやくのであった

『だとしてもよく食べたな』

「ぶつちやけもう一頭くらいは食べれそうなんだよ」

『マジか…』

「大マジ……ん？」

「!!!」

鳴き声のする方向を見るとそこには巨大な鰐のような口をした竜がいた、食べれるか
スキルで調べると

「えーと…アシュラザウルス？　そういやあ爺さんの獲物だよな……つー事は食えるな」

『え？　アレ食えるのかよ!!　完全にファンタジー世界の魔物だぞ!!』

「ファンタジーか……アナザーブレイブはナツキの所行っていないから……んじゃコレで行こうか」

ハルトがスイッチを押すとアナザーギーツと同じ素体に事故にでもあったのか頭の半分が割れているような外見をした…さながら化け猫のようなアナザーライダー

真実の愛を求めて　彷徨う悪猫

『ナーゴ』

アナザーナーゴ　初登場！

「ニャアー！」

『おいおい野郎の猫真似程みつともねえのはない……なあああああああ!!』

『あ、アナザーWが竜巻に攫われた!?!』

『この人でなし!』

「ふう……爺さんの言う通りグルメ界は魔境だぜ……『いや違うだろ!』さて……俺はこつちかな? アシユラザウルスは爺さんに任せよ」

その目の前には巨大な四足歩行のサメ、口は円形にある歯と生来の獰猛さが共存、八王にさえ牙を剥く サメの王

「!!」

王陸鯨 捕獲レベル4450

「蛇の次は鮫か…生まれ初めて食べて食べるなサメの肉は…うーん…フライが良いかな？
いや新鮮なら刺身で…いや…うん…間をとってたたきにしよう」

『どの間だ？その前に一言…あれ…鮫か？』

そしてアナザーナーゴは取り出したバックルをドライバーに装填し起動させる

「サメじゃね？フカヒレぼいのついてるし」

『どんな認識だ！』

『ファンタジー』

その鎧は幻想を現実に変える想像の力を宿す

アナザーナーゴ・ファンタジーアーマー

「投影開始（トレース・オン）!!」

早速、アナザーナーゴは右手を高く上げると同時に大量の刀剣が生成されて上空で待機している。気分はさながら無銘の弓兵だな

「幻想武器一斉射撃!!」

同時に剣の雨を降らせて王陸鯨にダメージを通すも王陸鯨はものともせずアナザーナーゴに噛みつく

ガキーン!!と高い音が鳴るがまるで霞でも食べたかのように手応えがない

「残念だね…今の俺はどこにでもいてどこにもいない陽炎…何てね、ネコならシユレディングアの猫とかの方が良いかな?…ほいつと!」

剣にしていたエネルギーを鉤爪に変えて王陸鯨の体に切り傷を与えるが浅かったよ
うで王陸鯨を怒らせてしまった

「!!!」

「浅いか!!」

「!!!」

本気で怒っているのを見てアナザーナーゴは思案する

「もっと鋭く…早く…こうだ!」

幻想の剣を地面に突き刺すと巨大な虎鋏が現れて王陸鯨を捕らえると

「落ちろ!!」

『ファンタジー ストライク!』

「せいやああああ!!」

想像して創造した巨大なハンマーが王陸鯨の頭に落ちると脳震盪を起こし倒れるのであった

「つしやあ!!」

アナザーナーゴはガッツポーズをして取り敢えず

「よつしや食うゾオ!!」

『おい!この鯨はあの爺さんに渡すんじゃないのか?』

「いやあ…アレ見ろよ」

とアナザーナーゴが指差した先にはノッキング済みのアシユラザウルスと王陸鯨がいる

「終わってるし…俺も腹減ったからさ」

そしてハルトは捕らえた王陸鮫を捌くと…軽く火で炙りたたきにした

「いただきます！」

ポン酢とネギをかけて一口……うむ

「美味い!!…美味い!!」

こりや決まりだな

「この鮫を俺の魚料理にする!!」

決定 魚料理 王陸鮫のたたき（捕獲レベル4450）

「ほおほお…王陸鮫を倒したか」

「うん！そのたたきをフルコースにしたよ」

「そうかそうか…しかしお主の力は変わっておるのお」

「まあね…しかしデビル大蛇と言ひ王陸鮫と良い美味しいものばかりだな」

と感心しているハルトはご満悦に王陸鮫を捌きアナザーウィザードの魔法 コネクトで別場所に保管すると

「よし！どんどん行こう！」

「ちよつと待て今のは…何じゃ？」

「魔法だよ、俺こう見えて魔法使いなんだ…ってな」

「ほほほ！そうかそうか…いやあ長生きはしてみるものじやお、他にもあるのか？」

「あるよ、こんな感じ」

『バインド』

と突如伸びた鎖が背後から襲い掛かるアシユラザウルスを縛り付けると

「相手の動きを止めれるよ」

「ほほお…つと」

次郎は感心しながらノッキングにして動きを止めるのであった

「あんがと爺さん…よし、デロウスの土産はコレにしよう」

と笑いながらハルトはコネクトでノッキングしたアシユラザウルスを仕舞うのであった

「さてと……なあ、さつきから頭に響くんだけど君は誰？」

（ほお、私の声に分かるのですか？）

「そりやまあ聞こえるし」

（失礼、猿と竜の匂いがしたので身構えてましたが、どうやら目的は悪戯じゃないようです。ね貴方は何故ここに？）

「修行、どうしても勝ちたい奴と守りたい人達がいる……暴れたのはごめん……」

（なるほど……まあ良いでしょう、なら私が協力します……）

「え？良いの？」

（ええ背中では暴れられるよりはマシなので……では早速）

気づくとハルトはよく分からない空間に飛ばされていた

「何これ？」

首を傾げているとアナザーデイケイドが淡々と話す

『どうやら、更に時間の流れが乖離した世界に来たようだな』

「ふーん……どれくらい？」

『外界の1秒がここでの1000年くらいだな』

「え？マジ？」

スゲエ！そんな修行の贅沢して良いんですかあ!?!と感動しているが本来ならハルトのように時間攻撃耐性などの加護が無ければ秒で化石となるほどの恐ろしい空間なの

だ

その空間の支配者こそハルトが会話していた声の主 鹿王 スカイディアの力に他ならず

そして訓練相手に当てられるのは鹿王の背に住まう 猛獣の群れ 故奴等は鹿王の加護により時間経過の影響がないまま暴れる事が可能なのである

そこに現れるはアシユラザウルス、デビル大蛇、王陸鯨に止まらず 背に君臨する者達の群れだ

「はははははははははは!!こりゃ良いなあ!!」

『ジオウ』

「こいやあ!!」

そしてハルトvs猛獣たちと言う怒涛のボスラッシュが始まったのである

……余談だが この世界のラスボスと同じ目に遭っているとはハルトは知らない話である

そして猛獣たちを倒したハルトは傷を癒しながらも己に住まう怪人の力がより馴染むのを感じていた

「ふう……しかし怪人の力も奥が深いな……1000年近く経っても俺のような非才な身じゃ……その一旦も掴めそうにないよ」

『どの口が言っている?』

「道に果てなしだな」

（おや? 終わりましたか?）

「ああ! スンゲエ勉強になったよありがとうな!!」

(構いません、猿と竜によろしくと…それと)

「ん？」

(私は鹿王スカイディア、そう呼ばれています貴方は?)

「俺は常葉ハルトの一部だよ、けど一番大事な部分を宿している存在さ」

(そうですか…ならば次は全力の貴方と会う事を楽しみにしていますよ)

「おう！楽しみに待ってな」

そしてハルトが空間から出ると

「おおくおったか若いの」

「爺さんも元気そう…あゝそっか俺が消えて1秒くらいしか経ってないのか」

「ん？ほほお改造された裏のチャンネルに行ったのじゃな…。しかし鹿王、竜王、猿王と関係を築くとはお主、面白い奴じゃな」

「いやあそれ程でもあるかな」

と話していると次郎さんは依頼を完了したので人間界に戻るとのことだったので

「んじゃ爺さん、酒豪諸島に案内してくれないか？」

そしてハルト and デロウスは人間界に入り

「これってブランデーの泉にビールの滝!!しかも牛が酔って突進してきたあ!!?アナザー
剣！」

『剣……タツクル』

「ウエエエエイ!!」

ある時は酒飲みの集う島でブランデーやビールを樽で集め

「へえマンサムさんは研究所の所長なんですネ〜」

「へ?今、ハンサムって言った?」

「言っていないです」

またある時は

「この鍋池って場所の水…本当に出汁だな…この出汁で味噌汁でも作るか…逢魔みたいな空島に生えてた大根とネギも入れてと」

そして

「爺さんの紹介で来たけど…感謝か……」

『お前に一番必要な感情だな』

「ああ…ここでは多くのことが学べそうだ……え？俺って力み過ぎてて本来の技の威力が出てなかったのか……」

色んな場所を旅し出会いを経た

「今はただ食に感謝を……」

そして訓練を終えたハルトは堂々とした態度で

「出来たぜ！コレが俺の人生のフルコースだあ！」

オードブル フライアダックの骨煎餅（捕獲レベル15）

スープ 鍋池の出汁とベジタブルスカイの大根、ネギ入り味噌汁（捕獲レベル不明）

魚料理 王陸鮫のたたき（捕獲レベル4450）

肉料理 デビル大蛇（原種）ステーキ（捕獲レベル5100）

メイン 極楽米（捕獲レベル不明）

サラダ ビービーダンゴムシ（捕獲レベル1750）

デザート ホワイトアップルのコンポート（捕獲レベル1以下）

ドリンク 高級ブランデーの泉（捕獲レベル不明）

「満足！」

『なら良かったが…』

「やつぱり凄い人だったな爺さん」

『ああノツキングマスター次郎、強者と思ってたが…世界最高峰の美食屋の名に偽りなしだな』

「よし決めたぜ、またこの世界に戻ってきてきて爺さんとまた酒を飲む事にする!!逢魔のつ

まみも合わせてな」

『なら死ねないな相棒』

「ああ、俺達の1000年超え特訓の成果を見せてやろうぜ！」

『ああ！』

「!!!」

「よしデロウスも行くぞ！さあ久しぶりの我が家へ!!」

そして魔王の破片は新たな仲間と力を得て帰還した。それは

「ただいま皆ー！」

「おかえりなさいませ、我が魔王」

「ああ皆……1000年ぶりの気がするよ……あ、デロウスここに居る皆は食べちゃダメだよ」

「大袈裟だよ魔王ちゃん……あと本当に食べないでね……」

「ああ……っ！ハルト様コレは!!」

「そう！俺が修行した世界で手に入れたブランデーだよ」

「これが……」

「全部終わったら皆で宴会しようぜ」

「はっ!!」

「それよりカゲンちゃん、アレさやつぱり」

「デロウスだな」

「やはり…しかし記憶のよりは小さいのはお約束じやな」

「しかし魔王様も変わったものが集まりますね」

「そうだな」

ハルトは暖かい目で家臣団を見ていると

「おいハルト坊、取り敢えず妾達を変人扱いするでない」

「安心しろ、既にお前等は変人だ」

「何て嬉しくない褒め言葉!!」

家臣団と話した後はキャロル達の元へ向かうも

「見ろハルト!!コレがオレとエルフナイン、そして布教したサンジェルマン達と共同製作した錬金術の結晶!その名もガツチャードライバーとケミーカードだあ!」

「そして勢いで完成させたアナザーギーツ専用デバイスです!!」

深夜テンションのキャロル達に懐かしさを感じるが彼女とエルフナインから受け取ったデバイスとケミーカードには

アナザーギーツ、バッファ、タイクーン、ナーゴ、パンクジャック、ロボ、ケイロウの顔が刻まれたカードとなる

「さて…行くぞ」

その時 止まっていたゲームのカウントダウンがスタートしたのであった。

アナザーギーツ VS クロスギーツ 前編

ゲーム最終日

ハルト陣営もフリーガンも固唾を飲み込み開戦を待っている中

謎のハルトは

「……………」

デロウスの背中で食に没頭していた

「我が魔王、何してるのです?」

ウオズが引いている中、ハルトは己のフルコースデザート ホワイトアップルのコンポートを食べ終わると「ふう」と息を吐き

「ご馳走様でした……ん？何って食没」

キョトンとした顔で答えると

「あの…何聞いているの？みたいなリアクションを取られても困ります」

「まあアレだ戦い前の腹拵えだな…よし最後はドリンクだ」

「それならそうと仰ってください…って！決戦前にブランデー飲む人がいますか!!…しかも樽ごとー！」

「高級ブランデーだ間違えるなウオズ……よいしょ…食没と食技を覚えた今の俺ならカゲンと飲み比べても勝てるぞ……ん」

ゴギユン！と恐ろしい音と共にブランデーの入った樽は凹んで壊れたのであった

「ふう……いやあ！美味しい!!」

「本当に飲みましたか…はあ…何といえますか本当に人間やめてますね」

「良いじゃねえの別に」

「まあ我が魔王がそれで良いのなら」

元から人間への拘りなんて希薄な人だったからとボヤクウオズだったが足元にいるデロウスは腹減った！とばかりに吠える

「!!」

「おう、デロウスにも後で用意してやるから待ってるよ」

「!!」

デロウスの喜色に満ちた声にハルトは機嫌を良くするとウオズを見て一言

「しかしウオズ、お前以外とビビりなんだな」

「何の事でしょう」

「護衛はいらないって言ったのに無理強いするし、単純に飯食べてるだけなのにさ」

「いつフリーガンや黒ハルトが仕掛けるか分かりませんからね警戒はするに越した事は
ありませんよ」

「ジャンヌがいるから安心しろって」

「え？」

すると虚空から現れたジャンヌ・オルタは溜息を吐くと鎧を鳴らしながらハルトの隣に座るのであった

「全く気づいてなかったの？これがアサシンだったらマスターは暗殺されてたわね」

「そう言うなよ緊張してるんだろウオズ？」

「ええ我が魔王の破片を撃退し取り込んだ敵…今までの敵とは一味違いますから」

「まあな…今までで四番目に強い敵だろうな」

「因みに上から3つをお伺いしても？」

「上からオーマジオウ、デイケイド、師匠だ」

「あら？アンタの嫁さんは入らないのかしら？あの戦闘力なら上の方に入るでしょうに」

「え？キャロル達は敵じゃないよ？」

「そつ……あいつ等が裏切るとか考えないのね」

「考えないよ……まあキャロル達なら裏切られても許せる、何なら1人は俺を殺しても良いから」

「ふーん……元が復讐心に取り憑かれた男とは思えない発言ね彼女達に絆されたのかしら？」

「だね……まあ対象への憎悪は変わらないけどな」

「なら良いわ……このステーキ美味しいわね……何処の肉よ」

「ああ、それはな牛豚鳥って全部の肉を味わえるってのが売りの獣だなんて人がおやつに残したの食べるなよ」

「へえ…不思議な生き物もいるのね」

「聞けつて…つたく」

「しかしタイムリミットが近いのに何故仕掛けないのでしょうか？」

「うーん…同じ俺なら飯食ってる時は仕掛けねえよ…食べない辛さと空腹の地獄は同じように体験してるだろうから」

同じ経験をしているなら食べることの有り難みを理解している

笑うハルトは

「よしデロウス、ピースメーカーに頼むな」

「!!!」

そしてピースメーカーへと飛翔するのであった

—————

ピースメーカー艦内でハルトは仲間に笑いながら手を振り

「んじゃ行くよ」

「ああ、さっさと終わらせて帰ってこい…それと終わったら貴様のフルコースを食べさせろ」

代表してキャロルがハルトの背中を押すのであった。

「おう！楽しみにしてな」

「ハルト」

「何、銀狼？」

「気をつけて…それと頼まれてたもの見つけた」

「つしや！じゃあハウンド頼んだよ迎えに行ってくれ」

「お任せを陛下」

「それと銀狼」

「何？」

「ありがとう」

「当然、それと終わったら私にもライダーの力貰えないかな？」

「え？」

「その私以外は持つてて…その…私にも…何というか…皆指輪みたいに持つてて…」

「ああ終わったら俺のスペシャルメニューと一緒に銀狼に合うのをプレゼントしちゃう」

「なら死なないでよ約束」

「大丈夫大丈夫、だって俺達最強だから…んじゃ行つてきまーす」

そう言うとデロウスに乗り目的地へと飛翔するのであった

—————

場所は先日、力と知恵が敗れた街である

「おーい！お待たせつと」

「別に待っちゃいねえよ…しかし」

黒ハルトは苦い顔をしてデロウスを見た

「お前まさか竜王の系譜を仲間にしたのかよ」

「まあね、それに彼処で勉強して分かったよ…お前あの寺で食技と食没まで覚えてるだろ」

「まあ彼処まで行ったなら流石に分かるか」

「不思議だったんだよ、知恵の怪人軍団相手に消耗したけどアレは精神的な部分だけだろ？技や体術のキレまでは死んでなかったかな」

「まあ正解だなお前の分身が物量戦でごり押しして来ると思ってたが、まさかジャマ神と闘う羽目になったのは予想外だったよ」

「そうかいそうかい……さて最初に提案した勝負のルールに相違はないな」

「ああ、お前が勝てば知恵、力、センス全部返してやる、俺が勝ったら取り込むがな」

「そっかい……なら始めようか」

謎ハルトは軽くノビをするとクラウチングスタートの構えを取るのを見て

「何だソレは、かけっこ勝負でも決めようってか？」

小馬鹿にするように笑う黒ハルトに謎ハルトは顔を隠れているからか笑みを浮かべる

「いや違うよ……あの100倍の重力と時間加速空間から解放されてからイマイチ体の手加減が難しくくてさ……位置について……よーい！」

「100倍の重力と時間加速空間？……っ！お前まさかあのや「ドン！」っ！」

それと同時に文字通り瞬間移動した謎ハルトは八極拳のような構を取ると黒ハルトの腹目掛けて思い切り殴りつけた

あの世界で出会った老人 ノックングマスター次郎から教わった拳打を受けてみる

「インパクトノッキング!!」

「っ!!」

辛うじて攻撃を両手を交差して受け止めるが猿武の力で細胞全てが攻撃に転じた一撃は廃ビルを何棟も貫き最後は電信柱にぶつかり柱は折れるが黒ハルトは五体満足である

「んー……骨は逝ってないけど少し体が痺れてるな……しかしマジかよ弱体化させたのに、あの山で猿と鹿の空間で遊んだって？笑わせんなよ……ん？インパクトノッキングって……まさか……っ！」

黒ハルトはドライバーとバツクルを構えた先にはビルに開けた穴から見える先には

「この化け物め」

「あははははは！スゲエなあ！今ので倒れないか!!」

見るからにテンションが高くハイになっている謎ハルト、己の特訓成果がきちんと身を結んだことへの歓喜である

「こちとら頑丈さには自信があんでな」

「そつかそつか…けど残念だなあ今ので全身ノッキングさせるつもりだったのに」

「天与呪縛舐めんな、それに今の俺はお前の全ての力を持っている絞りカスのお前なんぞに「違うんだなあコレが」っ！」

「俺が絞りカス？残念大外れなんだよ」

今まで分からなかったのだ

戦闘力の力のハルト

ライダーやオタク知識の知恵のハルト

芸術や美的センスに長けた センスのハルト

今まで見てきたハルトの力全てを分解した、ならば目の前に立っているコイツは誰だ？

「誰なんだよ……お前は？」

「俺はな…強いて言うなら愛のハルトかな」

「はっ？」

「ライダー達への敬愛、妻達への恋愛、仲間達への親愛…全てが俺を強くしてくれる…！人だじや至れなかつたから…だから知恵は俺を残したんだ、俺だけが他の俺と違って上限なく成長して強くなれる可能性があつたから」

愛のハルトは腰にアナザージオウの黒ドライバーをつけるとテンションが昂つたま
ま話す

「お前の敗因は真つ先に俺を倒そうとしなかつたこととゲームに時間制限以外に異世界渡航を禁止にしなかつたことだ猿武も食技も覚えさせなければ良かったのにな！」

その言葉に黒ハルトはイラツときながらも懐からデザイアドライバーを取り付けた

「敗因？勝負はコレからだろう？ライダーならコレで決めようや」

取り出した黒いマークⅩバツクルを見て

「そうか？そうだなあ…そうかもなあ！」

謎ハルトはアナザーギーツのウォッチを取り出すと2人は互いのアイテムを起動した

『BLACK OUT』

『ギーツ』

アナザーギーツはウォズが見つけた白いブーストバックルとキャロル達が開発した新型バックルを装填、そして渡されたブランドケミーカード目掛けて

アナザーギーツ、タイクーン、バッファ、ナーゴ、パンクジャック、ロボ、ケイロウの7人がカードと一体化した

「変身!!」

『クロスギーツ』

そしてアナザーギーツの周りにアナザーライダー 達が一つに集まり合体する
体にはアナザーグランドジオウのようにそれぞれのライダーの歪んだクレストが刻
まれた姿

1人で強いクロスギーツとは違う

1人ではないも出来ないからこそ誰かと手を取り合う事を選んだ姿

アナザーライダーの象徴がアナザーグランドジオウなら、これは常葉ハルトという
人の男がこれまでとこれからの旅と得てきたものの結晶

天上天下唯我独尊を行くアナザーオーマジオウとは違う

和を持って尊しとなすを行くハルトの力

『ギーツ・ワンネス』

「アナザーギーツ・ワンネス……1人では至れなかつた王としての力、とくと見るが良
い」

「ああ、その負け様覚えてやるよ」

とクロスギーツは両手に剣を持ち、自前の戦闘能力と3人のハルトを取り込み強化された力で肉薄する、それは黒ハルト史上最大最高の加速と一撃である

しかしアナザーギーツワンネスはそのまま飛び上がり回避する本来なら物理法則に従い落下するが

『ケイロウ…アームドプロペラ』

ケイロウの力を使いプロペラでホバリングすると拳を前に突き出しに合わせてパンクジャックのクレストが光る

「これはセンスの分!!」

『パンクジャック…モンスター!』

同時に拳が某ゴム人間もかくやの伸縮でクロスギーツを殴り飛ばした、そこにダメ押しとばかりにアナザーロボのクレストが光り

『ロボ…ブースト!』

文字通り最速になったアナザーワンネスはクロスギーツの背後に周り回転蹴りを叩き込んだ

「さて…と本気で来な、まだ2人分御礼参りが済んでねえからよ」

「この野郎…」

魔王 v s 神殺し f i n a l r o u n d 開始

アナザーギーツ VS クロスギーツ 中編

「来いよあと2人…いや逢魔全員の怒りも叩き込んでやるからヨオ」

挑発するように手を振るアナザーワックスに対して

「少し修行して強くなったくらいで浮かれるな!!」

とクロスギーツが叫ぶとクラックが開き其処から下級のインベス、そして鏡の中からミラーモンスターが現れたのであった

「へえ…知恵の力か」

怪人生成、使役の力

「ああ今の俺なら怪人を使役する事なんざ造作もねえ!!」

その声を合図に怪人軍団がアナザーワンスに襲い掛かる、4分の1しかない俺の命令権より半分以上宿してる奴の方が命令権は上にあるから指示聞かねえな…幸いライダーと契約してる連中はこっち側だけだな

「はあ……悪りい、連中の相手はお前達に任せるわ」

「!!」

そう呟き飛び上がると突如 放たれた光線が怪人達に命中、そのまま建物や障害物まで貫通し遂には成層圏の先にある人工衛星まで破壊した

余談だが、この一撃により宇宙に眠る第六の精霊が目を覚まし 歴史が変わるのは誰も知らない話

その犯人はハルトの新しい仲間

嘗て牙一本でこの世の王となった竜の末裔

親を並び超える、意味を込めて名付けられた

「!!!!」

竜王の子　ゲロウス参戦

「だけどまだいるんだよお！」

「こつちにもな」

そしてその背に乗るのはもう一人、シアゴーストや下級インベスがアナザーワンネスに襲い掛かるも足元から伸びた鉄杭が貫通、そのまま流された炎により爆散したのであった

「ナイス、オルタ」

「全く漸く私の出番ね…やつと暴れられるわ」

「ああ止めねえから思い切りやれ」

「素敵な命令ありがとう、マスター」

それは知恵のハルトが残した遺産、英霊を呼ぶ札により現界した復讐の聖女

「ジャンヌ・オルタだど!!アイツめ余計な真似を!」

クロスギーツの驚きを他所に襲い掛かる怪人であるが

「あら、それで良いのかしら?今際の際の言葉が!!」

ジャンヌ・オルタが放つ幻想のその炎に焼き払われるのであった

「私に任せてさっさと本命を潰しなさい！こいつ等は私が灰にしてやるわ！」

「……頼んだオルタ！」

「任せなさいマスター……この私が……竜の魔女が全てを焼き尽くしてあげるから、見なさい！！」

それでも懲りずに攻撃を行い怪人軍団に全力の炎を叩き込むとジャンヌ・オルタはドヤ顔で

「強撃（バスター）で殴る！これが最強に頭の良い戦法よ！！」

—————

その言葉を聞いたウオズ達は理解した

ああ、同類（脳筋）なら呼ばれるわと

「ああ…そりや魔王ちゃんと相性良いよね」

「うむ！バッチリだ」

「これが聖杯の導き…凄いです!!」

「いや感心しとる場合か御主達!? 妾達の王は完全に脳筋と聖杯に認知されとるという事じゃぞ!!」

基本 英霊由来の聖遺物を持たないで召喚した場合、本人と相性の良い英霊が召喚される

つまりハルトとジャンヌ・オルタは根っこが似た者同士という事であったのだ

そう戦闘の基本がゴリ押し of 脳筋だと

そして戦いを見ていたセイバーオルタも

「やはり猪女か……向こうのマスターも似た気質のようだが戦場を駆けるならあれくらい勇ましくなければな……む、マスターよ追加だ次はフライドチキンを頼む」

「え!?!もう食べ終わったの!!」

「ああ……さて腹拵えも済んだ私達も出陣するぞマスター……バイクを出せ!」

「え? ちよつ! セイバー!?!」

「飛ばすから酔うなよマスター」

「ご、ご主人様 (マスター) ……ナツキさん……まさか女性に対してそんな劣情を「誤解だ

からエルフナイン！これは彼女と俺の雇用関係的な意味だから！」そうだマドカさん！
そう言えば一夏さん達が学祭でメイド喫茶をやると聞きましたか!!」

「ああ…成る程待っている直ぐに取り寄せる」

「お願いします！なら私達はメイド服で対抗です!!」

「む？メイドか…良いだろう受けて立つ！」

「いや凄いい見たいけどこの場な言わないで！キャロルと千冬さんが凄いい目で見ているから!!…ってセイバーも張り合うなあ!!」

引き摺られるナツキを見送った面々はポツリと

「さてお前達、感心してないで行きますよ」

「何処に？……まさか！」

「ウオズ正気か！あの現場に向かうのか！」

「辞めた方が良いですよ！魔王様の邪魔になりますけど…けどここで日和るようじゃ四天王失格ですね…ああ…最弱先輩コンビはここで指咥えて眺めてたらどうです？」

「誰が最弱だフィーニス（ちゃん）！」

「はあ…違うのだろう、のおウオズ」

「ええ、このふざけたゲームを考案した連中…フリーガンを叩き潰しますよ」

「え？場所分かったの？」

「ええ既にジャマト側とデザグラ運営の精鋭部隊で包囲しているとの情報がありました」

「精鋭部隊？」

「名前負けしなければ良いがな」

「それはないかと…聞いた話ではチエーンアレイのみでライダーバトルを勝ち抜いたゴリラやサポーターへギガントを誤射したネズミにトリガーハッピーなパンダ、クイズを出し続けるスズメ、スピード狂いのオオカミとメンタルが病んでる闇の剣士とジャマトの我が魔王がいると」

「え？何それ怖い」

「何とまあ奇天烈な連中をそこまで集めたのお」

「メンタルが病んでるハルト様が可愛く見える悪夢のオールスターだ」

「何て恐ろしいアッセンブル…」

「あら面白そうな話をしてるわね」

「テストタロツサ嬢？」

「ウオズ…私達は私達で動くけど構わないかしら？」

「勿論です…ああそれと我が魔王から伝言が」

「ハルト様から？」

「何々々？」「む？」

「派手にやれと」

「望むところですよ」

「ねえウオズ、私も出る」

「銀狼嬢？いやしかし貴女には」

「大丈夫」

と銀狼は以前使用したジャパニーズウルフゼツメライズキーを見せるがウオズは難色を示す、彼女のゼツメライザーは使用不能なのにと

「しかし…」

「心配するな…束」

「はいさー！銀ちゃんにプレゼントフォーユー！」

と銀狼に渡したのは銃型ツール ショットライザーであった

「これ…」

「前に大量に確保した、アバドンのライザーを改造したんだ。量産型だけど性能は東さんのお墨付きだよ!!」

「当然ナノマシンの影響はない……まあ本来なら脳にチップの移植が必要だが、そこは安心しろアークが代理演算してやる」

「2人とも……」

「だが一つ警告する……あのバカ夫の真似をしてキーを力ずくでこじ開けるな、アレが出来るのはゴリラだけだ」

「当然でしょ」

とだけ言う。銀狼はショットライザーを手にテスタロッサ達と転移したのであった。

「良いのキャロりん、私達も出なくて?」

「オレ達は後だ銀狼は因縁の相手がいる御礼参りくらいはさせないとな」

—————

「さて…俺から奪った手品は終わり？なら残念だな俺より使いこなせてない訳だな」

「っ…この野郎!!」

力のハルトが持つ身体能力を上乗せて体を捻り放つのはレイジングソードの一撃はアナザーワンネスの首を跳ね飛ばす事に成功した

かに見えた…だが剣の一撃はまるで霞を切るように通過したのである

「これなら！」

「残念、空振り」

『ナーゴ……ファンタジー』

「俺は何処にもいて何処にもいないシユレディングアの猫ってね、確率に完全な0はないから俺には当たらない」

「のやろう!!」

「っ遅い……捕まえた!」

更にクロスギーツは黒いQB9で射撃攻撃するがアナザーワンネスが呼び出した巨大なゾンビの手により防がれるものの、その衝撃は体に響いたがアナザーワンネスはそれが嫌だったので猿武で受け流す

『バッファ……ゾンビ』

「これは……………力の分だぁ!!」

その足元には猿武で流した衝撃で地割れを起こし、そのゾンビの手で相手を掴むとビルまで投げ飛ばした先にあるものを見てアナザーワンネスは笑う

「お、避雷針めつけ…よし頭を使おうか知恵の分」

『ナーゴ…ビート』

ビートアックスを呼び出すとアナザーワンネスはそのままギターを掻き鳴らした

「イエエエエイ!! 音撃斬! 雷電激震!!」

『メタルサンダー!!』

『それは音撃と違うぞ相棒!?!』

『何かカプリコーンと轟鬼が混ざったな』

そんなツツコミも虚しく奏でられた演奏と雷撃は壊れた避雷針に直撃、そのエネルギーは建物を伝いクロスギーツに命中するのであった

「グアアアアアアア！」

「やっとダメージか……ここで畳み掛ける」

『タイクーン……ニンジャ』

「分身の術！」

印を結びアナザーワンネスが7人に分裂するとそれぞれがマグナムシューター、ゾンビブレイカー、ニンジャデユアラ、ビートアックス、プロペラとブーストバツクル型エネルギー、巨大な拳を構える

そしてマグナムシューターを持った個体がワンネスバツクルを強く叩いたのである

『ワンネス・ビクトリー!!』

「「「「「セイヤアアアア!!」」」」」

最初はマグナムシューターの射撃から始まりビートアックスの雷がエネルギー型プロペラと合体し回転刃となり襲う

ゾンビブレイカーで帯びた毒の斬撃をニンジャデュアラーと合わせて放ち、ブーストの炎で強化したモンスターの拳を一斉にぶつけたのである

全員の同時攻撃は流石のクロスギーツでも受け流す事は出来ずに爆散した

「っー!」

変身解除して倒れるクロスギーツの喉元にブジンソードの刀を添える

「チエックメイトだ黒狐」

「っ!!」

—————

その頃

「っ!そんなハルトが…」

「あら…コレは予想外ね」

クロスギーツの敗戦を悟ったヴェルザードとカフカが遠くから戦いを眺めていた

「行かないきゃ!」

ヴェルザードが飛び出そうとする中、その頭上から巨大なブラックホールが放たれた回避したが周囲の建物を全て破壊した

「見つけたぞ白氷竜」

「リベンジマッチ」

「安心なさいな今度は撤退なんて無粋な真似はしませんわ……まあする気もありませんけど」

「悪魔が私の邪魔をしないで!!」

三人娘 v s ヴェルザード

そして

「見つけたカフカ」

「久しぶりね銀狼」

無言でカフカにショットライザーを向けると

「あら、どうしたのかしら？」

「どうしたもこうしたもない…君のせいで…私のせいでハルトが傷ついた」

「それは此方の台詞でもあるわね…今貴女のハルトの所為で私のハルトが傷ついたわ」

「昔の仲間と言いながら銃を向けた」

「あら？私達が組んでた時と必要ならしてたじゃない…随分と腑抜けたわね」

「逢魔じゃ攻撃しない仲間殺しは大罪」

「クローン兵が日常的に魔王を攻撃してるけど？」

「アレは訓練だからノーカウント…それにハルトは殺しても死ぬような奴じゃないから大丈夫」

「それはそれでどうなのかしら？けど私に勝てると思ってる？実力差は知ってるわよね？」

「勿論…けど借りを返しにきた」

「蛮勇ね前の貴女なら絶対しなかったわ」

「だね…けど私もハルトの」

未だに自分に専用ほライダーシステムを託されないのは嘗て敵対していたからか自分が他の面々よりも新参故に愛されていないのかと思っていた事もあった、それが不安

になり錫音とキャロルに相談したら彼女は笑いながら

【大丈夫大丈夫、ハルトは好きって言ってくれた子の気持ちは絶対に裏切らないよ何せ女の子一人を助ける為に世界と戦う事さえ躊躇わないイカれた大馬鹿野郎だからね、キャロル?】

【ああ安心しろ、あのバカはオレを含め何処かイカれてる女にしか惚れないからな】

【ねえキャロル…その理論だと私達含めて他3名もイカれてるんだけど?】

【元復讐鬼（錫音）、剣術馬鹿（千冬）、天災（東）、バトルジャンキー（アンティリーネ）…この中にマトモな奴がいるか?】

【……いないね】

【だから安心しろ銀狼、あのバカ夫が惚れてるって事はお前も】

「私も魔王の花嫁だから、これくらいイカれてないと務まらない！」

「ネジが外れてないとダメだ、今の狼のままではいられないならば過去を越えて挑むだけ」

「この間の貸しと過去を越える為にも貴女をぶつ潰す！」

「シヨットライザーをドライバーに装填して銀狼はゼツメライズキーを起動、それはI S世界のアークトリンクし人間仕様へとデータ変換された」

『JAPANESE WOLF!』

銀狼はそのままシヨットライザーにキーを装填しロック解除したキーを開く

『KAMEN (WARNNIG) RIDER KAMEN (WARNNIG) RIDER
!』

本来なら禁じられた手を躊躇いなく解放し銃口をカフカに向けて放つ

「変身!!」

『SHOT RISE』

現れたのは機械仕掛けの双頭の狼、銀狼へと駆け寄ると装甲に変異して合体する

その濃淡別れる青の鎧は本来の歴史において

同じ狼を宿す異なる者同士が共通の目的の為に力を合わせたからに他ならない

原典よりも小柄だが凛と立つその戦士の名は

『オルトロスバルカン!!』

『Awakening the instinct of two beasts 1』

O n g l o s t

負の連鎖を砕き未来をこじ開けた双頭狼

仮面ライダーオルトロスバルカン

「あらあら随分派手になっちゃって」

「ゲーム開始」

オルトロスバルカンはビームエクイッパーでアタツシユシヨットガンを複製しカフカへと発砲したのであった

アナザーギーツ VS クロスギーツ 後編

さて前回 無事にこっちの戦いは決着となりアナザーワンネスは刀を喉元に添え尋ねる

「んで結局何で俺を狙った？」

「何だよ話せば見逃してくれんのか？」

「その場合でも時間切れで終わりだろう？ならお前の戦う理由くらいは聞いたときたくてな」

実際、創世の力を狙うのならゲームなんかにせずフリーガンの支援も受けずに1人で闇討ちをすれば良かったのにしなかった

態々フリーガンを楽しませる為にゲームにしたのがコイツの敗因にもなる……まあ結果論だが

「もつと複雑なルール設定にすりやマシだったろうにさ俺の単純脳みそなら思いつかない抜け穴用意しておくのかな」

「……………」

『いや単純に考える頭がないのでは？』

『まあ並行世界とは言えハルトだしな……脳筋だし複雑な事を……っん？ちよつと待て！何でリボルキャリアがここにーう……うわああああ……』

『あ、アナザーWが跳ねられた』

『この人で無し!!』

「悪いな俺は人間じゃねえよ……ああ」

黙りするのは俺達の報復を恐れてんのか……そこまでして守りたい存在か？

「そんなに其奴等が大事なのか？」

「っお前に何が分かる！王になって全部を持ったお前に……世界を書き換える力なんて持ってる奴に!!」

「その便利パワーを使ったのなんて、それこそ最初の頃だけだけだな」

具体的にはシンフォギア世界で戸籍改竄と密入国に使ったくらいしか覚えてねえ

「だから力を奪って思い通りにしようってか？」

「っ！俺は……」

と話していると何か肌寒くなり何かが止まった気がした……まさか！と視線を向けるとそこには先日 三人娘と単騎で渡り合った奴ではないか！つまり

「おいおいテストアロツサ達が負けたのか？」

と慌てて身構える中、飛んできたのは白髪で雪のような肌をした美少女だ

「ハルトは殺させないわ！」

臨戦態勢の彼女にハルトは苦い顔をして

「ボスラツシュか？」

「ハルト様」

「あ、モスどしたの？」

「実は…」

困り顔をしているとテストタロツサ達の戦いを見ていた腹心　モスが報告に現れた

曰く　気づくと消えていた…転移や魔法ではないらしい

「モス、良く報告してくれたなありがとう…んじゃ後は俺「私達にお任せを」につて早っ
！」

そこには準備万全のテストタロツサ、カレラ、ウルティマがいるではないか

「いつの間に！」

「ふふふ…私達も転移魔法位は使えますわ」

「スゲエ…流石はテストタロツサ達だな…つかウオズと四天王は？アイツ等何してんだ
？」

「さあ？」（今フリーガンの拠点にカチコミ中）

「そつ」（ああ〜見られてるから念話な訳ね了解）

ウルティマからの念話で大凡理解を示すとテストアロツサは冷静に

「ええ、ではハルト様は其方を「ちよつと待て！」あら？」

黒ハルトはボロボロの体で立ち上がるとバックルを構え直す

「彼女に手を出すなら俺を殺してからにしろ」

その覚悟を見たハルトは取り敢えず真顔で一言

「んじゃそうするわ」

貫手で心臓を躊躇いなく狙おうとした　その時

「ちよつと待つて————！」

バイクのエンジン音と共にナツキとセイバーオルタが現れたではないか、鮮やかな着地とドリフトを決めた彼女はすぐに鎧を纏うと

「おい何伸びている起きろマスター！戦いだ！」

「ぜえ……ぜえ……ちよ……ちよつと待つて……乗り物酔いがひどくて……」

見ればナツキが顔を青くしふらふらであるがセイバーオルタはケロツとしている、こいつ……

「お前さアナザーライダーにして仮面ライダーが何乗り物酔いしてんだよ……それフグが

自分の毒に苦しむようなもんだぞ?」

「いや…マジで…ごめん」

「本当自分本位なサーヴァントを引き当てて可哀想ねえ、そっちのマスターは」

「私のマスターは繊細なのだ、それに自分本位なサーヴァントがサーヴァントならマスターもマスターのようだな脳筋と言ったか? 力押しばかりで芸のない奴だ」

「は?」「あ?」

「……………」

「焼き尽くしてあげるわ」

「貴様こそ聖剣の錆にしてくれる」

「せ、セイバーオルタ…辞めて」

「オルタも止せ、それとデロウスもビビりながらビームを撃つためにチャージしなくて良いぞ」

ジャンヌとセイバーオルタが急にバチバチと火花を散らすのをやれやれと被りを振り向き直る

「まったく……闘争の空気じゃないな」

「違うない」

「それでテメエの狙いは…ん？おお来たかナイスタイミング」

突如聞こえた馴染みある音にハルトが目線を向けるとそこには親衛隊のガンシップが数機、着地するとハウンドと親衛隊が現れた…沢山の子供をつれてだ

「嘘…」

「お前たち！何で此処に…」

「そのピンク色の兵隊さんが助けてくれたんだよ」

「ピンクじゃないマゼンタだ!!」

「異口同音!?黒ハルトはボロボロになってもツツコミしたぞ!!」

「いやあ並行世界でも陛下は陛下だな」

「軽口を叩くなルーキー…お待たせしました陛下、ハウンド以下親衛隊任務完了です」

「ご苦労、被害は？」

「軽傷数名です見張りのチンピラ風情に遅れをとる我々ではありませんよ」

「流石だな本当、お前達を切り捨てようとした奴の気が知れん」

「自分も同感です…それに銀狼の嬢ちゃんが良い仕事をしてくれましたよ警備システムを潰したりなどの確に支援してくれましたからね」

「流石だな銀狼の奴…本当に皆は頼りになるな」

ハルトが修行前に銀狼に頼んでいたのは黒ハルトが世界で何をしていたのか調べてもらったのだ

そしたら予想通りというか何というか

「しかし孤児院の子供を助ける為に神様になろうか…見上げた根性してるな」

そう我等がアナザーW（検索エンジン）の調査により判明した

クロスギーツこと黒ハルトは自分がお世話になった孤児院の為に天与呪縛の体を活かして地下格闘技界で暴れていたらしい：ファイトマネーを寄付していたと

何処の虎マスクと言いたいが、そんな日の中でバールクスがやらかした情報リークとフリーガンの接触が運命を変えたらしい

結果としてクロスギーツになった黒ハルトは

俺を倒して神の力を使い世界を変えようとしたと

自分が守るもの達の幸せの為に

だがフリーガンに孤児院の子供を人質に取られてしまったから嫌々、催しに付き合っていたとの事

「はあ……おい俺から奪った力、知恵、センスを返しな、そしたら一回だけお前の望む世

界に書き換えてやる」

「っ!!」

「陛下!?!」

「ハルト! そんな事して良いのかよ」

「ま、実際コイツのお陰で新たな仲間にも出会えたし力を得た…それに俺が慢心してた事も分かったからな」

見上げると嬉しそうなデロウスとセイバーオルタとバチバチと火花を散らすジャンヌ・オルタがいた

「それに戦う理由を知った今となつてはコイツを単純な悪とは見れねえ…つかパールクス
スの俺が悪い」

そうヘラヘラ笑うハルトであったが割と思う所はある、コイツもコイツで守るもののために戦おうとしていた事を、俺にはできない勇気を振り絞り挑んだ事への敬意を表して…そして

「しっかし純粋なライダーバトルと思ってたら人質使つて脅してたとかシケタ真似しやがつて…なあ見てんだろフリーガン、テメエ等のやった卑劣な行為の報いは必ず受けさせるどの時代、どの世界にいてもだ見つけ出して必ず落とすし前をつける」

この時、ハルトは宣戦布告をカメラ越しの安全圏で騒ぎ立てる悪辣者に告げた

「これは警告じゃない……………確定事項だ」

それと同時にフリーガンの拠点にしていた施設の一部が爆破された

—————

同時刻

大きな爆破で揺れる施設、そして魔王の逆鱗に触れ死刑宣告を受けたフリーガン達は慌てふためいている未来へ逃げようとするもの狼狽するものなど多様な反応だが

爆煙の中から現れたのは…

「オラオラア！悪い子しかいねえなあ！」

「お前達はお仕置きデース!!」

「ハイヤー！」

「ダー！やつと暴れるなあ…あのネズ公…覚えてろよ!!」

「行くでザンスよ、カー！」

「僕ちゃんも暴れるブーン！」

古の大戦 デザイアロワイアルを勝ち残り神となった者達 しかしながら彼等の願いは終わらぬ闘争 その為 運営に鉄火場にいる権利を与えられた戦闘狂集団 デザグラ運営の最終兵器

テスター軍団 攻撃開始

「テスター軍団だあ！逃げろお!!」

「おっと逃がさないんだナ、お前達はソラスプライム係長から預かったハンマーバックルで餅になるんだな!!」

「ぐぎやああああ!」

そして

「苗を盗んだのはテメエ等かあ！利子含んで取り立ての時間だぜえ!!」

『FEVER KNIGHT!』

「最速で終わらせる！」

「ああ…テスター軍団と鉢合わせたら…その前に終わらせるぞ！」

「ええ巻き添えは勘弁願いたいですね…おや？」

「ねえハルトを傷つけたのは君達かなあ？」

「せ、先輩！久しぶりの出番ツスけど目、目が笑ってないっす！ハイライトはどこ行ったんっすか!!」

「あはは…みーんな…切ろう」

『読後一閃!!』

「」「ぎゃあああああ！」「」「」

「ふふふ……あははははは！」

「せ、先輩——！」

完全にヤンデレ化したあかねカリバーを見て大智は顔を青くしながら

「彼方の巻き添えにもならないように気をつけましょう」

「意義なし」

ジャマトチーム参戦!!

またある所では

「ははははは！貴様等を引き摺り回してやろうか!!」

『1号』

「さあ豚のような悲鳴を上げろ」

『変身！ W A K E U P！』

「さあ我が魔王への許しを得た所で行きますよ！」

『アナザー…ファイナリー』

「う、うわあ…何てオーバーキル…カゲンちゃんどうす「行くぞお前達！手柄のかき入れ時だあ!!」って先陣切ってるう!?!」

ウオズ+四天王参戦

—————

その報告を聞いたハルトは機嫌良く、これで良しと落ち着くと

「これで良し」

「お前…」

「さーてと、返してもらおうぜ俺の力」

とハルトが手を伸ばすと中から赤、黄、青の光が抜け出た、それはハルト自身の破片である

そしてその力がハルトに取り込まれるとハルトの左手にアナザーグランドジオウウオツチが現れたのである

「完全復活だな【ヤハ！】【ええ】【イエー！】…ええ？」

何故かハルトの頭に響くアナザーライダー以外の声…ええ？

「なーんで消えないのさ」

【恐らく我々が合体するには何かしらの儀式を行う必要があるのでは？】

「例えば？」

【フリーガンを潰すとか？】

「ちよつと用事を思い出した、行ってくるよデロウス!!」

ハルトが背に乗ると黒ハルトが声をかける

「俺も行くよ連中には御礼参りしないとな、ヴェルザードは子供達を頼む」

「仕方ないわね気をつけなさい」

「あとカフカを止めてくれ」

「銀狼も居ると思うからよろしく」

「任せなさい」

そしてガンシップに乗り込み発進するトルーパー達を率いるかのようにハルトは告げる

「さあ行くぞお前達、そして連中に教えてやれ俺達が何者で誰に喧嘩を売ったのかを！」

「凄い覇気だな、このリーダーのためなら死ねるな…なあこれも洗脳か？」

「これこそが陛下のあるべき姿だ」

そしてハルトはデロウスの背から号令を出した

「さあ出動だ!!」

殴り込みフリーガン！前編

ハルトが手勢を率いてフリーガンの拠点に殴りに行く同時刻

フリーガン拠点はすでに地獄と化していた

「ダナア！」「デース！」「撃つべし！」

彼等のバツクルはデザ神特権で強化されている

例えばスターチのマグナムシューターはライフフルモードで城ジャマトに痛打を与えられるし、他のバツクルも小型ながら大型に引けを取らないレベルで強化されており、撃の威力が向上しているのもあるが単純な警備員程度では止める事など不可能である

それに加え、ジャマト側にも敵視されている四面楚歌　この状況にフリーガンのリー

ダーは通信端末を使い協力者に連絡を取った

「ちよつと!運営どころかジャマト側にも狙われてるんだけど、どう言う事よ!」

『どうやら苗を盗んだのが君達とバレたみたいだね』

「はあ!?!アンタが盗むから問題ないって言うから依頼したのよ!」

『世の中に完全はないさ、それに君達も僕に報酬を渡さなかったじゃないか?これでおあいこだよ』

「ふざけないで!!私は神の力でこの世界を好きにしたいのわ!玩具が持ち主に噛みつくなあ!!」

『その言葉…後で後悔するよ?ああそれと僕とこんな風に話してて良いのかな?そろそろ怒れる魔王が来るからさ頑張りたまえ』

「ち、ちよつと待ちなさい（ブツツ）……あ、あんの盗人があああああ!!」

――

その頃　ちよつと離れた丘で

「これで良し」「じゃないだろう」何だいま来たのか土？」

そこで話をしていた協力者　海東大樹は背後に現れた土に話しかける

「当たり前だ何でジャマトの苗を盗んだ？」

そう黒ハルトは本当に苗を盗んでなかったのだ

盗んだのは海東、彼でなければ盗めない程に要塞だったと言えるが：

「まさか神様を作つて自分の思い通りに世界を作りたい！なんてつまらない願いを持つてる奴らだったのとバイクを貰った御礼に彼の踏み台になつてもらおうとね」

「そしたらあのバカが4人に増えたんだが? 大変だったぞ、あの国の連中が目を回してたしな」

「まあそれは予想外だったかな…けど彼が暴れたお陰で未来のお宝が手に入ったから良いだろう」

海東は満足そうに戦利品 レーザーレイズライザーを見ていると士が

「それに彼なら僕がやったと知っても怒らないだろうしね」

「そうだろうな、あのライダーオタクめ…だがおいたが過ぎたな海東」

「何だって」

「はあ…後は任せるぞ」

と溜息を吐いていると

「成る程、今回の事件の黒幕はお前か」

眩い光に包まれて現れたのは白い鎧を着た青年

ハルトの師匠にして仮面ライダー鎧武

始まりの男 降臨

「俺の弟子に何をし「師匠—————!!!」は？」

さあ戦いだ！と言う場面で丁度到着したハルトが紘太を見るなりデロウスから飛び降りる着地と同時に土下座並みの角度で頭を下げた

「お久しぶりです!!お元気でしたか!!」

慌てて親衛隊もガンシップから降りて構えるがハルトの態度を見て混乱していた

「あ、ああ…久しぶりだなハルト…その…随分と面白い奴を連れてるな」

「はい!!アレは俺が並行世界で旅して会った仲間です、デロウス!!この方は俺の師匠だ間違っても攻撃するなよ!!絶対にだ!」

「!!!」

「そしてトルーパー!この人こそが俺の師匠だ!!無礼のないように!」

「こ、この人が…へ、陛下の師匠だとお!」

「噂に聞いてたより真人間じゃねえか!!これが…仮面ライダーなのか!!」

「見ろ…行き当たりばったりって言葉を体现している陛下が敬語を使っているぞ!!」

「お前達言葉を選べ!あの姿を見ろ!アレだけ平身低頭な陛下は奥方様以外で見せない

！アレを見せると言う事は…あの方が只者ではないだろうが!!」

「「「確かに」」」」

「失礼しました！流石は本物の仮面ライダーですね！あの陛下が借りてきた猫のようにおとなしくするなんて！」

「取り敢えずテメエ等そこに直れえ!!」

トルーパーは混乱を極めていたが紘太はやれやれと言う顔をしている

「それに士さんに海東さんまで…あ、この間はナツキにウオツチを送ったって聞きました!!ありがとうございます！」

八舞事件の際、ナツキにアナザーマツハとバースのウオツチを渡してくれたへ感謝を伝えると

「礼はいらないさ僕もバイクもらったしね」

「そのお礼で今回の事件を起こしたらしいがな」

「へ？」

「そうだジャマトの苗を盗み、フリーガンを焚きつけ、黒ハルトにクロスギーツバックルを渡し事件を起こしたのはコイツだ！」

「な、なんだってー！ー！」

ハルトは嘘だろう！と驚愕しているなか

「す、すみません…その…デイケイド ですよね？その…ファンでしてサインを貰えないですか？」

黒ハルトはマイペースにサインを頼んでいた

「はあ……おい魔王、お前は何処の世界でもこうだな空気読ませろ！」

「え？……まあライダー愛は魂に染み付いてますからね」

ドヤ顔で答えるがハルトは尋ねた

「あ、じゃあ俺の人格を元に戻せます？」

「安心したまえ……と言いたいが僕には戻すカードがない」

「……………ええ」

「だが君なら持つているだろう土？」

「はあ……これか」

士が見せたのはアナザーウオッチとアナザージオウの顔が入ってるカード……まさか俺のファイナルフォームライドカードだとお!!

「うおおおお!まさか俺に『ちよっとくすぐったいぞ!』をやってくれますかあ!!」

わーい!と喜ぶハルトに黒ハルトは良いなあと言う顔をしていたが紘太は冷静に

「あ、いやハルト……お前怒ってないのか?」

「んー……まあ顔面にグープパンチは叩き込んでやりたいですけど………海東さんですよね?連中の拠点をジャマトやテスターに流したのは」

「正解だよ」

「だから殴るのは保留にします………師匠」

「何だい?」

「ま、まさかと思いますが俺が心配で来たとかじゃ「その通りだが？」師匠――！俺なんかの為にありがとうございませす!!」

「い、いやちよつ！ハルト!!」

ハルトが号泣し崩れ落ちる姿に士は溜息を吐き空を仰ぐとぼつりと呟く

「なあ本当にこいつが、ああなるのか？」

イメージ出来ないと呆れているとハウンドが咳払いをして

「感動の所、申し訳ありませんが…戦場に向かいませんと」

「そ、そうだな…師匠少し待っててください…トルーパーは連中の逃げ道を塞げ、ハウンド背中では任せた」

とだけ言うとハルトは己の脚力だけで飛び込むのであった

「お任せください!…つてジェットパックなしに飛べるわけっ!そんな無茶な…ああ仕方ない陛下だ!!野郎ども続け!!」

ハウンドは他のトルーパーに指示を出しながら自らもガンシップに乗り込もうとするが絃太が声をかける

「なあ君に取って彼は…」

「陛下ですか?そうですね…手のかかる問題児です」

そう答えると他の親衛隊も違いねえ!と笑うが

「が、アレだけ己の感情に素直な方はいませんよそれに廃棄され戦う機会など永遠に無くす可能性があった我等兄弟の未来を繋いでくれた恩人です…我々が命をかける価値はあると思ってますよ」

それは本来 彼等が辿る未来 利用価値を無くしたと同時に切り捨てられ未来を奪われたと、しかしハルトや逢魔に出会い新たな未来を

かつての教えとは違う、己の心に従う事

それを教えてくれたのがただハルトという人間？だった

「そうか…手のかかる弟子だと思いが宜しく頼むよ」

「お任せを、脳筋陛下の面倒を見るのは慣れっこです！」

そう答えるとガンシップの扉は閉じ、発進したのであるが完全にダメな子を心配する保護者通しのやり取りであったのは言うまでもない

「はあ…何とか相変わらずの自由さだな」

「そう思うなら止めてくれ、お前の弟子だろ？」

「それは無理だ、アイツの道はアイツが決める事俺は見守るだけさ…さて折角地球に来ただんだ久しぶりに皆に会いに行くか！」

「この世界にも沢芽市があつたな…」

「彼知ったら大喜びするだろうね」

「そうだなこの戦いが終わったら連れてくか」

「あの魔王泣き崩れるな」

「僕もそう思うよ士」

—————

その頃

「行くぞ！変身!!」

『ARMED CHAIN ARRAY』

ゴリラ型のライダーがチェーンアレイをそのまま投げつけ壁を壊して中に入ると

「出たー！ー！鉄球ゴリラだあ!!」

「逃げろ！俺達もザクロになっちまう!!」

叫びながら逃げるフリーガンのメンバーに対し

「誰が鉄球ゴリラだあ！」

そのままツツコミと同時にチェーンアレイを投げつけ頭部から赤い花火を打ち上げたのであった

「いや的確な呼び方でしょ無茶ゴリラ」

「何っ!?!…ではなかったな…さて我等の目的を果たそう」

「おうよ!…んで彼処で暴れてる魔王幹部やジャマト達はどうするよ?」

チュータの指さす先にはアナザー1号の肩に乗りながらボウガンやミサイルで攻撃し尚且つ隕石を降らせるウオズ+四天王と…

「なあサイのオツサン!そのバックルあれだろ!改造したG3-Xのガトリングが出るって…なあ頼むよアタシに貸してくれ!!」

ダパーンがライノスに頭を下げて改造GX05を撃ちたいと伝えると

「ダメなんだな!運営側からお前にだけは絶対貸すなって言われてるんだナ」

「何でだよお!!アタシが何したってんだあ!!」

両膝をつき悔しがるダパーンだが

「いや運営の方が正論（です）」

「姐さん!？」

ツツコミをしたのは前回の事件での被害者、ナツジスパロウとロボだが

「あ、お二人さんにもバックル貸すなって言われてるんだナ」

「な、何故ですか！僕達はクリスと違って乱射魔じゃありませんよ！」

「そうだ！私は速いのが好きなだけだ！」

「姐さん達も似たようなもんだろうが!!」

「いや、お前等コントしてないで戦え!」

フィーバーナイトになった事で更にパワーが溢れているジャマトライダーの前では警備隊ライダー程度では足止めにすらならない、しかし不意を打とうとアローバックルで狙撃を狙うも

『FINAL VENT』

「はっ!」

弾丸と化したマントが貫通する警備隊ライダーは爆散し、そこに立っていたのはアナザーナイトであった

「あ、アンタはタヌキ!」

「ナツキだ! いい加減覚えろ!」

「どうやって此処に…」

「ミラーワールドから走ってきた」

「それは嘘ですよね!？」

「あーアナザーリバイブの力で飛んできた」

「なるほど…それで君は何しに？」

「此処にきた以上目的は同じだろ？」

「フリーガンの壊滅ですか」

「そつ！んじゃ派手に行くぜ！」

アナザーリバイブがウォッチを構えると

「なーんだ魔王かと思っただら万年二番手の救世主擬きじゃねえか!」

「あ?」

警備隊ライダーの面々は魔王でない事を安堵して挑発するが

「魔王の真似事してんじゃねえよ! やつちまえ!」

全員が武器を取り突貫する中、アナザーリバイブはウォッチを起動 黄色い光に包まれると

アナザーファイズに類似した意匠を持つアナザーライダーへと変わり、彼の愛車であるアナザーダイバー2ndは突如 サイドバッシャーに変身しバトルモードに変形するなり建物の天井をぶち壊して降りてきた

愛する者を守る為 敵を絶やすもの

『カイザ』

アナザーカイザ 変身

「はあ！」

アナザーカイザはサイドバツシャーを操作し両腕の銃火器で警備隊ライダーを蹴散らし接近した奴は足で踏み潰したのであった

「確かに俺は弱いが、お前達より弱くはない勇者？舐めんな」

—————

その頃 ハルトと黒ハルトは扉の前で中の喧騒に頭を抱えていた

「あのバカ供、何してんだ……っ！今師匠が何か面白い事を考えてる気がしたぞ!!」

「さあな……師匠つて来てんのか!仮面ライダー鎧武が!!」

「ああさつき会ってきた」

「よし早く終わらせて俺も会いに行くぞ!!」

黒ハルトは力任せに扉を蹴破ると中にいたフリーガンのメンバーは口々に黒ハルトを罵倒する

「貴様!!生き恥を晒しながらよくその面を晒せた「うつせえ」ー」

男が罵倒する途中で黒ハルトは飛び蹴りを顔面に叩き込み気絶させると首を鳴らすと

「その前に……散々扱き使いやがって……ガキ拉致った分とカフカとヴェルザードにセクハラした分だ受け取れ」

『クロスギーツ！ready fight』

変身したクロスギーツは恨みを晴らすと決めていたのかフリーガンのメンバーに攻撃を始めたのである

「おーおー派手にやってんねえ〜……ん？」

何処か気怠げに首を振るハルトは背後を振り向くと、そこにはスーツの似合う女性が幽鬼のような顔を歪ませて睨んでいた

「ま、魔王!!」

「あくアンタが…へえ…」

地団駄を踏む姿に滑稽さを感じつつハルトは嘲り笑いながら挑発する

「どう飼いだに手を噛まれた気分は？……いや違うかなコレ…」

「っ！アンタがさっさと倒されないからでしょ!! さっさと人柱になりなさい!! そしたら私がその神の力で理想の世界を叶えるんだから! 潤動!!」

リーダーが取り出したのは先日、バイカイザーになる際に使用したネビュラスチームガンであった、それに2本のギアボトルを装填してバイカイザーに変身したのである

『PERFECT!』

「さあ! さっさと創世の力で私の願いを叶えなさい!!」

「生憎、俺はその願いは叶えられないなあ」

と身勝手なエゴを叫ぶリーダーにハルトは呆れながらウォッチを構えようとしたが

『ああ俺もお前達の願いは叶える訳にはいかないな』

「……………え?」

突如聞こえた声に首を傾げると先程まで使っていたワンネスと対なすマークⅢバツクルが輝き始め、ハルトの手から離れると光の球となり現れたのは1人の青年

その腰にはジヤマトの俺が使うデザイアドライバーにキツネの顔が刻まれたコアI
D……まさか

「マジかよ……」

「嘘でしょ……何で……貴方がこの世界にいるのよ！創世の神……浮世英須!!」

現れた青年 エースは右手でキツネを作ると

「化かされただろ？まさか変身アイテムに隠れてたとか……しかしまた未来人がちよつかいかけてくるし前の俺みたいな事をしてくるなんてな」

現れたエースにハルトは開いた口が塞がらないでいると突如 空間が開いた現れた

のは

「鈴○福さん!」

伝説の子役にしてライダーファンの羨望を束ねる方ではないか!!

「誰?…いや…そんな事より久しぶりだねエース!」

「ああ、また会うなんてなゾーン」

「感動だよ、まさかこんな形でサプライズをしてくれるなんて!!流石俺の推しだ」

「喜んでくれて何よりだ、まあその魔王にも感謝だなデザグラの負の遺産を炙り出してくれたみたいだしな」

「お願いします!お二人のサインを下さい!（何、礼を言われるような事をした覚えはないですよ）」

『おい相棒、本音と建前が逆だぞ』

「仕方ないだろ？本物の仮面ライダーなんだからさ」

「へえ君が魔王なんだ、ケケラ達から話は聞いてるよ！」

「それは光栄「かなりクレイジーだって」じゃねえな…あのカエルめ」

『あははははは！いやあ確かにハルトはイカれてるか』

『相棒、すまんな否定出来ん』

「いや否定する気もねえよ『お仕置きがねえだト!!』何だして欲しい、それでエースさんはアレを倒すのを手伝ってくれる訳ですか？」

「そうなるな」

「なら俺も混ぜてもらえますか？」

『ブランドジオウ』

「ああ行くぞ、ここからがハイライトだ付いて来いよ」

「はい！」

「ああ！」

エースはマグナムバツクルを、ジーンはレーザーレイズライザーを

『(GENE) SET!』

た
2人は待機音と共にポーズを決めると最後のフィンガースナップに合わせて起動し

「「変身!!」」

『アナザーライダー！グランドジオウ!!』

『レーザー・オン』

『マグナム／ジーン…ローディング』

人の幸せを願う幸福の白狐

未来から来た感動を求める探究者

仮面ライダーギーツ、仮面ライダージーン

参戦!!

『READY FIGHT!!』

中編 集う者達

前回のあらすじ

フリーガンの拠点に殴り込んだハルト達、バイクイザーとなったりリーダーを前に創世の神 仮面ライダーギーツが現れたのである

『READY FIGHT』

その言葉を合図にギーツ、ジーン、アナザーグランドジオウvsバイクイザーというバトルが幕を開けた

「うおおおおー！」

アナザーグランドジオウはアナザーツインギレードを取り出して二刀流での近接戦闘を仕掛けるがバイクイザーはネビュラスチームガンの射撃で牽制をかける、しかし仮

面ライダージーンのベクトル変換により弾丸は明後日の方向に逸れるが何発は直撃しようとしていたが

ギーツの射撃で弾丸は全て撃ち落とされる

「なっ!」

「驚いてんじゃねえよ! 仮面ライダーなら朝飯前だろうが!!」

アナザーグランドジオウは接近戦に持ち込み、ツインギレードを槍モード変形させ目に止まらぬ速度で連続突きをお見舞いすると最後に強めに付いて吹き飛ばした

「ガハッ!!」

「おい立てよフリーガン、貴様だけは俺が地獄を見せてやる」

「っ! まだまだあ!!」

負けるかとフリーガンのリーダーは指を鳴らすと空から現れたのは大量のポーン
ジャマト達

「こりや…多いな」

「そうよ、あの苗から生まれたジャマトよ!!どう!!この数に勝てるかしら!!」

「俺相手に物量戦を挑むか、この間抜けが」

アナザーライダーを召喚しようとしたが

『ファイナルアタックライド!デイ・デイ・デイ・デイケイド !!ノデイエンド!!』

突如現れたカードとそこから放たれたエネルギーがポーンジャマトを大量に薙ぎ
払ったのである

「今のは！」

アナザーグランドジオウはキラキラと目を輝かせる先には仮面ライダーネオディケイドとネオディエンドがいるではないか！

「ありがとうございます!! 2人とも！」

「いや俺達だけじゃない」

「……………へ？」

『極スパークキング!!』

「セイハアアアア!!」

ダメ押しとばかりのライダーキックを出した白い鎧の戦士…間違いない

「し……師匠!!!」

仮面ライダー鎧武・極アームズ 出陣!

「待たせたなハルト……ん? その狐は初めましてだな」

「ああ俺は仮面ライダーギーツ、お前は?」

「俺は仮面ライダー鎧武、そのハルトの師匠をやつてる」

「魔王の?へえそれは凄いなお前」

「ソレ程でも……あるか? デイクイド?」

「俺に聞くな……それより」

「し……師匠が弟子公認してくれてる……これ以上の幸せはない……」

「分かるよ魔王、僕もギーツから公認サポーター1号って言われた時は感動したからね」
膝から崩れ落ちて泣くハルトにジーンは肩に手を置き気持ちを共有しているがフリーガンのリーダーからしたら涙目が止まらない：しかし幸福と不幸の差し引きは0とはよく言ったもので

『ボルテック／ドラゴニックファイニッシュ！』

フリーガンのリーダーが変身したバイカイザー目掛けて全員の背後からダブルライダーキックが叩き込まれたではないか！

「う、嘘だろ…まさか!!」

それは赤と青、そして龍を意識した2人のライダー間違いない！

「仮面ライダービルドにクローズだああああ！うおおおおおおおおおおおお!!! すごい

えええええー！」

『落ち着け相棒！このままだと興奮で死んでしまうぞ!!』

「本望!!」

アナザーグラウンドジオウが大興奮で叫ぶと2人の目線が集まった

「ん?」

「あ?…って何だこれ!!って仮面ライダーが一杯いるぞ戦兔!!」

「ああ、こんな現象…前にも何処かで…いや…」

「こ…こ…こ、こうしちゃいられないサインを貰わないと!!」

「ダメだ！今は戦いに集中しろ!!」

「っ！わ、分かりました師匠!!!」

ハルトの奇行を一言で制した鎧武に戦いを遠巻きで見ていたクローントルーパーは驚愕しウオズと四天王はやれやれと肩をすくめるのであった

「仮面ライダービルド、桐生戦兔と仮面ライダークローズ、万丈龍我だな」

「ああ……お前は……確か……誰だ？」

「ああ！その白い奴、見覚えあるぜ！確か……そう！オレンジだ！」

以前 劇場版で出会った事を思い出した万丈はおお！と言う顔をしていたがハルトはこのレジェンドの邂逅に

「凄い光景を生で見れてる……生きてて良かった……」

五体投地しようとするくらい体を倒していたのであった

「所で何でお二人はここに？」

「ああこの間、妙な事にネビュラガスの反応とカイザーシステムが使用されてる事件があつてな玄さんからの依頼で調査してたんだよ」

ソレは恐らく知恵と力の俺がバイカイザーになったからだろうなと思うが黙つておくが花だな…そんな事より

「な、何と!!では此処にあの人達もいるんですか!!」

「ああ別行動しているがな」

—————

その頃 ジャマトハルトとナツキの2人は周りを仲間任せで自分達は施設内に残るフリーガンの面々を蹴散らしながら前進していると

『スクラップ／クラックアップフィニッシュ！』

突如聞こえた音声とダブルライダーキックが警備隊ライダーを蹴散らしたのが見えた

「ま、まさか……新しい敵か！」

とナツキが身構えるがジャマトハルトは手で制した

「待て、タヌキ！あのお姿を見て何も思わないのか!!」

「へ？」

それは黄色と紫の装甲を持つ2人の仮面ライダー……まさか！

「足んねえな！全然足んねえな!!誰が俺を満たしてくれんだよ!!」

警備隊ライダーを蹴散らしてハイになっているが間違いない

「仮面ライダーグリスにローグだと!!」

「本物だあ!!あのおすみません!!」

「ああ!くそっ!異世界でもやっぱりハルトはハルトじゃん!!」

「ジャマトハルトは変身を解除して2人に近づくと全力で土下座して色紙とサインペンを突き出した

「俺…その…ファンです!!すみませんがサインお願いします!!!」

「あ?」「は?」

「この通り!!」

「いやハルト、待て!!今そんな事してる場合じゃない!!」

「黙れえタヌキ!魔王の俺は玄さんの文字Tを着こなしていると聞いたんだ!それなら俺はサインが欲しい!!」

「どんな理屈だ!」

と叫ぶとグリスは淡々と

「何だ?おいヒゲ…どした?」

「おいお前…魔王とやらは俺のセンスが分かるのか?」

「え?はい、何なら別にいる魔王なんてTシャツを普段使ってますよ」

「あのダサイTシャツをな」

「なーんか怪しい奴だな…ヒゲ取り敢えず戦兎達と合流するぞ」

「サインか…書いてやろう」

「あ、ありがとうございます！すーすー！」

「ヒゲえ!？」

「ふふふ…見たかポテト！遂に時代が俺に追いついたぞ!!」

「それはごく限られた環境での話ですよ!？」

—————

「さてと…お前が今回の犯人か？」

ビルドがバイカイザーを見るもクローズはアナザーグランドジオウを指差して

「アソコの奴じゃねえの!!」

「ソレはないと思うぞ」

「は？」

「この天っ才物理学者にサインを求める奴に悪い奴はいない!」

「つたく…まあオレンジの人が言うなら大丈夫か?…取り敢えず倒すならアイツからだ
!」

と全員の目がバイカイザーに向くのであったが

「ひゅー!」

これは敵ながら哀れと思わざるを得ない…が同情の余地も無いんだよね〜と冷めて
いると

「ハルトー！待たせたな!!」

ナツキとジャマトハルトもかけつけた背中に

「うおおおおお！グリスにローグだあああ！さ、サイン色紙を用意しないと……あ！
文字Tにサイン書いて貰おう!!」

「ああやつぱりハルトだ…全く同じリアクションしてる」

「かずみん！玄さん!!無事だったか」

「あつたり前よ…そんな事より2人とも聞け…ヒゲの私服センスと似てる奴がこの世界
にいる」

「!!!」
「!!!」

「うおおおおお！ビルドにクローズ!!それに…っ！仮面ライダー鎧武だあ!!うおおお！
すげえ！サイン下さい!!」

「ああ…並行世界でもハルトはハルトだな…取り敢えずサインは後だ」

「はい!!」

まるでエボルトが復活したかのようなテンションになるビルドとクローズに対しアナザーグランドジオウは今にも踊り出しそうなテンションであるが思い出したようにアナザーウオッチを返す

「ナツキ、お前にアナザータイクーン返すわ」

「サンキュー…よし、これで俺も！」

『アナザーマジエステイ!』

「変身!!」

『アナザーライダー!!ゲイツ!マジエステイ!!』

「そして更に見せてやるぜ…ハルト!俺のキングフォームを見る」

「え?失敗フラグ?」

アナザーマジエステイは左手にラウズアブゾーバーを装着すると

『アブソープ・クイーン』

待機音と共に取り出したカードを見てアナザーランドジオウとジャマトライダーは驚いた

「そ、そのカードはカテゴリーキング!!何処でソレを!!」

マジエステイはドヤ顔で一言

「カードは拾った」

「キメ顔で言う事かあ!!」

「何処の決闘者だあ!!」

2人のハルトのツツコミをスルーして変身する

「行くぞアナザーゲイツ!」

『増幅!』『エボリューション・キング!!』

キングのカードをラウズすると右手には大型の銃 キングラウザーが現れると頭部にクワガタの衣装と原典の封印シーンを意識したのかマスク割れされた頭部の隙間からは骸骨と赤い光が瞳のように睨んでいた

新たな運命を勝ち取る王 アナザーギャレン・キングフォームを憑依させる

「はっ！」

さて此処まで来ると敵が哀れになるも流石は暴力的なファンを指すフリーガンの長である

「どどどどうしたら……そ、そうよお前たちなんかこうしてやるわー！ー！」

何を思ったのか突如として巨大化し更に大量のポーンジャマトを展開したのであった

「あはははは！そうよ！最初からこうすればよかったのよ！貴方達を潰せば世界は私の思い通りなのよ!!」

そんなバイカイザーと怪人軍団を見て皆が驚くもハルト達には不思議と怯えはない

「そんな事させない…変身!」

『SET IGNITION!ギーツ!マークIX!』

世界を見守る白狐 仮面ライダーギーツ・マークIX

「ああ、この世界を好きにさせるか」

『W、オーズ、フォーゼ、ウィザード、鎧武、ドライブ、ゴースト、エグゼイド、ビルド、ジオウ、ゼロワン!!ファイナルカメンライド!デイケイド!コンプリート21!』

「そうだね僕を利用したツケは払ってもらおうよ」

『G4、リュウガ、オーガ、グレイヴ、歌舞鬼、コーカサス、アーク、スカル!ファイナルカメンライド!デイエンド!』

並び立つ2人のコンプリートフォームに

「全く、んじゃやりますか」

「おう！」

「おいおい俺達も忘れんなよ行くぞヒゲ」

「黙れポテト」

グリスとローグもビルドドライバーを取り出して装着すると

『ALL YEAH! ジーニアス!!』

『ボトルバーン! クローズマグマ!!』

『ボトルキーン! グリスブリザード!!』

『プライムローグ!!』

そして全員がビルドドライバーのレバーを回し

「「変身!!」」

『ビルドジーニアス!』 『クローズマグマ!』

『グリスブリザード!』 『プライムローグ!』

その最強フォーム勢揃いに

「凄い圧巻だな…これが世界を守り続ける本物の仮面ライダーの覇気か…：…凄いなハルト…っ!」

「……………っ!!」

余りの感涙咽び泣いていたが

「気持ちに分かるよ2人とも」

ジーンは分かっているよと頷いていた

「つしやあ！俺達も行くぞお！」

「うおおおお！」

「なあハルト…いつもお前なら逃げようとか言うのに今日は言わないんだな」

「あつたり前よ！これだけのレジエンドライダーの皆様がいるのに何を恐れる必要がある!!」

「そうだ！憧れのヒーローと肩を並べて戦えるのに戦うことに日和ってる奴いるう!!? いねえよな!!」

「ああ皆さんに見せようじゃねえか!!」

る
ジャマトライダーはジャマトファイバーバツクルを起動させるとスロットが回転す

『ROOK…プロモーション!!』

ルークフォームになりボウガンを構えると

そしてアナザーグランドジオウはアナザーマジエステイの首根っこを掴むと新たな相棒の頭に乗る

「来い！デロウス!!」

「ど、ドラゴンだあ!!」

「!!」

因みに

「うおおい戦兎見ろよ！本物のドラゴンだぞ！」

「あ、あんな生き物がこの世界に……凄いな」

「いや、アレは異世界の化け物で魔王のペットだ」

「ペット!?スゲエ！後で乗せて貰おうぜ戦兎！」

「お前だけにしなさいバカ」

「せめて筋肉つけろ!!」

「いつまでごちゃごちゃやってるの!!!」

バイカイザーも待てないと叫ぶが

「んじや皆さん……行きましょう!!」

受けて当然の仕打ちがフリーガンを襲う

因みにピースメーカー艦内では

「び……ビルド!!まさか本当に……っ!」

「た、束さんは今、猛烈に感動しているよ!!ちよつと戦場に行こう!ねえ艦長、進路変更!ハルくんの所に!!」

エルフナインと束はビルドの登場に歓喜していたが

「あの男なら、あのファントムリキッドを何とか出来るのか?」

「ああ…取り敢えず話は終わってからだな」

キャロルと千冬は別のことを考えていた

後編 終息と裏で動く？

「おのれええ！やれええええ！」

バイカイザーはポーンジャマトに指示を出すのが先陣を切ったのは

「行くよ土、最初は僕達だ」

『アタックライド…ゲキショウバン！』

デイエンドは歴代劇場版限定ライダーを召喚する、その中にいるアークを見て親近感を覚えるが

「ああ」

『カブト！オーズ！ドライブ！…カメンライド！ハイパー！プトティラ！トライドロ

！』

『ファイナルアタックライド…カ・カ・カ・カブト！オ・オ・オ・オーズ！ド・ド・ド・ド
ドライブ！』

「「「たあ！！」」」

デイクライドはコンプリートフォーム由来の召喚機能でハイパーカブトとプトティラ
コンボとドライブ・タイプトライドロンを召喚し

全員で持ち前の射撃攻撃で敵を薙ぎ払った

「何っ！」

バイカイザーが驚くが

「余所見すんじゃねえ！」

『ソイヤ！！極・スカッシュ！！』

「セイハアアアア!!」

真上から鎧武・極アームズが合体剣による重たい一撃を叩き込みバイカイザーにダメージを通すと追撃するように

「心火を燃やして…ぶっ潰す!!」

『グレイシャルフィニッシュ!!』

「大義の為の犠牲となれ!!」

『プライムスクラップブレイク!!』

凍結の力とワニの噛み砕く力を宿すダブルライダーキックは巨大化したバイカイザーの体をくの字に折らせて膝を付かせ、更に

「今の俺たちなら…負ける気がしねえ!!」

「勝利の法則は決まった!!」

『ボルカニックファイニッシュ!!』

『ジーニアスファイニッシュ!!』

炎の龍と未来を示す科学式を宿したダブルライダーキックを胸部へと叩き込む、その仮面ライダーの勇姿に2人のハルトは

「……………っ!!」

仮面の下でも分かるくらい号泣していた

「おい泣くなよハルト」

バイカイザーは仕返しとばかりに近くにあつた鉄塔を鷲掴んで投げようとするが

「!!!」

デロウスのレーザー光線が鉄塔を蒸発させるとその光線は成層圏を貫き再び、宇宙で寝ていた第六の精霊に命中し目覚めさせたのは別の話

「しかし凄い威力だなデロウス…また進化したんじゃないのか？」

「感心してる場合かよ！アレ!!」

よく見るとバイカイザーはまだ立ち上がり武器を構えるではないか…タフ過ぎるのも考えものだな!!

「なら俺の出番だな！」

『JYAMATO FEVER VICTROY!!』

ファイバールークフォームから放たれたボウガンの矢球は地面に刺さると巨大な植物のツタがバイカイザーを拘束した

「っしやあ!!見たか俺の超ファインプレイ!!」

「へえ……ジャマトライダーが……」

「アレは別世界のデザグラススタッフみたいなものかな」

「なるほど……ま、この世界に介入しないならそれで良いか……やるぞジーン」

『BOOST IX STRIKE!!』

「ああ!行こうギーツ!」

『FINISH MODE!レーザービクトリー!!』

炎を纏う白狐と青光を纏う銀狐のダブルライダーキックはバイカイザーの顔面に命中、その仮面の歯車を破壊する

「はああああ!!」

「あぎやあああー！」

その仮面の下からは赤い目の素体が剥き出しになり

「き、貴様等あ…許さない…許さないわあああああ!!!」

叫んでる所、悪いが怒りの度合いとしては

「奇遇だな…俺達もだ！行くぞナツキ！」

『反転！』『剣』

此方の方が上なんだよ!!つまらない願いで俺たちを巻き込みやがって

アナザーグランドジオウはアナザー剣のレリーフを触りキングラウザーを召喚する
と

「おうー！」

同時に2人の体からラウズカードが抜けると強化されたラウズカードをラウザーにスキャンする

『◇／◇ 10！J！Q！K！A！！』

アナザーグランドジオウはデロウスを踏み台に高く飛び上がり、アナザーマジエステイはそのままラウザーを腰に入れて力を入れて構えるとそれぞれの上位カードレリーフが射線に現れた

『ロイヤルストレートフラッシュユ！！』

「はあああああああ！！！！」

ダイヤのレリーフから放たれる金色のレーザー光線がバイカイザーの体を貫くと同時にアナザーグランドジオウがレリーフを通過しながらエネルギーを貯めていった

に合わせて最強の一撃　ロイヤルストレートフラッシュを叩き込んだ

しかしタフさがあるのか、それでも起きあがろうとするバイカイザーの執念深さに呆れるが

「さてさて…トドメと行くか」

「いや、これで行くぞ」

アナザーグランドジオウは必殺技を発動しようとしたが

『ファイナルフォームライド！ア・ア・ア・アナザーライダー!!』

「魔王、ちよつとくすぐりたいぞ」

その台詞に反射的に答えた

「OKどんとこい!!……っ!」

するとコンプリート21がアナザーグランドジオウの背中に手を突っ込み入れるとアナザーグランドジオウの体が巨大なアナザーウォッチへと変わったのである

「うおおおおお!!これが俺のファイナルフォームライドかあ!!アナザーウォッチなんだな!!」

「よし行くぞハルト」

「はい!!……ん?あれ?土さん今俺の名前……」

『ファイナルアタックライド!ア・ア・ア・アナザーライダー!!』

「キックオフ!!」

「え?ちよっ……うわああああ!」

必殺技の発動なのだろうがコンプリート21のキックが始まりのように他のライダー達も顔を合わせた

「そう言う事か…万丈!!」

「おう!!」

まずはビルドとクローズの2人がタイミングを合わせたダブルシュートがバイカイザーの体にアナザーウオッチとなったハルトを蹴り込むとボールのようになったアナザーウオッチはそのまま宙に浮くのに合わせてグリスとローグのパンチングで押し飛ばされたアナザーウオッチがバイカイザーのボディーにめり込んだ

「よし！行くぞヒゲ！」

「黙れポテト！」

「(ぎ)ふうー！」

「あははは！っしやあ!!」

「このおおお！」

「そうはさせないよ」

「撃てええ！」

バイカイザーがアナザーウオッチを掴もうとするがその手をディエンドとアナザーマジエスティの射撃がバイカイザーの手を潰すと再度トラップしたアナザーウオッチを今度はギーツIXとジーンが反応した

「ジーン」

「ああ任せてくれギーツ」

ジーンはベクトル操作してギーツの体の位置を変えるとギーツとジーンは左右からボレーシュートを蹴り込むと

「ダメ押しだ、やり返したいのは一人じゃないだろ？」

「ゴーン!!と鐘の音が鳴り響くとアナザーウォッチが四つに分裂した

「ヤーーハーー!!」

「この軌道の命中率100%!!」

「この連携…素晴らしい!!」

「行くぞ! 4人のハルトシュート!」

4つになり人格分裂した結果 アナザーウォッチはそれぞれバイカイザーの手足に命中に身動きを完全に封じると鐘の音が鳴り再度一つのアナザーウォッチに戻ると最後は

「師匠！お願いします!!」

「ああ！任せろ!!!」

最後はハルトの師匠にして、かつてサッカーの力を借りてオーバーロードを沈めた彼
始まりの男の力を借りる

「セイハアアアア!!」

鎧武はそのままオーバーヘッドシュートでアナザーウオッチを蹴り出すと炎を帯び
たアナザーウオッチがアナザージオウの幻影となると

「セイヤアアアア!」

「い、いやだ…私がこんな所でええええ!!」

そのまま蹴りがバイカイザーを貫くと断末魔共に爆散し、ウオッチはアナザージオウ

に戻って着地を華麗に決める……が

「モモタロスの言う通りだったな…以外と痛い」

少し体に鈍い痛みを感じるが爆炎見ながら

「けど、終わったな…」

変身解除したハルトが一安心するとウオズとハウンドが現れ

「我が魔王、お待ちせしました」

「どうだった？」

「フリーガンのメンバーの殆どは逮捕され、デザグラ運営に回収されました」

「おう…五十鈴とあかねからだジャマトの苗も回収出来た、これでコツチも任務完了だ」

「そうか…ハウンド、この施設の情報完全に消去して爆破しろデザグラ側の痕跡を残すなよ」

「イエツサー！」

「さてウオズ」

「何でしょう」

「戦いが終わったな」

「ええ」

「なら俺達がやる事は分かっているよな」

「はい、デザグラ側の計らいで食糧や調理班も確保されております……また我が魔王のフルコース完成を記念して逸品の包丁を贈られたとも」

「包丁か…良いねえ…よし皆で宴会と行くぞおおお!!」

ハルトは両手を天に掲げて勝利宣言をするのであった

—————

此処は黒ハルトの世界

「ゴーン!」と鐘の音が鳴ると黒ハルトが面倒を見ていた孤児院の子供達が各々笑顔で新しい人生を歩んでいた。しかし黒ハルトの事は忘れているが

「……………ありがとうな魔王」

「気にすんな約束は約束だ」

「お陰でアイツらが幸せになった…感謝しても仕切れねえよ」

「おう………んでお前はこれからどうすんだよ？」

「そうだな…何処かフラフラと旅でもするかね」

「あら？1人で旅する気かしら？」

「私達を除け者にするのは良くないわね」

「わーってるよヴェルザードもカフカも来てくれる？」

「当然」

「羨ましいねモテる男は」

「お前が言うな」

黒ハルトは恥ずかしそうに顔を背けていると

「みーっ……けーっ……たーっ……ぞーっ……！」

空から突如現れた謎の騎士甲冑　否！

「見つけた黒狐!! さあ！俺のガイソーケンを返せ!!」

ガイソーグハルトが現れたのであった、そう力のハルト戦で使ったガイソーケンは彼の物であったのだ

まあもう用はないので

「ほらよ悪かったな返す」

「おう……じゃない!!そこは返して欲しければ戦え!とかじゃないの!」

「いやもうそんな展開じゃないから」

「おお！魔王の俺！久しぶりだな」

「ああ……さて2人共……今回の件で一番問い詰めたい相手がいるんだが一緒にべない？」

『グランドジオウ』

「ああ」

『クロスギーツ』

「そうだな」

『ガイソーチェンジ』

変身しながら話しているとクラックが現れたと同時に

「この度は誠に申し訳ございませんでしたー！」

パールクスハルトが全力のジャンピング土下座をしたのであったが

「いやその通りだよ!!」

『アナザーオールトウエンティタイムブレイク!』

『クロスギーツ・ストライク!』

「エンシエントブレイクエッジ!!」

「ですよねー!!」

3人の怒りの必殺技がバールクスハルトを吹き飛ばしたのであった

—————

「はあ……はあ……こ、此処まで来れば大丈夫だろう……」

あの乱戦を辛うじて逃げ延びたフリーガンのメンバーであったが

「ジャマトのデータは手に入ったし魔王の戦力も割れた…このデータがあれば世界は俺の思い通りだ」

と高笑いするが、その体を貫くのは巨大な鍵であった

「……………へ」

それを刺したのは長い金髪とチャイナドレスを着たスタイル抜群の美少女であった

「お主がむくの眠りを妨げた輩か？」

「な、なんのこ…「まあ良い主の声は耳障りじゃ…このまま失せよ、開（ラーダイヴ）」ぐぎゃああああー！」

彼女は自らを攻撃したデロウスのレーザーを異空間に閉まっております、それをゼロ距離

で浴びせたのであった

「ふう……さて、また宇宙に戻るかの…はあ…ん？」

むくと自分を呼ぶ少女の目線の先には

「さてと…つかあのバカ魔王、俺に買い出しを頼むなよなあ〜自分で行けよ」

「ほお誰がバカ魔王だと？居候が偉そうに言うな」

「は、ハルト!!あ、あはははく……た、助けて!アナザーダイバー2nd!」

「逃すかあ!!アナザーオートバジン!」

『come closer』

「待てやー!」

「ひいひい!」

と騒がしくバイクで追いかけてっこをしている魔王と勇者であった、本来なら煩わしいと排除に動くのだが

「……………」

彼女の目には何を感じたのだろうか…ただ一言

「似ておるの、あの男の目…むくと同じじや…誰か知らんが…まあ良い今日はもう寝るとするか」

それだけ言うと彼女は宇宙へと帰るのであった

t o b e c o n t i n u e d

祝勝会!!

と
前回 諸々解決し人格統合を果たせたハルトは仲間達を連れて逢魔に一時帰還する

「うおおおお!!」

デザグラ運営から渡された大量のグルメ食材を応援してくれるファンがフルコース完成を記念して贈られた初代メルク包丁で捌いていた

「ふはははは！ 馴染む！ 馴染むぞ！ このメルク包丁！ 手に吸い付くように馴染む！ これまで以上に腕が上がった気がするぞ……まあアレだ……最高にハイって奴だあ!!」

「陛下！ デビル大蛇の肉が来ました！」

「任せておけ…見よ！メルク包丁！食技！グルメ細胞!!」

ジュバババババ!!と音がすると共に巨大なデビル大蛇（原種）も綺麗なブロック肉に速変わりである

「まあ、こんなもんよ…あ！そのスタッフさん！そのシヤクレノドンで出汁をとってね！ラーメンのスープにするから！あ、そのタワーバーガー…トリコバーガーだっけ？それはナツキのセイバーオルタに渡して!!付け合わせでポテトも！」

「は、はい!!」

「骨無しサンマは外の屋台で炭火焼きするから、そのまま大丈夫だよ！ちよつと待ってフグ鯨は俺が捌くから触らないで！そして見るが良い！俺のフグ鯨捌きを!!よし完了！お酒用意して！確か美味しいのは…熱爛だっけ?…そだ！白いリーゼントの爺さんが来るけど来賓だから！はいそのスタッフ！隠れて七味ワインを飲まない!!」

と厨房で忙しなく動くハルトに対して

「いや魔王ちゃんさ…ねえ」

「宴会の主役が何しているのだ」

「ま、まあ…魔王様じゃないと捌けない食材がありますからね」

「久しぶりじゃのおハルト坊のフルコースを食べるのは…のおウオズ？」

「ええ…しかも今回は骨無しサンマや他の食材まで…楽しみですね」

ウオズと四天王が感心している中、ハルトと目線が合うなり

「お前たち！駄弁らないでハウンド達みたいに宴会の準備する！じゃないと今日の飯は無し！いや味消し生姜のガリとグルメタウンの星無巨大缶ジュースだけにするぞ!!」

『鬼か』

「鬼だし悪魔だし魔王ですが何か？」

「「「我等が魔王様！何なりとお申し付けください！」「」」

『お前等それで良いのか？』

正に、この王あつてこの部下ありである

「ウオズは来賓を出迎えて！他ヤクツキとフィーニスは配膳！ジヨウゲンとカゲンは会場設営ね!!!」

「「「はっ!!」「」」

散ッ！と各々が行動を開始する5人を見送ると

「やれやれ仕方ないご褒美に宝石の肉盛り合わせでも作るかな」

肩を竦めながらも笑顔を浮かべるハルトがいたが

「ほお、オレ達には何もなしか」

「安心しろ既に特別デザート 虹の実ゼリーを拵えてるから」

キャロルの問いかけにハルトが笑っていたのであつた

一方その頃

「スツゲエな戦兎！こんな宴会初めてだな！」

「こ、この島はどんな原理で動いているんだ？どんな科学で……」

「この野菜炒め美味しいじゃねえか、アイツ等も連れてくりや良かったな…ヒゲ？つて…
いねえ？アイツどこ行つた？」

「おい見ろ、お前達!!」

と玄德が『親しみやすさ』と書かれた文字Tを見せると周りは

「ちよっ! 辞めなさいよ恥ずかしい!」

「こんな所で見せびらかしてんじやねえよ玄さん!」

「ああ大丈夫だと思うぞ」

「「え?」」

一海が指差した先では宴会に参加している逢魔の国民達が口々に話す

「あ! ハルト様と同じ服着てる」

「本当ねえ、流行ってるのかしら?」

「よく似合ってるわねえ、お兄さん」

好意的に捉えられている光景に3人の口が空いたまま塞がらないでいた

「来たぞ！俺の時代が！！」

「こ、こんな事が…」

「マジでありえねえ」

「言ったら？魔王はあのヒゲと同じセンスだって」

「ど…どんな奴なんだ魔王」

戦慄している3人の所にエルフナインと東が近づいていき

「は、初めまして！！僕エルフナインって言います！その…戦兎さんのファンです！握手してくださいー！」

「お、おう…ありがとう…何か恥ずかしいな」

わあ!と喜ぶ彼女はそのまま笑顔で

「あ、後ですね…その…この…」

エルフナインは恥ずかしそうに自作のビルドドライバーを見せると4人は驚愕した

「一体これをどこで!…君もまさか旧世界の」

「ち、違います!…えつとですね」

エルフナインが自らの力を手に入れた経緯を話すと

「そうなのか…しかしよく出来てるな俺のと大差ない」

「本当ですか!!」

わーい！と喜ぶエルフナインに対して東も同じように

「あ、そうだ！あのねコレなんだけど戦兎さんなら何か知ってるんじゃないかなあ〜つて」

東は東で先日 八舞事件の折に発見したファントムリキッドを戦兎に渡すと戦兎は興味津々に

「これは？」

「温泉掘ったら地面から出たんだよね〜コレ、東さん達はファントムリキッドって呼んでるんだ〜調べて分かったのはネビュラガスが液体になった位しか分からなくて…専門家なら何か分からないかなって」

「ま、まあ確かに俺以上の専門家はいないか…」

「最悪、水脈を潰す予定だったんだけど何かの役に立てば良いかなあ〜ってそしたらハ

ルくん…魔王がね『戦兎さんがいるなら渡して何か人のためになるものを作って欲しい』って」

「……………そっか、分かった俺達でも調べてみるよ」

「本当…ありがとう!!…あーごめん…実は束さんも皆のファンだからサインお願い出来ないかなあ〜」

結果4人のサイン色紙を束は手に入れたのであった

—————

その頃 ナツキは

「あ、ハルトからだ…えーとトリコバーガー?…つてのが来たけど…デケエ!」

「ほお…これは中々、よし…むぐむぐ…」

「食べ初めてる!？」

「ナツキ、千冬姉さんとハルト義兄さんから差し入れだ…何でもベジタブルスカイ?にあるフライドポテトの泉から取ったポテトを付け合わせにと」

「え……フライドポテトの泉って何!？」

「な……何だその素晴らしい泉は!!まさか……遙か遠き理想郷(アヴァロン)はそこにあっただか!マドカよそこへ直ぐに案内せよ!!円卓の騎士を呼べマスター!!」

「違うよ!アヴァロンなんてないから!あるのは野菜とフライドポテトが湧き出る泉だよ!マーリンがそんな所にいたら油まみれで泣くと思うよ!!」

「アイツは泣け」

「マーリン可哀想じゃない!？」

「これが昔読んだ円卓の騎士を束ねた騎士王なのか…何かイメージと…いや…まあ…
良いか今なら」

マドカは周りを見るなりナツキの隣に座りサラリと腕を組む

「マドカさん!?!」

「エルフナインや八舞姉妹もないのだ…お前を私が独り占めしても罰は当たるまい」

「い、いやまあその…」

「だろナツキ?」

「…分かったよ」

「それで良いさ…そろそろ始まるようだな」

目線の先には壇上に立つハルトの姿があった

「皆!!今回は集まってくれてありがとう!長い挨拶は嫌いだから、じゃあ早速行くよ!乾杯!!」

それから逢魔国内での大宴会が始まったのである

「つしやあ!皆楽しんでるう!？」

ハルトはノリノリでウオズや四天王に声をかけると

「祝え!分裂した我が魔王が再び一つになった瞬間を!!」

「いやあ!めでたいねえ!!」

「ええ!! 1人でも手にかかる問題児が4人になってましたからね!」

「うむ! 我々も大変だった!」

「お主達はまあ中々毒を吐くの…いや確かに大変だった…主に力のハルト坊の奇行は」

「いやアレは我が魔王の平常運転ですよ?」

「」「確かに」」

「テメエ等…本人の前で良い度胸してやがるな」

ハルトは額に怒りのマークを浮かべるが溜息を吐き

「ま、今回の手柄で不問にするか…ほら追加メニューだ牛豚鳥の生姜焼きとトンカツに
ビリオンバードの焼き鳥だ」

「ハルト様！私には「わーってる、ほらブランデーの樽だ」感謝！では俺は次郎殿と飲んで参ります」

「あの人と!?!倒れるよカゲンちゃん!?!」

「いやいやカゲンも太陽酒（サマーウイスキー）を飲んで普通にされてるんですから大丈夫ですよ」

「相変わらずどんな肝臓をしとるのじゃ？」

皆が驚きつつも楽しそうにしているのに気分を良くしていると

「おい魔王、トリコバーガーとポテトをお代わりだ」

「もう食べたの？セイバーオルタ!?!」

「はいよー」

「ちよつと待ちなさいな」

「ん？どつたのジャンヌ？寿司はサビ抜きが良い？」

「有りで大丈夫だけど…じゃない！何で私のマスターがそんな冷血女の言う事を聞いているのよ!!」

「あんなジャンヌ、今回俺は宴会の幹事だ参加者をもてなすのが俺の仕事でもある」

「けどアンタ主役じゃない」

「まあね…ああ俺が好きでやってるから気にしないでよ」

「……………」

「んじゃ俺は他の人と挨拶しなきゃだから後でねー!」

と離れるハルトを見たジャンヌ・オルタにウオズが串焼き片手に話しかける

「慣れて下さいジャンヌ、アレが我が魔王です」

「知ってるわよ、アンタ達より付き合い長いんだから」

「でしようね……ゲーム画面越しとは言え世界を救った人ですから」

「ま、本人は一生知らない話でしょうけど……それよりその串焼き何よ？」

「これは我が魔王曰く……ビリオンバードの焼き鳥との事……意外といけますね塩も悪くない」

「寄越しなさい、タレでね」

「はい、では貴女も歓迎しましょう！我が魔王の我儘に振り回される家臣団（苦勞人同

盟)に!」

「いや入りたくわね…その同盟、てか一番苦労してるのは」

—————

「よお!ハウンド!楽しんでるかい!」

「はっ!だろろうお前達!!」

「おおおお!」

「いやあ良かった良かった…あ、追加の蟹ブタと羽衣レタス炒めとウインナーズで作った麻婆茄子と霜降り豆腐の麻婆豆腐だ!…因みに辛いから苦手な人は気をつけてね」

「ありがとうございます、陛下」

「気にすんなって好きでやってる事だしな、あとコレな」

とハルトは酒豪諸島から採取したビールとワインの樽を渡すとクロイントルーパー達は喜びの声をあげる

「「「うおおおお！流石陛下!!!」」」

「それとハウンドにはエメラルドラゴンのワインなボトルでやるよ」

「よろしいのですか!?!こんな立派な酒を！」

「ああ友達だからな」

「え？」

「黒ハルトにやられた時、俺を友と呼んで守ってくれたからな」

ははは！と笑うハルトは対等以上の友達なんてリムルさんくらいしか思いつかない、ウオズ達はちよつと違う…だがハウンド達クロントルーパーはあの時、自分を友と呼び守るとならば信頼には必ず応えるとね

「陛下…」

「俺に取っては大事な友達だ、今後ともよろしく頼むぜハウンド」

「此方こそよろしく頼みますハルト」

そう笑いながら盃を交わすのであった

—————

そして

「よお楽しんでるか？黒とジャマトの俺」

「ああ……つか本当に良いのか俺達まで？」

「まあ協力に感謝してだな」

「そう言つて貰えると助かる……つか今回の件……まさか海東さんが犯人つて」

「ま、お陰でデザグラの膿は無くなったんだし苗も戻ってきた結果オーライじゃん」

「そうだなあ……あ……最初に謝つとくうちの馬鹿どもが……」

「あ?」

ハルト（魔王）の視線には壇上にマイク片手に

「テメエ等！アタシの歌を聞けえ!!」

マイクパフォーマンスをするクリスとドラムをする冴に何故かギターを掻き鳴らす

ビートフォームのパンクジャックがいた

その隣のステージでは何故か大智とルサルカ、後ろにはDJのように立つアルキメデルが立っており

「ハルト、何しているのです？君と私、ルサルカとアルキメデルの4人でジャマーガーデンを結成したじゃありませんか！何の為です！」

「いや俺はそんな音楽グループを結成した覚えないけど？」

「正解はこのような場面の時に歌う為です！」

「俺の話聞いてる!？」

「行きますよ odds n' ends!!」

「いや聞けよ!!…ああもう！マイク貸せ!!」

と言いつつもノリノリで歌い踊るのは才覚なのか…原典だと道長パートを歌うハルトの姿に会場は盛り上がるのであった

「……………」

「何だ歓迎されてないって顔だな」

「んな訳ねえよ…ただ利用されたとは言え敵を宴会に誘うか普通」

「普通じゃないから誘ったんだよ」

「そうだな…取り敢えず礼は言っとく孤児院の奴らの件。本当にありがとう」

「別に良い」

「俺はヴェルザードやカフカと一緒に世界を旅する予定だ…何かあれば連絡してくれ俺

は「借りは返すだろ？」ああ」

「期待しないでおく」

「ほげげ」

と笑いながらグラスの酒をあおるのであった

—————

そしてハルトは身なりを整え、まるで最終決戦に向かうかのようなテンションで話しかけたのである

「すみません！サインください!!」

ギーツこと英寿とジーンに色紙を出すのであった

「ああこつちも楽しい祭りに呼んでもらえたからな」

「同じ感動をした仲間だしね」

書いてくれた姿に感謝を伝えるとハルトは更なる色紙を携えてビルド組の方へと向かい皆さんのサインを頂いたのでが

「貴様が魔王か？」

遂に出会ってしまったのだ氷室玄徳と、対面したハルトはキラキラ目を輝かせて

「はい！常葉ハルト！魔王やらせてもらってます！あと！」

『今日のシェフ！』（オーラア！）

「です！」

「ほお…中々良いセンスをしているな」

『親しみやすさ』（オーラア！）

「貴方も……流石です！」

「お前もな……よし何着がお前に譲ってやろう」

「あ、ありがとうございます!!」

着ている文字Tを見せ、固い握手をし何か通じ合う2人にビルド組が騒めく

「ええ……」

「さいつあくだ」

「マジでヒゲと同じセンスしてやがったよ魔王」

「え？何で皆さんドン引きしてるんです？」

『いや分かるだろう』

そして

「師匠！楽しんでますか!!」

「ああ、俺は普通に飲食出来ないけどな」

「変わりに余興もありますよ！」

「余興？」

「題してナツキ危機一髪！」

「名前からして不穏な空気がするんだが…」

「ナツキを打ち上げ花火が入った樽に入れて皆で剣を樽に刺して打ち上がった人の負けです」

「それだと彼も吹き飛ぶよな？」

「ええ……本当に汚い花火ですね」

「魔王だな本当」

「あ、嘘ですよ安心して下さいな、そんな悪の大魔王みたいな余興しませんよ」

「そ、そうだな……あ……そだ……今度里帰りするけどお前も来るか？」

「里帰り?……てっ!まさか沢芽市に!」

「ああ「是非お願いします!!」お、おう予定空けといてくれよな」

「はい!何があっても必ず行きます!!ビートライダーのダンス見たいしシャルモンとか行きたいです!!」

「ははは……っ!」

うおお！と目を爛々と輝かせるハルトの背後に恐ろしい圧を感じた紘太は恐る恐る間合いを取り怪しいと思つたハルトも気配を感じ後ろを見ると

「貴様…妻たるオレ達をおいて楽しんでるじゃないか？ええハルト？」

「キャロリンに賛成、少しお話しが必要だね」

「そこに直れ…取り敢えず説教からだ」

「逃げてもバインドで縛るから安心してね」

「少しOHANASHIをしましょうよ旦那様？」

「頑張れハルト…私も参戦する」

怒れる瞳を宿す自身の妻達を前にジリジリと下がる…まるで熊に会つた時の対処を

しているが

「え？ちよつ！ま……」

「問答無用だ……失礼しました葛葉紘太さん、オレはキャロル・マールス・デインハイム……ハルトの妻です以後お見知りおきを」

「あ、ああ宜しく……そうか君達がか……ハルトを宜しくな無鉄砲で単純で能天気な奴だけど俺の弟子だ苦勞かけれると思うが頼むよ」

「はいお任せしてください、では行くぞハルト」

「し、師匠！助けてえええええええ!!」

「すまんハルト……俺は無力だ」

「神様の言う事つすかああああああああ!!」

さて見事に連れてかれた俺は彼女達の前で正座し説教が始まった

「まあアレだ、貴様の問題行動は今に始まった事ではないが…」

「そうだねえ〜ハルくんはノリと勢いで出来てるから〜」

「ハルト、流石に今回の件は肝が冷えたぞ」

「ああ言う時はもつと冷静に考えて欲しいかな君が消えたら…私達は寂しいよ」

「そうねえ。流石に私も結婚前に旦那様に先立たれるのは嫌よ…だから後追いつるわ必ずね」

「はい…次回から気をつけます…今回は手遅れなので…」

「素直で宜しい…さてハルト、貴様が婚約指輪感覚でライダーシステムを渡しているが

…まだ一人渡してない奴がいるだろう」

「ああ、銀狼のこと？」

「あの戦いでセンスを破ったカフカを単独で引き受けた武功…オレはアイツを認めてやらんでもない…反対のものはいるか！」

キャロルの言葉に周囲は沈黙すると

「賛成多数だな銀狼」

「うん…ハルト、その宜しく…」

「おう…実は最初から決めてんだよ」

ハルトが渡したアタッシュケースの中には…宿るのは青い銃と複数のプログライズ
キー

そして絶滅動物十種の力を宿したダイヤルをつけたキーが鎮座していたのである

六喰プラネット 一幕 懐かしき怨敵

前回 大規模な祝勝会を終えたハルト達はピースメーカー艦内で簡易的な報告をラタトスクの面々としていた

『成る程ね並行世界の…』

「まあ、この世界には偉大な彼等がいる限り手を伸ばす事はないでしょうな…寧ろ精霊の境遇知ったら絶対に助けますからね…」

最強で無敵なレジエンドライダーの皆さまがいますし…つか師匠や呉島主任、ミツチー、ザック、鳳蓮さんや城之内さんがいると知っているのかDEMよ恐らくあの人達が暴れたら野望はすぐに潰えるぞ…取り敢えずサイン欲しい…更にビルド組の皆さん、あの場には居なかったが北都を三羽鳥や葛城親子、そしてサイボーグ内海も…サインや

写真頼めないかなあ……しかも何より

「ギーツがいるって事はタイクーン達もいるって事じゃん！何故その思考に至らなかった!!こんちくしょう!!」

床にヒビが入るくらいの怒り任せに踏み込むと

『ダメだコイツ大量に邪念が混ざってやがる』

邪念かな相棒？別のことで頷くハルトに琴里は新しい仕事と前振りして話を始めた

『それか……アンタのドラゴンが地上からビーム撃った結果、新しい精霊が見つかったのよ』

「ドラゴン？……え？」

ハルトは映像でビームを撃つデロウスを見て理解した

『調べてみたらビームが2回直撃してるのよね』

「嘘だろ！地上から宇宙のターゲットを射抜く何てすげえエイム力なんだ！！やるなデロウスー！」

『褒めてる場合か！！…全く…便宜上の名前はゾディアックよ』

「ぞ…ゾディアーツだと！」

『微妙に違う!!』

ラタトスクから渡された映像は明らかに宇宙空間に漂うチャイナドレスのような衣装と何処かのキングダムなゲームに出る鍵の剣みたいなものをもっている女の子であつた

「ふーん…この子が」

『そうよ取り敢えず彼女を起こさないとダメなんだけどね』

「はははは！それならこつちに任せておけ少年君は俺達を送ろうじゃないか」

『出来るんですかハルトさん！』

「あつたり前よ少年君！俺達の船 ピースメーカーは本物の宇宙戦艦よ自力で大気圏突入と離脱も行えるのさー」

『スゲエ…』

「ですが陛下、彼を送るだけならアナザーフォーゼに変身するだけで良いのでは？船よ
り接触もしやすいかと…ぶつちやけ燃料が勿体無いのと大気圏突入離脱の装備換装の
手間が面倒なので」

「ハウンド……お前天才か!!」

「後半部分聞こえてた魔王ちゃん!？」

「いや待てよ…そうだ!その手があったぞお!皆!!俺に良い考えがある!」

「その台詞を言う奴は大体失敗するんですが我が魔王?」

「ウオズ、黙っているハルト様の事だきつと誰も思いつかないような名案が浮かんでくるかもしれない!」

「カゲン先輩、それは無いですよ…だって魔王様ですよ?」

「そーそー魔王ちゃんだしね」

「うむ、どーせ脳筋的な解決方法しかない」

「テメエ等、俺をイジメて楽しいか?……つたく見てろ」

ハルトが意気揚々と取り出したのはフォーゼの持つスイッチ その最後を飾る40番

最強フォームに至るスイッチ コズミックスイッチだ

「このスイッチの力を使えば変身して直ぐに宇宙空間へワープが出来る!!」

「あ、珍しく考えてる」

ナツキが感心するがカゲンが珍しく動き

「ナツキ、貴様は不敬だ!」

「理不尽!!」

カゲンの右ストレートがナツキの顔面を捉えて吹き飛ばした

『ライダーってのは何でもありませんか!?!』

「君も同じ仮面ライダーだよ少年君? よし行くぞ!」

『danger』

「……あれ? 使えない?」

『danger danger』

「デンジャラスゾンビ?」

「んな訳あるか!」

「そつかあ…まだ使えないかあ」

ハルトは残念そうにコズミックスイッチを懐にしまうも

「ま、アナザーフォーゼなら問題なく宇宙に行けるだろうな…いや待てよヴァルゴになつてダークネビュラ経由で宇宙行く？」

「精霊会う前に俺達がとんでもない目に遭「おい」え？な…っ！」

頬を腫らしたナツキがやれやれとしたり顔で言うのに腹が立ったのでナツキからアナザーメテオウオツチを引ったくり起動、強引に体へ振り込んだ

隕石が減り込んだような頭部と元の武器を彷彿とさせるガントレットには惑星を思わせるような出立の石が嵌められている

一人で戦う流れ星

『メテオ』

アナザーメテオ

「いやちよっ！何でいきなり変身させたのさ！」

「ウオズは宇宙行けるから一緒に来て、ハウンドは暇な連中集めて戦闘配置」

「お供いたします！」

「そんでハウンド、ナツキを成層圏から落とすぞ」

「御意」

「御意じゃないよ！……お……お前まさか！」

「取り敢えず大気圏の摩擦熱に耐えながら【我が魂は！ゼクトと共にありい!!】と言いな
がら地球に不時着しろ落ちたら王の勅令で動けねえようにしとくから」

「それ違うメテオ!!嫌がらせにしては性格悪いわ！」

「ああ安心しろアナザーメテオ達は地面に直撃する前に回収するから…お前は地面とキスでもしてろ」

「体が砕け散るわ!!」

「さて冗談はさておき「冗談には聞こえなかったけど!」ナツキうつさい、んで…いつ宇宙行く?」

『あの…俺にも宇宙の力を宿した本とがあります?』

「フォーゼのレジェンドライドブックがあれば大丈夫大丈夫」

『それ、ハルトさんが持つてる奴ですよね?貸してくれるんですか?』

「へ?貸さないけど?」

「いや貸してやれよ!!この状況で貸さないとか正気か!!」

「やなこった」

「子供かよ…キャロルさん！千冬さん！説得手伝ってください！」

ナツキはハルトの奥さんの中でマトモな部類に入る彼女達にお願いすると千冬も納得したのか

「おいハルト貸してやれ」

「やだ！」

「子供じゃないのだ別に良いだろう、彼も終わったら返すだろう？なら少しくらい良いではないか」

「……………」

「おいハルト、あいつに貸すのは逢魔の為でもある…そもそもオレ達がこの世界にいる理由は国に空間震を叩き込む精霊を見つけることだ…目的を忘れるな」

「はあ…しゃあなしか…必ず返せよ少年君」

『コネクト』

魔法を使いライドブックを土道に送り準備完了なのだが一つ問題があった

『あの…説得終わった後の帰り道どうするんです？』

「そんなの決まってるよなウオズ」

「はい、勿論決まっています我が魔王」

2人は冷静にナツキの肩を力強く締め上げる

「あ、あの2人とも何で僕の肩を叩くのでしょうか？」

「そりやお前が俺達の盾…ごほん…：大事なサーフボードだからな！」

「何故ひどく言い直した!!やだぞ!てか知ってんだからな!お前達普通に大気圏突入で
きる事!バリア展開したりパラシュート使えるの知ってんだからな!」

「何処でそれを…ああ死に戻りしたの?」

「ああ…エルフナインがな…あのゾディアックにセクハラした結果…ある奴から提案さ
れた罰ゲームで大気圏突入してと言われてな…」

「いやあの子にセクハラしたのかよ…：つか誰がそんな酷い事を!くそっ!一体誰なん
だ!そんな愉快な催しを考えた天才は!エボルトか!!ダグバか!!」

「お前だあ!!お前以外の誰がいる!」

「つか実行したのかその世界線の俺は…流石の俺でもやらねえぞ」

「未遂ですが我が魔王もやろうとしてましたよね？」

「記憶にございません」

「それで誤魔化せると思ってるの!？」

「ヤハ！」

「あれ？まだ人格統合しきれてない？」

「安心しろ惚けているだけだ、おいハルト！」

「ん？」

「真面目にやれ」

「わーってるよ」

「それと一言…これ以上妻を増やそうものなら…分かっているな」

「誰が増やすか」

しかしハルトは知らなかった後、何人か増える事を…その度にキャロル達からしぼかれる未来が待っている事を!!

「はいそこ不穏なモノログを残すな!!」

「ほお……」

「キャロルも間に受けない!慌てるな皆んな!これは孔明の罠だ!」

「いやあの教授はそんな事…微妙にしそうで怖いわね」

「俺と同じく癖ある問題児を束ね胃薬が友達なエルメロイ二世に謝れ!!」

「え？問題児を束ねてる？冗談よねマスター？寧ろアンタが問題児じゃない」

「あれえ！ジャンヌは俺の味方だと思ってたのに!!」

「やれやれ…我が魔王行きますよ」

「スルー!?いやまあ行くけど……ま、あんな目されちゃ放っておけねえな」

「何か言ったかハルト？」

「ん？どうやってお前を宇宙空間に放置してやろうかなあつて言った」

「マジでサーフボードしないよな！」

「大丈夫大丈夫、危なくなったらするから」

「笑えねえんだけど!!」

笑いながらハルト達は一旦地上で土道達と合流する

「いやあ今日は絶好の打ち上げ日和だな!」

「それだけ聞くとまるで花火大会ですね…」

「ま、打ち上がるのは俺達だかな」

「けど本当にこれで宇宙に行けるんですか?」

「取り敢えず頑張る…よしナツキ」

「ん? 何だよ」

「プレゼンターに会ってこい（打ち上げるぞ）」

「へ？いやプレゼンターって誰？」

「は？フォーゼ見直せよ？まあアレだ、銀狼頼む」

「ん」

ハルトが銀狼を呼ぶとスマホを操作して何か呼び出した…それは黄色の巨大ロボ
パワーデザイナー それを打ち上げモードに移行したが

「けどマツシグラのパワーでも宇宙へは行けないよ」

「知ってるラビットハッチに行けなかったのはフォーゼで見たからな」

「なら何でパワーデザイナーを？」

「このエネルギーを貯める為だ」

『フォーゼ：ロケット・オン』

アナザーフォーゼに変身しロケットモジュールを片手に装備するとパワーダイザーに足場を固定しエネルギーを蒸し始めた

「あの……何されてるのです？我が魔王」

「ジオウはフォーゼアーマーになったから宇宙に行けた……ならアナザーフォーゼの場合はロケットモジュールの力を溜め込む必要があるんじゃない？」

「普通ならそうですよ、我が魔王は怪人でもありませんし猿武や食技も納めてますので普通に地球の重力振り切れますよ？」

「……………と言うのがパターンBな訳だ」

「他のパターンは？ 脳筋魔王」

「ナツキだけを括り付けてそのまま打ち上げる」

「俺だけ!？」

「ハルト…」

「ごめん銀狼」

「仕方ないよ変わりにデート行こう」

「おう」

「やった」

「っ！ハルト伏せろ!!」

ナツキの言葉に弾かれたように回避行動を取る全員、ハルトは銀狼を守るように飛び出し庇うと久しぶりにファイズフォンXをブラスターモードにして構えた

「誰だ!!」

するとガサガサと近くの垣根が揺れると中から現れたのは最早、久しぶりとも言える顔ぶれであった

「ネオタイムジャッカーか…」

「久しぶりですね魔王」

「何の用？俺達今、打ち上げ花火するのに忙しいんだけどパターンC、ナツキだけを縛りつけて打ち上げないと行けないんだ！」

「ハルト…取り敢えずそのプランと両手に持つてるロープを捨てろ！」

「それは失礼：ですが我々の目的はその打ち上げ阻止なのですよ」

「そんな事させない！俺達の花火大会を邪魔なんてさせるか!!」

「目的変わってるゾディアックに会う為に宇宙に行くんじゃないか?」

「それはついでだな銀狼」

「それがメインイベントですよ我が魔王」

「いやハルト、すまない今心情的にネオタイムジャッカーの味方だわ」

「安心しろ冗談だ」

「笑えねえよ」

「それに我々だけだと思いませんか？」

クジヨーが指を鳴らすと現れたのは大量のB1バトルドロイドの群れに砲撃役のス
パイダードロイドもいるときた

「え……え！」

初めての展開に士道は慌てふためく中、鉄火場になれている面々は欠伸をする始末で
ある

こんなの脅威のうちに入らないと

「俺を倒したいならこれの10倍は連れてこい、ウオズ」

「銀狼嬢はお任せください」

「ん、頼んだ」

「ちよつと待った私もやるから守らなくて良い」

「なら俺が守るから安心して戦え」

「分かった」

「よしつと」

アナザーフォーゼは一旦変身解除して改めてクジヨーを視界にとらえた

「テメエ等…まだ懲りずに俺に挑むの？」

「ええ何度でも…アダムの裏切りから組織を立て直すのに時間がかかりましたが…これから再び我々ネオタイムジャッカーが相手になりますよ魔王軍」

「そうかいまた潰してやるよ俺の愛しき敵対者…そうだ俺達にも新入りがいてな、ほら

挨拶」

「!!!」

ネオタイムジャッカーがいた中心を撃ち抜くのは高出力の異次元レーザー、それを放ったのは竜王の系譜にしてハルトのパートナー デロウスである

「おっと失礼、新しい仲間はやいなもんでね挨拶する口より先にレーザーが出ちまつたみたいだ」

「ペットは飼い主に似るな」

「お前もくraitたいかなツキ？」

「あ…あははは…ど、ドラゴン…」

突如現れたデロウスに土道は引き笑いが止まらないでいるも、その中心にいたネオタ

イムジャツカーの面々は何と無傷であった

「ま、中々の速度だったが俺の建築速度には勝てねえみてえだな！」

そこにいたのはネオタイムジャツカーの戦闘担当 レックこと仮面ライダーシーカー・パワードビルダーフォームか

「ならコレはどうかしら！」

突如、デロウスの背から聞こえた声と共に巻き起こる幻想の炎がシーカーが作る壁を焼き払ったのだ

「んな！」

「アレは…まさか!!」

「そうよ！恐れなさい！慄きなさい！私こそが竜の魔女 アヴェンジャー！魔王 常葉

ハルトのサーヴァントよ！」

「ジャンヌ・オルタ!? 魔王の奴いつのまに…だが」

その手にあるギガントブラスターで門を作り攻撃を逸らしたとなると予想通りというべきが、デロウスのレーザー光線は別に作られた門から出てきた射線にはハルトがいる

「危ない！」

「問題ねえよ少年君、なあカリユブデイス」

『カリユブデイス』

「その通りでございますハルト様！」

アルターブックを開き現れたメギドがレーザー光線を大口開けて飲み込んだのであ

る

「調子はどう？ノエルからやられた傷は癒えた？」

「はい！存分に休んだ分働かせて頂きます！」

「流星は俺が作ったメギドだ、産みの親として鼻が高いよ」

ハルトはカリユブデイスの頭を撫でると改めて敵を見る

「んじや面子も揃ったし、行くぞ野郎ども」

『グランドジオウ』

「ええ我が魔王」

『アナザーギンガ』

「さっさと終わらせないとだな」

『ゲイツマジエステイ』

「このまま差し込んでキーを開ける！」

『BULLET！オーソライズ！』

「え？ちよつ！…えーいままよ！」

『ブレイブドラゴン！』

「「「変身!!」」」

『SHOT RISE』『烈火抜刀！』

『アナザーライダー！グランドジオウ!!／ゲイツマジエステイ!!』

『アナザーファイナリー』

『シューティンググウルフ！』

『ブレイブドラゴン!!』

「ほお壮观ですね、ではこちらも変身」

『仮面ライダージュウガ!』

「アマゾン」

『シグマ』

ジュウガとアマゾンシグマに変身し全員が武器を構えると近くの枝が折れたと同時に一斉に戦闘が開始され

短編 ハイパーバトル風?

「やあ皆！俺はナツキ、今日は俺達の話を集集編のように話していこうと思ったんだけど…ギャラルホルンが新しい世界を出してきたか…よし行くぞ！」

そしてナツキはギャラルホルンを使い世界を超えるのだが辺りは自分のいる世界と何ら変わりなかった

「え？何この世界？」

と疑問に思っていると突然、大量の怪人軍団が現れた

「っ！」

『ゲイツ』

ナツキはアナザーゲイツに変身しアナザージカンザックスで応戦するが

「て、敵の数が多すぎる!!」

他のアナザーライダーに切り替えられないしていると背後にシアゴーストが…まずいやられる！

そう思った刹那

『ファイナルベント』

「!!!」

「たあ！」

サイの肩に乗り相手に体当たりを仕掛ける見覚えのある紫蛇と

『アナザーエクスプロージョン！』

星の雨が降り注ぎ、更に

『ゾンジス／ザモナス！タイムブレイク!!』

2人のライダーキックが怪人達を蹴散らしたのである

駆けつけたのは言うまでもないハルト、ウオズ、ジヨウゲン、カゲンの4人であった

「大丈夫ナツキちゃん？」

「申し訳ありません、遅くなりました」

「大丈夫かナツキ？」

「安心しろ！俺達がついてる！」

ん？ちよつと待て……この人達こんなに俺に親切だったか？

「どうしたんです？何か皆変ですよ？……つかハルト！お前なんでそんなに爽やかなんだよ！基本お前悪いやつじゃん！」

「何言ってるんだナツキ！俺達の使命を忘れたのか！」

「使命？」

この脳筋……遂に完全に頭が逝ったか……変なヒーロー感出てるしと思ったら魔王軍の連中もだ

「そうです！我等は人間の」

「自由と」「平和を守る」

「」「ライダー同盟だ！」「」

何故かポーズを決める4人に思わずナツキはキョトンとした顔で

「……………え？」

そんなのお構いなしにアナザー王蛇は

「皆！行くぞ！！」

「「おう！！」」

その言葉を合図に再び敵陣に切り込む4人を見て

「やっぱり何か変だなあ…ハルトトつてあんな事言う？…まあ良いか今はそんな事よりも…俺も戦うぜ！」

4人に加勢して攻撃を加え怪人軍団が全員怯んだと同時に

「今だ！」

「おう！」「そうだね！」

『FINISH TIME!』

「決めるぞウオズ！」

『FINAL VENT』

「はい！」

『アナザー… エクスプロージョン!』

4人のライダーキックは怪人軍団を一掃したのだが、全員のいる場所に巨大な爆破が起これると巻き込まれて変身解除され転がる4人の上には

「ふははははは！何故か本編よりも早く登場してしまったよ！」

「素晴らしいです！ウエストコット様！」

白髪の青年と嘗て八舞姉妹を狙いハルトに返り討ちにされた最強さんこと エレン

さんではないか

「あ、アイツはDEMの社長 アイザック・ウエストコット!!」

「え? あんなのが!! DEMの社長!?!」

「ナツキ、見た目で侮るのは危険です彼はこのミラクルワールドの真の支配者なのです
!」

「え? み、ミラクルワールド? え?」

「油断するな奴は本編でまだ出てないのに番外編が初出のやばい奴になっている!」

「カゲンちゃんの発言がメタ過ぎてやばいよ!」

「愚かなライダー同盟よ消え去りなさい!」

何故かアイザックは右手から火球を放ち全員に当たろうとしてその時

『烈火抜刀！クリムゾンドラゴン!!』

「はあ!!」

突如、現れたセイバーが火球を一刀両断したのである

「へ？土道君？」

「大丈夫ですか皆さん！加勢に来ました！」

変身解除して駆け寄る土道に対してハルトは軽口を叩く

「遅いじゃないか少年君」

「前にハルトさんが言ってたでしよ主役は遅れてやってくるって」

「だな」

「立てますか？ 師匠？」

「え？ ハルトが師匠？ どゆこと？」

「誰に言っている弟子よ…皆？ まだ行けるよね！」

「勿論ですとも！」

「無論だ！」 「俺達もブレイブに行くよ！」

「ナツキ！」

「ああ！ もう何でも良いや！ やってやるぞお！」

「おのれ…何故か知らないが僕が雑な悪役にされているだとお！」

そんな中、ハルトは堂々とアイザックに啖呵を切る

「初対面で済まないがアイザック・ウエストコット！俺は君が嫌いだ！…俺が嫌いな家族と愚妹の彼氏に匹敵するレベルで嫌いだ！」

「初対面だったの!?一応だけどこの世界の支配者なんだよね!?つかミラクルワールドのハルトも家族仲悪いんかい！初対面なのにかんりの嫌われようじゃん！何したのウエストコットの奴！」

「具体的には君を倒さないと妻の1人である二亜が遠くない未来に絶望から反転しかけ、お前の闇討ちで瀕死の重傷を負うからな！」

「あれ？妻？ハルトって二亜さん口説いてたか？つか反転って何？」

「何なら彼女はそもそも君主体の人体実験の被害者でもあるからここで彼女の恨みも含

めて倒させてもらおう！つか地獄に堕ちろ！！ウエストコット！！」

「急なメタ発言と、一部まだやつてもない事で僕はボコられるのか！！」

貴方に関しては原作での所業が所業なので割とメツタメタにさせてもらいます、人体実験はギルティだよ

「作者あ!？」

「それ以前、我々を誰だと思っているのです？」

「俺達は人類の自由と」「平和を守る」

「」「ライダー同盟だ!」「」

「行きますよ皆さん!」

「「「おう！」「」」」

全員がアイテムを構えるのである

『ブレイブドラゴン！ストームイーグル！西遊ジャーニー！』

『ジオウⅡ』

『アナザーギンガ』

『アナザーリバイブ剛烈！』

『ゾンジス／ザモナス』

「「「変身！！」「」」」

『烈火抜刀！クリムゾンドラゴン！！』

『RIDER TIME！仮面ライダーザモナス／ゾンジス！』

『ジオウⅡ』『リバイブ…剛烈』『ファイナリー』

「「こうなれば！！」」

「その言葉を合図に全員が構えると彼も何処から現れた怪人軍団を使役してきたではないか

「い、この数は…」

「何を怯む事がある！ナツキ、俺達ライダー同盟の絆は世界を超える!!」

「へ？」

聞き返そうとしたら何処から共なく現れた影が怪人軍団にライダーキックを浴びせて爆散させている現れたのはナツキでも知っている大英雄ではないか

「え…ちよつ！本物のダブルライダー!？」

「ほ……本郷さん！一文字さん!!良かった…無事だったんですね!!」

「ああ心配をかけたなハルト」

「遅いですよ本当に……」

「ば、バカな！お前達はDEMヨーロッパ支部の爆破事故に巻き込まれて死んだはずだ何故ここに……」

「貴様は知らないだろうから教えてやる……我等仮面ライダーは不死身だ……」

「そうだお前達のような悪を倒し、世界が平和になるその時まで俺達は歩みを止める事はない……」

そこに立つ2人 赤いマフラーが風に揺れ

原点にして頂点

技の仮面ライダー1号

力の仮面ライダー2号

見参!

「いや明らかに番外出て良い人達じゃない!」

「ぐぬぬ……かかれえ!」

「行くぞ!!」

1号の号令に弾かれるように全員が駆け抜けたのである

そして

「ダブルライダーキック!」

「おのれええええ!」

怪人軍団はハルト達により蹴散らされ、アイザックはダブルライダーキックで遠くま

で吹き飛ばされたのであった

全員が一緒の場所に集まると1号と2号はサイクロン号に乗っていた

「行くんですか？ ゆっくりしてけば良いのに」

「そうもいかないまだ世界にはDEMの陰謀により傷ついている人が大勢いる」

「彼等の為にも俺達は戦い続けるぜ」

「流石…本郷さん、一文字さん…頭が下がります!!」

「では、また会おう！」

「できれば本編にお願いします!!!」

ナツキのツッコミを無視してダブルライダーは走り去っていったのを見送ると

「まだDEMがある以上、戦いは続く…ナツキこれからも力を合わせて一緒に戦いましょう」

「ウオズさん…」

「人の自由と」「平和の為にな」

「ジヨウゲンさん、カゲンさん…」

「俺達は仲間だ、ずっとな」

「ハルト…ごめんやっぱりお前だけ何か慣れんわ…」

「「お前と出会えて、俺達は幸せだ」「」」

「皆…っ！」

「あはは…そうか…はは」

「おい何呑気に寝てんだ起きろボケ」

突然頭を叩かれ目を覚ます

「あいた!!…つてハルトか驚かせるなよ」

「寝てるお前が悪い…全くやる事沢山あるのに昼寝とは良い身分だな、お前」

「……………ん？あれ？なあハルト…ミラクルワールドは？本郷さんや一文字さんは？」

「お前…どんな夢見てたんだ？何であの偉大なお二人の名前が出てくる？」

「それにしても驚いたよ、ハルト…お前やウオズさんジョウゲンさん達が俺の事を大事

な仲間とか出会えて良かったとか思ってたとかさー」

「……………ドクター」

ハルトがドン引きしながらブレイクガンナーを取り出し マッドドクターを装填した

『TUNE MADDOCTOR!』

「……………え？」

「ナツキ…安心しろ俺が治してやるよ…頭の病気をな!!」

「え?や、やつぱり夢オチかよおおお!い、いやちよつ…ぎやああああああ!!」

余談だが、この夢の内容を後でハルトの奥さん達に話すと

「何だその綺麗なハルトは気持ち悪い」

「イメージ出来んな」

「そうだね！ハルクんに王道な正義のヒーローとか似合わないし！」

「もしハルトがそうなたら病院に連れて行くよ」

「そうねえ……あの……ごめんなさい……少し吐き気が……」

「解釈違い」

「そうだよなあ……綺麗なハルトって無いかあ〜」

やはりハルトは

「大変ですキャロル様!!陛下が街で女性にナンパをされています!」

「お前達行くぞ、あのバカはまだ懲りてないようだな」

「「「「おう!」」」」

「それ多分だけど道聞かれてるんじゃないや……」

数分後、逢魔の街で小さな爆破事故が起こったという

六喰プラネット二幕 かーなーり強い奴等！

前回のあらすじ

新たに発見された精霊に会う為に宇宙へ行くことになったハルト達、そんな彼等を邪魔すべく現れたのはネオタイムジャッカーとドロイド軍

今、戦端は再び開かれたのである

「え？ちよつ！」

士道は変身して訓練を重ねているものの実戦経験は無い、何なら初陣なまであるがロードオブワイズの鬼訓練を伊達に受けていない次第に空気にも慣れ火炎剣烈火を使えばバトルドロイドを切り捨てていく

「これでー！」

『ドラゴン一冊斬り！ファイヤー！』

「はあ!!」

そしてドロイドは爆散したのであった

「よし、皆の援護……に」

加勢にと思ったセイバーの目線の先には

「あはははは！死体は火葬するに限るわね！燃え尽きなさい!!」

「脳筋な主従ねアンタは四手で詰む！」

「やってみなさいな……デロウス！はかいこう○ん!!」

「!!!」

まるでポケ○ンのような指示にデロウスが従い口からレーザー光線を放つもアマゾンシグマは半身が抉れながらも立っていた

「化け物ね」

「君達と魔王には言われたくない言葉だ、それに」

すると体からゴボゴボと音が鳴り始めると黒いスライムのようなもの…正確に言えば進化した再生能力を持つ溶源性細胞が傷を修復したのである

「無駄だ私に死という概念はない」

「厄介な体質ね…なら予定通り火葬してあげるわ!!」

ジャンヌは火柱をアマゾンシグマに叩き込むと炎の中からシグマが飛び出してきたのである

その近くでは

『アナザーエクスプロージョン!』

『バレット! シューティングブラスト!!』

「はあ!!」

アナザーファイナリーとバルカンが必殺技でドロイドを蹴散らしていた

「え…ええ…」

「安心したまえ土道君、君は自分の身を守る事そして大事なのは実戦の空気に慣れる事だ露払いは私たちの仕事だからね」

「じゃあ次はコレで行ってみよう…じゃあハルト風に…えい」

『POWER』

シューティングウルフにより強化された腕力でキーのロックをこじ開けた銀狼は新しいキーをショットライザーに装填し引き金を引いた

『SHOT RISE!パンチングゴング!』

身軽な狼に変わるは腕力で全てを突破するゴリラ 両腕のガントレットで全てを破壊する

仮面ライダーバルカン・パンチングゴング

「これ…ハルト好きそうだね」

「実際、我が魔王と相性良いですよ」

「ナンダアレハ!」

「カンケイナイ!ヤツチマエ!」

「サンドバッグには華奢だけど…仕方ないか!」

やれやれと肩を竦めるウオズだが銀狼はお構いなしに今度はドロイドの攻撃を避けずに突き進み拳で蹴散らし始めたのであるが

「……………これロボットだよね?」

なら、とバルカンは自分のハッキング用端末を起動しバトルドロイドのプログラムをハッキングした

「私相手にロボット軍団で挑む?こんなファイアーウォールで?笑わせないでくれる?ブリキのおもちやめ!」

completeの文字と共に戦場に展開されていたバトルドロイド達は銀狼の傘下に収まったのである

「撃て」

その赤いレーザー光は嘗て主人だったもの達に牙を剥く

その頃 アナザーゲイツマジエステイはシーカーと戦っていた

「そらそらそらー！」

持ち前の建築能力を駆使して自身に優位な戦場を構築、そのまま高所からギガントブラスターで狙撃するがアナザーマジエステイも負けてはいない呼び出したギャレンラウザーを駆使して全弾撃ち落としたのである

「今度はこつちの番！」

『増幅…：ダイエンド』

ダイエンドの力を解放し右手を前に突き出すと

『KAMEN RIDE FINAL FORM RIDE 剣！』

召喚したブレイドブレイドを構え腰を落として構えるとアナザー版必殺技である紫の雷斬撃を放つアナザーデイエンドエッジをシーカー目掛けて放つ、大量の壁で防御するも斬撃は貫通、シーカーを吹き飛ばすまでに至るのであったが防御により威力は落ちており変身解除には到らずときたか

「タフなのはお互い様か」

「タイシヨウヲオマモリシ……プログラム……シヨキカ……バックアップキドウ! アイツヲウテ!」

追撃と行く前にバトルドロイドが邪魔するかのよう射撃を開始した

「邪魔すんな!!」

『増幅! マツハ……ゼンリンシューター!』

「シグナル!」

マジエステイが空へゼンリンシューターの弾丸を放つと

「拡散！」

『カクサーン!!』

エネルギー弾が拡散して雨霰となりバトルドロイドを撃ち貫いた

「さてとハルトは……つと」

—————

そしてアナザーグランドジオウvsジユウガでは銀狼が操作したバトルドロイドと新たに投下されたバトルドロイドによる凄惨な同志撃ちが行われていた

「まさかドロイドをハッキングしたか！」

「彼女なら朝飯前だろうさ」

「電界の猟犬と言われた銀狼、噂には聞いてましたが……コレ程とは！奇跡の殺戮者、戦少女、天災、指輪の魔女、絶死絶命、竜の魔女……元いた世界において別格とされるものばかり……。これらを伴侶にして普通にしていられるなど!!やはり貴方は頭がおかしい!!」

「ジャンヌは嫁じゃねえけど?……つか遠回しにバカつて言われた?」

『事実だろ?』

「なんつーか否定しきれねえよな」

「今ですよね、これに加えて全知の精霊だけならず花の魔術師 マーリン(プロト)、戦少女 ベアトリス、KANSEN ベルファスト、戦姫 アレクサンドラの心を射止めるだけの事はある!」

「おいちよつと待て……誰でしょうか!その人達は!!」

「貴方の未来の伴侶ですが」

「はあ!?!」

『ハルト…お前…』

「待て相棒!?!この件に関しては俺全く知らないんですけど!!」

それを聞いていた面々は

「あらあらマスター大変そうねー…ってマーリン?まさかあのろくでなしと!正気なの
マスター!?!」

余談だが観戦していたセイバーオルタはマーリンの名を聞いただけで可哀想なもの
を見る目をしていたという

「ハルトさん…これは何というか…不誠実では？」

「士道君、君も俺も複数人と関係持つてるから人の事言えないぞ…つかハルトさあ更に増やすとか正気か!? 命知らずだろ!ん? 待てよこの会話って今ピースメーカーにも筒抜けじゃなかったか?」

「っ!!」

その時、息を呑み顔面蒼白なハルトへ追い討ちの通信が入る

「ハルト、この件が終わったら説教だな千冬はサタンサーベル、束は電気椅子、錫音は拘束魔法を用意しろ…このバカには矯正が必要だ…さてオレはあの薬品でも持って来るか」

「ちよ…ちよつと待てキャロル!これは敵からの情報だぞ! 鵜呑みにするな!!こ、コレは罠だ! だろウオズ!?!これ以上増えないよな! だろウ!!」

アナザーグランドジオウは剥き出しの人体骨格部分から血走る視線で己の右腕を見

るがアナザーウオズは一言

「増えます」

「嘘だ、みんな俺を騙そうとしている!!!」

「この本によれば戦少女　ベアトリス・キルヒアイゼン、花の魔術師　マーリン、KAN
SEN　ベルファスト、戦姫　アレクサンドラは我が魔王のは「何も聞こえない!!」はあ
…やれやれ」

【罨なら問題無かろう、だが取り敢えずOHANASHIだ】

「電気椅子や投薬などのOHANASHIラインナップを聞いて俺は拷問以外の何を思
えば良いのでしょうか!?!」

【なら言葉を変えるぞ、まだ現地妻を増やすのか愚か者!!】

「べ、弁護士を呼べ!! 少なくとも今の俺は無実だ!!」

【ごめんねハルクん、弁護士型ヒューマギアのビンゴでも弁護出来ないって〜】

【あとは北岡なる弁護士が逢魔に来たらしい…だが事情を聞いたら『俺でも白に出来ない帰ろうか吾郎ちゃん』と言って帰ったぞ】

「ちよつと待て千冬! 俺の制裁は別にして大至急その弁護士達を引き止めてくれないかな!! つか俺は黒を白に変える最強弁護士やヒューマギアからも匙投げられてる!! まさかの俺の罪状は浅倉さんレベルだとしても言うのか!!」

『罪の方向性は違うがな、女の敵め』

「待ったキャロル」

【待ちなさいな】

銀狼様、アンティリーネ様！ありがとうございます！！お願いします！！お願い助けてください！

【何だ？】

「私とアンティリーネが入ってない、何か役目が欲しい」

【そうだな済まない2人には逃げようとしたらそのバカを抑えて欲しい…セキユリ
ティと物理の二枚看板だから頼むぞ】

「お安い御用」

【分かったわ、楽しみね…旦那様】

ふむ……これで俺の死が決定したか……よし

「クジヨー……お前は殺す!!」

「今…割と理不尽な理由で僕殺されかけてます?」

「理不尽な訳あるかあ!!」

『アナザーオールトウエンティ!!』

「痴情のもつれは貴方のせいでは?」

『アメイジングフィニッシュ!!』

「セイヤアアアア!!」

『タイムブレイク!!』

ジュウガのライダーキックと20連撃のアナザーキックは周りに強い閃光と爆破を引き起こすのを見届けた面々は

「なあ…まだハルトの奥さんって増えるのウオズさん…」

「ええ……しかし何故彼はそれを知っているのでしょうか?」

「いや、マジで増えるのか！」

「貴方も人のこと言えないかも知れませんがね」

「は？それどう言う…」

「おっと、これは未来の話でしたかね？」

「辞めろ！不穏な前振りは!!」

爆煙去る後に残るはドロイドの残骸のみであった

「逃げた……くそ！アナザーデイケイド探せ!!」

『無理だな完全にオーロラカーテンで逃げられた座標を見つけん限り追撃できん』

「くそっ!」

「なあ打ち上げどうするよ」

「取り敢えず延期だな、ネオタイムジャッカーが出たとなるとこつちの戦力を整えないとまずい…少年君はラタトスク側でのアプローチもあるだろうが取り敢えず俺は…」

【ん?】

「逝ってくる」

【ご武運を我が魔王!】

「頑張れハルトー」

【ナツキさんも人の事言えませんかよね?】

「はい！肝に銘じます!!」

「取り敢えず少年君、何かあつたら連絡くれ力になるよ」

「多分今一番、助力欲しいのハルトさんですよね？」

「うん……俺……明日の朝日拝めるかな？」

その夜

「さて……覚悟は良いか？」

ハルトは電気椅子に座らせられてガタガタ震えていた

「あの……さ……やっぱり可笑しいと思うんだよね！やつでない事で断罪されるのは!!」

「今は……だ未遂というか確定事項だ……ならば事前にと行ってな取り敢えずお仕置きと行

「こうハルト…今日は眠れると思うな」

「あ、やば…」

ハルトは全員から何かを搾り取られたのは言うまでもなかった

二日後

復活したハルトは幹部を集めネオタイムジャッカーの対策会議がピースメーカーで開いた結果

「一旦逢魔で戦力を整えて再度戻る、この間の件で修理しないとダメな所もあるしネオタイムジャッカーが出た以上はこっちも本腰入れないとな」

これに落ち着いた、戦力再編と補給をする

『分かったわ、どれくらいかかりそう?』

「最大で5日かな」

『OK、じゃあその間に私達も土道の方で彼女に会ってもらおうわ』

「その方が良いかもな…少年君に俺達側の通信端末 コムリンクを渡すよボタンを押すだけで俺達と連絡が取れる、あの精霊の力が未知数である以上は警戒しておくに越した事はないし…ネオタイムジャッカーが出た以上、ライダーの力を持つ少年君も無関係とは言えないからな」

『分かったわ土道に渡しておく』

「護衛にロードオブワイズの4人を残しておくから…んじゃ後日」

通信を切るとハルトはハウンドとウオズに指示を出す

「ピースメーカー針路、逢魔！ハウンド達には暫く休暇を出すから羽を伸ばせ」

「はっ!!」

この選択が結果論として難を逃れた事をまだ誰も知らない

—————

逢魔では溜まった仕事を片付けたハルト達は船の修理や補給が終わるまでの数日は余暇となった。その時、ナツキが夢で綺麗な俺を見たとか色々あったらしいが取り敢えず今は

「ギーーツ————!!」

ハルトはキャロル達とファンから送られたギーーツ最終回を見ていたのである

「ま、まさかあの時会った英寿さんは!!」

自分と会っていた彼は既に肉体が減びていた
のか…それでも人を世界を守ろうとする姿にハルトは感動に涙が止まらなかったの
である

「やつぱりあんた仮面ライダーだよ……だが、この五十鈴大智って男…ジャマトの俺と
いたがジャマトになつたり教祖になつたり色々と忙しないな」

あの彼と同じかは知らないが…いろいろと癖の強いメンツが集まるのはどうやら俺
の業のようなものだろう

『まあそもそもお前が濃いからな』

「それは言わない約束でお願いします」

そして感動から一息ついたハルトは新しくガッチャードを見ようと思った時、ふと
思った事がある

「そう言えばガッチャードドライバーとカードはどしたの？」

アナザーワックスに変身する時にキャロルが見せてくれたドライバーの行方を尋ねると

「ああアレか、あれは逢魔の保管庫に置いてある現状は変身者がいないからな現れた時の為に備えている」

「まあ妥当だな」

「そう言えば副産物…というよりガッチャードの試作品があつてな、これだ」

とキャロルがハルトに渡したのはレンチと剣が合体したような外見の武器である…エンジンブレードのように中折れするようだが

「おおお！カッコ良い！」

「ヴァルバラツシャーというらしい、ヴァルバラドなる戦士に変身するアイテムとの事だ」

「おおおお！」

「このマッドホイールや乗り物系のカードを使うんだ」

と渡されたケミーカードを見てキラキラ目を輝かせるハルトに

「俺に渡しても変身出来ないんじゃない？」

『問題ない、コイツからOKだ』

「けど俺に錬金術は使えんぞ？」

「安心しろオレがキチンと教えてやろう2人でな」

「！！！！」

キャロルの言葉が火種となり周りの顔つきが変わる

「何だ錬金術でオレに勝てるっても？」

「ぐぬぬ…」

東が悔しがるも全員納得せざるを得ないキャロルは自他共に認める天才錬金術師である

「という訳だ安心しろハルト」

「宜しく願いますキャロル！」

そして始まったキャロルとマンツーマンでヴァルブラッシャーの使い方を学び。帰還の日

万全の状態のピースメーカーは来禅市に帰還した

取り敢えずフラクシナスに通信をしたが

『はあ？誰よそれ？』

「え？少年君のこと知らない？」

『だから知らないわよ…全くどうなってんのよ』

琴里が士道の事を知らないというではないか…これは一体と考えているとコムリンクに通信がまさか！と思いつくと

『ハルトさんですか！』

「ああ、一体どうなってんだい？新手的ドッキリ？」

『違うんです、大至急話したい事があるのでコツチにこれます?』

「ああ待つてろ少年君、ハウンド!ガンシップ用意!コムリンクの座標まで飛ぶぞ!」

「イエツサー!」

どうやら訳ありのようだとハルトは冷や汗をかいたのであった

—————

その頃

「はあ…:一体どうなつてんだよ…:」

士道は公園のベンチに座り黄昏ていた

あの後、宇宙にいる精霊　六喰に会えデートに漕ぎ着けたまでは良かったものの並外れた独占欲を持つ彼女の天使により周りの人間が自分を忘れてしまっている事態になっっている

幸いなのかハルトさん達は逢魔にいたから難を逃れている事だな　だが

「ハルトさん達まで六喰にやられたらおしまいだぞ…」

そう頭を抱えていると

「おいデネヴ、本当にこの世界に魔王がいるのか？」

「間違いないよ最近この辺りで目撃情報が沢山あるって近所のおばちゃんから聞いたから」

「本当に大丈夫かよ…」

突如、聞こえた声の方向を見ると自分より年上の青年と弁慶のような人？がいるではないか

「……………俺疲れてるのかな？幻覚が見える」

溜息を吐いていると弁慶のようなイマジンことデネヴは此方に気づいたようで

「大丈夫かい？何か悩み事？」

「え？あー…はい」

「そっか…あ、良かったらこれ食べて元気出して」

と渡されたのは飴…え？

「これは…」

「デネヴキャンディだ…あ、そうだ君！魔王って呼ばれる人に心当たりない？」

「そんなのある訳ないだろうデネヴ！」

「ありますよ」

「ええ？」

「魔王って呼ばれてる人なら…何ならもう少ししたら来ると思いますけど」

「……………お前、何者だ？」

「ちよつと侑斗ダメだよ、そんな高圧的に話したら！」

「ええと…俺はー」

そして同じようにベンチに腰掛けて話を聞いてくれた青年　桜井侑斗さんはそうかと頷くと

「あの魔王が人助け？」

「あの…本当にハルトさんってその魔王なんですか？」

「ああ俺達は最低最悪の未来を止める為にこの時代にやって来た」

「そうなんだ…常葉ハルトはこのままじゃ最悪の魔王になって世界を滅ぼすんだ何とか止めないと！」

「……………」

その時、土道の脳裏に過ぎつたのは火炎剣烈火を託された際(狂三キラー後編より)に白スーツから見せられた予知夢のような夢

怒れる獣のように叫び暴れるアナザーギーツになったハルト、もしくは

『アナザーライダー！ストリウス！』

魔道書の名を冠する滅びの本を開いたハルトか

「あ、あのお2人は「待て」え？」

「何隠れてやがる出て来い！」

そう侑斗が言うとは何処からともなく現れたのは左手に船の錨を思わせる武器を装備したイマジン モールイマジンであった

「え？モグラ？」

「まさか俺達に気づくとは流石はゼロノスだな」

「ゼロノス？」

「侑斗、イマジンだよ」

「ああ…お前たち魔王の仲間か!」

「いや、俺達はこれから魔王軍に入る予定だ!お前たちの首を手土産にしてな!!」

と笑うモールイマジン達であるが

「それ…ハルトさんには悪手な気がする…」

「おい小僧…っ!そうか貴様か…契約もあるから少し大人しくしてもらおうぞ」

「契約?」

「っ!隠れる、コイツはお前を狙ってる!」

「っ!は、はい!」

士道は少し離れると侑斗はベルトと緑色のカードを取り出した

「アレは…」

「行くぞデネヴ」

侑斗はベルトの上部をスライドすると流麗な待機音と共にチケツトを構える

「変身」

『アルタイルフォーム』

するとエネルギーが装甲を形成し緑と黄色の鎧を纏った戦士へと姿を変える 頭部に牛のような意匠が加わると変身完了

忘却される運命だとしても愛する誰かと世界の為に戦う仮面ライダー

「最初に言っておく！俺はかーなーり強い!!」

仮面ライダーゼロノス・アルタイムフォーム

ゼロガツシャーを武器に変えて構えるのを見て

「え！仮面ライダー!!」

「え？君、何で知ってるの？」

「俺も……似たようなものだから……」

と言いついでいる間にもゼロノスは軽快な動きでモールイマジンを切り捨てて行く

「デネヴ！」

「了解！」

「デネヴも指鉄砲を放ちゼロノスを援護する長い間戦い続けた故の完璧な連携がそこにあつたのだ」

「すごい……」

感動している内にモールイマジンは切り捨てられ爆散したのである

「終わりか？」

「いや違うよ侑斗、アレ！」

「あ？」

「あ、ハルトさん!!」

その言葉と同時に着陸したガンシップからハルトが降りてきて土道に駆け寄る

「大丈夫かい少年君！一体全体何があつ……」

その時 ハルトの目線がゼロノスとデネヴに向いたのである

「常葉ハルト、魔王だな」

「え？は………はい!!」

「俺は桜井侑斗、俺達はお前の作る最低最悪の未来を変える為にやってきた！」

「…っ!!!」

「来い！デネヴ!!」

「了解！」

するとデネヴはゼロノスの背中に立ち両手を肩に添えるとゼロノスはカードを反転させ黄色のカードに変えたのである

『ベガフォーム』

するとデネヴはゼロノスと融合し新たな形態へと姿を変えた

「最初に言っておく……侑斗を宜しく!!」

『バカ！魔王に宜しくする奴があるか!!』

「あ、ごめん……つてあれ？」

「……………」

「あの、ハルトさん？」

士道は気になり、ハルトに近づくとハッとする

「き、気絶してる!？」

「ええ!」「はあ!？」

その頃、ハルトの精神世界では

「ああああああ相棒、俺を殴れ!本物のゼロノスとデネヴが俺の前に現れて生変身を見せてくれたんだ!!こんなに嬉しい事は夢に違いない!」

「落ち着け相棒!これは現実だからさっさと起きろ!命狙われてるんだ!!」

「っ!おう!!」

—————

「……………はっ！危ない三途の川が見えた」

「大丈夫ですか!!」

「大丈夫だ少年君、ただ……そうか仮面ライダーゼロノス……桜井侑斗にデネヴか間違いないな」

ス
ハルトは懐に手を入れるとゼロガツシヤーをボウガン形態に変えて警戒するゼロノ

『油断するなデネヴ、何か来るぞ!』

「あ、いやあ……これは……」

するとハルトはキリツとした顔をしてそのまま懐にしまっていた色紙とサインペンを差し出した

「ファンです！サインください!!!」

「……………え?」『はあ!?!』

「あちや〜」

戦いの空気が霧散したのは言うまでもなかった

六喰プラネット三幕！未来を変える為？

3部

さて今回の魔王の話は前回の直後、サインの懇願で霧散した戦闘の空気だったが侑斗側もハルトに聞きたいことがあるらしく、自分達の愛車に案内した、そう

「うおおおおおおお！ぜ、ゼロライナーだあああああ!!」

目の前に止まる巨大な牛を思わせる列車にハルトは目を輝かせながら両手を上げて
いると

「うるせえ!!」

侑斗の声にハルトはピタリと黙るがそれでも目はキラキラ輝いていた、土道はキョト

ンとしていたが恐る恐る電車に乗り込むのであった…そして

「……………っ!!」

ハルトはTVで見たゼロライナーの内装を直視した事で再び気絶しそうになるが士道が支えて何とか堪えるも

「ヴアルハラはここにあった……………っ!!」

泣きながら両膝をつき祈るように手を合わせるまるで聖地に來た信者のような姿のようだ

「わあ……………あ……………」

「ハルトさん!正気に戻ってください!!」

『済まない少年、今の相棒は絶賛正気だ』

「嘘でしょ!?これで!」

『本当に申し訳ない』

「さて…お前に色々聞きたい事がある魔王」

「あ……は……はい!何でしょうか!!…あ、すみませんその前に実は俺の妻達も侑斗さん達のファンでしてサイン良かったらお願い出来ませんか?」

「馴れ馴れしいな…何枚だ? ったく面倒だったらねえ」

「本当は嬉しい癖に、さつきサインお願いされた時笑ってたよね?」

「デーナーヴー!」

「あ、ごめん侑斗ちよつ、まつ!」

「デネヴに関節技を決める侑斗を宥めて何とか会話の席につくと

「あ、粗茶です」

「ありがとうございます…あ、これつまらないものですが」

『コネクト』

「良かったら」

「あ、これは丁寧にありがとうございます…これは？」

「俺が異世界で入手した甘味、美味しさのあまり巨大化すると有名な和菓子 芋長の芋羊羹です」

「ありがとうございます、じゃあ早速切り分けるね」

とデネヴが奥に行く

「さて、まずお前が常葉ハルトで間違いないな」

「はい…間違いありません俺が常葉ハルトです」

「そうか…」

「あの…お二人の言う最低最悪の未来って何です？」

「簡単に言えば、とある日にお前が世界を滅ぼす本を開いてこの世界を滅ぼす」

「世界を滅ぼす本？」

カリユブデイスの力ではないだろうしプリミティブドラゴンとも違うようだと考えていると

とある本に行き着いたが

「いやいや無い無い、その本俺持ってない」

ハルトは否定するように首を振る…何故ならあの本を完成させる材料がないのだから…

「グリモワール…」

土道の眩きにハルトは驚愕の目をしてみる

「少年君…何で君がその本の名前を知ってるの?」

「前に予知夢? って言うんですかね、それで見たんですハルトさんが…その本を開く姿を」

「けど何で俺がグリモワールを…いやいやどうやって…だってあの本を作れる訳がない

じゃないか!!」

感情的になるハルトだが我に帰り直ぐに腰掛けた

「すみません……そして本を使った俺が世界を滅ぼしたと?」

「大雑把に言えばな」

「そうですか……しかし……何で?」

ハルトからしたら訳の分からない話である

仮面ライダーストーリーウスが返信に使用する

全知全能に近い破滅を齎す魔の本

グリモワールライドブックは

全知全能の書の破片全てと仮面ライダーソロモンに変身する為に必要なオムニフースライドブック、そして

「俺がカリュブデイスを生贄にするとか絶対はない!」

取り込んだものを融合させる力を持つ、カリュブデイスメギドが自らを贄にする事で完成するのだから

ハルトからしたら確かに力への憧れはあるが

「それに大事な仲間を犠牲にしてまで世界を滅ぼす力なんて欲しくない!!」

大事なものを助けたい、守りたいから魔王になる事を選んだ、それを捨ててまで力を得て魔王の座に固執する意味なんてない

「ハルトさん…」

「だが未来でそうなる」

「未来は変えられるんでしょ？ 未来の貴方が自分を犠牲にしてまで変えようとしたように」

「……………っ！お前何処まで」

「言ったでしょ、ファンだって……………はっ！」

ハルトとはとある可能性に至り恐る恐る質問する

「あの…因みにですが…野上良太郎さんとか来てたりとか…」

「あ？野上？アイツなら確か…」

「最悪の未来を変える為に今こっちに向かってるって」

その言葉を聞いたハルトはキリツとした顔になり

「何が何でも…変えるぜ運命！」

と力強く拳を突き上げるのであった

「ええ…」

「野上良太郎さん達が来るだ！こりや大変だ!!」

偉いこつちやと慌てるハルトであったが、ふと我に帰り

士道に状況の確認をすると憤慨して

「人の記憶を奪った!?!そんなの許さん!!」

「何でそんなに怒ってるんです!?!」

「時間とは記憶！皆から忘れられたら終わりなんだよ！！だから少年君任せろ俺が六喰って精霊を倒してやる！」

「いや俺達の目的は霊力封印ですよ!?!」

「あ？何言ってるの？」

「え？いや精霊の霊力を封印して日常に戻すのが俺達のやるべき事じゃ」

ハルトは冷めた目をして土道を見ている

「確かにラタトスクはそうかもしれないけど、俺達は自分の国に空間震を落とす精霊を見つけて倒すのが目的だラタトスクの方法が被害が少ないから協力してるだけで、もし

「国以前に俺の仲間やキャロル達に手を出す精霊や連中がいるなら…俺がそいつ等を殺す」

「っ!」

そう士道とハルト、2人は目指す先は同じだが過程に違いがあった。その事に今気づいたのは士道にとって幸か不幸か?

「取り敢えず…野郎ども討ち入りじゃ…「ちよつと黙ってる」むぐ!」

ハルトが盛り上がってるので侑斗が口に「デネヴキャンデイを突っ込んで黙らせる

「美味しい…っ！これデネヴキャンディじゃん！ありがとうございます！」

「いやいやこつちも美味しい芋羊羹ありがとう」

「そう言えば…デネヴさんって料理出来るんですっけ？」

「うん！まさか君も？」

「はい！自慢じゃありませんがミリ単位で繊細な毒処理が必要なフグも捌けます！」

「それは凄いい！あ、そうだそうだ」

と2人が料理の話で盛り上がる中、侑斗は土道にアドバイスするように話しかける

「ま、お前は頑張れば周りが思い出せるんだ慌てる事はない」

「え?それって…」

「俺は変身したら周りから忘れられるんだ、ずっとな」

「え……」

「あのカードは周りの記憶を元に生まれる…だから周りの記憶から完全消えたら俺は必ず消える筈なんだが…何故かゼロノスのカードが切れないんだよ」

「だから…」

その言葉の意味を理解した、何故ハルトが憤慨したのか侑斗さんが親身になってくれるのかを

だが

「忘れる訳ないじゃないですか」

「何？」

「桜井侑斗さんとデネヴ、仮面ライダーゼロノスの戦いの記憶…その勇姿と生き様は俺達の世界から消える事なんて絶対にはないです！」

「な、何言ってるんだか…」

「カードを何十何百枚使おうが少なくとも俺の記憶から魂からお二人の事が消える事はありません！」

「……………」

その言葉に何か思う所があったのか閉口する侑斗、言いたい事を言えたハルトは再度デネヴ料理の話に戻ろうと思ったが

「ありがとう」

「デネヴに頭を下げられたハルトは気恥ずかしくなるも

「お礼を言うのはこつちですよ、皆さんには返しきれない程の恩がありますから」

「それでもありがとう」

「はい……んじゃ話を戻しましょうか……えーと確か……」

「侑斗のシイタケ嫌いを治したいんだよ」

「はあ!?!」

「デネヴの言葉に我に変えるがハルトは冷静に

「そーは本当に美味しいシイタケを食べてないからじゃないでしょうか? 実はですな俺の旅した世界にジューシイタケって高級霜降り肉と同じくらい美味しい癖のない良

いシイタケがありましたな」

「それは凄い！ちよつと譲つてくれないかな？」

「勿論ですよ！好きなだけお譲りします！」

とダンボール一杯のシイタケが入った箱を見て侑斗は怯えながら

「デネヴ！お前等何話してんだ！！」

と話してる中、アナザーディケイドがふと気になったことを聞いてみる

『なあ相棒、お前に嫌いな食べものってあるのか？』

「ん？俺に食べ物を選び好み出来るなんて贅沢があったと思う？」

『…すまん』

――

取り敢えず現状維持となりゼロライナーから下車したハルトは一言

「幸せな時間が終わるのが早いな…もうちょい乗ってたかった」

歓喜に震えているも土道はガンシップに待機していたナツキにも事情を説明しているの

「なあ相棒、少年君や侑斗さんの話だけど…」

『あり得るな…材料はお前の中に既に揃ってる』

「え？」

『お前の中にはアナザーソロモン、アナザータツセル、アルターブック、そしてレジエルとスオスの一部もメギド故に継承している』

「後はカリユブデイスとルナ…ようは世界を繋ぐ巫女がいれば……」

『お前の魔道書は完全に覚醒する』

「つーか、そんな巫女なんて都合よくいる訳ないじゃん」

『お前の近くにいるかもな』

「んな訳ねえだろ」

「あのハルトさん」

「何かな少年君？」

「ありがとうございます、助けてくれて」

「お互い様さ……だけど六喰って精霊の能力は厄介だな……さてどうするか……」

頭を抱えているとハルトは冷静に分析してみる

今こそ戦いで磨かれた知恵のハルトの出番だ!

ポクポクポク……チーン!

「取り敢えず能力使われる前に捕まえて、皆を元に戻させよう!」

考えるのを辞めてたのである

「少しは考えろ!あの騒動で頑張ってた知恵のハルト何処行った!」

「取り敢えず少年君は暫く、ピースメーカーで寝泊まりすると良いよ必要なものはコッチで買いに行くよ……ナツキが!」

「無視!?つか俺かよ!!…っ!」

今後の事を簡単に打ち合わせしていると道の影から大量のモールイマジンが現れた

「イマジン!!」

「わお!こんなに沢山!君たち良かったら逢魔で働かない?」

「お前は何スカウトしてんだ!」

「貴様……五河士道…お前を連れて行く!!それが契約だ!」

「え……何処に?」

「お前達に答える必要はない!」

とモールイマジン達が殴り掛かろうとした時

「ホイーール!!」

突如現れた、アナザートライドロンのような改造車両がイマジンを跳ね飛ばして行く
とハルトの手にあるカードに吸収された

「モールイマジンか…この力の実験には丁度良いかな」

『コネクト』

ハルトがコネクトで取り出したのは剣とスパナが合わさったような武器 ヴァルバ
ラツシャーを肩に担ぐ

「何?そのお前の趣味全開な武器は…ついに剣とか技術が必要な武器辞めてハンマーと
かの振り回すだけで威力のある武器に目覚めた?」

「これか…まあ見てろよ…ふん！」

そのままハルトはヴァルブラッシャーを振り下ろしたのだ…ナツキの頭目掛けて

「うおおおお！危ねえ俺を殺す気か!!」

濟んでの所で回避したがそのせいで地面にそもそも目立つクレーターが出来た…何なら軽く地面まで揺れている

伊達に食技や猿武を体得していない

「けっ、避けんじゃねえ…この武器の威力しつかりと味わってから死ね」

「殺す気だった!?!」

「何、仲間割れしてるんだ！かかれ!!」

その言葉を合図にモールイマジン達が襲い掛かる

「少年君は下がってろ…おらあ!」

ヴァルバラツシャーの一撃を脳天にくらい一体気絶させると同じ要領でモールイマジン達の顎に当たって脳震盪を起こさせたのだ

「な…なんて威力だ!」

「あれが魔王………何て力(物理)だ!」

「あれが俺達、怪人界に名前が轟いている脳筋魔王…噂レベルだが未来でシヨッカー、はぐれイマジン軍団、クライシス帝国、タイムジャッカーの残党、銀河帝国、旧分離主義者の残党、サノス一派や金属生命体でお馴染みのデイセプティコンなどを従えている巨大国家の王だと」

「俺も聞いたぜ智謀や陰謀が得意なシヨッカー首領、銀河皇帝、戦闘で右に出る者がいな

いサノス、メガトロンを従えて三千世界を統べようとしてるとか」

「ああ…何でも向かう戦場に負けはないと言われる西楚霸王の生まれ変わりとか」

モールイマジンのカミングアウトにハルトも笑いながら答える

「ああそうだ…こう見えても鍛えてるからな!!ん?ちよい待て誰だ今脳筋って言った奴は!つか俺は怪人界限だと項羽や呂布並の脳筋で伝わってんの!」

『いやその前だ!お前どんな経緯で古今東西に名の知れているシスの暗黒卿や破壊大帝を従えているのだぞ!』

「そりや侑斗さん達から最悪の未来とか言われるよ…つか俺の体験した未来でも似たような顔ぶれになってたなあ…キャロル達が死んでしまったシヨックで闇堕ちし黒い衝動のまま悪の巨大国家を作り上げ並行世界戦争を引き起こすからな…」

「待って!闇堕ちしたら俺そんなヤバイ感じになるの!!俺、マイキーじゃん!そりやお

前何度も死に戻るよ改変頑張るよ!だって闇堕ちした俺巨悪じゃん!」

「ダース・ベイダーと恋愛面から友達になりダース・モールと剣技を競い、グリーヴァス将軍と戦いの歴史でドゥークー伯爵とは政治的な話で盛り上がってたらしい」

『何だと!この脳筋に政治という難しい話が理解出来ているのか!!』

「俺一応、王様ですけど!」

『だが脳筋とは的を得てるナ、敵さんにも情報が正確に伝わってやがる』

「印象操作だろそんなの」

『仕方ない今までの行いの結果だ諦めろハルト』

「なーんか納得いかねえんだけどな」

俺のした事なんて…取り敢えず強そうなドラゴン（親デロウス）やバンビーナ、スカイディアの背中いる猛獣と戦ったり、アイテムが解錠しないから不破さん式解錠術使ったりしたり、小難しい能力を使う相手を力押しで薙ぎ倒しただけだ！

「一体これの何処が脳筋だ!!」

『『脳筋以外の何がある（ル）!!』』

「いやまごう事なき単細胞だろう?」

「ハルトさん…いや…ごめんなさい弁護出来ない」

「取り敢えずナツキは後で頭力チ割る、けど先ずはテメエ等だ…そんなお前達に俺の美学を教えてやる」

ヴァルバラツシャーのボタンを押しながら回転させる

『ガキン!』

そしてマッドホイールのケミーカードを装填し折りたたむ

『MAD WHEEL!』

『ゴキン!』

そして待機音が鳴るヴァルバラツシャーを天に掲げる

「鉄鋼」

『ヴァルバラツシュ!TUNE UP!MAD WHEEL!』

紫の雷に撃たれたハルトの体は瞬時に錬金術で肉体が機械のような装甲へと変異する

顔に向かってスパナが埋め込まれたような外観を有する戦士

ヴァルバラド 調整完了

「凄い馴染む…俺専用の調整か？流石キャロル」

「見たことない姿だが…まあ良いやつちまえ！」

「らあー！」

「「「うわあああああ!!」」」

モールイマジン達とヴァルバラドが両者が激突したと同時にモールイマジンが宙を舞う事になる

「見たか！俺の美学…取り敢えず…殴れば必ずダメージは必ず入る！ノーダメージなんて絶対ない！」

『座右の銘は?』

「水滴石を穿つ!!」

「凄いなあ…いや…色んな意味で」

「本当、戦闘能力とあの行動力だけは見習いたいよ…後はちよつとな…さて俺も働かないと頭カチ割られるから…行かないと」

『カイザ』

ナツキもアナザーウオッチを取り出しアナザーカイザに変身するとアナザーゲイツから声をかけられた

『おいナツキ、実は今新しい力が解放されたぞ』

「え？何それ、この間のギャレンのキングフォームみたいな感じ？」

『ああそれに合わせてお前に新アイテムを渡す使え』

と光が両手に収まりガラケーとスマホに形を変えた

「これハルトの持つてるファイズフォンXに似てるな？」

『最初のそれはカイザフォンX、ボタン入力でシングル、バースト、ショット、ポインターを呼び出せる』

「便利だな…んじゃこのスマホは？」

『それはカイザフォンX X アナザーネクストカイザに変身する為のアイテムだ！』

「何？そのネクストカイザって」

『詳しくは後で話す、さあ!変身だ!』

「お、おう!」

変身アプリを押すと液晶画面に入力アイコンが現れたので

『9 1 3 ENTER』

『STANDING BY』

お馴染みの低い音声と待機音が鳴る

「変身!!」

『COMPLETE!』

アナザーカイザの体を覆うように再びフォトンブラットが流れるとその姿を変える

「アナザーカイザの全身にまるで機械仕掛けのバイザーや追加装甲のような意匠が加わり有機的な装甲がメカニカルなものへと変わる、まるでアマゾン・ニューオメガのようない出立ちをしているベルト部分には新しいアイテム カイザフォンX Xが装着された新たな時代の戦士

アナザーネクストカイザ 誕生！

「じゃあ………んで武器は？」

『腰のボタンを押すんだ』

「おう！」

『カイザクロスラッシュャー…マテリアライズ！』

ボタンを押すとアナザーネクストカイザの両手にトンファー型の新武装 カイザクロスラッシュャーが二振り現れたのである

「す、スマートブレイン社の科学力すげえええ!よし行くぞ!」

アナザーネクストカイザも参戦にモールイマジンも混乱が起こるが

「え?何その新装備!?!そんなカイザ俺知らないんだけど!!カッケェ!」

「これはアナザーネクストカイザ、何か新フォームらしいよ!」

「何っ!カイザに強化形態だと!!おいアナザーファイズ!お前にも何か無いのか!」

『あるよ俺も最近アナザーネクストファイズに変身可能になった』

「あるんかい!!そんな大事なことは早く言え!」

『だって聞かれなかった』

「取り敢えず話は後で聞く、今はヴァルバラドで蹴散らすぞ!」

そう言うのと腰のベルトから新しいケミーカードを取り出した

『ガッツシヨベル！TUNE UP！ガッツシヨベル！』

ヴァルバラドの左腕にシヨベルカー20台分の掘削力を誇る追加武装 シヨベル
バーサークが装備されたカスタムモデルとなる

「せいやあああ！」

『SCRAP！ヴァルブラブレイク！！』

現れたエネルギー状のシヨベルが地面を掘りモールドイマジンごと持ち上げる

「つし…今だ！ナツキ！」

「おう！」

『EXCEED CHARGE』

両手のカイザクロスラッシュシャーにフォントブラッドが充電されると同時に跳躍クロスラッシュシャーを交差するように振り抜き、すれ違い様に斬撃を与えると

歪んだXの文字と共にモールイマジンは灰になったのである

「ふう……中々の使い心地だな」

『元は人間の体を装甲に変えている……それを怪人のお前が使えばパワーアップするなど当たり前前的事だ』

「それもあるだろうけど……キャロル達の思いも籠ってるからな、そんな未来には絶対にさせない!」

新たに決意を固めたハルトであったがナツキはやれやれと肩をすくめる

「惚気るのは後にしろよハルト」

そんな話しをしていると虚空から突如現れたのは

「六喰!？」

「久しぶりじゃのお…：しかしまだお主を忘れておらぬ輩がいたとは、まあ良い子奴等の記憶も消すだけじゃ」

その時！

【!!】

蒸気機関車のような音と共に空から線路が走り現れたゼロライナー、通過すると先程出会った2人がいた

「侑斗さん！デネヴさん！」

「あ、皆さつきぶり…侑斗、あの子だよ!」

「そうか行くぞデネヴ」

侑斗は六喰を確認するなりベルトを装着、あの時と同じようにカードを取り出したではないか

「え……ちよつ!待ってください!何で彼女を!」

「その女がイマジンの契約者だからだ」

「え?」

「ああ…あのモグラのような奴等か…願いを叶えるとか言っておったからお主を連れて来いと望んだのお」

「そんな……でも2人が倒しましたよ」

「その子、大量のイマジンと契約している…今までに無いことだよ」

「マジかー……んじゃ倒さないとですね！……ん？」

ハルトは呆れながらも六喰の顔を見る、あの目の感じ

「あぁ～お前も七罪と同じ口？」

「何じゃ、はつきり申せ」

「んじやはつきりと……お前さ家族に捨てられたか愛されてない口だろ？だから愛に飢えているとか」

「何の事じゃ」

「嘘が下手かそのトラウマで覚えてないか…或いは両方か…あゝ誰にも愛されてない…」

だから誰かに愛されたいその愛を独り占めしたいって感じかな」

「何じや何じや…何なのじや!お主のような人間にむくの何が分かる!!」

「分かるよ、だって俺も同じだから親兄妹や周りから忌み嫌われ迫害されてたし」
『相変わらず重たい過去を軽く話すな』

「今じゃ笑い話みたいものだしね、だって俺今と未来が凄く幸せだし…多分、少年君は部分的には理解出来るけど彼は親兄妹に愛されてるから分からないって所、君の不満はそんな感じかな」

「……………嘘は言っておらんようじやな」

「まあね侑斗さん、少年君…どう?攻略のヒントにはなったかな?」

「何?」

「人の心読んで…妖怪サトリかお前は」

「言い方悪いな今回はセラピーやカウンセリングみたいなものだよ……ねえ……つていない!!」

「逃げられた! 士道君大丈夫か!」

「は、はい……けど六喰が契約者って……」

「取り敢えず探るか行くぞデネヴ」

「了解!」

2人はゼロライナーに乗り込み走りだそうとした時

「うおおおおおおお!」

ハルトは感動しながらバットショットを使い撮り鉄と化していた

「はあ、ハルトの奴……」

「あの本当なんですか？ハルトさん……」

「ああ親云々の話？本当らしいよ本人の口から聞いているから」

「じゃあハルトさんの言ってた六喰の事って」

「本当だろうな、何せ同じ境遇で同じように愛に飢えた男は何人も奥さん娶って更に増やすらしいからな恐れ知らずだよ本当」

「……………それナツキさんものでは？」

「そんな訳ねえよ何せ俺は……………4人いますね……………つか待て俺はこれ以上増やさねえよ!!!」

「耶俱矢も夕弦も心配してましたよ……………この間2人で話してましたナツキさんも同じよう

に増やすんじゃないかって…それだったら誰も知らない場所に監き「ストロップ！何でヤンデレ化してんだ！」俺に言われても！」

「はいはい喧嘩しない！ま、向こうの狙いも分かったし後は対策立てるだけかな」

「だね…取り敢えずピースメーカーに引き返して情報の整理を……って危ない！」

三人が回避すると、そこに黒い斬撃波が襲いかかったのである

「今度は何だ！あの黒い斬撃…お前の所のオルタじゃねえよな！」

「んな訳あるか！今彼女はピースメーカーの大食い大会に参加してるわ！」

「そんな催し開いた覚えないけど!？」

ハルトとナツキはその敵の姿を見てキョトンとしていたが土道は目を見開く

「と……十香!」

「え?」

「戦いの気配に釣られて来てみたが、いるのは童と人擬きが2人か……まあ退屈凌ぎにはなるか」

「十香ちゃん……イメチェンした?」

「何処となくアルトリアっぽいけど」

「誰だ十香とは……まあ良い相手してもらおうぞ!」

黒いオーラを放つ十香が3人に襲い掛かるのであった

六喰プラネット4幕 特異点 参上!?

前回のあらすじ

最低最悪の未来を聞いたハルト達

そして六喰と契約したモールイマジン達を退けたハルト達の元へ現れたのは記憶を失くした筈の十香、しかし何故かその様子がおかしくて…

『コネクト』

「っ!」

慌てたハルトはコネクトを使い無銘剣を呼び出し十香の剣を受け止める、強い衝撃に大気が震え地面にも亀裂が入る

「うわあ!」

「ハルト!」

「やるな」

「大丈夫だけどいきなり斬りかかるとは…驚きだねえ」

「ほお面白い…ただの人間と思つたら中々の脅力か」

「生憎こちとら力自慢なんだよ!!」

雑に無銘剣を振り抜くと十香は真後ろに吹き飛ぶものの器用に宙返りをして衝撃を和らげるとそのまま脚に靈力を込め再度突貫する

「ちい!」

迎え撃ち再度鏢迫り合いになる中、ナツキが訪ねる

「なあ士道君、十香ちゃんの靈力って封印したんじゃないの!?!何で完全武装してんのさ!」

「封印してます…けどアレは…十香じゃない？」

「うーん…オルタみたいに別側面の人格が現れたか別の理由があるかは知らないけど今は逃げるよ」

「ハルトさんを置いてですか！」

「大丈夫大丈夫！あの魔王なら転移出来るし！つか基本的にあのバカの周りに誰もいない方が良いんだよ！つか巻き込まれて死にたくないし…ハルト!!」

「聞こえてるさつさと行きなよ邪魔だから」

ハルトはヒラヒラと手を振り見送ると2人は迷わずにガンシップに乗り込み、ピースメーカーへと飛ぶのであった

「っ！逃がさんぞ！」

「させつかよー！」

十香の斬撃波を無銘剣で吸収し無効化し返す刀でカウンターを放つなりハルトも転移して撤退ふる十香が剣を振り払うとそこには誰もいなかったのだ

「逃したか…まあ良い次は心ゆくまで戦うとするか」

そう言うのと彼女も転移したのであった

—————

ピースメーカー艦内では

「さて…取り敢えず大食い大会を開いた阿呆と参加者正座しろ」

食糧の管理も担当している身の上は必要と思ひ参加、主催した親衛隊連中を正座させ

ただが

「お前もかよオズ」

「申し訳ありません……止めようとしたのですが……我が魔王がおつまみにとビリオンバードの焼き鳥（タレ、塩）を置いたままにしているのも責任の一端があると思いませんか!!」

「取り敢えず右手に持つてる焼き鳥を食べ終わってから話せ!!」

「くっ……何故王である私が「セイバーも対象だからね?」……」

更にはアルトリアも正座させている、それを見て

「あはははーぎまあないわね冷血女……まあ私みたいに賢いサーヴァントならあんな危険な大会出る訳ないのよ」

「ジャンヌ・オルタも出ようとしたらしいよね？セイバーに対抗して」

「……………」

「はあ……まあ良いか取り敢えずセイバー達は艦内清掃三日の刑なナツキもセイバーの監督責任で出る事」

「俺も!？」

「信賞必罰……それに俺もウオズやトルーパー達の管理不行き届きもあるから俺は三日厨房で食事を作るとしよう」

「罰かそれ!？」

「お前と違って適材適所だろ？それにホラ見ろ」

周りの反応は

「うおおお！陛下万歳！」

「陛下、貴方はやっぱり最高だぜえ!!」

「「最高だぜえ!」「」」

と盛り上がっていた

「これにて評定は終わりだ!!」

そう言いハルトは近くの椅子に座り溜息を吐く

「あー疲れた…猿武や食技覚えてもメンタル面は別か…二亜、七罪」

「はいはい！久しぶりの登場だよ！何の用だいハルきちー！」

「私も！何の用かしら…役に立てないのに…」

「んな事ねえよ七罪、頼りにしてるぜ…さて本題だあの状態の十香ちゃんについて何か知らない？それと…七罪の天使で六喰の天使を模倣できないか？」

「え？」

「侑斗さんも言ってた通り、周りの人間が思い出して貰える可能性があるなら総当たりはすべきだろう？」

「うーんとねえ…ちよつと待ってね調べるから」

「私の贗造魔女で天使を真似するなら…どんな外見か能力か分からないと出来ない…」

「ならその辺は次の戦いで引き出すとしようか」

一二亜が囁告篇帙で調べているも先に調べていたのかハルトの中に住まう叡智が動い

ていた

『あれは反転というらしいナ』

「何か知っているのか検索エンジン！」

『やっぱその呼び方なんだナ…取り敢えずお前にわかりやすく説明すると…ゲートがフアントムになる現象と思え』

「OK、十香ちゃんが絶望して中からやばい奴が出たって事だな」

『そう言う事ダ』

『相変わらず何て明後日の方向な理解力…』

「らしいぞ少年君」

「どうやったら元に戻るんですか？」

『そうだな…何か強い衝撃でも受ければ戻るだろうな』

「強い衝撃ですか」

「難しい話だな…」

とアナザーWの言葉に全員が頭を悩ませるがこの男だけは違った

「強い衝撃……つまりライダーキックか!!確かにエビルとライブを反転させるのにもライダーキックを使うからな!!確かに有効と言えるだろうな」

QED!とドヤ顔するが、周りのトルーパーは溜息を吐き

「多分、強い衝撃の意味違うよね!!」

「まあ頭を使うって言って物理的に頭突きかますのがハルくんだからねえ」

「寧ろ哲学的な解答を出されたら私達は偽物だと疑うからな」

「千冬！東も酷い！俺だつて真面目に頑張つてるのに！」

「今大事な話の最中だ、お前は黙っているハルト」

キャロルに冷たい目で睨まれたので

「はい……………はあ…俺つて奴あ…ダメダメだあ…キャロル達に迷惑かけてばかり…王様になつたり色々頑張つてみたけど…俺なんかが頑張つても意味ないのかなあ……………」

『おい誰か何とかしろ、でないかと相棒が地獄兄弟に加入するくらいに闇堕ちするぞ』

『では一つ元氣付けるか、闇堕ちしたら面倒臭いし…なあ今思つたんだが、アナザーカブトの契約者つて仮面ライダーだよナ』

『ああ』

『つて事はアナザーカブト経由ならハルトの奴も仮面ライダーキックホッパーになれんじゃね?』

「つーこいホッパーゼクター!!」

ハルトは輝く瞳でゼクターを呼んだ

しかし何も起こらなかった

『まあ俺達の変身出来てもお前は仮面ライダーにはなれんさ』

「知ってたー…はあ……」

ハルトはシユンと凹むのであった、それを見逃さない者がいた

「しかし自分の意見を言っただけなのに否定するとか本当に酷い人だよねハルト、そん

な女より私を正妻にしないかい」

「……………ん？」

「キャロル、最近君はハルトに冷たいんじゃないのかい？そんなに仕事大事なら私が彼の正妻として動くんじゃないか？」

錫音がしたり顔でハルトを抱きしめキャロルにドヤ顔をする、少し焦ったように

「っ！ち、違うぞハルト！オレはだな…ただ…」

「そうね安心なさいな旦那様、私は旦那様の味方だから」

「き、貴様等!!」

アンティリーネも参戦すると千冬と束は

「さて…私達も参戦するか束」

「うん！スーちゃん退きなよ！そこは束さん達の場所だあ！」

銀狼はやれやれと呆れながら資料を取り出した

「皆は既に負けている、見てよこのアンケートの結果を見ると良い私が正妻に一番相応しいとの結果が出ている…だからそこを退いて」

「そんなアンケートは無効だ銀狼！」

「そうだ！そんなアンケートを取った記憶はないぞ！あつたとしても私達が投票すると思っっているのかあ！」

「無駄、正妻は私」

「何だと…新参者が吠えるではないか」

「私達とやる気か？良い度胸だ」

「これは…やっぱり白黒はつきりさせないとねえ」

と全員がドライバーを取り出したのを見て周りは慣れた様子で避難訓練のような統率を見せた

「さーて俺達は巡回任務に戻るか！」

「そうだな！早速艦内清掃業務に服するぞ！」

「あー！それにしても陛下の作る食事が楽しみだなあ！」

親衛隊は慣れた様子で逃げる姿に

「ちよつと待って！アレ止めないの？」

しかし一部の頼もしいトルーパー達は

「さあさあ！今始まった奥方様の頂上決戦！誰が陛下の正妻となるのかの正妻戦争勝者は誰か！さあ！賭けた！賭けた！」

トトカルチヨを始める始末

そんな中、ハルトは

「んじゃ仕込みを始めるか」

「お前は止めろ！！旦那なら責任を取れ！！」

「んじゃwこほん…喧嘩する人には今日のデザートなし！」

「「「「喧嘩はしません！」「」」」」

「よし…じゃあご飯の支度するね」

ハルトは笑いながら厨房に立つも周りは戦いを回避された安堵が支配したが

「魔王じゃなくてオカンですね…」

「いやあんなオカンいてたまるか」

その一方でキャロル達は真剣な眼差しで話し出す

「それであの六喰という精霊…ありえると思うか？」

「ないと思うなあ〜多分ハルクくんが向けてる感情って恋愛というより同類だから助けた
いって感情だけだと思うよ？」

「だろうな…しかしクジョーとやらが言ってたがあのバカはまだ増やすのか？」

「あり得るね…今までの統計から見てもハルトが知らない内に相手の心を射抜いてしまう可能性は大いにある人助けのつもりか何かは知らないけど」

「そうなる私達も考えないといけないね」

「まあ私は旦那様に愛して貰えるなら順番は別に気にしないわ…けど増えるのね…4人も…それは問題ね…」

「よしお前たち、手を出せ行くぞ！」

「『同担…拒否!!』」

キャロル達は手を重ねて新たに決意を固めたのであった

—————

とある未来で

「ご主人様、ベアトリス様、テイオ様……またお仕事を抜け出したのですか？ご主人様とテイオ様は私と少しお話しましょう？」

「ち、ちよつと待つてベルファスト!!話せば分かる!」

「待つのじゃベルファスト!これには深い理由がああ!」

「ぷぷぷく大変ですなハルトにテイオは……ん?どうしたんです千冬?……ま、まさか……っ!私には!」

「ああベルファストに頼まれてな……で、お前に頼んだ仕事はどうした?」

「え、トルーパー達の訓練はカレンに任せましたよ?え?私も混ぜつてこい嫌ですけど?え?いやちよつ!辞めてください千冬!アイアンクロードだけはあ!」

「少しは働けバカ娘!カレンを見習え!悪魔憑きと蔑まれた自分を助けた恩義から進ん

で伴侶がしなくても良い、トルーパーの教導を行っているのだ！貴様も魔王の伴侶なら少しは働け！」

「あいたたたたた！だから働いてるじゃないですか！こうやってハルトと一緒に仕事を忘れて彼のささくれた心を癒そうとって千冬待つてください！力込めないでえええええ！」

「あははは！いやあマスター周りの話題は面白いよ…君もそう思わないかい？ミレデイ」

「いやあ流石の天才ミレデイちゃんもトンデモない人についてきたなあって思うよ…本当にさあ…あ！ちよつとテンペストに行つてくるね！ラミスちゃんと迷宮の罫を話し合つてくる！」

割と未来は変わっているのかも知れない？

「キャロル達、何盛り上がってんだ？」

「陛下はいつか彼女達に刺されますよ？」

「笑えないジョークだな」

翌日

凹んでいる士道は外に出て気分転換をしていた

「十香は変わっちゃもうし皆、俺のこと忘れてるし…どうすりや良いんだよ」

ハルト達と合流出来たのは幸運でしかない…もし仮にハルト達の記憶まで消えていたら

『お前の火炎剣烈火とライドブックを貰うぞ、その聖剣と本はお前なんかが持っている代物じゃない!』

『取り敢えず…話だけ聞かせて貰える?』

あれ? ナツキさんの方がまともだな…てか何で

「あの人が王様なんだろう?」

強いし優しい所はあるが苛烈過ぎる上にイメージしている王様像と比べて思慮に欠ける所がある

「どうして?」

「見つけたぞ、五河士道」

「っ! イマジン!!」

「お前を契約者の元へ連れていく」

「断る！」

士道は侑斗の話からイマジンは過去に飛び歴史改変を行う奴等がいると聞いていた
…何なら契約者の兼ね合いもあるので襲ってくる事は分かっていたのだ

「なら力づくで連れて行く!!」

「っ…変身！」

『烈火拔刀！ブレイブドラゴン！』

士道はセイバーに変身してモールイマジンとの戦いが始まったのである

その頃 少し離れた場所に本来は止まらない筈の電車が佇み 中からイマジンが降

りてきた

「おいおい、本当に此処におデブと侑斗がいるのかよ！」

「まあまあ先輩、今は取り敢えず情報収集だよ」

「せやな、魔王が何処におるかも分からんしな！」

「じゃあさじやあさ！魔王最初に見つけたら倒しても良い！答えは聞いてない！」

「皆…取り敢えず侑斗達と合流しようよ」

「」「」「」

...

「……………ん？匂うぞイマジンだ！行くぞ良太郎！」

「うん！」

—————

「ぐつ…こいつらあ！」

『烈火抜刀！クリムゾンドラゴン！』

ワンダーコンボを使い変身したセイバーはモールイマジンの間合いにはない空からの攻撃により牽制を加えるも

「クソっ！こうなった！行くぞ！」

「おう！」

モールイマジン達は近くの巨岩を拾い上げるとハンマー投げの要領でセイバーへと投げたのである

「っ！うわあああああ！」

見事に直撃して墜落と同時に変身解除した土道を見て

「よしコレで契約完了だな」

「後は連れていくだけだぜ！」

「……………」

土道はボロボロのまま立ちあがろうとするが起き上がれない遠くからバイクの音がする…が音の反響からして間に合わないだろう…自分の油断でこんな事になってしまったのだ

しかし

「オーラア！」

突如、モールイマジンの背中を蹴り飛ばす二つの影があった

「え？」

それは一人は気弱そうな青年と赤い鬼という変わったコンビであったが

「俺、参上!!」

「君!だ、大丈夫!」

「は、はい…あなたは?」

青年は慌てて駆け寄り土道を介抱するがモールイマジンは混乱のど真ん中にいた

「で、電王だと!バカな!この時間には貴様等でも干渉出来ないはずだ!」

「そうだ!仮面ライダーのいない世界にお前達が現れるなど!」

「馬鹿野郎、そんな事俺が知るかよ!良いかお前等、俺達には前振りはないねえ最初からクライマックスなんだよ!」

「行くよモモタロス、準備は良い?」

「おう！こーやるのも久しぶりだな良太郎!!」

すると良太郎と呼ばれた青年は笑って返すとベルトを腰につけ赤いボタンを押すと右手に持つパスをセットアンドタッチ

『SWORD FORM』

良太郎の体から溢れるエネルギーが鎧となり重なるように赤い装甲と桃のような仮面が装着される

人の記憶を守る 時間の番人

最高で最優の特異点

「俺、参上!!」

仮面ライダー電王 ソードフォーム

推参！

「ば、バカな！」

「ふざけるな！ゼロノスと魔王だけじゃなく電王も来るだ！こんな世界ではなかった筈だ！」

「んなの事知るか…見せてやるよ俺のクライマックスをな！行くぜ行くぜ行くぜ！！」

デンガツシャーを剣モードに組み立てた電王はそのままモールイマジンに斬りかかるその技術は剣道などの武術らしきはない、さながら不良の喧嘩殺法に近いが、その勢いはモールイマジン達を押ししていたのだ

「ふざけるな!!俺達の方が数が多いのに何で!!」

「知らねえのか？戦いってのは…ノリの良い方が勝つんだよ!!」

「ぐあー！」

モールイマジンを全員、切り倒し追い詰めると再びパスを構えた

「見せてやる密かに温めてきた新！俺の必殺技！」

『FULL CHARGE!』

同時にデンガツシャアの刀身が外れエネルギーと繋がった状態に変わるとそのまま左右に振り抜き敵を切り裂いていくと射線の敵は爆散、最後に残った敵は振り下ろされた刀身の一撃で爆散したのであった

「くう……最高!!」(同じに見えたけど……)

「馬鹿野郎！こういうのは勢いが大事なんだよ……ん？」

電王がベルトを外して変身解除しようとしたが聞こえたバイクの方向を見て手を止

めた

「う……うそ……ほ……本物の電王だとおおおおおおお！うおおおおお！きゃあああああ
あ！」

涙を流しながら叫ぶ奇怪な青年とそれを止める青年がいた

「落ち着けハルト！これ以上興奮したら死んでしまうぞ！！……ってこれこの前もやったぞ
！」

「こ、こうしちゃられない！！さ、サインを……」

「少し落ち着けバカ魔王！！」

「って！ならお前は耐えられるのかよ！何なら今の俺は……無茶苦茶泣いてるでえ！」

「あーもう！って！士道君大丈夫かい！」

「な、ナツキさん…ありがとうございます…えーとあの人は」

「大丈夫だよ…多分」

ナツキは遠い目をしながら

「すみません！サインください!!お願いします!!」

と
全力で頭を下げるハルトがいた、電王が変身解除してモモタロスと良太郎に分かれる

「……………」

ハルトはピタリと叫ぶのをやめて、そのまま仰向けに倒れて気絶したのであった

「本当、何であの人が王様なんです?」

「良い質問だな土道君、それは…次回話すでしょうか今は…ハルトを運ぶでしょう」

t o b e c o n t i n e d . . .

逢魔王国 設定

逢魔王国

概要

常葉ハルトがシンフォギアG編冒頭において

一部の政治家連中が自分達の名前や看板で私腹を肥やした挙句に風評被害をばら撒くなど好き勝手やった事に腹を立て、ナツキとの取引もあったが他者が自分や仲間達を誰かの思惑に利用させない、侮られない為に強奪したフロンティアを元に立ち上げた国元々、ハルト自身が自分の世界に帰ることが目的なのもあり名ばかりの国だったのだが

転スラ世界でオークやゴブリン、コボルト、カミーノアン、クローントルーパーを受け入れた事から仕組みを整理し本格的な国として活動する事になる

国是は 国民が飢えることのない国

主な産業は異世界の物品の輸出入と医療

此方に関してはハルトのオタクな部分もあり娯楽や文化面は肝要なのでかなり発展している、中でも食文化はハルト自身が傾倒している事、トリコ世界からのグルメ食材輸入などを積極的に行っている

因みにビリオンバードの焼き鳥や骨無しサンマなどは屋台で人気の商品

軍事面

近未来の兵器で武装尚且つ 戦うために生まれた最強の兵士、クロイントルーパーを常備軍としている事からも兵卒の練度が高く規模も数十万単位と国民の総数より兵士が多いと言う矛盾が存在している

基本的な軍人方針は捕虜の人道的扱い掠奪、暴行、民間人への攻撃などは禁じているなど兵士達の倫理意識は高い方だか

ハルトが『大切な存在を傷つけるならば誰であろうと、どんな組織だろうと問題無用で叩き潰す』と言う人種の為、侵略やテロなどの行為に一切の慈悲がなく AXZ編であつた風鳴機関主導の部隊との抗争においても最終的には殲滅させている

国家体制

王政としているが、そもそもハルトが腹芸が出来ない直情型な人間かつ政治ど素人だ

が飾らない本人の性格から国家機構は清廉かつフランク、国民や幹部陣との関係は良好、ハルトの普段の態度から揶揄われたりなどはあるが対外的な上下関係はしっかりしている、因みに一夫多妻制

異世界を旅する事が多い為、ハルトがいなくても国が回るような制度や仕組みを作っているが最終決断はハルトに一任されている場面も多い

対外関係

テスタロツサの尽力もあり転スラ世界では良好 テンペストやドワルゴンの三国同盟に加え、最近ではブルムンドとも国交を樹立

ファルムス王国や西方聖教会とは現在 敵対関係となっている

また建国前から因縁のある、異世界のシンフォギア世界の組織や国家は基本的に信用しておらず個人単位なら問題ないが組織単位の場合、建国理由もあってか全体的に（主にハルトが）毛嫌いしている

組織図（ ）は称号や役職

国王 常葉ハルト

作者が王様像のモチーフは前漢の皇帝 劉邦

基本ダメ人間 女たらし、色々と俗物的と王様になってからの共通点がある

No. 2 筆頭秘書 ウオズ

逢魔四天王

筆頭 ヤクヅキ

ジョウゲン、カゲン、フィーニス

No. 3 宰相 テスタロッサ（原初の白）

補佐役 モス、シエン

裁判長長官 カレラ（原初の黄）

補佐役 アゲーラ（撃剣師範も兼任）、エスプリ

検察庁長官 ウルティマ（原初の紫）

補佐役 ゾンダ、ヴェイロン

幕僚長 ハウンド（クローンマーシャルコマンドー）

逢魔親衛隊

近接戦闘部隊 抜刀隊

隊長 織斑千冬

副隊長 アンティリーネ（番外席次）

撃剣師範 アゲーラ（カレラの補佐役も兼任）

錬金術師総括 キヤロル・マールス・ディーンハイム

幹部 サンジェルマン、カリオストロ、プレラーティ 麾下 元パヴァリア光明結社

構成員

科学研究所長 篠ノ之束

サイバー対策室室長 銀狼

宮廷魔導士 白鳥錫音

守り神？デロウス

外部組織

篠ノ之製作所 IS世界の拠点

最近、サウザー系女子なる人物から大量にヒューマギアの発注が入り好景気

特別外部協力者

野田ナツキ、エルフナイン

オマケ

良太郎や土道、ナツキが見た最低最悪の未来（老ハルト√）は組織図が変わっている

国王 常葉ハルト

筆頭秘書 ウオズ

第二秘書 ヤクツキ

相談役 ドウークー伯爵、クライシス帝国皇帝

逢魔四天王

筆頭 ネガタロス

総参謀 シーヴ・パルパティーン

幕僚総長 破壊大帝 メガトロン

技術開発局長 ショツカー首領

大幹部

テストアロツサ、カレラ、ウルティマ

死神博士

サノス

グリーヴァス將軍

旧分離主義者 首脳陣（インフラ担当）

銀河帝国軍総括 ターキン

兵卒

シヨツカー戦闘員

クローントルーパー、バトルドロイド

ストームトルーパー、サノス一派

はぐれイマジン軍団、デイセプテイコン

六喰プラネット5幕 感動は電車の中から

前回のあらすじ

電王、参上!!

☒内部

そこには気絶していたハルトが寝ていた

「うーーーーん……はっ!で、電王!!」

周りを見渡すと白くて綺麗な内装にそこに座る多様なイマジンがいた

「あ、起きた起きた!」

「全くいきなり気絶したって聞いた時は驚いたよ」

「鍛え方が足らんとちゃうか？どれ！ワイが鍛え直したる！」

紫、青、黄色のイマジンを見て

「……………」

再びハルトが白目で気絶しようとした時、ナツキが慌てて止めに入った

「おい気をしっかり持て!!話が進まない!!」

「どどどどどという事なんだ！ナツキ！何で俺の目の前にウラタロス、キンタロス、リュウタロスの3人がいるの！……ままままかさか、あの時見たモモタロスや良太郎さんも！」

「本物だぜ、つたくやつと起きたのかよ」

「起きたんだね…体は大丈夫？」

その姿を見るなりハルトは

「……………」(灰化)

オルフェノクのように灰になった

『相棒しつかりしろ!!』

『気持ちは分かるが気をしつかり保て!!』

『フォトンブラット浴びてないのに何で!?!』

「えーと…コレどういう事？」

「凄い大雑把に言えば…ハルトは貴方達のファンなんですよ、ほらハルト最初に何すべ

きか分かるな」

「……………っ！ファンです！サインください!!お願いしますこの通り!!」

「違う！挨拶!!」

『相棒は今日も平常運転だな』

「これが平常運転なのはやっぱり心配になるよー」

色紙を持ち土下座するハルトを見て、ナツキは変な安堵を覚えたという

数分後

「ありがとうございます…良太郎さん…皆さん…このサインは家宝にさせていただきます!!」

号泣しながら色紙を抱きしめるハルトに思わず
「ええ!？」

「国宝認定したよ…いやまあ気持ちは分かるが…」

「……………そう言えば此処って」

ハルトが場所を確認しようとしたら扉がプシューと開くと中からスーツと杖の似合うおじさんと綺麗な女性が現れた

「デンライナーの中ですよ」

「新しいお客さんだあ!いらっしやい!」

「お、オーナーにナオミさん?!い、いや待て…ま、まさか…こ、ここがデンライナー…」

「はい」

オーナーの言葉にハルトは涙を流しながら両膝をついたのであった

「うおおおおお！」

「マジ泣き!?!そろそろ泣きすぎて白目が萎むぞ!!」

「涙ならコレで拭いときー！」

「あ、ありがとうございます！まず！本当のデンライナーだあ……」

「こ、ここまで情緒不安定なハルトは初めてだな」

「そうなの？」

そう思い直すナツキだったが

『くらえ！日本遊戯カゴメカゴメ！』

『見よ！この文字Tシャツ!!』

「いや……普段から割と情緒不安定だからコレが平常運転だったなごめん」

「それで良いんですか!？」

ナツキは納得しているが士道は嘘でしょ！と視線を送ると良太郎がハルトに目線を合わせて

「ねえ君が本当に魔王なの？」

「はい!!常葉ハルト！魔王やってます！その…皆さんに会えて嬉しいです…そうだ、ウオズ！」

「(イ)ちらに」

「え？一体何処から…」

「我が魔王いる所に私あり、初めまして私はウオズ「あ、この間の奴じゃねえか！」それは他人の空似だよモモタロス」

「電王の皆さんに会った日を祝して電王記念日として国の祝日にするけど良いかな！

「……御心のままに、そうなりますと鎧武、デイケイド、剣、ゼロノス、ビルド、ギーツと会った日も記念日になりますね」

「よし決まりだ！テストアロツサに頼んですぐに施行してもらおう！名前は仮面ライダーの日だ！」

「御意」

「毎年増えて行く記念日になるな！」

『相棒の瞳がレジェンドライダーに会えるという希望に満ちている！』

『何て澄んだ瞳をしてやがル!』

その様子に思わず

「スゲエな色々と」

「僕達、国の祝日になっちゃったよ」

「ほんま変わった王様やなあ」

全員が驚愕する中、ナオミはトレーにカラフルなコーヒーを出してくれた

「取り敢えず皆さん、コーヒー飲みませんか」

「是非!」

そしてコーヒーブレイクしたお陰かハルトは一息つけ普段の冷静さを取り戻した

「ふう……美味しい……デネヴキャンディに続きナオミさんのコーヒーまで……幸せだあ……」

かに見えただけだった

「ありがとうございます！」

「さて……ハルトが落ち着いたので本題に入りますね取り敢えず皆様がこの世界に来たのは侑斗さんと同じですか？」

「そうなんだ彼が最低最悪な魔王になっちゃうからそれを止めに來ただけ……」

良太郎は困り顔で言うのも納得である、どんな怖い奴かと思ったら自分を見て気絶するなんて思っただけ無かったのだから

「そんな未来にはしません！最善は尽くしますよ！でないとな仮面ライダーの皆さんに顔向け出来ませんし、師匠にも怒られちゃいます……あ」

ハルトはカラカラ笑いながらコーヒーを飲むと思いついたように

「実は皆さまに会う事を想定して実はささやかながらお土産が…」

『どんな状況を想定してるのだ相棒！』

『コネクト』

そこから出たのは多種多様なお土産であった

「うわあ！凄いい!!今のどうやったの!?!」

「これは魔法ですよ、まずはリュウタロスさんに…異世界から集めたお菓子の詰め合わせです」

「うわーい!!」

「そしてキンタロスさんには…こちら！とある商店を営む下駄と帽子の似合う人から

譲ってもらいました…どんな傷も癒す温泉…を模した入浴剤です！」

「ほほお！」

「ウラタロスさんには…此方を…癒しの国ライフから買いました香水や美容品を」

「ありがとう」

「そしてモモタロス！」

「何で俺だけ呼び捨てなんだよ！」

「別空間に格納してますが文字通り山のように大きいプリンことプリン山になります、因みに時間固定してますので痛む事はありません！」

「……………グツジョブ」

「オーナーには此方を…異世界の職人メルクさんに頼みましたオーダーメイドのスプーンです！」

「これはこれはご丁寧に」

「ナオミさんには新しいコーヒー豆を」

「うわあ！ありがとう!!」

「そして良太郎さん！」

「う、うん…」

「良太郎さんには…世界各地で買いました幸運のお守りを良かったら…」

「あ…ありがとう…」

「良太郎…お前…」

「あと…何でイマジンがこの世界に…」

「それは貴方達が呼び水になっているかと思えますよ」

「「え？」」

ハルト達はオーナーに視線を向けるといつの間にか炒飯で棒倒しをしているではないか

「それってどういう…後、それ俺もやりたいです」

「確かにこの世界には仮面ライダーは存在していました…しかし彼と精霊とは本来交わる筈のない物語が統合した結果、このような事態になっていると思えますねえ…良いでしょう受けて立ちます」

「……………」スッ

結果？オーナーに負けたよこの野郎!!!

—————

デンライナーから降りた後、ハルトはバットショットで撮り鉄している中、土道はナツキに質問する

「あの……何でハルトさんが王様なんですか？」

「は？」

「あ、いや……そのナツキさんの方がぼいなあ〜ってハルトさんはその……」

「あ〜あの脳筋ライダーヲタが何で王様やれてるかって話？」

「はい…」

その視線の先にはハルトが狂喜乱舞して撮影している姿があった

「俺に聞いて正解だよ、その質問をウオズ達に聞いたら消し炭も残らないし…まあ答えから言うとう、あのバカが捨てるって選択肢を選ばなかったから」

「え？」

「逢魔王国は最初は仲間内だけのグループだったんだよ、ある世界で色々あってな何かに利用されない為の名前だけの国だったんだ」

「それが何で…」

「だが行った世界で仲間に入りた奴を拒まずに受け入れた結果…逢魔に沢山の人に住むようになって…気づいたらハルトが王様になってた」

「ええ…」

「まあ言いたい事も分かる、取捨選択は人間なら絶対に避けられない事だけどハルトは、ああ見えて強欲なんだよ…土道君には出来るかい？一回喧嘩別れした好きな女の子を守るために国や世界と戦うなんてこと」

「それは…」

「戦うか無視するかのかの2択を出された時、ハルトは彼女を戦い守ると即決したんだよ、正直に言うけどその時のハルトの背中ではカッコよく見えるんだ…」

「カッコよく」

その視線の先には

「空を見る相棒！彼処にイスルギ、レッコウ、イカツチと戦闘で活躍するデンライナーの追加車両が走ってるぞ！すげえ……はっ！すみませんオーナー！後生の頼みです！連

結合体した姿を見せてくれませんか!!」

頭を下げているハルトがいた

「まあ…普段があだからつてのもあるけどさ」

「……………」

「君がハルトにどんな感情を持つてるかは知らないけどさ完全無欠な王様に誰が憧れる？誰が支えたいと思う？不完全でも不器用でも自分の信じる道を進み示すのがあの魔王の王道なんだよ」

「ナツキさん…」

「まあ」

2人の目線の先にはハルトがノリノリで撮影した後

「あの！皆さんと記念写真とかお願い出来ますか!!」

「本人はそんな小難しい事考えてねえだろうけどな…多分、ウオズさん達も心配だから付いて行ってるが理由の一つにあるだろうし」

「ですかね…」

「それに気に入った奴には優しいからな、お前の火炎剣やライドブックだって本当なら取り上げられても可笑しくないものだからな」

「……………」

「でもお前に預けて、更に力も貸してるんだ…何か意味があると俺は思うねえ…ま、今やるべき事は六喰の霊力を封印して皆の記憶を取り戻す事だな頑張ろぜ士道君」

「はー」

「……………何かバカにされた気がする？」

『安心しろいつもの事だろ？』

そしてハルト達はピースメーカーに帰り電王、ゼロノスにあつた事を話すと皆は驚くがハルトの対応には一定の理解を示していたのは言うまでもない

翌日

「そうか……………ありがとうな折紙」

『大丈夫、それよりハルトお義父さん……………今度錫音お義母さんと一緒にお義父さんのご飯食べたい』

「おう、んじや腕を振るわせて貰うよ」

『楽しみ』

ハルトは折紙に士道について尋ねたがやはり知らないとの事だ完全に士道は孤立しているな

「ん〜十香ちゃんの闇堕ち原因は少年君がいなくなったことによる精神的不安感って所かな」

『恐らくな…で、どうする対抗策だが本気で能力使用前に倒すだけか?』

「最悪…本当に最悪の手段として過去に飛んでなかった事にするよ、このカードの力だな」

ハルトが懐から取り出したのは時計が書かれたアドベンドカードである

「けどコレばかりは使いたくねえ、あの人達の矜持を冒瀆する事になるし……ん?」

『ハルト、後方注意』

「あいよ」

そのまま飛び出すと先ほどまでいた場所には巨大な鍵が出ていた

「なるほど不意打ちで少年君の関係者を襲った訳か」

「そうじゃ勘の良い奴め、お前を封じれば彼奴を守るものはおらぬ…残りはお前だけじゃ」

現れた六喰にハルトは呆れたような目を送る

「となるとナツキもやられたか…面倒くさいなあ…」

「お主人で何が出来る？今退いて彼奴を見捨てるならば其方の関係者に限り記憶は戻してやる、むくは嘘が嫌いじゃ約束は守る」

「それよりもっと早く全部元に戻す方法があるぜ」

「ほお……っ！」

慌てて伏せると先ほどまで顔の合った場所にエネルギー弾が撃ち込まれていた

「お前を倒せば全員の記憶が戻ってハッピーエンドってな！」

「身の程知らずめ、むくと戦うのか？」

「おうよ！俺は逢魔王国の国王にして怪人達の王 常葉ハルト」

その時、六喰の目にはハルトとその背に立つ怪人としてのハルトの姿が重なり合うように見えた

「俺は少年君に協力するって約束を守る、それに一つ言いたい……お前……人の記憶を何だと思ってる？思い出の価値をお前に教えてやるよ」

思い出 それは誰しも持つもの…それを誰の許可をもつて勝手に奪う

「キャロルや侑斗さんみたいな覚悟もねえ奴が人の思い出消してんじやねえよ」

「ならお主は敵じゃ、やれイマジン」

「「「ヒヤッハー！」「」」

ハルトの死角からモールイマジンが現れた彼等が六喰と交わした契約は一つ

「契約に従い、此奴を消せ」

「俺を最初から消す気じゃん…まあ…こうなるか…：…ならこっちも容赦しねえよ？」

そう言うモールイマジン達は四方に吹き飛ばされるとハルトを中心に囲むように新たな戦力が現れた

「んじゃ、こっちは任せたぜ四天王」

「はっ！」

「まっかせてよ魔王ちゃん！」

「ご期待には全力で答えます！」

「安心せいハルト坊、お主はお主の敵を倒せ！」

「おう！任せてとけ!!」

「っ！此奴等…一体何処から…それより何故、お主の危機に駆けつけたのじゃ！」

「ま、これが俺の人徳だな」

『寝言は寝て言え』

「いやいや！この辺はき！やっぱり建国前からの付き合いからくる絆の力だよな！」

「絆じゃと…」

何か彼女の地雷を踏み抜いたようだが知るか

「まあそうだね伊達に長い付き合いじゃないよ」

「そうだ！」

「僕達は四天王ですから」

「まあウオズから ハルト坊が何かやらかすのは確定だから助けてやれと言われての」

「ははは…ウオズは？」

「少ししたら来るってさ」

「「「テメエ等、何のんびりしてやがる!!」」」

「お主等、仕事の時間じゃ行くぞ」

「「「変身!!」」」

再起動したモールイマジジン達が四天王に襲い掛かるが

『R I D E R T I M E』

『変身』

『(コア) 1号』

変身した4人とそれぞれの戦闘が始まったのである

「さて……手品は終わりかお嬢さん？」

「絆?……そんなのまやかしじゃ!ある訳がない!お主が怖いから奴らは従っているだけじゃ!」

「アイツらが俺を怖がるとか無い無い」

『そうだな……この威厳が皆無の魔王の何処を恐れる必要がある!』

『おうとも!奥さん達の尻に敷かれ!戦いは力押しのパワープレイ!実はパラドに知恵要素を吸い尽くされてついたあだ名が脳筋魔王!!俺たちの半身!常葉ハルトたあ!こいつの事だあ!』

「バイス後で覚えておけ……ってパラド!お前が犯人だったのか!!」

『ああ俺の力を使うにはお前の力も必要だったからな』

「確かに俺はお前でお前は俺だしな……つまりパラドの頭の良さ||俺の賢さという訳だ!」

『いやそれは違う』

「何でさあ!!……じゃなかった、今すぐ少年君の関係者全員の記憶を戻すなら痛い目に遭わないよ……どうする?」

「仕方ない……むくが自ら相手してやろう!封解主!開放!」

すると六喰の中にある霊力が跳ね上がると同時に赤いチャイナ服のような霊装へと姿を変えた

「それが本気な訳か……こりやウオズ達待つてる訳にもいかないかな?よし久しぶりにてんこ盛り行くよ」

『ジオウ……トリニティ』

ハルトはアナザージオウトリニティに変身したのであった

精神世界で

「四天王派遣、流石はウオズ英断だよ」

「恐縮です我が魔王」

「なあ…八舞姉妹とデートしてたら、いきなり呼び出されたんだけどさ…取り敢えずあの子誰？」

「何この状況でデートしているのです…ああ…だからエルフナイン嬢とマドカ嬢がハイライト消えた目で外出していたのか…」

「え!!あの2人ついてきてたの!!」

「ええ…黒いオーラを放ちながら【注射】とか【箱にしまおう】とか小声で聞こえたような…」

「お、俺……明日の朝日拝めるかな……」

「知らねえ……つか話が逸れる！なあ、お前マジで忘れてんのかナツキ？少年君の事まで」

「え？少年君って……アスム君がこの世界にいるのに何でハルト冷静なんだよ！」

「いるならサイン欲しいよ！分かった本当に忘れてやがる……取り敢えずアイツ敵！倒す
！OK！」

「成る程俺に何かされたのか……よしやってやる！」

「行きますよ我が魔王！」

「おう！」

『アナザーツインギレード』

『アナザージカンザックス』

2人の武器を召喚すると両者は同時に走り出すと中間地点で武器が激突した

「らあー!」「っ!」

六喰も力を開放しているからか、単純な力は以前戦った琴里に匹敵するがトリニティの力の前に競り負け初める中、虚空からアナザージカンデスピアが放たれる封解主でガードするも

「ぐ……」

「舐めんなよ……これが俺達の力だ!」

すると突如放たれた糸がアナザートリニティを拘束するのであった

「まだいたか!」

「ふふふ……貴様を倒せば契約完了だ」

地面から現れたこいつは……間違いない

「スパイダーイマジンか！」

「良くやったのイマジン……こいつの記憶を閉じれば終わりじゃ」

「何を言う？こいつを消せば良いの难道？」

「何を言っておる？」

そう六喰とイマジンとの間に認識の差異があった、そもそもイマジンは契約者の望みを歪んだ形で叶える傾向にある

故に誰を消すなんて望みで契約したら

「殺そうとするよなあ…っ！まずい解けない！」

『よし！こうなったら分離だハルト！』

『残念ですが分離出来ません』

『ええええ！』

「以外と地味なピンチ！四天王は自分の相手に大変だし……ハウンド達は船だしキャロル達は……」

『そうだよ！キャロル達は!?!』

「今頃、女子会してる」

その言葉通りキャロル達はピースメーカー艦内でお菓子やお茶を飲みながら楽しく話していたが

以外なピンチにアナザートリニティは冷や汗を掻くも以外と冷静だった

『何でそんなに冷静なんだよ!』

「だってこんなにイマジンを暴れたらさ…来るだろう?」

『え?』

「来るよ…白線の内側に下りな」

それと同時に空から二両の電車が現れると中から降りた2人の青年と5人のイマジ
ンが現れたのだ

「大丈夫!」

「お前、何捕まってるんだよ!」

モモタロスが赤い剣でアナザートリニティを拘束した糸を両断して拘束を解く

「ありがとうございます!!」

変身解除するとナツキも驚いていた

「の、野上良太郎だ…：すげえ…：本物の特異点だ…」

「だろう! やつぱりカッコ良いよなあ…」

「で、電王にゼロノスだと…：馬鹿な!!」

「おう何、俺達のファンに手エ出してるんだ蜘蛛やろう!」

「逃げてるイマジン追いかけてみたら、まさかここに来るなんてね」

「逃げてるイマジン?」

「話は後だ野上!」

「うん…行くよ皆」

「き、貴様等あああああ！」

突如、スパイダーイマジンの呼び声に六喰が契約したモールイマジン達も現れるが

スパイダーイマジンが驚くも良太郎と侑斗、イマジンズ全員が横並びで立つとベルトをつけた良太郎はケータロスを侑斗は赤いカードを取り出した

「そ、そのカードは!!」

「俺を忘れないんだろ？信じるぞ」

「はい!!」

「ちよつと待てよハルト、俺達も忘れるなよ」

「あつたり前だろう！ウオズも行けるよなあ！」

「勿論ですとも我が魔王」

「じゃあ行くよハルト君」

「俺達のクライマックスに乗り遅れるなよ魔王」

「はい！全力で食らいつきます！！だよなお前等！！」

『『『おう！！』』』

良太郎はケータロスにコードを入力する

『モモ・ウラ・キン・リュウ』

軽快な音楽と共に全員がアイテムを構え そして

「変身！」

『クライマックスフォーム』

『CHARGE and UP』

良太郎には4人のイマジンが合体し両肩と胸、頭部にカメンがついた姿 消える筈
だった仲間との絆が繋ぎ止めた奇跡のフォーム

「ふふふ…俺！さんじよ『うわーい！すごい久しぶり!!だけどやっぱり気持ち悪い』おい
小僧！『ちよつとキンちゃん押さないで!』『狭いんやからしょうがないやろ!』うるせ
えええええ！」

仮面ライダー電王・クライマックスフォーム

そして

赤い鏢のようなアルタイフォーム、しかしその力の代価は重くのしかかる…まるで記憶が風化していくように…だがそれでも戦う戦士

「最初に言っておく！俺はかーなり強い!!」

『その通り!』

仮面ライダーゼロノス・ゼロフォーム

戦いの場でなければ地面に手をつき感動していただろうが、今は共に戦ってくれるのだからハルト達も変身した

「皆さんが強い?そんなのずっと前から知ってます!!」

『ジオウII』

「ハルトじゃないけど…この展開…確かに燃えるな!!」

『リバイブ・剛烈!』

「祝え!!時の番人達と我が魔王が一同に介したこの瞬間を!」
『ウオズ』

そして直ぐに

「かかれえ!!」

スパイダーイマジジン軍団と電王組withハルト達が駆け出すのであった

そんな中　小さな黄色の球がふよふよ浮いていた

『あの力は悪の組織のボスだ…あの悪の力は今まで見た奴より別格だな』

その光の球は戦いを見守っていたのである

六喰プラネット6幕 別格なあいつが現れた？

前回のあらすじ

最初からクライマックスだった！

「行くぜ行くぜ行くぜ!!」

電王はデンガツシャーをソードモードにし

「デネヴ！」

『了解!』

ゼロノスはデネヴを銃 デネヴィックバスターへ形を変えるなり撃ちながら走ると同時に敵に対して強烈な攻撃を浴びせながらスパイダーイマジンへと向かっていく
…その背を見て

「やっぱり俺なんてまだまだ…だけどさ…言ったら？このクライマックスに食らいつくんだらうかあ!!」

アナザージオウⅡも負けじとアナザーツインギレードを双剣にして突貫する

「さらさらさらあ！どけどけどけえ！2人の戦いを特等席で見るのは俺ダア!!」

同じように怯まず参戦するアナザージオウⅡの背中を見て

「全く、また1人で行ってますね…私や四天王の苦勞を知ってほしいです

「なら追いかけないとな…なあウオズ、俺の疾風とお前のシノビどっちが速いか勝負と
いかない？ハルトを捕まえたら勝ちな」

「望む所」

『PERMISSION TIME シノビ』

『リバイブ…疾風』

「はっ!!」

2人は高速形態に移行すると道を塞ぐイマジン達を蹴散らしながら前進して行くのであった

「何じゃ……何じゃ……何なのじゃ彼奴等は!!あの頭のおかしい連中は!!」

「六喰!!」

突如、彼女の背後からディアゴスピーディーに乗った土道が現れたではないか

「またお主か……何のようじゃ?むくは取り込み中じゃ話なら「今聞いて貰う」……むくは取り込み中と言っておるじゃろう!」

「変身!」

『クリムゾンドラゴン!』

電王 and ゼロノス vs スパイダーイマジンはと言うと

「へえ中々やるじゃねえかアイツ等」

「ま、俺達と良太郎には及ばないがな!」

「この虚仮威しがあ!」

「おせえ!」

吐き出す糸をデンガツシャーで両断するとその背中からデネビックバスターで攻撃するゼロノス、長年戦い続けている故の連携がそこにあつた

その頃 アナザージオウはと言うと

「この戦い…録画してくれよバットショット!」

メモリガジェットに撮影させていたのだ

「さあお前たちには特別サービスだ、俺なりのクライマックスを見せてやるぜ！」

『ディケイド』『W』『ファイズ』

「久しぶりの実体化だな」

「つたく…遅いんだヨ！ハルト！」

「………何で俺まで？」

「あ、そうそう！実はアナザーファイズに渡すものがあつてさ〜」

手渡したスマホ ファイズフォン20Plusを受け取ると一言

「………大体わかった」

「それは俺のセリフだぞ！アナザーファイズ！」

「別にお前のもねえけどナ」

「それより！強化アイテムがあつて羨ましいぞ！」

「いやお前、コンプリート21になれるじゃん」

「大丈夫ダロ、何か世間では金色のデイケイド が流行つてるらしいじゃねえカ？」

「アレは別人だ馬鹿者!!」

「え？ちよつと待つて！金色のデイケイド !?何それ俺聞いてない!!ちよつ、邪魔！」

「お前は戦いに集中しろ!!」

と騒ぐ三馬鹿を無視してマイペースにアナザーファイズは受け取ったアイテムを操作した

「……確かこうだな」

アナザーファイズは変身アプリを起動しお馴染みのコードを入力する

『5・5・5 ENTER』

『STANDING BY……COMPLETE!』

アナザーファイズの体に再度新しいフォトンブラッドが駆け巡りアナザーネクストカイザのような有機的装甲に機械的な装備が加わって

その力は神か悪魔か

次世代の救世主 アナザーネクストファイズ

「これは……祝わねばなるまい！」

「え？ウオズ？」

「祝え！20年の時を超え、新たな力を得た姿その名もアナザーネクストファイズ！ま

だー人新たなアナザーへ目覚めた瞬間である！」

「俺無しでも祝うのかあ…ちよつと複雑」

「失礼しました…：…今度は我が魔王が変身した時に祝いましょう」

「頼むぜウオズ」

アナザー・ジオウがアナザー・ウオズの肩に手を置くと

「勝負は私の勝ちですなナツキ」

「ちよつ！それズルだろ！ハルトから近づいてもらうとか!!」

「関係ありません、私は知恵を使ったまで！我が魔王が使わない分のね！」

「ウオズには今日の夜飯は無しだな…：変わりに」

ハルトの目線の先には四天王がイマジンを必殺技で倒し爆散させている光景が

「四天王には今日、デビル大蛇のステーキを振る舞おう」

「な、何だと…あの美味しい肉の塊を！」

「信賞必罰は世の常だろ？」

「因みにナツキは陰で我が魔王を脳筋ライダーヲタと罵倒してました」

「おい！それ士道君との話の最中に…はっ！」

「そうかそうかナツキ…君はそう言う奴だったんだな」

「突然のエーミール辞めい！」

「取り敢えず2人のお仕置きは後で密室ドドリアンボムの刑にするとして」

「終わった……未来で死刑囚や反乱分子の拷問に使われるドドリアンボムの刑に……」

「ふざけるな！こんな事で死に戻るなら俺はヤンデレ化した2人の手で死に戻るぞ!!」

「アホな死亡フラグ立ててる暇あったら働け、そしたらチャラにしてやんよ」

「っ見せましょう！見ててください我が魔王！私の頑張り！」

「おうよ！見てろよ！」

と敵陣に切り込む2人を見て

「これでよし、さて残りは俺達の仕事だな……行くぞ野郎ども!!」

「おう！」

「おう！見てろお前たち！これが日夜乗り物に跳ねられた事で得た耐久性ダア！」

「メモリアルイヤーの力、見せてやる！」

アナザーネクストファイズはベルトにつけたファイズフォン20Plusのアプリを起動した

『FAIZ EDGE MATERIALIZED!』

ファイズエッジを召喚して戦列に加わるのであった

その頃、電王とゼロノスはスパイダーイマジンを追い詰めるのは一つ

「ノリの良さだぜ！」

『何か違う〜』

『まあまあ』

『皆、行くよ!』

『よっしゃ!』

「おう！」

電王はケータロスのボタンを押し込みパスをセットアンドタッチする

『CHARGE and UP』

「行くぜ必殺！俺達の必殺技！！クライマックスバージョン！！」

『侑斗、我々も』

「ああ！」

『FULL CHARGE』

デネヴィックバスターにカードを装填してゼロノスも構えると

「せやああああ！！」

電王はすれ違い様に胴体にデングッシャーで一撃叩き込むとゼロノスの強烈な射撃

を喰らい爆散したのであった

「っしやあ！」

「さてと後はあつちだが…ちよつと待て俺達が追いかけてたイマジンは！」

「あ…そうだった…っ！彼処だ!!」

電王が指差した先にはハルトを眺めていた光の球が浮遊していたのであった

そして

「これが俺達のアナザーキック!!」

『EXCEED CHARGE!』

4人でアナザーキックを叩き込みイマジンを爆散させると同じタイミングでアナザーウオズとゲイツも倒した、合流して変身解除したハルトは

「んじゃ働きに免じてドドリアンボムは辞めておくよ」

「感謝します我が魔王」

「ありがとうハルト!!もう脳筋ライダーヲタとかバカにしないから!」

「変わりにナツキは闘技場で般若パンダと戦え」

「罰ゲームじゃん!!」

「当たり前だ……さてと残りは」

「おーいコッチは片付いたよー」

「全員負傷無しじやハルト坊！」

「もう少し暴れたかったです」

「その通り！」

「はいはい、気持ちは分かりますが我等の目的は……あれは……」

「つて少年!? 何で彼処に……こうしちゃいられねえお前達！ 少年君を援護するぞ!!」

とハルト達が加勢しようと走り出した時の事

『お前の望みをー』

3人を遮るように光の球が地面に落ちると鬼のような形を作る。それは上半身下半身が逆さにある砂の塊のような怪人

契約前のイマジン…なのだが

「ん……………今…何か蹴ったな」

余りのタイミングの悪さもハリトは蹴飛ばしてしまったのだ

「いや！イマジン蹴飛ばしてたよ！」

「え？イマジン？敵なら良くね？」

「あの…何と言うか魔王様と話したいみたいです…」

「ええ…契約のデメリット知ってる俺に契約を持ち掛けるイマジンなんていないよ……
まったく…幾ら脳筋だ馬鹿だと言われようが仮面ライダーと料理の知識だけは豊富な
俺を騙せると思うな！」

ドヤ顔しているハリトにウオズは溜息を吐きながら

「我が魔王、彼処のイマジンをご覧下さい」

「だーから！俺は簡単に契約なんて結ばな」

『ここに仮面ライダーキバこと紅渡のサインがあるが？』

「すみません貴方と契約するので俺にサインを譲ってくださいませんか！」

あっさりの手のひら返したのであった

「いや見事に騙されてますよ!？」

「いやあ見事なフラグ回収、俺じゃなきや見逃しちゃうね」

「流石ハルト様、素直さで右に出る者はいないな」

「いや、ただ馬鹿なだけじゃろアレは」

「しかしフラグちゃんは仕事してますね」

「ああこの間、ハルト達の実験に巻き込まれた子?」

「はい、アレ以来モブ男さんは逢魔の闘技場に足を運ぶと聞いています賭け事が好きな
ようで」

「何だろ破滅する匂いが…気のせいだと言いけど」

「因みに道案内してくれたトルーパーと仲良くなったらしく彼等にも賭け事を勧めた結果、自分達の事をスロットとケイバと名乗るようになったとか」

「がつつり賭け事にハマってるじゃん!それで良いのか逢魔の精鋭!!」

「ええ…おっと脱線してしまいましたか…おや?」

ウオズは未契約イメージンをよく見ると突然、契約してないのに実体化したではないか
「あれ？俺契約した？」

「違う、最初から俺は使い分けが出来るのでな」

この黒い鬼のような姿と何処かのゼロで天使のようなガンダムに乗る人のような声
間違いない

「え？ネガタロス？」

「ほお俺を知っているとは流石魔王だな、そうだそしてお前が常葉ハルトか…ふむ見れば見るほど面白い奴だ」

「はいはい…どーせお前も俺の事を脳筋とかライダーオタクとかハーレム野郎とかバカにするんだろ？」

「我が魔王、やさぐれないでください後ハーレム云々は純然たる事実でしょう」

「脳筋やライダーオタクも事実じゃん」

「ウオズの言う通りでもあるが…ナツキは後で処理してないニトロチェリーを丸呑みな」

「それ体内で爆破する奴だよな謝るから許して!!」

涙目のナツキをスルーしてネガタロスを見ると

「馬鹿にする？とんでもない俺はお前を高く買っている単刀直入に言えば俺を雇わないか魔王」

「……………はっ」

まさかの自分を売り込みに来ただとお！と驚くハルトに

『正気かネガタロスとやら！この男に雇われると苦勞するぞ！現に俺達は現在進行形で苦勞が止まらない!!』

『先に契約した先輩達が言うんだ！素直に聞いておケ！』

「そもそも俺の苦勞の発端はお前達の誘拐から端を発してますが？」

『その通りだったな…』

『おっしゃる通りデス！』

「んでネガタロス、何で俺なの？」

「魔王軍…聞けば未来では世界征服も狙える最強の悪の組織になると聞いてな俺が入れば更に層の厚みが出て魔王軍（最強）となるぞ」

「俺は世界征服を企む悪の組織は作ってないのでお帰りください！あとショックー、デ

ストロン、ゴルゴムとかに謝れ！」

「落ち着いてください我が魔王…取り敢えず先ずは」

「そうだな今すぐ良太郎さん達の援護「面接と行きましょう」……は？」

「ヤクヅキ」

「うむ任せておけい、お前達」

「かしこまりました我等がロード」

そう言うときヤクヅキは配下のレジエンドルガを呼び出し会場設営をしていた…

「あのお皆さん？ただいま戦闘中なの忘れてませんか？」

そんなハルトの声は虚しく何故かうオズと四天王に向かうような形でネガタロスが

椅子に座ってるではないか

「ではまず履歴書か何かをお持ちですか？」

「ある訳ないでしょ!!」「あるぞこれだ」まさかの準備万端!そこまでして俺の傘下に入りたいの!？」

『何て奇特的な奴だ!』

「ふむふむ…以前はネガタロス軍団(仮)のリーダーだったと…ふむビルの爆破にイマジン、人間、ファンガイアと種族を選ばずに人材を集め国会議事堂襲撃とは素晴らしいですね!逢魔に入りましたら幹部スタートは確実ですよ」

「そうか…これで俺も悪の組織の幹部(仮)か」

「ウオズ話聞いている!?!何で俺の了承なしに幹部に取り立てようとしているのさ!」

「では次に我等が魔王軍への志望動機をお聞かせください」

「何マジで面接してんだ!!つか話聞けよ!」

「先程も言ったが、その魔王を見ると身内絡みでは非常な決断を下すのに躊躇いがあ
るだろう?自分の組織の闇を見て心を病む可能性がある」

「ほほお、つまり我が魔王を支えるのが目的と」

「そうだ俺は役に立つ!そして俺は魔王の闇を引き受け成長し悪の組織大幹部 ネガタ
ロスとなるのだ!」

「いや魔王軍は悪の組織ではないけど…え?俺の病みを引き受けてくれるの?」

「それは無理だ、俺にお前の病みは引き受けられない」

「即答!?!そんなに酷いか俺の病みって」

「ぎゃああw」

「お前のはもつと無理だ、先程お前の恋人達とすれ違ったが中々の病みだったぞ」

「ええええ！」

「……………あ」

ハルトは危険を察知してウオズの方に移動したと同時にナツキの肩を強く掴む影が

…

「ナツキ（さん）？」

「ふ、2人とも!?!ここは危ないから早くに「がしませんよ?」「ああ私達を放置して良くもまあ抜け抜けと八舞姉妹とデートしていたな」…………い、いやあそれは「お話ししましょうか?」は…ハルト助けてえ！」

その涙目のナツキにハルトは笑いながら

「さあ修羅場を楽しみな！」サムズダウン

「行きましようかナツキ（さん）」

「い、いやああああああ！」

2人にドナドナされるナツキを見送る余談だが何度か死に戻りをした知識を用いて2人とデートする事で何とか難を逃れたナツキであった

そしてネガタロスは一言

「それで面接結果は？」

「貴方の今後の成功をお祈りします」

雇ってたまるかとハルトは否定するが

「「「採用！」「」」」

「お前等あ!?!」

「考えてみてください！我が魔王……今までこのように我が魔王に仕えたいと頼み込んだ者が他にいますか！これまでの……脳筋エピソードを聞いてからいましたか！」

「フィーニスがそんな感じだったろ？後そんなに俺をいじめて楽しい？いじめダメ絶対」

そうフィーニスを見ると

「確かに魔王様の闇を受け入れる方が必要であると思っていた所なのですよ！うんうん僕は賛成です」

「本音はフィーニス？」

「そろそろ僕にも後輩が欲しい！」

「素直でよろしい……んでジョウゲンとカゲンは何で賛成なのさ」

「いやリテイク前でも仲間にしてたし」

「今更だ」

「それはメタすぎんだろ!!! てかりテイク前って何さ！」

「それは知らない方が良いと思う」

「あれ？今難波チルドレンな記者がいなかった？じゃない！ネガタロスはいいのそれで
！」

「構わない、お前の下についた方が面白そうだ」

「え、ええ……あ」

「何い！そいつがテメエの下に付くだとお！」

「……………嘘だろ」

かつて2人を追い詰めたネガタロスが誰かの下に付くという光景に電王とゼロノスは驚くが

「何を驚いている？まあ俺様の別格な強さが魔王軍に入ったからな当然だな、これから先の魔王軍の活躍に乞うご期待だ」

「はあ……取り敢えず仮採用なネガタロス最初の頼みだ、その2人とは戦うなよ戦うなら俺が締め上げる」

「分かった」

「あれ？物分かりが良いな」

電王の以外という顔で答えると

「今の俺はアイツの部下だ、ボスの命令は聞くだろう？」

「お、おう……… そうか……… って少年君の援護行かなくちゃ！」

「その辺は大丈夫だ」

「何でだよ」

「アレをしろボス」

「誰がボスだ………ん？」

ネガタロスの指差す方向を見ると何故か士道は六喰を守りながら黒十香と戦ってるではないか

「どんな状況だよ！つて…え…あの本…何で!!」

士道の右手には新しい分厚いライドブックが現れているではないか

「覚悟を超えた先に希望はある…俺が…俺が2人を守る!!」

『ドラゴニックナイト!』

『烈火抜刀!』

「変身!!」

『ドラゴニックナイト!!即ちド強い!!』

その銀の全身鎧を思わせる姿は新たな剣士の戦装束 絆を忘れずに繋ぐと決めた英雄が織りなした力

仮面ライダーセイバー・ドラゴニックナイト

「いわ…います?」

「祝う気ないなら祝うな……んじゃお前達」

全員の視線が集まるのを感じたハルトは一言

「のんびりティータイムと行こうかほら俺手製のお茶菓子あるよナツキの分が余ったからネガタロス座りなよ」

『コネクト』

最早、アソコは士道の戦場だ邪魔するのは無粋以外の何者でもない

「いやお前達の仲間じゃ「特製プリンもありますよ？」…よし食べてから考えよう」
『ちよつとモモタロス！』「けどよお！」

「良いのか？」

「良いんですよ寧ろ手助けは彼の成長の邪魔になりますので」

そうハルトがお茶菓子を出そうとしたが、手をピタリと止める

「ウオズ、茶会の用意は済ませたからさ…もてなし頼める？」

「どうされました？」

「ちよつとな」

ハルトは帽子を目深に被り正体隠蔽する

「分かりました、お気をつけて」

「心配すんなよ……ネガタロス、ついて来い」

「俺？」

「ウオズ達が言うには幹部に入れるだけの力あんだろ？ならその実力で反対してる俺を認めさせてみる」

有無も言わせない覇気で威圧する姿に

「勿論だボス、任せてくれ」

「行くぞ……あ！皆さんは楽しんで！」

普段のヘラヘラした顔で答えて動くのであったが

「さて、では私が変わり「請け負いましょうか？」え？」

ウオズが目線を向けるとそこには場に不釣り合いな…そうメイド服を着た銀髪の女性
性がいなのだ

「貴女は……」

「通りすがりのメイドにございます」

その頃 ハルト達は気配の方向へ歩いていくと、そこにいたのはIS擬きを駆る 対
精霊部隊ASTT…成る程、黒十香と六喰を狙いに来た訳かさせないとばかりに2人は進
撃中のASTT部隊の前に立つ

「何者！」

「悪いけどここから先は通行止めだよ」

「貴様は……隠者（ハーミット）の件で介入した……」

「おーおーどうやら俺も有名になってるみたいだね」

「行く先先で我々の邪魔をして何が目的だ！」

「目的？」

「あつても話すか、この魔王の大いなる計画においてお前達は前座に過ぎない」

「お、鬼？」

「え？何それ俺知らない？」

周りが困惑する中、ネガタロスは感心感心とばかりに見ている

「何だこの世界を支配するのではないのか？」

「んな訳あるか!!確かに世界征服とか考えるならこの人達は前座だわ!!……はあ、ま、やるだけやってみる危なくなつたなら加勢するから」

「いらん、見ている」

そう言うとネガタロスには腰に電王ベルトをつけると何処からか聞こえる低い電子音……まるでスピーカーの不具合を思わせるような感じだ

「変身」

『NEGA FORM』

ライダーパスをセットアンドタッチしたと同時にネガタロスの体は電王プラットフォームになると同時に紫と燃える炎を思わせる色味が加わった電王ソードフォーム

が現れた

悪の組織を率いた逸れ者は新たな歴史を得る

影の時の運行を守る番人

仮面ライダーネガ電王

「やっぱり電王そっくりだな」

「強さは、別格だな」

そう答えながらネガ電王はデンガツシャーを銃モードに変えるとAST部隊目掛けて発砲した

その頃

「はあ……はあ………」

セイバーは黒十香と戦っていると何がキツカケかは分からないが急に自分のよく知る十香へ戻ったのである

「何故…お主はむくを助けた？」

「それは…っ！危ない！」

「っ！」

その時、六喰の背後からDEMの魔法使い エレンが襲い掛かろうとしていた狙いは六喰、振り下ろされた凶刃が彼女を切り裂く……筈だった

「つと危ない危ない」

ナツキが待ってましたとばかりにアナザーブジンソードの武刃で受け止める

「これでミツシヨン達成かな」

死に戻ったナツキは断片な情報から彼女に死なれると困ると判断して助ける事を選んだのだ

「お主…」

「ダメじゃん士道、ちゃんと守ってあげないとき」

「貴様…あの時ジャバウオックを倒した奴か」

彼女の脳裏には八舞姉妹の事件でジャバウオックと大型艦船相手に大暴れしたアナザーマジエステイの姿がよぎったのだ

「そうそう…そう言う君は…ああ〜ハルトにやられた元最強か」

ナチュラルに煽られてエレン キレル

「あの程度の実力の男など直ぐに私が始末してあげます、安心しなさいな跡を追わせてあげるから！」

「あ…」

遠くでスツと立ち上がる影が見えたのでナツキは直ぐにバックステップで間合いを取る

この後来る攻撃の巻き添えを受けない為に

「っ!!」

実際この一言の直後、エレンを燃え盛る巨大タイヤが跳ね飛ばした上に

追撃が起こる

『アナザーエクスプロージョン!』

大量の天体型光球の雨が降り注ぎ

『WAKE UP!』

絶対零度に等しい氷が逃げ場を封じ

『ゾンジス／ザモナス TIME BREAK!』

時代の狭間で生まれた者達のダブルライダーキックが放たれたのであった

「……っ!くっ!」

エレンも伊達に世界最強を自負してない、この不意打ちを最低限のダメージで堪えたのだが…そもそも絶対量が量なので足がフラフラとしている

「一体、どの男を始末するつもりですか?」

「まさかと思えますけど」

「ハルト様ではあるまいな？」

「だとしたら覚悟せよDEM」

正に怒髪天を突かないばかりの四天王、アナザーコア1号を背にしてゾンジス、ザモナス、レイが立っている中

その上に浮遊しているウォズは珍しく顔に怒りの表情が浮かんでいた

「ええ…我が魔王を害するならば我等の敵です、まあ二亜嬢や七罪嬢を狙う段階で敵ではありませんがね」

「そうじゃな、どれ貴様の音楽（悲鳴）をDEMにでも送りつけるかの最愛の社長にでも聴いてもらうが良い…さあ豚のような悲鳴を上げろ」

最低災厄の未来から来た 最古参の2人から放たれる純粹なる殺意を直接的に受けていない土道やナツキも思わず冷や汗をかく

伊達にあの魔王の側近と呼ばれていないと

普段の様子からは考えられない程の圧に寒気が止まらない

そして彼女は知るだろう、己が井の中の蛙であった事

今から戦うのは隠れた1人を探す為に世界を滅ぼした 魔王軍 その王の側近達なのだから

その頃ハルトはネガ電王の戦いを見ていたが

「……………これウオズ達か？少年君は何やってんだよ……………しゃあない止めるかネガ電王！
さっさと終わらせ…ん？」

「終わっているが」

「やるねえ、んじや皆の所に帰るよ」

「はっ！」

そしてハルトはネガタロスを連れて先程の場所に帰った、残るのはボロボロになって倒れるAST部隊のメンバーだけである

六喰。プラネット7幕 切り札は…

前回のあらすじ

「俺ごとネガタロスは今未来で世界征服を行う悪の組織 魔王軍への入隊を決める、魔王は反対していたが幹部達の推薦もあり仮採用、その後敵を蹴散らすと言う魔王軍流の面接を受けたのだが…果たして俺の可否は！」

「何ナチュラルに前回のあらすじしてんだよネガタロス!!あと魔王軍は世界征服とか企む悪の組織じゃありませんし電王とゼロノスの活躍、それに少年君の覚醒イベントが抜けてるぞ！」

—————

「たっただいま…っつてええ…」

ネガタロスの戦いを見届けた後、ハルトが転移した先の景色は

「……………」

完全に意識を刈り取られているエレンと暴れたりないとはかりにオラついている自分の臣下達であつた

「え…ええ…俺が離れた間に何があつたの？」

ハルトがドン引きする中、ネガタロスは感動しているようで

「こ、これが逢魔四天王と筆頭秘書ウオズのかか！そしてこの敵への容赦の無さ…確かに悪の組織に必要な要素だな勉強になる」

「お前は何感動してんだ!!あと悪の組織じゃないからな！」

そのツツコミでこちらに気づいたのかウオズは気絶しているエレンを投げ捨ててハ

ルトに近寄る返り血を拭いながら

「お待たせしました我が魔王、このような身なりの参上をお許してください」

「い、いや別に良いんだけど何があつた？」

「我が魔王を愚弄するDEMの先兵を排除したまでであります」

「そ、そつか……うん良くやった」

この人達、普段は俺を脳筋とか言つて弄るのに結構俺絡みだと沸点低いよなあ……慕われてると喜ぶべきかな、これは

「ありがたき幸せ……そして彼はどうでしたか」

その言葉に幹部陣の視線がネガタロスに集まっていく背筋を直し緊張している彼を見てハルトは溜息を吐きながら答える

「そうだなあ……ネガタロス」

「はっ！」

「お前には逢魔にいるライダー怪人軍の軍団長に正式に任命する…それに伴ってお前を幹部とする部下にはゴオマをつけるウオズ筆頭に幹部間の序列は無いが対外的には幕僚総長のハウンドの下だ、それを忘れるな外部ではハウンドを立てろ」

「はっ！」

「それと、俺の目が節穴だった事を謝罪する済まなかったな」

「気にするなボス、外様を直ぐには信用しないのは当然のことだからな」

「期待しているぞ」

そして周りには挨拶とばかりに駆け寄る

「祝え！我等の新しい仲間 of 参入を！」

「おめでどう!!宜しくねネガちゃん」

「めでたいな新しい仲間だ」

「や、やつと僕にも後輩が出来た…さあネガタロス！僕の事は今後フイーニス先輩と呼びなさい！」

「ふむ…癖の強い奴も多くて苦労するだろうが逢魔四天王筆頭として歓迎しようではないかネガタロスよ」

「宜しく頼む先輩方」

「ふう……んじゃ歓迎会の用意しないとなあ食材足りるかな買い足さないとそろそろ…

じゃなかったウオズ！お前には良太郎さん達の響応役を頼んだよな！何で戦列に参加してるの？」

「あ、それはですね彼女に変わりを頼みました」

「彼女？一体誰……………」

ハルトが目線を動かすと、そこには長い銀髪に少し胸部の自己主張が強めのメイド服を着ている美女がいた

「あら？お話は終わりましたか？」

その人物をハルトは知っていたが…しかしあり得ない

「べ、ベルファスト？」

彼女もジャンヌ・オルタと同じく自分がしていたゲーム世界の住人だからだ

「はい、お久しぶりでございますご主人様…貴方の妻 軽巡洋艦 メイド長、ベルファスト並びにロイヤルメイド隊…ただいま貴方の麾下に戻りました」

「……………はい？」

その頃 この戦いを観戦していたピースメーカー艦内では、ハウンド達親衛隊は血相変えて自室に撤退していたが残っていた面々はと言うと

「ほお……………」

キャロルが絶対零度の瞳で画面を凝視し

「さて…素振りをするか」

「私も付き合うわ千冬」

千冬とアンティリーネは武器を持ち訓練室に向かい

「じゃあ東さんはあの女の個人情報を探すよ」

「私も手伝う」

束と銀狼はベルファストの情報収集を始め

「なら私は逃げるハルトの捕獲かな」

「頼んだぞ錫音どうやらあの男には少しお仕置きが必要なようだジャンヌ」

「分かってるわ、火炙りの時間よ」

「そうだな……焼き加減はウエルダンで頼む」

キャロル的にはかつてのトラウマを想起するがそれくらい罪深いと自覚してほしい

—————

その頃 少し先に起こるとんでもない展開を予想したハルトは少し顔を青くするが、こほんと咳払いして

「状況説明をして欲しいが…まずは俺の恩人達へのモチなしありがとう」

「メイドとして当然でございませうご主人様」

「そして…一つ確認だ」

「何でしょうか？」

「お前は俺の知ってるベルファストで間違いない？」

「はい…この時をどれ程お待ちしていたか…漸く会えました」

「ベルファスト…」

目に涙を浮かべ抱きつくベルファストにハルトはアタフタしながらもきちんと抱擁で返した

その映像を見ている者の殺意が上がった事も知らずにそれを理解していたウオズ達

はやれやれと言う顔をし、ナツキは合掌していたがネガタロスはキョトンとしていた

さて場面を土道達に戻そう結果から言うくと六喰が皆の記憶を戻すから、もう私に関わるなど言い宇宙が上がってしまったのである

六喰は静かに暮らしたいとな

因みに反転十香ちゃんはドラゴニックナイトにKOされた後、人格が入れ替わったのか元の十香ちゃんに戻ったのであった…しかしあの状態になるトリガーが分かった以上、四糸乃や八舞姉妹、琴里、七罪や二亜もなる可能性があるわけか警戒はしておくに越したことはないが

どんだけ反転十香と土道がトラウマになったんだと言いたいが取り敢えず少年君周りの記憶が戻って良かったよ侑斗さんなんか暖かい目で見ていたし…取り敢えず

一件落着!!

だつたんだがなあ……

「キャロル……本当さ……火炙りだけは勘弁してくれませんか!! 助けてー!」

ピースメーカーに帰還した俺を待っていたのは怖い笑顔で俺を拘束し火炙りの刑に処そうとしている妻達であつた、気分はさながら人間の悪意で焼き殺されたサイ怪人である

「貴様と言う奴は前から思っていたがどこまで節操がないのだ!!! まさかメイドと関係を持つていたなど誰が予想した者がいる! 何処の宮廷ドラマだ!!」

「いやちよつ! 俺の! 俺の! 俺の……俺の話の聞けえ! 5分だけでも良い!!」

「あの名曲で命乞いするとかハルトにしか出来ないな……取り敢えず……さあネガタロス、修羅場を楽しみな!」

ナツキはサムズダウンで見捨てた意趣返しをするが状況に取り残されているネガタ

ロスは混乱しており

「先輩達、ボスが処刑されるのを見ているのだ？止めなければ!!」

だがそこは最古参のウオズや四天王達、代表してヤクヅキが説明する

「ネガタロスよアレが逢魔の日常じゃ早く慣れると良いツツコミ過ぎは体に毒じゃからな」

「王が私刑されているのが日常だと!どんな国なのだ!!」

「ああ…僕にもネガタロスみたいなリアクションをしていた時期がありましたね」

「けどフィーニスちゃんはすぐに慣れたよね」

「はい…まあこれだけハルト様が奥方様を増やせば慣れますよ、そりゃ」

「ハルト様は本当に恐れ知らずだな」

「ええ全く」

「王を躊躇いなく私刑するとは何て恐ろしい組織なのだ魔王軍……これが未来では血も涙もない殺戮軍団と恐れられた理由なのか……」

「怖気付きましたか？」

「まさか……逆に意欲が湧いてきたぞ、このまま行けば俺の悪の大幹部ネガタロス（本物）も夢ではない」

「素晴らしい！その上昇志向は逢魔の幹部に相応しいですよ！」

「成る程、俺は試されていたのか」

ふう、とため息を吐くも精進だなど気持ちを新たにネガタロスはキリツとしている

中、ハウンドが近寄ると

「お前がネガタロスだなウオズから話は聞いている俺はハウンド、親衛隊隊長にして幕僚総長だ」

「貴方が話は聞いている上司になるものと」

「宜しくな、まあ身内だけなら砕けて構わない何せ俺達の王があんな感じだからな」

「なるほど…勉強になる！」

「取り敢えず俺の今の姿で何か学ばないでくれますか!!」

「さあ！話せハルト！あのベルファストというメイドや他にも新しくきたあのメイド風軍団は何者だ！」

「メイド風ではなく彼女達は正真正銘のメイドにございます」

今まで沈黙をしていたベルファストが口を開いた

「貴様がベルファストだな…では聞こう、お前はハルトの何なのだ！」

「妻にして秘書にしてメイドですわ」

「そ、それで…ハルトとは長いのか？」

「はい、ご主人様が様々な世界を超える前からの…それこそジャンヌ・オルタ様より長い付き合いになります」

「ふ、ふん！偶々早かっただけで調子に乗らないでよね！！」

「じゃあハルトの正妻この人じゃん」

「ガハッ！」

ナツキの思わぬボディーブローにキャロル達は膝を突いたのである

「キャ、キャロルしつかりしろ！傷は浅いぞ!!」

「そうだよ！実際のハルくんと触れ合った時間なら束さん達の方が上だよ！」

「そうね世界の壁に阻まれて愛を育んだ彼女と違って私たちは実際の旦那様と愛を育んでるのよ？」

「そ、そうだな……オレの方がハルトを大切に思っている！」

「でしたら火炙り刑だけは辞めて貰えませんか！」

「分かった」

「ほ……ありがとう錫音たすか「束、ファラリスの雄牛を用意して」ってないだとお!!」

「はーい！」

「おい待て東、何している？」

「んーいやあ余りに暇だったから鳥の丸焼きを作ってたんだよー見て見て！もう火が通ってるから皆で食べよー！」

「拷問器具で調理をするなバカ兔!!」

「なっ！酷いよチーちゃん！天才にして天災の東さんをバカって言うかあ！少なくとも…ハルくんよりは頭が良いよお！」

「当たり前前だ！その脳筋と比べれば逢魔国民全員天才に決まっているだろう!!」

「あれ…おかしいな…涙が止まらないよ…」

『こればかりは仕方ないぞハルト』

『そうだなあー』

『いやそもそもパラドのせいじゃない?』

『それは言わない約束だつて』

一難去つてまた一難とはよく言つたものだと言ひ及ぶ中、取り敢えず

「ベルファスト……つて確か船の名前だつて?まさか偽名?」

そんな束の質問にベルファストは答えた

「いいえ本名です、私たちはKAN—SENと言ひまして人の姿をして船?であります」

「ん?艦船と何が違うのだ?」

「ほほお擬人化という訳だね!成る程成る程大体分かつた!」

「二亜!いつの間!」

「いや、皆が集まってるから何してるのかなあ、って思ってたらハルきちが修羅場作ってたから漫画のネタにしようか……と……後すみません！そのメイドさん達！今度の新作漫画に出すメイドのモデルになってくれませんか！しょうか！」

と二亜は高速で近くにいたメイド隊のケントに声をかけ持ち前の絵心で新しい絵を描いていたがベルファストはキャロルにキリツとした目で答える

「私も旦那様を愛しています、この気持ちは貴女達にも負けていないと自負しています」

「ほお……そうか……よし少し話をしよう……あと他のメイドの中にこのバカの嫁はいるか！」

誰もいなかったので、キャロル達はベルファストをつれて行ったのだが

「あの一ジャンヌさん」

「何かしら？」

「ちよーつと助けて貰えないか「無理」即答!？」

「仕方ないじゃない、私だつて命が惜しいわよ」

「皆さ俺が死なないからつて罰が過酷になつてない？」

「そもそもの原因は我が魔王が奥方を増やすからでは？」

「あく……つか何でベルファスト達はこの世界に？」

そもそもの疑問が解けていないのだと首を傾げていると

「でしたらその質問は私が答えましょう」

そう話しかけたのは小柄なショートヘアのメイド片目隠しの彼女は間違いない

「シェフィールド？」

「はい脳みそ蓑虫レベルの指揮官にも私の名前が浸透していて良かったです」

「蓑虫!？」

「ちよつと待てメイドよ」

「何でしょうか？」

「おうおう言つたれカゲンちゃん！」

「ハルト様の脳みそはミジンコだぞ！それを間違えるな!!」

「……………はい？」

「カゲンちゃん！フォローになってないよー！」

「……ネガタロス」

「何だ？」

「カゲンを降格させるからお前が繰り上げて四天王だ」

「良いのか！」

「ハルト様！申し訳ありませんつい本音が」

「カゲンちゃん！ダメ押しだからそれ!!」

「ダメじゃぞカゲン、ハルト坊が脳筋なのは我々周知の事実じやろうて」

「四天王揃って不敬ー！」

「僕何も言つてませんよ！魔王様!!」

「じゃが内心想うておるじゃろ？」

「そりや当然……あ」

「じゃあ今日のご飯はドドリアンボムにするねうちよつと用意したいなあ」

「ハルト坊を拘束しろお！」

「了解!!」

「辞めろ！HANASE!!」

「申し訳ない、これが我々の日常なもので」

「指揮官……貴方という人は……はあ……」

シエフィールドは溜息を吐きながらも事情を説明する

曰く、俺が指揮官としてゲームをしていた彼女達の世界にも空間震が発生し俺と縁のある者達が世界を超えてきたと…んでその縁とは

「ケツコンですか」

「はい指揮官と婚姻した船と関係した船だけが越えられるようでして」

「成る程成る程……だからベルファストさんが長のロイヤルメイド達が……あ」

ナツキは思い出した、思い出してしまったのだ自分も同じゲームをやっていたとそして同じように関係を結んだ子がいた事を

「いやいや彼女達はハルトの世界だから俺の世界じゃないから大丈夫だよな…メイビー」

「そう言えばユニオンの最強空母姉妹もこの世界に來ていると報告を受けています貴方の基地にいたものでは？」

シエフィールドの言葉にナツキは冷や汗が止まらないでいた

「……………」ダラダラ

「ナツキ…お前まさか……………」

「あーごめんハルト！ちよつと俺野暮用が「ナツキさん？」はい」

ナツキは逃げ出した、しかし周りを囲まれてしまった

「ちよつとお話し（ようか？）ましようか？」

「い、いやちよつ！待ってー！俺の話聞いてー！3分だけで良いから!!」

「拒絶、早く行きますよ」

「さっさと白状するのだナツキよ」

「おたすけー！ー！」

ナツキもドナドナされて混乱を極めている中にキャロル達とベルファストが帰ってきた

「さてハルト」

「はい…もう煮るなり焼くなり好きにして」

「今回の件に関しては不問にする…縄を解いてやれ」

「へ？」

縄を解かれて困惑しているハルトにベルファストは意を決したように

「旦那様……主人様……その……私も妃にして頂けますか？」

「勿論」

即答であった、この男迷わないのである

「ま、お前の過去にあった色々恥ずかしい秘密も知れたから不問にさせていただきに過ぎん」

「恥ずかしい秘密？」

「ああ例えば仮面ライダーのショップに行った際に目の前にあった等身大の像に土下座をしたとかな」

「な、何でそれを……つかベルファスト知ってたのか！」

「はい私ほど、ご主人様を知っている者はいませんので」

「あれ？仮面ライダーの前で土下座とかやってる事が今と大差なくない？」

「ま、ハルト坊じゃからな」

「ですねえ」

「お前らあ!？」

そんなこんなで逢魔に新しい仲間が増えました

???

「ちよ……ちよつと待ってお願い!!」

「さあナツキさん…少し話をしましょうか？」

「あの…エルフナインさん…その右手の注射は何でしょう…」

「これですか？これはナツキさんが素直に喋ってくれる不思議なお薬が入っているんですよ」

「それは自白剤と言いませんかね!?あとマドカは何でエンジンブレードを持っているのかな！それ生身で振り回せないよ！」

あの不死身の刑事でさえ生身で扱うのに苦心しているのだから

「大丈夫ですよねマドカさん？」

「ああ、頭に走る痛みは一瞬だからな…さて…ナツキよ…ハルト義兄さん程ではないにしろ後何人いるのだ」

「教えてもらおうぞナツキよ」

「尋問…キリキリ吐いてもらいます」

「い、いやー！ー！！」

その夜、ピースメーカー艦内でナツキの悲鳴が響いたのは言うまでもない

翌日

「し、死ぬかと思った」

「お前なあ…いや俺も同じか」

ボロボロのナツキを見て何も言えなくなるハルトだったが自分も夜、彼女達に搾り取られたので話すのも憚られた為、直ぐに話を切り替える

「六喰の件だけドラタトスクは士道と再度の接触を狙うみたいだな」

「この間の件でトラウマになってるだろうに」

「ま、イマジンの契約者でもある彼女を俺達側も放置する訳にはいかないからな」

あの激突で数は減ってるだろうが、どれだけ契約しているのか分からないとくれば問題だ

「確かに契約完了して彼女の過去に飛ばれたら、それこそ手に負えないか」

「良太郎さん達の手を煩わせるなど言語道断!! そう言う事だから俺達は暫く六喰と契約したイマジン狩りをしまーす」

「まあ俺達にししか出来ない事…だけどイマジンはどう探すのさ? 俺達モモタロスみたい
に匂いで探せないよ?」

「安心しろ…ネガタロス！」

「呼んだかボス」

「狩りの時間だけど行く？」

「良いだろう案内も任せておけ」

「よし…んじや行くぞ留守の指揮は任せたぞハウン…ド？」

定位置に副官がいなかったのでアレ？おかしいなと首を傾げていると食堂の離れた場所でもハウンドが誰かと話していた、気になり見てみると

「こうすれば簡単に綺麗になります」

最近加わったメイド隊のシェフィールドと話しているではないか

「成る程な…以外と単純だったのか…悪いな男所帯なものだからこの辺には疎くて…何せ俺達の掃除と言えば基本的にはこつちの方だからな」

「成る程確かにそちらの方が頼もしくはありますね、そのソウジも私は得意ですが」

そうブラスターライフルを見せるハウンドであつたが

「なあ隊長だけ狡いぜ！どうだいお嬢さん！今夜辺り俺と！」

「おい待てよ！お前さつきカーリユーさんにフラれたろ！見境無しか！それなら俺だつて！」

と親衛隊のトルーパーが横槍を入れるが

「ほお夜まで元氣があるなら訓練メニューを倍にしてやろうか？まずは逃げてる陛下を探し見つけスタンプブラスターで捕まえるを3セットだ」

このトルーパー…俺を訓練メニューの的扱いしやがった！少なくとも3回は狙われるのか!!

「つと思つたが予定があつたな」

「あーあ残念だぜ逃げてる陛下追いかけたら疲れるんだよなあ」

「けど色んな方法で逃げ隠れするから勉強にはなるんだよなあ」

「本当、変な所で有能なんだよ陛下は」

と離れるトルーパーに聞き耳を立ててたハルトは日頃の行いを改めてようと決めたのであつた

「すまない何せ今までこんな状況なかつたからな」

「まあ異性が少ない環境なので気持ちはわかります」

「しかしお前さん達…メイドだったか凄いな」

「当然です、ベルファストを筆頭に各部署の精鋭が集まっていますからちなみに私の担当は掃除ですね」

「そうか頼りにしてるゼシエフィールド」

「これはまさか」

「そう言う事なのか…」

「そう言う事でしょうな我が魔王」

副官にして友人である彼の幸せを邪魔してはいけないと思い、いつの間にか背後にいた右腕に頼む

「ウオズ」

「はっ！」

「留守居は任せたぞ、それとハウンドには特別休暇を与えてくれ」

「かしこまりました」

「んじゃ行こうか」

「どちらに行くのでしょうか？」

ベルファストが待ったをかけた

「外で運動」

「外で戦闘の間違いではないのでしょうか？」

「そうとも言うね上手いなベルファスト」

「私もお供させていただきます」

「却下だメイドを共にして歩ける街じゃない」

「そんなに治安が悪いのですか？」

「いや違うそうじゃない…今回の件は俺が狙われるんだ皆を巻き込む訳にはいかない」

「なら尚の事…護衛も無しに…」

「安心しろベルファスト」

「ネガタロス様？」

「実は昨日、はぐれイマジン仲間に声をかけたら1人直ぐに来てくれるとなつてな2人

「でボスを守るぜ」

「へえ、そうなんだ！誰々！」

「紹介するぞ、来い！ゴーストイマジン」

すると光の球体が幽霊のような姿を持つゴーストイマジンへと変わったではないか

「ネガタロス、コイツが魔王か？」

「そうだ紹介するぞ魔王、ゴーストイマジンだ」

「知ってるよ特異点すら押さえ込む憑依力を持ち尚且つ仮面ライダー幽汽になれる奴だろ？」

「魔王に認知されてるとは光栄だねえ」

「だが何故だ：お前は劇場版において電王クライマックスフォームに一刀両断された筈だが」

「劇場版が何か知らないが俺は幽霊のイメージから生まれたイマジンだからな魂だけの存在となつて時を彷徨つてた所をネガタロスに拾われた訳だ」

「へえ〜」

「コイツを副官にしたいが構わないか？」

「ネガタロス：前にも言ったが入りたいならコイツの力を見せてみる」

「お安いご用だ大将、何すれば良い」

「六喰つて奴と契約したイマジンを探して倒す」

「楽勝だなー発で済む」

「ハツタリじゃない事を願うよ…おいナツキ！」

「んあ？」

「お前も来い」

「えええ…今日は俺、買い物に行く日なんだけど「知るかネガタロス、ゴーストイマジン
取り憑け」い、いやちよっ！」

するとナツキに2体のイマジンが取り憑いたのであつた

「ふう…これで良し…いやあ自分の体があるのは良いねえ」

ゴーストイマジンに取り憑かれたナツキを見て一言

「つか普通に取り憑かれてるなナツキの奴」

『そもそもウオズやナツキ達が使っているアナザーウオッチはお前が精神汚染しないように調整された物だからな』

「ああ、そう言うことかイマジンの憑依とかには別の耐性がある訳ね」

『ゴーストイマジンの力が強いのもあるが大体そうだ俺達の力を純粋なまま使えるのはお前だけだからな』

「んじゃ行くぞ」

そして

「それで大将、六喰って子が契約したイマジンは何を願われたの？」

「俺を消せだってさ」

「へえ、そりや恐れ知らずだねえ」

『怪人の王である、お前の命を狙う奴がいるのか？』

「そりやいるだろうさ、ほらアレ」

ハルトが顎を向けた先には

「お前が魔王だな契約の為に死んでもらうぜえ！」

「俺達の時代の為にな！」

「お前はレオイマジンに……ザリガニイマジン！」

「ちげえよ！電王にも言ったが俺はアルマジ

ロだ！」

否 アルマジロイマジンである

「王には悪いがこれも契約でな、お覚悟」

「へえ六喰も中々の奴と契約したんじゃねえの」

ハルトはアナザーウォッチを構えたが手で止められた

「待つてよ大将、アレさ俺がやって良い？」

「勝てるの？アイツ等さ中々強いよ」

「当たり前でしょ？お望みなら大将が設定する制限時間内に倒してやるけど？」

「カウントダウンは別のライダーの十八番だ真似すんじゃねえよ」

「了解」

「イメージはお前等に任せた、ナツキの体から出てけ」

「やったぜ…んじやつと」

「任せたぞネガタロス、ゴーストイマジン」

「待て！」

「おっと残念、此処からは通行止めだよ」

「幹部としての初陣、心が躍るな」

するとナツキの体から2体が抜け出るとそれぞれがベルトを取り付けてパスをタッチする

「変身」

『NEG A FORM』

『SKULL FORM』

するとネガフォームと共に魂のような青い炎を纏い曲刀を担ぐ戦士

生死反転を求めぬ亡霊

仮面ライダー幽汽・スカルフォーム

「さあて楽しませろよ」

「これは前座だ、お楽しみはボスの方だな」

レオ、アルマジロイマジン vs ネガ電王、幽汽
開戦

その頃 解放されたハルトの胸ぐらを掴む

「ハールート!!お前って奴あいきなり何を」

「黙れお前の意見など求めん」

『それ俺のセリフ!?!』

取り敢えず殴りかかるナツキにカウンターパンチを叩き込み黙らせると

「ま、お前を連れてきたのは倒すのに手間がかかる奴がいるからだ」

「あ?………つてアレは!!」

2人に相対するように現れたのは

「アンデッド…」

「しかもスーツに分けられない人造タイプときたトライアルかケルベロスかテイターンかは知らねえが…DEMの奴等ほとんどもねえ代物に手エ出しやがったな、統制者が黙ってねえぞ」

「あの捻りこんにやくつてやつぱり危ないんだ…けどデータがないと…:あ」

「大方アバタートーマかハルカに残つてたナノマシンだろうなあ…そこからデータ抽出したつて所か？」

「じゃあ倒して封印するの？」

「いやアレはラウズカードに封印出来ねえんだよ…まあ細胞なら使い道はありそうだがな」

「細胞？」

「こつちの話だ、初手から本気で行くぜ」

「おう！」

『今回もマジエステイとグランドでやるのか？』

「いやコイツの力も借りるのさ」

『ほお以外だな』

「ロイヤルストレートフラッシュ使えるのが俺だけじゃないからな」
『カリス』

「よし変身！」

『ギャレン』

「あ、何か以外だなその姿になるの」

「そうか？ おいアナザーアビス」

『何ですか？』

「お前の力借りるぞ」

『正確には元の変身者の力ですがね』

そう答えるとアナザーカリスの手にあるブランクカードに巨大なカマキリが浮かび上がるのである

♡のK パラドキサアンデットの力を解放する事

「やっぱり切り札は、常に俺の所に来るみたいだな」

『それジョーカー違いだ相棒…全くいくらお前と相性の良いメモリもジョーカーだからと言って浮かれすぎだぞ』

「そーそー俺の相性の良いのは…：…おい、ちよつと待てそれ初耳なんだけど!?! え? 俺ってジョーカーメモリと相性良いの!!!」

『あれ? 言っておらんのかアナザーW?』

『いやあ俺の基本フォームがサイクロンジョーカーだから最初から分かかってると思つて

んだが…そもそもお前… ジョーカーのハイドーブだぞ』

「何い!？」

『だから色んな力を使っても普通にしていられるんだ進化した体質だけでは怪人の力は
どうにもならないんだよ』

「けどジョーカーの力って感情の昂りで出力を高めるって能力だろ？」

『もう一つある、それがお前の異能だジョーカーが他のメモリと合わせるのと同じどん
な力とも適合させられる力 それがお前のジョーカーとしての力だ』

「キャロルと束からガイアドライバーとジョーカーメモリ貰おう」

「好きにしろよ俺は早く終わらせて買い物に行くんだから」

『アブゾーブ・クイーン』

「好きにしろ、早く終わらせたい理由が俺にも出来た」

『EVOLUTION (KING)』

するとアナザーギャレンはキングフォームにアナザーカリスの体に大量のカードが取り憑き始めるも一枚に集約された姿は一言で言うならばカリスの装甲を内側から破壊しているジョーカーアンデッドである

WILD、道化師と侮れる一方で最強の切り札とされる力

『カリス・ワイルド』

アナザーカリス・ワイルド

2人は持ち前の武器を持ち人造アンデッドに挑むのであった

その頃、とある場所では白髪と金髪の2人の女性がいた

「ここに指揮官がいるの？姉ちゃん」

「ああ間違いない…いる」

「じゃあ探しに行こうよ！早く指揮官に会いたいし！」

「そうだな…：…どれだけこの時を待っていたか…離さないぞ指揮官、行くぞホーネット」

「うん！お姉ちゃん！」

六喰プラネット8幕 切られた切り札

前回のあらすじ

士道に関する記憶も戻り一安心と思いきや肝心の六喰が宇宙に戻ってしまった

しかも彼女と契約したイマジン達もまだ多くいる為 ハルト達はイマジン狩りを實行するが彼等の前に現れたのは人造アンデッド ケルベロス擬きであった！

—————

ハルトside

「先手必勝!!」

アナザーカリスは両手に持っている大鎌を使い近接戦を仕掛ける、間合いに入ると円運動により強化された斬撃が襲い掛かるも

「……………」

威力はあるが鎌の速度は遅い、人造アンデッドは余裕を持って回避をしようとしたが

「!!」

その足場にバイオの力で生えた蔦が生えて自らを拘束していたのである結果として斬撃は防御したが重たい一撃により人造アンデッドはダメージを負ってしまう

しかも攻撃はそれだけではない

「はあー!」

アナザーギャレンの銃撃を死角から受け更なるダメージを受けてしまったのだ、しかしアナザーギャレンは首を傾げる

「……………何か弱くね?」

そう弱いのだ、最初は警戒していたが蓋を開けてみたら此方の優勢ときたが

「油断するなよスロースターターな怪人もいるからな」

データが揃ってとか対策がとか技のカウンターを得意とする怪人もいる知らない故に警戒は怠るのは危険だ

「分かってるけどさ！ネガタロス達は大丈夫かな？」

「問題ねえよ、あの2人なら」

「偉く買ってるな」

「そりゃ幹部と候補生だからな…俺が何かを頼む時はそれが出来ると判断した奴にしか任せねえよ」

「それお前が脳筋で細かい事出来ないからじゃ…つぶねえ！鎌が当たりかけたぞ！」

「ちつ…そのまま首が飛べば良かったのに」

「凶星じゃねえか!!」

—————

その頃

「ほお中々に硬いな斧で切れないか」

「残念だが俺に近接戦は効かねえんだよ!」

「ならコレだ」

とネガ電王はデンガツシャーをガンモードに切り替えて相手の間合いの外から攻撃を行うと持ち前の鉄球や鎖など無視して弾丸が命中していく

「あがぁ！……く……くそふざけるなよ……こんな奴より……俺の方が強いのに!!」

「残念だな確かにお前は強い、だが俺の強さが別格なだけだ」

『FULL CHARGE』

「舐めるなあ!!」

アルマジロイマジンは鉄球を投げつけると、ネガ電王はそれに合わせて体を傾けながら銃口を向ける、その体の位置が相手の正面に向き合う時アルマジロの鉄球が肩を掠めるが、それを無視してエネルギー弾をお見舞いしたのである

「う……やられ……うわあああああ!!」

アルマジロイマジンが爆散する中、ネガ電王は冷静に

「今の俺は逢魔王国ライダー怪人軍団長（本物）のネガタロスだ、この名前忘れるなよ」

ネガ電王は腕を組み視線を幽汽に変える

「らあ！」

「おい手伝ってやろうか？」

「イラねえよ！」

「そうか？2人がかりでも俺は構わないが？」

流石のレオイマジンというべきか原典においても電王ライナーフォーム、ゼロノス・ゼロフォームに加え 未来の侑斗こと桜井の変身したゼロノスの3人がかりで戦った強敵である

「舐めやがって…カイに選ばれた程度で浮かれてんじやねえ!!」

「お前は選ばれなかったからな！だから死朗についたのだろうか？」

「確かに……だが今の俺は一味違うぜ」

「何？」

「今の俺は……魔王軍のメンバーだ!!」

「実力のない肩書きなど!!」

「っ！らあ!!……なんてな」

感情任せに見せかけた一撃に油断したレオイマジンの爪攻撃、その隙を幽汽は見逃さなかつた

「ぐ……き、きさま……わざと……」

長刀をすれ違い様に腹部に当てそのまま切り裂くと血の代わりに砂を吐き出すレオイマジンに

「言ったらー発で済むってな」

『FULL CHARGE』

「そーらよつと!!」

「がああああああ!」

増幅されたエネルギーが長刀に流れ込み終わると同時に袈裟斬りをかけるとレオイマジンは爆散したのであった

「ふう…お仕事完了」

「見事だったぞ」

「いやあお褒め頂いて光荣だねえ」

「折角だボスの戦いを見ていくか？」

「良いねえ、本当に大将が魔王なのか確かめさせてもらうぜ噂だとただの喧嘩バカとか色々聞いてるからな」

と2人は自らが担ぎ上げる王の元へ向かうのであった

—————

その頃

「らあ！」

「ふっ！」

「があ…」

「よしトドメだ！」

『◇ 10！J！Q！K！A！ロイヤルストレートフラッシュ！！』

「お前が仕切るな」

そう言いながらアナザーワイルドカリスは両手を合わせると手に持つ大鎌が弓矢の形へと変わると体の中から♡のラウズカードがジョーカーの力も合わさり一枚のカードへと変わるのであった

『WILD』

「消し飛べ！！」

「くらえええ！！」

2人の必殺技　ロイヤルストレートフラッシュとアナザーワイルドサイクロンは光の柱のようになって人造アンデッドを消滅させると変身解除したハルトはバグヴァイザーを取り出すと先程までいた人造アンデッドの破片を採取したのであった

「よしよし」

「何？また悪巧みか？」

「失礼な、新しい力の模索と言ってくれよ……これを使えば俺も天王寺さんよろしく体にアンデッドを宿せるかも知れねえ」

「既にジョーカーアンデッドに近い力を持つてながら何言ってるんだ？」

「何も出来ないで蹲ったり泣いたりするのは嫌なんだよ……無力だ何だで諦めたくないだけ……あー」

と話していると2人が現れたのだが

「2人とも無事だっ「アレだけの力がありながら更なる力を求めるのか?」え? いやまあそりゃ力が無ければ守れないものなんて沢山あるだろ? お前達とかキャロル達とか国とか色々々々」

「っ!!」「!!」

「なあ俺なんか変な事言った?」

「いや?」

「まあアレだ、お前達の背中には俺がいるから気兼ねなく暴れろ…安心しろ俺は負けん…:レジェンドライダーの皆さん以外にはな!」

「そこは誰にもとか言っしてほしいんだがな」

「それは様式美だぜネガタロス「大将!」ん?」

「つままない!!俺は貴方の事を噂通りの脳筋でノリと勢いで考えなしに生きているだけの奴だと侮っていた!」

『いや、それ概ねあつてるぞ?』

「だが、アンタは考えてないようでキチンと色々と考えていたんだな!」

「ん?」

「今の力に妥協しない向上心と野心…感服したぜ…改めて仮面ライダー幽汽ことゴーストイマジン、正式に貴方の傘下に加えて頂きたく思います」

「加えるよ正式にネガタロスの副官に任命する、それとお前の友達も連れてこい全員逢魔で面倒見てやる」

「いいのか!」

「勿論、そうなるも怪人軍団も分隊に分けないとダメだなネガタロスこの後時間ある？」
「当然だ」

「よし正式に逢魔ライダー怪人軍団を設立するから組織編成を考えたい付き合ってくれ」

「御意」

「んじゃ……まずは歓迎会の用意をしないと」

と笑っているとナツキのカイザフォンに通話が入る

「ん？もしもし？エルフナインどうしたんだ？」

『どうしたんだ？じゃないですよ!!また増やしたんですかナツキさん!!』

「は？ いやいや何のこと？」

『変わります!!』

「あ、ちよっ！」

『すまないエルフナイン…失礼…指揮官か？』

この声、間違いとナツキは顔を青くした

「え、エンタープライズか？」

『そうだ…やつと話せたな指揮官』

「あ、ああ…そうかベルファスト達が言ってた子って」

『……………指揮官』

「ん?」

『何で私との話で他の子の名前が出るのだ?』

「……………へ?」

地雷を踏んでしまい声の上擦っている様子にハルト、ネガタロス、ゴーストイマジン
の3人は

「何でアイツはあんなに動揺しているのだ?」

「気にするな、ドーせいつもの修羅場だ」

「修羅場!?逢魔では更なる戦いがあると言うのか!」

「まあ……………間違いはないな…だろネガタロス」

「ああかなり華麗で激しい修羅場だな」

そんな感じで話していると

『取り敢えず話は後でしょう、迎えを送ったから待っている』

「迎え？」

「私だよ！」

「うわあ！」

ナツキの背中に抱きつくのは金髪ツインテールにビキニに黒ジャケットと完全に痴女的な衣装をきた快活そうな女性である

「ホーネット!?!」

「そうだよ、貴方の奥さんのホーネットだよ！」

ヨークタウン級三姉妹 末っ子 ホーネットである

「まさかエンタープライズが言ってた迎えて！」

「私のことだよ、いやあくお姉ちゃんはお人使いが荒くて困るよ」

「あ、あはは……」

「じゃあいくよー！発進！！」

「あ、ああああああああ！！」

そう言うときホーネットが呼び出した艦載機にナツキは強制的に乗せられ、ピースメーカーへと飛び帰るのであった

「……あいつ大丈夫かな？」

『さあな』

—————

ナツキ side

俺、野田夏樹は現在、磔されています
理由？それは簡単

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

エルフナイン、マドカ、八舞姉妹とエンタープライズ、ホーネット姉妹の笑ってない笑顔が飛び交うと言う人生最大の修羅場を迎えております!!

この覇気と圧…俺には耐えられない!!これに耐えるくらいならばシビレモンを丸齧りしてやる!!

誰か助けてー!と目線をトルーパー達に送るが皆見て見ぬふり、そりやそうだろう彼等の雇用主はハルトであつて俺じゃない精々が友達程度の認識だろう…そしてキャロル、千冬に目線を送るが

「貴様……」

「エルフナインやマドカと言うものがありながら……」

逆鱗に触れてるのか殺意全開で睨まれてるう!!殺気のあまり気絶しかける…が

『気をしっかり保て』

アナザーゲイツのお陰で助かった…危なかった…

「しかしあの庄によく耐えてるなハルト」

『アレはアレでタフだよな』

本人の知らない所で株が上がるのであった

そして戦況が動き始めた

「僕はエルフナイン、ナツキさんの正妻です」

恋人飛ばして正妻とはこれ如何にとエルフナインの言葉に周りもヒートアップして
いる

「織斑マドカだ…そのそいつには一生一緒にいてやるとプロポーズされた」

「あれ？そんな感じだったか？」

『似たようなものだろ？』

「くくく…私は颯風の巫女、八舞耶俱矢！」

「参戦 八舞夕弦！ナツキは私達の共有財産です」

バチバチである

「私はヨークタウン級二番艦 エンタープライズだ指揮官とは戦いが終わった後もずっと隣にいますと言って指輪を貰いケツコンしている」

「同じく三番艦のホーネット！私も指揮官から指輪を貰ってケツコンしてるんだー！」

その一言に4人の首がグリーンと回転しハイライトの消えた瞳でナツキを見る

「指輪?」「ケツコン?」

「ナツキ?」「詰問、どう言う事です?」

正直言おう、今死に戻れるなら死に戻りたい…それくらい怖いよ…ハルト風に言うならテラードーパントの恐怖級と言おうか…いや仮面ライダーTHE NEXTのホラーシーンより怖い…アレはガチでトラウマだからな…

「因みに私もご主人様から生涯支えてほしいとプロポーズされ指輪を頂いております」

「何っ!」

「後でハルトにも話を聞かねばならないな」

「ナツキさん?」どこ見てるのですか?」

ハルトすまない…俺は先に逝く せいぜい頑張れ

「と言う事で指揮官は私達のものだ諦めろ」

「そう言う訳にはいきません！僕はナツキさんとデートしたりお風呂でハプニングあったり勝手に愛人増やされるとか色々ありましたけど…それでもナツキさんが好きなんです！」

「お風呂でハプニング…だと！」

「そうだ！私と姉さん達を繋いでくれた事もだが…私に生きていて欲しいとその手を伸ばしてくれた…そんな男に惚れない訳がないだろう！」

「その通りだ！」

「肯定 私達姉妹に別離以外の道を示してくれましたから」

皆の気持ちに心が温かくなるが

「あの本当に頼むから人目を考えてくれませんか？」

周りのトルーパーは「おー！」と感心しているしキャロルと千冬は「何故そこまで関係進めてるのに踏み出さないのか」と頭抱えていると来た

「けど私達姉妹だって指揮官が大好きな気持ちは負けないよ！」

「ああそうだと！私の帰る場所は指揮官の隣だ！」

白熱する雰囲気全員が固唾を飲む中

「では…戦いで決着を「ストップ!!」何ですナツキさん？」

「何で皆戦うのさ！話し合おうよ！それでキャロルさん達も解決してるじゃん!!」

「他所は他所！うちはうちです!!」

「だからって戦う!? 響ちゃんの話思い出そ！」

「何でそこで響さんの話が出るんですか？」

「……………あ」

「さてナツキさんには僕しか見ないように少しお話しをしないとダメですね」

「いやここはこれ以上、増やさないように箱にでもしまつて…」

「いやいやこんな時は夕弦の天使で縛ってしまおう」

「賛同 私にお任せ下さい」

「なら見張は私達の艦載機で行おう」

「そうだね姉ちゃん」

「じゃあナツキさん少しお話ししましょうか」

「み、みんな助けてー！ー！」

「さーて俺達は陛下の迎えに行かないとな」

「聞いた話だと新しい幹部と初任務らしいぞ」

「何だって！」

「無視しないでー！」

「さあ逝くぞナツキ」

「字が違ううううううう!!」

結果としてナツキは何とかこの危機を乗り越えエンタープライズとホーネットは仲間に入るのであった

因みに

「あの〜キャロルさん？帰宅早々何故俺は縛られたのでしょうか？」

「何、オレ達には渡してない指輪を何故ベルファストに渡しているのか知りたいだけだ」

「……………あ」

「漸く分かった、貴様が節操なしに増やす理由が…つまり相手にも所帯持ちとわかる目印があるのだとな」

「お…おおう」

「だから東さん達はハルくんに指輪を要求します！」

「そうだね…私達も欲しいな」

その頼みに

「そうだな…皆を心配させているのは俺のせいだしな…分かった、じゃあ作ってくる」

「買うじゃなくて!？」

「素材はミスリル、オリハルコン、アダマンタイト…あとヒヒイロノカネ…それと」

「ちよつと待つてハルト、何だそれは」

「指輪の材料？」

「ど、どれだけの指輪になるんだろう…お金にしたら……」

「噂に聞く伝説の金属ばかりね…流石旦那様、桁が違うわ」

「けど、そもそもハルトのセンスで指輪任せて大丈夫なの？」

銀狼の一言に全員がハツとなり

「よしハルト、少し待て」

「ん？」

「オレ達がデザインを吟味する、それが終わったらそのデザインで作ってくれ」

「俺のセンスとデザインは信用ならないと言うことかな！」

「「「「当然」」」」

「……………」

「ご主人様」

「ベルファスト」

「こちらでの私服の写真を見ましたが妥当かと」

「……………」

「お前に任せるとウィザードリングみたいになりそうだからな」

「それはやるな、ビースtringも良いなあ…」

「事前に聞いておいて良かったねキャロりん!!」

「ああ…よしお前達！集まれ！」

と皆が集まり話し始めたので

『良いのか?』

「当たり前でしょ。確かに指輪は渡さないと思って思ったからさ」

『いやそつちじゃない』

「え?」

【ちよつと待って、エンタープライズ! 関節はそつちには曲がらないからあー! ホー
ネットも辞めてー!! あ、う…腕ガアアアア!!】

【安心しろ指揮官、私達がつきつきりで看病してやる】

【うんうん！おはようからおやすみまで！…もちろんお風呂とかベッドの方も】

【い、いやアナザービーストの回復の力で治るから】

【ならもう一度やるぞホーネット今度は足だ！】

【合点だよ姉ちゃん!!】

【い、いやちよつ…た、助けてええええ!!】

【大丈夫ですよナツキさん…僕達がついてますから】

【安心しろナツキ】

【え？い。いや、ちよつ！】

鈍い音と共に響くナツキの悲鳴。そして聞こえる女性陣の声に

「今更だがエルフナイン達、何でヤンデレ化してるの？前まではあんなにピュアだったのに」

『恐らく死に戻りの弊害だろうな』

「どゆこと？」

ハルトの疑問にアナザーデイケイドが自分の考えを話す

『死に戻りする度にナツキの失敗した周回は剪定事象…つまり滅亡が決まった世界となる』

「ん？」

『要するジオウ最終盤でスウォルツがした世界のような状態になる』

「あくそう言う」

『その度にナツキは死に戻るが彼女たちは違う、愛する者の別離を何度も何度も何度も味わう事になる、それが恐らく死に戻りした段階で深い関係者の彼女達にもその記憶が断片的にも入るのだろうか』

「その分、喪失感が彼女達を襲うから離れたくないって愛情や嫉妬とかの感情が大きくなっていくって感じ？」

『ああ、アイツが死に戻りをしなければ良い話だが…』

「無理でしょ、今にも死に戻りそうだし」

『そうだな』

因みにナツキの悲鳴をBGMに四天王筆頭でレジエンドルガの女王は満面の笑みを浮かべながらワインを飲んでた

翌日、その日騒がしい一日はピースメーカーに流れた警報から始まった

「何事だ！」

ハウンドの声に管制官達が情報を報告する

「フラクシナスから通電！精霊 六喰と五河士道が邂逅！しかしながら敵イマジンの攻撃により危機と支援求めると」

「陛下聞かれましたな」

「おう……今日の鯖味噌は白味噌で行くぞ」

「全く聞いていないではありませんか!!」

「安心しろハウンド、俺はいつも通りだ」

「足元ふらついているのでいつも通りではありませんか？」

「何……ちよーつとキャロル達の指輪作りで徹夜しただけだ……」

「原因は確実にそれですね、どうしますか？」

「任せろ……」

『ジオウⅡ』

「久しぶりの回復方法で俺復活だぜ！よしウオズついてこい！」

「はっ！」

「俺は!?!」

「お前は……怪我を治せナツキ」

そこには全身包帯ミイラが車椅子に座っていたのだ、そう昨夜のお仕置きを受けたナツキである

「お前が治してくれるなら俺はすぐに戦線復帰出来るんだけど!!」

「悪いなナツキ、あの治療は俺専用なんだ!」

断じて後ろで車椅子を押しているエルフナインの圧に負けたとかそんなんじゃないからな!

そしてガンシップに乗り込むとボロボロの土道と泣きながら介抱する六喰

そこに襲い掛かるは土道を連れてこいと契約したイマジン達

「これで契約は完了だな」

「さて報酬を貰うとするぞ」

「い、いやじゃ……聞いたぞ……お主達はむくの大事なものを奪うと……」

「それが報酬だ最初に言ったぜ、お前の払う代償はたった一つ」

「だから扉を開かせてもらおうぜ！」

「誰か……」

その小さな声を聞きつけたのか空から2台の電車が現れると中から2人の青年が現れたのだ

「りよ……良太郎さん？」

「大丈夫？」

「まったく無茶苦茶な野郎だな」

「ははは…すみません」

「電王か遅かったな、もう契約は完了した…もう手遅れだ！」

すると良太郎の体に赤い光が走ると逆だったヘアースタイルになった良太郎が啖呵を切る

「遅いつて？残念だが俺達は最初からクライマックスなんだよ、だろう？良太郎」

『うん！』

「そんなお前達に今から本当の変身つてのを見せてやる」

2人はベルトをつけて待機状態にすると

「変身!!」

『SWORD FORM』

『アルタイルフォーム』

「へへ、俺！参上!!」

「最初に言っておく！俺はかーなり強い!!」

「「っ!!」」

イマジン達はあまりの迫力に圧倒されていた

「おいおいどうしたよ、そんなにビビって…まあ当然だがな！」

「いや、その……」

「あん？」

「あれ」

イマジンが指差した先には、現着したハルトが泣きながら此方を拝んでいた……そりゃイマジン達もドン引きする

「電王とゼロノスの生変身……みれでよかったあ!!」

「我が魔王……泣き止んでください皆様がこちらを見えています」

「陛下……彼を助けに来たのでしょうか？」

「お、おう……それはお前達に任せた」

「陛下は何を？」

「俺か？俺はここで……電王とゼロノスを応援する!!」
『ドレスアップ』

アナザーウィザードの力でハルトは背中に『俺、参上!』と書かれた赤いハツピとバ
ンダナを巻きペンライトを持っていた

「電王！ゼロノス!!頑張れー!!」

最早ヒーローショーを生で見ているファンのそれである

「ハウンド」

「はっ！撃て」

「あはははは……」

親衛隊は慣れた手つきでスタンモードにしたプラスターを発射、ハルトは感電しながら

ら地面に倒れ伏した

「真面目にやりましょう？我が魔王」

「は……はい……わかりました……」

六喰と土道に近づく衛生兵は冷静に処置を施していくがハルトはチラチラと戦いを
見ていた

「お願いじゃ……此奴を助けてくれ……」

「分かりましたから少し離れて」

治療中の最中に事件は起こる

「見つけたぞ！」

それは恐らくハルトを消す願いで契約したイマジンであった

「丁度良い、このまま消して契約を叶えさせて貰うぞ」

「ま、待つのじゃ…今叶えても」

「黙れ!!」

「陛下をお守りしろ!」

「邪魔だ!」

現れたイマジンにより親衛隊が倒されていく中感電したままのハルトは沈黙したままであった

「お前……何邪魔してくれてんの?」

「何？」

「今そこで……電王達が戦ってる途中でしようがあ!!!」

「そこですか我が魔王!？」

「なんてな冗談だよ冗談」

「いや全く冗談には聞こえないのですが？」

「……………テメエ、誰の仲間傷つけたか身を持って教えてやるよ」

そう言いながらハルトが取り出したのは先日キャロルに頼み込んで作ってもらった
新型のドライバーである

それは次世代型ガイドドライバーことガイドドライバー R e x

それに合わせるのは、己と最高に同調するガイアメモリ 流石に次世代型ではないが

『JOKER!』

あの切り札の記憶を内包している事に相違はない

「変身」

『JOKER』

すると同時に紫のエネルギーがハルトの体を包み込む

そこから現れた姿はピエロのような帽子にケタケタ笑う顔と怒りに震えている顔が半分になっている道化の仮面を被る異形の戦士

ジョーカードーパント

「覚悟しろ、お前の罪は重い!!」

「やっぱりそつちが本音ですか？」

六喰プラネットFINAL 時の電車を超えて

前回のあらすじ

親衛隊を傷つけられた怒りと、電王とゼロノスの戦いを見る事を邪魔されたハルトは怒りの感情に任せ ジョーカードーパントへと変身したのであった！

「らあー！」

「ふっー！」

ジョーカードーパントの拳打は的確にイマジンの体に当たっている、反撃に攻撃を放つがジョーカーは分かっているかのように避けて的確にカウンターを叩き込む

「っしやあー！」

『おいハルト、このガイドドライバーRe xの能力を把握したぞ情報を送る』

「……………つありがとうよ相棒」

『気にするな』

「んじゃ派手に行こう」

そう答えるとジョーカーカードパントは懐から新しいガイアメモリを取り出した

『JEWEL!……………RAISE!!』

ガイアウィスパーと共に腰のドライバーRへメモリを挿入するとジョーカーカードパントはそのまま右ストレートをイマジンに叩き込んだのだ

「がああああー…な、何だ今の一撃は」

「そりや痛えよな、ダイヤモンドの硬さで殴られれば」

「ダイヤモンドだと…」

「そ、レイズつて言つてドライバーにメモリを入れると短時間だけ他のメモリの力を上乘せ出来るんだよ、その力で右腕を宝石にして殴った訳」

同時に時間切れとなり右腕は元に戻るとメモリを抜き取りすぐさま新しいガイアメモリを起動する

「後ねこんな風な事も出来るよ」

『ARMS……RAISE!』

「メモリ違うけど……ゲームスタート!」

アームズメモリで右腕を今度はライフルに変形させると射撃による遠距離攻撃でダメージを与える、その一撃は的確に急所を捉えている

「な、なぜだ…ガイアメモリをそんなに使えば体は持たないはず…メモリの毒に殺されるぞー！」

「普通はそうだしメモリの相性によつては即死するだろうけど、それを可能にするのが俺のジョーカーとしての力」

俺の知る世界最高の探偵とその助手のように

感情に合わせ力を際限なく高め、一発逆転する最強の切り札（ジョーカー）ではない
俺はジョーカーを除く全部のメモリを80%の出力で使用できる、それがどんな危険なメモリであっても…それが俺のハイドروبとしての力らしいよ」

自分の手札に合わせて手役を作る最高の切り札（ワイルドカード）それが自分の力

「そんな反則な！」

「反則じゃないよ、俺以上の理不尽なんてありふれているだろう？」

歴代ラスボスをワンパンで沈めたり、死なない筈のアンデット倒したり、人類の運命握ってた神様倒したり、逆にライダー戦国時代を勝ち抜き神様になったり、何度もタイムリープして妹生き返らせようとさせたりとかな

「どんなミラクルも起き放題ってな」

『それ平成限定な』

「そんなのあるか!!」

「ははは…それより俺の話聞いてて大丈夫かい？足元がお留守だよ」

「何……っ!」

よく見ると自分の足元が完全に凍りつけられているではないか

『ICE AGE…RAISE』

氷河時代の絶対零度 全ての生命に等しく試練を与えし寒冷の世界 その記憶から
抽出された力だ生半可な力で溶けるものではない

「さてと……」

この場合、イメージンへ決め台詞を投げかけるべきだろう

お前の罪を数えろ…いやアレは街を泣かせる悪党に投げかけ続ける言葉だし、何より
俺が使うのは恐れ多い気もする…

なら数える資格はないのでな…それも少し違うだろういずれ俺が下す決断かも知れ
ないが

ならばどうだろう

「悩むな」

『悩んでる場合じゃないだろ!!!』

「ぐぬぬぬ！おい！！やるなら早くやれ！！」

「馬鹿野郎！決める場面でどんなセリフを言うかは大事な事だろうが！！」

「そうだな確かに」

『ちよつとモモタロス納得しないでよ！』

「よし決めたぞ…さあ償いの時だ！クラゲイマジン！」

必殺技を発動だ！とメモリを取り出したが

「今更俺の名前言っただど!!」

「はっ……!」

『どうした相棒!』

「しまった…重大なことを忘れていた」

『何だ重大な事とは!!』

『真面目に取り合うなアナザーゼロワン、どうせくだらん理由だ』

「実は…ジョーカーエクストリームの必殺技名を事前に考えていなかった!!」

「おい待て!そこもかよ事前に考えておけよ!」

「くそ……ジョーカーキックとかパンチだとひねりないし……うーん……困った」

『やめとけ相棒、俺は長い付き合いだから分かるぞお前のネーミングセンスはハンドル

剣や電車斬りと同じレベルだからな』

その何気ない一言にジョーカーカード・パントはピクリと肩を震わせる

「相棒……それはつまり俺は既に先輩ライダーの皆さん並みのネーミングセンスを持っていると言う事だな!! 止せよ! 照れるじゃねえか……」

『おいアナザー・デイケイド! このバカにそれは褒め言葉って少し考えたら分かるだろ!!』

『しまった!!』

「おい待てお前等! まさか魔王って良太郎並みのセンスなのか!!」

「え? てんこ盛りとか電車斬りとかカッコよくないです?」

「嘘だろ!! 『やっぱり良いよねてんこ盛り』良太郎! だから前にも言ってるだろう! お前

のセンスはー

「おいやるなら早くやれよ！頼むから！氷の冷たさで足の感覚無くなってきたんだが！！」

クラゲイマジンはもう涙目である

「待て今考えるところから……よし行くぞ！」

『しまらねえな、流石半熟卵（ハーフポイルド）』

「……っ！ちよつとどうしたのさ皆々今日は凄いや俺の事褒めてくれるじゃんく恥ずかしいな……もう！俺……今日の夕飯頑張っちゃうぞお！ご褒美に俺のフルコースご馳走しちゃうー！」

『しまった逆効果だった……』

「いや我々にとっては嬉しい悲鳴ですか？」

「ははは！ 昂ってきたぜ……」

同時に高まる感情のエネルギーがジョーカーのエネルギーに変換され右足に集中していくとジョーカードーパントの顔半分が笑顔に変わり同時に圧縮されたエネルギーを解放する

「よし決めた！ くらえ道化師（クラウン）キック!!」

有無の言わせぬ華麗なライダーキックを放つのであったが

『絶妙にダサっ!』

『やっぱりあの私服センスにしてのネーミングセンスだな』

『そりゃ嫁達も指輪のデザイン任せられねえよ』

ーテメエ等は後でビービーダンゴムシを万回お手玉してもらおうぞ三馬鹿（アナザー
デイケイド、W、セイバー）どもー

しかし師匠との訓練成果なのか華麗なライダーキックがクラゲイマジンをつえたのである

「あ……があああ、うわあああ！」

そして爆砕するクラゲイマジンを見送ると同時にジョーカードーパントの顔が哀しみの顔へと変わったのである。それはまるで同族殺しの罪を背負った仮面の戦士のよう……

「ふう……決まったぜ！」

見えたただけだった、変身解除して一言

「残念だったな、メモリの数が違うんだよ」

『Wより多いからな』

「まあ、ナスカ以外にゴールドメモリ持ってないんだけどね。キャラルや東でもシルバーが限界過ぎてさ。ケツアルコアトルスはこの間の件でブレイクされちゃったしね。まあたメモリ買いに行かなきゃ……待てよ俺がミュージアムのメモリを買い占めて独占したら風都が平和になるんじゃないかね！」

『できるか!!』

その頃 回復した士道は立ち上がるも

「ダメじゃ、今戦ったら死んでしまうぞ！」

「構わない……六喰は俺が守る！」

「っ！」

「おーおーカッコ良いねえ〜」

「そんな体で何ができる！」

「そう言いながらウルフィマジンとモールイマジンが絡むが

「取り敢えずハルトさんが来るだけの時間は稼げる！」

「それだけ出来れば十分ですよ、ほら」

「え？」

ウオズが指差すと同時にクラゲイマジンの爆散を見て

「ま、まずいぞ！クラゲがやられた！」

「逃げるぞ魔王が来るううう！」

慌てふためくイマジン達に

「なあ俺ってそんな怖い？」

ハルトが少しショックな顔をしていたが

「逃げろ！捕まったら脳筋に改造されるぞおおお！」

「いやだ…俺はあなりたくないいい！！」

「は？」

ウルフィマジンの一言にキレる

「……………ネガタロス、ゴーストイマジン」

「よ、呼んだかボス？」

「おいおい、どうしたよ偉く不機嫌だな」

「ああ、そりや不機嫌にもなるよ…ああなるともさ…あはははははははははは!!」
狂ったように笑うハルトだが感情的には怒りの方が強いのは一目瞭然だ

「こ、これが魔王覇気か!」

「何て圧だ…これが大将の本気か」

映画のボスでもある2人は震えながら参上するその時のハルトの瞳からは光が消えていた

「追撃だ…:…んでもってあのイマジンに恐怖を植え付けてこい、お前たちは狩られる側だとな!」

「任せておけ」

「ああ怖がらせるのは得意だからな」

「変身!!」

『NEGA / SKULL FORM!』

2人は武器を持ちウルフイマジン達を追いかけるのであった

「さてと少年君、よく頑張ったな」

「ハルトさん程じゃないですよ」

「まあな!!何せ今日の俺は全力全開だからな!……またあの駄菓子屋行こうかな……リュウタロスさんの分補充しときたいし」

『謙遜しろ馬鹿ハルト!!あと何処の世界の話をしている!!』

「え?俺1人であの船の連中の炊事面見てますか?」

「それについては我が魔王に感謝しかありません」

「これは俺が好きでやってるからよいんだけどね」

「それ故に親衛隊や遠征隊への志願者も鰻登りですからね」

「まあ流石に本職連中には劣るけど」

『何だ謙遜出来るじゃネエカ……ん？何だ、おい待て何でここにゼクトルーパーが……あ
ぎゃあああ！』キボウノハナー

『止まるんじゃねえぞアナザーW』

『いやもう止まってますね』

『ああ！アナザーWがゼクトルーパー達に撃たれた！』

『まるで裏切られたドレイクみたいだぜ、この人でなし！』

「はいはいコントはそこまで……そろそろ本番かなあ」

「本番？」

「そーそー六喰ちゃん、君とんでもないもの呼び寄せちゃったね……まさか世界の壁を開いてアレまで呼ぶとは」

ハルトはそう言うのと空から一体のイメージが降りてきた

「おいおいよりもよってこいつのお出ましかよー！」

「待てよー！コイツは確か倒したぞー！」

「む？成る程……どうやら別個体を倒したのか……まあ構わない、その男を殺して契約完了だ」

最悪のイメージ 滅亡した未来の象徴

デスイメージ 現れる

「で、デスイメージ様！お助けを！！」

「魔王が！」

「先程までネガ電王達に追いかけていたウルファイマジン達が掛けより助力を求め
るが

「弱い仲間など不用だ！」

「「ぎゃああああ!!」」

「デスイマジンの大鎌は仲間のイマジンを一刀両断したのである

「あんのやろう！」

「こいデネヴ！」

『VEGA FORM』

「ベガフォームになったゼロノスと電王がデスイマジンと戦いに挑むが

「貴様等に用はない！俺はその男を消すのだ！」

デスイマジンの登場に混沌極める戦場

そこに白い羽根が舞い降りた

「え？」

「ま、まさか」

「降臨、満を持して！」

その白いイマジンは王子のように唯我独尊だが受けた恩は忘れない

誇り高き白鳥 ジーク

「待たせたな家臣ども」

「手羽野郎!? 何でお前が!!」

「きゃあああああ！ジークさんだあ!!!うおおおお！電王チーム集合だあああ！」

ハルトは感動のあまりピョンピョンと飛び跳ねている

「え？ハルトさん知ってるんですか！あのイマジンのこと」

「あつたり前よ！ジークさんは電王チームの助っ人、いざという時は頼りになる仲間なんだぜ!!」

「そのいざと言う時以外は邪魔だけだな」『モモタロス！そんな事言わないの!!』

「む？貴様が魔王か、噂には聞いておるぞ色んな世界を旅していると」

「俺…時の狭間を漂うジークさんにも認知されてるう！うおおおお！旅してて良かった!!あ、あの！サインお願い出来ませんか!!」

「ほお、私のサインが欲しいか教養なき蛮族と思っておったが中々に見所があるなお主」

「あ、ありがとうございます!!」

『おいお前、蛮族呼びされてたぞ?』

「あ!良かったら!ビリオンバードの卵って言って異世界でも高価なドリンクですぞうぞー!」

「うむ、頂こう」

『聞けよ!』

ジーク登場に更なる混沌を深めていくも

「ハルト!!」

何故かナツキが車椅子と共に現れた

「え？何でお前いるの？」

その瞳はジークに会えた事の感動も相まって凄く冷めた目であった

芽生えた感情は一つ 邪魔すんな

「いや、俺の力がいるかなあーと思つてな！デスイマジン相手ともありやこつちも総力戦だろ！断じて皆が怖かった訳じゃないからな！あとお願いだから体治して!!」

「それが本音だろ？まあ……人手は多い方が良いかな」

『TUNE MAD DOCTOR』

慣れた手つきでブレイクガンナーにマッドドクターを装填する

「あ、あのハルトさん……ジオウIIやアナザーフォーゼのメデイカルで治せないかなあゝ
流石にボロボロの体にそれは……」

「安心しろ俺もその辺はわかってる腕だけ治せばアナザービーストが治療するだろう？」

「あれ？ハルトが優しい？」

「流石に緊急時にふざけてられるかよ、デスイマジン強いイマジンだからなさつきみたいにならなくてもいいからいい」

「……………っ！」

士道は震えた、あの人を人とも思わない理不尽が人の形をしたようなこの男が緊急と言ったのだ、それだけあのデスイマジンとやらが強いと言う事である

「んじや行くぞ」「お待ちを我が魔王」何？」

「その役目は私に、我が魔王は電王達と戦って下さい」

「っ！」

「さつきから一緒に戦いたいと顔に書いてありますよ」

「ふっ…よしウオズ任せたぞ!!」

「はっ!では…ナツキよ痛みは永遠だ」

「せめて一瞬にし…ぎゃあああああ!」

ナツキの悲鳴をバックにハルトはデスイマジンと相對する前に

「頼む……」

「あ?」

「助けてくれ…都合の良い事とは分かっておるがむくはもう一人は嫌なのじゃ寂しいのは嫌なのじゃ!!だから頼む…此奴だけは主様だけは助けてやってくれ」

その目を見た時、ハルトは共感してしまった

やはり同じだと、この子もただ隣にいてくれる誰かを欲していたのだと

「はあ…行くぞ取り敢えずアイツは倒す」

「は、ハルトさん…」

「だが勘違いするな、これはあのデスイマジン不倒さないと俺が死ぬから倒すだけだ…
お前の頼みを聞いた訳じゃない」

『ツンデレめ』

「つせえよ、あんな目で助けてとか言われたら…断れねえよ無視したら師匠に顔向け出来ねえ」

『本当にお前は素直じゃねえなあ！』

「ところでアナザーW、お前怪我しているな…どこここに偶然だがブレイクガンナーが
『そんな事してる場合か！早く行くぞ！』ま、そうだな」

『アイツ…危機回避能力が高まっているぞ！』

『可哀想な進化だな…』

そして

「お待たせしました！皆さん！！」

「つたく遅えんだよ！」

「その分は働きでかえます！」

「よろしく！」

「はい！行くぞ相棒！」

『ああ！と言いたいが喜べハルト』

「何だよ、ここはアナザーグランドジオウで決める場面じゃ『ここに新しい絆が芽生えた事で新たな力が目覚めたぞ』……まさか」

ハルトはアナザーフォーゼウオッチを取り出すと

「本当に行けるのか？」

『おう！見せてやろうぜハルト！』

その力強い答えにハルトはアナザーウオッチを起動する

「おう!!」

『フォーゼ』

アナザーフォーゼの変身するとそのままの勢いで懐から取り出したのは今まで使用できなかった40番目のスイッチである

「電王とゼロノス……そして皆さんとの絆で俺は宇宙を掴む!!」

『コズミック!』

するとコズミックスイッチは白い光の球 超新星のように変わりアナザーフォーゼの体に吸収されていく

『フォーゼ……コズミック』

その姿はまるでスペースデブリを思わせるような壊れたロケット しかしそれでも先を見ようとする意思がある

絆を紡ぎ宇宙へ向こうもの

「宇宙………来たあああああああああああああああ!!!」

アナザーフォーゼ・コズミックステイツ

「アナザーフォーゼ！この喧嘩、助太刀させてもらうぜ!!」

「ナツキの治療を放置して祝え！新たな絆から生まれし宇宙の力！その名もアナザーフォーゼ・コズミックステイツ！新たな最強アナザー覚醒の瞬間である！……よしでは治療の続きを……腕治ってますね」

『ビースト』

「よし治った、ありがとうウオズ！俺も行くぜ！」

『メテオ』

ナツキはアナザーメテオに変身すると何処からか現れた新しいスイッチを起動

『メテオストーム!!』

同じように超新星を取り込むようにアナザーメテオの体も変化が起こる 巻き起ころは黄金の風 流星群

「アナザーメテオストーム！俺の運命は嵐を呼ぶぜ」

大いなる流星 アナザーメテオストーム

これで準備万端…だがウオズは首を傾げる

「確かに腕だけならマッドドクターですぐ治せますが…治るのが早すぎませんか？」

「え？」

「我が魔王が懐古を使った訳でもなく、君のような特別な治癒能力もない…言うなればナツキはただの人間なんです」

「いや死に戻りが出来る段階で普通じゃないでしょ」

「そうですが……あの治り方まるで」

「ハルトさんみたいですか？」

「少しだけそう思っただけです……そもそも彼の死に戻りとは何のでしょうか……」

—————

「お前等！中々様になつてるじゃねえか！ま、俺達程じゃねえがな」

「ありがとうございます!!」

「俺達も負けてらんねえぞテメエ等！こつちもてんこ盛りだあ！」

『クライマックスフォーム』

するとタロス達は合体したのだ、背中にジークのような羽根が加わっているが

「つて、またお前か手羽野郎!!」「美しいであろう?」「うるせえよ! さっさとでてい」「また鳥さんも一緒だ!」「ちよつとキンちゃん!」「狭いんやからしようがないやろ!」「家臣ども! 苦しゅうない!」「苦しいんだよ!!!」

仮面ライダー電王・超クライマックスフォーム

「うおおおおお! カッコ良い!!」

「やっぱりハルト…お前のセンスっていや何も言うまい」

「待たせたな、今度こそクライマックスだ」

「最初に言っておく…胸の顔はやはり飾りだあ!」

「おいボス、俺達も混ざった方が良いか?」

「手を貸すぜ大将」

「ああ頼りにしてるぜ2人とも」

「お前等と一緒に戦うってのも変な感じだが、クライマックスにはもってこいか？」

「お前達はボスの前座だな」

「何お！」

「ああ大将の邪魔だけはしてくれんなよ」

「ネガタロス！ゴーストイマジン！主役は電王達だよ」

『この作品の主役はお前だぞ!!』

「メタいよアナザーデイケイド!？」

そして

「やれ！」

「「「うおおおお!!」」」

「行くぜ行くぜ行くぜ!!」

「っしやあ！」

『ランチャー・フリーズ…オン』

「発射!!」

アナザーコズミックステイツの能力はスイッチの能力を合わせる事、それによって放たれた冷凍ミサイルの雨は敵を捉えて爆散させるとそのまま電王達が突撃した

「行くぜ！」

「いっしょ！」

—————

ゼロノスに攻撃するイマジン達だが頑丈なベガフォームの装甲の前にダメージは通らない、その一撃一撃は重たくゼロガツシャーは的確な射撃をする

『FULL CHARGE』

「はぁ！」

その一撃は射線にいたイマジン達を薙ぎ倒し爆散させたの言うまでもない

「皆！侑斗をよろしく！」『しなくて良い！』

そしてアナザーメテオストームは棒状の武器を器用に使いこなし敵に払い、薙ぎ、突きとお見舞いするが

「ああ！もう槍って使いにくいなあ！」

ナツキの得意武器は銃や剣など王道な武器であり、槍やハンマー、斧などは元々ハルトが得意としているのだ

「こうなったら……アレ行くぞ」

『アレだな』

と言うと棒の先に赤い光が収束していくと

「アナザーメテオストームパニッシャー!!」

そのまま赤いコマが相手目掛けてゴーシュート！その一撃は相手のエネルギーを吸収し自らの力へと変える

「ぐ……ぐあああああ！」

爆散したイマジンを見送ると技を解除したアナザーメテオストームは肩に棒を担いで一言

「さーて、ハルトの奴は大丈夫かな？」

—————

推奨BGM double action (お好みのフォームで)

「そらそらそらそら!!」

デンガツシャーを振るう電王の喧嘩殺法は流石のデスイマジンでも完全に捌けないようであるしかし喧嘩殺法にも隙はあるそれを突きにかかると

「させねえよ！」

『エレキ・チェーンアレイ オン』

アナザーゴズミックスステイツが的確にその隙をサポートしてくるのだ、伊達に手数を売りにしていない

「そらあ！くらえ！アナザー雷鉄球！！」

『いやそこは滅殺！とかだろ！』

『何で変なネーミングセンスに目覚めた！』

『おいアナザーデイケイド！お前のせいだぞ！』

『すまない皆！俺の……俺のせいで！』

「何言ってるのさ相棒！俺は目覚めたぜ！」

『頼むからずっと寝ててくれ！！』

「アイツ等も大変そうだな」

「おのれ……ふざけるなあ！」

「何もフザげてねえよ!!」「そうだよ僕らを中身スカスカの先輩と一緒にしないでもらえる?」なんだとカメ野郎!」「えへへ〜じやあ僕がやるね!イエイ!」

「流石…電王だバラバラに見えても皆が良太郎さんや仲間を信じているから彼処まで強いんだ…けど俺は…」

『安心しろハルト、俺達も信じているぜお前のダサイセンスをな!!』

「……………」

『あれ?ハルト?もしもーし』

『ビート・チエーンアレイ…オン』

「音響破壊鉄球!!」

ビートで超振動を付与して鉄球を投げつけたのであった

「グアアアアアアア！」

『ファイヤー・フリーズ・ランチャー…オン』

「たあー！」

今度のミサイル攻撃は急速冷凍と加熱により体に熱疲労を与えると

「……………」

『あのハルトさん？』

「……………」

『は？』

「怒ってないよ、ええ怒ってませんとも…ああそうとも…けどこの気持ちの行き先が…ああ…そこデスイマジンさんちよーつと八つ当たりにつき合ってもらえますかあ？」

『は、ハルトがキレたあ！』

『やり過ぎたあ！』

「ふざけるな！この俺の方が強いのだ!!」

「馬鹿野郎！誰が強いとかじゃねえ、戦いつてのはな…ノリの良い方が勝つんだよ!!」

「その通り！そして今ノリに乗っているのは俺たちだ!!」

「さあ本番と行こう」

「大将の怒りが飛び火しないうちにな！」

4人はそれぞれの必殺技を発動する

『CHARGE and UP』

『FULL CHARGE』

『(アナザー) リミットブレイク!』

「必殺……俺達の必殺技!!せりやあああ!」

超クライマックスフォームは背中から巨大な羽根を生やしてそのまま急降下キックをデスイマジンに叩き込むと

「いけえええ!」

「言われるまでもない」

「トドメは譲ってやるよ大将」

2人はそのエネルギー弾を放つと

「ぬかせ、アナザー…超ギンガファイニッシュュ!!」

そのまま充電した力を振り抜いたアナザーコスミックステイツの一撃でデスイマジンは爆散した

—————

後日談

この戦いの後、六喰は霊力を封印して土道達と暮らしている幸か不幸かイマジン達は大方倒したらしく

「かえらないでくださいー!!!」

電王組は再び時の運行を守る旅に出る事になったのだ

デンライナーとゼロライナーを前にハルトは号泣していた

「辞めてください我が魔王、恥ずかしいですよ」

「だってウオズー！」

「だってありません、それに我が魔王はずっとここにいる電王に憧れたのですか？それとも」

「沢山の人を助ける電王に憧れた…カッコよく戦う電王が大好き」

「なら良いではありませんか」

「ん…：…わかった、なら笑って見送ろう野上良太郎さん、桜井侑斗さん！モモタロス！」
「だから何で俺は呼び捨てなんだよ！」

「ありがとうございます!!良かったら今度、逢魔に遊びに来てください！お姉さんやハナさん、幸太郎さんやテディも連れて来てください！国賓待遇でもてなしますので!!」

「ええええ！そんな大袈裟だよ僕達何もしてないよ」

「いいえ皆さんに俺は色んなものもらいましたから！」

「え？」

「だから俺は返したいです皆さんへ恩を…だからお礼させてくださいね!!」

「また何かあつたら声かけてねハルト君」

「は…：はい！ありがとうございます!!」

「あ、ハルト君…この間くれたジューシイタケありがとう」

デネヴがハルトに近づきお礼する

「あ、どうでした！」

「は？」

「この間、侑斗に試してみたら美味しいって食べてくれたよ！」

「本当ですか!!」

「デーネーヴーヴーー！お前、昨日の奴にシイタケ入れてたのかああ！」

侑斗がデネヴに関節技をかけられているが

「良かったら、また貰いにいって良い？」

「辞めろ!!」

「勿論!!」

「お前も渡すんじゃねえ!!」

「ウオズ! デンライナーとゼロライナー用の駅を帰ったら逢魔に作るぞお!」

「はっ!」

はははと周りが笑う中、デンライナーとゼロライナーが動き始めた

「皆さーん!! また会いましょう!!」

ハルトは大きく手を振り見送るのであった

???

「お前の望みを言え、どんな望みも叶えてやろう」

「私の望みは…」

新たな物語が始まろうとしていた

鳶一エンジェル編 序章 LOST MEMORY

ピースメーカー艦内

そこでウオズは慌てながら医務室へと駆け抜けていく慌ててドアを開ける

「我が魔王！……無事ですか!!!」

そこにいたハルトはキョトンとした顔をして直ぐに笑顔になる

「え！ウオズ!!本物!!何でここに!!」

しかしその瞳は自分じゃない誰かを見ているような気がした

「……………は？」

「あのねウオズちゃん」

「何でしょう？」

「ハルト様は記憶喪失になられているらしい」

「アナザーライダーにも変身出来ないとの事だ」

「後、ただの人間に戻ってるみたいです」

「え？我が魔王ってそんなに繊細な脳や体をお持ちでしたか!？」

「ウオズ！今の状況では笑えん!!」

「魔王様は僕達のことも忘れているみたいでして……」

ー折紙エンジェルー

ピースメーカー艦内は厳戒態勢になっていた、クロイントルーパー達は普段の軽口を叩く事もなく全員が臨戦態勢である、何せハルトが記憶を無くしたのだから。敵に知られた際必ず攻め込まれる片時も油断は出来ないのだ

「それで何故、あのバカは記憶喪失になったのだ？」

議長変わりのキャロルが真剣な面持ちで話しだす

「私から説明します」

と話し始めたのはハウンド

少し時間は遡る

「やあ少年君、どうしたんだい？」

「はい……実は」

ハルトは士道に相談ありと言ってフラクシナスを尋ねた、何でも新たに封印した精霊六喰の天使 封解主を使うのだがイマイチ能力を使いこなせていないらしい

「成る程な、それで俺を的にしたいの？」

「違います、万一危なかったら止めてほしくて」

「そう言う事なら任せておけ」

「はい！行きます封解主！」

「シドー！今日の夕餉は何なのだー！」

「あ、ちよつ！十香……危ない！」

「え？」

その時、士道が封解主を誤って使用しハルトの体に刺さってしまったのだ

そして ガコンと音が鳴ると何か閉じるなりハルトは気絶したのである

—————

「と言う事らしいです」

「よし、あのガキを連れてこいさっさとハルトを元に戻してもらおうぞ…そしてお礼をさせてもらおう」

「そうしたいのですが…実は何故か音信不通のようで…」

「関係ない！必ず探し出せ！！」

「「「はっ!!」」」」

「てか七罪ちゃんは？彼女の天使でも治せるよね？」

「彼女は四糸乃と一緒に土道を探している」

「そっか」

「『あんな大天使の頼みを断れる訳ないじゃない！任せなさい！私が早く見つけてハルトの記憶喪失を治してあげる！』と言っておりました」

「頼もし過ぎるね〜まあ四糸乃ちゃんの頼みなら仕方ないか」

あの頃のネガティブな彼女はいなかったと成長を喜ぶべきか普段のハルトの残念さが成長を促したのかは不明である、まあ四糸乃は逢魔陣営から見ればハルトをアナザーグラウンドジオウにしてくれた恩人なのだ故に丁重に接していたりする

「てか二亜ちゃんに頼んで探して貰おうよ」

「「「それだ!!」」」

「それを真っ先に思いついて!!」

そう二亜の天使 囁告篇帙を使えば1発ではないか!と皆の期待を背負ってしまった

「出番ですよ!二代目検索エンジン!!」

「初代がおネムだからって私を二代目にしないでくれるかな!!ウオズさん!」

「黙れニア!見つかったらアシスタント型ヒューマギアを追加で3人貸してやる!」

「何が知りたいのですキャロル様、全知の天使 囁告篇帙でわかる事なら何でも聞いてください!」

「懐柔早っ！」

「ハルト様よりカリスマありますね」

「本来の歴史ではたった一人で世界を戦おうとしただけの事はありますよ…ハルト様が惚れる女傑ですからね」

「ええ…流石は正妻だな」

「あ、カゲンちゃん！それ禁句」

「むっ？」

「ふふん…ならばオレはハルトに会いに行こう流石にオレに会えば何か思い出すだろうお前達と違って濃い付き合いを…？」

と自信満々にハルトに会いに行こうとしたキャロルであったが

「おい…東とアンティリーネは何処だ」

「先程まで此処に…ついでに銀狼！あの2人は何処だ！」

「監視カメラをハッキング…あ、ハルトの所にいる」

「お、おのれ…あの兎と戦闘狂めええええ！」

『CHANGE SCORPION！』

「クロックアップ！」

『CLOCK UP』

「おっと、なら私も」

『テレポート…ナウ』

転移や高速移動で動く彼女達を見てキャロルは黒い笑顔と共に

「ふ……ふははは……アイツ等……覚悟しろ！」

『ライオン！トラ！チーター！！』

「貴様等に独占はさせんぞ!!」

と走りだすのであったが銀狼は端末を操作して

「させない錫音は仕方ないにしてもキャロルと千冬だけは行かせない！」

ハッキングして隔壁を展開して進路妨害していたのである

「しっかし大変な事になったね、ウオズちゃん」

「ええ、しかし我が魔王の記憶がないといってもどのあたりから？」

「アナザーライダーと会う前までの記憶はある」

「それより後は覚えておらん、じゃからお主の事も仮面ライダージオウの臣下と思っておる」

「不愉快ですがね」

「アナザーライダー達は？」

「どうやら記憶と同じように封印されているようでして…アナザー1号が懸命にアタックしているのですが…中々破れないと」

「はあ…ハウンド、早く五河士道と七罪嬢を見つけてください記憶の封印を解くには彼等が必要です」

「おまかせを」

—————

その頃 ピースメーカー艦内では記憶を無くしたハルトは混乱していた

「その……ごめんなさい、2人の事を覚えてなくて…」

「気にしないでよ！ ゆっくり東さん達の事を思い出してくれたら良いからさ！ あ！ 汗かいてるね体拭いてあげるよハルくん！」

「えーい、いや大丈夫ですよー！ 一人で出来ますから！！ だから水をかけないで！ 桶で叩かないで…顔を桶に押し付けないで…っ！」

「いやそんな酷い事しないよ！！ 東さんそんな事する人に見えてるの！」

「それにしても普段の強い旦那様が気弱になっっているなんて新鮮ね…けどこれは…何と
いうか」

普段のカラカラよく笑うハルトではなく気弱で年不相応なまでにオドオドしていた

何かに怯えているように

「そっか…ハルクんってアナザーライダーと会う前って皆からイジメとかネグレクトされてたんだっけ」

「ああ…だから私達を見て怯えてるよね…大丈夫よ旦那様この船には旦那様を傷つける人はいない寧ろ守ってあげる為にいるのよ」

「本当ですか…え？あの…旦那様って俺はアンティリーネさんと交際してたんですか？何で俺なんか…だって俺と関わりと…」

「ええそうよ、私は旦那様の「ちよつと待てー！」ちつ…邪魔が入った」

アンティリーネは舌打ちすると乱入してきた千冬と錫音は

「貴様等と言う奴は…ハルトが記憶喪失なのを良い事に自分の都合の良い事を吹き込もうとしているな！」

「な…何の事かなあゝ東さんはハルくんに思い出して欲しくて寄り添ってるだけだよ、ね！」

「ええ…私はただ旦那様と子づ「アウトだアンティリーネ!!」そんな事ないわよ？」

「こ、こども！そんな…初対面なのに…わっ…」

ハルトが顔を赤くしてアタフタしていると千冬も

「こ、これはこれで新鮮だな」

「そうだね…こんなハルトは初めてだよ…ごめんちよつと押し倒しても良い？」

「え…まさかマウントポジションから顔面を殴るとか…」

「そんな事しないよ!!ちよつと待って！私そんな悪い人に見えてる!？」

「錫音お前…」

「スーちゃん…ハルくんの事やつぱり…」

「誤解だから！そんな事してないから2人ともそんな目で見ないで!!」

そう話しだす2人であったがハルトはキョトンとしているが

「あの…お二人は一体…」

「私は織斑…いや常葉千冬、貴様の妻だ」

「同じく常葉錫音だよ」

「ええええええ！俺結婚してたんですかあ!!となると俺は束さんとアンティリーネさんと不倫してたの！俺最低じゃないですか…まさか…俺ヒモなんですか！」

「違う！」

「てか、まだ誰とも式を挙げてないよ!!」

「どういう……」

ハルトは頭が混乱していると

「あ、ハルト……元気く」

「え？君は……」

「私は銀狼、ここのセキュリティ担当で……君のお嫁さん」

「え！ちよつ!!俺って何人お嫁さんいるの！」

「千冬、東、錫音、アンティリーネ、銀狼に最近加わったベルファスト……そしてオレ！ キャロル・マールス・ディーンハイムだ！」

「そして新しい人ですとお！ 更に7人のお嫁さん……もう混乱してきた……誰か助けてください！」

「ボスの助けを呼ぶ声聞いて！」

「来たぜ大将！」

新参幹部のネガタロスとゴーストイマジンが現れると

「ね、ネガタロスにゴーストイマジン!? ほ、本物!!」

「ああ……だが今の俺はネガタロス軍団(仮)のネガタロスじゃない逢魔王国 ライダー怪人軍団長にして悪の幹部(本物)のネガタロスだ！」

「同じく軍団長補佐ゴーストイマジン。まあ気楽にやろうや大将」

「ほ、本物のライダー怪人だ……っつか逢魔王国って何？」

ハルトが目をキラキラさせているが首を傾げるはて？と

「お待たせしました」

ウオズ達も入ってきた

「ウオズ……やっぱり本物!?!……え？」

と感動しているハルトに改めて臣下の礼を取るウオズに混乱している

「改めまして無事に目覚めてお喜び申し上げます、我が魔王」

「え？我が魔王？あのさ……誰かと間違えてない？ソウゴさんだよね君の王様？」

ハルトはウオズに警戒しながら少し後退りしている

「懐かしいですねそのお言葉…いいえ我々は逢魔王国の国王である常葉ハルト様に従う家臣でございます」

「そしてオレ達はお前の嫁だ！」

「国王と嫁!? 本当に誰かと勘違いしてるよ! あ、アレか! 俺は王様と顔がそっくりとかそんな奴とそんな感じか! 俺は鎧武外伝のバロン見て俺知ってたぞ!」

「違いますよ、貴方が我々の王なのです」

「騙されないよ…そう俺を持ち上げて…俺を…改造人間にするつもりだな! もしくは内臓を売ってお金にする気なんだ!」

「どうしようカゲンちゃん! 七罪ちゃんレベルのネガティブ思考回路だよ! 今の魔王ちゃん!」

「ああ…だから七罪の扱いも心得ていたのか…自分がそうだったなら理解するな」

「しかし改造人間など仮面ライダーを引用する辺り筋金入りのライダーオタクじゃなハルト坊」

「いやあくそれ程でも…」

「これで鎧武が師匠とか言ったらどうなるかな？」

「更にディケイド組やオーマジオウ、ビルド組や剣、電王組とも面識ありだからな」

「え？何それ…」

「さてどう話したものか」

「そうだウオズちゃん！いつもみたいに話してあげなよ」

「うむ、いつも持っている本の出番だ！」

「ああそうじゃな、お主も働け」

「お前達はいつも面倒事は私に振りますね…はあ」

そう言うとうオズは逢魔降臨歴・裏を開いて話し始める

「こほん…普通の青年 常葉ハルト…彼は未来において時の王 アナザーオーマジオウ
となる運命が待っています」

「え？アナザーオーマジオウ!?何それそんなアナザーライダー がいるの!……ちよつ
と待って!それって俺のこと?」

「はっ」

「俺がオーマジオウのアナザーに？」

「我が魔王？」

「いやいや無理でしょ!!嫌だつてあの人さエボルやあのダグバをワンパンで沈めたんだよ!そんな人にアナザーなんて生まれるかあ!作れるなら最初から作れよスウォルツ!!!」

「ま、魔王ちゃんお気を確かに!」

「大丈夫か!」

「う、うん…ありがとうございます…えとジョウゲンさん、カゲンさん…」

「や、辞めて魔王ちゃん!俺達に敬語使わないで!!」

「そ!そうだ!!俺達はハルト様の臣下!謙らないで頂きたい!」

「臣下なんて大袈裟な……その……記憶をなくす前の俺は皆さんの事をきつと大事な仲間……いや家族だと思ってたと思いますから俺に遠慮しないでください」

「わ、我が魔王……何と勿体無いお言葉」

「俺の家族……メイツ星人を殺した村人よりも最低最悪な人達ですから」

「それは知っています」

ウオズはちゃんと理解していたのでハルトの肩に優しく手を置いた

「だけど爺ちゃんや婆ちゃんは俺の味方なんだ……あと……あかねと……ーがいたんだ」

「え？」

「それでハルト、流石にこのオレのことは何か覚えて「ごめんなさい」……」

即答に思わずキャロルは膝をついたのであった

「きや、キヤロりん！傷は浅いよしつかり！」

「ハルト……すまない……以前オレはお前を傷つけまいと記憶喪失のフリをしてお前を突き離れたが……実際にやられる側になると心が痛い……すまないハルト……お前もこんなに苦しかったのか……すまなかつた!!」

キヤロルは膝をついて項垂れているのを見て束は あーと言う声と共に

「あくそう言えばキヤロりん前科持ちだったね」

「あの……キヤロルさん？」

「さんなど付けなくてくれ……オレはお前とずっと一緒にいるのだ覚えてなくても良いから……そんな突き離れたように敬語など使わないでくれ……」

と泣きそうな顔を見てハルトの脳裏に何か見えかけた

「なんかモヤモヤする…何で？」

そして

「失礼します、皆様大人数でお越しいただくのは感心いたしませんよご主人様は回復しきっていないのですから」

「ベルファストまで…一体どうなってるの？」

そうベルファストの言葉で一旦中座となった

その後

「取り敢えず我が魔王の記憶喪失の原因は分かりましたが…」

「まあ士道君達が見つかるまで慌てる必要はないよ！」

「そうだな！ハルト様がいなくても現状の問題なら我々だけで解決できる！」

「ええそうですよ！僕達の力を見せてあげましょう！」

「うむ！ハルト不在でも逢魔は回ると見せてやろうぞ！」

「そうだな此処は新設されたライダー怪人軍団にでも任せて貰おうか」

「ああ先輩達はのんびりしてると良い」

「え、ええ…」

「どうしたのウオズちゃん？」

とウオズ+四天王、ネガタロス達のテンションが上がるが慌てる必要はないと振る舞う中、ベルファストがふと思いついたように

「そうなりますと…誰がこの船の炊事全般を担当します?」

その一言に幹部陣とキャロル達が凍りつく、そうハルトにその辺何やかんやで依存していた事を…だって一番美味しく作れる人がやるのが良くね?との事で

「流石に艦内全員となりますと私たちメイド隊や調理の方でも足りませんが…」

シーーン、と沈黙が流れる

「お前等……」

「大至急我が魔王の記憶を取り戻しましょう!」

「「「「「おう!!」」」」」」

彼等はハルトにガッツリと胃袋を落とされていた

普段いがみ合う事もあるが今は

「俺達の夕飯のためにい！」

「「「「おおおおお！」」」」

心は一つであった

「……………それで良いのでしょうか？」

ベルファアストのツツコミがポツリと溢れるのであった

病室

「その…護衛？ありがとうございます」

「陛下、我々に敬語は不用ですよ」

「わ、分かってはいるんですが…その俺なんか守ってもらうなんて…その恐れ多いとか…」

「何を言ってるのやら…俺達からしたら陛下を守らないで何を守るってんだよ」

「だって俺なんか守ったって」

「なんかではありませんよ陛下」

「ま、陛下からしたら知らない人だらけの場所なんだ固くなるのも無理はないさ」

「ああ…そうだ陛下良ければ艦内を散歩しませんか？少しは気が紛れるかもしれません
ぜ？」

「そ、そうですね！こんな大きな船…1人だと迷子になりますから…ついてきてくれま
す？」

「勿論ですとも」

「けど病人服じゃ目立つか…」

「お召し物は此方に」

「あ、ありがとうございますっ」

ハルトは受け取った服を見て固まった

「えと……これは？」

「陛下が普段から愛用されている『二枚目気取りの三枚目』文字Tシャツになります」

「あの貰っておいて…すみません……ダサイので変えてもらいます？」

「!!!」

その言葉と同時にトルーパーの1人が警報のボタンをガラスごと叩き割り鳴らすと艦内に特大警報が響く

「な、何ですか!ま、まさか何か俺しちやいましたか!ごめんなさい!ちゃんと着ますから!文句言つてごめんなさい!!だから殴らないで!!」

『どうしたステイニング!陛下に何かあったのか!!』

コムリンクでハウンドが血相変えた声で会話する

「き、緊急事態ですコマンダー!!陛下が自分の文字Tシャツをダサいと……ご自身のコーディネートを否定しました!!」

その言葉に通信してハウンドや他の親衛隊は動揺を隠しきれなかった

『な、何だと!』

『じ、重症じゃないか…』

『野郎ども！コードレッド発令！世界中の名医を集めろ！陛下の私服センスがマトモになつてしまったぞ！一刻も早く陛下を逢魔の国立病院に連れて行くんだ!!』

同時に艦内で 何だつてー！と声が揃つたのであつたが

『それは喜ぶ場面では？』

「あの…俺そんな玄德さんみたいな私服センスだつたんです？」

『え、ええ…』

「そっかあ…そんなにダサかったのか俺のセンス…」

「へ、陛下お気を確かに!!」

「大丈夫ですよ…あはは…服のセンスから心配されてる俺つて…」

と悲観しているところに扉が開きキャロル達が現れた

「大丈夫かハルト！お前が文字Tを拒むだと！」

「これは天変地異の前触れだよチーちゃん！」

「あ…慌てるな！お前達！…こんな時こそ冷静に……だ…だがハルトが…そんな…いやいやいやいや…」

「千冬…体が震えているわよ？」

彼女達の様子を見て確信した、記憶を無くす前の自分はとんでもない奴であったと！

「もう嫌！何も思い出したくない！毎日記憶喪失になりたい!!」

「そんな津上翔一みたいな事言わないでよハルくん!!」

「あれ？…東さんはアギト見てるの？」

「へ？うん東さんはG3が好きだよ？」

「俺も好きなんだ…その…カッコ良いよね！」

ハルトは同志を見つけたと顔を赤らめながら少しずつ心を開いていくのだが

「は、ハルクん…あのさ東さんの部屋で仮面ライダー見ない？」

「良いの!？」

「『『『『!!』』』』」

こいつやりやがった！ハルト籠絡の禁じ手を使ったな！という目で見ていた

「あるよ！ハルクんが好きなクウガからジオウ！その先のゼロワンまで！」

「ぜ、ゼロワンまで！ジオウより後の仮面ライダー……本当に見て良いの!？」

「勿論！じゃあ一緒に観に行こう！」

「おーーー！」

「ま、待てハルト！ならオレの部屋にこい……2022年の仮面ライダー知りたくないか？」

「え……」

「あ！キャロル狡いよ！」

「黙れ！先に手を出したのはお前だろう！」

「仮面ライダーシノビじゃないの？」

「それもあるが見せてやろう、さあオレと来い！」

「待てハルト！それなら私だつて考えがある見ろ！」

「さ、サタンサーベルにサソードヤイバー！！」

「あ！ズルいよ千冬！なら私も！」

「ウイザードリングだあ！」

「あらあら皆、はしゃいじゃって」

「イクサナツクルだ…凄いい！」

ハルトは大興奮で彼女達のライダーアイテムを見ていると

「あの…東さん」

「東で良いよ！どうしたのハルくん！」

「その…G3のスーツとか此処にはないですよね？」

「あるよー！」

「あるんですか……え、えええええ！」

「見たい？」

「是非!!」

「じゃあ東さんのラボへGO!!」

「おー！」

「あ、取り敢えずハルくんは着替えようか病人服じゃ心配だし」

「え……あのダサイTシャツにですか？ちよつとやだ…」

「うん！やっぱりハルくんの記憶は早く取り戻そう！」

「」「」「異議なし！」「」「」

「そして発端である彼奴には制裁を」

「」「」「異議なし！」「」「」

「新たに重桜五航戦かプリンツオイゲン様を花嫁に迎える事には？」

「」「」「異議あり!!」「」「」

「ちよつと待てベルファスト！まさかまだいるのか!!」

「いいえしかし候補かと」

「な、なんて奴だ：おい待てハルトがいないぞ！」

「あ、陛下なら束様と一緒にラボにと」

「馬鹿者！それは止めないと：急ぐぞお前たち！ハルトの貞操が危ない！」

「いやもう捕食されてますよね？皆様に？」

トルーパーのツツコミも冴えていたが

「あの記憶を無くし不安のあまり小動物のようなハルトなど、猛獣の前に出された餌のようなものだ！それをあの天災兎に任せられるかあ！」

「そうだな以前、アイツは同じように弱ったハルトを押し倒した前科がある：東ならや

りかねん」

「よし銀狼！錫音！」

「分かった…前から束とハッキング勝負してみたかったから」

「じゃあ私はハルトの保護だね」

「そしてベルファスト」

「はい」

「暫くハルトの面倒を任せるジャンヌ・オルタも付けるから頼む、恐らくオレ達よりお前の方が現状信頼されている…複雑ではあるがな」

「承りましたキャロル様」

「じゃあさっさと行くわよ、マスターが弱ってるなんて最高に揶揄い甲斐があるじゃな

い

「不安になってきたぞ」

「私にお任せ下さい」

「頼んだぞベルファスト…さて、お前達…兎狩りだあ！」

まさかの艦内で不毛な争いが始まるとは思ってもなかった

「どうハルくん！本物のG3ユニットだよ！」

「す、凄い！これを作れるなんて東さんは本当に天才なんだね!!」

「そうなんだよ！東さんは天災だから！」

そう楽しそうに話しているとハルトはふと気になったものがあった

「東さん、アレは？」

「ああアレ、アレはねG1ユニット」

「それってまさか…っ！」

「そ、ハルくんの知つての通りG3の…先祖様だよ」

それは一言で言えば 機械仕掛けのクウガ

しかしそのモデルとなった存在はハルトにとって幼い頃に怪人から己を助けてくれた永遠のヒーローなのである

「本物のG1ユニット…：仮面ライダーダーククウガ…：五代さん…：」

それを見て感慨深くG1ユニットに見惚れていたが

「俺が青空に行ったら…いつか貴方と会えますか？」

その時の瞳からは光が消えていたという

それは本来 アナザーライダーと出会わなかったハルトが辿っていた最悪の未来と

も言えた

「ハルくん？」

「何でもないです束さん」

「因みのこの間、電王の人達と写真撮ってたよ」

「その写真見せてください！」

余談だがそもそもの原因の土道はその頃

精霊を倒すと吹っ切れた折紙に拉致られ椅子に拘束され放置されるといふ学生にして中々高度なプレイを受けていた

「違うから!!早く助けて!!」

暫くそのままでお待ちください

「ええええ！」

———

食堂　そこでウオズと四天王がおやつを食べながら話し合っていた　話題に困った
ジョウゲンが何気なく言った一言が

「そう言えばウオズちゃん、さつき何か考えてたみたいだけど？」

「何かあったか？」

「いやそのですね先程我が魔王が過去に己の味方をしてくれた人がいたという話をした
際に」

「ああ、黒川あかねちゃんだよね？」

「ハルト様の幼馴染だと聞いているが」

「それともう一人いたようなのです」

「え？」「何と？」

「妾もこっさり聞いていたが本当なのかウオズ」

「俄かには信じられませんよ…仮にそうでしたら何故我が魔王が今まであんな態度で接していたか分からなくなりますから」

「え？ちよつと待つて、その幼馴染って俺達も知ってる人？」

「ええ」

「今まであんな態度で接して……まさか！」

「ええ」

『だけど爺ちゃんや婆ちゃんは俺の味方なんだ……あと……あかねと』

ナツキがいたんだ』

「覚えてます？彼が我が魔王と錫音嬢の戦いを止めた際に出た言葉」

「あ……」

【俺の事忘れたのかよ！】

「ちよつとコレ……どういう事？じゃあ何で魔王ちゃんは覚えてないの？」

「ああ有り得ぬ事よ、ハルト坊は味方や身内には甘い……それも過酷な時の苦楽を共にした者の事を忘れるなど絶対にならない」

「本人に聞けば早い!!アイツは今どこにいる!!」

「訓練室ですかね……取り敢えずこれに関しては確認せねば」

「ではハルト坊の護衛は妾に任せておけ」

「頼みますヤクヅキ！」

「気をつけてな」

慌てて走り出すウオズ達を見送るとヤクヅキは少し考えてみる

「しかし彼奴がそんな大事な友人を忘れている？そもそもナツキの奴は死に戻ると言っていたな…アナザークイズで記憶を除いた時に記憶を見るのを邪魔されたとも、死に戻りで何故過去に戻る？そもそも死の記憶が本人だけじゃなく関係者まで断片的に覚えているとも…何故？」

しかし

「あーもう分からん！何故妾がハルト坊の事で悩まんならんのだ!!」

頭を掻きながら叫ぶ彼女であったが

【俺と来い最高の音楽（悲鳴）を聴かせてやるよ何せ鉄風雷火の三千世界で奏でる予定だからな】

「確実に知ってる奴に聞くかの、それが一番早い」

自分の知る歴史の彼ならば何か知っているだろう

「仕方あるまい、そこのトルーパー」

「はっ！」

「お主はハルト坊を護衛せよ、妾は別件で動く必要が生まれたのでな」

「イエツサー！」

「頼んだ」

の
い
る
未
来
へ
飛
ん
だ
の
で
あ
っ
た

そ
う
言
う
と
ヤ
ク
ツ
キ
は
船
の
格
納
庫
に
あ
る
自
分
専
用
の
タ
イ
ム
マ
ジ
ー
ン
に
乗
り
老
ハ
ル
ト

目覚めよ！その魂！前編

前回のあらすじ

士道の事故により記憶を無くしたハルト、それに伴い混乱を極める逢魔陣営 そんな中、記憶を無くしたハルトから溢れた言葉

それは何と アナザーゲイツことナツキがハルトの幼馴染だったという情報 何故それを彼は忘れているのか

それを調べる為にウオズ達は南米アマゾンへと向かったのである

「向かいません！」

「向かうのはアマゾンじゃなくて訓練室だよ」

「うむ！」

そして訓練室でエンタープライズと模擬戦をしていたナツキを見つけると

「失礼、ナツキ少しよろしいですか？」

「え?どうしたの?」

「いや、以前は我が魔王を欺く為の唾棄すべき狂言と思っただのですが」

「あれ…何で罵倒から入った?」

「ほら初対面の時に魔王ちゃんに俺知り合いだ! って言っただじゃん、アレってマジ?」

「どうしたの急に?」

「ハルト様が記憶喪失になるなり、お前の名前を言ったのだ同名の他人という線も捨てれんが今までの情報から見ても話を聞く価値はあろうと思っっている」

「成る程ハルトが…」

「指揮官？」

「分かった話すよ……けどこれは俺の知ってる範囲での話であって何故ハルトが俺を忘れてるかまでは知らないけど」

「構いません」

ナツキの話は大雑把に説明すると

ハルト、ナツキ、あかねの3人は昔からの友人であった

だが例の如く、ハルトの家族や周囲の嫌がらせによりこのグループは解散。あかねとナツキはハルトの元を離れた。その別れ方は今は語るまい

それぞれの日常を過ごす中でハルトが消息不明となったニュースを見て十数年後

「ハルトがフロンティア…今の逢魔王国と手勢を率いてお礼参りに来た」

「並行世界大戦の前哨戦と言われる、魔王の災禍ですね」

「噂には聞いている、未来のハルト様が嬉々として虐殺を行ったと」

「それ思い浮かぶわ〜」

「うむ…ハルカやトーマがネオタイムジャッカーに連れてこられない世界ならば報復に向かうな」

「その結果、老ハルトは家族やイジメてた奴等に報復した…家族やトーマは周りの魔女狩りにあつて生首だけになって…やった奴等はそれ手土産に命乞いをしたけど報復しそびれたハルトはそのついでに自分のいた世界の人類を追い詰めたんだ」

「ついでにやって良い事じゃないよね!？」

「え？そんな感じなんですか未来って？」

「四天王の1人　メガトロン傘下のデイセプティコンが開発した対地球人捕縛兼殲滅兵器　センチネルによって人類は滅亡寸前まで追い詰められた」

「あれ？それさ赤いタブレットか青いタブレット食べるか選んだり体は無茶苦茶後ろに倒したりする奴だよね？ってか四天王!？俺達じゃなくて！」

「未来の世界だと2人って新参ですよ？ここでは古参ですけども」

「あ、そっかってそんな事してたらそりゃ魔王ちゃん本当に最低災厄の魔王だよ……」

「その侵攻の最中、俺はセンチネルに殺されんだけど……気づいたらあの世界にいたんだ」

「それ……我が魔王の所為で死んでますよね？恨まなかったんですか？」

「ああ…けどハルトからしたら、自分を否定した世界の全てが憎かったんだろ…あかねと俺はハルトを見捨てたようなものだし祖父母もない世界なんてハルトからしたら自分を迫害したゴミと猿しかいない世界だったんだ…殺されたのだから最後まで向き合おうとしなかった罰だ…って思ってるよ」

ナツキの中にある記憶、それは老ハルトが世界に宣戦布告した時の事 全部が憎いというか興味が失せたような瞳でサムズダウンしながら布告したのだ

「この引き金はお前達が引いた、末路も受け取れ」

自分の生まれ育った世界を簡単に滅ぼしたのだ…幼少期に唯一味方だった祖父母や自分達の家やお墓は壊さないでいたのは彼に残る人の心がさせなかったのだろう…その分、自分のいた家は破片さえ残さずに消しとばしていた

「最初は死に戻りなんて知らなかったけど、あの世界でハルトと錫音さんが殺し合った結果、未来が死んで…世界が滅んだら戻ってた…絶対に迎えさせたくないって…頑張ったんだ…だからハルトと錫音さんの攻撃が予知したように分かった」

アレは死に物狂いでナツキが経験した攻撃を死に物狂いで避けた。だからあの場を乗り越えたのである。

「ですが我が魔王は完全に貴方を忘れてたと」

「そう、久しぶりに会ったハルトは俺を忘れてて更に割と酷い扱いしてくるようになった…カゴメカゴメしてきたりゴミの日に捨てようとしたり」

「それは貴方の所為も何割かありますよ？我が魔王を欺いたり利用したりなど」

「お互い様…とは言えないかな…」

「ん〜けどそれおかしくない？あの気弱メンタル状態の魔王ちゃんなら絶対に味方してくれただ人を忘れないと思うけど」

「ああ…ハルト様が友人を忘れるとは思えん」

『その答えなら知ってそうな奴がおる』

「ヤクヅキ? 貴女何処に? その前に我が魔王の護衛は」

『そんなのトルーパーとジャンヌ・オルタに任せたわ: それにキャロル達もおるし
ちよつと気になったのでな今、未来の逢魔にいる』

「「「は?」」」

「—————」

未来

「ふう: 久しぶりじやな帰ってくるのも」

タイムマジーンから降りると出迎えに来たのは

「おお帰ってきたかヤクヅキよ」

そこに現れたの体をガチャガチャと鳴らしながら歩いている巨大ロボットだ

「久しぶりじゃなメガトロン、壮健か？」

「無論だとも、我が主のお陰で大量の労働力が手に入ったからな……お陰でサイバトロンの復興も近くてな年甲斐もなく興奮しておるとも」

「そりや60億の労働力を得れば復興もするだろうさ、ハルトの奴は何処にいるかわかるか？」

「我が主の？……うむスタースクリーム、サウンドウェーブ知らんか？」

そこに現れた航空機とパンツがロボットになり膝をつくと

「ええハルト様でしたら玉座におりますです」

デイセプティコン航空参謀 スタースクリームと

「パルパティーンとイル」

情報参謀 サウンドウェーブだ

「そうか感謝する」

「うむ気をつけてな、さてお前達！次の世界を侵略するぞ！」

「かしこまりましたメガトロン様！」

こう話すと良いおじさんのような感じであるが敵対者にはハルトも真っ青な事をす
る…そうあの「オオウ…ジャズ…」をするのだ！

実際、とあるバースのトーマが【オオウ…ジャズ…】の刑にあっていたりする、老ハ
ルトはワインを飲みながら爆笑していたが

玉座

「ほほほ…それでこのデススターで反乱軍の基地どころかその惑星さえも破壊するのだよ」

「うむ流石はパルパルじゃな…俺では思いつかない発想…：素晴らしい！」

「だがデススター完成に人手が足りなくての、流石にウーキーとかワシの世界の人間に任せると反乱軍に情報が漏れる恐れがあつてな」

「なら問題ない、もう少ししたらサイバトロン星の復興が終わるからその労働力を使えば良い…猿が足りなくなれば、俺が死んだバースを襲えば簡単に集まるし…あの家族はマルチバース単位で根絶やしにしてくれるわ」

「流石はハルト殿じゃ…その悪行を心痛めずに行う姿に感服するわい、私を不老不死にするし色々とお世話になっておるのお」

「気にするでないパルパルよ、俺もパルパルの頭脳やシスの知識など色々頼りにしてい

るからなあ、そうそうバトルドロイドは有効に使わせてもらっているよ」

「ふふふ……ははははははは!!」

と笑いながら話す姿は完全に悪役であった

「失礼するぞ」

「おお帰ってきたかヤクヅキよ」

老ハルトは笑顔で仲間の帰還を迎えると

「お主は記憶喪失からは治ったのだな」

「ああそれは過去の話だとも」

「なら……ナツキとやらの事を聞かせてもらいたい」

「救世主を名乗る「違うかつての友の話だ」ああそんな時期か」

「ほほほ…知っておるぞ、そこはハルト殿の黒歴史だと」

「辞めてくれよパルパル、誰にだって黒歴史はあるだろう？昔スピーダーバイクを改造して走っていたとか、クローン一人一人にオーダー66を実行せよ指示していたともな」

「な、何故それを「ベイダーとドゥークーから聞いた」彼奴等めえええー！」

「怒らないでくれ…しかし機械弄り好きがなるのがシスの系譜か？」

「さあの…ははは！ああ…そう言えばハルトよ逢魔宮廷魔導士長にしてホグワーツ校長のヴォルデモートからじゃ今度、マグルを駒にした魔法使いのチェスとクディッチやらない？と誘われたがどうする」

「行くに決まっておろう！あんなにエキサイティングなチェスとスポーツが他の世界に

あるものかよ…アレを遊べない猿(マグル)は可哀想に、久しぶりに俺のライドスクレイパーが火を吹くぞい」

「ほほほ、ハルト様は元気じゃなく…そう言えばD I Oやメルエムも軍議やらない?と言っておったな」

「いやいやパルパルや、お辞儀を欠かさない礼儀正しいヴォル君ほどではないさ…そうかそうかメルエムやD I Oも久しぶりじゃなあ…流星の俺も昔みたいに世界を滅ぼす事は出来なくなつた…老いとは恐ろしい…今なら不老不死を求めた皆の気持ちが良いわかる」

「そう言えば最近、7つの球を集めると願いが叶うとかいうものを探してフリーザ軍が動いたのお」

「よしパルパル、銀河帝国軍とメガトロンのデイセプティコン軍団発進じゃ!フリーザ軍を叩き潰し傘下に加えて龍の球を集めるのじゃ!もしくは集めたところを奪うのじゃ!たかだか53万程度の戦闘力でイキれる輩など恐るるに足りん!あ、スカウター

は鹵獲しておけ欲しいのでな！」

「流石ハルト様ですが、その…差別的な発言は如何なものかと」

「安心せいターキン総督よ、今の発言は差別でない…：区別である！それに逢魔の民は家族だ故に全員でクディツチャチエスを楽しもうではないか、取り敢えず力で押さえつければ問題あるまいよ！圧政を通して平和を！が俺のモットーじゃ」

「ああハルト坊にも通ずる脳筋ドクトリン…：過去で記憶喪失のハルト坊を見たからか安心しておる妾がおる…：しまった話が逸れている…：教えてくれ何故過去のハルト坊は忘れているのだ？」

「簡単だとも…：思い出せないのだ」

「え？」

「知らんか？辛い過去の体験は脳がブロックして意図的に思い出せなくしておると」

「知っているが…」

「それだけ辛かったのじゃよ友人との離別はな…あかねは何とか飲み込めたがナツキの奴だけは別じゃよ」

【お前についていけない】

アレが別離となった 互いに同じものを見ていたと思っていた 目指す先は同じだ
と思っていた隣にいてくれると思っていた……

親友だった男との別れ

「以外と普通だったの」

「え? 劇的な理由があるか?」

「いらんな」

『という訳じゃ』

「なるほど…此方もある程度は分かりましたがナツキを転生させた存在、そして異能を渡しアナザークイズの情報収集を弾いた存在もいます油断なきよう」

『任せておれ、すぐに戻る』

ヤクヅキが会話を終えるとウオズは一言

「じゃあ帰りますか」

「ちよつと待てー！逢魔王国がとんでもない事してないか！あのフリーザとか名前と言っちゃダメな人とかビックネーム過ぎるんだけどー！」

「ええ最近、名前を言っちゃダメな人を仲間にしたらしいですよ……魔法ではなく拳を使つて」

「ええ……あの闇の帝王をどう倒したのさ?」

「報告によれば」

聞けば勝てば従うと約束して決闘となつたらしい、お互いにお辞儀をした後

【お辞儀だ魔王】

【よろしくお願ひしまーす!】

【くらえ!アバダケ「おらあ!」ごふっ!不意打ちとは卑怯だぞ!】

【ふははは!即死魔法とか禁じられた魔法なんて発動させなきゃ良いだけだ!最強の二

ワトコの杖!?分霊箱? 知るかポケエ!俺の魔法(物理)はこの世界の魔法を凌駕する!!」

「あ、がつ!辞めろ!魔法でけつ」なら食らえ俺の最強魔法!マジカルパンチ!!」それただの拳だ……こっつ!」

「俺に!従うまで!俺は!殴るのを!辞めない!!」

「……………」

「あれ?気絶した?まあ魔法特化型なら体鍛えてないだろうから当然か……んで死喰い人さん達や?アンタ等は誰に従う?俺?それともここで気絶してるエゴサに余念のない奴?」

「(一)我等全員!貴方様に従います!!(二)」

「よろしい」

「こんな感じで従えたらいいですよ？」

「何だハルトじゃないか」

「魔王ちゃんらしいね…しかし魔法（物理）って」

「うむ実家のような安心感だな！」

「何に安堵してるんですか先輩達は!!未来でも魔王様脳筋じゃないですか!」

「けど良かったらちゃんと思い出すんだよね」

「即死魔法を使う前に飛び膝蹴りを顔面に叩き込んでからマウントポジションを取り顔面にラツシユを叩き込むとか成長してもやる事変わってないですね…本当に何というか……」

「じゃつ俺達も頑張つて、魔王ちゃんに早く思い出して貰おうよ!」

「そうだハルト様はやはり豪快に笑っている方が似合う…あのように怯えるハルト様は見たくない」

「ですね…僕達の晩御飯もかかっていますから頑張りますよ、全く思い出したら魔王様の特別メニューくらいは作ってもらいたいですね」

「ええ…では頑張りますか」

「「おう!!」」

その頃 ハルトは自室に戻っており

「うーん…何故、前の俺はこの服をオシャレと認識していたんだろう」

【二枚目気取りの三枚目】 Tシャツを見ながら首を傾げていたが

「それに……何キツカケで俺は王様になつたんだろう……守りたいものなんてない……独りぼっちなの……一緒にいてくれる人なんていないのに……っ!」

ハルトの脳裏には過去の凄惨な記憶がよぎる

【何でお前なんかがいるんだ!】

【さっさといなくなれ!お前なんか!!】

「俺なんて生きる価値なんてないよ……俺みたいな奴が王様なんて……出来ないよ……怖いよ……何で……同じ俺なのに……何で?」

「そんな事あるか馬鹿者」

「え?……ち、千冬さん!?!」

「千冬で構わない、それよりも今の台詞だが……ふざけているのか!」

千冬は怒りの形相でハルトの胸ぐらを掴んで持ち上げる

「あ……あの……」

「生きる価値がないだと？王など出来んだと？笑わせるな…逢魔はお前が作った国だ！誰もが飢餓に悩まず笑顔でいられる、お前が一番苦しんだからこそ自分を慕う者に同じ思いはさせないと理想を掲げていた！だからお前でない！誰もついてこないぞ！特にあの暴走三人娘やウオズや四天王はな!!」

「俺が？」

「今思えば私達が再三注意していたのに文字Tシャツを着ていたのも皆を笑顔にする為だったのだろう…すまなかつたな色々と言ってしまった」

「それは違うと思う、趣味で着れるのが嬉しいと思ってる」

「そしてお前はそこに住まう者を愛し守る為に常に先陣を切って戦っていた!」

「それは…」

「確かに怖いこともあっただろう!だがそんな恐怖を笑い飛ばし常に前に進んでいた! まあ元からネジが飛んでいたと思うが…背中にいるものを守る為なら自分だけが逃げる事をしなかった!!怪人やアナザーライダーの力があつたからなどではない!私達の知っている常葉ハルトは!大事な誰かの為なら世界が相手でも戦うことを辞めない大馬鹿者だ!!」

その時、千冬の目には涙が浮かんでいたという

「そして何より…貴様を愛する者達を悲しまないでくれ…皆、お前が好きなのだ…自分に生きる価値がないと言わないでくれ…私だつてお前がいたから…生きてて良いと思えるのだ…」

「……………」

手を離すと泣き崩れる千冬を見てハルトは歯を食いしばる

「おい、テメエ…誰の嫁泣かせてやがる」

「……………」

そんな声が何処からか聞こえたような気がした

数分後、千冬は泣き止むと少し罰が悪そうに謝る

「すまなかつた…色々と」

「いや、元はと言えば俺が悪いから…ごめんなさい…その…そこまで慕われてたんだね記憶を無くす前の俺」

「まあな連中は口にしないだけで各々がハルトを慕っている理由はそれぞれだろうがな」

「そうなんだ…何がキツカケなんだろうね」

「アナザーライダーと契約したからじゃないか？」

「かもね…」

「所でだハルト、その…アレだ暇だから買い物に付き合え」

「是非、千冬さんみたいな美人なら荷物持ちでも財布でもどんとこいです！」

「褒められて満更でもないが何故そこでデートという発想にならん」

「すみません…大体異性と買い物というハルカの荷物持ちか財布代わりにされてたので…」

やはりアイツは一度締め上げようと千冬の決意したのであった

「分かりました…千冬さんを精一杯エスコートさせて貰います！」

「よく言った、では待っているぞハルト」

千冬は部屋を出るとハルトは慌ててロッカーを開き私服を見る

「……………どの服着れば良いの？」

独特なセンスの私服しかない現状に絶望していた

その中から辛うじて着られる服を選び千冬とデートに行こうとしたハルトであった
が

「お待ちください我が魔王」

「う、ウオズさん!」

「是非護衛を我等にお任せください」

「え? いやその…けど…俺なんか…それに千冬さんと2人で…」

「遠慮しないの。それに俺達はデートの邪魔するつもりはないから」

「まだ敵がいる状況だが戦いは俺達に任せて楽しんでくれ!」

「その通りですよ魔王様! 僕達は魔王様の家臣団なんですよ是非頼ってください!」

「この状況で陛下を守らずに何が親衛隊ですか、ご安心ください陛下の敵はブラスタアの鎧にしてくれます…なので事件解決したら少しまとまったお休みもらえませんか?」

「一応理由は？」

「実はシェフィールドと一緒に買い物をと」

「良いですがよ……えーと……じゃあお願いします？」

そしてハルトは

「お……お待たせしました……」

「待つてない、さあ行こう……まずは何から回るか？」

「取り敢えず服屋から良いですか？流石にあの文字Tシャツしか持つてないのは問題だ
と思うので……後早く着替えたい」

「……………そうか」

千冬と合流して買い物を始めると物陰から見守るウオズ達がいた

買い物も終わり喫茶店のテラス席で一服している時に事件は起こった

「おい兄ちゃん、綺麗な人連れてるじゃねえか俺達にも楽しませろよ」

と下卑た目線のチンピラが数名絡んできたのである

「えゝ本当にあるんだこんな事」

ハルトはドン引きする中で千冬は凜とした雰囲気です断る

「すまないが私達はデート中だ、貴様等と遊ぶ時間はない」

「そんな事言うなよ、そんな情けない男より俺達の方が楽しめるぜ?」

「それを決めるのは私だ失せろ」

流石の低脳と言わべきか沸点が低かった

「っ！下手に出てたら調子に乗ってんじゃねえぞこのアマア！」

雑なテレフォンパンチ、千冬なら簡単に投げ飛ばせるだろうが

「っ！」

ハルトは慌てて千冬を守ろうと体を盾にしたのである

それに反応してか現状 過保護な家臣団が動き出した

「っ!!」

「あがあ！」

カゲンの顎への掌底がチンピラを吹き飛ばしたのである、その一撃でチンピラのリー

ダーは顎骨を砕かれKO寸前だが

「ハルト様を殴ろうとするとは…敵だな貴様!」

その言葉に近くで待機していたジョウゲンとハウンドが何っ!と反応すると

「敵か!敵か!」

「敵か!敵か!」

オラオラ!と倒れた相手にダメ押しと2人の情け容赦のない蹴りが撃ち込まれていく、カゲンも混ざり蹴りを食らわせていくとチンピラ仲間も予想外の流れに混乱するしかなかった

「先輩、アレ止めなくて良いんですか?」

「……………」

ウオズは紅茶を一口飲み、ふう…と溜息をこぼすと

「はあ！」

まさか混乱して動きを止めていた敵のチンピラを殴り初めたではないか

「えー！いやちよっ先輩!？」

「我が魔王の敵なら倒すのみですよ？」

「ええええええええ！」

逢魔指折りの常識人（ストッパー）の暴走にフィーニスが困惑している

そして早く敵を倒したウオズは堂々と

「古事記にも書かれています、人の恋路を邪魔するものは…エラスモテリウムオルフェノクに踏み潰されてしまえ!と」

「どんな古事記ですか!せめて逢魔降臨歴に書いててください!何のための預言書ですか!!」

そんなやりとりにハルトはドン引きするも

「違うと思う…取り敢えずホースオルフェノクに蹴られるじゃないかな」

「馬に蹴られてた段階で死徒再生は悪夢ですが!」

「あと…助けてくれてありがとう…」

「勿体なきお言葉…!」

その背中ではチンピラのリーダーが3人に蹴られるという中々凄惨な現場があった

チンピラ達の不運は絡んだ人が悪かったである普段ならハルトの威圧一つ、或いは圧力から絡む事はなかっただろう：しかもピリピリしている中の幹部達を刺激してしまったのだ

「取り敢えずコイツら捕らえて拷問にでもかけますか？」

「そうしようか背後関係を綺麗に喋ってもらおうか？」

「そうだな取り敢えず……………何処の組のもんじゃい!!」

「カゲン先輩違いますよ：こう言う時はまず：魔王様の妃に手を出した罰が必要です、市中引き回しの後に生コンクリート詰めして近くの海に捨てておきましょう」

「ダメだよフィーニス、そんな事したら」

「何と！普段のハルト様ならば『ミラーモンスターの餌だ！』と言うのにお優しい……」

「うんうんいつもの魔王ちゃんなら『ヘルヘイムの森の肥料』とか言うのに」

「確かに『ロストスマツシユの実験体』とも言わないとは魔王様もお優しい…」

「では逢魔のグロンギ特区にして重罪人が流される最悪の処刑場 リントの街にでも送りましょう」

リントの街

それはハルトに従うグロンギ達の文化 ゲゲルをするための死刑になる人が住む街
グロンギの申告するゲゲルに該当する者は解放されるが解放された結末はゲゲルで
殺されるだけと言う死刑を待つ者が暮らす街である

がハルトは首を横に振り

「こんなゴミ屑を捨てたら、あの綺麗な海が汚れちゃうでしょ？だからダメだよクジラ
怪人が悲しむよ…せめてソイレントグリーンみたいに加工してさアマゾンのご飯にし

てあげようよ…えーと…SDGsだっけ？資源は有効に使えだよ」

「ん？本当に記憶がないのだよなハルト？」

「ごめんなさい…こんな状況滅多に無かったから…けどね千冬さん…俺からしたら」

チンピラのリーダーに目線を合わせて笑顔で答える

「コイツみたい弱い奴から笑顔で大事なものを奪うような人がいなくなれば世界は平和になると思うんだよ…そういう意味では駆紋戒斗の目指した世界って正しいと思うんだよなあ」

「ひ、ひい!!」

「まあ長々と話したんだけど何が言いたいかって言うと」

ハルトは笑顔で

「ゴミは消えちやえ」

躊躇いなく死刑宣告を告げたのであった。

「ウオズお願いね」

「かしこまりました我が魔王」

ウオズはヒマワリロックシードを解錠して下級インベスを召喚すると、そのまま連中の首根つこを掴ませて連行したのであった

記憶を無くし王としての責任感からも解放された故に今のハルトはかつてハルカが言っていた

「あんな連中は…皆死ねば良い…家族も妹も…皆いなくなれ…全部消えてなくなれ…そうか…なら壊しちやえば良いんだよ…そうしたら少しはモヤモヤも晴れるかな？」

誰かと共感する心をなくした残酷な子供となっていた

余談だがこの辺りの残酷さや冷酷さから性格的に一番相性の良いウルティマが最初にハルトの元へとやってきたのである、その頃 ウルティマは名付けにより繋がっているからかハルトから流れる憎悪や怒りと言った負の感情が心地よく上機嫌だったと言
う

「本当に記憶喪失なんだなハルト!?!思い出す前と同じ事言ってるぞ!」

明らかに記憶喪失前と似たような発言をしているが本人はケロッとした顔で返す

「あれ? やっぱり俺ってかなりの危険人物?」

「今更では無いですか？」

「だがハルト……その……嬉しかったぞ」

「え？」

「体を張って守ろうとしてくれたな」

「あ……」

「やはり記憶を無くしても根っこは同じだ」

「そ、そうだといいなあ」

「そうとも」

はにかむハルトに千冬は、そうとも笑う

その影では

「千冬の奴…抜け目がないな」

「気弱なハルくん相手に…お姉さんらしさを全面に立てて頼れる女性とアピールするなんて…部屋の掃除とか出来ないのに！」

「しかもご主人様が明確に異性として意識するような頼れる女性像を捕らえておりますね」

「ちよつと待てベルファスト、その後で詳しく聞かせてくれる？」

「けど抜け駆けしたお仕置きが必要よね？」

「そうだねアンティリーネ…銀狼」

『ばつちりカメラで録画してる言い訳させない』

「行くぞ」

と全員が笑顔で千冬とハルトのデートに横槍を入れるのであった

—————

「おい千冬、何抜け駆けしている?」

「キャロル…皆…」

千冬はしまった!と言う顔をしているが

「俺が誘ったんだ…だから千冬さんを怒らないであげて」

「ハルト…」

「オレ達は怒ってなどないさ安心しろハルト」

「キャロルさん…」

「それで千冬とのデートで何か思い出しそうか？」

「いや…寧ろ思い出す前の私服センスに絶望してフアントムになりそうです」

「そこまでか…：…うーん…」

「チーちゃんの部屋見せたら何か思い出すんじゃない？キャロりんも冗談だけど記憶消しても残るって言ってたし」

「辞めろ束！今そんな事されたら」

「これ千冬の部屋」

「銀狼待て!!」

「おーつと千冬、大人しくして貰おうか」

「ええ旦那様との抜け駆けの罰はコレでチャラにしてあげるわ」

「離せ!!」

銀狼から渡されたスマホの写真を見てハルトの笑みが引き攣ったが直後

「っ！部屋の掃除……9割が俺の仕事……」

「おお！何か思い出しそうだよ！」

「流石は千冬の部屋だな……記憶を封じられても残るインパクトか」

「体が覚えてるんだね」

錫音の言葉が刺さり千冬は膝をついた

「…………キャロルのは演技だとしても本当に忘れてるハルトにまで断片的にも覚えられているのか…!」

「自分で掃除するようになったら大丈夫よ千冬」

「そーそーハルくんなら笑って許してくれるよ」

「大丈夫です千冬さん!汚しても俺が掃除しますから任せてください!…こう見えて掃除、炊事など家事スキルには自信ありますので…本当に…その人並みですが…」

「ミリ単位で食べられなくなるフグを捌く事のできる人の何処が人並みの料理人なんだろうね」

「普通とは一体…」

「知っている」

「え?」

「そんな事、知ってるさ」

「キャロルさん」

「ゆつくりで良い：そもそもこの状態だつて何処ぞの少年が戻れば解決するのだから
な」

「その前に二亜から情報来てる」

「それを先に言え!」

キャロルのツツコミに合わせて銀狼が端末を操作する

「士道は七罪と四糸乃が発見、現在ハウンドが部隊を率いて向かってるよ」

「よし早く連れてこい！このバカの記憶を思い出させるぞ」

「だけど折紙が精霊化して十香達と戦闘中、加勢したいと」

「折紙が！」

「ダメだ、その前にハルトを元に戻せ」

「けど折紙が……」

「錫音、お前の気持ちは分かるが此方も大事だろ？コイツが目覚めん事には俺たちも取れる選択肢が少ない」

単騎で戦況をひっくり返す切り札を指差すのであった

「一先ずは……皆でデートと行こうエスコート期待しているぞハルト」

「は…はい!」

「では行くぞ」

とキャロル達に少し遅れながら歩こうとするハルトだがポケットに入っているものを見て驚愕した

「え? ライドウォッチ!？」

t o b e c o n t i n u e d …

目覚めよ！その魂！後編！！

前回のあらすじ

記憶をなくしたハルトは千冬や皆と一緒に買い物デートを楽しんでいた

「大丈夫かハルト？元は病み上がりのようなものだ無理はしてないか？」

キャロルが心配そうにハルトの隣に立つが

「大丈夫ですよ…寧ろ楽しすぎて後が怖いです…」

「何でだ？」

「大体この辺りで怖い人達が来て美人局的な事をしてくるので…はい」

「それなら安心しろ…オレ達の旦那に安易なハニトラを仕掛けるような愚かな奴らがいたら国や組織ごと根絶やしにしてくれるわ」

「あ、あはは…」

「この言葉の圧力にはマジでやるといふ強い意志を感じたのである…いやその前に「これ以上増やさされても困るのでな」

聞かなかつた事にしたい

「あれ?そう言えばウオズは?」

「ああ彼奴なら今頃」

ピースメーカー艦内

「さて誰が黒幕かキリキリ吐け」

「んー!!んんー!」

ウオズは口をガムテープで縛り喋らなくさせたチンピラの面々を威圧する、ハルトのヴァルバラツシャーを肩に担ぎながらだが

「いや喋らせる気ないですよね?」

ジョウゲンとカゲンは退屈そうに雑誌を読みながら対応していた

「まあアナザークイズの力で記憶抜き取れますから…これは半分くらい八つ当たりですね具体的には我等の負担を増やした者達への!」

そのままバットの要領でウオズがヴァルバラツシャーをチンピラのボディーへフルスイング!クリーンヒットした一撃はチンピラを悶絶させたのは言うに及ばずだ

「サンドバッグとは可哀想にの絡んだ相手が悪かったと諦めよ」

「あ、ヤクヅキ先輩帰ってきたんですね」

「うむ久しぶりの帰郷じゃったが楽しかったぞ」

「それで首尾は？」

「報告したとおりじゃが…：どうにも気になる事があるのでな」

「分かりました無理せぬように…：でコイツらどうします完全にナンパ目的のチンピラでしたよ記憶消して放置しますか？」

「男か…：なら妾が使っても良いか？丁度ピアノの低音に当たる鍵盤素材が足りなくて困っておったのだ」

「え、確か鍵盤の素材って」

「あの逢魔にある人間の腸を使い悲鳴を音階にした人間オルガンだな」

「ああ…あのレジエンドルガ特区にある悪趣味な奴ですか魔王様が見たら気絶するよう
な」

「けど魔王ちゃん、タナトスの器とか普通に受け入れてたけど？」

「骨の塊と臓物加工したものを一緒にしないでください！」

「悪趣味とは失礼な！大変なのじゃぞ！人間はピアノと違い同じ部位を痛めつけても同じ悲鳴の音階にならないのじゃ！そこを苦労しながらも同じ悲鳴となるようにするのが妾こ楽器作りの楽しみなのじゃよ…まあその分傷むのも早いから交換頻度が多いのが問題じゃがな」

「流石悲鳴が音楽のレジエンドルガの女王だな」

「何とか音楽性が違いすぎて…何とも」

「取り敢えずヤクヅキは我が魔王の前でその話はしないでください…後、夜に演奏するのも控えてくださいよ時折悲鳴が響いて我が魔王の目が覚めましたから隠蔽するの大変だったんですから」

「う…うむ分かかっておるハルト坊が聞いたら卒倒するからの、それにコレは妾の趣味じゃからなしかし…ハルト坊の家族なら良い素材になりそうじゃな」

「それ遠回しに我が魔王を人間オルガンの素材にしようとしてませんか？」

「謀反か!!」

「先輩最低です」

「ヤクヅキちゃん……」

「せんわ!!そんな誰が恐ろしい事思いつくか!!」

「辞めてくださいね、災禍の時のように報復すべき家族を先んじて殺されると我が魔王の性格も変わりますので」

「それと楽器作りにハマる我が魔王とか面倒なので嫌です」

「ブラッディローズとかクリムゾンファンク並のバイオリン作ろうとしそうだね」

「ハルト様ならやりかねんな」

「まあ良い、しかし拷問か…ウルティマが関わらんだだけ慈悲よのお」

「ええ彼女が絡んだらこの程度では済みませんから」

「う……思い出しただけで吐き気が…」

「カゲンちゃん!しっかり!!」

「さて…では任せましたよヤクヅキ」

「うむ!任せておけ最高の音楽を奏でてやろう」

その夜 男性の悲鳴が響いた

余談だが逢魔王国のレジエンドルガ特区にあるピアノから出る悲鳴は夏の肝試し大会を盛り上げているとか 何でもリアリティがあるとかで

「リアリティ以前にリアルの悲鳴ですからね」

「ウオズちゃん、しっ!」

—————

「まあ大丈夫だぞ」

「今の会話の流れのどこに安心感を感じろと!？」

怖い!と怯えるが…

「まあ別に良いか…敵のことなんてどうでも」

アツサリと切り替える事にしたのである、流石ハルト無関心な奴には冷たいぜ!

「その…:…:だな…:ハルト今日の服だが…:似合ってるぞ」

「元が残念過ぎたからだと思えますよ、マイナスからスタートしたらどんなセンスでもプラスに変わりますよ」

「それは言えている…:だがお前もマトモなセンスをしていたのだな」

「色々複雑ですよ…本当……ん?」

そう溜息の吐くハルト、懐にあつたファイズフォンに通話が入っていたことに気づく

「もしもし?」

『陛下!ハウンドです』

「どうしましたか?」

『実は陛下の記憶を取り戻す為に少年の保護をしたのですが、現在モールイマジンの群れと交戦中!』

『狙いは陛下を誘き寄せる為だと推測!』

「っ!」

『なので絶対に救援に来ないでください！』

「え？」

『これは我々の戦いです…故に陛下は日常を楽しまれよ！』

「そんな…」

『ご安心を俺達が死んでも次の親衛隊が陛下をお守りします!!しかし陛下が亡くなれば我等の全てが終わります！』

「……………皆に変わりなんていないよ」

その声は音声に乗る事はなくハウンドは敬礼した

『では陛下!ご武運を!』

ハウンドの通話が終わるとハルトは慌てて走り出そうとするがキャロルが止めた

「行くな、行ったら間違いなく死ぬぞ」

「けどハウンドさん達を見殺しになんて出来ない!」

「アレは死ぬ覚悟を決めた戦士だ：お前なら分かるだろう?」

「分かりたくありません!!千冬さんが言ってくれました!皆、俺が好きだって!ハウンドさん達を見捨てるなんて出来ません!ここで動かないと絶対に後悔します!だから離してくださいキャロルさん!!」

その瞳には弱く儂いがしつかりとした光があつたのだ

「戦いに生き、戦いに死ぬという兵士の矜持を汚してもか?」

「皆には生きてて欲しいんです！だから戦います！これは……俺の我儘です!!」

その言葉を聞いてキャロルはフツと笑う、やはり

このバカの我儘は生まれつきのような

「そう言うと思ってたぞガンシップを回してあるから乗れ」

「ありがとうございます！」

と言いながらガンシップに乗り込もうとするが

「ちよつと待った私も行くよ近くに折紙もいるらしいからね」

「私も行くわ久しぶりに暴りたいわ」

錫音とアンティリーネがガンシップに乗り込むのであった

「あれ?行かないの?」

「珍しいねキャロルなら行くと思っただのに」

「ああ今日くらいは2人に譲ってやろうと思っただけな」

「それだけじゃないだろう?」

「気づいてたか千冬」

同時にキャロルの目が細くしながら物陰を睨みつける

「そこで何をみている?覗き見とは悪趣味な奴だな」

「っ!」

それまでふざけていた面々も警戒し各々のアイテムを取り出した

「あらあら、それは失礼いたしましたわ」

そこに現れたのは黒いゴシックドレスに片目の瞳に浮かぶ時計の模様

最悪の精霊にして逢魔空間震事件の最重要容疑者

時崎狂三であった

「魔王の奥方様に会うのは初めましてですわね私は時崎狂三、精霊ですわ以後お見知り
おきを」

「時崎狂三？ああそうか…貴様か………貴様が国に空間震を叩き込んだ張本人か!!」

キャロルの怒りの声音は大気を震わせ千冬は飛来したサソードヤイバーを掴み取り、

束はアタツシユアローを展開、ベルファストは艀装を構え銀狼はハッキングで周囲の監視システムを妨害し人払いに貢献したと思いきやショットライザーの銃口を向けている

結論から言おう 彼女達の殺意が高すぎるので流石の狂三も少し引いている
実際対面している面子が

世界を分解しようとした錬金術師

世界大会連覇を果たした最強の戦乙女

宇宙に届く翼を作り上げた月へ飛ぶ天災兎

ハッキングの名人も言える電脳世界の狩人

戦う為に生まれた最強の艦船メイド

後ここにはいないが魔王を倒せる魔法使いと元の世界では最強格 格付けできない
番外席次

「そ、その件なのですが…まず誤解を解きたく此方としても語弊があつた事をご理解頂

きたいのです」

「お前の言葉を信用しろと？」

「ええ危害を加えるつもりは毛頭ございませんので話だけでも聞いてくださいませんか」と？」

狂三からしたら、あの日を境にクロールトルーパー達や銀狼、束などの電腦戦組による探索によって拠点を潰され、天使を使うのに必要な時間の補給もままならなくなっていく日に日に追い詰められているのが現状である

目的の為に死ぬ事は許されないが 仮に彼の手勢に危害を加えればそれこそハルトを本気で怒らせてしまうので取り敢えず話し合いと思っただがハルト本人に会えば間違いなく戦闘となる ならば彼女達越しに話そうと思っただ次第と

「お前たちは武器を構えてろ、話だけは聞いてやる」

「キャロリン良いの? コイツが元凶なんでしょ? 撃ち抜いちやおうよ、そしたらここにいる理由がなくなるよ」

「ダメだ最重要容疑者というだけで犯人にして死刑判決は早いぞ、以前行った世界にいた:デカレンジャーだったか? あいつらだつて宇宙最高裁判所の判決が出てから倒すだろう? それと同じだ」

「ああ: そうだな以前ハルトに同行してあの世界に行ったが、ドギー・クルーガー: 彼とはまた剣を交えたいと思う、それほどに素晴らしい剣士だった」

「逢魔の警察庁長官のポストでは非ウチにとスカウトしたらしいけど、自分の仕事場は地球のデカベースだと断られたんだっけ」

「中々の人格者だったと聞くぞ」

「流石はご主人様が幼少期に【上司にしたいランキング第1位】となった人ですね」

「そうだったの!？」

「皆、話が逸れてる…あと私もカッコ良いと思った…モフモフしたい」

「あ…あの…一体なんの話？」

「すまない脱線してしまったな」

「じゃあ逢魔風ならカレラ最高裁判長が吟味して判決下さ感じ？」

「いや待て、二亜と二人きりだった時に危害を加えないと言う約束は守った、なら此方も一度は守らねばならない…とあのバカなら考えるだろう」

「ハルトなら見た瞬間殴りかかるだろうさ」

「だね、ハルトくんなら迷いなくやるよ、だって最初からアナザープリミティブになったし」

当たり前でしょとばかりに頷く3人にベルファストはクスリと笑い首肯する

「それで用件を言え、出ないとオレでも抑え込めんぞ」

「はい…ではまず私の目的ですが」

—————

その頃 土道を発見したハウンド達親衛隊であったが道中 徒党を組んだモールイマジンと交戦、七罪と四糸乃を逃すことには成功したが逆に自分達の命は風前の灯となっていた周りの親衛隊も倒れた以上、残りは俺だけか

「残念だったなあ!後一步で倒せたのになあ!」

「そうだな…ああ…最期に陛下の作った飯でも食べたかったなあ…」

それが今際の言葉になる筈だった

「食いたいならいくらでも作りますから死なないでください！」

しかし突如、放たれた魔法弾と空気弾で魔術師部隊は吹き飛ばされた

「まさか……」

「ハウンドさん大丈夫ですか!!」

「私達もいるよ」

と現れた最も来て欲しくなかった人の来訪にハウンドは吠えた

「陛下……何故来たのですか!!来るなど言ったのに!」

「行くなつてのは来ての合図でしょ!」

「しまった…陛下には逆効果だった…じゃありません!逃げてください今の陛下では勝てません!!」

「関係ない!!戦います俺だって!それに…:ある人が言っていました死なんて背負って食べる^ご飯が美味しい訳がない!!」

「その状態で戦えませんか!」

アナザーライダーにも怪人にもなれない非力な人間に戻ったハルトの戦闘力など役に立たない整然が野良猫相手に互角に渡り合えるくらいの戦闘力しかないのだ

「一兵卒を助ける為に戦場に来る王がいますか!」

「その一兵卒の為に体を張るのが王様じゃないんですか!!」

「っ!」

「確かに今の俺は何も覚えてません……けど皆がいなくなったら絶対に後悔する……だから全部思い出した時に皆には笑顔でいて欲しいんです！誰も欠けて欲しくないんです！だから今、戦うんですよ!!」

【ごめんなさい！】

あの時みたいに無力さで泣かないように

本音を言えば凄く怖い、今すぐ逃げだしたいけど彼女が鼓舞してくれたじゃないか

『皆、お前が好きなんだ……だから生きる価値がないなんて言わないでくれ……』

自分みたいな人間でも生きてて良いと思えるように……そう思ってくれた皆に少しでも報いたい為に

「だから見ててください！」

普段のハルトなら言わないだろう、思いがああの言葉を紡いだのである

「俺の!!変身!!!」

不思議なことが起こった（RX風）

ハルトのポケットに入っていたウォッチがハルトの体内に宿る力によって覚醒したのである

それは無限の進化 可能性の先にある存在

『アギト』

「っ……っ……!」

『アギト』

ハルトは躊躇わずにアギトウオッチのボタンを押し起動すると金色の力がハルトの中に流れ始めると腰に現れたのはギルスやアナザーアギトの使うベルトではない

光が宿す賢者の石　オルタリングが現れたのである

「っ!!」

待機音が鳴り、今か今かと待ちかねているではないか

本来なら感動に震えて二、三時間は泣くだろう状況だが今は泣くわけにはいかない

自分の大事なものを守る為、大事な帰る場所を守る為に…

ーお願いします…力を貸してください!!ー

憧れからあのヒーローと同じポーズを取る

今は歪なヒーローではない仲間の思いを背にして戦う為
記憶を無くしても己にあ
る譲れないものを貫くために!

目覚めよ!その魂!!

「変身!!」

同時にオルタリングの両脇のボタンを強く押し込むとハルトの体を強い光が包み込
む その中から現れたのはアナザーではない本物

金色の二本角、赤い瞳 その姿は紛れもない

「仮面……ライダー?」

そして高い所から宣誓する者が一人

「祝え!!記憶を無くしても己の在り方は忘れずに進んだ姿 その名も仮面ライダーアギ

ト！我が魔王が憧れに手が届いた瞬間である！！少し複雑な心境ですが…」

「うおおおおお！アギトに変身したのもあるけどウオズが俺を祝ってくれたあ！スゲエ嬉しい！！」

進化の化身 仮面ライダーアギト 覚醒

「ほ…本当に変身した…」

「あら旦那様カッコ良いじゃない」

「あ、アギトだと！バカな！！お前は仮面ライダーに変身出来ないはずだ！」

「何で変身出来たとかそんなこと知らないよ、ただ最初に言っておく」

今だけは変身の興奮と奮い立った覚悟により

恐怖は消え失せ 魔王の頃のように仮面の下で笑っていた

「今の俺は！負ける気がしねえ!!」

その動きと体の使い方は紛れもなく記憶を無くす前のハルトのそれだった

「ハルト…まさか記憶が…」

「いいえ恐らく体に染みついた動きを反復しているのてしょうね」

「そもそも何で旦那様が変身出来てるの？」

「確かに変身出来ない筈では…」

困惑する面々に説明役とばかりにウオズが現れた

「それは恐らくアナザーアギトが関係しているからかと」

「どう言う事なんだウオズ？」

「我が魔王と契約しているアナザーアギトにはかつて我が魔王が憧れてやまないヒーローの仮面ライダーアギトの力が内包したアギトウオッチが埋め込まれた事がありました」

そう、ウールの思惑によりオーマジオウ誕生阻止の為 アナザーアギトには本家アギト 津上翔一から抜き出したアギトウオッチが埋め込まれ本家アギトの姿へと変わった事があった

つまりアナザーアギトはアナザーライダーの中で唯一 オリジナルと共存した稀有なアナザーライダーなのである

「そして我が魔王は現在、アナザーライダーとのリンクが途切れ限定的ながら器が空の状態なのでアギトの力が入る要領が奇跡的にあつたのでしよう」

「つまりアナザーアギトの中に残ってた仮面ライダーアギトの力がウオッチになってハルトを助けたって事?」

「簡単に言えばそうなりますね」

「ふーん…そう、まあ旦那様が戦うなら私も行くだけよね変身!」

『F I S T O N !』

アンティリーネはイクサへと変身、そのままイクサカリバーで敵を切りつけていくと

「うおおお!イクサ!アンティリーネさんはイクサになれるんだね!」

「ええ、そうよ…さて貴方達の命、神に帰しなさい!」

『ライジング』

「さあ私の遊び心を見せてあげる!」

イクサカリバーとイクサフォンにより斬撃と銃撃によりイマジンはダメージが入ると

『ファイナリー…』

「はあ！」

アナザーファイナリーに変身したウオズが飛び蹴りをして間合いを作る

「つてウオズなの！その姿何！」

「これが私の力…宇宙最強アナザーファイナリー！緊急事態につき短縮版である」

「おお！カッコ良いな!!」

「何で君まで出るのさ過剰じゃないかい？」

「私に変身しないと単なる仮面ライダーの物語になりますので」

「何かすごいメタな理由だったよ!」

「皆凄いな…よし俺も負けてられないな!」

ふっ!とオルタリングのボタンを再度押し込むとアギトの体から風と炎が巻き起り両肩には左右非対称の鎧が追加されたのだ

元祖でんこ盛り、記憶を取り戻した彼が使った唯一のアギト この世界では記憶を無くした魔王が使う アギトである

アギト・トリニティフォーム

「っしやあ!」

両手に武器を持ったハルトは理解した

「使い辛い!!」

動きながら戦うのに向いていないのだ！いやそりゃ中の人があめちやくちや大変と
言っていたフォームだけはあるが

「これで……！」

エネルギーを溜め込み臨界まで達すると両手の武器を振り抜き強力な斬撃を放つ

「ぐあああ……！」

それは力任せの雑な一撃であったが、戦闘経験を失っているハルト故の戦法と言える

「つ！今だ！はああああああ……はあ！！」

同時にアギトは両手を広げると足にはアギトの紋章が浮かび額の角も展開される、そのエネルギーが足に収束すると同時にアギト・トリニティは跳んだ

「いっけえええええ!!」

そのまま放たれたライダーキックは流れるようにイマジンに向かっていき胸部に命中すると

「お、弟よ……後はたの……ぐああああああ!!」

イマジンは爆散したのであった、アギトはふうと溜息を吐き変身解除する

「俺……変身したんだ」

彼の胸に去来したのは感動と違和感

何かが違う、何かが足りない

「何か変」

そんな感情、その答えは

「それはアンタが一人で戦ってるからよ、相棒がないんじやそれが限界ね」

「っ！君は……」

七罪が贗造魔女で再現した封解主を持ってハルトの背中を刺していたのだ

「さっさと目を覚ましなさいな！行くわよ！『開』!!」

ガコン!!そんな大きな音と共にハルトは自分の体書き換わる激痛と共に力なく崩れ落ちた

「ふふん、こんなものね」

「ハルトー!」

慌てて駆け寄る錫音は体を揺すると

「……………うーん」

眠たげな目を開くと

「どしたの錫音?」

「っ!私のこと分かるの?自分の事は!」

「?今更何言ってるんだか」

ハルトは立ち上がると宣誓するように

「俺は常葉ハルト!逢魔王国の王にしてアナザーライダー達の王!そして!
いつものように豪快な笑みと共に

『二枚目気取りの三枚目』

いつの間にか着替えていた文字Tを見せながら答えた

「ですとも」

「っ！ハルト!!」

「うわあ！ちよっ！どうしたの！」

「どうやら無事に記憶が戻ったようですね」

「あ、ウオズく皆どうしたのさ急に：つかハウンド！お前怪我してるじゃねえか何が
あった！」

『ジオウⅡ』

慌てて懐古の力で治癒するとハウンドは困ったように笑い

「へへ…実は、イマジンに襲われましてね」

「イマジンだと…：…そいつは何処ダア!!引き摺り下ろして細切れにしてやる!!」

ハルトはクワつとした顔で周りを見渡すも誰もいない

「まさか逃げたのか？」

「いえ陛下が倒しました」

「え？俺の記憶にねえけど？」

「ハルトが倒したんだよ、仮面ライダーアギトになってね」

「な、何!!おい相棒!どう言うことだ!俺は仮面ライダーに変身出来ないんじゃ…」

『知らん!俺達が寝ている間のことなど分かるか!』

「親身になってよ！俺にとっては奇跡の大発見なんだぜ！よし！変身出来るならやるぞお！！」

とハルトが先ほどと同じようにアギトの変身ポーズを取る

オルタリングは現れない

「はあー！」

オルタリングは現れない……

「どうやらアナザーライダー復活に合わせて変身能力を無くしたようですね」

「……………錫音、本当にそれ俺だった？アギトの津上翔一さんとかじゃないよね？もしそうならサインもらった？」

「う、うん…ハルトがアギトに変身したんだ」

「そっか…：…つか今どんな状況よ？俺さ少年君の訓練に付き合っただけだ」

「実は「そうなんだよ！折紙が精霊になって大変なこと！」ありがとうございます錫音嬢」

「そうか大体わかった」

『俺のセリフだぞ！』

「んな事は後だ、とりあえず向かう…ハウンド達は仲間集めてピースメーカーに戻れ俺1人で行く」

「お待ちください我が魔王！単騎で精霊と戦うおつもりですか!!」

「何言つてやがる1人？違うな俺達でやるだろ？お前ら！」

『おう！何でか知らないが体が休めて回復している！ベストコンディションだぜ！』

「じゃあ！行く……って何だよ」

ハルトのコムリンクに通信が入った

「こんな時にはいいーい」

ハルトはコムリンクの通話に出ると

『魔王ちゃん!!』

「どしたジヨウゲン？」

『え？俺に敬語じゃない？』

「は?何で俺がお前に敬語で話す必要があるんだよ」

『ま、まさか魔王ちゃん…全部思い出したの?』

「何の事だよ、さつきから皆変だよ?」

『ハルト様!頭を使うと言うとどうしますか?』

「頭?…頭突き一択だろ?」

『この脳筋!間違いない!!』

『か、カゲンちゃん!魔王ちゃんが記憶思い出してるよ!!』

何故か喜ぶ2人に対してハルトは怒りの声で

「テメエら…人を何で正常だと判断しやがった!!」

「いやハルトの判定基準なら紛れもなく正解だよ」

「そうね旦那様ってそんな感じだもの」

「皆どうしたの！じゃない…何だよ急に…：…本当どうしたのやら…：そうだこんな時には
コーヒーブレイクしよう」

『そうだった！実は時崎狂三がキャロルちゃん達と接触しているんだ』

「何い!!」

ハルトは飲もうとしていた缶コーヒーを握り潰すほどに驚愕して一言

「こんな所でコーヒー飲んでる場合じゃねえ!!けど少年君の援護とキャロル達の救援
どっちもやらねえといけねえか…：やれやれこれは王様の辛いところだな！」

「あの我が魔王？」

「覚悟は良いか?俺は出来てる」

「ハルト、ジヨ○ヨ見た?」

「見ているよ?」

「その前にえ?ちよつ何するのハルト!?!」

「なあに2人で行くのさ、なあパラド」

「任せとけて俺は少年を助ければ良いんだろ?」

「頼んだぞ!」

「ああ!」

同時にパラドが粒子状になり転移するとハルトは

『カブト』

「クロックアップ!!」

アナザーカブトに変身して光速の世界に入るのであった

重なる疾風

前回のあらすじ

記憶を取り戻したハルト、そんな彼の元にキャロル達の元に最悪の精霊にして逢魔空間震事件の犯人候補 時崎狂三が接触を図る、報告を受けたハルトはアナザーカブトの力を使い現場に走り出すのであった

「はあ……はあ……はあ……っ！皆待たせたな！久しぶりの俺！参上!!」

アナザーカブトの変身を解除してハルトはキャロル達の前に立つと

「あらあらお久しぶりですわね魔王さん」

「時崎狂三……テメエ……」

「この口調の違和感にキャロル達は気づいた

「……おい待てハルト、お前まさか記憶が」

「だから皆何で俺が記憶喪失だった風に話すのさ!! 疑うならこれを見ろ!」

『二枚目気取りの三枚目』!! オーラア!

「この文字Tが目に入らぬかあ!」

『何で証明している相棒?』

「は、ハルト! 良かった全部思い出したんだな」

その顔を見てキャロル達は安堵し、そして

「ハルくーん！」

「いふうー！」

東の全速力ダツシユからのタツクルをボディーにくらい華麗に吹き飛ばされたのであつた

「良かった！思い出したんだね！本当良かったよお!!」

「東、落ち着いて今ので記憶どころか魂まで飛び出しそう」

「銀狼様の仰る通り実際、口から魂が抜け出しそうですよ」

良く見ると白目を剥いて口から魂的なものが抜けようとしていた

「ええ！は、ハルくーん!!」

『東の打撃は体に響くぜえ……』

「しかしオレとした事がお前の私服センスを見て安堵する日が来ようとはな」

「はあ……お前たちは……おいハルト」

「ん？」

「おかえり」

千冬の言葉に何の意図があるかは分からないが

「おう、ただいま」

取り合えず笑顔で返すと手を取るのであつた

そして起き上がったハルトは痛みに耐えながらも狂三を見るなり

「んで、お前はどの面下げて来やがった？」

ハルトは怒りの波動を発するとキャロルは溜息を吐きながらハルトを止める

「安心しろ戦うのが目的じゃないたのこどだ」

「え？」

「あのねハルくん、凄い大雑把に言うと話聞いて欲しいんだって」

「ふーん…やだ」

子供のように断るハルトにキャロル達は慣れたように溜息を吐いた

「敵と認識した奴の話の話を聞かないのはお前の悪癖だ治せと言わんが少しは聞く耳を持つて」

「けどコイツが逢魔に空間震を「それは違うみたいだ」あ？」

「前にアナザーデイケイドが行っていたように世界の壁を超えて空間震を撃つことは出来ないらしい…しかもピンポイントで何て不可能だと」

「んじゃ誰が撃ってんだよ？」

『これも乾巧って奴の仕業なんだ』

「何だって!!それは本当かアナザーデルタ!!え、まじで本当にそうなの?なら理由聞く前にサイン貰わないと…けど巧さんは人見知りだからいきなりサインくださいって言っても断るだろうし…どうしよう相棒!」

『落ち着け相棒!これは精霊の仕業だ!!乾巧は冤罪だぞ!』

「そっかあ……いやまあそうだよね、そんな真似あの人ならしないもんな…まあドーム

会場にフォトンブラッドを撒き散らして観客のオルフェノクを灰にしてたけど」

『それなんてテロ?』

「真面目にするか、精霊が犯人なのは間違いんだな」

「そうらしいしかも原初の精霊とき」

「あ? 原初?」

頭に過ぎるは逢魔の最強戦力にあたる彼女達だが直ぐに当たりがついた この世界で原初といえば

「あー、アレかユーラシアの空間震がどーとか」

「ええその精霊が犯人ではないかと」

「根拠は？」

「まず純粋な霊力……まあ魔力や気とでも例えられますが、その量が桁外れですわ、それこそ以前相対した反転十香さん以上とでも例えましょう存在するだけで世界のバランスが崩れますわ」

「へー」

オーマジオウやデイケイド並みの脅威なのだろうか？危険度を上げないとな

「原初の精霊ならば出力でゴリ押しして世界の壁とやらを壊せましょう、何故ピンポイントに当たっているかは分かりませんがね」

ー相棒、検索してキーワードは原初の精霊、ユーラシア、空間震ー

『もうやってるヨ……またこれかプロテクトされてる閲覧不可だ』

ーマジか……ヒントもなしか……いや待てー

「ああこの間、二重に会いに来たのはその情報を欲してか」

『あ、相棒の頭が珍しく回転している!』

『しかも真面目に推理しているだトオ!』

『おいコイツ、やはり何処かで頭打つたんじゃないか!』

『いや!悪いものでも食べたんだあ!』

—お前らは後で覚えておけよ…—

「ええ、その精霊の情報を欲してですわね」

「んで、そつちの要求は?」

「簡潔に言えば、不可侵の関係を提案したいですわ私からは貴方達に危害を加えません
正当防衛は別として欲しいですが…逆に貴方達にも不干渉を約束していただきたく」

「あく確かにトルーパー達に探すように言ってたな」

三人娘傘下の悪魔達が張り切って探してたな

「そのおかげで色々と此方も困っております」

「んでこつちのメリットは？襲われないだけ？」

「…私のことを好きにしても構いませんわ」

少し霊装をだけさせて見せてきた…そりや煽情的には見えるけどさ…

「[[[[ちゅー]]]]」

「あら？」

「はあ…」

「貴様…オレ達の旦那を誑かすとは死にたいようだな」

『プテラ！トリケラ！テイラノ！』

「流石の東さんも許せないなあ」

『everybody jump!』

「私もかな…蜂の巣にしてやる」

『OVER RISE!』

「邪魔するな貴様等…こいつは私が斬る」

『STANDBY』

「あらあらご主人様に手を出すなんて」

俺は今まで聞いたことがなかったキャロル達の瞳からハイライトが消えながら異口同音で相手を威圧している光景を……人は一定ラインを超えると怒りで冷静になると泊さんも言ってたな……うん、一言で言おう

俺の嫁達マジ怖い……師匠助けて

【無理だな】

「師匠!？」

怪電波か知らないが今、師匠の声が聞こえたけどマジですか!! 師匠でも無理と!!

「まあ冗談はさておき……そうですね、有事の際に協力それと情報などは如何ですか？」

「情報ねえ……」

ぶっちゃけその辺は間に合っている、何せ我が家には世界のGoogle先生も尻尾巻いて逃げるほどの超高性能検索エンジンがいるからな！

『誰の事ダ？』

『私のことじゃないよねハルきち!!』

それも2人も！

俺の煮え切らない態度に狂三は

「でしたら、今回の折紙さんの目的でもお教えしましょうか」

とんでもない切り札を切りやがった

「へえ」

興味を示すのも無理はなく、そのまま続けろと示す

「折紙さんの目的は精霊を倒すことなのはご存知で？」

「ああ知ってるよ親の仇を倒す為にASTにいたしな」

「その精霊が現れた過去に行き。その精霊を倒す事が目的ですわ」

「ふーん過去に行くね…この世界にはタイムマシンでもあるの？」

「私より貴方の方に沢山あるのでは」

「知らん」

心当たりしかない…何せ…

アナザータイムマジーン

アナザー、ネガデンライナー

キヤツスルドランの扉

最近何故か納車されたネクストトライドロ

等等…うん、折紙よ流石にいかんぜよ未来の子供達にも貸し出してないタイムマシン
を使わせる訳にはいかないが

「過去改変するのが目的？」

って事はつまり

「俺は親失格か…」

『何故そうなる！』

そこまで嫌われていたかと凹んでいると

「いや違うと思うよ」

東のツツコミがノータイムで刺さる…ふむとなると

「折紙は産みの親を助けたいと言う事か」

「まず最初に思いつく発想ですわ」

「今の会話の流れで理解できるだろう？」

そのキャロルの問いに

「何で産みの親を助けたいんだ？放っておけばよいのにあんなの」↓ハルト

「同じく…あんな男、何か強そうな骸骨の地雷を踏み抜いて殺されれば良いのよ」↓アン
ティリーネ

「そもそも生まれの関係で親がない」↓千冬

「私の親は未来のクソジジイなハルトに殺されたけどね」↓錫音

「ごめん錫音…」

「すまないこれに関してはオレが悪かった…あとハルト、それはお前の親の話だよな折紙の親ではないよな」

「当たり前じゃん」

「ハルちゃんとアンちゃんの親を考えるとお父さんとお母さんって束さんの事、大事に思ってくれてたんだなあ」

「た、束が親に感謝の意を示しているだど!」

「チーちゃん酷いよ!束さんだってハルくんやクーちゃんと一緒にいて愛情とか色々考えてるんだよ!!」

「親か：そう言えばそろそろ俺も東のお義父さん、お義母さんに挨拶しないとな：クロエの事もあるし：ちゃんと2人にも認めてほしいな：となると遊びに来てくれた時に合わせて逢魔に別宅を作らないと：」

「は、ハルくん!!」

と感動していた所に狂三も少し引いていた

「貴方達の家族絡みの過去が重たすぎませんこと！流石の私も胃がもたれそうですわ!!」

「まあ俺とアンティリーネは特にな、親の愛？何それ美味しいの？」

「空想上の概念よね？ほら家族旅行とか誕生日パーティーとか？」

「そうだな！」「そうよね」

「あははは!!」

2人の瞳からは光が消えておりキャロル達はこの時

誕生日は盛大に祝ってあげようと思ったという

「ああ〜ウオズが祝うのってハルくんが寂しいから?」

「いや違う。アレはライフワークだろう」

「や、闇が深いね」

「違いますわよ!?!その辺りは空想ではなく現実にありますわ!!」

流石の狂三もハルト達の言葉には困惑していた

「は…話が逸れましたが、折紙さんが過去に行く方法ですが…私の天使 刻々帝を使えば可能ですわ」

「ああ確か時間干渉する能力だったけ？」

「貴方には効きませんでしたかね」

そりゃ時の王の加護ありますし時の止めた世界？入門ところか鼻歌混じりで散歩出来ませんが？加速した世界？スカイディアの訓練で利用しましたが？

「その力の一つに撃った相手を過去に飛ばせる弾丸がありますの、どこで聞いたか知りませんが折紙さんはきつと私の力を狙いに現れます」

「んじや、待つてれば折紙は来るな…パラドゥ錫音に帰つてこいつて行つて来てくれる？え？今戦闘中？十香ちゃん達と少年君もいるのか…仕方ない行くか、キャロル達はお茶飲んで待つててくれる？ごめんベルファストお願い！」

「畏まりましたご武運を」

「デロウス!!」

「!!!」

「んじや行つてきまーす!!」

ハルトはデロウスの背中に乗るとパラド達の場所へと飛翔する

そして残った面々はベルファストの淹れた紅茶を飲みながら雑談をしていた…

「本当にお茶してますのね…何と豪胆な…」

「あ、そう言えばキャロりんさ新しいベルト作ったって聞いたよ〜」

「ああ実はエルフナインから借りた、このカイザフォンXXとハルトが持っているアナザーネクストファイズのファイズフォン20plusのデータをもとに開発したのだ」

キャロルが虚空から呼び出したアタッシュケースに入っている中身を皆に見せた

「これは…」

「名付けてミューズベルトとミューズフォンだ」

「何か石鹸みたいな名前だね」

「怒るぞ東、ミューズへの変身コードは666だ」

「黙示録の獣だったかしらにしても物騒なコードね」

「それで誰が持つのだ？ 私達は全員ライダーシステムを保有しているぞ」

千冬の言葉に全員が頷くと

「そうだね私も貰ったし」

銀狼もショットライザーを見せるのであった

「となるとベルファストか？」

「そうなりますが…よろしいのですか？」

「けどファイズ系列のベルトってオルフェノクの記号がないとなれないよね？」

「ああ…だが安心しろ！オレとエルフナインがLINKERの技術を転用したこのドリンク 安心安全変身一発を飲めば人間でも変身が可能だ！しかもドライバーの耐久性をあげたからベルトも変身した人間も灰になることは無いぞー！」

「それ飲んで大丈夫な奴？」

「問題ない！オレ達の錬金術を侮るな！」

「何で作ったの？」

「……………錬金術だ！」

「変身一発の材料の話だよ!! キャロりん!!」

「これ飲んで大丈夫なのでしょうかね？」

流石のベルファストも冷や汗をかいたという

—————

その頃 デロウスの背中に乗っていたハルトは視界に空戦をしている完全武装の十香とクリムゾンセイバーを視界に入れた

「パラド、錫音を連れて下がって」

指示だけ出すとパラドは言う通りに錫音を連れてくると

「よし、撃て」

デロウスはハルトの指示に従い口から異次元レーザーを放つ。かつて宇宙で眠っていた六喰を偶然とは言え直撃した精密さは健在、一直線で戦場に放たれた住んでのところまで回避されたが

「今のは…」

「シドー！」

「まさか…ハルトさん!?!」

その目線の先にはデロウスと背に乗り腕を組むハルトがいた

「お義父さん…」

「折紙！何で精霊になったとか聞く気はないけど前にも言ったよな…関係ない奴を巻き

込むなって」

「私は……怖い自分の気持ちがブレていくのが……お父さんお母さんを殺した精霊達を受け入れていく当たり前が……」

「それで精霊になったら元も子もないだろうに……」

「ハルトさん！」

「よお少年君、この間はどーも」

「あ、その……いや今は「わかってる」十香達の勝負の邪魔をしないでください」

「へえ……そこは2人を止めてくれ！じゃないんだ」

「そう言っつてハルトさんは止めないですよね？やりたい事は全力でとか言っつて邪魔してくるでしょっ……」

ハルトの目は折紙達を見るとすぐに目を閉じると一言

「じゃあ少年君が俺と戦ってくれるかい？」

「……」

「流石の俺もさ事故とは言え君に何かされたんだろ？皆の反応見たらそんな感じだし」

「ハルトさん……」

「それにテメエもライダーの力持ってただろうよ貫きたい意地があるってんなら言葉じゃなく、その力で証明してみろよ」

「……」

「まあ折紙をお前に任せても良いか確かめさせてもらうぜ」

「ハルトさん……それは何か違うような……」

「つー訳だジャンヌ」

「何よ」

霊体となりついてきてくれたジャンヌはやれやれと言った感じで背中に立つと

「お前はデロウスの背中で見てる」

と呼び出したエビルダイバーの背に乗る

「はいはい分かってるわよ……全くどうしてこんなにバカなんだが」

「ははは、そりやお互い様だろ」

「どう言う意味よ!!」

「あ、デロウスもパラドもバイスも手エ出すなよ」

「!!」

「ああ」「分かったって」

「これでタイムンだ」

ハルトは笑いながら言うとうと士道は

「錫音さん!？」

「悪いけどハルトの言う通りかな…我儘を通したいなら力を示してよ少なくとも君の目の前に立っている男は証明し続けてきた、その位の覚悟がないと折紙は任せられないかな」

「……十香は折紙を頼む、こうなったらハルトさんとやるしかない」

「分かった！」

「お義父さん……」

「全部終わったら話聞かせてもらおうぞこの間話したように飯の席でな……あと怪我したら治してやるから思い切りやってこい」

「ありがとう」

2人は2人で再び戦いを再開する中、セイバーはハルトを見て一言

「ハルトさんにとって戦う理由って何ですか？その力で本当に最低最悪の魔王になるんですか？」

その問いにハルトは退屈な顔をしていた

「最低最悪の魔王にはならねえよ、そんな不幸で師匠達を悲しませたくないな……俺の戦う理由？ そんなの決まってんだろバイス」

「おう!!」

「旗」

「りょうかー！ーい！そー！ーらあ!!」

その答えを言わんばかりにバイスが取り出し掲げたのは逢魔王国の国旗である、それを背にしてハルトは啖呵をきる

「俺達の戦う理由は今も昔も変わらねえ！この旗の下にある俺達の居場所と暮らしている者達の平和な今と明日を守る為にある！」

「……………」

「こんなに情けなくて頼りねえ俺の言葉を！こんな奴でも王と呼び憧憬の視線を向けてくれる小さな背中を信じて付いてきてくれた皆を守る為だ！そんな俺が闘いもせず日とつてたら俺を信じてきてくれた奴等に申し開きできねえだろうがこの野郎!!」

「ドン！と聞こえるくらいの態度でふんぞり返っていると

「俺みたいなバカついてきてくれる仲間や彼女達の為なら俺の命をかける価値がある!!
テメエにはあんのか！そんだけ譲れねえ何かだよ!!」

それが今の俺の生きる理由と価値だと思っている

『あ、相棒!!』

「あ…あれ？少年君に向けた言葉なのに何でお前らが泣いてんの？」

『お前の成長、俺達は嬉しく思うぞ！』

「保護者かお前たちは？」

『まあ今まで問題児の面倒見てきたからな…俺達の苦勞も報われたぜ…』

『あの実は気弱で泣き虫で卑屈だったお前を思えばな…今笑顔で相手を殴れるくらいに立ち直ってくれて…俺達は嬉しい!!』

『モーレツに感動しているぞお!!』

「辞めろ！その辺は黒歴史なんだ…辞めてくれよ」

『え？今のダサイセンスは黒歴史じゃねえのか？』

『あ』

『やべ…』

「ねえ」

『な、何だ相棒？』

「お前たち、アナザーWを締め上げといてくれ」

それはもう満面の笑みだったという

『や、辞めろおおお！お前たちまで何でノリノリで参加してやがる！！やめろお！カチカチと火打石を鳴らすナア！！』

『いや最近では冷え込むし暗くなるのも早いだろう？だから暖かくしようと思ってな、誰か油持ってきて』

『お、おい……まさか……』

『これからアナザーWを火炙りにしようぜえ！』

『殺す気だ!!』

その言葉を合図にアナザーウィザードが火をつけた

『マッチ棒呼びの恨み!!』

『おい待て！根に持ちす……つか火打石のい……あーっ……っ……い……!!』

『ほら見ろ明るくなっただろう？』

『お前等殺す気カア!!』

『おーい！火の近くで芋とか魚のホイル焼きとか串焼き持つてこいよ！良く焼けるから
さー』

『酒持つてこい！宴会しようぜ！』

『明るくて綺麗に燃えるな、煙が天高く登っている』

『今日から毎日アナザーWを火炙りにしようぜえー』

『お前らは正気か！』

このやりとりを聞いてハルトはうんうんと頷くと一言

「和を持つて尊しとなす！だな…そだあ、後でリアクターメモリ試すから宜しく〜」

『この状況でいう言葉じゃネエ!! つかリアクターは辞めろ！ロードよりかはマシだが、
お前でも使えば燃え尽きる代物だぞ！』

『まあ燃え尽きた後、灰の中から普通に蘇るがな』

『つか実際燃え尽きて蘇ってるし…何ならアナザーWは今燃えてるし』

アナザービルドの言葉の通りで以前、メモリの試験運用に伴いリアクター、ロード、アルコール等危険なメモリがいくつかあった…それは俺でなければ使用に耐えられない為、アナザーWが嚴重に管理しているし能力の反動からジョーカードーパントのレイズにも使えないときた。適正者なら耐えられるだろうがドーパントメモリの問題が問題なので俺としては失敗作だと思っている

だがアルコールメモリは魔王化に伴い状態異常耐性獲得後、使用可能になるがそれでは強みである酩酊による痛覚の麻痺、酔拳のような不規則な攻撃などメモリの長所を潰してしまう、食人衝動に悩まされるロードに関してには食没を体得しエネルギーが無尽蔵になった今なら十全に使えるだろうが副作用の思慮が浅くなるなどと言った部分があるなど問題は山積みだ

『思慮は元から浅いだろう？』

「アナザーWくリアクターでこんがり焼かれない？」

『ハルトの思慮深さにはいつも感服するぜ！』

『何で変わり身の速さ……』

「まあロードを量産して死刑囚や国を襲ったテロリストに宛てがうのもありかな？ 罪人の血肉が国家繁栄の礎になるね……」

以前、逢魔でクーデターをしたパヴァリア結社の過激派連中はサンジェルマンに許可を取りロードメモリの実験に使ったのだ、連中はその身をもつて逢魔国土の拡張に貢献、成功したデータもあるが常設して使うのも副作用からして危険なのが分かった、因みにその後はミラーモンスターの餌になったのは言うまでもないな

だがリアクターだけは光明がある使用の弱点である体が自壊する程の熱を溜め込む

という欠点を補い尚且つ武器にすることが出来そうなのだ

『アレか漫画の武器からヒントを貰った奴』

流石は人類の叡智が収められている漫画だぜ！と頷くハルトであった答えはあつたのだ

「そーそー、あの武器を作れば俺も普通にリアクターメモリを使えるし戦力アップも間違いない」

リアクタードーパントとは毛色が異なるが太陽の力を宿し その力を使い熟せる傲慢の騎士がいたのを思い出した

それと悪意に囚われたメダルクラスタホッパーを制御する為に生み出されたヒューマギアの善意の結晶である剣の事を

『神斧リツタとその特性 充填&放射（チャージ&ファイヤ）か』

ようするに力を吸収し溜め込む為のものが必要なのだ少なくともあの武器に似たものが出来ればリアクターも戦力化出来るしジョーカーカードパントのレイズにも使えるだろう

「だから武器開発宜しくー！」

『この状況で!?!』

「完成したら作った奴には1日俺の体貸すから悪いこと以外なら好きにしてくれて良いよー」

『任せろ相棒!』

『俺達に任せろ!!』

『お前等の中に熱耐性がある奴はいねえか!』

『目指せ!一日自由権!!』

『うおおおお!』

「これでよし」

「は、ハルトさん……いや何かもう何でもありだな」

「さて茶番は置いてこの間の件でドラゴニックナイトに目覚めたみたいだけども……今の力で満足してるとかないよね？」

「え……」

「これから先、どんな敵が君達を襲うか分からないのに進化を止めて良いの？俺の知っているブレイブドラゴンと火炎剣烈火の担い手達は並外れた覚悟を持っていたよ」

「……………」

「まあ俺も偉そうに言えた口じゃない……ただ今の強さに満足してるようなら君に折紙は任せられないな」

「なんかすれ違いがありますが…分かりました全力でハルトさんに挑みます！」

『烈火抜刀!!ドラゴニックナイト!即ちド強い!!』

ドラゴニックナイトになりブレイブドラゴンを呼び出し飛び乗る姿は正に竜騎士である

「ま、ナツキよりはマシなんだよね、何せアイツは俺、キャロル、千冬の3人抜きしてじゃないと結婚できないし」

「それなんて無理ゲーですか？」

「それくらいしないと俺の特別は任せられないんだよ」

とカラカラ笑うハルトに対して現れた人物がいた

「ならお前を倒せばエルフナインとマドカと先に進める訳か」

「ナツキ？」

「ナツキさん!?!」

現れたナツキはダークウイングに肩を掴まれ飛んでいた：しかしエビルダイバーとダークウイングが縁のある組み合わせだなと場違いなことを考えている

「土道君は早く折紙ちゃんの所に！でないと手遅れになるぞ!!」

「は、はい!」

「ちよつ！空気読めよナツキ、折角ここから俺が少年君の覚醒促したいのに!」

「俺の言ってるわからなかったか?…今の折紙ちゃんを止めないと大変な事になるんだよ!」

「まーた死に戻ったのかよ、ナツキ…そんなんだからエルフナイン達がヤンデレに「最近
はエンタープライズとホーネットも怖いんだよ…」そ、それは自業自得だろ…で今回は
折紙を放置するとどうなんだ？」

「折紙の天使による攻撃でピースメーカーが沈む」

行かせて正解だった。珍しく褒めよう良くやったナツキ

「ふーん…：…なら仕方ないな…：けどここまできて何もしないのは退屈だからさ遊んでけ
よナツキ」

「この感じ元に戻ってるなら手加減なしで良いよな、いやまあ全力で挑まないとダメな
んだけどさ」

「来いよ救世主、魔王に勝てるならな！」

「ああ…俺達なら勝てる！」

ナツキが取り出したのはカードが表に出ると同時に周囲に強風が吹き荒れる

「サバイブか」

「前に聞いたぜ、俺がこれを使ってる間はお前はサバイブを使えないって」

確かに以前のアナザーマジエステイ覚醒でサバイブ形態になった影響から俺の中にいるアナザーオーデインのサバイブがなくなった事があったな まあ

「一体、いつの話をしている」

しかしハルトが懐から取り出したのは全く同じカード サバイブ・疾風である

「何で…」

「親切な人が融通してくれてな条件はイーブンだけど、やる？」

「やるに決まってるだろ、ここで士道とお前を戦わせる訳にはいかない!!」

ナツキはアナザーウオッチを押すと姿を変えるその姿は元になった騎士甲冑は破損しており頭部の眼光は目的に向かう狂信者にも思える

『ナイト』

悪に堕ちた騎士 アナザーナイト

「残念だな、今日の俺は負けない…占いでそう出ている」

ハルトはアナザーウオッチを押すと現れたのは

虚言で時に運命を、時に敵味方を欺いたもの

『ライア』

運命を変える占い師 アナザーライア

そして吹き荒ぶ突風は嘗ての八舞姉妹が巻き起こした颶風に匹敵し周囲の人は慌てて避難を始めるが

「!!!」「涼しいわね」

冷静に見ているデロウスとジャンヌは頬杖つきながら戦いを見守る気分はさながらスポーツ観戦である

「おいおいハルトの奴、楽しそうだな」

「だな喜びの感情が伝わってくるぜ」

「折紙がピースメーカーを沈める？」

ハルトの半身とも言えるパラドとバイスは感心しているも錫音はナツキの情報に困惑する中。虚空から突如現れたネガデンライナーからネガタロスとゴーストイマジンが降りてきた

「間に合ったな」

「おいおい折紙を止めに来たって聞いたのに大将はお楽しみかよ……つか風強！」

そもそもハッキリ言ってしまうえばハルトがやられた事への八つ当たり過ぎないしナツキからしても戦う事に意味はないが

2人は本来なら一枚しかない筈の疾風をバイザーに装填したのである

『『サバイブ』』

そして現れたアナザーナイト・サバイブとダークレイダーに

本来の歴史にはないピンクの追加装甲とバイザーと合体した武器左腕にエビルウィップを持った右腕を持つアナザーライダー と強化されたエビルダイバー改めてエクソダイバーとなった

「祝え！全アナザーライダーの力を統べる裏の王者！その名もアナザーライア・サバイブ！また一人 新たな力に目覚めた瞬間である」

アナザライア・サバイブ

『SWORD VENT』

『SWING VENT』

2人は手持ち武器を召喚して構えると互いの契約モンスターを借りて飛行戦に、
そして互いの武器を交えたのであった

その裏で

「よしよし、このまま争えそうすれば契約完了だ」
と笑う者がいたという

過去へ向かつて 前編

前回のあらすじ

記憶を取り戻したハルトは時崎狂三から原初の精霊が犯人説を聞き驚くも別場所
戦っていた折紙の元へと駆けつける

そして成り行きで戦うことになったハルトとナツキ 一枚しかない疾風の方翼を纏
いて

今 戦い抜くことを選んだ騎士と目を背けずに戦うことを選んだ嘘つきが激突する

—————

サバイブ形態同士故にカタログスペックはほぼ互角 しかしそれだけで勝敗が決ま
るほどライダー の世界は甘くない

空中戦だがエクソダイバーに乗り足場を確保しているアナザライアが優勢に見えるが、アナザナイトの三次元的戦闘には押されていく、特に契約モンスターが足場と
なっている以上死角も多くなっている所に追い討ちをかける

『TRICK VENT』

トリックベントでアナザナイトが増えたのだこれにより多方向からの警戒する羽
目になったが

「その辺は対策済みよ」

『ADVENT』

アナザライアがアドベントカードで呼び出したのは巨大な鮫 アビソドンであつ
た

「他の奴も呼べるのかよ!!」

「本当はハイドラグーンとかデイスパイダーとも契約したいんだけど契約カードがなくてね」

ハイドラグーンでミラーワールドの行動範囲も広がるしデイスパイダーなら糸で相手の動きを止めたり、仲間の支援も出来る……あれ？こう考えると

- ・ 体格も大きい
- ・ ブランク態とは言えソードベントをへし折る耐久性
- ・ 糸や脚を模した武器もあるだろう（ガード、シユート、ストライクベント有り）
- ・ 何なら不意打ちとは言え仮面ライダーガイを捕縛し捕食している

となれば

デイスパイダーって優良物件では？何故1話に出したんだ…真司さんやあの蜘蛛なら普通に契約しても強いモンスターじゃんと今更ながらに思うよ

「よ、良かった…契約してなくて」

陸戦をアナザーインペラーのゼール軍団、空戦をハイドラグリーン軍団が襲い掛かるとか怖い所の話ではない

「しかも水中戦はアビソドンやエビルダイバーか…」

「まあピラニアのランチのアルターブックでピラニアメギド呼べるよ」

「全地形対応だとお！だけどこの数をどう捌く!!」

「当然対策済みよ」

強化されたエビルウィップは空中にいるアナザーナイトを捕縛すると

「おーーーーーりやああー!」

そのままハンマー投げの要領で振り回し始めると回避しそびれた一人に当たるがガ

ラスのように碎け散ってしまった

「外した…偽者かよ」

「何てパワー…油断してたらこつちがやられちまうな…ならー!」

『SHOOT VENT』

同時にアナザーダークバイザーツヴァイの先端にエネルギーが充填されていく

「ふーん…ならこつちも」

『COPY VENT』

真似するように構えると腕と一体化しているアナザーエビルバイザーツヴァイの先端にエネルギーがチャージされていく

「っっー!」

「っ！」

両者から放たれた疾風の弾丸は中間地点で激突コピーとオリジナルの激突は空中で霧散し引き分けという形となった

流石はハルト、元からのライダー知識に加えてアナザーライダーの能力も把握しているとくれば

『ブラストベント！』

するとダークレイダーの翼にあるタイヤが肥大化 それに伴い竜巻が起こる

「っ！」

流石の強風に足場にしがみつくと隙を見逃さなかった

『FINAL VENT』

「はあ！」

同時にバイクへと空中変形したダークレイダーに跨り 疾風斬を放とうとするアナザーナイトだが

「想定内だな」

とアナザーナイトもカードを使う、本来ならコンファインメントで無力化させても良いのだが必殺技の打ち合いがお望みなら乗るとしよう

『FINAL VENT』

同時にエクソダイバーはアナザーナイトの背中に合体すると翼を展開するとオーラを纏ったまま敵への体当たりを行う必殺技 ハイドダイブをぶつけるのであった

両者は中間地点で激突、その威力は2人の変身を解除して空から落ちる結果となった
が

「成長したなナツキ」

「呑気か！ いやああああ落ちてるうううう！」

「何で泣いてるの？ 高い所から落ちてるだけじゃん」

「空からのパラシュートなしのスカイダイビングは一般人からしたら即死案件なんだよ
！お前は常識まで無くしたか！！」

「一般人って…それに安心しろパラシュート持ってるし〜」

「流石ハルト！！」

『フォーゼ…パラシュート オン』

アナザーフォーゼになりパラシユートモジュールを起動、取り敢えずふわふわ浮いていると

「俺のな!!」

「は、ハルト！助けてえええええ！」

「悪いなナツキ！このパラシユートは1人用なんだ！」

「えええええええええ！」

「我が魂は！ゼクトと共にありい！つて言ってくれたら助けてあげる」

そう言われたのでハルトは躊躇いなく叫んだ

「我が魂は！ゼクトと共にありい！いいいいいい！」

「んじやそのまま流星（メテオ）になってねえ〜」

この男 性格悪いのである

「このおおお覚えてろおおおおお！」

そのまま落下するナツキは涙を流しながら

「た、助けて！エンタープライズ！ホーネット！！」

空が飛べる仲間の名前を呼ぶ、ナツキを優しく抱きしめる影があった

「っ！あ、ありがとう」「エンタープライズではないがな」「追記 ホーネットでもありません」……あは……

そこにいたのは部分的に霊装を取り戻した八舞姉妹であった

「さてナツキよ、このように我等姉妹が輝ける場があるのに何故頼らん？」

「疑問、そして何故エンタープライズ達の名前を呼ぶとは…」

「い、いやあ、そ…それは」

「(宣言) どうやらお話が必要です(ね)」

「は、ハルト助けて!!!」

ナツキは涙を流したままハルトを見るが

『ギーツ…アームド プロペラ』

「おーいデロウス！回収頼むわ…：ありがと〜」

そう呼びかけるとデロウスはアナザーギーツを背に乗せるのであった

「いや飛べるのかよ!! いや違った……た、頼むハルト! さっきの事は謝るから俺もそのドラゴンに乗せてくれえ!!」

「ん? なーにーにー! プロペラの音で聞こえなーい!」

「ふざけんじゃねえ! はっ倒すぞ!!」

「はっ倒せるならやってみなー! そこから生きてるならなー!」

「やっぱり聞こえてんじゃねえかあ!!」

「よし行こうデロウス」

「!!」

デロウスはそのまま飛び去ると

「い、いやちよつ！待ってーーーー！！」

ーーーーー

そんなこんなでハルトと錫音は

「頑張れ折紙！」「そこだ！いけえ！」

何故か折紙を応援していた

「ちよつ！いや何で2人は折紙応援してるんですか!!」

慌てるセイバーに対して2人は

「だって義娘だし？ねえ」

「ね〜！」

と朗らかに笑う親バカ2名にジャンヌは溜息を吐く

「やっぱり十香ちゃんはアレにならないんだな」

「あれ？」

「この間の黒十香ちゃんだよ、アレになったら勝てるだろうに…任意の切り替えが出来ないとか？」

「はいそうみたいです…ハルトさんはどっちが勝つと思いますか？」

「そりや勿論、折紙……と言いたいけど実際は十香ちゃんだろうねえ」

「え？」

「折紙は精霊になったばかりで力を使い熟せてるように感じない…いや彼処まで使いこ

なせているのは持って生まれた才能かそこまで精霊が憎いか…基礎スペックが互角なら後は経験値の差だし」

「見た所、折紙の天使は中遠距離対応かな…対して十香ちゃんは近接より間合いに入れば勝つのは彼女だよ因みに私も折紙と同じ中遠距離型だ」

「……………ハルトさんは？」

「ハルトは全距離対応だよ苦手な戦いがあるとしたらそれは電腦戦や頭脳戦というような頭を使う戦いだな」

「錫音酷い！俺だつて色々頑張つてるのに！」

「じゃあ相手が作戦立ててきたらどうする？」

「え？正面から叩き潰す」

「はあ……それだから脳筋って呼ばれるんだよ」

「何でだよ!! いやいやテスタロツサとかウルティマみたいな最強の策士が相手なら作戦を考えるけど、あの2人以下の作戦しかないような連中なら力押しで何とか出来るから問題無し!!」

そのアタフタした態度の中にもきちんと仲間を信頼しているハルトらしさがあつた

『ああ、この感じ落ち着くわあ……』

『スウォルツの顔より見た光景』

『もつとスウォルツの顔見ろ』

『呼んだか?』

『お前じゃねえだろ! アナザーディケイド!!』

「そんな呂布とか項羽みたいな事が皆出来ると思わないで!!」

「俺が出来るなら問題なし!! それに皆をそんな危ない状況にさせないのが俺の仕事!」

「はあ…またそんな事言つて…仲間を頼りなよハルト、何の為の家臣団や私達なのさ」

「そうだな…じゃあ俺が皆を守るから皆が俺を守ってくれ！そうしたら誰にも負けないよな！」

「うん…そうだねハルト」

「なら俺を助けてええええ！」

視線を向けるとハイライトの消えた耶俱矢にお姫様抱っこされながら姉妹に睨まれているナツキがいたがハルトは面倒臭そうな顔で一言

「やだ」

「いやちよっ！」

「あー何故か知らないけど、目が覚めてからお前を見るとイライラするんだよ…」

その瞳からは光が消え失せ、声も低くなっているハルトは少し怖かった

「は、ハルトさん？な、何故か知らないですけど黒いオーラが見えますよ!!あと蛇柄のジャケツトを着て鉄パイプを持った男の人の影が見えます!!」

「え？浅倉さんいるの!どこ?」

「いる訳ねえよ!つか早く助けて!!」

「何でかなあ…裏切られたとかついてけないとかをお前に言われて見捨てられた子犬みたいになるという屈辱を味わうという悪夢でも見たからかなあ…キャロル達や逢魔の皆…相棒達絡み以外で俺の頭を使わせてんじやねえよ」

「あれ?ハルト…もしかして少し覚えてる?」

「何を？いやただ何かモヤモヤするんだ考えても考えてもわからないんだよ」

「え？お前に使うだけの頭あるの？」

「あ」

その言葉で一ミリの躊躇いを無くしたハルトは笑顔で電話をした

「もしもしベルファスト？大至急エンタープライズとホーネット達をこっちに呼んでくれない？そーそーナツキが今、2人に会いたくて会いたくて震えてるって、そりやもう窒息死しかねない位のキスしたいってさ」

「ちよっ！おま!!」

「ナツキ？死神のパーティタイムだ愉快に踊れ」

と悪い顔を浮かべるハルトに記憶喪失時のか弱さはなかった、人の修羅場にニトログ

リセリン放り込むくらいには遅しくなっていた

そして遠くから聞こえてくるレシプロ戦闘機の音とそれに乗る2人の金銀髪の女性達、ナツキの顔が青くなつていくのも無理はない

「指揮官会いにきた……ぞ?」

「なーんで別の姉妹にお姫様抱っこされてるのかな? かな?」

「あは……あははは……」

それを見て2人はナツキをデロウスに一旦乗せると

「ナツキよ少し待っておれ」

「同意、久しぶりの蜜月を邪魔するものを払います」

「ちよつ! 2人とも!」

霊装どころか天使を呼び出して構える姉妹を見て

「指揮官から離れろ！」

「離れるのはお前達だあ!!」

と2人の天使と武器が交えた戦いが始まったのである、余談だがナツキは

「さあてナツキ、孤立無援だな…さあて…一体誰の頭が空っぽだつてえ〜」

「あ……ああ……」

「ぶ・ち・ご・ろ・し・か・く・て・い・だ・ね」

指を骨を鳴らした後に首を軽く回すと

「あ、ハルトこれ使って」

『コネクト』

「ありがとう…さあ地獄を楽しみな」

錫音から鉄パイプを貰うと笑顔でナツキを見てそのまま鉄パイプを振り上げ

「い、いやあああああああ!!」

躊躇いなく振り下ろしたのであった

その数分後

「ふう…やつぱり暴力はいいなあイライラがすっかり消えた。あの世界の皆が俺を虐めてた時もこんなに清々しい気分だったのかなあ？」

振り返り血まみれの鉄パイプをコネクトの魔法で収納したハルトは顔についた振り返り血を拭いながら笑顔で話している

『その同意を求めんなよ相棒』

「だよな…いやあくけど暴力は使い所が大事ってマキヤベリ？とか誰かが言ってたしケースバイケースだよ！まああの家族は許さんけどね」

「それは私たちも同じだよ…まあ直接的な加害者は皆 ああなるだろうけど」

と錫音の目線の先にはボコボコにされて倒れているナツキの姿があった

「(っ)……(っ)……(っ)ぶっ！」

「あー！ナツキ！血吐くなよデロウスが汚れるだろうが!!」

と顔面が腫れに腫れて倒れているナツキに躊躇いなく顔面に蹴りを叩き込んだハルトは笑顔で

「あ、ネガタロスとゴーストイマジンも来てたんだ〜どうだった俺の戦いぶり！」

尋ねるが彼等は震えていた

「こ、これが本気で怒ったボスか……流石は未来でヴォルデモートなどの名だたる悪な存在を殴り倒して傘下に収めただけはある」

「これは……逆らわないのが懸命だな……いや元より逆らうなんて考えてないがな、こりゃ良い！大将についていけば毎日が祭りだな!!」

「え？あのヴォルデモート殴り倒したとか何それ俺知らない」

「これはボスの未来の話だったな」

「ウオズのセリフが取られてるう！」

と雑談をしているとデロウスの付近で爆発が起こる 流石に傷一つも負わないが少し姿勢が崩れてしまった

「敵か…」

「けど誰が…：…っ！ハルト！あれ！！」

と錫音の指差す方向を見て驚いた

「あれはコブライマジン！！」

「そうだ！魔王に認知されてたとはなあ！光栄だよ」

何処か小馬鹿にした笑い声に反応する面々だがハルトだけはc v 浅倉さんなんだよなあとか考えていた…まさか黒幕が牙王さんなのか！！だとしたら

「こりややばい敵だな…」

「だがお前達と戦う理由はない、俺は契約を果たしに来ただけだ」

「契約?……誰と契約してんだ!」

「それは「私」って事だな」

「折紙……どうして!」

「過去に行く為の方法を調べてもらったの……その情報を元に私は過去へ行き歴史を變える!」

「方法は簡単だ、時崎狂三に会いに行けば良いそうしたら相手を過去に送れる弾丸を使わせろ」

「それで時崎狂三はどこ?」

「その魔王の嫁達と一緒にだ」

「分かった……ならむか「その前にだ」何?」

「契約完了」

とだけいうと折紙の体に入りこみコブライマジンは過去に飛んだ、少しふらりと膝をつく折紙を錫音は抱きしめハルトは迷わずにチケットを出す

ジワアと滲み出たのはコブライマジンの姿と行った年、月、日でが現れる

「この日が折紙の運命を決めた日か」

「恐らく精霊が折紙の親を殺した日だね」

錫音と顔を合わせて頷くと

「そうと決まれば過去に向かうぞネガタロス!!」

「おうー！」

「電車借りるぞゴーストイマジンもついてこい」

「無論だ」

「当然だぜ大将！」

「ちよつと折紙！」

「時崎狂三を見つける……あそこか！」

に
イマジンと契約完了したのに己の精神力で立ち上がり時崎狂三を探そうとする彼女

「私も「錫音はここに残って折紙を頼む」……分かったよ」

「ハルトさん！俺も」

「治ったなよし！」

彼処で争っている彼女達を見て呟くと

「デロウス、皆を守ってくれ出来るな？」

「!!」

「よし行くぞ過去に!!」

ハルトはネガデンライナーに乗り込み過去に飛ぶのであった

—————

そしてネガデンライナーに乗り込むとチケットを装填、過去へ向かい始めたのだが

車内で

「何でウオズ達まで乗り込んでるの!?! いつの間にも!?!」

ハルトからしたら当たり前のように乗っていたウオズと四天王に混乱をしていた

「我が魔王いるべき場所に我等有りです…あ、コーヒーお願い出来ますか?」

「はいはいすぐ淹れるよ…ジヨウゲン達もコーヒーで良い?」

「俺は緑茶で」

「OK」

と聞いてコーヒーと緑茶を淹れに離れた

「けど、これキツカケで魔王ちゃんが過去にに向かうって事は…折紙ちゃんと会うの
て」

「今回の件がキツカケじやな」

「だが錫音様がないぞ」

「分からんぞ歴史の修正か何かがあるのかも知れんのお」

と話す中、目的地に到着したのであった

降りたハルト達はネガデンライナーを隠してイマジンを探す事にした

「イマジンが既に誰かに憑依している可能性もある皆、油断するなよ！現在に帰るまでが任務だからな！」

「大将！バナナはおやつに入りますか！」

「すまないゴーストイマジン…俺にはその命題に答えるだけの知能がない…取り敢えず

2人1組に分かれて探すぞ！イマジン組は憑依してな」

「ボス！俺達は憑依する人がいません!!」

「バナナはおやつに入りますか！」

「一部はおやつに入るだろう…だがアレは食後のデザートだと思う！体がない？それなら俺に任せろ」

「ボス？」

ハルトは周りを見渡すといかにもガラの悪いチンピラが2名見えた、よし

「お前達の宿、確保してくるよ」

「ハルト様、俺も行くぞ！ネガタロス達は少し待ってる…ごめんね！」

「何をする気なんだボスは…」

「まさか」

「安心せい、そのまさかじゃよ」

「はあ……」

ハルトとカゲンは狙いを定めるなり走り出し

「テメエ等！少し気絶してろやコラア！」

ハルト達はチンピラを見るなり背後から殴りかかり数発顔面に拳を叩き込む、いきなり理由も分からずに殴られたチンピラは反撃するよりも笑いながら殴りかかる二人組という恐怖に支配されてしまい背中を向けて逃げ出してしまった

「待てやこらあ!!」

「寝てるだけで良いから！」

と躊躇いなく逃げ出した2人の背後からドロップキックをして確実に意識を刈り取ると、ハルトとカゲンは首根っこを掴むとズルズルと引き摺ってきた

「おまたせー！憑依の体用意したよー！」

「これでよし」

「だ、大丈夫なのか？」

「さあ？まあ怪我は我が魔王が治すので問題ないでしょう」

取り敢えずこれでよしと全員で街の散策をする事にしたのだが

「イマジン何処やねん！」

思わず関西弁が出るくらいに見つからない

「クソツ！」

頭を抱えていると

「ハルト！」

そこに聞き慣れた声が振り向いてみると

「錫音!? どうやってここに…！」

「タイムウイザードリングを使ったんだ」

「……あ！」

タイムウイザードリング 能力は時間遡行であり劇場版で大いなる活躍を果たした

指輪だが

「いつの間に作ったのさ！」

「ある人から貰ったの！それより大変なんだ!!」

「何があつたの！」

聞けば折紙が何故か反転して街で大暴れしているとの事

「イマジンの歴史改変の影響か…それなら早くしないと…」

「だから私が来たんだ…他のタイムマシンはハルトの許可があるのに加えてキャロル達は過去に移動出来ないからね」

「あゝ」

と頷くハルトであった

そして驚く事は更に重なる

「はるとさん！」

「え？」

トタトタと可愛らしく駆け寄るのは

「少年君？」

「はい！」

「あれ？何でこの時代の少年君が俺を知ってるんだ？この時代には俺は存在しないはずなのに……」

幼少期の士道なのであるが自分を知らないはずの士道が俺を知っている?…っ!まさか!!

「皆!コブライマジンが取り憑いてるぞ!」

「!!!」
「!!!」

「ええええ!」

「俺を騙そうたってそうはいかんぞ!」

「いや、おれですよ!!くるみにたのんできたんです!」

士道の言葉を借りると、フラクシナスが反転折紙によって沈められてしまった為 歴史を変える為に狂三の弾丸を使い過去に来たとのことだが

「おれもてつだいます!」

「よし！因みに聖剣とライドブックは？」

「もってません！」

「戦力外も良い所じゃねえか!!子供の良太郎さん！略して小太郎さんでも電王に変身出来たのに！」

「我が魔王、土地勘のある現地協力者がいるのは良い事では？」

「まあそう考えるか」

「あと、あそこのひとはだれですか？」

「ん？ネガタロスとゴーストイマジンだ体は現地調達した」

「お、おお…」

「それで少年君、折紙は何処にいるか分かるかい？」

「えーと…このこうえんにいるらしいです！」

「よく分かったぞ！よし錫音！乗れ!!」

「うん！」

「ウオズ達は少年君連れて早…っ！」

ハルトはライドチェイサーを呼び出して跨ると錫音を背中に乗せるのだが、ハルトはバイクから降りてブレイクガンナーを突きつけた

「へ？ハルト」

「どーやら俺にお客のようだ、テメエ等は少年君連れて先に行け」

「けど！」

「良いから行け！」

そう言うとうオズは

「ご武運を」

「おう」

それだけ言葉を交わすとマフラーワープで転移した、それと同時に世界から音が消えたような感じがし 現れたのは全身モザイクのように人の輪郭は分かるが正体不明なものが見えた

「やあ初めましてかな魔王」

「何者だ」

何だこの得体の知らない感覚は…未知との遭遇である

「私の名前はファントム」

「ふ、ファントムだと!!」

何故ここに！まさかゲートがこの世界にいるのか！いやまて…まさか折紙の親が死んだのはまさか！

「サバトが開かれていたのか……」

『今日は皆既日蝕の日ではないぞ？』

「あれ？違うの？」

「ああファントムというのは君たちの便宜上はそう呼ばれているだけさ、個体名であつ

て種族名じゃないよ」

「声音は女性にも男性にも大人にも子供にも聞こえるな……くそ……デンデンセンサーなら何か分かるか！どんなファントムなんだ

『話聞いている？』

「辞めておいた方が良く、君の道具でも分からないよ勿論中にいる同居人にもね」

「……………」

『ハルト、そいつの言う通りだ調べられん』

まさか正体不明のファントムが黒幕だったとはな…

「何が目的だ…まさか……器（タナトス）を完成させる為か！」

そんな事させない!!俺の希望が守ろうとする世界をお前なんかめちやくちやにさ

れてたまるか!!

「まさかそこまで気づいているとはね君の勘の良さを侮っていたかな…ああそうさ君達に器（土道）完成の邪魔されたくないのさ、前回は失敗したけど今回は違う…邪魔させてもらおうよ」

『また何か微妙にすれ違ってるように気がする』

最初は失敗？どう言う事だ…：…まるで何度もループしてるような口ぶりだな…まさか爺さんの介入とか？まあ良いか、取り敢えず

「邪魔すると言ったな…つまり俺達の敵って事で良いんだよな？フロントムさんよお！」

「早計ではあるが、今は敵になるね」

「OK、消しとばしてやる」

『ウィザード…ドラゴン』

ハルトはアナザーウィザード・フレイムドラゴンに変身すると初手から必殺技の構えを取るのであった

その頃

「だいじょうぶかな、ハルトさん」

「大丈夫ですよ、我が魔王の強さは君もよく知っているでしょう？」

「うん！りふじん!!」

「悪の魔王！」

「ヤベー奴！」

「その通りです！」

「ネガタロスちゃん、ゴーストイマジンちゃん…後で怒られても知らないよ」

「まあハルト様の規格外は今に始まった事ではないがな」

「じやな寧ろハルト坊の邪魔をせん方が賢明じゃ、さて此処からは分かれて折紙とイマジンを探すぞ」

ヤクヅキの言葉を合図に各々が探し始めたのであった

そして数分後、ウオズ達はコブライマジンを見つけたのである

「貴様！ここまで追いかけてきやがって!!まだ時間じゃねえんだ！」

「関係ありません」

「そうだね魔王ちゃんの敵なら倒すだけだ！行きますよ」

とウオツチとドライバーを構えるのを見るとコブライマジンは手を前に突き出す

「ま、待て!! 本当に俺はお前達と戦うつもりはないんだ!!」

「皆そう言いますよ?」

「言うかなあ…ウオズちゃん」

「寧ろ逆だ！味方なんだよ！俺が過去に飛ぶ事でお前達はこのタイミングで歴史を変えられるチャンスを得ただろう！」

「む」

「知ってるんだぜ、お前達の列車やマシンではあの年の4月10日以前には飛べない事をな！」

確かにコブライマジンが過去に飛ばなければハルト達はネガデンライナーで過去には迎えなかったのは事実であるが…

「なら何故、私達に利する行為を？」

「それはもう！あの方とお前達を会わせる為だ」

「あの方？いつ「よく来たな魔王…いや幹部陣か歓迎するぜ」っ!!」

そこに現れたのはとんでもない覇気を纏った山賊風の服を着ている渋い男である、その背には他のイマジンも徒党を組んでいるじゃないか、そして右手には大きな串焼きを持ちワイルドに頬張っている

「お頭！お待たせしました！」

「よくやった下がってろ」

「へい!!」

「なあ自己紹介はあるか？」

「不用です」

「これさ魔王ちゃんいたら発狂してるね」

「ああ驚いたぞ…」

「まさかここ迄の大物が来るとはの」

「ちよつと待てコイツは確か!!」

「何で生きてんだよ!!牙王!!!」

ゴーストイマジンはその名を呼ぶ

嘗て 神の路線に乗り込み、時間を喰らおうとした強盗にして電王四形態とゼロノス
総出で何とか倒せた最強格の敵 その牙がつけた傷跡は重く一時期は電王の力を削ぐ
事に成功した…あのてんこ盛りフォーム誕生の立役者

牙王

その人であった

「まあ話せば長くなる、座れ」

「貴方達を信じろと？ 畏かも知れないのに？」

ダークライダー以前に時の列車を強盗かした犯罪者なので素直に信頼出来ない

「好きにしな、だがお前達の慕う魔王ならどうする？」

その問いに皆が口を揃えた

「「「「座る」」」」」

あのオタクなら迷わずに座るだろうと思ひ皆座るのであった

「じゃあ話すぞ、その前に」

牙王が手下のイメージに用意させたのは串焼きセットであった

「喰うか？」

「日本酒もしくはブランデーを頼む」

「カゲンちゃん!!」

「一杯やろうとするな!!」

「構わん! 宴ダア!」

「お頭! 目的が変わってます!!」

続く

過去へ向かって 後編 時を喰らい牙と原初の精霊と雷光と？

前回のあらすじ

折紙と契約したコブライマジンを追ってハルト達は折紙の運命を決めた日へと向かう

ハルトの元へ現れた原初の精霊 ファントム

そしてコブライマジンを追ってウオズ達の元に現れたのは何と！かつて電王達に敗れた牙王とその配下達であった！

――

ウオズ side

「さて、いきなりですが牙王：何故あなたが？」

「だよねえ、魔王ちゃんが見た話だと電王にやられてたじゃん」

「成る程な可能性世界の俺を知ってる訳か」

「可能性世界？」

「IFの可能性、まあ魔王風に言えばアナザーワールドって奴だ」

「アナザーディケイド本来の能力：まさかそれを使ってきたのか！」

「けど今はオーマジオウから受けたダメージで使えないんじゃないっけ？」

「そうだ…だが魔王が世界を超える時に出来た僅かな歪みを通ってくれば転移なんて簡単だったんだが、まさか過去の時代に来るとは思わなかったがな」

「随分と我が魔王にご執心なようですね」

「魔王様に何のようですか列車強盗」

「フイーニスの瞳は敵対者を睨むそれであったが牙王からすれば軽く流せる程度の圧
でしかない」

「取引だ、俺達が戦力になる変わりに俺の息子の病を治せないか？」

「息子？」

「ああ俺のだ…」

「これは何とまあ」

「驚きだ」

「色んな世界や時間を回ったがどいつもこいつも治せないと匙を投げやがった！そんな中で聞いたんだ常葉ハルト…魔王には病を治せる力があると」

「それってアナザーエグゼイドかな？」

「アナザーフォーゼじゃなメディカルもある」

「それかアナザージオウII」

「マッドドクターじゃない？あの死ぬほど痛い奴」

「本当に治せるのか？」

「まあ可能性としてはですね」

確かにハルト自身の力もあるがカミーノの遺伝子方面からの治療法やキャロル達の錬金術方面からの薬学なんて方法もあるし、何なら同盟国のテンペストから回復薬もあ

る…ハルトが頼めばリムルさんも協力するだろう、確かに治せる可能性は一番高い

「頼む！この通りだ！金とか他のものが望むなら用意する…俺はどうなっても良い！だから息子だけは助けてくれ!!」

と真摯に頭を下げる姿に配下のイマジンもお頭と感動していた

「どうするウオズちゃん」

「聞いている限りだとハルト様に危害を加える気は無さそうだが」

「デンライナー盗んだ奴ですよ、私達の物を欲する為の罠ですよ罠」

「妾は任せるぞ、どうせハルト坊の答えは決まっておるからな」

「そうですね、取り敢えず我が魔王と合流しましょう牙王の話はそれからです着いてき

てくれますか？」

「すまない……そう言えば俺達と一緒に来た奴がいてな、おい」

「はいはい！」

そこに現れたのは金髪ポニーテールの何処かの軍服を着た女性であった、その腰には軍刀ではなく、雷を宿した聖剣が帯刀していたが

「初めまして」

フランクに挨拶する姿にフィーニスやネガタロス、ゴーストイマジンを除く幹部メンバーは驚きを隠せなかった

「あ、貴女様は!!」

—————

その頃 ハルトとは言えばアナザーウィザードにより強力な魔法攻撃を行うが暖簾に腕押しとばかりにダメージが入っていない

ー魔法はダメ…同じように物理もダメかなー

バインドの鎖もフアントムを捕らえられなかつたければ……そうか

「んじや行ってみよう！」

『ナーゴ…フアンタジー』

アナザーナーゴ・フアンタジーフォームに変身すると幻想の力で刀剣を作成した

「投影開始（トレース・オン）！」

『アーチャーに怒られるわよ！』

霊体化しているジャンヌのツツコミにハルトは

「あ、そつか…まあ良いや！放てえ！」

謝るも幻想の力で作成された刀剣はファントムの体を貫く…はずだったがファンタジーフォームと同じようにすり抜けていったのである

「幻想の力でもダメか」

対ライダーでないからアナザーバツファもダメ、ナツキに預けてるからアナザータイクーンもダメ！アナザーギーツも現状なれる最強札がレーザーストだから決め手にかける

ー他には他には…いや待てよ…そうか！あるじゃないか！コイツを何とかする方法！ー

『何だと！本当か!!』

『スゲエなハルト！思いつくなんて！』

『まあどうせダメージが入るまで殴り続けるだろうカナア〜』

『ポテチを食べてないで解析鑑定しろアナザーW！』

ーふふふ今日の俺は一味違うぞ現状、奴にダメージが入らないとくれば今戦うのは危険だと判断した！ー

『おおお！ハルトの頭が珍しく回転している！』

『あの脳筋が考えるって事は、かなりの危険って事だな』

『それでハルト！お前の作戦とは何だ！俺達も全力でお前を支援しよう！』

ーああ奴の足を見ろ！ー

『足？』

「ああ奴の体を見てみたが、さつきから微動だにしていない此方の攻撃を透過しているだけで反撃してこない」

『確かに』

「つまり奴はアバドンと同じように遠隔操作されているアバターである可能性が高い！故に精密動作に難があると」

『おおー！』

「そして動ける範囲に限界がある…後言つてたように俺の妨害が目的なら殺すまでは考えない奴の考えの盲点を突くんだ！」

『その盲点とは何だ相棒！』

「ふふふ、それはな…」

「何を話してるか知らないけど攻撃しても無駄だよ君の攻撃は私には効かないよ」

「だろうな、だがこの常葉ハルトには戦士だけではない策士としての一面もあると言うことをご存知でないか？」

「いや見てきたけど君の作戦って力押しじゃないかい？」

「……………」

『ギャハハハハハ！お前初対面の敵にも力押し of 脳筋認定か！ギャハハハハハ！』

ーアナザーW？今度脳天にアルコールメモリ挿すから覚えてろー

『すみませんでしたあ!!』

ーしかし見てきた？いや確かに俺の戦いを見る方法は沢山あっただろうけど、この違和感ー

『データとかで戦うタイプではないな』

ーそれだつたら楽だよ…出してない技でゴリ押せば良いんだから、けど一先ず俺のやるべき事はー

「本当にそうだと思うか！」

「そう思います」

「……………」

コイツは敵だ必ず倒すぞ

『そりやそうだ』

『あと脳筋云々は諦めろ相棒、日頃の行いだ』

ーなら好都合、奴は次の俺の作戦を読む事は出来ないぞ！くらえジョースター家に伝

わる作戦をー

『お前……まさか……』

秘技！

『カブト』

「ふふふ……逃げるんだヨオ！」

↓にげる

「え？」

『CLOCK UP』

アナザーカブトに変身と同時にクロックアップして全速力でファントムから逃げた

のであった

『確かにコレは予想外だ！』

「そして今のうちに敵の情報を考え直しながらウオズ達と合流する！常葉ハルトは戦術的撤退をしても戦いは放棄しないけど……アバターなら本体を叩けば良いんだが、それっぽい奴いる？」

『調べたがいらないな、かなり遠隔で操作してるか……俺達と同じように違う時間軸から操作しているな』

「アナザーワールドみたいなものか？」

『似たようなものだろう……時間切れだ』

『CLOCK OVER』

加速が終わりハルトは周りを見渡し安全を確保した

「ふう……取り敢えずは大丈夫かな」

『ああしかしどうする？此方の攻撃が効かないぞ』

「そうだよなあ……けどタネと仕掛けは必ずある……じゃない……イマジン倒さないと!!」

折紙を守る為に過去に来たんだよ！ファントムに足止めされてしまったが

「ウオズ達と合流しないとダメだ！こい！アナザーオートバジン！」

アナザーオートバジンを呼び出し乗り込むとそのまま街中を疾走したのである

すると喫茶店のテラス席に人影が……あれはウオズ達だ!!

「ウオズ！皆大丈夫!!って誰と話して……」

「そうでしたか…お任せをそう言った事情でしたら魔王軍は貴方を歓迎致しますとも」

「それは助かる、これでコイツらの未来も安泰だなテメエ等も飲め!!」

「」「」「おおおお!!」「」「」

そこには牙王と配下イマジン達とウオズ達が楽しく酒盛りしているではないか

「敵と何しとんじゃあ!!」

変身解除したハルトは躊躇いなく犯人であるコブライマジンにドロップキックを叩き込んだ

「コブライマジンさーん!!」

「テメエ等!人が命懸けの時間稼ぎしてた中で酒盛りするとは良い度胸だな!!それでも

俺の仲間か恥を知れ!!恥を!!」

『先輩ライダー見て発狂している姿に恥を知れ』

アナザーディケイドの言葉に視線を逸らすものの言うべき時には言わないとダメだ
!とハルトは向き合う

「おい、コレはどう言う事だ？」

『無視かよ!!』

「しまった、我が魔王には事情説明してなかった」

「おいおい……」

「あ、あのね魔王ちゃん実は「宴会するなら俺も混ぜろお！」いや錫音ちゃんの事とか良いのー!」

「え？錫音なら問題ないだろう、伊達に俺を後一步まで追い詰めてないし危なくなつた

ら分かるから大丈夫大丈夫」

「ほお、そんなに強い奴がいるのか」

「え？」

「初めましてだな、魔王」

「……きやあああああ!!牙王だああああああ!!さ、サイン……いや、その前に写真……いやその前に……何で生きて……電王にやられた筈なのに!!いやいやその前に落ち着け……お前はやればできる子だ常葉ハルト!!」

『おい部下に恥をかかせるな恥を知れ』

『後お前はやる時にしかやらないから困るのだ』

「……つまり俺は橘さんレベルのカッコ良さがあるって事だな!」

『橘さんに謝れ!!』

「だが私は謝らない」

「落ち着けハルト坊」

「コレが落ち着いていられるかあ！お前たち！何でこのような素晴らしい情報をすぐ俺に報告せんのだあ!!」

「ええ……」

「全員には罰として任務終了後のおかずを二品減らします！暫くお前たちは味噌汁と漬物とご飯だけだあ！」

『私怨じゃねえか』

「「「「「そんな殺生な!!」」」」」」

「黙れえ！つか何で牙王といるんだあ！そこから話せえ！」

『今更かよ』

「俺たち…ついてく奴間違えたか？」

「我が魔王、実はかくかくしかじか…という訳なのです」

「成る程……ん？ツー事は俺……まさか……っ！」

顔を青くしたハルトは慌てた様子で蹴り飛ばしたコブライマジンに近づくと

「勘違いで蹴り飛ばしてごめんなさい!!」

全力で謝罪したのであった

「い、いや……まあ誤解してたなら……な」

「本当ごめん!! 傷なおりますね病気とか大丈夫? 余程のでなければ治せますので!」

「それは本当か!」

「え?」

—————

その頃 錫音はと言うと

「はあ……はあ……はあ……」

プラモンスターで偵察もしているが一向に見当たらない、ウオズからの連絡でイマジンは敵でないと分かったが それでも

「折紙を守らないと」

彼女の安全が保障されていないのだから当然であるが

「けど、これでもし折紙の親が無事なら私達とも会わないんだ…あの子からお義母さんとも呼ばれないんだ」

その思考に行き着くと途端足を止めてしまったのである

「すずねさん？」

「そっか…：…そうだよね…：…本当の家族じゃないもん」

だが…：…それでもあの日々を嘘にしたくない…：けどどうしたら…：…

『やりたい事やれば良いよ』

脳裏に聞こえるのは愛する旦那の人生訓、その人生訓によって自分は彼と今の関係になれたのだ……なら私のやりたい事は……

「ごめん……なら私のやりたいことは！」

と言うとソーサリーに変身した錫音は土道から離れて空に現れた精霊を迎撃に向かうのであった

「すずねさん！」

「歴史が変わってもあの子が幸せな未来を作るよ！目の前で家族がいなくなる思いをするのは私だけで充分だから！」

だが

「本当に魔王とその伴侶達は何でまあ諦めが悪いんだか……辞めなよ歴史は変えさせてもらう君達と彼女の接点は消える」

現れたファントムに対してソーサラーは混乱する

「それでも構わない、ただあの子の親を殺させない……いや待てお前は……ハルトはど
うした！」

「彼なら逃げたよ、今頃仲間と合流してる」

なら安心とため息を溢すがコイツはハルトが逃げを選ぶほどの敵であると言う事だ

「だから辞めてくれるかな、君じゃ私には勝てないよ」

「なら俺達ならどうだい？」

そこにネガデンライナーが現れエビルダイバーやギガンデス達を足場代わりにして
ハルト達がやってきた

「っ！」

「錫音大丈夫？真打登場だ」

「ハルト…遅いよ！」

「ま、理由があつてな後は人助けを少々」

「また君か懲りないねえ」

「残念だが逃げてる間にお前の倒し方が分かったよ」

「何？」

「こうするのさ」

『王蛇』

ハルトは久しぶりのアナザー王蛇になるとユナイトベントを発動させ 獣帝ジエノ

サイダーを召喚した

「やっちやえジエノサイダー！」

「!!!」

同時に胸部が展開し小型ブラックホールがファントムを捉えて吸引する

「くっ！まさか」

「いくら透過しても光を飲み込むブラックホールは避けられねえよな！」

本来ならアナザーエボルになりたいのだが、あのウオッチはテストロツサが持つてるからなあ……つか、アナザーブラッドにアナザーキルバスってウルティマ、カレラが持つてたな……流石は逢魔三強……俺のでも持て余すアナザーウオッチ使つて平然としてるとかヤバいな本当に

しかし流石にブラックホールに吸い込まれてるとならばファントムも無事では済まない…が

「くっ！まさかこんな手で来るなんて！だがコレで終わったと思うなよ!!」

最後の踏ん張りを見せているところ悪いがな

「終わりじゃない死だ」

「だ、誰だお前は!!」

「俺の名前は牙王、今日から魔王軍に入った新参者だ覚えとけ」

「ちよっ！あの牙王を仲間にしたってどうやったのハルト！」

「まあ…それは…」

「それでどんな病気なのさ？」

「不明なんだ、何故か寝たまま起きないんだ」

「寝たままねえ、取り敢えず起こしてみるか」

「……だ」

そう言われ案内された場所には確かに寝たきりの子供がいた

「どんな名医にも聞いても分からないの一点張りなんだ……金を費やしても金が食われるだけで意味がない」

「まさか列車強盗してたのって……そうかそう言う事か」

何だ思ってたより悪い奴じゃないのかもと思うとハルトは笑って答える、相棒

『検索済みだ、こいつはどうやらとある世界の悪魔が疾患する眠りの病だな下手したら一生起きないぞ』

「寝てるだけ？」

『ああ起こせば治るそれだけだ』

「なら大丈夫だね」

「魔王？」

「任せて牙王、俺達が何とかしてみよ」

「つ本当か！報酬は何を望む？」

「んじゃこの色紙にサインをお願いします」

「……………それだけか？」

「ああポチツとな」

まずは小手調べとアリエスゾディアーツに変身そして

「なんとかなれー！」

とまあ気の抜けた掛け声で杖を額に添えてみると強い光と共に

「うーん…………あれ？ここは？あれ？お父さんに皆？」

「「坊ちゃん!!」」

「!!!」

「これにて一件落着!!」

「相変わらずですな我が魔王」

「そう言うなよウォズ…けど実は牙王助けたのさ気まぐれとかファンだからじゃないんだよ?」

「え?それが理由の100%では?」

「違うわい!その…アレだ羨ましいんだよ…親に心配されるとか…子供は親を選べない…けど欲しいものは親に愛される事…だっけ?だから助けてあげたいなって思ったんだ」

「我が魔王…」

「魔王!」

「は、はい!!」

「恩にきる!」

「いやいやお礼なんて…ただ息子さんと仲良くしてください」

「そこの預言者とは話がついてるが俺は逢魔に世話になるぞ」

「え?ウオズ?」

「祝え!牙王の息子が目覚めた日を!」

「「「おおおお!!!」」」

「俺以外を祝うほど誤魔化したいのか!？」

—————

「まあ不思議なことが起こった感じかな」

うんうんと頷くがソーサリーは冷たく返す

「いや原因あるよね、アリエスの力を使ったよね？」

「んで治療費とリハビリ代を逢魔が見る代わりにウチで働いてくれるって」

「とんでもない雇用契約だった…というか何で生きてるのよ電王にやられた筈なのに」

「何か並行同位体？って奴で俺の転移に合わせて移動してきたんだって」

「何というかハルトといると驚かないよね」

「いやいやどんなミラクルも起こる平成ライダーの力だからねコレ」

「それは怪人の力だよ？」

こんな雑談をしている時もファントムはビルにしがみつきのながらジェノサイダーのブラックホール攻撃に耐えていた

「牙王、お願い」

「ああ介錯してやるよ」

同時に現れたのはゴーストイマジンを幽汽変身に使うベルトに似た ガオウベルト

そして懐から取り出すのはマスターパス、そして??と刻まれたチケットである

「変身」

同時に響くオルガンで奏でられる危機を煽るような音楽 その待機音を背に牙王はマスターパスを投げるとパスは自動でガオウベルトにセタッチされる

『GAOH FORM』

同時に現れたプラットフォームに装着されるは銅色のライダーアーマー、と頭部に現れたのはワニの頭部を思わせる装備が展開され巨大な牙を思わせるような仮面となり現れるのは

絶対的な力を求めて 時という神さえも喰らおうとした牙

仮面ライダーガオウ 現る！

「さあ終わりだ」

『FULL CHARGE』

ガオウガッツシャーにより飛翔斬撃によりビルは切断されフロントムはジェノサイダーのブラックホールに吸収されたのであった

「一先ずは大丈夫かな？さて折紙だが…っ！あれ!!」

アナザー王蛇が変身解除したと同時に指を刺す方向には未来から来た折紙が何かと話しながら天使を展開して発射しようとしていた、この射線には……まずい！

「や…辞めろー！ー！」

あいつ、誰狙ってるのか分かってんのかよ!!

その先にいるのは幼い頃の自分と家族じゃないか!!

「っ！」

『ファルシオン』

ハルトはアナザーファルシオンになり炎の翼を背に飛翔する、そのまま折紙の天使絶滅天使（メタトロン）最強の技 砲冠（アーティリフ）を発射してしまう

それを無銘剣虚無の無効化能力を頼りに受け止める…しかしその攻撃範囲は広くハルトが捌けなかつた流れ弾が過去の己に襲い掛かる…筈だった

「!!」

士道が幼い頃の折紙を庇って攻撃を避けるが両親は

突如として現れた雷によって救われたのである

「へ？」

「何だよ今の…」

そこに現れたのは金髪ポニーテールの軍服を着た女性 その手に持つのは聖剣だと
!

「雷鳴剣!?!何で……つか何者!」

彼女は堂々と名乗りあげた

「通りすがりの戦乙女！ベアトリス・ヴァルドルート・フォン・キルヒアイゼン見参!!」

「へ？誰!!」

「いやあ長かったですよ！シンフォギアG編の世界から駆けつけようと思ってましたのにタイミングがズレてズレて今になるとは…おのれカグ槌…今度会ったら三冊ワンダーぶつけてやる…」

「メタすぎて何処かの白スーツに刺さってるよ！その言葉!!つてか…あ!!」

思い出した以前戦った際にクジヨーから聞いたベルファストと一緒に未来の伴侶の中にいた子じゃん！

「ベアトリスって…まさか」

「あ、貴女が錫音さんですな宜しくお願ひします」

「あ、どうもご丁寧に…」

「牙王さんもありがとうございますね連れてきてくれて」

「ついでだ、礼はいらん」

「君が何者でとか…今は後で良いや！取り敢えず今は撤退!!皆！帰るまでが任務だからね！」

全員慌ててネガデンライナーに乗り込みこの時代から現代に帰ったのである

フアントムの追撃もあるが、この時代に長く残る事はそれだけバタフライエフェクトを引き起こし自分たちの帰る時代に帰れない可能性があるので

そして帰った未来ではフラクシナスも沈まずに無事で土道が望んでいた未来となっていた

まあ俺達にとっては望む未来ではないが折紙の記憶は消えてしまった

あと序でに言えば歴史改変の影響か折紙関連の記憶が俺とナツキ以外には消えてしまっているようだ：まあ特異点じゃないと歴史の乖離内容までは覚えられないってのを身をもって味わったよ

ただ覚えているのは精霊の対応で過去に飛んだって事実だけだ

というより

「牙王だ息子と配下連中共々世話になる」

「まあ俺の下だかな先輩を立てろよ」

ネガタロスはマウントを取りに行くが

「は、その地位に胡座かいてるなら食ってやるから気をつけな」

「下剋上とは粹の良い奴だねえ」

そして

「初めまして先輩方！不詳 ベアトリス・キルヒアイゼン、これからお世話になります」

「ベアトリスって確か…」

「おい錫音」

「な、何かな？」

「お前が過去に行く云々は置いてだ…何故…何故貴様がついていながら現地妻が増えて帰ってきたあ!!」

「いや私も分からないよ!」

「ハルト!!」

「俺にも分からん牙王!」

「知らん…それより飯はまだか?俺の雇用条件は3食昼寝付きだ」

「なんて贅沢!…いやまあ良い…取り敢えず…歓迎会諸々含めて宴ダア!!」

宴会のハイテンションを理由にハルトは有耶無耶にしようとしたが

「その前に正座しろハルト」

「はい」

キャロルと千冬の圧に負け正座したのであった

「ぶぶぶ…可哀想ですねハルト」

「貴様もだ座れ小娘」

その圧力にベアトリスは何処か赤い髪をした上官が見えたという

「何故でしょう無性にどこかの上司を思い出したのですが…気のせいですかね…」

ベアトリスも仲良く説教されたのであった

鳶一デビル編

前回のあらすじ

過去に飛んだハルト達、そこで折紙の両親生存というミッションを達成し牙王、ベアトリスという新たな仲間を得たのだが……錫音は歴史改変の影響で折紙との接点を無くし元気を無くしていた

ピースメーカー格納庫

「お前等!!いつも俺の無茶振りに答えてくれて感謝してるよ!それに今回の戦い、失うものもあつたが新たな仲間を得た!それを祝うとしよう!乾杯!!」

ハルトが慣れた音頭を取るとトルーパーや主役の牙王達は喜んでいたが一部はお通夜のようにだった

「我が魔王」

「何だウオズ？」

「本当に罰で漬物と味噌汁とご飯だけ出す人がいますか!!」

「そう皆が派手で豪勢な食事をするなか自分達に出されたのはシンプル過ぎる定食であつた」

「酷いよ魔王ちゃん！牙王達とかお肉やお魚とか沢山美味しいの食べてるのに！」

「待遇格差を是正せよ！新参者にハルト様は甘すぎる!!」

「そうですよ魔王様！せめて焼き魚を所望します!!」

「お主等の方がハルト坊の料理食べとるだろうに……じゃが罷りにも一種族の長に出すものではないのお……」

「テメエ等、食わず嫌いは感心せんなあ…取り敢えず食べてみろつて俺は妥協しないところはないからさ」

「「「「「「………」」」」」」

「返事は？皆、次は味覚をシャットアウトしてやろうか？」

「「「「「「頂きます!!」」」」」」

逢魔には共通認識がある食事関係だけは誰もハルトには逆らえないと

「普通に大根の味噌汁だな………っ!!」

一口飲んだ瞬間、ウオズ達の体がふわふわ浮いているように見えたという

「何ですかこの味は!!」

「この大根…っ!!天国の上に位置している…っ!」

「天の道をいく人のアイデアをお借りした切ったベジタブルスカイで取った大根を外の風に当てて干したんだ結果として大根に独特な歯ごたえが生まれたって訳よ」

「まさか…そよ風を調味料にするなんて!!」

「大根自体の美味しさもですが素晴らしい風が吹き抜けていく……」

「お主等、以外と楽しそうじゃの…まあ美味しいのは美味しいがな」

「食べ終わったらあつちの奴を普通に食べて良いからさ…さてと」

ハルトは愛用のメルク包丁片手に戦いに挑む侍のような顔になった

「人生初の大物に挑ませてもらうかね…さあいくゾオ！マグロお！」

『最終決戦みたいなテンションで挑むなややこしい！』

ハルトはメルク包丁片手にとある方から頂いたマグロの解体ショーを始めるのであった

その頃

「あのバカは何をしている」

「マグロの解体ショーだな小さな包丁、よく切れている」

「メルク包丁とか言ったかしら？すごい切れ味ね刀剣ならなかなかの業物よ」

「だね、あ、ハルくん！東さん達にもマグロの舟盛りお願い！」

「あいよー！」

「そう言えば最近機嫌が良いな束」

「うん！実は篠ノ之製作所に依頼が結構来てるんだあゝ」

「ああ…確か【サウザー系女子】だったか、ヒューマギアの素体発注を受けたと」

「そーそー、あとね【預言者】って人からレイドライザーやプログライズキー、ザイアス
ペック発注もあったんだ！その間送ったから届いてると思うけど」

「それ渡しても大丈夫なの？」

「大丈夫じゃないか束が送ったんだその辺は信頼しても良い」

「まあ普段からハルトを抑えてくれれば文句はないがな」

「それは無理、キャロル、東、ハルトは悪ノリするし」

「銀狼言い過ぎよ、貴女だってその恩恵を受けてるじゃない」

「それもその兎達が趣味で作ったものだから」

「けどまた戦力が増えたわね…これも旦那様の魅力なのか将又別の意思が介入してるのか」

「関係ないなどこの誰が丁寧にレールを用意してやろうがああのはバカは歩道が広いなら脱線し人を跳ねながら前進する奴だ」

「そう聞くとハルくんって周りを巻き込む暴走列車だよな」

「それに乗ってる私達も私達だけだ」

「やれやれオレ達とはんでもない男に惚れたな」

「だね〜」「ああ」「うん」

「ふふふ…まだまだ旦那様は強くなるのね良いわあ…」

「本当に相変わらず料理スキルが高いな…流石だハルト」

「まあな！そして見よ！俺が学んだ食技を使えばマグロは切られた事さえも気づいていないのだ！」

そこには頭と骨だけなのに動こうとしているマグロがいた

「ハルト、真面目に剣を学ぶつもりはないか？」

「ちーちゃん!?!」

「それは今度、でか俺の得意武器は槍だって…つか1人だけ空気重くね？」

「ああ」「そうね」

「はあ……………」

千冬とアンティリーネの目線は溜息をついて虚無感に浸っている錫音に集まるのであった

「過去で何を見たんだろうな」

「さあ…ハルくんの話だと折紙？って子との繋がりがなくなつたとか何とか」

「改変前の記憶が多い分、喪失感も大きいみたいね」

「だがオレ達は忘れている…覚えているのはハルト達特異点や牙王、イメージン達だけか」

「だね…何というか…俺もかける言葉が見つからないよ」

「だがお前にしか元気つけられないだろう？」

「そうだなー行ってくる！あ、千冬これマグロの中落ち、美味しいよ」

「すまんなハルト」

「良いって良いって」

「おい待て何故千冬には一皿多いのだ！」

「何でだろ？何かお礼したいからかな千冬ありがとう」

「何の事だ？忘れたな」

ぼんやりとだが千冬に喝を入れてくれたような気がしたという理由でもあるが

「まあ良い、さて問題はお前だ……ベアトリスとやら」

「何です？……いや本当に何ですかこの料理！人の手で作られたんですか！」

「目の前にいたバカが拵えたものだ……さて聞くぞお前は何者だ」

「あ、そうですね其処から話さないとダメですね……あ！すみませんビールおかわり！」

「話を聞け!!」

「そうですねえー私はー

ベアトリスの話をもとめるとこんな感じ

元々彼女は無銘剣に選ばれて仮面ライダーファルシオンになった俺（ファルシオン√）がいた世界の住人らしく、その世界のハルトに剣を教えてくれた先輩らしい

「ですがハルトときたらあろう事か剣士が倒すべきメギドを相棒にするなんて」

「ああデザストのことか」

「ええ倒すべきメギドだが旅する相棒だと…とんだダブルスタンダードです…後はハルトと恋仲になってくれた煙の剣士には感謝ですね」

「ああこの間の宴会にいた蝶の着物を着た女か」

「はい！胡蝶しのぶ…まあ力関係はハルトが尻に敷かれていますねオイタをしたハルトに麻痺毒を打ち込んで連行しています」

「ああその辺はオレ達のハルトと同じだな」

「というより毒が効くハルクんっていたんだ」

「ああ…やっぱり此方もですか…ええ？」

「そうだあのバカはオレ達が抑えないと暴走するからな…まあ麻痺毒で倒れるのは驚くな……すまない少し話が逸れたが何故異世界の剣士がこの世界に」

「毒が効くのとて当たり前では？…あ、それはですね」

ソードオブロゴスは様々な世界に散らばった聖剣とライドブックの回収や調査をしていたのだが、あのハルトレンジャー事件において、デザストが聖剣と新しいライドブックを作った事があの世界で波紋を呼んでいるらしい

「何で？」

「何でも条件があれば無尽蔵に世界に新たな聖剣やライドブックが生成されるのでは？という意見があるらしく調査してるんですよ生成方法が分かれば悪しき聖剣…まあ魔剣製作の対策も立てられますから…あとうちの刀鍛冶の人が『そんな聖剣が生まれるなんて幸せがあつて良いのかよ!!刀鍛冶の血が騒ぐぜベイバー!』と狂喜乱舞してましたね…はい…」

「どの世界にも大秦寺さんみたいな人はいるんだね〜」

「それが何で私達のハルトと会うことにつながるの？」

「大雑把に言うところの世界で火炎剣烈火とブレイブドラゴンの波長を確認しましたので調査と、あの事件（ハルトレンジャー事件）の関係者に聞き込みしてる所ですね、あの事件は魔王のいた世界にリンクしてますから話を聞くなら彼の方が早いと」

「成る程な筋は通る…だが魔王ハルトの無銘剣は回収しないのか？」

「ああアレは大丈夫ですよ、あの無銘剣虚無は特別製？とか何とか」

「そうか」

「あ、後で火炎剣烈火の剣士に合わせてくれますか？」

「構わんが？」

「では先輩として剣を教えてあげると「四賢人が鍛えてるが？」え？何でこの世界にいるんですか？あの人たち」

「正解に言えばハルトが怪人を作ったのだ、彼奴はその剣技と力が全盛期以上に強化された怪人？に扱かれてるぞ」

「あ、悪夢だ…あの4人が強化？この世の終わりですよ」

「何せハルトも能力なしの正攻法で勝つのは面倒くさいと言わしめる相手だからな」

「うわあ…魔王こわあ…：しかし皆さん狡いです！ハルトがこんなに料理上手なんて知りませんでした！」

「え？そつちのハルくんは作らないの？」

「全く、外食やカップ麺で済ませますし料理なんてしませんよ!!あの仕事人間は食事な

んで栄養補給だから拘らないとか何とか!!この間なんかその辺にいた蛇捕まえて串焼きにしてみましたからね懐かしいとか言いながら食べてましたよはい!!」

「ハルトが仕事一筋とか想像出来ん」

「料理を作らないハルトだと…」

後に聞けばアナザーカブト、アギトから教わらなければウオズや皆に会わねば作らないだろうなと魔王は答えたという

誰かの為が上達の道だったという事だ

「そうね…旦那様は趣味の合間に仕事するような人ですもの」

「それはそれで問題なような…まあ良いでしょうそれで皆さんには心当たりありませんか?魔王のハルトが何か作った〜とか」

「あるな」「あるよ!」「ありますね」

「こんなあつさりと手がかり見つかった!?!どんなです!」

「アルターブック作ってた」

「メギド生み出したな」

「ツアアウト!!それはソードオブロゴスに所属する剣士として聞き捨てなりませんよ!!」

「未来で限りなく全知全能の書に近い本を完成させて世界を滅ぼそうとするらしいよ」

「アウト!もうスリーアウト超えてゲームセットですよ!魔王だ!この世界のハルトは間違いなく大魔王だった!!!」

「まあお前達世界で見たらストリウス並みの魔王だろうな」

「最初はあんなにオドオドしながらもキラキラした目でベアトリス先輩！なんて可愛く寄ってきてたのに！何でグレてしまったんですかあ！」

「何だそのハルト？」

「えーと…マジないわー」

「蓮くんみたいな事言わないでください、アンティリーネさん」

「それでお前の目的は分かったが、本当に調査だけか？」

「え？」

「それだけなら問題ないが…貴様がオレ達のハルトに色目を使うならば」

「使うならば？」

「貴様をチタタブして故郷に送り返してやる！」

「キャロりん、北海道が舞台の漫画読んだりした？」

「ああ…ハルトに勧められてな…取り敢えず千冬サタンサーベルを貸せ。こいつをチタタブしてやる!!」

「殺害予告!? ミンチより酷いです安心してください! 私は貴女達のハルトに興味は……」

ないといい切る前にベアトリスの頬は赤くなり目を少し泳いでいた

「おい何故言い淀む？」

「え? いや別に私の知ってる彼より逞しいなあとか強くてカッコいい……けど何処か脆

そうだから私が守ってあげたいなって庇護欲にかられる……って何言ってるんでしょうか私は!!」

「よしこの娘は経過観察だ千冬、見張っている」

「ああ任せろ、覚悟しろ小娘」

「何故でしょうか……その目にそこはかたなく既知感があります……何といたしますか男を見る目がないというか」

「ほお、その減らす口とブーメランを投げたのはこの頭だなバカ娘!」

「ぎゃああああああ! 頭が割れるう!!」

「うわあ……ちーちゃんのアイアンクロー……らって軽口言えるって凄いなえ! ベーやは」

「その呼び方辞めてください！なんかカップ麺みたいじゃないですか!!」

「安心しろ東があだ名で呼ぶのは認めた証だ」

「はい東様は親しい方以外はそもそも人間と認識しませんから」

「以外と東はサイコパス」

「そこまでないよ!!」

「ま、まさか…アイアンクロー食らっただけで認められる力とか千冬さんってまさかゴリ「あ？」いたたたたたた!」

「いやあ…ゴリラはハルくんでしょ」

「そうだな…程々にしておけ千冬」

やれやれ、あのバカがまた増やしたなど

キャロルは呆れながらに酒盃を煽るのであった

—————

またもう一方では

「お父さん…これ美味しい！」

「そうか、それは良かったおい魔王！こつちにも追加だ！」

「はいよー！」

「何故魔王が厨房に立ってる？」

「ああ実を言えばこの船の炊事周りは魔王ちゃんがほぼ1人で賄ってるんだよね」

「何っ！」

「しかも美味しいとくれば文句ない！」

「確かにこの串焼き…中々の味だ…追加してくれ」

「それはビリオンバードと言って逢魔国民の主食として愛されている鳥ですよ」

「まあ、ちゃんと処理しないと美味しくないんだけどな」

「大将の手にかかればこの通りって訳」

と皆が舌鼓を打つ牙王は満足そうに食べるのであった

「所で牙王、酒はいけるか？」

「良いだろう受けて立つぞカゲン」

そこにあつたのは酒樽と向かい合う2人、今男のプライドをかけた戦いが幕開けた！

—————

そんな宴会も終わりピースメーカーの面々が二日酔いでKOしていたこの頃

ハルトはナツキと一緒に行動していた

「んで歴史改変した結果が今つて訳か」

「そ、俺達は特異点あるいはそれに近い存在だから歴史改変の影響がなく覚えてるんだよな」

アナザー電王、アナザーゼロノスウオッチにより俺達は擬似的だが歴史改変の影響を受けない特異点となれている

「成る程……しっかし牙王まで仲間にするとはな」

「いやあ……一時雇用関係と言いますか本来なら幹部の席を渡したいんだが役職が」

現状、必要な役職は埋まってんだよなあ……と考えていると

「あるじゃん、ほら逢魔義勇隊の隊長」

「あゝ」

逢魔義勇隊

それは建国直後から逢魔にいる軍団でジュラの森で起こったカリユブデイスの事件をきっかけに設立された。ボブゴブリン、ハイオーク、コボルトやドワーフなどあの世界の現地勢力で構成された部隊である

悪魔達は管轄上は3人娘の手下で俺の直轄部隊でもあるからカウントされない

現在は戦いはクローントルーパーに任せている事から役割は領内の警邏や監視に留

まっているがトルーパーじゃ対応できないあの世界での揉め事には率先して出陣させているが隊長がいないので格種族の長が分隊長として種族を率いている 故に全種族をまとめあげるリーダーが欲しいのだが…

「けどなあ義勇隊の指揮かあ…」

「アレか？ ならず者上がり軍権預けたくないとか？」

「違う違う、そんなんじゃないだよ」

少なくとも牙王を幹部に据えるならそこじゃないんだよなあ

「うーむ悩むな… 何とか牙王は攻めつけて感じなんだよ将軍みたいな攻撃的なポジションに据えたいね」

「……………」

ナツキは知っている牙王が最低最悪の未来においてハルトの悪辣な左腕にして生粋の武断派として猛威を振るう事を未来を変えるなら

「ハルト、逆に考えるんだ国内において守りを固めてみるとか」

「うーん……けどテストタロツサ達がいるからなあ…」

彼女達の実力を知っているからこそ俺は主力を率いて戦えてる訳だしなど色々考えていると

「ハルトさん！」

士道が気づいたよう駆け寄ってきた

「よお少年くん」

「お願いします力を貸して欲しいんです!!」

「は？」

聞けば折紙は精霊としての記憶を無くしているが精霊の反応を感知したら反転モードで現れて襲いかかるらしい

「それで」

「またデートして折紙の力を封印します」

「成る程な…つかそれラタトスクの仕事じゃん」

「いやそれが折紙なんですけど記憶が二つある？というか二重人格みたいで何かハルトさん達の事覚えてるんですよ」

その言葉にハルトは目つきを変えて

「それを先に言え協力しようこれ以上、錫音の凹む姿は見たくないナツキ手伝え」

「えええええ！」

「働け、ハウンドは今シエフィールドとデートしてるから人手がないんだ」

「他の人達は？」

「大半が二日酔いで伸びてる…動ける奴等はピースメーカーで片付けしてる」

「ダメじゃん!!いやだよ今日は拙僧働きたくないでござる!!」

「そうか仕方ないな…もしもしエルフナインゝ何か今日ナツキが働きたくないらしいからデートしたいって」

「ほっ……なーんだエルフナインか驚かせやがって」

「マドカや皆とだつてさ」

「は？いやちよつ！「あ、変わるね」あ、おい！も、もしもし！！」

『ナツキさん、帰ったらお話ししましょうか？』

「あ、いやちよつ！今のハルトが勝手に」

電話越しからでも分かる圧力、マズイ！エルフナインが切れてる！！

「分かった…終わったら2人きりで行こう」

『はい！楽しみに待ってますね！！』

良かった機嫌治った！

『ですが…それはそれこれはこれなので覚えておいてくださいね！』

前言撤回！！ツーツーとなるスマホをしまおうと

「俺終わった…」

「寧ろ病むまで放置するなよ」

「ならお前の所はデートとかどうしてんだ？」

「あ？んなの毎日とは行かないがしてるよ、勿論それ以外で取れる時間はきちんと取ってる」

「そういう所さ優しいよな無駄に」

「ん？それはどういう意味かなあ？」

ハルトのオーラを察して周辺の野生動物は野山を後にし、地球に全てのものが地球最後の日!?!と錯覚するほどの胸騒ぎに襲われたらしい

「ちよちよっ！喧嘩しないでください!!」

「そうだな…今は折紙を助けるのに力を貸そう！」

「んじや頑張つてー」

「お前も手伝え」

「しやあない…貸しだからな後でエルフナインに弁護してくれよ」

「分かったよ元はと言えばエルフナインは俺が火種だから弁護する」

「んじや協力する」

「それと少年くん、君の持つてる火炎剣烈火について専門家が来てるから」

「四賢人みたいな人達ですか？」

「あの人達よりも実戦的な剣技を教えられる人かなベアトリス」

「はい！呼ばれて飛び出て電撃バチバチ！皆の戦乙女ベアトリス・キルヒアイゼンでございませーす！」

現れたのは妙にハイテンションなソードオブロゴスの制服を着た金髪ポニテの美少女　ベアトリスであった

「まだ昨日の酒残ってる？」

「いやいやソードオブロゴスでは伝説と言われてる火炎剣烈火　その担い手に会えるのは嬉しい事ですからね」

「伝説？」

「ええ実際に火炎剣烈火と担い手にはこういう話がありました『人が鍛えし始まりの聖

剣に、火を灯さんとする者現れし時、星を結びて力を束ね、物語を終焉へと導く聖剣が生まれる』』と云い伝えられてますから」

「物語を終焉へと導く聖剣…」

士道に過ぎつたのはハルトが使うかも知れない本

グリモワールライドブック

ならば終焉とは世界を滅ぼす魔剣なのではと身構えるがハルトは

「安心しな少年くん、その聖剣は希望の聖剣だよ」

「え？」

「知ってるんですか？」

「その鑄造方法までね」

「本当ですか！」

「作り方を教えるのは後でな……取り敢えず」

ハルトが冷めた目で離れた場所を一瞥するとファイズフォンXを銃モードにして数発撃つ

「覗き見とは感心しねえな」

「いやいや、まさか気づくとは思いませんでしたよ」

野生のネオタイムジャッカーとバトルドロイドが大量に現れた

「ポ○モンか!!じゃねえ……久しぶりだな魔王」

「共周りもないとは愚か」

「これはまたとないチャンス……おや？」

クジヨーはベアトリスを視界に入れるとガクガク震え始めた

「な、何故ここに雷光の戦乙女が……会うのは少し先の筈……まさか！この間の歴史改変の影響で！」

「お嬢ちゃんだけじゃないぜ」

と空から声と共に現れたのはワニのような頭部をした電車 神の路線を走れる唯一の時の列車

ガオウライナー

が両者の中間地点に現れると中から現れたのは

「牙王！お前二日酔いだったんじゃ…あとガオウライナー持つてるんかい！写真撮って良い!?!」

「好きにしろ…俺があ程度の酒で酔うか」

「つしやあ!!ガオウライナーさん！ちよつと顔向けてください!!」

『BAT』

バットショットを展開して写真をあらゆる角度から撮影している

「ほおお前達がネオタイムジャッカーか噂には聞いてるぜ、魔王の敵だな…食ってやろうか？」

「かなり不味そうだけど？何なら一人腐ったゾンビだし」

とメナスを見て話す

「美味しいもんたらふく食べたんだ、偶にはゲテモノ食べるのもありだろ？」

「ははは！スゲエ食欲〜」

とほんわか笑っているもクジヨーはドン引きしながら

「まさか牙王とその一派まで仲間に行っているとは…早すぎますよ！」

「ジジイと一緒にすんな俺には俺の歴史があるんだよ」

ハルトはアナザーウオッチを取り出すと

「魔王様は下がっててくれや！これは俺達牙王組の初陣だからよ!!」

コブライマジンに止められたのでハルトはムツとするがベアトリスも前に立つと雷

の聖劍 雷鳴劍黄雷を構えた

「ダメですよ私もやります。一宿一飯の恩は返します」

「それと土道くんでしたっけ？丁度良いです賢人達から劍技は習ってるらしいので実践的な方法を教えてあげましょう」

2人はベルトを付けると牙王はマスターパス、ベアトリスは黄色の本を取り出した

『ランプドアランジーナ…とある異国の地に古から伝わる不思議な力を持つランプがあった…』

ライドブックを閉じ物語のロットに装填するとギターのような待機音とオルガンの演奏が響き渡る

「変身」

『GAOH FORM』

牙王はガオウに変身しガオウガッツシャーを組み立てると

「変身!!」

『黄雷抜刀!黄雷一冊!ランプの精と雷鳴剣黄雷が交わりし時、稲妻の剣が光り輝く!!』

ベアトリスはドライバーから抜刀、そのままランプの精霊と雷を帯びて姿を変える

黄に輝く姿は迷える仲間を導く閃光の騎士

仮面ライダーエスパーダ 登場!!

その流れでネオタイムジャッカーの面々も変身するのを確認すると

「さて食ってやるか」

「見ててくださいね私の初陣!」

ガオウはガオウガツシャーをエスパーダは聖剣を手に敵に斬り込むのであった

「ヤツチマエー！」

バトルドロイドは戦列を組みブラスターを撃ちながら前進するも

「関係ねえな！お前らやつちまえ!!」

今度はコブライマジン以外、ガオウ傘下のイマジンがバトルドロイド達をまるで棒倒しのように壊しながら前進していく大軍にも怯まない姿は正に荒くれ者とも言えるが

「んじや俺も行くかね部下だけに任せられねえしナツキ手伝え」

「しやあない…行くか」

「お、俺も！」「お前はベアトリスの戦いを見て学びな」けど！」

「昨日千冬が言ってたよ」

【アイツは中々強いぞ…まあ私より弱いかな】

「つて、それに知識だけの俺や技術だけの四賢人と違った戦う為の剣だ学ぶことも多いよ」

「……………」

「黙って見てろ、今俺達に勝てねー奴が逆らってんじゃねえよ」

「まあまあハルト落ち着けて、士道くんは見てなよ…」

「じゃあやるぞ」

『ジオウ』

「おう」

『ゲイツ』

2人は変身してジユウガに挑むのであった

原初の竜と新たな切り札

前回のあらすじ

歴史改変により平和に戻ったはずの世界　しかし折紙に残った精霊の力を封印する為　士道達は動くがそれに待ったをかけたようにネオタイムジャッカーが襲来　初陣に張り切るガオウとエスパルダを加え戦いは激しさを増すのだが…

ー俺は何してるんだろう…ー

士道に感じたのは劣等感、彼のお陰で確かに強くなった　しかしそれでも届かないと分かる

敵相手に物怖じせず挑み、バトルドロイドの足を掴んで棍棒変わりに振り回す魔王とそれに負けずに暴れる配下達…

四糸乃や狂三や六喰の事件には彼らの協力がなければ乗り越えられなかった現に今の折紙の件だって……自分じゃなくても良いのではと

そんな諦めに近い感情が湧き出ると同時に

「アレだけの力があれば俺だって……」

この言葉が届いたかどうかは知らないが運命の神は微笑み力を与えた　まあ

使い熟せるかは別としてだが

現れた禁書を土道は開き、読み頭に流れるは

死して尚、亡くした仲間と居場所を求めて彷徨う孤独な竜の物語

「……………」

士道の意識は途切れ、残ったのは新しいライドブックだけであった

『プリミティブドラゴン』

—————

ガオウside

「ブリキ人形じゃあ食い出がないな…おい、かかってこい」

と指差すのはメナスことアマゾン・シグマである

「いいでしょう、より進化した細胞の力見せてあげます」

とシグマは体の細胞を変異させ新たな腕を生成し武器と融合させた

これはアマゾンズドライバーに宿る、小太刀、槍、鎌の武器生成機能を全身に回したのだろう死体故に痛みを感じない徹底した効率重視の強化を施したのである

「面白い食ってみるか」

ガオウは走り出すと迎撃に出された武器腕の一撃一撃をガオウガツシャーで弾き飛ばしながら間合いを詰めていく今度はシグマとの格闘戦となるがガオウは恐れ知らずという言葉が似合うようにシグマのダメージを認識できないという死者ならではの弱点を知ってか知らずか、或いは戦闘経験からかひたすら攻めるといふ選択をした

結果として功を奏し シグマはダメージと再生が追いつけなくなってきた

「くっ……負けてなるものか!!」

「負けじゃない…死だ二度目のな」

『FULL CHARGE』

「はあ!!」

分離した刃がシグマの体に食らいつくタイラントスラッシュが襲い掛かる、その斬撃はまるでシグマの体を削り取るように裂いていく

「……………っ！」

しかしジャンヌ・オルタの時と同じく切られた所から再生が始まっていきダメージがなかった事のようになっていた

「やるな」

「残念ですね私は不死身です」

「死んでるのに不死身とは笑えない冗談だな！」

ベアトリス side

その頃 ベアトリスはシーカー相手に戦っていた

「くっ！」

「残念だったな！アンタと俺じゃ相性最悪だよ!!」

その言葉の通り エスパーダの持ち味は雷のような高速機動にあるがシーカーのギガントウエポンは障害物を糸に作れる為、起動力を奪っていく事が可能
つまりベアトリスの得意な機動により攻撃が対応できない

のだが

「ええ最悪ですね貴方にとっては」

「は?」

『必殺読破！黄雷抜刀！アランジーナ一冊切り!』

「トルエノ・デストローダ」

建築した壁や柱を足場を使い三次元的な機動を描く、その速度は人の目では追う事は

出来ない

何もない平野ならば直線的な動きしかできないのだが、シーカーは建築能力で大量の侵攻方向を与えてしまった

ゼウスやインドラなど神話の名だたる存在が必ず保持するもの

それは神なり（雷）である

気づくとエスパーダはシーカーの背中に立ち聖剣を払い納刀の所作を取る

「何やってんだ！」

ギガントブラスターを構えるシーカーだったがエスパーダはポツリと一言

「すみません、もう切っちゃいました」

「は？何言つて『サンダー！』ギヤああああ！」

突如として襲う斬撃のダメージと落雷によりシーカーは変身解除して倒れ伏した

「レッスンは終わりです分かりましたか？」

「いや早すぎです」

と土道はツツコミを入れたのであった

アナザージオウ、ゲイツvsジユウガ

「やっぱり強えな、あの2人」

「だな！こりやウカウカしてたら追い抜かれてしまうぜ」

「どの口が言ってたんだよハルト!!」

2人の前蹴りがジユウガに当たると間合いを作るとアナザーツインギレード、ジカン

ザックスにアナザーウオッチを装填する

『リバイ…バイス……mixing！リバイス！アナザースラッシュ！！』

『マツハ！アナザーストラッシュ！！』

「はあ！！」

アナザーツインギレードからはスタンプ型の斬撃とアナザージカンザックスからはバイク型のエネルギーがジユウガに向かっていくが

「何の！」

『オクトパス！』

『アブゾーブ！ドライブ！』

それはジュウガに宿るスタンプによる強化能力

『オクトパスフルスロットルアタック!!』

それにより強化された高速移動によりジュウガを見失った2人は攻撃により体制を崩してしまうが

「スピード勝負なら望む所だ！」

『リバイブ…疾風!』

「そうだな光速のヴィジョンを見せてやる」

『カブト』

「クロックアップ！」

そのまま3人は光速の世界に突入、戦いに移りゆく中

「！！！！」

周囲にいた者がその圧力と力に手を止め、その方向を見たのだ

「士道くん？」

「ちよっ！あの本は！！」

ベアトリスは驚くのも無理はない

「おいおい笑えねージョークだな」

何せハルトが一番危険度を知っているから…

昔 キャロルと喧嘩した時や狂三と戦った時

怒りに囚われた自分が良く解放した力で

彼がセイバーとなった日にもそのアナザーに変身していたからだ

士道は虚ろな目のまま禁じられた本を開く

『プリミティブドラゴン！』

そのライドブックは何故か余白とスロットがある　そこに足りない何かを埋めるようにライドブックを取り出した

『ブレイブドラゴン……GET！』

ソードライバーに装填すると現れた巨大な骨の竜を背に士道は逆手で剣を持ち

「変身」

抜き放つ

『烈火抜刀!!』

すると骨の竜は土道を強く抱きしめた。まるでどこにも行かないようにと押さえつけるように

『バキボキボーン！バキボキボーン!!プリミティブ……ドラゴン!!』

「……………」

その白い姿は先程の竜と同じく骨を思わせる鎧しかし本から流れる物は力を制御する筈のソードクラウンから逆流現象を起こし、変身者の理性を消し飛ばす

「うわあああああああ!!!」

その咆哮は周囲のものを吹き飛ばした耐えられたものは少なくひ弱なバトルドロイドはドミノ倒しのように倒れてしまったのである

禁じられた竜の物語　それに宿る悲しみを帯びた剣士

仮面ライダーセイバー・プリミティブドラゴン

「ぐ……ああああああ!!」

獣のような咆哮と共にまずセイバーが襲い掛かるのは

「ちっー！」

ガオウからである、逆手持ちの火炎剣をガオウガツシャーで受け止めるがガラ空きのボディーに荒々しい蹴りが叩き込まれる

「ガッ……この野郎……」

「ああああああああ!!」

『グランプ必殺読破!』

同時に現れたのは巨大な骨の尻尾がそのままガオウを狙ったが済んでの所で回避し、その背後にいたシグマを貫いた

『烈火抜刀!クラッシュ必殺斬り!!』

「ぐっ……」

流石にネオタイムジャッカーにかまけてられないと2人はプリミティブドラゴンを見る

「こりやマズイな」

「どうするハルト?」

「やるだけやってみるよ…コブラ達はガオウ連れて下りな、アイツの後始末は俺がやる」
「合点だ！」

コブライマジン達はガオウを連れて下がるとエスパーダは剣を構えて

「私も手伝いますよ！」

「いやベアトリスはフィニッシュを頼む、攪乱と足止めは俺達がやるから」

「んじゃ足止め宜しく攪乱は俺がやる」

「OK、さてどうしたものかな」

アナザーウィザードのバインドは力任せにちぎられて終わりだし、暴走フォーム故に
理性なんてない

「抑え込むならアナザーメタルクラスタかな」

あの蝗害の力なら抑え込めるだろうが

「少年君は或斗さんと違うからなあ」

精霊の力を宿している十香、四糸乃、琴里、八舞姉妹、七罪、六喰の霊力と天使を持っている

「まあた封解主刺されるのも嫌だしなあ」

「良いんじゃないの記憶無くしたらアギトに変身出来るぜ」

「は？何言ってるんだよ俺なんか仮面ライダーアギトに変身出来るかよ……ん？そういうやあ」

プリミティブドラゴンは言うなれば体に宿るエネルギーが処理できないで暴走して

いるのだ…ならば

「ナツキ、デカした」

「え？」

「俺も暴れるから後始末宜しく」

「あ、おい！」

『どうする気だ？』

「やっぱり、あーだこーだ考えるのはさ俺らしくない訳よ」

『やっと分かったカ』

「つー訳で獣には獣だ」

『まさか…』

アナザージオウはヒラヒラと手を振ると、あるアナザーライダーに変身する

「うおおおおお!!!」

それはシンフォギア世界にある聖遺物とアギト因子から生まれた異端児 その力は聖遺物由来の吸収能力と自己強化

アギトと似て非なる存在

『ギルス』

「うおおおおお!」

アナザーギルスに変身するとそのまま全力で獣のように走り出すと高く飛び上がる
ヒールクローを初手から振り下ろす

その一撃を火炎剣烈火で受け止めるも力をアナザーギルスは完全聖遺物 ネフィリ

ムに由来する力で取り込み自己強化を行う頭部の角は肥大化しながら足に入る力は増
していく流石のプリミティブドラゴンも吸収による弱体化は避けられず

『黄雷居合!』

「しのぶちゃんから教わりました雷の呼吸?一の型崩し」

「ちよっ!それ首飛ばしの技じゃ」

それ故に我流に崩す(アレンジする)のである

「霹靂一閃・改め」

エスパーダの雷速はガラ空きのボディーを的確に捉え切り裂くと

『読後一閃!!』

雷の放電現象によってセイバーは地面に倒れて変身解除となる

「っ……………はぁ……………はぁ……………」

同時にアナザーギルスも変身解除となる

全力稼働しか出来ない故にエネルギー消費が激しいのが欠点であるからこそハルトは変身するのに躊躇いがあった、ネオタイムジャッカーはあの混乱の中逃げたように残るは俺達だけであった

ピースメーカー艦内

ハルトは医務室で軽く検査を受けていたが

「いや見事に健康ですね」

「だろお！進化してこの方、風邪なんて引いてねえぜ！俺の働きすぎな細胞う！」

「何は風邪をひかないって奴じゃね？」

「恐らくそれもあるかと…」

「はっはあ！」

医師の診断に対して笑顔のまま躍るハルトであったがアナザーライダー達は

『すまん、頭の辺りを重点的に見てくれ』

『大事なネジが外れてないか？』

同時に船医は深刻な顔で答えた

「……………もう手遅れです」

『そんな！何とかならないのか!!』

『せめてコイツに一般常識を与えてクレ!!』

「おいコラ失礼過ぎるぞお前達、俺の何処に常識がないと言うんだい？」

『日頃の行いを振り返れ!!』

「え？俺ほど常識の塊がいると思うか？」

『黙れこの自称常識人!!』

「んだとコラア!!もっぺん言ってみろ落武者があ!!」

「はあ……」

ナツキはやれやれと呆れるが士道自身は気絶しているのを見て

「しっかしプリミティブドラゴンかあ……」

「あ？まあそりやそうだろうとは思ったよ」

「制御方法教えるか？」

「無理」

「え？」

「だってアレ、俺の知ってる仮面ライダーセイバーが作家だからこそ成立した話であつて少年君に作り上げるのは難しいでしょ？」

「……………」

「まあヒントくらいは上げる予定だけど」

「……………ん…っ!!」

士道は目を覚ますとハルトはそれはもう良い笑顔で

「おはよう少年君、あのさ暴走して俺達殺す気？」

「え？」

「覚えてないの？」

「あ……その「謝らないで良いよ責めるつもりないし」え？」

「寧ろ制御してたら殴ってるくらいあった」

「ええ……」

「つー事で少年君には課題を渡そう」

「課題？」

「あの力を制御しろ、そしたら力を貸してやる」

「そんなのどうしたら…」

「自分で考えな…：まあ困ったら二亜に聞くと良いアイツなら分かるだろうし」

「それ答えじゃん囁告篇帙で見ろって事だろ？」

「アホか作家なら分かる事もあるって話だよ」

「作家？」

「おっと、ヒントあげすぎだな…：今日は養生しときな少年君」

ハルトは医務室を出るとそれはもう良い笑顔で尋ねる

「それで俺の頭のネジがない云々言った奴は誰だ？」

『『『アナザーW』』』』

『ちよつ、お前達い!!』

「あ…：そーういやあアレ出来たか？」

『アレって何だ？』

「ほら、リアクターの制御装置」

『ああアレか！出来たぜ、これだ』

『1』『2』『3』

「お前らノリ良いなつと、コレか」

と右手に現れたのは片手斧、ビジュアル的にはメモリスロットのあるメダガブリューだ恐竜の意匠はないが

『名付けてリアクターアックス！世界初のドーパントメモリ専用ウエポンだ！』

「へえ〜」

『リアクターメモリの過剰出力を吸収して任意のタイミングで放つ事が可能とし、更にメモリスロットを付与する事で多様性を確保したぞ』

『俺達技術者系アナザーライダーが作りました』

『スツゴイでしょ！最高でしょ！天才でしょー！』

「確かに凄いな！」

『だがその分、重量を増したのが欠点だが…』

「え？これ重い？」

首を傾げているとナツキが興味半分に

「気になるな…持つていい？」

「ん？ほらよ」

「っ!!!ぐぎぎぎぎ……お、重たい!! 剛烈にならないと持ち上げられないよ!」

よく見ると地面に減り込むほどの重量であるのが分かったがハルトはヒョイと軽く持ち上げた

『重すぎてハルトにしか振り回せない結果となった』

『ある意味完璧な安全装置だな』

『てかライダー にならないと持ち上げられない武器を軽々となんてパワー馬鹿』

「アクセルの照井竜だつて生身でエンジンブレードもつてるだろ？それと同じ、あと今はこの武器の完成度に感動してるから何言われても広い心で許せるよ」

『脳筋』『ハーレム野郎』『脳みそ3グラム』

「早速試し撃ちしたいからお前達（アナザーアギト、アナザードライブ、アナザーキカイ）は的になれ」

『許さないじゃん!!!!』

『心狭っ!』

『俺は燃え散るんだが!!』

『材木だから良く燃えるだろうなあ…』

「早く使いたいなあ!」

ハルトは笑顔でリアクターアックスを振り回していたという

そしてそんな感じに日々が進み、皆が新しい歴史に慣れ始めた頃、ハウンドが凄みを持った目で俺を見てきた

「実は陛下に相談したい事がありました」

「何だハウンド、言ってくれ」

「は！……実は……」

ハウンドが真剣な面持ちで相談してきた……ふむ何だろうか新しい作戦の立案か？それとも他に……ふむ……こんな真剣な眼差し……分かったぞ

「夕飯のリクエストだな任せろ」

シエフとして腕を振るおうじゃないか！

「違います」

「あれ？」

「実は…シエフィールドとデートに行くのですが、そろそろ手持ちの服も無くなりそうですして」

そうなるとお金の話だな

「ふむ給金だな任せておけ用意しよう、ウオズ」

「いえ次のデートの服を陛下に選んで頂こうかなと」

その一言を発した直後 世界の時間が止まったような気がした

『カマシスギ!!』

「は？ごめんもう一回聴いていい？」

「陛下にデートの服を選んで欲しいと」

聞き間違えじゃなかったな、ふむ…

ハルトが首を傾げると付近に待機してたウオズ十四天王が立ち上がった

「血迷いましたかハウンド!!」

「そうだよ！知ってるでしょ魔王ちゃんの絶望的なセンスを!!」

「アレを着るのを選ぶまで服に悩んでいたのか！」

「くっ！せめて妾達に相談してくれ！ハルト坊のセンスに任せた先は破滅じゃぞ！」

「ええ魔王様の文字Tなんて着なくて良いですから僕達で服を用意しますよ!!」

この古参組はハルトの絶望的センスをよく知る故に懸命に止めているがそれが逆にハルトを傷つけていた

「ジャンヌ…ベルファスト皆が冷たいよ…」

「妥当じゃない」

「はいご主人様のセンスなら尚のこと」

「俺には味方がいない…」

『そんなの最初からいたか？』

その一言にハツとした様子のハウンドは冷静さを取り戻す

「皆、済まなかったデートに行く服を悩みすぎてたようだ…そうだよな陛下に頼むなんてどうかしてたよ、あのセンスに任せるのは危険だからな」

「それを本人の目の前でよく言えたなハウンド」

その言葉に顔が青くなるハウンドはそのまま

「し、失礼しました!!ではコレで！」

逃げた相手に対してハルトは笑顔でプラスチックライフルを持つと

「待てやコリア!!」

そのままハウンドを追いかけたのであった

その頃 土道は二亜の元を訪ね、プリミティブドラゴンの制御方法を教えて貰おうとしたが

「分かる訳ないじゃん、ただ」

二亜はペラペラとプリミティブドラゴンの中身を読んでみる：言葉はわからないが伝えたい事が分かるのは彼女の漫画家としての業なのだろう すぐにハルトが何故自分を頼れと言ったかを理解した

「これ前編？ 続きは？」

「え!？」

「え?これで打ち切りなの!そんなのアリ!？」

それは新しい力の扉であると土道は気づいていなかった

—————

さてそんな中、土道は折紙の力を封印する為にデートとなったのだが

「何で俺まで」

「しっ!」

錫音に連行された先には折紙と土道がいた

「あのさあ、どしたの錫音?」

「いや何かあの子の事が気になってさ……不思議と目で追うんだよね」

記憶が消えても残るものか……しやあないな

「わーった付き合ってやる」

「やった！なら見よう」

「ちよっ引っ付くな！」

腕を組んできたのに動揺すると錫音が

「最近は新しい子にご執心で私達に構ってくれないじゃん」

「酷い言いようだが……わーった好きにしろ」

確かに最近はベルファストやジャンヌという時間が長い気もするのは事実なので付

き合う事にした

「やった、ハルト大好き」

「俺もだよ」

そう答えた時、ピースメーカーの温度が少し下がったという

その一方で

「行きますよナツキさん！」

「ちよつと待ってくれエルフナイン！走らなくても良くない!？」

「ダメです！でないと…」

「へ？」

その背後から感じる圧力にナツキは身震いする

「え？」

振り向くとそこにはハイライトの消えた瞳で完全武装のマドカ達がいた…エンター
プライズよ弓矢は下ろしてくれ危ないから

「大体分かった急ごう！」

「はい！2人で愛の逃避行ですね！」

「微妙に違う気もするけど、まあ良いか！」

と走り去る姿に対して隠れていた面々は

「指揮官、もう少し右に動いてくれないだろうか…エルフナインを撃てない」

「もう良いよ姉ちゃん、一緒にやっちゃおうよ」

「そうねもうやっちゃいましょう」

「肯定、たとえば屍でもナツキは共有財産です…っ！勘づかれました！」

「逃さない！」

『ACCEL』

「変……身!!」

マドカはアクセルになるとドライバーを動かしてバイクモードに変形すると

「乗れエンタープライズ、ホーネット！」

「失礼する」「ま、一時休戦かな…よいしょと」

「我等も参るぞ！」

「首肯、ナツキは渡しません!!」

と全員が武装を展開してナツキとエルフナインを追撃に走るといふ別の戦いが幕を開けていたのであつた

余談だがそのやり取りを見ていたハウンドは

「アイツよく生きてるな」

「ちよつと何処見てるんですか?」

今回はメイド服ではないオシャレな格好の彼女に視線を直し

「ああ、悪いなシエフィールド似合ってるぞ」

「ありがとうございます…そろそろシエファイと呼んでくれでも良いんですよハウンド?」

「すまないまだ俺にはハードルが高くてな」

「なら気長に待つとします、ほら行きますよ」

「あ、ああ」

「これはこれで初々しいやり取りがあつた影で

「頑張れ隊長！」

「安心してくれ俺達がついてる！」

「隊長のデートの邪魔する奴あ！俺達が蜂の巣にしてやるぜえ!!」

「例え陛下であつてもなあ！」

「寧ろ陛下が邪魔してくれ良心の呵責なく撃てるからな!!」

「お前達待て！その発言色々とまずいぞ！テロリストみたいだぞ！」

一致団結している逢魔親衛隊メンバーがいた

「つて、おい見ろよアレ…あれってDEMの最強さんじゃねえか！」

1人が気づくと1人は双眼鏡で拡大して監視しているのがハルトと互角に渡り合える存在 エレンだと気づくが

「本当だな…まさかシエフィールドの姉御の力を…」

「そうはさせねえぞ！野郎ども！行くぞ！邪魔して隊長のデートを成功させるんだあ
！」

「！！！！」

一致団結して事に当たる姿は正に歴戦の勇姿だが…何故かこのトルーパーの妨害が折紙捕縛に燃えるエレンに降りかかる火の粉であったのは言うまでもない

余談だが、この後彼女は落とし穴、滑る床、金だらき落下、拳銃の果てには狙撃しようとしていたビルを丸ごと爆破されたの言うまでもない

これぞクローントルーパー、戦う為にいる銀河最強の兵士達…その技能が無駄に使われているのは言うまでもなかったが

「アイツら何してんだ？」

トルーパー達の奇行に頭を悩ませているハルトがいたという

今ここに乱戦デートが幕開けた！

「乱戦なのは俺とエルフナインだけじゃないですかね!!」

とエルフナインをお姫様抱っこして逃げるナツキであったがそれが逆に追跡者に火をつけたのであった

「ぎゃあああああ!!」

その時、ナツキはいつぶりかの死に戻りをしたという

15の影と原初の竜

前回のあらすじ

その日の来禅町は折紙を助ける為にデートする土道、それを見守るハルト、ヤンデレに追いかけて回されるナツキ、そして何故が頂点を極めようとした須藤刑事が加わり混沌を極めていた

「いや須藤刑事は何処からきたの！」

「ふふふ…いやはや頂点を極めるのも…までボルキヤンサー!!ぐあああ!!」

「見て見て〜サイン貰った〜あ、ボルキヤンサー!ダメ!!その人ご飯じゃないからあ!!」

—————

ハルトは錫音と共にデートを尾行していたが

「さてさて少年くんはどうやって折紙を攻略するかな？」

高みの見物を決め込むとどうやらデートコースの意見を聞き終えて行動しようとしたのだろう

が何故か土道が連れていったのは、休憩という宿泊システムのある大人のホテルであつた

「……………は？」

それには思わず面を喰らうと錫音は黒いオーラを出しながら

「あのガキ……」

「いや落ち着け錫音…しかし少年くんって意外と肉食だったんだなあ、よく六喰ちゃんや十香ちゃんのアプローチを流せたな…」

『貴様は基本、押し倒されてるからが本番だからな』

「ノーコメント…あ、流石に折紙も断るか」

「おかしい」

「え？ 錫音さん？」

「あの子がピユアなのは分かったけど何故かアイツの選ぶコースがハルトとのデートコースで私、アンティリーネ、束が選ぶコースの面影を感じるわ」

「……………」

「改變前の歴史ではその3人から薫陶を受けたらしいし…つか待てよ彼女の持つてる電子機器類の強さつてまさか銀狼も一枚噛んでるんじゃないや」

や、辞めよう…何か考えたらダメな気がする

「あ、動いたぞ」

そしてその後 入った服屋で何故かスク水と猫耳をつけた折紙がいたという

「っ!!」

「錫音堪えて!!お願いだからあー!」

「ハルトは許せるのかしら!あんなピュアな子を誑かしてあんな格好をさせるなんて
!」

「いやあの手の格好に興味持つ気持ち分かるよ!男ならスリット入ったチャイナドレス
やバニーとかメイド服に興味あるもん!」

『だからベルファストが…』

『ああ衣装あるもんな』

「そ、それだけじゃないかなあ!!あの子の優しい所とか頼れる所が好きだからかなあ!」
『惚気るなド阿呆』

『こいつは以前、黒髪お姉さんタイプが好きと言ってたが本音で言うとなんか頼れるお姉さんタイプなんだよなあ好きなの』

「おい相棒、リアクターアックスの錆になりたいか」

『とアナザーWが言ってたぞ』

「ほお」

『とんだとぼつちりじゃねえか!』

因みにピースメーカーで一部始終を聞いたベルファストはあらあらと頬を赤らめたと
言う

「メイド服……私も着てみようかな」

「そーゆーところが似てんだって」

――
その頃 ピースメーカーでは

「ほおハルトにもそんな趣味があつたのか」

「じゃあキャロりんはスク水だね子供体型にもなれるから似合うようちよっ！まっ――

「ふん！」

数秒後、キャロルのダウルダブラの糸により逆さ吊りにされた束だったのである

「だがメイド服か……」

千冬の視線はベルファストに向くが流石に北半球が露出している服を着るのはと苦悩している中、銀狼はハッキングした監視カメラの映像で懸命に落とし穴を掘るクロントルーパーの一团を見た

「ん？あのペイントは親衛隊…かこんな所で何を？」

銀狼はマジマジと見ていたが

「まあ良いか親衛隊だし」

ハルトとハウンドに対しての忠誠心が高い集団にして魔王の悪影響を受けた最強集団それが親衛隊だ故に放置してても問題なしと銀狼は判断したのであった

その頃 親衛隊はと言うとハウンドとシエフィールドのデートを陰ながら護衛していたのである、時にシエフィールドにナンパする不埒者をスタンモードのブラスターで狙撃、CQCで気絶

将又、ハウンドに逆ナンを仕掛けてくる猛者には自分が影武者となり逆ナンされるといふ奉仕ぶりである…

「お前達い！掘り終えたな！そこに別の班の奴らから分けて貰った噛み噛み白菜を投入しろ！」

「『『『おぉおー！』』』」

とそのまま何故か噛み付く習性のある魔法生物　噛み噛み白菜を投下した親衛隊は落とし穴を擬装、流石に土を被せるとバレるので立体映像で擬装したのだ

「東博士と銀狼殿の予測コースだと敵は必ず道を渡る！そこを落とすのだあー！」

「『『『おぉおおー！』』』」

「もし仮に民間人が落ちても心配するな！責任は隊長が取り陛下が治療してくれるだろう！つまり俺達に責任はないQ E D !!」

「『『『Q E D Dー！Q E D Dー！Q E D D !!』』』』」

「しかし俺達のこの任務は誰にも評価されないが隊長とシエフィールド姐さんの恋路を邪魔するものは我等親衛隊のウォーカーで踏み潰してやろうぜ!!」

「「「「「おおおお!!」」」」」

士気の高い集団である、何せ普段からハルトとハウンドの直参としてあらゆる戦場を駆け抜けた逢魔屈指の戦闘集団、特に逃げ隠れする敵の追跡や罠の設置技術は逢魔最強（ハルトの逃走阻止の為に磨かれた技術）

そして仲間思いの熱い心を持った兄弟なのだが…

普段から問題児気質のハルトと我の強い親衛隊に囲まれている苦労人それがハウンドなのであった

「副隊長！敵が予測進路に入りました！」

「よし全員隠れろ！」

と隠れたと同時にボロボロのビジネスウーマンがヨロヨロと歩いてきた

「まったく…何のですかあの落とし穴は…それとあの襲い掛かるキャベツは…おのれラタトスク妨害工作とは言えここまでやるか…いや魔王側なのか…それなら納得もしかし最強の私が落とし穴なんて古典的な罠にはまるなん……てえええええええ!!」

哀れエレン、再び落とし穴へと放り込まれたのであった

「作戦成功!」

「よし蓋をしろ」

「「「イエツサー!!」」」

そして流れるように落とし穴に鉄板で蓋をしてエレン妨害工作に勤しむ親衛隊であった、生コンクリートじゃないだけ情けである

「い、いやあああああ!またキャベツがああああ!」

因みにそれは白菜です

—————

因みにその守られてる2人はと言うと楽しくデートしていた

そしてナツキはと言うと

「まーてー！ー！！」

「ぎゃあああああ！何でさー！ー！」

エルフナインを背中に乗せて逃げていたのであった

—————

さてさてさーて、そんな感じでハルト達は折紙と土道のデートを見ていたのだが！その時！！

「あ、アレはまさか!!」

「どうしたのさハルト？」

「いやいやそんな…だがしかし!!こんな事が…お、落ち着け、俺!!そうだ俺はいつだって冷静さだけは忘れない男だ…」

『どの口が言ってるんだ?』

かつてない程に動揺するハルトに鈴音は困惑する今までこんなにこの男が動揺したことがあっただろうかと……

『きゃあああああ!門矢さんだあー!』

『ゼロライナーだああ!』

『……………』
『気絶』

失礼かなりあった、寧ろ平常心でいたことの方が少なかつた

「どうしたのさハルト？」

「あ……ああ……アレだ！」

「ん？」

そこには大きな本屋でのサインイベントがあるようだが……あ

「か、神山飛羽真さんのサインイベントなんだとお!!こうしちやいらねえ!すぐに並ぶんだ!!」

『落ち着け相棒!!サインイベントは明日もあるんだ!今日じゃなくても良いだろう!』

「相棒!明日って今さ!」

『ジヨジヨ風に言つて誤魔化せると思うなあ!!』

「ハルト？」

「はい!!」

「明日にしようね」

「……………はい」

「うん。じゃあ行こうか」

「はい!!」

『やはりハルトには錫音達が必要だな』

『』『』『』『』『異議なし』『』『』

やはりストッパーが必要なハルトであった

さてデートも佳境となり十香を封印し土道が折紙に狙撃されたあの高台まで来た

いよいよ封印かという時に事件は起こる、何と高台の柵が壊れて折紙と土道が落下したのだ

「アレは洒落にならねえぞ」

『サイガ』

ハルトはアナザーサイガに変身するとフライングユニットを使って飛ぼうとしたが
錫音に止められた

「何で止めるのさー！」

「あれ！」

「え？……っ！」

その視線の先には巨大な竜の骨、それが杭のように突き刺さっているではないか間違いない

『プリミティブドラゴン!!』

「!!!」

その咆哮と共に再度着地したセイバーなのだが予想外は更に重なっていく

それは土道に宿る精霊の力が流出し折紙の中にいる悪魔を目覚めさせてしまったのだ反転折紙はすぐさま攻撃対象をセイバーに向けるがプリミティブドラゴンとなつているセイバーにはそれが反撃行為と捉えられまさかのセイバーvs反転折紙という異種格闘技が開幕したのである

「は、ハルトどうしよう」

「やれやれだぜ少年君を助ける、折紙も助けないとダメなのは王様の辛い所だな」

『どうする？セイバーの力は凶悪だぞ』

「だから初手から全力で行くぞ」

アナザーグランドジオウオウオッチを構えたその時！

『ルパン!!』

「え?」

気の抜けた声と共にアナザーグランドジオウオウオッチを盗られてしまった

「はあ!!ちよつ!誰だ!!」

と答えるとそいつは木の上から名乗りあげるように宣誓した

「私の名前は仮面ライダーパン、以後お見知りおきを」

そのカイゼル髭を思わせる顔と金の鎧、間違いない

歴史輝く孤高の大泥棒 仮面ライダーパンではないか……いや待てよ……とスマホを見て一言

「ちよい待て！お前七罪だろ!!」

するとルパンは明らかな動揺を見せたではないか

「だ、誰のことだろうか！私は七罪などというネガティブ思考全開の気弱な儂い美少女ではない！」

「嘘つけえ！なら何故そこまで詳細な情報が出てくるう！」

「なら何故私を七罪だと思うのだ、教えてもらおう」

「だって、そのルパンガンナーは東とキャロルと俺が作ったし」

「え？」

「一応俺達の作ったライダーシステムには発信機をつけてるのよ盗まれた対策も兼ねてね…だから今頃ピースメーカーは大騒ぎじゃないかなあ〜」

「な、何だと！」

「さて、アナザーグランドジオウオウオツチを返してもらおうぞ今なら悪戯の範疇で許してやる」

「ふざけないでくれたまえ！私は君のお宝を頂いたまでだ」

「なら残念、お前は何一つ俺から盗めてないな」

「何！」

「何せ俺の宝物は……」

ハルトは錫音を抱き寄せてルパンを見て一言

「逢魔で暮らす者、そして俺を愛してくれる奴等だ!!」

「何だと！この力ではないのか!!」

「力はただ力だ、それを使って何を為すかだよルパン……そしてあるお婆ちゃんが言っていた二兎を追う者は二兎とも取れ、そして人のものを盗む奴はもつと大事なものを無くすとな……取り敢えず返してはもらおうよ」

『STAG』

「あとこれは俺のあるあるだが怪盗を捕まえるなら探偵と刑事の出番だろ？なあ」
『!!』

「え！ちよっ！」

同時に放たれたスタッグフォンの体当たりによりアナザーグラウンドジオウウオツチを手放してしまいハルトの手元に戻ったのである、そして倒れたルパンを閉じ込めるようにシフトカー、ジャステイスハンターが檻を作り閉じ込めたのであった

「さてと七罪、お前にはお仕置きと行こう」

「だ、誰が七罪だ！私は仮面ライダーパンで」

「ハルト待ちなよ、七罪のお仕置きは私がやろう今は彼女達を頼んだよ」

「……………分かった！」

ハルトはそのまま走り出すが

「さて七罪、君は何故ライダーシステムを盗んだのかな？」

「だから私は仮面ライダーパ 「ハルトに頼んで今日の食事をガリだけにしても良いのだぞ？それも市販のやつだ」 申し訳ありません出来心でつい…」

あっさり自白したのであった

「まったく…だが何故ルパンガンナーにしたのさ…」

「その……実は…何故か呼ばれたような気がして…」

「ふーん……」

呼ばれたか…ハルト風に言えば運命とでも呼ぶものだろう

最たる例がT2ガイアメモリ、あれは適合者を自分で選ぶ それと同じようなものだろうな…

「なら仕方ない、それは君に預けておこうただし悪用はしちやダメだよ」

「いいの！」

「そりゃね前にハルトの記憶喪失なんとかしてくれたし…それと一応聞きたいんだけど
さ」

「何だ？」

錫音は檻越しで彼女に尋ねた

「実は最近さジャンヌやベアトリス、二亜みたいに候補が増えるから確認するけどね君のハルトに対して持つてる感情はLIKE？それともLOVEどっちかな？」

「っ!!」

さてハルトはその頃

「さーてと、やるか先ずは少年君を叩き起こす!んで靈力を封印してもらおう」
『グランドジオウ』

「変身!!」

『祝え!アナザーライダー!!グランドジオウ!』

「よし久しぶりに行くぞ皆!」

『ちよつと待て!リアクターアックスを使ってくれないか?』

「けどさセイバーの火炎剣烈火は炎を吸収するだろ相性が悪いって」

『安心しな火炎剣烈火が取り込むのは炎だ熱じゃない』

「成る程、そういう事ね…こい！リアクターアックス!!」

『リアクターアックス』

「けどこれどう使うのさ」

『先ずはメモリを差し込め』

そう促され俺は原子炉、反射炉、融合炉に代表される炉の記憶を内包したメモリにして裏風都なる危険な街の番人の力を解放する

『REACTOR!』

ガイアウイスパーを鳴らしてリアクターアックスを装填すると起動状態に入ると

アックスの刃が赤熱化、叩き切るではなく熱で焼き切る事に特化した姿へと変わりはじめ

「おおおお!!いいねえ!俺の好みの武器だ!」

『どんな防御も一刀両断つてな!』

『ま、本来はジョーカーカード・パント用だから気をつけろよその斧にはリアクターの過剰出力と熱を吸収し任意で放てる能力がある、つまり溜めれば溜めるほど威力が上がるわけだ』

「おう!ならお前達の中にある熱、俺に見せてくれよな!!行くぞアークレーディ!!」

『『『イエエエエエー!』』』

「良いレスポンスだな!お前ら最高だーぜえ!!」

『』『』『おーーーーー…』『』『』

『俺達のバイブスをあげてどうする』

「つしやあ！何か今なら切れる気がしてきたぜ！」

『正気か相棒!!精神世界の熱量で敵が倒せるから苦勞はないぞ!』

「バツカだなあ相棒、モモタロスも言ってたろ…戦いってのはなあノリの良い方が勝つんだよ!!」

『因みにリアクターアックスにあるスロットにもう一つメモリをさせるぜ!!』

「つしやあ!!んじや行くぜ行くぜ行くぜ!」

そしてアナザーグランドジオウが走りながら選んだメモリは

『JOKER』

初手から適合率カンストしているメモリにして切り札のクライマックスだった

『おいしいいいい！何初手から切り札使ってた!!』

「全力全壊!!」

同時にリアクターアックスを掲げるとジョーカーメモリとリアクターメモリ両方の出力向上により何と右手にバレーボールサイズの太陽並みの熱量を帯びた火球が生成されたのであった

『少年まで殺す気か!』

「今思ったが少年君の人外並みの回復力なら遠慮する必要がなかったぜ!!」

『おい誰か！こいつに手加減を教えてください!!』

「……………はっ！今この技の名前を思いついたぞ！」

『少しは悩んで欲しかった!!』

「W風に名乗ろう！リアクター!!チャージアンドファイヤー!!!」

『思ってたよりネーミングセンスが成長しているう!!』

その勢いのまま放たれた小型太陽はプリミティブドラゴン目掛けて突貫していくが流石に野生の本能で危険を察したからか新しいライドブックを装填した

『ストームイーグル!……GET!』

『烈火抜刀!プリミティブドラゴン!!』

!!!
」

『グラップ必殺読破！クラッシュ必殺撃!!』

青白い炎を帯びた翼で飛翔して回避しようとするが

「あ、ちよっ！どいてええええ!!」

!!!
」

予想外、飛んで逃げた先にはアナザーバースになりカッターウイングで飛んでいたナツキと激突したのであった

その勢いそのまま落下したプリミティブドラゴンはそのままだ小型太陽に衝突し大きな爆破を起こしたのであった

「お前にファイナーレはない」

「じゃ……ねえだろおおおおお!!」

エルフナインをおんぶしたままナツキのマジギレツツコミがアナザーグランドジオウの顎をとらえたのであった

「????」

「何だ今の技！火球が太陽に見えたぞ！アレか！王の力で太陽まで作れるようになったんかあ！そして暴走してるとは言え士道くんは何て物撃ち込んでるんじゃあああ！」

「え？問題なくね？」

「全人類が風鳴司令レベルの耐久性を持つてると思うなあ!!」

『残念だ相棒、今だけはナツキが正しい』

「まあ良いじゃん結果オーライだし」

『そんな相棒にバッドニュース！流石にジョーカーメモリの出力向上能力でリアクターアックスでも処理できない熱を持ちまっただ！暫く冷却するから回収するぜえ』
『よしこのデータを元に頑丈なの作るぞー！』

と言うとりアクターアックスは消えてしまった

『それと最近の変身頻度からだがアナザーグランドジオウのメンテナンスもする預かるぞ』

「ま、仕方ないな」

変身解除するとアナザーグランドジオウオウオッチはアナザーデイケイド達に回収されて整備に出されたのであった

「んじゃ、後は折紙を止めるか！」

「その前に士道くんの容態は!？」

「大丈夫大丈夫、全身大火傷程度で威力抑えたからすぐに戦線復帰するって」

「今すぐマッドドクターで治せ!!」

自分と同じようにしろ!と目で言っているが

「ええ!今使うの面倒だし……ほいっと」

『ジオウII』

アナザージオウIIの力で回復させたのであった

「何で!ねえ何で俺と同じようにしないの!?!」

「いやこつちの方が早いし」

「なら俺もそうしてよ！」

「やだ！何故か知らないけど俺…俺は…」

「ハルト？」

「俺はお前の苦しむ顔見るのが大好きなんだ！」

「良い笑顔で最低の事言わないで貰える!？」

『そんなんだから魔王って呼ばれんだよ』

「……………っ！」

「今気づいたの!？」

「はっ!!」

「あ、起きたか」

「大丈夫かい士道くん！」

「あ、はい……っ！折紙!!」

しかしあの折紙を止めるには

「あの力だと……あれは少年君に封印してもらうしかないな」

「大丈夫、俺達が道を作るよ！」

「2人とも……」

「と言いたいが」

「これは初めてのルートだね…気を引き締めないと」

「え？」

ナツキの死に戻りでループした世界でも初めての事 それはつまり

「よ……………漸く見つけました…そ、その精霊は…我々が頂きます……………」

現れたのは何故かボロボロのエレンであった

「いやその前に大丈夫？」

「よくも…よくも!!今まで落とし穴や滑る床、金だらいななど古典的な方法で追い詰めてくれましたね！」

「何それ？」

「あくウチの親衛隊が何かしてたな…アイツら落とし穴掘ってたのか」

『因みにだが、その様子はピースメーカーで生中継されてたぞ…バラエティ番組感覚で見ているキヤロルが爆笑していた』

「あ、あのキヤロルが!!そ……そんな……俺の前では基本的にムスツとしてたりツンデレな感じのキヤロルが屈託もなく笑ってた……だと!」

そんな俺にはいつも恥ずかしそうな笑みしか浮かべないのに!!

『そりや文字T着てたら恥ずかしそうに笑うわ』

『日頃の行いの賜物だろ?』

「そ……そんな……っ!」

「ちよっ！おいハルト落ち着け！！瞳からハイライトが消えてるぞ！！」

「俺の怒りや悲しみを今ここにぶつけてやる！！」

「良いでしょうならば見せてあげます、私の新しい力を！」

そう言いエレンが取り出したのはハルトの師匠が持ち得るバツクルであった

「戦極ドライバーだと！」

—————

その頃 ピースメーカーでは

「キャロル……」

千冬の咎めるような視線に困り顔でキャロルは答える

「す…すまんお前達、流石のオレもハルトが彼処までなるなんて思ってもなかった…笑
いすぎて…少し息苦しい……」

「いやあやつぱりハルくんの愛は重たいねえ〜」

「寧ろああでないと困る」

「旦那様が嫉妬に狂う姿…良いわあ…」

恍惚に笑うアンティリーネを見てベアトリスは引いていた

「うわあ見事に全員拗らせてますね」

「アンタも何れそうなるかもね」

「や、やだなあジャンヌさん辞めてくださいよく私がそんなヤンデレ手前みたいな感じ
になると思いますか?」

「ベアトリスは全力で否定するが

「いやその素養はお前にもあるぞ？」

「やだなあ千冬さん辞めてくださいよ〜」

「そもそもハルトに惚れた段階で素養あり」

「アイツは惚れた女は手放さない程の独占欲の塊だからな」

「惚れてしまったら最後の蟻地獄だよ〜まあ束さん達はノリノリだけど〜」

「あのバカに惚れたなら地獄の底まで付き合ってもらおうぞベアトリス、でなければ離れろ」

「わ、私は……」

「ま、答えを急かせる理由もないがな」

と千冬は笑うと画面の向こうのハルトを見ていたが

「何故貴様から正妻オーラが出ている!!」

「残念だったなキャロル！記憶喪失時にハルトと良い感じになったのは私だ!!」

「おのれ！記憶を無くした隙にハルトを籠絡するとはこの雌猫め!!」

「今更だけど、そのハルトくんと距離を詰め方は狡いよチーちゃん!」

「そうね…あの時の旦那様ならば…一緒にお風呂入って既成事実を…そうすればっ!」

「それ…ハルトが危ないよね…けど千冬は狡い!」

「その隙を見逃した段階で負けは決まっているのだお前達!!!!」

「まあ私の方がご主人様と長い付き合いなのですがね」

「火に油を注いだなベルファスト!!許さんぞ!」

その次の瞬間、艦内で正妻戦争が幕開けたのは言うまでもない

「え…………ええ…………」

「あははは!いやあマスターがいないのは残念ねえ」

「ジャンヌさんはハルトさんの事好きじゃないんですか?」

「……………嫌いよあんな奴」

「へえ〜」

「な、何よその目は!!」

「うわちよっ!!」

ベアトリスはドン引きしていたのは言うまでもなくジャンヌはコーラを飲んで修羅場を満喫していたがベアトリスのニヤケ顔にイライラし炎で攻撃した

因みにウオズ達家臣団はと言うと危険を察知してピースメーカーから離脱してハルト達を見守っていた

そしてハイライトが消えた瞳でハルトはアナザーウォッチを構えていたオーラが未来の姿に近い感じていたが加勢すべく行こうとした途中に

「アレは十香殿!」

「む?お主は……そうだ!祝えの人だ!」

「私の認識ってそんな感じなのですか？」

「いや、あつてるでしょ」

「その通り！」

「うんうん」

「そ、そうだシドーと転入生を助けたいのだ、力を貸してくれるか！」

「無論ですとも、では皆さん此方で」

と全員マフラーワープで移動したのであった

その頃 ハルトは戦極ドライバーを持っているエレンを見て困惑していた

「そのベルトをどこで…」

「ああこれですか？黒の菩提樹なるカルト集団の残党を襲撃した際に持っていた旧ユグドラシルの遺産ですよ戦極ドライバーでしたか？まあ普段こんなものは使いたくありませんが貴方達を倒すには必要なようですからね！」

と息巻くエレンが取り出したのは赤いオレンジのロックシードであった

『ブラッドオレンジ！』

「は？」

「変身」

『ブラッドオレンジアームズ！邪の道オンステージ！』

その姿は鮮血に染まりし者 覇道の果てに全てを倒した存在

天下布武 仮面ライダー武神鎧武 出陣

「こんなもの？使いたくない？その戦極ドライバーで変身したいのに出来ないで苦しむ人間がどれだけいると思ってるんだ？現に俺だつて変身したくても出来ないんだぞ…ヒマワリロックシードで栄養補給しかできない俺の気持ちを考えた事があるのかあ!!」

『は、ハルト！黒いオーラが出てるぞ！』

「それ以前に師匠と同じ格好をして生きて帰れると思うなよ!!!消しとぼしてやるよパチモンがあ!!」

『黒い衝動だナ！ライダーオタクの地雷を踏み抜いたぜあの女!!』

「あれそつち！今さ黒の菩提樹とかユグドラシルの遺産とか色々気になるワード出てきたよ!?!」

それ以前に戦極ドライバーを悪用するだど！そんなの

「DEM絶対許さねえ!!師匠達に変わって俺が成敗してやる……あとその姿で俺の前に立つんじゃねえよ」

その時ハルトは怪人王の力によりオーバーロードに擬似変異しクラックを開くと中から巨大な野太刀のような剣 黄泉丸が地面に刺さると

ハルトは躊躇いなく手に取ると剣がウォッチに変わると直ぐに起動するとハルトの体に抱きつく骸骨が鎧と化した

その顔はまるで子を失い悲嘆に暮れる落武者

本来の歴史では生死をひっくり返す悪のライダーにして

あのデイクイドやハルトの師匠 鎧武も追い詰めた存在

15の歴史を背負う者

『ファイフティーン』

アナザーファイフティーン

「ああ……よし」

そして近くに生えていたヘルヘイムの実をもぎ取るとロックシードへと姿を変えるのだが

不思議な事が起こった！

今までハルトが集めてきた

剣、電王、デイケイド、ウィザード、フォーゼ、そして鎧武のサインに宿るライダーの力がそのロックシードに吸収されていったではないか！

その力は

「平成ライダーのロックシード!?…けどハルトには使えないんじゃない」

「それを試してやる」

『デイケイドアームズ！破壊者！オンザロード!!』

「お前が平成ライダーになる？10年速いわ戯けええ!!そして死ぬえええ!!」

『デイケイド スカツシユ!』

「ええええ!!」

アナザーファイフティーンの頭にデイケイドの顔が装着されるとアナザーファイフティーンの体に鎧として展開されたと同時に武神鎧武ヘイメンションキックを叩き込むと言う不意打ちをかましたのであった

「何で!? 仮面ライダーの力宿せてるの!?!」

「その前に祝え! 新たな歴史を刻みし我が魔王に宿る15の力! その名もアナザーファイティーン! また1人新たなアナザーの力を宿した瞬間である!」

「ウオズ!?!」

「それで何で魔王ちゃんがライダーのアームズ着れてるのさ普通なら反発するよね?」

「しかも武器とは違うぞ、あれら変身用の純正のライダーアイテムだハルト様には合わない!」

「そうじゃな最初からそれが出来ているならハルト坊はノリノリで変身しておるわ」

「恐らく我が魔王と歴代ライダーと繋いだ絆がアナザーと仮面ライダーとの共存を可能にしたのではないでしょうか」

「確かにアナザーグランドジオウには反転ってあるけど…」

「しかし変身出来るアームズもサインを貰った方に絞られますね、現にあのロックシードにはサインを貰ったライダーの顔しかない」

「だとしても理不尽じゃないです!？」

「まあ魔王ちゃんが理不尽なのは今更だしね」

「うむ…我等も参戦する…待て!あれは仮面ライダー鎧武なのか!!」

「師弟対決になっているじゃと!!」

「お前達の目は節穴ですか!あれは武神鎧武!鎧武のそっくりさんです!電王とネガ電王みたいなものですよ」

「ああ成る程」

「全くそんな知識で逢魔の幹部を名乗るとは恥ずかしい我が魔王に笑われますよ!!」

「いやその前に肅正コースでしょ、俺の師匠の見分けもつかぬが愚か者め! って」

「未来の我が魔王ではないのでそこ迄はいかないのでは?」

「取り敢えず加勢するぞハルト! そして見てろDEM! 武神は1人じゃないんだぜ!」

『BLACK GENERAL BUJIN SWORD』

「いざ参る!」

ナツキはアナザータイクーン・ブジンソードに変身して抜刀し参戦したのであった

「いや君のは武刃でしょ?」

「惜しい一文字違い」

「しかしハルト坊の師匠に似た姿を取るとはあの女は運が無いのお」

「ええ魔王様にとっては何よりの挑発ですしね」

「お前達はそんな所で観戦してるだけか？」

「先輩達はお高く止まってるねえ」

「ま、そんな姿じゃ俺達が四天王になる日も遠くないな下がってろ、お前達は前座の四天王に過ぎない」

「「「はっ」」」

かつて三人娘を煽り倒したセリフをそのまま返されるとは思わなかった四天王はマジギレしていたが

「テメエ等、何ぼさつとしてやがる！ さつさと変身して手伝うか少年くんの援護しろや
!!」

その一喝で全員を従えさせるはハルトにしか出来なかったのである

「では我々も参りますか」

「ああ…取り敢えずはボスの為に」

全員変身したのである

『ファイナリー…』

『仮面ライダーザモナス／ゾンジス!!』

『1号』

『ヘンシン！ WAKE UP！』

『NEGA FORM』

『SKULL FORM』

『GAOH FORM』

正に劇場版のような豪華さに加え

「ここに仮面ライダーパン、参上」

「お待たせ皆！」

ルパンとソーサラーも加わったのである

「くっ！こうなったら…アルテミシア！」

「呼んだ？」

そこに現れたのはオレンジ色の髪をした女性　AST最強格の魔術師　アルテミシアであつた

「手伝いなさい！数が多すぎます！」

「そうだね多勢に無勢なら行くよ変身」

彼女が取り出したのは黒いバナナロックシード

それをドライバーに装填してカッティンググレバーを倒した

『カモン！バナナアームズ！ナイトオブスピア!!』

己の野心に従う男爵　仮面ライダーブラックバロン

しかしそのまま直ぐに展開した為　アナザーファイフティーンから

「えええ！そこはバナナ!?バナ、バナナ!?つてやるべき場面でしょうがあ！つか…戒斗の…バロンの姿まで借りやがって許さねえ!!」

「何それ？行くよ…ふっ！」

「おっとお前の相手は俺達だぜ」

「楽しませろよ」

「邪魔しないで」

「生憎だが…趣味なんだよ！」

ネガ電王、幽汽、ガオウvsブラックバロン

そしてアナザーファイナリー筆頭に四天王達は十香を助ける為に動いたのであった

「加勢しますよ」

「助かる！」

「先陣は僕の仕事だあ!!」

そのままアナザー1号は前輪を使い反転折紙を踏み潰しかかるが天使による防御で止められる

「なら一旦突破だよカゲンちゃん！」

「よし行くぞ！」

『FINISH TIME! ゾンジス/ザモナス TIME BREAK!!』

2人のライダーキックはやはり障壁に阻まれてしまうか

「ならば「力を合わせましょう！」何？」

「バラバラじゃダメなんです、だから！」

「断る、弱卒の頼みなど聞け」「お、お願いします」……」

とヤクヅキが否定しようとしたが四糸乃がうるうるとした瞳でお願いしてきたので

「仕方ありませんね…良いでしょう」

「ウオズちゃん!？」

「我等のやるべき事は最短で彼女を助ける事違いますか？それに彼女は我が魔王覚醒の恩人 その彼女に借りを返さないのは我が魔王も望まない事ですよ」

「違わんな」

「じゃやりますか！」

共闘戦線と相なったのである

—————

そしてアナザーファイフティーンvs武神鎧武はと言うと

「らあ！」

「せいやあ！」

「くっ！」

師匠を侮辱するような姿に対し怒り心頭のハルトの黄泉丸の攻撃は一撃一撃が重くのしかかる

何ならデイクイド アームズだが激情態並みの強化補正されていたりする、それを援護するようにアナザータイクーンは鋭い斬撃を放つ

「はあ……」

『ダイケイド オーレ!』

するとロックシードに刻まれた剣が反応しブレイドブレードが現れたのである

『ダイケイド スパークング!』

『BUJIN SWORD STRIKE!』

「おらあああああ!」

「はあ!」

同時にエネルギーがチャージされ雷の斬撃と黒いエネルギー斬撃が襲い掛かる

「グアアアアアアア!」

倒れた武神鎧武を見るとアナザーファイフティーンはブレイドブレードを投げ捨てず
ずにと地面に置くと

「終わりだ」

『ディケイド スパーキング!』

アナザーファイフティーンはディメンションキックを叩き込もうとしたが

「させない!」

『バナナスカッシュユ!』

バナスピアーにより刺突攻撃が横合いから襲いかかりアナザーファイフティーンは転がるとブラックバロンは武神鎧武と合流して

「逃げますよ」

「仕方ありませんね!」

無双セイバーの銃攻撃で煙幕を作ると撤退したのである

「すまないボス」

戦いの邪魔をした事を謝罪するネガタロスであったがアナザーファイフティーンは変身解除して

「気にすんなネガタロス…お陰で頭が冷えたよ」

「しかし黒の菩提樹…ユグドラシルの生き残りか」

「これさ…師匠絡みつてなら話しておかないと不味いな」

俺だけで解決して良いか悩ましい案件になってしまった

そして士道達は仲間達の援護により折紙の心を開き靈力を封印する事に成功した
親への愛を士道に求めていたと…彼女らしい理由だったが改めて宣戦布告して士道を落とすと決めたらしい…ふむ頑張れよ

その副作用かは分からないが改変前の記憶を思い出し錫音と俺とまた楽しく買い物をしていするなど日常を取り戻し始めている

めでたしめでたしと言いたいね

因みに少年くんは二亜の助言からプリミティブドラゴンの制御方法を思いついたらしく物語を書いて二亜に持っていつているが

「没」

「そんなあ!!」

本業ゆえに妥協しない二亜の拘りを感じたのであった

そして俺は師匠の元へと行き今回の武神鎧武やブラックバロンとドライバーの出所を話す

「黒の菩提樹だつて！」

「DEMも戦極ドライバーとロックシードを集め始めたようです沢芽市の皆さんにも危険が」

「そうだな至急伝えないと…よし帰るか！」

「里帰りの決断早いですね流石師匠！」

「お前も来るか？」

「はい？」

次回 ハルトin 沢芽市

番外 ハルト i n 沢芽市!!

前回のあらすじ

折紙の霊力を封印したがDEMのライダーシステム導入にハルトは自らの師を尋ねる

そして師は仲間にごこのことを伝える為に地球に帰還したのであった

沢芽市

「懐かしいなあ、この街の空気も」

ハルトの師にして仮面ライダー鎧武こと葛葉鋤汰は普段の姿ではなく人の頃の格好で街を歩いていたのである

「お……………うわおおおおおおおー！」

その背には感動に打ち震える弟子を連れて

「わ、我が魔王…お、落ち着いてください!!」

「いや無理だろ？ハルトに聖地巡礼させといて感動するとかさ」

途中合流したウオズは慌てて介抱しているのだがナツキは最早手遅れと匙を投げている

「ここ、ここが沢芽市！師匠がかつて住んでた街にしてビートライダーズの聖地…そして黄金の果実を巡って争った場所…あ、ありがとうございます師匠！このような凄い場所に連れて来てくれて！」

「大袈裟だな来いよ、俺の仲間の所に案内してやるからさ」

「は、はい!!乗れウオズ！」

「はっ!」

ハルトはサクラハリケーンを出した師匠を追いかけるようにウオズを背中に乗せるとアナザーオートバジンを出して追走したのであった

「あ……あれ!俺は!」

「お前ば自分のあるからそれで行け」

「酷い!」

とナツキは涙目でアナザーダイバー2ndを走らせたのであった

そしてここはビートライダーズがかつてインベスゲームで競い合っていたステージ
そこでは

歪みあっていたダンスチームが一つとなってダンスをしていた、その中に

「おーい！みんなー!!」

紘汰が手を振りながら駆け寄ると仲間達は驚きの表情を見せる

「葛葉!?!」

「紘汰さん!!どうしてここに!」

「久しぶりだなミッチ!ザックも元気してたか!!」

「あ、はい……お久しぶりです」

「どうしたんだよ急に帰ってきて」

「実はちよつとした情報を手に入れて戻ってきたんだ」

「情報?……あとその前に聞きたいんですが…」

「ああ……あそこの奴さ何で泣いてんだ？」

ミツチこと呉島光実は目線を絃汰の背中にいる何故か両膝をついて泣いている男に移っていた

「ほ……本物のアーマードライダー龍玄とナツクル!?……お、おおおおお落ちて着け今日の俺は師匠の付き添いだろ！こんな所で師匠に恥をかかせる訳にはいかない……耐えろ……俺……堪えるんだ！」

『おお相棒が本能と理性との間で葛藤しているぞ!』

「……サイン頼んだら貰えないかな!!」

『本能が勝ったな』

「先ずは落ち着けハルト」

「なあ…アイツは誰だ？」

「ああ俺の弟子だ、何か俺達のファンらしくてな会えて感動してるらしい」

「紘汰さんの弟子!?じゃああの人も」

「俺や戒斗と同じように元人間のオーバーロードだな」

「そうなんですか…」

「全くそう見えねえな…こう言っちゃ悪いけど2人と比べると」

「当たり前ですよ！俺なんかを師匠達と比べないでください!!!俺はオーバーロードの中でも最も小物…最弱よ」

「自分で言ってる悲しくない？」

「最終回のコウガネよりは強いと思いたい」

「おいハルト、そんな所にいないでこっち来いよ」

「は……はい師匠!!」

ハルトは手足が同じタイミングで動いていたのを見てナツキは溜息を吐く

「はははははは初めまして!!お、お俺はーと、ととと…常葉ハルトって言います、宜しく
お願いします!!」

「我が名はウオズ、その彼の従者のような者です…そこにいるのはナツキ…ただのオ
マケです」

「酷くないか!?!」

「お前はエビフライの脇にいるパセリくらいの価値しかない」

「そんな事ねえよ！あとパセリ美味しいだろうが!!」

「はは、宜しく僕は呉島光実、こっちはザック」

「宜しくな！」

「は、はい!!」

「所で紘汰さん、その話って」

「ああ……ここじゃ何だから場所を変えないか？」

「そうだなシャルモンのおっさん達にも話した方が良さそうだな」

「シャ……シャルモン!!!」

「奥方様達のお土産に買いましょうか」

「そうだな！」

「お、俺も買つとくよ…エルフナイン達のお土産に」

ハルトの瞳はまるで子供のように輝いていたという、その道中で

「あの…すみません…お二人のサイン頂けたらと…」

ちやつかりサインをもらっていたハルトであった

そして此処は洋菓子店 シヤルモン

「!!!!」

満面の笑みを浮かべながらケーキを食べるハルトは感動していた

「これがシャルモンのケーキ…すげえ美味しい…こんなに美味しいケーキ食べたの初めてだあ…」

静かに泣いていたのであったがその様子を見ていた

「なあ…アイツがお前の弟子？」

「変わった子ね」

「まあ確かに変わってる奴だが良い奴だぞ？」

そこに現れたのはメガネをかけた男と屈強な肉体を持った方である

「っ！風蓮さん…アーマードライダーブルーボに城之内さん…アーマードライダーグリドン!？」

「わてくし達の事も知ってるとは」

「俺達も全国区に知られているのか！」

「ワールドワイドに知られています!!」

「いやまあそうだけでも!!」

そしてハルトは懐からすかさず色紙を取り出して

「あの良かったら…サインとか貰えませんか！」

「よし貰ったら話してくれハルト！」

「はい!!」

ハルトは恒例のサインを貰った所で本題に入る

曰くDEMが黒の菩提樹残党からドライバーとロックシードを回収し変身した事を話した

「DEMが戦極ドライバーとロックシードを！」

「あらドライバーがユグドラシル並みの大企業の手に移ったのね」

「そんな…」

「写真もあります」

とハルトが見せた写真を見て皆が驚くなか

「これは…」

「この間戦った時の写真です……ちよつと色々あつて俺は今、DEMと戦っています……そのせいで師匠達に迷惑をかけてますが……」

「何言つてんだよ幾らでもかけてこいつてんだ肝心な時に頼りにならないで何が師匠つて話だからな」

「し……師匠!!自分一生ついていきます!!」

「ま、確かにユグドラシルの関係者でもある僕達を狙ってくる可能性はありますね」

「上等だ返り討ちにしてやる」

「落ち着きなさいな、それに1人忘れてるわよ」

「ああそうだなアイツも同じ気持ちだろうな、ミツチ」

「はい先程、日本に帰つたと聞いてますが……」

「え？ま、まさか!!」

「待たせたな……っ葛葉！」

そこに現れたのはスーツ姿の似合う貴公子がいた

「!!!!!!」

「落ち着いてください我が魔王」

「ここではリントの言葉を喋れ」

「た、たたたたたた!!」

『ダメだ興奮のあまりバグってる』

「ダメだこりゃ」

「貴虎!! 久しぶりだな!」

「お前どうして…まさかDEMの件か!」

「そうなんだよ、俺もそれを聞いてきたんだ! あ、紹介するぜ貴虎こいつは俺の弟子だ」
「弟子だと…そうか…お前も成長しているのだな」

「よせつて恥ずかしいだろう」

彼は呉島貴虎、かつて師匠と敵対したが絆を紡いだライダーで…色々とおかしい戦闘能力を有している人だ

「あ…あの! は、初めまして! 常葉ハルトです宜しくお願いします! ……その……サインください!!」

「……………」

「ああコイツ、アーマードライダーのファンらしくてな」

「そう言うことが良いだろう」

「あ、ありがとうございます!!」

横でわーい！と喜ぶハルトだが、ふと止まる

「あ、あのまさか戦極ドライバーを持つてるDEMと戦うってなったら…」

「無論俺も加勢する、ユグドラシルの遺産を奴等に好き放題させる訳にはいかない」

「勿論ワテクシも協力するわよメロンの君」

「感謝する」

「やれやれそうなたら策士も必要でしょ師匠？」

「勿論俺達も力を貸すぜ！」

「勿論です！」

「お、おいどうするよ相棒…百万の軍勢に勝るとも劣らぬ方々が対DEMに参戦してくる状況に俺は今全身が感動で震えている！」

『安心しろ相棒、それは昨日の酒が抜けてないだけだ』

「んな訳あるか！よし束に頼んでドライバーとかアイテム作ってもらわないとね！」

その一言で周りは静まる

「束って誰だ？」

「俺の奥さんです、いやあく実は戦極ドライバーとゲネシスドライバーも作れるくらいの天才でして「ドライバーを作れるのか!!」はい!!」

「それなら話は早いわねワテクシ達にも用意してもらえるかしら？」

「無論ですとも！もしもし束！」

『はいはい！ハルくんには仕掛けた盗聴器から大体の事情は分かってるよ！これからチーちゃんとドライバー持って行くから待っててね！』

「ちよつと待て盗聴って聞こえたのだが…」

貴虎のツツコミをハルトはスルーして一言

「ありがとう束!!大好き!!」

『東さんもだよー!!』

電話を切り終えると皆が驚いていた

「まさか凌馬以外にドライバーを作れる人間がいるとはな」

「これでまた戦えるわね」

「ありがとなハルト」

「お礼なら束にお願いしますよ師匠……ん? 待てよ……ライダーシステムを持つてる奴を
狙ってるなら……っ! もしかして!!」

と思いはルトはスマホに登録したある番号に連絡した

「もしもし玄さん!」

『久しぶりだな魔王、どうした急に？』

「申し訳ありません実は伝えたい情報がありました」

『奇遇だな俺もだ実は新しいTシャツを製作中でな今度観に来ないか？』

「そ、それは魅力的なお話です!!」

と以前の戦いで面識を得たハルトのファッションリーダーこと仮面ライダーローグ
氷室玄徳に連絡を取ったのだ

『成る程、別世界のライダーシステムをDEMが保有していると』

「はい、現状別のライダーシステムですが…ビルドのライダーシステムを狙ってくる可能性もあると思います」

『分かった警備を厚くするように言っておく…それと戦兎とポテトには此方から連絡し

ておく』

「ありがとうございます!!では今度新モデルの試着行きますね!」

『楽しみにしているぞ』

「ああ我が魔王のセンスがまた一歩」

「真人間から遠のいたな」

電話を切るとハルトは一息吐くと

「おいテメエ等、そこに直れ」

「おい…今のは氷室玄德…内閣首相補佐官のか?」

「はい、ちょっとしたご縁で仲良くさせて貰ってまして〜」

あははくと笑ってるハルトに貴虎は困惑するが気を取り直し

「情報提供感謝する、流石は葛葉の弟子だな」

「いやいや俺なんてまだまだですよ！日々精進です！いつか師匠に自慢の弟子と胸張って貰えるくらいじゃないとカッコ悪いですから！」

そうとも俺なんかまだまだ師匠達の背中を追いかけている非才の身だ、努力なんていくらしても足りないくらいだと思っっているのだからと

「は、ハルトが凄い殊勝なことを言ってるう！」

「わ、我が魔王が真人間に見える……これが仮面ライダーの力！」

『いや違うと思う』

「あれ？俺ってそんな人格破綻者に見えてた？」

「え？ギャグですか我が魔王？」

「嘘でしょ!!……あ、すみません！ケーキをホールで買っても良いですかー！」

「あ、俺も!!」

取り敢えずお土産のケーキをかうとハルトは満面の笑みを浮かべていた

「本当、うちの国に支店作ってくれないかなあ〜」

「国？」

「あ、言っただけでなかったなハルトは王様やってんだよ」

「はい！俺、王様やっています!!」

「「「え、えええええ!!」」」

「何……だと……!」

「いやその気持ちは良くわかる」

「その話詳しく聞かせて貰えないかしら」

「はい!!」

そしてハルトのシャルモン 逢魔支店誘致計画が始まったのであった!!

「しかし大事になりましたね我が魔王」

「ああ……だけど師匠達が本腰入れてDEMと戦うってなら俺達も気を引き締めていかな

いとな…もう俺達だけの喧嘩じゃないんだ…負けてられないな皆!!」

「は、ハルトが沢芽市に来て成長してるう!？」

「こ、コレほどまでに成長の兆しが見えるとは…」

と感動している2人を尻目に遠くからサクラハリケーンに乗ってきた2人が見えた

「ハーーーールーーーーくーーーーん!」

「束!!」

ドリフト駐車して降りてきたルパンダイブした束を抱きしめると

「むふふ…ハルニウムを摂取だあ!」

「何その粒子みたいなの?」

「説明しよう！ハルニウムとはハルくんの体が出てる私達の精神を安定させてくれる粒子なのだあ！」

「マジかよ！俺の体からそんな不思議な粒子が出たのか!!」

『出てる訳ないだろう』

「因みにこのハルニウムはかなりの依存性があつて定期的に摂取しないと束さん達は強烈な副作用に襲われてしまうのだあ！具体的には体の震えや独占欲の肥大化だね！」

「ガイアメモリよりも悪質な副作用じゃねえか！」

『相棒、ツツコミのポイントがずれてる』

「その前に衆目を考えろ駄鬼」

「ぎゃん！」

束の頭を叩くのはサソードヤイバーを入れた竹刀袋を持った千冬である

「ありがとう千冬」

「気にするな、それよりも……後で……」

「分かってるよ千冬」

「いてて……あ！ハルくんの師匠！久しぶりー！」

「久しぶりだな2人とも」

「それと……あの人達は……っ！」

「ほ、本物のアーマードライダーだよチーちゃん！」

「ハルト程ではないが、同じ力を使う身としては先達との出会いは感動ものだな」

「だね〜…あ！ハルトくん！コレ頼まれてたドライバーとロックシードだよ！」

と東が開けたアタッシュケースには戦極ドライバーとゲネシスドライバー　そして

「エナジーロックシードまで！」

そこにはレモン、チェリー、ピーチ、メロン、マツボックリ、マロン、ドラゴンフルー
ツと多様なエナジーロックシードがあつたのだ

「これを作り上げたのか！」

「いやあくまあ東さんは天才ですから！」

「天災だな」

「おや？一文字違うような…」

「と、取り敢えずこれで戦力は大丈夫ですね」

とミツチの言葉に安堵する面々だが

「では貴女を攫えばドライバーの量産も容易いと」

「世界の為について来てもらうよ」

そこに現れたのは先日 アーマードライダー に変身したエレンとアルテミシアであつた

「DEMのアーマードライダー！」

「こいつ等が！」

「おやおやお始まりの男、黄金の果実を宿すもの貴方の事も調べてありますよその力も私達がいただきます」

その一言を聞いたと同時にハルトがキレた

「あ？テメエ東と師匠をどうするって？笑わせんなよ、やれるもんならやってしろ」

「待てハルト」

「師匠？」

「お前は下がって彼女達を守っててくれ」

「そんな！これは俺の喧嘩ですよ師匠が出るなんて」

「偶にはカッコつけさせてくれよ、な？」

「……わかりました」

ハルトは下がるとビートライダー達はDEMの2人と相対する

「悪いが彼等に手出しはさせん」

「関係ありませんよドライバーとロックシードは奪うだけですから私達でね」

と2人が取り出したドライバーとロックシードを見てミッチとザックは驚いた

「あれは!」「戒斗の!!」

『ブラッドオレンジ』『バナナ』

『ROCK ON!』

流れるギターとファンファーレ、それに合わせて2人はレバーを倒した

「変身！」

『!!ブラッドオレンジアームズ！邪の道オンステージ！』

『カモン！バナナアームズ!!ナイトオブスピアー！』

「さあ行きますよ、お前たち！」

「[[[変身!!]]]」

『マツボックリアームズ！一撃！インザシャドウ！』

現れた黒い足軽の軍団を見て全員驚く

「黒影トルーパーまで…まさか連中は既に量産しているのか！」

「ええゲネシスドライバーやエナジーロックシードはまだなので、そのドライバーと

製作者の身柄を頂きます!!」

「そんな事はさせない!皆行くぞ!」

「[[[[おう!!]]]]」

『オレンジ』『ブドウ』『メロン』『ドリアン』『ドングリ』『クルミ』

『ROCK ON!』

因みにその姿をハルトと束はバットショットとファイズフォンで撮影し感動の涙を流していたのであった

「[[[[「変身!!」]]]]」

『ソイヤ!／カモン!／ハイ〜!／!!!』

『ブドウアームズ!龍!砲!ハッハッハ!!』

『メロンアームズ！天下御免!!』

『ドングリアームズ！NEVER GIVE UP!』

『ドリアンアームズ！Mr！DANGEROUS!』

『クルミアームズ！Mr！KNUCKE MAN!』

そこに現れたのは世界を守る為に戦うヒーロー達

過ちを償うもの 仮面ライダー龍玄

高貴なる戦士 仮面ライダー斬月

諦めずに成長する策士 仮面ライダーグリドン

妥協を許さない職人 仮面ライダーブルーボ

街を守る闘士 仮面ライダーナツクル

そして戦国乱世を制して天下を取った始まりの男

『オレンジアームズ！花道！オンステージ!』

仮面ライダー鎧武

「此処からは俺達のステージだあ！」

「—————!!!」

その決め台詞を聞いてハルトは号泣しながら倒れ伏した

「神はここにいたあ!!」

「ハルくん!？」

「はあ……コイツは……」

「行きなさい!!」

その合図で黒影トルーパーは走り出すがビートライダー達も武器を構えて激突する

その姿に

「うおおおおお！師匠達！頑張れエエエエ！！」

『お前も戦え！！』

ハルトは大興奮のまま、手を振り応援していたのである……ただのファンですねこうなると

「だ、だが俺なんかが師匠達の戦いを邪魔しちゃ……だがこのステージに上がりたい気持ちもある……くそ！俺は一体どうしたら良いんだ！！」

「そう言えば、お前の師匠はこう言ってたな彼女達を守れと」

「え？ああそうだな」

「なら私達が参戦したらハルくんが守ってくれるよね？」

「……………そりやもちろん」

「言質は取った…行くぞ束」

「あいあいさー！前に助けてくれたお礼しないとね!!」

と千冬はゲネシスコアを合わせたドライバーを束はゲネシスドライバーを取り出した

「2人とも?」

『メロン』『メロンエナジー』

『ドラゴンフルーツエナジー!』

「変身!!」

『ソイヤ!／ソーダア!』

そして2人にもアーマーが装備された

『メロンアームズ！天下御免!!…MIX！ジンバーメロン！ハハア!!』

『ドラゴンエナジーアームズ!!』

新たなる戦装束 斬月・ジンバーメロン

赤龍の公爵 仮面ライダーデューク・ドラゴンエナジーアームズ

その変身した姿に

「斬月だと！」

「デューク!?!しかもあのアームズは!!」

その姿を良く知る者達から動揺の声が溢れるが

「私達も参戦するぞ！」

「東さん作のゲネシスドライバーの性能テストに付き合っつてよね！答えは聞いてない！」

2人はソニックアローで狙撃してビートライダー達を援護している……くそ

「つたく俺が我慢してたのが恥ずかしいぜ！」

『お前は少しは自重しろ』

「俺もこのステージに混ぜて貰います！ウオズ！ナツキ！行くぞお!!」

『ファイティーン』

「はあ、しゃあなしだな…バロンになるとややこしいし」

『バース』

「では私はいつも通り」

『ウオズ』

ハルトはアナザーファイフティーンに変身すると平成ライダーロックシードを起動、現れた装甲を纏うなり

『フォーゼアームズ！青春スイッチオン！！』

「宇宙……………来たああああああああ！！」

これはやらねばならないと全力の宇宙来たー！を見せつける

「しゃあ！アナザーファイフティーン！助太刀するぜ！！」

そのままバリズンソード片手に黒影トルーパーを切り裂きながら参戦していく姿に
斬月は

「成る程…あんな感じでやるのか……」

「兄さんも確か前に同じアーマー使ってたよね」

「ああ懐かしいな行くぞ光実！」

「うん！」

そして

「貴女、メロンの君と同じ姿なのね…けど貴女にはエレガントさは感じないわ！」

「分かっている、同じ姿をしているだけだからな…だが剣の冴えは負けたと思ってはいない！」

ソニックアローの弓部分で黒影トルーパーを切り捨てるブラーボは

「成る程、中々やるじゃない…メロンの君には負けるけど」

「負けてるかどうかは私の技をとくと見るが良い!!」

またある場所では貴虎と束が戦っていた

「その格好!色々と因縁を感じるな!」

「だよね〜ハルくんから話聞いた時、嘘でしょ!とか思ったよ〜」

「その力で何をするつもりだ?れ

「束さんは…ハルくんやチーちゃん、クーちゃんや皆がいる日常を守りたいな!そして皆で宇宙旅行に行くんだよ!」

『ソーダア!ドラゴンエナジーオーレ!!』

「はあ!!」

「成る程な…その夢忘れるなよ」

「忘れないよ!!」

————

そしてハルトはと言うと

「何で俺は雑魚の相手なんだよ!!」

「じゃあないだろ? 武神鎧武とブラックバロンは因縁ある2人がやってる訳だし」

目線の先には師匠とミッチが武神鎧武をザックがブラックバロンと戦っていたのだ

「それに強い奴に強い奴を当てるのは上策だしね」

「成る程! 勉強になります城之内さん!!」

「本当いつもこんな感じで素直なら俺達も楽なんだけども!!」

「テメエは別だ馬車馬のように働け」

「私は？」

「ウオズは無理するなよ、俺達の目的は千冬と束の護衛だからな！」

「はっ！」

「待遇改善を要求する!!」

「ほお、お前はヤンデレモードの彼女達相手に薬や監禁計画など使おうとする修羅を相手に一線超えないように抑えている俺に更に頑張れと？」

「いつもありがとうございます!!」

「よし、その分働け!!」

「おんどりやあ!!」

「計画通り!」

「お前も以外と策士だな」

「いやゝそんな事ないですよゝ」

『ああそうだな……おい待て相棒アレ!』

「……え、スイカアームズ!! あんなのまであるのかよ!」

驚く中、デュークは手を振りながら

「ふふふ……ここはこの天災科学者の出番だね!」

デューク取り出しのはSと書かれたロックシードである、それに合わせてスイカとチューリップのロックシードを取り出した

「え！シドのロックシード!? あんなにいつ作ったんだよ！」

「あはは〜そらいけえ！」

『connecting!』

ソニックアローで狙撃したロックシードは鎧モードなどに変形して自立行動を開始するとデュークの指示に従い自動で攻撃を仕掛けるのであった

そんな乱戦となる中、鎧武と龍玄vs武神鎧武という最早敵が可哀想な戦いと言うと

「何でこんな事をする！」

「お前には関係ない！あの方の為に！」

「あのお方とやらの目的は知れねえが弟子の幸せは俺が守る！」

その言葉にアナザーファイフティーンは

「し、師匠—————!!!」

感動して首を垂れていたが

「戦え!!」

「はい!!」

と斬月・ジンバーメロンの狙撃で促されたので戦うのであった

「……………さあ行くぜ！」

『オレンジスカッシュ！』

「はい鉾汰さん！」

『ブドウスカツシュ!!』

「はあああああああ!!」

2人のダブルライダーキックを受けた武神鎧武は剣で防ぐが威力を殺しきれずに後ろに吹き飛ばすと

「エレン!」

「くっ!これがアーマードライダーのチカラですか逃げますよ!」

「逃すかあ!!」

「っ!」

『バナナスパーキング!!』

しかし追撃も虚しくバナスピアーが出したバナナのエネルギーが壁となり2人は逃走

さて、残りの連中はというと

『メロンスカツシユ!』

『クルミオーレ!!』

『ドングリスパークینگ!』

『ドリアンスカツシユ!』

レジェンド達の攻撃と

『ジンバーメロンスカツシユ!』

『ドラゴンエナジー!』

束と千冬の攻撃によつて撃退された

まあ結果として街中でドンパチしたテロリストになった下つ端達だが何名かは此方で頂いた…我が逢魔の拷問官ことウルティマが情報を吸い上げてくれるだろう

だがここで予想外の出会いがあつたのだ、鳳蓮が警察の中に顔馴染がいたことに気づき手を振る

「あ！照井ちゃーん！」

「久しぶり〜」

「……っ！久しぶりだな2人とも」

そこに現れた警察官の1人 明らかに場所に合わない赤いジャケットを着た人……ま、間違いない……あの方は!!

「ま、まさかあの人ってハルト…いねえ!!」

ナツキは確認しようと目線を動かしたが既にハルトは彼方に行っていた

「彼方です」

「て、照井竜さんですよね!」

「そうだが…誰だお前は?」

「俺、常葉ハルトって言います!あの…その…えーとファンですサインください!」

「……………は?」

「この子ね仮面ライダーのファンなのよ」

「そう言うことか…しかしサインを頼まれたのは二度目だな」

「そ、それってまさかジョージ狩崎さんですか！」

「俺に質問をするな」

「あ…ありがとうございます!!!」

ハルトは大興奮のまま、わーい！と踊っていると

「凄いよ本物の仮面ライダーアクセルだよチーちゃん！」

「ああすまない私の妹もファンなのだサイン貰えないか？」

「良いだろう」

ちやつかりサインを貰っていたのであった

そして沢芽市から離れる時が来てしまったのだ

「風蓮さん！ぜひウチの国にシャルモンの支店を宜しくお願いしまーす！」

「前向きに検討するわよー！」

「いよっしゃああああ!!」

ハルトはガッツポーズして盛り上がる中

「どうだった俺の仲間は？」

「最高ですよ！やっぱり皆さん心強いですね!!」

「そうか」

「……って師匠のお姉さんには会わなくて良かったんですか？」

「……………あ」

「大丈夫ですか師匠!?今なら戻れますよ!!!」

「いや大丈夫だ、いつでも会えるから」

「そうでしようけど……………ん?」

今日は色々な体験をしたな、俺も一つ成長したような気がするが……………待てよ

「師匠と照井さんがここにいた…という事は久留間市と風都もある……………つ仮面ライダーWとドライブもいるのか?…いやあ楽しみになってきたな相棒!」

『お前旅の主目的変わってるぞ!!』

そしてハルトはシャルモンのホールケーキを手土産にお茶会を開いていると

「このケーキ美味しいね〜」

「そうだなあ…そりや美味えだろうよ」

「んぐんぐ…ふう……ねえハルきち」

「何さ二亜？」

「私を攻略してみない？」

「やだ…あ、ケーキおかわりー！」

「私の色気がケーキに負けた!!」

二亜 a n d 美九編 プロローグ

さて前回 怒涛のレジエンドライダーとの出会いとDEMのアーマードライダー登場によりハルトは

「いいかお前達！ライダーシステムを軍事転用しようと言論むDEMをぶっ潰すぞ！恐れる事はない！！この戦いには師匠達も参戦する！しかし俺個人の感想としてはその前に奴らを潰すぞ！！DEMはぶっ潰す！！」

「祝え！今の我が魔王は不破諫氏の加護を得ているぞ！！」
『それいつも貰ってねえか？』

「「「「「「「「「「「「「「」

などとピリピリしていた

因みにキャロル達はずっとピリピリしていた

理由？それは

「ハルきちち〜どう？お姉さんと良いことしない？」

「そういうの間に合ってます」

「ハルきちちドライ!?!」

二亜が急にハルトにアプローチをかけたのだ

「何故いきなり？」

「そうですよ！順番を考えたら私かベルファストさんですよねハルトさんと距離詰める

のは！おのれ白スーツ…やはり雷の呼吸で…っ！」

「ベアトリス様、あまりメタな発言はしない方がよろしいかと」

「そうだな今までギャグ時空にしかでなかった奴が今更本編に絡もうとは片腹痛い！」

「キャラルそれはメタ過ぎる！それと二亜の囁告篇帙のお陰で助かった場面もあるよ！
えーと……」

ハルトは数秒沈黙したに笑顔とサムズアップで

「今は思い出せないけどきつとあるよ！」

全力で憧れのヒーローの力を借りたのであった

「フオローするならちゃんとしてよ！！このハーレム王！」

「千冬お願い」

「あ…」

「任せろハルト、少し仕置きしてやる」

「え、ええええ！ちよっお助けー！」

ドナドナされる二亜を見送るハルトは一言

「千冬…俺より亭主じゃね？」

「何だ今更気づいたのか？」

「そうね旦那様って王様としての威厳も皆無だし」

「いやあくそれ程でも」

「褒めてませんよご主人様？」

「そう言えば前に実験で来たモブ男だっけ…彼もちーちゃんが魔王だって言ってたし…以外と魔王だよねちーちゃん」

「うわぁ束って命知らずう！」

「ダメだろ束、千冬は魔王じゃないよ…魔王は…俺だ！」

「そう言えばそうだったねー！」

「酷い!？」

「……そう言えばハルト」

「何？」

「あの時貴様が押し倒したNo. 13とはその後どうだ？」

「押し倒したって人聞き悪いな！あの人とは時たま電話してるよ、何でも不死に等しい存在の死亡フラグを回収させるにはどうしたら良いって相談受けてる」

「それハルくん殺したいからって話だよね!!」

「殺して独占したい程愛してると！」

「ヤンデレはエンタープライズ様達だけで大丈夫でございます！」

「それ本人の前で言うなよ」

「今度その話したいから喫茶店でお茶でもって話だけど」

「何だそれは聞いてないぞ」

「今初めて話したよ？」

「ま、まさか…ハルトさんは死神まで落としたんですか!!」

「ご主人様…流石にそれは如何かと」

「ハルキちはまだハーレム拡大する気なのかい!!」

「ハーレムとは人聞き悪いが…：現状的に否定できねえ!!」

「だってまだ増えそうだもんね〜」

「ハルキち凄いな!」

「はあ…：…あ」

ハルトが頭を抱えているがふと思い出す

「なあ錫音」

「何だいハルト」

「七罪の件どうした？」

「ああるパンガンナーは彼女に預けたよDEMの戦力を考えたらライダーシステムで自衛出来た方が安全だしね」

「そっか」

DEMがアーマードライダーを大量に量産したとなれば警戒するに越した事はないか：此方もライダーシステムを導入する？いやいや！そんなのダメだろ兵器として正式採用なんてしたら戦兎さん達に申し訳がたたない！

「そう言えば玄さんが新しい文字T作ったって言ってたな」

「旦那様は少し冷静になりましたよねそれより…」

「ねえまさか七罪もか？」

「錫音貴様…」

「けど彼女の気持ちは測りかねるしあの年齢で人生を大きく変える決断させるのもどうかとね保留にしてるよ」

「まあそうだな」

何かヒソヒソ話してるが、おい

「二亜」

「な、何だろうかハルきち」

「まさかと思うけどライダーシステムが欲しいから自分を攻略して欲しいなんて思っていないよね」

ビクウー！と体を震わせた二亜：確定だな

「ごめん、今の二亜には渡せないかな」

「ち、違っ！」

「ごめん、ちよつと部屋出るよ」

ハルトは退室するとキャロルは溜息を吐いて二亜を諭すように

「あれはお前が悪いな。側から見たら力だけ欲しいと言外に伝えているようなものだ」

「……………」

「確かにDEMに捕まっていたしな不安な気持ちもわかるがな」

「PTSDだっけ？」

「それだけでライダーシステムを求めるのはダメだ」

「そうだねえ、しかも攻略しては良くなかったなあ」

「どうしてよ？ハルきちって押しに弱いじゃん聞いたよ、ハルきちを押し倒したって」

「いや何処の部分だけ切り取ってるんですか！」

「そうだがハルトにだって背負うものがある、オンオフの使い方があるのは当然だ」

「今のがオンのハルトだ」

「うむ……ハルきちにオンオフなんてあったんだ意外」

「気持ちには分かるわよ旦那様って基本的に全力疾走してるし」

「まあお前に護衛はつけておく、その辺は安心しろ」

というキャロルの言葉に二亜はポツリと溢す

「私は特別じゃないのかな？」

「特別じゃなければハルトが彼処まで世話を焼かん憧れの王様（オーマジオウ）からの依頼というものもあるだろうがな」

「……………」

「ま、あのバカを振り向かせたいなら頑張る事だな」

「あれ？これって私がハルきち攻略する話になってない？」

「実際今回そんな感じでは？」

「けど二亜いきなりどうしたのさ二次元以外にガチ恋しないんじゃないんじやなかったっけ？」

「そ、それは……」

—————

そんな会話が行われているとも知らないハルトは1人

「これでよしとー！」

今まで貰ったサイン色紙を劣化しないようにケースに直していた

「さて……ご飯でも作るかな！」

と調理場へと移りながら話すハルトに対してアナザーデイケイドが問いかけた
『相棒』

「何？」

『何故二亜の好意に応えてやらののだ？お前らしくもない』

「うーん……何というか……こう打算的な感じがして嫌だな」

『キャラルも最初は打算から付き合っただろう？』

「いやキャラル達とは違うんだよ、何というかこう……時じゃない！みたいな」

『成る程全く分からん！』

『まあ相棒に常人の感覚を当てはめる方が可笑しいのは今に始まった事じゃねえから
な』

『違いねえ！』

とカラカラ笑うコイツらにも慣れてきたというか無いと落ち着かない

「ほーんとお前たちとは長い付き合いだな〜」

『そうだな相棒…だがな俺達が…もしも俺達が反逆したらどうする?』

「どうしたよ脈絡も無くさ…お前たちは俺を裏切らないだろ契約、忘れたか?」

『だからもしもと言ったろ?』

「うーん…王の勅令で気絶させてから縛ってから話聞くな」

『殺さないのか?』

「当たり前じゃん…ぶつちやけるとキャロル達に裏切られるより悲しいよ…一番長い付き合いだし実はウオズ達より信頼してんだぜお前達の事をな」

『相棒……』

「何より逢魔は俺達の国だろ？あとな俺の人生を……良い方向に変えた責任は取れ」

前にも伝えた言葉を改めて伝える それはハルトの偽らざる本心でありアナザーラ
イダー達への揺るがぬ信頼が為せるものだと

『脳筋だと思ってたが以外と考えてたんだナ！』

「前言撤回、アナザーWは余程愉快的な死体になりてえと見えるな」

『俺だけ扱い酷くネエか!!』

『いつもの事だろ』

「あ、あとコレは体験談なんだけどさ」

『何だ？』

「皆がいなくなったら俺何するか分からないからね……皆がいないと一体何処の誰が俺の正気か狂気なのかを保証してくれるんだい？ほらこう言うじゃん」

ハルトはメルク包丁を研ぎながら笑顔で言うのであった

「刃物で人を幸せに出来るのは料理……だけかな？」

『その笑顔で包丁を持ちながら言うな!!』

『人間を調理（物理）するってか！怖えよ!!』

「アマゾンズでそんな話あったよな？人間料理するレストランとか……うーん捌けるかな……」

『ハルト怖っ!!』

「皆がいなくなったら……うん

「この世界とさよなら（心中）かな」

………待てよ

「推しのいる世界と心中？………何て浪漫のある話なんだあ！」

『おいアナザーキルバスにでも取り憑かれたか？』

「んやアナザーキルバスはカレラというよ？」

『では何で貴様がヤンデレ化している!!それはナツキの周りだけにしろ!!』

「あはははー……」

そんなツツコミを背にハルトはハイライトが消えた瞳でメルク包丁を研ぎながらあ
る歌を口ずさむ

「かーなーしーみーのー」

『それはナツキに来るいつかの明日だろうな』

『逃げろナツキいいいい!!』

『nice boat!』

『勝手に殺すな!!』

そんな感じで笑っていたのであったがナツキは謎の恐怖に震えていた

「何か悪寒がする……風邪かな？」

その時、エルフナインは好機！と言う目をしてナツキの手を引く

「大丈夫ですか？ボクが看病しますよ！」

「え？いや別に「いやいや早く寝ましょうよ！」ちょー！エルフナイン!!」

その後、ナツキはドナドナされ四肢をベットに拘束されるとナースコスに着替えたエルフナインがそれはもう良い笑みを浮かべて一言

「さて……ボクが看病しますよ」

「お願いだからその手に持つてる注射器をしまつてくれ!!俺はすこぶる健康だから!あと何で拘束してるのさ!!」

「逃げない為ですよ？」

「何当たり前の事聞いているの？みたいな顔してるのさ!!あの頃のピュアで優しいエルフナインは何処いったんだよ!」

「そこにいなかったらいいですね」

「嘘でしょ!」

「ナツキさんが悪いんですよ、ボクと言うものがありながら女性にフラフラしてるんですから…」

「え、ちよつ…!」

明らかに風邪薬ではない蛍光色の液体が入った注射にナツキはガクガク震えていた

「そうか!さつきの悪寒はこの未来を暗示していたのかあー!!!」

当たらずしも遠からずである…この男 死に戻りする度に相手のヤンデレが加速する事を把握していないのである

だってハルトが黙ってるから何故かって

「その方が面白そうだからかな…知らないと思うけど俺は人の嫌がることをやるのが大好きなんだ！」

そりやウルティマに好かれるわ、この男

「ダメですよ風邪は万病のもとなんですから」

「何の風邪だよ!! 少なくとも俺はこれから来るかも知れない恐怖によって汗が止まらな
いよ!!」

「そうですね…診断結果は…ボクへの恋の病でしょうか」

「それは不治の病で完治の見込みはないね!俺の側で一生看病してくれないかな!」

「な、ナツキさん！それはぶ、プロポーズですか!!」

「それはムードある場所でやるので、今はこの拘束を外してくれませんか!!」

「嬉しいです！じゃあボク以外の人が見れないように、この薬を注射しますね！」

「た、助けて！メデイック！メデイック!!」

『嫌ですわ私が力を貸すのはハート様だけ』

「メデイック違いだよ！俺が呼んだのは衛生兵!!ちよ……ぎやああああ!!」

「あはは……はは……あははははは!!」

—————

【ぎゃあああああ！】

そんなナツキの断末魔が聞こえたような気がしたが

「ん？何か声があったような…気のせいだな」

『ああそうだな』

ハルトは暇つぶしのBBダンゴムシお手玉をしていた

「しかし今メデイックの声が聞こえたような…」

『それは聞こえたな』

「もしかしたらロイミュードもいたりしてなブレンとか」

調べたが久留間市や風都の存在も確認出来たのだから……いやちよつと待て！

「大天空寺とC Rも探すぞ相棒!!」

ゴーストにエグゼイドもいるかも知れない！

つまり

W、鎧武、ドライブ、ゴースト、エグゼイド、ビルド、ギーツvs DEMか…ふむ

『DEM詰んだな』

「俺もそう思う、この布陣は誰だつて逃げるよ俺だつて逃げ……いやサインをもらえるなら覚悟決めて行くか？」

『いや世界中の皆がお前みたいなの熱狂的ライダー ファンだと思ふな』

「DEM? そんなの関係ねえ…あるならば俺のやるべき事はただ一つ」

とハルトはBBダンゴムシをリンゴのようにムシヤリと食べるとサイン色紙を取り出した

「偉大な皆様のサインを貰うだけだ! ファンとしてな! 我が愛に一点の曇りなしの青空である!!」

『すげえブレないなハルト!』

『そこに痺れる憧れるう!』

と話していたが、ハルトの頭に一つの仮説が過った

「まさかルパンガンナーが七罪を選んだのって…ロイミュードの意思とか関係あったりする?」

怪盗アルティメットルパンの意思を継いだ二代目ルパン 七罪 v s 刑事で仮面ライ
ダードライブ 泊進ノ介…ふむ

「ちよつと見てみたいかも…はっ！」

『どうした相棒！』

「そ、そうか！この世界には特状課もあるならば！ベルトさんもいるんじやあねえか！
すげえ浪漫じやねえか…こんな所でBBダンゴムシお手玉をしてる場合じやねえ！
ちよつとツーリングしてくる!!」

『二亜の事とかいいのかよ!!』

「HEY SAY!平成!HEY SAY!平成!!」

ライドハイセイバーの必殺待機音を口ずさみながら小踊りするハルトに対してアナ
ザーライダー達は戦慄していた

『相棒が狂喜乱舞している!正気じゃない!!』

『いや正気だった事あったか?』

『いや待て相棒のライダー愛が溢れてやがる!』

『この間のアーマードライダー集合でハルトのライダー愛がオーバーフローしてやがる!』

『ヤベーイ!』

「よし行「かせると思うか?」…きや…キヤロル! いやこれはだな!」

「……………オレも行くぞ」

「へ?」

「何最近、お前と2人きりの時間が余り取れてないと思ってだな…それに千冬や錫音に出番持っていかれているし…ベアトリスやベルファストのような新入り…しかもジャンヌや七罪に二亜まで…断じてお前を1人にしておくと新しい現地妻が増えるのが心配だからとかではないからな!」

「あれ?俺そんなに信頼ない?」

『寧ろ信頼あると思ってるのか？』

「ですよねー……けどそうだな俺もキャロルと行きたいな」

「それで何処に行くのだ」

「そりゃ勿論、風【!!】ん？もしもし……え？分かった」

かかってきた電話を切るとハルトはキャロルに話す

「逢魔に謎の黒い箱？」

「そ、なーんか俺宛てらしくてき一旦戻るよ」

「そうかならオレもついて行く」

「はいはーい！私も良いかなー！」

「私も行ってみたいです！」

「二亜にベアトリス？」

「久しぶりに漫画のネタ集めってね」

「私は単純に行きたいな」と

「良いよ〜ベルファストいる？」

「此方に」

「丁度良い機会だから逢魔の皆を紹介するからついてきて」

「畏まりました」

「よしと…んじや行きますかー！」

そしてハルト達は逢魔に戻ると早速

「えーと…この箱？」

「はっ！突然執務室に置かれておりまして」

「そっかありがとう」

見かけたトルーパーの報告を聞き終えると箱に手を触れてみる

すると プシユーと近未来な開閉音と共に現れたのは

「無銘剣？」

ハルトがアナザーファルシオンに覚醒した際からお世話になっている剣 無銘剣虚

無ではないか

「いや誰がこんなの……つか禍々しいなおい」

自分のと見比べると分かる……こりや聖剣というより魔剣だなと笑っているとその横にはブランクウオッチがある

「何だ？別世界のアナザーファルシオンのものかこれ？」

かつての事件においてマドカが変身していたアナザータイクーン・ブジンソードとナツキのアナザータイクーンウオッチが融合した事を思い出した

「あの時はソシャゲの限界突破とか挿揄ってたけど……何か関係があるのか？……取り敢えず持ってみよ」

「正気かハルト！こんな如何にも持ち主に呪詛放つような剣を持つとは！」

「いやそれで言うとな銘剣虚無の担い手は世界滅ぼそうとしてたし大丈夫でしょ」

同じ無銘剣虚無と思いいハルトが触れたと同時に
視界がブラックアウトしたのだ

???

「あれ?ここ何処?相棒」

しかし反応がない…完全に黒だけの世界である

「参ったなあ…隔離されたのか?よし暇つぶしにBBダンゴムシお手玉をしよう」

いついかなる時でも修行と偉い人が言ってし

「誰か助けに来るかもだから気長にやろう、これ回せば回す程、美味しくなるんだよね

」

するとズズズと金属が擦れる音がしたので振りむくと

「お前……こんな所で何している？」

「え？………ええええ!!」

そこにいたのは上半身裸にジャケット、そして俺と同じ無銘剣虚無を持っていた剣士がいた

間違いない

「バハト!!」

「何だ俺を知っているのか」

不死鳥の剣士、無銘剣虚無の担い手、世界への復讐者　バハトであった

「あの…サインもらえませんか？」

「……なんだそれは？」

「あ、この色紙にハルト君にと書いてもらえるだけで良いんですよ」

「書いても良いが持っていけないぞ？」

「な、何だってー！！つかここ何処ですか？」

最初に聞くべき情報よりサインが先なのであった

「ここは無銘剣虚無の中だな」

「聖剣の中？」

「お前、あの箱にあつた剣に触れただろう」

「ええそしたらココに」

「あの剣はとある奴が改造した逸品でな、本来ならライドブックを渡す予定だったんだが…何故かうオッチとやらと合体して黒い不死鳥となつて飛んでいったんだ」

「不安な前振り!?え、黒い不死鳥!!」

「どうやらお前に用があるらしい」

「何で?」

「お前の力になるかは知らんがな」

「ふ、不穩だ……」

「ま、頑張れよ」

鷹山さんみのあるバハトが指を鳴らすと意識は元の世界へと帰還したのであった

「ハルト大丈夫か！」

「!!う、うん大丈夫だよ…よっと」

新しい無銘剣虚無を手に取ると

不思議な事がおこった アナザーファルシオン覚醒時からハルトの手元にあったが
使い道がなくて本棚に閉まっていた

世界を滅ぼす本こと破滅の本がライドブックに変わったのだ しかもそれはプリミ
ティブドラゴンと同じく空白のある本となったのである

本の題名は 無い

それは単体では成立せぬからかそれとも名前を
つけるのはハルトかそれとも

「!!!」

今彼の元へ飛んできている黒い不死鳥かは誰も知らないが

そんな感じでハルトは取り敢えず贈り物を受け取ると軽く国内の仕事をする事にした時

「コリウス王国？確かここから離れた砂漠にある国だよな：確か前にリムルさんが行ったとか聞いた気がするけど：何でうちの国にも親書が来てるんだろ？いやまあ仲良くしたいけども：向こうも色んな交易品を売り買いする空島の利点を使わない手はないか」

と考えていると

「あ、ハルおかえり」

「ただいまウルティマ」

「それにしても、まーた新しい女の子連れてきたんだ〜ほーんとハルって女誑しだなあ
〜」

「人聞き悪いな」

「けど事実でしょ？ほーんと逢魔が一夫多妻で良かったよね〜じゃなかったらハルでも
捕まえないとダメだもん」

「いや俺が一夫多妻なのに他の奴らがダメは道理が通らないだろ？」

「ま、そう言うことにしておこうか」

「そう言えばこの間捕まえた捕虜から何か分かった？」

前回の戦いで何名かは捕虜にしてウルティマに情報の抜き取りを依頼したのだ

「分かった事はハルト達はDEMから指名手配されてる事かな、それと相当数のドライバーが生産されてること」

「そんだけ分かれば十分だ、ハウンド」

『はっ！』

「DEMの工場を見つけたら破壊しろ」

『お任せください』

「つか皆はっ？」

「ああベアトリスって人はカレラとアゲーラと剣で模擬戦してるよ、ベルファストって人は…」

「ベルファストは？」

「何故か掃除してる」

「お待ちせ致しましたご主人様」

「いや何で掃除してるの？」

「初めての場所故に普段通りと心がけたのですが」

「そ、そうか……」

「それとご主人様、かなりの量の仕事が溜まっていますね」

「それをやろうと思つてたんだよ」

「成る程…では私もお手伝い致します」

とベルファストが秘書艦時代と同じように手伝おうとしたが

「お待ちをそれは私の仕事ですわ」

「あ、テストアロツサただいま！本当さ…いつもありがとう！」

「おかえりなさいませハルト様、いえ当然の事ですわ」

「そんな皆に異世界からのお土産だよ！異世界のケーキ屋シャルモンのホールケーキ！皆で食べてね」

「ありがたく頂きますわ、それよりもハルト様彼女は」

「私はベルファスト、ご主人の側に侍るメイドにして秘書にして妻でございます」

「成る程…ハルト様また増やしたのですか」

テストアロツサの赤い瞳が鋭利に刺さる！

「テストアロツサまで!?!」

「分かりました…ならば奥方様に任せる訳には参りませんので此処は私めに」

「いえいえ私が」

何故だろう2人の間に凄いオーラが見えるな…取り敢えず

「ごめんウルティマ、ヴェイロンいる？久しぶりに紅茶飲みたい」

「分かった！じゃあケーキ一緒に食べよ、おい」

「はっ！お嬢様、ハルト様もお久しぶりです」

「ああ久しぶり早速だけど頼める？」

「お任せを」

「皆も食べないと無くなるよー」

やれやれと肩を竦めるがハルトであった

因みに

闘技場では

「なかなかやるではないか！これぞ千冬と違う異世界の剣技か！」

「ええ見せてあげますよ！私の剣技！」

カレラとベアトリスが模擬戦していたのを二亜が漫画の動きに取り入れようとしていた

「凄い！凄いよ！ネタが溢れるう！流れ出るう!!」

「見事にハルトに毒されてるわね二亜」

「あ、なつつんどしたの？」

「あ、いやその朝のやりとりで凹んでると思って」

「ああ〜大丈夫大丈夫、確かに私も焦ってた所あるけど今はコレで良いって思ってるよ」

「けどハルトの事好きなんでしょ？」

「まあね〜ハルきちの事をさ囁告篇帙で見たんだけど…彼さ、何というかとんでもない

人間だよね」

「そうね…前に記憶をなくしたハルトを見たけど悪い事してないのに謝ったり殴られ慣れてるといっうか…」

「そ、あの卑屈な性格から今の天上天下唯我独尊なハルきちになったんだから変わるキツカケって大事だよね」

「二亜は変わりたい?」

「どうかにやぐま、私はこんな漫画のネタに困らない場所にずっといたいからなーんて理由が大半だからねくなつつんは?」

「私は……まだ分からないけど私を見てくれた受け入れてくれたハルトを助けない」

それが彼女の本音、そして渡されたルパンガンナーを見て

「正妻戦争のどさくさに紛れて私がハルトの心を盗む」

「なつつんも参戦かあ、こりやハルキちはますます大変だねえ」

と笑っていたのであった

そして逢魔の仕事もひと段落したハルトは

「よしガツチャードを見るゾオ！」

自室でガツチャードを見ようとした…

「そう言えばアナザーガツチャードっていないよな？」

『ああまだいないな』

「まあ気長に待とうか「おいハルト」はいはいキャロルこつち」

「うむ」

子供モードになったキャロルがハルトの膝上に座るとハルトはガツチャードを再生したのであつた

そこで

「成る程…ケミーカードの組み合わせが大事とふむふむ」

「そう言えばガツチャードライバーどうするかな」

「それなら問題ないぞ」

「何で？」

「最近ホッパーが逢魔で適性者を見つけたらしくてな、そいつと訓練中だ」

「俺の知ってる奴？」

「ああよく知ってるよ」

「そつか…なら今は知らなくても大丈夫かな…それよりキャロル」

ハルトは抱きしめる力を強くすると

「……………ん」

至近距離で頬を赤らめたキャロルを見て

「良いかな？」

「ああ…」

そのまま2人の距離は限りなく0に……な方としたその時

【は、ハルト助けてくれええええ！】

ナツキの通信で良い空気が霧散したのだ2人は怒りの余りに

「ハルト」「ああ……」

「あいつめるか」

武器を持ってピースメーカーへと帰還したのであつた

その頃 ナツキはエルフナインから逃げる途中で遭遇したDEMの黒影トルーパー軍団に追いかけて回されていたのだ

「クソッ！ タイミング悪すぎだろ！」

哀れナツキ、そのタイミングの悪さが己に降りかかる事をまだ知らない

「何だ貴様は…ぐあぁ！」

突如、黒影トルーパーが吹き飛んでいくのが見えたのでナツキは恐る恐る物陰が顔を出す

「ナーツーーキーー」

「どーこーだー」

何故か怒り狂う最恐夫妻が見えた…まずい俺が何かしたのかと震えるナツキだが黒影トルーパー軍団は

「おい見ろよ！最優先捕縛対象が悠長に現れたぜ！」

「おいおい隣の美女！そんな奴より俺達と遊ぼうぜえ！」

とナンパする姿に

「仮面ライダーの格好で子供の夢を壊すなよチンピラ崩れが」

「ああ流石のオレも堪忍袋の尾がキレたぞ」

「あ？何言ってるんだコイツ？」

それを見たナツキは理解した

「あ、あいつら死んだわ」

慈悲などないとハルトは新しい無銘剣虚無で黒影トルーパーを一刀両断する

「ぐあああああ！」

壊された戦極ドライバーを回収すると同時に

「みんなー今日のご飯よー」

そう言うのと鏡の中から現れたベノスネーカーが待つてましたとばかりに変身者の頭に噛み付くとそのままミラーワールドへと連行していったのである

「さーて……次は誰の番かなあ？」

「ふ、ふざけんなー！どうせ今のだってトリックだろうが！」

「数はこつちのが多いんだ」

やっちまえー！と影松を手に襲いかかるのだが

「数？なら見せてやろう行け！屑ヤミー！」

「んじや俺は行け！アナザーライオトルーパー！」

「「「皆殺しの時間だぜえ！」「」」

哀れ物量で叩き潰されたのであつた

そして全員の戦極ドライバーを回収した後

「ふむふむ発信機の類はなしか」

「取り敢えずこつちで保管しようか」

捕虜を見て一言…

「ウルティマに頼んで自我を消してもらつたらコイツらの体をイマジン達に使わせるのもありか？」

まさに魔王の所業である

「ハルト!？」

「あ、ナツキいた」

「おい貴様！折角オレとハルトが久しぶりに2人きりは時間を邪魔しておって!!」

「理不尽!!」

「おいハルト、コイツをどうする！」

「取り敢えず全員に窒息するまでハグされるとか？」

「それは物理的に窒息する奴だよな!!」

「お望みならやりますよ」

「……………へ？」

「あはは〜や〜つと見つけました〜」

「は、ははは……………」

顔を青くして下がるナツキにポツリと

「か〜な〜し〜み〜の〜」

「や、辞めろ！不穏な気配を纏わせるなあ!!」

ナツキは全力で逃げたのをエルフナインが同じように走り追撃する…あの子根っからの技術者だよな？何で俺達並みに早いのか　そう遠くを見ていると

「ん？」

ハルトの目線の先には土道に似ている雰囲気の子高生とアイドル的な感じの女の子がいた

「ふむ……人違いだな帰ろうキャロル」

「ああ」

もし仮に女装した少年君と言うなら、次会った時には優しくしてあげよう
そう思った数日後

「お願いします！女装してライブに出てもらえませんか!!」

そんな頼みをされる日が来るとは思わなかった

1話 予想外の依頼

前回のあらすじ

「かーーーーーなーーーーしーーーーみーーーーのーーーー!」

「いやあああああああ!」

『あらすじを説明しろ!』

—————

さて今回の物語はピースメーカーの中に始めよう

どうやら前回見た土道風味の女子高生を見たがアレは間違いなく土道だったようだ

聞けば今回の精霊 美九は極度の男性嫌いらしくコンタクトするのに士道は女装して接触したのだと折紙から送られた写真で判明したので誤解は解けたのだが

うむ

「趣味は人それぞれだけどねし…士織ちゃん」

「そうだ…世界は広いなあ……」

「ちよつ、ハルトさんまで!!」

目の前で辞めて!とツツコミを入れる女装…つか女性にしか見えない士道を見てハルトは心配な顔をしながら錫音に謝る

「ごめん錫音、俺自身無くしてきたよ彼に折紙任せて大丈夫かなあ…彼に合わせて性癖歪んだらどうしよう」

「大丈夫、今回は任務って言うてたからさ…それとあの子は私達の教えを受けてるんだ性癖歪んで当たり前だよ」

アンティリーネや東達から相手を捕まえる方法を教わったとあれば…うん

「そ、そうか…手遅れだったあ…そもそもの教育方針を間違えてたあ…」

錫音に慰められたハルトは少し正気を取り戻したハルトは

「よし、それで少年君は俺達に何を望む？」

「その…美九は可愛い子が好きらしいので…」

「分かったキャロル達は全員逢魔に帰す寝取られなど言語道断だ彼女達を狙うなら問答無用で実力で排除する…いや今すぐでも倒しに行こうか」

彼女達の安全が一番だしと頷く

「おい、オレ達がお前以外の奴に靡くと思っっているのか？」

「怖いんだよ誰かに取られるとかいなくなるとか…ハルカやトーマ相手に何も出来なかつた頃を思い出すし…何より皆の事が大事だから」

それはハルトの根底にある本当の恐怖なのだろう

過去の体験から誰かに奪われる事が当たり前だったハルトからすれば今の状況を脅かす恐怖など排除すべき敵でしかない

「ハルくんが心配なら封印じゃなくてその精霊消した方が早くない？」

東の意見も最短ルートで排除すべき案件である

「いやそれ最終手段でしょ？」

「それで…その…：…靈力封印にあたって学祭のライブの人気投票で決着をつけようとな
りまして」

「ふむ」

「その…ハルトさんは楽器弾けたりしますか？」

「うーん…ギター、和太鼓、シンバル、銅鑼、トライアングル、琴、トランペット…あと
は…バイオリンだな」

「そ、そんなに出来るんですか！」

「相棒達に教えてもらいましたから」

「残念だが此処のバカ旦那は以外と器用でな私服センスを除けば割とオールラウンダー
なんだ」

「普段が脳筋ポンコツ魔王だから以外と思うだろうか？」

「キャロルも千冬も酷い!!」

「反論出来るか？」

「うーん………できません!!」

「てか何でハルキちは楽器弾けるの？」

「え？音撃道やるなら楽器は弾けないと話にならないよ？こう見えて俺は結構努力型な訳よー!」

アナザー響鬼、威吹鬼や轟鬼達に教えて貰いアナザーキバ、ダークキバからバイオリンを教わったのだ

「なら……ナツキさんは……」

「俺？俺はトランペットだけかなあ…アナザー威吹鬼に習ってるよ」

「後は無理してやるならアナザースラッシュユの音銃剣錫音とブレーメンのロックバンド、アナザーナーゴのビートフォームを使えば演奏の名人にはなれるな」

その答えに土道は真面目な顔で

「お願いします！どうか女装してライブに出てもらえませんか！」

「他を当たって下さい」

「ごめん少年君、俺にはそっちの趣味はない」

「そこを何とか!!」

土道が懇願する気持ちも分かるがハルトは以前話したように女装すると忌むべき実

妹を思い出すので嫌なのだ

「んじやナツキ、女装しろお前なら大丈夫だ似合うから」

「俺だけ！やだよハルトがやれ!!」

「やなこった」

責任を押し付け合う姿にキャロルが険しい目で2人を黙らせた

「取り敢えずバカ2人は黙れ」

「はこ」

「お前の気持ちも分かるがオレとしても旦那の女装姿を見たいなんて気持ちは
.....」

キャロルは少し思案する…

「いや待てよ？ハルトが擬態するならば間違いない、このバカは自分の理想の女性像を再現ふるだろう…つまりの好み知れる…それはつまりハルトに近寄る異性を減らせる対策となるならば…ふむ以外と女装させるのも悪くないのでは？」

と止まってしまった

「キャロル？」

ハルトの疑う目によつて意識を戻すと、咳払いして一言

「ない！」

「ちよつと待て今の間は何だ！不穏な香りがしたぞ!!」

「どうかダミーメモリでハルトが化ければ良いじゃん！あとワームやロイミュードみ

たいに擬態すれば良いし！無理に女装しなくても良いじゃん!!」

「えええ！あれやるの面倒くさいんだけど!!」

「そうだよ！ハルトが女装すれば良い！潜入任務なら適任じゃん」

「それ得意なの七罪なんだけどなあ…」

現状化けるのなら彼女の方が上手いしと呟くと

「出来るならやれよハーレム魔王！」

こいつは調子乗ってるな…よし

「ナツキ」

「な、何だよ」

「これからは自分の力で戦い抜けよ彼女達の暴走を俺は止めないから」

「……………っ!!」

「と言う訳で義妹達よ頑張れー押し倒すなり薬打ち込むなり監禁するなり四肢砕くなりお任せするよ」

そう言うとき目を光らせる彼女達にナツキは後退りながら背を向けたのであった

しかしナツキは捕まり拘束されると薬を打たれ監禁され全員から美味しく搾り取られたのであった…

「……………」

誰かが言っている此処で死ぬ運命ではないと

「タイムベントー」

「っ！」

「と言う訳で頑「生意気な口聞いてすみませんでした！申し訳ありません!!」お、おう」
何があつたのか知らないがナツキの態度にハルトも謝罪を受け入れた

「な、何があつた？」

「いや最悪な未来が見えて……何卒宜しくお願いします!!」

「お、おう…だが流石に靈力封印に協力する為とはいえ俺が…」

「だがハルト、お前の場合はワームやロイミュードでもあるから擬態なんてお手のもの
だろ？」

「けど面倒なんだよなあ」

「具体的には」

「だってあの辺の怪人って成り替わる時に本体消すでしょ？それに完全に別の人物でつち上げる方が難しいし」

「以外と考えてたな」

「だって擬態って聞こえは良いけど整形とかと違うんだオリジナルと鉢合わせ！なーんて事になったら大変じゃん」

そもそも彼等の擬態って人間社会に潜伏するのが理由だし

「本音は？」

「ぶつちやけ面倒くさいからやりたくない！」

よく見たら

「おいお前等」

「何々キャロりん？」

「実はな…」

「成る程、擬態させる事で好みを分析すると」

「それは良い考えねキャロル」

「旦那様に近寄る女性を減らせるなら協力するわ」

「そう言う事なら私たちも手伝おう」

「……よしスタンガンを用意して」

キャロルが千冬達を集めて何かこそ話してる……これはまずいと経験が言っているな逃げろ！

しかし判断の遅さがハルトの運命を分けた！

「よしハルトを縛り上げろ錫音！」

「かしこまり！」

『バインド』

「は？ちよつ待つて！俺はそんな趣味は「安心しろハルト」へ？」

「オレ達はお前の味方だ」

「キャロル！なら何で拘束するのさ!!」

「違う！今のオレ達の心は一つだ」

「」「取り敢えず着替えようか」「」

「色んなハルトを見てみたい」

「旦那様を着せ替え人形にする日が漸く来たわね」

「まあ性別違うけどね！」

まさかの裏切りだと！

「ちよつと待てー！ー！変な所で団結するな!! って千冬お前もか!!」

数少ない常識人枠である彼女の裏切りにハルトは驚きを隠せない

「すまないなハルト、流石の私も知的好奇心には逆らえないのだ」

「ベルファスト！ジャンヌ！ベアトリス！」

「申し訳ありません、ご主人様少し用事がありますので」

「良いじゃない私みたいに新しい一面の扉を開いて来なさいな」

「あ、あはは〜」

「この裏切り者ー！」

そしてハルトが連行されると部屋に監禁されてしまう……これはまずい！ならば

「い、こうなったらー！」

恥ずかしいがやるしかない！怪人王の力でロイミュードの擬態を発動した

「わかったよ！こんな感じでどうだ！」

とハルトの体は変わる、普段の黒髪と違いウエーブしている青い髪とスレンダーな体格を見てナツキは理解した

「これで文句あるかあ！」

その姿は正に何処かのv t u b e rさんであった

「まさか…スターの原石の人か!？」

「そうだよー私はく「今日も小さいー!」は?」

「あ、いやごめん様式美的な感じかと」

「何が小さいって言った？」

ハルト（スターの原石モード）は笑顔で最近東が完成させたシンゴウアックスをナツキにつきつけて威嚇する

「しまったサイコパスが表に出てる！」

「そのスカスカな脳みそに最近目覚めたロイミュード001 フリーズの力を応用した極細針打ち込んで血管破裂させてやろうか！」

「ゴ・ジャラジ・ダの真似すな！そんな真似したらクウガに斬られるぞ！」

「あの人にやられるなら本望！いや…一条さんに神経断裂弾で狙撃されるのも捨て難いな…いや同じ警察繋がりでドライブやアクセルにも…G3ユニットとかないかな？」

「見た目すごい美少女なのに中身はハルトなのが安心感を覚えてる……」

「因みにパレードもいるからパズルゲームも出来るよ」

「歌唱力は？」

「まあ大丈夫だよ人前で歌った事あるし最悪これがある」

『DIVA』『LIAR』

「これでもかと精神操作系能力のメモリを見せた

「メモリ？」

「そもそもプロがアマに大人気なく喧嘩売ってんだから、これくらいしても良くね？俺にこんな恥辱を与えてくれたんだそれ相応のお礼はしないとなあ……」

『黒ハルトだ』

「写真が流出したら立ち直れないからな！」

「つかラタトスク側で投票操作するんじゃないの？」

「いや観客全員クロントルーパーにして全員俺に入れさせてやろう」

「疑う余地のない出来レース！」

「それより相棒、この姿の俺をどう思う？」

『相棒、その姿で一人称俺はどうかと思うぞ』

『仮にもアイドルとしてやるなら問題だな』

『そうだキャロルのようなオレっ子属性は人を選ぶ折角の可愛い外見が台無しだぞ』

『一人称は私、最低でも僕にしな』

「おいテメエ等、何でいつもより親切丁寧なアドバイスをしてやる」

『考えてみるお前の知ってるアイドルで一人称俺と言う奴はいたか』

「ふむ」

【コスチュームチェンジ！】

【はーい！皆のアイドルみーたんだよ！ぶんぶん！】

「いないな」

注意 これは彼のアイドル像に偏りがあるだけです

「もしくは」

『でないとおマジオウに報告するぞ』

「そ、そんな脅しに、この僕が屈すると思つたのか相棒！」

『あつさり屈したな』

『思い切り効いてるな』

「当たり前だろ！こ、こんな姿を師匠やオーマジオウに見られたら……恥ずかしくてこの世界を破壊しちゃう！」

『照れ隠しで世界が滅びるのか……』

『デイケイドよりも悪魔してるな』

「だから絶対士さんは呼ぶなよ！写真を撮られたら恥ずかしさの極みだからな絶対やるなよ!!」

立ちました！（フラグちゃん）

パシヤリ

「……………へ？」

視線を向けると何故か士さんがいるではないか…その手には伝説のトイカメラが……ふむ

「フラグちゃん、変なところで仕事しないでよ…それと士さん何故此処に？」

「何か呼ばれた気がしてな…しかし魔王の女装か…これを鎧武が見たら何というか確かめてみるか」

「ちよつと待てー！ー！貴方だつて色んな世界に行く時にコスプレしてんじやないですか!!学ランとか色々!!しかも俺の世界いる間の写真でそれは嫌だ!…つてもういい!!おのれデイケイドおおおおお!!!!」

『え？呼んだ？』

「お前じゃねえよ!」

後日 写真を見た師匠は一言

【ハルト、何か悩みがあるなら相談してくれよな】

【違うんです師匠！これには深い理由があー！】

誤解を解くのに大変だったのは言うまでもない

「こ、こんな生き恥を晒す日が来ようとは……もうやだハルト、アナザーオーマジオウになりゆ……」

「何だと！それは本当かボス！ならば俺達ライダー怪人軍団は並行世界に攻撃を開始する！」

「その世界の時を喰らってやるか」

「生死をひっくり返してやろうぜ」

『全並行世界の危機が来たゾオ!』

『おい相棒のメンタルが壊れそうだ! 気をしっかりもて!』

『こんなんであナザーオーマジオウになったら殺す予定の錫音が浮かばれん!!』

「逢魔の日ってハルトの匙加減じゃん」

「今更ですね」

と仲間の懸命な説得で正気を取り戻したハルトは一言

「取り敢えず任務終わったら少年くんには後で全力のリアクターチャージアンドファイヤーとアナザーオールトウエンティタイムブレイクを叩き込む事にしたよ」

「いや〜これは士道くんが悪いな、うん!」

ナツキも今後の脅:いや交渉材料に録画や写真とも考えたが後の報復が恐ろしいので辞めたのである

そんな中、キャロル達が後ろでコソコソ話していた

「成る程…ハルトはクール系が好きなのか」

「チーちゃんやキャロリンとベルファストはストライクだね」

「そうか…ふふ」

「ま、容姿の好みであつて内面は別だろうけどね主に生活能力とか」

「その点、千冬は皆無よね記憶喪失の旦那様にさえあの部屋の断片が記憶されてたんだから」

「がはっ！」

「チーちゃん!? スーちゃんにアンちゃんもはつきり言い過ぎだよ! 本当の事でも!」

「……………」

「東、千冬にダメ押し入ってる」

「銀狼、それはもう手遅れだぞ」

「さてとコレで何とかかなりそうだな」

「っ！」

と話していた、因みにだがハルトはナツキを巻き込むためにダミーメモリを突き刺さうとしたが止められた

「はあ！」

「ちよっ！お前ふざけんなよ俺まで巻き込むな！」

「僕だけ恥ずかしい思いをしたくないから、お前も道連れだあ!!」

「ふざけんな！お前だけで今回の任務成立するから大丈夫だろ！」

「うるさい!!お前も女装するんだよ！」

「俺はお前と違って擬態出来ないんだよー！」

「な、ナツキさん!？」

「辞めろエルフナイン関わるだけ疲れるぞ」

「だけどキャロル！」

「それにだナツキにダミーメモリを撃ち込めば恐らくナツキが好む異性の姿を取る…となれば後は分かるな」

「ふっ！」

気づくとエルフナインは吹き矢を使いナツキの動きを止めたのである

「うっ!!…か、体が動かない…:…っ！」

「こんな事もあるうかと麻痺毒を塗りこんだ吹き矢を用意して正解でした！」

「どんな事を想定してんだ!!」

「ボクだって本当はこんな事したくないんですよ…」

「なら何故…」

「ボクがやらないと…」

「すまんエルフナイン、私の矢だとダメージが大きいからな」

「気にしないでくださいエンタープライズさん！今のボク達の心は一つです」

あの状況だと俺はエンタープライズの矢で射抜かれたのか、ありがとうエルフナイン
!!

「ああ耶俱矢と夕弦も呼ぼう」

「ちよーつと待った姉ちゃん、私とマドカを忘れてるよ」

「ホーネットさん！」

「ち、ちよつと待て！何で結託して…」

「皆でナツキさんの服を着せ替えましょう！」

「っ!! 待て頼むハルト!! その手にあるダミーメモリを離してえええ!!」

「い! や! だ!!」

「助けてアルトリアー!!」

「仕方ないな… 助けて「今度トリコバーガーとポテトの泉のポテトを」ご馳走するよ」すまないマスター、私は無力で」

「ジャンクフードで買収されてんじゃねえ!!」

結局ハルトはメモリを入れられて擬態させたのであつた

「うう…:… もうお嫁に行けないにえ…:」

と涙目になっているナツキの姿は何処かのエリート巫女のようになっていた

「人聞き悪っ！いやいやお前が貰う側だから…まあエルフナインとマドカに関して僕、キャロル、千冬を倒さないとダメだけど」

「難易度ルナティック!!」

因みにこれを見ていたナツキのサポーターであるケケラは

「ほお…こうなるのか凄い時代なんだな此処は」

と感心していたと言う

「成る程…ナツキさんはキュートな感じの女性がタイプとふむふむ…」

「そして…!!」

ナツキが擬態した姿…その一部を見てマドカと耶俱矢は膝から崩れ落ちる

「そんな…ナツキは胸の大きい人が！」

「嘲笑、そうなるよ耶俱矢とマドカには未来がありません」

「何をー!!」

「そうだ！訂正しろ夕弦！耶俱矢と違って私には将来性があるぞ!!」

「マドカ!？」

「いやあく良かったね姉ちゃん」

「そうだな…しかしそうなるよ私はナツキの好ましい容姿ではないのか…」

「違うと思うよ！じゃなかったら結婚しないし！」

「そ、そうか…そうだなホーネット！」

とナツキ側はナツキ側で盛り上がっていたが

「しかしこの後体だと戦えないにえ」

そうナツキが自分の胸部を持ち上げるとマドカが切れた

「だったら私とその胸切り落としてやろうかあ!!」

「ちよつと待つて!何でマドカがキレてるのさ!」

「いやキレるだろ…何の所為とは言わないが」

「まさか…勘違いするなよマドカ」

「何をだナツキ?」

「人間大事なのは中身だにえ!」

「可愛く言っても誤魔化せるかあ！」

んで

「す、凄いですねハルトさん気合いの入りようが」

「今回の件が終わったら少年くんは殺す」

「物騒!?!」

「けど彼、再生力高いよ?」

「なら再生が追いつかないまでの一撃を叩き込んでやる…生憎その辺の技は体得している」

「冗談に聞こえない!!」

「少し待て」

とハルトは自分の家臣団の方へと歩くと一言

「お前等、何見てんだ？」

「いやいや魔王ちゃん、流石の俺達もこの状況には混乱してるから」

「その証拠にウオズを見てくれ」

「あ？」

「……………」

「異常事態で固まっていますね」

「おーい起きろウオズ、しかしハルト坊…いや今はハルト嬢か？」

「冗談なら許すけどマジで言ってるなら怒るぞ」

取り敢えずだ

「後で全員の記憶と記録から今の俺を消す」

「記憶は時間、大事なものと電王から教わったんじゃないの魔王ちゃん！」

「書き換えたい記憶もあんだよ!!…銀狼、束」

「な、何？」「何かなハルくん…」

「今の姿を記録には」「残してません！」よし「ほっ」終わったら確認するぞ……」

その時のハルトの覇気は外にいたデロウスも怯える程だったという

それを終えてハルトは士道に近づき

「後で覚えてろ」

と満面の笑みで答えたという

だが流石に本番だけだとバレる恐れがあるので練習と

「なーんでこうなるかな」

「知らないよ」

2人は女の子らしい格好をして外に出る事となったのだ

「取り敢えず少年くんと精霊はめる」

「精霊に関しては…何か状況次第でやりそうで怖いね」

遠くない未来で現実となるのをまだ知らない

2人で話していると何人かのキャラそうな連中が近寄ってきて

「ねえ君たち可愛いねどう俺と遊ばない？」

「女の子だけより楽しいぜ」

「ま、嫌でもついてきてもらうがな」

そう下卑た目でナイフを見せながら脅してきたがこんな脅威のうちには入らない

「は？失せる屑ども」

笑顔で威圧するハルトであったが

「おいおい生意気だな、この女…まあ気の強い女は嫌いじゃっー」

同時にハルトは右足を強く蹴り上げ爪先で野郎の股間を思い切り蹴り上げたのであつた

「がはっ…」

同時に倒れ伏した男の頭を踏みながら一言

「失せろ生ゴミが」

「ひい!!」

ハルトの威圧でナンパした男どもは倒れた仲間を連れて逃げ出すが腹の虫が治らないのかハルトはスマホで怪人軍団に連絡する

「お前等、今の連中捕まえてこいー人も逃すなよ取り逃したらそいつの命はねえぞ」

「捕まえて何する気!？」

「h e a v e nの材料にする」

「え? h e a v e nって何?」

「えーとね創世王の血と生きてた人肉をコネコネして作る羊羹みたいな奴、何か怪人が食べると最高にハイって奴ダア! って気分になつてく若さを保つてく強くなれる不思議な食べ物だよ」

「明るいテンションでとんでもない事を口走っていた」

「え? 何それ怖っ!!」

「いやく相棒に聞いたら僕の血液から作れるらしくてさくほら、逢魔にもアマゾンみたいに人を食べる奴等も迎え入れたいからさくそう言った方達向けのメニューに思つてね!」

『民の為にか…相棒、お前も立派な王になってるな』

「まだまだだよ僕なんてね…いつか逢魔にはいろんな世界の怪人や元の世界で居場所のない奴等が笑って暮らせる国にしたいんだよ」

『相棒』

それを聞いたネガタロスは、ああと納得した

老ハルトの未来において銀河帝国やデイセプティコンなどやばい連中を受け入れた最強の悪の組織が生まれたのかと

「だからあのナンパ男連中は僕にナイフ向けて脅してきたから体をナイフで器用に薄皮を剥いで生きたまま全身をチタタプしてあげてね」

『食べ物だけをチタタプしなさい!!』

「え？怪人からすれば人間って食糧だろ？ダメならジョジョ〇風に仲間の目の前で輪切り

して、その死体をホルマリンして額縁入れてあげようか!!」

『可愛らしい顔で怖い事を言うな!』

「そんな真似するから魔王って呼ばれんだよ!!つか創世王なんて大物どうすんのさ!!」

「えーと僕の右腕切り落とした血を流してそれを混ぜるだけでOKって何か俺の腕って溶解性細胞みたいだね!…山に埋めたりとかウォーターサーバーに入れたら怪人になったりするかな?」

「おいサラツとスプラッタな事言うなよ!」

『逃げろオ!千翼オ!』

「アナザークローズ!?!落ち着けえ!」

「大丈夫大丈夫、腕なら秒で生えるから」

「そつちじゃねえ！ やっぱお前イかれてるよお！」

命令を聞いたネガタロスは

「お前等、あの連中捕まえろ！ でないと俺達がチタタブされたりホルマリンにつけられるぞ!!」

「「「「「おおおお!!」」」」」

「やれやれ大将は恐ろしいなあ、ネガタロス屋」

「中の人ネタに走るなゴーストイマジン」

「お前等メタだな……おいウオズ、焼き鳥は何処だ？」

「牙王、焼き鳥はさつき食べたでしょ？」

2話 ライブ開始とローレライ 目覚めるは太陽と月

前回のあらすじ

士道の依頼で女装させられたハルトとナツキはライブに向けた準備をしていた

ハルトとナツキはいつもの姿に戻るとため息を吐きながら一言

「曲どうするっ?」

「うーん……2人で歌うならdouble act ionみたいな電王系、オーズの挿入歌、あとは……finger on the triggerや乱舞escalati on……」

「あのさハルト、それ女装して歌う曲だよな?」

「ああ double actionなら Coffee formつて女性のダブルボーカルもあるけど」

「うーん…その何だキャピキャピした感じの歌を歌う方が良いんじゃないか？」

「ええーどうせ出来レースになるんなら趣味に走ろうぜ」

そもそも土道と精霊との喧嘩なのだから俺達くらいは遊んでも良からうと思う
だつてギター弾いた後は普通に出るし

「なら一曲だけはさ、こんなのだうよ」

とナツキが見せてきたのは俺のいた世界で一世を風靡したアイドル B小町の曲であつた

「あゝそつかお前。俺のいた世界にいたんだっけ…」

「そうだよ…どう？」

「やだ」

「何で！」

「いや、このセンターのポジションで踊るのは複雑」

ハルトが指差したのは十秒で泣ける天才子役として有名な子だが

「何気にセンター要求してたな…この子がどしたの？」

「いや…元の世界のあかねが嬉しそうに話してて…その…何か嫉妬したからヤダ」

「ああ…つて？そんな理由!？」

「ん」

「つたくお前は…嫌なら歌うライダーソングも俺が選ぶぞ」

「えええ！」

「てかハルト、もし女装ライブを鎧武や電王達が見に来てたらどうすんだよ？」

「そりゃ…まあ…」

ハルトは軽くイメージしてみただけで顔面蒼白となり一言

「そんな目で俺を見ないでください!!」

「ええええ!!」

膝を突き倒れたのである

「師匠違うんです！これは任務で仕方なく！！後で諸悪の根源は俺が超自然発火能力でウエルダンにするんで許してください！！」

「え？イメージしただけでそんなダメージ入る？」

その姿を見てアナザーデイケイドは溜息を吐き

『おいハルト、何を自分の想像で致命傷を負っている？』

「だってだってえ……師匠達に見られたりしたら……究極の闇になりゆ」

『お？出番か？』

『おい誰か止めろー！』

「……………俺ってやつア……」

『ああダメだなこりや、ウオズー!』

「お呼びでしょうか？」

『すまない。このバカが凹んでるのだ何とかしてくれ』

「ええ…はあ…我が魔王落ち着いてください」

「うう…」

「そのような態度ですと周りのものが不安になりますよ、王ならドンと構えてください」

「そ、そうだなありがとうウオズ…さつきまで師匠達を取り囲んで俺を否定してくる幻覚が見えたよ…絶望のあまりファントムになる所だった」

『だったじゃなくてお前はファントムでもあるけどな』

「とんでもないですね、それより我が魔王一つお願いしたい事が」

「何だ」

「が
ウオズがこんな真面目な顔で頼みを言うとは珍しい：どんな内容だと身構えたのだ

「是非女装した我が魔王のライブを逢魔全土で配信したいのですが！」

「おいこの預言者と頭を抱えると一言」

「おいトルーパー、そこの不穏分子を捕えろ」

「我が魔王!?!」

「ウオズ……自分の黒歴史を国民に喧伝する馬鹿な王がいるかあ!!」

「あの文字Tシャツで街を出歩くのは黒歴史でない?!」

「前から思ってたがなんで自分のお金で選んだ好きな洋服がデイスられているんだ!!」

『私服のセンスがないからだ』

「私服のセンスが悪かったんですよ」

「悪かった!?!なら何時この文字Tの時代は来るんだよ!少なくとも玄さんは好んでたぞ
!」

「その自称ファッションリーダーの事は忘れてください」

「忘れねえよ玄さんの事を!!」

「真面目なシーンみたいに言わないで頂きたい!」

「今度新作出来たらしいから見に行くんだ」

「何仲良くしてるんですか!」

「文字T仲間というのものもあるが、これは彼を介する事で氷室泰山首相と会う事でこの世界の日本政府と逢魔王国の友好関係を模索するという高度な政治的判断に基づいているのだウオズ!」

「…………… 本音は?」

「レジエンドライダーと仲良くなれて嬉しいという趣味と国益が一緒に叶って嬉しい」

「少しは隠しましょう!!」

「と言い合いをする姿を見たナツキは渡された水筒の水を飲みながら背後に控えていたトルーパーを見て一言

「なあお前等さ、アレの何処に魅力を感じたの?」

「やる時はやる所ですかね」

「そのやる、やらないが極端なんだよなあ…あいつは」

「後は……自分よりも他人の為に怒れる所でしょうか」

「ん？　後先考えずに拳を出して皆を巻き込んでるだけじゃね？」

「そうではありますが私達を束ねる者からそれくらいでなければダメです…そうすね…：…国連の旗を撃ち抜いて喧嘩？　望む所だあ！　とか言うくらいでない」と

「アイツならマジでやりそうで怖い」

事実 ナツキの知らない歴史において国連に囚われたキャロルやサンジェルマン達を助ける為に軍勢を率いて躊躇いなく宣戦布告、シンフォギア世界全土を巻き込み焦土にした絶滅戦争をしたのは誰も知らない物語

「俺はいつかあのバカが抱えた責任の重さで潰れるんじゃないか心配だけだな」

少し無理をしているように感じると伝えたが

「責任の重さ?.....失礼ですが」

トルーパーの指差した先では

「ウオズは分かかってないなあ!焼き肉にはネギ塩だろうが!」

「我が魔王こそ分かかっていません!焼き肉はタレこそ至高な事を!!」

焼き肉に何つける議論をしていた2人がいた

「ハウンド!お前は焼き肉にはネギ塩とタレどっち派だ!」

「強いて言えば…わさび醤油派ですね」

「新たな派閥だとお！おのれ…四天王と牙王達も呼べ！こうなったらハッキリ白黒つけてやる！」

「またにして良いですか？そろそろ私はシエフィールドとお茶に行くので」

「何い！よし言つてこい！お前は働きすぎだから少し休め！それよりウオズ！これからお前にネギ塩の魅力について語り聞かせてやるから覚悟しろ！」

「良いでしょう受けて立ちます!!」

と不毛なトークを繰り広げている姿にポツリと

「今の陛下が責任の重さを感じていると思いますか？完全に部下と一緒に悪ふざけしてますよ…しかし焼き肉に塩単体は邪道なんでしょうか」

「ないな…それと邪道だぞお前等あ！焼き肉から迸る肉汁を何だと思ってる!!」

「いやアンタも混ざるんかい!!」

其の後 突如焼き肉には何派閥抗争と言うピースメーカー乗員を全て巻き込んで起こった逢魔史上一番不毛な争いが幕を上げたのであった

「いやあ！結局皆違つて皆良い！つて話になったなあ〜」

『考えればわかる事だろ?』

「んじゃ今日の夜は…：…焼き肉つしよー!!ははっ！折角だから船にあるお肉使おう！」

そう何処かのバンドマンみたいに弾けていた

そしてピースメーカーでBBQを開き皆で英気を養った後 遂にライブ本番！

なのだが

「何でメイド服？」

「知らないよ」

改めて擬態した2人は何故かメイド服を着ていたのだ

「すみません…その出店に出ないとライブ参加はダメみたいで…」

「はあ……てか何処から用意したのさこのメイド服？」

「何かオーディエンス？の人が持ってた古式ゆかしいメイド服らしいけど」

「オーディエンス……まさか！」

ナツキは慌ててスマホを取り出し電話した

「おいケケラ！おめえ！何してんだ！」

『おい誤解だ野田夏樹！俺はメイド服など送ってないぞ!!』

「ふざけるにや！こんな事するのはお前しかいないだろ！」

『いや…誰か知らないが良いセンスだと思っぞ』

「褒めるにや!!」

あいつはあいつで自分のサポーターと喧嘩してた

「はあ……面倒だなあ…適当に流すか……いや待てよ」

この状況は

「あら面白い催しですね、お嬢様」

「ベルファスト!?!いつの間に！」

「こんな事もあるのかとですよ」

あの完璧主義メイドを呼び寄せてしまった！だが流石にあの露出はダメと判断したのかユニオン製の露出少なめの奴を選んでいるぞ偉いぞベルファスト!!

「しかしお嬢様、メイドとしての振る舞いに難点があるかと」

「いやこれイベント、本職メイドが出てきてどうするのさ！大人気ないよね！」

「でしたら私がお嬢様にメイドとしての作法を教授させて頂きます」

「嬉しいけどそれはまた別のきか…」

いや待てよ、最近どうにも俺は上に立ち過ぎて付いてきている皆の事を考えてあげられてないんじゃないか…

『相棒?』

仲間の気持ちも分からないような奴は悪い魔王になっちまうぜ…寂しい時は寂しいと言えとソウゴの叔父さんも言ってたじゃないか！

『いやいやお前既に虐殺とか色々悪い事やってるから悪い魔王ダゾ?』

いやアレは敵なので人じゃないから沢山殺しても俺の中で殺人してるカウントにはならないので問題はなし!ノーカウント!!

『サイコパス!?!』

身内の命と他人の命は等価ではないでしょ?じゃなかった…じゃなかった…そうだよ最近俺は命令するだけだから…よし

「ベルファスト…僕に教えてくれ!」

「かしこまりました」

何故かベルファストのメイド講義を受ける事になった

「しかし以外とシンプルな服なんだな」

メイド喫茶のようにフリルやミニスカートではなく逆にロングスカートで華美な装飾は抑えられていたのだ…その分

「けど胸周りが苦しいにえ…」

「あのさ…本当にいつか刺されるよ？」

このバカは何故人の地雷を踏み抜くのやら

「はあ……」

『どうした相棒』

「なーんか、やな予感がする」

『今更だろうそんな事は』

考えても埒が開かないなとしていると

「ハルさん！ ナツさんお願いします」

「ん」

「はいはい！ 行こうぜえ！」

と集まって演奏の用意をしていると

「あら無駄に頑張るんですね士織さん、足掻いても私の勝ち揺るがないのに」

「美九」

「約束忘れてませんわよね？」

「ああそつちも忘れてないよな？」

「勿論、勝つたら十香さん四糸乃さん六喰さん」

ほーほー

「折紙さん、七罪さん」

は？

「耶俱矢さん、夕弦さんは私のですよ？」

「……え？何か増えてない？」

しかしその言葉でキレた者がいた

「ちよつと待て何それ」

「聞いてないにえ」

2人は怒りの余り士織の肩を砕かないばかりの握力で握りしめていた

「あたたたたた！すみません!!後で説明しますから離して!!」

とりあえず離して2人の話に戻る

「アイツ聞いてたよりヤバいな」

「つかなんで人の恋人を勝手に賭けてんだよ」

ギターの調整をしていると美九がハルトの元へ近づき一言

「あなたが連れてたメイドさん、私に下さいな」

彼女はベルファストを一眼見た段階で彼女を狙ったのだろうそしてお嬢様と呼んだ

俺を言霊で相手を操り奪うのだろうか…生憎

「やなこった、ベルファストは僕のメイドだよ誰にも渡さない」

「こちとら最高最善の魔王からお墨付き貰ったんだ洗脳、催眠の類は効かねえのよ
だ
が

「っ！あなたも…」

「特異体質だか何だか知らないけどさ僕の大切を奪うなら…」

それと同時に気温が物理的に下がると周囲の大気が震え、鏡からは金切り音と王の許可を待つミラーモンスターの入群

「殺す」

ぶつけるは純粹たる殺意

「あ、ちよつ！」

土道は止めに入るがナツキが止める

「はいはい君は下がって」

「なんでですか！」

「そもそも君の喧嘩なのに何、八舞や七罪にハルトの義娘も巻き込んでんだよ！」

「それは…その…」

「理由は後で聞く、つか了承無しに話進めた事が俺は許せないにえ…だから今回は何があってもハルトの味方をする君の助力はしないよあの精霊を殺すとハルトが決めたなら俺も彼女を殺す」

「っ!!」

「今回の喧嘩は君とアイツのだ、始末は後でするよ」

「っ！見てなさい完璧に打ち負かしてあなたのメイドを奪いますから！」

と部屋から出たのを確認すると

「誰が七罪と折紙をお前みたいなのに渡すか」

「よく堪えたなハルト！」

「なーにアレくらい朝飯前だともさ…やっぱりあの女は敵だ…結果関係無く排除する」

「だよねー俺も耶俱矢と夕弦を渡したくないし勝ち負け関係なく排除だね」

「それは困ります!!」

「前に言ったでしょ？俺の大切に危害を加える奴は誰であろうと叩き潰すって、次は止めないからお前らも好きにしろ」

『『『『』』』』』
!!!!!!

すると聞こえるのは鏡の世界からの大観声、アナザーオーデインが加わった事でミラーワールドにいる最強モンスター ゴルドフェニックスが傘下に入り、結果としてミラーワールドのモンスターの大半がハルトの傘下に加わったのだ

故に養うコストが多くなったが、そこは問題ない以前から支援物資で彼ら用のハムやらベーコンを貰っているので大丈夫だから

「ありがとうなあ皆々」

「ナツキさんも何か言ってください!!」

「あゝ」

ギターを握る手は血が滲んでいた、かなりギリギリで堪えていたのが分かりナツキは止めるデメリットよりも止めないメリットを選んだのである

「勝つぞ」

「は？ 負けるとか思ってたの？」

そう答えたのであったが

「ちよつと！」

「ごめん士道君：やっぱり俺も彼女達を狙うなら今回は排除するに賛成かなラタトスクの理念で精霊の社会生活支援とかあるけどアレは折り合いつけられないでしょ？」

「でなくても俺の大切に手を出す奴は等しく敵だ」

全てを救いたい士道と仲間の安全第一のハルト達で意見が割れてしまったのだ

その頃

「なーんで東さん達は船で待機なのさあ！折角ハルくんの女装ライブ見に行けるのに！」

と文句を言う東に対して千冬は淡々と話す

「仕方ないだろう、今回の精霊の能力が音に関連する力というのは二重のお陰で分かっているとは言え対策無しだとハルトも落ち着かないだろう仮に洗脳でもされたら眼も当てられないぞ」

「多分そうだったらハルトはアナザーオーマジオウになるね」

「だからって音銃剣錫音とライドブックをピースメーカーに置かなくても」

「音の聖剣とライドブックだからな加護が何かで私達を守ってくれるらしいが……」

千冬の目線の先には

「これが音銃剣錫音…アナザースラッシュから手に入った聖剣か……調べたい…錬金術師の血が騒ぐ!!」

「キャロりん！落ち着いて!!」

「それよりキャロル、ガツチャードの件だが」

「いや冷静すぎるでしょ千冬」

「ああそれなら問題ない適正者はそろそろ来るぞ」

「そうか…」

「そう言えばさガツチャードが誰か東さん知らないんだよね〜」

「そうかアレはキャロルとエルフナイン、サンジェルマン達を作ったから東は知らないのか」

「私も知らない」

銀狼も首肯すると千冬は一言

「安心しろお前達も良く知っている奴だ…きたぞ」

「へえ〜……え？えええええええええ!!」

とブリッジに束の絶叫が響いたと言う

—————

さて取り敢えず

「ベルファストはピースメーカーに帰ってね、ジャンヌ送ってくれる」

「いやよ折角のお祭りなのに！」

「何かあつてからじゃ遅いから頼む、嫌なら令呪を使う」

「……………分かったわよベルファスト」

「はい……………ではご武運を」

そう言うと2人は転移したのであつた

「さーて、やりますか」

憂いはない、ならば全力でやるだけと気合いを入れ自分の番の前　ステージ脇で

「キキキキンチョウしてきた！」

ナツキがガクガク震える中でハルトは軽くストレッチをして

「え？なんで？」

あつけらかんと答えた

「何でお前は緊張してないんだよ!!」

「そりやもつと多い人の前に立って話してますし」

「あ……」

そだった、この男は何千何万という数の前で堂々と演説などをしているではないか

ピースメーカー艦内で

『俺達は敵を倒しに来たんじゃねえ！ぶっ潰しに来たんだ!!ぶっ潰す!!ヤーーーー
ハーーーー!』

『『『ヤーーーーハーーーー!』』』

「アレは演説なんだろうか…」

確かに

『オーケイ！お前ら待たせたなあ！今日の宴会も楽しんでこうゼエ!!』

と宴会で場を盛り上げる事に余念のない奴でもあるな

「失礼な俺だつて王様として国に住まうものにちゃんと話すよ……テストタロツサが台本
作ってくれるからな！」

本当、テストタロツサ様様である！

『お前の言葉で話せ!!』

「話してるとも…俺の国の民になってくれてありがとうと…ちゃんと伝えているとも」

「こう言う時だけ王様ぶるなよ腹立つ」

「あ？何か言ったか？」

「いや何も」

そりや緊張しないかと納得する…：しかしまあ

「緊張しなさ過ぎるだろ失敗するかも！とか思わないの？」

「思わないやるだけやったら後は野となれ山となれ、それに大丈夫だよ」

「何というか…」

「ま、僕達は最強だからな相棒？」

『ま、相棒らしいな』

『おうとも！俺達あ無敵だぜ！』

「ねえ、まさかと思うけど失敗してもタイムベントでやり直せるとか思っていないよね？」

「……………」

「おいこつち見ろ」

「時計の針は前にしか進まない、戻つちやダメなんだ！」

「その台詞をこつち見て言えヨオ!!」

「なんてな安心しろって」

「次の方お願いしまーす！」

「はーい!!」

「聞けよ!!」

作り笑顔でハルトはバイオリンを片手に現れると

「さあ行くぞブラッディローズ（市販のバイオリン）」

そしてアナザーキバ、アナザーダークキバ仕込みのバイオリン演奏をしたのであった

俺に技を教えてくれた先生に恥をかかせる訳にはいかないと意気込んだ演奏は会場をスタンディングオベーションで沸かせるが

『まあまあだな』

アナザーダークキバの言葉にハルトは笑う当然、この程度で妥協などしないさ

「当たり前だ」

礼をするが自身に満ちて答えるハルトだったが

係の人にバイオリンを渡すとマイクに持ち帰る

「よし撮影完了」

「ねえこれ大丈夫？」

「知らん何かあればウオズの責任にする」

「それで良いんですか？」

「知らん：しかしウオズよ流石に女装したハルト坊のライブを録画するのは：」

「我が魔王が珍しく演奏してるんですから撮影しないとダメですよ」

「まあそうじゃな」

そして後から現れたナツキと一緒にステージに立つとマイク片手に一言

「降臨！満を辞して！！」

そして流れる歌は理外の double action wing form 高貴な舞を思わせるダンスと共にナツキが良太郎パート、ハルトがジークのパートを歌い上げたのであった

二曲目はナツキに頼まれて仕方ないと思いい仕上げたサインはB…ふむやはり複雑！

そして終わると土織と合流、イライラのままギターとドラムを鳴らしたハルト達であつた

結果はまあね

「勝ちー」

「当たり前だ」

しかし美九は認められないと痲癩を引き起こし天使を顕現 奏でる音楽で会場にいた観客が暴徒とかしハルト達に襲い掛かる土道は十香と逃げたようだが…

「はあ…これだけいるならheavenの在庫には困らんな」

「作るな！逃げるぞ!! 3・8・2・1!」

ナツキとハルトは元の姿に戻ると専用コードを打ち込む

「よし宣言通りあの女は排除だ」

変身しようとアナザーウオッチを構えると

「我が魔王」

「ウオズ？何でここに……まあ良いや蹴散らすぞ！」

『ゾンジス／ザモナス！TIME BREAK！』

この技はジョウゲンとカゲンかアイツらめ俺が心配で駆けつけ

『相棒避けろ!?!』

「っ!!」

ハルトは慌てて体を逸らすと俺のいた場所にライダーキックが命中したのだ

「テメエ等、俺を殺す気か！敵はあっち!!」

指差して叱るが頭上に影？

ドローーン!!と大きな音と共に振り下ろされた大きな前輪、巻き起こる粉塵にナツキは驚く

「ハルト!?!」

ナツキは叫ぶがハルトはアナザージオウⅡに変身して攻撃を回避していた

「おいテメエ等、何してんだコラ」

・・・

「簡単じゃよお姉様に手を出す不届き者に仕置きをするのじゃ!!」

「は？」

仮面ライダーアークの踵落としを回避したアナザージオウⅡは取り敢えず

「らあ！」

アークの顔を殴り怯ませると

「ウオズ！四天王が反乱したぞ！どうなってんだ！」

「当然です、我が女王の覇道を汚す者に誅罰を加えているのですから」

「お前何言ってる…」

『ファイナリー』

アナザーファイナリーに変身したウオズはそのままアナザージオウⅡに襲い掛かる

「ウオズ……」

『待て様子がおかしいぞ！』

「みりや分かる！ナツキ!!」

「あいよー!!」

同時にやってきたジェットスライガーに乗り込むと2人はすぐに会場から撤退した

道中 ピースメーカーに連絡すると

「銀狼、東！」

『はいはい！』

『見てた…まさかウオズ達が…』

「あの馬鹿5人に何があつた教えて！」

『簡単に言うとな彼女の天使の力で洗脳されてるねえ〜』

『私達は技の射程外なのと音銃剣錫音のお陰で大丈夫だったけど…』

「ウオズ達は会場にいたからダメだった訳ね」

『それと序でのバッドニュース！』

「何さ！」

『七罪と折紙、八舞姉妹、六喰、四糸乃ちゃんがあっちについて二亜が攫われた』

「ハア!?何で二亜が！」

『何かハルクんのメイド服を撮影しに行った時に拉致られたみたい!』

「アイツ追われてる自覚ある!?!」

クソツ! 状況は最悪だ特に六喰の力はまずい!

現状 ハルトを倒せる可能性を秘めた彼女が敵対するのは不味いし二亜の援護にも向かわないとダメになった

「取り敢えず皆はそこに待機して! 変に援軍は送らないで敵はあの馬鹿5人で大丈夫だから!」

通話を切るとジェットスライガーは近くに着陸すると

「どうするハルト、ウオズ達が!」

「……………だから言ったんだよ馬鹿どもが」

『相棒……』

歯を食いしばる胸に去来するは怒りの感情

暫くすると土道が合流した

「ハルトさん！すみません…その」

謝罪をされたが今のハルトには響かない

「だから言ったんだ排除しろとな」

「っ……」

「行くぞナツキ、あの馬鹿共を助ける」

「あいよ」

「けどあの人数に折紙達も「だからって逃げる理由あるか？」…」

「俺達は俺達の大切を取り戻す…あの女は排除する」

「だね耶俱矢と夕弦…必ず助けるから」

「悪いな少年くん、これからは競争だ俺達があの子を殺すか君が助けるかのな」

2人はバイクを呼び出すと跨るが発進前にある人へと電話した

「ケケケラ、悪い力を貸してくれ」

『そう言うと思ってDEM側にテスター軍団と逢魔に貸し出された改造ジェットスライガーやサイドバツシャーで並べたぜ』

「頼もしいな」

「よお…この間の借りを返してもらおうぞ黒狐」

『いいぜその依頼聞いてやる』

そしてバイクを走らせた2人の前には操られた大量の人がわらわらと邪魔している

「分かってんだろ？」

「ああ今回は自重はしない」

と2人が下車するとスピーカーに響く声

〈あられましたの。負け犬が〉

「負け犬はお前だろ、敗北の事実を認めず捻じ曲げて」

へけど残念ですね、貴方達のお仲間と大事な人は私のものですわよ可愛い彼女達と遊ぶから消えなさいな怪物が

その一言で完全にハルトとナツキがキレた

「ふざけんな……テメエ……」

「お前だけは……」

「許さん!!」

すると何処からともなく空から声が響く

『そうか……なら俺の夢をお前に託す』

『怪人と人間の共存する世界……その夢を叶えてくれ魔王』

『感情の閾値突破を確認 世紀王の力が覚醒完了』

同時にウオッチに刻まれた顔は太陽と月の戦士

それを見るとハルトとナツキは鏡合わせになるように同じポーズを取る 体の中にある怒りを爆発させるように

「変……身!!!」

「変身!」

ナツキは力強く、ハルトは冷静に発した言葉に合わせてアナザーライダーになる為の紫の波動が周囲の人を吹き飛ばすと現れた姿

とある世界で 怪人の王として君臨した創世王

その後継者 世紀王

力を与えられた2人は王の証である石を賭けて敵対の歴史を歩んだ

だがこの世界では肩を並べて敵と戦う友である

その姿は黒いバツタと銀のバツタ

まるでハルトの怪人態を思わせるような怪人バツタ男だが体の節々には戦いで擦り切れた2人を示すような容貌

『BLACK SUN』

『SHADOW MOON』

人と怪人の未来を信じる太陽 アナザーブラックサン

怪人の世界を照らす月光 アナザーシャドームーン

負け続けた世紀王達が立ち上がる 今度こそ

己の大事なものを守る為に！

3話 星と惑星 集うもの達

前回のあらすじ

精霊 美九の天使の力で七罪や八舞達だけにならず ウオズ達までも洗脳され二亜が攫われてしまったのだ

その事実にはルトとナツキは怒りの感情に任せてアナザーBLACK SUN、アナザーSHADOW MOONに変身し仲間を取り戻す為にライブ会場で再度の殴り込みに行ったのであった

会場付近では洗脳された観客が数に物を言わせて2人に襲い掛かるが

「邪魔だ」

アナザーSHADOW MOONの手から発生した念動力によって吹き飛ばされるが、

それでも数は多く何人かは間合いに入る……しかしながら

「はあ！」

アナザーBLACK SUNが肉弾戦……まあ手抜きながらも当身で気絶させて回る

ひたすら前進していくが

「数が多過ぎる!!」

「文句言ってる暇があるなら手を動かせ！」

そんな感じで話していると突如、空から現れた電車が2台停車すると中から

「待たせたな魔王」

「遅れたが悪の幹部（決定）のネガタロス参戦だ」

「俺もいるぜ大将、ナツキ屋」

「ゴーストイマジン：それ中の人ネタか？」

「俺も個性豊かな魔王軍に埋もれないようにと思つてな：まあこの選択に後悔はねえ」

「流石はゴーストイマジン：一人で怪人一個部隊並みの戦闘力があるとの噂だ」

「そりや変身出来るし劇場版の敵：あとお前が兵長は無理だろ？」

「お、おう：じゃない！何してんだよアイツに操られるぞ！」

「安心しろ魔王、俺達は大丈夫だ」

「へ？」

「どうやら会場で聞かない限りは影響が薄いらしい」

ほほお、つまりあの馬鹿共は会場にいたから洗脳されたという事だな

「つまり露払いくらい俺達も役に立てるって訳だ」

「お前等…」

「そう言う訳だここは俺たちに任せろ、ライダー怪人軍団長ネガタロス」

「同じくゴーストイマジン兵長だ」

「同じく副長 牙王…おい待て兵長がいたぞ」

「気のせいだ」

と全員がベルトをつけてパスを読み込む

「変身」

『NEGA／SKULL／GAOH FORM!!』

変身した3人はガッシャーと武器を構えると手製を率いて2人の活路を開いたのだ

「今だボス!!」

「ありがとうお前たち!それと命令だ!終わったら宴会するから死ぬなよ!!絶対だ!!」

「はっ!!」

「行くぞ!」「おう!」

2人はバイクに跨り颯爽と道を駆け抜けた

そして会場近くまで行くと

「遅かったな野田夏樹！」

「ケケケラ……」

「待たせたな！ テスター軍団は別場所に控えてるが……しかし黒いバツタか以外と似合
うじゃないか」

「ああ……託されたんだよ」

「そつか……しかしここからが本番だぜ」

「中の様子は？」

「見れねえが精霊達は中にいるのは確定だな」

「ウオズ達は？」

「それは…あそこだ」

ケケラの手を向けた先には

「待つてましたよ魔王」

そう見下すような目をしているウオズ達であった

「ウオズ…」

「女王の為に貴方には死んでもらいます」

「…………ハルトここは俺が「いやお前はお前の目的を果たせ」けど！」

「仲間だから殴れないとかじゃないよ…ただ部下の不始末は上司の責任だから…あの馬

鹿共は俺が倒す」

「……………」

「良いから行け！」

「頼んだ!!ケケラ！」

「おう！」

「ああ任せ」行かせるわけ無いよねえ」っ！」

邪魔するとはかりにボウガンで射撃したザモナスの攻撃をアナザーBLACKSU
Nは近くのマンホールを蹴り上げて盾にして防ぐ

「危なかった…流石はメイドインジャパン…」

「そりゃそうだろう何せあのギンガの攻撃を止めたんだからな」

日本のマンホールは宇宙の概念にさえ手が届く

「そんな！」

「ならばこれでどうだ！」

『真』

ゾンジスがネオライダーの1人 仮面ライダーシンのウオッチを起動 体はその物が万物を両断する刃と化し そのままかつての主人に振り払われようとしていた

『相棒！危ない！』

声に反応し念動力で防御するとアナザーSHADOWMOONは何を思ったのか

「ふん！ぐぎぎぎぎ……」

自分の体についているバツタの両脚部分を鷲掴み強引に引き剥がそうとしていた

『お、おい相棒何して…』

「ガン〇ムで見たんだ！機体の手を千切り武器にする姿を!!」

『お前……まさか』

「俺は生きる!!生きて皆と宴会する!!だからこの程度の痛み何ともないわあ!!!」

そのままメリメリメリと生々しい音と共に両腕は両脚部分をもぎ取る、ブツ！と千切れた脚を力強く振り抜き剣にするとゾンジスの手刀を双剣で受け止めたのだ

そして無くした部分は怪人由来の再生能力により直ぐに再生したのである

生涯で2本しか使えない誓約を無くしたのだ

「はあ……はあ……痛え」

「貴様……そこまでするか！」

「けどな……俺はお前たちがいなくなる方がもつと痛え!!」

そのまま力強く双剣を振り抜きゾンジスを弾き飛ばすと双剣をゾンジスのマントに突き刺し動きを封じる

「痛いだろうが覚悟決めろよコラア!!」

同時にアナザーSHADOWMOONは体内に溜め込んだ生命エネルギーを解放すると両目が緑色に光始めると同時に跳躍すると両足を前に突き出すドロップキックを叩き込んだ

アナザーシャドーキックによりゾンジスは変身解除しカゲンはそのまま気絶した

「次！」

「舐めんな!!」

そしてザモナスはボウガンの射撃により牽制する…流星に大変だな

「ちっ！」

伊達に仮面ライダーに変身はしていないなど一人ゴチると

「っ!!あのバカっ！」

『アナザーエクスプロージョン』

突如降り注ぐ流星群に慌てて念動力を使うが間に合わずに直撃を数発受ける

「あ……………く……………っ」

「無様なものですね」

そこにいたのは紛れもなく

「ウオズ：お前ジョウゲンとカゲン諸共やる馬鹿がいるかよ」

「全く困すら熟せないとは」

その足元には念動力で引き寄せた2人の姿があつた

「何で？助けたのさ敵なのに…」

「仲間だろうがボケ!!それと逢魔で仲間殺しは重罪なのを忘れたかよ…」

「逢魔？あんな時代の敗残兵が集まる居場所に用などありませんよ…私が忠誠を尽くすのは女王だけです」

「っ!!!」

「貴方にはもう付いていきません」

『もう付いていけない』

それを聞いたハルトは怒りのあまり頭が真っ白になった……基本的に部下には寛容であり多少の無礼は笑って許しても今の言葉だけは許せないものがあつた

「……………」

「何？」

誰が未来で王になると俺に言った！その為の預言者として来たのは誰だ！未来の俺よりも今の俺の側にいると言つたのは誰だ！

大事な居場所と言つたのは誰だ!!

「その言葉は取り消せよウォズ!!!」

ー皆の居場所になつたらなつてー

「っ!!」

同時にアナザーファイナリーの体を放電が襲うと強制変身解除と相まつた。そうアナザライダーの反乱防止機能。王の勅令が今本来の用途で使われたのである。生身になつたウォズにアナザーSHADOWMOONはそのまま胸ぐらを掴んで持ち上げた。

「……………こんな事の為に王の勅令があるんじゃないよ……………」

『いや正しい方法なんだが?』

「今までとは違うんだよ、今日…俺は仲間裏切られた……………しかも一番信頼していた仲間!!」

『ハルト落ち着け！今のは洗脳されての言葉だウオズの本心ではない!!』

「許せない許せない!!このまま、こいつの首をへし折ってやる!!!」

『おい聞いてんのか相棒!!』

ハルトは手に力を込めそのままウオズに引導を渡そうとした その刹那に過ぎるは過去の記憶

『我が魔王』

「……………つ!!」

ハツとして手を離すとウオズは咳き込みながら此方をみる

「何故です殺せたのに」

「あ……だ……だ……だ……皆ずつと一緒だったじゃん……そんな家族同然の人を殺したりなんて出来ない……」

だが

「ですが私達を殺そうとしましたよね家族同然というならば少しは躊躇ってくれても良いのでは？」

「矛盾しておるのお……お主の信念や在り方は」

「歪ですよ」

「あ………」

その刹那 ハルトの中で何かが千切れた音がした

「そ…：そうだよね守るって言った人達を殺そうとしてんじやん…：…何？俺って敵も味方も同じにしが見えないの…：…何それ…：俺って皆の言う通り本当に馬鹿じやん…：」

ガラガラと崩れ始める自己 暗転する視界、涙で歪む顔 そして体表に現れる体の亀裂

それはアナザーライダーのいる精神世界にも影響を与え初めていた急に暗転し亀裂が入り壊れ始めたのである

『おいハルト、落ち着け!!』

『頭冷やせよ、お前のやった事は「仲間殺しでしょ！結局助けるなんて綺麗事だったんだよ俺は殺したいだけなんだ!!」違うぞハルト!』

仲間を手にかけてそうになった絶望と悲しみがハルトの中にある ライドブックやア

ルターブック、そして始まりの5人に連なる力と共振を果たしたのである

「……………もうやだ……………もう全部……………消えちやえ!!」

ドス黒いオーラと聞こえる怨嗟の声の一つに集約し始め 遂に本となる

『グリモワール…』

災厄の未来が確定しかけた時 ハルトの脳裏に

—————

「此処は？」

先程までいた場所と違う事に混乱している中

「常葉ハルトのアンダーワールドだ」

「アナザーライダーのいる場所じゃなくて？」

「ああ……そして見ろ」

その視線の先にあるのは

【ごめんなさい……本当にごめんなさい!!】

泣きながらハルトから離れた彼女の姿である

「あかね……」

「絶望の瞬間だ、お前がふざけてハザードがトラウマと言っていたがあの程度、表層に過ぎん本当の絶望はあの場面だろ？」

「……………」

「そして出会った大切な仲間を手にかけてしまった」

「っ!!それは違「くはないだろう?」あ……ああ……」

「どうだ?今の気持ちは?」

「ははは……もうどうでもいいーや……」

その誰かの声にハルトの意識は闇に堕ちかけた その時!

【助けてクウガーー!!】

「っ!!」

場面が変わり 立つのはかつての自分、何も出来ない助けしてくれないと全部諦めた幼子が叫んだ助けを求める声に

「!!!」

自分を助ける為に現れたヒーローがいた

「そうだ……」

あの時……俺は何を望んだ？

—————

現実世界で

「……………て」

「何だ？」

「……………けて」

「何を言っている」

仲間といたが本当の意味で彼等を信頼していたのだろうか？相棒達を守る為に仲間達を守る為に彼女達を守る為に強くなつた…だが無くす事を恐れてしまいらー人で立つ事に慣れ過ぎていたからこんな当たり前の言葉すら言えなくなっていたのではないか？

「助けて……………助けてよお……………」

国を引っ張る者でも怪人達の王でもない ただの泣きじやくる弱い人としての常葉
ハルトの言葉である

「助けて……………仮面ライダー……………助けてよお……………」

助けて…そんな小さく掠れる声と共に流れた涙が地面に落ちると

オーロラカーテンと共にある人物が現れたではないか

「あれ？ゴージャスじゃない…つてハル兄！大丈夫!!何で泣いてるのさハル兄!!さつきまでゴージャスな感じだったのに!!」

それはハルトより幼い少年だが大事な義弟でもある

「……………」夏?」

織斑一夏である

「何で?」

逢魔にいる彼が何故此処に?と去来する疑問に答えた

「助けてって声が聞こえたんだよ何でか知らないけど……まさかハル兄なの？」

「あ……………」

「けど何で聞こえたんだろ？俺、逢魔にいたのに？」

それと同時に現れた人物がその問いに答えたのだ

「それはお前が仮面ライダーだからだ」

そこに現れたのは指輪の魔法使い 仮面ライダーウィザードこと晴人であった

「仮面ライダー？俺が？いやいや俺なんかハル兄が言ってたヒーローになんて……」

謙遜する一夏だったが

「助けを求める声があるならば必ず駆けつける、お前もその声を聞いたんだろ？」

「っ！」

その言葉に一夏は首肯すると彼は

「俺と一緒にだ、必ず助けるそう答えただから此処にきた…だからお前も仮面ライダーだ」

かつてハルトの師匠に向けて言った先輩の言葉に一夏はゾクゾクと体を震わせた

「うおお…ハル兄の憧れからお墨付きを貰ったよ…なら俺は…今日から」

一夏はオレンジ色のドライバーを腰につけた

『ガッチャードライバー』

そして二枚のカード…それはキャロル達が作り上げた錬金術の結晶 ケミーカードである

「仮面ライダーガッチャードだ!!」

『ホッパー! スチームライナー!』

二枚のカードを装填して一夏は習ったばかりの錬金術の構えを取り

「変身!!」

『ガッチャーンコ!!』

そして二つの力が一つとなる

『スチームホッパー!!』

現れた青い装甲にマフラーを翻すのは新たなヒーロー

ケミーと手を繋ぎ新たな地平を開くもの

仮面ライダーガッチャード 誕生!!

「一夏……」

「待っててハル兄！ウオズさん達は俺が助けるから!!」

と慣れないながらも戦いの輪に参戦するガッチャードを見送る

『おいハルト…義弟が仮面ライダーと認められたのに何故貴様は膝をついて泣いている!!』

「っ！泣いてなんかないやい!!」

『嘘つくな!』

「…………ごめん皆……」

『本当だ』『そうだな』『反省しろ脳筋』

「わーったよ……晴人さんもありがとうございます……やっぱり仮面ライダーが俺の希望です」

「約束しただろう？俺が最後の希望だとな」

「っ!!はい!!」

晴人は肩に手を置く

「あ………」

「これ使うぞ良いな」

「はい！」

—————

アンダーワールドにて

「くそッ！何でこんなタイミングで仮面ライダーが現れるなど!!」

悔しがる影はだんだんと形を成していく

「奇跡だつて？」

「っ貴様あ！」

現れた晴人、彼はエンゲージリングをハルトに使いアンダーワールドへとやってきたのである

「アレって」

「お前の無くした記憶の残骸とでも言うものかなそれがファントム因子と結合した個体だな……お前を絶望させて最強のファントムになると」

「残骸？」

「そうだ！俺はお前が捨てた記憶を宿すもの、あの世界で貴様が己を保つ為に切り捨てた負の存在だ！」

「へー」

「いや興味を持って」

「あ、相棒」

「全く……貴様という奴は！」

「ごめーん！」

「ノリ軽いな！そのノリでグリモワールを開かれたら仮面ライダーが浮かばれんぞ!!」

「それは一夏に感謝だな」

「そうだね本当、義弟の成長は早いもんだよ」

「お前は全く成長してないがな」

「……………闇堕ちるよ？」

「いや立派に成長しているぞ！胸を張れ！」

「よろしい……………んで何の記憶を捨てたのさ……………まあアレか俺が受け止めないとダメな奴な訳ね」

「ナツキやあの世界での悲劇だ」

「悲劇は分かるけど何でナツキ？」

「アイツもウオズ達と一緒にだ、お前の家族にいじめられて苦しんで…そしてお前をついていけないと見捨てたんだ！」

「あの時の…そう言う事ねそりや初対面のナツキが俺を見るなり知り合いみたいに話す訳だ」

「アイツらだって同じだいつかお前を見捨てる！俺は1人だ!!」

「そんな事ない！」

「何故そう信じられる！ウオズの言葉を忘れたのか！」

「忘れてない……だけど……助けてって俺の声を聞いてくれる人がいる助けしてくれる手を伸ばしてくれる人がいる……そんな人達がいるなら……そんな優しい世界があるなら……俺は信じてみたい！」

「その我儘は皆を不幸にする!!」

「それ以上に皆を幸せにすれば良い！俺みたいな奴を作らない誰もが互いを尊重し合える世界を作る……それが……俺の王道だ！あとお前は忘れてるぜ俺は1人じゃない!!」

「その通りだハルト」

「俺達がいるってな」

「それに希望もある」

晴人を見ると彼は少し笑う

「そんな……また俺は奪われるのか……そんなの嫌だ！そんなの「俺はお前から何も奪わない」っ！」

「お前の持つてる闇も全部……俺に託せ」

「託す……」

「同じ俺なら……元に戻るだけだお前の闇も全部受け止めて……俺は王となる！」

「綺麗事を！」

「綺麗事だよ……けどそれが一番良いつてあの人も言つてたろ！いつまでも拳でしか解決出来ない方が悲しいって!!お前も俺ならあの人の言葉を信じてみるよ！」

「……………」

「俺を信じなくても良い……けど俺が憧れたヒーローを信じろ」

「……………良いだろう」

「そっか」

「だが忘れるな貴様がブレたら遠慮なく体に乗っ取ってやるわ」

「そんな時は晴人さんお願いします」

「ああ任せろ」

「……………おい」

「ん？」

「後は頼んだよ幸せになれ、なれなかった俺の分まで」

「……一緒になるんだよ馬鹿野郎」

と2人はハイタッチをするなり世界が白く染まり全員の意識は元の場所へと戻るの
である

—————

現実世界

「うわあ!!」

ガッチャードはアナザー1号と仮面ライダーアークの巨人タッグに押されていた

「くっ……まだまだあ!!」

負けられない!義兄が皆が託してくれた力で守る為にと気合いを入れるとその背中
から聞こえる歩く音 振りむくと

「ま、初陣にしては中々やるじゃん一夏」

「ハル兄、大丈夫なのか？」

「あつたり前よ！さつきは悪かったなカッコ悪いところ見せてさ…その代わり特等席で俺の活躍を見せてやる」

「そんな事…寧ろハル兄も人間だったんだなあ」と

「それと言う意味だ？…ま、仮面ライダーガッチャードな良い名前じゃないか頑張れよ一夏」

「っ！ああ!!」

「という訳で第二ラウンドだフィーニス、ヤクツキ」

「妾達に勝てると思っっているのか！」

「勝つさ、お前は聞こえなかったのか？ハルトの助けてって声が」

「勿論聞こえたぜ！」

と現れたのは

「師匠!!」

「久しぶりだなウイザード…それと…ハルトお前の声ちゃんと聞こえたぜ!!」

「し…師匠……!!!」

「俺だけじゃないぞ」

「まさか!!」

すると遠くから

「怪電波の発進源はこの辺りでござるぞタケル殿お!!」

「本当なの御成?……つてウイザードさん!!」

そこに現れたのは袈裟懸けのハイテンションな坊主と若い青年だった

「久しぶりだなゴースト」

「どうしてここに…」

「助けてって声が聞こえてな」

「俺もです」

そしてまた一人

「暴徒化した市民がいるというのは此処か…つてあれは…仮面ライダー!! まったくルパンの奴も復活してるらしいし一体どうなってんだ!」

「取り敢えず泊さんは避難誘導を怪我人は僕がみます」

「ああ頼んだ!!」

パトカーから降りた刑事と白衣を来た医者が現れた、近くに知り合いに気づいたのか

「神様に…君は!」

「泊さん!! 先生!」

「タケル君!」

「ああ久しぶりだな皆」

「何かちよつとした同窓会みたいだな、ならー人忘れてるな」

と師匠が進ノ介に渡したのはベルトであつた

「ベルトさん？」

「やあ進ノ介、また眠っていた所を鎧武に起こされてね…またドライブピットの地下深くから呼ばれたよ」

「やつぱり神様ってスゲエな」

「進ノ介、エンジンの調子はどうだい？」

「ああトップギアだひとつ走り付き合えよ」

「OK！」

この錚々たる顔ぶれに

「凄い……これが本物の仮面ライダー……」

「お前も晴人さんから認められたろ？なら胸を張れ仮面ライダーガッチャード」

「ああ！ハル兄じゃないけど燃えてきたぜ！」

「それより……この光景を生で見れる日が来るなんて……」

『どうしたハルト？いつものお前なら感動しながらサインを求める場面だろ』

「……………」

『ハルト？』

『お、おい気絶してるぞ！急な幸せの過剰供給で頭が弾けてやがる！』

『しつかりしろハルト!!』

「これは夢なのか俺は今、伝説を目撃しているんだ!!」

「安心なされ、これは夢ではございませぬ現実ですぞ!!」

「うおおお！御成さんだあ！…すみませんファンですサインください!!」

「拙僧のを!!」

「お願いします!!」

『よし、それでこそハルトだ!』

『実家のような安心感だあ!』

『親の顔より見たぜこの光景!!』

「えーと彼は？」

「俺の弟子だ」

「神にも弟子とかいるのか……」

「は、初めまして皆さん！俺常葉ハルトつて言います！その……皆さんのファンです！サインを……と言いたいんですが……実は……彼処で暴れてるのは俺の仲間なんです敵に洗脳されてて……お願いします!!俺の仲間を助けるのを手伝ってくださいませんか!!!」

ハルトは躊躇いなく土下座をした、それは迷いなんてなく純粹に仲間を助けたいという思いからきたものであった

「……………」

「何故……あの姿を見て心が痛むのでしょうか？」

「知らん！仮面ライダーは人類を滅ぼす兵器のなり損ない！ここで粛清してやる！」

「さあお前たちの悲鳴を聞かせてみよ!!」

「お前らさ悪者してる方がイキイキしてて俺複雑だよ」

ハルトは冷めた目をしていたが

「けど待つてろ今すぐ助ける！」

「また私達を傷つけるのですか？」

その問いにハルトは迷わず答えた

「もう決めたから迷わない！安心しろ痛みは一瞬だ！」

言つて分からないなら殴り飛ばして話をしてやろうと思ったのである

「取り敢えず話は後だ…美九を殴り飛ばす前にお前達を助ける！」
『グランドジオウ』

ハルトは迷わないとばかりに力を解放させた
そして

「さあ行くぞ」

『ドライブバーオン・プリーズ！』

「市民の安全は俺が守る！」

『!!』

「弟子の頼みだ答えてやらないとな！」

『オレンジ』『レモンエナジー…ロックオン！』

「皆の命を未来につなぐ！」

『アーイ！バッチリミナー！バッチリミナー！』

「これ以上、患者は増やさせない…お前たちの運命は俺が決める!!」

『マイティアクションX!…ガツシャット!』

「[[[[[変身!!]]]]」

『フレイム!プリーズ!ヒー!ヒー!ヒー!ヒーヒー!!』

『ドライブ!タイプ・スピード!!』

『MIX!ジンバーレモン!ハハア!!』

『開眼!!俺!iet's go!覚悟!ゴ・ゴ・ゴースト!』

『レベルアップ!マイティジャンプ!マイティキック!マイティマイティアクションX!!』

『祝え!!アナザーライダー!グランドジオウ!!』

そして並び立つヒーロー達

「さあ！ショータイムだ！」

「行くぞベルトさん！」

「OK！START YOUR ENGINE！」

「此処からは俺達のステージだ！」

「命燃やすぜ！！」

「ノーコンティニューでクリアしてやるぜ！！」

「大丈夫、俺は強い！！」

『相棒がふざけてないだとお！』

『それだけ本気って事だ行け！ハルト！！』

「オラアアアアア！」

恐れなどかなぐり捨てた魔王は再起する為に仲間と戦う！

4話 怒り任せの私刑人

さて前回、平成ジエネレーションズが幕開けた頃

ナツキはケケラと共にライブ会場へ殴り込みに行ったのだが

「っ！何だよ今の恐ろしいオーラ!!」

まるで負の感情を物質化したそのものと言わんばかりの庄に驚愕しているとケケラの端末に情報が来た

「おいおい魔王の奴が禁書を開こうとしてるぞ！」

「そうか……なら大丈夫だな」

「そんな訳あるかこの世界が滅びるぞ！」

「そつちじゃない、どうせあのバカは立ち直るだろうから俺は最初の目的を果たすとす
るよ」

そこには口に出さない信頼が確かにあった

「昔からそうなんだよ、アイツは一人で抱えて一人で爆発して一人で終わらせようとする」

「よく知ってるんだな流石は親友」

「元だよ、俺はアイツを我が身可愛さで見捨てたからな」

「ま、そんな事もあるだろう……お？どうやらお前さんの言葉通りみたいだな」

その頃 ハルトは絶望の中から立ち直り平成ジェネレーションズの同時変身を見て

興奮していた

「言つたら、あのバカは立ち直るって」

「だな…よしじゃあ……ん？」

2人の視線の先にはメイド服を着た姉妹が見えた

「耶俱矢…夕弦……」

「ふん！下郎如きが私達の名前を呼ぶでないわ！」

「首肯 お姉様の敵は私達が排除します」

やはり洗脳されているのか刺々しい発言である

「こりゃ身内からの精神攻撃だとメンタル豆腐なハルトは答えるなあ…」

冷静に分析していたが

『取り敢えず殴って黙らせてから話させる！痛みは一瞬さ！』

そんなとんでもない開き直りをしていた事をまだナツキは知らない、し

「やっぱり言ったろ、お前の正ヒロインはエルフナインだつてな」

「ケケケラ……お前な……」

「俺はお前達の恋愛模様から尊いという感情を知ったからな、だからその分幸せになつて貰いたいんだよ」

「何から感情学んでんの？…一応警告するね2人とも俺は君たちとは戦いたくない」

「そんな腑抜けた言葉、二度と吐けぬようにしてやるわ夕弦！」

「肯定 いきます！」

と2人の霊力から顕現したのは碧色の剣である

「風双剣だ!!」

「くくく…この何故かいきなり現れた剣でお前を切り裂いてやろう！」

「宣言 参ります」

そして取り出したのはライドブックである

『猿飛忍者伝!』

『とある影に忍ぶは疾風!あらゆる術でいざ候!』

夕弦が開いたライドブックを耶俱矢の聖剣に装填 和風の待機音を背にして2人は

互いに聖剣を抜刀した

『双刀分断!!』

「変身!!」

『一の手 手裏剣!二の手 二刀流!風双剣翠風!!』

すると聖剣の力が分からないが耶俱矢と夕弦は融合して1人のライダーへと姿を変えたのである

「歓喜!喜べ愚民よ精霊 八舞此処に完全復活である!!」

強さへの求道者 仮面ライダー剣斬 参る!

「精霊八舞……だと……耶俱矢と夕弦はどうした!!」

と尋ねると剣斬が笑いながら答える

「彼奴らの望み通りよ一つとなったのだ、この聖剣の力を使ってな！」

「っ!!!」

ナツキは驚愕の表情の後、怒りの感情を爆破させた

「2人を戻してくれ!!」

「否定 それは無理な話よな」

その時、ナツキの脳裏によぎる2人との日常であるそれが戻らないとなれば

「そうか………なら退け！2人に変わって美九は俺が斬る!!」

元凶を排除すると

「嘲笑 それは叶わぬ夢よ」

「知るかよ……」

「疑問 やる気か？」

「ああ……だから邪魔すんなケケラ」

「当然だ、さあ拜ませて貰うぜ野田夏樹……お前が本物の仮面ライダーか見させて貰うぜ」

「仮面ライダー？」

「知らないのか？ 悲しみの涙を仮面に隠して戦う戦士の事だ」

因みに魔王に同じ問いを出したならば

バイクと共にマフラーたなびかせながら現れる永遠のヒーローと答えるだろうと

だがそんなの知らないとなツキはアナザーウオッチを取り出すとアナザータイクーンの顔になったのだ

「耶俱矢を…夕弦を…2人を返せえ！」

『タイクーン』

『BLACK GENERAL BUJIN SWORD!』

それは普通のアナザーブジンソードではない、かつてマドカが使っていた復讐の刃を持った侍としての アナザータイクーンブジンソードである

忍者と侍の対決が始まったのである

「参る！」

「はあ！」

劍斬は忍びや風の力を宿した聖劍を使う三次元的な挙動 更に建物内という地形効果
果が更なる予測を無効としていた

「ちっ!」

「貫った!」

「甘いわ!」

ブジンソードが居合い抜きを放つがそれは残像であり劍が空を切る

「ちい!」

「嘲笑 その程度は八舞に勝てると思つたかあ!」

—————

推奨BGM ーBATTLE GAMEー

その頃 レジエンドライダーが集結しているハルト側はと言うと

「行くぞー！」

鎧武とドライブは仮面ライダーアークをウイザード、ゴースト、エグゼイドはアナザー1号と戦うことになった

ハルトは

「オラアー！」

迷いを捨て去りアナザーファイナリーに戦いを挑んでいた

「くっ…！」

「そらそらそらあー！」

勢い任せの荒々しい喧嘩殺法に加えて王の勅令でデバフをかけ続けている流石にアナザライダーを倒せる力を内包したギンガの力は放置できない…例え

「マンホールで防げる攻撃でもなあ!」

「バカにしないでもらいたい!」

「バカにしてねえよ!!敬意を払ってんだ!」

「何処が!」

2人はノーガードで殴り合いとなる互いに一発ずつ殴るのだが

『おい相棒!俺達を出せ!そしたら終わるだろ!』

「ごめん、それ無理」

『何でだ!』

―前にウオズがキャロルの時に記憶喪失で俺を忘れたなんて嘘をついた時のこと覚えてる?―

『ああ貴様の情緒が不安定だった時だな』

『ま、こいつの情緒はいつも不安定だがナ』

―後で覚えてろ…まあ良いや…あの時さ俺ウオズに言ったんだよ―

「テメエとまともに喧嘩したことなかったなあつてさあ!」

「がつ…」

『ああ…言ってたな』

ハルトは拳を交えたら友達なんて脳筋じみた考えを持っていた……まあ交えない事も殆どであるが

「よくよく考えたら、俺はお前と真正面から向かい合ってたか分からないんだ！そもそもお前は未来の俺から言われてきただけの奴だフィーニスやネガタロス、テストアロツサ達みたいに俺に忠誠を誓ってねえ!!それにお前からしたらその未来に行かない俺が不安でしかないのは分かる……けどな」

「何が言いたい……」

「簡単に敵に操られてんじゃねえボケェ!!」

その拳は見事にウオズスの顔を捉えて吹き飛ばす

「普通は洗脳されたフリして影ながら情報集めてましたー！がお前の担当だろうが！四天王ならまだしも何簡単に操られてんだあ！」

「く……」

「立てよオズ、テメエの気持ちを俺にぶつけてみる」

「ならば……いつまでもダサイ文字Tを着ないでもらいたい!!!」

今度はアナザーファイナリーの拳が顔面を捉えたが同時に疑問が出た

「ごふ……え？アイツさ洗脳されてるんだよな？結構普段の怒りが込められてたぞ!!」

『ギャハハハハハ！洗脳されてても不満だったみたいだな！』

「喧しい！つかお前が逢魔のことを敗残兵の集まりとか言うとかふざけんなあ！」

「がはっ……」

「良いか！逢魔は敗残兵の国じゃねえ!!確かに色んな怪人やダークライダーが集まった

国だ！しかも全員本物の仮面ライダーに負けてる負け犬連合だよ俺や相棒達も含めてな！」

「……………」

「だけど負けたから痛みを知ったから全員が共存してるんだ！……それに……元々逢魔は俺が皆と一緒にいたいから大事な奴等がどーでも良い奴等に利用されたくないから………って作った国って事を忘れたのかあ!!」

「っ!!」

「それも全部お前達が来てからだ!!でなければ今頃俺はただの風来坊だったんだよ!!お前達が来たから俺は王様になったんだ！お陰で帰る場所が出来たんだ！それなのにその場所をお前が否定するのは我慢ならねえんだよ！こちとらこれから誰に飯作れば良いんだこの野郎!!」

『アナザーオールトウエンティタイムブレイク!』

「っ！」

『アナザーエクスプロージョン!!』

「いい加減目え覚ませよバカ従者!!」

「はあ！」

両者のライダーキックは中間地点で激突 最後まで立ったのは

「しゃおらあ!!見たかあ!!これが俺達の手だこの野郎!!」

アナザーグランドジオウ、倒れたファイナリーは変身解除となった

「ふう……おいウオズ」

「何だ？」

「少し寝てろ、お前の負けだ」

「くっ……」

「だが安心しろ起きてる時には全部終わってるから、そんな時はまた飯作ってやるからよ」

それだけ言うとハルトは悪鬼のような顔をして会場へと向かう

「さて……行くか」

『おい！仮面ライダーの活躍を見ないのか！』

『ハルトらしくねえぞ！』

「今、バットショット達が全力録画しているしピースメーカーのカメラを使って撮影もしている聞けば銀狼と束がBlurayどころかIMAX上映も狙っていると、けど偉大な人たちの戦いをリアタイで見たい…それはもう今見たい」

『そこは素直なのな』

「だが今はそれ以上に俺の大切な仲間達に手を出した奴を潰す!!」

そう言うとうハルトはアナザーレーザーを召喚しバイクモードに変形した相棒を走らせ会場に殴り込むのであった

—————

そして

「アイツもアイツで自覚が出来てきたんだな」

「あの人…ロイミュードみたいな感じがするな」

「ああ確か…怪人王って言って色んな怪人の力を持つてるって言ってたな」

「そうなのか！ベルトさん！」

「ああならばチェイスやハートのデータも持っているかも知れない…後で話してみたい
仲介を頼めるかい鎧武？」

「頼まなくても向こうからよってくるぞ何せハルトは俺達仮面ライダーのファンらしい
からな！」

「そうか…ならアイツも聞いたら喜ぶな」

「アイツ？」

「ああ俺の義弟だ」

その頃 エグゼイド、ウィザード、ゴーストはアナザー1号を相手に

「行くぞパラド！」

『マイティブラザーズXX！ガツチャーン！俺がお前で！お前が俺で we are！
マイティマイティブラザーズ！XX!!』

「超強力プレイでクリアしてやるぜ！」

「ああ！」

エグゼイドが2人に分裂、片方にはエグゼイドの相棒 仮面ライダーパラドクスこと
パラドが現れたのだ そのままエグゼイドは互いを知り尽くした連携とエナジーアイ
テムによる強化補正により巨大な相手と渡り合っている

「先生が増えた!?!」

「やるねえ…なら俺も」

『フレイムドラゴン…ドラゴタイム！スタート!』

ウィザードもドラゴタイムを使い体内に宿るエレメントを解放した

『ウォータードラゴン！ハリケンドラゴン！ランドドラゴン！』

「「っしやあ！」」

「ええ!!なら……俺も皆力を貸して!!」

『グレイトフル！全開眼!!』

全員が中間フォームに変身してアナザー1号と戦闘だ、アナザー1号の口から放たれる光弾や車輪の一撃を回避しながら各々の属性、英雄、相棒の力をぶつけていく

その背中を見ている1人の新たな原石は

「すごい……これがハル兄の憧れるヒーロー達の力！誰がを守る力」

俺もいつかあのステージに……行くんだ！

『ホッパ―!』

「え? 『お前も今は仮面ライダーだろ?』 そうだな行くぞ!」

するとガッチャードの体は突如大型のバッタへと変わると持ち前の脚力で仮面ライダーアークを蹴り飛ばしたのである

「今です! 先ずはヤクヅキさんからお願いします!」

「やるなガッチャード! じゃあ俺も見せてやるぜ!」

『フルーツバスケット!』

「ああ俺達も先輩として負けてられないなベルトさん」

「ああ」

『FIRE ALL ENGINE!』

2人は己が持つ最高の力を解放した

『ROCK OPEN! 極アームズ! 大・大・大・大將軍!!』
鎧武にはアームズが合体しドライブの起動した力で現れた赤い車 トライドロンの
体当たりはアークを怯ませたのである

『ドライブ! タイプトライドロン!!』

現れるは白銀の鎧を纏いし天下無双の神

仮面ライダー鎧武・極アームズ

そして対となる赤い体 文字通り一心同体

仮面ライダードライブ・タイプトライドロン

参戦

因みにこのシーンを見ていたハルトというと

「うおおおおおおお!!最強フォームの同時変身だとお!!やばいやばい!超戻つてみたい!!けどやっぱり仮面ライダーはカッコ良いぜf o o!!!」

『決意がぶれてるぞ』

「そ、そうだな…よし!美九を秒で絞め落としてロスタイムで応援に駆けつけるぞ!」

『手段と目的が逆転してるう!?!』

「そんな事させないわ」

と現れたのは魔女の格好をした女の子…ふむ

「七罪か」

「お姉様の元へは近づけさせないわよ賊め」

「俺に向かってよく言うじゃないかクソ雑魚メンタルが!」

『どの口が言ってるんだ？』

『同じ穴の貉って言葉知ってる？』

「貴方に言われたくわね泣きながら助けを求めてたじゃない」

「だからその原因を潰すんだよ」

「させる訳ないじゃない」

と取り出したのはルパンガンナーである

「おいおい錫音が知ったら悲しむぞ、そんな事の為にルパンガンナーを預けた訳じゃないだろうし」

「知らないわよそんなの彼処にいる奴らに変わって私が悪を制裁する英雄になってあげるわよ……変身!!」

『ルパンー!』

ルパンガンナーのマズルを長押し流れる優雅な待機音と共に放たれた光弾は宝石となり七罪の体に鎧として装備される

世界最優の怪盗にしてドライブのライバル

「仮面ライダールパン、ここに参上」

—————

ルパンの姿を見たドライブは

「ルパンだと!」

「そんなまさかルパンガンナーはドライブピットに封印されている筈だ!」

と混乱していたが鎧武が

「ああアイツらさ俺達のドライバーとかアイテム作れるぞ」

「それを先に言え！ ったくさっきの彼に聞くべき事が増えた！」

「お前達、いつまで話してるつもりだ！」

「うるさい!!」

同時に飛び上がり顔面にパンチを叩き込む事で怯ませた隙に

『火縄橙々DJ銃……ロックオン！ オレンジチャージ!!』

鎧武は武器を呼び出しオレンジロックシードを装填した

ドライブも同じようにトレーラー砲にタイプスピードとワイルドを装填する

『ヒッサーツ!! フルスロットル！ フルフルフォーミュラ大砲!!』

二つの光弾がアークに命中した後2人は

『極スパークキング!』

『ヒツサーツ!フルスロットル!!トライドロン!!』

ダブルライダーキックでアークは爆破し強制変身解除するなりヤクヅキは気絶したのである

「よっしゃー!」

「NICE DRIVE」

そしてエグゼイド達はというと

「おのれ仮面ライダーめ!!」

「お前を攻略する…行くぞパラド!」

『マキシマムマイティX／ハイパームテキ!』

「ああ!心が躍るな!」

『デュアルガシャット!』

「ハイパー大変身!」「マックス大変身!」

『パツカーン!ムーターキー!輝け!流星の如く!黄金の最強ゲーマー!ハイパームテキエグゼイド!!』

『赤い拳強さ!青いパズル連鎖!赤と青の交差!パーフェクトノックアウト!!』

その黄金に輝く姿は正に無敵状態の化身

仮面ライダーエグゼイド・ムテキゲーマー

それに追従する最強の相棒コンボと連鎖を繋いで敵を倒す

仮面ライダーパラドクス・パーフェクトノックアウトゲーマーレベル99

参戦！

「おおやるな…なら俺も」

『インフイニティ！プリーズ！ヒースイーフードー！ボーズバビユードゴーン!!』

「俺も行きます！」

『無限進化！アーイ！バツチリミナー！チョーカイガン！KEEP on GOIN
G!!ゴ・ゴ・ゴ・ゴ・ゴ・ゴ・ゴ・ゴ・ゴ・ゴ・GODゴースト!!』

そして新たな姿に変身した2人の英雄

その身の絶望を乗り越えた希望の魔法使い

仮面ライダーウィザード・インフイニティスタイル

命の力を爆発させる無限の可能性

仮面ライダーゴースト・ムゲン魂

参戦

後にこの映像を見ていたハルトはペンライトと法被を纏ったまま発狂し三周視聴しても変わらず夜間に発狂した為、キャロルと千冬から騒ぐなど説教されたのは別の話

「お……おのれ仮面ライダー!!!!」

「さあフィナーレだ!」

『ハイタッチ!シャイニングストライク!!』

ウィザードの巨大な斧の一撃でアナザー1号の前輪が破壊され機動力が奪われると

「フィニッシュは必殺技だな!」

『HYPER!CRITICAL SPARKING!』

「ああ!」

『PERFECTKNOCKOUT!CRITICALBOMBER!!』

「命燃やすぜ！」

『チョーダイカイガン！ゴットオメガドライブムゲン!!』

エグゼイド、パラドクス、ゴーストの最強フォームからなるトリプルライダーキックがアナザー1号を吹き飛ばす流石の巨体だが致命的なダメージである

「今だガツチャード!!」

「はい！ウイザードさん！」

人型に戻ったガツチャードはドライバーを操作して高く跳躍そのままドライバーを展開

『スチームホッパー！FEVER!!』

「たあ!!」

ガッチャードのライダークックがアナザー1号を捉えると爆破を起こし変身解除、フィーニスも気絶したのである

「さて後はハル兄次第か…けど何か嫌な予感がする」

—————

その視線の先にはハルトとルパン…ではなく

「久しぶりの出番だあ！」

彼が呼び出したカリユブデイスメギドがルパンと相對していたのである

「いのおー」

ルパンはコアの持たないボディだけのロイミュードを戦闘員として操り自らも戦闘に参加しているがいかなせん経験値が違いすぎた

ハルトの元で様々な戦闘経験を積んだカリユブデイスと天使、そして貰ったばかりのライダーシステムを使う七罪とでは埋められない差があったのである

というより七罪は元々支援役よりな上にルパン自体が 怪盗アルティメットルパンが持つ怪盗としての力 つまり直接的戦闘手段が少ないのだ まあこれも本家の持っていた人殺しはしないという誓いがあるからというのもある

—————

そしてハルトは怒りの感情に任せたまま会場を進んでいくと目的地の前にきた

「ここか」

『ああ間違いない精霊はこの先だ』

「分かった」

そう言うなり強引に扉を蹴破り侵入すると中にいた

「あら？誰かと思えば泣き崩れた化け物ではありませんか」

視界に入れた瞬間に溢れた怒りのオーラは周辺にいた野鳥や野犬が生命の危機を感じて逃げ出し周辺に住まう者にえもしれない不安を与えたという

「お前を殺す」

「はい？」

「聞こえなかったか？お前を殺す」

「何を仰っているのか分かりませんがね、そもそも貴方のお仲間だって私の命令一つで自死させる事だって可能なのですわ！」

「やってみな」

「おバカな人ですわね！これだから男は愚かですわね、さあ死になさいな破軍歌姫（ガブリエル）!!」

美九は自分の天使を使いそのように命令を下そうとしたがタネが割れた手品で俺を倒せると思うな対策済みだよ

種族的な力を使うのも久しぶりだな……一息入れると瞬きと同時に怪人王としての力を行使する片目が血のように赤く染めて力を解放する

『スキル 怪人召喚を行使』

「音符眼魔…やれ」

「お任せアレエ！魔王様ア！」

突如現れた音符眼魔は持ち前の能力で周囲の音を奪う、当然彼女の声は届かないし銀

狼に頼んで近隣施設の音響機器は使用不能にした

!!!
」

「悪い何言ってるか知らんよ、それとだー

ハルトは念動力を使い美九の首を締めると持ち上げた

「あ……………があ……………」

音符眼魔の能力を解かせるとハルトは一言

「残念だが、お前の自慢の声はここで枯れる」

この手のタイプは発声器官を潰せば済む、ドライブが戦ったロイミュード ボイスも
同じ方法でやられたしな

「そして二度と歌わせない」

このまま力を込め更に力を入れると

「お姉様から離れよ下郎」

虚空から現れたのは六喰、その手にはハルトにすら届きうる天使 封解主が握られているが

「どんな理不尽な能力でも触れなきや問題ねえ」

『ZONE』

ゾーンメモリの力で六喰を宇宙空間へと飛ばした彼女の封印された天使の力なら数分で戻るだろうがそれだけあれば十分だ…よし

「音符眼魔、あいつの範囲数メートルに絞って音を奪え」

「かしこまりい！」

同時にハルトは手を離す少し咳き込む美九は今度こそ報復の為に天使の力を使おうとするが音符眼魔の力のせいで声が出ない

「ノイズキャンセルって知ってるか？音と音をぶつけて消音にするって奴、今それをお前にしてるのさ……」

「!!!」

「悪いな何言ってるか聞こえないよ……さて」

「八舞はいない……ナツキの所か六喰は今対処した……四糸乃は……取り敢えず」
『DIVA』

ガイアメモリを首に差し込みデーバドローパントになると相手の十八番を奪うように声を出す

『眠れ』

気分はさながら、おにぎりの具でコミュを図る呪言師の気分である

四糸乃はパタリと眠り落ちる、さてこれで大丈夫

『今更だがそのメモリの力なら何とかなつたんじゃないか？』

「残念ながら俺の力では肉声の届く範囲で、しかもドーパントになつてる間しか言霊の効力がないんだよ…ボイスロイミュードの力とか使わないで良かったよドライブに追いかけられたらどうし…いやそれはそれで嬉しいな…それとさ後でサイン貰わないとね！」

そして漸く追い詰めた黒幕の精霊を見てハルトはガイアドライバーReexを腰につけた

「さてと悪いな相棒、コイツは……コイツだけは俺の手で消す」

『だろうな』『好きにやれ』

「ありがとよ相棒」

了承を得たのでガイアウイスパーを鳴らす

『JOKER!』

すると紫のオーラがハルトを包み込むとハルトを戦場で笑う道化師 ジョーカー
ドーパントへと姿を変える、そのまま美九の元へ一歩、また一歩と近づいていき間合い
に入り首を掴んで持ち上げると一つ問いを出す

「全員の洗脳を解け」

音を戻すと

「だ、誰が……戻しませんの……私のものを……」

やはり同じか人を操り駒のように利用する その姿に

『愚兄が』

あの忌々しい人間と重なって仕方ないのだ！

「あっそ」

今更ながらボイスロイミュードで洗脳し直せば良かった……もしくは殺せば洗脳が解けるだろう

「けど楽には殺さない……お前は俺の地雷を踏み抜いた」

それは他ならぬ仲間を利用した事、そして彼らの在り方を傷つけた事だ

「これはあの人達には見せられないなあ…本当に…本当に…気分は最悪だよ!!」

ケタケタ笑いながら言うジョーカーは感情が反転しているようにも思えたのである

あの探偵なら罪を憎んで人を憎まずというだろう 罪を数えて償えと背中を押すだろう

ごめんなさい

「罪を数えろ?冗談じゃない……」

どうやら今の自分は罪も人も憎まずにはいられません!

怒りによって増幅された感情エネルギーは一枚のカードに姿を変えると彼女に差し込むと同時に彼女はカードの中に囚われ一切の身動きを禁じられた

「ぐ……か、体が動かない!!」

コイツだけは絶対に許さない!

「お前には……罪を数える資格もない!!」

少し下がると同時にジョーカードーパントは右足に紫のエネルギーを溜め込むと同時に高く飛び上がりそのまま急降下キックを放つ

その勢いは彼女を消し飛ばす……筈だった

『一の弾』

突如加速した影が美九を抱き抱えると逃げ出しジョーカードーパントの蹴りは空振り終わった

「あ?」

そこにはゴシックドレスを着た片目時計の女の子と

「何の真似だ少年」

士道が立っているでは無いか

「一旦矛を収めてください！二亜も十香がDEMに攫われたんです…だから今は」

「関係ない、そいつは殺す」

「ハルトさん！」

「あらあらコレは中々に厄介ですわね…まあ約束は果たしますわ2人きりにして差し上げますから後は任せますわよ」

そう言うと狂三は影の中に2人を引きずりこむのであった

「何の真似だ時崎狂三？」

「実は約束しましてね霊力封印する為に士道さんを美九さんと2人きりすると」

「それなら安心しろボトルで無理矢理霊力だけ抜いてやる」

「美九さんを殺すつもりですの」

「アイツは俺の仲間を傷つけた…それだけで俺がアイツを殺す百の言葉に勝る理由になる」

「やれやれ…何をどうしたらここまで怒らせたのやら」

銃口を向ける狂三にジョーカーカードパントは顔を顰めた

「邪魔するか」

「生憎さま私は約束は守る主義ですよ」

「そつ、けど残念だなああの女の現在地は割り出せる」

ジョーカーカードパントが取り出したのは数本のガイアメモリ

「アイズメモリで目を分散して視覚を確保、その目をメガネウラムメモリの複眼にした、んで処理する脳容量を確保する為のオウルメモリ…メモリの組み合わせはWの十八番じゃねえんだよ」

仮面の下ではドヤア！としているが

『脳容量を肥大化かあ…お前の頭も良くなると良いな』

『まあ元の容量が少ないから大きくしてやっと人並みだしな』

『しかしメモリの応用方法とかよく考えたな…これがオウルメモリの力か…』

『良かったなハルト！コレで人並みの知性を手に入れたぞ！』

ー取り敢えずアナザーデイケイド、ゴースト、キカイ、ビルドは覚えてろー

『『『』つてアナザーWが言ってた！』『』』』

ーほおー

『だから何でいつも俺に擦りつけんだテメエ等わあ！』

ーこれこそハルトのハイドロープの本領、ドーパントメモリの並行と重ねかけである

『だから足止めしても無駄』

『だとしても止めさせて見せますわ』

『なら残念だよ…まずマトモには死ねないぞ』

ジョーカードーパントはリアクターアックスを呼び出しメモリを装填 赤熱化した刃の温度は会場の機材を溶解させ始めていた

だがその時

「ハル兄！何してんのさ二亜さんがDEMに攫われたつて」

現れたガツチャードに淡々と答えた

「聞いたよ一夏、けどその前に敵を倒し「仲間がいなくなるんだよ！二亜さんは仲間じゃないの！」っ!!っ!」

一夏の言葉で我に帰ったのである…そうだな仲間を失うのは嫌だな

「はは…一夏、二亜はどっかにいるっ!」

「えーとDEM日本支部って」

「そうか、じゃあ行ってくるよ」

「ハル兄…大丈夫？」

「安心しろ常葉ハルトは揺るがない」

『そんなお前に外で戦ってるレジエンドライダーの映像をどうぞ』

「うおおおおおおお!! カッコいい! 頑張れ仮面ライダー! 負けるな————!!」

「お…思い切り揺らいでますわね」

「いつも通りだから大丈夫」

カッコよくライブ会場から離れようとしたのだが同時に斬撃が近くの柱を破壊されて粉塵と共にアナザーブジンソードと剣斬が現れたのだ

「くっ……」

「勧告、諦めよ貴様では八舞には勝てない」

剣斬か八舞？なるほど…

「大体わかった……おいテメエ」

ハルトはアナザーブジンソードの頭を掴むと

「へ？」

「人が感動してるのを邪魔してんだあ！この野郎！」

そのまま地面に顔面を叩きつけたのである

これには流石の八舞も困惑した

「えええええええええ!!」

「ドーせ俺と同じだろ傷つけるから戦えないとかそんな理由だろ? なら選手交代だ」
変わりに戦ってやろうとハルトが前に立つがナツキが足を掴み止める

「待てよハルト……八舞は俺が助ける……」

「そっか……んじゃ任せたよ」

『ジオウⅡ』

「……………え?」

懐古の力で治したのに驚いたのである、いつもなら躊躇わずにマッドドクターを使うのに何故！

「思い出した……だから今回は最後まで付いてきてもらおうぞナツキ」

「っ!!」

「先に行く必ず来てくれ」

「ハルト……」

「じゃあな……そして待つててください仮面ライダー!!直ぐに駆けつけます!そしてサインとツーショットをお願いします!!」

と会場からハルトが離れると入れ替わるように白いバイクに乗った青年が現れたのである

「あれ？今誰かとすれ違ったような…お、見つけた見つけた、アンタが魔王かい？」

「いや魔王は今走り去った奴だけど…」

「何!!…まあ良いかアンタお困りのようだし手エ貸すよ」

「貴方は一体?…いや大丈夫です…それよりも魔王に用があるんでしょ追いかけないで大丈夫ですか？」

「大丈夫だ俺はマツハだからな直ぐに追いつく」

と笑う青年だったが突如ドドドドドドドドドド!と大きな足音がした後

「あ、あの!詩島剛さんですよね!仮面ライダーマツハの!!」

「あ!さっきの!…つて事はお前が!」

「常葉ハルト、ファンです！サインください!!」

「俺の？いやあ困っちゃうぜ人気者だなあ俺も」

「やつふう！気づいて引き返して良かったあ！」

その喜ぶ姿は先程まで怒りに支配され揺るがない！と断言していた姿はカケラも無かった…

『バカか！貰ったら早く行くぞ！』

「分かってるって…ありがとうございます！剛さんでは俺はこれで「待つてくれ」はい？」

「お願いがあるんだ」

「な、何ですか剛さん！お、俺にできる事なら何でも言つてください!!」

「その…ロイミュードのデータを持つてるって聞いたんだが…」

「ありますよー俺自身がロイミュードみたいなもんですし〜1〜108の能力も再現出来すよ〜」

「ならチエイスのデータも！」

「ありますよ〜でない」と魔進チエイサーの象徴とも言える、このブレイクガンナーと実は作ってたバイラルコアは出来ませんから」

実際はアナザーチエイサーのデータと俺のロイミュードとしての力を掛け合わせてデータを元に束とキヤロルが生み出した産物であるが

「た、頼む！そのデータを俺に譲ってくれないか！このと「はい」へ？」

ハルトは迷わずにUSBメモリを渡したのである

「チエイスの為ですよ？勿論協力しますよ!!俺も会いたいですし!!」

「良いのか？」

「当然ですとも!!何を隠そう、この常葉ハルト!仮面ライダーの皆様から受けた恩は生涯どころか来世まで消える事はありませんから!使ってくださいデータが足りなければ言ってくださいな!俺全力で協力します!!」

『おいハルト時間だ!』

「えー!もうちよい話したいのにくごめんなさい剛さん話はまた今度:よし行くぞDE M!今度こそ叩き潰してやるぜエ!!」

オーロラカーテンを超えたのであった

残された2人は

「手を貸そうか？」

「いいえ、彼女は俺が助けます」

「滑稽 そんな様で何が出来る」

「俺はずっと悩んでた皆と幸せになって良いのか俺にとって最高の未来が何なのか分からなかった…けど今なら分かるそれは皆が笑ってる場所なんだって…だから俺が守る！」

「否定 お前には何も守れぬさ!!」

『翠風速読撃！ニンニン！』

「疾風劍舞…廻天!!」

縦横無尽に放たれた手裏劍の攻撃からナツキを守るように氷壁が現れると同時に砕

け中から現れた聖剣　水勢剣流水がナツキの元へと現れたのだ

「この聖剣は…っ！決めた…俺はもうブレない今度こそー

『最後までついて来いよ』

あの時　否定した言葉を否定する

「ハルト達についてく…この聖剣に誓う！俺は大事なものとの未来を諦めない！！この死に戻り続けて積み重ねた思いは…誰にも否定させない！！」

すると何処から共なく現れた力の破片なナツキの持つアナザーブレイズウォッチに反応しナツキは新たな姿へと変わり始めた

『氷獣戦記…』

それはまるで返り血を浴びた剣士、体に残る生傷は研鑽の為に傷ついたような生々しさがあがるが体に残る、しかしながら汚れのない鎧は変わらずそこにある

死しても毛皮（研鑽）を残す白獅子の剣士
アナザーブレイズ・タテガミ氷獣戦記
出陣

「いざ参る！」

その先で

「やったー！仮面ライダーマツハのサイン貰ったぞ〜」

と喜びながらDEM日本支部前に現れたハルトに声をかける影

「何い!!」

「こらハルト、落ち着きなさいな」

「これが落ち着いていられるかヴェルザード！あの仮面ライダーマツハのサインをだ
とお！」

「因みにエグゼイド、ゴースト、ドライブにも会った」

「う、羨ましいい！羨ましいいぞ貴様ああ！」

と胸ぐら掴んできたのは、かつてハルトが力、知恵、センス、愛と4人に分裂したと
いうとんでもない事件を起こした犯人にして天与呪縛のフィジカルギフトを与え
られた天与の暴君こと クロスギーツのハルト 人呼んで黒ハルトである

「どーだあ〜」

『そんなお前に悲報だ、エグゼイド から本家パラドが現れたぞ』

「何い!!!」

異口同音とはこの事とばかりに騒ぐバカ2名

「こうしちやいらねえな俺達も行くぞ！」

「ああ！そしてサインを貰うんだあ！」

「「おおー」」

『その前に二亜を助ける間抜け!!』

「ちよつと黙りなさいな」

「その口塞ぐわよ?」

ヴェルザードの冷気により足が凍ると同じく彼という女性 カフカからはサブマシンガン突きつけられているのだ

「はい」

そして冷静さを取り戻すと

「お前も尻に敷かれてるのか」

「お前もな」

「ああ……そう言えば最近どうよ？」

「アレから色んな世界を皆で見てんだよ……あ、そうだ紹介するぜ俺のパートナーアニマルを」

と黒ハルトがそう言うとき空から現れたのは……一言で言うとき機械仕掛けのコーカサスオオカブトである……何コレ？

「え？何？」

「キングゴージャスカブト！なんと城にも宇宙戦艦にも巨大ロボットにもなる凄いパー
トナーアニマルだ！」

「いやアニマル要素どこ行つたあ!!」

珍しくハルトのツツコミが正論だったのは言うまでもない

5話 本と聖剣と精霊と 前編

さて前回 ウオズを拳で沈めたハルトは紆余曲折の末 一連の犯人である美九を追い詰め

「お前に罪を数える資格はない！」

と私刑のライダーキックを行うが土道と狂三に妨害される その頃 ナツキは風双剣の力で融合した八舞を耶俱矢、夕弦に戻す為に激突 しかし剣斬の力と風の精霊である八舞の力がベストマッチ！となりナツキは追い詰められていた

全てを思い出したハルトはナツキを叱咤…その直後に入れ替わりで現れた仮面ライダーマツハこと詩島剛からサインをもらい、いざDEM日本支部へ！

そんなハルトの前に現れたのは黒ハルト達であったが…

—————

「いや、アニマル要素どこ行ったあ！」

と叫ぶハルト、それは無理もない何故なら目の前に現れたのはハルトのピースメーカー並みの巨大さを誇る戦艦だったからだ

「アニマルじゃないキングゴージャスカブトだ」

「カッコつけんなよ何だアレは！アレの何処がアニマルなんだよ！完全にロボットだろうが！」

「変形合体するからアニマルだろ？」

「うーむ……確かにウイザードさんのウイザードラゴンもバイクやキック形態に変形と合体するしゴーストのキャプテンゴーストも変形する……ほんならアニマルかあ……」

『変な常識に染まってるな』

「けどロボットになった時にさ大量の歯車鉄屑が必要だったな」

「ほなアニマルと違うかあ、アニマルは歯車や鉄屑使わんもん」

「けど自己修復機能や俺達と意思疎通出来るな」

「ほなアニマルかあ…自我があるんやもんな」

「コントやってないで行くわよ」

「けどカフカ、俺達だけであの会社を潰すのは…いやキングゴージャスカサスカプトを口ポットモードにすれば行けるか」

「それだと無関係の人も巻き込むわね辞めましょうか」

「おいおいあのカフカが一般人に配慮しただと！」

「そ、そんな！大丈夫かしらカフカ！貴女何か悪いものでも食べた!？」

「あら？ 私ってそんな血の多い人に見えるのかしら？」

『少なくとも貴女から聞く言葉ではない』

突如聞こえたのは彼女しか使わない、彼女が居た世界由来の通信デバイスからであった、それにかけられる人物は一人だけ

「あら銀狼、久しぶりね」

『うん：：しかしカフカは現場にいるなんて狡い：：私も行く』

「待てよ銀狼、敵の『ハッキングするなら私が専門』：：わーったよ無理するなそれが条件だ」

『なら無茶はするね』

「あ、おい待て銀……つたく誰に似たんだ！あの揚げ足取り！」
『間違いなくお前だろ？』

「これでハッキングで施設攪乱と情報収集は可能か……けど頭数に問題があるな俺達だけだと不足だ……まあ建物壊して皆殺しだけなら十分だが人質助けるとなると不安か」

「安心しろ黒狐、俺は最強の助っ人と呼んでいるのだ……まあ師匠が頼んだのだがな！」
「お前の師匠？……まさか！」

と黒ハルトがハツとすると同時に

「ここがDEM日本支部か」

「そうだよ此処で戦極ドライバーが量産されてるらしいね」

「なら早くぶっ潰さないとな」

「破壊工作ならワテクシと傭兵時代の仲間達に任せなさいな」

「俺もついていきます師匠！」

鎧武の要請で参戦したアーマードライダー達に加え

「此処か…ガイアメモリの製造をしている違法施設とは」

赤いジャケットを纏う刑事 照井竜

そして現れた二つの影

「そうだ調べてみたがDEMは財団Xと繋がりがあつたようだね」

「全く…この会社も俺達の街を泣かせてた訳だな」

現れたのは白帽子を被る青年と本を持つ浮世離れた雰囲気のある青年である…ちよつ

と待て！DEMと財団Xに繋がりと！この人サラリととんでもない情報を出したな！

「紹介しよう左、フィリップ、今回俺達に協力してくれる仮面ライダー達と…変な奴等だ」

「変な奴？え？」

白い帽子を被る青年　左翔太郎の前には何故か土下座しながらサイン色紙を出す2人のハルトがいた

「お願いします！お2人のサインください！！」

世界線は違ってもハルトはハルトであった

「翔太郎にサインを頼むなんて確かに変わっているねえ」

「ああ俺も頼まれたからな」

「しかも僕にも頼むとは興味深い…」

「うるせえフィリップ！まあやつと俺のハードボイルドな仕事ぶりが評価された訳だな」

「それは違うフィリップもだ」

「そう言えば誰宛てに書けば…」

「常葉ハルトでお願いします!!」

「常葉ハルトと…ふむ…へえ君は異世界人なのかい？」

「名前だけそこまで分かるとは…流石の情報収集能力ですフィリップさん！」

まったく…うちのイジられ検索エンジンとは大違いだ流石本家の仮面ライダーだな

『何だトオ!!』

「異世界だと…まさか裏風都の!」

「裏風都? 何すかそれ…まさか風麵の裏メニューとか!! どう思う黒狐!」

「それよりも俺は彼処にいるアーマードライダーの皆さんにサインをもらって来るぜ!!
今の俺ならあの時の四分割魔王にも素手で勝てそうであ!」

と黒ハルトは色紙を取り出してサインを求めんと走ったのである天与呪縛の無駄遣
いここに極まれり

「おい、もつかいやるか脳筋ゴリラ」

『お前も人の事言えないだろ?』

「はあ？」（うさぎ風）

『脳筋なのは同じだろうが!!』

「そう言う異世界じゃないよ以前ディケイドと会っただろ？こことは違うパラレルワールドさ」

「成る程な…しかしパラレルワールドとやらにも俺の事が伝わっているとはな」

「そこは俺達だよ翔太郎、さあこれでよしだ」

「ありがとうございます!!」

わーい！と喜ぶバカ2人に溜息を吐く、カフカとヴェルザード、そこに追加で新たな人物が現れた

「ハハハ！」

「つてえな…ああ、んだよベアトリス!!聖剣で頭を叩くな!!雷でビリビリすんだよ」

「や、ハルト」

「よ、銀狼」

新参の剣士　ベアトリス・キルヒアイゼンと銀狼のコンビであった

「ほんとうに常識を考えてくださいよ！いきなり初対面の人に土下座でサインを頼むとかどんな神経してるんですか？」

「憧れのヒーローがいたらサインを求める！それが俺達の常識だ！」

「大至急そんな常識はドブ川に投げ捨てなさい！まったく…千冬さんもこんなバカが旦那だと苦労しますね」

「ベアトリス…ハルトに常識解くのは意味がない、そもそも本人が非常識の塊」

「そんな褒めるなよ銀狼」

『何故アレが褒めてると思えるのだ？』

『バカにしてるヨナ？』

「つて誰がバカだとベアトリス！せめてライダーをつける！」

「怒るポイントそこですか!!」

「これがハルトクオリティだね」

「なあ魔王、お前また嫁を増やしたのか？」

「人聞き悪いな気づいたら居候してたんだよ」

「あれ？私つてまだそんな認識？くそくそ何で恋愛フラグが立たないのか…おのれ白スーツ！今度こそその首に霹靂一閃を叩き込んでやる！」

「銀狼頑張れ」

そんな話していると

「久しぶりだな魔王」

新たに現れたメンバーを見て喜びの声をあげる

「玄さん！お久しぶりです!!」

そう魔王ハルトの文字T仲間にして先達でもある仮面ライダーローグこと氷室玄德である

その背中から現れた戦兔、龍我、一海に加えて

「カシラ！こいつが噂の魔王ですか！」

「何か変わった匂いだね！ネビユラガスの匂いはするけど…」

「スマツシユなのか？」

「ま、まさか北都三羽鴉の皆さん!？」

赤、青、黄色のバンダナをつけた青年達とおじさんに加えて

「やれやれ全て思い出したと思ったら、いきなり実戦とはね」

メガネをかけた青年…間違いない彼は！

「あ、貴方は！サイボーグ内海！！」

「初対面の人にまでそう言われるとはちよつとショックだよ」

「す、すみません!!…けど何で此処に？」

「コイツにネビュラガスを吸わせて全部思い出させた」

「えー！じゃあ旧世界の事も覚えてるんですか！」

「勿論彼だけではないよ」

「そ、その声は!!」

ハルトが慌てて視線を向けるとそこには研究所の制服に袖を通す2人の男性がいた

「父さんのライダーシステムを兵器にするなんて許せない」

「そうだな…巧、あの世界と同じ過ちは起こさない為にも私達が止めるんだ！」

間違いない葛城忍さんと悪魔の科学者 葛城巧さんだあ!!!

「あ、あの!!さ、サインを…」

『お、落ち着け相棒！今は二亜を助ける方が先決だろ！』

『サインは後にしろ』

「だ、だがしかし…：…分かった…：…そうだなそれに皆の洗脳も解かないとダメだし…：けどサインは欲しい…：けど逢魔の為だ頑張れ俺！我慢できる子だろう！」

『そうだ！我慢できて偉いぞ！』

「そうだ！後で貰えば良いんだ！」

『なあハルト、俺ucci思っただけだよ』

「ん？何だよバイス？」

『さつきもサイン貰ってないだろ？なら次いつ貰えるか保証がないぜ』

「……………」

『おいハルト、そこの馬鹿悪魔の戯言に乗せられるなよ』

『しかしアナザーバイスが珍しく悪魔らしい事してるな』

『はあ…………』

「だがしかし！貰える時に貰っておかないと必ず後悔する！俺はどうしようもなく今を生きているぜー！」

『この単細胞があ!!』

「しかしこんなに頼もしい人達が味方とか…やばいな今日の俺は!!!」

『負ける気がしねえ!』(オーラア!)

魔王ハルトは堂々と青い文字Tを見せると

「良いチョイスだ磨きがかかったな」

「いやいや玄さんには負けますよ」

『あまり磨いてほしくないのだが…』

「あ!今度新作試着に行きますね」

『行くな!自重しろ!!』

「期待している良いものを用意したぞ」

「やったぜ!!」

『やばいぜ…』

そんな感じで色々話していると

「失礼、内閣首相補佐官の氷室玄德さんですか？」

「そうだが貴方は…確かユグドラシルの」

「元主任の呉島貴虎です良かったら少しお話しても」

「そうだな照井刑事付いてきてくれ」

「はっ!!」

と大人組は作戦会議のため離れたのだが

「魔王の奴、俺のセリフを文字Tにしやがった」

「本当万丈のセリフを選ぶとかセンスねえな、せめてそこは『勝利の法則は決まった!』
だろ」

「誰の台詞がセンスないだど!」

「喧嘩すんなよ…しかしお前さんは着ないのか?」

「いや流石に俺はちよつと…奥さんが怖くて」

目線の先には お前は着るなよ?という圧を出すヴェルザードとカフカがいた

「成る程な」

「カシラー!俺生まれて初めてサイン頼まりました!」

「僕も僕も!」

「まったく浮かれやがって戦いの前だぞ？」

「おいおい…」

そして

「よし作戦を説明するぞ」

玄さんの作戦はこうだ

まず違法兵器製造の調査として潜入するメンバーが中に入る、それとは別に潜入して証拠の確保と人質奪還、その後は変身して関係者を捕縛することだ

「奇襲作戦という訳だな」

「つまりガーって行って、いきなりワーってやって全員捕まえるんだな」

「バカっぽく言えばそうなるな」

「誰がバカだ！せめて筋肉つけろ！」

「しかし敵の戦力はかなりの数になるかとDEMのCRユニットにライダーシステム、中々の激戦になりそうですね」

「良かったら地図を提供するわ、銀狼」

「はいはい…これね」

と頭脳派な面々や凰蓮さん筆頭に戦いのベテラン勢が熱く会議している中

「見ろ黒狐、この光景を！」

「ああ…俺はモーレツに感動している！」

「ちなみに俺さつきドライブ、ゴースト、エグゼイドと御成さんに会ってきたんだぜ映像もあるけど見たい？」

「何!?やはり羨ましいぞ!!後でダビングしてくれ」

「本音隠せてないな」

「なあお前凄く鍛えてるみたいだけど、どんなプロテイン飲んでんだ！」

「あ、俺はですね」

とプロテインのトークで盛り上がる2人に対して

「か、カシラー！みーたんが生配信してるっすよ！」

「な、何だと！ゲリラ配信か!？」

「え？マジで！俺も見たいです！」

と完全に戦闘寄りの面々は皆のアイドルの生配信を見て

「「「みーたん！みーたん！みーたん！」」」

魔王は見事に馴染んでいたのである…

「えーこんなんで大丈夫なんですか？」

「大丈夫だ…多分」

「そこは自信を持って下さい葛城博士！いやお願いします誰かあのバカ魔王を止めて下さー！」

と叫ぶベアトリスに助っ人が現れた

「おいハルト、何浮かれている？ 気持ちは分かるが落ち着け」

「まあハルトらしい」

そこに現れたのは金髪美女 大人モードのキャロルと銀狼に加え

「あらハルト、楽しそうねえ〜それなら今日の夜は期待していいのかしら？」

小柄ながら逢魔3人娘を単騎で相手取る竜種 ヴェルザードが笑顔の中に圧を出して威嚇しているのは流石のハルト達にも応えたのだろう

「どうか、お慈悲を」

大人しく正座するしかなかったのである

そして数十分の打ち合わせの最中

「なあキャロル、俺も会議に参加したい」

「ダメだ、どうせお前の事だから頭に入らないだろう？なら聞くだけ無駄だ」

「うぐ……」

「それと…無理してるだろう？」

「あ、分かる？」

「分かるさ手が震えている、今のお前は忘れようと無理矢理動いてるように見える…そこまでウオズ達に言われた事が気になるのか？」

「まあね…それと不謹慎だけど操られたのがウオズ達で良かったって思ってる…」

「何？」

「キャロル達に同じ事を言われてたら俺もう立ち直れなかった…前にキャロルと喧嘩してた時だって心がずつと痛かったから…キャロルだけじゃない千冬達だって同じだよ……」

『あの世界規模の重大事件、魔法少女事変をただの夫婦喧嘩としか見てないのはお前達当事者くらいだぞ』

「まったく…貴様は相変わらずだな」

「だね…いつもと変わらず寂しがりの魔王だよ…今日は人肌恋しいからもう少し…」

そう言い強く抱きしめるハルトの手が震えていたのを感じたキャロルは溜息を吐く…やれやれこのバカは無理しすぎだと、普段の彼を見ていれば今がどれだけ不安定な状態かなんて一目瞭然だ

「仕方ない…気の済むまでいてやる」

「……………」

その話をしているハルトの膝上に子供モードになり座るキャロル、余談だが一部始終
見ているベアトリスは

「へ、これが正ヒロインの力！」

「そうだ…これが正妻の余裕という奴だ分かったか新参者め！」

「そう言う割には最近、千冬さんに負けてません？」

「うん、最近は千冬の方がメインヒロイン感ある」

「何だあ…お前…」

キャロルがキレた！まずい！

「キャロル落ち着いて?……ね?」

宥める為に強く抱きしめるとキャロルは穏やかな顔になり

「うむ……仕方ないな」

「……この写真、撮影して千冬さんに送りますね」

「何考えてんのさ!」

「いやあく流石に少しは懲りろと思いましたが送信と」

「いやああああああ!!」

『何ふざけているのだ貴様は』

またある方では

「なあヴェルザード…流石にこの歳で公衆の面前で公開膝枕は恥ずかしい」

「あら良いじゃない偶にはこれくらいしても良いわ」

「まあ良いか」

黒ハルトもヴェルザードに膝枕されていたのであるが

「なあキャロル、膝枕して」

『素直か!』

「他所は他所!うちはうち!」

「ええ!」

「お、終わったらしてやらんでもないが…今はダメだ!」

それならまあ良いやと割り切るが

余談だがこの光景をピースメーカーで見ていた面々は

「ベアトリス……やはりお前にはまだ早かったか」

「まあキャロリンのハルくん独占を止めない辺り若いねえ」

「まあまあ皆、仕方ないよまだ新参なんだから」

「まあ今のキャロルの独占は気に入らないわね……しかしあのノリを止められないようじゃステージには立てないわ……さて旦那様にはお仕置が必要ね」

「ああ……」

「さーて東さんも久しぶりにゼロツーになっちゃうぞー！」

その庄はトルーパー達が震えるに至るが

「皆様紅茶の用意が出来ました、ティータイムと行きませんか？」

「早くしないとマドレーヌ食べちゃうわよ」

「」「そうだな（ね）」「」

ベルファストとジャンヌ・オルタの一声で危機を乗り越えたのであった

—————

「そーいやあ黒狐」

「何だ魔王？」

キャロルを膝に乗せヴェルザードに膝枕されているハルト達は心に思い浮かんだ事を何となく聞いてみたい

「お前今何してんの？」

「ああ、あの後白スーツに誘われてな世界に散らばったフリーガンの残党狩りをしてる……まあアレだなデザグラ運営スタッフとして働いたんだ」

「じゃあジャマトの俺と同じか？」

「いや俺は完全な運営側だからゲーム側にはノータッチだ、待遇いいんだぜ？うちの孤児院の奴等の面倒見てくれるしな」

「そっかあ……大変そーだなーあとさ、あのデカイカブトムシ誰が操縦してんの？流石に三人じゃ無理だよな？俺も同じくらい船持ってるから分かる」

「聞きましたかカシラ、魔王も船持ってるですって」

「アイツ……ああ見えて本当に王様なんだな」

「玄さんと同じTシャツ着てるのにな」

と赤羽さんと一海さんと万丈さんが話していたのを聞いていた

「良かったら後で乗ります船？」

「良いのか？」

「よっしゃあ！えーと船旅だ！」

「違うよ赤ちゃん、クルージングだよ」

あ、成る程…そうなるとピースメーカー見た時ビビるだろうなあ……面白そうだから
黙ってよ

「ああそれはな……ちと待ってろ…」

黒ハルトはスマホを取り出して通話をかける

「おーい魔王に紹介するから降りてこい、あゝそうそうキングコーカサスカブトは自動操縦モードにして良いから」

「やっぱりさパートナーアニマルじゃねえよな？アニマルに自動操縦モードなんて付いてねえよ」

そんなツツコミを無視して現れたのは1人の男

何というか何処かアメコミのヒーロー的な見た目をした奴である

「紹介するぜ彼は分倍河原仁、コードネームはトゥワイスだ」

「初めましてだな魔王／さよならだ！俺はトゥワイスよろしくな／よろしくしたくねえ

よー。」

「いや確かに凄い面白い奴なのは分かるが……」

「因みにデータがあればどんなものでも2倍に増やせる能力がある」

「すげえええ!!あ、ちよつとこの栗饅頭を2倍にしまくつてくれない?」

『そこはお金じゃないの?』

「だってお金は沢山あるし」

『変なところで王様らしさを出すな』

「懐かしいなあ…株とか色々してウオズ達の生活費捻出してた頃を……なのにアイツらと来たら……」

『お前もお前で苦労してたなそう言えば』

『先行投資でこき使ってるけどな』

「俺をまるで考えなしの脳筋のように扱いやがって！」

『それは日頃の行いの結果だ』

『自業自得ダナ』

「おいおい栗饅頭？それ知ってるぜ／知らねーよ！その2倍は危ない奴だろ／大丈夫！安全だぜー！」

「そしてその気になれば自分も増える」

「そりゃ人員問題解決するわ!!」

「だがトラウマで簡単に自己増殖は出来ないんだよ…あ、あともう1人いる」
「え？どこどこ？」

「此方ですわ」

「ぎゃああああああ!!」

「きゃあー!」

余りの不意打ちに魔王ハルトはびっくりした拍子にベアトリスを抱きしめた可愛い
声出すのね君

「あ、ごめん」

「い、いいえ!そんな事ありませんよただ…」

「あ…」

「おいハルト、何故抱きつくのがオレじゃない」

「不本意、体格差なら私の方が良い筈」

嫉妬に狂う2人は置いといて

「い、いやその前に待て！誰だ！」

俺の探知スキルを掻い潜り背後を取るとは…なんてワザマエだ！

「はあ夜架、 椰揄うなよ」

独特な和服を着ているオツドアイの美少女であった

「失礼しましたわ私は切姫夜架、 貴方が黒狐と呼ぶ主様の従者ですわ」

恭しく礼をする以前に

「お前この歳の女の子にご主人様呼びさせてんの？引くわー」

「誤解すんなよ……つかお前も似たようなもんだろ」

「あ？俺、王様だからお前と一緒にするなよ」

「はあ……夜架は白スーツの紹介で来た俺の監視役だよ」

「ああ……そう言う事ね」

「心外ですわね……キツカケはそうでしたがあの時主様に救われた時から私の身も心も全ては貴方様のものですわ！」

「何したんだよ、お前？」

「はあ……話せる時に話す」

「わーった、んじや貴虎さんの分担に従って俺たちは潜入と人質奪還側だ」

「OK任せろ」

そして近づく作戦の時 事件は起きた

「なんだコレは？」

玄さんが見た光景は

「ヒヤッハー！新兵器が撃ち放題だぜえ！」

「お前らあ！魔王提供デザグラ改造ギガントや量産型ジェットスライガー、サイドバツシャーの性能をみせてやれえオラア！」

「こんなのグルメ界の悪天候に加えたら、凧みたいで欠伸が出るわあ！このこのこの！」

「俺のバナナを食べた奴は誰ダア！」

「いや本当誰だよ食べたの！！校長先生は怒りますよ！コラー！」

「今回は制限なしの大暴れデース！」

と魔王提供のライダーマシンを魔改造した、謎の部隊……まあデザロワを勝ち抜いたデザ神で構成された戦闘狂部隊 テスター軍団が施設を攻撃していた

「一体何を………ん？」

玄さんは自分の端末に送られた情報を見ると、DEM日本支部どころか全支部で行われていた違法兵器製造や人体実験などまあ危ない物証やデータが送られてくることくること……これだけでDEM全体を潰せるくらいの交渉材料になり得るのだ

「成る程アイツらは先行した訳か……これは……」

「こんだけ連中が暴れてんだ、これで小難しい作戦はなしだろ玄さん！」

『覚醒！グレートクローズドラゴン！』

「潜入とか囮とかまどろこっしいと思ってたんだよ」

『ロボットゼリー!』

「ああ好きに暴れろ」

『DANGER CROCODILE』

「やれやれまあ良いでしょう、DEMが潰れば難波重工の発展も夢じゃない!」

『コウモリ!発動機!…エボルマツチ!』

「この科学は人類に貢献するか確かめさせて貰おう」

『ゴリラ!ダイヤモンド!ベストマツチ!』

「そうだな」

『ニンジャ!コミック!ベストマツチ!!』

「行こうか!!」

『MAX HAZARD ON!ラビット&ラビット!』

全員は構えるといつもの問いかけがある

『Are you ready!?!』

「「「変身!!」」」

「今の俺は負ける気がしねえ!」

『WAKE UP クローズ! GET GREAT DRAGON!』

「心火を燃やしてぶっ潰す!!」

『ロボットिंगリス! (ブラア!)』

「大義のための犠牲となれ」

『クロコダイルinログ:オーラア!』

「全ては:難波重工の為にい!」

『バットエンジン:フハハ:』

「仮面ライダービルド、創る形成するって意味のビルドだ以後お見知り置きを」
『輝きのデストロイヤー！ゴリラモンド！イエーイ…』

「やるな息子よ、だが単純な性能ならば私こそがベストオブベストのビルドだ！」
『忍びのエンターテイナー！ニンニンコミック！イエーイ！』

「勝利の法則は決まった!!」

『ラビットラビット！ヤベーイ！ハエーイ!!』

そしてその背後では三羽鳥がそれぞれのロストボトルを装填しキャッスル、オウル、スタツグハザードスマッシュに変身すると全員が戦場へと走り出したのである

「俺達の出番はあるか？」

「さあ？」

「そんな事より翔太郎！あの空飛ぶバイクを是非調べたいんだ！」

「それより俺達は俺達の仕事をするか、なあ財団X」

すると現れた白服の集団はマスクレードメモリを装填しマスクレードドーパントに変身した

「行くぜフィリップ」

「ああ」

「俺も付き合おう」

『CYCLONE!』『JOKER!』

『ACCELER!』

そして3人はドライバーにガイアメモリを構えると

「変身!!」

「変……身!!」

『CYCLONE JOKER!』

同時にフィリップの意識は移動して気絶するが

現れたファングメモリがロープを使って支えてくれている

『ACCELL!!』

巻き起こる風と共に現れた2人の戦士

愛する町の涙を拭う二枚のハンカチ

仮面ライダーW・サイクロンジョーカー

熱い思いで駆け抜ける戦士

仮面ライダーアクセル 参上!!

「俺は仮面ライダーW、さあ！お前の罪を数える！」

「さあ！振り切るぜ」

その頃

「うおおおおおおお!!」

2人の変身にはしゃぐバカ2名はDEM日本支部内部に潜入し二亜と十香を助ける為に行動していた え？どうやって入ったか？それはね銀狼がシステムをダウンさせた所にアナザーゴーストですり抜け潜入した俺が中から扉を開けた後は…

「らあー！」

「あーあー」

「ぎやああああ!!」

この黒狐と従者が腕と刀で解決したのであるがそして遂に

「あ！ハルきち…良かった来てくれ…つてハルきちが2人いるう!!なんだコレは！天変地異の前触れか!!」

「失礼だな、つか会ったことあるだろ」

「ん?…あゝこの間のハルきち分裂事件の犯人か」

「そこだけ切り抜くと俺は凄い悪人だな」

「事実だろ…ん?ケケラから?へえ」

「どうした?」

「ナツキが仮面ライダーマツハと共に八舞を撃破してここに向かってるって！」

「そうか……楽しみだ……おい！魔王コレを見る！」

と黒狐が見せてくれたのは最高の探偵の変身シーンである

「ほ、本物のWとアクセルだと……」

「こりや大変だ！二亜を助けてる場合じゃねえ！」

「いや私は助けてくれないかなハルきち!!」

「冗談だよ〜2割くらい」

「それ見捨てようとしてるよね！ハルきちは私と仮面ライダー！どっちが大切なのさ
！」

「仮面ライダー」

「即答!私シヨツクだよ!」

「じゃあ二亜に聞くぞ?俺と漫画どつ「漫画!」そうそれが答えだ」

「え〜」

「けど、二亜が助けてって言うなら俺はその手を掴むよ」

「は、ハルきちち〜助けて〜」

「だが断る!」

「嘘でしょ!」

「冗談だよ、さてとこの牢屋をどうやって壊……さなくても良いな」

ハルトはシフトカー デイメンションキャブを使い牢屋の柵を異次元に飛ばしてやろうとしたが

メリメリメリメリメリ!!

「へ？」

「ん？鉄格子ならぶっ壊した方が早いだろ？」

黒ハルトが腕力に物を言わせて鉄格子をぐんにやり捻じ曲げたのであった

「もしくは切り刻んだ方が速いですわね」

「な、何てパワー！コレが天与呪縛!!」

「何感心してるのハルト？……っ！」

「どした銀狼……っ！」

全員の視線は新たに現れた白衣を着た男と

「ハルトお……」

虚目で最早、怪人よりも怪人しているアバタートーマがいるではないか

「ええ……」

ドン引きしていると白衣を着た白髪の高齢な男が話しかけてきた…

「貴様が魔王か？」

「人違いです」

「いや違うお前じゃない」

「まあ魔王は俺だわな、お前がその正義バカを甦らせた奴か？」

「まあそうだな私は…ドクトルまあそう呼んでくれ」

「どもー」

と軽く流すハルト

「単刀直入に言う財団Xの未来の為、お主には標本になつてもらおう!!」

「死ね」

「ほほほ、良いのか？憧れのヒーローが苦しむ姿を見ても」

その言葉に何言ってるの？って顔をした魔王と黒狐は一言

「だとしても、勝つよ仮面ライダーは」

その言葉には揺るがぬ信頼があつた

「ならばその希望を砕いてやろう！メガヘクス事件で入手した複製機よ！さあ！複製機よこの世界最強の戦士を甦らせるのだあ！」

ドクトルガリモコンで操作した同時に異変が起きたのである

その頃 アーマードライダー達は前回からの因縁ある 武神鎧武とブラックバロンを相手していたが

両者の中間地点に突如現れたマシンが何か作り始めたのである

「これは…まさか!!」

「そんな！」

心当たりのある面々は驚愕の表情を浮かべると出来上がった人を見てザツクと同行していたペコが叫んだ

「戒斗!!」「戒斗さん!!」

それはバロンのリーダーにしてハルトの師匠と天下分け目の大戦を繰り広げた終生のライバルにしても友

「貴様等、こんな所で何をやっている?」

駆紋戒斗 参戦!!

その気配を聞きつけたハルトの師は転移して戦場に向かう

またある所では

「さて、俺達も剛と合流して……っ!」

ドライブは突然受けた攻撃に動揺した

「そんな…」

「ハート！ブレン！メディック!!それに…」

それはかつて共に戦った仲間の姿であった

「チエイス!!」

ハート、ブレン、メディック、チエイス参戦

ハルトの目の前にはゾウ、トラ、クワガタ、シヤチ……そしてタカのような顔をした
怪人が五体

「ま、まさか!」

「そうよメダルの怪人グリード、財団Xでも研究されていたが完全状態で復活よ…まあ一部を除き反乱防止に自我は消したかな」

「……………?」

ならば一番自我を消さないとダメな奴の自我を残しているのだが…まさか

「お前バカなのか?」

この状況になった時、真っ先に反乱するだろう人をハルトはよく知っていたのだ

中編

前回のあらすじ

遂に始まった二亜奪還戦

出会って信じあつて創る最強のチーム with テスター軍団の先制攻撃はDEM日
本支部と財団Xの連合チームを初手から追い詰めていた

二亜の奪還も成して一息つく間もなく、アバタートーマとそれを復元しこの世界の
DEMにライダーシステムを流通させた主犯 ドクトルが現れる

そのドクトルは何とメガヘクスの技術を流用した複製機により死んだはずの戦士達
を甦らせたのであつた！

そしてハルトの目の前に現れたのはメダルの怪人で…

—————

さて

「さあ死から生き返った正義の味方によって貴様の憧れが倒され絶望するといい!!」

と勝ち誇るドクトルなのだが

「あのさあ…」

「何だ？」

この人は恐らく知らないのだろうが知ってる人から見たら

「お前バカだろ？」

「ははは！気でも狂ったか！」

「違う違う…お前さ怪人側の自我は消したって言ったよな？けど一番消さないとダメな人の自我をそのままにしちまってんだよ」

「何？」

少なくとも誰かの言いなりになるような人じゃない

「あの人は何せ…師匠のライバルだからな!!」

—————

同時刻

「貴方が駒紋戒斗ね」

「アーマードライダーだと？それに…お前たちは」

「戒斗…」「戒斗さん！」

「DEMめメガヘクスの技術で甦らせたのか！」

「これは……」

「ドクトルね都合の良い……さあ早く変身して戦いなさいな！」

「そうか……良いだろう戦ってやる」

「嘘だろ戒斗!!」

「戒斗さん!!」

「俺のやる事は変わらない……変身」

そして戒斗は戦極ドライバーをつけるとアルテミアと同じバナナロックシードを解錠して変身する

『カモン！バナナアームズ！！ナイトオブスピアー！！』

現れたのは赤い男爵 理不尽な世界を変えようとした誇り高い者

仮面ライダーバロン 出陣！

「さあ戦いなさい！！」

武神鎧武がそう命令するとバロンはバナスピアーを構えて突き出したのである

「はあ！」

「がつ！！」

「え？…っ！」

武神鎧武に目掛けて、怯んだのと動揺のあまり困惑するブラックバロンにも一撃与えて間合いを作ったのだ

「な、何をする！私達は味方だぞ!!」

「味方だと笑わせるな！死人に頼らないと勝てないという弱い考えなどする奴等は倒す！」

そのまま戦いに移行しようとしたその時！

「戒斗!?!」

「葛葉か…丁度良い手を貸せ」

「……分かった行くぞ此処からは俺達のステージだ！変身!!」

『フルーツバスケット！ROCK OPEN！極アームズ!!大！大！大！大！大將軍!!』

極アームズになった鎧武を見て

「待つてくれ鉢汰！ここは鎧武だけのステージじゃない俺達バロンのステージでもあるんだ行くぞペコ！」

「そうだよ！僕だつてやれるんだ！」

そういったザツクの手には戒斗のゲネシスドライバーから取り出したゲネシスコアとマロンエナジーロックシード、そしてペコは束が製作したゲネシスドライバーとマツボックリエナジーロックシードが握られていたのだ

「お前たち…まさか！」

「見ててくれ戒斗、これが今の俺達だ！」

「僕だつて…戒斗さんの役に立ちたいんです！」

『ROCK ON!!』

「変身!!」

そこに現れるのはバロンの後継者 戒斗が認める強さをもつ者

『MIX!ジンバーマロン!ハハア!』

陣羽織纏う 二代目リーダー

仮面ライダーナックル・ジンバーマロン

そしてペコが変身するのは嘗て夢でなった己の姿 黒い鎧に三叉の槍を持つ戦士

『LIQUID!マツボックリエナジーアームズ!ソイヤ!ヨイシヨ……ワツシヨイ!!』

仮面ライダー黒影・真

出陣！

「戒斗、鉦汰！黒いバロンは俺達に任せろ」

「2人は鎧武擬きを！」

「ああ任せた！」

「見せてもらうぞ、お前たちの強さを！」

その戦いをピースメーカーで見ていた千冬はほおと感心し東は自分作成のドライバーを何処かに送ろうとし錫音とアンティリーネは抜け出して向かおうとしていた所をベルファストに止められていた

その頃ハルト達はピースメーカーからの映像を受信した端末を起動して見ていた

「うおおおおおおお！か、戒斗さーん!!」

バロンが予想通りの行動をした事、鎧武とバロンの共闘という胸熱展開に感動している

「な、何故だ！仮面ライダーは正義のヒーローではないのか!!」

「え？どこから勘違いしてんの？」

「あの人を蘇らせたなら、ああなるのはライダーファンの常識ですよ？」

「いやしかし貴方の無知さが俺達にこの夢の舞台をくれたのなら…感謝だな」

そう首を傾げているもドクトルは余裕の笑みを崩さない

「だがグリードがいれば問題ない、さあ！魔王を殺すのだ!!」

その指示にアंक以外のグリードは従うのだが残念だなドクトルよ、此方も同じように研究している錬金術師がいるんだよ

「キャロル」

「ああ」

その言葉だけでハルトの意図が分かったキャロルはメダルホルダーからクワガタ、ライオン、シヤチ、サイのコアメダルをハルトに渡すと

「頼んだ」

「おう任せろ」

『memory』

「おりゃ！」

ガイアメモリを使いハルトの記憶にあるグリード達の記憶とハルト自身を怪人王の力で一時的に変異したグリードのデータをコアメダルに流しこむと、グリード達の眉間に投げたコアメダルは華麗に吸い込まれていったのである

「「……………」」

「何だ何故動かん！」

ドクトルはまだ己の敗因に気づいていないのだ

「後、俺に怪人を当てたのは失敗だったな」

「何だと！」

俺をただの人間と油断したのが運の尽き！

「俺は仮面ライダーの敵であり怪人達の王だ！」

ハーツハハハ！と高笑いする魔王の声がトリガーになったのか4人のグリードは突然意識を取り戻したように話し出した

「お、俺は一体何を…」

「コアメダルが復元されて蘇ったみたいね」

話し出したのは昆虫系グリード、ウヴァと魚系グリードのメズールである

「実験成功だなハルト」

「ああやったなキャロル！」

ハイタッチする2人に気づいたのかフラフラと近づいてきたのはネコ系グリードのカザリである

「実験？それって僕達を蘇らせる事？」

「その通りだよ……まさかメガヘクスの複製機で完璧な器を用意してくれるなんてね、その点はドクトルに感謝かな」

「おれ……よく分からない」

「まあ簡単に言えば生き返ったって事だな」

「なるほど」

と重量型グリードのガメルも納得した所でウヴァがハルトに食ってかかる

「おい貴様！どうやって俺達を甦らせた！たかが人間擬きと小娘に出来るわけがないだろ！」

感情に任せて魔王ハルトの胸ぐらを掴むウヴァであったが直後

「失礼な奴だなあ……えい」

「がつー！」

ウヴァの頭部目掛けて右腕を突っ込み中から意識を宿すコアメダルを引き抜き、体をセルメダルに返したのであった

【な、何をする!!早く俺の体を元に戻せ!!】

「助けてくれてありがとうはないのかなあ〜」

【何故俺が人間に礼を言わねばならん!】

「俺は人間じゃないんだよなあ〜よーし、このままメダル砕いちやお」

メリメリメリとコアメダルをへし折ろうとする笑顔の魔王ハルトの姿にウヴァは

【わ、分かった！復活させてくれて感謝する！！だから壊すのは辞めてくれえ！】

「よろしい」

満足するとコアメダルをセルメダルの山に戻してウヴァは元の姿に戻る

「な、何て奴だ…俺を脅すなんて！」

「それはウヴァが単純に突っかかったただけでしょ？」

「何だと！」

「それより僕達を蘇らせた目的は何？」

「正確に言えば君たちで実験、本命はあそこの彼が復活するかの確認だよ」

と指差した先にいるのは、自我が消えているアंकである

「まさか…アंकを蘇らせる為に！」

「という事はオーズの仲間か！アंकは抜け目のない奴だ何を企むか分かったもんじやない！」

「僕も賛成かな、オーズについた裏切り者だし」

「おかし…たべたい…」

「まあアंकのコアメダルに関しては俺よりも純度の高い力を持つてる彼の方が適任なんだよね〜それと俺はオーズの仲間？違うぞ俺は……！ファンだ!!」

それに彼の手でなさないとダメな事なのだ、取り敢えず、こいつ等を御するかな

「それで僕達を解放する感じかな？」

「本来ならそれで良いんだけど流石に野放しはまずいかなあ」

この世界で800年前の王なんて復活させたら大変な事になるし

「取り敢えずお前達は俺に従え」

「はっ！何を言ってるやがる俺達がお前に従う理由などない！」

「そうだね、取り敢えず君は邪魔かな」

ウヴァとカザリは反旗を翻すように魔王ハルトに襲い掛かるが

『オーズ……プトティラ』

ハルトはアナザーオーズ・プトティラコンボに変身するとメダガブリューをカザリの首に構えて脅すような声で話す

「またコアメダルを砕かれない？それとも」

そしてキャロルからメダルホルダーを渡されると何枚ものコアメダルを突き出して

「自我のないメダルの器に変えてやろうか？」

「っ!!」

2人はかつての記憶に宿る恐怖心で動きを止めたのである

「別に忠誠を誓えとは言わないけど、今だけは敵対しない方が利口だよ…それと安心して欲しい俺は味方は裏切らないから」

「分かったわ私は貴方に従うわ…貴方はガメル？」

「メズールがついてくなら僕ついてく！」

「そう良い子ねえ〜」

メズールは目敏く俺に従うことを選んだかガメルは流れだな…よし

「宜しくね、さて2人はどうする?」

「僕は従おうかな」

「俺もだ」

「よしよし、けど2人には罰ゲームね」

指を鳴らすとウヴァとカザリの体内からコアメダルが格一枚ずつ抜き取られたので
あつた

「俺に逆らうとこうなるよ意志を持つメダルじゃないだけ情けだと思いな」

「くっ!」「おのれ!」

「まあ安心してよちゃんと返すからさ」

カラカラ笑う魔王ハルトであつたが、彼は後に思い出す

それは800年前の王がグリードを従えさせるのにやつてた事と同じだと言う事に

「さーとドクトルだっけ手品は終わり?なら早く二亜連れてつてドライブの所行きた
いんだよなあ〜」

「お、おのれ!!トーマ!何をしている!早く其奴を殺せえ!」

「は、はるとおおおおおお!!」

「っせえな」

「同感だな……魔王、お前は彼女をつれて下がれ護衛しながらじゃ面倒だろ？」

確かに俺の目的は先輩ライダーの皆様にサインをもら……ごほん！二亜の救出だしな

「おいハルきち、本音を言ってみな？お姉さん怒らないから」

「まあそうだな……よし頼んだ」

「スルー!？」

「え？早く仮面ライダーのサイン欲しいからお前を安全圏につれてく」

「素直かあ!!そこは君を助けるよとかじゃないの？」

「いや早くしないと駒紋戒斗のサインが貰えないでしょうがあ！」

「二亜を安全な場所に送った後、俺はレジェンドライダー達の戦闘を応援するのだあ！」
2人に対してベアトリスは驚く

「いや馬鹿なんですか！この2人は!!」

それを見た銀狼とキャロルは

「ハルトは馬鹿だね」「今更だな」

また夜架達もそうそうと頷いていた

「そろそろ真面目にやれ」

キャロルのツツコミが入るも実際、黒狐の言い分の方が正しいので

「任せた」

魔王ハルトはアナザートライドロンを呼び出すと

「さあ乗りな！」

「「私（オレ）が隣に乗る……は？」」

「喧嘩すんな！後でドライブしてやるから黙って乗れえ！」

「はいはい！ハルきち！私の席は何処かな！！」

「悪いな二亜、この車は4人乗りなんだ！」

「本当に私を助けに来たんだよねハルきち！！」

「冗談だよ、ちゃんと対策してるから」

「本当にもお！素直じゃないんだからハルきち〜」

そう言うのと全員乗り込んだ……キャロルは子供モードで運転席に乗るハルトの膝上に座っていたのだ

「よし行くぞ！」

「皆！シートベルトはしたか！」

「ちよつと待てー！ー！」

「何だ？」

「いや！キャロルさんを膝上に座らせるのはダメでしょあぶな「行くぜ！フルスロットル!!」あ、ぎゃああああ!!」

ベアトリスの悲鳴がドツプラー効果と共に消えていったのだ

「やれやれ騒がしい連中だな」

「うちも大概じゃないかしら？」

「そつかあ？」

「ええそうよ」

「逃がさぬぞ！追え！追うのじゃ！！」

ドクトルが指示を出すアバタートーマが反応するより早く黒狐のドロップキックが顔面にめり込んだのであった華麗に宙を舞い顔面着地した後

「来いよトーマ、今度こそきっちり終わらせてやるよ」

『デザイアドライバー』

そう以前、アバタートーマが暴れた際に始末をつけたのは黒狐だったのである彼から

すれば個人的な因縁もあるのでボコボコにしてやりたいのは本当なのだ

「はるとおおおお!!」

そう叫ぶアバタートーマの右手に何処かのデュエルディスク的なアイテムが現れると左手にはチェンジと書かれた人造アンデットのカード

それは以前 ハルトとナツキがアナザーロイヤルストレートフラッシュとワイルドの一撃で消しとばした量産型アンデットのカード

それを右手のディスクに読み込むとアンデットとトーマが融合し頭部は羊で体が人間の要素が混ざったカメラとなった…ぶつちやけ何処ぞのホラー映画のキャラである

「んだありや?」

「ははは!あれはトーマの記憶にある人造アンデットの記憶を複製した量産型アンデットじゃよ」

「羊（ラム）のカードね…量産モチーフならもつと良いのがいたろコックローチとか」

「ほほほ、確かにメモリでもアレの生産性は群を抜いておる貴重な意見どうも まあお主など恐れる必要はない調べはついておる今のお主にはかつてのような創世の力はないのじやろ？」

「だな」

「滑稽じゃのお創世の力を無くした抜け殻…いや搾りかすのようなライダーで私が止められると？」

相手の弱点を見て己の自尊心を保つ、それは本来なら間違いな選択肢ではない、ただドクトルの失敗は二つ 一つは己に戦闘能力が皆無な事と

「まあ良いお前を殺し、魔王を標本に献上すれば私の財団での地位は確固たるものとなる！あの魔王は様々な世界の怪人の遺伝子、データを有する貴重な素体だ…素晴らしー！アレさえ手に入れば！！」

自己陶醉か過信か不明だが

目の前にいる暴君は分割されたとは言え魔王をギリギリまで追い詰めた化け物 天
与の暴君である事を

ドクトルは知らない彼も彼でハルト（異端児）という事を

とある世界では自らを凍り漬けにした失意に沈む竜種を包む氷を蹴りの一発で砕き
助け出し

ある世界では星核ハンターと戦い

またある世界では正義の象徴と呼ばれるNo.1ヒーローとそのライバルを三節
棍だけで相手取る怪物

単純な身体能力だけで言えばマルチバースに存在するハルトよりも優れる：正に最

強なのである

本来のやる気ならば魔王ハルトさえも流石に命懸けにはなるが分割させずに沈める事のできるのだ

「搾りかすには勿体無いがの私の作品の実験体となつてもらうぞ、さあトーマ……いやラムアンデット！」

確かにあの事件の後、黒狐にはクロスギーツの力は残つたのだが創世の力はなくなつた元々魔王ハルトの力を取り込む事で完全体となるのだから当然の帰結であるが

しかしながら残滓は残っているならば

「あのさクロスギーツのバックルつて元はブーストバックルなんだぜ？なら創世の力はブースト（増幅）させれば良いだけだろ？」

マッチ棒並みの残り火でも薪をくべて酸素を送れば大火とする

「へ？」

『XGEATS』

「それによ他人の禪で相撲してる時点でお前は三流だぜドクトル」

「っ！」

「君は研究者として三流だね」

「黙れ…黙れええええ！貴様も狩崎と同じようにワシの技術を馬鹿にするのかあ!!」

「そりやなあ…出来たアンデットはテイターンやケルベロスにも劣る劣化品、アバター
トーマも複製した技術はすげえがナノマシンの無限再生はしねえし自我が暴走して
…ん？狩崎？」

ただメガヘクスの複製機を再生して怪人や死んだライダーを復活させたのは凄いと
思うのだが

恐らく自分のやりたい事と適正能力が噛み合っていないのだろうな 他の道を選べ
ば大成しただろうに

「まあ関係ねえなヴェルザード、手エ出すなよ」

「分かってるわ下がりましたようカフカ、夜架」

「ええ」「かしこまりました」

「サンキュー、んじや始めるか」

『BLACKOUT::REVOLVE ON』

コイツは敵だ、それだけ分かれば良い…というより魔王には孤児院を守るキツカケを
くれた借りは返さないとダメだろう

「変身」

『DARKNESS BOOST!! XGEATS! READY... FIGHT!』

再び現れるは世界を滅ぼす神殺しの黒狐

狐はお稲荷様のように神の使いと呼ばれながらも殷の妲己や玉藻前に代表される国に仇なす厄災の象徴でもある

ギーツが神様なら彼は邪神と言えるだろう

かつて神になろうとした暴君

仮面ライダークロスギーツ

両手に双剣を持つとそのまま全速力で走り抜けラムアンデットを切りつけにかかったのであった

—————
その頃 ナツキと剛はと言うと

「ありがとうございますございました剛さん、お陰様で耶俱矢と夕弦を助け出せました！本当にありがとうございます！しかも融合態ロイミュードの分離プログラムで2人を戻してくれてありがとうございます！！」

「良いつてことよ」

「2人をピースメーカーに送ってと…よし、じゃあハルトの加勢に向かいます！！」

「俺もついてくぜ」

「これは頼もしい！！」

ナツキは安堵するもケケラは端末のメールを見て顔を顰めた

「だが早くした方がよいぜ」

「何で？」

「どうやらDEMの連中は財団Xと共闘してるみたいだな、メガヘクス？って奴の複製機でロイミュード？ってのを生き返らせたって」

「おいオツサン！それは本当か！」

「ああコレを」

ケケラの見せた端末の映像を見て剛は血相を変える

「チエイイス!!」

「嘘っ！は、ハートにブレン、メディックまでいるじゃん！」

「おい急ぐぞ！」

「なら行かなきゃですね！こいアナザーダイバー2nd！」

ナツキはバイクを呼び出すとアナザーマツハウオッチを使いライドマツハーに擬態させた

「嘘だろ！それ俺のバイクじゃないの!!」

「話しは後で性能は据え置きですから行きますよ！」

「ちよいちよい！ライドマツハーの運転なら俺に任せな！」

「おいそれは野田夏樹のバイクで「ケケラ」分かったよマスターパスを仮発行してやるから乗れ」

「つし、じゃあお願いしますね剛さん！」

「ああ！マツハで行くぜ!!」

2人がライドマツハに乗り込むとケケラはカエルの置物に姿を変えナツキの肩に乗るのであった

—————

そして魔王ハルト達と言うと

ワラワラと邪魔してくるロイミュードやインベスを跳ね飛ばしながら進んでいた
正に

「戦う交通安全!!」

暴走車両である

「率先して安全乱してるじゃないですか！銀狼さんも何か言ってくださいよ！」

「……このまま真っ直ぐ進んで」

「おうよ！アナザートライドロンなら…あんなこんなカーブもへっちゃらさー！
激走戦隊並みの暴走である

「いや明らかにカーブする前提じゃないエンジンの形状だよねハルきち!!」

「後、早く芋長の芋羊羹食べたい」

「おうよ銀狼！またあの世界に行こうぜ！」

「楽しみ」

「銀狼さん!？」

「ベアトリスは黙ってて今、DEMのハッキングで忙しい」

「あ、ごめんなさい」

「やれやれ二亜大丈夫か？」

「まあね〜…けどハルきちって本当、私のことどう思ってるんだろ？」

「大切に思ってるだろ？」

「へ？」

「でなければお前を助けに乗り込むなんてしないさ、このバカは身内と他人の線引きが酷いからな」

「そっか……なら良いな……っ!!」

そう話しているとハルトはアナザートライドロンの運転を止めたのである、その目の前にいたのは

「し、師匠に……く、駒紋戒斗さん!!」

ハルトは慌てて下車して戦場に現れると

「誰だ貴様!」

「俺は常葉ハルト……葛葉紘汰さんの弟子です!」

「弟子だと!」

「ああお前がいなくなった後色々あつてな!」

「メガヘクスの力で……でも！束！！アレいけるか！」

『あーもすもすひねもす？ハルくん！いつでも行けるよ！』

「ありがとう束！！そんな事より戒斗さん！これ使ってください！！」

『コネクト』

魔法でピースメーカーと接続した先から取り出したのはゲネシスドライバーとレモンエナジーロックシードである、それをハルトは躊躇わずに投げるとバロンは手に取った

「これは……」

「俺の大事な人からの贈り物です！！ぜひ使ってください！」

「良いだろう」

『レモンエナジー！ロックオン！……ソーダア！レモンエナジーアームズ！！』

同時にバロンは新たなドライバーと新たなロックシードで姿を変えた

仮面ライダーバロン・レモンエナジーアームズ

「行くぞ葛葉!」

「ああ!サンキューなハルト!」

「礼なんて不用です師匠!あと…ここは任せても良いですか!!彼女を安全圏に連れていくので!」

「ああここは俺たち、アーマードライダーに任せろ!!」

「はい!行くぞキャロル」

「ああ…だが良いのか?混ざりたいのでは?」

「だけど二亜も大事だから」

「ハルきち…」

「それと映像はピースメーカーで撮影してるから大丈夫！」

「色々と台無しだよ!!」

「んじゃ行くぜ行くぜ行くぜ！」

再びエンジンを蒸したハルト達一向、そこに

「うおおおっと、ハルト無事だったか！」

「ナツキか」

「追いついたぜ」

「良くやった、今度はついてきてくれたな」

「おうよ！」

2人はハイタッチを交わすと

「いやあ久々の運転だけど、やっぱりいいなあライドマッハは」

「剛さんを連れてきたのは大手柄だ！」

「いやそつちかい!!……つて十香ちゃんは？」

「ああ…アレは少年の管轄だろ、俺には関係ない…まあ」

ハルトの目線には現在も乱戦続くDEM日本支部が映る、現在もテスター軍団の改造マシンがDEMのパンダースナッチを叩き落としている

「無事に辿り着けたらの話だな」

「そつ……そ、そうだよハルト！大変なんだ！」

「大体わかってるチエイズさんやブレン達の事だろ？」

「そうなんだ！頼む手伝ってくれないか！」

「勿論です」即答

「あれ？ハルきち？」

「今更ながらに思った二亜をピースメーカーにテレポートさせれば良かった！」

「それは最初に思ってたよ!!」

「まあ流石に敵陣ど真ん中でやるのは危険だから外に出たんだよ……つてな訳で錫音、頼んだ」

「まったくもう！私はテレポート担当じゃないよハルト！」

テレポートで現れた錫音にハルトは手を合わせて謝る

「ごめん……お願い錫音」

「良いよ変わりに今夜の特別スイーツ期待しちゃっても？」

「OKだ、お菓子の家作っちゃる！」

「じゃあ行くよー！」『テレポート……ナウ！』

錫音は二亜を連れてテレポートしたのだが

「なーんでお前たちは残ってんだ？」

キャロル、ベアトリス、銀狼は残っていた

「お前のストッパーが必要だろ？」

「ええタダでさえ目的がブレブレなハルトさんには千冬さんによって私がしっかり見張ってないとダメだとわかりました」

「私は財団Xのデータが欲しいから残った」

「銀狼は思い切りやっちゃって」

「任された」

そしてハルト達はドライブに加勢する

「進兄さん大丈夫かい？」

「剛!」「やあ剛久しぶりだね」

「クリームも久しぶり、それよりもチェイスが復活したって」

「ああ」

「けど自我が無い器でしょ、なら有り難く使わせて貰いましょうよ」

「何?」

「どう言うことだね」

「俺の力を使えばチェイスやハート達の動きを止めて更に全員の記憶データをインストールする事が出来るんです!」

「何だって!」

「ただチエイイスだけは特別で俺のデータだけだと魔進チエイサー…つまり死神時代の彼になっちやうんです」

「そんな！ならどうしたら…」

「剛さん！」

「何だよ」

「剛さんに渡したメモリとシグナルチエイサーを貸してもらえませんか！それを使えばチエイイスの記憶を完全な形で戻せるんです！」

「分かった！使ってくれ!!」

「ありがとうございます!!よし…行くぜ！」

『memory』

メモリーメモリの力でデータを移し終えたシグナルチェイサーを剛に渡した

「後は任せます剛さん…これは貴方のやるべき事ですから」

「道は俺達が開いてやるから行ってこい剛！」

「……ああ!!」

「っしやあナツキ！俺達もやるぞ」

「おう！」

「ならオレ達もやるか」

そしてハルトとナツキもノリノリで参戦しようとした時！

「それは困るねえ」

と現れたのは白髪スーツ姿の青年だった

「お前はここの間の夢に出た奴！」

ナツキは以前、夢に見た性格反転ミラクルワールドに君臨していた世界の支配者と同じ顔をしていた

「誰の事だい？」

進ノ介は驚きの表情を浮かべた

「お前は…DEMの社長!!」

「アレが…」

「そうだよ初めまして仮面ライダードライブ、そして異世界の魔王 私がアイザック・ウエストコットだよろし…っ！」

挨拶する彼に向かってファイズフォンXの銃撃を浴びせたのは他ならないハルトであつた

「そうかお前が…お前が二亜に人体実験をさせた犯人か…：テメエ…」

その手は怒りで血が滲むほど握りしめられていた

「ん？あああの資材の事か」

その一言でハルトは完全にキレた

「お前…嫌いだわ初対面で人を嫌いになつたのは久しぶりだな…：ははは、どーせ社長とか何だからお前はここの世界の司法で裁けないんだろ？なら俺が裁く！」

「精霊を人体実験させてた主犯か……なら俺の敵でもある！お前がいるだけで彼女達が安心して眠れない!!」

『アナザー氷獣戦記……LONG GET!』（ガオー!）

「はあ!!」

現れたアナザーブレイズ・タテガミ氷獣戦記にハルトは驚愕した

「え？何それどうやって手に入れたの？」

「覚悟を超えた先に希望があったんだよ」

「そっか……なら俺も!」

そう言うハルトは右手を前に突き出すと現れたのは一冊の本であった

「それグリモワールじゃない？」

「オムニフォース…さっき絶望した時に現れかけた未完成のグリモワールって所かな」
「やっぱりあの波動はそれだったか」

「仮面ライダーがいなかったら終わってたぜ、まあアレだなウエストコット…滅べ」

ハルトは完成したライドブックを開く

『オムニフォース！伝説の聖剣と選ばれし者が交わりし時！偉大な力を発揮する！』

更に

『魔王と本が交わりし時 外史より新たな力が呼び出される』

するとオムニフォースが魔王に最適化された形へと変える 突如空から現れた黄金大剣 カラドボルグにウオッチを装填するスロットが出来上がると

『ソロモン』

虚空から現れたアナザーウオッチを装填したのである

同時にライドブックから流れる黒いモヤがハルトの体を包み込む

モヤが晴れた先に現れたのは金色の剣 カラドボルグを携え、ボロボロのマントと装甲を有する歪な戦士

『OPEN the OMNIBUS FORCE of the GOD!アナザー
ライダーソロモン!! DESPAIR is COMING SOON』

倦怠の平穏を嫌い 破滅を求める空虚な末裔

アナザーソロモン 現る

「さてと懺悔の用意はできたか？二亜が受けた痛みを何那由多倍にして返してやる」

「ははは！素晴らしい力だね是非とも欲しいよ」

「ほげげ!!」

そのままアナザーソロモンは跳躍してカラドボルグの斬撃を頭部へと振り下ろしたのであった

—————

その頃

「ぐ………はぁ!」

「せいっ!」

ラムアンデットはクロスギーツとの戦闘で劣勢だった、まあ基礎スペックと変身者の

経験値が違う 何せクロスギーツは魔王の力を取り込んでいたとは言え、トライセラトプス、Tレックス、ブラキオサウルス、ケツアルコアトルスの恐竜系ドーパントを瞬殺しているのだから

「オラオラオラオラオラ！」

何度も何度もパンチを浴びせると今度は地面に刺した2本の剣を引き抜き黒いオラを纏わせた斬撃を放つ

「がああああ……おのれハルトおおおお！何で貴様は俺の邪魔をする！俺の正義を邪魔するのだ！」

「はっ。」

「精霊や怪人？そんな化け物が人のいる世界にだけで危険なんだ！だから俺が排除するんだそして俺は英雄になるんだ……そうだ！俺が正しい！間違っていないんだ!!」

「間違いだらけだな」

「何だと!!」

「俺は魔王に負けた後、色んな世界を見たけど正義だの何だの掲げた連中が齎すのは平和じゃない支配だ結局、お前もハルカと同じだな自分中心の世界でふんぞり返りたいだけだろ?」

「ふざけるな……俺が正しい!お前が間違っているんだ!!その子達やお前の仲間だつて洗脳してるに違いない!!」

その言葉にヴェルザードは冷気を発し、カフカはサブマシンガンの狙いを定め、夜架は抜刀しキングゴーカーサスカブトに残るトウワイスは艦船モードから戦闘口ボモードになるように指示を出していた

「アホかお前と一緒にすんな、俺みたいならくでなしについてきてくれる優しい奴等だよ」

「ほぎけえええええ！」

「だから俺が守るって決めてんだ！」

『X—GEATS STRIKE!』

走り出したラムアンデットに強化斬撃を交差するに剣を振り抜いて一刀両断する

「そろそろ滅べ亡霊」

「ぐ、ぐぎやああああ!!」

そんな断末魔と共に爆散すると彼を構成していたナノマシンが飛散するが

「ヴェルザード」

「はいはい」

彼女の力は固定 物質の原始に干渉してラムアンデットの周りを凍りつけにしてナノマシンの機能を無力化させた

「これで良しと」

これでアバタートーマは動かないだろう永遠の凍結地獄に囚われ二度と蘇ることはない

「お前にファイナーレはない」

「そ、そんな私の最高傑作が…そんな、そんな」

「さて残りはお前だけだぜ？」

ギーツバスタークロスを銃モードに変えて狙いを定めるとドクトルは

「ありえないありえないありえない！そんな事ありえないんだ、そうだ私は一流の科学

者なんだあ！」

と何かのリモコンのスイッチを押すとドクトルの体にはDEM日本支部地下で栽培されていたヘルヘイムの果実とツタが体にまとわりつくど体が巨大化を始めると

『Stage select』

テスター軍団が危険を察知して黒狐達を別空間に転移させたのである

その直後 ドクトルはヘルヘイムの力と融合しかつて本家 武神鎧武が形をなした
巨大な木の怪物となったのである

「おいおいコレは不味いな……トウワイス!! 出番だ！」

『おうよー!』

その言葉と同時にハルトのパートナーアニマルであるキングコーカサスカブトは航空母艦モードから変形を始める

そして現れた地面に立つ超巨大ロボット

『キングコーカサスカプト!』

まるで重装甲の甲冑を思わせる巨大シユゴツト
キングコーカサスカプトである

『完成したぜキングコーカサスカプト! 乗ってくれ皆!』

「よし行くぞ! キングコーカサスカプト!!」

と全員が跳躍してキングコーカサスカプトに乗り込むと巨大樹VSキングコーカサスカプトの対決が幕を開けたのである

後編 1

魔王側

「ははは！これは良いねえ」

「さて命乞いするなら考えてやらんでもないな」

「命乞い？とんでもない真逆、何の備えもなしに来たと思うのかい？」

そう取り出したのは戦極ドライバーと金色の錠前

「まさか」

「君達流ならばこうかな？変身」

『ゴールデン…ロックオン…カモン！ゴールデンアームズ！黄金の果实』

金色に輝く装甲と現れた盾と剣が重なる武器、ソード部リンガーとアツプルリフレクターを構える荘厳な姿

戦いを求める戦神 仮面ライダーマルス
現れる

「正にラスボス参戦って感じだな」

「というより此奴が諸悪の根源だろう…だから消し飛ばす!!……だが」

アナザーソロモンとアナザーブレイズは警戒していた、何せ金メッキと称されていても黄金の果实に近い戦闘能力を有しているのだから

「初登場時の無敵効果は侮れない！」

「メタ発言は止せ！」

「何の話をしているんだい？」

「いやいやハルト、お前の師匠のカチドキ初陣は貴虎さんは互角に渡るから「あの主任と師匠と同じに考えるな！」お、おう」

補正なんて関係ないくらい強い主任…流石です

因みにだがその主任はキングゴージャスカサスカブトを見ていない為か周りが映像越しに変形した時もロボットなんていないと良い最終的には

「皆、疲れているのか？」

何処かのイメージネーション事件と同じように首を傾げていたという

「取り敢えず邪魔すんなあ！」

アナザーソロモンはカラドボルグに力を込めるそれだけで地水火風の属性が発生、統合されていく、オムニバスの名前は伊達ではないとばかりに放たれた強化斬撃はアップルリフレクターに止められる

「へえ……ならコレはどうだ！」

アナザーブレイズは足元を凍らせると氷の獅子がマルスに襲い掛かるが

『ゴールデンスカッシュ！』

「ふんー！」

マルスの斬撃で一撃で破壊される綺麗に散らばる氷を見てアナザーソロモンは新しい力を解放する

『アナザーローディング！……ソロモンブレイク！』

「消し飛ばせ!!」

カラドボルグから衝撃波を放つアップルリフレクターに防がれてしまう

「やっぱり初登場の無敵効果はあるのか…」

『ふざけてる場合か!』

「安心しろ、今の俺は二亜を傷つけた犯人が目の前にいる事だな…怒りの力でメラメラと闘志が湧いてくるんだ」

『そ、そうか!仮面ライダーソロモンは元々変身者の精神力を糧にするライダーだアナザーになってもその力もある!』

『イカれてるハルトとは相性バツチりなわけだ!』

『つまりハルトのバイブスを上げれば良い訳だ!』

「おうとも……だけどそんな簡単に俺のテンションが上がると思うな

『そんな相棒に今絶賛戦っている鎧武、ビルド、W、ドライブの映像をどうぞ』

「……………ふおおおおおおおう！やべー！流石師匠とそのライバル！！そしてレジエンドライダーの皆さんだ！やべえ…っしやあ！俺もこんな所で手をこまねいてる場合じゃねえ！！見ててください！師匠！俺の全力！！」

「あ、アナザーソロモンの力が高まつてる！」

『やっぱりこのバカは単純だな』

『単純過ぎて寧ろ心配になるわ』

『行け！ハルト！！』

「うおおおおおおお！！」

高まる出力はアナザーソロモンの宿すライドブックとアルターブックの力を束ねたエネルギーがカラドボルグへと伝達される

「どんな技が来ようとも僕に勝てると思わない事……だ……」

ハルトが選んだ技はジャツ君と土豆の木を使ったツタや小豚三兄弟のレンガなどで超巨大化させたカラドボルグの刀身を振り下ろすというシンプルなものだった

「鉄塊」

ナツキはシンプルにそう形容したのであった

「そーそーそーらぶつ潰れろおおお!!」

「甘いねそんな力任せな一撃なんて当たる訳……なっ!」

「さつき見せたる?俺は足元を凍らせる事が出来るんだよ」

「くっ!だがこの盾があれば!」

アップルリフレクターを構えて防ぐマルスであるが質量によりドンドン地面にめり込み始めていく

「な、何故だ！アーマードライダーならばこの程度の重さなど！」

「まだ分からないのか？」

「何？」

「お前には一つ足りないものがある、それは!!仮面ライダーへの愛だあ!!」

「何故ここで愛？」

「この世界において仮面ライダーへの愛で俺に勝てると思うなああああああ!!」

『凄い！精神力がドンドン上がっている！』

『こう見ると感情の振り幅で強くなるジョーカーと相性良くて当然だワ』

「く……まだまだあ！」

『ゴールデンオーレ！』

「ぬんー！」

剣を振り抜くと剣に込められたエネルギーが爆破しマルスは転がりながら変身解除した

「う……くう……」

「しゃおらあ!!!……ん？」

カラドボルグを頭上に掲げて喜んでいと束から通信が入る

「どしたの束と七罪？」

『大変だよハルクくん！篠ノ之製作所に置いてたヒューマギアが暴走してそっちの世界に行っちゃったんだ！』

『そのハルト……ごめんなさい通り魔にルパンガンナー盗られちゃった』

「……………はあ!？」

同時刻

『タイヤ交換!!ジャステイスハンター!』

『ヒツサーツ!フルスロットル!ハンター!』

「せやあー！」

ドライブがハンターの力でハート達を檻に閉じ込めるとシフトカー達が懸命に足止めすると

「剛、今だ!!」

「ああー！はああああああ!!」

剛はその刹那を突いてチエイスの体にシグナルチェイサーを埋め込む

「ぐ……ぐあああああー！」

チエイスもその器にデータが強制入力され苦痛の顔を浮かべるが 同時に飛翔してきたチエイスが使っていたバイラルコア三体、そしてライノスコアが体に入る事で痛みは緩和ポロポロだが膝を突き倒れるも剛がそれを支えた

「チエイス!!俺が分かるか!!」

「剛………?俺は一体?」

「チエイス!!」

剛は感動の余りチエイスを抱きしめるがチエイスは

「進ノ介、クリーム一体此処は何処なんだ」

「いやそこはもうちよい感動する場面だよ!」

「本当相変わらずだなチエイス」

「剛………お前は助かったのか」

「お前のお陰でな」

「ハート…ブレン、メディック？ 一体コレは…」

実際再会して何を言っているのか剛には分からなかった色々言いたい事があったのに…とだが

彼の復活に感動していた存在が別にいた

「うおおおおおおおおおおおお!!!」

このバカ（魔王）である

遠目で復活を見ていたのだが、見たと同時に号泣したのである

「良かった…本当良かったあ!!」

『号泣してる!?!』

『おいハルト、今はそんな状況ではないだろ!』

『完全に目的を見失ってヤガル!!』

「馬鹿野郎！剛さんとチェイスの再会なんて仮面ライダーのファンからしたら涙腺ものだぞー！実際ジオウ本編でニアミスした分、俺の感動は三倍増しだあ!!」

『おいおい感動の大きさをハザードレベルが急激に上がってるぞー!』

『プラス方向にハザードレベルが振り切れるのはこのバカ位だよなあ』

『おい程々にしろ感情の高まりでカラドボルグが悲鳴をあげているぞ』

『嘘だろ!?!』

『誰かりアクターアックスかザンバットソードを持ってこい!!』

「このライダーオタクは本当に…あれ?」

『良かっただよお!』

『泣くな東…』

『千冬も泣いてるじゃん』

『良かったわね…』

「見事にハルトの影響受けてんな千冬さん達も…あ、待て逃げんじやねえ」

おいおいと泣くハルトにアナザーブレイズはやれやれと肩を竦めていたがちやっかりウエストコットの足元を凍りつけにして身動きを封じているあたりしっかりしている

「ハルト、行ってこい俺はこいつを締め上げる…夢で散々俺を振り回した恨みを晴らしてやる」

『すまんナツキ、既にあのバカは走ってるぞ』

「ええ!？」

「夢? 一体何のこ「知る必要はないこれから消えゆく者に」それは今甦った彼のセリフでは?」

「よくも……よくも性格反転した綺麗なハルトなんて悍ましいものを見せやがったな! あんなハルトが現実にいる訳ねえだろうがあ!」

「何の事だあああああああ…」

ウエストコットのツツコミはアナザーブレイズのピーターファンタジスタの力で逆さ吊りにされた事で消えたのである

そして変身解除と同時にハルトは

「何かナツキにデイスられた気がする」

『安心しろ、デイスられたから』

「そうか…なら後で…じゃなかった！剛さん良かったですね！」

「ああお前さんのデータのお陰だ。ありがとうな」

「とんでもない！これは剛さんの力ですよ俺は少しお手伝いしたに過ぎません」

「剛、コイツは誰だ」

「本物のチェイスさん…魔進チェイサー、仮面ライダープロトドライブ、そして仮面ライダーチェイサー!!俺…その…ファンです！サインください！お願いします！」

『この土下座…スウォルツの顔より見た光景だ』

『もつとスウォルツの顔を見ろ定期』

『これも風物詩になったナ』

ハルトは全力で土下座と共に色紙を突き出すと

「剛……コレは一体？」

「ああ俺達のファンなんだと、コイツの協力で復活したんだ」

「ファン？」

「アレだ、頼まれたサインを書くのが人間のルールつてな書いてやってくれ」

「そうか分かった」

「ありがとうございます!!あ、後……束！」

『ぐす……はいはい！束さん印のマツハドライバー炎を転送するよー！』

と現れたマツハドライバーを渡す

「コレ使ってください!!」

「コレは…」

「俺もお前から預かったシグナルチェイサー返すぜ」

「剛…持っていてくれたのか」

「当たり前だろ!…:…ダチなんだからな!!」

「剛…俺はお前のダチになれたのか…」

「すまない!感動の再会は後にしよう!!」

「おい頼む!ハート達も治してくれないか!」

その頼みにハルトは即答する

「任せてください!!行きますよ……たあ!!」

ハルトの怪人王の力で複製されたハート達のコアに干渉 彼が見てきた記憶とデータを入力すると

「修復完了!!」

「っ!ここは一体…泊進ノ介にクリムまで!」

「ハート!」

「成る程、どうやら私達は再び甦ったようですね」

「(ハート)は?」

またハルトはこの光景を見て脱水症状になるくらいの涙を流していると

『大変だハルト！メガヘクスの複製機が暴走を始めたぞ！』

「へ？」

『どうやら黒狐との戦いでドクトルの制御を離れて怪人を手当たり次第に甦らせているようだ！』

「問題ない！どんな怪人が来ようともな!!」

『おお！ハルトが普段よりも頼もしく見えるぞ！』

『今こそ怪人王の力を見せる時だ！』

「仮面ライダーの皆さんがいれば大丈夫だ!!」

『知ってたー』

『ハルトならそう言うわー』

『マジないわー』

「おいコラ、俺もやる時はやるぞ！」

「なら私ならどうだ？」

「この声はまさか！」

「嘘だろ……オーマジオウさん!?……ダメだあ！もうおしまいだあ……絶望しかねえよ勝てる訳がねえ……」

その時 ハルトに流れたのはオーマジオウとの模擬戦 手も足も出ないでボコボコにされた存在する記憶である……いやマジで初戦は舐めプというか手加減してくれてたのがよくわかったよ!!あれから一矢報いれないもん！

だが

「誰だそれは…私は未来の支配者 パラドックス!!」

それはロイミュード108 最悪の未来から来た存在であったが

「ややこしいわ!!」

ツツコミを入れる中、ハートに駆け寄る進ノ介さんはいつの間にか変身解除していた

「話は後だハート」

「そうみたいだなブレン、メデック行くぞ」

「勿論です」「かしこまりましたわ」

「やべえ皆さんがこの状況…って誰だ!!」

興奮しているハルトの頭上に影を見るとそれは白いマント、スーツにシルクマット、顔は仮面で見えない……

「お前……まさか……ルパンか！」

「その通りさ泊進ノ介、君のライバル！怪盗アルティメットルパン！ここに完全復活」

「でもどうやって……まさかメガヘクスの！」

「複製機で甦ったが私のコアは何故か異世界のヒューマギアというマシンに憑依していた、その世界から脱出すると偶々ルパンガンナーを持つていたお嬢さんからコレを拝借していると君達の声が聞こえたから、来たのだよ」

「暴走した素体と七罪からルパンガンナー奪った通り魔はお前かい!!」

「やれやれ全く厄介な奴まで甦ったみたいだな」

「また君に挑ませてもらうよ泊進ノ介」

「その前にそのルパンガンナーを返せ！それは七罪のだ！」

『そうよ！返しなさいよ!!』

「確かにその通り、ではギブアンドテイクと行こうこのルパンガンナーを貰う代わりに今回私は君達に加勢する…私の変身、見たくないかい？」

「凄いい見たいです!!」

『ちよつと!?!』

「…………やるなルパン!!だがそんな素晴らし過ぎる誘惑に屈する程、俺の心は弱くないぞ!!」

『さつき思い切り屈してたよな?』

「キノセイダ!!」

「だが君達でもこの数は厳しいだろうか? 戦力は多いに越した事はないと思うが?」

「成る程、確かにパラドックスロイミュード相手なら戦力は多いに限る…よし追加条件を飲めたらルパンガンナーを譲ろう」

『ちよつとハルト!?!』

「その条件を聞こう」

「そんな難しい事じゃない」

ハルトは鬼気迫る表情で近づくと懐から取り出したのは

「あの…サイン貰えませんか？」

見慣れたしかしとサインペンだった

「お安い御用だとも」

「やったぜフオー…ウ!!!」

喜びの余り発狂するハルトに

「あのバカ…おいオレもサインを要求するぞ！」

「貴女もですかキャロル!？」

「仕方ない私達もハルトの影響でライダー好き…後でマツハにサイン貰う！」

「銀狼まで！」

『ちよつと！あれは私のルパンガンナーよ!!』

と七罪は怒るがハルトは

「洗脳された挙句に襲いかかって来た子のルパンガンナーなんて知りません！」
『え？お母さん!?!』

「後は2人のドライバーだけど…流石の俺達でもドライブのベルトはないんだよ」

「では私が転送しよう」

「クリムさん!?!」

ベルトさんが転送したのはハートとブレン用のドライブベルトである

「それは進ノ介用のスペアドライバーだ、まあ中身のデータは空のドライバーだからシフトカーやデータが必要だがね」

「そうか取り敢えず貰うぞ」

「全く、こんな不完全で未熟で出来ない試作品を渡すとは……ですが使えなくはないので貰っておきましょう」

「嫌なら返したらどうですブレン？」

「メデイックの言う通りでは？」

「何故私の扱いが雑なのでしょう……キー!!」

「ブレンなら妥当ですわ」

話していると

「貴様等あ！私を無視するなあ!!」

「皆、ひとつ走り付き合えよ!!」

そして全員がドライバーとシフトカーとシグナルバイクを構えた

『SIGNAL BIKE!』

『FIRE ALL CORE…ドライブ!タイプ・ミラクル!』

鳴り響く待機音と共に全員の声が揃った

「「「「「変身!!」」」」」

『ドライブ！タイプ・スピード！』

『シグナルバイク／シフトカー！ライダー！デットヒート！』

更に変身するは蘇るライダー達

「人間は俺が守る」

『ライダー！チェイサー！！』

ドライブ世界最古のライダーにして1人でロイミュードと戦い続けた英雄
仮面ライダーチェイサー

そして

『ハート・THE 仮面ライダー！』

ハートとメディックは高まる力を糧に仮面ライダーハートへ変身し更に
『ブレン・THE 仮面ライダー！』

個性の塊 仮面ライダーブレンも現れ

『ルパン！』

甦った怪盗 仮面ライダールパン 復活！

今ここにドライブライダー達の全員変身が起こったのだ

「うおおおおおおおおおおおおおおおお!! すっげえええええー! フルスロットルーー!」

子供の頃に戻ったような瞳で感動しているハルト

その感動の余波は当然

—————

オーディエンスから渡された端末に流れた映像で天元突破しているバカ一名

「うおおおおおおおおおおおおお！」

「落ち着けよ／テンション上げていこうぜ！」

キングコーカサスカプトで暴走したドクトル巨大樹と戦っている黒狐のテンションも上がったのである

「やべえな…おいトウワイズ！こんな所でのんびりしてる場合じゃねえ！早くこの樹を伐採してやろうぜ！」

「どうすんだよ俺達見事に縛られてんだぞ！」

事実 キングコーカサスカプトは巨大樹のツタに拘束されていたのだ

「関係ない！見てろ!!」

クロスギーツはキングコーカサスカブトを操作するのに必要な王冠をつけた赤い槍を構えると王冠部分を回転させ必殺技を発動する

『キングコーカサスカブト！フィニッシュユ！』

するとゴッドヘラクレスが斧モードからシユゴッドモードに変わりツタを全て切り裂くとキングコーカサスカブトは重力に従って落下した

「どーだ！」

「けど、どうするの？このままだと拉致が開かないわよ」

「せめてもうちよい火力があれば…」

「主様アレを！」

視線を上げるとオーロラカーテンが現れていた

「何だよ、また何か出てくるのか？」

そしてオーロラカーテンが揺らぐと中から現れたのは

『シユゴツド！大集合!!』

黒と金色で形成された装甲を持つゴツドコーカサスと似た人造シユゴツドことシユゴツドZERO達であった

「え？あれ味方？」

「マジか」

シユゴツドZERO達は一気呵成にと巨大樹への攻撃を行なっている余りの状況にハルト達の頭が固まっていると

「通信が来たわ、モニターに出すわね」

カフカが端末を操作して映像を出すと、それは片腕が異形の物に化していた並行世界の自分である

『やあ初めましてであつてるかな?』

「アンタは…確かハルトレンジャーにいた!」

『その通り狭間の王!その影武者だよ』

クモノスハルトが黒と金色の蜘蛛型シュゴツドのタランチュラアビスに乗って現れたのである

「何でお前が…」

『俺はただオーディエンスから預かったシュゴツドZEROを君に届けるように言われ

ただけさ』

「シユゴツドZERO?」

『細かい説明は行間を読み、君達にコレを転送する』

「いや説明を放棄するな!!」

と送られたのは金色の剣と角や羽など多彩な昆虫のパーツが加えられた剣であった

「何だコレ?」

「剣ね」

「剣ですわね」

馴染みのある武器を夜架とカフカは手に取る

『そして剣を頭上に掲げてこう言うんだ！降臨せよ！キングオージャーZERO!!と』

「夜架に任せるわ」

「では失礼して……降臨せよ！キングオージャーZERO！」

夜架の声を起動サインにしてシユゴツドZERO達は合体を始め 現れたのは黒と金の巨人 かつて戦いを終わらせた伝説の存在 その模造品

『キング！キングオージャー！ZERO!!』

キングオージャーZERO 参戦!!

「更に俺の出番だ、行くよアビス」

その声と共にタランチュラアビスと三大シユゴツドが合体を開始すると同時にトウワイスは閃いた

「ま、まさか！」

「どうしたの？」

「このノリなら俺達も合体できるかも知れねえ／出来ねえよ！」

「トウワイス…お前天才か!!よしじゃあやってみよう頼むぜコーカサス！」

するとキングコーカサスカブトは両眼を光らせると体を城モードに変形させるとその体はシュゴツドZERO達と合体　そして頭部にヘラクレスの角が装備されて完成

伝説を超え　今　神へと至る

重装甲の巨人　神の紛い物

『GOD!GOD!GOD!GOD!!ゴツドキングオージャー!ZERO!!』

ゴツドキングオージャーZERO　現れる

「まさかキングゴージャスと合体するなんてな！」

「これぞ正に伝説が生まれた瞬間だね、どれ俺も人肌脱ぐとしよう……王鎧武装！」

『スパイダークモノス!!』

「さあ行こうか黒狐」

「ああ……さあドクトル、白黒つけようぜ!!」

再び巨大樹がツタを伸ばしてゴッドキングオージャーを捕らえにかかると

「んなの知るかあ！」

強引に引き千切りながら間合いへ近づいていき

「ガーディアンズ攻撃開始!!」

クモノスの指示で稼働した武装シユゴツド達が持ち前の技を持ってゴツドキング
オージヤーを援護する、捕縛しようにも

「させるかよ」

ゴツドクモ、タランチュラの糸によって拘束され逃げ道などもう無い

「さあ幕引きだ」

「ああ決めるぜ!!」

同時に背後に装備された剣を展開、ゴツドアントが全シユゴツドZEROのエネルギーを収束し剣をGの形で振り回し溜め込んだエネルギーを爆破させる

「そらいけえ!!」

その斬撃を放った後 納刀と同時に巨大樹を一刀両断し爆砕する

「スゲエー撃だな」

「やつぱり凄いなZEROでもゴッドキングオージャーは…さて今日は俺の仕事は終わってるし後はゆっくりバグナラクで、もっふんと一緒でも見「ハルト」げ、ゲロウジーム!?何でここに!」

「私はどこにもいない陽炎…ではなくジェラミーがシユゴツタムへ出かけました!」

「はあ!?!仕事抜け出さないよう監視にサナギム達も置いてたろ!」

「アデューの一言で我々の監視の目を掻い潜りました…」

「すぐ帰るぞゲロウジーム…あの行間バカには発見次第、説教が必要だ」

「は…」

「悪いな黒狐、俺は帰る！シユゴツドZERO達確かに預けたぞ！待ってるよ…あのバカ王があ!!」

ゲロウジームと共にオーロラカーテンで帰還次第　クモノスハルトは

「サナギム達！大至急俺達に行間読みを強いてくる狭間の王を引っ捕えてこい！捕まえた奴には六カ国の専属通訳兼狭間の国バグナラク宰相であるハルト・トキハの名の下で三日間の特別休暇をくれてやる！さあバグナラクの有志達よ！王の居場所を奈落の果てまで行って探し出すのだ!!!」

「「「「「おおおおお!!」」」」」

とジェラミー捜査網を展開したと言う…世界が違えば探す側と探される側が入れ替わるのは難儀なものである

そして残されたゴッドキングオージャーZEROでは

「嵐のような展開だったが改めて宜しくなクワガタ」

「!!」

と新たな仲間を歓迎し、そして

「よし俺達も戻るぞ」

合体解除して戦艦モードに変形しシユゴツドZERO達を格納すると元の世界へと
帰還するのであった

—————

そして魔王はと言うとドライブ達全員集合に感動していたが

『何か私は複雑ね』

かつての契約者がボコボコにされてる姿に困った顔をしているアナザードライブがいたが

「ハルト！まだ力は残ってるな！」

「おうよつてウエストコットだっけ？アイツは？」

「ああ……ボロボロに痛ぶったら武神鎧武がクラック開いて回収してきた」

「クラック使ったなら……あ、もしもし師匠くあ、そうです！はい！あ、逃げられた！わかりましたく……拠点放棄して逃げたな」

「なら俺達はどうする？ぶつちやればパラドックスとかドライブ達で大丈夫だろ？」

「そうだな……だが！」

『フォーゼ……カメラオン』

アナザーフォーゼになりカメラモジュールを起動しハルトは撮影会を始めようとした

「俺はこの戦いを見ないと死んでしまう病なんだ！」

「はあ……ん？」

と嘘八百並べるハルトにナツキは態とらしく空へ指を差し

「ハルト！空にアंकと映司さんが!!」

「なにぃー!!」

「何だと!!」

ハルトどころかキャロルまで反応するハツタリに思わずドン引きするナツキであつ

たがカメラモジュールで映像を拡大すると確かに何かが落ちてる風景が……おい

「本当に映司さんとアंकが落ちてるう!!」

「あの複製個体を…だが何故、火野映司が…そんな事より行くぞハルト!」

「おう!!」

「行かせんぞ!これ以上敵を増やされてたまるか!」

とパラドックスが邪魔するようにスパイダーロイミュードを派遣するが

「ポイズンハンカチーフ!そりゃ!」

突如投げられた二枚の毒に浸ったハンカチがロイミュードの顔面に叩きつけられるとそのまま地面に倒れ伏したのである

「ブレン!?今の技って…」

『あの技は嫌いだ』

「あー…別の奴だけどアナザーパラドクスも喰らってたなアレ」

「ハートを復活させてくれた借りは返しますよ、ご存じですか?仮面ライダーブレンは体内に999の毒素を持っているのです」

「そんなにあんの!!」

ナツキは驚愕するがハルトはやれやれと被りを振る

「知ってるよ、本当お前の復活が一番簡単だったよ何せ個性の塊みたいな奴だからな」

「褒められている気がしませんね」

「褒めてるよっ！後ろ！」

「ご安心をライダー！……毒手……いひひひひ！」

待つてましたとばかりに毒貫手でロイミュードを爆散させた

「毒手!? 仮面ライダーなのに!!」

「何てライダーらしくない必殺技ばかりなんだ！」

と驚くベアトリスとナツキであったが

「まあそりやなあ」

「けどなんでブレンは簡単にデータが揃ったんだろ？」

「同じ個性の塊が復元したからじゃない？」

「それはいつたい誰のことかな銀狼？」

「つてアナザーWが言ってた」

「ほお…」

『ちよつと待て！銀狼ちゃん！何で俺売った!？』

「んー…ゲームが楽しくなるから？」

『悪趣味だなオイ!』

「誰の妻が悪趣味だとアナザーW？」

『どっち選んでも詰みじゃねえか!!』

「な、何だこの力は!!ブレンがこんなに強いなんてありえない!!」

パラドックスが混乱する中

「ブレンメガネブレード!!」

現れたのは何処かタケル殿が持つてそうな剣でロイミュードを切り捨てていく…ブレンなのにカツコ良いじゃねえか、と思っっていたら

『ヒツサーツ!フルスロットル!!ブレン!』

まさかのカツコ良さ全開のライダーキックだとお!と感動していたが、ブレンはパラドックス相手に

「ブレン…ヘッドクラッシュャー!!」

「ぶっふう!ず、頭突きだと!!」

「知りませんか？私の最大の武器はココ（頭脳）ですよ？」

「成る程、俺の武器（頭突き）と同じだな！」

『お前の武器とブレンの武器は違うぞ、主に頭の使い方が』

だが吹き飛ばされたパラドックスはそのまま

「たあ！！」

「ぬ！！」

ハートとドライブが共闘して当たっていた

「此処は俺達に任せていけ！」

「これで貴様への貸し借りはこれで0だ！行け！」

「はい！よしキャロル行くぞ、銀狼とベアトリスもついてきて！後で皆さんのサインをお願いしまーす!!」

「俺も行くぜ！」

「悪いなナツキ！これは4人乗りなんだ！アデュー!!」

「ちよつ待てやコラア!!」

とアナザートライドロンで再び爆走 ナツキはアナザードライバーで追走する邪魔するロイミュードを跳ね飛ばしながら目的地まで移動するのであった

その頃 完全に渦中から外れていた土道達はと言うと

「ええ…」

このあり得ない風景に混乱していた

「あの……ここに十香さんがいるんですの？」

怯えながら話しかけるのは美九、取り敢えず彼女を説得して十香救援までの手筈は整えたのだが

「これさ前にも同じような事があったな」

ハルト側の勢力だったな……待てよ

「マズイ……美九隠れ「あ、みーつけた」っ！」

そこにはアナザートライドロンとアナザーダイバーが待つてましたとばかりに止まり下車したのは言わずもがな怒れる魔王と救世主である

「あ……ああ……！」

過ぎるトラウマに彼女は震えているがそんなの知った事ではないと

「そうだそうだ思い出したよ、お前には耶俱矢と夕弦の洗脳を解いてもらわないとな」

「あと七罪やウオズ達のもの……つー訳でキャロル達は先に行け、俺達は落とし前つけてから行く」

「分かった」

「キャロルさん！」

「諦めろ、お前は触れてはダメな奴の逆鱗に触れたんだ……おいハルト」

「何だキャロル？」

「緊急事態だ!!この車のペダルだが……足が届かないぞ！」

「大人モードになれよ!!………つたくアナザートライドロン自動運転モード!!」

するとアナザートライドロンは再起動目的の地まで発進したのである

「さーて少年くん、死ぬ覚悟は出来た？」

「十香ちゃんはこの先だよ……取り敢えず彼女は置き去りにして貰おうか？」

→悪役みたいですけど2人は一応主役です

「そんな事……」

「俺達は洗脳を解けつて言ってるだけだけど？まあその喉にはコンクリ詰めて歌えなくしてやるがな」

「今回ばかりは賛成かな……そいつに歌わせた結果がこの惨事だからね」

「……………」ガタガタ

「お願いです美九の話も聞いてもう良い、いい加減イライラしてたんだ…前にも言ったけどやりたい事があるなら全力で来い仮面ライダーなら証明してみろや!!」っ！

ハルトはイライラしたままアナザーウォッチを起動すると再び現れたオムニフォー
スにウォッチを埋め込んだ

「変身」

『アナザーライダー！ソロモン!!』

「まあそうなるよねえ〜って音符眼魔は？」

「アイツは今、ライブ会場を無音化させてる……あ、よし折角だ暴れるお前らなら問題
ねえだろ」

とハルトがけしかけたのは

「おいおいこんなガキ一人が相手か？」

「油断しない方がよいよウヴァ、またメダル獲られるよ？」

「何だと!!」

「あらあらメダルを抜かれた連中が騒いでるわね」

「メズール! アイツ倒せばメズール喜ぶ!？」

「ええ」

「じゃあ頑張る〜!!」

ハルトが800年前の王と同じ方法で仲間にしたグリード達である

「コイツらは……!!」

「っ！破軍歌姫！」

美九は天使の力で彼らを操りけしかけようとしたが反応がない

「ん？何かしたか？」

「ガンガンうるさーい!!」

「な、何で効いてないのですの？」

「ああ好きに歌えば良いさ、人の歌はそいつらには響かない」

メダルの怪人 グリードにはそもそも五感がない、人間が感じてる音や音楽は彼らの耳にはノイズにしか聞こえないから 美九の音対策も万全な訳だ

「さてどうする少年？ 一対たくさんだぞ」

「……………っ！ 変身!!」

『烈火拔刀!!』

士道はドラゴニックナイトに変身しようとした時 プリミティブドラゴンが割って入って変身してしまう

『プリミティブドラゴン!!』

「あ……………がああああああ!!」

その暴走した姿を見てハルトは暴走したなあと他人事のように感じていたが

「暴走しているだ!!」

「これは気をつけないとね」

「暴走、咆哮、武器でメダルに……うつ、頭が！」

「メズール！だいじょうぶ!？」

コイツら暴走フォームにトラウマ抱えてやがった！まあ全員一度暴走してるから当然の感情なんだがな

「ガアアアアア！」

「うるさいー！」

とガメルの突撃を合図に全員がプリミティブドラゴンに挑んでいる、よしこれで大丈夫だな

さてと

「君を守る騎士はいないよ？歌姫さん」

「さあて俺達の大事な人の洗脳を解いて貰おうか？解いてくれたら助命は考えても良い」

「わ、分かりましたわ!!」

美九が歌うと同時に今まで洗脳されていた仲間が洗脳を解除された。めでたしめでたし

と行かないのが今作である

「こ、これで良いですわよね！」

「うん！ありがとね!!……ナツキ」

「ん」

『マツハ………トマーレ!』

アナザーマツハに変身したナツキがシグナルバイクを模したエネルギー波を放ち美九に命中させた

「きゃあああああ!ど、どうして」

「ハルト、お前さ考えてやるとしか言っていないよね?」

「ああ……よ……く考えた結果、やっぱぶちのめす事にしたわ」

「そうだろうね」

「ど、どうし」どうしてもねえよ!!」っ」

「お前は俺の大事なものに手エ出した、ずっと俺みたいなバカを慕ってくれる仲間を駒みたいにしやがって!!」

『アナザーローディング……ソロモンストラッシュユ!!』

「お前はここでぶっ潰す!!」

「その前にだハルト、仕事を果たそう」

とナツキはブランクフルボトルを向けて彼女の霊力を封印した

「これでよしと、んじややつちやつて」

「ああ終わりだ」

そのままアナザーソロモンの凶刃が彼女を切り裂こうとした その時!

「っ!!!」

暴走した筈のプリミティブドラゴンが彼女を守ったのである

「何!?!」

「!!!」

「…なんで…貴方にだって同じを事をした筈なのに…」

「ま……も……る」

「っ!」

「へえ暴走を抑え込んだか…けど」

「ぐ……あ……あああああ!!」

「ダメダメ無理に抑え込むからそうなる」

『アナザーローディング』

「少し頭冷やしな少年!!」

『ソロモンブレイク!』

アナザーソロモンが生成した光弾がプリミティブドラゴンを打ち抜こうとした時、土道の体内から霊力が溢れ出し、地、水、火、風の力を形成。それと同時に土道が書いていた竜の物語がライドブックとなり形を変ええる。

同時に変身解除した土道の手に宿る新たな力

『エレメンタルドラゴン』

「これは……」

「へえ目覚めたんだ、けど残念だな…もう遅い!!」

カラドボルグで力を解放しようとしたアナザーソロモンだったがナツキは何かに気づいたようだ

「待て！ハルト!!」

「ん？……っ!!お前から逃げろ！」

「が……」

そうグリード達の背中から伸びた手が彼らのコアメダルを奪っていたのだ

「そんな…嘘でしょ」

ハルト達が混乱するのも無理はなかった 現れたのは赤い異形の手を持つ者と青年の二人組である

「君、大丈夫？」

「あ…貴方は？」

メダルを抜かれたグリード達は反応した

「アंक！貴様も蘇ったか!!」

「ああお前たちまで復活しているとはな」

「話は後アंक、行くよ」

「終わったら今日のアイス寄越せ」

「分かったよ…んじゃ」

「ああ映司」

投げられたコアメダルは迷わずに投擲 渡されたメダルをドライバーに装填 ス
キャナーでリードした

「変身!!」

『タカ！トラ！バッター！タ・ト・バ！タ・ト・バタトバ!!』

現れたのはキャロルが変身する仮面ライダー しかしながらあふれる闘志は比較
にならない

ハルトとキャロルを繋いでくれた大恩人にして全ての始まりとも言えるライダー

「はあ！」

仮面ライダーオーズ 参戦！

これには思わずハルトは目を爛々と輝かせ

「うおおおおおお！ハッピーバースデー!!!」

両手を上げて喜びを示していた

余談だが逢魔の錬金部門は本物のオーズの変身に感涙咽び泣く者が続出したという

ハルトの布教活動が明後日の方向で身を結んだのであったが

「良かった間に合ったな……しかしオレが複製したタカメダルに意識を移す事でアングの消滅を防ぐ……我ながら完璧な錬金術だ！」

キャロルはちゃっかりサインを懐に仕舞いながらハルトを止める

「おい聞けハルト！メガヘクスの複製機の暴走がいよいよ臨界に近い！破壊せねばこの街そのものが消し飛ぶぞ！」

「え？そうか……よし分かった…取り敢えず彼女の処遇は後だな」

アナザーソロモンの変身を解除したハルトはアंकに向けて赤いコアメダルを何枚か投擲した

「お前コレ…」

「完全復活には遠いですが良かったですら」

グリード達が人間の五感を味わえるように憑依用のホムンクルスとか作らないとダメだな

そう考えたハルトはアナザートライドロンに乗り込むと子供モードになったキャロルを膝上に乗せ 複製機を破壊すべく行動を開始したのである

後編2

前回のあらすじ

黒狐はゴッドキングオージャーZEROでドクトル巨大樹を倒し

魔王達はドライブ達の援護もあり暴走するメガヘクスの複製機を破壊しにかかるが道中、一連の事件の遠因でもある精霊 美九と土道と再会

目的を忘れて排除しにかかるハルト達の前に現れたのは誰かに手を伸ばし続ける英雄 仮面ライダーオーズとその相棒 アンクであった

そして暴走臨界を迎える複製機を破壊する為 皆一路 移動するのであった

—————

アナザートライドロン内

ハルトの膝上に乗りながらキャロルはライドベンダーで爆走するオーズと後ろに乗るアンクを見ていた

「オーズか…」

「どしたのキャロル？」

「今思えばオレとお前の手を繋がせてくれたのは目の前にいる2人のお陰だと思ってな」

「そうだなあ…人生何があるか分からないなあ」

そうハルトは身バレで動揺し、キャロルは正体を確認した後 帰ろうとしていた

「正直に言えばあの段階の貴様に異性としての魅力などカケラも感じなかった」

「こつちもだよ、見た目生意気のロリなんて一昨日きやがれだったな」

「は？」「あ？」

「何で喧嘩してんです？」

「こほん…まあそんな時に来たのだな」

「未来の俺からお歳暮感覚で届いたんだよなあ…」

そこに届いたのが仮面ライダーオーズのDVDセットである

それを見たキャロルはオーズの錬金術に興味を示しメダルの研究、資料を見るためにハルト宅へ足繁く通う事になった

今の関係を作ってくれた、そういう意味ではオーズは大恩人でもある

「どうした急に」

「いや何、思い出してなお前の家でオーズを見てなければここまでの関係にはなれな

かっただろう」

「かもなあ…お義父さんの墓前でも言ったけど初対面の時は生意気なガキだなあとしか思わなかった子の為にわざわざあの世界に行つて、一緒にいて欲しいから帰つてきてなーんて言わなかったかも知れないなあ…まさか本当にコアメダル作つてオーズになるとか思つてなかったけど」

「そうだなオレも貴様など歯牙にかけなかっただろうな精々が見せ物小屋の珍獣レベルだったからな…それで惚れてみたらあつちこつちで現地妻を増やすわ国を作つて王になるわ散々だ」

「玉の輿だつたら？」

『いや世の中の人、皆が王にはなれないぞ相棒』

　　そういやああの頃はキャロル利用してアंक復活の為にメダル作らせようなーんて考えてたなあ色恋じゃなくて打算からだったのに…今じゃ考えられないなあ…つか何ならその夢叶つたし

「だが貴様が手を伸ばしたから今のオレがある」

「キャロルが手を伸ばしてくれた今の俺がある」

「そうだろうそうだろう…だから二亜の気持ちにも素直に答えてやれ」

「は？」

「今更何人増やそうが構わん、正妻はオレだからな…だが惚れた女を前に責任を取らない腑抜けなど夫とは認めん!!」

「はあ!？」

「だがな…その分…オレとの時間は必ず作れ良いな」

「キャロル……」

「ハルト…」

そのまま2人の距離は0に「ちよつと運転中ですよ！」とはならなかったベアトリスが止めたのでハルトは運転に戻ったのである

「何、人前でイチャコラしてるんですか！車内じゃなかったらワンダーコンボからの雷の呼吸メドレーを叩き込んでやりますよ!!」

「ベアトリス貴様あ…ハルトと良い雰囲気だった所を!!」

「いや何、運転中に惚気てるんですか！危ないですよ!!」

「これはベアトリスに同意」

「おのれえ…」

「あ、そろそろ着く」

目的地付近でアナザートライドロンを止めると同時に空からゴッドコーカサスが現れるとゴッドテントウZEROの背に乗り仁王立ちした黒狐が降りてきた

「待たせたな！ドクトルは倒したぜ！後は複製機を壊すだけだ！」

「待て黒狐！一応確認だが複製機を壊したら作ったものの機能停止とかあり得たりするのか！俺仮面ライダー詳しいから知ってたんだ！大体この手のは壊すと複製した連中が消える可能性が高いだろ！」

その疑問に答えたのは頼れる相棒達であった

『それは無いなメガヘクスと違って中央コンピュータのようなもので操っていないロイミュードやグリードはお前が自我やデータを埋め込んだる？なら本人に相違ない』

『まあアレだ本人に限りなく近いロボットだったのがお前の力で本物の怪人に戻った訳だ』

「じゃあ戒斗さんは？」

『さあな分からん、お前がロードバロンとしての記憶を与えれば大丈夫だろうが現状のままだと読めん』

『仮にこの世界だと生きる場所があるのやら…』

「少なくともDEMを潰すまでは手を貸してくれそうだよね」

「けどこのバリアさ、どう破る？」

ナツキの指差す先には複製機を守るようなバリアが展開されていたのである…ふむ
怪しいな…よし!!

「ウヴァ〜取り敢えず攻撃してみて〜」

取り敢えず丁度良く頑丈な奴がいたので頼もうかガメル？ いや流石に中身幼い子に危険な真似させられないでしょ（外道）

「ふん！ 良いだろう見ている！！ このバリアを壊したら俺のコアは返してもらおう！！」

「うわあ見事なまでの失敗フラグ立てたなあ」

「ふん！！」

意気揚々とバリアを殴るウヴァであったが

「アバババババババババババ！」

殴ったダメージが雷となりウヴァを痺れさせたのであった

「う、うわあ……つか雷属性のウヴァが感電する威力つてベアトリスの聖剣並じゃん」

「気をつける皆んな危険なバリアだ！ウヴァの尊い犠牲を無駄にするな!!」

「さりげなくウヴァを犠牲にしたね彼」

「はっ、当然だな」

カザリとアंकは冷めた目で痺れてるウヴァを見ていた

「さて、どう突破するか……ナツキのアナザータイクーンのニンジャですり抜けれるかな」

「いやいやいや!!流石にウヴァが感電した姿を見て行こうとはならないよ!」

「良いかナツキ、俺は映司さん達が安全にバリアの向こうへ渡れる為なら…別にお前が死んでも構わないと思ってる」

「はっ倒すぞテメエ!!」

「はははは！」

「笑って誤魔化すな!!」

と笑いながら話すハルトの背中で銀狼がネットニュースを見て気づいた

「あ、ねえハルトこれ」

「ん？何……んなあ！」

それはDEMの違法研究や兵器密造など今回の件以外にも二亜のような人体実験など出るわ出るわ表沙汰にできない事案と証拠データの山、それがネットに拡散され世界的ニュースになっている

「これ銀狼がハッキングした奴以外の情報もあるけど……玄さんが意図的に流したとは思えないし」

「あ、そういやあケケケラの奴がテスター軍団潜入工作班がヤベー研究データを片っ端から外部へ流出させてるって言ってたな」

「間違いねえ、それが原因だな」

「むー…だけどメガヘクスの複製機のデータまではないよなあ…」

「あるよ？」

「はい？」

「私がドクトルの研究データをハッキングしたから材料があれば逢魔で複製機を作れるよ」

「ぎ、銀狼!!最高!!愛してる!!」

「は、ハルト…恥ずかしいな皆が見てる」

と頬を赤らめ満更でもない顔をしている銀狼を強く抱きしめるとキャロルは舌打ち、ベアトリスは

「おいベアトリス」

「何でしょうか？」

「何故か知らんがイライラしてきた」

「私もです…そろそろ白スーツに霹靂一閃を叩き込みましょうか!!」

と恐ろしい事を言っているの、私も動くとしようか何せ今回の件は予想外だからね

「それは勘弁願いたいな戦乙女さん」

「し、白スーツ!!」

「やあ久しぶり魔王、分割された君とは話したけど相変わらずだね黒狐は雇用して以来かな？」

「久しぶりだな」

「うん久しぶり「おい」わかりました後で何でもするんで聖剣とダウルダブラを下ろしてくれない？」

「ヴィジョンドライバー持ちのお前が簡単に何でもするとか言うなよ創世の力にアクセス出来るから冗談に聞こえねー」

「文字通り世界は君の思い通りってな」

「冗談はよしてくれ…僕にも変えられない事くらいあるさ」

「でしたら私がメインヒロイン…いや正妻のルートでも「おい調子に乗るな新参の小娘が」あ、いやあく冗談ですともー！まあヒロインの座は狙ってますがね」

「それは構わん、だが正妻はオレだ！」

「気に入らない、逢魔国民の声を聞けば正妻が私なのは一目瞭然このグラフを見るべき銀狼の支持率100%」

「そんなのでつち上げだろう!!」

「そうですよ！よく見れば投票したの銀狼だけじゃないですか！こんな不正です!!」

『おい貴様等』

『束さん達抜きでそんな大事な事を争うなんて良い度胸だねえ!』

『あら今こそ雌雄を決する時なのかしら?』

『そうでしたら私もメイドではなく妻として参りましょう!』

『じゃあ私も「来なくて良い!全部終わったら話せ」…そうね』

「お前たちも異論はないな」

「まあ構わん」

「ん」「はい」

「それで白スーツ：傍観者が今更何しにきた」

「想定外の事案発生と対処だよ何せドクトルがこれを復元するのは僕の知る歴史にはないんだ」

「何?」

「それと精霊・美九：彼女が生きてる事かな：止めたのは：ああ流石は仮面ライダーオーズというべきだね」

「貴方は一体?」

「何者だ」

「初めましてアंक、偉大な存在よ…私は火野カグ槌しがない傍観者にして様々な世界を切り抜き数多の物語を紡ぐ語り部 またある時はオーデイエンスに細やかな娯楽と非日常を提供する舞台装置！はたしてその実態は!!」

仰々しく振る舞う白スーツは堂々とした所作で色紙とサインペンを差し出した

「へ？」

「貴方達仮面ライダーのファンであります是非この色紙にサインを」

「おいテメエ、俺だって貰ってねえ映司さんのサインを貰おうなんて不届千万！このまま地獄に叩き落としてやろうか！」

「落ち着いてくださいハルトさん！あの男の首を刎ねるのは私の仕事です」

「なら一緒にやれば良い」

「それもそうか！」

「はあ……このバカ共は……それで早く本題を言え」

「その前に各地にいますライダー達の活躍をご覧あれ！見たい人は？」

「賛成だあ!!」

「落ち着けバカハルト!!」

「……………」
その頃 Wとアクセルはメガヘクスが複製したウエザードーパントと戦闘をしてい
た

「井坂の亡霊か……行くぞ左」

「ああ、あの時のWと同じだと思うなよ俺達はあの頃よりもずっと強い絆で結ばれてんだー!」

『その通りだ翔太郎、さあ行くよ!』

「!!!……エクストリーム!!!」

「トライアル」

「『たあ!』」

現れるは地球のデータベースに繋がる最高のW

正に一心同体 仮面ライダーWサイクロンジョーカーエクストリーム

そして現れるは最速を駆け抜ける青のアクセル

仮面ライダーアクセル・トライアル

「さあ!振り切るぜ!」

同時にアクセルはトライアルメモリを空に投げてタイムカウントを始める そのま

ま最高速で加速しウエザードーパントへ高速の蹴りを連続で浴びせ始めるとTの文字を模っついていきトライアルメモリをキャッチと同時にスイッチを止める

『トライアル！マキシマムドライブ!!』

「9・7、それがお前の絶望までのタイムだ！左！フィリップ!!」

「ああ行くぜフィリップ、『さあ！お前の罪を数えろ』!!」

『PRISM』

Wはプリズムビッカーにプリズムメモリを装填し引き続き

『サイクロン！ヒート！ルナ！ジョーカー！マキシマムドライブ!!』

怒涛の4連マキシマムを発動、その力は刀身部分に集約される更にダメ押しとばかりに

『エクストリーム！マキシマムドライブ!!』

「『ビッカー！チャージブレイク!!』」

「ガアアアアア！」

そのまますれ違い様にウエザードーパントを両断すると同時に大爆発が起こるのであった

そしてビルド組は

「勝利の法則は決まった!!」

「今の俺達は負ける気がしねえ!!」

「心火を燃やしてぶっ潰す！」

「大義の為の犠牲となれ!!」

「全ては難波重工の為にい!!」

『ready go!ボルテック/エボルティックフィニッシュ!』
『クラックアップフィニッシュ!/スクラップブレイク!!』

5人のライダーキックで複製スマッシュを残骸に変え

「俺達も行くゾオ!」

「うん!」「ああ!!」

と三羽鳥もエネルギーを放出した三方向からの体当たりで複製ブラッドスタークを
倒し

「スタークは個人的に僕が倒したかったな」

「なら私達はこつちをやろう」

「そうだね父さん!」

『ready go!ボルテックフィニッシュ!!』

『火遁の術!火炎切り!!』

巧、忍ビルドは各々武器や専用技でナイトローグを倒したのである

そしてドライブ達は

「泊進ノ介！」

「ああ行くぜベルトさん！これが俺達のオーバードライブだ!!」

「行くぜチエイス！」

「ああ！」

「私も混ぜてもらおうよ」

「では私『ヒツサーツ！フルスロットル！』待ちなさいな!!」

そして放たれた全員のライダーキック（一名頭突き）によりパラドックスロイミュードは爆散した

「ぐ…ああ…こゝ、こんな雑なやられ方なドオ!!!」

因みにコアが破壊される直前 何者がそれを回収したのはまだ誰も知らない物語

「とまあこんな感じだね」

「おお……」

感動する2人であったがアंकは雑に一瞥して

「お前の目的は何だ？」

「簡単に言ってしまうえばバリアを壊そうと思ってるね。それと予期せぬ変数への対策かな」

「変数？」

「僕の想定なら彼はドラゴニックナイトで進化は打ち止めで先は無かったのにプリミ

タイプ超えてエレメンタルドラゴンまで手に入れたんだ」

「へえー」

「そして魔本を開いて君はアナザーストリウスとなり仮面ライダー達の敵になるはずだったんだ…つまり今のドクトルの立ち位置には本来君がいるはずだったんだよ」

「成る程なそれが少年が侑斗さん達の前で話した最低最悪な未来か」

『確かにウオズ達が洗脳され、一夏が現れなければ絶望のままアナザーストリウスになるのは確定だったからな』

「だが未来は変わった、そこにいる死に戻りの彼と君の義弟のお陰でね」

「ナツキと一夏…そうだな」

「しかし逆行手段として死に戻りを選ぶとか正気じゃないね、他にも握手とかハイタツ

チとか色んなトリガーを用意してたのに死で戻るとか君も君でイカれてるねえ、救世主」

「やけに詳しいなお前」

「そう！何故なら彼の死に戻りの権能はとある仮面ライダーの力を応用した力！それを埋め込んだのはそう！

「の僕さ!!」

「え…」

「展開が読めそうな事をグダグダ話してんじゃねえよ白スーツ」

「釣れないね。そう言えば前にもあつたね君は千冬さんの複雑な出生も君にとっては『万丈、お前人間じゃないってよ?』レベルの事だったんでしょ?」

「あのさ俺みたいなの畜生腹が人様の生まれや血筋に文句を言えた口か?つか人間辞めてるし…そんな俺みたいなの化け物を愛してる奴の生まれや血筋なんて関係ねえ惚れてる女なら尚更な」

「本当、こんな自然に口説き文句出るんですからねこの女誑しは」

「否定はせん、現に千冬は赤面したまま固まっているからな」

「ハルトの不意打ちは狡い」

『ちよ!ちーちゃん!!しっっかり!!』

映像越しで爆破しそうな程赤面している千冬の額に束が氷囊を置いたりしていた

「ま、それもそうか君は身内と認めた人間には優しいが他人や敵には排他的だ…これから会う魔王とも仲良く出来るだろう」

「は？魔王？」

『魔王…嘘だろ…異世界にはこんなやばい奴がまだいるのか！』

「アナザーディケイド、それどう言う意味かなあ〜」

『俺達という制御装置を持たない本能とノリと勢いで生きてるような危険人物が野放しになっただけで！』

「おいアナザーディケイド、隣見てみる制御装置無しで神の力を宿してる黒狐がおるで」

『こんなの落ち着いていられるか！俺は自分の部屋に帰るぞ!!……とアナザーWが言っていた』

「本来ならハルトがアナザーライダー達の制御装置で君達を抑える想定だったのが何故こうなった……見事に逆転している……」

白スーツは頭を抱えハルトは笑顔でアナザーウォッチを握りしめていた

「ほお丁寧に死亡フラグまで立てるとは……覚悟は出来てるようだな」

『何でお前らは俺を避雷針にするんだヨ!!』

「だけどこう言うよね？連帯責任とも」

『そんな殺生な!!』

「つせえ!!」

『珍しくハルトが優しいだ!!』

「……………やっぱりアナザーWだけにするか」

『異議なし』

『え、ちよつ!!』

「おつとまだ知る時ではないね、その世界で君は新たなサーヴァントと妻達と出会う事も知るべきではないね」

「ほお…」『ちよつとマスター良いかしら?』

「それは今こそ知るべき時だね! 教えてくれないかなあ!! つか達!! 複数形!」

「next カグ槌ヒント!! 1人は森の中、1人は性格がこれでもかと捻じ曲がった悪趣味な迷宮の主と一緒にいるよ! 後は自力で探すといい、その彼もね」

「は? いや『またですか?』え? ちよつ!」

「ま、まあ良い「それを決めるのはこっちだぞ？」こほん…回帰の力なんてもの持ってる
仮面ライダーとかオーデインかクロノスあたりだろ？伊達に時の神なんて触れ込み
じゃねえしな」

「あれ？君はギーツ…創世の神の物語は見てないのかい？」

「それは見て……つてまさか!!」

「そう仮面ライダーリガドΩ、時間を巻き戻すリバースの力を使ったんだよだいぶ無茶
してけどね」

「な、なら俺は…リガドΩに変身できるのか!」

「それは出来ない、だが僕が渡したのは生死逆行のリバースだけ転生させて別世界に飛
ばすまではしてないんだよ」

「は…けど俺は…」

「だから気になるんだよ誰が君を生き返らせたのか……色々出来るけど僕には死者蘇生なんてのは出来ないからねえ〜ちよつとごめんよ」

ナツキの額に手を添えた時、白スーツの脳内に流れるのは

【覗かないで】

顔の見えない誰かの圧と、触れたものの気を触れさせるような呪いの波動

「おつと危ない危ない……へえ成る程そうかそうかそりゃ逆行のトリガーが死ぬ事になるか」

「何だよ」

「君さ魔王に滅ぼされたあの世界で何をしたの？呪術とかオカルトでしかないんだけどなあ〜」

「呪い？」

「いやあ……愛ほど歪んだ呪いはないか言い得て妙か簡単に言えば君さ神に呪われてるよ」

「どう言う『ナツキさん？』ちよつと待てエルフナイン、俺も一体何が何やら……」

「僕から助言するとしたら君を転生させた人に会いたいなら……つと話はここまでかな……僕は僕の役割を果たすとしよう」

「あ、おい勝手に終わらせるなよ」

「生憎だけど僕も忙しいんだよ。本体はこの世界に来れないからアバターでくるんだけど……その場合は現界制限があるんだ特に変身するとかなるんならね」

『ヴィジョンドライバー……GAZER LOG IN!』

認証と同時にカードを投げるとヴィジョンドライバーにカードが自動で読み込まれる

「変身」

『Install……innovation & control GAZER』

仮面ライダーゲイザーに変身した姿を見て

「前にアダムを倒した時は分からなかったが、それは仮面ライダーゲイザー、つまりデザグラ運営側のライダーか」

「正解、ただこの世界で行う気はないよ仮面ライダーと敵対なんてしたくないし何より……何せあの老いぼれ（スエル）が敗れた世界のデザグラプロデューサーとか誰がするかよ、この世界でギロリ先輩も消えちゃうし……はあ……」

「え？あの人と知り合いなの？」

「ん？ああ真面目で優秀なゲームマスターだったよプロデューサー白帯の俺にデザグラ運営の何たるかを教えてくれた先生でもある」

「ギーツ脱落到に囚われて暴走してたが？」

「まあデザグラ的には同じ人が勝ち続けるとマンネリ化するから番組的に考えると面白くないんだよ、ギーツ一強なんてね聞けばオーデイエンスからは張り合いがないとかギーツは運営嗅ぎ回ってる何とかしろとか、出さないを選びたいけどあの人願いで死ぬまで参加するとかなくなってし！文句言われたギロリ先輩が不便でならないよ俺がプロデューサーならある程度の無茶は出来たけどあの公平なニラムさん管轄だとなあ…」

「へえ…」

「つか何でギロリ先輩の後任にチラミを勧めたの!?!おかしくない！いや確かにエンタメ系なら彼の出演だよ！低迷した番組視聴率の回復請負人だけだよ!!世界救う目的のデ

ザグラ的にはアウトだよ！しかもヴィジョンドライバー取られる！変身用に指紋も取られる！拳句にはジャマト側にID横流しとか正気かこのやろう!!」

「おーい」

「どんだけギロリさんがドライバー悪用されない為に慎重に振る舞ってたか見てなかったのかよ!!本当にイラつくな！」

「仕事の愚痴は後にしろ」

「つといけないいけない…まあ今の僕はジーンやキューンと一緒にこの世界でデザグラ開催の反対派として活動しているんだ、俺の先生が事情あり気とは言え命懸けで守ろうとした世界で好き勝手させる訳にはいかないよ」

「白スーツ……」

コイツもコイツでデザグラに命かけてんだな…と感心しているハルトに

「だから結婚式には呼んでくれよ！君の奥さん増えるは確定だから!!」

「俺の感動を返せ、あと不穏な情報を残すな」

「さて冗談はこの辺にして「いや本編に関わる重大情報を結構話してたよね!!」そんな事
ないさー！いけ!!」

放たれたドミニオンレイがバリアを展開して複製機を守るバリアを相殺して道を開
いたのである

「さあ通るんだ！」

「よし行くぞ!!」

「ウヴァが感電してるままだけど?」

「問題ない！俺に考えがある！」

それだけ言うとハルト、ナツキ、オーズ、アークの4人はバリアを超えるとハルトは
アナザーウィザードに変身して

『コネクト』

「ほいっと」

そのまま感電したウヴァやグリード達を引き摺り出したのであった

「何で僕達を呼んだのさ？」

「まあ必要そうだから？」

「おいおい…」

「そんな事より複製機を破壊しないと!!」

「おう!!」

と走り出したハルト達は目的地の複製機の前に到着した

「直ぐにでも爆発しそうな感じだ」

「よしウヴァア!たいあたり!」

「できる訳ないだろ!アレをみろ!触ったら爆発するぞ!!」

「え!虫って強い光に集まるよね!なら適任だ行け!!」

「俺は虫ではないぞ!」

「嘘お!虫系グリードなのにい!!」

「何お前達何ふざけてやがる、映司さつさと破壊してアイスを「わかってるって」なら良

「い」

「そうだなこんなの破壊して俺は皆様のサインを貰……避ける皆！」

回避したと同時に全員のいた場所に斬撃が叩き込まれたのであった

「今のって「十香!?!」だよな〜」

士道の目線の先には以前、六喰の時にあった反転十香がいるではないか

「最悪の門番だなオイ！」

「少年、後は君の仕事だ姫様を助けてあげな」

「ハルトさん……」

「一先ず説教は後だ、あの子の相手はお前に任せた複製機は俺達が破壊する」

「分かりました…行くぞ十香!!」

「あの時の小僧か…まあ良いあの時より強いのであればな」

「ああ見てろ!」

そして土道は想定を超えた力を解放する

『エレメンタルドラゴン!そして太古の竜と手を結び、全てを救う神獣となる!!』

『エレメンタルドラゴン!GET!!』

軽快な待機音と共に土道はドライバーに装填そして

「変身!!」

『烈火抜刀!!バキボキボーン!メラメラバーン!シイクハーンズ!!エレメンタルドラゴン!!エレメントマシマシ!絆カタメ!!』

現れたのは物語を完成させ幸せを得た太古の竜と新たな友との力
仮面ライダーセイバーエレメンタルプリミティブドラゴン

「覚悟を超えた先に希望はある!!」

「ならば希望とやらを見せて見よ!!!」

2人は飛翔して刃を交えていると

「何か土道の変身音聞いたらラーメン食べたくなってきたな…」

複製機が突然 異変を起こし最期の悪あがきとばかりに複製を開始した

「何する気……っ!おい!!」

それはハルトが胸にしまうメモリーメモリとフィーニスが持っている三枚の黒いコアメダルに反応したのだ

『ふはははは！再起の時だ……変身!!』

記憶のメモリと意識宿るメダルが交わりし時 歪な記憶を持つ炎の巨人が現れる

「我は異形に変えられた悲しみを胸に戦うもの……我は仮面ライダーコア!!」

「コイツあの時の!」

「くそっ!!」

映司はかつての宿敵に驚いていると

「まったく……今日は同窓会か懐かしい連中に会うじゃないか」

「あ!!」

「久しぶりだなオーズ、手え貸すぜ」

「ありがとう探偵さん!!」

「気にすんなライダー同士は助け合い…だろ？」

「ヤベー…この2人がいるなら負ける気がしないな」

「つかアイツさ…フィーニスのコアメダル使って何してんだよ」

「ほお貴様等は…まあ良いあの時の借りを返させてもらうぞ！」

だが

「ふっ！」「はあ！」

先手必勝とばかりにカザリとアंकが攻撃を開始したのである

「ぬう！不意打ちとは姑息な!!」

「関係あるかよ」

「そうだね君のコアメダル頂くよ」

「うわあメダルの奪い合いとかマジでグリードしてるう！」

「アंक！」

「お前たち！アイツは強いんだ皆で力を合わせてだ「関係あるかお前は黙ってる！」よしウヴァが暴走する量のコアメダルを投げちやうぞお！」

『何でウヴァには当たり強いんだ、お前？』

何かアナザーWと同じ雰囲気があるから

『ああ可哀想に…』

『アナザーWが慈愛に満ちた眼で見ているだと！』

「やめろお！俺は暴走するつもりはない!!」

『ああそういう事か可哀想だな…』

「分かった？なら黙って俺の言うことを聞け」

「マカセロ!!」

「見ろカザリ…あいつ、ウヴァを手懐けてやがる」

「王と同じ方法だけどね」

「だがアイツは王とは違う俺や映司にサインを頼むような……ただのバカだ」

「それは同感かな」

「何か言ったかなカザリ？」

「何も無いよ」

「そうか……しかし仮面ライダーコアとは厄介なものを……」

「と、取り敢えず映司さんとWの力があればいけるけど……アंकさん！メダル！！」

ナツキの説得にアंकも溜息を吐く、これしかないかと

「しょうがねえ……おい映司！！コレを使え！！」

とアंकが手を伸ばしたと同時に放たれたのは自らのコアメダル三枚

「アंक、行くよ！！」

三枚のメダルを投入しリード、それは通常のオーズと違う力を目覚めさせたのだ
人の重なる声に應える 2

『タカ！クジャク！コンドル！！タージャートルー！エタニテイ！！』

その姿は新たなタジャドルコンボ 否 2人の完全同調故に生み出された不死鳥！

仮面ライダーオーズ・エタニテイタジャドルコンボ

「うおおおおお！」

Wはその体から発せられた風にのり力を解放する

「たあ！！」

仮面ライダーWサイクロンジョーカーゴールドエクストリーム

伝説の同時に変身にハルト達は感動の涙を流しクラッカーを取り出して鳴らした

「ハッピーバースデー!!うおおお!!」

「……………」

魔王は感情的に黒狐は静かに泣きながら喜んでいたが複製機は過去の魔王の記録から新たな敵を生成したのだ

それは2人にとって不倶戴天の敵 相互不理解を具現化した存在

「あら愚兄どもじゃなー」

「死ね」

理外の複製ハルカを見た瞬間、2人のハルトはダッシュし勢いを乗せたドロップキック

クを顔面に叩き込んだのである

華麗に宙を舞い放物線を描いた彼女は顔面落下をしたのを理解したナツキは溜息を吐くが止める気もない

「ふ…ふざけるなあ！そこは私との会話を聞いてからの攻撃じゃないかしら!？」

「知らん、それに折角の同時変身を邪魔するとかくたばれ」

「ああ、複製機はどーやら上質なスクラップになりたいみたいだな」

「ああ俺達を最高に不快にする奴を作ったんだからな…つーか何でデータあるの？トーマなら分からなくもないけどさ」

「さあ?」

「やっぱり野蠻極まりないわね!!愚兄ども!!」

だが今回のハルカは一味違ったのだ、今までのルシファーではない新しいドライバーであるが

「見なさい！コレが私の新しいち「浅倉さんアターック!!」があ!!」

「!!」

変身前に魔王が背後から偶々落ちてた鉄パイプでハルカの後頭部に振り下ろしたのであった

「あがつー……」

「ふー……よし!!」

そしてドライバーを奪い取るなど…やっている事が完全に悪役のそれである

そのまま倒れるハルカの後頭部を踏みつけながら魔王はベルトを見ている

「へえ、初めてみるベルトだな…俺のライダー知識にないとすればシノビみたいにミライダーのベルトかガッツチャード系かな？」

『待つてろ調べてみるぜ』

「いやいや変身まで待つてやれよ」

流石の黒狐もドン引きの攻撃だったようで

「他の奴ならそうするけど、こいつは別さね…後さ…楽に死ぬると思うなよガラクタ」

少し力を込めて踏みつける

その目に宿るは今でも消えない復讐心

契約する復讐の聖女を満足させるだけの怨嗟が魔王の中にある心へ燃料を焚べて燃え上らせる

「ぎげんじやないわよ……この劣等……があ「うるさい」あがつー！」

「お前もこうしたよなあ……冤罪吹っかけて俺に土下座しろって無理矢理させて頭を足で踏みつけて、それを動画にしてSNSにあげてたなあ……」

かつての怒り、ねちっこい？小さい事？そんなの言わせておけば良いこちとらやり返さないと気が済まないんだよ

「ガメル」

「なくに〜？」

「重くする力で俺の足元にいる奴、潰してくれない？終わったらお菓子あげる」

「ほんとう！わかったー！！やるー！」

ハルトが足を退けるとガメルは重力操作でハルカを潰しにかかる、地面にめり込み始める彼女は怨嗟の目で魔王を睨むが

「どれもこれも全部お前達が始めた事だよ、撃つて良いのは撃たれる覚悟のある奴だけって……だからお前は……ここで死ね」

最早、屠殺所の豚を見るような目で見下す魔王に哀れな道化は場違いな怒りを燃やす

「ふざけるなあー!!」

逆恨みに激しい感情をぶつけると同時に彼女の体から溢れ出たのは黒い泥……スパイトネガカコレ……となると

「アーク？」

ガメルの重力の縛鎖を千切り現れたのは悪意の具現化

その姿はまるで返り血を浴びたような仮面ライダーアークワン

「アークゼロワンか」

「あははははは！そうよ私にはコレがあるの！貴方達のような紛い物と違ってね！！甦ったお人形と遊んでるような連中じゃ私に勝てる訳ないのよ！」

「アークの傀儡がよく吠えるな、ルシファーといいアバドンと良い悪意の塊だなホントにシンクネット（台所のゴミ）がお似合いだな」

「バカにしてんじやないわよお!!」

とアークゼロワンが複製したのは大量のアタッシユショットガン その弾雨は2人を襲うが

突如 現れた本がバリアを展開して攻撃を防いだのである

「これは……」

それは最悪の未来の象徴とされたもの

『グリモワール』

その黒い本が手に落ちた時に魔王は困惑する

「何で？オムニフォースで止まったんじや……」

あの感情に任せて生まれかけたが思い留まった結果が不完全なオムニフォースだった筈だと

『託せって言ったのはお前だろ？だから俺の闇、全部をお前に託す』

「あ……」

遠くから聞こえたのは己のアンダーワールドにいた闇の声

そう、これが答えだったのだ絶望や悲しみに囚われたままグリモワールを開く事が最悪の未来になる事だと

己の闇と向き合った事で本は力を貸してくれる

だが怖いと思ったのは原本の性能か、ここまでの負の感情を溜め込んで完成まで持ち込んだ己の闇…或いは両方か

「どうするよ使うか?」

が
黒狐が答えたのは罷りにも神殺し、その神性を感じ取れる感性から来たのかは不明だ

「躊躇う理由がある? 最悪でも何でも俺の居場所を守る力なら手を伸ばす……誰にも手を出させない」

特別を守る為ならば障害は全て排除する

例え三千世界に天まで届く屍山を築いてでもだ

『グリモワール』

魔王は躊躇わず魔道書を開く

『WHEN THE HOLY SWORD AND THE BOOK INTER
SECT REWRITE THE WORLD』聖剣と本が交わりし時、世界が書き
変えられるー』

英語で流れるライドスペル、流れる情報の嵐を掻い潜り力を掌握すると一瞬だが魔王の瞳にライダー文字が現れては消えると変化が起こったのだ

魔王の衣装が原典の変身者を思わせる姿へと変わる

「馬子にも衣装ね愚兄…いつもの文字Tがお似合いよ」

他の仲間なら笑って流せる言葉でも、コイツだけは例外だ許せない…

「ハルカ、お前に相応しい結末をくれてやる」

同時にグリモワールにもオムニフォースと同じくアナザーウォッチを装填するスロットが現れる。まるでウォッチと同調するように

ーアナザーライダーが仮面ライダーから奪い、消した歴史の空白を埋めるようにー

『さあ貴方の物語を見せてくださいよ私の王』

「ああ見せてやるとも…ハルカ、お前の終幕は無様で醜悪でないとならない」

笑う終末の導き手が俺を挑発するが知った事ではない

『ストリウス……SET』

「変……身」

アナザーウオッチ装填と同時に滅びの魔道書は開かれ 覚醒する

『OPEN the Grimoire the end of the story
!』

ANOTHER RIDER!STORIUS!』

溢れ出る黒いオーラと舞い散る黒羽はタジャドルエタニテイが神聖な不死鳥と形容するならコレは堕ちた天使

最低最悪の未来において世界を滅ぼした力

しかし己の闇を受け入れ、完全に制御する

穴の空いた表紙から見える無機質な目は外界の現実と全知の書による残酷な真実と最悪の終末に絶望した吟遊詩人を思わせた

終わりの黙示録遂行者

アナザーストリウス 制御完了

「俺の物語に、お前は不要だ」

呼び出したのは黄金大剣 カラドボルグと王の剣 ザンバットソード（ザンバットバット無）を持つと感情と溢れ出る生命力を糧に強化し続ける

「ガメル、ありがとうお菓子だ」

『ヘンゼルナッツとグレーテル』

「あーりーがーとーう！わーい!!」

完全に近い全知全能の書の触れ込みは伊達ではない。カラドボルグを頭上にかざしただけでライドブックの力をアツサリと引き出せる、現れた大量のお菓子をみてガメルは喜びながら食べ始めた、味覚はない筈なのに美味そうに食べるのは羨ましいまでである。

「ふざけんじゃないわよ!!」

大量に複製したマギア達を差し向けるが

「アークワンを量産出来るのに…マギアのみとは愚かな」

アナザーストリウスは本のページを捲るだけで対処する

『OPEN THE STORY of THE END!』

こちらが呼び出すのは聖剣を使う剣技を使う創始者にして士道の剣の師匠達

「え!!先生!？」

「余所見をするな!!」

その登場に士道は困惑するのも無理はない現れた　ローブをかぶる4名の老人の実力を知る故にだろう

だがその姿は各々の武器を構えた黒い戦士達ロードオブワイズへ姿を変える

「怪人生成で復元させた個体よりも精密かつ精強にできた…流石はグリモワールと言ったところか」

四賢人の復活、コレを見たベアトリスは

「えええ！何で生きてるんですか！あの化石ジジイ！」

「おい仮にも上司だろ！」

「ならファルシオンのハルトに聞いてみますよ！もしもし!!」

『どったんですかアトリス先輩?…あ、すみませーん！牛丼特盛汁だけで！コイツにも同じのを！』

「何のんびり食べてるんですか!!…じゃない…もし四賢人が生きてるって言ったらどうします?」

『はあ!?!そんなのタチの悪い悪夢じゃん!…墓に戻れよジジィ!…おいデザスト!!何、人の頼んだ牛丼食べようとしてんだ!コレは俺のだ!!あー!…食べやがったな!許さねえ!!牛丼の仇い!』【エターナルフェニックス】

「との事です」

「その前にそっちのハルトは大丈夫か!?!」

流石の魔王でも食べもの取られたからと言って変身したりはしないぞとキャロルが頭を抱えていることなど知らんとばかりに事態は動く

「雑魚はお前達に任せた」

同時に四賢人が走り出すのだが激突と同時にマガリアが華麗に吹き飛んだ、本当に流石仮面ライダーをラスボス以上に追い詰めた中ボスである
ただ

「「「ヒヤッハー！」「」」

「おかしい…何故あんなった？」

威厳のある人達だった気がしたのだが…何故血に飢えた戦闘狂（バーサーカー）になったのだろうか…いや歴代マスターログスに仕え剣士の技を作り上げた人だ若い頃には色々あったに違いないと現実から目を逸らしていた

『使う奴が使う奴だからだろう?』

『成る程…相棒が甦らせるとああなるのか』

「その辺は後で確認するとして…取り敢えず今は…おい逃すと思うか?」

ザンバットソードで放った不可視の斬撃は見事に逃走しようとしていた愚妹の背中を切り裂いたのである

「あれ?当たった?じゃないや何逃げてんの?ほらアークゼロワン頑張れ頑張れ」

『何呪いの王ムーブをしている?』

「何っーか今の俺って快か不快が指針になってる気がしたから…ってか何で当たった?」

未来は見えてそうなのにと首を傾げるも倒れ伏したアークゼロワンに近づこうする

「このお……っ!!」

『アークライジング…インパクト!!』

カブトのようなカウンターを狙ったようで悪いが

「無駄」

アーク系列にある演算処理を使えばこの手だつて読めただろうに……まあ読めてた所でこの結末は変わらないか、その蹴りはアナザーストリウスに命中したが霧のようにボヤけて消える、これは本来の変身者 ストリウスが得意とする幻覚攻撃だ…実際 グリモワール覚醒に必要な始まりの5人の力は全て俺の手元にあるが巫女の力は何処から来た?と首を傾げるが、その謎を解くのは少し先の話

「そんな!!」

というよりルシファーになってまだ気づかないのか?

ルシファーやアークゼロワンというよりゼロワン系列の仮面ライダー共通の弱点

それはデータ重視のライダー故に初見殺しに弱い事、アーク由来の演算能力も元になるデータがなければ

「宝の持ち腐れだな」

だから俺は初見殺しを徹底する、それは学習能力の高いアークへの備えに他ならない

「っ!!」

故に未知への事象への適応、機械には持ち得ない生物的直感による反射は命あるものだけの特権である

故にフリーズしたアークゼロワンの再演算 その刹那があれば充分

『GRIMOIRE READING…ULTIMATE DESPAIR!!』

「アークゼロワンを包み込むような黒い幕が展開されると同時に内側から現れた刃が装甲を貫く

「あ……があー！」

その時、アナザーストリウスの頭部が光ると彼は遠くで輝く聖剣の姿が見えたのであった

「少年、お前に見せてやろう全ての聖剣が集いし時に現れる原初の聖剣を」

『GRIMOIRE READING!! THE END OF THE WOULD !!』

すると魔王の体内に住まうセイバー系列のアナザーライダーの宿す聖剣とハルトの改造無銘剣　そして

折紙の光剛剣、八舞姉妹の風双剣、ベアトリスの雷鳴剣、ナツキの水勢剣、ピースメー

カーに鎮座していた音銃剣、そして土道の火炎剣、更に沈黙を続けていた土の聖剣が土豪剣全ての聖剣が魔王の周りに集い浮遊すると

生命の樹 の形に該当するように聖剣が集いし時

―物語を終焉へと導く聖剣が生まれる―

剣 カラドボルグをしまおうと同時に落下したのは青く輝く新たな息吹を吹き込む創造の

『刃王剣十聖刃!!』

「結末は俺が決める」

魔王の元に複製された全知全能の書と原初の聖剣が集う

—————

「アレがベアトリスさんの言ってた伝承の聖剣…」

「アレが…まさかハルト1人で目覚めさせるなんて！」

「伝説の聖剣まで目覚めさせるか…素晴らしいぞハルト！調べたい…錬金術師の血が騒ぐぞー！」

「大秦寺さん大変です！見てください！！」

ベアトリスは自分の所属する組織に映像を送ると

『あ、アレは…伝説の聖剣!?本物なのか…刀鍛冶の血が騒ぐぜf o oー!!』

「キャラルと同じリアクションしてる…」

と銀狼は遠い目をしながら呟いたのであった

—————

「は、ハツタリだああああ!!」

哀れな奴…複製とはいえ慈悲はない………本当一人の悪意で俺に挑むとは
「残念だな妹よ、これは全部本物で……俺が…俺達が積み上げた絆の力だ!!」

仲間を得て国を作り王となり、絶望を乗り越えた、最愛の存在を守るためにこの力を
使う!!

『既読!十聖剣!!』

エンブレムに宿る聖剣の力を全て解放すると同時に十聖剣の幻影が現れ対空する

『刃王!クロス星烈斬!!』

「はあ!!」

十聖剣がアナザーゼロワンを貫くと暫くの放電の後に

「ぎゃあああああああ!!」

爆散した

「はあ!!」

決めポーズで勝ちを誇るとその背中では

『スキヤニングチャージ!!』

『エクストリーム!マキシマムドライブ!』

ダブルライダーキックで弾け飛ぶ仮面ライダーコアは己を形成していたメモリはブレイクされ

残った意思を持つコアメダルは突如現れた黒い影が108のコアと共に回収したのであった

だがそれは爆発に紛れ 事実を知るのは少し先の事となる

そして合流した仮面ライダー達の一斉ライダーキックにより複製機は破壊されたのであった

エレメンタルドラゴンは十香を再封印し事態は一応の収束を見た

これにより 様々な人物を巻き込んだ大騒動は一旦の幕を閉じる

そして此処からは待ちに待った大宴会となる!!

その場で告げられる精霊2人の気持ちをハルトはどう受け止めるのか！次回大宴会
！お楽しみに!!

200話 記念短編 黒狐√ 天与の暴君

天与呪縛

それは生まれながらに課されたハンディキャップとそれに見合う対価の異能を与えられる等価交換…ではないな割に合わない事が多い

ある世界にいた普通の総合格闘家？常葉ハルトはフィジカルギフトドの天与呪縛を武器に格闘技界で名を馳せたが ひよんな事から仮面ライダーとして異世界に行く事になった

そして彼の大事なものを人質にされてしまい解放条件として魔王と戦い、紆余曲折の末に自分を利用したフリーガンを壊滅させる

物語は魔王に呼び出される前にあつた話

???

此処はハルト達が拠点にしている巨大パートナーアニマル？ことゴッドコーカサスの中にある厨房にて

「しかし今回の件で貰った報酬で暫くは遊べるな」

と満面の笑みでフライパンを振るハルト、まあ人によつては黒狐の方がしつくりくるかな？

「おーい飯出来たぞ〜」

支度を終えたので艦内放送を使いご飯だと言うと

「あら、今日はパンなのね」

最初に現れたのは銀髪に青い瞳をした小柄の美少女？ 彼女はヴェルザード、実は彼

女 元いた世界では最強格のドラゴンだったりする

彼女との出会いは簡潔に言えば想い人にフラれ自暴自棄になり自死を選んでいた時に出会ったのだ…まあ色々あつて俺が彼女を閉じ込めた氷を壊して出して外に連れてつた感じだな

あと…俺が弱みを見せられる大事な人でもある

「ああ最近、ライ麦パンにハマつてな」

「へえ〜」

「おはよう、早いわねヴェルザード」

「おはようカフカ」

次に現れたのは気怠げな雰囲気纏う紫紺の髪をした美女 カフカ、彼女は元星核ハ
ンターという銀河レベルのお尋ね者という経歴を持っている

この2人はフリーガンという民度低い番組視聴者の徒党が魔王から力を奪う為に訓練がてら飛ばされた世界で出会った大事な人達だ以前まで3人だったのだが

最近、このチームに新しい仲間が加わったのである

1人目は

「おはようございますわ主様」

着崩した改造和服と腰に刀を帯びた虹彩異色の美少女 切姫夜架 白スーツ…火野カグ槌の紹介で出会った俺達の監視役である

んで最後は

「おはようハルト！今日はパンか／＼米が良いぜ！」

支離滅裂な言動が目立つヒーローみたいなマスクを被る男 分倍河原仁 俺達は

コードネームとしてトウワイズと呼んでいる、コイツに関してはある奴の紹介もあり俺がスカウトした

「おはよ仁、そう思ったから両方ある好きなの取りな」

「ありがとな／＼ノーサンキュー！」

「しかし何で俺が料理してんだ？」

「仕方ないじゃない貴方以外料理スキルな壊滅なんだもの」

「ああ」

まあ魔王の俺程ではないが俺もあの世界で学んだので料理は出来る…何故俺は炊事廻り担当になる事が多いのだろうか

「主様の要望とあらば、私の刀で魚を切り捨てましょう」

「切り捨てるな、せめて三枚におろせ」

「悪いなハルト…俺の力だとハルトを分裂させて家事効率を上げるくらいしか「お前は十分に役立つてるよ」そ、そうか！」

実際、この大喰らい達の腹を満たすのに俺1人では足りないし他の家事の時間もあるから仁に分身を作ってもらっている…本当助かってます！

余談だが魔王は1人で解決してると…あいつ本当に人間か？まあ人間じゃねえからそんな真似出来たんだよなと考えていると

「「「(´▽`)馳走様」」」

「お粗末さん」

「こんな日常も悪くないな

「悪いヴェルザード、留守は任せた」

「仕事の話かしら？」

「ああ」

「派手に暴れられる依頼だと嬉しいぜ／不安だな」

「安心しろ少なくとも俺を呼ぶ時点で平和的な話し合いじゃないから」

「不安しかねえよ／やったぜ！」

食後のお茶とお茶菓子を出した後、ハルトは仕事の話をする為にある場所へ転移した

???

ある町の廃墟の屋上で

「待たせたなハルト」

「待っちゃねえよ…時雨、夕飯のメニュー考えればな何せ健啖家ばかり集まったからな」

来たのは渋い雰囲気を持つタバコを啜えたおじさん名前は孔時雨、デザグラ運営の一人で俺みたいな半分フリーランスみたいな掃除屋に仕事の依頼をする情報屋みたいな奴だ

「久しぶりだな聞いたぞ、ヒーロー世界でオールマイトと梅干頭相手に生身で三節棍片手に戦ったってな」

「仁のスカウトに行つた時に巻き込まれただけだ…んで俺の身体能力を個性だから狙うとか言つてた梅干し頭に三節棍を叩き込んだ俺は悪くない…つか耳が早いなやっぱりその辺の話も通ってるか」

「あの世界を震撼させた三節棍の通り魔が、こんな奴とはな」

「三節棍の通り魔とか俺呼ばれてんのか？」

「遊雲だっけ？あれ使いやすいなだよなあ軽く振り回すだけで凄い威力だし力が溢れる感じがするんだよな」

「しかしあの分倍河原仁を仲間になえ…ほんととお前は面白い奴と会うな」

「まあな…って今回は仕事の話だろ？」

「あ、そうだな…まずはこれを見せてくれ」

と送られたデータには

「フリーガンの違法研究所か」

「何でも、運営側があ的事件後に調べた結果色々分かってな」

あの事件

それは俺がフリーガンの手先となつてアナザライダーやライダー怪人に変身する俺との戦いだ

結果として俺はフリーガンを裏切り魔王側について卑劣な連中を打ち倒したとき

「どうやらアイツらは魔王のDNAからクローン研究をしてたらしい」

「クローンなあ…そんなの簡単に作れるのか？」

「お前知ってるだろ？クローントルーパー、魔王軍主力の事」

「そーいやあ彼奴の国の兵隊もクローン兵だったと思ひ出した

「勿論、魔王についてるクローン製作者が関与してないから別世界の技術で作られてるがな」

「それって何処？」

「学園都市」

「よりにもよってあそこかよ…」

「どーやら後ろめたい連中抱き込んだようだな魔王のクローンを作成して新しい創世の器にしようとしてるみたいだな」

「うへえ…」

「場所と戦力はリストアップ済みだ、受けてくれるか？」

「いいぜ受けてやるよ、確認だ設備と研究者は？」

「……だ」

「OK、聞いたなカフカ」

『ええ、じゃあ行きましようか』

「トウワイス、コーカサスの舵を切れ座標は学園都市」

『ヨーソロー！』

さーて仕事の時間だ

—————

ここは超能力研究をしている場所 学園都市

そんな科学の最先端を行くような場所にある廃棄された研究所で暴れるのは

「オラオラオラオラ!!どけえ!!」

「参りますわ」

前時代の遺物とも言える三節棍と刀で学園都市製の銃火器で武装して警備員を叩き潰しているハルトと夜架…何故かハルトが三節棍を振るだけで人が面白いくらい吹き飛ぶのである

何なら放たれた弾丸を三節棍で受け止め跳ね返すまでやっている

「あらあら楽しそうねえ」

カフカは暴れているハルトを見て恍惚な表情のままサブマシンガンを乱射すると

「PON!」

狙ってたかのような跳弾が迎撃する警備員を貫くのである逃げようとした警備員は突然 吹雪に巻き込まれ氷像となる

「ダメじゃないカフカ、取りこぼしがあるわよ」

「あらごめんさい……けど寒いから程々にしてくださいなヴェルザード」

そう言いながらも何気に真夏の学園都市に暴風雪を起こしている天災はヴェルザードであった

ただ一人辛うじて常識人側のトウワイスは

「あれ？俺がおかしいのか？普通に銃向けられたら怖いよな／怖くねえよ」

「だろー！」「ああ怖いよな！」

とまあ簡単に言えばトウワイスもトウワイスで自分を無限増殖させていて施設内を制圧させている……君も君でおかしいよ？

だがそんな彼等の足も止まる待ち伏せがある

「やっと来たか」

「ははは！暴れるぜオラア！！」

そこにいたのは護衛か用心棒である飛び出して蹴りを叩き込んだと同時にトウワイ
ス分裂体は何人も吹き飛んだのである

「「「「「俺達い！！」」」」」」

楽ではいかないと気を引き締める

「まあそうなるよな…楽勝とはいかねえか下がってろトウワイ、こいつ等は俺が相手
する」

「あらあら」

ハルトと夜架の前に現れたのは改造されていない和服に羽織を来た眼帯ツインテールに日本刀と属性マシマシな奴と褐色銀髪的美男子

「つしやあ！行くぜ行くぜ行くぜ!!」

変身なんて間を置かずに斬りかかるツインテに三節棍で応戦鏢迫り合うとツインテは狙い澄ましたように腹へ蹴りを叩き込む……が

「つてえ！テメエ腹に鎖帷子か何か仕込んでやがるな!!」

「別に何も仕込んでねえぞ?」

「ふざけんな！こちとら霊圧で強化した足で蹴り上げてんだよ！普通なら内臓が破裂してんだって!」

と騒いでいるが

「つせえなあ」

ほら見やがれ！とばかりに上着を抜くと文字通り何も仕込んでない無傷な体な事に
怯えている

「んなバカな……そんなの……テメエ化け物かあ！」

「いや普通の元格闘家です」

「普通の人間はデカイ恐竜（ドーパント）を剣で切らねえよ！」

「違うぜトウワイス、恐竜3に翼竜1だ」

「細けえ!!」

分裂したトウワイスがツッコミを入れている

「へえ面白え…確かお前さ黒い鎧みたいなのがあんだろ？変身しろよ待ってやるから」

「まあ良いか、見てろよ俺の変身」

デザインドライバーにIDコアをセットしバツクルを分割する

『X GEATS』

そしてドライバーにセットするとツインテに通信が入る依頼主は剣幕で

【何してんだ！早く殺してしまえ!!】

「つせえな黙ってろよ俺あ強え奴と切り合えるつて聞いたから、こーんな辛気臭い場所に来てんだよ、ちゃんと切ってやるから安心しろ」

「安心しろちゃんと倒してやるよ」

『BLACK OUT!』

「……………変身!!」

そしてドライバーを回転させると黒い九尾が顔を出す、フィンガースナップと共にレバーを押し込む黒紫の炎と共に黒いアンダースーツを纏い現れるは世界を破滅へ導く妖狐

『DARKNESS BOOST! X GEATS!』

仮面ライダークロスギーツ 参戦

「待たせたな」

「待つてねえよ、おいお前の名前は？切る前に覚えといてやるよ」

『ready』

「仮面ライダーダークロスギーツ、常葉ハルト」

「元護廷十三隊 6番隊隊長 齋藤不老不死だ」

「ん？不老不死？なんか面白えなお前、俺の仲間になれよ彼処のイケメンも一緒にさ」

「は、俺達に勝てるなら聞いてやるよ」

「んじゃ勝つとしますかね」

「行くぜ!!」

『FIGHT!』

同時に剣鬼と妖狐の得物が激突したのである

そして銀髪美男子は夜架と相對している

「くっ！」

この人、強いですわね魔力などで強化してますが身体能力は主様に迫る勢いがありますわ

「なあ降参してくれねえか？俺としちや女の子と戦う趣味はねえんだよ」

「それは残念ですわね主様との戦いが終わるまでは邪魔させて貰いますわ」

「そりゃ残念だ……っ！」

殺気に反応した美男子が下がると先程までいた場所に弾丸の雨が降り注いだのである

「大丈夫か夜ちゃん！助っ人トウワイス参戦だぜえ！」

「あらトウワイスさん…その銃は？」

「俺達が倒した警備員から拝借したぜ！見せてやるよ俺達の弾幕射撃／いや待てよ俺は馬鹿か！／否定しねえ」

「何話してんだ？」

「気にしないでくださいいなアレが平常運転ですので」

「そうだよ！喧嘩は並の俺達より／そうか！よし」

「こうしてやるぜえ!!」

そう言うとトウワイスは手から泥のような物を出すと 人の形となりそれが夜架とハルトに変わったのである

これぞトウワイスことトウワイスの個性 2倍

データとイメージが固まれば何でも2倍に出来る、それは人にも適応されるのだ

「へえ〜中々やるじゃん」

と感心している美男子を無視してトウワイスは一喝する

「いいか！お前達はコピーだ！よって死んでも特に問題ねえ！！／問題しかねえよ！！」

「安心しろお前達の墓は建ててやる」

「いやいや死ぬ前提でリーダー増やすなよ…つたく…だがグツジヨブだトウワイス」

「うふふ…へえ彼強そうね」

「少しは楽しめるかしら？」

現れたのは戦闘能力据え置きのハルト、カフカ、ヴェルザードの3人である

「おいおいコレは…」

流石に美男子も冷や汗を掻く

「安心しろドライバーはないから変身出来ねえお前にはコレで相手してやるよ、おい」

「しゃあねえ使え！」

投げ渡された三節棍を軽く振り体を動かした後

「んじゃやるか」

「ああ元護廷十三隊 四楓院千日 参る！」

此方も此方で限界バトルの幕が開けたのである

その頃

「あははははは！やべえなお前！楽しい！こんな楽しい戦いは久しぶりだぜえ!!」

「ははは……っちもだよ!!」

クロスレイジングソードとギーツバスタークロスの二刀流を笑いながら避けながら攻撃する齋藤……こいつ戦いを楽しむタイプだなバトルジャンキーと思うが楽しいのはお互い様だから良いか

しかしギーツバスタークロスが弾かれて飛ばされた取りに戻る事も出来ないの

「っ！」

鋒で引っ掛けて手元に戻そうとしたが。その時偶々引き金に鋒が当たったようで

「つぶねえ！今のも計算か……こいつ頭も使えるのかよ……油断ならねえな……常葉ハル

トってのは力押し of 脳筋ゴリラじゃねえのかよ」

「知らないのか…俺の武器は此処（頭脳）なんだぜ」

全くの偶然だがハツタリは大事としている

「やっぱりかそこの強さ（頭突き of 威力）なら俺も負けねえぜ!!」

「自慢じゃねえが俺のIQは53万だ」

ふつ、俺の頭脳が恐ろしいぜと構えるクロスギーツに

「何だとお!! そんなに頭良いのかお前!!」

驚く齋藤であるがハルトを知る面々からは

「「「んな訳あるか（りません）（ないわよ）」」」

散々な言われようだった…仕方ない何せ魔王が

【俺のIQは53万だ！】

【我が魔王、病院行きましようか安心ください腕の良い医者を知っています】

【馬鹿にしてんだろお!!】

【黙れ脳筋】

同じ事を言おうものなら頭の病院を勧められるから

「は、ハツタリかよ…残念だか俺の方が頭が良かったみたいだな!」

「いや本当に賢い奴は自分の事を賢いとか言わないぞ」

「っ!!」

「こいつ、やはり頭が良いぞ!!」

齋藤不老不死の人生において盛大な勘違いが生まれた瞬間である

余談だが。このやりとりを見ていた千日は

「何やってんだアイツら?」

「知らん…馬鹿が馬鹿な事してるだろうがよ!!」

「つぶねえ!つかお前の事だろうが!」

「はあ!誰が馬鹿だとコラア!!」

「キレる所が違うだろうがあ!!」

此方は此方で明らかに龍の玉ばりの空中戦からのラツシユという出る作品間違えて
いる戦いを繰り広げていた

だが戦いに堪忍袋の尾が切れたフリーガン残党が戦力投入した事で事態は変わる、こ
の学園都市の兵器を投入したのだが

「戦いの邪魔してんじゃねえ!!」

怒れる二人の攻撃でジャンクに早替わりとなると

「あいつ俺達まで殺す気か！許せねえ！おい常葉、一時共闘だあの馬鹿を締め上げんぞ
！千日!!テメエも一旦喧嘩やめろ！」

「元からそれが依頼なんだけどな…ヴェルザードついてきてくれる」

「分かったわ」

「因みに分身した奴らは？」

「ああ彼らなら彼処で」

目線を動かすとダメージ許容量を超えて泥になりつつある俺と千日が仰向けになつていた

「やるじゃねえかお前」

「お前もな…分身でこれなら本体は強えな」

「ああ変身した状態ならお前はデコピンだぜ」

「んな訳だろうがよ」

「あはは」「ははは…」

何か不良が河原で殴り合ってわかり合ったぜ！みたいなテンションなんですけど、あ、分身達消えた

「トウワイス、取り敢えず游雲は回収しといて〜」

「おうよ！それと屋上にあつたヘリコプターや銃器なんだけだよ！奪つた方が良いか！」

「大至急全て奪い取れえ！学園都市製の兵器は高く売れるんだ！マニアには涙腺ものだぞおー！」

「俺達も使いたーい！」

「なら好みとスペアだけ奪つて後は売却なあ〜」

「おう！あ、因みにさ俺コーカサス操作してたから聞こえなかつただけど今回の研究員や設備ってどうなの？」

「あ？」

その問いにクロスギーツはギーツバスタークロスをレールガンモードに変えて逃げる資料を持った研究員達に狙いを定めて

「廃棄処分」

引き金を引いたのだ逃げようとする奴等はトウワイスに捕縛され研究データそのものはバックアップ含めてカフカに破壊された

そして研究員と責任者を引っ捕えたとクロスギーツは笑顔でギーツバスタークロス額を押し当てる

「さーて君達、魔王のクロンをどこ置いたかな？」

「お前に話す訳がないだろ！大事な研究せいー

次の言葉を告げる前に引き金を引いて頭から赤い花火を咲かせたのであった

「さーて次は誰にしよかなー俺をモルモットにするような俺の家族にも劣る下劣畜生にはそれ相応の扱いが必要だな」

次の的を極めて額に銃口を当てて聞く

「クローンは何処？」

「う、上の階にいる！大きな培養ポッドに入ってる!!」

「あ、あの部屋の奴か！そいつなら今俺がポッドを壊してるぜ！」

「そつかサンキューなトウワイス！んでお前たちはどうするよ？依頼人こんなだけど」

齋藤と千日を見て尋ねると

「まあ依頼人がこんなだし…暫くやる事ねえなあ……」

「それより夜架ちゃん、さっきの戦いで使った刻撃って技について教えて欲しいんだけど」

「テメエは何夜架にナンパしてんだ！そいつは俺のだ!!」

「あ、主様…私は…」

「あら、貴方は貴方で何口説いているのかしらハルト？」

ヴェルザードの庄に思わず二、三步下がるも

「よ、よしトウワイス!!クローンは何処ダア！」

((全力で逃げたな))

その心は一つであった：取り敢えず時雨に電話して研究員はジャマーガーデンの肥料、一部は魔王軍が研究している怪人強化用食材 heaven の素材にするという生きたまま：まあ自分の意思で命を玩具にしたのだ その報いは受けてもらうぞ

ある研究室で

「何だこれ？」

「どしたトウワイス？」

「これ見ろよ」

トウワイスに見せられたのは何か手のひらサイズの時計を思わせるような物の図面であつたつて待て！

「これ……ブランクウオッチの設計図か？」

「これが？」

「何でこんな物が……取り敢えずこの辺の資料は白スーツに渡すぞ何か嫌な予感がする」

「廃棄処分にはしないのか？時雨の話だと全部って」

「コレは別だクローンの変身ツール作ってたならそれまでもしフリーガン残党を利用して何か企んでる奴がいるなら不味いだろ」

「な、なるほど……それよりもこの施設だけだよ、どう破壊するんだ！」

「取り敢えず全員外に出てからだな、俺の力で全部破壊する」

「おーよー！」

そして一先ず全員外に出たのを確認する

「行くぜ」

『DARKNESS BOOST TIME』

不穏な待機音を共に飛翔、そのまま黒い尾が翼のように展開しクロスギーツの頭上で巨大なエネルギー球へと変化する

本家ならば世界を滅亡させた一撃 だが弱体化した今のハルトでは…

「この学園都市を消し飛ばす程度火力しかないのが情けない！不甲斐なし！穴があつたら入りたい!!」

何処の炎柱だお前はやってる事はどちらかと言うとパワハラ無惨様だぞ…

「ええ本当よ魔王を取り込んでいた頃は世界を三度焼き払っても、まだおつりがきたのに」

「かなり弱体化したわねハルト」

と辛口な評価を下す二人に対してトウワイスは

「弱体化して良かったよ！健全な弱体化だよ!!」

「ええ流石にそれは…」

そんな中エネルギーが臨界まで達したので

『X GEATS VICTROY!!』

「はあ!!」

放たれたエネルギー球で見事研究施設のみの破壊に成功したのである

「やっぱり弱くなったな俺」

「どの口で言ってるの!?!」

そして

「いやあ!今日の仕事も無事終わったし皆でご飯でも食べ!あ!ハルトじゃない!」フレ
ンダじゃん久しぶり〜」

そこに現れたベレー帽を被った金髪の美少女が笑顔で駆け寄ってきた

「久しぶりね〜また遊びに来てたの?」

「ああ依頼でな、どうだ妹さんと仲良くやってるか?」

「当然な訳よ!!」

「良かった、俺は兄妹仲が悪かったからさ上手くいって嬉しいよ」

あの凄惨な環境を悪かったの一言で済ませる辺りこの男もこの男でヤバい奴なのである

「そっかくねえこの後時間あったりする良かったら〜二人でご飯とかどう?」

「悪いな今日は連れが「あらハルトこの子は誰かしら?」ああ紹介するよヴェルザード、この子はフレнда、前にこの世界に来た時に一緒に戦った中だ」

「よろしくな訳よ!」

「ええ」

おかしい何故、ヴェルザードの背後から絶対零度のオーラが出ているのだ…おかしい

ぞ

「おおおお落ち着けヴェルザード、彼女とはお前の思ってるような関係ではない!!」

「あらそうなの…ごめんなさいね早とちりだったみ…」

その時 ヴェルザードの目は見逃さなかった絶対零度のオーラから自然に自分を守るように盾となったハルトの背中ではんわりと頬を赤らめ…そう正に恋する乙女的な顔をしていたことを

「ハルト、そこを退きなさい私…その子とお話があるの」

「OHANASHIだと!!辞めろヴェルザード!お前が本気を出したら…この星の地軸が傾くぞ!」

「結局!この人そんなヤバい奴なの!!」

「あと何で怒ってるんだ！ヴェルザード!!」

「無自覚は罪よハルト？そんな貴方にはあの子（ヴェルドラ）と同じお仕置が必要かしら。」

「お、俺はお前みたいに簡単に転生出来ないんだよ!!と、取り敢えず…逃げるぞフレнда！」

『X GEATS』

ハルトはクロスギーツになるとフレндаを抱き抱えて空を飛ぶと

「待ちなさいハルト!!」

そのまま飛翔して追いかけてこを行うヴェルザードを見送ると

「あいつ…鈍感なの／違うだろ！」

「あらあらヴェルザードつたら」

「はあ…主様は本当に…」

その後 捕まったハルトは凍りつけにされヴェルザードから説教をくらったのであつた

あと何故かヴェルザードとフレンダは会話して何事もなかったが

「今度、一緒に他の世界へ行きたい訳よ!!」

何故そうなった？

因みに

「んでその子がクローン？」

な
ハルトが見下ろす先にいたのは幼少期の己を彷彿とさせる男の子…ふむクローンだ

「おいおい威嚇すんなよハルト」

「いや威嚇してねえよトウワイス、なんつーか俺は後何度同じ顔をした奴と会えば良いんだ？会いすぎた挙句にハルトレンジャーなんて人格破綻者集団がアツセンブルしてんだよ!!」

「それ遠回しにお前も人格破綻者認定してるぞ？」

「ああん!？」

「味方に噛み付かないのハルト」

「わーったよヴェルザード…ツー訳で夜露死苦!!」

「ひい！」

「虐めるなって…本当に怖いお兄さんだよな」

「……………ん…あの人が言ってたみたいに本当にゴリラだ」

「んだとゴリア!!誰がゴリラだあ!!」

「ひい！」

トウワイスの背中に隠れて怯えるクローンに思わずイライラするハルトは

「おい齋藤、四楓院」

「ん?」「あ?」

「お前たちでガキの面倒見ろ」

「ええ!!」「面倒くさ…」

「殺す寸前まで鍛えやがれ俺が許す!!」

「任されたあ!」

「え……ええ……怖いよトウワイス」

「安心しろハルト?…うーんややこしいな…名前別で考えないとな…おいハルト携帯なってるぞ?」

「本当だ…え?魔王から?もしもーし………は?ウオズ達が操られて大変?ふーん………何!その世界には平成ライダーの皆さんがいる!!分かった駆けつけるぜ!!」

ハルトはキリツとした顔で皆に伝える

「魔王への借りを返しに行くぞ！」

「その前の台詞が気になるのだけど……まあ良いわ」

「つしやあ！ゴッドコーカサス発進!!」

そして魔王の世界へ向かうのであった

???

「申し訳ありません、クロック様：例の研究施設が黒狐に襲われてしまいこれ以上のウオッチの入手が不可能になりました……」

「よい、計画に必要なブランクウオッチは手に入っているからな、後は時が来るのを待つだけだ」

そう話す男の手には、とあるアナザーウォッチが現れていた…

「あの魔王はこの手で…っ！」

怒りに震え 時が来るのを待つ

大宴会

前回のあらすじ

事件解決!!

「仕事しろ!!」

—————

ピースメーカー厨房　そこは平時と違う重たいオーラが漂っていた

食堂にいたクロイントルーパー達もそこに立つハルトのオーラに圧倒されていたのである。歴戦の兵である彼等が圧倒される理由それは

「今日の宴会はレジエンドライダーの皆様も来るとなると一筋縄ではいかない…だが今日の俺はアナザーゼロワンによるあらゆる事象全てを考慮した最高のおもてなしが可能…よしおもてなし全開だあ!!」

『おい誰だ！この男にゼンカイジャーを見せた奴は!!』

「おい待てよ」

「黒狐…」

「俺も手伝う、仮面ライダーへの恩返しをしたい心は一つだろ？トウワイス俺達を増やせ！」

「おう!!」

と二人は分裂し大量の食材を捌き調理すると満漢全席も超える大量の料理を拵えていた

「おいおいマジかよ」

「グルメ界の食材に陛下のフルコース…それに黒狐だと！こうしちやいらねえ！俺、皆にこの事を伝えてくるぜ！」

「俺もだ！逢魔に残ってる兄弟やテスタロツサ様達にも伝えてくるぜ！！こりやとんでもない規模の宴会になるぞお！！」

「そして逃げ野郎ども！会場設営怠るなよ今回の宴会で絶対に陛下に恥をかかせるな！！」

「俺達もこのビッグウェーブに乗るしかねえぜ！」

「笹食ってる場合じゃねえ！」

「笹食ってんじゃねえ！」

とクロイントルーパー達は手慣れた手つきで宴会場を設営していく……余談だが、この宴会を聞いた三人娘など逢魔留守番組も巻き込んだ世界を跨ぐ大きな宴会は定例と

なるのはまだ知らない話し

トルーパー達が作業する中、食堂の隅でどんよりしている集団があった

それは今回、洗脳されていたとは言えハルトに牙を剥いた四天王とウオズ、そして七罪である

「私……私……ハルトに……ひどいこと……」

もう号泣して顔もグチャグチャである……彼女からしたら自分の全部を笑って受け止めてくれた大事な人 その人に暴言吐き攻撃までしたのだからだが

「安心せい七罪よ、お主の攻撃などハルト坊は気にもしておらんさ……じゃが」

年長者であるヤクヅキは優しく落ち着かせると

「俺達……操られてたとは魔王ちゃんに何てことを……」

「更に言えば…ハルト様に土下座までさせてしまった…我等のせいで…不甲斐なし!!」

「魔王様…：貴方の最初の臣下でありながら刃を向けた愚行をお許し頂きたく…：」

何やかんや言いながらもハルトを慕っている四天王達には一番ダメーヅ入っていた

「こつちのが重症じゃな…：一番問題なのが」

四天王の視線はウオズに向かう

「私は我が魔王の信に背き…：あのようなものを女王と呼ぶなど…：なんたる不忠!この身で償うしか!」

「ちよつと!先輩!食堂で切腹しようとししないでくださいよ!!」

「離しなさいフィーニス!!私は一番信頼していたと言った我が魔王の心を深く傷つけた

のです！このくらいせねば気が済みません！」

「魔王様に助けてもらった命投げ出す方が本当の不忠ですよ！魔王様が土下座してまで助けて守ろうとした命を無駄にするんですか！」

「……………」

「けど魔王ちゃん仮面ライダーに会うと土下座するよね？」

「あれは崇拜、我等にしたのは嘆願だろうな」

「……………」

思いとどまったウオズ達であったが、そこに

「よお 反乱者」

煽るように現れたのはゴーストイマジン達である

「良かったな、殺されなくて」

「だけどもあ今回の件は大変だなあ…ま、判決はボス次第だが今まで通りとは行かんだらうよ」

「けどコレで、俺達の出世も遠くないぜ！」

「ああ今回俺達はあの戦いで魔王に加勢した、それだけで値千金だろうよ最古参がこの様なら哀れだな」

「感謝するぜお前たちの不祥事で俺達は悪の大幹部となれるんだからな」

「っ!!」

「お?やるか?」

「いいぞやれ牙王」

「ああ、こいよ裏切り者共」

「きさまあ！」

「カゲンちゃん落ち着いて！悔しいけど今回は向こうのが正論だから!!」

「貴様等に何が分かる!!ハルト様が奇行に走る度に止め、制御するという超高難易度任務を遂行しているウオズや我等四天王の苦勞を!!」

「「いやお前、上司の認識どうなってんの?」」

「落ち着けカゲンよ!今喧嘩したらハルト坊もいよいよ収まりつかんぞ!あとカゲンの意見には賛成じゃ!お主ら程度がハルト坊の奇行を今レベルまで抑え込めると思わんな!!妾達の苦勞を味わってからのものを言え!!!」

「先輩も先輩で苦勞話は後にしてください!!確かに聖地巡礼と称して仮面ライダー由来の場所に行き発狂した魔王様を前に同じことが言えますか!」

「お前ら…ボスを擁護するか貶すかどちらかにしろ!!」

「一二」お前達にあの脳筋を制御するなんて事は絶対に出来ない!!「一二」

「何故貶す方向に舵取りした!やっぱり大将へ叛逆する気だろ!!」

四天王と煽る牙王達の中間地点にフォークが壁が破壊される突き刺さった勿論投げたのは

「「「「「!!!」」」」」」

「あのさ宴会前に何、喧嘩してんの?お前等……刻むよ?」

料理の合間に食技を使い投擲したハルトは笑顔のままその辺にあったフォークで巨大な肉塊を薄切りにしたりサイコロステーキにして、お前もこうなるぞと脅しの意味も込めて

「「「「「「「喧嘩してません!!」「「「「「「」」

「よろしい……早く準備に散りやがれ!!」

それだけ言うと蜘蛛の子を散らすように準備に移るのである

「つたく、あの馬鹿どもが……おい黒狐フグ鯨捌くぞ」

「おう、けど良いじゃねえの向上心あってよ」

「まあな……けど今回の件は流石に応えたよ、何つーか信頼してる仲間の裏切りはね……そりゃソウゴさんも飛流の変えた世界でメンタル折れるわ」

「んでどうすんの？」

「何が？」

「あいつ等の処遇だよ流石に無罪放免じゃないんだろ？」

「……………うーん俺的には無罪放免なんだよなあ」

『ハルト、お前の心が痛いのは分かるが今のお前は国王だ今までのような仲良しクラブのリーダーではない 側近の仕置きも王の役目だ』

「けど……………そんなの可哀想だよ！皆洗脳されただけじゃん！罰なんてそんなの……」

『それでは集団がまとまらない、統率を欠いた集団は必ず崩壊する!!』

「……………」

説得力しかない…何せ俺の所にいる奴は結束的なのを欠いてヒーローに負けた連中だからだ…こんなの参考にしかならない

「だけど無理だよ…俺なんて…俺なんて！ノリと勢いと料理以外取り柄のないライダーオタクのポンコツだし」

『そうだな』『うんうん』『なんだ自覚ありか』

『おい女誑しが抜けてるぞ』

「そんなダメダメな俺へ王様になって欲しいって初めて言ってくれたのは皆なんだよ！その人達を『なあ相棒俺達は別に殺せとは言ってないぞ？』へ？」

『いやお仕置きは必要だと言ったが肅清しろとは一言も…』

「だってお前たち、ちゃんと裁けと」

『いやそれは必要だからだ殺すまでは言っていないぞ』

『だが相棒は相棒で考えていたのだな：アイツらも喜ぶだろう』

『何せ、ウオズの事を一番信賴しているなんて言ってたからな』

「……………おいお前ら」

『いやお前が勝手に死刑一択って思ってただけじゃないぞ、相棒が早とちりしただけだ』

「許さない…………許さないぞウヴァ!!」

「何故俺を指名する！俺が一体何をした!!」

と食堂でたむろしていたグリード組の中からウヴァがツツコミを入れたのであった

—————

さて今回の事件解決に伴い新たな問題が浮上した。そう複製機で蘇ったものの処遇である。

流石に経緯的にこの世界的にも残るとまずい人たちがいるので…

「取り敢えず皆さんは逢魔で面倒を見る事にします！」

ハルトは腕を組み　ドン！と構えてみせると

「ロイミュードを受け入れるだと本気なのか」

「危険ではないのかね？」

進ノ介とベルトさんが心配そうな顔をするが問題ない

「ええ勿論希望者のみになりますね、流石の俺もチェイスや072のように居場所のあ

るロイミュードまで連れて行こうなんて思いませんよ」

「072だと!？」

「彼も複製されてたんですよねえ、いやあ驚き驚き!」

「ハート達は?」

「俺達は暫くコイツの世界で厄介になる」

「はい、ロイミュードの皆さんには逢魔議会への参政権や戸籍など色々受け入れる代わり力を貸してくれる事になりました」

「ハート、お前…」

「勘違いするな泊進ノ介、俺達はロイミュードの国を作るその為の足掛かりに過ぎない」

「え？そんな事狙わずとも王国に独立行政特区作りますよ」

「何だと？」

「形式的に代官は置かせてもらいますけど自治云々は基本的に其方にお任せします」

ハルトからすれば多民族共生国家と構想している先祖代々、伝統ある生活を捨てられない者もいると知っている。だからこそ彼等の特区を作っていたりする

「良いのか？」

「断る理由がありませんし…ただロイミュードが王国内で犯罪を起こした場合ですが」

「それは任せろ」

「チエイスさん？」

「俺は仮面ライダーだが、ロイミュードの番人だ道を外したロイミュードの更生するチャンスを与えるのも俺の仕事だ」

「協力してくれるのか？」

「ああ…ただダチに会うから休みをいただくが」

「勿論だ歓迎するぞ友よ！」

後は

「お前らはどうする？」

「その前にメダルを返せ!!」

「あいよー」

と素直にハルトはウヴァとカザリから没収したコアメダルを返却、完全体になった二人はハルトに襲い掛かろうとしたが思い留まる

「何故素直に返した」

「これはさっきの仕事の報酬、それとこれから提案する依頼の前払いかな」

「前払いって僕達が受けると思ってるの？」

「思ってるよ君達ならね」

とハルトが笑って見せたのはキャロル達が生成した大量のコアメダルである、それはアंकも立ち上がり反応する

「おいコレは」

「逢魔の錬金術師達に映司さん達の物語を見せた結果…何故かコアメダルが量産出来た

んだよ」

「こんなに……」

「そこで君たちに提案だ」

それはハルトにしか出来ない方法である

「そもそも君達は他のグリードのコアメダルを取り込んでも暴走するリスクがある、それは何故か！欲望を受け止める上限だ誰にもある…例外は紫のメダルだけだな」

俺だってアナザーライダーや怪人に変身出来るが仮面ライダーには変身出来ないし「それで」

「上限値を超える方法は一つじゃない俺はそれを旅して学んだ」

例えば グルメ細胞 予期せぬ形で取り込んだが美味しいものを食べれば食べるほ

ど自らの力を高められ 適合食材を食べれば限界突破も可能である

例えば アナザータイクーンの例

マドカとナツキが持っていたアナザーウオッチだがウオッチ自体が一つとなりナツキの力が高まったのだ：つまり並行世界にあるアナザーウオッチを取り込む事でも強化が可能と言う事になる

「グリードの強化方法はセルメダルを大量に取り込むか コアメダルを取り込むかだ：だが実験してみたいのは」

そう言いハルトはコアメダルを見せながら伝える

「君達と同じコアを10枚、20枚つて渡したらさ器そのものの強度も上がるかどうかの実験」

メダルを取り込む上限値があるなら、取り込む物の質を上げれば良い 至極単純な事だがコアメダルの精錬方法など失われて久しい上に彼等自身には製作する能力もない

故に至らなかつた考え

「興味ない？勿論、仕事の働きぶり次第で他のコアメダルを渡すのも考えるけど？」

だがその前に

「先ずはアंकがアイスを食べる前に渡したいものがあるので、良かったら」

指を鳴らすと同時に現れたのは人が入ったポッドである

「コレって…人？」

「正確に言えばホムンクルスです、俺の妻がかつて錬金術で使用していた技術の応用な
んですよ」

『サラリとキャロルを妻と呼ぶ事に慣れてたな』

『お、キャロルが照れてるぞ』

ーその顔を撮影してもらえる？ー

『そう言うと思って撮影したぞ』

ーでかした相棒ー

「そもそもアंकは人間と合体した事で五感を得ました、ならば！器があればグリードは人間の感覚を手に入れる事が可能という訳です」

その言葉に全員が反応した

「どうです？冷たいアイス、甘いお菓子食べたくないですか？」

「たべたーーい!!」

「じゃあ素直なガメルが一番に「おい待て」はい？」

「まずは俺からだ。前の経験を元に完成度を確かめてやる」

「ちよつとアंकは前に体験してるじゃん、だから僕からだよ」

「待て最初は俺だ」

「私よ、ねえ魔王様？」

「慌てないで全員の体はあるから」

そして彼等のコアメダルを特別に調整したホムンクルスに比べると

「へえ、これが人間の感じてるものかあ」

「ふん…悪くない」

「うわあ！コレ美味しい!!」

「良かったわねガメル」

「……おい映司！アイス！」

「分かったよ、はい」

「……………っ！冷たくて美味しい」

「良かったねアंक：けどハルトさん「さん付けしないでください！恐れ多いです!!」え
！じゃあハルトくんで」

「はい！何でしょうか!!」

「ありがとう、君達のお陰でアंकとまた会えた今日だったみたいだよいつかの明日は

…」

「え、映司さん…なんでもつたいお言葉！ですがそれはうちの技術者に言つてくださいな皆さん映司さんとアंकの物語に感動したからこそ力になりたいと思いましたから」

何せ映司さんはパヴァリア結社の人たちからは神様レベルで崇められていますのでとは口が裂けても言えなかつた

余談だが、後にサンジェルマン達が里帰りした際に映司とアंकがいた現場に立ち会えなかつた事実には膝を突き絶望したというのは別の話

「そうだね…後で紹介してくれる？」

「勿論！さて…お前達はどうする？」

「ま、暫くは世話になるよ」

「俺もだ」

「ねえ他にお菓子ある〜？」

「あらあらよく食べるわね〜」

取り敢えずグリードの懐柔は良さそうだな…さてと

「アंक、どうですか？体の異変があれば治しますが」

「ない」

「よし〜」

—————

「これでよし〜」

そんな感じで俺の所にロイミュードとグリードが仲間になった現在、グリード達はキャロル指導の元 俺の実験に協力してくれているし現在はハイオーク達協力の元ロイミュードの街を作っている

『これも全部乾巧って奴の仕業だ！』

「何だってそれは本当か!!つかいるなら探しだせえええ！」

『あの人もとんだ冤罪だよ!!』

そして

「これで……最後だア!!」

『だからいつも何で最終決戦並みのテンションで行くのだ!?!』

「今日の俺の料理は過去最高の出来だと思う」

『おおおお！』

「よし俺は逢魔に戻るから後は任せた!!」

そして料理の支度を終えたハルトがした後、ハルトはふと考えていた事があり一時逢魔に帰還した

「ハルト様、おかえりなさいませ」

「ただいまテストアロッサ、ごめんちよつと時間ある？」

「当然ですわ」

良かった…：現状一番信頼の出来る彼女の協力はありがたい

「それで話とは？」

「簡単に言うとなね戦力拡大による組織再編かな」

テストタロツサに今回のウオズ達の件を伝えると顎に手を置いて考える…本当美人は何しても絵になるな

「美人なんてそんな…」

照れてる彼女に対してハルトは首を傾げる

「あれ？声出てた？」

『出てたぞ阿保』

「成る程…それで意見とは？」

「そつ…一応アイデアはあつてね」

とハルトが見せた組織図は、とある海賊団と同じ組織階級であったが国家運営故に多少の変更はある

「でしたら」

そしてテスタロッサと組織再編の話をしていると背後から現れた影が

「ハールー！」

「うわあ！ウルティマ!？」

「テスタロッサと何してるのさ〜それよりもこの間は美味しい感情ご馳走様」

「は？何のはな「よくぞ帰られた我が君！トルーパーから聞いたが宴会なのだろう！さあ行くぞ!!」 ああ行くこうか」

「はあ…悪いモス頼める？全員集合」

「お任せくださいハルト様」

「いやマジでありがとう」

そしてハルトは仲間を連れてピースメーカーに帰ったのだが

「何だこの小娘は？」

「あ、ウヴァ絡むの辞めた方が良いよ」

「何？こんな弱そうな小娘など「ねえ」あ？」

「邪魔なんだけど」

「は？何言っ……ごふう！」

「ちよっ！ウヴァさーん！！」

ウルティマの右フックが哀れウヴァを飛ばして壁に減り込ませた…お、恐ろしい

「ウルティマ、あの子は新しい仲間だから」

「え？ そうなの？ そういえば何処かで見たような気が…あ」

「な、なんだ」

「ごめんね」

「あ、ああ…」

「けど噛み付く相手は選びなよ虫ケラ」

「ひひ!!」

哀れウヴァさんロックオンされたか…ん？ゲートからまた誰か出てきたな

「ハルト！今日こそお前を倒し玉座貫う!!」

久しぶりの登場、ズ・ゴオマ・グさんでしたが

「そーい！」

慣れた手つきで突撃してきたゴオマの顔面にカウンターを合わせて吹き飛ばす

「が…まだだ！まだコレがある！」

とゴオマが取り出したのは見覚えのある青いゼリー

「あ、おいお前それ」

それを食べたゴオマは突如、体に襲う高揚感に浸るとゴオマは先ほどとは異なる速度

で襲い掛かるが

「しーねえええ！」

「オラア！」

「ズ（ふう）！」

先ほどの再放送と同じ展開をした後、ハルトはゴオマの胸ぐら掴んで問い詰める

「テメエ、heavenの試作品どこから持ち出した？つかそれ食べても俺には勝てねえよ」

「な、何故だ！」

「だってそれ俺の血が入ってんだもん強化上限が俺なのに一部取り込んだだけで勝てると思うなよ」

そんなんだからダグバに返り討ちに合うんだよお前は

「つまり、あれはハルト味か…」

「何とち狂ってやがる！ テメエはもう一回逆さ吊りにしてやろうかあ!!」

取り敢えずゴオマは逢魔で蝙蝠傘の刑（逆さ吊り）確定だな

「h e a v e n っ て ？ 」

「ああグロンギみたいに生物ベースの怪人の強化食材？」

「何で疑問なのさ…」

「その前にアレは我が君の血液で出来ているのか？」

「まあ後は…人の死体をこうコネコネと」

「ああ…だからこの前、ウオズ達が捕まえたチンピラが牢屋から消えたんだ」

「そーそー…後はミラーモンスター用の加工食品にするからって欲しい人に分けたなあ」

「一口食べると腹の中に太陽出来たような感じになつてな…食べてみな、トブゼ」

人間擬態時の格好的に怪しい売人にしか見えない…いや危ねえ!!

「お前はウルティマ達に何薦めてんだ!アレは試作品!!食べたらどんな副作用があったか分からないんだよ!取り敢えず逆さ吊りの刑だあ!」

ゴオマを放り込み直すのであった

「油断も隙もねえ…あ、後さ3人とも」

ハルトは笑顔で話す

「この世界で逢魔に喧嘩売った挙句に舐め倒してる奴がいるんだけど」

具体的には何処そのDEM社長だったり、何処その歌姫だったりだな

その言葉でデートアライブ世界の住民が不穏な気配を感じるほどの庄に襲われたのであった

「は？何処そいつ？」

「許せんな」

「そいつには死なんて生温いですわね」

おおう何て殺意だ、流石は逢魔最高戦力…歩く戦略兵器の異名は伊達じゃないぜ

「だろ？だから3人と配下に出撃を命じる、俺も今回の件で堪忍袋の尾が切れた……さあお前達！お望みの戦争（デート）の時間だ！逢魔を舐めた奴は片っ端から殺すのが逢魔の流儀だ！！んで捕虜はHeavenの材料にしてやれ！！慈悲などいらん！歯向かう奴は全て殺し尽くせ！！死体の山でバベルの塔を築くのだあ！！」

『そんなんだから魔王って呼ばれてんだろが！！』

さて後はDEMを殲滅するだけの簡単なお仕事です

まあシリアスパートは此処までにし「ちよつと待てー！ー！」

「何ナツキ？」

「いやいや！あの刃王剣はどうしたの？」

「ああ、あの剣なら超超超嚴重なセキュリティの元で保管していると…何かその件でベアトリスが今度刀鍛冶を連れてくって」

「そ、そっか…」

「何か今回の件を報告したら【伝説の聖剣だと、刀鍛冶の血が騒ぐぜFOO!!】って言うて来ると」

「何処の世界にもマトモな奴はいないのか!!」

「いやあまさかグリモワールに目覚めて俺がアナザーストリウスになるなんてないやあ驚いた驚いた!後聞いてくれよ一夏の奴が俺を助けに来てくれたんだよ、あの千冬の背中を追いかけてた幼子がな…本当義弟の成長は早いよ…自慢の義弟だよ本当何処かの愚かな妹には彼の爪をアカを煎じて飲め…本当に…いや勿体無いな」

「お前は成長してないがな」

「ん?」

「な、何でもないぞ!!」

「そつか…取り敢えずナツキ」

何を思ったのかハルトはナツキに頭を下げたのである

「今回は助かったありがとう」

「どどど『黒龍剣?』違う!!どうしたんだよハルト!!」

「いや今回の件はお前の協力あつてのものだからな」

実際、ナツキの奴が八舞を足止めしなかったら大変な事になってたのは想像に固くなかつたし素直にお礼を言わないとダメだな

え? 一国の王が頭を簡単に下げるな? 俺に今更そんなプライドがあるとでも?

仲間や大事なものの為ならこの頭いくらでも下げると決めている

だが

「え？ハルト…俺に感謝するとか何か悪いもの食べた？」

この男は空気が読めなかったのだ

「猿武＋食技…次郎さん直伝」

「あ、あれ！ハルトさん!？」

「インパクトノツキング・ベリーウエルダン!!」

「ごふう…：…か、体が動かない…」

殺意全開のインパクトノツキングでこの男の動きを止めると

「ほーら新鮮なナツキだよお〜」

餌に飢えたヤンデレ（義妹， s & 船姉妹）の元へ放り投げると全力疾走で離脱したのであった

その後ナツキの悲鳴が聞こえたがハルトは全力で無視だったという

そして宴会の時を迎えた

「今回も皆の協力で事件は無事解決しました…細やかながらですが宴の席を用意しました楽しんでいただけると幸いです…では盃を飲み干すと書いてええ!!」

『乾杯』オーラア！

お馴染みの文字Tで開会を宣言したのであった

皆が思い思いに楽しんでいる中、ハルトは真剣な面持ちである席に近づくのである

それは今回洗脳された面々の場所

そこではまるで今回の宴会が最後の晩餐とも言わんばかりの表情を浮かべる面々の前で

「そ、その皆…楽しんでる?」

すると皆が気まずそうな顔をしている…いや君達さつき俺の制御云々でデイスをかましてたよな?

「わ、我が魔王…今回の件何とお詫びをす「質問に答えるお前達」はっ!何なりと」

「その…あの精霊の洗脳は解けてるんだよな?」

「はっ！全員正気に戻っております」

「そうか……なら良かった……ほんと……ほんと良かったあ……みんな……よかったあ……」

その言葉に安堵したのか今まで張り詰めていた緊張の糸が完全に切れたのかハルトの目からポロポロと涙が落ちるとまるで子供のように泣き始めたのであった

「ちよっ！我が魔王!?!」

「魔王様!?!」

流石の展開に家臣団は困惑するし、ネガタロス達は

(（うわあまたアイツら泣かせてるよ）)

とあらぬ誤解を生んでいたりした

「だつて…皆、俺が敵とか…ダサイ文字Tとか人の心ないような罵倒してくるしい!!」

『いや文字Tは割と通常営業じゃないか?』

「それ以上にあのまま俺の所にもどらなかつたらとか考える心配でえ!!」

「我が魔王…」

「お前達までイかれたら俺のクレイジーキャラが薄れるじゃないかあー!」

「あ、自分がイかれてる自覚はあったんだ」

「我が魔王?」

「さつきまでの感動返せ」

「それに…みんなないとご飯作ってもたのしくないし…。」

そもそもハルトが料理に手を出したのも最初は教わったからであったが根幹として

この家臣団と小さな部屋で切り盛りしている頃に皆が美味しいと喜んで食べる姿を見てからであったからだ

「みんないないならご飯作る意味ないし…帰ってこないならもう作らないってきめてたから」

その言葉に思わずゲストと新参以外の面々はウオズ達に最敬礼をした。それは

【我等の食卓を守ってくれてありがとう!!】

の一念であったのは言うまでもない、それには思わずキャロル達でさえも困惑した表情を浮かべていたのだから事態の深刻さが理解しただろう

「命令だ、もう俺を裏切るな」

「拝命します我が魔王、この身果てるまでお側に」

「ん、次裏切ったら…お前達にインパクトノッキング・ベリーウエルダンを叩き込む」

「因みにその威力とは？」

「ナツキが身動きできずにエルフナイン達にドナドナされた」

「」「肝に銘じます!!」「」

四天王達の姿を見て安堵し泣き止むとそもそもの疑問を口にした

「つてか、そもそも何でライブ会場いたの？俺さピースメーカーで待機って言ったよね？」

その言葉に家臣団は凍りつくもヤクヅキは淡々とした口調で

「ウオズがハルト坊の女装ライブを撮影しようとして会場に潜入した」

「ヤクヅキ!?!」

「事実であろう」

「ウオズちゃん……あれ」

「?……………っ!」

その言葉にハルトはそれはもう良い笑顔を浮かべるとコネクトの魔法でシンゴウアックスを取り出すと剛から借りた際に復元したシグナルチェイサーを装填したのだ

「あはは……」

『ヒツサツ!! マツテローヨ!!』

軽く素振りを始めた姿と信号の音が鳴り響く中、家臣団が堰を切ったように弁明する

「そうだよオズちゃんが言ったんだ! 俺達は辞めろって言ったのに!」

「私を売りましたね貴方達!」

『マツテローヨ!』

「黙れ! そもそも俺達は巻き込まれた側だ!」

「そうですよ! だからあれだけ辞めろと言ったんです先輩!!」

「わ、我が魔王! 私のお話を「大丈夫だよオズ、四天王も安心してね」っ!」

「魔王ちゃん!」「ハルト様!」

「おいフィーニス準備しろ」

「分かってますとも」

『イツテイーヨ!!』

「逝っていいってさ」

それと同時にシンゴウアックスを振り下ろすのとタイミングを合わせてフィーニスはアナザー1号に変身、全員肩に乗ると魔王から逃げ出したのであった

「待てやああああテメエ等ア！俺がどれだけ心配したか分かってんのかゴラア!!」

シンゴウアックスを振り回しながらハルトは気の済むまで四天王と追いかけることになる結果として涙目で謝罪する家臣団であったとき

そして遂にその時が来た

「あ、あの!!改めて皆さんありがとうございます!!あと良かったらサインお願いします!!」

『ああこの光景を見て安堵している自分がある』

そしてハルトはドライブ、ゴースト、エグゼイドからサインを貰うなり

「うおおおおおおおおお!!!」

「やったあああああああああ!!!」

「はあ…あのバカは」

「良いじゃない可愛いものよ」

「ヴェルザードだったか？あの旦那の奇行を前によく言えた」

「私としてはハルトが笑顔なら良いから……まあ彼方此方で女の子と仲良くするのは頂けないけど」

発狂して喜ぶバカ二人の背中でこっそりと炎を燃やす奥さん達　その中で

「あ、あの……仮面ライダーのみなさん……さ……サインお願いします……」

小さな子供がサインを頼んでいた

「あ、ありがとうございます！」

「あれ一人増えてる!?あの子誰！」

「なんか俺のガキの頃に似てる……あの頃と同じ綺麗な目をしているな」

『ほお貴様にもこんな純粹で心優しそうな頃があつたのか』

『今はカケラもないがな』

「一言余計…誰だお前？」

「初めまして、オリジナル…僕は魔王…あなたのクローンです」

「クローン？」

「ああ何かフリーガンの奴が新しい創世の器にしようと作ったのがコイツなんだと」

「へー俺のクローンか…：そりや大変だな〜」

『よりにもよつてこの脳筋のクローンか』

『生まれからして可哀想だ…』

『という事はこんな幼い子供でも何年か経てば女誑しのろくでなしになるのか』

「テメエら後で締め上げるから覚えてろ」

『つてアナザーWが言ってた』

「ほお…」

『だから俺のせいにするナ!』

『全部アナザーWの所為になる魔法の言葉だぜ』

「なら連帯責任で全員締め上げることにしよう」

「いやもつと驚けよ!!自分のクローンだぞ!!」

「いや俺の国の兵士もクローンだし色んな自分見といって自分のクローンとか言われてもなあ」

視線を向けるとハウンドと一緒に食事をするシェフィールドの姿が目に入る、君達はそのままできてくれ

「これが僕のオリジナル……皆が言ってたみたいにゴリラですな知性のカケラも無さそう……」

『ほお相棒のクローンにしては賢いな』

『オリジナルよりも知能も高そうダ』

『何て的確な表現だ』

「ああ!?!誰がゴリラだあ!目の前にいるのが未来のお前だオラア!!」

「ひい!そ、そんな……」

『おいハルト!! 何て最悪な未来を子供に見せている!!』

『未来ある子供の夢を壊すな愚か者!!』

『そりゃソウゴも最悪の未来の自分見たらお前と違うと言うわ!!』

『てかこの子もこの子でサイン頼んでたな…』

『この男の仮面ライダーへの愛は遺伝子レベルで刷り込まれてる訳だな』

「どーだあ！（ドヤア！）あとお前等そう思ってたの!？」

「何て大人気のない事を…子供にしたらだよハルト」

「あ、ナツキ生きてたか」

「ほんと…お前のお陰で大変だったんだからな!!身動き出来ない事を良い事にエルフナイン達に…押し倒されそのまま…:…うう」

「そんな事より八舞のメンタルケアしてこい、彼処で凹んでるから」

「そんな事!?!い、いやまあそ、そうだな…行ってくる」

「俺は俺でやりますかね」

く
ハルトは飲み物片手に七罪に近づくと隣に飲み物を置いて彼女の頭にポンと手を置

「大丈夫か七罪」

「うん…:…ねえハルト私「謝らなくて良い」え?」

「悪い事してねえ奴は謝らなくて良いんだよ」

「けど私、ハルトを…」

「あんなの攻撃された内に入らんさ安心しろ、俺は何があっても七罪を見捨てない」

「……………」

「だから安心しろ嫌とかじゃねえなら、ずっと一緒にいてやるから……………」

「うん……………うん!!」

小さな体で強く抱きしめる七罪に応えるハルトは泣きじやくる彼女を落ち着かせるまで付き合っただけだ

「落ち着いた？」

「その……………ありがとう」

「おう泣いた分ちゃんとお楽しんでけよ、んじや後は」

そのまま歩いていくと

「いやあ！今日もハルキちの飯で酒が美味しい!!」

「元氣そうで良かったよ二亜、大事ない？」

「あ、ハルキち焼き鳥おかわりー！」

「後でな……ちよつと面貸せ」

「ま、まさか！プロポーズ!?!」

「何でそうなんだよ……おい待て千冬！酔ってんだろ！危ないからサタンサーベルをしまえ!!」

そして宴会場から離れた場所で酒の入ったコップを渡すと

「ありがとねハルきち」

「気にすんな、いつもの事だ」

「いつもの事…それってオーマジオウって人に頼まれたから助けてるの？」

「ん〜どーだろよく分からん」

「ねえハルきち」

「あ？ああ追加の焼き鳥なホラ」

「ありがと〜…じゃない!!その…ハルきちはさ…私のことどう思ってるの？」

「ハイテンションなオタク友達」

「そ、それはそれで嬉しいけど……その……男女的な意味だよ……真面目に答えて……私はハルきちの気持ちを知りたいな……」

二亜の言葉にハルトは次の言葉に困ってしまうが答えは以外と出ていた

「特別だよ二亜はずっと」

「え……」

「じゃねえとわざわざあんな苦労して助けに行かねえし」

「それってその……千冬ん達と同じって意味でかな……」

「まあな……だから二亜の手は離さないよ必ず握り続けるから……後一つ、きつと悪い男を好きになると思うよ？それでも良いの？」

その言葉の答えはハルトの唇を塞ぐキスであった

「ふう……悪魔と相乗りして地獄までついてくから安心して」

「なら死んでもついて来い……まあ死ぬ予定なんてないんだけどね」

「うん、じゃあ改めて宜しくねハルきち」

「おう」

そして目線は俺のクローンに向かう

「しかし旦那様のクローンとは面白いね」

「こんな無垢な子供が大人になったら、ああなるのだから」

「本当大変だよー!!」

「ちよつとダメだよ、まだこの子には可能性があるんだから」

「それハルトには無いつて言ってるよね？」

「いや旦那様のアレは手遅れでしょ」

「……………僕も大人になったらああなるの？」

「安心しろ」

「キャロルさん…」

「お前もそうなる」

「断言された!!」

安心しなクローンよ…君も遠くない内にそうなるから

「嘘ですよね!?!」

万由里ジャッジメント 1話

宴会を楽しんだハルト達は翌日、逢魔王国

その玉座の間を集った逢魔の仲間達を前にハルトは王となる

「論功行賞を行うぞ、その前にウオズと四天王の的に洗脳され反旗を翻した件は聞いてるな」

全員領くのを確認すると

「洗脳されたとは言え造反は事実だ：しかし洗脳されていた点を憂慮して現四天王は解任、新しい者を四天王に任命する今から名乗る者は前に出る」

呼ばれたのは

ネガタロス、牙王、ゴーストイマジン

と功績を上げた者達の中に

「織斑一夏」

予想外の指名に騒めく玉座の間、一緒にいた千冬と束でさえ啞然とする中 本人は

「……………」

少しの沈黙後に

「ええええええええええ!!?!」

ワンテンポ遅れての反応にハルトはカラカラ笑う

「な、何で俺!?! いやそこはハウンドさんとかじゃないの!?!」

確かにと周りは頷く 幕僚長にして親衛隊隊長

ハルトの信頼も厚くライダーシステムを渡されるのも秒読みカウントダウンと言われる彼を差し置いて自分!と驚くしかない

「あの時、俺が失意の底に沈んだ際に駆けつけ更に希望の魔法使いに本物と認められたお前を正当に評価したまでだ」

「……………ええ」

「あ、因みに下剋上は認めるから腕に自信があるなら四天王の座を奪っても良いぞ」

ニヤニヤ悪い顔をするハルトが、そう話すと色めき立つ面々、自分こそが相応しいと息巻く者もヤクヅキ達旧四天王も返り咲く為の野心を燃やす

「いいかお前達、今回の件で逢魔には新たな戦力が加わったからな今まで通りならば先はない…新たな風を組織に通す必要がある腕に覚えあれば挑め! ってな」

新しい目標や刺激とは必要である

さて新四天王に挨拶と行くか

「ネガタロス、お前を新四天王筆頭とする…だがお前とライダー怪人軍団云々は別として考えているからそのつもりで」

「了解だボス、しかし義弟殿の扱いは？」

「遠慮すんな」

「分かった、宜しくな一夏」

「は、はい！けどハル兄、やっぱり俺には「荷が重いか？」うん」

「誰だって最初はそうだ俺だって、王様なんてならない！って言ってたけど頼れる仲間

のお陰でちゃんんと王様やれてんだから安心しろ副官は置くから細かい事はそいつに聞け…あと前にも話したが俺が何かを頼むのはそれが出来ると判断した奴にししか頼まない、出来るさ一夏」

そう答えて玉座の間から出ると千冬が慌てた様子で

「ハルト！お前何を考えているのだ一夏に四天王など」

「大丈夫だよ千冬、一夏は強い俺達の思ってるより成長してるよ」

「だ、だが…あいつは半人前で「過保護は嫌われるぜ千冬」む……なら愚痴らせろ夜付き合え」

「はいはい分かりましたよ」

「うむ」

千冬の頭を撫で落ち着かせるハルトは笑顔で応えると

「よし！取り敢えず王様として仕事しますか！」

そうハルトがノビをしながら呟くと玉座の間に響くシャッター音…まさか

戻ると二亜が取材なのか玉座の間を撮影していた

「いやあ！流石ファンタジー世界のお城だねえ！！あ、ハルきち！あそこの玉座に座って
！」

「まあ俺の椅子だしな」

ハルトは頬杖を吐きながら玉座に再び座ると二亜は興奮しながら絵を描いている…
こいつ俺をデッサンモデルにしてやがる

「はあ………んで今何書いてるの？」

「えーとねえ、王様になりたい普通の高校生の所に自称臣下の未来人と王の命を狙うレジスタンスが会って更に歴史改変を狙う悪の組織の陰謀が重なった結果新たな歴史が生まれるって話」

おい待てこの漫画家

「二亜、その話俺よく知ってる…それ仮面ライダージオウや」

「何ですトオ！やはりこのアイデアはベタだったか」

「戯け我等が石○森大先生がとうに採用しておるわあ!!何ならその物語をリアルに体験してる人と話した事あるわあ!!」

「是非取材させてえ！お願いい!!」

「これが新しい日常だったりする…普段と変わらない所もあるが変わってる所もある

「ねえハルト…」

「どうした七罪？」

「あの……その……」

言いにくそうなのを理解したハルトは膝をポンポンと叩くと

「良いよ、ほら座りな」

そう言うと七罪はハルトの膝上に座るのであった

「そう言えば私のルパンガンナーはどうするの？あの怪盗にあげたのよね？」

「うーん……まあアレだな変わりを探さないとな」

「二亜にもライダーシステム渡すの？」

「まあ考えてはいるよ流石にDEMの件もあるし油断出来ないからさ」

残念な事に逢魔に参加しなかった怪人もいる

ルパンは泊進ノ介さんと決着をつけるべく華麗にアデューしたり

戒斗さんは「俺は俺の力で世界を掴む！」と言うなり白スーツが別世界へ連れて行ってしまったのだ

因みに

「……………おいハルト」

「…その位置はボクのだよ……………」

その光景を見て嫉妬する鍊金術師と紫の悪魔がいたという

さて今回の件でスタンスの違いが明らかになったとは言えラタトスクとの関係は継続していく事にする　まああの精霊に関しては何があってもノータッチだ　助けるなんてしない事にする…次顔見たら恐らく、あの子の頭から綺麗な赤い火花が咲くだろうから

んで、ここからが俺にとって案件だ

「流石にコレは不味いだろう」

『ノリと勢いで生み出したらダメな奴だな』

ピースメーカー内部で嚴重に管理されている青の聖剣　刃王剣　前回作ってしまった以上は責任を持つべきだが

「グリモワールとクロスセイバーとか笑えねー組み合わせだな世界を滅ぼせるか新たに

作れる……てかさ」

鎧武、セイバー、ギーツとどれだけの神様格が集っているのだとボヤきたい……が

「それだけライダーの皆様とエンカウント出来るんだよなあ……やばい燃えてきたな……
ふふふ……」

『ええ相棒、頭のネジ緩みすぎ』

とドン引きするしかないアナザーライダー達である

「先ずはベアトリスが言ってた刀鍛冶の人を待つしかないな」

い
聖剣に関しては彼女が適任だろう、本当ならファルシオンの俺に話しかけるべきと思

宴会後電話で

「もしもしファルシオンの俺？魔王だけど」

『もしもし、あ？魔王久しぶり〜』

「実はクロスセイバーが出来てな『話はベアトリス先輩から聞いてるよ』なら話が早いな
そっちで預かって貰ったりできないか？流石に伝説の聖剣は無銘剣と同じとはいかな
いだろ？」

『そうしたいのは山々だけど、こっちも今立て込んでるからな…ああそうそう前会った
魔王の俺だよ』

「あ、誰かといるなら切るけど」

『大丈夫大丈夫…あ、はい！その一斗缶プリンは俺達のです！』

「バケツプリンでない!?一斗缶!?お前そんなの食べてんの倒れるぞ!!」

『流石に一人じゃ食べないよ…しのぶと一緒にさ』

「ああ煙の剣士さんだっけ？ いやいや二人でも無理でしょ」

『大丈夫だ他にもいるから！』

「まさか女の子？」

『そだよ？ えーと…後輩剣士の真菰ちゃんというよ？ 3人で食べるんだ』

「そう来たか！ この女誑しめ！！」

『失礼だな…純愛だよ』

この男…まさか他にもいるのか!! と驚くが自分も同じだったと気づく

『はい、なので早く通話切ってください』

『邪魔』

「マジで俺、デートの邪魔者じゃねえか後はベアトリスに頼む事にするから!!」

『いや別に気にしてないぜ流石に伝説の聖剣絡みとなりやソードオプロゴス全体の問題だベアトリス先輩だけの話じゃないからな』

「そ、そっか…」

『取り敢えず先輩の話した通り刀鍛冶の人を送ってからの話になるが…デザスト!? お前何やってんだよ! それヒナタのケーキだぞ!』

「ヒナタ?」

『そつ、ヒナタ・サカグチさん最近 時刻剣に目覚めた剣士でな強いなのって【再界時!】あ、相棒……!!』

「いや待てそれ俺の国を狙ってる敵……切れた……なんてこつたい！」

別の世界の奴とはわかるが不安しかないな！

そして

「ハルトさん！紹介します彼が刀鍛冶の大秦寺さんです」

「よろしく……」

手で顔を隠して視線を逸らしているが間違いない！

「仮面ライダースラッシュ……本物だあ！」

ハルトは目をキラキラ輝かせているが今回は仕事と自製してピースメーカーに管理している刃王剣の元へと案内すると彼はまるで展示されているトランプットを見る子

供のような目をして

「これが伝説の聖剣！刀鍛冶の血が騒ぐぜFOO!!」

テンションがはじけたのである……本当にギャップ凄いなあ…

「いやあまさか大秦寺さんが彼処までテンションが上がる逸品とは流石は伝説の聖剣」

「これに火炎剣烈火や水勢剣流水に無銘剣虚無があると知ったらどうなるか」

そう話すと大秦寺の手がびくりと止まると

「あるのか？」

「え？ありますよ」

「是非見させてくれ」

その言葉にハルトは即答したのであった

と言うわけでナツキと士道を呼び出したのだが

「こんなにボロボロになるまで酷使するなんて…何を考えているんだ！」

「す、すみません!!」

いやまあそうなるよなあ〜と遠い目をしていたがベアトリスがフォローするように

「仕方ないですよ、そもそも彼が聖剣に選ばれたのは最近なんですから私達のような存在を知らないのも無理はありません」

「ベアトリスさん…」

「だがこのままでは聖剣がダメになる、至急メンテナンスするお前達の剣もだ」

「俺のも!?!」

「見て貰えよナツキ、良い機会じゃねえか何せ俺達のは変則的な覚醒で手に入れた聖剣だからなちゃんとして見てもらおうじゃん」

「お前の無銘剣とベアトリスの雷鳴剣もだ。見せてくれ」

「分かりました…:お願いします!!」

と全員の聖剣を預けたのであった

「どうしよう…:」

士道からしたら天使以外で使える自衛手段の喪失は痛い 前回、美九に仲間が洗脳された結果天使が使えなかったという点からも剣士としてのレベルアップを果たしたいのに…:

「メンテナンスって」

「どんな名刀も手入れを怠れば鈍となる…それに聖剣だつて休みは必要だよ土道くん」

「ナツキさん…」

「それに良い機会だ君の自力を高めるチャンスと思えば良い」

「自力を高める…」

「今回の件で分かったら、俺達が敵になった時どうなるか…その時守りたいものを守るのは君だ…今の君では本気のハルトを前にした時…灰すら残らないな」

「っ！」

「と言うのは建前、実はハルトから精霊 美九を庇い立てたお仕置きとしてロードオ

ブワイズと組み手百回しろってさ」

「!!!」

同時に士道の肩にポンと置かれる手…恐る恐る振り向くと

「炎の剣士よ楽しい楽しい訓練の時間だぜえ!!」

「「ヒヤッハー…!」」

アナザーストリウスの所為でネジが抜け落ちた四賢人が立っていたではないか

「い、いやああああ助けてえええええ!」

「ごめん士道くん、俺としても今回の件は弁護しないから地獄を見てこい」

「そんなあああああ!」

ドナドナされた土道を見送った後、自室に戻ったナツキを迎えたのは

「さあナツキよ、今日は私達姉妹とデートに行こうではないか！」

「首肯、私達はずつと一緒です」

両腕をホルルドする八舞姉妹である、それに対して

「さーて…ハルトさんが妹さんから奪った新しいドライバーの試験と行きましようか…
何故か不思議と親しみを覚えるので」

『ドレッドドライバー』

「最近キャロルと開発したレプリケミーカードで…ふふふ…あははは!!」
スチームライナーのレプリケミーカードを読み込ませる前に止めに入る

「え、エルフナイン！落ち着け!!そのベルトはあかんで!!何か呪い的なのがありそうだ

から辞めような!! 疲れてんだゆっくり休め!!」

思わずナツキは関西弁になりながらも止めに走るのであった

—————

とまあそんな感じで怒涛な日常が続く中 この世界も動き出す

まずDEMが倒産 理由は社長失踪だが実際は件の違法兵器製造やら人体実験やら色々と玄さんにリークされた情報の賜物であろう

恐ろしきデザグラ運営と戦慄したが何も知らない社員の人には悪い事をしたな…そう思ったので白スーツの紹介で新しい会社を推薦したのであった

「取り敢えず平穩に戻ったな…」

逢魔に落ちる空間震の被害も減少傾向にある…事態の終幕も近いのであろう これなら遠くない内に逢魔へ帰る事も可能だ

「何というか帰る場所が変わってるな…皆の居場所を守るのも王様の仕事だな…頑張らないと」

『無理も無茶もするなよ』

「はいはい程々にするよ、取り敢えず…今はゆつくり羽を伸ばしたいな最近怒涛の展開で疲れたし夕飯の仕込みまできゅーけーい！」

ベットに飛び込むとハルトは数秒で寝落ちした

までは俺の記憶にあるのだが

「なーんで逢魔にいた俺がこの街にいるんですかね？夢遊病か？」

目を覚ますとそこは来禅に立っていたのである、取り敢えず迎えに来てもらおうとスマホを取り出すが電波が入らず誰にも繋がらない　つまりこれは

「っ！ピースメーカーの夕飯が大変だあ！」

『まずは市街地なのに仲間と連絡が取れない、この異常事態に危機感を覚える!!』

緊急事態だあ！と慌てるハルトの理由が所帯染みてるなあ…

「だって考えてみる彼奴らだけでピースメーカーの台所を賄える訳ないだろう！メイド隊でも出来ないさー！」

『そもそもロイヤルの最精鋭相手に一分野だけとはいえ優れてるお前はなんなのだ？』

「なーんてね、こんな事もあるうかとアナザーディケイドの力でオーロラカーテンを潜れば直ぐにも戻れ……あれ？」

おかしいな展開して超えた筈なのに戻らないぞ…ふむ

「相棒手抜きした？」

『そんな訳あるか！どうやら俺達はこの街に閉じ込められたようだな』

本来なら慌てふためくのが普通なのだろう

「此処は何処！俺はナツキ!!」

彼奴みたいにだが

「そつかあ閉じ込められたかあゝ……ならこの世界を破壊するか」

『突然の破壊者ムーブは辞めろお!!』

『どうした急にそんな事言って!』

「夢なら覚めるかなってさアナザーW、何かわかる?」

『残念だが不明だな街から出られない……と言うより』

「街の外がないか?俺やナツキを隔離出来る実力者の存在や能力とかも考慮しないとダメだな、取り敢えず今は落ち着ける場所に移動して状況整理だな、今優先すべきは仲間と合流そして外部への連絡手段の確保するべきだな」

『あ、相棒が普段使わない頭を使っているぞ!』

『こんなに嬉しい事はない!』

『これはいつぞやの知恵のハルトだあ!』

と騒ぐアンポンタンどもには後で仕置きするとして

「ナツキ」

「ハルト! 此処は何処なんだよ! さっきまでエンタープライズとお茶してたら急に眠気が襲ってきて……その後の記憶がないんだ! 確かホーネットの声も聞こえて確か……姉妹で既成事実がどうか話すつて夢を見たんだ!」

「それはそれで事件の香りがする夢だな」

『いや相棒、これって……』

「考えるのやめた!」

深くは突っ込むまいと目線を逸らすも互いに現状の確認をする

「んで何で俺達此処にいるのさ?」

「知らん…分かってるのは夢遊病になったか異常事態に巻き込まれたかだ…クソツ!このままじゃ皆の夕飯が危ない!ふざけんなよ!晩飯は三日間熟成させた牛豚鳥の生姜焼きなの!!」

「嘘だろ!!それなら早く解決しないとな!!」

『おいヨダレ出てるぞ救世主』

「取り敢えず状況を把握出来そうな奴を呼ぶか」

「え?…あつ!!成る程!!」

そしてハルトとナツキは互いの体に刻まれた令呪を使う事にした

「セイバー!!」

「来てジャンヌ!!」

すると二人の令呪は一画消えてしまいがやむを得ないと呼び出したのは黒い装束を纏う二人の女性

「呼んだかマスターー!」

「まったく…何してるのよアンタは!!」

「ジャンヌ、良かったあ!!」

ハルトは喜びながら抱きつくどジャンヌは顔を赤らめ手をあたふた振る

「ななななな何すんのよ!!」

「それより今どうなってるの?」

「それはこっちのセリフよ！アンタが寝たまま起きないって心配してんのよ皆!!そしたら令呪で呼び出されて…」

「此処に来た訳だマスター」

「成る程…そうなる…あれ夢じゃないのか!」

「ああエンタープライズとホーネットがそれはもう良い笑顔で寝てるマスターを抱えて走って行ったのをマドカ達が止めに入って大変な事になっているな」

「うおおおい!早く目覚めないと俺が大変な事に!!」

「別にどーでも良いなあ」

ハルトは興味ねーとノビをしていたがジャンヌがポツリと

「因みにアンタが寝てる影響でピースメーカーは慌てながら夕飯ないって騒いでるわ」

「うーん…俺がいなくて指揮系統がない!とか組織として求心力がないとか王様いなく

て心配!とかじゃなくて今日の飯の心配してるのは平和な証拠だな!」
『逆にそれで良いのか王様!?!』

それなら大丈夫だなと頷くとハルトであるが

「取り敢えず今は夢の中? 或いは幻覚? のような場所で俺達は隔離された…という事だな…:…はてさてどうしたものか」

『相棒の頭の回転が良い時、それは良くない事の前触れだ』

そんな中 ナツキが話す

「これが夢の中なら何で令呪使って2人を呼べたのさ?」

「ああそれは私のせいだね」

その声に反応するように全員が臨戦態勢を取る

「え？ちよつ！待つてくれ私は敵じゃない！だから武器を下ろしてくれ！」

声の主は慌てたように手を振りながら宥める、現れたのは白い服と杖を持ったフードの女性だな

「ハルト……この人！」

「ああ強いな」

2人は最強フォームになるウォッチを取り出すがフードの人物は冷静な態度を崩さない

「待ちたまえ私は味方だよ！だから本来令呪で呼んでもこれない2人を呼んだんだ！」

「……………色々詳しそうだがお前何者だ？」

と尋ねると彼女はフードをとり名乗る

「初めましてだね私は魔術師マーリン！人類の物語を見届けるものにして常葉ハルト！君の奥さんのひ「約束された勝利の剣!!」「吼え立てよ、我が憤怒!!」うわああああ！」

マーリンと名乗った女性が堂々と名乗ろうとした時 まさかのセイバーオルタとジャンヌオルタが宝具を使ったではないか

「ちよつと2人とも何してんの!？」

「本当だよ！宝具をいきなり使うなんて!!」

『その前に気になるフリーズが出てきたぞハルト!!』

『お前初対面の奴に妻自称されてるぞ!!』

「何も聞こえないぞ俺にはハルトの妻を自称する人の事なんて、戻ったらキャロル達の地獄が待ってる…ん？あれ…こんな指輪持ってたかな？ハルトこれ使ってみ」

「え、おう」

『フォウ撃』

「は？何この指輪？お前変なの渡すな……あ？」

疑問に感じた刹那 魔法陣と共に放たれたのは白いモコモコした狐？のような生き物だった

「マーリンシスベシフォーウ!!」

「あだあ！この使い魔め!!」

それはマーリンの額に肉球パンチを叩き込むと出した魔法陣に戻り姿を消したのであった

「あれ？フォウが見えた気が……通り魔アタックしたような……」

「気のせいだ……あの魔法はきつとオーディエンスが作ったものだろうな」

「お、おうオーディエンスやべ…」

「それでマーリンだっけ？お前何で俺の味方するの？」

「それは君と契約しているサーヴァントであり、君の奥さんの一人だからね！」

「おいコック」

「誰がコックだ!!一流が抜けてるぞ」

「忌々しいが料理スキルだけは高いからな…お前、マーリンと契約したのか？」

「いや俺はジャンヌとしか契約してないんだけど…ん？マーリン？」

確かクジョーの奴が言ってたな…マーリンも俺の奥さんとか何とか…ふむ

「記憶違いだな」

「違わないよ私は君の奥さんなのさ!! まあ未来で会うだけどね!!」

「う、胡散臭え…」

「奇遇だなコック、私も同じ気持ちだ…本当に…何故コイツに唆されて選定の剣を抜いたのだ私は!」

「残念ね冷血女!! こんな胡散臭い詐欺師に騙されるとか!!」

「黙れゴリラ」

「なんですつてエ!？」

「はいはい喧嘩しなーい!」

「つか待てよ……喧嘩してるのに街が静かなのおかしくないか！2人の宝具を使ったのに」

「うーん……壊れてもアナザージオウⅡの力で治せるから大丈夫じゃね？」

あつけらかんと答えるハルトであつたが

「取り敢えず移動するか……マーリン、お前もついてこい」

「勿論だよ……では失礼して」

ナチュラルにハルトの腕を組むマーリンにジャンヌオルタは私服に着替えると張り合うように逆の腕を組む

「ジャンヌさん!?!」

その光景に

「うわぁ大変だな…行こうセイバー…あれ？」

よく見ると新宿衣装の彼女が自分の腕を組んでいるてばないか

「セイバー？」「マスター…」はい？」

「私というサーヴァントがいるのに何故、他の女にうつつを抜かしているのだ？」

「あ……あれ!?アルトリアさん!?う、腕ガア!!」

そのままサーヴァントの力で関節が明後日の方向に曲がりそうなナツキをスルーして取り敢えず移動したのであった

――

その頃 現実世界では

「起きろハルト!!…くそっ!寝たままか」

「まあハルク最近頑張ってたから少し寝かせてあげようよ」

「そうなる今日夕飯はどうなる?」

「!!!!!!」

「そこは私達で作ろうという発想にはならないのですね」

「だってハルトさんの方が美味しいですし」

「旦那様の方が上手いのよ」

「ベアトリスとアンティリーネは料理作れないだけでしょ」

「そうなるよ……だが一夏には無理だな……」

「よしオレ達の方でハルトを起こすようにアプローチをかけてみるぞ」

「キャロルの言葉に全員が頷くと束は抜け駆けするようにハルトを俵持ちして走り出そうとした

「ではまずは科学的視点からアプローチするよー！その為にハルくんのお包みをは「させるかあ！」キャロりん邪魔しないでくれるかなあ！！これは医療行為だよ！」

「何を言っている万年発情三月ウサギ……貴様寝ているハルトに何をやる気だ？」

「そりゃナニかな」

「そんな真似させるかあ！それなら順番からしてオレからだ！錬金術視点からのアプローチでハルトを起こしてみせる！」

「そうかあ…キャロりんは邪魔するんだね…：…じゃあ死んでもらおうかあ…」

「東、草加スマイルは辞めろ起きてたらハルトもドン引きするぞ」

「ちーちゃんは良いの！今なら寝ている無抵抗なハルクんにあーんなことやこーんな事が出来るんだよ！」

「あ、あーんな事やこんな事にそんな事だとお!!」

「いやそんな事は言つてないよ千冬」

「だ、だが錫音…最近ハルトといる時間が少ないという事を感じないか？」

「確かに…つまり今のハルトを攫えば独り占め出来る？アンティリーネ行くよ」

「ええ…ベアトリスとベルファストはどうする？」

「でしたら参戦しますか」

「ええご主人様の眠りのために私も一肌脱ぎますか」

一触即発の面々であるがウオズは冷静に

「取り敢えず我が魔王の安全は確保しますかヤクツキ」

「賛成じゃな」

此方でも熾烈な戦いが幕を開けていたのである

新年短編十萬由里ジャツジメント2話

前回のあらすじ

謎の力で夢の世界に閉じ込められてしまったハルトとナツキ達 令呪を使いアルトリア達を呼べたのも束の間 突如現れた謎の美女 マーリン…ハルトの妻を自称する彼女は敵か味方か

「敵だマスター、退け…私がカリバーする」

「落ち着いてアルトリア!!今カリバーしたらダメだからせめて話は聞いてあげよう!!」

「離せマスター!!私がやらねばならないのだあ!!」

「やれやれ此処のアーサーは短気だなあ」

「その原因の何割かはお前にあると思うぞ」

「そうかな？うーん……あ！そうとも！全部私の所為さ、あはははははは！」

「ああ間違いなくお前は俺のサーヴァントだよ、そこで戦極凌馬を選ぶ辺りな……はあ……んでマーリン、お前は何者で此処には何しに？」

『間違いなく相棒の精神汚染を受けているな』

『それも高濃度な奴をな』

「精神汚染してくるのはお前達だろうが」

『それは最初だけだ！俺達はお前との長い付き合いの結果、あらゆるミーム汚染を喰らったんだ！』

『その結果俺達の紳士性はドブの底だぜ！』

「か、カウンセリングしないとダメだあ……」

「ああそこからだね、では王の話をしよう」

「あれ？ 宝具使う？」

「マーリンは夢魔であり夢に自由に出入り出来るのは知っているが、彼女はアーサー王が亡くなったカムランの落日の後、アヴァロンに引きこもり人類の物語を眺めている筈なのだが……」

「まず私の体は此処とは違う世界で眠りにについているんだ」

「何で？」

「それはまだ未来の事だから今の君は知る必要はない」

「ウオズのセリフ取ってんじゃねえよ」

「だが流石に寝たままは退屈だから精神だけ別世界に飛ばしているんだ…そしたらマスターが夢の世界に閉じ込められているじゃないか、そんな面白いてんか…ごほん…マスターのピンチを見て見ぬふりなんてサーヴァントとして出来ないよ！」

「おいコイツ、面白いつて本音漏らしてたよな」

『ああ欲望に素直なのは相棒に似ているな』

「俺の何処が欲望に素直なんだよ、こんなに王様として自制しているというのに」

『仮面ライダーに会ったらサインを頼むだろ？』

「へ？何常識を言ってるの？サインもらわないとダメじゃん世界共通の認識だろ？」

『ダメだこりゃ…』

「つまり…マーリンは未来で会うサーヴァントで肉体は何処かに封印されてて精神体…それで俺のピンチを見て駆けつけたって所？」

「そうそう、その為にグラランドサーヴァント特権で2人を参戦させた訳さ…でないと大変だろうからね」

「マーリン…」

「さて、これで私は味方だと信じて貰えたかな？」

「騙されるなコックよ！この女は別世界の私で双六をして楽しむような奴だ人間を昆虫と同じにしが見えない精神構造をしているぞ！」

「つまりマーリンは男なら虫にも欲情する変態って…事！いや確かに俺の怪人態はバツタだが…え？マーリンまさか…そんな趣味が…ごめん流石にちよつと…」

「凄まじい誤解だねマスター！あくまで精神構造が虫云々は彼女の例えだよ!!」

「なら何で俺の妻を自称してるの？」

「自称ではなく妻なのだが…まあアレだね私が君の夢に來た際に私に欲情した君が嫌がる私の体をベツトに抑えつけて、あーんな事やこーんな事をされてさ…もうマスターは鬼畜なんだから♪」

「ハルト、お前…嫌がる女性になんて事を…」

「なんつーか身に覚えがない事で責められるのはもう慣れたよ何せキヤロル達からは増える予定の嫁で何度締め上げられた事やら…その度に死と再生を繰り返してるよ」

『増やすのが悪い』

『いやな慣れだなオイ』

『お前にファイナーレはない』

『不穩だぞアナザーウィザード！それだと相棒が太陽まで打ち上げられてしまう!!』

とんだ風評被害だ、頭ピンクの淫魔め

「取り敢えずジャンヌ燃やしてくれる？」

「任せなさいマスター…汚物は焼却処分よ」

「ベリーウエルダンでヨロ」

「あれえ！そこはキレてマスターを締め上げる場面ではないかな！ジャンヌちゃん!!」

「貴方は勘違いをしているわ、マスターは女性に押し倒されて搾られても女性を押し倒す事はないの夜の戦いでは基本受け身のヘタレで押しに弱いのだよ!!マスターにサディズムが生まれたならそれはそれで良いと思うわ!!」

「お前はお前で何をカミングアウトしてんだ!!」

本当に大丈夫か このパーティで心配していると向こうから駆け寄る人影が

「あ、ハルトさん達だ!おーい!!」

よく見れば士道と精霊達が何人か駆け寄ってくるではないか

「耶俱矢、夕弦!」

「ナツキ!!」

飛び上がる2人をキャッチするとそのまま抱きしめるナツキ…うむ悪くない対応だ
が

「マスター、そこを退け…前から気にしていたんだが…エルフナインといい此奴とい
い何故マスターと近いのだ…その位置は私のものだ…そうとも私のものなのだあ!」

「アルトリアさん!? 誉れ高き騎士王がそこまで狂いますか!？」

「今ならランスロット卿の気持ち分かるぞ! この気持ちが愛だとな!」

「その愛を少しで良いからモードレッドに向けたげて!!」

その頃 シーカー世界にいたモードレッドがくしゃみをしたのは内緒である

「おいナツキよ、何故そこに騎士王が此処におる?」

「肯定、私達の逢瀬の邪魔をしないでください」

「黙れ! 貴様等がそうくるならば!」

そう言うとなんとアルトリアは霊基を書き換えたのか その姿を馬にのり馬上槍を構える姿、かつて霧の都に訓練した騎士王その人 ランサーアルトリア・オルタになつたではないか

「え、アルトリアってそんな事出来たの!？」

「ああ…それでどうだマスターよ私の体は…そう言えば以前、貴様は言ってたな異性の好みは金髪巨乳のお姉さんだとな」

「何で此処でカミングアウト…っ!」

おかしいハルトの殺意が俺に向かってる!？」

「あれ?つまり金髪巨乳だと…それだとキャロルもストライクゾーンにいるのかナツキ?だとしたら俺はお前を「そんな訳ないだろう!外見の好みと性格は別だよ!」つまり…キャロルの性格が宜しくないと言いたいのか!あのツンデレなキャロルを見てときめかないとかお前頭イカれてんじやねえの!!お前知らねえだろ!普段はつつけんどんな態度を取るけど2人きりの時は服の裾を少し引っ張って上目遣いとかして可愛いんだぞ!!」

「どっち選んでも地獄確定じゃねえか!!あとイカれてる奴にイカれてる言われたのは凹むんだけど!!あと性格で言うのはお淑やかなエルフナインの方が可愛いだろうが!!」

「ヤンデレ化して今じゃ投薬とかしてくるじゃねえか!俺の可愛い義妹を返せ!」

「うるせえ!そんな愛の重いエルフナインもかわいいだろうが!」

「おいマスター、私がいるのに他の女の子の話をするな」

ランサーオルタは姉妹所か他のナツキラヴァーズも圧倒する胸囲をナツキの顔に押し当てて勝ちを誇示しているではないか

「そ、そんな!」

「驚愕!あのボディを前にしたらマドカや耶俱矢のぺったんこボディでは勝算がありません!」

「何お!!最近マドカと共に努力しておるの知らんのか!!というよりナツキの嗜好はそ

んなのだったなんて…私は…」

「嘲笑 無駄な努力ですね」

「許さん、許さんぞ夕弦!!」

「受けて立ちます!」

まさかの乱闘が幕開けているがハルトはマーリンに聞いてみた

「何でセイバーは他のクラスに変わったの?」

「実はナツキくんの死に戻りで契約したサーヴァントにはセイバー以外のアルトリア・オルタとも契約しているんだ、だからその魂に刻まれたパスを辿れば霊基を書き換えるなんて荒技が可能なんだね」

「スカサハみたいなものか…つか何処の世界線でもアルトリアと契約してんのか? 一体

何処の正義の味方だ？」

「まあ近いかな。それよりもマスター……こほん」

「何だよ？」

「私と契約して魔法使いになってよ！」

その台詞は悪徳な奴が使うものなので

「アナザーウィザードになれるので魔法使いは間に合ってます」

「しまった！違うよマスター私とも主従契約してって話、今のままだと魔力関係で役に立たないからね……では改めて」

と一息いれて

「私のご主人様（マスター）になつてよ」

「人前でそれ言える度胸はすげえよ」

胡散臭い…。この女を信用してよいのか？今までのが全部罠という可能性もある…だが敵なら態々邪魔するような戦力を外部から招き入れるなんて真似するか？…となれば完全な味方？マーリンの話が全部嘘という可能性も…

ぶつぶつとハルトが真面目に考え込む姿に士道は

「ハルトさんが真面目に考えてる！あの人真面目に考えるとか出来たんだ！頭の中が仮面ライダーで埋め尽くされてるとばかり」

「それは失礼だぞ士道くん！確かにハルトは服を着た理不尽とか脳筋と皆にバカにされる事はあるが人並みの思考回路はあるんだ！」

「ナツキ……死に戻つて寝ないように対策するつて選択肢を選ぶのか？さーてナツキが

餅に見えたから餅つきするかあ!!」

「いや待て殺すなよ! 悪魔か!!」

『呼んだか?』

「え? 誰?」

凄い失礼なことを言ったお礼だ戯け…だが現状断る選択肢はないな

「OK、契約しようマーリン」

「ありがとうマスター! では早速このまま休憩するホテルにもでも「おいこの淫乱ピンク何とかしろ」冗談だよ冗談」

「取り敢えずフォウ撃連射の指輪を使おうかな」

「え？ちよつと待ちたまえ！あの巨獣が連発してくるなんて悪夢でしか無いんだけど！」

「その頭にもう一撃！」

『フォウ撃』

「マーリンシスベシフォーウ!!」

「あいたあ!!」

「おいシドー、休憩するホテル？とは何なの「十香は知らなくて良いからな！そのままできてくれ!!」う、うむ分かった」

「はあ…危ないったらねえ「お義父さん」おお折紙お前も来てたのか」うん。マーリン」

「何だい？」

「私に士道をそのお城的なホテルに連れて行く方法を教えて欲しい」

「辞めなさい折紙!? まだ君には早いよ!」

「お義父さんと錫音お義母さんが若い頃はよくいつ「折紙少し黙ろうか」うん」

久しぶりの家族の団欒といきたいが今は後である

「ハルきちー!」「ハルト!」

「2人も無事だったか!」

「まあね」

「……………はっ! そうだよ二亜の囁告篇帙なら調べられるんじゃない!?」

「もしくは六喰の天使でも世界の壁を開けられたりできるんじゃない」

「試してみるかの主様」

「よし！じゃあ私も頑張っちゃおうぞー！」

2人が天使の力を使おうとした時

「きゃあああああああああ!!」

聞こえた感高い悲鳴に全員が振り向くと

「お前…確か」

前回の事件で完全にハルト達にトラウマを植え付けられた精霊 美九であった

「あ……………ああ……………」

まるで怪物にでも会ったかのような怯えぶり…いや市街地でクマに遭遇したような顔だな

『というより野生のラスボスとエンカウントしたようなものだろ』

「野生のラスボスって何さ?!」

「取り敢えず音符眼魔呼ぶか? この女は何するかわかったものじゃない洗脳とか催眠とかされて利用されるとか最悪だしな…まあ俺には効かないけど」

「賛成かな…ハルト」

「布留部由良由良…」

「え? マーリンさ何呼ぼうとしてる?」

「うーん……ビースト?」

「何、人類悪顕現させようとしてんだ!!」

「愉快犯気質はここでもかあ! 寧ろハルトと契約した影響で性格の悪さに拍車がかかっ

てるうー！」

「失礼な奴だなあ！」

『的確だぞ？』

「そんな私よりもあっち止めた方が良いよ〜」

「は？……っ！」

「これは憎悪によつて磨かれた我が魂の咆哮」

「突き立て！喰らえ！十三の牙！」

「アルトリア落ち着いて！今は内輪揉めしてる場合じゃないから!!」

「ジャンヌ〜やっちゃって」

「お前は止めろお!!」

と何とか2人を落ち着かせた後

「士道くん、早く説明して!!」

「はい!!」

士道の話はこんな感じ

自分と精霊達もこの世界に来た、その際に現れた謎の影?から告げられた

「私は君たちを見定めるものって」

「見定める?何様のつもりだよ」

『オーマジオウが見定めた時もそう思ったのか?』

「そんな訳ないだろう…寧ろ全力のあの人と戦いたいとすら思ったまでだ」

「なんて見事な手のひら返し…というかマジで挑む気なのライダーの王に」

「向こうがライダーの王なら俺は怪人の王だ何を恐れるものがある」

「そう言うところは素直に見習いたいよ」

「ふむふむ多分だけどコレさ精霊と関係を持った人を見定めると言う意味があるんじゃないかな？」

「成る程…確かに俺、ナツキ、少年は精霊と恋愛関係があるな」

「ハルト…どうする？」

「取り敢えずデートすればOKな感じか？」

「ハルきちのような勘の良い人は好きだよ」

「俺も二亜みたいな人は好きだよ……しかし街から出られないとなると二亜のデートで一番良いアキバに行けないのは痛いな」

「まあその辺は置いて」

「となるとアニメの聖地巡礼か？」

「私と普通にカフェとか服屋でデートしないかいハルきち!!」

「え!?!二亜からオタク要素取ったらただのお酒好きでお茶目な美女じゃないか!」

「ハルきち!!いきなりの落差に私の心臓はドキドキで壊れそうだよ!」

「おい、この女誑しなんとかしろ
!!!!!!」

「流石お義父さん…この手口で何人もお母さんを増やしたのか」

「今折紙から不穏なワードが聞こえたんだけど…気にしてる場合じゃないな」

「だから士道、私が正妻なら他のお嫁さん娶るのは許す」

「え、いや待つ…コレ絶対ハルトさんの影響ですよね!!」

「だがデートで服屋には行った事なかったな…コースに入れると皆反対すんだよなあ」

『お前と行くとセンス矯正でデート所ではないからな』

「私は良いから行こうハルきち」

「ああ行こうか、七罪はデートどこ行きたい？」

「わ、私なんかの行きたいところなんか「なんかじゃないよ」そんな…」

「七罪とだから俺は一緒に行きたいんだ、行きたい場所があるなら何処でも連れてく遠慮して言わないのは悲しいな」

「う……うん、ならその…行きたい場所が…」

「よし行こうか」「まだ何も言ってないわよ」けど七罪は行きたいんだろ？なら行こうぜ」

「見ろ土道くん、あれが行く先先で嫁がいながらも新たな嫁を作る男の手口だ」

「人聞き悪いですね」

「ではナツキよ私達は何処に行くか話し合うとするか！」

「え？それは……あー！」

そんなナツキはドナドナされていったのは言うまでもない

取り敢えず必要なのは今日の宿という事なので

「取り敢えず宿の部屋取れて良かったな」

「仕方ないよなあピースメーカーには戻れないしハルトのコネクトも使えないときたからな所持金的に泊まれる場所も限られるし」

「で、どうするよコレから」

「相手の言ってる裁定が俺達と精霊のデートから来るなら従うしかない現状ではな」

「ハルトらしくねえな盤面壊すのがお前だろ？」

「流石の俺でも他の勝ち方が浮かばない以上は向こうの指示に従うよ」

「ふーん……あとさ今更ながら男女で部屋何で分けなかったの？」

「考えてみろアルトリアとジャンヌを同じ部屋にしたらホテルが消し飛ぶ」

「……………確かに」

「あとマーリンの事まで考えるとな」

「成る程な」

「と言う訳でお前は部屋に帰れ」

「そうする、んじやおやすみ」

ナツキが部屋に戻る眠りにつくとハルトは溜息を吐く

「ジャンヌはベット使って寝な」

「けどマスターは？」

「俺は浮遊できるから大丈夫」

「何言ってるのよ、ほら寝るわよ」

「同じベットだよ？」

「構わないわ…そんな無駄な魔力を使って戦う時に魔力ないじゃ情け無いじゃない」

「ジャンヌ…」

「それに……私だってマスターのこと…」

「何か言った？」

「何でもないわ、ほら早く眠りなさい！」

「オヤスマミー」

とハルトは夢の中で眠るなんて器用な事をやっている…風に見えて精神世界にいた

「よし取り敢えず特訓だな相棒！」

「おい脳筋、お前は自分の体を心配しろ」

「なんで？大丈夫でしょジャンヌだよく寝込み襲うなんてしないよー」

「アレを見てそんな事がまだ言えるか？」

「はっ。」

するとジャンヌの方へと映像が変わる

「ま、マスターが悪いのよ…そんな無防備な状態で寝てるんだから…そうそんな無防備なマスターだから…知らないのね世の中には悪い女もいると言う事を…」

と瞳にハートが浮かんでるように見えたが間違いない あの目を俺は知っているぞ 具体的には夜に俺を襲うキャロル達と同じ目だ！とハルトが震える中

「そ、そうよ…けど…うーん流石に無抵抗なマスターを襲ってもねえ…束みたいに意識あるうちに押し倒して…って何考えてるのよ！」

『ヘタレだな』

相棒の言葉に全てが籠っていた

翌日

「昨夜はお楽しみでしたね」

「……………」

「ちよつと待ってくれ、フォウ撃の魔法は使わないでくれよマスター！」

「ならそろそろ真面目にやれ」

「分かったとも!!取り敢えず状況のおさらいだがね」

マーリンの話をもとめるとこんな感じ

俺、ナツキ、土道の3人と精霊がデートする

この場合は

土道は十香、四糸乃、六喰、美九、折紙、琴里

ナツキは八舞姉妹

俺は二亜と七罪

って感じだろうな狂三は別って感じだな

「デートを採点されるというのは複雑だな」

「だがやるしかないだろう、少年くんは聖剣持ってないし俺達は帰還方法に関して不明点も多い現状だ向こうのルールに従うしかない」

「刃王剣やグリモワールは呼べないの？」

「アナザーストリウスになるのは可能だが流石にな使い所が難しい…何とかするかシヨツカー戦闘員一人倒すのに三人娘の全力核撃魔法を打ち込むような感じかな、刃王剣に関しては何というか…」

言い淀むハルトにナツキは

「メンテ中だからか？」

「いやそれもあるけど…うーん言葉にすると…俺を真の主人と認めてくれて無い感じかする」

「は？ いやいやお前が作った聖剣だろ？」

「作りはしたけど主人ではないとか？ 何というか作った義理で手伝ってる感があつてさ」

「本来の所有者……あ」

「そ」

――影の15と原初の龍より――

「か、神山飛羽真さんのサインイベントなんだとお!! こうしちやいらねえ! すぐに並ぶんだ!!」

――

「ああ」

「だから俺を認めてない認められるとすればあの人か…」

2人の目線は土道へ向かう

「へ？」

「次代セイバーなんだよなあ…まあ俺の英雄達には程遠いがな！」

「だからお前四賢人に稽古させてるの？」

「そうそう…まあ刃王剣を使うような状況にはなっってほしく無いけどな」

「確かに…グリモワール開いといて何言ってるんだよ」

取り敢えず向こうは話はまとまった

「んじゃデートを始めるか…行くよ七罪…しっかり掴まってるよ」

「うん…」

ハルトはバイクを走らせ街中にある喫茶店に入ったのであった

さあデートを見定めよう

正月特別短編 一夏ガッツチャードvsハルトレジエンド

前編

初めまして！俺は織斑一夏、ひよんな事から錬金術で生まれたケミー ホッパーと友達になってキャロル姉達を作ったベルト ガッツチャードライバーを貰って仮面ライダーガッツチャードになったんだ！箒や鈴、ケミーの皆を守る為にハル兄達が生かしてやるような戦闘訓練を毎日しているぜ！

そんな感じだったんだけど…

逢魔王国闘技場にて

「し、しぬ…あの人の訓練……凄い為になるけど量が……おかしい」

とゼエハアしながら仰向けに倒れる俺に対して

見下ろすように見る幼馴染2人

「仕方なからう、あの人は千冬さんや姉さん以上の身体能力を有している」

「そもそも人間辞めてるしねハルトさんは…ポニーがサラブレッドと競争するようなもんよ一夏、アンタは慌てずにやりなさい」

「ありがとう箒…鈴」

「だが一夏も仮面ライダーか…」

「驚きよねえく千冬さん達も変身するけど何でアンタが」

「それは「ホッパー！」コイツに聞いてくれ」

そう俺の頭に乗るデフォルメされたバッタ…ケミーのホッパーが明るく挨拶する

ある日 俺の所にコイツが来てから俺はガッチャードになった、仮面ライダーを名乗らないのはハル兄が嬉しそうに話す憧れのヒーローと自分が同列ではないと思ってるからだ

迷う事はあつても諦めずに最後まで自分の理想を信じて戦い抜くヒーロー

自身の義兄が憧憬を感じて仕方ない存在の称号を掲げるには自分はまだ若いと思っ
ている

「では休憩するぞ一夏、そのだな良かったら昼食を一緒にどうだ？」

「はあ！待ちなさいよ！私が誘おうとしたんだからね！」

「負け惜しみだな！私の方が先ダア！」

「五月蠅いわね！ならI Sで勝負よ！」

「良いだろう！姉さんとハルトさんが深夜テンションで組み上げて第四世代 赤椿の性

能を見せてやる！」

「性能だけで勝てると思ってるんじゃないわよ!!」

と2人が戦いそうになる中　一夏は2人を止めようとした　その時

突如　オーロラカーテンが一夏を別世界に飛ばしたのであった

???

「うーん……あれ？此処どこ？」

「お目覚めになられましたか？ガッチャード」

そこにいたのは執事服を着ているが間違はなく義兄の悪友であった

「ナツキさん、何してるんです？エルフラインさんに頼まれてコスプレですか？」

「おや？私を存じているとは流石はガッチャードですね…あとコレは私の正装ですの
で」

「え？てか何で俺は檻に入れられてんだよ！出して!!」

「それは無理です、マイロードの許可がなければ開ける事は出来ません」

「マイロードって誰!？」

「それは俺様に他ならない!!」

と現れたのは豪華絢爛という言葉が似合う華美な装飾や衣服を着た

「ハル兄!?!何その格好!!いつもなら仕事着以外でお金をかけるのはナンセンス!私服に
使うお金があるなら国の為に使えって言うのに!」

その言葉には『俺は文字Tがあるから私服は大丈夫!』という残念ファッションセンスがあるというのも理由であるが目の前にいるのは己の義兄 常葉ハルトであったが

「馴れ馴れしいなお前は」

そう答えると姿は初対面の相手を見るようなものであった

「え?俺を忘れたの?ナツキさんもだけど何か悪いものでも食べた?また記憶なくしたとか?」

「此奴…無礼を極めていますねマイロード」

「ああ、だがコイツのいた世界では俺の関係者なのだろう許してやろう」

「あのダサイ文字Tシャツはどうしたのさ!」
「二枚目気取りの三枚目」
「Tシャツとか!」

「マイロードはそんなお召し物に袖を通す訳ないでしょう！ね、マイロード!!」

「その通りだ！この俺様がそ、そんな文字Tを切る訳ないだろう！……寝巻きにはしそ
うだが」

「マイロード!?!」

と言うより

「何でナツキさんがハル兄の従者みたいに振る舞ってるの!?!そこウオズさんのポジシ
ョンだよね!!」

「ほお貴様の世界の俺様の従者はウオズなのか……羨ましい従者交換してくれないか
な?」

「何か仰いましたかマイロード?」

「ああ…ウオズとチェンジで」

「そんなにはつきり言わなくても!?!」

「まあ良い解放しようガツチャード!ここで貴様にはゴージャスとは何かを教えてやるう!」

「いえ間に合ってます!だから逢魔に返してええ!」

「即答するとは流石だな、安心しろ此処とお前のいた世界の時間の流れは違うここでの数日は向こうでの1秒になる…だから従え」

「嫌だ!俺はNOと言える日本人なんだ!」

「見事に魔王の影響を受けてますねマイロード」

「ああどうやら魔王の俺様は個性の塊のようだな」

「個性という意味ならマイロードには敵いませんとも…マイロードの輝きはジオウや
ディケイドの比ではありませんから」

「戯け、俺様の輝きは偉大なる先人達の力によるものだナツキよ、だがその輝きを何倍に
もして輝かせるのがこの俺様だ！」

そこにある仮面ライダーへの憧れや敬意を払う姿に義兄の姿が重なったのは言うま
でもない

「取り敢えず貴様を呼んだ理由を説明してやろうナツキ話せ」

「かしこまりましたマイロード…ではBGMお願いします」

「良いだろう！集え我が楽団！」

「え？何処から来たのこのオーケストラは!!」

「奏でろ」

そう言うとオーケストラは演奏を始めた

(ドラマのアラスジ) ♪

今までの話

この世界に悪の組織　ネオタイムジャッカーの魔の手が迫った！

混乱で逃げ惑う人々、悲しみの涙を流す子供達

そんな中現れた1人の英雄

その名は常葉ハルト

またの名を仮面ライダーレジェンドである！

「俺、そんな話聞いた事ないよ!」

「お黙りください!こほん」

ネオタイムジャツカーに対抗する為、マイロードはオーロラカーテンシステムを開発、異世界からの知識や技術、人々の協力によつて世界は復興し世界は豊かになったのであります…ただネオタイムジャツカーの脅威は依然として市民を脅かしております

ネオタイムジャツカーと戦う為にマイロードは異世界のライダーの力を借り、戦う為のベルトを開発、3人の錬金術師の協力により完成させ、そして仮面ライダーレジェンドとなり世界を守る為に闘い始めたのです!!

「えーと色々ツツコミたいけど…三人の錬金術師って誰?」

「お前も良く知る3人だ…革命やあーし、という訳だが口癖な「あー分かったあの3人か…」ふふ理解が早いな、まあそう言うことだ俺は新しい仮面ライダーの力を貸して貰い

たくて呼んだのだ」

「あ、そういう……ならお願いだから出して！」

「まったく落ち着け、まずはこれを見ろ」

指を鳴らすとナツキがテーブルに乗せたものを一夏に見せた

「これって仮面ライダーのケミーカード!?すごい！」

そこにはクウガからギーツまでの全ての仮面ライダーのケミーカードがあるではないか！

「半分正解だが……これは並行世界にいる仮面ライダー達のゴージャスかつエレガントな力を写し取らせて頂いた特別なライドケミーカードだ」

「お、おおお……この人数の仮面ライダーに会ったんだ……ハル兄が見たら嫉妬に狂いそ

う…」

「無論これだけではない、しっかりとサインも頂いている!!」

一　　とその背後に現れるのは豪華絢爛な箱にディスプレイされているサイン色紙を見て一言

「ああ世界が違ってもハル兄はハル兄だあ…」

「そう言う訳でお前のガッチャードの力も借りたいのだが今のお前には仮面ライダーとしてのゴージャスもエレガントもない!!何だその様は!!弛んでいるぞ!」

「ええ!?!」

「だからそんな貴様にはこの俺様がゴージャスかつエレガントな仮面ライダーをレクチャーしてやろう、まずはゴージャスな昭和、平成、令和仮面ライダー全話視聴だ!!ネオライダーも忘れるな」

「あ、それ逢魔でやった」

何気に魔王ハルトからライダーの英才教育を受けていたりしたのであった

「ならば…ゴージャスな変身ポーズから行くぞ」

「あれ？急に実践的？」

と話しているとナツキの端末に反応があった

「マイロード、ネオタイムジャッカーです」

「早速だな…檻から出してやれ」

「はっ！」

一夏を解放するとガッチャードライダーを渡したハルトは一言

「ついてこい、俺様の輝きを見せてやる」

それだけ言うとナツキを連れて行くのであった

そこには大量のワーム、インベスなど大量の戦闘員が町を攻撃していたのだ

「なんて事を……」

「まあ当然だな、怪人はこの俺様の輝きに照らされ集まる害虫でしかない害虫は駆除だ」

「ああ……そう言う所は違うなあ……世界が違うと此処まで変わるのか」

「だがモグラ獣人やクジラ怪人のように優しい奴等もいる……そんな奴等を守るのも俺様の仕事だがな」

「そこは変わらないなあ……」

と一夏はギャップに慣れつつあった頃

「見つけたわよ、常葉ハルト!!」

そこに現れたボブの茶髪の美女…え？

「えー！錫音さん!？」

「何だお前は何故私を知っている!…：そうかお前がハルトが呼び寄せた新しい仮面ライダーだな!!」

魔王世界ではハルトの妻である錫音ではないかと驚く一夏に

「そうだレクチャー中だがな、しかし何だ今日も貴様か錫音、まったく俺様に会いたいなら街を壊さずに直接来れば良いのに俺様は歓迎するぞ」

「流石はマイロード、敵の女幹部であれ異性を口説くその姿勢！すでに妻子のいる身とは思えません！」

「え！結婚してるの！それに子供!？」

「俺様は仲間として認めても良いと言っているだけだ…それと生涯で愛する女はただ一人で十分だ」

「ふ…ふざけるな！今日こそはネオタイムジャッカーの為に貴様を倒す!!撃てえええ！」

怪人達の飛び道具による攻撃 それに反応するハルトは

「仕方ない奴め…下がってるナツキ」

「はっ！」

く
2人を下がらせると金色に輝くバツクルを前に突き出してバリアを展開し攻撃を防

「そして見ていろ、この俺様の変身を特等席で拝ませてやろう」

『レジェンドライダー』

腰につけた金色のバツクル レジェンドライダーは黄金に輝き周囲の視界を奪うと
ライドケミーカード 金色の獅子と背後に見守るライダーが入ったカードをドライ
バーに装填すると背後に同じような門が現れる

『CHEMYRIDE』

「変身」

ドライバーを操作 開かれた門からライダーの幻影が重なりあい始める

『LE LE LE LEGEND』

そして現れたのは、ディケイドに似ている豪華絢爛な仮面ライダーであった

「えええ！黄金の仮面ライダー!?!」

「その通り!では…遠からん者は音に聞け!近くばよつて目にも見よ!今現れし伝説
その名も仮面ライダーレジェンド!!広くあまねくこの世界を照らす 正に行ける伝説
!!」

「ナツキさんがウオズさんみたいに祝え!つてしてるとか…うわあ…」

「さあ、初めよう」

「やれ…:…やつてしまええええ!」

錫音の指示で怪人達が襲いかかるが、レジェンドはまるでウィザードのようにアクロ

バットで相手を翻弄し、時にはカブトのような的確なカウンターを叩き込む、魔王のような喧嘩殺法ではない洗練された闘い方がそこにはあった

そして敵の顎に蹴りを入れて跪かせるとそのまま椅子代わりにし、ホルダーからカードを取り出すと銃型アイテム レジエンドライドマグナムを構える

「さあヒーロータイムだ」

『鎧武RIDER』

『ファイズRIDER』

『カブトRIDER』

『ウイザードRIDER』

「その力…お借りします!」

『LEGEND RIDER!』

バイク型エネルギーの通過と同時に現れた4人の仮面ライダーである

「仮面ライダーを召喚した!!」

「では右からオレンジの鎧を纏うアーマードライダー鎧武、人の夢を守る仮面ライダーファイズ、天の道を行く仮面ライダーカブト、希望の魔法使い仮面ライダーウィザードにございます」

「いくら仮面ライダーを呼ぼうか敵ではない! やつてしまえ!!」

その言葉に再び戦闘員が襲い掛かるが仮面ライダー達が迎え撃つ、戦う姿に一夏は

「凄い……これが本物の仮面ライダー!」

「当然だ……だが本物はこの比較にならない輝きをしているぞ」

そして

『ソイヤ！オレンジスカッシュユ!!』

エネルギーを貯めた無双セイバーと橙々丸の一撃がインベスを一刀両断すると宝石が飛び散りオレンジの断面に合わせて時計のエフェクトが浮かび上がったのだ

『ゴ・ゴ・ゴ・ゴージャス!!』

『CLOCK UP』

『START UP』

カブトはクロックアップ、ファイズはアクセルフォームに変身し高速移動で敵にダメージを与えていくと

『1、2、3』

カブトはドライバーを操作 エネルギーを貯めると角を元の位置に直して構える
『exceed charge』

『3』

『2』

『1』

貫き
カウントダウンが進む中 ファイズのアクセルクリムゾンスマッシュユが多数の敵を

「ライダー…キック」

『RIDER KICK!』

「はあ!!」

カブトは回し蹴りでワームにライダーキックを叩き込むと

『CLOCK OVER』

『TIME OUT』

時間切れと同時に鐘の音が鳴り響き、爆破と共に宝石が飛び散る

『ゴ・ゴ・ゴ・ゴージャス!!』

そんな中

『キックストライク！サイコーー！』

「はあ!!」

ウイザードのライダーキックが敵をビルの壁にまで減り込ませるとウイザードの魔法陣がビルの壁に刻まれて爆破した

『ゴ・ゴ・ゴ・ゴージャス!!』

「さて……と」

レジェンドは立ち上がり、そのまま怪人にライドマグナムを発砲して撃ち倒す

「ぐああー！」

最後に残った一体を見て

「ゴージャスな切り札は最後まで取っておくものだ」

『CHEMY RIDE……BLADE』

同時に現れた金色のオリハルコンエレメント、それを潜ると現れたのは左肩から右腰にかかつて金色の装飾が加えられた剣が立っていた

「ご覧ください！トランプの力を使う仮面ライダーブレイドが更にゴージャスになりました!!」

「運命の切り札を掴み取る！」

仮面ライダーゴージャスブレイド

『ゴージャスアタックライド!!』

ドライバーを操作し必殺技発動となる

『KICK』『Thunder』『Mach』

三枚の黄金のラウズカードのエネルギーを溜め込むと音速で走り跳躍、そのまま急降下キック ライトニングソニックを叩き込んだ

「はああああああ!!」

『ゴ・ゴ・ゴ・ゴージャス!!』

「グアアアアアアアア!」

宝石と共に爆散した敵を見送ると

レジェンドに戻りライドマグナムの銃口を錫音に向けた

「手駒は全滅したがまだやるか?俺様は構わないがな」

「くっ、覚えていろ!!」

そう言い錫音はオーロラカーテンを使い撤退したのであった

「やれやれ……仕方ない奴だ帰るぞナツキ」

「はっ!」

「ちよつと待ってくれ!!」

帰路に着くハルト達を一夏は慌てて追いかけたのであった

t o b e c o n t i n u e d ……!?

正月特別短編 一夏ガツチャードvsハルトレジエンド 後編

推奨 ドラマのアラスジ

これまでの仮面ライダーレジエンドは！

突然オーロラカーテンで拉致られた織斑一夏はその先で執事服を着た ナツキとそれを従える何か豪華絢爛な服を着る義兄 ハルトを目にする どうやら彼はこの世界において仮面ライダーレジエンドとしてネオタイムジャッカーと戦いを繰り広げているのだという

新たなライダーガツチャードの力を借りる為に呼ばれた一夏 これからどうなる!?

これはハルトが絶望に沈み、指輪の魔法使いから本物と認められる直前の未熟な果実である一夏の物語

—————

夜 家に自宅に帰ったハルトは一夏を連れて帰る

「呼んだ手前だ今日は俺様の家に泊まるといい」

「助かったよ野宿とかだったらどうしようって思ってたから…あの屋敷って家じゃないの？」

「そんな真似はしないさ…あれは仕事場だ」

「仕事場!? いやがつつり豪邸なのに」

「管理するものがあるが俺としては落ち着くのはこの家だ」

ハルトが扉を開けると青い髪をした小さな男の子がトタトタと歩いてきた

「お父さんおかえりー!」

「ただいま司、元気にしてたか？」

「うん！今日もお父さんが変わってお母さんを守ってました！」

「よくやった！それでこそ俺様の息子だ」

「わーい！！」

その光景に一夏は開いた口が塞がらなかった息子？お父さん…え、ええええ！

「え？じゃあこの子が！！」

そう言うところの子供 司が此方に気づいた

「この人は？…あ！新しい仮面ライダーなの！」

「まだまだひよつこだな、司自己紹介できるか？」

「うん!!初めまして常葉司です!宜しくお願ひします!!」

「あ、えーと織斑一夏です宜しく…」

「よーし良い子だぞお!司!!」

たかいたかーいと司を持ち上げるハルトに先程までの唯我独尊はなかった、ただの子
煩悩な父親である

「こちら司。お客さんがいるでしょ」

だがそこに現れたのは青いエプロンをした青色ロングの女性だ

「ごめんなさい…」

「まあそう怒らないでくれよ、可愛いじゃないかなあ司?」

「もう、ハルトはいつもそうやって甘やかして」

「そう言うなよ今日も帰ったよ…ただいま、あかね」

「うん、おかえりハルト」

ハルトが笑顔で抱きしめる女性…最早一夏の頭は大混乱であった

「紹介するぞ俺の妻だ」

「常葉あかねです宜しくね」

「あかね…あれ？確か黒川じゃ」

「ああそうかお前は別世界の俺様に会ってるから知っているのか黒川は旧姓だ」

「はい」

「けど確か…喧嘩別れというか色々あって…」

「うん色々あったけど、今こうして一緒にいれるんだ…ハルトのお陰だよ」

「そんな事ないさ、あかねが側にいるそれだけで十分だ…それに諦めない限り道はある、あかねがずっと一緒にいてくれたから今があるんだ」

「あ……………」

それで理解した、ここはハルトとあかねが離れずに一緒にいた世界なのだ…

「お父さんとお母さんは今日も仲良しだね！」

「ああその通りだとも何があっても母さんとお前は守るからな」

「お、俺の世界のハル兄と全然違う…」

「因みにだけどそつちの世界の私とハルトってどうなの」

あかねの質問にハルトは言い淀む

「うーん…何というか…」

【逆らう者は皆殺しだあ!!】

切り抜いた記憶的にい、言えない…ハーレム築いて怪人となり国の王様やってますとは流石の一夏も言えなかった…ただ

「俺のいた世界でもハル兄はあかねさんの事を大事に思ってるよ」

実際義兄から聞く話はどれも楽しい思い出ばかりである

「そうか」

「あ……あはは〜」

こうして一夏はまた一つ大人になったのであった

「ご飯出来てるから食べよう君も食べてくよね？」

「は、はい！いただきます!!」

そして夕食を食べた時

「……………？あれ何かハル兄の味付けに似てる」

「ん？全部あかねの手料理だが？」

「あ、いや俺の世界の料理に似てて…」

そう思うのも無理はない、確かに魔王はアナザーライダーやトリコ世界の料理人から料理の指導を受けているが基本的な好みの味付けは空腹で死にかけて時にあかねが作ってくれたご飯の味なのだから

空腹は最大の調味料であり何より魔王自身が好きな料理である

「ハルに…ハルトさんは料理するんですか？」

「しないぞ俺様なんかより。あかねの方が美味いからな…あ、口にソースついてるよ」

ハルトはあかねの頬についたソースを舌でペロっと舐めるとそれ以上に赤面したあかねは

「もうハルトは…ダメだよお客さんが見てる…」

「えー！」

「えーじゃない！」

頬を赤らめている、あかねだがそれ以上に

「ウソダドンドコドーン!!」

家事能力のないハルトという衝撃の事実には打ち震える一夏であった！

翌朝

「行ってくる」

「ハルト、いってらっしゃい」

「お父さん気をつけてね」

「ああ世界の平和は俺様に任せろ、お前には世界よりも大事な母さんを任せろ」

ハルトは司と拳を合わせる

「うん！いつてらっしやい!!」

「行つてきます……ほら乗れ」

「あ、はい!!」

そして呼び出した屋敷まで戻すと

「何とかちちゃんとお父さんなんですね」

「当たり前だろ？何を言っている」

「俺の世界のハル兄は自分の親兄妹と仲悪くて絶縁みたいな感じって言つてたから……あとネグレクトとか虐待とかされた子は自分の子供にもするって……」

「普通ならそうかもな……だけど俺様にはあかねや爺ちゃん達がいるからな間違つてることは間違つてるとはつきり言ってくれる彼女達がいるから間違わずにいられるんだ」

「……………」

「あとあのクズを絶縁程度ですませているなど魔王は優しいじゃないか」

「……………え？ここでは違うんですか？」

「ああ説明するのも面倒だが仕方ないナツキ、楽団！カモン」

「では私から説明いたします」

「あれえ！いつの間に!？」

「BGMスタート！」

（ドラマのアラスジ）

前回説明したオーロラカーテンシステム、その発明者となったハルトは一躍時の人と

なつたあらゆる分野、技術に革命を起こし文字通り全てを繋いだのですが

「何処から聞いたか醜く擦り寄ってきたのだ地面の肥やしにもならない生ごみがな」

「親に言うセリフではないですね？」

「事実だから仕方ない、魔王の俺様も嫌悪しているだろう？」

「国に入れば問答無用で射殺するって言っていました」

「……………マイロードの両親は熊か何かで？」

「はあ…似たようなものだ」

やれお前みたいな出来損ないには管理出来ないから全ての権利をよこせだの、私の方が管理するに相応しいだの、コレがあれば世界の王なれるなどと世迷言を並べていた…というより貰って当然という態度や言動でマスコミの発表会まで殴り込んだのは流石

に驚いたがな

後で調べた結果、どうやらかなりの借金で首が回らなくなった所でハルトの成功を知りその権益を奪い返り咲こうとしていたのだ

「そんな時、マイロードと交際中のあかね様を誘拐する計画を立てておりました」

「そんな!! 実の息子の彼女に!？」

「アレには他者への思いやりなんてない、あるのは醜い我欲を満たす心だけだ妹だけはそのドス黒い悪意を継承していたから皺寄せが全て俺様に来たのだ……はあ何故あの両親から俺様のようなのが生まれたのか不思議でならん」

「世界にはまだまだ未知な事もありますね、勿論マイロードは対策しておりました」

「当然だ彼女は何かがあっても守ると決めたからな」

「そんな時に相談したのが仮面ライダーG3、アクセル、ドライブ、マツハと名だたる警察ライダーだったのであります」

「警察に相談！普通に現実的な対応をしてる!?!」

魔王ならそんな計画（奥さん拉致誘拐）なんて立てた段階でトルーパーに捕縛、銃殺刑か人間なら生きたままheavenの材料にされるのに！

「流石は本職警官だ…当時の俺様は法律の知識はなかったからな」

「ですがマイロードも勉強したではありませんか」

「自慢ではないが六法全書は全て暗記している」

「流石はマイロード、何という無駄なハイスペック!」

「減給するぞ「素晴らしいお方です!」よろしい」

計画が実行に移す段階までいき、あの家族があかねを拉致しようとした その時 仮面ライダーの皆さんが逮捕してくれたのだ

「怪人で闇討ちなんてしないんだ」

「流石にそんな事はしないさ、それで」

司法に裁かせたのだが、まあアレだ保釈金目当てにしつこく手紙を送ってきたのだ……というよりアレは出所後に強請るとか生活費とか明らかに不要なお金も混ぜていた、後々調べれば自分の名義でお金を借りて豪遊していたのだから救いようのない

「うわあ……」

「そして俺様はいる刑務所の情報を借金取りにリークし俺様名義で借りてた金の取り立てを依頼して出所した後 全員何処かの国へ連れてかれたと……今頃カニ漁船でベールリング海を彷徨っているだろう」

「本当にあつた怖い話だ…」

「まあ自業自得だ…唯一感謝すべき点は、何が何でも俺があかねを守ろうと…プロポーズする覚悟を決めさせた所だな」

「その後 マイロードはあかね様にプロポーズし結婚、無事に司様を授かりましたとき」

「おおお……今更だけどナツキさん」

「何でしょう?」

「何でこのわがままな人についてるの?」

「それはマイロードの輝きに惹かれたからであります」

「は、はあ……それで何で司なの?」

「よくぞ聞いてくれた、話は省略するがネオタイムジャツカーが最初にこの世界で暴れた時：俺を助けてくれたのが仮面ライダーディケイド、彼のようになって欲しいという意味を込めて司と名付けたのだ」

「だからレジェンドってディケイドに似てるんだ」

「その通り、だがお礼をしようにも彼等は次の世界へ旅をする……確か魔王のいる世界とか何とか言っていたな異世界ファンタジーな世界なのだろうか？」

「(ディケイドって、ハル兄に会う前にこの世界来てたんだ)」

という以外な事実を知るのであった

「よし今日のスケジュールだが、まずはゴージャスなエステ、ゴージャスなトレーニング、ゴージャスなシアターで仮面ライダー the first を視聴「マイロード」何

だ？」

「ネオタイムジャッカーです…今回はボスもいるようですね」

「ほお、やつとか予定はキャンセルだ行くぞ」

「かしこまりましたマイロード」

そして一夏も慌てて追いかけていくのであった

その町に向かうと、そこには戦闘員とそれを率いる仮面をつけた男が立っていた

「あれがネオタイムジャッカーのボス!？」

「正確にはこの世界にいるボスだがな奴等は並行世界に存在している」

「漸く現れたな常葉ハルト」

「主役は遅れてやってくる事を知らんのか？ ナツキ」

「はっ！ 楽団の皆さん、BGMお願いします」

指を鳴らすと同時に戦闘の雰囲気盛り上げる為にオーケストラを連れ、そして何と演奏を始めたではないか

「まあ良い、常葉ハルト我々の仲間にならないか？」

「は？」

「お前はオーロラカーテンシステムで様々な世界を巡れる力を手に入れた…我々と同じ力をな、こんな小さな世界で輝くよりもっと広い世界で輝く方が良いだろう？ 我々と共に来い」

「かもな、俺様はこの世界で収まらない輝きを既に持っている」

「ならば「だが」なに？」

「お前のいう小さな世界に大事な人がいる守るべき家族がいる」

「……………」

「それと息子と約束した、この世界の平和は俺が守るとな」

「マイロード……」

「それにこの世界だって捨てたものではないぞ俺様のような人間だって仮面ライダーになれた」

レジェンドライダーを見せながら話す

「なら、この世界にもいるだろう仮面ライダーへと至れる原石達が最高に輝くその瞬間まで俺様がこの世界を守ると決めている、だから貴様の好きなようにはさせない……」

「行くぞガッチャード」

「え？俺も!？」

「当たり前だ一宿一飯の恩は返してもらおうぞ」

「まあ確かにアイツらの好きにさせたらダメだよな」

2人はドライバーを腰につけるとカードを取り出した

『CHEMYRIDE!』

『ホッパー! スチームライナー!』

「変身!!」

『LE LE LE LEGEND』

『スチームホッパー!!』

そこに現れた仮面ライダーレジェンドと仮面ライダーガッチャードと同時に戦闘員達は走り出す

「さあ行くぞ」「ああ!!」

2人はそのまま戦いとなるガッチャードは不慣れながらもシンプルな拳打で相手するが

「だったらコレだ!」

『スケボーズ!アツパレブシドー!ガッチャーンコ!!アツパレスケボー!!』

同時に赤い鎧甲冑を思わせる形態 アツパレスケボーに変身しガッチャートルネードを使う近接戦により戦闘員を倒して回る

「成る程、見た目よりゴージャスになれる素質があるな……よしディケイド……貴方の力……お借りします!!」

『CHEMYRIDE……DECADE!!』

するとブレイドと同じように肩から腰まで金色の装飾が入った姿 仮面ライダー
ゴージャスディケイドに変わるのであった

「さあ、ヒーロータイムだ」

ライドマグナムにディエンドのカードを装填しハンドルを捻り力を蓄える

『DECADE RIDER……LEGEND ATTACK RIDE!』

『FIFIFIFINISH!』

すると現れた何枚ものカードがリングを形成しその中を放たれた黄金の光線が収束、

敵を貫通して撃ち倒した

そして残りはボス1人だ

「おのれ…レジェンドおおおお！」

ボスは体を突然 カツシスワームに変身する

それを見ると2人はレジェンド、スチームホッパーに戻ると

「成る程…おいガツチャード、タイミング合わせろ同時攻撃だズレれば奴は技をコピーするぞ」

『ゴージャスアタックライド!!』

「分かった!!」

2人は同時に飛びあがるとガツチャードの一撃と全く同じタイミングでカードエネルギーを何枚も通過するキックが叩き込まれた

『スチームホッパー! FEVER!!』

『ゴ・ゴ・ゴ・ゴージャス!!』

「爆ぜろ」

「グアアアアアアア！」

ボスが爆散した姿を見送ると2人は変身解除して一息つく

「終わったね」

「いいや、まだ奴等はこの世界にいる俺様の戦いはこれからだ」

「そうか……強いなあ」

「当たり前だ俺様だぞ？」

「やっぱりねハル兄はハル兄だ」

「お前の兄ではないが……そう言えばお前の名前を聞いてなかったな」

「え！今更!？」

「この人マイペース過ぎる！と驚く一夏の耳に聞こえるのは

【助けて……仮面ライダー……】

「っ!」

「今の…ハル兄!？」

「マイロード！ある世界で強力なエネルギーを検知しました！」

「成る程、大体わかったナツキその世界へ座標合わせろオーロラカーテンシステム起動だ」

「はっ！」

「え？」

同時に現れたオーロラカーテンに一夏は困惑する

「お前にも聞こえたのだろうか？助けてと言う声が」

「う、うん」

「ならお前には輝ける素質がある、だが俺様の力になるにはまだまだ力不足…故にもつと強くなれその時が来れば再び相見えるだろう」

「あ、ありがとう！……あ、俺は一夏、織斑一夏」

「そうか…よしなら行け一夏！走り抜けた先でその声が聞こえた理由がわかるだろう！

お前の望みをガツチャするのだ！」

「うん!!」

一夏は走り抜けた先で見たのは泣き崩れる己のよく知る義兄であった

「あれ？ゴージャスじゃない…ってハル兄！大丈夫!!何で泣いてるのさハル兄!!さっきまでゴージャスな感じだったのに!!」

「けど何で聞こえたんだろ？」

それと同時に現れた人物がその問いに答えたのだ

「それはお前が仮面ライダーだからだ」

そこに現れたのは指輪の魔法使い 仮面ライダーウィザードこと晴人であった

「仮面ライダー？俺が？いやいや俺なんかがハル兄が言つてたヒーローになんて…」

謙遜する一夏だったが

「助けを求める声があるなら必ず駆けつける、お前もその声を聞いたんだろ？」

「っ！」

【助けて……】

あの声が聞こえたのだと

その言葉に一夏は首肯すると彼は

「俺と一緒に必ず助けるそう答えただから此処にきたんだ、だからお前も仮面ライダーだ」

かつてハルトの師匠に向けて言った先輩の言葉に一夏はゾクゾクと体を震わせた
そう言う意味なのだと言ったと震えたのだ

自分も仮面ライダーである その資格があるのだと 他ならぬ義兄の憧れから認め
られたのだ、これで自信がない自覚がないなどは他ならぬ冒険に他ならない

「うおお…ハル兄の憧れからお墨付きを貰ったよ……なら俺は……今日から…今日から
！」

一夏はオレンジ色のドライバーを腰につけた

『ガツチャードライバー』

そして二枚のカード…それはキャロル達が作り上げた錬金術の結晶 ケミーカード
である

「仮面ライダーガツチャードだ!!」

『ホッパー！！スチームライナー！』

二枚のカードを装填して一夏は習ったばかりの錬金術の構えを取り

「変身!!」

『ガッチャーオンコ!!』

そして二つの力が一つとなる

『スチームホッパー!!』

現れた青い装甲にマフラーを翻すのは新たなヒーロー

ケミーと手を繋ぎ新たな地平を開くもの

『仮面ライダー』ガッチャード 誕生!!

「つてな感じだったんだけど」

「何その世界線！俺がハルトの従者!?!」

「魔王ちゃんが仮面ライダー!?!」

「そうか俺とあかねが…んで子供もいるのか」

「ああ…あと凄いゴージャスだったし料理出来ないって」

「なんて事だ…」

「そんなボスはボスじゃないぞ!」

「飯がまずい魔王など解釈違いだ!!」

「お前ら、俺を飯当番か何かと思ってるな……ああだから俺見てゴージャス云々言つたのかよ、んで何お前は凹んでるんだウオズ？」

「ま、まさかライバルはすぐ側にいたとは……私のライバルはケーキを作る会長ではなく……貴方でしたか野田夏樹！」

「ウオズさん!?何で俺に当たるの!?身に覚えがないんですけどおおお！」

「問答無用!私の立ち位置を狙っていたとは許しません!!」

「俺は狙ってねえよ!ちよっ……ふ、不幸だああああああああ!!」

ウオズがマフラーでナツキを縛りあげてハンマー投げでもするのかとばかりにブン振り回していたのであった

「はあ……その世界の俺は仮面ライダーのサインを持ってたのか……ん?待てよクウガの

カードがあるって事は…まさか会ったのか!!許さん!ウオズ!俺もマフラー掴ませろ!ナツキをぶん回してやる!」

「八つ当たりじゃなあああああああ……」

ハルトも混ざりナツキに八つ当たりしたのであった

レジェンド世界にて

「マイロード、逢魔へ座標を確認しましたいつでも動けますよ」

「そうか…機会があれば行くでしょう借りは返してもらどうぞ織斑一夏」

『ハルト?その前にやる事あるよね?』

立体映像に現れたあかねの言葉にハルトはキリッとした顔で答える

「勿論だあかね……ナツキ車を回せ!近くのスーパーでトイレットペーパーを買いに行

くぞー！ゴージャスな奴をな!!」

「イエス、マイロード」

やはりハルトはハルトなのであった…とき

万由里ジャツジメント3話

前回のあらすじ

マーリンと契約したハルトであったが事態を解決する為
七罪と二亜とのデートを
する事になる

七罪をバイクに乗せて向かう先には…

「此処で良いの？」

「うん……その…絵を描いてみたくて…」

「ああそれで画材を買ってたのか」

「そーういやあ二亜も絵が上手い言ってたな」

と思ったがデート中に他の異性の名前を出すのは良くないと思い黙っておく

因みに出すと

「そーいやあカラオケはエルフナインと言ったなあ「おいナツキよ」ん？」

「何故他の女の名前を出すのだ？」

「あ……」

「少しお話しだね」

「待って耶俱矢謝るから許して!!」

「……なら変わりにマーリンとやらが言ってた場所に行こう」

「まてえええええい！そこはまずいからあ！いやちよつ！離してえー

――
〈ぎやあああああ！〉

とまあこんな感じになるのだ哀れナツキ

「そっか……んじゃ俺も描いてみるからな」

「アンタ…絵描けるの？」

「そーいやあ絵とか描いた事ないな」

「ふーん意外ね」

「時間の余裕がなかったのもあるかな取り敢えず…えーと……画材眼魔召喚！」

「ハルト様！お呼びですか!!」

「絵の先生はOK……あれ？普通に怪人呼べた？」

『どうやら外界に連絡を取る以外の能力は据え置きのような』

「だとしたらフータロスを呼んで時空を繋げて……もらうとかは無理か、そもそも夢と現実に干渉できる怪人とかナイトメアドーパントらアリエスゾデイアーツくらいしか思いつかんよ、けどドーパントメモリは持ってないしスイッチがあつて変身してもな」

『ここに居る人間が寝るだけで現実世界側のお前が目を覚ます訳ではない』

『例外と精神攻撃する怪人は貴重だからな』

「ああ取り敢えず！ご指導お願いします先生！」

「お任せあれえ！」

「あ、アンタやっぱ何でもありね」

「まあね〜因みに画材眼魔にはある能力があるんだ」

「ではお手本を一枚」

数分後

「これ……抽象画？」

「んでモデルになったビル見てみ」

「え？………はあ!!」

七罪の目線の先には絵と同じ抽象画のように歪な形に変形したビルであったのだ

「そう！画材眼魔は絵のモデルを描いた通りの形にする事が出来るのだあ！」ドヤア！

「とんでもないけど面白いわね……てつきりハルトの下にいる怪人って皆、血に飢えてる暴力的なみたいいな連中ばかりと思ってたからゴオマとか」

「アレはアレで向上心高くて可愛いけどな、まあ大体はそんな感じだが一部は穏和で優しい奴等もいるんだよ……今度紹介するから」

と笑うも七罪は何か不安そうな顔をしてハルトに尋ねる

「その……ハルトは……全部終わったら此処からいなくなっちゃうの？」

それは彼女初め八舞姉妹達も不安に感じている事なのだ 二度と会えないんじゃないかな
いかという不安 それにハルトは淡々と答える

「まあな逢魔には帰るよ俺達の帰る場所だし……こう見えても俺も王様だからな」

『本当にこう見えても王様なんだよ』

『見えないのが不思議、上位者としての威厳なんざあつたもんじゃネエ！』

「まあ此処にはレジエンドライダーの皆様もいるし文字T仲間の玄さんもいるから偶に帰ってくるけども」

『更に増やすのか文字Tを』

「おうとも！」

「……………」

「全部終わったら、七罪も逢魔に来るか？」

「え？」

「お前が嫌じゃなきゃな…流石に助けて一緒にいるのにこの世界でさよなら、はい放置なんてしねえよ帰る場所があるなら止めないけど…流石にそんな無責任というか助けたって満足感の為だけに助けるなんて…それこそ屑のやる事だ、それが善意でしたとしてもな最後まで面倒は見るとよ」

話
それはとある世界にいた独善の勇者に邂逅した時に告げる言葉となるのはまだ先の

「正直に言えばラタトスクはラタトスクで信用できるか不安だしな何か洗脳催眠系の能力とか放置するだけで危険な匂いするし、ナツキの世界にもDEMやASTと同じかそれ以上な屑連中がワンサカいる、それなら逢魔の方が何倍も安全だ頼れる仲間もいるし」

「ハルト…」

「自慢じゃないが俺も強いしな！」

『本当、ムカつくくらいには強いよなお前』

「逢魔には家も作るからいつでも会えるぜ？七罪はどうしたい？」

「うん……私は…ハルトといたい私も連れてつてくれる？」

「わーった…んじや帰ったら家作るか要望あったら教えてくれ」

「うん……その2人で考えよ」

「お、おう…分かった…」

「……………」

「おお！甘酸っぱいですな、ではお二人で一枚」

「ちよつと待て!!それは今度な!」

「うんうん」

あのビルの二の舞にはなりたくないと思つたのであつた

ハルトは七罪を見守りながら微笑ましく思つてゐるのだが側から見たら事案ではと顔が青ざめていくが

「出来たわハルト見なさい力作よ!」

「おー!スゲエ上手いな」

「そう!本当!!」

あの頃の怯えて彼女はいない自信に満ちた彼女を見たらどーでも良いかと割り切つてゐる

「やっぱり人は変わるんだな」

『お前は変わりすぎだがな』

『あの頃 王にはならない！とか相棒って呼ぶな！とか言つてたお前がな今じゃ王様だからナ』

「まあ変わるものだよ…変わらないものもあるけどな」

『何だ？』

「お前たちへの信頼かな…今回も頼りにしてるぜ相棒」

『ふ、ふん！そんなセリフで俺達が喜ぶと思うなよ！』

『ああそうだ！検索エンジンと呼ぶ恨みは忘れないからな！』

『『うおおおお！俺達に任せろハルト！』』

『お前らチヨロいな!!』

「おう任せた」

からから笑うとハルトを見て

『心配だな』

『ああ』

ハルトは自分達がいるから精神的にも成長しただがいなくなると感情任せで走る傾向にある

『まあ俺達がハルトから離れる事はないのだがな』

『アナザーライダーをメタるような奴がいなければナ』

『やめろ不穏なフラグを立てるな』

と不穏な前振りを残したのであった

その夜 七罪をバイクで送るハルトの道中 見知らぬ影が立ち往生していた

「おーい危ないぜアンタ？」

「……………」

「ん？」

「ね、ねえハルト…その人…足が！」

七罪が怯えるのも無理はない、その子の足が幽霊なみに消えてるのだから

「幽霊なら……えーと……くらいえ！さつきスーパーで買った岩塩だあ!!」

『清めに加えて物理ダメージも与えるとは相棒らしいチョイスだな』

『いやアレお祓いしてないだろ？』

『ダメだぞハルト、そこは清めの音を撃ち込むんだ』

「そ、そうか！音撃で！」

『落ち着け相棒』

怪人の腕力で投げられた岩塩を喰らっても立ち塞がる謎の影……ふむ幽霊か？物理ダメーシ入ったな……おかしい壁に減り込む程度の威力だからダメなのか？

「普通の人なら即死よ」

「なら岩塩くらって立ってるなら相手は普通じゃないなパラド、バイスは七罪を頼む」

「OK」

「分かったぜ……けど何処で普通の判断してんの？」

「コレでよしと」

「さて…どうするか」

『相棒分かってると思うが破壊力が高い技は使うなよ現状では影響するか判断がつかない』

確かに街の外へ出られない以上に加え。黒幕の思惑も分からないときた

「分かっている…なら幽霊には幽霊をつてね」

『ゴースト』

ウオッチのスターターを押してアナザーゴーストに変身すると それは姿を現したのである

「あ……………ああ……………」

「何だお前？」

「ま、魔王……………す」

「は？」

「殺すうううう!! ああああああ!」

『相棒…怒らないから正直に答えろ、アイツに何をした?』

「まっつっつたく身に覚えがないんだけど!!」

「よくもおおおお!!」

そう叫んだ幽霊?は突如、その体を書き換えるような反応をしたのだ

『Virus』

「許さない……………許さないぞまおおおお!!」

「え、バイラスドーパント!? マズっ」

こいつ相手にするのならアナザーWが適任である幽霊だからアナザーゴーストと安直過ぎた、だったら!

「ニユートン!!……いけやおらあ!」

ニユートン魂を使って重力で物理的に押し潰しにかかる……少しでも時間を稼げれば問題ない

「何でメモリ挿してねえのにドーパント化してんだよ! しかも何でバイラス!!」

それだけ警戒するのに値する怪人だからである

バイラスドーパント

本編ではメモリ挿入時に意識不明となった女性が騙した男性への恨みの力で精神体

のドーパントとなり風都で幽霊騒動を引き起こすのだ

この事件は救いのないもので解決された、しかしこいつの特筆すべき点はスペックとバイラス（ウイルス）という性質に由来する

このドーパントは街一つ簡単に滅ぼせる程のウイルスを空気散布、毒として水道に流せるなど極悪極まりない性能を有しているのだ

「何でそんな危険メモリを風都に簡単にばら撒いたんだよミュージアム!!」

民間人に巻くならコックローチとかアノマロカリスとかにしるよテロリスト…NE VERの手に渡れば風都壊滅なんてあり得たのだから笑えないのである

『んな事言ってる場合かよ変われ!』

「言われずとも!!」

『W』

アナザーWになった際に重力から解放されたバイラスは近くの街灯に寄生すると金属の鞭とかした 一撃は七罪に襲い掛かる筈だったが

「つと危ない危ない、大丈夫かい七罪っち！」

『ジャックリバイス』

アナザージャックバイスが受け止めると

「あ、ありがとう…！」

「七罪を狙うか…しかもかなりヤバい敵か、ハルト久しぶりに俺も行くぞMAX大変身！！」

『デュアルガシャット!!ガッチャーン!!マザルアップ!悪の拳強さ!闇のパズル連鎖!悪しき闇の王座!パーフェクトノックアウト!』

アナザーパラドクスに変身するとバグヴァイザーをチェインソーにパラプレイガンと左右に武器を携えて街灯を両断すると中からバイラズドーパントが現れたのだ…逃す訳にはいかない！

「パラド!!」

「あいよ！暫くピヨってろ!!」

『混乱』

「今だ!」

エナジーアイテムをバイラズドーパントに当てるとバイラズドーパントの動きが止まった

「ああナイスだパラド!んじゃ俺達も決めるぜ」

『ああやっぱりアレだな』

「サイクロンは風でウイルスが散る可能性があるシルナでは完全に倒せたとは言えないから」

『燻蒸消毒だ行くぜ』

『ヒート トリガー』

「行くぜ 『アナザーエクスプロージョン！』」

放たれた火炎光線はバイラズドーパーントを悲鳴を上げる前に焼き払い消滅させた

「相棒 『反応無しだ』 OKだパラド、バイスありがとう」

「ああ」「おうよ！」

「七罪、飛ばすぞ掴まれ」

「うん…」

2人は体に戻ると再びバイクに戻り七罪と共に移動したのである、取り敢えず怖いので七罪と二亜、八舞姉妹とジャンヌ、アルトリア、マーリンのチームをホテルに集めたのである

「ドーパントに襲われた!?!」

「ああしかもピンポイントに俺達をな。夜は気をつける」

「でも、どうしてドーパントが…」

「分からん、ただマーリンの話だとこの世界は夢の一種だから現実世界にはないバグみたいなものもあるかもな」

「或いはマーリンの差金か？」

アルトリアの目にマーリンは慌てて

「酷いな！私がそんな酷い奴に見えるのかい！」

「娯楽目当てに怪人投入する姿が見える」

「胡散臭いわよ新宿のアーチャーと同じね」

何故かマーリンを弄る時だけ仲の良い2人である

「私をあんなアラフィフ紳士と同じにしないで欲しいかな！こんなに綺麗なお姉さんなんだよ！黒幕とかそんなポジション似合わないじゃないか!!」

「綺麗なのは否定しないが…アルトリアに聖剣抜かせた段階で割と黒幕では？」

「マスター口説かない、この女のタチの悪さではアレと同類よ?」

「そんな!酷いなどうやったら信じてくれるんだい!」

「そうね今すぐに貴方の世界のアーサー王に面と向かって謝罪を「これから真面目にするのでそれだけは!!」 そんなに嫌なの!?!」

「気まずいんだよ!!まさか英霊になってまで会うとか思わないじゃないか!!」

「いやそれ自業自得じゃない?」

「はいはいいい喧嘩しない…取り敢えずそういう事だから奇襲には警戒してくれ基本単独行動はNG必ずツーマンセルで動く事、あと俺とナツキ以外は怪人に会っても逃げて合流優先で」

「そうだね私となつつんは戦闘向きじゃないし寧ろやられる自身しかない」

「私としても反対はないわ」

皆も考える中 ナツキも意見を言う

「それって査定する奴の試練とかかな？」

「成る程な精霊と関係を持った俺たちだけが巻き込まれている…ならば選ばれた理由から調べるのも手か…どうしたパラド？」

『いや何でもない』

「何か違和感あるなら言ってくれ、判断材料は多い方がいい」

『分かった…なら早速だけどよ少年は兎も角俺達まで来た理由はなんだ？』

「そりゃ精霊と関係を持ったから？」

『精霊を直接封印してないのか？』

「っ！」

確かに自分達は土道のように霊力を封印していない、エルフナイン作成のブランクボトルで抜き取り それを土道に渡しているつまり

ハルト達の体には霊力がないのだ

なのに自分達を精霊の器として査定する？それはおかしいのである

「パラドの言う通りだ…何で」

「そうだな…取り敢えずおいおい調べてからにするか少年くんにもこの事を伝えないと
な」

「確かに自衛の手段が少ないからな」

「取り敢えず夜間のデートは無しにして、明日は二亜とデートだけど何処行きたいとかある?」

「なら服買いに行こう!ハルきちチョイスで!」

ーポーズ……(カチカチカチ)ー

「「「「「!!!」」」」」

その言葉に部屋は鎮まり返ると反射するようにアナザーライダー達もクロノスのポーズを喰らった並みに停止した

そして

ーリスタートー

「に、二亜アンタ正気なの!?!」

「驚嘆！彼の私服センスで行く場所ではありませんん！」

「そうよ！メ切近くで頭逝ったんじゃないの!？」

「辞めなさい二亜、そこから先は修羅の道よ！」

止める精霊達、あのアルトリアでさえ食べていたハンバーガーを落としかけたのだナツキに至っては

「辞めろ二亜！普通のセンスに戻れなくなるぞ！」

辞めろ！それ以上は人間に戻れない！と止めんばかりの決死の説得と爆笑しているジャンヌオルタとマーリンを見て、この魔王（バカ）は

「ふむ…それは一度文字Tを着ると病みつきになるという意味か」

明後日の方向に思考を飛ばしていた

『違うわ!!』

『辞めろ！その無駄なポジティブ思考!!』

『あ、相棒！わかっていると思うが！服屋は絶対にデートコースに選ぶな!!』

相棒達まで俺を止めるか

「いやいや二亜が俺チヨイスの服屋に行きたいなら別に『辞めろお頼むから！アナザーWを火炙りにして良いからそれだけはあ!!』……え、ええそこまで？」

本気の命乞いとばかりに懇願する姿に言葉が出なかった

『おいアナザーデイケイド、何俺を生贄にシタ?』

『これは……この世界の為に必要な犠牲なのだ』

『なのだ……じゃねえよ!!』

「全く失礼だなお前たち！俺だって少しは成長しているんだぞ！」

ザワツ！

と流れる空気だが

「ビーセアレだろ、文字Tをワンポイントにしてるとかそんなんだろ」

『ああもしくはファッション誌に出た服だから大丈夫だろ？分かってるカケラも成長していないことなどな』

「失礼な奴等だな！○ニクロのマネキン見て これ一式くださいといえれば良いんだろ
!!」

「『『『!!』』』』」

「どしたお前ら」

『お、俺達は今この時ほど相棒の成長を感じた瞬間はないぞ!!』

『おいおい……誰か今のセリフを録音した奴はいるかあ!!』

『本当に大きな成長していだあ!!』

『俺達の苦勞が報われたぞお!!』

「ハルト大丈夫なの!」「七罪さん?」

「アンタがそんな事言うなんて…何か良くない事の前兆じゃない!!」

「は、ハルきちが常識的なことを……凄いやハルきち!!私驚いてるよ!!」

感動する皆の姿を見て

「何か腑に落ちない…」

とぼやくのであったが、この怒りを抱えたままでは勝てる戦いも勝てないと判断し

「……………ナツキシباكか」

八つ当たりを実行する

「イライラしてるのだねマスター、じゃあナツキの顔をお殴り！」

まるで僕の顔をお食べと勧めるアンパンヒーローのような口調でありながら一人の人間を絶望においやる悪辣な魔法使いがそこにいた

「おう行くぞナツキ覚悟はいいか？俺は出来てる」

「俺は出来てませんが!!しかも顔!？」

「らあ!!」

「理外のボデイ!?!」

「ふう…これでよし」

『何処が!?!』

「マスター!?! マーリン…貴様、遂に本性を表したか!」

「ごめんよ異世界のアーサー! 私は今…この状況にとんでもない愉悦を感じているのだよ!! あはははは! やはり私のマスターは良い性格をしているね! 顔と見せかけてボデイなんて!! 流石は私は見定めたマスターだ!」

「貴様ああああ!!」

「落ち着きなさいよ冷血女!! 私達が煽り過ぎたのが悪かったのよ!! 彼は尊い犠牲になったのよ!」

「……………それもそうだなすまない頭に血が登っていたようだ」

「お願いだからアルトリア最後まで怒って!」

「これは必要な犠牲だ」

「そんな所で冷血な王様ムーブしなくて良いから!!」

「スッキリしたぜ♪これからイライラしたらナツキ殴ろ!」

「おいそのサイコパス!人の嫌がることをするなって教わらなかったか!」

「あはははく嫌だよ俺は人の嫌がる事をするのが大好きなんだ、特に君みたいなたいプにはね」

「そんなんだからウルティマやマーリン引き寄せんだよ!人格破綻者!!」

事実なので、何とも言えないウルティマは以前にも説明したがハルトの内面に同調する存在故にあの世界で最初に邂逅、マーリンに關しても同じで

聖遺物なしでのサーヴァント召喚は契約者と相性の良い英霊が現れるとされている

だが本来の英霊召喚でグランドサーヴァントは相性が良くても現れる事はないFGOという世界そのものがイレギュラー 世界と繋がった故にマーリンを呼ぶ事が出来たと言える ジャンヌオルタがハルトの中にある憎悪がトリガーとなったのならばマーリンはハルトに宿る愉快犯、快樂主義な側面：或いはキングメーカーとも言える彼女の業が引き寄せたと言える

余談だが他のハルトと相性の良いサーヴァントは

・ 黒狐は魔力を天与呪縛で持てないので呼ぶ場合はケイネス・エルメロイ方式（魔力負担とマスター権を分割し管理する）必要があるもの

クロスギーツの狐と神という要素が触媒になる事から玉藻前やタマモ系列に当たるサーヴァントが現れる

ジャマトハルトにはデザグラの特性上サーヴァントが介入出来ない為かキャスターシエイクスピアなど文豪系サーヴァントが付く

ファルシオンは世界を守る剣士でもあるのでセイバークラスが召喚に応じやすいと言った面がある

が

「おい今ウルティマとマーリンをバカにしたな？よしもう一発行くぞ……はあ！」
『容赦ねえな相棒!!』

「再びのボディーー！」

イライラしたハルトはナツキの顔面ではなくボディーへの確なレバーブローを叩き込んだ……因みに綺麗なくの字に曲がったと言う

余談だが事件後 この話をキャロル達にしたら

キャロルは開いた口が塞がらず、千冬と錫音、ベアトリスは青褪めた顔で病院を勧め、銀狼と東は名医を探し初め、ベルファストは血相を変えて寝巻きに着替えさせベットに寝かしつけ看病を初めたのである

ついでに言えばハウンド達すら天変地異の前触れと言わんばかりの大混乱であった
という

「そこまで俺のセンス酷いの？」

「え？笑えないジョークだよマスター？」

「そんなに!?もう良いもん！不貞寝してやるう!!」

「おいブレーキがないから暴走し放題だぞ、この我儘魔王……まあ良いや俺も寝よダメージ回復しないと」

「大変だな」

「一番はお前の腹パンなんだよ!!」

「そうかではナツキよ、私達が」

「添い寝してあげますおはようからおやすみまで一緒です」

「何故だろう…不安がある助けてアルトリア」

「すまんマスター、私はこれから夜ワックの倍メニューを食べる所だ力になれん」

「夜食は程々にね!!」

—————

翌朝 取り敢えず士道に情報共有した後、ハルトはバイクを呼び二亜を背中に乗せると

「よし!しっかり掴まってるよ!!」

「では行こうハルきち!新たな文字T探して三千里!」

「おーーーーー！」

『辞めて!!それ以上残念な文字Tコレクションを増やさないで!!』

『ナツキの命を賭けた説得が響いていないのか!!』

『ナツキは死んでないぞ?』

アナザーライダー達の必死の嘆願にハルトはあっけらかんと答える

「大丈夫だ相棒、今更ながら夢の中で買ったものって現実側に持ってけないだろ?」

『『『あ………』』』

「と言う訳で問題なし!」

『ナツキ殴られ損じゃね?』

その通りである

「よし二亜行くぞ!」「おー!」

『不安だ…』

『今思えば相棒の私服みて着たいと言ってたなコイツ』

後の歴史においても魔王の私服センスを理解していたのは二亜だけなのである

―逢魔降臨歴・裏から抜粋―

そしてバイクを走らせた先で

「よし買い物と行こう」

「おー!」

2人でノリノリでショッピングモールに入ると

「どうハルきち！似合う!？」

それは「炭酸入り麦茶」と書かれた文字Tを見せる二亜 この酒飲みめ

「中々のチョイスだが、そのレベルでは俺や玄さんの領域に至れんぞー！」

とハルトは『威風堂々』と書かれた文字Tを見せてけるように仁王立ちすると

『お願いだから至らないで!!文字Tにハマるハマらないで黒閃を撃てる撃てないくらいの差があるからあー!』

『寧ろその扉は開けないでくれえ!』

「未体験ZONEだな」

『一生未体験で構わん!そんなもの!!』

『なあアナザー電王:アナザーデンライナーで相棒がアナザーログにならない歴史とかあつたりする?』

そもそもハルトがアナザーログに変身した際に副作用で文字Tを着ていたのだが何故かハルトの琴線に触れてしまったのが元凶なのである

『無理だなどの道、ビルドに会った段階で文字Tは着ている避けられない運命なんだ…』
『そんな…嘘だろ……』

因みにアナザーログにならなかったハルトが玄徳に会った際に

「その文字T何処で売ってるんですか!!」

「ふっ、オーダーメイドだ」

「買います!!」

「待て魔王!」「早まるなって!」

「ヒゲと同じセンスになるな!!」

と全力でビルド組に止められると言うルートもあつたりする

「さてと此処には色んな文字Tがあるな…逢魔に輸入したいなあ大量に」

笑顔で買い物籠にジャンジャンと放り込む姿に

『よせえ！や、辞めろー！』

『くそツ！ブレーキがないとコイツがバカになるのを忘れてたあ!!』

『頼むウオズ!! キャロルでも良い！誰かこの暴走を止めてくれえ!!』

その祈りが天に届いたのか不思議なことが起こった！

「大変だあ！怪人が現れたゾォー！」

「っ！行くぞ!!」

『ありがとう怪人!! 今ほど来てくれた事に感謝しているぞ!!』

とその声に反射して振り向くとハルトは文字Tをそっと戻して二亜の手を引き現場へ駆けつけたのである

「!!!」

「何あれ？」

暴れているのはまたもや怪人…あのメカニカルかつ頭にガシヤットが刺さってる
フォルムはまさか！

「コラボスバグスターだ!! すごい! 何のバグスターだろう!!」

何のゲームかは体を見ればわかるのだが…初めて見るフォルムだな油断はしないで
行こう最初からクライマックスだぜ

「リプログラミングで弱体化した所をフルボッコだな」

容赦はいらんな思い切りやってやろとアナザーエグゼイド ウオッチを構えた所で

『は、ハイパー無慈悲!! せめてアイツに見せ場を……見せ場を作ってやってくれ!!』

「えー! つもりそれって俺がボコボコにされるって事じゃーん!」

『お前それでも怪人の王なの!?!』

「はあしようがない……ならおい! そのバグスター!」

『質問した所で答える訳「ナーニー!」話すんかい!!』

「君は何のゲームのバグスターなのかなあー!」

どーせアレだろう? 神が携わっていない層みたいなゲームのバグスターだろうなあ
!とふんぞり返っていたら

「デンジヤラスゾンビー!」

メイドイン神様のとんでもないコラボスバグスターじゃねえかあ
!!!!

「テメエに見せ場やらんぞ! この場で秒殺してくれるう!!!」

『見事な手のひら返しだ…』

「ゾンビは放置したら大変な事になる…二亜は下がってな」

「言われずともオオ！…あ、ナツキン？そうそう今ねハルきちが怪人とエンカウトして
るよ！何でもデングジャラスゾンビって…え？仮面ライダーじゃないよ怪人だよ？す
ぐ来るって！」

と話している…よしなら

「久しぶりにトリニテイで行くか…ってウオズがない!!」

しまったあ！と頭を抱えるハルトであったが

「……………いや呼べるなあ」

そうだよ、アナザーワールドに隔離されたゲイツも未来で変身した時も過去にいた2

人を呼ぶ事が出来たのだ……つまりアナザートリニティならば時空を超えられるのだ！

「そうだよ、さつさとトリニティになれば良かったんだ！」

ウオズを援軍で呼べた事に気づいたハルトにアナザーライダー達からは

『最初にそれを思い出せえ！』

『ウオズ頼む来てクレエ！この暴走列車を止めてクレエ！』

『後生の頼みだ!!』

そんなご意見を頂いたので

「よし……行くぞ」

『ジオウトリニティ!』

—————

ウオッチの起動に伴い現実世界でも異変が起こったのである

「っ！」

「どうしたのウオズちゃん？」

「我が魔王が呼んでる？」

「へ？魔王様なら今寝てますよ？」

「成る程…アナザートリニティを使ったのか」

「ならハルト坊はピンチという事じゃな…行つてこいウオズ！先日の汚名を返上してこ

い！」

「ならば留守は新四天王に任せて貰うぞ」

「ネガタロス貴方…」

「よし織斑屋！四天王最初の仕事だメイド隊と共に夕食を作れ！」

「おう！…つて俺一人でハル兄と同じ量は捌けないよ！」

「ご安心を私もサポート致しますので」

「ベルファストさん…ありがとうございます！」

「それとだウオズ、あの馬鹿が馬鹿してたら止めてこい！」

「かしこまりましたキャロル嬢」

するとウオズの体が緑色に光り始めると時計のような形に変わりハルトのいる世界に転移したのである

「けど俺達も向かわないと！」

「ああハルト様の危機に駆け付けないで何の為の進化だ！」

「じゃがウオズと違う妾達には時空を超えての移動方法はないぞ『ヤクヅキ様！』なんじゃ？」

『実は逢魔にこのようなものが！』

トルーパーが映像で見せたのは赤いブレスレット型のアイテムと

「恐竜ロボット？」

「トレックス型のロボットが鎮座しているではないか聞けば当然、逢魔に落ちてきたのだと」

「確かに緊急事態だと思うが、今は後に」

『実は…』

『僕宛てのものらしいんですよね』

「お主は！」

—————

逢魔王国

「この間の宴会ぶりですね魔王軍の皆さん、クローンのハルトです」

『その声、シヨタハルトか！』

「その呼び方は不本意です！まったく白スーツから連絡受けてきてみれば…」

逢魔上空にゴッドコーカサスが浮遊している

「あの恐竜ロボ…ブイレックスとコントローラーのブイコマンダーは僕宛てにオーディエンスが送ってくれたのですが、どうやら座標の間違いで逢魔に来たようですね」

『分かったがブイレックスとやらで何が出来るのだ？』

「オーディエンスの話ですと時空の歪みを作り出しオリジナルのいる世界に行く事が出来ます！」

『何じゃと!!』

「ですがその為にはブイレックスと僕がそちらの世界に行くのには時間が『ポータルを通れば直ぐに行けるよ!』……それだ!よし行きます!ブイレックス!!」

クローンハルトはブイコマンダーを頭上に掲げるが何も起こらない

「……………あれ?」

うーんとクローンハルトは首を傾げているとブイコマンダーから英語で使い方のアナウンスが流れる、クローンハルトは首を縦に振り

「うんうん……………分からないから日本語で喋って!!」

『ああお主、やはりハルト坊のクローンじゃな』

『左手につけろって言ってるよ』

「ありがとうございます!よし……………ブイレックス聞こえる!?!」

「!!!」

　　頷くブイレックスを見て

「よし僕を乗せてポータルに突入!」

「!!!」

そしてブレックスに乗り込むクローンハルトはポータルを超えてデートアライブ世界に到着したのであった

「到着!!」

「おお！よし束、銀狼！お前たちの出番だ、このブレックスの力を使ってハルトのいる世界への門をこじ開けるぞ！」

「おおお！束さんにお任せあれえ！…取り敢えずあの恐竜を分解して良い？」

「それはダメだよ…今は堪えて」

「!!」

何故かブレックスは体が震えていたという

『ジオウ！ゲイツ！ウオズ！アナザーライダー ジオウ！トリニティ！トリニティ！！』

「はあ！」

アナザージオウトリニティに変身すると

「お待たせ致しました我が魔王」

「ウオズ！よく来てくれたな！」

「我が魔王が望むのならば必ず馳せ参じますとも」

「ありがとう！」

「助かったよウオズ！頼むからこの馬鹿止めてくれ！」

「その一言と声音で大体わかりました：我が魔王、後で説教です」

「ええ、もう仕方ない、取り敢えずやるぞ！」

「「おお!!」」

「ゾンビーーー!!」

ゾンビコラボスバグスターがアナザートリニティに襲い掛かるが

「右手で打つべし!!!」

「また俺かよお！」

アナザーゲイツ側で只管、殴る殴る殴るのである

「右手で打つべし打つべし打つべし!!よし！」

「よしじゃねえよ！相変わらず怖えから！」

「ええ……なら仕方ないヴァルブラッシャー!!」

久しぶりのヴァルブラッシャーを肩に担ぐと

「一緒にドン！」

『バッファ』

アナザーバッファアウオッチも起動、現れたゾンビブレイカーを手にして

「オラオラオラオラオラア！」

両手の武器でコラボスバグスターに攻撃する頭目掛けてヴァルブラッシャーを振り下ろし右肩にゾンビブレイカーを添えるとそのまま振り払い切削する

「ゾンビには打撃じゃあ!!」

再び頭部にヴァルブラッシャーを振り下ろしてゾンビコラボスバグスターの動きを止めると

「っしやあ！行くぜえ！」

『アナザーフィニッシュタイム!! ジオウ！ゲイツ！ウオズ！アナザートリニティ！タイムブレイク！バースト！エクスプローション!!』

「「はあ!!」」

三位一体のアナザーキックはバグスターを吹き飛ばした後、緑色の箱に閉じ込めるなり爆散残されたのはデンジャラスゾンビのガシヤットだけであった

「ふい〜回収完了」

ガシヤットを拾い変身解除するとウオズの姿も隣にある

「何か久しぶりな感じだなウオズ」

「ええ…取り敢えず我が魔王、今どのような状況なのでしょう？」

「話せば長くなるけど…あ、二亜大丈夫？」

「大丈夫だよそれよりナツキン、デート大丈夫だった？」

「ああ今日はお休みしてたからな」

事情説明中

「成る程、我が魔王達は精霊を幸せに出来るか査定されていると」

「そういう感じだね」

「成る程…そして何故貴女がここに居るのですかマーリン嬢」

「いやあ面白そうだなあつてつい」

「はあ……全く貴女と我が魔王が会うのは先の話ですよ」

「良いじゃないか歴史は変わってるんだし」

「やれやれ……」

「何か意味深な話してるな」

「ああ」

「あ、君にはコレをあげよう昨日のお詫びだ」

とマーリンがお詫びに渡したのは濃い青・黒・銀の三色の配色のワンダーライドブツ
クだった

『ラウンズオブキヤメロット』

「……何コレ？」

「俺も知らねえライドブックだな」

「君につてき、それ用に渡しておくよ起動に必要なキングオブアーサーだよ」

「あ！無くしたと思った奴…海東さんが盗んだと思ったばかりに」

「へえ…コレ使うんだ」

「んでウオズ、外はどんな感じなんだ？」

「簡単に言えば我が魔王の食事が食べられない事によりピースメーカー乗員が総動員で事態の解決にあたっています」

「そうか」

「そして寝ているナツキの体を巡ってエルフナイン、マドカ、エンタープライズ、ホー

ネット姉妹により壮絶な空中戦が行われております」

「おおおおい！人の体で何してんだ!!」

「俺の体は？」

「現在、キャロル、東、銀狼嬢の協力の元で調査しております」

「そうか無事ならよし！」

「本当に大丈夫か!？」

ほんわか話していると突如、空に現れた空中要塞と街めがけて落ちる雷に事態は急変を迎える

万由里ジャツジメント 4話 集うものと

前回のあらすじ

アナザートリニティで怪人撃退と喜んでいたハルトであったが突如町に現れた天使の雷撃により街は大混乱！

その頃 現実世界ではブレックスによる時空を歪ませる攻撃で四天王達が馳せ参じようとしたのだ

現実世界にて

東、銀狼は未来技術で出来ているブレックスを解析し武装の威力を調整 ハルト達
のいる世界への道を作ろうとしていた

「よーし！調整完了!!」

「けどコレで夢の世界？に行けるのかな？」

「多分だけどハルくんを隔離してるのは別空間に飛ばしたんじゃないかな？多分劇場版エグゼイド にあつたゲーム空間みたいな感じだと思う、睡眠時は精神的防御が緩まるからその隙を突かれて引き込まれたんじゃないかなあ？」

「ふーん…敵の能力って事？」

「だね〜けどあつちの器の子や精霊だけが巻き込まれた所を見ると精霊に関係した子だけが行けるんじゃないかな？」

「けどジャンヌやアルトリアは飛べた」

「サーヴァントはハルくんと契約している使い魔？みたいなものだから入れたのかも…あとこれは私としての解釈だけどね2人は多分電脳世界に近い場所にいるんじゃない

「？」

「その心は？」

「そもそも精神攻撃ハルくんには効かないし」

「確かに」

「ならば後はウオズや2人がその世界に入り込んだ歪みの座標を特定して、この子の力で歪を大きくすれば入れるはずだよ！OK!!」

「準備完了いつでも行けるよ、そっちは？」

『済まないちよつと待ってくれ』

「どうしたの千冬？」

『いやその何だ………』

—————

「魔王ちゃんの応援は俺達が行くよ！」

「何を言っている！ここは新四天王の出番だ！足手纏いの旧四天王はここで留守番でもしていろ！」

「でもそっちの1人は炊事場だ！となると万全に動ける俺達の方が良いだろう！」

「ぐぬぬ…だが向こうにはあの精霊 歌姫がいるまた洗脳されるやもしれんな！」

「それは君たちもだろう!!」

「何だと!」「やるかあ!!」

「誰が助けに行くかで揉めている」

『あちや〜』

『皆、ハルトが心配』

「それは私達もものだがな…何せあのバカはストッパーがいないと暴走が止まらないからな」

『ハルトは止まらない』

「ハザードみたいに言ってやるな」

そんな中、乱入した影が一人

「おうおうおう！何小さな争いをしてるんです！今はそんな喧嘩をしてる場合じゃないでしょー！」

「黙れ！ボスのヒロインでありながら未だヒロインらしさを出せてないポンコツ戦乙女

のベアトリスは引っ込んでろ！」

「何ですとお！それは私のせいじゃないというのに！！ネガタロスそこに直りなさい！私の同僚から習った鬼専用首斬り剣術！雷の呼吸！伍の型！熱界雷！！」

「ふざけるな！俺のモデルは一寸法師だあ！」

『NEGA FORM！』

「……はあ何をしている！！」

ライダーバトルを始めたバカ2人に対して千冬は久しぶりの出席簿が炸裂した

「喧嘩するなバカども」

「はこ」

「やれやれ……ん？待てよ魔力か……テスタロッサ」

キャロルはそんな考察を確認する

「はい」

最近ハルトが呼び寄せた最強戦力に声をかける

「まさかと思うがお前達は「ハルト様やジャンヌさんの魔力残滓を辿れば向こうへいきますわよ」よし先行してくれるか？」

「畏まりましたわ」

これには仕掛けもある 実はハルトが名付けを三人娘にした事で魂の回廊が繋がりはハルトは悪魔召喚魔法を使わずに3人を呼ぶ事が出来るのだ 何故やらないかって？ ハルトは知らないからだよ!!

「ちよつと！ボク達に命令していいのはハルだけだよ！」

「だがその我が君も寝たきりなのだ仕方ないだろウルティマ、行くぞ」

「最近ハルトは膝に座らせてくれない…と思ったら緑色の髪したチビを座らせてるとか許せないよねー」

「でしたら今回の褒美で座るといいのでは？頼めば膝枕くらいは許してくれると思いますわよ」

「なら撫で撫でとかもありかな！」

「大丈夫と思いますわよ」

「よし頑張るか」

「……………あまり調子に乗るなよ悪魔め」

「は？何？キャロルこそハルトから愛されてるからって正妻面しないでくれる？」

「は？オレは正妻だが？」

「自意識過剰なだけじゃない？」

「は?」「あ?」

「お前達も何をしている!喧嘩している暇があれば彼処の寝坊助を叩き起こしてこい!!」

千冬の一喝で全員慌てて移動を開始する

三人娘は先行して向かう事となり、さて残りのメンバーだが

「ふはははは!見たか新参者よ!これがレジエンドルガの女王たる妾の力よ!」

「そして、これが剣士が積み上げた一撃ですとも!」

何故か拳と木剣だけで参戦した連中を沈めていたヤクヅキとベアトリスであった足元に負けた者達が転がっている…おい戦う前からバテてるが大丈夫か?」

「はあ仕方ない、行ってくれるか?」

「無論じやとも」「任せてください先輩！」

「ちよつと待て」

そんな中、大秦寺が全員の聖剣を持って現れた

「聖剣とドライバーのメンテナンス完了だ完璧に仕上げたぞ」

「流石です大秦寺さん!!」

「それと伝説の聖剣も持っていけ」

「はい！刃王剣はハルトさんに渡しますとも！」

「……その聖剣は彼を選んではない」

「へ？」

「いや、何でもない今は早く駆けつけろ」

「分かりました!!」

「よし束!」

『ほい来た!ピースメーカーのハッチオープン!!出番だよチビハルくん!』

その頃 ピースメーカーの格納庫からブイレックスが出てくるとクローンハルトはブイコマンドーから指示を出す

「その呼び方は不本意ですが仕方ないですね…エックスレーザー!!」

指示に従いブイレックスが肩に搭載したレーザー砲を発射、ウオズ達を通った際に現れた歪みが拡大された

『今だ!』

「ボイスフォーメーション！ブイレックスロボ！」

その音声と同時にブイレックスの体の変形を始める胸部にレックスの頭部が収まると右腕にはロケットトランチャー、左手にはロケットパンチを内包した時をかけるロボット

ブイレックスロボ 参上！となる

「これが僕のロボット…僕之力…じゃないやクロノスユニット全開！……発射あ！！」

クローンハルトの指示に従いブイレックスロボは肩部に搭載しているビーム砲を発射 極太緑光線は歪みを更に肥大化させ道を作ったのである

『今だ！』

キャロルの声を合図に三人娘とヤクヅキ、ベアトリスが入ると道は閉じるとブイレッ

クスロボは膝をついて倒れたのである

「あちやくクロノスユニットがオーバーヒートしてる冷却しないとダメだね」

「出来る限り急いでくれ束」

「アイアイサー！くーちゃん手伝って！」

「勿論ですお母さん」

—————

その頃 ハルト側では

突如現れた天使により攻撃と放たれた怪人軍団により街は大パニックとなっていた

「突然の劇場版展開やめえ！」

「ふざけてる暇あるなら戦うよ！」

『リバイブ…疾風』

「言われずとも」

『ジオウⅡ』

ハルトのぼやきにナツキがツツコミ入れる

「あーもう！ゾンビバグスターやらバイラスやらふざけてんのか！」

「恐らく…この世界そのもののバグが怪人として現れているのでは？」

「は？それってどういう……ん？何だよこの未来？……っ！下がれお前ら巻き込まれるぞー！」

「な…何にいい!!」

同時にハルト達を襲い掛かろうとした怪人軍団は砲撃魔法により跡形もなく消し飛

んだのである

「今のまさか」

「テストarroツサ達か!!」

「その通りですわハルト様」

「良いタイミングだったようだな我が君!」

「やっとなれたよ…で、今どんな状況なのさハル?」

「皆!どうやってここに?」

テストarroツサ達の加勢に安堵していたらだ

「ふははははははは!妾の敵ではない!退け雑魚どもお!」

「ヤクツキ!」

「ハルトさん！」

怪人を投げ飛ばす仮面ライダーアークと聖剣を手にかけつけたベアトリスがいたのだ

「ベアトリスまで！一体どうやって…」

「詳しい話は後です！取り敢えずあのいかにもトラブルの象徴とも言える要塞を攻撃しますよ」

「ああ！そうだ「待つてくださいい！」「お義父さん待つて」ん？お折紙with少年達！無事だったか！」

「はい！「あ、君にも聖剣をどうぞ」あ、ありがとうございます…と、取り敢えず彼女の話聞いてくださいい！」

「お義父さんにも協力して欲しい」

「分かった！可愛い義娘の頼みだ俺に任せろ！」

「土道」

「ああ、これからハルトさんと話す時は折紙を間に立てよう」

「それが懸命」

と土道が担いできたのは万由里という精霊？であった

彼女曰く

この場所は精霊の力を宿すものを査定する特殊空間である
良くない器と判断したら器を破壊する目的があつた

そして査定の直前 予期せぬバグに見舞われてしまい査定に関係ない者 加えてバグと言える怪人を倒す為にハルト達を連れてきたと言うこと

そして目の前にある雷霆聖堂という天使が暴走しているとの事だ

「バグ？」

首を傾げると令音さんから通信が入る…どうやらフラクシナス側でも歪からのアクセスに成功したようだ

『恐らくだが彼等怪人やや仮面ライダーの力をシンが取り込んだ影響だろうね…予期せぬ成分が空間の機能に支障をきたした可能性がある』

「成る程、だからバイラスやデンジヤラスゾンビみたいなプログラムのバグとも言えるような奴等が出てきた訳だ」

ウイルス（バイラス）やバグスター（バグ）って訳ね

「そうなる私達のいる世界はSERAPHのような電脳空間という訳か」

「夢って解釈は間違えてた訳か…どっちかと言えば意識だけをダイブさせる類のゲームだったか」

「ソードアートな奴？」

「大体合ってるよ近いようで遠い空間とも言えたからね、それは「ちよつと待ってくださいー」ん？何さベアトリス？」

「それよりも誰ですか！その魔法使的な衣装の女は！またですか！まさかまた増やしたんですか！何人作れば気が済むんですか！このすけこまし魔王!!別の世界でも新しい嫁を作るか!!この女誑しめえ!!」

「失礼だな…純愛だよ」

『どの口が言っているのだ凡骨？』

「まだ君たちとは初めましてだね…私はマーリン！偉大な魔法使いにしてハルトと未来で出会うお嫁さんさ！」

「ハルト様？まさかまた…」

「テストarovツサ、まだ自称な点を留意してくれ」

「畏まりました…：…いつになったら私はご寵愛を頂けるのでしょうか？」

「何か言った？」

「いえ何も」

「そんな事よりさハル！彼処のでかい奴壊したらご褒美頂戴！」

「良いよー俺に出来る範囲なら叶えちやる！2人も同じだよー！」

「…」

「やったー！じゃあ……えい！」

まるで軽く棒を振るような勢いでフェニックス・ファントムを太陽まで吹き飛ばす程のエネルギーを帯びた核撃魔法を雷霆聖堂に叩き込んだのである

「ふう〜よし「待て」は？」

ウルティマが目を細めるとダメージを負っても再生を重ねている天使の姿が見えた

「何アレ？ウザいなあ……」

不快な顔をするウルティマに対してカレラは自信満々と言った顔で

「なら次は私の番だな……いやあ楽しみだよ最近開発したこの技の威力がね……！行くぞ！
魔王レオンハルトの領地を的にして練習した私の必殺魔法だあ！」

ん？ちよつと待てとハルトは首を傾げた

「おい待てカレラ、今聞き捨てならない台詞が聞こえたんだが？最近もやってる？」

「大丈夫だ我が君！私の核撃魔法はレオンハルトの領地にいる者からしたら花火くらいの認識だ寧ろ撃たないと苦情がくるらしいぞ」

「そうかなら大丈夫……じゃないよ！だとしても撃つなよ！！また他の魔王への借金が膨らむうー！」

「安心しろ我が君……私の魔法で魔王レオンを消せば借金など払う必要はない！」

「……………カレラ天才!!」

「ふははは！そうだろうそうだろう!!」

「カレラしゆき」

「……………」

「はははは！私も我が君が好きだぞ！こんな風に楽しい祭りを催してくれるのだからな！！……っ！な、何をするウルティマ！」

「……………ごめーん手が滑った誤核撃魔法だよ」

「なら私も済まないな……魔法が暴発したあ！」

「……………」

と2人が互いに魔法を誤発させまくるといふ場外乱闘が始まったのである

『……かあ……祭りの場所は……』

アナザー王蛇も混ざりたいと言っています

『おいこの暴走列車を止めろ！』

「では失礼して我が魔王、カレラ嬢、ウルティマ嬢！そこに正「食らえ!!」ちよっ！カレ

ラ嬢!!」

ウオズが説教をする前にカレラが魔法を放つ：伊達に側近からブレイキの壊れた暴走列車と例えられていない：下手すればハルトよりも制御不能である、そして彼女の核撃魔法はウルティマよりもダメージを与えたのだが再生を始めたのである

「ほお…再生能力か…：良いなあ！これなら気の済むまで魔法を放てるじゃないか！」

「うんボクの八つ当たりに付き合つてよね！ついでにカレラにも当たれえ！」

「お待ちなさいな2人とも」

最後は仲裁に入るテストタロツサ：見た目に騙されるな原初の悪魔組ではディアブロやギイさえも警戒する程の悪魔であり人の下につくような奴ではないとすら形容された存在であるが現在ではハルトの仲間なのだから不思議でならない

「では最後は私が行きますわ」

テスタロッサも同じように砲撃魔法を叩き込むが再生を初めていくが回復速度は落ちている

「なるほど…あの巨体の維持と再生能力は厄介ですが私達の敵ではありませんわね」

「じゃあ！行くぞ!!」

「ハル！ご褒美の約束忘れないでね！」

戦意の高まる3人を見て

「勿論…ああ再生能力って厄介な象徴だけど実力差があるとただのサンドバッグとなるのが不思議で仕方ないな」

アナザージオウIIは遠い目をしていると万由里は

「な、何なよあの3人は!!私の霊力が雷霆聖堂の再生だけでゴリゴリ削れていくのだけ
ど!!おかしいわ!あの威力!!まるで核ミサイルを連続で撃ち込まれてる気分よ!!」

「ええ!」

「彼女達は逢魔王国が誇る最強戦力だ…その力は一撃で何万もの敵を薙ぎ払うのだ」

「今、実行されてるから良くわかるけど…うわあ」

「相変わらずテストタロツサさん達は苛烈…」

唯一面識のある折紙からすれば見慣れた光景でしかなかった

「でも無理よあの天使を落とすのは」

「へ?逢魔三強の魔法を立て続けに食らってるの?俺でさえ当てれば無傷で済まない
一撃なの?」

「アレを倒すには一点に攻撃を集中して霊力の供給を立つ必要があるのよ！」

「ふーん……じゃあやるか」

「仕方ない……って何か方法思いついてたりする？」

「ノープラン！取り敢えず殴り続けければ再生にリソース割いて攻撃はしてこないだろう？ならその間に少年君達が対策を立てれば良いさ」

「俺達に丸投げですか！」

「いや……俺なら再生も追いつかない程の一撃を叩き込んで倒すのは出来るけど少年君はその子も助けたいんだろ？ならその方法が見つかるまでの時間稼ぎはやるさ」

正直に言えばアナザーストリウスやアナザーグランドジオウで攻撃を叩き込めば消滅させる事は出来ると思うが

「ハルトさん……」

「時間を稼ぐのは良いが……別にアレを倒してしまっても構わないのだろうか？」

「それは辞めてください！あとそれ死亡フラグ!!」

「んじや行こうか「何じやこりやあ!!」は？」

目線を向けると二亜と七罪……彼女達だけではない精霊の皆が霊装や天使諸共完全復活しているではないか！

「二亜ちゃん！完全復活!!……ん？となれば囁告篇帙!!」

全知の天使 その魔王の検索エンジンに匹敵する情報収集能力で雷霆聖堂への的確な攻撃方法を割り出した

「よっしゃあ！検索完了！」

「何て検索スピードだ…」

うちの検索エンジンと大違いだ！

『んだとゴラア!!』

精神世界で喧嘩していると二亜は囁告篇帙をめくりながら

「私の指示に従って攻撃してくれる？」

その言葉に全員が頷く

「じゃあ行くよ！私の見せ場!!」

「っしやあ！まずは空気を読まずに核撃魔法!!」

「撃たんで宜しい!!」

「「えー!!」」

「えー!じゃないよ!ハルきち!!説得して!」

「大丈夫だよ2人とも二亜ならきつと2人のカッコ良い見せ場も作ってくれるから」

「なら良いや」「ああ頼んだぞ、ニア」

「突然の無茶振り!!」

「それで先ずはどうするの?」

ウルティマの質問に二亜は囁告篇帙をめくりながら説明する

「えーとね…まずは攻撃で外装を削ります」

「ボク達の魔法で削れてるね」

「次に形態を変えてくるので、その形態の雷撃を受け止めます」

「なら私の出番ですね雷を司る雷鳴剣は伊達ではありません！」

「なら俺も！」

『バカ辞めろ！』

『ゴースト…エジソン』

『しかも何でそれにするかなあ!!』

『そこは俺にしてライジングだろうが！』

「あ……ちよつと待ってチェンジしー」

アナザーゴースト・エジソン魂になり放たれた雷霆聖堂の雷撃を聖剣で頭のアンテナで受け止める

「あばばばばばばばー！」

感電している姿を見て思わず周りは驚いた

「そこまで体を張るなんて」

「単純な選択ミスですね」

異変はすぐに起こった

「大丈夫かハルト!!」

「ああ大丈夫だナツキ君、幸いエジソン魂のお陰で脳へのダメージは無い戦闘続行可能だ」

「え？君？…いや、どうしたのハルト？」

「雷に撃たれた結果、私の脳の活動が活性化し普段の120%で仕事をしている、そう今の私ならミレニアム懸賞問題を解ける程の演算能力を獲得したのです！」

『ああ普段使っていない頭が回転しているのが良くわかる』

「つまり滅茶苦茶頭の良いハルトって事？」

「正解です、では実験を始めましょう」

『ビルド』

「ふむふむ、アナザーWと二亜の囁告篇帙から得た情報から整理しますと……」

ハルトがアナザービルドに変身すると本家仮面ライダービルドと同じように突如として複雑かつ多次的な数式が浮かび上がるではないか、因みに普通のハルトが同じことをした場合

【複雑な数式】【難しそうな図形】【よくわからない式】【理解不能】【進〇ゼミで見た所】

など何かバカ丸出しな数式になるのである…これは喜ぶべきか悲しむべきか…

「成る程実に面白い…コレほど難解な計算は初めてですが…必ず解き明かして見せましょうー！じつちゃんの名にかけて！」

『前から思ってたんだが…お前の祖父母は何者だ？』

「何、普通の酒屋です」

『この流れだと数学者じゃないのか!?』

「さあ…行きますよ!!」

「こ、こんなのハルトじゃない！」

七罪の一言にハルト関係者全員が頷く

「頭の良い我が魔王なんて解釈違いも甚だしい!!」

「そうだよ! ハルは普段のおバカな位が可愛いのに!」

「こんなに理論を重視するのは我が君ではない!!」

「私達の知る間の抜けた呑気なハルト様を返してください!!」

「お主等…いつか不敬罪に問われるぞ?」

三人娘にまでそう思われているというハルトにヤクヅキはツツコミを入れざるをな
かった

「でも本当に雷に撃たれて頭良くなったんですか?」

「見たまえベアトリス君! この頭から溢れ出るインスピレーションや量子物理学や多次
元並行世界にいる私の力を借りる為の立体交差並行をさせるこの数式を用いれば敵の
行動予想から精霊? 万由里を助け出す事が可能なのです!」

「ほ、本当に頭が良くなっています……あのハルトさんから量子物理学や立体交差並行なんて小難しい言葉が出る訳ありません！」

「そうだ！ハルトは頭を使うで頭突きを選ぶような単純脳筋魔王なんだぞ！」

「皆、大袈裟……お義父さんなら大丈夫「しかしこの文字Tシャツは似合いませんね実用的ではありませんね私には不用です」……じゃない……！」

余りのシヨックに完全霊装の折紙も膝をつくほどに動揺している

「大丈夫か折紙！」

「心配 マスター折紙、お気を確かに！」

「お……お義父さんが文字Tシャツを不用？そんなのお義父さんじゃない……絶対おかしい……こんな幻覚に決まってる……嘘だ……助けて錫音お義母さん……！」

「ハルト！よく見ろ折紙ちゃんがお前のキャラ崩壊に混乱しているぞ！」

「何だと大丈夫か！折紙!!」

「あ、戻った」

「何じゃこの難しい数式!?!」

『それはお前が作った精霊を助ける為の方程式だ』

「俺がこんな難しい計算式、作れる訳なくね？」

「ああ良かったいつものハルだ」

「なあ攻撃するなら「取り敢えず物理攻撃」良かった元に戻ったぞ！」

「そう！それこそが我が魔王です」

「安堵したぞ我が君よ！」

「ハルト様……よくぞご無事で」

「テストアロツサ達まで!?!……まあ良いや!二冊!その後は!」

「えーと……変形した後の雷撃を撃ち終えたら更に獅子に変形します放たれる雷撃を処理しましょう」

「またまた私の出番ですね!では!」

『ランプドアラランジーナ!』

『ニードルヘツジホッグ!』

『トライケルベロス!』

三冊の黄色のライドブックの組み合わせは新たな力を剣に宿す
ワンダーコンボ発動!
『ランプの魔神が!真の力を発揮する!ゴールデンアラランジーナ!!黄雷三冊!稲妻の剣

が光り輝き、雷鳴が轟く!!』

仮面ライダーエスパーダ・ゴールデンアランジーナ 出陣

『必殺読破!黄雷抜刀!!ケルベロス!ヘッジホッグ!アランジーナ!三冊斬り!』

「雷の呼吸…壱の型…霹靂一閃!!」

雷鳴と共にベアトリスは獅子の背後に立つと納刀するような所作を取ると同時に

『サ・サ・サ・サンダー!!』

雷速の一撃が獅子の首に深い裂傷を与えたのである

「!!!」

「どうですか!これが剣士の力ですとも!」

「すげえなベアトリス、あのライオンを…」

『負けてられないな』

「次は奴に強烈な一撃をぶつけて核の露出だよ！」

「それならうってつけな奴がいるな火力バカ（ハルト）!!」

「流れ弾に気をつけろナツキ、来い刃王剣」

ハルトは決めるべく刃王剣を呼び出したのである

「さあ……ん？」

不思議なことが起こった!!

刃王剣はこの時を待っていたとばかりに眩い光を放ち

土道の手元に飛んでいった

ではないか

「あれ？」

「え……えええ！」

「シドー！その剣は」

「ハルトさん！コレどういうこと！」

「ああそう言う事ですか」

「やっぱりな」

事情を理解したのは大秦寺の眩きを聞いたベアトリスと直勘的にそれを理解していたハルトだけであった

「何故……」

「単純な事だ、俺はあの剣の担い手に相応しくないつてさ」

「我が魔王以上に相応しい担い手はいません！」

「だが現に聖剣は相応しい者を選んだ、さあ見せてみる五河士道…お前が俺の憧れる英雄達と肩を並べるに相応しい男か！」

「……………」

「シド…」

「お義父さんがああいった時は大体上手いく、士道なら問題ない私を救ってくれた時のようにすれば大丈夫」

「十香…折紙…」

「そうよ…貴方なら出来るわ…立ちなさい」

私のヒーロー」

万由里の励ましが少年に勇気を与える

「っ！」

士道は覚悟を決めた　その時

—————

盤面に現れる筈のない男、白スーツが楽しそうにビルの屋上の柵から身を乗り出しな

がら嬉しそうに呟いた

「今、聖剣に火を灯す者よ物語を終焉へと導く力を今ここに示せてね」

「あらあら今回も傍観するだけですの?」

「僕の出番は少し後さ、何せフロントム戦と乱入者の所為でドライバーがホラ、お釈迦になつたからね…お陰で変身できてもグレアIIだよ、それより君は良いのかい?他の子みにたいに混ざらなくて」

「ええこの件が終われば士道さんを頂きますので馴れ合いは不用ですわ」

「そう言う割には猫絡みで良く彼と会つてたようだけど…まあ良いや狙いは彼とあの聖剣かな」

「勿論ですわアレさえあればフロントムを亡き者に出来るのでは?」

「正解、あの聖剣は原初の精霊に届きうる刃さ…どう使うかお手並み拝見だよ仮面ライダーセイバー」

—————

「そうだハルトさん達任せじゃダメなんだ…万由里も十香達も…俺が助ける!!」

刃王剣をドライバーに納刀、そして

『ブレイブドラゴン』

ドライバーにライドブックを装填し剣を引き抜く！

「変身!!」

『聖刃抜刀!!刃王剣クロスセイバー！創世の十字！煌めく星たちの奇跡とともに！
高き力よ勇氣の炎！クロスセイバー！クロスセイバー！クロスセイバー！クロスセイバー！』
気

正当な担い手振るいし聖剣は 十の聖剣を束ねて 真価を示す

それは想像したものを創造する原初の聖剣に認められたものだけが至られる姿

『交わる十本の剣!』

青いブレイブドラゴンと表現するのが最適であろう。しかしそこから放たれる力は
その比でなく、魔王の首元にさええ刃が届きうる、その剣士の名は

仮面ライダークロスセイバー 覚醒!

その立ち姿に思わず

「シドー!何というか凄いキラキラしているぞ!!」?

「凄い士道…キラキラな美ボディー」

余談だが映像越しで見えていた大秦寺さんは

「アレが伝説の聖剣で変身した姿…凄い…刀鍛冶の血が騒ぐぜ！ F O O !!」

ハイテンションになっていた

そして

「クロスセイバー…遂に覚醒したな土道!!」

ナツキは我が事のように喜び

「何アレ！凄く強そう！ねえハル「後にしなさい」えー！」

「気持ちわかるがな…しかし我が君が作りし聖剣が他の奴の手に渡るとはな

「少々複雑ですわね…」

「はいはい落ち着け俺は気にしてねえ寧ろ嬉しく思うかな」

ハルトは気分良く答えているとクロスセイバーは聖剣の力を更に引き出しにかかる

『激土！錫音！黄雷！既読！！激土！錫音！黄雷！クロス斬り！！』

同時に現れた巨大化した土豪剣の刀身で雷霆聖堂を物理的凹ませると追撃とばかりに銃剣モードの錫音のビーム砲、分裂した黄雷が文字通り雷となって降り注ぐと奴の核が現れたのである

「ナイス！さあ出番だよハルきち！！奴のコアを破壊したと同時に靈力の供給を絶てば奴は停止するよ！」

「ああ！ま、クロスセイバーならアレくらい当然だな靈力は少年に任せて俺達は行くぞナツキ」

『グラランドジオウ』

「ああ！」

『ゲイツマジエステイ』

「私もお供いたします我が魔王」

『ギンガ』

「変身!!」

『祝え！アナザーライダー!!グランドジオウ!!』

『アナザーライダー！ゲイツ！マジエステイ!!』

『ファイナリー…』

三人も各々の最強フォームを解放したのである

「私達も」「負けられないわね」

精霊達も天使を使い 各々の形で援護すると三人は必殺技の体勢に入る

『アナザーオールトウエンテイ!』

『アナザーエル・サルバトーレ!』

『アナザー…』

「「たあ!!」」

『タイムブレイク／バースト!／エクスプロージョン!』

三人のアナザーキックが核に命中と同時に士道は万由里の霊力を封印　これで解決の筈だったのだが

「!!!」

「嘘…今ここで反転とかマジで!!」

反転天使の暴走が始まる　その時

「私の出番だな」

「セイバー!?!」

「マスターよ剣士となり、あの魔術師が渡した本を使え」

「えーと…ブレイズになって、本ってこれの事？」

『ブレイズ…』

『ラウンズオブキヤメロット』

本を開きライドスペルを詠唱させる

《高潔な騎士が剣を持ち、円卓を囲う》

「それに私のライドブックを装填しろ」

「キングオブアーサーを?ことう?」

言われるままにライドブックを装填

《集え！騎士王の名の下に！！》

そしてドライバーに装填、そのまま水勢剣を抜刀！

「変身！！」

《煌めけ、ラウンズ・オブ・キャメロット！輝く、円卓の誓い！》

その姿は青と白の装甲とマントを纏いし新たなアナザーブレイズ

打算などなく真摯に研鑽を積み重ねた氷獣戦記とは違う それはまるで王のような

雰囲気を纏いし姿

水勢剣の鋒を地面に突き刺した獅子王

アナザーブレイズ・ラウンズ・オブ・キャメロット 出陣

「うおおおお！何だこのクロスセイバーみたいな強化形態は!?カッコ良いな！」

「俺の知らないライダーのフォームだと……グーレイトだ！ ナツキ!!」

するとマーリンが杖を持ち、歩きながら祝詞をあげる

「祝え！ 円卓の力を束ねる騎士王と共に歩む新たな剣士、その名もアナザーブレイズ・ラウンズ・オブ・キャメロット……正に誕生の瞬間である」

「わ、私のセリフと役割を!!」

ウオズは役目を取られた事の悔しさに震えていたのであった

「まあそこそこだなマスター……しかしペアルックのようで悪くないな……」

セイバーオルタの言葉に八舞姉妹は首をグルリと向けて睨みつける……ちよつと怖い

「何だと?」「疑問、ペアルックとは?」

「さて決めるぞマスター！」

「ああ！」

「卑王鉄鎧、極光は反転する光を呑め!!」

『必殺読破！十三拘束解放!!（シールサーティン）円卓議決開始（デイシジョンスタート）
!!』

必殺技を発動すると同時に水勢剣が光り輝き始めたではないか、するとマーリンはクスリと笑う まるでかつての記憶を回想するように

「承認、さあ決を取ろう」

共に戦う者は勇者でなくてはならない 否決

心の善い者に振るってはならない 承認

この戦いが誉れ高き戦いであること 承認

是は、生きるための戦いである 承認

是は、己より強大な者との戦いである事 承認

是は、一対一の戦いである事 否決

是は、人道に背かぬ戦いである 承認

是は、真実のための戦いである 否決

是は、精霊との戦いではない事 否決

是は、邪悪との戦いである事 承認

是は、私欲なき戦いである事 否決

是は、世界を救う戦いである事 承認

『円卓議決 可決！』

「議決に従い敵を撃つ！最果てへと至る為に！！聖槍抜锚！！」

同時に水勢剣へ魔力の奔流が螺旋の形を描き始めて行く

「最果てにて輝ける槍（ロンゴミニアド）！！」

「約束された勝利の剣（エクスカリバー・モルガン）！！」

その奔流は正邪の区別なく天使を冠する厄災を払ったのであった

「……………」

「……………」

「ああ！私の囁告篇帙の検索やハルきちの計算式が無になった!!」

「いや驚く所そこじゃないでしょ」

「何だあの威力は…」

「いやあく自重なしの聖剣と聖槍の一撃、見事だったねえ！」

「マーリン！お前……っ!!」

アナザーブレイズが詰め寄ろうとしたが体からスパークが入り体からライドブックが抜け出たのである

「無茶が過ぎたか失敗失敗」

「当たり前だマーリン、まだマスターに円卓を束ねる力はない」

「ならコレは君の試練だ、あの力が再び使いたいなら私のいる世界に散らばるライドブックを集めたまえ……そうすれば魔王を倒せるかもよ」

「っ!」

「マーリン、貴女は!!」

「良い、ウオズ「しかし」良いと言っている俺を倒す勇者ならそれくらいしてくれないと張り合いがない……それと感謝するよマーリン」

「ん?」

「お前が見せてくれた新たなアナザーライダー…それはつまり俺にもまだ強くなれる伸び代があると言う事だろ?」

「その通りさ、流石は私の旦那様だね」

「まだ自称が抜けてるがな…さて、士道そつちはどうだ?」

「え?今名前で」

「最強フォームになったお前を認めてやらんでもない」

「もうハルキちはツンデレなんだからあ!」

「二亜は暫くビール禁止!」そんな殺生な!」

「でしたら我が魔王も暫く文字Tを買うのをお控えください」そんなあ!」自業自得です

よー！」

「はあ………ん？」

ハルトが空を見上げるとそこには歪みが浮かんでいた

「何アレ？」

「どうやら迎えが来たようですね」

「んじゃ帰りますか…行くぞマーリン」

「残念だけど少しお別れかな、私は前にも話した通り精神体でね今回は特別な形で参戦したんだ」

「………そっか、じゃあまた会えるんだな」

「勿論！じゃあまた会おう私の旦那様」

投げキッスをして光の粒子となりマーリンは消えたのであった、そして万由里はと言
うと

「じゃあね士道……いつかまた」

と消えようとしていたが

「えーと……何とかなれえ！」

士道は刃王剣の力を使い消滅を回避させたのである

「そんな雑な感じで良いの!？」

「良いんじゃないかな? じゃあ帰ろうぜ」

と全員、元いた場所へ帰るのであった

そして物語は最終幕へ向かっていく

リバイス I F コラボ記念短編

E P O 魔王の災禍

???

ここはあるマルチバースに存在する王国

文字通りの軍事国家であり、未知の技術で構成されている

戦場に向かえば百戦百勝の常勝軍団

そして その国の王は賢王であつた

た 武力のみに頼らず時に話術で時に権謀術数で敵を倒していき国土を豊かにしている

唯一後継者には難があつた

長男は傲慢で短慮、武力で王国…否一部の特権階級の者のみを繁栄を導くと主張

対する次男は冷静で深慮、武力はないが人柄から国民の支持は熱狂的である

これはそんな王国の

???

「ほお…こんな面白いマルチバースがあるのか」

「はっ！調べた結果、これらのテクノロジーは逢魔にも利用可能です…また豊富なエネルギー資源は現状我等が使用しているエネルギーの代替品となります」

「素晴らしいな見つけた物には褒美を取らせろ」

「かしこまりました陛下！」

「それで如何なされますか我が魔王？」

「ふむ、見つけた以上放置とはいかんさ…ほおアナザービルドも興味深いかそれに未知の技術と聞けば束やキャロル達も喜ぼう」

『だが未知は未知だ警戒しておくに越した事はないぞ相棒』

「ああ…常勝軍団？なら筆舌しがたい負けを教えてやろう代金は国の全てだ」

「かしこまりました、直ぐに軍を手配します」

「ああ頼むよウオズ」

その玉座に座るのは白髪の老人、ただその身に宿る覇気は紛れもなく暴君のそれと思

わせた

人ではなく物として見ている冷徹な目はまるで料理の塩がないからコンビニへ買いに行く位の気軽さであつた

「決まりじやなメガトロンを呼べ」

隣にいる赤髪の軍服を着た少女は冷徹に部下へ指示を出す、その横には若々しい青年がいた

「何じゃワシの出番かと思つたのに」

「お前の出番は無いさパールパティーン、あの国は話術や策謀で奪うより力で奪う方が爽快だ」

「でしたらグリーヴァスの専門ですな残念で仕方ありませんわい……ああそうだ原住民はどうするおつもりで？」

「基本は皆殺しだが…戦意のないものは捕えてショツカー首領とメガトロンへ渡す素材と奴隷の補充にでも当てろ、それと空いた国土にはクライシス帝国の連中にくれてやれ、丁度炭鉱のような仕事も出来るからな現地の雇用も作れる」

「はっ！」

「ほほほ流石はハルト様じゃな」

「あとあの王都は俺が攻め落とそう」

「陛下自らが!？」

「何だ不満か？」

「い、いえ!そのような事は断じて」

「何、ミラーモンスターの餌やグロンギ達のガス抜きにと思ったただけだ…ウオズ」

「はっ！全員集めております我が魔王！」

「であるか……」

「総員傾注!!」

「逢魔に仕える勇士達よ！次の戦場が決まったぞ……さあ行こうか戦友諸君」

楽しい楽しい戦争の時間だ」

魔王によって滅ぼされ 復讐に燃えた王子が過去の魔王へ報復へと走るまでの物語である

—————

王国にて

「お前たち愚民なんかが俺様に意見しようなんざ1000年早いわ!!」

「しかし王子、このままですと田畑が干上がってしまいます」ならば土壌が豊かな土地や港を奪えば良いだろうが直ぐに他国へ攻め込む用意をしろ大義名分などいらん」ですが

「おいクオーツ、そいつを黙らせろ」

「はっ！」

王子の側近は諫言した臣下を容赦なく射殺したのである

「そのこの生ゴミは外に捨てておけ、まあそろそろ俺が国王になる時だな」

「その通りにございます、弟君など後継者としての教育も受けずに下々のものと戯れる始末です」

「はん！構わないさ俺様が王になれば辺境送りだからな関係ないさ、それより父上が呼んでいたな乗り物を出せ」

―王都―

「何故ですか父上!!」

「今述べた通りだ、お前は王の器に在らず家督は…次期王は弟とする」

そんなの認められない！とばかりに怒りながら玉座の間から離れた

これが親子最期の会話と知らずに

「何で俺様じゃないんだ！下々のものと戯れるような奴が何故王位に!!」

「兄上？」

「何だ貴様……その目は！次期王になったからってそんな目で俺を見下すとは良い度胸だな！おい!!」

「僕はそんなつもりじゃ…「黙れ！」うわっ！」

「王子！いけませんぞ王都で暴力沙汰などすれば廃嫡の恐れも…」

「構うものか！何故こんな奴が王になど！俺の方が優れているというのに!!」

と頬を殴ろうと拳を振り上げたその時

「!!」

見慣れぬ灰色の幕が国のあちこちで広がるとその中から現れたのは巨大な空中戦艦
や見慣れぬ兵器の山

そして鉄の巨人に白装甲の歩兵達、更には見慣れぬ亜人達までいるではないさ

「なんだ……なんなのだアレはあ!!」

ピースメーカー艦内

「全軍配置につきました指示を陛下」

「始めろ」

さあ終わりの始まりだ

魔王が命じたのは国の国境線から徐々に包囲していく事、敵を1箇所を集めていけど
まるでゴミを角に追いやり塵取りで集めるばかりの気軽さだ

だが折角奇襲で先手を取った意味がなくなるではないか？その点は抜かりはない

「EMP（電磁パルス）拡散終了しました陛下、これでアイツらの兵器群は使用不能です」

「成る程鹵獲するのも容易いか流石だな」

「もつたいなきお言葉」

「私の方でもハッキングは完了…なんだ折角未知の技術で出来てる国って聞いてたのになあ」

「しかし脆弱で情弱な軍勢よの…これでは張り合いもないな」

「所詮は下等な原住民ですからなあ未知の技術と言ってもたかが知れていきましょう」

勿論 各地の軍勢もいるが壊滅的な損害を受けている相手からしたら兵器も無力化されているのに此方は制限無しで色々しているからな

「さて、そろそろ首都だな」

「漸く我が魔王の戦いですね、この戦いをこの本に記させていただきます！」

「好きにせよ……さあて始めるとするかな」

魔王はまるで近くに散歩へ行くような口調だが突如

「陛下、敵からの通信です！」

「繋げ」

と話すともニターに現れたのは自分と同じ歳くらいの爺さんである

『世はこの国の王である、お主の名は？』

「逢魔王国 国王 常葉ハルトだ単刀直入に言えばお前達の国を滅ぼす」

『何故だ…我等が貴国に何をした!!』

「別に？お前達は俺達に何もしていない偶々通りかかったから滅ぼそうと思ったからかな？」

『そんなば「後は面白そうな玩具を持っているから欲しくなっただけだ」何？』

「お前達の持っている兵器や技術が面白そうだから、折角素晴らしいものを持っているのにバカの手元にあるならバカな使い方しかしない、なら俺達で有効的に使ってやろうと思ったただけだ、後はまあアレだ俺達の兵士のガス抜きだ最近暴れさせてなかったのにな」

『捕虜はどうした！我が国の民は!!』

「安心せよ丁重に扱っているとも、まだ利用価値があるんでな……それで用件を言え」

『降伏を「却下だ下らん」何だと!!』

「生憎だが俺が欲しいのは民と資源と道具だけでなお前達王族や貴族のような人間は不

要なんだよ腐ったリングゴは捨てないと」

『そんな…』

「あく仲間や家族だけでも安全な所に逃したい！とかなら辞めた方が良い、俺の妻達の魔法で灰すら残らないから」

同時に国内で3箇所で起こるキノコ雲は首都からでも確認は取れた

「さてさて…用事は済んだ？そろそろ『ま、待つのだじゃ！』は？俺に命令すんなよ生意気」
魔王が手を前に突き出すと念動力を使い王の隣にいた側近の首を締め上げそのまま絞殺した沈黙が支配した相手には悪いが興味はないので

「さーとと…テスタロツサ『はい首都は包囲しますわ誰も逃しませんわ』ありがとう、じゃあ行つてきまーす」

そのままピースメーカーから飛び降りると丁度良い高度でアナザーウォッチを起動

『オーマジオウ』

アナザーオーマジオウに変身したハルトは右手を頭上に掲げると

「さてどうやって遊ぼう……そうだこうしよう」

『リバイ』『バイス』

「ほいっと」

体内からアナザーウォッチを取り出し起動すると現れたのはアナザリバイとバイスの2人のアナザライダー。そこにアナザーオーマジオウから溢れる黄金のオーラを流し込むと2人の体がレックス型のエネルギーに包み込まれ姿を変えた

アナザールティメットリバイとアナザールティメットバイスへと

「ついて来い城へ行くまえに余興と行くか」

2人に命令するとアナザーオーマジオウは、まずアナザーウィザードの力で結界を展開して首都の人間を誰一人逃げられなくした：そして首都に降り立つと近くにいた手近な人間へと

『ゲナム』『アギト』

「行って来い」

アナザーウオッチを振じ込み手駒とする、アナザーゲナム（ゾンビゲーマー）とアナザーアギト：この2人の参戦が意味する所は逃げ惑う民に襲いかかり仲間を増やすことである

それを理解した民達は門まで逃げようとするが当然結果があり外に出ることはない逃げられる！と希望を抱いて彼処まで辿り着いたのに外に出られない そんな絶望に叩き落とされた瞬間に襲い掛かるのはアナザーゲナムとアナザーアギトの軍勢に襲われ自らも襲った物と同じ存在になるのだから

「いやあ愉快愉快…取り囲んで逃げられない相手を追い詰めるのは楽しいねえ、あ、王城は囲んで火でもつけようかあ」

そう笑う仮面の下はまるで過去の己を彷彿とさせるような純粋な笑みであったのは言うまでもない

「さて残りは王様だけだね」

そして王城では

「王をお守りしろ!」「敵だ!であえ!」

と衛兵達が迎撃するのだが自分の目の前を通り過ぎたアナザーアルティメットリバイとバイスのコンビに蹂躪されていく…いやまあ殺すなど言うけども無理な話だよな」と笑いながら

玉座の間へと繋がる扉を蹴破る

「なーんだ、もうおしまいかあ残念残念」

「魔王め」

「今更気づいたの？まあどうでもいいやお前等」

指を鳴らすとアナザーアルティメットリバイとバイスは王や側近を守る護衛だけを排除したのである

「ふわあ…：以外と退屈だったなあ」

「退屈だと…：貴様が我が国にした事の何が退屈だと言うのだ！」

「だって面白い玩具持つてるだけで常勝とか世界の頂点！とか言うような奴には身の程つてのを教えてあげないとダメなのさ」

「たったそれだけの理由で……だが希望は残っておる……貴様がバリアを張る前に我が国の後釜は2人を逃がせたのだ彼等が私の意思を継いでお前を倒す！人間を舐めるなよ魔王が！」

「いやあ驚いた驚いた」

「何だと」

「まさかその程度で逃げて助かったあ！なんて思えるその脳みそに驚いたって言うてんだよ」

同時に魔法陣が現れると

「ふん、ふんは……うち、父上!!」

「ふん……一人だけかもう一人は逃げたか首都の中かなあ」

「た、頼む息子だけは殺さないでくれ…大事な後継なのじゃ…この通りだあ！」

「え？さつき意思を継いで俺を倒す云々言つてたよね？そんな奴を俺が助けると思つてるの？まあ影武者かも知れないが取り敢えず」

「よせ！やめろおおおおお！」

「えい」

そんなまるで人形の関節を外すように気軽さで行われた暴力（首の折れる音）と共に弟の首はへし折れると力無く地面に倒れ落ちたのであつた

「あ……ああ……あああああああああ！！！！」

それを見て泣き崩れているが知つた事ではない

「後はもう一人か……うわあ……超クズではないか」

弟の頭を鷲掴んで記憶を見るが、まあ良くある傲慢貴族の見本のような奴だ放つておいても勝手に死ぬだろうな……市井に溶け込む生活は出来ないだろう、だが念の為に心は折っておくか

「おい来い」

「ま、まて何をすう!!」

取り敢えず立体映像にすると

「さて、お前達助かりたいか？」

と魔王は悪辣に笑うと民の悲鳴や絶叫 この大合唱は 我が国の第二秘書（ヤクヅキ）を満足させるだろう

「では明日の朝までに首都にいる王子の首を持ってこい見つけた奴の安全は保障しよ

う、ああそうそう其奴等には手出しはさせん安心して探すといい」

そう言うのと民草は目の色を変えて首都にいる王子を探し出す

「そ、そんな…」

「所詮、人間はな自分が処刑台に登る順番を後ろに出来るなら誰であろうと裏切る生き物さ…他ならぬ俺はよく知っている」

過去、自分が虐められたくないからという理由だけで親友や仲間を見捨てた奴、そもその原因である家族の顔を浮かべていた

「さてと王よ…助かりたいなら演説でもして息子よ自分は死にたくないから変わりに死ぬ！とでも言ったらどう？」

「そ、そうすれば助かるのか？」

「さつきも言っただろう？約束は守るさ」

そしたら王は王で息子への演説を始める始末である

「ははは…やはりな大事なのは片方だけでもう片方など愛しておらんよ、これだから…」

この国の運命は決まっているというのに

—————

そんなバカなありえないと慌てるしかなかった今までであった当たり前が無くなったのである目の前に現れた魔王を名乗る連中に

自慢の兵器は使えず、王城は乗っ取られ、映像を見れば弟は亡き者とされ

「探せえ！あの王子の首を差し出すのだあ！」

更には道具達から命を狙われているというこの屈辱である

「おのれ：アイツ等今まで誰が国を守つてたと思つてんだ！それにあの恐竜みたいな奴ら何者なんだよ!!」

「王子よ落ち着いてください」

側近のクオーツに諭され冷静になっていると

「王子」

そこに現れたのは己の婚約者ではないか

「無事だったのか」

「ええ何とか、そんな事よりどうしますの？」

「なら僕たちと来ないかい？」

慌てる中 声が聞こえたのだ

「誰だ!」

「失礼、僕はネオタイムジャッカーのクジヨーと言うものだ」

「ネオタイムジャッカー?」

「今この国を襲っている魔王と戦うためのレジスタンスみたいなものかな? 今僕たちは戦力を集めていてね…君はなかなか良いものを持っているじゃないか、どうだい? 助かりたいなら僕たちと来ないかい?」

「王子よ危険ですぞ、このような怪しいものに」

「だがこのままだと君達は民に捕まるか夜明けと共に魔王に滅ぼされるかだよ?」

「……………良いだろう付いて行ってやるれ

「王子！」

「黙れ！あの魔王の力だ…アレがあれば世界を統べるのだって夢じゃない…そうだアレは俺が持つに相応しい力なんだ」

「へえ中々に面白いかな、ほら付いてきなよ」

そう言うとき王子、側近、婚約者の三人はこの国から消えたのであった

そして夜明け

「あーあ、ついに見つからなかったね」

「そんなまさか！頼むもう一日だけ猶予を！「嫌だ」た、頼む！私はまだ死にたくないのだ！」

「それさ今まで攻め込んだ国の人も同じ事を言ってたと思うけど聞いた事はあるか？」

「そ、それは……」

「自分は聞き入れないのに危なくなったら聞き入れては虫が良いだろうさ、ではな」

魔王が王を放り投げると同時に指を鳴らした

それが国の首都を消し飛ばすだけで滅んだのである

これが魔王の起こした災禍　だがこの話には続きがあつた

「陛下！例の王子なのですが生命反応がある世界で確認されました!!」

「そうか、だが世界の何処にいるのか分からないのではな……よしその世界事滅ぼすか」

この決断が後のネオタイムジャッカー幹部にして仮面ライダーソーサラーとなる

少女の運命を決定つけた事

そして

「この力があれば…俺は…アナザーオーマジオウを超えて王へとなれるのだあ!!」

『パールクス』

アナザーパールクスとなった王子 クロックは過去の魔王の力を奪い 己の国を襲った2人のアナザライダー そのオリジナルがいる世界へと足を伸ばす事になったのだと……

そして物語は動き始める……

リバイス I F コラボ編へ……

最終幕 1話 流れる季節と始まる終わり

前回のあらすじ

士道がクロスセイバーに変身し無事に事件を解決したのである

ピースメーカーでは

「助かったよチビ俺」

「相変わらず失礼ですねオリジナル」

「そう言うなよ今回は感謝してんだから」

「まったく…僕はブイレックスの回収に来ただけなのに何でこうなったのやら」

「しかし立派なものだなあ…巨大ロボかあ…俺も欲しいな」

『お前にはダイマジンやアナザータイムマジンとかあるだろ』

「えー！折角だから大きな合体ロボット乗りたい！」

『子供か！アナザータイムマジンがあるでしょ！』

「確かに！だけどやっぱり変形合体は男のロマンだよ!!」

「はあ…僕はそろそろ帰りますよ、ではまたいつか…っ!!この気配は…まずい！タイムファイヤー!!」

まさかのブイコマンダーに変身コードを伝えて変身したのだ、このガキ…やはりハルトか…

「今変身する必要ある!?!あと何か地の分が失礼!?!」

「理由ならあります、俺を追いかけてくる自称姉から逃げる為に!」

「え？ジャンヌ呼んだの？」

「違います…実はある世界で出会った人をお姉ちゃんと呼んだのですが…何故か【私はお姉ちゃんだぞ！】となってしまうまで」

「おう！気をつけてな！それには関わりたくないぜ！」

「オブラートに包みましょうよ！とお！」

そう言うとゴッドコーカサスは元いた場所へ帰ったのであった

「さーて…今日のご飯作るか」

「その前に正座しろ」

「はい」

最早慣れたとばかりに正座するハルトの前には仁王立ちするキャロル達…ふむ心当たりしかないぜ！

「まず……貴様……また誑かしたのかあ！」

「やつぱりマーリンの件か！ちくしょう!!チクリやがったなベアトリス!!」
「仕方ありませんよ情報共有は大事ですから」

「それとウルティマへ膝枕と頭撫で撫でだと！許さんぞ！羨ましいにも程がある！終わったらオレにもやれえ!!」

「私怨混ざってんじゃねえか!!」

ハルトは思い切りツツコミを返したのであった

そして

「ハルトさん、これを…」

と刃王剣について尋ねる士道な対してハルトは

「それはお前のものだ理想の世界を想像し創造する力…それは使い方次第で善にも悪にもなる、俺のグリモワールと同じだ託された意味に自問自答しろ士道」

「世界を想像して創造」

「だがお前はその聖剣の使い方について疎いのもあるし十聖剣の使い方も知らねばならない…という訳でレッスンを追加だ」

「へ？」

「『ヒヤッハー!!』」

「俺がグリモワールを使い全盛期以上の力と技を持たせた代償に頭のネジが外れてし

まった狂戦士達ことロードオブワイズ達との模擬戦だ何回やる？」

「断固拒否したいですよ！」

「だが士道、お前にはベアトリスのような剣士としての剣技もナツキみたいに死に戻りして積み重ねたものもない…そんなお前が立ち止まっている暇などあると思うのか？」

「っ！」

「精霊が後何人いるかは分からない、だが守りたい時に力がなく守れないという後悔をしたいのなら構わないがな…少なくとも諦めが悪い方が最後に希望を掴めたりする」

「なら俺も諦めずにお前に挑めば玉座が俺「のものになると思うなあ…このコウモリ!!」
「いふうー」

「逢魔の王は！このハルトだ！以前変わりなく!!」

『誰かこいつにレクイエムかけてくれ』

突然現れたゴオマを殴り飛ばして気絶させる、こいつはこいつで諦めるといふ事を知らんのか！だが

「こいつの諦めの悪さ、向上心は素晴らしい…何度でも挑むと良いゴオマ！さて土道よ何回模擬戦する10回？100回？いや」

まるで何処かのジョースターの立ちは決めた後　ハルトは土道を地獄に落とす言葉を告げる

「1000回だ!!四賢人よ連れていけ!!」

「「ヒヤッハー!!」「」」

「あ、ぎゃああああああ!!」

その様子を見てベアトリスは戦慄していた

「お、鬼がいます…あの老人達を頭のネジ外して蘇らせただけに飽き足らず模擬戦千回

なんて！聞きましたかファルシオンのハルト!!」

『魔王の俺ヤベー…人の心とかなんか?…どうしましたかヒナタさん? え? ケーキバ
イキングのチケツト? え? 一緒に! あ…俺にはしのぶって恋人いるの知ってます
よね? そんなの関係ない? え? ちょっと待てしのぶ! 落ち着いて聖剣を下せ…ヒナタ
さんも聖剣下ろしー』

ブツとガトライクフォンの通話が切れたので

「ふう向こうのハルトもハルトで修羅場でしたか」

とベアトリスは遠い目をしていた

まあそんな感じで万由里も士道達との日常に慣れていた頃

「クリスマスにはストライプサーモンと金色イクラを食え!」

「白スーツ世界でのクリスマスは終わりましたよ我が魔王……あと何処から出しましたソレ？」

「冷凍庫に入れてた、折角のクリスマスだから色々やろうって思ってたさあ〜クリスマスに誰も退場しなかったお祝いをお祝いと思ってるね!!」

「メタいです我が魔王」

「みんなー！集まれー！誰も退場しなかったクリスマスを記念してハルトサンタからこの中の1人にスペシャルなプレゼントがあるよー！」

「な、何い!？」

全員が戦慄した、一国の王からプレゼントだと！それは最早下賜である!!

「俺はアルトリアがサンタになるから別に良いなあ……つかジャンヌオルタもサンタになっちゃった気が……」

とナツキの台詞をかき消す歓声と共に出されたのは

「じゃーん！逢魔王国のレストランで使える無料ダイナーのペアチケットだあ!!」

おお！と騒めくが1人のクロイントルーパーの質問が争いの火種となった!!

「あの……それも魅力的ですがそのレストランで陛下の手作りフルコースや自分だけのスペシャルダイナーとかも頼めたりしますか？」

「え？皆が良いなら俺が作るけど？俺の料理で良いの？折角のクリスマスだよ？食べ慣れた俺の料理なんかよりも他の所で食べなよ？」

「ち、因みにそのチケットを貰える人とは！」

「え？うーん……この中で一番強い人かな」

ウオズは慌てた顔で

「我が魔王、何て事を…」

「はっ。」

「貴方はご自身の料理の腕を甘く見ている！」

「いやいやクリスマスにしか使えないタダ飯チケットくらいでそんな大袈裟な、皆なら平和にー

その時 視線を変えた事をハルトは僅かながらに後悔した

「陛下の手製ディナーチケットを頂くのは俺達だあ!!行くぞ親衛隊!!隊長とシエフィー
ルド姐さんの恋路のために素敵なクリスマスプレゼントするんだあ!今までにない
強敵ばかりだが日和るんじゃねえ!!」

「お前ら……」

「おうよ！普段陛下の子守りをしているストレスマックスな職場にいる隊長に最高のクリスマスを!!」

「野郎ども！命を惜しむな！名こそ惜しめ!!」

「お前達…俺は何て良い部下を持ったんだ」

「あれ？可笑しいなハウンドが信頼されて嬉しいうのに俺は涙が止まらないや、そんなに皆に迷惑かけてたかな？」

何気に親衛隊からの扱いも悪かったハルトである

「否！あのチケツトは我等ライダー怪人軍団が頂くぞ!!」

「魔王の飯となれば食い出がありそうだなあ」

「俺も参戦させて貰うぞ」

「ねえお前たち分かってるよね？」

「勿論ですお嬢様、我等がチケットを手に入れてご覧に入れます」

「お前たち行くぞー！」

「はっ!!」

「行きなさい下僕達」

「行くぞー!!」

まさかのチケットを巡って血を血で洗うとんでもない戦場とかしていたのだ…いやいや待てウルティマ達は眷属まで動員している…何で逢魔建国以来の激戦が身内同士の間割れなのさ!!

「何やってんだアイツら？」

あとハウンドには別でチケットあげるからシエフィールドとおいで!!

「流石に旧四天王は食べ慣れてるから冷静な対応を」

「ついて来い貴様等！連中を血祭りにしてディナーを頂くのだあ！」

「戦わなければ生き残れない!!」

「行くぞ！」

「絶対に負けられない戦いがここにある!!……ですがペアチケットなので同じ四天王でも2人しか行けないのでは？」

フィーニスの発言に凍りつく四天王

「!!!」

「ははは！そうなれば、お前達はここで倒れろおお！」

ドーーーーーン!!と大きな振動と共にトルーパー達が愉快に飛んでいるではないか

「してない!?!むしろアイツらより悪化しとる!!」

「まあ我が魔王の手料理を前にしたら、そうなりますよ……では私も失礼して……」

『ギンガ』

「はあ！」

「嘘だろ俺の料理にそこまでの価値が!？」

『あるから争いになってんだよ!』

「ちよっ!そ、そうだキャロル達は!!」

慌てて振り向くとキャロル達は優雅にお茶をしていた

「あれ?喧嘩してない?」

「当たり前だろオレ達はお前のクリスマスを貰うのだ何を争う必要がある?ケーキやデイナーも確約されているのだからな」

「そうだホワイトクリスマスでハルトとイルミネーションが綺麗な街でデートを…」

「楽しみね旦那様」

「私としても楽しみです」

「ん？クリスマスの日に雪は降らない筈じゃ」

「降らせろハルト」

「無茶ぶりい!?!…あ、ウエザードーパントになれって事ねOK!」

「けどハルくんがディナー作るなら夜は一緒にいられないよね?」

「まあ今のチケットを取った人次第かな…ケーキとかも作るから楽しみにしてね!」

「「「「「……」」」」」

「あの、みんな？」

「退けお前等…そのチケットを寄越せええ！」

「予期せぬ乱入!？」

とまあ波瀾万丈なクリスマスをしていた……因みに結果だが

「優勝はアンティリーネ!!」

「ふふふ…まあ当然よね」

「はあ……」

今回の件をきっかけにチケットは特別報酬ということになったのは言うまでもない

――――
因みに後の時間軸において

「風鳴機関の連中が俺達に政府要人暗殺をしたテロリストなんてくだらない冤罪を吹っかけて来やがった！その無罪証明をする為に皆の力を貸してくれ！」

おおおお！と騒めく会場にハルトが一枚のチケットを見せると

「報酬はこの特別ダイナーチケットだあ！」

うおおおお！と張り上げる声の中にちらほら

「行くぞお前等！風鳴機関が政府要人を暗殺しているなら俺達が先に政府要人達を暗殺すれば良いんだあ！」

「天才かお前!?!よしそうと決まれば行くぞおおおお!!」

「「うおおおおお!!」」

「やべ…冤罪じゃなくなるかも知れない……」

そんな危険なチケツトである事をハルトはまだ知らなかった…

—————

「~~~~♪」

「なあウルティマ…こんなのが褒美になってる?」

「なってるよ当然じゃん……うーん良いね」

「ゾンダ、ヴェイロン…ヘルプ!」

「申し訳ございません、ハルト様」

「無力な我らをお許してください」

「いやまあ許すけど……ひい！」

「……………」

また前回の件で手柄を立ててご満悦に褒美を享受するウルティマを陰から見ていたキャロルと七罪が血涙を流していたとは誰も知らない話である

しかしカレラやテストアロツサも休みの日に俺と遊びたいとか、それ息抜きというかご褒美になってるのかな？不安だ…確かに金とか宝石とかないように見えるけど俺だって王様なんだから頑張れば何とかなるのになあ

『相棒……お前と言う奴は……』

そして逢魔王国では魔王の餅つき撲殺事件（正月短編）を得て新年を迎えたのである

そして響く　時崎狂三　復学のニュースに騒めくラタトスク　だがハルト達は

「へー」

「いや関心持ってくださいよー！」

炬燵に入って気を抜いていた!!

「だって俺達からしたら、別に今更感凄いし…それに空間震が逢魔に落ちなくなっただから此処にいるモチベーション下がってんだよなあ〜ナツキはナツキで円卓のライドブック探しに動いてるし…あ、リモコン届かない…念動力使ってよいしょ〜」

とハルトは膝上に座る子供モードのキャロルをそのまま抱きしめ暖をとっている…ふむ悪くない、そして自身の超能力を使い遠くにおいてあったリモコンを炬燵から離れずに取る…これぞ超能力の使い方よ!

『何て無駄な使い方!?!』

「キャラル暖かい〜子供モードだから体温高いのかな?」

「!!!」

『相棒、キャラルの頭が茹蛸になってるぞ』

「まあ良いやーあーウオズ、炬燵の蜜柑…いやオレンジ!取って〜」

「我が魔王、師への配慮は不用かと」

「いやあく流石に正月モードから抜けられないけどさあ…今こーやって久しぶりのおやすみを満喫してる訳よ〜…んー平和」

因みにだがモードレッドのライドブックはシーカー世界のハルトと契約しているモードレッド から貰ったのだがアルトリア・オルタに会って

「く、黒い父上え!!やべえ!闇墮ちした父上カツケエ!なんかブリテン救えそんな感じがするぜ!」

「あれ?そもそもモードレッドが留守番中に叛逆しなかったら良かったんじゃ…」

「うっせえ!ハルトは黙ってる!!」

「モードレッド卿協力感謝する」

「父上がおれにお礼を言っただとお!!!」

「落ち着けモードレッド !!興奮で死んでしまうぞ!」

「これは何だ夢なのか…オレは今…アヴァロンにいるのか…だぜ!」

「ならばマーリンによろしく!言う訳ねえだろ!あんな詐欺師によ!」そうだお前はやは

り円卓の騎士だな」

「そんなマーリンをハルトは嫁にしてんだから大変だあ」

「は？」

「おいマスター、今のはどう言う事だ？オレというものがありませんながらマーリンと浮気か！お前も母上と同じ事をする気なのか！」

「え？全くもって身に覚えがな「何であの人格破綻者と関係なんて持つんだあ！正気じゃねえ!!」そんなの持つ訳ないじゃん」

「魔王の方だよ」

「大丈夫なのか魔王？」

とまあ誤解をされたシーカーハルトであったとき

「しかしもうバレンタインか早いな」

「バレンタインって何？」

膝下のウルティマが見上げながら尋ねてきたので答える

「んー女の子が男の子にチョコレートをあげる日かな」

「へーじゃあハルは沢山貰えそうだね」

「いや貰わないよ？基本皆に俺がチョコを渡す日だから」

「ええ…ソレで良いの？」

「まあ俺が好きでやってるだけだからね、今年はのんびり作るとするよ」

と朗らかに笑っていたのだが

その数時間後

「お義父さん、チョココレートの作り方を教えてほしい」

「任せろ折紙!!」

折紙が土道に渡すチョココレートを作りたいと協力を求めてきたのである

「料理は俺の数少ない見せ場の一つ!ここは出来る所をアピールしておかねばならん
!」

『まあその点に関してはお前は信頼できるわな』

「そうだろうそうだろう……へ?その点に関しては?」

「あと…キャロルお義母さん」

「何だ？」

「士道を夜の獣にするためのびや…興奮作用のある滋養強壯の薬を貰いたい」

「折紙!? オブラートに包んでるけどそれ媚薬だよね！」

「包めてねえよ火の玉ストレートだよ!!」

義娘の言葉に義母　錫音困惑！

「仕方ない…エルフナインに頼まれた奴を貸すかナツキに試す予定だった薬を貸してやろう」

見るからに怪しい液体を渡すキャロル

「これはっ？」

「コレを飲めばナツキなら三日間、普通の人間なら一週間理性を飛ばして獣のようになる…既成事実を作れ、そうすればアイツはお前のものだ」

「頑張る」

「無理に頑張らなくて良いんだよ!!てか何て薬を処方してんだよキャロル!」

「ダメだよ折紙! キャロルや束の作る薬とか使っちゃダメ! 体悪くするから!」

「安心しろその辺は抜かりはない! 副作用は飲んだ相手の理性が吹き飛ぶだけだ!」

「あるじゃねえか! スゲエ副作用が!!」

『その前にその薬をナツキに飲ませる予定なのだろ?』

「ナツキは別に良くね止めなくても本望だろう」

この男、暗い過去とか全部思い出したのだが割とナツキの扱いは雑である

「親友は親友だが敵と内通したりパヴァリア結社との抗争中に風鳴機関の乱入とか不
な俺達との戦争を誘発させた罪は重い」

『ああ…そう言えばアレはナツキがGPSとか捨てとけば起こらなかった話だもの
なあ』

「流石キャロルお義母さん…ありがとう」

「気にするな後で感想を聞かせてほしいのと…激励だ…押ししてもダメなら「押し倒せ」そ
の通りだこれは東達の教育の賜物だな」

「完全に良くない方向に振り切れてるなあ!?!」

「私、そんな事教えてない!?!」

「ダメだよ折紙!? 彼処の皆の話を間に受けたら! 天国の両親が悲しむよ!!」

「大丈夫錫音お義母さん…私はお義父さんから大事な事を学んだ、土道の独り占めは良くない皆で幸せになれば良い私はハーレムでも2番目でも構わない」

「ちよつ!! ハルト!?!」

「ああーコレは俺のせいだな」

「そうだよ!! 君以外に誰がいる!!」

「これはハルトが悪い」

何というかこの子は逞しいわ色々と

そして中途半端は良くないという事で

「良いのかいハルきち？また私とデートして」

「この間のはノーカンだ、流石にアレをカウントするのは気分が悪い」
そう二亜のデートの続きだ、場所は勿論

「アキバよ私は帰ってきたー！！」

「はあ…この感じ落ち着く故郷に帰ってきたような感じだ」

『実家のような安心感か』

「俺の実家に安心なんてない…俺の家は逢魔でそこに暮らす皆が俺の家族だよ、早く爺ちゃん達に見せたいなあ」

と答えたハルトは買い物と洒落込むのであった

そして

「いやあく色んな買い物したねえ！」

「ああ、予想外だった……こんな素晴らしい文字Tがあるなんて!! 流石はアキバだ!」

そこには表には奇想天外!そして裏には天上天下唯我独尊!と書かれた文字T……勿論購入済みである

「早速これを着て街を歩こう」

『辞めろ!それだけは絶対辞めろ!』

『貴様は羞恥心を何処に捨てたあ!!』

「捨ててはいないさ……だが俺は以前から思っていた」

「何を?」

「裸の王様って話あるだろ?」

「あるね、あのバカには見えない服着た奴?」

「そーそーアレって王様騙されてやんのプププ！じゃなくて…実は王様としては自分の国に見えないような馬鹿な民などいない！って純粹に信じた結果じゃないのかなって？」

「物語にとんでも解釈放り込んだねハルきち！」

「なら俺が文字Tを着るのも同じ理屈とまらないかなと」

『だからって本当に着る奴があるかあ！』

「安心しろ相棒、先程羞恥心云々言ったが…流石の俺も人前で服は脱がないさちよつとトイレで着替えてくる」

『辞めろおおおおおお!!』

「けど今日はデートだからさ、着るのは待ってくれない？」

「分かった今日は二重の日だからな尊重しよう」

『あ、ありがとう二重!!お前のお陰で助かったぞおお!』

「けど後で見せてね」

『違った!絶望が先送りになっただけだった!!』

そして2人で買い物を終えた帰り道

「やっと見つけたく初めましてお父さん、お母さん」

何か浮いてる黒髪の女の子が現れた父と母か

「誰の事だろうね?」

「さあ？ねえハルきち、私フア○チキ食べたい」

「んじや帰りに寄つてくかあ」

「待つてよ、普通はお前何者!?!とか尋ねる場面じゃないのかしら？無視は良くないわよ
!!」

「え？まさか……っ！ハルきち！自称娘が現れたよ！」

「またかよ最近自称嫁（マールン）なのでお腹いっぱいなんだから!!」

「何でそんなに手慣れてるの？」

「この世界来てから可愛い可愛い娘（折紙）が出来ました何が?!?!しかもそんな可愛い娘が悪い男に引つかかって愛が重い子になってんだよお！」

『その何割かはお前の過失な』

「あと未来から子供とか来てんだ！こちとら自称子供とかそんな展開なれてんだよお
！」

『そう言えばその時の子供から二亜やアンティリーネの事を聞いたなあ』

「本当に慣れつて恐ろしいわね…」

「だ、誰の子だ！」

「いや待てハルきち…さつき私達を見て父、母と呼んだ…という事は！」

「未来から来た俺達の娘という事か！」

「そういう事よ！QED!!」

「二亜…お前天才!?!」

「その通り!!」

「いや認知までにどんなに時間かかっているのよ？それとあたしは未来から来たんじゃないよ！今この時の娘よ！」

「っ！！」

2人は嘘だろ！という顔をしていた

「そんな……まだ……私はハルきちに抱いてもらってないよ！それなのにこんな大きな子供があ！」

「まさか二重……元カレとかの娘じゃ「いる訳ないじゃん！知ってるでしょ！私の人間嫌い！」それもそっか！」

とまあ家庭崩壊を超えてメルトダウンまで行きかけたのあった

「じゃああの子は誰なんだ、取り敢えず降りてくれない？スカートの中が見えそうだ

「よー」

「見たいの？」

「んな訳あるか」

「そうだよ！ハルキちはチラリズムも好きだけどはだけた着物姿とかチャイナドレスのスリットから見える生足とかそつちに興奮す「黙れ」あだだだだだだだ！」

何が悲しくて性癖カミングアウトされにやならん

「お父さん以外とムツツリ？」

「まあ否定はしない……」

「そうぞぞ！ハルキちはジャンヌに聞けば夜は押し倒されるのが定番なくらいのヘタレ受けなんだぞ!!」

「二亜は取り敢えずお口チャックと行こうかあ！話が進まん!!」

「えーとあたしは或守鞠奈、貴方達のデータを元に生まれた人造精霊よ」

「人造精霊？」

「あーだから私達が親なんだ」

「そう言うこと」

「ふむ……取り敢えずクロエと折紙に妹が出来たな」

『自然に受け止めてる場合かあ!!意味がわからんぞ!!』

と言っていたが取り敢えずバイクから降りて話し合いと行こう……いきなり全面的な信頼を寄せるのは不安なので仮の宿に案内しよう

「鞠奈と言ったかな？では質問と行こう」

「うん！何でも聞いて!!」

「君は人造精霊と聞いたが何処から生まれたのかな？」

「DEMだよ」

特に驚きはないな

「成る程な、だから二亜なのか」

他の精霊と違い 二亜は長い時間DEMに捕縛されていた人体実験もされたと聞くならばデータもかなり残っているだろう

だが俺のデータは…恐らく過去の戦闘データから産出したのだろうか？

『は、ハルトの頭が珍しく回転している!』

『この間の雷に撃たれた後遺症残ってんじやねえの?』

「つて人造精霊？普通のと違うのか？」

「精霊は普通の人間から変異して誕生するんだよハルきち」

「……………へ？」

「あり？これ話してなかったかな？」

「そんな重要そうな情報は早く言って!？」

何気に超重要な情報をあっさりカミングアウトしやがった!!

『いやお前も大概なような…』

「だまらっしやい！んで鞠奈、君の目的は？」

「あたしの妹達を助けて！」

「妹？達？」

「なるほど…さっぱり分からん」

聞けばDEMの残党が財団Xの人達の協力の元で彼女を作り彼女をモデルとして複製機で戦闘員として模造精霊 ニベルコルを作った

脱走した自分は妹を助ける為に親に助けを乞いに来たと

「はあ……こりや大変だな」

「断るなら……何で……私を娘と認知してくれないのお父さん!!私が愛人との子供だからなの!」 って近所で言いふらすよ?」

「何て悪辣な奴!!俺を醜聞で脅しにくるなんて!!」

『ああ、この棍棒外交は間違いなくハルトの係累だな』

まさかの展開にハルトは頭を抱えたのである

「しかし人造精霊の私兵と復元怪人軍団か……今度はドクトルみたいな事にはならんだろ
うなあ」

今更ながらに戒斗さんの助力を仰ぎたいと天を仰ぐ

「問題ないよコッチにも復元機が」「現在東達が製作中な」あ…」

現在、東達は以前接收した復元機の再現を行なっている

「分かったよ。だが協力するかどうかは皆と話し合つて決めるよ」

「助けてくれないの？」

「DEMから来た自称娘を直ぐに信じる訳にはいかないんでな」

冷たいと思うだろうが流石にDEMの繋がりを考えると警戒しておくに越したことはない

「なら囁告篇帙で調べてあげようか？」

「一応頼む……さてとウオズ聞こえたか？」

「はい我が魔王」

「兵隊集めろ、今度は先輩の皆さんの手を借りずにやるぞ……害獣は駆除一択だ」

「かしこまりました」

「さてと……アナザーW」

『検索済だ、確かにアイツはお前と二亜の娘だよ』

「そうか……なら助ける」

『そうだなお前はそう言う奴だな』

「だから手エ貸せ」

『言われるまでもないさ我等が王よ』

因みに同時刻　ファルシオンハルトは

「……………」

地面にのたうっていた

「あれ？またチョコレートに入れる薬の調合を間違えましたね失敗失敗」

「さ、再生能力が無かったら即死だった!!」

炎と共に甦ったハルトであったが

「最初から即死する猛毒を使っていたんですが……まあ良いでしょう、次の注射は私以外

を見れなくなる葉ですよ……あんな泥棒猫なんて視界に入りませんかからね〜

何か怖いので

「ひい!」『抜刀! エターナルフェニックス!』

「逃しませんよハルトさん、そろそろ誰にでも優しくするその軽薄さを叩き直して差し上げますから」『狼煙開戦!!』

「待ちなさいしのぶ」

「何でしょうか泥棒猫のヒナタさん?」

「貴女からハルトを頂くわ、彼は私が守る……しのぶあまり私を怒らせないで」
『界時逆回!!』

「あはは〜そんな態度だから嫌われてるんですよヒナタさん」

「構わない、ハルトだけが私を見てくれるなら…私は何処までも強くなれる！」

「やだ、ヒナタ…すてき！」

「お前、えらい余裕があるな」

「あ、デザスト！何してんだ俺を助ける！」

「修羅場とチョコレートと剣が交わる甘くて苦くて愉快的匂いがするな！」

「お前変な所でストリウスに似てんじゃねえ!!」

ベアトリスとの電話が切れてから　こんな戦いがあったという…その後　この世界の仮面ライダーバスターの尾上さんに全員揃って説教喰らったのは言うまでもない
……

2話 予想外の出会い

さて前回のあらすじ

自称娘の鞠奈の頼みで、知らない内に増えた娘を助ける為、DEMとの決着のためハルトは戦いに備えていた！

ピースメーカーの会議室

「さて…お前達旧四天王とウオズに集まってもらったのは他でもない、これは逢魔王国に関する最重要案件に対してお前達の意見が欲しいのだ」

「[[[[[.....]]]]」

ハルトはいつになく真剣な顔で幹部達を集めていた来たるべき戦いに備えー

「最近、俺の嫁と娘増えすぎじゃね？」

てはなかった

「はい解散」「おつかれー」「お疲れ様です」

「全くつまらん理由で我等を集めるでない」

「魔王様、それはないです」

「ちよつと待て旧四天王！まだ座つてよお願い！！」

「いや魔王ちゃん…そりや増えるでしょ！！」

「うむ増えない方がおかしい」

「何でだよ！俺が一体何をした！」

「自分の胸に手を当てて考えてみよハルト坊!!」

「分かんないから皆んな呼んだんだよ！あ、もしかして未来がそうだから動く歴史の修
正力的な！」

「違いますか？」

「自覚無しなの？この女誑しめ」

「何てことだ!!」

「因みに我が魔王「何だよ」まだ増えますよ？」

「……………」サアアアアア

「あ、灰化した」

「無理もないな」

と頷くフィーニスとヤクツキであった

まあコントはそれまでにしておいて

「成る程、人造精霊とDEMの残党が攻勢をかけてくると」

「そー、だから準備してんだけどさ…ぶつちやけ精霊 ファントムが動いた時にどう攻略したものかなとさ」

「あ、何か真面目な議題になりましたね」

「最初から真面目だ」

原初の精霊 フアントム

かつて折紙の過去に介入した際にハルトは実際戦闘をした 向こうが足止めメインだったのとハルトの奇策がハマリ何とか切り抜けたが本腰を入れてきた場合 どうなるのか正直言つて読めない敵である

「正直に言えば三人娘の核撃魔法での絨毯爆撃やアナザーグランドジオウの力でレジエンドライダーの皆さんを呼んでもダメーシが通るのか分からないんだよ、何とか暖簾に腕押しつて感じだし」

「確かにハルト様の攻撃が通らぬのではな」

「うん、理不尽が服着て歩いてる魔王ちゃんの攻撃が…」

「はい、やる事なす事ノリと勢いとドンブラでゼンカイな魔王様の攻撃が…」

「確かにの」

「あれ皆んな？俺の事イカれてるとか思ってたの？」

「「「え？今更？」」」

「ウオズ、ハリセン貸してくれ…この旧四天王には一撃必要だ」

「我が魔王、正論が痛いのは分かりますが聞き入れるのも王の器かと」

「ブルータス、お前もか!!あとゼンカイとかドンブラって何なのフィーニス？」

「見ますか？戦隊ヒーロー」

「うん徹夜して見る」

「健康の為に寝てください」

「ダメだ！特撮を前にしたら俺は夜も眠れない…見たさの余り夢遊病になるぞ！」

「脅しになりませんね」

「明日の朝ごはんの質が落ちるよ」

「どうぞ見てください!!」

『飯が脅しとして機能しているな』

その翌日

「はーはっはっはっはっは！おはようお供達よ今日のおやつは特製吉備団子だあ!!はーはっはっはっはっは！」

笑いながらシミーやバグスターウイルス達に神輿を担がせ、上から紙吹雪と共に扇子を仰ぎながら徹夜明けのまま 目の下にクマを作ったハルトが現れたのであった

「そののトルーパー！俺と目が合ったな！これで貴様とも縁が出来たぞ親衛隊に入れえ

！

「よ、よろしいのですか!!」

「はーはっはっは！戦力集め全開だあ!!」

と高笑いするハルトにウオズと旧四天王は円陣を組んでいた

「フィーニス!!あなた何したんですか!!」

「すみません…魔王様が一度ハマるとのめり込みやすい事を忘れてました…」

「いや魔王ちゃん、ハマりすぎでしょ!」

「元々素質はあるからなタイムファイヤーやガイソングなど戦隊ヒーローになってるハルト様もいた」

「「確かに」」

「はーはっはっはっはっ!! ハウンドよ、これでお前もイヌブラザーにならないか?」

「撃て」

暴走したハルトは親衛隊が手慣れた動きで撃ったブラスターライフルの放火を浴びて気絶したという

「あ、アレが私のお父さんなの…」

「いやあハルきちだねえ〜」

と驚く親子がいたが

「おい二亜、そこの小娘は誰だ?」

「あ、この子は私とハルきちとの子供だよ」

「初めまして」

「な……んだと……おいハルト！ どういう事だ説明しろ!!」

「待つてよキャロル！ 今のハルト起こしたら、また頭ドンブラしちゃうよ！」

「そ…それは面倒臭いな、よし少し待つてやろう」

目を覚ますと

「うーん……この数時間の記憶がない」

と言う事だったのでキャロル達は全力全開で神輿と監視カメラの映像は削除してか
ら

「ハルト…貴様…二重との間に子供がいると聞いたが…コレは一体どういう事だあ！」

「説明するから聞いてよ!!」

「問答無用だ!このまま押し倒してお前の体に聞いてやる!!」

「い、いやちよまつ…あーっ!!」

翌日

「悪いキャロル、昨日の俺に何があっ「知らなくて良い事だハルト」お、おう…何か体がだるいな…」

という一幕の後に幹部達を集めた真面目な会議が始まったのである
因みに今回はストッパーとして背後にベルファストが控えている

「さてと…今回の『チキチキDEM殲滅!ドッキリワクワク大作戦』についてだが「お

待ちを我が魔王」どうしたウオズ？」

「何でしょうか、その可愛さと血生臭さが両立した作戦は？」

「なんか一昔前のバラエティみたいだね…内容は殲滅作戦だけだ」

「今回はノリと勢いだけじゃ勝てない可能性がある…だからこそ綿密な作戦を立てて敵に当たらないとダメだ」

「！！！！」

大凡ハルトから聞かない台詞に困惑する幹部陣だが、それだけ危険な敵という事で気を引き締め治す

「戦いはノリの良い方が勝つが信条の我が魔王がノリと勢いを捨てるなんて」

「それだけ危険な相手という事ですわね」

流石、逢魔きつてのインテリ組だ頭の回転が速いが

「何だと！ボスからノリと勢いを取ったら何が残る！」

「大将、やっぱり疲れてんじゃないか？」

「仕方ないさ、ここ最近働き詰めだったからな」

「大丈夫ハル兄？ちゃんと寝てる？」

何故か新四天王には心配された始末である

「そう……今回の作戦の肝になるのはテストロッサ、カレラ、ウルティマだ」

その人選にウオズは恐る恐る尋ねた

「我が魔王、まさかと思いますが敵のいそうな場所目掛けて三人の核撃魔法を撃ち込む予定で？」

「そんな訳ないだろう彼女達の火力は素晴らしい……だが使い所を間違えると危ないんだ……あの偉大なレジェンド達が守った世界をこれ以上傷つける訳にもいかないからな」

「安心したまえ我が君！私だって手加減というのを学んでいるのだ！」

「因みにカレラ嬢よ、それはどんな？」

「うむ！核撃魔法を直接撃ち込むのではなく、魔法で発生した熱で焼き殺すのだ」

「素晴らしいぞカレラ！流石、逢魔最高戦力に相応しい成長だ！」

「いや成長ではありませんよ!?!進化した結果獲得したのは割と残酷な敵への攻撃方法ですよ!?!」

「大丈夫だ安心しろ！今回の戦いの被害の責任は全部DEMの仕業って言えば良いから！！」

それはもう良い笑顔で責任転嫁をするつもりでいたのである

『本当なんでこんな奴が主人公してんだ？』

『乾巧の仕業にすりや良「アナザーファイズ？親しき仲にも礼儀はあるよな？」ひい！』
「何仮面ライダーの仕業に仕立てようとかしてる訳？それ俺が一番嫌な方法なの分かるよね？…ねえ？」

『は、ハルト冗談だからな！落ち着け！！』

『ああそうだよ悪い冗談だったな、謝るよ！』

「なら良い、俺も沸点が低かったな」

『いやそれ本当』

「あ?」

『何でもありません!!』

本当何ででしょうか…謎です最初はアナザーライダーに振り回される子だったのが何故今は振り回している

「おい聞こえてんぞ白スーツ!!だが今回の戦闘の目的は俺の娘達(自称)を助けるためでもあるんだ…頼む皆の力を俺に貸してくれ!!」

「お前等気合い入れろお!!」

「「「「おおお!!」」」」

凄い声で答えてくれた皆にハルトは感動の涙が流れた

「お、お前等!ごめんな普段の扱いが雑だから俺王様で良いのかどうか心配で…」

「そう言う事なら俺に任せてくれよハル兄！」

「陛下の娘達という複数形！これ即ち修羅場案件である！気張れお前達！しくじればキャロル様達からのお仕置きがあるぞお！！」

「あと…魔王ちゃんの実の娘とか血統的に性能ヤバそうだから気をつけてね絶対ヤバい身体能力とか頭のおかしい特殊能力とか変身能力とかガン積みしてるから！」

「だが安心しろお前達！ハルト様の娘という事なら弱点がある！そうだ頭を使わせろお！難問クロスワードやナンプレ、クイズを解かせるのだあ！」

「知恵の輪とかも良さそうだね」

まあすぐに引っ込んだが…

『相棒、日頃の行いって大事だな』

「それを今身をもつて体験してるよ…ハウンド、ジョウゲン、カゲンには作戦終了後の宴会参加権を剥奪する」

「「どうかお慈悲を!!」」

「土下座するほど嫌なの!?!はあ……あ、取り敢えず経緯から説明するな」

ハルトが話したのはドクトルが製作した複製機を再び復元して生まれた人造精霊鞠奈 彼女とその劣化版とでも言うべき妹達ニベルコルを助けたい

「という訳だ」

「よ、予想以上に真面目な理由でしたね」

「ハルト坊にそんな優しい心が芽生えているとは」

「何を言っている？自称だが子供が父に助けを求めたのだそれに答えぬ父親など俺は一人しか知らないぞ、そんな屑にはならない俺は助ける」

「ヤクヅキ聞きましたか？」

「うむ…まさかあのハルト坊がお」

「未来では敵の王族や残党を探す為に王や姫を馬車で引き摺り回して生き餌にしたり」

「国内の裏切り者を炙り出す為に敵の忠誠の対象である貴族をミラーワールドに放り込んで誘き出す生き餌にしたりした、あの我が魔王が…」

「それ未来の俺だよな？」

「そして若い頃とはいっても何やかんやで刃向かった敵軍を蹂躪し笑顔で皆殺しにした我が魔王が…ちゃんと人を思いやっています…遂に人の心を取り戻したと言う事なのでしょうか!!」

「コノキモチ…コレガ…ココロ??」

「お前等も宴会参加権剥奪で良いかな？」「大変申し訳ございませんでしたー！」「よろしい話を戻すぞ、まずは複製機の破壊とDEM側の戦力を削る事だ」

「ですがニベルコルだけは無力化という訳ですね」

「そうだ…つまり乱戦となった際に咄嗟の判断が求められる訳だ」

「ご安心ください陛下、我々は平時から市街地を逃げる陛下を捕えるための専用訓練をこなしております…それに比べれば大した事ありません！」

「頼もしい発言ですねハウンド！それでこそ幹部の1人だ」

「俺そんなサボり魔だと思われてるの!？」

「まあ妥当かと…」

—————

一方その頃 二亜はキャロル達に囲まれていたのであった

「予想外だった…クロエや折紙の件は何となく飲み込めたが二亜、お前という奴は！」

「まあコレに関しては何とも言えないよね、まさか最初にハルくんとの子供を作るとか思わないじゃん！」

「旦那様介してないけどね」

「アンティリーネ、その辺生々しいから辞めて！」

「まさか二亜が…」

「先を越された!!」

「処す? 処す?」

「ちよつと待つてくれるかな！流石の私も予想外だったんだって!!」

「いやまあそうでしょうよ、知らない所で実子生まれてるとか軽くホラーよ」

「なつつんありがとう!!」

「まあそう言う事情なら、あのバカは間違いなく動くだろうな……よし二亜は無罪だ」だがお前は別だキャロル」何の件だ？」

「貴様は夜の順番を無視してハルトを押し倒しただろう、その件について裁判と行くぞ……昨日は私の晩だったのに……」

千冬が笑顔でサタンサーベルを抜刀した姿を見るなりキャロルは青ざめた顔で走り出した

「……………」ダッ!

「逃すな追ええ！」

「何か逃げ方がハルクくんみたいだよ!!」

「なら同じ方法で追い詰めましょう！」

「ハルトと同じなら逃走パターンAで対応可能、隔壁閉じるよ」

「じゃあ鬼ごっこに行きますか」『テレポート…ナウ』

「あら楽しそうねえ私も参加するわあ」

ここにピースメーカーを舞台にしたとんでもない鬼ごっこの幕が開けたのであった。

そんな嫁達の攻防を知る由もないハルトは

「ふう……紅茶美味しい…本当スゲエわ、ヴェイロン」

「恐縮でございますハルト様」

会議終了後、幹部陣とのお茶会に参加していた淹れてくれるのはウルティマの側近にして執事のヴェイロン、彼の紅茶を淹れる技術はコーヒー派のハルトを紅茶派へ変えた程であり、未だにハルトが紅茶の淹れ方や知識ではヴェイロンには勝てていない程である

「本当、俺なんてまだまだだよ」

「そんな事ございませんよ、何千人分もの食事を用意するなどハルト様しか出来ません」
「いやいやゾンダも出来そうじゃない？」

「そんな芸当私にはとても」

彼はゾンダ、ヴェイロンと同じくウルティマの側近で料理担当：マジで俺が忙しい時にヘルプしてくれる頼れる奴だ、因みに何個かレシピ教えてたりする

「しかし色々考えすぎて頭痛いな」

「まあ普段使わないからですね」

ウルティマ達の側近はちゃんと上下関係意識してくれるのに俺の側近ときた

「辛辣だな」

何て奴らだ本当！

『日頃の行いの結果だ相棒』

「へいへい……ん？」

と会話しているとスマホから通話が入る

「もしもし？どつたの銀狼？」

『ハルト、そこにキャロルいる？』

「キャロル？いないけど？……つまさか何かあったのか!!!」

『違う迷子みたいだから探し「それなら俺も探すよ」別に良い……いや待てよ……ハルト、その近くに七罪かウルティマいる?』

「ウルティマならいるけど?」

「何々々ボクの話?」

「うん……分かった?ウルティマ、ちよつと手伝つてくれる?」

「良いよ!何すれば良い?」

「んじゃ失礼して……よいしょつと」

ハルトはウルティマを膝上に座らせたのだ

「コレで良いのか？」

「どうしたのさハルト？急に？いや嬉しいけど」

「いや何か俺の膝にウルティマを座らせるとキャロルが見つかるって…何でだろう？」

「さあ？ボクは気にしないけどねえ」

「オレは気にするぞハルト!!」

「あ、キャロル見つかったよ」

「何？………しまったこれは罠「捕まえたぞキャロル」………千冬キサマア！」

「さあOHANASHIしようか」

何故かこの時の束の背中には白い服と機械的な杖を持ったツインテールの女の子が

見えたのであった

「ま、待て！助けてくれハー

最後まで告げる事なくキャロルは千冬と束にドナドナされたのであった

「あれ…何だったんだ？」

「さあ？ねえもう少しこのままで良い？」

「良いよ協力してくれたし」

「やった」

「おい我が君、流石にそれは羨ま…：けしからんぞ！」

「ふふーんだ、カレラはこんな事出来ないからね」

嘲笑うかのようにウルティマはハルトの方へ体を向けるとそのまま抱きつき顔だけ向けると

ニヤリとカレラを煽るのであった

「つーー!!!我が君!隣に座るぞ!」

「へ?ちよつ、カレラ!?!」

そう言うとかレラはハルトの右側に座ると強引に腕を組んだのである

この時、経験豊富な古参組は身の危険を感じ現場から離れたが新四天王や彼女達の側近は離れる事が出来なかつた一重に魔王の修羅場への経験値の差が出てしまったのである

「ねえカレラ、邪魔なんだけど」

「奇遇だなウルティマ、私も我が君の近くにいるお前に対してそう思っていた所だ」

「……………」

この2人の覇気にピースメーカーが震えるが

「何でこうなってるの？」

『身から出た錆』

だが

「まったく2人ともハルト様や周りの方が困ってますわよ」

「ちっ」

テストアロッサの仲裁で2人は怒りを沈める

「ありがとうテストタロツサ」

「いいえお気になさらず」

「しかしテストタロツサには本当にお世話になつてるな…俺は国を留守にする事多いから迷惑かけてばかりだし前から話してた褒美なんだけど何か良いのがあったら言つてね」

「それでしたら……ハルト様の一日を頂けないかと」

「!!!」

「え？そんなので良いの？」

「ダメだよハル！悪魔との契約をあつさり了承したら！」

「そうだぞ我が君！テストタロツサの事だ何か裏があるに決まってる!!」

「いや2人も悪魔だよね？けどテストタロツサにはお世話になつてるし…良いよ一日あげ

る」

「感謝しますわハルト様」

「ああ!!」

そんな訳で翌日

「しかし本当に良いの？俺とで」

流石に文字Tシャツではなく普通に着飾ったハルト…だが

「ええ勿論ですわ、今後の市街地開発事業に向けての参考資料が欲しいのでハルト様に協力頂ければと何せここでは世間知らずなものですので」

「分かった、微力ながら頑張るよ」

隣にるのが周りの視線を独り占めするような優雅さとお淑やかさを兼ね備えた何処かの姫を思わせるような美女 テスタロッサが前では霞んでしまうな…やはりイン

パクトの為に文字Tを

『辞めておけ』

「そうだなテストアロッサに恥は欠かせられないからな」

『そう思うなら他の奴等という時も恥じてくれ』

『これから何かあった時、キャロルやテストアロッサの名前出したら相棒の暴走止まるんじゃないか?』

『そう言えばキャロル達には話してるのか?』

「ん? お話したけど…何故その時『嘘だろ!』とかこの時が来た!』みたいな感じだったんだよなあ…何でだろ?」

『変な所で鈍感すぎるなこのバカは』

「つせえ……さてとじゃあ行こうか……へ？テストタロツサさん！腕組んでますよ！これは調査では!!」

「ええ組んでますわ……うふふ……」

どうしよう！と真剣に考えているハルトの腕を組んで狼狽する彼を愛しく見つけるテストタロツサ、その物陰では

「……………」

金と紫色の髪をした女の子2人が見張っていたのであるハイライトの消えた瞳とその体から溢れる殺意と覇気とオーラから誰も美し黒可愛らしい2人に声をかけないでいた……という声をかけようものなら側近に仕置きされてしまう

「ねえカレラ」

「何だ？」

「あれ腕組んでるよね？」

「組んでいるな」

「そっか、白昼夢でも幻覚でも見間違いでもなく現実か……」

「そうだな……テストタロツサの奴……大人しいと思ったら長いスパンでの計画だったのか！我が君の信を得て……全てはこの時の為に……策士だな」

「だけどボクは愛称で呼んでるからね、その辺はテストタロツサと大ちが「今日だけは様ついでなくても宜しいですか？」は？」

「良いよ？じゃあ行こうテストタロツサ」

「はい、ハルト」

その言葉に思わず2人は困惑する

「呼び捨てだと！そんなまさか!!」

「く……はは……あははははは!!」

「よし殺そう（すか）!!」

何故この時ばかりは不倶戴天の2人が同じ意見を述べ魔力を解放しようとしたので彼女達の側近は頭を抱えながらも止めに入ったのである

困みにウオズ達は

「大丈夫なのウオズちゃん!この間似たような事して魔王ちゃん困らせたじゃん!」

「大丈夫ですジョウゲン、今回はそのような失態は犯しませんとも」

「フラグを立てるな!」

「コレどう選んでもダメな気がします先輩」

「安心せいフィーニスよ、もう詰んでおるならば最後までやり通すぞ」

と旧四天王は出齒亀していた：何なら新四天王もこつそり見ていたのである

「旧四天王が前回ポンコツだった案件を俺達が完璧に対応する事で俺達の評価も上がるって寸法だ」

「いやそれはわかりますが…」

「まだ魔王は旧四天王に絶大な信頼をおいている、それを覆すには何が大きな手柄を立てなきゃならねえのと連中が下剋上なんて血迷った事をしないようにもな」

「いやそれなら普段の働きで示しましょうよ、てか近くで戦いがあるんですから…つてあの…：大丈夫ですか2人とも？」

『お前の体は丁度良く隠れ蓑になるからな』

『安心しろ乗っ取りはしねえからよ織斑屋』

一夏の体を借りて2人は同行していた：因みに最初はハルトがやったようにチンピラを気絶させて取り憑こうとしたが

「いや、それはダメでしょ!!」

「お前の義兄はノリノリでやってたぞ？」

「織斑屋は堅物だねえ、大将なら躊躇いなんてないがな」

「ハル兄の悪い所を学ばない!!そんなの人のやる事じゃありませんよ!!」

『バオージ!!』

と一夏に説教されたので代替案として憑依させてもらっている

「は、はあ……しかし出歯亀なんて」

「お前も幼馴染とのデートの参考にするんだな」

「何言ってるんですか牙王さん、箒と鈴とはそんな関係じゃないですよ」

「はあ……あのお嬢ちゃん達も前途多難だな」

「へ?」

「動いた、行くぞ!」

「待っててくださいよー!」

何故かこの時ばかりは逢魔の主力が自発的に行動していたのである

そんな中 周囲の視線を独り占めしているテストタロッサとの調査なのだが…しかし

ーこれデートじゃね?ー

『今頃気づいたのか?』

相棒……どうしようテストタロッサを喜ばせる為のデートプランなんてすぐに思い浮かばないよ!今回真面目な調査と思ってたから博物館とか美術館とかそんな場所しか選んでないのに!くそお!アナザーゼロワン直ぐに良いプランを演算してくれえ!!

『任せろ!あらゆる可能性をシミュレーションしてやるぜ!!』

『いや博物館とか行けよ』

ーそ、そうか!!ー

「な、なあテストタロッサ今日は博物館や美術館を回ろうと思うんだけどどうかな?」

「勿論、お供いたしますわ」

「いやテストタロッサに今日一日あげる言つたから君の行きたい場所じゃないとダメでしよ」

「でしたら博物館からお願いしますわ」

「OK！じゃあサイドバツシヤー出すからサイドカーに「歩いて行きましょう」へ？いや歩くと時間かか…まあ良いや行こうか」

「ええ行きましょうハルト」

自然に腕を組んで歩くテストタロッサに動揺を隠しきれないハルトであったが、その時テストタロッサは後ろを振り向くとクスリと笑い覗いていた2人を見ていたという

因みに件の2人は

「……………」

怒りと嫉妬で更に圧を強めていた、何なら手が触れていたコンクリ部分が減り込んでいるし מאודである

「……………殺す」

「お嬢様！落ち着いてください！」

「カレラ様！お怒りを鎮めてください!!」

ヴェイロンとカレラの側近 アゲーラが怒り狂う主人を懸命に止めていたのである

そんな感じ混沌を知らないハルトと知っていて楽しんでるテストアロツサは博物館に来たのだが…

「博物館（ミュージアム）か…」

巨大なTレックスの化石を見て呟くと

『おい不穏なルビが見えたぞ』

「展示品が夜に動いたりするかな？」

『エジプトの石板があれば大丈夫じゃないか？』

「そうかあ…夜動くのか…んじゃ俺の部屋にある仮面ライダーのフィギュアも夜な夜な俺が寝ている時に……」

これ以上考えるのは辞めよう怖くなってきた

「しかしこうなるなら良い所色々押さえたのに」

『お前以外とそう言う所は考えるよな』

「当たり前だろ？俺みたいな奴を好きになつてくれたりついてきてくれる奴等の期待や思いだけは裏切っちゃダメだろ」

『そうかなら文字Tも「男には時として譲れないものがある」ダブルスタンダードが過ぎ

るぞう』

「しかしなあ」

ハルトの目線が絵画を見ているテストタロツサに動く…それだけ既に一枚の絵になりそうだから恐らく宮廷画家とかいければ書いていただろう

「どうされましたハルト？」

「いや美人は何しても絵になるなって思ってる」

「あ、ありがとうございます…」

「お、おう」

何だこの気恥ずかしい感じは…まずいな今まで仕事仲間という認識だったから、何か変な地雷踏んだか！

「ごめん何か気分を悪くしたら」

「いいえ、ありがとうございます嬉しいですわ」

「そっかなら良いんだけど…」

そして博物館での散策も終わり、昼時となったが

（うーむしまった、ご飯作ってない）

弁当を用意すれば良かったと後悔している…仕方ない逢魔に戻って作るかなと考え
ていたが

あるレストランを前に足が止まる

「……………は？」

偶然なのかどうかは不明だ…しかし同じ名前をしているなど運命としか感じられな
かった

「なあテストタロツサ、昼は此処でどうだろうか？」

「ええ勿論」

赤い看板の店 レストラン A G I Ω

カランカランと音が鳴ると

「いらっしやいませお二人ですか？」

その姿は間違いない自分の知る英雄その人ではないか！つて事はマジか！！

「は、はい！予約無しですが大丈夫ですか！！」

「勿論！どうぞ」

「あ、ありがとうございます！えと…津上翔一さんですか？」

「はい！アレ何処かで会いました？」

「いいえ…その何といたしますか仮面ライダーアギトの事を知っていると云いますか…その……ファンです！サインください！！」

「え！僕の、いやあ嬉しいなあ〜」

やったぜ！！と歓喜するハルトであったがガチガチに緊張したまま席に座るとテストタロツサが尋ねる

「ハルト、あの人は…」

「おおおおおお落ちて着けテストタロツサ！あの人はははははは…」

「ハルトが落ち着いてください」

「お、おう！！」

だがメニューを持つ手が震えているとテストタロツサは優しく包むように手を置いた

／／／／／

「大丈夫ですわ深呼吸して」

「ん」

何か今日俺おかしいよ!!何この感じは!!と混乱していた

それも無理はない、何せハルトからすれば時間をかけて恋から愛に変わったキャロル達と違い異性ではなく仲間と認識していたテストタロツサからのアプローチである…美人に言い寄られて困る男がいる訳ない

いくなればハルトは夫婦の買い物物はした事あるが恋人のようなデートの経験値が皆無なのであった…おいこのリア充め…

そんな混乱も

「お待たせ致しました」

と出された翔一さん綾里を食べれば忘れてしまった見事な単純さである

「超美味い…」

『流石はアナザーアギトのオリジナルだな料理スキルの桁が違う』

「何せアナザーアギトの時にはフランスで修行していると来たんだからなあ…ん待てよ？」

俺はアナザーアギトから料理を教わった、そのアナザーアギトは翔一さんの力から生まれた…となると

「俺は翔一さんの孫弟子？」

『落ち着け相棒』

「ん……………ん？」

あれ？いつもの俺なら発狂するのに精神的に落ち着いているな？

『確かに発狂しないから気づかなかった!』

そしてハルトは食事を終え

「ありがとうございます!また来ます!!」

と笑顔で答えて退店したのであった

満面の笑みで土道と十香が告白した丘に行くと

「ふう……一息」

「今日はありがとうございます」

「いやいや俺も楽しかったからお互い様だよありがとテストタロツサ」

「いえ……こちらこそ……」

ふむ、顔が赤いなテストタロツサも中々可愛らしいな

「ハルト様!？」

「あれ口に出てた？」

「……………oh」

そんな青春的な空気すら漂う場所の側で

「……………」

殺意全開の悪魔が見ていた…何なら2人の側近に至ってはボロボロになっている

「あ、あのハルト様…その私のこと」「見つけたぞ魔王!!」「は？」

意を決して踏み出したテストタロツサの声を遮る声に彼女の絶対零度の瞳が相手捉える

「貴様を捕らえるぞDEM再興の為に！」

それはDEMの人間であった…CRユニットやパンターズナツチなど大量に展開しているのだが

「黙れ」

それだけ言うと彼女の体から溢れる怒りのオーラが周囲を震わせる…だが彼女の怒りはすぐに霧散した何故なら

近くから自分より強い怒りの波動を感じたからである

「何人の休み邪魔しに来たの？今テストタロツサが話そうとしたじゃん…空気読めよ屑

が」

「な、何を言っているのだ！この化け物め」

「はあ……しゃあない、いるんだろ？カレラ、ウルティマ」

「はいはい！」「呼んだか我が君よー」

「ガラクタ掃除は任せるぞ、あの男は俺が殺す」

「はい、丁度ボクもイライラしてんだあ」

「了解だ遠慮なくやらせてもらうぞ」

「テストロツサも好きにして良いよ…終わったらさっきの話聞かせてね」

「はい」

「……………」

「貴様等あ「黙れや」っ！」

「今回聞くBGMは愚行を悔やみながらする命乞いが相応しいな……変身」

『アナザーライダー！ストリウス!!』

アナザーストリウスになり無銘剣を呼び出し鋒を向ける

「慈悲とか期待するなよ…滅べ」

剣から放たれた斬撃がパンターズナッチを撃ち落としたのを合図に開戦となったのである

精霊降臨 前編

前回のあらすじ

テスタロッサとのデートを邪魔したDEMの残党に対して魔王は躊躇いなく、グリモワールの力を解放したのであった

—————

そこは最早戦場ではない一方的な虐殺であった

「あれ？もうおしまい？」

「つまりあなたが気は紛れたな」

ウルティマとカレラが残骸と化した無人機の腕を投げ捨てるとつまりらないという表

情をしていたが目線がデートをしていた同僚に向かう

「しかしテストタロッサ、貴様だけ抜け駆けとは許さんぞ」

「そーそー」

「あら抜け駆けとは心外ですわね」

これは日頃の功績による褒美と主張する彼女に2人はムツとするも響く断末魔に

「終わったか我が君？」

「ああ終わったよ…さーてお前には話すこと話して死んでもらうよ」

「だ、誰が話すか!!」

「別に話してとは言ってない、嘘つかれるとかあると面倒くさいから……あ、そかメモ

リーメモリはないのか」

記憶を抜き取るメモリーメモリ、それは以前の事件で黒メダルと共に仮面ライダーコアとなった後、メモリーブレイクされてしまったのだ風都で調達せねば……はあ……

「アナザークイズはウオズの手元だしなあ……はあ……しゃあないな最後は悪いウルティマ頼める？」

「はーい！」

「んじややりますか」

「あ、ハルがやるんだ珍しいね」

「まあ下手人くらいは俺の手でな」

ハルトは最近目覚めた新しい力を解放するようなアナザーウオッチを押した、その体

に包むのは機械的な装甲と、アナザーライダーらしからぬ…まるでメタルヒーローのようにも思えるほど機械的なのだが割れた顔の下から見えるのは正に怪人バッタ男のよ
うな醜い有機的な姿を持つ

己を偽る有機の仮面

『真』

アナザー真となったハルトはDEMの人間の首を右手で掴みながら持ち上げると左手には原典が持っていたスパインカッターが超振動によりキイイイイン！という音を耳元で聞かせていた

「や、やややややめろ！わかった！全部話す!!だからたすけてくれええええええ！」

「答えは聞いてない」

そう宣言したと同時にチョップを叩き込んだ後爪を使って…そうあの原典ライダー

の技

真・ライダーチョップ…というより真・アナザーチョップ…：知っている人風に言う
と脊髄ぶっこ抜きをやったのである

「ふう…：スツキリした〜」

変身解除して返り血を浴びながらもハルトはそれはもう良い笑顔で三人を見た

「おお…：中々だねハル」

「まあ必要なのは首から上だしな…：それより下はいらん…：あとテストアロツサとの一日を
潰した罪は重い」

「あら嬉しいですわね」

「ちっ…」

「んじやウルティマ、情報抜き取りお願いします」

「良いよーけど終わったらボクにも一日頂戴」

「終わったらな」

「何!!」

「やったあ!じゃあ行くよー」

頭を鷲掴みながら情報を抜き出す姿にカレラは

「我が君よテストタロツサとウルティマだけ狡いぞ!私も一日要求する!!」

「OK、良いよー」

『ノリ軽!?!』

そんな感じでやり取りしているとウルティマは全部分かったのか頭をポイとその辺の山へ投げ捨てた

「何か分かった？」

「うん！何でも社長？があの子狙ってるって」

「土道か……ふーん……」

「どうされましたか？」

「ナツキに連絡、おう事態が動いたから戻って来い……え？何ランスロットのライドブツク受け取ろうとしたら、ランスロットがアーサーとか叫びながらサブマシンガン連射してる？んなの知るか！アルトリアのカリバーで蹴散らしてこい!!」

連絡するとハルトはつまらなさそうな顔をするが

「何錯乱してんだよ湖の騎士さんは：はあ：取り敢えずパンツァースナッチは集めとくか」

無人機の残骸だが東達なら何かしら有効活用するだろうと判断して、コネクトを解して投げ入れたのである

「さてと終わつたしデートの続きと行きたいが尾行してたのに戦いに不参加だった奴等はお仕置きと行こう」

返り血を拭いながら目線を動かすと

「[[[[[!!]]]]」

それに慌てたのは原初の側近達である、実はモスとシエンも今回のデートを護衛の名目でついていたりする：上の問題行動で理不尽なお仕置きが！と怯えているので流石に責められないというよりウルティマとカレラの暴走を止めていたなら褒美すら上げたいのだから

「まずゾンダ、ヴェイロン、アゲーラ、エスプリ、モス、シエンは無罪…いや寧ろ勲功有りだ後で褒美を取らせる」

その言葉に安堵する側近達だが…なら誰が有罪だ？と首を傾げると

「ウオズ、新旧四天王は有罪…ロードオブワイズと組み手2000回な」

というと全員高速移動して物陰から現れて頭を下げる始末であった

それだけのご勘弁を！という声もあつたのも無理はない組み手1000回完了後の士道が正に真っ白に燃え尽きたようボクサーのようだったのだから

「そもそもモス達は兎も角、ウオズ…お前達はまたか」

「あ、いやこれは…」

「んで一夏、何でこうなった？」

「えーと前回旧四天王が失敗した任務を完璧にやり遂げればハル兄の覚えが良くなるって」

『一夏!?!』『織斑屋!?!』

「よーし正直に答えた事に免じて新四天王の模擬戦は500回にしてやる」

「それでも500!?!」

「4分の1まで減らしたんだから感謝しろよ…つか良いのか新四天王? お前達の地位は飾りじゃないんだ…実力で勝ち取ったのに慢心とか、そんなんじゃ旧四天王の二の舞だぞ」

『(そんなの俺たちに言われても)』

「そんなの俺たちに言われても? 何だ?」

る
ゴーストイマジンの弱音を聞いたハルトは少し不機嫌な顔で憑依している一夏を見

『(心読めてるのか! まずい!!)』

「心を読まれて何がまずい? 言ってみろゴーストイマジン? …ん? それとネガタロスよ、お前は何気に俺を立場を狙おうと思ってるな?」

「『そ、そんな事思ってる訳ないだろう! 俺は』」

「ほお、お前は俺の言う事を否定するのか?」

『今日の相棒は何か怖い』

笑顔のままハルトは圧を強めていく…ウオズ達は老ハルトを幻視してガクガク震え始める

その庄に思わず2人は

「すみませんでした!!」

一夏の体から抜け出て頭を下げたのである、この時の一夏には義兄の背中に和服をきた圧力強めの鬼が見えたという

「よし以後気をつけろ」

「はっ!!」

実は内心、2人は普段の扱いから魔王って大した事なくね?という侮りやアレなら俺でも王なれるんじゃないやね?不忠や叛意に気づいてたか知らないかは別としてハルトに釘を刺された形となったのであるというか逆らう心が折られた

「で、魔王ちゃん」

「ん？」

「俺達の処罰は？」

「その前に…この両足を襲う慟哭を鎮める為に自由への解放を」

「は？フイーニス？」

「足が痺れたから崩して良いか？」と

ブチっ！ほほおふぎける余裕があるなら今回は頭来たので徹底的にやってやろうか

「何で翻訳出来てんだウオズ…よしシエン」

テストロッサの側近はハルトの意図を汲んだのか大量の書籍を魔法陣から取り出したのである

「はっ、六法全書をお持ちしました」

「流石だ：よしウオズと馬鹿旧四天王達の膝に乗せろ」

「はっ!!」

「え！私達もですか？」

「連帯責任だ」

「そんな!!我が魔王！お慈悲を！」

「何か言い残す事はあるか？」

「最初からクライマックス!？」

「待つてくれハルト様！俺に暫しの猶予を！」

「具体的にどれくらい猶予をやれば良い？」

「は？」

「お前の力で今、どんな役に立てるのだ？今回だって前回の失態から何も学んでいないではないか、その様で俺にとって何の役に立つ？」

「ハルト坊のマジレスが胸に刺さる！」

「新しいお力を俺に！そうすれば必ず」

「何、お前の指図で俺がお前に力を渡さねばならん甚だ図々しい、身の程を弁えよ」

「違います！違いますハルト様!!」

「違う、俺は何も間違えていない：お仕置きだカゲン：六法全書10冊追加だ」

「は、ハルト様やめー

ぎやあああああああ！と野外の丘に悲鳴が響いたのであった

膝に分厚い雑誌を載せられた結果、足の痺れが限界に來たカゲンの姿を見て旧四天王とウオズ達は戦慄した

「それと二度も言わせるな旧四天王の罰はロードオブワイズ＋滅亡迅雷との模擬戦2000回ずつだ」

「罰が増える!?!」

「模擬戦4000回になってます!?!」

「計算能力すら無くしたのかハルト坊よ!」

「いや、そもそも人のデータの尾行とか何考えてるの?…というよりお仕置き追加だタ

○ンページ5冊膝上に乗せておけ」

「我が魔王から予想以上の正論が！」

「本当に魔王ちゃんだよね!？」

「ボケて主の顔すら忘れたのかお前達は？今回は俺が正しい絶対正しい、何も間違っていない全ての決定権は俺にあるのだから罰を下すのだ…お前達の意見など求めん」

「は、ハルト坊よ何故か知らぬが怒っておるのか!？」

「いやあ久しぶりに頭来たよ…命令無視して洗脳された挙句に俺へ攻撃してとか色々してるのに反省してないんだもん…そりゃキレるよねえ…」

「何か今回俺達の扱い酷くない!?落ち着いてよ魔王ちゃん!」

「あ…」

「ジョウゲン貴様は黙ってる！」

「さよならです先輩」

「へ？」

「俺に指図したな？よし分かった…旧四天王は模擬戦倍プツシユだ、アゲーラとモス…
ヴェイロンとかも他の奴等も混ざりたいなら混ざってウオズ達ボコボコにしろ」

「…いやあああああ!!」

「大丈夫だ安心しろ」

「わ、我が魔王…」

「死んでも俺がアナザージオウIIの力で生き返らせるし、死にかけてもゾンダが魔法で
治すから大丈夫！限界は超える為にあるから!!」

『お前が言うど洒落にならん』

「「「「……………」」」」

何氣に古參に甘いとカ魔王の扱いが雑と言われるが…ハルトの方も旧四天王の扱いを雑にする事もあるのでお互い様だったりする…というより上の立場の人間がするからパワハラだろう？

「ちつたあ修行しろ…俺は二度とテメエ等がいなくなるのが嫌なんだよ…だから強くなりやがれ」

まあ一番期待しているからというのものもあるが

迷いなく建国の功臣をといえども厳罰する姿に悪魔達は震えていたと言う…何なら今までなあなあで済ませていた事なのだが魔王軍が組織としての規律が出来た瞬間であつた…何故かウルティマだけは四天王の悲鳴を聞いてご機嫌だつたのは言うまでもない

そして夜、テスタロッサを呼び2人きりとなる

「悪かったなテスタロッサ今日あんな事になっちまって」

「いいえ、私とてあのような事態は予想外でした」

「そうか……んでだ、あの時お前は俺に何を言おうとしたの？」

「それは……」

何というか言う空気ではないと悟ったハルトはコホンと咳払いして

「無理に答えろとは言わないさ……時が来たらまたな」

「はい……」

「それとだテストロッサ、これはその…王とかじゃなくて俺個人としての言葉だが…」

ハルトはテストロッサの両手を取る

「いつもありがとう」

「っ！」

「国を空けることの多い俺に変わって色々してくれて…俺の帰る場所を守ってくれて…その…テストロッサがいるから安心して行けるんだ」

これは紛れもない純粋な感謝の言葉である、留守にする事が多いのに俺が王様やれるのは彼女達の協力があったのもだと分かっているから、その感情が伝わったのか

「い、いえ勿体無いお言葉…」

「これからも宜しくなテストロッサ」

「はっ」

「(いつかはちゃんと振り向かせたいですわね)」

ちゃんと自分の気持ちを伝えられて満足満足としたハルトであるが訓練ルームから聞こえる悲鳴は聞かないフリをした

翌朝、ボロボロになっているウオズと新旧四天王を放置して

「束ー!!」

「なーにハルクん!!」

「ワンパンでオーディエンスの視覚映像にアマゾンズフィルターやBLACK SUN並みのバイオレンスが起こせる武器を作ってー!」

何言っただ、この魔王はそんなことしたら対象年齢が上がっちゃうだろうが

「いいよー！」

東がサムズアップで応えると

「辞めろ!!」

「作るな！そんなスプラッタ生産機!!」

千冬とキャロルの2人が止めに入ったのであった、よくやった

「どうしてそんな血迷ったものを頼んだのだハルト！」

「いやあ最近、色んな強い奴が沢山出てきたろ？だから皆を守れるように……敵を五センチくらいの細かい肉片にするくらいの力がないとダメだって事に気づいたんだ！」

「だとしても、その発想が怖いわ!!」

「その力無くても私達は守れるだろう！」

「そうか…そうだな分かった」

「本当に分かったのか？」

「ああ……やはり肉片にするんじゃないじゃなくて跡形もなく消し飛ばすくらいじゃないとな！
こいパーフェクトゼクター！」

「来るな！それを呼ぶのは危ない時だけにしろ！あと早く片付けんだ！そのワーム絶滅兵器をな！」

キャロルに言われたので渋々、パーフェクトゼクターを直すのであった

さてと冗談は置いて

「では今日は皆のバレンタインチョコを作りまーす」

「こんな緊急時に!？」

「あ、ナツキ帰ってたか」

「帰ってきたよ! ランスロットがアーサー! つて狂乱しながらサブマシンガンを乱射する地獄からな! アルトリアのお陰でランスロットのライドブックを手に入れたよ!」

「んじゃ休んでなよ」「いや俺はここで見る」何で? お前も作る?」

「エルフナイン達が何かしないか見張る為に」

ヤンデレの進行はそこまで行ったのか?

「安心しろ食べ物に髪とか血液とかは入れません、それは俺の料理人としての矜持だ!」

「heavenについては?」

「あれは食べ物じゃないから、配管工のキノコと同じ強化アイテムだから問題はなし！」

と頷くハルトだが

「そうですよナツキさん心外です!!」

「じゃあ聞くぞエルフナイン、その手に持っている瓶は何だ？」

「ナツキさんが素直な気持ちになる飲み物です！」

「やばい媚薬の話はキャロルから聞いてんだよ！それを捨てる!!」

「嫌です!!これでナツキさんを夜の獣にして僕を押し倒してもらいます!!」

「もうちよいオブラートに包んでくれない!?!そんな事しなくてもエルフナインを押し倒すけどー!」

「なら今夜良いですか？」

「お…おう」

「マスター？」

「あ、アルトリアいつのまに？」

「今夜は私の魔力供給する筈では？」

「ナツキさん…そこに正座です！」

「はい…」

「ではアルトリアは見張っててください、僕はチョコを作ります」

「ああ」

「ちよつ！お願いだからその液体は捨ててくれえええ！」

さて彼方のイチヤイチャは放っておいてと

「んじゃ折紙、チョコレート作るぞ」

「お願いします」

「よし、じゃあ先ずは「ハルトさん！」何だい？」

「あ、えーと…その…えと」

「あのさ要件ないなら帰つ「待ったハルト」は？」

「ほら少し待つてあげろよ、な」

「……………」

この男が何かしらのアクションを起こす時は何かの分岐点と言う可能性が高い…恐らく追いついた分岐は良くない展開だったのだろう…正座してるが…ふむ

「分かった待つてやるから早くしろ」

「あ、ありがとうございます…実は」

士道の話だとDEMの元社長が宣戦布告してきた日取りに己のデートと重なりそうだから護衛をお願いとの事だった

「いや別に構わないが…今更護衛とか必要か？」

士道はロードオブワイズ達との鍛錬で既に中々の実力をつけている…いや確かに護衛の必要性は分かるが

「お願い出来ませんか？」

「まあ…アイツだしな」

二亜の事件で出会った印象からすれば危険人物という認識である警戒するに越したことはないだろうマルスに変身するし

「わーった」

取り敢えず生返事で答えたが

『人選はどうする？』

「うーん俺とウオズとナツキ…後は待機かな」

『了解した』

つまり決戦は明日なので…

「ごめん東……ちよつと甘えたい」

少し彼女に膝枕をお願いしている……ふむ柔らかいな

「いいともー！しかし珍しいね〜ハルくんからそう言ってくれるなんて！」

「うーん最近色々あつてさあ……何というか疲れた」

「まあ、珍しく長居してるよね……けど何で今日は東さんなの？こういう時キャロりんじゃん」

「東と話すの楽しいし……あと思つた事を遠慮なくズバズバ言うから東好き」

「おお……ハルくんのデレは中々の破壊力だねえー！東さんも好きだよ！」

「それにこの間の件と言い、いつもお世話になつてるから……ありがとう」

「それはお互い様だよ、東さんもハルくんに助けられてるから」

「助けた覚ええない」

「まあ東さんもだよ」

「はは…何だよそれ」

「あは！…お、ハルくんからチョコの匂い！」

「ああ毎年恒例のチョコを作ってるんだ当日までお楽しみに〜」

「おー！楽しみだねえ〜今年はハルくんが全身にチョコを塗りたくって私を食べて！とかやるの？」

「誰がやるか!!野郎の全身チョココーティングとか誰得だ!東がしてよ!!俺得だから

！」

「良いよー！」

「え、マジで？」

思わぬカウンターにハルトが赤面するが立て直す

「なら俺がリボン巻いて『プレゼントは俺』とかした方が良いのか」

「良いねえ！それでい「くな馬鹿者」いたあ！酷いよちーちゃん!!」

「どつたの千冬？バレンタインのチョコは今冷蔵庫で固めてるよー」

「チョコの催促に来たのでは無い…まったく見当たらないと思ったら束の所にいたのか
…」

「うん……そしたら束とバレンタインで盛りあがろうとなりまして」

「そのまま熱い夜をね！」

「まったく貴様と言う奴は……おい待て束、それは狡いぞ私もませろ……それで首尾は？」

「お、おう順調かな……明日で一切合切全て終わらせる……DEMも精霊も空間震も全部な」

『ほお、ファントム対策は何か浮かんだのか？』

「ああ……ある」

「ほお、では聞かせて貰うぞ対策とやらを」

どうせ何も考えていないだろうという目で見た千冬にハルトは束の膝枕から起き上がるのとドヤ顔で答える

「いやさ……土道の霊力封印を見ててずっと思ってたんだよ……エルフナインのフルボトルで霊力が抜けたって事はライダー技術でも封印や吸収は可能……同じ封印なら、これも行けるんじゃないの？」

ハルトが懐から取り出したのはブランクのラウズカードである

「ほおラウズカードとは考えたな」

不死の怪人はディケイド以外には倒せない、故に封印する事で倒すのだ

「今までは人助けと思ってたけどファントムだけは違うんだ逢魔を攻撃した主犯には今まで通りの封印じゃ生ぬるい、次出てきたら奴に直接投げ込む、その後アナザーレンゲルでリモート使えばコッチの勝ちよボヤけてた奴の顔拝んでやる」

今までの彼女達には同情する余地があった（1人を除き）霊力の封印となったがファントムは別である諸悪の根源にはきちんとお礼をせねはならないとな

リモートのカードは封印した存在を解き放ち操る能力を有するラウズカード、ようは

力使って一連の事件を洗いざらい吐かせれば良いのだと

「だけどラウズカードに封印するには、それなりにダメージを与えないとダメだよな？」

東の疑問はアンデット以外で効力を発揮するのか キングやスパイダーアンデッドのように封印されても自我を持っているのか判断に困ると言う点である

「だから対策だよ」

だからウオズのアナザーファイナリー…ギンガ由来の宇宙の力

アナザーストリウスのグリモワール

士道の刃王剣

この辺ならいかなる能力が来ても対応可能だ

更に手数で押せるアナザーグラウンドジオウ

物理でゴリ押し可能なナツキのアナザーゲイツリバイブ

「完璧な布陣だ」

「まあね油断しちゃダメだよ」

「分かってるよ…何せ相棒達の攻撃を素通りしたんだ…あの謎現象の答えが分からないからね」

と話していると

「それは俺が答えよう」

「白スーツ！」

「やあ魔王久しぶりだね」

「お前、何でそんなボロボロなの？」

「いやあくファントムと一戦交えてね「戦ったのか!?!」ああナイトメア…時崎狂三との共闘」

「で結果は？」

「逃げられたかな、途中ウエストコットの乱入があって撤退したんだよ、どうやら奴らの狙いは土道の刃王剣、君のグリモワール、私のヴィジョンドライバーのようだ」

「何て贅沢セットを狙ってんだよ!?!」

「因みにファントムは私達との戦闘で消耗している」

「おお！」

朗報！と喜ぶが

「しかし俺のヴィジョンドライバーも損傷した」

「おお…」

悲報だな

「結果として俺はゲイザーには変身出来ないと来た」

「んじゃ何しに来たんだよ役立たず」

「酷くないかい!?俺だつて頑張つたんだよ!ウエストコットの顔面に!ドミニオンレイをこの時代に叩きつけてやったりのき!」

「てか、どうやってファントムに攻撃を当てたんだ?」

「それは狂三ちゃんが時止めてる間に攻撃浴びせて削り倒した」

「何とかまるでゲームデウスみたい倒し方だな時止めて攻撃とか………ん？時止め？」

「成る程……しかし私達では時を止めるなんて真似は「出来るゾォー！」可能だった」「俺は時を止めれるのだ！呼吸をするようにな！」

ふはははは！と笑うハルトに千冬は頭を抱える

「はあ……本当にスペックの無駄に高いバカはこれだから扱いに困るな」

「ちーちゃん、今束さん見て言ったでしょ？」

「何の事だ？お前だけじゃないキャラルも考えていたぞ」

「酷いよ！ちーちゃん!!」

しかし時止めてダメージ通せるなら俺の専売特許だ

「伊達に時の王の影とは呼ばれてねえよ」

『誰も呼んでないぞ』

『脳筋魔王だな基本的に』

「よし相棒達には後でお仕置きな」

と笑顔で答えたのであった

精霊降臨 後編

前回のあらすじ

DEM残党の土道襲撃計画を察知したハルト達魔王軍、彼等は土道の依頼により時崎狂三とのデートを陰ながら見守っていた？

「やっぱりラーメンには餃子と炒飯だな…あ、ウオズ…ラー油とつて〜」

「かしこまりました我が魔王」

「いや、何で俺たちは中華料理屋で飯食べてるの!? 護衛の仕事は？」

「何だよ模擬戦終わった記念に色々ご馳走してんだが？」

「感謝します！」

「じゃが、ハルト坊の麻婆豆腐の方が美味しいのお」

「嬉しいねえ〜けど俺の奴より旨辛な店知ってるよー」

「ほお、何処じゃ？」

「冬木市にある泰山って名前の中華料理屋で「アウトーーー！」ええ！あそこの美味しいよ!」

「いや魔王ちゃん、それアレじゃん旨辛じゃなくて極激辛だから」

「アレは人間の食べるものではない！」

「お前等、考えてみろハルト坊は既に人間ではない」

「確かに！」

「確かに魔王様は人間じゃないので味覚も人間辞めてるんですね」

「それだとお前達の飯も人間辞めて良いな、じゃあフィーニスには泰山の麻婆豆腐を「お慈悲をどうかお慈悲を！」よろしい」

「寧ろよく味覚が破壊されませんでしたね」

「うーん………美味しかったけどなあ」

「ま、まさか……魔王ちゃん、その時グリードやインベス化してたんじゃ……」

まさか怪人化の弊害で味覚まで無くしたんじゃ！と心配する面々だが

「そりゃ無い無い、だって俺怪人特性無効化でその辺のデメリットないから……まあ昔から辛味とかの耐性は高いのかもな何せ子供の頃空腹の余りに唐辛子を生で齧ったし、いやあ辛くてひっくり返ったんだよ！」

「それ危険な奴だよハル兄!!」

「そつかな? 地面掘って芋虫を生で食べるよりは人間的じゃないかな…知ってる? 都市部の芋虫よりも畑のあたりで取れる芋虫の方が美味しいんだよ? あと栗の木にいるカミキリムシの幼虫とか、クリーミーでさあ…火を通すと甘くなるんだよねえ…もつかい食べたくなってきた」

「何故我々は中華料理屋で芋虫の味レビューを聞いているのでしょうか?」

「いやその前に魔王ちゃんが心配だよ俺達は」

「あ、皆も食べたいなら今度採ってくるけど?」

「結構です」

「そうかあ…美味いんだよ…冬休み…給食とか食べるものがなかった俺にはご馳走

だったんだから」

「その頃の苦しみがあるから我が魔王の料理は素晴らしいのですね…本当我等に取っては我が魔王の料理こそが至高です」

「そうか…ありがとうウオズ」

「いえ当然の事を申したまでです」

「なら明日の朝は昆虫食にするね！イナゴの佃煮とか蜂の子とかカイコの蛹とかスズメバチやトンボやコオロギの素揚げとか！美味しいよ火を通すだけで別物なんだから」

それはもう良い笑顔でハルトはピースメーカーの女性陣を地獄へ叩き落とすようなことを言うのである…何なら艦内にいた面々は戦慄しあのベルファストやテストアロツサでさえ顔面蒼白であったという、唯一トルーパーだけはそっかあ！という顔であった

地獄への道は善意で舗装されている とは良く言ったものである

この言葉に船員達とキャロル達の心は一つになった

―それは辞めてくれ―

と

「我が魔王!？」

流石にこのままでは自分が明日の朝飯をやらかした戦犯として処刑台に挙げられてしまうのでウオズは慌てて止める

「分かってる皆まで言うな、全員分の昆虫を確保出来ないって言いたいんだろ？」

「違います」

何勘違いしてんの？と言わんばかりに食い気味に答えるも

「安心しろ」

「話聞いてます?」

「逢魔で既に釣り用や食用で養殖してるのがあるから!明日にでも食べれるよ!何にしようかなくモルス油があるから揚げ物にしよう…唐揚げ…:…フライ…つ!かき揚げ…!!」

何か天啓を得たと言わんばかりに目を見開くハルト…恐らく何処かのダンジョンの魔物を料理するドワーフと会えば盟友になれるだろう、そもそも選り好みできる食生活でなかった故の弊害が出ていたのである

「我が魔王!私の話を聞いていただきたい!!」

「よーし明日の朝は気合い入れてコオロギと野菜のかき揚げそばにしよう!」

「我が魔王!私と言葉のキャッチボールをしませんか!!そのかき揚げは辞めてください

!!
」

その頃ピースメーカーではテストタロツサ、ウルティマが虫の養殖場を破壊せんと逢魔へ戻ろうとしたのを側近達が懸命に止めていた

「ち、千冬姉助けて！お願いだからハル兄を止めてえええ！」

と思わず頼れる姉に縋る一夏だが通信機から聞こえたのは

『すまない一夏、私の力では束の矯正だけで手一杯だ…ハルトまで手が回らん』

「明日の朝ごはんで虫料理で良いの!？」

『分かった任せろ』

「今俺は嫁達から見捨てられた？」

『その馬鹿旦那は私達全員で矯正する』

「良かった…これでハル兄に常識がつくよ」

「俺そんな非常識じゃないよ？」

「「「嘘だ!!」」」

「それは新手のギャグですか我が魔王？」

「そこまで言わなくても良くない!?分かったよ明日の昆虫フルコースはウオズとナツキだけにするね」

「「「異議無し」」」

「私は何か気に触るような事をしましたか我が魔王!!」

「いや、イジメか!!」

「イジメじゃないよ、美味しいから食べてほしいの」

「やばい…ハルトの食事で地獄を見る日が来ようとは…」

「ナツキ君、死ぬ時は一緒…いや待て貴方死に戻りが出来るなら私、犬死では？」

「君のような勘の良いウオズは嫌いだよ」

「ふむ、ゲテモノ料理とか出すのもあり」「」「それは辞めて!!」「」「あのさ食わず嫌いは良くないよ!」

馴染みの旧四天王とナツキに

「けど確かに鈴の作る餃子が美味しいかな」

一夏とネガタロス、ゴーストイマジン因みに一夏へ憑依してもらっている牙王は留守番だ

「ほほお一夏、そこで鈴が出てくるか」

「へ？ いやあ2人が作ってくれてさ」

ほおほお、箒ちゃんや鈴ちゃんもアプローチをかけているのか良き良きと頷いている

「因みに逢魔は重婚可だから2人とも娶って良いぞ？」

「っ！ゴホゴホ！な、何でそんな話になるんだよ!!」

「いやあく老婆心だよ、早く身を固めて千冬や束を安心させてやりな四天王だから給金もあるし甲斐性は大丈夫だろ？」

ニヤニヤと笑うハルトに一夏はムツとした顔でカウンターを返す

「それなら早く千冬姉のウエディングドレスが見たいんで式挙げてよハル兄…あと箒も言つてた姉さんのウエディングドレスが見たいって」

「ほ、ほほおく言うようになったじゃないか義弟よ言われずとも挙げてやるともさ…先ずは東のお義父さん達に挨拶からだな…」

「あはは…それより何なのさロードオブワイズ達は」

「滅亡迅雷もね」

「は？」

「あの人達に同じ戦法通じないし回数重ねれば重ねる程強くなるし本当なんなの！」

「いやラーニングで強くなるのはヒューマギアですし、本当に狂戦士化してて技術惜しげもなく使うし何なのアレ！」

「そう言う仕様だから」

「アレがゲームならコントローラー投げてる…って良いの？こんなものんびりしてて」「んじゃそろそろ仕事に戻るかね」

「我が魔王、ここは私が「悪いな、もう払ったよ」っ！ご馳走様です」

「「ご馳走様です！」」

「ありがとうハル兄」

「気にするな…さーてお前達、仕事の時間だ」

ハルトはそれはもう良い笑みで返したのである

さて狂三と土道がデートする影でハルト達とは言うのと

「さてと、これから野田夏樹の弾劾裁判を始める」

河川敷でナツキの裁判を始めていた

「いや何故に！」

本当にゴザを引いた上に正座させられているナツキである

「罪状は俺の可愛い義妹達をヤンデレにさせた罪だ！これは国家転覆より重罪だ…ナツキよ俺の可愛い義妹を返せ!!」

「それに関しては誠に遺憾である！弁護士を、弁護士を呼んでくれ!!」

「では弁護士を呼びましょう……北岡先生宜しくお願いします」

「初めまして弁護士の方です」

「……………ええええ!!何で北岡さんがあ!？」

「何か色紙にサインと多額の報酬に加えて病氣治してくれるなら、茶番に付き合っても良いかなあって」

「貴方はこんな場面で出る人じゃないですよね!？」

「先生が弁護するんです、落ち着いて」

「吾郎さん!？」

「因みに吾郎さんにもサインを頼みました」

「裁判長の息がかかった弁護士とか悪意しか感じないんだが!？」

「え？俺は起訴した人だよ？裁判長はカレラだ」

「うむ！ナツキは有罪、死刑に処す！」

「最初からクライマックスだとお!!」

「裁判しようよ裁判長!!即死刑!？」

「異議あり！」

「北岡君」「国会中継!？」

「まずー」

と河川敷でカレラと北岡が法律について凄い論争を繰り広げている姿に

「流石先生だ」「ですな北岡さんスゲエな」

「それより本当に先生の病気が治るんですか？」

「勿論！俺の国では色んな並行世界の医療があるんだよ、この世界では不治の病でも他の世界で治療法が確立してたんだから治せる!!俺を信じて！」

「……先生をお願いします」

「勿論、何せ俺はファンですから!!なので北岡さんには是非俺の女性問題でも弁護を」

「先生は刑事事件専門なので女性問題は取り扱っておりません」

「そんな!!」

結果としてナツキは無期懲役となったが執行猶予がついたのであった…飛んだ茶番である

「じゃあ楽しみにしてるよ」

「勿論です北岡さん！あ、この薬飲めば治りますよー」

「……………用意が良いね」

「まあ当然ですね！……………ん？そう言えば北岡さんって浅倉って人弁護した事」あるよ「っー」

「わ、我が魔王？」

「よし浅倉さんに会いに行こう」

「辞めてください我が魔王!!」

「落ち着いて魔王ちゃん!!」

そんな茶番を見て北岡と吾郎は帰ったのであった

「いやあナツキは無期懲役で良し！」

「じゃねえよ！執行猶予ついたけどふぎけんな！」

「大丈夫大丈夫！カレラから働けば減刑も考慮するって言質取ったんだ！」

「ふぎけんな!!」

と話していると全員が何かの気配に気づいた

「どうしたの皆？」

ナツキを除いて

「我が魔王」

「ああ…派手にやって正解だったな」

「見つけましたよ魔王、貴方の持つ本を頂きます」

現れたのはエレンとアルテミスア…そして

「ニベルコル…」

鞠奈に似た黒髪の人造精霊 ニベルコルか

「ああそう言えば失敗作の司令塔が其方にいたのでしたね」

「鞠奈が…：…テメエ余程愉快な死体になりたいと見える」

ニヤリと笑うエレンであるがハルト達はと言うと

「あれが魔王ちゃんと二亜ちゃんの娘達…」

「ハルト様！二亜様と励み過ぎでは!?!」

「これは王位継承権が大変な事になるのお」

「よくよく考えるとクロエ様や折紙様と違い名実共に魔王様の血を引いているのですよね」

「となるとやはり弱点は…」

「『「頭か」』』」

「んな事言ってる場合か!!知ってるだろ!あの子達は俺と二亜の娘だけど微妙にその辺違うって!!あと俺が馬鹿だと笑うのは構わないが!娘達まで馬鹿扱いしてやるなよ!二亜に似て賢くて絵心あるかも知れないじゃないか!」

「いやあ二亜さんもハル兄と同類だからなあ…」

「一夏それどう言う意味?」

「お前達ふざけているのか!!」

「だって奇襲してドヤ!!って感じだけど寧ろ多勢に無勢だぜ、やるぞお前達!!」

全員が変身アイテムを構えると向こうも受けて立つとばかりに構える

『アナザージオウ…トリニティ』

『1号』

『仮面ライダーゾンジス／ザモナス！』

『ヘンシン！』

アナザージオウトリニティ、アナザー1号、ゾンジス、ザモナス、レイと全員変身と
なったが

「あれ一夏？何で変身してないの？」

「いや…：ゴーストイマジンとネガタロスが俺が戦うって喧嘩してて」

「なら体から出て戦え!!」

「そうだったな!」「流石は大将!」

「あ、出てきた…よし行くぞ！」

『ホッパー！ スチームライナー！』

「「変身!!」」

『スチームホッパー!』

『NEGA FORM』

『SKULL FORM』

全員変身完了とポーズを取ると同時に武神鎧武とブラックバロンに黒影トルーパーへ変身

「さあ覚悟なさい」

「は？ 行くぞ野郎ども叩き潰せえ!!」

戦闘を開始したのであった

その頃 士道と狂三のデートは良い感じに来ている後は彼女の口から事実を聞き出

すだけ…なのだが

「やあ久しぶりだね時崎狂三」

まさかのファントムの介入である

「あらあらお久しぶりですわね」

「まったくこの間は酷い目に遭ったよ」

「当然の結果では？」

「さてシン、早く彼女の霊力を封印するんだ」

「え……いまシンって」

そう自分と呼ぶのは彼女だけである、まさかそんな！

「刻々帝 七の弾（ザイン）！」

狂三の分身体が死角から弾丸を放ち動きを止めると影から現れた分身体が一斉砲火を浴びせるのである

「狂三！待ってくれ！」

「待ちませんわ、漸くこの時が来たんですの…逃しませんわ!!」

そして弾丸の時間が切れたと同時にダメージが通り始めて行き、今までファントムを守っていたモヤがはれたのである

その中から現れたのは

「令音さん……」

「やあシン」

ラタトスクの管制官　村雨令音であった

「何ですか、どうして!!」

「そんなの知るかよ!」

『アナザー…オールトゥエンティタイムブレイク!!』

「これで終わりだ!滅びろ!!」

突如転移したアナザーグランドジオウは高く飛び上がると必殺技を発動して諸悪の根源を倒すべく技を発動させた

「辞めろ……ヤメロオ!」

『聖刃抜刀!!クロスセイバー!!』

クロスセイバーは彼女の代わりに攻撃を受け止め、転がりながら変身解除となった

「ガアアアアア！…」

「テメエ、本当に何してんだ!!」

「令音さんに攻撃なんてさせません！」

「バカかよお前！そいつはファントムだ！俺達の国に空間震を起こした犯人で敵なんだよ!!」

「けど!!」

「良いんだシン、さて魔王…君の本を貰うよ」

「そう言われて素直に渡すバカが何処にいんだよ」

「そう…なら君を倒して貰うことにするよ」

「その前に一つ腑に落ちねえ事がある」

「何だい？」

「グリモワールに目覚める前から俺達はこの世界にやってきた…何故俺達の国に空間震を落としたグリモワールに目覚めた後でも呼び寄せるのは良かった筈だ」

「ああ、それはね…ある人が教えてくれたんだよその世界にはあらゆる異形の力を宿した万能な魔王がいると」

「それは一体誰なんだ…万能とか俺を持ち上げて…ちよつと良いやつだなソイツ！」
『褒めてんじやネエよ！そのバカのせいでこんな状況になってんだろぅが!!』

「眉唾でも掛けて見た、精霊が現界する際の空間震の座標を私の力で変更して逢魔に落とし続けたんだ君を呼び出す為に」

「それならそうと最初から言え!!んな回りくどい事しなくても素直に助けると言えば助けたわ!!」

いや本当その通りである結果としてファントムは話を拗れさせてしまっただけであつた

「……………」

「んで俺にして欲しい事って何だよ」

「……………ある人を生き返らせたい」

「成る程死者蘇生か…任せろ！」

『即答するな!!』

「大丈夫大丈夫、四賢人達を蘇生させた俺なら実績充分」その賢人も賢さを捨てた狂戦士

「なってる件については?」………本当に出来たの蘇生だけだな」

「可能なのか…それなら良かったよ」

「そもそも死者蘇生なんて誰を?」

「シンだ」

「成る程シン（仮面ライダー）か…え?あの人死んだの!?!なら全力で蘇生…して良いのかなあ?」

また絶妙な勘違いをしているバカが1人

「何てなシンって確か士道の事だよな…コイツまさか…幽霊なのか!!」

「いや違うぞ」

「そっか……ん？どう言う事だ？」

「では少し昔話をするでしょうー

そこから語られた内容は驚愕の一言であった

それは士道が真士なる人物を模した存在である事、そして精霊の力を受け止める為に作り出された存在である事、そして一連の事件は全部自分が彼を蘇らせてずっと一緒にいる為の計画なのだと

それを聞いて茫然自失の士道、そりや自分の本当の親の記憶がないのも当たり前だし自称妹の真那が自らを兄と間違えたのにも納得がいった

だがアナザーグランドジオウは一言

「へえー士道、お前人間じゃないってさ」

それだけとばかりのリアクションだった

「いや何でそんなに普通にされてられるんだい」

「そりゃ俺も人間じゃないからね：成る程成る程士道に抱いたのは親近感だったのか」

かつてナツキが士道を評したハルトと似ている点 それは力の受け皿のような存在
この一点だ

自分は天然物、士道は作られた物 差異はあれども同じ存在なのだから笑うしかない

「よーするに士道は精霊の力を溜め込む為の器でしかなかったと？」

「まあそうだね」

「そしてその力で蘇らせたいたのは彼の前世？みたいな人と」

「ああ」

「その時、士道はどうなる」

「消えるね自我も記憶も跡形もなく、約束する蘇生させてくれるなら君の世界に二度と干渉はしない」

「そっか……」

国を思えば国の未来と一人の人間の命など天秤にかける意味もない

だが

「断る！それなら彼を助けて君の大事な人を助ける片方だけなんて選ばないさ！」

2 択以外にも道はがあると教えてやろう

「無理だよ」

「無理だと？笑わせるな、それを決めるのは俺だ」

そして変身を解いたハルトは両手を広げて宣言する

「民のためならこの世の理さえも超越する存在が王、目の前の小さな命一つ、世界の不条理一つ変えられないんじや王なんざなれねえんだよ！

仲間の為なら惚れた女を救う為なら躊躇わず三千世界の一木一草悉く滅する！誰の為とかじゃねえ！テメエが決めた事を全力で貫き通すのが王としてやるべき事だ」

「傲慢だな」

「傲慢結構！意地も通せぬ繁栄や王ならこつちから願い下げだ。生憎様、こつちは色んな経験をしてんだよお嬢さん」

数多の旅を繰り広げて絆を紡ぎ、国を起こした魔王は宣言する

「テメエの小さな物差し一つで測れるほど、この常葉ハルトは小さき王ではないわ!!」

『おお！ハルトが何かカツコ良い事を！』

『成長したな…ホントに』

「お前たちは俺の保護者か？」

しまらねえとボヤクも

「その通りですとも我が魔王！」

「ウオズ、どうして此処に？」

「彼奴らは新旧四天王に任せてきました」

「ハルト！つて令音さんが…ファントムなのかよ」

「ああそうだ詳しい話は後だ……土道」

「……………」

「別に今更テメエの生まれだ何だは正直興味がねえ、まあ俺も人様に褒められるような存在じゃないからな」

「……………」

「それによ誰かの代用品だったとしてもテメエが助けてきた人は代用品じゃない五河士道って男を好いてんだよ、今までの全部が嘘に思えるか？五河士道は五河士道で歩いた歴史があるんだよ、そこで諦めたら全部がおしまいだぜ」

「……………」

「だからちやちやつと立てや、同じ聖剣に選ばれた男は迷うことはあっても絶対に諦めはしなかった…そして奇跡を起こしたんだよ」

「俺はそんなに強くないですよ……ハルトさんには分からないんですよ!!弱い人の気持ちなんて「オラア!」ぐっふっ」

「士道さん!?!」

「弱い人の気持ちがわからないだあ?モッペン言ってみろ士道、顔面殴るぞゴラア!」

「殴ってから言うなよ!?!」

ナツキの高速ツツコミが入ると

「俺は弱い!何せ仲間が洗脳されている時に洗脳を瞬時に解けなかったからな!」

「あの我が魔王、我々はいつまであの失態を弄られれば良いのでしょうか?」

「黙れウオズ!良いか士道、俺は弱い!!俺程度を小指のデコピンで倒せる本物の魔王

（オーマジオウ）が存在する世界だ！」

「比較対象がおかしいんですよ!!」

「おかしくて当たり前だ！仲間や愛する者達を守る為に強さに限界などあつてはならないんだ！」

「……………」

「俺は弱いから強くなれる、その強さの果てを俺は知らない！知りたくない!!仲間を…愛する人達を守る為の力や強さは果てなどあつてはならない!!その為ならば俺は何処までも強くなろう!!」

「だから士道、俺の見せかけの強さを見て強いと思つたらダメだ…俺の本当の強さは泣けるで！」

『ふざけてる場合か!』

自らの弱さを知る故に果てなき強さを追い求めるのだから

「よし行くぞお供たちよ、御神輿大変身だ」

『御神輿大変身!? どんな変身なんだ!!』

『コイツ…俺達が寝てる間に特訓していたのか!?』

「説明しよう! 御神輿大変身とはドンブラ風に御神輿に乗ってアナザーライダーに変身する変身なのだ!!」

『ただの変身じゃね?』

『おいやつぱりコイツにドンブラ見せたの失敗じゃないか?』

とお! とハルトは何処から共なく現れた御神輿に担がれながら笑いだす

「はーっはははは! 笑え士道よ! そうすれば嫌な事など吹き飛ばわあ! 俺がもつとも憧れるヒーローの最高の武器は笑顔なのだからな!!」

「笑うだけで解決などする訳がない」

「は？お前、俺の英雄を侮辱したな死ぬ覚悟は出来てるだろうな？」

『どんな情緒してるんだお前は…』

殺すとばかりに憤怒の形相を見せられて

「君の沸点はよくわからないよ」

「安心しろ俺にもよくわからないから」

「どうでも良いよ私は負ける訳にはいかないのだ！」

「知るかよ！」

士道の決断

前回のあらすじ

遂に姿を表した精霊ファントムの正体はラタトスクのメンバー 村雨令音だった
彼女から語られた士道と逢魔への攻撃の真実 それを聞かされたハルトは取り敢えず
いつでも通り殴ってから話を聞く事にしたのである！

「行くぞ！御神輿大変身！」

『ムテキ』

アナザーエグゼイド・ムテキゲーマーに変身すると持ち前の高速機動で相手を翻弄す
る…何気に初手に選ぶ奴ではない

「まさかまだ手札を隠し持っていたとは」

「貴様如きが俺の底を知れたと？ 思い上がるな!!」

そうハルトは怪人、ライダーの技や能力を使える、その点で言えば恐らくハルトが唯一オーマジオウを超える武器なのだ通用するかは別として

「無駄だ私にはどんな攻撃も通用しない」

「関係ない」

「何だと？」

「言つたら？ 俺は王だと」

『アナザーエクスプロージョン!!』

離れると同時に広範囲に着弾する隕石エネルギーは精霊に全弾命中となる

「その通り我が魔王には我ら臣下が共にある事をお忘れなく！」

「くっ！」

「臣下じゃないけど、俺もいるぜえ！」

「っ！」

『アナザーエルサルバトーレ！タイムバースト！』

アナザーマジエスティの必殺の一撃は死角から打ち込まれ令音のボディを捉えて近くのビルをあたると同時に粉碎させたのである

「やったか！」

「フラグ立てるなナツキ」

「ケホケホ…いきなり酷い事するね」

服の汚れを叩きながら無傷の彼女が出てきたとあれば応えるな

「いやあそりやそうだろ今までのお礼をたーつぷりしてやらないとな」

散々、逢魔に空間震を叩き込んでくれたのだからやり返してやらないと気が済まないのだ

「今のは主役のセリフじゃねえよ…けど」

アナザーファイナリーの力は仮面ライダーギンガ由来の宇宙の力…ようする外なる世界の力でありこの世界の存在に対しては等しくダメージとなるのだが

「ダメージ通ってる気がしないな」

『前回と同じだな』

「おかしいな結構全力で殴ったんだけど」

「私も手加減などした覚えはありません」

物理特化の攻撃は通りにくい…だとしたら俺のインパクトノッキング・ベリーウエルダンでも通らないだろうなデロウスのレーザーも同じだろうし…三人娘の核撃魔法もダメだろうな

「なら奴の技か何かだな…よし」

ガシヤコンキースラッシャーを召喚して構える

「一発行ってみよう」

初手からリプログラミングという相手のアドバンテージを奪う技を使おうとしたそれを本能的に察知したのか令音は遂に今まで隠していた天使を顕現させたのである

それは同時に村雨令音ではなく本来の姿 原初の精霊 崇宮滯としての姿に戻るこ

とを意味していた

己の悲願を邪魔する者を倒す為に

『万象聖堂（アインソフオウル）』

それは万象の死を招く 異形の天使

だが何を恐れる必要がある、己は不死であり尚且つ常識の敵
ライダーの歴史にある
影の王だ！

だが

「っ！」

『相棒、アレはまずい!!』

何せ相棒の検索力でヤバいなんて言葉は初めて聞いたからだ、二亜からも通信が入る
囁告篇帙で見たがアレは即死チートだから逃げろと

逃げる？いいや違う…何だろうかこの胸に湧き立つ思いは溢れ出るインスピレー
ションは!!

ハルトの中にあるのは歓喜 目の前にいるのは明確な強者であり不条理 以前 エ
レンに言った言葉 挑戦者はお前だ それを痛烈に返された気分である

故に挑まさせて貰おう…己に宿る全てを賭けて

「……………変身」

『アナザーライダー！ストリウス!!』

『バカ！一旦引けつて言っただ!!』

ーだが放置という訳にもいくまいさ、それに俺の憧れなら必ずこの場面は逃げないー

アナザーストリウスに変身して

「ウオズ、ナツキ」

「はっ!」「おう!」

「ジヨウゲン達と合流してピースメーカーに戻れ…最悪俺を置き去りにして逢魔に帰れ」

「かしこまりました…とても言うと思いましたが?」

「え、いやちよっ! そうだつて皆で倒そうよ!」

「うーん(そうだな最悪死に戻りさせて対策立てさせれば大丈夫だな)ウオズは無理するなよナツキは頑張れ」

「今恐ろしい文言が隠れてたな!!」

「気のせいだ」

「嘘だ!!つと!」

そんな合間にも攻撃されているが回避一択である… ふむやはり

「この力で攻撃を文字通り殺してたつて感じか?」

モヤがああの天使だと仮定して防御に転用していた…けど目的の為には俺を殺す訳に
いかなかったから死はなかった訳だ…けど今は攻防一体の武器として俺を殺しにきた

「成る程…とではどうされます?」

「決まってるじゃん、知ってるだろ俺がこう言う時に何をするかとか」

「愚問でしたね」

「だな」

2人は下がるとアナザーストリウスは魔道書の力を解放する

『GRIMOIRE READING!』

最強の矛と盾を破るならどうしたら良い？

そんな問いかけに魔王はこう答える

「盾を上回る出力の矛で押し切れれば良い」

『THE STORY OF DESPAIR!』

頭上に浮かび上がる巨大な魔法陣から放たれる雷撃は寸分の狂いもなく崇宮滯へと襲い掛かる文字通りの雷速 常人では回避しようのないものである触れれば即死の盾で耐えられるだろうか

「いつまで持つかな？」

とアナザーストリウスは無銘剣の力を解放する

無限に増えた無銘剣の鋒が全て滯へ向くと

「撃て」

それを合図とばかりに剣の雨が降り注ぐ天使で防御するが無効化能力により徐々に天使の壁も削れていく

此方は全知全能の書の力で最善手を選び続けられる…というより、この本の先の記述で気になるものがあつた

「土道、いつまで自分の生まれなんてもので悩んでるのさ？そろそろ手伝つてよ」

「……………」

まだ蹲る姿にハルトは失望した

「こりや期待外れだな刃王剣、今は世界を救う為に俺に力を貸せ」

その命令に従い刃王剣は動こうとするが士道から離れないというより士道が強く握りしめているのだ

「あのさ士道、早く手放せよじゃないと」俺も戦います！」へえ…」

「俺だって守りたいものがある！これは代替品じゃない！俺だけのものだ!!」

「なら頑張りな、ほら吹っ切れたご褒美だ」

と現れた光の粒が士道の中に入る

「今のは？」

「全知全能の書の一端だよ、これで君も彼女のターゲットだな」

「元からですよ……令音さん……」

「シン、待ってて私が……」

愛する今は亡き者との再会 それを果たす為にどれだけの思いがあったのだろう、覚悟があったのだろうか……それは察するに余りある

明日は我が身 奪う側から奪われるかもしれない

だが

「知るか……俺は俺達の幸せの為にお前をカードへ封印する」

「させません、そうなる前に俺が彼女を止めます変身!!」

『聖刃抜刀!!クロスセイバー!!』

「たあ!」

『既読十聖剣!!刃王クロス星烈斬!!』

現れた十の聖剣が滯の天使へと突き刺さると聖剣は天使により朽ちていくが彼の想像にして創造の聖剣は再生し防壁へ亀裂を作る

「今だナツキ!アイツへぶちかませ!!」

「そう言うと思ったよ!」

『ブレイズ』

アナザーブレイズになり以前勝ち得たライドブックを起動する

『ラウンズ・オブ・キヤメロット!』

『キングオブアーサー!!』

「変身!!」

『流水抜刀!!』

《高潔な騎士が剣を持ち、円卓を囲う》

? 《煌めけ、ラウンズ・オブ・キヤメロット!》

? 《輝く、円卓の誓い!》

そして現れるは歪んだ騎士王 アナザーブレイズ・ラウンズオブキヤメロット
万由里の時よりは弱体化しているものの力を取り戻し始めている

何より彼を愛する騎士王の力が引き出せるのだからと、ドライバーに装填したライドブックにある機能を解放 下部の数字を7に合わせると現れたのは世界を繋ぐ礎 ある世界を理想を捉えた 獅子王の最果てへと至る槍である

聖槍ロンゴミニアド 顕現

「借りるよアルトリア」

それは令呪を介して答えが出た

『承認だマスター』

「ありがとうアルトリア…愛している」

フツと仮面の下で笑うナツキだが、その言葉で勝ち誇るアルトリアと嫉妬に狂ったエ

ルフナイン達との乱戦がピースメーカーで起きたことをまだ彼は知らない

『円卓議決開始（シールサーティーンデイシジョンスタート）』

是は、生きるための戦いである —— 《ケイ》 承認

是は、己より強大な者との戦いである事 —— 《ベデイヴィエール》 承認

是は、一対一の戦いである事 —— 《パロミデス》 否決

是は、人道に背かぬ戦いである —— 《ガヘリス》 承認

是は、真実のための戦いである —— 《アグラヴェイン》 承認

是は、精霊との戦いではない事 —— 《ランスロット》 否決

是は、邪悪との戦いである事 —— 《モードレット》 承認

是は、私欲なき戦いである事 —— 《ギヤラハッド》 否決

是は、世界を救う戦いである事 —— 《アーサー》

「承認、決めろマスター」

「古き神秘よ死に絶えろ…古き謎よ尽く無に帰れ!!」

原初の精霊よ、お前の願いは純粹なものだ…自分でさえ共感を抱く　だがお前は手段を間違えた歌姫の事件で学ぶべきだったのだ

触れてはならない奴の逆鱗に触れたのだと

「聖槍抜锚……ロンゴミニアドー……!!」

神秘の光が天使を砕いたのである

「……………っ!」

ボロボロになった彼女に近づきながら

「これで終わりだ…」

ラウズカードで封印するべきと取り出したら

「ハルトさん待ってください」

「は？なんだよ」

「令音さん」

土道は彼女に近寄ると一言

「俺とデートしましょう」

「「はあ?!」」

—————

そんな感じで一時戦闘中断となったので取り敢えず戦果の確認である

「人造精霊ニベルコルは新旧四天王の奮戦で全員無力化、現在は逢魔の病院に搬送しています…：ナノマシンやら何やらの対策もあるので色々警戒しながらですね」

「鞠奈もついてったよ」

「エレンとアルテミシアの2名は捕縛しました現在は地上拠点の牢屋にぶち込んであります」

「ウルティマからの報告によりますと…：エレンとウエストコットは簡単に言えばこの世界にいる魔法使いの一族でしたと…：そして魔女狩りで迫害されたから今度は自分達な迫害をする番だと」

「その気持ちはよくわかる、俺も同じようなことしてるし」

迫害した連中には地獄など見せて然るべきだろう報復はせねばならない…：が

「まあ俺の場合は実行犯2名は本国の地下牢でウルティマの拷問の実験台だしね！家族連中とかは最後は…：そうだな地獄を見せてやろうかな」

ウルティマの実験台、それだけでテストタロツサもカレラもドン引きするに値するだけの苦痛でもあるのは言うまでもない…：聞けば定期的に新しい毒の威力を試す実験台にされてるとか

『ハルがグルメ界？つて所で見つけた毒持ちの生き物は良い毒持つてるね〜後は腐つてもハルの妹だよ無駄に頑丈だからつぎはもーっと強力な毒を撃ち込むよ』

『ムーーーーー！！』

「まあ虚な目で猿轡噛まされて毒針撃ち込まれていたがな」

「サラリと笑顔で言わないでくれない？」

「それとアルテミシアですが洗脳されていた形跡がありましたので現在医療施設に送つ

ています」

「ふーん」

「因みにアルテムシアに関しては折紙さんからお世話になった人だから助けると助命嘆願がされてますが」

「なら全力で助けろ」

可愛い義娘の頼みなら断れないさ

「かしこまりました」

「ではエレンの処遇はどうしますか？」

「え？体内に凄い爆弾を埋め込んで記憶消した後、向こうの基地で起爆させろ」

まるで名案！とばかりのハルトの意見に幹部陣が騒めく

「「「「えええええ!!」「」」」」

助けるんじゃないの!?!という幹部陣の騒めきにハルトはあっけらかんとした顔で

「ほらーかの項羽も捕虜にした20万人を生き埋めにしたとか言うし捕虜を1人人間爆弾にするくらい大丈夫だよ！今まで散々ちよっかい出してくれたお礼もしないよね……何せ俺の師匠とその友人達に喧嘩売っただけに飽き足らず俺から束を奪おうとしたんだからそれ相応の苦痛を味わって貰わないと……」

*このセリフは主人公が言っています

「「「「そ、そうだった……この人最初から敵認定した奴には人権とか考えてなかったー!」」」」」

ウオズと旧四天王は顔面蒼白になりながら、自分達はハルトの懐に入れて良かったと安堵していた……入ってなければ降格処分以外にも制裁があつたと……逆に新四天王 特

に一夏は普段の優しく温和な義兄しか見ていなかったものでダークサイドな義兄にビビっていた

『爆発オチなんて最低だぞ相棒!!』

『いやその前に怖っ！何か病んでるなら相談に乗るから!』

『やめろ！そんな真似したら主人公じゃなくなる!』

『……けど相棒ってテンペストのある世界やシンフォギアの世界で何万単位の人を虐殺しているから今更では?』

『『『『……確かに』』』』

本当にアナザーライダー達もハルトの扱いに慣れていた

「良いねくやろうよハル!」

『しまったハルトと混ぜたら危険な悪魔（ウルティマ）が乗った!』

「無事の再会に安堵して皆の所へ駆け寄ったと同時に爆破させるか、愛する人の抱擁と

共に爆破させるか……どつちが良いと思うウルティマ？」

「悩むねえ……これは悩むよ……ハルが作った蕎麦の出汁を関西風か関東風のどちらにするかに匹敵する悩みだね」

「そんなに重要に聞こえんぞウルティマ、因みに私は我が君の蕎麦なら関東風だな天ぷらがあると尚良い！」

「私は関西風ですわね……後、私のお昼はぎる蕎麦でお願いしますわ」

「あ、ならお昼は蕎麦作るね！」

「ええですが昆虫のかき揚げや天ぷらは辞めて下さいまし」

「勿論だよ！トンボの天ぷらやコオロギのかき揚げはウオズとナツキだけにするね」

「我が魔王!?!」

「「「異議なし」」」」

「そんな!!お慈悲を!!」

「美味しいから大丈夫だって!!はあ……分かったよウオズ」

「我が魔王!」

「トンボやコオロギが嫌ならカイコや蜂に変えておくね!」

「違うそうじゃありません!!」

「うーん……」

「会話を続けましょう我が魔王!私の食事がかかっています!!」

とまあ捕虜に人権などないと考えている魔王と悪魔の残虐コンビは置いといて土道

は令音とデートをしているのだが

「そーいやあナツキは？」

「彼は今頃、エルフナインさん達に説教されてますね」

「ああ…成る程」

さっきのアルトリア愛してる事件だな…頑張れナツキよ死に戻ってそうじゃない道を探せ

だが魔王は知らない ナツキが死に戻る時 並行世界の自分にその記憶が送信され 黒狐世界のナツキを苦しめている事を

その頃、黒狐世界のナツキは頭痛に倒れていた

「ぐああああ！な、何だ今のは…今まで記憶に出てきた女の子達に取り押さえられて…

そのまま押し倒されて糸鋸で体を……お、おのれハルトおおお!!」

飛んだ冤罪である

—————

そんな小休止をとった後、ハルトがした事は

「みんなー！昼ごはんできたよー！」

その一言に全員が全神経を尖らせた、どんなゲテモノが出るのだろうか

「今日はビリオンバードの天ぷら蕎麦！ごめんね！戦いが終わった逢魔で大きな宴会を
やろうぜ！だから死ぬんじゃねえぞテメエ等!!」

「！！！！！！うおおおおお!!！！！！！！」

「何だよ皆、そんなに嬉しそうに「昆虫食ではないぞ！」え、そっち？」

「良かった生きて明日の朝日を拝めるぞ」

「ああ本当に良かった!!」

「まったく失礼な…あ、ナツキ大丈夫か？」

「あ、ああ……」

ナツキはゲツソリした顔で歩いてきた、どうやらかなりの修羅場だったのだろう

「そんなお前には精の付くものを選んだぞ」

「助か………る？」

「カブト（カブトムシ）、ザビー（蜂）、ドレイク（蜻蛉）、サソード（サソリ）の天ぷら

をつけた、オールゼクターコンバイン蕎麦：違うな名付けてパーフェクトゼクター蕎麦だ!!」

そこにはカブトムシの成虫と蜻蛉とサソリの天ぶらに蜂の子が浮いている、見るからに危険な蕎麦があつた

クローントルーパー達は美味しそうと思つたがそれ以外の面々は戦慄していた
危なかつた、ウオズの失言で下手したら自分達はアレを食べていたのかと

「マジで昆虫食にしたのか!!」

「はははは！有言実行するともさ！あ、追加でパンチ、キックホッパー（バッタ）も彩りに加えとくね」

「ふざけるなよ！こんなの食べられるかあ！」

「……………ん？」魔王覇気

「い、いただきます！」

「よろしいお残しは許さないよ？ケタロス、コーカサス、ヘラクス（カプト）が入れられたくないならな」

「……………俺さ死に戻ってこのルートを回避する道を探すんだ！」

「安心しろ何度ループしたって必ずこの結末に辿り着くからな」

「そんな……………嘘だ!!」

ハルトは笑顔でナツキのフラグを立てたのであった

それを見ながら新四天王はと言うと

「何がエモい感じだが」

「どう足掻こうとも、あの昆虫の天ぷら蕎麦は避けられないルートって事だよね？」

「可哀想に……うむ美味しい」

「興味半分で一口食べてみたくはあるかも」

「止せ織斑屋、その先は地獄だぞ」

と話しているがナツキは顔面蒼白なままである

「こ、こんなの……」

「大丈夫ですよナツキさん！」

「エルフナイン……」

「食べて精をつけて、また頑張りましょう！」

「あれ？これどちらにしても俺詰んでね？」

「そうだ！はい、あーん」

エルフナインはカブトムシの天ぷらを箸で掴んでナツキの前に出す

「よせええええ！笑顔で昆虫の原形を見せつけながらのアーンとか辞めてくれえええええ
！」

涙目で後退りするナツキに

「(愉悦)」

と何か心が満たされていたハルトなのであった

涙目のナツキの口に突っ込まれたカブトムシの天ぷらをポリポリ咀嚼して飲み込むと

「あれ？以外と美味しい、何か土臭くないな」

「当たり前だ！料理で俺がまずいものなんか出すかよ失礼だな！ちゃんと処理食べられるものを出すよ……けど黒狐から教わったレインボージュールは未だにレシピ通りにいかないんだよ……何か隠し味があるのかな？」

「それは知らない方が良いと思うー」

「え？」

「……………助かったよ、んじやいただきます」

ナツキがフライドポテト感覚でトンボの天ぷらを食べている姿に全員何とも言えない感情が去来していたという

「因みにダイナマイトンボの天ぷらだ体内で起爆食材を食べても威力を抑えてくれるぞ」

「どんな状況想定してるのハルト？んじやこの蜂の子もグルメ食材だったりする？」

「ん？それはその辺の山で俺が巣ごと捕まえたスズメバチだ」

ザワツ！と震える面々であった…

「飛びかかる一匹ずつをノッキングしたから以外と時間かかったんだよなあ…俺もまだまだだよ」

「マジかよ…：以外といけるな…食わず嫌いはダメだなあ」

「そうだろうそうだろう」

「今更ですが昆虫食べた人とキスはしたくありませんね」

「あ、しまった」

「まあ明日すれば良いよ」

「そうですね！また明日……逃げないでくださいねナツキさん」

「俺は今ほど今日に感謝したことはない！」

「良かったね」

何故かナツキは助かったのだが

「陛下！私にもその蕎麦を！」

やはり何処でもチャレンジャーはいるものである

「うむ。お前には特別に天ぷらをオマケしてやろう」

「ありがとうございます、いただきます!!」

と出された蕎麦をズルズルと食べたトルーパーは一言

「うわ、美味しい!!」

「」「何だと!!」「」

その日からパーフェクトゼクター蕎麦は裏メニユーとして有名となったのである、何故表にならないか？簡単だよ女性陣から反対にあつたからである

—————

そして土道は滯とデートしているのだが

「ウエストコットが何もしないのが気になるな」

向こうの狙いが土道のクロスセイバーだとしたら仕掛けるのは今なのにと分析している

「モスの調査でも残党は動いてませんわ」

逢魔の諜報も担当しているテストタロツサの側近が調べても動きなしか…しかし彼も働かせ過ぎていいるから色々と労働時間などは考えないとな

「この間の戦いで叩いたからな、そう言えばDEMの複製機は…」

「調査によると破損しているようですわね」

「よしハウンド、コマンドー部隊を送り込んでDEMの複製機を破壊しろ」

クローンコマンドー部隊 それはクローントルーパーの中でも最精鋭の分隊であり
各々が何かしらのスペシャリストである

彼等の任務達成率は非常に高く実は逢魔が様々な組織や国家との抗争においては必
ず重大な場面に投下されるのだ

「イエツサー…しかし以外ですな陛下が彼に忖度するとは」

「うーん…まあ俺としては霊力だけじゃなくて存在そのものを封印しておきたいんだが
な」

個人としても王としても被害者が0とは言え下手人を放置しておくのは問題なので
ある、周りに舐められる可能性もあるし、そもそもの遠征で成果なしでは示しがつかな
いのだ

「ままならんよなあ〜」

『以外だな、お前がその辺まで考えてるとは』

「そりや俺だつて色々考えてるよ」

『今日の晩飯何にしようくらいだろ?』

「まあそうだな…今日の宴会の主菜は肉か魚かで悩んでるよ」

『たいした事ないな』

「いいえアナザーW、それは逢魔王国全体を揺るがす重大案件でありますよ!」

「ええ、皆の士気にも関わりますわ!!」

「大事な事だよ!」

「我が君の食事は我等の明日に関わる!!」

『本当にお前から過保護過ぎないか!?!』

「それに……俺にはこれくらいでしか皆の役に立てないから……あははは……今日は何を捌こうかなあ……」

『怖っ!?!』

『メルク包丁片手に笑うな!!』

『そう思うなら国家元首として最低限の教養や帝王学を習え』

「まあそうだな……テストロッサ悪いけど「私で良ければお手伝いしますわ」ありがとう」

「ねえハル、それならボクが教えてあげるよ」

「いや私に任せろ我が君」

「あらハルト様は私をご指名よ?」

「まだハルから了承得てないよね?」

「得てないなら私達でも問題ないな？」

何でか最近バチバチしている三人娘だな…いや前から張り合っただけが最近は何か別方向でバチバチしてるようだな

「陛下、あちらを！」

「ん？……え？えええええ！」

映像には土道と溼が 仮面ライダーマルス…アイザック・ウエストコットに襲われている所に颯爽と現れた炎の塊…否

「オレンジのガッチャード!? え！一夏の奴いつの間に強化フォームに目覚めたのさ!!」

「いや一夏は別場所にいますよ！」

「なら誰がガッチャードに変身して…んな事より行くぞ相棒！」

『テレポート』

そして転移した先ではマルスを退けた謎のガツチャードが2人の前に立っていた

「待て!!」

「っ!」

「お前は誰だ!何で一夏と同じガツチャードドライバーを使ってる!しかも赤色だとお!

……カッコ良いじゃないか!!」

『そっちな相棒!』

ガツチャード?は慌てて銃を構えるがハルトは待てと手を突き出す

「待て、俺は敵じゃないよ」

「だな、お前には二つの選択肢がある、一つは俺を見逃すか、一つはウエストコットを共

に倒すか？」

「ふむ…先ずはウエストコット！何故お前は精霊を狙うんだ」

「はは…僕は彼女の絶望する顔がまた見たいのさ！」

「また…ねえ」

どうやら彼女を前に一回絶望させたようだな…うーむこの人の相手は俺じゃなくて俺の希望（仮面ライダーウィザード）に頼んだ方が良さそうな気がしてきたな…あの人ならきつと、この人に罪を償わせることができるだろう…だが俺は違う

「絶望する顔が好きねえ…奇遇だよ俺も何だよ特に嫌いな奴が絶望していく顔が大好きなんだ…アイザック・ウエストコット…絶望の悲鳴を俺に大声で聞かせろ」

『ストリウス・セット』

「変身」

『アナザーライダー！ストーリーウス!!』

アナザーストリウスに変身するとそのままマルスへ無銘剣片手に斬りかかるがアツプルプリンガーで受け止められてしまう

「無駄だ、前回は不覚をとったが今回はそうはいかないよ！」

と背後から現れたのは洗脳されたのか虚な目のニベルコル達、まさか！

「はははは！試作品は自我が強かったからね後継モデルは自我を奪ってあるんだ」

「OK、テメエには地獄すら生温いな」

絶対殺す誰が止めても許されないことをしたぞコイツは

「さあ変身しろ！」

と取り出したのはジューサーのようなドライバー……え？ゲネシスドライバー!?

「財団Xの支援品だよ彼等も良いものを作るからね君の奥さんが開発したドライバーをそのまま複製したんだよ！」

そのまま複製？ならね此方にも考えがあるよ？

「東」

『はいはいキルプロセス!!ポチツとな』

同時に彼女達のドライバーに放電が起こるとドライバーが自壊したのであった

『ふはは!!東さんのドライバーには原作再現をする為にキルプロセスを搭載しているのだよ!因みに戒斗やザックのドライバーにはつけていないのさ!』

「流石東、レジエンドの皆様への配慮だな…」

アナザーストリウスの力でアルターブック、ピラニアのランチの力を使いピラニア軍団で彼女達の動きを止めて貰うとハルトはピタリと動きを止めると

「……………」

しかし凄いなあ今まで色んな人が俺を怒らせてきたけど家族以外でここまで怒ったのはシンフォギア世界以来かも知れないな…風鳴機関は必ず潰す

ゆらりと体を起こしてマルスを睨みつけた

「お前、俺の娘に手を出したんだから…それ相応の覚悟はあるよな？」

「あはは、俺にも人の親としての優しさってあったんだあ…あんな屑達しか知らないのに」

『相棒の闇深いな！』

『まあ心の闇がグリモワールの力を強めてるから大丈夫だろう』

『だな危なくなったら俺達が戻せば良いだけだし』

「アレが娘？あれは遺伝子が同じだけ道具だろう？」

更に燃料を投下するバカに対して溢れる怒りの黒いオーラを見ていきなり現れたオレンジ色のガッチャードは土道と溝を守りながらジリジリと後ろに下がる

アレはダメだ関わってはいけない

「美九以外にハルトさんの地雷を踏み抜く奴がいるなんて」

「構わないよ、私からしたらアレは好みじゃない…寧ろこの世から消えて無くなれば良い」

「令音さん!？」

「はあ……この世界でもハル兄は過激だなあ」

「え？今なんて…」

「おっと何でもない、五河土道急ぐんだ彼女のデートを続けろ！でない大変な事になる」

「大変なこと？」

「具体的には常葉ハルトが彼女をカードに封印して怒りのまま世界を滅ぼす」

「大至急行ってきます！行きましょう！」

「え…私はもう少しあの男がタコ殴りにされる姿を見たい」

「令音さん!?どれだけあの男を恨んでるの!」

「それは原作読んでとしか」

「原作って何!？」

『ゴールデンオーレ』

「これでどう?」

クラックが開いてヘルヘイムの蔓がアナザーストリウスに襲い掛かるが

「なにつ!」

命令を無視してマルスの体を締め上げ始めたのだ

「……………」

今更だがハルトは種族 怪人王となっている影響で様々な仮面ライダー世界の怪人の特性を有している、つまりヘルヘイムの住人 インベスの長 オーバーロードでもあ

る まあ森の支配権は始まりの男に比べると小さなものだが

「金メッキの贋作に劣ると思われてる方が心外だよ」

藁の一、二本の所有権くらいなら難なく奪えるのだ

「せい」

アナザーストリウスのまま力を行使するのも悪くないな…なら

「お前も暴れたいよな」

『カリユブデイス』

「らあ!」

「っ!」

久しぶりのカリユブデイスメギドの背後からザルツドラの一撃を受けてしまうマル

スは転がってしまおう

「良い子だ、カリユブデイス」

「ありがとうございます、ハルト様」

最近逢魔の闘技場で名を馳せており、ハートの戦いは会場一のベストバウトと名高いのである

「久しぶりの実戦だが鈍ってないよな？」

「勿論ですとも」

「んじゃ行くぞ」

「はっ！」

「二対一とは卑怯じゃないかい？」

「最初から弱い女子供痛ぶった挙句、絶望させた顔が見た喜ぶ変態に言われる道理はねえよ何なら俺の憧れが一番嫌う邪悪だ」

「君の？へえ……憧れねえ……ああ……あの時会社にいた人達か……それならその人達を殺せば君は絶望すー」

マルスはその言葉を話す前に再びヘルヘイムの蔓で拘束された後何度も何度も地面に叩きつけられたのである最後は近くの柱が破壊される勢いで叩き潰されたのであった

「……………」

『あー俺達しーらね』

『だなハルトの家族だけじゃなく憧れのヒーローまで……死んだな』

『骨すら残らないだろうさ可哀想に』

そんな相棒達の声が届かない程にハルトの頭は怒りで真っ白になったのに口から溢れた言葉は今までにない程にドス黒い感情が溢れていた

「ぶっ殺す」

デートアライブ編最終回 前編

さて前回のあらすじ

最終決戦でハルトの逆鱗に触れたマルスことアイザック・ウエストコットは

「がは……」

ヘルヘイムの蔦に足を取られると装甲もボロボロの状態で地面に叩きつけられたのである

「……………」

そこには怒れる魔王が1人 カリュブデイスはハルトの怒りを察して本に戻ったのであった、本当に空気の読める子である

「ふ、ふざけるなあ！」

「黙れ」

起きあがろうとするマルスに容赦無く爪先からの蹴りを腹へ叩き込み再び仰向けに倒れさせた

『王蛇……ソードベント』

アナザー王蛇ウォッチを起動してベノサーベルを召喚するとバットを振り回すかのような乱暴さでマルスのドライバーを何度も殴打する、まるでお前を認めないと言うように

「くっ！」

変身を解かれたら危険とばかりにアナザーストリウスから離れると漸く起き上がりが追撃を止めるほど魔王は優しくない

「行くよ」

『タドルファンタジー』

オーディエンスから貫ったギアデュアルβを起動し現れた ファンタジーゲーマーが魔王の持つ魔法を行使 爆裂魔法がマルスを吹き飛ばすと

「まだまだ」

「!!!」

ミラーワールドから現れたハイドラグーンの高速体当たりでアップルリフレクターが破損してしまう、まだ逃げようと展開したクラックから待ってましたとばかりに上級インベスが現れたではないか

今更だが黒狐の事件の折に知恵のハルトが行使した怪人使役であるが何が恐ろしいか今の彼は

相手を殺す

そんな遊びが入らないからか最善手を出し続けている理詰めのモンスターと化している何ならマジギア並の演算能力で相手の行動予測をしているまでである

以前 ハルトは手数が多いと言ったが：実際恐ろしいのはその手数の得手不得手を全て把握し状況で使い分ける事 伊達に脳みその容量の大半を仮面ライダーと家事全般に割り振ってはいないのである

結論 ライダーオタクがライダーの力を持つたらヤバい

「何故だ！何故インベスが私に逆らう！この力はオーバーロードのものではないのか！」

「当たり前前」

確かにマルスのロックシードは本来人造の黄金の果実とでも言うべき性能を有している、実際にインベスも従えさせているのだから、本来の実力は言わずもがなだが

「お前がオーバーロード？冗談じゃない…お前なんか本物じゃないタダの金メッキだ、お前みたいな奴が…師匠や戒斗さんと同じ領域にいるとか思い上がってんじやねえよ…っ！」

そもそも怪人使役する能力？お前の目の前にいるのは、その怪人達の王ですが？彼等だつて上位命令権には逆らえないのである、あと実際に拳を交えたからこそ分かる 己の憧れ…師匠や彼等の力やそれに至る覚悟を…ただ画面で見ただけじゃない実際に出会った事で本当の背中に憧れたからこそ許せない

その彼等を殺すと宣う無知さが、それを言わせてしまった己の不甲斐なさが

「お前なんかが逆立ちしたつて本物に勝てる訳ないだろうが…偽りの仮面すら倒せない奴が何言つてんだ？」

己は永劫に彼等の影法師 届かぬ星へ手を伸ばす者

ならばこそ見せてやろう 災厄の魔王と未来で呼ばれるものの片鱗を

『オーガ』

「このまま消え失せろ金メッキ!!」

『exceed charge』

『GRIMOIRE READING!...THE STORY OF DESPAIR
!!』

「この雑魚が…悲鳴をあげろおおおおお!!」

現れたオーガストランザーにフォトンブラッドを充填 空まで届く巨大な刀身になると同時に落雷を浴びて雷神の剣となる

そのまま振り下ろした横に降らなかつたのは周りを巻き込まない故の配慮である、アップルプリンガーで受け止めるものの前回と同じ質量攻撃に膝をつく

それを見逃す訳もなく追撃の手は止まらない

オーガストランザーを投げ捨て……ずにそつと地面に置くと新しいアナザーウオツチを起動した

『キバ』

「こい、ザンバットソード」

突如としてやってきた魔剣 ザンバットソード（ザンバットバット無）本来ファンガイアの王以外は使えない魔剣のだがハルトは怪人王故にその制約を無視できる……対価としてザンバットソードを持つ間のみ持ち前の不死性を失ってしまう、その見返りに

スツ

「っ!!」

軽く試しに振っただけで近くのビル群が溶けたバターのように両断されてしまった

「ごめん外した……次は当てる」

ザンバットソードに吸収されたハルトの膨大なライフエナジーを使い化け物染みた斬れ味と威力を発揮する、なまじ威力があり過ぎるため 使える状況が限られてしまうのだが一振りで戦局をひっくり返せる魔剣なのである

ハルトも味方を巻き込む可能性がある剣を使いたがらない……使うとすれば彼の逆鱗にふれた相手だけだ……コイツみたい

振っただけでその方向へ必殺の斬撃を放つ、ライダーと言えども回避一択の恐るべき武器

その脅威を感じ取れたのかマルスは脇目も降らずに逃げ出そうとしたのだが

『ベルデ……FINAL VENT!』

突如、現れたバイオグリーザが舌を近く電柱へ繋ぐとアナザーストリウスの足を拘束、逃げるマルスを捉えると振り子運動の要領で上昇しながら体勢を整えて上空からパイルドライバーをお見合いするも、まだ魔王の怒りは収まらない

『インペラー…FINAL VENT』

同時に現れたギガゼール軍団がマルスに体当たりなどの辻斬り攻撃を行っていきロボロになったマルス目掛けてアナザーストリウスは飛び膝蹴り ドライブデイバダーを顔面に叩き込んで吹き飛ばすと連続でアナザーウォッチのスイッチを押す

『タイガ…FINAL VENT』

それに追撃とばかりに射線にいたデストワイルダーがマルスを捕縛、地面に押し付けながら引き摺り回していく

その先にはデストクローを構えたアナザーストリウスがいた

「はあ!!」

クリスタルブレイク 炸裂!!

そのままデストクローは引き摺り回され高熱を帯びた戦極ドライバーを急速冷却して熱破壊を起こした

変身解除されたウエストコットはそれでも黄金の果実を取ろうとするがアナザーストリウスはそのロックシードを踏み砕いたのである

「きゃ、きゃん…」

ウエストコットが言葉を紡ぐ前にザンバットソードで右腕を切り落としたのである

「!!!」

「黙れ」

怒りのまま前蹴りを叩き込んで蹲らせると変身解除してハルトはウエストコットを見下す

「お前に…何が分かるのだ！私の苦しみが！絶望にしか生きる価値を見出せなかった私の気持ちがい！」

ここで主人公なら改心させるような台詞を言うのだろう、少なくとも彼の憧れるヒーロー達なら確実に だが

「何も分からないよ？だから君だって同じ事をしたんだろ？奪うだけ奪って自分はおめんは道理が通らないよ？」

ーこいつは人の言葉を喚き散らすだけの獣ー

だから潰すんだが？と首を傾げるハルトの瞳は黒ではなく

「さあ地獄を楽しみな」

3本のドーパントメモリを額に押し込んだのである

『TERROR』『nightmare』『XTREME』

恐怖、悪夢を増幅されるという精神攻撃メモリ連続投入したのである

「ぎゃあああああああ!!!」

ウエストコットに見えるのはこの世のものとは思えない苦痛の光景、そして己が苦しみ続ける事だけ 死者の世界があるならば己が殺した者達の怨嗟の音がずっと大音量で響いているのである…何とか橘さんの感じだな

取り敢えず動きは止めたのでアナザーストリウスは改めてデイブレイクのいた方向を見る

「さてと……お前は誰だ？」

『俺の中の俺？』

「いや相棒、違うそうじゃない……けど影に隠れたその姿は見せてもらおうか？ ザンバツトソードの射線に入るのはおすすめしないよ？ 敵味方なく一刀両断だから」

「分かったよ……やれやれ過激だなウエストコットを瞬殺とは」

「憧れの侮辱は絶対に許さないだけ」

「だよなあ……容赦ねえ……」

「しかし誰なのか本当に気になるな、よしデンデンセンサー」

本当に中身覗いてやるとアイテムを取り出したが

「それは禁止だよヒーローの中の人は見ないのがお約束さ」

いつの間にかデンデンセンサーがデイブレイクに取られていたのである

『見えたか？』

『いや全く見えなかった…』

クロックアップ？いやフリーズ？タイムのスカラベでも重加速やポーズでもない…
時間に干渉する能力なら間違いなく俺には効かないのだ…つまりコレは

「俺が反応出来ないスペックの高さって訳ね」

それでは説明がつかない。現状の己を超えるスペックの相手か…楽しみそうじゃ
ん

「正解、流石ハ…魔王だな」

何か言い淀んだが知らないねと話を続ける

「褒めて貰えて光栄だよ、さて色々聞きたいんだけど……君は誰かな？何で一夏しか持っていないガッチャードライバーを持つてるの？」

「それは答えられない」

成る程成る程……

「そういうと思ったよ……なら死んで貰おうかな？」草加スマイル

『相棒落ち着いて話し合おう？』

『ネクスト……カイザ』

ウォッチを起動してアナザーネクストカイザに変身するとカイザクロススラッ

シャーを召喚してそのままタイプブレイクに切りかかる

『何でアナザーネクストカイザに!?!』

『あーそう言う事かアナザーカイザとアナザーネクストカイザを別々にした訳だ、そうすればハルトでも使えろ』

『ナツキの奴はアイテムありだが相棒は無しでOKと… 何でもありだなコイツ』

クロススラッシュシャーを2丁拳銃にトンファーにと切り替えながら使っていくアナザーネクストカイザに対して

「沸点低くないかな! ああもう!」

何とか止める為にホルダーを展開すると中から大量のケミーカードが現れ空中で固定されるとアナザーネクストカイザは手を止める

「何だこのワイルドカリスのようなオシヤレ演出は! 俺もあんなのしたい!!」

『アナザーブレイドが似た事できるよな？』

『相棒…以外と余裕だろ？』

「やはり情報通りだな…常葉ハルトはライダーっぽい演出を見ると手が止まる！」

「っ！そんなのハツタリだ！」

『いやその通りだが？』

「頭冷えたなら俺の話聞いてくれ」

「共通の敵のウエストコットなら彼処で発狂させたが？」

「うわああああああああ!!」

虚な目で虚空を見ながら悲鳴を上げるウエストコットは何か橘さんみたいな感じだが比べるのは失礼だなと冷めた目をしていたが

「まあそれもあるが織斑一夏と野田夏樹に伝えろ」

「何て？」

「ああ…ヤンデレの義妹には気をつけろと」

何か色々考え抜いてキーワードを抜粋したぜ！つてキメ顔してる所悪いが…

「それはナツキに言えよ…けど何で一夏？…妹？あ、マドカの事か！」

あの子も最近ヤンデレ化してるからな！と納得していると

「違うそうじゃない…そうかこの時間軸だとまだ会ってないのか…野田夏樹の義妹に気をつけろ」

ナツキの義妹…いや待て

「へ？いや何でお前そんな事知って？」

「ハルト！すまない待たせたな俺も加勢するぞって終わってるう！？」

噂をすれば何とやら ナツキが現れるとデイブレイクは

「野田夏樹…義妹には気をつけろ」

「義妹………っ何で咲那の事を知って……まさか俺と同じように転生して……いやその前にお前は誰だー！」

「答える必要はない」

「答えろお!!咲那に何をしたあ!!」

『ゲイツ』

「つと、落ち着くんだナツキ！」

『さつきまで草加スマイルして襲いかかった奴が言うな』

「黙れ！ 咲那に何かあったら遅いだろうが!!」

「あれ？ そんなシスコンだったかお前… まあ確かに咲那ちゃんは可愛いよな… 俺のアレとトレードして欲しいくらいに」

「誰があんな粗大ゴミ引き取るかあ!! 金貰っても断るわあ!!」

「それはそうだが、その粗大ゴミの兄をさせられた俺の気持ちがお前に分かるか!!」

「ごめんね!!」

『否定出来ないのは最早…』

「さてと」

と頷くハルトであったが、取り敢えずデイブレイクを逃すのは良くないと思ったが逃

げられてしまったな

「そーいやあヤンデレに気をつけろってどう言う意味だ？」

「ヤンデレ……エルフナイン達か？」

「そこでエルフナインが変換される辺り中々だな……あのキラキラした目で流し素麵に感動してた純粋なエルフナインはもういないんだよ……お前の所為で!!」

「てか何でアナザーネクストカイザになってんの？」

「まあ王の特権って奴よ」

「そうか……んでアレどうする？」

そこには橘さん並みに叫んでるウエストコット……取り敢えず絶望で顔がグチャグチャなので……ふむ

「あのままで放置するかな目の前で仮面ライダーを殺すなんて言ったんだ死なんて生温い…ずっと苦しめばよ良いんだよ……こいつを琢磨くんみたいにいじめてあげようかあ……」

ハイライトの消えた瞳で草加スマイルを浮かべたハルトにナツキはドン引きしていた

「うわ…そんな事したのかよ命知らずだな」

「テラーとナイトメアをエクストリームで強化した…終わりが無いのが終わりかな」

「私の側に近づくなああああああー！」

「可哀想…全く同情しないけどな耶俱矢達も二亜さんみたいになってたかもだし」

「んで士道、そっちはどうだい？」

『じ、実は…』

ウエストコットをラタトスクに預けると変身解除したハルト達は士道と合流すると彼の話を聞く

曰く 滯を封印すれば霊力を失い消える

曰く そうなれば彼女が力を与えた精霊達は人間に戻る

だが例外とも言える滯と同じ純粹精霊の十香は消えてしまうとのこと

「そんな…」

「どうしたら…：：：そうだハルえもん何とかしてよ！」

「馬鹿じゃねえの？」

「大事な人が消えそうなのに、そんな事言うとかお前人間じゃねえ!!」
「違う、土道お前の聖剣ならそんなルールを壊せる」あ、そっか」

「後、俺はもう人間じゃないからな今更だ」

「確かに！」

「テメエに北崎さんの真似しながら虐めてやろうか？
頬を少しずつ灰にしてやろうか？」

「怖っ!!!」

「確かに刃王剣なら…確かに万由里は助けられたけど」

「十香ちゃんも同じ原理なら助けられる安心しろ」

「よしー！」

「だが…その聖剣だけではダメだな」

「え、英寿さん!？」

突如現れた 仮面ライダーギーツこと浮世英寿にハルト達は困惑する

「どうしてここに」

「何、ファンサービスだ…ようするにその子達全員が人間として暮らせる世界を作れば良いんだろ?」

「そんな事を!けどそんな大規模改変なんて…」

「俺だけの力なら難しい、だがここにもう一つ創世の力がある」

「あ、アナザーギーツか!」

「ハルトさんの力ですか？」

「そうだ2人の創世の力とその聖剣を重ねればな…その願いを叶えられる筈だ確証はない…この言葉をお前は信じるか？」

試すような言葉にハルトはキリッとした顔で

「何言ってるすか英寿さん、俺はいつだって…仮面ライダーの言葉を疑った事はありませんよ！」

ドヤア！とキメ顔をすると英寿がポツリと

「コレも全部乾巧って奴の仕業なんだがな」

「何ですって!!それは本当ですか!?!何処何処!!!」

『素直に受け取り過ぎるのも考えものだな』

「あのバカ……けどハルト、お前は助けたいのか？ 創世の力云々って何か叶えたい！ って気持ちが必要なんじゃ……」

「んや全然、そもそも俺の国に対する補填何もない状態で大団円とか許せん」

コレは個人ではなく王としての本音である

「はあ……仕方ない奴だお前達、説得頼んだ」

英寿が指を鳴らすと現れたのは

「一体何だ、こんな所に呼び出しやがって」

「良いじゃない道長、珍しく英寿が頼んできたんだよ？」

「そうだぜイエー！」

「えーと彼は？」

そこに現れた4人の男女を見て

「ハルト？」

「……………」

ハルトは数秒のフリーズの後

「……………ヴァアアアアアアアアアアアアアアア!!」

再起動と同時に不動の裁判長並みの絶叫をあげたのであった

「え？誰？この人達、ハルトさん知って「吾妻道長さんに鞍馬祢音さんに桜井景和さんに晴家ウインさん…世界の常識だぞ！」ごめん、さも当然みたいに言われても…あ！祢音ってまさか祢音TVの!？」

「そうそう…だがwhether heartsを知らないとかお前正気か？ふざけんなよ？ギーツ見直せ!!名作だぞ！」

「落ち着けよライダーファン過激派!!」

【そうだよギーツの神話は感動するんだ!】

「何処からか声が聞こえた!?!」

と土道の胸ぐら掴んで威嚇するハルトを止めるナツキ達を見て

「何だコイツ?」

「俺達のファンだとさ」

「ファン!俺に? いやあ嬉しいなあ」

えへへ〜と照れる青年 桜井景和にナツキは

「そう言うものなのか？」

「お前さんもファンがついてると嬉しいだろう？」

「まあ応援されてるのは悪くはないかな」

ナツキの後ろにいる男を見て驚く

「ケケラ！何でここに！」

「おっと待て、俺は確かにケケラだがお前の知ってるケケラじゃない」

「何？なぜぞぞ？」

「並行世界の別人なんだよ俺の推しはコイツ：野田夏樹だ」

「うお！いつの間に俺の後ろに!？」

「君……気を付けてねソイツは油断ならないから」

「何で同情されてんの俺!？」

「されるだろうなあ……可哀想に」

「ハルト!?!ケケラさん良い人だよバイクくれたし」

「そのバイク渡す時に推しの解釈違いを理由にお前跳ねたよな?……はあ、さて……初めまして!俺は常葉ハルトって言います!皆さんのファンでして……その……サインください!!」

「は?誰が「つまらないものですが『コネクト』このA 5ランクの和牛をどうぞ!」……書いてやるか」

「道長が懐柔された!？」

「あいつ…只者じゃないわね」

「いや賄賂に弱いだけじゃ…つて俺達も!？」

「はい是非お願いします!!」

「勿論「書いても良いが俺に協力するのが条件だ」え？何で英寿の頼みを？」

「世界を救うのにコイツの力が必要なんだ」

コイツの力が必要なんだ、なんだ…なんだなんだなんだ（エコー）……それを聞いたハルトはガクつと膝を突き項垂れる

「いふいふ……」

「あれ？ハルトさん？」

「英寿さん…あんだ…このライダーオタクになんて燃料を投下してくれたんですか…」

「はーははははははは！憧れのヒーローにそうまで言われて立たないファンが何処にいますか!!良いでしょう!!この影の魔王、常葉ハルト！全身全霊をもって英寿さんに微力をお貸ししますとも!!」

ハルトの顔はそれはもうキラキラした瞳のまま堂々と言ったのであるが

「鎧武から色々聞いてたが思ってたよりチョロいな」

「ちよつ、英寿ダメだよ協力してくれるって言ってくれたのに」

「けど確かにチョロいな英寿の言葉一つで喜ぶとか」

「うん……」

「これがA5ランクの和牛!!」

「いや戻ってきてよ道長!!」

「ハルトさん本当ですか!」

だが士道の言葉にジト目で返す

「あ?勘違いするな士道、俺は英寿さん達の頼みだから聞くんだからな!!……すみませ
ん皆さんのサインと後……できれば写真とかも良いですか!!!」

「だけどハルト?逢魔の連中には何て説明すんの?」

「ん?原初の精霊は世界改変の余波で死んで被疑者死亡書類送検かウエストコットを犯
人にして死刑にさせるでカレラに話を通しておく」

「それって「別にお前のためじゃない」なら何で…」

「そりゃ勿論…」

ハルトはうつとりした瞳で英寿達を見て

「英寿さんが…仮面ライダーからまさか…俺の力が必要なんだって言われるなんて…
そ、そんな事言われるなんて…この世界は本当に色んなレジエンドライダーに会える
なあ〜」

まさかここまで言われるとは思ってなかったからコレでもかとはばかりに口角も下が
り笑顔になりながら真っ赤になる顔を手で隠していた

「うわあ…ハルトの奴デレデレじゃん」

「無理ありませんよ我が魔王からしたら憧れのヒーローに君の助けがあると頼られて
いるのですから」

「あれ？ウオズさんいつの間！」

「先程到着しました…取り敢えず士道くん」

「何ですか？」

「ウエストコットの身柄は我等で預かります…意味はわかりますね」

「要するに令音さんの身代わりに処刑するって話ですよね？」

「そう言う事です、我等も国としての立場もありますからテロリストを放置するなど許されません」

「……………けど逢魔の攻撃にアイツは関わってませんよ？」

「でしたら二亜嬢を拷問した件で処刑するだけです」

「あ……」

逢魔王国の妃に非人道的扱いをした それだけで死刑たり得る理由である

「成る程……けど十香は本当に助かるんですか？」

「助かるだろ」

「その心は？」

「英寿さんが言ったからかな」

うんうんと頷く道長さん達三人とハルトにナツキはやれやれと言った態度で士道は不安な顔だが

「大丈夫、俺が十香を助けるんだ……みんなとの未来の為に!!」

その時 不思議な事が起こった！
ハルトの渡した全知全能の書の力が刃王剣に呼応し士道の願いを叶える…新たな力を発現する

『ワンダーオールマイティ』

「これ…」

「揃ったな」

「刃王剣とワンダーオールマイティの組み合わせか…オリジナルを超える力を発揮する」

「それに魔道書もある」

「まあバレるよな…けどいらないでしょ？」

『ギーツ』

「ああやるぞで」

『GEATS IX!』

「はい!!」

『烈火!全抜刀!!』

鐘の音が鳴ると同時に世界は書き変わった

改変された世界において

まあ結果だけ抜粋していくと十香ちゃんは消えずに残った…んで今回の黒幕 崇宮
濤は人間として今蘇った最愛の人と楽しく旅してる

それで土道達は日常に戻ったが彼の持つ聖剣とライドブックが新たな世界…ゼンカ

イトピアと繋がるのは別の話

だから俺も捕まえたウエストコットを犯人に仕立て上げて 彼女を見逃す事を選んだがカレラからは今回だけというお目溢しである…んで俺の一日を追加で彼女にあげる事になった

んで霊力が霧散した事で精霊の皆も人に戻った彼女達が人としての記憶や名前を思い出し、アイドル、学生としての日々を過ごしている

筈なのだが

「かーつかか！さあナツキよ私達姉妹と温泉に行くぞ！」

「同意です行きますよナツキ」

「え！ちよつ！何でそんな展開に!？」

「何やってんのよ…アンタ…」

「まあ私は楽しければ良いよ、それよりナツキくんや私の新作ハーレム系恋愛漫画の主人公のモデルにならないかい？」

「それはアンタの旦那をモデルにしろおおお!!」

「おい何。俺を売ったなテメエ」

「そんな旦那とか…まだ籍入れてないよ…キヤツ！」

「はあお母さん…鼻血出てますよ」

「おーありがとね！鞠奈〜」

そう何故か俺達が封印？した精霊は霊力そのままなのだ…歌姫こと美九の霊力は消えていたので恐らく俺達に好意を持った精霊の霊力だけ消えたのだらう…というよ問題なのが八舞姉妹は聖剣を持っている為、ベアトリスがスカウトしている

「まあ学校を卒業したら彼女達も進路として考えているらしいが…その間どうするか
と言おうと」

「ナツキの部屋に住むから」

「首肯 今日から宜しくお願いします」

「うえええええ！」

「待てお前達、それは叶わぬ夢だ」

「そうだよ！既に私と姉ちゃんまでナツキと暮らしてるんだから！」

エンタープライズとホーネット姉妹が立ち塞がる

「一つのベットで川の字だ」

「そうだよ！2人の場所はないから!!」

「一つのベットで…」 「川の字…」

「それに指揮官には最近、ベルファストに習ったお菓子も振る舞ったんだ」
「クリームにも隠し味があるんだよね」

「まさか髪とか血を入れたんじゃない！」

ピクリと耳を傾けるハルトに対して姉妹が言った隠し味とは！

「隠し味……それは」

「ナタデココだよ！」

「普通!!」

「そんな訳でお前達の居場所はない！」

「私にはあるなマスターのサーヴァントにして伴侶だ…さあマスターそのまま一夜の夢を」

「させるかあ!!」

「かかってこい船舶よ、冷たい海に沈めてやる!!」

「行くぞホーネット!」「はいよ姉ちゃん!!」

「「はああああああ!!」」

そんな決戦が始まったので八舞姉妹は

「ではナツキよ今のうちに」

「行きましょう」

「は、はい…」

2人の目からハイライトが消えたがナツキは絶望に満ちた顔をしている…まあ頑張れ

「しかしエルフナインやマドカよりも先に同棲したのが2人だもんなあ…スゲエよ」

「まあ我が魔王の場合はアレですが…全員と同棲してますし」

「まあね…んで二亜と七罪はコレからどうするの？」

「私は逢魔とこの世界を仕事で往復する感じかな、仕事のネタには困らないし切危なくなったら時間の流れがゆっくりな世界に行けば切対策になる…それに娘も出来ちゃったしね」

「まあいきなり子沢山になったのは俺としても驚きだよ」

「2人で育てようね」

「鞠奈やニベルコル達は全員逢魔で暮らすことになったクロエは混乱していたが今では折紙と一緒に仲良く姉妹しているIS世界のラウラが見たら発狂するかも知れないなどは口が裂けても言えない」

折紙は逢魔に来て錫音と良く買い物をしているらしい

「あのね折紙、その鞭と縄は何に使うのかな？」

「土道に使うか使ってもら「アウトロー!!」おかしい…」

「おかしいのは折紙だよ!」

「まあ平和である…彼女の性格矯正は責任取らないと折紙が土道を押し倒してしまうからな」

「ハルきちが婚前交渉したいなら私は良いよ?」

「それは魅力的な提案だな…じゃあ早速」

「お父さん、お母さん…まだ昼です」

「ならホテルでどうだい?」

「やだハルきちイケメン!」

「玄さんがこうやると良いって言ってた」

「仮面ライダーの教えだとお!!」

因みにあの世界にいる仮面ライダーの皆様にはサインを貰った…余談だがレストラ
ンAGIΩには内緒で通つてたりする、玄さんとは文字Tシャツについて熱く議論する
仲である……何故か戦兎さんや万丈さんは困った顔をするのだが…

「私はその…絵の学校に行くの…ラタトスクが支援するからって」

「そっか…」

「そしたら私がアンタの国の宮廷画家になってあげるわよ」

「ありがとうな七罪」

「ふん！その代わりに私と一緒にいなさいよね」

「お安い御用だよ」

ラタトスクの面々はそもそも精霊達の社会復帰も仕事の一つである故に彼女達の支援は今後ともやっていくと…コレは最近知ったがウエストコットやエレンの身内が組織してたとか驚いたよ…2人の件で司法取引を持ち掛けられた…エレンに関しては応じる余地があるがウエストコットは流石にこちらも応じられない

因みに諸悪の根源は現在、あの精神攻撃により廃人寸前であるトーマ、ハルカと同じ
独房にぶち込まれ夜な夜な牢獄で発狂している…まあ絶望しろと思っただけ
る気もないが

何故かウルティマとヤクヅキが一緒になってピアノとかバイオリンとか何か話して
たな…趣味の話かな2人なら似合うよね、ということウオズに話したのだが

「我が魔王…知らない方が幸せなこともありますよ」

なるほど今度の演奏会で披露するって事かな楽しみだよ！

*この楽器くだりの意味は 目覚めよ！その魂！後編を見るとわかります

それで白スーツはヴィジョンドライバーが修復された…までは良かったのだが帰る
日のこと

「あの何で君はついてくるのかな？時崎狂三？俺はプロデューサーとしての仕事がある

「んだけど?」

「あら心外ですわね貴方と私は共犯者ですわ」

「まあそうだね」

「一緒に原初の精霊と戦いましたわよね?」

「そうだね」

「一緒に猫さんを愛しましたわね」

「猫カフェ行ったね」

「弱ってる私の体を滅茶苦茶にしましたわよね?」

「してないね!!あらぬ誤解をオーディエンスに植え付けないでくれるかなあ!!」

「それに私、目的を果たしてやる事がないので貴方の旅についていくのも一興かと」

「それはダメ！プロデューサーの仕事つてのは様々な時間や世界を渡り歩いて「御託は良いので早く連れていってくださいまし」何で銃持つてるのかな？」

「それは秘密ですわ」

「はあ……しゃあない好きにしろ」

『GAZER』

「では遠慮なく」

「んじや行くかね」

とドライバーの力で別世界へと移動したのである

「……………あ、そうそう色んな世界行くから気をつけてね」

「勿論「柏餅食べないと発狂したりクリスマスに鮭を勧める世界とかあるから」何ですのその物騒な世界は!!」

とまあそんな感じで一先ずの事件が解決したので

「お馴染みの宴会じゃああああああ!!」

今日も手勢料理が並ぶ大宴会となる

「「「「「うおおおおお!!!」」」」」

ピースメーカーと逢魔を巻き込んだ

今回はロイミュードやグリードも参加しているので過去最大規模だな

またDEM残党の複製機はクロントコマンドーが破壊されたが束と銀狼がDEMの複製機を修復した、結果としてこちらもメガヘクスの真似ができるようになったが死者蘇生ではなく、ピースメーカーの艦載機やウォーカー、船の部品などを製作する予定だ：カミノアン達も兵器の調達には時間がかかるらしいしトルーパーのアーマーや武器弾薬だつて無限じゃない現地調達可能なら用意してあげるべきだ

そんな時にハートから交渉を受けて何人かのロイミュードを復活させたのである

「初めまして、我等が王よ私はロイミュード001フリーズでございます」

その1人が彼 フリーズだ

「宜しく」

「はい今後はハートの隣で補佐役をさせて頂きます。ブレンやメディックは優秀ですが交渉などの政治周りとなると私の出番ですからね」

「そうだな任せた、ハート達を宜しくな自治周りで必要なものがあつたら言ってくれよ」

「はっ!!」

んでグリード側のまとめ役はメズールに任せたアंकは映司さんといえるらしいしカザリは危険…というよりゴオマ焚き付けるとか考えてそう ウヴァやガメルは無理だなという消去法でメズールだ

余談だが給料代わりにセルメダルとコアメダルを渡している、まさかの雇用契約に俺は驚いている

しかしまあ凄い世界だったな沢山のレジエンドライダーに会えた…サインも貰ったよりも

「グリモワールやオムニフォーラスなんてとんでもアイテムが手に入った事の方が怖いよ」

世界滅ぼすアイテムとか笑えねえと引いていると串焼きを食べていたジャンヌ・オル

タから

「あ、そだマスターの部屋の書棚にコレがあつたわよ?」

と渡されたのは髑髏の意匠が入っているライドブック?である

「何だコレ?アルターブックじゃないしイエティみたいに人と融合するモデルじゃないな」

「というより私に近いものを感じるわ」

「それってサーヴァントって事?……ん?」

よく見るとライダー文字だった本のタイトルが俺にもわかるように翻訳されている
…何故に?タイトルが

「呪腕の教主?」

『かつて、その顔を削ぎ落とし、その片腕を代価として呪いの力を得た暗殺者がいた』

ライドスペルが読まれると本が発光し始めると魔力的な経路がつながる…コレって契約したって事？

そんな混乱の中、現れたのは片腕を包帯で隠した髑髏の仮面…その男はまさか

「サーヴァント・アサシン、影より貴殿の呼び声を聞き届けた」

「呪腕さん!？」

「おや魔術師殿…いや今は魔王様でしたか？」

「呼びやすい方で良いよ…しかし今の本って」

「アレはオーディエンス?とやらが魔術師殿の為に我等、山の翁の物語を纏めた本で

ありました触媒としても機能したようですね」

「なるほど!!」

彼は呪腕のハサン…その昔、暗殺教団にいたとされる1人だ…その暗殺者らしからぬ人間臭さというかが在り方は好ましく思える

「君の知ってる魔術師じゃないけど…俺と契約してくれる?」

「無論、私の主は貴方のみにごこぎいます…同じ人外を宿すもの同士仲良くやりましょう」

「そうだな宜しく呪腕さん」

「はっ!!」

「あら珍しいわね貴方が来るなんて」

「ええ久しぶりですねジャンヌ」

ジャンヌからすれば数少ない同郷との再会なのだ気が緩むのも分かるがアルトリア・オルタは過去の経緯（聖杯戦争）から若干彼を苦手になっていた

その頃 一夏は船のデッキから外の風に当たっていた

「ふう……」

と飲み物入りのグラス片手に黄昏ていた

「まさか俺が四天王とか……」

普通の学生だった自分が国の幹部となり人を率いる立場になったのだから驚くしかない

「ホッパー!!」

「ありがとうな」

ホッパーの頭を撫でてると

「黄昏てる場合か織斑一夏」

突如声をかけられドライバーを構えると

「良い反応だが落ち着け、俺は敵じゃない」

「誰だお前は！何でこの船に…つてガッチャードドライバーを！」

曲者！出逢え！出逢え！と言おうとしたが口を塞がれてしまった

「んぐ!!」

「だから落ち着け順追って話すから！」

首を縦に振ると手を離してくれた

「俺は仮面ライダーガッチャードデイブレイク…長いが宜しくな」

「ゲホゲホ…宜しく…んで何なのさ」

「お前の未来に関する事を伝えにな」

「へ？」

「お前は近いうちにある決断をする…その時に悔いない方を選べとな」

「何だよそれどう言う意味で！」「一夏大丈夫!?!」クロスウィザード！」

一夏を助けるべく現れたのは魔法使いのようなケミー キャロル達が制作した中で

の最高ランク レベルXケミーのクロスウィザード 最近友達になったケミーである

「お前！一夏から離れろ！」

と魔法で攻撃すると警報がけたたましく鳴り響く

「時間切れか…また会おう織斑一夏」

ダイブレイクはそう言って転移したのであった

新たな謎を一夏に与えて

コラボ編 魔王side

前回 逢魔で起こった一連の精霊と空間震事件に一応の解決を見たハルト達 一行は国への帰宅準備を始めていた

「帰っちゃうんですか？」

「まあ俺の帰る場所があるしポータルもあるからまた会えるよ」

「そうですね」

「因みに士道」

「何ですか？」

「折紙に手を出すなら責任は取れ」

「はい？」

「言質はとつたぞ忘れるな」

「えーちよっ！」

「アデュー!!」

ハルトはニヤリと笑ってピースメーカーに戻るのであった

ブリッジ

「さて帰るかエンジン始動！ポータル接続！」

「イエッサー!!」

「はあ…コレで暫くは休暇だな」

「ああ…やつと休めるぜ」

ボヤクトルーパーであったがふと気づいた

「つて事は暫く陛下の手作りご飯はお預け？」

「っ!!」

「陛下！もう暫くこの世界に駐屯しませんか!?!」

「任務終わったから帰るんだぞトルーパー!!」

「え？いつも飯作ってんじゃん」

「暖かいご飯が良い！」

「それなら終わったら作るからな仕事しろ！」

まさかの理由で命令非服従をされるとは思ってたなかった

「そうですね我が魔王」

「つたくアイツらは……ん？どうした一夏？」

「いや何でも……」

「ディブレイクの件か？」

「……………」

頷く姿に何かを考えているのが見て取れた

「今こつちでも追いかけているが油断するなよ、お前とナツキがターゲットみたいだから……ぶつちやけナツキはどーでも良いがお前は心配だ」

細かく言えばナツキはある程度自衛出来るので心配してない…最悪死に戻りして対

策するだろうと歪な信頼を寄せている…あと仲間扱いだが一応は外様だし

「あれ敵なのかな？」

「助言が意味深なのは置いといても、現状一夏しか持つてないドライバーを改造して持つてるんだ警戒するに越したことはないさ」

「あとハル兄、ナツキさんの義妹って」

「ああ咲那ちゃんか…ナツキの義妹だよ、血の繋がりはないがな」

「え？」

「細かい話は知らないが遠縁の子だったかな？詳しくはナツキに聞いてくれ」

「分かった…で、ナツキさんは？」

「現在、その義妹のことで問い詰められてる」

「先程見てきましたが逆さ吊りにされてましたぞ？ 後…何故か気配遮断していた私の方を見てましたな」

「マジで!？」

「いや誰!？」

「失礼しました一夏殿、私はサーヴァントのアサシンでございます」

「えーとサーヴァントってジャンヌさんみたいな英霊だっけ？」

「左様、今後は主の影として行くのでお見知りおきを」

「よ、宜しくお願ひします」

「お前も呼んでみたい？」

「え！いやそんな事「興味ないと言えば嘘だろ？」まあ確かに」

魔法は空想でないとわかっているからこそ使いたいという気持ちは分かるので

「けど令呪をどうしたら宿せるんだ？」

因みに此方の令呪はFGO仕様で1日に一角戻るようになっていたので移植すれば問題ないが

「あと魔力を流してサーヴァントを維持する回路が必要ですね」

「それが俺みたいにファントムでもいれば……いや待てよ……そうだ！錫音！」

「はいはい」

「ワイズマンのドライバーってまだある？」

「スペアならあるけど何に使うのさ？」

「一夏に使う」

「ちよっ本気!？」

「試してみる価値はあるだろう？」

「辞めなさいってアンタみたいなファントムや私みたいなゲートじゃないと変身なんて出来ないわよ」

「変身するんじゃないよ？魔力タンクとしてファントムが必要なだけかな」

「ああそれなら大丈夫かな…」

「OK…ならどの子にしようかな〜」ちよつと待つて!」ん?何?」

「そんな魔法とかいきなり言われても」大丈夫大丈夫今回は英霊召喚と維持に特化したドライバーだから!」ええ…」

「そうなるで一夏の護衛に適したサーヴァントが良いな」

今後の展開まで見て行くと影に隠れて彼を守るものが必要な気もする　IS世界に残るネオタイムジャッカーの勢力や亡国企業の実存も軽視できない　それ故にどうしたものかと考えていると

「それでしたら我等、山の翁は如何でしょうか?影に隠れて守るのは我等の役目にて」

「アサシンか…ふむ」

気配遮断スキルを持つ彼らならIS世界以外にも陰日向に一夏の護衛が務められるだろうし彼の性格なら私利私欲に使う事はないだろう…よし

「名案だな呪腕さん採用！」

「恐縮であります」

「それにアサシンを呼ぶには触媒はいらないよな？」

「左様でございます」

確かアサシンは詠唱次第で狙って呼べた筈だ…確か本来はアサシンという語源になる暗殺教団の長である山の翁の誰が出るかはランダムであるが…

「なあ呪腕さん」

「何でしょう？」

「これ何かの手違いでキングハサン来たりしないよね？」

元祖首狩りのグランドアサシンが過ぎる…いや頼もしいがな!!

「ご、ご冗談を…初代様はグランドですぞ簡単にはこな「俺さまーリン呼んでるんだよね」……ないとは良い切れなくなりましたな」

「ジャンヌ、この間の呪腕の教主みたいなライドブックは書棚になかった?」

出来れば百貌さんに来てほしいのだがと思うが

「見てないわよ私だって漫画読んで暇潰そうと思った時にたまたま見かけたんだから」

「うーむ…」

困ったー!という顔をしているが

「いや、ハル兄今すぐじゃなくても」

「何言つてんだ思い立ったが吉日！これが俺の座右の銘よ即断即決!!」

『その思い切りの良さで俺達と契約したものな』

「そう言う事！後はノリと勢いでドーにかなる！大丈夫。俺が保証しよう!!」

「……………」

否定できない確かに目の前の人は普段は抜けているが実際の行動力は目を見張るものがある…でなければ戸籍やら何やら偽装してた人が一国の王様になてなれるものかと一夏はこんな所で義兄の凄さを知る…まあ考えなしとも言えるのだが…

「はあ分かったよ…呼ぶよ」

「よっしやあ！直ぐに準備しようぜー!」

「我が魔王その前に帰らないと」

「よし！ピースメーカー発進!!」

それと同時にデートアライブ世界からハルト達は離れ逢魔に帰ったのである

そして簡単な事後処理後に

「そう言う訳で一夏に護衛のサーヴァントを呼んでもらいまーす！」

「うおおおお！ハルきちがいきなりファンタジー全開だあ!!」

「待てハルト、お前正気か！」

「安心しろ千冬……俺は正気だ!!」

ハルトは笑顔で言うとうと

「ダメだ狂ってる……」

「そうだな……いやもう何というか、あのハルトに慣れた自分が憎い」

「ハルくんのノリと勢いは束さんよりも無軌道だもんね」

「それはないハルトはちゃんと自制する所はしてる」

「ダメよ銀狼、本当のこと言ったら」

「ナニオ!!」

「はいはい喧嘩しない、それで誰を呼ぶの？」

「護衛だからな百貌さんなら安全だろう」

「確かに百貌のなら問題ありますまい」

うんうんと頷くと一夏に自らの令呪を一角渡す

「さあ！召喚だ一夏！」

「おう！」

一夏は手を前に突き出すと少しの沈黙の後に

「ごめん、どうやって呼ぶの?」

全員が転けたのは言うまでもない

「そ…そうだったな一夏には先ず魔法のレッスンからだった…」

どーするかなあと考えていると

「ハルトー!聞いたぜ一夏のサーヴァントを呼ぶつてな!」

「ああ何だお前もいたのか」

「俺の扱い酷くない!?まあアレだけだよ…:ちよつと魔法陣貸して」

「え?何す「えい」うおおおい!何投げ込んでんだ!!」

ナツキが石を3個投げ込むと魔法陣が起動し始めたではないか!

「おいコラ！何ぶちこんだ！」

「えーとオーディエンスから貰った聖晶石」

「マジのガチャ引いてんじゃねえ!!頼む！泰山の麻婆豆腐出る!!俺が食べるから！」

「ハズレの霊装を願うな!!」

そんな話をしていたらナツキの持つラウンズオブキヤメロットとキングオブアーサー……そして

ナツキがオーディエンスから貰った鞘が光ると

魔法陣が爆破した

「うわあああああ………ててて………え？」

ナツキが吹き飛んで腰を抜かしていると、そこに現れたのは綺麗な金の髪に碧眼の美少女である

「マジかよ」

ハルトが眩くと彼女は告げる

「問おう、貴方が私のマスターか？」

この日 ナツキは運命に出会った…おい主人公な運命構図だぞ、それは！

「は、はい！」

「では契約を此処に宜しくお願いしますね、マスター」

「ナツキだよ野田夏樹」

「ではナツキ、一つ確認したい……………」

何故黒い私の方と先に契約しているのでしょうか？」

「あ…」

「それは私が最初に呼び出されたからだ私」

「何ですって…どうして何ですかナツキ！どうして黒い私を先に」

「当たり前だ私は脱ぐ系の再臨だが貴様は着込む系の再臨……ふふマスターとて男という訳だな」

「いや違……わなくもないな」

肯定したので全員の目が細くなる

「ナツキ最低です」

「見損なつたぜ」

「ハルトはどーなんだよ！ジャンヌだつてそうじゃん！！」

「ジャンヌはジャンヌだろ？可愛いかカッコ良いの違いでしかない」

「美味い感じで誤魔化すな！！スカサハさん来てたらどうなんだよ！」

「あの人の場合は異性的な魅力よりも物理的な戦闘力に目が行く」

「胸的な事？」

「ナツキ、有罪（ギルティ）！」

「…マスター？」

「せ、セイバー？」

「どうやら私は…マスターの性に爛れた生活を何とかする為に呼ばれたようですね」

「違うよ！俺的には戦力欲しいから呼んだんよ!!」

「つまり体だけ欲しかったと」

「お前最低だな!!」

「誤解を招いてるね！」

「問答無用です！さあ！ついてきなさい！」

「オルタ助けてええええええ！」

「任せろマス「セイバー、トリコバーガー作ったけど食べる？」すまない私はこれから
コックのトリコバーガーを食べる約束があるのだ」

「おのれハルトおおおお!!」

「酷い冤罪だなオルタ、ポテトもセットでどうだ？」

「良いだろうナゲットも頼む」

「OK」

そんな声と共にナツキは攫われたのである、ドアが閉じると悲鳴が聞こえたのであつた耳を澄ますと

「何で私じゃないんですか!! 本当なら私が先に呼ばれる筈だったのに!!」

何か殴つてる音が聞こえるな…うん、知らない方が幸せな気がしたな

「何あれ?」

「さあ? まああんな感じで良いからやってみ一夏?」

「うん…」

一夏も同じように石を魔法陣に入れると魔法陣は起動する さてさて誰が出るかな?

百貌さんかなあ?…待てよ石で呼んだ場合って詠唱がない?…:…つ!

「待て一夏!!!」

「へ?」

だが時既に遅く既にサーヴァントは召喚されたのである

「やあ初めまして!僕はライダー アストルフォー!」

現れたのは桃色の髪をした美少女?であった

「え?ライダー!?アサシンじゃないの!?あ、えーと宜しく織斑一夏です」

「うん!契約はここに…つと宜しくねマスター!アサシン?」

綻ぶ無垢な笑顔に頬が赤くなる一夏だがハルトは苦虫を噛み潰したような表情で告

げる

「一夏、誤解してるだろうから言うぞ…そいつ男だぞ？」

「へ？ いやいや何言つて「ボク男だよ？」 え？ ……ええええええー！」

一夏が宇宙猫になっている間、ウオズ達は

「あ、アレがアストルフオ…」

「シャルルマーニュ十二勇士の1人…理性が蒸発しているで有名な騎士…」

「魔王様と組み合わせたら絶対ダメな奴ですな寧ろ最初に来てくれたのがジャンヌ様で良かったです」

「そうじゃな…理性がぶっ飛んでる2人が合わさったら大変な事になる!!」

この時 四天王の脳裏には 混ぜるな危険！の文字が浮かんだと言う

「よしアストルフォ！早速この国を案内しようじゃないか！」

「ほい来た！宜しくね!!」

「おうとも!!ついてこーい!!」

早速予想出来た非常事態にヤクツキが動く

「待つのじゃハルト坊！その役目は妾に任せよ」

「え？んー…分かったお願いねヤクツキ」

「任せておれ!!」

とアストルフォを連れて行くヤクツキを見て

「なーんかアストルフォとは仲良く出来そうだよ！」

あははは！と笑うハルトであったが

「それは辞めた方がよろしいかと」

「何で？ 呪腕さん？」

「はい、あのものは良くも悪くも純粋な英雄です敵対するものには苛烈な魔術師殿とは水と油かと」

あくまで性格的に相性が良いだけで戦う方針は合わないという評価にハルトは

「そうかーま、いいや…それより…：…おーいー夏起きろー！」

「はっ！嘘でしょハル兄！あの人の方が男って！」

「あーそうだったな、お前デユノアの男装も見抜けない程鈍かったな…本当だよ」

はあと溜息を吐く

後日、一夏の護衛を頼むと二つ返事で領いてくれた、一安心!と思ったのだが女装したアストルフオを彼女と誤解した筈と鈴が一波乱起こすとは誰も知らない話である

まあそんなこんなで新しい日常に慣れてきたのだが

逢魔にて

「っ!!」

ウオズと旧四天王とキャロル達とで街を視察している時にハルト達はネオタイムジャツカーのクロック一派に襲われてしまう

ジョウゲンとカゲン、フィーニスはライダーの力を奪われてしまい

肝心のハルトも

「コイツで！」

『アナザーオールトウエンティ！タイムブレイク！』

「はあああああ!!」

アナザーライダーの連続キックがアナザーバールクスを貫く爆炎を上げるのを見ることが油断は出来ない

「やったか？」

「無駄だ」

その爆炎からアナザーバールクスがリボルケインのような剣を抜いて襲い掛かる、オリジナルで言うリボルクラッシュを受けてしまい変身解除される…しかし何故

「な、なんでダメージが……」

アナザーバールクスの防御のタネがわからず

「では終わりだ魔王」

「……がああああああ！」

ハルトの体にウオッチを押し当てられてしまうとブランクウオッチに力を抜き取られてしまうとハルトと繋がっているアナザーライダー達はジオウを除いていなくなつた……そう仲間を奪われてしまったのだ

「ではな、魔王」

「ふざけんな……逃すかあ!!」

それだけ言うなりオーロラカーテンを展開して退く連中を追いかけたハルトが抜けた先は

「……………は？」

至って普通の世界であつた

「んだよ……アナザーW検索……そうだ出来ないんだつた……」

アナザージオウにしかねない……一応アナザーライダー同士は惹かれ合う性質？というのがあるらしいから何とかなるかな？と割り切るも

「ジャンヌにハサン……も無理……何というか久しぶりの独りぼっちだな」

令呪を使つても世界の壁は越えられない……はあどうしたものか

「我が魔王！」

「ウオズにキャロル？」

「ここにいましたか」

「ああ……そうだウオズ、ノートを使え指定する時間に連中を暴れるようにな」

「かしこまりました」

「残り時間は散策と行く、騒動の開始がわかるようにド派手にやれ合流はその時だ」

「はっ！」

「それで久しぶりに体に誰もいない……1人の気分はどうだハルト？」

「静か過ぎて気持ち悪い」

ずっと相棒達が騒がしいからか、この静かさは何とも言えない異物感がある……だから「さつさと連中を締め上げて帰る相棒を返してもらおう」

取り敢えず街の散策でフラフラ歩いていると、ある銭湯が目に入った

「え、嘘……まさか!」

慌てて中に入る

「うおおおっ!……ここはまさか、幸せ湯!?! って事は本当にリバイスの世界だ……」

感動している店員さんが困った顔をし話しかける

「えっと、お客様……申し訳ありませんがお静かにお願いしま……」

ハルトは目線を動かした先にいる青年 五十嵐一輝を見ると高かったテンションを

更に爆上げして一輝へと詰め寄った。

「ほ、本物だ……沸きまくってきたあああつ！五十嵐一輝さんだ！」

「え……どうして俺のこと……」

「フアンです！サイン下さい！」

そうやってペンと色紙を差し出す…一輝はそれを戸惑ったような顔つきで受け取る……この男やる事がぶれないのである

「えつと……取り敢えずこれで良いかな？」

そう言つて一輝がサインを書いてから色紙を返すと興奮冷めぬ様子で一輝を見つめていた。

「君は？」

「俺の名前は常葉ハルト！年齢は……」

ハルトがそう言った所で突然言葉を止める。そして、ハルトは何かを感じ取ったかの

ように：正確に言えばウオズがノートに書いた通りに連中が何かしらのアクションを起こしたのだと判断しキョロキョロと辺りを見渡した。

「この気配……まさか、アイツら。やっぱりこの世界に来ていたのか！ウオズの予言通りだぜ！」

ハルトがいきなり訳の分からない事を口走っているのを見て流石の一輝も困惑した表情を隠しきれない。するとハルトは一輝へと頭を下げるようにして話を切り上げる事に。

「すみません一輝さん！急用ができてしまつて……。また話は後程伺いに来ますので！今日はこの辺で！」

そう言つてハルトは嵐のように出ていくとどこかへと走つて行つてしまう。そんなハルトを一輝は啞然としたような顔つきで見っていた。

そして数十分後

眼下に居るのはアナザーリバイとアナザーバイスの2人に本家のリバイス

「やつぱりリバイスいるじゃん！けどアレじゃあマズいよね」

俺のアナザーライダー達と違い この世界で生まれたアナザーリバイスは彼らの歴史を奪って誕生している このままだと彼らは変身能力を無くしてしまう…

「まあ良いか取り敢えずは力を取り戻す事を優先しよう」

すると2人のライダーキックがアナザーリバイとアナザーバイスを倒す 爆炎と共にアナザーウオッチは砕けたので

「さーて…行きますか」

彼の体にアナザーライダーの残滓が残っているのも後々厄介なので除染と戦力強化も兼ねますか

『ジオウ』

そしてリバイスの戦いに乱入し倒れている変身者にブランクウオッチを押し当て彼に残ったアナザーライダーの残滓を収束する

『リバイ』『バイス』

「これでよし…」

その姿に困惑する本家リバイスは先程の奴の仲間と誤解して襲いかかってきたのである

「え？ちよつ、まつ!!」

そして物語は 魔王の知らない歴史を歩むリバイス世界へと繋がっていくのであった。

ありふれた職業で世界最強

ありふれ編プロローグ

前回のあらすじ

デートアライブ世界のいざこざが解決したと思つたら今度はネオタイムジャッカーのクロック一派の不意打ちを受けたハルト、頼れる相棒達を失い追いかけた先は魔王ハルトの知らない歴史を歩むリバイス世界であつた

無事にとりかきバイスIF世界での事件を解決し相棒達を取り戻したハルト達は

「ただいま…おみや「おかえりー！」（ぶ）ふうー！」

ハルトはオーロラカーテンを抜けた先で待ち受けていたのは束の体当たりであつた

「……………」

「大丈夫なのハルくん!!」

「あ……ああ……今腹が痛いのと、風呂に入って綺麗な体が汚れた以外は大丈夫だ」

「心配したんだよ！本当に!!」

「ごめんよ束……」

「じゃあご飯作って」

「私は洋食を希望します！」

「そこブレないのは本当に好きだよ銀狼、ベアトリス」

取り敢えず力を無くしたジョウゲン達にウォッチを渡して起動させて力を取り戻さ

せるのには成功 此方の被害は回復した…これで一件落着

相棒達の帰還祝いも兼ねて色々と話したいと思っていたのだが……

精神世界

「みんな！元氣して「貴様等あ!!そこになおれえ!!」ええ…」

「お前たちがけしかけた所為で俺達ア！また悪役にさせられてオーマジオウに消される所だったんだぞ!!」

「何気にオーマジオウに立ち向かったハルトの功績を無に帰す真似をして許せんぞ！」

「何より相棒へ攻撃させた事が何より許せん!!火炙りだあ！」

「おう！やつちまおうぜ!!別に俺は日頃の検索エンジン呼びとか日頃の恨みを晴らせるからってノリノリで参戦とかしてないぜ!!」

「ついでにアナザーWも焼こうぜ！」

「何でダヨ!!」

「妥当だろ」

そこに見えたのは今回クロック一派に使われていたアナザーバールクス、ザモナス、ゾンジスの三人が他のアナザーライダーに囲まれてボコボコにされていた、道具扱いされた件についてかなり怒り心頭のように

「うわあ……」

怪人が怪人を袋叩きをしているという姿にドン引きしていると

「相棒！」

アナザーデイケイドが嬉しそうな顔？で近づいてきたのだが…絶妙に返り血浴びて怖いと引いているが…

「おう…皆大丈夫？」

騒がしい日常が帰ってきたとハルトは笑う

「ああ皆無事だとも！」

「そう、それで何でパールクス達を袋叩きにしてるの？」

その目線の先には柱に縛られて足元から火炙りにさせられかけているアナザーパールクス達…キャロルやジャンヌ達の事を考えると心痛いから辞めさせたいな

「今回クロックに誑かされて俺達全員を敵に回したからだ」

「そうだけど皆仲良くしなよ…確かにクロックはやり過ぎたけどアナザーパールクス達

「が悪い訳じゃないからさ」

「相棒は甘すぎるのだ!!コイツらは言うなれば謀反人だぞ!」

「そんなの言ったらお前たちだって操られた結果、王の俺に逆らった謀反人だよ?」

「そ、それは……」

「だから、この話はこれでおしまいだよ大丈夫?」

ハルトが回復の力を使うと三人の前に立つ

「何故俺達を……」

「敵だったのに」

「俺はアナザーライダーを敵と思ってないよ?恨むのはクロック達であってお前達じゃ

ない…けど道具扱いしてくるクロックに従った君達も相棒達を道具扱いしたのも悪いのは分かるよね？」

「あ、ああ……」

「だからさっきの仕返しは仕返し…これで貸し借り0ね、今後はクロックじゃなくて俺を手伝う事、いいね？」

「委細承知」

それで無事に事件解決！となるのだが

実はこの件には続きがあった

そもそもクロックが何故ハルトを狙うのかという理由 老ハルト異世界侵攻の件をウオズから詳細に聞いたのだ

実際の細部はハルトの予想通りというか

「兵器目当てに侵攻するとかマジ魔王じゃん」

『しかも異世界人を捕虜にして奴隷として労働力にするとか』

『見つければ助けるなんて悪辣な娯楽をするとか』

『しかもクライシス帝国とか傘下に収めているのか』

「何があつた未来!!」

『今も割とそんな事してるだろ?』

「流石に捕虜を奴隷扱いはしないが?」

それよりもだ、ウオズの報告に気になるものがあつた

「え？クロックの世界滅ぼした後に錫音の世界に？」

「はい、ネオタイムジャッカーの職員…というより逃げたクロックがいた世界が彼女の世界でした」

過去に聞いたが職員1人殺すために世界全てを滅ぼした理由も分かった気がする

そりゃ己の悪業というか、亡国の王子とか生かしていると何するか分かったものではないって事ね

「けどそれって」

「彼女の家族の死にネオタイムジャッカーが関与していたと言う事になります」

「おい、フィーニスを呼べ大至急だ!!」

「はっ！」

そしてハルトは元ネオタイムジャッカー幹部にして旧四天王の一人　ファイニスを呼び出して事情を聞いた

「はい知っています、クロックの件は確かクジヨーが主導していました」

「となると錫音の件も」

「彼女がその世界出身の人間とは把握はしてまず、ただ彼女がソーサラーになったのは本当に偶然ですので…誘ったのも…」

「クジヨーからすれば柵から牡丹餅か」

「はい」

『どうする錫音に話すか？』

「話す、大体この辺は放置すると後で仲間の亀裂とかになるからな…血気にはやらないようにするけどね」

しかし彼女からしたら復讐相手が増えたのだ…面倒な事にならないと良いのだがな

そしてハルトは一人 夜空を見ながら新たな力であるアナザージオウ・ファイフティズのウオッチを見ていた

これはあの世界で偶然手に入れたアナザーウオッチ…リバイスの宿すバイスタンプの力を使えるという能力を有している 当然ハルトの知らないアナザーライダーであるが

「俺って頭固かったのかもな」

ナツキはラウンズオブキヤメロット、ウオズはあの世界で仮面ライターセンチユリーのデータを元に新たな力 アナザーセンチユリーに目覚めた キヤロルもジョージ狩

崎の影響からアルケミスなる新しいライダーに変身したのだ

「俺は知らないってだけで新しい可能性を見て見ぬふりしてたんだな」

至らなかった、自分の知識外の発想：そんなの悔しい以外の言葉は出ないが

「至れば良いだけだ」

過去にはなかった 今はある ならば獲得していけば良い スタートラインに立て
ただけ凝光なのだから

そして

ある世界 その綺麗な山にて

「ん？君は誰かな？」

真つ白な服を着た爽やかな青年が話しかけてきた。その体にこびりついた死臭までは隠しきれてない……死神や悪魔といっても信じる……いやこう言おう

大量殺人鬼の怪物だ

「常葉ハルト、通りすがりの魔王だよ」

「へえ、僕はダグバだよ……魔王だっけ君強いの？」

ダグバと名乗る青年にハルトは覚えがあつた……いやあつて当たり前だ。彼からすれば画面の向こうで何度も何度も途方ない程見てきたライダーの物語に出る最初の絶望……怪物である

「普通かな……ダグバ……お前はグロンギか？」

「そうだよ、ねえ君でしょ？アイツ等逃したの？」

アイツ等、それはゴオマや他のグロンギ達の事だろうな、そもそも彼等はダグバの肅清から逃げるために逢魔に来たのだから…

「ああそうだよ」

だから俺の役目はダグバからアイツ等を守る事である

「そうかそうかく僕のおもちやを取るんじゃないよ」

青年が手を前に突き出すとハルトの体が突然発火したのである

「我が魔王!？」

「大丈夫……まさか今ので焼いたつもりか？」

その言葉を証明するようにハルトは消火するとお返しとばかりに指を鳴らすとダグバも発火するが直ぐに鎮火すると体の煤を払いながら話しかける

「君強いね!!」

「お前もなダグバ、流石は究極の闇だね」

「君も僕と同じくらいだよ」

「残念だが俺を超える病みをもたらず者（ナツキ）がいるからな」

「我が魔王、その病みは違うかと…」

「面白そうだね…ますます興味出たよ」

「そっ」

両者は今のやり取りで互いの実力に気づいた

「(っ)っ、強(っ)」

ダグバは新しい遊び相手の登場にハルトは憧れが泣きながら拳を振るった化け物に戦慄して

そうなると思えば道具での戦いには意味がない

「やっぱコレしかないか、ウオズ下がってろ」

「ハッ！」

「それとアナザーライダーにはならない俺の力でやる」

『正気かよ相棒！』

「正気から見てろ……おいダグバ構えろよ男だろう？」

「いいね君！僕を笑顔にしてくれるの!!」

「ああ沢山笑わせてやるから俺と遊ぼうぜ！」

ハルトはジャケットを脱ぎ捨てて

『かかってこい！』と書かれた文字Tをダグバに見せつけると彼も意味を理解したのか満面の笑みを返す

「え？我が魔王…冗談ですよ？あの人ラスボスですよ？」

「知ってるけど関係なくね？行くぞ」

「ははは！」

ウオズがドン引きするがそんなのお構いなしに両者は全く同時にスタートを切るとダグバもハルトも怪人態へと姿を変える

こんな時　ハルトが何をするかと言えば一つ

「殴り合いじゃあああああああ!!!」

笑顔でダグバ相手にステゴロで挑んだのである

後にウオズが録画映像をグロンギ達に見せたのだが

「あ、あのダグバ相手に拳で!？」

「魔王様はやはり凄かった!」

「いや…イカれてね? ガドル様でもやらねえよ」

と賛否両論であったというが

「「まあ魔王様だし仕方ないかあ」」

グロンギ達にもハルトⅡの脳筋の概念が定着していたのであった

「あはははははー！」

「ぶっ…ははははははー！オラア!!」

綺麗な野原でクワガタ怪人とバッタ怪人が笑い声をあげながらノーガードで返り血も気にせずに一発ずつ殴り合うという格闘家でもない光景をウオズは見ていた

「あはははははははー！おらあ!!」

「ぶははははははー！らあ!!」

互いに全力で殴り合う

方や己に比肩する遊び相手が出来た喜びに

方や己の中にある鬱憤を晴らすように

まあつまりイライラしていた所に丁度良く殴り合えそう奴がいたので喧嘩したかったのだ…冷静ならハルトの憧れにも会えたのに気づいてないほどに冷静ではなかった

戦う両者に去来するのは

戦いへの快樂と全力を出せることへの喜びである

「君強いね！クウガより！」

「何言つてんだ！俺よりクウガの方が何万倍も強えよ！」

「あはははははははは!!」

「はははははははははは!!」

笑うダグバに対してハルトも笑顔で返す憧れの敵とか知らない 何故かは知らない
が彼は今日の前にいる究極の闇をもたらす者を感じ的にだろろうか

「オラア!!」

俺は、ねじ伏せたくて仕方がないのである

この殴り合いは三日三晩続き最後は両者ノックアウトで幕を閉じた

互いに仰向けになり青空を見ながら不良漫画レベルに友情を確かめ合った

「あはは！君強いね！」

「そうか？」

「強いよ、だから君が逃した奴には何もしないであげる」

「そりや助かる、アイツ等は逢魔の民だからな」

「逢魔？」

「ああ……こことは違う世界にある俺の治めてる国だ」

「へえ……君は王様なんだ、そりや強い訳だ」

「まあな……良かったらお前も来るか？異世界には俺より強い奴とかいるぞ？」

「え、いいの!？」

「大きな喧嘩する時は声をかけるよ……強い奴沢山いればお前も退屈しないだろ？そいつ等とも戦えるし俺ともまた遊べるぜ、だから他の奴には手を出すなよ雑魚と戦っても虚しいだけだろ？」

「また君と遊べるの!?分かった!約束する!!」

「おう」

—————

「そんな感じで喧嘩友達となった、ン・ダグバ・ゼバ君です皆仲良くしてね」

「宜しく」

笑顔で挨拶するダグバに対して皆一度宇宙猫のような顔になると再起動したウオズ
が

「ほお…ん?ダグバ?ダグ…ダグバあ!!」

「ハルト…貴様と言う奴は……」

憧れを泣かせた諸悪の根源であるが今のハルトからすれば

「拳を交わして育む友情！悪い奴は大体友達だぜ！」

「イエーイ！」

ダグバとハルトは肩組みながら笑うのである

「流石が怪人の王だ……」

「これぞ魔王様クオリティ」

家臣団は戦慄しているとダグバは笑顔で

「あ、安心してよハルトと遊ぶのが楽しいから他の奴には何もしないから逃げた奴にもね」

その言葉にグロンギ達は安堵するが

「ハルト！ダグバ！覚悟しろ！」

懲りないゴオマは襲い掛かるが

「とお！」

「ゴふう！！」

パンチ一発で吹き飛ばされ近くの街路樹に激突しへし折ったのである

「う、うわあ…ハルトが増えた…」

ナツキがドン引きするなかハルトはキリツとした顔で一言

「逆らう相手はねじ伏せる、この拳が俺のアームドギアだ！」

「いよっ！魔王ちゃん！」

「それでこそ魔王だ！」

「かかか！遂に覚醒したかあ！！」

「その前に響に謝れ！！あとお前疲れてんなら寝ろ！！」

流石のナツキもキレて掴み掛かるとハルトを首根っこ掴んで仮眠室のベットへ放り投げたのである

ダグバ到来に戦慄する逢魔幹部陣だが三人だけ明らかに瞳の色を変えていた

「ダグバと言ったか？早速私と殴り合おう！」

ブレーキの壊れた逢魔の暴走列車 カレラである

「え？良いの？」

「構わん、我が君と三日三晩殴り合う強者なのだろう？ならば戦ってみたいではないか！」

「ボクも良いかな？ハルの憧れてるクウガのラスボス…その力を見て見たいし」

「私も是非に」

ここで名乗りあげるのはカレラ、ウルティマ、テストロツサ、逢魔の最強三人娘である流石の戦闘狂ぶりだハルトからダグバの凄さをかたられているだろうに

名乗り出た三人を見てダグバはそれはもう良い笑顔で闘技場に向かい三人娘とバトルしたのであった 結果は時間切れによる引き分けだが実際はダグバに余裕があったので三人の負けに近い形であるゴングに救われたようなもの…ダグバはダグバで自分に並みに強い面々がいる逢魔に満足しているようだ…お願いだからガドル閣下とかスカウトしてくれませんか？ゴ・ジャラジ・ダ…テメエはダメだ

それ以来三人娘は何かしら鍛錬している描写が多く、どれだけ刺激になってんだって話である

それでもつてエネルギー溜まったから旅をしていたら

「なーんだ、この石像」

人と羊のお化けのような石像があったのである

「ふーん、オシヤレじゃん…ええ？これ封印されてると言う事はコイツ…動くぞ!!」

ハルトは目をキラキラ輝かせている

「我が魔王…まさか」

ウオズは経験からこの時のハルトは大体ロクな事をしないと理解していたが

「ねえ…ウオズ知ってる？」

「何ででしょうか？」

「封印は解かれるためにある!!なんかボタンあつたら押したくなるのと同じだよな!!」

「封印してると言う事にはそれなりの理由もあるのに考えなしに解く馬鹿が……いますね私の目の前に」

「今は聞かなかったことにして…よいしょと」

封印を解くと石像は元に戻っていく

「お前は誰だ？」

「常葉ハルト、異世界の魔王だ」

「魔王？ほほお異世界とは面白い話だな」

CV安元…：かなりの強キャラじゃねえか油断ならねえぜと警戒する

「お前は誰だ、あとお前を解放したら何か面白そうな感じがしたから封印を解いたが何をした？」

「そのような遊興で解放されたのか？…まあ良い儂の名はクヴァール、この世界の魔王様に仕えたものだ…まあ勇者一行に封印されていたがな」

その言葉にハルトは瞳をキラキラ輝かせながら

「勇者一行に封印された魔人…：なんか凄いファンタジーだな!!」

「そんな呑気なのは我が魔王だけです…それに我が魔王にも勇者(ナツキ)がいますよね？」

「うーん……今更だけど俺の勇者……アレかあ……なんか聖剣持つてるけどさ……なんかないわあ……ヤンデレに刺されて死ぬ勇者とかないし……アルトリアの方が勇者ばいし」

「それ本人の前で言わないでくださいよ」

ん、と短く答えるとハルトは

「おいクヴァール！お前何か面白そうだから俺の仲間になれ!!」

凄いふんわりした理由で勧誘したのであった……フットワークが軽すぎるし理性や常識が本当に破綻している魔王であるが……現状ハルト自ら勧誘した仲間がデロウス（親）とクヴァールなのは何とまあ……

「我が魔王!？」

何言ってるんだお前！とばかりにウオズは驚くがクヴァールは驚きながら顎の髭を撫でる

「ほはお儂を勧誘するとは驚いたぞ」

「何かお前といたら面白そうな感じがするから！それに異世界の魔法とか興味ない!？」

そうやってクヴァールは手を前に突き出すと

「興味はある…だが儂を従えさせられるか試させてもらおうぞ…：：：ゾルトラーク!!」

放たれた黒い閃光 それは世界初の貫通魔法 ゾルトラーク 発明当初は大陸に住まう数多の人間を死に追いやる程の魔法だがハルトは

「よこしよ」

右手で払ったのであった

「何!？」

「凄い魔法だな、俺の片腕が消し飛ばされたよ……痛覚無効で痛くないけど血が出てるあたりマジですごい威力だね！片腕無くしたのは初めてだよ」

となくした右腕をヒラヒラと見せるハルト、出血も凄いのだが炎が体から噴き出すと同時に無くした腕も治癒された

「よし完治！さあ今度は俺の魔法を受けてみる！」

「ほほお前も魔法使いだったのか……では見せてみるお前の魔法を！」

「受けてみる！俺の必殺魔法!! 逕庭拳！」

「(ぎ)ふう!!……なん……のお!!」

その拳は本来の拳の一撃と本来遅れない筈の魔力が時間差で襲ってくる技で流石のクヴァールの体をくの字に折ったのである

「これが俺の魔法だ」

アナザライダーをなくしてからハルトは自分の基礎スペック向上に努めていたダ
グバ戦で手応えを感じたハルトは体内に宿る魔力を自力で制御する術を得た結果

拳で殴った後、遅れて魔力が襲うなんてどこぞの主人公の必殺技を習得していたので
ある

「拳法の間違いでしょう?」

「はははははは!まさか魔力が遅れてやってくる程の身体能力か…言葉で欺き攻撃する
とは魔族に近しいなお主」

「まあ魔王ですし!!」

「いやアレ、人の心とかないのか?みたいな事言われていますよ?」

「うーん……そこに無かつたらないですね」

「ただの腕力でアレなら魔法も……ふむ良かろう、この腐敗の賢老　クヴァール　常葉ハルト……新たな魔王様の傘下に下ろう」

「うん宜しくね!!」

そんな感じで

「新しい仲間のクヴァール君です！みんな仲良くしてあげてね！」

「宜しく頼むぞ」

「まーた魔王ちゃんが規格外な怪物連れてきたあ!!」

「本当に自重を知らんなハルト様は！」

「まあダグバと殴り合うくらいにはイカれてますよね」

「かかか！それでこそハルト坊じゃ！」

「ああやっぱりボスは悪の組織の長になるべくして生まれた存在だな」

「そうだな！何て血の気の多さだ！」

「こりゃ食い出のありそうな強さだな」

と笑う新旧四天王であるが

「改めて宜しくなクヴァール」

「うむ」

「つと魔力が抜けたな久しぶりに名付けしたって事ね」

これが名付けにカウントされたようで俺の魔力がクヴァールの体に流れ込んだのだ……そしたら異変が起きたのである、別にイケメンになったとかではない

何故か瞳から六芒星の魔法陣が浮かぶようになったのだ

「ま、まさか複写眼（アルファステイグマ）!?!」

ハルトは驚くも

「何だこの魔眼は……む?」

クヴァールは生来の直感からか魔眼の使い方を学習したようで

「成る程、こうするのか……」

と遠くで魔法を使っていたウルティマの核撃魔法 破滅の炎さえも模倣したのであ

る

「ほほお魔法を複写する魔眼か」

「うおおおお！スゲエ!!」

「え！嘘なんで魔法使えてるの!?!」

「そりゃ複写眼使えばな」

あの魔眼は魔法発動に必要な数式を瞬時に読み解き模倣する力がある

勿論使い熟すにはそれ相応の力が必要だが、そもそもクヴァールは勇者一行が倒せなかった魔法使いにして魔王軍でも腐敗の賢老の二つ名を得るほどの魔法使いだ。その辺りも簡単に使えるのだろうか

「ならばボクもゾルトラークを教えてよ！」

「良からう」

この結論から言うとうルティマ、カレラ、テストロッサ、錫音の4人がゾルトラークの解析をした結果として、逢魔王国宮廷魔導士団全員が人を殺す魔法（ゾルトラーク）を習得。後の未来にある、ありふれ世界や転スラ世界の東の帝国戦で予想以上の猛威を振るうことになるのは別の話である。

その結果、後にクヴァールはウオズ、テストロッサと並ぶ逢魔王国大幹部の地位を与えられたのである。それは少し先の話

「はははは！見てくれ我が君！クヴァールのゾルトラークを解析した結果！防御不可の核撃魔法を体得したぞ！」

「見て見てハル！ボクの派生したゾルトラーク！これね魔法陣で防御した相手をボクの毒で犯して殺せるんだよ！」

「ハルト、私もゾルトラークを派生させて防御貫通させて魂を直接攻撃する魔法を編み

出したのですが…」

「やっぱり三人はすげえなクヴァールさんの魔法解析したとか…というより全員の魔法の殺意が高すぎる!?!」

「ねえハルト、見て見て！私のゾルトラークをウィザードリングに刻印して使えるようになったんだ！」

「何気にお前が一番やべえよ錫音!!それ俺にも使えるって意味だからね!?!」

元の世界で解析に80年掛かった 人を殺す魔法を何て短期間で実用段階に漕ぎ着けているんだ

そして新たな防御魔法も開発したのであった

そんな感じでハルトがやらかした結果

「おい貴様、暴走も大概にしろ」

「はい…」

キャロルから説教が待っていたのであった

「まったくオレがあの世界で手に入れたドライバーの解析で目を離した隙にダグバを仲間にするわ魔法使いが増えてるわ…どんな風に考えたらそうなる！」

「俺が強くならないと皆を守れないから…弱いままだと…また奪われるから…いや…皆いなくなるのは…」

その言葉にキャロルは理解した、このバカはクロツクの事件で大事な仲間を奪われた事で軽度のPTSDを発症しているのかと

「はあ…落ち着けハルト」

「……………」

キャロルは優しく抱きしめる……側から見たら幼女に抱きしめられているという事案なのだが、それは置いておこう

「お前がこの間の事件で昔を思い出したというのは大体察しが着く……がもう昔の弱いハルトじゃないだろ？」

「……………」

「安心しろハルト、お前がどんな化け物であろうと弱くともオレはお前の味方だ必ず側においてやる他の奴等は知らんがな」

とさりげなく好感度アップを図るあたり流石は世界を相手に1人で戦おうとしただけの事はある

「うん……ごめんもうちょいこのままで」

「仕方ない奴だな……貴様、クヴァールのいた世界で現地妻は増やしていないな」

「増やしていない感覚で何でも切り裂く魔法使いと殺し合いしただけ」

「それならヨシ！」

「楽しかったから殺さないでいたら帰るまで粘着された」

「……………ほお」

何故か声が絶対零度まで冷め切り問い詰める寸前で

「ハルト助けて！2人のアルトリアがラウンズオブキヤメロットを使い熟せるようにつて地獄の特訓を……………」

余計なバカが乱入してきた

「貴様、何しに来た？」

「キャロル!?! い、いやそのハルトに助けを『コネクト』へ? ああああああ!!」

ナツキの足元にコネクトの魔法陣が現れると彼はアルトリアのいる闘技場に送り返されたのである

「ナツキ、見つけたぞ」

「では続きと行きましょうか？」

「い、いやあああああ! 助けてエエエエエ!」

そんな断末魔を無視して暫くキャロルに甘えていると

「キャロル貴様ア! 何一人でハルトを独占している!」

「そうだよ！キャロリンはこの間ハルくと旅行したじゃん！」

「残念だがソレはソレだ」

「反則じゃないかしら？」

「アンティリーネに賛成、ハルトは共有財産」

「ほほお…なら再び決めるか…誰がハルトの正妻か！」

とんでもバトルが幕を開けようとした時

「旦那様、安全な場所に避難しましょう」

「うん、分かったベルファスト」

「そうですよそうですよ戦いなんて野蛮な方法しか取らない先輩達は置いて私達と

ゆっくりしましょう」

とベルファストとベアトリスがちやつかりハルトを連れ去ろうとしたので

「お前たち抜け駆けか？」

「いやいや違いますよ私達にもそろそろキャロルさんのようなヒロインイベントをですね「関係ない」でしたら」

雷鳴剣を抜刀し参戦を決めるベアトリス

「私も実力でハルトさんを頂きます」

「余りに優雅さには欠けますがね」

「よく言ったな小娘達！だがハルトはオレのものだ！」

その日 ハルトの庵は見るも無惨な姿に成り果てた

「わあ……あ……」

「あ、泣いちゃった！」

遊びに来たウルティマに助けられたハルトであったがその残骸を見てほんのり涙を浮かべたのであった

その翌日

「……………」

ハルトは建て直されている庵を見てみると

「すまなかったハルト」

「いや俺が弱かったからダメだったんだよ…やっぱりもっと強くなりたいと」

「いや待て、何か闇堕ちしかけてないか!？」

「この程度じゃ…もつともつと」

「強さへの向上心とは素晴らしいぞ我が君!どうだ!私と一戦!」

「よし戦おう…行くぞカレラ」

「ああ楽しみだなあ、新しく出来た魔法を試させてもらおうよ!」

「行くぞ!」

と逢魔上空で行われたバトルの結果、乱入したウルティマ、テスタロッサとの戦いはシンフォギア世界に移動後、ある無人島を消しとばしたとされる

その報告を受けたナツキは胃薬をおかわりしたのであった

とまあそんな感じで各々が新たな成長を感じているなか

「我が魔王、エネルギー充填完了しましたが転移しますか？」

「おう、じゃあ行こうぜ！今度はどんな出会いが待ってるかな！」

「そしてマーリン嬢はいつ見つかるのやら」

「おい不穏な前振りは辞めろ」

そしてハルトはいつもの面々と行きたいが今回に関してはキャロルはドライバーの解析で休み

千冬や東はI S学園の後期授業関係とマドカの転入手続きで不参加と、銀狼は東と一緒にに行くとの事だ、錫音はクヴァールさんから教わる魔法の研究と、んでマドカはと言

えは

「だ、ダメなんだ姉さん！私はナツニウムを摂取しないと死んでしまう病なんだ！」

涙目になりながら拒否していた

「束と同じ事を言うな馬鹿者」

「分かるよマドツち！束さんもハルニウムを摂取しないと体がおかしな痙攣をするんだよー」

「それと同じだ！私も体の不調が「アホか」そんな殺生な！！じゃあ千冬姉さんはハルト義兄さんと会えないとか耐えられるの？」

「無理だな、あのバカは目を離せば何をするか分からない！何なら知らないうちに現地妻を増やすのだぞ！あの女誑しは！！だが私も私の立場がある、まあお前の場合はあの世界での学歴は付けておけ」

「そ、それを言われたら…確かに一夏兄さんとも学生生活はありだが…」

「それにナツキを長期休業中は好きに出来「さあ行くぞ姉さん！」現金な奴め」

「ちーちゃんには言われたくないよね？」

三人娘は戦力的にアレなので、ついて行くのは

ハウンドと親衛隊、ウオズと旧四天王と呪腕さんとジャンヌに

「今回は楽しそうな感じがするからついていくわよ旦那様」

「さあ！漸く私 ベアトリス・キルヒアイゼンのターンですとも！」

「お供いたします」

アンティリーネ、ベアトリス、ベルファストの三人と…オマケ（ナツキ）だ

「酷くないか？」

「別にい…んじやキャロル手勢のポータル組み立て器はあるな？よし座標合わせろ、飛ぶぞー。」

「ピースメーカー発進!!」

そしてピースメーカーで世界を超えたのである

—————

飛び込む世界には何も無い荒野が広がっていた

「何も無いですね？」

「だな、取り敢えず適当に着陸して野営地探るか」

「イエッサー」

ハウンドが周囲の探知をかけていると何か見つけたようで

「何だこれ？」

「どうした？」

「モニターに出します」

そこには白髪眼帯の少年と金髪赤目の少女がウサ耳の美少女に泣きつかれていると
言う光景だった

「何だありや」

「あ、此方に気づきましたね」

カメラの目線に合わせると彼等は空いた口が塞がっていないようだ よし！

「行くぜ！未知との遭遇全開!!」

ブリッジから出ていくハルトを見て

「陛下を止めろ！」

「あの人に交渉させたら大変な事になる！」

「ノリと勢いで走るのはほんとに辞めてくれ!!」

「……………はあ」

親衛隊は慌てて止めに入るがウオズは冷静にマフラーで拘束して止めたのであった

「ハウンド、お願いします敵対の意思はないように伝えてください」

「イエッサー」

「何で俺じゃダメなのさ」

『王が先陣きるな』

「ええ！何でさ!!」

不満全開な顔をしているもハウンドの乗るガンシップは彼等の元へ辿り着く

身元と目的を明かして接触を試みた結果、此方の交渉OKとの事だったので船を着陸させてトルーパー達が整列すると

「軍学隊！演奏!!」

「おお！登場のBGMで威厳出す感じか？」

ハルトが首を傾げると軍学隊のトルーパーが奏でたのは……

やる気のない帝国のマーチであつた

「何だよこの威厳も何も無いような音楽は！」

「陛下にお似合いですな」

「ソレ褒めてねえよハウンド!!ウオズ!これだと俺の魔王らしさが0だぜ!!」

『まあ普段の相棒はこんな感じだよな』

「え?俺ってそんな認識?」

だが取り敢えず挨拶といこう

「初めまして、日本語大丈夫?」

「あ……ああ」

「俺は常葉ハルト、こことは違う世界にある逢魔王国の王にして魔王だよろしく頼む」

「俺は南雲ハジメ……こっちはユエだ」

「よろしく」

「そしてハジメさんの奥さんのシアですう！」

金髪の子はユエでウサ耳の子はシアな覚えたぞ

「違うだろうがダメ兎!!」

「ぎゃああああー！」

アイアンクローで沈黙するシアとハジメのやり取りを見て

『東貴様あ!』

『ぎゃあああああ!』

千冬と束を幻視したのであった…ふむ世界が違っても変わらないものがあるんだなと感心していると

「……………ん?常葉ハルト?じゃあアンタがハル爺か!!」

「は?」

その言葉に親衛隊や全員が硬直した何老人扱いしてんの?と混乱していると

「けどオスカーの話より若い…」

「ハジメ、あの時計渡したら分かるかも」

「そうだな、いや俺に色々話してくれたオスカーって人がアンタと同じ名前の人の事を

話しててな……この時計を見せたら色々分かるって言ってたんだ」

「時計？………っ！！！！」

ハルトはハジメから受け取ったものを見て硬直した。それはライドウォッチであったのだしかも

「仮面ライダー1号のライドウォッチじゃん！！」

伝説の中の伝説ではないか！！取り敢えず

「ウォズ！祭壇を用意しろ祀るんだ！！」

「我が魔王、落ち着いてください」

「けど……何でウォッチを……いやその前にハル爺って事は……」

「未来の我が魔王ですね」

「え？未来？」

「多分だけど、オスカーって人が知り合つたのは未来の俺だろうな…しかしハル爺って良く許してたな…」

あの性格的に余程の仲良しで無ければ話は通じないのだが…未来の俺なら分かるだろうが答えを聞くのは何か負けた気がする

「南雲くんや君はこの時計を何処で？」

「あ、ああ…実は」

南雲くんから聞いた話はこんな感じだ

何でもこの世界にはエヒトなる邪神が君臨し、世界の住人をゲームの駒にして遊んでいた

それを知り神に逆らった解放者と呼ばれる者達はエヒトと戦ったが敗北し世界に七つの迷宮を残して消えたという

その7つの迷宮を攻略したものは世界を超えられると

「俺もアンタと同じで別世界から来たんだが色々あつてな、今はユエと一緒に帰るために動いてるんだ」

「そうか……君も……よしウオズ!!」

俺と同じ目的を持つ者がいるならば先達として助けよう

「はっ!」

「俺は南雲くんに協力するぞ!!」

「え? ちよっ!」

「俺も君と同じで自分の世界に帰る旅をしているんだ…そんな時何やかんやで国王になつて魔王になつたんだ！」

「そのなんやかんやを教えてください！一体どうしてそうなつた!!」

「よし！宴だあ!!」

「」「」「おとおおお!!」「」「」

「その前に私の一族を助けてくださいですう!!」

「え？」

森の人達

森の人達

前回のあらすじ

色々やらかしたハルト一行はエヒトなる邪神が支配する世界にきてしまう。そこで出会ったのはライドウオッチを持つ異世界の少年。南雲ハジメの一行であった。予期せぬ形で助力を決めたハルトであったがシアの頼みによって…

「一族を助けて？」

「はい……その……」

聞けばシアのいるウサ耳の兎人族は、この森の獣人族カーストで下だったのに、シアという本来は魔力を持たないのに何故か魔力を持った獣人が生まれてしまった。慈悲深い彼等はシアを隠して育てていたが遂にバレてしまい森から追放。さらに追い討ち

とばかりに奴隷狩りをしている帝国兵に襲われているのだとか

「獣人にそんな事するとかカリオンさん激オコ案件だな……取り敢えず帝国を滅ぼそう、ウサ耳を傷つけるのは重罪だ!!」

東も機械だがウサ耳つけているので他人事とは思えないのである!!

「落ち着いてよ魔王ちゃん!!」

「まだどんな強者もいるか分からない世界で敵を増やさないでもらいたい!!」

「かーかつかかか!それでこそハルト坊よ!!」

「あと帝国滅ぼしたら、この森を焼き払え!!」

「環境破壊ですよソレ!?!」

「……………それすると大地の精霊が起こって巨大化したJとか来ないかな!? 仮面ライダーJに会いたいから、この森を焼き払え!!」

「仮面ライダーJは来ませんよ!」

「ええ…わかったよ……. じゃあ変わりにシンフォギア世界の無人島を消し飛ばすね」

「何が変わりなんだよ!! ごめん! 胃薬おかわり!!」

「キャロル嬢! 千冬嬢! 戻ってきてください!!!」

「魔王ちゃん…俺達しかいなかった頃より暴走度合いが増してるう!!」

「ストッパーがないとこうなるのか!! 千冬様! 戻って来てください!」

「まあ平常運転ですよね」

阿鼻叫喚の旧四天王とナツキを見てドン引きするハジメだがその脳裏にはこの男を

制御するキャロルと千冬なる人物に畏敬の念を覚えたという

「えーと…取り敢えずアンタの助力は嬉しいんだが…一つ聞きたい…アンタは俺の敵か？」

「味方じゃないと協力しないし…それに君は俺と同じだよな？敵以外には牙を剥かないよ」

あっけらかんと言いつつとハルトはハジメに

「そーいやあアンタ、ライダーがどうか言つてたが…」

「ああ俺は仮面ライダーの影と言えるアナザーライダーに変身し尚且つ！古今東西の怪人を総べる王らしいよ！」

「まあ良い…ん？仮面ライダー？…アンタの話だとまさか…バイクとかあるのか？」

「オフコース！俺のマシンのコレクションみたい？」

「ああ！」

よしならば俺のコレクションが火を吹くぜ！！

「ハウンドは取り敢えず兎人族の人達見つけたら保護して…んで帝国兵はサーチアンド
デストロイで！！」

「イエツサー！我々も違う世界とは言え帝国には酷い目に遭わされていますからね腕が
なります!!野郎ども戦闘準備だ!!」

悲報 帝国兵 銀河帝国と同じ帝国だからという理由でとばっちりを受ける

「そう言えばアンタの横にいる人……ウオズじゃねえか！」

「そーだよ俺の頼れる右腕さ！」

「初めまして」

「サインを頼めないか？」

「良いけどライダーになる白と黒のウオズじゃないよ？」

「確かに赤くもないな」

「え？赤いウオズって何ソレ…怖い」

「知らないのか？ジオウのファイナルステージに出るんだが…」

「ファイナルステージに赤ウオズが出るのか知らなかったよ…俺はオーマジオウ爺ちゃんからはジオウシリーズ見せて貰えないの」

「オーマジオウ爺ちゃん？……まさかお前知り合いなのか！」

「おうとも！一回半殺しにされたけどな今はお茶飲みながら仮面ライダー見る仲間だぜ
！」

「スゲェ!!」

「因みに俺の国には門矢士さんが暮らしている」

「おおおおお!!」

「そして最近ダグバと殴り合って友達になった！」

「嘘だろ!?!あの究極の闇相手にか!?!」

「実際の映像は此方」

『殴り合いじゃあああああ!!!』

「マジかよ!!!あのクウガのラスボスと殴り合ってる!!」

「更に俺の師匠は鎧武だったりする!」

「何い!!」

とテンション上がるハジメを見て皆が理解した

ーああ、この人もハルトと同じかー と

しかしそんな中、赤ウオズの情報に

「赤ウオズ…恐らく衣服が敵の返り血に濡れたウオズなのだろうな」

「それってウオズちゃんがヤクヅキ先輩みたいなバーサーカーになってる……っつて事
?」

「返り血舐めて恍惚にしてる先輩とか最悪ですね」

「ソレはどちらが最低なのかのヤクヅキ？」

とコソコソ話す旧四天王だがハルトはライダー好きということを痛く気に入り

「よし！ハジメくんの好きなライダーマシンを譲っちゃる!!」

「良いのか!!!もしかしてネクストライドロンとかあつたりするか?」

「イエース!!オーディエンスが送ってくれたものだよ!」

「オーディエンス?」

「俺の旅の支援者みたいな人達だよ、時折こうやって支援物資を送ってくれるんだ」

と意気揚々とガレージにハジメを連れて行こうとするが

「その前にシアさんの家族を助けましょうか？」

この中で辛うじてまともなベアトリスの言葉でハルトは正気に戻ったのである

そしてハルトは手勢を隠してベアトリスとアンティリーネを連れていく、ハジメもユエと共に移動する

そこには鎧を着た兵士が何人か

「おい貴様ら…冒険者か？」

「そうだな師匠に言われてこの渓谷に放り込まれてな…漸く指定期限過ぎて帰る途中なんだよ」

ハジメの嘘を間に受けて可哀想な顔をする兵士達だが彼等の狙いはシア達兎人族を

捕まえる事なので

「おい、お前溪谷で兎人族を見たか？」

「いいや？見たか？」

「いや見てませんよ？」

「ちっ、魔物の餌になるくらいなら捕まれば良いのにな」

この兵士達を見ると逢魔のクローントルーパー達はいかに兵士としてのモラルを兼ね備えているのか良くわかるな…チンピラや野盗の類いにしか見えないな、今日のご飯は奮発してやろうと考えていたら…

「ところでお前等の後ろにいるのは連れか？」

どうやら連れてきているベアトリス達に気づいたようだな

「丁度良い、その女達は帝国が引き取るから置いていけ」

「お前、随分良い剣を持つてるな…それもー」

兵士達は愚かにも自らの手で生存する道を閉ざしてしまった、男が無銘剣に触る前にハルトは念動力を使用

「あ……………がつ……………かぁー！」

兵士は首を両手に抑えながら跳きながら宙を浮き始める、その異常現象に困惑する兵士達の前でハルトは悪い笑顔（草加スマイル）を浮かべると手を握りしめるジェスチャーをすると

「ぐぎやああああああ!!」

兵士は雑巾絞りされたような体を歪曲させられ…振じ切られた…その血飛沫を上げ

ると兵士は怯えながらも武器を構える

「テメエ等正気か!?俺達に逆らってタダで済むと思ってるのか!!」

「ええ?帝国の名を語る野盗を討伐するだけだよ?」

「テメエ!泣きながら許しを乞いてもころー

ドガン!と言う音と共に兵士の一人の頭が柘榴のように砕け散る
それはハジメの拳銃ドンナーの一撃であつたのは言うまでもない

「凄い一撃だね」

「だろ?まあ人間相手には苛烈だがな」

「んじや俺も負けてられないな…よし!」

ハルトは以前　又集団のグロンギから貰ったアクセサリーを千切るとモーフィングパワーでクロスボウに似た武器へと変える（ガドル閣下がタイタンフォームに使った奴）と逃げようとする兵士に狙いを定めて引き金を引く、圧縮された空気弾は逃げる兵士の頭を　パン！と爆ぜさせて残った体はまだ逃げようと暫く走ったが首を切られた鶏のように少ししたらパタリと倒れてしまったのである

「うーむ空気弾でこの威力か…相変わらず射撃下手だねえ俺　この距離でヒヤヒヤするとか」

「うわあああああ！化け物めえ!!」

「あ、今頃気づいた？俺化け物なんだよ？」

今度は空気弾にある種族の力を込めて引き金を引く　兵士は無傷であった

「何だよ驚かせやがって…どうやら魔力がー」

同時に心臓が燃やされると体がすごい勢いで灰になったのである

「おお、やつぱ俺も死徒再生出来るんだくんじゃ後は〜」

ハルトは笑顔のまま残った兵士達を見てニコリと笑顔を浮かべると 彼等の肩に巨大な牙が突き刺さる それと同時に彼等のライフエナジーが吸い取られていき

「うわあ…まず…まあ雑魚ならこんなもんか」

と指を鳴らすと同時に吸われた兵士達はステンドグラスのように砕け散った

「うへえ…」

「おい、逃げた奴がいるぞ」

「ああ大丈夫大丈夫」

「ぎゃあああああ!!」

トルーパーがブラスターライフルを浴びて気絶させた

「クリア！」

「鎮圧しました陛下！」

「グツジヨブだハウンド、さて…話を聞こうか」

ハルトは笑顔で涙を流し失禁する兵士を見る

「ひいいいいい！」

「さてと話聞いてくれる？」

「は、話すから殺さないでくれえええええ！」

「考えても良いよ…じゃあ最初の質問、多分兎人族を捕まえたと思うけど、どこにいる

？」

「て、帝国にいると思う……」

「移送済みか…かなりの数いた筈だが？」

「そ、それは人数を絞ったから……」

それはつまり老人や病人、怪我人は既に…ほお

「待て！他にも何でも話すから！帝国のとか色々！だから殺さないでくれえ!!」

「じゃあコレでと」

ハルトはメモリーメモリを額に突き刺し記憶を抜き取ると

「情報はコレでよし、んじゃ俺は考えた結果は」

そして指を鳴らすと反射する仲間の血溜まりから現れたベノスネーカーに頭を齧られ鏡の世界へと連行されていったのである

「こうだよ……？悪いね邪魔して」

「いやお陰で楽できたよ……凄いな本当にライダー怪人の力を使えるのか」

「まあね」

と笑いながらハルトはメモリーメモリから情報を抜き取るとメモリを起動して中身を見る

「本当に移送されてるね……どうするハジメくん？」

「俺が知るか」

「だよね、取り敢えず当面の安全は確保したで良いか」

そして戻る時にベアトリスがハルトに困った顔をして話す

「何だよ」

「何ですか！あの乱暴な戦い方は!!」

「敵に恐怖を植え付けるのには必要だろ？」

「だとしても過剰に痛めつけ過ぎです！あの戦い方は命のやり取りや殺しを楽しんでる人の戦い方ですよ！」

『確かにグロンギぼいな』

「……………」

相棒にまで言われて自省するしかなかった

「搾取する側になったからって、相手にやられた事と同じ事を仕返したら嫌いな奴と同じになってしまいますよ!!」

本当…ベアトリスが正しいのだろうけど

「知ってるよね？俺は俺の特別に手を出す奴は誰だろうと許さない……奪う奴は皆消さないと奪われるんだよ!!」

過去の経験や最近の経験から来る過剰防衛癖であるハルトのそれを見たベアトリスは

「それは……いやその前に私達は弱いですか？」

「そうとは言ってね……ええ！」

突然ハルトは押し倒されると首に聖剣を突き立てられたのである

「べ、ベアトリスさん!？」

「取り敢えず私とお話ししましょうか? こう見えて私はファルシオンの貴方より強いですよ弱いと思われるのは心外です私だって千冬さん並みには強いと思ってますから」

「……………へい」

「では無闇やたらに虐殺するのは辞めてくださいね」

「敵に慈悲なんているかよ「ハルトさん?」わーったよ分かりましたよ! 可能な限り善処します」

「よろしく」

「「「おお……………」」」

この日 ベアトリス・キルヒアイゼンはハルトのストッパーとして覚醒したのであつ

た

そしてピースメーカーに帰り顛末を伝えるとハウンドが事前に保護したハウリア族と合流、どうやらハジメは彼等に迷宮までの案内をさせようとしているようだが、その為にはフェアベルゲンという亜人の国へと行かなければならないとダメらしい

「となるとピースメーカーでは入れませんな」

「んじゃハウンド達はここで待機、俺達でフェアベルゲンに行こう」

「ど、どうされたんですか陛下!?!いつもなら森を焼き払って着陸地点を作れと命じるのに!!」

「いやベアトリスからその辺辞めろと諭されて」

おお!と騒めくトルーパー達を知り目に

「では私も行きますね」

「わーっ たよベアトリス、付いてきて」

「はい！」

するとハウンド達が

「ベアトリス様!!」

「な、なんです?」

「是非陛下の手綱を握ったまままでお願いします!」

「「「お願いします!!」」」

「はい!このベアトリス・キルヒアイゼンにお任せくださいな!」

「あれ？俺そんなに信用ない？」

「今更ですよ我が魔王」

「本当さ一応だけど俺、王様ぞ?!」

そして森の長老との階段、何か迷宮云々の事で揉めているようで人間如きに神聖な森を渡らせるなみたいなき空気感だ……ふむ俺の出番かな？

『武力を背景に脅すのはお前の得意分野だしな』

『見せろ！久しぶりの棍棒外交!!』

ーんじゃ、やりますか！ー

行くぜ！と気張るが何故かハジメがハウリア族の面倒を見る事と案内役にする事で手打ちとなったのだ……何故かその前にハジメが締め上げた熊人族代表が此方を睨んでいたので、ふむ

【俺と戯れ合うか？】

と、何処かのグルメ四天王レベルの圧と細胞の悪魔的な奴が現れ威圧し返したのだが何故か周りからドン引きされた…わからん、あの程度の威圧なんて八王の前ではただの子猫の威嚇レベルだというのに

『強さの基準がバグってるぞ相棒!』

ー嘘だろ！アンティリーネなら心地よい殺気ね！とか言つて武器向けてくる位の圧しか出してないよ!?!ー

「ハルトさんは自重してください」

「何でさ!?!」

何故こうなるのか分からない…

んで、ハジメはハウリア族に自衛などの戦闘訓練　これは専門家でもあるハウンドにも依頼した

「その辺は教導がメインのランコア大隊の管轄ですがね」

「取り敢えず頼んだ、流石にその辺はハジメくんを助けてやって欲しい」

「イエツサー、宜しく」

「ああ俺も本職がいてくれて助かるよ」

そしてシアはハジメとの旅同行をかけてユエと勝負をしているらしい
んで俺は手持ち無沙汰なので料理が終わるとやる事がないので

「うーむ…平和だあ」

膝の上でアンティリーネが猫のようにしているので頭を撫でているがな！

「あら嬉しいわね…私も旦那様といれて嬉しいわ」

「俺もだよ」

と笑いながら頭を撫でてると呪腕さんがシユツと現れた カッコ良いな

「どうしたのアサシン？」

「はっ！ここから数キロ先の地点にエルフを数名確認…怪我をしている模様です」

「ふーん…斥候…いや帝国に追われてるとかかな？なら放置は出来ないな」

ハジメくんとハウリア族の隠れ家も近い、帝国の追跡ならば撃退、何し殲滅せねばならないな

「んじゃ俺達で行くか、ジャンヌいる？」

「勿論、久しぶりに暴れられるのね」

「森に火はつけるなよベアトリスに怒られる」

「あんた見事に尻に敷かれてるわね」

「余計なお世話だ!!アンティリーネはハウンドの所に行って事情のせ「ついて行くわよ?」だよな……なら」

ディスクアニマル アカネタカを使いハルトの音声を録音させてハウンドの元へ飛ばした:一応ディスクアニマルの再生レコーダーもあるので情報の再生は可能であろう

「んじや行くかうか」

バイクは使えないので走っての移動となる……ので

「ごめんねアサシン!」

「何、魔術師殿をおぶりながらの移動など造作もありません」

ハサンにおぶられて移動するとどうやら目的地についたようなので全員が物陰から見張る

「よしバイオグリーザ」

ハルトは最早マブダチレベルのミラーモンスター バイオグリーザの光学迷彩を使い、こっそり移動する

「エルフだな本当に」

強化された視力で見ると金髪、黒髪、銀髪のエルフだな美女という感じかよく似合う

「ええ…しかし怪我をしているようですね」

「周囲に帝国兵やフェアベルゲンの連中は？」

友釣りの可能性もあるので警戒すると

「影も形もないですな、あつても野生動物や魔物の類になりますぞ」

「なら…はぐれか？」

「訳有りなら見捨てるべきよ、そんなのにかまつてる程私達も暇じゃ」「行つてきまーす」
ちよっ！待ちなさいよ!!」

ジャンヌの静止を振り切りハルトはフラリと近づくと

「誰だ！」

そりやまあ警戒されるよなあゝ

「大丈夫、敵じゃないよゝまあ味方でもないけど」

「人間がこの森に何の用だ？」

「友人の付き添いかな」

「貴様は帝国の手先か…おのれ同胞には手出しはさせんぞ!!」

何か金髪片目隠れの美女から槍を突きつけられているんだが…ん？

「止せ…もう私達は長くないからな……」

「……………」

「人間、今すぐ逃げた方が良い私達は未知の病気に感染して里を追い出されたのだ…貴様にも感染の恐れがある…早く逃げるといい」

「まさか死体を抱くなんて性癖だったりするのかい？」

黒髪でトライバルな刺青を入れているエルフにそう言われたが不満な顔で答える

「そんな悪趣味な性癖ねえよ……んで一つ聞きたいんだけど」

「何だ？」

「もし俺がお前達を治せるって言ったらどうする？」

「っ!!それは本当か!!」

「そりゃねえ」

これは病気じゃない魔力回路に処理できない魔力が流れて肉体が変異しているのだ
…ようは血管が千切れて流れた血が体をおかしくしている

ならどうすべきか？壊れた回路を直せば良い

「なら頼む！私のことはどうなってもいい！後ろの2人を助けてやってくれないか!!」

「おい！そんなの無しだ！頼む私以外の2人を！」

「辞めろ！犠牲になるなら私だ最後に騎士らしいことをさせてくれ」

「そんな訳に行くか！お前達を見捨てるなど」「あのさ盛り上がってる所悪いけど全員助けるよ？」 なっ！！」

「俺の憧れのヒーローが言っていた…患者を助けるのがドクターのあるべき姿とな」

天道のポーズを決めながらエグゼイドのモットーを告げる

「それに見捨てるなんて気分の悪い事はしないよ…俺の手に届く範囲で助けてって言ったんだ必ず助ける…じゃないと憧れのヒーローに怒られちゃうからさ…なあエグゼイド？行くぞで」

『了解だ！』

『マキシمامマイティ…』

アナザーエグゼイド マキシمامマイティゲーマーレベル99に変身してガシヤツトを装填する

「さあ行くよ、俺が運命を変えてやる!!」

『マキシمامマイティ！クリティカルフィニッシュ!!』

ピンク色の光線が三人に命中すると彼女達の体を蝕んだ魔力暴走は治り始める、魔力回路は修復され魔力の流れも元に戻り始める

「い、これは…」

「大丈夫？何か変な所はない？」

「どんな魔法なんだ…」

「体が…」

「あ、まだ怪我してるな…よし！これ使って」

とハルトはテンペスト名産 完全回復薬を使い彼女たちの外傷も治療したのだが、
2
人の閉じられていた目が完全に回復したのである

「これは…まさかエリクサー？」

「そんな伝説級の薬をこんなあつさり…」

「あんた、一体…何者」

よし聞かれたなら答えよう

「俺の名は常葉ハルト、最近異世界からやってきた魔王だ!!」

『2枚目気取りの3枚目!』という文字Tを見せながら堂々と名乗る、流石に日本語は読めないようだ……ふむ

「ウケなかったのは初めてだ」

「魔術師殿、この世界では言語が違うので分からないかと」

「そうだな…ナイスツツコミだ!アサシン!!」

「っ!!」

「敵じゃないわよ、そこのバカの連れだから」

「異世界の魔王……」

「こんなのが魔王なら私達の世界終わってるわよ」

「だが命を救われたな、どうお礼を(グー)……」

腹の鳴る音を聞いたならば

「その音を聞いたなら仕方ないな」

『コネクト』

ハルトはコネクトを使い取り出したのはアウトドアの調理セットである

「待ってろ直ぐに出来るから」

ホットサンドメーカーにパンとピリオドバードの照り焼き、チーズを挟んでメーカーをパタンと閉じる

「そして…よしアマゾン!!」

ハルトはアマゾンライダーがアマゾンに変身する時に発せられる高熱でホットサン

ドメーカーを加熱したのである

『何て能力の無駄遣い!!』

『流石相棒！イカれてるぜ!!』

『そこは超自然発火能力だろお!』

だがその辺でやると火力調整出来ないから黒焦げるんだよ…けどアマゾン変身時の熱量ならば

「出来たぜ！照り焼きチキンとチーズのホットサンドだ！」

「「……………」」

全員が目の色を変えて唾を飲む、恐らく何日もまともな食事が出来なかったのだろう…ならば俺のやる事は

「沢山作るから皆で食べな…俺のモットーとして食いてえ奴にはまず食わせる！話はそ

れからだあ!!」

その空腹の苦しみを知る故にそんな人たちは見捨てられないのである

「あ、お茶つと」

再びコネクトでお茶を取り出してコップに入れると

「さあ、ドンドン作るから食べてね!」

と笑顔でホットサンドメーカーを持つハルトであったが三人は泣きながら食事にありつくのであった

しかしまあアレだな

「匂いに釣られて来たか」

現れたのは猪の魔物である…よし

「今日はボタン鍋だな」

俺のスキルで処理すれば食べれると出たので問題ないだろう腕が鳴るな

「アサシン！」

「はっ！」

彼の投げた短剣は的確に猪の額を貫き絶命させると

「流石はアサシンだな、よし……後は血抜きしてと」

ハルトは慣れた手つきでメルク包丁を使い血抜きを済ませると近くの木に猪を逆さ釣りにした

「これでよし……んじやあ続きを作るか……そういやあ焼鳥の缶詰とコーンの缶詰があつたから……炊いた米とビリオンバードの鶏がらスープで炒飯とスープ作るかな」

「「「「「宜しくお願いします!!」」」」」」

匂いを嗅ぎつけたのかトルーパー達が武器を持って現れたのである…お前たち助けにきてくれたのだろうか飯が優先とな…

「腹減った奴が優先だ！お前達には後で作るから待つてろお!!」

「イエッサー!!お前達負傷者の手当をするんだ!」

「んじゃ！作るからドンドン食べてねー!」

と副官の指示でテキパキ働くトルーパー達にも炒飯とスープを振る舞うのであった

余談だがウオズ達はハブられた事を知り不貞腐れていたので別に作ったのは言うまでもない

オマケ短編 今日のご飯は何？

ある日の食堂にて

「なあハルト今日のご飯何？」

ナツキが料理中のハルトに尋ねると上の空なままハルトは答える

「ん？内臓」

その一言で食堂に戦慄が走る！

ま、まさか血の滴る内臓の生食か！おい誰が陛下の機嫌を損ねた！などトルーパー達の困惑が伝わる…

「いやいや！内臓つてモツとかホルモンとかそんな話だよな！」

「ん？そーそーモツ鍋にしようと思ってる」

「そう言えよ！怖いから!!」

周囲からは安堵の声が聞こえるとナツキは質問を続ける

「何のモツ？」

「ナツキは何のモツだと思う？」

ハルトは笑顔でメルク包丁を見せながらナツキに話しかけると

「怖えよ！まさかアレか！晩飯はお前のモツだよつてか!？」

「そんなの作るかよ、アレだよアレ」

と冷めた目でハルトは後ろを指差すと牛豚鳥がドン！と鎮座していたので アレのモツ鍋なのだろうと理解した

「良かった……………色々と」

「最後の晩餐味わってくれよなナツキ」

「最後のはわざとだろオメエ!!」

ライセン迷宮 前編

前回のあらすじ

怪我したエルフを助けたら宴会になった…とき

森の中にて

「我が魔王、何故我らが怒ってるか分かってますか？」

何故かハルトは正座をさせられていたので理由が分からないと首を傾げていると

「独断専行？」

これしか分からないと言うと周りからはため息が聞こえた解せんな

「違いますよ……ハウンド」

「はい…何故食事を作ったなら我らを呼ばないのですか!!」

「え、そつち?!」

「美味しそうな匂いを嗅ぎながら新兵の訓練をしていた我等の気持ちになってもらいたい!!正直任務放棄して行きたかったです!」

そこで職務放棄しないのは我等が幕僚長なんだよなあ…

「ここまで匂いしてたかあ…照り焼きチキンはダ

メだったな…今度はケバブとかにするか?」

『香辛料の匂いでバレるぞ』

「確かに!!」

「いや私達にも作ってください!」

「食べたいなら最初からそう言え!! あ、ハジメくん達も食べるかい!!」

「あ、ああ頼む」

「OK! ちと待つてな」

「暫くお待ち下さい」

「ひ、久しぶりの地球食だあ…」

「これがハジメの世界のご飯…」

と久しぶりな故郷の味に感動するハジメと新しい味に驚くユエの後ろでウオズ達は
照り焼きチキンサンドを食べながらエルフ達に話しかける

「貴女達は何者でしょう? 見た所エルフですが…」

「まあ色々あつて故郷を追われたんだよ死にかけの所をその自称魔王に救われたつて
訳」

「我等の王が自称魔王ですと!？」

「それは聞き捨てならないな！」

「おいオリガ、恩人に向かって何て事を」

「だって自ら料理をする魔王なんて見た事あるかい？」

「そ、それは…」「ないだろうカレン？」

「貴様等あ…いや確かに普通の魔王は料理はしないからその通りだな」

「そうだね魔王ちゃんしか思い至らないよ」

「まあハルト様は普通ではないからな」

「いやそこは否定する所では？」

「実際我らは陛下の料理を楽しみに仕事をしています！」

「それは…いやまあ確かに美味しかったです、その…お抱えの料理人くらいはいるものでは？」

「まあ我が魔王は見ての通り普通ではないのですし」

「魔王ちゃんが作るのが一番美味しいからね」

「なので僕たちは魔王様がいなくなると餓死します」

「そこまで依存してるのですか!？」

実際、記憶喪失時や万由里の事件時に最初に心配したのが食事周りだったので押して知るべしと言う所だろう。一応はハルトも念の為にレシピを残しているのだが：

「まず料理人の技量が追いついてないので」

「あの人、王より料理人目指した方が良いんじゃない？」

「オリガ!?いくら何でもそれは失礼だぞ!!」

そんな中

「みんなー! ケバブ出来たけど食べる？」

「「「是非!!」」」」

「よーし食べたい奴は並べえ! 慌てるなよ全員分あるからな!」

とハルトは笑顔で回転するケバブを切り分けていた

「いやそもそも何故、王自ら料理を？」

「我が魔王の趣味です」

「まあ実際、効果靦面ですからね食事目当てで遠征隊に志願する者までいますから」

「確かに美味しかったが…」

「何で私達に施したのだ？」

「我が魔王だからですよ、あの人は空腹の人は絶対に見捨てません…飢えの苦しみを誰よりも理解していますから」

「何なら一回冗談じゃなく餓死しかけたしね」

「その時に料理を作ってくれた人と食への感謝から今の我が魔王がいると言う訳です」

「あと建国時のメンバーに家事スキルがなかったので現在でも魔王様に任せきりです
！」

「胸張って言う事ではないのでは？」

「お前達はケバブいらねえの？」「」「頂きます!!」「」「んじや並べ」

これで上下関係やら色々が成り立つのだから侮れないものである

そして腹一杯になった所で

「んで、お前達はそもそも何者なんだ？」

「そうだな…今更だが自己紹介だな私はジナイーダ、後ろにいる黒髪はオリガ、金髪はカレン…エルフ達の教官役をしていたものだ」

「学校の先生…じゃないよね」

「ああ軍事的な教官だ、また諜報員としても動いていたから各国の情報にも精通している」

「今一番欲しい人材だな」

ハジメが素直に関心した、ハウンドも頷いた流石この辺りは本職軍人、情報の価値を正しく認知していたのだが

「……………」

オリガは不思議そうな顔でアンティリーネを見ていた

「どうしたのかしら?」

「いや、エルフと交わる人間がいるのだなと思ってな」

「何でかしら？」

「この世界の人間の主観では私達は人の形をした獣だからな私達と子供を作る人間なんて正気の沙汰じゃない犬猫と交わるくらいの悪趣味さ」

「オリガ!!」

「……………」

アンティリーネは、やはり望まれぬ形で生まれた自分なんかと…落ち込む顔をしたそれは

「あのさあ…何で人の嫁泣かそうとしてるの？」

魔王の地雷に他ならない、その背後に現れた圧は先程の長老達の比ではなく周囲にい

た魔物達は本能に従い逃走、普段からハルトの怒りを間近で見ている家臣団達さえも膝をついて礼を示し、ハジメやユエも冷や汗を掻き腰のドンナーとシユラークを抜こうとしたほどである…そこには比喩なき魔王としての圧力があつた。間接的に浴びた者でさえコレなのだ直接向けられた者は

「!!!」

顔面蒼白となり呼吸も荒くなる…何なら過呼吸にすらなりかけていた

「何だ俺の特別を侮辱しただろ？こんなのエボルトやダグバなら笑って流せる程度の圧しか出してないぞ？」

つまり歴代ラスボスに向けて放つレベルの殺意など恐ろしい以外の何者でもない、実際ダグバの殺気などクウガ・ペガサスフォームが遠くから感じ取っただけで変身解除した程に強力なのだから

「も、申し訳(ご)ぎいませ…奥方様とは知らずに無礼な真似を!!」

と頭を下げて謝罪するジナイーダだがハルトはそのまま手を彼女の首に手を伸ばそうとした、その時！

「ちよつと退いてー！ー！」

時空がゆらめくと虚空から現れたのは鷲と馬ののキメラことピボグリフに跨る英霊アストルフオとそのマスターの一夏であった

「い！ぶ！う！！」

ハルトはまるでトラックに跳ね飛ばされたような衝撃に襲われ空中で錐揉み回転しながら地面に落下した

「あ…やっちゃった」

「ハル兄ー！ー！！」

アストルフオはやべつと呟くと一夏は慌ててハルトに駆け寄った

「しっかりしてよハル兄！」

「こ、これが英霊の宝具が…き、効いたぜ…」

ガクつと気絶すると一夏はハル兄!!と森の中に悲鳴が響いたのであった

数時間後 目覚めたハルトはアストルフオと一夏を正座させた

「成る程な一夏がアストルフオの宝具を見たいと言ってアストルフオがピポグリフを使ったと」

「そしたらピポグリフの力で世界の壁を跨いだみたいでハルトにぶつかっちゃった！テへ」

「よしアストルフオの膝に六法全書を3冊載せろ」

「ごめんってば!!!」

「一夏を直ぐに送り返せ」

「何でさ!」

「当たり前だろ!ただでさえ色々混み合ってたんだよ!」

「俺だって四天王だろう!ならハル兄の揉め事に巻き込んでくれよ!!てか出来る奴にしか任せないって言ったよな!なら任せてくれよ!!」

「っ!一夏お前……成長したな……」

義弟の成長に感動していると

『よく言ったぜ一夏!』

一夏の体から二つの光が抜け落ちるとネガタロスとゴーストイマジンが現れたではないか

「俺は悪の組織の大幹部（本物）になってからというものの派手な見せ場がないからな、せめて俺にも見せ場が欲しい所だ」

「俺もだな折角派手に暴れられる場所なのに呼ばないなんて酷いぜ大将」

「おお…ネガタロスにゴーストイマジンだあ…」

「ほお、お前は俺たちの事を知ってるみたいだな」

「あ、ああ…子供の頃に映画館で…」

「ほほお俺達も銀幕デビューしてたのか「ゴーストイマジンは噛ませ犬だったけど」んだとお！」

仕方ないな

「一夏、無理はするなよ」

「無茶はするけどな」

「誰に似たんだよ、それ」

『お前だな』

「変な所ばかり似てきたな…」

やれやれと被りを振るとオリガは一夏に近づくと

「すまない助かったよ」

「え？えーと「オリガだ」オリガさんか…いやあ偶々だよ」

「さんはいららないよ…しかし借りができてしまったな」

「借りなんて良いよ別に気にすんなくて」

「そうもいかないさ…あの恐怖に対抗するなんて凄いなアンタ」

「凄くないさ、けど困ったら俺を呼んでくれ力になるから」

「そ、そうかい…感謝するよ」

何故か頬を赤らめているオリガ…ほほお一夏の奴め、やりおるな

『お前の影響だろうなあ』

そんなアナザーディケイドの言葉に天を仰いだハルトであった

そしてハジメくんの鬼軍曹レベルの訓練にハウンドの戦術訓練、武芸の参考にとロー

ドオブワイズを呼び出して教えた結果

ピフオー

「あはは！あ、ダメですよ足元にお花があるんですから」

足元を気にして戦えない奴や

「ぎ、ぎめんなさい……」

短刀片手に返り血を浴び、骸となった魔物を見ながら、まるで最愛の人を手にかけたように震える奴がいた

流石のハジメもキレたので鬼のような訓練を施した結果

アフター

「へへ、出てこなければやらなかったのにな」

「可哀想な奴め」

「おい、お前達！あそこに鹿の魔物がいたぞお！狩りじやあ!!」

「「「ヒヤツハー!!」」」

それはもう見事な戦闘民族へと変わったのであった

「見事な手並みだな良ければこのまま逢魔で新兵の教官にならないか？」

「いや魅力的な提案だが俺は元の世界に帰るから断らせて貰うよ」

ハウンドがスカウトするほど見事な手並みであり尚且つ ジナイーダもこんな訓練方法が!?!と感動を覚えていたのであった

「は、ハジメ殿…あの訓練方法について詳しく教えてくれないか!!」

そんな一族の変貌にユエの旅同行の試練をクリアしたシアが思わず現実から目を背けたのであった

因みにカレンは槍を使うとの事だったのでハルトに槍術について手解きをしていた

「っー!」

「せやあ!!」

ハルトの手にある槍が弾き飛ばされて地面に刺さると首元に鋒を向けられた

「はあ…またか強えなアンタは」

「まあ私にはこれしかありませんから」

とはにかむカレンにハルトはそんな事ないと思う

「俺は逆に羨ましいけどな…武芸やら魔法やら色々手を出した結果として俺は一つを極める事を諦めた半端者だから極めた先にあるものつてのが分からねえな」

色んな事が出来るから目移りしてしまうと言うとカレンは困った顔で

「私は逆に貴方が羨ましい色々と器用に熟せるのは私には出来ない生き方ですから」

その言葉にハルトは笑う

「ははっ、隣の芝生は青いな」

「ええ…しかし先日は同僚が無礼な事を申し訳ない」

「気にすんな、もう怒っちゃいねえよ…まあ嫁をあ言われて気分は良くなかったがな…なあカレン……オリガの言葉って全部本当なのか？」

「ええ人間からすれば我等亜人は人ではない獣の混ざり者と」

「アホじゃねえの？こんなに綺麗なエルフが獣と人の混ざり者？笑わせるな」

「っ！お戯れを」

彼女の顎をクイっとしてマジマジと碧色の瞳を見るハルトにカレンは頬を赤らめながら突き離す

「本気なんだけどな、俺だって……いつから人間だと思ってたの？」

指を鳴らして怪人としての姿を見せるとカレンは驚いた

「そんな……まさか完璧な擬態を……」

「残念、正解は人間から怪物になったんだよ」

と元の人間の姿に戻り笑う

「だから色んな世界が見えて色んな奴がいる事はわかる……けどな……生まれが違うだけでその相手を迫害して良いなんてそんなのは笑えないジョークなんだよ……」

かつて迫害されたからこそわかる痛み、餓死しかけたからこそ分かる苦しみ、何もしていないのに理不尽な暴力に晒される恐怖だから

「だから俺の手に届く範囲にいるなら助けるよ……まあ時と場合によるけどさ」

「……………貴方みたいな人が王様なら民は幸せなのでしょうね」

「ははは！そうかもな逢魔に入れば衣食住は完備されてるしな！」

「そう言う意味ではないのですが……」

「そーいやあカレン達はこの後どーするの？」

「え？」

「俺達は迷宮の入り口になつてる神木に行くのに邪魔な霧が晴れるまでの滞在だからなハジメくんはハウリア族の訓練でいるだけだし、それが終われば俺たちは迷宮攻略やら何やらする予定だし、お前達を縛りつける気はねえよ後は好きにしな」

「……………」

そんな現実を突きつけられたカレンは途端に絶望に満ちた顔になるのを見て溜息を吐くと

「はあ…………やる事ねえなら来るか？」

「良いのですか？」

安堵というか何か別の感情も混ざったような確認にハルトは答える

「まあ助けたのに放置は気分が悪いからな…だがかなり危険な旅路だぞ？」

「構いません、私は本来あの時に死んでいますから…この命に貴方に」

彼女は槍を横に置いて膝をつく姿を見て

「それが君のやりたい事なら俺は応援するよ」

ハルトはコネクトで剣を取り出すと彼女の肩に添える

「カレン・フォン・ヘルツォーク…其方を逢魔王国初の騎士に叙する」

「っ！その意味…しかと胸に刻ませていただきます、私の忠誠は貴方に…」

「宜しくなカレン」

「はっ!!」

「つしやあ!!新しい仲間も出来たところで飯のじゅん「大変だハルトお!!」何?」

「さつき白スーツとケケラから連絡があつて、オーディエンスが俺達の応援に送つてくれた仲間達が暴れてるんだ!」

「いやごめん何一つ理解できないんだが?」

「とにかく来てくれ!!」

「……………は?」

目の前には何故か大暴れしているメカメカしい恐竜がいた

「あ、あの赤い竜はガブティラじゃないか!しかも獣竜達じゃん!!」

ハルトはかつての映画に現れたブレイブな恐竜を思い出した

「おおお！この世界にはデーボス軍がいるのか！」

ハジメもハジメで感動しているが、取り敢えず

「よっしゃ！ハジメくん！やることは決まったな！」

「ああ」

「俺達のブレイブを見せてやろうぜ!!」

ハルトは槍を、ハジメはドンナーとシユラークを装備して各々挑むのであった

「我が魔王！正気ですか!?!」

「あんな巨体、生身の人間が挑んで良い相手じゃないですよ!!見てください!あのブラキオザウルスみたいな奴とか!!」

「いやいけるよ!」

「ジヨウゲン?」

「何か、あの黒いパラサウロロフスには運命を感じる……俺はあいつと戦う!!」

「しまった中の人ネタか!」

「ジヨウゲン先輩!カムバーク!!」

「では私は雷使うので彼処のプテラノドンを相手しますね!!」

「ベアトリスさんまで!」

「お前達！最終試験だ！あのトカゲをぶちのめせ！！」

「「「ヒヤツハー！！」」」

ハウリア族まで参戦するという樹海の大決戦が幕を開けたのである

結果から言おう

「宜しくなトバスピノ！」

「！！」

ハルトはトバスピノを倒して認めて貰いブーメラン型武装 フルーツバスターを貰った

ハジメはガブテイラからガブリボルバーを

ベアトリスはプテラゴードンとガブリチェンジャーを

ナツキはまさかのプレズオーに認められた

ブラギガス達は認めてくれたが一先ず変身する奴を見定めると言う事だな

あとジヨウゲンがパラサガンに認められたのは運命としか言えない

取り敢えずはハウリア族の護衛をお願いした…いや獣電竜を前に仕掛ける奴がいるのか?とは思うが…そんな事より

「ハジメくん!特撮ファンならアレやるぞ!」

「ん?おおアレかあ!」

「ハジメ、アレって何?」

「決まってるだろユエ…そう!」

「合体だあ!!」

2人はテンションが振り切れたまま獣電池を投擲し力を得た彼等に乗り込むと

「カミツキ合体!!」

そしてトバスピノとガブティラが変形を始めていき両手にはブンパッキーとアンキドン、ステゴツチとドリケラがそれぞれ合体した

『スピノダイオー!!』『キョウリュウジン!!』

「完成!スピノダイオー!!」

「完成!キョウリュウジン!!」

「お、おおおおお!これがロボから見た景色か!」

「まさか巨大ロボに乗る日が来るなんて…」

と感動しているがハルトは知らない この後入る迷宮で

「行くぞ、お供たち……合体だあ!!」

『ドンオニタイジン！いざ出陣!!』

「「何じゃこりゃあ!!」」

「……………」

「い…………い…………いわえ？」

自らが巨大ロボになることを…

因みに余談だが

「な、何だあの青と赤の巨人はあ!!」

遠くから見ていた帝国兵が樹海に巨人を発見したのは言うまでもなかった

そんなこんなで霧が晴れて一堂 森の迷宮目指して歩き始めると

「ボス、どうやらこの先に熊人族の奴らが待ち伏せてるみたいですね」

「ほお」

「ゴール目前で襲うとは良い趣味だな」

「んじや俺達が先行して片付けるか」「お待ちを」へ？」

「ここは俺達に任せてください」

「やれるのか？」

「何のために今まで鍛えてきたのかを見せてやりますよ」

「よし、じゃあ奴らに敗北を教えてやれ!!」

ハジメの号令で散!と動いた兎人族達にシアはあの頃の家族はもういないと遠い目をしたのであつた

「シア様、その気持ちよく分かります」

「え?ウオズさん?」

「私も最初は理性的な王と思っていたのですが…」

「やっぱり森焼き払わない?」

そんな事を言うハルトを見て

「時折見せてくれる知的な我が魔王はどこにいますか……」

と悲しい表情を浮かべた姿にシアはお互い、大変だなと慰めあったのである

熊人族達は突然、森の奥から奇襲を仕掛けてきたハウリア族の奇襲を受けて大混乱していた、その悲鳴が遠くからハジメ達の耳朵をうつ

「なあハウンド、ジナイーダ専門家として聞きたいんだが今のアイツらで熊人族に勝てるか？」

「問題ないでしょう、奇襲で先手を撃ちロードオブワイズの技術や我々の近代的な戦術を使い尚且つ足りなかった戦意を貴方が補いました方に一つもありませんよ」

「ですが初陣なので…やはり気になるところも」

「だよな…よし俺たちも急ぐぞ」

「熊人族を根絶やしにするのか？」

「違う違う、ハウリア族を止めにだよ」

「何でさ優勢なの？」

「アホかナツキ、止めないとダメだろうが」

「ハルトにアホ言われた!? 脳筋に言われるのはムカつくな!!」

「取り敢えずこいつは簀巻きにして放置しよう」

取り敢えずその辺のツタで締め上げてナツキは放置した

「ちよつと待てええー！助けてー！ー！ー！」

「誰かが止めないとやり過ぎるだろ？」

「力に溺れた奴の姿なんて嫌と言うほど見てるからな」

ハジメの頭にはクラスメイトが何人か浮かんでのであつた

そして森の中を進む一堂、余談だがナツキはアサシンに助けられましたとき

んでまあ予想通りとか何とかどうか優越感で増長していたハウリア族をハジメが叱り飛ばして襲いかかってきた熊人族を条件付きで解放し森の迷宮に向かったのだが

「どうやら今は入れないみたいだな」

「ぶーん…」

どうやら複数の迷宮攻略が必要なようである

取り敢えずハウリア族と別れたハジメ達はライセン迷宮を探して移動しているも深谷には迷宮の影も形もない、しかも魔力が霧散する土地のよう身体強化以外の魔法も使えないとききたのだ

『要するに魔法メインのアナザーウィザードが役立たずな場所だ…なああああああ！
あついいいい!!』

『ああ！アナザーWがアナザーウィザードの火炎魔法で火だるまになった!』

『是非もなし!』

『いや助けるよ!!』

とまあそんな馬鹿達のやり取りに呆れながらもハルト達は野営していると

「なあハルト、付いてきてくれないか？」

どうやら何かあるようだな、よし

「おうよ、一夏達は待機しといてくれ…ハウンドには念の為にコレを」

「ハ、これは!!」

ハウンドに渡したアタッシュケースにはこう書かれていた

『SMART BRAIN』

と、慌てて開けて中を見るとそこには青いψを模したガラケーとスマートフォン、そしてドライバーが鎮座していたのである

「ま…まさか!」

「お前なら使いこなせると信じてる…これからも頼むぜハウンド」

「は、はっ!!」

「よーし行くぞお前らあ!!」

「はっ!」

「ちよいちよい!俺達も行くよ!」

「目を離すとハルト様は何するか分からないからな」

「先輩達に同意です」

「妾も参るぞハルト坊!」

「では私も」

とカレンも付いていくとそこには

【ようこそライセン迷宮！】

何処かの遊園地みたいな売り文句が異世界言語で書かれていた

「そーいう悪戯か？」

「公園のトイレにある奴な」

「いやいやまさかそんな訳…」

シアが手を叩いた瞬間　まさかの回転扉となり彼女が迷宮に入るとハルトは目を輝かせて

「うおおおお！すつげえ!!なんだよ今の扉!!大冒険の匂いがするな!!こんなワクワクが

止まらない冒険を待ってたんだよ俺はさ!!異世界最高!!」

「感動しないで貰えますかね!?我等これから危険地帯に行くのですよ!」

「誰か魔王様を止めて!何で少年みたいな目をするのですかね!?」

「行くぞ!全力全開!!」

「おい待てよハルト!いやまあ気持ちにはわかるな…:そうか今の俺の胸から湧き出る物が…:あくなき冒険スピリッツか!!」

「ブレイブに行くぜ!!」

とハルトとナツキとジョウゲンが同じように迷宮に飛び込んだのである

「ああもう!何で先輩も行くかな!?!」

「忘れてるが、彼奴もハルト様の友人だぞ？」

「しかも死に戻りをしてる段階で頭のネジがマトモじゃないですよね」

「何気にジョウゲンさんも行きましたね」

「行きますよお前達、我が魔王に遅れるなどあつてはならない!!」

と全員意を決して入ると 待つてました!とばかりに放たれた矢を全員が防御したりはたき落としているもの

「ガードベント(ナツキ)」

「ちよつと待てええええ!」

友を盾にするものなど色々いた

そこに現れたのは参加者を馬鹿にするようなメッセージと攻略できるならやってみろと煽り散らかす文言 間違いないな

「この迷宮を作った奴の性格は俺並みに捻じ曲がってやがる」

「恐らく我が魔王とウルティマ嬢とダグバを合わせたような性格の悪さでしょうね」

「ウオズ、何か言った？」

「いえ何も」

「んじゃ……始めようぜ！初めての迷宮攻略!!」

行くぞー！と号令を出すとハルト達は迷宮の中を進んで行った

とある場所に

「ふんふーん、初めての挑戦者だねえ〜大人数だけど……ん？あれ？」

その影は現れた映像にあるハルトを見て

「ハル爺に似てるなあ……いやまさか……まあ良いや！ここまで来たら聞けば良いし！！」

と答えたという

ライセン 迷宮後編

さて前回のあらすじ

ライセン迷宮に入ったのであった

「いや仕事しましょうよ！」

「なあ何か凄いワクワクするな！」

「何でそんなにハイテンションなんですか？」

ハルトはワクワクが止まらない子供のよう目をしていると、シアが何か踏んだようだ

「あ……………」

すると聞こえるゴロゴロという唸り声 恐る恐る振り向くとそこには

「おおお！鉄球…お約束だな！この迷宮はわかってるぜ！！」

「何やっっているのですか我が魔王逃げますよ！」

「おう！まさに冒険だなあ！！」

皆で全速力で逃げるとナツキが転けたのである

「っ！たすけてー！！」

「っ！待っている！！」

「陛下！カレン嬢が！」

「ナツキはどーでも良いがなカレンは俺の騎士だ！よし助けるぞ唸れ！俺の剛腕!!」

『スクリュー、マツハ!』

ハルトはアンデットの力を借りてナツキを庇うカレンを守るように転がる鉄球を殴り壊したのである

「ふう……だいじょつ!!逃げろー!!」

その背後から待ってました!とばかりに現れた二発目の鉄球を見てハルトはカレンとナツキを肩に乗せて全速力で走り抜けたのであった

その後も

「うおお!針の壁!?!」

「こっちは迫り来る壁だ!」

「ヌルヌルの液体をかけられた!？」

「ちよっ！何の液体なのさコレ!!」

変な液体をかけられて

そして

「おお見ろナツキ！こんな所に宝箱があるぞ！」

「流星は大迷宮だな色んなものがあるな」

「この手のアイテムは今後の展開に必要な物が入ってることもあるから開けてみよう
!!」

「お待ちを我が魔王！」

「何？」

「畏かも知れません、お気を「えい…うわあ!!!」我が魔王!？」

同時に開けたハルトは突如 ミミックに頭を齧られたのである体が食われかけているハルトは…上半身が埋もれたまま叫ぶ

「……………くらいよー!こわいよー!!」

バタバタ手足を動かしていた

「ええ……………」

「なあアレって本当に魔王なのか？」

「残念ながら…」

「ミミックに騙される魔王を見たのは初めて」

「ですう」

その後 何とか解放されたが

「ふう…俺を欺くとは何て擬態能力だ！ワームやロイミユードを超えるとは!!」

「いや魔王ちゃんがバカなだけじゃ…」

「だが安心しろお前達、今の俺には次開ける宝箱が本物だと俺の経験が言っているぜ！」

ー立ちました!!ー

数分後……

「くらいよー！こわいよー！」

先程のリプレイが行われていたという

とまあ混乱を極めているがハルトは

「何だよ……この楽しいアスレチックパークは!!」

「ミミックに食べられかけた奴が何言ってるんだ!!」

と意に介してなかった、何ならハジメ達は嘘だろコイツ!?と言う目で見ておりナツキに至っては死に戻りで罫を把握しているとは言え中々に答えているのにバカはこれだから……

「いやあ……本当に昔からこんなに体を動かして遊ぶなんて事出来なかったんだよ、基本縮こまって殴られたり蹴られたりされてたし……皆で何処か行く時も俺は何もない家で放置されて掃除ばかりだったからさ」

「主にそんな真似を!?!」

そんな以外と暗い過去にカレンは嘘でしょ！という顔をし慣れているウオズ達はやはりかと頭を抱える始末である

「んで、何で俺たちはスタート地点に戻ってるの？」

「え？」

ハジメが目線を変えると其処には

『ぞーんねん！最初からだよー！あと迷宮は形を変えてるから地図作っても意味ないよー！無駄や努力おつかれー！』

ブチっ!!その時 ハジメ達はキレた

「この迷宮の主は殺す!!」

「異議なし!!」

と全員にやってやろう！と言う意思が見えたのだが

「んじやもつかい行こうか!!」

とハルトは二周目ヤツホー！という笑顔であった……人だけモチベーションがおかしいのである

そして艱難辛苦を超えた先で待っていたものは

「良く来た、挑戦者よ私が！超絶美少女魔法使いのミレディ・ライセンだよ!!よろしくね
！」

現れたのは超巨大な鎧を纏うゴーレム？だった

「よろしく!!お前がこの楽しいアスレチックパークの運営をしてるのは!!」

「+6c」

「楽しかったよありがとうー！」

「おお…あの鬼畜迷宮をアスレチックパーク呼ばわりされるとは…流石のミレデイさんも驚きだよ」

「ミレデイ・ライセン？ いや待て、そいつは遙か昔の人だろう？ もう死んでるんじゃない」

「ふふーん！ 何で私が生きてるか…それは秘密だよ！」

「いやオスカーの日記読んだから」

「へ？ オークんの迷宮攻略したの？ 順番おかしくない？」

「え？」

「ミレデイの話だとオスカーの迷宮は正規の攻略順だと一番最後に攻略するラストダンジョンだという」

「それであんな鬼畜迷宮だった訳か…」

「けどオーくんの迷宮攻略をしたなら私達 解放者の事聞いてるよね?」

「ああ……だが俺はアンタらの頼みなんざ聞かないぞ?俺は俺の為にアンタの神代魔法をもらうだけだ」

「なるほどねえ」

「あ、その辺で俺も聞きたい事があるんだけど」

「何かな?」

「アンタ、あのクソジジイとどんな関係なんだよ」

「クソジジイ?……うーん……ああ!ハル爺の事?」

「クソジジイで我が魔王が連想されるのは複雑ですね」

「妥当だろうがクロツクの件といい錫音の件といいな…アンタ、知り合いなんだろう？」

「え？ いやまあそうだけど…君何者？」

「俺は常葉ハルト、異世界の魔王だ」

するとしばらくの沈黙の後に

「……………へ？ うそおおおおお！ ハル爺って若い頃はこんなクソ生意気な奴なの!? ぶははははは！ うわあ嘘でしょマジウケる!!」

「何かスゲエ失礼だな」

「だってそうだよ!! あのお茶飲んで日向ぼっこしてるような枯れ枝みたいな老人がだよ!? 確かに『俺は異世界の魔王なんじゃぞ!!』とか色々変なボケをした事はあったけど」

……まさか本当に魔王だったの!？」

「自称じゃなくてマジ魔王な……んで解放者とクソジジイの関係を聞いてねえんだよな」

と尋ねるとミレディは昔を懐かしむように答えた

「ハル爺はね……私達と一緒にあのクソ忌々しい邪神を倒す為に戦った仲間なんだよ」

いま明かされる驚愕の事実には驚く一堂だが

「ああだからハルト坊は……」

「成る程」

未来組は何か合点が言ったような顔になるもハルトは驚いていた

「そんなあのクソジジイが……そんな神を倒して世界を救おうなんて正義感に駆られてたのか!」

「いやそつち!？」

「いや待てよ…………あ…」

「ハルト、何を思ったか言ってみろ」

「アギトみたいに神を倒してみたい!と思ったとか」

「……………」

『ほほほ…魔王と呼ばれた儂が英雄アギトのように神を倒すのも一興じゃな長生きしてみらるものじゃよ』

「君、本当にハル爺なんだ」

「あのジジイじゃないけどな」

「似てるよ、私達と旅してた…あの人に」

「感傷に浸ってる所悪いが早く始めないか？」

「そうだね!!じゃあ私を倒してみろー!!」

「よし行くぞ!!」

「おう!!」

「あ、ハル爺の相手は別にいるよ!」

「え?まあ良いさどんな奴でもドーンと来い!!相手になってやる!!」

さあ!かかってこい!と武器を構えてやる気を出すか

現れたのは恐らく この迷宮に置かれているライドウォッチがミレディの魔力で具現化した姿なのだろう だが立体投影された姿でもその身に宿る歴史の重さは変わりなし

「とお………仮面ライダー2号!!」

仮面ライダー2号 現れる

そして更にハジメから預かった1号ウォッチも光を放つと不思議な事が起こった!

その隣に彼と似た戦士がもう1人現れたのである

その身に宿る風格は正に歴戦の強者 この世に悪が蔓延る限り戦い続ける伝説の英雄にして創世のヒーロー 永遠の憧れ

「仮面ライダー1号!!」

「本郷!!」「俺も行くぞ一文字!!」

まさかのダブルライダー現れる!!これには流石に

「もうダメだあ!おしまいだあ!!伝説に勝てる訳がねえよお!!」

視界に入れた刹那にうわあ!とハルトは泣きながら頭を抱えた……飛んだ即落ち二コマである、いやBLACK RXが出て同じことを言うだろう

「我が魔王!?!」「無理もねえ」

ウオズとナツキはやっぱりかあくという顔をし旧四天王はうわあ……という顔をしたが唯一知らないカレンは

「あの……1号、2号と名乗ったあの方はそんなに強い方なのですか?」

「我が魔王の力の源泉となる戦士 仮面ライダーその始祖とも言える存在です」

「そんなつまり…神話に伝わる戦士という訳ですか」

「まあ大袈裟に言えばそうですね」

「なら僕の出番だね、行くよ始祖光来!!」

『1号』

「仮面ライダーの歴史を歪めた失敗作め！我が相手だあ!!」

「何!」「お前は!!」

アナザー1号vsダブルライダー そんな展開もありなのだろうか……

「待てファイニス!!」

「魔王様?」

「おおおおお俺が戦う！お前らは引っ込んでろ!!」

「ハルト正気かよ！お前が仮面ライダー相手に戦うなんて!!しかも伝説のダブルライダーだぞで?！」

「そうだよ！魔王ちゃんの下がってさ俺達になんてなよ！」

「ハルト様には荷が重い！」

「それならお前達に任せる方が荷が重いわ！お前達ではあの人には勝てない！俺が挑む方がまだマシだ」

ハルトの手はガクガクと震えていた

「手が震えてますよ」

「怖いんだな」

「最初に言っておく……今凄く怖くて逃げ出したい!!」

涙目で答えるハルトに周りには納得した

「だろうな」

「だけど皆がいなくなる方がもっと怖いから……もうあんな目に遭いたくないから……」

もうクロツクの時のような不覚を取りたくない弱いままで自分の拘りの為に仲間を危険に晒したくない……何より

「だから俺が戦う!!!敵わないからこそ挑んだ!憧れだから超えたいって思うんだ!!!」

この身に宿るのが霸道か王道かなんて分からない、前にもオーマジオウと戦った時に感じた感情と同じだ

譲れないものがある それを守る為ならどんな奴が相手でも戦うんだ……必要なのは

戦うって覚悟だけ

「俺は仮面ライダーと最後まで戦い抜いたカッコいい怪人達の王様なんだ：そんな王様が仮面ライダー相手にビビってたら、俺を信じてついてきてくれた奴等に顔向け出来ねえだろうがあ!!」

一度決めたらこの魔王は梃子でも動かない、止められる者などいないのである！

「敵ながらその心意気は良し！」

「怪人ながらも良き覇気だ！」

「ふざけんなミレディ！俺にこんなことさせやがって!!後で悲鳴をあげさせてやるぞお！」

「ならば私もお供しましょう」

「ウオズ…」

「言つたでしょ？俺達は魔王ちゃんの臣下だよ？」

「我等の王はあなた一人！王を一人で戦わせはしない！」

「我からすれば因縁ある相手よ…それに我の特攻があれば魔王様も優位に立てるぞ」

「それとじゃ、こんな楽しそうな祭りを独り占めとは人が悪いぞハルト坊！」

「ははは！ハルト様が怯える程の強者、ならば暗殺者たる私の腕の見せ所ですな」

「はあもう、本当なんで変な所でカツコつけるんだか…けど嫌いじゃないわよそういうの」

戦意十分な幹部達を見てハルトは少し涙ぐむ實際　ハルトの為にと動いてくれた人など過去数えるほどしかないなかつた…なのに今では沢山の人が自分を助けてくれてい

る…

「お前達……」

「しようがないな、まあ鉄球から助けてくれた借りは返さないとな」

ナツキもノリノリで名乗り出るが

「その他……」

コイツは別である外様が何言ってるんだ？

「いや名前で呼べよ!!」

実を言えば、ハルトは普段はヘタレだの何だの言われるものの一度決めたら何が何でも周りを巻き込んでやり通そうとする強さ

そして一度思考が切り替わると止まらない、その勢いや行動はあのオーマジオウ相手に啖呵を切って戦うほどのものである

「ふふ……はーはつはつ!!後ろにお前達がいるならば何も恐れる事などない!俺は世界のあらゆる不条理全てを変える王になってやる!!」

本人の前なら絶対に切らない啖呵を切るのは立体映像故かハルトの覚悟か?

否 ハルトは越えなければならぬのだ憧れをそれに怪人がライダーには勝てない? 否! そんな絶対などない!!

「聞けええ仮面ライダー!!俺は貴様等の歴史より生まれし影にして破れ去った怪人の思いを汲み取り怪人達に勝利を齎す者!!」

羽織っているジャケットを脱ぐと

『一切の退路を断つ、悲しみを支配する王者！』

と長い台詞が入った文字Tを見せた

「怪人王！名を常葉ハルト!!今からお前達を倒す者の名だあ!!」

『グランドジオウ』

久しぶりにハルトを囲むようにアナザーライダー 達の銅像が現れると

「変身!!」

『祝え！アナザーライダー!!グランドジオウ!!』

アナザーグランドジオウに変身しアナザーツインギレードを呼び出して構えると

「行くぞ伝説ううう!!」

両者は同時に走り出したのである

――

余談だが この時の映像が何故か外部に流れており

「ほほお仮面ライダー相手にあそこまで啖呵を切るとは中々見所のある奴じゃな」

「よしゾル大佐と接触を図れ、穩便にな」

「はっ!!」

そう驚のレリーフが輝いていたという

――

「我等も行きますよ!」

『p e r m i s s i o n t i m e センチュリー』

ウオズはリバイスIFの世界において獲得した新たな力　アナザーセンチュリーに変身すると時流操作で高速移動して攪乱すると

「おう!」

『ラウンズオブキャメロット!』

ナツキはお馴染みのアナザーブレイズ・ラウンズオブキャメロットに変身　聖剣を構える

2人も変身するとそのまま伝説へ突貫した

「ふっ!たあ!!」

「のやろお!!」

アナザーグランドジオウは未来予知を使い行動を予測するも2人いる故に高度な連携で一部見えない事もある

流石の連携だ彼の未来予知すら超えるとは伊達に半世紀以上も人類の自由と平和を守ってきていない掛け値なしの英雄である

「くっ…やっぱ強えな基礎スペックと経験値が違いすぎるな!!」

「なら特殊能力で!」

『アロンダイト』

ランスロットの聖剣 アロンダイトを呼び出すとアナザーブレイズは2号に目掛けて振り下ろすが真剣白刃取りで受け止められてしまう

「んな!」

「何でビーム撃てる聖剣を選ばないんだよ!」

「こんな迷宮でカリバーしたら崩落しちゃうでしょ!!」

「それもそうか!……ん? 待てよアロンドナイトなら……」

「お前の考え当てようか? ザンバットソードよろしく魔力流して一刀両断だろ」

「よく分かったな」

「お前は、わかりやすいんだよ!!」

「ならコレは分かったかな?」

「何?……ぐっ!」

「本郷!!」

よく見ると1号の太腿に黒い短剣が…まさかハサンが一撃入れていたのか

「いつの間に!」

「決めるぞ!」

「何か以外だな、こういう時は正々堂々!が売りなのに」

「俺の小さなプライドを捨てて仲間が救えるなら捨ててやるわあ!!」

『アナザーオールトウエンティ!!タイムブレイク!!』

「行くぞ!」「ああ!」

2人は高く飛び上がり飛び蹴りの構えを取る、これが元祖

「ダブルライダー キック!!」

「くっ………だが俺達は負けないんだ!!」

「達?……まさか!!」

三人のライダーキックが中間地点で激突!そのエネルギーはナツキ達が目を覆うほど粉塵を巻き上げた。1号、2号も意識が完全にハルトに向かった時、影がゆらりと蠢いた。

「申し訳ないな戦士達よ」

同時に今まで拘束されていた片腕を解放。その身に封じられていた、シャイターンの腕が伸び、2号の体に触れたのである。

「しまった!」

これは暗殺の伝承がそのまま形となった暗殺教団の長、山の翁、ハサン・サツバーハ

呪腕の二つ名はそこから来た 触れれば即死の腕の名は

「苦悶を溢せ…妄想心音（ザバーニーヤ）!!」

現れた仮想心臓を握り潰すと2号はガクリと項垂れ力なくそのまま地面に落下する
ドサつと軽い音が響くと

「一文字!!おのれええ!」

「生憎こっちは卑怯上等の怪人でな…ライダー相手勝つなら俺のプライドなんか捨ててやるぜえ!!いまだ……ありつたけの力で!!ぶち抜けー!ー!」

「グアアアアアア!」

足に怪我をしているとは言え 仮面ライダー1号のライダーキックを押し切り倒して貫通、1号は爆散し残ったのは1号と2号のライドウォッチだけであった

「はあ………みたか………これが俺の……戦い方だ……よ………」

宝具使用による魔力消費かメンタル的な疲れがドツと出たのかそのままハルトは変身解除して倒れたのであった

―――

その頃とある場所では

「何だと！立体映像とは言え仮面ライダーを倒しただと!!」

「これは……何という力だ魔王恐るべし……ゾル大佐!」

「かしこまりました！何が何でも傘下に「いや同盟にせよ」はっ!!」

「彼等の力侮りがたし、彼奴らの力が我らに向かわぬように注意すれば良い」

「はっ!!」

—————

そして

「……………ん?」

はて俺は何してた? そういやあ1号と2号と…あれ? んじやこの柔らかいものは…
まさか

「ジャンヌ?」

「ええそうよ、この聖女の膝枕を感謝なさい」

ジャンヌオルタに膝枕されている件について、恐らく今頃ジルドレは泣き崩れている

かも知れない……が役得なので味わっておこう、つか力が入らない恐らく魔力も体力も搾り出したな……かなりギリギリの戦いだっただ立体映像とは言え初見殺しの不意打ちや能力有りでも此方がギリギリって恐ろしき原点にして頂点

「うん……それでどうなった」

「終わりよ、ハジメ達もミレデイを倒したわよ……あのキョウリユウジンでね」

「はい？」

よく見るとハジメ、ユエ、シアの三人がキョウリユウジンに乗り込みミレデイ（ゴレム）を足元に倒して勝ち誇っているではないか

「おおハルト、起きたか」

「ああ……まさかいきなりキョウリユウジンとは驚いたな」

「ガブティラ達が俺達に任せろ！ ってばかりに出てきてな、んでノリと勢いで合体した」
「ま、まさかの巨大戦力にミレデイさんはボロボロだよお〜」

「俺もそつちが良かったかもスピノダイオー出したかった」

「嘘でしょ！ ハル爺とトバスピノってこの頃からの付き合いなの!？」

「は？ いや今さつき会ったばかりだが？」

「ん〜？ ああそういうこと……か……ああもう時間かあ……」

同時にミレデイの体から粒子が抜け出始めているどうやら魔力が持たないようだ

「んじゃ……これで」

『プリーズ』

ミレデイに魔力を渡すプリーズを使い延命させる

「ええ！感動の別れの場面なのに！！……ありがとね！！」

「気にすんなクソジジイが迷惑かけた詫びだ」

「あはは…そう…あ、そういえば君に渡すものがあるとか言つてたなあ、この奥の部屋にあるから持つて行きなよ」

「そうさせて貰う」

何だろう？と首を傾げているとハジメはハジメでミレデイに質問していた残りの迷宮は何処だと

ミレデイは途切れ途切れな声でちゃんと迷宮の場所を教えてくれた。そして最後は力尽きゴーレムは動きを止めた

各々が哀悼の意を表した、最後の解放者ミレデイ・ライセンここにねむ「る訳ないよね！」

その声に目線を向けるとそこにはゆるキャラな人形のゴーレム…ふむ

「残念でしたー！バックアップくらい残しておくよー！どう？このミレディさんの頭脳！！凄いでしょ！最高でしょ！天才でしょー！ねえねえこんな可愛くなつた私殴れる？殴れないよねー！ぶぶぶぶ！！」

ドヤア！としている所悪いがそれはハジメ達にとって地雷でしかなかった、囲まれてボコボコにされた後、全員部屋の奥に案内させた

「んじゃ私の魔法 重力魔法を渡すね！」

「おおー！」

と全員感動していたが

「あ、ハル爺達は魔法適性皆無だから使えないよ」

「えええええ俺も使いたい!!な!ハルト!」

「いや俺はグラビティのリングあるから」

「そうだった!!」

「私もファイナリーで重力を操れますからね」

と話している中、ハルトの視線は明らかに剣と魔法のファンタジー世界にそぐわない近未来なワールドスリープ装置があつた

「明らかに俺の要件つてコレだろ」

取り敢えず触つてみると、プシュー!と大きな音と共に中から現れたのはハルト達が以前邂逅した懐かしき存在である

「んー！いやぁライセンス迷宮攻略おめでとう！久しぶりだねマスター、いやちゃんとした形で会うのは初めましてかな？」

「久しぶりだなマーリン、やっと会えたよ」

グランドキャスターの魔法使いにして嘗てデートアライブの世界でハルトを助けてくれた自称嫁のマーリン（プロト）である

「自称嫁じゃないよ！この頼れるマーリンお姉さんを前に何か一言ないかい？」

「んじゃ再会祝して」

『フオウ撃』

「え？ちよつ！ま「マーリンシスベシフオーウ!!」あだあ！この巨獣!!一度ならず二度までもお!!」

やはりこの魔法はマーリン特攻のようだ、螺旋回転するフォウの一撃はよくダメージが入る…額に肉球の跡をつけた1人と1匹が醜い争いをしているのを生暖かく見守っている

「なあ…マーリンってアーサー王物語の？」

「ああ何故か俺の嫁を自称する不審な妖精だ」

「あのマーリンに？……可哀想に……」

「何で？」

本当に何故会う人皆そう言うのだろうか？と首を傾げるがまあ良いかと切り替え

「んでマーリン、何でお前はここにいるんだ？」

「それは未来のマスターから頼まれたんだよ、ここに来る君を助けてくれとさ…それま

で暇だから精神だけあちこちに飛ばしてたらこの間の世界で会った訳」

「ふーん、あのクソジジイの置き土産？」

「そうとも言うね、それに私としても枯れ枝のようなマスターより瑞々しい若いマ「王の財宝レベルでフォウ撃の魔法を使うよ？」ごめんって謝るから許して!!」

「ったく」

「しかしあの魔法さ…連発出来るの？」

「頑張つて全方向からの飽和攻撃までいけるようになった」

「そんな品性のカケラもない魔法使わないでよ！」

そんなやりとりをしているとハジメは何を思ったかミレディを逆さにして上下に振り彼女から大量の鉱石や貴重なアーティファクトを巻き上げていた流星の彼女も

「セクハラー!!」

と叫んでいたが

「もー！ハジメさん言ってくれば私のスカート捲りますのに!!」

「馬鹿野郎！お前のスカートからはアーティファクトや鉱物は出ないだろ！」

ハジメの一言にミレデイも思わず

「アンタ最低か」

「ん？このライドブックは……」

『江戸の盈月』そう書かれたライドブックが落ちていた、恐らくミレデイが持ってたものなのだろうが

「これには英霊の力を感じますな」

「あ、アサシンもそう思う？」

「けど江戸？日本のサーヴァントが出るのかしら？」

「日本かあ……」

頭に過ぎるのはご主人様大好きなタマモナインや鬼絶対殺す！な平安武者達、首置いてけ！なみの過激な源氏、ぜひもないよね！のノツブに新撰組！な人達と……うん型月世界の日本は魔境だぜえ！！

「うーむ……取り敢えずもつとこ、しかしどうやって俺達迷宮から出るんだろ？」

いやまあそりやなあ……と遠い目をしていると

「あの主」

「どつたのカレン？」

「あれ……」

「あ？」

ハルトは視線を変えるとそこには何かレバーを引いているミレディ……その目の前にはとんでもない濁流……水攻め!?

「エビルダイバー！アビソドー」

泳げる海洋系モンスターを呼ぶ時すでに遅し 濁流をハルト達が飲み込んで迷宮の外へ押し出されたのであつた

そして湖に出されると全員が咳き込みながら怒りを発する

「あの迷宮の主、本当に性格悪いな!!」

「この恨み晴らさでおくべきか!!」

「あれ？ハルトは？」

「あ、あそこを……」

カレンが指差す先にはプカプカ浮いているハルトの姿が

「我が魔王!!」

「ああ！そうだった魔王ちゃん泳げないんだ!!」

「キャロル嬢と喧嘩した時（GX編）で判明した死に設定を今使うのか！」

「カゲン先輩、メタいです!!」

「助けるぞお主達!!」

そしてハルトを助けるも水を大量に飲んだのか顔が青くて気絶していた

「これは…」

「人工呼吸だね」

「うむ、よし奥方様を呼ぼう!!」

「お呼びとあれば即座に」

「ベルファスト嬢!?!何故ここに!」

「大きな水柱を見ましたので、一足先に来ましたらまさか…こんな役得…:…いえ人命救助ですわね」

自分の欲望を隠しきれない彼女であったが

「ちよつと待ちなさい!」

待ったをかけたのはジャンヌ・オルタであった

「抜け駆けは許さないわよ」

「でしたら、ジャンヌ様からどうぞ」

「ん？ 妙に聞き分けが良いわね…いいわ見てなさい!!」

ジャンヌオルタがハルトの顔を間近で見たと同時に赤面したまま硬直した

「……………そ、そうよマスターは寝てるじゃない今更よこんなの……………そ、そうよね!!」

誰に向かってるか分からない独白にそこはかとなない既知感を感じているがベルファ
ストは

「はあ……………変わりなさい私がやります」

そう言うとはベルファストはジャンヌからハルトを取るとそのまま人工呼吸を始めた

「ああ!!」

「ごほごほ……ん?……俺確か……あれ?ベルファスト?」

「はい旦那様、おはようございます」

「何でここに?てか何が?」

「溺れてたので人工呼吸を少々」

「ふえ!!」

「では起きたのでお祝いの」

「んぐっ!!」

「ああ!!」

ベルファストはそのままハルトにキスをする、しかも

「んちゅ…………ん…………」

「!!!」

舌まで入れるディープな奴だった！それが終わると唾液でできた銀の橋が途切れる
とベルファストは舌舐めすりし

「旦那様がお望みならこの続きをしても構いませんよ？」

「!!!」

不意打ちにハルトの頭の処理が落ちる中

「ちよつと待ちなさい!!!」

ジャンヌもハルトを引つたみると上書きせんとばかりにハルトにキスをした、それが終わるとハルトも再起動して

「!!!じゃ、ジャンヌ!?」

「私はアンタのサーヴァントでアンタは私のマスターよ!他の誰にも渡さないんだから!!」

「おやおや面白そうな事になってるね、では私も」

「っ!!」

マーリンすらもハルトにキスをして戦線布告する

「では改めて私は花の魔術師マーリン…まあアレだ色々省くがハルトのお嫁さんさ!」

「撃ち方始めます」

「ぶっこむわよ!!」

「切り捨てます」

「あら貴方ね……ハルトから聞いてるわよ嫁を自称してるとね!!」

「何で私にだけは当たりが強いんだい!？」

まさかの参戦！にオオ……ウと手で顔を覆うウオズ達であった

「さて神代魔法も手に入れたし……どうするか」

「ピースメーカーは……遠いな呼ぶのもアレだしなあ……」

「俺達はブルツクの町の引き払いをしてから合流するか」

「分かった……しかし俺達もこの世界での身分を作る必要があるな」

「けど大丈夫かよ、この世界には天職とか色々あるんだろ？今までみたいに偽装するのは無理じゃ…」

「大丈夫だろ？」

「何でそう言い切れるのさ」

「俺の天職は魔王か料理人だろうから人前に出せないだろうし」

その一言に家臣団全員が頷くのは無理もなかった

「確かに！んじゃ俺は救世主だな！」

「黙れヤンデレ製造機」

迫る地獄の軍団!!

前回のあらすじ

ライセン迷宮を攻略したハルト達 2号ウオッチを獲得そしてデートアライブ世界で会ったマーリンを仲間にしたのであった!

そしてハジメ達が拠点にしていたブルックの町を引き払う用意をしていた頃

「んじゃ会議を始めるぞ議題は俺達の身分証をどうしようだ」

「それは我が魔王がアナザージオウIIの力で拵えるのは如何でしょう? シンフォギア世界でやりましたよね?」

「しかもこの世界って見た感じ偽装するの簡単そうに見えるけど?」

「うーん……いや作れはするんだが……それするとエヒト……まあクソジジイと因縁ある邪神が俺達に気づく可能性がある」

「世界超えてる段階で気づいてると思いますか?」

「けど誰か来た? くらいなら大丈夫だが明確にアナザージオウの力を使って俺たちが来た! って言うのはまずい……多分クソジジイ色々やらかしてるだろうから」

変な信頼がある……あのジジイの気まぐれはとんでもないからな!! という未来で振り回されてる組は納得の表情をする

「ああ……成る程」

「という訳で俺達は非合法の方法で合法的身分証を手に入れないとなりません!」

「凄いな……そんな悪い事をはつきり言うなんて」

「だが俺はこの世界に……そんなコネはない!!」

「威張って言う事ですか？」

「慣れなさいカレン、これが旦那様よ」

「いつもこのように道家を演じられています」

「慣れると楽しいですよ」

「は、はあ……」

「だからお前たちの意見を聞いて色々やってみようと思う！さあブレイクスローイングだー」

「ブレイクストーミングですかね？」

「壊して投げてるね」

「ハルト坊らしいがな」

「この馬鹿具合…まるで実家のような安心感!!」

「何処にそれを感じているんですか？ いやまあ感じますけども」

「不敬だぞお前たち!!」

「けど実際、ハルトさんの意見にも一理あります私達だけ宿屋使えないとか物資の補給とか色々不便ですもん」

「ハジメ殿に依頼するにしても量を考えると不自然極まりませんし」

「となるとうーん…」

「あ！魔王ちゃんがワームの擬態能力使って民間人と成り代わる！」

「そんな真似したら俺は天の道を行き総てを司る人や神に代わり剣を振る男に殺されま
す!!」

「ではハルト様がロイミュードの力で擬態を」

「そんな事したら死神に処刑されるわ!!」

「けどそれは？」

「本望!!」

「イエエエエエー!とベアトリスとハイタッチするハルトであつたが真面目にやれとばかりに威圧されたので素直に会議を続ける」

「となるとアレかあ…」

「あれ？」

「簡単な話だ非合法組織を物理的な交渉で従えさせて身分証を作らせる!! そうすれば俺達が偽装した痕跡は残らないし情報収集も楽になるぞ！」

「成る程悪党退治ですね、でしたら私にお任せを」

「良いですねカレンさん！私もお供します！」

「話聞いてました？退治じゃないですよ!!」

「あと発想が既に悪の組織なんだよお!!」

と嘆くナツキに対して、慌てたトルーパーがドアを開ける

「た、大変です陛下!!」

「騒々しいですよ、どうし」「ゾル大佐なる軍服眼帯の男が陛下に会わせると！」ゾル大佐？」

「それ鳴滝さんじゃん、コスプレしてまで何しに来たのあの人？」

「デイケイド劇場版で鳴滝はデイケイドを倒すのにゾル大佐を名乗っていたので偽名だろうと思っっていると」

「側にイーっ！と手を上げる全身黒タイツの兵士達と一緒に「急いで客間に通せ!!」はっ！」

ハルトは青い顔をしながら慌てて身なりを整えて客間に入る

「お…お待たせしました、私が逢魔王国国王 常葉ハルトでございます」

「シヨツカー幹部 ゾル大佐だお会いできて光栄だ怪人王」

「此方もです、かの仮面ライダー相手に半世紀以上も戦う伝統ある秘密結社の幹部とこうしてお話出来るのですから」

「それは良かった…しかし噂とはアテにならないな」

「噂ですか？」

「怪人王は古今東西の怪人を従えるも粗野で粗暴、礼節なんぞクソ喰らえな奴と聞いていたが実際会ってみるとキチンとしていないではないか」

*それはハルトが伝説の存在だからと敬意を払っているだけです

「それは良かった…しかし噂を流した者にはそれ相応に仕置きと行きましようか…」

具体的にはheavenの材料行きだ慈悲はない

「そうしてくれ」

「それで悪の秘密結社ショツカーの幹部が態々我々に何の用でしょうか？」

「単刀直入に言えば同盟関係の締結だ」

同盟？

「……………申し訳ない疲れからか聞きそびれてしまったもう一度お願いします」

「我々ショツカーと逢魔王国の同盟関係締結だ」

「……………」

情報が完結しないハルトが向かったのは

精神世界

「あ、いやなんでさあああああああ!」

「落ち着け相棒!」

「何で世界征服企む悪の秘密結社が俺達みたいな勢力との同盟関係求めてんの! 普通傘下になれ! とかじゃないの!! あと俺仮面ライダーのファンだよ! それ知らないの!?!」

「落ち着くのだ相棒!」

「これが落ち着いていられるかあ! どうなってんだよシヨツカーと同盟とか…マジで悪の道を進んでるじゃん!!」

「まあ色々やらかしたから声はかかると思ってたがな」

「俺が一体何をした!」

「自分のやらかした事を振り返れ!!」

「うーん……シヨツカーに目をつけられるような事したかな？」

「オーマジオウ、デイケイド と戦い色々な仮面ライダーと面識を持ち、更に行く先先の世界で逆らう奴等を問答無用でジェノサイド！していく奴だぞ？興味を持たない方が不思議だぞ!!」

「つまり？」

「客観的に見ると、お前は新進気鋭な悪の組織のリーダーだ」

「ウソダンドドコドーン!!」

—————

「ど、同盟ですか」

「驚かれましたか？」

「え、ええまさか伝統と格式高いショッカーが我々のような零細組織と同盟など…」

「我々として関係を持つ相手は選ぶ、それに立体映像とはいえ仮面ライダーを倒せる勢力を無視できる程、我々も愚かではないぞ」

「え？まさか迷宮の「ええ一部始終見させて貰った」おお…」

「それで如何だ我等との同盟関係締結は」

「……………いや素晴らしい提案なのですが…そもそも貴方達にメリットありますか？」

「何？」

「いや、俺たちはショッカーって後ろ盾が入りますが貴方達が俺達と手を組むメ

リットが見えないと言いますか…」

「ほお…」

「流石に対等とまではいきませんが少なくとも格差ない関係でない」と

「成る程な…では話すでしょう」

ゾル大佐曰く

ネオタイムジャッカー絡みの案件であると

何でもアイツら各世界にあるショッカー支部を潰して技術やら敗残兵やらを取り込んで今の勢力を作ったのだと

それはつまりショッカーという組織を敵に回したに他ならないのだが

「いやアイツら馬鹿だなあ〜シヨツカーに刃向かうとか」

「そうだな…だが奴等も中々に粒揃いでな我々も仮面ライダーと並行して奴等と当たるのは難しいのだ」

「つまり現状奴等とバチバチやり合ってる俺たちにネオタイムジャツカーの相手をして欲しいと?」

「そうなる勿論此方も支援するがな」

「と言いますと?」

「我等シヨツカーは様々な世界に支部がある、その世界にある拠点を一つ貸し出そう」

「おお!」

「そしてだ、聞けばこの世界の身分証に困っていると聞いたぞ」

「ええどうしたものかと」

「ならばその辺も我等に任せよ、シヨツカーハイリヒ王国支部の連中に身分証を作らせる」

「至れり尽くせりで怖いすな……え？この国にもシヨツカーの支部が？」

「うむ、何先行投資だとも…我等とてネオタイムジャツカーの蛮行にはうんざりしているのだ」

「こりや期待に応えないとダメだな」

「でないと困る」

「……………」

このタイミングで大組織からの同盟の提案元より断る気はなかったが……ここまでの条件を引き出させた欲を搔くのはダメだな

……………ん？何か外が騒がしいな

「ちよつと失礼」

と扉を開けてみると外で泣いているネガタロス

「いや何泣いてんだお前？」

「ボス！俺は感動したぞ、まさかあの大組織ショッカーに同盟を結ぼうと声をかけられるとは……やはりボスは俺が見込んだ通り悪の組織のボスになるべくして生まれた存在だ！」

「いや俺は国王だからね？」

「つまり生まれながらの王でありながら悪の組織のボスという事か!」

「戻ってこいネガタロス!! ショッカーに会えて興奮してるのは分かるけども!!」

頭に金ダライを落として目を覚まさせると

「申し訳ない、ゾル大佐…その同盟の件 お受けします此方もネオタイムジャッカー案件では迷惑かけられていますので」

「かたじけない」

「後悔はさせません、ネオタイムジャッカーは殲滅します」

———

んで

「シヨツカーという大口の同盟相手が出来たって訳」

「魔王ちゃん正気なの!？」

「これはめでたい!魔王様と逢魔が名実共に悪の組織として認められたという事です
ね!」

「だから悪の組織違うからね国だから」

「お、俺はこれ程までにボスに感動した事はない!このネガタロス!怪人軍団長として
の働きを約束する!!」

「お前等は落ち着け!!」

フィーニスとネガタロスは喜びを全身で発しているが

「おいハルト、大丈夫なのか?そんな真似したらオーマジオウが黙ってないぞ?」

「だ、大丈夫だよ俺は別にショツカーの一員じゃないし多分だけどオーマジオウはその辺狙ってんじゃないかね？」

「は？」

「ライダーの王がオーマジオウなら俺が怪人やらを束ねる王になる、そしたらバランス取れるんじゃないかな？お互いに足りない部分を補える意味で」

要するにオーマジオウはライダーを俺は怪人や悪の組織をそれぞれ統治する王となる構想だ

「おお…何か訳ありな感じですね」

「という訳でショツカーの人たちが用意してくれたステータスプレートが此方です」

そこにはこう書かれていた

常葉ハルト 天職 魔王

と

「ふあ!？」

思わず声に出してしまったが

「これがステータスプレートか…」

「いや待てお前等！俺の天職が魔王だぞ！何かその辺にツツコミ入れろよ！」

「いやいや今更だろ？」

「まあ料理人と思ってたので魔王なのは驚きましたが…」

「となると俺の天職は勇者か救世主だな!!」

野田ナツキ 天職 大道芸人

「何でさああああああ!!」

「「「はははははは!!」」」

同時にゲラゲラ笑う面々であった

「ハルトの奴細工してねえよな!」

「してねえよ多分体張るのが仕事だろうな」

「誰も望んでねえけど!」

「頑張れ」

「いやだあ!!俺だつて勇者とか賢者とかそんなカッコ良い天職が良い!!」

「哀れだな」

「うんうん」

さて、そしてハルト達はハジメ達と一旦合流すると

「成る程な隊商の護衛任務か」

「ああ依頼をこなしながらだから、合流するのに迷惑かける」

「気にすんなハジメくん、俺も俺でこたつてゐるから助かるよ」

「どうしたんだ？」

「シヨツカーが同盟申し込んできた」

「何!？」

「取り敢えず終わってからの合流になる…んで、その隊商の名前は？」

「えーと、モットーユニケルって人の隊商だ」

「何だ、その栄養ドリンクみたいな名前の人」

「俺もそう思ったよ」

「道中に護衛付けようか？」

「いや流石にそこまでは…」

「目的地は？」

「フューレンって町だ」

「OK、フューレンだな合流場所は…」

細かな打ち合わせをした後、ハルト達は

「んじゃフューレン行きたい人！」

とハルトが人員を尋ねると皆が手を挙げた

「うーむ…どうするか」

流石に今回はネガタロス達は無理だとなると

「ウオズと…一夏とハウンド頼める？」

「イエツサー、アーマーは収納しますが大丈夫ですか？」

「問題ねえよ、この間のベルトがあるだろ？」

「確かに」

「お任せを」「俺も良いの!？」

「ああ楽しい楽しい課外授業だ…シヨウゲン達は念の為に待機な…シヨツカーの奴等が良からぬ動きを見せたら俺に知らせろ…ネガタロス！ゴーストイマジン！一夏に取り憑けよ危なくなったら」

「サーチアンドデストロイ!!」

「よろしい！逢魔やその関係者を舐めた相手は皆殺しにするのが逢魔の流儀だ!!」

よく訓練されているなど頷くも

「何も宜しくないからね!!」

「あの…」

「私達は如何しましょう?」

と手を上げたのはカレンとオリガである

「え?そりゃたい「お待ちを主!護衛もなしに街を出歩くなど危険では?」大丈夫だよ逢魔でも偶に仕事抜け出して街へ歩いてる」

「我が魔王?」「陛下?」

「つてナツキがあらぬ噂を流してたなあって」

「ナツキ」

「何でさあああああ!!!」

「ごめん、今回はマジで……」

冤罪をかけた事を内心で反省したハルトはその日のおやつのスコーンに多めにシロップをかけてあげたのであった

んで持つてメンバーは決まった……はずなのだが

「なーんで三人も来るかな？」

ベアトリス、ベルファスト、アンティリーネも付いてきたのである

「私は千冬さんにな変わってハルトさんの暴走を止める役目を」

「私はご主人様にメイドとしてご奉仕する為に」

「私は旦那様と一緒にイタズラする為よ」

「流石アンティリーネ分かってるう!」

「今のメンバーだと私が長いのよ!」

イエエエエエイ!とハイタッチをする2人にベアトリスは怒鳴る

「2人とも!!」

だがそうなると

「移動手段どうしようか」

元々4人の予定だったのが増えて九人だ

「トライドロンは4人乗りだし、バイクだと……一夏、バイクの運転してみる?」

「いや俺はバイクの運転は出来ないよ「愚か者お!」何で!」

ハルトのハリセンの一撃が一夏の側頭部を捉えた

「仮面ライダーなんだからバイクくらい運転出来なくてどうすんだ！ほら見ろゴールドダッシュが泣いてるぞ!!」

確かに懐に入れているゴールドダッシュのカードから泣いてる声……いや事情知らない人から見ると怖いな!!

「じゃあハル兄は運転出来るの？」

「あつたり前よ!!」

「……………免許は？」

「一夏……………バイク運転に必要なのは免許じゃない技術だ!!」

「まさかの無免許ライダー!？」

「だっていちいち世界移動する度にバイクの免許取るの面倒くさいじゃん、それにライダーマシンは持ち主の思考通りに運転してくれるから実質自動運転だしな」

「悪い笑顔を浮かべない!!」

草加スマイルを浮かべるハルトにハリセンを見舞う一夏なのであった

「そろそろ真面目に話しましょうか」

「9人の移動かぁ…」

「んじゃウォーカー使う?」

ハルトの目線の先には6脚と大砲を装備するクロントルーパー達の戦車兼装甲車ことATTE、通称ウォーカーである歩くのは遅いがあらゆる環境への運用が可能であ

るが

「けどさこの世界で徒歩移動は無理じゃない？」

「馬車で良いんじゃないか？」

とナツキが言うから

「ほお……ならば馬車を用意するか」

んで

「何で俺が馬なんだよ!!」

ナツキが馬のスペースに立たされていた

「まさかいつぞやの馬車馬のように働け！を体現してくれるとはな……俺は嬉しいぞ!!」

「誰も物理的に馬させられるとは思わねえよ！そこはお前がホースオルフェノクの激情態に変身して引けよ！」

「我が魔王に馬車馬になれと？」

「それは凶々しいんじゃないかな？」

「王を馬乗りにしてよいのは奥方様達だけだ!!」

「それは夜の意味ではないか!？」

「ぐぬぬ……」

「よし行けナツキ!!」

「いやコレは色々問題あるのでは？奴隷制あるといつてもあんまりですよ」

ベアトリスの鶴の一声で

「ごめんアルトリア…ドゥンスタリオンにこんな真似させて」

「大丈夫ですよマスター」

「問題ない……だが魔力供給は頼むぞ」

「う……うん」

「良かったなナツキ」

「いやこの状況は素直に喜べないよ!!」

さて馬車にゆられていると

「ごめんハルト、酔った」

「お前マジか」

乗り物酔いしていた、そりやサスペンションない馬車+舗装されてない道での移動だからなあ……

「んじゃアルトリアに膝枕してもらえ」

「お、おう……お願いアルトリア」

「はい……マスター失礼、どちらの私でしょう（だ？）」

異口同音とはよく言ったものである、だが何故だろう2人の目からハイライトは消えているので

「……………2人で」

2人が交互に膝枕をしている現状を写真に撮ると

「よし送信」

「おい待て誰に送った」

「エルフナインとマドカ」

「……………」

ナツキは乗り物酔い以外の理由で顔面蒼白になったのは言うまでもない

「因みにマスターはどうなのよ?」

「俺は魔王化した時に状態異常耐性が出来たから乗り物酔いしないからなあ」

「そう残念ね」

「残念じゃないかな…眠たくなつたなあ…」

わざとらしく言う

「分かったわよ。ほら」

「ん、ありがとう」

そして暫く揺られて日も暮れ始めるのを見てハルトはコネクトの魔法で食材を取り出すと

「んじゃ飯作るか」

「何作るの？」

「シチュー、野菜とか肉とかバランス良くいけるし」

あと、鍋に入れて煮込めば良いのは洗い物やら少なくとも済む水の節約にもなる、まあ
コスパの問題だ

そして暫く煮込んでいると

「我が魔王」

「わーってる山賊か魔物だね？」

「愚かな」

「狩り開始」

「魔王様の食事を邪魔しようとは…万死に値します!!」

「豚のような悲鳴をあげさせてやろう！」

殺意が高すぎる旧四天王だが

「そうだな……そうだ先制攻撃と行くかな……ハウンド！」

「はっ！」

「この間渡した帝王のベルト、その力の一端を見せてやれ」

「イエツサー」

するとハウンドはアタッシュケースから携帯をドライバーを取り出す

そして腰につけて携帯を開いて変身コードを入力する

3・1・5

Enter

『STANDING BY』

待機音と共に何度も練習したのか携帯を上に向けてキャッチすると

「変身」

『COMPLETE』

途端にハウンドは青い光に包まれると現れたのは純白の装甲にゆをイメージしたような頭部に背中には天のベルトと呼ばれる由来となった飛行ユニット フライニングア
タッカーを装備した

大空の支配者 敵を狩る猟犬

仮面ライダーサイガ 変身完了

「これがベルトの力ですか」

「そうだよ」

「我が魔王！このベルトは」

帝王のベルトは完全にオルフェノク専用　つまり人間が使えば死を意味する危険なベルトなのだが……

「大丈夫、キャロルに頼んで人間にも変身できるようにしてるから……後は上の上とも言えるハウンドなら使い熟せるって俺の判断だよ」

「では行って参ります」

それだけ言うとライニングアタッカーを起動し目標へ飛翔すると、その目には武装した山賊達があった

「賊ならば慈悲はいりませんね」

呟くと同時にフライングアタッカーから高濃度フォトンプラット弾を連射 突如空からの奇襲を受けた山賊達は突如、灰となつていく仲間達が1人、また1人と灰になる中 頭目らしき男は馬に乗り逃げようとするが音速には及ばず落馬させられて捕まってしまう

「たたたたたたのむ！見逃してくれ!!もう足を洗う！だから助けてくれえええ！」

「貴様はそう言った罪なき人間にどう答えた？」

「あ……」

「ならば答えは同じだ、その身で受け取れ！」

「ぎゃあああああ!!」

それだけ言うときサイガはフライングアタッカーで飛翔しそのまま最高度に達すると急降下し地表スレスレまで接近するとそのまま頭目を地面に叩きつけたのである、生身の人間がそんなGと威力に耐えられる訳もなく頭目は何も言わない骸となった…というよりミンチより酷い状態になったのである

数秒後 サイガはハルトの元へつき変身を解くと

「流石だな」

「まだまだです自分も鍛錬あるのみだと解らされました」

「真面目だな」

「いや、陛下が不真面目なだけでは？」

「んじゃ不真面目にハウンドの飯はなし！」

「そんな殺生な!!」

途端に笑いが起こるがハウンドからしたら死活問題なのであった。まあ無事にシチューにありつけたのだが褒美に大盛りだったのは言うまでもない

そこで先にフューレンの街を目前にして

「んじゃアンティリーネとカレンとオリガにはコレを」

聞けば巫人は基本奴隷しか街にはいないと言う事と奴隷じゃないと人攫いのターゲットにされてしまうのだと言う…まあ彼女達を狙おうものなら四肢をもがれた後、生きたままプレス機に潰されてheavenの材料になるのだが…

「これは街で君たちを守る意味があるんだ奴隷制なんてあるらしいからな」

「ま、だよねえ」

「主の命とあらば」

「あとベルファストもチョーカーは外してくれ余計なトラブルを招きたくない」

「かしこまりました」

だが

「成る程つまり旦那様は私に裸にした後、この首輪をつけさせて夜の街を散歩させたいと」

真顔でそんな事を言うアンティリーネに思わず

「話聞いてた!?! 誰がそんな倒錯的な趣味に走ると言ったかなあ? あと俺にそんな趣味あると思う?」

「ニアから聞いたわ、ハルトはチャイナドレスのスリットから見える生足みたいなチラ

リズムに興奮するって」

あの漫画家、とんでもない爆弾を残しやがったな!!

「あの女には帰国後に説教が必要だな!」

くしゃみと悪寒に彼女が襲われたのは言うまでもない

「あああああ主! わ::私は「安心しろソレはアンティリーネの冗談だ」そ、そうですか」

赤面するカレンだが新参にそんな誤解を植え付けたくはないと弁明する

「……ムツツリだな」

だがコイツは別だ

「ナツキよ辞世の句は読んだか?」

「へ？」

「前に話したなお前は最後に殺すと」

「いや言っていないけどお!!」

「は？」

ナツキを掴んでオーロラカーテンで逢魔に戻ると

「受け取れマドカ！新鮮なナツキだよ！それえ！」

「ちよつまっ！」「ナツキー！」ゴフウ!!」

ナツキの来訪に出会えなかった反動が爆発したマドカが体当たりをしながら抱きつく
くとナツキはそれはもう見事に吹き飛んだ

「ナツキ!!」

「お、おう……」

流石に引いていると途端にマドカの動きが止まる

「ホカノオンナノニオイガスル……ネエナンデナノ? ナツキコタエテ?」

ハイライトが消えてそのまま万力の如き握力…その力はある世界だと赫刀になるぐらいでありナツキの顔が反比例して青ざめていった

よし

「んじゃマドカ、ナツキにつく匂いを上書きしてやれ」

「アリガトウ、ハルトニイサン…ジャア、ウワキスル、ナツキヲハコニシマオウカ？ソウ
スレバワタシイガイ、ミエナイヨネ？」

その恐怖に思わず

「ハルト助けてー！！！！」

「あの時、お前にそう言ったな？」

「何か知らないけど言ったかも！！」

「アレは嘘だ」

そう答えるとオーロラカーテンで戻る

その直前、ナツキのアー！と言う悲鳴を背にして戻ると

「我が魔王、ナツキは？」

「マドカの息抜きに当てたら喜んでた……マドカが」

「「「……………」」」

それがどう言う意味か分かるウオズ達は身震いし、マドカの兄である一夏は

「マドカ……お前……」

妹の先行きが一気に心配であったという

「さてお前達？さっきの件だが」

「「「私達は何も聞いてません!!」」」

「よろしい」

余談だがナツキは無事に帰還したが暫く何故か携帯のバイブレーションのように小刻みに震えていたと言う

ウルの街 前編

前回のあらすじ

シヨツカーと同盟を結んだハルトは身分証を手にした。新たな街へ向かう道中ハルトを煽ったナツキを制裁したのであった。

「ハルトサン！ゴメンナサイ！」

「反省したな次はないぞ」

「キモニメイジマス!!」

「まあマドカも息抜き出来たと喜んでたからヨシとするか」

「いやマドカの奴、何をした!？」

一夏は妹のやったお仕置きに恐怖し

「ナニじゃねえの?」

「嫌だ聞きたくない!!」

「まあなあ…家族のそんな話聞きたくないよなあ…因みに千冬は普段はああだが夜は受け身でな」

「聞きたく言ってるだろハル兄!」

「悪ノリが過ぎますよ我が魔王」

「まあそんな千冬もスイッチが入ると男前でな…気づくと俺が押し倒れてしまうんだよな」

「流石は我が魔王、安定のヘタレですね」

「まあ知ってたけど…アンタ、ヘタレ受けだもんね」

「ウオズとジャンヌは飯抜き」

「お慈悲を!!」

「やはり神なんていないのね…」

「ふん!!」

さて、そんなこんなでフューレンの街の検問待ちをしている…流石に横入りなんて真似はしないルールはルールだからと待っていると

「ハルト!」

「おお！ハジメくん!!」

「アンタらも付いてたのか！」

「おうよ！それより依頼の方は？」

「無事達成だ、まあ色々大変だったがな…その…俺の持ち物や武器やらで目をつけられた」

「ああ…」

この世界には勿論だが銃の概念はない、剣や弓、魔法と違い引き金を引くだけで使えるのだ

勿論運用するにはノウハウも必須だが短期間で近接武器と比べて訓練が早く済むのもメリットであろう…こうなるとクロントルーパーのブラスターライフルとか絶対見せたらダメだろくな事にならないと

ハルトはこの世界にいる人の信頼度がシンフォギア世界並みに低下している中、目線を向けると何かしら言いたそうな商人がいた

「この人が護衛の人？」

「ああ…」

「初めましてモットーユンケルです貴方は？」

「常葉ハルト、まあアレですよハジメくんの…友達？」

「だな」

「良かった」

「ほほお…そうなりますと貴方も色々…ふむ」

そう呟くと目線がカレンやアンティリーネの方へと向かう……何か値踏みされてる
ようで気分が悪い

ーなあ相棒、こいつ闇討ちしちやう？ー

『止せ、色々と面倒になる』

ー大丈夫ミラーモンスターの餌にするからー

『カケラも安心できねえよ!!』

と話している中

「失礼ですが、そちらのエルフを私に売ってはくれませんか？お金でも物でも融通し
ますぞ」

「お断りします。彼女は俺の特別なので誰にも渡しません」

「!!!」

それにアンティリーネとカレンは赤面していたが

「しかしながらあの美しさでは良からぬ輩に狙われるかと」「知らんそんな真似する奴は皆倒す」何とまあ剛毅な」

「あと警告する俺のものに手を出すなら誰でも敵だ…一木一草悉く滅ぼすから覚悟して挑め」

ハルトは軽く脅してみるも

「い、いえ其方の方にはお話ししましたが無闇に力を見せるのは危険と…」

「注意してくれただけだとさ」

「ふーん…ま、そう言うことにしておくか」

ハルトは威圧を解くとモットーは

「貴方様は……失礼ですがどこか高貴な出て？」

「何でそう思うの？」

「見目麗しいメイドといて一見粗野に見えますが所々に高等な教育を受けた節がある」

なかなか鋭い観察眼だな確かに王様としての振る舞いをテストアロッサに教わったが

…

ー以外と身についているんだなー

『普段からそう振る舞わないから問題なんだよな』

黙れと思いなながらもハルトは冷静に分析してみた

「まあ身分を隠して色々しているな」

「おお……では何か入り用でしたら我等の商会をご最真に」

とモットーが去るのを尻目に

「確かに高貴な出（魔王）だけだな」

「今更ながらに俺遠い所に来た気がするぜ」

そんなこんなで俺の順番だステータスプレートを見せると

「ああ貴方でしたか、話は太左から聞いておりますお連れもどうぞ」

まさかの顔パスだと！ま、まさか！シヨツカーハイリヒ王国支部はこの街にまで手を伸ばしていたのか！

『流石は悪の組織』

『俺達も見習わないとな、こんな風に敵組織内に内通者を作る方法とかな』

―確かに！―

流石は先輩！悪巧みの年季が違うぜ!!と驚きながらも街に入る…やっぱり俺もそんな感じに振る舞った方が良いな

「うーむ邪悪な王様か」

「我が魔王？」

「こんな感じか？はーはっははははは！」

「落ち着きましようか」

「はい」

「さてと補給と情報収集ですね」

「此処からは別れていく……前に一夏！」

「はい！」

「ほら少し遊んでこい、オリガついて行ってくれ」

「任せろ」

「さてハウンドは「シェフィールドを呼んでも？」好きにしろ」

「では」

「あいつ……会った頃は仕事人間だったのにな」

「これも我が魔王の影響でしょうね」

「そうだな」

と笑っているが野郎の視線が痛いな……ふむ成る程

「美少女達を連れているから嫉妬されてるのか」

「我が魔王漸く客観視が出来るように」

「取り敢えず全員heavenの素材だな俺の嫁や騎士に色目を使うなど許せん」

「何も学習してない……落ち着いてくれハルト様！」

はあと溜息を吐いていたが、リシーと名乗る子が道案内を買って出た何でもこの広い街は道案内がないと必ず迷うらしい……ふむ一夏とハウンドを大至急呼び戻すべきだ
ぜと判断

この世界で人の奴隷を奪うのは御法度だが見目麗しい女性だ乱暴な方法に走るバカがいるかも知れないと警戒すると

ミラーワールドで陰ながら一夏達の護衛をギガゼール達にお願ひし：尚且つ彼らを狙う不届き者はボルキャンサーの餌になって貰おう：最近オーデイエンスと安心と実績の野座間製薬と五流護無から来たハムやベーコンだけだったから新鮮な生肉が食べたいとうるさいからな：あいつらもグルメになった者だぜ

余談だがシンフォギア世界でハルトが逮捕された際 ハルトは護送車にいた人間を全員呼び出したメタルガラスの餌にしたという世界線もあったのだという……こいつ浅倉をリスペクトし過ぎだぜ！

「んじゃ宿屋に行くか」

「そうだな宿屋の壺割ってお金を得るか」

「どこの勇者だソレ？」

そんな風にハジメと軽口を叩きながら話すと何か気持ち悪い視線を感じた、これは彼女達にだらうな…粘着質で気持ち悪い…というよりアンティリーネは不快を感じたのか武器を手に持ち始めた辞めろソレは最終手段だと制してその気配の先を辿ると

まあ簡潔に言うとな人の服をきたブタがいた、いやまあそのバカ貴族、ダメな二代目の見本だろう…あんなのがオークの評判を下げるのだ逢魔やテンペストで働くハイオーク達に土下座した後 脊髄ぶっこぬきの刑に処したい

『殺意が満ち満ちているな相棒！』

同じ感情なのか面倒くせえと顔をしたのだがズンズンとコチラに近寄ってくる、リシーも営業スマイルを忘れるくらいに悪評があるのだらうと思つたが 俺達の所に近づきアルトリアやベルファスト、ジャンヌを見て舌なめずりし、シアやカレンの首輪を見て不快な顔を見ると今俺たちに気づいたようで、見た目に違わぬ傲慢な態度と口調で

「お、おい、ガキ共。二百万ルタやる。この兎とエルフ達を、わ、渡せ。それとそつちの女共はわ、私の妾にしてやる。い、一緒に来い」

どもり声で何か喚いておりユエヤベルファストに触れようとする、どうやらおめでたい頭では既に自分のもの認定である

この作品を読んでくれている懸命なオーディエンスなら分かるだろう、こんな選択肢を選ぶバカが、どんな末路を辿るのかは

「……………」

刹那、周囲にいた人間や動物達に純粹たる殺意の圧が襲いかかった犯人は言わずもがなハジメとハルトである周囲にいた人間は血相変えて逃げ始め距離を取る

ウオズ達は巻き込んでしまったりシーを殺意から守っていた

そんな殺意を直接受けたブタはと言うと

ひい！と悲鳴をあげて腰を抜かして後退り失禁していた：本来なら気絶させるだけで良かったが難癖つけられると困るのと、この手の奴はしつこいので徹底的に心を折ることにしている

「ユエ、シア場所を変えるぞ」

「お前たち、行くぞ不愉快な奴と同じ空気は吸いたくないからな」

流石に暴力に訴えたら、俺達が加害者になるので辞めておく正当防衛は別だがな

因みにハジメはブタ男にしかぶつけてないがハルトは視界にいる連中に圧をぶつけていた、自分のものに手を出すところになると見せしめの意味も込めて

すると背後から現れた大剣をかついだ歴戦の戦士のような男がブタ男に近寄ると気絶しておけば良かったのに再起動して自滅の道を進んだのである

「そ、そうだ、レガニド！ そのクソガキ共を殺せ！ わ、私を殺そうとしたのだ！ 棚

り殺せえ！」

「坊ちゃん、流石に殺すのはヤバイですぜ。半殺し位にしときましようや」

「やれえ！ い、いいからやれえ！ お、女は、傷つけるな！ 私のだあ！」

「了解ですぜ。報酬は弾んで下さいよ」

「い、いくらでもやる！ さっさとやれえ！」

「おう、坊主達。わりいな。俺の金のためにちよつと半殺しになってくれや。なに、殺しはしねえよ。まあ、嬢ちゃん達の方は……諦めてくれ」

成る程、このレガニドは高ランクの冒険者でこのブタ男の護衛なのかと判断すると、哀れな奴めとハルトは懐から契約モンスターのカードを取り出しにかかる

いい加減堪忍袋の尾が切れそうだと動こうとした瞬間

「ハジメ、ハルト待つて私達が相手する」

「え？ 私もですか？」

ユエの意見では自分達が守られるだけの姫でないと見せつけなければ今回のようなバカは減るとの事 高ランクの冒険者であるが

「(戦闘員よりちよいましだな)」

そんな感じであるので問題ないだろう、ベアトリス達は出ないのはオーバーキルになるからなのと

「落ち着いてくださいアンティリーネさん!!」

「アンタが暴れたらマスターの我慢が無駄になるでしょう!!」

絶賛、暴れそうなアンティリーネを抑えてくれているので不参加だ

その後レガニドはユエとシアにより半殺しにあい 漢女として新しい扉を開いてしまったのである

さて護衛を無くしたので。このブタ男の処分である。逃げ出そうとしたので扉の入り口にはハルトが魔法陣で壁を作り逃げ道を封じた

「わ、私を誰だと思ってる!!プーム・ミンだぞ!!ミン男爵家に逆らう気か!!」

「はっ?知らねえよ、テメエの事なんざ」

「俺と喧嘩したいなら国動かしてこい。それで暇つぶしになるレベルだ…お前なんかじゃ相手にもならねえよ」

「流石ハルト坊じやな」

「あ。アレが本気の主…」

そしてハジメは足を振り上げるとブタ男の顔を靴で踏みつけた。めり込む音が聞こえる自分の骨の音を聞き悲鳴をあげた

「ほお中々の音楽じゃな」

「そんな所でレジェンドルガしない！」

「忘れてると思うが妾はロードじゃぞ？」

踏まれたブタ男はやめてくれ！とハジメに目線を送るとトドメとばかりに足に力を入れた哀れだ、そしてブタ男を脅したハジメはダメ押しとばかりに靴底にスパイクを作ると更に顔面に蹴りを入れたのであった

「いいぞーもつとやれー」

「混ざらないのですか？」

「え？俺がやると死体も残らないからハジメ君の方が慈悲あると思うよ？」

まあもし懲りずに来たなら俺が殺すけどな

「ねえウオズ」

「何でしょう?」

「脊髓ぶっこぬきと溶源性細胞のあの男にはどっちが良いかな!」

全然許せてなかった寧ろ苛烈である

「何て恐ろしき我が魔王」

と震えているとギルド職員からの仲裁が入るが

此方としては仲間に連れ去ろうと手を出そうとした不埒な輩が逆上してきたから撃退しただけであり目撃者もいるとハジメが説明したので援護射撃

「それに高ランクの冒険者が人攫いをしたなーんて事もあるよ、ね皆?」

ハルトは笑顔で周りにいた人間に同意を求めると全員が赤べこなみに縦に振る…何気に脅しと威圧混じりの交渉のみで言えばテストアロッサよりも上手いのだ

だが両者の意見を聞いて裁くらしいがブタ男は恐らく二、三日は寝たままだろう

「アレ起きるまで街で待てと?被害者の俺達が?」

「任せろハジメ君、最近覚えた雷魔法がある心臓に叩き込めば目を覚ますだろうさ」

「どんな威力だ?」

「クウガがライジングになるくらいの威力(AED)だ」

「なら大丈夫だな頼んだ」

「任せろ」

だが待つてくれ！と止められたどうやら殺すと思われたようで話し合いで！と言われたのだが

「けど待つのも面倒だから外に連れて埋めるか？」

「それは良い考えだな殺すなら良い道具がたくさんあるぜ…伊達に人殺しをゲーム感覚で楽しむ戦闘民族から王と崇められていないぜ」

「お前グロンギからそんな風に思われているのかよ」

「ダグバと殴り合った結果だな」

「本当後でその映像見せてくれよ」

「勿論だノーカット版もあるぜ…けどやっぱり議論は野蛮だな、やはり穏便に暴力で蹴

り付けようぜ」

アクセサリーをモーフィングパワーで剣に構え肩に担ぐとブタ男に電撃を流そうとするがギルド職員は止める姿に

「ハルト坊の思考回路はグロンギ並みに物騒じゃな」

「まあでなければ逢魔の荒くれ者を従えられませんよ」

「怪人王 その二つ名は伊達じゃないからね」

そう普段は炊事係だの脳筋だのバカにしている面々だが全員共通してハルトの強さとその仲間への情愛の深さを良く知る。そして誰よりも逢魔の玉座に君臨するに相応しいものと認めているのだ

そして遂に現れた偉い人。その人も話すとお刺防衛ではあるが嘘ではないと理解してもらった後。やはり規約の関係から街に残ってほしい連絡先と滞在先を聞きたいと

言うので

取り敢えずハルトは 高ランク冒険者が人攫いをしようとした ギルドは犯罪組織と手を組んでいる、いや犯罪組織の隠れ蓑ではないか?と言う話をモットーユンケルに流すというと更に偉い人の顔面が青ざめていく

まあレガニドが人攫いをしようとした事実がある上にそんな噂を商人に流されたら街に物流が途切れ真面目な冒険者が泣きを見て街から離れる そうなれば街は死活問題だと話す

ケケケと笑うハルトにハジメもドン引きしているとウォズが

「見なさいハジメ君アレが我が魔王の得意技、棍棒外交です」

「お、おう…」

「後加えるなら「もう勘弁してください!!」お前の意見は求めん」

『よっ！流石ハルトの棍棒外交!!』

『まるで実家のような安心感だぜ!!』

『スウォルツも草葉の陰で喜んでるぜ!』

『面識ないけどな!!』

と相棒達は騒いでいるし

この時 ハジメはハルトと敵対したくないと思ったのであった

ハジメとしても涙目の偉い人を放置する訳のは良心が痛むのでブルツクの町で貰った紹介状を渡すと血相を変えて確認の為に走り出した、さて暇なのとハルトら迷惑料も込めて金貨袋を置くと

「迷惑かけた分。この場のお代は俺が持とうお前たち好きに飲めや歌え!!」

おおおおお！と歓声が上がる中

ハジメ達は心の中で目撃者を買収しやがったと

そして遂に出てきた大物　ギルドマスターのイルワ　彼にも同じ話をすると

「成る程ね彼女の言う通りだ」

聞けばハジメがブルツクの町であつた人は昔ギルドの顔役だつたらしい引退して中央から離れたとか

だがまあやりすぎたのは事実であり色々と面倒な顔をしていると目を瞑る代わりに依頼を受けて欲しいと話があつた

「どうする？」

回り道してゐる場合ではないと伝えるとハルトは聞くだけ聞けば良いと答える

彼曰く　とある冒険者の身元確認らしい何でも近くにあるウルの街での調査らしいな

対価として非常時の協力とユエ達のステータスプレート製作
ステータスの黙秘と
きた

「所で君達は？」

「通りすがりの料理人だ、屋台を引いてご飯を作っている」

「いやハルト坊!!確かにそうじゃがそこだけ抜粋するか!？」

「まあ大体あってますね」

成る程、ハジメと同じトラブルメーカーかとイルワは納得し

「君達にも彼と同じ依頼を受けてもらいたい」

「見返りは？」

「彼と同じ協力かな」

「ふーん」

「―どうするよ、ぶつちやけシヨツカーいるならいらなくね?」

『いいやそうでもないシヨツカーは裏の組織代表だ、公的機関じゃねえその息のかかった奴等はいらるだろうが組織全体を動かす程の力はないだろうさ』

「―なら、聞いておくのが一番か」

「分かった、けど一つお願いがある」

「何だ?」

「二度とあの豚貴族と関係者を俺達の前に出さないで次直接間接的に関わつてるとわ

「かっいたら問答無用で殺すから」

「分かった警告しておくよ、それにしても君の目……人殺しの目だ何人殺したんだい？」

ふーん、やっぱり人を見る目はあるんだ……けどさ

「アンタは食べたパンの枚数覚えてるの？」

まさかのDIOのセリフを言うとは思わなかったよ……

「いいや覚えてないよ」

「それと同じさ……まあ万を超えてから数えちゃいないよ」

「万……」

「嘘が本当か信じるか否かは貴方次第ってね……さーて行くぞお前等々明日からまた移動

だからなあ〜」

ハルトは笑顔で応えたと部屋を出るウオズも続こうとしたが止められた

「待ってくれ、彼の言葉は「自分で考えたらどうですか？」……」

それだけ言うと退室した

「珍しいね教えてあげないなんて」

「ええ情報は秘匿にする、秘密があるのは女子だけの特権ではありませんよ」

「じゃな、因みにハルト坊から聞いたが今日はウオズにだけスペシャルデザートがあるらしいぞ」

「何っ!?!」

「まあ嘘じゃがな」

「待ちなさいヤクヅキ!!」

「断る妾は逃げるぞー!」

ドタバタと逃げる姿に

「暴れないで貰えますか?」

笑顔のベルファストに説教されたのであった

そして翌日

「んじゃ行くか」

「おう!」

ハジメ達は車でシアはバイクで行くらしい

「ハルト達はどうすんだ？」

「俺達も車だよ…まあ地球産のじゃないけど」

「つまり異世界の車なのか！」

「ああちよつとやさつとじや壊れない逢魔王国正式採用戦闘装甲車両 H A V W ク
ローンターボタンク…通称はジャガーノート!!」

コネクトの魔法と共に現れたのは50メートル級の超大型10輪装甲車である

「うおおおおお！」

デカイ硬いカッコ良いと男心くすぐるロマン装備に興奮するハジメ

「最高時速160キロ、30000キロを走破し、二十日分の食料まで備蓄しているんだ！」

ドヤア！とすると

「更に戦闘方面は全身にタレットを装備しておりどんな敵の攻撃も耐えて敵の城壁を打ち破る逢魔の破城槌にして正に大いなる巨獣ジャガーノートに相応しい代物だ！」

「凄い！こんなのまであるのか！」

「ああ！ぶっちゃけピースメーカーで死蔵されて食料貯蔵庫にされたのを勿体無いから使おうと思ったただけだぜ！」

「まあ我が魔王の場合、ガンシップやウォーカーの方が好みですからね」

「六脚装甲戦闘車両とか嫌いな男の子いる？いねえよな！ロマン最高!!」

いやっほー！とテンション高く話すハルトであったが

「因みに浴室とかついでますか？」

「兵器に客船みたいな設備を求めるなベアトリス」

そして逢魔組全員が乗り込むと

「ジャガーノート発進!!」

道中 魔物が襲い掛かるのだがジャガーノートの潰された轍は巨獣の唸りとして名所になったという

—————

所変わって2068年のオーマジオウ

「ほお遂にシヨッカーが小僧に接触を図ったか」

「はい、これも魔王様の計画の通りです」

カツシーンの報告にオーマジオウも嬉しそうに

「やはりアイツには才覚があつた、数多の勢力を受け入れる才能がな…彼奴はまだまだ大きくなるさすれば我と対等以上の王となるだろう」

「それは大袈裟では？」

「それを見極めよう…そうだ彼奴等なら丁度良い」

オーマジオウが手を叩くとオーロラカーテンから2人の男が現れた

「まさか……」

「うむ宗一、政人よ頼んだぞ」

「はっ!!」

————

そしてウルの街から少し離れた場所にジャガーノートを止めて

「んじゃ護衛宜しく」

「!!」

ハルト傘下の戦闘員に護衛をお願いし

「さーてウルの本へ行くか……ウルかウルティマの奴元気にしてるかな」

「大丈夫でしょう、今も元気にカレラ嬢と仲良く喧嘩している筈です」

「それ大丈夫じゃねえよなあ!!」

ハルトは慌てていると何を思ったのかアタツシユケースをナツキに渡した

「これ?」

「この間の詫びだ、お前はライダーにもアナザーライダーにもなれるハイブリッドだ
バース以外にも慣らしておけ」

「あ、ありがとう……嬉しいなあ」

とナツキが開けてみると中には銃のグリップに似た通信機と△の意匠が入るベルト
を見てナツキは

「え?これ……」

「3本目のベルトは本当の持ち主を探して」

わざとらしく歌うハルトにナツキは溜め息を吐くとケースを閉じて突き返す

「これは返す、俺には荷が重い」

「重くねえよ馬鹿野郎」

「ん？」

「そのベルトの意味は知ってるならな」

3本のベルト

ファイズ、カイザ、デルタ

このベルトはオルフェノクの王　アークオルフェノクを守る為に存在している
つまりハルトは暗に認めているということに他ならない

「だとしたら他の奴に渡せよ俺は勇者だけ魔王を討つ為に使うかもよ」

「それならそれで面白いから良い、出来ればタツ君、草加さん、三原さんの三人にやられるなら本望」

とか笑って応えると2人は何か気配を感じて動きを止めた、ウオツチを取り出すと背後にいる面々に指示を出す

「お前達は急いでジャガーノートに戻れ」

「我が魔王、今のは！」

「シヨツカーと組んだ時から連中の方から来るとは思ってたけど、まさか今かよ」

『オーマジオウカネオタイムジャツカーの関係者だな』

と警戒する中 現れたのは2人の男性だった1人はF G Oのぐた男こと藤丸立夏に似ており、もう1人は

「ま、まさか草加雅人さん!!」

あの憧れの一人 呪いベルトと呼ばれたカイザギアを使って大丈夫な彼ではないか
！と感動していると

「誰がああのネチネチしたマザコン嫌味野郎ダア!!」

「え？違うの!!草加雅人にそっくりじゃん!!」

この男 本当に人の地雷を踏み抜くのが上手いのである

「俺の地雷を踏み抜くなさとは許せん!!ここで倒してやるう!」

と男はそういうとアタツシユケースを開いて中から取り出したのは世にも珍しいス
ライド式携帯である

「お前それ…」

9・1・3 Enter

『STANDING BY』

「変身!!」

『COMPLETE』

その体は黄色のラインが流れると光に包まれ現れたのはXの顔をした戦士

仮面ライダーカイザ 現れる

「カイザだと……」

それはキャロルが立花響の誕生日プレゼントに作ったが渡せず今は逢魔にある筈だ
……まさかコイツ……俺達より先に逢魔を襲ったのか……なら

「お前……キャロル達に何をしたあ!!」

『ファイズ』

アナザーファイズに変身してオートバジンからファイズエッジを取り出すとカイザに襲い掛かる同じくカイザブレイガンにメモリを挿して剣を出して両者鏖迫り合っている中 ナツキは頭を抱えながらも戦闘に参加するウォッチを構えると邪魔が入る

「ハルト！ああもう!!」

「おーつと、先へは行かせないよ」

「本当に誰だお前達は！ネオタイムジャッカーの仲間か？」

「俺は蛇倉宗一……今はそれだけで充分だ」

『コブラ』

蛇倉と名乗る男は黒い銃 トランスチームガンにコブラロストボトルを装填 警告を示すような待機音と共に引き金を引く

「蒸血！」

『M I S T M A T C H : : コ ・ コ ッ ・ コ ブ ラ : : i ・ コ ブ ラ : : F I R E !!』

現れたのは嘗てハルトも変身した星を滅ぼす赤い蛇

「ブラッドスターク…この姿にはなりたくないが…足止めはさせて貰おうか」

「だったらコッチは！」

『クローズ』

アナザークローズになりビートクローザーを呼び出すと

「成る程、なら此方も」

ブラッドスタークはトランスチームガンにスチームブレードを合体させたトランスチームライフルにする銃と剣を重ねた姿で迎え撃つたのである

ウルスの街 後編

前回のあらすじ

ギルドマスター イルワの依頼でウルスの街近くにある森で消息を絶った者の捜索を依頼されたハジメ一行 それぞれが別ルートで移動し合流を図る中 突如 オーマジオウから派遣された2人の戦士 カイザになる東雲政人とブラッドスタークになった蛇倉宗一と戦闘になったのである

「ふっ!!おらあ!!」

「っ!はあ!!」

アナザーファイズとカイザの戦いは互いに荒々しい喧嘩殺法から来るスタイルからかノーガードでの攻撃という様相を呈していた

「おい答えろ、どこでそのベルトを手に入れた！」

「答える必要はないな！」

「この野郎!!」

『READY SHOT ON』

ファイズフォンXを操作してナツクルを召喚するとカウンターで一撃叩き込んだが

「くっ………このお!!」

『EXCEED CHARGE』

お返しとばかりにカイザはブレイガンにエネルギーを充填 間違いなくカイザス
ラッシュを放ってくる…ならば

「正面から迎え撃つ」

グランインパクトで迎撃と構えると

『スチームショット!』

「があああああ!」

「え? うわあ!!」

吹き飛ばされたアナザークローズがアナザーファイズにぶつかり両者は互いに転がるとカイザスラッシュは空振りに終わる

「お前何してんだ…つてブラッドスターク!？」

「アイツ…強えよ……」

「なら交代するか?」

「ああ…ならアレを使うか！」

「はよ行つてこい」

ナツキは変身解除して慌てて先程 ハルトから受け取ったアタツシユケースを開いてベルトをつける

「させるか！」

「通す訳ないだろ？」

『ゼロワン…シャイニング』

アナザージオウは警戒されていると思うのでアナザーゼロワン・シャイニングホッパの未来予測によりアナザーツインギレードを投擲して邪魔をすると準備は完了

ナツキはグリップ デルタフォンに変身コードを認識させる

「変身！」

『STANDING BY』

そのままベルトのムーバーに装着すると青いフォトンブラッドが包み込み姿を変える

『COMPLETE』

その姿は王を守る三人の一角にして原初のライダーシステム
悪魔の技を冠する戦士 仮面ライダーデルタ
変身完了

「うおおおおおおらあ!!!」

「っ！」

ナツキはデルタになるとそのままカイザへ接近しながらデルタムーバーに更なる音

声を入力する

「フアイヤー！」

『BURST MODE』

「っ！」

『BURST MODE』

両者 フォンブラスターから放たれた銃弾を浴びながらも接近戦の間合いに入ったのである

「……………マジか」

「大マジだよ……………ブラッドスタークなら！」

『ビルド』

「残念だが俺の前にビルドの力は無意味だよベストマッチの対策は済んでいる…初見殺しも意味はない」

「安心しろ、初見殺しするだけだから」

「話聞いたか？」

アナザービルドが取り出したのは2本のスマッシュボトルを飲み込んだのである

「何してんだ…」

「水泳選手、弓道……ベストマッチ！」

そしてオリジナルよろしくレバーを回すと能力発動

「お前まさか…」

「はあ！」

アナザービルドはそう言うのと地面をまるで水の入るように飛び込みながら泳いでいけと突如高く飛び上がり手から現れた弓形エネルギーを引き矢を放ったのだ

「グア……なんだ今のは」

「驚いたかアナザービルドはその辺にあるものをボトルに入れて使うことができるんだよ」

『その辺に水泳選手と弓道の要素が……?』

「こんな事もあるかとかとh e a v e nの素材にした奴らから成分奪っておいた!!」

正に外道である

「は……俺を前に能力を話すなんて馬鹿なことだな!」

「え……っ!お前まさか!!」

『エレキスチーム！フルボトル！』

「これでも食らえ!!」

『スチームアタック!!』

「ガアアアアア！」

雷を帯びたロケットボトルの一撃をモロにくらい倒れてしまうとアナザービルドは転がりながら体のダメージを回避する為に新しいアナザーウォッチを使いダメージをキャンセルした

『ゴースト』

アナザーゴーストになってダメージを消すと変身解除して警戒を強める

「つぶねえな…」

「へえ本当にアナザーライダーを切り替えられるのか噂に違わぬといふべきかな」

「ああそうだよ……そう言うことか……」

この臨機応変さ、此方の能力を熟知し、何よりブラッドスタークって事は

「テメエ……まさかブラッド族か!!」

「そこまで気づくとは流石は怪人王かな」

「当たり前だ!あのエボルト、キルバスを排出した宇宙からの侵略的生命体を放置できるか!!」

「同族の問題児筆頭の2人と比較するなよ!!つたく……けどさっきの攻撃で測ったけどハザードレベル3.6こんなものなのか魔王?」

「え、うそ…俺のハザードレベル低すぎ……っ！」

『まあ感情の振り幅が小さいからな』

ーどゆこと？ー

『この間の事件でアナザーソロモンになった時…レジェンドライダーが目の前にいた事でお前の精神力は最高潮に高まっていた時のような強化があればハザードレベルは上がるぞ』

ーああ、今はノリノリじゃないから弱い訳だー

「まあ戦いはノリの良い方が勝つだからな」

『そもそもハザードレベル云々でブラッド族と張り合うな埒が開かない』

ー分かってるよ、誰が釈迦に説法するかー

ハルトの得意分野は手数で押しつぶす事であるならばブラッド族相手に取る最善手はアナザーグランドジオウだが…

ーこの世界で使うのは不味いかなー

時ではない…少なくとも今使うのは色々不味いとの判断だ……なら俺にある力を使うならとバグヴァイザーを取り出して解放する

「培養」

『infection::the bugster』

「コッチだな、なんか私服並みに馴染むわ」

「ゲームデウスだと、そんな馬鹿な！」

「こうでもしないと意味ないじゃん…くらえ！クダケチール!!」

魔法攻撃をブラッドスタークは回避するが

「逃すかよ、モータス！」

「イヤッホー！」

「くっ！」

バイクに乗るモータスの体当たりを回避して隙が出来たな…ならば

『鋼鉄化！マツスル化！マツスル化！』

ーパラド、久しぶりに力借りるぞ！ー

『ああ！心が躍るな！』

パーフェクトノックアウト それに宿る力 エナジーアイテム使用と…防御システム貫通だ！

「ぶち抜け……紅蓮爆龍剣!!」

そのままデウスランパードを振り抜くと赤い龍と共にブラッドスタークは近くの樹木に叩きつけられると

「つつても、スライムになるんじゃないか？まあ良いや…これで終わりだ!!」

ブラッド族は学習能力が高いから放置するには危険だ！と技を発動しようとするが

「そこまでだ」

この威厳と覇気は間違いない

「オーマジオウ!？」

「久しぶりだな、若き日のハルトよ」

「呼び方変わってる？」

「矛を納めろ、それと貴様の妻には指一本触れていない我が誓おう…あのカイザギアは元から奴のものだ」

「……………分かりましたよ貴方がそこまで言うのなら…ナツキ！そこで終わりだ!!」

「3821!」『ジェットスライガー come closer』

「辞めろ言ってるでしょうが!!」

ハルトのハリセンが彼の動きを止めるが

「何してんだコラア!!」

「あ…何調子乗ってんだ締めるぞ？」

「ごめんなさい!!」

デルタギアの副作用 闘争本能を刺激する機能デモンズスレートにより興奮しているのだがハルトの圧力で正気に戻ったのであった

「政人も辞めろ!!」

「……………」

取り敢えずカイザも変身解除して2人はオーマジオウの隣に立つ

「誤解があつたようだな」

「いや俺がキレたのが悪い…」

「気にするな愛する者に何かあったとなれば冷静さを失うのも当然よ」

オーマジオウは寛大さを示して

「んで、この人たちは？」

「お前の援軍にと思って派遣したものよ」

「援軍？」

「そうだこの世界は未来のお主が仲間と共に邪神と戦った世界、その結末は今では語らぬがな……」

「……………ん？おい待てオーマジオウ、アンタまさか全部知って……」

「我と対等以上に渡り合える新たな宿敵、影の魔王の登場への祝福だ」

「……………はい？」

おい待て今なんて言った？新たな宿敵だと？誰が？

『お前だろ？』

「いやいや待て待て待ちなさい！俺はアンタと戦うつもりなんてこれっぽっちもないけど!？」

「だろうな、だが我は貴様…常葉ハルトを一人の王と認めた…この世に王は一人で十分であろう？我のライバルに相応しきものよ」

その言葉は他ならぬオーマジオウが送る賛辞に他ならない…今まで進んだ道を他ならぬライダーの王が認めてくれたと言う事だ

お前は自らが倒す相手に相応しいと

ならば迷う意味などないだろうならば

「俺が……か……ふふふ……はーっはははは！良いだろうオーマジオウ！覚えておけ俺は貴様の玉座を奪い魔王として君臨する!!」

「ほお期待しているぞ、我を倒すと謳う貴様ならばショッカーなど傘下に加えるのも造作もないだろう?」

「当たり前だ！俺は！この世全ての怪人達を総べ仮面ライダーと相対する影の魔王!!」

『あ、相棒?』

『おーい……』

「この俺 常葉ハルトが世界を支配する!!さあオーマジオウ！恐怖しろそして慄け！貴様を一切の情け容赦なく討ち滅ぼし玉座を狙う新たな宿敵の誕生にな！はーはっはははは!!」

テンションが天元突破しているハルトに対して

『相棒!?ノリと勢いで行きすぎてるぞ!』

『ダメだ頭がハイになってやがる!!』

余談だがやはり見ていたショッカーの面々、我等になんて舐めた口を!とか思う面々もいたが大半は

【オーマジオウに宣戦布告してるよヤベエな】
であつた

「成る程期待しているぞ、若き日のハルトよ」

それだけ言うとオーマジオウは鐘の音と共に自分の世界へ帰った

――

2068年

「魔王様！何故あのような暴挙を!!」

「落ち着けカッシーン、彼奴はな」

「彼奴は？」

「そう…褒めると伸びるのだ…褒めた時の伸びしろが凄くてな…昔から何故かハルトの奴は我や仮面ライダーが褒めたり認めると壁を破った際の成長幅が大きいのだよ」

「そんな子供みたいな理由で敵を増やしたんですか!？」

「まさか、我は…いやコレは彼奴も気づいているだろう」

——

「……………あれ？俺…まさか今オーマジオウ相手に宣戦布告した？」

『考えてから喋れ!!』

数分後

「やっちゃまったああああ!!!」

「いやわかってたつもりだったけど、お前があそこまで馬鹿とは思わなかったぞハルト」

ナツキも流石に哀れという目で見るとは思わなかった

全力で頭を抱えて両膝をつくほどの後悔したのは言うまでもない

『アホ』『馬鹿』『脳筋』

「わかってらいい!!…んで今更だけど君達誰?」

「あ、ああ…まさかの展開過ぎて固まっていたよ」

「まさかオーマジオウに宣戦布告するなんてな」

「ちよつと前にも実は一回やらかしてんだ」

「前科持ち!?!」

『懐かしいなあ…今思えばアレは俺達を守る為に喧嘩を売ったんだよなあ…』

「まあ責任取れとか言う理由で喧嘩したなあ…そーそー… 本当あの時よく死ななかつたよなあ…今度は死ぬかも…」

と全員がしみじみしている中で

「話が進まないから自己紹介!!」

「俺は蛇倉宗一、本名はナーガ…アンタの察しの通りブラッド族だ」

「やっぱりか……やっぱりパンドラボックスとかライダーシステムとか知ってる感じ？」

「というよりエボルドライバーは俺が作ったからな」

「ん？ごめんもつかいお願い」

「エボルドライバーは俺が作った」

「……………お前がスカイウォールの……全ての元凶か!!許さん!!」

「ハルト……話がややこしくなるから後にしろ！」

ナツキのハリセンでハルトは動きを止める

「へい……けど技術者は嬉しいな」

「そして、もう一人は」

「東雲政人、仮面ライダーカイヤだ…念押しするぞ俺を草加雅人と勘違いしたら許さない!!」

「それはさっきの流れで学んだよ…悪かった」

「いやこっちも…けどデルタギアは其方で作ったのか?」

「おうよ因みに帝王のベルトもある」

「っ!!」

数十分後

「オーマジオウに王にしてライバルと認められて興奮したまま俺は悪を総べる王になる

と宣言し、お前の玉座を貰って俺が世界を支配する！って宣戦布告しちゃったんで宜しくう!!」

「「「「……」」」」

開いた口が塞がらない幹部陣と

「あ、後ね新しい仲間も増えたから仲良くしたげてね!!」

あっけらかんと笑うハルトに対して

「ハルトさん正座しましょうか?」

「はい」

ベアトリスは笑顔のまま庄を放ったので正座をする…流石にと反省はしているが

「いや何をやっているのですか我が魔王!?!」

「ノリと勢いでやって良い事じゃないよ!!」

「ナツキ、貴様はあの場では錯乱するハルト様を止めるのが貴様の仕事であろう!」

「俺じゃねえよ!それは四天王の仕事!!」

「さ、流石の妾も驚くしかないの:いやしかしなんとまあ:」

「大丈夫だ!」

「どの口が言うのじゃ!ハルト坊の大丈夫はカケラも信用できん!!」

「酷くない!？」

「では、一体何を根拠に!？」

「俺のお婆ちゃんが言っていたんだ」

「おお…陛下に最低限の倫理観を植え付けた聖人君子のお言葉…」

「確かに…あのハルト様を制御できる存在だから…」

その人がハルトに残した言葉とは

「『ハルトはやればできる子だから大丈夫と』」

「そんなふんわりした理由でライダーの王に反旗を翻したのですか?」

「やれば出来るでオーマジオウ倒せたら魔王ちゃん本当に何者なんだよ!!」

と慌てる面々もいれば

「お……お……何というか事だボスが遂に……世界征服を野心に抱いたのか!……それにオーマジオウ公認のライダー世界最大の悪の組織と認められた……よしボスでは直ぐにシヨツカーを傘下に加えよう策謀ならば任せておけ!!」

「正当なライダーの歴史を継承する魔王様が立ち上がった!!こんなに嬉しいことはない
!」

「ああ……俺は一生ついて行くぜ!!」

「はい!!僕も付いて行きます!!」

ネガタロスとフィーニスは感動で泣いていたが

「よし……取り敢えずハジメ達と合流しようか!」

「現実逃避しないでください!!……ん?」

ウオズの視線は宗一……具体的にはその私服である　そこには『親しみやすさ!』と書かれた文字Tが

「あの……何で……それ着てるのですか?」

「俺の趣味だ」

「ほお……」

その時 ハルトの瞳はキラキラ輝いたのであったが

「良いセンスだな…ふむ、ならば見よ！この俺の文字Tを!!」

そこには『威風堂々』と書かれたTシャツが…

「……………」

お互い何かを感じたのか無言で通じ合い固い握手を交わしたのだ

「嘘でしょ、魔王ちゃんと同じセンスなの…」

「なんて悪夢だ」

「うわあ…宗一と同じセンスの奴がいたのかよ」

家臣団は頭を抱えたのである

ウルの街

「なあハルト、そこの2人は誰だ？」

「ああ紹介するよオーマジオウから派遣された俺の味方だ」

「宜しく」「どうも」

「あ、ああ……ん？オーマジオウ!? いたのか!!」

「いたよ、俺にアイツ等を預けたら帰ったけど」

「そっか……」

会いたかったようでガクリと落ち込むハジメであった

「んで褒められて調子乗った勢いで宣戦布告してきた」

「何してんだ!？」

「ん〜…ノリと勢い？」

「そんなので喧嘩売って良い相手じゃねえだろ!!」

「安心しろハジメ君、その辺は理解している…まずは俺達のレベルアップだ…迷宮攻略と並行して迷宮に眠るだろうライドウォッチを集める事だな」

「取り敢えず此处で飯にするか…腹減ったし」

「だなく俺も偶にはゆっくりしたいし」

「我が魔王、今日の夜はすき焼きを所望します」

「そう言うと思つて既にリーガルマンモスの肉を解体してる……それを十黄卵で食べるぞー!」

「「「「おおおおお!!」」」」

「つしゃあ!失礼します!!」

カランカランとベルが鳴り全員が席に移動すると

「南雲くん?」

「あ?先生?」

何か子供が話しかけてきた

「いえ人違いです」

と否定した、成る程訳ありか…なら俺達は

「皆、席着いて食べる奴決めようぜ俺が奢ろう」

メニューを開きながら話を聞き流していると

あの人はハジメの担任らしい、んで迷宮から生還したのを喜んでるがハジメはクラスメイトなんか知った事かという突き放している…ほむ

「所で貴方達は？」

「俺の旅の仲間色々あつて俺達と同じように元の世界に帰ろうとしているな」

「じゃあ貴方達も異世界から？」

「ああアンタ達とは違う方法だね」

巨大戦艦で異世界転移したなんて言えるかよと思っていると隣にいた護衛の騎士が混ざる

「何だ貴様ら愛子が心配しているというのに！」

「アンタには関係ねえだろ？俺も関係ないし」

「関係なくない……まあ薄汚い亜人共を連れている段階で程度は知れているがな、貴様らが何故同じテーブルに座っている、ああ……その耳を切り落とせば人に見えるだろうよ」

その一言で落ち込む面々であるが幹部陣は顔面蒼白となる……言うまでもなくハルトがキレて店が血の海になると

「何だと!!」

「よせ一夏」

何と珍しくハルトが止めたのである、その光景にウオズ達は ありえない！という顔を
をした

「何でアンタ等が驚いてるの？」

宗一が尋ねるとウオズは

「私の知る我が魔王だと…この場合相手を…そう脊髄ぶっこぬきにする筈なのですが」

「え？あの仮面ライダー屈指のバイオレンスな技を？」

政人も嘘だろと言う顔をしていたが

「けどハル兄！」

「争いは同じレベルの奴でしか起こらねえよ、お前はこんな程度の低い奴に向ける拳を

持つな、テメエも人を率いる立場……幹部なら分かれ」

「ハル兄……」

「それに器の小さな奴の言葉なんて聞く価値もない」

「何だと!!」

「考えるスケールが小せえよ色んな奴がいる。強さだ、そんな簡単な事がわかんねえから魔人との戦争で負け続けて、悪趣味な神様に縋って他所の世界から助っ人呼ばないと満足に戦争も出来ねえんだろ？ 間抜けの腰抜けじゃねえか」

「貴様！我等が神を愚弄するか！」

「俺が崇める神達（鎧武、ギーツ）は他にいる、この世界の邪神なんざ崇めちやいねえよ……対して強くもねえのに他人を見下して差別して悦に浸るのが正しいなんて説く神なんざこつちから願ひ下げだ！、いらねえんだよそんな腐れ神」

それは少なくとも誰かのために変身し、人の希望となつた英雄達への冒瀆に他なら
ない

「つーこの異教徒がー」

聖騎士が剣を抜くと同時にハジメがゴム弾を発射して騎士を黙らせた

「やり過ぎだ刃傷沙汰になる所だったぞ」

「いやいや事実言つて逆ギレする方が問題でしょ、それにな…大事な仲間が目の前で馬鹿にされてんのに立ち上がらねえ王がいるかよ」

「いやさっきの云々は良いのかよ」

「当たり前だ俺が日和つたら負けだろうが、テメエ等の前でカツコ悪い姿を見せられるか」

全員がアングリとしているも幹部陣はやれやれと肩を竦める

「全く我が魔王は」

「本当に……」 「やる時はやる男だな！」

「それでこそ我等の魔王様です!!」

「へ？魔王？」

「何か異世界の魔王だとさ……まあ魔王は称号みたいなもんなんだと」

魔王と聞いて聖騎士達が身構えるが

「あ？何？」

ハルトの庄に武器を下す

「取り敢えず食事だな…すまない店長迷惑料も込みで払わせてもらおうぞ」

そしてハジメ君はクラスメイトと談笑　男子勢はユエやシア、ベルファスト達に視線が向く気持ちはわかるが何か複雑である

んで聖騎士達はハジメの武器に興味を持った曰く　使えば兵士の犠牲が少なくなるとか仲間のためとか　だがハジメは拒否　そもそもこの世界の人間に此方の技術を渡すのは危険だという意見には全面賛成（シンフォギア　世界にライダー技術をばら撒いた前科ありなので）した

食事も終わり　そろそろ帰りたいのだが先生はハジメに話を聞きたいのか離そうともしない…ので

「ハジメ君、説得は任せた」

「はあ……わかった」

取り敢えずハジメに丸投げして俺達は帰途につく途中聖騎士から恨みがましい目で見られたが平和に笑顔で圧をかけてみると顔を真っ青にして腰を抜かしていた

「はあ……ズ集団並みの圧しか出してないのに怯え方やべえな……ウチの連中なら笑って流せる程度の圧なのにな」

「我が魔王……普通の人間から見たらズ集団のグロンギは出会っただけで絶望な敵ですよ……森で野生のクマに会うくらいの絶望がありますよ」

まあズ集団でも拳銃の弾が効かないからな……けど

「ズ集団はクマか……まあ確かにゴオマ級の圧にビビるようじゃ逢魔とは戦えないな」

ハルトは肝心な事を忘れていた

今のゴオマはハルトの眷属となった影響でスペックが向上しており常時ダグバの破片を取り込んでゴ集団と戦える究極態（暴走しない）と同じ能力を有している事を…
何気にゴオマもこの世界に現れたダグバ並みの脅威になることを

そしてそんなゴオマをワンパンK.O出来るハルトの物差しがバグっていることを…

その後 ハジメ君は夜に先生の所へ向かい迷宮で何があつたかを話したと 曰く
自分を攻撃して奈落に落とした奴がいると

以外と彼は敵対者には慈悲はない！とか思つてたのに義理堅いなど感心していたの
だがハルトが極端なだけである

翌日

「何で先生達がいるんだ？」

何故か先生とハジメのクラスメイト達がい

何か聞けばハジメから全部聞くまでついて回ると、だからついていくと馬に乗っている

「うわぁ面倒」

「置いていくぞ」

クラスメイトの1人も噛み付くが此方は車なのだ速度が違うのだと…クラスメイト達も車に乗って近くの山道付近まで移動すると

「さて歩くか」

うわぁと言う顔をしているが全員慣れたような顔をしたがハジメとハルト達は軽口叩きながら移動を開始した

までは良かったが流石の担任やクラスメイト達はバテバテになったので近くの小川で休息とした

ハジメはミレディから貰った鉱石で製作したアーティファクトを使って上空から人探しを始め

ハルトも助けようと取り出したのは

「おお！それはディスクアニマルじゃないか！」

「質より量だろうか？よーし行つてこい！」

音叉で清めの音を流してディスクアニマルを野に放ち、後は手がかりが見つかるまで待機……ふむ良い機会だ

「お前たち座つてくれ」

仲間を集めて全員が各々座ると

「俺達は今後の共闘するに当たつて必要なことをしてなかった、この時間を気にやつていこうと思う」

「それは何でしょうか我が魔王？」

「ふふふ……それはな……」

全員が固唾を飲んで待つとハルトは真面目な顔で一言

「自己紹介だ!!」

「いや大事だけでも!!」

ナツキもツツコミが板についてきたのである

そしてメンバーが自己紹介して交友を深める中

「あ、ハジメ君！君に渡すものがあつたんだよ」

「何だ？」

「ふふふ、コレだ」

「へ、これは!!」

そこにはゆの顔が刻まれた携帯電話とドライバーのセットがあつたのである

「俺変身できないな」

「安心してくれ、逢魔のベルトは人間でも使える仕様かつ原作再現が可能だ!」

「何だと!」

「そして君にはバイクをあげよう」

すると空から現れたのはロボット…否!頼れる相棒!オートバジンであつた

「おおおおおー！」

ハジメが興奮する中、周りが良いなああって顔をしていた時、ハジメは偵察機から探し人が見つかったと連絡を受けた

全員で移動して駆けつけ無事に保護！までは良かったのだが…

「に、逃げてくださいアレが来る前に！」

「あれ？」

「ハジメ…あれ」

「あ？」

その先に現れたのは漆黒の竜であった

!!!
!!!

天高く響く咆哮を上げると高熱のブレスをハジメ達目掛けて吐き出したのであった

悲しい生き方

前回のあらすじ

オーマジオウにライバル認定されたハルトはノリと勢いで宣戦布告するというライダーの歴史において類を見ない愚行を犯してしまいが新たにブラッド族の宗一、カイザになる政人を仲間を迎えハジメの依頼である人探しをしていた

そして無事に発見と安堵した時 彼を襲った黒竜が現れ、そのプレスが襲いかかったのである

だが

「ある日、森の中ア…ドラゴンに……」

「出会ってしまいましたね」

「だな……………ん…」

ハルトはあくびしながら魔法陣で防御する

「俺、本当にドラゴンに縁があるな」

「良いではありませんか竜は富と権威の象徴として扱われますし」

「だとしてもだろ……………あ、ジャンヌも竜の魔女って呼ばれてたな操ってもらおうか？」

ドラグレッターやデロウスなどなど俺と竜の宴は深いと思う、取り敢えず思うのは

「素材の剥ぎ取りな」

「ああドラゴンの素材は昔から高価だと相場が決まっているしやるか」

「ジークフリート案件だけどやったらあ!!」

とことんゲーム脳であるハルトとハジメは置いといてユエとシアは戦闘開始ハルト達は

「行くぞ政人」

「ああお前も足引つ張るなよ」

「おい待てよ、そのベルトで変身するなら俺も忘れるな」

「ハジメ？」

「見てろユエ、俺の変身」

3人はライダーのベルトを腰につけると2人は携帯を操作して変身コードを入力する

5・5・5 ENTER standing by
 9・1・3 ENTER standing by

「変身」

『standing by』

『『COMPLETE』』

3色のフォトンストリームが体を覆い淡く光ると その姿は紛れもなく歴史に名を
 残した戦士達である

仮面ライダーファイズ

仮面ライダーカイザ

仮面ライダーデルタ

アークオルフェノクを倒した三傑が揃った瞬間である

「お、俺にも変身出来たぞ！」

「そりや俺の嫁の力作よ、当然さ」

「アンタの嫁って何者だよ…スマートブレインの人だったりするのかわ？」

「いいや、一人で世界と戦おうとした錬金術師や世界を変える為に戦う天災兎かな」

「複数形？」

「そのバカ、既に何人も嫁がいるんだよ」

「お前が言うなよ同じ穴の貉が!!」

「うっせえ！お前よりマシだろうが!!」

「ナツキ、アンタもか」

「話はある「おい！」一先ず倒すぞ！3821『ジェットスライガー come close er』っしやあ！」

「行くか」『BATTLE MODE』

「よし頼む一緒に戦ってくれ」

「!!!」

2人はジェットスライガー、サイドバツシャーとそれぞれの専用マシンに乗り込みオートバジンもバトルモードで竜と空中戦を行う絵面は完全に劇場版だ

「よしハウンド、いくぞ」

「イエツサー！」

「お待ちを」

ハルトはアナザーウオッチをハウンドはサイガフォンを構えたのだがベルファストが待ったをかける

「ベルファスト？」

「そう言う事でしたら私も参加させて貰います」

ベルファストが取り出したのは青いスマートフォンとドライバーである既にアプリを起動して待機状態だ

「よし、んじゃ三人で行くぞ！ウオズ達と宗一さんは先生さん達の護衛を！」

「お任せを！」

「何ですか！僕のアナザー1号なら「フィーニス！」分かりましたよ」

「クロスウィザードお願い！」

「任せてよ一夏!!」

いや、お前何でもありか

『お前が言うな』

「ですよねえ…よしやるか」

3・1・5 ENTER

6・6・6 ENTER

「変身」

『COMPLETE』

2人の体に青いラインとフォトンブラッドが流れると変身を完了する

仮面ライダーサイガ

そして次世代の戦士 仮面ライダーミューズ

「ふふふ」

「え？新しい仮面ライダー!?!」

「マジかよ!」

「では参りますわ予測AI起動!」

その予測では黒竜の横薙ぎのブレスが全員を焼き払うと出たので

「ハウンドさん」

「お任せを!」

フライングアタッカーを使ってフォトンブラッドの弾丸を顔面に浴びせて攻撃をキャンセルした

「BAD回避ですわね」

「お見事」

ミューズはベルトのアプリを起動して予測AIから相手の行動パターンを予測する
これがスマートブレインの新技术である

まあ流石に飛電インテリジェンス並みの演算ではないのだが、問題ないくらいの戦闘力は有している

そして現れるは地の帝王

『オーガ』

アナザーオーガ 現る

「うーん……何か足りないな……」

『いやそんなことはないぞ?』

「そうか分かった!オーガコールだお前たち!!オーガコールで盛り上げろ!!」

『何だその理由!?だが仕方ない!お前達!!』

『やるぞ!せーのの!!』

『オーガ!オーガ!オーガ!!』

最早手慣れたとばかりにアナザーライダー達はオーガコールをする気分最高で

「は、はははは……はーはっははは!そうだこれだ……力が漲ってきたあー!」
『マジか』

「は、ハザードレベルが急上昇している…何！ハザードレベル6. 2だとお!!何て振り幅だ!」

「この感情の昂りでの成長、これが魔王なのか!」

「はーはっははははは！雑魚め悲鳴を上げろお!!」

『いや単純すぎて逆に怖い』

『相棒…お前……やっぱりバカだろ?』

ハルトのテンションが天元突破したのである　こうなったら何でもありだ

「盛り上げるぞ、来いデロウス!!」

『ドラゴライズ!!』

「!!!」
「!!!」
「!!!」
「!!!」
「!!!」
「!!!」
ウイザードの魔法陣を潜ると逢魔で暇してたデロウスが現れたのである

久しぶりの出番に喜ぶ咆哮と目の前に現れた黒竜：成る程

「やれ」

主人からの短い命令に委細承知とばかりに襲い掛かる体当たりして山に叩きつけると口からレーザーを放つが黒竜はブレスを放ち僅かながらに軌道を変えて回避する

「何だよアレ! 何処からきた!？」

「俺のパートナーアニマルのデロウス」

「デロウス……まさかグルメ界の八王か!？」

「なんて奴をパートナーにしているんだ…いや待てよ確か未来のこいつのパートナーはギドラだった筈だぞ！」

「ああアレはその子供だよ、親と喧嘩したら認めてくれて預けてくれたんだ…ちよつと待て、ギドラって…まさかキングギドラか!？」

「ああモンスター0と呼ばれて南極で寝てた奴を叩き起こして従えたんだ…拳でな
！」

「モンスター0って海外版のゴジラで出たキングギドラか!?俺スゲエな、つか、あれとい
るのか」

「というより喧嘩!?八王と!？」

「本当に怪物だな!!」

「まあな!…しっかし変だな」

「変なのはお前だよ！」

「いやデロウスを見て恐れずに暴れるなんて：奴の捕獲レベルが以下ほどかは知らないが八王の系譜に連なる者へ恐怖もなく襲い掛かっているとか野生動物としての本能がイカれてるのか？」

『イカれてる相棒に言われちゃおしまいダロ？』

『そうだな』

「なんだとコラア!!」

「ん？どう言う事だ？」

「んー何というか：本能以外の理由で動いてるとか？」

「それって…あの竜は操られてる？」

「かもな、だから解けば戦意をなくすかも憶測だけどね」

「解けるのか？」

「心当たりはある」

「十分だユエ！シア！」

「分かった」「了解ですう！」

2人は氷の魔法で黒竜の足を凍らせ、

「おーーりゃあ!!」

シアの武器 大型のハンマー ドリユツケンで黒竜の頭を強く殴りつけて地面に叩き落としたのである

「よしデロウス待機してて」

デロウスは口を開けてレーザーをチャージしているこれで消し飛ばせるだろう後は洗脳を解くだけなのだが

【あーーーーー!!】

何か艶やかな声が聞こえたのである……へ？

視線を向けるとファイズが竜の尻にパイルバンカーを打ち込んで……いや何してるの

!!

「いや。強化された力を試したくてな……まさかあの鉄杭がこんなに軽く感じるなんてな……」

「いや、あんなの刺されたら竜が死ぬわ!!」

【お、お主達よ、やめてたもう!!】

「え？やっぱり人語を話してるのは…この竜？」

【そ、そうじゃ…頼む！迷惑をかけたことは謝るからお尻のそれを抜いてたもう!!】

何か必死だな、いやまあそりやそうだなと遠い目をしていると

【考えても見てくれ！己の尻に太い鉄杭が刺さっておる光景を!!】

全員顔が青ざめたのは言うまでもない

「なんか可哀想になってきた」

「喋る竜…貴女まさか竜人族？」

ユエの話だと絶滅したとされる伝説の存在らしい

【そ、そうじゃ話せば長くなるのじゃか…そろそろ魔力が尽きそうなのじゃ…事情を話すから助けて欲しいのじゃが…】

「と、取り敢えずハジメ君、引き抜こうか…痛みで目覚めたから洗脳解く意味無くなったし…あとデロウスもレーザー引っ込めて」

2人を宥めて、取り敢えず

「よいしょっと」

杭を引き抜いた

【あふん！】

それだけ言うと黒竜は光と共に人型に戻った…その姿は正に黒髪和服の美人、何より目がいくのは胸部のメロン…おっといけないベアトリスが首に剣を添えている

「ハルトさん、どこ見てました？」

「別にどこも？」

「ほほお……」

「聖剣で叩くなよ……」

「ふん!!」

雷鳴剣で頬を叩かないでもらえますかね？ビリビリして痛いから

「何だ嫉妬か？」

「ハルトさん？」

「ごめんなさい、けど」

！
ナツキは和服美人のメロンをチラチラ見ている、ふむパシヤリ……証拠 ゲットだぜ

「おい待てハルト、今の写真は消せよエルフナインに送らせねえぞ!!」

「わーったよ、エンタープライズに送信だ!」

「待てやコラア!!」

取っ組み合う2人を尻目に竜だった人が挨拶する

「た、助かったのじゃ異形の者よ……あのままでは新しい世界の扉が開いたところじゃつた……」

「それ開いたらダメな奴だな……何とまあ……」

実際本来の歴史なら開いてしまうのは何とも言えない話である

「失礼した妾はテイオ・クラルス、そちらの吸血姫が言つてた通りの竜人族最後の生き残りクラルス族の一人じゃ」

その挨拶を聞いてヤクヅキが震えながら叫ぶ

「こやつ…一人称が妾と被つておるぞ!!許さん今消さねば妾のキャラが危ない!!」

「ヤクヅキ先輩!ステイ!!」

そしてテイオから聞いた話はこんな感じ

何でも竜人族は人里離れた場所で外界との交流を絶つていたが、ある日 ハイリヒ王国から巨大な魔力反応を検知（ハジメ達 came）して調査も兼ねて人里に came との事だが

「疲れて寝てしまつてのその隙に操られてしまつたようじゃ」

聞けば竜は一度寝ると中々起きないらしい、その隙を突かれたのだと

「そんな…なら僕たちを襲つたのは！」

「そうじゃな結果とは言えお主の仲間に手をかけたその事は事実じゃ、咎は受けよう…だが暫しの猶予をくれぬだろうか？」

「っ!! 貴方のせいで皆は!!」

「アホじゃねえの? 弱い奴は死ぬのが自然の摂理じゃん」

「貴方は…:自分の仲間が死んだ時に同じ言葉が言えるんですか!!」

「言わない、だつて俺が殺させない…:俺は強いからな」

「っ！」

「連中も仕事でボンボンのお前守って死んだんだろ？あのさ、この世の不条理は全部当人の能力不足だ……それを棚に上げて人に当たんなよ身の程を弁えろ痴れ者が」

そして聞けば竜を洗脳した者は ハジメのクラスメイトの可能性が高いらしいがな

「と、所で異形の者よ……あの竜は何なのじゃ？」

「ああアレはデロウス、異世界である牙一本でこの世の頂点に君臨したとされる竜の末裔だよ俺の大事な仲間さ」

「なんと……ならばそれを従えるお主は一体……」

「彼の名前は常葉ハルト、異世界で魔王と呼ばれている者です！」

「魔王じゃと？この者が？」

「疑うのも無理はありません、平時では民の為に炊事をしているのですから」

「しかも作る飯が凄く美味いんだよ」

「この間のフライドチキンは美味だった！」

「うむ、妾はこの間のクラムチャウダーが」

「俺はラーメンと餃子、半炒飯セットだな」

「「ああ、分かる分かる」」

「お前等！そこは俺がいかに優れた王なのかを話す場面だろ！普通に飯の感想を言っただけでどうする！！」

「我が魔王が他の王より素晴らしいと思うのは、そのノリと勢いでやらかす行動力と料

理の技術だけです!!」

「後はダメダメだしね」

「その通り!!」

「お前等不敬——!」

「それ魔王か?」

「まあ戦場に出れば数万の屍の山を笑いながら作ります」

「魔王じゃった!!」

「この世界の魔人族の王という意味での魔王ではありません、まあ称号のようなものですね」

「弱いのか？」

「さあ？1人で何万の敵を笑いながら倒せる程度だしね」

「ジヨウゲン、人はそれを化け物と呼ぶぞ」

「ジヨウゲン、カゲン：今日のフグ鯨には気をつけるよ」

「ちよっ！毒の処理はちゃんとしてよ！」

「待てジヨウゲン！…と言う事は今日の夜は！」

「ああ今日は依頼達成記念にフグ鯨の刺身と鍋に天ぷら！そして一夜干しとヒレ酒だあ
!!全員分あるしおかわりも許すぞ!!」

「「うおおおおお!!!」」

「逢魔の福利厚生は最高です!!」

「時折このように慰労してくれるのだから逢魔は辞められない!」

「魔王ちゃんは本当に良い魔王ちゃんだよ! 素晴らしい為政者だ!」

「今日の夜は豪勢じゃな!!」

「お前等、手のひらにドリルアームでもついてんのか?」

「な、成る程の…その奇妙な鎧の戦士や武具も異世界のものなのかの?」

「あ? テメエ、仮面ライダーが奇妙な鎧の戦士だと?」

『ready』

「お前…許さねえ……やっぱり悲鳴を上げろお!!」

アナザーオーガはアナザーオーガストランザーで必殺技を放とうとしたがサイガに

止められる

「落ち着いてください陛下！」

「離せ!!」

「BAD回避ですわね、気をつけてくださいね」

「わ、分かったのじゃ…しかしあの殺気…なんじゃこの感覚は？背筋がゾクゾクとする…何故じゃ？妾はもつと浴びたいと思っておるのか…ふむ済まないもう一度先程の圧をぶつけてくれぬか？」

「ダメですよ！その折角閉じた扉ですから閉めたまままでいてください!!」

とベアトリスが懸命に止めていたのは言うまでもない

そして変身を解いて全員が一息つく

「んじや目的も果たしたし帰るか……なあオートバジン乗って良い？」

「どーぞどーぞ……ん？ 茜鷹？ どしたの？」

「何か見つけたんじやないか？」

「まさかお宝か!! よし再生……」

空から来たのは先程偵察に飛ばした茜鷹であるハルトの手のひらにのるとディスクに戻ったので音叉を介して録画映像を見るとそこには

「つと、ん？………な、何じやこりやあ!!」

地面を埋め尽くす魔物の大群がいたではないか

「ハジメ君！」

「おう、こつちでも視界に入ったぞ…何だ、この数…ざっと数千はいるな…いや待て桁が増えるぞ…成る程な群れのボスだけ洗脳して部下も率いてんのか効率的だな」

「けど、なーんだ数万程度なら俺に任せろ「陛下お待ちを」何だよハウンド？」

「この状況、地形から考えますと殲滅は難しいかと思われまます」

「何それ、俺が取りこぼすとか思ってるわけ？」

「滅相もない、ただ陛下が暴れた場合…山が消し飛び溪谷になる可能性があります」

「「「「ああ…」」」」

「え？そこの心配？」

納得する面々だがハウンドはチームで唯一軍事訓練をされている故のプロ目線の意見を言う

「この状況の場合、地雷を仕掛けてのゲリラ戦で遅滞戦闘するならば問題ありませんが地形的に別動隊の可能性もあります包囲される前に街へ撤退するのが宜しいかと、ならば退路もございますし街のものへの避難誘導も可能です」

ハウンドの意見は最もだ、山を包囲されたら突破は難しい　ハジメや俺達は問題ないが担任やらクラスメイトやらが死ぬだろうし街に行くのが賢いかな街にいる民間人？　そんなの知らん

「であるか、なら早く撤退するぞ…の前に嫌がらせはしておこうウオズ、デロウス」

「はっ！」「!!」

「嫌がらせだ、やれ」

「お任せを」『ファイナリー』

アナザーファイナリーに変身すると必殺技を発動

『アナザーエクスプロージョン!!』

「!!!」

空から降り注ぐ流星群とレーザーのエネルギーは十数キロ先にいた魔物の群れの先鋒を叩いたのである

これで時間は稼いだぞ！

「デロウスは逢魔に戻れ、よし撤退だ」

「お前たち、早く乗れ!!」

全員が乗り物に乗り込むと全力でアクセルを蒸したのである

そしてウルの街戻り魔物の群れが襲い掛かると説明　最初は疑ってた奴らも愛子が言うならという事で大パニック、上から下への大騒ぎ

街から逃げるだの残って戦うだの何だの色々言ってるが解決策はない、小田原評定とはよく言ったものだ意味のない会議してる暇あるなら動けよ

「ふわあ…」

やる気もねえしなあとブーツと見ていると

「んじや帰るかハルト」

「ん、よし帰ろう」

え？と皆の目線が集まった

「俺達はそいつをフューレンのギルドマスターまで送り届けるのが依頼だ街の運命なんて知った事じゃねえよ」

「ぶっちゃけ好きにすれば？意味ない会議とかするだけ時間の無駄だし、さっさと逃げ支度しなよ」

ハルトからしたら興味もないし依頼未達成とかの方がだるい あの手が難癖つけてくる可能性もあるので早く帰りたいのだ

「っ！強い皆さんがいればこの街も！」

「何言ってるの？」

何か護衛対象が何やら言ってるが

「腕へし折りますよ？多分首から上が無事なら大丈夫だろうし」

「それ依頼対象に言うセリフじゃないな」

政人がやれやれと肩を竦めながら話すと

「確かにハウンドの言う通り包囲される前に行くのが吉だ、貴族なら出来る事あんだろ戦うだけが全部じゃないさ」

に
ナツキが慰めているが泣いている、護衛対象ことウィル・クデタの相手を数秒した後

「俺が慰めてるのに何泣いてんだテメェ!!」

ナツキ デルタの副作用からキレ芸に目覚める

「何デモンズスレートに飲まれてんだ、アホ」

ハルトはナツキの頭を鷲掴んでメデイッククロイミュードの力で除染する

「お、俺は何を…」

「デルタギアは改良の余地ありだな」

「おい待て、まさかあのデルタギアって」

「帰るぞ……やっぱりデモンズスレートの供給量は大事だなく改造しないと」

「あ！やっぱりお前無改造の純正品渡してやがったな!!」

「3本のベルト♪」

「誤魔化すんじゃねえ!!」

するとハジメの説得にと担任が止めに入る

「南雲くんや貴方ならあの魔物を全滅出来るんですか？」

「いや無理だな」

「ん」

「先程車内で出来ると言っていましたよね？」

「は？」

「気が向けばね〜」

実際はアナザーハイパーカブトのパーフェクトゼクターを使えば一撃である……
まあ広い道へ集める必要があるし黒幕諸共消し飛ばすから面倒くさいんだよなあ……

適当に流しておこ、としていたらだ力を貸してくださいと　そして教え子の未来を本
気で案じているように

「貴方は元の世界に帰った後でも愛する者を守る為に力づくで相手を排除し続けるのですか？ 生き方を変えられますか？ その……大切な人以外を一切切り捨てて生きていく、それはその……悲しい生き方だと思います、だから他人を思いやる君の持つてゐる心を忘れないでください！」

何と良いか良い先生なんだと思う、俺の担任なんざ 愚妹のデマに踊らされたかストレス発散かで生徒に混ぜてイジメしてきたからな……やつぱりあの世界に戻つても爺ちゃんと婆ちゃんとあかね一家だけ逢魔に連れてつて後はもう究極の闇にしてやつていいんじゃない？

「なーんかさ俺、あの世界への愛着が薄まってんだよねえ、俺の帰る場所は逢魔で其処には大事な家族と相棒達もいるし」

『あ、相棒！』『嬉しいぞ！』

『そこまで思つてくれたんだな！』

けどさ先生さん

「その悲しい生き方しないと守れないものもあるんだよ……その生き方を選んだから俺は今があるんだ」

誰にも聞こえないように呟くも

『相棒……安心しろ俺達はお前と一緒にだ』

『そーそー、お前放っておくと何しでかすか分からないから不安だし』

「んじゃ。その人間の腕二、三本切り下ろしてフューレンの街に帰還しようかあ」

「陛下」

「何、ハウンド？」

「この街で魔物の殲滅する事を提案します」

「何でだよ、お前が街を守る義理もねえだろ？お前は逢魔の兵士だ逢魔以外の戦いで死ぬなんて許さない……お前達の命は俺が預かってんだ犬死になんて認めない」

「ええですが。別働隊の行動や黒幕がいるとしたらここで叩いておくのが最善です、包囲して逃げた先で待ち伏せや旅の妨害をする恐れもあります、今より細かな部隊運用が出来ないうちに叩きましょう」

「まあ一理あるかフューレンの街まで遠いし、間引けるなら間引くか」

「ええ……私は兵士です戦う為に生まれてきました、ただそれは力無き市民を守る為であります、優秀な兵士は命令に従う……ですが、命令に従う以上に己のやりたい事に殉ずる！それを陛下から我々は教わりました！」

「……………」

「この街にいる民間人を戦火から守る、それが我々兵士のやりたい事です陛下!!」

あの実直な軍人を絵に描いたようなハウンドが

「ここまで言うとは……………ふむ」

「俺は王として仲間の命と安全を考える、それだとハジメに賛成だ」

「……………」

「だが俺個人は別だ。あの魔物の群れは殲滅するよ……………お前等には分裂した時に助けてもらったからな…俺は友達の頼みが聞けない程冷たい王様じゃねえよ」

「あ、ありがとうございます!!」

「つーわけでお前らはハジメと一緒に帰れ邪魔」

「自分は残ります！私は戦友を決して見捨てません！」

「私達も残りますよ、我が魔王を1人放置したら何しでかすか分かったものじゃない」

「見てない所でオーマジオウに宣戦布告したりするからね」

「ハルト様の尻拭いは我らの仕事です」

「魔物の群れとか僕が轢き殺して終わりですよ」

「ウルティマ嬢達呼ばなくて良いのかな？」

「呼ばない方が良いと思います」

「おいおいマジかよハルト、甘くねえか？」

「別にいく俺としては最近暴れたりなかったからストレス発散には丁度良いよね」

「6万の魔物の群れをストレス発散のサンドバッグ呼びか」

悲しくも寂しい生き方しか出来ないから、それを貫くだけだよ　もう奪われるのだけは嫌だ

「笑いながら万単位の敵倒せねえようじゃ、ライダーの王は倒せねえからな……」

ハルトは新たな目標の為にその力を磨く事を決めたのであるならば迷いはない

「そう言えば我が魔王、今日の夜は？」

「この非常時に呑気に飯を作ると思うか？　美味しい酒とフグ鯨の刺身を新鮮なウチに食いたいなら働け」

「お前達！　フグ鯨の為に魔物を殲滅しますよ！」

「「おー！！」」

「つとに現金な奴だな…バカかよ」

「ご主人様の影響かと」

「ベルファスト!?!」

その夜 魔物が来る前にハジメは壁を錬成しハウンド達 親衛隊は塹壕を作り防衛準備をしている

そんな中、ハルトは猪口を片手にフグ鯨の鰭酒を熱燗で飲んでいた

「うん…美味しいなあ流石は次郎さんがシーズンになると必ず飲む奴だな」

『お前はスキルで酔わないよな』

「気分だけでもな…何かね色々と複雑だね」

「隣よろしいですが？」

「カレンが良いなら良いよ？」

「では失礼して」

とカレンは隣に座るとハルトの顔を見て尋ねる

「その…本当に暴れたいだけなのですか？」

「は？」

「私は主と短い時間ですが接してみても思ったのは、貴方は根っからの悪人ではないと言
う事です」

「何言ってるの？俺は魔王だよ必要なら笑顔で無抵抗な敵を虐殺するくらいには悪だよ

「?それとノリと勢いで国の皆を晒さなくても良い脅威に晒してしまったが?」

『信頼と実績があるバカだ』

「本当に悪人なら仲間を労ったりしませんし迷宮攻略だって仲間を捨て駒にして放置します」

「なら俺は悪人だな、ライセン迷宮で罠にハマったナツキを置いて行こうとしたからな」

「まあナツキの扱いに関しては日常的なので問題ない：いやまあアレは可哀想だったが」

「けど助けてくれましたよ?」

「お前がいたからだ、お前は俺の騎士なんだあんな所で犬死にするなんて許さない」

「そういう所ですよ仲間れの口が悪いですが必ず見捨てず諦めず、手を引いてあげる優しい王なのですね本当に」

「うるさい…お前達がいなくなると俺の飯を食べる奴が減るから困るだけだ！アレ全員分作るの大変なんだぞ!!おかわりするから余計に作らないとなのに死んだりしたら食料庫の管理が面倒くさいだけだ」

『え？ツンデレ？』『気持ち悪い』

ーお前等、アナザーWとアナザーゼロワンで焚き火してやれー

『ぎゃあああああああ！』『助けてええええ！』

取り敢えず制裁を済ませたが…

「ええ誰かが傷ついたり、いなくなるのが嫌だから自分だけで戦おうとするのですよね…もしくは共に戦うなら相応でないと認めないと」

「……………」

実際 ハルトはウオズ達は勿論だが非常時には必ずテスタロツサ達、三人娘を呼ぶのは彼女達なら大丈夫という絶大な信頼があるからだ…というより信頼してないと留守は任せない

「私は槍働きしかできない者ですが、それでもその救われた命を貴方の為に使いたい…貴方の騎士として隣にいたいのです」

「はあ…バカじゃねえの救った覚えなんてねえよ貸し借りなんざ忘れちまえ、俺は何貸したとか覚えてねえよ」

「忘れる訳ありませんよ、あの時私達を助けてくれた貴方を…その奥方様達とは違います…貴方の背負うものを少しでも分けてください隣で背負わせてください」

「カレン…」

「主…」

お互いがお互いの瞳を見つめあっていると

—————

2人のやり取りをこっそりみていたナツキとティオは

「くそー！じれったい…俺ちよつとやらしい雰囲気にしてきます!!」

「よし行ってくるのじゃー!ごしゅ…ごほんあの初々しい雰囲気を何とかするのじゃ!!苦いお茶が飲みたくなる!」

「貴方達何してるのかしら?」

「え?あ、アンティリーネさん?」

「昔旦那様が言っていたわ…人の恋路を邪魔する奴は…エラスモテリウムオルフェノクに踏み潰されると」

「イクサナツクルから手を離して!! あいつ、そんな物騒な事言つてたの!?! つかアンタもアンタで浮気しようとしてる旦那を止めろよ!」

「あら? 私はキャロル達と違って旦那様が妻を何人抱えても気にしないわよ?」

寛容であつたアンティリーネである、そもそも

「旦那様は止めようが止めまいがあの人はず増やすわよ? ねえベルファスト」

「その通りでございます、しかしまた一人増やすとは困つたご主人様です」

「カレンさんはその辺の自覚無いと思うけど?」

「その辺に關してはいずれ理解するのでは?」

「てかアンタも止めないのか?」

「私はご主人様が幸せでしたら構いません、何番目の妻でもご主人様の隣にいらるのでしたら」

「かーっ！健気だねえ!!」

「お前も見習ったらどうだ？」

「いやあ俺は……っつてアレ？」

「テメエ、何覗き見してやがる？」

「……………」

そこには笑顔のハルトがいた…いや笑ってないがな

「えーと、そのあのく……………てへ」

「よし、お前にちょうど良い役目がある」

「へ？」

「デイスパイダー」

ハルトはミラーワールドからデイスパイダーを呼び出し糸でナツキを縛りつけると

「ありがとう、これでよしと」

「何が!？」

「お前はハンマー投げを知らんのか？」

「知ってるけど……つてまさか」

顔が青ざめているがアホめ

「そのまさかよ……そーらあ飛んでけー!!」

「ぎゃあああああ!!!」

ハンマー投げされた、ナツキはそのまま星となった

「さてと……ティオさんまで何をしてるんですか？出歯亀なんて悪趣味ですな恥を知ってください」

「あふ……なんじゃ、罵倒され冷たい目で睨まれておるのに、この高揚感は……いかん……何かいけない扉が開いてしまいそうじゃ!」

「取り敢えず後はウオズにでも投げといて俺は……っ!」
『団体客が来たぞ』

「おいおい人が折角気分だけでもほろ酔いしてるのに」

『気分だけ酔っ払いじゃないだろ？年中酔っ払いみたいな思考回路じゃねえか』

ーんだとゴラア!!ー

『大体ノリと勢いでお前やらかすじゃん』

『オーマジオウに喧嘩売るし』

『色々やらかすし反論は？』

ー(ぎ)いません!!ー

「んじやちやちやつと終わらせて、フグ鯨のフルコース作らないとね……あ、毒袋の処理任せれば良かった」

口に放り込めば毒耐性くらい付くだろうと思いつながらハルトは外に出ると

「凄い数……まあ烏合だなクロントルーパー達に比べれば獣の群れなんて恐れる理由

がねえ」

「当然ですよ陛下」

「どうするハルト、あの数お前でも」

「ハジメ君達は遠くから援護してよ、俺が乱戦に持ちこめば街と壁の距離も維持できるし俺を無視して攻めてきた奴の足止めをお願い」

「当たるなよ」

「当たり前でしょ?」

ハルトは不敵に笑うとコネクトでアナザーツイングレードを用意して構えると

「んじゃ行ってきまーす!!」

そのまま跳躍して魔物の群れの中心に着地すると獲物が来た！と襲い掛かる間抜け達は瞬時に千切った二つのアクセサリーをモーフィンングパワーで剣に変えて切り刻んだのであった

返り血を浴びると体に弾ける狂気に身を委ねたハルトは剣を構えて突貫する

「はははは……いゃあー!!」

その言葉を合図に魔物はハルトへと襲い掛かるのであった

「はははははははー!」

笑いながら敵を倒していく姿とその周囲だけ明確に円が出来るほどに出来た死体の山に立つ

「よしハルトが混乱を作ったぞ！撃て!!」

ハジメ達は空を飛ぶ魔物とサークルの外にいる魔物 具体的には統率する奴だけを
狙い子分達に混乱を生むとハルトは動揺した子分達を狩っていった

「出てこいお前等あ!!」

その言葉を合図に魔物の血溜まり……つまり反射するものから金切り音と共に現れた
のはミラーモンスター達 全部ハルトが契約している者達だ

「獣の群れを操るのは、テメエの専売特許じゃねえだろ？だがテメエと違って群れの長
だけ操ってねえよ何せ……俺が群れの長だからな久しぶりに新鮮の肉だぜ、お前等」

鏡からワラワラと現れるのは鏡面世界の住人達

「食い尽くせ」

!!!
!!!
!!!

ギガゼールやガルド系列、更にはハイドラグリーンにデイスパイダー、仮面ライダーと契約しているミラーモンスター達と様々なものが魔物を餌とばかりに襲いかかり思い思いに捕食する

力の優劣は言わずもがなミラーモンスターは新鮮な肉だあ!!と最近加工食品の味を覚えてしまったのだがそれでも野生動物ばりに肉を求める流石だ…よし

「んじゃ敵対象目掛けていざ行くか」

『一応聞くけど何する気だ?』

「こうするんだよ」

『王蛇』

アナザー王蛇になるとカードを2枚出す

「2枚ある、どっちが良い?」

『んじゃサイの方で』

「あいよ……ん？」

よく見ると政人がカイザになってサイドバッシャーを操作してミサイル攻撃して
る！やばい！頼りになるう！うちのとは大違いだ！ほんとに何してんだナツキの奴は
!!

『お前が投擲しただろう？』

ーそうだった…良い奴だったよー

『勝手に殺すな』

あああああああ！と言うと何かが落ちてきた

「はあ……しやあない」『フロート』

ドラゴンフライアンデットの力を借りてナツキの近くへと飛ぶと

「ハルト！助けに来てくれたのか！」

「飛べる二号のアナザーいるから頑張れ〜」

と
アデューとそのまま言いさって着地、今度は狂ったような笑顔を浮かべて力を念じる

「んじゃ怪人の力借りるよ!!」

腰に現れたのはジョーカーアンデットの緑色のバツクル それにラウズカードの力を使う

「変身!!」

『change』

しかし変わるのにはカリスの元となったマンティスアンデットではない

「しゃオラア!!」

理外のスパイダーアンデットになったのである

余談だが

『ふふふ…魔王、貴様の精神を支配して俺が王に…おい待て、何だ貴様! 何故乗っ取れないのだ!』

『おいテメエ、何相棒の邪魔してんだ』

『おい困め』『なあ蜘蛛って食べれたっけ?』

『取り敢えず焼いてみようぜ!』

『お、おい待てやめろ…ぎや、きやああああ!!』

精神支配かけようとしたスパイダーアンデット本体が涙目になるくらいに乗っ取れなかった何気に精神攻撃耐性が高すぎたのである

取り敢えずスパイダーアンデットの力を借りて戦っていたのだが

――

「おや？これは……私と同じ始祖の蜘蛛？いや私よりも上位の？…なんなのコレ…調べ
てみる必要があるわね久しぶりに動いてみるかな？」

また舞台が動こうとしていたのであった

――

「ふざけんなあああああ……あ、ナイト……!!!」

『ナイト』

アナザーナイトになるとダークウイングがやれやれとばかりに背中に張り付き翼の
代わりとなる

「あ、危なかったあ…じゃねえ!!なんだよこの数は!!」

「あははは!!やべー!戦うのチョー楽しい!!今ならカレラの気持ち分かるわ!そりや消化不良でイライラするよな!!あの時のリベンジで心ゆくまで相手してやらねえとな!!」

『相棒!逢魔が壊れるぞ!』

「馬鹿野郎!シンフォギア世界でやるんだよ!どれだけ暴れても文句はねえからな!」

「俺の文句は出るが!」

「関係ねえ!!」

敵を蜘蛛糸で捉えてハンマー投げ宜しく投擲していた

「ははは!来いよ!!」

「うわあハルトがバーサーカーになってるよ」

「今更ですネ」

「ほんと魔王ちゃんは突っ込みすぎ」

「我等が駆けつけるまで待つてもらいたい」

「えーと皆さんどうやって此処に？」

「あれで」

「へ？」

「はははは！踏み潰すだけで手柄とはな何と素晴らしい!!」

そこにはアナザー1号が高笑いしていた成程ね、あの巨体の肩を借りたと

「では俺達も」

「派手に行こうか……というかハルト、その変身辞めてくれ蜘蛛嫌いなんだよ」

「あ、そっか……んじゃ！」

『王蛇』

「おらぁー！」

『FINAL VENT!』

そしてアナザー王蛇になったハルトはメタルグラスを呼び出して 必殺技 ヘビー
プレッシャーで魔物の群れを跳ね飛ばしながら突撃していった

「うわぁ……ま、俺もやるか」

と宗一が取り出したのはビルドドライバーの原型とも言える破滅のベルト

『エボルドライバー』

「嘘ーーーー！」

アナザーナイトは驚くのも無理はないが、それを無視して

『コブラ！ライダーシステム！evolution！』

『Are you ready？』

その問いかけに宗一は答えた

「OK、変身」

同時に現れたランナーから装甲を形成し合体すると現れたのは星を滅ぼす蛇

『コブラ！コブラ！エボルコブラ！！』

「エボル、フエーズー」

仮面ライダーエボル 襲来

「今回はゆつくりしてる場合じゃないから早く終わらせる!!」

そしてレバーを回してエネルギーをチャージする

『ready go! エボルティック・フィンッシュ! CIAO!!』

近くの魔物を蹴り飛ばしてエネルギーを爆破して周辺の魔物を巻き込んで果てた

「ふう、まあ2%ならこんなものか……お、そろそろハルトの奴が黒幕目掛けきたな」

怪物は、また1人現れる 災厄の蛇は未来に備えて脱皮していく、その進化は止まらない

その爆発は遠くから……黒幕 清水の目にも映ったのである

「何だよあの化け物連中！あの街にあんなのがいるとか聞いてねえぞ!!」

慌てるも自己暗示のように

「問題はないんだ…俺には魔族の勇者として与えられたこの力がある…無敵の力がな
！」

其の手にはアナザーウォッチが握られていたのであった

それを見たアサシンは

「アレはアナザーウォッチ！何という事だ…主殿に知らせねば」

慌てて念話を使おうとしたが、その前に怪人の群れを蹴散らしながら駆け抜けるメタルゲラスとアナザー王蛇が通過したのであった

「……………え？」

流石の呪腕さんも思考が停止したという、そしてメタルゲラスから降りると一言「ハジメにゾルダのカードデッキとマグナギガ任せよう！」

『また思いつきで動こうとするな!!』

「ならスナイプとかどう！シューティング、ジェット、タンク、シミュレーション付きでとかー！」

『おいその前に目の前の奴を何とかしろ!』

「あ？ああ……お前が黒幕か？なら」

『コネクト』

ザンバットソードを呼び出して鋒を向けて一言

「その首置いてけ」

歪んだ魔法使い

さて前回のあらすじ

竜人族 ティオを何とか撃退したハルト達だったが 六万の魔物の群れがウル街へ向かったことを知る ハウンドや皆の説得で取り敢えず殲滅戦を行うハルトはへビープレッシャーで魔物の群れを薙ぎ倒しながらついに黒幕を捉えたのである

そして敵を見るなり

「首置いてけ！なあお前が大将首だな！大将首だろ！首置いてけ！晩鐘が汝の名前を示した！！信託が下ったからその首を断つから出せえええ！」

「主殿お！何処となく初代様の雰囲気を出さないでもらいたい！その初代様を意識した所業には我が右腕のシャイタンもドン引きですぞ！！」

ザンバットソードで敵の首を断とうとするハルトとそれを止めている呪腕さんがいた、これには敵の清水もドン引きである、いや捕まえる云々はどうした

『落ち着け相棒、責任を取らせるのдар？』

「そだった……取り敢えず四肢を切断してから皆の前に引きずりだすか！」
恍惚とした顔でザンバットソードを見ているアナザー王蛇に対して

「主殿！」

「どうしたアサシン！」

「この忠臣は一言

「止血や治療が面倒なので四肢の骨を砕いた方が効果的かと」

「流石だなアサシン!!」

「恐悦至極」

「んじゃコレだな」

『STRIKE VENT』

メタルガラスの頭部を模したガントレット型武器　メタルホーンを呼び出して構える

「安心しろ骨を砕いて動けなくするだけだから」

『何処を安心しろと?』

「へ? ナツキなら笑って許してくれるよ」

『んな訳あるかア!!』

「こ…この化け物共め!! いや待てよ、お前人間じゃないな!」

「怪人ですが何か？」

「そうか…お前がああの凶悪の群れを従えさせているなら、お前を従えさせれば問題ない！そしたら連中に街を襲わせてやる!!俺に従え!!」

何か洗脳系のスキルを使ったのだろう、テイオにかけたのと同系統の能力らしいが…何だろうムズムズするくらいだ

「アホか」

俺にはその手の精神攻撃は一切効かないとばかりに圧を放つと、あっさりキャンセルされた

「ば、バカな！俺の洗脳は竜だつて操るんだぞ…こんなよく分からない頭のおかしい奴に効かないなんて事があるか!!」

『部分的にはそうだと思う』

『主に頭のおかしい部分にはナ』

『相棒がマトモだった頃なんて会って数日くらいだったからな』

『あああの頃の相棒は気弱で情けない…そう野上良太郎みたいな奴だった』

『それが今じゃコレだもんな…』

『時の流れとは何て残酷なんだ』

ーテメエ等、後で覚えてろ、あと良太郎さんと俺を比較するな恐れ多いぞー

「黙れ、というよりお前やつちまったな」

哀れな奴…俺を洗脳して操ろうとかしたら

!!!
「!!!」
!!!
「!!!」
!!!

俺の契約モンスター達がブチ切れるに決まってるじゃん、王を傷つけられて怒らない部下はいない……何かウオズ達よりコイツ等の方が忠臣に思えてきたとか考えているも、その証明とばかりに咆哮するのに加えて

「ねえ、ハルを操るとか何考えてるの？」

「命知らずめ跡形もなく消しとばしてやろう」

「ハルト様、出陣の許可を魂を握りつぶしてご覧に入れますわ」

魂の回廊を繋いでいる三人娘まで激おこだよ!!この3人飛んできたなら瞬殺というより絶望しか終末戦争の始まりだエヒトどころかこの世界の全てを滅ぼすなど冷や汗をかいている

「ふ、ふざけんなよ俺は勇者なんだ…その力が効かないわけ!!」

「へえくなら可哀想だな勇者さん…俺は魔王な訳よ!」

今まで押さえていた魔王覇気を解放すると清水は体を震わせる

「な、何だよそれ…なら俺は魔人族に嵌められたのか！」「ああ違う違う異世界の魔王なのよ俺」「んな!!」

その頃

『ケルベロス！ヘッジホッグ！アランジーナ！3冊切り！サ・サ・サ・サンダー!!』

「トルエノ・デル・ソル」

雷撃に身を委ねながら無数の魔物に斬撃を喰らわせ魔物の背後に立つと

「これで話は終わりです」

納刀すると同時に落雷が魔物に降り注ぎ彼等を黒焦げにする

「まあこんなもので『FIRST ON!』のわあ!!」

「コレが私の遊び心よ」

イクサに変身したアンティリーネはイクサカリバーを構えて魔物を高速移動しながら切り捨てていく飛んでいる敵には銃モードにしての射撃で沈めていく。もう射撃が苦手な彼女はいなかった類稀な努力とセンスで下手な狙撃手並みの遠距離攻撃まで可能となっていた

「こんなものね」

「アンティリーネさん！危ないですよ！もう！」

「あら、さん付けはいらないわよベアトリス、私ね遠慮されてるようで嫌だったのよ」

「今それを言いますか!!もういいですよ行きますよアンティリーネ！」

「ええ」

「では、私も混ぜてください」

「ベルファスト?」

『exceed charge』

「ふうふう」

ベルファストはミューズに変身すると短刀を投げつけてポインターを出すとそのまま斬りつけるとばかりに接近 気づくと貫通した体が魔物を灰に返したのである

「こんなものですね」

「こわあ…じゃなかった! 皆さん離れましょう! そろそろアレが始まります!」

「そうね」「かしこまりました」

3人は撤退するのにも理由がある。空へと伸びる金と黒の魔力の柱だ

その下には2人のアルトリアがいた

「令呪を持ってお願いする！セイバー！全力の宝具で敵を倒せ!!」

「承諾しました、束ねるは星の息吹！」

「良いだろう…卑王鉄槌…光を呑め!!」

現れたのは人の希望と絶望を色にしたような魔力。それを見ていたマーリンは

「うわあ…サクソン人も見たら絶叫して逃げるねコレ」

コレを放たれる敵に同情するしかなかった

「約束された勝利の剣!!（エクスカリバー!!）」

その魔力の奔流は射線上の魔物を全て消し飛ばしたのは言うまでもない…ヘラクレ
スでも消し炭だろう

「そ、そんな…俺の軍勢が…」

「これで詰みだな」

コイツには使える駒はない、取り巻き連中はハジメ達が倒したようであるし

「んじゃ拘束して全員の所に連れてくか」

取り敢えず拘束してそのまま引き摺る

「ふざけんな!!俺がこんな所で死ぬるか!!おいあの男を殺せ!

アサシン！」

「かしこまりましたマスター」

「はっ!？」

そこに現れたのは黒い服をきた褐色の美少女…いや待て、この髑髏の面は!!

「まさか静謐の!?!しまった！」

呪腕さんも突然の奇襲と同僚の存在にハルトを助けるのにワンテンポずれが出来た

…そしてハルトを襲うのは暗殺者の英霊にまで彼女を押し上げた猛毒の接吻

「妄想毒身（ザバーニーヤ）」

「!!」

その宝具の一撃を受けてしまったのであつた

「あははははは！そりやそうだなその毒の一撃には流石の化け物も耐えられないだろうな!!」

ハルトは力無く倒れると呪腕は短刀を構えた

「静謐の！何故貴様が！」

「……………何であなたが此処に？」

「此方のセリフだ!! 良くも主殿を……あれ？」

そう言えば何故、自分は消滅せずにいるのだろうか？ 魔力の供給が途絶えたら消えるはずなのに……

「いやいやまさか……この世界にはマシユ殿はいないのですが……」

恐る恐る死体？となった主へ視線を向けると

「ふわあ……あー！ 死んだ死んだ！」

ハルトがケロツとした顔で起き上がったのである、流石に全員がアングリした顔を浮かべた

「よ、静謐ちゃん！ 久しぶり」

「な、何で私の毒を受けて……普通にしているの……おかしい……」

「いやその通り」

「そうだ！その女の毒はどんな奴さえも殺せるんだ！一体どんな手品を！」

「いやまあ確かにタネも仕掛けもあるんだよなあ……いやグルメ界様々だよ」

「？」

それは簡単な話 毒の抗体をその場で体内で生成して耐えた

グルメ界にいる大量の猛毒生物の毒データから瞬時に抗体を生成、まあその前に彼女の宝具で死んだのだが

「フェニックス・ファントムの不死の力で回復したぜ！」

太陽に打ち上げる以外に倒せないでお馴染みのフェニックスの力を使ったのである
……んでもってヘラクレスの十二の試練よろしく並外れた回復力と同じ技が効かない能

力があるからな……だが

「危なかった……いやオーマジオウに相對して以来のピンチだったぜ」

「そんな……私の毒を受けて普通にしているなんて……」

渾身の暗殺が失敗した……いやコレに関しては

「静謐の気持ちは分かる、主殿はその……常識の敵なのだ」

「成る程……」

暗にヤベー奴と伝えた呪腕さん……恐らく逢魔で屈指の苦勞人である、帰還後に3人娘の側近達と苦勞話で盛り上がるくらいには友達が出来たりするからだ

「さてと暗殺者まで伏せた以上は許す訳にはいかないな」

「ふざけんな…俺がこんな所でやられる訳にはいかないんだ!!」

「清水君！」

先生やハジメ達が駆けつけてきた、まずい！

「下がれ!!」

「今だ…やれアサシン!!」

「はい」

それと同時に静謐が唇を噛み切り毒の煙を出す

「つ、間に合え！」

『UNITE VENT』

アナザー王蛇はカードを握りつぶし、メタルゲラス、ベノスネーカー、エビルダイバーの三体を合体させて獣帝 ジェノサイダーを呼び出すと腹部から出した小型ブラックホールに毒の煙を吸い込んで貰った

「呪腕さん!!」

「承知!!」

「っ!」

静謐さんを拘束してと…よし

「ナイスだジェノサイダー!!」

「!!!」

「うおおおお！ジエノサイダー本物か！すまない写真良いか！」

「おうよ」

ハジメ、宗一、政人の3人がジエノサイダーの撮影会を開いている…いや待て何故撮影に合わせてポーズ決めてんだジエノサイダー、さてはお前ちよつと賢いだろう？

『相棒より賢いだろうな』

ーんだとコラア!!ー

「清水君、どうして…」

先生の問いに清水はこう答えた

「俺はアンタを殺す事で俺は魔人族の勇者になるんだよ!!」

「!!」

「君！辞めるんだ!!勇者なんて響きが良いだけでロクな事にならないから!!」

ナツキの一言には逢魔の幹部は可哀想な目で見るしかなかった、なまじ加害者故の同情もあるのだが、それを知らない清水はかみつく

「何だよお前も俺に出来ないってバカに」「その二つ名は苦勞するぞ!!」は？」

「俺はお前を拘束したこの世全ての理不尽を凝縮した人格破綻者かつ何でもありな脳筋魔王を倒す為の勇者なんてクソ理不尽な運命を背負わされたんだよ!!」

「おい」

「勇者に相応しい性格だとしても、初対面の魔王と幹部にいきなり囲まれて謎のカゴメカゴメされたり！理不尽な理由でボコボコにされたり！拳げ句の果てにはハンマー投げのハンマーにまでされたりするんだぞ！今からでも遅くない！勇者になるのは辞め

ろ！良い魔王だと良いがそこにいるロクでもない魔王に会うと俺みたいになるぞ！！あ
と世の中には自分の領地に核撃魔法を叩き込まれ続けられる勇者にして魔王がいるん
だから色々分かつているんだ！」

まるで爆弾のリモコンを此方に渡せ並みの説得に全員が迫真だと理解するが理解し
てないものが1人

「何て酷い事をする魔王もいるもんなんだな」

ーそうだな世も末だな我が君ー

「ああ一体ナツキをそこまでイジめる魔王ってー

「お前だあ！！お前とその部下だあ！！」

「ん？………ああ！なるほどそれは俺だな！そうそう………なら………おい誰が人格破綻者
だゴラア！！」

「いや正確じゃ……(ふう!!)」

取り敢えず綺麗な右アッパーカットを顎に叩き込んでKOさせると

「け、雑魚が」

その光景を教材にしたのか

「清水君、あの……生徒の夢を壊すのは教師としてどうかと思いますが……ああなりたいですか？ 私は大至急天ノ川君を停めに行きたくなりましたよ」

「……………」

何だろう……子供に現実を突きつける悪い大人をやってしまった気がする

「確かに誰かの特別になりたいという気持ちはわかります……けど誰かを傷つけて得た居

「場所は本当の居場所ではないと思うんです」

「先生……俺……」

「いや静謐さんとキスして生きてる段階で特別なんだが？」

何か感動している所悪いが事実を突きつける、アレくらって普通にしている段階で普通ではないのだよ

「確かに静謐の宝具は主殿さえ一時的な死へと追い込むほどのもの……それを受けて何故……」

「ああそれは「マスターは令呪で私の接近を禁じてますので」ちよっ！」

「うわあ……最悪」

ハルトの評価が世界恐慌レベルで下がっていく

「体に毒があらうと何だろうと性格がドカスなゲボカスとかそんな一部例外を除いて女性には真摯であるべきだろう！」

『その一部例外に凄い心を込めてるな』

『まあアレに関しては俺達も弁護できないわゴメン』

「ハーレム作ってる件については？」

「ノーコメント！それと作っていると人聞き悪い事言わないで!!」

やれやれと肩を竦めるも清水は懐からある物を投げ渡した

「魔族と取引した時にいくつか貰ったものの中にアサシンを呼べたものがあつたんだよ…何か古の魔王が残したアーティファクトとか何とか」

そこには 〈静謐の教主〉 かつて呪腕さんと呼び出したものと同じ 髑髏の意匠のライドブックだったのである

「これ……不味いな」

「ええ……由々しき自体です」

その脅威を正確に認知したハルトだが復活したナツキは何故と尋ねると

「魔族側にも俺達側の技術やアイテムが流れている可能性があるって事だ」

「!!!」

ウオズは戦慄する、此方のアイテムが敵に流れている事 それはつまり此方のアドバンテージの消失 そして

「我が魔王が凄い知的な推理をしている」

「おい空気読め」

「そうなりますと魔族側にも迷宮攻略者がいる可能性がありますな」

「だな……こりや魔族側の情報も収集もしないとダメだな」

「ディスクアニマルやカンドロイドなら大丈夫だろうが、もつと詳細な情報収集を……あ

「ギガゼール！君に決めた！」

ハルトは手鏡にいるゼール系統に指示を出した

彼らと契約した仮面ライダイインペラーはゼールと契約して情報収集にあたっていた事からもわかるように潜入にはうってつけだ鏡の中にも入れるし

「お願い!!」

というゼール達は全員がミラーワールドから魔族側の領地に移動したのである

「んで俺をどうする気だ？流石に無罪放免とはいかねえだろ？」

「普通に考えれば極刑だが、幸いにも事実を知るのは此処にいる面々だけだ全員が口裏を合わせてれば無罪放免なんじゃね？」

ナツキの意見だがハジメや宗一から嫌な顔をされた

「いや裏切った奴と一緒に暮らせるのか？」

「確かに」

今まで通りとはいかないだろう…ならば

「んじゃ逢魔で面倒見る？」

「おいナツキ勝手に決めんな」

「いや考えてもみろよ、6万もの魔物の群れを洗脳して使役するなんて芸当が勇者に出来るか？」

「勇者はしねえよ！それは悪役がやる技だよ！」

「あとハジメ君みたいに覚醒する例もある、この世界の天職が異世界でどう機能するかも調べる必要があるだろう？このまま元の世界に戻ったらハジメ君達は怪物並みの身体能力を持つてると思う、検証とか色々あるから一時的に預かるとかになるだろうけどさ調べる事も逢魔の利益にも繋がると思うぞ？」

うーむ、確かに天職とやらがこの世界以外でどう作用するか ハジメ君や先生も気になる所だろうな…それを彼を使って試す訳か幸いにも逢魔には異世界渡航技術があるからな試すには問題ないという訳か

「ファミレスドリンクバー往復係にしては珍しく良い提案だ…よしサラダバー往復も加えてやろう」

「え？俺ってそんな立ち位置なの？」

「まあ静謐ちゃんのマスターでもある以上放置するつもりはなかったが……あ！腕を切り落として俺の腕に令呪を移植すれば良いのか！腕とか生やせるし!!」

『いやそれ出来るのお前だけ!!』

『それはサイコパスだぞ相棒!?!』

『その思考回路に俺達もドン引きだよ!!』

「そんな事考えるな!! いいか普通は生えないの！お前がおかしいんだって！」

「んな事ねえ俺の腕を舐めるなよ！俺の腕には不思議な力があるんだ！」

「どーせHeavenの材料になるとかだろ？」

「近くの水源に放り込むと人間が溶源性のアマゾンになる」

「やべー奴の腕と同じ力持つてんじゃねえよ!!」

「テメエ！生まれた事が罪と言われながらも懸命に生きて千翼さんをバカにすんじや

ねえ!!」

「いやお前も似たようなもんだからな！」

魔王になった途端人類に牙を向いた大量虐殺の化け物め!!」

その言葉に幹部陣が全員目線をハルトに向けた

それはハルトの旅路を侮辱するに等しい 魔王の逆鱗である

「……殺す」『グランドジオウ』

「やってみろ!!」『ゲイツマジエステイ』

「いやちよっ！何魔王ちゃん落ち着いて最終決戦始めようとしてんのさ！」

「ナツキもだ！貴様バカか!!落ち着け!!」

そんなやり取りを見てウオズが諭すように清水に話す

「見なさい、勇者になるとアレと戦わないとダメなのですよ」

「……何か無理な気がしてきた」

「懸命です、貴方はまだ若い道を踏み外してもやり直せるのです……目の前の2人と違って」

「何だと!!?」「……飯抜き」

「そんな殺生な！私はただ事実を言ったままでです！れ

「ウオズとナツキの分のフグ鯨フルコースはジャンケンで勝った奴が取ってよしとする」

「「うおおお!!」」

「お前達に今日のフルコースは渡しませんよ!!」

「……………」

とまあ仲良くウオズと旧四天王が喧嘩しているのを視線を逸らして放置すると

「んじゃ、取り敢えず…アサシン」

「はっ!」

突如 短刀を投げると、その先には人と同じ姿をしているが溢れる気配は別物 この世界の敵である魔族が現れたのである

「良くぞ気づいたなに「人を殺す魔法（ゾルトラーク）」あぶな!おい貴様!不意打ちと

「は卑怯だぞ!!」

「知るか俺知ってんだ魔人族つてのは人の言葉を話す猛獣か何かなんだろう？なら会話なんて不用だ」

「ハルト……お前殺意高くね？」

「何処かの誰かさんのせいだなイライラをぶつける相手が出来て嬉しいよ」

ハルトの不意打ちゾルトラークを回避した魔人族……出来る

「まさか魔王ちゃんの不意打ちを交わすなんて!」

「コレが魔人!」「何て強さだ!」

「いやアンタ等は何処で実力を見てんの?」

「転移者の監視をし、いざとなれば口封じも兼ねていたがバレてしまっただけはしょうがない……このアーティファクトで!!」

そのアイテムを起動すると魔法陣が魔族の体を通過すると片腕が歪に肥大化したアナザーライダーが現れたのである

「まさか」

「我が魔王の勘が当たりましたね」

それは人柱……否 魔女狩りで消された魔法使い

『メイジ』

アナザーメイジになったのである

「よりにもよってメイジかよー!」

単なる量産型ライダー と侮るなかれメイジは原典において敵幹部のメドゥーサを倒せるポテンシャルを持っているのだ…しかも実際はドラゴンフォームやエレメントチェンジできないだけで実質仮面ライダーウィザードなのである

い ハルトの中ではハイグレードな量産品という認識だ断じて侮って勝てる相手ではない

それと

「やっぱり魔人族側にもアナザーウォッチがあるのか」

「厄介ですね…」

「まさか魔人族って全員魔王ちゃんみたいな体質持ちなのかな？」

「何それ性格も良ければ魔王ちゃんの完全上位互換じゃん！」

「いや待て！魔人族が全員ハルト様レベルの料理人ではないだろうならばハルト様が相応しい」

「カゲン良い子や…いや待てお前、俺を飯の美味さで判断したな!!」

「っ!!それはないでしょう、見なさい!!」

「この力を使って私が魔人族の頂点に立つのだア！」

「見事に飲み込まれています！であるならば我が魔王がアナザーライダーの王に相応しい！」

QED!と叫びウオズ…そんなに飯抜きは嫌か

「取り敢えずウオズのフルコースは用意しておこう」

しかしまあ

「何とまあバカな奴」

「何だと貴様如き人間擬きが高貴たる魔族の私に勝てるとても思っているのか？」

「お前こそ、そのアナザーウォッチを使う正当な王を前に勝てると思っているのか？」

「何？」

「だと思ってるなら、俺とお前の相性最悪だよ…王の勅令」

「があああああ!!」

右手を前に突き出すと突如 アナザーメイジの体に放電が走りそれが本体へとダメージを与える

「なんと…」

「あの放電かなり痛いのですよ」

「ああウオズちゃんそう言えば受けてたね、あの雷」

「あの事件がなければ今も我等が四天王だったのじゃな」

「思い出したら腹が立ってきました、あの世界に戻ってあの精霊締め上げてきます!!」

「落ち着きなさいお前達!!」

と怒りが再燃する旧四天王達の横で

「何なのじゃあの雷は！受けてみたいのじゃ！」

「テイオさん落ち着いてください！受けたらダメな扉を開いてしまいますよ!!」

「既に手遅れな感じがするなあ…」

まあアレだ

「コレが王の勅令、アナザーライダー達の暴走を制御能力だ……今更ながらにクロックの時に使う事に至らなかつた視野の狭さを呪いたい」

『残念な事に相棒を制御する能力ではないがな』

「一番作って欲しいですよ、その力」

「それだと面白くないじゃないベアトリス」

「ジャンヌさん？」

「寧ろじゃじゃ馬を乗りこなすくらいで無いとダメね」

「いやあの人じゃじゃ馬では無いでしょ！動物園脱走したシマウマですよ！あんなの誰が止めると思ってるんですか!!」

「おいベアトリス、俺はシマウマじゃ……はっ！そう言う事か!!」

「何が？」

「シマウマ怪人の力を使えという事だな！」

「違いますよ!?!どこをどう思考したら、そんな回答になるんですか!」

「よし、行けナツキ！」

「え?俺?……ああそういう……」

『ギャレン』

ナツキはアナザーギャレンになるとカードを3枚取り出した

『ドロップ』『ファイヤー』『ジェミニ』

『バーニングデイド』

「たお！はあ！！」

そして2人に分かれて脳天へ踵落としを放つ必殺技　バーニングディバイドでアナザーメイジを倒したのだが

「コレで良いのか？」

「この愚か者お！！」

「何で!?!」

「その必殺技を使うのならば、最後に愛する者の名前を叫ぶのが定番だぞ!!」

「そんな理由で俺殴られたのか!?!」

「殴るわ!!」

「あ………が………ああ………」

「ああその前に」

アナザーメイジは変身が解けたのでハルトは念動力でウォッチを回収する

「コレでよし、除染開始と」

んでもって

「いいか！ナツキ！今から俺がピーコックアンデットになるからやり直しだ！同じ技を撃ってみろ！」

「ええめんど…おお！」

突如アナザーギャレンはびっくりして変身を解いてしまい魔族の人質になってしまった

「動くなあ！動くとこいつの命はないぞ！」

「ヤ、この光景は!!」

ナツキには微妙にこの状況に覚えがあつた具体的には夢の中で

アルトリア達はどうしようと考えていたがハルトは

「良いよー別にいい」

『デルタ』

判断が早い!!と鱗滝さんがピンタするレベルの即決であつた

ハルトはアナザーデルタに変身するデルタムーバー型の銃を構えて一言

「FIRE」『BURST MODE』

そして躊躇いなくトリガーを引き放たれた3連弾はアナザーゲイツに変身が間に合ったナツキ諸共 魔族を撃つたのである

「きさま……人質が……」

それにはウオズ達が

「残念ですが、アレに人質としての価値はありません」

「寧ろ魔王様を殺そうとか考えているので殺してもらえると助かります」

「あははは！良い悲鳴じゃ…魔族とはこうも良い音楽（悲鳴）を鳴らすのじゃな…ほれもつと鳴らしてみい！」

「い……ぎやあああああ!!!」

事件性のある悲鳴が周囲に響く中 アナザーデルタは

「全く困った人だなあ……」

「ハルト……マジで撃つやつがあるか…」

「近くにいた、お前が悪い」

何処ぞの北崎、浅倉さんムーブをかますハルトに

「何だ、この光景にそこはかとなくデジャヴが…」

「ああお前も戦つてたからなラッキークローバー…」

政人と宗一は苦い顔をしていたと言う

そして魔族に近づくとメモリーメモリで情報を抜き取り終わると

「んじゃ後は任せた」

「任せておれハルト坊！丁度…新しい楽器の部品のこうか…ごほん使い道があるのでな
妾に任せておれ」

「楽器？まさか…最近逢魔の夜に響くという人の悲鳴つて「我が魔王落ち着いてください
い、アレはテンペストから来たアダルマンさんを夜に見た市民の悲鳴です」何だそう

だったのか！確かにあの人、骸骨だしゾンビ連れてるし…夜に会ったら悲鳴をあげるよなそりゃ」

今度リムルさんにも夜間外出するなら事前に通知をお願いしておかないとダメだなと考えていると

「ヤクヅキ」

「分かったのじゃ……が取り合えず新鮮な魔族を使ったバイオリンを作ってみるかの」

ヤクヅキの狂気的な笑みに魔族はこの場で死んだ方がマシと思う未来が待ち受けている事を理解したのであった

「あ、そだ宗一さんにバイオリンの届け物があつたんだ」

「今の状況だと人間バイオリンだと思ふから辞めてくれハルト!!」

こうして6万の魔物が襲いかかってきたウルの町の平和は守られたのであった

取り敢えず犯人は魔人族にして、魔物を操るアーティファクトを使ったとライアーメ
モリを使い信じさせる

んで事後処理している街の面々は俺達を引き止めようとしたので、それはもう良い笑
顔で拒否した 此方の妻を汚らわしい呼びした奴のいる町などお断りだとな！

そして本当の犯人である清水だが

「すみません常葉さん、彼をお願いします」

「宜しくお願ひします」

「うむ、心を入れ替えるなら逢魔は君を歓迎しよう」

取り敢えずナツキの提案もあつたので一時預かりとするか…ふむ

「所で清水君、君は仮面ライダーを知っているかな？」

「も、もちろん全シリーズ見ってます」

「うむ逢魔は君を大歓迎するぞ…よし今日は歓迎会だな…所で新設予定のライオトルーパー部隊長の枠が空いてるのだが君、興味ない？」

「態度変わりすぎじゃな」

「まあまあ…けど何でテイオさんがここに？」

「うむ…：童人族の者として目の前の魔王が異端なのかどうかを見定めさせてもらうぞ」

「本音は？」

「それはもうあの時と同じ冷たい視線と心ない罵倒を浴びせて欲しいのじゃ！」

「ハジメ君、この駄竜の尻にパイルバンカーを撃ち込んでくれ」

「任せろ」

「何というご褒美なのじゃ！」

「逆効果だと！」「こんなのが竜人族……ああ……」

「ユエさん！しっかりしてください！ユエさ……ん！」

「うわあ……アイツと同じかよ」

「宗一が遠い目をしている！どんな知り合いと会ったらそんな目になるんだ!!」

とまあこんなカオスの状況のまま、一同はイルワを連れてフューレンへと戻るの

あった、あ、そうそうこんなやり取りがあった

「……………」

「ちよつと毒女！私のマスターに近づきすぎよ！離れなさい！！」

「断ります」

「清水君、いきなりだが彼女を何とかしてくれ」

「実はあの本を渡した後、何故かマスター権と令呪が無くなりました……………」

「何い！」

「恐らく触媒にしての召喚と違い、本を開いただけでは正式契約でなかったのでしょう」

「つまり…静謐さんのマスターは今は俺だと？」

「はい宜しくお願いしますマスター」

「うそーん…」

そしてフューレンへの帰途での事

ジャガーノートを降りて歩哨兼炊事をしていると

「ん？蜘蛛？」

1匹の小さな蜘蛛がいた別に森の中だから珍しくもないが

『初めまして言葉は分かるかな？』

「喋った…あ、ああ分かるよ大丈夫」

「『そうか良かったよ…最初に眷属を介しての会話でごめんね』」

「気にしてないけど君は何者？」

「『私は…まあアレだね異世界の魔王だよ』」

「えー！貴方も異世界の魔王なんですか！俺も何ですよ〜」

「『え〜こんな偶然ある〜』」

「実は不可抗力で迷い込んでしまった〜」

「『え〜何それまじウケる』」

「ちよつと魔王ちゃん、早くご飯作ってー」

「えー！折角異世界の魔王と話してるのに！」

「異世界の魔王!？」

『『初めまして!』』

「蜘蛛の魔王?」

『『コレは眷属だよ…まあ良いや本題と君は何で私と同じ蜘蛛の力を持つてるのかな?』』

「ん?蜘蛛の力?」

『『惚けなくても良いよ、私の同じ始祖の力を持つてるよね異世界の魔王さん』』

「蜘蛛の始祖…ああ!スパイダーアンデットか!」

『『ん?何だいそれは?』』

「えと、異世界には色んな生物の始祖が己の種の繁栄をかけて凄惨なバトルロイヤルをしてただけど…その時に蜘蛛代表で出た人の力を使ったんだよ」

「『何その血生臭い世界』」

余談だがスパイダーアンデットはハルトの精神支配が出来なかった上に

『やめろおおおお！こんな非道が許されるのか!!俺がいないとレンゲルに変身出来なくなるぞお！』

『変身させたら襲いかかってくるだろうが!』

『お前が本編で睦月にした事よりはマシだろうがあ!』

『大人しく封印されていれば、俺のキングフォームを20年前に見せられたのに…お前のせいデエー!』

『アナザーレンゲルが闇堕ちしてるう!』

『ハブラレンゲル呼びされた事を根に持つてるぞ!』

絶賛相棒達に囲まれて火炙りされている…いや何してんの?もつとやれ

『魔王!?!』

とまあこんな感じで

「成る程な経緯は異なるけど同じ始祖の力を持つてるなら気になる訳か」

「『そうだよ、それとその力を使う人はどんな人かなあつてね』」

「本題は?」

「『早い話が助けて欲しいんだ』」

「良いよー」

「『即答!』」

「助けを求める声があるならば必ず駆けつけるって俺もそうやってヒーローに助けて貰ったからね」

「『そ、そうなんだ…えーと私はフェアベルゲンの森にいますけど…：…何か昔やった色々で帝国兵から捕獲せねばならない神獣!とか王国からはタイムして勇者の使い魔にしてやろうとか色々命を狙われて困ってるんだ…：本当なら私が深淵魔法を叩き込んで終わらせたんだけど、生憎私にはもうそんな力は残ってなくて…』」

その悲しそうな声を聞いて頷く

「分かった…：取り敢えず帝国と王国を滅ぼせば良いんだな朝飯前だ」

「『話聞いてた!?!誰もそこまでやって何て頼んでないよ!?!』」

「分かってる皆まで言うな…私に逆らうなという意味も込めて民間人共々虐殺するから」

「『言っていないから！だからこの人の専属通訳を呼んでえええ！』」

とまあそんな混乱はあつたものの

「取り敢えず俺は異世界の魔王を助けに行ってくる」

「ちよつとお待ちください我が魔王」

「何だよ？」

「普通に畏とか考えないのですか？」

「うーん……畏じゃないと思うよ」

「根拠は？」

「勘だな」

『本当にこのバカは…』

「取り敢えず我が魔王一人では心配なので誰か同行させましょう、最悪本当に国を滅ぼす恐れがあります」

「私が同行しましょう」

「呪腕殿がいれば問題ありませんね」

名乗り出たのは呪腕さんである、彼ならば大丈夫と皆が頷いた…何気に逢魔幹部陣の信頼厚くなっていた

「では他には」

「森の中となりましたら私も同行しましょう案内人が必要ですから」

カレンも名乗り出る確かに案内人がいなければ迷子になるだろうと

「けどハジメにはどう伝えますか？」

「別件で動くと言ってくれ」

「はっ」

「一夏」

「ん？」

「俺の代理を任せた」

「えええ！」

「宗一さんは一夏を補佐してくれ、ウオズ達は難癖つけて働かないだろうから」

実際 ウオズ達は俺に忠誠を誓っている代理に首を垂れるなど言語道断だろうなという判断である…というより

「俺の家臣団だからな、あの5人は」

単に俺の我儘である

「大丈夫だ一夏、どーせ俺のいない所で問題なんか起きる訳ないからさ」

「不穏なフラグを立てないでもらいたい」

そのフラグは立つ事になるのは言うまでもない

異世界の魔王

前回のあらすじ

無事に6万の魔物の群れと黒幕である清水、それを利用した魔人族がもたらしたウルの町での騒動もひと段落し、彼等のパーティに竜人族のテイオと清水が加わった。そんな中、スパイダーアンデットの力に惹かれて蜘蛛の魔王が彼に助力を求め、ハルトはフェアベルゲンに向かったのである。

樹海にて

「此方です」

「本当、カレンがいて助かるよ」

「いえそんなことは…」

「いやいや実際、我等だけでは迷子でしたからな」

「ありがとうなカレン」

と談笑していると蜘蛛が1匹現れた

「『やあ、来てくれてありがとうね』」

「良いつてことですよ〜それよりこの方向であつてます?」

「『勿論だよ…:そう言えば君の名前聞いてなかったね』」

「『そう言えばそうか…:俺は常葉ハルト宜しくね』」

「『宜しく!私は…:ん?ああ来たか』」

「は？」

―主殿―

念話つて事は誰かいるのかと目線を向けると

「おい何で、ここに人間とエルフがいるんだ？」

あの鎧は帝国兵だな前に見たやつと同じだ、俺とハジメが殺した奴の調査にでも来たのか？と首を傾げるが取り敢えず身元は明かしておくか

「ギルドの方から噂になっている巨人の調査の依頼を受けてここにいる」

実際 ギルドにキョウリユウジンとスピノダイオーの絵があつたしなと心の中でつぶやくと

「成る程、へえ……」

そこにはカレンを舐め回すように見る連中……ふむ

「仕事ご苦労だな任務は俺達が引き継ぐ、そのエルフも俺達帝国があずかー」

何故、助かる道を自ら放棄するのか理解に苦しむな、その言葉を繋ぐ前に男の体は綺麗に真っ二つとなった、犯人は言うまでもない無銘剣についた血を祓うハルトであった
「俺の騎士を誰かに渡すと思ってるの？あと帝国はやっぱり滅ぼすか」

何故かハウンド達も帝国と聞いたら帝国は滅ぼすと帝国スレイヤーになっているし……ハウンドのいた世界ってどうなってるの？とか考えてると

「テメエ！帝国に逆らってタダで済むと思ってるのか！」

「え？帝国の名前使って野盗の真似してる連中でしょ？害獣なら駆除しないとね」

「この数で勝てるのか本気で思ってるのかよ！」

武器を構えるが恐怖たり得ないな、ハルトはアクセサリーを千切りモーフィングパワーで剣にするとそのままの勢いで兵士の首を切り落とした

「な、何だと！まさかアーティファクトか…へへ便利なもの持つてるじゃねえか！俺が使っ！」

「あのさ何で余裕あるの？分からないんだけど？」

今度はボウガンに変えて空気弾で兵士の頭から赤い火花を咲かせると漸く恐怖が伝播したのか

「ふざけるな！こんな化け物と戦えるかよ!!」

逃げ出そうとしたので

「逃すか」

今度は槍に変えて投擲すると面白いくらいに当たる、その兵士の体を貫通して絶命させる

「んじゃ残りは「ま、待ってくれ!!」あ?」

蹴りで沈めてやると思つたら全員が武器を捨てて土下座してきた…おい

「俺達はもうお前たちに何もしねえし帝国にもこの事は話さねえ!だから俺達を見逃しちやくれないか?」

我が身可愛さとは何処までも腐ってやがるな

「なら俺達の質問に答えたら考えてやる」

「はい!!」

「何で帝国兵が、この森にいるんだ?」

「そ、それはアンタ…いや貴方と同じく赤と青の巨人の調査でさあ、あと何か最近この森を歩き回る巨大なトカゲも調べてあわよくば捕まえろと」

成る程なキョウリウウジンとスピノダイオー、獣電竜の調査って訳か…いや待てよと
なると蜘蛛魔王が困ってるのは俺のせいではないか!?

そんな冷や汗をかくが話を変えよう

「そ、そういうえば帝国ではこの森にいる神獣なる存在を狙っていると噂で聞いたが? その調査ではないのかね?」

「は、はい帝国では強いものは正義!という考えですので、この森にいる神獣様を保護しようとしているのはあります」

保護というか従属を強いてるよね?と聞いたくなるな

「穩便に話し合いで連れてく気だったの？」

「ええまあ、聞けば王国の奴等は捕まえて勇者の使い魔にしようとか言ってるらしいじゃねえですか！許せませんよ！神獣は誰のものでもないのですから!!」

ほむほむ、蜘蛛魔王さんの話は裏付けが取れたな帝国は保護、王国は隷属か…何というか笑えない2択だな

『因みに相棒は服従か死かを選べと言われたら？』

ーどれでもないな、そんな俺を舐め腐った奴の断末魔を叫ばせるという邪道を行くー
『だろぅなあ』

「うむ……あと追加の質問、この間ライセン溪谷の周りで兎人族を追いかけ回してる帝国兵見たけどアレ何？」

ついでにハウリア族の情報も集めとくか

「あ、ああ…あれは何でも奴隷として売るとか何とか…今はもう帝国について売買されてるか」と

こりやシアちゃんに伝えるか悩む案件だな

「ふーん……」

取り敢えず聞くべき案件は終わったな…ハウリア族は帝国に捉えられて売買されたと…奴隷商人を襲ってリストを奪うとか考えない…いや待てその辺のヤバそうなのシヨツカーなら知ってるかもな

「な、なあ他にはないのか？」

ほお、そこは普通は もう良いだろう！早く終わらせてくれ!!なーんて話をするだろうに

「そうだな、すぐ聞かないといけないのではないかな」

取り敢えずコイツらの処遇をどうすべきか……うん！

「この森にいる帝国兵はアンタらだけか？」

「いや別にもいる」

「んじゃ全員集めろ、王国勇者パーティの足止めをしたら見逃してやる」

「足止めで良いのか？」

「倒せまでは言わねえし無理なら逃げてても良い、死んだ仲間は魔物に襲われたとかで言いくるめろ、俺達のことを完全黙秘するなら殺しはしねえよ」

流石に無闇矢鱈と殺すのもどうかと思う……そもそも此方の目的は帝国と近い保護と

「うか救助だ 一応王国にいる勇者の人物像をハジメに聞いたのだが 完全にトーマと同じ自分都合解釈の正義バカだと、顔を合わせれば間違いなく殺すだろう、それくらい水と油である…何ならあの手の人種は根絶やしにすべきと思う」

「なら会わなければ良いだけで良い、一応今回の目的は戦闘じゃないしな、あとは蜘蛛の魔王と会うだけだ」

「んじゃ行け」

「ありがとうございますだ!!」

「取り敢えず監視はつけておくか裏切ったと同時にミラーワールドに引き摺り込めとデストワイルダーとアビスラツシャーに命令を出して」

「森の中を進んでいくと」

「いやあ遠路はるばるありがとう魔王常葉ハルト君！私は魔王少女 アリエルだよ！宜しくう！」

そこには車椅子に座る妙にハイテンションな女の子がいた

「お、おう何というか聞いてたよりも元気で安心した」

「いやいやあく流石の私も最近は色々あつて疲れたよ」

「そっか…んじや取り敢えず飯でも作るか」

「そこまでしなくて良いよ」

「まあこれは趣味みたいなものだから気にしないでくれ」

『この魔王は趣味で数千人分の料理を1人で拵えるぞ』

「嘘でしょ……」

異世界の魔王をドン引きさせたのが力ではなく料理スキルというのがハルトらしい

…

「んじや作「ちよい待ち」ん？何？」

「いやいや君を呼び出した目的だよ目的」

「ああ帝国と王国を滅ぼせって話だな任せろ更地にしてやる」

「違うからね！」

「んじや俺にどうして欲しいのさ」

「早い話が私を保護して欲しいのと、この下に封印されてる巨人を倒して欲しいのさ」

「巨人？」

アリエルの話だと こう

彼女は異世界で天寿を全うしたのに何故かこの世界で　そして色々あったが現在では森で隠居生活をしている　力の衰えもあるが実際は森に封印されている大地の巨人なるものの存在を見張っているからだという

「けど私じゃ倒せなくなっちゃったんだよ勇者でも無理だと思つてたら同じ蜘蛛の始祖になつた人？がいるから話しかけた訳」

「成る程な大地の巨人か……」

「昔の人間はJつて呼んでたよ」

「J……ふむ不穏な名前だな」

大地の巨人……Jいやいやまさかな彼なら封印なんてされてる筈がない……だが念のため確認だ

「もしもしゾル大佐！」

『何だ魔王？』

「この世界の森にJって名前の大地の巨人が封印されてるらしいんだけど何か知らない？」

『ああ仮面ライダーJだな、そのウオッチが古の時に起動したが何故か制御を失い暴れ回り大地の精霊達に封印されたと言われてるな』

確定！いや待て何暴れてんだよ!!

『ライドウオッチ絡みなら』

間違いなく、あのジジイが笑ってやがるな悪趣味極まりねえ!!

「ジジイ…やっぱり今度会ったら…」

『会つたら？』

「巨大戦力で取り囲んで容赦なく地鳴らししてやる！人類なんて滅んでしまえば良いんだ!!」

『怒りの矛先が人類に飛び火してる!』

『マイ〇ーより黒い衝動に溢れているが大丈夫か相棒!』

「あくやっぱり、君絡みなんだ」

「未来のな…責任持って倒すからアリエルさんは安全な場所に移動してくれ」

「一応聞くけどどう倒すの？」

「簡単だよ巨人には巨人だ」

ドヤ顔する

『相棒、悪いお知らせがある』

ー何?ー

『今回、アナザーJは不参加だ』

ーはあ!?!ー

『クロックの事件の際に巨大化のエネルギーを使い果たしてしまつてな…今回は変身出
来ない』

ーふざけんなよ!!ならアレか!?!ギガントやサイドバッシャーで攻撃しろつてか!?!ー

と内心でビビり倒していると懐から鳴き声が

「……………そうかお前がいるな!」

そう、いるじゃん巨大化できる奴!!

「んじゃ明日解放しようか」

「そうだな今日は疲れたし……俺が飯作るよ何食べたい？」

そんな感じで翌日

「じゃあJの封印を解くよ！」

「おうともさ!!」

そして封印が解けると地鳴りと共に地面から抜け出たのはハルトのよく知る仮面ライダーJであった

「……………」

「こんにちはー！初めまして!!」

「貴様は……魔王か？」

「いかにも！俺は常葉ハルト!!」「死ね」アイエエエ!!ナンデーー!!」

その踏み込みを全力回避したハルトは涙目でJを睨みつける

「ふざけんな！俺が一体何をした!!この世界ではまだそんな酷い事してねえぞ!!」

「魔王は悪!!」

「偏見だあ!!」

『いや事実もあるよな?』

確かに色々やらかしたけどな！と逃げながら答えていると

「!!!」

「わーってる、アレは立体映像だけどさあ！何で俺への殺意が全開なんだよ!! 凄いショックなんだけど!?あのクソジジイやっぱり殺す!!」

「!!!」

「ああもう！分かったから行くぞ！」

「ブレイブ・イン!!頼むぜトバスピノ！」

『ガブリンチョ！トバスピノ!!』

「とお!!」

トバスピノに乗り込むとハルトは構えた

「行くぜ！カミツキ合体!!」

そして現れたのはブンパッキーとアンキドンの2匹。それがトバスピノの両腕となると現れた獯猛の巨人

「完成！スピノダイオー！！」

『スピノダイオー！！』

「む！来たか！！」

「取り敢えず頭冷やせえ！！」

とブンパッキーボール…まあ早い話が鎖つき鉄球をJに叩きつけた

「ぐおお…」

ズシンと倒れ伏したのだが

「……………」

『どうした相棒！ 畳みかけるチャンスだぞ！』

「お、おう！ 行くぜアンキドンハンマー!!」

今度は片腕のアンキドンハンマーで腹部を殴りつけて吹き飛ばした

「おお…………あの仮面ライダーJがスピノダイオーに圧倒されてるう…………あはは…………何か憧れを痛ぶる現状に気分が昂るよ…………なんで？ 良くないことしてるのに…何で楽しいとか思ってるの？」

『ま、不味い相棒が怪しい何かに目覚め始めようとしている!』

『早く決着をつけるぞスピノダイオー!!』

スピノダイオーもオオ！と叫びながらJに怒涛の追撃を行うダメージがガンガン入

るのは感じる

だが流石にウオッチの映像とは言い仮面ライダーJだ…しかしおかし

「何で倒れない？」

これだけの猛攻、普通なら逃げるなりする逃げないのは仮面ライダー故かそれとも

『大変だよハルト！この辺りの精霊が根こそぎ取り込まれてる！』

「あー成る程そういうカラクリか」

つまり、このJは大地の精霊達から力を吸い上げて暴れているのだ…何がきっかけでこうなったとか知らないが

「なら簡単だな」

『何が簡単なのか教えてくれ相棒』

「この俺のIQ2000の脳内CPUが導き出した結論だと、この手の敵は空へと打ち上げて奴を倒すのが良い…フォーゼがやるみたいに奴を空へと上げるぞ！」

『待て相棒、その結論は欠陥だらけだぜ！』

「何!？」

まさか相棒達は俺でも想定してない要素を考えたというのか!!流石相棒だぜ!!と感心していたが

『だって相棒のIQは5とかだろ』

違った、いつものノリだった…

『IQ200とか本郷猛並みの天才だからナ!!』

『そんな頭脳持ってるとか相棒とか相棒じゃない!!』

『お前偽者だろ? つてなるな…末弟は単純なのが良いだ』

ー取り敢えず、アナザーW、アナザーディケイド、アナザーカブトは火炙りなー

『『ぎゃああああ!!』』

制裁完了! とばかりにアイデアを整理したが…

「はっ! しまった! スピノダイオーでは空が飛べない!!」

このプランの重大な欠陥に気づいてしまったのだ

『これが相棒、クオリティだ』

『ああ実家のような安心感』

「笑ってる場合か!! こうなったら……」

『こうなったら?』

「必殺技でゴリ押す!! 取り敢えずこのブーメランに獣電池を装填だあ!」

『ガプリンチョ! アロメラス!!』

その光景に

『それでこそハルトだ!!』

『俺達は信じてたぞ!』

『そうだよハルトはこんな感じで良いんだよ』

『おい後方腕組み彼氏面するな』

「行くぜトバスピノ!! ブーメランフィニッシュ!!!」

それと同時に投擲された燃え盛るブーメランは何度もJを切りつけていくと流石のダメージも許容を超えたのか体がバチバチしている

「よっしや！このままト「待った魔王ちゃん！」え？ジョウゲン!？」

「俺もいるよハル兄!!」

「え？一夏!?!何処!?!」

「ここだよ!?!」

「まさか…ザクトルに乗ってんのか！お前俺の代理頼んだろ！仕事放置して何してんだ
!?!」

「い、いやあ…まさか勝てるとは思ってなくて勝ったら気づくと乗り込んでて此処に…」

「一夏ボーイの成長速度は凄いなえ」

「そんな事は…」

そこにはパラサガンに乗って現れたジョウゲンがいた…いや似合うのが腹立つ！これが中の人効果なのか!!

『メタいな…』

「何で2人が此処に…:…」

「パラサガンに言われてね」

「ハル兄、水臭いじゃん俺達も行くよ！」

「そうだな…:…よっしゃ！お前たち！アレをやるぞ!!」

「アレ？アレって何だよハル兄!!」

「決まってるだろう？……合体だあ!!!」

その時 ハルトの顔は天元突破の人並みの劇画タッチであつたのである

「「カミツキ合体!」」

そしてスピノダイオーの両腕がザクトルとパラサガンに変わる

「「完成!スピノダイオーウエスタン!!」」

正にガンマンという感じであるがコックピットに3人いた

「おお…何か新鮮だな!」

「魔王ちゃん！早く決めるよ!!」

「おう！合わせろ一夏!!」

「ああ！」

「二スピノダイオーウエスタン！ブレイブファイニッシュ!!」

パラサビームガンから放たれた圧縮レーザーはJの体を貫通させず当初の予定通り空へと打ち上げた

「つしやあ一夏!!」

「おう！ザクトルソード!!」

「ぐ……ぐああああああ!!」

今度は高く跳躍してすれ違い様にザクトルソードで切り付けると遂にダメージのキヤパが限界となったのかJは派手に爆散した

そしてスピノダイオーウエスタンは勝利のポーズを取ると隣のブンパッキーとアンキドンも一緒に喜ぶのであった、そんなハルトの手元に現れたのはJウオッチである

しかし

「つかしいなあJのウオッチはカゲンが持つてるだろ？」

そう、カゲンの変身するゾンジスはシン、Z O、Jのネオライダーの力を有し、ウオッチも持っている筈だが…？と考えるのは後だなと思つてると

「きよ…巨大ロボとかあるのかい！ハルト君!! 凄いね逢魔つて!!」

何故かアリエルさんがコックピットに乗っているではないか

「うおおおい!!」

「いつの間に!?!」

「いや、この人誰!?!」

「あ、その2人は初めましてだね! 私は魔王少女アリエルちゃんだよ! 宜しくう!」

「魔王!?! ハル兄やディーノさん、八星魔王以外にも魔王がいるのか!」

「一夏、そりやいるよ魔王だもの後一夏。オーマジオウが抜けてるぜ」

「ハル兄……この人只者じゃないね」

おお一夏よ、そこまでわかるようになったか弟の成長は早「ハル兄レベルの問題児魔王とかこの世の終わりだあ!」違ったいつものノリだった!

「君、部下になんて思われてるのさ……私も他人の事言えないけどさ……世界救う為に魔

王軍を率いて人類の半数を殺したし」

「ハル兄！この人本物の魔王だよ！！人類の半数を殺すなんて！！」

「一夏、隣を見てみるお前の義兄も魔王だ」

「ハル兄……も確かに色々理不尽な事をやるから魔王だな」

「けど一夏ボーイ、俺達のために料理をしてくれる魔王なんて居ると思うかい？」

「じゃあハル兄は魔王じゃないかあ……」

「あ、料理なら私もするよ！」

「じゃあハル兄は魔王なんだ！」

「おい一夏、魔王は料理人の称号ではないぞ？」

まあそんな感じで話していると

「すまない!!!」

何か足元にいるなあ……………ん？

「そこには金ピカの鎧をつけている……………トーマがいるではないか何だまたアバターか？なら踏み潰すか

「俺は天ノ河光輝！ハイリヒ王国に呼ばれた勇者なんだ！君が最近森に出る青の巨人かい？」

成る程他人の空似か……………勇者だが全員ボロボロだ…成る程帝国兵は此方の約束を守ったようだな…よしあの帝国兵達は帝国を滅ぼしても許すでしょう！

『早く失せよ下等生物』

あ、やべトバスピノの口から俺の本音が漏れた

「っ！頼む！赤い巨人と一緒にその力を俺達のために貸してくれないか！魔王を倒すんだ！この世界の平和のために、その力を正しいことの為に使うべきなんだ!!」

は？俺達に貸して？コイツ何言ってるの？この力を正しいことに使え？そんなのが前が決めるなよ、はい決定！この勇者はトーマと同類だ！アリのように踏み潰しちゃらんん!!

しかもよく見ればハルカまでいるじゃないか！くそ！あのクソ忌々しい愚妹め！まだアバターを残していたか！トバスピノ……んん!!

本日3回目の驚き、あの黒い髪の華奢な女の子は!!

「咲那ちゃん!?!」

ナツキの義妹　野田咲那ではないか!!

何でこうなってるの!?! 取り敢えず勇者とハルカ擬きは消し飛ばす!! と息巻いていると

「!!!」
「!!!」

あ! 野生のワーウルフが現れた……おい待てアレがいるとなるとウルファンデットもいるのか!! 咲那ちゃんがやられると不味い!! だから……ああ仕方ない!! 最悪俺はテレポート出来るしやるぞ!

「二夏! ジョウゲン、お前たちはアリエルさん連れてこのままスピノダイオーで撤退しろ!」

「ハル兄は!?!」

「咲那ちゃんを助ける、でないとナツキが大変なことになるからな」

腰にジョーカーのバツクルを呼び出すと

「変身」

『evolution!』

そして姿をクラブのカテゴリーク 嶋昇 本来の姿 タランチュラアンデットに
姿を変えるとそのまま飛び降りた

「ふっーらあ!!」

着地と同時にワーウルフを倒すと

「そこか!」

糸を伸ばして敵を拘束して釣りのように手元に引き寄せる

「があ!!」

「やっぱり、お前かウルフ」

「タランチュラだと！何故貴様が!!」

「答える必要はない、これから封印されるものに」

「何だと！……いや待て……これは風？……つ！お前はいや、貴方様は!!」

「覚悟「申し訳ございませんでした怪人王様!!」へ？」

タランチュラアンデットは頭を下げて礼を尽くしたウルフを封印するカードを手を澄んでの所で止めたのである

「お前、何故俺のことを……」

「やはり！そうでありましたか!!!お願いです怪人王様!!この俺を貴方の配下に加えて頂きたい！そして我等、狼の繁栄を!!」

「うむ怪人王として貴様を配下に加えよう、繁栄か容易い願いだ任せておけ…あの捻り蒟蒻よりマトモな繁栄を約束しよう」

「ははっ！」

「では少し下がっている 俺はその奴等に用があるのでな」

「はっ！」

あれ？ウルファンデットってこんな感じだったか？と首を傾げるが勇者一行を見やる

「おいその女、野田夏樹という人間を知ってるか？」

「っ!!え……兄さんの事を知っているんですか!？」

「無論だ、俺と共に来いそうすれば義兄と会わせてやろう……まずは証拠だ」

そして彼女に向けて思念を風に乗せて送ると

「つ!! 兄さん……兄さん!!」

これは咲那ちゃんだな間違いない

「咲那!……貴様!! 咲那に一体何をした! それに怪人王だと! 何者なんだ!!」

「この人間が……怪人王様に何て口を! 「黙れウルフ」はっ!」

「咲那をそうやって攫う気なんだろう! 騙されるな咲那! 君の兄さんなら俺が見つける! だから……」

「もう良いです、見つけましたから」

「へ?」

「それにあの人を悪く言うなら私は許しません」

「さ、咲那？お前何言ってる…」

そこに待ったをかけたのは如何にも三下なチンピラのような男…恐らくいじめっ子だろうなあ…：よしアイツは後で殺すかハジメと相談しよつと

そう考えていると咲那はハルトの隣に立つ

「そもそも私は兄さんを探す為についてきたんです…見つかったならついて行く理由もありませんから」

「そうかではウルフよ行くぞ」

「はっ!!」

良かった、もし洩るようならイーグルアンデットに変身して攫う所だったからな…相棒、テレポート

『了解』

そしてテレポートして全員で帰ると

「咲那……そんな……さくなあああああ!!」

この日 勇者は初めて挫折?を味わったのである

そしてジャガーノートに帰還したハルト達

「ただいまー!」

「おかえりなさいませ我が魔王…そちらが」

「ああウルファンデットだ」

「今日から怪人王様の元で働かせてもらおう宜しくな！」

「歓迎しますよ……しかしアンデットは貴方だけで？」

「ああ他の連中は自分の繁栄の為に倍率低いバトルファイトに出たからな……俺は手軽に繁栄する為に怪人王様の軍門に降った訳だ」

「懸命な判断ですね」

さてと、まずは一夏とジヨウゲンが慌てて駆け寄る

「ハル兄!!……っ！ハル兄がまた女の子連れてきたア！」

「こりや国が荒れるぜえ!!」

「違うわ!!」

「え??」

「あ、そうだったそうだった…咲那ちゃんにはこの格好が馴染み深いか」

『s p i r i t』

このカードでタランチュラアンデットの擬態を解くと彼女は目を見開いて

「ハルト……さん……」

「そうだよー！久しぶり咲那ちゃ「ハルトさん！」おつとお!？」

泣かれて抱きつかれた！この状況は誤解を生んでしまうぞ!!

「ハル兄……」

「魔王ちゃん……」

「いや違う！彼女は野田咲那、ナツキの義妹だ！」

「いや親友の義妹とか」「嘘でしょ」

「何故誤解が解けない！いいかこの子はな!!」

「おいハルト！あのアリエルつて魔王さんスongoイ食べるんだけど!!早く厨房に立つてくれ！いま魔王とWアルトリアの大食い大会が開かれて………咲那？」

ナツキがありえない物を見たような顔を見ると咲那はパアツ！と花を咲かせたような笑顔でナツキ目掛けて走り出した

「義兄さん!!!」

「咲那!!」

死に別れた恋人のように互いに走り出して抱きしめ合うと泣き始めたのである

「良かった………本当良かったあ……」

「あのね義兄さん…私頑張ったんだよ…義兄さんいなくても1人で色々出来るようになったんだよ……」

「そうかあ！そうかあ!!頑張ったんだな…ごめんなあ……これからは俺が咲那を守るからなあ……」

と
そうかなら咲那ちゃんを、あのヤンデレ軍団から命守り抜いてみせろとエールを送る

うむこの状況を邪魔するのは無粋だな、よし俺は魔王だ

「お前達、ついてこい…俺が料理を作ろう」

と
食堂に行くとWアルトリアに魔王アリエル、相手にとって不足は無し!!と厨房に立つ

「む、コックか遅かったな」

「ハルト…早く料理をお願いします」

「私も久しぶりの料理にお腹空いててさあゝ見せてもらおうよ怪人王」

恐らく俺の短い料理人生で屈指の大喰らい達だが

「ああ受けて立つぞ相手にとって不足なし！」

「行くぞ怪人王！食材の貯蔵は十分か!!」

「思い上がるなよ！アリエル！無限食材ビリオンバードと俺の調理技術を侮るなあ!!」

その両手には馴染みのメルク包丁と、オーディエンスから貰った 伝説の黒包丁があつた

その光景に

「最強包丁の二刀流!?!は、ハル兄が本気だ!」

「これは荒れるね!乗るしかない!このビッグウェーブに!!」

「野郎ども!この対決を逢魔で流すんだ!!」

「先ずは!ピリオンボードの照り焼き!しょうがやき!串焼き!ハンバーグにチキンカツじゃない!!」

早速の料理が

「「おかわり」」

置いた瞬間に皿から消えたのである

「しゃおらあ!!」

と此方は此方でお祭りとお化していたのである

余談

「ところで義兄さん」

「何だい咲那？」

「ナンデホカノオンナノニオイガスルノ？」

ナツキは咲那のハイライトの消えた瞳に思わず

「ブルータスお前もか!!」

そう叫んだと言う

海人族の少女

さて前回 勇者？パーティからナツキの義妹 咲那を取り返した俺達、魔王アリエルの依頼も果たした所で今!!

「「「ちこそうさまでした」」」

「お粗末う!!」

「「「「「おおおおおお!!」」」」」

ハルトは片手を突き上げて勝利宣言をする見事 腹ペコ3人組を沈めたのである!

だが此処で緊急事態が発生

「調味料が無くなった!？」

アレだけ豊富にあった調味料が底をついたのである

「「「「「なにい!!」「」「」」」」」

それに騒めくトルーパーと幹部達…それ即ち

「暫くはビリオンバードの血とかで代用するかなあ…じゃないと暫く無味の水炊き鍋になるぞ」

アイツは一ミリも無駄な部位がない…当座は代用出来るが、根本的な解決にはならぬ
い最悪食材の水煮となってしまうと伝えると

「お前達!街に行つて調味料を買い占めますよ!!」

「逢魔に戻って調味料を揃えるんだあ!!」

かつて船乗りが言っていた　食事は乗組員のコンディションに影響すると

「「「「「おおおお!!」」」」」

今俺はその理由をマジマジと見せつけられている…食事だけで目の色を変えるのが逢魔だと

「ふう……ごちそうさま、ありがとねハルト君」

「どういたしまして」

「それにしても君の魔王軍は賑やかだねえ」

「そりゃ貯蔵した食料が無くなれば誰でも慌てますよ」

「あはは！そうだねごめんごめん」

「後、逢魔でタダ飯食いは極刑らしいんで働いて貰います」

「極刑!?!そんなタダ飯だけで!!」

「一応言っておきますが俺が定めた法じゃないですよ、文句なら司法を管理してる悪魔に言ってください：俺もやりすぎだと思っただけどさあ」

トルーパーと幹部陣の目がギロリとアリエルを見たのである……余談だが逢魔にいる三人娘も圧をかけていた

「働かざる者食うべからずって訳」

「いやまあ美味しかったしご馳走になったから働くは働くけど私…見ての通り戦ったり出来ないよっ!」

「んじゃ先ずは体の不具合から治す所からかな」

「出来るのかな君に」「アンタ、体内の毒に侵されてる感じだろ?」「っ!」

「分かるのハル兄?」

「当たり前だろ、何せ俺には世界最高の検索エンジンがあるからな」

『誰が検索エンジンだあ!!』

「けど珍しいねえ…自分の体内で作る毒に苦しむなんて、それフグが自分の毒に当たるようなものだよ?」

「何その的確な例え…つて治せるのハル兄?」

「……………そういや俺にもあるよな毒を使う怪人の力」

『まあお前の場合は特製無効で毒に当たらんだけだ』

「何て便利な体だ……まあ治せるだろうさ要するに体内にある毒に耐性を付与させれば良い、そうすりゃあ毒に苦しむ事はねえだろ」

『エグゼイド』

アナザーエグゼイド に変身してマキシマムマイティの力を解放する

『マキシマムマイティ！クリティカルフィニッシュ！』

そのピンクの光線はアリエルの体内で生成される毒を己に無害な形に変換したのである

「……………え？」

恐る恐る車椅子から降りて立ち上がると体をストレッチした後

「体が戻ってる…」

「ありがとよアナザーエグゼイド」

『気にするな』

「んじゃ早く働いて「ありがとねハルト君！」近い近い!!」

「あはは！こりや残りの人生かけて返さないとダメな借りだね」

「なら忘れろ、貸した側は何も覚えてねえよ」

「そうはいかないよ君に保護を頼んだ建前だ何でもするよ…望むなら夜の相手でも……」

「そう言うのは間に合ってますので！」

「おや？愛する娼婦でもいるのかい？」

「何でそこで妻がいるとかにならないかなあ!! いないから! 俺はこう見えて純愛だから!!」

『どの口が言ってるんだろう』

「黙れ相棒!! 俺は嫁を差別した事は一度もないし暴力だつて振るつた事はない!!」
『そこは紳士なんだよな…無駄に』

「取り敢えずアナザーデイケイドはジープから逃げてねえ〜」
『死んでたまるかあ!!』

追走劇を始めたのでスルーすると

「まあ冗談だよ、けど君には借りがあから返さないと気が済まないな」

「んじゃ、この世界について教えてよ」

まだ知らない事多いし、ハジメ君以外の情報源は欲しい特に

「さっきのJみみたいな奴ってまだいるの？」

「いる、確かフェアベルゲンの森にある迷宮の中には緑と赤と紫のトカゲがいるとか！」

はいオメガ、アルファ、シグマですね！あんなのいるのかよ!!ネオがいないだけマシだな…いたら森の獣人達がアマゾン化してた…いやまあいるならいるで話してみたくはある

「そしてそれを従えるオオトカゲがいるとか」

仮面ライダーアマゾンって事は

「やっぱり迷宮にあるのは栄光の7人ライダーのウオッチだな…ますます魔人族側に渡ると厄介だぞお」

こりやこつちも真面目に迷宮攻略に入らないとダメだなこりや

「そう言えばカゲン、お前のJウオッチだが」

「Jウオッチなら此方に」

「あれ？ならこのウオッチは？」

ハルトが首を傾げるとJウオッチが共鳴するとカゲンのJウオッチと合体したのである……この現象に見覚えが……あ！ナツキのアナザータイクーンと同じだ！

過去にマドカの持ってたアナザーブジンソードとナツキのアナザータイクーンウオッチが合体した事を思い出して手を叩く

「成る程なあ……ふむナツキに話を聞くか」

あの体験者だしな

「咲那ちゃんにも事情説明しない……と？」

そこには

「義兄さん……まさか…何人もの女性と関係を持つなんて！そんなの不純です！！！」

「いや待て咲那！一から事情を説明するから「黙ってください!!」「はい!!」

見事に尻に敷かれてるなナツキよ

『あの光景凄い見覚えがあるな』

「エルフナインに説教されてる時な」

その言葉にピクリと反応する

「エルフナイン？ダレデスカ？ナツキニイサン？」

オオウ、ハイライトが消えている……そういやあ

「咲那ちゃんは昔からナツキにベツタリのブラコンだからなあ、義兄に恋人とかできた
らこうなるかあ……」

『そうだったのか……』

「おうよ、昔からナツキの後ろをトタトタと歩いてるそりやもう可愛らしくてな……い
やまあ俺の比較対象がああヤベー奴なのもあるんだが……それを引いても優しい奴
なんだよ」

『ほほお、この脳筋から良い奴と言われるとは中々の聖人だな』

と見ていると

「まさかデイベレイクの言ってた義妹に気をつけろって」

以前、相対した謎のガツチャードの言葉を思い出す一夏は納得した

「多分アレだな」

「うん……けど何で俺も？」

「何かあるんだろうな、気を緩めるなよ」

「ああ！」

「ハルトさんも！何で義兄さんを見てなかったんですか！義兄さんが複数の女性と爛れた関係になるなんて……私悲しいです!!」

「まあ俺も人の事は言えないので……ナツキ頑張れ」

「薄情者お!!」

「義兄さん!そこに正座です!!」

そして

「えへへ〜義兄さん〜」

椅子に座るナツキに抱きついて全力で抱きしめながら顔を擦り付けるそれはもう可愛い生き物がいた……

「お、おう」

ナツキも頭を撫でるのだが…その背中から溢れる圧が恐ろしかった

「……………」

2人のアルトリアがカタカタと震えた手でエクスカリバーとロンゴミアドを構えていたのである……よし取り敢えず

「エルフナインに送信と」

ハルトは更にナツキを地獄へと送ろうとした

するとポータルが開き

「ナツキさん！あの写真は何でしょうか!!」

まさかの彼女投下！

「エルフナイン!?何で此処に！」

「義兄さん?この人は誰？」

「その人、離れてください…そこは僕の場所です！」

『ドレットドライブー!』

それは以前の復元機事件の際にアバターハルカから巻き上げたドライバーである…
おい大丈夫なのか

「大丈夫ですよ一回煮沸と液体窒素で消毒しましたから！」

「もつと錬金的なアプローチで消毒してくれ！」

「キャロル監修で安全性は確保してますから問題ありません」

「なら大丈夫だな!!」

するとエルフラインはレプリケミーカードを取り出す

『スチームライナー』

不穏な待機音が流れる中、咲那が立ち上がる瞳から光が消えた彼女に宿るのは再会した最愛の兄を狙う泥棒猫への憎悪である

『取り押さえろお!!』

『遅いぜ! あばよ!!』

そして咲那はチェンジスパイダーのカードを手に取ると同時に

咲那の足元に黄色の箱が…おいアレは!

「オーディエンスの応援アイテム!? 何で今来たんだよ!!」

開けてみるとそこにはレンゲルバツクルとラウズアブソーバー、そしてクラブのラウズカード一式があるではないか

「まるで狙い澄ましたようなアイテムじゃねえか! ベアトリス! 今度白スーツあつたら切り捨てろ!! 俺が許す!!」

「合点です!!」

「あははは……これは義兄さんが見てたから知ってます……ねえ蜘蛛さん？私に力を貸してくれるんですか？」

『ああ、貸してやるから戦え……戦え……俺の為に……』

「あの……その程度の催眠暗示で私を乗っ取れると思ってます？それと私が戦うのは私の為です貴方の為じゃないです……虫ケラが身の程を知れ」

『ん？何だ？おい待て!!何だこの小娘の病みは!!睦月の奴より深い……だ、駄目ダア！俺には制御が……ぐあああああ!!』

「コレでよし……えへへ……見てくれましたか義兄さん？」

そのやり取りの後 咲那の持つチェンジスパイダーのカードは怪しい紫色から完全封印状態のオレンジ色のカードへ変わったのである……おいアンデットが精神侵される

ほどの病みって何だ

ウルファンデットは恐れ慄き

「何だと、あのスパイダーが逆に精神支配されただと！そんなヒューマンアンデットがこの世界にはいるのか!!」

「いや皆がそうではないぞ？というより止めるナツキ、ジャガーノートが壊れる」

「分かってる！2人ともやめろ!!」

「退いて下さい、ナツキさん…その女には分からせる必要があります…誰の男に手を出したのか」

「退いてニイサン…その女の人をやれませんので…」

「どうしてだよ咲那、どうしてそんな乱暴な子に！俺か！俺のせいなのか!!俺がいな

かったから寂しくてグレてしまったのか咲那!! なら安心しろ俺はもう咲那を離さないから一緒にいよう!」

「義兄さん!」「咲那!」

「ナツキさんは僕を捨てるんですか……」

「違う! エルフナインやマドカ達も一緒だ!」

「義兄さん?」

この光景に思わず

「うわ、最低」

「お前は黙れ!! エルフナインも待ってくれ! 咲那は俺の義妹なんだよ! 咲那! 彼女はエルフナイン……俺のその……大事な人だ」

「なーんだナツキさんの義妹さんでしたか、僕とした事がうっかりしてましたよ初めまして咲那さん！僕はエルフナイン、ナツキさんの恋人です！お姉ちゃんでも構いませんよー！」

「へえ……義兄さんの恋人……」

「それとその歳なんだからいい加減兄離れた方が良くと思いますよ、ほらナツキさんから離れてください膝上は僕の定位置です」

「いやです!!私!!は義兄さんとずっと一緒にいるんです!この居場所を取らないでください!!…それに知らないんですかあ?」

咲那はゆらりとした動作で目を開くと

「義妹なら結婚だつて出来るんですよ?お兄ちゃんだけ愛さえあれば関係ないんですから……」

その時にゆつくりとチェンジスパイダーのカードをバックルに入れる

「ナツキさん！貴方、自分の義妹になんて教育施したんですか!!」

「ナツキ……いや、俺よりも酷いぞ」

「ちよつと待て咲那！俺がない間に何があつた！」

「私、義兄さんがいなくなった後沢山考えたんです考えて考えて……義兄さんが死ぬ悪夢を見続けて……そして一つの結論に達したんです」

「結論？」

「大好きな義兄さんは私を守る、他の人も寄りつかない場所で2人きりで暮らせば良いと……これがアークの導き出した結論です!!」

完全にエルフナイン達と同じ目をしてやがる！

「アークは何を演算してくれてんねん!!」

「咲那!?!」

「成る程…今わかりました貴女とは一度お話しする必要がありますね」

「私も話があります…:義兄さんと別れてください…:エルフナイン!!」

「さんをつけてください!デコ助!!」

「変身!!」

『ドレッド…零式!』

『OPEN UP!』

同時にエルフナインの体が燃え盛る炎と骨に包まれてスチームライナーの力が彼女に宿る漆黒の装甲を纏う錬金術師 字は

「仮面ライダーレッド」

漆黒暴走機関車 仮面ライダーレッド・零式

そして咲那はオリハルコンエレメントの盾を通過すると蜘蛛とクラブスーツを意識した装甲を纏う 現行のブレイド世界にある最新ライダーシステム 最強と噂の

暗躍する蜘蛛 仮面ライダーレンゲル 現れる

睨み合う両者に対して

「さあ始まりました！第一回 ナツキ争奪正妻戦争!!司会は私、常葉ハルトがお送りします！」

「そして実況解説は俺、織斑一夏が行います」

「さあ一夏、今回の対戦カードをどう思いますか？」

「取り敢えず……マドカはロクでもない男に惚れたのは分かります！」

「おーつと！解説とは思えない暴言ダア……というより俺は良いの？」

「ハル兄に関しては諦めています」

「おーつと一夏にも匙を投げられてしまったあ！けど一夏、明日は我が身だぞお！」

「人聞き悪いな!!」

「夜中、鈴と箒ちゃんにオリガ……あとセシリア、ラウラ、シャルロットに警戒……いや待て後2人増えるのか!!いやあ一夏もモテますな!!」

コイントスしてみる、ふむ女難か

「不穏な事言わないでくれよハル兄！ 箒達はそんな事しないぞ！」

「安心しろ一夏、俺の占いは当たる」

「だから怖いんだって!!」

しかしドレッドとレンゲルか、この対戦カードは見ものだな

ドレッドはキャロルの解析だとレプリケミーカードを使った際な戦術を得意とするらしいが

「レンゲルにはアレがあるからな、カードの使い所が大事だぞ」

と手に汗握る戦いが始まろうとした…取り敢えず危ないので……シンフォギア世界の無人島へ飛ばしたのだが

その日 その島の生命全てが死に絶える程の凄惨な戦いが繰り広げられた

余談だが

「うわあ……睨那……あんなに強く……あはははは」

「ハル兄！ナツキさんがおかしな事に！」

「無理もねえ、俺達の記憶にある睨那ちゃんは健気で可愛い子だったんだ…彼処にいる
バーサーカーな感じではない」

まあ結果として2人の仲は深まったのだが

「義兄さん」「ナツキさん」

「どっちを選ぶの？」

「勘弁してくれえええ！」

ナツキはナツキで新たな修羅場が始まったのは言うまでもない

そして後日 ハルト達はフューレンでハジメと合流を果たしたのである

「すまなかったハジメ、俺の事情で…」

「気にすんなよ、しかし野田がナツキの妹だったとは知らなかったよ」

「因みにスパイダーアンデットを精神支配し返して完全封印させるメンタルの持ち主だ」

「マジかよ!! 人は見かけによらないなあ…」

「後はハジメ君、あの樹海で帝国兵と勇者一行に会った」

「っ!!」

情報共有はすべきと知った事実を伝えた

曰く、キョウリュウジンとスピノダイオーは帝国に追われている、そして捕まったハウリア族は帝国で売買されていると

「成る程な…情報感謝するぜ、ハルト」

「気にするなよ、それよりあの勇者一行…森にいる神獣を使い魔にしようとしてたんだが…」

「何？」

「まあ色々あつて、今俺達はその神獣といえるんだけどよ…勇者なら何しても良い訳じゃないだろ…無理やり手籠にするとか…つかこの世界の人間が信仰してる宗教って魔物、亜人は人じゃないんだろ？どーせロクな事にならないって」

「確かにな」

「だから保護した！今は逢魔で元気に飯食ってる！あそこまで俺の料理スキルに感謝した事はない!!」

「そうか」

「そう言えばハジメ君のファイズギアだが不具合とかないか？あるなら此方でメンテナンスするけど」

「問題ない…が」

「分かってるアクセルやブラスターも開発中だよ出来たら渡す」

「助かる、後はネクストだが」

「それは待ってくれ、時間がかかる」

「分かった、しかしお互い大変だな」

「そうだな…逢魔ではマトモなのが俺くらいしかないから困ったものだよ」

『笑えないジョークだな』

『それテストアロツサにしか許されないセリフだぞ』

『問題児筆頭が偉そうに言ってるよ』

「んだとおコラア!!」

『つてアナザーWが言つてた』

『おい待て!!久しぶりの避雷針にすんじやねえ!!』

「連帯責任!」

『』『そんなお!!』

『俺は悪くないゾ!!』

コレでよしと

「んじや俺は食材の買い出しに行くよ、ハジメ君は?」

「俺はシアと買い物だ」

「そうになるとユエちゃんが暇になるな…良かつたらテイオを連れてつてくれないかなーんか鎖国してたから街が目新しいんだと、けど土地勘ないから不安だな」

「分かったユエには俺から話しておく」

「それと……ハジメさん…実はこーんなものが、ありましてな」

とハルトがこっそり取り出したのは、緑色のカードデッキ

「そ、それは!!」

「マグナギガと契約済みのゾルダデッキよ…実はハジメ君のバトルスタイルに合うかな
と思っつてな、ドーよ今ならハジメ君特製のハンドガン一丁と弾薬と交換で「これでどう
だ!」まいどありー」

「うおおおおお!!」

喜ぶハジメに

『以外だな貴様がライダーシステムを譲渡するとは』

「ありがとうなハルト！」

「どういたしまして、まあハジメ君は俺の貴重なライダー仲間だからねえ、ああ宗一さんと政人さんにもアイテム作ってるよ…まあ時間はかかるけどな」

ハジメと別れると、んじゃ俺も食材の買い出しに行くかなと思う

「行こうぜベルファスト」

「畏まりましたご主人様」

そして一通りの買い物済ませると

「いやあ！買った買った!!」

「流石の量ですね」

「まあねえ、まあ俺はコネクトで異空間に放り込めるからな！」

「相変わらず規格外ですわね、ご主人様は」

「ベルファスト…今は2人きりなんだ…その」

「分かっていますよ…では参りましょうか」

「おう」

因みにだがベルファストを見て、何か良からぬ事を企んだ輩は…まあアレだ

「「「ぎゃあああああ!!」」」

シアゴーストの餌かHeavenの素材である…しかし

「h e a v e nの使い道がなあ…」

そもそも強い怪人作ろうにも強さ上限俺じゃ、ライダーにも勝てないだろう…いや
まあその他には無双するだろうけどさあ

「基礎ステータス上げるだけとか微妙だよね…」

『まあそもそも試作品だからなアレは』

「そうそう…うーむ……………まあ使い方はおいおい考えようか…今はベルファストとデー
トだ」

「ありがとうございます、ご主人様」

まあ楽しく2人でデートしていると、路地裏で

「おい兄ちゃん、美人メイドと散歩かい？」

自殺志願者が来たようだ…愚かな

「だつたら何さ？」

「俺達下々の者にも恵んでくれや最近はお金が寂しくてよ、いやならそのメイドを置いていけよ」

「はあ……お前ら食って良いぞ」

「はあ？何言つ「ぎやあああああ!!」!!」

よく見れば割れた鏡の中から現れたベノスニーカーに仲間の1人の頭から丸齧りされていたのだ

他にもボルキヤンサーがメタルグラスがエビルダイバーが輩達の頭をボリボリ食べ

ていた…ふむ中々にドン引きだが…まあ良いか

「ベアトリスから無山矢鱈に殺すなど言われてるけど襲いかかって来たんだから良いよねえ…」

敵に基本的な人権などない！武人や戦士には敬意を払うがな！

「テメエ等チンピラは、餌がお似合いだ…ベルファスト行くぞ」

「畏まりました、ご主人様」

「おいテメエ！俺達フリートホープに手を出したこの街に生きていけると思ってるのか
!?!」

「知らない？取り敢えずお前たち、このバカは踊り食いしてとさ
!!!」

「ひ、ひいーや。やめろおおお!!」

そんな知らない奴の名前出されても知らん…取り敢えず足から食われろ

「よーしよしよし…腹一杯ならミラーワールドに戻ろうなあ〜」

と手を振ると全員満足したのか帰っていった

の다가何故かハジメが殺意バチバチで待機してるではないか

「何あったの?」

「実は…」

シアの話だと、どうやら保護した海人族の女の子 ミユウを街の保安部に預けたが何かしらの人身売買組織が襲撃してその子を攫ったと…そしてシアと…何故かベルファストの身柄を要求してきたと

ふむふむ、それはつまり

「宣戦布告か…」

ハルトの敵である

「そうだな、すまないがミュウを取り戻すのに力を貸してくれ」

「愚問だハジメ君、ベルファストを狙う奴は敵だからね…ははは…よしアサシン!!」

「此方に」「お呼びでしようか？」

「お前たちの力を見せてくれ」

「お任せあれ、そのミュウという者の居場所を探してご覧に入れましょう」

「はい」

2人は直ぐに姿を消すと

「んじゃ取り敢えず行きますか」

「ああ」

そして指定の場所へと向かうとそこにはミュウの姿はなく武装したチンピラが沢山いた

さて問題 彼等はどうなったのでしょうか！

正解は!!

「ありがとうハル、いやあ久しぶりの仕事だから心踊るよ」

「だが時間との勝負だ、頼んだウルティマ」

「はいはい！」

「ハジメ、後は任せろウルティマの拷問なら刹那で吐くから」

「そ、そうなのか…あんな可愛い子が…見た目によらないな」

「あまり舐めない方がよいぜ、あの子は逢魔王国の誇る最高戦力の1人だからな」

「マジか！」

「あ、終わったよー」

「流石だなウルティマ、偉いぞ」

「えへへもつと褒めて良いよ！」

「おう！本当ウルティマは良い子だよ…いつもありがとう」

「うん!!」

ハルトは返り血を浴びずに凄惨な死体を作ったウルティマを頭を撫でて褒めたのであった

正解は尋問用に何人か残して後は皆殺しました

外れた方はボツシユート!!です

まあ連中が待ち伏せてる所に俺が先にアナザーベルデに変身してクリアーベントで隠れるとリーダーばい奴を見つけてファイナルベントのデスパニッシュを叩き込んだ、あとアナザータイガになって玄関から逃げようとした奴をデストワイルダーが捉えて引き摺り回して、腹に爪を刺す技 クリスタルブレイクをすると

仲間の悲鳴を合図にハジメがゾルダに変身して突貫してゾルダバイザーで敵を蜂の巣にして回り、最後は両肩にシユートベントを装備して敵を屠っていった

その後は手っ取り早く拷問して情報吐かせたいので逢魔からウルティマを連れてきたのである

「ねえハル！お願いがあるんだけど」

「何だウルティマ？」

「1人が情報全部吐いたから残りはいらさないよね」

「ああミラーモンスターの餌だな」

「ならばボクに頂戴！魔法のサンドバッグにしたいんだよ、最近クヴァールお爺ちゃんから新しい魔法を教えてもらったから実験の的にしたいんだ」

ほほおクヴァールの奴、中々やるな流石は逢魔の宮廷魔導士長だ

「因みにどんな魔法よ？」

「えーと…確か…突然人体が破裂する魔法！」

「それへ凄い魔法だな！流石クヴァール！！人を殺す魔法を作る魔法使いだ面構えが違うぜー！」

「でしよ〜ボクもさ悪魔だから魔法には一言あつたんだけど、クヴァールお爺ちゃん
の発想には驚くばかりだよ…あ！今度さゾルトラクを改造した魂を貫く魔法をハル
にも見せてあげるね！」

「楽しみにしてるよ、取り敢えずその全員にこの世のありとあらゆる苦痛を味わせた
後にその魔法を使ってくれ」

「はーい！！じゃあ君達はコレからボクの玩具だから簡単に壊れないでよ、クヴァール
お爺ちゃんの魔法の成果をヤクヅキにも見せてあげるんだからさー！」

と笑顔でウルティマは連中の首根っこ掴むと逢魔へ帰っていった…アイツ等には

真つ当な死などないな同情はしない

ウルティマの情報だと、どうやら今回攫った連中はフリートホープというらしい、ああベルファストを狙ったあの連中かと納得したが

何故2人の身柄を狙った、というよりあの時フューレンの街にいたユエ、テイオ、カレン、アンティリーネ、ベアトリス、オリガの誘拐計画まであったと……ふむコレはあれだな

「ハジメ君、提案があるんだけど」

「何だ？」

「どの組織が攫ったとか考えるの面倒くさいからさ、もう皆殺しにしようよゴミ掃除したら街は綺麗になるよね！」

慈悲はない敵なら皆殺しの時間だぜえ

「賛成だ」

「よし宗一さん、政人さん…ちよーつとゴミ掃除しませんか？」

と電話をした後

「あ、ゾル大佐？コレからこの街の人身売買組織根絶やしにするんでショツカー関係者を全員逃がしてください、でないとな巻き込む可能性があるんで」

報連相は大事とばかりに連絡すると人身売買組織を根絶やしに動いたのである

その途中でユエとティオ、カレン達とも合流して全員で人身売買組織を潰して回った…しかしカレンが張り切ってるのは予想外だったな

「主殿、ミュウなる海人族に関して情報が」

「アサシン！グツジョブだ！」

「はっ！どうやらこの街の地下にある奴隷オークションで売られる予定です…反吐が
出ますな」

「よし、ハジメ君をその会場に案内してくれ…この元締めにはそれ相応の仕置きをく
れてやる」

「はっ！南雲殿、此方へ！」

「助かるぜ、呪腕さん！」

「何、気にするな行くぞ！」

アレぞ正にジャステイスハサンだなと感心した

そしてハルトはフリートホープの本拠地を発見すると

「んじや潰すか、ミュウつと子の場所が分かればアソコは用済みだ……うーむ人身売買組織だから……」

「ご主人様には考えがあるのか？」

「ティオは何故俺をご主人様と呼ぶのかは置いといて……」

「ああアイツ等全員生捕りにしてショツカーに売ろうと思つてさー！」

「まさかの人身売買じゃとー！」

「アイツ等さ今まで子供攫つて食い物にしたんだから自分達も商品として売られる覚悟を持つてるよね？」

「ご、ご主人様？流石の妾でもその闇はドン引きなのじゃが……」

「静謐ちゃんいる？」

「此方に」

「静謐ちゃんの毒って麻痺毒とか選べたりする？」

「ある程度強弱は選べますが、麻痺などは…」

「分かった、なら俺が合図したら弱毒をあつ建物に送り込んでくれる？」

「主の御心のままに」

「テイオは土魔法とか使える？」

「む？使えない事はないが…」

「なら大丈夫だな俺が合図したら土魔法で建物を密閉してくれ」

「密閉……毒……まさか……」主人様……」

「大丈夫大丈夫、殺しはしないから」

笑顔でテイオを安堵させたが直ぐに草加スマイルを浮かべて

「ベアトリスは殺すなど言っただけど死なない程度に痛ぶるなどは言っていないからねえ
……」

「怖っ!?!」「いいぞもつとやれー」

政人と宗一さんとも合流したので準備は万端だ……ナツキ? ああアイツか……良い奴
だったよ今頃、咲那ちゃんやエルフナインと修羅場を迎えているだろう

「悪いな2人も巻き込んで」

「気にするなよ、人身売買組織なんて見逃してたらオーマジオウに怒られちまう」

「ブートキャンプは嫌だ！ブートキャンプは嫌だ！ゼインニキ辞めてえええ！」

「ああ！政人のトラウマスイッチが!!」

オーマジオウのブートキャンプ……何だろう知りたいような知らない方が良さそうな気がするので放置！取り敢えず目の前の人身売買組織を根絶やしにしまーす！

ユエさん達の協力の元、残りはあの支部にいる奴だけなので全員が集まったと同時に

「よしテイオさん！」

合図と同時に土壁が建物を覆い隠すと静謐が待ってましたとばかりに弱毒を密閉空間で発動するとどうなる？

中は死屍累々であるが、それを見たハルトは笑顔で

「かの偉人、織田信長は言いました」

「何だよ？」

「敵拠点を囲んで火をつけるのは気分がいいなあ！」と

「それ放火魔のセリフだろう!？」

「後言うとしたら、それ明智光秀のセリフだから」

「取り敢えず合流して頭目捉えるよ、政人さんは防毒マスクしてね」

「あの、俺は？」

「ブラッド族なら毒くらい大丈夫でしょ？」

「いや俺にも毒は効くからな！」

「!!!」

「そんなバカな！みたいな顔しないでくれよブラッド族の事どんな認識してるのさ！」

「ヤベーイ奴」

「それ一部だけだから!!」

と言う訳でハルト達は毒ガスで密閉された拠点に入ると全員が泡吹いて気絶している……ふむ

「流石静謐ちゃんだな」

「寧ろ毒ガスが何で禁止兵器にカウントされた理由がわかったよ」

「しかも科学兵器じゃなくて英霊の毒だからな……」

「取り敢えず行くぞ！」

「いや防毒マスクは!？」

「ああ俺なら大丈夫、俺毒始めとする状態異常耐性持つてるから」

「何て便利な耐性スキルを!!」

『ハルト! いつの間にそんな耐性なんて手に入れたんだ!』

「ああ、俺の体にはいつもお前たちがいたから覚えたんだよありがとうな相棒!」

『王! …いや待て: ……誰が毒物だゴラア!!』

『お前に状態異常なんてかけた覚えはねえぞ!!』

「前は隙あるならば体乗っ取ろうとした癖に」

『それはそれコレはコレだぞ相棒!!』

「へいへーい、取り敢えず此処がリーダーの部屋だな」

ドアを蹴破るとそこには

「た……たふけて……」

毒で今にも死にそうなフリートホープのリーダーがいた手配書の顔とあつて……よしコイツは衛兵に渡して金にしよう。そして残りはシヨツカーに売ることしようと思つてたら

「マスター、私はお役に立ちましたか？」

「勿論だよ静謐ちゃん。ありがとうね」

「はい……」

頭を撫でて褒めると

「取り敢えず外に出ようぜ」

「だな」

そして外に出ると同時に美術館で大きな爆破が起こる

「ハジメやったな」

結果としてフューレンの閥組織 フリートホープは壊滅した その残された市場に
シヨツカーが参入 その規模を拡大したのである

そしてハジメはイルワ支部長の依頼という形でミュウを海人族のいる街まで送り届
ける事になったのだが

「パパ！」

笑顔でそう言うとハジメは困った顔をして

「成る程、海人族はお兄ちゃんをパパと呼ぶのか」

「いやそれは無理があるぞハジメ君」

「お前はいきなり女の子にパパと呼ばれて冷静でいられるのか？」

「いや慣れたものだが？」

「何でだよ」

「だって俺、娘いるし」

「はっ!?!娘!!」

「アレ？言ってなかったか？」

「初耳だよ！アンタ子持ちだったのか!？」

「こう見えてな人生経験豊富なんだ、それに養子もいる初対面の女の子からお父さんと呼ばれた回数なんか数えきれないぜ!!」

『それが異常だと言う事に自覚を持って』

『正確には未来から来た子供達、クロエ、折紙、鞠奈だな』

『こんなバカだが一応人の親なんだよ』

「マジかよ…」

「良ければその経験を色々教えられると思うんだが」

「ぜひ教えてくれ!!」

『おい見ろよ相棒の知識が普通に役立ってるぞ』

―失礼だな!!―

そしてハルトがハジメに色々教えて終わり一旦帰ると、そこには

「ではナツキさんの右半身をボクが」

「左半身は私が貰いますね」

「んーーー!!!」

今日の前で友人が真つ二つにされかけていた…エルフナインの手には恐らくレプリアッパレブシドーから抽出した刀が、咲那の手にはレンゲルラウザーが……ほむ

「いゆると」

「ん—————!! (俺を助けてお!!)」

「ええ……もうしようがないなあ2人とも!やるなら外でしてよ!! ジャガーノートが汚れるじゃないか!!」

「ん (え、そっち) !?」

流石に止めるしかなかったが二度とごめんである

迷宮へ

前回のあらすじ

海人族のミュウを救う為に街のゴミ掃除をしました。

「作文!？」

「そしてハジメ君も父親となりましたとき」

「そこだけ切り取るなよ!!」

そんなこんなで平和に一路、フューレンに向かっているのだがナツキの修羅場でジャガーノートは大変な事になっていた

「義兄さん……」

「咲那…頼むから皆と仲良くしてくれ」

「義兄さんは私がいらないんですか…そんな…」

そんな潤んだ瞳をされたら

「そんな事ないよ咲那は大事な義妹だからな」

「はい私も義兄さんが必要なんです、比翼連理なんです」

先日の樹海事件で見つけたナツキの義妹 咲那ちゃん…元々ブラコンだったのだが
久しぶりの再会で何か弾けている…元々大人しい子だったのに…

「なあウオズ」

「何でしょう?」

「比翼連理って……何だ？」

「我が魔王には一度義務教育が必要かと」

「辛辣だねウオズちゃん」

「え！勉強出来るの？」

「何故喜ぶのでしょうか」

「だって俺は学校ついていじめられる、暴力受ける場所ってイメージだからちゃんと勉強出来るのは嬉しいんだよ」

「ハル兄の学校って、そんなイメージだったの!?!どんな気持ちでIS学園の先生してたのさー」

「え？一夏とクロエは俺とは違う楽しい学園生活を謳歌してほしいなあって邪魔するならミラーモンスターにいじめっ子を襲わせる予定だったよ…何ならクラス代表戦の時、オルコットはボルキャンサーに襲わせるつもりだったんだよ…千冬に止められたけど」

「ハル兄ごめん!!俺のそんな気持ちでハル兄が先生してるって知らなかった!!あとそんな事やろうとしてたの!?!セシリア間一髪だったんだ!ありがとう千冬姉!!」

「ベルファスト嬢!お願いします、我が魔王に勉強を教えてください!!この人に最低限の教養を!!」

「かしこまりました、ではご主人様には基礎を施すとしましょう」

「わーい!!」

『末弟の闇も中々のものだな…』

『アナザーカブト…それは俺達がずっと感じてるものだ』

そしてハルトはジャガーノートに設けた一室で勉強をしているのだが

理系

「何故A君とB君は一緒に家から出て足並み揃えて学校に向かわないんだ!!何故時速が違う!!何で点Pはこんなにも移動するんだ!!理不尽だぞ点P!!」

「それが数学です」

と数学問題で頭を抱え

「作者の気持ちねえ……うーむ締め切り伸ばして!」

「行間を読んでください、ご主人様」

そして

「見える!見えるぞ!!これが勝利の法則なのか!!!成る程……つまりピースメーカーに積んであるイオンエンジンとシールド発生装置……そうか!この材料があれば俺でもシールド

ド発生装置が作れるぞ!!」

『おい相棒の目には何が見えているんだ!』

『怖いんだけど!』

『あと、何作ろうとしてんだ!』

「これで基礎学力が上がったのか? いや楽しかったな」

『うむ…ではハルトよボトルを振ってみよ』

「ええ…うん」

言われるがままフルボトルをシャカシャカすると今まで『複雑な数式』や『難しいグラフ』と知能指数低めな式が 戦兎さんのような複雑な数式やグラフになったのである
「うおおおおおおお! やべー!! 俺賢くなってるう!! やつと戦兎さんみたいになつたあ!」

周りから脳筋だ何だと言われているハルトだが実を言えば地頭は悪くないのである

IS編ではアナザライダーの助けもあつたが開発途中のISの基礎理論を頭に叩き込み、IS世界で戦う為に専用機 シエイプシフターを開発しているなどバカではない

なのでキチンとした教育や仕組みさえ分かっているならば、それなりには出来るのだ…でなければ王様なんてやっていない

『あ、相棒が賢くなったぞお!!』

『天変地異の前触れだあ!』

『いや成長を祝えよ!』

『何か前にもこんなやりとりあつたな』

「ウオズ見て見て〜ベルファストのテストで100点取った」

「っ!! 祝え!! 我が魔王がテストで満点を取った瞬間を!!」

わーい!と皆が喜んでくれた…が

「うーむ今まで勉強してなかったが…やってみると普通に面白いものなんだな!!」

「寧ろ今までがおかしかったのか…」

「まあそもそもあの妹とトーマの様子から見ても真つ当な教育とか無理でしょ」

「意図的に学ぶ機会を奪いハルト様を見下しやすいバカにしたと…そのせいで我々がどれだけ苦労してきたか!」

「気分の悪い話じゃな…:…ん? 待てカゲンよさり気無くハルト坊をバカ呼びしとらんか?」

「気のせいだ」

「カゲン先輩最低です」

「よし！賢くなったのをキャロル達に見せて来よう!!」

「賢さが0から1になっただけだよね？」

「それでも大きな成長じゃろう？ウオズや妾達旧四天王からしたら奇跡的な瞬間じゃかな」

「武芸一辺倒の西楚霸王が策謀を身につけたら誰にも止まりませんよ天以外にはね」

「まあのお」

—————

逢魔

「キャロル！」

「おかえり、帰ってきてたのかハルト」

「ただいま、あのさ…前から思ってたんだけど…あの錬金術の思い出変換効率って、どしたのキャロル？」

よく見るとこの世のものとは思えない！という顔をしたキャロルがいる……ん？

「どうしたのだハルト!!何か悪いものでも食べたか!？」

再会早々になんて事を言うんだ、この錬金術師は

「いやいや最近、ベルファストに勉強教えて貰ってるんだけど意外と楽しくて…ん？」

そこには書類とサタンサーベルを落とした束と千冬がいた

「あ、2人も久し「ハルクくん風邪じゃないよね！」へ？いやちが「お前からそんな台詞を聞く日が来るとは思ってたぞ!!」はい？」

「大丈夫なのかハルト!？」

「大丈夫ですが何か？」

「ちよつと待つてろ……おいベアトリス！何故ハルトがこうなるまで放つておいた!!ハルトが自分の意思で勉強を始めるなど……そのトルーパー！今すぐ国民に知らせろ！嵐が来るぞ!!」

「ベアトリスは何もしていないから怒らないでもと千冬ー!!それは嬉しい事なんじゃないの!？」

「何を言っている、俺達は確かにハルトの成長が嬉しい……だが少し複雑でもあるのだ」

「そうだよハルクくんが賢くなったら束さん達、ハルクんの役に立てないと思つて……」

皆……

「早い話しが頭良いのは解釈違いなんだよ」

「銀狼？何言ってるのかな？」

メタだなあと思ったが……ふむ確かに

「一人で全部やろうとしたらダメだよな」

『相棒？』

「誰かに頼る事も大事か……また皆に教わったよ確かに一人で全部やるのはダメだな」

そしてジャガーノートに帰ると

「いつも通り、皆に頼む所は頼むから宜しくう！」

「お任せください我が魔王」

「あのさ俺が賢くなったら解釈違い？」

「割と」「いやまあ成長は嬉しいが…」

『まあ、お前はありのままが良いって事だ』

何か色々複雑であるが仕方ないと割り切ろう

だが六万の魔物を蹂躪し、シヨツカーの市場を拡大した事が予想外の効果を齎した

「良くやったな流石はオーマジオウを相手に啖呵を切るだけの事はある」

「いやいやそんな事ありませんよ」

ゾル大佐がジャガーノートにきて話し合っている

「まあその位で無ければ我等を率いるなどの妄言は吐かん」

「……………」(バレてるー！)

冷や汗が止まらない会談であつたのは言うまでもない

「だが期待してなくもないから頑張れ」

「どつちだよ」

「まあ貴様が矢面に立つから我等は痛くも痒くもないがな」

「そつちが本音か」

そして

「やあ初めましてミュウちゃん、俺はハルト宜しくね」

「宜しくなの！」

うん！元氣いっぱいだな！！

「んでハジメ、エリセンで子離れは出来そうか？」

「どうだろうなよく分からない」

「そんなものだよ…俺だって未だに子離れ出来そうにないからな！！」

「胸張って言う事かよ」

「俺の娘を嫁に欲しくば俺を倒していけ！！」

「理不尽だな」

「それなんて無理ゲー？」

宗一と政人が呆れるのと一緒にハジメはやれやれ、これだから親バカはと思ってたが
数日後 再会したクラスメイトに対して言う

「テメエ、何娘泣かせてんだ！殺すぞ!!」

結局 どっちもどっちと言う事はまだ知らなかったのであった

そして最近 ナツキはと言うと

「なあハルト…」

「んだよ」

「咲那と俺の距離近すぎない？」

「え、今更？」

「普通の兄妹の距離感じゃないって思い始めてきたんだよ！最近さ何かエルフナイン達並みの圧を出すようになったし、スパイダーアンデットを完全封印した仮面ライダーレングルになるし！もうピブペポパニックだよ!!」

「取り敢えず落ち着こうな、ほら…ってどの辺で距離感おかしいと思いはじめた？」

普段と逆の構図に困惑するが

「ああ…最近、買い物に出る時も一緒」

普通だな

「^ズご飯食べる時も一緒」

普通だな

「一緒にお風呂にも入ろうとしたから全力で止めたけど」

「はいアウトーーー!!」

「しかも最近ベットに侵入しようとしてますんだぞ!!怖くなってきたわ!!」

「全国の妹に夢見る連中に謝れ!!」

「だからかエンタープライズ達も距離詰め始めて来たし…アルトリア達も…うう…けど不思議でさあ…最近俺の私服が何着か無くなってんだよハルト知らない?」

「俺が知るかアホ」

自業自得として思えないが…ハルトは数時間後

「咲那ちゃん、ご飯出来たから食堂に……………ん？」

ハルトはノックして部屋に入るとそこには壁、天井を覆い隠さんばかりのナツキの写真……恐らくアングルの隠し撮りだろう、私服を着せたマネキンがある……まさかナツキの無くした私服って!!

「な、何だこれは……………まさか咲那ちゃんが……いや待てよ……………これ……………」

『あ、相棒……俺は今、怒り狂ったオーマジオウを前にしたあのトラウマ並みに震えているぞ』

『それ恐怖のベクトル違うナ』

「これナツキの……………いやいやまさか……そんな……………」

恐らく見てはいけないものを見てしまったという恐怖…具体的にはパニックホラーで襲われて死ぬキャラと同じ状況だなと感じると同時に背後に近づく影が

「ハルトさん」

おかしい、ここは振り向いてはいけない気がするが……ダメだ振り向いてしまう!!

そこには件の咲那ちゃんがいた

「よ、よお咲那ちゃん、ご飯出来たから呼びにな…それと悪いノックしたが反応なくてな
…」

「そうでしたか！ありがとうございます」

「良いって事よあと「ハルトさん」何かな？」

「コノコトハダレニモハナサナイデクダサイネ？」

ハイライト消えた目でそう言われた時

「はい！神（師匠）に誓って!!」

俺はその日 初めてヤンデレに立ち向かうナツキに敬意を払ったのである

「はあ……」

「どうしたのさ溜息なんて吐いて」

隣に座るアリエルに思わずポツリと本音が溢れる

「いやさあ、世の中知らない方が幸せな事であるな」

「ああそうかもね」

「思えば遠くに来たなあつて思つてさ」

「そう言えばハルトはどうして国を作つたんだい？」

「うーん……ノリと勢い？」

「そんなフワツとしたもので建国したの!？」

「まあそれはキツカケみたいなものだよ……」

作つた理由はウオズが洗脳された時に話したから後で話す理由もないんだけどね

「気づくと出来てたんだよ俺の居場所が……皆の帰る場所が……それを俺が守れたなあつて

思うんだ」

アギトみたいな事を言ってしまったなど困った顔で笑うも

『俺じゃない俺達だ相棒』

「だな…：そーいやはアリエルさんや」

「何かなハルトさんや」

「体の調子はどう？アレから変なところない？」

「ないよー！いやあ健康な体で動き回るのは楽しいねえ！昔を思い出すよ」

「ああ人類の半数を殺したって奴」

「そうそう、その時は憎いエルフのあんちくしょうを殲滅したんだよねえ」

「マジか」

「あ、けど私の世界のエルフ限定ねアンティリーネちゃんやカレンちゃん達には何も知らないから安心してよ」

「そうか」

「しかし君のところは本当に凄いねえ」

「そうか？普通だろ？」

「いやいや何処の世界に暗殺教団の教主やグランドサーヴァントの花の魔術師とか竜の魔女を従える人がいるのさ？」

「訳に詳しいな俺達側の話、誰か話したの？」

「ああそうなんだよ、実は前いた世界である奴と私の魂が混ざった時に色々知ったのさ」

「魂ってそんな簡単に混ざるものなのか？」

「いいや普通は混ざらないけど？」

「そうか……」

　　そういやあウルティマと初めて会った時に言われたな、俺の魂は色々混ざってるって
　　…あの時から相棒達と魂レベルで融合してたのか

「俺よく自我保てるな」

「本当そうだよ私だって一つ混ざっただけで侵食される恐怖に怯えたり自分と誰かの境
　　目が曖昧になったり性格とか変わったのに何百も取り込んでおいて普通にしていると
　　可笑しいよ」

「うーん……」

確かに俺。侵食される恐怖の無かったなあ、そもそも我思うゆえに我あり！な精神だしだからか良くある人外に変わるなんて恐怖も無かったんだよなあ……

「まあ良いか！相棒達というなら楽しいし」

考えるのやーめた！とばかり笑う、だつてクロツクの時に静かすぎて気持ち悪いとかあつたからなくあの静寂に耐えられないわ！

「やっぱりお前達がいないとつまらないわ……別に俺の魂がどうこうとかじゃなくてさ皆一緒だから大切なんだよ」

『相棒……なら俺の待遇改善を要求するゾ！』

「検討に検討を重ねます」

『真面目にやれ!!』

んでだ

「今更だけど何でジャガーノートにテイオも乗ってるの？」

「何を言うのじゃ、ご主人様…妾も旅の友にしてくれたもう!!」

「ええ……」

「その不快に感じる眼！なんとまあ心躍るのじゃ!!妾に新しい世界の扉を開いた責任をとってほしいのじゃ！」

「それハジメ君に言えよ、君にケツパイルした人に」

『ええ……』

俺の心のパラドもドン引きしていた…いや初めての人種で混乱が隠せないでいる

「やっぱ、ハジメ君に投げよう」

「それが懸命かと」

そんな話をしているとフューレンの街が見えて来た

取り敢えず護衛対象を実家に帰して報酬を貰ったハジメはミュウの事情を説明して
いた

ハルトは欠伸をしていたが取り敢えず精神世界に入った

ー精神世界ー

「んじゃ、今日は帝王学と農業の本でも読むか」

「帝王学と聞いて」

「天地の帝王登場！ i t , s s h o w t i m e !!」

「あ、アナザーオーガとサイガか…悪いな読書が終わってから読んでくれ」

「あ、ああ……」

「oh…」

何か変だなと思いい本に目を落とす

「やっぱりに立つ王にはそれ相應の立ち振る舞いが必要か…うーん……こんな時誰を見本にしたら良いんだろ…テスタロツサに…ああけど忙しいよな…」

「ここは俺だな相棒！俺は王になる為の教育も受けているから教えるのも造作もない」

「そうだな宜しく頼むよ、特にマナー関係とか頼む皆に習ってるが各地の文化や風習によつては無作法とも取られてしまう…その辺も学んでおきたい」

「任せておけ………え？」

「ど、ど、どうしたんだ相棒！普段のお前から絶対聞く事のないワードばかりだ！」

「うん…：やっぱりいつまでも皆に迷惑かけてばかりじゃダメだって思ったんだ！」

「おおおお！」

「オーマジオウを倒すって、その場のノリと勢いで言ってしまった手前、あの最低最悪の魔王を撃ち倒す為に俺は成長しないとダメだなって自覚した!!」

というより

「」「」「」「」「」「」

「あ、相棒が至極真つ当なことを言っているう!？」

「こ、これが成長!!」

「付き添って何年目か…俺達はこれ程感動した事はないぞ!!」

「取り敢えず本読むから黙ってろ」

—————

うたた寝している中、談笑する面々のいる部屋をぶち破る音が

ボタン!と慌てた様子で来たのは

「……………遠藤?」

影の薄い彼のクラスメイトであった

「な、南雲…なのか?何処だ南雲!!」

「ここだ」

「お、お前無事だったのか……そんな事より何でここで呑気に茶しばいてんだよ!!」

「ひう……」

驚いて泣きそうなミュウを見てハジメは怒る

「おいテメエ、何娘泣かせてんだ殺すぞ!!」

「ええー!」

「……………ん、ふわあ……………っ誰!?!」

「いやこつちのセリフ!!」

「……いつハサン並みの気配遮断スキル持ちなのか!……と困惑していると

『主殿、此奴の気配遮断スキルは磨けば光るものがありそうですね…』

おい呪腕さんが褒めてるよヤバいつて!!

「そ、そうだった頼むよ南雲！高ランクの冒険者って事は強いんだよ！天之河や白崎達
が危ないんだよ！迷宮で魔人族と出会ったら変な時計みたいなので怪物になって強くなるし！頼むよ南雲!!」

「……………白崎は無事なのか？」

「魔人族が…時計？」

「あ、ああ…」

「ハルト、すまないが「俺も行くよウォッチ絡みなら俺の担当だお前はその白崎って子を助ける」頼む」

「イルワ、すまないが早速だ今回の救出はギルドの依頼って事にしてくれ人助けは慈善事業じゃないからな」

「それに一回助けただろう！って何度も依存されるのは迷惑」

シンフォギア世界でも正当防衛でノイズ蹴散らしてただけなのに任意同行を強制したりとか助けて！とかうるさかったからなあ…

「分かった」

「行くぞユエ、シア」

「ウオズ達はジャガーノートで戦力集めて待機、現場には宗一さんと政人さん、ナツキとカレンで行くよ、ティオは…」

「すまないがミュウを頼めるか？」

「分かった、呼ぶぞ」

『ドラゴライズ！』

「俺達が暴れてる間ミュウを守ってくれ、頼んだテイオ」

「うむ任せておれ、カレンは部屋の外で待機しておつた」

「主命とあらば即座に」

「ありがとうよ、今回は護衛任務も兼ねてる俺の騎士の武勇見させてもらうぜ」

「念願の槍働きです、お任せを主」

「よし行くか」

そして迷宮に入ると全員全力疾走で駆け抜ける

「俺、この階層から奈落に落ちたんだよなあ……」

「ハジメ君……こんな高所から落ちてよく無事だったな……俺なら死んでたよ」

ナツキは驚くも

「え？この高さから落ちて死ぬなんてないでしょ」↓宗一（ブラッド族）

「そうそうこの高さの自由落下程度じゃ人間死なないって」↓ハルト（怪人王）

「ああ死んでも蘇生するだけだ」政人↓（オルフェノク）

「「……………」」

すると3人は目で打ち合わせし呼吸を合わせるとナツキを煽る

「ええーマジ、ナツキは落ちたら死ぬの！」

「この高さで死ぬとか小学生までだよね！」

「あははははは!!」

「黙れ化け物怪人トリオ!!普通の人間なら即死する高度なんだよ!!無駄に頑丈だから腹が立つ!」

と話していると罫が開かないとハジメが取り出したのはティオに新しい世界の扉を開いた鉄杭を打ち出す そうパイルバンカーであった

「これで真下まで降りるぞ」

「うん」「了解ですう!」

「成る程な……そう言えばそれは……」

「おお!それは妾に新しい世界を教えてくれたものじゃな!」

「？」

「おい駄竜、ミュウの前で何て事言つてやがる！」

「落ち着けハジメ君！大丈夫だ最近テイオの奴はウオシユレットで新しい世界の扉を開いてたという事実が判明した！断じてケツパイルが原因ではない！」

「アレがキツカケでしかなかったというのか!!てかウオシユレットで!?!どうなってんだよー！」

「それより早く行こうぜ！」

「あ、ああ……」

そしてハジメは迷宮の下まで繋がるパイルバンカーを打ち込むと

「んじゃ」

「お先ー！」

「よっしやあー！」

「とおー！」

「待てよ……これ俺も落ちるよねえー！」

と全員そのまま自由落下していった

「なあハルト！このままだと俺と影薄い子は死ぬんだけど！」

「大丈夫大丈夫！打ち所が悪くなければ死なないし戦士なら自由落下程度なら死なないでしょー！」

「そんな何処ぞのドワーフみたいな奴が戦士だと思うなよ虚弱な人類舐めんな！」

「はあ注文の多い面倒くさい奴だなあ……鉄鋼」

『TUNE UP!ゲキオコプター!』

ヴァルバラドに変身して左手にゲキオコプターの多重錬成　ヘリの力によるホバリ
ングでナツキと遠藤を掴むのであった

そのまま降下を続けると目的地に着地するとハジメは先制攻撃とばかりにクラスメ
イトを襲う魔物に踵落とし一撃を加え、後発組は変身解除して合流する

「また泣いてるのか白崎？」

「南雲君!？」

「つと」

全員無事着地を終えると

「皆！助っ人を連れてきた！」

と味方だよ！と報告するがナツキはハルトの肩を叩く

「おいどうすんだよ、お前何に変身するんだよ」

「俺さこう見えたヒーローっぽい奴にもなれるのよ以外とね、カレンは彼処の連中をただ優先はミュウちゃんだテイオと一緒に守れ」

「はっ！」

「呪腕さんと静謐ちゃんは待機、あの魔人族が逃げようとしたら追撃だ」

「はっ！」「承知」

「ふーん………んでどれか分かるか？アナザーライダー」

「十中八九アレだな」

「やっぱり？」

「まあ暗い場所での戦闘なんて出来る奴ピックアップしたら、そうなるよ狙ってやったかアレしかなかったかだが…」

「流星はライダーオタクだな、その知識量だけは褒めてやるよ」

「ナツキ、デスパニツシュ」

大晦日のタイキツク並みのノリで伝えたと

「ナチュラルに必殺技を打ち込まないでくれ！」

「もしくは彼女の所へ私を食べて！って札をつけたまま部屋に放り込む」

「それだけは許してください!!」

渾身の土下座をするナツキ…そんなに嫌かと呆れるもハルトの視線の先には体から煙を出すコウモリのアナザークライダーが立っていた

その装甲は無機より有機、アナザークビルドやアナザークローズ達と同じ系譜のアナザークライダーだ…体から出る煙は原点においてトランスチームとライダーシステムのハイブリッド故の能力だろう

憎しみで力が増す狂った悪党

アナザーマッドローグって所か

「おいおい、魔人族がアナザークウォッチを何処で手に入れた」

「まさか人間がこの古のアーティファクトの正しい名前を知ってるとはね」

「ああ知っているよ何なら名前どころか元の持ち主だよ返せ、そうすれば命だけは助けてやる」

その言葉に驚く面々もいるが知った事ではない

「何?!へえなら断るね…私達の方が圧倒的優勢だからだよ、アンタを倒せして残りアーティファクトを頂くよ」

ほほお…つまりコレは

「舐めてやがるな、余程愉快な死体になりてえと見える」

交渉決裂、まあ交渉する気なんてないけど

「ナツキと政人さんはハジメの援護を、俺と宗一さんでアナザーマッドログをやる」

「おう！このエルフナインが改良してくれたデルタギアで！」

「暗い場所ならこの変身、映えるんだよな！」

「ハルトは分かっているぜ！」

3人はアタッシュケースからそれぞれのドライバーを取り出して腰につけると各々の変身コードを入力する

5・5・5 Enter

9・1・3 Enter

『standing by』

各々の待機音が鳴り響く中

「変身」『standing by』

「変身」

「変身!!」

『『complete』』』

そして3色の光が洞窟を満たすと現れた3人の仮面ライダー達の隣で

『バット』

『コブラ』

「蒸血」

『mist match』

『バット!バ・バット!／コ・コブラ!コブラ……ファイヤー!』

ナイトログとブラッドスタークに変身した

「ふう……ここにファウスト出身の戦士が3人揃ったな!どうだ粋な図らいだろう?」

「言ってる場合かよ……なら……んん！……とても不本意だがこっちの声の方が良いだろうなあ

「おおお！CVエボルトか！テンション上がるう！」

『だがトランスチームシステムではハザードレベルは上がりませんぞ』

「それって必要するに变身前のハザードレベル以上にはならないって事だよね？」

『そうだな』

「だからこそ、この最近勉強して賢くなった頭で考えた、その問題の解決策をな」

指で頭を叩きながら答える

「その答えは？」

「ああ…最初から高いハザードレベルで蒸血したらハザードレベルは高いまま維持されるんじゃないかな!」

『流石相棒!三步進んで三步下がってるぜ!』

『相変わらずの脳筋理論!いやあ実家のような安心感ですなあ!』

『うんうん、これでこそハルトだ』

「まあそれ以外にも狭くて暗い場所なら。こいつの出番だろ」

ナイトローグにはマッドローグと同じ暗視ゴーグルのような機能がある、モチーフの
コウモリよろしく暗い場所での戦闘が得意だからな

「この姿…戦兔さん達には見せられないな」

「おい待て…まさか会った事あるのか!れ

「ああサイン貰ったし、何なら今度玄さんと文字Tを買いに行くんだ!」

「俺も行きたいんだけど!？」

「何ごちやごちやと話してんだい!」

その言葉を合図に戦闘が開始された

「ふっ!」「はあ!」

ハジメはフォンブラスターと元々の武器 ドンナーの二丁拳銃スタイルのガンカタを使っているが時折 ドンナーをしまい拳打で敵を沈めるが その時 殴った後の手首のスナツプも忘れずにやっている…中々ライダーポイント高いよハジメ君!!

そんな中 政人とナツキは連携して大型の相手を沈めていた

豊富な武器による攻撃が可能なカイザをパワーはあるが手数が少ないデルタが援護するスタイルのようだな…確かに原作デルタの三原修二も戦闘よりも仲間の支援では名アシストを決めているし

「殴り倒す」

何故か知らないがエビとワニ、ドラゴンとかみたいなモンスターには殺意全開の攻撃を……あ！

「なあ……あの人さラツキークローバーに恨みでもあるの？」

「あるアイツ、二元流星塾生だからな」

「そりや恨んでるよ！自分達ああなつた諸悪の根源だもの！」

「死ねやあ！」

「もう1人で突撃しすぎだよ！fire！」

『BURST MODE』

あつちはあつちで問題なさそうだな……さて、こっちは

「ふはははは！はあ！」

ネビュラスチームガンで銃撃しているが

「無駄な努力だな…はあ！」

ブラッドスタークは体から蛇型のエネルギーを投影するとそのままアナザーマッドローグに体当たりさせると主人を助けようと動いた魔物にはスチームガンの射撃で沈めていく

スタークのスタイルは剣と銃のスタイルで状況に合わせて使い分けるようだな、ナイトローグは逆にライフルモードに合体しての槍や銃にして使うなど個性が分かれている

『フルボトル！スチームアタック!!』

スタークはガトリングボトル、ナイトローグはロケットボトルを装填して引き金を引く放たれた弾雨とミサイルは蛇魔物の頭を粉碎し大きな風穴を開ける

「まだだよ!!」

アナザーマッドロークを前にブラッドスタークは変身を解くと

「ならコレだな」

『コブラ!ライダーシステム!evolution!!』

エボルドライバーとエボルボトルを装填、第九の壮大なBGMを背景に力は解放されていく

『Are you ready?』

「変身!」

『エボル・コブラ!!フハハハ!!』

宗一はエボルに変身するとそのまま高速移動でアナザーマッドロークに接近してボ

ディーブローを叩き込む

「はあ!!」

「ぐっ!!」

拳のラッシュでアナザーマッドローグを削っていくとハルトは変身を解除すると

「んじややりますか……変身」

『change』

ハルトはチェンジマンティスのカードをジョーカーバツクルに読み込ませてマンティスアンデットに変身すると、カリスアローを呼び出すと見様見真似の弓道の構えをする

「モノは試し……魔力を収束、圧縮、螺旋回転」

『tornado』

読み込ませて弓矢に突風の力を付与すると矢は回転と強化が起こす

「しっ！」

放たれた魔力矢はハルトに宿る高濃度の圧縮魔力矢は銃弾よろしく螺旋回転しながら魔物を射抜いたのであった

「まあ……こんなものか」

『相棒、いつの間にこんな技を』

「俺だって能力ごり押しだけじゃないんだ…コレくらいはやれば出来る今まで俺が処理してみたのを眷属のファントムに任せてみたんだよ」

「ハルト!!」

「ん、何？」

カリスアローで一閃すると敵の魔物は賽の目切りされ血飛沫と返り血を浴びた

「なーんだ魔物って、どんな化け物かと思ったたらグルメ界にいる猛獣の方が強いじゃん
…これなら人間界側のガララワニの方がマシだね」

「ハルト！決めるぞ！！」

『ready go!!』

「ああ…んじゃ3枚コンボー！」

『float』『drill』『tornado』

3枚のラウズカードを読み込ませると互いに力を解放する

『エボルティックフィニッシュ！Ciao!』

「スピニングダンス」

マンティスアンデット故に技発動が自己申告ではあるが飛翔し螺旋回転をしながらのライダーキックを叩き込んだ後に

エボルの超圧縮したライダーキックがアナザーマッドローグに命中するとアナザーマッドローグは悲鳴を上げながら爆散する

魔族の女が倒れてウオッチが排出されたが幸いな事にマッドローグの力で倒していないのでアナザーウオッチを回収して除染すると

『魔王……』

ー初めまして、アナザーマッドローグ何か悪い所はないかな？ー

『いいえ……そんな事より………ふん！』

ベキと何かへし折れた音が…へ？まさか

『貴方い………忠誠を！誓おう!!』

「いや本家の真似せんで良い！それに俺達には上下関係とかないからさ対等に行こうぜー」

『そ、そうですか…：でしたら私の力をお使いくださいアレに使われていたとは腹が立つて仕方ありません』

「そうだな…見せてやるよ正当な持ち主が使う力をよ」
『マッドローグ』

天狗の巢のように乱雑に伸びたケーブルが体に纏わりつくつと先程のアナザーマッドローグとは違い やや本家に近づいた姿、しかし顔の右半分の面は砕け中からは頭蓋骨を意識したようなサイボーグの瞳が赤く光る

「へえ、ハルトが使うと同じアナザーマッドローグも別物だな」

「まあな………さてハジメ達とは」と

『『『exceed charge!!』』』

巨大な亀の魔物にファイズ、カイザ、デルタのトリプルライダーキックを叩き込み魔物を灰化させたのである

「いや、あれローズオルフェノクに原作で叩き込んだよな…」

「殺意ヤバあ…ちよつと！何逃げようとしてんだよ？」

『フルボトル！スチームアタック!!』

スパイダーフルボトルをトランスチームガンに装填して蜘蛛の糸の弾丸を放ち動きを止めると戦い終わったハジメ達と合流する

「オツカーレ」

「ああ、けど流石だな」

「当然よ、ナツキドーよ改造したデルタギアの調子は？」

「最高…てか最初からコレを渡せよ!!」

「善処しまーす！んでよお…魔族、誰のものを奪うつて？おい」

「くっ！殺せ!!」

「んじや遠慮なく…死ね」

「待てよハルト、話を聞いてからだろ？」

「そうだな…さーと、んじや俺の質問だ魔族はあと幾つウオッチ持つてんだ？」

「話す訳ないだろ、それより古のアーティファクトの正統の持ち主なんて迷宮を作った時代の者だアンタ何歳だよ人間じゃないのかい？」

「俺の質問に答えろ、お前の質問なんて求めてない」

そのまま腹に爪先蹴りを叩き込む

「いっふっー！」

そこから聞き出した情報をハジメは整理し終えると

「ああそう言う事か魔人族も大迷宮を攻略してる訳か…けど何でオルクスから挑むかな」

「ああ確か最後に攻略するのが良い場所…だったか？」

ミレデイのセリフを思い出すと魔人族の女は攻略者なのかと驚くが、それはつまり魔人族も迷宮攻略した奴がいる…7人ウオッチが敵の手に渡ったのは確定だな

「ちっ、面倒くせえ事になったな」

「で、どうするよコイツ？」

「まあアレだ」

「アレだね」

ハジメとハルトは無表情で武器を突きつけた

「敵なら殺す」

「だと思った」「だねえ」

2人の仲間達はそう言う奴と知っているからだ

だが

「待て南雲!!何も殺す必要はないだろう！」

え？と全員の目線が勇者wに向かう

「捕虜に…そうだ捕虜にすれば良い！南雲も俺達の仲間だろ？なら俺に免じて引いてくれ」

何言ってるんだお前と言う顔を見ると

「なあハジメ君、お前あの頭お花畑の仲間なの？」

「んな訳ないだろう…迷惑でしかない」

「だねえ…まあ俺は呼ばれなかったしな、一応聞くけど捕虜なる？」

「ないよ！殺すが良いさ！だけど覚えておきな、アタシの恋人がアンタを殺すから」

「俺を殺す？笑わせるなよ俺を殺すのはテメエ等じゃないんだよ仮面の戦士やその王だけだ」

そして鬱陶しそうにナツキの顔を見ると何見てんだよ？という顔をされたが、

「あのバカが俺を殺す勇者らしいけど……アイツの場合は……ヤンデレに刺されるな」

「んだとお!!」

「はぁ……」

そのままネビュラスチームガンの引き金を引いた　パァン!と弾けた音で全部終わらせたのは言うまでもない

「ハルトさん……アンタ」

「俺は別れたらそれまでだけど、君はその後があるだろう?なら俺が殺すのが筋だ」

「いや殺したいだけだろ?」

「あ、バレた？だって相棒を…俺の半身を我が者顔で使う奴なんて死んでしまえば良い」

「なんて事…貴方は自分が何をしたのかわかっているのか!？」

何か勇者が喚いているが

「敵を倒した、それだけだよ？」

「人殺しだぞ!?!悪いに決まってる!?!」

「は？アンタ等の価値観だと魔人やら亜人やらは人じゃないんだろ…人の言葉を話す猛獣を殺したのと大差ないんじゃない？」

「ふざけるな!!」

「ふざけてるのはどっち？君の言ってる殺すなつてのはさ、街に降りてきた熊を殺すの可哀想！眠らせて山に返そう！って言ってる人だよ？」

「その何が悪い!？」

「そのクマがまた人里に降りて人を襲ったらアンタ責任取れるの?」

「っ!」

「アンタのそれは大事な人が襲われてないから、奪われてないからそんな事が言えるんだよ、全部自分達が原因な癖して被害者面してんじやえよ」

この時 ハルトは過去の汚点とトーマを幻視したからか、今までに他人に向けた事が少ない純粹な殺意を向けた

「殺し殺されるの覚悟もないのに失せろよ……下等生物が」

「っ!!」

勇者達を威圧した時に後ろにいたパーティーメンバーも引いていた、1人いた小物のチンピラは

腰を抜かして失禁していた：ああアレがハジメ君の、これはハジメ君が決着つける場面だから後で良いやと一瞥されると仲間の元に戻り、変身を解除すると

「んじや帰ろうぜ」

「あ、主……」

「ああ大丈夫大丈夫、俺の敵だったら殺すけど今回は護衛しないとだから殺さないよ」

「はい」

「まあ向こうが死にたいなら別だけどな」

しかしまあ人の善意が届かないバカなのだろう、トーマと同じく正義バカだからな、取り敢えず連中を連れて迷宮に帰ると

「っ！義兄さん!!」

「咲那?!」

待ってましたとばかりに咲那が走り出して抱きしめたいのであった、それはクラスメイトは驚く

「咲那！良かった無事だったのか!! さあそんな男から離れて「は?」え?」

「何言ってるんですか? 貴方は…私の義兄さんがそんな男?」

咲那の目が怒り狂っている、ヤベーいな

「な、何だよ咲那！俺たちはお前を心配「しなくて結構、元々貴方達とついてきたのは世界渡航して義兄さんを探す為でしたから…貴方方とは義兄さんが会ったらそれまででしたので」なんだとふざけんなよ！咲那の癖に！泣きながら許しを乞えば良いんだよ

!!

チンピラの臆病者 檜山は咲那へ拳を振り上げようとしたが

「おいテメエ、誰の義妹に手を出そうとしてんだコラ」

ナツキはすかさず咲那を庇い檜山の拳を掴むとそのまま握りつぶさないとはかりに握りしめた

流れるにこの男は咲那に暴力を振るっていたのだろう……この屑め

「ぐぎやああああー！」

「なあハルト、助けるのは勇者だけで良いんだよな？」

「ん？そーそー依頼だとなあー」

「じゃあコイツは「殺して良いよ寧ろ殺せ」おう」

「ひ、ひい!! さ、咲那! 止めてくれ!! 俺とお前の仲だろうが!」

「クラスメイトでイジメの加害者と被害者ですよ? 貴方の粘着には迷惑してたんですよ」

「イジメ? テメエ咲那に何しやがった!!」

珍しいなナツキがマジギレしてるな

「そ、そんな、俺は…咲那の! テメエ何者だ!!」

「俺は咲那の義兄だ、俺の可愛い義妹を泣かせた傷つけた…それだけで万死に値する」

「待ってくれ、檜山は咲那のことを考えて「もうテメエは喋るな」ごごふ!」

「これ以上ややこしくしないように腹に一撃叩き込んだが

「つたく、お前みたいなタイプは周りを不幸にするしか取り柄がないんだから変なことすんじゃねえよ、あ、コレは経験則な実際俺は不幸になったから…目に見えることだけが全部じゃないのに見える範囲だけ見て全部知った気になるそんな奴は目の前の問題だけ解決して良い気になつてるだけのガキだ」

この一言にポニテの女の子とメガネをかけた女の子がピクリと反応した

「ごほごほ…ほ、そう言えば…お前はあの化け物になる時計の持ち主だつて言つてたな！その化け物時計なんてあるから魔族が人間に迷惑をかけているんだろう！沢山の人間を不幸した責任は取るべきだ!!あんな時計で簡単に化け物になるお前みたいな人間じゃない化け物だ!あの中に封印されてる化け物を利用して何を企んでいるんだろ!もしくは取り憑かれてるんだ!可哀想な奴め!」

「はっ。」

その勇者の言葉を聞いたハルトは迷宮にいる全ての魔物は命の危険を察知して大移

動する程の恐怖にして脅威　テイオでさえ普段の言動よりも先に恐怖が勝る

無言の魔王覇気と感じる殺意に政人と宗一も思わず震え上がり理解した　成る程
オーマジオウの奴が監視につける訳だ　と

ハルトの逆鱗は幾つもあるが、ナツキやウオズ達　果てにはクヴァール達のような新
参者でさえ理解している暗黙の了解　それは

ハルトの中にいるアナザーライダー達を侮辱する事

長年ハルトと苦楽を共にした相棒。半身への侮辱、その地雷を踏み抜いたものの末路
は総じて無惨であった

「……………」

「ど、どうした怖気づいたのか！ 凶星で言葉も出ないか!! 化け物め!!」

「あはは……愚妹とトーマ以外でこんなに怒ったのは初めてだよ……このまま消しとばし
てやる依頼なんか知るか」

「おい天之河、お前はもう黙れ!!」

『exceed charge!』

場を納める為に勇者の顔面に全力のグランインパクトを叩き込んで気絶させる

「ハルト!頼むから今は堪えろ!今の一撃と俺に免じて今だけは抑えてくれ!!」

「……………」

「あ、主…………」

カレンでさえ初めての展開であたふたしている

『おい相棒、あの男の言葉も部分的には事実だろ?』

『魔族側にアナザーウォッチはあったからな』

「王国の連中も持ってんじゃねえの?」

『かもな…なら取り戻すだろ？』

「ああ『なら今は堪えろ』けどお前たちを侮辱するの許せん、ただでさえトーマと同じ顔してんのによ」

『俺達も堪えているのだ、我慢しろ』

「……………へーい」

『アナザーWを磔にして良いから』

『だから何で俺ナンダヨ!!』

「はあ……………つたくお前等は…」

魔王覇気を解除して、一面倒くせえという顔をしたのだが

キーンキーンキーンと甲高い音と精神世界から

「あら、この男……」

「ねえ、ハルそいつ殺して良い？」

「構わんよな我が君？」

問題児筆頭に殺せ！殺せ！と怪人軍団さえ怒りのコールをする始末である

「黙れ俺だって我慢しろって言われてんだからよ」

そう言うのと全員押し黙ったが全員が思ったが次顔見たら 殺すと決めたのであった

「つー訳だナツキ、その屑を一発殴るのは許すが追撃はするな」

「ありがとよハルト！んじゃ……」

『fire』『upper』

「これは今までイジメられてた咲那の分じゃ！死ねボケエ!!」

燃え盛る拳のアップパーカットが檜山の顔面を捉えて顎を粉碎した死んではないから手加減はしたようだが

「あ、あがぁ…」

それには過去の件もありハジメもスカツとしたのと

「ぞまぁみろ」

咲那が悪い笑顔を浮かべていたという

そして迷宮を出るとミュウの件でハジメをパパと呼ぶのは何故だ！と白崎香織が問い詰めていると

「私もついていくから！」

その一言で勇者パーティに激震走る！何か揉めてるが知ったことではない

「ご主人様…今回の妾の戦いぶりは如何じゃったか!？」

「あ。ごめん見てなかった」

「何と辛辣う!じゃがこれが堪らんのだじゃあ!!」

身をくねらせて愉悦しているティオにハルトはドン引きする

「何でこうなった…」

「はあ…それは言わない約束かと思えますよ」

「だよなあ…カレンもありがとな」

「騎士として当然の事ですよ」

「なら俺の騎士に相応しい力が必要だよな? オリガとジナイーダにも渡す予定だが…俺

の最初の騎士に贈り物だ」

オリガは一夏を守る為にジナイーダは……どーだろハジメ君が気になってるみたいだけどなあ

「これは……ライダーシステム!?!ですが私にはコレを纏う資格なんて……」

「ある、お前は俺の騎士だ……他の誰が笑っても俺だけは肯定してやる……つか笑った奴は俺が潰す」

「主……」

緑色のバックルにケルベロスのチェンジカードを渡したのであった

「これからも宜しくなカレン」

「はいー!」

そうすると目を覚ましたのか勇者がブツブツと

「そんな香織が何で……香織は幼馴染で俺とずっと一緒に……っ！お前が何かしたのか
南雲！！」

「なんでやねん」

思わず関西弁でツツコミしたハジメに同情する

「あんな怪しい連中を連れているだろう！そいつ等に頼んだんだ！それに子供や奴隷を
つれてる奴らだぞ！ダメだ香織！女性をコレクションしてるような奴のところに行く
べきじゃない！」

何故あの手の連中は地雷原をタップダンスするのだろうか？

「君達もだ。これ以上、その男達の元にいるべきじゃない。俺と一緒にいこう！ 君達

ほどの実力なら歓迎するよ。共に、人々を救うんだ。シアとカレンだったかな？ 安心してくれ。俺と共に来てくれるなら直ぐに奴隷から解放する。テイオも、もうご主人様なんて呼ばなくていいんだ」

その言葉に全員がドン引きしていたが

「何を言ってるのでしょいか主？」

「アレはないの…うん、ない」

「無視しとけ、あのタイプは取り合うだけで時間の無駄だけど…俺の大事な奴を奪うなら本当に依頼とか別に殺してやろうか…」

相棒達が止めなかった殺してやるんだがなあ…ベアトリスとかに怒られるけどアレは殺すのが世のためだと思うんだよ、そんな感情が顔に出ているのだろうか

「お前等決闘しろ！武器を使わずに素手でだ！俺が勝ったら香織を離して全員を解放し

てもらおう!!」

この言葉…ハルトを知る者達から見たら自殺志願者のそれでしかなかった、一応バツ
タカンドロイドからピースメーカーで中継されている映像を見る面々は勇者への怒り
と同時に

—————

ジャガーノートで

「うわあ魔王ちゃん相手にステゴロって」

「死んだなああの男」

「同情はしませんよ、やっちゃえ魔王様あの男の体を粉微塵にしてください」

「無様じゃな、何故よりにもよってハルト坊の得意分野で挑むのか」

「まあ知らないから言えるのでしようが」

心は一つ

「「「あの脳筋にステゴロとかバカじゃねえの?」」」」

伊達に究極の闇相手に殴り合いしてないのだと

「なら俺達が勝つたらお前は何をやる？」

「何を言つて！」

「負けて失う覚悟もないのに決闘なんて笑わせるなよ人の大事なものを賭けさせるんだ、テメエも等価になるものを賭けないとダメだろうが」

だが勇者の目には俺達が彼女を不幸にしているそれを助けるんだってご都合解釈しているのだらうな哀れだな、しかし勇者は突貫するがハジメの作った落とし穴にはまり落ちた穴にハジメは追撃として閃光手榴弾や麻痺属性弾丸を放つとトドメとばかりに生き埋めにした

「おい、ナツキ！ここに穴があるからここに生ゴミ捨てようぜ！」

「そうだな丁度ジャガーノートに大量にあったな」

「俺も手伝おう」「俺も俺も！」

「ごめんなさい!!あのバカには説教しておくからどうかそれだけは許してくれないかしら!せめて人の尊厳は守ってあげて!!」

「え?俺の敵には人権なんてないよ?殺さないだけ慈悲かな」

「そーそー助けたのに感謝の言葉なしに暴言やら論点すり替えた妄言を吐くし」

「それに女性をコレクションしてる!とか自分の事を柵に上げてよく言うよな!」

「コレクションだと…咲那もそう見てたのか…なら許さん!!おいハルト他にはないのか?」

「普段なら止める側のナツキも今回は約2名には腹が立つので止めないでアクセル全開である」

因みに檜山は嫌々な香織の回復魔法で傷を治すと再び懲りずに咲那や香織を引き止めようとしたがナツキの殺意に後退りして押し黙った、ナツキもナツキで化け物に囲まれて成長しているのである

「…はっ！一匹でマウス十万匹を即死させるフグ鯨の毒袋が大量にあつたな、この間のフグ鯨フルコースの残りだけど…」

「なあハルトよ彼処に丁度良く処分出来そうな穴が無いか？」

「っ！お前……天才か!？」

「本当なら止める側の俺だが咲那に手を出す有象無象は俺が許さん！今だけは全力でお前の味方だ！さあ勇者を毒殺するんだあ！」

「ふふふ…ナツキよ流石は俺の事をよく分かっているな宗一くん、ブラッド族の猛毒も貸してくれ」

「ああ…触れた瞬間に激痛が走るタイプと触れた瞬間に消滅するタイプどっちが良い？」

「激痛が走ると同時に消滅するタイプで」

「ふはははははは！まさかそう来るとは…これだから人間は面白い！」

「おい宗一、エボルトと同じ事言ってるぞ？」

「本当にごめんなさい！毒殺も辞めて頂戴!!」

何気に腹が立っていたので勇者のいる穴へと生ゴミと猛毒投下をしようとする4人がいたが、ポニテの女の子 八重樫雫が全力で謝って止めようとしていた

余談で勇者は命は助かったのであるがハジメ達が離れてから掘り起こされたのは言うまでもない

また結果としてハジメが檜山を脅して黙らせて終わらせたユエとシアと香織のバチ
バチな雰囲気にはジメはため息を吐いて

「何でこうなった」

天を仰いだ

んで

「ご主人様！妾もライダーシステムとやらが欲しいのじゃが！」

「は？これは俺が認めた最高の信頼の証だカレンは頑張りを認めた…が誰がお前に渡す
か駄竜」

テイオに絶対零度の声音で答えると

「おおー！何という言葉のナイフ！じゃがコレはコレでよいのお……」

「何でこうなった」

そして

「義兄さん…ありがとう」

「咲那は俺の大事な義妹だよ何度でも助けるさ…けど辛い時に側にいなかった俺が言うのもアレかな？」

「そんな事ないです…そうだ！今度義兄さんと買い物に行きたいです！服とか見たいな」

「咲那が望むなら、付き合うよ」

「本当！義兄さん大好き！……なら採寸しないと」

「おいおい気が早いな咲那は…」

だがその採寸は

「これで義兄さん抱き枕カバーが作れる…えへへ…」

個人的な願望が混ざっていたのは言うまでもない

「咲那何か言ったか？」

「何も無いですよ義兄さん」

「そ、そうか」

知らぬが花である

火山 グリユーエン大迷宮へ…

前回のあらすじ

取り敢えず魔族からアナザーマッドローグを助けた後、頭がおかしい勇者と咲那を苛めていた檜山なる外道に一撃をかましたハルト達

香織が仲間に加わったメンバーは一路 ミユウの故郷 エリセンを目指して移動していたのである

「ふははは！このジャガーノートは冷暖房完備！そして武装面からも魔物に襲われる心配はない！」

「本当この車便利ですよね…逢魔で試験走行とかしてませんよね？」

「ああ！シンフォギア世界で歯刺さらせたノイズのせいでゴーストタウンになった街を

中心に色々な環境テストもしたからな途中建物を壊しながら進んだ問題なかったぜ！」

「まさかあの世界で突然現れた巨大タイヤ痕って……ダメだ考えるのはやめよう……」

「だがしかし！この砂漠の暑さは皆の体にも毒だろう俺のグルメ細胞は暑さへの適応を済ませているが、お前達にはこの暑さは毒だと思う」

「まあそうですね日射病や熱中症、しかも砂漠は寒暖差の激しいと有名ですからね対策してないで砂漠に入った私達には危険とも言えますね」

「そう！そしてこの砂漠に長時間滞在するのは問題なのだ！」

「何で？魔王ちゃんは暑いのが嫌いなのは知ってるけど……」

「この暑さだと、魚の刺身やビリオンバードの鳥たたきを作っても傷んでしまう……そう！食事メニューが限られてしまうのだ！故に早く砂漠を走破する必要がある！あと砂漠だと食料補給が難しい……頑張ればサポテンくらいは調理できるがな」

「何て事ですか！」

「これが砂漠の罨！」

「クソ！食事という僕達の些細な楽しみを奪うなんて！」

「許さないぞ砂漠!!」

「その通りじゃ！砂すら見えなくなるまで植樹してやる！おい！テンペストにいるドラ
イアドを呼んでこい!!ここを砂で森にしてやるわ！」

わかりやすく混乱するウオズと旧四天王を見てハルトは一言

「何か最近、食事をネタにしたらコイツ等は俺の言う事を聞きやすいつて学んだ…王の
威厳で一体…」

『相棒…』

「あ、オリガとジナイーダにコレ渡しとくよ自衛の為に持つてな」

そう渡したのはカレンと同じくチェンジケルベロスと色違いのバックルである

「あ、ありがとうございます」

「感謝します！」

「良いつて事よ、特にオリガは一夏を宜しくな」

「はい、その宜しければ私もカレンのように街で彼の護衛をさせて頂きたい」

「まさか仕事に対してやる気のかけらもなかったオリガが仕事をしたいなんて言うなど…コレが恋なのか」

「バカそんなんじゃないよ…一夏には助けられた借りがあるから返したいだけだよ」

だがそんなオリガも逢魔に来た際に

「アンタ達が箒と鈴だね一夏から話は聞いてるよ私はオリガ…一夏の部隊の副官さ、後最初に言っておくよ一夏は私のものだ！」

「何お!!」

と宣戦布告し、更に

「えーと……貴女が一夏の姉さんかな？」

「そうだが…何だ貴様は？」

「おつと失礼、私はオリガ…まあ彼の部隊の副官になる予定のものなのだが…担当直入に言おう弟さんを私にくださいお義姉さん!!」

「何だと！いやちよつと待て！普通は逆だろう！？色々といきなり過ぎてびつくりの方が勝るんだが！？」

「一夏兄さんにも春が…これは赤飯炊かないとだよ千冬姉さん！」

「マドカ!?これは普通彼女の家に一夏が「あ、私は病気のせいで実家から勘当されたから独り身なんだよ」お前も苦労しているな…」

「どうしたんだい？」

「いや何。だがまだ義姉と呼ぶな一夏から告白された時にまた来ると良い」

「忘れないでくださいよ」

「忘れるものか一応言っておくが、あの唐変木を簡単に落とせると思うなよ！」

「それ実の弟に言う言葉かな？」

そんなIS世界の一夏ラヴァーズでさえ挑んだ事のない偉業に挑んだのだから

そんな事は知らないハルトであったが、肝心の一夏は何故か浮かない顔をしていた

「どうした一夏」

「いや、そのデイベレイクの件で気になる事があつてさ」

「ああ確かに奴の予言の通りに咲那ちゃんが現れたな」

「けど俺に警告した理由がわからないんだよ、ハル兄、俺の兄妹つて千冬姉とマドカ以外にいるのか?」

「さあなあ…俺も東と探してやっとこさマドカを見つけたんだ、だから他にいるのかいないのかは知らないよ」

「そうか「だが」」

「デイブレイクが味方かどうか分からない以上、警戒はすべきだな一夏、護衛がいるけど油断はするなよ」

「安心してくれボス、一夏は新四天王筆頭ネガタロスがキチンとガードしてやるからな」

「俺も忘れてもらっちゃ困るぜ大将！」

「それに私もいる、一夏には指一本触れさせはしないよ」

「皆…」

「所で一夏、アンタは年上は好みかな？」

「え？何でそんな話？」

「何、アンタが年下好きならどうしたものかとね」

「いやそんな事考えた事も…」

「ほほお…」

「おい今は仕事でぞ」

「そんなカレンだって、ハルトさんがどんな風なお洒落をしたら喜ぶのか相談する癖に「オリガ!」」

「全くお前達は「そんなジナイーダもハジメさんの為に手料理とか勉強してるってシアから聞いてるけど?」あの兎には特別訓練が必要なようだ!」

鞭を振る彼女に全員が間合いをとったのである

しかしまあ平和なものである、だが

「おい咲那と言ったか指揮官を離せ」

「そうだよ！指揮官は私達のものだよ！」

「義兄さんは私のものです他の人には渡しません！」

彼方は彼方で修羅場しているのだ…愉悦う！おつといけないいけない明日は我が身だ自重せねば

「どの口が言ってるのよ」

「ジャンヌは変わらないなあ、本当安心するよ」

「それどう言う意味よ」

「マスター、私はどうでしょうか？」

「静謐ちゃんも頼りにしてるぞ！アサシンの2人には色々迷惑をかけるからな」

「はい」「お気になさらず」

「あ、そう言えばウオズ」

「はっ！」

「清水の件だけど」

「ああ彼の天職は逢魔でも有効でした…持っている能力は別世界でも問題なく機能するようですね」

「となるとハジメ君達も元の世界だとんでもないことになるな」

「ええ…それと以前我が魔王が言っていたライオトルーパー部隊の隊長としての訓練を開始しようです」

「え？マジで？」

「はい変身するんだ！と張り切っています」

まさかの成長にハルトも引いていた

「そ、そうか…まあそれは喜ばしい事だな」

「はい…それと逢魔にいるテスタロッサ嬢からの報告で」

「テスタロッサから？何だろうまさか聖教会の奴等が動いたのか!？」

「いえ何でも我が魔王を愚弄した、あの勇者とチンピラを殺したいと奏上されまして…
同じ内容をカレラとウルティマ嬢からも言われていますね」

「うーん行ってよし！といたいけど流石になあ…」

アレ殺すと邪神が別の玩具を用意するだけだろうしと考えると、殺したり再起不能にするのはダメなのだろうな

「つか殺せるならとうの昔に殺してるよトーマ擬きだからな！てか腹立つならトーマを殴れよ！」

「実際 ウルティマ嬢が怒りに任せて殴り倒しています」

「ぐまあ！」

「何でも最近、ウルティマ嬢とカレラ嬢は我が魔王の記憶にある『マジカル八極拳』なる武芸を試してるとか」

「マジカル？八極拳？……っ！アイツ等何やってんの!？」

あの一撃必殺拳法を覚えて何する気だ!?!と戦慄していると

「テストタロツサ嬢は最近、クヴァールと一緒に何やら魔法を開発しているとか」

「あの勇者、俺が何もしなくても死ぬんじゃないかね？」

まあ同情はしないが

「ハルト！あの檜山とかいう屑野郎は次会ったら殺すよな！！そりやもう凄惨に！」

シスコン拗らせたナツキが笑顔でそんな事言うものだから

「ナツキが魔王ちゃんみたいな事言ってるよ」

「ナツキ…貴様までそこに行くのか！常識人にしてツツコミ役というアイデンティティを無くしてしまうぞ！！」

「大丈夫では？義妹さんが絡まない範囲で今まで通りですし」

「じゃなあ…それよりも驚いたのはハルト坊じゃな」

「え？」

「今までのハルト坊なら、あの小僧共を脊髄ぶっこぬきしながら高笑いしておつたらう？それなのにアナザライダーの静止もあつたとは言えよく堪えたの成長したと思うぞハルト坊」

「確かに！今までの魔王ちゃんなら脊髄ぶっこぬきしてるね！」

「ああ…未来で日常的に反逆者へ行う脊髄ぶっこぬき…それをこの時代に来てからは数える程しか見ていない！」

「いや数える程見てるのも問題では？」

「あ、あの…作品対象年齢を引き上げてしまう必殺技を！魔王様は未来では当たり前前にしているのですか!？」

「フイーニス、メタ発言は辞めなさい」

「いやいや流石の俺もミュウちゃんの前でそんなスプラッタな事しないよ」

そこは配慮する男であつたが

「あの…何でしょうか、その脊髄ぶっこぬきとは？」

カレンの一言に全員の視線が動いて慌てふためく

「だ、ダメですよカレンさん！貴女は知らなくても良いんです！」

「そうよカレン！貴女が見たら発狂するわ！」

「ですがベアトリス様、私も騎士として主の深遠な考えに少しでも近づきたく」

「ダメです！その考えに近づいたらハルトさんみたいになりますよ!!」

「おいベアトリス、それどう言う意味だ」

「それに深遠な考え？ 旦那様にはそんなのないわよ、ねえベルファスト」

「はい、ご主人様の頭は今日の献立で一杯ですから」

「おいベルファスト、お前もか」

「ま、仕方ないわよ…だってマスター脳筋だもの」

「そうだなその猪女と契約するくらいには脳筋だな、本当に可哀想で仕方ない」

「アンタや善良な貴女だって、あんなシスコン野郎と契約してヤンデレになってるじゃない！ はつきり言ってるわ！ 冷血女 アンタ病気よ？」

「貴様……」「何よ？ やる気？」

オルタ同士のバトルが勃発しようとしていたが

「2人とも飯抜くよ？」

ハルトの一言で止まると

「すまなかったコック」

「……仕方ないわね引いてやるわよ」

何とか諫めると

「マスター」

「どつたの静謐ちゃん」

「あの彼方に巨大な芋虫が」

よく見るとそこには怪獣映画に出るような巨大な芋虫の大群がいるではないか

「んじゃ、ハウンドやれ」

「イエツサー！撃ち方始め!!」

その言葉を合図にジャガーノート、通称クロウンターボタンクの本領が発揮された
大量に格納した武器の数々 プラスターやミサイルの雨は芋虫の体を吹き飛ばしたの
である

「おお……」

感心していると同時に別方向から移動しているハジメから通信が入った

何か砂漠で倒れてる人がいるのを拾ったと

「はっ。」

取り敢えず砂漠装備でジャガーノートから降りたが

「あ、暑い…」

「だなあ……いやあグルメピラミッドを思い出すわあ！」

「こう言う時はお前の体が羨ましいよ」

その一言に全員が間合いを取ると、

「ナツキ、ごめん…俺には妻と娘がいるからお前の趣味には付き合えない」

「は!?!お前、暑さで頭いかれたのか!!」

「ハジメ君やこの人が？」

「いや聞けよ!!」

「ああ何でもアンカジって街の奴らしい」

聞けば水が毒に侵され、奇病が蔓延しているとの事 それを治せる人を求めて外の街へ向かっている途中であの芋虫に襲われたらしいのだが…

「水に毒……腕……ウォーターサーバー……うっ！頭が！」

「水を飲んで認知症治る……息子の前で笑顔……いやああああ!! 駆除班の人おおお！その人に銃を向けないでえええええ！」

「千翼おおおおおおお!!」

勝手にトラウマスイッチを踏み抜いてる3人に対して

「暑いから黙れや怪人トリオ!!」

とまあ そんなコントもしたが幸いな事にジャガーノートには医療用のドロイドが待機しているので診察をお願いしたが

「分かりません」

まさかの言葉に未知の病と混乱が起こるが白崎香織は冷静に答えた

「これ魔力暴走だね」

魔力暴走？

「ようするに体内の魔力が制御出来なくて暴走して体に良くない影響の出る病気だよ」

なーんか聞いたことある話だな

「私達と同じ病気ですな」

「それだ」

「けどカレン達のアレとは違うよね、あの腫瘍みたいなの出てないし」

「同じ病気の亜種なんじゃないのかしら？」

「かもな…そりゃ魔力絡みなら医療ドロイドも音を上げるかあくまで連中の専門は医学からくる病気だ、魔法方面の病気なんて風土病みたいな認識だろうなあ薬でどうこうつて話じゃないし」

「でしたら主なら治せますね」

「同じ病気ならな、けど今回は彼女がやるみたいだ俺の出る幕じゃない」

見れば彼女が治療しているのを見て

「成る程」

そして回復した領主の息子という案内人を得て一路 アンカジへ向かうのであった

アンカジの街でユエが魔法で飲み水を生成して当座は何とかかなりそうと安堵していたが

「こりや、原因療法しかない対処療法じゃ限界が来る」

元の木阿弥にならぬように根絶しておかねばはらないだろう

「毒の発生源を断つべきですね」

カレンの意見に頷くと全員で水の調査を始める事にしたが向かう途中

「なあハルト、お前の腕を実は埋めたりしてないよな？」

ナツキは冗談混じりに尋ねると

「は？誰がするか、そんな事」

「いやごめん冗談「埋めてるなら街の人は全員怪人になってるわ」うん、笑えないジョークだわ…バイオハザードになるとか…」

現実より酷い事態になるのは確定だったのは流石は魔王と言うべきか…
案内されたのは街のオアシスである　ここが水源らしいが

「しかし怪しいものはどこにも無いな」

「いや何かある…」

「オアシスの底に毒を出す魔法陣でもあるんじゃないの？」

「いやいやまさかそんな事ないだろう」

「だな、そんな悪趣味な事をする奴はいないか！」

余談だがこの時 逢魔にいたウルティマがクシャミをしたのは言うまでもない

「っしー！」

突然ハジメがオアシスに手榴弾を投げ入れたのである

「ちっ！すばしっこいなあ！」

「お！んじや、俺もやるかな」

『アイスエイジ』

アイスエイジドーパントになりオアシスを凍らせにかかると

「お、何かいたけど…早いな…」

水とは違う何かが凍結を嫌って動いたのを感じたのだ

それは一言で言おう スライムである

「おお……」

「成る程なアレが毒を吐き出すスキルか何かを持つてた訳か」

「んじゃさつさと駆除……っ！」

「どうしたハルト」

「ごめんハジメ君、任せた」

「え？」

「いや逢魔最大の同盟国の総統がな、スライムこ魔王なんだ…何か俺的に戦うのに抵抗があつて…」

あの人に足を向けて眠れないのである…個人的にも王としても敵対はしたくないのだから

「スライムの魔王？何か凄いな…まあ良い、任せておけ」

1・0・3 Enter

『Single mode』

ファイズフォンを精密射撃してスライムのコアを砕いたが オアシスは時間経過で元に戻るとの事だが、もう一つの病気はかなり不味い

い 特効薬と言える静因石はグリユーエンの大迷宮がある火山でしか採取できないらしい

ので

「んじゃ向かいますか」

「いざグリユーエンの火山へ!!」

「咲那は彼女と一緒に留守を頼むぞ」

「義兄さん気をつけて！」

「ああ行つてくる!!」

そんな元気を出して言つて数日後

「あちい……」

ナツキは迷宮中にある火山の熱でK O寸前であるが

「えー！ナツキ！この程度の暑さにも耐えられないの！」↓怪人王

「この暑さに耐えられないのは小学生までだよね！」↓ブラッド族

「あははは!!」↓オルフエノク

再び呼吸するように煽る怪人トリオにナツキも

「うるせええええ！暑いもんは暑いんだよー！」

「そうかなあ？」

『お前はグルメ界で適応済みだからなあ…』

「そうなんだよ…うーむ…このマグマは普通のマグマか…残念だ」

「普通じゃないマグマってあるの？」

「あるよ、ユエちゃん！俺の行ったグルメ界にはコンソメ味のマグマがあるんだ、あれ美味いんだ」

「どうやって食べるんだよ…コンソメ味だけどマグマだろ？食べたなら喉が焼かれるぞ」

「ん？適切な温度処理をしたら食べられる」

今更だが時折 グルメ界に戻っては新しい食材探しや冒険をしている、次郎さんとも親交を深めており 最近では週八で行くと言われる酒豪諸島で酒を飲んだ…後日酒臭くてキャロルに怒られたが…

しかしグルメ界では俺の強さなどまだまだだと思いき知らされた

「馬王と狼王はヤベーいな」

鼻息一つで半身が物理的に削り取られ、狼王とその部下達の連携攻撃には流石に驚いたよ…

「我が魔王また別の八王に喧嘩売ったのですか!？」

「まさかの場外乱闘してた!？」

「いやあ強えわマジで…けど全部終わったら皆に俺のフルコースを食べてほしいな」

「わ、我が魔王!!そんな至高の贅沢許されて宜しいのですか!!」

「は？いや食べたいなら言えよ俺がグルメ界に取りに行くから」

「「うおおお!!」」

「叫ぶな暑苦しい!!」

「こんな暑さに負けるかあ!」

「マグマの魔物がなんぼのもんじゃあ!」

「暑さが終わった後のワインは効くんじゃあ!」

「我が魔王がフルコースを振る舞うと言ってくれた、今日は私のフルコース記念日です
祝え!!」

「ハジメ君!すまないウチの連中が暑さでおかしくなってるから休まないか!？」

「そうだな……ちよつと休むか」

そして仮説の休憩所で

「よし氷は俺に任せろ」

『アイスエイジ』

アイスエイジドーパントになり氷の塊を作るとテイオが風魔法でひんやりした風を場に流す

「ふう、生き返りますう！」

「何て暑さだ……こりや冷房用のアーティファクトでも作るべきだったな……」

「ふむ、となるとこの迷宮のコンセプトは暑さから来る低下した集中力での環境適応というところか？」

「コンセプト?」

と尋ねるとティオは 迷宮は神様を倒す試練の場という言葉から 七つの迷宮にはそれぞれのコンセプトに合わせた試練があると推察した

ライセン大迷宮は魔力が使えない状況での適応と身体能力を

オルクス大迷宮は最後に攻略が推奨される場所とミレデイが言っていた事から恐らく

「他6つの神代魔法を使って、色んな敵との戦闘訓練って所か?」

「そうじゃろうな」

「それを必須の神代魔法無しで攻略したハジメ君って」

「かなり凄いな…いきなりラストダンジョンから攻略したって事だし」

「うーん、迷宮とコンセプトか」

「どうしたハルト？」

「いや、迷宮に栄光の7人ライダーのウォッチがあるのにも理由があるのかなと思ってな」

「確かに我が魔王に関する事ならばアナザーウォッチを置くだけで充分ですからね」

「そう、それにさハジメ君の話だとオルクスの迷宮にあったオスカーオルクスの研究室で全部を聞いたんだろ？」

「ああエヒトって邪神や解放者にハルトの事もな」

「けどオスカーオルクスの話だとお爺ちゃんだって言ってた」

「これさ、多分だけど不完全な形で迷宮攻略したから俺が来たんじゃないやねえ？もしかしたらさ」

そう前置きハルトは思いつきを口にした

「もしかしてハジメ君達の前に現れる筈だったのはジジイの俺だったんじゃないやねえの？」

その言葉に全員の視線が集まった

「どういう事だよ？」

そもそもの違和感というか、恐らく俺が呼ばれた事事態がイレギュラーなような気がしてきたのだ

「本来オルクス大迷宮は最後に攻略される場所だろ？だから彼はメッセージを残した、そうなるオルクス大迷宮を攻略した奴は6つの神代魔法と6人のライドウオッチを持つてる状態になる」

「ああ」

「そしてウォッチの事や俺の事をオスカーオルクスが話してたって事は」

「7つのウォッチを集める事で未来の我が魔王がこの世界に現れる筈だったという事ですか？」

「可能性の話だけど、この説は結構確信めいたものがあるよ」

それはライセン迷宮のミレデイのリアクション

アレは旧友の再会というより、嘘でしょ!?!みたいなリアクションだった点から見ると恐らく迷宮攻略時に現れるのが 解放者と共に戦った老ハルトが出てくるというのが本来のあり方ではなかったのだろうか…

「確かに…ですが何故ライドウォッチなのでしょう？我が魔王所縁のあるものならア

ナザーウオツチの筈です」

「そこまでは分からないけど7つの神代魔法を手に入れた者が7つのウオツチをオルクス大迷宮のゴールで起動する、と何かが起ころんじやないかな？けどハジメ君は攻略時に手元にあるのはオルクスの神代魔法と1号ウオツチだけだったから不完全な形での起動となつて、かわりに俺が来たとか…ね」

「そうなるともう一度、オスカアの迷宮に行く必要があるのか」

「少なくとも俺は行く必要はあると思うな、仮にジジイが飛び出してきたら殴り倒してやる…」

暑さの逃避にした話だが、これは逆を言えば

「けどそうなるら魔人族側にある7人ライダーのライドウオツチを奪う必要が出てきた訳だ」

「確かに…」

「まあ最悪、俺が魔人族の国に殴り込みに行つて蹂躪すれば良いだけだ…ふふふあははははは!!その方が話早いかな？」

「魔王ちゃんも暑さにやられた!？」

「いや、これが普通だろう」

「見てください、魔王様の頭脳が元に戻ろうとしています」

「ああ実家のような安心感だ」

「不敬ですよ貴方達!？」

そして休憩も終わった彼等は一路 迷宮ゴールを目指して前身!と思つたが

「行き止まりじゃん」

「いや、この先からは船が必要みたいだな」

「船かあ…そんなの「あるぞ」ハジメ君スゲエ！」

全員で船に乗り一路進むが

「何か火山を進むアトラクションみたいだな」

「ああ……」

そして進んだ先にあるドーム、恐らくアレがゴールと喜ぶ一同だが最後の試練とばかりにマグマの蛇が襲いかかるが

「死ねえええ！エボルトおおお！」

哀れ、蛇の姿で生まれた故に宗一が変身したエボルのライダーキックをくらい鮮やかに爆散したのであった

「蛇へのヘイト高いな」

「政人さんも、エビ、ドラゴン、ムカデ、ワニへのヘイト高いよね？」

「ラツキークローバー死すべし!!」

「うむ、これは重症だな…やっぱり四天王じゃなくてチエックメイトフォーとかラツキークローバーみたいな感じの名前にした方が良かったかな……」

そう考えるとキャロルのオートスコアラ―達 終末の四騎士…ふむ

「キャロル、ネーミングセンスあるな」

「我が魔王はハンドル剣とかドア銃とかの側の人ですからね」

「辞めろよー俺に泊さん並みのネーミングセンスがあるって褒めちぎるなって」

「褒めてないのですが…」

「さてと、んじゃ迷宮をゴールしますか」

だが、そうは問屋が卸さないみたいだな

現れたのはマグマで出来た巨大な蛇…どうやら再生したみたいだな

ならどうすべきか

「マグマが厄介なら凍らせてやる見てろ、俺の切り札！」

『JOKER!』

久しぶりにジョーカーカードパントに変身すると

「俺の声に応じて現れろ、リアクターアックス!!」

呼びかけに応じて現れたリアクターアックスにガイアメモリを装填する

「伊達に氷河期の記憶を有してなどいないわ！」

『ICE AGE ! X T R E M E ! m a x i m u m d r i v e !』

「凍てつけえええ!!」

強化された氷の一撃は瞬時にマグマの蛇を凍りつけにして岩となり砕かれたが直ぐに再生し火炎弾を放ち 攻撃を再開した

「クソ!!マジか！」

「涼しくなったのに暑くなっちゃった！」

「ああ、もう!!……そうだハジメ君、ゾルダの力を使うんだ!!!」

「成る程な、よし変身!!」

そしてハジメは新たなカードデッキを使い、緑色の機械的な戦士へと生まれ変わる

砲撃の暴牛 仮面ライダーゾルダへと

「コレでどうだ!」

『シユートベント』

現れたのは両手持ちの大型大砲 ギガランチャーを召喚して発砲すると蛇の頭部は簡単に砕かれたのである、その一瞬見えたものを彼等は見逃さなかった

「凄い反動だな…」

「まあその分、威力はお墨付きよ」

「成る程、核を中心に蛇は再生してる訳か」

「オアシスのスライムと同じなら、やりようは有る…」

「よし行くぞ！」

「「お前が仕切るな！」」

背後から3人のキックを喰らいナツキはマグマに落ちかけたのであった

「助けてー！ー！」

脱出！グリユーエン大迷宮から 幻想郷へ

さて前回のあらすじ

グリユーエン大迷宮の最後の守護者であるマグマの蛇相手に打開策を見出した面々は一同 全ての蛇を倒しに動くのであった

「んじゃ、行きますか！」

アイスエイジの力を解放しマグマを凍らせて足跡の足場を作る まあすぐに溶けてしまうが、その僅かな時間さえあれば良い

「そーれえ！」

斬撃で蛇の首を切り落とすとエボルのトランスチームガンによる狙撃で核を砕く、これで一匹

「やるねえ」

「当たり前だ、おいハルトまだまだ行けるな？」

「当たり前よ、ハジメ君のゾルダに負けられないからな！」

『スナイプ』

ハルトはアナザースナイプに変身すると以前、オーディエンスから受け取った強化アイテムを起動したダイヤルを回転させると

『バンバンシミュレーション!!』

現れたシミュレーションゲーマーが艦砲射撃で蛇にダメージを与えて時間を稼ぐと

「見せてやる……これが俺の第五十戦術!!」

『バンバンシミュレーション! 発進!!』

沈没した軍艦を纏う戦士、アナザースナイプ・レベル50に変身し全身に装備された火器の全てを蛇の顔面目掛けて叩き込むと

「そらそらそら!! あはははは! トリガーハッピー!!」

「ああ……我が魔王の上があった知能指数が下がっていく…」

「この光景に安心感すら覚えるよ…」

「いやお主らも戦え!!」

そして

「つしやあ! 今だあ!」

『アナザードラゴニックファイニッシュ!!』

アナザークローズに変身したナツキのボレーキックがアナザースナイプが抉り出した蛇の核を破壊した

「どんなもんだい！」

「アホかお前！クローズになれるなら!!」

「わーつてるよ、コレだろ！」

『ボトルバーン!!』

アナザークローズが取り出したのは赤い拳型アイテム それにボトルを突き刺して
起動する

「変身!!」

『極熱筋肉！クローズマグマ!!』

アナザークローズマグマ 変身完了！

「つしやあ！燃えてきた!!」

その言葉に

「足りないな、力が漲る！魂が叫ぶ！俺のマグマが迸る!!もう誰にも止めらねえ!!くらい言わないとダメだなナツキ、ライダー点数低いよー」

「お前がそんな様でクローズになったら誰が、この迷宮を攻略すると思う?」

「万丈だ」

「お前から仲良いな!」

そんな中

『exceed charge』

カイザはカイザブレイガンで相手を拘束しすれ違い様に切り裂く　カイザスラツシユで本体ごと核を両断すると

「残りアレだけだ!」

「なら、これでミッションコンプリートだ!」

『キメワザ』

アナザースナイプの両腕にあるユニットを連結体の各部にある大砲が全て正面に向きエネルギーチャージが始まる

「これで決める」

『ファイナルベント』

ゾルダの方もマグナギガを召喚し、背後にバイザーを装填　マグナギガの銃火器が全ての敵を捉える

「っ!!」

「お前ら全員下がれえええええ！」

その言葉と同時に

『バンバンクリティカルファイヤー!!』

用意ドン！とばかりに放たれた大量の銃火器の一斉発射はマグマの蛇の核と本体諸共破壊し、更に迷宮内部の壁にも大きな亀裂を加えた

アナザースナイプの強力な点の攻撃とゾルダの面攻撃 合わせたらどうなるか…

その先には解放者の隠れ家を残して全てが消えていた…

「こう言ったゴチャゴチャした戦いは好きじゃない」

「お！ハジメ君、今のはライダーポイント高いね！」

「じゃ、ねえだろおおお!!」

ナツキは思わずハリセンで2人の頭を叩いたのである

「んだよ今の技!!」

「アナザースナイプのバンバンクリティカルファイヤにゾルダのエンドオブワールドだ
!」

「流石の火力……まさか俺がこの技を使える日がこようとは!」

「危ねえよ!俺達まで巻き込む気か!」

「んな訳ねえだろ……さてと、あのドームに向かいますか」

「ああ」

変身解除した面々がドームに向かう途中 先遣隊のハルトとハジメの頭上から突如
光が降り注いだのである

「ハジメさー！ーん！！」

シアの心配な声が迷宮に響くのだが

「あ、魔王様巻き込まれましたね」

「心配無用」

「そーそーあんなので魔王ちゃんが死ぬ訳ないし」

「アレで死ぬなら今まで生きておらぬしな」

「確かに…まあ我が魔王が死ぬとかないですよ」

「「「だよー」」」

旧四天王達の歪な信頼に思わず

「いや心配してあげないのですか!？」

カレンも可哀想と思ったのであるが

「安心なさいカレン、旦那様があの程度で消し飛ぶ訳ないわよ? その程度なら私が殺してるから」

「そうですよ、だってあの人…:心臓に呪いの魔剣が刺さっても生きてたらしいですからね本当に怪物ですよ…:とんでもないです」

「ええ……:いやいや旦那が消し飛んでるかも知れないってのに冷静だね君達」

「ご主人様が普通ではないという事ですよ、アリエル様」

そして件の直撃を受けた2人はと言うと

「あはははは！いやあ驚いたよ、未来視してても今のは危なかった〜これがダメージを負う感覚…痛みか久しぶりだな……あ、取り敢えず着替えてと」

笑いながら攻撃を受けたハルトはボロボロになった服をドレスアップの魔法で着替えながら発射した敵を見た

「生きてるハジメ君？」

「ハルトがカードを読み込んでくれたお陰でな」

そうあの攻撃の最中 ハルトはリフレクトのラウズカードを読み込み あの光の攻撃を逸らしていたのだ…しかし

「受けた攻撃を反射するリフレクトでも逸らすのがやっとか…」

『となるとリフレクトじゃ、どうにもならない質量攻撃か』

「神代魔法だな……ああ」

「まさか今の一撃を受けているとな…予想外だ」

その上を見ると白竜に乗る褐色赤髪的美男子と竜の眷属達が周囲に待機していた…
ほお魔人族か、あの女といい腹が立つな魔人族と殺意の波動をぶつけると、流石に向こ
うも冷や汗をかくが高所での優位は変わらない……ハルトが相手でなければ

「まさかたかが人間如きか迷宮攻略に挑むとはな…」

「おい……」

『コネクト』

「ゴチャゴチャうるせえ!!あと良くも俺の文字Tをダメにしたな!!玄さん監修のお気に入りでっただんだ!!死ねええええ!!」

『いや違うそうじゃない』

なんて理由でキレてんだ…とアナザーライダー達が頭を抱えているも

『けど汎用魔法をこんな殺傷力の高い攻撃にするとか…ヤベー』

白竜の周囲にいた竜の頭上に迷宮を覆っている大量のマグマが降り注ぐ…コネクトは空間を繋ぐ魔法とも言える、このまさかの応用にはアナザーライダー達も感心していた

「「「「!!」」」」

流石の竜も背後からマグマを直に浴びるのは応えるようだな苦しむ声が聞こえるよ

「はははは！良い悲鳴だもつと聴かせろ！殴る方はもつと痛いんだよ!!トカゲどもめ…

俺の受けた痛みを倍返しにしてやるから味わって苦しめえ!! 文字通り燻蒸消毒してやるう!!!」

『いや、痛くないだろ魔法使っているのだから』

「な、何と…マグマぶっかけプレイか! ご主人様! 次は妾にもマグマをかけてほしいのじゃー!」

まあマグマをかけても喜ぶヤベー奴がいるようだが…

「テイオさん!? 流石に火傷じゃ済みませんよ!?」

「本当さ何でアイツみたいな変態って湧き出るんだろうな…」

「まあ落ち着けよ宗一…いや待てベクトルがおかしい変態だぞ?」

「この人間風情と仮面の戦士風情が我等が大義を阻むな! 俺は貴様らの全てを否定する

!!
」

「「あ？何だあテメエ？」」

怪人トリオ、キレた!!危ない!と直感が働いてたのか魔人 フリード・バグアーは撤退を選ぶが

「おい待てよ」

『All ZECTOR CONBINE!!』

「逃すと思ってるのか？」

『ready go!』

「お前は此処で死ね」

『exceed charge』

ハルトはパーフェクトゼクターに全ゼクターを合体させ銃モードで構え、エボルはレ

バーの回転させたエネルギー球体を、カイザはポインターからマーカーを射出して白竜を捉えていたのである

一撃で相手を灰燼にする技が三種類向けられている…これにはローズオルフェノクも涙目である

「殺意高あ…」

思わずナツキさえもドン引きするくらいだから

「ならば、ここのマグマ溜まりを抑えていた要石は壊した、間も無くこの迷宮は破壊される…さあマグマに焼き殺されると良い!!」

「意趣返しだな」

「上手くねえなあ…うーむ…このマグマがコンソメマグマなら食べられるんだが…ん? 食べる? つ! アリエルさん! お願いします!! 何でも食べると聞いたので!!」

ついてきていたアリエルに希望の目を向けるが

「いやいや！流石の私もマグマは食べられないよ!」

「クソっ!!」

「我が魔王なら食べられるのでは？」

「んな訳あるか!!……っ、テイオ！」

「何じゃご主人様？」

「お前は竜になってアンカジへ行け、んで静因石を持ってけ」

「じゃがご主人様達は……」

「問題ない、必ず追いつく」

「信じておるぞ…でなければ妾のマグマぶっかけプレイというご褒美が無くなるのじゃあー!」

「なあ宗一、あの竜をマグマで焼かないか?」

「奇遇だな、俺もそう思っていた」

「辛辣う!じゃが委細承知!」

「アサシン達とテイオと一緒にアリエルも頼めるか?あつちに残った奴らに報告を頼む」

「心得た」「はいはい!」

そして避難できる面々はテイオの背中に乗り避難する、途中敵の妨害もあつたがハジメの援護で辛くもテイオ達は脱出したのである

残された面々は

「いやあ見事にマグマだねえ…」

「ハルト坊、全部凍らせられんか？」

「無理言うな凍らせて一時凌ぎだよ、取り敢えず迷宮行くぞコラア!!」

取り敢えず全員でゴール地点に入ると

「これは…空間魔法か」

「転移魔法の種…」

「んでこの迷宮のウォッチは？お、仮面ライダーXのウォッチか…けど何で魔族の奴の手に渡らなかつた？」

「今はそんな考えおいておけ…取り敢えず脱出するぞ」

「そうだ！我が魔王のテレポートで！」

「そうしたいのは山々だが、さっきの攻撃を逸らすので魔力切れた…全員は飛ばせないよ」

「そんな……」「嘘でしょ……」

まさかの展開に困惑していると

「あら、政人随分面白いものを貰ったじゃない」

そこに現れたのは場違いな和服擬きを着る、狐耳の美女、まさか

「八雲紫!? 何でここに!!」

「話は後よ、お連れさんも一緒にどうかしら？」

「ここから逃げられるならドント来い！」

その言葉に従って全員、紫が用意したスキマにダイブしたのだ！

それがほんの数分前の話

「落ちてるううううう！」

現在俺達はパラシュートなしのスカイダイビングをしていた!!

「死ぬうううう！」

「俺だけならまだしも、皆の命までとなったら…仕方ない…アレをやるぞ！」

「アレって何だハルト!」

「スキル怪人召喚を行使、こい!! キャツスルドラン!!」

「!!!」

すると虚空が揺らめき 久しぶりの登場キャツスルドラン その大口で全員を飲み込む

皆、あの部屋へと辿り着いたのであった

「ふう、サンキューな」

「こ、ココってまさか…」

そこに現れたのは管理人 水兵服の少年、ガタイの良いタキシードをきた青年、壮年のワイルドな男がいたのである

「ようこそキャツスルドランへ」

「かんげいする」

「ふん」

「おお！本物のキャツスルドランなのか！って事は!!」

「サンキュー、助かったよガルル」

「いきなり呼び出すな魔王驚いたぞ」

「良いじゃないか主役は遅れてくるものだろう？」

「ふん」

と軽口叩き合う そう彼らはアームズモンスター、アナザーキバに変身した際に仲間になっっている 現在は過去に遡りファンガイアに絶滅される前の同胞や異種族を助けて回っているとの事だが

「あの…すみません！ファンです!! サインください！斬鬼さん!!」

「いやそれ違う!! あ、俺もサインお願いします!!」

「この通り!!」

まさかの宗一、政人、ハジメが色紙を出してお願いしてきたのに思わず

「何だコイツらは…魔王と同じ事をしてやがる」

「うわあ…」「おどろき」

取り敢えずサインを書いた後、近くの森に着地させると

「助かったあ……」

「本当死ぬかと思つたぜ」

「……………てか、ここはどこなんだ!？」

「八雲紫……俺の知つてる彼女なら此処は」

「ええ、ようこそ幻想郷へ」

そこには自然豊かな…いや忘れられた存在が集まる夢の里があつた

「うわあ! 凄いですう!」

「驚き」

「このような場所があるのですね」

皆が感心する中

「取り敢えず…腹拵えかな」

「いやその前にハジメさんの治療を！」

「そうだな…俺は仕込みするからナツキ、頼んだ」

「何で俺!？」

「アナザービースト、後は考えろ」

「ん?…あ! ドルフィンか!!」

『ビースト』

ナツキはアナザービーストに変身してドルフィンのリングを使い怪我人の治療を行

なうも

「流石に義手は修理が必要だな」

ハジメはどうしたものかと困っていると

「んじゃ、片手で食える串焼きにするか」

『コネクト』

「えーと、ガスバーナーにコンロと炭…よしあるな！ やっぱりでやるならバーベキューっしょ！！ハッハー！！」

気分はさながら佐藤太郎であるハルトに思わず

「いや呑気か！！んで八雲紫さんだっけ？」

「安心してくれ彼女は味方だ」

「何でそう言い切れる政人？」

「此処はオーマジオウに派遣されるまで俺が暮らしてた場所だ：彼女はそれより前から付き合いでな」

「成る程、里帰りな訳か」

「で。俺を呼び出して何する気だ？」

「貴方にその力の使い方を教えてあげようと思ってね、そうしたらいつでも帰って来れるでしょ？」

「本音は？」

「最近幻想郷に人を襲うオルフェノクが多くて困ってるのよ、人里にいるファイズ達も困るくらいにね」

「そうか巧さん頑張ってるのか…」

「もう1人の雅人も頑張ってるわ」

「アイツは論外ですよ、陰湿マザコン野郎め…」

「……………」

「どうしたハルト？」

「ま、まさか乾巧と草加雅人のことか？ いるのか？ この幻想郷に？」

「ああいるけど？」

その政人の一言にライダー 好きは怪我をしてるのも忘れて動き出す

「すまない! 飯は中断だ! 俺はすぐに人里とやらに用事ができた!」

「俺も行くぜハルト!!」

「よし俺の改造シユライクに乗れ! 行くぞ人里!!」

ライダー バカ三名が動き出した

「誰か! アイツらを止めろお!!」

ナツキは慌てて指示を出すと総出で取り押さえたのである

「離せ!! 俺はタツくんサインを貰うんだあ!」

「そうだ! ファンならお願いしないとダメだろお!!」

「お前らさつきまでヤバ〜イ魔法を喰らったよなあ!?!」

閑話休題

取り敢えず腹拵えということではバーベキューが始まったのである

「うう……お前ら食べ……早くタツくんに会いたい……」

「本音がダダ漏れじゃねえか……やっぱり美味え」

「牛豚鳥の串焼きだ……一頭で三種類の肉が味わえる」

「相変わらずおかしいなあの世界」

と全員が食べていると

「お！私にも一本くれよ」

「おう」

何故か現れた魔法使いのようなどんがり帽子を被った女の子にも串焼きを渡す

「お、美味しいじゃねえか！」

「おうよ! ……つて誰!？」

「私は霧雨魔理沙! 普通の魔法使いだ!!」

「魔理沙、何でこんな所に…」

「お前政人か! 久しぶりだな! いやあ飛んでる途中で美味そうな匂いがしてついつい…」

「そうか…政人の知り合いなら名乗られたなら返さねばならない! おれは常葉ハルト! 異世界にいる普通の魔王だあ!!」

ドン!!と胸を張るが

「いや魔王ちゃん張り合わなくて良いから!!」

「普通の魔王って何です!?!」

「ハルト坊が普通な訳なからうが!!」

「そもそも非常識と書いて魔王様ですから!」

「常識の敵が何か言ってますよ」

旧四天王とウオズズの総ツツコミである

「へえ……政人と知り合いか……こんだけ美味しいなら霊夢とアリスも呼んでみるかな」

「友達なら呼んでこい政人の友人なら俺の友人だ、折角だからご馳走してやる」

「お!流石は王様、太っ腹だねえ」

「早くしろ、でないとなくなるぞ」

指を刺すと全員がガツガツと食べる姿を見て

「よし行ってくるぜえ!!」

魔理沙は慌てて箒に乗って空を飛ぶのを見ると

「あれは…ライドスクレイパーか？」

「いや空飛ぶ箒だよ、魔理沙は魔法使いなんだ」

「俺だって魔王ですが何か!？」

「張り合わんで良い!!」

ナツキのハリセンがパチン!と良い音を奏でたという

そして

「いやあアンタ、タダ飯食わせてくれるなんてやるじゃない!!」

改造巫女服を着た赤いリボンをつけた少女 博麗霊夢に肩をバシバシ叩かれ、

「もうダメじゃないの霊夢、あの良かったらこちらもどうぞ」

「シャンハイー!」

何か小さな人形を連れてる金髪碧眼の美少女がお茶をくれた…アリス・マーガトロイドさんか、ふむ

「人形のような美しさとはあのような人を言うのだろうか…」

「あら旦那様、増やす気かしら?」

「辞めてもらいます? 千冬さん達に説明するの面倒なんですけど!!」

「アンティリーネ、ベアトリス待て! 身に覚えがないから関節技はやめろお!! か、カレン

助けてえー!」

「申し訳ない…私にはどうしようも不甲斐ない騎士を許してください…」

「ぎゃあああああ!!」

ハルトの断末魔が響く中、何故か時間が経つとバーベキューが宴会の様相を呈し始めたのである

そしたら来る来るわの幻想郷の住人達、いやアンタらお祭り好きだとハジメは思ったが

「いやあこの義手。すごい技術で作られていますねえ、ちよつとドリルとかウインチとか取り付けても良いです?」

「お前……天才か!?!なら銃を内蔵して…」

幻想郷の河童に並々ならぬ感心を持たれ、ハジメと義手の魔改造が始まったのは言うまでもない

そして宴は進み

「いいか！弾幕はパワーだぜ!!」

魔理沙の一言にハルトは

「!!!」

『まずいハルトの脳筋スイッチに火が入ったぞ!』

天啓を得たとばかりに瞳を輝かせていた

「成る程そう言うことだったのか…幻想郷に来てつかんだ…火力の核心!!」
『何を掴んでんだヨ』

「弾幕はパワーなのか…つまり銃ライダーの必殺技はゾルダのエンドオブワールドこそ至高!! QED!!」

「至高? 何言ってるんだ? 銃ライダー最強議論はコレからだろ?」

ハジメ参戦に思わず、ハイ! になってるハルトは答える

「そうかあ? そうだなあ…そうかもなあ!!」

『おい誰か殴って止めろ!!』

『うわあ相棒も疲れてるなあ…』

「では遠慮なく、えい!」

「いふう!」

「安心してください、峰打ちです」

「なあベアトリス…雷鳴剣の峰って何処使ったんだ？」

「……………あ！」

ドサツ…

「は…………ハルトさ……………ん!!!」

ベアトリスは血まみれの雷鳴剣を地面に突き刺しハルトを介抱したのであった

翌朝

キャツスルドランにある個室にて

「うーん……………昨日の記憶が微妙に飛んでる…あと頭痛い…」

『まあ頭飛んでたしな』

「それどういう…」「ハルト! 起きたか!」なんだよ急に朝何時だと思っただよ…」

「大変なんだよ! 助けてハルえもん!!」

「馬乗りになったヤンデレに刺されるなら協力してやるぞナツキくん」

「何て対価要求してんだ!! 俺に死ねと!!」

「んで早く要件を言え…でないと」「オルフェノクが人里で暴れてんだよお!」は?」

そう言われてナツキの案内に従った先には

「!!!」

「!!!」

「本当にオルフェノクじゃん!!」

まさかの登場にハルトは感心しているが、人里の人を襲うのは流石に許容出来ないの
で

「しやあない…やるか」

アナザーファイズウオッチを構えるが、ハルトの目の前に銀色のバイクが止まる

「危ねえぞアンタら早く逃げろ」

「え？」

「タツくん！これ!!」

突如現れた青年がタツくんなる青年に投げ渡したのはドライバー!?まさか!!

「おう」

「嘘でしょ…まさか…」

「君! 危ないから下がって、もう大丈夫だよ!」

「この善人オーラ全開の人はまさか!!」

「嘘でしょ…貴方は…菊池啓太郎さん!? んじゃタックんつて!!」

5・5・5 Enter

『standing by』

高鳴る待機音と共に携帯 ファイズフォンを頭上高く掲げて彼は言う

「変身!!」

『complete』

流れる赤いフォトンストリームとΦの顔をする戦士……その体から溢れるオーラは
ハジメが変身する姿とは一つ上に位置している

疾走する本能 仮面ライダーファイズ

現る！

そして人里のある場所では

「またオルフェノクか……本当にしつこい奴だなあ……」

9・1・3 Enter

『standing by』

「変身！」

『complete』

黄色のフォトンストリームを形成して現れた戦士 仮面ライダーカイザが

そして

「寺子屋の子達に手出しさせない…変身!」

『standing by…:complete!』

青いフォトンストリームを形成した戦士

仮面ライダーデルタが

この幻想郷を守護する3人のライダー現れたのである!!

目の前でのファイズ生変身にハルトは

「うおおおおおおお!!」

『相棒が発狂してる!』

『まあいつもの事だろ』

幕間 幻想郷

前回のあらすじ

グリューエン大迷宮で魔族の奇襲を受けたハルト達 脱出不可能な現状に頭を悩ませるが突如 現れた政人の友人 八雲紫の協力の元 彼女の拠点 幻想郷へと避難する英気を養う彼らの元にオルフェノクが人里で暴れてると聞き駆けつけると現れたのは!!

「仮面ライダーファイズだああああ!!」

うおおおおお!とテンションが天元突破しているハルトは最早 完全にヒーローシヨーを見ている子供と化していたのである!!

「ファイズ頑張れー!!」

『いや相棒も戦えよ!!』

「いや君、危ないから避難…そう言えば何で僕の名前を「通りすがりの1ファンです！」ファン！僕の!？」

「はい!!この色紙にサインお願いします!!」

「ええ、困っちゃうなあ〜良いよ！」

「ありがとうございます!!いよっしゃあ!!」

いついかなる時でもレジエンド達へのリスペクトを忘れない　それが常葉ハルトという男である

「はあ！」

オルフェノクへパンチを叩き込んだ後に手首のスナップを一度する…やはり間違いない!

「乾巧さんが変身する本物のファイズだあ！」

目がキラキラ輝いている所に

「ぐあー!」「のおー!」

他の場所から投げ飛ばされたのであろうオルフェノクが

「乾さん!」「何だ君も暴れていたのか」

「三原さん!草加さんも!」

啓太郎の一言にハルトは

「嘘!!あのデルタとカイザは三原修二さんに草加雅人さん!?!うおおおおレジエンド勢揃いだ!!すごいよ!アメイジング!!!」

最早喜びだけで空へ飛びそうな彼にナツキはハリセンで叩いて目を覚まさせる

「何してんのさハルト？」

「え？ 応援しているのが見えないのか？」

お前は何言っているとかばかりに尋ねるハルトの手にはいつの間にか呼び寄せた彼らのフォトンストリームに囚んだ3色のペンライトが握り額に鉢巻をしていたのである

「頑張れええ!!」

「いやお前も行くんだよ!!」

「いや、俺は行かない！」

「何でさ!?!」

「このウォッチが言うんだよ…あの時の青年が夢を守る戦士が見届けろと！」

「それ仮面ライダーXのウォッチじゃん」

「劇場版で縁が出来たからだろうな」

「いやメタいな」

光るのは迷宮で獲得した仮面ライダーXのウォッチであったが

その光景に

「何なんだいアレは？」

「知らん」

「と、とにかくやりましょう！」

3人はそのままオルフェノクへ突撃し前蹴りを叩き込むと、そのままデルタはデルタムーバーで銃撃し前衛はファイズとカイザが担当している

『Ready』

ファイズエッジとカイザブレイガンのソードモードだとお！

その接近戦は、やはり歴戦故の経験値の高さ

そしてファイズやカイザに慣れ親しんでいる故の親和性を感じる

これが本物の仮面ライダーの戦いだ

とハルトは感動しているが最早手慣れた対応のアナザーライダー達がいた

「うおおお……やばい感動の涙で前が見えない……」

『本当、相棒の仮面ライダー愛は重いな』

『多分、エルフナイン達がナツキに向ける感情並みに思いが重いぜ！はい！或斗じゃー

ないと!!』

『笑えないジョークだな』

『辛辣う!!』

「失礼だな…お前たち…純愛だよ」

「その服装で言われても説得力がねえよ」

押しの主張強火なハツピとサイリウムを持つ姿だと滑稽でしかなかった

そんな事を話している間にもファイズ達はオルフェノク達を追い詰めていくとファイズは足にファイズポインターをカイザはブレイガンのコッキングレバーを引く

『exceed charge』

2人はそれぞれのEnterキーを押してエネルギーを解放すると。その体にフォトンブラッドが流れると

「たあー!」

ファイズは高く飛び上がりオルフェノクの眼前にマーカーを射出した

「!!」

「せやああああ!!」

「せいっ!!」

もう一人のオルフェノクは仲間を見捨てて逃げようとするがカイザのブレイガンの銃撃により動きを止められる拘束から抜け出せない内に逆手持ちにしてブレイガンを構えるとマーカーと共に敵へと突撃 すれ違い様にキックと斬撃を浴びせた

これはクリムゾンスマッシュにカイザスラッシュか!とハルトは生で必殺技を見れた事に感動するとオルフェノク達はΦとλの文字と共に灰化した

「おお……」

そして3人は変身解除して一息つく

「よし帰るか」

「その前に彼だ、君は何者だい？何故ファイズやカイザの事を知っている？」

「あれ？政人？…ん？けどさつき草加さんて…ん？」

「何だい君は馴れ馴れしいな「ハルト！大変だオルフェノクが…っ！テメエ！」ああそういう事が生きてたのか？暫く幻想郷にいなかったからとつくにくたばったと思ったよ」

「何だ、まだ死んでなかったか陰湿マザコン野郎」

雅人と政人の邂逅に

「やっぱりそっくりだな」

「うん、見分けるの難しいよね」

「!!!」

「ハルトもそうだそうだと行ってますー

「いやお前はラオンか…あと会話にナチュラルに混ざらないでくれよ、せめて人の言葉を喋れ」

「————!!!」

そしてハルトは意を決した表情で

「あ、あのー！」

「何だ？」

「乾巧さんですよね？」

「だったら何だ？」

「俺、常葉ハルトって言います！その…ファンです！サインくださいお願いします!!」

土下座し色紙とサインペンを突き出すハルトに巧は うわあと引いていた

「いいじゃない、タツくん書いてあげなよ土下座までしてるんだよ？」

「そーそー巧のファンなんて頭のおかしい人出てこないと思うから」

そこに現れた女性は…まさか！園田真里さんか!!おおお！と感動をしているハルトだが

「いやコイツよりはマトモだろ」

『そりやそうじゃ』

『こ、これが本物の仮面ライダー…何て観察眼だ…相棒の頭がおかしい事を見抜いてい
るじゃ』

ーお前たち?ー

『つてアナザーWが言つてた』

ー……ほおー

『冤罪ダア!!』

そんなやり取りをした後 巧さんは困つたような顔をしながらサインを書いてくれた…やはり根は悪い人じゃないんだよなあ流星は憧れのヒーローだなと頷いていると

「ほらコレで良いだろ?」

「あ、ありがとうございます!! いやったあ!!」

やったぜフォー……ウ!!!と小躍りするハルトに巧は少し引いていた

「………はっ!三原さんは何処ですか?あの人にもサインを!!」

「ああ彼ならオルフェノク倒したから寺子屋帰るって「何処にあります!？」えーと彼処かな」

「分かりました!すぐに「行かんでよろしい」離せナツキ!!俺には皆さんのサインを貰うという重要な使命が!!」

「違うだろ…お前は彼処の喧嘩を止めろ」

指差す先には

「やはりオルフェノクだね君も…」

「頭来た、やっぱりお前は此処で消した方が良いなあ!」

2人は同じカイザギアを取り出して再度変身しようとしていた!まずい!!

「だけどどっちが俺達の仲間なんだ!」

双子並みに見分けがつかないぞ!!

「何だ見分け付かないのか？」

「乾さんは分かるんですか!? 凄い… 流石です!!」

「見てろ、お前…草加か？」

「誰がそこの陰湿マザコン野郎だあ!!」

「ほら、あっちが東雲だ」

「ありがとうございます!! 流石です!!」

「タツくん!? 何て方法で見分けてるのさ!!」

啓太郎さんナイスツツコミ!とハルトは取り敢えず政人の首根っこ掴んでナツキの所へ放り投げた

「これですよ」

「よしじゃねえよ!!」

「さて……草加雅人さん……お願いします!サインください!!」

『いや見境なしか!!』

そして クリーニング菊池 幻想郷店にて

「……………」

まるで店頭飾られたトランプペットを眺める子供のような純粋な笑顔でサイン色紙を眺めるハルトがいたが

「それで君達は八雲紫の案内でこの幻想郷に？」

「はい、そしたらオルフェノク騒動に巻き込まれて…今に至る訳です」

ナツキが説明している中でも色紙に目線を向けているハルトに

「おいハルト、お前から何か話せ」

「ダメだナツキ…今俺視線を皆さんに向けると喜びのあまり灰化するかもしれない!!!」

「いや何言ってるんだ!!この馬鹿!!」

「んだとお!今の俺のハザードレベルは53万だぞ!!」

「そんなハザードレベル、エボルトが涙目になるわ!!」

「はいはい喧嘩はやめてくださいね」

とお茶を出してくれた女性……え？まさか

「長田結花さん？」

「はい、本当に私のことまで知ってるんですね」

「因みに僕の許嫁だよ」

「……………はい」

「ええええええええ！啓太郎さん…マジっすか!!」

まさかの展開にハルトは困惑を隠しきれない……はっ！まさか!!

「海堂直哉さんもいるんですか!？」

「良いや、あの人には会ってないんだ」

「そうかあ……」

ハルトは知らなかった、彼は現在 人間と共存を望むオルフェノクを保護しながらも クリーニング屋を改築してラーメン屋をしている事を、そして出会うと起こる化学反応も

「けど凄いなあ……けど何でオルフェノクが？」

「分からないんだ、何でオルフェノクが此処にいるのか……何で僕たちが幻想郷にいるのか……何で死んだ筈の草加さんが生きてたのか……」

『何故変身後に頭が痛むのかア!!』

ーアナザーオーズは黙ってる!!ー

だが確かに……けど

「俺としては嬉しいです、憧れのヒーロー達に会えたので…えへへ…」

「な、何言ってたんだ……熱っ！」

「あ、良かったらどうぞ…冷ましたお茶です」

ハルトが水筒を出すと確かに少し温度が下がったコップに入れて出すと

「っ！お前分かってるじゃないか！」

「ありがとうございます!!!」

ハルトはわーい！と喜んだ乾巧さんが猫舌なんて情報は昔から把握しているぜえ！と内心では思っていたが

「あ、そーいやあハジメ君は？」

「昨日の宴会で会った河童の女の子…にとりさんだったかな？その子の所で義手を治してるよユエさんとシアさんとジナイーダさんも一緒に」

「んで、うちの連中は？」

「カレンさんとアンティリーネさん、ベルファストさん以外二日酔いで伸びてる…未成年組はオリガさんというよ」

「あの馬鹿共が…：しょうがない、シジミの味噌汁でも作ってやるかな…：ありがとうございました！…またお邪魔します!!」

と退室して思った

「逢魔の服、ここでクリーニングしてもらおうか」

「はいはい、そんな考えをする前に戻るぞ」

「おう………ん？」

視線を向けると誰かが転けたな……ふむ仕方ない

「大丈夫ですか？」

「あ、ありがとうございます」

「怪我とかは？」

「大丈夫です」

「ですが念のために……回復魔法と」

ハルトはハルトで魔法や色んなものを学んでいる……軽い怪我なら自分の力で治療も可能だ

「あ、ありがとうございます」

「良いつて事です、けど気をつけてくださいいね」

「はい、それでは「ちよつと待った」何でしょう?」

「何で君がこの本を持つてるの?」

拾った本のタイトルは 逢魔降臨歴 ウオズの持つ預言書である

「あ、それですな図書館で借りたんですが私には意味のわからない内容でしたよオーマ
ジオウがどうか」

「図書館?まさかウオズの奴、あの本を自伝か何かで売ったのか?…つてよく内容覚え
てるね」

だがそんな自費出版するような奴だったかなと首を傾げるが

「はい私には『一度見たものを忘れない程度の能力』がありますから」

「全然程度じゃねえよ完全記憶能力とかヤベーよ！」

「いやナツキ、それは誰しもが持つ能力だ」

「持つてねえよ」

「では貴方も？」

「ああ憧れのヒーローの物語やその活躍はこの脳みそに網膜にいや魂にすら刻まれていくからなー」

『少ない脳みその容量を何処に使ってんだ！』

『おいこのオタク何とかしろ』

「何か言われてるなハルト」

「大丈夫だ、後であるの馬鹿共とはジェットスライガーで鬼ごっこするから」
『死刑宣告!』

「凄いな読んだ本の中身を丸暗記か…宮使えの文官なら大成するだろうな」
「そうですかね？」

「というより家に一番欲しい人材では？武官ばかりだから官僚や文官粹欲しいと思っ
てんだよね」

「あ、失礼…俺は常葉ハルト、幻想郷に来たばかりのものだ」

「稗田阿求と申します」

「稗田？確か七、八世紀に古事記の編纂に携わった人にそんな名前の人がいたような
……そうそう名前は稗田阿礼だったかな？」

『あ、相棒が博識な知識を有しているう!!』

『そんな!!このバカの脳みそには料理と仮面ライダーの知識しかない筈だ!!』

『こいつ偽者ダア!!』

『それ為政者としてどうなの?』

ーんじやもう一つ博識さを…君主論の著者マキャベリはこう言った…暴力は使い所が大事とー

『微妙に違うぞ!それは残虐さを見せる云々の話だ!』

ー博識だな相棒、よし頭良い奴は死刑!ー

『何処の独裁者だ!!』

「はあ……あの馬鹿共は」

「どうかされましたか?」

「い、いや何でもない……ただ……君が綺麗だなど思つてな」

「へ？」

「あ、いやあ……その……」

「……………」
／／

「……………」

互いに気まずそうに顔を逸らす2人に思わず

『おいこの馬鹿マジか』

「ベアトリスさん達にメール……えーとハルトが人里で女性を口説いてますと……送信」

「ちよ、おい待て!!」

「断る！前に俺をエルフナイン達に放り込んだお返しだ!!」

「その携帯を渡しやがれ修羅場製造機!!」

「んだとお！行く先手で現地妻を増やす女誑しが!!」

「純愛言ってるだろうが!!」

「あ、あの！」

「ん？」

「その私…綺麗って…そう見えるんですか？」

「え？俺はそう思ったからそう言ったけど？阿求さんは綺麗な大和撫子だよ」

「!!!!」

「だから、お前は何ナチュラルに口説いてんだ!!」

「いやいや俺は思った事しか言わないが?」

「素直すぎるのが問題だって言ってるんだよ!!」

「は? 綺麗なものを綺麗と大切な人だから行かないでと、あかねにあの時何も言わずに手を伸ばさずに後悔したから今の俺がある」

「どんだけトラウマになってんの!!」

「彼女は魅力的な女性だ、お淑やかに見えるがうちに秘める情熱があると一眼見て分かっちゃったよ」

「だから黙れ!!」

『もう辞めろ相棒！阿求とやらのライフはゼロだ!!』

「へ？……あー！」

「……………きゆう……」

まさかの赤面からのキャパオーバーで気絶するとは

「まさかの気絶!?衛生兵!!」

「彼女は俺が連れてく、お前は説教されてこい」

と阿求をお姫様抱っこしたナツキは

「ハルト？」

背後に現れたのはアンティリーネか……これはまずい……

「あ………」

「正座」

「はい」

「さて、ハルト……少し頭冷やそうか？」

『ready』

「え？ちよつ待ってアンティリーネ!!」

「その命、神に返しなさい」

「師匠や英寿さんに返すのは良いけど？」

『いや辞めろおお!』

「はあ……」

とまあそんな感じの修羅場をしていたのだが

ーありふれ世界 アンカジ公国にてー

患者の治療をしていた咲那が何かを感じ取った

「はっ！義兄さんが女の子をお姫様抱っこしている気配が！」

「そんなピンポイントな気配まで分かるの咲那ちゃん」

「はい！……っ！そんな義兄さんにつけた発信機から反応が消えている！」

「ちよつと待つて咲那ちゃん、何でナツキさんに発信機つけてたの!？」

「義兄さんは放っておくと何するか、わからないからです！だから見張るためにつけま

したよ！前の世界でも義兄さんに発信機をつけてたのですがバレてしまったんです…
その反省を活かしてハルトさんをおど…お話しして最新のナノマシンを応用した発信
機をつけたのに！」

哀れ ハルト脅された結果、エデンのナノマシンを応用した監視のナノマシンを強請
られた…エスが草葉の陰で泣いてるぞ！

「咲那ちゃん！大丈夫!? 疲れたなら休んで良いからね!!」

「義兄さん……………どこ？」

—————

そんな事も知らないナツキは身震いしていた

「何だろう…俺生きて帰れるかな？」

「知らね」

その後 メンバーはキャツスルドランに帰還し
ハルトはアンティリーネ達から説教されていた

「今後は一人で出歩かず私達の誰かと必ずいる事！良いですね！！」

「何で俺の行動制限を「でないと勝手に増やすからですよ！！」って誰が増やすかあ！！」

「人里で阿求さんという女性を口説いてたらしいですが」

「え？あれって口説くとかに入るの？」

「ハルトさん？」

「え、いやあ……あはは」

「はあ…あのリボン巫女さんもハルトさんの料理を気に入ったのか」

「アンタ！八目鰻って捌ける!？」

「できるよ？昼は蒲焼か何かにする？」

「蒲焼…：…っ！お米用意してくるわ!!」

「食材持ち込んでくる始末ですし」

「良いじゃないか現地の人とこんなにも穩便に交流出来たのはテンペストの人達以来だよ」

「そうなのですか？」

「うん！後はいきなり俺に攻撃してきたりするからね俺としては穩便な話し合いを望んでいるのよ」

主にシンフォギア世界の連中とかな！と内心で呟くも…よくよく考えたらIS世界や精霊達の世界も比較的穏便に話しているのだが…

「何で皆。ドン引きするんだろうね俺はただ目の前の泣きじやくりながら命乞いする奴等を笑いながら脊髄ぶっこぬきしてるだけなのに…」

「そうだよなあ…俺も星狩りをしてたときは今まで協力関係を持った奴らがいきなり『この星は俺達を守る！』とか無駄に正義感が目覚めた裏切者共が故郷の星が滅ぶさまを見せながら絶望した所を始末しただけなのに…」

「「本当何でだろうなあ…」」

「お前らが物騒すぎるからだよ怪人コンビ!!穏便から最も遠いよそれ!!」

「なんと人聞きの悪い！逆らうものは皆殺しが俺達の方針だろう!？」

「そうだ！取り敢えずあの魔人族は消すぞ」

「消すだけじゃ足りない魔人族は根絶やしだ！奴らに絶望を教えよう……そうだアン
ティリーネから教わった『黒き豊穰への貢』とかいう超魔法を魔人族の国の中心でぶち
かますか」

その魔法を聞いた時、ナツキの顔は思わず青くなりながら尋ねる

「は、ハルトさん？その魔法はどんなものか知ってますか？」

実際 ある周回でハルトが使ったので威力や恐ろしさを身をもって理解している

「え？即死魔法だよな！痛みなく死ぬるとかなんて慈悲ある魔法だろう」

「そうだけど、その後に死体を糧にとんでもない奴を呼び出す魔法だよ!!」

「ふーん……へえ……ならシンフォギア世界で実験してみようか、あの世界の人間なら

いくら死んでも構わないし…使っても良いよねえ…」

「魔族絶滅は賛成だが、あの世界でその魔法使うのは辞めろお！」

ナツキは懸命に止めたのであった、そんなやり取りをしているとカレンが頭を抱え

「と、時折主が本当の魔王に見えます」

「え？俺、魔王だよ？」

「そうでした…普段の様子から忘れがちですが魔王でしたね」

「そうだよ！取り敢えず、シジミの味噌汁作ったから二日酔いで伸びてる馬鹿共に出してくれ…本当にアイツらこの非常事態によく伸びてるな」

と呆れているが平和なのは久しぶりだなあ

「さーてと…んじゃそろそろ支度しますか」

「何の?」

「霊夢さんが八目鰻持ってきたから昼飯にな、お前たちも食べるか蒲焼と白焼とひつまぶしを作る予定だぜ」

「二日酔いしてる人に勧めるものじゃねえよ」

「ふーん、そつか…んじゃ作るかね……ん?あれは?」

誰かがキャツスルドランの前にいるな。取り敢えず出迎えよう

「よっ!昨日ぶりだな」

「ですね。魔理沙さん…あ、八目鰻を霊夢さんから貰ったんですが食べます?もうちよいしたら米も来るんで白焼、蒲焼、ひつまぶしのフルコースですよ!」

「おおおおお!それは良いなあ!よっしや!今日も宴会だな」

「そうですね…まあ昨日は怪我で不完全燃焼でしたからね…万全の状態で最高の料理を出すぞ…何せ宴に来た客人を満腹にしてこそ料理人の本懐と言えましょう!!」

『目的変わってるぞ』

「だって、政人達が魔法覚えるまで俺は暇ですしおすし?…そういえばあの宴会に制服ウサ耳の女の子がいたような」

「ああ永遠亭の兎だな、確か『狂気を操る程度の能力』とかもってたな」

「へえ狂気を操る…」

『た、頼む魔法使いよ! そのウサ耳娘に相棒の狂気レベルを下げるようお願いできないか!!』

『後生の頼みダア!! 相棒の最早狂気とも言える性格を矯正してくれえええ!』

「へえ…この世界にもいるんですね…」

「お前の世界でもそうなのか？」

「俺の国にも獣人族はいますから」

「国？」

「俺は元いる世界では王様なんです！こう見えて！！」

「本当にこう見えてだな…全く王様に見えなかったぜ」

「だろう！ほーんと何でかなあ相棒はどう思う？」

『諦めろ、今更王様ぶるとか無理な話だ』

『威厳が皆無だからな』

「辛辣う!!流石相棒、その言葉は俺に突き刺さるぜえ…」

「まあ良いや…それで満腹にしたい奴って」

「あの寝巻きみたいな服着た女性ですよ、ほら人魂みたいな連れて刀持ってた子とい
た」

「ああ幽々子の奴か…」

「絶対に負けられない戦いが此処にある」

『今使う言葉じゃないぞ、それ』

「お米持ってきたわよ…って何で魔理沙がいるのよ」

「また美味しい飯頼みにきた」

「おいおい」

「はあ……仕方ないわね、それよりほら早く作りなさいな！」

「おうよ、ちと待つてなく蒲焼、白焼、ひつまぶしく」

鼻歌混じりで厨房に行く

「おい霊夢、お前さんが食べ物持参してくるとかどんな風の吹き回しだ？」

「べ、別にあれよ料理が面倒だから趣味の奴に頼んだだけよ、それに美味しいし」

「ふーん、そうか」

「何よ？」

「いやいや、お前がアイツを気にいったのかなあつてな」

「そ、そんな訳ないじゃない!!」

「ほほおそうか？」

「な、何よ…」

「ま、何でも良いけどよくそれよりまだかハルト!!」

「もう少しだよ、そういやあシジミの味噌汁あるから先に飲んで待つててくれ」

「おうよ！」

2人が動いたのを見て

「ポチツと」

ホロスコープスのスイッチを起動 ジェミニを作り出した

「お前が饗応をしろ、俺は招かざる客の相手をしてくる」

「あはは！お任せあれ〜」

「んじや行つてくる」

『テレポート』

—————

キャツスルドランから少し離れた場所

「ははは、まさか本当にオルフェノクの王…いやそれ以上の力を有する怪人王が幻想郷にいるとはな」

「あの男を捕らえれば、俺達もラッキークローバーの一員に…いやそれ以上の地位だつて…」

「よし行くぞお前等、あそこに博麗の巫女も人質にすれば怪人王とてー」

「俺の城に俺の催す宴会の準備中に何しにきたのさ、オルフェノク」

「!!!」

3人の目線の先には、ハルトが立っていた

「宴会に参加するなら歓迎するが、荒事ならお断りだ幸い今日の俺は気分が良い…今逃げるなら殺しはしないと」

オルフェノクに変身した1人が武器である刀剣を取り出してハルトに斬りかかろうとするが、モーフィンングパワーで加工したアクセサリーソードに止められてしまう

「へえこれが答えね…ふう面倒だなあ、んでお前の目的は？」

「怪人王の生肝を食べれば千人力の怪人になれると聞いた、そうなればオルフェノクの時代がこの幻想郷にやってくる!!そしてその手柄で俺達がラッキークローバーにな

るって寸法よ」

「ラツキークローバー？ ああアレか……つてか俺の内臓を食べる……うわあ悪趣味くせめて腕とかにしなさいよ切つても生えてくるんだから、けど地面とか水源に埋めるなよ大変な事になるから」

『普通は腕とか生えないんだよ間抜け』

「分かってるよ、けどまさか怪人が俺に逆らうなんて……ゴオマみたいなノリじゃなくてマジな奴とか楽しいな幻想郷……」

『まあ眷属に入れていないからだろうな』

「そっか、オルフェノクが俺の言う事を聞くなら乾さんも俺の言う事を……はっ！ ど、どどどどうしよう、俺のせいで乾さんに迷惑かけたとかあつたら！ そうなつたら……切腹して責任を!!」

『辞めんか!!』

アタフタするハルトを見て高笑いする

「おいおい、怪人王つてのはこんな腑抜けなのか？」

「ならお前を倒して俺が玉座に座るのも悪くないよなあ」

「ぎやはははは!!」

そんな笑い声を上げるオルフェノクだったが

『おいハルト、舐められてるぞ』

「いいよいよ気にしてないし王らしくないって自覚もあるよ」

「そんな奴を王と担ぎ上げる間抜け共がいるなんて笑えるぜ!!」

ギヤハハハハハハ！と高笑いする奴等、彼等は己の言葉が魔王の逆鱗となるのを知らなかつた

ギリギリ……そんな金属が擦り切れるような音と共にハルトの内側から何かが溢れ出した

「はっ？」

その一言で場の流れが変わったことを

「おい、誰の前に立ってると思っている身の程を知れ木端」

瞳の色を変えると同時に圧をかける、その姿には普段の呑気で仲間には揶揄られるハルトはいなかった いるのは

「頭が高いぞ平伏せ」

ドス黒いオーラを纏い、圧倒的な力と恐怖が人の形を為す

不敵な笑みを浮かべながら死を振り撒く者

の
その付近にいた生き物は人生最後の日と錯覚する程の形容し難い不安に襲われる程

絶対的な恐怖にして悪辣の魔王

裏のライダー達を統べる唯一無二の存在にして

過去、現在、未来 全ての歴史に存在する怪人達を率いて天に君臨する仮面ライダー
の王に反旗を翻した傲慢なる魔王など

「跪け」

常葉ハルト以外に務まる訳がないのだから

「「!!!」」

全員その言葉にオルフェノク達はボタン!!と膝をつき臣下の礼を取るとハルトは土魔法で生成した仮の玉座に座る

「そうだ貴様等はそうするのが分相応だ、それで誰の玉座に座ると?」

「ひい!!」

それを言ったオルフェノクは涙目で怯えているそして理解する 己はとんでもない暴言を吐いたのだと

「そ、それは……」

「貴様如き木端でも座れると思われたのか?」

「……」

「そんな妄言を吐かれたなど俺にとつては恥以外の何者でもない…随分と俺の玉座も舐められたものだ…やはり不愉快極まりない」

「ひいひいひい!!」

まるで二重人格のように口調も態度も入れ替わったハルトの姿にオルフェノク達は恐怖で支配された

「で…貴様等は、この箱庭に王様擬きとして君臨するだけで満足なのか?」

「へ?」

「しかし情けねえ、それでもオルフェノクか? 怪人か? 小さくて情けねえなあ、この世に生まれたからにはデカイものを狙おうぜ」

まるで人格が混濁しているかのような話し方で違和感はあるが…オルフェノク達にはそれを理解する精神的余裕なんて無かった

「デカイもの？それは「オーマジオウを倒す」っ!!そんなの出来るわけないだろう!!」

「出来ないか…ははは、やる前から諦める腰抜けには分相応…いや負け犬だな」

「何だと!!」

「お前達はそれで満足なのか？俺達怪人はいつも仮面ライダーに負け、人類に負け続け世界の中から溢れ落ちていく嫌われ者として終わる事を良しとするのか？」

問うように

「いつまで負け犬でいる？いつまでライダーに勝てる訳ないとか諦めている？」

投げかけた

「！！！！」

「いつまで人間の擬態でいる事に満足してる？ちまちまと人間を襲う事でしか愉悦を感じない腰抜けが……怪人としての姿や種の在り方に誇りはないのか？今の自分で悔しくないのか！！映画パラダイスロストを見習え！あの世界では人間が狩られる側だ！お前達はいつまで人間に狩られる側でいるつもりだ！」

『おいハルト？』

「その力や衝動のまま人間を娯楽混じりに襲ってみたくないか？…そもそも欲望のまま戦おうとしているのは人間の方だ！俺の理想郷の一つは怪人が有象無象の人間どもより上位に君臨する世界でもある！！」

『ダメだ、怒りで熱が入ったままだ』

「そんな世界の為に一度位は連中に勝ちたいと思わねえのか？」

「勝ちてえ…よ、けど！仮面ライダーに勝てる怪人なんている訳ねえよ！」

「此処にいる、お前たちの目の前にな」

その言葉が本当にしてけると思わせるくらいの説得力があった

「！！！！」

「だから俺と来い、来るものは拒まない、去る者も追わない…だが俺の覇道を邪魔するんなら誰だろうとぶっ潰す!!」

『あのおハルトさん？』

『何殺そうとした奴スカウトしてるんですか？』

相棒達の言葉も届かないにスイッチが入っていたハルトは続ける

「俺が作るのはオーマジオウや仮面ライダーや人類に怯えない場所だ、だから俺に従え

オルフェノク…なあ見たくないか？仮面ライダーが地べたに這い蹲り怪人が拳を突き上げて勝ち誇る素晴らしい未来を」

「!!!」
「!!!」

「見たいなら付いて来いオルフェノク!!俺がその未来へ必ず連れて行く!!…俺が怪人達の新しい時代を作ってやる!!」

その時 ハルトの家臣団や眷属となる怪人達とはある未来を幻視した

アナザーオーマジオウとなったハルトが怪人達を率いてオーマジオウ率いる仮面ライダー達と全面戦争をしてハルトが逢魔の旗を掲げる姿が

その可能性に至れる、最強なるライダー王を正面から相対し下せる資格を有するは

怪人達の絶対的な支配者（オーバーロード）

目の前にいる王に他ならない

「どうだテメエ等、中々唆る話だろう?」

「お前……いや貴方様は何処まで見えているんですか?」

「何も見えてねえ、だからーから作るんだろ?色んな世界を旅して、色んな奴と出会い、未踏を踏破して未知を既知にするなんて、誰にもできない事じゃねえ……だから挑むんだよ……んで、どうするよお前等?このままチンピラとして終わるのか、一旗上げて名を残すのか好きな方を選びな特別にさつきまでの事は不問にしてやるよ負け犬でいたいなら俺の前から失せな」

「!!!」
「!!!」

ザッ!と全員がハルトの前から一步も動かなかったという

「んじゃ降りてこい………ん………取り敢えず飯にしようぜえ」

にへらくと笑う普段のハルトに戻りオルフェノク達を連れてキャツスルドランの元へ向かう

「どつちが本当の貴方なのですか？」

「さあ？どつちも俺で俺じゃないかな…ただ裏切り者は殺すから覚えておいてね」

「「ひい!!」」

余談だが。この時の映像は録画されておりウオズ達が二日酔いの体に鞭を撃つように立ち上がり興奮していたの言うまでもない

さてとラツキークローバーまでいるのか…とハルトが考えているが、取り敢えず

「宴会じゃあぁー！」

まさかの連日の宴会であつた

そしてハジメ達が戻ってきたのだが

「なあハジメ君、その義手は…」

「ああ。にとり…あの河童と意気投合してな見てくれ、義手に仕込み銃をつけたんだよ」

そしてハジメが見せてくれたのは…

それは仕込み銃とは言うには余りにも巨大過ぎた、大きく、太く、そして威力があり過ぎた

「ベル〇ルク風のナレーションで説明してんじやねえよ」

「と、とんでもねえ魔改造をしちまったな!!片腕ギガランチャーとかスゲエ!!いや待て、

これはガトリングを内蔵してるのか!!とんだ浪漫砲だな!!」

「まあなハルトもハルトで…何でオルフェノクも混ざって宴会してんだ?アレ人里襲う奴なんだろう?」

「さあ…何か俺についていくぜ!つて感じなんだよなあ…」

「あはは俺達あ!アンタについてくぜ親分!!」

「おうよ!!!」

何か楽しそうに面々と酒盃を交わしているので何も言えないが

「何か俺を殺そうとした奴なんだけどき…何で俺に従ってるのか分からないんだよ…
なーんかブチ切れした所まで覚えてんだけど微妙に記憶が飛んでるんだよ」

『お前……覚えてないのか?』

「うん……何というか、またノリと勢いでやらかしたなという自覚はある!!」

『持ったらダメな自覚だな…』

『俺はあのとくに相棒の王としての片鱗を見たが…幻覚だったか?』

『幻覚だろうなあ…』

「残念だ……あ、そういえば俺のこと誰から聞いたの?」

「ああ、それはなメガネをかけた白軍服の男だよ」

「親分の生き胆食べたら強くなるとか言ってたな」

「そーそー」

その人物に該当する人間は1人だけだ

「ネオタイムジャッカー……まさか幻想郷にまで手を伸ばしたか…」

「ハルト、ここは」

「だが大丈夫だろう、ファイズの皆様がいるんだからな」

「何で全幅の信頼を寄せているんだ！」

「すごい綺麗な瞳だな!!」

責任はあるし取らないとね、けど今は！

「ねえハルト！おかわり!!」

「はいよ〜」

八目鰻の蒲焼作りから手を離せないぜ!!

「いやあ…アンタの料理なら毎日食べたいわあ…」

満足とばかりの霊夢にハルトは揶揄い混じりで

「なら霊夢も逢魔に来るか歓迎するぞ、神主や神職を担当する奴がいなくてな」

「それは無理よ私にも巫女の仕事があるから」

「んじゃ気が向いたら飯作りにまた戻るよ」

「そ、そう期待しないでおくわね」

「「……………」」

何故かベアトリス達の視線が痛い…うむ

「皆は何食べたい？」

「旦那様かしら」

「は？ちよつ！なにいつー」

油断した隙を突かれたハルトはアンティリーネにタツクルを喰らうとそのままの勢いでキャツスルドランの一室に放り込まれた後は
彼女達に捕食されたの言うまでもない：

そして数日間 全員が思い思いの時間を過ごし
空間魔法の習得や能力拡張を果たしたのである
取り敢えずあのオルフェノク3人は逢魔で面倒見ることにした……聞けばラーメン屋を開くらしい……おい待てどんな野望だコラ

「さて、と貴方達をあの世界へ送り返すわね」

「ああ色々助かったよ」

「座標としては迷宮の外に設定しておいたから後はスキマを潜るだけよ」

「ありがとうな」

「良いのよそれより政人、暇なら帰って来なさいな」

「わかった、そうさせてもらうよ…でないと言われれば何と言われるか」

「これが修羅場か…これだから人間は面白い」

「いやお前も大概だぞ？」

「……………何のことだ？」

「惚けるなあ!!」

それぞれが別れの挨拶をしている時

「ハルト、また遊び来いよな！」

「勿論ですよ魔理沙さん…今度は弹幕ごっこしましょう」

「んじゃ最後に…アタシ等の合言葉を…せーの」

「弹幕はパワーだぜえ!!」

その合言葉と共に固い握手を交わしたのだが

「ああ…我が魔王ですね」

「ああハルトの感じから実家のような安心感を得るなんて……そういやあ霊夢さんは
?」

「どうやら来ないようですね」

「それは寂しくもあるが、今生の別れでもないんだからまた会え「ハルト」お、来た来た」

「よっ」

「本当に行っちゃうのね」

「おうよ仲間達の怪我也治ったからな…世話になったよ、ありがとな」

「そう……」

「安心しろよ終わったら飯なら作りに戻ってくるからさ」
『違うそうじゃない』

「……………っ！」

そのまま霊夢は何を思ったかハルトの頬にキスをすると

「早く帰って来なさいよ……布団とか寝巻きとか色々買ったのが無駄になるじゃないの……バカ」

「へ？いや、ちよっ!？」

「ほほお霊夢の奴……よし詳しく話を聞かせてもらおうぜえ！」

霊夢は魔理沙と何処かに行ったがハルトは

「……………」

『相棒が処理落ちしているう!!』

「わ、分からん！分からねば!!」

『あ、相棒後ろ』

「……………」

ギギギと首をブリキの人形のように動かした先には

「……………」

ベアトリス、ベルファスト、アンティリーネ…全員が武器を構えていた……あ、これ死んだわ

「あ、ちよつ…話を」「問答無用!!」「ぎゃあああああ!!!」

そして死体のようにグツタリしたハルトは隙間に投げ捨てられるのを皮切りに全員が元の世界に戻ったのであつた……だが

「あら私は誰も陸の上とは言っていないわよ?」

そう抜けた先は

「落ちてるううううう!!」

「おのれスキマ妖怪いいいい!!!」

全員が絶賛 空の上に投げ出されたのであった

結果としてハルトを叩き起こしアビソドンに全員を乗せるとハジメが潜水艇を召喚して仮の陸地とした

「なあ、ここ何処だよ?」

「さあな」

「んじゃ、このオーシャンビューを記念して……バーベキューしようぜえ!」

「ハルト様がアウトドアの楽しさに目覚めてしまった!」

「魔王ちゃんのゆるくないキャンプが始まるよ！」

「いや辞めましょうよ先輩達……はあ幻想郷に戻りたい」

「まあまあ、また行けば良いのですよ……そうですよね我が魔王？」

「だな……うし！頑張るぞ!!」

エリセン到着!迷宮攻略前編!!

前回のあらすじ

幻想郷に避難したハルト達 ファイズ達との出会いでテンション天元突破!そんなこんなでハジメの義手やらも治り皆、再びの迷宮攻略へと向かうのであった

何処かの海上に浮かぶはハジメが制作した潜水艇型アーティファクト

「……………何もないね」

「完全に漂流してるねコレ」

とナツキ達は海を眺めているのに

「おい見ろよ宗一！こんなデカイ魚が釣れたぞ！」

「でかした政人！よし」

「ハルト！コレで何か作って!!」

「任せなさい！今日はそうだなあ…そうだしビレモンのソースを使ったムニエルにしようー！」

「おおおおお!!」

「野菜もあるしパンもある、サンドイッチにすれば一石二鳥や！」

「いやまあサバイバルしてるから、料理とか栄養管理とかしてくれるその辺は助かるけどさ…もうちよい危機感持とうよ！絶賛漂流中なんだぞ!!」

「え？大丈夫だから暫く船上生活を満喫しようよったくナツキは硬いなあ」

「てか何でこの緊急事態に落ち着いてるの!？」

「お前達の持つてるライダーシステムには追尾用の発信機があるんだよ…それを向こうは迎れるから迎えは来るよ」

「え? マジでそんなのつけてんの!？」

「敵に奪われた時の備えだよ…まあファイズ系列にはつけてないけどね、つけてるのはカレン達のバックルだよ…アンデット解放されてバトルファイト開始とかしたら、生真面目捻りコンニャクが黙ってないし」

「お前くらいだよバトルファイト統制者を捻りコンニャクって呼べるのは…つか何でファイズ系列にはないんだよ」

「だってさ…盗まれてもエラーでベルトに弾かれるか、そのまま呪い殺されるか、性格が凶暴になるから別敵の手に渡っても大丈夫かなと寧ろ弊害しかないし」

恐るべきファイズ系列のベルト…変身のメリットに匹敵する以上のデメリットを内包しているとは…因みにだがある世界線ではカイザギアを奪った勇者が変身後に灰になっただけもしている…哀れ

「ああ……そうだね」

「それにハジメ君やナツキ達のベルトには、戦極ドライバーを参考にしたパーソナライズ機能があるから人間で使えるのは最初に変身した人だけ、後は原典通りの性能が適応されるよ」

「おお…何てハイテク」

「本当、キャロルと束と銀狼様々だよ」

逢魔の技術屋連中は頼りになるぜ！

「そうだなあ………そういやあ夜空の北極星を見て昔の船乗りは位置を見たと聞いたが」

「この世界に北極星があると良いけどな」

「ああ……そうか………ここ日本じゃないんだあ」

「つか、ハルトなら泳いで助けて呼べるんじゃないかね?」

「出来るけど……俺がいなくなったら誰がこの船の食事を用意するのかな?」

「「「「申し訳ありません」」」」」

いやそう思うなら考えて話せよ

「はあ………ベルファストに頼むのも危険だしなあ」

「ご用命とあらば出ますが……海上でしたら折角の見せ場ですし」

「エンタープライズとホーネットもいるから助けを呼べるかもよ！」

「艦載機も使えるけど陸地までの距離が分からない以上迂闊に動くのは危険だ燃料が持つか……」

「何か珍しく慎重だな、いつものノリと勢いはどうしたよ」

「現在地がわからないんじや流石に慎重になるさ……ここは無難に救助を待つべきだよ……つか海か……新しい子が来ないよな？」

「っ!!」

「お前……まさかエンタープライズとホーネット以外にケツコンした子がいるんじや」

「い、いるなあ……」

「何人？」

「ヨークタウンに高雄型姉妹と…イラストリアスにZ23かな…」

「どんだけ課金してんの！つか全員来たらとんだ修羅場になるよ！ピースメーカーに血の雨振るよ!! エンタープライズとホーネットの2人だけでも修羅場だったのに!! 合計7人とケツコンしてるのか!!」

「そういうお前はどうかんだよ？」

「俺は……」「重桜五航船姉妹とプリンツオイゲン様がいらしてますよね」「へい」

「やっぱりお前もか」

「けど何でベルファスト達だけこの世界に来れたんだろ？」

「分かりかねます」

「それより我が魔王……私はてつきり……」

———

「よつしやウオズ！ちよつと陸地まで泳いでくる！そうだ！海を凍らせれば歩いていけるじゃん！よし！今から海を凍らせるから皆俺に続け——！」

———

「という感じで行くのかと」

「「「確かに」」」

「あー分かるわ……」

「いやいや俺も海を凍らせるとかできないぞ……あと流石にそこまで化け物じゃないよ

「！」

「でしたら割るのは？」

「一時的なら出来るんじゃないかな？」

『凍らせるのとそんなに大差ないぞ』

「だが暇なのは困ったな」

「んじゃTV用意するから平成ライダーのDVD BOXでも見ようぜえ」

本当にこの男は平常運転であるが

「皆の使うライダーシステムの教本も兼ねてるから」

「以外と真面目な理由だった！と戦慄していた」

ファイズから見始め、次はブレイド劇場版と鎧武になったのだが鎧武を視聴中に

「師匠元気かなあ…」

「師匠？ハルトの師匠ってどんな人なんだ？」

「このとんでも魔王の師匠とか興味しかないと尋ねると

「あれ言ってなかったけ？俺さ鎧武の公認弟子1号なんだよ」

とTVで変身する鎧武を指差した

「嘘だろ!!」

「本当本当、沢芽市でビートライダーズにも会ったんだ〜サインもこの通り〜」

色紙を見せてドヤ顔すると

「う、羨ましい…」

「今度行く? 師匠に会いたいなら紹介するよ」

「良いのか!!」

「おーつと!俺達も!」

「忘れてもらっちゃ困るな!」

「んじゃ皆で行こう!あ、けど戦極ドライバーはつけてね〜じゃないとヘルヘイムの実を食べて人間辞めちゃうよ〜」

『俺に力おお!!』

現在TVでは初瀬がヘルヘイムの果実を食べインベス化する、あのトラウマシーンが流れていたのだが…

「何て身にしみる忠告なんだ!」

「いや俺は元から人間ではないが？」

「その場合宗一はブラッド族でインベスで仮面ライダー、俺はオルフェノクでインベスで仮面ライダーになるのか…属性過多だな」

「俺の胃酸強化のスキルでも流石にヘルヘイムの実はダメか…だが抗体を作ってから食べてロードバロンみたいになるのもワンチャンありだな」

「ハジメ君、ダメだ！その怪人トリオの領域に行ったら戻れないぞ!!色々と性格が破綻する!!」

「その辺はオルクスの迷宮で破綻してんだけどな」

「おのれオスカーオルクスううう!!」

「あ、因みに俺、この間沢芽市（時系列は番外　ハルトin沢芽市）に行く前にさ森でヘルヘイムの実を食べただけぞ」

「いつの間に食べたの!!」

「マジかよ!!」

「てか食べて大丈夫…ああそうかオーマジオウから聞いたがお前もオーバーロードだったな」

「こーう見えてもね…：食べても大丈夫なんだあゝいやさ皆にも食べれるように品種改良とか出来ないかとか試したんだけど…無理でした、そりやメガヘクスみたいに完全に排除するか師匠みたいな決断するしかないよ」

「食べたのに味覚とかそのままなんだ」

「俺は怪人特性無効のスキルがあるからね、人間の五感とかはそのままだよ、因みにヘルヘイムの果実は何かこうライチみたいなの食感で一口食べたら体の中から力が湧き上がるような感じがして、そこから更に自分の体が人から外れた何かになったようなテン

シヨンになるんだあ」

「恐らく世界初だなオーバードの食レポ、ヘルヘイムの果実編か？」

「何か途中から危ない薬みたいな感じになってたよ？」

「まあぶっちゃけ味は甘い寒天ゼリーだな……そりゃ師匠も泣くよ、アレしか食べられないんだもん」

「ハルト……その涙は姉の料理が食べられない悲しみの涙だからな」

「知ってるよ……だから俺は師匠の前で食べ物の話はしないんだよ……だつてさあ！キノコかタケノコか話してたら『良いじゃないか食の好みで喧嘩出来るなんて』つて偉い笑顔で言われた日には俺師匠に土下座するしかないもん!!てかしたよ!!」

あの日見た師匠の悲しい顔を俺はまだ忘れないと言うとんでも後悔をしていた

「だから俺は師匠にまた人の食べ物が食べられるようにジーンメモリの強化とかヘルヘイムの果実の味の改良とか試していきたいんだ!!」

「いや努力の方向性!？」

「本当にあの人、凄いな……この性格破綻者を弟子に迎え入れてるって」

「だろう!俺の自慢の師匠です!!」

『おい、デイスられた事に気づけ』

「そう言えばさハルト、この間の事件で駒紋戒斗さん復活したけど何処にいるんだろうな」

「復活してるのか!？」

「色々あつてね……」

「分からないけど、きつと弱い誰かを守る為に戦つてるよ思うよ…多分この世界に来たら『弱者を虐げるだけの神など俺は認めん!』とか『貴様程度が神を語るな、アイツへの侮辱に他ならん!』とか言うかなあ…」

「ごめん、鎧武本編見るよりそつちの話が気になるわ」

「んじゃ暇つぶしがてら話すかな…洗脳されたウオズ達の裏切りに始まり、そして絶望した俺の前に現れたウィザード、鎧武、ドライブ、ゴースト、エグゼイド、そしてビルド、W…それとガッチャード初登場から来る財団Xと精霊との戦いを」

「平成ジェネレーションじゃねえか!!何だその劇場版展開!!」

「その話我々の心が痛むのですが…」

「仕方ないよウオズちゃん…けどあの事件さえ無ければ今も俺たち四天王…」

「やはりあの小娘殺した方が良くないか?」

「カゲンよく言ったのお妾も賛成じゃ」

「やるなら僕も呼んでくださいね、たつぷりとお礼しますから」

ウオズと旧四天王からヘイトを稼ぎまくった歌姫はくしゃみと悪寒に襲われたのであつた

「だが間接的にアレはお前達の独断専行もあるからな、こほん……んじやまずは……」

自分が体験した事を話すと空から何か声が
それを見た宗一が

「親方あ!空から女の子が!」

「助けるぞ!40秒で支度しな!」

「んじや俺がイーグルアンデットに変身して行くぜ!!」

「いや俺が行く」

そう何故なら

「パパあああああ!!」

ミュウちゃんだったからだ、と言う事は

「救助きたああああ!!」

「予定より早いな…んじゃ魚のムニエルは後にするかハウンド、ガンシツプ用意してくれ」

『イエツサー、しかしまた派手に暴れましたな陛下』

「知ってるだろ？俺は過激なんだ」

『存じておりますよ』

「飯終わるまで救助待つて貰ってくれない?」

「いや喜べよ!!」

そして龍化したティオを筆頭に後ろからピースメーカーがやってきてガンシップに回収された

「陛下!ご無事でしたか」

「ああ助かったよハウンド」

「ご主人様!妾も心配しておったのじゃ!」

「任務ご苦勞ティオも助かったよ、あとでアンカジでの報告を聞かせてもらうぞ」

「ご、ご主人様が妾を褒めた!これは天変地異の前触れか!」

「ハウンド、アイツの足元に穴開けて落とせ」

「陛下、ここはピースメーカーのカタパルトではありませんよ」

「残念だ…」

「これじゃコレえ！この辛辣さよ！」

「はあ……」

『相棒が溜息だと！』

「いやするよ…何でああなるかな……なあザビーのライダーステイングをケツパイル代わりに刺したら治るかな？」

『治る訳ないだろう!!』

『その前にザビーゼクターあるのか!?!』

『あのハチには地獄を味合わせてやる』

『あ、アナザーカブトが闇落ちしたぞ!』

『いや元々じゃねえ?』

「最初はハウンドにザビーの資格者ありと考えたが……縁起が悪そうだから辞めた」

アレなると地獄兄弟になるか一回死んでガタツクになるかのどちらかだからなあ……

ハジメは潜水艇のメンテナンスをクロンメカニックと一緒にやっているがメカニック達がハジメの技術力を賞賛しているとハジメは照れているのか顔を逸らした
いやまあこの人達の兵器並みの性能とか凄いよね

「あ、ジャガーノートは?」

「回収して現在は点検と補強中です」

「OK」

俺達は情報共有と移動したのだがナツキは

「義兄さん！」

「咲那！ただいま！」

「もう遅いですよ！！けど良かった……」

「大丈夫ここに居るから」

「所で義兄さん」

「ん？」

「ワタシノイナイトコロデナニシテタノ？」

ハイライトが消えた瞳でナツキに問いただしていたマジ怖い

「え、いや幻想郷って場所でハジメ君達の療養を」

「あ、そいつな守矢神社って所の巫女さんと仲良くしてたぞ」

「ばっ！俺と早苗はそんな関係じゃ」「ニイサン?」「はい?」

「私心配したんですよ?急に連絡取れなくなったから心配でまた義兄さんが消えたんじゃないかと……それに巫女服なんて言ってくれば着替えるのに」

「咲那さん?俺「だから……私……」へ?ちよっ!」

『OPEN UP』

「分かったんです義兄さんを凍らせてしまえば、もう何処にも行かないって」

「さ、咲那さん?おかしいなあ……そんな事言うのはマドカやエルフナインだよお……」

「また他の女の名前を……大丈夫だよ義兄さん」

『Blizzard』

「凍らせた後に残りの女は消すから、義兄さんには私だけいれば良いんだよ…」

「ハルト助けて!!俺、築地のマグロみたいに凍らされるう!!」

「コールドスリープなら問題なくね?」

「そんなSFみたいな話じゃねえよ!!あと咲那が排除系ヤンデレに覚醒したあ!!」

「それお前のせいだろ」

「いやいや!助けてよハルえもん!!」

「本当どうしようもないなあナツキは……えーい!」

『BIO』

ナツキは突然、ハルトの手から伸びたバイオプラントの蔦に捕まり蓑虫にされた

「何すんねん!!」

「いや素直に犠牲になってこい咲那ちゃん!新鮮なナツキだよ!それ!!」

最早新しい顔を投げる人の感覚だ

「ありがとうございますございますハルトさん…さて義兄さん、どうして逃げたんですか?」

「咲那!落ち着くんだ!!…そうか!スパイダーアンデットの精神攻撃で暴走してるのか!!許さねえよくも咲那の心を蝕んだな!!」

「いやそうしようとスパイダーアンデットが精神攻撃したら咲那ちゃんの病みに心を蝕まれた結果完全封印されたが?」

「嘘だろ！睦月さんの苦勞とは！」

「さあ義兄さん…凍りつけになりたくないなら……」

「……………」

「今日、私の抱き枕になってください」

「……………はい？」

「了承を得たので今日は義兄さんの部屋で眠りますね」

「今のは了承のはい、じゃなくて確認のはいだよ!!」

「よせナツキ、傷口に塩コショウを塗りたいくるな」

「どう言う事!!」

ナツキの部屋つて事は自分の部屋、見られたくないんだな咲那ちゃんと、あの魔窟を
思い出していた

「ちよつと待て、咲那さん？何があつたか知らないけどもう一回俺と話し合いませんかあ!？」

――――

「呪腕さん、静謐ちゃんもありがとうね助かったよ」

「勿体なきお言葉」「感謝します」

「概ねの報告はテイオから聞いてるよ、静因石の供給でアンカジの人は快方に向かつてるって」

「はい……時はかかりましようが治るといのが治癒師（香織）殿の見立てです」

「そうか……なら大丈夫かな、それで2人に御礼をと思ったんだけど」

「勿体ない、我等は陰に潜むもの無いものに報酬を払うものはおりますまい」

「私達はマスターの魔力で現界している……ならこの身はマスターのもの……」

「うん、静謐ちゃんの発言は誤解を招きそうだね！けど……俺は皆のことを大事な仲間だっと思ってからさ細やかなものだけだね」

そうやって渡したのはメルクの星屑である

「短剣のメンテに使ってよ、俺の知る範囲で世界最高の砥石だから」

「感謝！」

「さてと……あと実は……2人に調べ物をお願いしたいんだ」

「何なりと」

「実は前にウルスの街やオルクスの迷宮で会った魔人族が言ってたじゃん、アナザーウオッチが古のアーティファクトって」

「はい」

「魔人族側にそう伝わってるなら人間側は?と思ったのよ」

「成る程、では我等に王国や帝国、アンカジ公国のウオッチに関する調査を行えと?」

「まあアンカジ公国は問題ない今回の件でウオッチの交渉が出来るが…」

「問題は王国と帝国?」

「そう王国は勇者の国だから俺達はどう伝わってるのか分からん、それにシアちゃんの件やトバスピノ達を狙っている事からも帝国は信用できない」

「ならばそれぞれの王の命を狙うと？」

「いや、そこまでしなくて良い…要するに」

「両国にウォッチがあるのか調べて欲しいと」

「そう言う事なんだよ…あるのが分かれば…」

「取り戻しに行くと言う訳ですな」

「そう言う事、頼んだよ2人とも」

「承知！」

2人は散つ！と直ぐに行動に移る　いや流石アサシンだなあ…

「後は魔族側の情報だよなあ」

こちらが欲しいのは魔族が誰のウォッチを持っているのか、そして他にアナザーウォッチを持っているのかの情報である

「コレに関してはどうしたものかな…」

こう考えると諜報機関の有用さを身に沁みて理解する…ああ久しぶりにカメレオンデッドマン呼び戻そうかなと考えていたが

「あ、ワームを擬態させて魔族領に送り込むのはありだな」

もしくは擬態させて情報を得る、ワームは記憶や知識を全て模倣する事が可能だし

「政府要人に擬態させて国を内側から崩す事も可能だな」

『出た草加スマイル』

「いやいや俺の笑顔はあの草加スマイルには劣るよ」

『遜色ないぞ』

「マジンナー」

取り敢えずピースメーカーは浮遊させて待機　メンテナンスを終えたハジメの潜水艇で俺達はエリセンへと向かうのであった

そしてエリセンについたのは良かったのだが

「貴様等は我等が同胞を攫った者の仲間か！」

全員から槍を突きつけられたのであるのだが

「ああ！誰か人攫いの仲間だあ！！勘違いしたテメエ等にお手軽に異種族転生出来るヘルヘイムの果实スムージーをご馳走してやろうか！」

「お前等を死徒再生オルフェノクにしてやろうか！」

「ネビュラガス注入してスマツシュにしてやろうか！」

まさかの臨戦態勢の怪人トリオに街はかつてない危機に襲われた!なんてこった:
と頭を抱えるウオズと

「火に油を注ぐな怪人トリオ!!あとそのスムーズージーは辞めろ!!」

「この状況に怯まないとは流石は我が魔王、武力を背景に脅す棍棒外交の達人」

「テスタロツサちゃんも言ってたよね〜アレは私にも出来ない」と

「うむ…」

「流石魔王様、相手を脅すのに定評がありますね」

「いや待て!それは王としてどうなのだ!?!」

「主、落ち着きましよう話が進みません」

だがミュウの説明とギルド支部長の依頼で誤解が解けたので取り敢えずは当初の目標である彼女の母親の元へ行く

「ママア!」

「ああミュウ…」

感動の再会で抱き合っているのに思わず涙ぐむ

「これは……泣けるでえ!!」

子を持つ父の身としてハルトは号泣していたのを見て

「鬼の目にも涙か？」

「涙はコレで拭きとけえ！」

「ありがとう…2人ともおおお!!」

「お前にも人の心がまだ残ってたんだな」

そんなナツキの一言に涙がピタリと止んだハルトは

「おーいアビソドン」

なあにいい? とミラーワールドから覗き込むアビソドンに一言

「ナツキを尻尾に縛り付けるからあの海を泳いで来い」

「へ? ちよつ、うわああああああ!!」

哀れナツキはアビソドンに捕まり、水上スキーツアーに巻き込まれたのであった

「俺だって人の親なんだよ」

「ならもう少し自重なさってください」

「必要ならする」

だが彼女の母親は足を怪我しているのだが香織が彼女の足を治した…までは良かった

たのだが

「ずっとミュウのパパでも良いですよ、あなた？」

「んな!!」

まさかの参戦にユエ達も驚いていたが

「人妻参戦かあ…：ランスロットいなくて良かったなあ」

何故か海藻を頭につけたナツキだが

「ナツキ…後ろ後ろ」

このバカは何をしているのだろう

「へ？あ、アルトリア！いつの間に!!ちよ、ちよつとま……あ———!!!」

哀れナツキ…君はWアルトリアに搾り取られる運命なのだろうな…ドナドナされた
彼に敬礼!!

そして一晩明かした面々は迷宮についての意見交換をする事になった

「まずは迷宮の位置がわからないのと…この海域には悪食という大きな魔物がいるらしいな」

「ほほお海の化け物…魚かな?ムニエル…刺身……かき揚げえええ!!」

天啓を得たような顔をしているが

「今日は揚げ物にするかな」

「なあまさかと思うが食べようとか考えてる?」

「食べれるならな……だが用心しないと海の化け物……油断ならん……つか悪食とか言われてるし美味しくなさそうだな……」

「そんなに強い魔物の可能性があるのか……あとハルト、魔物は食べたら腹下すぞれ

「いやマジで辞めろそれ」

「うん、まあ……グルメ界の鯨王並みに強い奴とかそういかあ！杞憂杞憂！あははは!!」

「お前の強さの物差しバグってるよ!!前にも話したけどあの怪物達が強さの尺度なのかしいよ!!」

「いやあ鯨王は俺も噂レベルでしか知らないんだけどさ口の中がブラックホールとか、どこかのピンク色のコピー能力者みたいだよな！」

「鯨の体格でカー〇イの吸い込みやるとか、それは災厄だろうが!!」

「鯨の厄災、白鯨……ナツキ…鯨王ムーン相手にナイスジョーク」

「「おお」」

「感心するな腹立つ!」

「ごほん……で、だハルト迷宮の位置分らないか?」

「うーむ……反響定位で海の様子は見れるけど…沈没船みたいなのが引つかかって見つけるのは時間がかかりそう潜れるなら別だけど……その魔物がいるなら反響定位中に襲われる可能性もあるし」

「我が魔王に襲い掛かる猛獣とかいるなら見たいものですよ」

「うんうん魔王ちゃんならノッキングして終わりですよ」

「いやいや俺のノツキングなんてまだまだだよ……俺にノツキングを教えてくださいた人は地球をノツキングする人なんだよ」

前に地球の自転を止めたと聞いた時は、この人ならオーマジオウ倒せるんじゃないかね？とか思ったのは内緒だ

「それ本当に人か？」

「今では週一で酒の島で飲み会してる仲だよ……白髪リーゼントの渋い爺さんだよ」

「白髪リーゼントにノツキング……っ！まさかその人ってノツキングマスター次郎か！！」

「そうそう何、次郎さんって有名人なの？」

「その世界基準でもかなりの化け物だよ！！」

「ああやっぱりかあ…」

「因みにニトロって生き物の脳みそを手で揺するだけでスムージーにするぞ」

「何！流石次郎さんだ…俺もそれくらい出来ないとダメだな」

『ああ相棒の人間離れが加速していく…』

「あと程々になビールの滝とかブランデーの泉をガブガブ飲むから酒臭いってキャロルに叱れたろ？」

「うう…はい」

「まさか酒豪諸島行ったのか!？」

「因みにブランデーの泉から出るブランデーは俺のフルコースのドリンクだ」

「ハルトのフルコース…ちよつと興味あるな」

「ハジメ、話が逸れてる」

「悪いユエ…」

と考えているとナツキが思いついたように

「そーいやあ樹海の迷宮には入る条件みたいなのがあつたよな？」

「ああ4つの迷宮攻略の証と神代魔法…一つは再生魔法ってのまでは分かつてるんだがな」

「もしかして今までの攻略証に次行く迷宮のヒントとか入ってたりとかないかな？」

「っ!!」

それは盲点だった!と言う顔の面々、確かに樹海の迷宮がオルクス大迷宮に攻略条件が設定されているなら、それを示す為のものが攻略証にはある筈というのも合点が行くが

「取り敢えず攻略証出してみたが反応がないな…」

「うーむ違うのかなあ…」

「海底に迷宮とかあるなら潮の満ち欠けも関係するかも知れないな。取り敢えずデイスクアニマルを放って周りを探させてみるよ」

「頼んだ」

そして夜になり外に出たハジメ達

「ん? コレは!!」

何とこの間のグリユーエンの迷宮から手に入れた攻略証が何か光を放ち道を示していたのである

「まさかナツキの言ってた通り、この先に迷宮があるのか！」

「んじゃナツキを放り込むか」

「何で俺!？」

取り敢えず迷宮の入り口にある罠を掻い潜り、中に入る

「しかし……つと！中々の攻撃だな」

「ああ……けど！ライセンの迷宮に比べると可愛いもんだな！」

皆さんのレベルが上がってますなあと油断したのが悪かったのだろう

「「「ああああああ!!」」」」

全員ものの見事に濁流に飲み込まれ流されたのである……何かライセン迷宮でもこんな事があつたような……

「……………ん」

ムクリと体を起きると

「骨や内臓には異常はないは…装備の失逸はなしか他の奴等は……っ!」

周りを見渡すと

「ご主人様、お待たせしました」

「ベルファスト! 良かったあ無事で…他の皆は!」

「いちらに」

全員をおぶったり抱えていた気絶してるだけで後は目を覚ますのを待つだけか

「あれ？ウオズ達は？」

「申し訳ありません離れてしまったようで…」

「気にするな幸いな事にウオズとフィーニスの座標は確認出来るから旧四天王とは合流できるけどハジメ君達とは完全に逸れたな…くそライダーシステムのGPSはファイズ系列につければ良かったな…あ、ジナイダーのライターシステムを追尾すれば良いじゃん」

「流石ご主人様です」

「よせやい……んじゃ先ずは全員起きるまで待つか」

しかしやる事もないので……あ

「ベルファストは皆、診ててくれ」

「何をなさるおつもりで？」

「俺が料理したら連中なら飛んできそうだなあと」

アイツらなら嗅ぎつけるといふ絶妙な信頼があつた

「あのご主人様、犬猫ではないのですから来る訳ありません」

「まあまあ、けどこう言う時こそ普通の過ごし方をするのがメンタル的に助かるだろ？」

「そうですね」

「ベルファスト?何故背後から俺を抱きしめてんです?その背中に柔らかいものが…」

「当たってるのですよ」

なんてこつたい！いやまあケツコンしてますが!!こんな展開ありですか!!と困惑するが

「不思議な人ですね、彼方此方で女性を関係を持つのに女性から迫られると困惑するなんて」

「おい人をスケコマシみたいに言うのは辞めろ」

「否定出来ます?」

「出来ません!!」

『だよなあ』

『相棒のそれはなあ…』

「でしたら構いませんよね、今は私が独り占めしても」

「ダメだよベルファスト、鍋から離れたら…ぬわ!」

押し倒されてしまったな

「ダメです、今は私だけを見てください」

「ベルファスト…」

「ふふふ…」

うむ、流されても良いよな!そうしよう!

ハルトは考えるのをやめ「ここから食べ物のお…あ」

そこに目を向けると気まずそうな顔をしたナツキと、あわあわと赤面する咲那がいる
ではないか…ふむ

「ご、ごめん…そのごゆっくり!!」

ナツキは逃げ出そうとしたので

「ナツキ、クリスタルブレイク」

「ぎゃああああああ!!」

ベルファストが離れ、それだけ言うとデストワイルダーがナツキを捕縛して引き摺り回したのであった

「……………」

「ごめん、ベルファスト…けどさ迷宮攻略したら夜に…な？」

「はいー」

「んじゃナツキ…hey!!」

流石にデストクロード突き刺す訳にも行かないので顎に蹴りを叩き込むだけで許したのであった

そして寝てた面々が目を覚ました後、食事となる…あ、ナツキは咲那に治療されたよ、けど

「咲那ちゃんがいるからマッドドクターで治療できないな」

マッドドクターが出番がなくて寂しいぜ！と言ってたんだよなあ……

「ありがとう咲那!! お前のお陰で俺は元気だよお!!」

「あわわわわ! に、義兄さん!?!」

パシヤリ、よしこれをエンタープライズ達に送るか

「んーしかし今更ながらに此処は放棄された街みたいだな」

「だな…しかしどうする？ 一先ずハジメ達と合流を狙うか？」

「そーするのも有りだけど、俺達だけで挑むのもありだよな…」

「確かなあ…合流待つて待ちぼうげとかダメか…あ、宗一さんと政人さんは？」

「あの2人なら。多分そろそろ」

「心配を感じて！」

「参上！」

「な」「おおう…：…そういやあテイオさんは？」

「別にいなくて良くね？」

何処かでティオがありがとうございます!!と言ってるな……うむ

「何か分からないがナツキよ」

「んだよ宗一さん」

「何故か君の姿を見て飲む紅茶は美味しい」

「人の不幸を肴に紅茶を飲むなあ!!」

「あははははは!!」(エボルドライバー風)

「笑うなあ!!」

流石宗一さん、ナツキの身に起こる不幸を先読みしたのか?

「なあウオズ達探さなくて良いのか？」

「別に構わん、アイツらなら勝手に追いつくから俺達は攻略するぞ」

ハルトは適当に言い放つ

「おい古参だからって扱い酷くないか!?!いやまあ普段の扱い考えたら分からなくもないけどよー!」

毎回脳筋呼びされたり攻撃されても雑に扱われたら、そりゃ怒るよなー!と言うが

「違うぞナツキ、あの馬鹿共は俺みたいな化け物と一番長い付き合いなんだぞ?」

「そうだな」

「そいつらが普通の連中だと思うか?下手したら俺並みの問題児だぞ?」

「あ……いやお前並みではないぞ?」

「つかさ、お前は俺の家臣団を舐めすぎだ…知ってるだろ？俺が誰かに何かを頼むのはそれが出来る奴だけだ…俺が無理難題ふっかけ続けるって事はな、それだけ出来る奴なんだよ」

「おいおい…」

「ドーセアイツらも俺の事を探さずに迷宮攻略してるわ、攻略してた追いついてくる」

その頃 ウオズと旧四天王達は

「魔王ちゃんどこー！あーもう！邪魔!!」

ザモナスはオメガウオツチで呼び出した槍で幽霊を串刺しし

「む……これは迷子じゃな…ええい！うめき声は音楽ではないのだ！消え失せろ!!」
アークに変身したヤクヅキは敵を踏み潰し

「どうしましょう！僕達がないも魔王様が迷宮壊すかも知れませんが！此処にいますのなんてエヒト様ばんざーい！とか喚き散らす幽霊風情ですし魔王様つて確か幽霊嫌いなんじゃない！」

フィーニスはアナザー1号に変身して下半身のバイクで幽霊を轢殺していた

「……………大丈夫だろう」

『シン』

カゲンはゾンジスに変身すると幽霊相手にハルトのお株を奪う程の華麗な脊髄ぶっこぬきをかましていた、伊達に原典の力は有していなかった

「カゲンの言う通りですよ、お前たち…慌てずに合流しますよ？それにフィーニス誤解を解いておきます」

アナザーファイナリーに変身して隕石を落として敵を消滅させると

「へ？」

「幽霊風情に遅れをとる我が魔王ではありませんよ、我々は我々だけで迷宮を攻略します」

「魔王ちゃんより先に攻略してさ、そろそろネガタロス達を旧四天王呼びさせてやろうよ!!」

「そうだな!一夏を除けばただのチンピラ上がりだ、そんな奴等に逢魔四天王の二つ名は勿体無い!!」

「確かに……行きますよ!!僕達が先に迷宮攻略して「アレエ?魔王様遅かったですねえ」って煽り倒してあげましょう!!」

「待て貴様ら、四天王復権は当然として願いが小さいな……ここは大きく……ハルト坊のフルコースを……馳走してもらおうのじゃ!!」

「「おおおおおおお!!」」

「行きますよお前たち!迷宮攻略ついでに我が魔王を探しますよ!!」

「「「「おおおおお!!」」」」

この王あつて、この家臣団有りだった

――

各々が迷宮攻略に励んでいると、何か幻影が
エヒト様ばんざーい!!とか何か狂っていた

「テイオの話だと迷宮には解放者の教えがあるんだっけか?という事はこの迷宮のコン
セプトは…」

『狂った神が齎す悲劇を知れ、ダナ』

「狂った神なあ…そうか」

『ヴェハハハハハハハ!!私は神ダア!!』

「成る程な…狂った神が齎す悲劇か」

『何故俺を見るんだハルトお!!』

「いやアナザーオーズやアナザーゲムム見てるとこの迷宮作った人の気持ちわかるかも」

だって、あの神いなかったらエグゼイドの事件とか殆ど起こってないからね?と呆れて返すが

『いや俺達は結構間近で見てるぞ?』

「何処で?」

その頃 ウォズ達は

へへうおおおおお!エヒト様……!ばんざーい!!<<<<

「ああ、成る程これがこの迷宮のコンセプトなのでしょうね」

「そう言う事か確かにのお…」

「しかしこの光景何処かで……あ」

「『あ、推し（仮面ライダー）と対面したハルト坊／魔王ちゃん／ハルト様／魔王か』」

哀れ迷宮の試練は家臣団に取っては見慣れた狂気の光景だったのである

海底迷宮 後編!

前回のあらすじ

迷宮攻略中に仲間と離れ離れになってしまったハルト達 それぞれが迷宮攻略に励むのであったが……

「何か幽霊が沢山だねえ……」

「てか幽霊が物理攻撃仕掛けてくんよ!!ふぎけん!!」

現在ハルト達は変身して襲い掛かる幽霊達の相手をしていた

「ならば仕方ないコレばかりは使いたくなかったが!」

「何か打開策があるのか!!」

「ああ、幻想郷で霊夢から貰った博麗神社特製ほ清めの塩を使う!!」

「おお！なんかご利益ありそうだな…俺も早苗から清めの塩を貰ってたな」

「……………」

何故だろうか博麗神社と守屋神社の代理戦争になってる気がするの

「よし他の方法でやるか」

「同じく」

ならばコレだ！

「行くぞ岩塩で！」

「だから幽霊に物理攻撃するなよ!!」

「いやあ…幽々子さんとかには攻撃効いたからワンチャン通るかなと」

「……………確かに!!あの人には普通に弾幕効いたし!!」

幻想郷での学びがこんな所で役立つとはな！

「エビデンスがあるから幽霊に物理で行くぞ!!くらえ！岩塩ハンマー!!」

「よし！皆、清めの塩を振った丸太は持ったか！行くゾオ!!」

「いやナツキさん！ツツコミ入れるのをやめないで！」

「ハルト！そんな丸太がそこら辺に転がってると思うなあ!!」

「うおおおおお!!」

2人は突撃すると丸太を振り回して敵をまるでボーリングのピンのように吹き飛ばしたのである

「咲那さん……その……お義兄さんが大変な事になってますが……」

「大丈夫ですベアトリスさん、見てください……あんなに笑ってる義兄さん見たのは久しぶりです」

「いや止めましょうよ!?完全にバーサーカーのような笑顔ですよ!!」

「え?けど」

「旦那様に負けてられないわね!消えなさい雑魚ども」

「ほらアンティリーネさんも楽しそうですね」

「うわぁ強い……」

「まあ実際の戦闘能力だけで言えばご主人様の妃の中では最強に迫りますからね」

「そうなのですかベルファスト？ いや確かに強い方だと思いますが……」

「はいアンティリーネ様はカレン様や千冬様のように槍や剣だけでの勝負でしたら分が悪いです……しかし魔法やスキルなど何でもありの総合力でしたら旦那様に迫ります」

「そんなに!!」

「実際、彼女との初対面時には当時のご主人様がボロボロになる程に追い詰められての辛勝だったとも聞いております」

「ああ……だから千冬さんがアンティリーネさんと戦う時にはルールを作れと言っただけですね」

それ即ち 一対一のルール無用の殺し合いになったら千冬でも負けると言う事に他

ならない

「ええ今ではかなり矯正されていますが来たばかりの頃は自殺志願者ばかりにキャロル様、千冬様、束様、錫音様と4対1で戦ったとも聞いております」

「何ですか？その世紀末乱闘？」

結論、アンティリーネもストッパーがいないと大変な事になる

その暴れぶりは

「あ、魔王ちゃん彼処じゃね？」

「だろうな」

「何で幽霊相手に物理攻撃してるのでしょうか…アナザーゴーストで取り込めば瞬殺なのよ」

「確かに！」

「向かいますよ、でないと我が魔王の力で迷宮が崩落しかねない」

目印となっていたのは言うまでもない

そして走った面々の先には

「我が魔王!」

「あはははは! 見ろ!! 幽霊がゴミのようダア! 俺をビビらせたのなら『ハイ、ジオージ!』とか言つて風船見せつけるピエロでも連れて来いやあ!! って、ウオズ大丈夫だったか!」

返り血を浴びて笑顔で丸太を振り回すハルトであった

「ええ……そちらも……あの我が魔王、何故丸太を持つてるのですか?」

「え？清めの塩を使った丸太で幽霊を攻撃してるからだけど？いやあコレがさ、意外と遠くに飛ぶから面白くてさ……ねえウオズ」

「何でしょうか？」

「今更ながらにさ人間って脆いんだね、魔力も何も込めずに振り回して丸太の一撃で死んじゃうんだもん！」

「は？」

「え？だって今の一撃とか千冬なら笑いながら回避してカウンターしてくるよ？」

いや何言ってるんだ、お前？と思わず旧四天王もドン引きしている

「我が魔王の膂力で振り回せば、そうなりますよ……というより周りが才気煥発の超人ばかりだからか我が魔王の常識の尺度が崩壊している……」

「さ、流石魔王ちゃんだね…というより幽霊相手に物理攻撃とか」

「ハルト様…清めの塩はそこまで万能ではないかと」

「そうじゃと言いたいが既に丸太で伸しておるのお…おお…振り回した一撃で見事に上半身だけ吹き飛んでおるわい」

「流石魔王様…これにはドン引きです、そこはアナザーゴーストで倒しましょうよ」

「あ、そうじゃん！ナツキ！」

「おう!!」

『ゴースト』

『スペクター』

ハルトはアナザーゴースト、ナツキはアナザースペクターに変身すると2人がパーカーゴーストが体内から抜け出して攻撃するが

「命燃やすぜ!!…つてまだいるのか!!多すぎる!!…はっ、そうだ!ビリー・ザ・キッド!!」

「俺の生き様見せてやる!!なら俺はノツブだ!!」

「いやそれ信長違い!!」

『ビリー・ザ・キッド!』

『信長!』

2人はそれぞれのフォームに変身したは良いのだが

「そう言えば魔王ちゃんって射撃スキルが…」

「お、おい…まさか…」

「全員伏せろ!!」

それと同時に

『オメガドライブ!!』

2人の必殺技が発動した、アナザースペクターの背後には大量の銃が並び出す

「天魔轟臨!!これが魔王の3段階撃ちじゃあ!!」

「だからそれ違うノツブ!!」

政人のツツコミも虚しく、ドドドドド!!とエネルギー弾雨が敵に降り注ぐがそれでも尚立ち上がる敵に対して

「これで終わりだあ!!」

収束したエネルギー弾を叩き込んで幽霊を全て滅した……筈だった

「よしお終い!」

「オツカーレ」

「……………ふふふ」

「どうしたんですか？ アンティリーネさ…っ！」

全員が慌ててアンティリーネから距離を取ると彼女は虚な瞳でイクサナツクルを構え仲間へ攻撃をしていた

「ちよつと！ 敵はあつちですよ！ まさかアレですか！ 旦那様の奥さんは私だけで充分よ！ とかで排除する奴ですかあ!？」

「違う敵はお前達だ…あの方、復活の為にこの体を使わせて貰おう!!」

「どうされましたか、アンティリーネ様！」

「まさか……幽霊に取り憑かれたのか！」

「そんなホラー映画みたいな事あるの!？」

「っ!!」

アナザーゴーストはすぐさま行動に移る

「ふふふ」

ガンガンセイバーで切り付けるが彼女が転移前から持っていた鎌で受け止められてしまった

「ほお……この女は貴様の妻か？随分とこの体を楽しんでいるようだな？」

「テメエ、今すぐアンティリーネの体から出ていけ……消し飛ばすぞ」

「断る、何故この最強の体を捨てねばならん？女としても良いでは無いか…まあハーフエルフのような半畜生など戯れに抱いているのか？悪趣味な奴めれ

前にオリガが言ってた事か…エルフやらは人じゃない云々と、だがな

「それ以上、俺の女の体で何かしてみろ殺すぞ」

「くくくやってみろ、愛する者を手にかける事が出来るものならな!!…っ！」

アナザーゴーストは躊躇いなく首に手をかけた

「ちよっ！ハルトさん!？」

「大丈夫、アナザーゴーストに変身して更に三人娘の恩恵か知らないけど…こいつの魂だけを知覚出来るんだよピンポイントで殺せる」

「な、何だと…」

「貴様の敗因は一つ……俺の特別に手を出した事だ……このまま締め上げてやる」

「ひ、ひい！や、やめろ！貴様正気なのか！このまま首を絞めれば……愛する女の体に傷がつくんだぞ!!」

「どんな傷があつてもどんな生まれであつても俺はアンティリーネを愛している……キツカケはアレだったが彼女は俺の特別だ、彼女だけじゃない皆……俺の大切な人達だ……それに手を出すなら邪神だろうとオーマジオウだろうと俺がぶつ潰す……それが俺のルールだ！」

「っ……ふざけるなあ……このまま消え去つてたまるか「やつとお前だけを捕まえた」ひい!!」

アナザーゴーストの力で魂を鷲掴み幽体離脱させると

「どうしてくれようかあ……」

其の手には歪んだ魂が掴まれていた

「た、頼む！やめてくれ！ほら！貴様の女からは抜け出ただろう！だから頼む！命だけは助けてくれええ！」

「死人の靈魂が何言ってるんだ？お前は俺の大切に手を出したんだ。このまま消すと思うのか？いいや違うなあ……このまま貴様の魂だけをピンポイントで破壊して2度と復活出来ないようにしてやる！」

魂を知覚すると言う事はピンポイントで破壊も可能だ……あの世界においてディアブロが赤の悪魔を魂ごと本体を破壊した事から分かるようにその手の攻撃は可能なのだ

その感覚は漠然とだがハルトも認知していた

キツカケはかつての戦いで神の力の化身となった立花響を救う為に行った アナザーエグゼイド レベル1達の分離作業だ アレで体に救う病巣と本体を分けて見え

るようになったのだが

「こんな形で活かされるか…さあ豚のような悲鳴を上げろ」

「いやだああああああああ!! やめろおおとおおとおお!!」

「このまま消え失せろ…慈悲なんてあるか…俺の女に手を出した罪を永劫続く苦痛と絶望を与えてやる地獄で苦しめ」

そのまま魂をすり潰すように握り潰して変身解呪するとハルトは慌ててアンティリーネの治療を行うと

「っ、アンティリーネ!! 大丈夫!!」

「……………ん? 私は何をしてたのかしら? あら? もう終わったのかしら旦那様?」

普段と変わらない瞳で見る彼女に安堵するとハルトは彼女を抱きしめたのである

「アンティリーネ！良かったあ…本当良かったあ…」

「あ、あら？旦那様どうしたのかしら？突然大胆になったわね？」

「アンティリーネさん、さつきまで幽霊に取り憑かれたんですよ？」

「あら…それで…大丈夫よ旦那様、私はここに居るから…」

「良かったあ…本当良かった…」

「けど、ぼんやりとだけど特別とか俺の女とか言ってたような」

「違うのか？」

「いいえ、その通りよ…ええ愛してるわ旦那様」

「っ…お、おう」

ストレートに言われると、やはり弱いなどハルトは頬を赤らめて目線を逸らすと

「ぐあああああ!!」

「義兄さん!?!」

「ええ……天井かよ…」

またかよとハルトの涙が引っ込んだ

「まさか彼奴がやられるとはな…まあ良いこの体を使えばな!先程と違って今度は友の体ならばどうだ!!」

どうやらナツキに取り憑かれたようだが

「オラア!! 空気読めええ!」

「んぐあ!!」

ハルトは全速力でドロップキックを顔面に叩き込んだのであった

「貴様正気なのか!! 友を人質にしたにも関わらず!! 顔面に蹴りだとお!」

「ソイツに………人質としての価値はねえ」

ハルトの一言が全てを物語っておりカレンを除く逢魔幹部全員がうんうんと頷いている

「何だと!!」

「ええ!」

「あと、それは悪手だ」

「ふふふ何を言っ「あの、義兄さんから出て行ってください？」ん？何を言っ「消えてろ」何?! 何処から」

まさかのヤンデレモードの咲那とWアルトリアに聖剣と聖槍まで向けられている…
哀れだが同情はしないぞ

「何、取り憑かれてんだ間抜け」

「ふふふ…何を言っても無駄だ、この男の意識に貴様の声は届かな…:…な、なんだこの声は…:や、やめろ…俺に近づくなああああ!!」

何かに苦しむ幽霊…:そういや前に白スーツが話してたな、あいつの死に戻りはリガドΩのリバースの派生型 死ぬという形がトリガーになったのは…

「神の呪いだっただか?」

「そんなものだよマスター」

「マーリン！お前どこ行つてんだよ？」

「いやあごめんごめん、ちよつと霊廟にいる髑髏の叔父様と話しててね」

「髑髏の叔父様？まあ良いや…それより呪いつて？」

「まあ凄い大雑把に言っちゃうと、アレは神の愛だよ」

「愛なのソレ？」

「まあアレだね、愛ほど歪んだ呪いはないかな…あと神と人間の尺度が違うからね」

「うわあ………んで、あの幽霊は今何で苦しんでんの？」

「恐らく彼の中にある、神の残留思念か何かの地雷に触れていたようだね…敵意を持って彼の体に侵入した異物を排除しているのだろう」

「怖っ!」

「ぐぎやあああああああ!!!」

そんな断末魔を上げながら苦しむ幽霊?だが同情はしないで、取り憑く相手が悪かったな…つか

「寧ろ聖剣や聖槍で浄化されてた方が幸せだったな」

気づけば浄化…いやアレは滅却された…アンティリーネに取り憑いた奴にした攻撃よりも高威力なのである

「どんだけ愛されてんだ、あのバカ」

「嫉妬狂うような話とかあったかな？確か私の記憶だと…知識を得る為に片目を渡したり、逆さ釣りになるくらいの変人だったんだがね」

「隻眼に逆さ吊りつて何処かで聞いたような気が…じゃねえやナツキ、生きてるう？」

「あ、ああ………何だよ今の…自分の中にスーツと入ってくるような感覚は」

「あ、生きてた…ああそれが取り憑かれる感覚らしいな」

「お前は体験しねえのか？」

「ん…俺に取り憑ける奴とかいる？」

実際今も

『おい、侵入者だよつちまえ!!』

『浄化だ！いやアナザーゴーストの餌にしろ!!』

とまあそんな感じで相棒達が排除してくれんだよなあ……けど

「るる」

「どんな奴?」「モモタロス」是非取り憑いてください!!この通り!!」

「あのベアトリス嬢……恐らくこの迷宮のコンセプトは「狂った神のもたらす悲劇を知れ
とか?」その通りです……えと」

「言いたいことは大体分かります、普段のハルトさんって狂った信者側ですよね」

「ええ……しかし……大丈夫ですかナツキ?」

「何とか……けど俺どんな神に呪われてんだよ」

「さあな、旅進めたら分かるんじゃない?」

そう答えて歩いていくと迷宮のゴール地点が見えたのだ

「ハルト！無事だったか」

「ハジメ君達も無事だった…んで何でユエちゃんと白崎さんは喧嘩してんの？」

「恋敵の戦線布告じゃな」

「マジか…ってかティオいたのか悪いお前の事忘れてたわ」

「おおう！このご褒美の為なら頑張れるのじゃあ！」

何故恍惚となるのか分からないが

「ウオズ、胃薬おかわり!!」

「我が魔王に効く胃薬はないかと」

「お待ちを主！それ以上の胃薬は逆に胃に悪いです!!」

「なんか頭痛いなあ……」

そして念願の魔法とウオツチは

「再生魔法……っ!!」

「お、これで樹海の迷宮に挑めるな！」

再生魔法に四つの攻略の証 それ即ち樹海の迷宮に挑める事に相違ない

因みにウオツチは

「うおおおおお！V3だああああ!!」

これで伝説の3人が揃ったあ！と歓喜に震えていると

「いや待てハルト！このウオッチは栄光の7人ライダーじゃない可能性がある！」

ナツキの一言に周囲が度肝を抜かれる

「何だと！」

「1号、2号、V3……この3人は仮面ライダーTHE FIRSTとTHE NEXTの可能性もあるんじゃないか！」

ピシヤヤヤアアアン!!とまるで雷に打たれたような衝撃に襲われた

「そ、そんなまさか……いや確かに0ではない！」

「ナツキ……貴方は何て可能性に気づいたのですか！」

「天才か!？」

「いやいや待って待って待ちなさい! そんな可能性はないだろう……だけどこれで迷宮は終わりか?」

動揺する幹部陣とハルト……まさかそんな引つ掛けクイズのような事があつて良いのか!! と困惑している

「そうだウォッチを持つものには別の試練がある」

「俺達が相手だ」

そこに着地して現れたのは アナザーライダー とは違う理由で改変した歴史に生まれた仮面ライダー

「仮面ライダー3号!」

「仮面ライダー4号！」

まさかの参戦！いや

「誰だよ!!この自称3号4号!!」

ナツキの who that guys! (あいつら誰だ!) ! な驚きも無理もないが
ハルトは

「ふざけやがって……仮面ライダー3号と4号?それはV3とライダーマンだろうが
!!」

『言ってる場合か!』

「クソっ!やつぱり敵ながら良い声だな!すみませんサインください!!」

「おい待て、写真が先だ!!てかやつぱり4号って克己さんと同じ声だな……」

「え、そっち!?いやその話は後にしろよ!」

「ふん…まあ良い、俺達はお前と同じ改変した歴史に存在し、そして消え去る運命にある歴史のライダー…この命の燃やす所があるならば!」

「試練となり相手になろう、かかってこい!!」

「なんか彼方はバチバチの臨戦態勢何だけど!!」

「まあ気持ちは分からんでもない、その無念…痛いほど良くわかる」

アナザーライダー だってジオウに倒されなければ本物の仮面ライダーとして戦っていたかも知れないのだから…改変された歴史にいたヒーロー…まあ

「相棒達の場合変身者の大半がとんでも無い奴らばかりだったから悪役にされただけだよな!」

『そうだけど…俺達の正統継承者がコレだからナア…』

『このバカが色々やらかしたよなあ…』

『いやあ契約したばかりの頃はあんなに大人しかったのに…何でこんな戦闘狂になってしまったんだ…』

「ん？何か言ったか、お前たち？」

『『何でもありません！』』』

「んじゃ俺がや「待つてくれハルト」何だよハジメ君？」

「4号は俺にやらせてくれ」

その腰にあるファイズギアを見て理解した

「よし任せた、んじゃ俺は3号をやるか」

「準備は良いか？」

「おうよ、んじゃ行くぜアナザードライブ!!」

『ドライブ』

アナザードライブに変身した隣で

『standing by』

「変身!!」

『complete』

ハジメもファイズに変身して向かい合う、緊張の空気が場に張り詰める中、最初に動き出したのは

「食らえ!重加速!!」

ロマンもへったくれもない不意打ちからであった

『あ、相棒!?!マジか!!』

「あたぼうよ！どーせ奴らもこの重加速の中では動けな…いいいい！」

「隙ありだ、ライダーパンチ！」

「つと危ねえ！何で重加速が効いてないんだ!!」

回避した衝撃で重加速が解けてしまうとファイズと4号も戦闘開始となった

「俺達はショッカーにより様々な改造が施されている…貴様程度の浅知恵でどうにかなると思わない事だ」

『何だと！相棒のライダー知識を先読みしているというのか！』

『流石はショッカー…仮面ライダー相手に半世紀以上も戦っていないな…』

『それより相棒の攻撃が浅知恵呼ばわりされてるとか…まじウケる』

取り敢えずの最後の奴には後でお仕置きだが…

「ん？待てよ今、シヨツカーって言ったか！ふざけんよ!!アイツらの差金か!!クソが！後で大佐の奴締め上げてやる!!こう…奴の眼帯を引っ張った後に手を離して奴に【イッタイ…メガー!】の攻撃を加えるんだ!!」

「話は後にしろ!くっ、空飛んでんじゃねえ!!」

「……………そうだ!ハジメ君!これを使え!!」

政人がハジメに投げ渡したのは腕時計型のアイテム…否!ファイズの強化アイテムであった!

「…、これは!!」

「何をしようが無駄だ!それを飛ぶ俺の前に敵はいない!」

「お前は知らないようだから教えてやる、空を飛ぶにはな…広い空間が必要なんだよ！」

『complete』

ファイズは腕につけたアイテムからミッションメモリを引き抜きベルトに装着すると、音声と共に胸部装甲が肩へ移行し体を流れるフォトンブラッドの出力が上昇。ゲルタ級の質を示す銀色に変わったのである。

正に疾走する本能 仮面ライダーファイズ・アクセルフォーム

『start up』

ファイズは腕時計型アイテムのスイッチを押しカウントを始めると、ファイズは姿を消した。

「何っ!!」

困惑する4号を襲う拳打の雨、そして蹴りの一撃で4号は飛行能力を失ってしまった。

のである

それを待ってましたとばかりに現れるポインター達 全てがクリムゾンスマツシユ
の必殺技

アクセルクリムゾンスマツシユが突き刺さる

3

2

1

『time out:re formation』

その全てを受けた後 加速を終えて元のフェイスに戻る時 全ては終わっていた

「ぐああああああ!!!」

4号はφの文字と共に爆砕したのである

「な、何が起きたの…」

理解できないユエ達に対して

「なんて恐ろしく早い、アクセルクリムゾンスマッシュだ俺でなきや見逃しちゃうね」

まるで何処かの強者みたいなセリフを言う政人に

「政人、今のが見えたのか!？」

「いや全く、この展開になったら一回言ってみたかったんだ」

その一言に転けた人間もいるが、まあ要する高速移動で相手をタコ殴りにし その隙に連続クリムゾンスマッシュを叩き込んだのである

「ふう、手を貸してやろうかハルト?」

余裕そうなハジメだが、新技があるのはお前だけじゃないんだ

「ぬかせ…見せてやる俺の必殺技!!」

「ほお、どんな技だろうが返してや「インパクトノッキング!」があ!!」

まさかのライダーじゃない技に面を食らった3号だが

「残念だが、その技は筋肉や神経を麻痺させる技だと聞いている…我が身は改造人間故に神経攻撃は通らないぞ」

「それはどーかな?」

「何?……!」

突如、3号の体に不具合が発生した……この異変はまさか

「まさか……！」

「そう！今のはインパクトノックキングに見せかけた……ただ内側にダメージを与える拳の一撃……名付けて【すごいパンチ】だ！」

『スゲー！これほど名前がピンポイントに効果を示してるとは予想外だぜえ！』

『相棒らしい単純なセンスだ！』

『ドア銃やハンドル剣よりも酷いセンスだぜ！』

『あの私服センスにしてのネーミングセンスだな』

「誰が単純だと！あとアナザービルド……はあ……まあ良い……この拳の一撃はあのダグバさえも仰け反るほどの威力を持つ……シンプルを極めればそれが必殺技になるってな！！」

「我が魔王の場合 ただのパンチでも必殺技ですか」

「やーっぱり理不尽だわ、魔王ちゃん」

「更にその出力を引き上げる！こいデットヒート!!」

そして飛んできたサイドカー型の特殊シフトカーを腰に添えるとアナザーマツハのような白と赤の装甲を纏う戦士に変わる、しかし頭部には仮想敵である ハートのような角が片方だけ伸びている

『デットヒート』

アナザードライブ・タイプデットヒート

「更に俺自身に宿るハートのデータを引き出して…デットゾーンに突入だあ!!」

体が赤熱化し始めていくと同時に体内の力が増幅され始めて行くのである

「気分はさながら界○拳!!うおおおお!!」

更に力を高めていくのだが

「そのネタは辞めろ!色々と敵が多すぎる!!」

「メタい」

肩にあるメーターが何か危険信号的なアラートを発しているが関係ない!な

「ふはははは……そうだ思い出せ俺のハザードレベルが何故上がったか……そうだ……」

思い出すのは、あの絶望に沈み涙を流した俺の目の前に駆けつけてくれた師匠達、レジェンドライダー達の姿が脳裏に浮かぶと

ガチリと何かがハマったような音がした

「ははは……ははははは……はーっははははははは!!」

その時の嬉しさだけでテンションは天元突破!してハザードレベルと共に力の枷が外れていく、常葉ハルトの単純さはオーマジオウさえもドン引きするのだ

「ははははははは!!うおおおおおおお!!!!諦めなければ夢は叶うのだあああああ
あ!!!」

何か覇気だけで大気が震えている

『な、何か相棒のテンションが振り切れてデットゾーンも振り切れてる!!』

『嘘!それだとタイヤバーストして暴走するのよ!』

『いや待て、ハザードレベルも上がっている…まさかハザードレベルの上昇がデットヒート自身の耐久性も上げているのか?』

『能力の併用をしてるのか！そりやスゲエなハルト！』

『これ要するに思い出し笑いみたいなものだろ？それでパワーアップしてんのか…やば』

「ははははははは！アドレナリンが沸騰してきたあ！！そら、行くぜえ！！」

ブン！と一瞬の音が鳴ると、3号の胸元至近距離に拳を構えたアナザードライブがいたのである

「はあ！！」

「いっふっ…」

その拳の一撃は3号を近くの壁にめり込ませる程の威力があった

「っしやあ！コレで終わりだあ！」

『アットヒート!!』

飛び上がると同時に自分の体を回転していきエネルギーをチャージしていき エネ
ルギータイヤになり相手への体当たりを行う

アナザースピードドロップを叩き込むも

「ライダーキック！」

3号も最後の意地とばかりに反撃のライダーキックを放つが

「ぐああああ!!」

勢いに乗ったアナザードライブのライダーキックを相殺出来ずに直撃を受けてし
まった

「ぐ……お、おのれええ」

仰向けに倒れる3号に対して

「伊達に仮面ライダーを名乗ってはないな…幻の戦士だね」

「な、何……」

「本当、もしもの歴史があればお前達が正義のライダーとして人類の未来を守っていたかも知れない…だが、その歴史は誰にも語られない影の歴史だ」

「……………」

「だから俺が貴様等の物語と歴史を背負おう、お前たちのように消え去った歴史を未来に残せる存在だ、俺はお前達という戦士がいた事を生涯忘れる事はない」

「これは敬意 誰にも語られない歴史を戦い抜いた戦士達に贈れる唯一の賛辞

「そうか……………ならばこの力、お前に託す…好きにしろ」

そう言うのアナザードライブの手元に3号と4号のライドウォッチが託されたのであつた

「そうさせて貰う……つて何してんだお前ら？」

何か温かい目で見られているが…

「いや、我が魔王はやつぱり我が魔王だなと思ひましてね」

「どう言う意味だよ」

「やはりノリと勢いで生きてるなと」

「そんな俺が良くついてきてんだろ？違うかお前等？」

「「「はっ!!」」」

！てかなんでデメリットがそのままにい!!へ、変身解除は!!」

『出来ない』『暫く暴れてろ』

「そんなああああ!!」

やはり制御できずに力に振り回される姿と何故か知らないがバチで太鼓を叩くようなモーションをしているアナザードライブを見て思わず

「覚醒が何ですか？」

「いえ気のせいでした、やっぱり彼は彼ですね」

「だから旦那様は面白いのよね」

「話してないで誰か止めてえええ!!」

結果としてファイズのグランインパクトの一撃を受けて変身解除となりました

「つぶなかつたあ!!死ぬかと思った!!」

「それどつちの意味で？」

OVA編 時を超えた出会い 前編!

前回のあらすじ

ハプニングはあったが無事 海底の迷宮を攻略し再生魔法を獲得、これで樹海の迷宮も攻略出来るようになったのだが、それはミュウ達とのお別れを示していた

エリセンに戻ったハルト達は攻略祝いにバーベキューをしていた

「うんうん！流石は牛豚鳥の熟成肉だな味も良い！よし焼けた：まずはレバーだぞナツキ」

「あ、ありがとう」

「よしヒレ肉が焼けたぞ」

「ありがとうございます」

「これ美味しい！」

「塩だけでここまで味が変わるのか…」

「あ、レバーが焼けたぞナツキ」

「お、おう」

「次はロース肉だ」

「この歯ごたえ…病みつきになりますなあ…」

「この味、んぐ…酒！飲まずにはいられない!!」

「カゲンちゃん、ダメでしょ！高級ブランデーの泉から汲み取ったブランデーを樽で飲んだら…それ魔王ちゃんのフルコースのドリンクだよ！」

「許可を得ているから問題はない！」

「なら俺も飲む!!」

「待て貴様ら…妾を抜きにして酒を飲むとは良い度胸じゃな」

「私はワインよりビールで実はドイツ生まれなので」

「だろうな、なら酒豪諸島で手に入れたビールの滝から汲み取ったビールがあるからそっちを飲んでくれ」

「何ですか、その全ドイツ人が発狂して喜ぶような滝は!!」

「他にもブランデーの泉もあるぜ…ドイツ生まれは知ってるよ、それにベアトリスは貴族の生まれだろ」

「え!何で知ってるんですか!ハルトの癖に!」

「人を何だと思ってやがる!!名前にフォンって付くのは貴族の家柄って前に聞いた事があつてな」

「まさかハルトにそこまでの教養が」

「よし、俺そこまで教養ないと思われてたのか…ならばベアトリスにはホルモンだけ渡す

としよう」

「ちよつと待つてください！私に内臓つて何の嫌がらせですか！日本人だけですよホルモン食べるのは!!」

「焼けたぞレバーだ、ナツキ」

「……………」

「あ、お待たせく酒乱牛が焼けたよくお酒の味だから未成年組は食べたらダメな大人の味さ」

「……………つ！美味しいなそして適度なアルコール分…味に酔うとはこの事だあ…」

「おお！滴り落ちる肉汁までお酒なのか！」

「うまうま…」

「あ、レバーじゃナツキ」

「どうだ美味いかナツキ？」

「しっかり食べろよナツキ」

「……………ほ」

「へ？」

「他のところも食わせろ!!」

何か劇画調なナツキが夜のエリセンで叫んだのである

「ふざけんな! 何で俺だけレバー担当なんだよ! 体で鉄分が大量生成されてるわ!」

「良いじゃないか、メタリカのカミソリ攻撃を体内で受けても耐えられると思うぞ」

「それに俺、そんなにレバー好きじゃないんだけど!？」

「けどレバニラ炒め好きじゃん」

「アレはセットだから良いんだよ！誰がレバー単体が好きと言った！」

「面倒臭え奴だなあ…出されたものくらい文句言わずに食べるよ、俺なんかマトモな物が食べられるだけ幸せなんだから…お前ないだろゴミ箱漁ったりとか山で撮った虫食べたりする事」

「だからって全部レバーは辞めろ！あとゴメンね！」

「分かったよ…ならホルモンな」

「レパートリー増えれば良いものじゃねえんだよ!!」

そんな感じで皆が楽しんでる中

「はあ……」

「浮かない顔だなハジメ君」

何か上の空のハジメにハルトが話しかける

「ハルトか…いやな」

「ミュウちゃんと離れるのが嫌なんだろ」

「え、いやそんな事…あるな」

「分かるよその気持ち、俺も自分の娘達が行くとか親離れしたとか考えたら……」

ほわんほわんとイメージしてみた

【お父さん、今までありがとうございました】

【私達お嫁に行きます！】

ウエディングドレスを着たクロエや鞠奈達を想像したが……誰か知らない男に手を引かれていくのを想像すると

「ごめんちよつと想像しただけで吐き気がしてきた……そんな未来あるのか……いや娘達の幸せを考えれば嬉しいが……ダメだ肝心の俺が子離れ出来てない!!」

『ダメじゃん』

「いや、何で自分の想像でダメージ負ってんだよ」

「いやだあ！クロエ達が欲しくば俺を倒してからにしろお!!」

「いや、それ嫁に行かせる気ないだろ！」

『すまない…相棒が落ち着くまで待つてくれ』

「お、おう」

「ま、まあそんな感じだ…先達としてアドバイスすると…今生の別れじゃないんだからさ深く悩まなくても大丈夫じゃないか？心配ならミユウとレミアさんをハジメ君の世界に連れていけば良いんだし」

「っ!!」

その手があったか！みたいな顔していたハジメだった

「それに逢魔に來れば重婚もOKだ、甲斐性があれば大丈夫!!」

「何ですとお！それは凄い国ですう！」

シアが身を乗り出して訪ねると

「そうだろうそうだろう！日本だと一妻だが逢魔でなら堂々と大きな結婚式を挙げられるぞー！」

「因みにハルトさんは挙げたんですか？」

「……………まだだな、何ならプロポーズもしてないから事実婚だわ」

「何ですトオ!!」

「いやプロポーズする予定はあるが……………その今更言うのが恥ずかしい……………そうだ酔った勢いであるかカゲン!!俺にも酒樽を用意しろ!!」

「いやいや人生の一大決断を酒の勢いに任せるのはどうかと思うのですう！」

「こういうのはノリの良い方が勝つんだよ！」

『モモタロスも予想外の使われ方されてるう!』

そんな時

「びやああああああおあ! うまいいいい!」

何か悲鳴が聞こえたので駆け寄る、ナツキの手には瓶から取り出したであろう酒盃が…
おい待て

「ナツキ……お前それ何処から持ってきた?」

「ええ? 何かハルトの部屋に後生大事に隠されてたから良い酒なんだろう、もってきた」

「え! ちよつ! まさかこれって!!」

「ドツハムの!!」

「なんて事を…」

「へ？」

「それはな…次郎さんが俺に譲ってくれたドツハムの湧き酒って大変貴重な酒なんだぞ…おれだってまだ飲んでなかったんだ…この旅が終わったらキャロル達と飲もうと思ってたんだよ」

ハルトの手がワナワナと震えていくと、ゆらりと動く…何故かその瞳は赤く光っていた

「へ？ちよつ！ハルトさん!!ご、ごめん！そんな酒と分からずに美味しかったから…ガブ飲みし…あ」

酔ってるのか口が軽いなコイツは…

「ほほおガブ飲みか…まさかと思うが」

念動力で酒壺を持ち上げるが軽いな…ほほお

「全部飲んだか」

「い、いやあ……あはは……」

「弁償とかしなくても良いよ、またグルメ界に取りに行けば良いし……そもそもナツキにグルメ界とか踏破出来ないからね飲みたい気持ちは分かるが……そうかそうか君はそう言う奴だったのか」

ハルトの瞳が敵を見るレベルまでに睨みつけていたのである

「突然のエーミールは辞めてえええ！いや、ごめんなさーい!!」

酔いが覚めて顔面蒼白なナツキの土下座をすると同時にハルトは溜息を吐いた

「はあ……もう良いよ」

「へ？」

「それだけ言うとハルトはナツキから離れた

「おかしい……いつもなら俺、殺されるのに」

「それで、ナツキとドツハムの湧き酒飲んだ奴いる？」

「「「「……………」」」」

「さっ！と旧四天王は顔を背けた、成る程全員か

「ウオズは？」

「申し訳ありません…」

「はあ……仕方ない、グルメ界で取ってくるか」

「[[[[[?]]]]」

いつもなら激怒してお仕置きが飛んでくるのにお咎めなしなのは何故?と首を傾げている面々だが

次の日

「ちよつと魔王ちゃん!俺達の朝ごはんがBBダンゴムシだけって何でなのさ?」

「ん?何か文句あるか?嫌ならお手玉すれば良い猿武も覚えられるし一石二鳥だ」

ハルトが笑顔で答えると旧四天王達は

「不味い!魔王ちゃんが激おこじゃん!!」

「くそっ!何故俺はあの時、酒を…くっ!」

「まあ過ぎた事は仕方ないが…取り敢えずハルト坊済まなかつたな」

「ん？」

「その知らぬとは言え大事な酒を開けた事は…申し訳ない…申開きの余地もないな…」

「良いよ、気にしてないから…ほら素直に謝ったヤクヅキには普通の定食をどうぞ」

とお盆にある定食を見て

「おお！感謝するぞハルト坊！」

盆を受け取り席に戻る前にヤクヅキはウオズ達を見て

ニヤリ

と笑ったのを見て理解した

「「「あいつ抜け駆けしやがった!!」」」

と

「いやあやはり誠意ある謝罪が一番じゃな…うむ美味しい!」

「謀りましたねヤクヅキ!」

「何の事じゃ? 妾は別にハルト坊に昨日の謝罪をしたに他ならぬ謀りなどせんよ」

「しかし今行けば」

『二番煎じで謝る奴には誠意はないから飯は無しだ、おら、さっさとダンゴムシでお手玉しろ』

「なんて言われてしまいます!!」

「しかもしつこく迫ったりしたら包丁投げられた後、ノッキングされた活け造りにされるんだ！自分の体が切り刻まれるのを痛覚を感じずに見る事になるんだ!!」

「その後残った頭はh e a v e nの材料にされてしまう!!」

「いやああああああ!!」

「俺……仲間にはそこまでの非道じゃねえよ！素直に謝ったら飯用意するわ!! 敵なら別だけど!!」

「魔王ちゃん！お願いですから晩飯の材料にしないでえ!!」

「てか、俺ってそんな風に思われてたの!?!心外なんですけど!?!」

「まあ大体は」

「はあ………ドツハムの湧き酒はグルメ界に行けば良いのは本当だからな場所教わった

から自分で取りに行くよ死ぬほど大変だけどね」

やれやれと肩を竦めるハルトに

「あ、あはは〜」

「そう言えばナツキは？」

「あのバカか?…ああ主犯のアイツなら宴会後、頭をバットで殴って気絶させた後、身包みを剥いでエンタープライズ達の所に投げ込んでおいたよ」

何処からか ぎゃあああああ!!という悲鳴が響く 恐らくナツキが目覚めて修羅場となったのだろう…実際 ナツキは何度かここで選択を誤り死に戻りしたのは言うまでもない

「皆も気をつけような…警告するが三度目はないぞ」

「「我等が王の慈悲に深く感謝します!!」「」」

「よろしい」

結論、お仕置きされている時が花である

さてと、そんな感じで療養（主にナツキ）をしていたのだが

「旦那様、似合うかしら？」

「よく似合ってるよアンティリーネ」

アンティリーネは黒のビキニタイプの水着を着ていた（オバマスの水着衣装）

「これが水着なの……変なの」

「まあ海水浴なんて、それこそ平和な世界じゃないと出来ないよな……」

遠目には鮫型の魔物が海面から飛び上がっていたのが見えた

「今日はのんびり釣りでもするかな」

「あら…なら旦那様の隣に座っちゃおうかしら?」

そう言ったのに何故かアンティリーネはハルトの膝上に座った

「アンティリーネさん!?!何故そこに!!」

「あら以外と悪くないわね旦那様への密着度が高い…キャロル…:貴女中々良い位置にいたのね…帰ったらお話ししないとならないわ」

うふふふ、と黒い笑みを浮かべるアンティリーネに思わずハルトは目を背けたが

「まあ良いや」

「旦那様、積極的ね」

「お望みなら今日の夜もどうか…：迷宮で俺以外に触れられたんだ嫉妬もするよ」

「ええ、なら「お元気そうで何よりです」カレンじゃないどうしたのかしら？」

「はあ……アリエル殿から言伝を預かりました」

「アリエルから…：何て？」

「お腹減ったと」

「アリエルさん、さつき朝ごはん食べたでしょうが!!」

「あと水着で行きたいが露出多くて恥ずかしいと」

「普段着の方が露出多くないかね!？」

「あとマーリン殿ですが」

「まだあるのか」

「やあ!マスター、どうだいこの水着は!今の私は…そうだな…レディ・アヴァロンとでも呼んでくれ!」

「頭痛のタネを増やすなあ!!」

「酷いね、折角マスターの役に立つアイテムを霊廟の髑髏の叔父様から貰ってきたんだよっ…」

「そーいやあ迷宮で言ってたな」

「霊廟…髑髏…叔父様…おい待て!お前何処行ってたんだよ!無茶苦茶やばい人」

だぞ!!」

この魔術師とんでもない奴を引き込もうとしてないか!とハルトは見ていると

「大丈夫だったよ? まあ羽音のうるさい妖精呼びされて腹立ったから魔法使おうか悩んだけどね」

「絶対やるなよ!あの翁が出てきたら、呪腕さんと静謐さんが胃痛で倒れるから!!つか俺の首が物理的に飛ぶ!!」

てかあの人出てきたらヤバいわ!つか

「贈り物?」

「そうそう、『しつこい羽虫よ、これをやるからとく失せよって渡されたんだよねえ』」

「いやいや渡してるじゃん…それ本当に大丈夫なのかよ……ちよつと待ってろ、もし

もーし呪腕さん?」

『どうされた主殿、定時報告にはまだ早いかと』

「緊急の要件だからな…マーリンのバカが初代の所へ行ったらしい」

『何ですトオ!!』

おお、あの冷静な呪腕さんが取り乱すとは恐ろしいなと困り顔を浮かべながら話す

「んで贈り物を貰ったらしいんだよ…どうしたものか…」

『初代様のものですからな…取り敢えず我等が帰還するまで開けられないようお頼み申す』

確かに山の翁由来のものなら彼らに相談するのが良いだろう

「了解、それでそっちはどうだ?」

『はい、私が王城に静謐のが王立図書館に忍び込み文献を調査した所　どうやら迷宮を作った者達と同じ時代にアナザーライダーになる者がいたそうですね』

「それ未来の俺だな確実に」

ミレディ・ライセンの話と一致するし

『ですが、解放者達と邪神との最終決戦においての記録がないのです…エヒトが倒したまでと書かれているのですが』

「ジジイの記録がない…エヒトにとって都合が悪い存在だから記録を改竄した…それとも…別の理由が？」

『そこまでは分かりませぬ、ですが戦いのあつた場所に残つたアナザーウォッチは押すと常人離れた姿になり力を得る代償として理性やらが無くなる　呪いのアーティファクトとして世界各国で嚴重に保管されていると』

「マジかあ…いやまあ俺以外が使えばそうだろうけど」

『マスター』

「静謐ちゃん？」

『街の人に聞き込みしたのですが、どうやらアナザーウオッチは違法薬物並みの扱いらしく…どうやら世界の闇市場にも巻かれているらしいです』

「あ？それをばら撒いてる阿呆は何処のどいつだ探し出したら報告しろ、俺が直接殺す」

『その組織はマスターが先日崩壊させたフリートホープだったようです』

「……………ああミュウの誘拐に関与した、あの愚か者どもか」

『あの時、アジトは潰したので…もしかすれば』

「OK、あそこのリーダーを引つ張つてウルティマに拷問させてウオツチの事を全部吐かせるかな…そのリーダーにはそんな重要情報隠蔽の罪で全部吐かせた後簡単に殺すなよ、殺してくれ！つて頼んでも暫くは殺さないようにとね」

「うわあ…」

「ハウンド、至急隠密行動や潜入に長けたものをアイツらのアジトに派遣、ウオツチを見つけ出せ」

『イエツサー、しかし衛兵の詰所にあるものなどは』

「その辺はミラーモンスターにこっさり持ち出してもらおうよ、後はウルティマの拷問次第かな」

『直ちに準備しますハウンド、アウト』

「敵ながら同情します…あの方の拷問はその…」

カレンが言い淀むのでハルトが笑顔で

「人間の体ってあんな簡単にもげたりとれたりするけど簡単にくつつくんだよね！けど俺はウルティマみたいに器用に出来なくてさあく前とか左右の腕逆につけたりとか両腕が左手になっちゃったんだよ」

あはは！と笑うハルトだが

『明るく言ってもスプラッタな表現は隠しきれないぞ!!』

「はあ旦那様…そんな真似したら千冬が怒るわよ」

アンティリーネがやれやれと話すも

「なんかもう今更な気がするから、とことん行こうと思う！怒られるのは決まってるか

らな！」

『まずは怒られない努力をしろよ!!』

「2人は暫く残って調査をお願い危なくなったら自分の命優先で、この後樹海の迷宮を攻略する予定だからフェアベルゲンで落ち合おう」

『御意』

「所で旦那様」

「何？」

「あそこにある大きな船は何かしら？旦那様の新開発した兵器？」

「は？………はあ!!」

そこにはハルト達世界にあつた軍艦が戦列を作り前進しているではないか

「は、ハジメ君！船が見えているかな!？」

『見えている、何だアレ!』

「ハジメ君作の船でないとすると……よし」

ハルトはアンティリーネを下すと立ち上がり

「早速挨拶（突貫）してくる」

『おい、この突撃バカを止めろ!!』

ハルトはアナザーウォッチを取り出すと

「お待ちを!ご主人様!!」

「へ?ベルファスト?」

「彼方の船は味方でございます」

「……………へ？」

ハルトは宇宙猫になっていた

数分後 流石にエリセンに止める場所がないのでピースメーカーを発進させて仮の港として

「指揮官会いたかったわ」

改造軍服で中々の露出をしている銀髪美女…しかし本当に胸に黒子があるのだな

「ご主人様？」

ベルファストの目が痛いので彼女の目を見るか

「ごほん……久しぶりだなオイゲン」

鉄血所属のKANSENにしてハルトとケツコンしている彼女はプリンツ・オイゲン

「ええ…本当に因みに指揮官ならもつと見ても良いわよ」

「何ですと!？」

こんな美女に誘惑されて喜ばない男はいないとばかりに困惑していくが

「冗談よセクハラは程々にね」

「まさか…からかい上手のオイゲンさん!？」

「もう、相変わらずですね2人は」

「ひ、久しぶりね指揮官」

「翔鶴に瑞鶴！久しぶりだな」

「え、ええ……」

新しく現れたのはポニーテールに改造和服……何とかモチーフの鶴に因んだ羽根がある

重桜五航戦 翔鶴と瑞鶴

「お久しぶりです皆様」

「久しぶりねベルファスト、本当……抜け駆けして先に指揮官の元へ駆けつけるのは如何なものかしら？」

「翔鶴様は先手必勝という言葉をご存知ではないのでしょうか？」

まさかのベルファストと翔鶴がバチバチしている

「なあオイゲン、まさかと思うが」

「ええ指揮官と最初に直接会える権利を巡って模擬戦してる中、ベルファストは抜け駆けして会いに行ってたのよ」

「数十話越しに語られる驚きの事実!?!いや最初から全員で来てよ!!」

「だから私は指揮官に今までの分、甘えさせてもらうわ」

「お、おう……つか待てよ、そうになるとナツキの所も」

その発想に至ると離れた場所から ナツキの断末魔と砲声と艦載機の爆撃が始まったのである

「お、おう……酒の盗人……略して酒盗だが同情するぜえ……」

遠くから

『エンタープライズ、ホーネット…貴女達は暫く指揮官を独占してたじゃないの…ここは私に譲りなさい』

『断る！姉さんといえども譲るつもりはない！』

『行くよお姉ちゃん!!』

「エンタープライズもホーネットもちよつと待って姉妹喧嘩とか辞めろよ！つて高雄、愛宕！いやいやいきなり夜戦どう？とか普段のお淑やかさ何処行ったのさ！イラストリアスも助け…ちよい待て!!何で混ざって俺を押し倒しにくるのかあ!!助けてZ23
(ニーミ)!!」

『『指揮官?』』

「いつー！」

『何故、他の女に目が行く?』

『感心しないねえ、私達と熱い夜を過ごしたってのに』

『指揮官?まさか私を裏切るつもりはありませんよね?』

「何でヨークタウンもヤンデレ化してんの!?!」

『指揮官から離れなさい!!』

『そうだな…邪魔するならば切る!』

『大丈夫よ弟君、お姉ちゃんが片付けるから!』

いきなりエンタープライズ三姉妹 v s 愛宕、高雄、イラストリアスとかの聞こえない

『喧嘩はやめなさいーい!』

てかZ23ちゃんはヤンデレでなかったのである

んで

「ありがとう！ニーミ！君は俺の救世主だあ！」

「ちよつと指揮官!?くつつき過ぎです!!」

「[[[[[.....]]]]」

それを駆けつけて確認すると

「あの男は修羅場を作り出すのが趣味なのか？」

「それ指揮官が言えた事じゃないわよ？」

「人聞きの悪いなオイゲン、俺は大切な人にしかそんな言葉は使わないって」

「「……………」」

『お前もナツキと同じだぞ相棒』

「マジでか!!」

「ハルト!? 丁度良い所に! 今修羅場で困ってんだ助けてよハルえもん!! 昨日のドツハムの湧き酒の件は謝るからさー!」

「本当にどーしよーもない奴だね、ナツキは…仕方ない」

『コネクト』

「えーと、アレでもないコレでもない…」

ハルトがコネクトから取り出したのは色々な雑貨であった

「どんだけ出てくるのよ」

「あつた！たららららー！」

何処かの猫型ロボットのようなテンションで取り出したのは

「ロープ！」

「ロープ!?それで何する気なのさ!!」

「え?それはね」

『オーズ』

ハルトはアナザーオーズに変身すると3枚のコアメダルを取り込んだ

『ブラカワニ』

アナザーオーズ・ブラカワニコンボになると

「翔鶴、余ってる笛あつたら貸して」

「え、ええ……」

「んじゃ……音撃奏！疾風一閃!!」

羽撃鬼の技を意識して笛を吹くと起こるのは清めの音……ではなくロープがまるで操られた蛇のように動き出してナツキを拘束した

そうブラカワニコンボで操るコブラ……をロープで代用したのである

「コレでよし」

「何処が!?!」

「んじゃ皆さん……その男を預けるので煮るなり焼くなり180°の油でカラツと揚げ

るなり好きにしてください……ナツキはエルフナインとマドカと八舞姉妹に咲那とアルトリアにも説明責任を果たせよ俺は疲れたから寝る」

「ちよつと待てー！ここは修羅場を解決してくれるんじゃないのー！」

「俺に出来るのはこれまでだ……さあ地獄（修羅場）を楽しみな」

「誰が修羅場を作れと頼んだ！」

サムズダウンして見送る、ナツキの修羅場を更に焚き付けたのは大成功なので

「コレでよし……いやマジで疲れたから寝る」

「なら指揮官。私の膝枕で寝るのはどうかしら？」

「あらあら、指揮官ダメですよオイゲンさん……ここは私が」

「ちよつとちよつと！そこは私が……かわりに……」

「何か恥ずかしがり屋な瑞鶴可愛い」

「そうよね指揮官そう思いますよね！」

「分かる」

「ちよつと翔鶴姉！指揮官も!!」

「成る程…これが嫉妬ですか」

「あらムスツとして可愛いわねベルファスト」

「オイゲン様は人を煽るのがお好きなようで」

「それは心外ね」

「……………何となくですがオイゲン様の話し方や煽り方は「指揮官に似てる？」ええ」

「逆よ、指揮官が私のを真似たのよ」

「それは…」

「何てね…けど抜け駆けしたのには事実だから少しは我慢しなさいな…じゃあ指揮官、私と夜戦しない？」

「はいいいいいい!!」

「あらあら可愛いわね…許可も貰ったから「何回言えば良いかな! 肯定の意味じゃねえよ!」 良いじゃない折角なんだからあ」

「指揮官(さん)!!」

「相棒助けて!!」

『人を呪わば穴二つだな』

『哀れ』

相棒に見捨てられたハルトはその後、ベアトリスから霹靂一閃で攻撃され、アンティリーネは楽しそうとワクワクしたという…お前も俺の修羅場を望むか……とか考えていたらピースメーカーのポータルが起動したが誰か来るのか？

「いきなりだけど、久しぶりの二亜さんだよ！それより助けてハルきち！！何か漫画のネタになりそうな話とかないかなあ！！~~メ~~切近くて困ってるんだ助けてよハルえもん！！」

彼女は本条二亜、二元いた世界で精霊として長らく人体実験をされたりと大変だったが現在は人間として逢魔に暮らしながらも自分のいた世界で漫画家をしている。ハルトとはオタク仲間として波長が合う事からも相思相愛となり尚且つ数少ない文字Tシャツの理解者でもある

「勿論だとも二亜？そう言えば鞠奈は？」

「鞠奈なら今はニベルコルの皆と買い物や学校に行ってるよ」

「そうか…何とか無事に馴染めてるようで安心するよ」

余談だが現状逢魔で唯一、ハルトとの実子を設けているのも二亜だけだったりする、この辺の紆余曲折はデートアライブ編をご覧ください

そんな彼女の悩み、良人なら答えねばならないが…

「うーん…そうだなあ…樹海に現れたブレイブな恐竜をステゴロで倒したら恐竜が仲間になって。そのまま合体ロボになったなあ…あ、奴隷売買をする犯罪組織潰したり、自称勇者を助けに迷宮に行ったり、6万の魔物を全滅させたり、ケツパイルで新しい世界を見たDMのドラゴンと会ったり、ノリと勢いでオーマジオウに宣戦布告したりシヨツカーと同盟結んだりしたくらいしかないな…ごめん二亜の喜びそうなネタはないよ…」

「十分すぎるよハルきち!!それだけで長編が描けるよ!!というよりDMのドラゴン?」

「ああ…ケツパイルをキツカケにウオシユレットで新しい世界の扉を開いた奴がいてな

…」

「何で？」

「俺が聞きたいよ……泣きたい」

「ハルきちが泣きそうになるとか、どれだけ問題児なのさ！ちよつと興味持つてきた!!というよりハルきちハーレムが拡大しているだとお！これは逢魔の千冬んにも話さなければ!!」

「それは少し待て二亜」

「待つので少しで良いんだ」

「隠すつもりはないから」

「まあだよねえ……あ、リーネんは？」

「お前の気配を感じたのか逃げたぞ」

アイツの気配察知能力凄いよ、感心しているが

「そんな！どうして!!」

「初対面のトラウマが抜けないんだとき、何か戦士とは違う狩るものの目をして怖いとか」

そう、ハルトの奥さんにおける逢魔戦闘部門最強のアンティリーネが涙目で逃げ出す相手は戦闘最弱の彼女だったりするのだ

「そんな事ないよ私は純粋にインタビューをお願いしただけだよ！はあ…リーネんと普通にお話ししたいんだけどなあ…」

「大丈夫だよ時間はあるんだからゆっくり打ち解けていこう」

「そうだね！そうだよガンガン行こうぜ！！」

「取り敢えず落ち着こうか二亜…んじゃ久しぶりに雑談するかね……ん？ちと待て電話だ」

それはハジメからの電話で要約したら、エリセンにある七不思議を探してみないかと言ふ事だった。成る程ミユウちゃんとの思い出作りかと思つたのだが

「私も行く！なんか面白そうじゃん！！」

「だな折角だし行くか」

「なら私も行くわ」

「リーネん！！久しぶりー！！」

「ひ、久しぶりねニア…」

抱き付かれて困った顔をしているが、ここはドンマイと諦めた顔でハルトは見送るのであった

やはりというかウオズと旧四天王は付いてくるとの事　まあ有事に備えてというのもあるがナツキもノリノリなのは驚いたな…だがしかし

「3人がついてくるとはな」

「私は主の騎士です」

「私は一夏のお守りさ」

「ハジメに頼まりましたので」

エルフ3人組と一夏も行くとの事だ

さてと、そんな感じで始まったエリセン七不思議探訪をしていたのだが

「ねえハルきち、ここ何処？」

「知らねえ…気づけば廃墟だったとか笑えねー」

「マジないわーって感じかしら」

「アンティリーネ正解だよ……はあウオズ達とも離れたか……」

幸い アナザーウオズウオッチを辿れば場所は分かるが…

「うひょー！この崩壊した都市の朽ち果て具合素晴らしい！今度の回に出る廃墟のモデルにしよー」

と二亜はスケッチブックで風景画を始めたのである

「すげえ、この状況を逆手に取るとか二亜スゲエ」

「そうね……けどカレン達とも逸れたのは困ったわね」

「取り敢えずディスクアニマルを放つか…後は…」

メモリガジェットを解放しようとしたその時

近くでズシン!!と何かが潰れる音がした

「何!?!」

「取り敢えず行ってみよう!!」

そして走り出して行った先には

「ミュウちゃん?」

「あ、ハルトお兄さん!」

「ハジメ君は？」

「パパと逸れたの…なの…」

「OK、なら探すのを手伝おう…ん？」

そこにいたのはメガネをかけた人と金髪サイドテールの美少女 寡黙な青年に大人の海人族…なんか海人族に関しては見覚えがあるが、取り敢えず

「この子と一緒にいてくれて、ありがとうございます」

「あ、いやミュウちゃんの保護者ですか？」

「その友達ですよ、あ、失礼しました…俺は常葉ハルト、異世界にある国 逢魔王国の王様やってます!!」

「「「「……………」」」」

4人は数秒の沈黙の後に

「「「ええええええええええ!!」」」

大声で叫んだのである

「は、ハル爺!? どう言う事だ!」

「嘘でしょ! あのハル爺って若い頃こんな感じなの!」

「は、ハル爺が若返ったあ!!! てかハル爺が言ってた通り若い頃はクソ生意気だね!!」

「んだと! 初対面で失礼な事を言うなアンタ!」

「あ、そうそう聞きたかったんだけどさ木苺食べてるのを邪魔した奴がいたから、そいつの世界を滅ぼしたって話ホント?」

「え、何それ俺知らない」

その頃 ハジメはレミアアの治療をしつつ周囲の警戒をしていたが

「おーい…皆どこじゃあ……」

と弱々しい声が、年齢からして老人…貴重な情報源とハジメは老人に話しかけた

「爺さん、アンタはこの都の人か？」

「違うのじゃよ、僕は旅の仲間を探しておるのじゃ…全く突然飛ばされたとは言え彼奴らめ、いい歳して迷子になるとは情けないのお」

「いや多分、アンタが迷子なんじゃないか？」

「何い！そ、そんなバカな事が…いや……」

なんかこのリアクションに凄いデジャブを感じたハジメであったが

「なら一緒に探さないか？俺も娘と離れて困ってたんだ」

「おお助かるわい……娘か、ならば探すのを手伝おう……俺も娘を持つ身なのでな」

「そうか助かる俺はハジメだ、アンタは？」

「おっと自己紹介が遅れたの俺の名は常葉ハルト、異世界にある逢魔王国という国の国王をやっておるものじゃ宜しくの」

「……………はあ!?ハルト!!どうした急に老化の波に襲われたのか!!浦島太郎か!？」

「失礼じゃな少年よ……俺はこう見えて」

ハルトを名乗る老人が上着を脱ぐと中には

『生涯現役!』（オーラア!）

と書かれた文字Tシャツがあつたのである

「じゃよ……ふふ」

「この文字Tセンス…間違いない、ハルトだ!!」

「ん? 何で儂に親しげに「やっと見つけましたよ……え? 我が魔王!!!」おお! ウオズではないか……ん? ウオズ!? 何故ここにおるのじゃ!!」

「それは此方のセリフです!! 何故未来から来ているのですか!」

「は? どう言う事だ?」

「彼は未来の常葉ハルト……ハジメ殿に分かりやすく言えば ハル爺と呼ばれていた頃

の我が魔王です」

「……………はあ!？」

「おお…………このリアクション懐かしいのお…っ!大変じゃ木苺がないぞ!」

「木苺?」

「大変じゃ…木苺無いとシンフォギア世界滅ぶ」

「我が魔王、シンフォギア世界なら滅ぼしたでしょ? 一部の人以上は皆殺しにしたではありませんか」

「おお! そうじゃったな、そうそう…あのパルパル君が作ったデススター? とやらの的にしたんじゃったなあ…」

「ちよつと待て!! 今聞き逃せない未来の情報が飛んできたんだがあ!!」

「あ、ナツキが見つかりましたね」

「は、ハル兄!?! どうしてお爺ちゃんに!!」

「おお! 一夏ではないか若いのお…そうかそうか奥さん達は元気かい?」

「へ? 俺結婚してない…って達! 複数形!?!」

「ほほほ…どうやら面白い事になったようじゃなあ…」

「こ、この老人が未来のハルトだと!」

「そうじやとも「あの銀河皇帝や名前を言っではいけないあの人を拳で従えたで有名な!」ほほお農も少しは名の知れたのかあ…」

「逆らう者には高笑いして脊髄ぶっこ抜きするリアルバーサーカー!!」

「おい待て、何の話じゃソレは？」

後編

前回のあらすじ

エリセン七不思議探訪をしていたハルト達は謎の光で離れ離れに、ミュウと合流したハルト達であったが、そこにいたのは迷宮を作りし解放者!? 同時刻ハジメのところに老ハルトが現れて…

俺達は今

『完成! ブラックドンオニタイジン! いざ出陣!!』

「エイエイオーー!」

「「「何じゃこりゃあ!!」」」

『虎龍攻神!』

「ホワツタア!!」

俺達は今、何故か鎧武者や龍戦士のような巨大ロボになって敵と相対していた

何故こうなっているかと言うと

時は遡り

「私は超絶美少女魔法使いのミレディ・ライセンちゃんだよ!」

「……………思い出したの!世界一うざい人!」

「んな!!」

「!!」

「ミュウちゃん!？」

「この子は何て鋭い一撃を放つのだ!と驚いていると

「あれ、おかしいな…ミレデイさん何かしたかな?」

「パパが言ってたの、後にも先にもミレデイ・ライセンよりウザい人はいないだろうって」

「[[!!]]」

「オー君もナツちゃんもメル姉も笑うなあ!!」

「あはははは!!そこまで言われてたか!」

ハルトは膝から崩れ落ちる程の大爆笑である

「若いハル爺も爆笑するなあ!!」

「後……」

「まだあるの？君のパパさん、どれだけミレデイのこと嫌いなのか？」

「トイレに流された恨みは絶対に忘れないって言ってたの」

「嫌われるどころか恨まれてる!?トイレに流すって何！流さないから!!」

と話すが仲間達からは「マジかお前」という目で見られていた

「違うよ誤解だよ!!ミレデイさんをトイレに流した事ないよ!!」

「ああ……アレは確かにトイレだわ」

「若いハル爺が流されてた!!」

「「……………」」

「やっぱりか！じゃないから!! もう!!」

「えーと…お兄さんがメイド大好きのおスカーオお兄さん？」

「んな！」

「ロイヤルメイド隊見たら喜ぶだろうなあ…」

「その話詳しく!!」

「DSで大雑把、ミュウはあんな海人族の大人なつちやダメだそのメール・メリジーヌお姉さん」

「ミュウちゃんのパパとはちよーつとお話が必要かしらね」

「それからお兄さんは…」

「自分もか？」

「他の3人に比べるとめっちゃマトモ、きつと苦労人のナイズ・グリユーエンお兄さん」

「っ！グリユーエンの名を知っている…のか？」

それだけ言うとミュウは考えこんで一言

「どうして生きてるの？」

恐らく過去の死んだ筈の人が何でここにいるの？と聞きたいのだろう 彼女からしたら歴史の本に載るくらい古い人達なのだから…だか

「い、いきててすみません……」

だが、恐ろしいその言葉の刃はミレディを一刀両断したのである

「海人族は皆ドSなのか？」

「こんな純情そうな子でさえ将来はコレになるのか」

「ナイズ君、それどう言う意味かしら？あとオスカー君、メガネがち割るわよ？」

「こ、この人達がクソジジイと旅する仲間達か…」

『やはり曲者揃いだったか』

『やっぱ相棒は変な奴を引き寄せるな』

「黙れ引き寄せられた変人筆頭が何言ってやがる」

『んだと!!』

『そうだ！引き寄せられたのはアナザーデイケイドだけだ!!』

『お前達!?!』

「クソジジイって…君…一応だけど未来の自分の認識ソレで良いの？」

と話しているとミュウが地割れに巻き込まれて落ちかけた。その時！突如彼女の頭に乗っていた小さな鯨が巨大化してミュウを助けたのであるが、何か流暢に話して急げと急かす

すると地震が起こると銃の発砲音にマゼンタの斬撃…ハジメ君の銃撃と

「アレはハル爺の！」

ああジジイのかと感じているとミュウがこの現象の意味を理解したと同時に地面から大量の魔物が現れると

「上等！さあオー君、ナツちゃん、メル姉、小さなお姫様のお願いだ！一つ張り切って神代魔法の力を見せつけてやろうじゃないの！」

「まあ帰るための手がかりもありそうだしね」

「子供の願いとあらば無視もできないな」

「ミュウちゃんはもうメイルお姉さんの妹だもの任せなさいな！」

メイルが魔法で大量の水を出して敵を押し流そうとするが

「見ろよ相棒！新鮮な敵だぞ!!! 久しぶりだなあ…俺に喧嘩売るバカとかさあ!!!」
『ジオウ…アナザーツインギレード!』

「は、雑魚どもかあ! 散れえ! そこ退けそこ退けえ!!」

アナザージオウが走りながらすれ違い様に敵を切り捨てていき

「魔王が通る」

屍の山に立つと同時に魔物は粒子と帰る

「は…ハル爺って昔からこんな感じだったんだ」

「自分達という歳のハルトと大差ないな」

「正に生まれながらのバーサーカーね」

「ハル爺のノリと勢いはこの時から健在かあ…」

「え？やっぱり俺って、そんな感じ？」

『ま、まるで成長してないだど！』

『嘘だろ!!』

「良いじゃないの旦那様が元気なら私も嬉しいわ」

「そうそう、ハルきちの性癖とか「性癖？……そう言えば二亜」な、何かな？」

「思い出したが…何純情なアンティリーネにあらぬ事吹き込んでんだあ!!」

「アイタタタタ!!ハルきち!頭が割れるう!!」

そんな間に現れた敵はメイルの水魔法の濁流で流されたのであった

「わお…」

じゃあ行きますか!

その頃

「ほほほ!何じゃこの程度か!つまらんな…貴様等!もつと儂を楽しませてみよ!!かかって来いや雑魚共があ!!」

アナザージオウに変身した老ハルトがザンバットソードを使い笑顔で魔物をなます斬りにしていたが、その光景に

「さ、流石我が魔王…あの暴れぶりに実家のような安心感を感じますね！」

「かーかつつか！これでこそ我等の魔王よ!! さあさあ貴様等はどんな悲鳴をあげるのじゃー！聞かせてみい!!」

最古参組は日常を感じながら戦闘していると

「いやホントにヤバい人だわあ…」

「うむ、というより」

「僕達からしたら年老いても今とやってる事大差ない事に驚いてますよ……ええ」

「「まるで成長してない（な）（ませんね）」」

「ウオズ、何じゃその不敬な3人組は!!」

「彼等は過去の我が魔王が新しい召し抱えた臣下達に存じます」

「何じやと!! ははは! 聞いたか相棒! 既に若い日の儂とは違う歴史を歩んでおるぞ! 愉快愉快!!」

『そうか良かったな相棒』

『だが老けると結局コレになるんだよナア: 頭残念ダア:』

「アナザーWよヘッドシエイカーの刑がお望みか?」

『辞めろおお! この魔王の叡智と: もつばらの噂で有名な俺の頭がスムーズになっちまう!!』

『自己評価高いな相変わらず』

「ならば: : : 脊髄ぶっこぬき?」

『ソレは敵にやれえ!!』

「ほほほ…さあハジメとやら…ここはこの老骨魔王と愉快な仲間達に任せてお主らは娘を探すと良い」

「けどアンター1人でこの数の敵の足止めとか…出来そうだな老いてもハルトだし」

「安心せい、儂は1人ではない…頼れる仲間がおるのでのお」

「ええ久しぶりに未来の我が魔王の為に戦いますか!」

「逢魔双翼、久しぶりの復活じゃあ!」

と張り切る2人だが

「いや、お主達ではないぞ?」

「へ?」

「ほら、やってきたわい」

「パパー！」

「ミュウ!!」

感動の再会、そして邪魔する奴等を迎撃すると

「成る程、雷の加速で礫を飛ばすのか面白い仕組みだね」

「オスカーオルクスだと！そんなバカな！」

「ミュウちゃんの言う通り本当に僕達を知ってるみたいだね」

更に

「今度はメール・メリジーヌ……オマケにナイズ・グリユーエンまで……まさか」

「天が呼ぶ！地が呼ぶ！人が呼ぶ！」

まるで電撃を放つ昭和ライダーのような言葉と共に空から落ちてきて粉塵が上がる
と

「超絶美少女魔法使いのミレデイちゃん！参上！！」

「序でに！！儂！参上！！」

何故か変身解いた老ハルトがミレデイとポーズを取ると

パァン！

「へ？」「ぬ？」

放つ
ハジメはミレデイを掠めるように銃を発砲、ハルトもファイズフォンXでレーザーを

「死ね、ミレディ」

「くたばれクソジジイ」

阿修羅が4人現れた

「きゃあああああ!!」

慌てるミレディと老ハルトに殴りかかろうとする面々を解放者と家臣団が止めに入る

「君、落ち着いて!」

「離せオスカー!俺達がどんだけおちよくられたと思ってる!一発風穴開かないと気がスマねえんだよ!!」

ハジメはオスカーが止める、やはり迷宮の件での恨みは根深い

「全く落ち着きなさいな。ミレデイちゃんがウザいのはお姉さんもよく知ってるから」

「何度臭い液体を被さったと思ってるんですか！この恨み……はらさでおくべきか!!」

シアはドリユッケンでメールの作った水球を破壊

「ミレデイちゃん！貴女本当にこの子達に何をしたの！」

そしてナイズはユエを空間魔法で拘束したが

「ミレデイ、死すべし慈悲はない」

「空間魔法だと！どうなっている!!」

と同じく空間魔法で相殺している

因みに

「落ち着いて魔王ちゃん！」

「暴力は良くない！」

「というより自分を殴るなんて虚しいだけですよ!!」

ハルトはジョウゲン、カゲン、フィーニスに、老ハルトはウオズとヤクヅキに止められていた

「離せお前ら!!俺があのかソジジイの残した負の遺産にどれだけ苦しめられたと思ってやがる!!この間のクロックや錫音の件だって元を辿れば全部このポケジジイが原因だろうがあ!!」

「若い日の儂よ…丁度良い儂も言いたい事があるぞ!!こほん…：貴様も大概にせんかあ！何処までハーレムを拡大させれば気が済む！逢魔で毎日搾り取られるから儂の干物化など待ったなしじゃぞ!!自制せよ、この色ボケ魔王があああ!!」

「うるせえええ！その何割かはお前の過失だろうが！つか幸せな悩みぶち撒けてんじゃねえ!!」

「何じゃその責任転嫁！ふざけた奴じゃ！親の顔が見てみたいわ!!」

「2度と見たくねえよ！あのドブカス共の顔なんてよお!!」

「その通りじゃああああ!!」

「こうなったら」

同時に走り出すと

「殴り合いじゃああああ!!」

とお互いが静止を振り切り虚しい殴り合いをしていた

「いや何してんだよハル兄……」

「爺さんになっても全然中身成長してねえな」

い
一夏とナツキは何してんだコイツ？という瞳のまま動かなかつたのは言うまでもな

その頃 逢魔で

「はっ！何かハルトが面白いことをしてる気がする!!」

とダグバが直感で何か感じていた

そんな時 解放者達は

「うわあ……ハル爺と若い日のハル爺が殴り合ってる……」

「何とか色々大変だな」

「不毛ね」

「というより血気盛んなのは昔からなんだ…」

「あの……失礼……私はウオズ、あそこにいる我が魔王の家臣なのですが……本当に我が魔王がお世話になっております」

「あ、いえいえそんな」

「ところで……我らの単細胞魔王が皆様にご迷惑をおかけしておりませんでしょうか？」

「一応君の王様だよね!? そんな事ないよいつも彼の料理や知恵には助けられているよ」

「知恵ですと!!」この橋渡るべからず」という立札を見て『ならば橋を一から作ろう』と

「答えた我が魔王が!？」

「そんなクレバーな一面があるなら普段から頭を働かせ!! パルパティーンやヴォルデモートが頭を抱えておる苦勞を分かち合え!!」

「これには同情する…」

「まあちよーつと目を離したら女の子を口説いているけどね」

「ハル爺は私達の大事な仲間だよ!!」

「そうですか…良かった…我が魔王にまともなご友人ができて…あの人は未来だと本当に問題児しか仲間にしないので…」

「いやそつち!？」

「そうなるら魔王様の仲間の皆さんは…問題児?」

「違うから！ミレディさん達は問題児じゃないよ！……い、いやまあ神を倒そうとか考
えているけど」

「何だハルト様並みの問題児じゃないですか」

「ちよつと心外だよ！私達ハル爺並みにイカれてないよ!!」

「そうでしょうね」

「そうだよ！だってハル爺は『アギトが神を殴つたのならば…儂も神を殴り飛ばそうで
はないか!!』とか訳わからない理由で仲間入りしたんだよ!!」

「ああ…やっぱりか…」

「そんな事だと思えましたよ、ある時なんて即死魔法使うやばい魔法使いと決闘したん
です………拳で」

「いや魔法は!？」

「使う前に殴り倒せば良いと言って馬乗りになった後に拳で沈めました」

「ああハル爺ならやるね間違いない」

「ウオズちゃん!そろそろ止めないと大変な事になるよ!!」

「早く手伝え!!」

「つて、いつまで喧嘩しているのですか我が魔王!!」

よく見ると2人は笑顔で殴り合っていた…蛮族極まれりであるが

「何故老人と喧嘩しているのですか主よ」

「カレン!? いやこれは…」

「何か?」

「いえ何ありません」

「やーいやーい! カレンに怒られてやんの! どんな気持ちじゃ! カレンに叱られるのは
どんな気持ちじゃ!!」

「千冬様に報告しますが?」

「すまない…どうか、お慈悲を」

「やつぱり未来でも千冬姉や東さん達の尻に敷かれているのか…」

「おお…明日は我が身じゃよ一夏」

「は?」

「お主はそう遠くない未来、複数の女性に押し倒され責任を取る日が来るから頑張るのじゃぞ!」

「そんなハル兄やナツキさんみたいな未来なんてないからな!!」

「さて一夏よ老骨から助言じゃ……変えられないものだつてある……」

「避けられない未来つて事なの!!」

「ほほほ!」

「いや教えてくれよ!!」

ほお、と言う顔でオリガが一夏の背後を見ていた……うむ頑張れよと、そんな感じで話しているとミュウちゃんが新しい情報をくれた

どうやら、この都市は魔物を封印している結界を展開しているが経年劣化して崩壊しつつあるソレを直せるのがハジメとオスカーだけらしい
との事

「成る程な」

「それで僕達か」

「なら早く行くか」

そしてナイズの転移魔法で修復場所に向かうとハジメとオスカーの作業を邪魔しない為の防衛戦闘が始まる

香織とは結界を張るカレンとアンティリーネは二亜とミュウとレミアの護衛

残りは結界外にいる敵の駆除である

「さあ行くかのお…」

「下がってろクソジジイ、お前みたいな老いぼれに出番はねえぜ」

『ジオウ』『グランドジオウ』

「ほほお…生意気な、では見せてやろう、お主の完成系と呼べる災厄の魔王と呼ばれる力を…」

『オーマジオウ』

アナザーウオツチを押すと鐘の音と共にオーマジオウドライバーが現れると

「変身!!」

『祝え!!アナザーライダー!グランドジオウ!!』

アナザーグランドジオウとなるハルトの隣ではそれを遥かに凌駕する…別格の力を解放されていた

『恐怖の刻!!最低!最悪!災厄!怪人王!!アナザーオーマジオウ!!』

溢れる覇気は偽りの王　だがそれでも最強の王の陰法師　揺るがぬは怪人達の絶対王にして

未来の超越者

最低災厄の魔王　アナザーオーマジオウ　君臨!

そして並び立つ両雄を見て思わず高ぶる男が一人

「祝え!!今、時を超え、2人の魔王が揃いし瞬間を!!……まさかこのような場面に立ち会えるとは光栄の極み!!」

ウオズの祝え!!にも熱が入る

「うむ、やはり祝つて貰えると引き締まるな」

「だよな……んじや行きますか!!」

『反転!……カブト!』

反転して仮面ライダーカブトの力を引き出す

『ALL ZECTER COMBINE!!』

呼び出された全ゼクター装備のパーフエクトゼクターにある全てボタンを押して必殺技待機状態として力を解放する

『マキシマムハイパータイフーン!!』

「オラア!!」

初手から広範囲斬撃の必殺技で大量の敵を薙ぎ払う

「お前等あ！俺に続けえええ！」

「「「おおお!!」」」

「全くハル兄は元気だなあ」

「元氣過ぎて大変だけどな…アレ止める身にもなれよ本当」

「なら俺達も参加すれば良いだろ？続けて言ってるし」

「そりや名案だな!!」

『ゲイツリバイブ！疾風!!』

「だろ？オリガもカレンさん達と同じように動いて、外のは俺達がやる」

『ホッパーー！スチームライナー！』

「「変身!!」」

『スチームホッパー!!』

そして変身を済ませた面々から戦列に参加するが

「ほほほ、そのペースでは持たぬぞ今回の戦いは制限時間まで対象を護衛する戦いじゃ
…少しはクレバーに立ち回るべきじゃろ」

『デューク』

アナザーデューク力からソニックアローを召喚し弦を引きエネルギーをチャージ、
最大まで貯まると矢を放つ エネルギーがレモンの形となるとそのまま矢の雨が降り
注ぎ魔物を蹴散らしたのである

「時代は省エネじゃよ、5の力で倒せる敵に10の力をぶつけるとは…本当にバカじゃ
な繊細な力の制御も出来ずに何が怪人王じゃ影のライダーの王じゃ…笑わせるのお」

『おい相棒、ブーメランって知ってるか?』

「は？俺がバカだと……他の奴に言われるのは良い……だが俺にバカ呼ばわりされるのは我慢ならねえ！お前は俺と同じ知能指数だろうか!!」

「何じゃと！無礼なクソガキじゃ！」

『過去のお前だろうか』

「ふざけるでないわ！昔の儂はあんな性格が捻じ曲がつたクソガキではないぞお!!」

『いやいやお前は昔からアアだぞ？お前ら、相棒がバカだと思っ奴は手を上げ……満場一致だな』

「何じゃと!!」

「けどあのクソジジイに出来るなれ俺にも出来る!!」

『そうだな……ならば見せてやれお前にも出来る筈だ相棒!』

「おう！」

『デューク』

同じくソニックアローを召喚して一矢お見舞いする

「お、大分楽だな…」

「そうそうやれば出来るではない頑張れ頑張れ「あ、やべ」ぬおおお！お、お主よそこで誤射するか普通!」

「悪い悪い手が滑った…くそ…今ので吹き飛ばよなあ…」

「本音が聞こえておるぞ!!…じゃが…確かにこのような楽しい祭りは久々じゃなあ！イライラがすっかり消えたワイ!!ほほほほ!!さあ魔物どもよ！儂をもっと楽しませるのじゃああああ!!」

『王蛇』

ベノサーベルを呼び出して敵へと突貫する老ハルトに思わず

「どうしよう未来の俺が浅倉さん級のバースカーカー案件について」

『安心しろ相棒、イライラしたって理由でダグバと殴り合いするお前も大概バースカーだ』

「ほほほ…儂も偶には若い頃に習うとするかあ!!」

『結局こうなるよな…仕方ないケツは持ってやるから好きに暴れろ相棒!!』

「任せておれえええええ!」

未来のアナザーディケイドは溜息を吐く

『おい未来の俺』

『何だ? 過去の俺』

『どうやら苦労しているな』

『この苦勞はお前もする苦勞だぞ』

『だとしても楽しそうだが？』

『はっ！あのバカといえるのだぞ？これは経験談だがあのバカとつるんでから退屈など感じる暇がないわー！』

「こいザンバットソード!!」

『WAKE UP!!』

「んじゃ俺は…『反転 ブレイド』こい！キンググラウザー!!」

『スピード10、J、Q、K、A!!ロイヤルストレートフラッシュ!!』

「オラア!!」

その斬撃は多くの敵を飲み込んだが

「ほほほ！今の一撃…儂の方が多く倒したわい」

「は？ 毫碌して数も数えられないのかクソジジイ俺の方が多いで」

「何じゃと！ならば見ておれ！儂の最強必殺技！！儀典・逢魔時王必殺撃！」

「ああん！なら俺の持つ技で超えてやるわあ！！アナザー！オールトウエンティ…タイムブレイクうううう！」

2人のアナザーキックで敵の爆破で空が照らされるのを見て

『ふっ同感だな、退屈など感じる暇もない』

『だがジジイになったハルトもコレなんだよな…』

『変えるぞ未来！！』

『ちよつとでも俺達がハルトを真人間に戻してやるんだ!!』

何故か別の意味で決意をしたアナザーライダー達であった

「おい儂よ今気づいたが」

「ああ？」

「儂とお主の力を合わせれば最強の一撃となるのではないか？」

「……………お前、天才か!!」

「当然じゃ、儂を誰だと思っていやがる!!」

「バーサーカー」

「ブーメラランじゃぞ？それ、まあ良いお主の最高の瞬間を思い出すのじゃ」

「まあ良いさ……最高の瞬間ねえ」

カラドボルグを呼び出すとアナザーソロモンの力を部分解放した感情を力へ変える能力を

「うおおおおおおお!!」

「ハザードレベルや出力が上がっておるのお……ならば儂は……そうあの人……五代雄介さんと出会った日じゃああ!!うおおおおお!!滾るぞおおお!!」

何か老ハルトも覚醒しているのだがハルトは手を止めて恐る恐る老ハルトを見る

「ん？ちよつと待て……会ったのか？あの人に!!」

ハルトからしたら至上の望みであるのだ

「うむ!!サインも貰えたぞ」

会える、サイン貰える?俺の心を救ってくれた青空の人に会えた?…と言う事は会えるのか?

「しかも儂に向けて もう大丈夫とサムズアップもしてくれたわい」

「サムズアップまで……は……ははは……はははは!はーはっはははははは!!うおおお おおおおおおおお燃えてきたああああああ!!掴むぜ未来いいいい!!!」

『まあ最推しが自分だけにファンサしてくれたとかなればそうなるよな』

『けどよ今の相棒にその燃料供給は過剰だろ?』

そのテンションの高さから変換されたエネルギーはかつてのアナザーソロモンで解放した最大エネルギーの臨界点を遥かに超えていた

「諦め無ければあ……夢は叶なああううううううう!!」

カラドボルグがかつて無い程の軋みと悲鳴をあげていた

「ほほほ流石は儂、これもまた伸び代よ……オーマジオウに届きうる刃　これぞ正に影の魔王よほほほ！」

「我が魔王」

「ほほほウオズ、戦況は？」

「それぞれが分担して相手しております」

ナツキはアナザーゲイツマジエステイに、一夏はガツチャードに、とそれぞれが己の全力を出し合い切磋琢磨していた

「一夏君！他のフォームも試してみるんだ！」

「はい！よし行くぞ！」

『ガツチャー！ンコ！アントレスラー!!』

「よしラウラ直伝の軍隊近接格闘術だ！」

「一夏君!?!魔物の関節がへし折れてるから、もうやめて良いよ！」

「次はコレ！」

『スケボーズ！アツパレブシドー！ガツチャー！ンコ!!』

「たあ!!」

「一夏も成長しているのお…となればアレを託す時は近いかも知れぬなあ…」

老ハルトの懐にはとある赤いエンジンのようなバックルパーツがあったな

「ですが、一先ずはアレを」

「ん？ほお巨人型の魔物か」

「アレだけは我らの手では「任せておれ」はっ！」

「今の儂と若い儂の放つ最強必殺技を見ると良い、タイミングを合わせろ若い儂！」

「うおおおおおおおお！震えるぞハート！！燃え尽きる程ヒート！！」

『相棒！それ以上はいけない！！』

「これより放つは魔王2人により絶技…ある世界で恐竜と巨人の住まう島で見た技よ
！！」

「え？お前何の世界言ってるの？まあ良いや！」

2人の溜め込んだ最大エネルギーが天を着くほどであるが2人の剣を重ね合わせて力を揃える

これは本来 巨人族最大の奥義なのだが2人はその体に溢れるエネルギーだけで巨体の一撃を代用したのである

2人が振り抜いた一撃は

「覇国!!」

巨人型魔物の上半身を消しとばしたのである

「おいおいマジか…」

「2人の魔王ちゃん居れば敵無しでしょ」

「その通りだな!!」

と感心しているが巨人は消し飛ばされたり部位を瞬時に再生させたのである

「何!」

「こうなるなら行くぞトバスピノ!カミツキ合体だあ!!」

獣電池を取り出そうとしたが老ハルトに止められた

「待つのじゃ若い儂よ…オーディエンスの総意によつて今からお主に秘められた力を解放してやろう!!」

「へ?」

「最初に言っておく、痛みは一瞬じゃ」

「何する気!？」

「てっ」

アナザーオーマジオウがアナザーグランドジオウの背中に触れるとハルトの体が黒いモモタロウのような戦士になったのである

「何じゃこりゃあ!!」

「ほほほ、名付けてロボタロウじゃ!」

「ロボタロウじゃ!じゃねえよ!!何だこれ!!」

「何コレ!!」

視線を向けると、

「な、何で俺は犬になつてるのさ!!」

「お手」

「ワン!じゃない!!」

ジヨウゲンは犬型ロボに

「な、何故俺がゴリラに…これはハルト様の方が相応しいぞ!」

「おいカゲン、後で面貸せや」

カゲンがゴリラロボ…否、猿型ロボになり

「妾は鬼か…ほほお金棒とは良いものじやな」

ヤクツキは鬼型ロボに

「何で僕だけこんな感じなんですか!!」

フイーニスがキジ？型ロボになっていたのである。全部黒と金、赤で統一されている。ふむ

「成る程大体わかった」

「魔王ちゃん！この状況は何なのさ！」

「俺も知らない…だがこの5人、そして目の前には巨大な敵と言う事なのだろう…」

「ハルト様？」

何か悟ったハルトは一言

「お供達よ！アレをやるぞ!!」

「「「アレ?」」」

「決まっているだろう？合体だああああ!!」

何か空色デイズを流しながら合体したい気分である

すると突然 場面が変わり全員が船の上に立っていた

『大合体！大合体！大合体!!』

謎のコールアンドレスポンスに困惑する面々、先陣を切ったのはジヨウゲンとヤクツキである

「何!?!これ一体!!」

「妾達どうなっておるのじゃ!」

体が変形して足のようにになると

「お供達よ！足となれ!!」

その言葉に従うように足パーツとなった2人の体とハルトの両足が合体したのだ

「ワオーン！」

「ええ!!」

そして

「次は俺達か！……ぬ！体が分割されてしまった!!」

カゲンの猿ロボは左右に体が分裂したのであった

「いやこの状況大丈夫ですかね先輩！えーいままよ!!痛っ！くはないですね」

フィーニスのキジ型ロボも体が分割されたが痛くは無いらしい

「お供達よ！腕となレエ!!」

「成る程、俺は両腕だったのか!!」

「え？僕は肩だけなのですか!!」

「あ、僕の尻尾」

両腕と肩に2人が合体、尻尾は背中に旗のように装備され腹部パーツと連結後頭部兜を装着して完了である

『完成！ブラックドンオニタイジン！いざ出陣!!』

「エイエイオーー！」

ハルトは師匠のカチドキにならないエイエイオーー！と叫ぶが

「「何じゃこりや!!」」

「こ、これは!……取り敢えず祝え!!我が魔王と旧四天王が合体した新たな戦士!その名もブラックドンオニタイジン!!正に生誕の瞬間である!!……何故私は合体出来なかつたのでしょうか?」

旧四天王の声は見てみたものの総意であつたが

「あ、相変わらず何でもありの連中だな……けどロボだと……カツコ良いじゃねえか!」

「やっぱりハル爺って……」

ハジメとオスカーはドン引きし

「ほほほ、そしてナツキよオマケに目覚めよ!ほれ!」

「は?ちよつ俺が金の竜になって……ええ!何か虎の俺が2人いるう!」

「貴様……ヤンデレを生み出すなあ!!」

「全く身に覚えがないが、取り敢えず虎の俺！合体だ!!」

「嫌だあああ!!! 助けてええエエエエ!!」

『大合体!!』

そして龍虎交わる戦士となる

『虎龍攻神!!』

「おお!!俺もロボになった!!」

「離して!!ここから出してえええええ!!」

「ハウス」

「嫌ああああ!!」

何かとんでもない事にナツキもなっているが

「よし行くぞナツキ!!」

「ああ!」

「行きたくないよ助けてえええ!」

「待たせたな巨人よ! いざ尋常に勝負勝負!!」

「しゃあ! 何か分からないけど行くよ魔王ちゃん!」

「おう、キジンソード!!」

「そんな名前なの!?!」

ブラックドンオニタイジンと虎龍攻神はそのまま走り出してすれ違い様に一撃を叩き込むも、やはり再生してしまう

「成る程…この手の敵への対策はシンプルだ」

「一撃で消し飛ばすのじゃな！」

「その通りだヤクヅキ」

「結局、必殺技という訳ですね」

「その通りだ右肩」

「今日、僕何かしましたか!？」

「最初からクライマックスだぜ!!」

「一騎桃千!!」

「ドラゴンクロー!! 必殺!!」

「「「ブラックドnbrパラダイス!!」」」

「炎虎龍々！ナツキ，sハリケーン!!」

桃型エネルギーに相手を閉じ込めて敵をスイカ割りのように真つ二つに両断し同時に炎を纏う龍虎の体当たりで巨人は再生する間もなく爆散したのである

「「これぞ完全勝利!!」

「「「えい！えい！おーー！」」」

結果 ハジメとオスカアの修理は完了し、それぞれの時へと戻る時となった

「おいクソジジイ！」

「何じゃひよっこ！」

「未来の逢魔はどうなってるんだ？」

「ふふふ皆が笑ってる国じゃよ」

「そう良かった」

「まあ、まだまだ奥さんは増えるがな…ナツキも一夏も」

「おいコラ待てえええ！不穏な事を言うなよ！！」

「おい待て！それ聞き逃せないんだけど！！」

「俺も…：…いやいや俺にそんな相手いないから…」

「はあ、やれやれ…」

「そして一つだけ、オーマジオウに勝ちたいのならば全てのアナザーウオッチを手にするのじゃな」

「ああ、まあ俺はお前にはならねえよ錫音に殺されるからな」

「そうか…まあそれも一興よな其方の未来に祝福を!!」

そしてそれぞれの時間に戻る時 皆の記憶は消えていたが

「何か錬成の力が上がってるな」

皆の経験値や熟練度の上昇などはそのままになっていた それはハルトにも言えた事で

「うーん…何か肩の力が抜けたなあ…出力調整が大分楽に出来るようになってる精神世界で修行した覚えはないけど…まあ良いか!」

「何か俺、犬ロボになったと思ったらロボになった魔王ちゃんの足になった夢を見た」

「奇遇じゃなジヨウゲンよ妾もじゃ」

「俺など分割されて両腕になつたぞ」

「僕なんて肩になってましたよ」

「「何で肩？」」

「僕が一番聞きたいんです!!」

「何してんだ、お前ら…帰るぞ〜」

過去？

「ミレデイさん…何か理不尽な理由で攻撃される変な夢見てたよ」

「僕は不遜な弟子名乗る人がいたような」

「私は新しい妹が出来たような…」

「ほほほ」

「ハル爺どうした？」

「いや何…未来に希望はあるなど思ってたのお……っ！何と！木苺がなくなった！そんな…これじゃあ究極の闇がくるぞおおお!!」

「まあたハル爺がボケてるよ」

「はあ…仕方ない木苺を取ってくるか」

「ほほほ…この空は繋がっておるのじゃな…頑張れよ若い儂」

遠い空にいる
老魔王だけは覚えていたのだと言う

王都動乱 前編

前回のあらすじ

前回を見てね！

「おい白スーツ!!唯一の仕事を放棄するなあ!!」

ミュウと別れ一路 新たな迷宮攻略に励む一同

その前にピースメーカーで補給を受けていた

「陛下ご覧ください!故郷に戻った仲間達が帝国のアン畜生の新たなウオーカー兵器を
ろか……ほん合法的海賊行為の末に購入してきました!」

「おい待てトルーパー、今鹵獲言わなかったか？つか待て！それ分取り品だろうが!!」
「空耳ですよ陛下！ではご覧あれ！」

「誤魔化すな！」

とトルーパーが見せてきたのは 此方の主力戦車 ATTEを遙かに超える巨体：脚の線は細いが大ききだけで言うならば イヴァン雷帝の象並みにデカイ四本脚の化け物

それは銀河帝国軍において恐怖の象徴とされた魔物

AT—AT ウォーカーである

「いやカッケェ!!てか凄いなコレ…乗れるの？」

「無論です、我々のウォーカーを超える人数の兵士を乗せて移動できます…見た目から

してジャガーノートよりも敵を威圧するでしょうね」

「魔物もビビるなら旅の時短になるか…なら乗り換えるぞ、お前ら荷物を積み変えてくれ！頑張った奴にはオーディエンスからの贈り物 ビックリアップルで作ったコンポートをご馳走してやる！」

「！！！！うおおおお！！！！」

そして積み替えを済ませたハルト達はハジメの車両に追従する形で移動していたが

「うーむ絶景」

「しかしながら中々目立ちますな」

「良いんじゃないの？どーせ街から離れた場所からはいつも通りなんだし」

『おいハルト』

「はいはい！何かなハジメ君！」

『そつちから何か見えないか？』

「んーとねえ……ああ何か結界張ってるなあ戦闘か何かしてるみたいだな」

『そうか…取り敢えず偵察してくる、ハルト達はゆつくり来てくれ』

「OK、必要なら此処からブラスター撃てば終わるけど？」

『いや俺達だけで大丈夫だ』

「わーった…手が必要なら言ってくれ」

通信を切り

「A T A T全速前進！ハジメ君の車両を追いかけろ！敵がいれば問答無用でブラスター
の鎧にしてやれ！」

その巨体がうねりを上げながら前進を始めたのであるのだが現場に着いた頃には全てが終わっていたが地響きを上げながら現れたA T A Tの遭遇に別のパニックが起きた

「鉄の魔物だああああ!!」

「逃げろおおお！」

「あー大丈夫ですよー」

飛び降りたハルトが説明するのであった

「香織！」

「リリイ!!良かった元気そうで!!」

と再会を喜び合う2人だがハルト達は

「ちえつ、折角ウオーカーの射撃を観れると思ったのに！」

「しかし外から見るとやはり大きいですね」

「正に暴徒鎮圧の騎兵だな……あ、ウオズ」

「はっ」

こっさり耳打ちし

「かしこまりました手配しておきます」

「宜しく、んでハジメ君……この後どうする？そのまや送る気か？」

「しないと言いたいが、どうやら王都が大変みたいだな」

ハジメがリリイ……リリアーナ王女から聞いた話だと 何か王都で死兵が暴れてパ

ニツクになっていくとのことだ

「そうか」

ハサン達に念話をして無事は確認しているが王都の宝物庫にあるアナザーウォッチが心配だな

「なあハジメ君」

「分かってる、それともう一つ先生が攫われたらしい」

「先生？」

「ほら、ウルスの街で会った」

「ああ、あの合法ロリ先生か！」

「おいハルト、お前なんて人の覚え方してんだ！」

「けど何で作農師の先生を何で攫ったんだ？」

「分かったぜ！……おにぎりパーティー？」

ハルトがキリツとした顔で答えるとお姫様は真面目な顔で

「うちの国めっちゃ平和じゃないですか」

「けど、アナザーウォッチに眠る仲間の事は見捨てられないな……おい姫さま依頼達成の報酬に俺は宝物庫にあるウォッチを要求するぜ」

「陛下」

「ハウンド、俺の同胞を助けるのに力を貸してくれるか？」

「無論です、陛下の同胞は我ら逢魔の同胞です助けるのに力を惜しむ理由などありません」

「俺もハル兄の手伝いをする!!」

「マスターの御心のまま」

「え？あ。アサシン!! 2人とも無事だったか！」

「無論ですとも、主殿は心配性ですなあ…おや？まさか奥方様が増えたので」

「君のような勘の良いアサシンは助かるよ久しぶりだな!!」

と再会を喜び合うハルト達もだがハジメ達はどうしたものかと話し合っている

「アレなら二手に分かれるか？ハジメ君達は樹海の迷宮、俺達は王都近くの神山の迷宮に向かうとか」

「いいや俺も行く、先生には借りがあるからな」

「OK、なら準備が整い次第移動開始だな」

「あの…すみません、アレは貴方が使役してるんですか？」

「ん？あのウォーカーは俺達の乗り物ですが？」

「乗り物!?…あの良ければ「上げないよ」…」

「はあ…誰が渡すかよ、大方事件後に侵略しようとする国への抑止力に使いたいとかだろ?..」

「……………」

「生憎様、俺は自分の仲間を馬鹿にしたあのバカ勇者一行を囲うお前達なんか信用してないんでな」

それだけ言うとハルトはウォーカーの膝を曲げて車高を落として作った仮設作戦室で作戦会議となった

「王都の位置は此処です、神山は此処となります」

「かなり離れてるな、けど先生が隔離されてるのは神山で会ってるのか？」

「はい銀髪シスター服の人が攫ったと目撃情報があります、この辺に人を隠すとすれば教会の本山以外にはないかと」

「それならコマンドー部隊を潜入させた方が早いな」

「いや神山には俺が行く、1人なら気取られない」

「待った、ハジメ君それは危険だ俺も行く…2号系列のライダーには妨害系のトリックキーな技を使う奴も多い 役に立てると思う」

「ああいざとなれば先生のいる扉も不破ライズして開けてくれるだろうな」

「いや、それやるのお前だろ？」

「分かった、頼む」

「テイオ、お前は龍化してハジメの移動の足になってくれ」

逢魔の航空戦力である L A A T ガンシップは音を立てながら移動するから潜入には向かない

「心得た…がデロウスではダメなのか？」

ハルトのパートナーアニマルの名前を出すのが

「アイツは俺以外の言う事は効かないんだよ」

デロウス グルメ界にある八大陸に君臨する王の一角 竜王の息子 彼は父がハルトとの戦いで気に入ったから着いてきているだけ 他の連中の頼みなど聞かない

認めさせたいなら挑めが彼の方針である

「まあお前達にもそれくらい強くなってもらいたいな」

「グルメ界の最強生物と殴り合えるのは我が魔王だけですが？」

「まあそんな俺でもグルメ界だと下から数えた方が早いんだよなあ……」

「は、ハル兄が弱い……どんな魔境なのさグルメ界って！」

「まあ山を一撃で切り捨てて山で水切り始める猿とか時間の流れを加速させる特殊空間を使う鹿とか体を垂直に起こして惑星を食べる蛇とか……口からビーム撃つ竜とか……鼻息で俺の半身を削り取る馬とか……後。群れで襲い掛かるやばい狼とかいたな」

順番で言えばハルトに猿武を教えた猿王、覚えた直後に戦闘した竜王、訓練がてら裏のチャンネルに飛ばした鹿王、その後出会った馬王と狼王である、蛇王は噂レベルだが

：

「何その猛獣達の世界!？」

「惑星を食べる」「蛇?」

ナツキと政人は宗一に目線を向けると

「そこで俺を見ないでくれるかな!!」

「いやお前さ中身的にはエボルトと同じじゃん」

「星狩る蛇のブラッド族」

「そこだけ切り抜いたらな!!あと俺をエボルトと同じにするな…って話が逸れてるぞハ

ルトー！」

「そうだった、ハジメ君が先生の救出に行くなら俺達もチーム分けをすべきって話だ」

「成る程、それでテイオ嬢はハジメ殿とですか」

「そうだ、ハジメの援護で神山に向かう組とユエちゃん達と一緒に王都潜入組、そしてA T A Tから俯瞰して指示を出す見張り組だな」

「なら私とシア達は王城に潜入する」

「分かった：俺はユエちゃんとは別ルートで王都に潜入して宝物庫にある同胞の安全を確保後にユエちゃん達と合流だな」

「でしたら我等アサシンは潜入組ですな、王城には何度か忍び込んだ事もあります姫君が別行動ならば案内と護衛は必要でしょう」

「そうだな頼んだ」

『そうなると思ひ込む能力を持つアナザールライダーが必要だな』

「問題ねえよ、アナザールパンがいるからな」

何故そこでアナザーデイエンドでないかというと

「あ、そか俺がアナザーデイエンド持つてるから…使えないんだ…」

「怪盗の力をお借りするだけだからな…予告する俺のお宝奪い返すぜ！…いや待てよ海東さんに頼んだらノリノリでやらかしてくれそうな…宝物庫の金銀財宝には興味ねえしなアナザーウォッチ取れば良いし」

「それはルパン違いだよ魔王ちゃん！あの人は色々ダメだ！なんか嫌な予感がするぞ
！」

「しかし我が魔王が潜入ですか…いやアナザールベルデとかいるから大丈夫ですか…ならば私も同行しましょうアナザーシノビでお供します」

「頼りにしてるぜウオズ」

「うーん、そうになると俺達は見張り組かな」

「潜入向きの力はないからな」

「仕方ないですね今回はウオズ先輩に見せ場は譲りますよ」

「そうじゃが、ハルト坊よ「わーってる敵が来たら呼ぶから」楽しみにしておるぞ」
旧四天王は待機、まあ全員が戦闘向きだし、巨大な奴だったりするから妥当だな

「ハル兄、俺は？」

「一夏は此処で待機かアストルフオのピポグリフに乗って上空の偵察を頼む」

「分かった、ライダー」

「はいはい！お任せあれえ！」

「ジャンヌ、護衛頼める？」

「仕方ないわね、分かったわよ」

「ちよつと待った私も行くよ」

「オリガ、貴女」

「私のライダーシステムは飛び道具だからね、援護や支援ならうってつけだ違うかい？」

「まあそうだな…ジャンヌは別任務をお願いしよう」

「分かったわよ…ふん！」

「さてと…そうなる」と

チーム分けは

先生救出組 ハジメ、テイオ、ナツキ

王都潜入1 ユエ、シア、香織、リリアーナ、咲那

王都潜入2 ハルト、宗一、政人、ウオズ、呪腕、静謐

監視組 ハウンド、一夏、オリガ、アストルフオ

待機組（予備戦力）二亜、アンテイリーネ、ベアトリス、旧四天王と

仮面ライダーになれるジナイーダ、カレン

宝具での広範囲攻撃 ジャンヌ、アルトリア、s、マーリン

近代戦ならベルファスト、プリンツオイゲン、五航戦、高雄姉妹、ヨークタウン三姉妹、ミーニ

見事に偏りがあるな

KANSEN組は現状 待機組に回ると一部は砲撃で遠距離支援をしてくれるらしい助かるが

「戦力が先生救出組にもうちよい欲しいなあ」

「となると」

全員の目が恐ろしいオーラを放つ箱　そうマーリンが髑髏の叔父様なる人から貰ったものが収められた箱である

「使うしかないかあ……ここに2人がいるのも何かの縁だろうし」

「そもそも我等はこの箱の為に戻りましたからな」

「だな」

が　そしてハサン達が受け取ると箱をマジマジと見て、振ってなどして色々調べてくれた

「ふむ、山の翁に由来するものではない本当に箱のようですぞ」

「毒も入ってない…火薬の匂いもしない」

なら大丈夫かなと思いい箱を恐る恐る開けてみると

「何じゃこりゃ？」

それは一冊の髑髏の意匠があるライドブックだがしかし

「名前がありませんな」

そうタイトルがないのだ、これがハサンの誰かしらを呼ぶ為のライドブックであるな
ら

くくの教主と書かれているはずである

「取り敢えず開けてみないか？」

何か分かるだろうとナツキは開けようとするがびくともしない

「な、何でだよ！」

「ほら次は俺だ」

と政人、宗一と変わっても本は開く気配がない

「どうなってんだよ」

「仕方ないな、どれ真打登場だ」

遂にゴリラ（常葉ハルト）動く

「おい白スーツ、表出ろ」

そしてハルトも本を開こうとするが、やはり開かない……が

「ぐ……ぬおおお!!」

まるで不破さんのように諦めずにこじ開けようとしていた

「ハルト!? 辞めようぜ! なんかにライドブックからメリメリつて聞こえちゃダメな音が聞こえてくるから!!」

「この俺にこじ開けられないものなんて……あんまりねえ!!」

「閉まらないな」

「普通なら解錠方法探すのにあんな強引に……」

「アレが我が魔王が頼りにしている不破諫式解錠術……通称不破ライズであります」

「うおおおおお!!」

「それ使えるのプログライズキーだけだよね」

「「あ……」」

一夏の言葉に納得したと同時にパキン!と言う音と共に眩き光と共に現れたのは黒いフードを被る謎の女性だ

「貴方は聖杯を得る為に私を呼び出した者ですか？」

「え? 違うけど? てか聖杯ないし……変だなあ初代翁から貰ったのにハサンじゃない? あの髑髏の面がないけど……」

「それは一体……っ!」

「どうされた」

「？」

「まさか静謐様に……じゅ……呪腕の……！」

「貴公は何者か？」

「は、初めまして!!!私は一」

何かテンション高く話しかけている彼女の話は

百貌の同期で同じように山の翁の座を競い合っており人体改造の結果 百貌以外のザバーニーヤを体得するに至ったという

「まさかの努力チート!？」

「全てのザバーニーヤを……だと……我等の苦労は……」

「そうですか……可哀想に」

「しかし私は何も生み出せなかった…皆様の尊き技を穢してしまった……どうか私に罰を！」

「いや戦力として呼んだのに何自害したいよランサー！…みたいになってんの!？」

「てか何で初代はこの人を俺たちに？」

「何というかあの人さ…」

「山の翁の手にかかるなら本望!!」

『俺を倒せるのは仮面ライダーだけだ!』

「ああ…今、推しに会ってテンション高いな」

「成る程…ハルトに似てるな」

「え？何が？」

「推し見て発狂するところが…成る程、だから狂信者という訳か」

確かに触媒無しで英霊を呼べば自分と相性の良い英霊が来るというが

「これさハルトの不破ライズが触媒となるライドブックに不具合を起こしたかも知れないよ、もしかしたらアレはハサン確定のライドブックだったのかも」

「確かに、それはあるな…てか力技でバグ発生とかコレだから脳筋は…」

「おいナツキ覚えてろよ…けど普通にスゲエと思うけどな、つか初代が使えと託したなら…きつと」

「ええ貴女は認められていますよ誇りなさい、山の翁と認められずとも我々は此処に認めますよ」

「っ！ありがとうございます……それで皆様は何を？」

「端的に言えば、これから異教徒の総本山に殴り込みに行くと言う話ですな」

「そして、その異教徒の国の首都を攻撃します」

「確かにそうだけど呪腕さん!!言葉のチョイスが不味いよ!!それだと俺達が王国を滅ぼすみたいに関こえるから!!」

「成る程…でしたら微力ながらお力添えを！」

「ダメだこの子！推しの言葉を間に受けるタイプだ！早く何とかしないと…」

「あら旦那様と同じじゃない」

「何ですトオ！」

「推しという文化は分かりかねますが確かに彼女は平時の主に似ていますね」
「カレンまで!!？」

取り敢えず狂信者ちやんだが……

「お任せあれ皆様！私が総本山に巣食う異教徒を皆殺しにご覧入れましょう」

ハイテンションで目をグルグルしながら先達に物騒なことを言っていたな

「皆殺しにしなくて良いから!?! 本当にヤベー奴が来たな!!」

「ああ成る程…:そう言う事か」

「呪腕さん？」

「いえ何も、我等も準備に入りましょう主殿」

「おう！今回の潜入任務だが頼りにしてるぜ呪腕さん」

「その期待には応えてみせるのがサーヴァントというものでしょう」

「翁の皆様に関りにしている？そんな親しげに話しかけるとは無礼な奴だ……殺す！」

「なあ何で俺はあの子に殺意向けられてんの？一応だけど俺マスターだよ？」

『相棒、イメージしてみろ仮面ライダーを知らないニワカファンがレジェンドライダーに馴れ馴れしく話している場面を』

「ア？クロス!!」

『そう、それが答えだ』

「成る程…推しに馴れ馴れしく話しかけるなという事か」

『やつぱり似た者同士だな』

『ジャンヌとは別の意味でな』

「んじゃハジメ君、制御頼んだ…別に先生以外は死んでも構わないだろうが…一応加減するようにな」

「丸投げだと！いやまあ……おう」

よしと頷くと

「パイロット、王都付近まで前進した後は待機！身を眺めて戦況を見守ってくれ」

「イエツサー」

「残りは作戦開始まで休息だな…ふわあ…」

「眠いのかしら旦那様？」

「何か眠くて…」

「主、仮眠室でお休みを」

「皆……zzzz」

「いやせめて部屋まで歩いて!!」

「私が連れて行きますよ」

「申し訳ないカレン嬢」

「お任せを」

「けど魔王ちゃんが疲れてるとか珍しいねえ」

「疲れ知らず、限界知らずのハルト様だからな」

「先輩達、忘れてませんか魔王様が複数のサーヴァントと契約してるの」

「「あ」」

「成る程のお契約した際に魔力を持っていかれたか」

「本来なら聖杯のバックアップやら地脈から魔力を汲み上げるのに魔王様は自力で賄ってますからね」

実際は体内に宿るファントムが持つ魔力をエクストリームメモリやジョーカーメモリの力で増やし、リアクターアックスに貯蔵しているのだが…

「やっぱ魔王ちゃんヤバイね」

「だからこそ我らが付いていくに値するものよ」

「そう言えばオイゲンさん達が見当たらないのですが……」

「……………放っておきましょう」

「「異議なし」」

魔王と救世主の修羅場には近寄らず、それは逢魔家臣団の暗黙の了解となっていた

「さて主、此方へ」

「ありがとうカレン、後は私に任せて」

「かしこまりましたオイゲン様」

翌朝、朝飯作りに体を起こしたハルトだが

「んで…何故オイゲンが此処に？」

布団に忍び込んでいるオイゲンに思わず本音が溢れる

「忍び込んだのよ、だって指揮官早く寝ちやうんだもの」

「そりや色々あつて疲れたからな」

「指揮官も疲れるのね」

「人を何だと思ってるのさ…状況は？」

「折角の2人きりなんだから、もう少し良い睦み合いましよようよお」

「そうしたいけど作戦中だからな、そういうのは終わってからだオイゲン」

「もうしょうがないわね…夕方までには王都付近に到着するわ作戦決行は夜になりそ

う」

「そうか」

「全員準備は問題なし…ただ」

「ただ？」

「――」

A T A T 作戦ルームにて

「大丈夫か咲那、忘れ物はないか？ちゃんとレンゲルバックルは持ったか？」

「もう大丈夫だよ義兄さん」

「だが潜入とかそんな危ないことしなくても…今からでもA T A Tに待機しても「義兄

さん」ん?。」

「いつまでも義兄さんの背中で守られてばかりじゃないんですから!」

「おお……咲那が成長してるよお……」

「それにリモートのカードで封印解けば問題ないからな」

「あ、そうか! 嶋さんがいるじゃん!!」

アンデット屈指の穩健派にして良識人のカテゴリーKの嶋さんだが

「そういやあ俺……その力使ったような」

「お前嶋さんの力で何してんだ!」

「アリエル助けるのに変身したのと咲那ちゃん説得に使ったが!!」

「そうかありがとうね!!」

「んじや気をつけてな咲那ちゃん、危なくなったら嶋さんのカードでエボリユーションするんだ」

「はい!」

「それ大丈夫なのか確かキングフォームって変身したらジョーカーアンデットになるんじゃない?」

「へ? ジョーカーアンデットになるのはデメリットじゃなくね?」 ハルト

「ああブラスターフォームみたいに変身時のノックバックで体がちよつとずつ灰になるとかないし良心的だろ?」 政人

「そうだな、変身したらちよつと人外に近づくだけだ」 宗一

「お前等怪人トリオと咲那を一緒にすんじやねえ!!」

「まあまあ大丈夫だよ、そもそもキングフォームによるアンデット化は剣崎さんの高すぎる融合係数が原因だからね、アンデット13体融合なんてしたらそうなるよ…普通の人が変身してもキングだけの融合だしね」

「ギャレンやレンゲルもキングフォームになったがカテゴリKだけの融合だったぞ」

「え? 何それ俺知らない…レンゲルのキングフォーム!? 出たのか政人君!」

「あ、そかハルトは知らないのか…ジオウが終わった後に始まったシリーズと特別会で変身したんだよ」

「何だとおおおおお! チクショウ…: チクショウーウ!! (CV若本)」

「落ち着いて…大丈夫だよ俺達を信じてくれ怪人の専門家だからさ」

「怪人の王ですが何か？」

「ここだけ切り抜くとハルトの頼もしさがやばい」

「んだとゴラア！……なあ相棒、今更なんだが俺をラウズカードに封印したらどんなカードになるんだ？」

『ん？お前を封印した瞬間 捻り蒟蒻がダークローチを出して世界を滅ぼす』

「ジョーカー以上の厄災じゃねえかあ!!」

「まあそんな感じでキングフォームⅡアンデット化じゃないから安心しなよ」

「はいー！」

さてと……ん？コムリンクから通信？

『陛下、哨戒中のトルーパーから通信が入りました…』

「ん？」

そしてハルトは話を聞くとそのままテレポートしたのである

「陛下！ご足労頂き感謝します」

「ハウンドからあんな話聞いた日には飛んでくるさ…んで、そこのお嬢さんが件の？」

「はっ！何でも王都の事件についての情報があると」

「へえ」

「やあ初めまして…ではないかな魔王さん」

メガネをかけた黒髪ショート…悪いが愚妹を彷彿とさせる容姿なので何か関わりのくないが

「ん？ああなーんか見覚えあると思つたら勇者（笑）といった奴か」

「笑…つて…そう僕は中村恵里、宜しくね」

「要件をさっさと見え、俺達も暇じゃないんだ」

「勿論さ…担当直入に言えば今夜、王都を魔族と魔物の大群が襲うから気をつけなよ」

「何？」

「というか全部、僕が手引きしたんだよね」

まさかの真犯人のカミングアウトに

「一応聞くけど何ですか？」

「光輝君を僕のものにする為さ」

「あの勇者か」

「そう光輝君には香織や雫が側にいる…だから僕は特別じゃない、僕は彼の特別になりたいんだ！」

「へえ…」

その何かに縋るような目、依存とも言える声音にハルトは覚えがあった

「ああ、お前親に愛されてない口か、てかそれ依存先を独占したいだけだろ？」

七罪と俺に似てた

「っ！お前に何が分か「俺も同じだから」へ？」

「俺も同じだからだよ、親に愛されていない疎まれてるんだ……ま、立ち話も何だから……トルーパー、テーブルと椅子を用意してくれ」

「イエッサー」

「それで君の要件は？」

「実は南雲君の件で檜山を脅して下僕にしているんだが正直に言って用済みだから消したいんだよね」

「檜山？ ああ……あの咲那をイジメたチンピラか」

「なーんか2人を殺した後、僕の降霊術で香織と咲那を蘇らせて自分のものにしたいてき」

「おいトルーパー、ナツキに報告しろ」

「直ちに」

「僕としてはどーでも良いんだよね、まあ死んでくれるなら御の字くらいかな」

「お前等、コイツを蜂の巣にしてやれ」

「待った、それでだ魔族の協力も取り付けたけど…不安材料がある君達だ」

「へえ…俺達に静観しろと？目の前で友人の義妹を殺そうとする連中を放置しろってか？」

「違うよ保険とでも言うかな人間サイドにも戻れる橋渡しを頼みたい、その代わりに君達に情報を渡す、勿論君達の情報も向こうに渡す」

この女、太々しくもダブルスパイになりなんて取引を持ちかけて来やがった

「見返りは？」

「君の持つてる怪物になる時計を渡してもらおうか」

「殺す」

「ちよつと！沸点低くない!!」

「凶に乗るなよ痴れ者が、相棒達を渡せと宣うなど余程命が惜しくないと見える」

「ん？あの時計って意思があるのかい？そんな風には見えなかったけど…」

と見せて来たのはアナザーウォッチであった

「!!」

「成る程ね、君はコレが欲しいのか呪いのアーティファクトが欲しいなんて変わった趣味だね」

「呪いのアーティファクトじゃない、それは資格者が変身すればちゃんとした力になる」

「ふーん、やけに詳しいね」

「俺はその時計達に認められた正統の王位継承者だからな」

「へ？ちよつと待った、君の歳いくつだい？王都の文献にあつたけど何百年も前の産物だよコレは」

「色々あるんだよ、こつちもな……ふむ」

中のアナザーライダーは……成る程ね

「取引は乗ったが、そのアナザーウォッチを安全に使えるようにしてからだ渡して貰うぞ」

「良いよ、ほら」

投げ渡されたアナザーウォッチにしているのは：

『初めましてかしら魔王』

ーそうだなアナザーミューズ、どうする？ー

『貴方についていくのも面白そうだけど、暫くはこの女について行くわ私に似てるから』
『なら私も行くわよ』

ーアナザーベロバ!?ー

『この女が不幸になるか、どうか高みの見物をさせて貰うわあ』

ー好きにしろ、どーせ事件が終わったら回収するからなー

ハルトは面倒なのに、取り憑かれたなど恵里を可哀想なものを見る目で見るとアナザウオッチを二つにして投げ渡す

「ほら使え」

「どうも」

「ただ警告させて貰うが…ハジメ君達と敵対するのは利口じゃないコッチに付くのが賢明だ」

「忠告どうも」

「力を渡した対価として早速一働きして貰おう、魔族が何個この時計を持ってるか調べてくれ」

「分かったよ調べておく」

それだけ言うと彼女は転移して消えた

「宜しいので?」

「アナザーライダー達の意識があるならば、位置を知るなど造作もない…利害が一致している内は利用し倒してやる」

『そう言うところは王様なんだよなあ』

「と言うよりアレは利益と打算の裏切りだ…そういうのは恨みだの何だのがないから信用できる誰かを裏切ってる内はね」

だがそれ以上に聞き逃せない

魔族と魔物の大群の王都侵攻か…アレを手引きしたって事と

何より咲那ちゃんが危ないと言う情報だ

「ハジメ君とナツキと咲那ちゃんに大至急連絡…その檜山とかいう奴は確実に消せ、向こうの思惑通りなのは癪だがな」

利用されてるといふのは我慢ならないが仕方ない知り合いに死なれるのは夢見が悪いし

『素直じゃねえな』

「うるせえ…まあアレだ、ナツキにはキャロルの暴走を教えてくれた件とか色々と借りがある普段の迷惑料だな」

『迷惑かけてる自覚有りか』

「あんなんでも逢魔のドリンクバー&サラダバー往復係だからな」

『そこは俺を殺す勇者だとかじゃないのか？』

「あのバカに殺される程に俺が弱いと？」

『そこまで言つてねえよ』

「つー訳で連中の居場所を割り出せ」

「はっ!!」

「ハウンド、聞いてたな」

コムリンクを起動するとハウンドが待機していた

『はい陛下』

「ピースメーカーで暇してる奴…航空、地上兵器…兎に角動かせる兵力は回せるだけ回して防衛線ないし陣地形成だ」

『お任せあれ、そう言った戦いは我等の領分です』

こうなれば兵力温存は甘い考えだな

「敵はサーチアンドデストロイな、オーバー」

『イエツサー！』

「ナツキは咲那ちゃんの方に動くなら…ウオズ」

「はいはい」

「二連の話を聞いてると思うが…すまない俺は外の魔物を倒す方に回るからウオツチの件はお前に一任する」

「はっ！しかし、あの女が宝物庫から全て持ち出した可能性もありますが」

「それだったら俺に見せて交渉のカードにするだろうな、しなかったって事は呪いのアーティファクトの噂を間に受けて保険代わりに持ってたって事だ、そうなると思わずつかはある、魔人族に奪われる前に呪腕さん達と回収頼んだ」

「御意」

「ヤクツキ」

『うむ』

「祭りの時間だ暴れたい奴は合図するから全員出る、ケンカ祭りで行こうぜ」

『それは重畳、では遠慮なくいかせて貰うぞハルト坊』

「宗一、政人」

幻想郷で親交を深めて呼び方変わった2人だが

『ん?』『どうした?』

「ごめん状況が変わった、潜入とは別件で一働きして貰うけど大丈夫か?」

『分かった』

『任せな』

「ベルファスト、オイゲン、瑞鶴、翔鶴」

『何でしようか』

「指定座標に艦載機飛ばすのと砲撃を頼む」

『お任せあれ』

「一夏」

『聞いてるよハル兄、空の警戒だろ』

「頼んだ無理はするな…：A T A Tの前線を下げてピースメーカーからの援軍が来るまでは隠れるように言ってくれ」

さて打てる手はこんな感じかな

「後は野となれ山となれだね…：」

さてあてどんな風になるのかな…

王都動乱 後編!

前回のあらすじ…真面目にやるかあ

女王リリアーナの話でハイリヒ王国の混乱を知ったハジメ達、神山迷宮のついでに立ち寄るのであった

準備に励むハルト達の元へ現れたのは事件の黒幕 中村恵里 彼女は情報提供し合うダブルスパイとしてハルトへの協力を提案…したのだが…

—————

A T A Tの会議室にて

「恵里ちゃんが黒幕!?!」

「王都の結界を破壊して魔人族まで引き込んでいるのか…」

だ
ハルトはリリアーナ王女を除く仲間達を集めて先程までの話をする情報共有は大事

抜粋して事件の黒幕は勇者を狙う恵里と咲那と香織を狙う檜山が魔人族を手引きして王都侵攻を狙っていると話すと

「そうなる」と先生の誘拐も魔人族が手引きしているのか…」

「可能性は高いね」

「中村が教会の誰かを利用している可能性もある…だがそうなる」と作戦の見直しも必要だな」

ハジメの言葉に全員頷くが…

「いや此処は敢えて敵の策に乗るべきだと思う」

「ハルト、一応言っておくが作戦なんてパワーで振じ伏せるなんて意見は聞かないぞ」

「違うよ仮に俺達がこの情報を元に魔族を完全にメタ張りして完全準備万全な待ち伏せしたらスパイの安全や信頼に関わる…俺としては今後魔族側の情報が流れなくなる方が怖いかな」

これはハジメ達も思っていた事だ、今まで不透明だった敵側の情報は無視できる物ではないしハルトからしたら魔族側の持つ 7人ライダーのウォッチの行方を知る事も出来るが

「そんなのアナザーWの地球の本棚とか二亜の囁告篇帙で解決じゃない」

「いやそうとも行かないんだよね、前に逢魔で囁告篇帙を使ったら調べられる範囲に制限があった…多分だけど、自分のいない世界の情報は囁告篇帙でも集められないと思うよ」

「ニアが真面目な意見を言うなんて熱でもあるのかしら…」

「あのさ私って、どんな認識なの？」

「え？旦那様並みの問題児」

「リーねんやハルきちと一緒にしないでよ！」

「五十歩百歩ですよね〜皆さん」

「ベアトリス：明日は我が身よ」

「それどういう意味ですか!!」

と話している中、ナツキは

「咲那を危険に晒すってのかよハルト!!」

怒りながらハルトの胸ぐら掴んで持ち上げたのである

「その咲那ちゃんが絡むと暴走する癖は直せナツキ、冷静さを無くして暴走するのは俺だけで十分だ」

『一番冷静さを無くしたらダメだろ、お前は』

「まあノリと勢いと推しへの愛で暴走するのが我が魔王ですからね」

「だから妾達がおる…ハルト坊が無意味な暴走せぬようにな、じゃから落ちつけナツキよ」

「いや暴走させないようにしようよ」

「…人の家族を囚にして最悪死ぬかも知れない場所に放り込む屑魔王よりかはマシだ！」

「あ？」

「へえ……」

「おい貴様、随分と調子に乗っておるのおハルト坊を本気で侮辱するか……外様風情が偉そうに吠えるでないか！」

ヤクヅキの一喝に従うように旧四天王も反応するがここで驚いたのは一夏

彼等の本気の殺意 それを目の当たりにしたからだ普段はハルトを脳筋だ単細胞だと馬鹿にしている彼等だが、その実 ハルトへの忠誠心は人並み以上に兼ね備えている

「外様だろうが何だろうが関係ない……てか邪魔なんだよ、ハルトの腰巾着共が！」

「何だと……それは聞き捨てならん!!」

「腰巾着？それは貴方でしよう魔王様の庇護や恩恵を受けながらの罵詈雑言…許せませ
んね」

「もう殺つて良いよねウオズちゃん？」

「ご自由に…止める気もありませんので」

「ちよつとウオズさん！アンタが止めないで、あの喧嘩を誰が止めんだよ!!」

ハジメすらも慌てる程の圧であるが

「問題ありません、こうなったら必ず止めますよ」

売り言葉に買い言葉 一触即発の雰囲気を止めたのは言うまでもない

「おい」

その一言で周りの温度は下がると全員が畏怖しながら上座を見るのであった

「「「!!!」」」」

その時 全員ハルトの背後に黒い何かが見えたような気がした

「お前等、じゃれ合いはその辺にしておけ……まあナツキの気持ちも分からなくもないのでコレを使え」

「何だコレ？」

何かカラフルな球であるが

「俺がグルメ界に行った時に次郎さんから貰った身代わりの球だ持てれば即死しても球が身代わりになる、一つしかない貴重なものだ」

「だからってなあ!こんな石ころで咲那が守れるのかよ!」

「それに咲那達を狙うのは檜山なんだから、それなら」

「っ!やられる前にやれって事か」

「勘の良いナツキは珍しいな…あと俺を屑魔王呼びした罰は後で受けてもらうぞ旧四天王も落ちつけ」

「じゃがハルト坊!そのような態度では舐められてしまうぞ!」

「普段から俺を舐めてる奴に言われたくない…まあアレだ、そろそろ大人しくしないと…俺のグルメ細胞の悪魔が飛び出てくるぞ」

「「「!!」」」

「我が魔王!いつの間に悪魔が目を覚ましていたのですか!」

「ん？前にグルメ界で馬王と喧嘩した時に落ちてきた酸素が沢山入った果実を食べたら目覚めた」

「酸素が沢山入った果実？……おい待て！それアカシアのフルコースじゃ「その前にどんな悪魔なの？」」

「ん〜とね……ごめんまだ細胞レベル足りないから、みんなの前に出れないって」

「そうかあ残念だ……」

「けど何か全盛期の頃は星すら複製した何とか言ってるな」

「おい待て、それまさか……」

「あ、そうそう何か次郎さんの兄弟子の知り合いなんだって」

「知り合いの兄弟子の知り合い…それもう他人では？」

「脱線したがハジメ君！君の力が必要だゾルダのエンドオブワールドで王都を更地にしてやろうぜ！」

「いやいやナツキさん！その手の物騒な事を真面目なツツコミ役が言うなよ！いやその前にハルトの話聞いてやれ！」

「そうだなツキ！この作品で貴重な常識人にしてツツコミ役という役割を捨てるのはもったいない！」

「気をつけよ！貴様までボケに回るとなればウオズが胃薬を飲まないとかダメになる！」

「メタですね先輩達」

「それに俺、神山に行くから援護は出来ないぞ」

「けど咲那の安全も考えるなら……よし先手打って檜山という奴を消すか……すまない……止めてくれるなハジメ君!!」

「いや止める気はないんだが……俺も香織の心配があるし遠慮なくやれ……いや待て」

「ん?」

「檜山の件だが殺す前に俺にも一撃入れさせてくれ……アイツの魔法で奈落に落とされた恨みがあるからな」

「分かった任せろ!」

「なら俺がノッキングして全身の動きを止めた後、楽しく拷問すると良い」

「誰も拷問までしないが!」

「え? 咲那ちゃんイジメてた奴だよ?」

「全身の骨を粉状になるまで擦り潰すぞ!!」

「指揮官!?!戻ってきてくれ!捕虜の拷問はジュネーブ条約で禁止されているんだ!」

「この世界にはジュネーブ条約はないよ?」

「……………」

「俺の家族を虐める奴は等しく敵だそんな危険な奴、誰一人として生かしてなるものか
……………」

「指揮官……………」

「此処で黙りしたらダメだよ姉ちゃん!!頑張らないと!」

「あらあら指揮官は元気ねえ」

「言っている場合か愛宕！指揮官を止めるぞ！」

「ナツキさん、落ち着きなさーい!!」

KANSEN組がナツキを止めてるのを見て

「ああ見るとお前等は俺を止めないよな」

「我が魔王は止めるだけ無駄ですから」

「「そうそう」」

「ハルト坊のような、災害が人の形をしたような奴を止められるものか」

「俺、災害か…天災…はは良い響きだあ、あ、お前もそう思う？」

「あの…誰と話してるのですか魔王様？」

「ねえ、もしかして海底迷宮行ってから見えちゃダメな奴まで見えてたりする?」

「まさかイマジナリーなフレンズが見えるのか!」

「いやそんな訳…ハルト坊だから有り得るのお…」

「え? 皆には見えない? ……は? アナザーライダーに挨拶したい? ならちよつと待って、ごめん一回精神世界潜るわ」

「え? 何それ怖いんだけど!!」

「ちよつと寝る」

「あ、主!?! 目を開けてください! 主!!!」

精神世界では

「おい、アナザーデイケイド…感じるか？」

「どうした？…ああ今わかった…何だアレは？アナザーライダーではないみたいだが…」

「初めましてだな、お前たち俺の相棒が世話になっている」

「相棒だと！いや待てその前に…」

「お前は誰だ!!いつから相棒に取り憑いた!」

「此奴が生まれた瞬間だから最初からじゃ、わしの名はドン・スライム…小僧の体に宿るグルメ細胞の悪魔だ」

「あ、起きたんだ」

「おう、やっと目覚めたわい初めましてだなハルトよ」

「初めまして、確かこうして話すのも初めてだなこの間はあのエア？ つてのを食べた一瞬だけだったし」

「ああ今まではアナザーバイスとやらに押さえつけられていたが…クロック？とやらのお陰でアナザーバイスの制御が緩んだから久しぶりの自由を取り戻せたわ」

何か王冠被ってるスライムがいるとアナザーライダー達が困惑する中

「しかしコレが俺の細胞の悪魔なんだ…何か凄く怖い鬼とか化け物が出るとか次郎さんが言ってたけど…何か俺のはこんな感じなんだな」

「まあ相棒のグルメ細胞だからな」

「食欲が具現化してもコミカルな感じとか相棒らしいナ」

「コミカル!? 何と失礼な連中だ、わしはこう見えてかつては全宇宙を支配した王よ」

「全宇宙の王!? ははは！ そりゃ良い！ 俺の細胞の悪魔なんだから、それくらいの啖呵は切ってくれないと困るな」

「本当の話なんだが!!」

「そうか全宇宙の王か…響きが良いな、なあドン・スライム…うーん名前長いからドンスライムって呼んで良い?」

「会って数秒で略称じゃと!? 何という距離の積み方じゃ!!」

「これが相棒だ」

「リアルに友達百人以上いるからな」

「丘の上でおにぎりパーティが出来るじゃと！」

「残念ながら頭の中身は小学一年レベルだがな」

「よしアナザーゴースト、関節技の稽古をするかかあ？」

「い、いやちよつ、ま！ぎやああ!!」

「アイツの元契約者、警察官だよな」

「その筈だが…強くなったな相棒！」

「いや止めろヨ!!」

—————

「そうか……」

「主、大丈夫ですか」

「ああ……何か全宇宙の王になったとか言う人間大の黒スライムが俺のグルメ細胞の悪魔だった」

「何か可愛らしい感じですね」

「はあ……」

「主、お気を確かに」

「何か今、パンチ一発で星を壊せるとか、宇宙の災害と呼ばれて一度解放したら星にいるあらゆる生物が絶滅する程度の災害を起こす程度の力はあるって……うん……全然大した事ないな！仮面ライダー界ではその辺簡単にする敵とか当たり前にいるし！何なら

俺はその怪人達の王様だし!!」

「そうね旦那様からしたら大した事ないわよね」

「あの…我々の目線からしたら、とんでもない恐怖なのですが……」

「カレンちゃん、本当に今更だけどね」

「ハルト様はマトモではないぞ!」

「凡人の尺度で魔王様を計らない方が良いですよ!そもそもその尺度が壊れますから」

「そもそもハルト坊がイカれておるからな」

「それは知ってましたが…何という規模で…」

「まあそんな魔王ちゃんが越えようとしている奴とか、そんな魔王ちゃん配下をワンパ

ンチで倒す魔王とかいたりすんだよ」

「主を一撃で倒すなど、どんな怪物なんですか!!」

「ドン・スライム…つて!」

「あれハジメ君、知ってんのドンスラの事?」

「もうそこまで距離縮めてんのか!!そいつやばい奴だぞ!隕石降らせたり、黒い雷落としたり、超新星爆発起こしたりできるんだ!」

「え?それくらい出来るでしょ、仮面ライダーギンガは隕石降らせたり出来るし、雷とか普通に出せるし確かエボルのキックって超新星爆発並みの威力だったような…」

「んでかつて全宇宙を支配した事があるっていう伝説があると言われてる」

「全宇宙の王ってマジの奴なの!?え、そんな奴が俺の細胞の悪魔なのか!!スゲエゼ自分

！」

『そうじゃよなあ普通こう言うリアクションになるよなあ…一龍なぞ、最初ガン無視じゃったもんなあ』

「あのコミカルスライムがそんなに強いとは思えないが縁起は良いな、全宇宙を支配するか…オーマジオウを超える俺の細胞にもってこいじゃん」

かかか！と笑うと

「魔王様の細胞は…全宇宙を支配した悪魔、何と凄い」

『流石はボスの食欲だな』

「ネガタロスまで…：…なあハル兄、そんなヤバい奴に取り憑かれても大丈夫か」

「心配はしてくるだけ旧四天王と違うよなあ…」

「いや千冬姉と東さんを結婚式挙げる前に未亡人にはさせられないから」

「言うようになったな一夏！」

「いやしかし本当お前色々覚えてるよなあ…」

「そうなんだよ！最近、相手の頭を振るだけで体内器官全てをスムーズにみたくにする技も覚えたんだよ、今度見せてあげるね！凄いなだよ全身の体液という体液が体の穴からゴボオ！って一気に噴き出てくるんだよ、まあ即死なだけ慈悲だよね！」

「そんな新しい玩具買ったから見せてあげる！くらいのテンションでいうものじゃないぞー！」

「後、それ人間に向けて絶対使うなよ!!」

「大丈夫大丈夫…使っても死なない奴等にやるから」

チラリと目線を向けた先では

「何で俺を見るのかなハルト!？」

「ブラッド族は死なないように見えて死ぬ時は死ぬからな!!」

哀れ…恐らく魔王と怒れる救世主に狙われた三下は原点より酷い末路が待ち構えていることになるとは…だが同情はしない

—————

そんなこんなで全員が準備をしていると

「何だい?」

背後には狂信者ちゃんが立っていた

「貴方は何故…聖杯を求めない」

「求めても意味ないから俺は別に魔術師って訳じゃないし」

「……………」

「自分の望みは自分の手で叶える…そう決めた…泣いて祈れば降りてくる奇跡なんて
いらぬい何時でも望んで勝ち取る…傍観するだけで叶えられる願いなんでないのは今
までの旅路で嫌というほど思い知らされたからね」

「成る程、貴方は変な人間というのは理解した」

「ならその俺の召喚に応じた君も大概の変人だね」

「……………私はお前とは違う」

「あ、どしたの呪腕さん」

「!!」ガタツ!!

「ははは！いる訳ないじゃん！「苦悶を溢せ：」ちよい待て!! 宝具使うなよ!!」

「落ち着くのだ、主殿の挑発に乗るようでは百貌所か暗殺者としても問題ありだぞ」

「っ！呪腕様！」

「あれえいつの間に!!」

「私は主殿の影、お呼びとあらば即座に」

「おお…って、どうしたの王都で何かあった？」

「いえ現状は何もハジメ殿が準備を始めておりますので、そろそろ其奴を呼ぼうと思つた次第」

「呪腕様が私を探され…っ！その意図に気づけぬとは不甲斐無し！ならば自害にて責任を「取らんで宜しい！」はっ！」

「何か極端な奴だなあ」

『そうだな』

「んだよ相棒？」

『何でもない』

『あ、クウガ!!』

「何処ダア!!」

『冗談だ、いる訳ないダロ!』

「……………超自然発火『すみませんでしたあ!!』はあ…」

『あの狂信者が呼ばれたのって…ハルトと似た者同士だからじゃね?』

『流石だなドンスラ、これで相棒検定は合格だ』

『お主等まで略称か！まあわしの方がハルトの事を知っておる何せ生まれてからずっといるからの』

『ふざけるな！俺達の方が相棒と心通わせているぞ！』

『何じゃと！わしの方がハルトとは長いんじゃあ！』

『このスライムがあ！』

『かかってこんかい！怪物どもお！』

「何お前等不毛なマウント合戦してんだよ…」

はあと溜息を吐くと

「全く…主殿と其方は本当に似ておるな」

その一言に2人は反応した

「何言つてんだ相棒！俺は彼処まで推しへの愛が強いか!?普通だろ!!」

「その通りです！私をその人間の狂信と私の信仰を同じにしないで貰いたい！私は山の翁の皆様には敬意と節度を持って崇拜しております！」

「なんだと!」「何ですか?」

「主殿と其方も喧嘩は辞めないか」

「けっ!」「ふん!」

似た者同士過ぎる…と呪腕も頭を抱え

「やれやれ…其方もハジメ殿の援護頼んだぞ」

「はいお任せください必ずや異教徒どもを根絶やしにして参ります!」

「今回は潜入任務だ、根絶やしにする必要はない」

「そんな…異教徒の殲滅をしないなんて」

「待った呪腕さん!俺達を道中で異端者呼ばわりした奴等の殲滅いつやるの?」

「今アでしょ」

『変な所でシンクロした!』

『異端児は異端児だろ、お前』

「主殿!?まったく聖杯もとんだ知識を授けたものだ」

「俺、彼処までじゃないと思うが」

『相棒、冗談はそこまでにした方が幸せだぞ』

「どう言う意味だよ相棒!?!」

そして戦い前の最後の食事を済ませて全員がそれぞれの行動を始める

ハジメ、狂信者ちゃんが神山の教会に潜入し先生を救出に動くテイオは安全圏から戦場を俯瞰していた

が

「消えろ異教徒、マスターの記憶にあつた…死んだ異教徒は良い異教徒! 死なない異教徒はよく訓練された異教徒だ!!」

陰からの不意打ちからの奇襲攻撃で教会内部で騒動を起こしたのである

「敵襲!! 全員戦闘配置だあ!!」

信徒達が武器を構えて狂信者ちゃんへと向かう中ハジメはこつそりと移動していた

「まさか、こんな形になるとはな」

実はハルトトから作戦前にアドバイスを貰っていた。それは

『アイツ、俺と一緒に隠れるの苦手だから暴れさせて囷にした方が良いよ』

その言葉に従い、指示を出したら水を得た魚のように目を輝かせ異教徒死すべし!と聞からの短刀投擲からの宝具連発で信徒を倒していったのである

「隠れるのを嫌う暗殺者って一体…」

そうコレが狂信者ちゃんが山の翁を襲名出来なかった理由である

「苦悶を溢せ、妄想心音（ザバーニーヤ）！」

仮想心臓を改造シヤイタンの腕で握り潰し対象を呪殺すると

「かかってこい」

そう本人の気質が暗殺者らしくなかったのだ

どちらかと言うと俊敏な戦士のそれであり、暗殺教団の根幹を揺るがすような在り方を上層部は忌避したのである

だから百貌なのだろう、技量は別として暗殺者としての在り方ならば彼／彼女が優れているのだから

「よし先生無事か？」

「南雲君！どうしてここに…いやその前に外が騒がしいのですが…」

「ああ話すと長くなるが味方が囷になってくれるから今の内に逃げるぞ」

「そうはさせません…南雲ハジメ、主の盤上に不要な駒は排除します」

現れたのは銀髪で天使の羽を生やした美女…双剣を構えており完全に味方ではない

「誰だお前？」

「私はノイント、神の使徒の1人…イレギュラーは排除します」

その言葉でハジメは誰の差金か理解した

「成る程な俺は神のゲームのバグって訳か、神の使徒はゲーム管理のプログラムって所だな…まあ良い敵なら消すだけだ」

念話でテイオに合図を出すとハジメは先手必勝、開戦の合図としてドンナーを構えて発砲したのであった

その頃

「では案内しましょう、此方へ」

ウオズ達はアナザーウオツチの奪還へ行動を開始した 呪腕の案内で王城にある宝物庫へ向かう

「流石に外でのパニックから見ても、この辺の警備は手薄ですね」

「ええ。上手くやっているようすな」

「我が魔王も良く思いつきましたよ」

「確かに言い方を悪くすれば火事場泥棒ですからなあ…」

「それだけ手段を選べる場合ではないと考えますが」

現状 ハジメや逢魔組が優位に立てているのは神代魔法以外にも異世界の兵器や武

器、ハルト達のライダーシステムによる部分が大きくある

がコレは此方で独占している為言い方は悪いがお手軽に強化が可能なアナザーウオッチやライドウオッチの回収は最優先とも言えるだろう

魔人族側も呪われたアーティファクトと知られている、それを使つてでも成したい何かがあるのだと言うのは分かるが

「ただ魔人族が我が魔王の怒りに触れたら」

「外の野山は更地になるでしょうな…主殿に取り憑いたドンストラとやらの力が嘘でないなら世界の危機ですからな」

「なら早くウオッチを回収すべきですね…そうすればマスターも褒めてくれます」

「静謐の言う通りだな…と言うよりハジメ殿につけた彼奴が心配だが」

「彼女ですか？現状我が魔王に従っているように見えますが？」

「アレの戦い方は暗殺者ではない、戦士のそれよ…恐らく百貌時代の教団はその辺を危惧して百貌のを山の翁に選んだのだらうな」

『呪腕よ正解だ首を出せえ!!』

「何故でしょう、今初代様から褒められたのに首を出せと言われたような…」

「となりますと」

「彼奴を囮に使う、その辺の判断は間違えてはおりませぬ…ただ彼奴が宝具を連発した時、主殿の魔力が持つかどうか」

「その辺は大丈夫ですよ」

「何故だウオズ殿」

「我が魔王の持つてるリアクターアックスやザンバットソード、あの斧や剣には我が魔王の魔力や熱量やら何やらを溜め込む性質がありますのと、あの人は食没という技でエネルギー量が人間のそれではありません…まあ元々怪人ですが…要するにそもそも溜め込みやすい体質ですから減つても問題ないのです」

実際 リアクターアックスに溜め込んだエネルギーも消費先がなくて困つてた位である…過去に一度 グルメ界にいる馬王目掛けて解放したエネルギー球を放つたが鼻息で消し飛ばされた事があるが 逆に言えば八王が迎撃を選ぶ位の警戒度がある技と言える

「それはそれでどうかと思うがな…おつと無駄話はコレくらいにして向かうとするかの」

そしてその頃 ハルトはと言うと

「いやあ魔人の群れは壯観だねえ…」

『おお中々の食欲だな…流星はわしの宿主』

「本当良く食べるな」

「うわあ…見てるだけで腹が膨れるわ」

デロウスの背に乗った後、料理を大量に口に頬張りながら高級ブランデーの泉から汲み上げたブランデーを樽ごと飲んで食没していたのである…

遠くから魔人族襲来を見ていた一緒に乗るのは宗一と政人である、ナツキはお察しの通り咲那の護衛だ

「なあお前、待ち伏せしないとかが言っただけでなかったか？」

「言っただけど奴等は無傷で王都に向かわせるのはまずい数でしょ間引かないとね」

と笑いながらブランデーを煽るハルトに呆れる二人だが

「そうだけど…ああそう言う事か」

宗一の目には以前、火山の大迷宮でハルトとハジメに不意打ち魔法を叩き込んだ魔人族のフリードが見えたのだ

「お前、以外その辺しつかりしてやるよな」

「ああ受けた不意打ちには此方も不意打ちでお返しするのさデロウス頼んだよ…後は政人」

「!!」

待ってましたとばかりにレーザーのチャージに入るとハルトはコネクトの魔法を使い政人にアタッシュケースを投げ渡した

「つと、んだよコレ」

「開けてみる、使い方わかるだろ？」

言われるままに開けると中身を見て驚愕した

「おいおいマジか」

それはΩを示す ミッションメモリが入る携帯と短剣、革ベルトというシンプルな
セット

ハウンドの使うサイガは天を支配する

しかし 天を支配する者も何れは地に伏せる

全てを支配する地の王

地のベルト オーガギアである

「俺に帝王のベルトを…」

「それだけ認めてるって事、必要ならオーガコールしてやるけど？」

「いらないけど信頼されてるなら返さないとな」

「頼むぜ…んじゃさつさとやりますかデロウス！」

ハルトの言葉に待ってましたとばかりに口を開くと

「撃て!!」

開戦の号砲とばかりに放たれたレーザー光線はフリードから外れて別の魔人族の集団を捉えて消し炭も残さなかった

「さーて、行くか「待って」何ユエちゃん? ってか王女さんの護衛は?」

「ナツキと香織に任せてきた、それより私達も手伝わせてれ

「迷宮でハジメさんに攻撃したお返しですう！」

「ああ成る程ねOK……んじゃ雑魚は任せな！」

と全員がデロウスに乗ると天高く轟く咆哮を上げながら魔人族の方へと向かうのであった

そして魔人族の前まで移動すると

「よお色男、この間の火山以来だな溶岩の中からアイルビーバック!!」

「貴様……やはり生きていたか！」

「おうよ！まさかの感動の再会に涙が止まらないね」

「何故我等の位置が…まさか!」

「何?こつちの使い魔を大量に放ってネットワークを形成してんの、お前達の接近もこの通り」

と待ってましたとばかりにアカネタカがハルトの右手にディスク形態に変形して戻ったダブルスパイの事はバレたら面倒だしな

「後は俺は人の嫌なことをするのは、だーいすきなんだよね」

『それはそうだな』『うんうん』

『むしろ生き甲斐なまである』

『この男の嫌がらせは悪質だからな』

取り敢えずこいつ等は締め上げるとして…

「本来なら俺が手ずからつてのもありだが、今回は愛する者を傷つけられて怒り心頭な彼女達に任せるとしよう」

合図と同時にユエとシアがフリードに襲い掛かると魔族も分断して俺達に当たるようだ

「んじゃ俺は残りをやるかね」

「俺達な」

「なあ彼処の奴、俺達睨んでね？」

そう言われて視線を向けるとハルトを鬼の形相で睨む魔族がいたのである

「俺、何かしたかな？魔族に恨まれる事はしてないんだけど？」

するとリーダー格の男が叫ぶ

「惚けるな！カトレアを…俺の恋人を殺しただろう！オルクスの迷宮で!!」

オルクスの迷宮で殺した魔族？と首を傾げると思い出したハルトは

「あ？………ああそーいやあ、んな事を言ってたな、アタシの恋人が殺しにくるとか何とか……うわあ無駄に伏線回収しやがった」

「良くもカトレアを…聡明で誰よりも仲間のことを考えていたアイツを良くも!!」

何か仇打つ自分に酔いしれているようだが欠伸しながら答える

「ふわあ……知らねー」

ハルトからしたら興味ないのだ

「殺した奴がどんな奴だったとか聞かされてもつまらねーんだけど、俺が殺した連中皆

がそんなの言つて聞いてたら日が暮れるわ」

実際この手で殺めた命は千などでは聞かないし

どうでも良い有象無象の奴等の人生に価値などない

己の中にあるのは最大の信頼を寄せる相棒達

そして最愛の者達と逢魔の仲間達

そして偉大なる仮面の戦士達

それ以外の万象全て 塵芥 故に消え失せろ

俺の世界にお前等の居場所などない

「お前だつて聞かないだろ、殺した奴がどんな生き方してたとかさあゝそんなのくどく

ど聞かされても迷惑なんだよお…御託は良いから、さつさとかかかってきなよ…ああ安心してよ、お前等レベルに力は落としてやるからさあ」

ニヤニヤと悪い笑みを浮かべる、正に悪役である

「うわあ…」

「いや気持ちは分かる…俺も星を滅ぼしてたりするからな」

「そうだったな…」

『ハルト、何か煽り方がウルティマに似てきたな』

「そう?…デロウス頼んだよ」

ハルトは息をするように煽る冷静さを無くして此方の土俵に引き摺り込む為、デロウスから降りるとフロートのラウズカードで空に浮きながらと挑発変わりに指を曲げる

のを合図に

「一齐攻撃しろ!!」

魔人族は指示に従い攻撃魔法や使役している使い魔の攻撃をするが謎の障壁に阻まれる

「何だ、今の魔法は」

「魔法じゃないんだなあコレが」

タランチュラと同じくカテゴリーKのアンデットにして ジョーカーさえ倒せれば 偽りのバトルロイヤルを生き残り種族の繁栄を勝ち得たもの

【この距離ではバリアは張れないな】とダディにゼロ距離射撃後に水落ち封印されたでお馴染みの

ギラフアアンデットのバリア

コレを破りたければ橘さんを真似して自滅覚悟のゼロ距離射撃してくると良い！その度胸があるならばな！

「橘さん以外に破れる者がいるならかかってこいやー！」

「慌てるな！攻撃が効かぬならばコカトリスの針で石化させるのだ！」

石化ねえ…あ、そだ

「なら俺も見せてやるよ…おいでジャマタノオロチ」

ケミーカードを一枚取り出して封印を解くと空に暗雲立ち込め始め 雲から顔を出すは巨大な大蛇 その名はジャマタノオロチ

その瞳に見られたものは言わずもがな

瞬く間に石化して地面に落下、芯まで石化しているので見事に砕けた石像の出来上がりである

「ば、バカな…そんな魔物がいる訳」

「魔物じゃないよケミー…俺の大切な同胞さ」

ケミーをカードに戻すと、それはもう悪どい笑みで

「ねえどうしたの…次の出し物はないの？俺は退屈だよ…ないなら潰してしまおうよ？折角相手してんだから楽しませろよ…これで終わりなら拍子抜けだね…これならアツチを俺がやれば良か…ん？」

何かチクつとしたなあ…あ、やべ…バリア解いてた

「よしコカトリスの針が刺さったぞ！さあその傲慢の代償として石化しろ」

「あ、別にそう言うのいいんで…よいしょっと」

モーフィングパワーでアクセサリーを剣にするとそのまま石化した腕を切り落とす

「ふっ、まあ当然よな…何だと!」

しかしながらスキル 超速再生とグルメ細胞の力により瞬時に元通りである

「腕が生えるなんて…魔法も無しに…この化け物め!!」

「いや本当、俺…化け物みたいになってるよなあ」

石化した腕をコネクトで収納すると軽くノビをして

「まあ良いや皆を守る化け物ならね…さあ行くよ!」

『キバ』

ハルトはアナザーキバになるとフェツスルを取り出すと腰に添えた

『来なさい』

そして現れたのは小さな黄色の竜であった

「ビュンビュン!! やーつと出番ですね! 行きますよ! テンション! フォルテツシモ!!」

「タツちやーん!! 今日はいしくう!!」

現れたのはタツロット、彼はアナザーキバの腕に装着されると内包された力を完全解放する

「ヘンシン!!」

眩き光に包まれるアナザーキバの後ろにいた、デロウスの背中で宗一と政人は

「んじや行きますか」

「蹴散らすぞ!」

新しいドライバーを構えたのである

その頃 ナツキはと言うと屍兵と化した兵士を蹴散らしていたが分断されてしまう

「咲那!!クソ!お前等邪魔だあ!!」

確かに彼女には身代わりの球やレンゲルのバツクルがあるが…それでも不意打ちで急所を刺されたら万一という事もあるが

「こうなったら高雄、愛宕!座標送る徹甲弾発射!」

『任せろ』『分かったわ』

そして ヒューーと遠すから音がすると

『弾着……今！』

愛宕の声と共に砲弾が命中すると屍兵は消し飛び後はクレーターを残すだけとなつた

「っ！咲那!!」

『マツハ』

アナザーマツハに変身して重加速と共に己の速度を高めて今にも刺されそうになつた咲那を守る

「義兄さん！」

「咲那は香織さんの回復急いで！ハルトが何とかするから」

「うん！」

まさかのハルトに丸投げしているが、ナツキは一呼吸入れると

「テメエ何しやがる」

ナツキの怒りの視線は咲那を刺そうとした檜山に向けられるも檜山は

「南雲やお前等なんかいなければ香織と咲那は俺のものになるはずだったんだ!! お前等のせいで!!」

実際 二人に懸想していたのは本当であるが接し方を間違えていたのは言うまでもない横恋慕叶わぬ恋 香織と咲那の目には最初から彼など映ってなかった、だから映る奴を貶める形でしか向き合えなかった

だがそれは

「咲那はお前の物じゃない……いやそれ以前に俺の大事な家族に手を出したんだ楽に死ぬると思うなよ」

普段はイジられてばかりの救世主が持つ 数少ない地雷を踏み抜いた事に他ならぬ
いのである

『ゲイツリバイブ……剛烈』

アナザーリバイブに変身するとそのまま檜山へと歩を進めていく

「や、辞めろ！来るな！来るんじゃないやねえー！」

火球魔法でアナザーリバイブを攻撃するがダメージなど通らない

そもそも原典の仮面ライダーゲイツリバイブの段階で当時最強のジオウⅡ、その影であるアナザージオウさえ完封した強さを誇る

アナザライダーのオリジナルを超える性能を得るといつ性質から見ても 檜山程度では敵うわけもないのだ

そのまま至近距離になると同時に剣で斬りかかろうとする檜山だが、それより早く胸部にパスワードノコを添えられて

『ノコ切断!』

振り抜かれた一撃で道中の屍兵を巻き込みながら会場の端まで吹き飛ばしたのである

だが幸いなのか致命傷は避けられた…だがそれはハジメとの約束の為である

さてと

「お前だけは許す訳にはいかないな」

ダブルスパイとは言え、自身の義妹を傷つけようとした輩を許す訳にはいかないと武器を取り出そうとした その時！

「おい待てよナツキ」

そこに落ちてきたのはボロボロの状態のハジメである

「ハジメ君、大丈夫か？ボロボロだけど」

「ああ先生は助けたんだが予想外の客の相手をしてな…まあ後で話す」

「分かった、そいつは頼んだぞ」

「ああ………ん？」

ハジメが目線に向けた先にはオーロラカーテンが現れると中から現れたのは先日ウルルの街で戦ったクラスメイトだった

「待たせたな南雲、加勢するぜ」

「清水……何で此処に？」

「ハルトさんから助っ人に頼まれたんだよ、人質はこつちで何とかするから他は任せたい」

「ああ頼んだ」

「よし皆行くぞ！」

「了解でさあ隊長!!」

清水の後ろにはハルトが幻想郷で従えたオルフェノク達、彼等と清水は smart brainと刻まれた銅色のバックル付きのベルトをつけると

「変身！」

「変身」

『complete』

シンプルな音声と共にバツクルを倒して装甲を纏う変身したのは、まるで銅色のファイズ。その複眼は白く、体にはフォトンブラッドが流れてない。

しかし本質は連携による戦闘を得意とする

暴徒を鎮圧する騎兵隊 闇に堕ちても光を求めた者達

「よし行くぞー！」

「「おおー！」」

ライオトルーパー出陣

U A 1 0 万突破記念短編!ファルシオンハルト part 2!

t 2 !

「ボンヌ・レクチュール!久しぶりだね皆!僕の名前はタッセル、この物語はひよんな事からワンダーワールドに迷い込み無銘剣虚無に選ばれた青年 常葉ハルトが様々な世界を旅しているんだ、さあ虚無の剣士の旅的一幕を見てもらおうか!」

此処は世界中に散らばったライドブックや聖剣を搜索、管理する組織 ソードオブロ
ゴス拠点

その一室にて

「うへえ……疲れたあ……」

制服に身を包んだ男がソファで横になっていた 名を常葉ハルト、無銘剣虚無に選

ばれた剣士 仮面ライダーファルシオンである

「おいおい、若いのが昼から寝てんじゃねえよ」

「つて！てて…尾上さん痛いっすよ！」

そんな彼の頭を叩いたのは背中に大剣を背負う大柄の男性 尾上またの名を仮面ライダーバスター ハルトの先輩である

「しかし今回の任務は長期間だったな」

「そうなんすよ…… 何かライドブックがバトルトーナメントの優勝商品になって…しかもライドブックじゃなくてアルターブックだったし…優勝したのにメギド切り捨てたら、何かいきなり追いかけられるし踏んだり蹴ったりですよ…」

「それは災難だったな、けど本の回収は俺達剣士の役目だろ？」

「分かってますけど……何でか俺ってアルターブックに好かれてんだよ……」

「それには同情する」

「おいおい当然だろう相棒? 何せ俺といるんだからな」

隣に現れたのは本の魔人 メギド デザスト

紆余曲折の末に剣士となったハルトの相棒であるが

「つせえ!! つか、お前大秦寺さんから解放されたの早くね?」

デザストはある事件の際に己の力で聖剣を作り、仮面ライダーとなったのだが……その聖剣を調べたいと最近まで刀鍛冶の大秦寺さんに追いかけて回されていたのである

「ああ何でも別世界で最初の聖剣が目覚めたとか言ってたな『こうしちゃいけないぜえ!』ってよ」

「何だと！」

「ああ魔王の俺か…本当色々やらかすな…」

事実 この頃 魔王のいる精霊の世界では風の聖剣使いも目覚めていたのである

この間 そんな話があつたなあと思ひ返していると

「ハルトさん」

話しかけてきた柔らかな声音 振り向くとソードオブゴスの制服の上に蝶の羽のような模様がある羽織を着こなす美女がいた

「しのぶ？俺はさつき任務から帰って疲れてるからデートは後にして…」

胡蝶しのぶ、とある世界でハルトと出会い聖剣に認められた剣士にしてソードオブゴスの医師でハルトの恋人だったりする

「はいソフィアさんから新しい任務を貰いましたよ一緒に行きましょう」

話聞いてた!?!と驚愕するハルトに

「ええ!拙僧今日は働きたくないでござる!!」

「もう…そんな分からず屋にはキツイお薬をいきますよ」

その手には蛍光カラーの液体が入った注射がある…ふむ危険!

「わーい!僕、任務大好き!!」

命大事に!!と立ち上がると

「では行きますよ、あ、尾上さん失礼しますね」

「あ、ああ…女医も気をつけろよ」

「はい」「つてきまーす」

「完全に尻に敷かれてやがるなアイツ」

「言つてやるな土の剣士、相棒が一番分かつてる」

「お前とこうして話す日が来るとはな」

「メギド生、何があるかわかんないよなあ」

そして2人は任務に向か「待ちなさい」にストップをかけた人がいたのである、一言で言えばクール系の美女

「何でしょうかヒナタさん？」

ヒナタ・サカグチ、彼女もハルトが任務で行った世界で会い、聖剣に認められた剣士である…後

「その任務、私とハルトで行くわ」

何故かハルトを狙っていたりするので、しのぶとは頗る仲が悪い

「何を言っているのでしょうか？これは私が受けたソフィアさんからの依頼ですよ？」

「だとしても医師を失うのはリスクが大きい、ここは私に変わるべきよ」

如何にもな正論を言うヒナタにしのぶは額に青筋を浮かべながら静かに

「いえいえ、これは私とハルトの任務です」

「関係ないそもそもハルトは不死、死なないなら同行者は私でも大丈夫よ」

「行く世界がどんな世界かも知らないのに？」

「なら尚更医師を向かわせるのは危険ね私とハルトの2人で見に行くのがいいわ」

「なるほどなるほど死にたいようですな貴女：ハルトに手を出す泥棒猫が！」

『昆虫大百科！』

「関係ないわ、私は彼に命を救われた：なら今度は私が彼を守る！」

『オーシャンヒストリー！』

「ちよっ!!喧嘩は辞めて!!」

「ははは！嫉妬と剣が交わる、甘くて苦い匂いがするな！成る程：魔王が言ってたな、これがメシウマという感情か！」

「黙ってるデザスト!!つか喧嘩するなら俺はデザストと行くわ!!」

「お、良いねえ！楽しくなりそうじゃねえか相棒！」

「つせえ行くぞ!!」

喧嘩する2人なんて知らない！とばかりにハルトはデザストを連れて任務に行ったのであった

???

「そう言えば闇の剣士と光の剣士だが」

「ああ、あの2人なら今頃デザグラ見てるだろうなベアトリス先輩も魔王の俺といるみた
いだが…あの世界で風双剣と火炎剣に認められた剣士の訓練があるんだとさ」

「炎と風の剣士ねえ…どんな奴だろうな」

「何でも複数人の女性と関係を持っているらしいな」

「何だ相棒と同じじゃねえか」

「誰がハーレム野郎だ切り刻むぞゴラァ!!」

無銘剣の埃を祓いながら軽く伸びをしていると

「つかお前に皺寄せ来てるの、そのせいじゃないか?」

「かもな…烈火の剣士には今度会ったら派手な歓迎をしてやるか……んで任務の内容はと……へ?」

「どうしたよ相棒……あ?」

とある男女のダンスパーティーの景品になっているライドブックを回収せよ

「だから2人がノリノリだったのかあ!!」

綺麗なドレスとか着れるならそりゃ喜ぶわな!ヒナタは以外だったな…

「待てよ…流石の俺でも人間の擬態は頑張れば行けるが…よし!相棒が女装するならいけないな」

「よしじゃねえ!!何で俺が女装する前提で作戦立ててんだよデザスト!!」

「2人で行くにはコレしか方法はないだろう!」

「だったら会場に殴り込んで本を奪えば良いんだよ!」

注 彼は世界の均衡を守る剣士です

「お前…天才か…!」

注 このメギドも世界の均衡を守る剣士です

「何だよ今頃気づいたか」

注 彼は魔王の並行同意体です、悪しからず

「天災の間違いですよね？」

「え？しのぶ?!ヒナタはどうしたの!？」

「この期に及んで他の女性の名前を出すとは…物理的に刻みますよ？」

「何でもない…だから、しのぶは俺と来たかったのかよ、そうならそうと言えよ」

「そう言おうとしたらいなくなつたのですがね…はい！ハルトさんとなら踊りたいと思
うまっっ」

「けど俺ダンス出来ないよ？」

「それは大丈夫ですよ! どんなにお馬鹿なハルトさんでも反復練習は有効ですから!」

万人を魅了する笑顔なのだが

「明るい笑顔でとんでもない毒を吐かないでよ!! 俺泣くよ!」

「泣けば良いですよ、彼方此方で女の子を落として回る女の敵め」

「そんな男を恋人に選んだのは誰だが…」

「まあ私でないとハルトさんの手綱は握れないという事ですね」

「へいへい……んじゃ真面目にやりますかねえ…」

その後　しのぶと練習を重ねた結果　何とか覚えて

本番当日

「うーむ、やはり似合わないなあ」

何かパリッとしたダンス用のタキシードスーツ、身軽なのは良いのだが……

「ええ馬子にも衣装ですね」

しのぶは紫のドレスを着ている……ふむ

「しのぶさん、余りにも毒吐かれると俺泣いちゃうよ？美人の毒舌は心にダメージが多いんだ」

「泣き喚け」

「しのぶさん!?!」

「冗談ですよ、本当にハルトさんの精神面はガラス細工ですねえ」

「大切の人に毒吐かれたら、流石の俺だってメンタル碎けるんだが!」

「とても上弦の壱相手に笑いながら単騎で切り結んだとは人の言葉とは思えませんね」

「大した事なくね? 最後なんかお互いに笑いながら戦ってたし」

何かあの鬼、家族にコンプレックスあったみたいだからなあ鬼で無ければ良き友人になれただろうと残念でならない

「アレは勝ちじゃねえよ、お互い再生能力任せでダメージ受けながらの斬り殺し合いだからな」

最後なんか技も減ったくれもない戦いだっただからな…てか最後なんか

『優秀な弟を持った兄の気持ちが貴様にわかるかあ!』

『うるせえ！性格ドブカスな家族を持たされた長男の気持ちがお前に分かるかあ!!』

『そうだ！テメエ等の所為で心優しい弟から人殺しと罵倒された兄ちゃんの気持ちがテメエに分かるかあ!』

『何張り合ってたんだよ兄ちゃん!?!』

『何この人達の家族構成、泥沼じゃん』

『それ俺にも刺さるから辞めてくれ!』

『諸行無常』

し
最後何か普通の殴り合いだったしな…何か一緒にいた風柱…もとい義兄も領いてた

あと…

『お前も鬼にならないか？不死故にいくらでも鍛錬が出来るぞ?』

『既に俺は不死ですが?』

『……………』

『なんかゴメン』

とか言うのもあつたなあ……ああそうそうその前の電車とか

『貴様あ!俺の家族がこの程度の罵詈雑言で済ませられると本気で思っているのかあ!
俺の家族を愚弄するなあ!!』

『え?君の家族どんだけ人でなしなんだい?』

何か幻覚見せてきた奴とかドン引きしてたし…

「……………やはりハルトさんは狡いですね」

「何故に!!」

『おい相棒、何か外が騒がしいぞ』

「ん?」

そう言われて窓から外を見てみると人集りが出来ていた

「成る程…しのぶを見に来た訳か」

ハルトがわざとらしく呟くと、ふふふと笑うしのぶだが

「どうやら違うみたいですね」

「はっ?」

「ハルトさん、因みにですが今回のターゲットの情報は持ってますか？」

「確か人魚伝説ってアルターブックだよな？」

歌の力で相手を操るとか何とか

「はい、さて人魚と言えど？」

「歌で船を沈める……まさか」

「恐らくアルターブックが開こうとしてますね」

「大方、ここに人を集めて餌にでもするんだろっな」

「なら早く止めに行くぞ！」

ハルト達は慌てて走るのであったが、しのぶは慣れないヒールのせいで走り辛そうで

ある

「しのぶ、悪い！」

「ありがとうございます」

両手が塞がるが、コレで良いやとしのぶを抱き抱えて本のあるメインホールまで向かうが

「昔は俵持ちだったのに成長しましたね」

「誰かに女性の扱い方を教わったものでな」

「その結果…やはりハルトさんの脳みそに電極でも刺しましょうか？」

「怖いことを言わないでくれるかな!？」

何かに操られている虚ろな目をしたスタッフが立ち塞がったのである

「こりやメギドが目覚めたな」

「デザスト、お前なら説得できるか？」

「いや無理だね…しようがない正面突破だ」

「しゃあないな行くぞ」

「待ってください、私の力で通り抜けましょう」

「そっか、頼んだぜ煙の剣士」

「ええ」

『狼煙霧中!!』

そのまま煙と化して移動、敵の目の前までやって来たのだが

「さーて情報だと音を聞くと操られる感じか」

耳を澄ましても音がしない…能力を発動してないのか？

「何で俺達は平気なんだ？」

「さあ？ 剣士だから耐性でもあるのでは？」

「うーむ……………これさ今更だけど大秦寺さんの得意分野だよね」

「確かに」

大秦寺さんは音の聖剣を使う剣士で、この手の敵にはうつつけの人なのだが

「本が完全に開く前に回収するよ流石に放置は出来ないな」

ハルトもハルトで使命感に燃えている

誰にも選ばれなかった己を認めてくれた無銘剣その前任者は世界を破滅に導こうとした悪人と聞いているが…自分は自分

「剣士の一人として、この世界を守る」

もしこのセリフを魔王が言ったものならば、周りの人間は病気を疑うだろう、世界が変われば人も変わる

「へえ〜守るのは世界ですか…」

「その前にも目の前の恋人一人守れる位に強くないとな」

／
／
／
／

「おい顔が赤いぞ煙の剣士」

「な、何でもありません!!」

「はは」

ハルトは顔を赤くする、しのぶを見て微笑むと力を解放、腰に炎と共に現れたのは

『覇剣ブレードライバー!!』

ドライバーに無銘剣を納刀し己のライドブックを解放する

『エターナルフェニックス! かつてから伝わる不死鳥の伝説が! 今、現実となる!!』

本を閉じドライバーに装填、力が満ちるのを感じると同時に剣を抜き放つ!

『抜刀!!』

その瞬間 世界から音が消えるがハルトは燃え盛る刃を握りしめて覚悟を決める

「変身」

『エターナルフェニックス!!虚無!漆黒の剣が無に帰す!』

現れるは不死鳥の剣士 仮面ライダーファルシオン 見参

「チャチャツと終わらせ……っ!」

「あらあらコレは」

「マズイなあ」

そう本が開いて中から人魚型のメギドが現れたのである

『人魚伝説』

「!!!」

「つせえ！」

『永遠の音楽隊…無限一突！』

大秦寺さんから借り受けたブレイメンのロックバンドをリードすると音符のエネルギーが人魚メギドの音を打ち消したのである

「しのぶ、デザスト！」

「はい、行きますよ」

「漸くか」

「変身!!」

『昆虫大百科! ……狼煙開戦!』

『骸骨忍者伝! ……漆黒抜刀!』

『昆虫大百科!揺蕩う鋒!』

『黒嵐渦巻く百鬼夜行!骸骨忍者伝!!』

二人も煙の剣士 仮面ライダーサーベラ、骸骨の騎士 仮面ライダーデザストに変身する

幸いなのか人魚メギドは、能力全振りなのと肉弾戦闘は得意でないようである

「生憎だが対策済みなんでな……おい相棒合わせろ」

『必殺罫體』

「へいへい、ミスるなよ相棒」

『必殺黙読』

「誰に言っただよ!」

「だよな、行くぜ!」

『抜刀！不死鳥無双斬り！』

『漆黒抜刀！！骸骨無双斬り！』

呼吸を合わせた二人は同じ構えを取り放つは必殺の一撃

「カラミティ・ストライク！！」

そのまま互いに駆け出し、すれ違い様に敵を切り捨てていく。最後の一撃は炎を帯びた髑髏のビジョンが剣を振り下ろしてメギドを真つ二つにしたのである

「!!!」

人魚メギドはその一撃で爆砕しアルターブックを残すのみとなった

「よーしお仕事完了」

「やったな相棒」

「つせえ！」

軽口叩き合う二人の背後でこっそりと復活した人魚メギドだったが

『煙幕幻想斬！』

蝶の羽を生やしたサーベラの刺突により完全にノックアウトされたのであった

「お2人とも油断大敵ですよ」

「はい」「おう」

「さて……人魚メギドの洗脳は解けたと思いますが……へ？」

「どうしたよ、しのぶっ？」

驚く視線を向けた先には先程の人魚伝説アルターブックがあるが突如 眩い光を放つとそれは一冊の白いライドブックへと変わったのである

『アメイジングセイレーン』

「これ、どうなってるんだ？」

「分かりません取り敢えず調べてみる必要がありますね」

「ああ行くぞ」

「その前に……折角ですから一曲踊りませんか？」

「そうか、邪魔されたとは言えな……」

「そうだな……デザスト」

「はいよ、邪魔者は何とかしておくぜ」

「悪いな」

「気にすんな、牛丼にネギと卵トッピングさせてもらうがな」

「おう、特盛な」

「よし任せろ」

「デザストが離れると2人は変身解除して

「では改めて、一曲踊りませんか?お嬢様」

「はい……何とか丁寧口調のハルトは何か……ないですね!」

「んだとゴラア!」

「ふふふ、冗談です…では」

そのまま2人は楽しく練習したダンスを踊ると

「まあまあですね」

「うるせえよ…それより悪かったな色々」と

「気にしないでください、私も意地悪でしたから」

「お互い様かな…なあ、しのぶ早く任務が終わったからさ…その良かったら…」

言い淀むハルトが意を決して言おうとした瞬間

ドーーーーーン!!と扉を破壊する大きな音が響く2人は動きを止めて剣を構えると粉塵の中からデザストが飛び出してきた

「デザスト!？」

「あ、相棒……逃げろ……」

「デザストをここまで追い詰める奴とかどんな奴だよ!と困惑していると

「見つけたわ」

「そこにいたのは三叉槍…否 時刻剣を手にした剣士 仮面ライダーデユランダルが立っていたが変身解除すると黒いドレスの似合う美女が立っていた

「ヒナタ!？」

「どうして此处に…あと何故デザストに怪我を?」

まさかの同僚に困惑していると

「私とハルトに手を出す泥棒猫の味方をしたから」

「泥棒猫はどちらでしようか…本当に厄介ですね貴女は！」

『昆虫大百科！』

「欲しいものがあるなら手に入れる、そうするべきよね」

『オーシャンヒストリー！』

「ちよ！喧嘩は辞めて！」

「ならハルトさんに決めてもらいましょうか」

「ええ…」

「何を？」

「私とヒナタさんどちらと踊りたいですか？」

「私よねハルト?」

ふむ美女2人に誘われている…がコレは

ーどっち選んでも死ぬんじゃないやね?ー

冷や汗を掻いていたが、そんな事など知らない彼女達は手を伸ばす

「さあ、どっち?」

ふむ、こうなれば!!

「逃げるんだよおデザスト!!」

倒れたデザストの首根っこを掴み逃げの一手を打つが

『界時抹消!』

そうは問屋が卸さなかった、時刻剣の時飛ばしにより先回りされてしまい

『再界時!』

「何逃げようとしてるのかしら?あまり私を怒らせないで」

デュランダルから三叉槍の鋒を突きつけられてしまう

「こうなりましたらヒナタさん」

「ええ…」

『ジャツ君と土豆の木』

ハルトはライドブックの力で拘束されると

「ちよつと待て!な、何をする気だ!!」

「ナニかしらね」

「女の子がはしたない言葉を使うんじゃないやありません!!」

「ハルトさん」

「何でしょう?」

「今からやるので責任とってくださいいね」

しのぶの顔が笑ってない!コレまじだ!俺乾涸びるまで搾られる!!

「っ!!ちよ、離して助けて相棒!!」

「悪い…トッピング全乗せでも引き受けたくないな」

見捨てられた!!

「そんなあああ! 助けてえええええ!」

「さあ行きますよ(行くわよ)」

その夜 2人に搾られたのは言うまでもなかった……

ワンダーワールド

「さあどうだったかな、不死鳥の剣士の一幕はくしまさかアルターブックが新しいライドブックになるなんてねく…しかし彼も彼で遅しくなった…いやあ親目線で涙が止まらないよくおや?」

「よ、タツセル久しぶり」

「白スーツ……いやカグ槌君! 久しぶりだねえくどうしたんだい?」

「なーに、ちよつとお祭りがありそうだから不死鳥ハルトを連れて行こうと思つたんだが…」

「彼なら取り込み中だよ」

「みたいだな…んじゃ出直すか」

「ちよつと待つた！実は君に届けて欲しいものがあるんだよ」

「ん？俺に？」

「君の所のオーディエンスからの届け物が間違つて僕の所に来ていてねソレを届けて欲しいんだよ」

「そう言うことなら任せてくれ」

「コレだよ」

「へえ…」

それは円型のナックルガードをつけた双刃、しかし刃がないな…と首を傾げている
「あ、それは魔剣だから気をつけてね」

「危なっ!!そう言うのは早く言ってくれよタツセル!」

「それと、このライドブックも一緒をお願い…えーとヤクヅキだったかな魔王世界の彼女に渡してくれ」

「分かったよ…しかし何て物騒なライドブックと魔剣なんだ」

剣と本に刻まれた銘を見て白スーツは冷や汗をかく

『拷奏剣 ブラスレイダー』

『トーマンター獄門帳』

それは嗜虐や悲鳴、怨嗟を好むレジェンドルガの女王（ロード）の為に制作された一振りの魔剣であった

動乱終結 待ち受けるのは！前編

前回のあらすじ

中村恵里からの情報提供で一旦の対立はあつたものの再度協力して事件解決に奔走するハルト達 ハジメは神の使徒 ノイントを撃退していた頃 ハルトはと言うと

「ふう……やっぱり良いものだな」

その身は金色の鎧にステンドグラス模様の意匠 頭部の蝙蝠は血を求めて飢える
まるでドラキュラ伯爵のようなアナザーライダー

アナザーキバ・エンペラーフォーム

参上

「な、何だその姿は！」

「まあアレだ、この姿になった俺は誰にも止められねえ!!」

力を解放すると足元に現れアナザーキバの背に映るはキバの紋章、さあ

「魔族、滅べ」

『絶滅タイムよ有り難く思いなさい!』

「いやそれはダークキバ!!」

そんな宗一のツツコミも虚しく空に響くだけであつたが

「滅ぶのは貴様だ!受けよ!この千の落雷!!」

魔族は魔法を展開、そのまま雷を放つが

「ほお…ならば来い、ドツガ」

ドツガハンマーを呼び出したアナザーキバはそのままハンマーを横に振る、それだけで放たれた雷は音を立てずに消し飛んだのである

「何だと！」

「今度はお返しだ…タツちゃん頼むわ」

『ドツガ…ファイバー!!』

そのまま必殺技を発動、ドツガハンマーがエネルギーを受けて肥大化 それに合わせ背後のキバの紋章がハンマーに吸い込まれ チャージ完了

「か、回避——！」

「もう遅えよ!!まとめて吹き飛ばやあぁ！」

正に紫電一閃 アナザーキバの動きに連動したドツガハンマーのエネルギーはリーダー格以外の魔人族を捉えると仲間と乗り物の魔獣達はステンドグラス状に肥大化し

ていき

パチーン!と指を鳴らすと同時に魔族はガラスのように砕け散ったのであった
残されたのは魔族のライフエナジーのみとなると

「!!!」

待つてましたとばかりにオーロラカーテンが現れキャツスルドランが飛翔しライフ
エナジーを捕食したのである

「この間の幻想郷での借りを返すぜ、たらふく食べるよキャツスルドラン」

「!!!」

気にするなどばかりに咆哮を上げると、そのままキャツスルドランは現れたオーロラ
カーテンを潜り逢魔へと帰還したのであった

「な、何だ、何なのだ貴様は!!」

「名乗ってなかったか？俺は常葉ハルト、最高最善のライダーの王に叛旗を翻した怪人達の王にして災厄の魔王だ、覚えておけ！」

「ま、魔王様以外に魔王を称する者がいるなど言語道断！貴様を倒してその最高最善の魔王も捻り潰してくれる!!」

「「あ?」」

魔族は素直に逃げれば良かったのに自ら自殺を選ぶような愚行を犯したのは言うまでもない

何気に怒りをトリガーに政人の背後には己のオルフェノクとして姿が、ハルトの背中にはドンスラが現れていたのだ：マジギレである

視線を逸らすとユエとシアはフリードとその手勢の相手をしているが決着は近い、な

ら

「終わらせるぞ、おい説明書は読んだか? 政人」

「ああバツチリだ……いつでも行ける……オーマジオウを捻り潰すだと? 出来るわけない
だろう愚か者め」

「その変身にはコレがないとな!」

するとフロググポットが待つてましたとばかりに音声が再生する

『オーガ!オーガ!オーガ!オーガ!オーガ!』

まさかのオーガコールに

「……………おい」

「雰囲気は大事だろ？」

「ああ…」

そして政人はオーガギアを装着、オーガフォンに変身コードを入力

0・0・0 Enter

『standing by』

それはファイズ系列にしては低すぎる音声と待機音 そんなの関係ないとばかりにオーガフォンを折りたたみ握りしめ 何かを決めたように政人は宣誓する

「変身」

『complete』

溢れ出るフォトンストリームと装甲 眩い光に包まれ現れたのは 漆黒の騎士

地を支配する帝 仮面ライダーオーガ 推参！

『おおおお!!』

音声も最高潮であるが敵からしたら何やってんだコイツ!と動揺を隠しきれないでいる

「な、何なのだコイツ等は!!」

本当その通りである

「学ばない奴だな、ならば何度でも思い知らせてやる!!」

アナザーキバも笑いながらアナザーウォッチを起動し直した

『オーガ』

アナザーオーガに変身すると2人は同じタイミングでオーガストランザーを抜き放ちミツシヨンメモリを装填する

『ready』

長剣へと変えたオーガストランザーを構え

『exceed charge』

低い音声と共に2人の長剣の剣身がエネルギーと共に延長、拡大され巨大な剣へと変わる

「な、何なのだその剣は…それより何故呪いのアーティファクトを使っても自我が消えないのだ！何故だ何故だあああ!!!」

「うるせえええ！雑魚の分際で!!」

「頭が高けえんだよ!!」

2人はまるで目の前の敵など眼中にない、己を侮った無礼者に罰を下した

「跪けええええええ!!」

2人のアナザー、オーガストラッシュは唐竹割りの要領で魔人族の体を魔獣ごと両断したのであった

「か、カトレア……おれは……ぐああああ!!」

最愛の者の名を呟くとΩの文字と共に魔人族は灰化したのであった

「俺にさえ勝てない奴がオーマジオウに勝つ?そんなのありえないね…デロウス」

ハルトはデロウスに跨ると同時に通信機を取り出す

「ウオズ、そつちはどうだ?」

『は、アナザーウオッチの回収は完了しました』

「分かった、こつちも決着ついたからそつち向かう」

『お願いします』

「カレン」

『はっ！』

「ジナイーダとオリガもだが、渡したライダーシステム使えるな」

『万全です主』

「そうか、なら頼んだぜ俺の騎士」

『お任せを！』

さてとコレで大丈夫かな、なら

「ユエちゃんとシアさん助太刀…いららないな」

よく見るとハジメから前回受けた傷が再生されフリードに大ダメージを与えていた

「痛い?ハジメから受けた痛みは?」

「こんなものじゃないですよ〜このままその頭を叩き潰してやるですう!!」

よしアツチは大丈夫そうだな!

「よし行くぞ」

「え?助太刀しないの?」

「お前、あの勢いの女性陣見て止められるか?」

「無理だな」

宗一と政人はそれぞれの世界に置いてきた大切な女性陣の顔が過ると

「反論はないな、行くぞ！」

「おー！」

怒れる女性に近づくべからず、それが怪人トリオのモットーである

そのままデロウスに待機を命じてハルトはテレポートの魔法で敵陣中央へと現れる
が

「あ、やべ」

座標計算を間違えて落下しているのだ

「落ちてるうううう!!けど大丈夫か」

「大丈夫だろ」

「そーそー」

今更高所からの落下ダメージなんてあつてなきようなものであるとばかりに雑に不
時着するとハルトは体の埃を払いながらナツキと清水達と合流する

「やあ清水君、調子はどうだい？」

「最高ですよ、まあ流石に戦闘面はまだまだですが…」

清水はテイオや万を超える魔物を使役していた事からも分かるようにやれば出来る
子なのである また以前ハウンドが懸念していた通り指揮官としての適性も有してい
たが流石に前線で戦う職業でない為か肉体改造に時間はかかったが身を結んだよう
である

「それは追々な…お前等も良くやった」

「気にすんなよ!」「そうだぜ大将!」

オルフェノク達は以外と上下関係はしつかりしているようで清水を上と認めたら素直に従っている

「よし、お前等は人質を救助した後は1箇所に戻まってくれその方が守りやすい…カレン達も来るから一緒に人質を守れ、頼んだぞ」

「はい!」

「んでお前はどーなのさナツキ?」

「最高だよ…此処までアナザーライダーの力をコントロール出来てるのは初めてだ」

「そりゃ良かった…んで、彼処でノビてるのが檜山か」

外壁にめり込み何か人間がしたらダメな痙攣をしている…胸部には何か鋸で切られ

たような一撃を見て理解した

「ノコ切断を人に向けてしたのか?」

「当然だ咲那を殺そうとする奴に人権はない!」

「そう言えばシンフォギア奏者にもいたよな電鋸使う子」

「いたな調ちゃんな…何か今思えば生身の人間に当たると考えると痛い所では済まないよな」

「それをあの子は小型電鋸を雨霰にして俺目掛けて撃つんだよなあ…俺何かしたかな?」

「アレはお前が悪い」

「何故に!?!」

「うるさい」

ナツキの庄にハルト達は一瞬閉口するが直ぐに話しかける

「アレどうする?」

「殺すなよハジメ君との約束がある、殺すのはその後だ」

「へーい…けど俺も消化不良なんだよね〜ならアイツらで遊んで良い?」

「それは止めないけど来たぜ」

テイオの背中から飛び降りたハジメは慌てて倒れている香織に駆け寄る、咲那が治療しているが…

「ハルト、後でアナザージオウIIで治してやってくれ」

「分かったハジメ君、なら彼女の体は冷凍保存かな」

『ICE AGE』

ガイアメモリの力で香織の体を冷凍させて腐敗を防ぐと恵里が話しかける

「助っ人か…まあ良いよ君に何が出来るのかな?それとも人を撃てるのかい?……え?」

パアーンと弾けた音がすると恵里は目線を向ける先では先程 降霊魔法の手本代わりに殺した小悪党組の1人の頭が吹き飛び血柱をあげていた

「何言ってるんだ?まさか魔物は撃っても人は撃てないなんて腑抜けてる奴だと思ってるのか?」

「くっ!やれ!!」

そこに現れたのは、メルド団長 この国の騎士団長でありハジメ達の教官をしていた

人だ：既に殺され屍兵になっていたが：何か言いたげな瞳と意思をハジメは汲み取ると即座にメルドを射殺 宝物庫から取り出したのは ガトリングと弾薬庫：それに合わせてナツキはアナザーG3ウオッチを起動しGX05を取り出すとパスコードを入力 ガトリングモードにして構えた

「ありや…」

全員伏せろー！と叫ぶと同時にハジメとナツキは手に持つガトリングを斉射した

バババババババ!!と続け様になる音が鳴ると屍兵は文字通りミンチになり蹴散らされたのである、その弾雨の中でもハルト達はライオトルーパー隊や人質勇者（笑）をバリアでガードしていたが

「うわあ…」

さつきまで命だったものが当たり一面に転がる

光景に宗一はドン引きするが2人はケロツとしていた

「Heavenの生産工場で割と見慣れたな」

「そうだなスマートブレインでも割と見るぞ」

「それには流石の俺でもコレにはドン引きするわ!SAN値ピンチって奴だよ!」

宗一がそういうのがハルトの中にはボンヤリと

ーシグマ型とかNEVERの研究に死体とか回せないかな?ー

などライダーファン以前に人として何か外れたことを考えてしまっていた

ーこりやダメだね、そこまでいったらダメだー

俺は悪党であつても外道ではない、人体実験なんて言語道断である屍を弄ぶなどあつてはならないと自制するが

まさかの2人のセリフに震える宗一であったが斉射を終えると熱を帯びた武器を投げ捨て諸悪の根源に銃を向けるハジメはまだ許せたが

「GX05を投げ捨てるのか、どんな了見してんだナツキい!!今此処で惨たらしく殺してやろうかあ!」

『フォーゼ…ランチャー、ガトリング、チェーンアレイ・オン』

先程までの自制など何処へやら、ライダーの武器を粗末にしたナツキにライダー狂信者ハルトがキレた!アナザーフォーゼに変身して殺意高めのモジュールを一齐起動してナツキに狙いを定めたのである

「落ち着いてくださいハルトさん!」

「いや流石に空気を読め!!」

清水が変身したライオトルーパーと政人が止めるがアナザーフォーゼは怒れる獣の

ように唸りながら

「離せ!偉大なる先人の武器を蔑ろにするなど愚の骨頂だろうがあ!!」

「お前も投げてねえか?」

「いや俺は投げずにそつと地面に置く」

「いや今は落ち着いてくださいって!」

「ごめんアンティリーネさん!お宅の旦那を止めてくれえ!!」

『そうなる私には無理ね千冬かキャロルを呼んでくるわ』

とその間に宗一が通信機でハルトのストッパーに助けを求めると

「主!お待たせしました………た?」

「カレンさん良い所に！ちよつと止めるの手伝って!!」

「ええ…」

『落ち着くのじゃハルト!』

ハルトの暴走はドンスラの一喝で止まるが

「あの野郎…」

『今のは相棒が悪い』

「へいへーい…：…んじゃ、どーするかねえ」

本音を言えば彼女を殺されるのは困るが、自然に逃せる状況ではないのである

そう考えていると虚空から現れたのはユエちゃん達が相手をしていた魔人族…ありや生きてたか

「追いかけるのは構わんが、この王都には十万の魔物がいる! 貴様1人で勝てると思っ
ているのか!」

そう挑発するフリードにハジメはため息を吐きながら宝物庫から武器を取り出そう
としたが

「十万か」

「準備運動位には」

「なるかな?」

此処に不完全燃烧気味の怪人トリオがいるではないか

「頼んだ、俺は疲れたから動けない」

「任せたまえよハジメ君!!」

「いやあ楽しみだ………ん？」

2人の視線を向けると、エボルに変身した宗一がブラックホールを使って敵を掃除機で吸い込んだゴミのように取り込んでいるではないか

「おいしいい！何勝手にやってんだ！」

「お前らはさつき暴れただろうが！」

「不完全燃焼言っただろ!!10万の敵がいるのにそれは無いぜ!!」

「知るか！この魔物達は俺に任せろ！」

「カッコつけてるけど出番無くて拗ねてるだけだな」

「ああ」

「因みにお前たちも巻き込むかもな」

「なら任せた」

ハルトが宗一に任せようとした時、ナツキとハジメの背後に火球が放たれる振り向かずに迎撃する2人がそれに合わせて斬りかかるのは先程まで瀕死だった檜山である

乾坤一擲! そんな決死の突撃だが動機が動機なので感動すら無いハジメに押さえつけられてあっさり無力化されると、今までの返礼とばかりに全身へ渾身のラツシュを叩き込むのであった気絶するも激痛で目を覚まし、再び気絶と悪循環が彼を襲う、最後までボロボロの状態で2人に逆恨みの妄言を言い放っていたが

「ごろして…やるう…かならずう!」

そんな奴を生かしておく程、ハジメは良心的ではないし何より

「これは香織の分だ」

と刺された彼女の分と称して全力の蹴りを顔面に叩き込んだのであるが

「う、あああああああ!!!」

UFOに攫われる人のようなブラックホールに吸い込まれようとしていたが

「よっと」

コネクトの力でハルトは此方へ引き摺り戻す

「おいハルト、何の真似だ」

ナツキは助けた理由を問うが

「え？まさか一回殺しておしまいとかで良いと思ってるの？2人は優しいね」

と朗らかな笑顔で死刑宣告をする

後に逢魔の格言にもなるが

「逢魔に敵対した奴らにとつて死とは、これ以上の苦痛を与えられないという意味で慈悲なんだよ!」

何処の骸骨オーバードだとツツコミたい格言に流石のハジメもドン引きしていた…人でなしと思っていたが世の中には上がいるものである

「さーて、どうしてやろうかあ」

その時 檜山が目にしたのは、これから人を殺そうとする人間とは思えない感情の声、ただし口は三日月のように釣り上がり、嗜虐的な表情を浮かべている事と先程の言葉から自分はまだともに死ねないという絶対的な恐怖を前に

「い、いやだたすけてええええええ!!!」

涙を流しながら命乞いをする檜山だがハルトはそれはもう良い笑顔で、その時 檜山の目には夜の闇に紛れて表情が見えず口角を上げた口だけが見える化け物が見えたのである

「ばーかテメエみたいな屑を助ける訳ないだろう？お前はそう言った人をどうしてきた？助けた？してないよね？だから俺もお前にはそうしないよ？」

そもそもハルトからすれば近しい誰かを傷つける輩にかける慈悲など持ち合わせていないのだ

「い、いやだ……たのむ……たすけて……」

「お前は豚や牛の命乞いに耳を傾けるか？しないよな……あと一生使わない知識だけど教えとくね、一つは命を握る者を楽しませる事、もう一つはその人間を納得させる理由を述べる事、お前はまだ、どちらも満たしていないよ？さあ、踊れよ、そうまでして助ける義理がどこにあるのか俺に教えてくれない？」

「たのむ……しにたくない……」

「それ君が殺した香織さんもそうだよ? 香織さんは殺したのに君は死にたくないとか道理が通らないよねえ、だから殺すのは確定かな」

「そ、そんなあー!」

体から様々な液体を流しながら命乞いする檜山にハルトは

「うんうん良い顔だねえ沢山苦しんでよ、その絶望した表情が大好きだからさあ」

→ 皆さんラスボスのような事を言ってますが彼が主人公です

因みにこの頃

「うんうんハルは分かっているなあ、流石はボクの主だけど少し頂けないなあ、60点だね、ずーっと恐怖させると感覚がダメになるんだよ」

ウルティマはハルトから流れる感情を受け取りご機嫌だった

「お嬢様？」

「恐怖には鮮度があるんだ希望が絶望に落ちる一瞬の落差が一番輝くって事を今度ハルにレクチャーしてあげないと、あはは！」

これには側近のゾンダとヴェイロンの2人も驚くほどである

「あ、これはこつちの事だよほら早く仕事しなよ」

「はっ！」

「やっぱりハルに付いてって正解だね、玩具に困らないし楽しいし最高」

困みにだがカレラとテストアロツサは

「我が君…」

「あらあら」

驚いていたのは言うまでもない

場面戻してハルト側

「……………」

檜山への怒りを宿していたハジメとナツキだったが、今では最早屠殺場へドナドナさ
れそうな檜山へ哀れんだ表情を向けていた、その理由？

「どうしてやろうかな、まあ俺の友達をイジメた屑を楽に殺すとか俺の辞書にはないけ
ど……そうだ！前にドンスラが言ってたNEOって奴が良くやる方法を試してみよう
か！」

『一応聞くが、それどんな方法だ相棒』

「えつとねえ死の絶望が強く与えたら美味しくなるだっけ？その絶望の悲鳴をあげた相手を生きたまま食べられるんだよ、そして脳内麻薬の分泌で味に落差が出るんだってえ〜まあ俺は食べないけど」

『何て悪趣味な奴!!』

『わしもそうやって食われたんだよなあ』

『ドンスラが負ける程のヤバイ奴って何だよソレ!!』

「あ、四肢を再生しながら切り刻んでミラーモンスターの餌にするのもありだなあ〜食レポ聞きたいし…美味しいって言うなら今度からそうさせるのもありだよねえ」

まるで献立を考えるような笑顔と気楽さで人を痛めつけようか考えている魔王に震

えていた

直接的に殺意をぶつけられている檜山の目には恐怖の大魔王に見えて異なるに違いない、いやそうなのだが…

恐らく 一般人がステゴロでダグバに挑む位の絶望的な差が存在していた

「あゝハルト」

「何かなナツキ?…あ、魔族が逃げるよ?」

「何!?!」

指差す先にはフリードの竜 ウラヌスに乗り逃げ出す恵里の姿が

因みにだがこの時 恵里の脳内に

【僕、もしかしてヤバい奴と取引したんじゃない？】

と言う今更な思考が過つたのと、裏切るところなると言う見せしめを見たような気がしたのである

「あーあ、完全に見捨てられたねえ〜可哀想に」

ハルトはサディスト全開で檜山の顔面を足蹴にしていると

「そうだハジメ君はコレにイジメられてたんだよね？」

「ん？ああ……」

流石のハジメも今のハルトにドン引きしているし後ろにいた清水に至っては下手したら自分がこうなつてたと戦慄していたが

「なら君が決めて良いよ、コイツどうするか」

!!!
」

恐らく頼む南雲!助けてくれえ!!と言いたいのだろうが踏みつけられているから唸り声しか聞こえないがハジメからしたら虫の良い話など聞く訳がない

「ハルトに任せた」

この瞬間、彼の運命が決まったのは言うまでもない

「んじゃあNEOの刑かな」

要するに徹底的に絶望させて死の恐怖に苦しみ続けるという 正に黄金体験のレクイエム的な末路になったのである

「んじゃ後はウルティマやヤクヅキと相談しながらにしようくあの2人なら俺より良い案が思い浮かぶかも知れないし」

ソレはもう良い笑顔でハルトは檜山を逢魔へ転移させたのである

「あははく……あは……あはははははははははは!!」

「俺……ハルトと敵対したくない」

「俺も……」

政人と宗一は恐怖を覚え、ハジメでさえ敵対したくないと思ったという

そしてひと段落したので全員A T A Tに帰還すると

「旦那様、正座」

「何で？」

そう言いながらも素直に正座するハルトであった

「流石にやり過ぎよ」

「まさかアンティリーネに説教される日が来るなんてな…普段は俺と同じく怒られる側なのに」

「因みに説教するのは私じゃないわ」

「へ?ならばルフアストか?それとも「オレだ」……………キャロル!?何でここに!!」

そこにいたのは逢魔で留守番している筈の人だからだ、彼女は子供モードで仁王立ちすると

「アンティリーネから助けてと言われてな…」

「ああ……そゆことか」

「本来なら千冬が来て言うべき場面だろうが正妻として言わせてもらう……ハルト」

「はい」

「オレの見てない所で何人増やせば気が済むのダア!!」

「え、そつち!？」

「当たり前だ! 貴様の精神構造や立ち振る舞いがイカれてるなどオレ達からしたら今更な事を説教するよりその女を口説いて回る姿勢を改めろお!」

その言葉にナツキがツツコミを入れる

「いやイカれてるのが旦那で大丈夫なの!？」

「この間、何人増やそうが構わん!とか言つてなかつた!？」

「限度を知れえ!オレと千冬が見てないとこうなるのか!!やはり貴様にはオレがいないとダメだな!」

「そうだなあ…俺にはキャロルがいないとダメかも」

「ど、どうした急に…」

「いやさ、最近俺がプツンした時に思うのが…誰も止めてくれないと俺ってヤバい奴なんだなあって」

『今更気づいたのか』

「うん……やっぱり俺にはキャロル達が必要だったんだよ……やっぱり幸せって無くして初めて幸せって気づくんだなあ…前(GX編)にも味わったのに忘れてたんだよ」

「わ、分かれば良いのだ……分かれば」

と互いに頬を赤らめている光景にハジメはナツキに聞く

「ナツキ、あの子誰だ？あのハルトが大人しくなったぞ」

「彼女はキャロル。数百年の時を生きる錬金術師にしてハルトの奥さんだよ」

「数百年？そうは見えないが……まあユエとかジナイーダやテイオもそんな感じだがって錬金術師!!指。パツチンで火を起こしたり手合わせ錬成!とかやるあの!」

「そうだなキャロルはやろうと思えばその辺出来るな」

「おお…凄い人なんだな…というより」

「あのハルトが」

「素直に人の言う事を聞いているとか…ありえない」

天上下天下唯我独尊を行き、逆らう奴等には無慈悲な制裁を加えたハルトも流石に

「流石の魔王も嫁には勝てないのか」

「そう言う事だね…ああそれとハジメ君や清水君のベルトを作った人でもあるよ」

「ほお、それなら礼を言わないとな」

「後気をつけろよ、ハルトはキャロルが絡むと戦闘能力が倍加する」

「嘘だろ!アレで全力じゃないのか!!」

「具体的にはアメイジングマイティからライジングアルティメットまで跳ね上がる」

「究極を超えているだとお!」

「そうなんだよ政人君、因みにハルトはまだ怪人態への変身を残しているからな」

「なんか…オーマジオウから聞いてたが、滅茶苦茶だな」

「因みに以前、キャロルとの夫婦喧嘩で街が一つ吹っ飛んだ事もある」

「それ本当に夫婦喧嘩？」

「良いかいユエちゃん、ハルトとその関係者の周りに常識なんて通用しない」

「見れば分かる」

と話している中でも

「成る程、ベルファストと同じ世界から来たのか」

「ええ、しかし正妻とは大きく出たわね」

「ああ、オレとハルトには向こう二百話近く育んだ愛があるからな」

オイゲンとキャロルがバチバチしていたが

「それでこのバカに好いているのは他にいるか？」

と言われて手を挙げるのがKANSEN組と

「まあ、好いてはいるかな」

「うむご主人様には新しい世界を教えてもらったからのお」

まさかのアリエルとティオである

「誰だ貴様等は？」

「私は魔王少女アリエルちゃん！この世界では樹海の神獣と崇められてたりするよ」

「ほお……なら樹海へ帰れ、そう言うキャラは束だけで十分だ」

「断る！だって彼の作るご飯が美味しいんだもの!!」

「は？」

「あんな美味しいご飯で胃袋を握られたら、彼に責任とってもらえないでしょ！もうハルトつてば私を肥えさせて何する気！」

「はあ……おいハルト、何だこの女は」

「滅茶苦茶食いしん坊」

「凄い端折り過ぎだね、こう見えて人類の半分を殺して世界を救った魔王なんだよ」

「まさかの魔王と来たか……はあ……何でこのバカに惚れる女は、何故どいつもこいつもハルト並みのバカなのだ」

「それ遠回しに自分をバカと言ってますよキャロル?」

「オレは貴様に惚れた段階で自覚している」

「あれ?嬉しいけど遠回しにバカ呼びされたような……まあ良いか」

「良いのかよ!」

「それで、お前は?」

「妾はテイオ・クラルス、竜人族の生き残りでご主人様に新しい世界を教えてもらったのじゃ」

「ハルト」

「んーと出会いはケツパイルと貸したトイレのウオシユレットでドMに覚醒した」

「よしクーリングオフしろ若しくは山に捨てて来いオレが許す」

「任せろ」

「おおう！流石はご主人様の正妻よ…中々の辛辣さじゃな、これはこれで来るものがあるのじゃあー！」

「おいハルト、オレを正妻と認めるのは評価するが流石のオレでも見た事ない人種で軽く恐怖している」

「分かるよ、その気持ち」

と2人は遠い目をしていたがキャロルはハジメを見ると

「お前が南雲ハジメだな家のバカ旦那から話は聞いている、オレの作ったファイズギアを持つているとな」

「ああ…アンタがライダーシステムを作ったって聞いてな助かってるよ」

「気にするな貴重な戦闘データが入って助かっている、礼は不要だ…それでお前に渡すものがあつてな」

とハジメにキャロルが渡したのは

「これ…ファイズブラスターか!!」

「専用アイテムが漸く完成したのだ、お前に合わせた調整も済んでいる…戦力として使うと良い」

「助かるぜ、遂に最強フォームになれるのか!」

「む……」

「妬くなハルト」

「俺はキャロルに……いや愛や思い出と沢山のものをキャロルからは貰ってるな」

ハツとしたような顔で言うのであったが

「ばっ！何を言っている!!そう言うのは…その2人きりの時に…」

「そうだな」

2人で話していると

「2人で惚気ないでくれるかしら？」

「まさかのリーネんがツツコミを入れた!？」

因みに余談だが

「あの…キャロルさんに質問が」

「何だ……っ！本物のウサ耳だと！」

「はい！私は兎人族のシア・ハウリアって言いますう！」

「そうか、すまないなウチにも機械仕掛けだがウサ耳をしている奴がいてな」

「おお！それは親近感を覚えますねえ！」

「ハルト、二亜、アンティリーネと並んで逢魔問題児四天王に数えられている、マッドサイエンティストだ」

「急に遠い存在に感じますう！」

「え？何その四天王、俺知らない」

「安心しろお前がNo. 1だ」

「嘘だろ！そのメンツの中なら俺はまともじゃないかな！」

『いや違うだろう』

「ちよいちよい！ハルきち！それは聞き捨てならないねえ！この私とその枠組みにいたとしてもハルきちよりはマトモだあ！」

「ちよつとニア、それは違うわ私の方がまだマシよ2人よりも自制しているわ」

「いやいや！アンティリーネはこの間ノリノリで戦ってたじゃん!!」

「なら」「だね」「おう」

「「No. 1は束(ん)だね」」

—————

その頃 束はこの電波を受信したのか

「誰がクレイジーウサギだあ!」

「クレイジーなのは間違いないだろう?」

「酷いよちーちゃん!」

「ほらそんな事より、マドカの入学手続きをするぞ」

「はあ…これが終わったらハルニウムを撮取しに行きたいなあ」

「そうだな私もハルトに会いたい」

「ハルクン、東さん達が見てないから増やしてそうだよねえ」

「ああ確実に増やしているな」

「だよねえ」

「そうだな…行くなら銀狼や錫音も呼ぶとしよう全員でハルトに説教だ」

「賛成」

—————

と東がいつてた頃 ハルトは悪寒に震えた後にアナザーライダーに諭されているハルトからシアに目を向けると

「何だ」

「その……一途な相手がいる人に自分も振り向いて欲しい時はどうしたら良いのでしょうか!」

「簡単だ教えてやろう【押ししてもダメなら押し倒せ!】」

「な、成る程!!確かに押し倒して既成事実を作れば後はこちらのもの……とても参考に
なりますう!」

「いや何感心してんだ残念ウサギ!!あとキャロルさん、家の変な事を吹き込まないで
くれ!」

「安心しろ、コレでオレ達はハルトを手に入れた!」

「信頼と確かな実績があるのですう!」

「辞めろお!!」

「ハジメの大切が増えるのは嬉しい」

「ユエさん!?!何言ってるんですか!」

「安心しろハジメ君」

「ナツキ…」

肩に手を置いたナツキは一言

「俺はその教えを受けた子達に押し倒された…対策してても向こうは上に行く」

「詰みじゃねえか!」

そして王都での結界修復やら事後処理やら死んだ香織の蘇生やら済ませている中で

「成る程な神山には二つの攻略の証が必要なのか」

「そして特定の神を崇拜してない事と神の影響を及ぼす何かに打ち勝つ事が条件だな」

「無理だな!何せ師匠が神で仮面ライダーの皆様も崇拜してますしい!神の影響を及ぼす何かに打ち勝つとか無理だな!!」

「初代様や歴代の翁を崇拜するとか無理ですね、それに我等の神は試練を与える存在ですから」

と呵呵大笑したハルトと冷静な狂信者ちゃんは開き直っていたが

「ねえねえあの2人って」

「根っこは似た者同士だな」

「そりや呼ばれますよね」

そんな会話が陰でされていたという

「しかしそうなるとうるしの迷宮のアナザーウォッチが…」

「その件なんだがな…何故か俺に渡されたぞ」

「何っ！」

「ほら」

ハジメの手には神山の迷宮にあったのだろうアナザーライダーマンウォッチがあったのだ

「何で……」

「そう言えばハジメ殿は以前、オルクスの迷宮でもアナザー1号ウォッチを貰ってましたね」

「確かに…何でだろうな」

「まあまあありがとうハジメ君」

「気にするな」

「何が欲しい?」

「いやこの間、アンタの嫁さんから貰ったものと交換で良いぜ」

「ありがとう」

それだけ言うとアナザーライダーマンウォッチに触れると

「宜しくなアナザーライダーマン」

『エヒト許さん!裏切り者は殺す!!』

『お前は何処のヨロイ元帥だ』

『見事に復讐に燃えているな』

『そりや神山のアナザーウォッチになるわ』

「そうだ！教会の跡地に師匠を祀る祭壇を作ろう!!」

「何言つてんだ辞めろバカ！」

「賛成!!」

「頭を冷やせよ怪人トリオ!!」

「ああ、このツツコミに安心感を覚えますよ」

「義兄さんはこうでない」と

「咲那!?!」

ナツキのツツコミに日常の帰還を感じるのであったが、ぶつちやけるとこの後の方が面倒くさくなるのをハルトはまだ知らなかった

後編

前回のあらすじ

事件解決後 簡単に報告を済ませたハルト達はハウンドから簡単な報告を受ける

A T A T の中にて

「え？ピースメーカーが飛べない!？」

「正確に言えば被害を受けて修理が必要になりました」

聞けばノイントがハジメの方向へ向かう前にピースメーカーを急襲していたとの事
そのせいで防御シールドは全損、ウォーカーやガンシップ、スターファイターなどの
兵器も失逸したとらしい

「ならピースメーカーは逢魔に帰るしかないな」

「はい整備には時間がかかりますので、その代替品としてアクラメイター級を手配して
います暫くすれば到着するかと」

「アクラメイター級か」

アクラメイター級

ピースメーカーが該当するヴェネター級と違い 輸送能力や揚陸艦としての性能を
高めた船である 戦闘能力はヴェネター級に劣るが 現地世界の文明レベルを見ても
充分な兵力と言えるな

「分かった、すぐに手配してくれ：それと二亜はピースメーカーと一緒に逢魔に戻る事」
「ええ！折角ここまで来たのにい！」

「理由はシンプル、ハジメの報告にあった神の使徒って連中だよ」

「ああ……」

「そいつが動いたって事は、この世界の邪神もコツチに気づき始めたって事だ、これから先の戦いは油断なんて出来ないから、そういう訳で一夏と新四天王は帰って留守番頼むわ」

「何でさハル兄!？」

「残っても良いがそもそもお前、学校の準備どうした」

「あ……………」

そう言えばと顔を青くした、そもそも一夏はアストルフオの宝具によつてこの世界に飛んできたのだ。千冬も知つてるとは言え流石に離れるのは不味い

「という訳でひと段落するまで戻ってくるな、オリガも連れて行け…お前に預けたト

ルーパー部隊を指揮する奴が必要だろ？」

「はい……」

「我が魔王、今回の敵ですがどう思います？」

「あ？ 神の使徒（アンノウン）を語る奴等を放置するなどライダーファンとして許して置けるかあ!! いいかお前等！ 神の使徒はサーチアンドデストロイだ！ いいなあ！」

「そうです邪神の使徒など殲滅あるのみです！」

「「おお!!」」

『今日も相棒は平常運転だな』

『ああまるで実家のような安心感だ』

ハルトと狂信者ちゃんが盛り上がっているが

「そうだ今度ハジメ君達を逢魔に連れていかないか」

「そうですね彼等には是非遊びに来て貰いたいですな」

とカラカラ笑いながら話していると

「キャロルも帰って」

「断る」

「何でさ!？」

「貴様を止める奴が必要だろうか？それにこれ以上増やされるのは困る、幸いオレの仕事は終わったからな」

とキャロルが見せたのはドレッドドライバーである

「え？何で持つてんの？」

「まあ色々あつてな」

「そうか頼りにしてるぜキャロル」

「任せろ」

ドン！と並び立つ姿に

「ああ良かった…ハルトのストッパーがいる…こんなに嬉しい事はない、ありがとう神様…」

と眩くナツキだったが

「そう言えばエルフナインが言ってたな、帰ったら覚えておけど」

「神は死んだ!!」

「おいテメエ！ 師匠と英寿さんと檀黎斗神の事言ってんなら張り倒すぞ!!」

「最後のはエヒト級の邪神じゃない？」

その数分後 ナツキはロープで縛られA T A Tの頭部分に逆さに宙吊りされたのは
言うまでもない

—————

そして改めて

「ハジメ君、改めて紹介するよ俺の嫁だ」

「キャロル・マールス・デインハイムだ、うちのバカ旦那が世話になってるな」

「お、おう南雲ハジメだ、こつちがユエでウサ耳はシアだ」

「宜しく」

「宜しくですう！キャロルさん！あとで相手を押し倒す方法を教えて欲しいです」

「ああ任せろ、有効なのは不意打ちだがいざとなったら寝込みを襲うのも有りだ」

「勉強になりますう！」

「いざとなればこの薬を使うのだ、ハルトでさえ飲めば数分は動けない代物だ」

「ありがとうございます！これならハジメさんも…うふふ」

「おい何渡してんだ錬金術師」

「キャロル、他所様の家庭に我が家のルールを教ええない!!あとその薬はダメな奴!!」

「こほん。その話はまた後で…しかしハルトからファイズギアにゾルダのデツキを託されるとは中々の奴だな」

「そうなのか?」

「あのバカがライダーのベルトを託すなんて相当信頼してないとありえないからな」

「そうだったのか」

「そうとも…それでお前等がオーマジオウから派遣された2人か」

「ああ宗一と政人、こう見えてブラッド族にオルフェノクだ」

「怪人なのか?」

「ああ因みに宗一はブラッド星でエボルトとキルバスに勝った事があるらしい」

「何の冗談だ？あの化け物コンビに勝つなど」

「俺もそう思った、けど腕は立つし信頼できる」

「なら問題ない、逆らえば」

「逆らえば？」

「生きたままプレス機にかけて潰し続けるか…或いは創世王のように体液を抜き取られるだけの検体にされるから気をつけろ」

「絶対逆らいません」

「よし」

「俺より脅し慣れてるな」

「そこは経験の差と…バカ旦那の棍棒外交の影響だな」

「そうかく流石キャロル!!」

ハルトは笑顔でガバツと抱きつき、頭を撫でると、それはもうリラックス効果があるのが穏やかな顔つきになる

「おい抱きつくなハルト!!」

「えく久しぶりだから良いじゃーん…うん束が俺からハルニウムという訳分からない物質を摂取してた気持ち分かるなコレ、うん落ち着くわ」

「場を弁えろ!!」

「ん、分かった」

そう言つて離すとハジメが真面目な話に戻す

「それで香織の件だがー」

場面は変わり 闘技場にてハジメがクラスメイトにオルクスで見た世界の事実を話すらしいが

まず香織さんについての話だが

「ハジメくーん！うけとめてえええええ！」

と何か空から叫びながら落ちてくる奴がいた…何アレ？と首を傾げているとハジメ君はスツと動いて……スルーした

「へ？」

ドーーーーーン！と強い振動と出来たクレーターに全員唾然としていると

出てきたのは銀髪の人……ん？確かこの人は…

「ほほお……良くもまあ俺の前に現れたな神の使徒とやら、うちのピースメーカーや兵器群を台無ししてくれた礼をたつぷりさせて貰おうか…あと序でに俺の目の前で神の使徒（アンノウン）を語った大罪 その身で味わえ」

骨を鳴らしながら彼女に近づくと妙に人間臭い動きで

「ちよちよっ！待って！違うの！あ、いやこの体の持ち主がやった事だけど、私じゃないの！！」

「あ？」

流石の言い訳に固まったハルトだが、どうやら勇者パーティのメンバー 雫は何かに気づいたようで目を見開く

「か、香織なの？」

「そうだよ私だよ！」

そして始まる説明 死んで抜け出た香織の魂を

神代魔法 魂魄魔法で固定 その後肉体を治癒したのだが…ハジメの役に立ちたいと元の肉体に帰るのを拒否しハジメが倒したノイントの体を治して取り憑いたとの事

「死体に取り憑くとか悪霊じゃん……いや待てよ確か魔戒騎士なるヒーローの敵もそんな感じの敵だったような」

「違いますよ我が魔王、ホラーはどちらかというトファントムのような怪人になります
が」

「そうだったな……うーん」

「どうされましたか我が魔王？」

「あ、いや…俺も悪役ロールをする時さ、あのジंगाって悪役みたいになりたいなって思ってたさ！ジオウの士さんみたいな感じでカッコ良い…いや待て！演者さんが同じだあ！！」

「ご安心ください我が魔王、この世界の民間人からしたら既に我が魔王はジंगा並の恐怖を抱かれていますから」

「マジで！！」

「いや寧ろ逆に何故、ヒーローのように慕われてると思う」

「まあそうだな」

と話している中、会話は進み

「何だよソレ！つまり俺達は神の掌で踊らされていたって事なのか！何で話くれなかつたんだよ!!」

「俺がそうって話したところでお前信じたか？どうせお前のことだからご都合解釈して、教会の信じる神が悪い訳ないとか言うだろう」

「そうだよなあ、トーマも同じ事をするよ。あの正義バカなら必ずとか頷く、似た者を知るからこそその共感である」

「なら何度でも言ってくれば」

「何で俺が俺がお前にそこまで時間を使わないといけない？」

「そーそー時間の無駄」

「何言ってるんだ、一緒にこれから戦うなら」

「は？ いやいや挑まれたら戦うが態々見つけ出して倒す気は無いぞ？」

「っ！ この世界の人間がどうなっても良いって言うのか！」

「顔も名前も知らない人間に振るう力なんてない」

「何でだよ！ お前達は俺より強いじゃないか！ それだけの力があるなら正しい事の為に使うべきだよ！」

お、珍しく良いこと言ったなと思ひ、ハルトは勇者（笑）を威圧した

「アホじゃねえの？ 何でお前が俺達の旅についてくとか仲間とか、正しさとかどの口で言ってるの？」

いや何で？という顔をしている先生親衛隊の隣でオルクス迷宮での顛末を知る面々からは

あ、ヤベ という顔になっていた

そう以前の迷宮での戦闘で勇者はハルトを面前で侮辱し、その怒りをぶつける前にハジメにノックアウトされた一幕を

ハジメの説得で止まったがハルトからしたら、未だ憎悪の対象であり アリエルの身柄を狙った前科者であるが

愚者は過ちを繰り返す

「何を言つて…まさか…：そうか！お前がああの化け物の力で今回の件を引き起こしたのか！：檜山も恵里も貴様に利用されてたんだ!!」

「はっ！」

「檜山は利用されたんだ！卑劣な奴め…拷問されてる檜山を解放しろ!!」

「何でやねん」

思わずハジメが関西弁でツツコミ入れる程の展開、解放したら逆にナツキかハジメに殺されるのだが、その辺理解してないときた

「生きてるんだから幸せじゃね？つかこの世界でもあつちの世界でもさ前に言ってたお前の理屈なら人殺しは悪い事なんだろう？なら殺人犯を野放しにする方が悪じゃないのか？」

以前迷宮で言われた事をブーメランよろしく投げ返した

『お前、死は慈悲であるとか言ってなかったか？』

記憶にございませぬ、と目線を逸らす…何故このバカ勇者は俺をここまで罵倒する

の
だ
ら
う

「論点をすり替えるな！俺達のクラスメイトを解放するんだ!!そんな幼い女の子を連れ、女の子にそんな露出の高い服装をさせる奴の言葉なんて信用出来るか！」

その目線にはキャロルとアリエルが…ふむ初対面なのだろうが…露出に関してはシアさんも見て言ってくれお頭を抱える

「君達、安心してくれ僕がそいつを倒して解放するから！そんな奴の言う事を聞く必要なんてないんだ！」

そこで止めておけば良かったものを

.....

「そんな醜い化け物なんか捨ててこっちに来るんだ！」

その一言が完全に地雷だったのだろう、ハルトの瞳から光が消えると同時に己に課し

た枷を外す

「クソガキが…灰すら残さず消しとばしてやろうかあ!!」

怒りの余り威圧のビジョンで復活状態のドン・スライムが現れる程の威圧と魔王覇気の同時使用、周囲にいた野生動物は全速力でハイリヒ王国から逃げるように去つていき、旧四天王に関しては冷や汗を掻きながら冷静にカレン達に殺意が当たらないようにする

「おい、貴様……」

だがハルトの怒りから我に帰った自らの隣にいる小さな女の子の放つ 己を超える怒りによって

「へ?」

「誰の旦那が化け物だと?」

「旦那？え…」

「そいつ見た目は子供でも中身は百年以上生きてる錬金術師だからなんだよな」

ハジメの補足に勇者は何を思ったか

「こ、子供扱いした事に腹を立てたなら謝る、けど！君の知識や研究を正しい事の為に使うんだ！錬金術…僕達の世界でも奇跡のような力でこの世界を救うんだ！」

何か酔っているようだが…このバカは何処まで俺達の地雷を踏めば気が済むのだろう

奇跡 それはキャロルにとって最大の地雷であるのに

「奇跡だと？…笑わせるな…オレは奇跡の殺戮者だ！」

「でた！キャロルの決め台詞！」

「茶化してないで止めてくれハルト!!」

「やだ、あの勇者は死ねば良い」

「そんな子供みたいな事言わないでよ！」

ナツキが説得するがハルトは嫌がり

「キャロル」

「何だ？」

「万象黙示録、完成させちゃう？」

「良いだろう、前はハルトに止められたが今回はこの世界で万象黙示録を完成させてや

ろう！」

「よっしゃ！実は前にガリイ達から滅びの旋律のデータを受け取ってたのが役に立ったな」

「良くやったハルトはチフォージュ・シャトー級の施設で滅びの唄を奏でるだけだ」

「それなら最近異世界で見つけて俺が復元したクライシス要塞があるからそれ使おう」

「用意が良いな」

「魔王ですから！」

「ちよつと待て！どこではそんなの見つけてきた！つてその前に世界破滅させるとか辞めろお!!」

「安心しろナツキ、俺も無名剣に選ばれた日から常に破滅の本を携帯しているんだよ気

分次第でこんな世界簡単に滅ぼせるんだ」

笑顔で破滅の本を見せる姿にナツキはハリセン片手にツツコミを入れた

「物騒なもの携帯してんじゃねえよ!!」

「流石魔王ちゃん」

「発言がラスボスだな」

「感心してる場合か!？」

「ええ！マジで破滅の本を持つてんの!!」

「見せて見せて！」

「おう実はな…このページを開くとシミーが大量に溢れ出るのが分かったんだよ。んで

次のページ開くと」

「いや真面目に止めろ！お前の嫁だろうが！」

「ええ！うーん……………」

目線を逸らすと彼女は勇者wの前に立つと

「お前に分かるか？世界から忌み嫌われた者達を笑顔で受け入れるアイツの優しさが！仲間達が笑って暮らせる居場所を作る為に国を興せる決断力が！喧嘩別れした惚れた相手を守る為に世界の壁を世界全てを敵に回して戦う覚悟が！自分の大切なものを守る為に人間を辞めてでも成し遂げようという思いが！貴様にはあるのかあ！」

何か凄いヒートアップしていらっしやる!!

「その男は言葉ではなく行動で全部示したのだ！貴様のようにハリボテの言葉ではなく行動でだ！」

その熱弁にハルトは頬を赤らめるも

「時折ノリと勢いで周りを巻き込んで色々やらさす!! 現地妻は勝手に増やすなど周りに迷惑もかけるが!!」

「おい」

それは一瞬でしかなかった…が

「だが、それでもオレの選んだ男だ! 生涯オレの隣にいる男だ! オレを守る為に笑いながら世界全てを敵に回す事を躊躇わなかった男だ! 惚れた男を侮辱するのは国家だろうが神だろうが何だろうが許さん!!」

「キャラル……………やばい惚れる…いや既に惚れてるわ何て男前に口説いてくれるんだ、俺の心臓がドキドキで壊れそう…まづい……………」

再び顔を赤くして熱に浮かされた瞳でキャロルを見てると

「おおキャロルちゃんが、ぶっちゃけた！」

「盛大に惚気た!!」

「大胆じゃな流石はハルト坊の嫁よ」

「ん?………っ／／!!」

「勢いで自滅するのは魔王様と同じですね」

「ダメですよフィーニス言ってしまったら」

自分の言葉を思い出すと同時に赤面し頭から煙が出たキャロルであった

その頃 逢魔では

「はっ！何かキャロリンがハルくんへ熱烈ラブコールをした気配が!!」

「落ち着け東、キャロルなら彼処に……いない!!」

「そう言えばキャロル、何処か行つてたよ」

「それを先に言え銀狼!!」

「行くよ皆！ハルくんとのいちやラブなんて東さん以外にやらせるかあ!!あとハルニウムの摂取だあ!!」

「待て東!!」

そして場面は戻り

頷く面々に

「ハジメ」

「何でしょうユエさん」

「あの人、私と似てるから気持ちかわかる：ハジメをバカにされて許せる訳ない」

「ドリユツケンでナニを潰してやるですう!!」

「命の恩人を愚弄されて許せる訳がない！」

「ユエ堪えてくれないか!!頼むから!!シアもジナイーダも落ち着けえ!!」

ハジメはハジメで動けなくなったのである

「な、何故……そうか！全部お前が操ってそう言わせてるんだな！洗脳するなんて絶対許せな—

ある意味で勇者、しかしこれは流石にマズイと思ったのか雫が鞘で勇者を殴り気絶させた

「ごめんなさい！色々言いたい気持ちはあるだろうけど今は怒りを抑えてくれないかしら!!」

だが

「謝罪で済めば警察はいらん、消えろ」

無慈悲とばかりのキヤロルにハルトはやれやれと被りをふる、何とか怒りは消え失せて抱いたのは彼女への感謝である

「キヤロル」

「何だハルト」

「ありがとうな俺の為に怒ってくれて」

「あ、当たり前だ！彼処まで大事な人が言われて怒らない奴などいるか…」

「そうか…本当に嬉しい」

「お、おう…」

「俺みたいなのを選んでくれて、ありがとう」

「やはり貴様は大馬鹿だな…なんかではないお前だから選んだのだ」

「キャロル」「ハルト…」

「はいはい2人の世界に入らない！」

「ベアトリス、流石に空気を読みなさい」

「アンティリーネさんに言われた!？」

「ちよつと私の認識を聞きたいのだけど？」

と抱きしめ合う2人に目を覚まし地面にうつ伏せになっていた勇者が

「光輝、あの2人が洗脳されてるとか言ってたけどそんな関係に思えるかしら？」

「……………」

「本当に愛し合っているの、私の知ってる形とは違うだろうけどね」

「……………」

勇者は何か言いたげな顔をしているが雫は再び謝罪する

「うちの人が貴方達に酷い事を言ったわ、ごめんなさい…その南雲君…」

「分かった香織は任せろ…後、いい加減に矯正しないとあのバカ必ず死ぬぞ」

「分かった…一応参考までに聞くけど彼、何者？」

「大雑把に言えば異世界の魔王で迷宮の創設者と共に邪神と戦ったメンバーさ…色々あってその辺の記憶はないがな」

「そう…えーと」

「取り敢えず、あのバカとハルト達を関わらせるな…でないと次はどうなるか分からん」

「肝に銘じるわ」

「後、あそこの女の子はお前たちが捕らえようとした樹海の神獣だ」

「え!？」

「教会の奴らが何企んでか知らないが、お前達に襲われる情報を掴んだからハルトに保護を求めて一緒にいるとき」

「そうだったの…」

「因みにさ、あの時私をどうするつもりだったのかな」

「えーと…蜘蛛の魔物だから人じゃない、使い魔にして旅へ連れて行けと教会の人が…」

「うんうん、ねえハルト」

「何？」

「この辺の教会に深淵魔法を打ち込んで良いかな？」

「いいともー」

「はーいじゃあ行ってくるねー」

「待って頂戴!!」

話　　それで場は引いたが後の迷宮攻略でハルトは徹底的に勇者を叩き潰すのは少し先の

――――

そしてATATにて

「いやあまさかキャラルが俺のことをあんなに想ってたなんて」

「……………忘れろ」

そこには顔を真っ赤にして蹲るキャロルが…可愛い!

「やだ…まあ今日は気分が良いから」飯奮発しちやおく宝石の肉のフルコースだあ」

「因みに何言われたの？」

「生涯隣に立ってくれるって」

「ほお」

「へえ」

何故だろうデジヤブが止まらない

「え?ち、千冬!束!?!何でここに!?!」

そこには逢魔にいる筈の2人がいた

「キャロリンを迎えに来たんだよ！もう抜け駆けして！東さんは怒ってるんだよ！しかもハルくんといチャコラしてるとか完全にギルティだよ!!」

「お前たちの仕事を終えるのが遅いのが悪い」

「何おお！」

と東と久しぶりのやり取りを見ている中

「千冬さーん!!」

「どうしたベアトリス？」

「ハルトさんが行く先先で問題ばかり起こして私大変でした……何か千冬さんいないからか羽を伸ばしたようにトラブルを起こすんです!!」

「分かった何も言うな…」

ベアトリスが泣きながら抱きつく姿に大方の事情は理解したのであった

「千冬さん！私頑張りましたよ…」

「ああ…さてハルト」

「ん？」

「そこに直れ」

「はい」

抵抗は無意味とばかりに素直に従う、千冬には頭が上がらないのだ

『千冬にもだろ相棒』

「まあな」

「何故、私が怒ってるか分かるか」

「えーとシヨツカーと同盟結んだ事？それともノリと勢いでオーマジオウに宣戦布告した事？それとも修行の一環で黙ってグルメ界に行つて八王に喧嘩売つた事？それともドンスラの力試しに山を消しとばした事？それとも「おい待て」はい？」

「何だそれは？」

「ん？あれ全部違うの？」

「東、逢魔からカレラとウルティマを呼んでこい余罪の追求と行くぞ」

「しまった！藪蛇だった!!」

「貴様、私が見てないからといって何をしたあ!!」

「結果から言えば魔物と屍兵の大量虐殺!!」

「正座だあ！それと過程を説明しろお！」

「イエス、ママ！」

結果数時間正座していたのは言うまでもない

結果

「足が痺れた……」

「にやるほど……よしハルクン！ここは束さんが膝枕をしてあげよう！」

「わーい！束大好き!!」

と普段のノリに戻るハルトを見て千冬はため息を吐くと

「はあ…それで何故、ハルトがあんなにささくれ立っている？彼処まで不機嫌なハルトは久しぶりだぞ」

「分かるのですか？」

「アレと何年いると思う、あのバカが素直に人に甘える時は決まって嫌な事があった時だ」

「慧眼ですね」

「茶化すな、何があつたのだウオズ」

「簡単に言えば我が魔王の旅路と出会つた女性達に向かつて我が魔王が彼女達を洗脳と恐怖で従わせたのだと妄言を吐く阿呆の対応でイラついてました」

その言葉を聞いて2人の瞳から色が消えると

「はっ。」

千冬と東の殺意に思わず宗一と政人はガクブルである

「誰だそれを言った奴は？」

「あはは〜それは東さんの的に笑えないなあ」

ゴゴゴと物理的に大気がゆらめくほどの圧力に驚く面々、千冬は通信機を取り出して

「銀狼」

『聞いてるよ、そいつらの個人情報特定してそいつらの世界にあるネットにばら撒く』

「流石だな銀狼」

「いや待てネット方面からの攻撃は流石に怖いぞ!!」

『安心して私は天才ハッカー…狙った情報だけ漏洩させる』

「怖っ!?!」

『当然、因みに錫音もキレてる…ゾルトラークの飽和攻撃で蜂の巣にしてやるって』

「へえ〜楽しみだなあ」

『因みにテストタロツサ、カレラ、ウルティマが早く呼んでくれて、その勇者を消し飛ばしたいって』

「よし今すぐ呼ぶか…えーと召喚魔法!」

「全力で止めてください!!お願いします!!」

『ごめんよナツキ、私は非力なんだ戦闘力なんてあつてないようなものだしね』

「どの口が…」

久しぶりのやり取りに安堵していきりとハジメがA T A Tにやってきて

「なあハルト」

「何？」

「相談があるんだが」

ハジメの提案は勇者パーティを連れていこうと言う事だった

「ええ……」

「気持ちにはわかるが、アレには使い道がある」

「使い道？んなの炭鉱のカナリア以下の…あ…」

「そうだ」

「成る程な肉壁にして囃か」

流石ハジメ君だなど頷くも

「アイツらとは別行動なのと俺の船には載せないから乗ろうとしたら攻撃するようにハウンドに言っておく…ハウンド」

「はっ！」

「近づいたら撃て、慈悲は不要…アレは敵だ」

「サーイエッサー!!」

流石に学生を撃つのは上官の命令でも意見したいハウンドであったが出禁や射殺命令にも納得であった後ろにいた女性陣がそれはもう良い笑顔をしていた：逆らえば殺されるというのは過去の経験から学んでいたのである

翌日。王国での食堂でハジメの思惑通りなのか本人の意思かは知らないが

リリアーナ王女が帝国に行き会談する道中の護衛を依頼したのを機に

「化け物と南雲にこの世界を任せられない」と訳の分からない理論を言いながらもハジメが場所を教えるから自分達でやれと言うのに、俺達の迷宮攻略に寄生して神代魔法を貰おうという薄汚い野心が見え隠れする勇者に呆れると

「これが勇者なら俺の勇者の方がマシだわ」

「な、何だよハルト急に褒めるなよ〜」

だがハルトは思い出した 作戦開始前に自分を屑魔王呼びした事を

「お前も似た者だったな」

「何で!？」

「あ、その……実は貴方達にご依頼したい事が」

「断る」

「あの私王女ですが」

「俺も王だ……まあ魔王だがな」

「なら対等ですね」

「王位を得てない小娘の依頼などき「おいハルト」ん？」

「聞いてやれ、本当に困ってるみたいだぞ」

「千冬がそう言うなら……聞くだけ聞く」

勇者パーティの面々はハルトが素直なのに驚くも

「んで依頼って」

「それがー」

—————

そして場面は変わりピースメーカーの代役として現れた
アクラメイター級スター
シッフ

その名も レストインピース（安らかに眠れ）

明らかに輸送船の名前につけてはダメである

「という訳で樹海にいるって言う山みたいな牛と狼の調査に向かいます」

「魔物では？」

「俺もそう思うんだけどさ…もしトバスピノみたいな奴だったら面白そうじゃね！」

「はあ……」

「という訳で志願者で行こうと思いまーす！俺と樹海に行きたい人！」

「妾は行くぞ面白い匂いがする」

「となりましたら私もですね…2人だけにしておくとしておくと樹海が焼き払われる」

「でしたら私も土地勘はあります」

「なら私も行く！」

ヤクヅキ、ウオズ、カレン、アリエルは参加と

「因みに行かなかったら？」

「うーん……留守番組は暫く保存用のレーション暮らししか持ち回りでご飯当番だよ」

「」「」「ぜひ行かせてください!!」「」「」

そう言うのと全員が目の色を変えて挙手したのは言うまでもない……おいそこまでか

「わーった、わーった……そうなると悪いハジメ君、俺達は別行動を取るわ」

「その方が良いな、帝国に姫さま下ろしたらすぐに樹海に向かうハウリアの場所で合流

と行こう」

「了解」

ハジメからしたら勇者と行動してハルトが暴れる方が危険と判断したのであった

そして広い場所に出て何かを待っているも

「そろそろか」

そう呟くとポータルが開くと現れた、アクラメイター級…それに乗り込むと装備を整

え

「いざ発進！」「ちよつと待ってくれないかい？」白スーツ？」

「やあ久しぶりだね魔王」

「何のようだ？」

「失礼、ヤクヅキ宛てにオーディエンスから贈り物があつてね」

「妾に？」

「そう、君向けの逸品だ剣と聞いたから間違つてファルシオン世界に届いてたみたいでね代わりに持つて来たんだよ」

「ファルシオンの俺か…元気してた？」

「ああ2人の女性に押し倒されてたよ」

「そうかそうか…つておい」

「平常運転だな」

「ハーレムしてる辺り魔王様ですね」

「ハルト…お前…」

「俺そんな認識!？」

「まあ話を戻してと「その前に」何かな？」

「時崎狂三とは如何なんだ白スーツ」

「下世話な話題だね…ノーコメント」

「人の人生は物語にする癖に自分の物語は語らんのか」

「それが私だからね…さて受け取りたまえ」

「妾に贈り物か…む？アクセサリーか？」

ヤクヅキが取り出したのは円形のネックレスであったが

「それを装飾品を持ってみな」

「うむ、おお」

すると装飾部は折り畳まれ半月型のナックルガードをした剣となる

『拷奏剣 プラスレイダー』

「プラスレイダー？そんな聖剣あったかな？」

「それ魔剣だってタツセルが言ってた」

「何つーもの持たせてんだ！ヤクヅキそんなの投げ捨てる！」

「とんでもない！その魔剣はオーディエンスの手で製作された一点物だよ、それとライ

ドブックとカリバー型のバツクルもあるから使つてよ！」

「至れり尽せりだな」

「ほお……しかしこの剣、刃がないようじゃが……」

「えーと説明書によると……ふむその剣には魔力を流す事で魔力の刃と内部から金属の剣が出せるみたいだね形は自由自在と」

「ほお……中々じゃな」

「そしてヤクヅキ専用ブックが、この【トーマンター獄門帳】ヤクヅキの拷問日誌がライドブックになったよ」

「ほほお中々良い趣味じゃな」

「ライドブック化する程したヤクヅキの拷問日誌とか怖えよ」

「因みに他には【不夜城の帝】【吸血婦人カーミラ】【断頭執行人サンソン】と…後これだ」

現れたのは禍々しいオーラを帯びたライドブックである、歪みすぎて表紙がわからな
いときた

【暗殺紳士ジャック／暗殺怨霊ジャック】

「なあこれまさか英霊内蔵の奴じゃ」

「いや違う、そうなると武則天、カーミラ、サンソン、ジャックがやってくるからな」

「歴史的にも類を見ない程の悪方面の英霊ばかりじゃねえか！ソレの力引き出すとかマ
ジの魔剣だよソレ！」

だが肝心の本人は

「ははは！気に入ったぞハルト坊！実は前々からファンガイアにだけザンバットソード

なる剣があり羨ましいと思っておったのじゃ！これは良い拷奏剣：拷問して悲鳴を奏
でろという事か！」

「正解だ」

「正解だったのか白スーツ!!」

「まあ君の場合はマニュアルより使って覚える方が早いかな」

「そうじゃな…さてお主らは試し切りの案山子となれえ!!」

「「うわああああ!!」」

「待たんかあああ!!」

ヤクヅキが残りの旧四天王に斬りかかる姿を見て

「主！ヤクヅキさんがご乱心です!!止めなければ」

「ああアレなら逢魔では日常だから大丈夫だよ、ほら見てご覧ヤクヅキだつて本気で斬ろうとは思ってないから」

「成る程のお使い方が分かつてきたぞ覚悟せい！おい…待て誰がロリババアじゃあ！手足を盆栽のように剪定してやろう!!」

「そんな事誰も言つて…ああああ!!」

「ジヨウゲーーーーン!!」

「せんぱーーーーい!!…よし今のうちに逃げるか」

「逃すか！おのれファイニス!!空を自由に飛べれば……」

恐らく、あの猫型ロボットでも必ずタケ○プターは貸さないだろう

「ん？そうじゃー！」

するとブラスレイダーの形が双刃へと変わるとナツクルガードが装飾状態と同じ円形になるなり 高速で回転を始めるとヘリコプターのようにホバリングしながら空を飛ぶのであった（スターウォーズの尋問官がライトセーバーで飛んでいるイメージで大丈夫です）

「これが妾の遊び心じゃあ!!」

「どんな遊び心だよお!!」

旧四天王の鬼ごっこを見て

「どんな国なのですか逢魔とは!!」

カレンのツツコミに頭を抱えていると千冬は溜息を吐くと同時に手に持った鞆入り

の刀剣でヤクヅキの頭を叩いて止めたのである

「つて!!てて…痛いのじゃ千冬!!」

「当然だ馬鹿者」

「んで俺には無いのか？」

「あるよ、俺からの誕生日プレゼントだ」

と投げ渡されたのは黒緑の腕時計だった

「んだよコレ」

「僕が本体に頼んで用意して貰った新しいアナザーウォッチ、その名もアナザーネクス
トウォッチだ」

それはまるでエイリアンヒーローになる為の時計型アイテムに似ているのはアレであるが

「ネクスト…何に使うのさ？」

「今までの君の戦いを見て来たがアナザーライダーから他のアナザーライダーに変身する時、ウォッチを取り出し起動し変身するというプロセスを踏むだろう」

アナザーグランドジオウは別として状況に合わせてアナザーからアナザーへと変身するのが俺の戦闘スタイルだが

「ああ」

「だがその時、君は無防備になる時間が僅かに存在していた数コンマの時間だかね…それを補う為のアイテムだよ」

「へえ…」

無自覚の欠点に驚くハルトだったが

「そのネクストウォッチには君の持っているアナザーライダーの意識を移せば大丈夫だ、そしたらイメージするだけで他のアナザーウォッチが現れて自動変身さ、後は怪人に化身する時のアイテムも格納済みなのと、特におすすめのコレ！」

「んだコレ？」

ネクストウォッチのダイヤルを回すとライダークレストが浮かび上がる

クウガからガッチャードまでクレストが刻まれているが、ないのもあるな…

「アイテムを介さずに怪人になる時に使ってくれその辺のライダー怪人のデータは入れてある」

「はいよ……んじゃ調査開始だ！レストインピース！発進!!」

騒がしい話と共にエンジンを蒸しながら樹海へと進路を向けたのである

そして樹海に到着すると白スーツは離れていきハルト達は

「この辺で現れたらしいけどな」

座標に記された場所にきたが獣のけのじもない

「うーん…ディスクアニマルとか色々使うのも疲れるんだよなあ……ん？」

ボヤいていると 待て！と叫ぶ声に向くと何処となく見覚えの民族衣装を来た青年の兄弟である 体格の良い 恐らく兄の方だが

「人？」

「お前は王国か帝国の手先か？」

「んや、俺達はギルドからの依頼で此処に現れたって話の牛や狼の調査に来ただけだが？」

「星狩族を連れてか？」

おい待て

「え？……は？お前何者だ」

「やはりな……この星を貴様等の思い通りにはさせんぞ！騎士転生！はっ!!」

すると男は剣を掲げて体を牛のような意匠を持つ黒い戦士へと変わる

「黒騎士ブルブラック!!」

まさかの登場に

「はあああああ!？」

「覚悟しろ星狩族!!」

「いや俺かよ!!」

宗一をロックオンしたのでハルト達は顔を合わせ頷くと

「んじゃ宗一、後は任せた」

「俺達はレストインピースに戻っておくわ」

「あ、久しぶりに卓囲もうぜ」

「ちよつと待ってえ!!」

「待て貴様等も奴の仲間だろう？ならばこの森から生かしておく訳にはいかない！来い
ゴウタウラス!!」

すると地鳴りと共に現れたのは山のような牛…否！星を守る聖獣である!!

「ゴウタウラスまで…どうなつてんだよ！話は…聞いて貰えそうにないから…正当防
衛だ！ブレイブイン！行けトバスピノ!!」

「なら俺もプレズオン！お願い!!」

2人は獣電竜を呼び出して戦わせるのであったが その樹海にある木の上から一連
の流れを白スーツが見ていた

「うわあやつぱりこうなるか」

「やっと見つけましたわ白スーツさん」

そこに現れたのはゴスロリの片瞳が時計の美少女 時崎狂三である

「やあ狂三、どうだった？」

「ええ見つけましたが分身体が何人かやられてしまいました…まさか樹海に逃げるとは思わなかったのです」

「やっぱりか…しかし珍しく本体からの指示で何かと思ったらさ」

間違つてハイブリッド恐竜を送ったから回収してとかマジかよ」

「特級な外来種を樹海に放つとか何を考えているのでしょうかね」

「そうだよなあ…」

その森の中に

「グルルルル」「!!!」

人の手によって生み出された被害者にて加害者の唸り声が響くのであった

樹海から出てきてKILL THEM all!!

前回のあらすじ

ハルトは王都での騒動解決後、ハイリヒ王国女王 リリアーナの依頼を受け樹海に現れたという魔物?の調査を行う

樹海について早々に邂逅した 黒騎士ブルブラックは何故か星狩族というだけで宗一に襲い掛かるが ハルト達を仲間と誤解した所為かゴウタウラスをけしかけられたので獣電竜で迎撃するのであった

「ちよつと待つてくれ!俺は確かにブラッド族だが別にこの星を滅ぼそうなんて考えてないぞ!」

「そう言つて俺達を油断させるつもりだろう!」

とりつく島がないとはまさにこの事である

「あーもう！話聞けって…変身!!」

『エボルコブラ!!』

スチームブレードでブルブラックの剣を受け止めるも力で押され始めた

場面は変わり

「おい政人」

「何だよハルト」

「この状況を丸く収める名案がある」

「一応聞けど何だよ？」

「あそこの子供を人質にして交渉する」

*悪人のような事を言ってますが彼は主人公です

「お前それやっちゃダメな奴だろ！」

「ええ！手っ取り早く終わるのにい〜」

「だからってそう言うのはダメだろ！」

「なら…トバスピノの強制カミツキ合体だ！スピノダイオーになって、さっさとゴウタウラスを叩き潰せ!!」

「ならこっちもロケット変…形？」

ハルトとナツキはロボットモードにして決着と考えたが遠くから聞こえる狼の遠吠えに手を止めたのである

「何だアレ？」

「狼の遠吠えだな……そういやあ依頼の対象に……」

とナツキが思い出した瞬間 森を全速力で駆け抜けトバスピノに体当たりをして吹き飛ばすとそのままプレズオンの上に乗ったものがあった

「!!!」

それは狼というには余りにも大きすぎた

大きく、いかつく、そしてパワーアニマル過ぎた

「ベル○ルク風のナレーションで解説してんじゃねえよ!!パワーアニマル?……つて、あれまさかガオウルフか!？」

「本当この樹海どうなってるんだよ、異世界から来た外来種を野に放ちすぎだろ！」

「一番の外来種が何か言ってるよ」

「何か言ったかなナツキ君？」

「違うわ！見てみるよ宗一が完全にロックオンされてるぞ！！」

「流星狩族。前にあいつらのいる星を襲ったんだろうな」

「感心してんじゃねえよ！！」

ガオウルフの遠吠えに合わせて飛んで来たものが更にいた

「!!!」
「!!!」
「!!!」

「ガオアリゲーターにガオハンマーヘッドまで！」

「何、宗一ってガオシルバーなのか!!」

2人が混乱の極みにいるとブルブラックと間合いを取ったエボルとなった宗一は

「おいおい何でお前等が…」

「知り合いなの？」

「おあ…前に色々な」

「ガオアニマルと面識が…ふざけるな！星狩族は言葉巧みに騙してくる！そんな奴の言葉など信じられるか！」

「だったら…フェーズ2」

『ドラゴン／ライダーシステム evolution!!』

『are you ready?』

「変身!!」

『ドラゴン…ドラゴン…エボルドラゴン!フハハハ!!』

頭部は仮面ライダークローズになったエボル、全身はスラつとしているが宿る力は跳ね上がる

古来より神聖とされる竜だが、その反面 破壊や厄災 という負の側面も現れる

星を滅ぼす邪竜 仮面ライダーエボル・ドラゴンフォーム

「フェーズ2…完了」

『ビートクローザー』

「見てくれが変わった所で!!」

「ああ関係ねえだろ!!」

再び戦う2人を見守るようにガオウルフ達は観戦していた……プレズオンの上で

「いや降りろよ!!」

「だったら引き摺り下ろしてや……ん?」

何か樹木を薙ぎ倒しながら此方へ進んでくる音が

そして樹木を薙ぎ倒したものは現れると同時に天にも届く咆哮を上げた

!!!
!!!
!!!

白い肌に長い手足を持つ二足歩行の竜 それはかつて地球に君臨していた覇者……なのだが

「あんな奴いたか?」

そう存在しない 人間の歪んだエゴが生み出した新種の存在 あらゆる恐竜、生物の
遺伝子を組み合わせさせて生まれた新世代のハイブリッド達

その名は

!!!
!!!

制御不能の暴君 インドミナスレックス

!!!
!!!

蠍の王 スコーピオスレックス

現る

「何じゃコリャ!!」

「おい白スーツからメールだぞー！」

ナツキが開くと立体映像と共にメッセージが再生される

『やあ！その様子だと二匹に会ったみたいだね：アレは私の本体から送られたハイブリッド恐竜だよ』

「ハイブリッド？」

『簡単に言えば色々な生物の遺伝子を組み合わせたキメラだね』

「おお……」

『デカいのかインドミナスレックス、頭が良くて強くてタフな奴だ、隣にいるのはスコーパーオスレックス：情緒不安定で一分間位しか大人しく出来ず行動も予測不可能な上に単為生殖で増殖するし猛毒攻撃をする危険な奴だ』

「何ですか……それ……」

ウオズが震えながら一言

「ウオズ危ないから、皆を連れてレストインピースまで戻って！」

だが最古参の従者はキリツとした顔で一言

「我が魔王の方が、ずっと危険ではありませんか！」

「は？」

「驚いて損したぞ！」

「そうだよ！一分所か10秒も我慢出来ずに変な所で暴れ出す魔王ちゃんに比べたら1分も我慢出来るとか可愛いものじゃないの！」

「なあ相棒、俺はあいつ等より危険な猛獣か？」

『安心しろ相棒、お前の方が危険だから』

『そうじゃな、わしを宿してるからの』

「何とかアイツらの強さの物差しが壊れてて心配だよ」

「いやお前も大概だからな」

「え？何で？」

『お前：…今のゴオマはな……正直に言うとなTV版のガドルと戦って勝てる可能性がある位強いぞ？…』

「いやいやまさかそんな俺とダグバのワンパンチで沈むような奴だよ閣下より強いとかないって〜」

『それはお前等がおかしいだけなのだが…』

「我が魔王、あのトカゲ擬きは我々にお任せください!!」

「え? いや任せるけど、後で覚えてろよお前等」

流石に俺はあその恐竜よりは危険じゃないだろうと思うのだが…解せない…
はあ溜息を吐いていたのだが

「トカゲが増えたぞおお!」

よく見ると単為生殖したスコーパーピオスレックスが…ほほお

「丁度良い、八つ当たりさせろ」

「アレ見てそう言えるなら十分に化け物だよ」

ハルトは笑いながら走り出すと瞬時に最高速度まで加速、大口開けて威嚇するスコーパーピオスレックスの顎目掛けて全力の飛び膝蹴りを叩き込んだ

「うるせえええ!!」

初手の一撃でズシン!!と地鳴りを上げながら倒れたスコープオスレックスを取り敢えずノツキングしてもう一頭を見る

「あはは……行くぞオラア!!」

と襲い掛かる姿を見て

レストインピース内に待機している面々は

「うわあハルくんが見てない間に凄いバトルジャンキーになってる!あ、恐竜の尻尾掴んでジャイアントスローしたあ!!」

「あの恐竜相手に怯まずか」

『調べたけど、アレ猛毒があるから本来なら即死するんだけど…あ、後ね』

と銀狼が先程白スーツが話した情報を伝えると

「何だ一分間も大人しく出来るとかハルくんより大人しいじゃん」

「ハルトより待てが出来るあたり利口だな」

「ああ…少なくともインドミナスの方もハルトより知能は高そうだ」

うんうんと頷く面々に二亜が

「いやいや三人とも旦那の知能がトカゲ以下で良いんですか!!」

「ハルトは馬鹿な方が可愛い」

「うんうん」

「えーと…あの先輩方、助けなくて良いんですか？」

「お前は確 瑞鶴と言ったな…知らないようだから教えておくぞ、ああなったハルトは放っておくのが一番だ…適当に暴れさせるのがガス抜きになる」

「ええ…」

「えーと彼処で恐竜と生身で喧嘩して暴れてるのが私達の旦那なのですが…」

「翔鶴ちゃんだね、まあアレだよ…直ぐに慣れるよハルくんはねえ…山のように大きな竜とか究極の闇というラスボスと笑いながら殴り合ってたんだ！」

「そんな非日常には慣れたくはありませんね」

「これが逢魔の日常よ」

「何て人外魔境なのよ…セイレーンが可愛く思えるわ…」

「ねえ、あれ美味しいのかな？」

「辞めなさいアリエル、断言するアレは美味しくはないわ」

「リーネんのツツコミする所違うと思うのは私だけかなあ!!」

「二亜、落ち着け…お前は正しい」

「だよね千冬ん!!…はっ！ハルきち！」

「何だ二亜！」

通信機で話しかける…まさか何か見つけたのか！と驚くも

「今度の漫画で使うから、そいつの動きを抑えて貰えるかなあ！」

「OK!!」

そしてスコープオスレックスの首を掴むと

「ふん！」

(首の折れる音)

と共に目を白黒させたスコープオスレックスがズシンと倒れ伏したのであった

「コレでよし」

「おおおお！よしコレで次回のネタが埋まるぞお！」

と紙に絵を走らせていった

「まさか旦那の戦闘シーンで漫画描いてたとは…」

「リアリティ抜群だよ〜」

「確かにリアリティは凄いが…」

「あ、因みに恐竜で話を思いついたよ遺伝子実験で蘇った恐竜達のテーマパークで起こる恐竜達に襲われるパニックホラーだ」

「二亜…その話私達の世界では映画になってるぞ」

「しかも世界の巨匠が描いてるから」

「何ですトオ!! 流石は私だね! その巨匠と同じ発想とは!」

「そこで喜ぶニアにドン引きよ」

「ああもう！リーネんつてば可愛いねえ〜」

「ひっ！た、助けて旦那様あ！！」

「そこまで怯えられるとか私何かしたかなあ！！」

「あのアンティリーネ様が彼処まで怯えられている……ニア……あの方は相当な戦士に違いない」

「違うぞカレン、彼女は漫画家だ」

「え？」

「え？」

—————

「あいつ等 何やってんだよ……本当馬鹿だなあ」

あははーと笑うのだが

『相棒には言われたくないだろうな』

「んだとゴラア……まあ良いやドンスラ！」

『何じゃ？』

「見せてみるよ、お前の力」

『良からう、では手を頭上に掲げてみよ』

「え？ここう？」

すると突然雷雲が立ちこみ始めると

「『黒い稲妻!!』」

ドーーーーーン!!と爆弾が爆破したような音と衝撃、そして黒い雷撃がインドミナス

レックスとスコープオスレックスに直撃したのである

!!!
」

二匹はまだまだと立ち上がり咆哮を上げるものの 戦列復帰したトルーパー達の分
隊射撃やウオズのライダーキックで遂に気絶したのであるが

「な、何じやこりゃあ!!!」

流石のハルトも驚くしかなかったのであった…

『まあこんなものだ、本調子ではないがな』

「うわあ…お前ヤベエ奴だなドンスラ」

『ふうふう』

そして

「陛下、鎮圧完了しましたが… あのトカゲどうするつもりですか？」

「んーと、ちよつと待っててねえ」

ハルトが近づくと二匹は目を覚まし、本能のまま拘束具を引きちぎろうとしながら威嚇を開始するが

「喧しいぞトカゲ共、今日の晩飯にしてやろうかあ!!」

再びの威圧に二匹は震え上がった、それは本能に刻まれた生物として当たり前にもっているもの

それは己の命の危険である

そもそも二匹には単純な狩りの為ではなく娯楽目的で殺しをすることもある危険な奴等だが、それは実験室で生まれ他者との関わりを知らず己の生態系での立ち位置を模索していたとも言える…それで命を狙われた側は可哀想としか言えないがな

そんな二匹の前に現れた絶対的な強者の存在には怯えるしかないのである

「……………」

取り敢えず二匹を黙らせると

「俺、お前達より強い分かるな」

「……………」

「返事しろお!!」

「!!」

「日本語喋れ!!」

そう言うハルトに思わず

『言葉も話せない奴に…なんて理不尽』

『仕方ない、これがハルトだ』

「それでお前達、俺より弱い、だから俺に従うOK」

「!!!」

『OKだとさ』

「よし、ここにいる奴らはお前達より強い、その命令に従えと…んじゃ最初の命令だ背中に乗せてもらおうか」

取り敢えずこの辺の奴らには上下関係の刷り込みから始めようと思いはルトが威圧しながら話していると

「!!!」

そしてインドミナスレックスの背中に乗ると同時に立ち上がる

「おお！見て見て！！なんか俺カッコ良くね！！」

ハルトは剣を片手に掲げてポーズを決めていたのである

「凄い余裕ですね我が魔王」

その脇で

「ハウンド、怪我してる？」

「大丈夫だシェフイ、こんなのかすり傷さ」

「だとしてもきちんと診てもらいましょう…彼方のトカゲには毒があると聞きましたお願いですからちゃんと診てください…私を心配させないでください」

「分かったよシエフィ、なら行ってくる」

「ついていきます」

と歩く姿にトルーパー達が話していると

「おい隊長とシエフィールドの姉さん良い感じだな」

「ああ上手くいつてるよな」

「それに引き換え」

二人のトルーパーの視線はハルト達に向かう

「見てくれ皆！俺、恐竜に乗ってる！子供の頃の夢が叶ったぞ!!」

「うおお！ハルきち！少し動きを止めてて！絵にするから！」

「よっしゃあ！今の俺をカッコ良く書いてくれよ二亜！」

「任せんしやい!!」

「おいハルト、後ろに乗せろ」

「ちよつと待ったハルくんと乗るのは東さんだよ!」

「旦那様、ちよつと良いかしら」

「こほん…ご主人様、早く降りましょうか?」

「そうだ貴様ら!今の状況を考えろお!!」

「大将がアレだもんなあ」

「あの感じ、逢魔を思い出すな」

千冬が全員を叱り飛ばして場を宥めている光景に実家のような安心感を感じたト
ルーパーもいたという

「あ、宗一は？」

「えーと、アレ」

ん？と目線を向けると

「合身獣人！ブルタウラス!!」

とまさかのロボが立っているではないか！

「何じゃコリヤ!!」

「ハルト、アレ！」

と指差す方向には三色の宝玉を持つ宗一が…どうやらガオアニマルに認められたよ
うだが

「まったく俺に付き合うとは物好きな奴らだ…。なら、とことん付き合ってもらおう!! ぶんっ!!」?

? 三つの宝珠を放り投げ魔笛に装填される。そして…。

?? 「百獣召喚!!」?

宗一が持つ三つの宝珠が輝き、笛の音色が響渡っている。そして笛の音と共に3体のパワーアニマルが現れた!?!? 「何っ!?!」?? 「行くぞガオウルフ! ガオハンマーヘッド!! ガオリゲーター!! 百獣合体!!」?? 三つの宝珠が紋章を描く時…三体のパワーアニマル達は一つに重なり荒ぶる精霊の狩人が誕生するのです(c v マス○さんの人)

?? 「降臨! ガオハンター!!」

コックピットに転移して武器を構えていたのだ

「何い! カッコ良い!!」

「宗一の奴、ガオハンターに乗って…う、羨ましいぞ!」

「ああ政人だけ巨大ロボないもんな……ん？何か今俺が巨大ロボになってたような……
気のせいだな……うん、ない幻覚だ

カラカラ笑っているが

「手出し無用だ、奴の戦いに手を貸すのは誰だろうと許さない」

「つて、宗一を見捨てる気かよ!!」

「ブルブラックの怒りからして、奴の過去に何かあるんだろ？なら俺達が踏み込んで良
い問題じゃない、それに」

ハルトは艦内のモニタに目が行く

「派手に暴れたからか招かるざる客も来たようだ」

武装した帝国軍の部隊かロボットを捕まえようって感じかな

「バカな奴等……ん？」

それとあの位置だと、この船の居場所が分かるのは不味いな現状まだ光学迷彩が機能していないのである

「しようがないな……ハジメ君との合流には時間もあるし少し位なら遊んでも良いかな……は？」

すると突然 見覚えのある大爆発が帝国軍に襲いかかったのである。そしてかろうじて生き残った者達も大量に降り注ぐ魔法弾の雨により蜂の巣と化したのであった

「え、えええ……」

「アレってまさか!!」

「あ、いたいた〜ハル〜久しぶり」

魔法陣と共に転移してきたのは

「ウルティマ!! って事は…まさか」

「我が君、遊びに来たぞ！早速だが彼処で不穏な奴等を見つけたから消しとばしておいたぞー！」

「お久しぶりですわハルト様」

同じく転移してきたのは逢魔王国最強の悪魔達である

「カレラにテストアロツサ!？」

まさかの三人娘登場に驚いていると

「いや…お前等留守はどうした」

「ご安心くださいなハルト様」

「留守番ならアゲーラやモス達に任せてきたぞ」

哀れ悪魔の縦社会…今度彼等を労るとしよう…何というか可哀想過ぎる…

「そ、そうか…それで何で此処に？」

「はい」

「私達もそろそろ暴れたいと思ってるな！」

「それにキャロル達だけ狡いよねえ、ボク達なんていつも留守番なんだよ？行かないって言いながら勝手に行き来するとかさ」

「それは…悪いと思ってるけど」

「勿論、留守を任せられている意味は理解しておりますがやはり私達とてハルト様とは旅をしてみたいと思うのです」

テスタロツサの言う事にも一理あるな

「分かった、なら今回は一緒に旅しようか」

「ありがとうございますわ…では早速」

「あの勇者とやらを消しとばしに行くか」

「ダメだよ2人とも、ハルや皆を彼処まで罵倒したんだ…それ相応に絶望して貰わないとね」

「ちよつと待てー！あいつを殺すのは後にしろ!!てかそれが目的かあ!!」

「いや殺すんかい」

ナツキはやれやれと肩を竦めてツツコミすると

「なら、あの巨大な奴は？」

「ははは！中々の巨体だな……うむ私の魔法の的になるな」

うーむ、何てバトルジャンキーとハルトはやれやれと被りを振るしかなかったがどつちもどつちである

勝負の結果は両者痛み分け、野牛鋭断とガオハンターの技がすれ違い様に当たりロボ戦は終わったのだが

「まだだ、俺は倒れる訳にはいかない……俺はもう一度使命を果たす為に！」

「何か盛り上がってる所、悪いんだけどさちよつと話聞いてくれないかな黒騎士？」

「お前は神獣アリエル！」

「そうそう久しぶり、あのさ彼は星狩族だけど悪い奴じゃないよ」

「だが…」

「此処は私の顔に免じて抑えてよね」

「……………分かった」

「ごめんね、宗一くん、実は最近帝国が亜人族の奴隷狩りしてるから樹海側もピリピリしてるんだよ」

「それで俺を警戒してた訳か」

「お前の場合は種族としての危険性だな」

「何い？」

流石にカチンと来たが

「大変だ宗一！」

「何だよ政人？」

「レストインピースに逢魔三人娘が現れたぞ！」

「何い！あの逢魔最高幹部の三人が!!」

宗一は戦慄した、以前オーマジオウが自分達を派遣する前の話を思い出したのだ

こいつらを甘く見ない方が良いと

・常葉ハルト

・逢魔三人娘

・牙王やネガタロスなどダークライダー達

・ヤクヅキ

・野田ナツキ

そして！

・その他

と後にこの話をした際 宗一は旧四天王3／4とウオズ、トルーパー達に囲まれ袋叩きにした後オーマジオウに対して怒り普段よりも訓練に打ち込む事になったとかというより外様のナツキに負けたのが悔しかったらしい

「え？誰それ？」

「逢魔王国の最高戦力、ハルトが戦場に呼び出せば万の死体を築き上げると言われている」

「え、何それ怖い」

そんな話をしていると 独特な起動音のするL A A Tガンシップが着陸してハルトが降りてくる

「取り敢えずお前等、休戦してくれ不味い事になってる」

「知ってるよ亜人族の奴隷狩りでしょ？」

「それもだけど帝国が樹海に火を放ちやがった、今トルーパーが手分けして消火してる」

『アナザーフォーゼのヒーハックガンやスイッチでもこの範囲をカバーするのは難しいのだ』

「此処まで火の手が回ると流石にな」

「聞いた黒騎士？今帝国を止めないと星の危機以上に今住んでいる樹海の亜人族全体の危機なんだよ、だから此処で戦ってる場合じゃないって」

「……わかった一時休戦といこう」

「よし、んじや取り敢えず帰る前に火をたべちやおうか」

「は？」

「いただきまーす!!」

するとアリエルは火を物理的に捕食し消火したのである

「マジかあ……」

取り敢えずレストインピースを着陸させて野営地を築く
ブルブラックはゴウタウ

ラスと弟を連れて何処かに行ってしまったな

「改めて紹介するな、彼女達はテスタロッサ、カレラ、ウルティマ、逢魔王国が誇る最強戦力さ」

「あ、主がそう仰るなら」

「かなりの強さじゃな最強戦力とは…」

「まあ確実に君達よりは強いけどね」

ウルティマの発言にムツとする人もいるが事実である

「しかし今更ながらだが冒険者のような格好をする必要があるな流石にテスタロッサとか異国の姫と言っても遜色ない美貌と衣服だし」

流石に白ドレスは目立ってしまおうと考えていると

「あらハルト様に褒められるのは嬉しいですわね…ならばコレでどうでしょう」

と三人娘はそれぞれが新しい衣装に身を包んだのである

ウルティマはゴスロリのような服に鎧の部品を当てたドレスアーマのような服を着ている可愛らしい

カレラはシンプルに黒コートとミニスカートを
着ている片手剣が何とも戦士と言った感じだ

テスタロッサはベレー帽のような帽子を被り黒のドレスのような衣服と来た優雅さを感じるの流石と言わべきであるが

(イメージ まおりゆう2. 5周年衣装)

「似合ってるよ三人とも…へえテスタロッサの得意武器って槍なんだ以外」

「武器はあまり使わないのですが」

「まあ悪魔つて魔法使うイメージあるし…んじや改めて頼りにしてるよ三人とも」

「うむ任せてくれ我が君!!ウルティマ以上の働きは約束しよう!」

「なら叶わない願いだね、ボクが一番働くんだからカレラの出番はないと思うよ?」

「何?」「何?」

2人のじゃれあい…というより喧嘩の合図とばかりに魔力の波動がぶつけられる、慣れてるものは軽く受け流しているが

ティオ、カレン、アリエルなど初めての者はその実力に驚愕する

「…、これが逢魔最強…ウオズさん達を超えている」

「何という力の波動……これがご主人様の国にいる最高幹部！」

そんな中

「やっぱり三人には四天王とかと別の枠を用意すべきだな……うーん大看板とかどう……じゃなかった、はいはい喧嘩しない……ほら初めて組がびっくりしてるから」

「けどさあ……ハル」

「なら今度来た帝国兵を尋問する1人以外は皆殺しにしてよし」

「やったあ！ありがとうハル！」

「感謝するぞ我が君」

「あらあら」

帝国兵には彼女達の生贄になつてもらおうと黒い笑顔を浮かべるのであつたが

「ねえハル、どつちかボクのペットにして良い？」

ウルティマの指差す先にはインドミナスとスコーピオスがいた……うん

「好きにしろ」

「やったあ！あ、そう言えばヤクヅキ面白い剣持つてるね」

「そうじゃろう見よ！手に入れた我が愛剣を！」

何かあの二人仲良いよなあ……共通の趣味でもあるのかな？とか考えていると小声で何か話してた素材がどうの言つてるな……料理の話なら興味があるなと思つたが公私混同は後と判断して

「さて、と自己紹介もあらかた終わったな……んじゃ依頼主に報告するか」

「けど、どう報告するのさ流石にブルタウラスの事がバレたら大変だろ?」

「それよりも有益な情報を送る帝国の傭人族狩りと樹海の焼き討ちだ依頼の件は発見したが帝国兵の襲来と共に樹海の奥深くへ逃げたと言えば良いしな」

「まあ確かに外交カードには使えるか」

「という訳でナツキ報告よろしく」

「はあ!?お前じゃないのかよ!」

「だってハジメ君や姫さまの周りにアレいるじゃん」

アレとは勇者wの事である ハルトからすれば接点など持ちたくない悪意の化身であるし必要以上に顔を合わせたら恐らく彼の命はないだろう

「ああ……そう言うことなら俺も嫌なんだけど」

　咲那の件もあり勇者には関わりを持ちたくないナツキであったが他の面々は勇者へ敵意全開、何なら三人娘は勇者を見るなり出陣して惨殺まで提案する程の殺意を持っているのだから仕方ないので

「分かったよハジメ君経由で報告する」

「頼んだ……んじゃ飯作ってくる今日は豪華にしないとな」

　そしてハルトは手慣れた手つきで料理を完成させ全員の夕食を済ませると

「ふわあ……しっかしどーするかなあ」

　こつちからすりや知り合いのハウリア族以外の亜人には興味がない……まあカレンやオリガ達の件もあるからエルフとは話があるが

「取り敢えずはブルブラックやインドミナスみたいなのもいるから、改めて樹海の調査だな…あとは白スーツに一撃叩き込むかな」

「それは勘弁してもらいたいなあ」

「何だよいたのか白スーツ」

「まあ今回の件の説明責任を果たしにね…つてかよく倒せてなアレ、暴れるだけで街一つくらい壊滅させられるくらいの怪物なんだけど」

「その辺で確認したいんだけどよ、あれって何なんだ？」

「ジュラシツクなパークで生まれた人造恐竜だよ」

「おいおい何でそんなものを」

「表向きはアトラクションの目玉にする為に裏では生物兵器として運用する為にかな」

「何ともまあ趣味の良い事で」

俺もそう言う意味では同じだろう、同じように遺伝子操作されたクロールトルーパー達を兵士として戦わせているのだから

「ただカミーノアンのクロールニングと違い遺伝子操作技術の未熟さと人間との信頼関係や協調性なんかを欠いた結果がアレさ」

「成る程ねえ……んでアレを何で俺の所に？」

「その辺は話すと長くなるんだが、まず前提として僕はアバター……要するに君の物語に入る為に用意された体と言う事は本体がいることになるよね」

「そうだな、アレは本体からの贈り物って聞いたが」

「そうなんだよ、この間の獣電竜とか今回のハイブリッド達とか……本当やらかしてくれ

るよ！オーディエンスの皆さんは良識を弁えたアイテムを送ってくれるのに!!」

「おいおい」

「本当に勘弁してほしいんだよ!!」

「頭冷やして話を戻せ」

「ごめん……いや最近振り回される事が多くてね」

「そもそも話、何でアレ送ったのさ？」

「ん？戦力だよ」

「ならもう少し大人しい奴でお願い！」

そうツツコミすると、ふと疑問に思った事があり尋ねてみる

「ヤクヅキにあの魔剣を送ったのは、本体か？」

「いいや別のオーディエンスだよ」

「そうか…その呪いの魔剣とかではないんだよな」

「違うよ安心してくれ」

「そうか…ならあと一つ聞く、俺はクソジジイの未来に繋がるのか？」

「さあ？その辺はダメだよネタバレしたらつまらないじゃん」

「そうだよなあ「ただ一つ、老婆心から警告するなら」あ？」

「君の未来は決まってない…けど望む未来を掴めるのは今を生きる君だけだ」

「未来を…」

「頑張ってくれよ」

「ああ気をつけてな」

「じゃあね」

ヴィジョンドライバーを押しして現れたゲートを潜ると白スーツは何処かへ去って行った

「望む未来を掴むか…」

『相棒?』

ふと考えてみた

ーアナザーオーマジオウになった俺と今の俺、どっちが逢魔の皆や大事な人達を守れ

るんだろうかー

「なあ相『それはお前が見つける答えだ俺達には何も言わんぞ』だよなあ」

『まあどちらを選んでも面白そうだがな』

相変わらず愉快犯な奴らであるが

「そうか……今更だけどよ相棒」

『ん？』

「お互い遠くまで来たもんだな」

『そうだな……昔は俺達だけだったのが……』

気づけば沢山の絆ができた、居場所が出来た……

「だから俺はもつと強くなりたい、これからも一緒に戦ってくれるか？」

『勿論だ』

『おうよ！お前の修羅場で酒が美味しい！』

「アナザーW……タイキック」

『え？ちよつ、やめ……ぎゃあああああ!!!』

「空気読めバカ」

脳内に断末魔が響いたのは言うまでもない

その夜

ハルトの知らない所でレストインピースの艦内でこんな会議が開かれていた

「今日のハルトの布団に忍び込むのは誰かを決めようではないか！」

キャロルの台詞に全員が目を疑った

「いやそれはその「いいねえ」た、束殿？」

「カレンちゃんは知らないだろうけどハルクンのお嫁さん達は日夜誰が布団に忍び込むのを決めるんだ」

「順番にすれば良いのでは？」

「以前はそうしていたが、ノリと勢いで抜け駆けする奴がいてな」

千冬の目には抜け駆けの前科持ちの束とキャロルがいた

「な、成る程……」

「それで順番と抜け駆けしないようにという話し合いだ」

「因みに銀狼は？」

「逢魔で留守番……いや待て……っ!!」

と同時に会議室のドアが閉まったのである

『だーいせいこーう』

モニタに浮かぶ狼のマークに全員が齒噛みした

「銀狼貴様!!」

『私だけがフリーとか、こんな好機見逃す訳ないでしょ?』

「大人しい思っていたら!!」

『そもそも私は星核ハンター、欲しいものは手に入れる……という訳じゃあね〜』

その一言で会話が終わったが閉じ込められたという事実以上に

「遂に抜け駆けしたか、あの狼があー！」

千冬の怒号が全てを理解していた

「退きなさい！こんなドアなんかぶっ壊す!!」

「落ち着いてリーネン！それハルくんが起きる奴だから！」

「なら東さんに任せよ！ハッキングしてドアをこじ開けてやるう!!」

「いや待て…落ち着けハルトならこの状況どう切り抜ける!!」

「あのバカのやる事など一つだ！」

「「「「ドアを力づくでこじ開ける!」」」」

—————

その頃

「コレでよし」

「あれ? 銀狼じゃん、どうしたんだよ」

「ウォーカーやガンシップ、スターファイターのプログラム調整に来た…流石に数が多いけど疲れたな」

「お疲れ様、何か飲むかい?」

「ならコーラで」

「おう、んじや部屋に行こうか何故か皆と会えなくてな…そだ、新しいゲームが届いたんだけどさ遊ばない？」

「勿論、そのゲームは私を楽しませてくれる？」

「当たり前だろ、神の作ったゲームで退屈なんか感じないだろう？」

「それはトラブルが尽きないからと言う意味かもね」

「だな」

「それよりハルトに質問」

「何？」

「部屋に閉じ込められたらどう対処する？」

「へ？不破さん式 ドア解錠術でこじ開ける」

「流石の脳筋ぶりに安心したよ」

「まあ誰かを頼るなら銀狼や東に電子的に解錠してもらうか、千冬やアンティリーネに破壊してもらおう…もしくはアナザービルドやアナザーキカイに開けてもらおうよ」

「そう」

「頼りにしてるぜ銀狼」

「まあ当然…ねえハルト一つ助けて欲しい事がある」

「何だよ急に」

「何でもない、取り敢えずベットに…っ！もう出てきたか」

「は？何言っつ！！」

ハルトは目線を向けるとそこには悪鬼羅刹も涙目で逃げ出す者達がいた

「見つけたぞ、銀狼」

「抜け駆けしたお仕置きタイムだよ！」

千冬と東にドン引きするハルトに

「なあ何したんだよ」

「ん？監禁」

「犯罪だね！何してんの！！」

「ハルトを独り占めしたくて…」

「それならそうと言えよ…確かに皆との時間を作れてなかったなあ…分かった俺の
日を皆にあげるよ、だから抑えて」

「まあ」「ハルくんがそう言うなら」

「よし、じゃあ最初は私からだ」

「え？ちよつ、銀狼——！」

「計画通り」

そう悪どく笑う銀狼がいたのであった

翌日

「そろそろ合流予定の筈ですが」

「見当たらないな、センサーの有効範囲を拡大しろ必要ならスピーダーバイクで偵察もするよように」

「イエッサー」

そうハジメの使う乗り物が見当たらないのである

「何かトラブルにでも巻き込まれたか？」

「ですが彼等が遅れをとる程の猛者など…」

警戒を強めていく中

「陛下、通信が入りました」

「ハジメ君か？」

「現在哨戒中のナツキからです」

「どうした敵襲か!!」

「いえ…アルトリアがもう少しツーリングしたいから哨戒時間の延長を申請しています」

「勝手にしろ!!アホかアイツは!!」

「全くです…哨戒中にデートなど言語道断だ!」

「そう言うハウンドも偵察任務と称してシェフィールドと買い物をするとのタレコミがあつたが?」

「な、何故それを……い、いや違います陛下!コレは!」

「咎める気はないよ任務から外れない範囲ならそこは自己判断だからな」

「感謝します…それで誰からタレコミを？」

「それは守秘義務があるな」

「でしたら親衛隊全員で誰が漏らしたか白状するまで腕立て伏せと行きますか」

その顔に親衛隊の顔はヘルメット越しだが青くなつたのを感じたのは無理もない

「程々にな、それとハウンド…本気でシエフィールドを娶りたいというならコレを渡しておくKANSEN専用のケツコン指輪だ」

「……………陛下！ありがとうございます!!」

「頑張れよ」

「はは、私はシエファイ一筋ですから陛下のようにはなりませんよ」

「ほほお言うねえ」

そんなほんわかする一幕があつたが直後に

「哨戒中のスピーダーチームから入電！ 兎人族が帝国兵に追いかけているとの事
！」

「よしレストインピースは戦闘態勢！ 偵察チームはその座標に向かわせるようにし
ろ、そこで合流する無理なチームの回収にガンシップやウォーカーはいつでも出せるよ
うにしておけ」

「はっ！レストインピース発進!!」

そして喧しいエンジン音と共にレストインピースが浮上し指定座標へと向かうので
あつた

しかし追われていたのは兎人族の罾であり、追っていた帝国兵は伏兵の狙撃で撃沈、その確認に来た追撃も兎人族の包囲にあい全滅した

「見事な包囲殲滅だな、奴ら訓練は怠ってないと見える」

「教官としては鼻が高いか？」

「ですが、まだ離れた位置から狙撃出来たと思います改善点を言いに行きますか」

「それは任せた「陛下！南雲から通信です」繋げ」

すると液晶にはハジメが写っていた

『そつちも見えたようだな』

「ああハウリア族だな…しかし帝国兵と何やってんだ？」

『会ってみれば分かる、着陸するぞ』

「了解だ、此方も中隊を率いて降りる」

『じゃあこの座標で合流だ』

「おう」

通信を終えると

「ガンシップ発進用意！ウオーカーや武器のチェックを忘れるな!!」

そして数分後、ハジメに続くようにハルトの乗っているガンシップが着陸した

直ぐに防御陣形を取る流れるような動きにハウリア族は おお、と歓声を漏らした

「久しぶりだな訓練をサボってないようで安心したぞ」

「おひさ〜」

ハウンドがヘルメットを取る皆の顔が喜びに変わる

「お久しぶりです教官!!そしてハルト殿!」

ザツ〜と全員が流れるような敬礼をすると付いてきた面々で唯一知らないティオが尋ねる

「のおご主人様、ハウンドは何をやらかしたのじゃ」

「凄い大雑把に言えば、奴らのメンタル矯正と作戦指南だな」

「俺はいつも通り飯作った」

「それでああなるのか…」

「まあメンタル面はハジメ君のお陰だな」

「はい！ボスと教官のおかげでハウリア族は強くなりました！我々全員ボス達の事が大好きなのです！」

と子供のハウリア族が言うのと香織とティオが頷いていた

「おい、何だその初対面だけど仲良く出来そうみいなリアクションは？」

「まあ色々聞きたい事はあるんだが…」

「取り敢えずはアレかな」

ハルトの目線には如何にもな荷馬車があつたのだが出てきた人物を見て驚いたのはカレンとジナイーダであつた

「っ！お嬢様!!」

「え？ジナイーダに…カレン!!」

それは金髪のエルフであった…どうやら二人の知り合いらしいが

「どうしてここに…確か未知の病気に侵されて…」

「ええですが其処の彼に助けられたのです」

「お嬢様が何故ここに…」

「カレン、知り合いか？」

「はっ！彼女は森人族の長老の孫娘 アルテナ・ハイピスト様…しかし何故」

「取り敢えず奴隷用の拘束具を解く所からだな」

「そうですね」

「という訳で保護した奴等の面倒を頼んだテストタロツサ」

「お任せください」

「ハウンド、ウルティマ、カレラ」

「はっ！」

「はいはい」

「何だ我が君？」

「狩りの時間だ、逃げてるだろう帝国兵残党を捕えろ」

「ん？殺さないのか？」

「貴重な情報源だ将校や士官クラスは殺すな麻痺か気絶でもさせろ、今回の襲撃に関する情報が欲しい」

「お任せを直ぐに兵士を集めてきます」

「仕方ないな」

「捕まえた後はボクの番だね」

「ああウルティマ、どんな手を使っても良いから情報を吐かせろ」

「任せてよハル！あ、助手にヤクヅキ連れて良い？」

「任せる…それと仕事から外れなければ多少趣味に走る事も許す」

「やったあ!!」

「悪いなテストタロツサ、暴れる機会は別に作るから我慢してくれ」

「かしこまりましたわ…でしたらハルト様と一緒に彼方の国長との会談に同行してもよろしいでしょうか？」

「それは助かる！交渉事は俺はダメダメだから頼りにしてるぜテストタロツサ」

「ええお任せください」

「ぐぬぬ…」

「ウオズちゃん、どつたの？」

「やはりテストタロツサ嬢はライバルですね…我が魔王の右腕は私です!!」

「ああそう言えば張り合ってたね」

「やれやれ」

ジョウゲン達が肩を竦めていると

「そのパイロット！ガンシップを用意しろ直ぐに出るぞ！」

現れたL A A Tガンシップに乗り込んだ面々は追撃ないし捕縛任務に動くのであつた

「正に猟犬（ハウンド）だな、頼りになる」

「そうですわね」

「さてと……ん？あのヒポグリフ……」

何か凄い見覚えがあるな……うん、帰れと言ったのに何してんだ俺の義弟は

「人の話を聞かない所は誰に似たんだろうな」

『間違いなく相棒だな』

『お前じゃよハルト』

「よしトルーパー、アレを撃て」

近くにいたATTEの大砲がヒポグリフを狙ったが数発至近弾はあつたがそれでも落ちないのは騎手の英霊たる所以だろう

「撃たないで！俺だから!!」

「一夏…俺帰れって言っ「森の中でオリガみたいな症状の人が倒れてるんだよ!」何?」

「けど俺じゃ、どうしようもなくて…お願いハル兄その人達を助けて!」

「はあ…千冬」

「分かった、後で説教だ」

「え、ちよつ！」

「んでアストルフオ、そいつ何処にいる？」

「助けてくれるの！」

「義弟に頼まれたら断れねえよ……つかそこまで人手無しじゃない」

「良ければ私もついていきましようか？」

「頼もしいが、テストロツサが居なかったら誰が指揮を取るんだよ」

「俺が取るよハル兄！」

ほおほお言うようになったな義弟は

「分かった副官にオリガをつけるウオズ！ダメな所があったら補佐してやれ」

「お任せを」

「よし、んじや行くかね……案内し、アストルフオ、よし早速試してみるか」

ハルトは早速怪人化身能力を有する新アイテム

アナザーネクストウオッチを起動すると中央の液晶にライダークレストが浮かび上がる

選ぶのは勿論 クウガ

「んじや早速 化身!!」

ネクストウオッチを押し込むとハルトの体が突然変異を始める 段々と空を飛ぶに相応しき姿に それはゲゲルを見守る裁定者 ダグバに挑む権利がありながらも放棄した実力者

ラ・ドルド・グの体へと変異したのである

「おお！良いねえコレ……テストロッサ」

「はい……きやつー！」

ハルトはお姫様抱っこで抱えると

「普段の格好じゃなくて悪いな」

「いいえ……その……ありがとう……ございます」

何故テストロッサの顔が赤いかとかキヤロル達の視線が痛いとかは置いて

そのまま背中の羽で空を飛ぶのであった

そしてアストルフオの案内で到着した場所にはやはりカレンと同じように腫瘍に襲われている獣人とエルフがいた

「助けに来たよ!!」

「全く毎度の如くだな」

「化身解除してハルトが溜息を吐くとアナザーエグゼイドに変身して行くぜ!!」

「リプログラミングの力を解放してカレン達にした施術を施すと

「体が!」「治ってる…」

『コネクト』

「取り敢えず毛布を被せて完了だ」

「よしアストルフオ、その子達を連れて行ってくれ」

「ハルトはどうするの？」

「ちよつと運動してくる」

「あら私も行きますわ」

「はいはい！2人仲良くねー！」

アストルフオは2人を乗せると陣地まで一つ飛びである

その直後に現れたのは褐色の肌をした人ならざる魔力をもつ者である

「魔族か」

「ほおただの人間にしては中々賢いな」

「自慢じゃないが（仮面ライダーと料理の知識だけは）天才と呼ばれている」

『天災だな字が違うぞ』

「まあ良い、そうだ人間…貴様は樹海の迷宮について何か知っているか？」

「あ？」

「知らぬか…まあ良い見られたからには死んでもら…：「遅いですわよ」っ！」

気づくとテストタロツサの持つていた槍が投げられ魔族の体に綺麗な穴を開けていたのである

「な…んだと」

「これ以上ハルト様への無礼、許せませんわ…身の程を知らなさいな下等生物」

それはもう万人を魅了する笑みだが敵からしたら死神の笑みであったのは言うまで

もない

「もう折角ひと暴れできると思ったのに」

「申し訳ありませんわ、最近ストレスが溜まってましたので体が勝手に」

「何かごめん…本当俺にできる範囲なら何でもするよ」

「言いましたわね…でしたら此処から歩いて帰りませんか？」

「レストインピースまで!!…良いよ、んじゃ通信して……よし」

「ふふふ…では失礼」

「ちよつ！テストアロツサさん!？」

腕を組まれて赤面するハルトに

「あら？アレだけの奥方がいらっしやるのに慣れてないのですね」

「いきなりテストロッサみたいな美人に腕組まれたら誰だつて赤面するよ」

「そう…ですか」

「んじゃ帰るか」

「はい」

そして時間をかけて二人で歩いて帰ったのだが

「テストロッサ」「狡い」

と嫉妬する二人の悪魔がいたの言うまでもないのと

「ハル兄！助けて！！」

一夏は一夏で助けた子達に追いかけてまわされていたのも追記しておこう

帝都へ殴り込み!前編!!

前回のあらすじ

樹海の迷宮を目指すハルト達だが帝国に追われていたハウリア族とハジメと合流する

一夏の頼みで謎の病に侵されたエルフと獣人族を助けたのだが…

合流地点に作った拠点 仮設会議室にて

「成る程な奴等、他の迷宮にも手を伸ばしていたのか」

聞けば魔人族は樹海の迷宮攻略を狙いフェアベルゲンの攻撃を開始 何とかハウリア族は罨や奇襲で魔物や魔人族を撃退したが 火事場泥棒のように帝国軍が進撃し亜人族を拉致してきたそう

散り散りとなったハウリア族が偶然助けたのは、その輸送車両との事だ

「ボスも何か？」

「ああハルト共々、他の迷宮で会ってな」

「しっかし火事場泥棒とはこの事だな……こうなったらジャガーノートで蹴散らしてやろうか」

「ああ……させて」

ハジメはシアの本音を聞き出すと 帝国に囚われた可能性のある父親を助けたいとの事だ

ならば

「俺達も協力するぜハジメ君、族長のカムさんはハウンドの教え子だ逢魔としても無視できないな」

「ハルトさん」

「すでに布石は打ってある、今ウルティマ達が帝国の将校を捕縛して拷問中だ」

「情報源はあるって事か」

「ああ、その辺は俺達の専門分野だから任せておけ」

話し合っているとウルティマから通信が入る、内容は帝国の樹海侵攻の目的…やはり亜人族の奴隷を捕まえる事と最弱のハウリア族をバーサーカーにした黒幕を探る事らしい

「それ……」

「間違いなく我々ですなハジメ殿」

ハジメとハウンドの二人が頭を抱えたが

「なら俺達逢魔の問題でもあるな」

ハルトは最初から参加する気と表明すると近くに立体地図を用意しての作戦会議が始まった

「まずはハウリアの囚われている場所ですが、ウルティマ様とヤクヅキ様の拷問で得た情報では帝都の城内にいるというのは分かりましたが具体的な場所は分からないとの事です」

「それ本当か嘘言ってる可能性は？」

「あの二人は逢魔王国が誇る最恐の拷問ソムリエだぞ？それは無いね」

「まあ最悪脊髓ぶっこ抜きして情報抜き取るとかも出来るし問題はないな」

「なあハルト、今俺の耳にはハイテクマシンで人間を狩る捕食者のなワードが聞こえたような気がしたんだが気のせいかな？」

「大丈夫だハジメ君、君の耳は正常だ」

「気のせいじゃなかった…」

「安心せいハルト坊、妾とウルティマじゃぞ？捕虜（楽器）へ適切な拷問（楽器へ加工）を施した結果得た情報（悲鳴）じゃぞ？間違いなからう」

「そうだな流石はヤクヅキとウルティマだな」

「おい待てハルト、今不穏な副音声聞こえた気がしたんだけど！」

「何言つてんだよそんなの無いよな」

「うむ！じゃがハルト坊、一つ謝罪がある……その……拷問（楽器加工）中に捕虜を一つ壊してしまったのでのお趣味に走りすぎた……申し訳ない」

「なーんだ一人だけか！大丈夫、失敗は誰にでもあるから！」

「なあナツキ……ハルトがマジの魔王に見えてきたんだが……今人を個数で数えたぞ」

「安心しろハジメ君、ハルトは今も昔も恐怖の魔王だ」

「んで持つて俺の耳には捕虜を楽器に加工したつて聞こえたんだが……」

「ああ……そもそもレジェンドルガにとって悲鳴は音楽だからな……それを奏でる人間は愉快な楽器に他ならないからな……聞けば捕らえた捕虜を夜な夜な楽器に……」

「それ以上は言うな……ハルト怖え」

「因みに怖いのがハルトはそれを本当に楽器に加工してるってことを知らない所だな」

「え？何それ怖い」

閑話休題

そして帝都に侵入してハウリア族を助けようとなつたのだが

「どうやって侵入、脱出するかだな」

「城の警備は嚴重でしょう忍び込んでも囚われた者達を連れて脱出するのは至難の業かと」

「脱出した後で城を爆撃したらどうだ？侵入の証拠諸共焼き払うんだ」

「おい辞めろ隠密作戦の意味がなくなる！」

「良いアイデアねハルト、なら城下町に火をつけてしましましょう!!」

「便乗しないでジャンヌ!!」

「辞めんか馬鹿者」

そして千冬の拳で沈められる2人を見て

「ええ!けどさ見てよ千冬」

「何だ……は?」

千冬が驚くのも無理はない、何故なら

「聞いたかお前達、俺達は帝国に見捨てられた者達だ陛下と出会わなければどんな目に遭わされたか分かった身ではない……今、俺達の仲間であるハウリア族やカレン達エルフ

族へ行われる帝国主導の迫害、これを許して良いと思うか？」

「サー！ダメであります!!」

「その通りだトルーパー！彼等は俺達がなっていたかも知れない存在だ！俺達はそんな同胞を放置出来るか!!」

「無理であります！サー！」

「戦うべきだ!!」

「そうだ！放置など出来ない!!我等を救ってくれた陛下なら必ず立ち上がるのだトルーパー！敵は我々の知る銀河帝国ではないが同じ帝国の名を冠する国だ……我等の誇りの為に全力で攻撃するぞ良いな!!」

「」「サー！イエッサー!!」「」

ハウンドの櫓に親衛隊全員が反応する：流石だよく鍛えられているな、だが帝国を名乗ったと言うだけで攻撃されるヘルシャー帝国哀れとしか言いようがない

「野郎ども武器システムに火を焚べろ！銃を持って!!帝国の施設を残らず攻撃するんだ！そして陛下も言っていた……戦う帝国兵士は良い兵士！戦わずに逃げようとする兵士は良く訓練された兵士だと！これは陛下の言葉である良いか兄弟、一晩で帝都を焦土に変えてやレエ!!」

「「「「「サーイエツサー!!」」」」」

まさか逢魔幹部屈指の常識人事ことハウンドの暴走であった

「おいハルト！今すぐ止めろ!!」

「いやあまさか帝国へのヘイトが俺よりヤバくて引いてる」

「アイツらのいた世界とは違う帝国だぞ、アイツら民間人まで攻撃する可能性があるか

「ら止めろ!!」

「大丈夫だ千冬………ん?待てよ国を焦土にする………おいハウンド待てええええ!!」

流石のハルトも止めに入る、真面目な奴のボケは分かりづらい事 この上ない!!

「止めないで下さい陛下!帝国に慈悲などありません!」

「それ八つ当たりだろうが頭冷やせよベルファスト!!シエフィールドを呼んでくれ!!」

そして

「帝国が憎いからとヒートアップする気持ちは分かりますが、指揮官のように暴走したらダメでしょうハウンド」

「すまないシエフィ、何か今なら陛下の真似をして帝都を焦土にしても怒られないかな
と思つてな」

「どんな理由ですか、それ？あの指揮官の真似したらダメに決まっています」

「面目ない」

「お仕置きに正座したまま私への膝枕3時間の刑です」

「……………それ罰になってるのか？」

メイドに説教される我等が幕僚長がいたが

「ふう危ない危ない……………だがイチャイチャしてるな」

「本当だよ！あとノリと勢いで国家滅亡させるとか正気かハルト!!」

ナツキのツッコミに

「最初に言っておく、俺の影響を受けて逢魔で正気を保つ奴など少ないわあ!!」

『すまない…俺達の国家元首がコレだからなあ…』

「威張って言う事か馬鹿者!!」

「だが戦意が高いのは良い事だ…この勢いがある内に何か有効な対策プランを練らないと」

ハルトは地図と睨めっこしているとテストタロッサが

「でしたら爆撃機中隊で、この無人区間を爆撃し火災を起こして帝国の注意を逸らしましょう」

「成る程、消火と避難民誘導に城の兵士も動かざるを得ないな」

「ええ、その隙に城に潜入しハウリア族を救出し空間魔法、或いはガンシップやターボタ

ンクで安全地域まで移動させます」

「そうになると爆撃ポイントは選ばないとダメだな民間人の被害者が出るぞハルト」

「は？ 奴隷制度公認して奴隷を使う奴等も同罪だろう？ 慈悲などいらないだろ、目標の城以外の無差別爆撃に切り替える、その方が帝国の受ける戦術的效果も大きい」

「そんなのダメだ！ 関係ない人間まで巻き込むなんて!!」

そこに現れたのは勇者Wであるが

「おい、部屋で大人しくしろと言った筈だが？ 天之河」

「奴隷とか聞かされて大人しく部屋に籠れる訳ないだろう！ 無差別爆撃とか攻撃するとか！ 戦争をする気なのか！ アンタ達は！」

「アホか今のはテストアロツサのは現実的に使える戦力で有効手段を立案し俺の意見を加

えただけだ、それに帝国が大きなダメージを受ければ奴隷にされた亜人達を助けるチャンスは多くなり奴隷狩りしようにも戦力や資金繰りから始めるから直ぐには再建出来ない」

「だとしても爆撃するのはダメだ!せめて避難勧告してから「アホか」な!」

「俺達の目的は城にいるハウリア族の奪還、今はそれ以外はどうでも良いし丁寧に爆撃しますって警告したら連中は対空兵器全開で迎え撃つぞ間抜け、こっちの爆弾や爆撃機は無尽蔵じゃないからな」

「帝国の人がどうなっても良いって言うのか!」

「どうでもいい俺の仲間達を狙ってる奴らは全員敵だ、逆らうなら血の制裁を加えてやる」

命に優先順位があるとするとするなら帝国の連中は圏外である助ける意味もない

「やはりお前は魔王だ!!ここで俺がたお…」

その言葉を言う前に勇者wは雫の鞆で頭を殴られ気絶した

「ごめんなさい、見張ってたのだけど…」

「気にするな、それより早く連れていけ…この人達が暴れても俺は止めないからな」

「待てトバスピノ、アレは食べ物じゃない食べたら腹を下すぞ?」

それだけ言うと雫は勇者を引きずり消えたのであるが王女は申し訳なさそうに手を上げながら

「あのお私達は魔人族との戦争中でもありますので帝国に極端に弱体化されると私達は困るのです…できれば被害は少ない方向でお願い出来ないかと」

この世界に住むリリアーナ王女の意見に全員、唸る 確かに帝国は憎い敵だが魔人族

との戦争中の現在は人間側の貴重な戦力であるのに変わらない

現にハイリヒ王国は中村と檜山の裏切りで王都再建中だ それに加えて帝国の帝都にまで何か有れば得するのは魔人族であると伝えたいのだろうか

「だが今、帝国を徹底的に叩かないで中途半端にしたらフェアベルゲンの亜人連合軍が帝国へ報復戦をするぞ? そうなったら人族の敵は魔人族だけじゃなくなる: この場で帝国を徹底的に叩く方が向こうの溜飲も下がるし帝国市民の犠牲だけで亜人族との戦争を回避できる少なくともマシにはなるな」

最大の懸念はそこである、そもそも魔人族は別として帝国は長い間 樹海の亜人族を捕らえて奴隷にするなど食い物にしてきた そんな帝国が弱体化するか隙ができたなら今までの報復にと戦争になるのは想像にし易い そうなったらこの世界の人類はおしまいだろうな

「受けた恨みは必ず倍にして返すのは何処の世界でも何処の種族でも国家でも同じだな」

「それ実の妹に受けた仕打ちや組織へ必ず倍返しにした、お前が言うと言説得力違うわ：因みにハルカ本体って逢魔で何してんの？」

「ん？ウルティマとヤクツキの話だとトーマと一緒に何かバイオリン？ピアノ？にされてるって：汚い悲鳴しか上げないから調律が大変とか言ってたな：何かザマアだよね！あ、そうそう何か聞いたらベルトの人体実験に使われてるって」

「ベルトの？」

「そうそう政人のオーガドライバーやカレン達の使うバックルの試験とかな：何か聞いたらオリハルコンエレメントを突破出来ないで弾き飛ばされた拳句に壁とオリハルコンエレメントに挟まれたって」

「いや、それ死んでね？」

オーガやサイガのベルトは人間が変身すれば即死のベルトであるのだが：

「大丈夫蘇生して変身させて死んだら蘇生してって永劫の苦しみを味わせてるから、アイツにファイナーレはない」

「いや人の心とか無いんか!?!」

「ああ、それはあの家族が全部奪っちゃったよ」

とハルトはまるで悟った目をしていたが

「あの両親も同じ目に合わせてやるんだ」

『相棒怖え…』

「いやインドミナスやスコープオスに追われ食われ、その後蘇生してまた追われ食われを無限にさせるか……ふふふ……ふははははは!!」

「落ち着けハルト」

とキャロルの言葉で元に戻る

「俺は何を？」

「作戦会議中だっただろうが」

「そうだったな…すまないキャロル、何かダークサイドの声が聞こえた」

「安心しろ元からお前はダークサイドに堕ちている」

この時、全員が暴走を止めたキャロルを尊敬の目で見ていたのは言うまでもない

「こほん魔族だけでさえ劣勢なアンタ達が亜人族と二つの戦線を抱えてどれくらい持つのか見ものですね」

人と亜人の確執から考えると長期化は避けられないだろう

「だからこそ今回の件は早急に解決しないとダメなんですよ帝国が負けを認めて奴隷を解放し、フェアベルゲンの亜人族が早く回復して武装蜂起したら、それこそ全面戦争です」

「まあその辺の政治云々は此処で生きるアンタらの仕事だろうな」

「今回の任務に戻すと俺達の勝利条件はハウリア族の救出」

「次点で姫さんは帝国と交渉して亜人族絡みの件を何とかするかな」

「姫さんの件は俺達には関係ない、俺とユエとシアが城に侵入する…その方がアイツらも素直に言う事を聞くだろう空間魔法で脱出すれば問題ない」

「なら俺達は陽動だな当初の作戦通り首都の無人区間に爆撃して奴らの目を逸らす」

「けどよ弱肉強食が国是の帝国、素直に市民の避難誘導をする可能性は微妙じゃねえか」

「？」

「ならデカイ囿を使うかな」

「囿？」

「もう一個あるだろ？帝国が追いかけてた奴」

そうハルトが見せたのは小型化したミニスピノであった

「キョウリュウジンとスピノダイオーか」

「プテラゴードンかプレズオンと合体すれば空中へ逃げられる、少し暴れて注意を反らせるなら御の字かな」

「良いアイデアだが、その場合誰がキョウリュウジンに乗るんだ？」

「俺が乗るのはどうかかな?」

一夏が恐る恐る手を挙げた

「一夏?」

「ジョウゲンさんの力を借りる事になるけどウエスタンになるなら俺達で動かせると思う」

「確かにライデンキョウリユウジンならベアトリスもいるし空戦も可能だ、となると俺はナツキのプレズオンとブンパッキーでバクレツスピノダイオーだ」

ナツキのプレズオンとブンパッキーとトバスピノで合体すればいける筈と考える途中で

「すみません」

と話しかけて来たのは奴隷の一団にいた金豹族の人達である

「はい何でしょうか？」

一夏が代わりに相手をする

「おお貴方でしたか……娘の命を救って頂きありがとうございます」

と頭を下げ始めたのである

「え？ちよっ！」

流石の光景にパニックになる一夏だが

「ああ、その人はお前が助けた女の子の親だよ」

さつき挨拶してきたから間違いない

「え?」

「はい…実は我等は娘の病気を治す術を探していたのですが娘は一族の重荷になりたくないと出奔してしまい探していた所を帝国に…ですが我等のみならず娘のリリムまで助けて頂きありがとうございます!!」

「い、いや俺は当然の事をしたまで…と言うより治したのハル兄だし」

そう言えるのが一夏らしいとハルトは笑うが

「ですが御礼をしたくともご存知の通り帝国に全て奪われてしまいました…何もお返しできるものは」

「御礼なんていいですよ娘さんと幸せに暮らしてくれば「大丈夫だよ父さん」え?いつの間に!!!」

一夏の背後を取る金髪猫耳の美少女　リリムに困惑する一夏

「私が彼に嫁いで彼が金豹族の次期族長になって貰えば良い、それなら問題ないだろう？」

「おお確かに…彼ならリリムの伴侶に申し分ない娘を宜しくお願いします婿殿」

「……………はい？」

流石の一夏も宇宙猫になるしかなかったが

「本人の了承も得たし宜しく頼むよ旦那様」

「は……………はあああああ!!!」

その光景に

「何か凄いデジャブ」

そうハルトが呟くのであったが千冬は余りの状況に混乱し

「一夏が………一夏がハルトのように……うーん……」

「ちーちやーん!!」

「まさかの千冬が倒れた!?衛生兵!衛生兵!!」

と混乱極める中

「一夏?」

「お、オリガさん?」

「私は君の副官であるが、それ以上に君に命を救われた身だ」

「はい…」

「だからこそ…節操なしには少しお話しが必要だと思うね」

オリガは笑顔のままピンク色のチェンジケルベロスのカードとバツクルを取り出すとカレンは慌てた様子で

「オリガ！一体何を」

「変身」

『OPEN UP!』

ピンク色のオリハルコンエレメントと共に現れたのは新世代ライダーの1人 仮面ライダーラルクである

「え…ちよっ!」

「えーと…貴方のハート撃ち抜いちやうぞ!だったか?」

「物理的に撃ち抜かれるううう!!」

「あ、待ってくれ一夏!!」

と追いかけられる一夏にナツキがハルトを見て冗談混じりに

「なあ…お前の女難が移ったか?」

「違うな、アイツのアレは元からだ」

「そうか…一夏も大変だな」

「それはお前もだな」

「は？」

そうナツキが呟くと彼の肩をがっしりと咲那が掴んでいた

「咲那さん？どうしましたか？」

「何でもありません、義兄さんの体からナツニウムという物質が出るとエルフナインさんから聞いたので接種してみようかと」

「俺の体からそんな物質出てないけど？」

「出てます出てます…良いですねえ…義兄さんの成分が体に染み込んできます」

「咲那取り敢えず離れようか、これは普通の兄妹としての距離じゃないぞ恋人の距離感だ」

「なら問題ありませんね…取り敢えず義兄さんには私を置いてけぼりにした分だけ私に

構ってもらいます」

「問題しかないが咲那さん!?俺達兄妹!!あと今重要な会議中だから後にしてくれないかな?」

「あ、別に良いよナツキは退席しても別にお前いなくても構わないし」

「ハルト!?!」

「ありがとうございます!では義兄さん行きましようか……久しぶりに一緒に寝ましよう?」

「ちよつ!!ハルト!助けてー!!」

「よーしブリーフィングを続けるぞ」

あつさり見捨てたハルトに

「薄情者——！呪ってやるう！お前も修羅場になるよう呪ってやるう!!」

「残念だな…すでに呪われた身だよ」

『カッコつけた所悪いがカッコよくないぞ』

わーっつてると話し合いに戻るのであった

結果はキョウリユウジンとスピノダイオーが帝都近隣で暴れて注意を惹いてる間にハジメ達は城に侵入しハウリア族を解放し脱出するとの事

リリアーナ王女は先に城に行き皇帝の足止めを丸投げした…勇者W一行はハジメ手製の船で待機だ降りてきたら問答無用で攻撃すると脅してある、まあ彼等の安全の為にある

ハジメがいない場合 ハルトの関係者が今までしてきた彼への暴言への報復に走り

かねないのである…主に殺意全開な三人娘

だが決行までの準備中、一夏はリリムという獣人族とイータというエルフの子に追われている

「助けてー!」

「一夏頑張れ」

ハルトは笑いながらブランデーを飲んでいると

「ハル、今度さ帝都に行くじゃんその時にデートしよ」

「何を言っているウルティマ、我が君と逢引するのは私だ…貴様は逢魔で我が君とこっそり逢引しているだろうこの場では私に譲るべきだ」

「何言ってるの?それはカレラが鈍いからでしょ?」

テストロッサの件で2人は積極的に行動していたのだが

「ならハルに決めてもらおう、ハル？」

「我が君？」

「どっち!!」

「……………」

酔いが覚めたのは言うまでもないが、取り敢えず

『ナツキの呪いか？』

「ならお祓いするかな」

結果としてジェミニで分身して2人とデートする事となったのである

レストインピースの食堂

ハルトとハジメが最終的な打ち合わせをしていると

「しかしゴウタウラスや獣電竜までいるとなったら他にも何か居そうだな」

「いるかもな」

「へ？」

「バル達に聞いたんだが…何か空飛ぶ要塞みたいな奴と青い機械仕掛けの鳥型巨人やサイ型の巨人までいたらしい」

「要塞に鳥とサイ……うーむ心当たりがある」

ゴウタウラスや黒騎士がいるとなると可能性は高いが

「調べてみるか？」

「賛成と行きたいが迷宮攻略前で良いだろう」

「なら帝国の件を完結させてからだな、つか一番早く丸く収まる方法がある事にはあるんだがなあ」

「聞くの怖いんだけど怖いもの見たさで聞いていい？」

その時 ハジメが見たハルトの顔は普段の間抜けな顔ではなく…冷徹かつ冷酷な魔王としての顔を出したハルトであった

「俺が帝国を支配する」

「怖えよ!!」

「いや実際その方が効率的じゃないかなあつて思うのよーそもそも俺達が頭悩ませてる理由の何割かは改善される」

そこからハルトの意見だが

「まず逢魔では奴隷は違法だから占領か属国にすれば治安維持を目的とするライオットトルーパー達が摘発する形で全員集められるし、こっちの乗り物で樹海まで送り届けられる奴隷解放すれば樹海へ侵攻する理由はないからな」

「まあそうだな」

「次に姫さんの懸念、戦力も俺達の軍事力を人類側として戦力化すれば問題ない、実際こっちは魔人族と交戦状態だから逢魔に待機してるクローントルーパーの大部隊を堂々と投入出来るしな他の迷宮攻略とかも事前調査とか色々今まで以上に楽になる情報収集可能な範囲が広がる、何より魔人族と正面切つて戦争出来るのは俺達だけだからな」

実際コソコソせずに大部隊投入してからはシンフォギア世界とかデートアライブ世界では楽になった部分も多いし

「うん」

「まあ問題は皇帝一族と貴族達なんだけども」

「その辺はどう考えてるんだ？」

「え？領地財産全没収の上で一族郎党残さず死刑だけど？俺の国に根腐れしたり危険因子を残す必要ない…まあ利用価値があるなら無くなるまで使うとかはあるかもだけどね」

「お前、暴君だな」

「そうかもねえ」

思いつきであるが、その辺の思考回路があつた自分にドン引きしてるくらいだからな

「ごめん、今のは忘れてくれ：疲れてるのか物騒な考えになつてた」

「ああ俺も興味本位だったからな：というよりやろうと思えば出来るのか？」

「出来るよ、伊達に魔王なんて呼ばれてない」

「やっぱり怖いなお前」

「じゃないと魔王の肩書きに偽り有りでしょ？」

そう笑いながら明日に備えて食堂を出たハジメを見送ると

「お前、マジでそんな事考えてたのかよ」

ナツキがドン引きした顔で入ってきた

「聞いてたのか…どこから…つてまあ最初からだよな、てかどうやって？」

「アナザービーストの力借りてグリフォン使った」

「あ、プラモンスターか」

「そ、因みにその話「ウオズにもハウンドにも話してねえよ」へえ…それを話だつてあたりハジメ君を信頼してんだな」

「まあね…というよりウオズ達に話したらノリノリで実行しそうだから怖いんだよ」

実はアナザーWやアナザーゼロワンに頼んで内緒に帝国占領計画のシミュレーションをして貰ったのだが

「武力的な方法なら簡単だが反乱分子との戦争に数年かかるってトルーパー損失とかその辺りの費用対効果に合わないんだけど…シヨツカーの手を借りれば平和的にクーデ

ターして乗っ取れる事が判明したからな」

あの悪の組織はどうやら帝国中枢にも食い込んでいたらしく、俺達が帝国へ攻撃したら連動して手先の貴族に便乗させた反逆をさせるとの事

「だから今回はその辺はしない方向で行く」

「その方が良い」

「今はね」

「いや本当に辞めろよ!」

だが逆を返せば、ハルトはそれでも必要だと判断したら帝国を滅ぼすという可能性を持つていたのだ

もしナツキに誤算があるとすれば、この場でハルトに釘を刺しておく事と

「あらまあ」

盗み聞きしていたのは自分だけじゃないと把握しておくべきだったのである

「そうしたいならそうと仰って頂ければよろしいのに…私に任せなさいなハルト様」

原初の白は人知れず微笑む

主の内に秘めた理想を叶える為に

帝都へ殴り込み 後編!!

前回のあらすじ

消息を絶ったシアの父 カムや囚われたハウリア族を助ける為にハルト達は帝国の首都へと向かうのであった

帝都の近くにジャガーノートを止め隠すと街に

「よし到着」

例の如くショットカーのコネを使った顔パスで帝都に入ったハルト、見渡すと雑多で規則性のない街並み これが帝国の首都という訳だな

今回のメンバーはウオズ、旧四天王、テイオ、カレンの7人だ カレンには対策として擬装の首輪をつけてもらっている：奴隷の本場ゆえに油断も隙もない

だが心配な点もある昨日からテスタロッサは姿が見えない、カレラとウルティマは留守番だ…だって勇者wと行動するのは嫌だろうしな

宗一と政人は捕まった人達をフェアベルゲンに送ってもらっている

カレラは千冬と剣を交え、ウルティマはキャロルのドレットドライブに興味津々だった

ナツキ? ああアイツは良い奴だったよ、朝飯食べた後 いきなり背後から現れた高雄と愛宕に拉致られた…後は知らん

ハウンド達は武装を整えている夜間爆撃の為にノリノリときてるし

一夏は今頃…

――

「待つんだ一夏!」

「いや何でオリガはバイクに乗ってるんだよ!!」

「このバイクは貰った」

「そんな事ある訳ないだろおおお!」

「おのれ…私と一夏の邪魔をするな!!」

「リリムも邪魔…一夏は私の…モルモット」

金髪の猫耳美少女とダウナーなエルフの少女がナイフと巨大なスパナ…否! 量産型
ヴァルバラツシャーを持って追いかけていた

「っ! 捕まつてたまるかああああ!!」

オリガ、リリム、イータに追いかけて回されているな…うん誰に似たかは知らないが頑
張れ!

しかし帝都に入って早々ハルト達は

「おい兄ちゃん、いいカツコしてんなあ」

「俺達下々のものは金が無くてな…変わりにその女達を置いて行っても良いぜ、そこのは貧相な体つきだが楽しめそうであ」

いかにもチンピラに絡まれたが

「俺の文字Tシャツのセンスが分かるのに免じて命は取らないでやる…よしヤクツキ」

「うむ」

その瞬間 2人の瞳が赤く光ると逢魔屈指のバーサーカーが動き出した刹那 チンピラが見たのは宙に浮かぶ仲間達と自分の光景であつたが

殺されないだけ情けであるが

「ほーんと何であんなに血気盛んなんでしょう？」

「いやフィーニスちゃんがそれ言う？」

「潜入調査なのに目立っているのですが」

「まあ我が魔王ですからね

「しかし本当に此奴は忍ばぬのお！」

例の如く主人の奇行に頭を悩ませる面々

「ああ俺は忍びなれども忍ばない！天下御免なサムライだ！」

「いや忍べよ」

「混ぜってるよ魔王ちゃん！色々混ぜってるから!!」

「いや待て、ウオズがタメ口でツッコミしたぞ!？」

そしてチンピラ達で出来た屍の山に立つと

「ねえ君達、死にたくないなら俺の質問に答えてよ」

「誰がお前な」「ごちやごちやウルセエんだよ、テメエ等は俺の質問に答えてりや良いんだよ…クソが」「ひい！」

「待つのじゃハルト坊、此奴らは妾が徹底的に痛めつけてから情報を吐かせてやろう…ちやうど拷問由来のライドブックもあるからのお」

ヤクヅキはそれはもう良い笑顔で言うので

「そつ、なら任せたよヤクヅキ」

「任せておれハルト坊、さあ豚のような悲鳴を上げろ」

『吸血婦人カーミラ』

魔力で出来たアイアンメイデンを見てチンピラ共は涙を流しながら震え上がって
た

「「「ひいひいひい!!!」」」

「な、何なのじゃ!あの見るからに痛そうな拷問器具は!!」

「アレに入ったらダメですよテイオ」

数分後

「お待たせー情報集めてきたよー!」

「お、おお……とところでその返り血どうしたんだ?」

返り血まみれのハルトにドン引きするハジメだったが

「ん？ いやあ実はチンピラに絡まれてさあ〜」

魔法で返り血を落としながら笑うハルトに

「っ、まさか殺したのか！」

勇者Wが突っかかるが

「は？ いやいや適当に骨を何本かへし折っただけだよ殺してない、今頃病院じゃね？」

と笑うが数分前

「おいお前ら、有金全部出せそつちが俺達に手を出したんだから迷惑かけた慰謝料払え
や」

最早どつちが加害者が分からない光景が広がっていた

「だ、だから俺はもう何も金なんてねえよ！」

「なら、そこで飛んでみ？」

言われるがまま飛ぶとなるのは小銭の音である

「なーんだあるじゃないか…ほら出せよ」

「お、おたすけえええええ!!」

「んじや黙ってたお前等には関節がパニックの刑だ」

迷惑料込みでチンピラ全員から情報と有金を巻き上げた後、取り敢えず全員の四肢を
明後日の方向にへし折ったのを見て

「確かにコレは関節がパニックになりますね」

「ああ…ハルト様恐ろしい」

「あ、もしもしゾル大佐？そうそう実はさ怪我した人を見つけたんだあゝそつちで治療（改造）できない？大丈夫？ありがとうゝじゃあ連れてくねゝ」

そしてチンピラ達はショツカーの運営する病院に回収され、治療（改造）されて元気になったのであったとさ

だが肝心の情報だが

「将校の奴と大差ないね捕まった奴等は城の中にいるくらいしか分からなかったよ…けどカテゴリー8並に面白そうな情報が一つ」

「何だ？」

「城の牢番してたネディルって奴の出歩く店を押さえた、そいつから話を聞けば城の中の事とか情報は集まるんじゃないかってよ」

「成る程な、よし探すか」

ハジメはユエを連れていくと、やる事ないので

「んじゃ暇潰しのゲゲルでもするかな〜ウオズ、バグンダダ持つてる?」

「持ってませんよ…と言うより我が魔王、まさかと思いましたがこの街気に入ってます?」

「んーまあね単純な暴力で全部解決出来るとか最高だよ爆撃するのが勿体無いよねーカレラとかダグバとか気にいる街だよ…そうだ呼ぼうか」

「街が消し飛ぶからやめて下さい」

「だよなあ、そうしたら意味ないか：暇を一緒に潰してくれる相手（ナツキ、政人、宗一）もないとなると：：しゃあない折角だから暫く散歩でもするかな網膜に焼き付けとこ、何秒記憶に残るか知らんけど」

『相棒の脳はネズミ並みだからな』

「俺の脳小さっ！」

『妥当じゃね？』

「んだとコラア!!」

「散歩の方がよろしいかと平和の為に」

「何か酷くないウオズ？俺こう見えて超平和主義者よラブアンドピースを掲げる天才科学者リスペクトなもの」

「寝言は寝て言うものですよ我が魔王」

「辛辣う!!そこまでかなあ!」

「ハルト坊の戯言を置いといいて「置いとくなよ!」これからどうする?」

「実際、暇だよね」

「仕方ないだろう、ハルト様がゴロツキを見せしめた結果として誰も喧嘩を売らなくなっただけ」

「良いじゃないですか? 退屈なのは良い事です」

「はあ折角新しい魔剣の試し切りにとっておったが…あの程度の攻撃で根を上げるとは情けないのお」

「ならBBダンゴムシお手玉するか」

「それ我が魔王しか暇潰せませんよね？」

「ならお前たちとグルメ界行くか！」

「あの魑魅魍魎跋扈する魔窟をアミューズメントパーク並みの気軽さで歩けるのは我が魔王くらいですよ」

「ええ！行こうよ皆くなんかドンスラの話だと悲鳴を上げさせてから獲物を食べるなんて食癖がある奴がいるらしいんだよ！会ってみたくない！！」

「そんなヤクヅキみたいな危険人物闊歩する世界に行きたくありません!!」

「おいウオズ、貴様ちよつと面を貸せ」

と話していると

「その今更なんじゃが、ご主人様について聞きたい事があるのじゃが」

「ん？何」

「えーとのお、一応の確認じゃが今回の作戦は平和的な解決というので大丈夫なのじゃな」

「まあ主役はアツチだからさ爆撃は無人区画だけ、後はこっちのロボットで暴れるだけだよ」

「平和的解決とは一体…」

精々が城壁をブンパツキーボールで破砕する程度である

「そうなのか…：…それなら…：…どうじゃ妾とご主人様で逢引きでも」

「寝言は寝て言えポンコツ竜」

「はう！何という言葉責めなのじゃあ！」

「だが…ティオにはこの間の一件で借りがあある」

「この間の一件 それはハジメと先生の加勢をした事を思い出す

「ハジメ君援護の手柄もあつたな信賞必罰は世の常だ、今日はティオの望みを聞いてやる」

「ならば妾を鞭で叩いて欲しいのじゃ！」

「そう言うのはノーサンキュー…それに俺の持つてる鞭だと」

取り出したのはアナザーライアのエビルウィップにアナザーサガのジャコーダーであるが

「こんなんだよ？」

「それはそれで良い！」

「ダメだこりや…まあ良いやウオズ、何かあつたら報告頼む」

「かしこまりました」

「後は」

ハルトは念話でカレラとウルティマヘテスタロッサを探して欲しいと頼むと

「さて行くかな」

「うむ」

その頃

「はっ！ハルくんが女の子とデートしてる気配を感じたよ！」

「二重調べろ」

「はいはいお任せあれ〜囁告篇帙！ふむふむ…成る程ね…ハルきちはテイオってあの和服巨乳美女というぞお！」

「ギルティだね!!今日はちーちゃんが気絶してるから私が変わるよ！さあ出動だ！」

「いや待て流石に仕事中だろう…それにオレ達はオレ達でやる事がある具体的には仕事と称して現地妻候補とデートしたあのバカへの説教だ」

とキャロルが笑う手元には3枚のレプリケミーカードがあったという

「ケミーの三重鍊成か楽しみだ」

「っ…」

「どうしたのじゃご主人様？」

「いや今悪寒が…：…大丈夫だ」

「それなら良いのじゃが…：…しかしご主人様は色々な存在を引き寄せるのじゃな」

テイオの上げた先には瑞鶴と翔鶴姉妹が使う折り鶴のようなものが見ていると

「まあ大半はヤバい奴だがな」

『上がコレなら部下も部下だ』

「真つ先に引き寄せられた筆頭が何か言ったらあ」

『何だと貴様!!』

「つせえなあ本当の事だろ？」

「ご主人様はそのアナザーライダーとやらを本当に信頼しているのじゃな」

「当たり前だ、こいつ等と出会ったから俺の運命が変わった、こいつ等と旅したから逢魔の今がある…だから警告するぞ俺の相棒達に手え出すならテメエでも締め上げるぞ」

それは言外にテイオを信頼してないと伝えているに他ならない

「前から疑問じゃったが、何故妾は信頼されておらんのかのお…南雲ハジメ殿や新参のカレンでさえあのベルトを貰っておるのに」

「純粹に信頼している結果だ、お前は信頼できねえんだよ何考えてやがる」

腹に一物抱えているような気がしてならない、彼女に關してはそもそも旅の目的が分かかってないのだ ハジメ達の監視や調査なら既に終わつてると言っても良いのについてくる、いや確かに責任云々言うならハジメと俺にはあるのだが

ただ純粹な疑念である

「何を言っておるのか、さっぱりじゃ妾はご主人様達に危害を加えるつもりはないからの」

「それなら良い」

ハルトはヘラつとした顔に戻ると囲まれてしまっていた

「おい、お前ら「おらあー!」「ごふう!」

早速顔面めり込みパンチでリーダーのような男をノックアウトさせると仲間が慌て逃げていったのである

「んじゃ、こいつにも聞くか」

「—————」

このチンピラは以外にも良い情報を持っていた、この街の冒険者ギルドの酒場なら街

の事で知らない事はないとのこと、そう言われて酒場に來たのだが

「アレ？ハジメ君じゃん」

「ハルト？どうしてここに」

「アンタと同じく人探しだよ……あ、マスター、ここにいる全員にお酒一杯ね」

チンピラから巻き上げたお金で客に酒を振る舞うと全員よっしゃー！と喜んでいた

「アンタ気前が良いな」

「ちよつとした臨時収入があつてね……変わりにだけど、この子とき、ちよーつと世間話お願ひ出来る？」

「ああお客ならな」

「という訳でハジメ君、後はよろしく」

と席に戻ろうとしたのだが

「ハルト様、酒をいっぱい飲んで良いのですか！」

「主！カゲン殿は樽ごと飲もうとします！」

「いっぱいじゃないよ一杯だよ！ってややこしいわ!! まあ飲みたいのは飲みたいか…マ
スター！ワインを樽で頼む!!」

「いや何言っているんじゃないやハルト坊!？」

—————

そして元牢番をハジメとユエのOHANASHIにより詳細な情報を手に入れたの
だが合流した場所で

「流石の俺でも、それはしねえよハジメ君」

「まあな流石に俺も可哀想とは思ったが…中々話さない奴が悪い」

「そうだな…素直に話しておけば股間をそこまで蹴られる事はなかったろうに」

「ファイズブラスターになってやろうかとも考えたがそれは辞めた」

「それが良い、それした瞬間に相手は灰になるからな」

そうファイズのブラスターフォームは並みのオルフェノクなら触れた瞬間 灰になる程のフォトンブラッドが流れているのだ…今更ながらに並みのオルフェノクつてどの辺のオルフェノクなんだろうとか考えなくもないが

「予定通り俺とシア、ユエで潜入だ」

「分かったハジメ君、城に潜入するならコレが必要だろう受け取れ」

「う、これは!!」

ハジメが受け取ったもの それは!

「潜入のお供、段ボール・伝説の傭兵仕様だ!!」

何処かのスニーキングをする蛇が愛用している段ボールだったのだ

「良いセンスだろう!」

「おお!分かってるじゃないかハルト!」

「潜入任務には必須だからな!」

とドヤ顔していたが

「いや……この世界には段ボールなんて無いんじゃないか？」

勇者Wが唯一まともな事を一瞬だった……

「……………」

数秒の沈黙の後

「くそっ！折角段ボールに隠れてスニーキング出来ると思ったのに！！その為だけに蛇さん意識して眼帯にもスコープ機能とかサーモグラフィとか色々付けたんだぞ！！」

「くそっ！そうだったよ！この世界には段ボールがないじゃん！！何でそんな当たり前な事にも気づけなかったんだ俺！！バカ！！」

『自覚が出来てきたなら良い事だ』

2人はノー！と頭を抱えていたのは言うまでもない

「さて茶番はコレまでだ、真面目な贈り物を渡そうコレだ」

「コレはクリアーイベントのカード!!」

アナザーベルデの中から借りた透明になれるカードである

「コレを使えばだいぶ楽になる筈だ」

「確かにな……おい待て違うライダーのアドベントカードはバイザー使っても本来の使用者にしか反映されないんじゃないや……」

「あ……そうだったな……ならコレだ」

「コレは？」

「フォーゼのステルスモジュールだ改造して押すだけで使える」

「最初からコレ出せよ…ハルト達は屋外で陽動だな」

「ああそれと並行して無人区画を爆撃して目眩しする」

「流石に巨人が二体も暴れたらコッチに目が行くだろう」

「そうだな…一夏」

「お、おう」

「ガブティラを頼んだ」

「ああ任せとけ！」

ハジメ達を見送るとハルト達はノビをして

「んじゃ行こうぜ、トバスピノ!!」

「!!!」

「プレズオン…初めての合体だね行くぞ！」

「!!!」

「皆、行くぞ！」

「おう！」

「さあ合体だ！と電池を構えたが

「待ってくれ」

「あ？」

なーんで、勇者は突つかかるかな〜と見ると

「南雲達のいない所で何をするつもりだ」

「話聞いてた？陽動ですが？つてか何しようが俺達の勝手だろ」

「陽動なら俺達がやるから、お前達は下がっている？」

「はあ？いやいやこの作戦にはガブティラ達の協力が必要ですが？」

「俺達が乗って陽動するから、その電池を渡すんだ」

「「何言ってるの、お前？」」

「この勇者にブレイブなんか無いだろ？いやそもそも認められてないし

「お前達に任せていたら帝国の市民が危ないに決まってる！その恐竜達には勇者の俺が

乗るのが当然の事だ」

「ねえハル兄、あの人何言ってるの？」

「さあ？何も出来ないからやつかみしてるんじゃないかね？」

「何だと!!俺はお前達に任せられないと言ってるんだ!」

「勇者つてのを盾にして他人の力を取ろうとするとかないわーまあ、ハジメ君達に寄生して神代魔法を頂こうなんて発想するんだから当然か」

「ふざけるな!貴様等が良からぬ事を考えているのは分かっているんだ!」

「アホじゃねえの？」

「俺は勇者として正しい事をする!魔王を倒すのが勇者だお前みたいによくの人を不幸にする魔王をな!!」

「はあ……ここまで来ると見下げ果てたアホだなどーしても俺を悪にしたいか」

「どうした怖いのか、所詮弱い者イジメしか出来ない奴だな」

「それはこの間の檜山とか言う奴だろ？」

「ふざけるな俺のクラスメートを「良くもまあ仲間を殺した奴をそんな風に言えるよな」っ！それは」

「あと悪いな、俺はお前には手を出さん……ハジメ君に文句言われそうだし、あと生憎殺気以外お前に向けて良さそうな技や道具はないから」

暗に面倒臭い、お前程度にはそれだけで十分と告げる

「それとお前程度の弱者に強者がどんな感情を抱くのか教えてやろうか？……憐れみだよ」

蟪蛄の斧という言葉がある、カマキリは己より大きな者へと果敢に立ち向かい捕食する習性があるが、それは時として敵わぬ強者にも挑み返り討ちにあう

身の程知らずという意味も込められている

「傲慢な奴め」

「当たり前前だろ俺はお前と別次元の怪物達と戦ってきたんだ人殺しの覚悟も無い子供相手にビビると思うか？それと違うんだよ俺を殺して良いのはお前じゃない絶対にな」

確かに勇者は魔王を倒す存在だろう

だが俺を殺して良い勇者はお前では断じてない

「コレ受けて平然としてるならな」

「何を言っーっ!!!」

この時 勇者が見たのは自分の四肢がもがれて首と背骨だけが抜き取られたのを滑稽と笑うハルトの姿があつた

「うわああああ!!」

「どうしたんだよ光輝!」

剣を投げ捨てて悲鳴を上げる勇者を見て

「ほらな、その程度なんだよお前は…俺の憧れからしたら小指の先で突けば終わるくらの庄でしかないんだけどねえ」

タネが割れば何て事はない殺気の塊をぶつただけで殺される幻覚を見ただけ

「うわああの程度で泣き叫ぶとか情けな、他のもビビってるしマジないわー…やっぱりゃ」

ハルトが後ろを向くと平然としているウオズ達がいた

「終わったか」

「魔王ちゃん遊びすぎだよ」

「悪い悪い、つか今の圧にもビビらないのは流石はお前達だな」

「当然です、あの程度で泣き叫んでいたら我が魔王の近衛など務まりませんよ」

勇者が悲鳴を上げるような恐怖の圧でも旧四天王からすれば扇風機の弱風並みの威力でしかなかったのである

「気は紛れたかハルト坊？」

「んー不完全燃焼だね…骨あるのかなと思っただら腑抜けの腰抜け、殴る覚悟はあるのに殴られる覚悟のない使命感に酔ってるだけの自己正当化マシンじゃんアレ」

「はは、アレがこの世界を救う勇者とかマジないね」

「忌々しいですがナツキの方がマシですよ、アレはアレで魔王様を止めようとする気概がありますぞんざいに扱われようとも折れずにある…まああの位でなければ魔王様の前で勇者を名乗る資格はありませんが」

「意外とナツキを買っているのだなフィーニスよ…ハルト様どうでしたか？」

「ん？そうだなあ……ああそうそう確かにつままないね、弱い者イジメってさ」

目の前にしゃがんで勇者へ笑顔を向けると勇者は顔面蒼白となり気絶したのであつた

「ありや伸びちやったか、なあアンタ等」

「つ、な……何かしら？」

「次、同じ事したらマジで殺すから覚えておいてね……あと邪魔しないように縛り上げてよ」

「わ、分かったわ」

—————

さて気を取り直して

「「「ブレイブイン!!」」」

そして全員が獣電池を投げると

『ガブリンチョ!!』

一斉に獣電池を取り込んだ獣電竜が巨大化するとそれぞれの相棒に乗り込む

「行くぞナツキ」

「ああやろうかハルトー！」

「バクレツカミツキ合体!!」

プレズオンの体が分割されていきトバスピノに合体していく、片腕にプレズオンの頭部がもう片腕にブンパツキーをつけた新たな巨人

『バクレツスピノダイオー!!』

「完成!!バクレツスピノダイオー!!」

バクレツスピノダイオー 出陣!!

そして

『キョウリユウジン・ウエスタン! ヒーハー!!』

現れた赤い巨人。そしてその背中を飛ぶ黄金のトサカが重なる時

「「ライデンカミツキ合体!!」」

一夏、ジョウゲン、ベアトリスの掛け声に従い、キョウリユウジンが新たな姿へと変わる背中に、プラゴードンを纏し空のキョウリユウジン

「「完成!! ライデンキョウリユウジン・ウエスタン!! いざ参る!」」

二体の獣電巨人が現れると同時に異変が起こったのだ

『ギガガブリンチョ!!』

「っ!!」

『ギガントブラギオー!!』

現れたのは白亜の巨体を持つ獣電竜を見守る巨人

ギガントブラギオー 現る

「誰だ?」

あのブラギガスに認められるなんて只者じゃないなと身構えると同時にブラギオアックスを構えて此方を攻撃したではないか!

「ふぎげんな!!」

「おい敵かよ!! 呪腕さん、ハジメに連絡！イレギュラー発生って報告して！」

それだけ言うのと改めてバクレツスピノダイオーとライデンキョウリユウジンがギガントブラギオーとの戦闘に入るのであった

敵か味方か閃光の勇者！

前回までのあらすじ

帝国に襲われた亜人族　その中でもハジメと面識を持つ　シアの家族を助ける為　帝国に殴り込むことにしたハジメ達！陽動の為にバクレツスピノダイオー、ライデンキョウリユウジンとなった2人の前に最後の獣電巨人　ギガントブラギオーが立ち塞がるのであった！！

「おいおい何でギガントブラギオーがいるんだよ！」

「誰かがブラギガスに認められた……って事？」

「んな馬鹿な！」

『話は後だよハル兄！！向こうはこっちと戦う気満々だつて！』

「ならやるしかねえ!!」

『くらえ!!』

2人はプレズオキヤノンとパラサビームガンで攻撃するモロに直撃したのを見て

「やったか!!」

「バカ、それフラグ!!」

【立ちました!】

「ほら見ろフラグちゃんの仕事しちやっただじゃないか!!」

やはりと言うべきか無傷なギガントブラギオーに

『なら空から仕掛けてやる!』

「待て一夏！奴はガーディアン獣電竜の力全て使えるんだ！」

『何だって！ガーディアンの皆の力を…そんなの反則じゃないか！』

「そうだ奴は仲間の力全部が使えるとんでもないチート野郎だ！」

『ブラギガスも魔王ちゃんには言われたくないだろうなあ』

「へ？」

『え？』

「おいハルト！ボケてる場合じゃねえよ!!何か対策ねえのか!!」

「取り敢えず……この場合は数で押すぞ、一旦解散!!」

すると全員が強化形態を解除して

「完成！スピノダイオー!!」

「完成！プレズオー！」

「完成！プテライデンオー!!」

「完成！キョウリユウジン・ウエスタン!!」

4対1である

「そら行くぜえ!!」

そのまま4体の巨人は武器をぶつけ合うのだが

「相棒、大変だ！」

『どうしたハルト!!』

「トバスピノの武器ってブーメランしかないのか!!」

『いやブンパッキーボールやアンキドンハンマーもあるだろ!』

「しかしブーメランって投げた事ないな…本当に投げたら戻るのか?」

『んな事言ってる暇あったら投げろや!!ダサ文字T魔王!!』

とナツキが言うので

「んだとゴラア!!」

思い切り投げたが明後日の方向に飛んでいった

「あ……」

『何やってんだ、ノーコン!!』

そう言ってる間にもプレズオーとギガントブラギオーは取っ組み合っていたのだが、その隙にブーメランが綺麗な弧を描きながら戻って命中したのだ

『ぐぎゃ!!』

プレズオーの後頭部へと

「あ、ごめんプレズオン」

『お前わざとか!!あと俺に謝れ!』

「お前は痛くないだろ?それに俺はいつでも真剣なんだが?」

『なら悪質だわ!!』

『2人ともいつもみたいコントしてないで!!』

『そうですよ!こっちは4人!向こうは1人ですよこのまま囲んでしまえば……つて何じゃありゃ!!』

ベアトリスの声のする方向を見てみると現れたのは巨大なサメ型の空中要塞である

「まさか…アレはギガバイタス!?!」

『ゴウタウラスがいますと思ったら、まだあんなのが樹海にいるのか!!』

『この樹海、完全に特撮系外来種に侵略されてるじゃないですか!!』

「おいベアトリス、獣電竜達や聖獣達は外来種じゃないぞ星の平和を守るありがたい存在なんだ!!」

『今その話必要ですか!?!』

さあ、敵か味方か…：…：味方してくれんじやね?とか淡い希望を持ってた時代もありました

ギガバイタスはロボモードになるとギガントブラギオーを守るように立ったのである

「まさかの敵側!？」

それと同時にギガバイタスの下腹部にある赤と青のランプが点灯すると全面展開現れたのは赤い車両と青い航空機が一齐に発進したのである

航空機は獣空合体して青き翼鳥　ギガフェニックスに車両は獣陸合体して赤き鉄犀ギガライノスになるのだ!

「解説う!?!数の優位がひっくり返されたあ!!」

とツツコミを入れるハルトだがギガライノスの体当たりでスピノダイオーは吹き飛ばされた

『スピノダイオーを吹き飛ばすとかマジかよ!』

『なら私が!!ちっ!』

加勢しようとしたプテライデンオーはギガフェニックスに邪魔され空中戦に移行する、それは見るものを魅了させる美しさだが体当たりくらったスピノダイオーは怒り顔である

「腹正しいな……潰すか」

『頭冷やせハルト、出ないと勝てる戦いも勝てんぞ?』

「ん……OK」

「!!!」

「どうしたトバスピノ?……ええ!お前そんな事出来るのか!!」

アナザーディケイドの言葉で少し冷静になったハルトは分析してみる

「取り敢えず何でか知らないが邪魔するなら敵……だけどギガントブラギオーが……つな

ら……一夏！ジョウゲン！こっちに來い！スピノダイオーウエスタンだ！」

『え！』

「良いからやるぞ!!」

『了解だ魔王ちゃん!!』

ガブテイラから2人が抜けるとフリーになったガブテイラはそのままギガライノスに体当たりしたのであったブンパツキーとアンキドンを離脱させて2人と合体

「完成！スピノダイオーウエスタン!!」

「で、合体しちやっただけどうするのさ！ハル兄！」

「一か八か……アレをやる！ベアトリスとナツキは暫く時間稼ぎお願い!!」

『分かりましたけど早くしてくださいね!!』

『頼んだぞ！来いやあ!!』

「アレ？」

「実はトバスピノには隠された機能があるんだ」

「その機能って？」

「強制カミツキ合体って言ってトバスピノは無理矢理他の獣電竜と合体出来るんだ！その機能を使ってトバスピノとブラギガスを合体させる」

「そんな機能があつたの魔王ちゃん！」

「何で教えてくれなかったのさハル兄！」

「俺もさつきトバスピノから聞いたから!!」

「まさかのぶつつけ本番!？」

「よし行くぞおおお!!」

「ええ！もう！何とかなれえええ!!！」

とスピノダイオーウエスタンは破れかぶれの体当たりすると

『ギガントスピノダイオー!!』

無理矢理スピノダイオーとブラギガスが合体したような姿　ギガントスピノダイオーになるが

「だがこの合体は無理矢理だから時間は短い、このままブラギガスに乗ってる奴を倒すぞ!!」

「おお!!」

そして3人はブリギガスの空間に入ると

「殴り込みの時間だゴラア!!」

「覚悟しろお!!」

ハルトとジヨウゲンが武器を構えて突撃するが

「誰もいないな?」

「アレおかしいなあ?」

「無人で動いてたの?」

困惑する3人だが、その背後に

「魔王ちゃん危ない!!」

「っ!!」

ハルトは慌てて横っ飛びで回避すると、いた場所に赤雷が放たれたのである

「つぶねえ! 助かったわジョウゲン!!」

「油断しちゃダメ、くるよ!!」

ソレはゆたりとした空間から現れたのは

「見つけたぞ常葉ハルト」

それはライオンのような顔をした鎧武者 七支刀を構える戦士……こいつ強い!!

「お前は……誰だ!!」

「え？知らないのハル兄!？」

「完全初対面だぜ!!」

初めましてだが強いのは分かる

「俺を知らないとは腹正しい奴だ：俺は戦騎ドゴルド、貴様を倒し最強になるものだ！」

「へえ、ハル兄に挑戦状を出すなんて中々の自信家だね」

「下がってよ2人とも俺がやるからさ」

「待てジウゲン：折角のタイマンだ受けて立つ、手出し無用だ」

「流石は最強を名乗るだけはあるな」

「お前に敬意を払うだけだ、だが場所を変えようブラギガス達の負担が大きいんでな」

「良いだろう」

「ジヨウゲン、一夏は早く戻れ」

「はっ!」「気をつけてねハル兄!」

そしてハルトとドゴルドは着地して生身で向き合おうと同時にギガントスピノダイ
オーの合体は解除されてしまったのだが

「漸く行ったか」

ブラギガスに乗っていたのは彼等だけではないのである

「さあ変身しろ

「ガイソーグに!!」

「……………へ？」

「おい待てコイツ何て言った？」

「ガイソーグ？」

「おいおい惚けるなよ、俺は貴様が宇宙最強の剣士ガイソーグだと聞いているぞ！」

『なあ相棒、コイツまさか』

言うな、分かったガイソグの俺と勘違いしてやがる

「ちよつと待て……あ、もしもし……そうそうお前に用事があるんだけど……うんお願い」
「何を呑気に話しているう!!」

数秒後、オーロラカーテンから現れたのは

「ガイソグハルト参戦!!」

「久しぶりだな!」

「ああ、それでアイツが俺に」

「そう言う事だ」

「な、何故2人いるのだ!」

「簡単に言えば、お前は勘違いしてた訳だ…ガイソーグはコツチな」

「な、何だとおおお!!そんな腹正しい事があるかあ!!」

「いやその通りだよ!」

ドゴルドは凄まじき勢いでブチギレている

「良い覇気だな、ドゴルド!相手にとって不足なし!」

「まあ良い本命が来たなら俺が倒す!!」

「やってみな、行くぞ鎧……ガイソーチェンジ!」

『ガイソーチェンジ』

そして鎧を纏うのは

「不屈の騎士！ガイソーグ！！俺の騎士道！見せてやる！！」

「良いだろう！戦騎ドゴルド！参る！！」

まさかの人違いによる場外乱闘が始まったが

「取り敢えず……こつちを何とかしないとだが……ハジメ君達は大丈夫かな？」

と疑問に思っていたが、帝国兵目線で見ると

巨人が帝都側で突然の大乱闘を始めるといふ異常事態 兵士達は城から出払い城下町はパニックの一言に尽きる

結果論だが陽動大成功だったのであるが

「ギガバイタス、ギガフェニックス、ギガライノス！何で君達は戦ってんのさ!!」

「!!!」

バイタスの鳴き声を聞いて

「ふむふむ、そう言う事か」

『相棒、アイツらの言葉が分かるのか!』

「さっぱり分からない!!」

『ダメだこりゃ……ん?』

その場に突如 現れたのはガオウルフにガオアリゲーター、ガオハンマーヘッド……まさか

「宗一か!!」

「その通り!!」「俺もいるぜ!」

「ナイスタイミングだ!コイツ等が何で暴れてるのか教えてくれ!!」

「ああ……ふむふむ……戦いの匂いに釣られたらしいな」

「本当にコイツら星を守る聖獣なのか!!」

「まあ元々、アイツ等敵に改造されてたからな……」

「はあ……ならトバスピノ!!」

「!!!」

「一夏達とスピノダイオーで戦ってくれ」

『相棒はどうする？』

「そりゃアレだよ……あの勇者の所為でイライラしたからさあ……ちよーつと八つ当たりさせて貰うぜ」

『王蛇』

アナザー王蛇になるとガイのカードを握り潰す

『FINAL VENT』

右腕にメタルホーンを装備して背後から現れたメタルガラスの肩に両足を乗せると直線距離で超加速し射線上にいる敵を纏めてヘビープレッシャーで吹き飛ばしたのである

「「「うわああああ!!」」」」

城の外で動いていた兵士をまるで無双ゲームの雑魚キャラのように吹き飛ばすのであった

その間 ギガントブラギオーを抑え込んでいた面々はと言うと何とか宗一とガオウルフの仲介により何とか双方矛を収めたまでは良かったのだが

「今だ巨人を捕えろ!」

などと愚かな事を言う帝国兵の上空から無人区間目掛けて 逢魔王国のYウイング、ARC170爆撃機等 出番少なめだが確実な働きをする兵器群が無人区画は爆弾の雨を降らせたのである

「な、何だアレは!!」

「おい!!」

などと目線を逸らしたのが運の尽き、炎を光源に反射している鎧から

「「「「!!」」」」」

ギガゼール出てきて、こんにちは！お前等が今日の晩飯だ！と襲い掛かるのであった、しかも丁寧に全員ミラーワールドに引きずりこむのであったが兵士の1人が

【いやだああああ！頼む！出して！ここから出してくれえええええ!!】

とまるでギガゼールと契約したガラスの幸福を味わったライダーみたいな悲鳴が聞こえると

「さてと久しぶりにミラーモンスターに餌をあげたし…後は派手に暴れるか」

『陽動なのを忘れるなよ』

「ああまあ正確に言えば、ブラギガスの中で悪さする奴かな」

『気づいていたか』

「今見たらドゴルド以外の生命反応があったからな…中にいる筈だよな」

『テレポート』

指輪の魔法で転移して誰もいないはずのブラギガスの空間に入る

「隠れなくて良いよ寧ろ対話が望みだ、あのブラギガスに認められたという閃光の勇者なら臆せず姿を見せて欲しいんだがな…俺もトバスピノに認められた獰猛の勇者な訳だからな」

「そうだな失礼した」

「お前は……?」

「私は今は名乗るものではないか……バランサーとでも呼んでくれ」

顔はフードで見えないが……分かるドゴルドよりも強いぞコイツ

「バランサーね……何で俺たちの邪魔をする」

「君達の存在と行動がこの世界の天秤を破壊すると判断したまでだ、ギガバイタス達もその意を汲んでくれたまでよブラギガスは中立だが今回は手を貸してくれた昔馴染みでね」

「おいおい今更、世界の管理人気取りで混ざりに来たってか？ふざけんよ、それなら邪神が暴走する前に介入しろや！」

「それがこの世界の流れなら我等は介入はしないが……お前のように我欲で世界の理を乱す奴は許容出来ない」

「ふーん……なら俺の敵か味方かお前は？」

「どちらでもある」

「へえ…」

どうしたものかねえと考えていると

『ハルト、任務完了だ撤退してくれ』

ハジメの通信を聴いて残念、タイムアウトのようだがハルトからしたらまだまだ暴れ足りないがアナザーディケイドに静止されたので撤退する

「コマンダー、連中を撤退させろ俺も撤退する」

『イエツサー!』

「次はお前の顔拝ませてもらうぜ、閃光の勇者さんよ」

『テレポート』

そしてハルトは転移して全員無事に撤退したが新たな脅威の登場に警戒心を強めたのであった

合流地点

「よっす」

「我が魔王、ご無事でしたか」

「おう」

そしてカムの話だとやはり完全にハウリア族は帝国のターゲットにされてるようだ
…んで問題なのはこれから

「我等で帝国と戦います!」

完全に血迷っていると思えない発言だが、樹海や亜人族の未来を考えるとハウリアが帝国と戦うべきという意見にシアは反対するが

「陛下…我等も」

ハウンドはどうやら助けたいと名乗り出るが

「あのなあフェアベルゲンやハウリア族で決着をつけるってんなら俺達は直接手は貸せないぞ」

「しかし陛下!!我等は帝都を爆撃しました!ならば彼等と共に戦うべきです!」

「コマンダー!確かに俺達は帝国を攻撃した、しかしハウリアと連携して帝国を負かした時に俺達が手を貸したと知られたどうなる?」

「それは…」

「俺達がこの世界から去れば帝国は同じ事を繰り返す、それも今度は本気で徹底的にだ
そう考えるとハウリア族だけで解決すべきなんだよ」

「陛下……」

「まあ支援は全力でするがな」

「は？」

「ハウンドのやりたい事だろ？なら俺は全力で協力するよ」

「陛下……」

「普段から皆に凄い迷惑かけてるからな！」

「自覚あるなら自制してください!!」

「善処します!!」

『まあこのバカに言ってもダメだろうがな』

「んで、どう支援するつもりだよ」

ナツキの質問にハルトは

「えーと……街の至る所に爆弾を複数仕掛けるんだ!そんで市民を人質に皇帝と交渉する!!」

*悪党なこと言ってますが彼が主人公です

明るい笑顔で言う言葉ではないとハジメ、ナツキ、宗一、政人はドン引きしていた

「我が魔王の言ってる事とやってる事が完全にテロリストですよ!!」

ウオズのツツコミが冴え渡るも

「成る程、我等が爆弾を仕掛けてリモコンをハウリア族に渡すという事ですか、それに仕掛けて効率よく起爆できるのは我等だけ…流石です陛下！」

「その通りだハウンド！後は井戸に毒でも投げ込んだりとか帝国領内の田畑を焼き払って食糧自給率を下げてやるとかな逢魔の餓え殺しよ」

「その通りだ、じゃないよ!!」

「我が魔王！その作戦は人道的に問題しかありませんよ!!」

「シェフィールド様！千冬様！お願いですからハルト様達を止めてください!!」

とジョウゲン、カゲンが頭を抱えるのも無理はなかったが

「ハルト」「ハウンド」

「へい」「はっ!」

「少し正座しろ」「正座してください」

「はい」「イエツサー」

復活した千冬とシエフィールドの説教により辛うじて踏みとどまったのであったと
さ

「やはり主従は似てくるものですね」

「ハウンド、最初の頃はあんな子じゃなかったのに」

「ハルト様に似てきたな」

「似て欲しくはないですね」

やれやれと呆れていると

『ハル』

「お、ウルティマ？ テスタロッサは見つけたか？」

『うん、見つけたんだけどさ……』

『凄い笑顔で良からぬことを考えているのだが……我が君よテスタロッサに何か吹き込まなかつたか？』

「いやごめん全く身に覚えがないんだけど……」

『えーと聞こえる範囲だと……この世界を支配するとか何とか言ってるね』

『あと……我が君がこの世界を征服すべきだとも言ってるな』

「大至急その計画を辞めさせろお!!何で俺の知らない所で世界征服のプラン練り上げてんの!?!」

「は、ハルキちがそんな悪の帝王のような発想に至ってたなんて!ねえハルキちモデルにして闇堕ちして世界征服企む主人公とかどうかな?」

「いやこんな所で職業病を出すな二亜!」

「まあ敵を虐殺してるから今更よね」

「いやいやその前にハルくんらしくないよ!世界征服とかどうしちやったのさ!」

「いや〜何か帝国が色々邪魔されてきたからさ、蹴散らすだけじゃダメだと思って…帝国を支配してやろうかなと思いました。」

「作文!?!」

「ハルト貴様！内心ではそんなことを考えていたのかあ!!」

「千冬待つて!!いや確かに思いついたは思いついたけど実行なんてしないって!!てか誰にも話してないし!!」

「その前に我が魔王にそんな野心があったとは…感動しましたよ我が魔王！やはり貴方にも霸王の素質があったんですね」

「流石です魔王様！なるほど…この世界で早急にショツカーと同盟を結んだのも円滑に世界征服を行う為の布石だったんですね！」

「そ、そうだったの魔王ちゃん!？」

「何と言う事だ…ハルト様はこの状況をあらかじめ予測していたのか…やはりハルト様の行動を詠むなど我々には無理だったな一体何手先の未来まで見ているというのだ…」

「こうなるから誰にも話さなかったんだよなあ……と上の空でいると

『済まない今、相棒の中で第48回精神世界カラオケ大会をしているのだが……相棒の記憶にあるアクエ○オンの歌詞がボヤけてるのだが……』

「ああ、それなら一万年と二千円くらいだな」

「まさかそのスケールで!!!」

「へ?……あ、違うから待って話をしよう!!」

「問答無用だ!そこに直れえ!!」

「てかハジメ君かナツキだろ!テスタロッサに話したのは!!」

「いや俺は話してないぞ?」

「俺も同じく」

「なら何でテストロッサが聞いてんだよ！」

「盗み聞きでもしたんじゃないかね？」

ナツキ正解である、ハルトは恐る恐る尋ねる

「……………因みにだけどさ何か俺の事で話してたりする？」

『んーとねーハルト様の為にこの世界を征服してご覧に入れますわって言ってる』

「テストロッサアアアアア!!何やってんだお前えええ!!」

忠臣の暴走に思わずハルトは混乱しながら念話を入れると

『ご安心くださいなハルト様、私の持つ力を持ってハルト様に世界を献上させてご覧に

いれてみせますわ!』

今までの付き合いでこんな自信に満ち溢れたテストタロツサの断言を聞いたことはあるか? いやない!!

『今のテストタロツサにはやると言ったらやる、凄みがある!!』

「ボケてる場合か相棒!? テスタタロツサ! 思いとどまれ! 確かに帝国支配は思いついたが実行しようとは言っていないし世界征服とか正気の沙汰じゃないぞ!」

「わ、我が魔王に正気を説かれている段階でダメだと気づきなさいテストタロツサ!!」

「そうだよ! 狂ってる状態が標準装備のハル兄がイカれてるって慌てふためてるんだからダメだって!!」

「ウオズ、一夏後で話がある」

『私は常日頃思っていたのです…』

「？」

『ハルト様が支配する領土が狭い、逢魔本土以外にも支配する領土を持つべきです…でないとい八星魔王に舐められてしまいます！』

「俺に世界征服なんてする意思はないからね！逢魔に暮らす手の届く範囲の皆が守れたら必要以上には望まないよ!!」

『それでしたら領土を広げハルト様の手の届く範囲を広げれば良いだけの事ですわ』

「映司さんと思わずびっくりの発想にドン引きだよ！」

『ダメだよテストタロツサ！』

『そうだぞ!!』

「ウルティマ!カレラ!!」

止めてくれるのか!と期待の眼差しを送るが

『凄い手柄を独り占めしてハルに褒めてもらうつもりでしょ!!』

『そんな真似断じてさせるか!!貴様だけが我が君の寵愛を受けるなど羨ま……けしからん!!』

「お前ら違う理由で怒ってるね」

『でしたら2人も参加しませんか?丁度2人にも手伝って貰いたい箇所がありました』

「ダメだよ2人とも!テスタロツサの作戦に乗っちゃ!それは孔明の罠だ!!れ

「孔明も冤罪で胃薬飲むわ!」

『この作戦が成功すれば、私達もキャロル様達と同じ妃としてハルト様の寵愛を受ける事になりますわ』

『……………何をすれば良い？』

「カレラさん!!」

『そういう事なら早く言つてよね』

「ウルティマ!?!裏切るのか!」

『裏切る?とんでもないコレはハルの為だよ!この世界征服を成功させてボク達も妃になりたいと思つてるよ!!』

『そうだ我が君、我等も妃の末席に加えて欲しいと常日頃から思つていてな…その言葉を言う為の手柄を立てる機会を虎視眈々と狙つていたのだ!』

「見事に懐柔されてんじゃねえよ!!あと狙ってたのか!!驚きだわ!」

「え、ハルくん気づいてなかったの!?!」

「なあナツキさん…今、ハルトが何気に天ノ河が言ってたみたいの世界征服を企む魔王に見えるな」

「まあそもそもハルトは別世界で色々やらかしてるから」

「例えば?」

その問いに旧四天王が答えた

「逆らう奴を数万人単位で大虐殺!!」

「降参した兵士も容赦なく、また捕らえた敵をプレス機で押し潰してるぞ!」

「笑顔で捕らえた人間を悲鳴を奏でる楽器に加工しておる！この間など腸を引き摺り出して針を突き刺し 悲鳴を調律した人間ピアノを作っておったわ！」

「それはヤクヅキ先輩でしょ！」

「え？ヤクヅキ何それ俺初耳なんだけど？人間楽器って、まさか夜な夜な逢魔の街に響いてた悲鳴って……」

「ハルト坊！背後に敵じゃ!!」

「何!! 「拷奏剣！」 うっ……」

タンコブを出る程のダメージと不意打ちで気絶したハルトを見てヤクヅキは

「ふう……これでハルト坊の記憶からは妾の趣味に関する部分が消えたな」

「魔王ちゃんの脳みそは昭和の家電じゃないからね!!」

「いやハルト様なら……ありえる」

「そんなピンポイント記憶喪失起こす方が難しいよ！」

「キャロル様はやっておつたろう？」

「アレは演技だからね！つてか魔王ちゃん起きて!!」

「その前に本当にやってる事は魔王とその部下じゃねえか!!」

「ハジメ君、ハルト達は敵には苛烈な魔王と部下だよ」

「それを今言うか！」

「痛……なんか後頭部にいきなりの衝撃が走ったんだけど……何の話してたっけ」

「アレじゃよ、テストロツサの奴がハルト坊の為の世界征服プランを練り上げて、その後は妾達が逢魔に逆らう者はどうなるか話しておったではないか」

「そうだったな…：そうそう虐殺云々の話をしていた所だな！」

「本当に魔王ちゃん忘れてるよ！」

「本当に昭和の家電並みの容量しかないの」

「いやいやアンタ達はハルト心配してあげなよ」

「ハジメ君、コレだけは信じて欲しい…：俺は好きで敵を虐殺とかしてるんじゃないんだ、俺は大切な人達と居場所に出す奴等にこの世の地獄を味わってから苦しんで死んでもらいたいって思っただけなんだよ、その苦しんでほしい人数が多いから結果として虐殺になっただけなんだよ…：信じて」

「信じよう」

「ハジメ君!?!止めてくれ!!」

「思考放棄するな!!」

「あの…これってトータス史上最大の脅威では?」

「ああ…」

カレンとジナイーダも溜息を吐く中、後ろで慌てる面々だがキャロルは溜息を吐き

「おいハルト、耳を貸せ」

「ん?おお…:…は?」

「良いから言え、そうすれば丸く治る」

「うん……テストタロッサ、カレラ、ウルティマ……結魂しよう」

『ハルト様!?!』『我が君!?!』『ハル!?!』

「だから辞めよ、な?世界征服なんてしたら仕事ばかりで一緒にいる時間が減っちゃうよ?。」

『た、確かに我らの仕事が増えてしまうとハルト様から寵愛を頂く時間が無くなる……それは盲点でしたわ』

『わ、我が君がそう言うなら今回は見送ろうではないか』

『そうだね、ふふハルと結魂式か……楽しみだなあ』

よしトータス史上最大の脅威は去った!

が

「おいハルト…貴様」

「東さん達の前でプロポーズをするとはねえ…東さん達は結婚指輪も式もまだなのに!!」

「旦那様? OHANASHIするわね」

「もしもし錫音? うん、ハルトがまた増やしたよ…うん分かった、錫音がハルトにゾルトラーク撃ちに来るから動くなってさ」

「ご主人様、少しお話しましょう」

しかし俺、史上最大の脅威が目の前に迫ったのは言うまでもない…今怒り狂う彼女達と戦うくらいなら生身でオーマジオウに挑んだ方がマシである

「相棒……」

『言っておくが俺達は助けないぞ』

「今までありがとう……お前等のお陰で楽しくてくだらない旅だったよ……」

『死を受け入れるな!!』

「貴様は死なんだろう？だから遠慮なくお仕置きだ」

「そう言えと言ったのはキャロルだろう!？」

「愛の告白しろとは言ったがプロポーズまでしろとは言っていないぞ？だからオレもお前を殴る事にした」

『ドレツドライバー……スチームライナー！ユニコン！ダイオーニ！』

「行くぞ三重鍊成だ」

「こいサソードゼクター」

『STANDBY』

「東さんも新発明行くよー!」

『アークライズ!』

「旦那様? 覚悟は良いかしら?」

『READY?』

「来たよハルト…久しぶりだけど少し説教ね」

『ジャバドウビタッチヘンシン!』

「ハルト、少し頭冷やそうか?」

『bullet!!』

「少しお仕置きしましょうか?」

『ランプ・ド・アランジーナ、ニードルヘッジホッグ、トライケルベロス』

「では参りますわ」

『6・6・6 standing by』

「なんて理不尽!!」

「主」

「か、カレン助けて!!」

「主の節操無しを諫めるのも騎士の勤めかと思えますので」

「ブルータス、お前もか!!」

「おいハルト遺言はそれで良いのか？今際の際だぞ？」

「あれ？俺死ぬの？」

「「「「「変身!!」」」」」

『ドレット参式』

『change scorpion』

『ALL ZERO』

『ライジング』

『チェンジ…ナウ…』

『シューティングウルフ!!』

『黄雷抜刀! ゴールデンアランジーナ!!』

『complete』

『open up!』

「ちよつと待て! キャロルと束のなるライダーは初めましてなんだけどおおおお!!」

変身した全員の必殺技を受けたハルトはそれはもう綺麗な放物線を描いて地面に倒れ伏したのは言うまでもない

「見ろハジメ君、アレが行く先々で女の子を口説き落として止まらない男の末路だ…なまじ養うだけの甲斐性があるのか面倒なポイントだからな気をつけろよ」

「いやハルト坊を教材にするでないわ」

「お、おう…」

「何か明日は我が身のような気がする」

「政人、落ち着け…そんな事…ありそうだな俺達…幻想郷にいるわ相手が」

「俺も元の世界にいるんだよなあ」

「お前等もか!!」

そして

「ただいま戻りましたわ、ハルト様」

原初組の帰還であるがハルトは包帯でミイラ男化していたのである

「お、おう…おかえりテストタロツサ…」

「我が君!?!酷い怪我だ…一体誰が…」

カレラの言葉に思わず目を逸らすキャロル達面々であったがウルティマは笑いながら両手を後頭部に組む

「まあハルなら治るから大丈夫でしょ」

「少しは心配してよ…まあ良いや治るし」

そう答えると包帯を取り完治をアピールする

「ほらね」

「テストロッサ」

「はい」

「ありがとうな、色々考えてくれて…それとこれからも宜しくね」

「勿体ないお言葉ですわ…この身果てるまでお供いたしますわ…」

ハルトは頬を赤くしながら彼女の手を取りそう伝えるが、彼女は内心で

【計画通りですわね】

そう彼女は帝国、世界征服を出汁にハルトの婚姻を狙っていたのだ

伊達に転スラ世界でも恐れられた原初の悪魔である……というよりハルトがテストサ不在に違和感を持たず放置していたら本気で彼女の智謀により世界征服を成し遂げ、その手柄で同じ事を狙っていたので犠牲者の少ない段階で止めて正解である……

ウルティマ達の参戦は予想外だったが……まあ別に良いか

【公私ともにハルト様の信頼が一番厚いのは私ですからね】

そう内心呟いていたテストサロツサであった

因みに

「おい魔王の俺！」

「おおガイソーグの俺！無事だったか！」

「あ、主が増えた！まさか分身!?!いやクローンの可能性も…これが影武者か！」

「そう言えばカレンは初めて見たのかアレは別世界のハルトだ」

「別世界の主？」

「確かにご主人様とは雰囲気の違いのお、しかし別世界とは？」

「ティオも納得したようだが分からない部分の答えに

「例えば、ティオがハルトにではなくハジメ君をご主人様と呼ぶ世界線があるとか」

「ほほお、そういう事か確かに彼なら妾を満足させてくれるじやろうなあ…」

「何見てんだ変態」

「うむ、合格点じゃが…やはりご主人様の罵倒には敵わないのじゃあ！」

「何だよ魔王の俺! あそこで恍惚な表情を浮かべながら震えてる変態は!!」

「……………頼むから触れないくれ」

「俺達と別れてからも沢山の冒険をしたんだな…: と言えばファルシオンのと最近会ったのだが少し妙な話をしていたな」

「妙な話?」

「何でも英霊の力を封じ込めたライドブックが世界に散らばっているとか」

「ごめん、それ凄いい心当たりあるわ」

「その様子だと既に英霊のライドブックを何冊か持つてみたいだな」

「ファルシオンには内緒で頼むよ、奴にバレたら面倒そうだ」

「分かってる、というよりアイツはアイツで忙しそうだしな…ああそれとだが白スーツの本体から通達だ、アイツの管理してた異世界渡航用のアバターが一体盗まれたらしい」

ガイソグの俺の話を聞いて

「白スーツのアバターって何体もいるのか」

「ある世界ではゴースタースのJとか現地に合わせたアバターがあるらしいぞ」

「へえ…で、盗まれたのって？」

「何でも女神の意思に干渉可能なヴィジョンドライバークラスやジリオンドライバークラスを使用可能な最高ランクのアバターを盗まれたとき」

「とんでもねえなソレは、んで誰に？目的は？」

「そこは調査中らしいが白スーツ本体の隙をついたのだからロクでもない奴なのは確かだな」

その言葉にバランスーと名乗った奴を思い出すアイツか?けど何の為に

「ま、その辺は今考えても仕方ない、いざとなったらハルトレンジャー再結成だ」

「ごめん被るぞ」

「ハルトレンジャー?」

「前に異世界連合ハルトレンジャーというそれぞれの並行世界代表のハルトだけで構成された常識に喧嘩を売ってる即席戦隊が結成されていたんだよ」

「な、成る程……主だけの問題児チームなど世界の終わりでは?」

「なんか失礼な奴だな…じゃない紹介するぞ！俺の新しい仲間のドゴルドだ！」

同時にドゴルドの鎧…否 本体に取り憑かれたが

【腹正しい話だが、こいつの体を借りて俺は武者修行してやる】

【ドゴルド、俺が先輩だから敬え】

【ふざけるな！誰が敬うか!!】

「はいはい喧嘩しないの…何で俺は変な鎧に好かれるんだよ、この間なんか四季咲つて刀鍛冶の作った鎧が飛んできたし片腕が赤龍帝とかいう自称最強ドラゴンの籠手になったし」

「お前どんな世界にいるんだよ」

「というよりご主人様は何処の世界でも奇天烈な者達と縁があるのお」

「それは昔からだ駄竜」

実際 アナザーライダー達と会ってから毎日が楽しいが変人に囲まれるのが日常だしな、やれやれと被りを振ると

「おおう何気ない会話に含まれる罵倒! それでこそご主人様じゃあ!」

「お前大変そうだな…そんな変態に付き纏われるとか…そうだ早く帰らないと七実に怒られる! んじゃあな魔王の俺! 待ってくれ! 七実! 謝るから鎧通しを使った七花八烈だけは勘弁してくれ!!」

そう涙目でオーロラカーテンを超える姿に

「哀れな奴だな完全に尻に敷かれてやがる」

『お前も人の事言えないだろう?』

「……………確かに」

「それで今更だけど、ギガントブラギオーには誰が乗ってたのさ」

「ああバランスを自称してた、フードで顔は見えなかったけど強い奴つてのは分かった」

「は？ハル兄より強いってのかよ！」

「んな訳ねえだろ戦えば俺の方が強いけど戦うのは面倒なタイプだな…アンティリーネと同じだ何でもできるハイスペック・オールラウンダー俺の一番苦手なタイプだ」

長い間戦って分かったのが俺は相手の苦手なスタイルで戦う傾向がある

多分、アナザーライダーや怪人達をよく知っているからこそ彼等の適材適所に使い分けて戦うスタイルになったようだ

相手へ対策を立てて弱点を集中攻撃する、或いはレベル差があれば力技で押し切るのどちらかだ…しかし

アンティリーネのように魔法と武芸など両方器用に熟せるタイプとは相性が悪い、対策立てるのに時間がかかるし何より弱点についても複合手段や予想外の攻撃で倒されてしまう……当時の技量は別として良くアンティリーネに勝てたと思う

「何かそいつ等曰く俺達が世界の天秤を壊す者ってさ」

「天秤……世界のバランス……まさかノイントみたいな神の使徒か？」

「近いと思うけどトータス側じゃないね、多分俺達側の管理プログラムじゃないかな？ まあ実際やらかしてるのは事実だし……主に白スーツの管理ミスでオーディエンスや白スーツ本体の贈り物が暴れてたからな反応したんだろ」

バランスの正体が白スーツと同じく本体のAvatarなのだとしても誰が乗っ取るかの目的で行動してるかわからない以上は話さない方が吉だな……魂の回廊が繋がってるテストロッサ達にはバレるから相談する必要があるが

「では我が魔王の予想が正しいとすると」

「諸々は白スーツに聞くしかないな…」

そこに尽きるだろう、でないと此方も選べる手段が少ない

「まあ今はハウリア達の件から解決しよう因みにハウリア族は今回の解決策として何を考えてる？」

「はい皇帝と重臣、その関係者を暗殺しようかと思つてます！」

「なあ俺の帝都同時多発テロ案より物騒じゃないかな？」

『似たようなものだぞ相棒』

「ほお…暗殺と聞いて」

「私達の出番ですか？」

「呪腕さん!? 静謐ちゃん!？」

「しまった暗殺と聞いて逢魔最高の暗殺者が反応した!!」

「何と!お二人の暗殺を生で見られるなんて…私は今幸せを感じています!!」

「狂信者ちゃんは別の感動で震えてるよ!」

「ごめん、あの感情の意味がわからん」

『相棒に分かりやすく言えば、レジエンドライダー達が相棒の目の前で変身して戦うのを至近距離で見れるという状況だな』

「何だそれは最高じゃないか!!」

『そう、それが狂信者が抱いている感情だ』

「成る程、今狂信者ちゃんの気持ちがあわかったぜ…よし!2人で帝国の皇帝と貴族を暗殺「せんでよろしい!」 ええ!」

「それをしたらテストタロツサ達を止めた意味がなくなるだろう!!」

「けどキャロル!これは狂信者ちゃんの手押し活なんだよ!なら同じオタクとして推し活の応援しないと!」

「それで人の命を天秤にかける奴があるか?」

「……………あ」

「そこに今気づいたのか!そこに直れえ!千冬!このバカの説教延長だあ!!」

「任せておけ」

そして千冬の説教が終わる頃には夜が明けていたのは言うまでもない

その後

「うんうん、久しぶりの膝上だ良い座り心地だねえ〜」

「そうか？普通こういうのは男の膝上なんて硬いとか文句を言う場面だろ？」

「そんな事ないよ、こうすればハルトと密着出来るんだから最高じゃないか…この位置取りはテストタロツサ達には出来ないからね、これはボクだけの特権さ」

「違どうぞウルティマ、大至急ハルトの膝から退けそこはオレの居場所だ」

「違うよここはボクの居場所だよ、それにキャロルはまだハルトと結婚してないじゃん…
そうだ！それなら正妻の座はボクが貰っちゃおうかな」

挑発するように笑うウルティマにキャロルはキレた

「よろしいならばハルトの膝上をかけて戦争だ」

「良いよー今後とも楽しく遊びたいし…実力位は把握しておこうか」

バチバチと火花散る2人を見てハルトは

「辞めて！俺の膝上をかけて争わないで！」

「初めて聞いたセリフだな」

「今後一生聴くことないだろうけどね」

やれやれと政人と宗一が眩くと

「キャロル、ウルティマ！待ってくれ!!ここで喧嘩するのはハジメ君達が困る!!オーロラカーテン繋ぐから………喧嘩するならシンフォギア世界で喧嘩してくれ、彼処ならいくら暴れても大丈夫だ」

「実際、私達の力でいくつかの島は消えているからな！」

「なのであの世界の島が一つ二つ減っても大差ないでしょう、人もいないので大丈夫ですわね」

「その通りだ2人とも、いいぞもつとやれ」

カレラとテストロッサのセリフにナツキのツツコミが炸裂する!

「いや大問題だよ!頼むからシンフォギア世界の皆の事も考えてくれないかなハルト
!!」

「断る!俺が過去に受けた心的負担分だけ苦しめ!」

「どんだけあの世界で受けた仕打ちを根に持ってたんだよ!」

ナツキが懸命に止める光景にハジメは

「なあハルトはナツキのいる世界で何したんだ?」

「いくつかの無人島を消しとばしましたね」

「逆らう者達を皆殺しにしたよ？ 懐かしいなあ魔王ちゃんが笑いながら敵を蹂躪した姿が今でも目に浮かぶよ」

「あの時のハルト様は楽しそうだったな」

「そこでもか!!」

「まあハルト坊を実験動物にしようとしたり、アナザーウオッチを奪い取ろうと特殊部隊投入したり政府所有の生物兵器とか宣ったのは向こうの愚か者どもじゃがな」

「どっちもどっちだな」

「ハルきち！ちよつとその辺の話を詳しく!!」

「あ、そうそうハル」

「何だウルティマ?」

「ニアから聞いたんだけどさ、ハルはチャイナドレスからのチラリズムに興奮するとか
…アレ何?」

ウルティマの無垢な瞳を見て、ハルトは一言

「おいニア、今思い出したぞ」

「……………やば」

「お前、前に純情なアンティリーネにも変な事吹き込んでたなあ!!」

「ぎゃあああああ!何か凄いデジャブううう!!」

元凶に2度目のアイアンクローで制裁を加えなのであった

「ああ、それでベルファストがああの部屋でチャイナドレスに着替えてたのか」

「マジで!?!……おい待てナツキ、何でベルファストが着替えてるの知ってるの?」

「あ……いやあ……それはその……ベルファストさんの着替え現場に誤って入った結果死に戻る世界線がありました……」

「ふむふむ……おいお前、何ベルファストの着替え覗いてんだテメエー!」

「それは不慮の事故なんだああああ!!俺の話の聞けー!2分だけでも良い!!」

「……………」

『ベルデ…FINAL VENT』

「え、ちよっ!!」

ナツキ…DEAD END

死に戻り中

『FINAL VENT』

『strange vent……CONFINE VENT!』

「危ねえ…助かった!」

アナザーベルデのデスパニッシュをアナザーナイトサバイブの力で凌いだナツキ
だったが

「ストレンジイベントからのコンファインメントは運が良いな…けど」

『RETURN VENT』

「へ?」

「勉強不足だな、こう言うカードもあるんだよ」間抜けえええ！」

コンファインメントの対策カード、仮面ライダータイガが持っていたリターンメントのカードで使用可能となった、デスパニッシュを受けてしまうのであった

強襲 首狩兔!! 前編

前回のあらすじ

ギガントブラギオーを操っていたのは謎の人物バランサー 敵味方曖昧な存在の目的とは!

そしてハウリア族は己の未来を賭けた戦いに挑もうとしていた!

――

ハルトはベットで仮眠をとっていたのだが誰かが忍び込む気配がしたので

「……………ん? 誰?」

体を起こすと眠くて頭が働かないでいる

「私ですわハルト様」

「テストタロツサか…おはよ…ごめん寝てた…飯作るわ」

「おはようございます、簡単ですが朝食の用意もしておりますよ」

その言葉に眠気が吹き飛んだ

「え、マジで！うわあ人の手料理とかいつぶりだろう！楽しい！」

「ハルト様程旨くはありませんのでお口に合えば良いのですが…」

「そんな事ないよ嬉しい、ありがとうテストタロツサ！」

食堂

「っ！美味しいっ」

「良かったですわ…ハルト様の方が上手ですので…」

「そんな事ないよ逢魔に来てから…俺の為にご飯作ってくれたのはテストタロツサが初めてだからさ」

「あら嬉しいですわ」

そして2人で食堂に入る姿に離れた場所から

「ぐぬぬ…」「テストタロツサの奴め抜け目ない」

ウルティマとカレラは齒噛みし

「まさかハルト相手に手料理でアプローチを仕掛けるなど」

「束さん達には無かった発想だよ！」

「ああ基本、朝起きたらハルトがご飯を作ってくれたからな…主夫レベルが高すぎるのも困ったものだ」

「千冬の場合は作れないだけ」

「何だと銀狼！お前も同じだろう!!」

「そうだー！ちーちゃんは家事スキルが壊滅な分家長としてハルくんを抑えられるんだぞおー！」

「東、後で話がある」

「私は作らないだけでちゃんと料理出来る、丸焼きしか無理なアンティリーネとそもそもできない千冬よりマシ」

「ならば見せてもらおうか？」

「望むところ」

「まあまあ、けどハルきちに手料理か…王道なアプローチだけどきハルきちの料理上手に甘え過ぎちやった私達には思いつかなかったねえ」

「まあ旦那様の場合は食材が独特なのと料理が趣味というのもあるから良いのだろうけど…あれ?ベルファストは?」

「あそこよ」

とオイゲンの指差す先にはさりげなく給仕をするベルファストがいた…メイド故に違和感がなかったのである

「おのれテスタロッサ…まさか今までハルトの隣で秘書のようにしてハルトの信頼を勝ち得ていたのは……正妻の座まで狙っているというのか!」

「別にキャロリンが正妻ではないよね」

「何だと？似非ウサ耳、ハウリア族の本場ウサ耳を見た以上貴様の似非耳は見るに堪えんぞ？」

「あははキャロりんは私のアイデンティティを傷つけたよ…よろしいならば戦争だあ！」

と火花を散らしている中、オイゲンは

「今夜指揮官にバニースーツでアタックしてみようかしら」

それだ!!と言う声が聞こえたが無視する

「そう言えばテスタロッサ達は指輪に注文とかある？」

「指輪ですか？」

「そうそう婚約者全員に渡すんだけどねデザインは決まって作ってるんだけど…何かしらの機能をつけたくてさ」

「ハルト様の原案としては何か？」

「彼女達を守る防御魔法や非常時の転移魔法かな」

「でしたら指輪を介してハルト様の魔力を使える機能など如何でしょうか」

「ああ…その発想はなかったな確かに俺のファントムから魔力は引いてるけどアナザーウィザード以外には使わないからなあ」

基礎的な身体能力向上とかは使うけど食技や猿武のお陰で燃費良すぎだから減らなくて困ったんだよなあ、余剰の魔力もリアクターアックスに溜め込んでるが限界近くだったから、その消費先も困っていたのだ

「確かにテスタロッサやカレラ、ウルティマなら俺より魔力や魔法の運用は長けている

し…一応アナザーウィザードのお陰で地水火風の魔法も使えるからね」

「それにキャロルや銀狼達にも身体能力付与が可能なら戦闘の補助にもなるな俺なんか魔力はあるけど使い道がないだけの魔力タンクだし…よし採用だ」

「感謝しますわ」

「本当頼りになるよ」

「ぐきゅん…」

「落ち着いてよキャロリン！ヒロインがしたらダメな顔してるから!!」

「さて今日は勝負の一日だな…まあどっちに転んでも勝つけどね」

ハウリアが成功すれば、それで良いし

失敗したら…その時は…ね？

懸念材料は

「はあ…バランサー…：…なあアリエル、カレン、ティオ何か知らない？」

「ごめん知らないや」

「私ものです…申し訳ない」

「妾も知らんのお」

…この世界組の皆も知らないとなると…

「ミレデイに聞くか？」

解放者なら何か知ってるかも…それか

「クソジジイか？」

老ハルトなら答えを知ってそうだが：アレに頼るのは何か屈辱である

『言ってる場合か』

「そうだよなあ……取り敢えず今日は帝国の皇帝に謁見して「皇帝を惨たらしく殺すんじゃない」アホかヤクヅキ話しあいするだけだよ！」

「しかし我が魔王が冒険者に身をやつしているとは言え膝をつく姿は何というかアレですぬ」

「解釈違い？」

「それです我が魔王が誰かに屈する姿など私は見たくない！」

「魔王ちゃん、よくレジエンドライダーに土下座してるけど？」

「当たり前だ俺がレジェンドライダーと同じ目線なんて頭が高いだろ？」
『信じられないだろ？こんなのが怪人王なんだぜ？』

「……私の記憶にはない光景です！」

「現実逃避だ！」

「あ、ハウンド昨日の件だけど」

「はい、ギガバイタス、ライノス、フェニックスは樹海に帰りました」

「パワーアニマル達は宝珠に戻ったぜ」

「獣電竜は小型化出来るけど」

「ステゴッチ、ドリケラ、アンキドン、ブンパッキーの枠は空いてるよね」

「ああ、ブラギガスの件もあるから残りの獣電竜の力はコツチで集めておきたいんだよ」

「確かにキョウリユウジンもマツチヨ、カンフーってフォームもあるしな」

「特にアンキドンとブンパッキーはスピノダイオーには必須な存在だ俺としては信頼の
できる奴に任せたいと考えてる」

「バランスーの目的が分からない以上は放置するしかないが…」

「二亜、何か分からないか？」

「残念だけど、囁告篇帙でも分からないよ」

「ニアから検索能力を取ったら何も残らないでしょ」

「何ですとお!!」

「はいはい喧嘩はおしまい…本当に私がいないと大変だねえ」

「錫音、すまないな…最近一夏達の件でも私は」

「大丈夫だよ千冬。まあ勝手に嫁増やしたバカ旦那にはそれ相応にお話しが必要だね」

「あ…俺、死ぬかも」

『人はいつか死ぬぞ』

「だが今日ではない？」

『相棒、使う場面間違えてると思う』

「取り敢えず！ハル兄はこれから、その帝国の皇帝に会うんだよね」

「おう！任せておけ!!カレン達の件もあるからバッチリ倍返ししてやるからよ!!」

「千冬姉、不安だからついてって」

「任せろ一夏、私がこのバカを抑えよう」

「おい義弟よ何を不安に思うのだ俺程このチームの中でマトモな人間はいないだろう」

「それ笑えないジョークだよ、狂人が常識解いてるとか」

「え？何で冗談扱いされてんだ？」

「じゃあ聞くけどさハル兄、もし皇帝が千冬姉達を口説いたらどうすんのさ？」

「え？グロンギ達呼んで皇帝と帝国市民全員を皆殺しにするゲゲルを始めるよ」

何当たり前の事言ってるんだ？と首を傾げると

「やってる事がダグバより悪質う!!」

「流石は怪人王!!」

「はいアウトー! やっぱりアウトだよ! ウオズさん達暴走煽ってんじやん!!」

「分かってるよ一夏、お前は参加させないから」

「いやいやそんな話してるんじゃないよ」

「皆まで言うな分かってるよ千冬達には指一本触れさせない寧ろ触れようと接近したら殺す…アナザーWに調べさせたら皇帝は女好きとか言うじゃねえか…ははは…彼女の間にいれれば殺すとも」

「いやまあそれもそれで心配だけど…ちよつと待ってハル兄が狂化してるけど?」

「ご安心ください一夏殿、我々が我が魔王を諫めます」

「すみません、テスタロツサさん達でお願いします」

「何故ですか一夏殿！我々程諫め方を知る者は逢魔にはおりますまい！」

「先程も見ましたが貴方達はハル兄のブレーキよりもアクセル踏ませる方が得意でしょ！」

「なら貴方に分かるのですが長年あの人の側で暴走を諫め続ける苦勞を！時にアクセル踏ませる位が我が魔王は自重してくれるのですよ！この間のテスタロツサ嬢の件で学びませんでしたか！」

「っ！」

「自分の意思で世界征服するとか流石にないなと思ってくれてた方が平和なのですよ！」

「……すみません言い過ぎました」

「気にしないでください、我が魔王の事で苦勞するのは皆が通る道です」

「お前ら、後で屋上」

「仕方ないねえよ、ハルトだからな問題児の面倒見るのは誰だつて嫌だろうさ」

「ボルキャンサー、よく見ろアレがお前のご飯だ…今日パーティー会場に行け…明かりが消えたらアイツを生きたまま頭からボリボリ食べる俺が許す」

「怖え事言うんじゃねえよ!!」

「あ、ミラーモンスター達に報告!今夜は帝国の皇帝一族、貴族連中食べ放題パーティーを開きます!参加したい人は鏡の中で待つように…因みに」

そう区切つて笑顔で一言

「ここにいる関係者とウサ耳つけた人以外は全員食べて良いからよ、あ、金ピカの鎧着た金髪野郎とその仲間達は食べるなよ不味いだろうから」

「物騒な事を頼むなあ!!」

「爆弾じゃなくてミラーモンスターに強襲頼んでますね」

「流石魔王ちゃんだね…」

「しかし帝国兵はどんな悲鳴を上げるのか楽しみになってきたわい、のおハルト坊！良ければ妾も手勢を連れて行きたいのじゃが」

「構わねえ好きにしろ」

「よし、帝国の城でどんな悲鳴の合奏を奏でてやろうか楽しみじやなあ」

「ウオズちゃん！1人だけ違う遊びを始めようとしてる人がいます！」

「アレは仕方ありません」

「諦めないで!!」

「さてお前等、皇帝と謁見しようぜ！」

「そんな野球しようぜ！のノリで会う人じゃないよ……って！何で緊張してないのさ!!」

「え？だって俺は政治的な会談で王様とか他の魔王とよく会ってるから偉い人に会うのは今更なんだけど？」

「」「あ」「」

「そう言えば我が魔王って国家元首でしたね」

「失礼ですよオズ先輩！確かに僕も忘れてましたよ」

「まあ普段がアレだからね」

「そうじゃよ今更じゃがハルト坊が緊張とかする訳ないのじゃ……何故なら頭のネジが壊れておるから!!」

「[[[確かに!]]」

「お前等、飯抜き」

「[[[どうかお慈悲を!!]]」

「しかしハルト坊がキレたのを合図に皇帝一族を皆殺しにしてやろうと思った妾の完璧な計画が台無しじゃあ!!」

「ウオズ！ここにとんでもない計画を立てている者がいるぞ!!」

「あ、それは大丈夫ですよテストタロツサ嬢と違って力技なので対策が可能です」

「失礼じゃな、久しぶりに妾がレジエンドルガの王（ロード）たる所以を見せてやろうと思つてのお」

「ん？レジエンドルガと言えば…ああ、あの悪趣味なお面ついたり満月にはりついた奴を装備したり色々あつたな…まさかあの辺の計画があるとか？」

「おい待てハルト坊、妾達レジエンドルガへの侵食や糧とする為の仮面を悪趣味じゃと？」

「あ…ごめん言い過ぎたなアレは伝統だよな、悪趣味と言つてしまつて」

「いやセンスに関してハルト坊に悪趣味と言われるならば仮面のデザイン全般を見直すべきと思つてのお」

「確かに私服センス悪い魔王ちゃんにセンス悪い言われたらダメだよねえ」

「そうだな！」

「お前等、人のセンスを否定して楽しいか!!」

「我が魔王、時に精神的に辛くても正論を受け入れるのも大事ですよ」

「キャロル！皆が俺を虐める!!」

「当然じゃないか？」

「酷い!!相棒!!」

『無理だな』『手の施しようがない』

「俺に味方はいないのか？」

そして勇者W一行を盾に城に入る

メンバーはウオズと旧四天王、3人娘、カレン、テイオ、千冬、東である

ハルトは笑顔で

「よーしお前等、家探ししようぜえ」

「おー！早速城に眠るお宝探そうぜえ！」

ハルト、東がノリノリに、こんな所で勇者の気持ちかわかるなんてな!!の笑顔だがナツキがツッコミする

「ドクエじゃねえんだよ、間違って城の中の宝箱とか見ても開けるなよ！」

「ならロツカーを「開けるな」壺は「投げるな！」へーいつまらねく、ゲームだと王様は銅貨とひのきの棒だけ渡して放逐すんだよなあ」

「ゲームしてて思うけど鬼畜だよね」

「ねー」

と束と話していると

「おい貴様、我等が皇帝を侮辱するか…しかし女、お前は別だ俺の相手をするなら罪には…」

後ろにいた守衛が下衆な欲望と共に槍を構えるが

「なあ、誰に武器向けてんだテメエ」

純粹な殺意をぶつけられ、守衛は槍を落として腰を抜かし怯える始末だ

「折角楽しい気分浸ってんに邪魔すんなよ」

「待てハルト、ここで暴れたら色々面倒だ辞めろ」

「わーった命拾いしたな」

流石に千冬が言うので引き下がるが窓ガラス越しに

「アレ、後で食っていいぞ」

すると分かった!とばかりに金切り音が鳴るのを何人かは理解すると守衛を憐れみの眼差しで見るのであった

「やっぱり俺達の城のがデカいな」

「そうなのか？」

「見る？逢魔にある俺の城」

と見せてきたのは西洋とSFが混ざったとでも言うような城である、これはハイオークとトルーパーの皆がノリノリで建ててくれたのだ城とかいらぬ普通の建物で良いのにと頼んだのだが…というより作業機に改造したATTEとか見た事なかったんだけどなあ

【魔王の家が普通では示しつかない！】

と言われてしまい…こんな感じとなったのである、いや本気出し過ぎだろと引いたのは本当だが

「おお……いや、ごめんお前マジで王様だったのか」

「まあ思えないよね、何せ俺には王としての威厳がないからな！逢魔では王様じゃなく

て近所の兄ちゃんみたいなものよ」

「王様に一番必要なものがないのかよ、それで良く王様やれてんな」

「こんな頼りない王様を頼りになる仲間達が支えてくれるからね」

「ああハジメ君、このバカは普段がコレだから誤解されるが逢魔王国では誰もが恐怖でひれ伏す主だぞ言葉は「おい」えらー

ドヤ顔でハルトを小馬鹿にするナツキだが、その言葉を継ぐ前にハルトがラツパ飲みしていた酒瓶をナツキの後頭部目掛けて全力で振り下ろしたのである

「あーあ…飲みかけだったのにさくあららーその頭だと返り血がワインか分かんないねえー」

砕けたガラス片と頭から血を流して倒れるナツキ、よく見れば白目を剥いているがハルトはイライラした表情でナツキの後頭部をそのまま強く踏みつけた

何かがいラついたのか知らないが突然の暴力に場が凍りつく、瞳から光は消え声音は普段の穏和なものではない、聞くもの全てを畏怖させて止まないでいる

「テメエが何、偉そうに俺達の国の事を話してんだ…あ？俺をこれ以上イライラさせてんじやねえ、もう一回死に戻りてえなら死に戻れ間抜けが」

足を離すとハルトは普段の笑顔で仲間を見る

「カゲン…窓から投げ捨てろ」

普段の冗談混じりではない本気の怒りに

「はっ」

首肯するカゲンを見てハジメは慌てながらジョウゲンに尋ねる

「何でハルト怒った？」

「魔王ちゃんの地雷踏んだから」

「そんな理由で……」

「まあ自分の大事な居場所を、外から見ただけで知った気になった人間から馬鹿にされればブチギれますよ……魔王様を笑って良いのは許されてる者か逢魔の者だけです」

「……………」

「覚えておいた方が良いよハジメちゃん、魔王ちゃんはキレたら何しでかすか分からないから」

「今それを実感してる」

「これですよ！この絶対的な恐怖と暴力で全てを統べようとする魔王様!!ああ！やはり

貴方は正当なるライダーの歴史の継承者だ」

「フィーニスちゃん、結構ヤバイ趣味してんね」

「ま、ハルト坊は身内以外には情け容赦がないからのお」

「ええ我々だって我が魔王の身内でなかったら、あのライブの時に全員死んでいます…
というより降格人事で済んだのは慈悲ですからね」

「ナツキは身内じゃないの？」

「微妙じゃな、我等のように臣下として忠誠を誓った訳でもキャロル嬢達のように惚れ込んででもないんじゃないよ…認めてはいるがハルト坊の中では割り切れておらんだろうな」

「そもそも二君を抱くような輩は不用です」

「というより我が魔王からすれば、いざと言う時に自分を殺せる奴が自分の名前で好き勝手されるのが不愉快なのでしょうね…実際、我が魔王の名前で私利私欲を肥やしたものの達（シンフォギアG編の政治家）がいましたが全員、それ相応の末路を辿りましたから」

「……………っ！何すんだよ……………ハルト……………」

再生魔法で肉体が治ると意識を取り戻したナツキが噛み付くが

「奏者か俺達かで揺れてる半端者が偉そうに俺達の国を語ってんじゃねえよ」

「なんだと……………」

ナツキはカゲンから離れるとそのまま正面に立つがハルトからは問答無用の前蹴りを腹に叩き込まれ

「がはっ……………」

「お前がいつ逢魔の仲間だつて？ 現地協力者が何偉そうにしてんだ」

くの字になると同時に踵落としを打ち込んだのである

「ほーんと、頭の悪い勇者だのバランスーだのどいつもこいつも邪魔でイライラしてんのに……お前まで俺をイラつかせてくれんなよ」

「我が魔王……一応ですが彼、ドリンクバー往復係ですよ」

「仕事してないから論外」

「ですが一応は逢魔の臣民では？」

「……………」

「感情任せに暴れるなど言いません……というより我が魔王は基本的にそれで良いのです

が…流石に今の立ち振る舞いは暴君のそれですよ我が魔王」

「はあ……分かった、ナツキ」

「ん？」

「コネクトで金属バットを取り出して一言

「この金属バットで俺の頭を殴れ」

「0か100しかないのですか主！」

「誰もそこまでしたいとは言ってねえよ!!いや俺も調子乗ってた所はあるけどな！」

「そうか……なら俺がお前をこのバットで殴る！」

「お前さては全く反省してねえな！」

「待つんじゃないご主人様よ……其奴を金属棒で殴るなら……変わりに妾を殴って欲しいのじゃあー！」

「ちちち、ダメだね君達！こう言う時は私はハルくんの腰にある棒で「アウト!!」何ですとおー！」

「当たり前だ発情ウサギ」

「発情するのはハルくんにだけだよ！」

「束……それなら今日の夜……」

「oh yeah」

「何で外国？それよりハル！」

「ウルティマ？」

「殴るならボクにやらせて」

「ちよつと待て！ウルティマの腕力でやられたら内臓が破裂する!!」

「大丈夫だよハルの記憶にあった釘バット？にしてから殴るから」

「殺傷力が上がってんだよ!!」

「ああ…俺が昔クソ親父に教育的指導って殴られた時の奴な」

「思い出すだけでも忌々しい、我が君よあの世界に行ったのならば必ずや!」

「ああ子供の育て方を間違えた親には教育的指導と行こうね」

「期待しているぞ」

「それよりも……もう一本お酒あるう？」

「あの！一応ここは王城ですが!？」

リリアーナ王女のツツコミが冴え渡るのであった

そして皇帝との謁見、全員がハジメの豹変に驚くが普段通りで良いと言うと皇帝の視線がハルトに移る

「で、お前さんが呪いのアーティファクトの正当継承者か？」

「ええただ俺の相棒達を呪いのアーティファクトなんて呼ぶのは辞めてもらいたいな」

「そうかい、しっかし姫さんから話は聞いてたがお前さんみたいな平和ボケしてそうな奴が異世界では王様やれてんのか……余程その世界は平和で腑抜けてるのか？」

その一言に逢魔家臣団の殺意が部屋の中に充満する、何なら通信を聞いてたハウンド達に至っては

『レストインピース発進!!俺達を愚弄した奴等に俺達の力を見せてやれ!!』

『隊長!!逢魔にいる兄弟達からも出陣を求める声が!!全て20万!』

『よく言ったな兄弟!旗艦ピースメーカーの修理はまだだが逢魔王国宇宙航空軍 輸送艦隊旗艦のレストインピースと最近就航したエグゼクター級のエネミースローター(虐殺者)も発進!』

『隊長!船の名前が段々と物騒になっております!』

『そうだコレは陛下の心情を表したものだ』

ーいや表してないよ?確かに殺意マシマシな気もするけどね?ー

帝国滅亡のカウントダウンが始まっていた、今頃 樹海に仕込んだポータルからピースメーカーと同じ戦闘特化ヴェネター級……否、元の世界にいるクローンとその協力者が鹵獲……ごほん譲渡された最新鋭のエグゼクター級 スタードレッドノートの エネミスローターが現れているだろう ピースメーカーが威圧と旗艦を兼ねているなら エネミスローターは完全に戦闘に極振りした逢魔王国最強の軍艦である。

何せ あの船一隻で逢魔の国民全員が收容出来るのだから……てか国並みにデカいし、ピースメーカーやレストインピースが小さくて可愛く見える

ハルトは笑顔なのだが体から溢れ出る殺意は家臣団が冷静になるくらいに威力があり、ナツキは先程の後頭部酒瓶アタックを思い出して震えていた……というより

「平和的なのは良い事ではないですか？王なら民が飢えずに暮らせていける国を作るものでしょう？そもそも自国で賄うのは大前提、それなのに他所から掠奪しないと自らの生計立てられない蛮族の国王よりも賢く懸命な発展方法だとおもいますよ？」

貴様等野蛮人と違って此方は平和的に発展してんだよと馬鹿にするような表情で煽ると家臣団はやれやれと肩を竦めた

「貴様！陛下を愚弄するか!!」

「先に愚弄したのはどっちだ雑兵、一国の王を公的な場で嘲り笑い物にした…それだけで俺達と開戦する理由にはなるぞ？俺を笑うのは構わないが俺の家臣や民草を笑うのは王だろうと神だろうと等しく俺の敵だ…根絶やしにしてやる」

「へえ、俺達とやろうってのか？」

「お前等こそ、俺達と戦って勝てると思ってるのか？」

その言葉を証明するように帝都上空に現れたのは二隻の大型艦船 レストインピースとエネミースローターである それは城を覆い被さり擬似的に夜を作り出すほどの巨体なのだ

脅してはない、少なくとも本気で滅ぼすという覇気と覇気のぶつかり合いに皇帝は手を止めて笑い出す

「はははは！バカにして悪かったな、平和ボケした王だと思つてたが中々良い覇気と殺意じゃねえか気に入った！お前さんも南雲ハジメと同じかそれ以上の化け物だな本当に人間か？…てかスゲエな空飛ぶ船とか初めてみたぜ一隻くれ！」

「断る」

「何だよ素っ気ねえな」

「当たり前だ、俺の妻にはハーフェルフもいるからな貴国の奴隷政策は個人的に好ましく思つてはいない…何せエルフの騎士もいる種族で差別するなど言語道断」

「成る程な…だが強い奴が弱い奴の上に立つ、それは当然の事だろ？」

「ならその力は強い魔人族に向けるよ他所から人を呼ばないと満足に魔人族との戦争も出来ない腑抜けの現地人が」

「はー言うねえ……しかし……お前さんの異世界技術や南雲ハジメのアーティファクトは素晴らしいな……それと」

皇帝の目は女性陣に向かった

「本当、美女ばかりだな……叶うならお前達と会う前に会いに行きたかったな……てか沢山いるならー人くれよそこの黒髪の女とか……おいお前、名前を聞こう」

「織斑千冬。彼の妻だ……悪いが惚れてる男以外に抱かれる気はないぞ」

「ほお……強気で凜とした顔、良いな……ますます気に入った俺好みにしたい、どうだ常葉ハルト、千冬と俺の娘を交換しないか？」

千冬を指差す皇帝に 家臣団全員は理解した

ーあ、こいつ死んだわー

と、何せ

『千冬姉を何、物扱いしてんだ？』

『一夏兄さん、あの男処そう』

レストインピースで待機してた弟妹が殺意全開のウォーミングアップを始めたのである

「断る、千冬は俺の女だ…お前に渡す道理はない」

「はっ、俺達は帝国だ欲しいものはどんな事をしてでも手に入れるぞ？」

「一つ警告する逢魔王国に敵対するものには死が慈悲と思える苦痛が待っている…あと…俺から特別を奪うってんなら根絶やしにするぞ」

を忠告すると

「あ、そうそう今日の夜にパーティを開くんだ顔を出しといてくれや、さっきの詫びも込めてな」

「分かった」

一応面倒くさいが外交だしな

「……………」

「……………」

「お前等、行くぞ……………はあ……………」

『レポート』

アナザーウィザードのレポートを使いレストインピースに帰還したのであった

レストインピースの会議室にて

「あの野郎…」

「逢魔や兄弟を愚弄するだけに飽き足らず千冬様や軍艦まで…許せん！もう帝国滅しましよう!!ハルト様！」

「それやろうとして皆から止められた記憶があるだけけど？」

「今こそ逢魔の力を見せる時!!」

「無視かよ…つかエネミースローターを何で引つ張ってきたのさ!!それ逢魔最強の戦闘戦艦だよ!!」

いざと言う時の避難先、戦闘力最高 逢魔全軍を格納出来る…当然火力もバカならない…あと

警備システム変わりに銀狼が遠隔操作で操れる無人スイカアームズやチューリップ ホッパーなどが待機しているし本来の火力でもこの世界程度なら更地にできる

「アレ使うの本当に危ない時って言ったよね!!」

「ええ危ないと判断し幕僚長としての権限を使いました」

「何してくれてんの!」

「まあ結局、陛下得意の棍棒外交になったのですから良いではないですか」

「まあな…つか千冬達を物扱いする態度が気にいらん!!」

「我々は陛下を平和ボケした王などと腑抜けた事を言う愚か者に頭来ましたがね陛下、此方へ来る前に我等にちよっかいを出した帝国兵を捕らえましたが」

「俺達は帝国と戦ってないから捕虜はいないそうだろう?」

「かしこまりました、ではプレス機にかけておきます」

「頼んだ」

「その書類コピーしてね、くらいのテンションでいう言葉じゃねえよ!!つかプレス機って何してんのさ」

「ああ宗一や政人は知らなかったな…実は逢魔にはheavenって言って俺にあるグルメ細胞やら他の怪人達のヤバい力を携行撮取で強化出来るお手軽アイテムがあるんだが…」

「ん?…なあ、その材料ってまさか…」

「え?人間をプレス機で圧縮して「それ以上は言わなくて良いから」そうか…因みにプレス機のボタンを押すのはレジエンドルガ達だよ」

「うむ見事な人選と思ったぞ、妾達は人間の命乞いと極上の悲鳴(音楽)を至近距離で聴けるのじゃからな…あのプレス機の音は楽器が音を奏でる前奏じゃな」

「これぞ適材適所だな」

「何て所で需要と供給を賄ってんだ!!」

「その試作品を食べたゴオマは強くなつてな…今ではBBダンゴムシお手玉3個まで出来るようになったぞ!」

「地道な努力う!」

「それで良いのか!!」

「アイツ最近、努力する事覚えてみたいでさあ…俺嬉しいよ」

「今の嬉しい意味、殴りがいのあるサンドバッグになるなあじゃないよね?」

「失礼だな一夏、俺は逢魔の仲間になんか事思わせないか!俺は逢魔に住む者達をかけたがえの無い存在だと思ってるぞ!」

「俺を後ろから酒瓶で殴った件については？」

「え？お前いつから仲間になってたの？そんな自然に仲間入りしてるベータータのポジションにお前入れる訳ないじゃん」

「理不尽!!なら俺のポジション何処なんだよ！」

「ギ○ユー特戦隊」

「その辺の色物キャラはウオズ達旧四天王だろうがあ!!」

「は？」「ふーん」「へえ」「ほお」

「ナツキ少しお話ししましょうか…何大丈夫ですよ高度数千メートルからパラシュートなしで飛び降りるだけの簡単な仕事ですから」

「あ、ちよつ！助けてええええええ!!」

哀れ引き摺られてから数秒後 レストインピースから投げ捨てられたナツキが見えたのは言うまでもない

「さて、今回はハウリア族の喧嘩な訳だが俺個人としては千冬達を手籠めにしようと狙ってる下衆皇帝一族には何かしらの報復はしようと思う：具体的にはドンスラの力を解放して流星群を降らせるとかな」

「トータス終了のお知らせですね我が魔王」

「ああ！一度更地にして俺達の新しい街を作ろう！」

「絶対魔王ちゃんは江戸無血開城のような発想にはならないよね」

「ああ寧ろハルト様なら焼き討ちだな」

「あの魔王様！」

「何フイーニス？」

「もし敵が城に立て籠ったら「囲んで火をつければ良いよね？」な、なるほど…先輩達の予想通りすぎますね」

「しかしそれだけじゃないぞ、いざとなればジャンヌの幻想の炎や静謐ちゃんの毒攻撃も可能だ！」

「おお！」

「いや絶対辞めろよ！前に人身売買組織の拠点潰すのに静謐ちゃんの毒ガス攻撃したの忘れた!？」

「ああ…何故でしょうか主といると常識が壊れていく」

「安心なさいなカレン、旦那様と一緒にいたら常識なんて無くなるわ」

「それはそれで怖いのだが!?!それよりアンティリーネ嬢よ主を止めないで良いのか?」

「大丈夫よカレン」

「はいはい!」

「ウルティマ!」

「奴らの使う上下水道や飲み水にデビル大蛇やフグ鯨、そしてハルの持つてる毒をボク自らが調合した激毒を全員に飲ませてやろうよ」

「採用」

「次は私だ我が君よ!」

「カレラ！」

「私の核撃魔法を上空に打ち上げ、その熱量で奴等をこんがり焼いてやろう！」

「採用」

「次は私ですわね」

「テストロッサ！」

「あの皇帝と帝国民に死の祝福をぶつけて魂ごと刈り取りましょうか？度と転生できな

いようかい」

「採用!! いやあ流石は逢魔の三人娘だ…逢魔最強戦力の名に恥じない実力だ」

「お褒めに預かり光荣ですわ」

「まあボク達はプロポーズされたからね〜」

むっ、とした顔の面々を尻目に楽しそうなウルティマであるが

「けどハルト、流石にハウリア族の件が解決してからだよな」

「それは勿論」

実際の所 ハウリア族が帝国に要求するのは4点

現亜人奴隷の解放

樹海への不干渉、不可侵

亜人の奴隷化と迫害禁止

そしてその法令化と遵守

である、それに以前警戒していたフェアベルゲンの報復戦の懸念だが宗一達の話だと現在のフェアベルゲンの状態ではそんな真似できないとの事だ

つまりハウリア族の攻撃が成功すれば、帝国とフェアベルゲンは休戦状態にはなるのか

さて問題、俺達はその状況で介入したらどうなるか？

正解はご破産である…が何かしらで協力はしたいので

「よしミラーモンスター…お前達はハウリア族と協力して城の警備してる奴等を食べていこう」

奴等からすれば鏡に突然、仲間が吸い込まれていくというホラー体験を味わう事になるが良いだろう

「後はテストアロツサ達の計画を織り込むと…帝国民が毒に侵された後、死の祝福で魂を刈り取られ…残された体は核撃魔法で火葬して俺達が新しい国や街を作る…勘弁じゃないか！」

「ハルト！頭を冷やせ！その計画を実行するのは本当に悪い魔王だぞ！」

「けど千冬、俺は嫌なんだよ……奪われるのは……俺から大事なものを奪おうとする奴らは……そんな奴等は全員消えてなくなってしまう!!」

復
それはハルトの過去にも起因している、奪われることへの恐怖と敵対者への苛烈な報

加虐的なものもあるが、本人からしたら殺れる前に殺れ であるからだが…

「なあ相棒」

『ん？どうしたんだのじゃハルト』

『おいおいハルトは俺達の事言ってるんだ、食欲スライムは引っ込んでろ!!』

『何じゃと！ふざけるな！ハルトは、わしを呼んだのじゃあ!!』

『呼ばれたのは俺達だあ!!』

精神世界でアナザライダー vs ドンスラの全面戦争が幕開け…

「つせえ！面倒な彼女かお前等あ!!？」

なかった

「つたく…こうなったらパーティに潜入してとなると……」

ハルトはパーティに入る人選を考えたのであった

その夜

「まさかまたこの服に袖を通すことになるとは思いませんでした。」

執事服の宗一に思わず

「何で執事になってんの!?!口調も違うし!!」??

「おお…久しぶりに見たな…アイツの執事姿」??

「昔、執事の知り合いからイロハを叩き込まれただけですよ、ハルト様。」??

「い、違和感がすげえ…」?

「ナツキ様?その首捻り切りますよ?」??

「怖えよ!!?」

ハジメ君側への連絡係も合わせてテイオ

ハルト、ナツキ、政人、宗一、三人娘と千冬、アルトリア、ジャンヌであるが

「うーん…ハルが作るのが美味しいなあ」

「確かに…」

「そうですわね」

「私達はハルトに胃袋を握られているな」

「今更よね…ねえハルト」

「何？」

「どうよ」

ジャンヌは新宿の時のドレスである

「似合ってるよ」

「そうよね！まあ私なら当然よ」

「ねえハル！ボクは？」

「ああ、皆似合っているよ」

ハルトが朗らかに笑うとドレスで着飾った皆が赤面するのを見て

「なあ政人さん、宗一さん後でハルトの奴締め上げません？」

「また後頭部を酒瓶で殴られたいならどうぞ」

「うっ…」

「それにお前には言われたくないだろうな…」

政人の目にはアルトリア（ランサー）にガッツリと腕を組まれているナツキであった
が

「つかそろそろだっけ？」

ナツキが時計に目を向ける

時計の針が刻むのは、虐げられたハウリアの叛逆の牙か
それとも 逢魔の鉄槌か